This is a reproduction of a library book that was digitized by Google as part of an ongoing effort to preserve the information in books and make it universally accessible.

Google books

https://books.google.com

Digitized by Google

HOOVER INSTITUTION
on War, Revolution, and Peace
FOUNDED BY HERBERT HOOVER, 1919

Digitized by Google

Digitized by Google

Digitized by Google

ついに映画化「踊る大捜査線」大特集！

キネマ旬報

KINEJUN

11 1998
NO.1269
11月上旬号

巻頭特集

おなじみ湾岸署の面々が遭遇する史上最悪の3日間とは？

踊る大捜査線 THE MOVIE

INTERVIEW
織田裕二・水野美紀・本広克行［監督］・君塚良一［脚本家］
TV Series STORY DIGEST & KEYWORDS/スタッフコメント集
美術スタッフ座談会

モンタナの風に抱かれて

リプレイスメント・キラー　チョウ・ユンファ インタビュー

ハーフ・ア・チャンス　パトリス・ルコント インタビュー

学校Ⅲ　山田洋次監督、大竹しのぶ、小林稔侍 インタビュー

カンゾー先生　今村昌平監督、柄本明 インタビュー

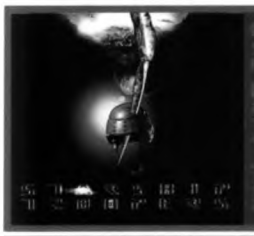
第11回東京国際映画祭ガイド

連載対談　和田誠×三谷幸喜『これもまた別の話』：「薔薇の名前」（前編）
インタビュー：原田知世、ロバート・レッドフォード、クロエ・セヴィニー、
千原浩史、石橋義正、アラン・ベリルネール、ロベール・ゲディギャン、
ガブリエレ・サルヴァトレス、フランシス・ルジー

Pioneer

RELEASE INFORMATION 11

1998 NOVEMBER



「トータル・リコール」の ポール・バーホーベン監督が放つSF超大作！

スターシップ トゥルーパーズ

<DD／ワイド>

11/6発売 特別価格 ¥4,700（税抜）

TRI STAR　DOLBY DIGITAL　WIDE

PILF-2657 ●チャプター付　©TOUCHSTONE PICTURES and TRISTAR PICTURES

TOUCHSTONE HOME VIDEO

始めなきゃ、始まらない。

ディズニー長編アニメーション第28作、<THX／ワイド>で、さらに字幕版はドルビーデジタル仕様で新登場！

Walt Disney CLASSICS

リトル・マーメイド

THE LITTLE MERMAID

字幕スーパー <THX&DD／ワイド>
二カ国語<THX／ワイド>

11/6発売 ¥4,700（税抜）

字幕 PILA-3010
二カ国語 PILA-3011
●メイキング映像付
●オリジナル・ポストカード付
●チャプター付

DOLBY DIGITAL　THX　WIDE　Walt Disney HOME VIDEO　初回限定生産

※ドルビーデジタル仕様は字幕版のみです。

©Disney

Lady and the TRAMP

時を超えて愛される、ディズニー屈指の名作！

初の<THX／ワイド>に、さらに字幕版はドルビーデジタル仕様で新登場！

Walt Disney CLASSICS

わんわん物語

字幕スーパー <THX&DD／ワイド>
二カ国語<THX／ワイド>

10/23発売 ¥4,700（税抜）

字幕 PILA-3012
二カ国語 PILA-3013
●メイキング映像付
●オリジナル・ポストカード付
●チャプター付

DOLBY DIGITAL　THX　WIDE　Walt Disney HOME VIDEO　初回限定生産

※ドルビーデジタル仕様は字幕版のみです。

©Disney

オリバー・ストーン監督がオールスター・キャストで描く
バイオレンス・スリラーの傑作！

LD、DVD、VC同時発売！

Uターン

<DD／ワイド>

10/23発売 LD&DVD 各¥4,700（税抜）

L D：PILF-2655
DVD：PIBF-1072
●予告編付 ●チャプター付

DOLBY DIGITAL　WIDE

あのリュック・ベッソンも大絶賛！ヨーロッパの新星が放つ、超絶バイオレンスSFXアクション！

ドーベルマン

<DD／ワイド>

10/23発売 ¥4,700（税抜）

DOLBY DIGITAL　WIDE

PILF-7381
●予告編付 ●チャプター付

発売元 テレビ東京 ポニーキャニオン コムストック

ジャッキー・チェン初期傑作選 VOL.1

PILF-7377<3枚組6面>

収録作品
1.成龍拳
2.クレージー・モンキー笑拳
3.カンニング・モンキー天中拳

<発売元:コムストック>

11/10発売 ¥15,000（税抜）

小林 旭 "渡り鳥" 全集1

PILD-1154<5枚組10面>

収録作品
1.南国土佐を後にして
2.ギターを持った渡り鳥
3.口笛が流れる港町
4.渡り鳥いつまた帰る
5.赤い夕陽の渡り鳥

初回限定生産

11/10発売 ¥25,000（税抜）

鈴木清順 日活傑作選 [活劇篇]

PILD-1150<3枚組6面>

収録作品
1.野獣の青春
2.東京流れ者
3.殺しの烙印

初回限定生産

11/10発売 ¥15,000（税抜）

LD-BOX先行ご案内

12/10発売

◆小林 旭 "渡り鳥"全集2
PILD-1155 ¥25,000（税抜） 初回限定生産

◆小津安二郎戦前作品集1
PILD-1163 ¥45,000（税抜） 初回限定生産

◆ジャッキー・チェン初期傑作選 VOL.2
PILF-7378 ¥20,000（税抜）

◆ミレニアム セカンドBOX VOL.3
PILF-2598 ¥18,000（税抜） 初回限定生産

◆J=L・ゴダール 傑作選 Vol.1
PILF-7379 ¥18,000（税抜） 初回限定生産

◆スペシャルコレクション
PERFECT BLUE
PILA-9002 ¥18,000（税抜） 初回限定生産

◆バイリンガル・コレクション
スター・トレック劇場版 I~VI
PILF-2439 ¥35,000（税抜）

革命的3次元の音場を再現した劇場用デジタルサラウンド・システムが家庭で楽しめる！

今、アメリカで話題の DTSレーザーディスク いよいよ日本で発売開始！

ロスト・ワールド JURASSIC PARK
<THX&DTS／ワイド>
PILF-2635

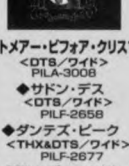
ザ・ロック
<THX&DTS／ワイド>
PILF-2648

DIGITAL dts SURROUND

DTS-LD、DTS-DVDとは？
(DTS：Digital Theater System)

「ジュラシック・パーク」以来、200本以上の映画の劇場上映に採用されているサラウンド方式のことで、フル・レンジ5の独立5チャンネルと専用サブ・ウーファー・チャンネルによって、ホームシアターでダイナミックな音響空間を実現させることができます。

10月23日発売！
各¥6,800（税抜）



ナイトメアー・ビフォア・クリスマス
<DTS／ワイド>
PILA-3008

◆サドン・デス
<DTS／ワイド>
PILF-2658

◆ダンテズ・ピーク
<THX&DTS／ワイド>
PILF-2677

DTSレーザーディスクは今後も続々登場に期待下さい！

⚠注意 DTSサラウンドを体験するには、DTSに対応したプレーヤーとDTSデコーダーが必要です。

dts このマークは、Digital Theater System, Inc. の登録商標です。

10/23発売

◆<70mm映画大全>サーカスの世界<ワイド>
PILF-2539 ¥4,700（税抜） 特別価格

◆X-ファイル シーズン・ファイブ VOL.3
PILF-2632 ¥6,700（税抜） 初回限定生産

◆地球カタログ 深海生物2
PILW-1255 ¥9,500（税抜）

11/1

◆スフィア<DD／ワイド>
PILF-2651 ¥4,700（税抜） 特別価格

11/6発売

◆シーズ・ソー・ラグリー<ワイド>
PILF-2654 ¥4,700（税抜）

◆ER 緊急救命室
サード・シーズン VOL.3
PILF-2619 ¥15,000（税抜）

11/6発売

◆ミッキーマウス／
70thアニバーサリーアルバム
PILA-3014 ¥4,700（税抜）

◆くまのプーさん／
クリストファー・ロビンを探せ！—二カ国語版—
PILA-3007 ¥4,700（税抜）

11/10発売

◆ATG映画 傑作選 2
PILD-1149 ¥20,000（税抜） 初回限定生産

◆スパイ大作戦
フォース・シーズン Vol.2
PILF-2318 ¥30,000（税抜） 初回限定生産

◆スタートレック ヴォイジャー
ファースト・シーズン VOL.2
PILF-2451 ¥30,000（税抜）

DVD VIDEO 10/23発売

◆フラバー
PIBF-1070 ¥4,700（税抜）

●カリートの道
PIBF-1048 ¥4,700（税抜）

●スニーカーズ
PIBF-1043 ¥4,700（税抜）

◆セント・オブ・ウーマン 夢の香り
PIBF-1041 ¥4,700（税抜）

●ダークマン
PIBF-1058 ¥4,700（税抜）

●ツインズ
PIBF-1045 ¥4,700（税抜）

●スパルタカス
PIBF-1054 ¥4,700（税抜）

●荒野のストレンジャー
PIBF-1055 ¥4,700（税抜）

●スティング
PIBF-1046 ¥4,700（税抜）

◆アニマル・ハウス
PIBF-1033 ¥4,700（税抜）

◆クリムゾン・タイド
PIBF-1018 ¥4,700（税抜）

※●印のタイトルは発売延期です。

特報！ レーザーディスク11/20発売決定 **タイタニック** TITANIC ジェームズ・キャメロン監督作品 <THX&DD／ワイド> PILF-2580 ●チャプター付 ¥7,800（税抜）

MOVIE・LD・DVD インターネット・ホームページ http://www.pioneer.co.jp/pldc/movie-LD

このマークはレーザーディスクの統一マークです。●ドルビーデジタル及び DTS は、それぞれ…の商標です。

■当社商品のお問い合わせは、お客様相談センターTEL.03(5721)9876まで。 パイオニアLDC株式会社

Digitized by Google

LaserDisc PLUS DVD VIDEO NEW

シガーニー・ウィーバー　ウィノナ・ライダー

あなたは「復活」を目撃する。

早くもレーザーディスクで登場!

エイリアン4

<THX&DD/ワイド>

10/23発売
¥4,700
(税抜)

ALIEN RESURRECTION

PILF-2652 ●チャプター付

DOLBY DIGITAL　THX

©1998 Twentieth Century Fox Home Entertainment, Inc. All Rights Reserved. "Twentieth Century Fox", "Fox" and their associated logos are the property of Twentieth Century Fox Film Corporation and are used under license.

NOW ON SALE

★印のタイトルは在庫僅少につき、品切れの際はご了承ください。

■エイリアン <ワイド>
PILF-2171 ¥4,700(税抜)('79 監督:リドリー・スコット)
未知の生物に仲間が殺られる中、リプリーだけは必死のサバイバルで唯一人、生き残る!

■スペシャルコレクションエイリアン<ワイド>
PILF-1743 ¥15,000(税抜)★

■エイリアン2 <ワイド>
PILF-2172 ¥5,700(税抜)★('86 監督:ジェームズ・キャメロン)
冷凍睡眠中に自分の娘の死を知ったリプリーは、孤児ニュートに愛情をほき、クィーンエイリアンと一騎打ち!

■エイリアン2 完全版 <ビスタ>
PILF-1515 ¥5,700(税抜)★

■エイリアン2 <完全版/スペシャルコレクション>
PILF-1516 ¥15,000(税抜)

■エイリアン3 <THX&DD/ワイド>
PILF-2562 ¥4,700(税抜)(92 監督:デビッド・フィンチャー)
男ばかりの"囚人惑星"に不時着したリプリー、やがて自分の胎内にエイリアンが宿っていることを知り…?

■ニュー・コレクターズセット エイリアン
PILF-2565 ¥14,000(税抜)★
(シリーズ3作+4のメイキング映像)

Pioneer

J-PN
1993
K45
No.1269-1273
Nov.-Dec.
1998

フラッグシップの思想をそのままに、高品位の深みへ。

DVDプレーヤー
DV-S5

標準価格 83,000円 (税別) 新製品
自照式ジョグシャトル付GUIリモコン付属

●DVDの高画質をありのままに再生する【デジタル・ビデオ・ノイズリダクション&画質調整機構】
●微小な音のディテールまで忠実に再現する【96kHz/24bitツインDAC&Hi-bit・レガート・リンク・コンバージョン】
●高精度な信号読み取りを実現する【アコースティック・ダンパー・トレイ&ダブルレイヤード・シャーシ】

パイオニア株式会社

Digitized by Google

遠藤久美子　河合美智子　小林麻子　濱田マリ　・　高島 礼子

会社をナメたら意外とアマイ!!

ラブリー♡ちょーいけてる!!♡

残業ヤダ!!

残業ヤダ!!

11/28(土)より
全国松竹系にて
ロードショー!!

原作:安田弘之(講談社/モーニングKC)／脚本:一色伸幸／音楽:ファンキー末吉
監督:渡辺孝好
製作・配給:松竹株式会社 http://www.shochiku.co.jp/

特別鑑賞券好評発売中! 一般:¥1,500／ペア:¥2,800

Digitized by Google

キネマ旬報 1998 NO.1269 11月上旬号

目次

ピンナップ
「踊る大捜査線 THE MOVIE」

巻頭特集 ——26

踊る大捜査線 THE MOVIE

撮影現場スナップ集／作品論 樋口尚文／織田裕二インタビュー 進藤良彦／キャラクター紹介／インタビュー 水野美紀、本広克行、君塚良一、堀部徹、松本晃彦 進藤良彦／関連グッズ紹介／ストーリーダイジェスト／美術スタッフ座談会／現場スタッフコメント集

スペシャル・レポート ——167

第11回東京国際映画祭ガイド

特別招待作品＆コンペティション 杉原賢彦／シネマ・プリズム 森直人／東京国際ファンタスティック映画祭 遠山純生

FACE ——15

原田知世 ●野村正昭

HOT SHOTS ——18

ロバート・レッドフォード来日 吉田真由美／クロエ・セヴィニー／「梟の城」製作発表 川村章子／千原浩史／第3回釜山国際映画祭／「チャカ」撮影現場 斎藤芳子／「リング2」製作発表 八森稔／並木座閉館

特集

モンタナの風に抱かれて ——64

作品評 河原晶子／ロバート・レッドフォード作家論 田沼雄一

リプレイスメント・キラー ——72

チョウ・ユンファ インタビュー 望月美寿／作品評 宇田川幸洋／フィルモグラフィ たかのひろこ

ハーフ・ア・チャンス ——80

パトリス・ルコント監督インタビュー 吉武美知子／作品評 河原晶子

学校Ⅲ ——86

インタビュー 山田洋次、大竹しのぶ、小林稔侍 八森稔／作品評 黒田邦雄／作家論 吉村英夫

カンゾー先生 ——94

今村昌平監督インタビュー 垣井道弘／柄本明インタビュー 金澤誠／作品評 村川英

X-ファイル ザ・ムービー ——123

プロダクションノート＆スタッフ、キャストインタビュー 小林雅明

KINEJUN CRITIQUES ——102

ポルノスター ●内海陽子

インタビュー

石橋蓮正 ●塩田時敏 ——104

アラン・ベルリネール＆ジョルジュ・デュ・フレネ ●吉田真由美 ——106

ロベール・ゲディギャン ●田中千世子 ——108

ガブリエレ・サルヴァトレス ●川村章子 ——110

フランシス・ルノー ●大和晶 ——112

スペシャル・レポート ——114

オランダ映画の魅力を探れ！ ●輿水晶子／森直人

Digitized by Google

キネマ旬報社の本

あの名場面、名台詞が蘇る！

青島が吠える、すみれが叫ぶ
室井が怒る、和久が怒鳴る
そしてボケるスリーアミーゴス

冴え渡る台詞と絶妙な構成で、
テレビドラマの常識をくつがえす
圧倒的な支持を得た傑作テレビドラマ
『踊る大捜査線』の世界をシナリオを基に徹底研究！
テレビシリーズ全11話・スペシャル2話を完全収録

踊る大捜査線

絶賛発売中!

湾岸警察署事件簿

B5判■438頁■定価2500円(税込)

脚本○君塚良一
「踊る大捜査線」ＴＶ作品全脚本収録
君塚良一「踊る大捜査線」全話解説
キャラクターガイド／スタッフ・キャスト　インタビュー

ＷＰＳステッカー付き

お問い合わせは、お近くの書店かキネマ旬報社　営業部　03−3815−7131　まで

踊る大捜査線 THE MOVIE

10月31日(土) 全国東宝系にてロードショー

織田裕二　柳葉敏郎　深津絵里　水野美紀　いかりや長介
小野武彦　佐戸井けん太　ユースケ　サンタマリア　斉藤暁　筧利夫　北村総一朗
プロデュース：亀山千広　脚本：君塚良一　監督：本広克行　音楽：松本晃彦
主題歌：『Love Somebody−CINEMA Version』織田裕二（オリジナルサウンドトラック マーキュリーミュージックエンタテインメント）
製作：フジテレビジョン　製作協力：ROBOT　配給：東宝

連載対談 ── 160
これもまた別の話
和田誠×三谷幸喜　「薔薇の名前」（前編）

連載
カミング・オン・スクリーン　日野康一 ── 141
デビュー作の風景　野村正昭 ── 142
百年の夢　山田宏一 ── 144
イラストレーターのいる映画館
第8回・荒井良二 ── 147
立川志らくのシネマ徒然草　立川志らく ── 151
リレー・エッセイ映画と私　石川忠司 ── 152
可愛い少女たちとの恋愛、それと映画
それ以外は消えうせてもいい、飽いんだから
田口トモロヲ ── 154
オールモスト・クール　芝山幹郎 ── 156
映画を訪ねて　田沼雄一 ── 158
映画戦線異状なし　大高宏雄 ── 188
私の映画日誌　井上一馬 ── 192
撮影時評　渡辺浩 ── 194
ピンク映画時評 ── 201
ちょっとイギリスびいき　大森さわこ ── 206
その場所に映画ありて　田中眞澄 ── 207
映画より面白い　西脇英夫 ── 209
TVワンダーランドの怪人たち　武市憲二 ── 213
ガクノススメ　牧野守 ── 237

キネ旬コラム ── 122
●浅野潤／石井美由季
ワールド・レポート98 ── 173
●U.S.A.　濱口幸一　●ON THE PRODUCTION　井口健二
●EUROPE　吉武美知子　●JAPAN　●映画界ニュース
TOPIC JOURNAL ── 182
●川端靖男／指田洋／鈴木元／青木眞弥
映画街 ── 186
●興行短信　竹入栄二郎　●スポットライト　内田達夫
キネ旬ロビイ ── 190
読者の映画評 ── 202
文化映画　渡部実 ── 204
映画の本 ── 208
●上島春彦
TVレポート ── 210
●池田敏／豊崎岳彦／杉原賢彦
サントラ・ハウス ── 214
●賀来卓人
VIDEO, LD&DVD GARDEN ── 216
●キューブリック初ビデオ化作品　杉原賢彦　●2001年ビデオの旅　吉川明利　●公開作＆未公開作　丸山尚輝　●アジアのピンキリ　望月美寿　●OVこだわりチェック　中村勝則　●アニメーション＆吹替版　米田由美　●ヴォイス大百科　弓家保則

キネ旬インフォメーションランド ── 240
シネ・ガイド
劇場招待券プレゼント＆上映スケジュール
愛読者プレゼント

短期連載
映画祭へ向かって ── 118
第6回　各国映画祭（5）　●林加奈子

COMING SOON［新作紹介］ ── 127
●X－ファイル　ザ・ムービー
●私の愛情の対象
●トゥルーマン・ショー
●始皇帝暗殺
●アンツ
●ジャングル・ジョージ
●ガンモ
●ぼくのバラ色の人生
●キャメロット
●ジェラール・フィリップ映画祭
●ニキ・ド・サンファル　美しき獣
●ダーニング・ラブ
●闇を見つめる瞳
●ハミルトル
●時雨の記
●Beautiful Sunday
●なぞの転校生
●速い猫
●新・極道渡世の素敵な面々
●クジラの跳躍

劇場公開映画批評 ── 196
恋するシャンソン　赤坂大輔
アベンジャーズ　宇田川清一
マーキュリー・ライジング　鬼塚大輔
血を吸うカメラ　野村梓
ガンモ　森直人
ムーラン　鬼塚大輔
雨上がりの駅で　中西愛子
ニルヴァーナ　村岡良昭
がんばっていきまっしょい　寺脇研

日本映画紹介 ── 225
ねじ式
キリコの風景
ネブチューン in どつきどつかれ
酔夢夜景
'hood　フッド
SPRIGGAN
Heavenz

外国映画紹介 ── 229
アイス・ストーム
アベンジャーズ
エベレスト
スピーシーズ2
プライベート・ライアン
マスク・オブ・ゾロ
ミル・マスカラス　愛と宿命のルチャ
ムーラン
リバース

今号の執筆者紹介 ── 238
編集後記＆次号予告 ── 246

Digitized by Google

世界の映画人が審査に当たる自主映画の祭典！

真冬の北海道で開催される"ゆうばり国際冒険・ファンタスティック映画祭"は、プロの映画人ばかりでなく、明日の映画界を担う若き自主映画作家にも広く門戸を開放しています。現在、同映画祭の自主映画コンペティション〈ファンタスティック・オフシアター・コンペティション部門〉の出品作品を募集しています。厳正な審査の上、選ばれた秀作は映画祭の会期中に上映します。詳しくは応募要項をご参照の上、ふるってご応募ください。

主催　北海道夕張市
ゆうばりマウンテンシティ実施機構
ゆうばり国際映画祭実行委員会

写真はすべてゆうばり国際冒険・ファンタスティック映画祭'98閉会式より

10th anniversary

東京国際映画祭協賛企画
ゆうばり国際
冒険・ファンタスティック映画祭'99
1999年 2/19(fri.) → 23(tue.)

ファンタスティック・オフシアター コンペティション

作品募集！！

■作品条件

❶自主映画作家によって制作された8mm、16mm、ビデオ等、サイズは問わない。

❷ジャンルは問わないが、イマジネーション豊かなファンタスティック映画であることが望ましい。

❸映画祭以前の発表・未発表は問わないが、1997年以降に制作されたものであること。

❹上映時間は30分以内であることが望ましい。

■申込方法

必要事項を記入した応募用紙と下記のものを提出すること。(応募用紙は右下の〔問い合わせ先〕へご請求ください)

❶出品を希望する作品をテレシネ、もしくはダビングしたサンプル・テープ(VHS/NTSC方式)。オリジナル素材は不可とする。
サンプルの返却は致しませんのでご了承下さい

❷応募作品の内容と創作活動に関する簡単な経歴を800字以内にまとめたもの。

■応募資格

本格的に映画と関わっていこうとする意欲のある者で、映画祭に参加できる者。

■締切日

1998年11月9日(月) ※必着

選考通過した作品は年内に出品者に連絡いたします。

■問い合わせ先＆送付先

〒101-0051東京都千代田区神田神保町1-24
ハクバビル4階　株式会社P2内

ゆうばり国際映画祭東京事務局
TEL 03-3219-3231

ゆうばり追想110年・市制施行55周年記念事業

る超メガ・ヒット2大作!

かわいい! おかしい! 爆笑につぐ爆笑!

世界が笑いの渦に巻き込まれる

エディ・マーフィ ドクター・ドリトル

世界で一人、不思議な能力で幸せを運ぶ男。

EDDIE MURPHY DR. DOLITTLE

20世紀フォックス映画提供 デイビス・エンターテインメント・カンパニー/ジョセフ・M・シンガー・エンターテインメントプロダクション ベティ・トーマスフィルム
エディ・マーフィー"ドクター・ドリトル"オシー・デイビス オリバー・プラット 音楽リチャード・ギブス スーパーバイザー現実効果ジョン・ファーハット 音楽ピーター・テッシュナー 撮影ラッセル・ボイドASC
原作ヒュー・ロフティング 脚本ナット・モールディンAND ラリー・レビン 製作ジョン・デイビス、ジョセフ・M・シンガー、デイビッド・T・フレンドリー
監督ベティ・トーマス
サントラ盤:東イーストウエスト・ジャパン www.foxjapan.com
ノベライゼーション:ポプラ社刊

'99年 正月、東京日劇プラザ 大阪三番街シネマ 他全国ロードショー

最高の恋のお相手は、意外な人

ジェニファー・アニストン ポール・ラッド

私の愛情の対象

製作総指揮ニコラス・ハイトナー 脚本ウェンディー・ワッサースティン
製作ローレンス・マーク 監督ニコラス・ハイトナー

Digitized by Google

全世界の話題を独占す

謎につつまれた、もう一つの未来。

想像を絶する恐怖に、世界が震撼

Xファイル™
ザ・ムービー

真実は映画館で明らかになる

'99年 正月、東京日比谷映画 大阪梅田スカラ座 他全国ロードショー

愛より甘いもの、それは復讐の快感。

ジェシカ・ラング　エリザベス・シュー　ボブ・ホスキンス

従妹(いとこ)ベット

甘美なる復讐の物語

製作サラ・ラドクリフ　原作オノレ・ド・バルザック　脚本リン・シーファート　スーザン・タール　監督デス・マカナフ

Digitized by Google

メイク　木暮モエ／スタイリスト　小柳真樹

原田知世

いい年のとり方をして、味わいみたいなものを加えたい

インタビュアー　野村正昭
撮影　吉岡誠

「時をかける少女」（83年）での鮮烈な映画デビュー以来、「早春物語」（85年）「私をスキーに連れてって」（87年）「満月MR. MOONLIGHT」（91年）、そして昨年の「傷だらけの天使」（97年）まで、主要作品だけを挙げても、原田さんと映画との蜜月の季節は、僕ら観客にも大いなる幸福な記憶だったが、最新作「落下する夕方」で彼女の端正な佇いは、さらに研ぎ澄まされてきたように見える。手許の資料には自ら「この作品は女優として、第二期の代表作」と語り、特に思い入れがあると記されている。脚本を読んだ段階で「これはやってみたいと思った」というあたりから、お話を聞いてみた。「女性の失恋というものをテーマにして、こんなに丁寧に新鮮に、その心模様を描

Digitized by Google

いたものって、今までになかったように思ったし、私はとりあえずやったことがなかったので是非やってみたかったんです。説明的なセリフがないにも拘らず、感情の流れを掴みやすい役だったし、最初からリカさんが心に棲みついたこともあって、撮影現場でも役作りを特にしなくても、その場になると自然にできるというか、いい意味であまり苦労がなかった作品です」

「毎日楽しくて、ヘンな緊張感も、萎縮してしまうムードも全然なく、今日はどんな芝居になるのかなあと、ワクワクする現場でした」と原田さんは、思い出すだけでも心ときめく現場だったと話してくれた。一言で言えば「すごく愛情のある撮影現場だった」。スタッフに女性が多く、柔らかい雰囲気だったことが作用したのかもしれないが「合津監督がすごく一所懸命で、周りの人も、合津さんのために何かできないかなあと思っちゃう、そういう人間的な魅力に溢れた人だったのでみんな一致団結していたんですよ。最初から最後まで監督が一番楽しそうで、いきいきしていて、今もそう（笑）。たぶん一番疲れているはずなのに、とても元気で、すごいなと思いますよ」。

感情の流れという点から、撮影は殆ど順撮りされた。「監督が演じる側の気持ちを考えて順撮りして下さったので、そのあたりもすごく影響していると思います。想像しながらでも芝居はできますが、これは大きな事件が起こったりする話でもないし、少しずつ変化していく日々を描いているので、それが前後すると難しかったかもしれない」

リカと一緒に暮らして4年目の健吾（渡部篤郎）が突然別れを切り出し、彼がその魅力の虜になった華子（菅野美穂）は何とリカの部屋を訪れ、そのまま住みついてしまう。渡部さんとはNHKのドラマ（「琉球の風」）で共演以来、久々の再会で役柄を話しあったりもしたが、菅野さんとは意識して距離を置くようにした。

「健吾や華子がどんな風にこのセリフを言うんだろうか、緊張感のある場面もあったりはしますが、リカはわりとそれを受けとめるタイプなので、本当にお互いの存在というか芝居の仕方が大事でした。洋画では全く異なるカラーの人が集まって、その人たちが微妙なバランスを保って、全員の関係が描かれる映画ってあるじゃないですか。そういう映画っていいなと思っていて、今回はまさにそういう形でしたしね」。約一カ月の撮影期間だったが「私が出てないカットがないぐらい、ずっといて（笑）。普通の映画だと実景撮影でスタッフのみでも、今回は大体私がこう小さく写ってる（笑）。最初から最後までずっと参加できて、スタッフの人とも、ずっと一緒にいることができて楽しかったですね。思い出に残る映画です」。

撮影時期でいえば、この作品は彼女にとって20代最後の主演作になった。「自分自身の気分が高まって、精神的にもコンディションが整ってきた時に、この作品に出会えて本当に良かった。どんなにいい作品でも、その時の自分の状態で、より良くなったり、そうでなかったりとかすると思いますが、そういう意味では昨年これをやれて良かったし、なかなかここまでピタッとくるものは、そんなにないと思う。又いつか、こういう作品に出会えたらいいな。やっぱり自分自身も年齢を重ねて変化していきますし、その時にしかできない役がきっとあると思うんですね。例えば5年前にこの作品に出会っても、こういう演じ方はできなかったし、今後は又ちがってくるでしょうし、それでいいんじゃないかと思う。その時のベストの形でずっとやっていければいいし」。

「落下する夕方」11月7日よりシネスイッチ銀座にてロードショー

音楽活動で自分と向きあう時間が、人間性や仕事にいい刺激を与えた

近年の原田さんはアーティストとしても作詞を手がけ、アルバムを発表し、コンサート活動にも力を注ぐ。98年8月にはアルバム「BLUE ORANGE」を発表。10月15日から30日にかけて〈原田知世'98 LIVE BLUE ORANGE〉と題し、全国8カ所でライブを行う。原田さんにとって、歌とお芝居は、どんなバランスで成立しているのだろうか。「大体年に1枚、アルバムを出していますが、音楽は自分で詞も書いて、この時期にライブをしてと、計画を立てていける。だから私が『落下する夕方』に出て、第二期だなと思えるようになったのも、音楽を通して、自分自身が思う自分像が、しっかり見えてきて、そこから新たな一歩が踏み出せた気がするからなんですね。これが音楽をやらずに、お芝居だけだと、もっとちがう表現の仕方になったかもしれないし、やはり音楽で、自分と向きあう時間がすごく増えたことで、人間的にも仕事の上でも、いい刺激になって、今の自分につながっているような気がします。何かひとつ自分で作りあげたという小さな自信というか、表現をすることの楽しみをそこで得て、いい意味で恐がらずに、ああしよう、こうしようと、どんどん前向きになれる自分に変化してきたと思うんです」。

「歌も芝居もそうですが、うまいというより味わいみたいなものを感じさせてくれる人が自分は好きだったり、自分もそうなりたかったり、そういう方向が見えてきたんです。今までは、もっとうまくなるのには、どうしたらいいのかと、枝葉のことばかり考えていたのが、そうではなくて、いい年のとり方をしつつ、味わいみたいなものが加わってきたらいいなあと。改めて歌も映画も難しいなあ、でも面白いなあと思います」と語る原田さんには静かな自信が漲り、聞き手であるこちらも励まされる思いがした。第二期のさらなる展開を期待しつつ、ひとまず筆を措きます。

Digitized by Google

1967年長崎市生まれ。82年角川映画大型新人募集で特別賞受賞。同年TV版「セーラー服と機関銃」でデビュー。83年「時をかける少女」で映画デビューを飾り、自身の歌う主題歌と共に大ヒットを記録。「天国にいちばん近い島」(84)「早春物語」(85)「黒いドレスの女」(87)で、薬師丸ひろ子、渡辺典子らと共に角川映画の黄金期を築く。87年に独立。以後、大ヒット作「私をスキーに連れてって」他、「彼女が水着にきがえたら」(89)「満月 MR.MOONLIGHT」(91)「水の旅人 侍KIDS」(93)「あした」(95)「傷だらけの天使」(97)等に出演。現在、音楽活動にも力を入れており、10月15日から最新アルバム「BLUE ORANGE」と同タイトルのライブツアーを全国8カ所で行う。

Digitized by Google

ISABEL MARANT FIBO/¥20,000
FIBO TEL03 3406-8289

INTERVIEW

ロバート・レッドフォード

真のコミュニケーションが困難な現代社会では、人々は〝癒し〟を求めている

84年7月に「ナチュラル」の宣伝のため、87年4月に〝サンダンス〟のPRのため来日して以来、11年ぶり、3度目の来日を果たしたロバート・レッドフォード。記者会見開始予定時刻を40分以上過ぎ（ブルース・ウィリスの45分遅れに次ぐ記録）ても、400人の取材陣から何のブーイングも出なかったのは（サンドイッチ&コーヒーがサーヴされたからというよりは）やはり〝スターのなかのスター〟の証明と理解しておこう。で、いざ御登場のレッドフォード様は、カメラのフラッシュ・シャワーを浴びてさらに輝く金髪と〝インテリめがね〟に縁取られた端正なカンバセがグッと迫りくるスターのオーラと貫禄で、監督と主演を初めて兼ねた（そして製作も）作品「モンタナの風に抱かれて」について&自らについて淡々と、しかし気合を入れて語るのであった。

「モンタナの風に抱かれて」は、〝不倫〟と〝癒し〟という昨今の2大トレンドを合体させたストーリー展開が鮮やかであるが。

「すべての愛は基本的にはgood thingだと思う。不倫に関しては、各々の文化によって認識は異なるが、共通していえることは、以前よりイージーに表面化されるようになった。が、私は〝家族〟を犠牲にしない結末を主人公に選択させ、映画作家として、他の映画とは違う角度からの〝不倫愛〟を描いた」と、威厳と風格をもってのたまう。

「テクノロジーの発達が著しい現代社会においては、その副作用も大きく、精神を病んだり心の重圧に苦しんだりする人が多い。コンピュータ網が整備され、携帯電話が普及してもかえって、人間同士の真のコミュニケーションは困難になってきている。そこで、人々は〝癒し〟を求める。『モンタナの風に抱かれて』においては、テクノロジー社会の東部からやって来た〝馬〟と女性を、かろうじて残っている西部の〝大自然〟と、そこに生きている男が、癒すのです」

と――エコロジストであり、芸術に造詣が深く、女心をよく理解し、しかし〝自分〟を見失わない主人公トム・ブッカーとロバート・レッドフォードが渾然一体となったお答え。

「私自身はhorse whispererのレヴェルには達していない。が、馬の〝心理〟に踏み込んで馬を描いた初めて映画だと自負している」

還暦を過ぎてなお、引き締まった腰、ジーンズの似合う体型を維持している秘訣は「心配事が多いから（笑）」とのこと。だが、俳優としても監督としても、サンダンス・インスティテュート&サンダンス映画祭の主宰者としても、大成功を収めたビッグ・スターにどんな心配事が？

「年をとること（笑）。と、『モンタナの風に抱かれて』でも、トム・ブッカーが少女の質問に答えて言っています。が、その後にすぐ――いやいや、年を取るのは当たり前。恐いことじゃない。恐いのは〝社会に対して機能しない、人生に目的を持たない人間になってしまうこと――と言う。私も、同じ気持ちです」とのこと。

最後に「私の成功は〝意志〟と〝情熱〟の賜物。自分の手で働いて得たもの。ですが、サンダンスに関しては、日本のサポーターの皆様のおかげと、深く感謝しています」と述べる姿は〝大統領演説〟のごとくでありました。

［吉田真由美］

「モンタナの風に抱かれて」©Touchstone Pictures

撮影　吉田誠

HOT SHOTS
Digitized by Google

Digitized by Google

撮影／吉岡誠

INTERVIEW

クロエ・セヴィニー

見たこともない映像詩「Gummo／ガンモ」に出演

CHROE SEVIGNY／75年生まれ。95年にデビューし、モデルとしても活躍。現在『PALMETTO』を撮影中。

「『Gummo／ガンモ』は若い人間による若い人間のための映画。ほかでは観ることのないアメリカが描かれている」。そう語るのは、95年に「ＫＩＤＳ」で衝撃的デビューを果たし、今も少女の雰囲気を残すクロエ・セヴィニー。同じく「ＫＩＤＳ」のシナリオを僅か19歳で書き上げたハーモニー・コリンの初監督作は、何かが歪んでしまった中西部郊外の町とティーンエイジャーを、ドキュメントともドラマともつかぬ赤裸々なイメージで綴り、新世代の到来を確信させる。「わたし自身はコネチカット出身だけど、映画に描かれる郊外がいかに退屈かは知っています。はじめハーモニーは、わたしが演じた白髪の少女を素人から探そうとしたけれど、実は脚本を読んだときからその役に魅かれていたの。彼（女）らの持つ虚無感は、ティーンエイジャーに多いものだと思う。わたし自身は将来にすごく希望を持っているけれど、15、6歳の時はあんなだったかもしれない」

本作では出演以外に衣装デザインも務めた。「とにかくリアルに見せること、おしゃれっぽくならないようにと気を使いました。ウサギ少年（写真下）の耳も自作で、パターンを起こさずに作ったら、パーフェクトな出来ばえ。でも１個しかないのに、殴られたり雨にうたれて汚れるシーンばかりで、最後は釣り糸でサポートしなければならないほどボロボロでした（笑）。ハーモニーの中でウサギ少年は、特別に神格化された存在なんです」

これまでインディペンデントにこだわってきたように感じるクロエだが、本人がいちばん気にするのは、「監督がどんな映画を撮ってきた」か。「映画は監督が負う部分が大きい。みんなを引っ張って行く力や忍耐力、情熱などが俳優どうしの関係にまで影響を与えますから」。公私においてパートナーであるハーモニー・コリンの監督ぶりを尋ねると、「秘密（笑）。でも、とても演じやすかったわ」。

「Gummo／ガンモ」10月24日よりシネマライズにてロードショー

Digitized by Google

新作

「梟の城」

忍者を絵空事ではなく描く

作家の故司馬遼太郎さんの直木賞受賞作「梟の城」が、来年、監督生活40周年を迎える篠田正浩監督によって映画化されることが決定。その製作発表が9月24日に行われ、篠田監督と劇中の衣裳で登場した主演の中井貴一、鶴田真由、葉月里緒菜、上川隆也が意気込みを語った。

「梟の城」は、絢爛豪華な安土桃山時代を背景に、太閤・豊臣秀吉暗殺を企てる伊賀忍者・葛籠重蔵と彼を取り巻く3人の男女の生きざまを描いた作品。

「忍者を絵空事ではなく描く」という監督は、「今まで多くの忍者映画を見てきたけれど、バック転をやったり、目立つ黒装束で走り回ったりというところに疑問を持っていました。ですから立ち回りも今までの時代劇、忍者映画の型通りのものを一切はずそうということで、フランス外国人部隊にいた経験を持つ方をアドバイザーに迎え、彼と一緒に基本的なところから動きを決めていこうと思ってます」と、これまでにない斬新な忍者像を作り上げることを明かした。

そして、主人公の重蔵を演じる中井貴一について、「この映画を忍者の陰惨な物語という形ではなく、忍者の位置から人間として再生できる喜び、そういう明るさ・輝きというものを持ち込みたいと思っていました。ですからこの映画を始めるときに『ビルマの竪琴』を演じたときの中井さんの人間としての美しい存在をすぐに思い出して、中井さんでやりたいと決めました」と語った。これを受けた中井も「ハリウッドでも忍者映画は数多くありますが、日本の文化の中で育ってきた忍者像をきっちりと描いていきたい。トレーニングはずっとやっていますが、走るシーンがとても多いので、これからちょっと走り込もうかなと思っています」と意欲満々。また、元忍者・くの一に扮する上川、鶴田、葉月もすでにトレーニングを開始しており、準備は万全だそうだ。

なお、豊臣秀吉には監督が「彼の姿、顔は秀吉そのまま」と絶賛する、ハリウッドで活躍中のマコ・イマワツが扮する。最近では「中国の鳥人」「共犯者」に次ぐ日本映画出演ということで、こちらの方もとても楽しみだ。来秋、全国東宝系にて公開予定。 [川村章子]

(左より) 葉月里緒菜、中井貴一、鶴田真由、上川隆也

Digitized by Google

INTEVIEW

千原浩史

「ポルノスター」、ついに公開！

「岸和田少年愚連隊 血煙り純情篇」（97）で映画主演デビュー

撮影／吉岡誠

〝日本映画界のアンファン・テリブル豊田利晃が描く、ニューエイジのための闘争劇〟。突如渋谷に現れた謎の男や大人になった元チーマー、他渋谷に生きる人々の〝理由のわからない苛立ち〟を描く「ポルノスター」のプレス資料には、そう書かれている。無表情にヤクザを殺す謎の男・荒野には、若手コメディアン・千原兄弟のJr.こと千原浩史が演じる。向き合ってみると、映画と顔の印象がかなり異なる。「顔が違うのは演技です。血糊は使いましたけど、メイクしたわけじゃありませんから。お笑い芸人としては、武器にもならない最低のボディです。それで、30点の笑いを80点にする奴もおるわけですから」と言うが、その表情は雄弁にものを語っており、俳優としてはむしろ有利。豊田監督も、まずはその顔に惚れたらしい。冒頭から、荒野は不敵な顔で現れる。「最初に貰った脚本は、大阪でヤクザを殺す所から始まってた。だから、その後、深夜バスで来よったんやわと思って歩いてました。友達ですから、豊田がどんなことを面白がるか、どういうことに興味を持つか、他の役者さんよりはわかっていた。普通に喋ってても、ああこいつ今フレーム切って見てるな、と思うこともありますから」

「ポルノスター」テアトル新宿にてレイトロードショー中、11月7日よりテアトル梅田にてロードショー

「ポルノスター」、非常に意味深なタイトルである。監督曰く「猥雑な中の救世主」を意味するのだそう。「人それぞれ、自分を守る武器を持ってる。僕やったら笑いやし、インタビューアーの方だったら文字やし。この映画のナイフは、比喩的にそういう意味の武器として使われている。坂があって、坂の上にはどっしりした奴らが、下からは少年ヤクザが来てる。その狭間の荒野や鬼丸は宙ぶらりんな世代。僕らでいうと大御所のお笑い芸人がいてて、どんどん若手が入って来てる状況。彼の苛立ちをそんな自分と置き換えて演じてました。豊田がどう思ってたかはわからないですけどね」

Digitized by Google

FESTIVAL

第3回釜山国際映画祭

アジア最大の盛り上がりをみせるも、幾つかの問題点を残す

9月24日から10月1日までの8日間、韓国第2の都市・釜山で行われた第3回釜山国際映画祭。今年は韓国経済の悪化で開催が危ぶまれたが、去年よりも規模が拡大し、41ケ国から211本の作品が上映され、観客数も21万5千人と過去最大の動員となり成功裡に終わった。

金大中韓国大統領の訪日を契機に日本映画の解禁が秒読み段階と言われているが、釜山では当初から日本映画が大きな人気。今年も「四月物語」（観客賞受賞）、「バレット・バレエ」、「落下する夕方」、「愚か者 傷だらけの天使」、「のど自慢」、「カンゾー先生」（クロージング上映）などの新作が招待上映され、とりわけ若い世代に熱狂的に歓迎された。5千席収容の野外特設劇場で上映された「のど自慢」の上映では映写のトラブルで1時間ほど遅れた間、舞台挨拶に臨んでいた主演の大友康平、室井滋らが日本語でのど自慢大会を行うというアクシデントも起きたが、これがかえって評判になった。

その他、「生きない」、「楽園」、「ワンダフルライフ」がコンペ作品として上映され、「生きない」は国際批評家連盟賞を受賞。さらにPPP（プサン・プロモーション・プラン）というアジア映画作家の新しい企画を応援するプロジェクトでも、石井聰亙などの企画が注目を集めるなど、日本映画はこの映画祭の大きな主役であった。

インディペンデント作品や国内の短編、ドキュメンタリーにバランス良く目配りすることでも評価できる映画祭だが、今回とりわけ目立ったのは映写状態のひどさ。スクリーンサイズはデタラメだし、音の再現もひどかった。さらには、通常右端に打たれているフィルム交換のためのパチ打ちを、何と勝手にど真ん中に堂々と入れてしまっている。国際映画祭を標榜する以上、このことは早急に課題としなければならない。

上段右＝クロージング・セレモニーに集まったゲストたち　二段目＝クロージング上映前に挨拶する今村昌平監督と麻生久美子　三段目右＝「愚か者 傷だらけの天使」上映後、阪本順治監督を迎えてのティーチ・インで盛り上がる観客たち　三段目左＝受賞記者会見にて。右端が清水浩監督、その左がグランプリのジャ・シャンク監督　下段＝「のど自慢」の五千人野外上映

Digitized by Google

TOPIC

『チャカ～LONELY HITMAN～』

森岡利行脚本・渡辺武監督による大人の純愛物語

10月24日より新宿ジョイシネマにてレイトショー公開（配給＝ビジョンスギモト）

人の命を奪うことを生業としてきたその男は〝チャカ〟と呼ばれた。「殺し合いのために生まれてきた」と噂され、恐れられているヤクザが、ある日出会った一人の女性。彼女は男が今まで知っていたどの女性とも違っていた……。原作は実在の人物をモデルに山之内幸夫が書き下ろした同名小説。森岡利行脚本・渡辺武監督作品「チャカ」は、極道の世界を背景にした大人の純愛物語である。主人公の島修を演じるのは竹内力、その相手役・順子に吉村美紀。また島と順子とは対照的に描かれる、もう一組の男女に木下ほうかと相生恵美。

5月13日、撮影現場を訪ねた。都内八丁堀の某ビル屋上にあるペントハウスを島と順子の部屋に見立て、撮影されているのはシーン98。島は順子と知り合い、かつて経験したことのなかった穏やかな日々を送る。しかし慕っていた兄貴分を殺されたことで再び拳銃を手にする。止める順子。二人が感情と体をぶつけ合う重要なシーンだ。「順子は一生懸命で純粋。最初に脚本を読んだ時〝今時、こんな子いるのかな〟と思いました。それに自分とは全然違うキャラクターなので多少戸惑いました。渡辺監督は〝こういう風にやってみて〟と台詞の言い方や動作を示して説明して下さいます。最初から信頼できたので、不安はありませんでした」と語る吉村美紀。竹内力は「単なるヤクザ物ではないところに魅き付けられました。島は孤独な生い立ちに故に、愛に飢えていた。だからこそ人のために生きられる、自分を必要としてくれる人のために殺しができるんです。そういう生き方しかできなかった男が、ある女性に出会ったことで揺れ動く。そして人生最後の時に変化していくんです」と語る。

また渡辺監督は言う。

「日常を描くことは難しいですね。この部屋は元は廃屋だった。そこに島は一人で暮らしていたんですが、女性がやってくることによって生活観が生じます。僕は荒唐無稽の方が得意、リアルなのは大変ですね（笑）。それと一人称だけの映画にはしたくなかった。男はどちらもヤクザ。一緒にいる女性を対比することで、男女2組を対照的に見せたかった」

力強い演出で良質のハードボイルド・アクションを描き続けていた俊英が、本作では〝男と女の情感〟を見事に描き新境地を開いている。「斎藤芳子」

Digitized by Google

新作

「リング2」製作発表

（左より）西野文男（東宝）、鈴木光司（原作者）、佐藤仁美、中谷美紀、中田秀夫（監督）、角川歴彦（プロデューサー）、原正人（プロデューサー）

今年1月に公開され150万人を動員した連作ホラー映画「リング」「らせん」の続編「リング2」の製作がスタート。原作者、監督、出演者らが出席して会見が行われた。「リング」「らせん」は、死の呪いのかかったビデオテープをめぐって展開する恐怖サスペンスで、新作でビデオは新たな謎を生みさらなる恐怖へと引き込んでいくという。前作に続いてメガホンをとる中田秀夫監督の抱負は「第1作はとにかく怖いと思わせる映画を目指したが、今回は人間ドラマにも力を入れて、グッときて泣けるところもあるホラー映画に」。前作で謎を生む女を演じた中谷美紀が謎を解くヒロインを演じ、他に佐藤仁美、深田恭子が出演。99年1月23日から長崎俊一監督「死国」と全国東宝系で公開。［八森稔］

TOPIC

45年の歴史に幕 並木座、ついに閉館

小津安二郎、溝口健二、黒澤明、成瀬巳喜男らをはじめ、木下恵介、豊田四郎、川島雄三ら巨匠・名匠の作品、あるいは「推理映画」「戦前・戦中映画」「キネ旬ベスト・テンから選ぶ傑作」などの個性的な特集を組み、日本映画の名作を上映し続けた名画座の老舗・銀座並木座が、9月22日「おかあさん」「晩菊」の上映をもって45年の歴史に幕を下ろした。最後の番組となった成瀬巳喜男特集は、もともと黒澤明や小津安二郎と並んで人気番組ではあったが、「並木座の最期」を見とどけようとする映画ファンで連日劇場前には長蛇の列ができ、中にはカメラを持った映画ファンの姿も見られた。多くの日本映画ファンを育てた当館の閉館を惜しむ声はいまだに絶えない。

最後の番組は「名匠 成瀬巳喜男の世界」14本の成瀬作品が上映された

Digitized by Google

巻頭特集

踊る大捜査線 THE MOVIE

湾岸署史上最悪の3日間！ 青島と湾岸署の面々の前に立ちはだかる巨大な事件とは何か？ 命を賭けた青島――捜査の果てに彼が見たものは！

テレビと映画、ふたつのメディアにまたがる空前のビッグプロジェクト「踊る大捜査線」の集大成が今、全面解決へ向けて動きだす。

ら致

逆探知

警視庁
極秘通達

尚、本件は
極秘捜査の為、
外部との接触を
一切許可しない

警視庁
副総監

湾岸署管内の
Y131号事件を
凶悪事件犯に指定

身代金

誘拐

脅迫

報道協定締結後、
全国に
広域緊急配備を発令

Digitized by Google

権力

要求

同級生

戒名

猟奇

あの「踊る大捜査線」が、映画になって帰ってくる！　97年1月からフジテレビ系で放送され好評を博した連続ドラマ「踊る大捜査線」。コミカルな描写とハードな物語が両立した作品内容と、従来の刑事ドラマには見られなかった警察機構のリアルな描写が高い評価を集め、近年にない盛り上がりを見せている人気ドラマである。再放送、ビデオ・リリースを経てさらに一般への認知度を高めた「踊る」は、97年年末の「歳末特別警戒スペシャル」、98年6月の「番外編・湾岸署婦警物語／初夏の交通安全スペシャル」、同年10月の「秋の犯罪撲滅スペシャル」を受けて、いよいよ劇場の大スクリーンに登場する。題して「踊る大捜査線 THE MOVIE」。映画でしか語れない湾岸署史上最悪の大事件とは何なのか、青島をはじめとする湾岸署の面々が迎える結末はどんなものになるのか。ファンの熱狂的な支持を集め続けてきた「踊る大捜査線」の集大成が、今まさに動き出す。

事件は湾岸署管内の川に浮かんだひとつの水死体から幕を開けた。初めは事故か自殺だと思われていたこの死体は、やがて湾岸署を震撼させる猟奇殺人事件へと発展していく。しかし、そんな騒動すらもこれから湾岸署を襲う最悪の3日間の、ほんのプロローグにすぎなかった……。同じころ、本庁と警察庁もまた、かつて遭遇したこともない事態に直面し、混乱を極めていた。前代未聞の誘拐事件発生。ふたつの事件が重なり合う時、青島が、室井が、和久が――、湾岸署が本当に直面する最悪の事態が、ついにその姿を現す――。

主人公・青島俊作にはおなじみ織田裕二がふんするほか、テレビ・シリーズのレギュラー陣が総出演。さらに小泉今日子をはじめとする豪華ゲストも顔を揃え、よりパワーアップした「踊る」ワールドが展開される。監督・脚本はテレビ・シリーズから一貫して「踊る」を支える、本広克行と君塚良一の名コンビ。映画とテレビをそれぞれ代表する一流のスタッフ同士がガッチリと手を組んで、これを支える。この秋最大の話題作。

いよいよ最終局面、すべてのケリは、ここでつく――。

レインボーブリッジ

仮想殺人

窃盗

封鎖

怨恨

編集　富田利一・進藤良彦　レイアウト　富田利一

Digitized by Google

「事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ！」

秘匿潜入

対策本部

栄養

「青島！確保だ！」

看護婦

初動措置

Digitized by Google

●1998年・日本・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビーSR・1時間59分（予定）
●監督／本広克行　脚本／君塚良一　プロデュース／亀山千広　プロデューサー／臼井裕詞、東海林秀文、堀部徹、安藤親広　協力プロデューサー／石原隆、高井一郎　ラインプロデューサー／羽田文彦　撮影／藤石修　照明／石丸隆一　録音／芦原邦雄　美術プロデューサー／梅田正則　美術デザイナー／　木陽次　編集／松尾浩　音楽／松本晃彦　助監督／羽住英一郎　主題歌／「Love Somebody－CINEMA Version」織田裕二
【CAST】織田裕二、柳葉敏郎、深津絵里、水野美紀、小野武彦、佐戸井けん太、ユースケ サンタマリア、北村総一朗、浜田晃、斉藤暁、小林すすむ、遠山俊也、甲本雅裕、星野有香、星川なぎね、児玉多恵子、山崎一、温水洋一、竹沢一馬、大杉漣、北山雅康、正名僕蔵、小泉今日子、津嘉山正種、隆大介、神山繁、覚利夫、いかりや長介
●製作／フジテレビジョン　製作協力／ROBOT　●配給／東宝
●10月31日より全国東宝系ほかにてロードショー

霞ケ関

報道協定

「青島くん、駄目ー！」

総理官邸

接触

ネット

追尾

さよなら

Digitized by Google

素顔の『踊る大捜査線』「THE MOVIE」撮影現場スナップ集

Photo & Text by　進藤良彦

「踊る大捜査線 THE MOVIE」の撮影は、まだ肌寒さが残っていた小雨の6月23日に始まり、梅雨の長雨と8月の猛暑をくぐり抜けて、秋の気配が深まった9月8日まで続いた。ある時は東宝撮影所、ある時は横浜のショッピングモール、またある時は練馬の巨大団地と、都内とその近郊をあちこち駆け回ったロケ隊の苦闘ぶりは、決して前号までお届けした僕の撮影日誌などでは語り尽くせないほどである。その間、のべ撮影日数は50日を超え、僕はそのうちのトータル30日の撮影現場にお邪魔した。助監督の経験があることで少しは現場のことも解っているつもりだったが、やはりスタッフ・キャストのみなさんにはいろいろなご迷惑もおかけしたことと思う。こちらのいろいろなお願いにもその都度ご協力いただき、僕のぶしつけな質問にもイヤな顔もせずに答えて下さったみなさんの暖かい気持ちには感謝いたします。撮影は終了し、スタッフ・キャストも再びバラバラになっていったが、この夏の全てがこの作品には凝縮されている。それは僕にとっても他の何にも代えがたい想い出となった。「踊る大捜査線」のスタッフ・キャストのみなさま、本当にありがとうございました。

Digitized by Google

踊る大捜査線 THE MOVIE

作品論

あの素晴らしいデカをもう一度

テレビシリーズからスペシャル、そして映画へ——湾岸署サーガの魅力を探る

樋口尚文

「都知事と同じ名前の青島です」とライトな笑顔で自己紹介を怠らない青島俊作（織田裕二）をはじめて見たとき、なぜこの巡査部長はコンピュータ・メーカーの営業マン出身だなんてこみ入った設定になっているのだろう、と思った。ところがどっこい、である。おそらく、この『踊る大捜査線』に突っ込み上手の意地悪な視聴者がすんなり入っていけるのは、青島が脱サラした刑事という珍妙な設定になっているからなのだ。

というのも、もしもただの刑事ばかりが登場するのでは世界が閉じてしまって、それこそ『七人の刑事』や『太陽にほえろ！』のように正調のカッコいい刑事にするか、『あぶない刑事』のように思いきり嘘臭くギャグめいた刑事にするか、そのあたりの料理しかできない。しかし、そういうそれぞれの路線でやりきってしまったシリーズをすでに見てしまっている視聴者にとっては、いま真正面から『七人の刑事』のようなことをされてもカッコよすぎて共感がないし、かといって『あぶない刑事』のようにあらかじめ茶化すというよりは、もう少しシリアスでカッコいいものを見てみたい、という心境なのではなかろうか。

そんな難儀な視聴者のドラマに対する要求を、実はこの脱サラ刑事自身が肩代わりしてくれているのだ。なんといっても青島は、取り調べの練習中に「カツ丼、食べるか？」と犯人役の刑事に尋ねて「刑事ドラマの見すぎだ」と呆れられる人間だ。青島は、できればカッコいい刑事ものを見たいと願っている視聴者同様、そんな画に描いたようなテレビの刑事ものの主人公よろしく「いつもどきどき」と正義感が沸騰するような捜査をしたいと願っているのだ。ところが、そんな希望を抱いて優秀な営業マンから刑事に転身した彼を待っていたのは、なんともいじましく情けない組織の上下関係に束縛された警察の実態なのだった。言わば、脱サラした青島は刑事でありながら刑事を客観的に見られる視点の持ち主として、そうやすやすとあのカッコいい刑事ものをもう一度、というわけにはいかない気分を視聴者と共有する。だからこそ、視聴者は青島が信じられるのであって、青島がそういう警察のちまちました現実にめげず、けなげにカッコいい刑事もののヒーローを目指そうとするさまを応援したくなるのである。青島はシニカルな視聴者が無理なく入っていける一拍おいたカッコよさに生きているのであって、当初とまどった脱サラの設定こそがその根拠なのだった。

さて、これが最も根っこのところで視聴者が『踊る大捜査線』に心を許してしまう理由だと思うのだが、表現の上での魅力はなんといっても設定の寄りから引きに至る細かさだろう。君塚良一の脚本も、本広克行と澤田鎌作の演出も、ともにストーリーから小道具にまでシリーズを通した統一感や関係性を出すべく凝りまくっていて、ひたひたと（見続けた人ほど愉しめる）『踊る大捜査線』サーガが築かれていくのであった。

Digitized by Google

小さな挿話の積み重ねによる キャラクター描写のうまさ

例えば物語でいえば、その回ごとの読み切り的なストーリーが語られてゆく一方、『ER』よろしく展開の随所で小出しにされるバックストーリーがあって、実はこの小さな挿話の積み重ねがけっこう根深い人物それぞれのキャラクターにかかわっていたりするのだ。代表的な例は、和久平八郎（いかりや長介）が青島にささやく「正しいことをしたければえらくなれ」という台詞にまつわるエピソード。はじめ、青島はこの台詞が理解できない。しかし、警察内部のタテ社会の実態にふれるに連れて和久の真意を理解した青島は、自分が希望を託す捜査一課の室井慎次管理官（柳葉敏郎）のペナルティを一身に引き受けて「室井さんは上にいてください」と爽やかに笑う。青島は、自分たちノンキャリアが「現場で正しいことができる」ためには、室井のように信頼できるキャリアには「上に行ってえらくなって」組織を変えてもらわなければ困るわけで、その実現に向けて自分のような「下が踏ん張る」必要を感じているのだった。

実際、和久のこのひとことは、シリーズを通したキャリアとノンキャリアをめぐる対立や共感の物語のキーワードなのだが、なんとこれは映画版まで引っ張って、警視庁の副総官と和久の若かりし時代のうるわしい逸話にまでそのいわれを遡ることになる。

和久といえば、もうひとつの印象的なエピソードは、彼がかつて組んでいた若い警官を殺した犯人を追い続けていることで、署内でも「どうして和久さんはいつも調べものしてるんだろう?」などとささやかれている。この警官殺しへの憎悪から、自分を爆弾付き健康チェアの罠に陥れた犯人・山部（伊藤俊人）には、てこでも譲らずにどやしつける。そんな和久が事件未解決のまま、一週間後に定年を控える「セブン」のモーガン・フリーマン的情況に立ったとき、意外にもくだんの爆弾犯・山部の情報で犯人逮捕にこぎつける（こういったちょっとした人物の活かし方がまた気がきいている）。

そしてもうひとり、りりしい巡査部長の恩田すみれ（深津絵里）にとりついているのは、魔の火曜日の記憶だ。彼女はひったくりに大きな傷を負わされ、その後も毎週火曜の夜に犯人につきまとわれている。この女性への暴力に対する怒りゆえに、女子中学生のひったくり事件をめぐる調書もみ消しには猛烈に反発し、留置場に立てこもったりする。彼女の憤りは、当のストーカー的犯人・野口（伊集院光）の逮捕によって解消されたのかと思いきや、なんと98年の『秋の犯罪撲滅運動スペシャル』でも男に虐待された傷あとだらけの女・相良純子（大塚寧々）に出会うことで再燃し、それが警察内での内偵と確執という苦いドラマにまで発展してしまうことになる。

こうして全11話とスペシャル版と映画をまたいで語られる、人物の個性にかかわるバックストーリーが『踊る大捜査線』の大いなる魅力の源泉なのである。そして視聴者は、そこで明かされる和久やすみれの私的な義憤やこだわりにふれて、そのためにどうしても彼らが警察の組織の枠をはみ出してしまうさまに共感してしまうのである。

こうした組織のなかで正義感から人間味が突出する瞬間は、彼らを管理する側についても描かれていて、とりわけ室井慎次は事あるごとに警察上層部の対応に憤然として「もう上の者には何も言わせない」とキャリアらしくない熱血漢ぶりを発揮して青島に肩入れす

▲テレビシリーズ第1話

▼テレビシリーズ第2話

▲テレビシリーズ第5話

▼テレビシリーズ第6話

Digitized by Google

る余り、査問委員会にかけられたりもする。映画版の室井は警視庁刑事局の参事官になっているが、ここでも東北大出身ゆえに東大閥のキャリアから皮肉られたり（なんという……）、体面にこだわる本庁を無視して独断で所轄署の青島に犯人確保を命じたり、とキャリアなりの不器用さをあいかわらず見せてくれてうれしい。

そして、室井が熟慮の末にキレる場面の熱い感じもさることながら、あのいつも神田署長（北村総一朗）にゴマをすってゴルフ三昧のふやけた袴田課長（小野武彦）が、事務的な本庁の電話に「わたしの部下の命を何だと思ってんだ！」と怒鳴るくだりなど、感動半ば笑い半ばで涙なしにはすまない。肝心の青島は意外にそういった痛切な背景を抱えてはおらず、むしろそのまっとうさと健全さによって、正義感から損得勘定ぬきになってしまう周りの人々を応援する存在なのである。本音で和久に学び、すみれを守り、室井を立てるというかかわり方によって、それまでの営業マン時代には持ち得なかった彼のバックストーリーづくりが始まったというわけだ。

▲テレビシリーズ最終話

癖のある犯人たちの描写と場面演出へのこだわり

さて、こうした警察側のキャラクターもさることながら、癖のある犯人たちの描写もなかなか凝っている。くだんの山部や野口はもとより、平凡な日常にあきた保険の営業マン・田中（近藤芳正）やジゴロの大麻の売人・岩瀬（布川敏和）、いかれた覚醒剤中毒の青年・鏡（稲垣吾郎）も印象的だが、極め付きは和久が追い続けた警官殺しの犯人で拳銃を密輸している安西（保阪尚輝）だ。黒い革のロングコートで、無言で拳銃を横に（！）かまえて容赦なく撃ちまくるクールな安西は、警察に情報を流す非合法カジノのオーナー・龍村（真木蔵人）ともどもかなりアジな存在で、映画版のレクター博士ふう殺人マニア・日向真奈美（小泉今日子）もこの系譜に連なるのだろう。

ところで、こういったダルな警察と屈折した犯人とが向かい合うところに、なかなかそれらしくカッコよく白熱した場面は登場しないのだが、それでもじっくり等身大の日常の段取りがすんだところで、ほんとうにカッコよくハラハラするシーンもいくつか見られなくはない。青島がマル被（容疑者）をクラブで目前にしたところで別の傷害事件に遭遇してしまうときの葛藤、あるいはクラブの客になりすました青島ほか捜査員たちが一斉にくだんの安西に拳銃をつきつける瞬間の緊迫。そして、真下（ユースケ・サンタマリア）が撃たれた雨の夜、湾岸署のフルメンバーが非常線を張る長いスローモーションの場面はその白眉で、しびれるくらいカッコよすぎて笑ってしまう。

このほか、とりわけ爆発物処理班や特殊部隊などが活躍する場面の演出の「いわゆるカッコよさ」へのこだわりは、「一度特殊部隊を見てみたい」と夢見て出動要請してしまう真下警部と気持ちがひとつのスタッフが「一度ドラマでこういうカッコいいのやりたかったんだよなあ!!」とはじけているようで愉しい。その延長上にあるのが、映画版での（詳しくは記さないが）「天国と地獄」の一瞬なのだろう。なんでも当初、亀山千広プロデューサーは映画版で「砂の器」を目指しかけて改めたというが、確かにこんな人を食ったパチあたりなかたちで「天国と地獄」をやってしまうなんて、よほど『踊る大捜査線』らしくて痛快だ。

ちなみに余談だが、例えばセットや小道具ひとつにしても、お婆ちゃんのお守りに始まり、「カエル急便」の箱にイメクラの「ピンクサファイアの部屋」まで、見続ける人にはサービスを惜しまない隅々の凝り具合も特筆ものであって、そういった記号のひとつひとつが大きいストーリーとともに湾岸署サーガをつくっているのだった。

Digitized by Google

織田裕二
[青島俊作役]

今回の青島は完全に巻き込まれ型で彼にとってはジレンマだらけです

取材・構成＝進藤良彦・早川あゆみ

1967年12月13日生まれ。神奈川県出身。87年、「湘南爆走族」で俳優としてデビュー。89年の「彼女が水着にきがえたら」の主演で注目され、以後、多数の映画・テレビで主演を重ねる若手俳優のトップの一人として活躍する。またデビュー時に音楽活動も開始、「歌えなかったラブ・ソング」「Love Somebody」など多数のヒット曲がある。

「踊る大捜査線 THE MOVIE」と「秋の犯罪撲滅スペシャル」の2本を合わせて3ヶ月弱に及ぶ撮影を駆け抜けた織田裕二氏。主役を張るというプレッシャー、体力の限界へ挑戦するかのようなハードスケジュール。予定より15日オーバーした「秋SP」の撮影をようやく終え、一息つく間もなく次の仕事でオーストラリアへ旅立つという織田氏の貴重な時間をお借りして、撮影の感想をお聞きした。

普段、映画を1本撮るスケジュールで、映画2本撮ってるようなノリでしたね。どこかホッとしてる部分と、作品自体がどうなったかなという不安というか、期待というか。それが、撮影を終えての率直な感想です。

――テレビシリーズから2年弱、青島というキャラクターは、織田さんご自身の中ではどんな位置づけになっているんですか。

青島という男については、連続ドラマがスタートしたころにかなり悩みました。作品自体は「刑事はサラリーマン」ということで作ろうとしている。でも、僕がやる青島は一人だけ変わってて、刑事ドラマの刑事に憧れて刑事になった男ですよね。その辺のいい浮き加減というか。主人公なんで、作品全体で言いたいことを背負ったりすることは結構多いんですが、それをやると青島という男のキャラクターから外れちゃう。反刑事ドラマと刑事ドラマの使い分けでしたね。

――映画版に至るまで、時間の経過もかなりありますけど、青島の成長や変化についてはどう考えてますか。

連続ドラマをやってる間から、どんどん変化が起こってましたね。例えば、最初は何も知らないところから刑事になって、だんだん

フィルモグラフィ

【TV】

※注記なしは連続ドラマ

1987
「プロゴルファー祈子」
1988
「北の海峡」（単発）
1989
「涙日記」
「19歳」
「風響！江戸の夜明け」
「ママハハ・ブギ」
「邪魔してゴメン！」
「あいつがトラブル」
1990
「卒業」
「予備校ブギ」
「世にも奇妙な物語／ロッカー」（単発）
1991
「東京ラブストーリー」
「初恋の殺人者」（単発）
「新説・三億円事件」（単発）
1992
「あの日の僕をさがして」
1993
「振り返れば奴がいる」
「素晴しきかな人生」
「振り返れば奴がいるスペシャル／最後の戦い」（単発）
1994
「お金がない！」
1995
「正義は勝つ」
1996
「真昼の月」
1997
「踊る大捜査線」
「踊る大捜査線／歳末特別警戒スペシャル」（単発）
1998
「恋はあせらず」
「踊る大捜査線総務外編・資産者爆破事物語／初夏の交通安全スペシャル」（単発）

Digitized by Google

いろんな事件が起きることが普段の日常になってきて、慣れてくる。最初は浮いていた存在だったのが、周りを巻き込んでいって、どんどん変革していった。湾岸署の人たちも最初は結構クールな人が多かったけど、だんだん温かい人たちになっていって。いい意味で青島菌が蔓延してきて、みんなそれぞれ変わっていった。それが本庁の方まで飛び火して、室井という男もずいぶん変化していったし。だから、ある種、連続の中で完結してる部分が、どこかあるんですよね。スペシャルや映画で和気あいあいだけじゃ、物足りないじゃないですか。そこに、室井の次の管理官で新城さんが来て、新しい対立が生まれていく。どんどん次へ次へと行ってますからね。

まあ、青島のポジション自体は、いつでも変わらないんだけど、青島という男によっていろんな人が影響を受けたり、青島も当然、和久さんからいろんなものを盗んだり、他の人からもいろんなものを吸収していって、変化してきてるとは思います。青島って、最初は球を投げる役目だったと思うんですよ。いろんな人にポンポン球を投げて波紋を呼ぶという。ところが進んでいくうちに、球を投げる側だったのが、逆に投げられて受け止める側になってきている。もう映画なんか、完全に巻き込まれ型ですから(笑)。普段だったら青島は自分の思ったことで突っ走っていくんだけど、今回の映画は、こうしたいのにできないとか、命令でやらなきゃいけないっていうサラリーマンの悲しい性ですよね。彼にとってはジレンマだらけです。まあ最後に爆発しますけどね。僕は役に影響される方なんで、今回はすごくストレスがたまりました。撮影が終わるまで本当にずっと寝不足みたいな感覚で。撮影もハードだったんで、かなりリアルな表情が出てるんじゃないかとは思います(笑)。

――映画化の話を最初に聞いた時は、どう思われたんですか。

あまり驚かなかったんです。僕は映画でデビューして(87年「湘南爆走族」)、映画と連ドラをだいたい同じくらいの割合でやってきてますし、「映画だ、テレビだ」っていう垣根は僕の中にはないんです。僕自身も行ったり来たりしてるし、スタッフもそういう人が多くなってきている。僕もどんどんそういう人が増えればいいと思っているし。実際、テレビでもとても時間かけて丁寧にやったり、「これ、映画のフレームだよ」ってドキッとする時があったりします。映画はお金払って足を運んでもらってという、2時間のものを見るだけでも結構時間がかかるじゃないですか。その辺の違いは多少ありますけど、だからって別にテレビだと手を抜くというわけじゃないですし(笑)。

――フィルムとビデオのフォーマットの違いは意識されませんか。

画角の違いだけですね、気になるのは。テレビと映画の縦横比の差、そのサイズの違いは意識します。特に映画だからっていうことはないですね。ただ、映画は撮影中の待ち時間が長いじゃないですか。その時に、いろんなことを考えすぎちゃうんです。「踊る大捜査線」の笑いは狙った笑いというか、「ガハハハ」って笑わせましょうという笑いじゃなくて、クスクスって笑えるくらいの微妙なさじ加減だったりするので、リハーサルやって「これでできるかな」って思ったものはなるべく旬のうちに撮ってしまいたい。そこで長い待ち時間があったりすると、今回なんかスタジオが暑いというのもあったりして、ついついオーバーアクションになってきちゃう。そうすると、クスクス笑いじゃなくなりますからね。そういう笑いをやる上では、結構大変だったと思います。

だから、ハリウッド方式じゃないけど、3カメ4カメでパンと一気に撮りたいというのはありますね。昔「BEST GUY」っていう映画で1回だけ3カメでやったことがあったんですけど、すごく流れが自然にできたんです。お芝居、止まらなくていいんですから。最初は僕も映画の1カメから入ったんで、初めてスタジオでマルチ(複数のカメラでスイッチングしながら一気に芝居を撮る撮影方式)で撮った時は、今どのカメラが撮ってるのか解らなくて、すごいとまどいました。でも、慣れちゃえばそっちの方がいいですね。芝居を一気に撮れるというのは、間違いなくその方がいい。極端に言うと、僕が昔やった深夜ドラマで「邪魔してゴメン!」っていうのがあって、30分のドラマなんですけど、ワンセットのシチュエーションコメディなんですよ。バーが舞台で、僕はバーのマスターやりながら、常連のお客さんやゲストの人が来るというドラマなんですね。これは前日ずっとリハーサルをやって、撮影は一日で一気に回しちゃうんです、まるまる一本。誰か必ず一人、台詞を忘れる役者さんがいたりして(笑)、そうすると隣で必ずフォローする人がいる。とにかくVTRを止めちゃいけないという。まるで舞台のようですね。そういう作

「踊る大捜査線 秋の犯罪捜査スペシャル」(単発)

【映画】

1987
「湘南爆走族」
監督:山田大樹 原作:吉田聡 脚本:山田大樹、和泉聖治

「ビーバーはクロスオーバー」
監督:栗原啓志 脚本:長瀬未代子

1989
「将軍家光の乱心・激突」
監督:降旗康男 脚本:中島貞夫

「彼女が水着にきがえたら」
監督:馬場康夫 原作:ホイチョイ・プロダクション 脚本:一色伸幸

1990
「BEST GUY」
監督:村川透 脚本:高田純、村川透

1991
「就職戦線異状なし」
監督:金子修介 原作:杉元伶一 脚本:福田卓郎、金子修介 脚本協力:坂元裕二

「波の数だけ抱きしめて」
監督:馬場康夫 原作:ホイチョイ・プロダクション 脚本:一色伸幸

1992
「エンジェル 君の歌は僕の歌」
監督:渡辺孝好 脚本:長谷川康夫

1993
「卒業旅行 ニホンから来ました」
監督:金子修介 脚本:一色伸幸

1995
「きけ、わだつみの声」
監督:出目昌伸 脚本:早坂暁

Digitized by Google

品などで、いい意味で訓練されていたので、できるものなら2時間カメラを止めずに撮ってしまいたいくらいで（笑）。舞台でいちばんいいなと思うのは、そこですね。

――映画の前の話である『秋SP』よりも、映画の方を先に撮影したというのも辛かったんじゃないですか。

そもそも『秋SP』のシナリオが、映画の途中で変わったりしましたからね。青島と室井の対立の仕方が、より濃くなっちゃったんですが、もうその間に映画を撮ってるんですよね。監督もそれぞれ違いますから、自分の作品じゃないところまでは「解らん」って。でも、僕らは繋がってるから（笑）、「こりゃどうしようかな」って思いますよね。やっぱりできるなら、順番通りに撮った方が、それは絶対いいです。

――現場にお邪魔していた間、セット裏のたまりで出番を待っているみなさんの雰囲気を見ているだけで楽しかった部分もありました。そこも湾岸署という感じで。室井の役柄のせいか、柳葉さんはどこか距離をおいている感じがあったり。

柳葉さんは、そういうところすごく我慢が必要だったでしょうね。やっぱり、そばで楽しい話してると加わりたくなるのが人情だし。僕もちょっと柳葉さんと話してみたいなと思ったりすることもあったけど、結局は連続の時から、挨拶しかしたことないですね（笑）。なんか、対立してる役同士が裏で仲良くしてると、どこか画面にそれが出ちゃうんですよ。スタッフもそれ見てたりすると、緊張感がなくなっちゃう。

――本広監督を指名したのは織田さんだという話を亀山プロデューサーからお聞きしたんですけど。

指名というわけじゃないんですけど、単純に亀山さんが「誰かいないか」って言った時に、こういう『踊る』のような作品だったら本広さんは好きそうだし、この企画に合いそうだなって思ったんですよ。ほかにもいい監督さんはたくさんいますけど、この企画を面白がって、どんどんプラスに持っていけるのは本広さんかなという。選ぶのはプロデューサーさんの仕事ですから。『お金がない！』を一緒にやった時に、本広さんの撮り方が、この企画に合いそうな感じだったんですね。新しいものを作る欲というのがありそうだった。本広さんも澤田（鎌作）さんも二人とも同世代の監督なんですけど、そういう人の方が割と面白がってくれるかなって思いましたね。まあ、保守的な人は若くても保守的だし、ベテランの人でも攻撃的な人は攻撃的だから歳は関係ないかもしれませんけど。

ただ、ひとつ言えるのは、二人とも若いんで体力があるし、手抜きをしない。連ドラのころから朝から朝までの撮影がしょっちゅうあって。まあ、本当はそれはいいことじゃないんだけど、そのおかげですごく細かいこだわりの部分までできたところがあって、そこを面白がってくれた人がちゃんといたということでも、寝ずに頑張った甲斐はありました。

――『踊る』のパート2を期待する声も多いですが。

それは僕は解らないです（笑）。やるやらないを決めるのは僕じゃないんで。特にやりたくないってわけじゃ全然ないし、いろんな改善しなきゃいけない部分とか、やると決まったとしたら、「じゃあ、どういうふうに面白くするか」という方に興味があるんですよね。

――『踊る大病院』なんていう形を変えた『踊る』シリーズという意見も出てますね。

それもひとつの面白いアイディアだと思います。もともと「パート2」をやらないかと言われた時も、青島が会社を移動して、また違う人たちと会ってという、そういうのを冗談めかして言われたこともありました。そこでどういう職業にするのか考えるのも面白いだろうし、やっぱり刑事を続けていくとしたらどうなるのかとかね。ただ、一応の区切りではあると思うんですよ。だから、このまま続編がなくても僕は構わないし、またやると言うなら、「じゃ、さらに面白いものを作ろうよ」っていうことになるでしょうね。

（9月30日、織田氏の所属事務所にて）

Digitized by Google

登場人物紹介

Character File Part.1

Text by Yoshihiko Shindo

青島俊作【織田裕二】

湾岸署刑事課強行犯係巡査部長

言わずと知れた本編の主人公、「都知事と同じ名前」の青島。刑事ドラマの刑事に憧れて、コンピュータ会社の営業マンから脱サラして刑事になった男。しかし、捜査にも参加させてもらえず、縦割り構造の組織や互いの縄張り争いなど、所轄の刑事の現実はサラリーマン社会とちっとも変わらないため、青島はさまざまな絶望と悲しみを味わう。そこで青島は、持ち前の前向きさと考えるより前に行動を起こす積極さで、周囲の人たちの意識をも次第に変えていった。自身も絶えず成長を続ける「永遠の子供」。自分たちが正しいと思ったことをするために、それぞれの立場でするべきことをするという室井との「約束」は、「THE MOVIE」での重要なキーワードともなっている。演じる織田裕二も青島同様、誠実で熱い男です。前ページまでのインタビューもぜひ参照下さい。

恩田すみれ【深津絵里】

湾岸署刑事課盗犯係巡査部長

青島と出会うまではお仕事をこなしているだけのOLのような刑事だったが、過去の事件で負った心のキズと青島との出会いによって、少しずつ熱い気持ちを取り戻していった「空き地署のワイルドキャット」。クールな強さと傷つきやすいナイーヴさを併せ持つ魅力的な女性（ひと）である。すみれの人生を大きく変えた過去の事件とは、ひったくりにあって腕に大きな傷を負い、執念で逮捕したその犯人から出所後にストーキングを受けていることだった。この時の体験から、他人が背後に立つことを極端に恐れ、女に暴力をふるう男を決して許さないという彼女のポリシーが生まれている。演じる深津絵里は、強さと可憐さが同居した「凛」とした雰囲気を持つ女優さんで、撮影現場では気軽に声をかけることをためらってしまうような、力強いオーラを発している。でも、話をすれば気さくで優しい人です、ハイ。

室井慎次【柳葉敏郎】

警視庁刑事部参事官警視正

テレビシリーズでは捜査一課管理官、『歳末ＳＰ』で警察庁警備局警備課長、『秋ＳＰ』より同・警務課主席監察官と出世してきた国家公務員Ⅰ種合格のキャリア組。警察官僚への道を突き進むエリートだったが、湾岸署や青島と関わったばかりに、「所轄と本庁の縦割り構造を見直すべきだ」などと会議の席で発言して、上司から睨まれる羽目になってしまう。中間管理職の悲哀を眉間の皺に刻んだ、口数は少ないが有言実行の男である。しかし、青島という男に出会わなかったとしても、もともと東大出ばかりのキャリアの中で、東北大卒であるというだけで差別されていた室井には、これは当然の結果だったかもしれない。演じる柳葉敏郎は室井と同じ秋田出身。室井が「ただのエリート」ではなく、田舎の人間であるというところにシンパシーを感じて演じていたという。興奮するとポロッと秋田訛りが出るのは彼のアイディア。

和久平八郎【いかりや長介】

湾岸署刑事課指導員

元・湾岸署刑事課強行犯係、巡査長。青島がその背中を見て育った「日本のモーガン・フリーマン」。6年前に同僚の若い刑事が殺され、その犯人を逮捕するために残り少ない刑事人生の全てを捧げてきた男。そのため、他の仕事に向けるエネルギーは希薄になり、青島に出会うまではやる気なく見える老刑事だった（多分）。「疲れるほど働くな」という言葉に代表される彼の人生哲学は、出世とも無縁に所轄の刑事を続けてきた彼なりの結論でもあっただろう。しかし、和久もまた青島と出会ったことで本来の正義感を取り戻し、警官殺しの逮捕に執念を見せる。「踊る」を語る上で、和久のキャラクターとそれを演じるいかりや長介の巧みさは欠かすことができない。彼の発する一言一言がどれほどの重みを持ち、同時に見ている我々にどれほどの感動をもたらすかは、とても言葉では言い表わせない。

柏木雪乃【水野美紀】

湾岸署刑事課強行犯係巡査

『秋ＳＰ』までは交通課の婦警だったが、「THE MOVIE」では刑事課に配属されることになっている。詳細は映画をお楽しみに、ということでここでは触れないが、もともと彼女は、青島が刑事になって初めて出会った殺人事件の被害者の娘として、このドラマに登場した。事件のショックで寝込み、しかも声を失ってしまったという役どころ。合気道もやりアクションを演りたくて仕方がないという女優・水野美紀自身とは、あまりにもかけ離れたイメージである。やがて、青島に心を開いた雪乃は声を取り戻すが、かつての恋人が大麻の運び屋であったことから再び事件に巻き込まれ、そこでも青島に助けられる。ショックから立ち直った雪乃は、青島やすみれの働く姿に感銘を受け、自らも警察官になることを目指していった。湾岸署の明日を担う雪乃の行く末は……次頁のインタビューを参照下さい。

魚住二郎【佐戸井けん太】

湾岸署刑事課強行犯係係長代理警部補

テレビシリーズでは係長だったが、『歳末ＳＰ』より出世した真下に追い越されて、係長代理となる。上から下まで中間管理職だらけの『踊る大捜査線』の中で、その悲哀をもっとも身に染みて味わっている「万年係長」。第1話では署内の健康診断を執拗に気にする男として登場し、ある種、記号的だったキャラクターがどんどん肉付けされていって一人歩きしだした典型でもある。奥さんがフィンランド人という設定も、演じる佐戸井けん太の何気ないアドリブから全て生まれていった。コメディリリーフ的存在であり、警察署ものとしての組織の中の人間というリアリティを一身に背負った役どころでもある。出演者の誰もが素晴らしい『踊る』だが、現場で直接お会いして、その声、お芝居、立居振舞いの全てに思わずシビレてしまった一番か佐戸井氏だった。とにかくウマイ！

真下正義【ユースケ サンタマリア】

湾岸署刑事課強行犯係係長警部

『歳末ＳＰ』で強行犯係長に昇進。『秋ＳＰ』では刑事課課長代理に出世するが、その後再び降格して係長に。警視庁第一方面本部長の息子で、キャリア組の幹部候補生。現場の捜査より昇進試験の勉強、犯人逮捕より自分の出世、警察組織におけるそのサラリーマン性を、一方から体現しているキャラクターでもある。彼が想いを寄せる雪乃の前でいいところを見せようと思ったのか、和久が長年追っていた警官殺しの犯人（保阪尚輝）に声をかけ腹部を撃たれて重傷を負うくだりは、今でも涙なくしては見られない名シーンだ。一歩間違えればイヤミそのものである役どころを、見る側に愛すべきお坊ちゃんと思わせたのは、ユースケの明るく爽やかなキャラクターにほかならない。現場でも真下そのままのムードメーカー。誰からも愛され、愛ゆえにいじめられる、湾岸署のマスコットともいうべき存在である。

Digitized by Google

水野美紀
[柏木雪乃役]

きっと雪乃は、もっと強くなって
青島さんの女版みたいになっていくんだろうな

取材・構成＝進藤良彦・早川あゆみ

1974年6月28日生まれ。三重県出身。90年、ドラマ『サーカスの惨劇』で女優としてデビューしたのち、92年の『コーセー・ルシェリ』のCMで注目を集める。以後、女優として映画・テレビ・OVなどで活躍し、歌手としてもシングル・アルバムを発表。また、少林寺拳法、殺陣、乗馬などを特技とし、アクション作品にも積極的である。

『踊る大捜査線』のテレビ・シリーズで水野さんが演じたのは、父親を殺され失声症になった被害者の娘という役どころでスタートし、やがて警察官になることを決心する柏木雪乃という女性だった。『歳末SP』からは実際に婦警として湾岸署の一員に加わった雪乃は、映画版に至るまでにもっともキャラクターの状況が変化していった役でもある。映画版で、雪乃はついに刑事課に配属された。

刑事になったことで事件に直接関わるようになって、すごく緊張する状況に置かれることが多くなりましたから、それが一番の違いかもしれませんね。周りの人たちとの相対的な位置づけは、そんなに変わっていないと思いますけど、ただ、（雪乃の）見る目線が全然変わりました。今回、会議室で報告するシーンがあるんですが、みんながいろいろ質問したり意見を交わすところで、自分はここでは全くの新人だから、「すごいなあ」っていう目線でみなさんを見ているんですよ。今までは三枚目なところとか、情けないところを見ていたのが、ちょっと尊敬の念で見るようになった。真下さんに対しては別ですけど（笑）。

テレビ・シリーズでは湾岸署の輪の中からは一歩引いた位置にいた水野さんだが、実際に中に入ってみて、どう感じたのだろうか。

中から見てる方がやりがいがありますね。「自分も捜査に加わりたい」って思ってましたから。嬉しいというか、興奮します。雪乃は、真下さんなんか引っ張っていっちゃうくらいの強い芯を持っているし、賢いので、きっとこれからどんどん出世して成長していくと思います。映画版の雪乃の役目は、そういう希望や可能性を感じてもらえたら、いいんじゃないかなと思ってます。雪乃は青島さんの影響を受けているので、

フィルモグラフィ

【TV】

※注記なしは連続ドラマ

1990
『サーカスの惨劇』（単発）
1993
『映画みたいな恋したい／ハードウエイ』（単発）
『湘南女子寮物語』
『真夜中を駆けぬける』
1994
『夢みる頃を過ぎても』
『はぐれ刑事純情派VII』
『君に伝えたい／溺れてみたい』（単発）
1995
『はぐれ医者・お命預かります！』
『恋人よ』
『AIBO 恋しくて』
『親子弁護士の探偵帖』（単発）
1996
『翼をください！』
『TokyoS23区の女／千代田区の女』（単発）
『親子弁護士の探偵帖2』（単発）
『ナチュラル　愛のゆくえ』
1997
『踊る大捜査線』
『職員室』
『ベストパートナー』
『親子弁護士の探偵帖3』（単発）
『踊る大捜査線／歳末特別警戒スペシャル』（単発）
1998
『彼女との時代』（単発）
『HOTEL』
『踊る大捜査線番外編・湾岸署婦警物語／初夏の交通安全スペシャル』（単発）
『踊る大捜査線／秋の犯罪撲滅スペシャル』（単発）

Digitized by Google

署長を叱りつけたり、真下さんもどんどん引っ張っていっちゃたりと、動じないんです。そういうのがすごく、気持ちよかったですね。もし、「踊る大捜査線」の続きがあったとしたら、雪乃はすみれさんばりの、やり手の刑事さんになってると思います。

今回は私、深く考えないようにしたんです。解剖に行くシーンがあるんですけど、深く考えると、雪乃はお父さんの死体を見てしまったことがフラッシュバックするだろうし、自分の父親もこんなふうに解剖されたのかって思って気持ち悪いだろうし、暗くなっちゃいますよね。そんなに何年も前のことではないですから。人間って簡単に忘れられたり、切り替えられるものでもないし。細かく考えるとそういう複雑なことがいろいろあるんですけど、そこまで考えないで、「雪乃は湾岸署のみんなに助けてもらってここまで来た。それで元気に頑張ってやっている」ということしか考えなかったです。監督とも、「昔のことは引きずらないで、気持ちを切り替えてやろう」という話をしました。周りからは「明るくなったね、雪乃ちゃんは」って言われましたね(笑)。

今回の映画版では、見た目で派手に体を動かすことよりも、精神的にいろんな動きがあって、緊張感があったりとか、気持ちの中でのいろんな葛藤や盛り上がりがあったりして、それがすごく面白かったんですけど、もっと弾けるのもやってみたいですね。きっと将来、「雪乃はもっと強くなって、青島さんの女版みたいになっていくんだろうな」という期待を持ってもらえたら、嬉しいです。

自身でもアクションを演じることに強い願望を持っている水野さんは、なかなかそういう機会が与えられないことを残念に思っているようだ。「踊る大捜査線」は刑事ものだがアクション・ドラマではない。ヒロインを演じた「ガメラ2 レギオン襲来」も作品の性格上アクション・シーンだってあり得なくはなかったが、実際には彼女のそういうシーンはなかった。女優・水野美紀のアクション指向が叶えられる時は来るのだろうか。

最近、ちょっとビデオを見てみようと思って、大量にガンアクションものとか、やくざものとか見てたんですよ。どういうことをやってるのかなって。サブさんが監督した「ポストマン・ブルース」が、すごく面白かったです。監督によってそれぞれカラーが違っていて、面白かったですね。青山真治監督は淡々とした引きの画が多くて、三池崇史監督のは雨が多くて暗い感じで。あと、小沢仁志さんとか。どれ見てもみんな同じ人が出てるんだなって思って(笑)、しかも同じようなキャラクターで。いっぺんに見ると余計に違いがはっきり分かって、面白かったですよ。

アクション・シーンも、かなり凝ってやってるのがあったり、今いちスピード感がないなと思ったのもあって。日本人がピストルを持っても、文化にないことだからリアリティがないんですよね。銃を持っている格好はサマにはなってるんですよ。持ち方がうまい方とかいますから。小沢さんの弟さんの小沢和義さんとか、ムチャクチャうまいですよね。ただ、それが日本の景色の中だと、リアリティがなくなっちゃう。だから、香港とか台湾とか、東南アジアの国の方に行って撮ったりしてるんだろうなあって思いました。アクションものは、すごくやりたいので、「やれますように」って毎日お祈りしてます(笑)。

週に一回は映画館に映画を見にいくという水野さん。アクション、コメディ、ホラーと自分で演じてみたいと思うほど好きなジャンルも幅広いし、テレビ・ドラマで多く演じているちょっと影があっておとなしい娘というようなキャラクターとのギャップはあまりにも大きい。水野さん本人というより、これはキャスティングする側の問題だろう。

コメディ大好きなんですよ。ジム・キャリーのものも結構見てますし、エディ・マーフィーとかも好きで。「オースティン・パワーズ」はまだ見てないんですけど、ああいうのも好きです。「ドクター・ドリトル」と、「トゥルーマン・ショー」が今すごく楽しみですね。

自分でもコメディはやってみたいんですけど、難しいですよね。「踊る」でずいぶん勉強にはなってるんですが、「やっぱり難しいんだなあ」って余計に感じてます。「私にはまだ無理だな」って。挑戦はいつでも何に対してでもしてみたいんですけど。もうちょっと違う面を見せるものも、やりたいって思ってます。ただ、長く女優をやっていきたいと思ってますから、あと1年で辞めるっていうんなら結局できなかったなで終わっちゃいますけど、まだ何年もあるので、がんばります。

「具体的に組んでみたい監督さんはいますか?」という質問に、特定の誰かの名前を挙げることに困っていた水野さんが、取材を終えて雑談に入ってから、今、「イノセントワールド」が劇場公開中の下山天監督の名を挙げた。以前から下山監督のミュージック・ビデオなどを見て、そのストーリー性と空気感が大好きだったという。このラブコール、意外な形で実現するといいな。

(9月20日、「秋SP」のロケ現場にて)

【映画】
1994
「シュート!」
監督:大森一樹 脚本:橋本以蘇
「踊る」
監督:篠師寺光幸 原作:北野太、一の瀬正 脚本:桃井章、伊藤秀裕、篠師寺光幸
「歌舞伎ゴルフ倶楽部」
監督:児玉高志 原作:鎌丈二、石井さだよし 脚本:前川洋一
1995
「大失恋」
監督:大森一樹 原作:清水ちなみ 脚本:尾崎将也、大森一樹
1996
「ガメラ2 レギオン襲来」
監督:金子修介 脚本:伊藤和典

【OV】
1991
「くノ一忍法帖」
1992
「くノ一忍法帖II 黒少女の秘法」
1993
「怪盗の掌ナナルミ2」

Digitized by Google

事情聴取③ INTERVIEW KATSUYUKI MOTOHIRO Director

本広克行［監督］

取材・構成＝進藤良彦・早川あゆみ

VTRだろうがフィルムだろうが、良い作品を創るという目的は変わらないです

従来の刑事ドラマにはない『踊る大捜査線』の独特の世界観を形づくってきたのが、亀山千広プロデューサー、脚本の君塚良一氏、そしてメイン・ディレクターをつとめた本広監督の3人であるということに異を唱える方は少ないだろう。もちろん俳優諸氏の功績にも多大なものがあるという前提の上で、スタッフサイドの功績者としては、やはりこの3人を挙げたい。『踊る』のテンポと映像美を構築した本広監督は、昨年暮れの『歳末特別警戒スペシャル』、今年6月の『番外編・湾岸署婦警物語／初夏の交通安全スペシャル』に続いて、集大成となる「踊る大捜査線　THE MOVIE」の演出を手掛けている。自身にとっても96年の「7月7日、晴れ」「友子の場合」に続く3本目の劇場用映画演出。撮影を終えて仕上げ作業中の監督に、今回の撮影を振り返ってもらった。

——今回の撮影を振り返って、どうでしたか。

難しい局面に立たされることもなく、スムーズに行ったという感じですね。撮影に入る前にスタッフやキャストのみなさんと話せたので、それが良かったのかなと思います。あまり揉めることもなく、楽しく明るい撮影現場でした。

——テレビの時との違いは意識されてましたか。

いや、あまりしてないです。フィルムで撮影すると時間かかるかなと思ってましたが、予想よりもスタンバイが早かったです。VTRだろうがフィルムだろうが、良い作品を創るという目的は変わらないです。

——技術スタッフにフィルムの人たちが新たに入ってくることで、『踊る』のカラーが変わることもあるかなと思ったんですが、大丈夫でしたね。

カメラマンの選定は、『歳末SP』のころからやってたんですよ。僕の注文は、とにかくカメラワークがうまい人、仕事が早い人ということでした。藤石さんはテレビもやられてるし、もちろん映画も何本もやってますけど、低予算の映画もやってらっしゃるので、そこがいいですよね。いろいろな工夫をされてアイディアをたくさんお持ちで。

——撮影前半で、小物撮りや実景撮りが続いていたころ、監督のOKと藤石さんのOKが微妙にずれるという場面をよく見たような気がしましたが。

僕は当然、お芝居的なことでOKを出しますよね。でも、カメラマンはやっぱり、ピントがぼけてるとか、フレームの動きが乱れたとかで、NGを出すんですよ。藤石さんには撮影前に「遠慮なくカメラNGを出して下さい」と言ったんですが、確かに序盤は僕がOKでも藤石さんがNGというのは多かったですね。やっぱり、カメラがよく動くということは、そういう微妙なNGもつきまとうということですよ。

「7月7日」の時は、そういう事前の打ち合わせがちゃんとできてなかったからだと思うんですけど、こっちが「OK！」って強く言うと、カメラマンが何も言えなくなったんでしょうね。「今の芝居良かったから」という感じで。あとで上がったフィルムを見ると、やっぱり問題があったりして。

そういう意味で、今回は普通の撮影よりもカメラNGが多かったですね。それは、カメラも芝居をしているということなんです。カメラも役者さんの一人として動くようなもので、カメラマンが生理的に気持ち悪ければNGを出すだろうし、もう一回やって同じだったら、それはそれで成立しているということでOKになるわけです。

——テレビとの違いということで言えば、ライティングが一番違ったんじゃありませんか。

『踊る大捜査線』って、結構色がないドラマなんですよ。みんなYシャツにネクタイとか、深

1965年7月13日、香川県生まれ、O型。横浜放送映画専門学校（現・日本映画学校）を卒業後、CM製作会社のアルバイトを経て共同テレビに番組契約で参加。フジテレビの深夜バラエティ番組などの演出を手掛けたのち、92年、深夜ドラマ『悪いこと』で監督としてデビューする。同年、深夜としては異例の人気を集めた『NIGHT HEAD』の演出家の一人として名を連ねて注目され、以後、『世にも奇妙な物語』『17才』『お金がない！』『ヘルプ！』などのヒット・ドラマを次々と手掛ける。96年、「7月7日、晴れ」で劇場映画を初監督。98年2月より、共同テレビを離れてフリー。

フィルモグラフィ

【TV】※はバラエティ

1989
※『IQエンジン』（コーナーディレクター）
1990
※『哲学の傲慢』（コーナーディレクター）
1991
※『深夜は踊る』
1992
『悪いこと』
『世にも奇妙な物語／見たら最期』
『上司ドライバー』
『NIGHT HEAD』
1993
『上司ドライバー2』
『青春もの』
『ifもしも…／誘拐するなら男の子か？女の子か？』（未放映）
※『MAESTRO』
1994
『恋とほどんなものかしら』
『17才』
『お金がない！』
『上司ドライバー4』

Digitized by Google

津さんも黒い服が多かったり。それで、衣装の能澤さんのアイディアで、犯人の服に色をつけていったんです。その同じやり方で映画的にも成立するのかという話をした時に、藤石さんのアイディアで、セットの部屋ごとに色をつけようということになったんです。例えば、湾岸署の廊下はタングステンのちょっと黄色っぽい明かりで、中に入っていくと蛍光灯になる。刑事課の壁はちょっとパープルっぽい色が入ってたり、場所によって微妙に違うんですよ。夕方のシーンはリアルさよりもアンバーの色を強くしたり、夜はちょっとブルーっぽくしたり、普通よりもライティングはオーバー気味に作ってあります。だから同じような画を撮っても、よく照明設計されているから、立体感が強調されて画に飽きない。その辺はスタッフのアイディアをいただいてます。映画はみんなで作るものですから。

——撮影を消化していくリズムもテレビと映画では全然違ったんじゃありませんか。

そうでもないですよ。時間がかかるところは異常にかかるけど、早いところはどんどん撮れましたし。「7月7日」で一度フィルムを経験してたんで、そんなに苦ではなかったです。ただ、待ち時間がテレビに比べると多いことで、考えを練り直す時間が多かったという感じですかね。テレビの時は撮影前に全部考えて、現場ではお芝居を撮るということに専念したけど、フィルムの待ち時間の長さの中では、役者さんとシーンをどういう風に考えているかという話ができたりして、そういうのはやっぱり映画ならではなんですかね。

冗談で、「映画なんだから手抜くなよ」なんてことを、テレビ・スタッフみんなでは言ってたんですけど、あくまでその程度で、中味は全然変わりなくやってるつもりです。VTRの方が、もう少し短い日数で撮れるということだけだと思いますね。

——「7月7日」の時にできなかったことを、今回挑戦してみたというのはありますか?

「踊る」の場合は湾岸署という母体があって、外に出ていく話じゃないですか。だから、セットをしっかり作っておいて、外で無茶するという感じですけど、「7月7日」は場所が転々とする話で、しかもナイトシーンが多い。もしかしたら、「7月7日」の方がいろんなことをやってるかもしれませんね。

あの時はとにかく「自分の色をなくそう」ということに苦労したんです。恋愛ものに監督のカット割りの癖みたいなものが出ると、ストーリーに感情移入しにくくなる。笑いがテーマの時は、ワンカット見てもらっただけでも「僕が撮りました」って解るような画作りを心がけるんですけど。「友子の場合」は、自分自身を前面におし出してました。多分、「7月7日」と「友子」の中間にあるのが「踊る大捜査線」ではないかと思ってます。

——「7月7日」には、すごいショックを受けたんですよ。冒頭のヘリの空撮を見た瞬間に、「これは普通の映画とは違うぞ」と。

「7月7日」で一番燃えたのは、あのヘリのところなんですよ(笑)。あのヘリをどうやって撮るかというので、そりゃもう、ライン・プロデューサーとは揉めたし、「ここはヘリは飛べない」というところを低空までやってもらって。珍しく絵コンテとか描いちゃったり。そうやって思い込んで力入れて作ってる画というのは、エネルギーが出てますよね。普段のんきな分、力を入れてやってるところは、みんなに誉められます。

あまり全部に力入れちゃうと、お客さんは息がつまってしまって見づらいでしょうから。僕は、ジョージ・ロイ・ヒルってすごく好きな監督なんですけど、彼の演出方法は、僕の理想です。力が入ってるところと、抜いているところの緩急というか。「ガープの世界」なんかも大事なところには力入っていて、いい画とか、うまいカット割りなんですけど、あのリズムが非常に好きなんです。エンターテインメントを作る映像作家というのは、ああじゃないといかんのだなということを学びました。肩の力を抜いてエンターテインメントな映画作ってる方が、意外と傑作が多かったりしますよね。決して僕が一生懸命映画を作ってないわけじゃないんですけど(笑)。

——「踊る」も緩急使い分けた作品になってますか。

かなり緩急はついてると思うんですけど。結構うまくいってるんじゃないですかね。映画も3本目だし、そろそろちゃんとしたものを作らないと(笑)。

——みなさんのお芝居も良かったですよね。

今回はほとんどの役者さんとクランクイン前に話をしました。柳葉さんとだけ事前にできなかったので現場で話したんですけど、例えば、室井が言える台詞と言えない台詞というのが、柳葉さんの中に微妙にあるんですね。今回の映画はどこか室井をいじめるという話なんで、室井がいろんなプレッシャーを与えられて困っていくさまがいいわけです。そういう時に柳葉さんと話をして、ちょっと変な台詞があったりすると排除しました。室井ってあんまり感情を喋らない男だから、「これは言える、これは言葉に

1995
「ヘルプ!」
「駐在所の人々」
「世にも奇妙な物語/友子の長い朝」
「JOHN COMIC SHOW」
1996
「世にも奇妙な物語/追っかけ」
「踊る大捜査線/新・木曜の怪談/サイボーグ」
「上司トライバー8」
1997
「踊る大捜査線」
※「もうひとつの東京日和」(メイキング)
「木曜の怪談97/爆弾一分身娘」
「踊る大捜査線/歳末特別警戒スペシャル」
1998
「上司トライバー9」
「踊る大捜査線番外編・湾岸署爆弾物語/初夏の交通安全スペシャル」

▲映画版撮影現場での本広監督

Digitized by Google

できない」という話や、「この台詞は言ってもらった方が室井がいじめられている感じがするから」とかね。今回の室井は本庁側を背負って立つポジションですから、かなり大変だったと思います。

――青島と室井の関係性が話の中心ですよね。

織田さん、柳葉さんも当然いいんですけど、それに輪をかけて良くしているのは、いかりやさんが演じる和久平八郎の「老い」というものを背負いながら希望に燃える姿。すみれさんの強い女を演じていながらひとりになったときの切ない表情とかいいですしね。深津さんの芝居に引き込まれます。織田さんはニュアンスの出し方がうまいです。台詞のない顔が、彼の場合は本当にいい表情ですよね。人の話を聞いている時の芝居なんか男でもしびれます。和久さんと話をしているところの青島の顔とか、おじいちゃんの話を「うんうん」って聞いている感じで、「いいヤツだよな、こいつ」と思う。青島というキャラクターを設定するにあたって、織田さんじゃないとできなかったんじゃないかなと今でも思います。

――今回のゲストの小泉今日子さんは、どうでしたか。

やりやすかったですね。彼女の役はかなりブッ飛んだ女性なんですが、初めにホンを読んだ時には「何言ってんだこの女は」と思ったんですよ。ただ、よく読んでみると「この人は子供なんだ」ということがだんだん解ってきて。それを小泉さんに説明したら、共感してもらえて。それで、「お芝居は普通でいいですから、衣装だとかメイクだとかを僕らの方で工夫します」ということになっていったんです。不気味さと可愛いらしさが、うまく共存していて、社会から少しだけズレているキャラクターになってます。芝居で何もしないことの難しさというのを小泉さんも解っている。こちらの注文は全て聞いてくれて、彼女自身も楽しかったみたいですよ。

――映画も『踊る』ならではの細かい仕掛けが満載ですよね。

小ネタがかなりあるんですけどね(笑)。2回目に見た時に初めて気づいてもらえるような仕掛けが一杯あります。その仕掛けに気づいた人はこの映画を傑作だと思うでしょうね(笑)。映画って、1回見ただけだとストーリーを楽しむだけになっちゃうじゃないですか。2回目の方が、画面の隅々まで見るから、伏線とかが解って意外と面白かったりしますよね。僕は、良い映画の条件は、2回目がさらに面白いと思うことだと考えてますから。あと、インターネットの公式ホームページの書き込みなんかが、結構励みになりました。「みんな、ここまで見てくれてるんだな」って、スタッフともども、またやりすぎてしまうわけです(笑)。

――『踊る』の今後について、監督はどうお考えですか。

『踊る大捜査線』という作品は映画で終わるんじゃないですかね。もうネタがないような気もするし。どうせ『踊る』で引っ張るなら、いっそ違うもので、例えば『踊る大病院』なら、その患者に『踊る大捜査線』の署長たちがいるとか、そういうことでリンクさせていく面白さはあるのかなと思うんですけどね。多分『大捜査線』でやっても、もう焼き直ししかできない気がします。やっぱり、いいところで終わらせておかないと、どんどん質の低いものになってしまう。「あ、ここで終わる。終わったあとどうなるのかな?」って想像してくれる方が楽しいでしょう。

――これから本広監督がどういう方向に向かうのかというのも、気になっているのですが。

僕はですね……、今ちょっといろいろ考えていて。何がやりたいとか、どういうものがやりたいというより、いいホンが欲しいな、と。脚本の時点で泣けるとか感動できるというホンをいただきたいというか……。そりゃ、楽してるっていうのか(笑)。なんか、その程度しか思い浮かばないんですよ。

映画は、本当に精神的に疲れるんですよ。テレビは肉体的に疲れる(笑)。どっちがいいかっていうと、肉体的に疲れる方が楽ですね。でも、もちろん映画もお話があればやりたいし、テレビは今後もやっていきたいです。CMからプロモーションビデオから、いろんな映像も勉強したい。もともとバラエティ番組の出身なんで、「ドラマじゃなきゃいけない」とかいう考え方がないんですよ。で、僕は何をやりたいのでしょう(笑)。

――テレビの監督って、それだけで映画マスコミの世界では低く見られたりする部分があるので、本広さんにはぜひそれを打破していただきたいと思っています。

低く見られても、そんなことはどうでもいいんです。ビデオではなく、映画館でたくさんのお客さんに観ていただければ、僕はそれだけでじゅうぶんです。公開されたら劇場に観に行って、観客の生なリアクションを見るのも楽しいですよ。

(9月23日、日活撮影所スタジオセンターにて)

【映画】

1998

「7月7日、晴れ」

製作:フジテレビジョン　配給:東宝　5月11日公開
脚本:戸田山雅司　撮影:袴一喜
照明:平野和義　編集:掛須秀一
録音:細井正次　美術:上條安里
音楽監督:中村正人　音楽:トリームズ・カム・トゥルー
出演:萩原聖人、観月ありさ、田中律子、升毅、榊原利彦、うじきつよし、taeco、伊武雅刀、山本太郎、きたろう、仲谷昇、西岡徳馬、西村雅彦、川平慈英、大高洋夫、小木茂光、高杉亘、宮本大蔵、中島陽子

世界的に活躍するアーティストの少女(観月)と平凡なサラリーマン(萩原)が偶然出会い、愛し合っていく過程を、七夕伝説になぞらえてつづったラブ・ストーリー。

ビデオ:東宝ビデオ

「友子の場合」

製作:フジテレビジョン　配給:東映　8月10日公開
原作:藤野美奈子　脚本:青柳祐美子　撮影:福田紳一郎　照明:澤田篤宏、加瀬弘行　編集:田口拓也
録音:松永英一　美術:板村一彦
音楽:大島ミチル
出演:ともさかりえ、木村剛、小木茂光、美保純、藤村ちか、新山千春、仲間由紀恵、高橋一生、松山幸次、越野鉄也、西村雅彦、布施絵里、森田洸輔、布川敏和、きたろう、六平直政、伊藤俊人、茅島成美、萩原聖人、高杉亘、原ひさ子、河原さぶ

クラスメイトと夏休みのお楽しみ旅行に出かけたひとりの女子高生(ともさか)が、数々の悲劇に見舞われる姿を描いた青春コメディ

ビデオ:ポニーキャニオン

Digitized by Google

登場人物紹介

Character File Part.2

Text by Yoshihiko Shindo

誰が呼んだか「スリーアミーゴス」。出世のためのゴマすりと根回しを決して忘れない、愛すべき中間管理職トリオである。「ミスのない捜査とスキのない接待」をポリシーに掲げる神田署長以下、何かと問題児の多い湾岸署はやはりこの人たちでなくては束ねきれまいという、不思議な説得力を見る側に与える3人だ。ここ一番というところでは体を張って、クビを賭けて部下をかばうスリアミの姿に、「こんな上司が欲しい！」と涙したサラリーマン、OLは数知れず。演じる3人の人気も急上昇して、ついには映画番宣用のミニドラマ（「深夜も踊る大捜査線・湾岸署史上最悪の3人」）で主役を張るまでにもなった。あの絶妙のやり取り（スタッフは大喜利シーンと呼ぶ）とアドリブも決してその場のノリだけの暴走ではなく、シナリオの解釈をめぐる徹底した論議と、入念な演技打ち合わせの末に生まれる、プロの技術の賜物である。

（写真は左上から北村、斉藤、右下が小野の順）

神田署長【北村総一朗】 湾岸署署長 警視正

秋山副署長【斉藤暁】 湾岸署副署長 警視

袴田健吾【小野武彦】 湾岸署刑事課課長 警部

同い年で警察官になったのも同期、湾岸署に配属されたのも同じ時で、強烈なライバル意識をむき出しに、どちらが先に刑事になれるかを競い合っている2人。『歳末SP』で森下が先に刑事見習いになったが、青島復帰のあおり（？）を喰って内勤に戻され、『秋SP』では緒方がお中元攻撃で見事、刑事見習いの座をつかんだ。しかし、これも署長たちの早トチリが原因で再び取り消され、失意のまま「THE MOVIE」を迎える。演ずる甲本雅裕、遠山俊也の2人は、実生活においては家が近所で、よく揃って飲みにいくという仲良しだとか。その呼吸がライバル意識の裏にほのかに見えるところも、この2人のキャラクターを豊かにしているのだろう。「（緒方は）きっといい親父になっても制服着ていて、どっちが先に刑事になるかって森下とやり合ってますよ」と笑った甲本氏の言葉が印象に残った。

（写真は左が甲本、右が遠山）

緒方警官【甲本雅裕】 湾岸署地域課 巡査部長

森下警官【遠山俊也】 湾岸署地域課 巡査部長

中西盗犯係長【小林すすむ】 湾岸署刑事課盗犯係係長 警部補

すみれの上司で、いつも「恩田くん恩田くん恩田くん」と3回呼びかける彼の声は、耳にこびりついて離れない湾岸署の名物のひとつである。どことなく気の弱い中西が、すみれの剣幕に押されて何も言えなくなる……。『踊る』における一番の哀しき中間管理職は、実は彼なのかもしれない。でも、すみれの上司になれるなら、何を言われてもいいというファンも多いだろう。演じる小林すすむが、テレビシリーズの収録中に別の仕事で足を骨折したため、残念ながら大きな見せ場はなかったが、名脇役揃いの湾岸署の中でも、さらにいぶし銀のごとく光る、その存在を欠かすことのできないバイプレイヤーだ。

山下圭子【星野有香】 湾岸署交通課 巡査

出番そのものは決して多くはないが、要所要所に華を添える湾岸署のアイドル。警察のエリートとの見合い話をエサに署長から取り引きを持ちかけられるシーンでの変わり身の早さで、現代っ子ぶりをアピールしたくだりが印象に残る。演じる星野有香も『踊る』以後、ドラマにバラエティにと活躍を続け、ひそかな圭子マニアを増やしつつある。売れっ子になって、忙しさのために逆に「THE MOVIE」の出番が減ってしまったような感もあり、それはそれで残念だが。同じ婦警の葉子（星川なぎね）と妙子（児玉多恵子）の先輩として、お姉さんぶりを発揮する場面も見られるようになってきただけに、今後の成長ぶりが描かれることも実は期待したい。

島津捜査一課長【浜田晃】 警視庁刑事部捜査一課課長 警視正

室井や新城とは違い、ノンキャリアの叩き上げとしてここまで出世してきた苦労人。彼もまた、組織の中枢にいる責任と現場の刑事が感じる悲哀との板挟みにあう、中間管理職であることは間違いない。何か問題が起きた時に見せる厳しい態度と、その裏に垣間見える人間臭さは、とかく悪者になりがちな本庁側に、人間らしい血を通わせている貴重な存在である。演ずる浜田晃は、映画版の撮影中、かつて「新幹線大爆破」（75・東映）に出た時はまだペーペーの捜査員の役で、猛暑の中を延々と何度も走らされてフラフラになったというエピソードをスタッフに語っていた。「それが今や捜査一課長だもんなあ」と笑うその笑顔が眩しかった。

新城賢太郎【筧利夫】 警視庁刑事部捜査一課管理官 警視正

警察庁警備局に転出した室井のあとを受けて、『歳末SP』から警視庁の捜査一課にやってきた管理官。人呼んで「初号機よりパワーアップした室井二号」。所轄の刑事を組織のコマとしてしか見ていない冷酷な男で、青島と室井の関係を疎ましく思っている。執拗なまでに青島をいたぶる憎々しさを見せるものの、「実はそれはジェラシーなんじゃないのか」と思えてしまうほど、演ずる筧利夫の素顔は、熱く人間味あふれる好人物である。室井以上に湾岸署の人たちの輪から身を引いたポジションにいる彼は、辛辣な台詞ばかりを投げかけなければならないその役柄を、「本当は良い子なのに、どうしてくれる！」（本人談）と気にしているようだ。

Digitized by Google

事情聴取④ INTERVIEW RYOICHI KIMIZUKA Writer

君塚良一［脚本］

取材・構成＝進藤良彦・早川あゆみ

最後まで実験と冒険の精神で行こうと決めました「僕らが面白いと思うことをやろう」と

『踊る大捜査線』の脚本家・君塚良一氏は、映画監督を志した映画青年から、萩本欽一に弟子入りしての構成作家を経て、今やテレビ・ドラマ界を代表する売れっ子シナリオライターとなった。そんな君塚氏の映画に対する想いを伺ってみた。

高校生のころから映画にハマって、『キネ旬』も読んだりしていたんですが、高三くらいの時に、サム・ペキンパーの「わらの犬」に出会って、衝撃を受けたんですよ。ここにはテーマとアクションとエロティシズムがある。これにショックを受けて、「映画監督にならなきゃいかん」と思ったんです。それで、日大芸術学部の放送学科に入ったんですね。そうしたら、学生課の掲示板に東宝撮影所のスタジオ付きのアルバイト募集が貼ってあって、製作進行の助手だったんですけど、こりゃもう、こんなキャンパスにいる場合じゃないなと思って、すぐ応募したんです。

約2、3年やったんですけど、その間に市川崑監督の「病院坂の首縊りの家」とか、森谷司郎さんの「聖職の碑」、西村潔さんの「黄金のパートナー」、岡本喜八さんの「ブルークリスマス」とかにつきましたね。やっていたことは、お弁当配りとか、ロケに行ったときの交通整理とか、本当に使いっ走りです。今日はこっちの組、明日はまた別の組という感じで、当時から東宝はスタジオレンタルもしてましたから、CMの現場にもついたりとか。一本通してやるというスタッフじゃないんで、もちろんクレジットもされてませんけど、とにかく映画の現場に入れたんです。すごい楽しかったですよ。

こうして日本映画の現場を垣間見た君塚氏は、しかしその後、撮影現場のさらに奥に足を踏み入れていくことはせず、テレビの世界に進んでいった。映画監督を志していた氏が、その方向を変えたのは何が原因だったのだろうか。

そこでやっていたからってそのまま映画監督になれるとは思わなかったんですけど、かなり頑張ってやってたんですね。ただ正直、そのころすでに日本映画がどん底だったんですよ。作品数も少なくなっていたから、40歳くらいの方がまだ助監督をやっていてなかなか監督になれないという状況を見てしまったわけです。それに、どうも映画がメディアとして先頭に立って走っているという感じがしなかったんですね。それで、大学の卒業と同時にテレビの世界に入って行ったんです。大学の教授から「バイトしながら脚本のコンクールに応募するのもいいけど、何でもいいから業界に入っちゃった方がいいぞ」って言われたんですよ。それで、教授の知り合いだった萩本欽一さんを紹介してもらったんです。

萩本さんのところでは、もちろんお茶くみとかもやりましたけど、もともと萩本さんも映画が好きだったし、僕がドラマをやりたいと思っているのを知ってたので、弟子というよりもお金もらって「映画見てこい」って言われてましたね。当然仕事もないから、毎日映画見て、年間500本以上は見てました。『ぴあ』を広げても見る映画がなかった時がありましたからね。全部見ちゃっていたという（笑）。名画座もまだあったし、フィルムセンターまで行ってたんで。映画以外にも、「舞台を見ろ」とか「本を読め」とか言われて、もちろんそうしてました。

当時、萩本欽一は各局のゴールデンタイムにレギュラー番組を持ち、テレビの世界で一番忙しい男と呼ばれていた。彼はこうした番組を通して、多くの構成作家やタレントを育てている。

でも、「お前は遊んでろ」って言われて、書かせてくれなかったですね。「いつかドラマとバラエティが融合する不思議な時代が来るから」と言われて。事務所にいれば笑いも勉強できるし、夢とかやりたいことを忘れないようにして、今

1958年4月21日、東京生まれ、A型。日本大学芸術学部卒業後、萩本欽一に師事してバラエティ番組の構成などに携わる。その後、単発ドラマの脚本も手掛けるようになり、『心はロンリー気持ちは「…」』『世にも奇妙な物語』『季節はずれの海岸物語』などのシリーズで頭角を現していった。92年には初の連続ドラマ『ずっとあなたが好きだった』を執筆。これが大ヒットとなり"冬彦さんブーム"を巻き起こした。97年、映画「パラサイト・イヴ」の脚本を担当。ドラマの脚本作品には、ほかに『時をかける少女』『誰にも言えない』『ヘルプ！』『コーチ』『世界で一番パパが好き』などがある。

フィルモグラフィ

【TV】（主なドラマ）
※注記以外は単発ドラマ

1984
「心はロンリー、気持ちは「…」」

1985
「俺たちの熱い風」

1986
「心はロンリー、気持ちは「…」」II

1987
「心はロンリー、気持ちは「…」」III
「心はロンリー、気持ちは「…」」IV
「心はロンリー、気持ちは「…」」V
「心はロンリー、気持ちは「…」」VI
「半熟ウィドゥ！　未亡人は18才」

1988
「善化者～さんまのホンじゃたのンます～」
「心はロンリー、気持ちは「…」」VII
「悲しみがとまらない」

1989
「心はロンリー、気持ちは「…」」VIII
「心はロンリー、気持ちは「…」」IX

1991
「世にも奇妙な物語／さよなら6年2組」
「世にも奇妙な物語／モルモット」
「中森明菜・メロドラマ」
「世にも奇妙な物語／急患」
「ノーサイド」

Digitized by Google

は「とにかく映画を見なさい」と。若い時に見ておかないと、30になってから見たって何とも思わなくなるし、技術のことしか勉強できなくなるから、感覚的にスポンジみたいに吸収していきなさいということでした。そういう弟子でしたね。だから苦労とかしてないんですよ。

そんな中で、だんだん「欽ちゃんのどこまでやるの!?」とか、『欽ドン!良い子悪い子普通の子』とかに、少しずつ参加させてくれるようになったんですね。例えば『欽どこ』の中でミニドラマなんかがあって、そのベースになるホンを書くとか、ちょっとドラマっぽいコメディだった「OH!!階段家族」のプロットを考えたりとか。そんなことをしていくうちに、ドラマっぽいもので笑いの解る人ってことで、呼ばれるようになったんです。

君塚氏が初めてテレビ・ドラマの脚本を書くことになったのが、明石家さんまの企画・主演による『心はロンリー、気持ちは「…」』であった。この9月まで放送された『世界で一番パパが好き』に至るまで、長い付き合いともなるさんまとの出会いでもある。

さんまさんもすごい映画が好きな人で、ザッカー兄弟の「フライング・ハイ」をテレビでやりたいということだったんですね。あれはパニックものがベースになっていて、そこにギャグを入れていくという形でしたけど、日本のテレビで一番ベースになりやすいのは「恋愛もの」だろうということで、そこにギャグを入れていこうとしたんです。ところが脚本家に頓むと、そこに笑いを入れてシナリオをいじくられると、普通は怒るわけですよ。じゃあ、ドラマが書けて、そういうことをされても怒らないヤツはいないかということになって、「萩本欽一のところにドラマを目指しながらコントを書いてるヤツがいる」ということで、僕が呼ばれたんです。「とにかくお前は、いい恋愛ものを書いてくれ」と。「その代わり、全部ぶっ壊すけど」って言われて、ベースになる物語を書いていったんですね。それが、実質上の最初のドラマです。

以後、年1本から2本のペースで作られた『心はロンリー、気持ちは「…」』は、まさに萩本欽一が予見していたバラエティとドラマが融合した新しいスタイルのドラマだった。ここでテレビ・ドラマの方向性がひとつではなく、いろんな可能性があると感じたという君塚氏は、『世にも奇妙な物語』や『季節はずれの海岸物語』シリーズなどで、次第にその評価を高めていく。君塚氏はこのころも萩本欽一のもとでバラエティ番組を担当しつつ、ドラマの脚本を書いていた。

今でも萩本さんのところの作家事務所（パジャマ党）に入ってますから。『仮装大賞』の構成もやってますし、コマ劇場の時代劇も書いたりしてます。映画のシナリオも「欽ちゃんのシネマジャック」が最初ですね。僕の中では、カリスマ的な萩本欽一さんと出会ったことで、テレビが圧倒的に面白いと思うようになったんですよ。映画よりもテレビの方が「かっこいい」というくらいに。もちろん映画も好きで見てましたけど、テレビの視聴率を上げるにはどうしたらいいかということを、真剣に考えてました。バラエティは視聴率戦争の真っ只中ですからね。面白いか面白くないか、それだけですから。萩本さんはドラマを作るとか笑いを作るという言い方じゃなくて、「テレビを作っている」って言ってました。お前がドラマをやりたくても、映画をやりたくても、「とにかく若い時にテレビを一度やっておけ」と。例えば単純に視聴率がボンと出ちゃうことだとか、野球中継の裏で戦わなくてはならないことだとか、そこで視聴者にチョイスされるということを経験しておけということでしたね。

ただ、そのうちに萩本さんが、映画とか舞台の演出をやりたいと思うようになってテレビから離れていくのと同時に、日本のバラエティ番組がトーク中心の時代になっていったんですよ。そうすると、構成作家がホンを書いていく時代じゃなくなっちゃったんです。僕も一時期参加してたんですけど、『笑っていいとも!』なんかだと企画コーナーを考えるのが構成作家の重要な仕事なわけですよ。どんなクイズやゲームが面白いか、どんなキャスティングが面白いかという、アイディアマンなんですよね。僕はやっぱり、ものを書かないのはイコール作家じゃないという考え方なんです。それで、だんだんドラマの方にスライドしていったんですね。

こうして映画ではなく、テレビの世界に活路を見出した君塚氏が、初めて先発完投で連続ドラマの脚本を担当したのが、〝冬彦さんブーム〟で一躍社会現象にまでなった、92年の『ずっとあなたが好きだった』である。以後、君塚氏は次々とヒット・ドラマを手掛けていった。

いつか映画のクレジットに自分の名前が出たらいいなと思っていた時期もあったんですけど、今はそれよりもテレビが面白いんですよ。ドラマだけじゃなく、バラエティも含めて。今回の「踊る大捜査線 THE MOVIE」にしても、「映画だから…」という意識がそれほどないんですよ。まだ僕なんかは、テレビが面白いから、

でも、僕のドラマは映画っぽいと言われることがすごく多いんです。『ずっとあなたが好きだった』のパート2の『誰にも言えない』の時な

『季節はずれの海岸物語 91秋』
1992
『季節はずれの海岸物語 92冬』
『世にも奇妙な物語／逆転』
『ずっとあなたが好きだった』（連続）
1993
『あの日に帰りたい』（連続）
『誰にも言えない』（連続）
1994
『時をかける少女』（連続）
『青春の影』（連続）
『21歳の別離』
1995
『ヘルプ!!』（連続）
1996
『ナニワ金融道』
『世にも奇妙な物語／怪我』
『コーチ』（連続）
『ナニワ金融道・2』
1997
『踊る大捜査線』（連続）
『心はロンリー、気持ちは「…」』×
『南の国から'97』
『踊る大捜査線 歳末特別警戒スペシャル』
1998
『ナニワ金融道・3』
『世界で一番パパが好き』（連続）
『踊る大捜査線 秋の犯罪撲滅スペシャル』

注1
『ずっとあなたが好きだった』
92年7～9月／TBS

注2
『誰にも言えない』
93年7～9月／TBS
いずれも賀来千賀子、佐野史郎の主演で製作された連続ドラマ。佐野演じるマザコン夫・冬彦さんが大フームを巻き起こした『ずっと～』に続き、誰にも～…では、かつての恋人をストーキングする麻利夫さんを再び佐野が演じている。初めは明らかにされていなかった2作の意外な関係も話題を呼んだ。

Digitized by Google

んか、ずいぶん言われましたね。テレビ・ドラマじゃない、と。ショットとビジュアルの映画的ドラマだったんです。今で言うストーカーの話なんですけど、怪奇映画みたいに撮っているんですね。今見ると不思議ですけど、マンションという日常の空間なのに光の当たる方向が毎回違う。そういう演出なんですよ。「コーチ」なんかはある種のロードムービーで、本来テレビ・ドラマでは、第1話と第2話で全く場面転換するというのはあり得ないんですよ。それは何故かというと、予算が大変だからなんですね。あるいは『ナニワ金融道』だと、第1稿を書いた時に、プロデューサーに言われましたよ。「これはテレビ・ドラマじゃない」って。話が転がっていくのと、きっちりしたストーリーは認めるけれど、「これは映画のホンだ」と。もうちょっとゆるく作って、例えば人が悩んだら悩むシーンをちゃんと入れないと「説明がつかない」ということだったんですね。それで多分、僕のリズムが映画なんじゃないかなって思ったんです。古典から至る映画の流れとかリズムが体に染み込んじゃってるんですね。

そういうところを自分でも自覚しだしたところに、『踊る』ではすごい映画ファンの亀山プロデューサーと出会って、さらに本広君という映画マニアが加わった。これはもう、自分をさらけ出すしかなくて、3人に映画の共通言語ができちゃったんです。「『セブン』のあそこみたいなもの」とか、「『クリムゾン・タイド』だ、『七人の侍』だ」って、打ち合わせや脚本ミーティングはすべて映画なんです。僕はずっとテレビをやってきて、映画よりテレビの方が面白いと言いつつ、実はテレビ・ドラマ映画をやろうとしていた。映画ができる可能性をずっと探していた。本広君もきっとそうだったし、亀山さんもそうだったと思うんですよ。その3人がくっついちゃったもんだから、『踊る』って意外と映画なんです。僕らの中の「自分の好きな映画をやりたい」って思いの結晶が『踊る』なんですよね。

その『踊る』に前後して、君塚氏は初の長篇劇映画となった『パラサイト・イヴ』のシナリオを手掛けている。それはどういう経緯で生まれ、結果、君塚氏にどんな想いを残したのだろうか。

家庭の事情で半年間連続ドラマができなくなっちゃった時期があったんですよ。そうしたら、フジテレビの人が「あまり急がない仕事をやってくれませんか」って持ってきた企画が、『パラサイト・イヴ』と『ナニワ金融道』だったんです。「考えておいてくれませんか」という感じで。もともと『パラサイト・イヴ』の原作は、瀬名秀明さんがアメリカのホラー小説を目指して書いてるんですよね。あれをそのまま映画化するのは到底ムリなんですよ。ところが、僕らはちょっとハリウッドを目指しちゃったわけです。じゃあ、予算に関係なく準備稿を書いてみましょうということで、僕は最後の病院の前で自衛隊と警察のヘリが飛んでいて、イヴが睨むとヘリコプターが炎上して落ちるというシーンなんかを、どんどん書いたわけですよ。プロデューサーの方々は言葉もないわけです(笑)。「君塚さん、気持ちよく書かれましたね。ここがどこの国だか解るでしょ」って言われて、「はい、日本です」(笑)。「じゃ、一行ずつやっていきましょう」ってな具合で、どんどん削られていくわけです。

そこで、製作予算の範囲でやるためには、フジテレビ映画のブランドを使うしかないわけですよ。つまり、「愛」ってやつですね。愛によって助かるとか、愛によって解決するという形にするしかなくなっていくわけです。僕はそれでも2稿目、3稿目ではまだヘリコプター落としてましたけどね(笑)。プロデューサーの計算では、中学生と高校生の女の子は入ってくれる。ただ、この原作のファンとホラー映画のファンからは叩かれるかもしれない。実際そうでしたけど、中高生は、あれを見て泣いたという。まあ、「ホラー映画で泣かせてどうするんだ」っていうのもありますけどね。そこで解ったことは、「ハリウッドを目指しちゃいかん」ということで(笑)。身をもって解りました。

ただ、ずっと『世にも奇妙な物語』でコンビを組んでいた落合正幸を、何とか映画デビューさせてやりたかったんです。彼は僕が大学の時からの仲間で、『世にも奇妙』なんかは二人で自主映画を作るようにやってたんですよ。予算の問題とか、あの原作の映画化という意味ではうまくいかなかったかもしれないけど、落合の演出はすごく面白かったと思います。

そして、2本目の長篇映画となる『踊る大捜査線 THE MOVIE』も、君塚氏は『映画』ということを特に意識せず、テレビと同じスタンスで、テレビの延長線上として書いたという。

多分、『秋SP』と『THE MOVIE』の両方が映画だったとしても、両方がテレビだったとしても良かったでしょうね。ギャグの質って、実は映画とテレビでは違うんですけど、今回はあえてそれは考えなかった。「テレビのホンを書きますよ」と。それをフィルムで撮って、でっかいブラウン管で見てもらうというくらいの気持ちでした。亀山プロデューサーや本広監督には別な想いがあるんでしょうけどね。

【映画】

1993

『君』

製作：石原プロモーション　配給：東宝　4月17日公開

監督：萩本欽一

出演：渡哲也、田中美佐子

一本15分の短編を五本立てで上映し、一本あたり300円の料金を自己申告制で払うというユニークなスタイルの短編集「第一回欽ちゃんのシネマジャック」の中の一作。

ビデオ：ポニーキャニオン

1994

『第の光』

製作：石原プロモーション　配給：東宝　9月23日公開

監督：萩本欽一　共同脚本：萩本欽一、マキノノゾミ

出演：渡哲也、宮沢りえ、仲代達矢、関根勤

『やさしい嘘』

製作：石原プロモーション　配給：東宝　9月23日公開

監督：萩本欽一　原案：安部譲二

出演：柳葉敏郎、大塚寧々、大沢樹生、高品格、渡瀬恒彦

いずれも、前作と同様の方式で公開された「第2回欽ちゃんのシネマジャック」の中の作品

ビデオ：ポニーキャニオン

1997

『パラサイト・イヴ』

製作：フジテレビジョン＝角川書店　配給：東宝　2月1日公開

監督：落合正幸　原作：瀬名秀明

撮影：柴崎幸三　照明：吉門荘介　編集：深沢佳文　録音：山方浩　美術：柳川和央　音楽：久石譲

出演：三上博史、葉月里緒菜、中嶋朋子、別所哲也、稲垣吾郎、大村彩子、薬田久子、三谷昇、

Digitized by Google

それと僕は、映画をやる前に亀山さんや本広君に、どうしても東宝映画の「野獣狩り」という作品を見てもらいたかったんですよ。須川栄三監督の誘拐を題材にした85分の映画なんですけど、ビデオになってないんですね。伴淳三郎さんの老刑事と藤岡弘さんの若い刑事が、テロリストの誘拐犯を追っていく話なんですけど、間もタメもありゃしない。「何故テロリスト集団が犯罪を犯したか」とか、伴淳さんと藤岡さんは親子という設定なんですけど、その関係性とか、ほとんど1、2行しか書いてないような感じで、ひたすら話を転がしていくんですよね。でも、この中のアイディアがすごい。松山善三さんがシナリオを書いてるんですけど、たぶんあの方、ミステリー小説がお好きなんだと思うんですよ。とにかくいろんなアイディアが入ってるんです。必ずしも人物が深く描かれているわけじゃないのに、なんとなく話が転がっていって、犯罪の方法とかトリックを暴く方法でちょっと洒落たアイディアが入っている。演出もすごいんですよ。ビジュアル的なショックとかも、非常によくできた映画なんです。それを二十歳くらいの時に見ていて、そのショックだった感じを今回やりたかったんです。

今回、『踊る大捜査線』という作品に映画で初めて触れる観客がいるということは、どのように考えていたのだろうか。

本シリーズの時の第1話も、実はどういうことが起きていたのか、さっぱり解らなかったと思うんです。キャリアとノンキャリアとか、実はほとんど説明してないんですよ。機動捜査隊も、最初から「機捜」としか言ってないし。だけど、混沌として解らないけど、システムの中で何かが蠢いているというところに魅力があったのも確かなんですね。要するに軍隊ものなんですね。『ER』の面白さなんかも、実は軍隊ものに近いんですよ。人が蠢いているだけでは魅力がなくて、そこに階級とか担当とか分担があって、それに対して規律よく動いていることの気持ち良さというのが、人間の中にはあるんですね。それは多分、『踊る』の第1話もそうだったんです。その混沌とした感じを、あえて解りやすくしようとしないで、映画はより一層ざわめいている感じにしてみました。だから、人はいっぱい出ます。それが、「何がなんだか解らない」と言われるのか、そこに魅力を感じてもらえるのか、そこが勝負だと思うんですけどね。

人物をもっと整理すべきだというのは基本ですよ。だけど、僕らはもともと『踊る』を実験で始めたんで、最後の最後まで、「実験と冒険の精神で行こう」ということにしました。「解らない人がいてもいい。僕らが面白いと思うことをやろう」と。いろんな役職や階級の人がドーンと出てきたり、それで怖がられてたりする感じが、僕らは好きなんですよ。組織の中の一度も見たことがない人がドーンと出てくる、その「感じ」が。

ファンの間ではテレビシリーズのパート2を望む声も大きい。君塚氏自身は、『踊る』の今後をどのように考えているのだろうか。別のインタビューで君塚氏が発言したという『踊る大病院』など、「形を変えた『踊る』シリーズを」という話も浮上している。

（パート2という考えは）僕は、ないです。ただ、一応家族は抱えてますから、「やれ」と言われれば考えますけど（笑）。亀山さんは『踊る大空港』って言ってましたね。でも、それも「やるとしたら…」ということで、僕の中ではもうないです。『踊るナニナニ』って、世界観だけ持ってくるという形なら、あるとは思うんですけど。でも、それを具体的に考えていくと、出演者全員のスケジュールをまた押さえるというのは2年後3年後でも無理だろうし、誰かが抜けた時に、それを『踊る』というタイトルつけてやるというのもね。スケジュールのことで参加できないっていうと、それだけで寂しいと思うんですよ。つまり、またあるだろうなという気はしますけど、それは『踊る』のようなドラマということであって、それが『踊る』というタイトルのものになるかどうかは解らないですね。単純に言うと、僕も来年は違う連ドラを書くのが決まっていますから。もう2年近く『踊る大捜査線』につきあってるんで、ちょっと出尽くしちゃったかなとも思います。

最後に、観客のみなさんにメッセージをお願いしたところ、君塚氏は、「映画だからってお澄ましたりしていないので、肩に力を入れずに気楽にご覧下さい」と語った。しかし、『踊る大捜査線 THE MOVIE』という映画は、見終わったあとで肩に力を入れて応援したいという気にさせる作品であることは間違いない。作り手たちが「映画を意識せずに作った」と謳って口にする割には、この映画、やはり『踊る』シリーズの集大成として、しっかり「映画」しているのである。もちろん、テレビの持ち味を全く消すことなしに。そこに大きく貢献しているのが、君塚氏の脚本の完成度の高さであることは言うまでもないだろう。あとは、みなさんが直接その目で確認していただきたい。

（9月25日、東宝宣伝部にて）

注3
「コーチ」
96年7－9月／フジテレビ
浅野温子演じる都会で働くキャリアウーマンが、千葉の缶詰工場へ左遷され、そこの工場の人々とのふれあいによって、人間らしさを取り戻していく姿を描いている。『踊る』ほどではないが、登場人物は多種多彩で、それぞれを魅力的に描いているのが見事

注4
「ナニワ金融道」
96年2月／フジテレビ
青木雄二の同名人気コミックのドラマ化。原作は金融屋に転職した主人公・灰原の目を通して、人間の欲望が渦巻く大阪の街を生々しく描いているが、中居正広を主役に起用したドラマ版では、原作の持つアクの強さを前面に押し出さず、主人公の成長物語としてうまくまとめている

注5
「ER」
ベストセラー作家マイケル・クライトンとスティーヴン・スピルバーグが手を組んで製作したテレビ・ドラマ。ロスの病院を舞台にそこの医師と患者たちとの姿が描かれる。詳しくは本誌9月下旬号（No.1266）を参照

河東善建三、深水三章、渡辺いっけい、大杉漣、佐伯真話
古代より人間の細胞に寄生するミトコンドリア、イヴ・の人類への反乱を、最新のSFXを駆使して描いたバイオ・ホラー。日本ホラー大賞を受賞した鳴名秀明の同名ベストセラー小説の映画化
ビデオ：ポニーキャニオン

Digitized by Google

事情聴取⑤ INTERVIEW TORU HORIBE *Producer*

堀部 徹「プロデューサー」

取材・構成＝進藤良彦

僕がビデオで『踊る』を見た時に面白いと思った感じを劇場で初めて見る人にも味わってもらえたらいいなと思う

本広監督の映画デビュー作「7月7日、晴れ」の製作を担当したROBOTに、「踊る大捜査線 THE MOVIE」の話が来たのは第1回脚本打ち合わせの直前だった。『踊る大捜査線』を見たことがなかった堀部氏は、初めは「テレビ・ドラマの映画化」に何の面白みも感じていなかったという。

「テレビでやってりゃいいじゃん」とか思ってたんですよね。でも、それは別にしても本広監督とまたやるのは面白そうだなと思ったんですよ。それで、「ドラマ見てないんですけど」って亀山さんに言って、ちょうどビデオができたころだったんで、まとめて見せてもらったんです。そしたら、「あれー、面白いぞ、これ」と思ったんですね（笑）。企画も面白かったし脚本も面白かったし、本広監督がいろんなことを試してるのがまた面白くて。これはもしかしたら映画も面白くなるかなと思って、脚本打ち合わせに参加しました。

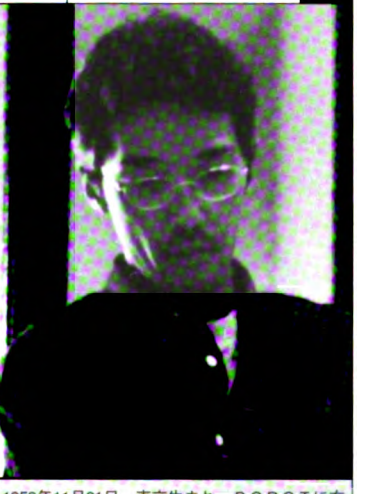
前に『キネ旬』のインタビュー（本誌8月下旬号から9月下旬号まで3回にわたって掲載）で亀山さんが、「ヒット作にしたいのか、賞を取りたいのか」と僕に聞かれたって言ってましたが、まさにあんなようなこと喋ったんですよ。『踊る大捜査線』って、すごいファンがいるじゃないですか。そのファンの期待を裏切らない形で『踊る』らしさがそのまま劇場にも持ってこれたらいいですよね。それプラス、ドラマを見たことのない人が初めて映画で見ても面白いと思える。このふたつを足すことができればヒットするでしょ。「そういうふうにしたいですか」と。それとも、今までのものは全部捨てても劇場でかける意味を別に見出して、社会派のドラマにしたりすることで、ドラマのファンを裏切っても新しいものにしたいのか。そういう意味で聞いたのが、「賞を取りたいんですか」ってことなんですよ。ただ、『砂の器』にしたいんですか」って亀山さんに言ったのは、俺じゃなくてフジの高井さん（プロデューサー補）なんだよね（注：事実確認を怠った取材者・進藤のミスでした）。

堀部氏個人としては、『踊る』のどのあたりに魅力を感じ、映画の方向をどこに向けようとしたのだろうか。

僕は『踊る』の前半の方が面白かったんですよ。例えば室井がキャリアの代表で、単純に言えば「悪い人」。青島が一般の観客の代表で、純粋な「いい人」。そういう対決の図式と、そこに本庁と所轄があって、それぞれの立場がはっきりしてたから、最初のころの方が面白かったんです。後半に行くにしたがって青島と室井が寄ってしまったりとかで、人間関係の緊張感がなくなったような気がしたんです。ファンの人たちは、もともとあった人間関係がどう変化していくかというところで楽しめると思うんですけど、変化した先で映画を作っちゃうと、そこで初めて見た人にとっては何のことだかさっぱり解らない。やっぱり、一度できあがった人間関係を擬似的に元に戻して、それぞれの立場を映画の中ではっきりさせた方がいいなと思ったんですよ。

あと、内容とは別に『踊る』にはかなりコアなファンがいる。インターネットでもすごく熱心なファンの人たちがいて、そういうコアな人たちだけのものに見えてほしくないというのがあったんですよね。テレビ・ドラマを見ていないと劇場で楽しめないんじゃないかというイメージができるのは、決してプラスではないわけです。そうなったらこっちも面白くないし、自分がビデオで見た時に本当に面白いと思った感じを、劇場で初めて見る人にも味わってもらえたらいいなと思いましたね。

「踊る大捜査線 THE MOVIE」のスタッフ



1959年11月21日、東京生まれ。ROBOTに在籍して、『アロンアルファ』、資生堂『ダンガリー』『スーパーマイルド』、UCC『パラダイスティー』、日産自動車『イチロ・ニッサン・キャンペーン』など、数多くのCM制作に携わる。岩井俊二の演出による日産『ルキノ』のCMをプロデュースしたのち、岩井監督による「Undo」「PICNIC」で映画製作も手がけるようになった。以後、CM、映画など多方面でプロデューサーとして活躍を続ける。本広監督とは「7月7日、晴れ」に続き、「踊る大捜査線 THE MOVIE」が2度目の顔合わせとなる。

フィルモグラフィ

【映画】

1994「Undo」
製作：フジテレビジョン＝ポニーキャニオン　配給：ヘラルド・エース　10月7日公開
監督・脚本：岩井俊二　撮影：篠田昇
出演：豊川悦司、山口智子、田口トモロヲ
ビデオ：ポニーキャニオン

1996「PICNIC」
製作：フジテレビジョン＝ポニーキャニオン　配給：エースピクチャーズ＝日本ヘラルド映画　96年6月15日公開
監督・脚本：岩井俊二　撮影：篠田昇
出演：浅野忠信、Chara、橋爪こういち、鈴木慶一、伊藤かずえ、六平直政
ビデオ：ポニーキャニオン

「7月7日、晴れ」
（データは本広監督のページを参照）

Digitized by Google

はテレビからのスタッフを中心にしながら、撮影、照明、録音などフィルムに定着させるための技術スタッフの要所は、映画の人たちによって占められている。特に現場スタッフの中心的存在であるカメラマンの選択には気を使ったのではないだろうか。

本広監督のカメラワークってやたら画が動くし、いろんな方向から芝居を押さえて編集でテンポを出していくという、フィルムでやると非常に手間のかかることをやってるわけですね。でも、それを変えちゃうと「踊る」らしくない。しかも、実はその奥に役者さんのちゃんとしたお芝居というものがあるわけですよね。そうすると芝居が解る人で、なおかつカメラワークがうまい人を探さなくちゃいけなかったんですよ。それで、ウチ（ROBOT）の安藤（プロデューサー）が片っ端からビデオを見まくって、2か月くらいしてから「いい人を見つけました」って、「陽炎2」と「七人のおたく」を持ってきたんですよ。それが藤石さんです。僕は「七人のおたく」を先に見て、藤石さんがエンターテインメントとして映画を面白く見せるためにカメラがどう動けばいいかというようなことを、いろんなことで試そうとしている姿勢が気に入ったんですね。物理的な限界もあったでしょうから、そこで全部が藤石さんの思い通りにはなってないんでしょうけど、僕はもうそれだけでじゅうぶんで、安藤オススメの「陽炎2」を見ずに決めちゃいました。

藤石さんも「踊る大捜査線」のビデオを一気に見て、「面白い、やりたい」と即決したという。「実景はなるべく光のいい条件で撮ってくれ」という要求にも、決して恵まれているとは言えない状況の中で、じゅうぶんすぎるほど粘って、いい画を撮ってくれたと、堀部氏は藤石カメラマンを高く評価する。その一方で、テレビ・ドラマのスタッフの優秀さにも驚いたそうだ。

スタッフがみんな映画好きなんですよね。テレビ・ドラマをやりながら、いろんなことを研究している。映画をやるための準備をいつもしてるのかしらというくらいに（笑）。映画やりたいんですかね、みんな。テレビ・ドラマってどんどん撮っていかなきゃならないし、経験もたくさん積んでいるから、彼らは非常に優秀でしたね。「踊る」って、助監督たちが作っている部分もすごく多くて、それが魅力にもなっていたりするじゃないですか。映画でもちゃんとやってくれてるし、安心して見ていられるという感じでした。

今までは演出部や制作部は、映画を経験していないとできないと思ってたんですが、全然そんなことはなかった。チーフ助監督の羽住君が映画は初めてだっていうから、「大丈夫かしら」って実は心配してたの。でも「そんなこと思って申し訳ない！」というくらい優秀だった。藤石さんに言わせると、「あんな優秀なヤツは映画界でもなかなかいない」と。もちろん、他の助監督たちも優秀だったけど、今回の映画も彼らに支えられてるところは大きいですね。

最後に、いよいよ完成に向かいつつある「踊る大捜査線 THE MOVIE」の手応えはどうなのか、堀部氏にお伺いした。

見た人が面白いと思うかどうかは、アイディアの数の差だと思うんですよ。映画にしろドラマにしろ、これだけいろんなものが作られてるから、必ずネタとしては過去にあったものなわけです。じゃあ、新しく作ったものの何が面白いかというと、見たこともないアイディアがどれだけ映画の中に入っているかということなんです。それはもしかしたら、見たこともない風景かもしれないし、聞いたこともない音楽かもしれないし、聞いたこともない台詞かもしれない。そのアイディアが新鮮であれば、ネタは同じであっても楽しめる。「踊る」のスタッフはみんな、どんどんアイディアを出すんですよ。みんながアイディアを出して、本広監督がそれをうまいこと採用する。脚本で書かれているような大きなアイディアから、すごく小さなアイディアまで、いろんなところに散りばめられていて、それを役者さんがきちんとしたお芝居で支える。アイディア盛りだくさんなところが面白いですね。

僕らにしてみれば、映画から参加してるというのは、そこにすごいプレッシャーがあるわけですよ。「テレビ・ドラマであんなに面白かったのに、映画になったら思ったほどじゃない」って言われちゃったら、「じゃあ、誰が悪いのか」っていうと、映画から参加した僕たちのせいだってことになっちゃうじゃない（笑）。それを心配してたんだけど、ファンの人たちに対しても「面白いのできたよ」って言えそうですね。

1回目に見て面白いと思ったところと、2回目に見て思うところが多分違うと思うんですよ。それで、2回目が一番面白いかもしれないけど、3回目はその面白さとまた違う面白さがある。だから、それぞれ違うお友達を誘って、3回くらい見に行くといいですよ。「騙されたと思って一緒に来いよ」って連れていったら、「ほら、面白かったろ」って、きっと相手に自慢できますよ。

（10月2日、日活撮影所スタジオセンターにて）

1997

「パラサイト・イヴ」

（データは岩塚氏のヘーンを参照）

「テポラがライバル」

製作：フジテレビジョン＋東映　配給：東映　8月9日公開

監督：松浦雅子　原作：多田かおる

脚本：伴一彦　撮影：伊藤昭裕

出演：吉川ひなの、谷亭貴介、松岡俊介、篠原ともえ、長谷川理恵

ヒテオ：ポニーキャニオン

ROBOT

ジャンルを越えて良質なソフトを供給することを目指し、CM制作業務からスタートした会社。当時、深夜トラマで頭角を現していた岩井俊二の演出で日産の「ルキノ」のCMを制作したのをきっかけに、岩井から映画のプロデュースをしてほしいという話を持ちかけられ、94年、「Undo」「PICNIC」の2本で映画製作に乗り出した。翌95年には、やはり岩井監督の「Love Letter」をプロデュースし、映画界でも脚光を浴びる存在となった。以後も、「7月7日、晴れ」「パラサイト・イヴ」「テポラがライバル」などの作品を送りだすほか、当初の目標通り、CM・映画だけではなく、インターネット事業、グラフィック部門など、あらゆる媒体での良質なソフト作りを続けている。今年初頭、大ヒットとなった映画「リング」「らせん」のポスターを手掛けたのもROBOTである。堀部氏によれば、今後もROBOTでは少なくとも年に1本は映画を撮り続けて行く方針であるという。

ROBOTホームページ

http://www.robot.co.jp/

Digitized by Google

事情聴取⑥ INTERVIEW AKIHIKO MATSUMOTO *Music*

松本晃彦［音楽］

取材・構成＝進藤良彦

――『踊る大捜査線』の音楽を担当するきっかけは、どういうことだったんですか。

僕はもともと映画音楽とか映像の音楽よりも、普通の歌手の方のプロデュースだとか、キーボード・プレイヤーという形でミュージシャンとしてやってきたんです。ドラマのエンディング・テーマなんかも手掛けたことはあるんですが、別にそれが中心ということではなかったんですね。実は織田裕二君がデビューした直後くらいから、もう10年くらい彼の音楽的な部分にずっと関わってきていて、ちょうど織田君のアルバムのプロデュースをやった時に、結局エンディング・テーマにもなった『Love Somebody』を僕がプロデュースしたんですよ。その流れで、ドラマのサウンドトラックもやってくれないかというお話があったんです。普通のテレビ・ドラマのサウンドトラックという形に捕らわれない、ポップなものを出せたらいいなと思いまして、お引き受けしました。

――『踊る』をやられたことで、ほかのドラマなんかから、音楽の依頼というのはなかったんですか。

ないわけではないんですが、もともと軸足を音楽業界に置いているので、スケジュール的な問題で限界があるんですよね。面白い企画があれば、いろいろやってみたいですけど。『踊る』の時はちょっとしか使われなかったものから日の目を見なかったものまで考えると200バージョンくらい作りましたから、そういうペースでやっていくと、ドラマの音楽ってそうそう頻繁にはできないですよ。映像に対して音楽をつけるのは楽しいんですけど、このシリーズじゃなければこういう音楽もつけられないかなという気持ちもあります。

――今回は映画ということで、特に音楽を作っていく上で違いを意識したということはありますか。

そうですね、一般的に映画音楽の場合はどのシーンに使うかということを前もって決め打ちでつくるじゃないですか。テレビシリーズの場合には、同じ曲をそのまま別のシーンにつけなきゃいけないから、編集しやすいようにサイズを作るというのがありますよね。映画だと完全にシーンの構成に合わせて音の厚みとか楽器の量を計算して音楽をつけていくことが多いので、今回はそういうことにも挑戦しています。

実は公開は後になるんですが、『踊る』の前にもう一本映画音楽をやってまして、そっちの方は完全に場面の進行に合わせて音楽をつけていってます。澤田謙也さんと高嶋政伸さんが出演している「ホーク」（99年春、日本公開予定）という香港映画なんですけど、「5分に一回、人が死ぬ」みたいなアクションです。

――映画のサウンドトラック盤として、『踊る』の三枚目になるアルバムが発売になるという話もお聞きしましたが。

テレビシリーズが終わった後のスペシャルで使われた楽曲にも評判のいいのがあるので、そこら辺をまとめて『サウンドトラックⅢ』に収録しようと、今、作成中です。当然「THE MOVIE」用の音楽も入ってきますけど、映画のサントラ盤という解りやすいものにはならなくて、またちょっと遊び心が入ってくるんじゃないでしょうか。今までの曲のバージョン違いとか、新たに生まれ変わっている曲も作ります。

映画はサラウンドなんで、今まで出た二枚に入ってる曲も作り直さないといけないんですよ。それで、サントラの方になると、映画用に作ったサラウンドの曲は、CDにする時にはまた作り直すことになるんですね。だから、スケジュール的にはかなりキツいです。

――映画には新たに「小泉さんのテーマ」みたいなものも出てくるんじゃないですか。

はい、出てきますね。今まさに作ってる途中なんですけど、ただ怖い曲でも彼女の感じは出ないと思うし、逆に普通の曲もつけられないかなという感じです。綺麗な部分もちょっと作りながら、気持ち悪い音も入れるというようなセンで考えてまして、女性の綺麗な聖歌隊のような声を入れて、それに合わせて「エクソシスト」のような鐘の音のアルペジオみたいなものが入ってたりとか、綺麗な曲にちょっと怖い音を入れていったら面白いんじゃないかって思ってます。もしかしたら、作品になっている時には違うことになっているかもしれませんけど（笑）、それは気が変わったんだなと思って下さい。

――映画のエンディング・テーマは、『Love Somebody』のシネマ・バージョンですね。

はい。それはもう出来上がってます。亀山プロデューサーからの発案で、ゴスペル調のアレンジで行こうということになりまして、ロンドンとロサンゼルスに行ってレコーディングしてきました。ゴスペル・ミュージシャンの黒人のコーラスの人たちを呼んで、澤田さんが監督したプロモーション・ビデオも同時に撮影してます。その曲が映画のラストで流れる予定です。

（9月1日、松本氏の所属事務所にて）

1963年2月14日、東京生まれ。叔父であるサックス奏者・松本英彦の影響もあり、3才にして音楽に目覚める。84年、大学在学中に“ショコラータ”を結成しプロデビュー。その後、スタジオ・ミュージシャンや作曲家、アレンジャーとして、数多くのアーティストのレコーディングやライブに参加する。主な参加作品に、KAN『NO-NO-YESMAN』、小泉今日子『BEAT POP』、サザンオールスターズ『サザンオールスターズ』、福山雅治『GOOD NIGHT』、内田有紀『純情可憐乙女模様』、CHAGE & ASKA『CODE NAME2-SISTER MOON』などがあり、近年はレコード・プロデュースのほか、映画・ドラマのサウンドトラックも積極的に手掛けている。

Digitized by Google

関連グッズ紹介

CD

踊る大捜査線 オリジナル・サウンドトラック

RHYTHM AND POLICE
ORIGINAL SOUND TRACK
PHCL-5059　3,059円（税込）

踊る大捜査線 オリジナル・サウンドトラックII

RHYTHM AND POLICE
ORIGINAL SOUND TRACK II SOUND FILE
PHCL-5066　3,059円（税込）

踊る大捜査線 オリジナル・サウンドトラックIII

RHYTHM AND POLICE
ORIGINAL SOUND TRACK III / THE MOVIE
PHCL-5106　3,059円（税込）　10/28発売

以上、すべて
マーキュリー・ミュージックエンタテインメント
より発売。

BOOK

『踊る大捜査線』湾岸警察署事件簿

君塚良一氏によるテレビシリーズ全11話＋スペシャル2本の脚本を完全収録。さらに君塚氏による全話解説、用語やリンクするシーン、小道具、ゲストキャラクターなどについても詳細に追ったシナリオガイドブック。　小社刊　2500円（税込）　発売中

『踊る大捜査線』ノベライゼーション

テレビシリーズを、君塚氏の脚本を基に小説化。　扶桑社刊　1325円（税込）　発売中

『踊る大捜査線』THE MAGAZINE

『踊る』ワールドに様々な角度から迫ったガイドブック。『TVぴあ』に連載されていた『踊る湾岸署タイムス』も完全収録。

ぴあ刊　1260円（税込）　発売中

なお扶桑社より、『歳末SP』『番外編』『秋SP』を収録したノベライゼーションと、よりディープに迫った研究本も発売される予定。

VIDEO

テレビシリーズ

第1巻　PCVC−30608　9800円（税抜）
第1話・第2話・第3話　収録（164分）

第2巻　PCVC−30609　9800円（税抜）
第4話・第5話・第6話　収録（141分）

第3巻　PCVC−30610　9800円（税抜）
第7話・第8話・第9話　収録（141分）

第4巻　PCVC−30611　9800円（税抜）
第10話・最終話
第12話　港区台場レインボーブリッジ付近会社役員絞殺凶悪殺人事件
NG傑作選　収録（119分）
※第4巻の巻末には第12話としてNG集が収録されている

スペシャル

歳末特別警戒スペシャル　完全版
PCVC−30684　12000円（税抜）（120分）
テレビでは放映されなかったシーンに加え、編集・音楽にも手が加えられたディレクターズ・カット版。

番外編　湾岸署婦警物語
PCVC−30726　12000円（税抜）（95分）

秋の犯罪撲滅スペシャル
12000円（税抜）　11月18日発売（予定）

以上、すべてポニーキャニオンより発売。

「踊る大捜査線 THE MOVIE」　予告編60秒バージョン

○湾岸署・表
T「湾岸署史上」
T「最」
○室井の横顔
T「悪」
○何かを見つめる和久
T「の」
○島津、新城ら本庁の捜査員たち
T「3」
画面を見つめるすみれ、中西ら
T「日」
○真奈美（小泉今日子）の顔
T「間」
青島の横顔
T「最悪の3日間」　F.O.
T「一日目　THE FIRST DAY」

身代金奪取誘拐無戒
仮釈減給司法解剖名
想水罪特捜本部奇ら
殺死体民領収書盗致
人逆探知警視福総監

池神の声「一時間前に副総監が何者かにら殺されました」
M「危機一髪」
走る覆面車
湾岸署の前に殺到する黒塗りの車
池神の声「一回目の電話があり、副社長は預かる」
会議室の電話
何かの波形を示したモニター
トアを開けて中の様子を伺う青島、すみれ、真下
「副総監誘拐事件特別捜査本部」の表札を貼る葉子と妙子
それを見ている署長、副署長、梅田
レインボーブリッジ
警官隊と押し寄せる報道陣の群れ
「仮想殺人事件ファイル」のホームページ
モニターを見つめる雪乃、真下、青島
雪乃「被害者の男性、ほかのみんなで殺して遊べてたんです」
フラッシュを焚く報道陣
記者会見の会場
中西の声「窃盗事件」
警視庁の大階段を駆け降りる報道陣
真上から見た階段と駆け降りる報道陣
窃盗犯を連れてきたすみれ
すみれ「現場どこですか？」
刑事課の青島
青島「ここ」
振り返るすみれ
T「二日目　THE SECOND DAY」

応援要請受身鍵声会
公衆注視官公安殺え
電話判断線不単独た
参入電内定法捜入ね
事官職質接放健康？

多重無線車の中の室井、新城、島津
新城「公衆電話に入電！」
公衆電話をとる女性捜査員
池神の声「捜査員は現場を離れろ！」
警察庁の円形会議室
湾岸署会議室の室井、新城
新城「なんで刑事がいるんだ！」
公衆電話の前で振り返る和久
棒のようなもので殴りつける男
パソコン通信の画面に「Teddy　会えたね」の文字
振り向く雪乃の向こうに真奈美
会議室の青島
青島の声「なんで上の情報、おれたちに降りてこないんですか？」
苦悩する室井
室井を囲む青島、すみれ、真下
青島「室井さん……」
T「三日目　THE THIRD DAY」

手術黒焼却通信販
報被塗り命二孫さ買
道疑者限令検問よ命
協敬礼界指揮権な確
定公開捜査雑魔ら保

女の声「キャー、誰か来て！」
拳銃を持って湾岸署の廊下に現れた真奈美
その手にくまのぬいぐるみと血のついたメス
青奈美の声「オッハハハ」
拳銃をこめかみに当てた真奈美の向こうに青島
青島「よせ！」
○真奈美を取り囲む湾岸署の署員たち
出動するSIT
池神の声「そこで待機だ、本庁の捜査員が行くまで待て！」
室井の横顔
ビルの屋上から下を監視する警視庁の捜査員
当たりを見回す青島
驚く真下
青島の声「雪乃さん！」
魚住
倒れている雪乃に駆け寄る青島
会議室の池神
池神「本庁が行くまで待ってろ！」
無線を手にした青島
青島「事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ！」
カッと目を見開く室井
M「Rhythm And Police」
地下室にやってくる青島とすみれ
不敵な笑みを浮かべる真奈美
ガムテープで縛ぐつわをされ縛られている和久
団地に向かって走る青島
団地の廊下をやってくる室井と捜査員たち
団地に終結するパトカー
何かのリストの中に「坂下始」の名前と「一件誠当」の文字
画面を見ている青島
扉を開けて中に飛び込む青島とすみれ
土手の草むらに集まってくる捜査員たち
出動する捜査員たちの足
走りだす覆面車
狭い室内にいる男たちと青島、すみれ　突然、青島の背後から女
驚愕の表情の青島、見つめるすみれ
倒れ込む青島
和久の声「青島ー！」
T「踊る大捜査線 THE MOVIE」
NA「踊る大捜査線 THE MOVIE」
T「最悪はここに潜んでいた」
すみれの声「青島くーん！」
「10・31［SAT］ROADSHOW」

『踊る大捜査線』公式ホームページ　http://www.odoru.com

踊る大捜査線

テレビシリーズ&スペシャル

ストーリーダイジェスト

Text by Ayumi Hayakawa

第1話 サラリーマン刑事と最初の難事件

演出　本広克行

脱サラして刑事になった青島俊作（織田裕二）29歳。お台場にできた「警視庁湾岸警察署」刑事課に配属され、意気揚々と出勤した。

だが彼を出迎えたのは、殺人事件の報にも動じずに取り調べを続ける盗犯係の恩田すみれ（深津絵里）。現場でも機動捜査隊から邪魔者扱いされる。捜査一課のエリート管理官・室井（柳葉敏郎）が臨場してきたが、先輩刑事・和久（いかりや長介）に現場から連れ出されてしまった。

接待ゴルフに余念がない課長の袴田（小野武彦）、健康診断にこだわる係長・魚住（佐戸井けん太）。第一方面本部長の息子で自らもキャリアの真下（ユースケ・サンタマリア）は昇任試験の勉強に夢中だ。署長（北村総一朗）や副署長（斉藤暁）までが、どこかとぼけている気がする。およそ「警察」らしくない署内の様子に、青島はすっかり意気消沈してしまった。

しかも、特捜本部での初仕事は室井の運転手だ。重要な事件は警視庁＝本店が担当して、所轄署＝支店はその補佐しかできないという、警察組織の現実を目の当たりにする。室井が行った被害者の娘・柏木雪乃（水野美紀）への非人間的な事情聴取にも違和感を覚えるばかりで、青島は思わず、職質で引っ張られてきた営業マンの田中（近藤芳正）に「刑事もサラリーマンと変わらないよ」と愚痴り、逆に励まされてしまうのだった。

ところが、自首してきた殺人事件の犯人はこの田中だった。署のロビーで偶然すれ違った田中に青島は言う。「君も刑事になれば良かったのに」。刑事の仕事に新しい何かを見つけた青島だった。

第2話 愛と復讐の宅配便

演出　本広克行

警官殺しの犯人・山部（伊藤俊人）が、和久を狙った可能性があるという。和久はかつて取り調べの際に山部に暴力をふるったことがあったのだ。島津（浜田晃）と共に湾岸署を訪れた室井は、警官は山部の復讐で殺されたのだと苦い顔で語った。

和久宛に健康チェアが届けられた。さっそく和久が座ってみるが、どうも様子がおかしい。青島が調べてみると、なんとこの椅子、和久が立ち上がると爆発するよう爆弾が仕掛けられていた！　蜘蛛の子を散らすように逃げ出す湾岸署メンバー。刑事課に残ったのは和久と青島、そしてすみれだけだ。

室井からの電話で、椅子は山部の復讐だと知った青島だったが、自らも細工のワイヤーに触れてしまい、身動きできないハメに。室井は何とか山部を説得して起爆装置を無力化しようとするが、山部は冷笑するばかりだ。警官殺しは許せないと説得に協力しない和久、あくまでも今夜レストランに行くのだと言い張るすみれ。「刑事は恨まれてナンボ」というすみれの言葉に、今朝方の犯人（篠原涼子）に恨まれた事を思い出す青島だったが、「犯人を恨むな」と和久に諭されるのだった。

ようやく到着した爆発物処理班によって、やっと爆弾椅子から解放された和久と青島。あくまで紳士的だった室井の態度に「あなたには復讐しません」と言い置いて、山部は連れ去られた。

第3話 消された調書と彼女の事件

演出　澤田鎌作

青島らが勝どき署の刑事（桜金造）と縄張り争いでもめていた頃、すみれはひったくりの捜査をしていた。だが犯人は政府高官（清水章吾）の息子・哲也（橋龍吾）で、捜査中止の圧力がかかる。過去にももみ消し工作が施されていたのだ。怒ったすみれは目撃者の婦警・圭子（星野有香）と青島を道連れに、留置所に立てこもってしまう。

自身が昔ストーカーまがいのひったくりにあった経験から、男の暴力は絶対に許さないと頑ななすみれ。署長らの必死の説得と懐柔にも応じそうにない。困惑する湾岸署メンバーの前に現れたのは、上層部からもみ消しの政治工作を依頼された室井だった。

マスコミに情報を流さないなら、哲也の事情聴取をしてもよいと申し出る室井。青島はそんな室井に「警

キャリアとノンキャリ

室井は官僚である。国家公務員I種試験に合格して警察庁に入った「キャリア」と呼ばれる彼らは、国の組織である「警察庁」と、東京都警察本部「警視庁」、各道府県を管轄する「県警本部」などを2〜3年ごとに異動して、最終的には警察庁長官なり警視総監なりになる人材だ。だが、トップに立てるのは20人程度の同期からたったひとり。出世コースに外れた者から退官していくという、厳しい現実もある。

しかし、地方公務員試験に受かって警官になった青島たち「ノンキャリア」の階級が、「巡査→巡査部長→警部補→警部→警視→警視正→警視長→警視監→警視総監」のうちの最下層「巡査」からなのに対して、キャリアは最初から3番目の「警部補」。ノンキャリが昇任試験を受けなくては上がれないのに、キャリアは無試験。20代後半で警視になり地方警察の署長を勤めるキャリアも少なくないのに、一生巡査のまま終わるノンキャリもいるのだ。

とにかく、入った時から特別扱いされ、所轄署に配属されても「大事な預かりもの」として現場の第一線にほとんど出ないのが普通とか。銃創はあるわ、何年も湾岸署にいるわの真下は、いろんな意味で特別なのだろう。

ちなみに、物語中、真下が昇任試験にあくせくしている描写があるが、これはドラマ的嘘。でも、それまでマイナスイメージにしか使われてなかった「試験勉強」の意味を見事に逆転させてプラスの切り札に使った、警部任命証を一倉に見せるエピソード（第7話）には、脚本と構成の底力を見せつけられた。こういう出来のいい「仕掛け」のための嘘なら大歓迎である。

Digitized by Google

察は会社じゃないでしょ！」と叫ぶしかも、呼び出された哲也にはまったく反省の色がなかった。忸怩たる思いのすみれ。思わず哲也につかみかかり、怒りをぶつける青島。だが、弁護士（真実一路）に責められる青島を庇ったのは、政治工作をするはずだった、当の室井自身だった。

「絶対上にいってやる」。呟きながら去る室井の後ろ姿を、笑みで見送る青島だった。

第4話 少女の涙と刑事のプライド

演出　澤田鎌作

室井からの要請により、捜査一課にかり出された青島。連続強盗傷害事件の被疑者・大木（井上慎一郎）が管内に潜伏しているという。益本（中根徹）ら一課の刑事に無視された青島は仕方なく単独でクラブの張り込みに赴くが、スリを捕まえようと警察手帳を出したすみれに気づかれ、大木に逃げられてしまう。

室井は、周囲の猛反対を押し切ってまで、再度の大木逮捕のチャンスにも青島を外そうとしなかった。青島の言葉に感銘を受けた室井は、彼を自分の部下にしたいと考えていたのだ。万全の体制でクラブに張り込む捜査員たちに、無線で指示を出す室井。読み通り大木は現れるのだが、ちょうどその頃、青島の目の前では、女の子が暴力を受けていた。室井からの制止と、すがるような少女の目との間で葛藤する青島。が、最終的に青島が選んだのは、大木の逮捕よりも苦しむ少女を助けることだった。

命令違反を責める室井に警察手帳と手錠をたたきつけてきびすを返した青島。だが、その目の前には、大木を捕らえた和久ら湾岸署メンバーの姿があった。

第5話 彼女の悲鳴が聞こえない

演出　本広克行

すみれが帰り道で襲われた。犯人はかつて彼女がひったくりで逮捕した野口（伊集院光）だ。幸いにも軽傷で済んだすみれだったが、今度は野口からビデオテープが届く。すみれをアニメのキャラクター「ピンクサファイア」と混同している野口からのメッセージは、すみれの部屋で撮られたものだった。野口は復讐を企てているだけではなく、悪質なストーカーだったのだ。

同じ頃、似た手口の犯罪が2件起きていた。本庁の室井のもとに捜査本部が設置され、青島たち所轄は実質的な捜査からはずされることになってしまう。だが、真下がインターネットで見つけたアニメオタクが野口だと見当をつけた青島は、すみれを囮に男を誘い出す計画を立てた。かつて野口の事件で婚約を解消していたすみれの心の傷を癒そうと、すみれ自身に野口を逮捕させようとしたのだ。

指定の地下駐車場に乗り込んだすみれと青島。だが、青島が目を離した隙に、すみれは再度野口に襲われてしまう。ナイフをかざす野口に飛びかかる青島。間一髪のところで捜査員を引き連れた室井が駆けつけ、かろうじて野口を逮捕することが出来た。

第6話 張り込み 彼女の愛と真実

演出　澤田鎌作

一日署長のタレント（篠原ともえ）に署内がすっかり浮かれている中、青島と和久は生活安全課の篠木（谷村好一）と八木（宇梶剛士）への協力で麻薬密売人の張り込みをすることになった。隣のおばさん（石井トミコ）に邪魔されながらも初めての張り込みにはりきる青島だったが、対象の部屋に現れたのはなんと柏木雪乃。ロス留学中に大麻パーティに参加したこともあるというのだ。和久には被害者に必要以上にのめり込むなと諭されるし、ヘリで会いに来た室井などは雪乃を覚えてもいない有様で、青島の心境は複雑だった。

彼女あてに届いた小包の中から大麻樹脂が発見されたため、署に連行される雪乃。だが、調整役の室井と共に麻薬対策管理官・一倉（小木茂光）が乗り込んできて、雪乃の身柄を本庁に引き取るという。雪乃は、一倉が追っている大物売人・岩瀬（布川敏和）と、ロス時代に恋人同士だったのだ。

麻薬のことなど何も知らなかったという雪乃を信じた青島は、わざと雪乃を怒らせて公務執行妨害で逮捕し、48時間だけ湾岸署に拘留できるようにしてしまった。この間に岩瀬を挙げれば、雪乃は本庁に連行されずにすむのだ。

第7話 タイムリミットは48時間

演出　本広克行

物量作戦でローラーをかける本庁に対抗するには、別な手段を講じなければならない。和久が青島をひきあわせたのは、六本木の顔役「もぐら」こと龍村（真木蔵人）だった。彼の情報から厚生省の大河内（浅野和之）の動きを知った青島は、和久の旧知だった大河内から岩瀬の恋人リストを入手した。

だが、彼女らは軒並み本店が挙げた後。手詰まりの青島に、留置所の雪乃は墨田綾子（佐伯伽耶）の名前を伝える。

翌日、持ち前の演技力と要領のよさで営業マンになりすました青島は、墨田の会社に潜入して接触に成功、彼女をひっかけて岩瀬の居所を探り出した。

一方湾岸署では、警部に昇任した

本店＝警視庁 支店＝所轄署

割り当てられた地域で起こった事件を担当するのが「所轄署」。青島が配属された「湾岸署」も、警視庁の第一方面本部管轄下の所轄署だ。あちこちの交番や交通違反を摘発する交通課などが、庶民生活に密着した仕事をしている。こそ泥の逮捕や酔っぱらいの保護なども所轄署の仕事で、普通に想像するいわゆる「警察」だ。

ところが、殺人や強盗などの大きな事件になると、所轄に出番はあまりない。現場の初期捜査は24時間体制でスタンバイしてる機動捜査隊（機捜）が担当、実際の捜査も各都道府県警察本部（東京都だと警視庁）の刑事が行う。特別捜査本部こそ所轄署の会議室に置かれるが、そこで所轄の刑事の出来ることといえばお茶くみや道案内、運転手がせいぜい。「踊る」の中では、警務課が資料を配ったり（歳末SP）、交通課の婦警が食事を作ったり（番外編）と、まさに使いっぱしりだ。それだけ、本庁と所轄の刑事には差がある。なにせ、本庁の刑事は捜査のプロ、ノンキャリ中のエリート。室井が青島を呼ぼうとした（第4話）ことでもわかるように、所轄の刑事の中からこれぞという人材が選ばれてなるものなのだ。

それらを皮肉って、「踊る」世界では所轄署を「支店」、本庁を「本店」と呼ぶ。実際にもそう呼ぶ場合があるとか。刑事も普通の人間なのだ。

ちなみに、テレビシリーズの時の室井の役職である「管理官」ノンキャリである本庁の刑事を束ねる役職だから、キャリアがなることは少ないという。出世のスピードといい、現場を知ろうとする姿勢といい彼はかなり異例のキャリアである。

Digitized by Google

真下やすみれらの協力のもと、時間稼ぎのための雪乃への事情聴取が行われていた。今まさに一倉が雪乃を連行しようとしたその時、ボロボロの青島と和久が岩瀬を連行してくる。ギリギリで拘留期限に間に合ったのだ。一倉は岩瀬を逮捕、室井のとりなしもあって、無事に雪乃は釈放された。

「正しいことをしたければ偉くなれ」。かつて大河内に言った台詞を、青島にも語る和久だった。

第8話 さらば愛しき刑事

演出　澤田鎌作

室井率いる殺人事件の捜査本部に、本店はプロファイリングチームを導入してきた。地道な和久の聞き込みを無視し、とうとうと犯人像を語り出すプロファイリングチームの中央（袴田吉彦）、専修（山下徹大）、法政（永堀剛敏）。昔ながらの捜査方法をバカにされて怒った和久は本部を飛び出し、単独捜査を始めた。

一方、すみれは空き巣の被害にあった少女・愛（西秋愛菜）を保護していた。科学捜査の扱いに悩む室井の目に、愛と楽しげに遊ぶすみれと雪乃の姿が映る…。

プロファイリングの犯人像通りの男・渋谷（岡安泰樹）が見つかった。だが室井は、和久から報告のあった久保田（石塚英彦）にも任意同行をかける。最初から落ち着きのない久保田を容赦なく追求する青島。和久が久保田をなだめて自供させるが、彼はすみれが調べていた空き巣事件の犯人だった。

プロファイリングチームによる渋谷の取り調べが始まった。ポリグラフ検査の機械を取り付けられた渋谷は簡単に激高し、中央らに殴りかかる。和久と同じ手をつかって渋谷を自供させた青島。事件の犯人はプロファイルの通りであったが、最終的に落としたのは和久直伝の青島の手腕だった。

第9話 湾岸署大パニック 刑事青島危機一髪

演出　本広克行

自殺しようとする浪人生（つぶやきシロー）を説得した青島と和久が署に戻ると、殺人事件の原因になった愛人（安永亜衣）をマスコミから保護して欲しいという要請が本店の室井から来ていた。ただでさえ納得できない仕事なのに、この愛人がわがまま放題。「殺してなんて頼んでない」と傍若無人の彼女に、青島やすみれら湾岸署メンバーは怒りを抑えきれない。

押し寄せる報道陣の中に不審な男（阿部サダヲ）を見つけた青島は、捜査本部に調査を依頼するが、室井からの返事はない。苛立ちながらも諦めかけた頃に愛人解放の指示が。彼女を送り出そうとした青島の前に、ナイフを構えて立ちふさがる男の姿があった。

実はこの男、行方不明だった被害者の兄で、青島からの情報が室井まで届いていなかったのだ。急き湾岸署に連絡を入れる室井。だがその頃、愛人を狙った男のナイフは青島の左胸に刺さっていた。

お守りのおかげでかろうじて一命をとりとめた青島は、電話で室井にくってかかった。「私の責任だ」と苦渋の表情を浮かべる室井。自らの無力さに無念を隠しきれなかった。

第10話 凶弾 雨に消えた刑事の涙

演出　本広克行

もぐらから、和久が長年追っている警官殺しのたれ込みがあった。取引次第で男の居所を教えるというもぐらを青島は拒否、あと一週間で定年を迎える和久は、ひとり捜査を始める。みかねた青島は室井を通じて本店に捜査員の増員を依頼したが、上層部は犯人逮捕よりも情報収集方法を問題にする有様で、室井は唇をかむのだった。

結局もぐらの協力によって男・トシ（吉田朝）を捕まえた和久だったが、トシは一緒にフィリピンから帰ってきた安西（保阪尚輝）のマネをしただけだと言う。右頬に大きな傷があるという安西は、大量の拳銃を密輸してきていた。

その頃、警察官採用試験帰りの雪乃は、警部講習帰りの真下と共に東京テレポート駅にいた。挙動不審な男を尋問しようとした真下が崩れ落ちるように倒れ、右頬に大きな傷のある男が去っていく。雪乃が抱き起こした真下の胸は、真っ赤な血に覆われていた。

真下が撃たれた。安西だ。非常線が張られ、拳銃携帯命令が出される。病院についていった和久は、雪乃の制止をふりきって捜査に向かった。降りはじめた雨の中での弾丸捜索。湾岸署メンバー総出で実施される非常検問。「上の者にはもう何も言わせない」と言う室井を、冷ややかに見つめる青島。

雨はまだ降り止まない……。

最終話 青島刑事よ永遠に

演出　本広克行

捜査会議で安西のことが報告された。食い入るように写真を見つめる青島、和久、すみれら捜査員たち。真下はいまだ重体のままだ。

真下の開いていたホームページに、安西らしい男がイメクラに現れたと情報が入った。青島とすみれが提供者の白石（堀真樹）から事情を聞いていると、そこに店長（武野功雄）に案内された安西が。簡単に発砲する安西に対抗して、仕方なく発砲し

『踊る』の中のリアルな世界

ストーカーでオタクで盗撮マニアのスリーセブン・野口が好きなアニメ（第5話）が「ピンクサファイア」だ。イメクラにコスプレ嬢はいる（最終話）わ、イベントは開かれている（歳末SP）わ、交通安全ポスターになる（番外編）わで、『踊る』世界では大人気作品らしい。

また、「カエル急便」は最大手の宅配業者らしく、爆弾椅子（第2話）やビデオ（第5話）や大麻入りコーヒー（第6話）を運び、密輸された銃（最終話）や青島の私物（歳末SP）などの入れ物になった。巨大ロゴ入りのビルが登場したこともある（番外編）。ついにはCMまで放送された（秋SP）。

他にも、現実の警視庁のマスコット・ピーポくんとは微妙に角と表情が異なる「ピーポーくん」や、元祖・虹の橋屋の「レインボーブリッジ最中」など、『踊る』世界独特の小物たちは数知れない。

これらは、ドラマという嘘の上に成り立つリアルな世界観だ。「湾岸署」がある「あちら側」に行けば、きっと本当に存在しているのだろうと思わせる、不思議な現実味。フィクションを構築する基本としての「ほんとっぽさ」が出来上がっているのだ。

物語としての『踊る』がリアリティに溢れた志の高いドラマとして成立しているのは、これら小物の存在が大きいに違いない。もちろん、単純にスタッフに「趣味人」が多かった、というのもあるのだろうけど。

Digitized by Google

た青島。だがこれが刑事局長（中山仁）や監察官（升毅）に問題視され、室井は青島を処分するよう命じられた。反発する青島に室井は叫ぶ。「俺がやると言ったろう！」。特捜本部も局長の命令も、管理官の立場さえも振り切った室井は、青島と共に湾岸署を飛び出した！

東京拘置所に乗り込んだ青島と室井は超法規的措置で山部と接見、武器取引の日時と場所を聞き出した。現場のバーに張り込んだふたりは、和久の言葉の意味をかみしめる。

姿を現した安西。室井は「確保！」と叫んだ。店内の客すべてが安西に向かって銃を構える。全員が捜査員だったのだ。青島に向けられる安西の銃口、その安西を狙って撃鉄を起こす室井。不敵に笑った安西は、静かに拳銃を外した。

安西の取り調べはすべて青島に引き継ぐという和久。「俺が辞めてもこいつがいる限り警察は死なねえぞ」と言い置いて、湾岸署を去っていくのだった。

1週間後、命令無視と単独捜査について、ふたりは査問委員会にかけられた。結果、青島は降格、室井は訓告のみ。平等な処分を求める室井に、青島は「あんたは上にいろ！」と言い放つ。「現場の刑事はあなたに期待してます」と語る青島に、「…わかった」と答える室井。敬礼と微笑みを交わしたふたりは、躊躇わず振り返らず、晴れ晴れとした顔で別れていった。

数日後。交番勤務の青島は、お守りをくれた吉田のおばあちゃんと話し込んでいる。春の日差しが暖かく降り注いでいた——。

97年年末。警察庁警備局の室井の尽力で、青島は湾岸署に復帰した。ところが最初の配属は交通課。雪乃と取り締まりに出かけたはずが、真下と和久が担当する小学校の傷害事件に首をつっこみ、警務課に回されてしまった。だが、勝手に捜査をしていたことで警務課もクビに。生活安全課で不良少女（広末涼子）を尋問していた青島は、前に取り調べた青年・鏡（稲垣吾郎）が犯人だと判断、緊急逮捕した。

地域課に配属され、ビーポーの着ぐるみで雑踏警戒に励む青島。偶然に再会した室井と、捜査の第一線にいた頃を懐かしむのだった。

ヤク中の鏡は、真下の取り調べの隙を見て刑事課を占拠してしまった。人質に取られる袴田課長。青島もすみれらとともに巻き込まれてしまう。説得を試みるが、猟銃を振り回す鏡は車とクスリを要求するばかり。単なる傷害事件のハズなのに、といぶかる青島だったが、なんと鏡は、新城管理官（筧利夫）率いる特捜本部が追っていた強盗殺人事件の犯人だったのだ！

ナイフマニアから車上狙いを経てスリグループから鏡へ渡ったという凶器のナイフの足取りと、目撃者の少女の証言で鏡の犯行が立証された。

「こいつの罪は死に値する」と鏡に拳銃を向ける新城。青島は、処罰するのは刑事の仕事ではないと語った。

真下の連絡によって室井が手配した特殊急襲部隊・SATが突入してきて、鏡は逮捕された。ようやく刑事課に配属になる青島。「おかえり」というすみれの言葉を背に、新たな事件の現場に急行するのだった。

警察学校を卒業し、希望に燃えて湾岸署交通課に配属された新人婦警・篠原夏美（内田有紀）。だがベテラン婦警・桑野（渡部えり子）の厳しい指導に初日から辟易してしまった。駐車違反取り締まりや捜査本部の食事作りはまだしも、小学生に腕章をあげたことや自殺未遂の女性への対応までルールで判断する桑野。夏美は反発ばかり感じてしまい「あなたが正しい警察官なら私は警察官なんて辞めます」と宣言するのだった。

そんな中、偶然夏美は、新城ら捜査本部の追っていた犯人の車を追跡するハメに。桑野の的確な無線の指示で犯人を追いつめ、車ごと体当たりした夏美は、無事に犯人を逮捕することができた。

「同じ警察官です」。去っていく桑野に、夏美は笑顔と敬礼で語りかけていた。

1ヶ月の内偵調査から青島が復帰した早々、放火殺人未遂事件が発生した。だがすぐに実行犯は逮捕され、殺人を依頼した女・純子（大塚寧々）も成田空港で捕まった。身柄を引き取りにいくよう捜査本部の新城に命じられた青島、すみれらだったが、護送途中で強盗事件に巻き込まれ、純子に逃げられてしまう。

本部出入り禁止になる青島とすみれ。そこに監察官になった室井が質疑に訪れた。上層部は、被害者の男に暴力を受けていた純子をすみれがわざと逃がしたのではないかと疑っているのだ。すみれを尾行しろという室井。青島はかつての室井との「約束」のために、それに従うのだった。

一方新城は、独断で真下と雪乃を青島らの尾行につけた上、彼らの不審な言動を室井に伝えた。確かにすみれは純子と接触しており、しかも青島はそれを上に伝えていなかったのだ。湾岸署の電話を盗聴する室井。青島はそれを裏切り行為だと責めた。

姿を現した純子はむりやり新城に捕らえられた。だが、青島は被害者の男を連行し、平等な取り調べを要求した。すみれは、室井らに騙されたと怒りを爆発させる。

亀裂は埋まらないままだ。「約束」は果たされないのか——。

吉田のおばあちゃんのお守り

最終話のラストシーンで青島と話しているのは、吉田のおばあちゃん。本人はここと『番外編』にしか出てこないが、彼女が青島に渡した「お守り」はテレビシリーズを通して登場しており、重要な小道具となっている。

田中に愚痴るシーン（第1話）で説明されるが、青島が交番勤務時代、吉田のおばあちゃんを守ってあげたお礼にもらったのがこのお守りだ。それまでは人から疎まれるばかりの営業マンだった青島が、初めて「仕事して人に感謝された」ことの証であり、警察官としての誇りや喜びの象徴でもある。何の変哲もないただのお守りだが、青島のとっては自分が選んだ職業にやり甲斐を見いだす指針でもあったのだ。

それが、ストーカー事件ですみれを守り（第5話）、麻薬密売容疑をかけられた雪乃を救い（第7話）、彼自身の命をもつなぎ止めた（第9話）。真下が生死の境から舞い戻ったのも（最終話）、もしかしたらお守りの効用だったのかもしれない。

そしてラストシーンで、青島は刑事としての生活をおばあちゃんに語る。志半ばで降格されてしまったが、決して後悔はしていないだろうということが、その表情から読みとれるのだ。おばあちゃんにもらった大切な「誇り」を無くさずに行動できたことが、彼にとっては何よりも嬉しいに違いない。染み込んだ血や不揃いな縫い目が象徴するのは、青島の生き方すべてだ。

Digitized by Google

美術スタッフ座談会

美術進行 大倉謙介
装飾（チーフ） 高田修司
持道具（チーフ） 志田尚二
衣裳（チーフ） 能澤宏明
ヘアメイク（チーフ） 松下　泉
ヘアメイク 佐藤宏恵

司会＝進藤良彦
構成＝早川あゆみ

―まずはみなさん、映画と『秋SP』合わせて3カ月という長い撮影を終えた感想をお願いします。

志田　志田です。担当は持道具です。連ドラの時は一人だったんですが、今回はアシスタントがついたので助かりました。でも、やっぱりすごいキツかったですね。

大倉　美術進行という映画にはない仕事の大倉です。テレビは美術の役割が細分化されてるので、その交通整理が主な仕事です。実は『番外編』という落とし穴があって、そこから考えると3カ月じゃ済まないんですが、僕は今年に入ってからずっと本広組（『番外編』の前が『上品ドライバー9』）なので、これで彼の顔を見なくて済むのが、正直嬉しいです（笑）。でも、終わってみると3カ月はそんなに長くなかったですね。何人も倒れたりした割には。

能澤　衣裳を担当していました能澤です。ついさっきまで東宝撮影所の衣裳部屋を片付けてたんですが、つくづく衣裳の多い作品だと思いました（笑）。平成6年に変わった警察官の新しい制服はまだそんなに浸透してなくて、各衣裳会社で取り合いなんです。それがほとんどウチに来ているので、どこが必要になってもまず僕のところに電話が来ますね。「お前のとこ、まだ終わらないのか！」って（笑）。

松下　メイク担当の松下です。私は『歳末SP』から参加したので、最初のころはできあがってる輪の中に入るのが難しかったんですけど、美術部はみんな知ってる人だったので、ここまで流れてこれました。とにかく、出演者の数が多いから、休憩時間に役者さんのメイクをやらなきゃいけないんですよね。撮影最後の一週間くらいは、ほかのスタッフがみんな休憩時間に寝てるのを見て、腹立ってきました（笑）。

能澤　あれは寝てるんじゃなくて、気を失ってるの。

松下　最後のころは私も、床であろうが椅子であろうが寝てました。

大倉　オレ、『秋SP』のクランクアップの日、現場で監督に起こされました。床で寝てたら、鎌作が「大倉さん、ラストカットです」って（笑）。

能澤　「かまさく」ってのは澤田監督のことです（本名は「けんさく」）。

大倉　長い付き合いなんで、そう呼ばせてもらってます。

佐藤　メイクアシスタントの佐藤です。私は連ドラからずっとやらせてもらってるんですが、内容が濃いので週に一本撮るのが大変でした。お台場が舞台だったので夜は寒いし。織田さんにヒーター当てるのが仕事みたいな感じで。今回は夏だったのでそれはなかったんですけど、逆に汗を押さえるのが大変でしたね。『踊る』と言えば、とにかく「大変」。それだけですね。ただ、役者さんがみんないい人ばかりだったから救われました。

松下　深津さんなんて、私たちが寝てる時に自分でスタンバイしてくれて。目を覚ましたらもう終わってて、「いいの、みんな疲れてるから」って。

能澤　役者さんたち、みんなそうだった。衣裳部屋で寝ちゃってたら、筧さんがそーっと入ってきたらしくて、全部衣裳に着がえてから、「ネクタイだけ結んでもらえます？」って（笑）。

佐藤　あと、映画のスタッフって「自分の仕事にプライドと責任を持ってるんだな」って思いました。やって良かったという気持ちと、終わって良かったという感じです（笑）。

高田　装飾の高田です。とにかく疲れました。連ドラからずっと2年くらい、これ（『踊る』）しかやってないです。警察のセット以外、忘れちゃった（笑）。

テレビよりも要求が高いよね

―映画とテレビの違いはどうでした？

能澤　撮るスピードが違うから、慣れるまで大変でしたね。

松下　映画のあとに久々に『秋SP』やった時、テレビのペースが早くて大変だった。

大倉　でも、映画の方が時間がある分、テレビよりも要求が高いよね。今回はカメラマンも監督も細かい人だったので、大変でした。あと、テレビのサイズでは気づかないことでも、大画面でアップになったら肌の荒れとかが目立つ。

松下　そうなんですよ。テレビだとモニターがあるから自分の目で確認できるけど、映画ってラッシュまで見られないし。

Digitized by Google

ヘアメイク 佐藤宏恵
ヘアメイク(チーフ) 松下泉
衣裳(チーフ) 能澤宏明
持道具(チーフ) 志田尚二
装飾(チーフ) 高田修司
美術進行 大倉謙介

能澤 後半、ラッシュも見れなかったしね。オレ、心配なシーンがあるのよ。暑い日のロケで役者さんがコートまで着てて、よく見るとネクタイが汗でまだらになってるの。ドライヤーで乾かす時間もないから、霧吹きで全部濡らした(笑)。

松下 本番前は汗拭いてあげられるんですけど、本番になったらもう入れない。織田さんもそうですけど、汗っかきの方が多いから。

能澤 織田さんはYシャツ、一日4回は替えました。

大倉 テレビではカットごとにチェックして、NGならすぐ撮り直しができる。でも映画のラッシュって一週間後とかだから、見て問題があっても撮り直しできない場合もあるじゃない。そういう点でキツイですね。

能澤 あと今回、セットの知能犯係のところの壁がなくなったじゃない。あれで刑事課がものすごくだだっ広く見えるようになった。もともと『踊る』ってセットも制服も白と紺とグレーの世界だから、色のあるものがないと目がいかないでしょ。だから、内トラ(スタッフが演じるエキストラ)に色のあるもの着せて奥にいっぱい立たせてるんだけど。

大倉 ほかの刑事ものって、役者がキャラクターとして立つじゃないですか。でも『踊る』の場合は、役者を記号として扱ってる。嘘のリアルをあえて作ったところで個性をいったん消して、こういう人はいそうだなというキャラクターにした。革ジャン着て走り回る従来の刑事ドラマより、グレーの背広を着た織田さんの方が、記号として見た時には警察官に見える。嘘だって解ってても起きない。

能澤 亀山さん言うところの「サラリーマン刑事」だから。

大倉 でも『歳末SP』からだんだんアクションも増えてきて。そういつも湾岸署で事件もないだろうと思うんだけど、湾岸署以外のセットを建てる予算がないからね(笑)。多分、あの空間というのも大事で、役者さんがよく言ってくれるのは、一歩湾岸署のセットに入っただけで、「本当の湾岸署だって感じがする」って。役に入りやすいって。あと、控室がスタジオから遠かったから、みんな待ち時間もスタジオにいるんですよ。道具や機材が多いから居場所も限られて、自然とセットの中で休憩して、タバコ吸ったりデスクに座ってる。そうすると、なんとなく一体感とか連帯感が出てくるらしいですね。今日、ここにいないけどデザイナーの精木さんの功績です。

佐藤 でも逆に、私たちはメイク直しが大変でした。

松下 セットが広いから、モニターから現場まで行くのに迷子になる。「あの役者さんはどこ!」って(笑)。

能澤 警務課のシーンがたまにあると、「警務課ってどこだー?」って言いながら覗くとコンピューター室だったり(笑)。

佐藤 こっちが近道だと思っていくと、機材で封鎖されてたりして。

嘘の上に成り立っているリアル

大倉 『踊る』ってその中で一個の世界観があるんですよね。今、僕らがいるところとは違うんだけど、嘘のリアルな空間があって、そこでは「佐●急便」や「クロ●●ヤ●ト」みたいに「カエル急便」があるという。『ビーチボーイズ』をやった時に、亀山さんが美打ち(美術打ち合わせ)で「宅急便はカエル急便だよなあ」って言ったの。

志田 それで出したんだっけ。

大倉 出してない、出してない。

能澤 だって、ウェア持ってるのオレだもん。貸さないよ、オレは(笑)。

大倉 それをほかの番組で出しちゃうと、『踊る』の世界観が薄まっちゃうという気がして、断ったんですよ。逆に本広さんも澤田もそうなんだけど、そうやって何気なく出したものをすごく大事にしてくれる。一度出したものを常に毎回出していけば、それが世界観になるから、嘘の上に成り立ってるリアルならいくらでもできるでしょ。誰もSAT(特殊急襲部隊)の本物なんて見たことないんだから、テレビでしか。

高田 警察の取材って、あまり写真とかもダメだから、ある程度は空想の世界かな、と。

大倉 本広さんと澤田と話したのは、本当にリアルにやったら「テレビ的には面白くないだろう」と。それだったら「見た人が納得する嘘を作りましょうよ」って。パトカーの使用許可証って、本来はハンコふたつで出るんですよ。緊急用なら直属の上司がOKならハンコがなくても出せる。でも、お役所はやたらと時間がかかるとか、そういう僕らが感じてることって見ている人も

Digitized by Google

感じてると思うんですよ。だから、嘘をつくなら見てる人が騙される嘘にしようって。

能澤　刑事もののお約束ってあるじゃないですか。机はグレーで折畳み椅子っていう。

高田　最初に楠木が描いた湾岸署のデザイン見た時、すごいモダンで、これで本当にいいのかなって思ったよ。

大倉　あのセットって、あと5倍パソコン増やせば普通のオフィスだよね。

能澤　『秋SP』で普通のオフィス借りてロケしたでしょ。「なんだ湾岸署と変わらないじゃん」って監督が言ってた（笑）。警察に行くと、一般職ってあるじゃない。階級章のついてない人で、制服も着てない。でもテレビでそれをやっちゃうと、見てても解らないからやらない。それがテレビ的な嘘なんです。みんなが期待してる嘘と本当の嘘との、ギリギリのところでやってる。

大倉　すごく嬉しいのは、僕らの仕事って普通はあまり脚本家の方とは接点ないんです。でも、君塚さんはちゃんと返してくれて、前はただの「宅急便」って書いてあったのに、次には「カエル急便」って書いてあるんですよ。監督もそういうのを解ってくれていて、反映させてくれる。こっちが「これ自信あるよ」って言うと、「いいよ、やりましょう」って。ただ、「次も当然このクオリティはあるんでしょうね」って。

能澤　それと、つながりを重視してくれる。連続の時にゲストの篠原涼子ちゃんに赤い格好させたら、『秋SP』で彼女がまた出ることになって、監督が「あのラインがいいんだけど」って。それは、個、勝利かなって思ったけど、反面「やらなきゃ良かった……」っていうこともある。

大倉　それ、レインボー最中シリーズだよ。一度そういうの作ったら、「次は何？」って言われて。「いや、次って言われても……」（笑）。

能澤　「最中の味はいかがでしたか？」って、キミのためにある台詞だと思ったけどね（笑）。

大倉　あと、見てる人の反応って普通僕らには返ってこないじゃないですか。今回はインターネットで『踊る』の公式ホームページがあって、見てる人の意見がすごくダイレクトに帰ってくる。励みになりましたね。『踊る』のインターネットはコアなファンの人が多いんだけど（笑）。

大スクリーンで見て欲しい

能澤　オレね、『番外編』のころにちょっと事故起こして交番で書類書かされたんだけど、その間も警官の制服じっと見てた（笑）。奥にあったコートとか。

大倉　僕もこの前、妻からのプレゼントの財布を盗まれて被害届を出しに行った時に、思わず「その書類一枚もらえませんか？」って言って笑われた（笑）。前にも嘘ついて、「弟が警察官になりたいって言ってるんで書類下さい」って。それは連ドラの時の雪乃さんの書類になったんですけど（笑）。警察署の前で写真撮ってて尋問された時も、「すいません、『踊る大捜査線』です」って言ったら、「自分、見てますよ」って中に入れてくれたこともあった。

能澤　オレなんか車にポンと台本置いてて取り締まりに引っ掛かった時、椅子の下に台本隠したよ。

大倉　バカだね、出しといたら見逃してくれたかもしれないのに（笑）。

松下　でも、みんな見てますよね。私、志田さんからもらった青島さんの名刺を財布に入れてて、ガソリンスタンドで落としちゃったんですよ。そしたら、店員さんがそれ見て目が点になっちゃって。「コピーさせてくれませんか」って（笑）。「無理だ」って言ったら、「じゃ、じっくり見させて下さい」って、私が帰るまでじーっと見てましたね。

志田　名刺の交換ってのも普通の刑事ドラマじゃしないけど、実際にはするらしいよね。警察手帳を見せるのだって、昔はただ出すだけじゃない。でも今は、『踊る』もそうだけど、ひもをつけておいて、かつ表紙を開く。開くと作る方は二重三重に大変なんだけどね（笑）。

能澤　連ドラの最終回、大変だったと思うもの。「警視庁だ」って保阪（尚輝）君に拳銃向けて。

志田　手帳百冊、拳銃百丁（笑）。

能澤　銀玉鉄砲も入ってたとか（笑）。

志田　だって間に合わなかったんだもん。ウチで揃えられるのは70丁くらいなのよ。残り30丁は銀玉鉄砲。

大倉　リアルな感じって重視したよね。かっこいいスーツはあえて着せてない。ソフトスーツでイタリアンな服着せたらかっこいいとは思うけど、多分そんなの実際にはいない。ヤクザに近い刑事とか、金八先生みたいな上下違うのを着た刑事とか。でも、最初に台本もらった時には、「え？　踊る？」って思わなかった？（笑）

能澤　亀山さんから、タイトルバックで、おネエちゃんが警官の制服もじった格好して踊っちゃうかもって言われた時、絶対当たらないと思ったもの。

大倉　ただ、幸いなことにスケジュールがきつかったので、そのタイトルバックは撮れなかった。

能澤　あれで、良かったよね（笑）。

――では、最後に観客のみなさんに向けて一言ずつお願いします。

佐藤　警察のものとかもすごい凝ってますけど、織田さんと柳葉さんの絡みとか人情的なものも見どころだと思います。

松下　スケールのでかさを大スクリーンで見てほしいと思います。内容は濃いですよ。

大倉　今までのファンには意外な驚きがあって、映画のかっこよさが解る作品になってます。連ドラから見ている人は、いろんな隠しキャラも散りばめられてますので、それをお楽しみに。

能澤　はい、スゴイと思いますよ、「踊る大捜査線」は。

志田　ぜひ、見てください。

高田　テレビと違ってお金を払うんですが、よろしくお願いします。

大倉　もうこの人たちと二度と仕事しなくていいかと思うと嬉しくて（笑）。

能澤　美術進行って最初に名前が出るからね。キミの名前見たらやらないよ（笑）。

（9月29日、新宿にて）

Digitized by Google

STAFF COMENTS

「踊る大捜査線 THE MOVIE」現場スタッフコメント集

ライン・プロデューサー
羽田文彦

キャリア　CF8年
映画4年

代表作　「7月7日、晴れ」「パラサイト・イヴ」「デボラがライバル」

これほどみんなに愛されている作品に参加できて幸せです。今までの刑事ものにない、身近に感じることのできる刑事たちの魅力がこの作品の力です。きっと何回も観たくなる作品です！

プロデューサー
安藤親広

キャリア　CF10年
映画4年

代表作　「7月7日、晴れ」「パラサイト・イヴ」「デボラがライバル」

冬の設定なので、暑さに苦労しました。役者の方々は大変でした。「踊る」の魅力は組織の中で「いかに自分らしく生きていくか」という葛藤だと思います。とにかくエンタテインメントしていますので、ぜひ観に来て下さい。

プロデューサー
堀部　徹

キャリア　CF14年
映画4年

代表作　「Undo」「PICNIC」「7月7日、晴れ」「パラサイト・イヴ」

各キャストが演じる登場人物のキャラクターが「踊る大捜査線」の魅力です。2回3回と見るたびに楽しめる作りになっていますので、いろんな友人を誘って何度でも見て下さい。楽しいです。

助監督（フォース・サード）
七高　剛

助監督（サード）
右近照久

助監督（セカンド）
長瀬邦弘

助監督（フィフス）
辻　成人

助監督（フォース）
高木健太郎

助監督（チーフ）
羽住英一郎

今回、現場ではなんといっても演出部のみなさんにお世話になりましたが、忙しさのあまり、そのみなさんにコメントをいただくことができませんでした。残念です。

羽住チーフは、堀部氏のインタビューにもある通り、そのスケジューリングをはじめ、現場を取り仕切るウデは見事でした。テレビの世界でも「10年に一人の逸材」と言われているそうです。監督作も楽しみに！

セカンドの長瀬氏は、エキストラへの演出を主な仕事に、現場でのスタッフ側のムードメーカーとして欠かせない存在でした。会話の中にも彼の気配りが感じられ、感心することしきりです。お世話さまでした。

サードの右近氏は、撮影日誌の連載でも触れた通り、異動のため途中で現場から離れてしまいました。現在は『踊る』の番組ソフトなどを地方局にセールスする仕事をしているとのことです。お元気ですか？

記録
馬場徳子
キャリア　9年

代表作　「踊る大上品ドライバー」「踊る大捜査線」「爆裂！分身娘」

映画の現場は初めてなので、いろいろ初めてづくしで大変でした。笑いあり涙ありで見どころだらけですが、2度3度と観ていただくと、より笑えますので、どうぞよろしく。

右近さんに代わってサードとなった七高氏は、なにかと現場で僕に気をつかっていただき、ずいぶんお世話になりました。来年には深夜枠で監督デビューできそうとのことで、今から楽しみにしています。

途中から現場に加わった高木氏は、大きな体に似合わぬ柔らかな物腰が印象的でした。初めはカチンコに苦戦していたようですが、後半は堂々として、ますますその体が大きく見えたものです。

これも途中参加の辻氏は、映画版でなんと、青島と絡む台詞のある役で出演しています。湾岸署地下室の場面をチェック。好漢ぶりは印象的でしたが、もう少し太って体力をつけた方が良いのでは？。

ところで、右近さんを除いて全員裸なのは、写真を撮っていた最中に突然、羽住氏が言い出したことが原因です。笑えるけど、やっぱりヘンですよね。

（進藤）

Digitized by Google

撮影助手（セカンド）
今井孝博
キャリア　8年

代表作　「寒椿」「四十七人の刺客」「陽炎II」「鮫肌男と桃尻女」

連ドラ時代からのキャストとスタッフの中に入り込めるのか不安でしたが、その一員になれたのではと、勝手に思ってます。常にカメラが動いているというくらい移動撮影が多かったので、ピント合わせで苦労しました。とにかく劇場で観ないとダメだよ。

撮影助手（チーフ）
谷川創平
キャリア　14年

代表作　「ルーズソックス」

楽しい現場でした。テレビスタッフは楽しく仕事するコツを知ってるみたい。このドラマの魅力は、真っ直ぐなサラリーマン刑事・青島です。史上最悪の3日間を見逃さないように。

撮影助手（フォース）
重森豊太郎
キャリア　4カ月

代表作

大勢いるスタッフ一人一人が、それぞれの役割を持って作品を作り上げていく楽しさと苦労を知ることができました。「ステレオタイプな刑事もの」ではないところがこの作品の魅力だと思います。ぜひ劇場で観て下さい。

撮影助手（サード）
松井信行
キャリア　3年

代表作　「学校の怪談3」「友情」

ヒーロー的な刑事ドラマではないという、ひとつの形ができあがっているこの作品が、映画という枠でどのように作られていくかを知ることができました。楽しく観られる作品になっていると思います。

撮影監督
藤石　修
キャリア　助手11年
　　技師11年

代表作　「七人のおたく」「陽炎2」「帝都物語外伝」「静かなるドン」

連続ドラマのテレビスタッフの優秀さに驚きました。ドラマのイメージを崩さずに、しかしひと味違う画作りをしなければならないので苦心しました。キャリア、ノンキャリアの現実的な設定と、会話・場面転換のテンポの良さが見どころです。派手さはないですが、人間ドラマを観て下さい。

特機
柳沢克幸
キャリア　3年

代表作　「学校の怪談2」「学校の怪談3」「パラサイト・イヴ」

セッティング変更などがいろいろ多かったところは大変でしたが、ひまがないほど忙しくても、とても楽しく現場に参加できました。

特機
上野隆治
キャリア　6年

代表作　「ビリケン」「傷だらけの天使」

今回の撮影は特機（クレーン撮影やレール移動）の出番が多く、とてもやりがいがありました。でかい画面で見るキレイな女性陣のアップをお楽しみに。スタッフロールも見てね！

ステディカム・オペレート
佐光　朗
キャリア　8年

代表作　「息子」「エンドレスワルツ」「ラブ・レター」「スウィートシーズン」

撮っている側を意識させないオペレートに苦労しましたが、ここ数年、田舎に帰っていないので、いいみやげ話ができました。エキストラとしても参加しているスタッフの影の熱演を楽しんで下さい。

応援照明（テレビ「踊る」の照明チーフ）
加瀬弘行
キャリア　13年

代表作　「友子の場合」「お金がない！」「ヘルプ！」「上品ドライバー」

今回の撮影で、フィルムとビデオの映像の違いにとまどいました。飽きのこないテンポのある映像が、この作品の見どころです。

照明技師
石丸隆一
キャリア　助手12年
　　技師8年

代表作　「BAD GUY BEACH」「チャカ」「フルメタル極道」

大変でしたが楽しい現場でした。刑事課のセットが大きいので照明には苦労しました。

＊石丸さんが現場中にデジカメで撮影したスナップが「踊る」公式ホームページで見られます。貴重なメイキング写真をお見逃しなく。

照明助手（サード）
金子康博
キャリア　6年

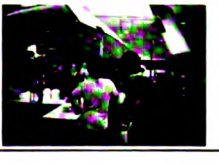
代表作　「ラブソング」「TOKYO BEAST」「ベル・エポック」

照明助手（セカンド）
山口賢二
キャリア　12年

代表作　「ヒルコ　妖怪ハンター」「フィレンツェの風に抱かれて」

照明助手（チーフ）
原田洋明
キャリア　12年

代表作　「ヒルコ　妖怪ハンター」「TOKYO BEAST」



実は照明部さんはここに掲載されている方たちだけでなく、ほかに4名の助手さんが現場にはいらっしゃいましたが、諸事情により、そちらのみなさんは掲載することができませんでした。また、照明部さん自体が撮影終盤、スケジュールの関係でとても忙しくなってしまったため、お一人ずつのコメントもいただけませんでした。（進藤）

Digitized by Google

録音助手（セカンド）
村上洋祐
キャリア　11年

代表作　「徳川の女帝・大奥」「友子の場合」「沙羅妙子最後の事件」

雰囲気を生かすアドリブへの対応で苦労しました。画面の細部へのこだわりと、テレビとは違ったリズム感を楽しんで下さい。ぜひテーマ曲を大きい劇場で聴こう！

録音助手（チーフ）
山根　剛
キャリア　17年

代表作　「大江戸捜査網」「抱きしめたい！」「夏子の酒」

とにかく撮影は大変でした。観客のみなさんへメッセージ「だれにも一個の人格がある。その人なりの自尊心がある。ゆえにいささかも差別の心で人に接してはいけない」……なあんてな。

録音助手（フォース）
井上　明
キャリア　7年

代表作　「内銃ルガーP08」「THE DIFENDER」

ひとつの物を作り上げる大変さを感じました。テンポのあるセリフ回し、緊張感のある展開、そしてテレビとは違った臨場感をぜひ楽しんで下さい。

録音助手（サード）
廣岡　豊
キャリア　7年

代表作　「北の国から」「ギフト」「きらきらひかる」

休みがない中での体調管理に苦心しつつ、初めての映画の仕事なので全てが新鮮でした。個々のキャラクターの絡みの芝居の面白さがこの作品の魅力です。お金を払って観る価値はじゅうぶんあると思いますので、このシリーズを長く愛して下さい。

録音技師
芦原邦雄
キャリア　助手6年
技師16年
代表作　「DOOR III」「THE DIFENDER」「西遊記」（堺正章版）

テレビと映画の混成スタッフ編成がいろんな意味で新鮮でした。夏場に冬のシーンを撮影したことで、セミがうるさかったのに苦労しています。テレビと同じノリで観て下さい。

美術進行
大倉謙介
キャリア　10年

代表作　「TVO」「湾岸バッド・ボーイ・ブルー」「ヌードの夜」「ビーチボーイズ」

画面サイズが大きい分、画面に映る隅々まで全てのものに手を抜かないよう気をつけました。テレビとはひと味違うカメラワーク、役者さんたちの絶妙のチームワークを、映画館のスクリーンで観ないときっと後悔しますよ。

デザイナー
楠木陽次
キャリア　8年

代表作　「若者のすべて」「僕らに愛を！」「ピュア」「DAYS」

映画製作にかかわれたこと自体が貴重で嬉しかったです。テレビ・ドラマの時よりも湾岸署のセットをバージョンアップさせることに苦心しました。観ると得する映画です。

美術監督
梅田正則
キャリア　30年

代表作　「北の国から」「町」「飢餓海峡」「さよなら李香蘭」「あすなろ白書」

映画への憧れがこの作品で実現できて嬉しいです。400坪のスタジオに建てた湾岸署内セットを映画の大画面で観て下さい。きっと正義と勇気を持って劇場を出ていけますヨ。

装飾
大久保俊彦
キャリア　4年

代表作　「ロングバケーション」「踊る大捜査線」

今回の撮影は貴重な体験をさせてもらっているという感じです。テレビ・ドラマの流れを継続しつつ、いかにバージョンアップしていくかという点に苦労しました。『踊る』を愛する全ての人々に観てほしい映画です！

装飾（チーフ）
高田修司
キャリア　26年

代表作　「すてきな片想い」「29歳のクリスマス」「ロングバケーション」「王様のレストラン」

映画の現場とはどんなものか楽しみにしていました。特別に苦労もせず、いつも通りにやっています。テレビと同様に湾岸署員のチームワークを、フラっと気楽に観てほしいです。

Digitized by Google

特殊電飾
小林信之
キャリア　5年

代表作　『ボディーガード』『世界ウルルン滞在記』『マジカル頭脳パワー』

刑事課のモニターや会議室で流れるビデオの映像などを担当しました。今回の映画は最初から最後まで全てが見どころです。まばたきするのがもったいない！

大道具
柿沼正俊
キャリア　1年半

代表作　『踊る大捜査線 歳末特別警戒スペシャル』、CF『NTTサンクスフェア』

初めて映画に参加したので、いろいろな面が見えてとても勉強になりました。撮影期間が長かったので、セットを維持するのに苦労しています。細かなレギュラー・エキストラの動きに注目！

大道具
入江　潤
キャリア　3年

代表作

セットの補強と暑さ対策に苦労しました。『踊る大捜査線』の魅力は「所轄の意地」というか、ずばり「青島さん」でしょう。スタッフのみなさんも肩凝って頑張ってます。

特殊効果
高橋信一
キャリア　18年

代表作　『北の国から'92巣立ち』『素顔のままで』『パ・テ・オ』

フィルム撮影ということで、VTRとは違った面が多々あり新鮮でした。派手なアクションは少ないですが、今までの警察ドラマにない新しいタッチがこのドラマの魅力です。お金を払って観に行っても決して損をしない作品だと思います。

持道具
上松厚子
キャリア　1年

代表作　『踊る大捜査線』

笑いあり、切なさありの『踊る』は、人の感情が全て含まれているところが魅力です。秋の設定で夏のロケは大変でしたが、やりがいがありました。ぜひ観に来て下さい。

持道具（チーフ）
志田尚二
キャリア　17年

代表作　『池中玄太80キロ』『古畑任三郎』『ビーチボーイズ』

俳優さんたちの身に付ける小道具やかばんなどを担当しています。東宝スタジオとロケの両立が大変な撮影でした。大画面の『踊る』をお楽しみ下さい。

スタイリスト
斎藤真喜子
キャリア　7年半

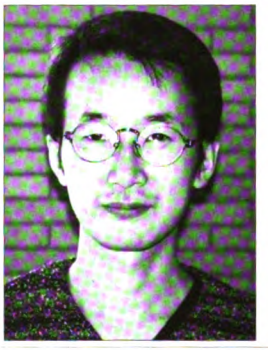
代表作　『極道の妻たち 決着』『外科医柊又三郎』『WITH LOVE』

映画とテレビでは撮影のペースも雰囲気も違っていました。夏に冬服を着ている役者さんたちは大変だったと思います。ぜひ家族で観にきて、みんなで楽しんでいって下さい。

衣裳（チーフ）
能澤宏明
キャリア　12年

代表作　『恋と花火と観覧車』『抱きしめたい！』『妹よ』『ナースのお仕事』

真夏に冬の設定で撮影しているので、役者さんたちのアセ対策とYシャツの洗濯やアイロンかけに追われました。見どころはテレビシリーズの持ち味を生かすために「映画だからハデに行きましょう」というところを、あえて抑えている点です。



スチール
宮田　薫
キャリア　13年

代表作　『全国高校生クイズ』『ショムニ』

映画初体験だったので、ワンシーンを撮る時間のかけ方に驚きました。スチールはリハーサルの時が仕事なのですが、役者のみなさんが暑さで上着を着ないでリハされるので、そこに苦労しました。映画は文句なく面白いです。

衣裳
木原雄一郎
キャリア　9カ月

代表作　『きらきらひかる』

撮影はとても大変でした。役者さん一人一人の持ち味を楽しんで下さい。ハンカチを忘れずに、笑い過ぎても平気なようにアゴを鍛えて、観に来て下さい。

衣裳
佐藤　七
キャリア　2年

代表作　『新宿少年探偵団』『踊る大捜査線』

出演者が多い作品なので、衣裳部屋がとっ散らかって大変でした。学校みたいな雰囲気の楽しい撮影現場です。とりあえず映画館で泣いて笑って下さい。

Digitized by Google

ヘアメイク
佐藤宏恵
キャリア　3年

代表作　「砂の城」「踊る大捜査線」

テレビから映画へと変わり、多少の違いにとまどいました。同じアップでも映画の画面ではさらに大きく映るので、そのことに気を使っています。あまり深く考えずに楽しく観られる作品だと思います。

ヘアメイク（チーフ）
松下　泉
キャリア　8年

代表作　「緑の街」「モスラ2」「みにくいアヒルの子SP」「ストーカー　逃げきれぬ愛」

毎度のことながら出演者の人数の多さには苦労しました。『秋SP』と映画が連続で休みがないのも辛かったです。テレビとは違う迫力を映画館の大スクリーンで味わって下さい。

制作主任
増子美和
キャリア　4年

代表作　「君といた夏」「御く季節の中で」「木曜の怪談　MMR」「白線流し」

撮影後半、天気に恵まれず、ロケに関して毎日天候判断となって苦労しました。テレビ・ドラマの時のノリは変わらず保ちつつ、さらにスケールアップした内容と画を、スクリーンの隅々までお見逃しなく！

制作主任
古郡真也
キャリア　8年

代表作　「7月7日、晴れ」「友子の場合」「シャ乱Qの演歌の花道」

近年まれに見るチームワークの良さに感動しました。今までのテレビシリーズに負けないロケ現場探しに苦心しましたが、偉大なる伏線の数々や細かいエキストラの動きにもいろいろ注意して観て下さい。

制作進行
巣立恭平
キャリア　これが初めて

初めての仕事で映画をやらせてもらえてとても嬉しかったです。自分がどう動けばいいのか解らずに、みなさんに迷惑かけてばかりでした。青島刑事の行動に注目して観て下さい。

制作進行
北原ゆき
キャリア　1年半

代表作　「シャ乱Qの演歌の花道」「借王」「ベル・エポック」「美少女日」

もともとチームワークが良い上に、年令層が若く、いつもノリノリの明るい現場でした。セットの暑さ対策に苦労しましたが、送風ダクトを織田さんに「命の風」と言っていただき救われた思いです。迫力のある映像は、ぜひ大スクリーンで観るべき映画です！

制作担当
曳地克之
キャリア　15年

代表作　「海と毒薬」「スキンレスナイト」「夏子の酒」「白線流し」

ひさしぶりの映画、一流のスタッフと仕事ができて幸せでした。「踊る」特有の大規模ロケーションと物量大作戦が見どころです。みな精一杯やりました。素晴らしい作品です。

踊る大捜査線　関連記事掲載号
Making of　踊る大捜査線　THE MOVIE

1998年8月下旬特別号 No.1263（定価860円）
FILE.01
亀山千広　プロデューサー　インタビュー①

1998年9月上旬号 No.1265（定価820円）
FILE.02
亀山千広　プロデューサー　インタビュー②
劇場版撮影日誌その1〈6/23～7/16〉

1998年9月下旬号 No.1266（定価820円）
FILE.03
亀山千広　プロデューサー　インタビュー③
劇場版撮影日誌その2〈7/16～8/3〉

1998年10月上旬号 No.1267（定価820円）
FILE.04
劇場版撮影日誌その3〈8/4～8/15〉

1998年10月下旬特別号 No.1268（定価860円）
FILE.05
劇場版撮影日誌その4〈8/16～9/8〉
梅田正則　美術プロデューサー インタビュー

左記及び上記の本のお申し込みは、最寄りの書店にご注文いただくか、小社宛、現金書留または郵便振替用紙にて、御希望の書名または号数、御住所、御氏名を明記の上、定価に送料（120円）をあわせて御入金下さい。

次号では、映画公開に合わせて10月12日～16日に放映された3アミーゴス主演（脚本・倉塚良一　演出・本広克行）の深夜番組「深夜も踊る大捜査線」の撮影現場ルポをお届けする予定です。

踊る大捜査線THE MOVIE
公開まであと11日

読者プレゼント

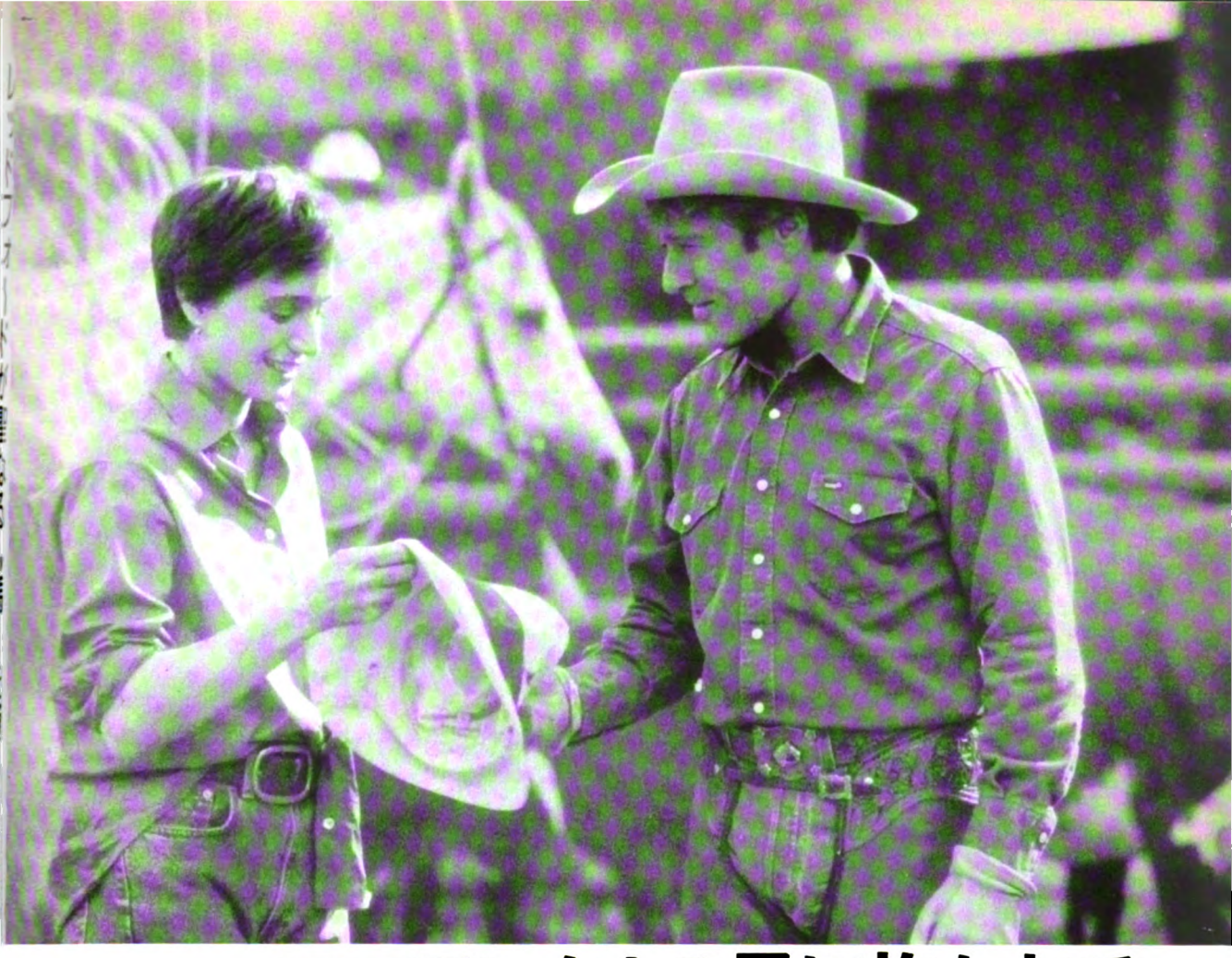
弊誌読者のみなさまに抽選で、「踊る大捜査線　THE　MOVIE」特製グッズをプレゼントいたします。ご希望の方は、本誌綴じ込みハガキに希望の品名をお書きの上お送りください。11月5日必着です。

劇場版ポスター10名様

特製うちわ10名様

〈提供：フジテレビジョン〉

Digitized by Google



作品特集 モンタナの風に抱かれて

THE HORSE WHISPERER

●1998年・アメリカ・カラー・シネマスコープ・ドルビーデジタル・2時間47分
●監督／ロバート・レッドフォード　製作　ロバート・レッドフォード、パトリック・マーキー　脚本／エリック・ロス、リチャード・ラグラベニーズ　原作／ニコラス・エヴァンス　製作総指揮／レイチェル・フェファー　撮影／ロバート・リチャードソン　プロダクション・デザイナー／ジョン・ハットマン　編集／トム・ロルフ　衣装デザイン／ジュディ・L・ラスキン　音楽／トーマス・ニューマン
●出演／ロバート・レッドフォード、クリスティン・スコット・トーマス、サム・ニール、ダイアン・ウィースト、スカーレット・ヨハンソン、クリス・クーパー、チェリー・ジョーンズ、タイ・ヒルマン
●配給／ブエナ　ビスタ　インターナショナル　ジャパン
●10月17日より日比谷映画ほか全国東宝洋画系にて上映中
●本誌関連記事／9月下旬号カラーグラビア、今号新作紹介グラビア

Digitized by Google

作品評

レッドフォードが聖なる〝馬〟を通して告白する大西部への永遠の忠誠

河原晶子

レッドフォードの生真面目な清潔感

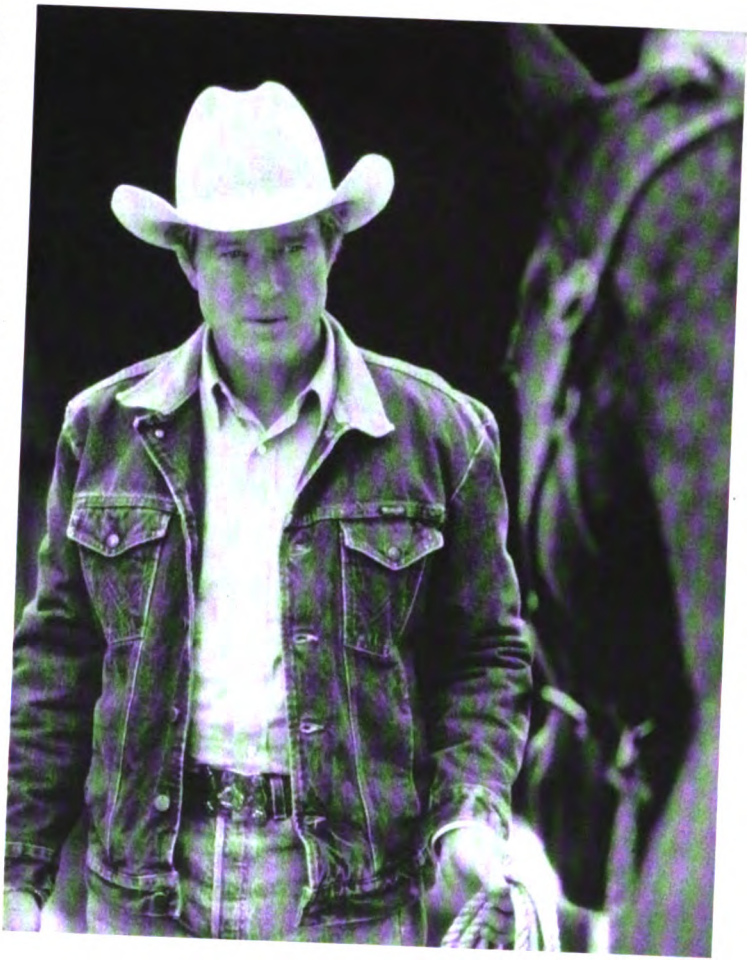
緩やかなスローモーション・カメラが追う一頭の荒馬の、躍動感溢れる美しい肢体。生きもののようにうごめく砂漠の砂。そして生命の象徴のように光を反映する水。映画「モンタナの風に抱かれて」は、少女グレースの夢を映像化した神秘的なプロローグによって幕を上げる。ジェリコーの描いた躍動する馬のスケッチ。そしてバルタバスの映画「ジェリコー・マゼッパ伝説」の、あの衝撃的な記憶。この映画はロバート・レッドフォードが、馬という神秘的で高貴な生きものと人間との生命の交流を通して、失われゆく大西部への永遠の忠誠を誓った愛の物語である。

冒頭に紹介した夢から目覚めた少女グレースは、早朝の雪に包まれた林へと乗馬に出かけ、そして突発的な事故で共に乗馬を楽しんでいた親友を亡くし、自らも片足を失い、そして愛馬ピルグリムもまた回復不能の傷を負う。ピルグリム＝巡礼者、象徴的な名である。少女グレースと愛馬ピルグリム。このふたつの傷ついた魂を癒すべく、グレースの母アニー（クリスティン・スコット・トーマス）が救いを求めたのが、馬と話し、馬を癒す特殊な才能を持つ伝説のカウボーイ＝ホース・ウィスパラー（映画の原題・馬に囁く者）と呼ばれるトム・ブッカー（ロバート・レッドフォード）である。ニューヨークに住む女性誌の編集長である女と、モンタナの大自然の中に荒馬と生きる男。映画は少しずつ相寄ってゆくアニーとトムの恋の感情を、静かに慎み深く描きはじめる。思い出してしまうのはどうしたって、クリント・イーストウッドとメリル・ストリープの「マディソン郡の橋」である。ニューヨークの最先端に生きる女と大西部の男。そして都会のフォト・ジャーナリストの男と南部の人妻である女。男と女の立場は逆であっても、もうすでに若くはない男と女の〝不倫〟と呼ぶにはあまりにも純粋でロマンティックな恋の出逢いと訣れは、すべてを可能にする青春の恋には描けない、幾重にも織り重なった情念の深さで心にしみじみと侵入してくる。

ロバート・レッドフォードとクリント・イーストウッド。俳優としてはもちろん、映画監督としても他の監督進出の俳優たちをはるかに圧倒する品格と力量を兼ね備えたこのふたりの映画人に、どうして思いをはせないでいられよう！　イーストウッドが自分の監督作に自ら主演することを厳しくコントロールしてきたように、レッドフォードもまた、これまでの監督作品「普通の人々」「ミラグロ奇跡の地」「リバー・ランズ・スルー・イット」「クイズ・ショウ」で自身の主演を禁じてきた。彼が自身の監督作品で自ら主演するのは、この作品がはじめてだ。そして実際、

© Touchstone Pictures

Digitized by Google



このトム・ブッカー役に彼以外の俳優は考えられないのである（ふとあの懐しいサム・シェパードの顔が浮かんだりもするのだけれど……）。

レッドフォードとイーストウッドは、それぞれの映画のヒーローとヒロインの忘れがたい恋の場面として、ふたりのダンス・シーンを用意している。食事に招かれた女の家のキッチンで、ジャズのスタンダード・ナンバーを伴奏に踊るイーストウッドとメリル・ストリープ。そして町のダンス・パーティで陽気な人々の輪の中で（その中にはニューヨークからやってきたアニーの夫の姿もある）カントリー&ウェスタンを伴奏に踊るレッドフォードとクリスティン・スコット・トーマス。どちらも燃えあがるような情念に包まれた官能的なラヴ・シーンでありながら、レッドフォードは彼と彼女との恋をあくまでも秘めやかにプラトニックなままにとどめるのである（原作とはちがって）。ここではレッドフォードの生真面目な清潔感が説得力をもつ。さらにつけ加えるなら、「マディソン郡の橋」の女の夫がそうだったように、アニーの夫もまた妻のひそやかな恋を察知し、苦悩の中に妻をひっそりと見守っていたのである。ちょうど〝不倫の恋〟の元祖のようなデイヴィッド・リーンの映画「逢びき」のシリア・ジョンソンの夫がそうだったように。アニーの夫を演じるサム・ニールが素晴しいが、ここで彼はジェーン・カンピオンの「ピアノ・レッスン」の悲劇的な夫を思い出させる。おそらくレッドフォードはこの映画をヒントにサム・ニールをキャスティングしたのだろう。ついでに言うなら、クリスティン・スコット・トーマスの起用は、あの「イングリッシュ・ペイシェント」からのものだろう。あの映画の中にも忘れられない官能的なダンス・シーンがあったのを思い出す。

原作と映画との重要な違い

しかしロバート・レッドフォードがトムとアニーとの秘めやかな恋にも増して魅せられていたのは、ひょっとしたらトム・ブッカーと荒馬との魂の絆ではなかったのだろうか？真っ赤な太陽が沈んでゆく大草原に、静かに向きあい、無言の対話を交わすトムとピルグリム。ここでは現実の大西部の風景が、まるで神話の中のエピソードのような高貴なイメージへと一変するのである。ホース・ウィスパラー＝トム・ブッカーは、けっして人間の、そして動物の心を癒す魔術師ではない。導師（グル）でもない。「トム・ブッカーのヒロイズムを解釈すると、彼が常に犠牲を伴っているということに気づく。手を差しのべ、打ちのめされ、他の人と同じように傷ついてゆく。彼には天賦の才能があるが、それは彼が望んだわけではない」（パンフレットより）、とレッド

Digitized by Google

フォードは語る。彼にとっては、トム・ブッカーもまた少女グレースやアニー、さらにはピルグリムと同じように、心の癒しを必要としている普通の現代人なのである。

人間レッドフォードにはいつもどこか誠実で無器用で高潔な、時代遅れの頑固者といったイメージがある。そしてそんな清涼感を、彼はカウボーイ・ハットにカウボーイ・ブーツ、ブルー・ジーンズにダンガリー・シャツといった永遠の西部男の姿で象徴する。今もう61才になるというのに、そんな彼の姿のなんと若々しいことだろう！　トム・ブッカーには過去に恋愛で傷ついた癒しがたい思い出がある。その思いが、彼をアニーとの恋を一歩手前で踏みとどまらせるのである。「努力すればするほど壊れてゆくわ」と嘆くアニーに、「壊せばいい」とトムは答えるのである。ここに彼の男としての固い信条が見え隠れする。そしてそんな彼の信条が、映画のクライマックスのピルグリムの荒療治の場面に鮮明になる。穏やかで優しく静かだった映画の空気が一変する。トム・ブッカーとピルグリムの、この凄まじい精神と肉体の闘い！　バルタバスが語ったように、ジェリコーが描いたように、馬という神秘的な聖なる生きものの精髄が目にみえるように立ちのぼってくる。そんな馬の魔性と相対する人間の精神の強靭な清々しさ！　レッドフォードがこれほど激しい情念をあらわに描いてみせる場面は、おそらくはじめてではないだろうか。

ここではじめてレッドフォードはイーストウッドに接近する。これまで誠実で清潔で優しくて生真面目だったレッドフォードの世界は、いつもなにか得体の知れない人間の心の闇を探っているようなイーストウッドの世界と重なりあうものをかすかにのぞかせるのである。レッドフォードがイーストウッドを意識していないはずはない。たとえば、レッドフォードはこの映画の二枚のオリジナル・サウンドトラック盤（一枚はトーマス・ニューマンによるオリジナル・スコア盤、そしてもう一枚はここに使用されたカントリー&ウェスタンの名曲集）のエクゼクティヴ・プロデューサーとして名を連ねている。イーストウッドは今さらいうまでもなく、マルパソ・レコードの設立者として映画「マディソン郡の橋」や「真夜中のサバナ」のオリジナル・サウンドトラック盤をプロデュースしてきたのである。

ここで原作と映画との重要な違いについて、ぜひとも触れておきたい。前述したように、原作ではトム・ブッカーとアニーは逡巡しながらも一度は肉体的に結ばれる。しかし娘アニーがそのことを察知したことで、トム・ブッカーは荒馬の前にさながら殉教者のように身を投げ出して生命を終える、というのが、原作のドラマティックな最終部である。しかしレッドフォードにとって、トム・ブッカーはそうした男にはみえなかった、という。彼は原作者ニコラス・エヴァンスに彼自身の解釈を話し、エヴァンスは彼の考えを尊重して、そうして映画の心にしみ入るようなラスト・シーンが誕生したのである。

ニューヨークへと去ってゆくアニーの車を、小高い丘の上で馬に乗ってひっそりと見送るトム・ブッカーの姿。ふと、あの懐しい西部劇の傑作「シェーン」のラスト・シーンの余韻がよみがえってくるような忘れがたい最終部である（もちろん、去ってゆくのが女、見送るのが男という違いはあるけれど）。「20世紀末に向けての狂ったレースの只中に、今私たちはいる。さあ、コンピューターのプラグを抜いて、のんびりとくつろぎながら、シンプルな場所のことを想像してほしい。家族や家畜、天気、干し草が最も重要だった場所のことを」、とレッドフォードは書く（映画「モンタナの風に抱かれて」のオリジナル・サウンドトラック盤ライナーノーツより）。彼にとって、偉大なる大西部は今も変らぬ彼の永遠の大地なのである。

Digitized by Google

©Touchstone Pictures

ロバート・レッドフォード論

〈時代〉の優しい風に抱かれて

田沼雄一

THE HORSE WHISPERER

レッドフォードは〈癒し〉の映画作家か

ロバート・レッドフォードは果たして〈癒し〉の映画作家なのだろうか？（癒し、という表現はあまり好きになれないが）

新作「モンタナの風に抱かれて」で初めて監督・主演を兼ねた。彼扮するは、馬と心を通わせ不安を取りのぞくことのできる男（H-orse Whisperer ホース・ウィスパラー）。

トムという名の男。モンタナ、たぶんミズーラかヘレナの郊外、町から車でも2時間ほどかかるだろう山合いに牧場を持っている（実際にロケが行われたのはリヴィングストンという町から1時間ほどのイングル・ランチ。リヴィングストンは「リバー・ランズ・スルー・イット」でミズーラの町という設定で登場してきたところ。レッドフォードお気に入りの町である）。

トムは牧場で馬のクリニックにあたっている。そこへ一頭の馬が連れられてくる。グレース（スカーレット・ヨハンソン）の愛馬ピルグリム。グレースと散歩の途中、事故に遭い人間に敵意をあらわにする荒馬になってしまった。グレースは事故で片足をなくした。母親のアニー・マクリーン（クリスティン・スコット・トーマス）に連れてこられたグレースは母親を嫌い、愛馬と同じように心を閉ざし始めていた。トムはピルグリムの不安を取りのぞくこと、グレースの心にも優しさの

Digitized by Google

風を送ってあげること、なによりアニー自身の心の平穏が必要だと感じる。アニーは人気雑誌の編集長。忙しさを理由に娘、家庭、自分自身をほったらかしにしてきた。トムはアニーが自分を見つめ直すことこそ必要だと教えていく。

二人の間にいつしか〈思い〉が通い始める……。

「モンタナの風に抱かれて」は〈癒し〉をテーマにしている。

「トムは他者の魂を癒し救うヒーローだ。彼には天賦の才があるんだ。ごく普通に人と接する、すると相手の人の気持ちが和らいでいくんだ」とレッドフォード自身、〈癒し〉という言葉をはっきり口にしている。

最近この手のテーマの映画が多過ぎる。現代人ってそんなに心に病を持っているのか、と疑いたくなるほど多い。とにかくアメリカ映画を筆頭にいまや〈癒し〉ブームである

「普通の人々」

「ミラグロ　奇跡の地」

（嫌なブーム）。この流れ、なんとかならないだろうか。少々、食傷気味である。

原点の監督第一作、「普通の人々」

考えてみれば、レッドフォードの監督第一作「普通の人々」（80年）がこの手の映画のハシリだったように思う。

シカゴ、高級住宅街に住む弁護士キャルヴィン（ドナルド・サザーランド）。妻ベス（メアリー・タイラー・ムーア）と結婚20年。ベスは溺愛していた長男をボート事故で亡くして以来、次男コンラッド（ティモシー・ハットン）に辛くあたるようになっていた。ボートにはコンラッドも乗っていた。母親のヒステリー、兄の死を自分の責任と思うようになりコンラッドは精神不安から自殺をはかる。未遂に終わるが母親との溝を埋めることはできない。やがてベスは夫と子を素直に愛することはできないと、ひとり家を出ていく。

人はどうすれば心を癒せるか、愛する人への思いを取り戻せるのか、レッドフォードはそれを丁寧に描いた。疲れた心の置き場所、それを誰もが求めている、でもなかなか探し出すことはできない。「普通の人々」は心の置き場所を探して迷う人々を真摯に取り上げた。アカデミー作品、監督賞も納得の秀作だった。

「モンタナの風に抱かれて」は「普通の人々」と相通うものがある。アニーもグレースもピルグリムもトムと出会って、初めて心の置き場所を見つける。レッドフォードは監督作品5本目で原点回帰したともいえる。

しかし本当にレッドフォードは〈癒し〉の映画作家なのだろうか？　と再び問いかけたい。

「ナチュラル」からうかがえる映画姿勢、映画作家のスタイル

早くから自分の製作プロダクション（初期はワイルドウッド・プロ、近年はサンダンス・プロ）を維持しながら好みの題材を取り上げてきた。監督作品だけに限らず主演作にも彼の好み、姿勢を伺うことができる。たとえばバリー・レヴィンソン監督を初めてメジャー系商業ベースのプロジェクトに引っぱった「ナチュラル」（84年）。当初はレッドフォード自身がメガホンを取る予定だった。「ダイナー」に惚れたレッドフォードがレヴィンソン監督を育てることのほうがアメリカ映画界の財産になると考え大抜擢した。

「ナチュラル」はレッドフォードの映画姿勢、映画作家のスタイルを考えるうえで欠かせない作品である。

主人公ロイ・ハブスの、少年の頃に亡くなった父への思慕、幼友だちアイリスへの思い、彼女との間に男の子が生まれていたことを知り父親となっていた自分を自覚し、やがてその子との絆、アイリスへの思いを優先させた人生を選択する。「ナチュラル」はアメリカ映画に限らずあらゆる国のあらゆる世代のあらゆる映画作家たちが描き取り上げ、さらに描き続けていくであろう〈絆〉という普遍的なテーマの映画である。

「人がいる限り、社会が営まれ続ける限り、映画は絶対に存在すると思う。なぜならば映画は多くの人たちに、社会のために、いつの時代でも人が生きていくために必要な事柄、物事を描くという責任があるからです」

Digitized by Google

「ナチュラル」（バリー・レヴィンソン監督）

「大いなる勇者」（シドニー・ポラック監督）

と以前レッドフォードに取材したおり彼はそう話してくれた。

彼はおそらく現代アメリカ映画の中で最も強く映画の「責任」を考えている映画作家だと思う。その「責任」とは映画が大勢の人たちに与える影響、社会に対する役割である。一本の映画によって大勢の人が扇動され、社会が大きく変わってしまうこともあるだろう。レッドフォードはそのことを気にかけている。映画の持つ影響力、社会的役割についていつも真剣に考えている。

そうした考えの表れの一つが真摯な映画を創るための〈場〉、ステップとなることを目的に設立した「サンダンス・フィルム・インスティテュート」である。ユタ州パークシティ。そこはレッドフォードのフィルム・ランチ。ちょうどトムにとって馬といっしょに暮らすために必要なモンタナの牧場と同じである。レッドフォードはサンダンス・インスティテュートで映画と真剣に向き合い、会話を続けている。

レッドフォード作品は映画の社会的役割を強く考慮されたうえで創られていると言ってもいいだろう。

自然保護、環境破壊を取り上げた「ミラグロ　奇跡の地」

監督二作目「ミラグロ　奇跡の地」（88年、この映画の原題が大好きだ。"The Milagro Beanfield War"ミラグロ豆畑戦争！）は自然保護、環境破壊を取り上げている。近年、全世界的に人々の関心がもっとも高い、社会的関心事である。映画の「責任」を真剣に考えるレッドフォードらしい題材の選び方だった。

ニューメキシコ州ミラグロ。大手企業による州最大のレジャーランドの建設計画が着々と進み始めていた。町を二分する事業だった。建設予定地の一角に、乾いて畑にもならない土地を持っているホセ。ところがある日、その場所に壜から流れ出た水が入り込んだ。ホセは適度に水を含んだその土地を耕し、豆の種を植え始める。町の人々は水を勝手に使うことが違法と知りつつもホセを応援する。大手企業と町の役人たちはホセの突然の豆栽培に驚き、レジャーランド建設予定地に入っているから直ちに止めろ、と脅しをかけていく。

ホセが先祖代々受け継いできた土地、自分の人生、生きることそのものをかけた闘いがこうして始まった。

周辺環境を変えてまでも企業の仕事は本当に必要なのか、再開発は本当に意義が深いことなのか、と問いかける。長い間土地を守ってきた、耕してきた、愛してきた人たちの気持ちよりも産業誘致のほうが大切なのか、とも問う。レッドフォードはユタ州パークシティ周辺のスキーリゾート開発による環境の悪化をこの映画で痛烈に皮肉ったとも言われる（2002年に開催されるソルトレイクシティ冬季五輪の主要会場の一つにパークシティが入っているが、環境アセスメントの厳しい条件をクリアーして冬季五輪を誘致した。レッドフォードら地元の人たちの厳しいチェックが環境を壊さない五輪誘致に成功した。それに比べて長野五輪のあとのヒドさといったらない……）。

「ミラグロ　奇跡の地」は全世界的関心事である環境問題を取り上げているが、その一方で昔からのもの、古くから伝わるものを現代人はどれだけ残していけるのか、とも問いかけている。レッドフォードはそのことについても以前から考えていた。

シドニー・ポラック監督「大いなる勇者」（72年）のロケでワイオミング・コーディを訪れたときのこと（バッファロー・ビル・コーディが開拓した町である）。町外れに開拓時代に建てられた納屋がポツンと立っている。文化財ではない。何気なく立っている。それを見てレッドフォードはコーディの町の人々が納屋を壊すこともなく、でも特別に保存するわけでもない、ごく普通のものとして残していることに深く感動したという。納屋は映画の前半、開拓村のシーンに登場する。じつは現在もなおコーディの町外れ、同じ場所にポツンと立っている。昨年9月、ワイオミング州観光局の招きでコーディを訪れたとき見学させてもらった。本当にごく普通にポツンと立っている、たんなるボロ納屋だった！

昔からのもの、古くから伝わるものをそのままそっと残しておくこと、それもまた大切なことではないだろうか。

家族と自然の美しい瞬間を記録した「リバー・ランズ・スルー・イット」

「リバー・ランズ・スルー・イット」（92年）では太古の時代から流れ続ける川の美しさ、岩の下にある川の言葉の大切さを描いた。主人公で原作者、ノーマン・マクリーンの見た昔からの美しいものの数々、モンタナ州ミズーラ、ヘレナ周辺に残る美しいものたち、その中に彼は厳格な教育で育ててくれた両親、巨大な鱒の考え方すら分かってしまうのではないかと思えるほどフライ・フィッシングの

Digitized by Google

達人となった弟ポール、心優しい妻と子どもたちの姿を重ね合わせている。ミズーラの町の真ん中を流れるビッグ・ブラックフット・リバーの澄んだ流れとともに自分の家族たちの美しい瞬間を記録していった。ノーマン・マクリーンの同名原作（邦訳は『マクリーンの川』）の筆致そのままにレッドフォードはマクリーン家の人々の絆の深さ、フライ・フィッシングへの思いの深さを映像で表現した。

好みで言えば「リバー・ランズ・スルー・イット」がレッドフォード監督作品の中で最も好きだ。いまでも、ちょっと嫌なことがあったときとか、フライ・フィッシングに出掛けられないときなど、ちょくちょく観ている。私にとって「フィールド・オブ・ドリームス」といっしょに〈癒し〉の映画になっている。生涯そばに置いておきたい映画を選ぶなら断然「リバー・ランズ・スルー・イット」である。

「リバー・ランズ・スルー・イット」

「クイズ・ショウ」

メディアの罪を問う「クイズ・ショウ」

「クイズ・ショウ」（94年）は「リバー・ランズ・スルー・イット」と同様、肉親の絆に着目した作品。主人公チャーリーと詩人で有名な父親との絆。そしてもう一つ大切なレッドフォード・スタイルを見ることができた。

「社会が営まれている限り映画は存在する」と話した彼はさらにこうも話してくれた。

「映画は時代をとらえるメディアだと思っている。いまこの瞬間の時代の出来事を記録するという責任と、なされてきた時代の断面を新しい解釈でとらえてみる、そういうこともまた責任の一つだと思う。過ぎ去った時代、歴史を知らない世代に伝えるという意味での責任も映画にはかかっていると考える」

「クイズ・ショウ」はTVメディアの出現によって多くの人たちの人生が変わってしまう20世紀という時代の形を丸ごととらえようとした野心作である。TVがなければチャーリーはあのように傷つくこともなかった……メディアの功罪の〈罪〉、それは現在もなおくり返されていることだ。メディアの罪、20世紀以降の時代の普遍的テーマなのかもしれない。

と、三たび問う。レッドフォードは〈癒し〉の映画作家なのか？

答え、違う。

「モンタナの風に抱かれて」で彼が描出した心の問題は、現代という時代が求めている、現代人が最も強い関心を示している事柄、という解釈だろう。〈癒し〉はいまの時代の空気、とレッドフォードは言っているように思える。

A　11月6日[金] 19:15開演
クリスマスに雪はふるの？
サンドリーヌ・ヴェイセ監督

フランス／1996年
南仏プロヴァンスの移り変わる美しい四季を背景にした、母と7人の子供たちをめぐる物語。ルイ・デリュック賞、セザール賞などフランスの代表的な映画賞を受賞した作品です。
トーク　小藤田千栄子［国際女性映画週間コーディネイター・映画評論家］
大竹洋子［国際女性映画週間ディレクター］

B　11月7日[土] 14:00開演
マザー・アローン
スミトラ・ピーリス監督

スリランカ／1996年
ピーリス監督は、スリランカ初の女性監督であり、現在は駐仏スリランカ大使。第9作目に当たる本作品も、他の作品と同様、自立する女性が主人公です。
トーク　高野悦子［国際女性映画週間ジェネラルプロデューサー・岩波ホール総支配人］

トーク＆ムーヴィー：
国際女性映画特集
映像が女性で輝くとき
International Women's Films
Feminine Brilliance on Screen
映像ホール（150席）
1プログラム：1,000円（税込）
各プログラム入替制／自由席
好評発売中

C　11月7日[土] 17:00開演
第七官界彷徨――
尾崎翠を探して
浜野佐知監督
日本／1998年
出演：白石加代子、吉行和子、宮下順子、柳愛里 他
1931年34歳の時に発表した長編小説「第七官界彷徨」で太宰治や林芙美子等に激賞され、文壇の注目を集めながら、忽然と姿を消した女性作家・尾崎翠の生涯と作品を紹介する映画。主人公の尾崎役として白石加代子さんが主演する他、吉行和子さん、宮下順子さんなど多彩な配役が魅力です。自主製作で作られた本作品は、女性を中心とする製作を支援する会のカンパ活動が話題になっています。
トーク　浜野佐知［映画監督］
高野悦子

プレイガイド／　彩の国さいたま芸術劇場…048-858-5511　彩の国情報ネットワーク…048-728-3111　チケットぴあ……03-5237-9999
お問合せ　彩の国さいたま芸術劇場　［〒338-8506 埼玉県与野市上峰3-15-1］ TEL.048-858-5503
▶JR埼京線与野本町駅下車徒歩7分（与野本町駅：新宿駅から快速で約30分）

Digitized by Google

チョウ・ユンファ、復活！

作品特集「リプレイスメント・キラー」

THE REPLACEMENT KILLERS

●1998年・アメリカ・カラー・シネマスコープ・ドルビーＳＲ・１時間27分
●監督／アントワ・フークワ　脚本／ケン・サンツェル　製作／ブラッド・グレイ、バーニー・ブリルスタイン　製作総指揮／ジョン・ウー、テレンス・チャン、クリストファー・ゴジック、マシュー・ベアー　撮影／ピーター・リノズ・コリスター　美術／ナオミ・ショアーン　編集／ジェイ・キャシディ　音楽／ハリー・グレッグソン・ウィリアムズ　衣裳デザイン　アリアンヌ・フィリプス　音楽総指揮／ラルフ・サル　キャスティング／ウェンディ・カーツマン
●出演／チョウ・ユンファ、ミラ・ソルヴィーノ、マイケル・ルーカー、ケネス・ツァン、ユルゲン・プロホノフ、チル・シュエイガー、ダニー・トレオ、クリフトン・ゴンザレス・ゴンザレス、キャロス・ゴメオ
●配給／ソニー・ピクチャーズ
●10月31日より有楽町スバル座ほか全国東宝洋画系にてロードショー
●本誌関連記事／９月上旬号『ボーダーレス俳優特集』、10月下旬号新作紹介グラビア、11月下旬号カラーピンナップ

Digitized by Google

周潤發（チョウ・ユンファ）インタビュー

インタビュアー・望月美寿

仕事に大切なのはまごころ。それと芝居に対する情熱があれば、文化や肌の色は問題じゃない

あせりは全くなかった。むしろ充実した4年間だった

「俳優になる前から日本にはもう何度も来ているけど、こんなに歓迎されたのは初めて。とても興奮しています。西洋の水を飲んで私の価値も少しはあがったのでしょうか？」

軽いジョークをとばしながら満面笑みでソファに座る。黒澤明監督に追悼の意を表し、長年応援してくれる日本のファンに感謝を述べる――。チョウ・ユンファが帰って来た。

「お帰りなさい」と抱きつきたい気持ちの反面、どうしたって観察してしまう。4年間のブランクがあった彼のルックスを。どうしたってさぐりたくなる。ハリウッド・スターとして再び私たちの前に現れた彼の変化を。何がどう変わり、何がどう変わっていないのか……。

だが、ご安心めされ。我らがユンファは昔のままだった。いや、肝炎を患い疲れが顔に出ていた数年前より、むしろ今のほうが若々しくスマートにさえ見える。おっかないエージェントやマネジャー、ボディガードの面々に囲まれてもいなかった。なんと香港からジャスミン夫人と二人だけで来日したという。来日記者会見の席では「私たちは友だち、ここはお家だと思って下さい」と言い、途中から司会進行を自分で仕切ってうけていた。人を魅き込む少年のような笑顔も、からだ全体から発する独特のあったかみも、少しも変わらない。いや、世界を広げ、自信を得た分一回り大きくなったというべきか。

39歳から42歳にかけての働き盛り男盛りに銀幕を離れ、ファンをやきもきさせたユンファだが、本人は「あせりはまったくなかった。むしろ充実した4年間だった」とふり返る。

「香港では私はあまりに忙殺されていました。渡米して、考える時間、体をやすめる時間、妻との絆を確かめる時間と空間を初めてもてました。さらにアメリカの文化や言葉にふれることもできました。ここにひとりの役者がいる、でもセリフの言葉を満足にしゃべれませんでは、映画作りに参加することはできないと思う」

ちゃんとした発音が身につくまでは映画に出ない、と数々のオファーを断り続けたユンファ。英語の特訓中には寝言も英語で言っていたそうだけど――。

「多分セリフを言っていたのでしょう。俳優共通の精神分裂症的職業病ですね。妻に『愛してるよ』と言った覚えはないけれど、『こいつを殺せ』とは言ったかもしれない（笑）」

ハリウッドに行って一番驚いたことは？

「俳優に40フィートもの長さの休憩場所（コンテナ）があること！　香港では裏方もスタアもみんな一緒の狭いところで食事したり化粧したり。でも、ハリウッドでは俳優は王様。ワンカット終わるごとにコンテナに連れて行かれて『どうぞここでお休み下さい』。それになかなか慣れなくてね。今でも私は、香港式の皆でわいわいやるほうが楽しいし好きです」

「ハリウッドの映画製作は制度化されています。アジア市場重視の香港とちがい、世界が相手だから製作規模も収益も何十倍。でもその分いろんな場面での浪費も多い。『ああ、これだけのお金があれば香港で何本いい映画が撮れるだろう』と思うと残念で、もったいなくて、悲しくなるようなこともありました。いま、香港映画界は不況で、長くがんばってきた映画人が次々と職変えするようなありさまです。復活のためにはまず資金がいるのですが……」

離れていてもいつも香港の映画界のことを見守っているというユンファ、眉のあたりがみるみる曇ってくる。

気をとりなおして「リプレイスメント・キラー」についてきこう。

「私にとってすべてが新しいものでした。言葉も、パートナーも、パッケージも新しい。私自身もハリウッドでは新人。ベストをつくせたと思います。87分と決して長くはないけれど（笑）、私とスタッフみんなの血と汗の結晶です」

「特に気に入っているのはオープニング・シーン。まず音楽がいい。後ろ姿の背中が神秘的でスローモーションがどこかジョン・ウー風。サムライのような感じもする。そしていきなり、門答無用の皆殺し！（笑）」

もともとは白人が主役だったシナリオを、脚本家と二人、話し合いを重ねながらアジア人のものに変えていったのはユンファ自身だ。「つらく苦しく時間のかかる作業でした。今思い出すとなつかしい、でもやっぱり大変だった……」

ということは、あの抑制のきいたラスト・シーンもユンファのアイデア？

「実はラストは4つのバージョンを用意し、実際に撮りました。①キスして別れる②キスしないで別れる③握手でバイバイ④は私がアメリカに残る。それから皆で意見を出しあい、最終的には最も私のキャラクターに合っているとのスタジオの判断で、あのようになりました。ラブシーンがなかったって？　ふーん、それであなたは失望したの？（笑）主人公二人は男と女ではあるけれど、兄と妹のような関係。愛というより友情で結ばれている。そこにラブシーンが入るのは不自然と感じました。結果的にそのほうがラスト・シーンが生きて、感動を伝えられたと思います」

今回、折りにふれては「私はハリウッドでは新人ですから」というセリフ（？）が飛び出したユンファ。ミラ・ソルヴィ

Digitized by Google

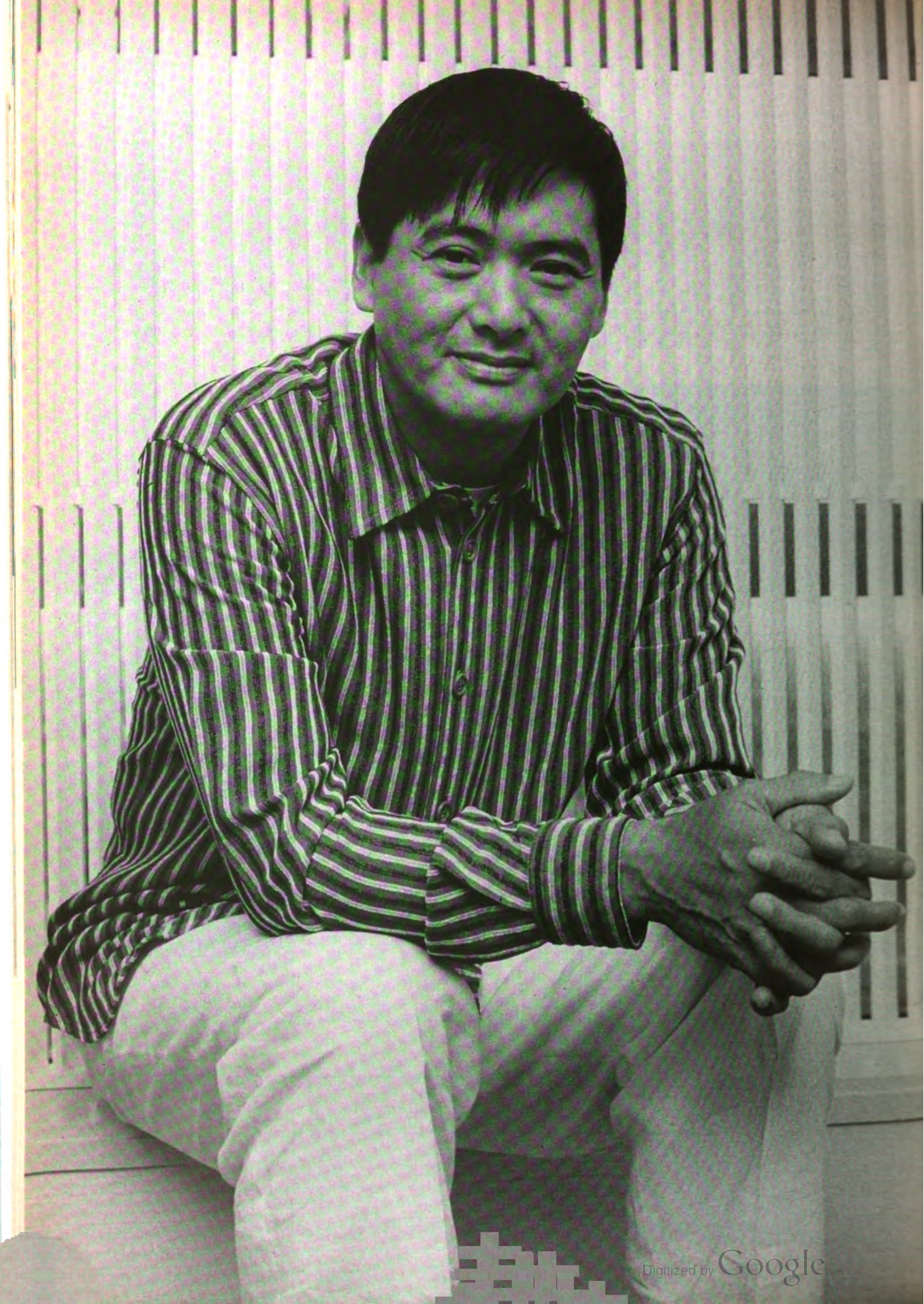
ーノについてきかれるとそれが爆発!?
「ミラさんのようなオスカー女優に共演してもらえて光栄でした。彼女は聡明で動きも機敏。たしかに私はアクション映画の経験は多いけれど、ハリウッドでは新人です。クィーンに動きの指導するなんてとんでもない。私のほうが彼女に学び、従う立場です。それに彼女の北京語は留学していただけあってとても流暢なのに、私の北京語はヒドい（笑）。中国人として恥ずかしかった。英語も北京語も中途半端で、ずいぶん迷惑かけたんじゃないかな」
「クエンティン・タランティーノは現場によく来てましたよ。〝ハリウッドで生き抜いていくにはどうすべきか〟とか、たくさんアドバイスしてくれました（笑）。私にとって二人はよき師匠でよき友人。でも、今はもう別れちゃいました。まさかこの映画が原因じゃなかっただろうな、と思ってますが（笑）」
ミラと二人で2週間、本物の銃を撃つ訓練にも行かされた。
「さすがハリウッド、と思いました。でも、これで本当に人を殺せるんだと思うと恐ろしくて。撮影に入ってからは銃の撃ち過ぎの反動が手にきて、茶わん持つのもハシ持つのもつらい、ということもありました」
これがデビュー作の32歳の監督アントワ・フークアについては、
「中国人の監督が、中国人の俳優を撮るのとはちがう角度の監督の視線を感じました。完成した映画の中の私は、今までの私とどこかちがう。どこがどう、とはうまく言えないのですが。監督は私を、ハンサムに偉大にクールにカッコよく撮ってくれました（笑）。自分に惚れ直したかって？　私よりも妻のほうが気に入ってくれたと思います」
愛妻家（恐妻家？）として有名な自分をちゃんと知っていて、こういう憎らしいことを言うのである。

ジョン・ウーとは、1999年に一緒に仕事する予定です

さて、ユンファといえばジョン・ウー。
「リプレイスメント・キラー」では製作総指揮を担当したウーとの今後は？
「ハリウッドに行って、ウーの仕事ぶりが変わったかって？　はい、楽しく優しく、そうまるで仏様のように慈悲心あふれるお方になりました（笑）。彼とは1999年に一緒に仕事する予定です。えっ、監督は映画が完成したら私を連れて来日するって約束したんですか？　私はきいてないな（笑）。じゃあその時は皆さんが証人になって下さいね」
「（ハリウッドの若手監督が香港映画の影響を受けてますが、を受け）香港映画は、かつてハリウッドや黒澤映画から影響を受けました。ジョン・ウーは日本映画やヨーロッパ映画に学びました。それが今、逆転している。これは一種の文化交流と考えていいでしょう。お互いが交換し合ってメリットもある、いいことです。今、香港では日本のTVドラマがブームで、映画界がさかんに取り入れています」
久しぶりなのでプライベートなこともききたい。そんなミーハーな質問の嵐にも二ッコリ。
「アメリカで慣れないのは食事。リトルトウキョウやチャイナタウンにはよく行きます。うれしいのは、誰も私のことを知らないので自由にふるまえること。自分で広東料理も作ります。蒸し魚と野菜炒めが得意。お皿洗うのはキライ、奥さんがやります。今回日本では九州ラーメンを食べに行きました。
趣味は水泳、ハイキング、おいしいものを探すこと、写真を撮ること。いや、人に見せられるほどの腕じゃありません。夜は基本的に11時に寝て、6時か7時には起きます。犬が好きで前は14匹飼ってたけど、今は4匹。2匹はゴールデンリトリバー、一匹はラブラドール、もう一匹は中国の犬です」
香港で10月に舞台に立ったあと（京劇を扱った芝居の客演だそうだ）、今年いっぱいは休むというユンファ。来年は「王様と私」の撮影が待っている。
「これはミュージカルではありません。歌わなくていい、踊らなくていい、頭も剃らなくていい。文芸作品ですね。相手役はエマ・トンプソンさんの予定でしたが、赤ちゃんができたので降りました。最新の候補者名は、えーと（誰？　誰なの？　と記者団）……知りません」
他にも、「始皇帝暗殺」の始皇帝役のアプローチがあったときは渡米直前だったため断ったが、自分のヘタな北京語とモダンすぎる外見ではやはり無理だっただろうこと。キン・フー、ジョン・ウーとの念願の企画「バトル・オブ・オーノー」（カルフォルニアの鉄道建設に従事し、完成後、無賃金で追い払われた労働者たちの苦闘の物語）は、スタジオが興味をもった矢先にキン・フー監督が急逝したため中断してしまったが、あきらめずにまたアメリカ側と交渉してみるつもりであること、なども語ってくれた。
〝亜洲影帝〟と呼ばれた男がすべてを投げ打ってアメリカに渡り、いま成功の扉を開けようとしている。だが、この男、謙虚にして慎重なことこのうえなし。
「今後私がハリウッドでどうなっていくのか、まだ何とも言えません。一緒に仕事してみたい監督も俳優もいまはまだわからない。私はやっと一本に出ただけで、2本目は撮影は終わったけれど（オリヴァー・ストーン製作の〝The Corruptor〟）全米公開は来年だから、まだ反応がつかめないのです。でも、さいわい私はまだ若い。まだまだ青春です。たくさん映画を撮りたい。それにはこれからハリウッドで地道にしっかりやらないと。なにせ私はまだ新人ですから。成果が出せるまで、時間をそう、少なくともあと5年下さい」
5年……といっても、「一作目に労力も時間もかけすぎて疲れた、今後はこんなに時間かけずにコンスタントに撮りたい」とのことなので、我々の首はこれ以上長くならずにすみそうだ。
「私は、世界は一つの輪になれると思います。仕事で大切なのはまごころ。それと芝居に対する情熱があれば、文化や肌の色の違いは問題になりません」
と語るユンファ。いつか日本で仕事することもあるでしょう、というニュアンスが感じられるのがうれしい。何はともあれ、復活ユンファの輝かしい未来にエールを贈ることのできる喜びをかみしめる来日インタビューであった。

撮影／吉岡誠

Digitized by Google



Digitized by Google

俳優論・チョウ・ユンファの魅力

最大公約数的な魅力をアピール

宇田川幸洋

これだけ待たされた以上、例の、一番いいヤツを！

チョウ・ユンファは、彼のハリウッド進出第1作となった「リプレイスメント・キラー」について、こんなふうに語っている。

「『リプレイスメント・キラー』は西洋人に見せるために作られたチョウ・ユンファ的なアクション映画だね。比較的新鮮なのは、画面の構図だ。監督はMTVを作ってきた人だから、音楽的なテンポが強い。音響効果もよく出来ている。しかし、ジョン・ウーの映画が好きな人が見ると、新鮮な驚きはあまりないだろう。ぼくがいつも言っていることだけど、香港の観客の要求はとても高い。彼らはジョン・ウーの『フェイス／オフ』を見ても、前の作品のほうがいいと言う。だから、いまのチョウ・ユンファを見ても、『男たちの挽歌』や『狼／男たちの挽歌・最終章』のほうがいいと言うに決まっている。観客が既成のものを認めている場合、それを超えるために、または自分を超えるために、ぼくたち映画人はまったく新しいキャラクターを創り出さなければならない。そうすることによってしか『男たちの挽歌』のマークを超えられない。でも、そういう作品は人の力だけでなく、いろいろな要素が整うことによってしか作られない。またそれは巡り会うもので、求めて得られるものではないのだ」（『HONG KONG RAPID』誌98年3月5日号より。なお原文は香港の映画雑誌『電影双週刊』掲載のもので、香港の映画ファンを読者として彼は語っている）

いきなり長い引用になってしまったが、「リプレイスメント・キラー」という作品の性質と評価については、このチョウ・ユンファ自身の冷静な分析によって、かなり言い尽くされている観がある。アメリカでも一部には熱いファンを持つが、広範囲にはまだ未知の東洋人俳優にすぎないチョウ・ユンファを、とにかく売り出すための御披露目映画、プロモーション・フィルム的フィーチャーが「リプレイスメント・キラー」なのであろう。そのためには彼の魅力の最大公約数的な部分を、とりあえず世界中の観客の舌に合うような味付けとパッケージでアピールするという、そういう意味ではきわめて目的意識のはっきりした映画である。

そこでアピールされるチョウ・ユンファの魅力とは、やはり「男たちの挽歌」（86）に始まるジョン・ウー監督とのコンビで生み出した、暗黒街に生きるアクション・ヒーローということになる。とりわけアメリカで人気の高い「狼／男たちの挽歌・最終章」の心やさしい殺し屋のキャラクターが、この「リプレイスメント・キラー」のジョン・リーの祖型になっているといえよう。

悪く言えば二番煎じということになるが、スターがその最も魅惑的な面を見せつづけることは、ファンにとっては悪いことではない、どころかむしろそうあってほしいものでさえある。一度成功した役柄は何度でも演じてもらいたいのである。

ましてや、最後の香港映画「大陸英雄伝」からもう3年も作品がなかったチョウ・ユンファの場合、ファンはしびれをきらせ、もう何でもいいからスクリーンに彼の姿が見たいし、どうせだったら、かつての最もカッコいい役どころで新天地でのカムバックを飾ってほしいと待望していたのだ。年間10数本出ていた頃なら、どんなヘンな役で出てきても、それなりに楽しめたが、これだけ待たされた

「男たちの挽歌」

「大陸英雄伝」

Digitized by Google

以上、例の、いちばんいいヤツを出してくれなきゃ、てな心理だ。

かくして、初見のお客も古くからのファンも、注文は同じ、求めるところは一致するのである、例のアレを、ということで。

演技力で見せるアクション映画のすばらしき時代への復古

流行りの言葉でいえば〝温度差〟が、作るチョウ・ユンファと待ち構えるファンの間にあったかも知れない。チョウ・ユンファのほうは冷静で戦略的であり、ファンのほうが熱くなっている。しかし、これはスターとファンの健全な関係というものだろう。

思えば、スターになってからのチョウ・ユンファは、いつもこの健全な関係を壊さないように注意を払ってきた。

「男たちの挽歌」の大ヒット以降、彼はガンを撃ちまくり、人をバリバリと殺しまくる役が多くなったが、その当時からすでに、そういう役はもうあまりやりたくないんだ、と言っていた。89年には親友でありジョン・ウーより以前からの名コンビであるリンゴ・ラム監督とプロダクションを興し、刑事ものではあるが恋愛ドラマの色のほうが強い、しんみりした「いつの日かこの愛を」を作ったし、もっと泣かせる「過ぎゆく時の中で」の原案を自ら（シルヴィア・チャンと共同で）提供したりしている。本当はああいう傾向のものがやりたいのだ。

チョウ・ユンファの本来は、アクション・スターではないのである。彼はあくまでも、すぐれた俳優にすぎない。

香港映画のスターにしては、彼はクンフーはまったくできないし、初期の出演作を見ると、殴り合いが目立って下手だった。香港映画の殴り合いシーンは本当に殴って迫力を出すことが多いのだが、そういうことが苦手なのである。しかし、俳優としてアクション映画のヒーロー役に必要とされる動作は身につけてきた。その動作、所作が、われわれを魅了してやまない。

アクション・スターとしてチョウ・ユンファを見るとき、そのありかたは、ここ20数年間のアクション・スターの傾向とまったく異なるものである。つまり、ジャン・クロード・ヴァン・ダム、ドルフ・ラングレン、スティーヴン・セガール、シルヴェスター・スタローン等々、実際に格闘技の達人だったり、そうでなくてもそのように見える筋肉を有しているスターが大勢を占めている近年の、一種のリアリズム、筋肉重視、格闘技偏重の傾向の対極をいくものであり、前の時代に戻ったものともいえる。すなわち、肉体的な特技を持たないスターが演技力で見せていたアクション映画のすばらしき時代への復古なのだ。

いまの格闘技偏重の傾向は、ブルース・リーが世界に与えた刺戟に端を発している。同じ香港からハリウッドにとび発ったチョウ・ユンファが、そのサイクルをくつがえし、役者の感情表現と所作の美しさ重視の華麗なるアクション映画の新派を興したらばおもしろいと思うが、ハリウッドでこれから彼はどんな役柄を選択していくのであろうか。

「リプレイスメント・キラー」

Digitized by Google

出演作でみる

チョウ・ユンファの軌跡

たかのひろこ

チョウ・ユンファの香港ノアール、ラヴストーリー、コメディといった幅広い演技力は敬服を通り越して、呆れる程だ。彼の凄さはその役が常に「チョウ・ユンファ」でありながら、どれもリアリティがあること。それは「大丈夫日記」だって例外ではない。

「獣たちの熱い夜～ある帰還兵の記録～」(81)
香港に文通相手を頼ってきた中国系ベトナム難民を演じる。ユンファが**注目されるきっかけとなった作品**。Vポニーキャニオン／日映

「終わらない愛を探して」(83)
人妻がパリで出会う留学生。ひとりの女性に満足しないキザな男なんだけど、スタイリッシュで美しいセットの中では**セクシーな魅力にあふれている**。

「傾城之恋」(84)
結婚に失敗し実家で孤独な生活を送っていた女性の前に現れる、イギリス留学帰りの実業家。この頃の彼は社交界を闊歩する**プレイボーイ**も様になる。LDパイオニアLDC

「風の輝く朝に」(84)
日本軍占領下の香港での青春を描いた香港映画屈指の傑作。友情のために恋をあきらめ、ふたりのため自らを犠牲にする元役者。どこか**孤独を感じさせる演技と、笑顔が輝いている**。Vポニーキャニオン

「サイキックSFX魔界戦士」(86)
ちょっと珍しいSFXもの。事故がきっかけで、自分の超能力に気づくデザイナー。深夜高層ビル街での悪魔との戦いは大迫力。

「夢中人」(86)
オーケストラの指揮者を演じる。2千年の時を越えた現代に蘇る宿命の女性と出会う。時代を超えたラヴ・ファンタジー。雨中のキスシーンや大胆なベッドシーンが、トニー・オウ監督の美しいカメラワークで描きだされる。**ユンファのフェロモン映画代表**。V東北新社（廃版）

「男たちの挽歌」(86)
日本にチョウ・ユンファが紹介された記念すべき作品。当時テレビでタモリがパロディを演じるほど、ユンファの華麗なガン捌きは新鮮だった。圧倒的な存在感でで香港金像奨を受賞。アクションだけでなく偽百ドル札でタバコに火をつける表情等も心に残る。V日本ヘラルド

「地下情　追いつめられた殺意」(86)
本当の主役はトニー・レオン。スタンリー・クァンの第2作。ここでは事件の担当刑事として、トニーをはじめ若者のまわりでウロウロし、気が付けば不治の病で入院している。**いかにもニューウェーヴらしい役柄**。V日映

「セブンス・カース（七番目の呪い）」(86)
香港の人気ヒーロー、ウェスリーを演じる。チン・シュウホウ演じるヒーローの冒険が主なストーリー。危機一髪！　の時だけ突然現れ、バズーカ一発で一件落着とは、ちょっと気が抜ける。Vポニーキャニオン

「傷だらけのメロディー」(86)
万引き娘をひょんなことから自宅にひきとることになる刑事役。密入国者にお約束のヤクザがからんでくるわけだが、追い出した少女を見つけだした時の**優しい眼差し**が印象的。Vオリエンタル・シネ・サービス

「誰かがあなたを愛してる」(87)
舞台はニューヨーク。気の進まないまま、留学中の女の子の面倒をみている男サンパン。彼は、やがて彼女に恋をする。だが賭事でしか感情のバランスの取れないサンパンは……。さりげなく彼女を励ますシーンや走る姿が訴える、このなんのとりえもない役に出会い、観客はかえって彼の**演技の幅や優しさ**を知ることになる。Vポニーキャニオン
LDパイオニアLDC

「誰かがあなたを愛してる」より

「男たちの挽歌」より

Digitized by Google

「大丈夫日記」（88）
コメディ部門の代表作。ふたりの女性と結婚してしまうエリートビジネスマン。ズルイヤツだが憎めない。英国舞台も香港映画にかかるとここまでなるかという作品。「もう自分でもどうしていいかわからないくらい喜んで」演じていたためか、観客もひかずに一緒に楽しめる。V アスミック（廃版） LD パイオニアLDC

「過ぎゆく時の中で」（86）
昔レーサーだった男が息子のCM出演がきっかけで別れた恋人と再会する。しきりに「もっと演技をしたい」という彼が好むのはこういう**感情の表現が楽しめる作品**なのかも。V LD ポニーキャニオン

「いつの日かこの愛を」（89）
妻子を失った特捜刑事。担当した事件で残された孤児の身内を探し、彼女の叔母である女性に出会う。**キスさえも交わさない大人の純愛が似合う**ようになる。V 日本ヘラルド

「狼／男たちの挽歌・最終章」（89）
非情でクール完璧な殺し屋。傷を負わせた女性を愛してしまったことと、彼を追う刑事との間に友情が生まれたことから、人間らしい心を取り戻していく。**「リプレイスメント・キラー」のフォーマットがアメリカでも公開されたこの作品であることは明白**。ただ心に残っているのはジェニーをみつめる顔だったり、川でのリー（ダニー・リー）とのシーンだったりする。V LD 徳間コミュニケーションズ

「ゴッド・ギャンブラー」（89）
世界的な活躍していた〝賭神〟が大勝負を目前に事故で、記憶喪失になり、それを世話する3人が抗争に巻き込まれていくという、まず**ユンファありきの作品**。本格的なカードテクニック、ガンアクション、幼児化したコミカルな演技、クライマックスの復活。これでもかと観客の期待を押し込めた演技。「完結編」（94）も大ヒット。V SPO LD パイオニアLDC

「恋のトラブルメーカー」（92）
お洒落なラヴ・コメディー。田舎の村長とロンドン帰りの幼なじみのお話。彼のナマリぶりが見事と、当時、香港人の間では評判だった。V ポニーキャニオン

「風の輝く朝に」より

「大陸英雄伝」（95）
香港最後作品。荒野の宿の主人で殺人王と呼ばれる伝説の男を演じた。これが〝最後〟とはちょっと残念。監督がカッコよく撮ろうと意識をしすぎているのが敗因。V LD バンダイビジュアル

その他「ゴールデン・ガイ」「僕たちは天使じゃない！」等のコメディも捨て難い。では今後の活躍はというと。

「コラプター」（99）
オリバー・ストーン製作で「バスケットボール・ダイアリーズ」のマーク・ウォルバーグとの共演。麻捜査にはまっていくチャイナタウンの刑事役。テスト試写を繰り返しながら現在、最後の調整に入っている。公開は99年始めの予定。

「Anna and I」（99）
「王様と私」のリメイク。以前報告した（キネマ旬報9月上旬号）エマ・トンプソンが（出産のため？）降板し、現在、共演者は未定。彼自身の話では「（苦手の）**歌もダンスもなく、頭も剃らない**」。

「王様の身の代金」
ファン待望のジョン・ウー監督作品。こちらはどうやら2000年以降になりそう。「狼たちの絆」に似たライト・コメディという噂だが2年先となると……。

「ゴッド・ギャンブラー」より

Digitized by Google

作品特集 ハーフ・ア・チャンス

1 Chance sur 2

●1998年・フランス・カラー・シネマスコープ・ドルビーDTS・1時間49分
●監督／パトリス・ルコント　製作総指揮／エルヴェ・トリュフォー　製作代表／クリスチャン・フェシュネール　脚本／パトリック・ドヴォルフ、パトリス・ルコント　台詞／セルジュ・フリードマン　撮影／スティーヴン・ポスター　音楽／アレクサンドル・デスプラ　美術／イヴァン・モーション　衣装／アニー・ベリエ＝フーロン　編集／ジョエル・アッシュ　録音／ポール・レネ、パトリス・グリゾレ、フレデリック・アタル、ドミニク・エヌカン
●出演／アラン・ドロン、ジャン＝ポール・ベルモンド、ヴァネッサ・パラディ、エリック・デフォス、アレクサンドル・イヤコレフ、ミッシェル・オーモン、ジャック・ロマン、フィリップ・マニャン
●製作／フィルム・クリスチャン・フェシュネール、UGCF、TF1フィルム・プロダクション
●配給／シネマパリジャン　提供／アミューズ、テレビ東京、デジタル・メディア・ラボ、シネマパリジャン、東京テアトル
●11月中旬より、銀座テアトル西友、渋谷シネ・アミューズにてロードショー
●本誌関連記事／10月下旬号新作紹介グラビア

Digitized by Google

パトリス・ルコント監督 インタビュー

撮影中、あードロンとベルモンドを撮っているんだ！ とずーっと感じていた

インタビュアー・吉武美知子

シネフィルの僕にとってドロンとベルモンドは生きた神話なんだ

「ドロン、ベルモンド、パラディの隠れ家だ。ここは、誰にも知られてない筈なのに、ロシア・マフィアの不意打ちに遭う。映画の2／3辺りに位置するシーンだ。爆破シーンや特殊効果があって、けっこう面白い撮影になると思うよ」

と、ルコント監督が今日の撮影について説明してくれる。97年7月21日、パリ郊外の空き地にセットされた「ハーフ・ア・チャンス」の撮影現場。午前中にセッティングを終え、昼食後、役者待ちのスタンバイ中に木陰で監督にインタヴューした。強い夏の陽射しが白い砂地を照り返す。上半身裸の日焼けしたスタッフが行き交う。

この撮影、楽しんでますか？

「もちろんさ。映画作りが楽しめなくなったら僕はリタイアするからね。役者の遅刻を除いては（苦笑）、今のところ全部が楽しいね」

実はこの日、ベルモンドが遅刻して来た（理由は、自分でフェラーリを運転していて道に迷ったのだ）。ところで、この企画の言い出しっぺは？

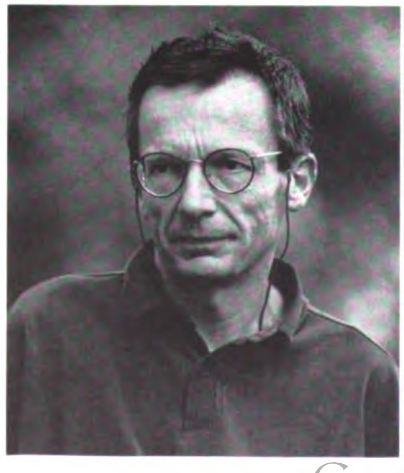
「プロデューサーの（クリスチャン・）フェシュネールだ。3年以上前に遡る。25年振りにドロンとベルモンドを競演させる映画を考えているんだが、監督しないか？ と持ちかけられ、僕は直ぐにウイと返事した。そこにヴァネッサを絡めるというアイデアは彼から、物語のベースは二人で考えた。それから脚本の執筆、これが大仕事だったね」

二人のスターのバランスを取らなければいけないから？

「いや、バランスというのは自然に取れる。これは三人のトリオの映画なんだ。誰か一人が突出することはなかった。むしろ、ダイナミックでリズムが良くて独創的でユーモアもあって退屈させない物語構成、これを生み出すのに苦労した。まあ、脚本を書くのはいつも難儀だがね」

今回もパトリック・ドヴォルフと共同執筆、セルジュ・フリードマンが台詞の仕上げをした。「彼は当分放したくない」そうだ。で、二人の伝説のスターと仕事してみて？

「僕の想像通り、やっぱり二人は伝説の人だったよ。よく『大変だろー』って訊かれるが、実は役者の器が大きければ大きいほどこっちは楽なんだよ。彼等は、さっと役に身を投じてくれる。大変なのは、実は、器の小さい役者や大根役者の方なんだ。余りしっくりした例えじゃないが、ベンツの運転は大変そうに思えるけど、小さなフィアットを運転する方が骨が折れる。ベンツの方が乗り心地も良いし運転も楽だし信頼がおける」



二人の乗り心地は満点。

「それだけじゃない。シネフィルの僕にとって二人は生きた神話なんだ。彼等の出演作は

Digitized by Google

殆ど観ている。だから二人と仕事をしてると瞬間瞬間に映画の記憶が強く蘇る。そしてその二人を僕が撮ってるってことに感動するんだ。かと言って遠慮はしないよ。遠慮してたら良い映画にならない。けどね、あードロンとベルモンドを撮っているんだ！　っていう感じ、分かるかな？　これをずーっと感じてるんだ。ファニー・アルダンは大好きな女優で、『リディキュール』で初めて一緒に仕事できて僕は感動したよ。でもね、今度の感動には伝説が付いて来るからね。異質なんだよ。彼等は60過ぎで、『山猫』、ヌーヴェル・ヴァーグの諸作品、メルヴィルの映画……みんなが知ってて愛した映画に出ている、映画史そのものだからね」

脚本を書いている段階で、彼等が過去に演じた役を意識したりしましたか？

「ああ。二人の役柄には、ドロンとベルモンドの過去を反映させるという基本があった。が、二人の神話をそのままマジに再現したら愚の骨頂になる。一歩さがって達観的に自分を見てる姿勢が必要だった。二人はそれをよ〜く分かって演じているね」

脚本に二人は意見したりしましたか？

「口出しはいっさいなかった。むしろこうしたらどうだろうという提案はあった」

ヴァネッサとは10年来の知り合いのように波長がピタッと合った

さて、ヴァネッサについて。

「彼女の出演作は観ていて、かねがね素晴らしい女優だとは思っていた。いざ、一緒に仕事し始めると、不思議なことにお互い10年来の知り合いのように波長がピタッと合った。稀な存在だ。彼女は自然で率直で、躊躇なく真の演技が出来ちゃう。それはもう驚きだ。天性の女優、才能に満ちている。おまけに、彼女は最高に良い娘なんだ。凄く明るい。わがままは言わないし心配性でもないし……。ドロン、ベルモンドも彼女をすっかり気に入って、ヴァネッサは直ぐに二人の間に自分の場所を確保した。センセーショナルなトリオの誕生だ。三人の間に一度たりとも乱調はなかったね」

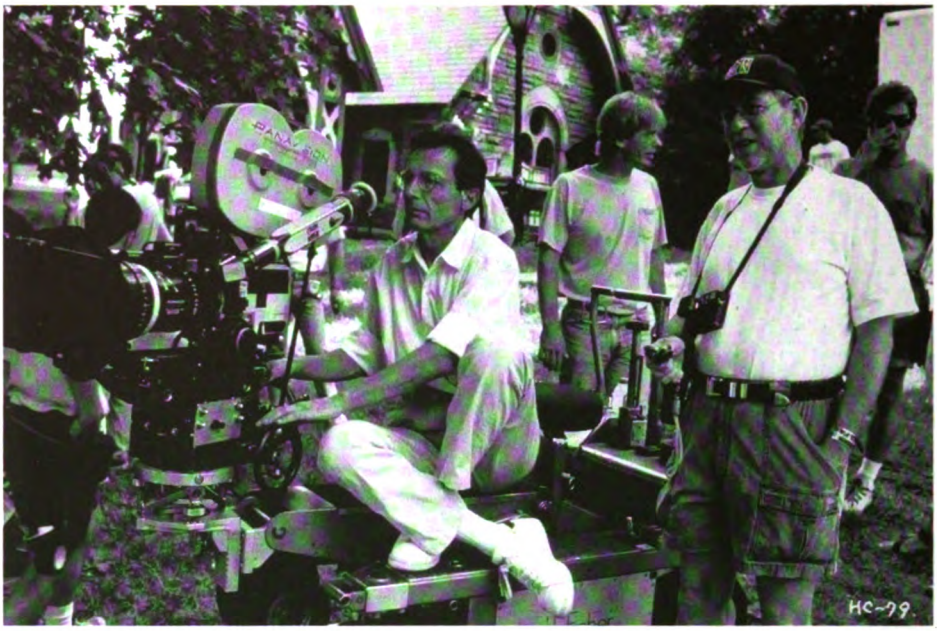
ちょっとバカな質問ですが、みんな興味があると思うので聞きますが、ドロン、ベルモンドの間にライバル意識というのはあるんでしょうか？

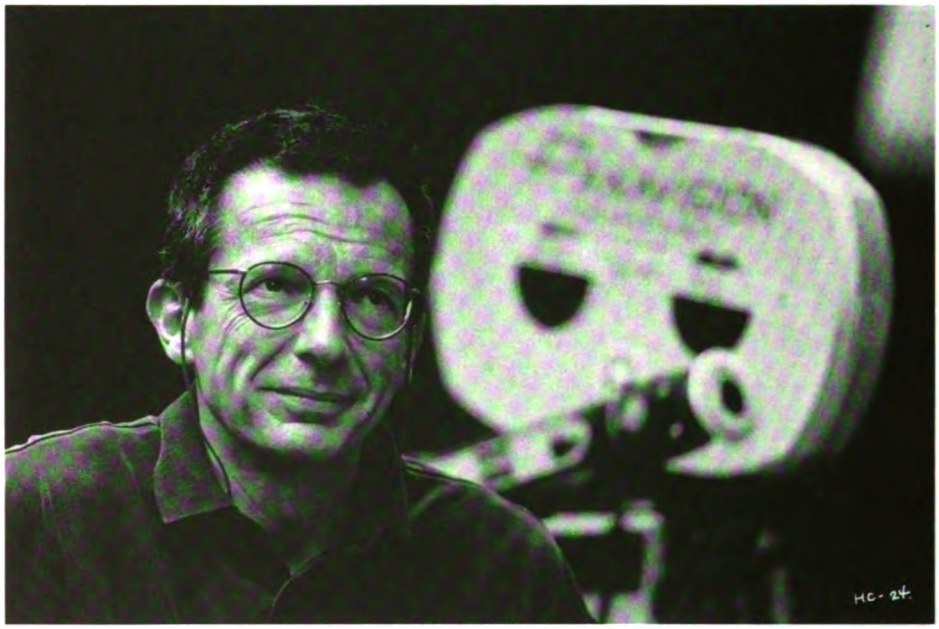
「各々、自分の最高のものを出そうとしてる。それは、必然的に相手が自分より良くては困るってことにもなるが、それはどの映画だってどの役者だってしている当たり前のことだ。が、ライバル意識はないよ。逆に、こんなこともあった。アランがこの台詞は僕よりジャン＝ポールに相応しいと思うんだがと提案して来た。ジャン＝ポール、この台詞を引き取ってくれないか？　いいよ。といった具合さ。事は理想的に進んでいるね」

そう、理想的ですか、万事順調に進んでいる。

「でも、これは大変な映画だよ。複雑で重たくて長丁場……野外ロケが多くて、特殊効果があって、アクションがあって、全てのシー

Digitized by Google





ンの組立が簡単じゃない。バジェットはデカイし、スタッフも大人数、肩の荷が重い。一番大変なのは、百人のスタッフと4ヶ月にわたる撮影の期間中ずっとコミュニケーションを取って行くエネルギーを保つことだ。いつも元気じゃなきゃならないし、躊躇は許されないし、常に前に前にと引っ張って行かなきゃならない。長い列車を牽引する機関車の心境だ。この映画の製作は容易ではないね。でも大丈夫さ。撮影が終わったら僕は、終わって寂しいと思いながらも心の片隅でアー無事に終わって良かった、さあ編集だ、なんて思うわけさ。いずれにしても、『仕立て屋の恋』には『仕立て屋の恋』の大変さがあったわけで、映画作りはいつも大変なんだ」

Patrice LECONTE　1947年、パリ生まれ。幼い頃から映画好きで、67年から2年間、ＩＤＨＥＣで監督科を専攻し、自主製作の短編映画を数多く監督する。卒業後は一時漫画家として活動、75年、「トイレの鍵は内側から閉まっていた」で商業映画監督デビュー。カフェ・テアトル「スペレンディド」のメンバー出演の一連のコメディが批評、興行とも大成功をおさめる一方、作風をガラリと変えた官能的な世界「仕立て屋の恋」(89)「髪結いの亭主」(90) で国際的な名声を確立、日本でも多くのファンを持つ。主な作品に「レ・ブロンゼ　日焼けした連中」(78)「タンデム」(87)「タンゴ」(92)「イヴォンヌの香り」(93)「パトリス・ルコントの大喝采」(95)「リディキュール」(96) など。

Digitized by Google

作品評

〝虚構〟と〝現実〟のあいだを戯れるドロンとベルモンド

河原晶子

「ボルサリーノ」から28年ぶり ドロンとベルモンドの共演

いったい、アラン・ドロンとジャン＝ポール・ベルモンドがあのマクドナルドのチェーン店でトマト・ケチャップで服を汚しながらタブル・チーズ・バーガーを口いっぱいにほおばる風景を映画で観るなんて、映画ファン、ましてやフランスのフィルム・ノワール・ファンの誰が想像したことだろう！　パトリス・ルコント監督はきっと、脚本を書きながらこのアイディアを思いついて、あの悪戯っぽい顔に笑みを浮かべていたのにちがいない。ヴァネッサ・パラディ演じる20才の娘アリスが、あなた方どちらかの娘ですといって二人の前に現れた時から、この二人の初老の男たちの人生は俄然〝バラ色〟めいてくるのである。ヴァネッサを真ん中にして、ドロンとベルモンドがぎごちない仕草でハンバーガーに食らいつく。もうこの場面では、私たちは映画の主人公たちとしてではなく、アラン・ドロンとジャン＝ポール・ベルモンドその人がマクドナルドに居る！　という現実を目撃してしまったような気分になってくるのである。

あの懐しいジャック・ドレー監督の「ボルサリーノ」(70)から28年、この二人のスーパースタアを再び共演させるというとてつもない企画を思いついたのは、しかしパトリス・ルコントではなくて、プロデューサーのクリスチャン・フェシュネールだという。彼はそれまで軽いコメディ映画を作ってきたルコントに、はじめてアクション・スペクタクル映画「スペシャリスト」(84)を作らせて大成功させた人物だ。その「スペシャリスト」はドロンとベルモンドよりはずっとスケールも小さいベルナール・ジロドゥーとジェラール・ランバン（といっても当時のフランスの若手人気男優だった）がコンビを組んだ、充分にハリウッド製アクション映画を意識した作品だった。

あの「髪結いの亭主」や「仕立て屋の恋」でルコントがみせた、こまやかな情念の世界とは似ても似つかない、直情径行の粗っぽさ。映画「ハーフ・ア・チャンス」もまた、同じように粗っぽい、というよりも荒唐無稽なお話である。「アリス、ママはあなたに大切なことをお話します。20年前、ママは生涯にないほどのふたつの恋をしました。それも同時に。そのどちらかがあなたのパパです」。急死した母親の遺言が録音されたカセットを手に、高級車窃盗常習犯の服役を終えて出所したアリスは、またもや高級車を拝借して二人の父親探しの旅に出る。ひとりはレオ・ブラサック（ジャン＝ポール・ベルモンド）。中古高級車の販売と修理を請け負うガレージのオーナーである。そしてもうひとりはジュリアン・ヴィニャル（アラン・ドロン）。高級レストランのオーナー、しかしじつは大銀行を狙う大泥棒である。突然姿を現わしたわれらが娘を中に、今まで逢ったこともなかった二人の男たちは次第に〝凝似家族〟のような愛に結ばれてゆく。そんな二人の父と娘が、ある日ロシア・マフィアとコロンビア・マフィアのドラッグ取引と、その囮捜査をしていた刑事キャレラ（いうまでもないエド・マクベインの小説の主人公の名、ジャン＝ルイ・トランティニャンが彼を演じた映画もあった）との抗争に巻きこまれて……。

アラン・ドロン、63才。ジャン＝ポール・ベルモンド、65才。もう髪は完璧なシルヴァー・グレイだけれど、あの大らかなニヤニヤ笑いが魅力的なベルモンドは、やっぱり昔のままのベルモンドだし、たとえ渋いしわが顔に刻まれようと、一瞬のぞく甘い美貌が懐かしいドロンは、やっぱり昔のままのドロンだ。そして映画は、ロシア・マフィアをキリキリ舞いさせる二人の勇姿に、あの「ボルサリーノ」やそれぞれの二人の主演映画への目配せを重ねてゆく。二人が銃を手に、いざ出陣！というシーンに、かすかにきこえてくる「ボルサリーノ」のあのクロード・ボーリングの

Digitized by Google

懐かしいテーマ曲！「（父親がどちらか判明しなかったら）夜明けに黒タイツ姿で決闘するさ」、というベルモンドの台詞、etc。そしてニース・マタン紙はこの二人組の大活躍を、ルコントの映画「タンデム」の〝二人乗り自転車〟にも例える。

「冒険者たち」や「夕なぎ」がうたいあげた至福の三位一体の延長

それでもやっぱり、この映画でイキイキと楽しそうなのはベルモンドだ。いっぽうのドロンは、彼にだってこんなコメディ・センスがあったのだ、と一瞬思わせたりはするものの、彼にはあの凄絶な「カサノバ最後の恋」の方がずっとふさわしい。この映画で二人と共演したヴァネッサ・パラディは、アランとジャン＝ポールは猫と犬ほどもちがう、と語っているが、もちろん犬はベルモンド、猫はドロンだろう。思い出すなら、「ボルサリーノ」は男たちのカップルが大活躍したアメリカン・ニューシネマとほぼ同時期に作られたものだった。「ハーフ・ア・チャンス」の息のあった二人のアクション・シーンは、ふとポール・ニューマンとロバート・レッドフォードの「明日に向って撃て！」を思い出させたりもするけれど、同時にフランス映画にもアラン・ドロンとチャールズ・ブロンスンの「さらば友よ」があったのである。

それでけっきょく、アリスの父親はレオとジュリアンのどちらだったのだろう？ その血液鑑定のために、三人はなぜかニューヨークへと旅立つ。セントラル・パークのベンチに座って、アリスの報告を待つレオとジュリアン。しかし……？ アリスのいうよう、どっちだってよかったのである。大切なのは、これからも三人が仲の良い〝凝似家族〟であり続けることなのだ。アリスと、そしてレオとジュリアン。家族のない孤独な三人が夢みる幻影の家庭。ロベール・アンリコの「冒険者たち」やクロード・ソーテの「夕なぎ」がうたいあげてきた、男二人と女ひとりの至福の三位一体の延長がここにもある。父親不在。父と娘。血液鑑定。そんな今日的な主題が連想させるのは、つい最近フランスをにぎわせたあのスキャンダル、今は亡きイヴ・モンタンの娘と称する女性をめぐるニュースだったりする。あるいはまた、かつてアラン・ドロンが息子と認知しなかった〝宿命の女〟ニコの息子アリだったりする。

あまりにも残酷で厳しい現実と、そしてフィクションの中の美しい〝家族〟。現実のドロンとベルモンドと、そして映画という夢の世界の中のドロンとベルモンド。映画が楽しく、夢と冒険とロマンに溢れているだけに、映画が終った時、二人の現在がまぎれもない現実となってのしかかってくる。「彼らは常に冒険者であり、戦闘的な男たちであり、勇敢なギャングたちだった。ヴァネッサが突然彼らの人生に入り込んできたために、二人の男たちは現役への復帰を余儀なくされたのだ」（プレスより）、とパトリス・ルコントはいう。ここでルコントのいう彼らとは、映画の中のレイとジュリアンであり、そして同時にベルモンドとドロン自身なのである。

映画プログラム通販！

パンフレットリスト
（プログラムリスト）
雑誌リスト
テレホンカードリスト
各切手400円

ポスターリスト
スチールリスト
チラシリスト
各切手500円

通信販売のみしています　営業時間 12時～18時

映通社
〒154-0024 世田谷区三軒茶屋2-14 ロイヤルマンション三軒茶屋1階 TEL 03-3411-9772

映画パンフ・ポスターフェア
10／31（土）～11／8（日）
Bunkamura 1Fギャラリー
パンフ・ポスター・チラシ
スチール写真・雑誌 他
3万点以上、展示即売

映画パンフ・テレカ展示即売
10／17（土）～11／10（火）
Bunkamura 6Fシネマショップ

Digitized by Google

作品特集 学校Ⅲ

●1998年・日本・カラー・ヴィスタサイズ・2時間13分
●監督／山田洋次　製作　大谷信義、氏家齊一郎、宮原賢次、角川歴彦、渡邊恒雄　製作　中川滋弘　プロデューサー／深澤宏　原作／山田洋次、鶴島耕沙子　脚本／山田洋次、朝間義隆　撮影／長沼六男　照明／熊谷秀夫　美術／出川三男　録音　岸田和美　編集／石井巌　音楽／冨田勲　主題歌／中島みゆき
●出演／大竹しのぶ、小林稔侍、黒田勇樹、田中邦衛、ケーシー高峰、笹野高史、寺田農、余貴美子、吉岡秀隆、小林克也、秋野暢子、鶴田忍、松金よね子、伊崎充則、園田裕久、伊藤敦史、中村メイコ、角替和枝、さだまさし
●製作／松竹、日本テレビ、住友商事、角川書店、読売新聞社
●配給／松竹
●10月17日より丸の内松竹ほか全国松竹系にて上映中
●本紙関連記事／9月上旬号HOT SHOTS、10月下旬号新作グラビア

Digitized by Google

山田洋次　大竹しのぶ　小林稔侍　インタビュー

職業訓練校を舞台に中高年者の再生を描き明日に希望を持てるような映画を

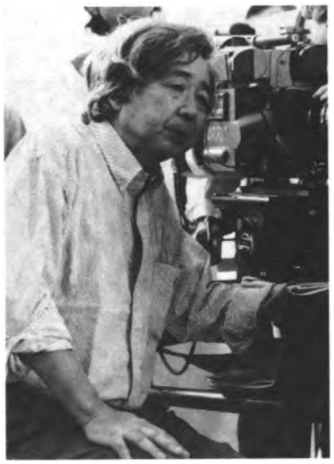
取材・構成　八森稔

教育現場にスポットを当てた山田洋次監督の〝学校〟シリーズの第3弾「学校Ⅲ」は、夜間中学や高等養護学校を舞台に先生と生徒の姿を描いた前2作とはがらり趣を異にして職業訓練校に学ぶ中年男女の物語。不況で職を失ったおじさんやおばさんが再就職のための資格を得ようと勉強に励む奮闘譚。厳しい日本の今を生きる中高年者の姿を追う監督と、それを演ずる俳優たちに抱負などを聞いた。

山田洋次

「今作るべき、今でなければ作れない映画です」――「学校Ⅲ」の製作発表会見の席上での山田監督の言葉である。それほどまでに〝今〟を意識し使命感にも似た思いで作る映画はどんなきっかけで生まれたのか。

「昨年の春、NHKで放映されたドキュメンタリー番組『われらの再出発』を見て、初めて職業訓練校のことを知ったんです。50歳前後の人たちが高齢者教室に集まって、これから人生や生活をかけて真剣に勉強している姿を見て、いろいろなことを感じました。50代前後の人たちは必死になって戦後の日本を築いてきた世代で、これから安らかな老後に向かおうとしていたのに、未曾有の経済不況に巻き込まれてリストラされたり会社が倒産したりして大変なところに追い込まれている。去るも地獄、残るも地獄とも言われていますが、自殺者も増えているとのことで、こんなことが許されていいのかという怒りを覚えました。と同時に、生徒は中高年者ですが一つの教室に集い、一つの秩序・規則のもとで勉強するということで、教育に共通したひとつのテーマがここにもあった。それで、この学校を舞台に中高年者の再生を描き明日に希望が持てるような映画作り、大不況時代に不安を抱えながらも懸命に生きぬくしかないおじさんたちにエールを送ろうと思ったんです。



ただ、おじさんやおばさんたちを並べてむさくるしい作品になるんじゃないかという心配はありました。でも、中高年者が一生懸命に勉強している姿には魅力があるんですねぇ。若者にはない不思議な魅力が。それに、人生の経験者でないと、という味もありますし。そこをキチンと描けば楽しんでもらえる作品になると思って、製作にかかりました」

物語は、10年程前に夫を過労死で亡くし、障害を持つ息子を女手一つで育てている中年女性・小島紗和子を主人公に展開する。不況のあおりで勤め先を解雇された彼女は、再就職のためボイラー技士の資格を得ようと技術専門校の高齢者教室に入学。リストラされた証券会社の元部長や倒産した町工場の社長、経営に失敗した喫茶店のマスターなどと学友になり、彼らに励まされ勇気づけられ新たな人生を歩みだし苦難に立ち向かって行く。

「それまで全く違った生き方をし、背負っている文化も違う人たちが、新しい人間関係を築いて行くのは厳しく大変なことだけど、それが出来るというところに、学問をするということだけじゃない学校の意味があるんじゃないでしょうか。前2作で扱った夜間中学や高等養護学校には競争社会はなかった。そこ

Digitized by Google

で学ぶ生徒たちは、競争社会では落ちこぼれたが、競争のない学校に来て心を開放させて人間らしい繋がりを得ている。今回の技術専門校にも競争はない。みんな一つの資格を取るという目的に向かって学んでいる。合格するために誰かを蹴落とすということがない。だから、仲間に対して優しくなれるし困っているときには手をさしのべてもやれる。教育の場のあるべき一つの姿は、そういうところじゃないんでしょうか。紗和子は、そういう場所に身を置いたことで、新しい友情とこれまでに味わったことがなかった連帯感を得て、生きる勇気を与えられてゆく。大人の物語ですから、自然に恋の話も出てきますよね」

登場人物のおじさんたちのキャラクターは技術専門校の取材で出会った人たちをヒントにし、ヒロインと自閉症の息子の設定とエピソードは、実体験を基にした鶴島緋紗子著『トミーの夕陽』がモデルとなっている。

「障害児を抱えた母親は、その子と生活してゆく中で人間の見方が鍛えられて、人間の存在をあるがままに受け入れられるゆったりとした人間観を持つようになるんですね。2年程前に本を読み、そんな魅力のある女性像を描いてみたいなってのがあったんです。彼女が子育てしていくなかでぶつかる問題には、親としての在り方や、今私たちが考えなければいけない社会や教育の問題も含まれてますし。著者に何度か会い、少年にも会いました。自閉症、この呼び方は嫌いなんですが、彼の時として口にする飛躍的発想に驚かされたりしたこともあって、この作品でも深刻なところで息子の脈絡のない言葉によって周りがホッとするといった場面もあります」

前2作の子供たちの教育の場から一転して大人の教室へ。キャスティングも一変して、紗和子の大竹しのぶをはじめ小林稔侍、田中邦衛、ケーシー高峰などベテランが出演している。

「『学校Ⅱ』はアマチュアの子供たちが多かったけど、今回はベテランの演技派揃い。頑張るおじさん、おばさんをそれぞれに持ち味を生かして演じてもらって、私も楽しませてもらいました。息子役の黒田（勇樹）君は、役作りを兼ねてモデルとなった少年の家族と寝泊まりしています。シチュエーションは悲劇ですが、この映画は人間ドラマの中で笑いを描く喜劇です。喜劇は『寅さん』がそうだったように、悲劇的状況でしか成り立たない。喜劇の根底には悲しみがあるんです。つらい時代を生きる懸命に生きているおじさんたちがちょっとした一瞬に幸せを感じて笑って苦境を乗り越えて行く。その姿を明るく描き、心から笑えて楽しめるような作品にしたい」

大竹しのぶ

撮影は、東京・亀戸の職業訓練校を中心に2ヵ月にわたって行われた。その日々をヒロインを演じた大竹しのぶは、

「毎日、学校に通っているみたいです」

と語った。撮影が中盤にさしかかった頃だった。山田作品に出演するのは、「男はつらいよ　寅次郎頑張れ」以来21年ぶり。

「その時に注意されたことははっきり覚えているのに、20年たってまた同じ注意をされ、怒られて反省の日々。今日は怒られないようにとか今日は宿題があったんだって、山田学校に来てるって感じです。自分では気がつかないうちにセリフとか演技にへんなクセが付いてしまってたんでしょうね。そこを徹底的に直されています。注意されて〝ああそうだな〟って分かって落ち込むこともありますけど、毎日、基本にかえって勉強し直しているって気がしてます」

演じている紗和子は、夫に先立たれ残された子供は障害児。勤め先は解雇され、やっと再就職したと思ったら癌が発見され、と不幸を一人で背負ったような女性。

「辛く厳しい境遇にある女性ですが、メソメソせずにカラッと演じるようにしています。監督からも堂々としていなさい、と言われました。傍から見ると大変だろうなと思う人も会って話してみると、意外な明るさがある。

Digitized by Google

苦境を乗り越えてきた逞しい明るさなんでしょうね。お会いしたお母さんたちもそうでした。人間は、どんな状況でも受け入れる能力と強さを持っているんですよね。紗和子もそんな女性ですから、つき抜けた明るさが出せればと思ってます」

母親役はテレビドラマで経験済み。だが、障害を持った子の母は初めて。

「障害があっても無くても、子供に対しての愛情、子を思う親の気持ちは同じだと思うんです。私も母親だからよく分かるし、病気になっても、子供のことを考えて絶対に死ねないんだ、泣き崩れてなんかいられないって強さが自分の中にも確かにあります。その子供に対する愛情が紗和子を演ずる核になっています。息子のトミーは他人と関係が持ちにくい自閉症の子供ですけど、言いたいことを言って周りを明るく楽しくさせてくれる。この子のためならお母さんも頑張っちゃおうって気になるように書かれているので、ごく自然に母親になっています。トミーのモデルになった少年、といってももう大人になってますけど、その彼に会って心が洗われるような気がしました。とてもピュアな感じで。何か、人間にとって大事な事を教えられたような気もしました。いろいろと考えさせられたり、実感したりすることが多い役ですね。一番実感がこもったのが、紗和子が勉強で悪戦苦闘するところ。2級ボイラー技士の資格を取るための授業とテストって難しいんですよ。教科書を読んでもさっぱり分からないし、テストは一問も解けなかった。授業に追いついて行けず、苛立ったり落ち込んだりは実感そのものなので、すごくリアルになっていると思いますよ。実際の授業も見学しましたが、学んでいた人たちはボイラー技士の資格が取れたのかなとか、どういう人生を送ってきたのかしらとか、いろんなことを考えるようになりました。町を歩いている時も、道路工事の現場で交通整理している人を見て、家に帰ったらどんな生活が待っているのかなんてふっと考えたりして。人間生きて行くのって、人生って大変なんだってことをあらためて考えさせられることがあって、その意味でも学校に来てるって感じがしてます」

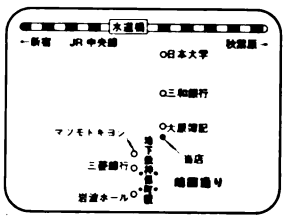
障害児を抱え、難しい勉強に挑み悪戦苦闘するヒロインは恋もする。山田作品には珍しいラブシーンもある。

「恋といっても激しいものじゃあないんです。男と女がふと心を寄せあうという感じで、ラブシーンもサラッとしてます。階段ですれ違ったりした時などに、好きだという感情がなにげなく出るといった感じの表わし方なので、目線のくばり方とか表情、動きなど演出は細かいけど、描かれる恋は淡いものです。大人の男と女がいて、お互いに好意を持ったら自然にこうなってしまうだろうって感じで、それもある節度を保っている。頑張って生きている紗和子にとって、つかのま訪れた幸せの時といった感じかな。でも、この恋が彼女の生きてゆく勇気の原動力の一つにもなるので、淡いけどインパクトは強いんです。恋もそうですが、いろいろなことが大げさではなく紗和子の日常として描かれる。日常の中でいろんなことがあって、ちょっとしたことで心が揺れるという役を演じたいという思いがずっとあったので、背負っているものは大きいけどごく普通の女性の感覚で生きている紗和子を演じられてすごく嬉しい。さりげない日常を演ずるのは、予想していたよりもはるかに難しかったけど。でも、山田監督に注意されるのは勉強になるし嬉しいし、難しいものにぶつかっての充実感もあります。毎日、ドキドキしながら撮影現場に行くってのも楽しいし、周りのおじさんたちは元気いっぱいなので、私もイキイキしていないと。ともすれば暗くなりがちな役ですが、ふと出てくる溜息なんかも何かをふっきる感じで明るく演じて、苦境を乗り越えていく強く元気な女性にしたいと思ってます」

映画 パンフ・チラシ・雑誌 専門店

☆総合リスト
（パンフ・チラシ・雑誌）
切手500円にてお申込み下さい。

☆営業時間
12:00～19:00



（有）かんたんむ 映画部

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-52

TEL・FAX
03-3296-7870

Digitized by Google

小林稔侍

大竹が演ずるヒロインと大人の恋を演ずるのが小林稔侍。山田作品初出演である。

「山田監督から〝会いたい〟という連絡があったと聞いて、小林違いだと思いました。山田作品とは、縁もゆかりもない別の世界の役者だと思っていましたから。マネージャーに聞き直させましたよ。小林稔侍で間違いないですかって」

間違いではなかった。山田監督は小林稔侍を必要としていた。

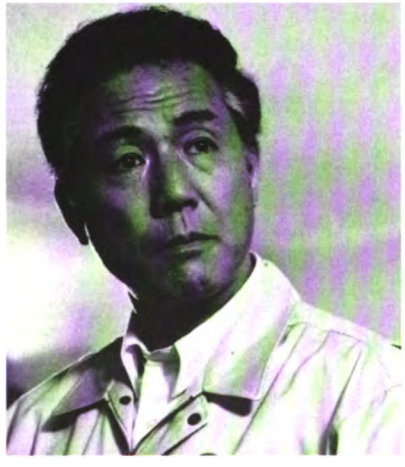
「お会いすることになって、どんな格好で行ったらいいものか、考えたりもしました。背広にネクタイかな。それじゃあ堅すぎるか。でも、いつものGパン姿では失礼にあたるんじゃないかとか。つまらない気苦労と言われるかもしれないけど、悩みましたよ。結果、いつもながらのGパンスタイルで行きましたけど。山田作品に出演することは、大先輩から、スポーツに例えて言うなら県体、国体のその上のオリンピックに出場するようなもんだと言われて緊張感がいっきに高まったけど、でも、その瞬間に、〝よぅし!〟って思ったんです。金・銀・銅のメダルは取れなくても、完走してゴールにはたどり着いてやろうって。ヘトヘトになってビリでゴールインして観客の胸を熱くさせる選手がいるじゃないですか。俺もそれで行こうって。胸を熱くさせられるかどうか分からないけど、とにかく完走してやろう、と」

役どころは、大手証券会社の元部長。会社のリストラ勧告に憤慨し辞表をたたきつけて退職。人生の再出発をかけて職業訓練校入りするが、エリート意識が邪魔して周りと馴染めずクラスメートの評判は芳しくない。一見偏屈な男。

「人生に挫折した男で、このまま世をスネて枯れていくのかなと思ったんですが、正反対のどんな境遇でも生きて行くエネルギーを持った力が漲っている男。状況や立場は違うけど同年代なのでよく分かるんです。今が人生で一番辛くてシンドイ時なんだろうなって。後がない、断崖絶壁に立たされている気持ちも痛い程分かります」

役にかなり自分を重ね合わせて、演じているようだ。

「重ね合わせるというよりも、役から触発された気持ちを大事にしてます。演ずる者の基本は気持ち。気持ちをいかに役に寄せられるか。素直に気持ちが寄せられれば、役には自然と入り込めると思ってます。自分だけの思い込みかも知れませんが、この思い込みが僕のエネルギーの素なんです。出来るだけ役に気持ちを寄せて、どこまで山田監督の期待に応えて、〝どことなくおかしいけど切ない男〟に近づけるか。難しいし、自分にそれだけの力量があるのか不安はあるが、山田監督に叱られながら頑張ってます。監督には毎日叱られてますが、それが楽しい、と言うか何か嬉しいんです。〝叱って、もっと叱って、オレを男にしてくれ〟って、本気でそう思ってるんですよ。役者は一作品ごとに新たなるスタートですが、私も50代で、これからの人生にさらなる気持ちで立ち向かっていく時。そうした時期に、生きることの意味を考えさせられる役に出会い、役者としての在り方を教えてもらえる監督とめぐり会えて、とても幸運だったなと思ってます。



吹き荒れる不況の嵐をまともに受けたリアルな役なので、世間への影響も大きいと思うんです。あまり可笑しくなって浮いてしまってもいけないし、と言って切なすぎてお客さんを沈み込ませるようでもいけない。そのあたりが微妙で難しいところですが、ともあれ負けないおじさんを元気に元気に演じて、大変な時代を生きている人たちに勇気を与えられたらと思っています。第一目標の完走は大丈夫いけます」

監督と主演者たち。三者三様に自らも含めての〝今〟を見据えて、映画作りに熱く燃えていた。

（文中敬称略）

Digitized by Google

作品評

小津映画との関連性

黒田邦雄

「学校Ⅲ」は、何が何だがわからない状態で職を失った人々が、再チャレンジを賭けて職業訓練校で学ぶ姿が描かれている。背景にたいまの経済破綻社会があるのだが、いつもの山田洋次作品と同じく基本は小市民物語であり、時代状況に深入りする映画ではない。

小林稔侍演じる高野周吉は、リストラされた大手証券会社の元部長。バブルの頃は相当えげつない仕事をしていたに違いないと思わせる、どこか尊大な男だ。そんな男がボイラー技師の資格を取るために職業訓練校に入学してくるのだが、彼は本気でボイラー技師になる気ではなく、再就職するための時間稼ぎのつもりでいる。というのも、彼にはかつて恩を売った友人がいるからで、その男が助けてくれると思い込んでいるのだ。

周吉が再就職の命綱としているその男に居留守を使われ、何度も街角の公衆電話から電話をかけるシーンに張り詰める空気がいい。街のざわめきと周吉の心の中のざわめきが一体となって、追い詰められた男の状況を確実に浮かび上がらせるのだが、こういう描写は映画ならではの醍醐味だ。小林の演技も秀逸で、西田敏行のようなクセの強い演技では、このペーソスは出なかったに違いない。

周吉の家庭は崩壊していて、彼はだいまひとり暮らしをしている。そこへひとり息子が度々やってくるのだが、父親をあっけらかんと批判するところなど、小津安二郎の映画で描かれた父親と息子をほうふつとさせる。山田は父親と息子を描く時、もっとも力を発揮するのだが、今回も実に巧妙である。

小津映画のファンなら誰もが気づくだろうが、周吉というのは、「晩春」「東京物語」「東京暮色」「彼岸花」「秋日和」で笠智衆が演じた男の名前である。「学校Ⅲ」の周吉が、小津映画の周吉と無関係でないだろうという推理は、多分当たっていると思う。それは周吉にキャラクター的な関連性があるだけではなく、山田が小津の後継者たらんとする決意表明のようなものが、この作品に感じられるからである。

小津には不況ものの傑作「大学は出たけれど」「落第はしたけれど」があるが、どうもこの二本からインスパイアされたフシがある。大学を出たのに受付の仕事にしかありつけない「大学は出たけれど」の主人公の嘆きは周吉に通じるものだし、カンニングをしたりマドンナに勇気を与えられたりする「落第はしたけれど」の学生たちの青春も、それとなく生かされている。

しかし、これらの小津映画と大きく異なるのは、ヒロインの描き方である。ヒロインが傷ついた男たちのリハビリテーションに一役買うという設定は同じなのだが、大竹しのぶ演じる小島紗和子は、父親と母親と女の三役も担わされているのである。

紗和子は夫と死別し、今は働きながら精神障害を持つひとり息子の富美男と暮らしているのだが、会社から突然解雇され、高齢者教室の紅一点として頑張っているところである。つまり、この働くマドンナは、男たちの癒しのシンボルであると共に、男たちと同じ辛苦をなめているのだ。

それはそれでいいのだが、問題は、紗和子の行動がかなり自己中心的なことで、その人間的リアリティが映画を必要以上に重くしていること。冒頭、会社から解雇を言い渡されるシーンで、同僚の女子社員が〝計理士さんではなく社長の口から説明して下さい〟と詰め寄るのに対し、彼女はそれに加勢せず会社を飛び出してしまう。ここでアレと思ったのだが、以後の彼女の行動も多分に感情的で、

Digitized by Google

作家論

なぜ「予定調和」的な枠を破ろうとしたのか

吉村英夫

理にかなっていないのが気になってくる。

例えば、理数系が苦手という紗和子がボイラー技師資格の免許を取ろうとするのも、いかにも思いつきという感じである。紅一点の受講生になるくらい女性に人気のない仕事に、彼女がいかなる意図で挑戦するのかはっきりしない。

新聞配達をしている富美男が、雨に濡れた新聞のかわりにゴミ置き場に積んであった古新聞を配ってしまう騒動の時も、この仕事が息子にはムリなのではという疑問に達せず、息子の思いつきがいとしくて仕方がないという母ごころで満足してしまう。息子が何度も自転車で転倒していることを知っていながら、そのまま仕事を続けさせる心境がわからない。

周吉と抱き合う仲になるのも、映画のムードから浮き上がっているし、周吉の妻が自殺未遂を引き起こしたことを知り、もう二度と電話してこないで、と切り口上で周吉に告げるのも感情的すぎる。

こういった紗和子の精神的幼稚さを、山田が意図して描いたものかどうかだが、とてもそうは思えない。彼女はあくまで観客の同情を集めるけなげな女であり、がんばっている女として描かれているのである。ということは、紗和子の感情的な行為も、女のかわいらしさの表現ということになる。

だから彼女はマドンナなんだということかもしれないが、ここまで生々しいマドンナでは、惚れる男たちがバカに見えるというものだ。マドンナにはマドンナの描き方があるはずで、小津作品における美女たちや、「男はつらいよ」シリーズのマドンナたちを思い浮かべれば、言うまでもないことだろう。

つまり、「学校Ⅲ」は、リストラされた失意の男たちと、奮闘するヒロインがうまく噛み合っていないため、印象がひとつにまとまらないのである。特に紗和子が乳癌とわかる後半は、何だか強引に紗和子のマドンナ化を進めているみたいで、これなら最初から「学校Ⅱ」でいしだあゆみが演じた女教師のようなマドンナにすべきだった。乳癌にしては大袈裟すぎる騒ぎようも、一考を要するだろう。

山田はこの映画について、〈日本の男たちへの心からのエール〉とコメントしているが、それならなおのこと、周吉の精神的リハビリに絞った方が、現代のドラマたりえたのではあるまいか。

山田映画のラストがめずらしく「予定調和」的ではない。前例は「故郷」(72)などが思い浮かぶだけ。大竹しのぶが乳癌の告知を受け、職業訓練校の仲間に励まされながら手術室に入っていくところでエンドとなる。ヒロインの生死はわからないままである。志賀直哉の長編『暗夜行路』のラスト二行の文章を思い出した。主人公謙作が重病の床に臥しているのを、妻の直子が「助かるにしろ、助からぬにしろ、とにかく自分はこの人を離れず、どこまでもこの人について行くのだ」とつぶやく。ラストと対応するがごとく「学校Ⅲ」はトップシーンで、リストラによる労働者の切り捨ての現実をシリアスな調子で描いており、やはり予定調和的路線でないかの印象を与えるものとなっている。

なぜ「予定調和」的な枠を破ろうとしたのか。寅さん以後とかかわって二つの要因をあげたい。一つは、山田自身がドラマの深化を望んだ。「虹をつかむ男」、とりわけ「南国奮斗篇」は不本意なものとなった。「虹をつかむ男」は、渥美清没後の短時間で企画製作されたが、追悼の気持ちがあふれ、映画へのオマージュとしても山田の気分が正直に出ていた。だが「南国奮斗篇」は演出巧者で情緒づくりの名人にしては完成度が低く、改めて渥美と「男はつらいよ」の偉大さを再認識させられるものだった。挫折を知らない山田の落胆は大きかったはずだし、展望を失うほどの危機だったかもしれない。そして約一年弱、もはや失敗は許されないのが「学校Ⅲ」である。シナリオ術の師である「構成の鬼」橋本忍流のがっちりしたシナリオづくりが必要不可欠だった。不況下の理不尽なリストラ問題にコミットしたい内面の要求もあって予定調和になじまない条件を多々かかえていた。

二つは「南国奮斗篇」の配給収入の不振が山田にプレッシャーをかけた。ここでも渥美と寅さんのブランド性を思い知らされた事だ

Digitized by Google

ろう。山田は老舗の大手映画産業松竹を背負っており、自己満足的な芸術映画はつくれない立場にある。暗い題材を選んでしまったからには、出来ばえをシナリオと演出に託して全力投球しなければならぬ。シナリオは、撮影現場での「号外」で改変されることが通常より多かったというが、山田の意気込みの投影である。予定調和の枠を超えたい気持ちが胚胎したとしても不思議ではない。

だが「学校Ⅲ」は、ⅠやⅡあるいは他の山田作品に比べて「予定調和」を払拭した異質の作品になったか。あるいは山田系列から軌道修正したか。答えはノーである。トップとラストを除くと不変の山田節でありハートウォーミングな雰囲気に満ちている。山田のドラマ術が巧みになりシナリオにめりはりを効かせた結果が、トップとラストの変化球になったのであって、山田の本質は微動もしないし依然として予定調和的である。それでいいのである。ドラマの高揚と予定調和は背反しない。山田を批判する紋切り型の予定調和という言葉を私は好感しないが、予定調和云々での山田批判では真の批判にはなりえない。予定調和などという言葉では片づけられない必死さから生み出される「予定調和」なのだが、山田は観客への慰めと励ましの提供をなによりもの信条としており、彼はある種の調和と秩序を意識的に求めているのである。

昨年はフランク・キャプラ生誕一〇〇年だった。TVでも回顧放映され、一〇本余を再見したが、そこには「予定調和」の世界があった。一九三〇年代米国を代表するキャプラはどこを切り取ってもキャプラである。人間への信頼のまなざし、未来に向かってまっすぐに顔を向ける点で「或る夜の出来事」(34)、「オペラハット」(36)、「我が家の楽園」(38)、「素晴らしき哉、人生!」(47)などにおけるキャプラの姿勢は不変である。あまりに楽天的、善意の度が過ぎる、リアルな人生凝視がない等々と批判されてはきたが、いま見てもキャプラの世界は実に生き生きと躍動している。ニューディール時代のアメリカ民主主義を守るとの視点を持ちつつ、彼の人情コメディーは普遍的な輝きを今も失ってはいない。

志賀直哉という名前を出したが、以前から私は山田洋次を、キャプラや志賀、武者小路実篤の白樺派とつなげてみたい気持ちを抑えきれないでいた。この「学校Ⅲ」を見て、私の直感は的外れでないのを再確認した。影響のあるなしの実証をも含めて、山田とキャプラや白樺派との相違をもっと追求すべし。「学校Ⅲ」は目先を変えたトップやラストでドラマ性と物語性に彩りを添えたが、本質は変わっていない。

つまり山田は常に「金太郎飴」であり、そこに山田の山田たる所以がある。チャップリンが常にチャップリンであり、モーツァルトが何を聴いても彼であるのが名誉なことに等しい。寅さんのマンネリズムが金太郎飴でありながらも、人間讃歌としていつか深みを増し確固たるスタイルをつくったように、山田映画全体に押し広げることができるのである。

「学校」では、教師は「子供から学ぶべし」と言った。「学校Ⅱ」では、子供を「学校の真ん中に」と語った。「学校Ⅲ」では、中高年が失業という挫折を経ながらも新しい人生を見つけ、順風満帆の時には思いもよらなかったもう一つの豊かな人生に向かって仲間たちと支えあって歩みだす。一歩間違えばリストラや切り捨て擁護に陥りそうなのを危ういところで持ちこたえているのは、社会的不正義への怒りが根底に脈打っているからである。そしてⅠ、Ⅱ、Ⅲをトータルして、やっと山田の学校と教育に対する憧憬と理想が見えてきた。キャプラと同様、名もなく健気に生きる生活者市民への讃歌という全容も見えてきたといえよう。

山田に金太郎飴からの本質的な脱皮を求めると、山田は山田でなくなる。作家性を堅持しつつ、いかにエンタテイメントであることができるか。芸術性と娯楽性の両立を、松竹の枠のなかでどう深めるかが一貫しての課題である。「学校Ⅲ」で山田はまたひとつの大きな頂に達したが、金太郎飴的自覚と自負のなかで山田は、朝間義隆との共同によるシナリオづくりで「構成の鬼」ともなって、さらに高い峰への挑戦を続けねばならない。

Digitized by Google

作品特集 カンゾー先生

●1998年・カラー・ドルビー・ヴィスタサイズ・2時間9分
●監督／今村昌平　原作／坂口安吾　プロデューサー／飯野久、松田康史　脚本／今村昌平、天願大介　音楽／山下洋輔　撮影／小松原茂　照明／山川英明　録音／紅谷愃一　美術／稲垣尚夫　編集／岡安肇　助監督／桑原昌英
●出演／柄本明、麻生久美子、世良公則、唐十郎、松坂慶子、ジャック・ガンブラン、田口トモロヲ、金山一彦、山本晋也、北村有起哉、神山繁、裕木奈江、渡辺えり子、伊武雅刀、清水美砂、小沢昭一
●製作／今村プロダクション、東映、東北新社、角川書店　配給／東映
●10月17日より丸の内東映ほか全国東映系にて上映中
●本誌関連記事／10月下旬号 HOT SHOT（世良公則、麻生久美子インタビュー）、同新作グラビア

撮影／吉岡誠

Digitized by Google

今村昌平監督インタビュー

役者を追い込んでいけば、彼らはちゃんと動くということに気がつきました

インタビュアー・垣井道弘

久しぶりに、元気がよくてエネルギッシュな今村作品が帰ってきた。新作の「カンゾー先生」は、敗戦直前の瀬戸内海の田舎町を舞台に、柄本明が演じる町医者が庶民のために走って走って走りまくる。無償の汗が一種の爽快感を感じさせ、腐敗した現代医学への痛烈な批判になっている。おおらかな女性像や脱走兵をめぐる人間模様など、今村作品ならではの皮肉とユーモアも健在である。念願の作品を完成した今村昌平監督に、撮影の裏話や演出の秘話を聞いてみた。

開業医だった父親への鎮魂歌とオールロケの偉力

――さっそくですけど、坂口安吾の原作を読んだのはいつ頃のことですか。

「昭和二十四年です。あれは『文学界』だったかな。『堕落論』なんかの影響を受けていたし、彼はもう流行作家だったから、勢い込んで読むというふうでした」

――それで、原作を読んだときにすぐ、これは映画になるなと。

「開業医だった親父のイメージと重ね合わせて、映画にしてもいいかなと思った。でもその頃は、なんたって小津（安二郎監督）さんの五番目の助監督でしたからね。これをやりましょうなんて言えないし、まあ言っても十年早いと怒られたでしょうね」

――監督のお父さんは、カンゾー先生のようなイメージの人だったのか。

「カンゾー先生でしたよ。どこか間抜けで、相当かったるい。儲けることができないというタイプでしたから。親父は三男坊の僕を医者にしようと思っていたらしい。しかし恥ずかしくて言えない、という人だったんですね。医者になれ、とは一度も言ったことがなかった。言えばいいのにね。言ってもこっちが聞くわけじゃあないけど（笑）。兄が戦死して、生き残った僕が医者になればよかったんだけど、勉強が辛いらしいと思ってね。親父は、大判のノートにドイツ語を鉛筆で書いて、それをまた万年筆で書き直すという大変な努力家でした」

――それで今回は、お父さんへの思いを込めて作ったわけですね。

「そうです。親父に逆らってばかりいまして、ろくな伜じゃなかったという思いがあって、それで鎮魂歌などと美辞麗句を掲げてやってみようと思ったわけです」

――映画を見て、カンゾー先生は町医者の理想像だと思いました。いまの医者を全員集めて、映画を見せなければいけない。

「医者たちが見て、『反省しなきゃあなあ』と言っていました（笑）。嘘だとは思うけど、言うことは言うもんですね」

――僕は「カンゾー先生」の脚本を初めて読んだときに、これは北村和夫さんの役だなと思いました。お父さんのイメージが、北村さんと重なるのではないかと。

「そうでしたけど、北村（和夫）が大病しましてね。困ったなと思った。それで三國連太

Digitized by Google

いまむら・しょうへい／1926年、東京大塚の開業医の三男として生まれる。51年に松竹大船撮影所に入所し、小津安二郎や川島雄三監督に師事。その後、日活に移籍し「幕末太陽伝」（58／川島監督）の共同脚本を務めた。58年「盗まれた欲情」で監督デビュー。以降「豚と軍艦」（60）「神々の深き欲望」（68）「黒い雨」（89）など、人間の性（さが）に基づく重喜劇を数多く発表。83年「楢山節考」と97年の「うなぎ」で2度のカンヌ国際映画祭パルムドールに輝く。74年、横浜放送専門学校（現・日本映画学校）を設立し、現在も理事長を務める。

郎になったんです」

——ところが撮影に入って、途中で主役が交代した。もうだいぶ撮っていたんですか。

「一週間足らずだと思いますよ。三國さんが足をくじいて、嘘じゃ無くて本当に痛いらしい。それで心配しましてね。一寸先は闇だなと思った。しかし『うなぎ』のときに使った柄本明でやったらどうかという案がでまして、一度東京へ帰ってあたふたして、あいつなら突っ立っていてもカンゾー先生の素朴さが出るよということで、急転直下、柄本くんでやることになった」

——カンゾー先生には、ドン・キホーテ的な要素がありますね。柄本さんにもそういう部分があるんじゃないですか。

「そうですね。ドン・キホーテ的なものは生得のものだということでしょうね。連ちゃん（三國連太郎）だと、理性的に苦悩を重ねていってそうなるんだけどね」

——すると一週間分を撮り直しただけで、後はうまくいったんですか。

「今度の映画は、赤城医院が映画全体の7割近くを占めている。その赤城医院の階段をトントントンと降りて、左に行くと遊郭があって、まっすぐ行くと海岸がある。そういう位置関係をイメージした私の地図というものが、まことにうまく出来ていた。それで赤城医院に小道具が入って、医療器械の道具がズラッと入ると、一週間ほどで消毒液の匂いまでするじゃありませんか。そこへ柄本くんが白衣を着て立てば、後は柄本くんが自由自在にやればいい」

——芝居の動きも自然に決まってくる。

「診察室の隅から柄本くんにね、『脚本にちゃんと書いてあるんだから、後はきみに適当にやってもらわないとかなわん』というようなことを言いますとね、役者は苦しいんですよ。いじめられているような気がするんでしょうね。だけど今度の演出は、芝居に全然触らないということで、それがよかったと思いますね。全部を設定してあるし、オールロケの偉力ですよ。そこで脚本を読めば、どこでどうするかは自ずと分かることだと。まあちょっとした役者いじめだけどね」

キャスティングの極意と原爆に対するこだわり

——俳優さんによっては、追い込まれて能力を出す人と、逆に出せない人とがいるんじゃあないですか。

「特に今回は、役者を追い込んでやればちゃんと動くもんだ、ということに気がつきました。柄本くんだけではなくて、みんながそうだっていうことです」

——若い俳優さんは、戦争中のことなんか知らない。知らなくても似たような状況を作ってやれば、そういうふうに行動できる。

「そうでしょうね。だから飯もなるべくカボチャを喰えと（笑）」

——ヒロインに抜擢した麻生久美子さんはどうでした、やっていて。

「なかなかよかったですよ。これも同じように地図を見ながら説明して、おっぱなしておいた。新人だから一挙手一投足がどうにもならなくて棒立ちになっている、というはずなんだけど、彼女は度胸がいいし、自分で動くんですよ」

——この娘は度胸がある、ということで彼女を選んだんですか。

「別に度胸じゃあないですね。あのね、千葉の九十九里浜から近い所で生まれ育ったと聞いて、一度で決めちゃった。最終的には親にも会いに行きました。家に行って彼女のお母さんと話して、おばあちゃんとも話して、だいたいよかろうと。お母さんが豪快に笑う人で、特に僕は気に入りましたね」

——親が売り込みに来るのではなくて、監督が親に会いに行くというのは珍しいんじゃあないですかね。俳優の出自というか、家系までこだわるのは今村監督しかいない。

「そうですかね。だって母親を見ないと、その娘の人となりが解らないですからね。そのためには親に会っていろいろ聞いてみたりもするわけです。それで決めるということでし

Digitized by Google

ょうね。極めてオーソドックスです」

——話が飛びますけど、原作ではカンゾー先生が海で死んでしまうんですよね。

「そうすべきかも知れないと思って、相当脚本で悩んだんです。そうこうしているうちに伜（天願大介）が出てきて、ちょっと変えてもいいかと。まかせたところが数日経ったら鯨が出てくることになっていた。それで、いいかげんにあしらっておりましたら、怒るんですよ。猛烈に苦労して書いたということを言いたいらしい」

——最初は、環境保護のシンボルの鯨と戦うのはどうかなと思った。しかし時代におもねらないのが今村監督かなとも思った。

「まあご好意感謝しますよ、そういう人もいるかも知れませんからね。でも、カンヌでもその他の外国でも、問題はなかったように思います。この映画を見て、環境問題にふりかえて悪いというのは、相当度胸がいるんじゃあないでしょうか」

——戦時中に、瀬戸内海に鯨が出てきても不思議じゃあないんですか。

「いや、不思議なんですよ（笑）。そんな事実はないと伜にも言った。二頭かなんかが間違って入り込んで、それが岡山の牛窓あたりまで入ってきたらしい。そんな事実はないと言ったら、『いいじゃあないか』とこともなげに言うので、たまげました」

——「黒い雨」は原爆で始まり、今度は原爆の閃光で終わっている。原爆の持つ意味がそれだけ大きいということですか。

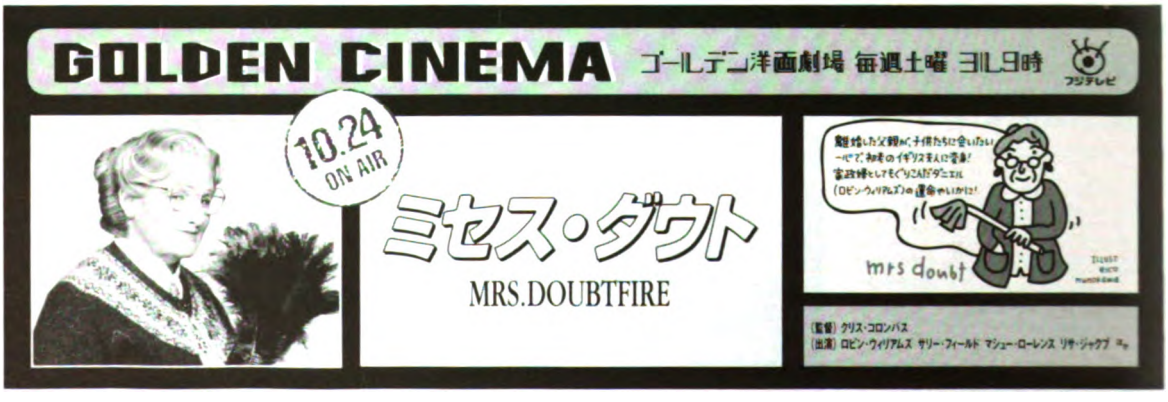
「それは大きいですよ。あそこで原爆を見せるというのは、舞台が岡山ですから本当はあり得ない。なくったっていいけど、まあ原爆に対するこだわりですね」

——長い間やりたかったものが出来て、どうですか、何点ぐらいですか。

「相当気に入っていますよ。えー、八十点ぐらいだと思いますがね」

●

かつて俳優たちから〝鬼のイマヘイ〟と呼ばれた今村昌平監督は、知る人ぞ知る無類の毒舌家である。その毒舌を久々に聞くことができて嬉しかった。体調を心配していたが、来年すぐにでも次回作に入るということで意気軒高だった。黒澤明監督の亡き後、今村監督には日本が世界に誇ることができる巨匠としてまだまだ頑張って欲しい。



Digitized by Google

柄本明 インタビュー

〝何も言わない〟今村演出が非常に重く感じられた

インタビュアー・金澤誠

今村昌平監督の新作「カンゾー先生」。この作品で、主人公の〝カンゾー先生〟こと赤城風雨を演じているのが柄本明である。昨年の「うなぎ」に続いて2度目の今村映画となるが、今回は特に監督・今村昌平と向きあうことになったようだ。その監督の〝こわさ、面白さ〟を、俳優の立場から語ってもらった。

役者の逡巡を見透かしている監督の視線があった

「カンゾー先生」は当初、三國連太郎主演で企画が進んでいた。その時、柄本明に振りあてられていたのは、赤城の親友・鳥海役。三國の降板によって、急拠、赤城風雨を演じることになった。

「最初、鳥海として2シーンほど撮って、一度ロケ地の岡山から東京に帰ってきたんです。それで三國さんからチェンジすることになって、また呼ばれたんですよ。三國さんから僕になったことで変わったことと言えば、主人公の年齢ですかね。第1稿が50になっていて、それを三國さんがやることになって60代にかえたんです。僕に決ってから、第1稿の年齢に戻したんですよ。三國さんから僕に代わったというのは、それは一俳優として嬉しいですよ。何で僕のところに来たのかは、わかりませんけれども」

とはいえ、今年49歳の柄本明にとっては、50代のカンゾー先生は、やはり初老の〝老け〟役である。

「そこは意識して、いろんなことを考えますね。ただ若い僕が歳をとった役をやっているということは、観るお客さんには情報として入っているでしょうし。一方では、自然に見えた方がいいとも思う。その辺は、矛盾したものをはらみながら、逡巡しながらやるんでしょうけれど。医者の役だといっても、じゃあどうやれば医者らしいのかという話になると、わからないですよ。そこで多くの役者は罠にはまっていくんですね（笑）。人間なんて、まったく新しい医者を創造できるわけではないし、結局自分の見てきた記憶の中から、医者とはこういうものというのをやるのが、せいぜいでしょう。今回の医者というのは〝人柄としての医者〟という風に見てもらえれば、僕は嬉しいんですけれどね」

今村演出について尋ねると、ポイントは、〝何も言わない〟ことだとか。

「僕は『うなぎ』の時からそれを感じたんですけれども、監督が〝ヨーイ、スタート〟と言うでしょう。すると非常に静寂みたいなものが、重くのしかかってきますね。監督は何も言わないんですけれど。怖いことです。僕が思うに今村監督は、例えばここにボールペンがあるとしますね。このボールペンと人間とを、同じ尺度で見られているように感じるんです。決して人間を、ヒューマンとしては見ていない気がする。ですから『うなぎ』の時には、〝これはヤバイ現場に来たな〟と思いましたね（笑）。やっぱり演出家だなと感じますね。演出上、〝こうして下さい〟と言われることは、ある種楽なわけです。こっちは〝こうすればいいんだ〟というので、責任転嫁できるわけですから。それが何も言われないと、役者は自分で選択していかなくちゃいけない。選択するということは、捨てたものが沢山あるわけです。そこでまた役者がはまる罠というのは、選択したひとつを磨き上げようとするんですね。そうすると余計なことまで積み上げていったりする。今村監督には、そういうことを見抜かれちゃうなっていうプレッシャーを感じます。こっちは、自分自身に〝これでいいんだろうか〟と質問しているわけですね。非常にナイーブになる。そのナイーブのハードルをどうやって越えようかと思って毎日やるという現場に巡

Digitized by Google

撮影／吉岡誠

りあうというのは、なかなかないことですね」

完成した作品が脚本とは異なる〝映画〟になっている凄さ

柄本明がまた今村昌平に感心したのは、シナリオライターと演出家の違いが、明確にあることだという。

「今村監督はシナリオライターでもあるわけですが、ライターから監督になるというのは、こういう風にやればいいなと思うんです。どうしてもライター兼監督の人というのは、ライターの部分を引きずって監督しちゃう感じを僕はうけるんですよ。芝居なんかやっても、作・演出という人は、作家の部分にいく人が多い。（脚）本を大事にするんですね。今村さんにはそれがないんです。僕は、今でも脚本は読んでいるんですが、〝本の印象〟というのはあまりないんですね。それは脚本がつまらないということではなくて、完成した作品は脚本とは違った〝映画〟になっている。そこが、今村さんの凄いところだと思うんです」

「カンゾー先生」は、今年のカンヌ国際映画祭でも上映された。全篇に今村流のユーモアをちりばめたこの作品は、カンヌで大ウケだったという。

「最初、日本で試写室で観た時には自分のことばっかり見えて、ダメだったんです。カンヌで観た時には、わりとお客として冷静に観れて、僕も一緒に笑えました。場内は非常に大ウケで、最後には皆が立ち上がって拍手してくれましたし。上映途中で、誰かの携帯電話が鳴ったら、ブーイングの嵐になりました。反応は、本当に良かったです」

共演者で眼を引くのが、赤城医院の見習い看護婦となるソノ子役の麻生久美子である。

「昔の今村映画で言うと、吉村実子さんの役どころですよね。麻生さんは良かったです。それは要するに〝ひとつ〟だからでしょうね。あっちこっちといかずに、〝ひとつ〟だけしかない魅力というのが、この作品では出ていると思うんですよ」

演技でいうと、今回の映画はとにかく走る。〝開業医は足だ〟というオープニングのナレーションがあるが、カンゾー先生は往診のために走り続ける。

「一番最初に、路地から赤城医院にかけこんでくるシーンがありますね。撮影も、あそこが〝走り〟の初めだと思うんですけれど、あのシーンから一環したイメージで、自分では走っていましたね。シナリオの時点よりも、〝走り〟のシーンは多用されているし、実際撮り足しも随分したんですよ」

岡山を中心にした3カ月半のロケ撮影。その中で彼が思ったのは、〝これは今村昌平という人の映画作家性が強く出た作品〟だということだ。

「それはもう、『うなぎ』よりも今村昌平が出ているんじゃないですかね。何か僕は、昔の「豚と軍艦」（61）の頃に戻っている感じもするんです。それと原作だとラストでカンゾー先生は死ぬんですけれど、ここでは生き残るでしょう。あの終わり方というのが今村さんらしい気がします。今村作品というのは、必ず生き残る感じがするんですが、それって何か死ぬより残酷なところがあるでしょう。生きていかなくちゃいけないということの方がね。そういうところや、ラストまで、ハッキリと今村さんの作家性が出た作品だと思いますね」

えもと・あきら　1948年、東京都生まれ。自由劇場を経て77年に劇団〝東京乾電池〟を結成。現在に至るまで舞台、テレビ、映画と幅広く活動を続ける。主な映画作品には、「疑惑」（82）「二代目はクリスチャン」（85）「マリアの胃袋」（90）「シコふんじゃった。」（92）「身も心も」「うなぎ」（以上97）ほか多数。92年には「空がこんなに青いわけがない」で監督業にも進出。

Digitized by Google

〝重喜劇〟に加えられた透明で澄明な美学

村川英

ジャズと今村映画の新鮮なコラボレーション

「うなぎ」に始まる今村映画円熟期の傑作が誕生した。「うなぎ」では、これまでの今村映画の特徴だった脂ぎった樹脂がきれいさっぱり拭い去られ、骨太な骨格が姿をあらわしたが、今度は、ビートのきいた山下洋輔のジャズ音楽をバックに、走るカンゾー先生の疾走感覚ともいうべき爽快さが加わった。昭和二〇年という戦争末期、岡山県日比の海岸の抜けるような青空とあいまって、ドタバタ人間模様を描きながら、澄みきったこの疾走感覚は、心地良い映画快楽をもたらす。それに今村映画にとって新しい魅力ともいうべき繊細さも加わった。

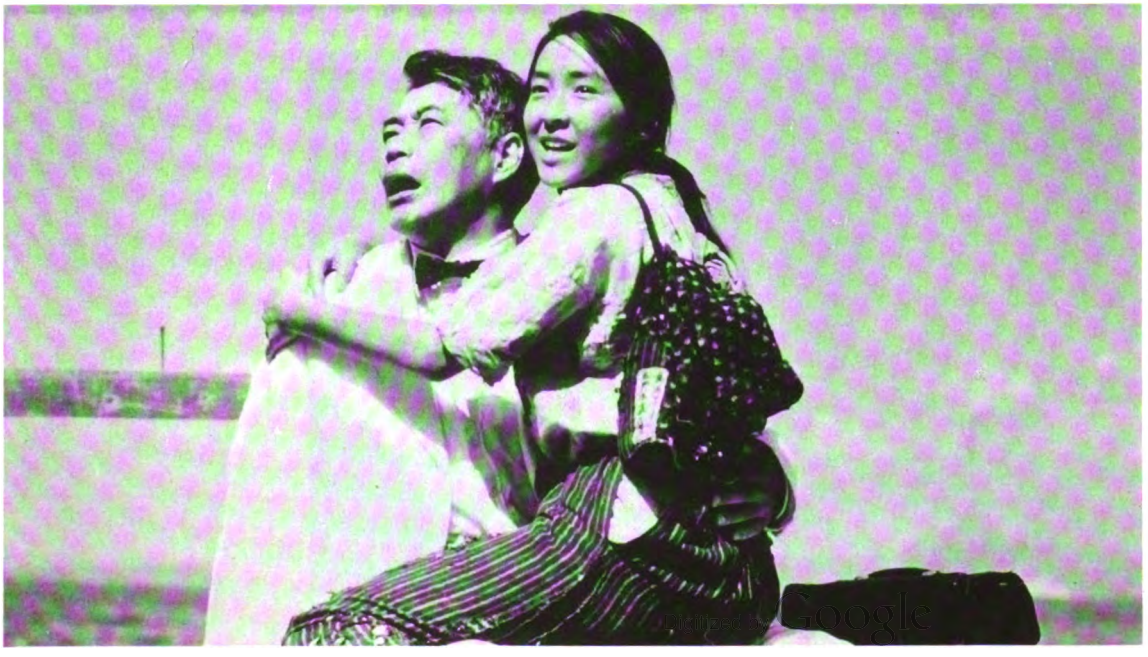
今村昌平には、〝重喜劇〟と自称したエネルギッシュな人間喜劇を描いた作品が多い。東京大塚の開業医の三男で、東京女子師範学校付属小学校、東京高等師範学校付属中学校から早稲田という、典型的な山の手中産階級の出身者でありながら、「にっぽん昆虫記」、「赤い殺意」、「神々の深き欲望」、「楢山節考」と、日本の辺境に題材を取り、自己の世界を構築してきた。都会っ子、今村昌平の描く日本の辺境に興味を持ったが、「カンゾー先生」ではそうしたこれまでの世界に、モダン都市、東京に生を受けた都会っ子の感覚が加わっている。

今村監督が若々しいのは、都会っ子特有の時代へのセンサーが鋭敏であるためだろうが、今回の山下洋輔とのコラボレーションともいうべきジャズと今村映画の組み合わせには興奮した。この起用は監督の指名なのかどうか知らないが、山下洋輔のジャズは時には軽快、時には悲しく、しかしあくまで明るい。今後の今村世界の新しい展開を予測させるほどゾクゾクした。ジャズと今村映画とのコンビネーションがこんなに新鮮とは。こんなに映画とジャズの出会いに感動したのは「死刑台のエレベーター」以来だ。同時に頑固な今村は、その骨格ともいうべき論理性を一貫して崩していない。

戦後のエネルギッシュで荒々しい時代を写し、また日本人離れしたスケールの大きな論理性を持つ今村の世界は、欧米でよく理解されたが、さらに言えば、「カンゾー先生」は、その論理的なわかりやすさに、つきぬけた澄明な美学が加わった。登場人物は、いかにも今村の好む愛すべきすけべえ人種だが、この透明で澄明な美学は、多くの人にアピールするだろう。

多分、この映画で問題があるとすれば、柄本明演じるカンゾー先生の存在だろうか。最初、三國連太郎が演じる予定だったが、健康上の問題で交替した。多分、この映画の企画が早くに実現していたら、三國の主演でもっと、エネルギッシュな重喜劇になったかもしれない。

しかし、今回、柄本明の重苦しくない個性は、この映画のモダンな感覚として生きたと思う。確かに、もう少し、カンゾー先生の持つ多面性が欲しい気もするが、ソノ子とのからみなどで、柄本明の持つ感性は、女性にとって好ましい男のタイプだろう。それに脇を固める面々が唐十郎、世良公則、松坂慶子など、結構暑苦しい人々ががんばっているので、バランスとしては良かったのではないか。そのバランスによってカンゾー先生とソノ子の個性がすっきりと浮かび上がった。



今村映画の原点ともいえる人間性復活を込めたヒューマニティ

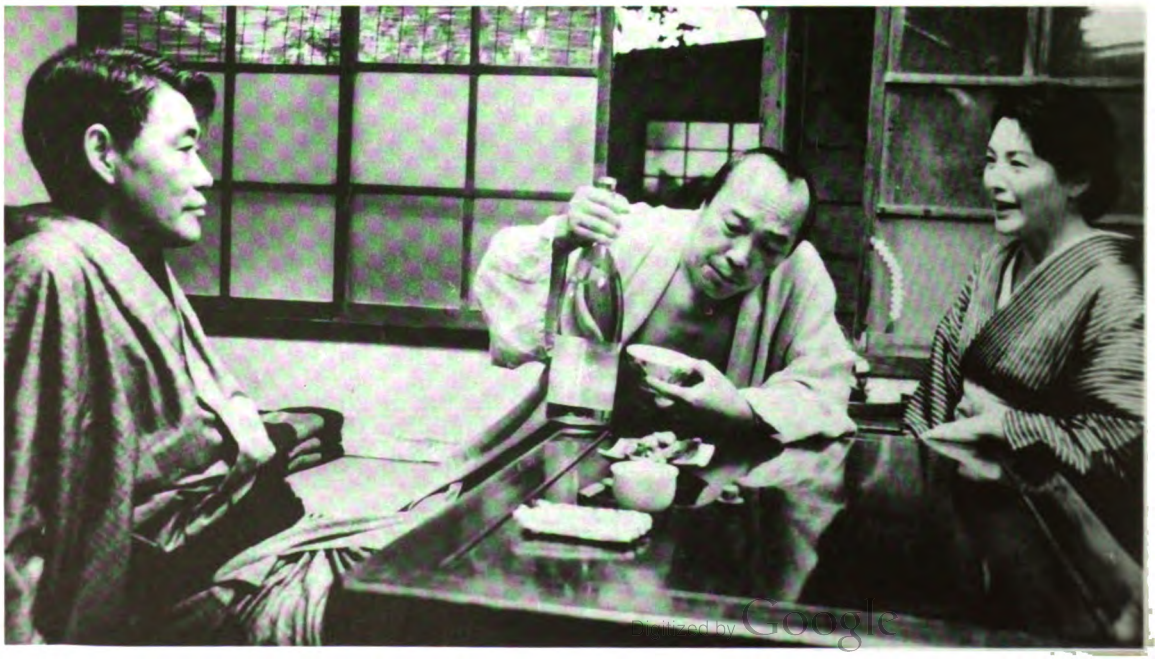
戦争末期のさまざまな人間模様が展開する。あの時代にもかかわらず、善良な人間がおおらかに生きた時代。敵国オランダ人捕虜が収容所を脱走してくれば、何とか助けようと奔走するカンゾー先生と周囲の人々。あるいは、肝臓炎の病原体発見に熱を入れ過ぎて、患者を死なせてしまったカンゾー先生の嘆き。あの時代への風刺を込めて、人間が人間らしく生きることの意味をこの映画は語りかける。ただし、この風刺は、明らかに今の時代にも向けられたものだろう。今村映画は「うなぎ」以来、現代社会に対して、人間性復活を込めたヒューマニティを語りかけるようになった。恐らく、このヒューマニティは、今村の原点なのだろう。戦後の混乱期、価値観が逆転した時代の中で、猥雑にしたたかに戦後を生き抜く日本人を自己の創造のエネルギー源としながら、ユニークな人間像を作り上げた今村だが、東京山の手中産階級に育った演劇青年の純な原点のようなものをこの映画は明らかにする。

この映画の収穫の一つは、今村映画の魅力の原点の一つであるユニークな女性像を麻生久美子が可憐に演じていることだろう。ソノ子は、幼い弟妹を養うために〝売春〟まがいのこともやる。死んだ母親は女郎上がりで、「ただマンをさせるのは生涯ただ一人」と、ソノ子に教えてきた。ソノ子は近所の手前、外聞が悪いからと、カンゾー先生の病院で看護婦として働くようになるが、ひたすら医師として本分をつくすカンゾー先生に惚れ込むようになる。カンゾー先生とソノ子のからむ海をバックにした恋愛シーンが美しい。照れくさそうなカンゾー先生と自然児ソノ子の嬉しそうな表情は、思い出すだけでも微笑ましく、最近では出色の恋愛映画である。麻生久美子が愛すべき自然児を演じた。今村映画の女性像は左幸子のエネルギッシュな女性像から、最近は清水美砂やこの麻生久美子のような細身の女性像に変わったが、相変わらず魅力的だ。麻生久美子は、田中裕子のような伝統的な日本の女性像を現代に蘇らせるキャラクターを持つ。まだ一九歳ということだが、今後の大成を期待したい。

この映画で、今村映画の原点の一つであるエネルギッシュな人間像は、カンゾー先生を取り巻く唐十郎演じる延命寺の住職や、モルヒネ中毒の外科医となる世良公則、あるいは料亭紫雲閣の女将トミ子となる松坂慶子に引き継がれている。かつての小沢昭一らが演じてきた世界だが、脂っ気が抜け、しょうゆ味の透明感が加わった。

しかも、オランダの捕虜ピートをめぐって軍と大立回りを演じる激しさを、この映画は持つ。官憲VS庶民ともいうべき、庶民の正義の戦いである。一時、カンゾー先生は肝臓炎の病原体発見の献身的な努力が認められて、東大を頂点とする医学界に受け入れられるシーンがあるが、カンゾー先生の先生たる所以は、この名誉を捨てて、町医者に徹したことにある。

今村監督が自ら語っているように、東京で健康保険医第一号で、貧乏を恐れず、庶民の人望を得たという父親への鎮魂歌なのだろう。赤ひげ先生の正義の血筋は、映画監督今村昌平に引き継がれたようだ。善意の庶民が救われないような世の中はおかしいと、この映画は語っている。



Digitized by Google

ポルノスター

●1998年・カラー・ヴィスタサイズ・1時間38分
●監督・脚本／豊田利晃　プロデューサー／竹井正和、菊地美世志　企画／有吉司、孫寛邦　撮影／笠松則通　録音／山方浩　整音／柿澤潤　美術／三浦伸一　装飾／山田好男　編集／深野俊英　衣装／宮本まさ江　メイク／小沼みどり　撮影効果／多正行　音楽／DIP　音楽担当／中西大輔
●出演／千原浩史、鬼丸、緒沢凛、杉本哲太、麿赤兒、広田レオナ、鈴廣寛、KEE・KENTA、奥田智彦、上野清隆
●製作・配給／リトル・モア
●製作協力／東京テアトル、フィルムメイカーズ
●10月10日よりテアトル新宿にてロングタイム・レイトショー中
●本誌関連記事／9月下旬号HOT SHOTS、10月上旬号新作グラビア、今号HOT SHOTS（千原浩史インタビュー）

渋谷という人種に引導を渡しにきたヒーロー

内海陽子

坂道のはざまで揺れ動く主人公たちの純情

ある街を嫌うことはある人種を嫌うことに似ている。昔は新宿が嫌いだった。今は渋谷が嫌いだ。渋谷という人種が我慢ならない。街にはそれぞれの人種の匂いがある。雨が降った後の路地の悪臭も、北千住なら人恋しくなるが、渋谷だとすさんだ気持ちになる。肩や背がこわばる。渋谷という人種に因縁をつけられているような気がする。これは偏見だと思うと嫌悪感はさらにつのる。

「ポルノスター」はそんな私の渋谷へのこわばりをほぐしてくれた。偏見がなくなったわけではない。偏見は偏見として受け入れればいいといわれた気がした。気が楽になった。それもこれも、主人公・荒野を演じる千原浩史のおかげだ。死神さながらにフードをかぶり、彼は渋谷という人種に引導を渡しにきたヒーローである。そのつらがまえを一目見るなり私の心は昂ぶり、それから大きな安らぎに包まれた。彼は私の救いの主だ。

何があったか知らないが、荒野の決まり文句は「いらん」だ。おおむね「やくざなんかいらん」という風に使われるが、何度も聞いていると、もっと底深い意味をはらんでいるように思えてくる。関西弁のイントネーションが、無気味さとかすかなユーモアを感じさせる。渋谷を肩で風切って歩く、ちんぴらの上條（鬼丸）までが心動かされるほどの魅力が、「いらん」にはある。

坂の上に住むやくざの組長（麿赤兒）から、彼の怒りを買った荒野を「沈めとけや」と命じられても、上條は優柔不断だ。あげくが、携帯電話で母親の声を聞いて心が萎えたのを「ツイてるぞ、おまえ、奇跡到来だ」とすりかえる。荒野を殺す気がなくなったという以上に、上條は彼に気圧され、ほとんど恋に落ちたも同然になる。恋に落ちると、人間はコンプレックスが強くなる。上條はどんどん人間ぽくなる。そんな上條の気配が配下の者にも伝染し、ある者は荒野にへつらい、ある者は上條への反感を隠さなくなる。それでも荒野は情緒をあらわさず平然としている。

しかし彼も人の子だ。放心して公園に坐る彼の前をスケボーに乗った少年たちが通る。彼らがやくざ風の男ともめた時、荒野は奮然とし、ナイフを出して男を追い払う。少年たちの姿に彼は何を思ったのだろう。彼の純情をくすぐる何かが彼らにあったのだろう。私はほっとする。そして不安になる。人間は純情でなければ生きていけない。それが弱点になる時がある。荒野が少年たちと、そして上條の女・アリス（緒沢凛）とスケボーに興じるさまは、心躍るシーンであると同時に、早くも悲劇の到来を予感させる、あやうくはかないシーンである。

アリスもまた純情という虫に取りつかれた。彼女は上條が荒野に恋したことを敏感に悟り、荒野に近づく。彼女の根なし草の風情が彼の心をくすぐる。純情と純情が掛け合わされたら、そこには愚行しかない。あとは、渋谷という坂の多い街をただ転がるだけ。

東京はそもそも坂の街だというが、「ポルノスター」はその坂の街のひとつ、渋谷の坂を実に巧みに描く。坂の上で動かない組長、始終、坂を上り下りしているちんぴらども、上昇志向と虚無感とのはざまで揺れている上條、

Digitized by Google

下りるために上る荒野、坂に逆らわないで生きるアリス。彼らをあくまでクールに見すえる渋谷の坂。坂は泰然として人間どもに踏まれている。

死を戴いて生きるしかない人間であることのよろこび

撮影の笠松則通は阪本順治監督作品でもよく知られる名手。「愚か者・傷だらけの天使」では新宿の街の魅力を引き出したが、本作では渋谷の坂が秘める魔力と呼びたいほどの美しさを存分に引き出す。前述の、荒野と少年たちとアリスのスケボー・シーンで、交差する坂道やスケボーだけがすべり下りて行くシーンなど、メロウな、といいたいほどの甘さが漂う。そしていっぽうで、坂は荒野の胸にひそむ死神をそそのかす。

上昇志向の強い上條の目下のターゲットは、やくざの松永（杉本哲太）。女たらしの松永が女といちゃついている場に出くわし、荒野はふたりを見つめる。ふたりが去った後、荒野の頭上からナイフが降る。……三本、五本、数十本。雨だったとわかってもなお、肌に突き刺さるようなナイフの冷たい感触。幻覚と納得してしまうには惜しい、シュールで痛いシーンだ。私は降ってくるナイフをつかんで血を流したい衝動に駆られた。荒野は自分の血を流す前に、松永の血を流すことにしたかのようだ。彼のいう「いらん」がだんだん鮮明になってくる。彼は自分自身を「いらん」と思い定め、渋谷と心中しに来たのだ。

そうなると、荒野がスケボー少年たちに見せた純情が、また新たな相貌をあらわす。彼は、少年たちに自分が失った何ものかを見た以上に、次代への希望、あるいは敬意のようなものを抱いたのではないだろうか。それが無残にも打ちくだかれるさまは見ていて辛い。そしてまた天からナイフが降る。諦観の先にまだあった屈辱感。この痛みを胸に、今は取りあえず「やくざなんかいらん」にすがるしかない。荒野の醒めた怒りは、たけだけしい若さに軽くあしらわれ、坂の上のターゲットに向かうしかないのだ。

豊田利晃監督のデビュー作は、ひとりのはぐれ者の思い上がりとも思いこみともつかぬ怒りとその発露を、痛ましくもみずみずしく描くことに成功した。「……おまえも寂しい奴だな」という組長、「……だから、何や」と応じる荒野。荒野がスケボー少年たちに抱いた純情と同質の感情が、殺される組長から荒野に向かって流れる。カメラは殺された組長とちんぴらたちの死体をていねいに悼む。組長が可愛がっていた龍雄（鈴康寛）の補聴器が血だまりに浮いている。組長が彼の誕生日にバースデイ・ケーキを贈った日のことがせつなくも脳裏に甦る。死んでしまったら、すべての記憶は無だ。

ありふれたちんぴら映画やバイオレンス映画と一線を画すナイーブな詩ごころが「ポルノスター」にはある。流血シーンに目を奪われても、荒野役の千原浩史の無表情にびくついても、坂をともに上ろう。天から降るナイフにともに打たれよう。きっと奇妙な快感が生まれる。それは死を戴いて生きるしかない人間であることの再確認のよろこびである。

千原浩史は渋谷に降りたヒーローである。

Digitized by Google

INTERVIEW

ライブやメディアと組合せ新しい映像分野を確立したい

石橋義正

「狂わせたいの」で初の劇場映画デビューを果たす

インタビュアー 塩田時敏

16ミリ、モノクロ、60分の小品ながら、この秋、最も面白い興奮の日本映画は「狂わせたいの」。山本リンダ〝恋の追跡〟を全裸で踊って立ちはだかる電車女、中村晃子〝虹色の湖〟で憩いの時をじゃまする居酒屋S男と居酒屋M女、金井克子〝他人の関係〟で面会に来る事故り女——等々が主人公の行く手をはばむ。ネオ・マニエリスムというかニュー・キャンプというか、悪趣味B級賛歌の超快作なのである。

不条理よりも、最初にヴィジュアルありき

「凄くハマッてしまう人と、二度と見ないという人もいますね。怒り出す人もいた（笑）。劇場も気に入ってくれる所と嫌う所に分かれ、関西ではちょこっと上映してたんですが、今回ユーロスペースの方に凄く気に入ってもらえて公開出来る事になりました」

——モノクロのメイン・タイトルにピンクの文字が〝踊る〟ところから、来たな！　と嬉しくなりましたよ。アラン・レネの「恋するシャンソン」がよくて、新人監督のこれがダメって事はないよね（笑）。70年代歌謡曲の不条理ミュージカルというべき作品だけど、68年生まれの監督が、何故これを？

「三才の時から山本リンダのファンでしたから（笑）。母親もファンで、出てるでぇと言われてTVに齧りついていた。レコードも聴き覚えがあって懐しい。それに今聴くとパワフルでバカバカしさがあって、またいいんですよ」

——まあミュージカルは元々不条理といえば不条理的に歌い踊るもんだけど、終バスに乗り遅れたサラリーマンが延々と帰路につけないという、こういう不条理は好きな世界？

「好きですけど、あえて不条理を目指したというわけじゃないです。まず最初にヴィジュアルありき。Macintosh にロケハン写真や出演者の写真を取り込んで合

©中嶋直美

いしばし・よしまさ／68年、京都市生まれ。京都市立芸術大学卒業後、英国王立芸術大学映画科に留学。「KINETOSCOPE」（90／8ミリ）、「ＣＲ製薬株式会社」「THE TANKING MACHINE」（以上91／Ｖ）などを発表するほか、京都を拠点に活発な演劇・パフォーマンス活動を行なう。16ミリ作品「狂わせたいの」（97）で劇場映画デビューを果たし、現在は新作「キュビキュビｌｓｔ」を製作中。

Digitized by Google

成したシーンにあう曲をCDから探して入れた。MTV的な曲がベースの、そうしたコンテがいくつかあって、それを繋いでいくために話を持ってきたようなもんです。当初、ほこら女役の女優に全部歌ってもらうつもりだったので、先にCDも作ったんですよ。そもそも、彼女が酔って歌ってるのを聴いて、これを作ろうと思ったところもありますから（笑）。で、そのマックの映像やCD持ってこんなん作りますとプレゼンかけて、役者くどいたり、スポンサーくどいたり、セット造りの参考にしたり。でもスポンサーから資金は出ませんでしたけど」

――強引に繋いだゆえの不条理か。でも夕張映画祭のオフシアター部門にプログラミングした、あなたの応募作「CR製薬株式会社」もヘンな作品だった。

「あれは、読売テレビで放送した時既成曲が使えない部分をカットした半分位のバージョンなんです。それで訳の分からないものになってしまった（笑）」

――でも今作の不条理は、京都というところや京都人の持つイメージ、閉鎖的ないやらしさにハマって、それが日本人の原点を浮かび上がらせるような感じはいいね。あなたは京都芸大出身だけど、同じ関西でも大阪芸大の人間が作る自主映画のノリとは全く違う。

「教えてる事、コンセプトも違いますから。大阪芸大は芸能分野も含まれますが、京都は日本一コンセプチュアルで、美術も、作るというよりは見方を教えるような大学の様に思います」

芝居よりも空間そのものの演出が好きになった

――イギリスに映画の交換留学もしてるけど、映像以外の活動も多いですね。

「子供の頃から『スター・ウォーズ』などに影響されて監督になりたかったけど、なり方も分からないので演劇やパフォーマンスやってるうちに、芝居よりも空間そのものの演出が好きになったんです。だからディズニー・ランドとかも好きですよ。比叡山の山頂にある遊園地で、ビリオンダラー・ゴールデンバッカスという、映像と組み合わせた人力ジェットコースターのアトラクションもやったりしました（笑）」

――ウィリアム・キャッスル監督ばりのギミック（笑）。どこか化け物屋敷的展開の、この映画にも匂うな（笑）それは。

「他に自分の作品ともいえないインスタレーション用のビデオ映像とかCM、ゲームとかも手掛けてますけど、やはり自分のものをやりたくなって」

――古い汽車の中で、全裸女が〝恋の追跡〟を歌い踊るシーンなんか圧巻なんだけど、この汽車がセットなのも凄い。

「作らんとこ思たんやけど、向い合せの席もないし、窓の下に引き出しが絶対欲しかったんで汽車のセット作りました。居酒屋も解体現場へトラックで行って廃材運んで来て、山奥にある僕のアトリエに組んだんです」

――自主製作でセット組むだけでも凄いけど、あの刑務所の塀もセットだというのは信じられないね。

「ベニア板の表面にセメント塗ってます。予算500万円のうち、美術セットに100万円。コネをフル利用して安く上げました。美大系の友人に手伝ってもらったりで、撮影より大工仕事の期間の方が長いですよ（笑）。どっちかというと、その方が楽しい。ロケだと早く終ってしまおうという気になるけど、セットだと、ここでさぁやろうという気になって、スタッフもキャストも喜びが違うし。

今は子供の頃のように、絶対に映画監督！　というのは無くなった。映画業界の人には怒られるかもしれないけど、産業というより映画は伝統工芸に近いものになったと思います。うちの親も、絶対に儲からないのに、着物の京友禅やってますけど（笑）。あえて映画にこだわらなくても、ライブやメディアと自在に組み合わせて、自分から見た新しい映像の分野を確立したいですね。最終的には宇宙ステーションを作りたいというアホな計画を持ってます（笑）」

――それはともかく（笑）、実家が友禅、なるほどね。なんとなく、映像のデザインと繋がるな。

「僕には黒澤映画的に奥行きのあるものをイメージ出来ないんですよ。画のつくり方が平面的で、それが良くもあり悪くもあり……。これは友禅と、それに昔、日本画をやっていたせいでしょうね。一番の見せ場が、妙にシンメトリーになってたりする（笑）」

――それがまた、70年代的サイケなノリにハマるんだよね。いい意味でのそういう薄っぺらさ、キッチュさは意識してのこと？

「意識的な方がいいんでしょうが、初めはマジメに書いてるんです。でもマジメに書いてる事が笑えてくる。さめた眼で見直してしまって、これは笑うよなと急に変えてしまう」

――大阪は明確に笑かそうという意識があるけど、そういう、フッとシニカルになるところが京都なんだろうな。

「感覚的に京都、と言われるのはそうなのかもしれませんね。ともあれ一、二回目は普通に、三回目からはカラオケ気分で見て下さい（笑）」

――「ムトゥ／踊るマハラジャ」に対抗出来るのはこの映画しかない（笑）。

「狂わせたいの」現在ユーロスペースにてレイト公開中

Digitized by Google

INTERVIEW

撮影／吉岡誠

監督とは〝自分の見たい映画〟を作る人であるべき

「ぼくのバラ色の人生」でデビューした

アラン・ベルリネール（監督）
ジョルジュ・デュ・フレネ（子役）

インタビュアー 吉田真由美

Alain Berliner　1962年ベルギー生まれ。ベルギーの名門映画学校で学ぶ。在学中は監督として短編を製作するが、その後は脚本家として活躍。本作は監督としての本格的デビュー作である。97年カンヌ国際映画祭監督週間正式出品作品。

Georges Du Fresne　1985年生まれ。劇場オーナーの父と女優の母の間に生まれる。本作でデビューした恐るべき天才子役。撮影当時の実年齢は11歳であった。

親は、子供が他の子と〝変わっている〟ことを不安に思うもの

〝女の子になりたい男の子〟のバラ色の夢とブルーな現実を、ファンタスティックにシヴィアに描いた「ぼくのバラ色の人生」。98年度ゴールデン・グローブ賞の外国語映画賞受賞作であるが、インタヴューは逆上ること昨年のフランス映画祭横浜において、である。

鋭く今日的なテーマを、こーんなにも可愛い映画に作品化しちゃうアラン・ベルリネール監督（62年生）っていったいどんな御方？　超キュートなジョルジュ・デュ・フレネくん（85年生）の素顔をとにかく見たい！　とミーハー丸出し気分で出かけた筆者の前に現れたるは……温厚な紳士であるパパと、お行儀のよい御子息の少年、といった風情のおふたり。映画のイメージとはまるで別人種のごとしで、インタヴューも静々とスタート。

――〝女性になった男性〟の映画『マイラ』（70）から〝女性になろうとしている男性〟のドキュメンタリー『ア・マン・イントゥ・ア・ウーマン』（90）まで〝性同一性障害〟（と近年では言う）をテーマにした作品はけっこうありましたけど、「ぼくのバラ色の人生」は飛び抜けてますよね。7歳の少年を主人公にして……というアイディアは、どのようにして得られたのですか（監督の自叙伝であろうことを予想しての質問）？

「私のアイディアではなく、共同脚本の

Digitized by Google

クリス・ヴァンデル・スタッペンのもの。彼女の〝半自叙伝〟なのです。クリスは〝男の子になりたい女の子〟だったのです。今でも男性っぽい女性です。自分の少女時代の体験を脚本化しているうちに、性を逆転させた方がインパクトがより強くなると気づき、書き直したというわけです」

――7歳という年齢にしたのは？

「理性が目覚める年齢が7歳、とされているからです。それまでは男の子が女の子の格好をしてても許されるが、それ以後は許されない」（〝7歳までは神のうち〟〝男女7歳にして席を同じうせず〟？）

――さて、その主人公を演じたジョルジュは11歳。主人公の少年をどのように理解した？

「フツーの男の子とは違う子。想像力がとても豊かで、夢ばかりみてるから、ちょっと問題になる」

――映画初出演の体験は楽しかった？

タイヘンだった？

「全体としてはとても楽しかった。けど、女の子の格好をさせられるのはイヤだった。あのヘアスタイルも嫌い」だなんて、そんなあ。

――じゃ、あんな子が同じクラスにいたら？

「この映画に出演する前だったらわかんないけど、今だったら〝受け入れよう〟とすると思う」と、このあたりでわかってきたことには、映画に描かれた〝夢〟の派手さとバランスをとるため〝現実〟をより苛酷に描いたとの筆者の理解は誤りらしい。

――あんな子がクラスに1人、御町内に1人と、身近にいてくれたら楽しいのにと望む私はマイノリティ？

「親というものは、子供が他の子と〝変わっている〟ことを不安に思うものなのです」

――父親役にジャン・フィリップ・エコフェ、母親役にミシェール・ラロック、ともに売れっ子をキャスティングされたのは？

「ミシェールについては、コメディの女優さんをシリアスな役に起用したときに映画にもたらされる〝活力〟が好きだから。エコフェは、素材としての本人自らが光を放つタイプの俳優で、父親の人間的部分を体現してくれると思ったから」

「エコフェは、ふざけてばかりで、子供たちに人気があったよ」とジョルジュがフォロー。

――そのジョルジュはどうやってみつけた？

「オーディションで、一目惚れです（笑）」

――女の子になりたいという夢の具体的モデルとして〝パム&ベン〟（バービー人形と、そのボーイフレンドのケンのような、着せ替え人形のカップル）のパムが、人間（バービーちゃんと違って、随分とオトナの女）として登場するシーンの、独特のローズ色は、どのようにして？

「実際に子供のオモチャにあの色が多用されているんです」（とおっしゃる。監督の出身地ベルギーなどのヨーロッパ圏と、日本やアメリカでは、お子様商品にかなり差があるのだろうか？）

世の多くの男性は〝男みたいな女〟とのデートを望んでる!?

――御自身の少年の頃の夢は？

「映画監督になること（笑）。お前なんかになれるはずがないと周囲からいくら言われても、あきらめませんでした（笑）」

――どんな映画がお好き？

「コメディの要素とドラマの要素が織り合わさっていて、現実のなかに突然〝夢〟が入り込んでくる映画」

――それってズバリ「ぼくのバラ色の人生」ですね。

「はい。私は、監督とは〝自分が見たい映画〟をつくる人であるべきと考えていますから」

――お好きな監督は？

「ティム・バートン、ビリー・ワイルダー、ジャン・ルノアール」

――ジョルジュくんは将来、何になりたい？

「できれば俳優を続けていきたい。そうじゃなくても絵とか音楽とか、芸術的な仕事がしたい」

――「ぼくのバラ色の人生」の主題歌の作詞もされてますよね。

「ジョルジュは〝この歌詞バカみたい〟と言うんですよ（笑）。10代の頃ロック・バンドでギターをやってたので、音楽には思い入れがあるんです。そういえばレコードも2枚出したのに、お金をもらってないままだなあ（笑）」

――映画のなかでは〝女になりたい男〟（〝性自認〟の問題）と〝男が好きな男〟（〝性指向〟の問題）をイコールとされていますが。

「それはべつものだと私自身はわかっていますけど、郊外の住宅地に暮らすフツーの人々にはその区別がついてないと思うからです」

――映画にも描かれているように〝男の子になりたい女の子〟はそれほどでもないのに〝女の子になりたい男の子〟となると許されないのは、なぜだとお考えですか？

「社会が受け入れてくれないからです」

――その理由は？（社会的地位の低い者が高い者になりたがるのは頷けることだが、高い方から低い方へなりたがるのはヘンタイだから。という順当な答は最後まで返ってこず、とても不思議なコメントが返ってきました）

「世の男性の多くは〝男みたいな女〟とデートしたいと望んでいるからでしょう。違いますか？」

違いますか？　と言われても……。この質問は、本誌本稿を読んで下さった男性の方々にバトン・タッチ、とさせていただきます。

Digitized by Google

INTERVIEW

明るさや希望に向かう映画を目指しました。

ロベール・ゲディギャン

「マルセイユの恋」を撮った

インタビュアー 田中千世子

撮影／吉岡誠

南フランスのマルセイユは、開放的な街である。パリはパリで都会らしい自由さがあるが、マルセイユにはもっとのびのびした人間の自由さが感じられる。それをロベール・ゲディギャン監督は魅力的に描いてみせた。六月の「フランス映画祭横浜'98」に際して来日したゲディギャン監督は、街と人と映画について次のように語った。

民衆を勇気づけ、力づけたかった。

——時代設定は現代ですか。

「勿論。映画のおわりでマリウスが七十五歳になって……と付け加えたのは御伽噺風のしめくくり方をしてみたかったからです」

——この映画で一番強調したかったことは何でしょう。

「アンクラージェということ。民衆を勇気づけ、力づけたかった。今までの私の映画は、どちらかというと、真っ暗闇。そのことに私は飽き飽きしていました。普通の人々を映画に登場させて彼らの素晴らしさを描くことで人々を力づけたいと思いました」

——彼らの日常には政治や宗教、経済のことがよく登場します。夫が極右のナショナル・フロントに投票したことを断固許さない奥さんがいたり。

「実際ナショナル・フロントは南フランスで勢力を伸ばしています。経済の世界化は人々の日常生活に及んでいますし、いろんな宗教が共存しています。映画を通して現代のいろんな問題を提示したかったのです。民衆や労働者の世界を描きながら今世紀の総決算もね」

——第二次大戦中のビシー政権下、ボルドー地方の警察官僚だったパポンがホロコーストの共犯者として訴追されたパポン裁判が昨年から話題になっていますが、今そのことが問題になるのは？

Robert GUEDIGUIAN
1953年12月マルセイユ生まれ。エクサン・プロヴァンス大学で社会学を学んだのち、80年に処女作 "Dernier été" を撮る。以後、一貫して、マルセイユを舞台に、労働者問題を主題とした作品を発表し続けている。主な作品に "Rouge midi" (83)、"Dieu vomit les tiedes" (89)、"A la vie, à la mort!" (94) など。「マルセイユの恋」はセザール賞7部門にノミネートされ、監督の妻でもあるアリアーヌ・アスカリッドが主演女優賞を受賞している。

Digitized by Google

「何故かというと、ナチとその協力者に対して戦ったレジスタンスのことをふりかえって過去の決着をつけることが大事だからです。それをするには時間がかかるでしょうが、やらねばなりません。私はパポンを告訴することに賛成です。キリスト教的な意味での罪が確かにあるからです。それはフランスが許しを受けなければならない罪でもあるのです。フランス全体の罪と言ってもいいでしょう。レジスタンスがいたと言ってもそれはほんのひとにぎりで、多くの人はホロコーストに対して黙っていたからです」

――ナチの収容所に入っていたカロリーヌは過去と向き合う意味で登場させたのですね。

「歴史についてひとつの見解を示したかったからです。収容所ほど恐ろしい場所はありません。収容所体験をした人はふたつのタイプに分かれます。その体験を一生話したくないと沈黙する人たち。収容所の苦しみを通してオプチュミストになる人もいます。自分たちは再生したんだ、もう死は恐くないと。カロリーヌはこちらです。実際にモデルがいたわけではないのですが、彼女のような人を何人か知っています」

――昔の収容所仲間が同窓会をして盛り上がるのがたくましいというか。人々の話し声はいつも隣近所筒抜け。

「どこの国も庶民階級にはああいった会話があるんじゃないでしょうか。暑いところでは外に出て話したり、窓を開け放しますから話も聞こえてきます。すると他の人もその話に参加して、いつのまにかみんなが意見を言っている。撮影はマルセイユの私が生まれた地区で行いました」

「マルセイユの恋」　銀座シネ・ラ・セットにて上映中。順次全国上映予定

観客はこの映画を欲してたのです。

――ところでこの映画はフランスで大ヒットして、かつセザール賞最優秀女優賞を受賞しました。そのことをどう受け止めていますか。

「映画の成功は漠然と嬉しいと言えます。疑いようのない完全な成功ですから。観客はこの映画を欲してたのです。ここに描かれたライフスタイルは悪くない、そんな風にフランスの左翼も支持しました。セザール賞受賞もよかった。四、五年前だったらこの映画の登場人物は受け入れられなかっただろうし、ジャネット役のアリアーヌもカトリーヌ・ドヌーヴには似ても似つかないわけですから。民衆を通じてこの映画の価値が認められたことを嬉しく思います」

――実生活上のパートナーでもあるアリアーヌさんの女優としての魅力は？

「彼女は本物の女優です。心と頭で演じることができるからです。何でもかでも演じればいいというわけではない。やはり（映画を）見る人に対して責任があります。彼女はプロとして正しい選択をします。その映画があまりに商業的だったり、イデオロギー的な問題があれば、断ります。また、CMには出ないという姿勢をとっています」

――マリウスには何か過去の秘密のようなものがありますね。

「ジャネットの人物像はわかりやすいのに対してマリウスにはあえて秘密を持たせました。この男女が人生でもう一度恋に落ちる時、そこにためらいがあるようにしたかったからです。それをのりこえていく勇気を持てるかどうか」

――ジャネットの娘のボーイフレンドは話題にはなりますが、登場しません。それは？

「娘とそのボーイフレンドの話を語りたかったわけではなく、世代間の違いを出したかっただけですから。また、スーパーマーケットの店長がコミカルな狂言回しとして登場します。御伽噺仕立てだからできたことです。実際、今回は明るさや希望に向かう映画を目指しました。何かきっかけがあったというわけではなく、自分自身、それが必要だと思ったからです。世の中、甘いものではないよという認識だけではなく、人々に夢を見させたかった。第一の観客は私ですから、私も……。しかし、これから先いつもこういう映画をつくるわけではありません。できれば悲劇と御伽噺風のものを交互につくっていきたい」

――映画のなかで登場人物がその人らしく、左翼の新聞を読んでいたり、穏健教養派風のを読んでいたりしますが、ゲディギャン監督がお読みの新聞は何ですか。

「私は月刊の『ル・モンド・ディプロマティック』です。問題が深く掘り下げられていますから。共産党の新聞の『ユマニテ』は失速しています。日刊紙全体に言えることですが、意見紙がなくなっています。残念です」

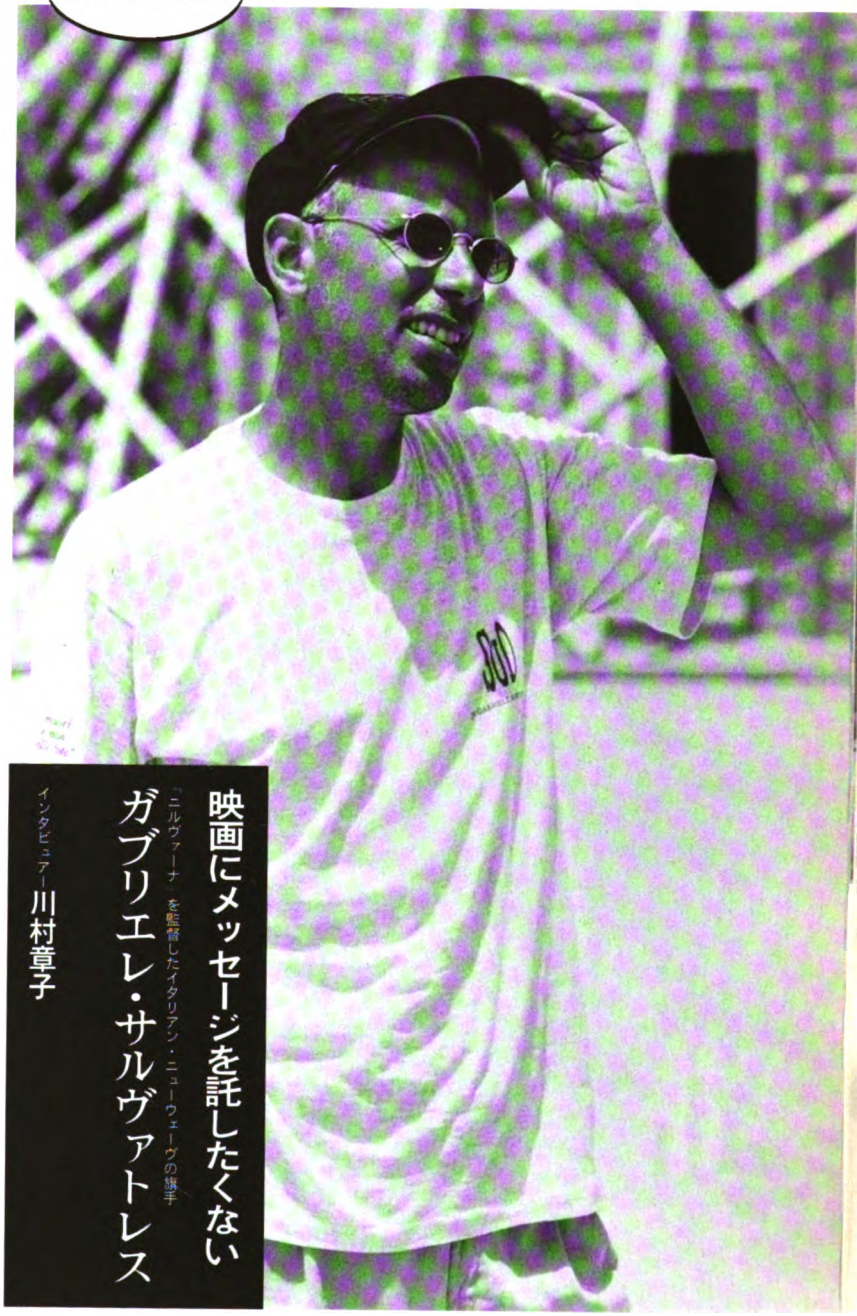
――ところで名前はアルメニア系ですね。

「はい、アルメニア系です。私はアルメニア語はできませんが、いつかアルメニアのエレヴァンに行きたいと思っています。と言うのも私の映画の成功をアルメニアの人たちがとても喜んでくれているからです」

マルセイユは古くから移民の街だ。アルメニア人も多い。そうしたコスモポリタン的な街の空気が自由さに通じているのかもしれない。

Digitized by Google

INTERVIEW



映画にメッセージを託したくない

ガブリエレ・サルヴァトレス

〈ニルヴァーナ〉を監督したイタリアン・ニューウェーヴの旗手

インタビュアー 川村章子

SFという伝統のないイタリアに新しいものをもたらしたい

第二次大戦中にエーゲ海に浮かぶ小さな島に派遣された8人のイタリア兵が、牧歌的でゆったりとしたリズムの中で暮らすうちに、童心を取り戻していくという心温まる物語「エーゲ海の天使」。この作品で92年アカデミー賞外国語映画賞を受賞したガブリエレ・サルヴァトレス監督の新作がついに日本で公開となった。本国イタリアでは97年に公開され、歴代2位の収益を上げたという新作「ニルヴァーナ」は、「エーゲ海の天使」とは全く趣の異なる近未来SFである。

「SFは、ずっと前から文学としても映画の分野としても興味を持っていました。SFという仮面をつけることによって、自分たちのアイデンティティーの問題など、現代の私たちが抱えている問題を時間的にも空間的にもある距離を置いて見ることができるからです。そしてもう一つこの作品を作った理由は、イタリアにはSFという伝統がないので、いつも同じことをするよりも、新しいもの、つまり実験的なことをしたいと思ったのです」

「ニルヴァーナ」の舞台は、2050年のクリスマスの3日前。主人公のジミーは大企業の人気ゲームデザイナーで金銭的にも恵まれているが、1年前に恋人が突然姿を消してから空虚な日々を送っていた。そんな時、製作中のゲーム〈ニルヴァーナ〉のキャラクター・ソロがコンピューター・ウィルスに感染して自我に目覚めてしまう。「同じことを繰り返すのはもううんざりだ」というソロの願いを聞き入れて、ジミーはゲームをキャンセルするため、そして恋人を捜すために旅に出る。そんなジミーの3日間の旅がヨーロッパともアジアとも思えるような混沌とした社会を背景に描かれる。

「この作品のアイディアは初めてインドに行った時に、ガンジス川に入って行く階段のところで浮かんだのです。そこに

Gabriele Salvatores　1950年ナポリ生まれ。アカデミー・オブ・ドラマティック・アート・オブ・ザ・ピッコロ・テアトロ・ディ・ミラノで学び、72年にテアトロ・デルルフォの創立メンバーの一人として参加。以後、この劇団のために21本の作品を演出する。82年舞台ロック・ミュージカル版『真夏の夜の夢』を映画化した作品で監督デビュー。他に"Kamikazen"(87)「マラケシュ・エクスプレス」(89)「エーゲ海の天使」(89〈92年アカデミー外国語映画賞受賞)"Puerto Escondido"(92)などの作品がある。

Digitized by Google

は物乞いの人やグルーなどいろいろな人がいたのですが、その中にシヴァ神の像のそばでコンピューターゲームをしている子供たちがいたのです。シヴァ神というのは彼らの宗教の中で輪廻を表しているのですが、それを見た時につまりコンピューターゲームの登場人物たちというのは、結局シヴァ神と同じように、死んではまた生き返り、また死んでまた生き返り、ということをずっと繰り返している、そこに共通点を見たのです」

監督はヒンズー教、仏教、さらに禅に対して深い関心を寄せているという。そのことは「ニルヴァーナ」というタイトルからも知ることができる。

「ヒンズー教と仏教においては、欲望、苦痛などが消え去った状態にあるニルヴァーナ（ヒンズー教では解脱、仏教では涅槃）に到達した時初めて、死と輪廻の環から解放されるのです。ゲームの主人公・ソロも途中で殺されてゲームオーバーとなっても、またリセットされるとゲームは始まり、同じことを繰り返さなければならない。そして自我を持ったソロは全てを消去することを望むのです。仏教においては、苦しみを消し去るとか、現実での無用な戦いを消し去るということをニルヴァーナと言いますので、そういう意味で映画のタイトルとゲームの名前に『ニルヴァーナ』とつけました。それからゲーム〈ニルヴァーナ〉についてはジミーを写す鏡というふうに考えてください。結局彼もゲームの主人公と同じように毎日毎日、同じことを繰り返し、そして恋人に去られ、愛を失うという生活を送っている訳ですよね。だからある意味で彼もゲームの主人公と何ら変わりはないということです」

大好きな日本文化、日本映画に影響を受けています

それでは、この作品を通して一番伝えたかったことは何なのだろうか？

「私はいわゆるメッセージというものを映画に託したくはないんです。見た人に何かを考えてほしいと思っています。今現在、多くの人たちがアイデンティティーの危機というものを感じていると思うのです。『自分の人生なのに、この人生は自分のものではない』とか『自分の人生はまるでゲームのようで、確かに自分はそのゲームの主人公だけれども、そのゲーム自体は誰か別の人が操作しているのではないか』というふうに感じているのではないでしょうか。この映画は、一方では自分を無にしてしまいたい、全てをなくしてしまいたいという欲望、それからもう一方では、本当ではない、真実ではないと思っていることが、実は真実であるということを発見する、その2つの目を持った作品なのです。ですからこの映画を見た人の心の中に『自分が今見ているものが本当なのだろうか？　現実なのだろうか？』『実は自分もあるゲームの中の一部なのではないか？』そういう疑問を起こすことができたらすごくうれしいですね」

ところで「ニルヴァーナ」の舞台は未来のイタリアということだが、その雰囲気はヨーロッパというより、アジア的でどこか異国情緒あふれるものとなっており、もちろん「日本」も随所に登場する（どんな形で登場するかは作品を見てのお楽しみ。一瞬で消えてしまうシーンもあるので、要注意）。何か日本のもので影響を受けたものがあったのだろうか。

「私の寝室は畳でふとんが敷いてあって、それから禅のお庭もちゃんと作ってあるんです。とにかく私は日本の建築や特に建物の内装が大好きですし、禅や神道などそういう日本文化というものが大好きなのです。もちろん日本の映画からも影響を受けています。黒澤作品は全部見ていますし、最近は『HANA－BI』がすごく気に入りました。それから『GHOST IN THE SHELL』、『AKIRA』のような日本のアニメ、特にSFのアニメがとても好きです。まだ日本を訪れたことはないのですが、この次の旅はぜひ日本にしたいですね」

次回作は近未来SF "Calcutta Chromosome" というマラリアをテーマにした作品だとか。

「19世紀初頭と現代のカルカッタ、そして2005年のニューヨークという3つの時代が同時に進行するサイエンス・スリラーという感じです」

初のアメリカ作品となるが、もちろんサルヴァトレス監督が深い関心を寄せる様々な哲学的な思考というものが織り混ぜられるという。「ニルヴァーナ」同様、いわゆるアメリカ発のSFとは異なる作品になることは間違いないだろう。これからもサルヴァトレス監督の動きからは目が離せない。

「ニルヴァーナ」シネセゾン渋谷にて11月7日よりロードショー

Digitized by Google

INTERVIEW

本物のピガール族との共演は僕にとっても貴重な体験だった

フランシス・ルノー

カリム・ドリディ監督「ピガール」主演

インタビュアー 大和晶

撮影／谷岡康則

自分の経験や感じたことがシナリオに反映されている

パリ18区ピガール。モンマルトルの丘を背にしたこの街には、昼と夜と、全く異なる二つの顔がある。昼間は、赤い風車が目印の〈ムーラン・ルージュ〉で知られる観光スポット。通りを埋めるのは、世界中からやって来た団体ツアーの客たちで、道端には、彼らの帰りを待つ大型観光バスが幾台も所在なげに停まっている。が、夜の闇が迫る頃、街の様相は一変する。ケバケバしいネオンに彩られたSEXショップがずらりと立ち並び、その店頭には、言葉巧みに〝カモ〟を釣る呼び込みの男たちと、肌露わな客引きの女たちが。そこには、物見遊山な観光客がうっかり足を踏み入れようものならたちまち〝火傷〟する、熱く妖しく刺激的な快楽の世界が広がっているのである。

映画「ピガール」は、そんなピガールの夜の顔と、そこに生きるピガールっ子たちの姿を、この街に魅せられたカリム・ドリディ監督が、愛情を込めてヴィヴィッドに描き出した、言ってみればドリディ監督のピガール讃歌である。主人公の若者フィフィを演じるのは、この作品で一躍注目を浴びるようになったフランス若手俳優フランシス・ルノー。彼は、18歳で俳優を目指して地方からパリに出て来てから8年間、映画の撮影のためにピガールを訪れるまで、一度もこの街に来たことがなかったという。

「撮影中は、ドリディ監督の意向で、ピガールの外に出る自由を与えられなかったんだ。スタッフもキャストも全員が、ピガール内にある千平方メートルもの広いスタジオで寝食を共にしたわけ。僕は、それまでピガールを全然知らなかったので、毎晩のように街をブラつき、バーに立ち寄り、売春婦やチンピラなどの〝ピガール族〟と知り合い、ピガールの〝香り〟を身につけようとした。この街には、ドラッグ中毒の人がたくさんいるんだけ

Francis RENAUD　88年ヴェラ・グレッグの演劇講座から俳優の道を歩む。89年、ジョルジュ・ロートネル監督の『思いがけない客』で映画デビュー。主な作品に「海を渡るジャンヌ」(91)「猫が行方不明」(96)「堕ちてゆく女」(96)などがある。

Digitized by Google

「ピガール」

れど、ある晩出会った17歳のジャンキーでエイズ・キャリアの少年は、とても印象的だった。僕は、3、4日彼と一緒に過ごすことで彼のフィーリングを体で感じ取ろうとした。それは、フィフィの役作りにとても役に立ったと思うよ。

で、ドリディ監督は、こうした僕の一夜のピガール体験を、翌朝まるでインタビューするように根ほり葉ほり聞き出し、それをシナリオに入れ込んでいった。だから、もちろん共同脚本ではないけれど、僕がピガールで経験したことや感じたことが、かなりシナリオに反映されていることは確かだと思う」

では、ルノーが自分の目で見、体で感じたピガールとはどんな街なのだろう。

「ピガールの住人は、前科があったりジャンキーだったりと社会的にマージナルな上、経済的にも恵まれていない人が多い。でも、みんなものすごく心優しくて庶民的なんだ。パリの他の区に住む人々にとってピガールは、イコールSEX産業でしかなく、それ以外の面では人々はピガールに対しあまりにも無関心だと思う。ある意味でこの街は、動物園の檻の中みたいなものじゃないかな」

つまり、見物人が興味を持つのは、中にいるのがサルかライオンか、ということだけ。それらが何を考え何を感じて日々を暮らしているかなど、まるで関心がないのである。だが、ドリディ監督と彼の映画仲間たちは違っていた。彼らは〝檻の中〟に踏み入り、中の住人たちを映画に引っぱり込んで、ピガールの真実を映し出そうとしたのである。

役者ならリスクに挑戦したい気持ちが必ずある

「映画には、本物の〝ピガール族〟がいっぱい出演している。例えば、フィフィに拳銃を渡すロジェ老人は、映画の完成直後に癌で亡くなってしまったけれど、本当に殺し屋だった人だし、のぞき部屋ショップのオーナー役のクリスチャン・ソーニエも、それが本職のピガール族。そうしたノンプロの人たちと共演することは、僕にとっても興味深い貴重な体験だった。

面白いエピソードを一つ挙げると、冒頭のフィフィと彼の弟分ムスタフが、イギリス女性のハンドバッグを引ったくるシーンの撮影でのこと。通りでの撮影は、ほとんど望遠レンズを使っているんだけど、この時もそうで、通行人は映画を撮ってることに気がつかなかった。そこに『トロボー！』という叫び声が上がったものだから、みんな本物のスリだと思ってムスタフをとり押さえようとしたわけ」

ちなみに、フィフィとムスタフのスリの手並は、正真正銘のスリの手解きによるらしい。

ところで、フィフィはヒモが生業のバイセクシュアル。恋人は、性転換者のディヴィンヌで、一方に兄妹のように仲の良い娼婦ヴェラがいる。この手の役柄は、とりわけ新人俳優にとり、後々まで尾を引く危険性のあるもの。事実ルノーは、「ピガール」で彼を見初めたカトリーヌ・ブレイヤ監督の「堕ちてゆく女」で、再びバイの青年を演じているのだ。

「リスクはある。それがカタログ化されて、同じような役ばかり回ってくる可能性はあるよ。でも役者ならば、あえてリスクに挑戦してみたいという気持ちが必ずあるはず。それと、自分とはかけ離れたキャラクターにトライしたいという思いもね。それに、僕はヘテロだろうがホモセクシュアルあるいはバイセクシュアルだろうが、愛であることには変わりないと思う。大切なのは、自分の性的悦びがどこにあるかを探し見極めることと、それに〝恥〟を持たないことではないかな。

ただし『堕ちてゆく女』に関して言えば、最初はあまり乗り気ではなかったんだ。同じ頃、他に二つ興味引かれるプロジェクトがあったしね。でも、それが両方とも流れてしまい、ブレイヤ監督が再度声をかけてきた時、やってみようかなと思い直した。理由は、この脚本が、実際に起きた事件を報じた三面記事を元にしていて、そこが面白いと思ったから」

と語るルノーは、さらに、

「今の時代で最も危険なのは、同性愛者ではなく極右の差別主義者の方」

と付け加える。その彼が、映画中、ムスタフ少年に「BOUGNOU（アラブ野郎）！」と、ひどく差別的な言葉を吐く。が、それは、決してアラブ系のムスタフを差別しているのではなく、

「フィフィはムスタフに、自分と同じ道を辿って欲しくないと思っている。だから彼をしいて突き放そうとした。一種の愛情の裏返し」

とか。そうした自分の役柄への内面的理解、分析も含め、ルノーは、なかなか思慮深くかつ意欲に満ちた、これからの活躍が楽しみな若手俳優であった。

Digitized by Google

日蘭交流400年直前！

オランダ映画の魅力を探れ！

1998ユトレヒト映画祭 オランダ映画祭1998

編集協力　新岡由紀

アムステルダムから列車で30分。大聖堂と大学の街として知られるユトレヒトで毎秋開かれている映画祭をご存知だろうか。長篇・短編劇映画、ドキュメンタリー、アニメーションといった新旧オランダ映画の上映や、関係者によるトークショーが行われるこの映画祭には5万人を超える映画ファンや映画関係者たちが訪れる。市内数カ所の映画館や施設を会場として今年も9月23日から10月2日まで第18回オランダ映画祭が行われた。その様子をリポートすべくプレス用の申請をしたところ、ゲストリストに名前が掲載され、一抹の不安と若干の期待を持ってユトレヒトに降り立つことになった。

リストによれば8割がオランダ国内からの参加者ということで、懸念していたとおり作品の上映はもちろん会場内のアナウンスもすべてオランダ語で進行される。国内映画祭としては最大級であり、短期間でオランダ映画をまとめて観られる絶好の機会なので、会場にはファンばかりでなくコンペ部門にノミネートされている人気俳優たちも気軽に顔を見せていた。今年の米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した「キャラクター／孤独な人の肖像」（マイケ・ファン・デイム監督、公開中）で爽やかな笑顔が印象的だったタマル・ファン・デン・ドップに映画館の前で会ったり、Grolsch 賞の会場でオープニングを飾った「Het 14e kippetje」の男優ディルク・ゼーレンベルフに写真を撮らせてもらったりした。

前述の「キャラクター」や95年にアカデミーの同賞を受賞した「アントニア」（マルレーン・ゴリス監督）、同監督の新作「ダロウェイ夫人」（公開中）など日本でも様々なオランダ映画が観られるようになり、22日からは東京でオランダ映画祭1998も開催される。国交400周年を2年後に控えた今、オランダの映画関係者たちが日本映画をどんなふうに見ているのか、また海外で評価の高いオランダ映画が国内ではどのように受け止められているのかを中心に取材した。

フランス・ファン・ヘステル
（プロデューサー）

「ポーランド人の結婚」

今回の映画祭で長篇部門の監督賞と主演女優賞を受賞した「ポーランド人の結婚」のプロデューサー、フランス・ファン・ヘステル氏、来日するパウラ・ファン・ダー・ウスト、ジアン・ファン・デ・フォルデ両監督と「ダンデライオン・ゲーム」を撮ったペーター・ファン・ワイク監督にそれぞれインタビューした。

「2年ほど前に発足したオランダ映画基金出資のプロジェクト“Route 2000”に登録してアイデアを公募したところ、無名の新人から『ポーランド人の結婚』が送られてきました。脚本自体うまく描けていたし、舞台が1箇所だったことも19日間で撮影しなければならなかった僕たちにとって大きな魅力だったのです」

ロー・バジェットでリスクも大きかったが、長編は初めてのカリム・トライディア監督を起用したのはなぜだったのか。

「映画は典型的なオランダ風景を描いているためオランダ臭くなりすぎないよう詩的な要素を織り込むことを考え、10年来付き合いのあるカリムが詩的な作家であることを知っていたので監督を依頼しました。映画の中でアナがモクモクとふくらんだ雲を見て〝見て！　きれいな山よ〟と言うシーンがありますが、これは山に囲まれたアルジェリア生まれのカリムならではの発想で、山がないオランダに育った人間には思いつきません。彼の外国人としての視点が映画に相乗効果を与えたのです。

作品の舞台になっているフローニゲンでの撮影中にちょっとした事件がありました。ここは撮影に使われたことなどない田舎なのでカリムがポルノ映画を作っていると勘違いされ撮影現場に警官がや

■来日ゲスト

監督
パウラ・ファン・ダー・ウスト
ジアン・ファン・デ・フォルデ
イアン・ケルコフ
俳優
トム・ホフマン

獣のようにやさしい人

Ryodal Makes the Big　1992・1時間24分　監督／イアン・ケルコフ　愛と暴力、痛みと喜びは、意外に近いところに位置しているかもしれない。少女がそれを男に告げた時、感情をうまく表現できない男は、ただ罵りの言葉を吐くだけだった……。「アムステルダム・ウェステッド！」のイアン・ケルコフ監督、92年の作品。92年オランダ映画祭グランプリと最優秀女優賞受賞。

Digitized by Google

ってきたのです。しかし現場を見た彼らはポルノ映画ではなく素敵な映画を作っていることを分かってくれました（笑）」

そんな地元の人たちの公開後の反響は「2月の公開以来、現在までロングランされ、過去10年間の観客動員数のトップを記録しました。ふだん映画なんか観ない人も、この作品のために映画館に足を運んでくれたのです。馴染みの風景と同郷の歌手が歌う〝フローニゲン賛歌〟が土地の人々に支持されたのでしょう」

近年、英語圏進出を睨み英語字幕付きも作られつつあるが、政府の助成金を受けるにはオランダ語で作らなくてはならないという。今後の展開について聞くと、「『HANA－BI』が日本語でしか作れないように『ポーランド人の結婚』もオランダ語でなければ駄目なのです。しかし英語での映画製作は、市場の拡大で資金や人材集めがしやすく、稼げる点が魅力です。芸術作品を作る一方で商業作品も作っていきたいと思っています」

パウラ・ファン・ダー・ウスト
（監督）

「テーチェの旅」

日常に生きる人々の感情の機微を独自のフィルターを通して捉えてきたウスト監督の今回のテーマは、新聞の投書がきっかけだったという。主人公のテーチェは小金を稼ぎながら成功を夢見る野心家だが、その人間臭さが悲惨な状況を描くこのドラマの中で見る者の心を和ませる役割を果たしているようだ。彼のような人物は現実に存在するのだろうか。

「テーチェは今のオランダ社会の新しい世代のひとつの典型で、他人に関心がなく金を稼ぐことで頭が一杯の、早く楽をして金持ちになることばかり考えている人間のことなんです。道徳的・倫理的意味からでなく、ただテーチェのような人物を描くことで話にコントラストをつけ、動きを出したかった。『テーチェの旅』では、他人に全く関心のないタイプの彼が、船員や船中で起きる問題にどのように対処していくかを描いてみたのです」

理路整然と答える監督に映画を撮る際一番重視することについて聞くと、

「映像も大切ですが、映画の出来そのものを左右する演技に重点をおきます。また重要なのは、作品の持つテーマについて、どのシーンにおいても不透明な部分がなくなるまでとことん役者たちと議論をすること。映画を作る上で役者と監督は一体でなければなりませんが、それは信頼関係があってこそ成立する。私は、その関係を作り上げることに最も時間とエネルギーを費やすのです」

オランダの映画界にはハリウッドのようなスター・システムは存在しない。肩書に〝映画俳優〟とつく役者はユルン・クラベやトム・ホフマンといった俳優を

オランダ映画祭1998

●お問い合わせ　オランダ映画祭実行委員会：ぴあ（株）文化事業部内
TEL：03 3265-1425（月曜～金曜10：00～18：00）

日程　1998年10月22日（木）～26日（月）
会場　草月会館ホール（東京・赤坂）

日場料金　前売り1回券＝800円　当日1回券＝1000円　その他、回数券有

■上映作品

フェリーチェさん

Felice…Felice…　1997・1時間30分　監督／ペーター・デルベウト

19世紀半、長崎、門司、尾道、富士、横浜、東京と、写真旅行をしたオランダの写真家フェリーチェ・ビアート。彼は、その旅にお菊という日本人女性を伴う。フェリーチェが愛した女性だった。そして1895年。映画は再び来日したフェリーチェがお菊を訪ねる所から始まる。

ポーランド人の結婚

The Polish Bride　1998・1時間30分　監督／カリム・トライディア

美しい田園地帯として知られるオランダのフローニゲン地方。この土地に、若い頃ドイツより移り住み、農業を営んできた男がいた。ある日彼の所に、ポーランドからの密入国者である女が転がり込んでくる。営々とした日々の中で、二人はいつしか愛を育み始めるのだが…。98年ロッテルダム映画祭観客賞受賞。

テーチェの旅

Tate's Voyage　1997・1時間90分　監督／パウラ・ファン・ダー・ウスト

ロッテルダムに住む若者テートは一世一代のカケに出る。荒業を使い貨物船を手に入れ、ガールフレンドと共に乗り込み、一獲千金を夢見る。が、その船は持ち主不明の積み荷と長い間給料の支払われていない船員たちというおまけつき。ついには彼女も他に恋人を作り……。本映画祭唯一の女性監督作品。

オール・スターズ

All Atars　1997・1時間45分　監督／ジアン・ファン・デ・フォルデ

少年サッカーチームで一緒にプレイしていた7人の若者の生きざまを描く青春群像劇。ガールフレンドが妊娠した者、ゲイであることを言い出せない者、老いた親の面倒を見ている者と、オランダの現在、オランダの若者たちの今が描かれる。もちろん、オランダ映画界が誇る若手オールスター・キャストで贈る。

Digitized by Google

除けば皆無のようだ。だからウスト監督の言うとことんまで議論する現場が生まれるのかもしれない。しかし意欲的に語る監督も、オランダ映画の製作現況に話を向けると顔を曇らせる。

「オランダの映画製作に欠かせない年間千七百万ギルダーの助成金の予算中、長編映画にまわされるのは一千万円で、年間10本程度製作される作品のほとんどが二百万ギルダーかそれ以下で作られるロー・バジェット映画。こうした中、労働に見合った収入が得られずこの世界を去っていくスタッフもいるのが現状です」

インタビュー中もテープを無駄にしないよう、会話が切れる度にスイッチをオフにする気配りを見せたウスト監督。彼女はこうした逆境に在ってもプライドを持って映画を撮り続けていくに違いない。

ジアン・ファン・デ・フォルデ
（監督）

「オール・スターズ」

低予算で作られることがほとんどのオランダ映画の中で、幅広い大衆の支持を集められる「オール・スターズ」のような作品は少ない。この作品にはサッカー狂の若者たち、同性愛、介護問題といったモチーフが全篇にちりばめられている。

「オランダでは地位や階級に関係なく、みんなサッカーを楽しみます。この作品に登場する7人の地位もさまざまですが、サッカーをするときは同等。彼らの社会的背景もオランダではよく見かけるものですが、ホモセクシャルの青年については例外。サッカーは〝男の世界〟なのでホモであることを公表したりはしません。だから彼のような人物を描くのは逆に面白いと考えたのです」

この作品は昨年公開されるや大ヒット、観客動員数の22位にランキングされた。監督の周囲の反響はどうだったか。

「映画を観た人たちから〝面白い〟〝大笑いした〟とダイレクトな反応が返ってきたのは初めての経験でした。オランダの人口は1500万人、そのうち半分がサッカーファンで、ファンの半分は実際にプレイしています。そんなわけで多くのオランダ人が『オール・スターズ』に描かれていることをよく知っていて、〝僕らのことが正確に描かれている！〟という声をよく耳にしました。〝頭の中であれこれ考えるくらいならサッカーでカッコいいことをやれ〟という言葉がそうした人たちの中には生きているのです」

ホットな若手俳優が多数共演するこの作品を撮る上で、彼らとのコラボレーションはどのように進められたのだろう。

「撮影中ボールがあるとみんなすぐサッカーを始めてしまうので大変でした（笑）。7人の俳優たちはすでに役を自分のものにしていたので彼らに自由に演技させ、上から指示するよりもむしろ彼らの下にいるようにしました。シャワーのシーンでは初めみんな恥ずかしがってタオルで体を隠すんです。彼らをすっ裸にするため、一人の役者に〝このシーンであいつがこのセリフを言ったらあいつの顔にスポンジを投げろ〟と指示し、別の役者にも同じ指示を出しました。そしてそのシーンが来た時、スポンジの投げ合いが始まったのです。その後はみんな裸になることに何の抵抗もなくなりました」

最後に日本映画、監督について聞くと、

「映画学校時代、黒澤を始めたくさん日本映画を見ました。僕の仕事部屋には黒澤監督の写真が貼ってあります」

ペーター・ファン・ワイク
（監督）

「タンテライオン・ゲーム」

〝ダンデライオン・ゲーム〟とは、タンポポの綿を1回で吹き飛ばすと、100歳まで生きられるという意味のオランダの遊びのことなのだそうだ。

「原作は67年にヘアート・ファン・ベークによって書かれたもので、学生時代この本を読んだ時に映画にしたら美しいだろうと直感したのです」

この作品を語る上で欠かせない二人の子役について聞いてみる。

「少年はオランダ映画の有名な子役、Olivier Tuinier で、女の子（Marie Vinck）の方はベルギーのTV番組に出ているのを見て出演依頼しました。ちなみに、彼女のお母さんも女優さんで、この作品の冒頭で棺に入って登場しています」

オランダの田園風景を男の子と女の子がどこまでも駆けて行く。その映像の鮮烈さが目の裏に焼きつき、作品のテーマソングが見終わった後も耳から離れない。

「オランダの風景は現に美しいものですが、それを超えるような画作りを心がけました。また、音楽もオランダ・ベルギーで大変有名なレイモンド・ファン・ヘット・フルーネワウトにシンプルで心に残るような曲をお願いしたのです」

黒澤を師とし訃報を聞いた際ろうそくを灯して追悼したというワイク監督。彼の作品が公開される日を心待ちにしたい。

「ダンデライオン・ゲーム」

Digitized by Google

今、日本で見られるオランダ映画

作品評　森直人

ドレス

アスミック　エース配給
俳優座トーキーナイトにて10月31日より公開

人の性欲を暴走させる力を備えた、枯れた木の葉がデザインされた一枚の青い〈ドレス〉。これを着た老女は突如発情してそのまま死に至り、若い女性の場合は必ず変態男に襲われるという、全く世のため人のためにならない史上最悪のお召しものである（なぜか性欲暴走の法則はまちまちである）。このロクでもない〈ドレス〉が、まるで意志を持っているかのように、風に乗り、店頭に並び、人から人へと渡っていく。そう、いわば「ババ抜き」と「不幸の手紙」を合体させたがごとき連鎖運動の物語なのだが、それをおどろおどろしいスリラーではなく、「ハリーの災難」（55）ばりに（？）、楽しく軽快に見せていくのが本作の面白いところである。

だが、この映画で最も重要なポイントは、〈ドレス〉を着た20代の女性と10代の少女を連続して犯そうとする、劇中でも突出した危険人物である変態車掌の役を、監督アレックス・ファン・バーメルダム氏自らがイキイキと演じておられることだ。「俺は変態じゃない、ノーマルだ！」と豪語しながら淡々と変態行為を進めていくその超マイ・ペースぶりは、フルチンでポーカー・フェイスという何の説得力もない姿とあいまって、まさに異様な迫力を醸し出している。「こんなオッサンにだけはなりたくない」と思いつつも、妙な感動を覚えてしまった。しかも、「コレクター」（65）や「スタン・ザ・フラッシャー」（89）などと違って、いわゆる〝変態男の哀しみ〟が少しもにじみ出ないのが、何ともシブイというか、一種のハードボイルドである。また、彼がイタズラした少女の両親にやっつけられている模様をロングでとらえたショットの自虐／マゾ的な感覚に、僕はこのヨゴレ監督の本領を見たような気がした。

さて本作品、海外では「ブニュエルを思わせる」などという安直極まる評が出ているようだが、バーメルダム演出の性格は確かなテンポとキャラの強さと分かりやすいドラマ運びを重視するオーソドキシーであり（物足りないとしたら逆に前衛性の欠如している点であろう）、ブニュエルよりはずっと万人向けの変態エンターテインメントに仕上がっている。ある意味、オランダ版「悪戯のいけにえ」（74）かもしれない？

キャラクター孤独な人の肖像

アルシネテラン配給
シネマスクエアとうきゅうにて公開中

何とも奇妙な〝関係性〟を描く映画であり、愛情表現の不器用さ、そして様々な〈観念〉がここまで人生をややこしくしてしまうものかと、改めて「生きるってメンドウだなあ」などと思わずため息をついてしまう快作、というより怪作である。

舞台は今世紀初頭から20年代にかけてのロッテルダム。貧乏な私生児として生まれた少年ヤコブが、勤勉に努力して弁護士への道を歩もうとする物語に、単なる〝無口〟というよりはまるで外界との接触を意識的に拒否しているかのように、ほとんど何もしゃべろうとしない母ヨバと、時折この母子の前に現れては、一見イヤガラセとしか思えない行動をして立ち去っていく父、金貸し屋ドレイブルハーブンの存在が重く絡んでくる。ヤコブはドレイブルハーブンと当時彼の家政婦だったヨバが一夜だけのセックスでうっかり出来ちゃった子供であり、ドレイブルハーブンは責任を取って結婚しようとするのだが、ヨバは承諾しない（ここには明らかに〝階級〟的屈辱の問題が横たわっているだろう）。そこでドレイブルハーブンは、恐ろしくねじれた形で父親の義務／役割、あるいは愛を果たそうとする。一言でいえば「息子を鍛える」という〝愛〟なのだが、説明なしでいきなりそれをやるので〝イヤガラセ〟にしか見えないワケだ。だから、はじめはヤコブにとっても我々観客にとっても、このオヤジは陰険なサディストとして不快にうつる。ところが劇が進むにつれて、彼の深い「孤独」が徐々に、確かに浮かび上がってくるのだ。このへんが本作最大の見所であろう。

冒頭でも述べたが、ドレイブルハーブンという人間は、アコギな資本家の役割、父の役割、男としての責任、さらには死へのエロティックな欲望など、いろんな〈観念〉でガチガチに呪縛された男であり、それが現実生活を「不器用」なものにせずにはおけないのだ。素朴な勉強家といった面持ちのヤコブも、恋心をよせる同僚の女性への「不器用」な接し方を見ていると「間違いなくこのオヤジの息子だ」とすんなり納得できてしまう。ならば彼の将来も……。

オマケ記述のようでナンだが、めまぐるしいカメラワークで125分突っ走る、マイケ・ファン・ディム監督の演出もパワフルで良かった。

■はみだし情報　「ダロウェイ夫人」岩波ホールにて上映中。オランダの女性監督、「アントニア」のマルレーン・ゴリスが人間の〝老〟と〝死〟を見つめた女性映画。

Digitized by Google

世界の映画祭へ向かって
国際映画祭での上映のために

林　加奈子

⑥各国映画祭の状況（5）

ロンドン映画祭
LONDON FILM FESTIVAL

事務局：South Bank, London, SE 8XT, U.K. TEL：44 171 928 3535 FAX：44 171 633 0786
ディレクター：Mr. Adrian Wootton

11月に行われるコンペのない映画祭。ナショナル・フィルム・シアターが会場の一つとなるので試写状況も完璧で、イギリス初上映となる外国映画を見るのでも、自国の新作をまとめて見るのでもロンドンの人々にとっては大賑わいの、意義深い映画祭。最近ディレクターが変わったので、マーケット色を強化しようとか、コンペ部門を設けようとか、このところ揺れているのが現状。基本的にはロンドンっ子のための観客を中心とした映画祭なのだが、ちょうどこの時期は、ミラノでのミフェッドという大きな業界マーケットがあるので、巧く連動させて国際的にもより強い注目度を浴びせようという動きもある。また、直前に全く別のコンペのある映画祭を別の組織が打ち立てようとか、いやそんなの無理だとか、様々な水面下の動きもあって、ちょっとこの頃ロンドンは揺れているので、動向を慎重に見ていく必要がある。

日本映画はここをプレミア上映とするよりも、各地で評判になった作品が集まる感じ。北野武監督作品や別の映画祭でグランプリに輝いた映画を除けば、上映されても珍しいアジアからの参加という枠での紹介になりかねない。「隠し砦の三悪人」の中のセリフじゃあないけれど、映画祭が選んでくれた好意を生かすも殺すも己次第。出たことに喜んで終始してしまうのと、そのチャンスを生かしてヨーロッパでの展開や次回作へのステップへと活用していくのとでは雲泥の差が生じる。私がご一緒した監督たちの中でも、舞い上がって完結してしまった人もいらっしゃるが、冷静に自分の作品の反応を確認して、他の映画からも吸収し、また新たな何かが見えてきたと目を輝かせている人には、その目の奥に明るい未来が見えるようだ。映画祭へ出席するチャンスそのものをどう生かしていくかは、出席者次第。海外に行っても堂々としている監督たちが増えているのは、うれしいことだ。

釜山国際映画祭
PUSAN INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

事務局：Pusan Yachting Center, Room 208, #1393, Woo 1-dong, Haeundae-Gu, Pusan Korea TEL：82 51 747 3010 FAX：82 51 747 3012
ディレクター：Mr. Kim Dong-Ho　アジアン・プログラマー：Kim Ji-Seok

今年3回目を迎えた新しい映画祭。9月終わり頃から10月にかけて開催される。アジアの拠点を目指して、過去2回は大成功を続けている。日本映画にとってはまだ劇場公開が解禁されていないので、映画祭期間中はスクリーンで見てもらえる貴重な時となる。逆にセールスを考える立場の人にとっては、日本映画を出したところで売れるわけじゃなしとクールに対応されてしまったりする事実もあるのだが、こればかりはニワトリとタマゴで、良い映画を紹介して実際に見てもらい、公開の意義があると政府にも納得してもらえるように私は見てもらえるチャンスを活用したらいいのにと願うばかりだ。

アジアの長編1・2作目を対象にしたコンペがあって賞金は韓国のその作品を配給する会社にプロモーションの資金援助として支払われる（日本映画がグランプリをとれたら見もの）。その他にも5000人の座席数を持つ夜の野外上映、短編や実験映画、アニメーションなどプログラムはヴァラエティに富んでいる。

この映画祭の凄いところは、他の映画祭の良いところを徹底的に調査して外国人を何人もアドヴァイザーに置きながら、外国からのゲストには自国の韓国映画新作とクラシックの特集を積極的に見てもらい、地元の観客に

世界の映画祭へ向かって　目次

8月下旬号
「第1回　映画祭への橋渡し」
9月上旬号
「第2回　各国映画祭の状況（1）」
・モントリオール世界映画祭
・トロント国際映画祭
・ヴァンクーヴァー国際映画祭
・ベルリン国際映画祭
・ロッテルダム国際映画祭
9月下旬号
「第3回　各国映画祭の状況（2）」
・エーテボリ国際映画祭
・テサロニキ国際映画祭
・トリノ国際映画祭
・ブエルトリコ国際映画祭
・香港国際映画祭
・シンガポール国際映画祭
・インド国際映画祭
・シドニー国際映画祭10月上旬号
10月上旬号
「第4回　各国映画祭の状況（3）」
・カンヌ国際映画祭
・ナント三大陸映画祭
・ヴェネチア国際映画祭
・ロカルノ映画祭
・タオルミーナ国際映画祭
10月下旬号
「第5回　各国映画祭の状況（4）」
・ハワイ国際映画祭
・モスクワ国際映画祭
・カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭
・イスタンブール国際映画祭
・サン・セバスチャン国際映画祭
・メルボルン国際映画祭
・オーバーハウゼン国際映画祭
・ヘルシンキ国際映画祭
・サンパウロ国際映画祭
・ミュンヘン国際映画祭
・ウェリントン国際映画祭
・ニュージーランド国際映画祭
・シカゴ国際映画祭

Digitized by Google

は欧米作品や評判のアジア映画を見せていく趣向が徹底していることだ。地元の高校生・大学生を中心にした若い人々に支持されて動員数も多く（何と今年は41ケ国からの211本が上映されて観客総数は21万5千人を記録した）、韓国の映画関係者が一丸となって盛り上げている勢いを感じる。

今年はPPP（プサン・プロモーション・プラン）が始まった。これはロッテルダム映画祭のシネマートなどにならったアジア映画を中心にしたプリセールスを支援する為の場で、セミナーもあり、新作のプロジェクトを持つ製作者たちと、バイヤーたちが盛んに打ち合わせを重ねていた。PPPだけで26ケ国から275人の参加となって、ここでの出会いが未来の新作を期待させていた。

日本映画も毎年20本以上もの作品が上映されて、熱狂的に歓迎された。今年上映された新作は「生きない」（清水浩）「ワンダフルライフ」（是枝裕和）「楽園」（萩生田宏治）「落下する夕方」（合津直枝）「A」（森達也）「四月物語」（岩井俊二）「青い魚」（中川洋介）などなど。諸外国からもカンヌ、ベルリンを始めとする他の映画祭関係者がこぞって集まり、韓国映画の新作やプレミア作品をどんどん見てくれている。これは日本映画にとっても、海外への展開のチャンスの場と言えよう。

クロージング上映としては、初めて日本映画が選ばれて「カンゾー先生」（今村昌平）が上映され、今村監督は韓国語でのスピーチをしてくださった。日本映画学校の生徒たちが作った新しい作品が、釜山で上映されているのをとても喜んでいるという、若い作り手たちへのエールも述べてくださって、近い未来の日本映画解禁を予感させる素晴らしい閉会式となった。

3回目にしてこの大きさに成長したのは、異例の事。あっぱれ、という感動と共に次回からは、これ以上の大きさに膨らんだ故に生じてしまいがちの、運営面での混乱に対処していかなくてはならない問題が残される。とは言え、春の香港国際映画祭と秋の釜山国際映画祭がアジアの拠点として、重要な役割を果たしていく事は、今後も大いに期待できる。釜山では、今年の12月からシネマテークがオープンするという。映画祭を単なるイヴェントとして終わらせまいとする志しの高さを高く評価したい。

サンフランシスコ国際映画祭
SAN FRANCISCO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

事務局： San Francisco Film Society, 1521 Eddy Street, San Francisco, CA 94115-4102, U.S.A. TEL：1 415 929 5000 FAX：1 415 921 5032

ディレクター： Mr. Peter Scarlet

4月に開催。40回目を迎えて人気が高まってきている。アメリカはハリウッドの影響が大きすぎるせいか、どうしても国際映画祭がなかなか大きくなりにくい。ここは期間中はノンコンペだが、開催前にエントリーされた作品の中からゴールデンゲート賞が選ばれる。日本からの参加も今後とも期待したい映画祭だ。

クレルモン・フェラン短編映画祭
CLERMONT-FERRAND SHORT FILM FESTIVAL

事務局： 26 Rue Jacobins, 63000 Clermont-Ferrand, France TEL：33 73 91 65 73 FAX：33 73 92 11 93

短編映画祭の中では最も注目されている所。20分以内の作品を対象にしたコンペあり。短編はカンヌ、モントリオールといった大映画祭でもコンペ部門があるので参加している多くの関係者に見てもらえるチャンスがあるが、クレルモン・フェランのような短編専門のところにはまたそれを狙っての参加者もいる。日本では短編を作っても上映の機会が非常に限られてしまうために、無理をしてでもまず長編を作らないと先へ進めない状況があるが、カナダ、スカンジナビアやヨーロッパ諸国では短編で才能が認められれば、スポンサーがついて長編を作るステップに結びつくので、短編は数多く作られている。一度トリノ映画祭で短編部門（30分以内）の審査員をしたことがあるのだが、短い中でのドラマ展開やオチのつけかたなど唸らせるものが少なくなかった。

97年には49ケ国から11万6千人の観客を動員し、短編映画へのマーケットとしての役割も果たしている。1月下旬に開催。

ニューヨーク映画祭
NEW YORK FILM FESTIVAL

事務局： The Film Society of Lincoln Center, 70 Lincoln Center Plaza, New York, NY 10023-6595, U.S.A. TEL：1 212 875 5617 FAX：1 212 875 5636

ディレクター： Mr. Richard Pena

10月と3月、春と秋の2回行われる。10月の方は、大映画祭で上映された作品のアメリカプレミア。春はニューディレクターズ・ニューフィルムズと銘打って、近代美術館との

ロンドン映画祭の会場のひとつ オデオン・ウエストエンド劇場

Digitized by Google

共催によりアメリカでまだ紹介されていない、彼らにとって新しい監督の新作を集めて上映する。コンペは無し。

アメリカでの公開と関連させて、タイミング良く活用できれば理想的だ。

今年の秋には日本から「カンゾー先生」（今村昌平）が参加。春には今までにも「3月のライオン」（矢崎仁司）「ＺＡＺＩＥ」（利重剛）などを始めとするインディーズが紹介されてきている。

サンダンス映画祭
SUNDANCE FILM FESTIVAL

事務局：225 Santa Monica Boulevard, 8th Floor, Santa Monica, California 90401, U.S.A. TEL：1 310 394 4662 FAX：1 310 394 8553

ディレクター：Mr. Geoffrey Gilmore

今まではアメリカのインディペンデント作品を中心にして、コンペを設けて新人の才能発掘の場、登竜門として評価の高かった映画祭。1月に開催。日本からはむしろアメリカ映画を買いつけるために配給業者の人々が参加することの方が中心だったが、ここ数年日本映画をはじめとするアジア作品も上映される場になってきた。とはいえあくまでも日本映画は中央に置いてもらえてはいないので、アメリカの公開が決まっていてプロモーションとして活用されるとか、参加側にヴィジョンがないと埋もれてしまう。

エルサレム映画祭
JERUSALEM FILM FESTIVAL

事務局：Jerusalem Cinematheque, P.O. BOX 8561, Jerusalem 91083, Israel TEL：972 2 724 131 FAX：972 2 733 076

ディレクター：Ms. Lia Van Leer

150本あまりの上映作品は諸外国からの新作、ドキュメンタリー、アニメーション、短編、ヤングシネマ、そしてユダヤ問題を扱った作品などの部門に分かれている。イスラエル映画のコンペもあって、現在のディレクターでこの映画祭の創設者でもあるリア・ヴァン・レアの大活躍が目に見える映画祭。日本映画の場合にはここをプレミア上映にする重要性はさほどないけれど、外国からのゲストもいるので、チャンスがあれば上映を生かしたいところ。開催は7月。

アムステルダム・国際ドキュメンタリー映画祭
INTERNATIONAL DOCUMENT F.F. AMSTERDAM

事務局：TEL：31 20 638 5388 FAX：31 20 627 3329

ディレクター：Ms. Andriek Van Nieuwenbuyzen

オランダのアムステルダムで12月に開催されるドキュメンタリー専門の映画祭。コンペがあり、オランダの生んだ有名な記録映画作家の名に因んだヨリス・イヴェンス賞が送られる。日本からも「ゆきゆきて、神軍」（原一男）などが上映された。近年ますますロッテルダムが注目されて大きくなってきているので、アムステルダムで上映されてしまうとロッテルダムに出せなくなるから、その調整には見極めが必要。

フィゲイラ・ダ・フォス国際映画祭
FESTIVAL INTERNATIONAL DE CINEMA DA FIGUEIRA DA FOZ

事務局：Apatado 50407, 1709 Lisboa Codex, Portugal TEL：35 1 812 6231 FAX：35 1 812 6228

ディレクター：Mr. Jose Vieira Marques

ポルトガルの中では最も確立された映画祭。長編をはじめ、中編、短編、児童映画なども行われている。9月のヴェネチアのすぐ後に行われている。97年には日本映画の特集上映をして、独立プロ系の作品を中心に「夏時間の大人たち」（中島哲也）「風のかたみ」（高山由紀子）などが紹介された。

ペサロ国際映画祭
MOSTRA INTERNAZIONALE DEL NUOVO CINEMA PESARO FILM FESTIVAL

事務局：Via Villafranca 20, 00185 Roma Italia TEL：39 6 445 6643 FAX：39 6 49 11 63

特に新しい監督、斬新な感覚の映画を集めて活発な上映と討論などが行われる映画祭。6月に開催。今年は「いつものように」（けんもち聡）が上映された。イタリア映画の回顧上映なども行われて、意義深い映画祭としての評判があるが、ディレクターが変わって今後の変化が注目される。

ソチ国際映画祭
INTERNATIONAL FILM FESTIVAL IN SOCHI

Digitized by Google

事務局：13 Vasilievskaya Str., Moscow 123825, Russia TEL：7 095 248 0966 FAX：7 095 255 9275

まだ数回で数えるばかりの新しい映画祭。ロシアではモスクワ国際映画祭が歴史を持ってチェコのカルロヴィ・ヴァリ国際映画祭と競っていたのだが、ソチが台頭してきて動きに変化が見られつつある。ここはヤングシネマのコンペがあり、「[FOCUS]」（井坂聡）「チンピラ」（青山真治）などが上映された。コーディネートしているのは、東京国際映画祭の審査員を務めたこともある、ロシアで有名な評論家アンドレイ・プラコフ。カンヌ直後の6月初頭の開催で、スケジュール的にはハンデがあるが、参加できればロシア貴族の保養地ソチでの日々を関係者たちと共に楽しめる。

ラ・ロシェル映画祭
LA ROCHELLE FILM FESTIVAL

事務局：16 Rue Saint Sabin, 75011 Paris, France TEL：33 1 48 06 16 66 FAX：33 1 48 06 15 40
ディレクター：Mr. Jean-Loup Passek

6月中旬から7月始めにかけて開催される。ここはむしろ新作上映をすることを中心とする映画祭ではなくて、テーマ性を重視した回顧上映や、特集に重点が置かれている。日本のクラシックも改めて再評価される可能性、いや必要性が大いにあるわけだから、それぞれのプロダクションの積極的な協力体制を期待したい。監督の特集上映をする場合には著作権を持っている会社がバラバラなことが多いので、実際大変だ。日本側でコーディネートする窓口がないと、映画祭側にとっても、悪夢のパニックが起こってしまう。対応と経済的な基盤も含めて、その対策は悔れない重要な課題だ。

＊

年間に開かれる映画祭の数は400とも600とも言われているので、ここに紹介したのはほんのひと握りに過ぎない。英語で書かれているインターナショナル・フィルム・ガイドなどの本を見れば、もっと沢山の映画祭の連絡先を調べられるし、インターネットでもホームページを開いている映画祭も増えている。

実際にはまだまだファンタスティック映画を集める映画祭とか、アニメーション専門の映画祭、ミステリー映画を上映するところとか、ヴィデオ作品を集中的に集めたり、無声映画の修復作業を積極的に続けているところとか、沢山の個性溢れる映画祭が開催されている。とにかくきりがないので、日本映画を出すという側面から考えられる各国映画祭紹介については、ここでひとまず区切りをつけておきたいと思う。ご参考になったかどうか、その、それぞれの作品と、海外への展開の作戦に合った映画祭が結びつけられて、参加上映がスムースに行われますよう。

Digitized by Google

関西映画界いまむかし㉙

阿部良行（東宝東和）

浅野潜

社内体制の変更から東宝東和の関西支社が営業所にかわった。初代営業所長になった阿部良行は宣伝部長との兼任で、初めての営業回りに腰の落ちつく暇もない。

関西では有名な文化人一家。父親はNHK大阪での声優第一号だった泉田行夫さん。大阪芸大の教授を退任後、体をこわして亡くなられるまでその名優ぶりには多くのファンがいた。

長男の阿部良行は東和に入社してからは宣伝部一筋、古川、山本正、西垣といったタイプの違う上司によくつかえ、いまでは中止になったが、年一回の名物パーティー「東和えびす」では常に司会で会を盛りあげていた。

大学時代からグリー・クラブで鍛えたノドは父親譲りの素晴らしいもので、関西の映画界では邦画の井戸幸一（日活）と並び称せられる名歌手ぶりだった。井戸の引退した現在も健在で、休日には地域のコーラス・グループのリーダーもつとめたから、ノドの手入れにおこたりない。

奥さんの和子さんはラジオ大阪で番組を持っているDJ。お嬢さんは宝塚を目指して勉強中というあたりは、住んでいるのが帝塚山とあって関西での理想的な家庭環境。勤務先も名門の東和以外には考えられない存在だし、宣伝部での催しやパーティーでの才能は光り輝いてきた。

だが、インディペンデントはなかなか難しい時代でもある。洋画界一の名門だった東宝東和も支社を縮小せざるを得なくなったのは、「東和商事」の時代を知っている私たちにとっては想像も出来なかったし、阿部自身にとっても経験したことのない時間が与えられたようだ。

もっとも育ちの良さからか、苦労を気にしないし、外にあらわさない明るさがこの人の持ち味、東宝との折衝や、気の張る興行主との交渉などがそんなに阿部にとって重荷になることはないだろう。声量の豊かさと、全身にただよう明るさ、他人に対するやさしさなどがあれば新しい仕事に対する不安はまずない。

そういえば最近覚えたゴルフがいかにもこの人らしい。良く飛ぶのだが、どこに行くかが判らない腕力型プレイヤー。右や左に曲げても笑いながら走り回ってボールを追い、ちっとも苦にせず楽しそうにプレイするため、みんなから好かれてプレイ相手に不足はしない。普通だと変に考えこんで悩み、暗くなるスライス癖も阿部にとっては「曲がるのは仕方がない」といった調子ですぐに忘れ去っていくのが良い。

可愛がられてのんびり育った良さが、阿部にとっては常にプラスしており、これからの困難な仕事もなんなく克服しそうだ。

ロンドン便り㊵

石井美由季

夏の終わりから秋にかけて、毎年イギリス国産映画がまとまって公開される。今年はグラム・ロック劇「ベルベット・ゴールドマイン」、画家フランシス・ベーコンを描く「ラブ・イズ・ア・デビル」、イギリスお得意のコスチューム物（H・B・カーターは出ない）「エリザベス」といった、イギリス映画にしては大きめの規模の、話題性のある作品が待機している。

その先陣を切って封切られ、チャートのトップに躍り出たのが、「ロック・ストック・アンド・トゥー・スモーキング・バンルス」という、長いタイトルの作品である。

もう聞きあきた、〝今年最高のイギリス映画〟の謡文句。「レザボア・ドッグス」を比較の対象にするのも、もういい加減やめて欲しい。

だが、〝ムービー〟という単語の選択が気になる。イギリス英語で映画は〝フィルム〟であり、〝ムービー〟はアメリカ英語である。ここでその〝ムービー〟を使っているのは、どうやらこれをイギリス映画らしからぬ、娯楽作としてアピールすることを狙っているらしい。

マフィアの下っ端が賭け事に負け、ボスに50万ポンドの借金を作る。返済期日が間近のこの大金を、どうやって工面するかがプロットだ。この下っ端ギャングに、色々な事情を持つアンダーグラウンドなキャラクター（すべて男）が複雑に絡み、それでも全体を通してまとまりのある内容になっている。ギャング物にしては、ユーモラスだし退屈しない。カメラのアングルやスローモーションが、ちょっとカッコつけてるようで鼻につく所もあるが、ま、これはイギリス映画特有の、淀川先生曰く「お遊び」センスなのだ。

そこそこ名の知られた俳優は、「カーテン・コール」のジェイソン・フレミングだけ。だが、彼以上に有名な異業種俳優が二人出演している。一人はスティング。もう一人はエリック・カントナに続けとばかりに、今作で映画デビューしたサッカースター、ビニー・ジョーンズだ。英国サッカー選手にありがちな〝サッカー・ウェアを着ていなければただのチンピラ〟的ルックス。「レフリーの見ていない隙に、どうやって相手選手に暴力を加えるか」という、ハウ・ツーを説いたことでも知られる彼は、マフィアの借金取りというバイオレンスな役柄に、ピッタリはまっている。

今回でこの連載は終了です。編集部の御好意と、ちゃちな文章に辛抱して下さった読者の方に感謝します。

［訂正とお詫び］10月下旬号の「関西映画界いまむかし」において取り上げられた、大阪新聞の笹井弘順さんのお名前が間違っておりました。訂正してお詫び致します。

Digitized by Google

プレ特集

Xファイル™ ザ・ムービー

プロダクション・ノート＆スタッフ・キャスト　インタビュー
小林雅明

INTRODUCTION

徹底的な秘密主義に貫かれた製作

93年9月にアメリカFOX—TVに登場、毎週金曜日の夜9時に放映され、26・7％という高視聴率を上げ、一大ブームを巻き起こした「X—ファイル」。その後、好評につき放映時間が日曜日のゴールデンタイムに昇格されたこの人気テレビシリーズは、イギリスBBC2でも放映され、最高視聴率を記録、日本でも本国と2年2ヶ月遅れで放映が開まり、97年12月のサード・シーズンまで平均して人気を持続している。

今年の6月19日に全米で封切られた「X—ファイル　ザ・ムービー」は、第5シーズンと現在全米で放映中の第6シーズンのシリーズの橋渡し役となっている。主役は、もちろんダナ・スカリー役にギリアン・アンダーソン、フォックス・モルダー役にデイヴィッド・ドゥカブニー。これまで5年間にわたり、排水溝に棲む突然変異体、2メートルの怪物、チェーンスモーカーの二重スパイ等と戦ってきた2人が、今回は活動の場をブラウン管からスクリーンへ移し変え、迫りくるエイリアンに立ち向かうことになる。

「5年も同じ役を演っていると、それがどんなにいい役でも、飽きてくるよ」

ドゥカブニーは語る。相手役のアンダーソンも24歳の時から、スカリー役を演じている。彼女はこの5年の間に（「X—ファイル」のアート・ディレクターだった）クライド・クロッツとの結婚、今年3歳になった長女パイパー・マルーの出産、そして、離婚と様々な人生経験を続けてきた。

「わたしたちは、毎日のように連続殺人犯や狂人を扱ってきたから、頭の中からそれを振り払うのが難しくなっているの。3年前の妊娠中はとても辛かったわ。女性のホルモンに変化がある時期で、外部からの情報に敏感になっていたから」

と振り返る。それでも、2人はシリーズの生みの親であり、製作・脚本を務めたクリス・カーターへの忠誠心から、今回の映画への出演を決めたという。

「クリスへの、そして番組への、さらには映画会社への忠誠からよ。わたしたちは2人とも、クリスに大きな借りがあるような気がしてるの。でも、もう借りは返したわね。今はお互いに同じ立場にいるわ」

映画版への出演を果たしたアンダーソンは語る。ちなみにテレビ版一話につき、彼女には10万ドル、ドゥカブニーには11万ドル、そして今回の映画版では、2人とも450万ドルのギャラが支払われている。

そして、製作に際しては、徹底的な秘密主義が貫かれた。撮影開始以前に、スクリプトを読んだ者はわずか20人あまり。しかも、コピーされることを防ぐため、スクリプトは赤い紙に印字されてあり、それを読んだ者にはその内容を決して口外してはならないという契約まで結ばせたのである。それだけではない。偽の脚本の一部をインターネットに流し、ファンを惑わしながら喜ばせるという、秘密主義を逆手に取った話題作りまで行なったのである。

カーターと共同脚本家のフランク・スポットニックは、96年クリスマスにハワイでストーリーの最終的な結末について語り合った。スポットニクは「最初の二、三日は、テレビ版についてのカーターのアイデアを聴いた。それで全体の流れがやっとわかった」という。このあたりのストーリーの謎については、

Digitized by Google

カーター自身が、映画のサウンドトラック盤で、10分以上にわたって話しているので、聴いてみるのも一興だろう。

SHOOTING

ストーリーのスケールアップと台詞の自由さ

通常、この規模の映画のプリプロダクションには20日から24日が確保されるが、この作品の場合、それが半分の10日間しかなかった。というのも、フォックス側からなかなか製作の最終決定が出なかったのである。97年後半の段階では、全米で公開済みの「スピード2」と「ボルケーノ」が1億2千万ドルの赤字を出していて、「タイタニック」の製作費も既に予算を遙かに上回っていた。あまりに悪条件が重なっていたのである。

「最終期限の10分前まで、果たして映画を作れるかどうかわからなかった」とカーターは語っている。

それでも、6千万ドルという製作費と、テレビ・シリーズの予算には雲泥の差がある。

「ストーリーのスケールを大きくすることができた。製作費の額が大きくなったから、大きなこともできるし、ロケ地にも趣向を凝らせる。出来上がるまでに膨大な時間のかかる、大仕掛けのSFXもやれる」

さらに、アンダーソンにとっても予算増は好ましい結果となった。

「シリーズの初期は、わたしも冴えないFBI捜査官ルックだったわ。でも、すぐにそんなのにうんざりして、それからはもっと衣装に気を使うようになったの。映画では予算が増えたから、イタリアの素材や布地を使えるようになったわ」

こうして撮影地も、カナダのバンクーバーからカリフォルニアへと変わり（愛妻家であるドゥカブニーが、妻で女優のテア・レオーニ（「ディープ・インパクト」）と暮らしているマリブ・ビーチの自宅に近いほうがいいと主張したからとも言われている）、映画にでてくる舞台も、チュニジア、南極とスケール・アップが可能になった。だが、これ以外にも映画化に際して可能になったことがある。

「"Fuck" とか "Shit" とか言えるんだ。それ以外は、実際には、何も変わっていない。以前、モルダーは "Fuck（クソお）" と思っても、口を "Fuck" ともごもごさせて、態度で "Fuck" と示すだけだった。そうやって拘束されていた登場人物が、人間的な行動をとっているのを見ると、うきうきとした解放的な気分になるよ」

とドゥカブニーは茶化してみせる。

「わたしも "Fuck" というようになってしまったわね。でなければ "Fucking" かしら。わたしも "I don't fucking believe this" なんて言ってるのよ。そんなところかしら」

ALIEN

カーターの陰謀とモルダー、スカリーの関係

ここで、スケール・アップした「X―ファイル ザ・ムービー」のストーリーのバックグラウンドに触れておこう。地球には百万年前から宇宙からきたエイリアンが隠れていた。彼らは人間をゾンビ化させるウイルス「ブラックオイル」を持った殺人蜂を大量発生させ、地球を植民地化しようという極秘計画を抱えていた。一方、シンジケートという一国の政府にも似た影の組織が長年エイリアンに協力し、テキサスの連邦ビルを爆破したり、チュニジアでトウモロ

Digitized by Google

コシを栽培したりしていた……熱狂的なX―ファイル・フリークにとってもこの中には今まで聞いたことのないような情報が含まれているに違いない。映画版では、これまでスカリーとモルダーが追い続けてきた〝謎〟が解明され、そういったフリークを確実に喜ばせる面も持ち合わせている。

その一方で『X―ファイル』を一度も見たことのない人も、この映画を見てもわからないことは何一つない。映画としてオリジナルの面白さに溢れている。特別の知識も要らない。多少ファンのための内輪のジョークはあるけど」とドゥカブニーは語る。テレビ版で支持基盤を固め、映画版でも確実に成功を収めている前例としては「スター・トレック」がある。ひとつの役でしか認知されていないウィリアム・シャトナーと同じ道を歩まないように、彼はどんなことを心がけているのだろう。「僕はひとつの役しか演らないわけではない。いつかきっと才能が発揮されると長年ずっと信じてきただけなんだ。それでうまくいけば、才能があるということだし、そうじゃなかったら、才能がないんだよ」

そんな彼はエイリアン物の映画では、「エイリアン」と「エイリアン2」、それに「E・T」は好きだが「インデペンデンス・デイ」は好きではないそうだ。「もともと、その手のジャンルのものには興味がないから」と理由を述べているが、本編を見れば、彼が「インデペンデンス・デイ」がどれだけ嫌いなのかよくわかるだろう。

『X―ファイル』で24のエピソードを監督し、その手腕を認められ、今回映画版でメガホンを取ることになったロブ・ボーマンによれば、「X―ファイルザ・ムービー」に登場するエイリアンは、「民間伝承、写真、目撃談、記述」に基づいたものだという。別の言い方をすれば、自分はエイリアンに拉致されたと主張する人たちが「まさにそれが自分が見たものだ、確かにこの目で見たものだ」と言ってくれるようなものになるということだ。ところが出来上がった映画では、そのエイリアンもはっきりと映しだされていないという。これも、カーターの陰謀なのか。

もちろん、彼は他にも様々な秘密を握っている。そして、モルダーとスカリーの関係を理想的なものとして捉えている。

「ベースになっているのは、お互い尊敬しあい、情熱を分かちあうこと。ただし、肉体的にではなく。男女関係というのはあれくらい素晴らしくないとね」

だが、ドゥカブニーに言わせれば、どうもそれは違うようだ。

『モルダーとスカリーはみんなのお手本だ』と言ってる人たちがいるけど、僕に言わせればいい加減にしてくれよ、モルダーは抑圧された仕事人間だし、スカリーは冷ややかで、笑顔を見せたりしない、怒りっぽい仕事人間なんだぜ。『クレイマー、クレイマー』のほうが、お手本としては、僕らなんかよりずっとましさ。このお手本云々の話はとんだお笑いだよ」

MYSTERY

カットされたシーンと解き明かされなかった謎

それでは、この二人を演じているドゥカブニーとアンダーソンの現場での関係はどうなのだろう。

「僕らは常に一緒に話したり、ゴシップを話したりする必要はないんだ。ずいぶん一緒に仕事をしているけど、僕らが望んだわけではない。僕らの間には友情というよりも、信頼関係があ

Digitized by Google

る。そういった相互作用を、仕事のためにとっておいている。カメラの前に立つときに備えて。もうそれがほとんど習慣になっているんだ」

とドゥカブニー。アンダーソンは、さらに割り切っている。

「わたしたちは近しい存在ではないわ。時々ふと気がつくと、打ち解けた感じで会話をしていることがあるけど、週末ごとに互いの家を行き来するようなことはないわ」

とはいうものの、スクリーン上でのモルダーとスカリーの関係に進展がみられるのかやきもきしているファンも多いはずである。例えば、二人は口づけを交わすに至るのだろうか？

「そうなると思うよ。いつまでも観客をじらしていると、欲求不満にさせてしまうから」

ドゥカブニーはこうほのめかすが、アンダーソンからはまったく逆の答えが返ってきた。

「それは不適当だわ。このシリーズは、わたしたちの関係を描いたものではありません。もし、そうなるとしても、最終回まで待たねばならないでしょうね」

目下、「X―ファイル」は現在全米で放映中の第6シーズンそして、第7シーズンまでが予定されている。

「モルダー（が12歳のとき、エイリアンとおぼしき何者かに拉致された4歳年下）の妹、彼女が拉致された意味について描いた場面があったが、それはカットした。情報量が多くなりすぎてしまったから。一本の映画にすべてを盛り込むのは無理だよ」カーターは説明する。そういえば、モルダーのお尻が眺められるシーンもカットされてしまった。

「確かに撮った。病院でガウンを着て。でも、僕のお尻を高さが15メートルもあるスクリーンで見たら、X―ファイルのファンだって怖がるよ」

とドゥカブニー。スポットニッツによれば、TV版に出てきた巨大な目をしたエイリアンと、映画版に出てくるエイリアンには関係があるということだが、

「そのことについてはまだ何も言えない」そうだ。しかも、

「番組がいつ終了するのか、そのときまでドゥカブニーがいるかどうか、自分にもわからない」と言っている。確かにドゥカブリーの契約は現時点では6シーズン目で切れるが、実はカーターでさえ来年の契約にまだサインしていないのだ。言うまでもなく、「X―ファイル」では〝未知なるもの〟が魅力を放っている。ドラマでは、不可解な事件が示されはするものの、最終的にそれを解決するというわけではない。カーターは、この5年をかけて〝真実〟以外のすべてを見せてきた。与えるものを少なくすれば、多くを欲しがる、という基本的な心理作用を理解している。スタッフ、キャスト、ますます誰も信じられなくなった今、果たして真実はどこにあるのか？

Digitized by Google

COMING SOON Special

●1998年・アメリカ・カラー・シネマスコープ・ドルビーSRD・SDDS・DTS・2時間1分
●監督／ロブ・ボーマン　製作総指揮／ラタ・ライアン　製作／クリス・カーター、ダニエル・サックハイム　共同製作／フランク・スポットニッツ　ストーリー／クリス・カーター、フランク・スポットニッツ　脚本／クリス・カーター　撮影／ワード・ラッセル　プロダクション・デザイナー／クリストファー・ノワック　編集／スティーブン・マーク　音楽／マーク・スノー　衣裳デザイナー／マーリーン・スチュワート　特殊メイクアップ効果／アレック・ギリス、トム・ウッドラフ・ジュニア　視覚効果スーパーバイザー／マット・ベック
●出演／デイヴィッド・ドゥカブニー、ジリアン・アンダーソン、ジョン・ネビル、ウィリアム・B・デイビス、マーチン・ランドー、ミッチ・ピレッジ、ジェフリー・デマン、ブライス・ダナー、テリー・オクィン、アーミン・ミュラー＝スタール、ルーカス・ブラック、ディーン・ハグランド、ブルース・ハーウッド、トム・ブレイドウッド、グレン・ヘドリー
●製作／テン・サーティーン・プロ　提供／20世紀フォックス
●配給／20世紀フォックス
●12月上旬より日比谷映画他全国東宝洋画系にてロードショー公開
●本誌関連記事／7月下旬号スペシャル・セレクション、9月下旬号「『ER』と外国テレビ映画研究」特集

TM and ® Twentieth Century Fox Film Corporation. All Rights Reserved.

INTRODUCTION

全米サマーシーズン・ムービーとして話題を呼んだ「X-ファイル」の正月公開がいよいよ間近となってきた。シリーズ生みの親クリス・カーターが製作・脚本、シリーズ第25話を監督したロブ・ボーマンが演出する本作は、TVシリーズのファンはもちろん、新しい観客も劇場に集められるよう、スクリーンサイズにふさわしいよりスケールアップした内容となっている。お馴染みモルダーとスカリーを演じるD・ドゥカブニーとG・アンダーソンや、FBI副長官のミッチ・ピレッジ、スモーキング・マンのウィリアム・B・デイヴィスに加え、マーチン・ランドーや「シャイン」のアーミン・ミュラー＝スタールら名優が重要な役を演じているのに注目したい。

Digitized by Google

STORY

テキサス州北部の小さな町。そこで謎の黒い液体が沸き出す洞窟のような穴が見つかり、少年や救急隊員などが次々と襲われるが、正体不明の男スモーキング・マンとその一団が現れ、その穴の回りを取り巻き一般市民をシャットアウトしてしまった。

その頃、ダラスの連邦ビルのテロリストによる爆弾騒ぎに捜査にあたっていたFBI捜査官のモルダーとスカリーは、爆弾処理班の不可解な行動で爆発事故を見逃してしまうが、そこでテキサスの少年と救急隊員の死体が発見される。

事件の背後に陰謀を匂いを嗅ぎとったモルダーたちは、何者かに命を狙われながら、その謎を追ってテキサス、そして南極大陸にまで向かっていく。

Digitized by Google

COMING SOON Special

私の愛情の対象

© 1998 TWENTIETH CENTURY FOX

INTRODUCTION

日本でも放映されたNBCの人気TVドラマシリーズ「フレンズ」（現在第4シリーズがWOWOWにて放映中）のレギュラー・キャストの一人で、映画では「彼女は最高」で注目され、私生活ではブラッド・ピットとの仲が噂される（？）ジェニファー・アニストンが、「クルーレス」のポール・ラッドと共演した、ヒロインとゲイのルームメイトとの、愛と友情の微妙な境界線を描いたロマンチック・コメディ。監督は「英国万歳！」「クルーシブル」のニコラス・ハイトナーだから期待できる。

他に「英国万歳！」でアカデミー主演男優賞にノミネートされたナイジェル・ホーソーン、ウディ・アレン作品でもお馴染みアラン・アルダなど芸達者が出演。

●1998年・アメリカ・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビーSRD・1時間52分
●監督／ニコラス・ハイトナー　製作／ローレンス・マーク　共同製作／ダイアナ・ボコーニー　原作／スティーブン・マコーリー　脚本／ウェンディ・ワッサースティン　撮影／オリバー・ステイプルトン　プロダクション・デザイナー／ジェーン・マスキー　編集／タリック・アンワール　音楽／ジョージ・フェントン　音楽スーパーバイザー／アレックス・ステイヤーマーク　衣装デザイナー／ジョン・ダン
●出演／ジェニファー・アニストン、ポール・ラッド、アラン・アルダ、ナイジェル・ホーソーン、ジョン・パンコウ、ティム・デイリー、アリソン・ジャニー、アモ・グリネロ
●製作／ローレンス・マーク・プロ　提供／20世紀フォックス
●配給／20世紀フォックス
●12月中旬より、スバル座ほか全国東宝洋画系にてロードショー公開

Digitized by Google

ニーナ（ジェニファー・アニストン）とジョージ（ポール・ラッド）の恋（？）の行方は……？

STORY

あるディナー・パーティーで小学校の教師でゲイのジョージ（ラッド）を紹介された、精神カウンセラーのニーナ（アニストン）。彼女は同棲していた恋人ロバートにふられて行くあてのないジョージをアパートのルームメイトとして迎え入れる。ニーナにはヴィンスという恋人がいたが、何かと押しつけがましくしっくりいかない。彼女の自由を尊重してくれるジョージは最高の男性であり、日を重ねるごとに2人は深い友情で結ばれていった。そしてニーナはヴィンスとの間に出来た赤ちゃんを、ジョージと共に育てていく決心をする。だがジョージのもとに別れたロバートから連絡が入り、微妙なバランスを保っていた2人の関係は徐々に混乱していく。

Digitized by Google

COMING SOON

新作紹介

トゥルーマン・ショー
THE TRUMAN SHOW

STORY
人生がはじめからメディアによって仕組まれていたら……という奇抜なアイディアをもとに、ひとりの男の数奇な運命を描く。オーバー・アクションを抑えた演技派ジム・キャリーに注目。夢のように平和な小島シーヘブンで、トゥルーマンは保険の外交員をしている。妻との幸福な生活に満ちたりているものの、彼には海を越えてフィジーへ行く夢があった。そんなある朝、昔死んだはずの父とそっくりな人物を偶然見かける。それからというもの、自分の身が何者かに狙われているような気がしてならず……。

DATA ●監督／ピーター・ウィアー　製作／スコット・ルーディン、エドワード・S・フェルドマンほか　脚本・製作／アンドリュー・ニコル　撮影／ピーター・ビジウ　出演／ジム・キャリー、エド・ハリス、ローラ・リニー　配給／UIP
●11月より丸の内ピカデリー1ほか全国松竹・東急系にて（98年・米・103分）

ジム・キャリー　62年カナダ生まれ。15歳でトロントのクラブに出演し、81年にはLAへ。90年TVのコメディ番組で人気者となり94年「エース・ベンチュラ」「マスク」で映画界を席巻。本作で新境地を開き、次作は自らオーディションを受けた「MAN IN THE MOON」。

Digitized by Google

STORY

日本・中国・フランス・アメリカの4ヶ国が結束し、8年の月日と60億円の製作費をかけて完成させた歴史ロマン超大作。紀元前3世紀、戦国時代。先祖代々の宿願、中国統一に命を燃やし、他国との壮絶な戦いをくりかえす秦の始皇帝・政。政のおさななじみであり、愛情を通わせてきた趙姫は、天下統一への夢を実現させようと一計を謀る。それは、政を憎む敵国の丹に彼の暗殺を仕向けさせ、計画を失敗に終わらせることで無条件の降伏をのまそうというものだった。こうして丹に近づく趙姫だが、哀愁に満ちた不思議な男と出会い心を奪われてしまう。かつて名の知られる暗殺者だったその男・荊軻は、やがて趙姫の愛を得るために始皇帝暗殺へ踏みきり……。

葉俐（コン・リー）　65年中国の瀋陽生まれ。88年「紅いコーリャン」で衝撃的なデビュー。「菊豆」(90)「紅夢」(91)「秋菊の物語」(92)など張芸謀作品で国際的なスターに。陳凱歌作品には「さらば、わが愛／覇王別姫」(93)「花の影」(96)につづき、三度目の出演。

始皇帝暗殺

荊軻刺秦王

DATA　●監督・製作・脚本／陳凱歌(チェン・カイコー)　製作／高秀蘭(シャーリー・カオ)、井関惺　撮影／趙非(チャオ・フェイ)　出演／葉俐(コン・リー)、張豊毅(チャン・フォンイー)、李雪健(リー・シュエチエン)　配給／日本ヘラルド　●11月14日より丸の内ルーブルほか全国松竹・東急系にて(98年・日＝中＝仏＝米・168分)

STORY

ウディ・アレン、シャロン・ストーンほか豪華俳優陣が声の出演に参加し、ドリーム・ワークスが放つユニークなアニメーション。個性や個人的な表現法を奨励する専門職は多いが、アリでいることはその範疇に入らない。平凡なアリ、Z－1948にとって、この真実ほど気をめいらせるものはなかった。セントラル・パークに生きる彼には、集合生活を尊重するアリの宿命は耐えられず、つねに一個人になりたいと願わずにはいられないのだった。アリのカースト制度にめげず、美しい王女ベイラに目をつけはじめたZ。普通の雄アリに彼女が傾くことなどありえなかったが、ひょんなことでZは革命のヒーローにまつりあげられてしまう。

アンツ

ANTZ

DATA　●監督／エリック・ダーネル、ティム・ションソン　製作／ブラッド・ルイスほか　脚本／ポール＆クリス・ウエイツ　声の出演／ウディ・アレン、シャロン・ストーン、ジーン・ハックマン、シルベスタ・スタローン　配給／ＵＩＰ　●11月中旬よりニュー東宝シネマ1にて(98年・米・83分)

Digitized by Google

ジャングル・ジョージ
GEORGE OF THE JUNGLE

STORY
70年代にアメリカのコミック・ヒーローとして大人気を誇った『ジャングル・ジョージ』が、ウォルト・ディズニーによる特殊視覚効果で甦った。アフリカのジャングル奥地でたくましい野生児として育ったジョージは、ある時ライオンに襲われた都会っ娘アースラを救う。瞬く間に恋に落ちる二人だが、アースラを付け狙う一味によってジョージは撃たれてしまうのだった。治療を受けるために訪れた大都会サンフランシスコで大騒動を巻き起こす野生児は……。同時上映には、あのパロディの王様、レスリー・ニールセンが主演する爆笑宝石強奪コメディ「Mr. マグー」。

「Mr. マグー」

© DISNEY ENTERPRISES, INC

DATA ●監督／サム・ワイスマン　製作／デイヴィッド・ホーバーマンほか　撮影／トーマス・アッカーマン　出演／ブレンダン・フレイザー、レスリー・マン、トーマス・ヘイデン・チャーチ　配給／ブエナ ビスタ　●11月上旬より東劇、渋谷シネパレスほか全国松竹洋画系にて（97年・米・91分）

Gummo／ガンモ
GUMMO

STORY
19歳にして「KIDS」の脚本を書きあげたハーモニー・コリンの第一回監督作品。ガス・ヴァン・サントに天才といわしめた才気溢れる若手新人監督は、素人俳優を使い、物語の起承転結を崩しコラージュを多用することで全く新しいドラマを作りあげた。オハイオ州ジーニア。そこは20年前に竜巻に襲われ、経済的にも、精神的にも立ちなおれずにいる薄汚れた小さな町。貧相に痩せた少年ソロモンは、友人タムラーと、退屈な日々をうめるためだけに町を徘徊している。自転車を乗りまわし、野良ネコを殺してはレストランに売りさばき、その金でシンナーを買いに走る。ジーニアの他の住民たちの日常も、また同じように鈍く動いているのだった。

DATA ●監督・脚本／ハーモニー・コリン　製作／ケイリー・ウッズ　撮影／ジャン・イヴ・エスコフィエ　出演／ジャコブ・レイノルズ、ニック・サットン、ジャコブ・セーウェル、クロエ・セヴィニー　配給／ケイブル・ホーク　●10月24日よりシネマライズ、11月下旬より大阪パラダイスシネマほかにて（97年・米・89分）

Digitized by Google

STORY

女の子になりたい男の子の夢をファンタジックに描いた、ベルギー出身アラン・ベルリネールの監督デビュー作。オーデションで選ばれた子役、ジョルジュ・デュ・フレネのキュートな演技は必見だ。7歳の少年リュドヴィックの将来の夢は女の子になること。お人形と遊んだり、ドレスを着てみたり、好きな男の子と結婚式ごっこをしたり、リュドは女の子への憧れを隠せない。とうとう学校から呼び出しを受けた両親は、心配のあまり、リュドの長い髪を切り落としてしまう。まもなく父の仕事上、引っ越すことになる家族。新たな土地で知り合ったのは、男の子みたいなおてんば娘クリスティーナだった。リュドを気に入った彼女は……。

ぼくのバラ色の人生

MA VIE EN ROSE

DATA ●監督・脚本／アラン・ベルリネール　製作／キャロル・スコッタ　脚本／クリス・ヴァンデル・スタッペン　撮影／イヴ・カーブ　出演／ジョルジュ・デュ・フレネ、ジャン=フィリップ・エコフェ、ミシェール・ラロック　配給／ギャガ・コミュニケーションズ　●11月7日よりBunkamura・ル・シネマにて（97年・ベルギー=仏=英・88分）

STORY

英国で語り継がれる古典『アーサー王伝説』をベースに、ひとりの少女の冒険活劇がファンタジックなアニメーションとなって登場。ゲイリー・オールドマン、ピアース・ブロスナンらが声の出演をしているのも注意したい。騎士になることを夢見て育った少女・ケイリー。女が騎士になれるはずのない時代だったが、ついに武器を手にする日がやって来る。それは、アーサー王以来の伝説の剣が敵に盗まれ、父を殺され、母を誘拐された悲劇の中での出来事であった。失われた剣を奪いかえすため、故郷キャメロットに再び平和を取り戻すため、そして愛する母を救うため、ケイリーは盲目の騎士・ギャレットと共に戦いの旅に出る……。

キャメロット

QUEST FOR CAMELOT

DATA ●監督／フレデリック・デュショー　製作／タリサ・クーパー・コーエン　脚本／カーク・デミッコ、ウィリアム・シフリンほか　声の出演／ジェサリン・ギルシング、アンドレア・コー、ケアリー・エルウィズ　配給／ワーナー・ブラザース　●11月より恵比寿ガーデンシネマにて（98年・米・86分）

© 1998 Warner Bros. All Rights Reserved

Digitized by Google

ジェラール・フィリップ映画祭Ⅱ

1922年にこの世に生を受け、59年にわずか36歳の若さで没するまで銀幕に燦然と輝き続けた、フランスの不世出にして正統派美男スター、ジェラール・フィリップ。その類いまれな美貌に加え、知性と品性を兼ね備えた彼は、文芸大作華やかなりし40年～50年代フランスで歴史に名だたる数多くの名作を残している。

96年に始まり、今年第2回を迎える今回の『ジェラール・フィリップ映画祭』では、40年以上も劇場では公開されていない「すべての道はローマへ」(48)「しのび逢い」(53)「パルムの僧院《完全版》」(47)や、劇場初公開にして、スクリーンで目の当たりにするのはこれが最後というテレビ映画「白痴」(46)が登場。さらにジェラール・フィリップが最初で最後の監督を手掛けた「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」(56／テレビ映画)が2日間(11月25日テアトル新宿／12月4日キネカ大森にて)に限って上映される。全13作品すべてから、ジェラール・フィリップの、これまで知ることのなかった新たな魅力が再発見できるだろう。

「愛人ジュリエット」

●主な上映作品

「白痴」(46年／98分)
監督／ジョルジュ・ランバン　共演／エドウィージュ・フイエール、リュシアン・コエデル
※文豪ドストイエフスキー原作にして、故・黒澤監督による映画化も有名な文芸作品。不幸な境遇にあるナスターシャに心魅かれるムイシュキン公爵。だが、誠実で理想家の彼は彼女の境遇をさらに複雑なものにしてしまう。

「パルムの僧院」(47年／167分)
監督／クリスチャン・ジャック　台詞／ピエール・ヴェリ　共演／マリア・カザレス、ルイ・サルー
※オール・イタリアロケによるスタンダール原作の英雄譚。故郷に帰ってきたファブリスは二人の女性の心を奪うが、それが元で幽閉の憂き目にあう。やがて脱獄した彼は悲恋人と束の間の愛を交わすが……。51年公開時より25分長い完全版で登場。

「すべての道はローマへ」(48年／97分)監督／ジャン・ボワイエ　共演／ミシュリーヌ・プレール、マルセル・アルノル、ルヴィニ
※ステレオ・タイプな美男子役を嫌ったジェラール・フィリップが、軽妙なコメディアンぶりを発揮するおっかけ喜劇。映画女優ローラが何者かに命を狙われていると勘違いしたペガスは、彼女を伴ってローマへの珍道中に出る。数々の困難の果てに彼らには愛が芽生えかける。

「すべての道はローマへ」

「愛人ジュリエット」(50年／98分)
監督／マルセル・カルネ　原作／ジョルジュ・ヌヴー　共演／シュザンヌ・クルーティエ、イヴ・ロベール
※「天井桟敷の人々」のマルセル・カルネ監督による、幻想的なラブ・ストーリー。愛するジュリエットのため、勤め先の売上金を盗んで刑務所行きとなるミシェル。彼はそこで、恋人ジュリエットが暴君青髭の城に囚れの身となっている夢を見る。

「しのび逢い」(53年／100分)
監督／ルネ・クレマン　台詞／レイモン・クノー　共演／ヴァレリー・ホブソン、ナターシャ・パリー
※「禁じられた遊び」の巨匠ルネ・クレマン監督による、シニカルなラブ・コメディ。度重なる浮気で離婚寸前にもかかわらず愛も変わらず女たらしを続けるアンドレ。妻の親友相手にこれまでの女性遍歴を披露する彼だが……。

「夜の騎士道」(55年／107分)
監督／ルネ・クレール　共演／ミシェル・モルガン、ジャン・ドザイ、イヴ・ロベール
※「悪魔の美しさ」「夜ごとの美女」に続きルネ・クレール監督と組んだ美男美女の愛の物語。とある田舎町に駐屯した騎兵将校アルマン。あるとき彼は、見ず知らずの女性を一月以内にものにできるかどうか、仲間内で賭けをする。

11月7日より12月18日までテアトル新宿(03－3352－1846)／11月14日より12月25日までキネカ大森(03－3762－6000)にて。詳しいスケジュールは劇場まで。

「しのび逢い」

Digitized by Google

ニキ・ド・サンファル —美しい獣(ひと)—

NIKI DE SAINT PHALLE—WER IST DAS MONSTER—DU ODER ICH?

STORY

女性アーティストのパイオニアとして知られるニキ・ド・サンファルの人生を追ったドキュメンタリー。フランスに生まれ、33年アメリカへ移り住んだニキ。10代には雑誌のモデルとして活躍し、20歳で結婚し娘をもうけた後、精神的挫折をうけ絵を描きはじめる。60年代初頭、鉄砲でキャンバスに絵の具を打ちつける“射撃絵画”で一躍注目をあびる。60年代半ば、ニキの関心は女性性の回復にうつり、素材とファンタジーの戯れる個性的な作品をつぎつぎと発表。70年代以降も精力的な活動をつづけ、映画製作も手掛けた。彫刻家ジャン・ティンゲリーとの稀有な関係を描きこんだ本作は、ひとりの女性が創作行為をとおし癒され成長する過程を記録している。

DATA ●監督・脚本／ペーター・シャモーニ　編集／トーマス・クラッテンマッハー　撮影／マイク・バートレット、ロジャー・ヒンリックスほか　出演／ニキ・ド・サンファル、ジャン・ティンゲリー　配給／パンドラ　●11月14日よりＢＯＸ東中野にて（95年・独・93分）

ターニング・ラブ

BREAKING UP

STORY

「L.A.コンフィデンシャル」で注目を集めるラッセル・クロウが、恋人との結婚に逡巡する男をせつなく演じたラブ・ストーリー。恋人役モニカには、「デスペラード」「フロム・ダスク・ティル・ドーン」のメキシコ系セクシー女優、サルマ・ハエックがあたる。幸福な出会いをしたスティーヴとモニカのカップルも、恋人歴２年半ともなると、どこか微妙な空気が漂いだしている。不安症のスティーヴは、セックスが瑣末な不安を解消すると広言する開放的なモニカを愛しくおもいながらも、ある時ささいな口論からついには別れ話へと発展してしまうのだった。寂しさに耐え兼ねた彼は、受話器を手に取ると……。

DATA ●監督・製作／ロバート・グリーンウォルド　製作／ジョージ・モフリー　製作総指揮／アーノン・ミルチャン、デイヴィット・マタロン　脚本／マイケル・クリストファー　撮影／マウロ・フィオーレ　出演／ラッセル・クロウ、サルマ・ハエック　配給／ワーナー・ブラザース　●11月上旬より松竹セントラル2にて（97年・米・89分）

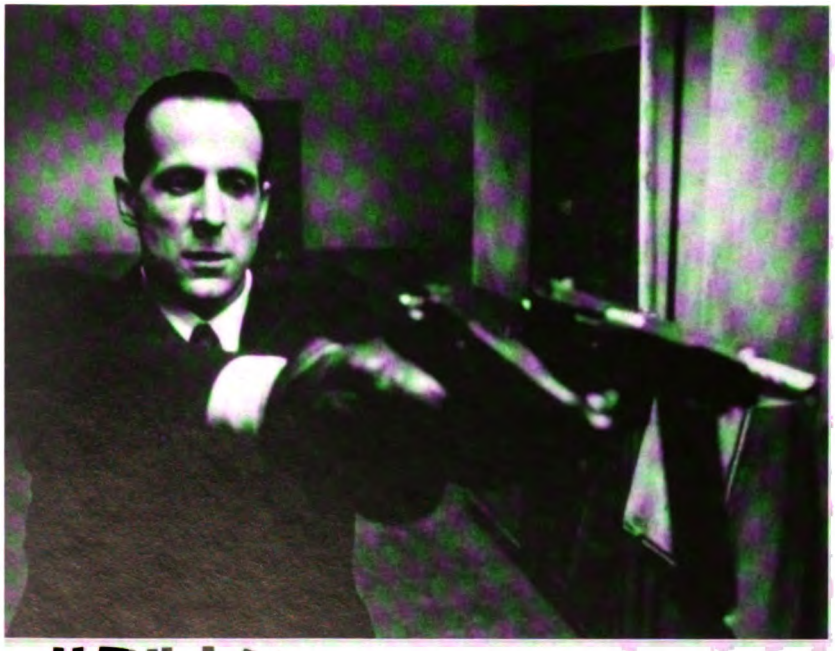
© 1998 Warner Bros. All Rights Reserved

Digitized by Google

闇を見つめる瞳
THE TIE THAT BIND

STORY
傑作サイコスリラー「ゆりかごを揺らす手」のスタッフ、プロデューサーが再結集したサスペンス巨篇。自分たちの子供をもうけることができないクリフトン夫妻は、養子縁組センターの手を借りて6歳の少女ジェニーを養子に迎えた。次第に本物の親子のように親密になっていく彼らだが、そんな時夫妻の前には、ネザーウッドと名乗るジェニーの本当の両親が現れ、彼女の身柄を要求するのだった。娘を取り戻すことに異常なまでの執念を燃やすネザーウッド夫婦は、実は殺人すら何とも思わない、サイコな犯罪者。愛すべきジェニーをかけ、二組の夫婦の間では戦慄の戦いが交わされることになり……。

DATA ●監督／ウェズリー・ストリック　製作／デイヴィッド・マデン、パトリック・マーキーほか　脚本／マイケル・アウアバック　出演／タリル・ハンナ、キース・キャラダイン、モイラ・ケリー　配給／日本ビクター
●11月7日より銀座シネパトスにて（95年・米・98分）



ハミルトン
HAMILTON

STORY
スウェーデンを舞台に、消えた核弾頭を巡る戦いを描くサスペンス・アクション。スウェーデン軍情報部に勤務するハミルトンは、CIAから驚愕の事実を知らされる。過激派グループに盗まれたロシアの核兵器が、中東に密輸されるというのだ。ただちに密輸団を取り押さえるハミルトンだが、後にそれがオトリですでに核は中東に密輸されたことを知る。捜査を進めるうち、背後には軍やKGB幹部によるクーデター計画が現れ……。※「ハミルトン」公開を記念して、11月2日の初日に望月三起也（『ワイルド7』原作）と小峯隆生氏を招いたトークショー、「サンドストーム」ほか2作のオールナイト上映、深夜コスプレコンテストを行います。（開場20時50分）

DATA ●監督／ハラルト・ツァート　製作／ハンス・ロンネルヘデン　製作総指揮／インクマール・レイオンボルク　出演／ピーター　ストーメア　レナ・オリン、マーク・ハミル、マッツ・ラングバック　配給／クロックワークス
●11月2日よりＢＯＸ東中野にてレイト（98年・米・126分）

Digitized by Google

STORY

芥川賞作家・中里恒子の同名ベストセラー小説を、吉永小百合・渡哲也というゴールデン・コンビで送る情感豊かな大人の恋愛物語。壬生（みぶ）は鎌倉で二十年ぶりに若き日の心の人・多江を見かける。壬生56歳、多江48歳の再会は運命的なものであった。大手建設会社の要職にあり家庭をもつ壬生と、早くに夫を亡くした多江は約束をかさねるようになるが、ある時、壬生は胸に激しい苦しみを感じ、主治医に心臓病の危険信号だと告げられるのだった。壬生と多江の関係は深まりつつも、口づけ以上の触れ合いはなかった。京都を忍びで旅した日、“時雨亭”の碑でふと余生について語り合うふたり。しかし、壬生の命は……。

吉永小百合　59年「朝を呼ぶ口笛」でデビューし、高校在学中には一年に16本の作品に出演する大スターに。「キューポラのある街」（62）、テレビ『夢千代日記』（81）ほか数え切れないほどの代表作があり、近年は「夢の女」（93）「女ざかり」（94）などに出演。

時雨（しぐれ）の記

DATA　●監督・脚本／澤井信一郎　企画／黒澤満、村上光一　脚本／伊藤亮二　原作／中里恒子　撮影／木村大作　出演／吉永小百合、渡哲也、佐藤友美、原田龍二、細川直美、裕木奈江、天宮良、岩崎加根子、林隆三　配給／東映
●11月14日より全国東映系にて（98年・116分）

STORY

97年「夏時間の大人たち」で劇場映画監督デビューを果たした中島哲也が、世紀末日本の風景をシュールでシニカルな映像に包みこむ。のどかなはずの日曜日、東京郊外のとあるマンションに暮らすさまざまな生活がはじまる。102号室に住む広介と小夜子はこのところ倦怠気味な夫婦仲を取り持とうとキャッチボールのできる場所を探すが、街の事情でままならない。202号室の少女は塾のライバルに勝とうと必死、301号室の女性は怪しげなストーカーに追われ、303号室に孤独に暮らす老婦人は今日も決まった時刻に叫び声をあげた。ひとり冷静な大家は、ひっそり自画像を描きつづけるが、奇妙な日曜日が暮れかけていこうとしたその時……。

永瀬正敏　66年生れ。83年「ションベンライダー」で映画デビュー。「息子」（91）「我が人生最悪の時」（94）「誘拐」（97）ほか、「ミステリー・トレイン」（89）「コールド・フィーバー」（95）で国際派として活躍。A・コックス作品のゲスト出演が決定している。

Beautiful Sunday

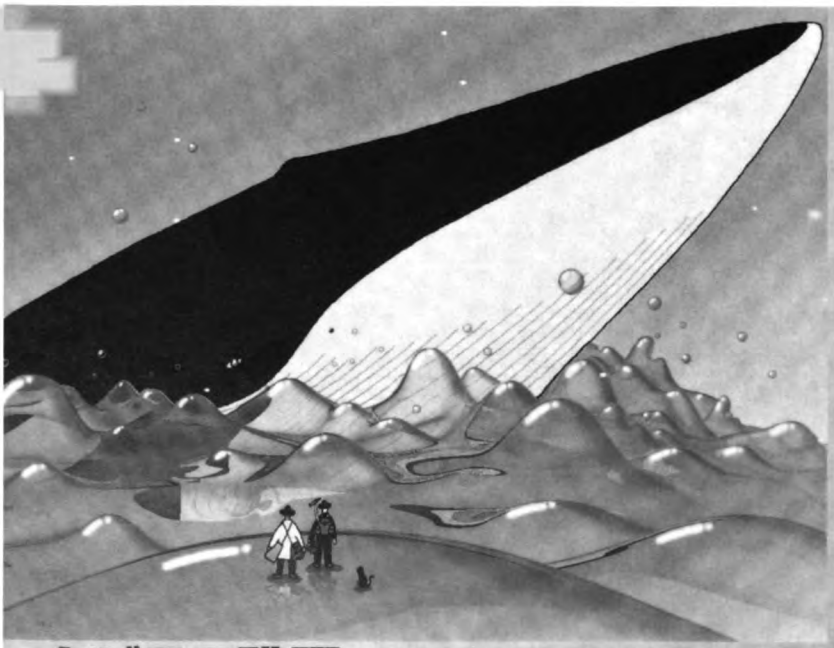
DATA　●監督・脚本／中島哲也　プロデューサー／宝田晴夫、畠中基博　撮影／阿藤正一　出演／永瀬正敏、尾藤桃子、中村久美、菜木のり子、遠藤京子、ヨネヤママコ、香川照之、松尾伴内、益岡徹、岸部一徳、山崎努　配給／シネカノン
●11月21日より渋谷シネ・アミューズにて（98年・93分）

Digitized by Google

なぞの転校生

STORY
「ねらわれた学園」から、「アンドロメディア」まで、旬のアイドルと切っても切り離せないＳＦＸ映画の新たなる傑作。ＳＦ小説の大家・眉村卓の原作に加え、お茶の間アイドル新山千春と佐藤康恵が主演する。一見、普通の女子高生・香川翠のクラスに転校生・岩瀬真祐未が現れる。“世界が滅びなければそれでいい”と初めの挨拶で述べた風変わりな少女は、大変な秀才だった。ひょんなきっかけで真祐未と親しくなりはじめた翠。そうしていくうち、真祐未は思いがけない真実を打ちあける。彼女は核戦争によって滅びた別次元からやって来たのだった……。

DATA ●監督／小中和哉　プロデューサー／杉山潔、今井朝幸、藤井恭　脚本／村井さだゆき　撮影／志賀葉一　出演／新山千春、佐藤康恵、妻夫木聡、志村光代、谷口あゆみ、清水香里、清水真実　製作／バンダイビジュアル　配給／メディアボックス
●12月26日よりシネ・ヴィヴァン・六本木にて（98年・95分）



クジラの跳躍

GLASSY OCEAN～たむらしげるの世界

STORY
絵本を中心に、イラスト、漫画など多彩な表現活動を続けるたむらしげるが、惑星ファンタスマゴリアを舞台にしたファンタジックなアニメーション作品を制作。ある日、ガラスの海に住む老人は、半日かけて行われるクジラの跳躍に遭遇する。この世のものとは思えない美しさに、老人は忘れかけていたある記憶を取り戻すが……。レイアウト原画に３ＤＣＧを巧みに合成させ、まさに手作りを実感させる映像美が絶品の１作。同時上映は、惑星ファンタスマゴリアで起きるエピソードを集めた「a piece of PHANTAS MAGORIA」からの４篇を抜粋した「PHANTAS MAGORIA」と、天の川を舞台にした冒険ストーリー「銀河の魚」。

DATA ●監督・原作・脚本／たむらしげる　３ＤＣＧ・ビジュアルディレクション／加藤慎也　アニメーションプロデューサー／上田明美　アニメーション／大島りえ、柏木郷子、富田悦子　声の出演／永瀬正敏、利重剛、永井一郎　配給／メディア・ボックス
●11月14日より銀座テアトル西友にてレイト（98分・全66分）

Digitized by Google

STORY

一般映画「ＬＵＮＡＴＩＣ」や「アタシはジュース」でもスタイリッシュな映像を紡ぎだすピンク４天王のひとり、サトウトシキが、女性の中に潜む愛と狂気を峻烈に描く。とある喫茶店で、一人のルポライターから取材を受ける佳子。彼女は、かつて結婚三年目にして倦怠に取り付かれていた。家庭に対する夢を失った彼女は、夜勤の夫を待ち侘びて、夜な夜な街で売春をつづけるようになる。ある夜、真二という男と出会い、たちまちセックスの虜になっていく二人だが、そんな彼女に対して夫は何かを感づいたのか暴力をふるうようになるのだった。やがて殺意を抱いた彼女は……。

迷い猫

DATA ●監督／サトウトシキ　企画／森田一人、朝倉大介　プロデューサー／衣川仲人、福原彰　脚本／小林政広　撮影／広中康人　出演／長曽我部蓉子、本多菊雄、寺十吾、平泉成　製作・配給／国映、新東宝　●11月7日よりユーロスペースにてレイト（98年・70分）

STORY

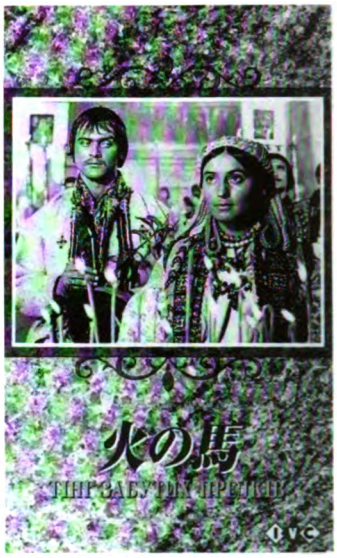
安部譲二が、ヤクザ社会の個性豊かな人間たちを面白おかしく綴った「極道渡世の素敵な面々」からはや10年。バブルの崩壊、暴対法などで様変わりした新世代ヤクザに原田龍二が扮して描く新シリーズ。出所後、かつての恋人・南との結婚を懇願しに行った弘は、彼女の兄で浦安握り屋一家の代貸・石川に魅せられて組に入ってしまう。ところが組は借金が元で解散目前、当の石川も足を洗ってカタギになると宣言するのだった。やがて……相次ぐ借金騒動の裏で、中国人マフィアが手を引いていることを知った石川、弘らは、マフィアのアジトへと乗り込んで行くのだった。

新・極道（やくざ）渡世の素敵な面々

～女になった覚えはねぇ

DATA ●監督　和泉聖治　企画／又来渉　プロデューサー／瀬戸恒雄、横山和幸　脚本／松本功、岩澤勝巳　出演／原田龍二、長川翔、寺田農、志賀勝、梅宮辰夫、坂上香織、大和武士　製作・配給／ムービー・ブラザース　●11月7日より銀座シネパトスにてレイト（98年・89分）

Digitized by Google



●「火の馬」 Тени ЗаБчтихПредкив 〈ビデオ／DVD〉

text by **日野康一**

60年代より今村昌平、羽仁進、大島渚、岡村喜八監督の一千万円映画など、独自の芸術映画を送り出した製作上映組織ATG（アート・シアター・ギルド）は、「尼僧ヨアンナ」「市民ケーン」「野いちご」など映画史上に輝く外国映画を送り出し、その精神は一部のミニシアターに受け継がれている。

ATGの厳しい選択の目にかなった旧ソ連の地方共和国（ウクライナ）映画。今日ならファンタスティック映画祭で上映される種類のカラフルなファンタジーである。東ヨーロッパの屋根、カルパチア山脈のルーマニアと境を接するウクライナ西部に住む少数山岳民族の素朴な愛と死の人生に西洋的な宿命感が結びつく。原名は「忘れられた先祖の影」、タイトルの文字も言葉もロシア語と少しちがう。グルジア出身で声楽と映画演出を学んだセルゲイ・パラジャーノフ監督は当時36歳、むせかえる民族色に、斬新なカラー処理とバレエ的なスタイリッシュな映画感覚を見せる。大胆な手法は受け入れられず、共産国特有の政治色がないことを批判された。消されなければ今日の巨匠になっていたであろう。65年マル・デル・プラタ映画祭監督賞、カラー賞。

19世紀の半ば、大自然の脅威が厳しい辺境の村に流血の争いをつづける両家族の青年イワン（イワン・ミコライチュク）と娘マリーチカ（ラリサ・カドーチニコワ）は幼いときから仲良しであった。東洋的容貌のロミオとジュリエットである。

物語詩のように「緑の大地」「孤独」「祭」「明日は春」「悪の力」「居酒屋」「イワンの葬式」など10ほどのチャプターに分かれ、イワンの生い立ちから語りはじめる。木樵りの兄が倒れてきた木の下敷きになって死ぬ場面は24ミリ程度の広角レンズを駆使するパワフルな描写、葬列の場面がつづく。つぎにイワンは父が斧で殴り殺される瞬間を目撃する。赤い馬のシルエットが走るシュール・リアリズム、雪の山肌を父の葬列が登る。

マリーチカは父を殺した男の娘であった。両家の争いを越えて結婚式が近づいたある日、出稼ぎに出て羊を追っていたイワンは胸が騒ぐ。留守中にマリーチカは崖から落ちて急流に呑まれていた。帰ってきたイワンはただならぬ気配に死体を見つけて筏の上で号泣する。

画面は青灰色になる。村の人々は放心状態のイワンに妖艶な娘を近づかせ、土俗的な結婚式をあげる。しかし彼はひとときもマリーチカの面影を忘れることができない。夫の愛を取り戻すため全裸で神に祈る新妻の願いは聞き入れられず、ほかの男に心を移す。イワンは相手に命を狙われ、マリーチカの霊に引き寄せられるように死の谷に近づく。

白い雪の風景をバックにした彩り豊かな冠婚葬祭の風習や深紅の衣裳、民族楽器の調べと歌と踊り、風光のひとつひとつが興味深い。旧ソ連のオルヴォカラー（共産側のアグファ）は劣化が早いが、このマスターは調子は保っている。

〈データ　ソ連＊ドフジェンコ名称キエフ撮影所64年。日本公開69年2月23日（ATG配給、新宿文化など）。IVC＝ビーム・エンタテインメント、10月25日発売、95分41秒、ビデオ4800円、DVD3500円。

Digitized by Google

デビュー作の風景

野村正昭

イラストレーション・宮崎祐治

㊷実相寺昭雄「宵闇せまれば」（69）

『ウルトラマン』（66～67年）や『ウルトラセブン』（67～68年）の頃から意識はしていたものの、中学生時代に茶の間のブラウン管で『怪奇大作戦』シリーズの『恐怖の電話』（68年）や『呪いの壺』（69年）、特に『京都買います』（69年）を目撃した時の衝撃は大きかった。やがて新宿三丁目、伊勢丹横のアートシアター新宿文化で「無常」（70年）が上映され、確か成人指定だったが、仲間たちと共謀して劇場に潜入し、芸術とエロスに興奮したものだ。実相寺作品が未知の世界への扉だったので、取材で御本人にお会いしても、面映ゆい思いでいっぱいになる。44分の中篇「宵闇せまれば」（69年）が劇場用映画のデビュー作になるそうだが、筆者がこの作品を初めて見たのは、公開後しばらくしてからであり、念願叶って『デビュー作の風景』を伺うことができた。

●

東京四谷生まれで、青島（チンタオ）や北京等で育ち「青島でドイツの飛行機映画を見た記憶がある」。親に連れられて、西部劇やチャップリン、アボット、コステロの喜劇映画などジャンルの見境いなく映画を見る。最も鮮烈に覚えているのは、アメリカ映画「ステート・フェア」（45年）で「子供心にも華やかさを感じましたし、カラー映画で一番印象に残っているんじゃないかな」。

幼稚園の頃、青島で金森馨（かおる）氏と出会う。「金森さんは小学一年生。僕が一人息子で金森家と親戚付き合いをしていて、お兄さんのような存在でした。金森さんは小学校でも絵の天才で画家になるのかなあと思っていたら、舞台美術家になって、彼の影響が一番強いですね。金森さんと出会っていなかったら、僕もこの世界に入っていなかった」。

引揚げ後、高校・大学時代は堰（せき）を切ったように映画館に通いつめる。「恥ずかしい話だが、私の青春の一時期は確実にフランス映画と共にあった。丸の内名画座、神田南明座、東洋シネマ、日活名画座、エビス本庄、人世座、等の小屋の暗闇が私の全てだった」（『闇への憧れ』77年創世記刊）。アメリカ映画や無声映画もよく見たが「（映画を）職業にしようとは思わなかった。小説家はダメだろうと思って、シナリオライター志望でした」。

家庭の事情で昼間は勤め、大学は夜間に移ったが、映画会社は夜間部の人間を採用せず、「遠縁に映画関係者がいて、その伝（つて）を頼り紹介してもらいましたが、結局ダメで」、フジテレビとTBSの試験を受ける。フジテレビは落ちてTBSに入社。同期に今野勉、村木良彦、のちに作家になった故・阿部昭、一期下に久世光彦氏らがいた。「テレビの揺籃期で、いろんな人間がいて面白かったですね」。『日真名氏飛び出す』などのAD（アシスタント・ディレクター）を務めた後、61年10月、日劇『佐川ミツオ・ショー』の中継番組で一本立ちする。「中継ディレクターをやって、スタジオものをやらせるというステップがあったんですよ。中継は対象との一期一会ですからね。ドラマの場合はNGだと仕方なくやり直しますが、

Digitized by Google

「宵闇せまれば」

プロダクション断層作品　製作／淡豊昭　脚本／大島渚　撮影／町田敏行　音楽／冬木透　出演／斎藤憐、清水紘治、樋浦勉、三留由美子　公開／1969年2月15日（44分）併映／大島渚監督「新宿泥棒日記」

［じっそうじ・あきお］1937年、東京市生まれ。59年、早稲田大学を卒業後、TBSテレビ演出部に入社。『佐川ミツオ・ショー』（61）を皮切りに『ウルトラマン』『ウルトラセブン』などの大人気シリーズものを手掛ける。69年、自らのプロダクション"断層"でデビュー作を撮り、70年にはTBS退社と同時に実相寺プロを設立。以降「無常」（70）「曼陀羅」（71）「ウルトラマン」（79）ほかを発表。しばらくテレビの演出に戻るが、88年に「帝都物語」でスクリーンに返り咲いた。「ラ・ヴァルス」（90）のほか、「屋根裏の散歩者」（94）「D坂の殺人事件」（98）の江戸川乱歩ものを手掛ける。「ウルトラマンのできるまで」ほか著作も多い。

舞台は進行していますから、そうはいかない。ウジウジしていたらできないので、決断力や判断力を養う意味もあるけど、要領良くもなっちゃう（笑）」。

62年、初のドラマ作品『おかあさん・あなたを呼ぶ声』（大島渚脚本）を演出。今回この『あなたを呼ぶ声』や傑作『おかあさん・さらばルイジアナ』（63年・田村孟脚本）を見る幸運に恵まれたが、その瑞々しい映像は『怪奇大作戦・京都買います』に優るとも劣らぬ素晴らしさだ。TBSではテレビ映画の局内制作を考え、円谷一、中川晴之助、飯島敏宏の三氏がフィルムの監督として、演出部から映画部に籍を移し、実相寺さんも映画部に転属する。日仏合作テレビ映画『スパイ・平行線の世界』（66年）で円谷一監督の助監督に就いた後、『ウルトラマン』や『ウルトラセブン』『怪奇大作戦』などのテレビシリーズを演出。「中川晴之助さんと創造社の山口卓治プロデューサーが大学の同級生だった縁もあったのか、大島さんはじめ創造社の同人にテレビドラマの脚本を随分書いてもらっていたんですよ。僕の体質には、大島さんのようにアピールする主題が明確で、ロジックがあってというようなものはないし、『愛と希望の街』（59）が好きだったこともあって、よく脚本を頼みに行っていました」。

「宵闇せまれば」は、大島監督が東京12チャンネルのテレビドラマ用に書いた脚本で、「ガス栓をひねって、部屋の中の4人の学生（斎藤憐、清水紘治、樋浦勉、三留由美子）の誰が最後まで残れるかという遊びのイメージがテレビではダメだったんでしょうね。それで僕が大島さんから脚本を貰って、短篇映画でやろうかと」。プロダクション断層が製作になっているが、「これは僕がまだTBSに在籍していたので、この映画のために作ったんです。《断》は今年亡くなった淡豊昭プロデューサーの淡をとり、《層》は実相寺の相をとって、合わせて断層にしたんです。三留さんは山口卓治さんの推薦で、大島監督の『新宿泥棒日記』（69年）の横山リエさんの役のオーディションで次点になった人で、その後は俳優はやってらっしゃらないようですね」。

撮影期間は約1週間。京都で栗塚旭主演の時代劇『風』（67～68年）を何本か撮り「スタッフと親しくなって、全部京都で撮りました。大道具の人にセットを10万円で作ってもらったりして、そういう迷惑をかけ、スタッフはボランティア。（東京から）呼んだ俳優さんの宿泊費と、お涙金程度のギャラで、そんなにお金はかかってないんですよ。斎藤憐さんの自由劇場とTBSの演出部時代から仲が良かったので、そういうところにも甘えました」。

かくて『花が女か、男が蝶か……』の、けだるい歌声から始まるワンセットドラマは〝遊びから始まっても、遊びでなくなる瞬間がきっとくる〟危険な空間を創出する。「最初の劇場用映画だし、あんまり映像的になるのはやめようと思いました。脚本のテーマである、若者の遊びと真面目さの交錯を『ウルトラマン』を撮っている時みたいな野放図な映像で撮ると、主題が散るといけないと思って、殆どミッチェルのカメラを動かさず、据えっぱなしにして、わりと禁欲的に撮った記憶がありますね。サイズもオーソドックスなスタンダード・サイズで撮りました」。

『風』の一篇『誰がための仇討ち』（68年）で一本立ちした町田敏行カメラマンが撮影し、「照明機材も京都映画が全部都合をつけてくれて、（他作品の）撮影がない時に借りてきてくれましたね。ミッチェルを使ったのは初めてでしたが、重たいカメラだし、エクレールとかアリフレックスとは大分ちがうというか、不自由で堂々とした良さがある。ちゃんと据えて、きちんと計算して撮らないとダメなんですよ」。

「宵闇せまれば」は、アートシアター新宿文化の支配人だった葛井欣士郎プロデューサーの尽力で、「新宿泥棒日記」の併映作として公開された。70年、実相寺監督はTBSを退社。同年公開された「無常」は前作の反動からか、移動撮影、広角レンズ、短いカットによるモンタージュ、遠近法を用いたグラフィックな構図と、テクニックが爆発し、キネ旬ベスト・テン第6位で、ロカルノ映画祭グランプリ受賞。テレビやビデオ、コンサートやオペラの舞台演出、小説やエッセイの執筆、イラストや本の装丁など、幅広い分野での活躍が嬉しいが、佳作「D坂の殺人事件」（98年）に続く、劇場用映画の新作こそが待ち遠しい。

Digitized by Google

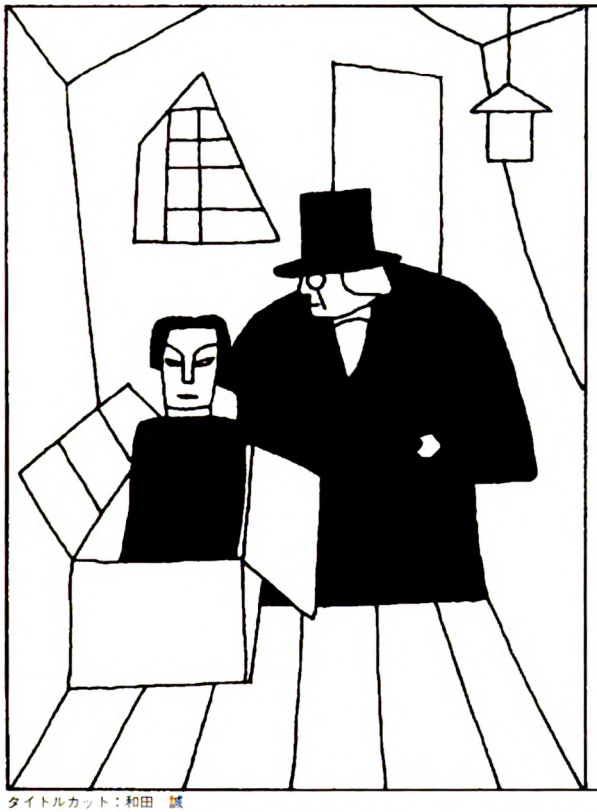
百年の夢

山田宏一

連載第82回

迷宮のフィルム・ノワール

——アレックス・コックス監督『デス&コンパス』『ザ・ウィナー』



タイトルカット：和田　誠

アレックス・コックス監督の二作品をビデオで見る。

『デス&コンパス』

『ザ・ウィナー』

ともに一九九六年作品。強烈な色彩の迷宮に魅せられ、入りこむや、逃れがたい眩暈の虜になること、必至である。

『デス&コンパス』は昨年の東京国際映画祭で、『ザ・ウィナー』はつい先ごろギリギリ間に合ってとびこんだ映画館の最終日に、見て以来である。名画座というものがなくなってしまったいま、この手の映画を発見、再見する歓びの可能性が残されているのはほとんどビデオだけになってしまった。

デビュー作の『レポマン』（一九八一）以来いわゆるカルト・ムーヴィーあつかいされてきたアレックス・コックス作品だが、ダニー・ペアリー著「Cult Movies」の副題でもある「the Classics,the Sleepers, the Weird and the Wonderful」という、カルト・ムーヴィーの定義を思い起こすことにしよう。

「the Classics」はクラシック、古典的名作のこと。

「the Sleepers」はスリーパー（眠れるもの）、「最初は注目されないがやがて思いがけず成功するもの」「長いあいだ売れずに地下の倉庫で眠っていたが、急に値が出てヒットした商品」のこと。

「the Weird」は異様なもの、おかしなもの、この世のものとも思われぬもの、魔法のようなものの意。

そして「the Wonderful」はワンダフル（すばらしい）の一語につきるもの、「驚嘆すべきもの」をさす。

かならずしも少数者の崇拝（カルト）の的に限定されるわけではないのだが、たとえそうだとしても、それはじつに幸福な少数者であることは間違いない。

『デス&コンパス』は「夢と現実のあわいに浮び上る"迷宮"としての世界を描いて、二十世紀文学の最先端に位置する」（岩波文庫版「伝奇集」のカバー折返しの解説による）、アルゼンチンの作家、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの短篇小説（「死とコンパス」）の映画化である。あるいはむしろ、その最初の一行、「……周期的かつ連続的な血なまぐさい事件ほど奇妙なもの——奇妙きてれつ、といってもよいもの——はない」（鼓直訳）の映画化とずばり言ったほうがいいかもしれない。謎のとけないミステリーだ。不可解な幻想的ハードボイルド活劇と言ってもいいかもしれない。殺人事件が起こり、探偵が出てくることはたしかなのだが……。

偶然の符号によって物語が進行するかと思えば、その機械的な無限の反復をおそれるかのように唐突に物語の流れが断ち切られる。

構図のシンメトリーへの偏執的なまでのこだわり。

ラストは円環の廃墟に「安らぎと屈辱と恐怖を感じながら」、敏腕を誇るランロット刑事（ピーター・ボイル）が「おのれもまた幻にすぎないこと、他者がお

Digitized by Google

のれを夢みているのだと悟る」のである。そして、何よりも――いや、のっけから――広角レンズによるキャメラのめまぐるしい動きが悪夢を映像化したような印象を生みだす。オーソン・ウェルズ監督の『黒い罠』（一九五八）や『審判』（一九六二）を連想せずにはいられない。

一貫して広角レンズが使用されているので、映像はきわだってデフォルメされている。広角レンズは画面の奥のほうまで鮮明にうつしだし、しかも世界から現実感を奪ってしまう。たとえばキャメラに向かって歩いてくる人間が、十メートルもの距離をわずか五歩でまたいできてしまうような、非現実的な効果をだすのである。たしかに、わたしたちは、この映画を見ているあいだ、ずっと、幻想的なお伽噺の世界に入りこんでしまっているかのようだ。スクリーンに現れる人物の誰もがまるでウォーキングベルトのうえをすべっているとしか思えない。あるいはむしろ、「長靴をはいた猫」のように七マイルをひとまたぎするというあの長靴をはいているかのようだ。

これはフランソワ・トリュフォーが一九五八年にオーソン・ウェルズ監督の『黒い罠』について書いた文章だが（わが人生の映画たち）、まるで、いま、アレックス・コックス監督の『デス&コンパス』について書いたかのようである。『デス&コンパス』では、オーソン・ウェルズの映画ばかりでなく、多岐多様な映画的記憶や引用がそれ自体で一つの迷宮を形成しているかのようですらある。ジャック・リヴェット監督の『パリはわれらのもの』（一九六〇）やベルナルド・ベルトルッチ監督の『暗殺のオペラ』（一九七〇）のボルヘス的冒険を踏襲してもいるにちがいない。

すべてに出典があり、すべては借りものであり再現にすぎないと自作のオリジナリティーを否定した（「みずから物語を書く勇気がないために、他人の物語を偽造し、歪曲して楽しんでいた」）ボルヘスのように、アレックス・コックスもまた、謙虚に自らの「汚辱の映画史」を映像で書くことをたのしむかのようである。

2点共『デス&コンパス』

映画がはじまると、長回しのキャメラと広角レンズがとらえたモノクロの世界で破壊と虐殺がおこなわれ、アレックス・コックス扮するボルヘス警視長なる人物が登場する。真っ黒なサングラスをかけた盲人で（ホルヘ・ルイス・ボルヘスも生来目が悪く、晩年は全盲になった）「目は見えんが早射ちだ」と豪語する。「まじめなうえに怖いもの知らず」で、「勝つ見込みがないほど闘志が湧く」などと「他人迷惑」な勇気をひけらかし、あっさりと殺されてしまう。ボルヘスもくそもないといったところか――いや、こうして、アレックス・コックス監督はボルヘスとともに討ち死にする覚悟だったのだろう。

因みに（というか蛇足ながら）、ボルヘスには一冊の映画評論集がある。彼はハリウッドのギャング映画の熱狂的ファンだった。「ジョゼフ・フォン・スタンバーグの忘れがたいギャング映画」になる『暗黒街』（一九二七）、ハンフリー・ボガートが忘れがたいギャング役を演じたアーチー・メイヨ監督の『化石の森』（一九三六）などがとくに好きだったようだ。

『ザ・ウィナー』もまた多彩な映画的記憶につらぬかれた映画だ。とくにオーソン・ウェルズ監督の『上海から来た女』（一九四七）のミラー・ハウスの凄絶な射ち合いが、カジノの暗闇のなかで銃声が入り乱れ、火花がストロボのように目をあざむくラストの銃撃戦に鮮烈に再現（あるいは反復）されるに至って、鳥肌が立つほど感動した。

物語はいわばアレックス・コックス版「さらば愛しき女よ」といった感じなのだが、アレックス・コックス監督は、これはお仕着せの企画で、初めて自ら脚本を書かなかったものだと述べているから（『ザ・ウィナー』プログラム／ケイブルホーグ）、むしろ、レイモンド・チャンドラー的悪女もののパターンにアレックス・コックス的味つけをたのしむ物語なのだろう。その味つけたるや、ちょっとニール・ジョーダン監督の『モナリザ』（一九八六）に似た戦慄と興奮をうけてくれるすばらしさだ。

Digitized by Google

2点共『ザ・ウィナー』

金のために男をたぶらかす悪女が出てくる典型的な（あるいはむしろ類型的な）フィルム・ノワールなのだが、その強烈な色彩、とくにネオンの光に彩られた不夜城ラスヴェガスは、迷いこんだら出られない、まさに迷宮の名にふさわしい閉鎖的でありながら無限の空間のイメージだ。

悪女役のレベッカ・デモーネイは、『ギルダ』（チャールズ・ヴィダー監督、一九四六）のリタ・ヘイワースのようにカジノに出没し（歌も歌う）、『上海から来た女』のリタ・ヘイワースのような末路を迎える。いや、ドタン場になって思いがけず男を愛している自分に気づくところはむしろレイモンド・チャンドラー脚本（原作はジェイムズ・ケイン）、ビリー・ワイルダー監督の『深夜の告白』（一九四四）のバーバラ・スタンウィックといったところか。

といっても、バーバラ・スタンウィックほどのあくどさもなく、いわんやリタ・ヘイワースとは似ても似つかぬ肉体的存在感の稀薄な、官能的ニュアンスを欠く、あっけらかんとした今風の若い女の子なので（黒いブラジャーが故意にドレスの胸の衿ぐりからはみ出ても下品にならない代わりに肉体も感じさせない）、それだけにいっそう手のつけられない不感症的色情狂、すれっからしのアバズレにみえるレベッカ・デモーネイである。男を誘惑するために別の男とのセックスを気軽に平気で話すような女の子だ。

物語はカジノのザ・ウィナー（勝者）をめぐってくりひろげられるのだが、レベッカ・デモーネイは勝者ではない。それどころか、カジノのオーナーで街の顔役である黒人（デルロイ・リンド）に多額の借金を抱えている身だ。彼女はヒロインではないのである。少なくとも、彼女をめぐって男たちが殺し合いをするようなことはない。

レベッカ・デモーネイはこの映画の共同プロデューサーに名をつらねてもいるのだが、あたかも、いつも男たちばかりが魅力的なアレックス・コックスの世界に紅一点、自らのりこんでいったかのようである。にもかかわらず、やっぱり男たちのほうが個性的で印象的に描かれるのだ。

日曜ごとにカジノでルーレットに勝ちつづける男（ヴィンセント・ドノフリオ）の純真無垢ぶり。女（レベッカ・デモーネイ）に誘惑されて生きる歓びを知る前は自殺願望にさいなまれていたらしい。

女の借金取立て役を命じられているカジノの用心棒で殺し屋（ビリー・ボップ・ソーントン）は女に夢中で、いつも暗い顔をしている。そんな彼の「幸福」を願うボスのデルロイ・リンドはホモセクシャルらしく、レベッカ・デモーネイも借金を肉体で返すことなどおよびもつかないようだ。

殺された父親の死体を発見してかつぎあげ、隠し場所をさがしまわる前科者（マイケル・マドセン）は、日曜日の勝者の兄である。レベッカ・デモーネイはこの兄の情婦でもあったことが判明する。

映画の冒頭、砂漠のまんなかの道路を一台のバスがやってきて停まる。長い時間待っていたらしい二人のチンピラが兄貴（フランク・ホェーリー）を出迎えにいくのだが、バスから降りてこないし、なかをのぞきこんでもいない。呆然とたたずむ二人の前をバスが走り去る。と、道の向こう側に兄貴が立っている。『キートンの蒸気船』（一九二四）のギャグを想起させるが、むしろ無理を通せば道理ひっこむ狂気じみたフランク・ホェーリーの背伸びをしても無理なリチャード・ウィドマーク気取りがおかしい。

ビデオながら「名画座」の珠玉の二本立てをたのしんだ。

『デス&コンパス』
発売元／パップ
¥15,800（税抜）

『ザ・ウィナー』
発売元／徳間ジャパンコミュニケーションズ
¥16,000（税抜）

Digitized by Google

荒井良二

「友だちのうちはどこ？」（87年イラン、監督アッバス・キアロスタミ）

僕はこの映画を始めから終わりまでニヤニヤ、ニコニコ、ウフフエヘヘとしながら観たんだよ、今までに観たことなかった映画だったから、しかもシンプルシンプルシンプルすぎるもんだからね、余計なものなんてなにもなくて晴ればれした気分を味わって、まるで雑草いっぱい草原の中に咲いた名もない花が風に少しゆれているようだったからね、でも風は大きなウチワでみんなしてソオッとあおいでいるような樹がしたもんだからニヤニヤニコニコだったんだよ。

Digitized by Google

BRATAN

Bakhtijar Khudojnazarov

「少年、機関車に乗る」（91年タジキスタン、監督バフティヤル・フドイナザーロフ）

なんだ？　この風景は？　見渡すかぎり平原だ平原だ!!　そしてタイトルどおり少年は（7才と17才）機関車に飛び乗り旅が始まるのだ。走るは、中央アジアの大平原、スゴイぞ、木なんかない平原だぞ、野生の馬が機関車の前を走るぞ、シュールな風景の中をつっ走るぞぼくらの機関車!!　ちょっとした不安とクスクスする笑いとがミックスされた心弾むロード・ムービーなのだ。

Digitized by Google

(FREEZE, DIE AND REVIVE!)

Замри-Умри-воскресни!

Vitali Kanevski

「動くな、死ね、甦れ！」（89年ソ連、監督ビターリー・カネフスキー）

なんかこわいタイトル。そう、たしかにこわい、生きることのこわさが映画のすみずみまでピリピリしている気がするなあ、この映画。鋭利な刃物で切り裂いたような風景とひふが痛むような空気が流れる街。そんな中でひたむきに生きる人達、そしてひとりの少年とひとりの少女。混沌と苦悩と痛みをジィーッと目をあけて見つめているような感覚。この少年と少女のふたり、グッとくるなあ……。僕はこの少女に恋をしたよ!!

Digitized by Google

(AN INDEPENDENT LIFE)
Une Vie Indépendante

VITALI KANEVSKI

「ひとりで生きる」（91年ロシア＝フランス、監督ビターリー・カネフスキー）「動くな……」の続編で少年の成長を追う。前作にもましてキーンと張りつめた空気が僕の心もこおらせる感じがして心が痛む!! 涙も出ないようなこのさびしさは、不安はなんなんだ!? と思いたくなるような感覚がひふにはりついてとれないんだよ。やり場のない重い重い悲しみがあるのだけれど、登場する少年と少女にはどこか澄みきった感情でもって淡々と生きてて背中がゾクッとしたよ。

Digitized by Google

「黒澤明」

シネマ

立川志らくの 徒然草

55

黒澤明が死んじゃった。

皆、晩年の作品はつまらないと言うが、果たしてそうなのであろうか？　確かに説教臭くはなった。でも黒澤明の説教なら聞いてあげようじゃないの。いや、進んで聞きたいよ。「七人の侍」をつくった人の説教だよ。だいたい映画監督は、年をとると説教臭くなるものだ。チャップリンだって、ジャン・ルノワールだってそうだ。特にチャップリンなんざ、あれだけトーキーを嫌がっていたくせに「ライムライト」では喋る喋る。それも面白い話ではなく人生訓を。「人生で大切なものは、勇気と創造力とそして少しばかりのお金だ」とか言ってるが、自分は目茶苦茶大金持ちであまり説得力がなかったりする。大阪の難波花月の客だったら「理屈はいいから、何かおもろい事言え！」と野次られるところだ。でも、いいんですよね。相手はチャップリンなんだもの。「モダン・タイムス」や「街の灯」をつくったんだから、大抵のことは許すってなもんだ。

晩年の黒澤作品がつまらないと言われる最大の要因は作風が抽象的になったからであろう。だが、娯楽性を追い求めていた人が抽象的になったのだから、かえって面白いとは言えまいか。鈴木清順がより抽象的になった訳ではなく、「用心棒」をつくった人が抽象的になったのだから楽しいじゃないの！

確かに「夢」はつまらなかった。私なんか初めて観賞た時は途中で寝てしまい、自分の夢を見てしまったぐらいだ。だけどね、具体的な夢なんてあんまりないし、あったとしても他人の夢なんか興味ない。しかし、黒澤明の夢なら話は別だ。どんな夢を見てるのか知りたい。それが現実になったのだから、面白いつまらないで判断してはいけないのだ。感謝しなきゃ。それに「夢」が心底黒澤ワールドである事に、実は私、気が付いた。テレビで観賞たときに、テレビのつまみ部分をいじってみたら白黒になったんですよ。そしたら「夢」の映像が見事に「隠し砦の三悪人」みたいになったのだ。いや、驚いた。当たり前と言われりゃそれまでだけど、抽象的だろうが何だろうが、間違いなくあれは黒澤明の写真なんだ、感激！

あと、黒澤明の晩年を悪く言うのに「影武者」がある。皆口を揃えて「勝新だったらなぁ」と。私も勝新の「影武者」を観賞たかった。でもそれは名優仲代達矢に対する冒瀆だ。あの仲代達矢だぞ！　パントマイムでカルビとロースの違いを演じ分ける役者だぞ（それはCMの話だ！）。だいいち勝新がいいと言ったって、若い頃の勝新が演ったらいいのであって、全体のバランスからしても「影武者」は仲代達矢で正解だったと思う。

それでは、ここで志らくの黒澤映画ベスト3を発表いたそう。

第3位は「酔いどれ天使」。私は三船敏郎の喋り方が好きなのだ。微妙に訛るのが素敵なんですよね。それから、ちょっとあたふたしているところも好き。「用心棒」みたいに堂々としちゃうと、私はあまり魅力を感じない。「天国と地獄」は最初は堂々としているが、段々とあたふたし始めるからよろしい。「静かなる決闘」はずっとあたふたしていていいなぁ。アラン・ドロンとブロンソンが共演した「レッド・サン」では、使う方が三船のあたふたの魅力を理解していなかったから、最後まで堂々としていて腹がたった。

続いて第2位！　何と意外や「どん底」である。本当は1位にしたいぐらい惚れている作品だが、世間の目が恐いので2位にさせていただいた。もう死ぬほど面白い！　怒鳴りまくる鋳掛屋の東野英治郎も、口の回らない役者崩れの藤原釜足も、殿様と呼ばれる千秋実も、にこやかなお遍路さんの左卜全も、因業大家の中村鴈治郎もみんな面白い！　特にいいのが遊び人の三井弘次だ。ラストの三井弘次の捨て台詞のかっこ良さ。史上最高のかっこ良さだ。そして全員で御神楽を踊るところは「巴里のアメリカ人」のラスト17分のダンスシーンにも匹敵するぞ。この貧乏長屋のイメージで『饅頭恐い』ができたらなぁ、と思う落語家の立川志らくさんでした。

さあ、いよいよ栄えある1位だ。「七人の侍」ではなく「生きる」でした！　私は志村喬を崇拝しているのです。変な例えだが志村喬はロバート・デ・ニーロより凄い！　そして志村喬を映画の中でミイラと呼んだ黒澤明のセンスも凄い！

何はともあれ黒澤明に合掌。

P.S.　小渕総理から国民栄誉賞なんぞ貰ったってしょうがない。

Digitized by Google

リレー・エッセイ 映画と私

㉟思想家 石川忠司

あらためて考えてみると、俺って随分映画と身近なところで暮らしてきたし、また現に今も暮らしている。

学生時代はそばにキクチっていう、「学園仕置き人」とか「特攻タダシの秋」とか「死霊をえぐりマンダラ」とか、一貫してソウルフルな自主映画を作り続けてる奴がいて、そいつに頼まれて一回撮影を手伝ったんだけど、現場のパワフルな雰囲気といい、そのあとでなだれ込む怒涛の飲み会といい、狂ったように面白くて病みつきになり、それからは撮影があるたびに混ざって騒いでいた。

拷問のシーンで、絶叫するアラハタを西武池袋線の線路に縛りつけ、電車が接近してくるのを撮ったときなんて、もう心から楽しくて本当にワクワクしたものだ（ちなみにキクチは後に東映に入社する。本人は、提出した履歴書は血糊で書いたんだぜ、と言っているが、彼は嘘をついていると思う）。

また、俺が性格的に、密室に閉じこもっての単純作業とか、心のこもらないうわべだけの接客とかが大好きで、だから映画館でバイトをはじめたんだが、やっぱりこれが性に合っていて、本を読む時間もとれるし、かれこれ十年ぐらい続いている。――ウチは最初はポルノ館で、次に邦画専門の一般館になって失敗し、そのうちにわりとマニアな洋画に転向したが再びコケて、現在は、結局ポルノ館に戻ってしまった。

こんなふうに、俺は映画とすごく近しい環境にいるにもかかわらず、しかし、肝心の映画鑑賞ってことになると、実は大して興味がない。映画作品はほとんど見ていないし、ビデオすら持っていない。

それは別に、映画を見るのが積極的に嫌い、というわけじゃ全然なくて、俺がただブルースやソウル、ジャズ、ゴスペルなど黒人音楽に取り憑かれているだけの話だ。ロバート・ワードとかカーティス・メイフィールド、ディアンジェロ、フェントン・ロビンスン、クリーブランド師、ドロシー・ラヴとかの名前を聞くだけで、もう平常心ではいられない。カネがあれば全部CDに突っ込むし、ヒマがあればやはりCDを聴く。自分の中の情熱／エネルギーは、ほとんど黒人音楽に捧げられていて、残った余りの情熱が文学や思想に与えられ、これで完全に「打ち止め」だ。――まあ、とは言っても、「嫌い」じゃないわけだから、気が向けば映画を見るときだってたまにある。動物がとても好きなんで、「動物映画」なら比較的見てるかもしれない。例えば「ウィラード」とか「ドーベルマン・ギャング」とか「驚異の世界」とか「ハレ」とか。――何か古いのばっかりだな。わりと新しめだったら「ジュラシック・パーク」とか「マウス・ハント」とかなら見たが、しかし「ジュラシック・パーク」には、とんでもねえ！　と思ったよ。

だって、あれ、結局ヒーローと資本家の一族だけが生き残る話じゃん。スゲー差別的。デブや黒人は速攻で恐竜に食われてるしよ。フランス人の数学者（だっけ？）は負傷しながらも助かったが、あいつ、しきりにヒーローのヨメの生物学者を口説いていたけど、それってホモだったらやっぱり恐竜に食われちゃうからだよねえ？

「俺はノーマルだ」っ

「ウィラード」

石川忠司
1963年、東京都足立区生まれ。立教大学文学部独文科卒業。89年に発表した「中原中也論」により、『群像』文学新人賞・評論部門優秀賞を受賞。97年には、近代から現代までの思想を縦横無尽かつ平易に論じた『現代思想・パンク仕様』を上梓。池袋シネロマンに勤務する傍らで、雑誌「文藝」誌上等でさかんな評論活動を行っている。

Digitized by Google

て、作品中でどうしてもアピールしなければならなかったわけだ。可哀相に。

でも大体、何でヨメの生物学者をあんなパッとしない女が演じてんだあ？　映画は現実とは違う夢の世界じゃないのか。だったら小賢しい「リアリティ」なんて放っておいて、素晴らしく美人で巨乳でスケベそうな生物学者を出して楽しませてくれ。まったく普段スケベなことしか考えてない奴に限って、何をやってもいい、となると逆に自主規制しやがる。野放図な「楽しさ」に耐えられないチンケな精神がすごくイヤだ。――この手の精神がそのうちに平和な日常にも耐えられなくなって、「戦争などの厳しい状況が人間を鍛える」とか言い出すんだろう。

「動物映画」以外では、俺はやられたらなるべくやりかえすようにしてるから、「復讐映画」なんて好きだなあ。スティーブ・マックイーンの「ネバダ・スミス」なんて最高だ。あと、一度社会から排除された奴が、再びそこでのし上がっていくのも広義の「復讐映画」だとすると、「ベン・ハー」はこのジャンルの永遠の名作だよね。――役者としても、マックイーンやチャールストン・ヘストンは、最近のディカプリオと同じくらいクールだよ。

でも、俺にとって「映画」とは、やはり第一義的には「見るもの」じゃなくて、「編集して映写機にかけるもの」だ。

「ポルノ映画館で働いているんだよ」って言うと、嬉々として「いい人間観察になるでしょう？」と月並みなことを返してくる文学部系の女がよくいる。ちょっと違うんだよなあ、とか思うんだが、確かに注目すべき人々との出会いは多い。

近くて遠い映画との距離

例えばポルノ見て盛り上がって、そのまま館内の電話でプロポーズしてた人。いやなプロポーズだよなあ。結局ことわられたみたいで、ロビーのベンチに座って泣いていた。お昼頃入館してくるなり、「遅れてすみませんでした！」って大声で呼ばわったおっさん。何が「すみません」なのかよく分からなくって事情を聞いたら、ウチの開店の十時三十分に間に合わなかったからだとか。そんな、別にあやまられてもなあ。

突然緑色の液体を吐いて病院送りになった人。暗闇でころんで額をパックリ割って病院送りになった人。オールナイトのとき、入院中なのにわざわざ脱走してきたが、やっぱり症状が悪化して病院送りになった人。皆んな、すごくディープな人たちだ。

「映画」を所謂映画鑑賞だけでなく、もっと広い意味にとって、「それがかかわることすべて」と解釈するならば、俺も一種の「映画ファン」と名乗っていいのかなあ。

Digitized by Google

女たちとの恋愛、それと映画 それ以外は消えうせろ！

'99、第3弾、風雲急を告げ撮影中!!!

♬イヤ～ッホーホーッララ、ヤッホホーッララ、ヤッホホッララ、ヤッホホっ!! せちがらい世の中だけに、つい明るく世紀末にお似合いの〝オオ・ブレネリ〟を口ずさんでしまう田口ですが、実はこの歌、今秋、松竹系で公開中の〝怪獣が登場しない怪獣映画〟と話題の、新進★宮坂武志監督劇場デビュー作「大怪獣東京に現わる」の中で、小生扮する田舎街の学校教師がキレた果てに歌い出す明るくも悲しいメロディなのです！

ジスムービー、あえて言うなら「エマニエル夫人　東京悶絶日記」って題名なのに、全然エマニエル夫人は出てこなくって、エマニエル坊やが沢山出て来て悶絶してるって感じ（？）の快作！　ロウバジェットを逆手に、発想さえ面白ければイケる！　怪獣映画をも撮れる!?　過大広告でジャロに訴えられることもないっ!?　こぉんな不敵な脚本をモノにしたのは宮坂監督と日本映画学校時代からの旧友で、最近じゃ、おなじみ邦画界の核弾頭こと三池崇史監督の「中国の鳥人」などで大型ぶりを発揮しているNAKA雅MURAさん！　そして、何を隠そう隠しもしない三池監督はお二人の先輩だったのですっ！

日本映画学校と言えば、待望の「カンゾー先生」が公開間近の巨人・今村昌平監督主催！　「カンゾー先生」も含めて小生、学生の卒業製作映画に出演したり、同校卒業生で「汝殺すなかれ」などの佐藤闘介監督と学園祭トークショウに招かれたり、実はゆかりあるところだったりして。僕が本誌読者時代に見た日本映画学校の前身＝横浜放送映画専門学校の掲載広告は、〝ウチには酒のんでヘラヘラしとるやつなんか一人もいないんだ〟ってコピーの廻りに、酒飲んでヘラヘラしっぱなしの生徒の写真がコラージュされていて、爆笑モンでした！　今村作品にも通ずるトンチのキいたユーモア（？）、あたしゃ好きです！　学校時代の友達が皆無で、ほぼ落ちこぼれ学生だった僕としちゃ、学友の先輩後輩同士がプロの世界で出会えるなぁんて、羨ましいっス！　僕も日映行っときゃ、もちっとグッドな人生送ってたかも!?　なぁーんてガラにもないことを考えたりして……テヘヘ。

某フライデー・ナイト、「大怪獣～」公開に先だってオールナイト上映イベントが行われ、我ら映画＆ロックン不良共のグレート姉キ・桃井かおりさんを先頭に、宮坂監督、NAKA雅MURAさん、最新ピンク界女流監督＆女優の吉行由実さん、僕、併映作品「岸和田少年愚連隊　望郷」の三池監督が登場!!　こぉんな異能で特殊学級な顔ぶれの司会をするのは、勿論、評論家塩田時敏さんで、みぃんなビール片手に和気あいあいなリラックス・トークで、いやぁ、なぁーんか楽しかったデス！　イベント終了後も、居残りメンバーで西麻布あたりのClubなんぞに繰出して、不良ぶり発揮のダンシング・オールナイトでもうたいへん!?　で、でも、桃井さんもおっしゃってくださってました。「この人達普段はこんなンだけど（笑）、仕事はちゃんとしてるのよ」って、ありがとうございますっ!!

さぁて、よく遊んだ後はよく仕事、てな訳で早速翌日から開始したのは三池監督の新作「LEY　LINES（仮題）」！　それぞれ独立したドラマなれど、「新宿黒社会　チャイナ・マフィア戦争」「極道黒社会　レイニードッグ」に続く黒社会シリーズ第三弾完結編!?　アンダーワールドに蠢く国籍を持てぬ者達の葛藤＆焦燥、かすかな希望とその挫折を描くドメスティック・フィルムノワール

Digitized by Google

田口トモロヲ

TAGUCHI TOMOROWO

1957年11月30日東京都生。漫画家、演劇人としてアングラ・インディペンデントシーンでの活動を経て、伝説のパンクバンド・ばちかぶりのボーカリストとして注目される。「鉄男」(89)に主演したことから俳優を生業とすることを決意。以後、様々な映画作品で活躍中。96年日本映画プロフェッショナル大賞功労賞、97年毎日映画コンクール男優助演賞を受賞。

コレが噂の爆笑広告
('85キネ旬より)!

'95、「新宿黒社会」!

(?) ムービー! 実はこのシリーズの木村俊樹プロデューサーと僕は、インディーズ・シーンでパンクバンドをやっていた二十代の頃からの知人で、共に若さゆえの理想から憎まれ口なんぞも叩きあっちゃったりした仲!? 当時のミュージックシーンも今はなく、消えたひと数多い中、ムービーサイドで再会出来るだなんて、『微子の部屋』で話したくなるよな、ちょいとイイ話!? 学友ならずとも、ベトナム帰還兵再会話の如く(かなりオーバー、ソレにどちらかと言えばベトコン側でしょ僕ら)、感傷的になれるなんて、わしも年取ったものよのう、ガハハハハハハ……!?

前作で僕は、説明不能のサラリーマン・ストーカー役。前々作はホモで鬼畜な中国マフィアのボス。で、今回はと言えば、主人公北村一輝さんと柏谷享助さん扮するヤングチームの一員だぁ!? (ホワァイ?) シリーズ三作目、常に新たな地平へと進めるべく監督からミーへの指令は、「不良番長」のよーに!? ウォォ ~ッ、「不良番長」といえば東映プログラムピクチャー黄金期、梅宮辰夫さん主演で十六作もヒット連打された不良バイカー&ハグレ者達の憧れ最終到達地点!? "カツドウ映画の限界に挑戦や"と叫んで数々のバースト・ギャグを連発し、某俳優さんが現場で台本読んでたらレギュラー陣が「辰兄ィ、こいつ台本読んでますぜ、シメますか?」って言ったとか言わないとか、宇宙レベルの豪快エピソードがマニアの間で語りつがれているアバウト・アナーキー・ムービーの金字塔! ……ってことは、台本読むなってこと……!? そおいうことじゃないだろ~田口ーっ!

ほかの出演者に、中国マフィアのボスに竹中直人さんを始め、哀川翔さん、大杉漣さん(WITHハージー・カイテルズね)などなど、ゴージャラス&デンジャラスな顔ぶれ!

もう、このメンツだけでも期待ワックワク、股間ドックドク!? 撮影中、並行して、ヴァンクーヴァー国際映画祭で「中国の鳥人」「極道黒社会」「BLUES HARP」などの特集上映が催される注目の三池監督!! 作品のテイストに合わせ、とどまることなく加速したニュー・アイディアを産み落とし続けるプリミティブ鉄人三池監督のハイパー脳ミソぶりは、いっつも刺激的ですっ!

はたして新作「LEY LINES(仮題)」は三池組版「狂犬三兄弟」か!? はたまた「アフリカの光」か!? 絶賛撮影中、乞う御期待なのだぁ!!

'97、「極道黒社会」!!

三池監督&宮坂監督&僕!

恐るべし!
日本映画学校っ!!

隔月連載第19回

可愛い少女たちとの恋愛それと映画それ以外は消えうせてもいい醜いんだから

Digitized by Google

Almost Cool

オールモスト・クール 131

『ビッグ・リボウスキ』の「ぐうたら礼賛」に一票を投じたい——その一

芝山幹郎 Mikio Shibayama

折れたたばこの吸いがらで……と、その昔、中条きよしは歌っていた。歌い手には責任も罪もないが、コーエン兄弟ならこの歌を聞いたとたんに吹きだすことだろう。一本だけ折るからいけないのさ。もしふだんから吸いがらを折りつづけていたら、その嘘は露見しなかったんじゃないか。そりゃまあ、男なんて嘘が下手だからほかのところでバレるかもしれないけど、すくなくとも吸いがらで墓穴を掘ることはないはずだよ。

コーエン兄弟の新作『ビッグ・リボウスキ』(映画のなかではリバウスキーと発音されているので、以後、人物名に関してはリバウスキーと表記する)を見ているうち、私はそんなことを考えていた。馬鹿だな、まったく。なにも中条きよしの歌まで引合いに出すことはないじゃないか——そう感じる一方で、私はこの映画に好意をいだきはじめていた。これは自分でも意外な反応だった。というのは、ここ数年、すくなくとも『未来は今』や『ファーゴ』といった彼らの作品を前にした私は、けっして幸福な観客ではなかったからだ。以前に書いたことのくりかえしはなるべく避けるが、要するに私は彼らのあざとさに白けていた。観客の鼻面をとってひきまわす、とまではいわぬにせよ、彼らの詐術にどこか見え透いたものをおぼえていたといいかえればよいだろうか。スクリューボール・コメディをつよく意識した『未来は今』には、三〇年代風コメディを五〇年代風の暗いワイドスクリーンで見せる強引さがあった。実話仕立てに見せかけた『ファーゴ』には、間抜けな悪党と寒い土地の情感を分かちがたくからませながら、神経症的な計算高さがちらほらとのぞいていた。

あらためていうまでもないだろうが、これまでのコーエン映画は、「ジャンル映画のルールを裏切る」ことにかなりのウェイトをおいていた。ジャンル映画につきものの「定型的な話法」にのっとるふりをしながら、じつはその話法にけっして吸収されないような仕掛け。コーエン兄弟はその仕掛けに委曲を尽くし、さまざまなトリックを(ときにはギミックさえ)用意してきた。だが、「ルールを裏切る」という行為は「ルールをそれだけつよく意識している」ことの反証といえなくもない。これは私のひねくれかもしれないが、『ファーゴ』の世評が高かったのは、あの作品がいつになく語りの一貫性にめぐまれ、「ルール違反」がすくなかったからではないだろうか。この映画に拍手を送った人たちは、コーエン兄弟の才気を賛える一方で、彼らがじつはルールを尊重する行儀のよい映画作家であると感じて安堵の吐息を洩らしたのかもしれない。だが、ほんとうにそうだろうか。コーエン兄弟とは、「口は悪いが性根はきれいな」グッド・バッド・ボーイズなのだろうか。そんなふうに結論を出すのは、どうも釈然としない。私の見るところ、この兄弟がほんとうに好きなのは、ばかばかしいほど滑稽なアナーキーさと、ナンセンスなまでのおかしさだと思う。いいかえれば、彼らが執拗にもとめているのは「こぎれいな意味づけに要約されないアナーキーな状態」であり、「どんな終点へもたどりつかないナンセンス」ではないか。そのためには、ルールを裏切ることを目的にしている暇はない。ジャンル映画のルールを十分に意識しつつ、それと軽やかに戯れる——この体勢に入ったとき、コーエン兄弟の映画は水を得た魚さながら精彩を放つように思う。

『ビッグ・リボウスキ』の冒頭に出てくるのは、荒地をころがるタンブルウィードである。そう、西部劇でおなじみの、ころころところがる乾いた草のかたまり。背後から流れてくる音楽もサンズ・オブ・パイオニアーズが歌う『タンブリン・タンブルウィーズ』だ。だが、ころがる草の行く先は、西部の荒野ならぬ夜のロサンジェルスらしい。しかもこのロサンジェルスは、ネオンと悪徳の輝くハリウッドやベヴァリーヒルズでもなければ、不穏な暴力の匂いに満ちたダウンタウンやサウスセントラルでもない。われわれの眼に映るのは、凡庸で殺風景で無気力で、ほとんど自堕落な匂いさえ感じさせるノースハリウッドの一画である。

ほどなく、そんな画面に、低くて太い男の声でナレーションがかぶさる。《時代は九〇年代の初め。アメリカがサダム・フセインを相手に戦争をしていた時代のこと……》。声とともに映し出されるのは、〈ラルフズ〉でミルクの紙パックを買っているジェフ・ブリッジスの姿だ。ショーツにTシャツ。サングラスと長髪と不精髭。長いコートと足もとのサンダル。画面の外から聞こえる声は、見るからにだらしないこの男がデュードという名で通っていることを告げる。デュードは六十九セントのミルクをラルフズのクレジット・カードで買う。説明するまでもないだろうが、ラルフズ

『ビッグ・リボウスキ』

Digitized by Google

というのはロサンジェルスのどこにでもある、サミットやセイフーのようなスーパーマーケットだ。デュードはミミズがのたくったような字でカードにサインする。レジスターの脇のテレビには、インタビューに答えるブッシュ大統領の姿が映っている。声はさらにつづける。《この男はぐうたらだ。ロサンジェルス郡広しといえども、これほどのぐうたら男はまずほかに見当たるまい……》

ところが、このぐうたらデュードにいきなり災難が降りかかる。ミルクのパックを手にボロ家のドアをあけたとたん、二人組の暴漢に襲われ、便器のなかに顔を突っ込まれてしまうのだ。西洋人と中国人の二人組は「おまえの妻のバニーが横取りした金を払え、ミスター・リバウスキー」と凄み、あまつさえ、彼が大切にしている敷物の上で長々と放尿する。デュードは茫然とたたずむ。なるほど、彼の本名はジェフリー・リバウスキーにちがいないが、その名で呼ばれたおぼえは久しくない。ましてや彼は、結婚などとまったく縁のない生活を送っている。これは人ちがいだ——事情に気づいた暴漢が去ったあとで、デュード自身もぼんやりとそう考える。

さて、ところは変わってボウリング場だ。だらけきった空気の充満するこの場所は、デュードと友人たちのたまり場らしい。ヴェトナム戦争の兵士だったウォルター・ソブチャック（ジョン・グッドマン）は、刈り上げの短髪に薄茶色のサングラスをかけた巨漢だ。もうひとりの友人ドニー（スティーヴ・ブシェーミ）は、色ちがいのボウリング・シャツを何枚かもっているようだ。短気でこらえ性のないウォルターは、客観性と裏付けに欠ける思いつきの意見を自信満々で口にする癖がある。頭のネジがすこしゆるんだドニーは、話に割り込もうとするたび、ウォルターの居丈高な態度に抑えつけられている。あとでわかることだが、彼の本名はセオドア・ドナルド・キャラボッソスというらしい。つまりこのトリオはポーランド系が二人にギリシャ系が一人というわけで、チームを組んだ彼らはボウリングのトーナメント（もちろんご近所大会だ）に参加している。

ふたりを相手に先夜の災難をぼやいたあと、デュードは「もうひとりのリバウスキー」をたずねていく。訪問先は、パサディナの豪邸に暮らすビッグ・リバウスキー（デヴィッド・ハドルストン）。朝鮮戦争の際に負傷して車椅子の生活を余儀なくされてはいるものの、リバウスキーは意気さかんで、敷物の弁償を請求するデュードを突慳貪にあしらう。その秘書をつとめているブラント（フィリップ・シーモア・ホフマン。『ブギーナイツ』でゲイの青年スコッティJを演じた人。最近では出色の性格俳優だ）は、ダークスーツにレジメンタル・タイを締め、堅苦しい英語を話しながらもどこかつかまえどころのない玉虫色の表情をしばしば浮かべる。結局、敷物を勝手に持ち出したデュードはブラントに送られ、邸をあとにしようとするのだが、去り際にリバウスキーの妻バニー（タラ・リード）に出くわす。バニーが寝そべるバルコニーの下では、彼女がニヒリストと呼ぶユーリという男（ピーター・ストーメア）がプールにぽっかりと浮かんでいる。リバウスキーの娘より若そうなバニーも、水に浮かんで昼寝をしているニヒリストも、イタリア風の豪邸にはあまりそぐわない。バニーはデュードに向かって「千ドルくれたらフェラチオしてあげるわよ」と本気とも冗談ともつかぬ声をかける。ブラントはそれを聞いてあわてる。バニーはそんなブラントを見て「横で見るだけなら百ドル」と追討ちをかける。

いや、この書き方では『ビッグ・リボウスキ』の空気はあまりよく伝わらないにちがいない。伝わらないどころか、これではフィリップ・マーロウやリュウ・ハーパーの登場するフィルム・ノワールの出だしと大差ないように思えるかもしれない。もちろん、それはそれでかまわない。なぜかまわないかといえば、コーエン兄弟自身が、『ビッグ・リボウスキ』の露骨な下敷としてフィルム・ノワールというジャンルを用意しているからだ。

だが、もうひとつつけくわえておくことがある。下敷が露骨だというのは、彼らが最初から観客にピックオフ・プレーを仕掛ける意思を放棄していることの証明にほかならないのではないか。思えば、彼らの処女作『ブラッド・シンプル』もフィルム・ノワールをはっきりと意識した映画だった。しかし、『ブラッド・シンプル』と『ビッグ・リボウスキ』の感触はまったく似ていない。もっとざっくばらんにいうなら、『ビッグ・リボウスキ』の登場人物は、立ち上がりから非常にコミックス的な処理をほどこされている。ラルフズのカード（あとでわかることだが、彼はこれ以外に身分を証明するものはもっていないようなのだ）でミルクを買うデュードのおかしさはいうまでもない。ひとつの会話に最低五回は四文字言葉をさしはさむウォルターのおかしさ。堅苦しい態度と言葉で武装しながら、その一方では慇懃で曖昧でいかがわしげな表情をひとつの笑顔に溶け込ませているブラントの怪しさ。彼らを初めとして、冒頭部分に現われる人々を、コーエン兄弟はじつにリラックスした感じで描写している。そう、ここで用いられるフィルム・ノワールの器は透明なガラスなのだ。われわれはそのガラスを通じて「ぐうたらデュードのぐうたら冒険」を予感する。ついでにいえば、そこに群れつどうのは、そろいもそろって「ぐうたらな人々」にほかならない。

（この項つづく）

Digitized by Google

田沼雄一 映画を訪ねて

その㊇ 「東京日和」の島津がカメラに収めた東京の片隅を歩く

ＪＲ中央線・神田駅と御茶ノ水駅間に［御成道］のレンガ塀はある。

竹中直人主演・監督の「東京日和」（九七年）は、東京の片隅、普段は忘れられている場所が出てきたのがなによりうれしかった。竹中直人は「１１９」（九四年）でも西伊豆という設定ながらお豆腐屋のシーンだけは東京、本郷の路地裏のお豆腐屋にわざわざロケしている。きっと昔熱心に観た日本映画の、たとえば成瀬巳喜男監督の東京路地裏描写に影響されたのかもしれない。

島津（竹中直人）と妻・ヨーコ（中山美穂）は京王線・下高井戸駅と連絡している、三軒茶屋間を走る東急世田谷線の沿線に住んでいるという設定。大都会のほぼ真ん中を走る豆電車のような路線である。画面に映っただけで妙に郷愁を誘う。

世田谷線の線路に沿う細い道を島津が肩落として歩いてくるところは名場面。細い道、寂しそうな男の風景に豆電車は見事に溶け込んでいる。

「東京日和」では松たか子が印象深い。大きな役ではないが、ドラマにアクセントをつける大切な役だった。島津と親しい水谷。二人がバッタリ出会う場面がいい。

レンガ造りの高い塀。いや、上に電車が走っている。線路の下が車道に沿ったレンガ造りの塀になっている。通過する電車はＪＲ中央線。映画では、レンガの塀の前バス停があって停車したバスから水谷が降りてきて、レンガ周辺を撮影していた島津と出会うという場面だった。

場所はすぐに分かった。ＪＲ中央線がレンガの上を通過する箇所はひとつ。神田駅と御茶ノ水駅間。聖橋、線路の向こうの神田明神を眺めながら神田駅方向へと歩く。坂道を下る。レンガの塀はすぐに見えてくる。秋葉原へ続く昌平橋のちょっと先。ただしバス停はありません。

あの場面で島津はレンガ塀に立て掛けられている看板を撮影していた。映画用のセットだろうと思っていたら、なんと実際にあるではないか。なにが書かれているかというと、レンガ塀前の道の説明で、そこは江戸期に書かれた「御府内備考」という書物によると「上野広小路に至る道」で［御成道］と呼ばれ親しまれたそうだ。

御成道でバッタリ会った島津と水谷はたぶん近所という設定なのだろう、とある喫茶店でくつろぐ。喫茶店の名は［さぼうる］。神田駅近くではなく、都営三田線・神保町駅を上がったところにある。レンガ塀から徒歩十分はかかるだろ

Digitized by Google

島津が懸命にシャッターを切った月島の小さなお店はいまも健在。

う。とても「近所の喫茶店」とは言えない。この喫茶店は近くの出版社の編集者の溜まり場。水谷に「出版関係にいこうと思ってるんです」と言わせるためにこの喫茶店にロケしたのかもしれない。「東京日和」と同じ年、「失楽園」（九七年）でもこの喫茶店が登場する。役所広司演じる編集者、久木が勤める出版社の近くの喫茶店という設定である。

しばらくして、島津はヨーコを呼び出す。待ち合わせ場所は東京駅構内にある「東京ステーションホテル」。ホテル内のバー・オークで島津は待っている。そのとき島津は文庫を読んでいる。国木田独歩『運命』。竹中直人のインテリぶりはこういう何気ないところでさりげなくフワァ〜とにじみ出る。

東京ステーションホテルは東京駅南構内の真上に造られている。ホテル内の回廊から眺める東京駅構内を島津はカメラに収める。ヨーコが改札口に降りる。ステーションホテルの島津に手を振る。それを島津はカメラに収める。別れの切なさの中に美しさを感じさせる印象的なショットだ。

撮影後に世田谷線沿線を訪ねる竹中直人監督（97年11月上旬号より）
撮影／雷松覚

「東京日和」を語るとき島津とヨーコの最後の〈センチメンタルな旅〉、九州・柳川行に触れる必要があるのだが、あえて東京の路地裏にこだわりたい。またそのほうが「東京日和」らしいと思う。ちなみに映画のラストの舞台ともなった「きゅうらぎ駅」（厳木と書きます）はJR唐津線にあります。

島津がカメラを手に築地の先、月島界隈を歩く場面が好きだ。「東京日和」の中でいちばん好きなシーンかもしれない。軒と軒が重なり合う路地。人通りが少ない、静かな町。大都会の片隅、そこだけが時間が止まってしまったような場所。島津は失われそうな東京の姿を懸命にカメラに収める。

東京ステーションホテルの回廊から眺めた東京駅南口構内。

島津はふと足を停める。路地の小さなお店。風雨にさらされ続けてきた看板がその店の歴史を物語っている風にも思える。「瀧瀬靴店」と書かれた看板。島津はカメラを向ける。その靴店はたぶん映画用、どこかのお店を借りて靴店の看板セットを掲げたのだろうと思っていた。看板には住所、電話番号が書かれている。（ずいぶん丁寧な造りだなぁ）と感心した。

だが待てよ、「家族ゲーム」（八三年）の東雲の本屋は映画用の設定とばかり思っていたら、実際にあったではないか。それと同じことがあるかもしれない。とりあえず月島へ行ってみよう、看板の住所を探そう、と思った。営団有楽町線・月島駅下車。そこから歩くこと五分ほど。めざす番地を探すことができた。驚きましたねぇ、映画のまんま、そのままに瀧瀬靴店は月島の路地にひっそりとお店を構えていたのです。こういう発見は本当にうれしい。

小ぶりの店構え、長年、月島の町の移り変わりを見てきた年季を強く感じさせる。「東京日和」にふさわしい都会の片隅の、ポツンと建つお店。いや、町の変遷を目撃してきた文化財のような存在とも言える。現在も営業されている。こういうお店にはできるだけガンバっていてほしい。とても良いものを見させてもらった気分。心が和んだ。

Digitized by Google

和田誠　三谷幸喜の映画対談

これもまた別の話

●今月のお題「薔薇の名前」――前編

ジャン＝ジャック・アノーって凝り性の監督さんですよね

和田　今回は「薔薇の名前」(86)です。ちょっと難しそうな題材だけど、これは三谷さんが言い出したんですからね(笑)。

三谷　原作は読まれました？

和田　読んでないです。原作こそ難しそうでしょう。

三谷　そうなんです。僕は挫折しちゃったんですよ。映画で言うと冒頭のウィリアムが修道院にやってくる前でやめてしまいました。

和田　(笑)。あの前がそんなに長いんですか？

三谷　いや、長くないんですけど(笑)。

和田　原作者のウンベルト・エーコ(註①)って人は記号論学者らしいんだけど、そもそも記号論っていうのが僕はよく分からないんですよね。

三谷　こういう時こそ助っ人にいて欲しい。記号論って、暗号を解くとか、そういうことですか？

和田　もっと難しいことじゃないですか(笑)。でも、この映画はそんなに難しいものではなくて、ミステリー、犯人捜しと思えば、そんなに面倒な映画じゃない。

三谷　「悪魔の手毬唄」(77)とか、ああいうものだと思えばいいんですね。

和田　そうそう。殺し方にも似てるのがあるでしょう、鍋から死体の足だけ出てるやつ。あの辺は横溝正史みたいだしね。

三谷　この映画って皆観てるのかな。僕はシネマスクエアとうきゅうで観ました。

和田　単館で公開して、結構ヒットしたんですよね。ジャン＝ジャック・アノー(註②)っていう監督は、「ブラック・アンド・ホワイト・イン・カラー」(77)っていうのがデビューですね。僕は見てないんですけど。去年は「セブン・イヤーズ・イン・チベット」(97)で来日してましたね。

三谷　テレビで見ましたけど、なんかお調子者だったな。ブラッド・ピットと二人で掛け合いみたいなことやってて。変な頭なんですよね。

和田　大きい頭で。

三谷　お茶の水博士みたいな髪型で。もっと気難しい人かと思ったんですけど。

和田　映画を見ると、ちょっとそんな感じもしますけどね。でも変ったことが好きな人でしょう。「人類創世」(81)も変わった映画でした。

三谷　あれってストーリーはあるんですか？

和田　原始人が火を求めて放浪の旅に出る話。でも全編台詞はないんですよ。

三谷　「恐竜100万年」(66・註③)みたいな映画？

和田　というより、「絶壁の彼方に」(50)みたいに、アントニー・バージェス(註④)が原始人の言語を作って、それが台詞になってる。わずかしかないですけどね。「薔薇の名前」もメイクが凝ってますけど、「人類創世」も凄い。ライオンに牙つけて、古代のライオンにしたり、マンモスなんか、本物の象に毛を着けてるんじゃないかな(笑)。

三谷　アカデミー・メイクアップ賞を取ってますよね。象のメイクで……？

和田　人間のメイクの方でしょう(笑)。

三谷　アノーの「子熊物語」(88)も面白かったですよ。

和田　それは見てないです。

三谷　ドキュメンタリー風なんですけど、ちゃんとお話になってるんです。崖崩れでお母さんを亡くした子熊が旅をする話。熊がいい芝居するんですよ。台詞もナレーションもな

註①　ウンベルト・エーコ(1932～)
イタリア、アレッサンドリア生まれ。ミラノ大学、フィレンツェ大学、ボローニャ大学で教鞭を取り、また世界的な記号論者として国際記号学会会長を務める。著書に『トマス・アクィナスにおける美学的問題』『開かれた作品』『記号論』『フーコーの振り子』などがある。『薔薇の名前』は1980年に発表した処女小説。

註②　ジャン＝ジャック・アノー(1943～)
フランスのトラヴェイユ生まれ。幼い頃から映画を志し、ソルボンヌ大学で美術、ギリシャ語、中世史を学んだ後、IDHECで映画を学ぶ。卒業後500本を超すコマーシャルを演出して数々の賞を受賞ひて注目を集める。初監督作「ブラック・アンド・ホワイト・イン・カラー」(77)はアカデミー外国語映画賞を受賞。以後「人類創世」(81)「子熊物語」(88)「愛人／ラマン」(92)、3Dアイマックス・フィルム「愛と勇気の翼」(95)「セブン・イヤーズ・イン・チベット」(97)を発表している。

Digitized by Google

いんですけど、熊の表情で気持が伝わってくる。全編どうやって撮ったんだろうという感じです。

和田　人間じゃなくて、熊だけの話なんですか。

三谷　ええ。熊に芝居心があるとは思えないので、きっと物凄い時間カメラを回して、それっぽい表情のカットをうまく編集してるんだと思います。凝り性の監督さんなんですね。

和田　「愛人／ラマン」（92）っていうのが、一番普通の映画かな。ヒットもしたしね。その次の「愛と勇気の翼」（95）は、眼鏡かけて見る3Dの立体映画だった。ちゃんと見世物風に作ってて、面白かったですけどね。僕が観た中では「薔薇の名前」が一番面白いな。

三谷　僕は専攻がずっと日本史だったので、世界史がまるで苦手で。この映画も宗教的な時代背景が分からないまま見てたんで、いろいろ聞きたいことがあるんですけど。

和田　僕も駄目ですよ。だから質問されても困る（笑）。まず、老人になったアドソが回想してるナレーションから始まるんですね。それがアドソだということは、しばらく見てないと分からないんですけど。1327年、北イタリアの修道院に、バスカヴィルのウィリアム（ショーン・コネリー　註⑤）と少年アドソ（クリスチャン・スレーター　註⑥）がやってくる。ウィリアムはイギリス人だけど、アドソってイギリスの名前じゃないですね。

三谷　メルクのアドソ。原作をちょっと見直したら、フランスの人でした。メルク男爵の末息子って言ってる。しかしこの修道院の人達は、みんな変な顔ですよね。

和田　この映画、ショーン・コネリーとクリスチャン・スレーター以外は皆変な顔してますよ。鼻を大きくしたり、メイクでそうしてる人もいるし、変な顔の人を選んでるっていうこともある。

三谷　サルヴァトーレ役の人は「ライオン・キング」のイボイノシシに似てるんですよ、『ハクナマタタ』を歌った（笑）。

和田　あのロン・パールマン（註⑦）って俳優は、「人類創世」では原始人の役でした。

三谷　この人、「エイリアン4」（97）でも似たような感じでした。一度見たら忘れられない顔。別所哲也さんを、思いっきり崩したような感じ。

和田　文書館長の鼻のとがった人、マラキーア（フォルカー・プレシュテル）は、「スター・ウォーズ／ジェダイの復讐」（83）でジャバ・ザ・ハットのそばにいつもくっついてる、サレシャス・クラムに似てる（笑）（註⑧）。

三谷　修道院長のミッシェル・ロンダール（註⑨）もよく出てる人ですよね。

和田　普通の役をたくさんやってます。

三谷　「ジャッカルの日」（73）のレベル刑事。でもやっぱりこれでは変な顔ですもんね。普通の顔のはずなのに、この映画ではやっぱり変な顔になってる。

修道士ウィリアムはシャーロック・ホームズみたい

和田　この修道院には、世界各国から修道僧が集まって来てるんですね。ウィリアムもどこかで出会ってアドソを弟子にしたのかな。

三谷　そもそも彼らが何をしに来たのか、よく分からないんですよ。

和田　会議に来たんです。

三谷　後半に出てくる会議？　あれは何の会議ですか？

和田　清貧というものが正しいのか、協議するための会議。キリストが着ている衣服はキリストのものであるか、聖職者は自分の財産を持っていいかどうかという会議なんですね。このベネディクト派の修道院に、聖職者は清貧に甘んじようというフランチェスコ派と、聖職者は富と権力が必要だという教皇派が集まってくる。

三谷　ベネディクト派は、贅沢してもいいと言ってる方ですか。

和田　どちらかというとそうでしょう。その他にフランチェスコ派よりもっと過激に、贅沢してる奴らを殺してでも財産を分配しようという人達もいたことがそれとなく語られる。

三谷　それが異端と呼ばれる人達ですね。後で出てくるベルナール・ギーはどういう立場なんですか？

和田　異端審問官。裁判官の中の右翼みたい

註③「恐竜100万年」監督／ドン・チャフィ
原始時代の恐竜と人間たちを台詞なしで描いたSF映画。

註④　アントニー・バージェス「時計じかけのオレンジ」（71）の原作者としても知られる作家・脚本家・言語学者。この映画のために、インド・ヨーロッパ語をもとに200語からなる原始言語を考案した。

註⑤　ショーン・コネリー（1930〜）
イギリス、エディンバラ近郊生まれ。鋼鉄労働者、道路工夫などを経て舞台「南太平洋」のコーラスボーイに合格。ロンドンで本格的に演技を学び、54年に映画デビュー、62年「007は殺しの番号」でジェームズ・ボンド役を得て一躍世界的俳優となる。007シリーズを降りた後、「オリエント急行殺人事件」（74）「風とライオン」（75）などに出演して渋い魅力のヒーロー・スターとなる。「アンタッチャブル」（87）ではアカデミー助演男優賞を受賞。ほかの出演作に「インディ・ジョーンズ／最後の聖戦」（89）「レッド・オクトーバーを追え！」（90）「ライジング・サン」（93）「理由」（95）「ザ・ロック」（96）などがある。

註⑥　クリスチャン・スレーター（1969〜）
7歳からテレビドラマに出演、9歳でブロードウェイ・ミュージカルに出演、子役と

Digitized by Google

な人じゃないですか。

三谷　対立する二人の勢力があって、それが辺鄙な片田舎でひしめき合っていて、なんか不穏な空気が漂ってるところに殺人事件が起こる。そこが何か横溝作品ぽいですよね。本家と分家の争いみたいで。

和田　（笑）。いろんな立場のが大勢出て来て、人間関係が分かりにくいですね。名前も長くて覚えにくいし。丸い禿げの人とか、そういう風にしか覚えられない（笑）。

三谷　登場人物が多いだけに、あれだけ皆変な顔だと逆に助かりますね。識別できて。フランチェスコ会の人だけは、妙に顔立ちが整っていたり。あえて記号的に作ってるところもあるかも知れませんね。

和田　それはあると思う。

三谷　あそこで会議があるってことは、有名な修道院ってことですか。

和田　ジュネーブみたいなところなのかな。それにしては辺鄙な場所ですけど。

三谷　今の国際会議も、わざと都会から離れたところでやりますよね。ああいうこと？

和田　実際にヨーロッパを旅すると古い教会とかお城とか、観光客も行かないような田舎に忽然と建ってたりするんですよね。そういうところをうまく探してロケしたんじゃないかな。ロケだけじゃなくて、セットもすごいですけどね。まあ、その修道院にウィリアムとアドソがやって来る。着いて早々、アドソがトイレに行きたいと思ってると、ウィリアムが「自然の欲求に逆らっちゃいけない」と言って、トイレの場所を教えるんですね。「ここを出て左に行って、右に曲がって三番目のアーチの裏……」なんて、シャーロック・ホームズ的な性格をいきなり見せる。

三谷　ここはまさにホームズですよね。アドソはワトソン。だから“バスカヴィルのウィリアム”って名前なんだ、と何かで読みました（註⑩）。

和田　なるほど。ウィリアムは、お墓をカラスがつついているのを見て「最近誰か死んだでしょう」って院長に言うんですね。院長は相談しようかどうしようか、ちょっと考える。ウィリアムは過去にも名探偵ぶりを発揮したことがある、そんな雰囲気でしたね。

三谷　院長は悩んだ末に修道院のアデルモという青年が塔から落ちて死んだことをウィリアムに話す。「悪魔の手毬唄」で若山富三郎の磯川警部が金田一さんに村で起こった不思議な出来事を話す、あの感じですね。死んだ青年は、あれは何をしていた人なんですか？

和田　字幕には写字生って聞き馴れない言葉が出ました。昔、印刷がなかった頃は、写経みたいに本を全部写してたんですね。そこにイラストレーションも描く。そんなことをやってた若者が死んだ。女みたいに魅力的な奴だったというのがちょっと伏線になってます。で、どうも彼の死に方がおかしいから調べて欲しい、と院長が言うんですね。

三谷　この謎の提出の仕方がワクワクします。

和田　塔の窓は閉まってたから、自分で飛び降りたんじゃないはずだ、とか。

三谷　塔の下を調べたウィリアムは、「死体は向こうから転がってきたんじゃないか」とちょっと石を動かすと、コロコロ転がっていく。坂になってるんですね。

和田　明解に示していくんですね。

三谷　まあ大した推理じゃないんだけど。ミステリー小説の映画化って、好きで沢山見てるんですけど、実は謎解きの部分よりこういう細かいところのセンスとか雰囲気が大切というか大事な気がして。本格ミステリー小説を小説より面白く映画にするのは凄く難しいんですよね。だからむしろ、こういったディテールで面白がらせてくれる方が、僕は嬉しい。この石のコロコロみたいな。

和田　そうですね。大体名探偵っていうのは、どうしてわざわざ事件のあるところへ行くんだ、っていう謎がある（笑）。金田一耕助だってポワロだって、必ず旅行先で連続殺人なんかが起こる。これも、そういうオーソドックスな推理小説のパターンを踏んでますよね。

三谷　そして必ず未然に防げない。金田一は毎回、もっと早く気づくべきだったって言ってますからね。

和田　一通り殺されてから解決するんですよね（笑）。

三谷　原作は、確かこの作者のエーコがどうやってアドソの手記をみつけたか、というところから始まったような気がします。そこまでしか読んでないんですけど（笑）。

和田　つまり、現代のエーコが手記をみつけたから発表します、というスタイルになってるんですね。なるほど。

三谷　ホームズ映画でもそういうパターンが多いですよね。ビリー・ワイルダーの「シャーロック・ホームズの冒険」（70）もワトソンの手記が発見されるところから始まる。

和田　そうでした。それでコナン・ドイルの原作にはないお話になっているんですね。

横溝正史のシリーズを彷彿とさせるミステリー

三谷　ショーン・コネリーって、ギリギリ僕の世代くらいまでが、「ネバー・セイ・ネバー・アゲイン」（83）で007やってるのをリアルタイムで見てるんですよ。「007」のイメージが強いお客さんは、こういう彼のイメージチェンジを当時どういうふうに受け止めたんですか？

和田　いきなりだったらびっくりしたでしょ

註⑦　ロン・パールマン（1950〜）
アメリカ、ニューヨーク生まれ。高校時代から演劇に打ち込み、大学在学中から多数の舞台に出演。81年、アノー監督の「人類創世」で原始人に扮して映画デビュー。テレビシリーズ「美女と野獣」（87〜89）で人気を得た。主な映画出演作に「蜘蛛女」（93）「ロスト・チルドレン」（95）「D.N.A.」（96）「エイリアン4」（97）などがある。して活躍した後、85年の「ビリー・ジーンの伝説」（V）で映画デビュー。本作で注目され、以後「ヘザース／ベロニカの熱い日」（89）「今夜はトーク・ハード」（90）「ロビン・フッド」「モブスターズ／青春の群像」「カフス！」（91）「忘れられない人」「トゥルー・ロマンス」（93）「告発」「インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア」（94）「ブロークン・アロー」（96）「フラッド」（98）などに出演している。

註⑧　サレシャス・クラムとフォルカー・プレシュテル

Digitized by Google

うけど、コネリーは「007」やりながら他の役も演じてたでしょう。ヒッチコックの「マーニー」(64)とか、「丘」(65)とか。だからちゃんと彼の成長というか、年の取り方を見てましたからね。

三谷 テレビで若い頃の彼をよく観ていたからか、僕は、これで突然変わったという気がしちゃって。

和田 僕はあまり思いませんでした。うまく年を取っているなって感じ。「007」も思ったほど沢山はやってないでしょう。「ネバー・セイ・ネバー・アゲイン」を入れて七本。ロジャー・ムーアも七本。

三谷 ロジャー・ムーアの方が三歳年上なんですよね。

和田 それは知らなかった。年上の人に交替するっていうのも凄い(笑)。

三谷 「007」以外だとなんだろう。「風とライオン」(75)は良かったですね。

和田 ええ。他にも「ロビンとマリアン」(76)「オリエント急行殺人事件」(74)、「王になろうとした男」(76)も、「007」とは全然違う印象だった。その後の「アンタッチャブル」(87)や「インディ・ジョーンズ/最後の聖戦」(89)でも、段々渋くなっていった気がします。普通二枚目のヒーローをやってきた人って、髪が薄くなってくると一所懸命カツラなんかでごまかそうとするものだけど、この人は全然そういうことをしない。年をうまく利用して演じてるんですね。

三谷 「007」の時はカツラだったんですか。

和田 だんだんそうなってきたようですよ。あれは禿げてちゃ格好悪いから(笑)。

三谷 そうか、「007」の時はカツラを着けて髭なしで演じて、それ以外の時はカツラを取って髭モジャで出ていた。それで違和感なくイメチェン出来たのかもしれませんね。

和田 (笑)。話を映画の方に戻すと、ウィリアムとアドソが塔の下で調査をした後、豚小屋で豚をさばいてる横を通る。血を樽に入れてるんですね。これがまた伏線になってる。

三谷 二人が修道院に行くと、ウベルティーノ神父(ウィリアム・ヒッキー 註⑪)がうつ伏せになってます。これがまた妙な男で。

和田 ウィリアムとは昔からの知り合いなんですね。ちょっと変わった神父で、ウィリアムに「この修道院には悪魔がうごめいている、立ち去れ!」なんて言う。

三谷 まるで「八つ墓村」(77)じゃないですか。「八つ墓明神の祟りじゃ」とか言うおばあさん。あれ、濃茶の尼っていうんですけど。

和田 あのシリーズは金田一耕助に「立ち去れ」って言う人がよく出て来ます。

三谷 その後、塔の下を通りかかると、ドサッと修道院から物が落とされて、それに人が群がってる。

和田 貧しい人達が教会の施しを受けてるんですね。

三谷 あの人々はどこに住んでるんですか?あの修道院の周りに村があるんですか?

和田 城下町みたいになってるのかな。

三谷 年貢を取り立てたりしてるんでしょうか。

和田 殿様もいないのにね。村の人が並んで、家畜とか作物を教会に納めてるシーンもあったでしょう。「天国に行けばこれが百倍になって返ってくる」とか言われて。

三谷 黒澤監督が亡くなった時、追悼の思いで「乱」(85)と「七人の侍」(54)を見たんですけど、凄いと思ったのは位置関係がよく分かることです。この映画も漠然とですけど、どこに何があるか、地理関係が意外と頭に入りやすい。俯瞰で見せるわけじゃないけど、いろんなものの場所が頭の中に自然に入ってくる。これって、面白い映画の秘訣のような気がするんです。

和田 そうですね。戦争映画でも、この橋を守らなきゃいけないという時に、ドイツ軍がどこから攻めてくるのか、どこを守れば大丈夫なのか分からないことがあるんですよ。ああいうのは困る。

三谷 そうなんですよね。黒澤監督の映画は、どう戦ってどう勝ったかがとてもよく分かる。どういう作戦だったかまで分かるんです。改めて凄いと思いました。どうぞ、話を戻して下さい。

和田 その後、夕食の時間になって、神父がお説教してる。ここで院長が、「ウィリアムが来てくれたからには、彼の過去の経歴から考えてもすぐに事件の謎は解決するだろう」と言う。アドソが過去の経歴って何か聞こうとするんだけど、ウィリアムは「まあいろいろあらあね」みたいなことを言うんですね。

三谷 ちょっと脚本的に変だと思ったのは、相当長い間この二人は一緒に旅してるわけですよね。過去の話なんてずっと前に聞いてとっくに怒られてる筈なのに、ここで初めて聞いたみたいで、ちょっと不自然な気がした。

和田 それは気がつかなかった。

三谷 テレビドラマでよくあるのは、結婚式に呼ばれた家族が家に戻ってきて、「いやあ今日の花嫁は不細工だったな」なんて話す。でもそんなことは帰りのタクシーの中で話してるはずなんです、本当はね。

和田 (笑)。その夜、修道院の人たちのそれぞれの様子が映る。本を読んでる人とか、自分を鞭で叩いてる人とか。

三谷 本を読んでる人は、なぜか笑ってるんですよね。ここではまだ彼らの説明は何もない。夜が明けると、2番目の死体が発見され

註⑨ ミシェル・ロンダール(1931〜)
フランス、パリ生まれ。父はイギリス人、母はフランス人で英仏2カ国語が自在なため、フランソワ・トリュフォー、ルイス・ブニュエル、オーソン・ウェルズ、フレッド・ジンネマンら世界の巨匠監督の作品に出演。主な出演作に「審判」(62)「好奇心」(70)「ジャッカルの日」(73)「自由の幻想」(94)「007/ムーンレイカー」(78)「炎の

三谷幸喜さん

和田誠さん

Digitized by Google

ます。豚小屋の、血の入った樽に逆さまに入れられて。

和田　この人が前の夜、笑いながら本を読んでたヴェナンツィオですね。

三谷　ちょっと二枚目の。

和田　黒人の血が混じってるような感じの人。

三谷　最初に塔の下で死んだアデルモの顔は出て来ませんけど、綺麗な顔をしてたという台詞があったじゃないですか。次に殺されたこの人も、変な顔ばっかりの修道院の中では唯一まともな顔だったから、何かそこに鍵があるのかと思いました。これは顔で殺されてるぞって。でもミスディレクションなんですよね。そこまで計算してるかどうか分からないけど。ただ、どうして樽に逆さになって死んでるんでしょう。

和田　ウベルティーノが叫んでた黙示録の内容に合わせてるんでしょう。「雹のあと二度目のラッパが鳴り、海は血に染まる」。

三谷　ここも「悪魔の手毬唄」に似てますよね。

和田　あれも手毬唄の歌詞に合わせて人が殺されていくんですもんね。

三谷　逆さで死んでるのは「犬神家の一族」。これちょっとネタばらしになるんで「犬神家～」の原作を読んでない人は飛ばしてほしいんですけど、「犬神家～」も、犬神家に伝わる家宝「斧（よき）、琴、菊」に合わせて殺人が起こる。「琴」は死体に琴線が結んであって、「菊」は菊人形と一緒に死体が並んでる。三番目の佐清（すけきよ）の死体は湖で逆さになって水から下半身だけ出して死んでいる。あれって本当は「すけきよ」を反対から読んで「よきけす」、その半分だから「よき」。そういう意味があるんですが、映画ではそれが全然描かれていなかった。たまたま湖に死体を投げ込んだらああなったという感じで。あれはちょっと納得いかなかった。

和田　ウィリアムは、今回と前の死と関係があるか調べたい、と言う。それで遺体を解剖するんですね。この時すでに、ウィリアムは砒素の話をするでしょう。「修道院で砒素を使うことがあるのか」って。「神経衰弱のために薬として使うけど、度が過ぎると死ぬ」と言われるんですね。死んだのがギリシャ語の翻訳家だったことも分かる。

三谷　解剖するのは植物学者のセヴェリーノ。この人もいい味出してますよね。刑事ドラマにも必ずこういう人が出てくる。顔なじみの気のいい解剖医。

和田　そうそう。この時、ウィリアムはヴェナンツィオの指が黒く汚れてるのを見つけるんですね。その後、アドソが修道院の中を調べてるとサルヴァトーレが暗がりから突然出て来て、「ペニテンツィアジテ！」って意味の分からないことを叫ぶ。

三谷　やたら「ペニテンツィアジテ」って言うところが、また「ライオン・キング」の『ハクナマタタ』を彷彿させて、余計にサルヴェトーレがイボイノシシに見えるんですよね（笑）。

和田　そこへ来たウィリアムは、サルヴァトーレの言葉をドルチーノ派の警句、「悔い改めよ」という意味だと言う。ドルチーノ派は清貧が正しいとする人達で、教会が裕福になるのに反対して人を殺したりするんだと解説するんですね。ここで名台詞を言うんですよ。「信仰と狂気の差はわずかしかない」。

三谷　何か、オウムとか最近話題の新興宗教を思い出してしまいます。

和田　外に出ると、ウィリアムが雪に何か証拠が残ってるかも知れないと言って二人で調べてみる。すると案の定、足跡が残っていて、ここでも推理するんですね。「他の足跡より深いのはどういう訳だ」とアドソに聞く。「太ってて重い人でしょうか」とアドソが言うと、「もう一人抱えて歩いたのかも知れない」。

三谷　結局、両方当たってるんですね。太ってるし、人も抱えてた（笑）。足跡とか、この人は後ろ向きに歩いて行ったはずだとか、ここも謎の散りばめ方のセンスがいいですね。

和田　踵の方が深くなってるから、後ろ向きに歩いたって。それで今度は写字室に行ってみる。白ポチャの修道士、ベレンガーがネズミを見つけてキャーキャー逃げてると、そこにいる人たちが笑うんですね。すると目の白い文書館長ホルヘが怒って入ってくる。あの人は目が見えないんですかね。

三谷　「盲目の文書館長」って資料には書いてありますけど、ちょっと見えてる感じがしますよね。白内障かな。うちの犬がああいう感じだった。

和田　映画の最後の方なんか、盲目には見えないですよね。とにかくホルヘが「笑いは悪魔の風だ」と怒る。「笑うと猿の顔になる」っ

ランナー」（81）「日の名残り」（93）「とまどい」（95）がある。英語映画の時は、マイケル・ロンズデイルとクレジットされることが多い。

註⑩　バスカヴィル
『シャーロック・ホームズ』シリーズに『バスカヴィル家の犬』という一篇がある。

註⑪　ウィリアム・ヒッキー（1928～）
アメリカ、ニューヨーク生まれ。数々の舞台に立った後、「聖ジョーン」（51）で映画デビュー。主な出演作に「女と男

Digitized by Google

て言うと、ウィリアムは「猿は笑わない、笑うのは人間だけだ」。ホルヘは「キリストは笑わなかった。彼が笑ったという記録はない」とも言うんだけど、ウィリアムは「笑わなかったという記録もない」って言う。

三谷 そういうのが記号論的なのかな。ただの屁理屈のような気もしてくる。

和田 ここでアリストテレスの話が出てくる。「アリストテレスは『詩学』の第2部で、喜劇は真実を伝えると書いている」とウィリアムが言うんですね。「もう何世紀も紛失したままの本だが」と。

三谷 ホルヘは「最初からそんな本は存在しなかったんだ」と言う。ここに出てくる『詩学』って、本当にあるんですか?

和田 『詩学』は実在するんだけど、第二部っていうのはないんだそうです。

三谷 じゃあ、喜劇について書かれた部分も創作なんですか?

和田 そうらしいです。

三谷 実はこの一節はちょっと嬉しかった。

和田 そうでしょう。あれはまさに、三谷さんが『笑の大学』で書いてたテーマだから。

三谷 そうなんです。結局この話って意外にもテーマが「笑い」じゃないですか。だから僕は好きなのかも知れない。

父性的な役がよく似合うショーン・コネリー

和田 ウィリアムが死んだヴェナンツィオの机を調べようとすると、丸ポチャのベレンガーがバンと本を置いて、机を調べさせないようにする。

三谷 二人がそこから出て来て、ウィリアムは「あれだけ人がいるのに、蔵書が少な過ぎる、どこか別の場所に隠してあるはずだ」とまた推理する。これも大したことない推理なんだけど、ショーン・コネリーが言うと凄いことのように思える。

和田 「あの塔に何があるんだ」って言ってると、上から大きな石が落ちてきて、危うくぶつかりそうになる。

三谷 サルヴァトーレが落としたんですね。アドソが追いかけて行って捕まえて、このことを秘密にする代わりに、サルヴァトーレの上司らしいミレージョから文書庫の情報を聞き出します。オーソン・ウェルズの三流のそっくりさんみたいな人。

和田 ミレージョに案内されてまた写字室へ行って、死んだヴェナンツィオの机を調べてみると、焙り出しの紙切れが出てくる。あれは、匂いで焙り出したと分かるのかな。

三谷 お酢とかミカンの汁なんかで作りますよね。何か懐かしかった。でも大抵焙り出す前に見えてるんですよね(笑)。よく分からなかったんですけど、あの焙り出しは、誰が何のために作ったんですか?

和田 「射手座、太陽」とか、ソディアックによるコードが書いてあるとウィリアムは言ってましたね。禁書のありかを焙り出しの暗号で教えてたんじゃないですか。

三谷 じゃあ、ここでまだ焙り出されていなかった文章っていうのは?

和田 まだ焙り出されてないんじゃなくて、しばらくたつと消えるんですよ、また。

三谷 え、また消えるんですか、焙り出しって。

和田 映画ではそうなんじゃないかな。僕らの知ってる焙り出しは、焦げて文字が見えるようになるから、一度焙ったらそのままになるんだけど、この場合はまた消えてるんだと思う。

三谷 熱い時だけ見えるとか、そういうものなんですね、きっと。そうそう頭上から石を落とすシーンは「ナイル殺人事件」(78)を思い出しました。

和田 ええ。遺跡の上から。

三谷 それから焙り出しのシーンは「オリエント急行殺人事件」に似たところがあります。一回燃やしたはずの脅迫状に何が書いてあったか、ポワロが調べるシーンがあるんですよ。黒焦げの手紙をもう一回火にかざすと、燃え上がる直前に一瞬ちょっと浮き出るんですよ。僕もやってみたら本当に見えました。

和田 やったんですか。

三谷 ええ。このもう一度焼くっていうのは、原作を何回読んでも意味が分からなかったんですけど、映画を見て納得しました。そういえば石を落とすとか焙り出しとか、ミステリーの定番ですね。

和田 エーコって人は、アガサ・クリスティもちゃんと読んでる(笑)。その焙り出しを見てる間に、部屋に隠れてたベレンガーが飛び出してきて、そこにあった本をウィリアムの眼鏡を挟んだまま持って逃げる。

三谷 ウィリアムとアドソは手分けしてベレンガーを追う。

和田 食糧庫を調べに行ったアドソは、そこで貧しい村の女と出会って、誘惑されて、その女とできてしまう。

三谷 このベッドシーンというのが、愛欲シーン、僕はレーザーディスクで見たんですけど、二人の前に突然樽が出現して……。

和田 (笑)。僕の見たビデオも樽が映ってましたけど、あれは後から日本で入れたんでしょう。昔は丸とか四角で消したり、ボカシを入れてたりしてたけど、最近は物を入れるようになった(笑)。

三谷 いつ頃からなんでしょうね。

和田 技術的に、そういうことができるようになってきたんでしょう。突然花が出て来る

の名誉」(85)「ピンク・キャデラック」(89)「彼と彼女の第2章」(95)などがあり、バーブラ・ストライサンド、スティーヴ・マックインなどの演技コーチとしても知られている。

ベレンガー

ブルゴスのホルヘ

ミレージョ

Digitized by Google

のもありました（笑）。

三谷　あれはたとえば、「ここは樽でいこう」ってことになると、似たような感じの樽を日本のスタッフが撮影して合成する……。

和田　そうなんじゃないですか。

三谷　じゃあ、海外で見るとあの樽はなくて、丸見えってことですか。

和田　でしょうね。海外でも、スペインはうるさいらしいから、また別のものを入れてるかも知れない。ギターか何か（笑）。

三谷　牛の置物は？

和田　その方が隠しやすいね（笑）。アドソは女が去った後、側にあった包みを開けたら心臓が入ってるんでびっくりします。また殺人だと思ってウィリアムを呼ぶと、「こんなに大きな心臓を人間が持ってるか、これは牛の心臓だ」って言われる。「醜男の修道士がこれで女を誘惑したんだ」って。どうして醜男と分かるのかって聞くと、「若くて美男なら、物をもらわなくても応じるはずだ」と言う。

三谷　結局、オーソン・ウェルズみたいな食料係のミレージョが、女の体の代わりに食料を与えてたってことですよね。

和田　そう。心臓っていうとびっくりするけど、ハツだと思えばいいわけで。

三谷　結局彼女は、アドソが若くて美男だったから心臓を置いていったんですね。

和田　アドソはウィリアムに、さっきの女のことを懺悔しようとします。

三谷　ここでまたいいことを言うんですよね。

和田　「女は魔物だと言われているけれども、神は何がしかの美徳を与えずに女を作ったとは思えない」とか、「禁欲の生活は平和であり平穏であり安泰だけれども退屈だ」とか。

三谷　ショーン・コネリーって、「アンタッチャブル」でもそうでしたけど、こういう台詞がうまいですよね。

和田　「アンタッチャブル」にもそういうのありましたっけ？

三谷　エリオット・ネスを励ましたり慰めたり。ああいう台詞を言っても臭くならない。

和田　「インディ・ジョーンズ／最後の聖戦」もそうだし、父性的な役が多いのかな。「ザ・ロック」（96）でもニコラス・ケイジのお父さん的な役だったでしょう。

三谷　日本の俳優さんには、こういう感じの人ってあまりいないですよね。映画を見ながら、日本だったら誰がやる役だろうと思って見てたんですけど。仲代達矢さんだと温かさが足りないような気がするし。

和田　三國連太郎さんだと……。

三谷　ちょっと怖い（笑）。屈折してる感じがして。勝新太郎さんもいいなと思ったんですけど、修道士って感じじゃないし（笑）。若山富三郎さんはいかがでしょうか。

和田　若山さんなら合ってるかも知れない。

三谷　ウィリアムは、女性を知らないんですよね。アドソに「私はお前のような経験はない」って。

和田　そう言ってますね。

三谷　ショーン・コネリーといえば絶倫のイメージだから、ちょっとかわいそうだった。

和田　意外な設定です。クリスチャン・スレーターはこの時16歳でしょう。役がらも同じくらいなんでしょうね。

三谷　彼は美少年メイクをしてますよね。

和田　そんな気がする。唇が妙に赤かった。眉毛も凛々しく書いてるみたいだったし。

三谷　あんなに皆を変な顔にできるんなら、良くすることもできるわけですもんね。

（以下次号）

THE NAME OF THE ROSE

1986年　仏＝西独＝伊映画　日本公開1987年

●スタッフ

監督……ジャン＝ジャック・アノー
製作……ベルント・アイヒンガー
原作……ウンベルト・エーコ
脚本……ジェラール・ブラッシュ
……ハワード・フランクリン
……アンドリュー・バーキン
……アラン・ゴダール
撮影……トニーノ・デッリ・コッリ
美術……ダンテ・フェレッティ
編集……ジェーン・ザイツ
音楽……ジェームズ・ホーナー
衣装……ガブリエッラ・ペスクッチ
製作総指揮……トーマス・シューリー
時代考証……ジャック・ル・ゴフ

●キャスト

バスカヴィルのウィリアム……
……ショーン・コネリー
ベルナール・ギー……
……F・マーレイ・エイブラハム
メルクのアドソ…クリスチャン・スレーター
セヴェリーノ……イリア・バスキン
ブルゴスのホルヘ……
…フェオドール・シャリアピン・ジュニア
カサーレのウベルティーノ……
……ウィリアム・ヒッキー
修道院長……ミッシェル・ロンダール
サルヴァトーレ……ロン・パールマン
マラキーア……フォルカー・ブレシュテル
ヴァラージネのレミージョ……
……ヘルムート・クヴァルティンガー
娘……バレンティーナ・バルガス
チェゼーナのミケーレ……
……レオポルド・トリエステ
ベレンガー……マイケル・ハベック

●上映時間2時間12分

●1987年度キネマ旬報ベスト・テン第10位

●ストーリー

1327年、ヨーロッパ中で宗教裁判の嵐が吹き荒れている頃、北イタリアのベネデュクト修道院へ、バスカヴィルのウィリアムと若い見習い修道士、メルクのアドソが宗教会議のためにやってくる。到着するなり院長に依頼され、ウィリアムは文書館の挿絵師だった若い修道士の不審な死を遂げた事件の解明に乗り出すことになる。調査を進めるうち、ギリシャ語の翻訳をしていた修道士ヴェナンツィオが殺される。ウィリアムは、これらの事件が立入禁止の塔にある文書庫と関係していると睨み、写字室を訪れるが、秘密の領域を侵されることを嫌う司書のマラーキア、ベネディクト会の戒律により笑うことを厳しく禁じ、何かを隠しているらしい盲目の文書館長ホルヘなどがおり、疑惑は深まるばかり。偶然秘密の文書庫に通じる道を発見するが、肝心の奥の一室は閉ざされていた。そのうちに宗教会議の代表団が到着。その中にはかつてウィリアムと敵対していた異端審問官ベルナール・ギーもいた。彼は修道院の物資給与係のミレージョとサルヴァトーレを異端として告発する。同じ頃、司書助手のベレンガーが風呂で殺されているのが発見される。ヴェナンツィオの時と同じく、指先と舌に謎の黒いシミが残されていた。異端審問会で有罪とされた二人の修道士と魔女と告発された娘が火炙りにされようとしている時、ウィリアムとアドソは再び塔に戻り、文書庫の閉ざされた扉を開けることに成功。そして、全ての殺人は笑いを禁じる文書館長ホルヘが、笑いを肯定するアリストテレスの書「詩学」の存在を隠すための犯行だったことが判明する。ホルヘは文書庫に火を放ち、辛うじて逃れたウィリアムとアドソは、修道院をあとにするのだった。

Digitized by Google

▶ジェレミー・トーマス審査委員長

1998 TOKYO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

Oct. 31 – Nov. 8

第11回東京国際映画祭

ガイド

特別招待作品／コンペティション　●[illegible]

規模縮小にともない コンペティション 一本化へ。

今年、第11回を迎える東京国際映画祭は、例年どおり東京・渋谷 Bunkamuraを中心に開催。昨年とほぼ同じ10月31日から11月8日までという、9日間のスケジュールで行われる。昨年との最大の相違点といえば、まず予算の大幅削減（5億5千万から4億円に縮小）による、各部門の大幅な見直しだろう。その結果、焦点が定まらなかったインターナショナル・コンペティション部門と、評価の高かったヤングシネマ・コンペティション部門が統合され、新たに〈**コンペティション**〉としてリニューアル。従来よりの、若手監督の発掘・育成という視点、さらにアジア映画へのコミットメントという視点を失わず、長編第3めまでの監督を対象に東京ゴールド賞（賞金1千万円）と東京シルバー賞（賞金5百万円）が設けられている。またアジアからのエントリー作品に対し、アジア映画賞が設けられているのは昨年から引き継いだものだ。

Digitized by Google

特別招待作品

アルマゲドン ARMAGEDDON

アメリカ作品　監督／マイケル・ベイ　出演／ブルース・ウィリス、リヴ・タイラー　31日オーチャードホール

イン&アウト IN & OUT

アメリカ作品　監督／フランク・オズ　出演／ケヴィン・クライン、ジョーン・キューザック／1日オーチャードホール

モスラ3 キングギドラ来襲 REBIRTH OF MOTHRA 3

日本作品　監督／米田興弘　出演／小林恵、建みさと、羽野晶紀　3日オーチャードホール

フェニックス —PHOENIX— PHOENIX

アメリカ作品　監督／ダニー・キャノン　出演／レイ・リオッタ、アンジェリカ・ヒューストン／3日オーチャードホール

コンペティション

レ・ミゼラブル LES MISERABLES

アメリカ作品　監督／ビレ・アウグスト　出演／リアム・ニーソン、ユマ・サーマン　7日オーチャードホール

あ、春 WAIT AND SEE

日本作品　監督／相米慎二　出演／佐藤浩市、斉藤由貴、山崎努　7日オーチャードホール

ブルワース BULWORTH

アメリカ作品　監督・出演／ウォーレン・ベイティ　出演／ハル・ベリー、オリヴァー・プラット／7日渋谷公会堂

6デイズ／7ナイツ SIX DAYS, SEVEN NIGHTS

アメリカ作品　監督／アイヴァン・ライトマン　出演／ハリソン・フォード、アン・ヘック／4日オーチャードホール

ジョー・ブラックをよろしく MEET JOE BLACK

アメリカ作品　監督／マーティン・ブレスト　出演／ブラッド・ピット、アンソニー・ホプキンス／8日オーチャードホール

コキーユ〜貝殻 COQUILLE

日本作品　監督／中原俊　出演／小林薫、風吹ジュン、益岡徹　1日オーチャードホール、2日ジョイシネマ

ゴールデンボーイ APT PUPIL

アメリカ作品　監督／ブライアン・シンガー　出演／ブラッド・レンフロ、I・マッケラン／1日オーチャード、2日ジョイシネマ

静けさが消えた日 EL DIA QUE MURIO EL SILENCIO

ボリビア作品　監督／パオロ・アガッツィ　出演／ダリオ・グランディネッチ、E・セラーノ／31日ジョイシネマ、2日オーチャード

スハイシー・ラブ・スープ 愛情麻辣燙

中国作品　監督／チャン・ヤン　出演／リュイ・リーピン、ブー・ツンシン、シャオ・ピン／5日ジョイシネマ、7日オーチャード

さて、お正月映画をいち早く見られるというのがウリとなった〈**特別招待作品**〉だが、31日のオープニングを飾るマイケル・ベイ監督&ブルース・ウィリス主演のSF大作「**アルマゲドン**」と、クロージングのブラッド・ピット主演の「**ジョー・ブラックをよろしく**」が目玉。ピットの来日も決定しており、クロージングの Bunkamura 周辺は超混雑が予想される。そのほか、ウォーレン・ベイティ監督・主演の「**ブルワース**」、ビレ・アウグスト監督の大作「**レ・ミゼラブル**」などに対し、日本から「**モスラ3 キングギドラ来襲**」と相米慎二監督の4年ぶり新作「**あ、春**」が迎えうつ。

そして〈**コンペティション**〉部門だが、良くも悪くも「東京国際映画祭組」が注目される。**ブライアン・シンガーの3作め**（それゆえ賞金対象作品）「**ゴールデンボーイ**」はすでに全米公開されたショッキング・スリラー。人間の奥底に潜む残虐性をじわじわ炙りだしにしていく手腕はさすがだろう。台湾の**王仁監督**（ワン・レン）の「**超級公民**」は、95年の「**超級大国民**」の続編的作品。またも、捜し物テーマが導入となる。そしてインドネシアの**ガリン・ヌグロホが「枕の上の葉」**を、クリスティン・ハキム（！）の主演で送り込む。ストリート・チルドレンを主題にした彼の、初心への回帰を願う。

また、イランの**モフセン・マフマルバフの娘サミラの**、今年のカンヌでも話題を呼んだ「**りんご**」も注目されるところ。手法的には父を受け継ぐ部分もある

Digitized by Google

オープン・ユア・アイズ
ABRE LOS OJOS

スペイン作品　監督／アレハンドロ・アメナバル　出演／E・ノリエガ、ペネロペ・クルス／5日ジョイシネマ、6日オーチャード

マラリア
MARARIA

スペイン作品　監督／アントニオ・ベタンコル　出演／ペンディエンテ、カルメロ・ゴメス／3日ジョイシネマ、5日オーチャード

おもちゃ
THE GEISHA HOUSE

日本作品　監督／深作欣二　出演／宮本真希、富司純子、津川雅彦
2日オーチャード、4日ジョイシネマ

ニンゲン合格
QUALIFIED TO LIVE

日本作品　監督／黒沢清　出演／西島秀俊、役所広司
2日ジョイシネマ、6日オーチャード

故郷の春
SPRING IN MY HOMETOWN

韓国作品　監督／イ・グァンモ　出演／イ・イン、アン・ソンギ、ソン・オクスク
5日オーチャード、6日ジョイシネマ

枕の上の葉
DAUN DI ATAS BANTAL

インドネシア作品　監督／ガリン・ヌグロホ　出演／クリスティン・ハキム、スグン、ヘル
3日オーチャード、6日ジョイシネマ

カサバ―町―
KASABA

トルコ作品　監督／ヌリ・ビルゲ・ジェイラン　出演／M・エミン・トプラク、H・サラム／4日ジョイシネマ、7日オーチャード

レッド・バイオリン
THE RED VIOLIN

カナダ作品　監督／フランソワ・ジラルド　出演／S・L・ジャクソン、グレタ・スカッキ／5日オーチャード、6日ジョイシネマ

スモーク・シグナルズ
SMOKE SIGNALS

アメリカ作品　監督／クリス・エア　出演／アダム・ビーチ、ゲイリー・ファーマー
3日オーチャード、5日ジョイシネマ

りんご
SIB

イラン作品　監督／サミラ・マフマルバフ　出演／ナデリー一家
1日ジョイシネマ、2日オーチャード

レクイエム
REQUIEM

スイス＝仏＝ポルトガル作品　監督／A・タネール　出演／G・ルーイ、J＝L・ポルシェ／4日ジョイシネマ、6日オーチャード

超級公民
超級公民

台湾作品　監督／ワン・レン　出演／ツァイ・チュンナン、チャン・チェンユェ
1日ジョイシネマ、4日オーチャード

＊作品タイトルは仮のものもあります。また製作国は編集部にて独自に追加したものです。監督、出演の後に上映日と会場を記しました。
＊上映作品、上映日、会場は10月8日現在のものです。追加、変更等の可能性がありますので、ホームページ： http://www.tokyo-filmfest.or.jp、各情報誌および映画祭チケットガイドでの確認をオススメします。
※東京国際映画祭チケットガイド：03-3563-6407（日曜休み）
※チケットは原則的に前売1000円、当日1200円

LOCK, STOCK, AND TWO SMOKING BARRELS
LOCK, STOCK, AND TWO SMOKING BARRELS

イギリス作品　監督／ガイ・リッチー　出演／ジェイソン・フレミング、ニック・モラン
1日ジョイシネマ、4日オーチャード

ようなのだが、18歳の感性に興味津々ではないか。なぜか忘れたころにやって来る**アラン・タネール**は、「白い町で」を彷彿とさせる「**レクイエム**」でリスボンを舞台に過去と現在を行き来しながら人の交わりの不可思議を描く。トルコから出品の「**カサバ―町**」にも期待したい。子どもの視点から社会を覗いた作品だが、トルコ映画がユルマズ・ギュネイばかりではないことを確認しようではないか。中国初のインディーズ作品、**張楊監督**（チャン・ヤン）の「**スパイシー・ラブ・スープ**」にも注目せねばならない。演劇界出身の29歳の監督が、北京にオールロケしたという瑞々しい新中国映画を発見せねばならないだろう。同じアジア系では、韓国の**イ・グァンモ監督**の「**故郷の春**」を見てみたい。朝鮮戦争を主題にした作品は、いかにも東京国際映画祭好みとも思われるが、それを突き抜けて迫るものがあることを願おう。そのほか、今年のベルリンで注目されたスペインの新鋭**アレハンドロ・アメナバル監督の第2作**「**オープン・ユア・アイズ**」、南米からエントリーの**パオロ・アガッツィ**監督のラジオと発電機を初めて前にした人々の驚嘆を描く「**静けさが消えた日**」なども、ちょっとチェックしておきたい。そして日本からは、**中原俊監督久々の**「**コキーユ～貝殻**」、**黒沢清監督**「**ニンゲン合格**」のほか**深作欣二監督の**「**おもちゃ**」が出品。これらを審査するのは、ジェレミー・トーマスほか4名の審査員。だがその前に、自身の目で確かめねば！

Digitized by Google

シネマ・プリズム

映画マニアのいかがわしい欲望をかなえる。

●森直人

カルトな作家の最新作を、日本では未紹介の傑作を、他の奴らよりも先に観たい、イバリたいという、映画マニアのいかがわしい欲望をかなえてくれる有り難い部門、それが〈シネマ・プリズム〉。今年の特色は、アジア全域から注目作が大量に流れ込んでいることだ。まずオープニング上映作から観逃せない。**スタンリー・クワン監督の新作「ホールド・ユー・タイト」**。中国返還直前の香港を舞台に4人の人生が交錯する人間ドラマ……と書くと、そんなもん去年から今年にかけて腐るほど観たわいと怒られそうだが、〝クワンが驚くべき新境地を開いた〟と傑作の呼び声高い作品である。

で、少し南下すると、「**戦争の後の美しい夕べ**」というカンボジアの映画がある。復員兵とホステスの恋を描く作品らしく、ホステス好きは観逃せまい。中国とロシアに挟まれた小国キクギスタンからも、「**ベシュケンピール**」なる作品が紹介される。レア物好きはこのへん要チェックだろう。

さて、そこから南下するとインドだが、待望のマニラトナム特集4作品――「心から」(98)、「顔役」(87)、「ロジャ」(92)、「ザ・デュオ」(97)――がひかえる。作家性で語ることができるインド映画の巨匠作品を一挙にこれだけ見られるのは、この機会をおいてない！　さらに西へ進んだらイランに到着。「かさぶた」(87)「7本のキャンドル」(94)が今年日本ロードショー公開される噂の映画作家**アボルファズル・ジャリリ**の、本年度ロカルノ映画祭銀豹賞受賞作**「ダンス・オブ・ダスト」**、最新作「**DON**」が早くも上映される。今回これが白眉かも。クロージング作品に選ばれている**モフセン・マフマルバフ監督作「沈黙」**も当然必見だろう。さらに西へ行きイスラエルからは、注目の作家**アモス・ギダイの「ヨム・ヨム」**。これはカメラがダニエル・シュミット作品でおなじみのレナート・ベルタだ。注目せずにいられない。やや北上しカザフスタンからは、今年のカンヌで評判を呼んだ**ダレジャン・ウミルバエフ監督作「殺し屋」**が。ロシアか

Digitized by Google

ジャックスカード東京国際ファンタスティック映画祭98

ワーナー75周年&インド映画に納得！

●蓮山純生

今年の東京国際ファンタスティック映画祭も、ヴァラエティに富んだ番組編成がなされた。映画史上に残る名作、映画ファン注目の監督作品からまったく聞いたことのない監督の作品まで。そして、日本のアニメーションからインドの歌謡映画まで。予想も含め、今年のファンタについて簡単に述べてみたい。

オープニング作品はジョン・カーペンターの最新作「ヴァンパイア／最期の聖戦」。ドラキュラを題材にしたアクションもの＋ホラーものといった感じの作品とのことだから、カーペンターのファンにはたまらないだろう。それに続くホラー映画四本立てオールナイト上映は拾いものに巡り会える可能性大だ。

恒例の旧作上映は、ブルース・リーの代表作「燃えよドラゴン」とウィリアム・フリードキンのオカルト・ホラー「エクソシスト」。共に73年のワーナー・ブラザース作品だ。前者は「ディレクターズ・カット」と称した未発表シーン復元版、後らはアルクセイ・ゲルマンの15年ぶりの新作「フルスタリヨフ、車を！」が登場！ 旧作「道中の点検」（71）「戦争のない20日間」（76）「わが友イワン・ラプシン」（82）も一挙上映というお得ぶり。お次は日本。石井隆「黒い天使Vol．2」、小林政広「海賊版」、山仲浩充「流★星」というラインナップ。そして突如イギリスからは、あの名物プロデューサー、ジェレミー・トーマスの初監督作「オール・ザ・リトル・アニマルズ」もやってくる。フランスからはまさにお待ちかね！ の、78歳現役ヌーヴェル・ヴァーグ爺、エリック・ロメールの「恋の秋」。ついでに残りの〝四季の物語〟シリーズ、「春のソナタ」（89）「冬物語」（91）「夏物語」（96）も上映される。フランスの四季を一挙に堪能するのも現実逃避には最高かも。

黒の天使Vol．2
BLACK ANGEL VOL.2

日本作品　監督／石井隆　出演／天海祐希、大和武士、片岡礼子
1日エルミタージュ

フルスタリヨフ、車を！
NIKOLI STALIOV, MY CAR!

ロシア作品　監督／アレクセイ・ゲルマン
出演／Y・ツォウリロ、ユーリー・ヤルヴェット／6日エルミタージュ、8日コクーン

恋の秋
CONTE D'AUTOMNE

フランス作品　監督／エリック・ロメール
出演／ベアトリス・ロマン、マリー・リヴィエール／7日コクーン

オール・ザ・リトル・アニマルズ
ALL THE LITTLE ANIMALS

イギリス作品　監督／ジェレミー・トーマス
出演／クリスチャン・ベール、ジョン・ハート／1日&2日エルミタージュ

ジャックスカード 東京国際ファンタスティック映画祭'98

ヴァンパイア／最期の聖戦
JOHN CARPENTER'S VAMPIRES

アメリカ作品　監督／ジョン・カーペンター
出演／ジェームズ・ウッズ、ダニエル・ボールドウィン／31日渋谷パンテオン（以下同）

燃えよドラゴン／ディレクターズ・カット25周年記念版
ENTER THE DRAGON: 25TH ANNIVERSARY EDITION

アメリカ＝香港作品　監督／ロバート・クローズ　出演／ブルース・リー／1日
© 1973,1988 Warner Bros. All Rights Reserved

エクソシスト／デジタル・リミックス25周年記念版
THE EXORCIST: 25TH ANNIVERSARY EDITION

アメリカ作品　監督／ウィリアム・フリードキン　出演／リンダ・ブレア／1日
© 1973 Warner Bros. All Rights Reserved

ヤジャマン 踊るマハラジャ2
YAJAMAN

インド作品　監督／R・V・ウダヤクマール
出演／ラジニカーント、ミーナ
3日

DDLJ／花嫁は僕の胸に
DILWALE DULHANIYA LE JAYENGE

インド作品　監督／アディティヤ・チョープラー　出演／シャー・ルク・カーン、カージョル／3日

ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ・アンド・アメリカ
ONCE UPON A TIME IN CHINA AND AMERICA

中国作品　監督／サモ・ハン・キンポー　出演／ジェット・リー、ロザムンド・クワン
6日

Digitized by Google

カネボウ国際女性映画週間

輝きの海
SWEET FROM THE SEA

アメリカ作品　監督／ビーバン・キドロン
出演／レイチェル・ワイズ、ヴァンサン・ペレーズ／1日シネセゾン渋谷

英国映画祭

ヒズ・ロードシップ
HIS LOADSHIP

32年イギリス作品　監督／マイケル・パウエル　出演／ジュリー・ヴェルノ、ジャネット・メグルー／8日渋谷公会堂

ニッポン・シネマ・クラシックス

黒澤明監督作品
特別追悼上映

渋谷公会堂、渋東シネタワー他で全30作品一挙上映

カネボウ国際女性映画週間／英国映画祭／ニッポン・シネマ・クラシックス　●杉原賢彦

追悼・黒澤&英国映画祭に大注目！

映画祭の自主企画が規模縮小となった分、ガゼン注目されるのが協賛企画だ。例年どおりの開催となる〈**カネボウ国際女性映画週間**〉に、今年は英国祭UK98の一環として〈**英国映画祭**〉が、東京国際映画祭よりひと足早く10月24日より開催。さらに、自主企画ではあるが、9月に亡くなった黒澤明監督にオマージュを捧げ、〈**ニッポン・シネマ・クラシック**〉は、**黒澤監督作品全30本を一挙上映**する（ただし予算の関係のため現存する最良のプリントでの上映）。

〈**カネボウ国際女性映画週間**〉は、今年は「世界の女性監督」「女性プロデューサー特集」「日本の女性監督」という3本柱で構成。**ビーバン・キドロン監督の「輝きの海」、テレサ・コネリー監督の「自由な女神たち」**といった欧米系の女性監督作品に混じって、フィリピンの**マリルー・ディアス＝アバヤ監督「海に抱かれて」**、インドの**スミトラ・ピーリス監督「マザー・アローン」**が注目される。女性プロデューサー作品として、マギー・レンジ製作、ジョン・セイルズ監督の「**パッション・フィッシュ**」、そして日本の**浜野佐知監督「第七官界彷徨　尾崎翠を探して」**も気になる。

〈**英国映画祭**〉は、なんといっても**マイケル・パウエル監督の発見された「ヒズ・ロードシップ」**（32）が見逃せない。ハマー・プロの未公開作「**ハンズ・オブ・ザ・リッパー**」（71）ほか、イギリス映画の奥深さを発見せよ！

TOKYO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

者は25周年記念のデジタル・リミックス版。リーのダイナミックなアクションと特殊撮影を使った恐怖場面を大画面で堪能できる絶好の機会だ。加えて、リー自身が登場して語る“**Bruce Lee in His Own Words**”と、BBC製作による「エクソシスト」のメイキング“**Fear of God; 25 Years of The Exorcist**”、そしてワーナー・ブラザースが自社の75年にわたる歴史を振り返った“**Warner Bros. 75th Anniversary: Award Winners**”という三本のドキュメンタリーが併映。

アニメ・ファンには、松本零士の漫画家生活45周年記念で「**火星旅団ダナサイト999**」が、また永井豪の漫画家生活30周年記念で「**マジンガーZ**」を始めとするロボットものが新旧とりまぜ八本オールナイト上映される。これまた恒例となった香港映画では、アメリカ映画「リーサル・ウェポン4」にも出演した**ジェット・リー（リー・リンチェイ）主演作二本**がある。〈**大インド極楽映画桃源郷PART2**〉と題して昨年に引き続き催されるのは、いずれも上映時間が3時間近くある**インド映画四本**。歌と踊りが満載されたエンターテインメントのお手本のような作品がインド映画のお家芸なのは、今年公開の「ムトゥ　踊るマハラジャ」によってその片鱗が伺われたばかり。他にも「ヘンリー」（86）や「恋に落ちたら…」（93）の**ジョン・マクノートン監督の新作**ミステリー「**ワイルドシングス**」や、ティム・バートン監督「マーズ・アタック！」（96）の脚本を担当した**ジョナサン・ジェムズの初監督作「愛のトリートメント」**、ヴェテラン監督**シドニー・ルメットの「クリティカルケア」**など、監督の名前にひかれて見てしまいそうな作品も。

しかしいずれも見てみないことにはわからない作品ばかりであることは例年通り。娯楽一辺倒のまさに「お祭り」的上映会だが、同時にそれを見る側の「目」が徹底的に試される点で、これほどスリリングな「お祭り」もないのではないだろうか。

TOKYO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

Digitized by Google

World Report 1998

ニューラウンダーズ

CONTENTS

U.S.A.
- Rounders
- Simon Birch
- Knock Off
- Without Limits
- 夏のシーズン総括
- 「タイタニック」のヴィデオの話題

U.S.A.
- 「マッドマックス」シリーズ再開
- ワーナー／VRPの製作計画
- "Eyes Wide Shut"
- "Memoirs of Geisha" 続報

U.S.A.
- Si je t'aime, prends garde toi
- A vendre
- La vie revèe des anges
- TOKYO EYES
- Conte d'automne
- Le diner de cons

U.S.A.
- 「日本沈没―1999―」
- 「共犯者」
- 「リング2」
- 「流☆星」

●マット・デイモンの主演作

マット・デイモン主演の「ラウンダーズ」"Rounders"（ジョン・ダール監督）が、9月11日にミラマックスの配給により公開された。

マイク（デイモン）は、ニューヨークの秘密のクラブで行なわれているポーカーにのめりこみ、そこのオーナーでもある名手テディ（ジョン・マルコヴィッチ）との勝負に貯金すべてを賭けるが、敗れて無一文となってしまう。

それから九カ月、マイクは法学部の学生として勉学に励むようになっていた。こうなったのも、ガール・フレンドのジョー（グレッチェン・モル）のおかげだったのだが、マイクがギャンブルに溺れていた頃の旧友ワーム（エドワード・ノートン）の出所により、再びマイクは神経をすりへらすポーカーの勝負に引き寄せられていく。

しかも、ワームの借金を肩代わりするような形となり、マイクは命懸けで臨まなければならなくなってくる。そういった中で再び、テディが彼の前に立ちはだかるのであった。

ポーカーが中心となった映画としては、「シンシナティ・キッド」（65）あるいは「テキサスの五人の仲間」（66）といった作品が有名だが、最近では題材として取り上げられることが珍しいと言えようか。日本では劇場公開されずにヴィデオ発売になったデイヴィッド・マメット初の監督作品「スリル・オブ・ゲーム」"House of Games"では、ポーカーが重要な要素となっているが、これもアメリカでの封切りは87年であった。

それはさておき、今作品に対するニューヨークの批評家の評価は、全般に悪くはないのだが絶賛にはなっていない。要するに、好悪相半ばといった立場の者が多く、肯定するには躊躇があるようである。

一方の興行は、最初三日間で約八五〇万ドルの興収という出足で、この時期のトップとなっている。秋のシーズンの最初として、昨年の「沈黙の断崖」よりもいい数字でのスタートであるが、今後に控えている比較的派手な作品との競走に、どれぐらい対抗できるのか。見込みとしては、かなり厳しい状況が予測されるところではある。

●ジョン・アーヴィングの小説からの映画化

ジョン・アーヴィングと言えば、これまでに「ガープの世界」や「ホテル・ニューハンプシャー」などの作品が映画化されてきた作家だが、そんな彼の小説から着想を得たという形での映画「サイモン・バーチ」

Digitized by Google

"Simon Birch"（マーク・スティーヴン・ジョンソン監督）が、9月11日にブエナ ビスタの配給で公開された。今作は、「ラブリー・オールドメン」の脚本家ジョンソンの初監督作品でもある。

映画は、成長したジョー・ウェントワース（あのジム・キャリー）が、旧友の墓参りをするところから始まる。その友サイモン・バーチは、ジョーの子供時代の不思議な仲間であった。

子供の頃のジョー（ジョゼフ・マズエロ）は、ニュー・ハンプシャー州の田舎町で母のレベッカ（アシュリー・ジャッド）と暮らしていたが、なぜか父のことは教えてもらえないでいた。

周囲からすればジョーは私生児なわけで、それゆえのいじめにあったりしていたが、そんな中で親しくなったのがサイモン（イアン・マイケル・スミス）である。このサイモンは、知能に問題はないものの肉体の成長不全のため、実の親からうとんじられる身であった。

言わば、のけ者扱い同士が仲良くなったというわけだが、サイモンは自分は神から遣わされた特殊な人間で、いつか英雄になる日が来ると主張していた。こんな彼との交流が、ジョーの少年時代を彩っていくが、一方でジョー自身の家庭にも、重大な事件が次々と起こっていくのであった。

アーヴィング自らの要請で、原作とは異なるタイトルでの映像化となった作品だが、仕上がりについてのニューヨークの批評家の評価は、あまり芳しいものではなく、否定的見解が多数を占める結果になっている。

一方の興行も、物語の語り手としてジム・キャリーが出ているとは言え、実質的にはノン・スターの地味な内容の映画ということで、危惧されていたように最初三日間の興収が約三三〇万ドルと、やや平凡なスタートである。今後の維持についても疑問で、多くを望むことはできないのではないだろうか。

「サイモン・バーチ」

●ツイ・ハークとヴァン・ダムのコンビ再び

「ダブルチーム」に続く、ツイ・ハーク監督によるジャン＝クロード・ヴァン・ダム主演作、"Knock off"「ノック・オフ」が、9月4日にソニー（トライスター）配給で公開された。

マーカス・レイ（ヴァン・ダム）は、中国返還前の香港でトミー・ヘンドリックス（ロブ・シュナイダー）と共に、ジーンズの会社を経営していた。だが実は、トミーはCIAのエージェントで、レイの方はトミーに恩義ある身だった。

というのも、レイは以前に有名ブランドの複製（これが作品のタイトルの一つの意味にもなっている）を手掛けており、これをトミーに見逃してもらっていたのである。ただレイは、今も複製商売の仕事仲間のエディ（ワイマン・ウォン）と接触は保っていた。

ところがエディが、服飾とは比べようもない危険物、小型爆破装置の密輸にからんでいることが明らかになる。エディとトミーを共に知るレイは、好むと好まざるとにかかわらず、事件に引き込まれていく。

レイバー・デーの休日を直前とした、サマー・シーズンぎりぎりに封切られたメジャー系列配給作品になるが、ニューヨークの批評家から寄せられたのは否定的な反応ばかりであった。

興行に関しては、レイバー・デーを含めた出足の連休の興収が、およそ五五〇万ドルと、いかにも物足りないスタートである。これは、今回と同じ監督と主演のコンビによる「ダブルチーム」（ただし週末三日間）の数字は凌いでいるが、昨年同時期に公開されたスティーヴン・セガール主演の「沈黙の断崖」（これも週末三日間）の実績は下回っている。要するに、あまり目立った成績ではないということである。

「ノック・オフ」

●再びのプリフォンテインの伝記映画

昨年の1月、アメリカの陸上選手スティーヴ・プリフォンテインの伝記映画が公開されたが（97年3月下旬号を参照）、9月11日、同じ人物をテーマとした"Without Limits"「ウィズアウト・リミッツ」が、ワーナーの配給で公開された。

これはトム・クルーズのプロダクションの作品で、クルーズがプロデューサーをつとめている。監督は、デビュー作「マイ・ライバル」で女子の陸上競技の世界を扱ったロバート・タウンが当たっている。

実在の人物の人生を描くのであるから、前の作品「プリフォンテイン」"Prefontaine"と内容的に大差はない。つまり、圧倒的な強さを持ったランナーとそのコーチの葛藤、ミュンヘン・オリンピックでの予想外の敗北が描かれていく。

配役は、プリフォンテインにビリー・クルダップ（前作はジェアド・レト）、後にナイキを創設する彼のコーチにドナルド・サザーランド（同じくR・リー・アーメイ）となっている。

作品の出来については、ニューヨークの批評家から、ほとんど否定的な見解は示されていないものの、肯定と同じくらいに好悪相半ばの立場を取る者がおり、その点で大歓迎とまでには至っていない。

興行の方は、限定的規模での公開のため、数字としては五桁という地味なスタートである。まずは、先行作品の実績を凌げるかどうかが注目である。もっとも「プリフォンテイン」のそれは、興収がトータルで六十万ドルにも達しなかったのだから、目標としては、あまりにも低いと言えるかもしれない。

Digitized by Google

●夏のシーズン総括

98年の夏のシーズンは、期間中（5月15日〜9月7日）に、興収二億ドルを超えるような大当たりの作品が登場しなかったにもかかわらず、全体とすれば、切符売り上げと興収それぞれにここ五年間では最高の数字を記録するに至った。具体的には、前者が五億三三〇〇万枚、後者が二十六億〇六四〇万ドルに上っている。

さて、二億ドルに達する作品こそなかったものの、期間中に一億ドルの売り上げを記録したメガヒットは8本を数えている。つまり、シーズンのトップ・テン作品のリストは、ほとんどメガヒットのそれに等しくなっている。以下にご覧いただこう。

＊

1「アルマゲドン」
（ブエナ　ビスタ）
一億九二〇〇万ドル
2「プライベート・ライアン」
（ドリームワークス）
一億六七一〇万ドル
3「ドクター・ドリトル」
（二十世紀フォックス）
一億三九五〇万ドル
4「GODZILLA」
（ソニー）
一億三五八〇万ドル
5「メリーに首ったけ」
（二十世紀フォックス）
一億三〇二〇万ドル
6「リーサル・ウェポン4」
（ワーナー）
一億二六二〇万ドル
7「トゥルーマン・ショー」
（パラマウント）
一億二四八〇万ドル
8「ムーラン」
（ブエナ　ビスタ）
一億一七七〇万ドル
9「ディープ・インパクト」
（パラマウント）
九〇三三万ドル
10「マスク・オブ・ゾロ」
（ソニー）
八八〇〇万ドル

＊

なお「ディープ・インパクト」については、5月8日の封切りから一週間の売り上げを加えれば、合計で一億四〇〇〇万ドルとなる。つまり、98年の夏は事実上9本のメガヒットを生み出したと言っていいわけである。

「アルマゲドン」
© Touchstone Pictures

一方、配給会社ごとの成績となると、今年前半に不振であったブエナ　ビスタと、昨年の夏とは正反対の成果を得た二十世紀フォックスの数字が目を引く。その統計は次の通りである。

＊

ブエナ　ビスタ　五億四四三〇万ドル
二十世紀フォックス　五億二九三〇万ドル
ワーナー　三億二二〇〇万ドル
パラマウント　三億〇九〇〇万ドル
ソニー　三億〇七二〇万ドル
ドリームワークス　二億二八八〇万ドル
ミラマックス　一億〇六一〇万ドル
ニュー・ライン　七二八〇万ドル
ユニヴァーサル　六二六〇万ドル
MGM　三〇一〇万ドル
マッギリーヴレン・フリーマン　二八二〇万ドル
その他　六六〇〇万ドル

＊

その他というのは、一社でマーケット・シェアが一パーセント未満のものの合計である。またマッギリーヴレイ・フリーマンは、IMAX劇場用の「エベレスト」を扱っているところで、「エベレスト」が、いかにヒットしているのかが、うかがえる結果と言えるだろう。

当然ながら上位を占める各社は、ワーナーを除いて昨年の実績を上回る形になっている。とりわけ二十世紀フォックスは、前年の約四・五倍という結果になっている。97年は「スピード2」が大きく期待を裏切ったのだが、昨年は嬉しい方の誤算が続出した。中でも「メリーに首ったけ」は、実に堅実な息の長い興行となっており、公開から8週目にして、興収レースのトップに立つという、珍しい記録も達成している。

一方、前年比でマイナスとなったのは、先に言及したワーナーをはじめとして、ソニー、ニュー・ライン、ユニヴァーサルで、やはりソニーについては、「GODZILLA」の期待を下回る数字が目立ってしまう。同社としては今夏最大の数字を記録しながら、否定的な言及の対象になるのは気の毒な面もあるが、結果で議論しなければならないのだから仕方ないところである。

ところでこの夏は、その他に分類される会社の売り上げも伸びている。「プライベート・ライン」や「トゥルーマン・ショー」も含めて、98年の夏は、深みのある作品と興行的成果が両立したシーズンと、一面では要約できるようだ。

●「タイタニック」のヴィデオの話題

アメリカでは9月1日に「タイタニック」のヴィデオが発売されたが、期待を裏切らない売れ行き、人気を見せている。結局、発売に向けて二五〇〇万本が用意され、実際の売り上げでも実写作品の記録（10月上旬号を参照）を更新している。

ただ売り出しに際しては、小売店で抜け駆け（予定日よりも早く売ってしまうこと）がないように、罰金や出荷停止などをちらつかせた強烈な指導が発売元から行なわれたそうである。これも「タイタニック」だからこそであろう。

ところで、ユタ州のある小売店が、サーヴィスとして客の求めに応じて、「タイタニック」のヴィデオの編集をしているという。これは、一家で見られるように、ヌード場面の削除などを行なうというもので、スタジオ側では違法としているが、一定の希望者がいるとのこと。

なおヴィデオ発売後も、劇場での興行は続いており、国内興収は六億ドルを突破、全世界の売り上げも十八億ドルを超えるに至っている。

〔濱口幸一〕

Digitized by Google

on the Production

「マッドマックス」シリーズ第4弾

今回は、ちょっと意外な展開を迎えたこのニュースから紹介しよう。

以前に一度紹介しているが、オーストラリア映画の世界進出の切っ掛けとなり、また「ウォーターワールド」などのポストアポカリプス（終末世界）映画の元祖ともいえる「**マッドマックス**」シリーズの**第4作（MadMax IV）**が本格的に動き出すことになった。

この計画について以前の報道（96年3月下旬号参照）では、「マッドマックス」シリーズの前3部作のアメリカ配給を手掛けたワーナーが、シリーズ・キャラクターの再開発計画の一環として、キャラクター玩具やテレビ・シリーズ化を発表し、そのテレビ・シリーズのスタートに合わせて劇場用の新作を製作するというものだった。そして当時の報道では、シリーズ生みの親のジョージ・ミラー監督との話し合いに入ったとも伝えられていたものだったが、実際にはワーナーの計画は実現せず、新作の計画も立ち消えになっていた。

その計画が息を吹き返したという訳だが、実は今回の計画を発表したのはユニヴァーサル。ミラーの製作による「**ベイブ**」シリーズの**第2作"Babe:Pig in the City"**の公開が11月に予定されている同社から、2001年か2002年の夏のイヴェント・ピクチャーとして「マッドマックス」シリーズの再開が発表されたのだ。なおミラーは「ベイブ」の第2作では監督にも復帰しているが、"Mad Max IV"でも当然ミラーの監督が予定されており、彼の次回作として計画されているということだ。

一方「マッドマックス」といえば、この作品の主人公マックス役で世界的なスターへの階段を昇り始めたメル・ギブソンだが、ギブソン側の話では、今回の計画に関して出演交渉等のアプローチはまだ受けていないとのこと。ただし第1作には1万5000ドルで出演したギブソンは、今や2000万ドル＋歩合という出演契約を結ぶまでになっており、しかも「ブレイブハート」でのオスカー監督賞を「ベイブ」の作品賞ノミネートで出席していたミラーの目の前で奪取したギブソンを、ミラーがどう演出するかということにも問題がありそうだ。なおギブソンとユニヴァーサルの関係では、90年製作のジョン・バダム監督作品「バード・オン・ワイヤー」にゴールディ・ホーンと共に主演したことがある。

「マッドマックス」

また、今回の報道ではワーナー側の反応は報告されていなかったが、当然ワーナー側にはオリジナルの3部作に関連してキャラクターなどの権利は残されているはずで、今後の映画の製作が開始されて公開されるまでには、その辺の動きも面白いことになりそうだ。なお製作の開始は、2001年の公開としても早くて来年の秋以降ということになるだろう。

ワーナー／VRPの製作計画

お次は、そのワーナーとオーストラリア映画界との関係で、以前にも紹介したオーストラリアの映画会社ヴィレッジ・ロードショウ・ピクチャーズ（VRP）との関係が大幅に強化されることになった。

ワーナーとVRPの共同作品では、すでにニコール・キッドマン、サンドラ・ブロック共演でアリス・ホフマン原作による**"Practical Magic"**の映画化が10月全米公開で予定されている他、ジョエル・シルヴァー製作、キアヌ・リーヴス主演のSF作品**"The Matrix"**、ロバート・デ・ニーロ、ビリー・クリスタル主演でハロルド・ライミス監督のコメディ作品**"Analyze This"**が撮影完了。また、ネーヴ・キャンベル、マシュー・ペリー主演のコメディ**"Three to Tango"**とレニー・ハーリン監督の海洋映画**"Deep Blue Sea"**が撮影中。さらに、湾岸戦争を背景にその戦闘の中で砂漠に埋もれた財宝の発掘を企む兵士たちを描いたアクション作品**"Three Kings"**が、ジョージ・クルーニー、アイス・キューブらの出演、ディヴィッド・O・ラッセルの監督で近日撮影開始。またジョエル・シュマッカーの製作総指揮で**"Gossip"**という作品も準備が進んでいるということだ。

そして今回、これに加えて新たに8本の計画が発表された。

その1本目は、49年にジェームズ・キャグニーの主演で映画化されたワーナー作品「白熱」（**White Heat**）のリメイク。オリジナルは結末の文字通りの白熱のシーンが伝説ともいわれる名作だが、今回の計画はこの脚本を、今年のオスカー脚色賞を受賞した「L.A.コンフィデンシャル」の原作者ジェームズ・エルロイが手掛けたもので、エルロイの脚色が伝説を超えられるか否か注目の作品だ。

2本目もリメイクで、こちらはアルフレッド・ヒッチコックがイギリス時代の35年に監督した**"The 39 Steps"**（邦題・三十九夜）を、「ミッション・インポッシブル」などの脚本家で、「テキーラ・サンライズ」などの監督作品もあるロバート・タウンが監督するもの。オリジナルは英国情報部長も務めたサー・ジョン・バカンの原作を映画化したもので、スパイ映画の元祖ともいえる作品、他にも2度のリメイクが記録されている。

この他の発表された作品で、**"Alone"**は、火星で遭難した緊急の救援が必要になった宇宙飛行士が描いた作品。脚本は「ジャッカル」などのチャック・ファーラーのオリジナルから「ディアボロス」のジョナサ

Digitized by Google

ン・レムキンがリライトしている。**"Replay"**は、スティーヴン・ロジャースの脚本で、タイムトラベル・ラブ・ストーリーと紹介されているが、同じ題名でケン・グリムウッド原作のちょっと捻ったタイムトラベルものがある。**"Drinking : A Love Story"**は、カロライン・ナップの原作の映画化で、アルコール依存症に沈んで行く中流階級の女性を描いた作品。ニコール・キッドマンの主演が予定されている。

"Dust"は、地球中に広がった疫病による環境破壊で絶滅に瀕した地球を救う研究を競争で繰り広げる科学者グループを描いた作品。原作はチャールズ・ペリグリノの長編小説。

"Breakdown in Evandale"は、外見は田園風だが、実は一つの頭脳に蜜峰のように操られているとしか思えない隣人や妻の行動でノイローゼになり掛かった弁護士が、そこから立ち直るまでを描いた作品。ブライアン・キングの脚本で、ヴィンツェンツォ・ナタリが監督する。

あと1本は題名未定で、キリスト教の総本山ヴァチカンを舞台にした「オーメン」のようなオカルト作品。脚本はミシェル・ペトローニとなっている。

以上が、VRPから発表された計画だが、VRPでは今夜5年間に20本を製作するということで、その内の15本が判明したということのようだ。

「白熱」

"Eyes Wide Shut" "Geisha" 続報

後半は短いニュースをまとめておこう。

最長製作記録に並ぶかというところまで来たスタンリー・キューブリック監督、トム・クルーズ、ニコール・キッドマン主演の**"Eyes Wide Shut"**の公開が、来年の7月16日と発表された。なおワーナーの発表では、作品は来年の早々には完成するが、一時発表された2月公開より最高の収益を得るためにに夏興行まで待たせるとのこと。またこれによって全世界一斉の公開も可能になったということで、別にさらに製作が遅れているという訳ではなさそうだ。しかし4月に出演者が再招集されて行われた撮影では、ジェニファー・ジェイソン・リーの役をメアリー・リチャードソンに変更して撮り直しが行われたということで、かなり大掛かりなものだったようだ。

スティーヴン・スピルバーグ監督の**"Memoirs of a Geisha"**で、主人公のニッタ・サユリ役にリカ・オカモト、共演者にジュリアナ・スーリスチョウ（と読むのかな）が発表された。なおオカモトは日本生れでヨーロッパで活躍、現在はニューヨークの舞踏団に所属するダンサー、スーリスチョウは昨年のトニー賞にノミネートされた新人の舞台俳優だそうだ。ただし配役がアメリカで選ばれたということは、故黒澤監督も心配していたように、映画は英語で撮られることになるようだ。

またこの作品の脚本は、「レインマン」「ベスト・フレンズ・ウェディング」などのロン・バスが担当することになった。なおバスは、スピルバーグが参加する以前からこの作品に興味があったが、スピルバーグの参加でさらにその気持ちが高まっていたということだ。撮影は来年の第1四半期に始められる予定だが、主演に無名の新人が選ばれていることもあって、脚本に掛かる負担はかなり大きく、このためスケジュールはかなり厳しいものになりそうだ。

〔井口健二〕

ときめいて
《映像のプロへ》
一直線

日活芸術学院

■映像科 創作科 技術科 美術科
■俳優科
■声優科（三科とも全日制2年）

入学願書受付中

キャンパスガイド〈体験入学〉
10/25日
11/8日
11/22日

参加ご希望の方は事務局K係宛ハガキ、電話、FAXなどでお申し込み下さい。

〒182-0023 東京都調布市染地2-8-12日活撮影所内
日活芸術学院 事務局K係
TEL:0424-85-2443 FAX:0424-87-1210
http://www.nikkatsu.com/school.htm

入学資料（無料）をお送りします。上記宛ハガキ、電話またはFAXでお申込み下さい。

日活製作第三弾
『きみのためにできること』
'99新春公開!!
監督：篠原哲雄 原作：村山由佳（集英社刊）
出演：柏原崇・真田麻垂実・川井郁子・岩城滉一
■日活芸術学院協力作品

Digitized by Google

from Europe

女性監督の新作2本

久しぶりにナタリー・バイが活躍する「**貴方が好きよ、でも自分のことに気を付けて！**」**"Si je t'aime, prends garde toi"**は、女性監督、ジャンヌ・ラブリュンヌの作品で、中年女性が、汽車の中で出会った正体不明の男との性愛に溺れて行く話だ。昨年のブリジット・ルーアン監督の（今年の横浜で上映された）「情事の後」と似たテーマだ。この映画の主人公は自分で収拾がつかなくなって落ちて行ったが、「貴方が好きよ…」のバイは結局、理性が勝って事を鎮圧（!?）する。どうもこの年代の女性監督は、ちと露悪趣味があるようで閉口する。自分にだけ興味があるので普遍性に届かない……。

それに比べると、若いレティシア・マソン監督はあっぱれである。処女作の（PFF96で上映された）「勇気をもって」で既に力量が取り沙汰されたが、新作の「**売ります**」**"A vendre"**でまた一回り大きくなった感じだ。彼女の盟友である女優のサンドリーヌ・キベルランが前作に引き続き、単純計算では割り切れない女性の心理と生理に迫る。構成も野心的で、失踪した花嫁を追う私立探偵の調査の上に浮かび上がって来る一人の女性像という形をとっている。

片田舎で生まれ育った娘が、故郷と両親を捨てて、職を転々としながら流浪する。彼女は、行く先々で出会った男たちとの恋愛関係を避けて、むしろ体を売ることを選ぶ。規範の、約束事のような人生を拒否して、何かを探して、でもそれが何か分からないままさ迷いつづけるのだ。

「売ります」

私立探偵が彼女に惹かれて行く過程は説得力を欠くし、ドキュメンタリー風にヴィデオ映像を挿入したりする技巧がイマイチ作為的で成功してるとは思えないが、それでも、観ている間中、色々なことを考えさせられ、観終わった後も、脳裏に焼き付く映像、そのインパクトは中々なものだ。同作品は夏休み明けの第一弾として8月26日にパリ市内28館で封切られ初日に8491人を動員した。この数字は、昨秋、同じタイプの作品で同じ規模で公開され、予想を遥かに上回るヒットとなった「ニノの空」や「マルセイユの恋」を上回る。

エロディ・ブシェーズ、ナターシャ・レニエのカンヌ受賞作

5月のカンヌで主演女優賞を、エロディー・ブシェーズとナターシャ・レニエがW受賞したことで一躍脚光を浴びることになった新人監督エリック・ゾンカ「**天使が見た夢**」**"La vie revée des anges"**は、満を持しての9月16日公開。パリ市内37館で初日に12478人の入りを記録し、アート系作品としては破格のスタートを切った。ゾンカ、42歳の長編デビューはさすがの演出力で、モーリス・ピアラを尊敬する彼らしく、二人の女優から、対照的な二人の女性像を引き出した。

「天使が見た夢」

ブシェーズ演じるフーテン娘、イザと、レニエ演じる縫製工場で働くマリー。二人の出会いと友情の芽生え。金持ちのプレイボーイ（グレゴワール・コラン）に振り回されて傷つくマリーと彼女を泥沼からどうにか救い出そうと必死になるイザ。モチーフは新しくないが、二人の女優の熱演に、つい感情移入してしまう女性も多そうな作品だ。

「TOKYO EYES」

こういったヘビー級の話題作の間隙を縫って、ジャン＝ピエール・リモザン監督、武田真治・吉川ひなの主演の超異色作「**TOKYO EYES**」は9月9日にスタート。パリ8館、1週目で2092１人（フランス全国の総計では33658人）を記録、その週一番の稼働率を上げた。この数字は丁度、昨年の「HANA－BI」の公開時に匹敵する。「HANA－BI」は最終的に234514人もの動員になった。ちなみに「うなぎ」は210000人だった。「TOKYO EYES」はこれらの成績に迫れるだろうか？ 日仏混血の不思議な映像が、世の興味を何処まで惹きつけられるか興味がつのる。

「TOKYO EYES」

エリック・ロメール四季物語完結

さて、9月23日公開のエリック・ロメールの「**恋の秋**」**"Conte d'automne"**は別格であ

Digitized by Google

る。何も宣伝しなくても必ず観客がついて来る。初日パリ23館で4860人を動員した。ヴェネチア映画祭で脚本賞を受賞したが、そういうことと、この監督の作品の集客率は関係ないのだ。何故なら、ロメールはもう自分の作風を極めていて、それを愛する人達が世の中にいっぱいいて、彼等は彼の新作を心待ちにしているからだ。

「顔を知られたくないから写真が掲載されるのは厭だ。先ず、人より作品の方が重要だと思うし、自己中心的に言わせてもらえば、面が割れてない方が、普段の生活も映画作りも快適だ……」という書き出しの一文が、売れ線の週刊カルチャー誌の表紙を飾った。逆説的宣伝効果も承知の上で、しかし（少額の製作費で充分な映画作法と必ず入る観客の間で）世にも稀な完全独立採算映画作りをつづけるロメールの誇りが伺える。

「恋の秋」は、四季物語の有終の美を飾る。ベアトリス・ロマンとマリー・リヴィエールというロメールが発掘し育てて、今40歳を過ぎた女優が二人、葡萄畑を渡る爽やかな秋風の中に立つ。子供が巣立って独りになった未亡人、彼女を気遣う親友は、彼女に再びロマンスを提供しようと画策するが、思惑通りには事は運ばない。その辺の心理の綾を描くのがロメールの真髄である。観てて楽しく、見終わってとっても気持ちの良い映画だ。こういう映画って、本当に貴重だ。

「恋の秋」

ロメール様「四季物語が完結してしまって寂しいのですが、次なる作品がどういう風に登場するか、待ち遠しいです！」一ファンより。

●フランス映画界のヒット作

今回は数字に凝った（そうそう、世界でフランスだけが、興収ではなく動員数で入りを勘定する）リポートになったついでに、今年のフランス映画界の稼ぎ頭に目を向けて見よう。当然ながらダントツ1位は2千万人（!!）を超えた「タイタニック」なのだが、2位には、なんとフランス・ローカルで大うけだった「おかしな、おかしな訪問者」の続編「おかしな、おかしな訪問者2」"Les couleurs du temps"を抜いて、「愚か者の晩餐会」"Le diner de cons"（横浜映画祭では「変人たちの晩餐会」という題で上映）が浮上。ともに800万人を突破している。4位の、既に日本でも好成績を収めている「TAXi」は、600万人に迫って来ている。

「愚か者の晩餐会」は非常に良く出来た脚本（基は舞台劇）に、俳優陣の名演（主演は、ジャック・ヴィルレとティエリー・レルミット、そこにフランシス・ユステールやカトリーヌ・フロ等が絡む）、そしてフランス・ヴェベール監督のさじ加減をわきまえた演出、と三拍子が揃った最上質のコメディだ。

世にもダサクてトロイ男を特別ゲストに、そいつをからかうのが目的の定期晩餐会を開いているエリート仲間。この鼻持ちならない状況をバックに、皮肉とペーソスに満ちた物語が展開する。アメリカの戦前のコメディや、フランスならサッシャ・ギトリーを引き合いに出してもおかしくない出来なので、日本でも公開して欲しい。しかし、この2位と3位は、国境を越えられない"喜劇"の悲劇的運命を背負って、海外には今のところ進出していない。それに比して「TAXi」は日本のみならず世界中で当たっており、単純明快なアクション映画の強さを見せているのだ。

［吉武美知子］

男性が読んでも面白い！
カルチャー情報満載で女性のオフタイムを応援する!!
Pause
月刊パウゼ12月号
10月23日発売
定価400円（税込み）
特集
25歳！そろそろ揃えたい「器」特集
CINEMA
トゥルーマン・ショー
作品論／P・ウィアー論／他
インタビュー
「アウト・オブ・サイト」ジョージ・クルーニー
「リプレイスメント・キラー」チョウ・ユンファ
「落下する夕方」原田知世
短期特別連載
小林千絵の"もっと映画を見ようよ！"
第8回ゲスト　高橋ひとみ
話題作を試写で先取り
"Pause CINE CLUB"
Vol.70「アンツ」
Vol.71「イン&アウト」
Vol.72「エディー・マーフィ ドクター・ドリトル」
Vol.73「マイ・フレンド・メモリー」
©1998 TWENTIETH CENTURY FOX.
詳細は本誌をご覧ください
試写会ご優待など特典がいっぱいの
"Pauseクラブ会員"募集中！
（入会金・年会費などいっさい無料）
全国有名書店・一部コンビニエンスストアで
毎月23日発売
〒153-0043 東京都目黒区東山2-6-4 東京学参ビル2F
東京学参株式会社
☎03-3794-3151（編集）03-3794-3159（販売）

Digitized by Google

from Japan

「日本沈没」を松竹が再映画化

松竹は9月30日、都内のホテルで会見、1999年12月公開に向けて大作「日本沈没―1999―」（小松左京原作）を映画化すると発表した。製作費12億円を投入、最新CG・デジタル技術を駆使して大森一樹監督がメガホンをとるスペクタクル作で、99年1月クランク・イン（特撮部分はすでに撮入）する。

「日本沈没」は1973年に発表され、社会現象を巻き起こしてベストセラーとなったSF小説。同年12月には東宝で映画化され、日本映画として初めて配収20億円の大ヒットを記録している。今回は、25年前に書かれた小松原作をベースに大森監督が脚本を執筆。舞台を1999年の日本に設定し、阪神大震災を予知して地震成り金となった

が落ちぶれ、再び日本沈没を予知する青年を軸に、全体的に登場人物を若い世代に代え、ストーリーを展開させていく。

大森監督は「経済的にも〝日本沈没〟と言われている今、タイムリーな企画。私の阪神大震災の被災体験を生かして、ハリウッドにまけない作品を作りたい」と抱負を話している。

製作の曽根俊治松竹取締役は「『ヒューマンドリーム』を標榜する松竹にふさわしい企画。製作費12億円をかけても十分回収が可能と判断して勝負に打って出るもので、配収は松竹のレコードである30億円を目指したい」と語った。

スタッフは、デジタル製作プロデューサーに大原伸一、CGディレクターに光吉俊二がそれぞれ担当。既にCG部分の製作作業は始まっており、製作費の半分、約6億円が投入される。キャストは年内に決定し、99年1月ドラマ部分を撮入、同10月完成の予定。公開は99年12月全国松竹邦画で拡大上映する。

竹中直人、小泉今日子共演のハードアクション

「ビー・バップ・ハイスクール」の原作者で、映画監督としても活躍する、きうちかずひろ監督が「鉄と鉛」に続いてメガホンをとり、竹中直人、小泉今日子主演「共犯者」（製作：東映／製作協力：セントラルアーツ）の映画化に取り組んでいる。

作品は、きうち監督のデビュー作品『カルロス』（OV）をベースに淡いラブストーリーを絡めて描くハードアクション。

主演は、『カルロス』に主演して以来きうち監督と親交を続けてきた竹中直人が、自分を陥れた暴力団への復讐に乗り出す日系ブラジル人の殺し屋・カルロスに扮する。共演の小泉今日子は、夫から乱暴されていたところをカルロスに救われる人妻の役。そして内田裕也が「エロティックな関係」以来6年ぶりに映画出演し、カルロスの命を狙う対立組織が雇った殺し屋役を演じる。他に大沢樹生、宮崎光倫、マコ・イワマツらが共演。作品は10月10日アップ、11月中旬完成。公開は、東映配給で99年4月東映系の予定。

オリジナルストーリーの続編「リング2」

大ヒット映画「リング」「らせん」の続編「リング2」（製作：「リング2」製作委員会／製作協力：アスミックエース・エンタテインメント）の製作発表が9月22日、都内のホテルで行われ、前作に続きメガホンをとる中田秀夫監督は「映画が終わる瞬間の観客のざわめきを意識して、とにかく怖い映画を作りたい」と抱負を語った。

「リング」は、200万部を突破した鈴木光司原作の映画化。今年1月公開の第1作は動員150万人、配収も10億円近くを記録して一大ブームとなった。

今回はこの続編で、呪いのビデオテープをめぐる新たな謎を中心に、人々を非日常の恐怖に陥れていくホラー。脚本は高橋洋が担当し、オリジナルストーリーを書き上げた。

キャストは、ビデオテープの謎を解く高野舞役に前作にも出演した中谷美紀。同じく前作に続いて高校生役で佐藤仁美が出演し、アイドル・深田恭子が共演。そして、前作で主演した松嶋菜々子と真田広之が特別出演する。作品は10月5日イン、12月完成。公開は99年1月23日より東宝系。併映は長崎俊一監督「死国」。

主演の中谷美紀と佐藤仁美

リトルモアMOVIES第4弾「流★星」

「どついたるねん」（89）「外科室」（91）等のチーフ助監督を務めてきた山仲浩充監督のデビュー作「流★星（リュウセイ）」（製作・配給：リトル・モア／製作協力：東京テアトル、フィルムメイカーズ）が、このほど完成した。

作品は、「ブープーの物語」（渡辺謙作監督）「Jam」（陳以文）「ポルノスター」（豊田利晃監督）に続くリトルモアMOVIES第4弾で、シリーズ最後の作品となる。物語は、GI級のサラブレッドを盗む、冴えない人生を送る老人、チンピラ、少女の3人が自らの運命を変えるために挑む誘拐劇を描く。

キャストは、冴えない老人を緒形拳、チンピラに江口洋介、少女に清水真実。ほかに國村隼、秋山道男、牧口元美、あき竹城らが共演。

公開はテアトル新宿にて99年新春レイトロードショー。なお、ホンマタカシ監督「謎のFLYING SAUCER2／FAKE OR LOVE?」（坂井真紀主演）が同時上映される。

Digitized by Google

映画界ニュース

●UPSアカデミーのオーディション

国際的に通用する俳優の育成を目指すUPS（ユナイテッド・パフォーマーズ・スタジオ）では、現在第二期生を募集している。

UPSは、「WINDS OF GOD」の監督、スピルバーグの新作「メモリーズ・オブ・ゲイシャ」の日本・アジア圏キャスティングディレクターなど、内外で活躍する奈良橋陽子が主宰する団体で、本年からはアカデミーを設立して2年間の総合演技トレーニングコースで、俳優育成に励んでいる。第二期生オーディションの詳細は次のとおり。

▽応募資格＝性別、国籍、年齢は問わない。
▽応募方法＝電話かハガキにより所定の申込書を請求、詳細を書き込み郵送。
▽しめきり＝98年12月15日（消印有効）
▽選考＝書類選考の第一時審査を通過した者だけ第二審査の面接に参加。結果はハガキにて通知。
▽合格後＝99年春スタート。2年間のカリキュラム（発声、身体訓練、演技レッスンなど）終了後、優秀者には次の内容のアフターケアが提示される。
・UPSインターナショナル部門に登録、海外の映画・TVへの出演プロモーション。
・日本国内における映画・TV・舞台への出演紹介。
・UPSほかのプロダクション、系列劇団への紹介、推薦。
▽講師＝フランク・カサロ、奈良橋陽子、ヘディ・ソンタグ、菊地隆則
▽問合せ＝〒151－0064 東京都渋谷区上原1－32－17 2階 UPSアカデミー係 ☎03・3466・2041

●東映邦画系の番組

東映邦画系の99年4月までの番組が決定した。

「時雨の記」（セントラルアーツ＝フジテレビ＝東映ビデオ）監澤井信一郎 出吉永小百合、渡哲也＝11月14日～

「ビーストウォーズ 超生命体トランスフォーマー」（タカラ＝東映＝イオン）監西森章 声岩浪美和＝12月19日～

「おもちゃ」監深作欣二 出宮本真希、富司純子＝99年1月15日～

「残侠」（製作委員会）監関本郁夫 出高嶋政宏、天海祐希＝2月中旬～

「99春東映アニメフェア」（東映＝東映アニメーションほか）＝3月中旬～

「共犯者」（東映）監きうちかずひ 出竹中直人、小泉今日子＝4月中旬～

●東北新社クリエイツのラインアップ

創立1周年を迎えた東北新社クリエイツ（近藤晋社長）は現在、映画、テレビと活発なソフト製作を行っている。ラインアップは次のとおり。

〈映画〉

「メトレス」監鹿島勤 出川島なお美、三田村邦彦＝99年4～5月洋画系にて

「レディ・ジョーカー」原高村薫＝99年秋公開予定

〈テレビ〉

「大丈夫です、友よ」脚山田太一 演深町幸男 出市原悦子、藤竜也＝今秋、フジテレビ系

「殺人捜査'98」脚金子成人 演深町幸男 出鹿賀丈史、高橋恵子＝12月29日、日本テレビ系

「救急指定病院⑨」脚渡辺善則 出池上季実子＝99年、日本テレビ系

「晴れときどき曇り（仮）」脚金子成人 出美保純＝99年4月TBS系

●またしても「どら平太」製作延期に!!

市川崑監督のメガホンで9月にクランク・インの予定だった「どら平太」（製作：日活＝チームオクヤマ）が、99年春に製作延期となることが決定した。

●「生きない」釜山で国際批評家連盟賞を受賞

ダンカン主演、清水浩第1回監督作品「生きない」（日本ヘラルド＝オフィス北野配給）が、第3回釜山国際映画祭（ニュー・カトント部門）で「国際批評家連盟賞」を受賞した。

●大阪ナビオに新劇場オープン

大阪北区のナビオ・阪急7階に東宝直営のミニシアター「ナビオシネ4」「ナビオシネ5」が、10月23日にオープンする。

▽座席数＝159席＋車椅子スペース2（シネ4）／141席＋車椅子スペース2（シネ5）
▽スクリーンサイズ＝2400㎝×5500㎝（シネ4）／2000×4700（シネ5）
▽オープニング作品＝「ライブ・フレッシュ」／「スライディング・ドア」（次回上映「ブギーナイツ」）
▽問合せ＝☎06・316・1318

訃報

秋山武史氏（あきやま・たけし／俳優）9月28日、直腸がんのため死去。45歳。75年「青春の構図」でデビューし、「トラック野郎・ご意見無用」やTV『翔んだカップル』80、『澪つくし』85、『あぶない刑事』86、映画「あぶない刑事」87～98シリーズ等に出演した。著書に『芸能界車狂い人間事典』がある。

Digitized by Google

日本映画の不振と黒澤明監督幻の企画

川端靖男●指田　洋●前野裕一（本誌）

A　今回は、ふたりが釜山映画祭から帰って来られないので欠席です。

B　向こうは台風が来ていて、飛行機が飛ばないようだね。

A　ですから、レギュラー・メンバーのふたりで進めていきたいと思います。

明暗を分けた評価の高い2本

A　まずは9月の興行から見ていきましょう。前回この欄でもふれた、評価の高い「愛を乞うひと」や「プライベート・ライアン」など多くの注目作が公開になりましたが……。

B　期待の1本、東宝「愛を乞うひと」は出足が悪いね。配収で1億5千万円程度だよ。企画そのものが地味だったということかな。それを大英断で邦画番線に出したのだが、結果的には失敗だった。

C　その大英断を応援したかったけど……。

B　宣伝はモントリオール映画祭に出品して審査員特別賞をもらったり、いろいろと推薦をとったりして作品のクオリティの高さをアピールした。原田美枝子もキャンペーンをがんばったからね。ところが「それが興行に結びつけば」という話が前回も出たけれど、案の定そうなってしまったね。

C　「こんな地味な作品をここまでヒットさせた。宣伝も中々やるじゃないか」と本当は言いたかったよなあ。

A　幼児虐待の場面が衝撃的すぎて、観たいと思う観客が少なかったということでしょうか。

B　メインの客層は主婦層になるのだろうけど、その層が来なかった。やはり、「失楽園」のようなラブストーリーがいいのかな。ヤング層は初めから期待できない。シルバー層なんかもねえ。

A　でも、東映の「プライド運命の瞬間」あたりは、シルバー層をターゲットにして見事ヒットしましたよね。日本映画は、ヤング層より年配層に向けた方がいいという傾向が最近はありますよね。

C　「愛を乞うひと」は問題提起をして社会問題化する映画だったといえると思うんだよ。「子育てとは何であるのか。ひいては親子の絆とは何か」。それを前面に押し出して宣伝をしなければダメだ。そんな情熱がなかったね。

B　「子育て云々」の宣伝展開では、もっと来なかったんじゃないの？

C　つまり、普通の映画を売るような宣伝ではダメだということだね。とにかく作品が浸透しなかった。これだけ評価が高いのに、一般に浸透してないパターンも珍しいのではないか。単館公開作品程度の知名度しかなかった。

B　ただ、悪いなりにも落ちは鈍い。それは作品評価の高さだろう。

A　次回番組「踊る大捜査線」の初日をくり上げるということはあるんでしょうか？

B　フジテレビの作品なのでで

「愛を乞うひと」

Digitized by Google

きないよ。5週はやらざるをえない。前番組を繰り上げてもダメ。急きょ番組を差し替えても無駄。

C　打ち切りといえば、松竹で公開中の「BEAT」が、10月2日でほとんどの館が打ち切り。10月17日からの「学校Ⅱ」までは各々の館で好きな番組を組む。「寅さん大会」が多いようだけど。

B　これは河井真也氏のプロジェクト「PeacH」の第一弾で、もともと東宝に持ち込んだ企画だったが、結局松竹で引き受けた。ところが、結果は惨憺たるものになってしまった。製作費は4億7千万。沖縄にオープンセットを作ったりして、結構お金はかかっているから痛いね。

A　配収でどれくらいですか。

B　3千万程度。

A　東映はいくらかいいのでしょう。

C　「あぶない刑事フォーエヴァー」は1週目がよくて配収5億の勢いだったけど、2週目でガクッと落ちて、どうやら3億5千万に落ち着きそうだ。

B　「愛を乞うひと」の前番組のアニメ「スプリガン」が3週で3〜4億。これは健闘していると思うよ。

A　洋画はどうでしょうか。前回この欄で「愛を乞うひと」同様、クオリティは高いが興行はどうだろうかと話題になったUIP「プライベート・ライアン」は？

C　予想以上の好調だね。30億以上は確実で、40億も可能ということだ。中高生から戦争世代まで観客層が広がっているのもいい兆候。「カラーパープル」「シンドラーのリスト」などスピルバーグのシリアス路線の作品では一番のヒットだろう。

B　「スプリガン」の健闘に対して洋画のアニメは弱いね。「アナスタシア」は惨敗。「ムーラン」がそれよりややよくて5〜6億。両作品とも宣伝費をかけているからねえ。

C　「シティ・オブ・エンジェル」が15億の大健闘。主演のメグ・ライアンが来日して、公開中になったけど、後パブとして大きく貢献した。ワーナーは「リーサル・ウェポン4」も12億で、上半期が不振だったけれどこれで一息つけるだろう。

不況の影響をうける東京国際映画祭

A　先日、第11回東京国際映画祭の概要が発表になりましたが、今年はどうでしょうか。

C　大不況のおり、映画祭も例外ではなく、映像振興文化財団への補助金や寄付金が減ってしまった。しかし、寄付金が少なくても開催しなければならない。よって映画祭の規模を縮小せざるを得ない。例えば、いままで二つあったコンペ「インターナショナル」と「ヤング」部門が一つになる。賞金の額も減って、ゴールドが3千万円から1千万円、シルバーが2千万円から500万円、ブロンズが無くなる。

B　それはそうだよ。全体の資金が4億円。ちなみに、昨年は5億5千万円。1億5千万円のダウン。

C　毎日出すディリーニュースも今年から廃止。いくらでもないと思うんだけどね。そこまで縮小する。

B　政府が出資するとか、東京都が思い切って金をかけるとか、そういうことをしないと「祭」という形が成立しないよ。イベント自体の運営費なんてべらぼうな金額ではないと思うよ。

C　そうなると、メジャーの映画会社に頼ることになる。つまり、正月映画のキャンペーンにならざるを得ない。

A　昨年からその傾向はありましたね。

「BEAT」

Digitized by Google

C　昨年は「タイタニック」「エアフォース・ワン」などメジャーの力を借りて盛り上がったでしょう。マスコミ的にもね。ディカプリオやハリソン・フォードが来日したりして。

A　しかし一方では、映画祭の本来の意味を忘れて、映画会社の正月映画の宣伝の場となったという批判の声も多くあった……。

B　しかし、映画祭を開催していることを誰も知らないといわれてきたのが、スター来日のおかげで一般にも知名度が広がった。それは大きいのではないか。

A　今年もスタイルは昨年と同じですね。ブラッド・ピットやブルース・ウィリスが来日する予定。

B　開催地区を渋谷から有楽町に移して国際フォーラムを会場にするという話も聞いたけれど、あれはどうなったのかな？

C　会場費が高いことと映写設備が整ってないことから不可能のようだ。

B　そもそも、東京都が開催しても無料で提供するわけがない。

C　映画会社（映連）が映画祭を開催しているのは、東京国際映画祭だけでしょう。他国の国際映画祭は独自の組織が開催していて、運営費は公共機関の、例えば映画庁の金などで開催されている。文化にかける金なんか大した額ではないだろう。もともと文化というものは、社会的状況からすると人に与える影響は大きい。そういう認識が日本という国には稀薄。もっともいえば日本人全体にないと思う。極端にいえば、だから映画祭も盛り上がらない。

A　今回の目玉の一つに、黒澤明監督の追悼特集がありますね。

B　そう。なにしろ「姿三四郎」から「まあだだよ」までの全30本を一挙上映するのだからね。

A　でも、これは「ニッポン・シネマ・クラシック」の枠でやるわけでしょう。もともと決まっていた番組があると思うんですが……。

C　そうなんだ。今年の「ニッポン・シネマ・クラシック」は、伊藤大輔、溝口健二、内田吐夢の生誕百年記念特集で、内田吐夢の幻の作品「暴れん坊街道」などをはじめ16本が上映される予定だった。それが急きょ「黒澤特集」と差し替えとなった。黒澤明監督の追悼企画はいまの時期には、とてもいい企画だと思う。しかし、東京国際映画祭の中に組み込む必要があったのだろうかという疑問もあるよ。今、黒澤作品をもう一度観たい、あるいは初めて観てみたいという人は少なくないだろう。「黒澤明追悼上映」は9日間で30本を上映する。ということは、平均して1日約3本、しかも全作品1回上映、平日の昼しか上映しない作品ももちろんある。そんな上映スケジュールで、通える人は一握りしかいないと考えるのが自然だろう。一挙上映といえば聞こえがいいが、短期間で全作品を上映することが果たして適切なのか、どうか。疑問を感じるけどね。

A　確かにそれはありますね。これを機に、東宝がイニシアチブをとって、「黒澤明監督特集」を映画館で開催すればそれもいいのだろうけど。

B　東京国際映画祭でやって、〝一応やりました〟という感じで終わってしまう気がしてならないけど。

C　黒澤監督の作品は、レンタルビデオでも回転率が非常に高いから、「追悼上映」を劇場でやれば興行として成り立つだろう。

黒澤監督の幻の2本
「海は見ていた」と
「どら平太」

黒澤明監督

Digitized by Google

A 黒澤監督の話題では、黒澤監督「まあだだよ」以降に映画化しようとして、結局断念した「海は見ていた」を、黒澤明の脚本で映画化するという話も出ましたね。あれはどうなるのでしょうか。

B ある名匠に監督依頼があったという話を聞いたよ。他にもいろいろと噂がとびかっているが、具体的な話は今のところはないね。

C 黒澤監督が撮ろうとしたときには、原田美枝子が予定されていたということが明らかになったね。

B 原田三枝子は主役じゃなくて、宮沢りえ主演、という話が当時出ていた。

C では原田美枝子は、「用心棒」の山田五十鈴のような位置だったわけ？

B そうそう。

A しかし、監督を引き受ける人はいないんじゃないですか。黒澤監督と比べられては……。

C だから、作風の全く違う新鋭監督を起用するしかないだろう。

A 黒澤監督のシナリオといえば、「どら平太」が製作延期になったという話も聞きましたが。

B これは、60年代末に、黒澤明、木下恵介、市川崑、小林正樹らが結成した「四騎の会」で製作しようとして流れた企画で、それを市川監督が再び映画化しようとしているのだが、9月のクランク・インを目前にして製作が延期となったそうだよ。

C 東宝の配給で来年秋公開の予定だったのでは……。

A でも東宝は秋に篠田正浩監督の「梟の城」がありますよね。秋に東宝から2本の時代劇が出るわけですか。

C それも変な話だね。

B 日活の公式発表によれば、黒澤監督が亡くなったばかりなので、自粛してインを来年に延ばすとのことだけど、日活のニュアンスとしては、亡くなるのを待っていた便乗企画と思われるのを避けたいということのようだ。

C しかし映画界の場合、今までの例からいうと、まず9割は「製作延期＝製作中止」を意味するからね。

A どちらも注目作だけに、陽の目をみることを期待したい。

■前回（10月上旬号）当欄のP150下段4行の「フジテレビ」は「TBS」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

キネマ旬報社の本

香港映画で学ぶ広東語・第二弾！

『香港電影的広東語 續集』

名作・名シーン・名セリフ集

陳敏儀著／236頁／2、000円＋税／10月23日発売

レスリーの、黎明の、小春のセリフの本当の意味は何だったのか……。香港映画のあの感動の名場面を再現。広東語・日本語完全対訳付で解説。

［収録作品］
■恋する惑星 ■君さえいれば
■月夜の願い ■ポリスストーリー3
■欲望の街 ■008 皇帝ミッション
■女人、四十。■ラヴソング

Digitized by Google

興行短信

竹入栄二郎

「あぶ刑事」vs「踊る大捜査線」日テレとフジの戦い

最近のテレビ事情はよく知らないが、日本テレビとフジテレビとはライバル意識が強く、視聴率争いをはじめ、ことごとに勝った負けたと飽くなき戦いに明け暮れているようだ。

テレビ放送自体はもちろんで、お互いが製作する劇場用映画に関してもその意識は強烈だ。最近では「もののけ姫」を筆頭に、どうやら日本テレビ側に軍配が上がることが多かった。とはいえ、満を持していたようにフジテレビは角谷優プロデューサーのもと「梟の城」を発表、来年にかけての戦いが面白くなってきた。

最近では、高岩淡社長をして「こんな光景は久々です」、岡田裕介営業担当をして「非常に好調！」と両首脳を手放しで歓喜させた東映＝日本テレビ「あぶない刑事フォーエヴァー」。配収にして6億円は確実というダッシュに関係者一同、まずはホッとした。

例えば9月の最終日曜の27日、都内4館の邦画3系統の成績を見ると、

松竹「BEAT」（13日目）動員878人、興収128万8700円

東宝「愛を乞うひと」（2日目）2075人　324万1400円

それに対して16日目の東映「あぶ刑」は3375人　529万9800円

とダントツの勢い（いずれも興行通信から）である。

日本テレビ＝東映は、テレビ放送でスペシャル番組を組み（8月28日）、映画館でその最終版を上映するという作戦をとった。その結果、映画の最初の日曜に都内3館でアンケートを行ったところ観覧動機は、

〔テレビのシリーズを見ていた〕　48・0％

〔TVスペシャルを見て〕　29・3％

〔好きな俳優が出ている〕　28・3％

〔ストーリーが面白そう〕　15・7％

などと出た。テレビ効果は合わせて77・3％にも及び、作戦が成功したことを裏付けている。

これが参考になったかどうか、10月31日から「踊る大捜査線」を公開する東宝＝フジテレビ陣営は、同様な戦略に期待を寄せ、東映＝日本テレビに追いつけ追い越せの掛け声で迫っている。

「あぶない刑事フォーエヴァー THE MOVIE」

「踊る大捜査線 THE MOVIE」

Digitized by Google

スポットライト
内田達夫
「プライベート・ライアン」が腰の強い興行になった理由・前編

10月6日のフジテレビ『踊る大捜査線　秋の犯罪撲滅スペシャル』で映画キャンペーンをスタートさせた。テレビシリーズは昨年1月から3月まで放映され、前回（12月）の放映スペシャルでは視聴率26％を上げており、その勢いを10月31日以降に持ってゆく作戦である。

それが成功するかのように、劇場前売りが絶好調。全国主要9館の9月29日現在の窓口売れ行きは1859枚で、この枚数は配収8億5千万円を上げた「バースデイプレゼント」の同日対比で164・4％、配収13億4千万円の「ヒーロー」インタビュー」に対しては275・4％という驚異的な数字が出ている。

劇場窓口だけでなく、プレイガイドの同日現在は「バースデイプレゼント」の198・0％、チケットセゾンでは「バースデイプレゼント」の実に674・0％という記録になっている。実際に売れた枚数はプレイガイド404枚、チケットセゾン337枚で、びっくりするような数ではないが、公開1か月以上も前の、この数は他の作品の過去の実績からも、大変な数なのだし、劇場窓口、プレイガイド、チケットセゾンなどが一様に売れていることは、ある種の保証になる。

「あぶ刑」は舘ひろし・柴田恭兵、「踊る～」は織田裕二・柳葉敏郎というそれぞれ自慢のコンビで売り、またともに「THE MOVIE」を付加し、テレビとの相乗効果を狙う点、この2作品には共通するところが多く、二つの〝娯楽テレビ局〟の激突として、どちらが、より優れた事件解決を果たすのか、外野席としては興味津々というところである。

秋興行最大の目玉として9月26日から日本劇場系で公開の始まったスティーヴン・スピルバーグ監督の「プライベート・ライアン」（UIP）が大ヒットを予感させる見事なスタートを切った。UIP映画宣伝部部長の三苫雅夫によると、「月末だから招待券のお客様も多くて、発表数字だけを見ても分かりづらいんですけど、日本劇場では初日から全回（土・日は4回、平日は3回の上映）フルキャパの状態が続いてるんですよ（10月1日現在）」とのことで、その勢いは公開前の多くの予想を上回っている。

この作品、その完成度に関しては、筆者も含めて多くの批評家やライター、マスコミが絶賛していたが、こと興行的なことに話が及ぶと誰もが不安を口にしていた。正直言って筆者もその1人。何故かといえば、作品の出来不出来に関係なく一部の例外（最近ではアカデミー賞受賞前の「タイタニック」）を除き、この作品は単純に「売れない映画の三重苦（冠なしで、長くて、暗い、歴史物）」を背負っていたからだ。おまけに出演者は男ばっかり。いくらアメリカで大ヒットして、スピルバーグとトム・ハンクスの名前があるとはいえ、これで〝興行的にもいける〟と断言するのはちょっと苦しい。もちろんスピルバーグ&ハンクスのネーム・バリューと作品のクオリティの高さがあれば、いくら何でも〝配給収入10億円以上は確実だが〟とは多くの人が思っていた。だが、アメリカで大ヒットした実績の手前、その程度では、UIPは困ってしまうはずだ。高めの予想をした本誌10月上旬号『TOP JOURNAL』でも〝いわゆる戦争映画〟〝女性には難しい〟を理由に、「シンドラーのリスト」（配給収入20億6千万円）よりはいく」としている。要するに公開前の予想はおおよそ10～20億前後程度になっていたわけだ。

「プライベート・ライアン」

ところが、「男性ばかりだろう……と予想していたんですけど、若いカップルが劇場を埋め尽くしました」という、〝もしかしたらイケる〟という手応えを示した先行オールナイトを経て始まった本興行は、「中・高校生のグループから若いカップル、中高年層まで」幅広い観客層を集めて多くの劇場で〝只今お立見です〟の札が出るスタートとなった。その勢いは「配収38億円を記録した『フォレスト・ガンプ／一期一会』（UIP・日本劇場系、95年3月11日公開）との対比（初日～3日目）で110％。9大都市とローカルの比率は42：58です。ローカルの方がいい作品は強いですよ。腰の強い興行になりますね」とのことだ。これは〝公開前の予想を覆す成功〟と言ってもいいかもしれない。一体、その要因は何だろうか。その鍵を握っていると思われる宣伝展開について、「不安が全くなかったと言えば嘘になるが……」と話す三苫氏に、引き続き話を聞いていく。（次号へつづく）

Digitized by Google

98年ニッポンのアニメ

映画戦線

大高宏雄

日本映画はアニメである、と改めて認識させられた。今年のアニメはすでに現時点（9月末）で公開が終了したものが12番組20作品。量的には例年と比べてそれほどの変化はないと思われるが、興行成績では1～9月の9ケ月間を見る限りにおいてはアニメは、邦画3社の全配収成績の何と52％を占める。具体的には3社の累計配収が211億円で、そのうちアニメの総配収は110億円となる。因みに昨年は邦画3社の年間配収のうち、アニメは68％。昨年は「もののけ姫」（最終配収113億円）という怪物アニメがあったから、当然のシェアとも言えるが、今年のアニメは宮崎アニメの突出性がなかった分、作品の各バリエーションにおいて興味深い色分けができていたように見える。色分けとは製作の形から中身、観客層、そして興行成績に到るまでのことで、そのバリエーションの一貫性こそがアニメのシェアや安定化に貢献していると見る。日本映画はアニメであるという言い回しを許す背景には、数字以前にアニメなりのそうした一種の自己成長の形が、そこにはっきり見えることが極めて大きい。

今年アニメのトップ成績になったとともに、洋画も含めた全公開作品中でも第3位の配収となりそうなのが、あのポケモンこと「**ポケットモンスター　ミュウツーの逆襲**」（配収41億円、以下併映作品略）であった。私はこの「ポケモン」と、例によってかなりの予断と偏見で相対しながら、しかしそのあまりの面白さに何のことはない、あっさりと脱帽することになってしまった。ポケモンの一匹であるピカチュウや様々な怪物の造型ぶりのユニークさももちろんのこと、変格ポケモンのミュウツーが、自身の出自を呪いながら同種のポケモンに復讐していく物語がとにかく面白いのだ。世評の分析はどうか知らないが、「ポケモン」の大ヒットの要因には、まず第一に内容の面白さを挙げなくてはならないだろう。確かに「ポケモン」はTVゲームと漫画が連動し、漫画やTVアニメを経て爆発的な人気を得ていく過程をたどっていた。だからこそ劇場版が作られたとも言えるのだが、作品化にあたっては、キャラクターのみを優先させて物語を貧弱にさせるような方法はとらなかった。これが子どもたちに、絶大な満足度を抱かせる大きな要因になっていると私には思える。

ふと気がつけば、3月公開の「**ドラえもん　のび太の南海大冒険**」（配収21億円）や4月公開の「**名探偵コナン　14番目の標的**」（配収10億5千万円）も、はっきりと物語主導のアニメであった。「ドラえもん」はよく、大人が観ても楽しめるというが（事実、公開前にはオールナイトでの上映が、大人たちの評判を呼んだこともある）、それは明らかに物語の運びの点で相当工夫が為されてあったからだろう。「南海大冒険」ももちろんそうであった「コナン」の場合はそれがさらに重要なポイントであって、謎ときを形成する物語が破たんしていたら、作品そのものが成立しない。観客の子どもたちが、もっと難しい筋立てにしてくれと要望しているという話を聞くと、さもありなんと思う。謎とき、あるいは物語の進行において子どもたちは、大人が想像する以上に本当によりよく理解している。よくアニメというと、どうしてもキャラクターが表に出て、その中身、つまり物語の点までは一般的にはなかなか取りざたされることはないが、以上の3作品はまずもって物語によって子どもたちの関心を惹こうとし、実際見事にそれに成功しているように見える。

反対に私は9月公開の「**スプリガン**」（配収3億5千万円）を観て、物語の面白さというようなものを味わうことがなかった。もちろん、そこには筋立てはある。しかし、その筋立てが物語として大きな満足を観客に与えるようにはできていない。物語に代わって観客の関心、というより観客の眼を楽しませてくれるのは、手を替え品を替え登場する様々な意匠のにぎわいぶりである。そのにぎわいは、一見ハリウッド調と言ってしまっていいかもしれない。「ジュラシック・パーク」やら「インデペンデンス・デイ」などにあったキャラクターや物量としての装置。一番似ていたのは、実はエメリッヒの愚作「スターゲイト」の装いだったというのは冗談としても、「スプリガン」が目指そうとしていた世界は、何とハリウッド大作の再現と似てしまっていたことか。これはいい悪いではなく、「スプリガン」が実写版への憧憬を作品の底部に秘ませていたからに違いない。大友克洋監督のあの傑作「AKIRA」との近親性を誇示しながらも、何故かそれはハリウッド調の意匠のにぎわいに終始せざるをえなかったと言っていい。ただ、子どもではないこの作品の観客にしたら、このにぎわいだけで本当に満足できたものか、どうか。

Digitized by Google

異状なし

意匠のにぎわいぶりを、コスプレやら美少女キャラクターなどのゴッタ煮で成立させたのが「劇場版　機動戦艦ナデシコ」（配収5億円）ということになろう。ここでももちろん筋立てらしきものはあるのだろうが、観客はそれを追っていくことをあまり迫られない。意匠のにぎわいがハリウッド調への傾斜ではなく、極めて日本的な前出のゴッタ煮調というのが「ナデシコ」の特徴だと言っていい。観客はこれらの意匠を自身の嗜好性に合わせて楽しむ。それがまた、心底満足できるものなのかどうか、門外漢の私には理解できないが、映画は明らかにそのように作られている。言ってみれば「スプリガン」がハリウッド調なら、「ナデシコ」は日本調。もちろん、意匠の中身は全く違っている。しかし物語に身を任せながらその奥のカタルシスを感じていく以上に、その都度の意匠の突出性を楽しむようにできている点でともに共通性がある。そして前出の3作品がキャラクターを楽しむ以上に、物語の面白さで観客を釘づけにしていくのとそれは随分違っている。

面白いことに、「ポケモン」「ドラえもん」「コナン」といった幼児から小学生を中心にした観客のアニメは物語が、「スプリガン」「ナデシコ」といった中高校生から20代を中心にした観客のアニメは意匠性が、それぞれの作品の特徴となっている。「ポケモン」などはその物語に、キャラクターの要素をつけ加えることができるが、それは意匠性の提示に見られるような複雑な感情操作を観客に強いない。極めてシンプルな世界像の提供であり、だからこそそこには大きな普遍性がある。反対に「スプリガン」「ナデシコ」は意匠性の要素が強いため、それが成立している背景を理解できる観客のみがその世界を共有できる。オタクという言葉はそこから生まれる。観客の年齢層が上がるにつれ、物語から意匠性に作品が傾いていくのが私には非常に面白く映る。そして興行成績の数字が、意匠性優先のアニメより、物語主導のアニメの方が断然上になっていることも非常に興味深い。

以上の中身の比較に、製作の在り方を加えてみるとその違いがより鮮明になってくる。「ポケモン」「ドラえもん」「コナン」（もちろん「クレヨンしんちゃん」もここに加えていい）はすべてTVアニメとして放映された後、劇場版が製作されている。テレビ放送と同時進行で映画化されているのが特徴的で、その基盤に立って観客層が想定され、ヒットに結びついた経緯をもつ。反対に「スプリガン」は雑誌連載で話題になった後、劇場版が製作されている。こちらは映像ではなく、雑誌媒体の読者を基盤に観客層が想定され、アニメ化の運びとなっている。そして「ナデシコ」はテレビでも放送されたが、映画化との同時進行ではなく、映像の基盤は前3作よりは強くない。この両者の違いの中に作品の中身から観客層、さらに興行成績が決定づけられていく一つの方向性が見えるというのがまた何とも面白い。

アニメのバリエーションの色分けとは、今年大枠では以上のような形で為されている。その結果、各々が全く違う観客層をもちながら、確実にそれぞれの興行の形を作り上げ、アニメのシェア安定化を促進した。これを私はアニメの自己成長と言う。今回はアニメファンなら当然と言える視点を、アニメファン以外に向けて記してみた。が、ただ何故、中高校生以上を視野に入れたアニメが意匠性優先なのかという疑問は最後まで残る。物語はもはやその層には有効な力と成りえないものなのか、どうか。この問いに答えうるのは前出の「AKIRA」と昨年の「エヴァンゲリオン」ということになろう。そして本質論、実写の日本映画は、自己成長を遂げるアニメといかに拮抗しうる製作姿勢を今後もつことができるのか。しかし、残念ながら紙数が尽きた。

「スプリガン」
©1998たかしげ宙・皆川亮二／「スプリガン」製作委員会

「劇場版　機動戦艦ナデシコ」
©ジーベック／1998 NADE SICO 製作委員会

Digitized by Google

キネ旬ロビイ

KINEJUN LOBBY

読者スクランブル

●恐るべき若手俳優

久しぶりに、魅力的な若手俳優と出会った。その男は、「ろくでなしBLUES98」に出ていた。主人公の不良（前田憲作）の敵役を演じていた。格闘シーンで構えた時に、全身から発散されるオーラが……。カラテ・アクションの素晴らしさには、胸が震えた。えっ？　その俳優の名前は誰なのかって？　真田由介、恐るべき奴。（桝井善史・大阪府茨木市・30歳）

●あいち国際女性映画祭98

「あいち国際女性映画祭98」の上映作品を2本観ました。今年で3回目のこの映画祭に出かけたのは今回が初めて。その内の一本、オーストラリア映画の「女と女と井戸の中」はちょいとコワい、ちと陰鬱な作品だけど、ラストの方のシーンを好き勝手に解釈したりしている内に、今では好き、というか面白いって印象を持っています。舞台挨拶&上映後のトークのサマンサ・ラング監督がとても魅力的な方でした！　この初の長編の前に撮っている、違う毛色の短編映画がどんなものなのか興味があります。陽気な作品？　このとてもステキな監督さん、帰るところがオーストラリアだからうらやましいです。あの国は子供の頃に暮らした、大好きな大切な場所。でも自分にとっては、あくまでも訪れる所なんですよね。最初に暮らした頃は、イヤな事を何も知らずにいられたけれど、いつの間にか白・黒・黄色って肌の違いが世の中に存在することを意識しています。「インディラ」や「ポンペイ」の中の、まだ差別って概念を持たない子供たちっていいですよね。このままずっと大人の世界の概念に毒されずに成長して行けたら、きっと世の中いい方向へ変わりますよね。（小野素子・愛知県名古屋市・アルバイト・36歳）

●名画座最後の砦・大井武蔵野館

大井武蔵野館は、本当に名画座最後の砦になってしまうのでしょうか。並木座が閉館したあい。利重剛監督と小山内美江子さんが対談されたという貴重な番組です。どうしてもどうしても見たいので、録画された方、ご連絡ください。お願いします。（〒969−65　福島県河沼郡会津坂下町村田17−1　本間千賀子）

■ジェット・リーこと李連杰の大ファンです。キネ旬9月上旬号の望月美寿さんの連杰の記事の中で、1995年の12月下旬号に連杰のインタビュー記事があると知り、必死で捜したのですが、キネマ旬報社及び古書店にもその姿はなく、それでもどうしても読みたいのですが、もしお持ちの方がおられましたら、コピーを送っていただけないでしょうか？　お礼は私の描いた連杰のイラスト入りTシャツをお送りいたしますのでIIこれからもずーっと彼を応援したくて、現在新聞作成中です。共に連杰を応援して下さる方もお便りお待ちしております。ヨロシクII（〒590−0403　大阪府泉南郡熊取町大久保中2丁目11−17　嵯峨眞理）

ロビイ読者伝言板

■11月1日、15日、29日、12月6日、20日と「もう迷わない見たい映画、好みの映画にたどりつくライブ版映画ガイドcinema講座」を開催します。サロン的な感じでワイワイと行いたいと思います。詳しくは80円切手同封のうえ問い合わせください。（〒552−0014　大阪府大阪市港区八幡屋1−10−4　久米喜典）

■海外の芸能雑誌から面白そうな記事を見つけては和訳して同人誌に掲載している我等が翻訳チーム（現在17名）が、結成1周年を記念して、これまでに発行した同人誌のバックナンバー全6号を一般に販売することにしました。R・マッチオ、J・デップ、D・ジョンスンに関する記事。あやしいゴシップもの。中国語圏なら台湾の女性アイドル、阿Mei、ビビアン・スーの記事など。他にも音楽に詳しい者が訳したベックなどグランジの終わりと新しい時代の始まりを象徴するアーティストたちの記事や「誰がカート・コバーンを殺したか?」「Hiphop in Japan」なども。各三千円。6号まとめてなら九千円。内容の詳細は、80円切手同封にてお問い合わせいただければ、お応えいたします。（〒562−0001　大阪府箕面市箕面8丁目17−21　福村ゆかり）

■写真集『映画館No.2』ではライター、カメラマン、モデルを募集中。映画館大好きの人、歓迎です。ご連絡ください。（〒164−0003　東京都中野区東中野4−4−5−307　高瀬進）

■日本文通友の会（J・F・C）では全国的に会員を募集しています。邦画大好きという方もたくさんいます。文通からの友達作りに興味のある方は、はがきにて連絡ください。案内書を郵送します。（〒355−0002　埼玉県東松山市東平1670−12　柴生田浩）

■1988年に公開された、金子修介監督作品「1999年の夏休み」という邦画のビデオテープを探しています。残念ながらビデオ、LD共に廃版になっております。どうしても観たいので、ビデオテープをお持ちの方、テープ代等、負担しますので、ダビングしてください。またビデオ店で在庫を見つけた方、ご一報ください。よろしくお願いします。（〒065−0019　北海道札幌市東区北19条東22丁目2−14　國守規）

■9月19日に放映されたNHKの『土曜ホットモーニング』を録画された方、どうかダビングさせてくださ

Digitized by Google

とは、10月から、小津特集を組み、並木座の分まで背負って頑張っていくようだ。「恐怖奇形人間」と「東京物語」、どちらもみられる〝何でもあり〟の映画館だ。（渡辺彰・東京都江東区・学生・27歳）

●辛いのに期待させる作家

とんでもない映画を見てしまいました。それは「鬼畜大宴会」。見る前から覚悟はしていたんですが、予想以上に残酷描写が生々しくて、頑張っても終盤は正視出来ないカットがほとんどでした。見終わると吐き気がして神経ズタズタになりました。もう2度と見たくありません。しかし、凄い映画であることは確か。プロの映画監督でもあれほど張りつめた強い演出をする人はいないでしょう。こんな映画を作る人（それも23歳）が存在するのかと思うと怖くなりますが、天才が現れたようで嬉しくも想います。YESレーベルの次作は是非、熊切監督にお願いしたいです。これから先、一体どんな作品を見せてくれるのかとても楽しみです。（鎌田一也・香川県善通寺市・学校職員・27歳）

●有意義だった小津映画祭

故・小津安二郎、ゆかりの地長野県茅野市蓼科高原で開かれた「小津安二郎記念・蓼科高原映画祭」に参加した。この種の映画祭では初めて映画監督協会のバックアップもあり、山田洋次氏、鈴木清順氏、岩下志麻さんなどもお見えになり、シンポジウム、「秋刀魚の味」「麦秋」などの上映と、とてもにぎやかで有意義な映画祭となった。平日の開催など考える点もあろうが、今後さらに発展させてほしいと思う。（山田隆康・長野県岡谷市・会社員・48歳）

●地味だけどかっこいい人生

「ER」フリークとしては特集を興味深く読みました。新聞なんかでも、本物の救急医が「ER」のドラマは見ていても勉強になるウンヌン……という記事を見たことがありますが、元看護婦の小林光恵さんのインタビューもまた、同じ職場の人間としての感想が知ることができてよかったです。私の職業はデザイナーで、一見華やかだと思われがちですが、現実は地味ーな仕事です。しかし日本のドラマで登場するデザイナーはこぎれいで……。だから私が、「デザイナーだ」と言うと「かっこいい」という返事……。というわけで私は「ER」にはまって以来、日本のドラマは退屈で見ないのです。（木村恭子・奈良県大和郡・デザイナー・23歳）

●応援しています！

東谷長吉の直木賞受賞作「赤目四十八瀧心中未遂」は、読み進むうちに「赫い髪の女」とイメージが重なってくる。神代映画を連想させるこの作品、荒戸源次郎プロダクションで映画化されると知った。「陽炎座」と「どついたるねん」のミックスも面白いかもしれない。（手束浩・愛知県名古屋市・会社員・44歳）

●質問

「外国映画人名事典・監督篇」の発売はどうなっているのでしょうか？　誌面で詳細を伝えてください。お願いします。（渡辺一弘・東京都武蔵野市・映画ライター修業中・28歳）

発売が遅れております「外国映画人名事典・監督篇」ですが、来年（99年）秋にはなんとか刊行出来る予定です。お待たせしておりますが、どうぞお楽しみに。

赤塚不二夫、学生と語る――編集部

本業以外でも何かと話題の多い赤塚不二夫氏が、9月10日特別講座に出席するために「東映アニメーション研究所」を来校、将来宮崎アニメを越えて21世紀に通用するアニメーションを目指すべく勉強する学生のために檄を飛ばした。

「手塚（治虫）先生が僕ら（寺田ヒロオ、藤子不二雄、石森章太郎ら）によくおっしゃった。君たち、漫画家は漫画から漫画を勉強してはいけないよ。それより、一流の映画を観なさい。一流の本を読みなさい。一流の音楽を聴きなさい。その中から自分の世界を見つけなさい」と。正直いって「どうして漫画から勉強してはいけないのか？」と思いましたよ。でも、僕らにとって手塚先生は漫画の神様ですから。生活を切りつめて、一生懸命映画を観て、本を買って、レコードを買って、機械がないから石森の電蓄を借りてみんなで聴いて勉強しました。それが後々、作品のもつリズムや構成などに役だった。ですから、みなさんにもそういう本当の意味での基礎を身につけてほしいのです」とトキワ荘の修行時代を語った。また、赤塚氏は大の黒澤明ファンであることも有名。「七人の侍」での高堂国典の「やるべし！」というセリフからベシという蛙のキャラクターをつくるほど。学生からその質問がとびだすと、

「僕は黒澤マニアだよ。だから、僕の飼っている猫の名前も菊千代だから。君たち「七人の侍」観た？　「蜘蛛巣城」は？　だめだよ、黒澤作品は全部観なきゃ」

話はディズニーからタモリまで広範囲におよんだが、最後には「うちにはいい映画もある。スクリーンもある。だからよかったら、うちへいらっしゃい。そして、飲んで、食べて、楽しんでいっしょに勉強しよう。ただし真面目な人だけだよ（笑）」

まるで「まあだだよ」の内田百閒先生を思わせるような言葉で、赤塚先生の講義はしめくくられた。

Digitized by Google

私の映画日誌

The Eye of Kazuma ㉔

井上一馬

アクション映画の傑作群

この数週間のあいだに、面白いアクション映画を立て続けに見た。

採れたて超新鮮！ という感じでまず気に入ったのが、クリス・タッカー主演の『**ランナウェイ**』。

この作品は、ケチなダフ屋（タッカー）が犯罪組織の大がかりな脱獄計画に巻き込まれるという、いわゆる「巻き込まれ型」のアクション映画だが、監督のブレット・ラトナーは、リュック・ベッソン監督の『フィフス・エレメント』で強烈な個性を発揮したクリス・タッカーのキャラクターをうまく抑えて生かしながら、アクション映画として存分に愉しめる内容に仕上げている。

クリス・タッカーは、アイス・キューブが製作・脚本を担当したユニークなブラック・ムービー『フライデー』（1995）でアイス・キューブの相棒役を個性たっぷりに演じ、ヒューズ兄弟の『ダーク・ストリート 仮面の下の悲しみ』（1995）では、ヘロイン中毒のベトナム帰還兵の役を迫真の演技で演じてみせた。

そして彼は、『フィフス・エレメント』（1997）では、端役だが、宇宙で人気絶大のDJ役を、持ち前のマシンガントークで圧倒的な迫力をもって演じ、一躍、注目を集めたのだ。

クリス・タッカーは今、

「エディ・マーフィーの再来」

とも言われているが、マーフィと同じようにタッカーの場合も、マシンガントークや悪ふざけがあまりにも前面に出すぎると、見るほうはちょっと辟易してしまう。

そこのところを、ブレット・ラトナーは非常にうまく処理しているのだ。

ラトナーは、コカ・コーラの全米用コマーシャルなどを手がけてきた人だというから、そのへんのところはソツがないのかもしれないが、聞けば、ニューヨーク大学映画科出身のこの監督はまだ二十六歳だというではないか。大変な若手の才能が現れたものである。

このブラット・ラトナーはこのあと、クリス・タッカーと、あのジェッキー・チェンを主演にして超大作アクション映画『ラッシュ・アワー』を撮ることになっているそうなので、こちらのほうも今から非常に愉しみである。

「ランナウェイ」

キーナン・ウェイアンズ

『**クロスゲージ**』も、アクション映画として抜群に面白かった。

この作品も、『ランナウェイ』同様、アフリカ系アメリカ人がヒーローの映画である。

その人の名は、キーナン・アイボリー・ウェイアンズ。弟のディモン、マーロンとともに、ウェイアンズ三兄弟として知られる人気俳優のひとりだ。

キーナン・ウェイアンズは当初、『エディ・マーフィ／ロウ』（1987）などの作品で、製作や脚本のほうの印象が強く、俳優としては、『モー・マネー』や『ラスト・ボーイスカウト』のディモン・ウェイアンズのほうが活躍しているように思えたが、自らが監督も務めた『ダーティ・シェイム』（1994）や、スティーブン・セガールと共演したアクション映画『グリマーマン』（1996）の頃から、徐々に俳優としても注目度が増していった。

そして、湾岸戦争で活躍した射撃の名手が無実の罪に問われるこの『クロスゲ

Digitized by Google

ージ』では、ジョン・ヴォイトやポール・ソルヴィーノといった白人のヴェテラン俳優を要所に配した大作映画で、見事に主演を張ってみせているのだ（彼は製作も兼ねている）。

キーナン・ウェイアンズは、一九五八年生まれで今年四十歳。

黒人がかなり自由に活躍できるようになってきた今のアメリカ映画界で、ようやくその才能が大きく開花しつつあるといえるだろう。

チョウ・ユンファ ハリウッド・デビュー

『**リプレイスメント・キラー**』は、ご存じ『男たちの挽歌』のチョウ・ユンファのハリウッド進出第一弾のアクション映画だ。

お相手は、今乗りに乗っていて、（私の大好きな）ミラ・ソルヴィーノ。

監督は、この作品がデビュー作になる若手（一九六六年生まれ）のアフリカ系アメリカ人アントワ・フークアだが、作品の大元締めとして製作総指揮に当たっているのは、『男たちの挽歌』などの作品でチョウ・ユンファとずっとコンビを組んできたジョン・ウーだ。

この映画では、香港の映画界からひと足先にハリウッドへ進出し、『ブロークン・アロー』や『フェイス／オフ』といった作品をヒットさせてきたジョン・ウーが、チョウ・ユンファのハリウッド進出の御膳立てをしたという格好だ。

この『リプレイスメント・キラー』で、チョウ・ユンファは、組織に依頼された子供の暗殺を拒否して逆に組織に追われることになるヒットマン役を演じている。

ユンファの英語には今ひとつ難があり、この作品ではまだ十分にその実力と才能と魅力を発揮しきっているとまではいえないが、抱擁力と繊細さを併せもったスケールの大きい俳優としての彼の魅力にはやはり絶大なものがある。ミラ・ソルヴィーノと恋をしても、彼にはまったく違和感がない。

同じアジア系の人間として、私は、チョウ・ユンファには是非、アメリカ映画界のメインストリームで大活躍してほしいと思っている。

モーガン・フリーマン、悪役に挑む

『ディープ・インパクト』などの作品でますますその存在感と演技力を際立たせているモーガン・フリーマンが、珍しく悪役を演じているのが、大洪水をテーマにしたアクション映画『**フラッド**』だ。

大洪水に襲われた街を舞台に、強盗と現金輸送車のガードマン（クリスチャン・スレーター）と警察が三つどもえの闘いを繰り広げるこの映画は、脚本が『スピード』で華々しく映画デビューを飾ったグラハム・ヨスト、製作が『スピード』のマーク・ゴードン、『ツイスター』のイアン・ブライスだけあって、とにかくテンポがいい。息もつかせない、スピード感のある映画である。

ヨストは、『スピード』でスピードという新しいテーマをアクション映画に持ち込み、今回の『フラッド』では洪水をテーマに据えた。

さて次はどんな意外なものをテーマとして取り上げるのか、これもまた愉しみだ。

「リプレイスメント・キラー」

「クロスゲージ」

バンデラスの魅力

『**マスク・オブ・ゾロ**』は、主役のアントニオ・バンデラスの魅力がはち切れそうな映画だ。

この作品は、『奇傑ゾロ』など一連のゾロ映画のリメイクだが、バンデラスという飛びきりセクシーなゾロ役を得て、大傑作として甦った。

この映画の監督のマーティン・キャンベルは、『007／ゴールデンアイ』でジェームズ・ボンド・シリーズの人気回復に貢献した人だから、古いものに磨きをかけて現代的にすることに長けているといえるかもしれない。

それにしても、この映画のバンデラスのセクシーな魅力はどうだ。

スペイン出身の彼はデビューしたての頃、一九二〇年代に一世を風靡した、イタリア出身のルドルフ・ヴァレンチノの再来と騒がれたが、この映画ではたしかに、ラテン系の男のセクシーな魅力が爆発している。

『マスク・オブ・ゾロ』では、共演のキャサリン・ゼタ＝ジョーンズも、ものすごくセクシーで魅力的だ。

Digitized by Google

撮影時評

渡辺　浩

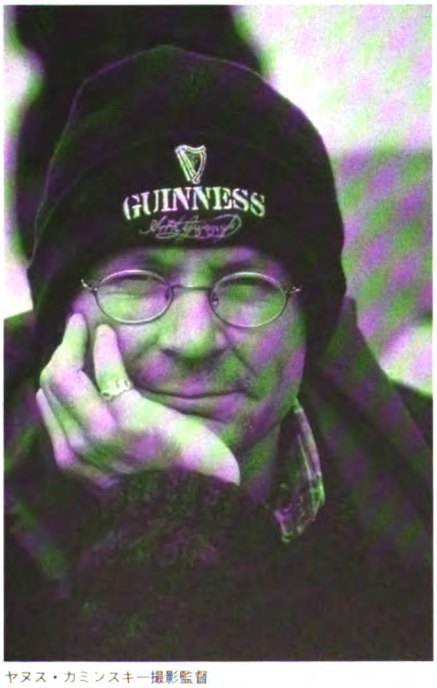
ヤヌス・カミンスキー、戦争を撮る

「プライベート・ライアン」を見ました。新潮文庫で原作を読んだ時から、スピルバーグ、カミンスキーのコンビが映画化すれば、「シンドラーのリスト」や「アミスタッド」同様、徹底したリアリズムでやるだろうと思っていましたが、期待どおりでした。今月はカミンスキーの仕事と、技術的背景のいくつかを取り上げます。技術資料の出典はいつものアメシネです。

スピルバーグには、ビルマ戦線で戦った八一歳の父親がいて、「戦争の現実を描いたハリウッド映画はない」と言っているそうです。その父親に捧げるつもりでこの映画を作り、「残酷で悲惨な争いを有りのまま描く、そうしないのは恥ずべきことだ」とも言っています。物語は一種の〝救出もの〟で、戦争映画のパターンからいくと、胸のすく冒険談にも、主人公を英雄に仕立てられもする種類のものですが、「プライベート・ライアン」はちょっとちがいます。

ノルマンディ上陸作戦でオマハ・ビーチに上陸したアメリカ軍、第二レンジャー大隊C中隊長ミラー大尉（トム・ハンクス）が、ドイツ軍重機関銃トーチカの正面に上陸してしまい、三十五名の戦死者とその倍の負傷者を出し、やっとトーチカをつぶします。そこに四人兄弟のうち三人が戦死したライアン二等兵（マット・デイモン）が、上陸前夜、パラシュートで敵中奥深く降下し苦戦している一〇一空挺師団にいるので救出せよと命令され、八人の部下と最前線に向かいます。一〇一空挺師団といえば「史上最大の作戦」で、ジョン・ウェインが師団長か旅団長だったかで、降下時に足を負傷し、部下にはこばれながら指揮をとっていた部隊です。あの映画では、苦戦しながらも、英雄的な戦いをつづけ勝利するアメリカ軍の格好よさが目立ちましたが、「プライベート・ライアン」は、克明に残酷な戦場の現実を描いていきます。

やはり冒頭の敵前上陸のシークエンスの迫力が全篇の白眉です。やっと浜辺に取りついたアメリカ兵士に、トーチカからの切れ目のない銃撃がつづきます。自分の腸をおし込もうとしている兵士、空中にふっ飛び片足がもげ、血をしたたらせながら砂辺にたたきつけられる兵士、片手を射ち落とされ、その手をぶらさげて散歩するように修羅場をさまよう兵士といった残酷なシーンが、実写とCG合成カットによって延々と描かれます。カミンスキーによれば、「大掛かりな戦場のシーンだとすぐ何十台ものキャメラを同時に回すというイメージがあるが、今回は使っても三台、それもほとんど手持ちで、スピルバーグは『シンドラーのリスト』同様即興的に、すごいスピードで撮っていった」そうです。とにかく、このシーンはキャパの「ちょっとピンボケ」の一枚の写真の強さと緊張感が連続する二〇分でした。これでカミンスキーのオスカー・ノミネートはまちがいないでしょう。



ヤヌス・カミンスキー撮影監督

ヤヌス・カミンスキー

カミンスキーは一九八一年、ポーランドから亡命してきました。シカゴに来た時は、英語もろくに喋れなかったのですごく勉強し、コロンビア・カレッジの映画科を出て、先月「撮影時評」で取上げたAFIで研修し、ジョン・アロンゾ（ASC）の助手になります。「シンドラーのリスト」を撮るまでに、十五本のDPをやっています。モノクロの「シンドラーのリスト」でアカデミー撮影賞を取り、「ロスト・ワールド」「アミスタッド」とスピルバーグとの仕事がつづきます。彼は台本を受け

Digitized by Google

取ると、まず感情移入して読み、それから消去法で読みなおすそうです。つまり、こういう風に見せたくない、たとえば、今回は「ロスト・ワールド」のようにはしたくないという所から、自分のイメージをかためていきます。次に当時の資料で研究し、監督でもあり戦争キャメラマンでもあったジョージ・スティーブンスの作品や、ロバート・キャパの写真に近いルックを作ろうと考えます。途中スピルバーグと、モノクロにするかどうか相談しますが、最終的にはエクター・クロームとアイモで撮られたニュースのトーンに近づける事にします。そのためダリウス・コンディ（AFI）の「セブン」「エビータ」、最近では「GODZILLA」「エイリアン4」で使われているENRという特殊なポジ現像を採用しました。

「プライベート・ライアン」のオマハ・ビーチ上陸シーン

画調とENR

最近のフィルムは、色ががっちり出すぎる傾向があるので、作品の狙いでトーンを変えるため、ポジ現像で一〇〇パーセント除去される銀の一部を残すことがあります。宮川一夫が「おとうと」で試みた〝銀残し〟が最初ですが、アメリカではヴィットリオ・ストラーロ（ASC、AIC）が開発した方法が使われます。テクニカラー・ローマで開発に関わったエルネスト・N・リコの名前をとってENRとよばれています。

DPの好みのパーセンテージで銀を残すのですが、影がべったりした黒にならず、かすかな光沢が加わり、コントラストが強まります。結果的にシャドー部分が深みをまし、軍服やヘルメットの光沢、水たまりの輝きがくっきりします。カミンスキーは血糊をリアルに見せるのにも役立ったといいます。この血の研究は大変だったようで、軍服に飛び散った血、三日後の血痕はどうなるかなど、厳密なテストを繰り返し、ENRに特殊効果でブルーを加えることによって満足しました。画調コントロールのもうひとつの工夫はパナ・フラッシャーで、後露光増感したフィルムをネガ現像時に倍増感し、すこしフラットにして彩度をおとし、撮影条件の悪いニュース・フィルムに似せたトーンを作りました。

キャメラの仕掛けと大がかりでスピーディーな撮影

まず、一九四〇年代のレンズに似せるためレンズのコーティングをとってしまいました。これでピントは同じですが、フレーアーでコントラストは低下し、太陽の角度によっては、霧がかかったように見えるカットもあります。砲撃でキャメラがふるえる効果は、キャメラのパン・ハンドルに電気ドリルのモーターをつけたり、クレアモント・イメージ・シェーカーというレンズ自体をゆらす装置をつけました。ニュース・フィルムに似せる効果も徹底してやりました。キャメラのシャッター同期をわざとずらし、画面にうっすら縦線を出したり、濃度ムラを出しました。これは画面が適当によごれて見えるダグラス・ミルサムが「フルメタル・ジャケット」でやった手法です。

曇りの効果ひとつを取り上げても、アイルランドの天気に助けられたとはいえ、手前は三〇フィート四方のシルク・スクリーンで太陽をカットし、ロングは何台ものトラックに二〇〇ガロンの重油ローリを引っぱらせて燃やしたという大掛かりな撮影です。俳優も大変で、トム・ハンクスをはじめメインの俳優たちは、十日間、平均睡眠三時間の軍事訓練をブッ通しでやってやつれ果て、撮影時にはメーキャップなしでリアルな兵隊の顔に見えたそうです。

ノルマンディ上陸作戦は、アイルランドにオマハ・ビーチに似た海岸を見つけてセッティングし、エキストラ七五〇人はアイルランド正規軍の応援をえました。勿論、武器は当時の本物を集め、スピルバーグはストーリー・ボードを無視して、即興的に、ワン・テイク、ツー・テイクでOKし、一日五〇カットも撮ったそうです。まったく、のっている時の監督は手がつけられません。

Digitized by Google

劇場公開映画批評

赤坂大輔／宇田川清一／鬼塚大輔／野村梓／森直人／中西愛子／村岡良昭／寺脇研

恋するシャンソン

ON CONNAIT LA CHANSON
コムストック配給
8月1日公開

映画の冒頭でドイツ将校がいきなりジョセフィン・ベーカーの声で歌い出すのを聞いたとき、「なんてケッタイなことするんだろう（笑）」と思い始めたときから、観客はこの「恋するシャンソン」の、普通の会話の途中でブツ切れのフレンチ・ポップスのフレーズに合わせてロパクする俳優たちの芝居に呆れながら、この全編にある不自然さを体験することになる。いわゆるミュージカル映画と違って俳優自身の声がポップスのフレーズそのものに入れ代わってしまうため、男の声が女の声に、逆の場合もあるのだが、その唐突な歌のフレーズの挿入と消滅のギクシャクしたリズムに戸惑ってしまう。しかしその不自然さとは、実はアラン・レネの映画をあらためて初期からたどり直してみると見えてくる自然な到達のように思える。

レネはかつて「私はずっと動き続けているのに止まっているような印象を与える映画をつくりたい」と語っている。例えば「去年マリエンバートで」は城でのカップルの対話が果てしなく続くが、その背景は屋内から屋外へ、池から庭へ、過去のある時からある時へと常に交換の動きを続けていた。実景を舞台にした「ミュリエル」でも、複数の部屋や場所にまたがって対話が続けられるシーンが数多くあった。「プロビデンス」は泥酔した老人の妄想という舞台設定で、全ての登場人物が話者の老人の分身として現れ、声や出て来るべき背景を交換し、時には階段の下だった場所が部屋の中だったり、同じバルコニーの背景が海だと思ったら次の画面では山だったりと、美術監督のジャック・ソーニエとの共同作業のもと、レネは劇の背景を動かし続け、それが意識と時間の交錯をあらわしていたのだ。

その後の「アメリカの伯父さん」のラボリ教授の解説、「お家に帰りたい」のマンガのキャラクターも、背景に付け加えられたり取り去られたりする要素として登場する。見ているほうは不自然に思うが、劇のなかでは誰もがそれを自然なこととして演じているわけだ。そして日本公開されなかった「スモーキング／ノー・スモーキング」ではピエール・アルディティが全ての男役、サビーヌ・アゼマが全ての女役を交換しつつ演じ、物語さえ「もし……したら」という形で交換できる要素となった。さらに「恋するシャンソン」では、対話の一部分も歌のフレーズと交換される要素になったということなのだ。背景や場面に見えているものの一部を交換し動かすというアイディアは演劇的だが、それを実現する方法は映画的である。ただレネはかつての盟友アラン・ロブ＝グリエの「囚われの美女」のようにCG映像を使うセンスはないだろう。またストローブ＝ユイレの「今日から明日へ」のように背景のミリ単位の設定を重視し、よりミクロな世界をとらえようとする過激さもない。「恋するシャンソン」がフランスで200万人もの動員を記録できたのもその保守性によるものだろう。しかしそこにあるヒッチコック映画の影は見逃せない。「お家に帰りたい」で「北北西に進路を取れ」のテーマ曲をさりげなく奏でた後の「恋する～」でのアニエス・ジャウイの原因不明のうつ病（「汚名」の毒薬で衰弱するバーグマンみたい）や夜の黒服のパーティ（「ロープ」の落日のアパルトマン？）等、その仕掛けが保守性を免れるのは、レネが演劇的発想を映画的にするのを忘れていないときなのである。**赤坂大輔**

恋するシャンソン

THE AVENGERS
ワーナー・ブラザース配給
10月3日公開

人気TVシリーズを映画化するのは、いかにオリジナルのムードを残すか、あるいは思っきりオリジナルから離れて現代的な味付けを施すかの二通りのようである。トム・クルーズがかねてから映画化を希望していた『スパイ大作戦』は、オリジナル版への思い入れなどどこ吹く風で完璧に装いも新たな「ミッション：インポッシブル」として蘇った。かつてのファンとしては、フェルプス君への配慮の欠けた扱いに唖然としたものだ。しかし、この思い切りのよさが成功を収め、オリジナルを知らない者にとっても存分に楽しめる内容となっていた。

一方、日本では知る人ぞ知るTVシリーズ『おしゃれ㊙探偵』を映画化した「アベンジャーズ」は、全編に製作者ジョン・ワイントロープのオリジナル版への愛着にあふれていて天晴れとしかいいようがない。しかし、この過度の執着が、オリジナルを知らない者にとって、

C 1998 Warner Bros. All Rights Reserved

Digitized by Google

素直に楽しむことのできない要因となっているのも事実。荒唐無稽な事件をテーマにしたり、年代物の車や気球を配してクラシックなムードを醸し出しているのはいい。しかし、主人公ステイードの行動がもたもたしているのはいただけない。オシャレというよりセンスが古いのである。パロディとしてなら成立しそうな60代型ヒーローを、レイフ・ファインズかクソまじめに演じているのは、気の毒なほど滑稽である。何かにつけてティータイムを楽しむという設定もユーモアと呼ぶにはお寒いし、ストーリーの流れを中断させてもどかしい。悪漢との対決を前に交わされる英国風のウィットに富んだ会話も無駄口としか思えない。突然現れる透明人間には、どう反応していいのか戸惑うばかりだ。意味もなくテディ・ベアのぬいぐるみを着た悪党たちの出現に「可愛い！」と声をあげるような知能の低い観客に媚を売っているようじゃ志しが低すぎる。レイフ・ファインズはどう見てもアクション・ヒーローが似合わないのが致命的。悪役ショーン・コネリーはいつになく精彩に欠けている。レザーのキャットスーツを難なく着こなしているユマ・サーマンの見せかけだけのカッコよさが救いである。　**宇田川清一**

MERCURY RISING
10月10日公開

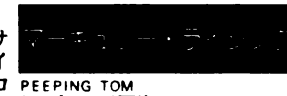
ブルース・ウィリスの新作「マーキュリー・ライジング」はいかにもウィリスらしいキャラクターを主人公としている。「ラスト・ボーイスカウト」、「スリー・リバーズ」、「ダイ・ハード3」などで演じてきた「過去の栄光と傷に食いつぶされそうになっているが、新しいパートナーとの出会いで再生していく」という人物像だ。今回のパートナーは自閉症の少年（ミコ・ヒューズ）。この少年がひょんなことから国防を左右する最新の暗号を解読してしまったことから、NSAのアレック・ボールドウィンに命を狙われ、FBIのウィリスが自らの命と人間としての尊厳を賭けて少年の生命を守り抜こうとする。

ハロルド・ベッカーの演出はいつもの通り手堅い。はったりとは無縁の演出家である。見せ場の連続を力業で見せきっていくというタイプの人ではない。今回も一つ一つのシークエンスをかなり丁寧なタッチで演出しているのでアクション場面に期待しすぎると少々肩すかしとなる。こういう場合、役者の力が試されることになるわけで、もっとも得意とする役柄を演じるウィリスのスターとしてのオーラが改めて確認できる。負け犬の意地、といった要素を出すのが上手いのは、一昔前ならバート・レイノルズだったが、今はこの人だろう。「マーキュリー・ライジング」ではブルース・ウィリスの個性の最良の部分が活かされている。「冷たい月を抱く女」以来ベッカーとは二度目のコンビとなる敵役のボールドウィンもこの人らしい静けさと落ち着きがウィリスと好一対で、やはり悪役にもこの人クラスを持ってくると作品に厚みが出てくる。ワイン・セラーでのウィリスとの対面のシークエンスなど「火花散る」という感じが出てまことにけっこうである。あくまでも冷徹なボールドウィンとある時点でエモーションを爆発させるウィリスとの対比が効果的な見せ場となっているのだ。

子役のヒューズも好演だが、彼の父を演じるジョン・キャロル・リンチがいい。「フェイス／オフ」の冷酷な看守役も良かったが、むしろ「ファーゴ」での女性警察署長をサポートする夫役、「ボルケーノ」での人命救助に自らの命を捧げる役など市井の人物が持つ凛とした力を感じさせる役柄が光っていた。本作でもすぐに消える役ながらしみじみとした情感のあるいい場面を一つもらっている。この人はこれから化けそうな気がする。同じ「ファーゴ」快演組でも、ピーター・ストーメアは今回は少々気の毒な使われ方。シカゴが舞台の一つとなっているだけあって、ジャズ・クラブのシークエンスにブルースの女王、ココ・テイラーが顔を出し、歌声を聞かせてくれるのもオマケのお楽しみである。

「マーキュリー・ライジング」は超大作でもなければ、異色作でもない。典型的なキャラクターたちが織りなす、すこぶる古典的な展開のサスペンス・アクションである。この作品には金に飽かした超大作アクションのスケールは望めないものの、文庫本で読んだ海外ミステリの拾いものの趣がある（実際に原作は文庫本で読める）。

映画がすべて超大作と異色作ばかりになってしまってはつまらないわけで、力のあるキャストとスタッフが手を抜かずにしっかりと撮った中規模の作品というのは実は貴重だと思うのだ。つまり「マーキュリー・ライジング」のような作品がだ。　**鬼塚大輔**



PEEPING TOM
ケイブルホーグ配給
10月31日再映

サイコ物といえばどんな映画かすぐ想像がつく。この言葉がヒチコックの映画に由来していることは今更いうまでもない。マイケル・パウエルの「血を吸うカメラ」の注目すべきはその「サイコ」と同年に、しかも何カ月か早く完成しているところにある。つまり「サイコ」を見ることなく作られた数少ない作品の一つであるということだ。

それ以前に同種のキャラクターを扱った映画といえば、フリッツ・ラングの「M」があるくらいだろう。他に「ドクトル・マブゼ」があるが、これはホラーとは言い難い。しかし「M」「サイコ」の二作は、この表現派の名作の影響を色濃く受け継いでいることは否めない。

本作においても同様その影響は見受けられるが、前出の二作と大きく一線を画しているのは、その主人公の捕らえ方にある。撮影所で映画カメラマンとして働く彼は、内気だがどこにもいそうな青年として登場する。こ

Digitized by Google

の印象は最後までどこかに残る。

というのも「M」や「サイコ」においては、ドラマの力点が恐怖のエモーションを醸性することに置かれているのに対し、ここではカール＝ハインツ・ベーム演じる青年マークが、なぜそうした性癖を持つにいたったかという、殺人の動機としての心因が描かれていることにある。そのことによって彼もまた哀れな被害者であることが明らかとなり、観客は彼に同情する気持ちにさえなるのだ。

この実はまた彼も被害者であるという犯人像は、「サイコ」にない〝今日的〟な人物像だろう。しかもその犯行はじつに凝っている。ただ殺すのではなく、殺される当人がその恐怖に直面した自分の顔を見ながら死ぬ、それをカメラ収め、映写することで彼の殺人は完結するのだ。なんと手の込んだ「見る・見られる」の関係だろう。だがこれを全部フィクションで行えば即ち〝映画〟であり、彼は観客自身ともなる。正しくは映画による映画の批評という他ない。写真及び映画の登場は「見る」ことの意味を大きく変貌させ、リアリティの質を変化させてしまった。こうしたメディアの状況の中で生きる人間の心の中に巣食うものを、いち早く描いた映画としても意味深い。　野村梓

恋するシャンソン

GUMMO
ケイブルホーグ配給
10月24日公開

「松本大洋のマンガみたいだ」と編集部のS氏に薦められて観た本作なのだが、確かに、松本大洋の代表作『鉄コン筋クリート』(94)とこの「ガンモ」は、驚くほど符合する点がある。猥雑な町で野良ネコを殺しては金に替え、最低の日々をサバイバルしていく「ガンモ」の少年ソロモン（ジャコブ・レイノルズ）とタムラー（ニック・サットン）は、〝ネコ〟と呼ばれる『鉄コン筋クリート』の少年シロとクロを思い出さずにはいられないし、オマケにシロが愛用しているクマやカバの帽子を真似たかのように、ウサギの帽子をかぶっているバニー・ボーイ（ジャコブ・セーウェル）というスケボー少年が登場する。そして何より注目すべき共通点は、両作の舞台になる町の〈廃墟〉の感覚だろう。秩序や機能が崩壊し、野生化した文明社会という意味での〈廃墟〉。『鉄コン筋クリート』の舞台〝宝町〟は、アナーキーな過剰さに満ちたアジア的混沌のイメージで固められているのだが、「ガンモ」のオハイオ州ジーニアの田舎町は、20年前に襲われた竜巻の被害からまだ立ち直っていない状態であり、ゴキブリやハエだけが元気のいい中、危ない目つきをした人々が蠢いているその様相は、やはり〝アナーキーな過剰さに満ちた混沌のイメージ〟を強く突き付けるものである。さらに両作の少年達は、この〈廃墟〉を〈孤児〉として生きていく点でも通じ合っている。いや、むろん「ガンモ」には少年ソロモンの母親（リンダ・マンツ）が登場するけれど、この母親は亡き夫を愛し続ける余り思い出の中でボケており、息子とはコミュニケーションしているようで実は無関係なのだ。だから今日もソロモン君は、友人タムラーとネコを狩りにいくのである。

これが初監督となる弱冠23歳のハーモニー・コリンは、このような〈廃墟〉と〈孤児〉の風景を凝りに凝った映像で描いており、松本大洋が『おとぎの国』（コミックス1巻60ページより）の空間を、あの独特の広角レンズで覗いたかのごとき歪んだ画で見事に造形したのに負けじと（？）、単なるリアリズムから独自の神話的空間へ飛翔させようと懸命である。思えば、コリンが初めて脚本を書いた作品「KIDS」(95)からしてそうで、この作品は、不幸にも現代若者事情をドキュメントしたものとしてジャーナリスティックに語られてしまうことが多かったが、実はジャン・コクトーの小説『恐るべき子供たち』に酷似した構造を持つ、魔性と官能だけがひたすら炸裂する夢幻的な傑作だと、僕は解釈している。故にハーモニー・コリンという作家の本質は、こういった一種のファンタジー感覚にあるのだと主張したい。実際、「ガンモ」には黒人の奇形男性なども登場するし、主人公格のソロモン君をはじめ役者陣は皆とんでもない顔をしており（クロエ・セヴィニーでさえマユゲがなかった）、同時代性や世代論の枠内では語り切れない骨太のフリークス嗜好が全編を覆うのである。彼が最も影響を受けたアーティストは、異形のものの中に真実を見るヴェルナー・ヘルツォークや写真家ダイアン・アーバスというのだから、これは納得だ。又、松本大洋が白痴の少年シロに聖なるイノセンスを見ているのにも似て、コリンの視線には、フリークスの底に貼りついている人間の根源的な精神を見据えようとする決意が厳かに感じられる。つまり『鉄コン筋クリート』にしろ「ガンモ」にしろ、加えて「KIDS」にしろ、目指しているのは様々な形の形而上レベルのドキュメントであって、決して時代の波により風化してしまう質の表現でないことはしっかり強調しておきたい。

ただ「ガンモ」が、「KIDS」や『鉄コン筋クリート』と少し違うのは、明確なストーリー・ラインが何もないことで、状況の断片だけが、時にはザラザラとした質感の、またある時にはブレたりかすんだりする眩惑的な映像処理で、次々と映し出されていく（撮影監督はレオス・カラックスの作品で素晴らしい仕事をしているジャン・イヴ・エスコフィエ！）。さらには、デスメタルと、バディ・ホリーの『エヴリデイ』やロイ・オービソンの『クライング』といったオールディーズ、オマケにマドンナの『ライク・ア・プレイヤー』までが混在する、雑多で不思議な音空間。これらが渾然一体となった様からは、アンダーグラウンド・フィルムならではの強烈なドラッグ効果が味わえ、脳髄が危険な快楽に侵されていく。そして、そんな恍惚の意識の中、じんわり体に染み込んでくる、怠惰で無様な人間達が織り成す〝おかしさに彩られた悲しみのバラード〟の、たまらない切なさ。まさに異能の傑作といえよう。　森直人

Digitized by Google

ムーラン

MULAN
ブエナ　ビスタ配給
9月26日公開

© Disney Enterprises

アメリカではさまざまな分野、特にエンターテインメントの世界でPC（ポリティカリー・コレクト）の嵐が今も猛威をふるっている。アメリカの（世界の、か）良心を自認するディズニー・スタジオがこのトレンドに無関心であるわけがなく、「ポカホンタス」、「ノートルダムの鐘」といった作品ではPCを強く意識しすぎた内容が、アニメとしてのダイナミズムをある程度犠牲にしていたということは否めないと思う。しかし、昨年の「ヘラクレス」ではヒーロー神話の脱構築を軽々とやってのけ、久々にのびのびとした作風で楽しませてくれた。「ムーラン」も内容的にはもろフェミニズム。どうなることかと思っていたが、どうやらディズニー・スタジオはPCの動きと、ファンタジーの「語り」のダイナミズムを両立させるこつを掴んだようである。

古代中国、性を偽って軍隊に入ったムーランが根性と知恵を示して、一人前と認められる。ヘタをすれば「G.I.ジェーン」にフェミニズムの側からぶつけられた痛烈な批判、女は男と「同じ」ことができなければ人間として認められないのか、に再びさらされることになったかも知れない。だが、女から男、というセクシャリティーの転回を、クライマックスの場面でもう一度逆転させている仕掛けが効いている。ムーランの仲間の一人の声を、カミングアウトしたゲイであるハーヴェイ・フィアスタインが担当しているのがここで活きてくる。

アジア系中心の声優陣だが、ムーランのガードのドラゴンを演じるエディ・マーフィがやはりいい。主演作では攻撃的な部分を弱め、受けのキャラクターに転身することで延命に成功したマーフィだが、ここではアグレッシブな個性を久方ぶりに爆発させている。しゃべりまくるドラゴンとピーピー囀るちびっ子コオロギのお供二人組は、「スター・ウォーズ」か。いや、ムーランは男装の麗人なんだから「隠し砦の三悪人」か。

ギャグとスペクタクルとロマンス、それに音楽の配分の絶妙さは他社のアニメの追随を許さない。老舗の貫禄を十分に見せつけながら、時代の趨勢も取り入れた秀作である。　**鬼塚大輔**

ムーラン

COMPAGNA DI VIAGGIO
アルシネテラン配給
9月19日公開

アメリカ生まれのイタリア系ユダヤ人監督ピーター・デル・モンテが、ホラー映画界の鬼才ダリオ・アルジェントの娘アーシア・アルジェントを主演に撮りあげたイタリアン・ロード・ムービー。流されるままふらふら生きる19歳の少女コラは奇妙な仕事をひきうける。それは、街をさまよい歩く痴呆症老人の後をつけて動向をチェックするというものだ。最初、ローマ市内を歩きまわるにすぎなかった老人だが、やがて電車へ乗りこみ街をでてしまう。コラの旅もこうして幕をあける。

自分の心がつかめずささくれた少女と、言語学教授だった日々の記憶を失いつつある老人の姿を平行にたどりながら、ふたりの心がまじわり、はなれ、再び重なり合う瞬間までを、デル・モンテはあたたかなタッチで綿密に綴っていく。クロード・ミレールが「オディールの夏」（93）で、少女と老人をエロスの世界でむすびつけ官能的に描いていたのとは異なり、ここではアガペ的な愛がふたりの心を歩み寄らせる。ウィノナ・ライダーとユマ・サーマンをまぜたような風貌の新鋭アルジェントが、思春期から抜けだしたばかりの不安定な少女を好演。とまどいに満ちた老人を淡々と演じるミシェル・ピコリの存在感は、作品に確かな風格を与えた。

本作は宗教映画ではないけれど、素朴な祈りをかんじる映画だ。前半、老人を追いかけて入った宿のテレビにロッセリーニの「ストロンボリ　神の土地」（50）が映っている。神に向かって叫ぶバーグマンのアップをコラはあんぐりと見つめる。もの珍しさに圧倒された表情を浮かべる彼女は、宗教なんて考えたこともないだろう。しかし、この引用は本作の通底低音となっている。「死んでしまったら私のことなんか誰も話さない」（95）というスペイン映画もそうだったが、今ではロッセリーニのように特定の宗教を通すのではなく、日常の中で起こる不思議な巡りあわせに神の摂理を示唆する西洋作品は多い。また、切羽つまったコラが旅先で出会った若い女工に〝その仕事はやりがいがあるの？　楽しいの？〟とすがりついて聞くシーンは、黒澤明の「生きる」（52）を想起させ興味深かった。**中西愛子**

ムーラン

NIRVANA
K2エンタテインメント配給
11月7日公開

これは〝新生「ブレードランナー」〟だ。本作を評価すればそんな言葉が浮かんでくる。

雨ではなく雪が降りしきる近未来都市。自己を持ったゲームキャラクター（ディエゴ・アバタントゥオーノ）は、レプリカンを連想させるし、そのキャラクターを通して、自分を見詰め直すクリストファー・ランバートの主人公は、やはりハリソン・フォードを見ているようであった（ソバ屋ではなく、寿司屋が登場しますしね）。

しかし、だからと言って本作は物真似映画と言っているのではない。確かにガブリエレ・サルヴァレス監督は、「ブレードランナー」ならぬ、フィリップ・K・ディックのSF小説から多くの影響を受けたと語ってはいるが、あの傑作SF映画は、自分の持つ思い出（記憶）こそが生きる証である言を訴えていたのに対し、本作では記憶を共有する事を重要視していると言えよう。

Digitized by Google

ランバートがステファニア・ロッカ（本作が映画デビュー）を借りて、亡き妻との思い出（記憶）を確認するシーンの持つ喜びの意味の深さはそこにある。さらに、ゲーム〈ニルヴァーナ〉内で、アバタントゥオーノが、同じゲーム・キャラクターであるアマンダ・サンドレッリに、自分たちが居る場所は〈現実〉ではなく、〈仮想世界〉である事を盛んに訴えるのも、自分しか持てない記憶を他者に共有してもらいたかったである。

ラスト。いよいよ消去される瞬間。〝キャンセルされた後どうなるのか〟と問いかけるアバタントゥオーノ。〝雪の欠片になるだろう〟と答えるランバート。その真意は何か。

タイトルの〈ニルヴァーナ〉とは、吹き消す事、消えた状態を意味する。また、仏教では煩悩が消え、悟りの境地を開いた事を指している。

結局消え去っていく運命を持つ我々。だからこそ生きる行為が実を結ぶ。雪が地表に落ちて、そのまま溶けてしまうのが、それとも積もっていくのかは落ちてみなければ分からない。人もまた然り。消えてみて、そこに何が残るのか。それが生きる証になるのだ。21世紀はただ生きるだけではダメらしい。

村岡良昭

恋するシャンソン

東映配給
10月3日公開

この映画に不快感を抱く人は、まずいないだろう。瀬戸内の美しい海があり、二十余年前、今となっては古き良き時代の少女たちがひたむきにボートを漕ぐ。伊予弁の柔らかい響きといい、いかにも田舎の高校生らしい物腰といい、ボート競技の躍動感といい、誰しもが心地よくなれそうだ。

だが、これは単なる爽やか青春ドラマとは違う。たしかに少女の成長物語であるものの、ヒロインの「成長」は屈託ない前向き一辺倒とは違う。冒頭、春ののどかな海を眺めている彼女の眼前を練習に励むボートがよぎる。一見穏やかで平和そうな情景だが、その実、高校入学直前の少女の心象風景はかき乱れていた。

夕刻帰宅して、今日は家出してたんだと洩らす。田舎の十五歳の行動範囲といったら多寡は知れているが、釈然とせぬ思いを抑えかねて方々をさまよい歩いていたのだろう。高校へ進むことの意味が明確に掴めぬ苛立ち。自分の居場所を確認できない不安感。それらをかろうじて乗り越え、彼女は高校生活へ入っていくのである。

だから、入学式の校長訓話にうつろな眼を向けるだけだし、生徒会長の「東高ォー、がんばっていきまっしょい！」なる伝統の掛け声にも心を動かさない。京大生の姉の優等生ぶりや数学教師の成績絶対主義には、反発し従おうとしない。

こうした屈折が前置されていればこそ、ボートという目標を得てからの彼女の発奮が輝いてくる。四人の仲間もできた。高校で何をやるかも見えた。居場所も見つかった。一年後の入学式、「がんばっていきまっしょい！」に力強く「しょい！」と唱和できるのは、鬱屈から逃れた証である。

磯村一路監督は、彼女と周辺の登場人物との関係について、べたつかせず馴れ合わずクールな描写に徹する。クルー仲間との友情は、あくまでボートを通した絆が主で各自の内面へまで深くは立ち入らない。幼なじみの少年への思いにしても、ふと気持が近づいてみたり遠ざかってみたり、周縁をさまようだけで核心へ進まない。決勝進出へ導くコーチとの愛憎劇も、距離を置いて展開される。

両親との関係も然り。父親も母親も、彼女の鬱屈に気づいていなかったり、敢えて避けていたりする。でも、自立を前に自分の居場所を探そうとする高校生にとって、親とのコミュニケーションは所詮そんなものだろう。決勝進出を珍しく弾んだ声で報告する娘に父親がそっけなく答える場面で、観客には彼の後ろ姿で子への愛情が感じられても、電話の向こうの娘へは伝わらない。それでいいのだ。人と人との間の思いは、直接相手に伝わらなくともそれがはっきり存在するだけでいいのだ、と作者はきちんと意識している。

人物各個に発着せず、画面上でもロングショット中心に構成してきた物語は、クライマックスの競走場面において一変する。アップの連続に切り替わり、ひとりひとりの叫びやもがきを画面いっぱいに焼き付ける。それまでの抑制とは対照的に、彼女たちの達成感、満足感、口惜しさ等々ないまぜになったエネルギーの爆発が、余すところなくみごとに表現される。

爽やかな感動とか少女たちのきらめきとかいったありきたりの賛辞を超え、生身の少女の鬱屈とそこからの脱却を描いた鮮烈な青春映画として記憶されるべき傑作である。

寺脇研

Digitized by Google

ピンク映画時評

切通理作

スプラッタ仕立てで話題になった、殺意のみなぎる作品「コギャル喰い　大阪テレクラ篇」を撮った友松直之監督が、新作「**痴女電車　さわり放題**」を発表した。

恋人の先生から教頭に売り飛ばされてしまった援助交際の女子高生、入院患者とデキていたが逃げられてしまった看護婦、夫の暴力に耐えている人妻。

三人の内、内気で地味な人妻（大河原ちさと）は、赤ずくめの派手な痴女に扮装して電車内に出没。男を誘い、イイ気持にさせたところで背広を切り裂いてしまう。

女を組み敷く身勝手な男たちに、団結して対抗する美女三人というストーリーからは、前作とは一転したコメディ・タッチの作品という印象を受ける。

ファックシーンは、女性上位の、下から見上げるようなカットをねっとり撮り、ポルノ的なサービスも前面に押し出されている。エロスよりタナトスだった前作とはハッキリ趣を変えている。

だが、妻に暴力をふるう夫と、その横で無表情に食事をしているしかない幼い子どもという風景は寒々しい。その五歳の男の子がぬいぐるみに刃物を立てて遊んでいるという辺りは、前作の似たシチュエーションを思い出させる。ピンク映画で子役を使うこと自体、生ま生ましい。

それだけに、初めて夫に口答えし離婚を要求する妻に、子どもが味方して立ちはだかる浪花節的なオチは、前作とはコインの裏表という感じで、友松監督の幅を感じさせる。ウルトラマンの服を着ている子どもが、雄々しく見えてくる演出がイイ。

宮台真司を皮肉ったような、現代風俗への視点も小気味いい。

榎本敏郎監督の三作目「**熟女ソープ　突きぬけ発射**」は、神戸の新開地のヤクザを主人公にした作品だ。ベテラン岸加奈子がチンピラヤクザ川瀬陽太の情婦であるソープ嬢を演じている。彼女の熟し切った肉体が客の男にサービスしている場面が淡々と描かれ、映画全体の静かなリズムを象徴する。

映画は後半、ヒットマンを命じられた川瀬が、弟分の草壁カゲロヲとともに城崎温泉まで出かけるロードムービーとなっている。

標的となる男の情婦・MiZuKiも同行させられる。彼女は、自分の夫が狙われているというのに大した危機感もないようだ。こういう白痴美を伴ったヒロインとの珍道中はヤクザものの一つの定番といえ、安心して観れる。

朝、旅館を抜けだした彼女が会っていた男を撃とうとする川瀬だがビビッて駄目。代わりに撃つ草壁だが、撃ったのはただの行きずりの男であることを知る。「でもカッコ良かったよ。アンタ」。草壁とMiZuKiはイイ仲になり、置いてきぼりを食った川瀬は、砂浜に置きっぱなしになっていた車にエンジンをかけようとするが、なかなかうまくいかないところで映画は終わる。

川瀬は岸加奈子ともう一度絡むこともないし、糸の切れた凧のように、映画の時間は唐突に打ち切られてしまうのだ。伏線めいた形で出てくる、川瀬が逃がしてしまった竜の鳥も、結局は映画の中で像を結ばない。

女池充監督の二作目「**ぐしょ濡れ美容室　すけべな下半身**」は、監督自身による脚本が意表をついている。冒頭の短いベッドシーンの後、すぐに火事が起き、ラブホテルが全焼する。

美容師の佐々木ユメカは、泥酔の末、行きずりの男・川瀬陽太とホテルに入っていたのだが相手の顔も思い出せない。そこに付け込み、彼らを救助した内気な消防士・田中要次がユメカの一夜の男になりすます。

火事の被害者への説明会で二人が再会する下りなど、単純に設定としても目新しく、飽きさせない。

田中要次は川瀬の方とも友達関係になるが、もちろん佐々木ユメカと会わせるわけにはいかない。失職中の日々を幻の女性を追い求めることに費やそうとする川瀬の前に、オロオロする田中といった展開は、軽妙なシチュエーション・コメディのようだ。

佐々木ユメカが田中と初めてセックスする時、彼女が「なんか違う」という表情を見せるくだりなどはオカシイ。しかしそれは最初だけで、二人は、その後際限なくセックスをするのだが、ベッドシーンは何度も小刻みに繰り返されるのにもかかわらず、いやらしさのない作品になっている。佐々木ユメカや同僚の性生活もいかにもポルノしたねっちょりさではなく、映画の中ではごくごく自然に取り扱われているのがいい。

何の抵抗もなく田中との仲にのめり込んでいたはずのユメカが、真相を知ったとたんに「幻の男」を捜し求めるのは、恋愛というもののフィクション性を表しているのかもしれない。

と同時に、捜していた女性が田中と暮らしていることを知り、留守中に酒を酌み交わしただけで、身を引こうとする川瀬陽太の人の良さが作品全体を温かいムードで覆っている。ウクレレ片手の漫談も味を出していた。

Digitized by Google

読者の映画評

●応募要項　住所・氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字前後で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募下さい（レポート用紙不可）。〒112―8502　東京都文京区小石川1　21-14小石川吉田ビル　キネマ旬報編集部『読者の映画評』係まで。

渡辺一弘／西山由美／森田祐子／須田総一郎

シティ・オブ・エンジェル

©1998 Warner Bros. All Rights Reserved

天使セス（N・ケイジ）は、まばたきもせずに人間の生死を傍観者として凝視している。だがマギー（M・ライアン）という女性と出会ったことで、彼は恋に落ちただけではなく、天使であることをやめる証（あかし）として儀式のようにまぶたをふさいで地上（人間界）に落下し、身も心も彼女と結ばれる。だが本作はもっと高い視点を目指し、この温もりに満ちた物語を、明日への希望にあふれた、まばゆいばかりの輝きで包み込むような終焉に導いている。

天使たちの街［ロサンジェルス］を離れて、結果的に彼との最初で最後の触れ合いとなってしまった夜が明けた翌日、太陽の光を全身に浴び、風に身を任せながら自転車を走らせていた彼女に、事故による突然の死が訪れる。

彼はもう天使としてではなく、血の通った生身の人間として、彼女を見とってあげる。彼女は「私だけを見ていて」と彼に言い残し、まるで今度は彼女が天使になったかのように、彼を見つめたまま二度とまぶたを閉じることはなかった。この皮肉だが美しい「命のすれ違い」を作為的な感じにさせなかった最大の功績は、彼女の死後残された彼が彼女の面影を求めて一人さすらう風景を、深く優しく追っていくカメラの、台詞以上に饒舌で静かな力強さだ。さらに天に召されて以降、写真やカットバックですら彼女の姿を画面に登場させないという着想の深さが逆に、近くで彼を見守っているかもしれない彼女の「見えない」という存在感を、無理なく実感させてくれた。

一人悩んでいた彼女が、病院の新生児室で目をつぶって生の安らぎを取り戻そうとする前半の場面と対をなすように、孤独に耐える彼が彼女の好きだった梨をほお張る姿が後半に映し出される。それぞれの「好きなもの」を死に逝く人たちにたずねていた彼だったが、その初めての味は、彼女の感触を少しだけでも甦らせてくれる「好きなもの」になったに違いない。生命の源である海で、人間としては生まれたばかりの彼の命が、生きる喜びの息吹で洗われるラスト。例え天使でなくとも、「永遠」という言葉が嘘でなくなるのだろう。

渡辺一弘

河

東京都武蔵野市・映画ライター修業中

どんよりと濁った河岸でマネキン人形の代わりに死体として浮かぶ主人公のシャオカン。もしかしたら自分はこの生に生きていないのではないか？　という一抹の不安が心によぎったのか、死体役を首尾よくこなした後、彼は自分の生存を確かめるがごとく、女友達との激しいセックスに溺れる。

だけど彼の生はすでに血が通った熱いものなんかではなく、不気味なほどひんやりとした死体のようなものだった。

エレベーターガールで一家の生計をたてる母親、そんな生活に寄生しながら、自分の居場所と存在を見失った父親……、妻と夫の均衡感覚が暗黙のうちに崩れてしまった殺伐とした家族関係や、情報と人が匿名性のままにゴミのように積まれ続ける台北という街が、彼のみずみずしい生を窒息死させてしまったのだろうか？

だから彼の首は、家族や社会を真っ向から正視するのを拒絶するかのごとく、ある日突然曲がり、全てのものから自分を遮断するように変形してしまったのではなかろうか。

シャオカンがどうして〝ゲイサウナ〟という場面に魅了されたのかは、この映画の中で饒舌には語られていない。ただしあの薄暗い廊下で夢遊病者のように歩く男たちの背中は、どれも社会や家庭から疎外された者が持つ特有の侘しさに包まれている。そんな場所に吸い寄せられていくシャオカンは、彼の家庭で不在となってしまった〝父性〟を探し求めて彷徨っていたのかもしれない。

だから彼はこのあまりにも非日常的な空間の中で、神の啓示のようにふと自分の前に舞い降りてきた情愛に満ちた匿名性の抱擁を、何のためらいもなく受け入れることができたのではないか。暗黙の中で体を寄せあう父親と息子のその姿は、たとえそれが罪深き交わりだとしても、親子の絆が深く結ばれた瞬間として、世俗的な非難や中傷の域を超え、純粋で崇高な美しさを孤高なままに放っている。それと同時に、現在の台北という巨大都市が、このような特殊な空間でしか、親子、そして人間同士の真のコミュニケーションを

Digitized by Google

はかることができないというイロニカルな現実も鋭い刃のように我々に突きつけてくる。

ホテルに戻った父親は息子に背中をむけ、ベッドに伏したまま声をたてずに涙を流す。それは〝夫〟だけではなく〝父親〟という役割さえも担いきれず〝父親失格〟の烙印を自ら押してしまったことに対する自身の敗北の涙だったのか？　それとも、どんな空間であったにせよ、最愛の息子と心を通わすことができたことに対する至福の涙だったのか……。

翌朝、シャオカンは、苦々しいまでの気持ちを抱えながらも、一筋の光を乞うように空を見上げる。彼の目にまぶしく映ったのは〝父親のぬくもり〟そのものだったのかもしれない。

西山由美
東京都新宿区・フリーライター・33歳

うなぎ

この作品の持つほのかな温かみとうら寂しさを、なんと形容すれば良いのか。妻を殺して服役し仮釈放の身でひっそりと生きる男は、飼っているうなぎにしか心を開かない。自殺未遂の末に男の営む理髪店で働くことになった女は、健気に店をもりたてるが背後には暗い影がちらちらのぞく。ああ、そうかと思った。二人とも死に直面し、そして生き残ったのだ。〝生き残りの哀れ〟ふとそんな言葉が思い浮かんだ。

途中、男の友人がうなぎの話をする。赤道近くで排卵、受精するうなぎは何千という犠牲を払って、生き残ったものだけが日本に帰ってくると言うのだ。ああ、やっぱり。「うなぎ」は〝生き残り〟の象徴だったのだ。ただし、男と女が弱さ故に辛い生き残りの人生を歩んでいるのとは違って、うなぎの方は力強く生き残ったポジティブな生存である。水槽の中のうなぎは男の分身ともとれるが、男が捨てしまった積極的な生をこの魚が引き受けているようにも思える。「あの時俺は死んだんだ」とつぶやく男を支えているのが、この魚なのだ。

男への思慕をつのらせながら女は次第に新たな人生に向かって歩き出そうとするが、男の方は頑なに心を閉ざし続ける。クライマックスで女の元恋人が金目当てに店に乗り込み、激した男が剃刀を手にしてあわやの惨劇になるところを助けるのが、女に新たな生命が宿っているという一言。誰の子か、と騒然とした所で男はようやく決意を固めた。「俺の子だ」と力強い嘘。この後の宴会が良い。UFO信者の青年がすっとんきょうな飾り付けを施した広場での酒盛り。フェリーニの「8½」のラストシーンを「人生を楽しもうじゃないか」というセリフと共に思い出させた。母親のショールをまとって母親そっくりにフラメンコを踊る女は、あの母親の娘であることを受容している。それでも私は生きていくという潔さが見てとれた。そしてそっとその場を離れた男は水槽のうなぎを放流するのである。閉じこめておいた「生」が人生に向かって開かれた瞬間である。男もまた「生きていく」勇気を取り戻したのである。

森田祐子
神奈川県横須賀市・社会福祉施設勤務・33歳

うなぎ

二人の浪人に撮影される善と悪の対立構図とその狭間でもがきながらも成長していく若者を、当たり前のようなハッピーエンドで締め括る古典的で分かりやすいストーリーの中、独特の映像感覚で描いた愛すべき作品である。

俳優陣もそれぞれピッタリはまっている。懐かしき突張り二枚目の「銀ちゃん」より、物腰の柔らかい慇懃無礼な浪人が似合う「風間杜夫」。「隠し砦の三悪人」で抜擢されたずぶの新人でありながら素人らしい擦れないせりふ回しが勝ち気な姫役にピッタリだった上原美佐のように、ぶっきらぼうで少ないせりふが悪役の個性にはまった「布袋寅泰」。いかにも宿場街の悪姉御で派手な着物と大きな白い花飾りが似合う「夏木マリ」。あまりに定石的な配役だが個性が充分に発揮されており悪くない。

その中でも数多くの工夫が随所に散りばめられ単純な物語に面白みを与えている。風祭の動きは、水で象徴される。刀番を水に落として殺す。海辺を歩く。大雨。風呂。毒入りの酒。最後も川に落ちる。一方の溝口は家の雨漏りを直しに来た大工道具の音色に聞き惚れる余裕を見せている。風祭を雨漏りに喩えれば、溝口一家が風祭を始末して乗り越える事になり、クライマックスにおける二人の対決の結果を暗示する。

カメラワークが印象的だ。崖の上に立つ風祭を下から仰ぎ見ているカメラが下から大きく上空に立ち上がり、真上から見下ろしたかと思うと反対側に降りて、正面から撮す。雄大で力強さを表すとともに迫り来る忍者との位置関係、高さを感覚的に教えてくれる。一方、オーソドックスなカメラポジションもある。土手を走る溝口と平四郎を下から撮すショットなどは、阪妻が出てきそうな構図だ。

題材も、敵討ち、身分の違い、出世、殺陣、やくざと美人姉御、賭博、忍者など時代劇の要素が全て盛り込まれている。出てこないのは悪代官と水戸黄門くらいのものである。雲・月などを美しく誂え、オーソドックスな配役とストーリー、個性的なようで実は基本をキチッとおさえた出演になっているのが分かる。「エピソード2」が楽しみな作品である。

須田総一郎
東京都目黒区・会社員・43歳

●第一次選考通過者
（応募総数120通）
「河」宮崎香苗、「キャラクター／孤独な人の肖像」、「スクリーム2」林雅人、「L.A.コンフィデンシャル」五十嵐美貴、「タイタニック」松村清志、「黄桃の味」古川博宣、「書を捨てよ町へ出よう」今井章

Digitized by Google

文化映画

渡部　実

見えない学校

教育に対するコペルニクス的展開

この映画は現在、さまざまな問題を抱えている教育問題に関して、ある学びの実践をしている人々を記録した長編ドキュメンタリー映画である。

冒頭から映画はさるビルの一室に集う人々とのミーティングを紹介する。部屋にはそれこそいろいろな人々が集まっているようだ。ダウン症の息子さんを抱える親もいるし、さる女性は数回の離婚歴を話す。またある人は自分の躁鬱の経験を話している。

一体、ここはどんな〝私塾〟かと思う。冒頭からそのような人々が自分たちの体験を交えて議論をし、しかも各人の会話は自発的というか、積極的である。議論を聞くうちにその内容は主に自分たちの日常に関する考え方、生き方といったものを他者に向けて喋るといった感じであることが分かる。それは一種の自己啓発、自己開発ともいえる。それならばそのような集まりは世の中にいくらもあり、何もこだけを取り上げなくてもよいという意見も出よう。しかしその集まりのベースは教育問題に根差している。

全編を通して登場するのは一人の実践者、平井雷太氏（1949年生まれ）である。ここの一室は東京・駒込にある平井氏の私塾「らくだスクール」。平井氏の私塾は子どもから大人まで幅広い参加者がある。

そもそも平井氏は昔、さる教育関係の機関で働き、そこで教材作りを経験したことから、マニュアルどおりの上位下達の教育方針に大いに疑問を感じたという。そして退社以来、独自のプリント教材を使った自学自習という教室で教えない教育の試みに取り組んでいる。その一環として平井氏は〝考現学〟と呼ばれる、日記のような通信を作り、全国各地、100人近くの仲間とやり取りをしてコミュニケーションを図っている。

〝考現学〟とは考古学とは異なり、現在を考える学問、それぞれが生活の中で、日々考えていることを、自分の言葉で書いてみる実践であるらしい。冒頭の集まりに見るさまざまな人はその〝考現学〟の実践者たちであった。

そこでさらに平井氏の考えを氏の著書『見えない学校　教えない教育』（97年／日本評論社刊）より引用させていただこう。

平井氏はルソーの『エミール』に大きな影響を受けた。また「子どもは子どもを教えることができるばかりでなく、大人を教えることができる」という考えに共鳴し、以前に氏が開設していた私塾でも、その言葉どおり子どもたちから本当に多くの事を教えられたという。

本書に書かれた「〜しなさい」と言わない教育」では、

「どうして学校に行くようになると勉強が嫌いになる子がふえるのだろうか？　教えられたことしか学ぼうとしない子、出された宿題だけをするのが勉強だと思っている子、わからないことがあればすぐに人に聞く子。学校で勉強しているにもかかわらず、勉強ができなくなる子が学年が進むにつれて増えていくのはどうしてだろうか？『あれもできない、これもできないと』と思う子がどうしてこんなにも増えていくのか不思議だった。」とある。

さらに「教育を再考する」の章で平井氏は教育と医療を同等のものとしてこう論じている。

「いい教育をすれば、いい子が育つという前提があるから、（より良い教育）になっていくと思うのですが、その結果、そのめざしたはずの学校で（授業についていけない子）（勉強嫌いの子）（学校に生きたくない子）が大量に発生している現実があるのです。この教育をとりまく現実は医療の現場と非常に似ています。」

そこで平井氏は教育現場と医療現場との共通点と問題点を列記する。平井氏はあえて〈教えない教育〉を実践している。それは例えばこのようなことである。

〈教えない教育〉ではできるだけ、平井氏の塾に来なくてもいいように、自分で学習ができるように指導していく。

これと同じ意味で〈治さない医療〉とは、できるだけ、病院に来なくてもいいように、自分の体を自分で看ることができるようにするのが医者の仕事——という訳である。

さらに言えばどの子にも自然学習能力が備わっていることを前提に生徒とかかわり、その力が引き出されていく手伝いをするのが指導者の仕事であるという。

その意味で医療も、どの患者にも自然治癒力が備わっていることを前提に患者とかかわり、その力が引き出されていくよう

Digitized by Google

にお手伝いするのが医者の仕事である、と指摘する。この他、平井氏の方法はいろいろな応用があり、すべては紹介できないが、ようするに平井氏の方法は今までおおっぴらに行われている教育方法とは異なり、決して強制しない。また人間は一人一人個性的で意見が違い、ときにぶつかり合うが、その違いこそを尊重して共存していく。さらに教師は逆に子どもから教わるという姿勢を尊重する。等々、一言ではいえない氏の実践方法は今までの日本の教育方法からのコペルニクス的転換を意味するものであると思われる。

伊勢監督の姿勢

映画「見えない学校」は主にこのような平井氏の理念に基づく姿と実践を記録している。そして氏の私塾のネットワークの人々との交流、氏の各地への講演の模様、また校舎をできるだけオープンスペースにして子どもたちが選択しながら学習ができるようにと教育改革に取り組んだ、福島県三春町の教育長であった武藤義男氏（1919年生まれ）、さらに雲仙で障害者の人々に乗馬を教えている女性、長友久美子さんらに取材をし、それぞれが抱いている教育の根本的な考えを聞き出している。

本編の伊勢真一監督は前作「奈緒ちゃん」「ルーペ」等の上映を通じて平井氏を中心とした私塾のネットワークの人々と出会い、強い関心を示したことからこの映画は製作されたという。

まずこの映画に抱いたいささかの躊躇を挙げなければならない。私は映画を見る限りでは、やはり平井氏の実践方法がまだ充分に理解できなかった。氏の言葉による説明はいささか分かりにくかった。それに関することかもしれないが、平井氏がこのような発想の教育を始めた遠い原因が、18歳までの長い間、氏が自分の実父の存在を知らなかったという氏自身の深い外傷（トラウマ）にあったという理由に、もうすこし具体的な説明と記録が欲しかったことである。このエピソードはいささか未消化の印象である。

その一方、この映画は「奈緒ちゃん」「ルーペ」と続く伊勢監督のヒューマンドキュメンタリーの方向を無理なく提示しており、監督の目指す世界――広い意味での他者に向ける共感、共鳴、思いやり、また自分に向ける理解と癒しというものがこの映画にも確かに描かれていると思った。

おそらくこの平井氏の実践は今の日本の学校教育のフィールドではかなりラディカルなものであろう。だがその平井氏の行為に密着したこの記録はやはり観客に何かを提示していると思われるのだ。「奈緒ちゃん」「ルーペ」に比べ完成度というべきものは弱いが、今の教育問題に一石を投じる映像記録であることだけは確かである。全国での上映が待望される作品である。

見えない学校

「見えない学校」製作委員会／一隅社作品

【スタッフ】製作・野口香織、佐藤健太郎、助川満、演出・伊勢真一、撮影・石倉隆二、照明・箕輪栄一、月足充、録音・米山靖、永峰康弘、沢畑明、渡辺丈彦、佐久間敏美、音楽・横内丙午、歌・水音、イラスト・堅田里栄、題字・長沼里絵、詩の語り・久保木み規、ネコの声・ポン太、製作協力・ヒココミュニケーション、共立、東京テレビセンター、YOKOCINE D.I.A.INC.協力・「見えない学校」ファンの皆さん、デザイン・グランツコーポレーション。完成・98年9月。16ミリ。問い合わせ先＝映画「見えない学校」上映委員会TEL03・5395・1456、FAX03・5395・6714

Digitized by Google

大森さわこ

ちょっとイギリスびいき

㉓複雑な女性心理を見事に描いた「鳩の翼」に脱帽！

英国というと〝紳士の国〟のイメージが強く、映画でも男優特集が組まれることが多いが、実は女性映画もいいものがある。特に屈折した女性の深層心理を掘り下げるのが英国映画は本当にうまいと思う。

イアン・ソフトリー監督の「鳩の翼」はこういう〝女性映画〟として久しぶりにガツンときた。

映像も服装も美しく艶っぽく、官能的ですらある。一見、きれいなだけの恋愛映画に思えるが、見終わった後、苦い感触が残る。なんだか何日も尾をひく映画だった。女性の心理を直視した、これぞ、英国の女性映画！

この作品でアカデミー主演女優賞候補になったヘレナ・ボナム・カーター。すごい！　とてもむずかしい役柄だが、その微妙なニュアンスを見事に演じている。

ストーリーはシンプルだ。金のないジャーナリスト（「司祭」のライナス・ローチ）と恋に落ちたヒロインは、彼との結婚を望んでいたが、後見人となった金持ちの叔母（シャーロット・ランプリング、これはミス・キャストでは）に貧乏な彼との交際を禁じられる。彼女が男と結婚できる方法はただひとつ。余命いくばくもないアメリカ令嬢（アリソン・エリオット）と男を結婚させ、その遺産を結婚資金にするのだ。

「鳩の翼」

作りようによっては悪女映画にもできる筋書き（実際、ヘンリー・ジェイムズの原作ではヒロインはすごく悪女になっているようだ）。しかし、映画版「鳩の翼」はけっして悪女ものではない。残酷な部分も持った女性だが、血も涙もある。実は同情すべき女性なのだ。早い話、これはお金がないため愛し合いながらも結婚できない恋人たちの話なのだから。

そして、最後に残された手段は別の人のお金をあてにすること。お金がなくても恋愛はできるが、結婚となると話が違ってくる。しかも、この恋人たちは身分が違う。きれいごとばかりはいっていられない。ロマンよりもやっぱり現実。ここが英国らしいではないか。

しかし、一見、策略家に見えたヒロインは前に進めば進むほどに、窮地に陥っていく（でも、前に進まなければ結婚できない）。やがて彼女はマイナス・ゾーンに入っていく。嘘、猜疑心、嫉妬。行きつく先は……もしかすると深い孤独。よかれと思って仕組んだことが後で自分に苦い影を投げかけてくる。そんな女性心理がけっして美化せず正面から描かれ、これは参った！

英国映画の流れを見た場合、この映画を見た後、筆者の頭にまっ先に浮かんだのは、劇作家デイヴィッド・ヘアの戯曲の映画化「プレンティ」だ。世間の男性からは〝最高にイヤな女〟と嫌われていたメリル・ストリープ演じる奔放なヒロイン。実は純粋な女性なのだが、自分の理想を追うあまり、どんどんマイナス・ゾーンに迷い込む。その理想と虚無感。

他にも同じデイヴィッド・ヘア原作の「ウェザビー」（ビデオ公開）のヴァネッサ・レッドグレイヴや「恋する女たち」のグレンダ・ジャクソン。さらに「ジェラシー」のテレサ・ラッセル、「ダンス・ウィズ・ア・ストレンジャー」のミランダ・リチャードソン。過去にも一筋縄ではいかない〝恋する女たち〟をクセのある女優たちが英国映画で演じてきた。

女の中にある不可解なマイナスの感情。〝ロリコン大国ニッポン〟では女性の深層心理にはあまり興味が持たれない。「鳩の翼」の策略家のヒロインも、コワイ、と逃げだす男性がいそうだ。

でも、彼女の状況を考えるとこうするしかなかった。知恵がありすぎて、逆に愚かな女。でも、不思議にシンパシーが感じられる。

そんな複雑なヒロイン像を見事に演じきることで、少女の面影がぬけなかったヘレナ・ボトム・カーターも初めてヴァネッサ・レッドグレイヴの系譜上の大人の女優になった。

Digitized by Google

その場所に映画ありて

田中眞澄

38

黒澤明の近未来

一九九八年九月六日、映画監督黒澤明は歴史になった。

年齢的に予想されないことではなかったとはいえ、その動かし難い現実に直面して、当面、或いは情緒的な、或いは儀礼的な対応は不可避であろう。その一過性の現象が過ぎ去った後に、黒澤明という存在は一個の完結した体系として、私たちに残されることになる。それに対する客観的な探究が、そこから始まる。棺を蔽うて人の評価が定まるとすれば、彼は彼の死によって、彼を理解すべき新たな出発点を設定したといえる。

黒澤没後の黒澤理解の新しい段階は、いかに展開するであろうか。だが、そのためには、さしあたって黒澤明の世界、彼の作品が、より万全な形で提供されなければならない。

黒澤明は、その創作した映画作品の全てが現存し、現時点で鑑賞することが可能な映画作家と考えられている。これは彼の時代の日本の映画監督としては、甚だ幸運な例外である。それはもちろん、彼の実績と権威の証明に他ならない。しかし、彼が演出者として記録されるもう一本の映画が、実は永年にわたって封印されてきたのは事実である。即ち、一九四六年に山本嘉次郎、関川秀雄と共同監督に名を連らねた「明日を創る人々」という映画である。これが黒澤作品としては「わが青春に悔いなし」に先立つ、戦後の最初の仕事のはずであった。

この「明日を創る人々」は、当時の東宝砧撮影所で強い力を持っていた日映演系労働組合の主導で企画された、組合運動啓蒙もしくは煽動映画というべき、要するに政治的、イデオロギー臭芬々たる類。製作期間も短時日であったらしい。おそらくそのような製作条件、動機、内容等であれば、彼としては主体的意義を持たない、不本意な仕事であったのだろう。わが作品歴に悔いありと考えたのかどうか、のちに彼は自作のフィルモグラフィーからこの映画を削ってしまう。そして（彼の実績と権威を慮ったのか）この映画はプリントが存在するのに（フィルムセンターに所蔵あり）、私たちの目には触れない幻の映画になってしまった。

しかしながら、種々の制約、条件づけは日本の映画製作の常態であり、宿命でもあった。むしろ、溝口健二に共同監督で「必勝歌」（四五）があり、翌年、黒澤に同じ形の「明日を創る人々」があるという偶然を、その一年の間のこの国の映画事情の変化の象徴として見たいと思う。その程度に、それらは既に〝歴史〟なのである。

黒澤明の全体像を認識するために、まずはまだ見ぬその映画が提示されなければならない。黒澤明が歴史になったということは、いかに不本意な関与であれ、その誕生にかかわった不遇の庶子の認知の機会となる。むろん、それは黒澤を貶しめる意図からではなく、彼を正しく理解するために必要だからである。とにかく、今後、黒澤全映画回顧上映といった企画で「明日を創る人々」を含まないとすれば、看板に偽りありとの批判を甘受すべきだろう。

その上で、今のところ不完全版しか上映されない「姿三四郎」（四三）と「白痴」（五一）が完全な形で見られれば完璧である。

もっとも、「白痴」の場合はいわくいい難い問題で、今すぐどうというものでもあるまい。少なくとも現行版より長い（三時間）版の存在をめぐる噂も根強い。もし噂が事実ならば、可能性なきにしもあらずと期待はしているのだが。それに対し「姿三四郎」に関しては、案外早く何らかの具体的な動きがありそうだとも聞くが、こういう話はこの目で見た時に信じることにしよう。

このような黒澤作品の発掘・上映にかかわる展開の一方で、彼の伝記的研究が進められるだろう。黒澤明は自ら〝自伝のようなもの〟と称した著作（『蝦蟇の油』）を残している。しかし、それは彼の記憶と主観によるものであり、しかも前半生（「羅生門」まで）で筆を止めている。そこで語られなかった後半生を含めて、緻密で厳正な調査と検証が求められる。今後の黒澤理解は、彼が提供した達成（パフォーマンス）をそれ自体に即して解釈する次元を超えて、客観的に黒澤明という人間がこの世に存在した意味を問う行為として、論者の構想力を問い返す。

私自身は、彼が若き日、プロレタリア美術運動に身を置いた体験に興味を持っている。知覚の人であるよりは視覚の人であった黒澤明を考える時、思想性云々よりも、それらのポスターや挿絵、カット図案等に見られるダイナミズム、対比、運動性、観念的な歪曲といった諸要素と、彼の映像表現との類縁を想う。彼自身は不毛な体験と回顧していても。

映画以前、一九二〇、三〇年代の美術運動の一傾向への同調に於いて、彼のインターナショナルな世界同時・同質性は無意識裡に培養されていたのではないか。そのように黒澤明の個人史を二〇世紀芸術の歴史に位置づけ得る可能性を、さしあたっての発想として書きとめておきたい。

Digitized by Google

映画の本 BOOK REVIEW

『INTERVIEW映画の青春』

日本映画が「世界水準」に達していた黄金時代を読む

京都府京都文化博物館・編

文＝上島春彦

京都府京都文化博物館・発行／キネマ旬報社・発売／本体2476円＋税

映画史家ロバート・スクラーの著書『映画』には特別なコラム扱いで「ソビエト映画の広範囲なインパクト」と題された文章が載っており、そこには我々日本人にはなじみ深い一枚の映画からのコマ写真も共に掲載されている。「能面の狂人」とキャプションにある通り、これは衣笠貞之助監督の1926年作品「狂った一頁」である。スクラーは述べている。「ソ連のサイレント映画に影響を受けた多くの映画及び映画作家の中で最も興味深い一例は、実質的にはソビエト映画を見た事のなかった（というのもそれらの映画は当局によって没収されていたからだ）同時代の日本の映画作家の手になる物であった」

ここで表明されたスクラーの驚きは、映画という19世紀末に誕生したばかりの〝ニューメディア〟が最も脱国籍的かつ無軌道でワイ雑な輝きを放っていたのが1920年代であった事実に裏打ちされている。「京都府京都文化博物館・編」になる日本の映画人へのインタビュー集が『INTERVIEW映画の青春』のタイトルで単行本化されているが〝青春〟とはまさに言い得て妙、ここには日本映画というローカリズムに依拠しながら実はあるメディアの青春その物が活写されているのだ。

登場するのは、金森万象、仁科熊彦、市川右太衛門、嵐寛寿郎、稲垣浩、牛原虚彦、五所平之助、田中絹代、衣笠貞之助、宮川一夫、伊藤大輔の11人。1971年から76年にかけて断続的に行われた聞き書き調査の成果である。この中で今も御存命なのは市川右太衛門氏と宮川一夫氏のみ。映画史上貴重な証言の数々がここに甦ったのは喜ばしい限り。例外はあるが話題の中心となっているのはほぼサイレント期からトーキ期の確立期、までで、実は日本映画が最も「世界水準」に達していたのはこの時期と50年代なのだ。50年代を代表する映画監督の一人が言うまでもなく、つい先ごろ亡くなった黒澤明であるが、彼は本書が主として扱う最初の日本映画の黄金時代にはまだ監督デビューしていない。この時代を代表するのは最初に例示した衣笠貞之助であり、伊藤大輔であり、という事になる。

本書の読みどころは数々あるが、滝沢一をインタビュアーにした、この伊藤大輔の部分もその一つ。加藤泰による名高いインタビュー本『時代劇映画の詩と真実』と併読する事をおすすめしたい。「忠次旅日記」の〝旅日記〟とはどういう意味だったのかを語る伊藤の生き生きとした口調こそが〝映画の青春〟である。先年、我々「後から来た」映画ファンはようやく（ほんの一部分ではあるが）この「忠次」の「信州血笑篇」「御用篇」を見る事が出来たのだった。

また、本書の読み方の一つとして（伊藤大輔もその内の一本を監督しているが）「忠臣蔵」の映画化に話題をしぼってつまみ読みしていくのも面白い（と言っても先に一回、全部読んでからだが）。戦後も大映や東映で、また連続TVドラマや特番でくり返し製作される事になるこの〝復讐譚〟は、日本映画の初期から最も稼げる物語の一つであったが、本書の冒頭に登場する金森万象が牧野省三に見こまれ映画監督となるきっかけになったのも19年の「忠臣蔵」であったという。日本の時代劇で最初の移動撮影と金森が語る、その駕篭の早打ちの場面を想像するだけで胸が躍らずにいられない。やがて牧野省三の監督した28年版の「忠臣蔵」が完成を見ずに焼散し、一時代を画したマキノ御室も32年に焼失、その同じ年に衣笠貞之助がトーキーで製作した「忠臣蔵・前後篇」で大ヒットメーカーの地位を確立する、といった具合。滝沢一がインタビューで衣笠に問いかける一言、「レーニンのお葬式みたい」な「赤穂城の受け渡し」の「鐘の音」という部分を読んでしまうと、つくづく我々がいかに多くの見ておくべき作品をなくしてしまったかに思いをいたさずにはいられないのである。

世界中の映画史家が、ようやくこの時期の日本映画に注目をし始めている。多くの宝が失われたとはいえ、残された数少ない傑作、あるいはその断片に、本書をつき合わせていく事で思いがけない発見が可能なはずだ。義務ではなく本当の映画ファンのための喜ばしき権利として本書を手に取ってもらいたい。

Digitized by Google

西脇英夫 映画より面白い

⑱2『裏窓』

ウィリアム・アイリッシュ著／村上博基・訳／創元推理文庫

アイリッシュは、コーネル・ウールリッチの別名をもつアメリカを代表するミステリー作家で、犯罪サスペンス物を得意とし、『幻の女』『夜は千の眼を持つ』『窓』（以上、米）『愛の迷路（妄執の影）』『親分（ボス）』『黒衣の花嫁』『暗くなるまでこの恋を』（以上、仏）『死者との血痕』『ああ爆弾』『夜の罠』（以上、日本）など、その多くが映画化されている。『裏窓』は1942年に発表された短篇で、54年にアルフレッド・ヒッチコックによって映画化された。

職業も理由も書かれていないが、骨折したのか足にギプスをはめ、車椅子に座ったままの男が退屈をもてあまし、寝室の出窓から前に見える六階建てのアパートの、それぞれの家庭の裏窓を観察している。アパートは老朽化し、今は五階が改装中である。男はそのアパートの四階に住む或る中年夫婦に注目する。妻は病気がちで、夫が失業中らしく、やがて妻の姿が見られなくなり、夫が殺したのではないかと疑い出す。男は通ってくるメイドのサムと、友人の殺人課刑事に協力してもらい、裏窓からの観察のみで、中年男の犯罪を暴こうとする。しかし、なかなか証拠が掴めず、ついに彼を罠にかけ誘い出すが、逆に相手に射殺されかけ、危機一髪で警察に救われ、中年男は刑事の銃に撃たれてアパートの屋上から落下死する。

アパートの住人を別にすると、登場人物は主人公とメイドと刑事と犯人のみ、短編だけに何ともさっぱりした人間関係だが、ヒッチコックはこれを魅力的なキャスティングと、華麗なカメラワークで見事なミステリーに仕上げた。まず、主人公（ジェームズ・スチュアート）の職業を有名な雑誌の報道カメラマンにし、カー・レースの取材中、事故で左足を骨折したため車椅子に座っていることとした。また、小説では協力者がメイドだったのを、保険会社から毎日派遣されてくる中年の看護婦に変え、さらに、主人公の恋人で、ファッション・モデルの金持娘（グレイス・ケリー）を新たに加え、ユーモアと華やかさを強調した。

小説と映画で大きく違うのは、夫が妻を殺した後の死体の処理の方法だ。小説では、改装中の階の床にセメントで埋め込んだとし、その床が他の階より一段高くなっていることが発見の糸口になるが、映画では、裏庭の花壇の花の高さが、それ以前に撮った写真と比べ、急に高くなったことで疑惑を抱くというものに変わっている。結局、掘っても何も出てこないのだが、推理の過程は同じである。

ただし、映画では死体はバラバラに刻んだようなのだが、その行方が最後まで曖昧で、刑事の「花壇に埋めたものを掘り返し、帽子の箱に入れた」と言うセリフがあるものの、これが死体のことなのか、凶器のことなのかはっきりしない。『ハリーの災難』や『ロープ』で、あんなに死体にこだわったヒッチコックなのに……。

また、犯人には共犯者の女がいて、殺された妻の身代わりとして、犯行を眩ます役目を担っているのだが、これについても推理だけで、事実としては明言していない。

そうやってよく見てみると、ずいぶんと不親切なミステリーなのだが、それもいつものことで、ヒッチコック・マジックというか、あまり気にならず、カメラ・アイと覗き見する人間の視点を同調させるという面白さに、最後まで酔わされてしまうのだ。ニクイ監督である。

新刊紹介

『映画「がんばっていきまっしょい」フォトブック　伊予東高校女子ボート部漕艇日誌』佐々木淳、アルタミラピクチャーズ・編集／ワニブックス・刊／本体1500円

どう見ても頼りなげな少女たちが創設間もないボート部で奮闘する姿を描く「がんばっていきまっしょい」は、少女期特有の儚さと眩しさを捉えた清々しい佳作である。本書はオーディションによって選ばれた少女たち（田中麗奈はじめ、ボートはもちろんズブの素人）の撮影奮闘記を収めた、もう一つの「がんばっていきまっしょい」。豊富なフォトエッセイや舞台・松山近辺のロケ地紹介（温泉・喫茶店は連絡先まで詳述！）、シナリオ採録、さらに本作の製作を務めた周防正行監督による寄稿など、なぜか「あ～あの日に帰りたい」と思わせる、魅力に溢れた一冊になっている。

Digitized by Google

池田　敏

字幕派？　吹替派？

今回は映画のＴＶ放送における“オリジナル音声（字幕放送）か、吹替版か？”という長年にわたって映画ファンの間で論争が続いているテーマに迫りたい。最近、インターネットを見ると、この種の論争をよく見かけるようになったが、それらには参加者たちの情報不足（又はエゴイズム）を感じる。

まず、ご存じの通り、現在ペイＴＶで見られる映画は圧倒的にオリジナル音声が多い。だからお金を払うんだという人がいる一方、年配の方々（若年層のマニア系視聴者と並んでペイＴＶを支持している貴重な層だ）の間では“字幕は目が疲れる”という声があって（中には若年層から見ても明らかに字が小さい字幕もある）、本当に字幕がベターかは判断がつきにくい。もっとも耳の不自由な人たちは絶対にそうは思わないのではないか。なので米国のような“クローズド・キャプション”（専用機にかけると字幕（英語）が出てくるシステムで多くの番組が導入）がさらに定着してほしいところ。

そう考えると、恐らく、ほとんどの層をカバーできる“二か国語プラス日本語字幕”（あるいはコストの低いクローズド・キャプション・システムの定着）がベストの放送形態だと思うが、ところがこれをよしとしない某映画会社がある。具体名は伏せるが“ネズミが永遠のアイドル”のあの会社（笑）は、特に衛星放送の“スピル・オーヴァー”（放送権を購入した局の国ではない例えば隣の国にも電波が届いてしまう状態）を警戒し、自社作品、特に廉価版ビデオソフトのセールスを伸ばしたい作品が英語で放送されるのを嫌っているフシがある。これは極端な例としてもやはり吹替、あなどれないのだ。

結局は字幕も吹替も、翻訳者次第で成功もすれば失敗もするということなのだろう。これ以上細かいことは一切言わない。が、インターネットで翻訳の粗探しをして時間を消耗している皆さんは翻訳者になるのをめざしてみては？　そして誰にも文句を言わせない素晴らしい翻訳があれば提示してほしい。

ＮＨＫ衛星第２『ミッドナイト映画劇場』は10／25深夜、ロシアの鬼才アレクサンドル・ソクーロフ監督の超レアな３作品を一挙オンエアという超大胆な編成。各タイトルは「セカンド・サークル」「ストーン／クリミアの亡霊」「静かなる一頁」。ロシア文学のエッセンスをＳＦ風の映像に鏤めたといわれる天才ソクーロフの作品がこれだけ一挙にＴＶオンエアされる（しかも天下のＮＨＫでだ！）というのは滅多にない機会、貴重なチャンスだ。また翌週の

「霧の中の風景」

11／１深夜はギリシャのテオ・アンゲロプロス監督による「霧の中の風景」「こうのとり、たちずさんで」を一挙放送。いずれもすでに評価を得た作品だけに安心して期待できる二本立てである。

同じくＮＨＫ衛星第２『衛星映画劇場』は10／19～22日“映画劇場”の看板を掲げながら、内３日間以上を同局（ＮＨＫ）制作のＴＶドラマで埋める模様。ならばこの看板をこの週だけは下ろすべきだ。同じ枠では11／２～５、“パリ発／最新フランス・ラブ・ロマンス”を放送。「女と男の危機」（２日）、「愛するための第９章」（３日）、「イヴォンヌの香り」（４日）、「ペダル・ドゥース」（５日）が放送されるのでミニシアター派は乞うご期待。

ＷＯＷＯＷ『シネマ・コレクション』枠は11月、“ヒロインたちの喝采”と題する特集をオンエア。シャロン・ストーン主演でリメイク版が製作中の「グロリア」（３日）や、キャンディス・バーゲン主演のビデオ未発売作「愛はひとり」（10日）を放送。また11／７『ＷＯＷＯＷプレミア』では“日本初の三次元ＣＧ・フィギュアニメーション・ムービー”である伊藤和典・脚本＆高田明美・キャラクターデザインのＳＦ巨編「VISITOR」を12月のビデオリリース（ＤＶＤ他でも発売される）に先がけて早くもＴＶ初放送（劇場公開も予定はなさそう）。ＳＦ＆アニメ・ファンならまずは必見であろう。

シネフィル・イマジカの日本初公開作デー『シネフィル・プレミア』の10／26と11／３は97年イタリア／トルコ合作「私の愛したイスタンブール」。既婚の男性が伯母の遺産であるトルコ風呂を相続し、やがてホモセクシャリティに目覚める物語を通じてイスタンブールの街にオマージュを捧げたドラマ。11／２・10は97年イラン作品「鏡の国のミナ」。迷子になる一人の少女をフィクションとドキュメンタリー、両方の手法でつづる。「白い風船」のジャファル・パナヒ監督がロカルノ映画祭金獅子賞受賞。

Digitized by Google

豊崎岳彦

DRAMA&SPECIAL

「見知らぬ乗客」TV版か!?

改変期は、かまびすしい連ドラの新作に紛れて(?)多くの特番が放映されるのが嬉しいところ。この秋には定番『世にも奇妙な物語』などから23年ぶりの復活となる懐かしの『寺内貫太郎一家』まで、バラエティ豊かな長尺ドラマが揃って、なかなかの壮観ぶり。特段、フィルム表現にこだわらない視聴者が増えたためか、シリアスなものすらビデオ撮りの作品が大半を占めるのは個人的に残念だが、過日のように焼き芋の季節だからといって、ヘタに芸術祭参加などと大上段に構えない作品が多い点は特筆すべきだろう。筆者がとりわけ面白く見たのは、最近小説家としても評価の高い野沢尚が脚本を書いた『その男の恐怖』(TBS)だ。真田広之&黒木瞳主演の"交換殺人サスペンス"だが、かの「見知らぬ乗客」のパクリかと思うとさにあらず。ロバート・ウォーカーより恐いかもしれない女殺人狂を黒木が、妻を殺され代わりに誰か(この場合は亭主)を殺せと迫られるファーリー・グレンジャーの役どころを真田が演じる。男女だから「あなたの子供ができたから邪魔な亭主を殺して」などと「見知らぬ乗客」では隠してあった性のテーマも堂々と使えますな。冒頭は会話主体で"妻殺し"の顛末を『刑事コロンボ』でお馴染みの倒叙形式で見せる(いかにも推理ドラマ風演出が一般客を安心させる"予想通り"の展開)。ところが途中から、固いこと言うなとばかりに細部をはしょりまくって、ドンデン返しの連続(←誰が一番お利口さんか?)という例のパターン。『危険なナントカ』ばりに、冷静に見てるとアホらしいほど話法を変え、ガンガン暴走しまくるあたりが最大の見どころ。このとき、俳優の既成イメージ(一例を挙げれば、黒木の亭主を演じる大建築家役の峰岸徹はマゼラーティに乗ってるとか)をうまく使い、視聴者の予想を次々とミスディレクションしまくる術はさすが手だれ。これで全体的にもうちょっと説明セリフが減り、無理にやってる"紋切り型の刑事たち"にもう一振りあると……というのはないものねだりか。再放送はお見逃しなきよう。

話は変わって、日立、インテル、松下、ソニー、東芝の5社が、ディジタル間の違法コピーを防止するための技術『Digital Transmission Content Protection(DTCP)』を開発。5社は共同でDigital Transmission Licesing Administration(DTLA)なる新会社を設立し、同技術の管理・運営に当たる。大手が揃っているだけに、これが"事実上の標準"になる見込み。もう一つ。米NCR社が、変な電子レンジ「Microwave Bank」を2〜5年後に売り出す。これは正面にタッチスクリーン付き液晶ディスプレーを持ち、料理はもちろん、ショッピング、銀行決済、電子メール、ホームページ閲覧ができ、テレビもOK。瞳、指紋、パスワードなどの認証方式に対応して決済も可能だとか。どれが付加価値なのかさっぱり分からないあたりが凄いなあ。詳細は http://www.ncr.com です。

TVフィーチャー旬報1998年9月 下旬

◆北の警察署長
(9.15/日テレ21:03〜22:54)
監=下村優/脚=坂田義和/出=螢江敬三、毬谷友子、すまけい、朝加真由美、不破万作、田村加奈子、八島智人、加倉井えり

◆愛と感動の特別ドラマ・麻意ちゃん、やさしさをありがとう
(9.18/ TBS 21:00〜22:54)
作=石黒美佐子/監=五木田亮一/脚=尾崎将也/出=浅野ゆう子、布施博、野村佑香、益岡徹、名古屋章、上船結友、梶原善、広岡由里子

◆嘘の女詐欺師 早苗とたまき・涙の事件簿2
(9.18/フジ21:00〜22:54)
監=中山史郎/脚=石原武龍/出=松本明子、泉ピン子、船越英一郎、石橋保、石原良純、東てる美、嶋田久作、黒部進、加藤治子

◆江戸川乱歩傑作選"十字路"
(9.19/テレ朝21:00〜22:51)
作=江戸川乱歩/監=高坂勉/脚=中園健司/出=風間杜夫、京本政樹、芳本美代子、中山忍、谷啓、内田春菊、深浦加奈子、平泉成

◆痛快! バツイチ・トリオ 女だけの便利屋事件簿2
(9.21/ TBS 21:00〜22:54)
作=合月勇/脚=上岡一美/出=高田久子、斎藤陽子、中山麻里、田中健、安達哲朗、大林丈史、藤木悠、八木小織、大土井祐二、赤木春恵

◆刑事鬼貫八郎6 青の殺意
(9.22/日テレ21:18〜23:09)
作=鮎川哲也/監=山田大樹/脚=坂上かつえ/出=大地康雄、左時枝、金久美子、国広富之、天田俊明、米山善吉

◆向田邦子ドラマスペシャル 寺内貫太郎一家'98年秋
(9.24/TBS21:00〜22:54)
作=向田邦子/監=久世光彦/脚=金子成人/出=小林亜星、加藤治子、西条秀樹、浅田美代子、城島茂、森公美子、左とん平、田利徹、高田次郎、竹内結子、近田春夫、桜井センリ、鈴木章生、樹木希林

◆1998バトルな女ドラマ 七人の OL ソムリエ
(9.25/ TBS 21:00〜22:54)
監=根本実樹/脚=矢島正雄/出=中森明菜、松本明子、とよた真帆、飯島愛、西田尚美、勝村政信、山本学、野際陽子/ワイン監修=服部幸應

◆世にも奇妙な物語 秋の特別編
(9.25/フジ21:00〜23:02)
案内人=タモリ▽中学教師・出=稲垣吾郎、大杉漣▽黄色がこわい・出=鶴田真由▽懲役30日 出=三上博史、夏生ゆうな▽ダジャレ禁止令・出=小野武彦、山崎一▽ホーム、スイートホーム・出=江口洋介、原田貴和子

◆高橋英樹船長シリーズ 太平洋殺意のうず潮
(9.26/テレ朝21:00〜22:51)
作=今井泉/監=野村孝/脚=柴英三郎/出=高橋英樹、春無美紀子、船越英一郎、大貫智子、桂小金治、木村元、中村綾、小林功、中島久之

◆西村京太郎サスペンス秋の特別版! 尾道・倉敷殺人ルート
(9.28/ TBS 21:00〜22:54)
作=西村京太郎/監=脇田時三/脚=長坂秀佳/出=渡瀬恒彦、菊池麻衣子、西村和彦、堤大二郎、鮎ゆうき、伊東四朗、新井康弘、ダンカン、高松英郎、小野ヤスシ、戸田太郎、山村紅葉、デビット伊東

◆ミステリースペシャル その男の恐怖
(9.29/ TBS 21:00〜22:54)
監=藤田明二/脚=野沢尚/出=真田広之、黒木瞳、峰岸徹、松田美由紀、斎藤洋介、阿部サダヲ、藤田啓而、須永慶、原サチコ、貴山侑哉、卜字たかお、小日向文世、山崎功、宮地悠子

Digitized by Google

杉原賢彦

NEW MEDIA

映画最新情報を拾う

朝（というには語弊がある、昼まえのことだが）起きて真っ先にすることといえば、メールのチェックだ。時間に余裕があれば、いくつかのメーリングサーヴィスから届いているニュースを、出かけるまでに読み飛ばすのだが……。

ところで、映画の最新ニュースにかんして、どのような入手方法があるのだろうか。インターネット以前には、雑誌と口コミがその主な方法だったと記憶される。本誌にも、その役割を担ったページが存在するわけだが、たとえば「スター・ウォーズ」のプレコール・シリーズ第１作のタイトルが“The Phantom Menace”でほぼ決定したそうだというようなルーモアが流れた９月28日（この原稿を書いている今日のことだ。もっとも、日本標準時では29日だが）、このルーモアが本誌に掲載されるのは、最短でも10月20日発売の号ということになる。その３週間ほどの間に、ルーモアから情報、そして事実となるか、あるいはさっさと変更されてしまうか……といったような中間的な事象は省かれ、いきなり記事になってしまうのが、雑誌のパターンだ。

毎朝、届くメーリングサーヴィスには、エレクトリック・コマースの動向調査についてのレポートやショップからのお買い得情報、新しくオープンしたホームページ情報などにまじり、映画情報のものもいくつかある。そのニュースを追っていくだけで、ハリウッドほか世界映画の動向の断片が、分かってくるという仕掛けだ。

前置きがいささか長くなってしまったが、インターネットならではのこのメーリングサーヴィス、いわば『Variety』や『Hollywood Reporter』などの日刊のショウビズ紙を日本にいながらにして講読する感覚ととらえれば分かりやすいだろう（電子メール・マガジンという呼称も出始めているが）。

メーリングサーヴィスについて説明を加えておくと、もともとは同じ趣味や志向をもつ人々が集まり、共通の話題について情報を交わす場として活用されてきたメーリングリストを、ワンサイディドなものにしたものといえる。インターネットならではの、一度に大量のメールを発信できる利点を生かし、情報をメールの形で多数の、しかし共通の興味をもった人々に発信する。本来は参加型のものだったメーリングリスト機能を、情報保有者からの発信のみに限って使用しているのが、メーリングサーヴィスといえるだろう。

こうした形で情報発信を行っている場はかなり多数に上る。もちろん、映画情報も例外ではないのだが、日本の国内情報というと、まだ手薄。８月にオープンしたばかりの「eiga. com」が、隔週刊のメーリングリスト（電子メール・マガジン）を流している程度だ。もちろん、情報がタダであることは、本来、稀なもの。雑誌を購入して、情報を得るという、昔ながらの情報取得習慣は、インターネットでも無縁ではない（立ち読みもできるけれど）。それが証拠に、『Variety』などは、メーリングサーヴィスそのものを行っていない。

『Hollywood Reporter』ホームページ

ただし、無料のメーリングサーヴィスもあるにはある（ちなみに、先に掲げた「eiga. com」は現在のところ無料サーヴィス）。情報（というよりもルーモア）の速さでは他の追随を許さない『Hollywood Reporter』のメーリングサーヴィスだ。土日を除く週５日、容量にして十数ＫＢほどの文字情報が毎日、「EMAIL EDITION」として送られてくるのだが、ほぼホームページ上のトップニュースがそのままパックされており、これを毎朝、読めば前日のハリウッドから世界のエンタテインメント・マーケットの動きがほぼ読みとれるようになっている（もっとも、全文英語だが）。

もしも、これだけではまだ情報が不足だという人がいたらば、『Hollywood Reporter』のホームページの講読をオススメしておこう。過去の記事を参照できるのはもちろんのこと、スクリプトの契約情報から、北米および全世界のプロダクション・チャートが参照できるのだ。あるいは、ハリウッドのウラネタなら、こいつはメーリングサーヴィスはないが、「Dark Horison」あたりがオススメ。

最後に、ＵＲＬは以下の通り：●「eiga. com」＝ http://www.eiga.com ●『Hollywood Reporter』＝ http://thr.telescan.com/ ●「Dark Horison」＝ http://www.darkhorison.com

Digitized by Google

TVワンダーランドの怪人たち

視聴率戦争の舞台裏で

武市憲二

㊺巨匠の思い出と営業中の白日夢

僕は「影武者」のロケ現場で黒澤監督と三分間会話した。TV取材の条件として、監督から十メートル以上離れて撮れと言われていたために、ディレクターチェアに腰掛けて台本にメモ書きしている監督の姿を望遠レンズで撮っていた時、突然監督が顔を上げ僕と視線が交錯した。咄嗟に「逆鱗に触れたか！」と思いながらもニコッと笑って軽く会釈したら監督が手招きして僕を呼んだ。そして筋肉を強張らせながら側に立った僕に「あんな遠くからじゃ良い画が撮れないでしょう。近くにおいでよ」。僕は我が耳を疑った。「いや、間違いなく天皇は近こう寄れと言った！」。気が変わらない内にとカメラクルーを呼び寄せて監督を撮りまくった。「テレビの仕事も大変だね」と言う驚愕すべき監督からの慰労の言葉で始まった僕たちの会話。残念ながら大部分は記憶していない。最初の二言三言と、最後の一言しか覚えていない。「監督、くれぐれも身体大切にして下さい」「ありがとう。僕を取材したかったら直接僕に言いなさいね」

その間たったの三分だったが、その三分間は僕の人生の中でとてつもなく重い。「珍しいね、黒澤さんがテレビの人と笑顔で話をするなんて」。遠巻きグループの中に戻った僕に声をかけた人がいた。東宝のボス松岡社長だった。「社長、お久しぶりです」「ああ、君ですか」。松岡社長とは、角川映画の「野性の証明」のアメリカロケで取材用バスで隣り合せたことがあった。映画会社のボスなのに、カメラ用三脚も知らず「それは何という機材ですか？」と質問したことを思い出した。

「社長、監督に挨拶しないでいいんですか？」「とんでもない。撮影中に声をかけたりしたら怒られますよ」

社長を叱り飛ばす黒澤さんはもういない。そして、野球界のもう一人のミスターが逝去した。虎の永久欠番・村山実氏である。マウンド上で喜怒哀楽の情をあれほど激しく表現した投手は他にはいない。巨人のミスターは言う。「村さんとの勝負は、勝っても負けても気持ち良かったですね。あの凄いフォークボールをどうしたら打てるか。夜中に何百回も素振りしたものですよ」。虎のミスターは答えた。「どうすれば長島・王から三振が奪えるか、巨人戦の前の日はそれを考えてなかなか寝つけなかったですよ」。インタビューが終わった僕たちを、村さんは甲子園球場に送ってくれた。「球団が粗相をして皆さんにイヤな思いをさせては申し訳ないから……」僕は目頭が熱くなった。僕にとっての20世紀の巨人たちが次々に他界する。人生の素晴らしさを教えてくれた先達のご冥福を心からお祈りする。

話変わって、久しぶりに営業中の日テレ（NTV）へ行った。お豆さんというニックネームで呼ばれるほど身体は小さいが心意気はでっかい、石川一彦取締役に頼み事があって出向いたのだ。かつては、スペシャル番組の名プロデューサーとしてNTVの娯楽部門を支えて来た氏は、現在報道担当役員として『ニュースプラス1』をはじめとする報道番組のボスとして君臨している。「いやぁー、久しぶりですな。僕で役立つことなら何なりと……」。いつも話の早い氏は、今回も僕の頼み事を聞くなり担当者を呼びつけ、話はものの5分で終った。酒が入るとお豆さんは言う。「僕はスペシャル番組予算で2億の赤字を出したけど、同時に5億は儲けさせている。僕のこのやり方を会社はどう評価するか、結果が出るのが楽しみだね」。結果、NTVは正しい選択をした。石川氏と佐藤孝吉ディレクターの両怪人を取締役に抜擢し、以降日テレの大躍進営業中が始まったのだ。石川氏と別れ、制作ルームで『11PM』時代からの戦友M氏としばしの歓談。彼と話をしていると僕は1970年代にタイムスリップしてしまう。現在都知事の青ちゃんこと青島幸男氏も若かったし、今は音楽界の大御所のひとりになった湯川れい子も美形である。今やマガジンハウスの重役になった淀川美代子（あの淀川長治氏の姪）が、あどけなく可愛い表情を見せている。へいチャンこと石坂浩二は天下の二枚目であった。そんな、つかの間の白日夢に浸ったNTV訪問。ところで営業中の僕は今、テレ朝の『宇宙船・地球号』と『南仏ワイン・グルメ紀行』の陣頭指揮者兼資金調達人として慌ただしい日々を送っている。次回から、TV最前線現場のリポートを再開しよう。

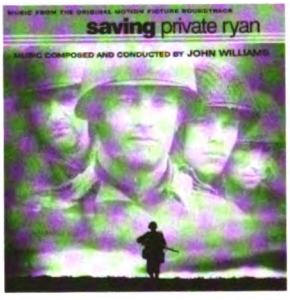
Digitized by Google

DISC REVIEW

サントラ・ハウス

賀来 卓人

プライベート・ライアン



♬ジョン・ウィリアムス
◎ユニバーサルビクター
9月2日発売／定価2541円
MVCA-24013

スピルバーグ×ウィリアムスのコンビ第16作は、第二次大戦中のフランスを舞台にした戦争ドラマ。リアリズムに徹した盟友の映像処理に、果たしてどのような作曲家は音楽設計をとったのか。

結果からいえば、かなり抑えを効かせた仕上がりだ。厚いストリングスにホルン、トランペット、ホルンのソロが絡む。伸びやかな響きを持つそれらは、概して十分な情感に富み、すこぶる耳に優しく迫ってくる。劇中でも明らかだが、戦闘場面に一切楽曲は盛られていない。その意味では活劇的なカタルシスはなく、ドラマティックな躍動感からは遠いが、幕間の登場人物の真情吐露、あるいは反戦意識への処方箋としてのアプローチは間違っていない。エンド・クレジットにおける合唱音楽が《戦没者への賛歌》と名付けられ、一種の鎮魂歌となっている辺りも象徴的だろう。最近の「アミスタッド」を含め、円熟味を示す一方、新味に欠ける仕事ではあるが、この静謐にしてクラシカルな上品さは捨て置けまい。

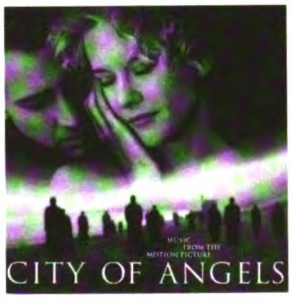
フラッド

♬クリストファー・ヤング
◎BMGジャパン
9月4日発売／定価2500円
BVCZ-24006

クリスチャン・スレイターが共同プロデューサーも兼ねたアクション映画。やはりスレイターがプロデュースに一枚噛んだ「告発」での仕事が評価されてのことだろうか。もしくはただの偶然か。クリストファー・ヤングが再びスレイターの奮闘を支えたのだった。

洪水パニックという部分に触発された部分も大きいのだろう。いつになく厚い金管部によるダイナミックな音場がまず胸を熱くさせる。そして、その楽曲のほとんどがアクション場面、とりわけ追跡場面に付せられているのが特徴か。全編アクション漬けとなっている映画にあって、それは当然のごとく受け取られそうだが、ここまで鳴りまくりのヤングの仕事も珍しい。どこか一本調子の感もなくはないが、重量感においては何ら問題はない。弦とシンセサイザーの組み合わせも悪くなく、強盗団の音色として絡むハーモニカの響きも、舞台となるアメリカ中西部の香りを醸して心地よい。スレイターもズブ濡れの甲斐があった。

シティ・オブ・エンジェル



♬ガブリエル・ヤレド
◎ワーナーミュージック・ジャパン
5月25日発売／定価2447円
WPCR-1947

かの「イングリッシュ・ペイシェント」の成功がやはり大きかったのか。ガブリエル・ヤレドがまたしてもハリウッドのラブ・ロマンスに招かれた。

透明感にあふれたヴァイオリンとシンセサイザーの響きがまず印象的だ。これにアコースティック・ギターのデュオ、女性コーラスが絡み、都会的な香りと幻想味を交錯させていく。いずれにしても、穏やかな心の触れ合いを描くドラマにおいては問題のない内容であり、リリカルなピアノ共々、ヤレドの繊細なる音楽的資質が味わえること請け合いだ。

ディスクには、ヤレドの楽曲は4曲を収録。ほかに、U2、ジミ・ヘンドリックス、ポーラ・コール、ジョン・リー・フッカー、サラ・マクラクラン、ピーター・ガブリエル、エリック・クラプトンらのポップ・ナンバーを10曲収めている。アラニス・モリセットの3年ぶりの新曲《アンインバイテッド》やグー・グー・ドールズの《アイリス》は、映画の観客以外のファンからも注目されそうだ。

Digitized by Google

ライオンハート

♫ジェリー・ゴールドスミス
◎カルチュア・パブリッシャーズ
10月25日発売／定価2100円
CPC8-5037

すべては50年代の半ばに始まっていた。CBS放送局で膨大なラジオ、TVの作曲に追われていた一人の作曲家は、やがて『プレイハウス60』なるTVショウの音楽を任される。そこには同様に配属された東京生まれの演出家がいた。演出家は程なくして20世紀フォックスで映画監督としてのデビューを果たすが、CBSで仕事を共にした九つ年下の作曲家のことを忘れたことはなかった。作曲家も彼のことを忘れはしなかった。幸運にもそのデビュー作「七月の女」で銀幕での共同作業が実現。以来、両者は70年代のハリウッドに輝かしい足跡を残し、演出家の魂が去るまで交友をはぐくんだ。

ジェリー・ゴールドスミスとフランクリン・J・シャフナー。前述の「七月の女」を皮切りに、「猿の惑星」「パットン大戦車軍団」「パピヨン」「海流の中の島々」「ブラジルから来た少年」と、胸熱いラインアップを誇った両映画人の最後の共同作業を彩った音楽がついに日本で日の目を見ることとなった。87年にカナダのみの公開に終わり、今も日本でのビデオ発売がかなっていない冒険史劇。80年代ゴールドスミスの最高傑作という一部の叫びも嘘ではない珠玉の一作だ。

ハンガリーとポルトガルにロケを敢行した作品に合わせてか、ハンガリー国立交響楽団を駆使してのブダペスト録音となった音楽は、総タイムにして90分近い長さになったという。上映時間が3時間に及ぶ「パットン大戦車軍団」では30分程度しか音楽を書かなかった作曲家の性分を思えば異例の事態だが、それだけ良きパートナーへの友情と敬意を熱くにじませた結果ととるべきか。

構造としては、主人公のフランス人青年騎士の主題と、彼を忌み嫌う元十字軍戦士（ブラック・プリンス）の主題のぶつかり合いが大きな柱となる。抜けのいいホルン、トランペットの金管で明朗なるを示す前者に対して、後者はファゴット、バス・クラリネットをリード楽器に用いた変拍子の楽曲となり、その明暗分けた対立構造が音楽的なうねりとなった。これにヒロインをめぐるリリカルな調べ、勝ち気な女戦士の主題、勇壮なるイングランド王の主題が絡む音楽は、したがって総じて華やかである。各キャラクターに明確な主題が設けられている意味では、ワグナー的なライト・モチーフの手法がとられているといってよく、だからこその音楽のヴォリュームでもあった。

また、ゴールドスミスの史劇風の音楽となると「風とライオン」や「トゥルーナイト」の仕事が思い出されるか。それらがモロッコの風味や英国的ムードに包まれていたのに対して、時代色、地域色について具体的な提示がないのも本作品の面白いところだ。無論、中世の香りはある。ただそれが、例えばミクロス・ローザーが執り行なったような音楽考証によるものではないということだ。ゴールドスミスは中世の時代物という一点を好んで作品に取り掛かったと聞くが、あくまでそれは作曲者の「気分」の中に落ち着いたといえる。その意味では従来の史劇とは全く違う地平にある仕事であろう。

だからといって、量産のためだけの手抜き作業ではない。管弦のアンサンブルは美しく、伸びやかな金管、うなる打楽器が織り成すヒロイックな高鳴りをどう例えようか。持ち前のリズミックな躍動感も貫かれ、冒険音楽としてりりしい。わけてもシンセサイザーの大胆な取り込みにおいては史劇音楽の常識を覆す大胆さであり、80年代半ば、狂ったように電子楽器を導入していた作曲者の歴史を知る意味で格好の素材だろう。「音楽のごちそうだ」とのシャフナーの言葉は、お決まりのお世辞ではない。長年の友人の才能と確かな仕事への喜びの表れだ。

ちなみに今回の日本版ディスクは、公開当時発売されたサントラ盤2枚から一曲外し、楽曲を物語順に並び替えてディスク一枚に収めた特別仕様となっている。シャフナーも草葉の陰で踊る快挙だろう。ともあれ、獅子心王のごとき活躍を見せた名手二人の最後の聖戦が幅広いリスナーを獲得することを期待しつつ、必聴。

アダムス・ファミリー2

♫マーク・シェイマン
◎カルチュア・パブリッシャーズ
8月26日発売／定価2100円
CPC8-5029

赤ちゃんが生まれてさあ大変！　の大ヒット怪奇家族コメディ第2弾。再び招かれたマーク・シェイマンは、前作同様、TVテーマをちりばめつつ、ぐっと音の速度を上げて突っ走った。シェイマン作詞による未発表挿入歌も聴きもの。

クロウ／飛翔伝説

♫グレアム・レヴェル
◎カルチュア・パブリッシャーズ
8月26日発売／定価2100円
CPC8-5030

ブランドン・リーの遺作となった復讐の物語。かねてより顔見知りだったアレックス・プロヤスとグレアム・レヴェルが初めて仕事を共にした作品として記憶してもいい。アルメニアの民族楽器を交えるなど、独特の音色が作品を包む。

Digitized by Google

VIDEO, LD&DVD GARDEN

キューブリック幻の作品が初ヴィデオ化

“目を見ひらく”（アイズ・ワイド・シャット）前に、その初期映像に息詰まらせたい！

杉原賢彦

スタンリー・キューブリック監督の初期作品が、ヴィデオ化された。それも、最初期の3本だ――。

実質的な処女作と言っても過言ではない、キューブリックが初めて批評家から注目を浴びたフィルムノワール「非情の罠」（55）、ラストの伝説的な幕切れが印象に深いクライム・スリラー「現金（ゲンキン）に体を張れ」（56）、そしてキューブリック最初の戦争巨編「突撃」（57）の3作。次第に映画作家として、その全貌を露（あらわ）にしていくキューブリックの、瑞々しいまでの映画的な閃きが迸る初期作品だ。

1946年、17歳のキューブリックは『ルック』誌専属の写真家として活動し始め、50年には職を辞して最初のドキュメンタリー作品“Day of the Fight”を撮り出す。これがRKOに100ドルで売れたことから、彼の映画作家への方向性は決定的なものとなる。さらに53年には、友人や知り合いからカネを借りまくって最初のフィーチャーとなる“Fear and Desire”を撮る。やがて、54年にジェームズ・B・ハリスとの出会いから、ハリス＝キューブリック・プロダクションを設立し、〈インディペンデント〉での映画製作を進めていくことになるのだ。

ヴィデオ化される3作は、まさに、キューブリックがキューブリックとして、その地歩を固めていく瞬間に立ち会った作品たちとも呼ぶことができるだろう（しかも、3作ともに初ヴィデオ化だ！）。

ところで、キューブリック作品の魅力を語ろうとして、わたしたちは言葉に詰まる。多様なるジャンルへの挑戦、1作ごとにスタイルを変化させながらの完璧なまでのスタイルの獲得、極限的に斬新な映像……。「スパルタカス」（60）で見せた壮大なスペクタクルと、「博士の異常な愛情」（64）で見せたブラック・ユーモアと、「2001年宇宙の旅」（68）で見せた荘厳なSFXと、「機械仕掛けのオレンジ」（71）で見せた未来社会の暗さと、「バリー・リンドン」（75）で見せた雄大なまでのコスチュームプレイと、「シャイニング」（80）で見せた壮絶なホラーとの間には、ほとんどつながりなど見いだし得ず、むしろその作品群の屹立した孤絶感が、キューブリックを際だたせる。ただ、その頂に昇るのに要した時間のすさまじさ（「バリー・リンドン」は撮影だけに300日を必要とし、最新作“Eyes Wide Shut”は、リテイクに次ぐリテイクのため、すでに公開が3度延期されている。ちなみに現在のところ99年

Digitized by Google

2001年ソフトの旅

吉川明利

発売日刻々迫る！我等の「タイタニック」

キネ旬読者の方々にはそれほどの興味はないだろうが、巷は今「タイタニック」のビデオが出る事に浮かれている。新作劇場公開作品としては（アニメは除く）「マディソン郡の橋」以来のいわゆるダイレクト・セルスルー発売である。本来であれば公開後半年でビデオリリースがひとつの基本なのだが、こうもバカ当たりしてしまっては遅くなったのも仕方あるまい。

しかし今でも劇場では一定の観客を呼べる作品である「タイタニック」なら無理してソフト化せず、ひたすら興行していれば良いではないか。では何故やむなく11月20日発売に決めたのか？　それはひとえに輸入ビデオ対策にほかならない。アメリカでは9月1日に発売となったが、発売元はパラマウント・ホームビデオ。そうなのだ、北米圏における「タイタニック」の権利はパラマウントだったのだ。これが日本と同じFOXだったらまだしも、他社のビデオで日本の市場を荒されてはかなわんという訳である。次なる対抗策は価格だ。アメリカでは19ドルから29ドルの間で売られている（インターネット通販で先着で10ドルもあったとな）ので、今まで通りに2巻組の新作だからといって5000円近くに設定しては日米の差額が出てしまう。そこは自信の一作ということで、そのままドル換算したら3980円に落ち着いたのである。

そしてもう一つは「もののけ姫」との数字競争。映画公開時の興行成績で競い合い勝利を収めた「タイタニック」はビデオ業界でもトップに立ちたいのだ。「もののけ姫」が400万本出荷したなら、その数字の上をいきたいのだ。しかし一度高価格商品を出し、その後のセル化では数字は絶対作れないためダイレクト・セルを選択したと勝手に予想したが、あながちハズレでもなかろう。ともあれビデオ業界において「タイタニック」はやはり10年に一本の作品。次の「スターウォーズ」新シリーズ3部作までの間は安泰であろう。来年には『再び劇場で「タイタニック」を』という声に答えて5時間版が登場か？　そしてそれがDVD化になるのか？7月に全米公開予定）だけが、共通項として残る。

ヴィデオ化された3本の初期作品は、この稀代の完全主義的スタイリスト、キューブリックを衝き崩す力となるかもしれない。なぜなら、その処女作にこそ、ひとりの映画作家のすべてが、結実するからだ。そして、しかも、今回ヴィデオ化された「非情の罠」は、67分オリジナル完全版でのもの。いままでわたしたちが知っていた43分の処女キューブリック（日本公開されたのは43分の短縮版）とは、明らかに様相の異なる映像が焼きつけられているはずだ。

撮影、編集、監督、そしてプロデュースまでも含めてキューブリックの手に委ねられた「非情の罠」は、駅にたたずむひとりの男のモノローグと、それに続く回想シーンから始まる。ボクサーらしき男の部屋と、ひとりのブロンドの女の部屋とを交互にとらえる、さりげない交錯の序章。窓越しの視線のさまよいのの、囚われの女の悲鳴がもらせた決定的な出会いへ。そして、女を囲うマフィアの男と、ボクサーと女のふたりの逃避行と闘いの幕が開く――。

キューブリックが差し出すのは、決して洗練されたムダのないショットではない。金魚にエサをやるため、水槽を覗き込むボクサーの顔の、忘れようもないクロースアップ。夜の街のあてどない断面。そしてボクシングの試合での、仰るようにしてとらえた圧倒的なアッパーカット（それはスコセッシの「レイジング・ブル」を時代遅れにしかねない）。フォトジェニックへと落ち込むギリギリのところでこれらの瞬間は、その突出した脈絡のなさゆえに緊張感を孕み、これから起こることへのただならぬ気配を生み出していくのだ（隠し撮りされたようなドキュメンタルな映像とのからみ合いのすさまじさ！）。

思い起こしてみよう。「スパルタカス」でわたしたちをもっとも高揚させた瞬間を、「2001年宇宙の旅」の崇高な宇宙のダンスの瞬間を、「シャイニング」の狂気を孕んだ恐怖の瞬間を。決してスムースに流れはしない、キューブリックの映画の突出したショットの時間が、このときすでに形成されていたことに気づくはずだ。そしてそうした瞬間をこそ、わたしたちは待っているのだと。

完成を望みながら常に拒否し続けるキューブリックの、荒々しいまでの原初の映像を見よ。キューブリックの完全主義を衝き崩す証拠物件を見つけだす絶好の機会を逃すな！　息を詰まらせ、その瞬間を待て、酔え！

非情の罠

55年・モノクロ・67分●監督・脚本・製作／スタンリー・キューブリック　製作／モリス・ブーゼル　出演／フランク・シルベラ、ジャミー・スミス、アイリーン・ケーン
●ワーナー・ホーム・ビデオより定価2480円にて10月23日発売（以下2本とも同）

現金に体を張れ

56年・モノクロ・85分●監督・脚本／スタンリー・キューブリック　製作／ジェームズ・B・ハリス　出演／スターリング・ヘイドン、コリーン・グレイ、ヴィンセント・エドワーズ

突撃

57年・モノクロ・88分●監督・脚本／スタンリー・キューブリック　製作／ジェームズ・B・ハリス　脚本／コールダー・ウィリンカム、ジム・トンプソン　出演／カーク・ダグラス、ラルフ・ミーカー

Digitized by Google

公開作&未公開作

●丸山尚輝

INTENSITY　インテンシティ　緊迫

97年（TM）●監督／イヴ・シモノー　出演／モーリー・パーカー、ジョン・C・マクギンリー　●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（178分）10月23日リリース

今年の7月に、WOWOWで無料放送されたサスペンス・ドラマが、前後編を同時収録してリリースされる。主演には「キリスト」で異常性愛者を魅力的に演じたM・パーカーが抜擢され、彼女を襲う非道の殺人鬼に「セブン」などメジャー作品で助演活躍中のJ・C・マクギンリーがあたっている。話は単純ながら、ハラハラドキドキが持続するエンタテインメント作品に仕上がっている。

サンフランシスコでウエイトレスをしているチャイナは、幼い頃に麻薬中毒の母親の愛人に虐待され、また殺人を目の当たりにしたことがトラウマとなり、以来心を閉ざすようになっていた。ある年の感謝祭、同僚のローラに誘われて彼女の家へ遊びに出かけたチャイナは、そこで突然押し入ってきた殺人鬼・エドグラーがローラ一家を惨殺するところを目撃する。ローラを助けようと、エドグラーのトレイラーに乗り込むチャイナ。しかし、既にローラは死亡しており、エドグラーはチャイナを乗せたまま車を走らせてしまうのであった。途中、立ち寄ったガソリンスタンドでチャイナは脱出を試みるが、エドグラーが彼の隠れ家にアリエルという少女を監禁していることを知ると、彼女は果敢にもアリエルを助け出そうと、再びエドグラーのトレイラーに忍び込むのであった…。

GROSSE POINTE BLANK　ポイント・ブランク

©Hollywood Pictures Company

97年（未公開）●監督／ジョージ・アーミティジ　出演／ジョン・キューザック、ミニー・ドライヴァー　●ブエナビスタホームエンターテイメント（108分）10月21日リリース

一匹狼の殺し屋・ブランクは、クールに仕事をこなしていく暗殺のプロ。ある日、彼の元に故郷グロス・ポイントの高校のクラス会の知らせが届く。出席する気のないブランクであったが、偶然にも次の仕事が同じ町であったことから、故郷へ帰ることに。しかし、そこでかつての恋人・デビーに再会したブランクは、次第に人間らしい気持ちを取り戻していくのだが…。

J・キューザックが、長年温めていた企画を、製作・脚本・主演を兼ねて実現させたアクション映画。キャストも豪華で、D・エイクロイド、M・ドライヴァー、A・アーキンらが顔を揃える中、キューザックの実姉ジョーン・キューザックが彼の秘書役で共演しているのも見逃せない。音楽も充実の一級娯楽作品に仕上がった作品。

CAPONE'S LOST TREASURE　ロスト・コネクション～アル・カポネの遺産～

94年（未公開）●監督／ロバート・ヒックス　出演／サマンサ・カベラ、ジェイムズ・クリストファー　●トラストピクチャーズ（93分）10月21日リリース

60年前に失われたままになっているアル・カポネの遺産を巡って繰り広げられる騒動を描いたサスペンス・ドラマ。

34年、暗黒街シカゴ。若者ジョー、ルー、アルの3人は、ある取引現場に向かう途中に車が故障して、取引を失敗に終わらせていた。それから60年後、80歳を過ぎ、同じ老人ホームに暮らしていた3人の元へひとりの紳士が訪ねてきた。ところが、アルが彼と接見した後、謎の死を遂げてしまう。アルの遺した手紙から60年前の取引にある裏事情があることに気づいたジョーとルーは、ホームの女性スタッフ、ミッシェルと共に当時の謎に迫る。

老人たちが活躍するシルバー・アクション。個人的にはJ・レモンとWマッソーのあのシリーズで観たかった作品。

ビデオ新譜

※＝廉価版、（R）＝レンタル

●IVC

10/5「汚れなき悪戯」※「火の馬」※「プロスマニ」※

●アップリング

10/23「ダライ・ラマ」※「ラスト・ホリデイ」

●アミューズビデオ

10/23「初恋（エリック・コット監督版）」

●カルチュア・パブリッシャーズ

10/25「大人は判ってくれない」※「家庭」※「恋のエチュード／完全版」※「C階段」※「シャドー（ダリオ・アルジェント監督版）」※「夜霧の恋人たち」※「歓びの毒牙（きば）」※「わたしは目撃者」※

10/30「パッション・ダモーレ」※「フランスの想い出」※

●ギャガ・コミュニケーションズ

10/23「ネプチューン'99どつきどつかれ」

●ケイエスエス

9/25「難波金融伝／ミナミの帝王　劇場版PART Ⅵ」（R）

●コムストック

10/23「ある大統領の情事」

●コムストック＝テレビ東京＝ポニーキャニオン

10/21「ドーベルマン」

●CICビクタービデオ

10/23「マウス・ハント」「ロスト・ワールド／ジュラシック・パーク」（THX）※

●ジャパンホームビデオ

10/23「THE GROUND／地雷撤去隊」

●ジュネス企画

10/12「レ・ミゼラブル（噫無情）」※「我は海の子」※

●松竹ホームビデオ

10/21「一生、遊んで暮らしたい」「ご

Digitized by Google

望月美寿の

アジアのピンキリ

ーそのまたキリー

目の前にユンファが！わが倉田保昭様がぁ…!!

「うおー俺はいま猛烈に感動している！」その夜の私はまさに星飛雄馬状態であった。目の前にあのチョウ・ユンファとわが永遠のアイドル、倉田保昭がいる。抱きあっている、笑いあっている、広東語でしゃべっている。「リプレイスメント・キラー」の来日記念パーティでの出来事である。この手の華やかな場には縁のない私だが、今度ばかりは呼んでもらって涙涙……。

上海での全40話（！）のTVシリーズの撮影がやっと終わったという倉田さんは心もちしまってカッコいい。ユンファ主演の「七番目の呪い」にだまくらかされて（！）ゲスト出演した爆笑エピソード（残念ながら今回は割愛）や、ヤングチャンピオン連載中の「王道ドラゴン」（倉田さんの自伝「和製ドラゴン放浪記」をとっても大胆に脚色した漫画）の話などをきく。「ブルース・リーが出てきてから俺んところに苦情がすごいのよ、事実と違うって。でも俺が描いてるんじゃないから弱っちゃって。もうじきジミーさん（ジミー・ウォン）も登場するんだけど、本人から苦情がくるんじゃないかってそれだけが心配」

あいかわらず倉田さんの話は飄々と面白すぎる。やがて生島ヒロシの素晴らしすぎる英語のMCとともにユンファ登場。この実物のかわいさをどう表現しよう。女性ファン代表の若尾文子さん、武田久美子さんとキスなど交わし、会場隅のジャスミン夫人の目が光る（ウソウソ）。と、壇上のユンファが倉田さんに気づいた。みるみる口角を下げた彼独特のうれしそうな顔になったあと、ちょっといたずらっぽくかしこまった日本式のおじぎを2回。あくまでさりげなく。乾杯が終わるや待ちかねたように〝先輩〟のもとに大股で近づいてきた發哥、私の目にはその姿がスローモーションとなって今も灼きついている……。

撮影／望月美寿

ZARKORR! THE INVADER

巨大怪獣ザルコー

97年（未公開）●監督／アーロン・オズボーン 出演／リース・クリスチャン・ボー、デブライズ・グロスマン ●ABC出版（80分） 10月22日リリース

怪獣映画ブームのさなか、またまた飛び出したアメリカ産モンスター・パニック映画。

ある夜突然、その怪獣はカリフォルニアの山中に現れた。怪獣の名はザルコー。ロスの街を破壊し始めたそれは、やがて進路をある方角へ向ける。一方その頃、その様子をテレビで知った郵便局員のトミーの元に、奇妙な来訪者が出現。宇宙人である彼女は、宇宙怪獣ザルコーの飛来により、人類絶滅の危機を彼に知らせに来たのだった…。

冒頭からいきなり、ぬいぐるみ怪獣が出てきて期待させる滑り出しだったが、その後は人間がドラマの中心になってちょっと尻つぼみの感は否めない。しかし、アメリカ映画としては少々テイストの違う作りに日本のファンにはチェックが必要アリの作品である筈だ。

THE INFORMANT

アンダーフィールド

97年（未公開）●監督／ジム・マクブライト 出演／アンソニー・ブロフィ、ケリー・エルウェス ●エムスリイエンタテインメント（106分） 10月23日リリース

すっかりジェイムズ・ボンド役が板についてきたT・ダルトンの顔が炎の中にぽっかり浮かび上がるジャケットを見ると、スパイ映画ではないかとの先入観を持ってしまうが、どっこいこの作品は骨太社会派ドラマなのである。

80年代の北アイルランド。裁判所判事暗殺の罪で警察に捕らえられたIRAの元工作員・ジンジー。彼は、家庭の安全と自身の釈放を条件に、テロリスト仲間の名前を裁判で明かすことを約束する。ところが、それを知ったテロリストたちは、裏切り者の命を狙って動き始めるのだった…。

史実に基づいたG・シーモアによる原作を完全映画化した、アクションあり人間ドラマありの作品。監督は「グレート・ボールズ・オブ・ファイアー」のJ・マクブライト。

存知！ふんどし頭巾」「SADA／戯作・阿部定の生涯」「新・サラリーマン専科」「てなもんや商社」「東京夜曲」

●新日本映画社

10/30「ラジュー出世する」

●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

10/23「ストリートファイター」※「ダブルチーム」※「ボディ・ターゲット」※「マキシマム・リスク」※「恋愛小説家」

●東映ビデオ

10/21「一心太助　江戸っ子祭り」※「御存じ解決黒頭巾神出鬼没」※「五番町夕霧楼（田坂具隆監督版）」※「超能力者／未知への旅人」※「森と湖のまつり」※「柳生武芸帳／独眼一刀流」※

●東北新社

10/30「アイドルを探せ（ミシェル・ボワロン監督版）」※「愛さずにいられない」※「パッション・ベアトリス」※「花のようなエレ」※「パリジェンヌ」※「巴里を追いかけて」※「ふたり　DEUX」※「僕と一緒に幾日か」※

●日活

10/23「シングル・アクション」

●日本ヘラルド映画

10/23「デストラクション／制御不能」

●パイオニアLDC

10/23「Uターン」

●パップ

10/21「香港大夜総会　タッチ&マギー」※

●ビームエンタテインメント

10/25「JOKER　疫病神」「008（ゼロゼロパー）　皇帝ミッション」※

●ファイブウェイズ

10/22「牯嶺街少年殺人事件（上下巻）」※「紅夢」※「天幻城市」※「宝島（パオタオ）／トレジャー・アイランド」※「魯冰花」※

●ブエナビスタホームエンターテイ

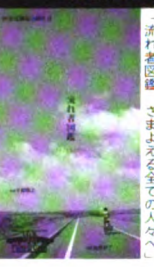
Digitized by Google

由美香／流れ者図鑑　さまよえる全ての人々へ

「由美香」

97年（公開）●監督・撮影・出演／平野勝之　撮影・出演／林由美香　出演／平野ハニー、由美香ママ
●V&RPLANNING（140分）
10月24日レンタル

「流れ者図鑑　さまよえる全ての人々へ」



98年（公開）●監督・撮影・出演／平野勝之　撮影・出演／松梨智子
●V&RLANNING（105分）
10月24日レンタル

AV監督の平野勝之が、彼の不倫相手と自転車で旅をするロードAV2作が一挙レンタル開始される。AVとしてもドキュメントとしても楽しめる作品で、第1作の「由美香」はピンク映画などで大活躍中の林由美香ちゃんをフィーチャー、東京から北海道へチャリ旅行するというもの。人々との触れ合いから、ふたりの〝ぶつかり合い〟を活写していく。ちなみに、由美香ちゃんは「もう二度とこりごり」と言っていながら、最近また自宅から40キロの自転車旅行に出たそーだ。

A FAMILLY OF COP Ⅲ　キング・オブ・コップ

98年（TM）●監督／シェルドン・J・グレイ　出演／チャールズ・ブロンソン、セバスチャン・スペンス
●インタラクティブシネマ（92分）
10月21日リリース

70歳を前に、未だタフガイぶり健在のC・ブロンソンが、第100作を記念して出演したポリス・アクション。政治家を巻き込んだ億万長者殺人事件の裏に潜む陰謀に、警部ポールが挑む「A FAMILY OF COPS」シリーズの第3弾。

BAD TO THE BONE　悪女は美しい…

97年（TM）●監督／ビル・L・ノートン　出演／クリスティ・スワンソン、ジェレミー・ロンドン
●CICビクタービデオ（90分）
10月23日リリース

何者かによって殺害された母親の遺産を受け継ぎ、恋人とクラブを開いたフランチェスカ。しかし、クラブ経営は難航。恋人に虐待を受けるようになった彼女は、未成年の弟に恋人殺害計画を持ちかける…。非情な美女を描いたサスペンス。

ELMORE LEONARD'S GOLD COAST　ゴールド・コースト

97年（TM）●監督／ピーター・ウェラー　出演／デイヴィッド・カルーソ、マーゴ・ヘルゲンバーガー
●CICビクタービデオ（109分）
10月23日リリース

「ロボコップ」のP・ウエラー初監督作品。犯罪組織の大物が急逝し、多額の遺産を相続した妻・カレン。だが、それには条件があった。再婚はおろか、恋愛も禁止されていたのだ。そして、殺し屋ローランドは彼女を見張るうち…。

MOTHER MAYISLEEP WITH DANGER　ザ・ストーカー　狂気の愛

96年（TM）●監督／ジョージ・モンテシー　出演／トリー・スペリング、イワン・セルゲイ
●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（93分）　10月23日リリース

恋人を殺した過去を持つストーカー男とは知らず、恋仲になってしまった女子大生の恐怖を、「オーメン4」のG・モンテシー監督が描いたサスペンス・スリラー。主演は「ビバリーヒルズ青春白書」のT・スペリング。

銃爪　ひきがね

98年（公開）●監督／佐々木正人　脚本／橋場千秋　撮影／小川洋一　出演／清水宏次朗、長島慶造、松田千奈
●ビジョンスギモト（75分）
10月23日リリース

組の若頭から、ある組長暗殺計画を指示された高志。男をあげる為、故郷・博多に乗り込んだ彼は、しかしかつての友人やホステスとの愛、そして使命に翻弄されるうち、ひとつの決断を下す…。清水宏次朗主演による任侠アクション。

WHEN DANGER FOLLOWS YOU HOME　ハッカー殺人事件を追え！

97年（TM）●監督／デイヴィッド・ペキンパー　出演／ジョベス・ウイリアムズ、マイケル・マナッセリ
●CICビクタービデオ（92分）
10月23日リリース

「ポルターガイスト」のJ・ウイリアムズ主演による医療サスペンス。コンピューター会社に潜入したハッカー青年が、彼の精神鑑定に関わった女研修医・アンの家で薬殺された。容疑をかけられたアンは、死の裏側に潜む謎に挑むが…。

メント

10/23「コン・エアー」※「ネゴシエーター」※

●フォックスホームエンターテイメント

10/23「エイリアン4」「素晴らしき日」※「ボルケーノ」（THX）※

●ポニーキャニオン

10/21「上海グランド」

●ミュージアム

10/21「さまよえる脳髄」

●ワーナー・ホーム・ビデオ

10/23「現金に体を張れ」※「コンタクト」※「ジョージ・ルーカスのTHX−1138」※「突撃」※「非情の罠」※

11/1「ケス」「スフィア」

LD新譜

W＝ワイド・スクリーン、D＝デジタル、DD＝ドルビー・デジタル

●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

10/23「恋愛小説家」（W、D）

●日本コロムビア

10/21「悪魔のはらわた」「処女の生き血／ブラッド・フォー・ドラキュラ」「ヒート（ポール・モリセイ監督版）」

●パイオニアLDC

10/23「エイリアン4」（W、DD、THX）「サーカスの世界（W、D）」「サドン・デス」（W）「ザ・ロック」（W、THX）「ドーベルマン」（W、DD）「ナイトメアー・ビフォア・クリスマス」（W）「ハード・ターゲット」（W）「Uターン」（W、D）「ロスト・ワールド／ジュラシック・パーク」（W、DD、THX）「わんわん物語」（W、DD、THX）

11/1「スフィア」（W、DD）

●バップ

10/21「香港大夜総会　タッチ&マギー」

Digitized by Google

オリジナルビデオこだわりチェック

中村勝則

「聖母の深き淵」の前段階が明かされる事実上の第1作

警察という男社会に生きる女刑事・緑子（＝RIKO）の活躍を描いた『女刑事RIKO・聖母の深き淵』。

一見沈着冷静なエリート刑事に見えるも、その一方〝母親〟としての優しい一面も合わせ持つRIKOは、滝沢涼子の個性的な魅力も相俟って、これまでの日本映画にありそうでなかったヒロイン像となり、そのオープニングから腹ぼての妊婦であるRIKOが、堂々家宅捜査に踏み込む姿には「こんなのあり!?」という疑問を超越して思わず圧倒されてしまった。

そしてOVとなっての再登場となった第弐弾『女神の永遠』。

少年レイプの実録ビデオを押収し、RIKOはその被害者のひとりにたどり着くが既にその少年は自殺。事件が身代金目当ての誘拐事件と関連性があると見た本庁は、RIKOと不倫関係にあった安藤警部（風間トオル）を中心に極秘捜査を開始。そんな中、犯人の手掛かりをつかんだRIKOの部下で恋人の鮎川（橋爪浩一）が殺害され、現場にはRIKOの指紋が…。

今回は彼女の〝母親〟としての部分は一切描かれない。それもそのはず、97年10月下旬号の撮影現場ルポでも書かれているが、ストーリーは『聖母の深き淵』の前段階、つまり正確にはこちらが一作目にあたるからだ。それだけにかつての同僚であり恋人でもあった安藤や高須（永澤俊矢）とRIKOとの具体的な関係、なぜ安藤の子を身ごもってしまい、未婚の母となってしまったのか？　また刑事である以前のどこか哀しい〝女の性〟を背負うRIKOの性格描写もより明らかにされている点も今回の大きな見どころと言えよう。『聖母の深き淵』を未見の方は、この『女神の永遠』から見ることをおすすめしたい。

脚本・原田ひろみ／監督・坂田俊／撮影・中村ヒロ／音楽・井上堯之／出演・柴俊夫、滝沢涼子、藤原一、永澤矢、中田浩二／オルガ・橋爪功／ダイヤ・野末陀丸／佐井・宮崎祐／宮間・柴田美／シノ・生田斗真／子・原枝美　●1998年作　●東映ビデオ（99分）10月9日リリース

DRIFTING CLOUDS　浮き雲

96年（公開）●監督／アキ・カウリスマキ　出演／カティ・オウティネン、カリ・ヴァーナネン、エリナ・サロメ　●ユーロスペース、日本スカイウェイ　10月22日リリース

オフビートな燻し銀監督、アキ・カウリスマキが、すべての苦労人に贈る人生への賛歌！　矢継ぎ早に職を奪われてしまったイロナ&ローリ夫妻。一時はどん底まで落ちた彼らだが、レストラン経営というささやかな夢に向かって歩み出す。

METISSE　カフェ・オ・レ

93年（公開）●監督／マチュー・カソヴィッツ　出演／ジュリー・モデュエシュ、ユベール・クンデ、ヴァンサン・カッセル　●日本コロムビア（92分）　10月21日リリース

「憎しみ」「アサシンズ」のカソヴィッツ監督幻のデビュー作。原題にある如く、混血の少女ローラが白人と黒人の恋人を従えてタフに生きる姿を描いたラブ・コメディ。部屋で鉢合わせた恋人達は、ローラから妊娠を告げられてしまうが…。

UNIVERSAL SOLDIER II BROTHER IN ARMS　ユニバーサルソルジャーII

98年（TM）●監督／ジェフ・ウールノー　出演／マット・バタグリア、バート・レイノルズ、ゲイリー・ビジー　●キングレコード（93分）　10月23日リリース

「GODZILLA」の製作チームが生み出したユニ・ソルがパワーアップして再登場するSFアクションのテレビ・シリーズ。G・ビジーがゲスト出演する他、B・レイノルズが助演するなど、キャスト陣も豪華。

Y'AURA T'IL DELA NEIGE A NOEL?　クリスマスに雪はふるの？

96年（公開）●監督／サンドリーヌ・ヴェイセ　出演／ドミニク・レイモン、ダニエル・デュバル　●オンリー・ハーツ（90分）　10月30日リリース

愛する母親の為に、正妻のいる父親との関係を受け入れた7人の子供たち。だが、そんな父が長姉に手を出そうとした時、母親はある決心をする…。プロヴァンスを舞台にしたある一家の愛と奇跡の物語。愛らしい子供たちが涙を誘います。

DVD新譜

●アミューズビデオ

10/23「乱気流　タービュランス」（W、DD）

●カルチュア・パブリッシャーズ

10/25「キートンの恋愛三代記（滑稽恋愛三代記）」「グリード」「クレオパトラ（セシル・B・デミル監督版）」（DD）「ことの次第（ヴィム・ヴェンダース監督版）」（DD）「サスペリア」（W、DD）「サスペリアPART2／完全版」（W、DD）「東京画」（DD）「パリ、テキサス」（W、DD）「ハレルヤ」（DD）「左利きの女」（DD）「ビッグ・パレード」「武器よさらば（戦場よさらば）」（DD）「ベルリン　天使の詩」（W、DD）「メリー・ウィドウ」（DD）「四十二番街」（DD）「類猿人ターザン（W・S・ヴァン・ダイク監督版）」（DD）「若草物語（ジョージ・キューカー監督版）」

●cine cube

10/25「シャドー（ダリオ・アルジェント監督版）」（DD）「欲びの毒牙」（DD）「わたしは目撃者」（DD）

●松竹ホームビデオ

10/21「天城越え（三村晴彦監督版）」（W、DD）「鬼畜」（W、DD）「霧の旗（山田洋次監督版）」（W、DD）「SADA／戯作・阿部定の生涯」（DD）

●ビームエンタテインメント

10/25「クライムタイム」（W、D）「サン・ロレンツォの夜」（W）「GEORGE A.ROMERO'S THE CONCLUSION「（W、D）「父　パードレ・パドローネ」（W）

Digitized by Google

アニメーション&吹替版

●米田由美

青の6号　vol.1 [BLUES]

98年●監督・メカデザイン／前田真宏　脚本／山口宏　声／郷田ほづみ、野上ゆかな、若松武　●バンダイビジュアル（30分）10月25日リリース　5000円

近未来の地球。そこでは環境破壊が進み、人類は残された最後のフロンティアである海に希望を託していた。そして海における国家間の秩序を再構築するため、【青】という超国家組織が生まれた。各国から集結してきた潜水艦は、海の安全を守るため【青】の任務につく。ところが、その中のひとりであるゾーンダイクが突然クーデターを起こし、地球人類を壊滅させようと動き始めた。そんな中、日本から【青】に派遣されていた6号艦は、人類最後の希望を乗せて極秘任務に就くのだった…。

60年代に日本中の少年たちの心を虜にした小澤さとるの海洋冒険小説が原作。発表からすでに30余年が経過しているが、ロングセラーとして今の若い世代にもファンは多いとか。注目すべきは、メカデザインなどに古めかしいテイストを残しつつ、フルデジタル&ドルビーサウンドという最新技術を用いてアニメ化している点だろう。もちろんフルデジタルはOAVでは初の試み。また「紺碧の艦隊」「新海底軍艦」など、どこか懐かしい香りのする戦艦や潜水艦を題材にしたアニメはこれまでにもあったが、「青の6号」ではCGによる海中シーンなど、あっと驚く映像マジックが満載。監督の前田真宏をはじめ、30代半ばという若手実力派スタッフの将来性を感じさせる1本である。

スレイヤーズえくせれんと　Vol.1 らびりんす

98年●監督／わたなべひろし　脚本／渡辺桂子　声／林原めぐみ、川村万梨阿、速水奨●バンダイビジュアル（30分）10月25日リリース　5000円

アニメ業界でもトップクラスの人気を保持している「スレイヤーズ」のOAVシリーズ第2弾。とある街で大暴れした魔導師のリナとナーガが、責任を取らされてタダ働きすることに…。シリーズを知らずとも楽しめるノリのいい新作だ。

ルパン三世　炎の記憶～ TOKYO CRISIS

98年●監督／篠原俊哉　脚本／藤田伸三　声／栗田貫一、増山江威子、小林清志、納谷悟朗●バップ（95分）11月6日リリース

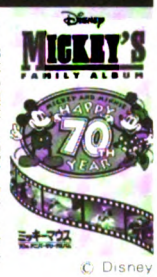
徳川幕府の隠し財宝を巡る大争奪戦が展開する「ルパン三世」のTVスペシャル第10弾。スペシャルとしては初めて日本を舞台にした作品であり、原作が再スタートしている今、注目度は満点だ。それにしても栗田貫一は頑張っている。

ベティ・ブープ　1～2

33年～●製作／マックス・フライシャー　監督／デイヴ・フライシャー　●IVC（各25分）10月25日リリース　各1980円

「ポパイ」と並ぶ伝説のアニメ作家、フライシャー兄弟の代表作がついにビデオ化。キュートでセクシーなベティちゃんのユニークな短編を1巻に4話収録している。ベティちゃんがくしゃみしながら歌う「ベティのカーレース」は必見。

ミッキー・マウス　70th アニバーサリーアルバム



© Disney

31～53年●製作・出演・声／ウォルト・ディズニー●ブエナ ビスタ（73分）11月6日リリース　3600円（二カ国語版、吹替版もあり）

今年はミッキーとミニーの生誕70周年。それを記念して、30年から53年に製作された名作短編10作を収録した貴重なビデオが発売される。ウォルト・ディズニー自らミッキーの吹き替えをしている録音風景など、見逃せない映像も併録する。

LADY AND THE TRAMP　わんわん物語

© Disney

55年●製作総指揮／ウォルト・ディズニー　声／ペギー・リー●ブエナ ビスタ（75分）10月23日リリース　3600円（二カ国語版、吹替版もあり）

ウォルト・ディズニー本人が手がけた初の長編オリジナル作品が、待望の再ビデオ化。お屋敷に暮らすお嬢様犬のレディと野良犬トランプが恋に落ち、そして冒険を繰り広げるという感動編。楽しいミュージカルシーンは何度観てもイイ。

BLACK JACK　ブラックジャック　完全版

98年●監督・製作総指揮／ジョン・ウー　出演／ドルフ・ラングレン（大塚明夫）●アミューズビデオ（113分）11月10日リリース

フリーのボディガード、ジャックが過去の呪縛に悩まされつつ、ひとりの少女を守るために戦う…。ジョン・ウーが製作総指揮・監督を手がけ、シリーズ化が決定したテレビ作品。低音が魅力の演技派・大塚明夫がさすがの好演を披露する。

※本ページの価格表示は全て税抜です

Digitized by Google

ヴォイス大百科 弓家保則

—第十六回—

内海賢二［前編］

色々な役ができないために確立した芸風

今回のゲストは、内海賢二さん。高校生の時、九州のNHK放送劇団に入ったのを皮切りに、役者への道を歩み始めた内海さんだが、単身、上京したのは意外なキッカケだったそうである。

「九州ではけっこうメシが食えていたんだけど『やっぱり、東京で勉強しなきゃ駄目だ』という気持ちが段々と芽生えてきたんです。そんなことを思っていた頃、同じ劇団の仲間で電通に入って、テレビ映画の製作をやっていた友達がいたんです。彼から、レギュラーで使ってやるからすぐに来い、という話があって、急遽、上京したんです。ところが、上京したらその番組が終わってしまった（笑）。それで、不思議な縁なんだけど、その番組の主役をやっていた柴田秀勝さんのお世話になって、上京して1週間後には今のゴールデン街でアルバイトを始めていたんです。将来に対する不安は『なかった』と言えば嘘なんだけど『俺は絶対に大丈夫』と思っていたので、夢の方が大きかったですね（笑）」

やがて、仕事の流れで自然と洋画のアテレコを始めていったそうだが、その当時は群雄割拠の時代。大塚周夫さん、黒沢良さん、矢島正明さん、納谷悟朗さんといったメンバーの中で切磋琢磨していった、と言う。

「荒野の七人」

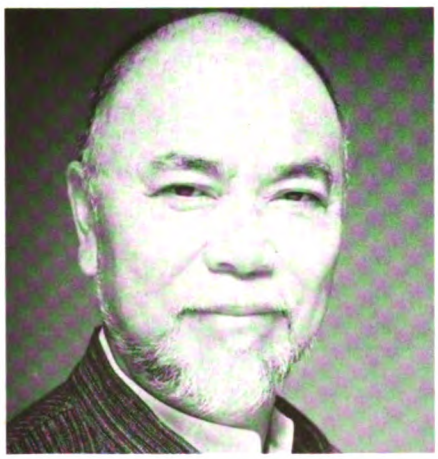
「このメンバーの中で生き残っていくのは大変ですよ。逆に、彼らと一緒に仕事できた、ということはいい勉強になりましたね。僕は、生の経験はなくて、もう録音ができる時代だった。それでもトチれば、もう一度頭から、という時代でした。そんな状況の中で、男Aや男1といった役をやっていたんです。それで僕達が一言、二言の台詞でトチるんです。そうすると、それはもう散々嫌味を言われましたよ（笑）。だけど、文句を言われながらも、そこで育っていく、ということがあったし、その中から仲間意識も生まれてきた。その点、今は、クールだから、職業的になりすぎてるんじゃないかな。声優というものが職業みたくなっている。僕達の場合、役者というのは、安定しているとか、そういうことではなくて、それでもやるんだ、というものだったんですよね」

洋画の場合、一言、二言の台詞をしゃべるような役が出てきた時〝ダブリ〟といって、出演者が本役以外の役を受け持つことがある。そのダブリに対して内海さんは一計を案じたそうだ。

「あの頃、色々な役をやっていくうちに『このままじゃ、絶対に駄目だろう』と思って、色々な役ができないようにするにはどうすればいいか？　ということを考えた。考えた末に、自分の芸風をきちんと確立させて、これは絶対だ、という声でしゃべるようにしたんです。そうすれば、ダブリでやっていると、見ている人にわかってしまう。その結果、思惑通り『内海はダブらせると声がバレちゃうから、ダブリはいいや』となっていった（笑）。ただ、そうなるまでは大変でしたけどね」

洋画の吹替で、内海さんといえば、スティーブ・マックイーンが印象深い。そのマックイーンを初めて演じたのは『荒野の七人』だったそうである。

「マックイーンを初めて知ったのは『拳銃無宿』で、宮部昭夫さんがおやりになっていた。宮部さんの声は、あの作品にとても合ってましたよね。それで、テレビ朝日が『荒野の七人』を初めて放映する時に、あるディレクターが僕を推薦して下さったそうなんです。マックイーンというのは、雰囲気がある人で、声だけで彼を表現するのは難しいんです。当時、そのあたりで苦労したのを覚えていますね」



うつみ・けんじ　1937年8月26日、福岡県生まれ。九州NHK放送劇団を経て、未来劇場に入団。その後、昭和59年に"賢プロダクション"を設立。吹替の主な出演作は『荒野の七人』『タワーリング・インフェルノ』『バビヨン』（スティーブ・マックイーン）『大いなる眠り』『三銃士』（オリバー・リード）等。その他の出演作は『狼少年ケン』『Dr.スランプ　アラレちゃん』（アニメ）『今夜は好奇心』『目撃！ドキュン』（ナレーション）等がある。また、新宿・シアターサンモールにて舞台『煙が目にしみる』に出演（11月4日～11月15日）。

Digitized by Google

日本映画紹介

製作会社　配給会社　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ／EK＝コダック／A＝アグファ）BU＝ブローアップ　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／EV＝ヨーロピアンヴィスタ／CS＝シネマスコープ　D＝ドルビー／DSR＝ドルビーSR　上映時間　フィルムメートル数　映倫演定（青少年映画審議会推薦／R指定／成人指定）封切代表館　M＝モーニングショー／L＝レイトショー

ねじ式■キリコの風景■ネプチューンinどつきどつかれ■酔夢夜景■'hood フッド■SPRIGGAN■Heavenz

ねじ式

石井プロダクション作品／ビターズ・エンド配給　98・7・18　C（スーパー16BU・EK）・V　87分　ユーロスペース

［STAFF］監督／脚色＝石井輝男　プロデューサー＝石井輝男／小林桂子　製作協力＝丹芳男／山崎陽一　製作担当＝井上博貴　原作＝つげ義春　撮影＝角井孝博　照明＝野口素胖　編集＝神谷信武　録音＝曽我薫　美術＝松浦孝行　衣裳＝石倉良子／金山修子　音楽＝瀬川憲一　選曲＝薄井洋明　スクリプター＝宮沢厚　スチール＝岡本真苹子　効果＝真道正樹　特殊メイク＝原口智生　助監督＝三木秀則

［CAST］ツベ…浅野忠信　国子…藤谷美紀　木本…金山一彦　家主…丹波哲郎　金太郎飴売り…清川虹子　看護婦…藤森夕子　もっきり屋の少女（コバヤシチョジ）…つぐみ　やなぎ屋の娘…藤田むつみ　ヌードの女…青葉みか　駅員…砂塚秀夫　女医…水木薫　村の飲み客…杉作J太郎　娘の母…三輪禮子　ロイド眼鏡の男…原マスミ　セバード（小次郎）…広崎哲也　寮の住人…神戸顕一　狐面の少年…西川直希　舞踏…アスベスト館

［解説］売れない漫画家の幻想的な放浪生活ととりとめもない妄想をシュールなタッチで描いたドラマ。監督は「無頼平野」の石井輝男。つげ義春の同名短編漫画を、石井監督自らが脚色。撮影を「汝殺すなかれ」の角井孝博が担当している。主演は「ラブ&ポップ」の浅野忠信。

［略筋］売れない貸本漫画家のツベは、どん底生活の果てに遂に内縁の妻の国子と離れて暮らすことになる。国子は世田谷にある会社の寮の賄婦として住み込みで働くようになり、ツベは知り合いの木本のアパートに転がり込む。ところが、ツベは国子が浮気をしているのではないかと心配でならない。そんなある日、彼は国子が別の男の子供をはらんでいることを聞かされ、ショックで自殺を図るのだった。木本のお陰で一命を取りとめたツベは、その後、放浪の生活と妄想に浸る日々を送るようになる。一銭五厘で買われてきたという山里の寂れた居酒屋の娘・チョジとの出会い、ヌード小屋通い、ふしだらな一夜を共にした女が営む海辺にある大衆食堂への再訪、そして海に入ったツベはメメクラゲに左腕を噛まれてしまう。パックリと開いた傷口を押さえ、医者を探すツベ。しかし、探し歩けど見つかるのは目医者ばかり。やがて、彼は金太郎飴を売る母親らしき老婆との出会いを経て、漸くひとりの女医を見つけ手術をしてもらう。だが、外科が専門外の彼女はツベの傷口にねじを取り付けてしまうのだった。以来、左腕のねじを締めるとツベの腕は痺れるようになる。

キリコの風景

日活作品（企画協力＊ニューズ・コーポレイション）／日活配給　98・7・25　C（スーパー16BU・EK）・V・D　105分　シネマスクエアとうきゅう

［STAFF］監督＝明石知幸　製作総指揮＝中村雅哉　プロデューサー＝坂本忠久　製作担当＝金子哲男　脚本＝森田芳光　撮影＝高瀬比呂志　照明＝小野晃　編集＝三條知生　録音＝柿澤潔　美術＝鈴木清倫　衣裳＝波多野薫一　スタイリスト＝宮本まさゑ　音楽＝木根尚登／葛城哲哉／嶋田陽一　スクリプター＝吉田久美子　スチール＝安保隆　音響効果＝渡部健一　助監督＝芳田秀明　主題歌＝木根尚登「UNKNOWN TOWN ～見しらぬ街で～」

［CAST］村石陽介…杉本哲太　霧子…小林聡美　西川…勝村政信　海田…利重剛　木崎…木根尚登　木村…田口トモロヲ　尾形…赤星昇一郎　田村…中村久美　香田…風見章子

［解説］ジョルジュ・デ・キリコを思わせる函館の街を舞台に、不思議な力を持つ男が別れた妻を探して歩く様子を描いた一風変わったラヴ・ストーリー。監督は「免許がない！」の明石知幸。脚本は「（ハル）」の森田芳光。撮影を「失楽園」の高瀬比呂志が担当している。主演は、「Mogura」の杉本哲太と「てなもんや商社」の小林聡美。

［略筋］北海道・函館空港に降り立った村石は、何かに引き寄せられるように西川という男が運転するタクシーに乗り込むと、マンションを見て回りたいからと一日貸し切りを申し出た。当惑しながらも西川は友人の不動産屋・海田を紹介し、3人の奇妙な部屋探しが始まる。ところが、村石は海田が紹介する先々で住人たちの歪んだ心を言い当て、ヒーリングを始めたのである。初めは訝しげに村石を見ていた西川と海田も、次第に彼の不思議な力と人柄に魅せられていく。実は、村石には空の消化器を訪問販売で売ると

Digitized by Google

いう詐欺で逮捕された前歴があり、その不思議な力も刑務所の中で培われたものらしいのだ。そして、改心した今はその力を使って心の病んだ人たちを助けて回っているという。ところで、村石の本当の目的は数年前に別れた妻・霧子を探すことにあった。霧子は、村石が刑務所に入っている間に家を出ていってしまっていたのである。函館に来て3日目、漸く霧子の住むマンションを見つけだした村石は自分が改心したことを話すが、彼女は他の男と暮らしていて村石とやり直す気のないことを宣言する。そもそも、霧子は村石が刑務所に入れられたことに愛想を尽かしたのではなく、その前の生活から既に愛を感じなくなっていたのだ。村石にさよならを告げる霧子。だが、ふたりが会っている現場を、霧子の現在の夫である西川が見ていた。ふたりの関係を知った西川は、村石が西川のタクシーを選んで乗ったのも全て最初から村石が仕組んだのではないかと疑うが、村石はかえってその偶然に運命的なものを感じる始末。結局、霧子への想いを断ち切れないまま、函館滞在の最後の夜、村石は霧子と共にベイエリアを散歩することになる。ところがその途中、突然村石の頭に火事の映像がひらめくのであった。せめて、自分の不思議な力を霧子に見せたいと思った村石は、しかし火災現場を言い当てることは出来たものの、犯人は見当違いの人物だったことに愕然となるのだった。「不思議な力をもってしても既に失った愛を取り戻すことが出来ない」。そのことを悟った村石は、ひとり東京へ帰っていく。

ネプチューンin どつきどつかれ

GAGA PRODUCTIONS作品（制作＊円谷映像／制作協力＊渡辺プロダクション）／ギャガ・コミュニケーションズ 配給（配給協力＊ゼアリズ） 98・8・1 C（スーパー16BU・EK）・V 98分 シネマ・カリテ L

［STAFF］監督＝小松隆志 製作＝山地浩 企画＝円谷粲 プロデューサー＝千葉善紀／米山紳 製作担当＝仲野俊隆 原作＝中場利一「どつきどつかれ岸和田ケンカ青春記」 脚色＝我妻正義／小松隆志 撮影＝喜久村徳章 照明＝居山善雄 編集＝菅野善雄 録音＝辻井一郎／星一郎 美術＝赤塚訓 スタイリスト＝小野今朝義 音楽＝埜邑紀見男 スクリプター＝森直子 スチール＝金澤栄一 助監督＝小貫英樹 主題歌＝ネプチューン「君を探して」

［CAST］リイチ…原田泰造 ガイラ…名倉潤 ミンチ…堀内健 美香…及川麻衣 トヨミ…栗林みえ 朝吉…木下ほうか チビマル…土平友厚 ウミ…北辻志保 住職…逢坂じゅん 保護司…レツゴー正児 美香のオヤジ…レツゴー長作 トーシバ…井手らっきょ 竹本組組長…中場利一 アフロヘア…井上吐詩 パンダ…桑原貞雄 ヤスシ…今村久仁人 カマキリ…こじ郎 スキンヘッド…将尉 ブルシゲ…亀井俊彦 スーツ男…藤崎光正 チン…駒井紀恵 クラブのマネージャー…川井勉史 バンドマン…ヤッホ寺田 ハルミちゃん…白石砂織 サリーちゃん…夏名里佳 アキミちゃん…大嶋うらら

［解説］大阪・岸和田を舞台に、喧嘩と女に明け暮れる悪ガキ3人の青春を描いたドラマ。監督は「JOKER 疫病神」の小松隆志。脚本は、中場利一の「どつきどつかれ 岸和田ケンカ青春記」を基に、「一生、遊んで暮らしたい」の我妻正義と小松監督自身が共同脚色。撮影を「卓球温泉」の喜久村徳章が担当している。主演は人気絶好調のお笑いグループ、ネプチューンの3人。

［略筋］86年、大阪の岸和田に喧嘩に明け暮れる毎日を送るリイチとガイラとミンチの3人組がいた。ある日、女がらみのいざこざでパンダとその親分・スキンヘッドをやっつけたミンチとリイチは、

キネマ旬報社の本

黒澤明をめぐる幻の名著
ついに復刻！

キネマ旬報復刻シリーズ

黒澤明コレクション

●黒澤明の全貌に迫る
「黒沢明〈その作品と顔〉」

●ファン垂涎の
「〈黒沢明・三船敏郎〉二人の日本人」

●黒澤映画関係者60人の証言
「黒澤明ドキュメント」

3冊セット［分売不可］
定価8,000円+税
好評発売中

Digitized by Google

クラブの用心棒の仕事をゲットする。ところが、ミンチが店のハルミちゃんと駆け落ちしたことから、今度は客でヤクザの竜胆会に所属するチビマルと一悶着。一度はやられたガイラとリイチは、再びチビマルのアパートへお礼参りに出かけるのだが、そこにはかつてガイラとつきあっていたウミがいたのである。チビマルをかばうウミに、手が出せなくなるガイラ。その上彼はウミに泣きつかれて、シャブをくすねていたことがバレて組に捕まってしまったチビマルを助けに行くことにもなるのだった。ところが、ひとりで竜胆会に乗り込んだガイラはあっさり捕まってしまう。一方その頃、秘かに想いを寄せている美香との初デートに成功していたリイチは、ガイラの話を聞いて竜胆会へ駆けつけるも、竜胆会の朝吉に50万円でオトシマエをつける約束をさせられる。なんとか30万円を集めるリイチたち。だが、一発にかけた競輪で破産。先輩のトーシバさんを巻き込んで、今度は竜胆会からシャブの横取り作戦に出るが、トーシバさんに裏切られてあえなく失敗してしまう。いよいよ竜胆会に追いつめられることになった3人は、竜胆会と真っ向からの勝負に出ることにする。「ずっと側にいてくれるふつうがいい」。そんな美香の願いを振りきり、ガイラやミンチと共に竜胆会に乗り込んだリイチは、そこで大乱闘を繰り広げるのであった——。

酔夢夜景

シネロケット作品（製作協力＊レジェンド・ピクチャーズ）／ゼアリズ配給

98・8・8　C（スーパー16BU・F）・V　81分　シネマ・カリテ　L

［STAFF］監督＝片岡修二　企画＝斎藤晃／利倉亮　プロデューサー＝菊田昌史／溝上潔／江尻健司　プロデューサー補／小野みねり　制作担当＝山田大作　脚本＝今岡信治／周智安　撮影＝下元哲　編集＝金子尚樹　録音＝沼田和夫　美術＝鈴村高正　選曲＝金子文郎　音響効果＝柴崎憲治　助監督＝杉山太郎　主題歌＝ハウンドドッグ「いくつもの夜を越えて」

［CAST］星野茂…大久保貴光　王美鈴…李丹　徐瑞芳…オン・スイピン　劉秀明…喜多嶋舞　清美…高樹まりあ　勝島…下元史朗　中井…螢雪次朗　山田…綾田俊樹　佐伯…遠藤憲一　野沢…さとうこうじ　戸田…木滝和幸　戸倉…上野淳　江藤明子…橘雪子　裕子…織田こずえ　恭子…榊彩乃　看護婦…淺川望　露店商…大沢樹生　警官…高山真也　美鈴の客…辻本晃良／相原涼二　戸倉の手下…白土光一／マフィー　犯人…井鍋信治

［解説］中国人女性と偽装結婚したアル中の男が、彼女の死をきっかけに人生をやり直そうとする姿を描いた純愛ドラマ。監督はの片岡修二。脚本は、「若妻　不倫の香り」（いまおかしんぢ名義）の今岡信治と「いんらん旅館　濡れ濡れ若女将」の周知安の共同。撮影を「安藤組外伝　群狼の系譜」の下元哲が担当している。主演は、「Give me a Shake　レディースMAX」の大久保貴光と「極道の妻たち　決着」の李丹。

［略筋］元F3レーサーで、今はホテル嬢を車で送る仕事をしているアル中の茂の元に、警察から妻が強盗に殺されたという知らせが届いた。「妻？」。戸惑いながら彼は、一年前に中国人女性・美鈴と偽装結婚していたことを想い出す。当時、酒とギャンブルによる借金で首が回らなくなっていた茂は、ホステスとして出稼ぎに来た美鈴と偽装結婚した。それで茂は人生をやり直す為の金を手に入れ、美鈴はビザを手に入れ、そしてふたりはそれぞれに新しい人生を歩み出す筈だった。だが一年後、茂は相変わらず酒に溺れる日々を送り、美鈴は何者かに殺されてしまった…。美鈴の住んでいたアパートの管理人から荷物の処分をしてくれと言われ、訪れた美鈴の部屋で彼女の親友・秀明と会った茂は、美鈴が茂のことを心の支えにしていたという話を聞かされる。その一方で、美鈴が働いていたクラブのママ・瑞芳は、美鈴が身勝手で金に貪欲だったと彼に話した。偽装とは言え結婚した女のことを何も知らない自分に、茂はやるせない気分になっていく。そんな彼に、ヤクザがドライバーとしての腕を見込んで接近してきた。落ちるならどこまでも落ちてやる。自暴自棄になった茂は、その仕事を受けることにした。しかしある日、警察から犯人が捕まったとの知らせが届く。そして、刑事は今は茂の部屋にある美鈴の遺影の前に、犯人から押収した指輪を置いていった。それは、入管審査を前に茂が美鈴の為に買ってやったイミテーションの指輪に違いなかった。美鈴は、それを強盗から守ろうと争って殺されたらしい。そのことを知った茂は、ヤクザの仕事を断り引っ越し屋に就職。美鈴の両親に仕送りしながら、今度こそ新しい人生を踏み出そうとするのであった。

hood フッド

エヌ・ケー・ケー作品（製作協力＊G・カンパニー）／日活配給　98・8・22　C（スーパー16BU・EK）・EV　88分　銀座シネパトス

［STAFF］監督／脚本＝砂本量　製作総指揮／企画／原案＝ヒロ・中村　プロデューサー＝内槻朗　撮影監督＝津田豊滋　照明＝川井稔　編集＝平澤政吾／ヒロ・中村　録音＝八木隆幸　整音＝山田均　スチール＝居山直也　スーパーバイザー＝谷川寛人　ダンスアドバイザー＝安藤旺嗣／BOBBY　監督補＝藤田保行

［CAST］稲森ミチオ…柏原収史　古谷チヒロ…松田千晴　北川義行…菊池健一郎　内田龍平…内田大介　野崎ナナエ…富樫菜々子　工藤淳…岡田浩志　日比野ユージ…井上健太郎　尾崎…塩屋俊　ミチオの母…中尾ミエ　ミチオの父…六平直政

［解説］ダンスにかけた若者たちの夢と挫折を描いたニュー・ジェネレーション・ムービー。監督・脚本は「恋と花火と観覧車」の砂本量。撮影を津田豊滋が担当している。主演は、「HAPPY PEOPLE」の柏原収史と「不機嫌な果実」の松田千晴。

［略筋］盗みやオヤジ狩り、喧嘩やドラッグに明け暮れるストリート・キッズのミチオと義行。ある日、ミチオはクラブで踊っている〝もんじゃ焼き〟というふたり組の女の子のひとり・チヒロに興味

Digitized by Google

を持つようになる。だが、チヒロは龍平というチーマーのリーダーと交友があって、一筋縄では落ちそうにない。そこでミチオはチヒロに近づく為、ダンスを習い始めるのだった。こっそりダンス・スクールに通い、家ではビデオでレッスン。そんな努力が実って漸くチヒロにダンスの腕を認められたミチオは、チヒロたちとあるダンス・コンテストに出場することになる。ところが当日、ダンスにミチオをとられたと思い込みすっかりヤク中になっていた義行が乱入し、彼らのステージを滅茶苦茶にしてしまう。せっかくのチャンスを潰されたチヒロは激怒。ミチオは彼女の機嫌をとろうと、チヒロの夢であるクラブ・ヘヴンの舞台に立てるように取り計らう。ところが、ひょんなことから彼らのダンスがプロデューサー・尾崎の目にとまり、プロとして契約することになるのだった。ファッション・ショウのバックダンサーとして舞台に立つなど、順調なスタートを切るミチオたち。だがその頃、またしても義行がトラブルを起こしていた。龍平を刺し、チヒロにも怪我を負わせた義行は、自らもかつて襲ったオヤジに復讐され入院する羽目になる。しかも、運悪く隣のベッドに龍平が寝ていたことから、逆に龍平に刺されて命を落としてしまうのだった。そんな事件を基にして歌を作った尾崎が、ミチオたちにメジャー・デビューを勧めてきた。しかし、ミチオは友達の死を商売にしたくないと拒否。結局、その曲は別のグループが歌い大ヒット。ミチオたちのグループは、解散へと追い込まれていくのだった。それから数日後、チヒロに義行に負わされた目の怪我の手術の相談を受けたミチオは、母親の当てた懸賞金を彼女に渡していた。ところが、目の怪我の話は嘘で、したたかなチヒロは同じようにして元メンバーから金を集めると、ダンスの本場ニューヨークへ旅立って行くのであった。

SPRIGGAN

「スプリガン製作委員会」（小学館＝バンダイビジュアル＝TBS＝東宝＝STUDIO4℃）作品（企画協力＊週刊サンデー編集部／制作協力＊IMAGICA／アニメーション制作＊STUDIO4℃）／東宝配給　98・9・5　C（EK）・V・DD／DTS　90分　日劇東宝

［STAFF］監督／絵コンテ＝川崎博嗣　総監修／構成／ノアの方舟デザイン＝大友克洋　演出＝須藤典彦　エグゼクティブ・プロデューサー＝山下暉人／渡辺繁／滝本裕雄／藤原正道　プロデューサー＝植田文郎／池口和彦／濱名一哉／斎春雄／田中栄子　制作担当＝高橋靖　原作＝たかしげ宙／皆川亮二「スプリガン」　脚色＝川崎博嗣／伊藤康隆　撮影監督＝白井久男　撮影＝スタジオコスモス　編集＝瀬山武司　音響監督＝鶴岡陽太　美術監督＝小関睦夫　設定＝末武康光　音楽＝配島邦明　音楽プロデューサー＝柴田新　キャラクターデザイン＝江口寿志　作画監督＝江口寿志／熊谷哲矢／松田勝己／清水保行／遠藤正明　銃器設定＝岡村天斎　メカニック設定＝山根公利　メカニック作画監督＝山下将仁　色彩設計＝秋山久美　CGI＝斉藤亜規子　特殊効果＝マリックス　演出助手＝有冨興二　主題歌＝Sāju「Jing Jing」

［CAST（声）］御神苗優…森久保祥太郎　マクドガル大佐…相ヶ瀬龍史　メイゼル…城山堅　ジャン…子安武人　リトルボーイ…鈴木勝美　ファットマン…高野拳滋　マーガレット…玉川紗己子　ヤマモト…有本欽隆　スチュワーデス…木村郁美　副官…長島雄一　コスモス時代の優…牟田将士　発掘研究隊員…相澤正輝　トルコエージェント…宝亀克寿／後藤史彦　田中…巻島直樹　将軍…石波義人　下士官…坂口賢一　幹部…石井隆夫／松本大／青山穣　級友…山崎優／う

キネマ旬報社の本

ニコラス・レイ
ある反逆者の肖像
ベルナール・エイゼンシッツ著
吉村和明訳

ジェームス・ディーンの神話的イメージを創出し、ジム・ジャームッシュ、ヴィム・ヴェンダース、ジャン＝リュック・ゴダールを熱狂させた孤高の映画作家ニコラス・レイ。

30年代の左翼演劇から出発し、赤狩の時代を経て、60年代のカウンターカルチャーを疾走し続け、アメリカ現代史そのものを苛烈に生きた偉大な反逆者の実像に迫る、画期的な傑作評伝！

好評発売中
A5判■800頁■本体6000円+税
お求めはお近くの書店か
小社営業部まで
TEL 03(3815)7131

Digitized by Google

すいたかやす　アナウンス…吉田孝　警備兵…中田雅之／押田浩幸　ナレーション…矢島正明

［解説］トルコの山奥で発見されたノアの方舟を巡って、アーカムと呼ばれる組織の工作員・スプリガンたちとペンタゴンの壮絶な戦いを活写したジャパニメーション。監督は、本作で監督デビューを果たした川崎博嗣。脚本は、たかしげ宙と皆川亮二による同名原作を基に、川崎自身が執筆。撮影を「劇場版ポケットモンスター　ミュウツーの逆襲」の白井久男が担当している。また、総監修に「MEMORIES」の大友克洋があたっている。声の出演に森久保祥太郎。

［略筋］トルコのアララト山でノアの方舟が発見された。その半年後、世界に散見する超古代文明を封印する事を目的に活動する組織アーカムの工作員〝スプリガン〟のナンバー1・御神苗優は、何者かから謎の脅迫状と共にプラスティック爆弾を受け取る。辛くも難を逃れた彼は、アーカムの日本支部でノアの方舟発掘現場で惨殺されたアーカムの隊員の写真に、「御神苗優、次はお前の番だ」というメッセージを発見。日本支部の制止を振り切って、トルコへ飛ぶことを決意するのだった。トルコ到着早々、敵の手厚い歓迎を受けた優は、大立ち回りを展開。執拗な襲撃を交わして、漸くアララト山奥地のアーカム調査基地に到着する。そこで優は、懇意にしているメイゼル博士とマーガレット助手に再会するが、またしても敵の襲撃に見舞われてしまうのであった。その敵とは、アメリカ国防総省、いわゆるペンタゴンだった。ペンタゴンは、ノアの方舟の秘密を手に入れるべく、殺人マシーンのファットマンやリトルボーイらが率いるサイボーグ部隊を次々に送り込んできた。優の命を狙っていたのも、彼らに違いない。何故なら、優はかつてサイボーグ部隊から脱走した過去があったのだ。優は、メイゼル博士が開発した精神感応金属オリハルコンと人工筋肉を組み合わせたアーマード・マッスルスーツを装着して、ファットマンやリトルボーイたちと激戦を繰り広げ、もうひとりのスプリガン、ジャン・ジャックモンドと共に基地を守ることに成功する。ところが、更にペンタゴンから送られてきたマクドガル大佐の超能力の前には歯が立たず、メイゼル博士とマーガレット助手を誘拐されてしまう。ふたりを拉致したマクドガルは、ノアの方舟の内部に侵入すると、そこでペンタゴンに反旗を翻し、実は生命創成装置であったノアの方舟を使って、新しい世界、新しい生物を誕生させようと企むのであった。そして、それに邪魔になる腐りきった人類を壊滅すべく天変地異を発生させる。しかし、そこへ3人の後を追って優が現れた。優は、神になろうとしたマクドガルの悪魔の計画を阻止しようと、果敢にも戦いを挑んでいく。そして壮絶な戦いの末マクドガルを倒し、ノアの暴走を食い止めることに成功するのであった。

Heavenz

映画「Heavenz」製作委員会作品（製作協力＊オブジェプロダクション）／べんてんムービー配給　98・9・19　C（16ミリBU・EK）・S　86分　銀座シネパトス

［STAFF］監督／脚本＝井出良英　製作／企画＝倉谷義雄　製作担当＝高橋正弥／青池雄太　脚本協力＝アオヤマ・ノイズ　撮影＝今井裕二　照明＝内原真也　編集＝村本勝　録音＝鶴巻仁　美術＝斉藤敏文　スタイリスト＝早川泰子　音楽＝濱池乾太郎　音楽プロデュース＝黒山仁孝　クラブ音楽＝丹沢稔／三上達治　スクリプター＝市川桂　スチール＝佐藤俊一　音響効果＝三谷直樹　助監督＝小野寺昭洋／小沼雄一　主題歌＝SATOSHI TOMIE「COME TO ME」

［CAST］テツ…山下徹大　ミサキ…関谷理香　リョウスケ…東儀秀樹　ミナ…つぐみ　ナツメ…鬼丸　マスター…白竜　八木…大杉漣　ミサキの同僚…峰野勝成　英次…津田寛治　達彦…森下能幸　私服の刑事たち…土平友厚／森羅万象　FM局のディレクター…堀口文宏／川本成　渋谷のチーマー…西田征史／佐野忠宏／野村浩二／磯山良司／藤原英志／鈴木裕美　さえないDJ…豊嶋稔　渋谷のFMのDJ…浦田麻衣／中村由季子　ゲストDJ…KO KIMURA／YO-C／MINORU NISHIKAWA

［解説］現在の自分に満足できず苦悩する若きDJが、恋やスゴ腕のDJとの出会いを通して成長していく姿を描いた青春ストーリー。監督・脚本は、OV「鍵師KACHIRI」の井出良英で、これが本編デビュー作となる。撮影を「緑の街」の今井裕二が担当している。主演は、「ACRI」の山下徹大と「スキヤキ」の関谷理香。

［略筋］都内のクラブで人気DJとして活躍するテツは、しかしその一方で人生に目的を持てずにいる自分に焦燥感を募らせていた。ある日、彼は渋谷にあるコミュニティFM局に勤めるディレクターのミサキと出会う。テツが出演する苦の番組に遅刻しそうになったことに対し、プロ意識がないとたしなめるミサキに心惹かれるテツ。その後、何かとミサキの興味を惹こうとするが、彼女はなかなか相手にしてくれない。ところで、テツにはもうひとり憧れの人物がいた。それは、テツを慕うミナと一緒に入ったクラブでDJをしていたリョウスケだ。彼の音に衝撃を受けたテツは彼に近づこうとするが、実はミサキはリョウスケの恋人だったのである。複雑な心境のテツは、無軌道に荒れていく。だが、そんなテツを見てリョウスケは、彼が「音楽に愛される人間」であることを見抜き、一方で音楽に愛されていない自分を嘆いて、ふたりの前から姿を消してしまうのであった。リョウスケの遺した言葉によって、自分が音楽の中に生きていける人間であることを悟ったテツは、ミサキの企画するDJイベント“Heavenz”に参加する。そして、DJイベントの成功をステップに、テツはDJの本場であるニューヨークへ渡ることを決心。人生の次なる到達点へ向けてスタートを切るのであった。

Digitized by Google

外国映画紹介

製作国＊製作会社　配給会社　製作年　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／CS＝シネスコ　D＝ドルビー・ステレオ　U＝ウルトラ・ステレオ　DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル　DTS＝デジタル・シアター・システム　SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド　SR＝スペクタクル・レコーディング　上映時間　EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー（製作総指揮）

アイス・ストーム■アベンジャーズ■エベレスト■キャラクター 孤独な人の肖像■Jam■スピーシーズ2
プライベート・ライアン■マスク・オブ・ゾロ■ミル・マスカラス 愛と宿命のルチャ■ムーラン■リバース

アイス・ストーム

The Ice Storm〔氷の嵐〕

米＊グッド・マシーン・プロ（フォックス・サーチライト・ピクチャーズ提供）／ギャガ・コミュニケーションズ配給　97＝98・9・26

C・V・DSD　113分　字幕＝松浦美奈

〔STAFF〕監督＝Ang Lee　製作＝Ted Hope／James Schamus／Ang Lee　脚本＝James Schamus　原作＝Rick Moody　撮影＝Frederick Elmes　音楽＝Mychael Danna　音楽監修＝Alex Steyermark　美術＝Mark Friedberg　編集＝Tim Squyres　衣裳＝Carol Oditz

〔CAST〕Ben Hood…Kevin Kline／Janey Carver…Sigourney Weaver／Elena Hood…Joan Allen／Jim Carver…Jamey Sheridan／Wendy Hood…Christina Ricci／Mikey Carver…Elijah Wood／Sandy Carver…Adam Hann-Byrd／Paul Hood…Tobey Maguire／George Clair…Henry Czerny／Libbets Casey…Katie Holmes／Francis Davenport…David Krumholtz

〔解説〕 70年代半ば、ウォーターゲート事件当時のニューヨーク郊外を舞台に、ある中流一家の不安な日々を描いた一編。監督は「恋人たちの食卓」「いつか晴れた日に」のアン・リー。94年に出版された作家リック・ムーディの同名小説（邦訳・新潮文庫）の映画化で、脚本はアン・リーのデビュー作「推手」以来の製作者としてもコンビを組むジェームズ・シェイマス。製作のアン・リー、シェイマスと彼のパートナーのテッド・ホープ、編集のティム・スクワイアズはアン・リー作品の常連。撮影は「ナイト・オン・ザ・プラネット」のフレデリック・エルムス。音楽は「スウィート・ヒアアフター」はじめアトム・エゴヤン作品で知られるマイケル・ダナ。音楽監修は「ボクサー」のアレックス・ステイヤーマークで、当時を反映してフランク・ザッパ、ニルソン、ボビー・ブルーム、トラフィックなどの曲が劇中で使用され、エンディングの主題歌をデイヴィッド・ボウイが歌う（新録）。美術は「カーマ・ストーラ　愛の教科書」のマーク・フリードバーグ。衣裳は「ティン・カップ」のキャロル・オディッツ。出演は「危険な動物たち」のケヴィン・クライン、「エイリアン4」のシガーニー・ウィーヴァー、「フェイス／オフ」のジョアン・アレン、「キャスパー」のクリスティーナ・リッチ、「エンパイア　レコード」の新星トビー・マグアイア、「ディープ・インパクト」のイライジャ・ウッド、「ジュマンジ」のアダム・ハン＝バード、「刑事エデン　追跡者」のジェイミー・シェリダン、「ミッション：インポッシブル」のヘンリー・ツァーニーほか。97年カンヌ国際映画祭脚本賞受賞。

〔略筋〕 1973年11月、全米がウォーターゲート事件に揺れていた頃。ニューヨークに近い、中流家庭が多く居住するコネティカット州。ベン（ケヴィン・クライン）とエレナ（ジョアン・アレン）のフッド家とジム（ジェイミー・シェリダン）とジェイニー（シガーニー・ウィーヴァー）のカーヴァー家は隣同士。豊かな生活こそ送っていたが、冷めた夫婦関係からベンとジェイニーは不倫関係におち、疑心暗鬼のエレナは万引きをしたりと精神的に不安な日々が続いている。寄宿して私立の学校に通うフッド家の長男ポール（トビー・マグアイア）は、ルームメイトのフランシスとガールフレンドのリベッツのことで張り合ったりと悪いことも覚えて、家に帰るのは時々。妹のウェンディ（クリスティーナ・リッチ）は思春期を迎え、わざと反社会的な言動を見せたり、カーヴァー家のマイキー（イライジャ・ウッド）、サンディ（アダム・ハン＝バード）の兄弟を誘惑したりしていた。感謝祭が過ぎ、ベンはジェイニーに愛想をつかされた。そのうえ、カーヴァー家でマイキーと抱き合っていたウェンディを見つけて連れ帰ってきたことで、エレナに浮気の確証をつかまれてしまったのだ。凍てつく嵐の夜。ニューヨークへリベッツとデートに出かけたポールを見送った後、最悪の状態のまま知り合いのパーティに出かけたフッド夫妻は、カーヴァー夫妻と顔を合わせたうえ、それが夫婦交換のお楽しみもあるキー・パーティ（全員がボウルに車のキーを入れ、帰る時に女性がキーをひいて相手の男性を選ぶゲーム）だと知る。ジェイニーが

Digitized by Google

若い男と去るのを見てベンはショックで倒れ、エレナは夫を残し、目の前で妻の浮気を知らされて動揺するジムと帰路につく。一方、家に残されたウェンディはカーヴァー家に出向き、サンディと一緒に裸になってベッドで寝る。ところが、雪の結晶を見るため夜の散歩に出かけていたマイキーは、切れた送電線によって感電死してしまった。翌朝。ベンは自宅への帰り道、マイキーの死体を見つけてカーヴァー家へ急ぐ。ジムは冷たくなった息子にすがってただ泣くばかりだ。さて、デートの方は不首尾のまま、夜行で帰ってきたポールを家族が駅前で待っていた。車中にそろう家族四人。愛する息子の姿をかえりみて、ベンはすすり泣くのだった。

アベンジャーズ

Year of the Horse〔馬年〕

米＊ジェリー・ワインドローブ・プロ（ワーナー・ブラザース映画提供）／ワーナー・ブラザース映画配給　98＝98・10・3　C・CS・DSD／DTS／SDDS　89分　字幕＝岡田壮平

〔STAFF〕監督＝Jeremiah Chechik　製作＝Jerry Weintraub　co.＝Susan Ekins　脚本＝Don MacPherson　撮影＝Roger Pratt　音楽＝Joel McNeely　オリジナル・テーマ作曲＝Laurie Johnson　美術＝Stuart Craig　編集＝Mick Audsley　衣装＝Anthony Powell　視覚効果監修＝Nick Davis

〔CAST〕John Steed…Ralph Fiennes／Emma Peel…Uma Thurman／Sir August de Wynter…Sean Connery／Invisible Jones…Patrick Macnee (voice)／Mother…Jim Broadbent／Father…Fiona Shaw／Bailey…Eddie Izzard／Alice…Eileen Atkins／Trubshaw…John Wood／Tamara…Keeley Hawes／Donavan…Shaun Ryder／Dr. Darling…Nicholas Woodeson

〔解説〕気象を操って世界征服を企む悪党相手に戦いを挑む諜報員と女性科学者の活躍を描くスパイ・アクション。60年代に英国のABCテレビ（現テームズ・テレビ）で制作、ITV局で放映された人気ドラマ・シリーズ『The Avengers』（61～69年、日本では『おしゃれ㊙探偵』『スパイ㊙作戦』の題名で一部を放映）の映画化。オリジナル版でパトリック・マクニー（諜報員ジョン・スティード役、本作では声だけの特別出演）とダイアナ・リグ（科学者エマ・ピール役、正確には同シリーズの二代目のヒロイン）が演じた役には、「オスカーとルシンダ」のレイフ・ファインズと「ガタカ」のユマ・サーマンが起用された。監督は「悪魔のような女」のジェレマイア・チェチック。脚本は「ビギナーズ」などのドン・マクファーソン。製作は「スペシャリスト」「ヴェガス・バケーション」のジェリー・ワインドローブ。製作総指揮は「ヴェガス・バケーション」のスーザン・イーキンズ。撮影は「未来世紀ブラジル」「ラブ・アンド・ウォー」のロジャー・プラット。音楽は「エアフォース・ワン」のジョエル・マクニーリー。オリジナル・テーマ作曲はローリー・ジョンソン。美術は「ラブ・アンド・ウォー」のスチュアート・クレイグ。編集は「12モンキーズ」のミック・オーズリー。衣裳は「101」のアンソニー・パウエル。視覚効果監修は「チェーン・リアクション」のニック・デイヴィス。共演は「ザ・ロック」のショーン・コネリー、「リチャード三世」のジム・ブロードベント、「アンナ・カレーニナ」のフィオナ・ショー、英国の人気コメディアンのエディ・イザード、「ウルフ」のアイリーン・アトキンズ、「リチャード三世」のジョン・ウッドほか。

〔略筋〕英国。極秘研究中の"反物質"を利用して外界からの敵の攻撃に備える"気象シールド"が何者かによって破壊された。政府の極秘情報機関"ミニストリー・オブ・シークレット・サーヴィス"の諜報員ジョン・スティード（レイフ・ファインズ）は、組織のトップのマザー（ジム・ブロードベンド）の命令で、"気象シールド"の研究者である才色兼備にして武術の達人、気象学者エマ・ピール（ユマ・サーマン）とコンビを組んで調査を開始。犯人はなぜかエマと瓜二つと、事件の背後には巨大な陰謀の匂いが。二人は機関を追われた天才科学者サー・オーガスト・デ・ウィンター（ショーン・コネリー）をマーク。彼は機関のナンバー2、ファーザー（フォオナ・ショー）と組んで、世界中の気象を自在に操り、世界征服をもくろんでいた。はたしてサー・オーガストは、全世界を氷河期に陥れると脅迫。かくして二人はサー・オーガストの基地へ乗り込み、みごと敵の野望を打ち砕くのだった。

エベレスト

Everest〔エベレスト〕

米＊アークトゥーラス＝マクギリヴレイ・フリーマン・フィルムズ作品（マクギリヴレイ・フリーマン・フィルムズ配給）／フィルミック・ヴィンヤード配給　98＝98・10・3　C・D　46分

〔STAFF〕監督＝David Breashears／Greg MacGillivray／Stephen Judson　製作＝Greg MacGillivray／Alec Lorimore／Stephen Judson　撮影＝脚本＝Tim Cahill／Stephen Judson　音楽＝Steve Wood／Daniel David Breashears　編集＝Stephen Judson May

〔CAST〕Ed Viesturs／Araceli Segarra／Jamling Tenzing Norgay／統率美代

〔解説〕1996年の5月に、エベレスト登頂を目指す4人のグループと自然の厳しさを追ったアイマックスのドキュメンタリー作品。同時期に相前後して登頂を目指していた隊が遭難するなどの過酷な条件の中、4人グループとアイマックス撮影隊は決死の登頂を敢行する。監督は「セブン・イヤーズ・イン・チベッ

Digitized by Google

ト」でメガホンを取り、自身も4度の登頂経験を持つデイヴィッド・ブリーシャーズと、アイマックスで数々の作品を手がけてきたグレッグ・マクギリヴレイ、「リビング・シー」のスティーヴン・ジャドソンがあたった。製作は監督のマクギリヴレイとジャドソン、アレック・ロリモア。脚本はティム・カヒルとジャドソンの共同執筆。撮影はブリーシャーズが担当した。音楽は『エイリアン・ファイター』（未公開）のダニエル・メイとスティーヴ・ウッド、挿入歌にジョージ・ハリスンが参加。編集はステファンが担当した。出演はアメリカ人のベテランクライマーのエド・ヴィエスチャーズ、スペイン女性として初めて登頂を目指すアラセリ・セガーラ、ヒラリーとともに世界で初めてエベレスト登頂に成功したテンジンの息子であるジャムリン・テンジン・ノルゲイ、日本人の続素美代ほか。

キャラクター　孤独な人の肖像

Karakter〔人物〕

オランダ＊ファースト・フロア・フィーチャーズ作品／アルシネテラン配給　97＝98・9・12　C・V・D　125分　字幕＝謝敷尚子

〔STAFF〕監督＝Mike van Diem　製作＝Laurens Geels　原作＝Ferdinand Bordewijk　脚本＝Mike van Diem／Laurens Geels／Ruud van Megen　撮影＝Rogier Stoffers　音楽＝Paleis van Boem　美術＝Rikke Jelier／Schief　編集＝Jessica de Koning　衣装＝Jany Temime　録音＝Peter Warmer

〔CAST〕Katadreuffe…Fedja Van Huet／Dreverhaven…Jan Decleir／Joba Katadreuffe…Betty Schuurman／De Gankelaar…Victor Low／Lorna te George…Tamar van den Dop／Jan Maan…Hans Kesting／Rentenstein…Lou Landrin／Stroomkoning…Bernard Droog／De Bree…Frans Vorstman／Schuwagt…Fred Goessens

〔解説〕悪評高い執政官の父と息子との長年に渡る確執と愛憎を描く人間ドラマ。97年度アカデミー外国語映画賞受賞作品。監督は本作が長編デビューのマイケ・ファン・ディム。原作はF・ボルデバイクの小説「キャラクター」と「ドレイブルハーブンとカタロドーフ」で、オランダ今世紀文学の古典。脚本はディム監督、製作のローレンス・ヘールス、ルット・ファン・メーヘンの共同。撮影はこれがデビューのロヒール・ストッフェルス。音楽はブン宮殿楽団が担当。出演は本作でジュネーヴ映画祭で最優秀男優賞を受賞したフェジャ・ファン・フェット、「アントニア」のヤン・デクレールほか。撮影は1920年代の街並みを再現するため、オランダ、ベルギー、ドイツ。ポーランドの4カ国9都市でロケ撮影された。

〔略筋〕港町ロッテルダム。ヤコブ＝ヴィレム・カタロドーフ青年（フェジャ・ファン・フェット）が警察で取り調べを受ける。アレント・バレント・ドレイブルハーブン（ヤン・デクレール）殺害の容疑者としてだ。ヤコブは彼との関係を振り返る――。ドレイブルハーブンは貧民の資産を容赦なく差し押さえる執政官。彼は家政婦のヨバ（ベティ・スヒュールマン）と一度限りの関係を持ち、彼女は妊娠したことを告げて去る。結婚を求められるが、彼女は拒否。生まれたのがヤコブだ。成長したヤコブは母から独立を決意し、国民信用銀行から借り入れて煙草屋を買い取るが、稼くずを掴まされて借金だけが残る。破産管財人のデ・ハンクラー弁護士（ヴィクトー・ロウ）は、ヤコブが無収入であることを理由に裁判所に執行停止を提案し、同時にヤコブを書記に採用してくれる。定収入のできたヤコブに再度の破産請求があった。国民信用銀行はドレイブルハーブンのものだったのだ。結局給料天引きで負債を返却することになり、全額返済の直後にヤコブは勉学のため、ドレイブルハーブンより再度多額の借金をする。ただし、いつでも全額の返済を要求できるという条件だった。一方、ヤコブは事務所の秘書ローナ・テ・ジョージ（タマル・ファン・デン・ドップ）に秘かに思いを寄せていた。だが、海岸で見知らぬ男といるところで会ったヤコブは、彼女を避けるようになる。前任者の使い込みで事務局長に任命されたヤコブだったが、直後にドレイブルハーブンから借金の全額返済を要求される。が、レンスタインの弁護により勝訴。その後ヤコブは国家試験に合格、母の死を経て、弁護士に就任した。彼はドレイブルハーブンを訪ね、数々の妨害に対する憎しみをぶつけて格闘になる。身体を痛めつけただけでヤコブは去った。実はドレイブルハーブンの死は自殺だったことが分かる。しかも、彼はヤコブのために遺産の相続について遺書を残していた。

Jam

Jam〔ジャム〕

台湾＊リトル・モア作品（東京テアトル＝フィルムメイカーズ提供協力）／リトル・モア配給　98＝98・7・4　C・V・DSR　102分　字幕＝粉雪まみれ

〔STAFF〕監督＝陳以文（チェン・イーウェン）　製作＝孫家邦（スン・ジャーバン）　EP＝余為彦（ユー・ウェイエン）　プロダクション・マネージャー＝陳希聖（チェン・シーシェン）　脚本＝陳以文（チェン・イーウェン）　撮影＝李以須（リー・イースー）　音楽＝嚴志宏（エド・イェン）　録音＝杜篤之（ドゥ・ドゥジー）　美術＝余為彦（ユー・ウェイエン）　編集＝陳博文（チェン・ボーウェン）

〔CAST〕カイ…蔡信弘（ツァイ・シンホン）／ジャジャ…六月（ジューン・ツァイ）／シュエ…徐淑嬢（ヴィナー・シュー）／チュン…陳立華（チェン・リーホア）／リュウ…高明駿（ガオ・ミンジュン）／ウェイ…江惠惠（ジャン・ホイホイ）／セン…李善郡（リー・シャンチ

Digitized by Google

ン）／シュウ…魏龍豪（ウェイ・ロンハウ）／リン…（タン・ツォンシェン）

〔解説〕東京テアトルと出版社リトル・モアがタッグを組んで提供する"リトルモアMOVIES"の第2弾。台北を舞台に5組のカップルの人生と恋模様を描く作品。監督・脚本はチェン・イーウェン。エドワード・ヤン作品のスタッフとして働き、ドキュメンタリー短編『暴力の情景』を経て、今回が長編劇映画初監督となる。製作は「ファザーファッカー」のスン・ジャーバン。製作総指揮・美術は「カップルズ」のリー・イースー。音楽はエド・イェン。録音はドゥ・ドゥジー。編集はチェン・ボーウェン。出演は新人のツァイ・シンホン、ジューン・ツァイほか。

〔略筋〕少年カイ（ツァイ・シンホン）と少女ジャジャ（ジューン・ツァイ）は、駐車場から白い乗用車を盗み出す。しかしそれは盗難車で、しかも殺人事件に使われたものであった。あわてて元の場所に車を戻す二人だが、その日の夕刊で、車の発見者には懸賞金が出ることを知る。二人は恐る恐る指定の番号に電話をかけた。その乗用車の持ち主は、映画製作会社の副社長の美女シュエ（ヴィナ・シュー）だった。シュエから懸賞金を受け取ったカイとジャジャは、彼女を食事に誘う。急速に接近していくカイとシュエ。それを見て嫉妬したジャジャは、自分がカイを愛していることに気づきはじめた。さて、白い乗用車を盗んだ犯人はやくざのホア（ガオ・ミンジュン）とセン（リー・シャンチン）で、彼らはマラソン中の男を殺した後、車を捨てて逃げ去ったのであった。ある日、カイは借金を抱えた友人の代わりに、ホアの事務所にショバ代の取り立てに行く。ホアはカイの度胸に惚れ込み、自分の組へと招き入れる。ヤクザの道を歩みかけたカイ。しかしホアが敵対する組のヤクザに殺されたのを機に、カイはその世界から逃げ出した。その頃、シュエは恋人の新人監督チェン（チェン・リーホア）と映画製作に入っていた。また、カイを待ちくたびれたジャジャはアメリカに旅立っていた。カイはチェンの映画に出演することになる。その撮影中、突然ジャジャからのメッセージが届く。ジャジャの元へと駆け出していくカイ。二人はお互いの気持ちを確かめ合い、恋人同士として向き合うのだった。

スピーシーズ2

Species II〔種（ここでは異星体の意）〕

米＊FGMエンターテインメント作品（MGM提供）／UIP配給　98＝98・9・23　C・V・D（SR）　93分　字幕＝菊地浩司

〔STAFF〕監督＝Peter Medak　製作＝Frank Mancuso,Jr.／ep＝Dennis Feldman　キャラクター創作＝Dennis Feldman　脚本＝Chris Brancato／撮影＝Matthew F. Leonetti／音楽＝Ed Shearmur／美術＝Miljen Kreka Kljakovic／編集＝Richard Nord／衣装＝Richard Bruno／オリジナル・スピーシーズ・デザイン＝H.R. Giger／クリーチャー＆特殊メイク＝Steve Johnson／SFX＝Joseph Grossberg

〔CAST〕Press Lenox…Michael Madsen／Eve…Natasha Henstridge／Dr. Laura Baker…Marg Helgenberger／Dennis Gamble…Mykelti Williamson／Colonel Carter Burgess, Jr.…George Dzundza／Senator Ross…James Cromwell／Patrick Ross…Justin Lazard／Anne Sampas…Myriam Cyr／Melissa…Sarah Wynter／Dr.Orinsky…Baxter Harris

〔解説〕凄まじい生殖能力を持つエイリアンと地球人との死闘を描くSFXアクション「スピーシーズ　種の起源」の続編。今回は凶悪な男性エイリアンと前作のスピーシーズから生まれたクローンの女性エイリアンとの戦いを描く。監督は「蜘蛛女」のピーター・メダック。脚本はTV「Xファイル」シリーズのクリス・ブランケイト。製作は前作に引き続き「背徳の囁き」のフランク・マンキューソ・Jr.。製作総指揮は前作を製作し、キャラクター創案者でもあるデニス・フェルドマン。撮影は「48時間PART2　帰ってきたふたり」のマシュー・F・レオネッティ。音楽は「妻の友人、夫の愛人」のエドワード・シアマー。クリーチャーと特殊メイクは「メン・イン・ブラック」のスティーヴ・ジョンソンが担当。そしてクリーチャーとスピーシーズのデザインは「エイリアン」や前作「スピーシーズ」のH・R・ギーガーの考案したものが再び使用された。出演は「フェイク」のマイケル・マドセン、前作のエイリアン役で映画デビューした「マキシマム・リスク」のナターシャ・ヘンドリッジ、「沈黙の断崖」のマーグ・ヘルゲンバーガー。以上3人は前作からの再登板。ほかに「ディープ・インパクト」のジェームズ・クロムウェル、「コン・エアー」のミケルティ・ウィリアムソン、「クリムゾン・タイド」のジョージ・ズンザ、「DEAD GIRL　狂気の愛」（未）のジャスティン・レザードほか。

〔略筋〕アメリカの火星探索船は火星着陸を成功させ、無事帰還する。だが、地球との交信が途絶えた空白の時間の内、乗員には異星生物（スピーシーズ）が取り憑いていた。火星帰りの英雄パトリック（ジャスティン・レザード）は祝賀パーティの夜、2人の美女相手の情事に及ぶが、彼の背中から触手が伸びて女を襲い、一人は瞬時にスピーシーズの子を宿らせ、二人とも死ぬ。その後もパトリックは次々と女を襲い、犠牲者は日増しに増えていき、赤ん坊を

Digitized by Google

次々と生ませる。国防省のバージェス大佐（ジョージ・ズンザ）は前回の事件で功績のあったプレス・レノックス（マイケル・マドセン）を雇い、スピーシーズ退治に当たらせ、ベイカー博士（マーグ・ヘルゲンバーガー）の研究所を共に訪ねる。彼女は前に大暴れしたスピーシーズのシルを、クローンでイヴ（ナターシャ・ヘンドリッジ）として蘇生させていた。彼らはイヴのテレパシーを使ってパトリックの後を追わせるという作戦に出る。火星探査のメンバーだった3人の内、アン（ミリアム・シアー）もまた体内にいたスピーシーズの犠牲となるが、もう一人のデニス（ミケルティ・ウィリアムソン）だけは遺伝子疾患だったためにスピーシーズから逃れ、プレスたちの捜査に協力する。やがてパトリックとイヴはテレパシーで感応しあい、ついに発情したイヴは研究所を脱走する。イヴが向かったのはパトリックが潜む納屋。そこはパトリックが生ませた子供の繭の巣窟だった。パトリックとイヴが激しく求め合うところを、プレス、デニス、ベイカー博士が到着。3人はデニスの血液を培養して製造した弾丸で応戦、半分が人間のイヴは自らを犠牲にしてパトリックに宿ったスピーシーズを死に至らしめるのであった。

プライベート・ライアン

Saving Private Ryan〔ライアン二等兵の救助〕

米＊パラマウント・ピクチャーズ＝ドリームワークスSKG作品／UIP配給　98＝98・9・26　C・V・DTS／SRD／SDDS／D（SR）　170分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Steven Spielberg　製作＝Ian Bryce／Mark Gordon／Gary Levinsohn／Steven Spielberg　共同製作＝Bonnie Curtis／Allison Lyon Segan　脚本＝Robert Rodat　撮影＝Janusz Kaminski　音楽＝John Williams　美術＝Thomas E. Sanders　編集＝Michael Kahn　衣装＝Joanna Johnston　録音＝Lance Brown　特殊効果スーパーバイザー＝Neil Corbould　特殊効果＝Industrial Light & Magic (ILM)　軍事アドバイザー＝Dale Dye

〔CAST〕Captain Miller…Tom Hanks／Sergeant Horvath…Tom Sizemore／Private Reiben…Edward Burns／Private Jackson…Barry Pepper／Private Mellish…Adam Goldberg／Private Caparzo…Vin Diesel／Medic Wade…Giovanni Ribisi／Corporal Upham…Jeremy Davies／Private Ryan…Matt Damon／Captain Hamill…Ted Danson／Sergeant Hill…Paul Giamatti／Lieutenant Colonel Anderson…Dennis Farina／Steamboat Willie…Joerg Stadler／Corporal Henderson…Max Martini／Toynbe…Dylan Bruno

〔解説〕 第2次世界大戦を題材に、過酷な戦地での男たちの友情と生き様を描いたヒューマンな戦争映画。戦場の殺戮を徹底したリアルさで再現し、ドキュメンタリー映画の迫力さえ帯び話題となった。監督は「アミスタッド」「シンドラーのリスト」のスティーヴン・スピルバーグ。製作は「ツイスター」「ビバリー・ヒルビリーズ　じゃじゃ馬億万長者」のイアン・ブライス、「ブロークン・アロー」のマーク・ゴードン、「12モンキーズ」ゲイリー・レヴィンソン、スピルバーグの共同。脚本は「グース」のロバート・ロダット。撮影は「シンドラーのリスト」でもスピルバーグと組んだヤヌス・カミンスキー。美術はフランシス・コッポラ監督の「ドラキュラ」でアカデミー賞にノミネートされたトム・サンダース。音楽のジョン・ウィリアムス、編集のマイケル・カーンは共にスピルバーグ作品のほとんどを手がける常連。出演は「フィラデルフィア」、「フォレスト・ガンプ」一期一会」で2年連続アカデミー主演男優賞を受賞したトム・ハンクス、「レリック」のトム・サイズモア、「彼女は最高」のエドワード・バーンズ、「ゴッド・アーミー　悪の天使」

キネマ旬報社の本

ハリウッド・スターたちの華麗な恋愛をリアルに綴る異色の映画史

箸見有弘・著

「ハリウッド・カップルズ」

恋を演じるスターは、
その恋にふさわしい波瀾万丈な人生を送っていた——。
スクリーンの内外で生まれた恋を追うことで、ハリウッド史を新たなる角度から綴った一冊。

A5判／本体3,800＋税

好評発売中

Digitized by Google

のアダム・ゴールドバーグほか。「グッド・ウィル・ハンティング」「旅立ち」では脚本の才能も認められたマット・デイモンが救出されるライアン二等兵を演じている。

〔略筋〕 時は1944年。第2次世界大戦の真っ只中、米英連合軍はフランス・ノルマンディのオマハビーチでドイツ軍の未曾有の銃撃を受け、多くの歩兵が命を落としていった。戦禍を切り抜けたミラー大尉に、軍の最高首脳から「3人の兄を戦争で失った末っ子のジェームズ・ライアン2等兵を探し出し、故郷の母親の元へ帰国させよ」という命令が下った。ミラーは古参軍曹のホーバス、2等兵のライベン、カパーゾ、メリッシュ、名狙撃手ジャクソン、衛生兵のクエイド、ドイツ語が話せる実践経験ゼロのアパムを選び、落下傘の誤降下で行方の知れないライアンを敵地の前線へと探しに向かう。彼らは廃墟の町で攻撃を受け、二人、二人と銃弾に倒れていく。なぜライアン1人のために8人が命をかけなければならないのか？とライベンが怒りを爆発させた時、ミラーはライアンを探し出し妻の元へ帰ることが自分の任務だと淡々と語り、離れかけていた皆の心をまとめあげる。前線へ進むうちミラーたちは空挺部隊に救われるが、その中にライアン2等兵がいたのだ。兄たちの死亡と帰国命令を知ったライアンは、戦友を残して自分だけ帰国することはできないときっぱりと言い放つ。ライアンの意思がミラーたちの心を捉え、共に踏みとどまりドイツ軍と一戦を交えることに。乏しい兵力、装備という悪条件の中、仲間たちは次々と銃弾に倒れ、ミラーも爆撃を受け死んでしまう。ライアンに「しっかり生きろ」と言い残して…。時を経て年老いたライアンは、ミラーの墓地の前で彼の言い残した言葉を再びかみ締めたのであった。

マスク・オブ・ゾロ

The Mask of Zorro［ゾロのマスク］

米＊トライスター＆アンブリン・エンタテイメント作品／ソニー・ピクチャーズエンタテインメント配給　98＝98・10・10　C・CS・D／DTS／SDDS　137分　字幕＝菊地浩司

〔STAFF〕監督＝Martin Campbell　製作＝Doug Claybourne／David Foster　Ep＝Laurie MacDonald／Walter F. Parkes／Steven Spielberg　原案＝Ted Elliott／Terry Rossio／Randall Jahnson　脚本＝John Eskow／Ted Elliott／Terry Rossio　撮影＝Phil Meheux　音楽＝James Horner　美術＝Cecilia Montiel　編集＝Thom Noble　衣裳＝Graciela Mazon

〔CAST〕Alejandro Murrieta/Zorro…Antonio Banderas／Zorro/Don Diego de la Vega … Anthony Hopkins／Elena…Catherine Zeta-Jones／Don Rafael Montero… Stuart Wilson／Captain Harrison Love… Matt Letscher／Prison Warden…Maury Chaykin／Don Luiz…Tony Amendola／Three-Fingered Jack …L.Q. Jones／Fray Felipe …William Marquez／Joaquin Murrietta …Victor Rivers／Don Hector…Moises Suarez／Don Julio…Humberto Elizondo

〔解説〕 ジョンストン・マッカリーの大衆小説の主人公"ゾロ"を映画化したアクション作品。かつてダグラス・フェアバンクス・シニアやアラン・ドロンが演じた伝説のヒーローをアントニオ・バンデラスが演じる。監督は「ゴールデンアイ」のマーティン・キャンベル。脚本は「アラジン」を手がけたテッド・エリオットとテリー・ロッシオ。製作は「マネートレイン」のダグ・クレイボーンと「激流」のデイヴィッド・フォスター。製作総指揮はローリー・マクドナルド、ウォルター・F・パークス、「プライベート・ライアン」のスティーヴン・スピルバーグ。撮影はキャンベルの長編映画全作品を手がけてきたフィル・メヒュー。音楽は「タイタニック」でアカデミー賞を受賞したジェームズ・ホーナー。美術のセシリア・モンティエルと衣裳のグラシエラ・マソンは「フロム・ダスク・ティル・ドーン」「デスペラード」を手がけた。出演は「デスペラード」「エビータ」のアントニオ・バンデラス、「羊たちの沈黙」「アミスタッド」のアンソニー・ホプキンズほか。

〔略筋〕 スペインからの独立を宣言したメキシコ。カリフォルニア知事のドン・ラファエル・モンテロ（スチュアート・ウィルソン）は、本国へ帰還する前に民衆のヒーローであるゾロを倒そうと待ち構えていた。ゾロの正体が町の有士、ドン・ディエゴ・デ・ラ・ベガ（アンソニー・ホプキンズ）であることをつきとめた彼は、デ・ラ・ベガを捕らえて投獄し、生まれたばかりのひとり娘を奪う。その争いにより、デ・ラ・ベガの妻は命を落とした。20年後、モンテロがカリフォルニアに戻ってきたことを知ったデ・ラ・ベガは彼を殺そうとするが、成人した娘のエレナ（キャサリン・ゼタ・ジョーンズ）を見て思いとどまる。エレナはモンテロの実の娘として育てられていたのだ。ほどなく、デ・ラ・ベガはモンテロ配下のラブ大尉（マット・レッシャー）に兄を殺され、自暴自棄に陥っていたお尋ね者のアレハンドロ（アントニオ・バンデラス）に出会う。アレハンドロが、かつてゾロを手助けした少年の成長した姿だと知ったデ・ラ・ベガは、彼をゾロの後継者として育てようとする。厳しい修行の末、新生ゾロとなったアレハンドロは、貴族になりすましてモンテロの屋敷に乗り込む。美しいエレナとの情熱的なダンス。アレハンドロとエレナはいつしか愛し合うようになる。一方、モンテロは山奥で

Digitized by Google

見つけた金鉱を基盤に、メキシコ政府からカリフォルニアを買い取ろうとしていた。ゾロの姿で地図を盗み、金鉱の場所をつきとめたアレハンドロ。人々が奴隷のように酷使される金鉱へ駆けつけ、宿敵であるラブ大尉と対決する。デ・ラ・ベガもまた、実の父親を知ったエレナの助力で、モンテロに立ち向かう。ラブ大尉とモンテロを倒し、復讐をとげた2人。だが、デ・ラ・ベガは激しい戦いで傷を負い、瀕死の状態だった。実の娘に見守られながら息をひきとるデ・ラ・ベガ。彼は最後にゾロの魂をアレハンドロに託す。やがて幸せな家庭を築いたエレナとアレハンドロは、幼い息子に祖父の偉大な功績を語り継ぐのだった。

ミル・マスカラス
愛と宿命のルチャ

La Verdad De La Lucha〔真実のルチャ〕

メキシコ　イーサン配給　88＝98・9・4

C・V　90分　字幕＝星野智幸

〔STAFF〕監督＝Fernando Duran Rojas　製作＝Arron Rodriguez　脚本＝Carlos Valdemar　撮影＝Armando Castillon　音楽＝Rafael Carmon　編集＝Max Sanchez

〔CAST〕Mil Mascaras／Dos Caras（ホルヘ）／Dragon I（セルヒオ）／Dragon II（ホエル）／ドン・ホセ…Noe Murayama／アレハンドラ（ホエルの妻）…Monica Prado／エステラ（セルヒオの妻）…Dacia Gonzalez／ギード・エル・マグニフィコ…Alfred Gutierrez "El Turco"／ドン・レアンドロ…Bruno Rey／ディアナ…Ana Luz Aldana／Kanec／Fishman／Scorpio

〔解説〕メキシコプロレス＝ルチャ・リブレのスターたちがリング内外で活躍するプロレス映画。監督はフェルナンド・ドゥラン・ロハス。製作はアロン・ロドリゲス。脚本はカルロス・バルデマル。撮影はアルマンド・カスティジョン。音楽はラファエル・カリオン。編集はマックス・サンチェス。出演は国民的英雄であるミル・マスカラスや、ドス・カラス、ドラゴンI&II、フィッシュマン、スコルピオといった実在のメキシカン・レスラーが総出演。

〔略筋〕1960年のメキシコシティー。セルヒオとホエルはドラゴンI&IIというリングネームでタッグを組む人気のルチャ・ドールだ。世界チャンピオンへの出場権を獲得できる試合が近づいているのだが、悪徳プロモーターのドン・ホセ（ノエ・ムラヤマ）は運営費が足りないという理由で給料をカットすると皆に宣言。協会へ訴えようとしたレスラーを手下を使って半殺しにする。激怒したセルヒオとホセは、何故か剣道の防具を身につけて手下たちに竹刀で制裁を加える。そんなある日、とうとう2人の対決が実現した。激しいファイトを繰り広げ、優勢に立ったセルヒオはホエルを鉄柱に何度も打ちつけて勝ち、ホエルは病院に運ばるが死んでしまう。ヤケ酒をあおっていたセルヒオの前にホエルの狂信的なファンが現れ、ホエルを撃ち殺す。残されたホエルの妻アレハンドラ（モニカ・プラド）は息子のギードを連れてヒューストンにいる兄の元へ去る。時は過ぎて1989年のメキシコ。成長したセルヒオの息子ホルヘはドス・カラスという人気のレスラーとして活躍していた。そこへドンが対抗馬としてアメリカから雇い入れたメキシコ系アメリカ人のレスラーが現れた。ザ・グレイト・ギード（アルフレド・グティエレス"エル・グレコ"）と名乗るこの青年こそ、あのホエルの息子であった。ギードの母親であるエステラ（ダシア・ゴンザレス）もアレハンドラも不運な出会いになす術もなかった。選手権当日。勝者が王者ミル・マスカラスと対決することが出来るとあってホルヘとギードの戦いもヒートアップし、ギードが勝利を収める。しかしドンがマスカラスに八百長をするよう要請、それに対して彼は「試合は正々堂々とやるものだ」と一蹴。結局、マスカラスはギードを倒したのだった。

ムーラン

Mulan〔ムーラン（主人公の名前）〕

米＊ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ作品（ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ提供）／ブエナビスタインターナショナルジャパン配給　98＝98・9・26　C・V・D／SDDS／DTS／D（SR）　87分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Tony Bancroft／Barry Cook　製作＝Pam Coats　原案＝Robert D San Souci　脚本＝Rita Hsiao／Chris Sanders／Philip LaZebnik／Raymond Singer／Eugenia Bostwick-Singer　音楽＝Jerry Goldsmith／Matthew Wilder(songs)　美術＝Hans Bacher　編集＝Michael Kelly　キャラクター・衣裳デザイン＝Chen Yichang　作画監督＝Mark Henn／Tom Bancroft／Ruben Aquino／Aaron Blaise／Broose Johnson／Press Romanillos

〔CAST〕（声の出演）Mulan…Ming-Na Wen／Mulan (singing)…Lea Salonga／Mushu…Eddie Murphy／Shang…B.D. Wong／Shang (singing)…Donny Osmond／Yao…Harvey Fierstein／Chien-Po…Jerry Tondo／Ling…GeddeWatanabe／Ling(singing)…Matthew Wilder／Chi Fu…James Hong／Shan-Yu…Miguel Ferrer／Fa Zhou…Soon-Tek Oh／Fa Li…Freda Foh Shen／The Emperor…Pat Morita／Grandmother Fa…June Foray

〔解説〕父の名誉を守るため、命を賭けて戦った中国の伝説の美少女「木蘭（ムーラン）」の物語をディズニーがアニメ化。監督は「美女と野獣」「アラジン」のアニメーター&エフェクト監修を務めたバリー・クックと、「ライオン・キング」でスーパーバイジングアニメーターを務めたトニー・バンクロフト。製作は「ミッキーのアルバイトは危機一髪」でエグゼクティブプロデューサーを務めたパム・コーツ。音楽は「プリティ・ウーマン」の『ワイルド・ウーマンドゥ』をヒットさせたマシュー・ワイルダーと「エイリアン」「スター・トレック」の巨匠ジェリー・ゴールドスミス。ヒロインのキャラク

Digitized by Google

ター作画は「リトル・マーメイド」「美女と野獣」などの女性キャラクターを手がけたディズニーのトップ・アニメーター、マーク・ヘン。声の出演は「ジョイ・ラック・クラブ」のミンナ・ウェイ、「ビバリーヒルズ・コップ」のエディ・マーフィ、「セブン・イヤーズ・チベット」のB・D・ウォンほか。

〔略筋〕由緒あるファ家の一人娘、ムーランは、自由な心の持ち主だったが、女らしくふるまうことが苦手なため、家族の頭を悩ませていた。ある日、「一家から一人男子を徴兵する」という皇帝からの命が下る。異民族であるフン族が中国侵略をたくらんでいるのだ。足の悪い父、ファ・ズーに代わり戦地へ赴く決意をしたムーランは、長く美しい髪を切り、男になりすまして軍隊にもぐりこむ。心配した先祖の霊は、ファ家最強の守護竜をムーランの守り神としてつかわそうとするが、手違いで、できそこないの守護竜ムーシューが行くことになる。ムーランはムーシューの助けを借りながら、軍隊での厳しい訓練を克服する。一方、自分の属する部隊の隊長であるシャンへは、ほのかな思いを寄せるのだった。いよいよフン族との戦いの時、ムーランは得意の知略で雪崩を起こし、フン族を壊滅させる。だが、その時受けた傷がもとで女であることが知られ、軍隊を追い出される。故郷へ帰ろうとしたムーランだが、フン族の生き残りが都をめざしていることを知り、シャンたちへ知らせに駆けつける。だが、ムーランが自分をあざむいていたことを怒るシャンは、ムーランの言葉を信じない。ついにフン族が現われた。ムーランの言葉が真実であることを知ったシャンは部下、ムーランとともに皇帝を救い出す。皇帝から感謝の言葉と宝を授かったムーランは故郷へ帰る。抱き合う父とムーラン。そこへ、シャンも駆けつけ、全員が微笑みを交わすのだった。

リバース

Retroactive〔遡及する〕

米＊ブラッド・クレヴォイ&スティーヴ・スタブラー・プロ作品（オライオン・ピクチャーズ提供）／ギャガ・コミュニケーションズ配給 97＝98・10・3 C・CS・D 94分 字幕＝林宗浩

〔STAFF〕監督＝Louis Morneau 製作＝Brad Krevoy／Steve Stabler／David Bixler／Michel Nadeau w.p.＝Jeffrey D. Ivers 原案＝ 脚本＝Michael Hamilton-Wright／Robert Strauss／Philip Badger 撮影＝George Mooradian 音楽＝Tim Truman 美術＝Philip Duffin 編集＝Glenn Garland 衣装＝Alexandra Welker

〔CAST〕Frank…James Belushi／Karen…Kylie Travis／Rayanne…Shannon Whirry／Brian…Frank Whaley／Jesse…Jesse Borrego／Sam…M. Emmet Walsh／Trooper…Sherman Howard／Bud…Guy Boyd／Martha…Kristina Coggins

〔解説〕殺人に巻き込まれた女性刑事が、時間逆行の実験装置を使って過去を変えようと苦闘する姿を描くSFアクション・スリラー。98年ポルト国際映画祭（ファンタジー部門）最優秀作品賞受賞作。監督はMTV出身で、ロジャー・コーマンのニュー・ホライズン映画『クラック・ダウン 狼たちの追跡』（未）のルイス・モーニュー。脚本はフィリップ・バシャー、マイケル・ハミルトン＝ライト、ロバート・シュトラウスの共同。製作は「ジム・キャリーはMr.ダマー」のブラッド・クレヴォイとスティーヴ・スタブラーの二人と、デイヴィッド・ビクスラー、マイケルネイデューの共同。製作総指揮はジェフリー・D・アイヴァース。撮影はジョージ・ムーラディアン。音楽はティム・トルーマン。出演は「シングル・オール・ザ・ウェイ」「ジョン・キャンディの大進撃」のジェームズ・ベルーシ、モデル出身で本作が映画デビューのカイリー・トラヴィス、「アウト・フォー・ジャスティス」のシャノン・ウィリー、「ブロークン・アロー」のフランク・ホェーリー、「パンサー」「グラス・シールド」などの名バイプレイヤー、M・エメット・ウォルシュほか。

〔略筋〕数日前の人質事件での衝撃を癒すために旅に出た女刑事カレン・ウォレン（カイリー・トラヴィス）。テキサスの砂漠の真ん中で車がクラッシュを起こし、そこへ通りかかったフランク・ロイド（ジェームズ・ベルーシ）とその妻レアンヌ（シャノン・ウィリー）の乗ったシボレーをヒッチハイクした。途中ガソリンスタンドに立ち寄ったフランクは、そこで店主のサム（M・エメット・ウォルシュ）から取引をしているマイクロチップの代金をもらうが、同時にレアンヌの浮気の現場写真を見せられる。車内で逆上したフランクは、カレンの制止も聞かず、レアンヌを射殺してしまう。カレンは銃口を向けるフランクから逃がれ、近くの研究所の中へ逃げ込む。研究員のブライアン（フランク・ホェーリー）が研究していたのは時間の逆行装置で、機械が誤って作動して、カレンは20分前のフランクの車中へとタイムスリップしてしまう。過去へ戻ったことを悟ったカレンは、レアンヌを助けるためフランクの銃を奪おうとするなど、孤軍奮闘するが、レアンヌどころか警官や罪のない旅行中の家族までも巻き込んで死者は膨らみ、家族から生き残った少年と共に、カレンはブライアンの研究所に向かい、今度はブライアンと一緒にやはり20分前に逆戻りする。しかし、結果は同じでやはりレアンヌたちは助からない。もう一度、今度は逆行装置が破壊される限界を越えた1時間前にセットしてカレン、ブライアンは時間を逆行する。ようやくレアンヌは助かり、フランクは撃たれ死ぬことになった。

Digitized by Google

ガクノススメ

第一〇七話

台湾ドキュメンタリー映画祭への旅（前篇）

牧野　守

胸部の切開手術を受けてから、回復に向って幾つかのハードルをクリアしてきた。しかし退院後、二カ月もたっていないのに台湾行きを決行したのは、その最大のものであった。最終的には執刀医の許可が降りたことで実現したのだが、実際は評論家の村山匡一郎さんのコーディネイトと、川崎市市民ミュージアムの川村健一郎学芸員が同行してくれたことで可能となった。

なぜ、このような時期に台湾行きを決心したのかというと、昨年開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭に参加した際、台湾から十数名におよぶ視察団と交流したことに端を発する。この時、台北で山形に次いで国際ドキュメンタリー映画祭を開催したいという企画を知った。一年おきに山形で催されるこのイベントが、当地で開催されない年に、同じアジア圏内の台北で催すことで空白を埋めようと意図されたのである。

それから今年の九月まで、台湾の映画関係者の精力的な活動がスタートした。この間、台湾の映画論壇の第一人者にして旧知の張昌彦（Chang Yann）さんがスタッフとともに拙宅を来訪され、戦前の日本側資料の調査が行われたこともあった。また今年の春、早稲田大学大学院の修士課程を卒業した留学生の洪雅文（Hong Ia Wen）さんが、指導担当の岩本憲児教授も高く評価する修士論文（『日本植民支配下における台湾映画界に関する考察』）を提出して帰国され、現在は国家電影資料館のスタッフとして台湾映画祭に携わっている。彼女も、離日前に拙宅で今後の研究の進め方について話し合うことが出来た。これらの結び付きを通じて第一回のこのイベントを直接体験したいという意欲が、わたしを無謀とも称せられる行動に駆り立てたのである。

もう一つ動機の根底には、ここ十数年間、映画館に出掛ける機会が少なくなっているわたしの数少ない体験として、侯孝賢監督の「非情城市」（一九八九年）を観たことが挙げられる。この作品は本国での検閲を避けて、日本の現像所から直接ヴェネツィア映画祭に出品されてグランプリを獲得。本国でその話題がもちきりとなっていたその時、わたしは記録映画の取材で南部の山岳地帯に滞在していたが当地で観ることが出来ず、帰国後東京の封切館の一隅で、初めて作品と出会うことになった。戦前の日本が台湾総督府を通じた半世紀に及ぶ植民地支配が残した後遺症、そして戦後の二・二八事件に及ぶ様々な問題の歴史的な背景が映画を通じて身近に迫ってきた。以来、この重く複雑な感動は忘れることが出来ない。その意識が潜在的に中国大陸や香港、そして東南アジアの中国語圏の映画に接している時に、もう一つの流れとして纏わりついてくるのである。

第一回を迎えた台湾国際紀録片雙年展（TAIWAN INTERNATIONAL DOCUMENTARY FESTIVAL-TIDF）は、台湾のフィルム・アーカイブである国家電影資料館の研究者・学芸員などのスタッフをはじめとして各分野の映画人の参加した執行委員会が主体となって国と台北市の全面的な支援によって九月十九日から二十六日の八日間、市内に新しく都市開発された東北地域の信義電影文化特区の台北市役所、新光三越信義店六階ホール、ワーナー・ビレッジ・シネマ館など五つの会場で開催された。出品参加国三〇、応募作品総数二六一本。その内訳はフィルム六六本、ビデオ一九五本である。

プログラムは五部門で構成されていて、第一が国際コンペティションフィルムセクションで二十本。第二が同じくビデオで三十二本、第三が国際審査員によるフィルムが八本、第四が台湾の一九二〇年以来のドキュメンタリー映画のレトロスペクティブで十五本。そして最後の第五部門は『アジアのイメージ』と題した十本である。これに並行してシンポジウムが四回開かれた。これらの会場には映画祭の看板とともに、いずれも"BACK TO ASIA"というキャッチフレーズが表示されていて、特にアジアに対する視線の鮮明さを読み取ることが出来た。山形映画祭と一味違うところは、山形でなかなか実現に踏み切れなかったビデオ部門を新設してしかも作品をフィルムと同じくコンペとして審査対象に据えたことであろう。このことは映画祭に参加した多くの若手の映画人たちの議論などにも大きく反映していたことからも、その効果が明らかであった。

ところで、このような具体的内容は、わたしたちが出発する間際まで届かなかった。村山さんがその数日前、福岡映画祭に来日した張さんから手渡されたプログラムをわたしが入手したのが開会式当日の十九日、わたしたちの一行は三日遅れの二十二日に羽田の早朝便で出発した。いずれも自費の渡航のため、川村君が一番安いフライトやホテルを探し出してくれた。それがためにわたしは、JRの朝四時半の始発電車に乗る羽目になった。そして現地に到着して選んだホテルが市内のダウンタウンともいうべき西南部に位置していて、映画祭会場とは正反対。タクシーで小一時間かかる場所であることが解った。

Digitized by Google

今号の筆者紹介

（　）は掲載ページ数

野村正昭　映画評論家。池袋のタウン誌『びいーゆ』に連載中の『巣鴨撮影所物語』を毎日興味深く読んでいます。（15）

吉田真由美　M・チャン、M・ライアン、C・ユンファ、R・レッドフォードの4日連続記者会見とは凄かった。（18）

川村章子　ライター。一週間ほど北海道へ。行きも帰りも台風に遭った私は嵐を呼ぶ女?!　でも本当は晴れ女です。（21）

斉藤芳子　ライター。「流★星」を観る。金髪の緒形拳さんがカッコ良くて、かわいい。あっ、馬もかわいかった。（24）

八森稔　映画評論家。クジラの頃から応援してきた横浜ベイスターズがリーグ優勝。嬉しさよりもテレ臭いのはなぜ?（25）

進藤良彦　踊るライター。この五カ月、「踊る」とともに駆け抜けてきました。抜けガラの私に誰か仕事を下さい。（30）

樋口尚文　映画批評。民放連連盟賞の審査で、特に『奈良へ行くまで』『月のかたち』に感銘を受けました。（31）

早川あゆみ　踊るライター。映画が楽しみでならない「踊る」漬けの毎日。でもこれで終わりと思うと寂しい……。（34）

河原晶子　映画評論家。最近のC・ベール（クリスチャン）はトニ・パキに似てきた。「アメリカン・サイコ」はやっぱり彼の主演で。（65）

田沼雄一　映画評論家。松たか子のセカンドアルバム『アイノトビラ』を聴きながらしみじみ秋を感じています。（68）

望月美寿　ライター。古谷一行とベネチオ・デル・トロと陳小春は、この順番で鼻の穴近辺がビミョーに似ている。（73）

宇田川幸洋　映画評論家。ひさかたぶりにチョウ・ユンファと会い、楽しい時間を過ごした。（76）

たかのひろこ　兼業ライター。「がんばっていきまっしょい」の予告編だけで涙。最近お気に入りの曲が主題歌と気づく。（78）

吉武美知子　ベルギーのゲントはお伽噺のような可愛い町。映画祭で今村特集。監督はファンに囲まれサイン攻め。（81）

黒田邦雄　映画評論家。イギリス映画の勢いは、フランシス・ベーコンを生々しく描いた「愛の悪魔」でも納得。（91）

吉村英夫　映画評論家。小津安二郎の生誕百年に向かい、代用教員をした三重県飯高町が小津顕彰の行事を企画。（92）

垣井道弘　映画評論家。世紀末ならではの「アルマゲドン」。イマジカで天変地異映画を見るとドッと疲れます。（95）

金澤誠　「どら平太」の製作延期にショック。一方で市川崑監督の「新選組」が完成したとの報に少し喜ぶ。（98）

村川英　那須の豪雨で夫が家ごと濁流に流されて亡くなった。すべてを失った衝撃に打ちのめされています。合掌。（100）

内海陽子　映画評論家。澤井信一郎監督「時雨の記」に酔った。自分がサユリストだということを30年ぶりに確認。（102）

塩田時敏　映画評論家。STRAYDOG舞台『闇のレクイエム』『カノン』を堪能。森岡自身による映画化も期待。（104）

田中千世子　映画評論家。P・ブランコにウィーンのマダヴィ監督を売り込む。気持ちのいいプロデューサーだ。（108）

大和晶　シネマライター。思いっきり笑わせ泣かせる「のど自慢」は正月映画イチ押し。室井滋はサイコー！（112）

林加奈子　映画祭コーディネーター。在香港。やっと一時帰国しようという気持になりました。祝・東京国際映画祭。（118）

浅野潜　映画評論家。山中貞雄忌が京都の大雄寺で。もう15回目。黒木和雄監督にお会いしたが20年ぶりと知り驚嘆。（122）

石井美由季　在英ライター。一年だけの予定が、三年以上にわたった在英生活。11月末とうとう日本へ戻ります。（122）

小林雅明　文筆業。「アウト・オブ・サイト」の男女にはスクリューボール・コメディのカップル像が投影か？（124）

日野康一　映画評論家。市川崑監督の最新切り絵長編アニメ「新選組」の若々しい感覚とエネルギーに驚く。（141）

荒井良二　イラストレーター。絵本を描いているせいか、子供が出てくる映画だとどれも気になって見てしまう。（147）

立川志らく　落語家。10月19日、18時30分～国立演芸場にて独演会『志らくのピン』を開催。☎3134・4404（151）

田口トモロヲ　俳優。ケガして救急車に乗っちゃったりして……みなさん、御心配をおかけしてドーモスイマセン！（154）

芝山幹郎　翻訳家。マック&ソーサの本塁打レースを楽しみすぎて、苦手のTVにまで出演。お陰で原稿が大遅刻。（156）

和田誠　ロディ・マクドール死す。こちらも子ども、あちらも子役、という頃からのなじみの人でした。（160）

三谷幸喜　脚本家。「長野には海がない」でお馴染みのJR東日本のCMはスゴイ。あのD・ワシントンは誰だっ。（160）

杉原賢彦　サイバージャーナリスト。この秋、なぜか映画CD－ROMのリリースが激減中。なぜなのだ???（167）

森直人　文筆仕事。「ラヴ・ゴーゴー」の色使い、「プライベート・ライアン」の金属音が最近の我がベスト。（170）

遠山純生　文筆業。肩こり。疲れ目。不眠。胃弱。歳取ったなと初めて実感する今日この頃。（171）

濱口幸一　非常勤講師。夏休み明け最初の授業が台風のため休講、翌週は祝日で、だらけにだらけて10月を迎えることに。（173）

井口健二　SF映画評論家。中田英寿のセリエAデビューは衝撃的だったが、意外と遅い試合運びで、こんなもの？（176）

竹入栄二郎　興行通信記者。釜山国際映画祭で「のど自慢」上映、のど自慢大会開催。歌うことの楽しさの保証。（186）

内田達夫　シネマライター。「クリムゾン・タイド」をパクッた某社のCMにボー然。アレはあまりにも露骨すぎ。（187）

大高宏雄　映画記者。某所で会った早大女子学生の矯正歯にドキ。本人はマジだったが、私は内心笑っていた。（188）

井上一馬　エッセイスト。PHPから『夫婦で子育てしてますか』という本を発刊。よければ手に取ってみて下さい。（192）

渡辺浩　映像評論家。森卓也さんの『映画この話したっけ』を読んだ。面白い、

Digitized by Google

笠さん、太一くんの話など懐かしい。(194)

赤坂大輔 ライター。F・ワイズマン「チチカット・フォーリーズ」は人類狂気時代に相応しい究極のホラー映画だ。(196)

宇田川清一 映画評論家。NYでショー『キャバレー』を観賞。ジェニファー・ジェイソン・リー、頑張ってました。(196)

鬼塚大輔 静岡英和短大英文学科。敬愛するシドニー・ルメットの『メイキング・ムービー』にやはり大満足。(196)

野村梓 映画評論家。ロンドンのグローブ座公演『お気に召すまま』で、久しぶりに芝居の楽しさを満喫。(196)

中西愛子 物書き。「チップス先生さようなら」を久々に観て、P・オトゥールの名演にまた胸を熱くした。(196)

村岡良昭 場内での飲食を禁止する劇場は、せめてロビーの食事環境を充実して下さい。特に映画祭関連劇場。(196)

寺脇研 映画評論家。「岸和田少年愚連隊・望郷」の面白さを堪能。これぞチープな日本映画の逞しさだ。(196)

切通理作 文筆業。脚本作「アクアリウム」12月19日公開決定しました。一日6回、中野武蔵野ホールです。(201)

渡部実 映画評論家。10月下旬号の書評欄で拙著の著者名、渡辺実は誤植で正しくは渡部実です。どうぞよろしく。(204)

大森さわこ 映画評論家。「プライベート・ライアン」以来E・バーンズが妙に気になる。若き日のR・ギア似との声も。(206)

田中眞澄 日々の背信。新国立劇場で『アラベッラ』を観る。オール日本人でなぜこんなに高いんだ！(207)

上島春彦 映画批評家。長篇評論『A・ポロンスキー』どこか本にしてくれる出版社はありませんか、連絡乞う。(208)

西脇英夫 映画評論家。台湾映画「ラヴ・ゴーゴー」の何とも言えぬ新鮮なユーモア感覚に酔った。(209)

池田敏 ライター。米国でJ・チェンの「ラッシュ・アワー」と共にサモ・ハン主演のTVドラマも話題に！(210)

豊崎岳彦 売文家。『浮浪者からホテル王になった男』(東西寺春秋著／ぶんか社)の3つの訓に感銘を受ける。(211)

武市憲二 TVプロデューサー。年に1回の都はるみ杯ゴルフコンペが近々開催。今年もブービー賞を狙う予定。(213)

賀来卓人 文筆家。休日の朝、隣の住宅展示場から響く子供たちの「アンパンマ〜ン」の合唱が辛い。眠れんがな。(214)

吉川明利 タワーレコード渋谷店勤務。ファンタ一番人気は「燃ドラ」ではなく「踊るマハラジャ2」の可能性大。(217)

丸山尚輝 ライター。国立国会図書館を利用したが、もう少し開館日・時間など利用者に便利にならないものか。(218)

中村勝則 シネマライター。いよいよ秋のGIも目前。天皇賞(秋)はスティゴールドの健闘に期待。日曜は競馬。(221)

米田由美 田舎暮らし実行中ライター。レオ様ご乱交の記事にショック。でもやっぱりステキだから許しちゃう。(222)

弓家保則 役者&ライターetc.。目の前に、山のようにある仕事に押し潰されそうになっている。映画が観たい。(223)

牧野守 映画史研究。日本初の映画雑誌『活動写真界』『シネマ・レコード』『キネマ・レコード』復刻版編纂再会。(237)

キネマ旬報
KINEJUN

—最新情報から作品研究まで—
映画ファンのための総合誌！

毎月5日・20日発売

◆ 年極購読のご案内 ◆

●月2回発行のため、忙しくて店頭で買えない方、近くに本屋のない方に毎号確実にお手もとへお届けする〝年極購読〟をおすすめします。お申し込みは本誌貼り込みの振替用紙をご利用下さい。

特典
小社発行の毎誌・書籍のご注文の送料は当方で負担します（代理部扱いのプログラム、書籍、ファイル等は除きます。ご注文の際には必ず会員番号をご明記下さい。）

購読料金
◇6カ月 12冊送付 …… 9,840円
◇1カ年 24冊送付 …… 19,680円

Digitized by Google

シネガイド

いま、イギリス映画がオモシロイ！『英国映画祭』いよいよ開催

超ロングランヒットとなった「トレインスポッティング」をはじめ、「ブラス！」「フル・モンティ」など秀作、話題作が次々と公開され、いま最も注目を集めるイギリス映画。今後も多くの作品が日本での公開を控えている。

そんな中、第11回東京国際映画祭の協賛企画として、また英国祭UK98の正式参加イベントとして、10月24日(土)より『英国映画祭』が開催される。

往年の名作から新作まで、選りすぐりの30本を一挙上映。ロバート・カーライル（「フェイス」）、クリスチャン・ベール（「ベルベット・ゴールドマイン」）他、豪華ゲストもあわせて来日するなど、イギリス映画ファンならずとも思わず足を運びたくなる贅沢なプログラムが用意されている。

《英国映画祭》

●第一部

10月24日（土）〈第一部オープニング・セレモニー〉11時30分「鳩の翼」12時10分「マイ・スウィート・シェフィールド」15時10分〈ハマー・ホラー・レイトショー〉「ハンズ・オブ・ザ・リッパー」「フランケンシュタインの逆襲」「ドラキュラの血のしたたり」18時

10月25日（日）「ラブ&デス」10時30分「ガールズ・ナイト」13時20分「クイーン・ヴィクトリア至上の恋」16時20分「アイ・ウォント・ユー」19時20分

10月26日（月）「クイーン・ヴィクトリア至上の恋」13時20分「マイ・スウィート・シェフィールド」16時20分「パフォーマンス」19時20分

10月27日（火）「ガールズ・ナイト」13時20分「ラブ&デス」16時20分「ナック」19時20分

10月28日（水）「ハンズ・オブ・ザ・リッパー」11時50分「ドラキュラの血のしたたり」14時20分「フランケンシュタインの逆襲」16時50分「ザ・ジェネラル」19時20分

10月29日（木）「日蔭のふたり」13時10分「グッバイ・モロッコ」16時20分「鳩の翼」19時20分

10月30日（金）「トレインスポッティング」12時20分「アイ・ウォント・ユー」15時〈第一部クロージング・セレモニー〉16時40分「フェイス」19時

●第二部

10月31日（土）〈第二部オープニング・セレモニー〉12時30分「エブリバディ・ラブズ・サンシャイン」12時50分「マーサ・ミーツ・ボーイズ」16時「トム・ジョーンズの華麗な冒険」19時20分

11月1日（日）「戦場にかける橋」12時「グッバイ・モロッコ」16時10分「フェイス」19時20分

11月2日（月）「日蔭のふたり」13時「地球に落ちてきた男」16時20分「エブリバディ・ラブズ・サンシャイン」19時40分

11月3日（火）「愛の悪魔」10時50分「フェアリーテイル」13時50分「ダウンタイム」17時「雨の中の恋」19時20分

11月4日（水）「ナック」13時「サンセット・ハイツ」16時「フェアリーテイル」19時20分

11月5日（木）「トム・ジョーンズの華麗な冒険」12時50分「ダウンタイム」17時「雨の中の恋」19時20分

11月6日（金）「戦場のメリークリスマス」12時50分「マーサ・ミーツ・ボーイズ」16時20分「ザ・ジェネラル」19時20分

11月7日（土）「サンセット・ハイツ」10時35分「フォトグラフィング・フェアリーズ」13時30分

11月8日（日）〈マイケル・バウエル特別上映〉「ヒズ・ロードシップ」「赤い靴」13時〈第二部クロージング・セレモニー〉16時20分「ベルベット・ゴールドマイン」17時

料金＝1200円／M・バウエル2作品券2000円／ハマーホラー3作品券2800円（㊐1000円／M・バウエル2作品券1800円／ハマーホラー3作品券2500円）

会場＝〈第一部〉渋谷東急、〈第二部〉Bunkamura（シアターコクーン）、〈M・バウエル特別上映〉渋谷公会堂

問合せ＝03・5467・6700

北海道

■第5回函館山ロープウェイ映画祭

●クレナモホール

10月23日（金）〈オープニング・イベント〉14時30分〈映画ワークショップ製作映画無料上映「一番列車の出る前に」「ある一日の風景」〉16時「がんばっていきまっしょい」17時50分〈第3回シナリオ大賞授賞式〉20時10分〈映画祭オープニングパーティ〉20時50分

10月24日（土）「イノセントワールド」10時50分「夢みるように眠りたい」13時「港のROXY」〈あがた森魚ミニライブ〉14時50分「SF サムライ・フィクション」16時50分「ツィゴイネルワイゼン」19時20分

10月25日（日）「ローカルニュース」10時30分「洗濯機は俺にまかせろ」11時45分〈篠原哲雄監督×中村義洋監督ティーチ・イン〉13時35分「アベックモンマリ」14時30分〈武藤起一プロデューサー×大谷健太郎監督「アンラッキー・モンキー」17時30分「アートフル・トヂャース」19時40分

●函館市公民館

10月24日（土）「殺しの烙印」11時「ギターを持った渡り鳥」13時「赤いハンカチ」14時40分〈じんのひろあきシナリオ講座〉

10月25日（日）「7/8nananainiguo」10時15分〈インディペンデント作品上映〉12時「祈りの踊り」13時50分「あなたはどこで死にますか」〈皇川子佳子ディレクターのティーチ・イン〉16時05分

料金＝1回券1500円／1日券3000円（㊐1回券1200円／1日券2500円／3日間通し券5000円

問合せ＝0138・23・3105

関東

■東京国立近代美術館フィルムセンター〈逝ける映画人を偲んで1997〉

10月21日（水）①「三等重役」②「フランキー・ブーチャンのあゝ軍艦旗」

10月22日（木）①「悪人志願」②「帰って来たヨッパライ」

10月23日（金）①「おトラさんのお化け騒動」②「雲の上団五郎一座」

10月24日（土）①「赤い殺意」②「一条ゆかり 濡れた欲情」

11月3日（火）①「フランキー・ブーチャンのあゝ軍艦旗」②「三等重役」

11月4日（水）①「帰って来たヨッパライ」②「悪人志願」

11月5日（木）①「雲の上団五郎一座」②「おトラさんのお化け騒動」

時間＝①15時②18時30分、土祝①13時②16時

料金＝一般410円／学生250円／小人180円

問合せ＝03・3278・8600

■川崎市市民ミュージアム〈スポーツ映画フェスティバル〉

10月21日（水）①「札幌オリンピック」

10月22日（木）①「鉄腕投手 稲尾物語」②「姿三四郎」

10月23日（金）①「標高八一二五米 マナスルに立つ」②「若い獣」

10月24日（土）①「剣」②「おれについてこい！」

Digitized by Google

10月25日（日）①「太平洋ひとりぼっち」②「シュートー」
10月27日（火）①「東京オリンピックへの道」②「ボクサー」
10月28日（水）①「日本ニュース　戦後篇第193号」「挑戦」「あるマラソンランナーの記録」②「サード」
10月29日（木）①「第50回全国高校野球選手権大会　青春」②「シコふんじゃった。」
時間＝①13時30分②16時
料金＝無料
問合せ＝044・754・4500
■ユーリー・ノルシュテイン祭
〈代表作7作品〉
上映作品＝「話の話」「霧につつまれたハリネズミ」「25日・最初の日」「ケルジェネツの戦い」「狐と兎」「あおさぎと鶴」「ロシア砂糖のCF3本」
11月7日（土）～27日（金）
時間＝11時／13時／15時／19時（土日20時から）
料金＝1300円
〈新作「外套」ラッシュ特別限定上映〉
11月13日（金）、14日（土）、15日（日）、21日（土）、22日（日）
時間＝10時／19時（13日は19時の回のみ）
料金＝800円
会場＝ラピュタ阿佐ヶ谷
問合せ＝03・5327・7654
■味覚の街パリ
〈ル・シネマ1〉
10月21日（水）「獅子座」「カフェ・クーポールの50年」11時10分／16時30分「パリ大混戦」13時50分
10月22日（木）「自由の幻想」「ラ・ミュエット」11時10分／16時30分「ギャルソン」「パリのカフェ」13時50分／19時10分
10月23日（金）「柔らかい肌」11時10分／16時30分「居酒屋」「パリの食事」13時50分／19時10分
10月24日（土）「ガスパール」11時10分／16時30分「愛すべきご婦人たち」「耐えられない空腹」13時50分／19時10分
10月25日（日）「ファーストフード」11時10分／16時30分
10月26日（月）「幸福」11時10分／16時30分「自由の幻想」「ラ・ミュエット」13時50分／19時10分
10月27日（火）「パリ大混戦」11時10分／16時30分「獅子王」「カフェ・クーポールの50年」13時50分／19時10分
10月28日（水）「現金に手を出すな」11時10分／16時30分「ガスパール」13時50分／19時10分
10月29日（木）「愛すべきご婦人たち」「耐えられない空腹」11時10分／16時30分「殺意の瞬間」「おばあさんの買物」13時50分／19時10分
10月30日（金）「ギャルソン」「パリのカフェ」11時10分／16時30分「パリの大混戦」13時50分
〈ル・シネマ2〉
10月21日（水）「しあわせはどこに」11時40分／17時「夕なぎ」「北駅」14時20分
10月22日（木）「聖なる酔っ払いの伝説」11時40分／17時「地下鉄のザジ」14時20分／19時40分
10月23日（金）「パリのレストラン」「日替わり定食」11時40分／17時「ディーバ」14時20分／19時40分
10月24日（土）「バベットの晩餐会」11時40分／17時「キッチンでの出来事」14時20分／19時40分
10月25日（日）「気のいい女たち」11時40分／17時「正装のご用意を」14時20分／19時40分
10月26日（月）「夕なぎ」「北駅」11時40分／17時「恐るべき子供たち」14時20分／19時40分
10月27日（火）「ニキータ」11時40分／17時「デリカテッセン」「ささいなことだけど……」14時20分／19時40分
10月28日（水）「ディーバ」11時40分／17時「バベットの晩餐」14時20分／19時40分
10月29日（木）「キッチンでの出来事」11時40分／17時「パリのレストラン」「日替わり定食」14時20分／19時40分
10月30日（金）「最後の晩餐」11時40分／17時「しあわせはどこに」14時20分
会場＝Bunkamura ル・シネマ1・2
問合せ＝03・3462・0345
■アテネフランセ文化センター
〈日本映画発掘シリーズ・其の弐〉
10月21日（水）「忠次活殺剣」18時「第二の母」19時10分
10月22日（木）「さむらひ鴉」18時30分「散り行く大和桜・空閑少佐」19時50分
10月23日（金）「忍術千一夜」18時30分「縷　水戸黄門」19時50分
料金＝1日券＝1000円
〈フィリップ・ガレル監督作品集〉
上映作品＝A「内なる傷痕」B「秘密の子供」C「愛の誕生」
10月28日（水）①A②B③C
10月29日（木）①C②A③B
10月30日（金）①B②C③A
時間＝①15時30分②17時③19時
料金＝1作品1000円
〈アカデミー短編賞東京上映会〉
10月31日（土）「ビザと美徳」
時間＝11時／12時／13時／14時／15時／16時／17時／18時／19時
料金＝1000円（前800円）
問合せ＝03・3291・4339
■日亜修好百周年記念　アルゼンチン映画祭
上映作品＝A「ペテン師」B「トゥ・ザ・ハート」C「英雄たちの夢」
10月26日（月）①A②B
10月27日（火）①C②A③B
10月28日（水）①B②C③A
※28日18時より野谷文昭氏（立教大学教授）と四方田犬彦氏による講演有。
時間＝①13時②15時③19時
料金＝無料
会場＝徳間ホール
問合せ＝03・5420・7101
■武蔵大学白雉祭特別上映
11月3日（火）「月とキャベツ」13時「おかえり」15時〈篠原哲雄監督×篠崎誠監督対談会〉17時
料金＝1000円
会場＝武蔵大学第二小講堂
問合せ＝060・646・5768
■第2回学生映画選手権大会――映画甲子園
11月3日（火）13時
料金＝200円
会場＝明治大学駿河台校舎11号館
問合せ＝010・457・9762
■ジェラール・フィリップ展
※パリのシネマテーク、アビニョンのメゾン・ジャン・ビラールに保管されている衣装、パスポート、免許証、ライター台本など門外不出の遺品を展示。
10月28日（水）～11月3日（火）
時間＝10時～19時30分（最終日は16時終了）
料金＝入場無料
会場＝小田急百貨店新宿店本館9F
問合せ＝03・3715・5758
■中国映画上映会
上映作品＝A「瞳の向こう側」B「戦争子午線」C「草原の覇者・ジンギスカン」D「デビッド・ウーの約束のゴール」E「マカオの恋物語」F「勝者」
10月31日（土）①A②B③C④D
11月1日（日）①A②C③E④F
11月2日（月）①D②A③F④E
11月3日（火）①F②E③D④C
時間＝①10時50分②13時10分③15時30分④18時50分
料金＝1作品券1300円（前1100円）
会場＝シビックホール
問合せ＝03・5689・3763
■凍田ホール　トーク&シネマ
10月24日（土）
「ルイズ　その旅立ち」
トークゲスト＝藤原智子監督
時間＝14時

Digitized by Google

料金＝1800円（㊫1500円）／学生1300円
問合せ＝03・3402・8832

■加藤泰監督作品上映会
10月23日（金）
「源氏九郎颯爽記・白狐二刀流」
時間＝18時30分
料金＝500円（定員先着50名）
会場＝イマジカ
問合せ＝03・3445・8807

■無声映画鑑賞会
10月28日（水）
「林長二郎傑作集」「剌青判官・総集編」
弁士＝澤登翠
時間＝18時30分
会場＝門仲天井ホール
料金＝1800円／学生1600円（㊫1500円）
問合せ＝03・3605・9981

関西

■心斎橋パラダイスシネマ
〈台湾映画祭〉
10月20日（火）①「光陰的故事」②「ある女の一生」③「娃娃（ワワ）と仔豚」④「恐怖分子」⑤「無言の丘」
10月21日（水）①「夫殺し」②「梅花」③「村と爆弾」④「さよなら再見」⑤「多桑—父さん」
10月22日（木）①「大輪廻」②「チュンと家族」③「墓あらし／笛吹きの恋」④「恋人たちの食卓」⑤「赤い柿」
10月23日（金）①「淡水行き最終列車」②「青春神話」③「坊やの人形」④「青春のつぶやき」⑤「非情城市」
10月24日（土）①「梅花」②「龍門客棧」③「俠女 上集」④「俠女 下集」⑤「超級大国民」
10月25日（日）①「海辺の女たち」②「あひるを飼う家」③「さよなら再見」④「藍月」⑤「赤い柿」
10月26日（月）①「多桑—父さん」②「天下第一」③「ある女の一生」④「青春神話」⑤「大輪廻」
10月27日（火）①「坊やの人形」②「墓あらし／笛吹きの恋」③「君を送る心綿々」④「熱帯魚」⑤「非情城市」
10月28日（水）①「我らの隣人」②「路」③「恋人たちの食卓」④「忠列図」⑤「光陰的故事」
10月29日（木）①「バナナ・パラダイス」②「恐怖分子」③「淡水行き最終列車」④「村と爆弾」⑤「無言の丘」
10月30日（金）①「娃娃（ワワ）と仔豚」②「夫殺し」③「チュンと家族」④「原郷人」⑤「河」
時間＝①10時30分②12時40分③14時50分④17時⑤19時10分
料金＝1回券1200円／小人・シニア1000円／「河」1800円（㊫1回券1000円／5回券4500円／「河」1500円）
問合せ＝06・282・1460

■キリンコンテンポラリー・アワード・フィルムフェスティバル98
上映プログラム＝A「金魚の一生」「二人が喋ってる。」B「二人が喋ってる。」C「キュビキュビ予告編」「狂わせたいの」D「A SHORT TRASH VIDEO」「八十年後」「軍装巡礼」E「マリア」「山田君ノ布団」F「Listen to CAMERA」「イタメシの純和風」「ヒトチガイ」「忘れな草子」G「不気味な悲鳴」「マリア」H「不気味な悲鳴」「山田君ノ布団」I「不気味な悲鳴」J「THE HOLE」「case」「ダンスが生まれたところ」「Screaming Videotape」「SPRIT」「赤ずきん～Little Red Riding Hood～」「pivot」「Lost Butterfly」K「Cosmic Dance」「30F」「pivot」「八十年後」L「YOZO」「みどりちゃん」「SPACE GO」「飛び出せー みどりちゃん」「愛は禁断の香り」「ヒトチガイ」「金魚の一生」M「A SHORT TRASH VIDEO」「軍装巡礼」「ジョルジュ・ルース 廃墟から光へ」N「ジョルジュ・ルース 廃墟から光へ」「Cosmic Dance」
10月23日（金）①N②D③J④E⑤F
10月24日（土）①I②F③E④M⑤A
10月25日（日）①E②L③D④B⑤N
10月26日（月）①J②M③G④L⑤K
10月27日（火）①M②K③F④E⑤A
10月28日（水）①D②N③L④B⑤H
10月29日（木）①G②J③N④F⑤D
10月30日（金）①F②D③J④I⑤E
10月31日（土）①I②E③B④K⑤F
11月1日（日）①E②M③K④J⑤L
11月2日（月）①K②G③J④L⑤M
11月3日（火）①E②L③C④K⑤A
11月4日（水）①N②B③D④L⑤H
11月5日（木）①L②G③K④J⑤M
時間＝①11時30分②13時③14時30分④16時⑤17時30分
料金＝無料
会場＝キリンプラザ大阪
問い＝06・212・6578

■シネ・ヌーヴォ
〈インド映画祭1998〉
上映作品＝A「私はピエロ」B「火」C「監インディア」D「雨季」E「ボビー」F「1942・愛の物語」
10月26日（月）②A④B
10月27日（火）①C③B④D
10月28日（水）①B③F④E
10月29日（木）①E③D④F
10月30日（金）①D③E④A
時間＝①12時30分②13時30分③15時45分④19時
料金＝1回券1300円／3回券3000円（㊫1回券1100円）
問合せ＝06・582・1416

中国

■下関アジア映画祭
〈アジアンテイメントー〉
10月24日（土）「ヘア・ドレッサー」11時「私の子供」13時「セイント・クララ」16時「光陰的故事」18時
10月25日（日）「光陰的故事」11時「ラジュー出世する」14時「ヘア・ドレッサー」17時
料金＝1日券1200円／2日券1800円（㊫1日券1000円／2日券1500円）
会場＝下関市民会館
問合せ＝0832・51・1225

■広島映像文化ライブラリー
〈喜劇映画特集〉
10月23日（金）「花嫁は世界一」
10月24日（土）「ニッポン無責任時代」
10月25日（日）「しとやかな獣」
10月31日（土）「吹けば飛ぶよな男だが」
〈1930年代の日本映画〉
11月1日（日）「マダムと女房」
11月5日（木）「東京の合唱」
時間＝10時30分／14時／18時（日曜18時の回なし）
料金＝大人440円／小人220円
問合せ＝082・223・3525

九州

■シネマクラブOITAウィークエンドシアター
10月30日（金）～11月1日（日）
「バルチザン前史」
時間＝30日19時、31日13時30分／16時30分／19時30分、1日11時／14時30分
料金＝1200円（㊫1000円）
会場＝大分映像センター
問合せ＝097・532・2426

■トークライブ～オタクアミーゴス in九州～
11月3日（火）
出演＝岡田斗司夫（東京大学講師）、唐沢俊一（カルト評論家）、眠田直（ゲーム・アニメ作家）
時間＝13時
料金＝3000円（前売りのみ限定200名）
会場＝西新パレス
問合せ＝092・761・0436

Digitized by Google

※劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけ下さい。（10月6日現在）＊印は次回作品。

ご愛読者劇場招待券プレゼントのスケジュール

●ご招待券ご希望の方は本誌挟み込みの（試写会ハガキ）でお申込下さい。しめきりは10月31日消印有効。プレゼントは11月中有効の招待券（ペア）です。

	劇場名	TEL	招待組数	10/20 火	21 水	22 木	23 金	24 土	25 日	26 月	27 火	28 水	29 木	30 金	31 土	1 日	2 月	3 火	4 水	5 木	6 金	7 土	8 日	9 月
銀座	丸の内松竹	03(3214)3366	2	学校Ⅲ																				＊ショムニ
銀座	丸の内ピカデリー1	03(3201)2881	2	シティ・オブ・エンジェル																	＊トゥルーマン・ショー			
銀座	丸の内ピカデリー2	03(3201)2881	2	相続人																				＊ナイトウォッチ
銀座	丸の内ルーブル	03(3214)7761	5	マーキュリー・ライジング																				＊始皇帝暗殺
銀座	松竹セントラル1	03(5550)1631	2	アベンジャーズ				ダイヤルM																
銀座	松竹セントラル2	03(5550)1631	2	TAXi				沈黙のジェラシー																
銀座	松竹セントラル3	03(5550)1631	2	学校Ⅲ																				
銀座	東劇	03(3541)2711	3	フラワーズ・オブ・シャンハイ													＊ジャングル・ジョージ／他							
銀座	有楽町スバル座	03(3212)2826	5	スライディング・ドア											リプレイスメント・キラー									
銀座	銀座シネパトス	03(3561)4660	5	タイタニック																				
銀座	銀座シネパトス	03(3561)4660	5	ムーラン（日本語版）／仮面の男〔入替制〕																				
銀座	銀座シネパトス	03(3561)4660	5	クロスゲージ											サソリ・女囚701号								闇をみつめる瞳	
銀座	シネ・ラ・セット	03(3212)3761	5	マルセイユの恋																				
新宿	新宿ピカデリー1	03(3352)1771	5	シティ・オブ・エンジェル													＊トゥルーマン・ショー							
新宿	新宿武蔵野館	03(3354)5670	5	L.A. コンフィデンシャル																				
新宿	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	シティ・オブ・エンジェル													＊トゥルーマン・ショー							
新宿	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	相続人																	＊ナイトウォッチ			
新宿	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	タイタニック											リプレイスメント・キラー									
新宿	テアトル新宿	03(3352)1846	10	生きない																			〔ジェラールフィリップ映画祭〕	
新宿	新宿昭和館	03(3352)2471	10	宮本武蔵60／大菩薩峠60				緋牡丹博徒・花札勝負／日本任侠伝・喧嘩竜　他					冷血の罠／極道黒社会／CAB					新極道の妻たち／ならず者／他						
渋谷	渋谷松竹セントラル	03(3770)1990	5	学校Ⅲ																				＊ショムニ
渋谷	渋谷ジョイシネマ	03(3462)2539	10	相続人																				
渋谷	渋谷シネパレス	03(3461)3534	10	フラワーズ・オブ・シャンハイ																				
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	犬、走る　DOG RACE																			ハーフ・ア・チャンス	
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	イノセントワールド											ブギーナイツ									
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	アベンジャーズ				ダイヤルM																
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	シティ・オブ・エンジェル													＊トゥルーマン・ショー							
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	学校Ⅲ																				＊ショムニ
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	カンゾー先生																				＊時雨の記
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	プライベート・ライアン																				
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	モンタナの風に抱かれて																				
池袋	テアトルダイヤ	03(3983)9793	5	愛を乞うひと											踊る大捜査線　THE MOVIE									
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	ザ・グリード																				＊アンツ
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	相続人																	＊ナイトウォッチ			
浅草	浅草松竹	03(3841)2022	5	学校Ⅲ																				＊ショムニ
浅草	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	ファイア・ストーム／ボディ・カウント				ナッシング・トゥ・ルーズ／スフィア									ジャッカル／ザ・クリーナー							
浅草	浅草名画座	03(3841)3028	5			必殺！　ブラウン館の怪物たち／難破金融伝　ミナミの帝王8／他			釣りバカ日誌10／暴れ豪右衛門／明治侠客伝・三代目襲名									新座頭市物語・笠間の血祭り／日本女侠伝・血斗みだれ花／他						
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	10	ツインタウン／シューティング・フィッシュ					ジャッカル／レインメーカー							アルビノ・アリゲーター／真夜中のサバナ								
東京	中野武蔵野ホール	03(3389)3301	5	大往生																				＊阿片戦争
東京	自由が丘武蔵野館	03(3717)6341	10	愛を乞うひと											踊る大捜査線　THE MOVIE									
東京	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	リーサル・ウェポン4／スクリーム2											HANA-BI／不夜城									
東京	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	あの胸にもう一度／シューティング・フィッシュ				スウィート・ヒアアフター															タイタニック	
東京	バウスシアター	0422(22)3555	2	マーキュリー・ライジング																				＊始皇帝暗殺
東京	バウスシアター2	0422(22)6631	2	アベンジャーズ				ダイヤルM																
東京	大井武蔵野館	03(3771)4934	10		落第はしたけれど、若き日				淑女と髯／出来ごころ			淑女は何を忘れたか／一人息子				風の中の牝鶏／父ありき					お早よう／早春			

Digitized by Google

	劇場名	TEL	招待組数	10/20 火	21 水	22 木	23 金	24 土	㉕ 日	26 月	27 火	28 水	29 木	30 金	31 土	㊊ 日	2 月	③ 火	4 水	5 木	6 金	7 土	⑧ 日	9 月
東京	キネカ大森	03(3762)6000	5	愛を乞うひと											踊る大捜査線 THE MOVIE									
				タンゴ／恋の邪魔者					イヴォンヌの香り／夢みるシングルス						パトリス・ルコントの大喝采／いとしのエレーヌ			リディキュール／スペシャリスト						
				裏街の聖者						＊チャイニーズ・ゴーストストーリー スーシン														
	亀有名画座	03(3601)3350	10		〔98ピンク映画 上半期傑作選VOL.2〕							〔98ピンク映画 上半期傑作選VOL.3〕							〔98ピンク映画 上半期傑作選VOL.4〕					
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	マッド・シティ／リーサル・ウェポン4														TAXi／スクリーム2 ウワサの真相						
	シネマ・ジャック	0120(198)009		釣りバカ日誌3／4				釣りバカ日誌5／6			釣りバカ日誌スペシャル／7				釣りバカ日誌8／10			釣りバカ日誌9／10	〔松本清張映画祭〕					
	シネマ・ベティ	0120(198)009		大往生				ヒロイン！																
	関内アカデミー劇場	045(261)8913		ビヨンド・サイレンス											ライブ・フレッシュ									
	関内アカデミー2	045(261)8913			女は女である											ミステリアス・ピカソ 天才の秘密								
弘前	弘前マリオン	0172(33)3365	2	シューティング・フィッシュ				女優マルキーズ							普通じゃない							スウィートヒアアフター		
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530	5	オースティン・パワーズ											ハムレット							スライディング・ドア		
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	愛を乞うひと											踊る大捜査線 THE MOVIE									
静岡	静岡ミラノ1	054(253)8758	2	マーキュリー・ライジング																				
	静岡ミラノ2	054(253)2713		相続人／リプレイスメント・キラー																				
	静岡ミラノ3	054(253)2713		アベンジャーズ／ディープ・インパクト																				
	静岡オリオン座	054(252)3652		プライベート・ライアン																				
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	夢翔る人 色情男女				ヒロイン！							アンジェリク									
	ヘラルドシネプラザ1	052(241)1581	10	ムーラン																		＊アンツ		
	ヘラルドシネプラザ2	052(241)1581		ザ・グリード													＊リプレイスメント・キラー							
	ヘラルドシネプラザ3	052(241)1581		ベル・エポック																		＊生きない		
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815		キャラクター 孤独な人の肖像																	＊ブギーナイツ			
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815		スライディング・ドア																＊ダロウェイ夫人				
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5	アンナ																	昼間は休館	ヴィゴ		
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	風の歌が聴きたい				学校Ⅲ																
	今池国際劇場	052(732)1880	5	愛を乞うひと											踊る大捜査線 THE MOVIE									
大阪	テアトル梅田	06(359)1080	10	Jam				イヤー・オブ・ザ・ホース																
				CUBE																		＊ニルヴァーナ		
	シネ・ヌーヴォ梅田	06(365)0094	5	〔黒木和雄特集〕				ボディ・カウント																
	国名小劇	06(213)9229	3	原色パリ図鑑																				
	シネ・ヌーヴォ	06(582)1416	5		〔第2回大阪シネマ塾〕				〔インド映画祭1998 Part.1〕						〔インド映画祭1998 Part.2〕							〔メルヴィル特集〕		
	第七藝術劇場	06(302)2073	5	〔侯孝賢アーリーディズ〕																				
近畿	朝日シネマ1	075(255)6760	5	北京のふたり											ヴィゴ／生きない〔入替制〕									
	朝日シネマ2	075(255)6760		ビヨンド・サイレンス				パーフェクト・サークル														〔味覚の街・パリ〕		
	祇園会館	075(561)0160	5	ジャッカル／ウワサの真相 ワグ・ザ・ドッグ											休館	〔祇園をどり〕								
	アサヒシネマ1	078(251)9877	5	ベル・エポック											キャラクター 孤独な人の肖像									
	アサヒシネマ2	078(251)9877		相続人																				
	アサヒシネマ3	078(251)9877		ヴィゴ											SF サムライ・フィクション／恋するシャンソン									
広島	広島サロンシネマ1	082(241)1781	10	タイタニック											L.A. コンフィデンシャル									
	広島サロンシネマ2	082(241)1781		パーフェクト・サークル				SF サムライ・フィクション														ウェルカム・トゥ・サラエボ		
	広島シネツイン	082(241)7711		ニューヨーク・ディドリーム				ムトゥ 踊るマハラジャ														〔アジア映画フェスティバル〕		
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10	アイス・ストーム											ニューヨーク・ディドリーム									
	シネサロン・パヴェリア	092(852)5650	10	ダロウェイ夫人											がんばっていきまっしょい									

◆次の各劇場へ今号の本誌扶み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●高知松竹●あたご劇場●高知にっかつモデル劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●グランド松竹●ライオンカン●高松東宝（高松キネ旬友の会協力）　【松山】シネ・リエンデ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡松竹ピカデリー●ニュー大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場●西新アカデミー（福岡キネ旬友の会協力）

Digitized by Google

Present

招待券

TAMA CINEMA FORUM

■多摩市　パルテノン多摩小ホール
■11月28日(土)・29日(日)
■招待券

11月21日から29日まで開催される第8回映画祭 TAMA CINEMA FORUM。28日の“魅惑のインド娯楽映画特集”「この命踊りに捧げて」「ボンベイ」「ラジュー出世する」＆講演と、29日の“日本映画をどうするのか'98”「不夜城（予定）」「がんばっていきまっしょい」「犬、走る」＆シンポジウムに。希望日を明記して下さい。

10名(各5名)

試写会

ノックオフ

■東京　銀座ガスホール
■11月11日(水)
■6時30分開場／7時開映

1997年、返還直前の香港で、謎の一団が超小型爆弾を海外に持ち出そうとしていた。それを阻止しようとするCIAと香港警察。実業家レイは、その抗争の真っ只中に巻き込まれるが……。ジャン＝クロード・ヴァン・ダム主演、ツイ・ハーク監督のアクション大作。10月30日必着。　〈ギャガ提供〉

50名(25組)

試写会

ナイトウォッチ

■東京　よみうりホール
■11月11日(水)
■6時開場／6時30分開映

病院で夜警のアルバイトを始めたマーティン。連続殺人事件の犠牲者の死体が運ばれてきてから、病院内で奇怪な事件が頻発するようになる。ニック・ノルティ、パトリシア・アークェット、ユアン・マクレガー共演、スティーヴン・ソダーバーグ監督のサスペンス。10月30日必着。　〈松竹富士提供〉

50名(25組)

©浦沢直樹・勝鹿北星／小学館・バップ・NTV

MASTER　キートン
主題歌CD　Sampler

88年から94年にかけて『ビッグコミックオリジナル』で連載された浦沢直樹による国際派サスペンス漫画『MASTER キートン』がテレビアニメに。10月5日より日本テレビ系で毎週月曜日深夜24時50分から放送開始されたのを記念して、菫島邦明作曲のオープニング・テーマ、話題のバンド Blue が手掛けた主題歌のCDを。

〈バップ提供〉

5名

ＥＲ　緊急救命室
緊急究明本ビデオ

本誌9月下旬号でも大特集した話題のドラマ『ＥＲ　緊急救命室』。サード・シーズンのビデオが発売された今、見たい、でも一番最初から見るのはちょっとツライ、という方のための“サード・シーズンからでもハマれる緊急テキスト”ビデオ。これを見ればⅠ・Ⅱシーズンをスキップしても大丈夫（本当は見た方が面白いけど）。

〈ワーナー・ホーム・ビデオ提供〉

5名

ジャッカル
ビデオ・レンタルリリース記念テレカ

ＦＢＩとロシア情報局を敵にまわす謎の暗殺者“ジャッカル”と、元ＩＲＡの“伝説のスナイパー”デグランが、息もつかせぬ攻防戦を繰り広げるサスペンス・アクション。ブルース・ウィリスとリチャード・ギア、そしてシドニー・ポワチエが共演した話題作が、11月13日にビデオ・レンタル・リリースされるのを記念して。〈東宝提供〉

5名

●プレゼントの応募は本誌綴じ込みハガキでどうぞ。10月20日必着です。

編集部だより

■10月上旬号新作グラビア中、「ポルノスター」の撮影・笠松則通氏の名前を誤記しておりました。また、10月下旬号のプレゼント欄で、「ゲンスブール・セレクション」と「アルマゲドン・オリジナルグッズ」の写真が入れ替わっていました。読者の皆様ならびに関係者の方々にご迷惑をおかけした事をお詫び致します。

出版事業部だより

■東京国際映画祭も目前。映画の秋にぴったりの3冊を10月末に出版します。国内外で活躍中の現役プロデューサーの実態に迫る『映画プロデューサーが面白い』、戦前から現代までの映画賞・映画祭のデータを網羅した『映画賞・映画祭データブック』、『ジェラール・フィリップ写真集』。お楽しみに！

営業部だより

■映画監督のアニエス・ヴァルダが、50年代に舞台俳優として活躍していたジェラール・フィリップをとらえた、世界初公開の写真も含めた『ジェラール・フィリップ写真集』を10月27日に発売致します。お近くの書店又は、小社営業部までお問い合わせ下さい。

Digitized by Google

キネマ旬報
平成10年11月上旬号
No.1269

発行人
土橋寿男（黒井和男）

編集主幹
植草信和

編集長
青木眞弥

副編集長
関口裕子

編集スタッフ
金田裕美子
前野裕一
志水邦明

広告部長
柳澤茂喜

広告スタッフ
島崎智朗

表紙デザイン
峰岸孝之

レイアウト
島岡進
梅津由子

発行
株式会社キネマ旬報社
〒112-8502
東京都文京区小石川1-21-14
小石川吉田ビル　2F
TEL　03-3815-7131
FAX　03-3815-7140
振替東京00100-0 182624

印刷・製本
凸版印刷株式会社

ISSN　1342-5412

本誌記事・写真の無断転載を禁じます。

編集後記

■ライターのSさんから、脚本家・森岡利行氏が主催する劇団STRAYDOGの公演に誘われ、久しぶりに活〝劇〟を堪能。映画でも活躍される菅田俊さん木下ほうかさんなど個性派から若手まで役者が粒揃いだったこともあり場内は超満員、客席も熱い！　一時の小劇場ブームを思い起こしました。後から聞いた話では連続公演した「暗闇のレクイエム」が来年早々に映画化されるということで、こちらもぜひ期待したい。　**志水**

■森卓也さんの批評集『映画この話したっけ』を読む。初出時に読んでいたものが多いから読み返すという形になったのだが、（自分が）映写について興味をもったのも（一般読者に向けてこれだけ解かりやすく、くわしい解説は他にないでしょう）、TVドラマを軽視しないのも、森さんの影響だったのだと気づく。本書はもちろん、映画やアニメーションに関しての言及も興味深いものばかりで、映画ファン必読の一冊であります。**前野**

■うちのベランダの手摺りを枝をくわえたヤマバトが歩いている姿を何度も目撃した。ふと見たら目の前の桜の木に巣があった。数日後、卵があった。ヤマバトが台風にもめげず卵を温めていた。さらに数日後、三羽のヒナが孵っていた。黄色っぽいポワポワの毛、と思っていたら、いつの間にかヤマバト模様になっていた。親がヒナに餌を与える姿が面白いので、ビデオカメラをひっぱり出してきた。気分はドキュメンタリー作家。**金田**

■最近映画祭づいている。先日しんゆり映画祭の「萌の朱雀」の上映に続く、仙頭監督を囲むトークに招待していただいた。トークは、進行役であったボランティアスタッフの皆様の、同作への熱い思いが炸裂し、血肉の通う興味深いものとなった。皆さん映画が好きだという。そんな市民が集まって、名画座についての講演会や、イヤホーンガイドや車椅子が使える場所での上映を企画した。映画祭の原点をみたような気がした。**関口**

■去年に続いて今年も釜山国際映画祭へ行って来た。前半に開催された、アジア各国の映画作家や製作・配給スタッフが集まったPPP（プサン・プロモーション・プラン）というシンポジウム&マーケットについては、実りある話が展開されたと聞いたが、後半からの参加だったので覗けなかった。だがもちろん映画上映を見るだけでも、あいにく雨続きだったにも関わらず、街の中心部はもう映画祭一色という感じのすごい熱気を今年も感じた。なかでもとりわけ20数本上映された日本映画はどれも人気だった。その中の1本として上映された「愚か者　傷だらけの天使」の阪本順治監督も釜山入りしていて、実は毎晩のように阪本組一行について回りご迷惑をおかけしたのだが、1500席ほどの映画館を満員にした若者たちが真木蔵人の一挙一動に大ウケする様子は実に心地良いものでした。ただし上映のコンディションはひどく、唯一残念だった。

■映画祭がちょうど終了した後に韓国の金大中大統領が来日し、日本文化開放の方針を日韓共同宣言の中で表明した。これまで韓国国内では公式には禁止されていた日本映画の上映も、今後は段階的に進んでいくだろうし、韓国映画もより身近なものになるし、共同製作の可能性も拡がる。いずれにしろこれからしばらくは韓国の動向がますます注目されるだろう。　**青木**

次号予告

11月下旬号［No.1271］／11月5日発売／定価820円（税込）

巻頭特集●「X―ファイル ザ・ムービー」
クリス・カーター（プロデューサー・原案）、ロブ・ボーマン（監督）インタビュー

Face ●永瀬正敏　ピンナップ●チョウ・ユンファ
インタビュー●長曽我部蓉子、尾藤桃子、ハーモニー・コリン、野村恵一、たむらしげる、大河内奈々子、合津直枝、コン・リー、陳凱歌
作品特集●「トゥルーマン・ショー」「落下する夕方」「始皇帝暗殺」
特別企画●ジェラール・フィリップ　イラスト●阿部真理子
連載開始2回目●『嘘つき映画館／シネマほらセット』橋本治
映画祭レポート●ヴェネチア国際映画祭、ロカルノ国際映画祭

Digitized by Google

キネマ旬報社

映画プロデューサーが面白い

世界各国で注目されつつある日本のインディペンデント映画。それらの作品の製作に尽力を尽くすプロデューサーたちにスポットを当て、映画製作の秘密について多角的に迫ったHow To & ドキュメント。巻末には、映画館・入場者数の推移、各年度興業記録、10大ニュース、キネマ旬報ベスト10なども収録し、資料性も高い本となっております。

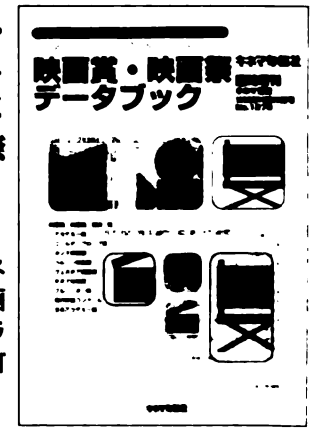
プロデューサー業総論 ―原正人（「乱」「不夜城」）
日本映画プロデューサーの現在
増田久雄（「ラジオの時間」）
仙頭武則（「萌の朱雀」「リング」「らせん」）
西村隆（「20世紀ノスタルジア」）
桝井省志（「Shall we ダンス」「がんばっていきまっしょい」）
森昌行（「キッズ・リターン」「HANA－BI」）
国際映画をプロデュースする日本人
井関惺（「クライング・ゲーム」「スモーク」「始皇帝暗殺」）
独立プロダクションの経営とは ―桝井省志
ドキュメント　映画「完全なる飼育」プロデュース密着取材
1970年以降の日本映画プロデューサー ―大高宏雄・黒井和男
サンダンス・フィルム・フェスティバル・イン・トーキョー97
インディペンデント・プロデューサー・セミナー講演録
アメリカのインディペンデント・フィルム・メーカーの状況
期待されるプロデューサー像

キネマ旬報社編
10月下旬発売
A５判■240頁
予価1800円＋税

キネマ旬報 増刊 映画祭・映画賞 データブック

世界各国及び日本国内の映画祭・映画賞のデータを年度毎に見開きで掲載。各映画祭や映画賞についての歴史、参加した映画人のコラム、その年に起こった出来事などを交えて、映画祭・映画賞を俯瞰できる構成となっております。巻末には各賞ごとにまとめた一覧表も収録。本年も開催される東京国際映画祭の受賞データも収録！

【収録　映画賞・映画祭】
アカデミー賞／ヴェネチア国際映画祭／ゴールデングローブ賞／カンヌ国際映画祭／キネマ旬報賞／毎日映画コンクール／ブルーリボン賞／日本アカデミー賞／ニューヨーク映画批評家賞／ベルリン国際映画祭／モスクワ映画祭／カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭／フランス・シネマ大賞／ルイ・デリュック賞／ジュルジュ・サドゥール賞／ジャン・ヴィゴ賞／ヨコハマ映画祭／報知映画賞／映画芸術ベストテン・ワーストテン／東京国際映画祭



キネマ旬報社編　B５判／並製／240頁／予価2500円（税込）

株式会社キ[redacted]しくは小社営業部（03-3815-7131）までご注文ください。

Digitized by Google

Lie lie Lie ／「マルタイの女」と伊丹十三監督／ウォン・カーウァイ監督インタビュー

●1236・10月下旬号　☆820円
「フェイク」＋選ばれし男たち／ボルケーノ／マーティン・シャーマンの世界／三谷幸喜監督作「ラヂオの時間」撮影現場レポート①

●1237・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ①『リュック・ベッソン』／リュック・ベッソン完全データ他

●1238・11月上旬号　☆820円
東京日和／萌の朱雀／バウンス ko GALS／黒い十人の女／「ラヂオの時間」撮影現場レポート②

●1239・臨時増刊　☆2200円
〈中華電影完全データブック〉
中国語圏映画全封切リスト／中華電影人名録

●1240・11月下旬号　☆820円
ラヂオの時間／ＮＹ検事局／喝采の扉［虎度門］／時をかける少女／中国映画祭97／インタビュー：北野武

●1242・12月下旬号　☆820円
セブン・イヤーズ・イン・チベット／スリング・ブレイド／阿片戦争／インタビュー：松田美由紀・大林宣彦

●1243・臨時増刊　☆1600円
〈天晴れ！時代劇〉
蔦屋錦之介メモワール／勝新太郎メモワール／時代劇を生きた人々

1998

●1244・1月上旬号　☆860円
新春中華圏映画大特集／ＣＵＲＥキュア／ピースメーカー／北京原人－Who are you？／インタビュー：ブラッド・ピット

●1245・1月下旬号　☆820円
ＨＡＮＡ－ＢＩ／桜桃の味／ラブ＆ポップ／グリッドロック／城戸賞受賞シナリオ「砂の蝶」／インタビュー：吉岡秀隆

●1246・2月上旬号　☆820円
フェイス／オフ／ハムレット：映画とシェイクスピア／Ｇ．Ｉ．ジェーン／コップランド

●1247・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ②『北野武』
対談：北野武×淀川長治／北野映画大事典他

●1248・2月下旬号〈決算特別号〉☆1300円
97年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1249・3月上旬号　☆820円
映画の用心棒　追悼：三船敏郎／「ユキエ」とこわれゆく女たち／アミスタッド／台湾映画祭／PERFECT BLUE

●1250・3月下旬号　☆820円
俳優が監督するとき／追悼　伊丹十三の記録／グッド・ウィル・ハンティング旅立ち／銀河鉄道９９９エターナルファンタジー／Ｆ

●1251・4月上旬号　☆860円
エイリアン４／オスカー・ワイルド／ドーベルマン／エンド・オブ・バイオレンス／シーズ・ソー・ラブリー

●1252・4月下旬号　☆820円
ジャッキー・ブラウン／ＳＡＤＡ／恋愛小説家／マッド・シティ／上海グランド／ジャンク・フード／ロッテルダム国際映画祭

●1253・増刊　☆4400円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1998〉
'97年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果

●1254・5月上旬号　☆820円
第70回アカデミー賞のすべて／スターシップ・トゥルーパーズ／ディアボロス　悪魔の扉／連載対談再開：和田誠×三谷幸喜

●1255・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ③『クエンティン・タランティーノ』／タランティーノ大事典他

●1256・5月下旬号　☆820円
ブルース・ブラザース2000／バタフライ・キス／友情Friend Ship／絆／ソウル・フード

●1257・6月上旬号　☆820円
シネ・チャイナ・ビッグバン／バリー・レヴィンソン研究／「プライド　運命の瞬間」をめぐって／ボクサー／ラブ・レター

●1258・6月下旬号　☆820円
レインメーカー／中国の鳥人／大いなる遺産／真夜中のサバナ／ツイン・タウン／ライアー／スペイン映画の魅力

●1259・7月上旬号　☆860円
普通じゃない／インド映画特集／Ｌ．Ａ．コンフィデンシャル／ディープ・インパクト／愚か者　傷だらけの天使／愛の破片

●1260・7月下旬号　☆820円
GODZILLA（ゴジラ）／ブルガサリ／ねじ式／アンラッキ・モンキー／キリコの風景／追悼：フランク・シナトラ、前田陽一

●1261・8月上旬号　☆820円
「仮面の男」と新世紀映画の旗手《俳優》／ニュー・エイジ・ホラー再考／ウェルカム・トゥ・サラエボ／ディカプリオ・ピンナップ

●1260・臨時増刊　☆2100円
〈黒澤明と木下恵介〉
特別対談：山田洋次×佐藤忠男／初公開未映画化シナリオ「どら平太」他

●1263・8月下旬号　☆860円
ガンダム20年あるいはアニメーション1998／踊る大捜査線撮影現場レポート①／TAXi／ＳＦ　サムライ・フィクション

●1264・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ④『ジェームズ・キャメロン』／ジェームズ・キャメロン完全データ

●1265・9月上旬号　☆820円
ボーダーレス・アクターズ：金城武、チョウ・ユンファ他／リメイク映画を愉しむ方法／イヤー・オブ・ザ・ホース／踊る大捜査線②

●1266・9月下旬号　☆820円
『ＥＲ』と外国ＴＶ映画の現在／現代ピンク映画考：ブギーナイツ、夢翔る人　色情男女／生きない／踊る大捜査線③

●1267・10月上旬号　☆820円
プライベート・ライアン／愛を乞うひと／従妹ベット／がんばっていきまっしょい／ＤＶＤ徹底検証／踊る大捜査線④

●1268・10月下旬号　☆860円
追悼　黒澤明／フラワーズ・オブ・シャンハイ／犬、走る　DOG RACE／踊る大捜査線⑤

■踊る大捜査線　THE MOVIE

●1263・'98・8月下旬号　☆860円
踊る大捜査線撮影現場レポート①

●1265・'98・9月上旬号　☆820円
踊る大捜査線撮影現場レポート②

●1266・'98・9月下旬号　☆820円
踊る大捜査線撮影現場レポート③

●1267・'98・10月上旬号　☆820円
踊る大捜査線撮影現場レポート④

●1268・'98・10月下旬号　☆860円
踊る大捜査線撮影現場レポート⑤

●**踊る大捜査線湾岸警察署事件簿**　☆2500円
全話シナリオ完全収録＆解説　◇送料450円

■ロバート・レッドフォード

臨時増刊〈ＳＵＮＤＡＮＣＥ／レッドフォードの映画に賭ける夢〉　☆1020円

■今村昌平

●1224・'97・6月上旬号　☆820円
「うなぎ」と今村昌平監督

■本欄掲載以外の号の内容リストもございますので、御希望の方は100円切手を同封の上お申し込み下さい。

■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または本誌挟み込みの郵便振替用紙にて、御希望の号数、御住所、御氏名を明記のうえ、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店の映画書コーナーにてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

札幌市　パルコＢＣ冨貴堂
東京都　八重洲ＢＣ本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・三省堂書店渋谷店・大盛堂書店・パルコＢＣ渋谷店あおい書店六本木店・ブックストア談原宿店・芳林堂書店池袋本店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋本店・紀伊國屋新宿南店・アイブックス成城店・パルコＢＣ吉祥寺店・阪急ブックファースト渋谷店・シネシティ
横浜市　有隣堂書店横浜東口ルミネ店・有隣堂書店イセザキ本店
名古屋　ちくさ正文館本店・パルコＢＣ名古屋・ヴィレッジヴァンガード生活倉庫店
京都市　駸々堂京宝店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ
金沢市　ＧＲＯＯＶＥ！金沢本店
神戸市　ジュンク堂書店サンパル店・駸々堂神戸三宮店
広島市　パルコＢＣ広島店
福岡市　リブロ福岡店

Digitized by Google

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価　送料は各120円
2／下、臨時増刊は160円

1986

●942・8月下旬号　☆735円
松竹創立90周年記念号

1989

●1000・1月上旬号　☆840円
1000号記念／日本映画史上ベスト・テン

●1001・1月下旬号　☆840円
1000号記念／外国映画史上ベスト・テン

1994

●1125・2月下旬号〈決算特別号〉☆1223円
93年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1136・臨時増刊　☆1529円
〈小津と語る〉シナリオ「瓦版かちかち山」「お茶漬の味」「月は上りぬ」「青春放課後」

●1138・8月上旬号　☆836円
平成狸合戦ぽんぽこ・スタジオ・ジブリ8年の歩み／80年代と90年代のゴダール／青いパパイヤの香り

●1140・9月上旬号　☆836円
トゥルーライズ／ウディ・アレン研究／北朝鮮映画事情

●1142・10月上旬号　☆866円
四十七人の刺客／二大監督研究・ジャン・ルノワールとロバート・オルトマン

●1143・10月下旬号　☆836円
未来は今／ナイトメア・ビフォア・クリスマス／ソクーロフと現代ロシア映画／フォー・ウェディング

●1147・11月下旬号　☆836円
MGMミュージカル／マノエル・デ・オリヴェイラ／石井竜也撮影ルポ

●1149・12月上旬号　☆836円
トリュフォー特集／今そこにある危機／オリーブの林をぬけて

●1150・12月下旬号　☆836円
河童／酔拳2／34丁目の奇跡

1995

●1152・1月下旬号　☆836円
フォレスト・ガンプ／東京兄妹／東京デラックス

●1154・2月下旬号　☆1325円
94年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1157・4月上旬号　☆866円
白い馬／クイズ・ショウ／中国映画の全貌

●1164・7月上旬号　☆866円
ダイ・ハード3／学校の怪談&トイレの花子さん／ポール・ニューマン特集／レニ

●1166・臨時増刊　☆1529円
宮崎駿・高畑勲とスタジオジブリのアニメーションたち　押井守語る／全作品解説

●1167・8月上旬号　☆836円
ウォーターワールド／ポカホンタス／レッド・ブロンクス／エドワード・ヤンの恋愛時代

●1168・臨時増刊　☆1529円
戦争映画大作戦　史上最大の作戦／コンバット／想い出の戦争映画を語る

●1170・9月上旬号　☆836円
マディソン郡の橋　野球映画特集　幻のオーソン・ウェルズ映画

●1173・臨時増刊　☆1631円
世界映画オールタイムベストテン
映画生誕100年記念特別号①

●1174・10月下旬号　☆836円
クリムゾン・タイド／スモーク　ポストマン／眠れる美女

●1176・臨時増刊　☆1631円
日本映画オールタイムベストテン〉
映画生誕100年記念特別号②

●1178・12月上旬号　☆836円
恋愛映画大特集／特別企画リュミエールとメリエス

1996

●1184・2月下旬号〈決算特別号〉☆1325円
95年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1185・3月上旬号　☆836円
ニクソン／ジェラール・フィリップ映画祭／KYOKO／愛と哀しみの邦題

●1186・3月下旬号　☆836円
ブロークン・アロー／トイ・ストーリー／ダニエル・シュミット監督研究

●1190・増刊　☆4282円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1996〉
'95年公開映画全記録／米国・日本配収ベストテン／映画祭受賞結果

●1192・5月下旬号　☆866円
スクリーンを彩る若手女優たち／アンカーウーマン／ピクチャープライド／ルネ・クレマン、クシシュトフ・キェシロフスキ追悼

●1193・6月上旬号　☆866円
スクリーンで闘う若手男優たち／いつか晴れた日に／必殺！主水死す／白い嵐／和田誠×三谷幸喜／林海象×ジェームス小野田

●1194・6月下旬号　☆836円
フロム・ダスク・ティル・ドーン／映画業界就職ガイド／ゲット・ショーティ／女人，四十。／カンヌ国際映画祭レポート

●1199・8月下旬号　☆866円
上半期映画決算／イレイザー／シクロ／ジャパニーズ・ホラー／パトリス・ルコント

●1200・9月上旬号　☆836円
ACRI／愛のめぐりあい／栄光と狂気／八つ墓村・撮影現場豊川悦司／石井竜也監督インタビュー／日本映画プロデューサーは今

●1201・9月下旬号　☆866円
追悼・羅美清／ウォン・カーウァイ監督大研究／リービング・ラスベガス

●1202・10月上旬号　☆836円
スワロウテイル／ザ・ロック／ティン・カップ／訣別の街／恋の力学／東京国際映画祭

●1205・11月上旬号　☆866円
八つ墓村／豊川悦司ピンナップ／関西映画ガイド／クロッシング・ガード／ザ・ファン

●1206・11月下旬号　☆836円
インデペンデンス・デイ／ファーゴ／ルイ・マルの軌跡／パリのレストラン／弾丸ランナー／アトランタ・ブギ

●1207・12月上旬号　☆836円
日本映画は越境する／クリスマス黙示録／クライング・フリーマン／追悼　藤子・F・不二雄／天海祐希インタビュー／ブラック・ジャック

●1208・臨時増刊　☆1020円
SUNDANCE／レッドフォードの映画に賭ける夢　サンダンス・フィルム・フェスティバル大特集

●1209・増刊　☆3262円◇送料380円
アニメ・データ・ブック1996　テレビ・オリジナルビデオ・映画の1995年のアニメーションのすべてを網羅

●1210・12月下旬号　☆836円
アル・パチーノのリチャードを探して／シェイクスピア・ブーム／追悼　小林正樹／誘惑のアフロディーテ

1997

●1211・1月上旬号　☆866円
虹をつかむ男／デイライト／花の影／秘密と嘘／竹中直人／アンナ・パキン

●1213・2月上旬号　☆836円
マイ・ルーム／エビータ／クラッシュ／ある貴婦人の肖像

●1214・2月下旬号〈決算特別号〉☆1325円
96年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1215・増刊　☆2450円◇送料380円
〈戦後キネマ旬報ベスト・テン全史〉
1946年度～1996年度まで収録

●1216・3月上旬号　☆836円
マーズ・アタック！／ジャック／聖闘間／ユメノ銀河／追悼・マルチェロ・マストロヤンニ

●1218・3月下旬号　☆836円
新世紀エヴァンゲリオン劇場版　シト新生／ジャン・ルノワール映画祭／シャイン

●1219・4月上旬号　☆866円
ロミオ&ジュリエット／スリーパーズ／そして僕は恋をする／太陽の少年

●1221・5月上旬号　☆850円
傷だらけの天使／ゴールデン・ウィーク映画ガイド／第69回アカデミー賞／田口トモロヲ隔号新連載開始／香取慎吾インタビュー

●1222・増刊　☆4300円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1997〉
'96年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果

●1223・5月下旬号　☆820円
スター・ウォーズ　ルネッサンス／失楽園／八日目／瀬戸内ムーンライト・セレナーデ

●1224・6月上旬号　☆820円
ザ・エージェント／目撃／「うなぎ」と今村昌平監督／追悼・杉村春子・田中友幸・田村孟・田山力哉

●1225・6月下旬号　☆820円
誘拐／ピーター・グリーナウェイの枕草子／東京夜曲／萬屋錦之介・追悼と再発見

●1227・臨時増刊　☆1800円
〈テレビの黄金伝説　外国テレビドラマの50年〉ジャンル別年代史／TV映画人物事典

●1228・7月下旬号　☆820円
20世紀ノスタルジア／ロスト・ワールド／ラリー・フリント／追悼　キン・フー③／インタビュー：ブラッド・レンフロ／西田尚美

●1229・8月上旬号　☆820円
アニメーション1997・夏：もののけ姫、ジャングル大帝他／作家研究：マイケル・チミノ学校の怪談3／カンヌ映画祭レポート

●1230・臨時増刊　☆1800円
〈ブルース・リー・リターンズ・超人伝説〉
「燃えよドラゴン」シナリオ完全収録／インタビュー：チャウ・シンチー、ドニー・イェン他／対談・平岡正明×内藤誠

●1231・8月下旬号　☆860円
上半期映画界決算／スピード2／セドリック・クラピッシュ監督研究／追悼：役者魂勝新太郎／追悼・苦見有弘

●1232・9月上旬号　☆820円
フィフス・エレメント／インタビュー岸谷五朗／追悼特集　アメリカの心と魂：ジェームズ・スチュアートとロバート・ミッチャム

●1233・臨時増刊　☆1600円
〈宮崎駿と「もののけ姫」とスタジオジブリ〉対談：宮崎駿×佐藤忠男／宮崎アニメのヒロインの系譜／スタッフインタビュー他

●1234・9月下旬号　☆820円
ブエノスアイレス／世界中がアイ・ラブ・ユー／私たちが好きだったこと／愛する

●1235・10月上旬号　☆860円

Digitized by Google

THE 2nd KINEJUN PRODUCER SEMINAR

第2回キネマ旬報 プロデューサーセミナー

参加者募集のご案内

98年11月29日(日)9：00〜18：00

池袋コミュニティ・カレッジ

参加パネラー（予定）

井関　惺　「始皇帝暗殺」
一瀬隆重　「リング2」
河井真也　"Peach"「BEAT」
佐谷秀美　「アンラッキーモンキー」
李　鳳宇　「のど自慢」

「のど自慢」鑑賞／インディペンデント作品「のど自慢」にみる、大映画興行会社との関係／国際合作プロデュースの実際／映画を中心としたソフトの企画開発／参加者企画のデベロッティング／交流パーティ

キネマ旬報社では、プロデューサーをめざす方々の為に、「第2回キネマ旬報・プロデューサー・セミナー」を開講します。このセミナーは、内外で活躍するプロデューサーを講師に招き、映画製作の現状、ケース・スタディの具体例を解説すると共に、参加者の企画の検討も行うなど、新しいタイプのセミナーです。

〈開講概要〉
主催：キネマ旬報社　協力：池袋コミュニティ・カレッジ（西武百貨店）
会場：池袋コミュニティ・カレッジ（上映のみ池袋地区映画館）
受講料：15,000円（税別）［交流パーティは別途料金］
申し込み先：キネマ旬報社映像事業部　〒112-8502（弊社専用郵便番号）
TEL03-3815-7143　FAX03-3815-7140
申し込み受付期間：98年10月5日（月）〜98年11月20日（金）
受講料に含まれる内容：セミナー受講、「のど自慢」鑑賞（交流パーティは別途料金）
交流パーティ：参加希望の方は下記の申込表にご記入ください。参加費は3500円で受講料振り込み時にご一緒にお送り下さい。

〈セミナー・プログラム〉
前説・試写「のど自慢」（映画館）
セミナー・プロデュース企画意図（以下、池袋コミュニティ・カレッジ）
インディペンデント作品「のど自慢」にみる、大映画興行会社との関係
パネラー　李　鳳宇
国際合作プロデュースの実際　パネラー　井関惺
映画を中心としたソフトの企画開発パネラー　河井真也
パネルディスカッション
これからのプロデューサーに求められる能力とは
河井真也、一瀬隆重、佐谷秀美
参加者企画のデベロッティング
河井真也、一瀬隆重、佐谷秀美
交流パーティ

参加申し込みの方は、下の申込用紙に必要事項をご記入の上、FAX又は郵便にて事務局までお送り下さい。おり返し、受付確認のご連絡をいたします。ご不明な点がありましたら、事務局までご連絡ください。なお、定員になり次第、締め切りとさせて戴きますのでご了承ください。
お問い合わせ先：キネマ旬報社プロデューサー・セミナー事務局
TEL 03-3815-7143　FAX 03-3815-7140
〒112-8502 東京都文京区小石川1-21-11小石川古田ビル

フリガナ 氏 名		年齢	
住所(郵送先)		交流パーティ	参加　不参加
会社・学校名		参加希望人数	
電話No.		FAXNo.	

Digitized by Google

史上空前のスケール、感動のドラマ。魂を揺さぶる、2時間40分。

The First Emperor

始皇帝暗殺

SHIN CORPORATION and LE STUDIO CANAL+ present NEW WAVE CO. and BEIJING FILM STUDIO production a CHEN KAIGE film "THE ASSASSINATION OF THE FIRST EMPEROR" Gong Li, Zhang Fengyi, Li Xuejian, Sun Zhou, Lu Xiaobe, Wang Zhiwen, Chen Kaige, Gu Yongfei, Zhao Benshan, Ding Haifeng, screenplay by Chen Kaige, Wang Peisang, director of photography Zhao Fei, production designer Tu Juhua, recorded by Tao Jing, edited by Zhou Xuixia, music by Zhao Jiping, costume designer Ma Xiaoman, associate producers Philip Lee, Sunmin Park, executive producers Tsuguhiko Kadokawa, Hiromitsu Furukawa, Han Sanpung, produced by Chen Kaige, Shirley Kao, Suoru Iseki, directed by Chen Kaige

陳凱歌 監督作品

壮絶に生き、壮絶に戦い、壮絶に愛すると、
魂は、こんなにも哀しい。

配給：日本ヘラルド映画［日本・中国・フランス・アメリカ合同合作映画］

11/14(土)より超拡大ロードショー

東京 丸の内ルーブル　大阪 梅田東映パラス　名古屋 グランド1　福岡 中洲大洋　札幌 ピカデリー　他、全国松竹・東急洋画系にて

［前売鑑賞券絶賛発売中］

Digitized by Google

美になる
妖になる

スペシャル メイクアップ・アーティスト科
平成11年4月生願書受付中
ビューティー・アートメイク科（共に修学2年）

学校法人 大学講座グループ
認定CG教育校
（CG-ARTS協会認定）
YAG 代々木アニメーション学院

0120-310-042（才能を世に）
FAX 0120-310-595（才能すごくいい）
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-20-3-KJ-10 代々木アニメーション学院
URL http://www.yag.ac.jp/ E-Mail yag_info@po.infosphere.or.jp

もっと面白く「SFXスペシャル・セミナー in 大阪」が
今年12月20日(日)に来る。
場所／YAG代々木アニメーション学院・大阪校、無料。
現役SFXアーティストになる「ニューエストな魅力ワザ」を伝授。

無料 入学案内書進呈中
ご希望の方は、ハガキに①住所②氏名（フリガナ）③TEL④年令⑤学年（職業）⑥「スペシャル／ビューティー」と書いて、上記住所へどうぞ。

雑誌 20721-11/1 Printed in Japan 定価820円 本体781円 T1120721110822

Digitized by Google

笑いとスリルとサスペンス！

豪華キャストで贈る、三谷コメディーの決定版！ LD・ビデオ好評発売中!!

97年度各映画賞総ナメ！

日刊スポーツ映画大賞
助演男優賞
助演女優賞

ブルーリボン賞
新人賞（三谷幸喜）
助演男優賞
日本映画ベストテン選出

ゴールデンアロー賞
新人賞（三谷幸喜）

報知映画賞
最優秀作品賞
最優秀助演男優賞

ヨコハマ映画祭
新人監督賞
主演女優賞
助演男優賞
日本映画ベストテン 第4位

毎日映画コンクール
日本映画優秀賞
脚本賞
スポニチグランプリ新人賞（三谷幸喜）

キネマ旬報
脚本賞
助演男優賞
日本映画ベストテン 第3位

日本映画批評家大賞
新人賞（三谷幸喜）
女優賞（鈴木京香）

日本アカデミー賞
最優秀脚本賞
最優秀助演男優賞
最優秀録音賞
優秀作品賞
優秀監督賞
優秀主演男優賞
優秀主演女優賞
優秀助演女優賞
優秀撮影賞
優秀音楽賞
優秀照明賞
優秀編集賞
話題賞

ぴあテン'97 第2位

ベルリン映画祭
ヤングフォーラム部門正式招待

脚本と監督 三谷幸喜

ラヂオの時間

唐沢寿明　鈴木京香　西村雅彦

井上順　戸田恵子　梶原善　益樹史朗　奥貫薫　小野武彦　藤村俊二／布施明　近藤芳正　モロ師岡　田口浩正　梅野泰靖　細川俊之　渡辺謙　桃井かおり　市川染五郎　佐藤B作　宮本信子

製作／フジテレビ　東宝　製作協力／ブルミエ・インターナショナル　©1997 フジテレビ　東宝

LD
▶TLL2541◀カラー
104分+映像特典／ステレオ
ビスタサイズ／1枚2面
¥6,000（税抜）

豪華マルチオーディオ
❶ 三谷幸喜監督による全編を通した解説・製作裏話（聞き手／八木亜希子）
❷ 劇場では聞けなかった"ラジオ弁天"ドラマスペシャル「運命の女」（CM・天気予報・通信販売・ニュース・DJなども含む）

映像特典 ❶ 予告編収録 ❷ TVスポット収録 ❸ メイキング・シーン収録

特典 ❶ カラー4ページ豪華解説書 ❷ オリジナル"掛け時計"が当る応募ハガキ

ビデオ
▶TG4955S◀カラー
104分／HiFiステレオ
ビスタサイズ
¥6,000（税抜）

特典
オリジナル"掛け時計"が当たる応募ハガキ

TOHO VIDEO　東宝株式会社 映像事業部　〒100-8415 東京都千代田区有楽町1-2-1 TEL03-3591-5044（代）

雑誌20726-11/2
Ⓛ-12/25
Printed in Japan
定価2,500円 本体2,381円
T1120726112500

Digitized by Google

映画製作を目指す人々へ贈る2冊の本

メイキング・ムービー
映画を創る

アメリカを代表する映画監督シドニー・ルメットが、その経験のすべてを書き下ろした“映画の教科書”決定版！

「すべての監督がそれぞれの手法を同業者たちと分かち合えるなら、映画の技術はいっそう向上するだろう。アメリカでもっともすぐれたフィルムメイカーのひとりであるシドニー・ルメットが、みずからの意見を聞かせてくれることは、われわれにとって幸運なことだ」

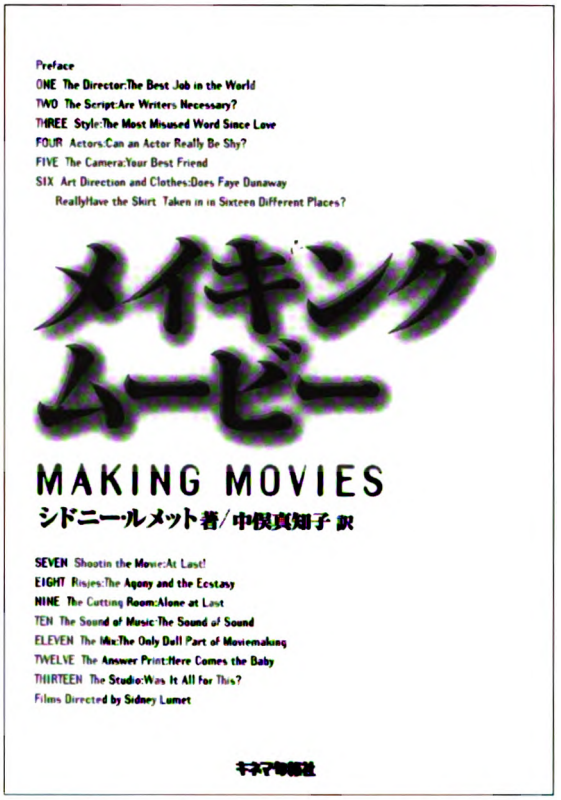
……スティーヴン・スピルバーグ

「いかにして一本の映画をつくりあげることができるのか。シドニー・ルメットはその方法について語れるかぎりのことを語っている。残りはミステリーだ」

……エリア・カザン

「アメリカ映画界を代表する監督が、映画の演出の何たるかを、どうあるべきかを、ひたむきに、くまなく書き記している」

……アラン・J・パクラ



シドニー・ルメット著　中俣真知子訳　A5判／並製／296頁／本体2800円＋税

ディレクティング・ザ・フィルム
巨匠たちの映像テクニック
映画を監督する

スピルバーグ、フェリーニ、ポランスキー等
世界の巨匠たちが明かす創作の秘密

アメリカを代表する映画学校ＡＦＩ（アメリカン・フィルム・インスティテュート）で開催されたセミナーの集大成。総勢90人に及ぶ第一級の監督、プロデューサーらの発言は、映画製作から映画評論、及び映画教育までと多岐に渡り、これ一冊で映画のすべてが俯瞰できる、映画製作を志す人にはもってこいの映画教本。

エリック・シャーマン編著　渡部眞・木藤幸江　A5判／並製／400頁／3800円＋税

Digitized by Google

映画賞・映画祭　データブック

キネマ旬報　第1270号　増刊1998年11月2日号

発行人＝土橋寿男
編集人＝掛尾良夫

編集アシスタント＝田代貴洋
編集協力＝林真由美

デザイン＝梅津由子

広告＝柳沢茂喜／島崎智明

印刷・製本＝中央精版印刷株式会社
発行所＝株式会社キネマ旬報社
〒112-8502　東京都文京区小石川1-21-14
小石川吉田ビル
TEL　03-3815-7131
FAX　03-3815-7140

Digitized by Google

KINEJUN MOVIE DATA BOOK

戦後、日本で公開された映画はこれらの本でデータを調べることが可能です。
映画ファン、及び業界関係の方々は、是非、お手元に一冊！

戦後～1971年	アメリカ映画作品全集／ヨーロッパ映画作品全集
戦後～1972年	日本映画作品全集
1972～74年 1973～74年	世界映画作品・記録全集1975年版
1975～76年	世界映画作品・記録全集1977年版
1977～78年	世界映画作品・記録全集1979年版
1979～80年	世界映画作品・記録全集1981年版
1981～82年	世界映画作品・記録全集1983年版
1983～84年	世界映画作品・記録全集1983年版
1985～86年	世界映画作品・記録全集1987年版
1987～88年	世界映画作品・記録全集1989年版
1989年	映画ビデオイヤーブック1990
1990年	映画ビデオイヤーブック1991
1991年	映画ビデオイヤーブック1992
1992年	映画ビデオイヤーブック1993
1993年	映画ビデオイヤーブック1994
1994年	映画ビデオイヤーブック1995
1995年	映画ビデオイヤーブック1996
1996年	映画ビデオイヤーブック1997
1997年	映画ビデオイヤーブック1998

株式会社キネマ旬報社　お求めの際は、お近くの書店もしくは小社営業部（03-3815-7151）までご注文ください

Digitized by Google

キネマ旬報　人名事典シリーズ

日本映画、外国映画の俳優・監督はもちろん、話題の声優、お笑い界のタレントまで幅広く網羅。

日本映画人名事典　女優編《上あ～そ・下た～わ》

A5判・上製●上・915頁／下・992頁●各9,515円

日本映画が製作を開始した1899年から1995年までの日本映画の女性俳優を総勢2,035名収録。映画専門の俳優ばかりでなく、映画に出演した経歴を持つ他分野の俳優、歌手、タレントまで網羅。下巻には生年月日、出身地別一覧も掲載。

日本映画人名事典　男優編《上あ～そ・下た～わ》

A5判・上製●上・888頁／下・996頁●各10,000円

日本映画が製作を開始した1899年から1996年までの日本映画の男性俳優を総勢1,952名収録。映画専門の俳優ばかりでなく、映画に出演した経歴を持つ他分野の俳優、歌手、タレントまで網羅。下巻には生年月日、出身地別一覧も掲載。

日本映画人名事典　監督編

A5判・上製●956頁●11,400円

日本映画が製作を開始した1899年から1997年までの日本映画の監督を収録。巻末には生年月日、出身地別一覧も掲載予定。

外国映画人名事典　女優編

A5判・上製●800頁●9,515円

映画草創期から現代までの外国映画の女性俳優を主役クラスはもちろん脇役にいたるまで網羅。アメリカ、イギリス、フランス、イタリアだけでなくドイツ、東欧、中東、アジアの女優たちも収録した、まさにワールドワイドな事典である。

外国映画人名事典　男優編

A5判・上製●1196頁●12,000円

映画草創期から現代までの外国映画の男性俳優を主役クラスはもちろん脇役にいたるまで網羅。アメリカ、イギリス、フランス、イタリアだけでなくドイツ、東欧、中東、アジアの男優たちも収録した、まさにワールドワイドな事典である。

外国映画人名事典　監督編　1999年発売予定

A5判・上製●912頁（予定）●予価10,000円

映画草創期から現代までの外国映画の監督を収録。アメリカ、イギリス、フランス、イタリアだけでなくドイツ、東欧、中東、アジアの監督たちも網羅した、まさにワールドワイドな事典である。

声優事典《第二版》

A5判・並製●696頁●2,500円

現在活躍する声優1,785人を収録。生年月日、出身地といったパーソナルデータに顔写真、フィルモグラフィーはＴＶ、映画、オリジナルビデオ、海外アニメ、ラジオ、ゲームと細かく分類。巻末には、ＴＶ、映画、オリジナルビデオ、ＣＤのリストも掲載。

お笑いタレント事典

新書判・並製●192頁●1,262円

期待の注目株から、まだまだ無名の新人まで35プロダクション、309組の若手お笑いタレントを収録。生年月日、出身地といったパーソナルデータはもちろん、顔写真、本人からの一言ＰＲも収録。

価格はすべて本体価格です。

Digitized by Google

キネマ旬報社の本

21世紀の映画作家を探る新シリーズ

Filmmakers フィルムメーカーズ

①リュック・ベッソン

★リュック・ベッソンのすべて
★ベッソン・ワールドの住人たち［人名録］
★完全データファイル
★フィルム・マップ

A5判■174頁■1600円(税込)
送料380円

A5判■216頁■1600円(税込)
送料380円

②北野　武

★巻頭対談＝北野武×淀川長治
★映画作家北野武の全貌
★座談会＝大杉漣×芦川誠×寺島進
★ヨーロッパの“キタニスト”たち
★北野映画大事典

③クエンティン・タランティーノ

★クエンティン・タランティーノの全貌
★『ジャッキー・ブラウン』をハグしよう！
★インタビュー＝千葉真一／パム・グリアー
★タランティーノ・ワールド探訪
★ＱＴ完全データファイル

A5判■216頁■1600円(税込)
送料380円

A5判■208頁■1600円(税込)
送料380円

④ジェームズ・キャメロン

★全作品ロングトーク
★キャメロン人物事典
★キャメロンの世界を探る
★完全フィルモグラフィ＆ディスコグラフィ

近日刊行予定
ジョエル＆イーサン・コーエン／宮崎　駿／ティム・バートン

YUSAKU MATSUDA CHRONICLE

松田優作クロニクル

A5判・特製ボックス入り
364頁■2800円+税

今なお根強い人気を誇る松田優作の全活動［映画・テレビ・音楽・CM etc］を、完璧なデータや豊富なヴィジュアルとともに、関係者や 生前行われた本人へのインタビューなどを交えて収録した初の集大成本。
松田優作自筆未発表シナリオ収録

Digitized by Google

キネマ旬報社の本

［定価は税込です］

黒澤明コレクション

現在では入手困難となっているキネマ旬報増刊の３点を当時そのままに完全復刻。
B5判／3冊セット箱入（分売不可）／定価8、400円／送料450円

「黒澤明＜その作品と顔＞」（1960年発行）、
「黒澤明・三船敏郎＜二人の日本人＞」（1964年発行）、
「黒澤明ドキュメント」（1974年発行）

【集成シリーズ】各巻　A5判／並製／送料380円

黒澤明集成　黒澤明集成Ⅱ　黒澤明集成Ⅲ

定価2、100円　定価2、310円　定価2、243円

キネマ旬報本誌およびその増刊類の中から黒澤明監督ならびにその作品に関して書かれた文章、インタビュー、座談会等の記事を厳選して構成。増村保造による作家論など読みごたえ充分な記事満載の黒澤明に関するキネマ旬報ベストセレクション集。

小津安二郎集成Ⅱ

「キネマ旬報」本誌より小津監督にまつわる記事を厳選して収録。定価2、243円（集成Ⅰは品切）

小津と語る

小津監督への思いを内外の著名人が語る。未刊行シナリオ「瓦版かちかち山」「お茶漬の味」「月は上りぬ」「青春放課後」収録。
キネマ旬報・臨時増刊／B5判／定価1、529円／送料160円

成瀬巳喜男　―日常のきらめき―

日本在住の新進気鋭のオーストリア人女性映画研究家による、成瀬全作品の徹底研究。
連続ショット写真をふんだんに駆使し、彼の映像世界を鮮やかに解明する。
スザンネ・シェアマン著　A5判／並製／定価2,940円／送料380円

黒澤明と木下恵介 素晴らしき巨星

日本映画の黄金期を築いた２人の巨星、黒澤明と木下恵介。
その同時代の作家としてライバルであり盟友でもあった２人が
日本映画に与えた多大な功績を、貴重な証言や評論、データから徹底検証した、
今後の日本映画界へ活かすための研究書。
キネマ旬報・臨時増刊／B5判／定価2、100円／送料160円

ご注文、お問い合わせは、お近くの書店または、キネマ旬報社 03−3815−7131 営業部まで

Digitized by Google

横浜映画祭

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1979 (1)	太陽を盗んだ男 (長谷川和彦)	長谷川和彦 (太陽を盗んだ男) 曽根中生 (天使のはらわた、赤い教室)	緒形拳 (復讐するは我にあり)	水原ゆう紀 (天使のはらわた、赤い教室)	蟹江敬三 (天使のはらわた、赤い教室)	亜湖 (赤い髪の女、濡れた週末)
1980 (2)	ツィゴイネルワイゼン (鈴木清順)	鈴木清順 (ツィゴイネルワイゼン)	古尾谷雅人 (ヒポクラテスたち)	桑師丸ひろ子 (潮騒だカップル)	風間杜夫 (四季 奈津子、夕暮まで)	伊藤蘭 (ヒポクラテスたち)
1981 (3)	の・ようなもの (森田芳光)	根岸吉太郎 (狂った果実、遠雷)	永島敏行 (遠雷)	風間舞子 (見せたがる女)	石橋蓮司 (獣たちの熱い眠り)	田中裕子 (ええじゃないか、北斎漫画)
1982 (4)	転校生 (大林宣彦)	高橋伴明 (TATOO〈刺青〉あり)	宇崎竜童 (TATOO〈刺青〉あり)	いしだあゆみ (野獣刑事)	平田満 (蒲田行進曲)	夏目雅子 (大日本帝国)
1983 (5)	家族ゲーム (森田芳光)	森田芳光 (家族ゲーム)	松田優作 (家族ゲーム)	永島映子 (竜二)	伊丹十三 (家族ゲーム、細雪)	田中美佐子 (丑三つの村)
1984 (6)	麻雀放浪記 (和田誠)	池田敏春 (人魚伝説)	鹿賀丈史 (麻雀放浪記)	白都真理 (人魚伝説)	高品格 (麻雀放浪記)	志穂美悦子 (バイキング) 菅井きん (お葬式)
1985 (7)	ラブホテル (相米慎二)	相米慎二 (ラブホテル、台風クラブ)	寺田農 (ラブホテル)	原田知世 (早春物語)	三浦友和 (台風クラブ)	中井貴恵 (哀しい気分でジョーク)
1986 (8)	ウホッホ探検隊 (根岸吉太郎)	那須博之 (ビー・バップ・ハイスクール)	岩城滉一 (南へ走れ、海の道を!)	安田成美(そろばんずく、南へ走れ、海の道を!)	小林薫 (そろばんずく)	渡辺典子(彼のオートバイ、彼女の島)
1987 (9)	ゆきゆきて、神軍 (原一男)	原一男 (ゆきゆきて、神軍) 梶間俊一 (ちょうちん)	時任三郎 (永遠の1/2)	富田靖子 (BU・SU)	河原さぶ (母娘監禁 牡、おバケちゃん)	石田えり (ちょうちん)
1988 (10)	ロックよ、静かに流れよ (長崎俊一)	長崎俊一 (ロックよ、静かに流れよ)	真田広之 (怪盗ルビイ)	小泉今日子 (怪盗ルビイ)	片岡鶴太郎 (異人たちとの夏)	本阿弥周子 (うれしはずかし物語)
1989 (11)	どついたるねん (阪本順治)	北野武 (その男、凶暴につき)	石橋凌 (Aサインデイズ)	中川安奈 (Aサインデイズ)	原田芳雄(どついたるねん、出張、キスより簡単)	相楽晴子 (どついたるねん)
1900 (12)	櫻の園 (中原俊)	中原俊 (櫻の園)	古尾谷雅人 (宇宙の法則)	斉藤由貴 (香港パラダイス)	蟹江敬三 (われに撃つ用意あり)	中嶋朋子 (つぐみ)
1991 (13)	あの夏、いちばん静かな海。 (北野武)	北野武 (あの夏、いちばん静かな海。)	赤井英和 (主手)	風吹ジュン (無能の人)	的場浩司 (獅子王たちの夏)	和久井映見 (息子、就職戦線異状なし) 広田玲央名 (夢二、王手)
1992 (14)	シコふんじゃった。 (周防正行)	周防正行 (シコふんじゃった。)	本木雅弘 (シコふんじゃった。)	南野陽子 (寒椿、私を抱いてそしてキスして)	室田日出男 (死んでもいい)	清水美砂(シコふんじゃった。、おこげ、未来の思い出) 荻野目慶子 (いつかギラギラする日)
1993 (15)	月はどっちに出ている (崔洋一)	崔洋一 (月はどっちに出ている)	真田広之 (僕らはみんな生きている、眠らない街・新宿鮫、病は気から病院へ行こう2)	鷲尾いさ子 (わが愛の譜・滝廉太郎物語)	萩原聖人 (月はどっちに出ている、教祖誕生、学校)	ルビー・モレノ (月はどっちに出ている) 水木薫 (ゲンセンカン主人)
1994 (16)	トカレフ (阪本順治)	阪本順治 (トカレフ)	奥田瑛二 (棒の哀しみ)	高岡早紀 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	佐藤浩市 (トカレフ)	室井滋 (居酒屋ゆうれい)
1995 (17)	Love Letter 岩井俊二	岩井俊二(Love Letter) 金子修介(ガメラ 大怪獣空中決戦)	豊川悦司 (Love Letter)	中山美穂 (Love Letter)	金山一彦 (無頼平野、新・悲しきヒットマン)	中山忍 (ガメラ 大怪獣空中決戦)
1996 (18)	キッズ・リターン (北野武)	周防正行 (Shall we ダンス?)	役所広司(Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道) 浅野忠信(Focus、PICNIC、Helpless、ACRI)	深津絵里 ((ハル))	石橋凌 (キッズ・リターン、迅雷組長の舞代會)	草村礼子 (Shall we ダンス?)
1997 (19)	鬼火 (望月六郎)	望月六郎 (鬼火、悪極道)	原田芳雄 (鬼火)	鈴木京香 (ラヂオの時間)	西村雅彦(マルタイの女、ラヂオの時間) 尾藤イサオ (シャ乱Qの演歌の花道)	片岡礼子 (鬼火)

Digitized by Google

日本アカデミー賞

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1977 (1)	幸福の黄色いハンカチ (山田洋次)	山田洋次 (男はつらいよシリーズ、幸福の黄色いハンカチ)	高倉　健 (幸福の黄色いハンカチ、八甲田山)	岩下志麻 (はなれ瞽女おりん)	武田鉄矢 (幸福の黄色いハンカチ)	桃井かおり (幸福の黄色いハンカチ)
1978 (2)	事件 (野村芳太郎)	野村芳太郎 (事件、鬼畜)	緒形　拳 (鬼畜)	大竹しのぶ (事件、聖職の碑)	渡瀬恒彦 (事件)	大竹しのぶ (聖職の碑)
1979 (3)	復讐するは我にあり (今村昌平)	今村昌平 (復讐するは我にあり)	若山富三郎 (極道殺人・息子よ)	桃井かおり (もう頼づえはつかない、神様のくれた赤ん坊、男はつらいよ・囁んでる寅次郎)	菅原文太 (太陽を盗んだ男)	小川真由美 (復讐するは我にあり、転落される三通の手紙)
1980 (4)	ツィゴイネルワイゼン (鈴木清順)	鈴木清順 (ツィゴイネルワイゼン)	高倉　健 (動乱、遥かなる山の呼び声)	倍賞千恵子 (遥かなる山の呼び声、男はつらいよ・寅次郎ハイビスカスの花)	丹波哲郎 (二百三高地)	大楠道代 (ツィゴイネルワイゼン)
1981 (5)	駅・STATION (降旗康男)	小栗康平 (泥の河)	高倉　健 (駅・STATION)	松坂慶子 (青春の門、男はつらいよ・浪花の恋の寅次郎)	中村嘉葎雄 (ブリキの勲章、陽炎座)	田中裕子 (北斎漫画、ええじゃないか)
1982 (6)	蒲田行進曲 (深作欣二)	深作欣二 (蒲田行進曲)	平田　満 (蒲田行進曲)	松坂慶子 (蒲田行進曲、道頓堀川)	風間杜夫 (蒲田行進曲)	小柳ルミ子 (鹿鳴館)
1983 (7)	楢山節考 (今村昌平)	五社英雄 (陽暉楼)	緒形　拳 (楢山節考、陽暉楼、魚影の群れ)	小柳ルミ子 (白蛇抄)	風間杜夫 (陽暉楼、人生劇場)	浅野温子 (陽暉楼、汚れた英雄)
1984 (8)	お葬式 (伊丹十三)	伊丹十三 (お葬式)	山崎　努 (お葬式、さらば箱舟)	吉永小百 (おはん、大国の駅)	高品　格 (麻雀放浪記)	菅井きん (お葬式、必殺!)
1985 (9)	花いちもんめ。 (伊藤俊也)	澤井信一郎 (早春物語、Wの悲劇)	千秋　実 (花いちもんめ。)	倍賞美津子 (恋文、友よ静かに眠れ、生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ覚宣言)	小林薫 (それから、恋文)	三田佳子 (Wの悲劇、春の雪)
1986 (10)	火宅の人 (深作欣二)	深作欣二 (火宅の人)	緒方拳 (火宅の人)	いしだあゆみ (火宅の人、時計 Adieu l'Hiver)	植木等 (祝辞、新　喜びも悲しみも幾歳月)	原田美枝子 (火宅の人、国士無双、ブルーアンブルーの肖像)
1987 (11)	マルサの女 (伊丹十三)	伊丹十三 (マルサの女)	山崎努 (マルサの女)	宮本信子 (マルサの女、夜汽車)	津川雅彦 (マルサの女、夜汽車)	かたせ梨乃 (極道の妻たちII、高原荒士)
1988 (12)	敦煌 (佐藤純彌)	佐藤純彌 (敦煌)	西田敏行 (敦煌)	吉永小百合 (つる、夢の乱)	片岡鶴太郎 (異人たちとの夏、幼女の時代)	石田えり (麻が丘、ダウンタウン・ヒーローズ、夢の乱)
1989 (13)	黒い雨 (今村昌平)	今村昌平 (黒い雨)	三國連太郎 (利休、釣りバカ日誌2)	田中好子 (黒い雨)	坂東英二 (あ・うん)	市原悦子 (黒い雨)
1990 (14)	少年時代 (篠田正浩)	篠田正浩 (少年時代)	岸部一徳 (死の棘)	松坂慶子 (死の棘)	石橋蓮司 (公園通りの猫たち、浪人街、われに撃つ用意あり)	石田えり (釣りバカ日誌2 釣りバカ日誌3、眠る夢をしばらく見ない)
1991 (15)	息子 (山田洋次)	岡本喜八 (大鹿村　RAINBOW KIDS)	三國連太郎 (息子、釣りバカ日誌4)	北林谷栄 (大鹿村　RAINBOW KIDS)	永瀬正敏 (息子、喪の仕事)	和久井映見 (息子、就職戦線異状なし)
1992 (16)	シコふんじゃった。 (周防正行)	周防正行 (シコふんじゃった。)	本木雅弘 (シコふんじゃった。)	三田佳子 (遠き落日)	竹中直人 (シコふんじゃった。)	藤谷美和子 (麻取られ茶舟、女殺油地獄)
1993 (17)	学校 (山田洋次)	山田洋次 (学校)	西田敏行 (学校)	和久井映見 (虹の橋)	田中邦衛 (学校、虹の橋)	香川京子 (まあだだよ)
1994 (18)	忠臣蔵外伝四谷怪談 (深作欣二)	深作欣二 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	佐藤浩市 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	高岡早紀 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	中井貴一 (四十七人の刺客)	宇井晶 (居酒屋ゆうれい)
1995 (00)	午後の遺言状 (新藤兼人)	新藤兼人 (午後の遺言状)	三國連太郎 (三たびの海峡)	浅野ゆう子 (疑)	竹中直人 (EAST MEETS WEST)	乙羽信子 (午後の遺言状)
1996 (00)	Shall we ダンス? (周防正行)	周防正行 (Shall we ダンス?)	役所広司 (Shall we ダンス?)	草刈民代 (Shall we ダンス?)	竹中直人 (Shall we ダンス?)	渡辺えり子 (Shall we ダンス?)
1997 (00)	もののけ姫 (宮崎駿)	今村昌平 (うなぎ)	役所広司 (うなぎ、久遠の絆、CURE)	黒木瞳 (久遠の絆)	西村雅彦 (マルタイの女、ラヂオの時間)	倍賞美津子 (東京夜曲、うなぎ)

Digitized by Google

報知映画賞

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1976 (1)	タクシー・ドライバー (マーティン・スコセッシ/米) 犬神家の一族 (市川崑)		藤 竜也 (愛のコリーダ)	秋吉久美子 (あにいもうと)	大滝秀治 (犬神家の一族)	太地喜和子 (男はつらいよ 寅次郎夕焼け小焼け)
1977 (2)	スラップ・ショット (ジョージ・ロイ・ヒル/米) 幸福の黄色いハンカチ (山田洋次)		高倉 健 (幸福の黄色いハンカチ、八甲田山)	岩下志麻 (はなれ瞽女おりん)	加藤 武 (悪魔の子 怪唄)	いしだあゆみ (青春の門 自立篇)
1978 (3)	スター・ウォーズ (ジョージ・ルーカス/米) サード (東陽一)		緒形 拳 (鬼 畜)	梶芽衣子 (曽根崎心中)	渡瀬恒彦 (事件、永遠城断絶、皇帝のいない八月)	大竹しのぶ (事件、聖職の碑)
1979 (4)	ディア・ハンター (マイケル・チミノ/米) 太陽を盗んだ男 (長谷川和彦)		沢田研二 (太陽を盗んだ男)	宮下順子 (赫い髪の女)	三國連太郎 (復讐するは我にあり、あゝ野麦峠)	小川真由美 (復讐するは我にあり、配達されない三通の手紙)
1980 (5)	クレイマー,クレイマー (ロバート・ベントン/米) 影武者 (黒澤明)		吉尾谷雅人 (ヒポクラテスたち)	倍賞千恵子 (遥かなる山の呼び声、男はつらいよシリーズ)	山崎 努 (影武者)	阿木燿子 (四季・奈津子)
1981 (6)	ブリキの太鼓 (フォルカー・シュレンドルフ/西独) 遠雷 (根岸吉太郎)		永島敏行 (遠雷、幸福)	松坂慶子 (男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎、青春の門)	中村嘉葎雄 (陽炎座、ラブレター)	田中裕子 (北斎漫画)
1982 (7)	カリフォルニア・ドールズ (ロバート・アルドリッチ/米) 蒲田行進曲 (深作欣二)		平田 満 (蒲田行進曲)	桃井かおり (疑惑)	柄本 明 (疑惑、男はつらいよ 寅次郎あじさいの恋、道頓堀川)	山口美也子 (さらば愛しき大地)
1983 (8)	フラッシュ・ダンス (エイドリアン・ライン/米) 家族ゲーム (森田芳光)		松田優作 (家族ゲーム、探偵物語)	夏目雅子 (時代屋の女房、無影の群れ)	伊丹十三 (家族ゲーム、細雪、居酒屋兆治、逃走地図、幸福宮)	倍賞美津子 (陽炎座) 永島映子 (竜二)
1984 (9)	ナチュラル (バリー・レビンソン/米) お葬式 (伊丹十三)		時任三郎 (海燕ジョーの奇跡)	吉永小百合 (おはん、人間の駅)	高品 格 (麻雀放浪記)	菅井きん (お葬式)
1985 (10)	刑事ジョン・ブック 目撃者 (ピーター・ウィアー/米) それから (森田芳光)	森田芳光 (それから)	北大路欣也 (火まつり、春の鐘)	倍賞美津子 (恋文、生きてるうちが花なのと死んだらそれまでよ覚書)	三浦友和 (右翼クラブ)	三田佳子 (春の鐘、Wの悲劇)
1986 (11)	カイロの紫のバラ (ウディ・アレン/米) コミック雑誌なんかいらない! (滝田洋二郎)	根岸吉太郎 (ウホッホ探検隊)	内田裕也 (コミック雑誌なんかいらない!)	いしだあゆみ (火宅の人)	すまけい (キネマの天地)	原田美枝子 (火宅の人)
1987 (12)	グッドモーニング・バビロン!(パオロ&ヴィットリオ・タヴィアーニ/伊・仏・米) マルサの女 (伊丹十三)	原一男 (ゆきゆきて、神軍)	陣内孝則 (ちょっちん)	大竹しのぶ (永遠の1/2)	津川雅彦 (マルサの女)	桜田淳子 (イタズ魔)
1988 (13)	ラスト・エンペラー (ベルナルド・ベルトルッチ/伊・英・中国) TOMORROW・明日 (黒木和雄)		真田広之 (怪盗ルビイ)	安田成美 (マリリンに逢いたい)	片岡鶴太郎 (異人たちとの夏)	石田えり (ダウンタウン・ヒーローズ、嵐が丘)
1989 (14)	ダイ・ハード (ジョン・マクティアナン/米) ウンタマギルー (島袋剛)	舛田利雄 (社葬)	三國連太郎 (利休、釣りバカ日誌)	田中好子 (黒い雨)	原田芳雄 (どついたるねん)	吉田日出子 (社葬)
1990 (15)	フィールド・オブ・ドリームス (フィル・アルデン・ロビンソン/米) 櫻の園 (中原俊)	市川準 (つぐみ)	菅原文太 (鉄拳)	松坂慶子 (死の棘)	石橋蓮司 (浪人街、われに撃つ用意あり)	樋口可奈子 (浪人街)
1991 (16)	羊たちの沈黙 (ジョナサン・デミ/米) 息子 (山田洋次)	北野武 (あの夏、いちばん静かな海。)	永瀬正敏 (息子、アジアンビート日本篇 アイ・ラヴ・ニッポン、貴の仕事)	工藤夕貴 (戦争と青春)	神戸浩 (無能の人)	風吹ジュン (無能の人)
1992 (17)	プリティ・リーグ (ペニー・マーシャル/米) シコふんじゃった。 (周防正行)	東陽一 (橋のない川)	本木雅弘 (シコふんじゃった。)	清水美砂 (シコふんじゃった。、おこげ、未来の思い出)	村田雄浩 (おこげ、ミンボーの女)	藤谷美和子 (寝取られ宗介、女殺油地獄)
1993 (18)	許されざる者 (クリント・イーストウッド/米) 月はどっちに出ている (崔洋一)	崔洋一 (月はどっちに出ている)	田中健 (望郷)	ルビー・モレノ (月はどっちに出ている)	岸部一徳 (僕らはみんな生きている、水の旅人・侍KIDS、教祖誕生、病院で死ぬということ)	桜田淳子 (お引越し)
1994 (19)	シンドラーのリスト (スティーヴン・スピルバーグ/米) 全身小説家 (原一男)	神代辰巳 (棒の哀しみ)	萩原健一 (居酒屋ゆうれい)	高岡早紀 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	中井貴一 (四十七人の刺客)	室井滋 (居酒屋ゆうれい)
1995 (20)	ショーシャンクの空に (米/フランク・ダラボン) 午後の遺言状 (新藤兼人)	岩井俊二 (Love Letter)	真田広之 (写楽、EAST MEETS WEST、緊急呼出し/エマージェンシー・コール)	中山美穂 (Love Letter)	豊川悦司 (Love Letter、トイレの花子さん)	梶芽衣子 (鬼平犯科帳)
1996 (21)	セブン (デイヴィッド・フィンチャー/米) Shall we ダンス? (周防正行)	森田芳光 ((ハル))	役所広司 (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	原田美枝子 (絵の中のぼくの村)	渡哲也 (わが心の銀河鉄道 宮沢賢治物語)	渡辺えり子 (Shall we ダンス?)
1997 (22)	ザ・エージェント (米/キャメロン・クロウ) ラヂオの時間 (三谷幸喜)	原田眞人 (バウンス ko GALS)	役所広司 (うなぎ、失楽園、バウンス ko GALS)	黒木瞳 (失楽園)	西村雅彦 (マルタイの女、ラヂオの時間)	倍賞美津子 (東京夜曲、うなぎ)

Digitized by Google

ぴあテン&もあテン

年度	作品賞（ぴあテン）	作品賞（もあテン）
1972 (1)	時計じかけのオレンジ (スタンリー・キューブリック)	
1973 (2)	スケアクロウ(ジェリー・シャッツバーグ) 仁義なき戦い(深作欣二)	
1974 (3)	スティング (ジョージ・ロイ・ヒル)	
1975 (4)	タワーリング・インフェルノ (ジョン・ギラーミン)	2001年宇宙の旅 (スタンリー・キューブリック)
1976 (5)	カッコーの巣の上で (ミロシュ・フォアマン)	2001年宇宙の旅 (スタンリー・キューブリック)
1977 (6)	ロッキー (ジョン・G・アヴィルドセン)	2001年宇宙の旅 (スタンリー・キューブリック)
1978 (7)	未知との遭遇 (スティーヴン・スピルバーグ)	2001年宇宙の旅 (スタンリー・キューブリック)
1979 (8)	ディア・ハンター (マイケル・チミノ)	明日に向かって撃て！ (ジョージ・ロイ・ヒル)
1980 (9)	クレイマー、クレイマー (ロバート・ベントン)	2001年宇宙の旅 (スタンリー・キューブリック)
1981 (10)	エレファント・マン (デイヴィッド・リンチ)	2001年宇宙の旅 (スタンリー・キューブリック)
1982 (11)	E.T. (スティーヴン・スピルバーグ)	スティング (ジョージ・ロイ・ヒル)
1983 (12)	戦場のメリークリスマス (大島渚)	E.T. (スティーヴン・スピルバーグ)
1984 (13)	インディ・ジョーンズ/魔宮の伝説 (スティーヴン・スピルバーグ)	ルパン三世・カリオストロの城 (宮崎駿)
1985 (14)	バック・トゥ・ザ・フューチャー (ロバート・ゼメキス)	E.T. (スティーヴン・スピルバーグ)
1986 (15)	エイリアン2 (ジェームズ・キャメロン)	バック・トゥ・ザ・フューチャー (ロバート・ゼメキス)
1987 (16)	アンタッチャブル (ブライアン・デ・パルマ)	
1988 (17)	ラストエンペラー (ベルナルド・ベルトルッチ)	
1989 (18)	インディ・ジョーンズ/最後の聖戦 (スティーヴン・スピルバーグ)	
1990 (19)	ゴースト/ニューヨークの幻 (ジェリー・ザッカー)	
1991 (20)	ターミネーター2 (ジェームズ・キャメロン)	
1992 (21)	美女と野獣 (ゲーリー・トゥルースデイル、カーク・ワイズ)	
1993 (22)	ジュラシック・パーク (スティーヴン・スピルバーグ)	
1994 (23)	シンドラーのリスト (スティーヴン・スピルバーグ)	
1995 (24)	フォレスト・ガンプ　一期一会 (ロバート・ゼメキス)	
1996 (25)	セブン (デイヴィッド・フィンチャー)	
1997 (26)	もののけ姫 (宮崎駿)	

Digitized by Google

映画芸術ベストテン・ワーストテン

年度	ベストワン		ワーストワン	
	日本映画	外国映画	日本映画	外国映画
1964(1)	赤い殺意(今村昌平)			
1965(2)	東京オリンピック(市川崑)	フェリーニの8½(フェデリコ・フェリーニ)		
1966(3)	白昼の通り魔(大島渚)	戦争は終わった(アラン・レネ)		
1967(4)	人間蒸発(今村昌平)	戦争は終わった(アラン・レネ)		
1968(5)	神々の深き欲望(今村昌平)	俺たちに明日はない(アーサー・ペン)		
1969(6)	私が棄てた女(浦山桐郎)	ウイークエンド (ジャン=リュック・ゴダール)		
1970(7)	にっぽん戦後史・マダムおんぼろの生活(今村昌平)	地獄に堕ちた勇者ども (ルキノ・ヴィスコンティ)		
1972(8)	人生劇場(加藤泰)	中止		
1973(9)	仁義なき戦い (深作欣二)	ポセイドン・アドベンチャー (ロナルド・ニーム)		
1974(10)	四畳半襖の裏張り・しのび肌 (神代辰巳)	最後の晩餐 (マルコ・フェレーリ)	サンダカン八番娼館・望郷 (熊井啓)	スティング (ジョージ・ロイ・ヒル)
1975(11)	新幹線大爆破 (佐藤純彌)	ガルシアの首 (サム・ペキンパー)	青春の門 (浦山桐郎)	タワーリング・インフェルノ (ジョン・ギラーミン)
1976(12)	さらば夏の光よ (山根成之)	ナッシュビル (ロバート・アルトマン)	北の岬 (熊井啓)	カッコーの巣の上で (ミロシュ・フォアマン)
1977(13)	悲恋物語 (鈴木清順)	惑星ソラリス (アンドレイ・タルコフスキー)	人間の証明 (佐藤純彌)	ネットワーク (シドニー・ルメット)
1978(14)	曾根崎心中(増村保造)	家族の肖像(ルキノ・ヴィスコンティ)	お吟さま(熊井啓)	愛と喝采の日々(ハーバート・ロス)
1979(15)	十九歳の地図(柳町光男)	木靴の樹(エルマンノ・オルミ)	衝動殺人・息子よ(木下恵介)	スーパーマン(リチャード・ドナー)
1980(16)	ツィゴネルワイゼン (鈴木清順)	マリア・ブラウンの結婚(ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー)	影武者 (黒澤明)	カリギュラ(ティント・ブラス、ジャンカルロ・ルイ) 地獄の黙示録(フランシス・F・コッポラ)
1981(17)	陽炎座 (鈴木清順)	ブリキの太鼓 (フォルカー・シュレンドルフ)	駅・STATION (降旗康男)	エレファント・マン (デイヴィッド・リンチ)
1982(18)	ニッポン国古屋敷村(小川紳介)	1900年(ベルナルド・ベルトルッチ)	海　峡(森谷司郎)	レッズ(ウォーレン・ベイティ)
1983(19)	家族ゲーム (森田芳光)	ガープの世界 (ジョージ・ロイ・ヒル)	楢山節考 (今村昌平)	アウトサイダー (フランシス・F・コッポラ)
1984(20)	Wの悲劇 (澤井信一郎)	欲望のあいまいな対象 (ルイス・ブニュエル)	上海バンスキング (深作欣二)	スカーフェイス (ブライアン・デ・パルマ)
1985(21)	台風クラブ (相米慎二)	エル・スール (ヴィクトル・エリセ)	乱 (黒澤明)	キリング・フィールド (ローランド・ジョフィ)
1986(22)	天空の城ラピュタ (宮崎駿)	ストレンジャー・ザン・パラダイス(ジム・ジャームッシュ)		
1987(23)	ゆきゆきて、神軍 (原一男)	グッドモーニング・バビロン！ (パオロ&ヴィットリオ・タヴィアーニ)		
1988(24)	となりのトトロ (宮崎駿)	フルメタル・ジャケット (スタンリー・キューブリック)		
1989(25)	どついたるねん (阪本順治)	ダイ・ハード (ジョン・マクティアナン)	オルゴール (黒土三男)	カミーユ・クローデル (グリュノ・ニュイッテン)
1990(26)	3-4X10月 (北野武)	悲情城市 (ホーン・シャオシェン)	あげまん (伊丹十三)	7月4日に生まれて (オリヴァー・ストーン)
1991(27)	あの夏、いちばん静かな海。 (北野武)	インディアン・ランナー (ショーン・ペン)	八月の狂詩曲 (黒澤明)	シェルタリング・スカイ (ベルナルド・ベルトルッチ)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1984 (27)	瀬戸内少年野球団 (篠田正浩)	伊丹十三 (お葬式)	山崎努 (お葬式、きらば箱舟)	桑師丸ひろ子 (Wの悲劇)	高品格 (麻雀放浪記)	三田佳子 (Wの悲劇)
1985 (28)	乱 (黒澤明)	森田芳光 (それから)	北大路欣也 (火まつり)	倍賞美津子 (友よ、静かに駆れ、悲文)	小林薫 (それから、悲文)	藤田弓子 (さびしんぼう)
1986 (29)	ウホッホ探検隊 (椎岸岸太郎)	熊井啓 (海と毒薬)	田中邦衛 (ウホッホ探検隊)	いしだあゆみ (火宅の人、時計 Adieu l'Hiver)	すまけい (キネマの天地)	大竹しのぶ (波光きらめく果て)
1987 (30)	マルサの女 (伊丹十三)	原一男 (ゆきゆきて、神軍)	陣内孝則 (ちょうちん)	三田佳子 (別れぬ理由)	三船敏郎 (男はつらいよ・知床慕情)	秋吉久美子 (食卓車)
1988 (31)	敦煌 (佐藤純彌)	和田誠 (快盗ルビイ)	ハナ肇 (会社物語)	桃井かおり (木村家の人びと、噛む女、TOMORROW・明日)	片岡鶴太郎 (異人たちとの夏)	秋吉久美子 (異人たちとの夏)
1989 (32)	どついたるねん (阪本順治)	舛田利雄 (社葬)	三國連太郎 (利休)	田中好子 (黒い雨)	坂東英二 (あ・うん)	南果歩 (夢見通りの人々、せんせい、蛍、226)
1990 (33)	少年時代 (篠田正浩)	篠田正浩 (少年時代)	原田芳雄 (浪人街、われに撃つ用意あり)	松坂慶子 (死の棘)	柳葉敏郎 (きらば愛しのやくざ)	中嶋朋子 (つぐみ)
1991 (34)	あの夏、いちばん静かな海。 (北野武)	北野武 (あの夏、いちばん静かな海。)	竹中直人 (無能の人)	工藤夕貴 (戦争と青春)	永瀬正敏 (息子)	風吹ジュン (無能の人)
1992 (35)	シコふんじゃった。 (周防正行)	周防正行 (シコふんじゃった。)	本木雅弘 (シコふんじゃった。)	三田佳子 (遠き落日)	室田日出男 (蜂雀の伝説、死んでもいい)	藤谷美和子 (強取られ京介、女殺油地獄)
1993 (36)	月はどっちに出ている (崔洋一)	滝田洋二郎 (僕らはみんな生きている)	真田広之 (僕らはみんな生きている)	ルビー・モレノ (月はどっちに出ている)	所ジョージ (まあだだよ)	香川京子 (まあだだよ)
1994 (37)	棒の哀しみ (神代辰巳)	神代辰巳 (棒の哀しみ)	奥田瑛二 (棒の哀しみ、極道記者2馬券転生篇)	高岡早紀 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	中村敦夫 (集団左遷)	室井滋 (居酒屋ゆうれい)
1995 (38)	午後の遺言状 (新藤兼人)	金子修介 (ガメラ 大怪獣空中決戦)	真田広之 (写楽、EAST MEETS WEST、緊急呼出し/エマージェンシー・コール)	中山美穂 (Love Letter)	萩原聖人 (マークスの山)	中山忍 (ガメラ 大怪獣空中決戦)
1996 (39)	岸和田少年愚連隊 (井筒和幸)	北野武 (キッズ・リターン)	役所広司 (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	該当者なし	渡哲也 (わが心の銀河鉄道 宮澤賢治物語)	渡辺えり子 (Shall we ?)
1997 (40)	バウンス ko GALS (原田眞人)	原田眞人 (バウンス ko GALS)	役所広司 (うなぎ、失楽園、CURE)	桃井かおり (東京夜曲)	西村雅彦 (マルタイの女、ラヂオの時間)	倍賞美津子 (東京夜曲、うなぎ)

Digitized by Google

ブルーリボン賞

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1950 (1)	また逢う日まで (今井正)	今井正 (また逢う日まで)	山村聡 (宗方姉妹、ほか)	淡島千景 (てんやわんや、ほか)		
1951 (2)	めし (成瀬巳喜男)	小津安二郎 (麦秋)	三船敏郎 (馬喰一代、女ごころ誰が知る)	原節子 (麦秋、めし)	笠智衆 (我が家は楽し、麦秋、命美わし)	杉村春子 (麦秋、めし、命美わし)
1952 (3)	稲妻 (成瀬巳喜男)	成瀬巳喜男 (稲妻、おかあさん)		山田五十鈴 (現代人、箱根風雲録)	加東大介 (決闘鍵屋の辻、おかあさん)	中北千枝子 (丘は花ざかり、稲妻)
1953 (4)	にごりえ (今井正)	今井正 (にごりえ、ひめゆりの塔)		乙羽信子 (縞図、欲望、女の一生)	進藤英太郎 (女の一生、紙園囃子)	浪花千栄子 (紙園囃子)
1954 (5)	二十四の瞳 (木下恵介)	溝口健二 (近松物語)		高峰秀子 (二十四の瞳、女の園、この広い空のどこかに)	東野英治郎 (黒い潮、熱章)	望月優子 (晩菊)
1955 (6)	浮雲 (成瀬巳喜男)	豊田四郎 (夫婦善哉)	森繁久弥 (夫婦善哉)	淡島千景 (夫婦善哉)	加東大介 (血槍富士、ここに泉あり)	山田五十鈴 (たけくらべ、石合戦)
1956 (7)	真昼の暗黒 (今井正)	今井正 (真昼の暗黒)	佐田啓二 (あなた買います、台風騒動記)	山田五十鈴 (母子像、猫と庄造と二人のをんな、流れる)	多々良純 (鶴八鶴次郎、あなた買います、台風騒動記)	久我美子 (夕やけ雲、女囚と共に、太陽とバラ)
1957 (8)	米 (今井正)	今井正 (米、純愛物語)	フランキー堺 (幕末太陽伝、俺せは俺等のねがい)	望月優子 (米、うなぎとり)	三井弘次 (気違い部落、どん底)	淡路恵子 (女体は哀しく、下町)
1958 (9)	隠し砦の三悪人 (黒澤明)	田坂具隆 (陽のあたる坂道)	市川雷蔵 (炎上、弁天小僧、ほか)	山本富士子 (白鷺、波岸花)	中村鴈治郎 (幽霊、炎上)	渡辺美佐子 (果しなき欲望)
1959 (10)	キクとイサム (今井正)	市川崑 (鍵、野火)	長門裕之 (にあんちゃん、ほか)	北林谷栄 (キクとイサム)	小沢昭一 (にあんちゃん)	新珠三千代 (人間の条件、私は貝になりたい)
1960 (11)	おとうと (市川崑)	市川崑 (おとうと)	三國連太郎 (大いなる旅路、ほか)	岸恵子 (おとうと)	織田政雄 (笛吹川、潮東綺譚)	中村玉緒 (ぼんち、大菩薩峠)
1961 (12)	豚と軍艦 (今村昌平)	伊藤大輔 (反逆児)	三船敏郎 (用心棒、価値ある男)	若尾文子 (女は二度生まれる、妻は告白する、婚期)	山村聡 (あれが港の灯だ、河口)	高千穂ひづる (背徳のメス、ゼロの焦点)
1962 (13)	キューポラのある街 (浦山桐郎)	市川崑 (私は二歳、破戒)	仲代達矢 (切腹)	吉永小百合 (キューポラのある街、ほか)	伊藤雄之助 (忍びの者)	岸田今日子 (破戒、秋刀魚の味)
1963 (14)	にっぽん昆虫記 (今村昌平)	今村昌平 (にっぽん昆虫記)	中村錦之助 (武士道残酷物語)	左幸子 (にっぽん昆虫記、彼女と彼)	河原崎長一郎 (五番町夕霧楼)	南田洋子 (続続上人行状記、サムライの子)
1964 (15)	砂の女 (勅使河原宏)	勅使河原宏 (砂の女)	小林桂樹 (われ一粒の麦なれど)	岩下志麻 (五瓣の椿)	西村晃 (赤い殺意、ほか)	吉村実子 (鬼婆、ほか)
1985 (16)	赤ひげ (黒澤明)	山本薩夫 (にっぽん泥棒物語、証人の椅子)	三船敏郎 (赤ひげ)	若尾文子 (清作の妻、波影)	田村高廣 (兵隊やくざ)	二木てるみ (赤ひげ)
1966 (17)	白い巨塔 (山本薩夫)	山田洋次 (運が良けりゃ)	ハナ肇 (運が良けりゃ)	司葉子 (紀ノ川)	中村賀津雄 (湖の琴)	乙羽信子 (本能)
1975 (18)	化石 (小林正樹)	深作欣二 (仁義の墓場、県警対組織暴力)	菅原文太 (県警対組織暴力、トラック野郎)	浅丘ルリ子 (男はつらいよ・寅次郎相合い傘)	原田芳雄 (祭りの準備、田園に死す)	倍賞千恵子 (男はつらいよ・寅次郎相合い傘)
1976 (19)	大地の子守歌 (増村保造)	山根成之 (さらば夏の光よ、パーマネント・ブルー　真夏の恋)	渡哲也 (やくざの墓場・くちなしの花)	秋吉久美子 (さらば夏の光よ、あにいもうと)	大滝秀治 (不毛地帯、あにいもうと)	高峰三枝子 (犬神家の一族)
1977 (20)	幸福の黄色いハンカチ (山田洋次)	山田洋次 (幸福の黄色いハンカチ)	高倉健 (幸福の黄色いハンカチ、八甲田山)	岩下志麻 (はなれ瞽女おりん)	若山富三郎 (春三四郎、悪魔の毛毬唄)	桃井かおり (幸福の黄色いハンカチ)
1978 (21)	サード (東陽一)	野村芳太郎 (鬼畜、事件)	緒形拳 (鬼畜)	梶芽衣子 (曽根崎心中)	渡瀬恒彦 (事件、赤穂城断絶)	宮下順子 (ダイナマイトどんどん、雲霧仁左衛門)
1979 (22)	復讐するは我にあり (今村昌平)	今村昌平 (復讐するは我にあり)	若山富三郎 (衝動殺人・息子よ)	桃井かおり (もう頼ってはつかない、男はつらいよ・噴んでる寅次郎、神様のくれた赤ん坊)	三國連太郎 (復讐するは我にあり)	倍賞美津子 (復讐するは我にあり)
1980 (23)	影武者 (黒澤明)	鈴木清順 (ツィゴイネルワイゼン)	仲代達矢 (影武者、二百三高地)	十朱幸代 (震える舌)	丹波哲郎 (二百三高地)	加賀まりこ (夕暮まで)
1981 (24)	泥の河 (小栗康平)	根岸吉太郎 (遠雷、狂った果実)	永島敏行 (遠雷)	松坂慶子 (青春の門、男はつらいよ・浪花の恋の寅次郎)	津川雅彦 (マノン)	田中裕子 (北斎漫画、ええじゃないか)
1982 (25)	蒲田行進曲 (深作欣二)	深作欣二 (蒲田行進曲)	渥美清 (男はつらいよ・寅次郎あじさいの恋、同・花も嵐も寅次郎)	夏目雅子 (鬼龍院花子の生涯)	柄本明 (男はつらいよ・寅次郎あじさいの恋、遠藤堀川)	山口美也子 (さらば愛しき大地)
1983 (26)	東京裁判 (小林正樹)	森田芳光 (家族ゲーム)	緒形拳 (楢山節考、陽暉楼、魚影の群れ、オキナワの少年)	田中裕子 (天城越え)	田中邦衛 (遥かなる街、居酒屋兆治)	永島映子 (竜二)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1988 (43)	となりのトトロ (宮崎駿)	大林宣彦 (異人たちとの夏)	ハナ肇 (会社物語)	小泉今日子 (快盜ルビイ)	大地康雄 (マルサの女2、バカヤロー!、ほんの5g)	秋吉久美子 (異人たちとの夏)
1989 (44)	黒い雨 (今村昌平)	舛田利雄 (社葬)	三國連太郎 (利休、釣りバカ日誌)	田中好子 (黒い雨、ゴジラVSビオランチ)	原田芳雄 (どついたるねん、出張、キスより簡単、夢見通りの人々)	相楽晴子 (どついたるねん、ハラスのいた日々)
1990 (45)	少年時代 (篠田正浩)	市川準 (つぐみ)	古尾谷雅人 (宇宙の法則、パチンコ物語)	松坂慶子 (死の棘)	石橋蓮司 (浪人街、われに撃つ用意あり)	つみきみほ (櫻の園)
1991 (46)	息子 (山田洋次)	山田洋次 (息子)	永瀬正敏 (息子、喪の仕事、アジアンピート アイ・ラブ・ニッポン)	北林谷栄 (人魚拐 RAINBOW KIDS)	三浦友和 (仔象物語、無能の人、江戸城大乱)	風吹ジュン (無能の人)
1992 (47)	シコふんじゃった。 (周防正行)	東陽一 (橋のない川)	長塚京三 (ザ・中学教師、ひき逃げファミリー)	藤谷美和子 (極取られ宗介、女殺油地獄)	村田雄浩 (おこげ、ミンボーの女)	乙羽信子 (都会綺譚)
1993 (48)	月はどっちに出ている (崔洋一)	市川準 (病院で死ぬということ)	岸谷五郎 (月はどっちに出ている)	ルビー・モレノ (月はどっちに出ている)	田中健 (望郷)	桜田淳子 (お引越し)
1994 (49)	全身小説家 (原一男)	神代辰巳 (棒の哀しみ)	奥田瑛二 (棒の哀しみ、極道記者2・馬券転生篇)	吉永小百合 (女ざかり)	中村敦夫 (集団左遷)	室井滋 (居酒屋ゆうれい)
1995 (50)	午後の遺言状 (新藤兼人)	新藤兼人 (午後の遺言状)	役所広司 (KAMIKAZE TAXI)	杉村春子 (午後の遺言状)	松方弘樹 (鰻)	鰐淵晴子 (遥かな時代の階段を、半盗無賃行、東京デラックス、眠れる美女)
1996 (51)	Shall we ダンス? (周防正行)	周防正行 (Shall we ダンス?)	役所広司 (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	高岡早紀 (KYOKO)	吉岡秀隆 (学校II)	草村礼子 (Shall we ダンス?)
1997 (52)	もののけ姫 (宮崎駿)	今村昌平 (うなぎ)	原田芳雄 (鬼火)	桃井かおり (東京夜曲)	田口トモロヲ (うなぎ、鉄塔武蔵野線)	倍賞美津子 (東京夜曲、うなぎ)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1967 (22)	上意討ち -拝領妻始末- (小林正樹)	今村昌平 (人間蒸発)	田中邦衛 (若者たち)	岩下志麻 (智恵子抄、あかね雲)	山本圭 (若者たち、君が青春のとき、陽のあたる坂道)	左幸子 (女の一生、春日和)
1968 (23)	神々の深き欲望 (今村昌平)	岡本喜八 (肉弾)	寺田農 (肉弾)	乙羽信子 (戦の中の黒猫、強虫女と弱虫女)	嵐寛寿郎 (神々の深き欲望)	山岡久乃 (眠れる美女、カモとねぎ、女と味噌汁)
1968 (24)	心中天網島 (篠田正浩)	山田洋次 (喜劇・一発大当り、男はつらいよ、続・男はつらいよ)	渥美清 (男はつらいよ、続・男はつらいよ、喜劇・女は度胸)	岩下志麻 (心中天網島、わが恋わが歌)	中村賀津雄 (わが恋わが歌、尻喰え観音、新選組)	小山明子 (少年)
1970 (25)	家族 (山田洋次)	山本薩夫 (戦争と人間)	井川比佐志 (家族)	倍賞千恵子 (家族、男はつらいよ・望郷篇)	笠智衆 (家族)	奈良岡朋子 (地の群れ、どですかでん)
1971 (26)	沈黙 (篠田正浩)	篠田正浩(沈黙) 山田洋次 (男はつらいよ・純情篇、同・奮闘篇、同・寅次郎恋歌)	勝新太郎 (いのちぼうにふろう、顔役、狐のくれた赤ん坊、新座頭市・破れ!唐人剣)	藤純子 (緋牡丹博徒・お命頂きます)		
1972 (27)	忍ぶ川 (熊井啓)	斎藤耕一 (約束、旅の重き)	地井武男 (海軍特別少年兵、どぶ川学級)	栗原小巻 (忍ぶ川)		
1973 (28)	津軽じょんがら節 (斎藤耕一)	山田洋次 (男はつらいよ・寅次郎夢枕、同・寅次郎忘れな草)	丹波哲郎 (人間革命)	賀来敦子 (青幻記)		
1974 (29)	砂の器 (野村芳太郎)	野村芳太郎 (砂の器)	三國連太郎 (極道の妻)	田中絹代 (サンダカン八番娼館 望郷、三婆)		
1975 (30)	化石 (小林正樹)	新藤兼人 (ある映画監督の生涯 溝口健二の記録)	佐分利信 (化石)	浅丘ルリ子 (男はつらいよ・寅次郎相合い傘)		
1976 (31)	不毛地帯 (山本薩夫)	山本薩夫 (不毛地帯)	渡哲也 (やくざの墓場・くちなしの花)	秋吉久美子 (あにいもうと)		
1977 (32)	幸福の黄色いハンカチ (山田洋次)	山田洋次 (幸福の黄色いハンカチ)	高倉健 (幸福の黄色いハンカチ)	岩下志麻 (はなれ瞽女おりん)		
1978 (33)	事件 (野村芳太郎)	野村芳太郎 (事件)	緒形拳 (鬼畜)	梶芽衣子 (曽根崎心中)		
1979 (34)	あゝ野麦峠 (山本薩夫)	長谷川和彦 (太陽を盗んだ男)	若山富三郎 (衝動殺人・息子よ)	桃井かおり (もう頬づえはつかない)		
1980 (35)	影武者 (黒澤明)	黒澤明 (影武者)	仲代達矢 (影武者)	倍賞千恵子 (遥かなる山の呼び声)		
1981 (36)	泥の河 (小栗康平)	小栗康平 (泥の河)	田村高廣 (泥の河)	倍賞千恵子 (駅 STATION、男はつらいよ・浪花の恋の寅次郎)		
1982 (37)	蒲田行進曲 (深作欣二)	深作欣二 (蒲田行進曲)	西村晃 (マタギ)	松坂慶子 (蒲田行進曲)		
1983 (38)	戦場のメリークリスマス (大島渚)	大島渚 (戦場のメリークリスマス)	緒形拳 (楢山節考、陽暉楼、無影の群れ、オキナワの少年)	田中裕子 (人魚伝説)	ビートたけし (戦場のメリークリスマス)	由紀さおり (家族ゲーム)
1984 (39)	Wの悲劇 (澤井信一郎)	伊丹十三 (お葬式)	山崎努 (お葬式、さらば箱舟)	吉永小百合 (おはん、天国の駅)	高品格 (麻雀放浪記)	三田佳子 (Wの悲劇、序の舞)
1985 (40)	乱 (黒澤明)	黒澤明 (乱)	北大路欣也 (火まつり、春の鐘)	倍賞美津子 (生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ交響詩、恋文、友よ、静かに眠れ)	井川比佐志 (乱、タンポポ)	藤真利子 (海化粧)
1986 (41)	海と毒薬 (熊井啓)	熊井啓 (海と毒薬)	奥田瑛二 (海と毒薬)	いしだあゆみ (火宅の人、時計Adieu l'Hiver)	植木等 (新 喜びも悲しみも幾歳月、愛しのティバッパ)	村瀬幸子 (人間の約束)
1987 (42)	マルサの女 (伊丹十三)	原一男 (ゆきゆきて、神軍)	津川雅彦 (マルサの女、別れぬ理由)	十朱幸代 (夜汽車、曼川)	三船敏郎 (男はつらいよ・知床慕情)	石田えり (ちょうちん)

Digitized by Google

毎日映画コンクール

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1946 (1)	或る夜の殿様 (長谷川一夫助)	今井正 (民衆の敵)				
1947 (2)	今ひとたびの (五所平之助)	黒澤明 (素晴らしき日曜日、わが青春に悔なし)	森雅之 (安城家の舞踏会)	田中絹代 (結婚、不死鳥、女優須磨子の恋)		
1948 (3)	酔いどれ天使 (黒澤明)	木下恵介 (女、肖像、破戒)	笠智衆 (手をつなぐ子等、生きている画像)	田中絹代 (夜の女たち、風の中の牝鶏)	宇野重吉 (わが生涯の輝ける日、破戒)	
1949 (4)	晩春 (小津安二郎)	小津安二郎 (晩春)	志村喬 (静かなる決闘、野良犬)	原節子 (青い山脈、晩春、お嬢さん乾杯)		木暮実千代 (青い山脈)
1950 (5)	また逢う日まで (今井正)	吉村公三郎 (偽れる盛装)	佐分利信 (執行猶予、婦唱)	京マチ子 (偽れる盛装、羅生門)	山村聡 (婦唱、宗方姉妹、大利根の夜霧)	
1951 (6)	麦秋 (小津安二郎) めし (成瀬巳喜男)	成瀬巳喜男 (めし)	笠智衆 (命美わし、海の花火)	原節子 (めし、麦秋)		田村秋子 (自由学校、少年期)
1952 (7)	生きる (黒澤明)	渋谷実 (現代人、本日休診)	佐分利信 (愚妻、お茶漬の味)	山田五十鈴 (粉雪風雪録、現代人)	加東大介 (おかあさん、決闘鎌屋の辻)	中北千枝子 (おかあさん、丘は花ざかり)
1953 (8)	にごりえ (今井正)	今井正 (にごりえ)	上原謙 (雲、夫婦)	望月優子 (日本の悲劇)	芥川比呂志 (嫉妬の見える場所)	杉村春子 (にごりえ、東京物語)
1954 (9)	二十四の瞳 (木下恵介)	木下恵介 (二十四の瞳)	山村聡 (山の音、黒い潮)	高峰秀子 (女の園、この広い空のどこかに、二十四の瞳)	宮口精二 (七人の侍)	久我美子 (女の園、この広い空のどこかに、息の愉しき、億万長者)
1955 (10)	浮雲 (成瀬巳喜男)	成瀬巳喜男 (浮雲)	森繁久弥 (夫婦善悪、流れ鳥いつ帰る、警察日記、人生とんぼ返り)	高峰秀子 (浮雲)	小林桂樹 (ここに泉あり)	左幸子 (おふくろ、人生とんぼ返り)
1956 (11)	真昼の暗黒 (今井正)	今井正 (真昼の暗黒)	佐田啓二 (あなた買います、古風婦人記)	山田五十鈴 (流れる、猫と庄造と二人のをんな、母子像)	東野英治郎 (夜の河、あやめ愛しき、夕やけ雲)	沢村貞子 (赤線地帯、太陽とバラ、現代の欲望、愛の心)
1957 (12)	米 (今井正)	今井正 (米、純愛物語)	三船敏郎 (蜘蛛巣城、下町、どん底)	高峰秀子 (喜びも悲しみも幾歳月、あらくれ)	三井弘次 (気違い部落、正義派、どん底)	田中絹代 (女体は良しく、地上、貴婦兄弟)
1958 (13)	楢山節考 (木下恵介)	木下恵介 (楢山節考)	小林桂樹 (鍵の大将)	淡島千景 (螢火、鍵雲)	中村鴈治郎 (鍵雲、炎上)	岡田茉莉子 (息女の季節)
1959 (14)	キクとイサム (今井正)	山本薩夫 (荷車の歌、人間の壁)	船越英二 (野火)	北林谷栄 (キクとイサム)	宇野重吉 (人間の壁)	吉行和子 (才女気質、にあんちゃん)
1960 (15)	おとうと (市川崑)	市川崑 (おとうと、女経・第二話)	小林桂樹 (黒い画集・あるサラリーマンの証言)	岸恵子 (おとうと)	森雅之 (おとうと、悪い奴ほどよく眠る)	田中絹代 (おとうと)
1961 (16)	人間の条件・完結篇 (小林正樹)	小林正樹 (人間の条件・完結篇)	仲代達矢 (人間の条件・完結篇)	高峰秀子 (名もなく貧しく美しく、永遠の人)	三國連太郎 (はだかっ子、隠書)	新珠三千代 (小早川家の秋、雨の風と波)
1962 (17)	切腹 (小林正樹)	市川崑 (破戒、私は一歳)	殿山泰司 (人間)	岡田茉莉子 (今年の恋、秋津温泉)	東野英治郎 (キューポラのある街、秋刀魚の味、ほか)	岸田今日子 (破戒、秋刀魚の味、忍ぶ者)
1963 (18)	天国と地獄 (黒澤明)	今村昌平 (にっぽん昆虫記)	小林桂樹 (白と黒、江分利満氏の優雅な生活)	左幸子 (にっぽん昆虫記、波女と波)	長門裕之 (古都)	中村玉緒 (越前竹人形)
1964 (19)	砂の女 (勅使河原宏)	勅使河原宏 (砂の女)	西村晃 (赤い殺意)	京マチ子 (甘い汁)	三木のり平 (舞踏)	楠侑子 (赤い殺意、おんなの船と船と流れ)
1965 (20)	赤ひげ (黒澤明)	内田叶夢 (飢餓海峡)	三國連太郎 (飢餓海峡、にっぽん泥棒物語)	左幸子 (飢餓海峡)	伴淳三郎 (飢餓海峡)	奈良岡朋子 (盗人の掟)
1966 (21)	白い巨塔 (山本薩夫)	山本薩夫 (白い巨塔)	小沢昭一 (「エロ事師たち」より・人類学入門)	司葉子 (紀ノ川)	三橋達也 (女の中にいる他人)	坂本スミ子 (「エロ事師たち」より・人類学入門)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1981 (55)	泥の河 (小栗康平)	小栗康平 (泥の河)	永島敏行 (遠雷、事故)	倍賞千恵子 (駅 STATION)	中村嘉葎雄 (陽炎座、ラブレター)	加賀まりこ (泥の河、陽炎座、ラブレター)
1982 (56)	蒲田行進曲 (深作欣二)	深作欣二 (蒲田行進曲)	根津甚八 (さらば愛しき大地)	松坂慶子 (蒲田行進曲、道頓堀川)	平田満 (蒲田行進曲)	小柳ルミ子 (誘拐報道)
1983 (57)	家族ゲーム (森田芳光)	森田芳光 (家族ゲーム)	松田優作 (家族ゲーム、探偵物語)	田中裕子 (天城越え)	伊丹十三 (家族ゲーム、細雪)	永島暎子 (竜二)
1984 (58)	お葬式 (伊丹十三)	伊丹十三 (お葬式)	山崎努 (お葬式、さらば箱舟)	吉永小百合 (おはん、天国の駅)	高品格 (麻雀放浪記)	三田佳子 (Wの悲劇)
1985 (59)	それから (森田芳光)	森田芳光 (それから)	北大路欣也 (火まつり、夢千代日記、春の鐘)	倍賞美津子 (生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ竜宮音、恋文、友よ、静かに眠れ)	小林薫 (それから、パラダイスビュー)	藤田弓子 (潮騒り物語、さびしんぼう)
1986 (60)	海と毒薬 (熊井啓)	熊井啓 (海と毒薬)	内田裕也 (コミック雑誌なんかいらない!)	秋野暢子 (片翼だけの天使)	植木等 (新 喜びも悲しみも幾歳月)	いしだあゆみ (火宅の人、時計Adieu l'Hiver)
1987 (61)	マルサの女 (伊丹十三)	伊丹十三 (マルサの女)	時任三郎 (永遠の2/1、ハワイアン・ドリーム)	宮本信子 (マルサの女)	津川雅彦 (マルサの女、別れぬ理由)	桜田淳子 (イタズ 無-)
1988 (62)	となりのトトロ (宮崎駿)	黒木和雄 (TOMORROW・明日)	真田広之 (快盗ルビイ)	桃井かおり (TOMORROW・明日、木村家の人びと、噛む女)	片岡鶴太郎 (異人たちとの夏)	秋吉久美子 (異人たちとの夏)
1989 (63)	黒い雨 (今村昌平)	今村昌平 (黒い雨)	三國連太郎 (利休)	田中好子 (黒い雨)	原田芳雄 (どついたるねん、出張、キスより簡単、夢見通りの人々)	相楽晴子 (どついたるねん)
1990 (64)	櫻の園 (中原俊)	中原俊 (櫻の園)	岸部一徳 (死の舞)	松坂慶子 (死の舞)	石橋蓮司 (浪人街、われに撃つ用意あり)	香川京子 (式部物語)
1991 (65)	息子 (山田洋次)	山田洋次 (息子)	三國連太郎 (息子)	北林谷栄 (大誘拐 RAINBOW KIDS)	永瀬正敏 (息子)	和久井映見 (息子、就職戦線異状なし)
1992 (66)	シコふんじゃった。 (周防正行)	周防正行 (シコふんじゃった。)	原田芳雄 (寝取られ宗介)	大竹しのぶ (死んでもいい、復活の朝、夜逃げ屋本舗)	村田雄浩 (おこげ、ミンボーの女、ゴジラVSモスラ)	藤谷美和子 (寝取られ宗介、女殺油地獄)
1993 (67)	月はどっちに出ている (崔洋一)	崔洋一 (月はどっちに出ている)	真田広之 (僕らはみんな生きている、眠らない街・新宿鮫)	ルビー・モレノ (月はどっちに出ている)	岸部一徳 (僕らはみんな生きている、水の旅人・侍KIDS、教祖誕生、病院で死ぬということ、帰って来た木枯し紋次郎、空がこんなに青いわけがない)	桜田淳子 (お引越し)
1994 (68)	全身小説家 (原一男)	原一男 (全身小説家)	奥田瑛二 (棒の良しみ、極道記者2・馬券転生編)	高岡早紀 (忠臣蔵外伝四谷怪談)	中井貴一 (四十七人の刺客)	室井滋 (居酒屋ゆうれい)
1995 (69)	午後の遺言状 (新藤兼人)	新藤兼人 (午後の遺言状)	真田広之 (写楽、EAST MEETS WEST、緊急呼出し/エマージェンシー・コール)	杉村春子 (午後の遺言状)	ミッキー・カーチス (KAMIKAZE TAXI) 竹中直人 (EAST MEETS WEST)	乙羽信子 (午後の遺言状)
1996 (70)	Shall we ダンス? (周防正行)	小栗康平 (眠る男)	役所広司 (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	原田美枝子 (絵の中のぼくの村)	渡哲也 (わが心の銀河鉄道 宮澤賢治物語)	草村礼子 (Shall we ダンス?)
1997 (71)	うなぎ (今村昌平)	望月六郎 (鬼火、悪極道、無国籍の男 血の収穫)	役所広司 (うなぎ、失楽園)	桃井かおり (東京夜曲)	西村雅彦 (マルタイの女、ラヂオの時間)	倍賞美津子 (東京夜曲、うなぎ)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1956 (30)	真昼の暗黒 (今井正)	今井正 (真昼の暗黒)	佐田啓二 (あなた買います)	山田五十鈴 (偽と真実と二人のをんな、流れる)		
1957 (31)	米 (今井正)	今井正 (米)	フランキー堺 (幕末太陽伝)	山田五十鈴 (細雪、東京綺譚、どん底、下町)		
1958 (32)	楢山節考 (木下恵介)	木下恵介 (楢山節考)	市川雷蔵 (炎上)	田中絹代 (楢山節考)		
1959 (33)	キクとイサム (今井正)	今井正 (キクとイサム)	船越英二 (野火)	新珠三千代 (人間の条件 第1・2部、私は貝になりたい、千代田城炎上)		
1960 (34)	おとうと (市川崑)	市川崑 (おとうと)	小林桂樹 (黒い画面・あるサラリーマンの証言)	山本富士子 (女経、源氏物語)		
1961 (35)	不良少年 (羽仁進)	羽仁進 (不良少年)	三船敏郎 (用心棒、大阪城物語)	若尾文子 (女は二度生まれる、妻は告白する)		
1962 (36)	私は二歳 (市川崑)	市川崑 (私は二歳)	仲代達矢 (椿三十郎、切腹)	岡田茉莉子 (今年の恋、鴛子の運命)		
1963 (37)	にっぽん昆虫記 (今村昌平)	今村昌平 (にっぽん昆虫記)	勝新太郎 (悪名シリーズ、座頭市シリーズ)	左幸子 (にっぽん昆虫記、波女と波)		
1964 (38)	砂の女 (勅使河原宏)	勅使河原宏 (砂の女)	山村聡 (傷だらけの山河)	京マチ子 (甘い汁)		
1965 (39)	赤ひげ (黒澤明)	黒澤明 (赤ひげ)	三國連太郎 (にっぽん泥棒物語)	若尾文子 (清作の妻、妻の日の愛のかたみに、波影)		
1966 (40)	白い巨塔 (山本薩夫)	山本薩夫 (白い巨塔)	小沢昭一 (「エロ事師たち」より・人類学入門)	司葉子 (紀ノ川、ひき逃げ、沈丁花)		
1967 (41)	上意討ち-拝領妻始末- (小林正樹)	小林正樹 (上意討ち-拝領妻始末-)	市川雷蔵 (夢千代日記、ある殺し屋)	岩下志麻 (智恵子抄、あかね雲、女の一生)		
1968 (42)	神々の深き欲望 (今村昌平)	今村昌平 (神々の深き欲望)	三船敏郎 (山本五十六、黒部の太陽、風林火山)	若尾文子 (不信のとき、積木の箱、遠れた二人)		
1969 (43)	心中天網島 (篠田正浩)	篠田正浩 (心中天網島)	渥美清 (男はつらいよ、続・男はつらいよ、喜劇・女は度胸)	岩下志麻 (心中天網島、わが恋わが歌、赤毛、日も月も)		
1970 (44)	家族 (山田洋次)	山田洋次 (家族)	井川比佐志 (家族、どですかでん)	倍賞千恵子 (家族、男はつらいよ・望郷篇)		
1971 (45)	儀式 (大島渚)	大島渚 (儀式)	佐藤慶 (儀式、日本の悪霊)	藤純子 (緋牡丹博徒・お命頂きます、その他のシリーズ)		
1972 (46)	忍ぶ川 (熊井啓)	熊井啓 (忍ぶ川)	井川比佐志 (故郷、忍ぶ川)	伊佐山ひろ子 (白い指の触れ、一条さゆり 濡れた欲情)		
1973 (47)	津軽じょんがら節 (斉藤耕一)	斉藤耕一 (津軽じょんがら節)	菅原文太 (仁義なき戦い・広島死闘篇・代理戦争)	江波杏子 (津軽じょんがら節)		
1974 (48)	サンダカン八番娼館 望郷 (熊井啓)	熊井啓 (サンダカン八番娼館 望郷)	萩原健一 (青春の蹉跌)	田中絹代 (サンダカン八番娼館 望郷)		
1975 (49)	ある映画監督の生涯 -溝口健二の記録- (新藤兼人)	新藤兼人 (ある映画監督の生涯-溝口健二の記録)	佐分利信 (化石)	浅丘ルリ子 (男はつらいよ・寅次郎相合い傘)	原田芳雄 (祭りの準備)	大竹しのぶ (青春の門)
1976 (50)	青春の殺人者 (長谷川和彦)	長谷川和彦 (青春の殺人者)	水谷豊 (青春の殺人者)	原田美枝子 (青春の殺人者)	大滝秀治 (あにいもうと、不毛地帯)	太地喜和子 (男はつらいよ・寅次郎夕焼け小焼け)
1977 (51)	幸福の黄色いハンカチ (山田洋次)	山田洋次 (幸福の黄色いハンカチ)	高倉健 (幸福の黄色いハンカチ、八甲田山)	岩下志麻 (はなれ瞽女おりん)	武田鉄矢 (幸福の黄色いハンカチ)	桃井かおり (幸福の黄色いハンカチ)
1978 (52)	サード (東陽一)	東陽一 (サード)	緒形拳 (鬼畜)	梶芽衣子 (曽根崎心中)	渡瀬恒彦 (事件、赤穂城断絶)	大竹しのぶ (事件、聖職の碑)
1979 (53)	復讐するは我にあり (今村昌平)	今村昌平 (復讐するは我にあり)	若山富三郎 (極道殺人・息子よ、遠い明日)	桃井かおり (もっ帰づとはつかない、男はつらいよ・噴んでる寅次郎)	三國連太郎 (復讐するは我にあり)	小川真由美 (復讐するは我にあり、配達されない三通の手紙)
1980 (54)	ツィゴイネルワイゼン (鈴木清順)	鈴木清順 (ツィゴイネルワイゼン)	渡瀬恒彦 (神様のくれた赤ん坊、影の軍団・服部半蔵、襲える者)	大谷直子 (ツィゴイネルワイゼン)	山崎努 (影武者)	大楠道代 (ツィゴイネルワイゼン)

Digitized by Google

キネマ旬報賞

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1924 (1)	日本映画の選出はなし					
1925 (2)	日本映画の選出はなし					
1926 (3)	足にさはった女 (安部豐)					
1927 (4)	忠次旅日記・信州血笑篇 (伊藤大輔)					
1928 (5)	浪人街・第一話 (マキノ正博)					
1929 (6)	首の座 (マキノ正博)					
1930 (7)	(現)何が彼女をさうさせたか(鈴木重吉) (時)続大岡政談・魔像篇第一 (伊藤大輔)					
1931 (8)	マダムと女房 (五所平之助)					
1932 (9)	生れてはみたけれど (小津安二郎)					
1933 (10)	出来ごころ (小津安二郎)					
1934 (11)	浮草物語 (小津安二郎)					
1935 (12)	妻よ薔薇のやうに (成瀬巳喜男)					
1936 (13)	祇園の姉妹 (溝口健二)					
1937 (14)	限りなき前進 (内田吐夢)					
1938 (15)	五人の斥候兵 (田坂具隆)					
1939 (16)	土 (内田吐夢)					
1940 (17)	小島の春 (豊田四郎)					
1941 (18)	戸田家の兄弟 (小津安二郎)					
1942 (19)	ハワイ・マレー沖海戦 (山本嘉次郎)					
1948 (20)	大曽根家の朝 (木下恵介)					
1947 (21)	安城家の舞踏会 (吉村公三郎)					
1948 (22)	酔いどれ天使 (黒澤明)					
1949 (23)	晩春 (小津安二郎)					
1950 (24)	また逢う日まで (今井正)					
1951 (25)	麦秋 (小津安二郎)					
1952 (26)	生きる (黒澤明)					
1953 (27)	にごりえ (今井正)					
1954 (28)	二十四の瞳 (木下恵介)					
1955 (29)	浮雲 (成瀬巳喜男)	成瀬巳喜男 (浮雲)	森雅之 (浮雲)	高峰秀子 (浮雲)		

Digitized by Google

サンダンス映画祭

SUNDANCE FILM FESTIVAL

年度 (回数)	グランプリ		観客賞	
	ドラマ部門	ドキュメンタリー部門	ドラマ部門	ドキュメンタリー部門
1990 (12)	カメレオン・ストリート (ウェンデル・B・ハリス・ジュニア)	H-2 Worker (ステファニー・ブラック) ウォーター・アンド・パワー (パット・オニール)	ロングタイム・コンパニオン (ノーマン・ルネ)	バークレイ・60's (マーク・キッチェル)
1991 (13)	ポイズン (トッド・ヘインズ)	American Dream (Barbara Kopple) パリ、夜は眠らない。 (ジェニー・リヴィングストン)	ワン・カップ・オブ・コーヒー (ロビン・B・アームストロング)	American Dream (Barbara Kopple)
1992 (14)	イン・ザ・スープ　夢の降る街 (アレクサンダー・ロックウェル)	ブリーフ・ヒストリー・オブ・タイム (エロール・モリス) Finding Christa (カミーユ・ビンショップス、ジェームズ・ハッチ)	ウォーターダンス (ニール・ヒメネズ)	Brothers Keeper (Joe Berlinger,Bruce Sinofsky)
1993 (15)	ルビー・イン・パラダイス (ビクター・ヌネッツ) パブリック・アクセス (ブライアン・シンガー)	チルドレン・オブ・フェイト (アンドリュー・ヤング、スーザン・トッド) Silverlake Life : The View from Here (トム・ジョスリン、ピーター・フリードマン)	エル・マリアッチ (ロバート・ロドリゲス)	Something within Me (ジャネット・イングル、エマ・ジョーン・モリス)
1994 (16)	What happened Was (トム・ニューナン)	フリーダム・オン・マイ・マインド (コニー・フィールド、マリリン・マルフォード)	スパンキング・ザ・モンキー (デイヴィッド・O・ラッセル)	フープ・ドリームス (スティーヴ・ジェームズ)
1995 (17)	マクマレン兄弟 (エドワード・バーンズ)	Crum (テリー・ツヴェゴフ)	ピクチャー・ブライド (ウヨ・ハッタ)	Ballot Measure 9 (ハザー・マクドナルド) アンジップド (ダグラス・キーヴ)
1996 (18)	ウェルカム・ドールハウス (トッド・ソロンズ)	トラブルサム・クリーク (ジアンヌ・ジョーダン、スティーヴン・アッシャー)	この森で、天使はパスを降りた (デイヴィッド・ズロートフ)	トラブルサム・クリーク (ジアンヌ・ジョーダン、スティーヴン・アッシャー)
1997 (19)	サンディ (ジョナサン・ノッシター)	ガールズ・ライク・アス (ジェーン・C・ワーグナー)	Harricane (モーガン・J・フリーマン) ラヴ・ジョーンズ (セオドア・ウィッチャー)	Paul Monette : the Brink of Summer's End
1998 (20)	Slam (マーク・レヴィン)	Frat House (トッド・フィリップス、アンドリュー・ガーランド) The Farm (ジョナサン・スタック、リズ・ガーバス)	Smoke Signals (クリス・エア)	Out of the Past (ジェフ・デュブル)

Digitized by Google

アヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭

年度	作品賞（びあテン）
1973 (1)	激突！(米) (スティーヴン・スピルバーグ)
1974 (2)	ソイレント・グリーン(米) (リチャード・フライシャー)
1975 (3)	ファントム・オブ・パラダイス(米) (ブライアン・デ・パルマ)
1976 (4)	Les Decimales du Futur (ロベール・フェスト)
1977 (5)	キャリー(米) (ブライアン・デ・パルマ)
1978 (6)	Full Circle (リチャード・ロンクレイトン)
1979 (7)	Patrick (リチャード・フランクリン)
1980 (8)	タイム・アフター・タイム(米＝英) (ニコラス・メイヤー)
1981 (9)	エレファント・マン(米) (デイヴィッド・リンチ)
1982 (10)	マッド・マックス　2(オーストラリア) (ジョージ・ミラー)
1983 (11)	ダーク・クリスタル(米) (ジム・ヘンソン、フランク・オズ)
1984 (12)	悪魔の密室(オランダ) (ディック・マース)
1985 (13)	ターミネーター(米) (ジェームズ・キャメロン)
1986 (14)	ドリーム・ラバー(米) (アラン・J・パクラ)
1987 (15)	ブルー・ベルベット(米) (デイヴィッド・リンチ)
1986 (16)	ヒドゥン(米) (ジャック・ショルダー)
1989 (17)	戦慄の絆(米) (デイヴィッド・クローネンバーグ)
1990 (18)	ハードカバー(米) (チボー・タカクス)
1991 (19)	フロム・ザ・ダークサイド(米) (ジョン・ハリスン)
1992 (20)	自由と呼ぶ映画館からの脱出 (ヴォイチェフ・マルチェフスキ)
1993 (21)	ブレインデッド(ニュージーランド) (ピーター・ジャクソン)

東京国際映画祭

INTERNATIONAL FILM FESTIVAL IN TOKYO

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演男優賞
1985 (1)	台風クラブ (相米慎二／日)	ゴタール・ベーテル (止まった時間／ハンガリー)		
1987 (2)	古井戸 (ウー・ティエンミン／中国)	ラーナ・ゴウゴベリー (転回／ソ連)	張芸謀 (古井戸／中国)	
1989 (3)	ホワイト・ローズ (ライコ・グルリチ／ユーゴスラビア・英)	ライコ・グルリチ (ユーゴスラビア＝英／ホワイト・ローズ)	マーロン・ブランド (白く渇いた季節／米)	エレーナ・ヤコブレワ (令嬢ターニャ／ソ連＝スウェーデン)
1991 (4)	希望の街 (ジョン・セイルズ／米)	アラン・パーカー (ザ・コミットメンツ／アイルランド)	オタール・メグヴィネトゥフツェシ (泣、去るべし／露)	趙麗蓉 (過ぎにし年・迎えし年／中国)
1992 (5)	ホワイト・バッジ (チョン・ジョン／韓国)	チョン・ジョン (ホワイト・バッジ／韓国)	マックス・フォン・シドー (ザ・サイレント・タッチ／英・ポーランド・デンマーク)	ルミ・カバソス (ひかされた愛／メキシコ)
1993 (6)	青い凧 (ティエン・チュアンチュアン／中国)	テイラー・ハックフォード (ブラッド・イン　ブラッド・アウト／米)	本木雅弘 (ラストソング／日)	ロリータ・ダヴィドヴィッチ (ヤンガー・アンド・ヤンガー／米＝独) ルー・リービン (青い凧／中国)
1994 (7)	息子の告発 (イム・ホー／香港＝中国)	イム・ホー (息子の告発／香港＝中国)	牛振華 (秋風に酔う／中国)	デブラ・ウィンガー (欲望／米)
1995 (8)	該当作品なし	ホセ・ノボア (少年パイロ　逃走の果て／ベネズエラ)	該当作品なし	富田靖子 (南京の慕情／香港)
1996 (9)	コーリャ／愛のプラハ (ヤン・スヴィエラーク　チェコ)	黄天明 (変面／中国)	朱旭 (変面／中国)	ヒルデグン・リーセ、マリエ・タイセン (麻しい日曜日／ノルウェー)
1997 (10)	ビヨンド・サイレンス(カロリーヌ・リンク／独) パーフェクト・サークル (アデミル・ケノヴィッチ／サラエボ)	アデミル・ケノヴィッチ (パーフェクト・サークル／サラエボ)	役所広司 (CURE／日)	ルネ・リュウ、ツェン・ジン (青春のつぶやき／台湾)

Digitized by Google

ジョルジュ・サドゥール賞

Prix Georges Sadoul

年度	作　品
1968年	Goto.l'ile d'amour(仏/ヴァレリアン・ブロウチク) The edge(米/ロバート・クレイマー) La chute des feuilles(ソ連/オタール・イオスリアリ)
1969	Un fils unique(仏/ミシェル・ボラク) Jagdszenen aus Niederbayern(独/ペーター・フライュマン) コンドルの血(ボリヴィア/イョルゲ・アンジネス)
1970	Le chagrin et la pitié(仏/マルセル・オフュールス) 王家の谷(エジプト/シャディ・アブデル・サラム)
1971	Paul(仏/ディウルカ・メドヴェスキ) Kodyu(セネガル/アルバカール・サム) Part of the family(米/ポール・ロンダー) La reconstitution(ギリシア/テオ・アンゲロプロス) Traces(モロッコ/ハミド・ベナーニ)
1972	Au rendez-vous de la mort joyeuse(仏/ルイス・ブニュエル) Reed,Mexico lnsurgente(メキシコ/ポール・レデュック)
1973	Kashima Paradise(仏/ヤソ・ル・マッソン、ベニ・デスワルト) La tiera prometida(チリ/ミゲル・リッチィン) La villegiatura(伊/マルコ・レト)
1974	Histoire de Wahari(仏/ヴィンセント・ブランシェ) La dernière tombe à Dimbaza Hearts and Minds(米/ピーター・ディヴィス)
1975	La fils de l'autre(Muna moto)(カルメン/ディコンゲ・ビバ) Lettre paysanne(セネガル/サワ・ファイエ) Nationalité immigré(モーリタニア/シドニー・ソユーナ) Iracema(ブラジル/ホルヘ・ボダンスキー)
1976	Touche pas á mon copain(仏/ベルナール・ブーティエ) La récolte、an 3000(エチオピア/ハイレ・ジェリマ) Winstanley(アルジェリア/ケビンブロンロウ、アンドリュウ・モロ) Trobriand Gricket(オーストラリア/ゲーリー・キルディア)
1977	彼女と彼たち－なぜ、いけないの－(仏/コリーヌ・セロー) Vingt jours sans guerre(ソ連/アレクセイ・ゲルマン)
1978	Passe-montagne(仏/ジャン・フランソワ・ステヴン) La femme gauchère(RFA/ピーター・ハントケ) With babies and banners(米/ロレイン・グレア)

年度	作　品
1979	Numérous zéros(仏/レイモンド・デバルドン) Le chemin perdu(仏＝スイス/パトリシア・モラス)
1980	Le rose et le blanc(仏/ロベール・パンサ＝ブレッソン) Cochon qui s'eu dédit(仏/ジャン＝ルイ・ル・タコン) ガイジン(ブラジル/山崎ちづか)
1981	Dernier été(仏/ロベール・ゲディギャン) Qui chante là-bas(ユーゴスラビア/スロボダン・シアン)
1983	Le destin de Juliette(仏/アリーヌ・イセルマン) La part des choses(ベルナール・ダグリテイス)
1984	Louise l'msoumise(仏/シャーロット・ツルベラ) Porlns caminos verdes(ベネズエラ/マリルダ・ヴェラ)
1965	Komba,dieu des pyg mées(仏/レイモン・アダム) 伽倻子のために(H/小栗喰平) Tasio(スペイン/モントクソ・アルメンダリス)
1986	Ou que tu sois(仏－アラン・ベルガラ) Le choix(仏/ブルキナファソ、イドリッサ・ウエドラオウ
1987	Faubourg Saint-Martin(仏/ジャン＝クロード・ギゲ) スリープ・ウォーク(米/サラ・ドライヴァー)
1988	Peaux de vaches(仏/パトリシア・アズィ) Le moine noir(ソ連/イワン・ディックホビィッチーニ)
1989	モンタルボと少年(仏/クロード・ムーリラ) Mlcoi(伊/マリオ・ブレンタ) スウィーティー(オーストラリア/ジェーン・カンピオン)
1990	Fortune Express(オリヴィエ・シャツキー)
1991	L'Annonce faite Marie(アラン・キュニー) カルネ(ギャスパー・ノエ)
1992	魂を救え！(アルノー・デプレシャン)
1993	おせっかいな天使(ローランス・フェレラ・バルボザ)
1994	天使が隣で眠る夜(ジャック・オーディアール)
1995	No Sex Last Night(ソフィー・キャル)
1996	Reprise(H・ルルー)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞
1985 (14)	炎628(ソ連) (エレン・クリーモフ) ソルジャー・ストーリー(米) (ノーマン・ジュイソン) Ikathodos ton enneaf The Descendant of the Nine (ギリシア)(クリストス・シオバウス)		ラース・シモンスン (Twist and Shout/デンマーク) デトレフ・キュゴウ (Wedzeck/西独)	ユーリー・バースティ (The Med Countess) 崔銀姫 (塩/北朝鮮)
1987 (15)	インテルビスタ(伊) (フェデリコ・フェリーニ)		アンソニー・ホプキンス (チャーリングクロス街84番地/英)	ドゥロティア・ウドヴァロウシュ (Love Mother/ハンガリー)
1989 (16)	シャボン泥棒(伊) (マウリツィオ・ニケッティ)		チューロ・パジャラ (Ariel/フィンランド)	カン・スヨン (波瀾万丈/韓国)
1991 (17)	A piebald Dog Running on the Edge of the Sea(ソ連) (クレン・ゲヴォーキアン)		ムスタファ・ナダレヴィチ、ブラニスラフ・レチッチ (Giuvi Barut/ユーゴ)	イザベル・ユペール (ボヴァリー夫人/仏)
1993 (18)	Ivan and Abraham(仏) (ヨランド・ザウベルマン)	エミール・スタング・ルンド (Bat Wings/ノルウェー)	リー・ドゥク・ワ (I will survive/韓国)	フルヤ・アヴサール (Berlin in Berlin/トルコ)
1995 (19)	該当なし	レジス・バルニエ (フランスの女/仏) ミラン・シュタインドラー (Diky za kazde nove rano)	ガブリエル・バリリ (フランスの女/仏)	エマニュエル・ベアール (フランスの女/仏)
1997 (20)	マイ・ルーム(米) (ジェリー・ザックス)	ヤーノシュ・サス (The Witman Boys/ハンゲリー)	ティル・ショヴァイガー (Knockin'on Heaven's Door/独)	イザベル・オルダス (シボレー/スペイン)(未)

Digitized by Google

モスクワ映画祭

INTERNATIONAL FILM FESTIVAL IN MOSCOW

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞
1959 (1)	人間の運命 (セルゲイ・ボンダルチュク/ソ連)	ルイス・ギルバート (The Tears of Orphans/英)	ヴィエンチスワフ・グリニュスキー、アレクサンデル・セヴルーク、ブロニスワフ・パヴリク (潜航！危機一髪/ポーランド)	ブレネ・ツェベルスレン (Messager du peuple/モンゴル)
1961 (2)	裸の島 (新藤兼人/日) Chistoye nebo (グリゴーリ・チュフライ/ソ連)	アルマン・ガッティ (l'enclos/仏)	ピーター・フィンチ (The Trial of Oscar Wilde/英) バンバン・ヘルマント(Combattants de la liberté/インドネシア)	ユー・ラン (Une famille de révolutionnaires/中国)
1963 (3)	8 1/2 (フェデリコ・フェリーニ/伊)	フランク・パイエル (裸で狼の群のなかに/東独)	スティーヴ・マックイーン (大脱走/米)	スヒトレ・セン (L'anneau de mariage/インド)
1965 (4)	戦争と平和 (セルゲイ・ボンダルチュク/ソ連) Húsz óra (ゾルタン・ファーブリ/ハンガリー)		セルゲイ・ザカリアーゼ (Otets soldata/ソ連)	ソフィア・ローレン (あゝ結婚/伊)
1967 (5)	Zhurnalist (セルゲイ・ゲラーシモフ/ソ連) Apa (イシュトヴァーン・サボー/ハンガリー)		ポール・スコフィールド (わが命つきるとも/英)	サンディ・デニス (下り階段をのぼれ/米) グリネット・モルヴィグ (Prinsessan/スウェーデン)
1969 (6)	ルシア (フンベルト・ソラス/キューバ) Serafino (ピエトロ・ジェルミ/伊) Dozhivem do ponedelnika (スタニスラス・ロストッキー/ソ連) カラマーゾフの兄弟 (イワン・ピリエフ/ソ連)		ロン・ムーディ (オリバー！/英) タデウシュ・ウォムニツキ (Pan Volodyewski/ポーランド)	イリナ・ペトレスカ (A Woman for a Season/ルーマニア) アンナ・マリア・ピッチオ (Un morceau de ciel/アルゼンチン)
1971 (7)	警視の告白 (ダミアノ・ダミアニ/伊) 裸の19才 (新藤兼人/日) 白樺の林 (アンジェイ・ワイダ/ポーランド) Byelaya ptitsa s chornoy otmyetino (ユーリ・イリエンコ/ソ連)		ダニエル・オルブリチスキー (白樺の林/ポーランド) リチャード・ハリス (クロムウェル/英)	アダ・ロゴフツェワ (Salute,Maria！/ソ連) イダリア・アンドレウス (水の日/キューバ)
1973 (8)	Eto sladkoe slovo-svoboda (ヴィタウタス・キャヴィチュス/ソ連) Oklahoma Crude (スタンリー・クレイマー/米) Affection (リュドミル・スタイコワ/ブルガリア)		セルヒオ・コリエリ (The Man from Maisinicu/キューバ) ラマズ・チヒクヴァーゼ (Sazhentsy/ソ連)	チャ・ジャン (The 17th Parallel;Days and Nights/北ヴェトナム) イングリッド・ヴァルドゥンド (Lina's Wedding/ノルウェー)
1975 (9)	デルス・ウザーラ (黒澤明/ソ連) 約束の地 (アンジェイ・ワイダ/ポーランド) あんなに愛しあったのに (エットーレ・スコラ/伊)		ミゲーリ・ベナヴィデス (もう一人のフランシスコ/キューバ) ゲオルギー・ゲオルギエフェゲツ (自転車に乗った農民/ブルガリア)	ハリエット・アンデショーン (白い壁/スウェーデン) ファチメ・ブアマリ (遺産/アルジェリア)
1977 (10)	第五の印判 (ゾルタン・ファブリ/ハンガリー) 週末 (フーアン・A・バルデム/スペイン) ミミノ (ゲオルギー・ダネーリーヤ/ソ連)		アムゼ・ペッラ (判決/ルーマニア) ラドウコ・ポリチュウ (理想主義者/ユーゴ)	マリ・アビク (袋小路/イラン) メルセデス・カレーラス (気が狂った女たち/アルゼンチン)
1979 (11)	メキシコ万歳 (セルゲイ・エイゼンシュテイン、エドゥアルド・ティッセ、グリゴーリ・アレクサンドロフ/ソ連)		ウリリフ・タイン (アントンは魔法使い/東独) ヴェリミル・バデ・ジヴォイノヴィチ (その一瞬/ユーゴ)	ヤスミネ・フラト (ナフリヤ/アルジェリア) デイシ・クラナドス (テレサの肖像/キューバ)
1981 (12)	こき使われた人 (ジョアオ・バディスタ、モラエス・アンドラデ/ブラジル)		カール・メルカーツ (ボッケレル/オーストリア) チト・フンチョ (国境警備兵/キューバ) ロマン・ウイリベリミ (蛾/ポーランド)	メルセデス・サンピエトロ (天国にいるゲーリー・クーパー/スペイン) マヤゴゼリ・アイメードワ (ジャマルの樹/ソ連)
1983 (13)	アモク！ (スウェイル・ベンニバルカ/モロッコ=ギニア=セネガル) アルシノとコンドル (ミゲル・リッティン/ニカラグア) ワッサ (グレーブ・パンフィーロフ/ソ連)		ヴィルギリウシュ・グリニ (田園詩エロイカ/ポーランド) 加藤嘉 (ふるさと/日)	ジュディ・デイヴィス (われらが希望の冬/オーストラリア) ジェシカ・ラング (女優フランシス/米)

Digitized by Google

ジャン・ヴィゴ賞

Prix Jean Vigo

年度	作　品
1952年	La grande vie(アンリ・シュナイダー)
1953	白い馬(アルベール・ラモリス)
1954	Les statues meurent aussi(アラン・レネ)
1955	Zola(ジャン・ヴィダル)
1956	夜と霧(アラン・レネ)
1957	Léon la lune(アラン・ジェシュア)
1958	Les femmes de Stermetz(ルイ・グロスピエール)
1959	Le beau Serge(クロード・シャブロル)
1960	勝手にしやがれ(ジャン＝リュック・ゴダール) Enfants des courants d'air(エドゥアル・リュンツ)
1961	La peau et les os(ジャン＝ポール・サッシ、ジャック・バニジェル)
1962	わんぱく戦争(イヴ・ロベール) Dix Juin 1944(モーリス・コーエン)
1963	Mourir à Madrid(フレデリック・ロシフ) La jetée(クリス・マイケル)
1964	美しき人生(ロベール・アンリコ) Le Saint Firmin(ロベール・デタンク)
1965	Fait à Coaraze(ジェラール・ベルカン)
1966	La noire de…(センベーネ・ウスマーネ)
1967	ポリー・マグーお前は誰だ(ウィリアム・クライン)
1968	O Salto(クリスチャン・ド・シャロンジュ) Désiirée (フェルナンド・モスコヴィック)
1969	L'enfance une(モーリス・ピアラ) Le deuxième ciel(ルイ・ロジェ)
1970	Hoa Binh(ラウール・クター) La Passion selon Florimond(ローラン・ゴメス)
1971	Rempart d'argile(ジャンルイ・ベルチュッセリ) Derniers hivers(ジャン・シャルル・タシェラ)
1972	Continental circus(ジェローム・ラベローサ)
1973	Absences répétées(ガイ・ギル) Le Soldat et les trois sceurs(パスカル・オービエ)
1974	Un homme qui dort(ベルナール・ケイザンヌ、ジョルジュ・ペレック) Septembre chilien(ブルーノ・ミュエル、テオ・ロビンシェ)
1975	Histoire de Paul(レネ・フェレ) La Corrida(クリスチャン・ブルタン)
1976	赤いポスター(フランク・カセンティ) Caméra(クリスチャン・ポーライル)

年度	作　品
1977	Paradiso(クリスチャン・ブリコー)
1978	Bako l'autre rive(ジャック・シャンブルー)
1979	Certaines nouvelles(ジャック・デビル) Nuit féline(ジェラール・マーク)
1980	Ma blonde, entends-tu dans la ville ? (ルネ・ギルソン)
1981	Le Jardinier(ジャン＝ピエール・センチエ)
1982	L'enfant secret(フィリップ・ギャレル) Lourd l'hiver(マリー＝クロード・トレイホ)
1983	Vive la Sociale(ジェラール・モルディラ) La Fonte de Barlaeus(ピエール＝アンリ・サルファティ)
1985	Le thé au harem d'Archimède(メディ・シャレス) Eponine(ミシェル・シオン)
1986年	Maine Ocean(ジャック・ロジェ) Poussière d'étoiles(アニエス・メルレ)
1987	Buisson ardent(ローラン・ペラン) Pondichery, juste avant l'oubli(ジョエル・ファルジュ)
1988	La Comédie du travail(リュック・ムレ) Elle et lui(フランソワ・マルゴラン)
1989	Chine, ma douleur(シジエ・ダイ) Le porte-plume(マリー＝クリスティーヌ・ペロダン)
1990	Mona et moi(パトリック・グランペレ) Elli Fat Mat(ミシェル・シュク)
1991	Le Brasier(エリック・バルビエ) 二十歳の死(アルノー・デプレシャン)
1992	パリ・セヴェイユ(オリヴィエ・アサヤス) Des Filles et des chiens(ソフィー・フィリエール)
1993	Les histoires d'amour finissent mal...en general(アンヌ・フォンテーヌ) Faist et gestes(エマニュエル・デコンヴ)
1994	Trop de bonheur(セドリック・カーン) 75 centilitre de prières(ジャック・マイヨ)
1995	N'oublie pas que tu vas mourir(グザヴィエ・ヴォーヴォワ) Tous à la manif(ローラン・カンチ)
1996	Encore(パスカル・ボニツェール)
1997	La Vie de Jésus(ブルーノ・デュモン) Soyons amis(トマ・バルディネ)
1998	Dis-moi que je rêve(クロード・ムリエラ) Les Corps ouverts(セバスティアン・リフシッツ)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞
1973 (23)	遠い雷鳴(インド) (サタジット・レイ)			
1974 (24)	グラヴィッツおやじの年季奉公 (カナダ)(テッド・コッチェフ)			
1975 (25)	養子縁組(ハンガリー) (マールタ・メサーロシュ)	セルゲイ・ソロヴィヨフ (子供時代の俺の百日間/ソ連)	ウラディミール・プロドスキ (嘘つきヤコブ/東独)	田中絹代 (サンダカン八番娼館 望郷/日)
1976 (26)	ビッグ・アメリカン(米) (ロバート・アルトマン)	マリオ・モニチェッリ (いとしのミケーレ/伊)	ゲルハルト・オルシュウスキ (失われた人生/西独)	ヤドヴィガ・バランスカ (夜と霧/ポーランド)
1977 (27)	The Ascent(ソ連) (ラリーサ・シェピチコ)	マヌエル・グティエレス (Black Litter/キューバ)	フェルナンド・フェルナン=ゴメス (The Anchorite/スペイン)	リリー・トムリン (The Last Show/米)
1978 (28)	優れた作品を出品したスペインに対して	ゲオルギ・ジュルゲロフ (Avantage/ブルガリア)	クレイグ・ラッセル (Outrageous/カナダ)	ジーナ・ローランズ (オープニング・ナイト/米)
1979 (29)	David(独) (ペーター・リリエンソール)	アストリド・ヘニング・ヤンセン (Winter Children/デンマーク)	ミケーレ・プラシド (エルネスト-美しき少年/伊)	ハンナ・シグラ (マリア・ブラウンの結婚/西独)
1980 (30)	heartland(米)(リチャード・ピアース) Palermo oder Wolfslourg(西独) (ヴァーナー・シュレーダー)	イシュトヴァン・サボー (コンフィデンス 信頼/ハンガリー)	アンジェイ・セベリン (Dyrygent/ポーランド)	レナート・クロスナー (Solo Sunny/東独)
1981 (31)	急げ、急げ(スペイン) (カルロス・サウラ)		ジャック・レモン(マイ・ハート マイ・ラブ 米)アナトリ・ソロニツィン (Dwadzat scheer clney is Shishi Dostojeuskogo/ソ連)	バルバラ・グラボウスカ (Goraczka/ポーランド)
1982 (32)	ベロニカ・フォスのあこがれ(西独) (ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー)	マリオ・モニチェッリ (グリッツ侯爵/伊)	ミシェル・ピコリ (Une Etrange affaire/仏) ステラン・スカルスガールド (Den entataldige Mördaren スウェーデン)	カトリン・ザス (Burgschaft fürein Jahr/東独)
1983 (33)	Ascendancy(英)(エドワード・ベネット) La Colmena(スペイン) (マリオ・カミュ)	エリック・ロメール (海辺のポーリーヌ/仏)	ブルース・ダーン (栄光の季節/米)	イフゲーニヤ・グルーシェンコ (Vlublen Po sobstvennomu Zelonuj/ソ連)
1984 (34)	ラヴ・ストリームス(米) (ジョン・カサヴェテス)	エットーレ・スコラ (ル・バル/仏)	アルバート・フィニー (ドレッサー/英)	モニカ・ヴィッティ (Flirt/伊)
1985 (35)	ウェザビー(英) (デイヴィッド・ヘア) 女と見知らぬ男(西独) (ライナー・ジーモン)	ロバート・ベントン (プレイス・イン・ザ・ハート/米)	フェルナンド・フェルナン=ゴメス (Stico/スペイン)	ジョー・ケネディ (Wrong World/オーストラリア)
1986 (36)	シュタムハイム(西独) (ラインハート・ハウフ)	ゲオルギー・シェンゲラーヤ (若き作曲家の旅/ソ連)	トゥンセル・クルティズ (子羊のほほ笑み/イスラエル)	シャルロット・ヴァランドレイ (赤い機動/仏) マルセリア・カルターホウ(暑さ時間/ブラジル)
1987 (37)	テーマ 田舎の出会い(ソ連) (グリエイブ・パンフィーロフ)	オリヴァー・ストーン (プラトーン)	ジャン・マリア・ヴォロンテ (首相暗殺/伊)	アーナー・ベアトリス・ノウゲイラー (Vera/ブラジル)
1988 (38)	紅いコーリャン(中国) (チャン・イーモウ)	ノーマン・ジュイソン (月の輝く夜に/米)	イェルク・ボーゼ、マンフレッド・メック (Bear Ye One Another's Burdens/東独)	ホリー・ハンター (ブロードキャスト・ニュース/米)
1989 (39)	レインマン(米) (バリー・レヴィンソン)	ドゥシャン・ハナーク (アイ・ラブ、ユー・ラブ/チェコ)	ジーン・ハックマン (ミシシッピー・バーニング/米)	イザベル・アジャーニ (ウミーユ・クローデル/仏)
1990 (40)	つながれたヒバリ(チェコ) (イジー・メンツェル) ミュージック・ボックス(米) (コンスタンチン・コスタ=ガヴラス)	ミヒャエル・ヴァーホーヴェン (ナスティ・ガール/西独)	イアーン・グレン (Silent Scream/英) モーガン・フリーマン (ドライビング・ミス・デイジー/米)	ジェシカ・タンディ (ドライビング・ミス・デイジー/米)
1991 (41)	House of Smiles(伊) (マルコ・フェレーリ)	リッキー・トニャッティ(Ultra/伊) ジョナサン・デミ(羊たちの沈黙/米)	メイナード・エジアシ (ミスター・ジョンソン/英)	ヴィクトリア・アブリル (アマンテス/愛人/スペイン)
1992 (42)	わが街(米) (ローレンス・カスダン)	ヤン・トロエル(キャプテン/スウェーデン=フィンランド=デンマーク)	アーミン・ミュラー=スタール (マイセン幻影/英・独・伊)	マギー・チャン (ロアン・リンユイ/阮玲玉/香港=台湾)
1993 (43)	香魂女/湖に生きる(中国)(シェ・フェイ) ウェディング・バンケット(中国=台湾)(アン・リー)	アンドリュー・パーキン (ルナティック・ラブ/禁断の結婚/英=仏=独)	デンゼル・ワシントン (マルコムX/米)	ミシェル・ファイファー (ラブ・フィールド/米)
1994 (44)	父の祈りを(アイルランド) (ジム・シェリダン)	クシシュトフ・キェシロフスキ (トリコロール/白の愛/仏=ポーランド)	トム・ハンクス (フィラデルフィア/米)	クリシー・ロック (レディバード、レディバード/英)
1995 (45)	ひとりぼっちの狩人たち(仏) (ベルトラン・タヴェルニエ)	リチャード・リンクレイター (恋人までの距離(ディスタンス)/米)	ポール・ニューマン (ノーバディーズ・フール/米)	ジョセフィン・シャオ (女人、四十/香港)
1996 (46)	いつか晴れた日に(米) (アン・リー)	イム・ホー(太陽に目あり) リチャード・ロンクレイン (リチャード三世/英)	ショーン・ペン (デッドマン・ウォーキング/米)	アヌーク・グランベール (私の男/仏)
1997 (47)	ラリー・フリント(米) (ミロシュ・フォアマン)	エリック・オイマン (ポート・ドジェマ)	レオナルド・ディカプリオ (ロミオ&ジュリエット/米)	ジュリエット・ビノシュ (イングリッシュ・ペイシェント/米)
1998 (48)	ウォルター・サレス (Central do Brasil/ブラジル=仏)	ニール・ジョーダン (The Butcher Boy/アイルランド=米)	サミュエル・L・ジャクソン (ジャッキー・ブラウン/米)	フェルナンダ・モンテネグロ (Central do Brasil/ブラジル=仏)

Digitized by Google

ベルリン国際映画祭

INTERNATINALEN FILMFESTPIELE BERLIN

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞
1951 (1)	Sans laisser d'adresse(仏) (ジャン＝ポール・ル・シャノワ) 裁きは終わりぬ(仏) (アンドレ・カイヤット) ジーブの四人(スイス) (レオポルド・リンドベルグ) ビーヴァーの谷(米) (ウォルト・ディズニー)			
1952 (2)	春の悶え(スウェーデン) (アルネ・マットスン／大衆投票1位)			
1953 (3)	路上の夜(西独) (ルドルフ・ユーゲルト)		クラウス・ビーデシュテット	バーバラ・リュッティング
1954 (4)	大いなる希望(伊) (ドゥイリオ・コレッティ)	ヘルムート・コイトナー (最後の橋/西独)		
1955 (5)	Die Ratten(西独)(ロベルト・ジオドマク) 汚れなき悪戯(スペイン) (ラディスラオ・バホダ) カルメン(米) (オットー・プレミンジャー) パンと恋と夢(伊) (ルイジ・コメンチーニ) Drei Männer in Schnee(西独) (クルト・ホフマン) ひろしま(日)(関川秀雄) The Dividing Heart(英) (チャールズ・クライトン) 若い恋人たち(英) (アンソニー・アスキス) Papa,maman la bonne et moi(仏) (ジャン＝ポール・ル・シャノワ) Animal Farm (以上、長編劇映画賞)			
1956 (6)	舞踏への招待(米) (ジーン・ケリー)	ロバート・アルドリッチ (Autumn Leaves/米)	バート・ランカスター (空中ぶらんこ/米)	エルザ・マルティネッリ (Donatella/伊)
1957 (7)	十二人の怒れる男(米) (シドニー・ルメット)	マリオ・モニチェリ (父と息子/伊)	ペドロ・インファンテ (Tizoc/メキシコ)	イヴォンヌ・ミッチェル (Woman in Dressing Gown/英)
1958 (8)	野いちご(スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)	今井正 (純愛物語/日)	シドニー・ポワチエ (手錠のまゝの脱獄/米)	アンナ・マニャーニ (野生の息吹き/米)
1959 (9)	いとこ同志(仏) (クロード・シャブロル)	黒澤明 (隠し砦の三悪人/日)	ジャン・ギャバン (Archimède le clochard/仏)	シャーリー・マクレーン (恋の売り込み作戦/米)
1960 (10)	El lazarillo de Tormes(スペイン) (セザール・アルダビン)	ジャン＝リュック・ゴダール (勝手にしやがれ/仏)	フレドリック・マーチ (風を受けて/米)	ジュリエット・メニエル (Kermesse/西独)
1961 (11)	夜(伊) (ミケランジェロ・アントニオーニ)	ベルンハルト・ヴィッキ (Das Wunder des Malachias/西独)	ピーター・フィンチ (ジョニーへの愛なし)	アンナ・カリーナ (女は女である/仏)
1962 (12)	或る種の愛情(英) (ジョン・シュレシンジャー)	フランチェスコ・ロージ (シシリーの黒い霧/伊)	ジェームズ・スチュワート (H氏のバケーション/米)	リタ・ガム、ヴィヴェカ・リンドフォース (出口なし)
1963 (13)	武士道残酷物語(日) (今井正) Il diavolo(伊) (ジャン＝ルイジ・ポリドーロ)	ニコス・コンドゥロス (春のめざめ/ギリシア)	シドニー・ポワチエ (野のユリ/米)	ビビ・アンデショーン (älskarinnan/スウェーデン)
1964 (14)	野生のもだえ(トルコ) (イスマエル・メンチ)	サタジット・レイ (大都会/インド)	ロッド・スタイガー (質屋/米)	左幸子 (彼女と彼、にっぽん昆虫記/日)
1965 (15)	アルファヴィル(仏＝伊) (ジャン＝リュック・ゴダール)	サタジット・レイ (チャルラータ/インド)	リー・マーヴィン (キャット・バルー/米)	マドファー・ジェフリー (Shakespeare Wallah/インド)
1966 (16)	袋小路(英) (ロマン・ポランスキー)	カルロス・サウラ (La Caza/スペイン)	ジャン＝ピエール・レオ (男性・女性/仏)	ローラ・オルブライト (Lord Love a Duck/米)
1967 (17)	Le départ(ベルギー) (イエジー・スコリモウスキー)	ジヴォジン・パヴロヴィチ (Bodjenda Pagova/ユーゴ)	ミシェル・シモン (老人と子供/仏)	エディス・エヴァンス (The Whisperers/英)
1968 (18)	Ole dole doff(スウェーデン) (ヤツ・トロエル)	カルロス・サウラ (Peppermint Frappe/スペイン)	ジャン＝ルイ・トランティニャン (L'Homme qui ment/仏)	ステファーヌ・オードラン (女鹿/仏－伊)
1969 (19)	Rani Radovi(ユーゴ) (ツェリミール・チルミニク)	ペーター・ツァデク (Ich bin ein Elefant,Madame/西独)		
1970 (20)	公式受賞作品の選出中止			
1971 (21)	悲しみの青春(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ)		ジャン・ギャバン (Le chat/仏)	シモーヌ・シニョレ (Le chat/仏) シャーリー・マクレーン (Desperate Characters/米)
1972 (22)	カンタベリー物語(伊＝仏) (ピエル・パオロ・パゾリーニ)	ジャン＝ピエール・ブラン (La vieille fille/伊)	アルベルト・ソルディ (Petenuto in Attesa di Giudizio/伊)	エリザベス・テイラー (Hammersmith is Out/米)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞
1994 (29)	Mi Hermano del Alma (スペイン)(Mariano Barroso)	Timur Bekmambetov、Gennadij Kajumov(Peshavar Wals/露)	マックス・フォン・シドー (Time is Money/仏)	ナターシャ・リチャードソン (Widow's Peak/米=英=アイルランド)
1995 (30)	Jizda/The Ride (チェコ)(ヤン・スヴィエラーク)	ラース・フォン・トリアー (Riget/デンマーク=スウェーデン=ドイツ)	Ernst Hugo Jaregard (Riget/デンマーク=スウェーデン=ドイツ)	Qui Ah-Lu (Maiden Rose ?/香港)
1996 (31)	Karkazskij Plennik (ロシア=カザフスタン)(セルゲイ・ボドロク)	Peter Gothar (Haggyallogre Vaszka/ハンガリー)	Pierre Richard (A Chef in Love/グルジア)	マリサ・パレデス (私の秘密の花/スペイン=仏)
1997 (32)	私のバラ色の人生 (ベルギー)(アラン・ベルリネール)	マルティーヌ・デュコヴソン (恋人たちのポートレート/仏)	Boleslav Polivka (Zapomenute Svetlo/チェコ)	Lena Endre (Juloratoriet/スウェーデン)
1998 (33)	La Coeur au Poing (カナダ)(Charles Biname)	Charles Biname (La Coeur au Poing/カナダ)	Olaf Lubaszenko (Sekal has to die)	Julia Stiles (Wicked/米)

Digitized by Google

カルロヴィヴァリ国際映画祭

INTERNATIONAL FILM FESTIVAL IN KARLOVY VARY

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞
1950 (5)	ベルリン陥落 (ミハイル・チアウレリ/ソ連)	フセヴォロド・プドフキン (Joukovsky/ソ連)		
1951 (6)	Kavaler zolotoi zvezdy (コーリー・ライズマン/ソ連)	ジャン＝ポール・ル・シャノワ (Sans laisser d'adresse/仏)		
1952 (7)	Nezabyvayemyi 1919 god (ミハイル・チアウレリ/ソ連)	イーゴリ・サフチェンコ (Taras Shevchenko/ソ連) クロード・オータン＝ララ (L'auberge rouge/仏)		
1954 (8)	Verniye druzya (ミハイル・カラトーゾフ/ソ連) 地の塩 (ハーバート・ビーバーマン/米)	アルベルト・カヴァルカンティ (O canto do mar/ブラジル)	シャルル・ヴァネル (埋れた青春/仏)	ロザウラ・レヴェルタス (地の塩/米)
1956 (9)	空と海の間に (クリスチャン・ジャック/仏)	イヴ・アレグレ (男の世界/仏)		
1957 (10)	Sous le couvert de la nuit (ラディ・カプール/インド)	アンジェイ・ムンク (Czlowiek ua torze/ポーランド) ウラディミール・ポガチック (Veliki i mali/ユーゴ)		
1958 (11)	静かなるドン (セルゲイ・ゲラーシモフ/ソ連) 異母兄弟 (家城巳代治/日)	ロベルト・ジオドマク (Nachts Wenn der Teufel Kam/西独)	マキシム・ストラウフ (Rasskazi o Lenjn/ソ連)	ナルギス (Notre mere l'Inde/インド)
1960 (12)	Serioja (イーゴリ・タランキン、ゲオルギー・ダネリア/ソ連)	ズビネク・ブリニフ (Smyk/チェコ)		
1962 (13)	Devyaty dneiodnogo goda (ミハイル・ロシム/ソ連)			
1964 (14)	Obžalovaný (ヤン・カダル、エルマル・クロス/チェコ)		ヴィエンチスワフ・グリニュスキー (Echo/ポーランド)	ジャンヌ・モロー (小間使の日記/仏)
1966 (15)	該当なし		(演技賞) ナウム・ショポフ(Tsar i general/ブルガリア) ドナタス・バニオニス(Nikto ne Khotel umirat/ソ連)	
1968 (16)	Rozmarné léto (イルジ・メンツェル/チェコ)		ニコライ・プロトニコフ (Tvoi Sovremennik/ソ連)	キャロル・ホワイト (夜空に星のあるように/英)
1970 (17)	The Crystal Globe (ケン・ローチ/英)		マチュー・カリエール (風の季節/仏)	ナターシャ・ベロチヴォスティコワ (湖畔にて/ソ連)
1972 (18)	Ukroschenie Ognya (ダニール・クラブロヴィッキー/ソ連)		ランジツ・マリク (インタヴュー/インド)	マリー・テレシク (Holt Videk/ハンガリー)
1974 (19)	恋人たちのロマンス (アンドレイ・ミハルコフ＝コンチャロフスキー/ソ連)			
1976 (18)	Cantata for Chili (フンベルト・ソラス/キューバ)	ラズロ・ラノーディ (だれのものでもないチェレ／ハンガリー)	ズグムント・マロノウィッツ (Jaroslav Dabrowski／ポーランド) ジョルジュ・ディニィツウ (Through The Ashes of The Empire／ルーマニア)	ヒルデガルド・フネ (Even in Death Alone/西独) カリン・シュローダー (Man Against Man／東独)
1978 (21)	Shadows of a Hot Summer (フランティシェク・ヴラーチル/チェコ) White Bim with a Black Ear (スタニスラフ・ロストツキー/ソ連)		ジュリアーノ・ジェンマ (The Iron Perfect/伊) ベーテル・ファベル (Doctor Vlimmen/オランダ)	マリソル (A Few Days of the Past/スペイン) マリー＝ジョゼ・ナット (A Simple Past/仏)
1980 (22)	The Fiancée (ギュンター・リュッカー、ギュンター・ライシュ/東独)		アル・パチーノ (ジャスティス/米) ウーレーズ・ベティア (Sons for the Return Home/ニュージーランド)	アンダ・オネサ (Gently Was Anastasia Passing/ルーマニア) ブリギット・ドル (Stories from the Wienerwald/オーストリア)
1982 (23)	Campanas rojas Mexico in Flames (セルゲイ・ボンダルチュク/メキシコ＝ソ連＝伊)		ヘンリー・フォンダ (黄昏/米) ドナルド・サザーランド (Threshold/カナダ)	
1984 (24)	Ler Tolstoy (セルゲイ・ゲラーシモフ/ソ連)		アウグスティン・ゴンザレス (Las dicicletas Son Para el Verano/スペイン) オム・プリ (Ardh Satja/インド)	スースー・ペイコラーロウ (カミーラ/アルゼンチン) マリー・コルビン(Der Fall Bachmeier-Keine Zeit für Tränen/西独)
1986 (25)	A Street To Die (ピル・ベニット/オーストラリア)		レオニード・フィーラートフ (Chicherin/ソ連)	ジェーン・フォンダ、アン・バンクロフト、メグ・ティリー (アグネス/米)
1988 (26)	芙蓉鎮(中国) (シェ・チン)		レス・セルデュク (Solomennie kolokoka/ソ連)	ユリーナ・ハルフォンユ (Die Schauspielerin/東独)
1990 (27)	チェコの復権した映画の監督たちに (エルロ・ハヴェッタ、パヴェル・ユラチェク、ヤン・カダール、エヴァルド・ショルム)	カヌシュ・キオウスキ (State of Fear ポーランド)	アンドレイ・スミルノフ (Chernou/ソ連)	クロチルド・ド・バイセルス、ドーレ・マルサク (Tumultes/仏)
1992 (28)	Krapatchouk(ベルギー＝仏＝スペイン) (エンリク・ガブリエル・リブチャッツ)		ガイ・ビオン (Krapatchouk/ベルギー＝仏＝スペイン)	イエブドキヤ・ゲルマノワ (Cracked/露)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1981 (34)	鉄の男(ポーランド) (アンジェイ・ワイダ)	ウーゴ・トニャッティ (ある愚か者の悲劇/伊)	イザベル・アジャーニ (カルテット、ポゼッション/仏)		イアン・ホルム (炎のランナー/ソ連)	エレナ・ソロヴェイ (Fakt/ソ連)
1982 (35)	ミッシング(米) (コンスタンチン・コスタ=ガヴラス) 路〈みち〉(トルコ) (ユルマズ・ギュネイ)	ヴェルナー・ヘルツォーク (フィツカラルド/西独)	ジャック・レモン (ミッシング/米)	エドヴィガ・ヤンコフスカ (Another Look/ハンガリー)		
1983 (36)	楢山節考(日) (今村昌平)	ロベール・ブレッソン (ラルジャン/仏) アンドレイ・タルコフスキー (ノスタルジア/ソ連)	ジャン・マリア・ヴォロンテ (La Mort de Mario Ricci/伊)	ハンナ・シグラ (ビエラ　愛の遍歴/西独)		
1984 (37)	パリ、テキサス(西独) (ヴィム・ヴェンダース)	ベルトラン・タヴェルニエ (田舎の日曜日/仏)	アルフレッド・ランダ、フランシスコ・ラバル (無垢なる聖者/スペイン)	ヘレン・ミレン(キャル/英)		
1985 (38)	パパは出張中！(ユーゴ) (エミール・クストリッツァ)	アンドレ・テシネ (ランデヴー/仏)	ウィリアム・ハート (蜘蛛女のキス/ブラジル=米)	ノルマ・アレアンドロ (オフィシャル・ストーリー/アルゼンチン) シェール(マスク/米)		
1986 (39)	ミッション(英) (ローランド・ジョフィ)	マーティン・スコセッシ (アフター・アワーズ/米)	ミシェル・ブラン (タキシード/仏) ボブ・ホスキンズ (モナリザ/英)	バーバラ・スコヴァ (ローザ・ルクセンブルク/西独)フェルナンダ・トアーレイス(いつまでも私を愛して/ブラジル)		
1987 (40)	悪魔の陽の下に(仏) (モーリス・ピアラ)	ヴィム・ヴェンダース (ベルリン・天使の詩/西独=仏)	マルチェロ・マストロヤンニ (黒い瞳/伊)	バーバラ・ハーシー (或る人々/米)		
1988 (41)	ペレ(デンマーク=スウェーデン) (ビレ・アウグスト)	フェルナンド・E・ソラナス (スール　その後は……愛/アルゼンチン)	フォレスト・ウィテイカー (バード/米)	バーバラ・ハーシー、ジョディ・メイ、リンダ・ムブシ (ワールド・アパート/英)		
1989 (42)	セックスと嘘とビデオテープ(米)(スティーヴン・ソダーバーグ)	エミール・クストリッツァ (ジプシーのとき/ユーゴ)	ジェームズ・スペイダー (セックスと嘘とビデオテープ/米)	メリル・ストリープ (クライ・イン・ザ・ダーク/オーストラリア)		
1990 (43)	ワイルド・アット・ハート(米) (デイヴィッド・リンチ)	バーヴェル・ルンギン (タクシー・ブルース/ソ連)	ジェラール・ドパルデュー (シラノ・ド・ベルジュラック/仏)	クリスティナ・ヤンダ (尋問/ポーランド)		
1991 (44)	バートン・フィンク (米) (ジョエル・コーエン)	ジョエル・コーエン (バートン・フィンク/米)	ジョン・タトゥーロ (バートン・フィンク/米)	イレーヌ・ジャコブ (ふたりのベロニカ/仏=ポーランド)	サミュエル・L・ジャクソン (ジャングル・フィーバー/米)	
1992 (45)	愛の風景(スウェーデン=デンマーク) (ビレ・アウグスト)	ロバート・アルトマン (ザ・プレイヤー/米)	ティム・ロビンス (ザ・プレイヤー/米)	バルミラ・アウグスト (愛の風景/スウェーデン=デンマーク)		
1993 (46)	ピアノ・レッスン(オーストラリア)(ジェーン・カンピオン)さらば、わが愛/覇王別姫(香港)(チェン・カイコー)	マイク・リー (ネイキッド/英)	デイヴィッド・シューリス (ネイキッド/英)	ホリー・ハンター (ピアノ・レッスン/オーストラリア)		
1994 (47)	パルプ・フィクション (米)(クエンティン・タランティーノ)	ナンニ・モレッティ (ぼくの日記/伊)	ゲン・ユー (生きる　中国=香港)	ヴィルナ・リージ (王妃マルゴ/仏)		
1995 (48)	アンダーグラウンド (仏) (エミール・クストリッツァ)	マチュー・カソヴィッツ (憎しみ/仏)	ジョナサン・プライス (キャリントン/英)	ヘレン・ミレン (英国万歳！/英)		
1996 (49)	秘密と嘘(英) (マイク・リー)	ジョエル・コーエン (ファーゴ/米)	ダニエル・オートゥイユ、パスカル・ディケンヌ (八日目/仏)	ブレンダ・ブレッシン (秘密と嘘/英)		
1997 (50)	うなぎ(日)(今村昌平) 桜桃の味(イラン) (アッバス・キアロスタミ)	ウォン・カーウァイ (ブエノスアイレス/香港)	ショーン・ペン (シーズ・ソー・ラヴリー/米)	キャシー・バーク (ニル・バイ・マウス/英)		
1998 (51)	The Eternity of a Day(ギリシア) (テオ・アンゲロプロス)	ジョン・ブアマン (The General/英)	ピーター・ムラン (My Name is Joe/英)	エロディ・ブシェ、ナターシャ・レニエ (天使が見た夢/仏)		

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1962 (15)	サンタ・バルバラの饗い(ブラジル) (アンセルモ・ドゥアルテ)		マレー・メルヴィン(蜜の味/英)、ラルフ・リチャードソン、ジェイソン・ロバーズ、ディーン・ストックウェル(Long Day's Journey into the Night/米)	リタ・トゥシンハム(蜜の味/英)、キャサリン・ヘップバーン(Long Day's Journey into the Night/米)		
1963 (16)	山猫(伊) (ルキノ・ヴィスコンティ)		リチャード・ハリス (孤独の報酬/英)	マリナ・ヴラディ (女王蜂/伊)		
1964 (17)	シェルブールの雨傘(仏) (ジャック・ドゥミ)		アンタール・バーゲル (Pacsirta/ハンガリー) サーロー・ウルツィ (誘惑されて棄てられて/伊)	アン・バンクロフト(女が愛情に渇くとき/英) バーバラ・バリー(わかれ道/米)		
1965 (18)	ナック(英) (リチャード・レスター)	リビィウ・チューレイ (Padurea Spinzuratilon/ルーマニア)	テレンス・スタンプ (コレクター/英)	サマンサ・エッガー (コレクター/英)		
1966 (19)	男と女(仏) (クロード・ルルーシュ) 蜜がいっぱい(伊) (ピエトロ・ジェルミ)	セルゲイ・ユケーヴィッチ (Lenin Polyshe/ソ連)	ベール・オスカルソン (Sult/デンマーク)	ヴァネッサ・レッドグレイヴ (モーガン/英)		
1967 (20)	欲望(英) (ミケランジェロ・アントニオーニ)	フェレンツ・コーシャ (Tizezer Nap/ハンガリー)	オデッド・コトラー (Trois Jours Pour un Entamt/イスラエル)	ビア・デーゲルマルク (みじかくも美しく燃え/スウェーデン)		
1968 (21)	五月革命の為、中止					
1969 (22)	if もしも・・・(英) (リンゼイ・アンダーソン)	グラウベル・ローシャ (アントニオ・ダス・モルテス/ブラジル) ヴォイチェク・ヤスニ (Vsichni Dobri Rodaci/チェコ)	ジャン＝ルイ・トランティニャン (Z/仏)	ヴァネッサ・レッドグレイヴ (縛足のイサドラ/英)		
1970 (23)	M★A★S★H(米) (ロバート・アルトマン)	ジョン・ブアマン (Leo, the Last/英)	マルチェロ・マストロヤンニ (ジェラシー/伊)	オッタヴィア・ピッコロ (わが青春のフロレンス/伊)		
1971 (24)	恋(英) (ジョゼフ・ロージー)		リカルド・クッチョッラ (死刑台のメロディ/伊)	キティー・ウィン (哀しみの街かど/米)		
1972 (25)	黒い砂漠(伊) (フランチェスコ・ロージ) 労働者階級は天国に入る(伊)(エリオ・ペトリ)	ヤンチョー・ミクローシュ (Meg Ker a Nep/ハンガリー)	ジャン・ヤンヌ (Nous ne Vieillirons Pas ensemble/仏)	スザンナ・ヨーク (Images/アイルランド)		
1973 (26)	スケアクロウ(米) (ジェリー・シャッツバーグ) The Hireling(英) (アラン・ブリッジス)	ジャンカルロ・ジャンニーニ (Film d'Amor e d'Anarchie/伊)	ジョアン・ウッドワード (The Effect of Gamma Rays on Man-in-the-Moon Marigolds/米)			
1974 (27)	カンバセーション…盗聴…(米)(フランシス＝フォード・コッポラ)	ジャック・ニコルソン (さらば冬のかもめ/米)	マリー＝ジョゼ・ナット (Les Violons du Bal/仏)			
1975 (28)	Chronique des Années des Braises(アルジェリア) (モハメッド＝ラクダール・ハミナ)	ミシェル・ブロー (Les Orders/カナダ)	ヴィットリオ・ガスマン (Protumo di Donna/伊)	ヴァレリー・ペリン (レニー・ブルース/米)		
1976 (29)	タクシー・ドライバー(米) (マーティン・スコセッシ)	エットーレ・スコラ (Brutti, Sporchi, Cattivi/伊)	ホセ＝ルイス・ゴメス (Pascual Duatte/スペイン)	マリー・トロシク (Deryne, Holvan?/仏) ドミニク・サンダ (L'Eredita Ferramonti/伊)		
1977 (30)	父/パードレ・パドローネ(伊) (パオロ・タヴィアーニ、ヴィットリオ・タヴィアーニ)		フェルナンド・レイ (Elisa, Vida Mia/スペイン)	シェリー・デュバル (三人の女/米) モニク・メルキュール (J. A Martin Photographe/カナダ)		
1978 (31)	木靴の樹(伊) (エルマンノ・オルミ)	大島渚 (愛の亡霊/日＝仏)	ジョン・ヴォイト (帰郷/米)	イザベル・ユペール (ヴィオレット・ノジェール/仏) ジル・クレイバーグ (結婚しない女/米)		
1979 (32)	ブリキの太鼓(西独) (フォルカー・シュレンドルフ) 地獄の黙示録(米) (フランシス＝フォード・コッポラ)	テレンス・マリック (天国の日々/米)	ジャック・レモン (チャイナ・シンドローム/米)	サリー・フィールド (ノーマ・レイ/米)		
1980 (33)	影武者(日) (黒澤明) オール・ザット・ジャズ(米)(ボブ・フォッシー)	クシシュトフ・ザヌーシ (コンスタンス/ポーランド)	ミシェル・ピコリ (Salto nel Vyoto/仏)	アヌーク・エーメ (Salto nel Vyoto/仏)		

Digitized by Google

カンヌ国際映画祭

FESTIVAL INTERNATIONAL DU FILM DE CANNES

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1946 (1)	田園交響楽(仏)(ジャン・ドラノワ)、失われた週末(米)(ビリー・ワイルダー)、逢びき(英)(デイヴィッド・リーン)、地球は赤くなる(デンマーク)(ボデイル・イプセン、ラウ・ラウリッツェン)、下の街(インド)(チェタ・アナンド)、無防備都市(伊)(ロベルト・ロッセリーニ)、白き処女地(メキシコ)(エミリオ・フェルナンデス)、試煉(スウェーデン)(アルフ・シューベルイ)、最後のチャンス(スイス)(レオポルド・サントブルグ)、翼のない男たち(チェコ)(M・キャップ)、決定的な曲り角(ソ連)(フレデリック・エルムレ)	ルネ・クレマン (鉄路の闘い/仏)	レイ・ミランド (失われた週末/米)	ミシェル・モルガン (田園交響楽/仏)		
1947 (2)	幸福の設計(仏)(ジャック・ベッケル)、海の牙(仏)(ルネ・クレマン)、ジーグフェルド・フォーリーズ(米)(ヴィンセント・ミネリ)、十字砲火(米)(エドワード・ドミトリク)、ダンボ(米)(ウォルト・ディズニー)、ポーランドの洪水(ポーランド)(E・ボサック)					
1949 (3)	第三の男(英) (キャロル・リード)	ルネ・クレマン (鉄格子の彼方/伊=仏)	エドワード・G・ロビンソン(他人の家/米)	イザ・ミランダ (鉄格子の彼方/伊=仏)		
1951 (4)	ミラノの奇蹟(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ) 金魚ジュリー(スウェーデン)(アルフ・シューベルイ)	ルイス・ブニュエル (忘れられた人々/メキシコ)	マイケル・レッドグレイヴ (The Browning Version/英)	ベティ・デイヴィス (イヴの秘密/米)		
1952 (5)	2ペンスの希望(伊) (レナート・カステラーニ) オセロ(モロッコ) (オーソン・ウェルズ)	クリスチャン=ジャック (花咲ける騎士道/仏)	マーロン・ブランド (革命児サパタ/米)	リー・グラント (探偵物語/米)		
1953 (6)	恐怖の報酬(仏) (アンリ=ジョルジュ・クルーゾー)	シャルル・ヴァネル (恐怖の報酬/仏)	シャーリー・ブース (愛しのシバよ帰れ/米)			
1954 (7)	地獄門(日) (衣笠貞之助)	アレクサンデル・フォルド (バルスカ街の五人組/ポーランド)	マリア・シェル (最後の橋/オーストリア)			
1955 (8)	マーティ(米) (デルバート・マン)	ジュールズ・ダッシン (男の争い/仏) セルゲイ・ワシーリコフ (Geroi Shipki/ソ連=ブルガリア)	スペンサー・トレイシー (日本人の勲章/米)			
1956 (9)	沈黙の世界(仏) (ジャック=イヴ・クストー、ルイ・マル)	セルゲイ・ユトケーヴィッチ (オセロ/ソ連)		スーザン・ヘイワード (明日泣く/米)		
1957 (10)	友情ある説得(米) (ウィリアム・ワイラー)	ロベール・ブレッソン (抵抗/仏)	ジョン・キッツミラー (平和の谷/ユーゴ)	ジュリエッタ・マシーナ (カビリアの夜/伊)		
1958 (11)	戦争と貞操(鶴は翔んでゆく)(ソ連) (ミハイル・ウラトーゾフ)	イングマル・ベルイマン (女はそれを待っている/スウェーデン)	ポール・ニューマン (長く熱い夜/米)			
1959 (12)	黒いオルフェ(仏) (マルセル・カミュ)	フランソワ・トリュフォー (大人は判ってくれない/仏)	ディーン・ストックウェル、ブラッドフォード・ディルマン、オーソン・ウェルズ (強迫 ロープ殺人事件(T)/米)	シモーヌ・シニョレ (年上の女/英)		
1960 (13)	甘い生活(伊) (フェデリコ・フェリーニ)			ジャンヌ・モロー (雨のしのび逢い/仏) メリナ・メルクーリ (日曜はダメよ/ギリシア)		
1961 (14)	ビリディアナ(スペイン)(ルイス・ブニュエル) かくも長き不在(仏) (アンリ・コルピ)	ユーリア・ソーンツェワ (戦場/ソ連)	アンソニー・パーキンス (さよならをもう一度/米)	ソフィア・ローレン (ふたりの女/伊)		

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1983 (41)	(ド)愛と追憶の日々 (ジェームズ・L・ブルックス) (ミ/コ)愛のイエントル (バーブラ・ストライサンド)	バーブラ・ストライサンド (愛のイエントル)	(ド)ロバート・デュヴァル (チンダー・マーシー) トム・コートネイ(ドレッサー) (ミ/コ)マイケル・ケイン (リタと大学教授)	(ド)シャーリー・マクレーン (愛と追憶の日々) (ミ/コ)ジュリー・ウォルターズ (リタと大学教授)	ジャック・ニコルソン (愛と追憶の日々)	シェール (シルクウッド)
1984 (42)	(ド)アマデウス (ミロシュ・フォアマン) (ミ/コ)ロマンシング・ストーン 秘宝の谷(ロバート・ゼメキス)	ミロシュ・フォアマン (アマデウス)	(ド)F・マーレイ・エイブラハム (アマデウス) (ミ/コ)ダドリー・ムーア (ミッキー&モード)	(ド)サリー・フィールド (プレイス・イン・ザ・ハート) (ミ/コ)キャスリーン・ターナー (ロマンシング・ストーン)	ハイン・S・ニョール (キリング・フィールド)	ベギー・アシュクロフト (インドへの道)
1985 (43)	(ド)愛と哀しみの果て (シドニー・ポラック) (ミ/コ)女と男の名誉 (ジョン・ヒューストン)	ジョン・ヒューストン (女と男の名誉)	(ド)ジョン・ヴォイト (最走機関車) (ミ/コ)ジャック・ニコルソン (女と男の名誉)	(ド)ウーピー・ゴールドバーグ (カラーパープル) (ミ/コ)キャスリーン・ターナー (女と男の名誉)	クラウス・マリア・ブラウンダウアー (愛と哀しみの果て)	メグ・ティリー (アグネス)
1986 (44)	(ド)プラトーン (オリヴァー・ストーン) (ミ/コ)ハンナとその姉妹 (ウディ・アレン)	オリヴァー・ストーン (プラトーン)	(ド)ボブ・ホスキンズ (モナリザ) (ミ/コ)ポール・ホーガン (クロコダイル・ダンディー)	(ド)マーリー・マトリン (愛は静けさの中に) (ミ/コ)シシー・スペイセク (ロンリー・ハート)	トム・ベレンジャー (プラトーン)	マギー・スミス (眺めのいい部屋)
1987 (45)	(ド)ラストエンペラー (ベルナルド・ベルトルッチ) (ミ/コ)戦場の小さな天使たち (ジョン・ブアマン)	ベルナルド・ベルトルッチ (ラストエンペラー)	(ド)マイケル・ダグラス (ウォール街) (ミ/コ)ロビン・ウィリアムス (グッドモーニング・ベトナム)	(ド)サリー・カークランド (アンナ) (ミ/コ)シェール (月の輝く夜に)	ショーン・コネリー (アンタッチャブル)	オリンピア・デュカキス (月の輝く夜に)
1988 (46)	(ド)レインマン (バリー・レヴィンソン) (ミ/コ)ワーキング・ガール (マイク・ニコルズ)	クリント・イーストウッド (バード)	(ド)ダスティン・ホフマン (レインマン) (ミ/コ)トム・ハンクス (ビッグ)	(ド)ジョディ・フォスター (告発の行方) シャーリー・マクレーン (マダム・スザーツカ) シガーニー・ウィーヴァー (愛は霧のかなたに) (ミ/コ)メラニー・グリフィス (ワーキング・ガール)	マーティン・ランドー (タッカー)	シガーニー・ウィーヴァー (ワーキング・ガール)
1989 (47)	(ド)7月4日に生まれて (オリヴァー・ストーン) (ミ/コ)ドライビング・ミス・デイジー (ブルース・ベレスフォード)	オリヴァー・ストーン (7月4日に生まれて)	(ド)トム・クルーズ (7月4日に生まれて) (ミ/コ)モーガン・フリーマン (ドライビング・ミス・デイジー)	(ド)ミシェル・ファイファー (恋のゆくえ/ファビュラス・ベイカー・ボーイズ) (ミ/コ)ジェシカ・タンディ (ドライビング・ミス・デイジー)	デンゼル・ワシントン (グローリー)	ジュリア・ロバーツ (マグノリアの花たち)
1990 (48)	(ド)ダンス・ウィズ・ウルブス (ケヴィン・コスナー) (ミ/コ)グリーン・カード (ピーター・ウィアー)	ケヴィン・コスナー (ダンス・ウィズ・ウルブス)	(ド)ジェレミー・アイアンズ (運命の逆転) (ミ/コ)ジェラール・ドパルデュー (グリーン・カード)	(ド)キャシー・ベイツ (ミザリー) (ミ/コ)ジュリア・ロバーツ (プリティ・ウーマン)	ブルース・デイヴィソン (ロングタイム・コンパニオン)	ウーピー・ゴールドバーグ (ゴーストニューヨークの幻)
1991 (49)	(ド)バグジー (バリー・レヴィンソン) (ミ/コ)美女と野獣 (ゲーリー・トゥルースデイル、カーク・ワイズ)	オリヴァー・ストーン (JFK)	(ド)ニック・ノルティ (サウス・キャロライナ) (ミ/コ)ロビン・ウィリアムス (フィッシャー・キング)	(ド)ジョディ・フォスター (羊たちの沈黙) (ミ/コ)ベット・ミドラー (フォー・ザ・ボーイズ)	ジャック・バランス (シティ・スリッカーズ)	マーセデス・ルール (フィッシャー・キング)
1992 (50)	(ド)セント・オブ・ウーマン 夢の香り (ミ/コ)ザ・プレイヤー (ロバート・アルトマン)	クリント・イーストウッド (許されざる者)	(ド)アル・パチーノ (セント・オブ・ウーマン 夢の香り)/(ミ/コ)ティム・ロビンス(ザ・プレイヤー)	(ド)エマ・トンプソン (ハワーズ・エンド) (ミ/コ)ミランダ・リチャードソン (魅せられて四月)	ジーン・ハックマン (許されざる者)	ジョーン・プロウライト (魅せられて四月)
1993 (51)	(ド)シンドラーのリスト (スティーヴン・スピルバーグ) (ミ/コ)ミセス・ダウト (クリス・コロンバス)	スティーヴン・スピルバーグ (シンドラーのリスト)	(ド)トム・ハンクス (フィラデルフィア) (ミ/コ)ロビン・ウィリアムス (ミセス・ダウト)	(ド)ホリー・ハンター (ピアノ・レッスン) (ミ/コ)アンジェラ・バセット (ティナ)	トミー・リー・ジョーンズ (逃亡者)	ウィノナ・ライダー (エイジ・オブ・イノセンス 汚れなき情事)
1994 (52)	(ド)フォレスト・ガンプ 一期一会 (ロバート・ゼメキス) (ミ/コ)ライオン・キング (ロジャー・アレーズ、ロブ・ミンコフ)	ロバート・ゼメキス (フォレスト・ガンプ 一期一会)	(ド)トム・ハンクス (フィラデルフィア) (ミ/コ)ヒュー・グラント (フォー・ウェディング)	(ド)ジェシカ・ラング (ブルースカイ) (ミ/コ)ジェイミー・リー・カーティス (トゥルーライズ)	マーティン・ランドー (エド・ウッド)	ダイアン・ウィースト (ブロードウェイと銃弾)
1995 (53)	(ド)いつか晴れた日に (アン・リー) (ミ/コ)ベイブ (クリス・ヌーナン)	メル・ギブソン (ブレイブハート)	(ド)ニコラス・ケイジ (リービング・ラスベガス) (ミ/コ)ジョン・トラヴォルタ (ゲット・ショーティ)	(ド)シャロン・ストーン (カジノ) (ミ/コ)ニコール・キッドマン (誘う女)	ブラッド・ピット (12モンキーズ)	ミラ・ソルヴィーノ (誘惑のアフロディーテ)
1996 (54)	(ド)イングリッシュ・ペイシェント (アンソニー・ミンゲラ) (ミ/コ)エビータ (アラン・パーカー)	ミロシュ・フォアマン (ラリー・フリント)	(ド)ジェフリー・ラッシュ (シャイン) (ミ/コ)トム・クルーズ (ザ・エージェント)	(ド)ブレンダ・ブレッシン (秘密と嘘) (ミ/コ)マドンナ (エビータ)	エドワード・ノートン (真実の行方)	ローレン・バコール (マンハッタン・ラプソディ)
1997 (55)	(ド)タイタニック (ジェームズ・キャメロン) (ミ/コ)恋愛小説家 (ジェームズ・L・ブルックス)	ジェームズ・キャメロン (タイタニック)	(ド)ピーター・フォンダ (ユリーズ・ゴールド) (ミ/コ)ジャック・ニコルソン (恋愛小説家)	(ド)ジュディ・デンチ (Her Majesty Mrs. Brown) (ミ/コ)ヘレン・ハント (恋愛小説家)	バート・レイノルズ (ブギー・ナイツ)	キム・ベイシンガー (L.A.コンフィデンシャル)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1965 (23)	(ド)ドクトル・ジバゴ (デイヴィッド・リーン) (ミ/コ)サウンド・オブ・ミュージック (ロバート・ワイズ)	デイヴィッド・リーン (ドクトル・ジバゴ)	(ド)オマー・シャリフ (ドクトル・ジバゴ) (ミ/コ)リー・マーヴィン (キャット・バルー)	(ド)サマンサ・エッガー (コレクター) (ミ/コ)ジュリー・アンドリュース (サウンド・オブ・ミュージック)	オスカー・ウェルナー (寒い国から帰ったスパイ)	ルース・ゴードン (サンセット物語)
1966 (24)	(ド)わが命つきるとも (フレッド・ジンネマン) (ミ/コ)アメリカ上陸作戦 (ノーマン・ジュイソン)	フレッド・ジンネマン (わが命つきるとも)	(ド)ポール・スコフィールド (わが命つきるとも) (ミ/コ)アラン・アーキン (アメリカ上陸作戦)	(ド)アヌーク・エーメ (男と女) (ミ/コ)リン・レッドグレイヴ (ジョージー・ガール)	リチャード・アッテンボロー (脱獄サンパブロ)	ジョスリン・ラ・ガード (ハワイ)
1967 (25)	(ド)夜の大捜査線 (ノーマン・ジュイソン) (ミ/コ)卒業 (マイク・ニコルズ)	マイク・ニコルズ (卒業)	(ド)ロッド・スタイガー (夜の大捜査線) (ミ/コ)リチャード・ハリス (キャメロット)	(ド)エディス・エヴァンス (The Whisperers) (ミ/コ)アン・バンクロフト (卒業)	リチャード・アッテンボロー (ドリトル先生の不思議な旅)	キャロル・チャニング (モダン・ミリー)
1968 (26)	(ド)冬のライオン (アンソニー・ハーベイ) (ミ/コ)オリバー! (キャロル・リード)	ポール・ニューマン (レーチェル レーチェル)	(ド)ピーター・オトゥール (冬のライオン) (ミ/コ)ロン・ムーディ (オリバー!)	(ド)ジョアン・ウッドワード (レーチェル レーチェル) (ミ/コ)バーブラ・ストライサンド (ファニー・ガール)	ダニエル・マッセイ (スター)	ルース・ゴードン (ローズマリーの赤ちゃん)
1969 (27)	(ド)1000Hのアン (チャールズ・ジャロット) (ミ/コ)サンタ・ビットリアの秘密 (スタンリー・クレイマー)	チャールズ・ジャロット (1000Hのアン)	(ド)ジョン・ウェイン (勇気ある追跡) (ミ/コ)ピーター・オトゥール (チップス先生さようなら)	(ド)ジュヌヴィエーヴ・ビュジョルド (1000Hのアン) (ミ/コ)パティ・デューク (ナタリーの朝)	ギグ・ヤング (ひとりぼっちの青春)	ゴールディー・ホーン (サボテンの花)
1970 (28)	(ド)ある愛の詩 (アーサー・ヒラー) (ミ/コ)M★A★S★H (ロバート・アルトマン)	アーサー・ヒラー (ある愛の詩)	(ド)ジョージ・C・スコット (パットン大戦車軍団) (ミ/コ)アルバート・フィニー (クリスマス・キャロル)	(ド)アリ・マックグロー (ある愛の詩) (ミ/コ)キャリー・スノッドグレス (わが愛は消えゆきて)	ジョン・ミルズ (ライアンの娘)	カレン・ブラック (ファイブ・イージー・ピーセス) モーリーン・スティプルトン (大空港)
1971 (29)	(ド)フレンチ・コネクション (ウィリアム・フリードキン) (ミ/コ)屋根の上のバイオリン弾き (ノーマン・ジュイソン)	ウィリアム・フリードキン (フレンチ・コネクション)	(ド)ジーン・ハックマン (フレンチ・コネクション) (ミ/コ)トポル (屋根の上のバイオリン弾き)	(ド)ジェーン・フォンダ (コールガール) (ミ/コ)トゥィッギー (ボーイフレンド)	ベン・ジョンソン (ラスト・ショー)	アン=マーグレット (愛の狩人)
1972 (30)	(ド)ゴッドファーザー (フランシス=フォード・コッポラ) (ミ/コ)キャバレー (ボブ・フォッシー)	フランシス=フォード・コッポラ (ゴッドファーザー)	(ド)マーロン・ブランド (ゴッドファーザー) (ミ/コ)ジャック・レモン (お熱い夜をあなたに)	(ド)リヴ・ウルマン (The Emigrants) (ミ/コ)ライザ・ミネリ (キャバレー)	ジョエル・グレイ (キャバレー)	シェリー・ウィンタース (ポセイドン・アドベンチャー)
1973 (31)	(ド)エクソシスト (ウィリアム・フリードキン) (ミ/コ)アメリカン・グラフィティ (ジョージ・ルーカス)	ウィリアム・フリードキン (エクソシスト)	(ド)アル・パチーノ (セルピコ) (ミ/コ)ジョージ・シーガル (ウィークエンド・ラブ)	(ド)マーシャ・メイソン (シンデレラ・リバティー) (ミ/コ)グレンダ・ジャクソン (ウィークエンド・ラブ)	ジョン・ハウスマン (ペーパー・チェイス)	リンダ・ブレア (エクソシスト)
1974 (32)	(ド)チャイナタウン (ロマン・ポランスキー) (ミ/コ)ロンゲスト・ヤード (ロバート・アルドリッチ)	ロマン・ポランスキー (チャイナタウン)	(ド)ジャック・ニコルソン (チャイナタウン) (ミ/コ)アート・カーニー (ハリーとトント)	(ド)ジーナ・ローランズ (こわれゆく女) (ミ/コ)ラクエル・ウェルチ (三銃士)	フレッド・アステア (タワーリング・インフェルノ)	カレン・ブラック (華麗なるギャツビー)
1975 (33)	(ド)カッコーの巣の上で (ミロシュ・フォアマン) (ミ/コ)ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ (ハーバート・ロス)	ミロシュ・フォアマン (カッコーの巣の上で)	(ド)ジャック・ニコルソン (カッコーの巣の上で) (ミ/コ)ウォルター・マッソー (ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ)	(ド)ルイーズ・フレッチャー (カッコーの巣の上で) (ミ/コ)アン=マーグレット (トミー)	リチャード・ベンジャミン (ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ)	ブレンダ・ヴァッカロ (いくたびか美しく燃え)
1976 (34)	(ド)ロッキー (ジョン・G・アヴィルドセン) (ミ/コ)スター誕生 (フランク・ピアスン)	シドニー・ルメット (ネットワーク)	(ド)ピーター・フィンチ (ネットワーク) (ミ/コ)クリス・クリストファーソン (スター誕生)	(ド)フェイ・ダナウェイ (ネットワーク) (ミ/コ)バーブラ・ストライサンド (スター誕生)	ローレンス・オリヴィエ (マラソンマン)	キャサリン・ロス (さすらいの航海)
1977 (35)	(ド)愛と喝采のH々 (ハーバート・ロス) (ミ/コ)グッバイ・ガール (ハーバート・ロス)	ハーバート・ロス (グッバイ・ガール)	(ド)リチャード・バートン (エクウス) (ミ/コ)リチャード・ドレイファス (グッバイ・ガール)	(ド)ジェーン・フォンダ (ジュリア) (ミ/コ)マーシャ・メイソン (グッバイ・ガール)	ピーター・ファース (エクウス)	ヴァネッサ・レッドグレイヴ (ジュリア)
1978 (36)	(ド)ミッドナイト・エクスプレス (アラン・パーカー) (ミ/コ)天国から来たチャンピオン (ウォーレン・ベイティ)	マイケル・チミノ (ディア・ハンター)	(ド)ジョン・ヴォイト (帰郷) (ミ/コ)ウォーレン・ベイティ (天国から来たチャンピオン)	(ド)ジェーン・フォンダ (帰郷) エレン・バースティン (Same Time,Next Year) (ミ/コ)マギー・スミス (カリフォルニア・スィート)	ジョン・ハート (ミッドナイト・エクスプレス)	ダイアン・キャノン (天国から来たチャンピオン)
1979 (37)	(ド)クレイマー、クレイマー (ロバート・ベントン) (ミ/コ)ヤング・ゼネレーション (ピーター・イェーツ)	フランシス・フォード・コッポラ (地獄の黙示録)	(ド)ダスティン・ホフマン (クレイマー、クレイマー) (ミ/コ)ピーター・セラーズ (チャンス)	(ド)サリー・フィールド (ノーマ・レイ) (ミ/コ)ベット・ミドラー (ローズ)	メルヴィン・ダグラス (チャンス) ロバート・デュヴァル (地獄の黙示録)	メリル・ストリープ (クレイマー、クレイマー)
1980 (38)	(ド)普通の人々 (ロバート・レッドフォード) (ミ/コ)歌え!ロレッタ愛のために (マイケル・アプテッド)	ロバート・レッドフォード (普通の人々)	(ド)ロバート・デ・ニーロ (レイジング・ブル) (ミ/コ)レイ・シャーキー (アイドル・メーカー)	(ド)メアリー・タイラー・ムーア (普通の人々) (ミ/コ)シシー・スペイセク (歌え!ロレッタ愛のために)		
1981 (39)	(ド)黄昏 (マーク・ライデル) (ミ/コ)ミスター・アーサー (スティーヴ・ゴードン)	ウォーレン・ベイティ (レッズ)	(ド)ヘンリー・フォンダ (黄昏) (ミ/コ)ダドリー・ムーア (ミスター・アーサー)	(ド)メリル・ストリープ (フランス軍中尉の女) (ミ/コ)バーナデット・ピーターズ (ヘニーズ・フロム・ヘブン)	ジョン・ギールグッド (ミスター・アーサー)	ジョーン・ハケット (泣かないで)
1982 (40)	(ド)E.T. (スティーヴン・スピルバーグ) (ミ/コ)トッツィー (シドニー・ポラック)	リチャード・アッテンボロー (ガンジー)	(ド)ベン・キングスレー (ガンジー) (ミ/コ)ダスティン・ホフマン (トッツィー)	(ド)メリル・ストリープ (ソフィーの選択) (ミ/コ)ジュリー・アンドリュース (ビクター、ビクトリア)	ルイス・ゴセット・ジュニア (愛と青春の旅だち)	ジェシカ・ラング (トッツィー)

Digitized by Google

ゴールデン・グローブ賞

THE GOLDEN GLOBE AWARDS

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1943 (1)	聖処女 (ヘンリー・キング)		ポール・ルーカス (ラインの監視)	ジェニファー・ジョーンズ (聖処女)	エイキン・タミロフ (誰が為に鐘は鳴る)	カティナ・パクシヌー (誰が為に鐘は鳴る)
1944 (2)	我が道を往く (レオ・マッケリー)	レオ・マッケリー (我が道を往く)	アレクサンダー・ノックス (Wilson)	イングリッド・バーグマン (ガス燈)	バリー・フィッツジェラルド (我が道を往く)	アグネス・ムーアヘッド (バーキントン夫人)
1945 (3)	失われた週末 (ビリー・ワイルダー)	ビリー・ワイルダー (失われた週末)	レイ・ミランド (失われた週末)	イングリッド・バーグマン (聖メリイの鐘)	J・キャロル・ナイシュ (A Medal for Benny)	アンジェラ・ランズベリー (ドリアン・グレイの肖像)
1946 (4)	我等の生涯の最良の年 (ウィリアム・ワイラー)	フランク・キャプラ (素晴らしき哉!人生)	グレゴリー・ペック (白鯨物語)	ロザリンド・ラッセル (世界の母)	クリフトン・ウェッブ (剃刀の刃)	アン・バクスター (剃刀の刃)
1947 (5)	紳士協定 (エリア・カザン)	エリア・カザン (紳士協定)	ロナルド・コールマン (二重生活)	ロザリンド・ラッセル (Mourning Becomes Electra)	エドマンド・グウェン (三十四丁目の奇蹟)	セレステ・ホルム (紳士協定)
1948 (6)	黄金 (ジョン・ヒューストン)	ジョン・ヒューストン (黄金)	ローレンス・オリヴィエ (ハムレット)	ジェーン・ワイマン (ジョニイ・ベリンダ)	ウォルター・ヒューストン (黄金)	エレン・コールビー (ママの想い出)
1949 (7)	オール・ザ・キングスメン (ロバート・ロッセン)	ロバート・ロッセン (オール・ザ・キングスメン)	ブロデリック・クロフォード (オール・ザ・キングスメン)	オリヴィア・デ・ハヴィランド (女相続人)	ジェームズ・ウィットモア (戦場)	マーセデス・マッケンブリッジ (オール・ザ・キングスメン)
1950 (8)	サンセット大通り (ビリー・ワイルダー)	ビリー・ワイルダー (サンセット大通り)	(ド)ホセ・フェラー (シラノ・ド・ベルジュラック) (ミ/コ)フレッド・アステア (上昇は貴方に)	(ド)グロリア・スワンソン (サンセット大通り) (ミ/コ)ジュディ・ホリデイ (Born Yesterday)	エドマンド・グウェン (Mister 880)	ジョゼフィン・ハル (ハーヴェイ)
1951 (9)	(ド)陽のあたる場所 (ジョーン・スティーヴンズ) (ミ/コ)巴里のアメリカ人 (ヴィンセント・ミネリ)	ラズロ・ベネデク (セールスマンの死)	(ド)フレドリック・マーチ (セールスマンの死) (ミ/コ)ダニー・ケイ (夫は偽者)	(ド)ジェーン・ワイマン (青いヴェール) (ミ/コ)ジューン・アリソン (Too Young to Kiss)	ピーター・ユスティノフ (クオ・ヴァディス)	キム・ハンター (欲望という名の電車)
1952 (10)	(ド)地上最大のショウ (セシル・B・デミル) (ミ/コ)わが心に歌えば (ウォルター・ラング)	セシル・B・デミル (地上最大のショウ)	(ド)ゲイリー・クーパー (真昼の決闘) (ミ/コ)ドナルド・オコナー (雨に唄えば)	(ド)シャーリー・ブース (愛しのシバよ帰れ) (ミ/コ)スーザン・ヘイワード (わが心に歌えば)	ミラルド・ミッチェル (自由の脱獄)	カティ・フラドー (真昼の決闘)
1953 (11)	聖衣 (ヘンリー・コスター)	フレッド・ジンネマン (地上より永遠に)	(ド)スペンサー・トレイシー (The Actress) (ミ/コ)デイヴィッド・ニーヴン (月着くまで)	(ド)オードリー・ヘップバーン (ローマの休日) (ミ/コ)エセル・マーマン (Call Me Madam)	フランク・シナトラ (地上より永遠に)	グレース・ケリー (モガンボ)
1954 (12)	(ド)波止場 (エリア・カザン) (ミ/コ)カルメン (オットー・プレミンジャー)	エリア・カザン (波止場)	(ド)マーロン・ブランド (波止場) (ミ/コ)ジェームズ・メイソン (スター誕生)	(ド)グレース・ケリー (喝采) (ミ/コ)ジュディ・ガーランド (スター誕生)	エドモンド・オブライエン (裸足の伯爵夫人)	ジャン・スターリング (紅の翼)
1955 (13)	(ド)エデンの東 (エリア・カザン) (ミ/コ)野郎どもと女たち (ジョゼフ・L・マンキーウィッツ)	ジョシュア・ローガン (ピクニック)	(ド)アーネスト・ボーグナイン (マーティ) (ミ/コ)トム・イーウェル (七年目の浮気)	(ド)アンナ・マニャーニ (バラの刺青) (ミ/コ)ジーン・シモンズ (野郎どもと女たち)	アーサー・ケネディ (アメリカの戦慄)	マリサ・パヴァン (バラの刺青)
1956 (14)	(ド)八十日間世界一周 (マイケル・アンダーソン) (ミ/コ)王様と私 (ウォルター・ラング)	ベビー・ドール (エリア・カザン)	(ド)カーク・ダグラス (炎の人ゴッホ) (ミ/コ)カンティンフラス (八十日間世界一周)	(ド)イングリッド・バーグマン (追想) (ミ/コ)デボラ・カー (王様と私)	アール・ホリマン (雨を降らす男)	アイリーン・ヘッカート (悪い種子)
1957 (15)	(ド)戦場にかける橋 (デヴィッド・リーン) (ミ/コ)魅惑の巴里 (ジョージ・キューカー)	デイヴィッド・リーン (戦場にかける橋)	(ド)アレック・ギネス (戦場にかける橋) (ミ/コ)フランク・シナトラ (俺の剣)	(ド)ジョアン・ウッドワード (イヴの三つの顔) (ミ/コ)ケイ・ケンドール (魅惑の巴里)	レッド・バトンズ (サヨナラ)	エルザ・ランチェスター (検察側の証人)
1958 (16)	(ド)手錠のまゝの脱獄 (スタンリー・クレイマー) (コ)メイム叔母さん(モートン・ダコスタ) (ミ)恋の手ほどき (ヴィンセント・ミネリ)	ヴィンセント・ミネリ (恋の手ほどき)	(ド)デイヴィット・ニーヴン (旅路) (ミ/コ)ダニー・ケイ (五つの銅貨)	(ド)スーザン・ヘイワード (私は死にたくない) (ミ/コ)ロザリンド・ラッセル (メイム叔母さん)	バール・アイヴス (大いなる西部)	ハーミオン・ジンゴールド (恋の手ほどき)
1959 (17)	(ド)ベン・ハー (ウィリアム・ワイラー) (コ)お熱いのがお好き (ビリー・ワイルダー) (ミ)ポギーとベス (オットー・プレミンジャー)	ウィリアム・ワイラー (ベン・ハー)	(ド)アンソニー・フランシオサ (果てしなき夢) (ミ/コ)ジャック・レモン (お熱いのがお好き)	(ド)エリザベス・テイラー (去年の夏突然に) (ミ/コ)マリリン・モンロー (お熱いのがお好き)	スティーヴン・ボイド (ベン・ハー)	スーザン・コーナー (悲しみは空の彼方に)
1960 (18)	(ド)スパルタカス (スタンリー・キューブリック) (コ)アパートの鍵貸します (ビリー・ワイルダー) (ミ)終わりなき唄	ジャック・カーディフ (息子と恋人)	(ド)バート・ランカスター (エルマー・ガントリー) (ミ/コ)ジャック・レモン (アパートの鍵貸します)	(ド)グリア・ガーソン (ローズベルト物語) (ミ/コ)シャーリー・マクレーン (アパートの鍵貸します)	サル・ミネオ (栄光への脱出)	ジャネット・リー (サイコ)
1961 (19)	(ド)ナバロンの要塞 (J・リー・トンプソン) (コ)A Majority of One (マーヴィン・ルロイ) (ミ)ウエスト・サイド物語 (ロバート・ワイズ、ジェームス・ロビンズ)	スタンリー・クレイマー (ニュールンベルグ裁判)	(ド)マクシミリアン・シェル (ニュールンベルグ裁判) (ミ/コ)グレン・フォード (ポケット一杯の幸福)	(ド)ジェラルディン・ペイジ (肉体のすきま風) (ミ/コ)ロザリンド・ラッセル (A Majority of One)	ジョージ・チャキリス (ウエスト・サイド物語)	リタ・モレノ (ウエスト・サイド物語)
1962 (20)	(ド)アラビアのロレンス (デイヴィッド・リーン) (コ)ミンクの手ざわり (デルバート・マン) (ミ)Music Man	デイヴィッド・リーン (アラビアのロレンス)	(ド)グレゴリー・ペック (アラバマ物語) (ミ/コ)マルチェロ・マストロヤンニ (イタリア式離婚狂想曲)	(ド)ジェラルディン・ペイジ (渇いた太陽) (ミ/コ)ロザリンド・ラッセル (ジプシー)	オマー・シャリフ (アラビアのロレンス)	アンジェラ・ランズベリー (影なき狙撃者)
1963 (21)	(ド)収穫期 (オットー・プレミンジャー) (ミ/コ)トム・ジョーンズの波乱万丈 (トニー・リチャードソン)	エリア・カザン (アメリカ・アメリカ)	(ド)シドニー・ポワチエ (野のユリ) (ミ/コ)アルベルト・ソルディ (To Bed or Not to Bed)	(ド)レスリー・キャロン (The L-Shaped Room) (ミ/コ)シャーリー・マクレーン (あなただけ今晩は)	ジョン・ヒューストン (収穫期)	マーガレット・ラザフォード (予期せぬ出来事)
1964 (22)	(ド)ベケット (ピーター・グレンヴィル) (ミ/コ)マイ・フェア・レディ (ジョージ・キューカー)	ジョージ・キューカー (マイ・フェア・レディ)	(ド)ピーター・オトゥール (ベケット) (ミ/コ)レックス・ハリソン (マイ・フェア・レディ)	(ド)アン・バンクロフト (女が愛情に渇くとき) (ミ/コ)ジェリー・アンドリュース (メリー・ポピンズ)	エドモンド・オブライエン (5月の7日間)	アグネス・ムーアヘッド (ふるえて眠れ)

Digitized by Google

ルイ・デリュック賞

Prix Louis Delluc

年度	作　品
1937年	どん底(ジャン・ルノワール)
1938	Le puritein(ジャン・ミュッソ)
1939	霧の波止場(マルセル・カルネ)
1940 1941 1942 1943 1944	第二次世界大戦のため，授賞取り止め
1945	Espoir(アンドレ・マルロー)
1946	美女と野獣(ジャン・コクトー)
1947	Paris 1900(ニコール・ヴェドレス)
1948	Les casse-pieds(ジャン・ドレヴィル，ノエル　ノエル)
1949	Les rendez-vous de Juillet(ジャック・ベッケル)
1950	田舎司祭の日記(ロベール・ブレッソン)
1951	該当なし
1952	恋ざんげ(アレクサンドル・アストリュック)
1953	ぼくの伯父さんの休暇(ジャック・タチ)
1954	悪魔のような女(アンリ　ジュルジュ・クルーゾー)
1955	夜の騎士道(ルネ・クレール)
1956	赤い風船(アルベール・ラモリス)
1957	死刑台のエレベーター(ルイ・マル)
1958	Moi ununo noir(ジャン・ルーシュ)
1959	日曜には埋葬しない(ミッシェル・ドラシュ)
1960	かくも長き不在(アンリ・コルピ)
1961	Un coeur gros comme sa(フランソワ・レシャンバック)
1962	女はコワイです(ピエール・エテクス) 不滅の女(アラン・ロブ＝グリエ)
1963	シェルブールの雨傘(ジャック・ドゥミ)
1964	幸福(アニエス・ヴァルダ)
1965	城の生活(ジャンポール・ラフノー)
1966	戦争は終った(アラン・レネ)
1967	めざめ(ミッシェル・ドヴィル)

年度	作　品
1968	夜霧の恋人たち(フランソワ・トリュフォー)
1969	すぎ去りし日の…(クロード・ソーテ)
1970	クレールの膝(エリック・ロメール)
1971	Rendez-vous à Bray(アンドレ・デルヴァワ)
1972	戒厳令(コスタンチンコスタ＝ガブラス)
1973	L'Horloger de Saint-Paul(ベルトラン・タベルニエ)
1974	L'a Gifle(クロード・ピノトー)
1975	さよならの微笑(ジャン・シャルル・タケラ)
1976	Le Juge Fayard(イヴ・ボワセ)
1977	Diabolo menthe(ディアヌ・キュリー)
1978	L'Argent des autres(クリスチャン・ド・シャローヌ)
1979	Le Roi et l'Oiseau(ポール・グモール，ジャック・プリベール)
1980	Un étrange voyage(アラン・カバリエ)
1982	ダントン(アンジェイ・ワイダ)
1983	愛の記念に(モーリス・ピアラ)
1984	La diagonable du fou(リチャード・デボ)
1985	なまいきシャルロット(クロード・ミレール)
1986	汚れた血(レオス・カラックス)
1987	右側に気をつけろ(ジャン＝リュック・ゴダール)
1988	読書する女(ミシェル・デヴィル)
1989	愛さずにいられない(エリック・ロシャン)
1990	髪結いの亭主(パトリス・ルコント) ピストルと少年(ジャック・ドワイヨン)
1991	めぐり逢う朝(アラン・コルノー)
1992	Le Petit Prince a dit(クリスティーヌ・パスクル)
1993	Smoking,no smoking(アラン・レネ)
1994	野生の蘭(アンドレ・テシネ)
1995	とまどい(クロード・ソーテ)
1996	クリスマスに雪はふるの？(サンドリーヌ・ヴェイセ)
1997	恋するシャンソン(アラン・レネ) マルセイユの恋(ロベール・ゲディギャン)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1985 (50)	女と男の名誉 (ジョン・ヒューストン)	ジョン・ヒューストン (女と男の名誉)	ジャック・ニコルソン (女と男の名誉)	ノルマ・アレアンドロ (オフィシャル・ストーリー)	クラウス・マリア・ブラウンダウアー (愛と哀しみの果て)	アンジェリカ・ヒューストン (女と男の名誉)
1986 (51)	ハンナとその姉妹 (ウディ・アレン)	ウディ・アレン (ハンナとその姉妹)	ボブ・ホスキンズ (モナリザ)	シシー・スペイセク (ロンリー・ハート)	ダニエル・デイ・ルイス (マイ・ビューティフル・ランドレッド)	ダイアン・ウィースト (ハンナとその姉妹)
1987 (52)	ブロードキャスト・ニュース (ジェームズ・L・ブルックス)	ジェームズ・L・ブルックス (ブロードキャスト・ニュース)	ジャック・ニコルソン (イーストウィックの魔女たち, ブロードキャスト・ニュース, 黄昏に燃えて)	ホリー・ハンター (ブロードキャスト・ニュース)	モーガン・フリーマン (N.Y.ストリート・スマート)	ヴァネッサ・レッドグレイヴ (ブリック・アップ)
1988 (53)	偶然の旅行者 (ローレンス・カスダン)	クリス・メンゲス (ワールド・アパート)	ジェレミー・アイアンズ (戦慄の絆)	メリル・ストリープ (クライ・イン・ザ・ダーク)	ディーン・ストックウェル (タッカー, 愛されちゃって, マフィア)	ダイアン・ヴェノーラ (バード)
1989 (54)	マイ・レフトフット (ジム・シェリダン)	ポール・マザースキー (敵, ある愛の物語)	ダニエル・デイ・ルイス (マイ・レフトフット)	ミシェル・ファイファー (恋のゆくえ/ファビュラス・ベイカー・ボーイズ)	アラン・アルダ (ウディ・アレンの重罪と軽罪)	レナ・オリン (敵, ある愛の物語)
1990 (55)	グッドフェローズ (マーティン・スコセッシ)	マーティン・スコセッシ (グッドフェローズ)	ロバート・デ・ニーロ (グッドフェローズ, レナードの朝)	ジョアン・ウッドワード (ミスター&ミセス・ブリッジ)	ブルース・デイヴィソン (ロングタイム・コンパニオン)	ジェニファー・ジェイソン・リー (ブルックリン最終出口, マイアミ・ブルース)
1991 (56)	羊たちの沈黙 (ジョナサン・デミ)	ジョナサン・デミ (羊たちの沈黙)	アンソニー・ホプキンス (羊たちの沈黙)	ジョディ・フォスター (羊たちの沈黙)	サミュエル・L・ジャクソン (ジャングル・フィーバー)	ジュディ・デイヴィス (バートン・フィンク, 裸のランチ)
1992 (57)	ザ・プレイヤー (ロバート・アルトマン)	ロバート・アルトマン (ザ・プレイヤー)	デンゼル・ワシントン (マルコムX)	エマ・トンプソン (ハワーズ・エンド)	ジーン・ハックマン (許されざる者)	ミランダ・リチャードソン (クライング・ゲーム, ダメージ, 魅せられて四月)
1993 (58)	シンドラーのリスト (スティーヴン・スピルバーグ)	ジェーン・カンピオン (ピアノ・レッスン)	デイヴィッド・シューリス (ネイキッド)	ホリー・ハンター (ピアノ・レッスン)	レイフ・ファインズ (シンドラーのリスト)	コン・リー (さらば, わが愛/覇王別姫)
1994 (59)	クイズ・ショウ (ロバート・レッドフォード)	クエンティン・タランティーノ (パルプ・フィクション)	ポール・ニューマン (ノーバディーズ・フール)	リンダ・フィオレンティノ (ザ・ラスト・セダクション)	マーティン・ランドー (エド・ウッド)	ダイアン・ウィースト (ブロードウェイと銃弾)
1995 (60)	リービング・ラスベガス (マイク・フィッギス)	アン・リー (いつか晴れた日に)	ニコラス・ケイジ (リービング・ラスベガス)	ジェニファー・ジェイソン・リー (ジョージア)	ケヴィン・スペイシー (ユージュアル・サスペクツ, セブン, アウトプレイク, Swimming with Sharks)	ミラ・ソルヴィーノ (誘惑のアフロディーテ)
1996 (61)	ファーゴ (ジョエル・コーエン)	ラース・フォン・トリアー (奇跡の海)	ジェフリー・ラッシュ (シャイン)	エミリー・ワトソン (奇跡の海)	ハリー・ベラフォンテ (カンザス・シティ)	コートニー・ラヴ (ラリー・フリント)
1997 (62)	L.A.コンフィデンシャル (カーティス・ハンソン)	ジェームズ・キャメロン (タイタニック)	ピーター・フォンダ (ユリーズ・ゴールド)	ジュリー・クリスティ (Afterglow)	バート・レイノルズ (ブギーナイツ)	ジョーン・キューザック (イン&アウト)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1960 (26)	アパートの鍵貸します (ビリー・ワイルダー) 息子と恋人 (ジャック・カーディフ)	ジャック・カーディフ (息子と恋人) ビリー・ワイルダー (アパートの鍵貸します)	バート・ランカスター (エルマー・ガントリー)	デボラ・カー (サンダウナーズ)		
1961 (27)	ウエストサイド物語 (ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンス)	ロバート・ロッセン (ハスラー)	マクシミリアン・シェル (ニュールンベルク裁判)	ソフィア・ローレン (ふたりの女)		
1962 ( )						
1963 (28)	トム・ジョーンズの華麗な冒険 (トニー・リチャードソン)	トニー・リチャードソン (トム・ジョーンズの華麗な冒険)	アルバート・フィニー (トム・ジョーンズの華麗な冒険)	パトリシア・ニール (ハッド)		
1964 (29)	マイ・フェア・レディ (ジョージ・キューカー)	スタンリー・キューブリック (博士の異常な愛情)	レックス・ハリソン (マイ・フェア・レディ)	キム・スタンレー (由の午後の降霊際)		
1965 (30)	ダーリング (ジョン・シュレシンジャー)	ジョン・シュレシンジャー (ダーリング)	オスカー・ウェルナー (愚か者の船)	ジュリー・クリスティー (ダーリング)		
1966 (31)	わが命つきるとも (フレッド・ジンネマン)	フレッド・ジンネマン (わが命つきるとも)	ポール・スコフィールド (わが命つきるとも)	リン・レッドグレーヴ(ジョージー・ガール)エリザベス・テイラー(バージニア・ウルフなんかこわくない)		
1967 (32)	夜の大捜査線 (ノーマン・ジュイソン)	マイク・ニコルズ (卒業)	ロッド・スタイガー (夜の大捜査線)	エディス・エヴァンス (Whisperes)		
1968 (33)	冬のライオン (アンソニー・ハーヴェイ)	ポール・ニューマン (レーチェル　レーチェル)	アラン・アーキン (愛すれど心さびしく)	ジョアン・ウッドワード (レーチェル　レーチェル)		
1969 (34)	Z (コンスタンチン・コスタ・ガヴラス)	コンスタンチン・コスタ＝ガブラス (Z)	ジョン・ヴォイト (真夜中のカーボーイ)	ジェーン・フォンダ (ひとりぼっちの青春)	ジャック・ニコルソン (イージー・ライダー)	ダイアン・キャノン (ボブ&キャロル&テッド&アリス)
1970 (35)	ファイブ・イージー・ピーセス (ボブ・ラファエルソン)	ボブ・ラファエルソン (ファイブ・イージー・ピーセス)	ジョージ・C・スコット (パットン大戦車軍団)	グレンダ・ジャクソン (恋する女たち)	チーフ・ダン・ジョージ (小さな巨人)	カレン・ブラック (ファイブ・イージー・ピーセス)
1971 (36)	時計じかけのオレンジ (スタンリー・キューブリック)	スタンリー・キューブリック (時計じかけのオレンジ)	ジーン・ハックマン (フレンチ・コネクション)	ジェーン・フォンダ (コールガール)	ベン・ジョンスン (ラスト・ショー)	エレン・バースティン (ラスト・ショー)
1972 (37)	叫びとささやき (イングマル・ベルイマン)	イングマル・ベルイマン (叫びとささやき)	ローレンス・オリヴィエ (探偵ースルース)	リヴ・ウルマン (叫びとささやき)	ジョエル・グレイ(キャバレー)エディ・アルバート(ふたり自身)	ジニー・バーリン (ふたり自身)
1973 (38)	映画に愛をこめてアメリカの夜 (フランソワ・トリュフォー)	フランソワ・トリュフォー (映画に愛をこめて　アメリカの夜)	マーロン・ブランド (ラスト・タンゴ・イン・パリ)	ジョアン・ウッドワード (Summer Wishes, Winter Dreams)	ロバート・デ・ニーロ (Bang the Drum slowly)	ヴァレンティナ・コルテーゼ(映画に愛をこめてアメリカの夜)
1974 (39)	フェリーニのアマルコルド (フェデリコ・フェリーニ)	フェデリコ・フェリーニ (フェリーニのアマルコルド)	ジャック・ニコルソン (チャイナタウン、さらばそのかもめ)	リヴ・ウルマン (ある結婚の風景)	チャールズ・ボイヤー (蘭徴のスタビスキー)	ヴァレリー・ペリン (レニー・ブルース)
1975 (40)	ナッシュビル (ロバート・アルトマン)	ロバート・アルトマン (ナッシュビル)	ジャック・ニコルソン (カッコーの巣の上で)	イザベル・アジャーニ (アデルの恋の物語)	アラン・アーキン (Hearts of the West)	リリー・トムリン (ナッシュビル)
1976 (41)	大統領の陰謀 (アラン・J・パクラ)	アラン・J・パクラ (大統領の陰謀)	ロバート・デ・ニーロ (タクシー・ドライバー)	リヴ・ウルマン (鏡の中の女)	ジョイソン・ロバーズ (大統領の陰謀)	タリア・シャイア (ロッキー)
1977 (42)	アニー・ホール (ウディ・アレン)	ウディ・アレン (アニー・ホール)	ジョン・ギールグッド (プロビデンス)	ダイアン・キートン (アニー・ホール)	マクシミリアン・シェル (ジュリア)	シシー・スペイセク (三人の女)
1978 (43)	ディア・ハンター (マイケル・チミノ)	テレンス・メリック (天国の日々)	ジョン・ヴォイト (帰郷)	イングリッド・バーグマン (秋のソナタ)	クリストファー・ウォーケン (ディア・ハンター)	モーリン・スティプルトン (インテリア)
1979 (44)	クレイマー、クレイマー (ロバート・ベントン)	ウディ・アレン (マンハッタン)	ダスティン・ホフマン (クレイマー、クレイマー)	サリー・フィールド (ノーマ・レイ)	メルヴィン・ダグラス (チャンス)	メリル・ストリープ (クレイマー、クレイマー、盛り上る遺伝子を求ま)
1980 (45)	普通の人々 (ロバート・レッドフォード)	ジョナサン・デミ (Melvin and Howard)	ロバート・デニーロ (レイジング・ブル)	シシー・スペイセク (歌え！ロレッタ・愛のために)	ジョー・ペシ (レイジング・ブル)	メアリー・スティーンバージェン (Melvin and Howard)
1981 (46)	レッズ (ウォーレン・ベイティ)	シドニー・ルメット (プリンス・オブ・シティ)	バート・ランカスター (アトランティック・シティ)	グレンダ・ジャクソン (stevie)	ジョン・ギールグッド (ミスター・アーサー)	モウナ・ウォッシュボーン (Stevie)
1982 (47)	ガンジー (リチャード・アッテンボロー)	シドニー・ポラック (トッツィー)	ベン・キングズレー (ガンジー)	メリル・ストリープ (ソフィーの選択)	ジョン・リスゴー (ガープの世界)	ジェシカ・ランゲ (トッツィー)
1983 (48)	愛と追憶の日々 (ジェームズ・L・ブルックス)	イングマル・ベルイマン (ファニーとアレクサンデル)	ロバート・デュバル (テンダー・マーシー)	シャーリー・マクレーン (愛と追憶の日々)	ジャック・ニコルソン (愛と追憶の日々)	リンダ・ハント (危険な舞)
1984 (59)	インドへの道 (デイヴィッド・リーン)	デイヴィッド・リーン (インドへの道)	スティーヴ・マーティン (All of Me)	ペギー・アシュクロフト (インドへの道)	ラルフ・リチャードスン (グレイストーク　類人猿の王者　ターザンの伝説)	クリスティン・ニーチ (Swing Shift)

Digitized by Google

ニューヨーク映画批評家賞

THE NEW YORK FILM CRITICS AWARDS

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1935 (1)	男の敵 (ジョン・フォード)	ジョン・フォード (男の敵)	チャールズ・ロートン (戦艦バウンティ号の叛乱、Rugges of Red Gap)	グレタ・ガルボ (アンナ・カレーニナ)		
1936 (2)	オペラ・ハット (フランク・キャプラ)	ルーベン・マムーリアン (我へ陽気に)	ウォルター・ヒューストン (孔雀夫人)	ルイーズ・ライナー (白星ジークフェルド)		
1937 (3)	ゾラの生涯 (ウィリアム・ディターレ)	グレゴリー・ラキャヴァ (ステージ・ドア)	ポール・ムニ (ゾラの生涯)	グレタ・ガルボ (椿姫)		
1938 (4)	城砦 (K・ヴィダー)	アルフレッド・ヒッチコック (バルカン超特急)	ジェームズ・キャグニー (汚れた顔の天使)	マーガレット・サラヴァン (二人の仲間)		
1939 (5)	嵐が丘 (ウィリアム・ワイラー)	ジョン・フォード (駅馬車)	ジェームズ・スチュワート (スミス都へ行く)	ヴィヴィアン・リー (風と共に去りぬ)		
1940 (6)	怒りの葡萄 (ジョン・フォード)	ジョン・フォード (怒りの葡萄、果てなき航路)	チャールズ・チャップリン (チャップリンの独裁者)	キャサリン・ヘップバーン (フィラデルフィア物語)		
1941 (7)	市民ケーン (オーソン・ウェルズ)	ジョン・フォード (わが谷は緑なりき)	ゲーリー・クーパー (ヨーク軍曹)	ジョーン・フォンテーン (断崖)		
1942 (8)	In Which We Serve (ノエル・カワード、デイヴィッド・リーン)	ジョン・ファーロー (ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ)	ジェームズ・キャグニー (ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ)	アグネス・ムーアヘッド (偉大なるアンバーソン家の人々)		
1943 (9)	ラインの監視 (ハーマン・シャムリン)	ジョージ・スティーヴンス (The More the Merrier)	ポール・ルーカス (ラインの監視)	アイダ・ルピノ (虚栄の花)		
1944 (10)	我が道を往く (レオ・マッケリー)	レオ・マッケリー (我が道を往く)	バリー・フィッツジェラルド (我が道を往く)	タルラ・バンクヘッド (救命艇)		
1945 (11)	失われた週末 (ビリー・ワイルダー)	ビリー・ワイルダー (失われた週末)	レイ・ミランド (失われた週末)	イングリッド・バーグマン (白い恐怖、聖メリーの鐘)		
1946 (12)	我等の生涯の最良の年 (ウィリアム・ワイラー)	ウィリアム・ワイラー (我等の生涯の最良の年)	ローレンス・オリヴィエ (ヘンリー五世)	シリア・ジョンスン (逢びき)		
1947 (13)	紳士協定 (エリア・カザン)	エリア・カザン (紳士協定)	ウィリアム・パウェル (Life with Father)	デボラ・カー (黒水仙、The Adventures)		
1948 (14)	黄金 (ジョン・ヒューストン)	ジョン・ヒューストン (黄金)	ローレンス・オリヴィエ (ハムレット)	オリヴィア・デ・ハヴィイランド (蛇の穴)		
1949 (15)	オール・ザ・キングスメン (ロバート・ロッセン)	キャロル・リード (落ちた偶像)	ブロデリック・クロフォード (オール・ザ・キングスメン)	オリヴィア・デ・ハヴィイランド (女相続人)		
1950 (16)	イヴの続て (ジョゼフ・L・マンキーウィッツ)	ジョセフ・L・マンキーウィッツ (イヴの続て)	グレゴリー・ペック (頂上の敵機)	ベティ・デイヴィス (イヴの続て)		
1951 (17)	欲望という名の電車 (エリア・カザン)	エリア・カザン (欲望という名の電車)	アーサー・ケネディー (Bright Victory)	ヴィヴィアン・リー (欲望という名の電車)		
1952 (18)	真昼の決闘 (フレッド・ジンネマン)	フレッド・ジンネマン (真昼の決闘)	ラルフ・リチャードスン (超音ジェット機)	シャーリー・ブース (愛しのシバよ帰れ)		
1953 (19)	地上より永遠に (フレッド・ジンネマン)	フレッド・ジンネマン (地上より永遠に)	バート・ランカスター (地上より永遠に)	オードリー・ヘップバーン (ローマの休日)		
1954 (20)	波止場 (エリア・カザン)	エリア・カザン (波止場)	マーロン・ブランド (波止場)	グレース・ケリー (喝采、裏窓、ダイヤルMを廻せ!)		
1955 (21)	マーティ (デルバート・マン)	デイヴィッド・リーン (旅情)	アーネスト・ボーグナイン (マーティ)	アンナ・マニャーニ (バラの刺青)		
1956 (22)	80日間世界一周 (マイケル・アンダーソン)	ジョン・ヒューストン (白鯨)	カーク・ダグラス (炎の人ゴッホ)	イングリッド・バーグマン (追想)		
1957 (23)	戦場にかける橋 (デイヴィット・リーン)	デイヴィッド・リーン (戦場にかける橋)	アレック・ギネス (戦場にかける橋)	デボラ・カー (白い砂)		
1958 (24)	手錠のまゝの脱獄 (スタンリー・クレイマー)	スタンリー・クレイマー (手錠のまゝの脱獄)	デイヴィッド・ニーヴン (旅路)	スーザン・ヘイワード (私は死にたくない)		
1959 (25)	ベン・ハー (ウィリアム・ワイラー)	フレッド・ジンネマン (尼僧物語)	ジェームズ・スチュワート (或る殺人)	オードリー・ヘップバーン (尼僧物語)		

Digitized by Google

フランス・シネマ大賞

Grand Prix Cinéma Français

年度	作　品
1934年	白き処女地(ジュリアン・デュヴィヴィエ)
1935	女だけの都(ジャック・フェデー)
1936	L'appel du silence(レオン・ポワリエ)
1937	Légious d'honneur(モーリス・グレーズ)
1938	Alerte en Méditerranée(レオ・ジョアノン)
1939	第二次世界大戦のため、授賞取り止め
1940	
1941	
1942	
1943	
1944	
1945	
1946	Farrebique(ジョルジュ・ルーキエ)
1947	聖バンサン(モーリス・クローシュ)
1948	Les casse-pieds(ジャン・ドレヴィル、ノエル　ノエル)
1949	該当なし
1950	のんき大将・脱線の巻(ジャック・タチ)
1951	田舎司祭の日記(ロベール・ブレッソン)
1952	該当なし
1953	夜ごとの美女(ルネ・クレール)
1954	青い麦(クロード・オータン　ララ)
1955	Les évadés(ジャン　ポール・ル・シャノワ)
1956	赤い風船(アルベール・ラモリス)、夜と霧(アラン・レネ)
1957	リラの門(ルネ・クレール)
1958	危険な曲り角(マルセル・カルネ)
1959	アルピニスト岩壁に登る(マルセル・イシャック)
1960	真実(アンリ・ジョルジュ・クルーゾー)
1961	地獄の決死隊(ドニ・ド・ラ・パトリエール)

年度	作　品
1962	明日に太陽を(フランソワ・ヴィリエ)
1963	Un roi sans divertissement(フランソワ・ルテリエ)
1964	太陽のとどかぬ世界(ジャック＝イヴ・クストー)
1965	ビバ！　マリア(ルイ・マル)
1966	Les fruits amers(シャクリーヌ・オードリ)
1967	パリのめぐり逢い(クロード・ルルーシュ)
1968	夜霧の恋人たち(フランソワ・トリュフォー)
1969	Le grand amour(ピエール・エテクス)
1970	愛のために死す(アンドレ・カイヤット)
1971	La veuve Couderc(ピエール・グラニエ・デフェール)
1972	ひきしお(クロード・ソーテ)
1973	Projection Privée(フランソワ・ルテリエ)
1974	Parade(ジャック・タチ)
1975	アデルの恋の物語(フランソワ・トリュフォー)
1976	Le Désert des Tartares(ジャック・ベリン)
1977	Le Crade Tambour(ピエール・ショーエンドエルファー)
1978	Le Papillon sur l'épaule(ジャック・ドレー)
1979	I comme I care(アンリ・ベルヌイユ)
1980	アメリカの伯父さん(アラン・レネ)
1981	Garde à vue(クロード・ミレ)
1982	Le Beau mariage(エリック・ロメール)
1983	愛の記念に(モーリス・ピアラ)
1984	田舎の日曜日(ベルトラン・タベルニエ)
1988	かごの中の子供たち(ジャン＝クロード・ブリソー)
1989	私の愛するテーマ(アンヌ＝マリー・メルヴィル)
1990	Erreur de jeunesse(ラドヴァン・タディール)
1991	Outre mer(ブリット・ルーアン)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1986 (43)	緑の光線(仏) (エリック・ロメール)		カルロ・デッレ・ピアーネ(クリスマス・プレゼント/伊)	ヴァレリア・ゴリノ (愛の物語/伊)		
1987 (44)	さよなら子供たち(仏) (ルイ・マル)		ジェームズ・ウィルビー、ヒュー・グラント (モーリス/英)	カン・スヨン (シバジ/韓国)		
1988 (45)	聖なる酔っぱらいの伝説(伊) (エルマンノ・オルミ)	テオ・アンゲロプロス (霧の中の風景/ギリシア=仏)	ドン・アメチー、ジョー・マンティーニャ (週末はマフィアと!/米)	イザベル・ユペール(主婦マリーがしたこと/仏) シャーリー・マクレーン(マダム・スザーツカ/英)		
1989 (46)	非情城市(台湾) (ホウ・ジャオシェン)		マルチェロ・マストロヤンニ、マッシモ・トロイージ(Che ora è?/伊=仏)	ジェラルディン・ジェームズ、ベギー・アシュクロフト(おかえりなさい、リリアン/英)		
1990 (47)	ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ(英) (トム・ストッパード)	マーティン・スコセッシ(グッドフェローズ/米)	オレグ・ボリソフ (たったひとりの目撃者/ブルガリア)	グロリア・ミュンヒメイヤー (La luna en el espejo/チリ)		
1991 (48)	ウルガ(ソ連=仏) (ニキータ・ミハルコフ)		リヴァー・フェニックス(マイ・プライベート・アイダホ/米)	ティルダ・スウィントン (エドワードII/英)		
1992 (49)	秋菊の物語(中国=香港) (チャン・イーモウ)		ジャック・レモン (摩天楼を夢みて/米)	コン・リー (秋菊の物語/中国=香港)		
1993 (50)	ショート・カッツ(米) (ロバート・アルトマン) トリコロール/青の愛(仏)(クシシトフ・キェシロフスキ)		ファブリッツィオ・ベンティヴォリオ (A Soul Torn in Two/伊)	ジュリエット・ビノシュ (トリコロール/青の愛=仏)	マルチェロ・マストロヤンニ (一、二、三、太陽/仏)	アンナ・ボナイユート (あなたはどこ?私はここ/伊)
1994 (51)	愛情萬歳(台湾) (ツァイ・ミンリャン) ビフォア・ザ・レイン (英=仏=マケドニア)(ミルチョ・マンチェフスキー)		シャ・ユウ (陽のあたる日々/中国=香港)	マリア・デ・メディロス (二人兄弟/ポルトガル)	ロベルト・チトラン (イル・トロ/伊)	ヴァネッサ・レッドグレイヴ (リトル・オデッサ/米)
1995 (52)	シクロ(仏=ヴェトナム) (トラン・アン・ユン)		ゲッツ・ゲオルグ (殺人者)	サンドリーヌ・ボネール、イザベル・ユペール (La Cérémonie/仏=独)	イアン・ハート (ナッシング・パーソナル/アイルランド・英)	イザベラ・フェラーリ (Romonzo di uu giovane Povero/仏=伊)
1996 (53)	マイケル・コリンズ (米)(ニール・ジョーダン)		リーアム・ニーソン (マイケル・コリンズ/米)	ヴィクトワール・ティヴィソル(ポネット/仏)	クリス・ペン (フューネラル/米)	
1997 (54)	HANA-BI(日) (北野武)		ウェズリー・スナイプス(ワン・ナイト・スタンド/米)	ロビン・タニー (ナイアガラ、ナイアガラ/米)		
1998 (55)	Cosi'Ridevano(伊) (ジャンニ・アメリオ)	エミール・クストリッツァ(Black Cat, White Cat/ボスニア)	ショーンペン (Hurly-Burly/米)	カトリーヌ・ドヌーブ (Place Vendôme/仏)		

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1957 (18)	大河のうた(インド) (サタジット・レイ)		アンソニー・フランシオサ(夜を逃れて／米)	ジドラ・リテンベルグス(Malva／ソ連)		
1958 (19)	無法松の一生(日) (稲垣浩)		アレック・ギネス (The Horses Mouth／英)	ソフィア・ローレン (黒い瞳／米)		
1959 (20)	ロベレ将軍(伊)(ロベルト・ロッセリーニ)/戦争(伊)(マリオ・モニチェリ)		ジェームズ・スチュワート (或る殺人／米)	マドレーヌ・ロバンソン (二重の鍵／仏)		
1960 (21)	ラインの仮橋(仏＝伊) (アンドレ・カイヤット)		ジョン・ミルズ (Tunes of Glory／英)	シャーリー・マクレーン(アパートの鍵貸します／米)		
1961 (22)	去年マリエンバートで(仏)(アラン・レネ)		三船敏郎 (用心棒／日)	シュザンヌ・フロン(Tunes of Glory／仏＝ユーゴ)		
1962 (23)	家族日誌(米　伊) (ヴァレリオ・ズルリーニ) 僕の村は戦場だった (ソ連)(アンドレイ・タルコフスキー)		バート・ランカスター (終身刑／米)	エマニュエル・リヴァ (Thérèse　Desqueyroux／仏)		
1963 (24)	Le Mani Sulla Citta (伊)(フランチェスコ・ロージ)		アルバート・フィニー (トム・ジョーンズの華麗な冒険／英)	デルフィーヌ・セイリグ (ミュリエル／仏＝伊)		
1964 (25)	赤い砂漠(伊) (ミケランジェロ・アントニオーニ)		トム・コートネイ (銃殺／英)	ハリエット・アンデショーン (愛する／スウェーデン)		
1965 (26)	熊座の淡き星影(伊) (ルキノ・ヴィスコンティ)		三船敏郎 (赤ひげ／日)	アニー・ジラルド (マンハッタンの哀愁／仏)		
1966 (27)	アルジェの戦い(伊＝アルジェリア) (ジッロ・ポンテコルヴォ)		ジャック・ペラン (Un Uomo a Mete／伊, La Busca／スペイン)	ナターリャ・アリンバサローワ (Le Premier Instituteur)		
1967 (28)	仔鹿(仏) (ルイス・ブニュエル)		リュビサ・サマルジッチ(Jutro／ユーゴ)	シャーリー・ナイト (Dutchman／英)		
1968 (29)	Artisten in der Zirkus Kuppel : ratlos(西独)(アレクサンデル・クリューゲ)		ジョン・マーレー (Faces／米)	ラウラ・ベッティ (テオレマ／伊)		
1969 (30)	公式援賞作品の選出はなし					
1970 (31)	公式援賞作品の選出はなし					
1971 (32)	恋(英) (ジョゼフ・ロージー)					
1972 (33)						
1980 (37)	グロリア(米) (ジョン・カサヴェテス) アトランティック・シティ(カナダ)(ルイ・マル)					
1981 (38)	鉛の時代(西独)(マルガレーテ・フォン・トロッタ)					
1982 (39)	ことの次第(西独) (ヴィム・ヴェンダース)					
1983 (40)	カルメンという名の女(仏) (ジャン　リュック・ゴダール)		マシュー・モディーン、マイケル・ライト、ミッチェル・リヒテンシュタイン、デイヴィッド・アラン・グリア、ガイ・ボイド、ジョージ・ズンザ (ストリーマーズ　若き兵士たちの物語　米)	ダーリン・レジディムス (マルチニックの少年／仏)		
1984 (41)	太陽の年(ポーランド＝西独　米) (クシシュトフ・ザヌーシ)		ナスィールッディーン・シャー (Paar　インド)	パスカル・オジェ (満月の夜　仏)		
1985 (42)	冬の旅(仏) (アニエス・ヴァルダ)		ジェラール・ドパルデュー(ソフィー・マルソーの刑事物語　仏)			

Digitized by Google

ヴェネツィア国際映画賞

MOSTRA INTERNAZIONALE D'ARTE CINEMATOGRAFICA DI VENEZIA

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1932 (1)	自由を我等に(仏)(ルネ・クレール) マデロンの悲劇(米)(エドガー・セルウィン) ジキル博士とハイド氏(米)(ルーベン・マムーリアン)	ニコライ・エック(人生案内/ソ連)	フレドリック・マーチ(ジキル博士とハイド氏/米)	ヘレン・ヘイズ(マデロンの悲劇/米)		
1934 (2)	Teresa Confalonieri(伊)(グイド・ブリニコーネ/最優秀イタリア映画賞)	グスタフ・マハティ(春の調べ/チェコ) ヨゼフ・ロヴェンスキ(ながれ/チェコ)	ウォーレス・ビアリー(奇傑パンチョ/米)	キャサリン・ヘップバーン(若草物語/米)		
1935 (3)	おもかげ(伊)(カルミネ・ガローネ/最優秀イタリア映画賞)	キング・ヴィダー(結婚の夜/米)	ピエール・ブランシャール(罪と罰/仏)	パウラ・ヴェッセリ(女ひとり/オーストリア)		
1936 (4)	リビア騎隊(伊)(アウグスト・ジェニーナ/ムッソリーニ杯イタリア映画)	ジャック・フェデー(女だけの都/仏)	ポール・ムニ(科学者の道/米)	アナベラ(戦ひの前夜/仏)		
1937 (5)	シオビネ(伊)(カルミネ・ガローネ/最優秀イタリア映画賞)	ロバート・フラハティ、ゾルタン・コルダ(カラナグ/英)	エミール・ヤニングス(支配者/独)	ベティ・デイヴィス(札つき女、倒れるまで/米)		
1938 (6)	民族の祭典/美の祭典(独)(レニー・リーフェンシュタール) 空征かば(伊)(ゴッフレッド・アレッサンドリーニ)(ムッソリーニ杯)	レスリー・ハワード(ピグマリオン/英)	ノーマ・シアラー(マリー・アントワネットの生涯/米)			
1939 (7)	Abuna Messias(伊)(ゴッフレード・アレッサンドリーニ)					
1940	L'assedio dell'Alcazar(伊)(アウグスト・ジェニーナ/イタリア映画賞)					
1941	La Corona di ferro(伊)(アレッサンドロ・ブラゼッティ)	G・W・パブスト(Komediante/独)	エルメーテ・ザッコーニ(Don Buonaparte/伊)	ルイゼ・ウルリッヒ(Annelie/仏/独)		
1942	Bengasi(伊)(アウグスト・ジェニーナ/イタリア映画賞)	フランチェスコ・デ・ロベルティス(Alfa Tau/伊)	フォスコ・ジャケッティ(Un Colpo di Pistola, Bengais, Noi vivi adio Kira 伊)	クリスティーナ・ゼーダーバウム(Die goldene Stadt, 偉大なる王者/独)		
1946	南部の人(米)(ジャン・ルノワール 最優秀劇映画賞)					
1947 (8)	Sirêna(チェコ)(カレル・シュテクリー)	アンリ=ジョルジュ・クルーゾー(犯罪河岸/仏)	ピエール・フレネー(聖パンサン/仏)	アンナ・マニャーニ(L'onorvole Angelina/伊)		
1948 (9)	ハムレット(英)(ローレンス・オリヴィエ/グランプリ) Sotto il Sole di Roma(伊)(レナート・カステラーニ 最優秀イタリア映画賞)	G・W・パブスト(審判/オーストリア)	エルンスト・ドイッチュ(Der Prozes/オーストリア)	ジーン・シモンズ(ハムレット/英)		
1949 (10)	情婦マノン(仏)(アンリ=ジョルジュ・クルーゾー/サン・マルコ金獅子賞・以後同名称)	アウグスト・ジェニーナ(Cielo Sulla Palude/伊)	ジョゼフ・コットン(ジェニーの肖像/米)	オリヴィア・デ・ハヴィランド(蛇の穴/米)		
1950 (11)	裁きは終りぬ(仏)(アンドレ・カイヤット)		サム・ジャフェ(アスファルト・ジャングル/米)	エリナー・パーカー(Caged/米)		
1951 (12)	羅生門(日)(黒澤明)		ジャン・ギャバン(夜はわがもの/仏)	ヴィヴィアン・リー(欲望という名の電車/米)		
1952 (13)	禁じられた遊び(仏)(ルネ・クレマン)	溝口健二(西鶴一代女)	フレドリック・マーチ(セールスマンの死/米)			
1953 (14)			アンリ・ヴィルベール(Le bon dieu Sans Contession 仏)	リリー・パルマー(The Fourposter/米)		
1954 (15)	ロミオとジュリエット(英)(レナート・カステラーニ)		ジャン・ギャバン(現金に手を出すな、われら巴里っ子/仏)			
1955 (16)	奇跡(ベルギー デンマーク)(カール・テオドール・ドライヤー)		ケネス・モア(愛情は深い海のごとく/英)	クルト・ユルゲンス(悪の決算、Des Teufels General/仏)		
1956 (17)			ブールヴィル(La Traversée/仏)	マリア・シェル(居酒屋 仏)		

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1984 (57)	アマデウス (ミロシュ・フォアマン)	ミロシュ・フォアマン (アマデウス)	F・マーレイ・エイブラハム (アマデウス)	サリー・フィールド (プレイス・イン・ザ・ハート)	ハイン・S・ニョール (キリング・フィールド)	ペギー・アシュクロフト (インドへの道)
1985 (58)	愛と哀しみの果て (シドニー・ポラック)	シドニー・ポラック (愛と哀しみの果て)	ウィリアム・ハート (蜘蛛女のキス)	ジェラルディン・ペイジ (バウンティフルへの旅)	ドン・アメチー (ミクーン)	アンジェリカ・ヒューストン (女と男の名誉)
1986 (59)	プラトーン (オリヴァー・ストーン)	オリヴァー・ストーン (プラトーン)	ポール・ニューマン (ハスラー2)	マーリー・マトリン (愛は静けさの中に)	マイケル・ケイン (ハンナとその姉妹)	ダイアン・ウィースト (ハンナとその姉妹)
1987 (60)	ラストエンペラー (ベルナルド・ベルトルッチ)	ベルナルド・ベルトルッチ (ラストエンペラー)	マイケル・ダグラス (ウォール街)	シェール (月の輝く夜に)	ショーン・コネリー (アンタッチャブル)	オリンピア・デュウキス (月の輝く夜に)
1988 (61)	レインマン (バリー・レヴィンソン)	バリー・レヴィンソン (レインマン)	ダスティン・ホフマン (レインマン)	ジョディ・フォスター (告発の行方)	ケヴィン・クライン (ワンダとダイヤと優しい奴ら)	ジーナ・デイヴィス (偶然の旅行者)
1989 (62)	ドライビング・ミス・デイジー (ブルース・ベレスフォード)	オリヴァー・ストーン (7月4日に生まれて)	ダニエル・デイ・ルイス (マイ・レフトフット)	ジェシカ・タンディ (ドライビング・ミス・デイジー)	デンゼル・ワシントン (グローリー)	ブレンダ・フリッカー (マイ・レフトフット)
1990 (63)	ダンス・ウィズ・ウルブス (ケヴィン・コスナー)	ケヴィン・コスナー (ダンス・ウィズ・ウルブス)	ジェレミー・アイアンズ (運命の逆転)	キャシー・ベイツ (ミザリー)	ジョー・ペシ (グッドフェローズ)	ウーピー・ゴールドバーグ (ゴースト ニューヨークの幽霊)
1991 (64)	羊たちの沈黙 (ジョナサン・デミ)	ジョナサン・デミ (羊たちの沈黙)	アンソニー・ホプキンス (羊たちの沈黙)	ジョディ・フォスター (羊たちの沈黙)	ジャック・パランス (シティ・スリッカーズ)	マーセデス・ルール (フィッシャー・キング)
1992 (65)	許されざる者 (クリント・イーストウッド)	クリント・イーストウッド (許されざる者)	アル・パチーノ (セント・オブ・ウーマン 夢の香り)	エマ・トンプソン (ハワーズ・エンド)	ジーン・ハックマン (許されざる者)	マリサ・トメイ (いとこのビニー)
1993 (66)	シンドラーのリスト (スティーヴン・スピルバーグ)	スティーヴン・スピルバーグ (シンドラーのリスト)	トム・ハンクス (フィラデルフィア)	ホリー・ハンター (ピアノ・レッスン)	トミー・リー・ジョーンズ (逃亡者)	アンナ・パキン (ピアノ・レッスン)
1994 (67)	フォレスト・ガンプ 一期一会 (ロバート・ゼメキス)	ロバート・ゼメキス (フォレスト・ガンプ 一期一会)	トム・ハンクス (フォレスト・ガンプ 一期一会)	ジェシカ・ラング (ブルースカイ)	マーティン・ランドー (エド・ウッド)	ダイアン・ウィースト (ブロードウェイと銃弾)
1995 (68)	ブレイブハート (メル・ギブソン)	メル・ギブソン (ブレイブハート)	ニコラス・ケイジ (リービング・ラスベガス)	スーザン・サランドン (デッドマン・ウォーキング)	ケヴィン・スペイシー (ユージュアル・サスペクツ)	ミラ・ソルヴィーノ (誘惑のアフロディーテ)
1996 (69)	イングリッシュ・ペイシェント (アンソニー・ミンゲラ)	アンソニー・ミンゲラ (イングリッシュ・ペイシェント)	ジェフリー・ラッシュ (シャイン)	フランシス・マクドーマンド (ファーゴ)	キューバ・グッディング・ジュニア (ザ・エージェント)	ジュリエット・ビノシュ (イングリッシュ・ペイシェント)
1997 (70)	タイタニック (ジェームズ・キャメロン)	ジェームズ・キャメロン (タイタニック)	ジャック・ニコルソン (恋愛小説家)	ヘレン・ハント (恋愛小説家)	ロビン・ウィリアムス (グッド・ウィル・ハンティング)	キム・ベイシンガー (L.A コンフィデンシャル)

Digitized by Google

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1956 (29)	八十日間世界一周 (マイケル・アンダースン)	ジョージ・スティーヴンズ (ジャイアンツ)	ユル・ブリンナー (王様と私)	イングリッド・バーグマン (追想)	アンソニー・クイン (炎の人ゴッホ)	ドロシー・マローン (風と共に散る)
1957 (30)	戦場にかける橋 (デイヴィッド・リーン)	デイヴィッド・リーン (戦場にかける橋)	アレック・ギネス (戦場にかける橋)	ジョアン・ウッドワード (イブの三つの顔)	レッド・バトンズ (サヨナラ)	ミヨシ・梅木 (サヨナラ)
1958 (31)	恋の手ほどき (ヴィンセント・ミネリ)	ヴィンセント・ミネリ (恋の手ほどき)	デイヴィッド・ニーヴン (旅路)	スーザン・ヘイワード (私は死にたくない)	パール・アイヴス (大いなる西部)	ウェンディ・ヒラー (旅路)
1959 (32)	ベン・ハー (ウィリアム・ワイラー)	ウィリアム・ワイラー (ベン・ハー)	チャールトン・ヘストン (ベン・ハー)	シモーヌ・シニョレ (年上の女)	ヒュー・グリフィス (ベン・ハー)	シェリー・ウィンタース (アンネの日記)
1960 (33)	アパートの鍵貸します (ビリー・ワイルダー)	ビリー・ワイルダー (アパートの鍵貸します)	バート・ランカスター (エルマー・ガントリー)	エリザベス・テイラー (バターフィールド8)	ピーター・ユスティノフ (スパルタカス)	シャーリー・ジョーンズ (エルマー・ガントリー)
1961 (34)	ウエスト・サイド物語 (ロバート・ワイズ,ジェローム・ロビンズ)	ロバート・ワイズ,ジェローム・ロビンズ(ウエスト・サイド物語)	マクシミリアン・シェル (ニュールンベルグ裁判)	ソフィア・ローレン (ふたりの女)	ジョージ・チャキリス (ウエスト・サイド物語)	リタ・モレノ (ウエスト・サイド物語)
1962 (35)	アラビアのロレンス (デイヴィッド・リーン)	デイヴィッド・リーン (アラビアのロレンス)	グレゴリー・ペック (アラバマ物語)	アン・バンクロフト (奇跡の人)	エド・ベグリー (逃いた太陽)	パティ・デューク (奇跡の人)
1963 (36)	トム・ジョーンズの華麗な冒険 (トニー・リチャードソン)	トニー・リチャードソン (トム・ジョーンズの華麗な冒険)	シドニー・ポワチエ (野のユリ)	パトリシア・ニール (ハッド)	メルヴィン・ダグラス (ハッド)	マーガレット・ラザフォード (予期せぬ出来事)
1964 (37)	マイ・フェア・レディ (ジョージ・キューカー)	ジョージ・キューカー (マイ・フェア・レディ)	レックス・ハリソン (マイ・フェア・レディ)	ジュリー・アンドリュース (メリー・ポピンズ)	ピーターユスティノフ (トプカピ)	リラ・ケドローヴァ (その男ゾルバ)
1965 (38)	サウンド・オブ・ミュージック (ロバート・ワイズ)	ロバート・ワイズ (サウンド・オブ・ミュージック)	リー・マーヴィン (キャット・バルー)	ジュリー・クリスティ (ダーリング)	マーティン・バルサム (A Thousand Clowns)	シェリー・ウィンタース (いつか見た青い空)
1966 (39)	わが命つきるとも (フレッド・ジンネマン)	フレッド・ジンネマン (わが命つきるとも)	ポール・スコフィールド (わが命つきるとも)	エリザベス・テイラー (バージニア・ウルフなんかこわくない)	ウォルター・マッソー (恋人よ帰れ！わが胸に)	サンディ・デニス (バージニア・ウルフなんかこわくない)
1967 (40)	夜の大捜査線 (ノーマン・ジュイソン)	マイク・ニコルズ (卒業)	ロッド・スタイガー (夜の大捜査線)	キャサリン・ヘップバーン (招かれざる客)	ジョージ・ケネディ (暴力脱獄)	エステル・パーソンズ (俺たちに明日はない)
1968 (41)	オリバー！ (キャロル・リード)	キャロル・リード (オリバー！)	クリフ・ロバートソン (まごころを君に)	キャサリン・ヘップバーン (冬のライオン) バーブラ・ストライサンド (ファニー・ガール)	ジャック・アルバートソン (The Subject Was Roses)	ルース・ゴードン (ローズマリーの赤ちゃん)
1969 (42)	真夜中のカーボーイ (ジョン・シュレシンジャー)	ジョン・シュレシンジャー (真夜中のカーボーイ)	ジョン・ウェイン (勇気ある追跡)	マギー・スミス (ミス・ブロディの青春)	ギグ・ヤング (ひとりぼっちの青春)	ゴールディー・ホーン (サボテンの花)
1970 (43)	パットン大戦車軍団 (フランクリン・J・シャフナー)	フランクリン・J・シャフナー (パットン大戦車軍団)	ジョージ・C・スコット (パットン大戦車軍団)	グレンダ・ジャクソン (恋する女たち)	ジョン・ミルズ (ライアンの娘)	ヘレン・ヘイズ (大空港)
1971 (44)	フレンチ・コネクション (ウィリアム・フリードキン)	ウィリアム・フリードキン (フレンチ・コネクション)	ジーン・ハックマン (フレンチ・コネクション)	ジェーン・フォンダ (コールガール)	ベン・ジョンソン (ラストショー)	クロリス・リーチマン (ラストショー)
1972 (45)	ゴッドファーザー (フランシス=フォード・コッポラ)	ボブ・フォッシー (キャバレー)	マーロン・ブランド (ゴッドファーザー)	ライザ・ミネリ (キャバレー)	ジョエル・グレイ (キャバレー)	アイリーン・ヘッカート (バタフライはフリー)
1973 (46)	スティング (ジョージ・ロイ・ヒル)	ジョージ・ロイ・ヒル (スティング)	ジャック・レモン (Save The Tiger)	グレンダ・ジャクソン (ウィークエンド・ラブ)	ジョン・ハウスマン (ペーパー・チェイス)	テイタム・オニール (ペーパー・ムーン)
1974 (47)	ゴッドファーザー PARTII (フランシス=フォード・コッポラ)	フランシス=フォード・コッポラ (ゴッドファーザー PARTII)	アート・カーニー (ハリーとトント)	エレン・バースティン (アリスの恋)	ロバート・デ・ニーロ (ゴッドファーザー PARTII)	イングリッド・バーグマン (オリエント急行殺人事件)
1975 (48)	カッコーの巣の上で (ミロシュ・フォアマン)	ミロシュ・フォアマン (カッコーの巣の上で)	ジャック・ニコルソン (カッコーの巣の上で)	ルイーズ・フレッチャー (カッコーの巣の上で)	ジョージ・バーンズ (ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ)	リー・グラント (シャンプー)
1976 (49)	ロッキー (ジョン・G・アヴィルドセン)	ジョン・G・アヴィルドセン (ロッキー)	ピーター・フィンチ (ネットワーク)	フェイ・ダナウェイ (ネットワーク)	ジェイソン・ロバーズ (大統領の陰謀)	ビアトリス・ストレート (ネットワーク)
1977 (50)	アニー・ホール (ウディ・アレン)	ウディ・アレン (アニー・ホール)	リチャード・ドレイファス (グッバイガール)	ダイアン・キートン (アニー・ホール)	ジェイソン・ロバーズ (ジュリア)	ヴァネッサ・レッドグレイヴ (ジュリア)
1978 (51)	ディア・ハンター (マイケル・チミノ)	マイケル・チミノ (ディア・ハンター)	ジョン・ヴォイト (帰郷)	ジェーン・フォンダ (帰郷)	クリストファー・ウォーケン (ディア・ハンター)	マギー・スミス (カリフォルニア・スイート)
1979 (52)	クレイマー、クレイマー (ロバート・ベントン)	ロバート・ベントン (クレイマー、クレイマー)	ダスティン・ホフマン (クレイマー、クレイマー)	サリー・フィールド (ノーマ・レイ)	メルヴィン・ダグラス (チャンス)	メリル・ストリープ (クレイマー、クレイマー)
1980 (53)	普通の人々 (ロバート・レッドフォード)	ロバート・レッドフォード (普通の人々)	ロバート・デ・ニーロ (レイジング・ブル)	シシー・スペイセク (歌えロレッタ・愛のために)	ティモシー・ハットン (普通の人々)	メアリー・スティーンバージェン (Melvin and Howard)
1981 (54)	炎のランナー (ヒュー・ハドソン)	ウォーレン・ベイティ (レッズ)	ヘンリー・フォンダ (黄昏)	キャサリン・ヘップバーン (黄昏)	ジョン・ギールグッド (ミスター・アーサー)	モーリーン・スティプルトン (レッズ)
1982 (55)	ガンジー (リチャード・アッテンボロー)	リチャード・アッテンボロー (ガンジー)	ベン・キングスレー (ガンジー)	メリル・ストリープ (ソフィーの選択)	ルイス・ゴセット・ジュニア (愛と青春の旅だち)	ジェシカ・ラング (トッツィー)
1983 (56)	愛と追憶の日々 (ジェームズ・L・ブルックス)	ジェームズ・L・ブルックス (愛と追憶の日々)	ロバート・デュヴァル (テンダー・マーシー)	シャーリー・マクレーン (愛と追憶の日々)	ジャック・ニコルソン (愛と追憶の日々)	リンダ・ハント (危険な年)

Digitized by Google

アカデミー賞

THE ACADEMY AWARDS

年度(回数)	作品賞	監督賞	主演男優賞	主演女優賞	助演男優賞	助演女優賞
1927 28 (1)	つばさ (ウィリアム・A・ウェルマン)	フランク・ボーゼージ (第七天国)	エミール・ヤニングス (肉体の道、最後の命令)	ジャネット・ゲイナー (第七天国、街の天使、サンライズ)		
1928 29 (2)	ブロードウェイ・メロディ (ハリー・ボーモント)	フランク・ロイド (情炎の美姫)	ワーナー・バクスター (懐しのアリゾナ)	メアリー・ピックフォード (コケット)		
1929 30 (3)	西部戦線異状なし (ルイス・マイルストン)	ルイス・マイルストン (西部戦線異状なし)	ジョージ・アーリス (Disraeli)	ノーマ・シアラー (結婚奴隷)		
1930 31 (4)	シマロン (ウェズリー・ラッグルズ)	ノーマン・タウログ (スキピイ)	ライオネル・バリモア (自由の魂)	マリー・ドレスラー (惨劇の波止場)		
1931 32 (5)	グランド・ホテル (エドマンド・グールディング)	フランク・ボーゼージ (バッド・ゲール)	フレドリック・マーチ (ジキル博士とハイド氏) ウォーレス・ビアリー (チャンプ)	ヘレン・ヘイズ (マデロンの悲劇)		
1932 33 (6)	カヴァルケード (フランク・ロイド)	フランク・ロイド (カヴァルケード)	チャールズ・ロートン (The Private Life of Henry 8)	キャサリン・ヘップバーン (勝利の朝)		
1934 (7)	或る夜の出来事 (フランク・キャプラ)	フランク・キャプラ (或る夜の出来事)	クラーク・ゲーブル (或る夜の出来事)	クローデット・コルベール (或る夜の出来事)		
1935 (8)	南部強戦隊(ウンテ)号の反乱 (フランク・ロイド)	ジョン・フォード (男の敵)	ウィクター・マクラグレン (男の敵)	ベティ・デイヴィス (青春の抗議)		
1936 (9)	巨星ジーグフェルド (ロバート・Z・レナード)	フランク・キャプラ (オペラ・ハット)	ポール・ムニ (科学者の道)	ルイーズ・ライナー (巨星ジーグフェルド)	ウォルター・ブレナン (大自然の凱歌)	ゲイル・ソンダーガード (風雲児アドヴァース)
1937 (10)	ゾラの生涯 (ウィリアム・ディターレ)	レオ・マッケリー (新婚道中記)	スペンサー・トレイシー (我は海の子)	ルイーズ・ライナー (大地)	ジョゼフ・シルドクラウト (ゾラの生涯)	アリス・ブラディ (シカゴ)
1938 (11)	我が家の楽園 (フランク・キャプラ)	フランク・キャプラ (我が家の楽園)	スペンサー・トレイシー (少年の街)	ベティ・デイヴィス (黒鷲の女)	ウォルター・ブレナン (Kentucky)	フェイ・ベインター (黒鷲の女)
1939 (12)	風と共に去りぬ (ヴィクター・フレミング)	ヴィクター・フレミング (風と共に去りぬ)	ロバード・ドーナット (Goodbye, Mr. Chips)	ヴィヴィアン・リー (風と共に去りぬ)	トーマス・ミッチェル (駅馬車)	ハティ・マクダニエル (風と共に去りぬ)
1940 (13)	レベッカ (アルフレッド・ヒッチコック)	ジョン・フォード (怒りの葡萄)	ジェームズ・スチュワート (フィラデルフィア物語)	ジンジャー・ロジャース (恋愛手帖)	ウォルター・ブレナン (西部の男)	ジェーン・ダーウェル (怒りの葡萄)
1941 (14)	わが谷は緑なりき (ジョン・フォード)	ジョン・フォード (わが谷は緑なりき)	ゲイリー・クーパー (ヨーク軍曹)	ジョーン・フォンテイン (断崖)	ドナルド・クリスプ (わが谷は緑なりき)	メアリー・アスター (偽大な嘘)
1942 (15)	ミニヴァー夫人 (ウィリアム・ワイラー)	ウィリアム・ワイラー (ミニヴァー夫人)	ジェームズ・キャグニー (ヤンキー・ドードル・ダンディ)	グリア・ガーソン (ミニヴァー夫人)	ヴァン・ヘフリン (Johnny Eager)	テレサ・ライト (ミニヴァー夫人)
1943 (16)	カサブランカ (マイケル・カーティス)	マイケル・カーティス (カサブランカ)	ポール・ルーカス (ラインの監視)	シェニファー・ジョーンズ (聖処女)	チャールズ・コバーン (The More The Merrier)	カティナ・パクシヌー (誰がために鐘は鳴る)
1944 (17)	我が道を往く (レオ・マッケリー)	レオ・マッケリー (我が道を往く)	ビング・クロズビー (我が道を往く)	イングリッド・バーグマン (ガス燈)	バリー・フィツジェラルド (我が道を往く)	エセル・バリモア (None but the Lonely Heart)
1945 (18)	失われた週末 (ビリー・ワイルダー)	ビリー・ワイルダー (失われた週末)	レイ・ミランド (失われた週末)	ジョーン・クロフォード (Mildred Pierce)	ジェームズ・ダン (ブルックリン横丁)	アン・リヴィアー (緑園の天使)
1946 (19)	我等の生涯の最良の年 (ウィリアム・ワイラー)	ウィリアム・ワイラー (我等の生涯の最良の年)	フレドリック・マーチ (我等の生涯の最良の年)	オリヴィア・デ・ハヴィランド (遥かなる我が子)	ハロルド・ラッセル (我等の生涯の最良の年)	アン・バクスター (剃刀の刃)
1947 (20)	紳士協定 (エリア・カザン)	エリア・カザン (紳士協定)	ロナルド・コールマン (二重生活)	ロレッタ・ヤング (ミネソタの娘)	エドマンド・グウェン (三十四丁目の奇蹟)	セレステ・ホルム (紳士協定)
1948 (21)	ハムレット(英) (ローレンス・オリヴィエ)	ジョン・ヒューストン (黄金)	ローレンス・オリヴィエ (ハムレット)	ジェーン・ワイマン (ジョニイ・ベリンダ)	ウォルター・ヒューストン (黄金)	クレア・トレヴァー (キー・ラーゴ)
1949 (22)	オール・ザ・キングスメン (ロバート・ロッセン)	ジョゼフ・L・マンキーウィッツ (二人の妻への手紙)	ロデリック・クロフォード (オール・ザ・キングスメン)	オリヴィア・デ・ハヴィランド (女相続人)	ディーン・ジャガー (頑丈の敵機)	マーセデス・マッケンブリッジ (オール・ザ・キングスメン)
1950 (23)	イヴの総て (ジョゼフ・L・マンキーウィッツ)	ジョゼフ・L・マンキーウィッツ (イヴの総て)	ホセ・フェラー (シラノ・ド・ベルジュラック)	ジュディ・ホリデイ (Born Yesterday)	ジョージ・サンダース (イヴの総て)	ジョゼフィン・ハル (ハーヴェイ)
1951 (24)	巴里のアメリカ人 (ヴィンセント・ミネリ)	ジョージ・スティーヴンズ (陽のあたる場所)	ハンフリー・ボガート (アフリカの女王)	ヴィヴィアン・リー (欲望という名の電車)	カール・マルデン (欲望という名の電車)	キム・ハンター (欲望という名の電車)
1952 (25)	地上最大のショウ (セシル・B・デミル)	ジョン・フォード (静かなる男)	ゲイリー・クーパー (真昼の決闘)	シャーリー・ブース (愛しのシバよ帰れ)	アンソニー・クイン (革命児サパタ)	グロリア・グレアム (悪人と美女)
1953 (26)	地上より永遠に (フレッド・ジンネマン)	フレッド・ジンネマン (地上より永遠に)	ウィリアム・ホールデン (第七捕虜収容所)	オードリー・ヘップバーン (ローマの休日)	フランク・シナトラ (地上より永遠に)	ドナ・リード (地上より永遠に)
1954 (27)	波止場 (エリア・カザン)	エリア・カザン (波止場)	マーロン・ブランド (波止場)	グレース・ケリー (喝采)	エドモンド・オブライエン (嫉妬の伯爵夫人)	エヴァ・マリー・セイント (波止場)
1955 (28)	マーティ (デルバート・マン)	デルバート・マン (マーティ)	アーネスト・ボーグナイン (マーティ)	アンナ・マニャーニ (バラの刺青)	ジャック・レモン (ミスター・ロバーツ)	ジョー・ヴァン・フリート (エデンの東)

Digitized by Google

リミニ・チネマ国際映画祭

文化的な相違を越えて、お互いに理解し合える関係作りを目指すことから発展して、不当に評価された作家たちや作品に対して特に注目していくイタリアの映画祭。フェデリコ・フェリーニ監督の生誕地としても有名なリミニは、海辺のリゾート地としても知られている所。長編コンペでは金のR賞（賞金1500万リラ）、銀のR賞（五百万リラ）が贈られる。その他にも国際学生映画のコンペ、専攻論文、回顧上映、討論会や特別企画もあり、別に2000万リラの賞金の出されるフェデリコ・フェリーニ賞が、若い監督の中から選ばれる。（98年9月）

ロカルノ国際映画祭

ディレクターのマルコ・ミュラーの手腕によって、世界初上映もしくはヨーロッパでのプレミア上映の作品が中心となり、内外から15万人もの人々が集まる、スイス南部のロカルノでの夏を華やかに彩る映画祭。新しい才能を評価するためのコンペ部門があり、今や世界の6大映画祭の一つとマルコ自身が言ってはばからない。コンペ部門の他に世界のアーカイヴと協力しての大々的な特集上映などの企画も興味深く、夜は8000人ともいわれるピアッツァ・グランデでの野外上映が楽しめる。98年で51回目を迎えた。（98年8/5～15）

ロサンゼルス国際映画祭

アメリカでも最大級の規模を誇るイヴェントの一つ。30以上もの組織・団体との協力によって、毎年様々な映画製作への局面に焦点を当てて行われている。（98年10月）

ロッテルダム国際映画祭

98年で26回目を迎えた、オランダの港町ロッテルダムで行われるベネルクスの中で最大の映画祭。商業映画と共に紹介されるインディペンデントのプログラムには斬新で評判が高い。上映作品のうち100本は、国際的に初上映かヨーロッパプレミア。短編、ドキュメンタリー、実験映画を含む多様な作品が紹介される。長編1・2作目を対象にしたタイガー・アワードのコンペもあり、ヤングシネマを積極的に応援している他、観客による人気投票も行われる。会場のアクセスも良く、機能的で運営も充実している。また独立プロの製作者、出資者、配給業者などを結び付けようとするシネマートという共同製作へ向けてのマーケットも設立されている。（98年1/28～2/8）

ロンドン映画祭

ナショナル・フィルム・シアターと幾つかの街の映画館にて、180本もの長編、ドキュメンタリー短編映画が紹介される。ノンコンペの映画祭。自国のイギリス映画のみならず、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカや欧州諸国からの見逃せない新作上映と、世界的にも影響力のあるアメリカの独立プロ作品なども集めた力強いセレクションで、国内からだけでなく海外からも合わせて400人以上のプレス関係者やバイヤーたちを引きつけている。（98年11月）

ワイン・カントリー映画祭

カリフォルニアワインの産地として有名なナパ・ヴァレーにて、ワインを楽しみながら映画を楽しもうという映画祭。独立プロ系の長編、海外からの作品、社会学的に注目される作品、アートに関する映画とそして環境問題を扱った作品の5つの部門に分かれて紹介される。映画祭自体としてはノンコンペだが、短編と監督第1作目を対象にした部門ではコンペがあり、賞が与えられる。（98年7月～8月）

ワルシャワ映画祭

4人のスタッフによって準備される11日間にわたるこのイヴェントは、85年から開催されて4万人もの観客を引きつけている。ヨーロッパ映画、アメリカンインディーズ、ワールド・シネマ、に加えて新作ポーランド映画の長編が紹介される部門に分かれるノンコンペの映画祭。（98年10月）

（Text by 林　加奈子）

Digitized by Google

キュメンタリー、短編、ビデオ作品を含めた紹介をしている。イタリアは地中海のリゾート地で33年にわたり活発な上映と討論会が行われている。最近では国や地域を絞った特集上映も行われ、毎年平行して自国イタリア映画の回顧上映も開催される。(98年6月)

ヘルシンキ映画祭

98年で28回目を迎えて、フィンランドでは最も重要な映画祭としてクオリティーの高い国際的な新作を紹介。若手の独立系の映画作家たちを積極的にサポートして、フィンランドの観客と配給業者たちとをつなげようと努力している。〈ラブ&アナーキー〉と銘打って、世界中から妥協を許さない作品を集めている。(98年9/18～24)

ベルリン国際映画祭

世界の大映画祭の中で最も効率的に運営されていると名高い映画祭。コンペやパノラマ部門を始め、児童映画部門、大々的な回顧上映、自国ドイツ映画の新作紹介もあり、加えてウルリッヒ・グレゴール氏が担当しているフォーラム部門では、最も独創的な作品の数々が紹介されている。ドキュメンタリー、短編、アニメーション、実験映画など幅広く作品を紹介。98年に48回目を迎え、50回目となる2000年からは会場が移転する計画が進んでいる。マーケットも同時に開催。コンペのグランプリには、市章の熊に因んだ金熊賞が贈られる。(98年2/12～23)

ポートランド国際映画祭

24ヶ国から100本余りの作品を集めた映画祭。諸外国からの新作、ドキュメンタリー、短編も紹介されて、アメリカ北西部を中心にこの街に3万人以上の観客が集まる。オーケストラのナマ演奏を付けたクラシック無声映画の上映や、児童映画の上映もあり、97年には特別プログラムとして、中南米のスペイン語圏の映画上映とその文学にも絡めたシンポジウムが行われた。(98年2/12～3/1)

北欧映画祭

ドイツはハンブルクの北にあるリューベックという中世の趣を残すチャーミングな街で行われる。スカンジナビア、バルト海諸国の作品にスポットを当てて、業界関係者を始め一般の観客にも新しい作品を見られる機会を設けている。またドキュメンタリー部門も特色とされている。(98年11/5～8)

ポルデノーネ映画祭

82年から開催されている無声(サイレント)映画を専門に紹介する映画祭。秋の一週間、この小さなイタリアの街にたくさんの熱心な学者、映画史家、コレクターやフィルム・アーカイヴ関係者たちが欧州、アメリカ、日本やオーストラリアからも集まってくる。近年ではイギリスの有名な映画史家、デイヴィッド・ロビンソンがディレクターに就任。97年からグリフィス・プロジェクトが始まって、長期間にわたって今だ修復作業によってより高く正当な評価が待たれている、現存する限りのD・W・グリフィス作品復元に向けて奮闘している。(98年10月)

香港国際映画祭

香港映画の回顧上映を含めた200本もの作品を紹介。98年には22回目を迎えて、香港返還後でも変わらずに台湾作品も上映し、アジアで重要な映画祭としての威信を保っている。多数の欧米からの参加者にとっては、アジア映画、特に中国映画を発見できる場としての価値が高い映画祭。早くからチケットが売り切れてしまうプログラムも多く、一般観客にとってもアート系の映画を集中して見られる絶好の機会となっている。コンペ無し。市政局によって運営されている。(99年3/31～4/14)

マンハイム－ハイデルベルク国際映画祭

世界の若手の独立プロ系の作家たちの為の映画祭。かつては早くからトリュフォー、ファスビンダー、キェシロフスキーそして最近ではブライアン・シンガーを紹介した。短編とドキュメンタリーにはコンペがあり、賞金が出る。(98年10/9～17)

ミフェッド

ミラノ・フェアーの一環として行われる。映画祭というより、特に世界中からの映画の売買にかかわるマーケット。カレンダーの順番では、恒例の3大映画マーケット(先のアメリカン・フィルム・マーケット、カンヌ映画祭)の中で3番目に数えられるが、お金の絡むビジネスばかりで、しかも北イタリアの陰うつな季節10月に開催されるとはいえ、まだまだ魅力あるイヴェントと言えるだろう。(98年10/19～24)

ミルヴァレー映画祭

サンフランシスコの北にある可愛らしい町、ミルヴァレーで開催される11日間にわたるノンコンペの映画祭。ビデオフェスティヴァルや特集上映、セミナーも行われる。

メルボルン国際映画祭

オーストラリアで短編コンペの部門を持つ映画祭。シドニー映画祭を追いかけるようにして7月に開催される。諸外国の長編新作、アニメーション、ドキュメンタリー、実験映画などが紹介される。(98年10月)

モントリオール世界映画祭

セルジュ・ロジック氏が設立した夏の終わりを彩る大きなコンペ部門を持つ映画祭。北米大陸の中では、フィアフ(国際映画製作者連盟)から正式に承認されている唯一の映画祭。部門は公式コンペの他にもラテン・アメリカ、カナダ・パノラマ、テレビ映画、新傾向と銘打った今日・明日の映画部門などに分かれている。一般観客の動員数が極めて多く、海外からの参加者も東欧、南米、フランスなどを中心に各国から集まる。英・仏二カ国語が両用されるモントリオールは、設備の面でもまた北米の映画が流出する重要な大都市と近接している点においても理想的な位置を築いている。(98年8月～9月)

モンペリエ国際地中海映画祭

地中海からの映画を集めてフランス南部のモンペリエで毎年開催されるこの映画祭は、長編、短編のコンペ部門があり、総額5万アメリカドルの賞金が用意されている。ヨーロッパでの商業展開を踏まえた試みや、長編大作の展開を検討したプログラムなども同時に行われて、業界関係者たちから注目されている。(98年10/23～11/1)

山形国際ドキュメンタリー映画祭

89年から隔年にて山形市で開催される。アジアのドキュメンタリーの拠点となるこの映画祭は、99年は10月19日から25日の日程。全世界からの募集の中から長編約15本のインターナショナル・コンペ部門を始め、アジア・プログラム、招待作品、スペシャル・プログラム、そしてスペシャル・イヴェントと多彩な構成により、充実した7日間が約束されている。ドキュメンタリーを対象にしたインターナショナル・コンペの大賞には、〈ロバート&フランシス・フラハティ賞〉(賞金3百万円)が、最優秀賞には〈山形市長賞〉(百万円)が贈られる。また、上映の為に事務局によって製作された日本語字幕版は、映画祭終了後、山形市のフィルムライブラリーに保存される。アジア・プログラムでは、フォーマットや上映時間を問わずに、審査委員会によって小川紳介賞(賞金50万円)、奨励賞(30万円)が選ばれる。世界から注目を浴びて、高い評判を得ている。

ラ・ロシェル国際映画祭

ジャン＝ルップ・パセック氏が、大西洋に臨むフランス西部のリゾート地、ラ・ロシェルで、過去と未来の映画の橋渡しを試みてくれている所。ノンコンペ。新作上映やテーマ性のあふれる独特なプログラムで、特色のある映画祭を演出。93年に行われたフランチェスカ・ベルティーニの発見に見られた様に、コンペを漂いている他の映画祭よりも、むしろより深い興奮をもたらしてくれていると言えよう。(98年6/16～7/6)

Digitized by Google

デンヴァー国際映画祭

98年10月に21回目を迎えるこの映画祭では、100本を越える映画が10日間にわたって上映される。新作の長編を始め、ドキュメンタリー、アメリカ本国からの新作、また批評家によるプログラムが用意されて、50人以上の作家たちが出席。おおらかでフレンドリーなコロラドで、気持ちの良い日々が過ごせる。デンヴァー・フィルム・ソサエティーの傘下で運営され、ノンコンペだが功労賞が贈られている。(98年10月)

東京国際映画祭

98年に11回目を迎える映画祭。国際コンペ部門を始め、特別招待、シネマプリズム、ニッポン・シネマ・クラシックなどの部門に分かれて、シンポジウムも行われる。同時期に協賛企画としてファンタスティック映画祭、カネボウ女性映画週間なども開催され、映画を通じて世界各国間の文化交流、友愛、相互理解と協力を促進することを目的として、また映画産業の担い手となる才能ある有望な若い映画作家の活動を支援し、交流の場を与えることによって、世界の映画芸術の発展を期すことを目指して行われている。98年からインターナショナルコンペ部門とヤングシネマコンペ部門が一つになり、最も高い評価を獲得した作品に〈東京グランプリ〉賞が贈られる他、同じコンペ部門の作品の中から監督の35ミリ長編映画の3作目までの作品を対象にして、以前のヤングシネマ部門の名残となる〈東京ゴールド賞〉(賞金1千万円)〈東京シルバー賞〉(5百万円)が選ばれる事となった。正式上映の作品は、英語および日本語字幕にて上映される。(98年10/31～11/8)

トロント国際映画祭

10日間で250作品を越える幅の広いプラグラムを構成している。基本はノンコンペの映画祭。カテゴリーはギャラ・プレミア上映、特別上映、ザ・エッジ、第一作、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、アメリカ映画のパノラマ、監督特集、ミッドナイト上映、カナダ新作紹介などなど多岐にわたっていて、数多くの一般観客にも熱く支持されている。バイヤーのための特別試写や、業界内でのシンポジウムも開かれている。(98年9/10～19)

ニューヨーク国際映画祭

98年に36回目を迎えて、ここは何百もの映画を上映するマーケット的な役割になってしまわないように、むしろ上映本数を増やさない事を努力し続けて来た映画祭だ。世界中から選び抜かれた長編、短編含めて30作品を越えない映画が上映される。ここ10年間、観客は95パーセント以上の会場の占有率を記録して、ニューヨークやアメリカ国内だけでなく、国際的なメディアにまで広範囲にわたって報道されてきている。尚、3月には同じ組織とニューヨーク近代美術館が共催となり、〈ニューディレクターズ・ニューフィルムズ〉と題した、アメリカで新しく紹介される監督たちの新作を集めた映画祭も開催される。いずれもノンコンペ。(98年9/25～10/11)

ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭

このドキュメンタリー映画祭は歴史は古いが、最近になってタイトルを〈ヴィジョン・デュ・リール〉と銘打って、新しいメンバーによって再構成された。コンペで独創的なドキュメンタリーを推進していくと共に、記者会見や話し合いの場も設けている。自国スイス映画のパノラマ部門もある。(98年4/20～26)

パームスプリングス国際映画祭

カリフォルニア、パームスプリングスで行われるこの映画祭は、90年にはたった3日間だったのに、96年には16日間の開催期間を持つイヴェントに成長して、今では25年目からプレミア上映作品を含む100本以上が紹介されることとなった。映画製作を様々な観点から考えるセミナーや、ブラック・タイ着用のフォーマルな催しまで行われる。(98年1/8～19)

ハワイ国際映画祭

〈見知らぬ人が出会う時〉というサブタイトルを付けて、映画を通じた国際文化交流を推進しようとしている映画祭。インド、オーストラリアを含む環太平洋の作品を集めた映画祭。特にアジア作品には力を入れている。長編劇映画コンペとドキュメンタリーのコンペがある。(98年11/6～19)

ファジール国際映画祭

97年から国際コンペ部門が設けられて、今やこの映画祭は東洋と西洋の映画の橋渡し的な存在として大きく発展しつつある。自国イラン映画の紹介が中心だが、諸外国からの作品も増えて、特集上映も行われる。テヘランにて開催。(98年2月)

フィゲイラ・ダ・フォス国際映画祭

98年に27回目を迎えるポルトガルの中では最も確立された映画祭。長編を始め、短編、中編、児童映画、ビデオのコンペ部門があり、その外にも回顧上映やポルトガルでもまだよく知られてない自国の作品を紹介する。9月の始めの美しい海辺のリゾート地区でのこの映画祭は、参加するスターや監督たちにとっては憩いの場となるだろう。(98年9月)

プエルトリコ国際映画祭

アメリカ自治領である西インド諸島に位置するプエルトリコでは、英語もスペイン語も話されるというクロスカルチャーな場所柄を生かして、急成長を遂げているこの映画祭は、3つの部門によって構成される。諸外国の新作映画、最新のスペイン映画パノラマ、そしてラテンアメリカのベストフィルム部門ではフィプレッシィ(国際批評家連盟)賞が選ばれる。合わせて100本程の作品が6つの劇場で紹介上映される。(例年11月、99年1月末～2月初旬)

釜山国際映画祭

96年から開催の新しい映画祭ながら、急成長でアジアの拠点としての役割を果たしつつある注目すべき所。3回目の98年からは、ロッテルダムのシネマートにならったPPP(プサン・プロモーション・プラン)が始まって、アジアの独立プロ系の作品を製作促進するための企画も充実。アジアの監督第1・2作目を対象にしたコンペ部門を始め、世界各国からの新作紹介、韓国映画パノラマ、夜の大スクリーンでの野外上映、ドキュメンタリー、アニメーション、短編、回顧上映や多彩なセミナー、シンポジウムなど、他の映画祭の良い部分を積極的に吸収して、高い評価を得ている。懸命な若いボランティアスタッフの活躍も特筆もの。97年は2回目にして、外国からの招待参加者が300人、観客総入場者数18万人だったが、98年にはそれぞれ419人、21万5千人を記録した。韓国南部の港町、釜山にて開催。(98年9/24～10/1)

フランダース国際映画祭(ゲント)

ベルギーのゲントで開催される。6万2千人もの参加者が、ベルギーではほとんどまだ配給の決まっていない長編150本、短編80本を楽しみ、コンペの総額は13万ドルに至る。特に〈映画に生かされる音楽〉にフォーカスを当てて、コンペ外でも自国の新作を始め、ヨーロッパやベネルクスでのプレミア上映、回顧上映も行われる。エントリーフォームは8月半ば、プリント送付は10月を締め切りとしている。(98年10/6～17)

ブリスベーン国際映画祭

98年に7回目を迎えて短編、長編劇映画、ドキュメンタリー、ビデオを上映している。オーストラリアでの長編作品に対して賞が贈られるほか、特集上映やアジア太平洋地域からの作品にも焦点を当てている。(98年7/30～8/9)

ブリュッセル国際映画祭

ブリュッセル・ファンタと呼ばれる、ファンタジー映画、スリラー、サイエンス・フィクション映画を集めた映画祭。世界各国から映画が集められて、ベルギーの首都ブリュッセルにて3月に開催される。コンペ部門あり。

ペザロ・ニューシネマ国際映画祭

特に新しい監督や斬新な感覚の映画、革新的なる作品に焦点を当てて、ド

Digitized by Google

サンタ・バーバラ国際映画祭

ロサンゼルスの北に位置する海辺のリゾート地サンタ・バーバラにて、毎春11日間行われる映画祭。86年に始まって以来、ヴァラエティーに富んだプログラムで、意義ある文化活動として認められてきている。映画業界人から指名された審査員たちが、アメリカ長編映画賞、外国作品賞、監督賞、長編ドキュメンタリー映画賞、短編賞などの幾つかの賞を選び、また一般の観客人気投票による観客賞も選出される。(98年3/5～15)

サンダンス映画祭

アメリカ、ユタ州のソルトレイク・シティーで開催されるこの映画祭は、急成長を遂げて、今やアメリカのインディペンデン映画を紹介する場として最も認められているイヴェントの一つとなった。コンペによってドラマ部門とドキュメンタリー部門でその年のアメリカのインディペンデン映画の最新動向を追うことが出来る。(98年1/15～25)

サンパウロ国際映画祭

ブラジル、サンパウロで行われる長編1・2作目のコンペ部門を持つ映画祭。特に独立系の作品に力を入れながら、30ヶ国から集められた長編、短編が紹介される。クラシックの特集上映もある。96年には20周年を迎えた。10月に開催。

サンフランシスコ国際映画祭

40回目を迎えて、ますます人気が高まってきている。招待を受けた150本以上の作品のみがノンコンペの形で期間中には上映されるが、それには世界中から1800本以上の作品が、映画祭開催前に決定されるゴールデン・ゲート賞を目指して事前にエントリーされている。(98年4～5月)

シカゴ国際映画祭

98年で40回目を迎えたアメリカでは最も古くからコンペのある映画祭。優れた諸外国の新作をアメリカに紹介するのと同時に、独立プロ系の作品も積極的に上映する。コンペ部門での長編20本程中からのグランプリには、ゴールド・ヒューゴー賞が贈られる他、短編、ドキュメンタリー、アニメーション、学生による作品も別個に競われる。ここ数年では、ジョディ・フォスター、オリヴァー・ストーン、ソフィア・ローレン、ジャック・レモン、シドニー・ポラックなどが特別名誉賞を受賞。(98年10/8～22)

シッチェス・カタルーニャ国際映画祭

98年に31回目を迎えるスペインの有名なファンタスティック映画祭。ファンタスティック・ファンタジー系の作品のコンペ部門があるが、そのジャンルに属さない作品も集めて最新作の上映、7人の批評家が選んだ商業展開が容易でない価値ある7本を集めた部門、新傾向のアニメーションの部門、映画史を彩るクラシック映画を特集する部門など、多彩なプログラムが同時に紹介されている。(98年10月)

シドニー国際映画祭

オーストラリアの首都シドニーで6月に開催される歴史のある映画祭。ノンコンペ。街中のステートシアターを中心に、世界各国から集められた新作が紹介される。オーストラリアの短編映画も同時に上映される。ここでのプレミア上映の後、オーストラリアで配給の決まっている作品は劇場公開される意味でも、その反応を知る上で重要な映画祭。

ジュネーヴ映画祭

〈明日のスター〉と題してそれぞれの自国では有名でもまだ国際的な知名度を得ていない俳優たちを紹介しているスイス、ジュネーヴで行われる映画祭。コンペ部門があり、ゲストも多く、特集上映の他、セミナーも行われる。過去に少なくとも3人のここでの受賞者が、後にアカデミー賞でオスカーを手にした実績がある。(98年10/28～11/3)

シンガポール国際映画祭

香港映画祭に続く形で、4月の終わりに開催される映画祭。アジア映画のコンペ部門がある。シンガポールプレミアとなる、新作の上映も行われるが、特にヤングシネマに焦点を当てて、短編やアニメーションなども積極的に紹介している。

ストックホルム国際映画祭

90年にスタートして、北欧のメディアをリードするイヴェントとなってきた映画祭。長編本数3作目までを製作してきた監督たちを集めたコンペ部門、諸外国からの新作、アメリカの独立プロ系の作品、北欧やバルト海諸国からの新作などを上映する。(98年11/6～15)

台北ゴールデンホース映画祭

台北国際映画博覧会は、台湾金馬賞と並んで台湾映画の為に台北市のフィルム・ライブラリーによって組織され開催される。異なる文化を映画を通じて理解促進していこうというもの。(98年11月)

タオルミーナ国際映画祭

イタリア南部のシシリー島にあるタオルミーナにて、〈タオルミーナ・アルテ〉と呼ばれる夏の芸術祭の一環として7月に行われる映画祭。ヤングシネマを対象にした長編コンペがある他、監督特集上映やディスカッションも行われる。夜には遺跡を活用した野外上映が、見事なイヴェントを演出してくれている。

タンペレ映画祭

フィンランドのタンペレで開催されるこの映画祭は、98年に28回目を迎えて、長い間にわたって世界の短編映画祭をリードしてきた。60カ国からのエントリーがあり、特に東欧諸国の興味深い作品を紹介してきた伝統がある。コンペは短編ドキュメンタリー、アニメーション、フィクションに分かれていて、その他にもセミナーや討論が行われる。マーケットでは特に北欧とバルト海諸国の短編やドキュメンタリーの部門が設けられている。(98年3/4～8)

チネマ・ジョーバニ(ヤングシネマ)[illegible](トリノ)

晩秋にイタリア北西部の美しい街、トリノにて開催され、特に新しい監督たちの作品を中心に紹介する運営の行き届いた映画祭。長編、短編、そして自国イタリアのインディーズ作品のコンペがあるほか、各国のヌーヴェル・バーク特集や監督特集なども行われる。新しい才能を見つけられるホットな映画祭として、今やイタリアではヴェネツィアに次ぐ重要な所としての評価が高く認められている。98年で16回目を迎えて、新たにイタリアでの公開時に配給プロモーション経費を援助するための賞金が出されるネッスル賞も設立された。(98年11/20～28)

テサロニキ国際映画祭

98年に39回目を迎える、ギリシャで最も長い歴史を持つ重要な映画祭。北部に位置する第2の都市テサロニキで開催される。才能ある監督の新しい感覚の作品や独立プロ系の映画を積極的に応援して、33回目から国際的な作品が対象となった長編1・2作目を対象にしたコンペ部門では、グランプリのアレクサンダー金賞(賞金約5万アメリカドル)、同銀賞(3万ドル)が贈られる。諸外国からの業界関係者の出席も多く、自国ギリシャ映画のコンペ、特集上映やギリシャプレミア上映となる世界からの新作作品も上映されて、絵コンテや絵画の展示会も同時に行われる。(98年11月)

テルライド映画祭

コロラドの山々が壮観な場所テルライドは、歴史的な炭鉱の街でもある。このフレンドリーな雰囲気の映画祭には、有名な監督たちや俳優、評論家がシェリダン・オペラ・ハウスと呼ばれる劇場を始めとする会場に集まる。浅薄で派手な宣伝から開放されて、参加者たちは映画を芸術として楽しむことに専念できる。98年は25周年記念を迎えた。(98年9/3～7)

Digitized by Google

る。映画祭参加者のためのセミナーやワークショップも行われる。(98年9/18〜26)

エーテボリ国際映画祭

スウェーデン第2の都市エーテボリにて開催。ノンコンペ。98年には21回目を迎えて、スカンジナビアで最も大きな映画祭としてだけでなく、ヨーロッパの中でも意義深い映画祭として認められてきた。凍りつくようなスウェーデンの冬の季節での開催だが、ホテルと会場とのアクセスも良く、とかく神経質になってしまいがちの監督たちでも寒さを吹き飛ばすかのような、10万5千人余りの真面目な観客からの温かい拍手に迎えてもらえる。スウェーデンのテレビ局で生中継も行われて、映画祭がプレステージとしての価値をますます深めてきている。97年にテレビ局と映画祭事務局とで共同製作されたスウェーデンの巨匠イングマル・ベルイマン監督へのインタビューは、貴重なドキュメンタリー作品として世界各地の映画祭でも紹介された。(98年1/30〜2/8)

エジンバラ国際映画祭

途中で中断することなく98年に52周年を迎えた、歴史のある映画祭。アクセスも良く、日本からの鈴木清順や今村昌平監督特集を始め、吟味された特集上映やセミナー、海外からの新作、自国イギリス映画、若い作家たちの作品をダイナミックに紹介して、地元の観客に熱狂的に支持されている。96年には50周年を記念して、ニュー・ブリティシュ・エキスポを開催し、ユニークなイギリス映画の紹介の場となった。(98年8/16〜30)

エルサレム映画祭

現在のディレクターでこの映画祭の創設者でもあるリア・ヴァン・レア。彼女の努力によってイスラエルで最も名声の高いイヴェントになっている。150本余りの上映作品は諸外国のベストフィルムを集め、ドキュメンタリー、イスラエル新作パノラマ、地中海からの映画、アニメーション、短編、アメリカ独立プロ系の作品、ヤングシネマ、ユダヤ問題を扱う作品などの部門に分かれて、またクラシック作品の復元版上映や回顧上映も行われる。自国イスラエル映画のコンペがあり、賞が選ばれる。(98年7/9〜18)

オーバーハウゼン国際芸術映画祭

98年に44回目を迎えて、短編映画祭としては世界最古だということだが、世界中からの短編(国際コンペと自国ドイツ映画のコンペあり)上映だけにとどまらず、様々な作品を上映する方向に変わりつつある。シンポジウムや討論会も行われている。(98年4月)

オデンセ映画祭

デンマークのオデンセにて開催されるこの映画祭は、デンマークが生んだ有名な作家アンデルセンに因むかのように、独創的で想像力あふれる個性的な短編作品ばかりを集めている。16ミリか35ミリの45分以内の作品に参加資格がある。(98年8/11〜15)

カルロヴィヴァリ国際映画祭

98年に33回目を迎えて、今や毎年開催されるチェコで最も名誉ある華やかな映画祭。国際審査員によって選ばれる長編劇映画とドキュメンタリーのコンペがあり、作品、監督、俳優への各賞と審査員特別賞が贈られる。自国チェコの新作パノラマ部門と同時に旧共産圏の国々からの作品も積極的に集められる。97年にはアメリカンインディーズとオーストラリアのここ20年の作品を大々的に特集し、ミロシュ・フォアマン監督特集を始め、アメリカのドキュメンタリー作品の数々、アレクサンドル・ソクロフ監督特集など個性あふれる企画も平行して行われる大映画祭。チェコの小さくも静かで美しい街、カルロヴィヴァリにて開催。(98年7/3〜11)

カンヌ映画祭

国際映画祭としては規模、注目度、業界関係者参加者数、など様々な意味でトップの座を維持している大映画祭。コンペ部門のみならず、ある視点と銘打った部門、監督週間、批評家週間とそれぞれの部門で魅力あるプログラムを提供している。マーケットも充実。参加者誰もが、その出席の重要性を痛感出来る映画祭。97年には50周年を迎えて、華やかに記念イヴェントが開催された。コンペ部門の中で最も高く評価された作品は、パルム・ドールの栄誉に輝く。(98年5/13〜24)

クラコウ国際短編映画祭

ポーランドで最も古くから行われている短編映画祭の老舗的な存在。5月にクラコウにて開催される。

クレルモンフェラン短編映画祭

フランスのオーヴェルニュ地方の火山の麓で、この土地の郷土料理に舌鼓をうちながら200本以上もの良質の短編映画を楽しみたい人には理想的な映画祭。コンペ部門を持つこの映画祭には97年には49ヶ国から11万6千人もの観客と1400人の業界関係者を参加させた。特集上映や学生映画、討論会などもあり、短編映画へのマーケットとしての機能を果たしている。(98年1/23〜31)

国際アニメーションフェスティバル広島大会

98年に7回目を迎えた、広島で開催されるアニメーション映画専門の国際映画祭。グランプリ、ヒロシマ賞、デビュー賞、国際審査委員特別賞、優秀賞の他、98年度より木下蓮三賞を設置。第1回から第6回大会までASIFA(国際アニメーションフィルム協会)日本支部会長として尽力された故・木下蓮三氏の功績を称えて設置されたものである。98年度コンペティション審査作品数は57ヵ国、1127作品にのぼり、国内外から注目を集める映画祭である。(98年8/20〜24)

国際ミステリー映画祭・ミストフェスト(カットーリカ)

ミステリー映画、犯罪ものや探偵映画を特別に集めて、その配給促進や普及をサポートするために行われている映画祭。市政局の財政上の対策により、98年からはアンテプリマ、ミストフェストとリミニシネマのイタリアの3つの映画祭が統合して、アドリア海沿岸の新しい映画祭としてスタートすることになった。それぞれが今までに築いてきた映画祭の特色を生かしながら、独立プロ系の作品やジャンル映画、学術研究、マルチメディア・イヴェントなどを行って、賞も出していく。

ザグレブ・アニメーション映画祭

短い中断の後、伝統あるザグレブ映画祭が再開したのは、世界のアニメーション映画ファンにとっても喜ばしい限り。コンペ部門があるが、賞の対象には入らなかった作品も同時に紹介される。クロアチアのザグレブにて開催。(98年6/17〜21)

サンセバスチャン国際映画祭

エレガントなバスク地方の海辺の街でのこの映画祭は、予算規模、きらびやかさ、パーティーとそしてもちろん映画の数と、どれをとってもスペインで最も重要な映画祭と言える。大コンペと並んで新人監督対象のコンペも行い、ハリウッド・スターの出席も多い華やかな映画祭。グルメを唸らせる料理、美しい浜辺、そして古風で趣のある街として良く知られているところだが、映画祭の方はディエゴ・ガラン氏の指揮の下で、国際的にも大いに注目される映画祭として意義深い特集上映もプログラムされ、称賛の評価を得ている。(98年9月)

3大陸映画祭(ナント)

アフリカ、アジア、ラテンおよびブラックアメリカの映画を集めてコンペを開催する独特な趣向の映画祭。これは第三世界への温情主義によるものでは無く、むしろ良い条件の下で彼らの文化的な真価に敬意を払うための試みである。国ごとにフォーカスを当てた特集上映も行われて、インドネシア、エジプト、韓国などの作品をいち早くヨーロッパで上映。96年からは映画だけでなく3大陸を対象にした写真に対しても、その関心を広げている。フランス西部にあるロワール河口の裕福な街、ナント市で開催。98年に20周年を迎える。(98年11月)

Digitized by Google

film festival

世界の主な映画祭

アジアフォーカス・福岡映画祭

福岡市のアジアン・マンスである9月に開催される、アジア映画に焦点を当てた映画祭。ノンコンペ。各国からの20本以上の新作紹介に加えて、特集上映、シンポジウムも行われる。上映後には監督との質疑応答も設けられ、福岡市民を始めとした参加者にとってアジア諸国の文化を知る絶好のチャンスとなるだけでなく、集まったアジア諸国からのゲストたちにとっても交流を図る貴重な出会いの場となっている。東京で記者会見をするなど、福岡市圏外への広報も海外へまでも含めて積極的に行われている。ディレクターは映画評論家の佐藤忠男氏。コーディネーターは夫人の佐藤久子氏。福岡市によって組織された映画祭実行委員会事務局の運営による。(98年9/11～20)

アヌシー国際アニメーション映画祭

アニメーションの国際映画祭としては歴史のある所。フランスの南東部サヴォア地方にて、マーケットとして名高いMIFAと共に行われてアニメーション映画の配給交渉が行われている。新作上映だけでなく、回顧上映や展示会も行われる。(99年5月)

アミアン国際映画祭

フランス北部のアミアンで長編、短編のコンペを持つ映画祭。特集上映もあり、96年には今村昌平監督特集と南アフリカ映画特集が行われた。同時に〈世界の映画〉シリーズでは、アフリカ、ラテンアメリカそしてアジアからの作品も紹介されている。(98年11/6～15)

アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭

オランダ、アムステルダムで12月に開催されるドキュメンタリー専門の映画祭。コンペで選ばれた作品には、オランダの有名な記録映画作家の名前を冠に付けた、ヨリス・イヴェンス賞が贈られる。公開討論会やドキュメンタリーの国際的な共同製作を募るマーケットも同時に行われる。

アメリカン・フィルム・マーケット

2月のベルリン映画祭の直後にロサンゼルスで開かれる、業界人専門のマーケット。特に英語圏で製作された長編劇映画のビジネス、売買に効果が期待できる所。

イスタンブール国際映画祭

アジアとヨーロッパの2つの大陸が出会う街、トルコのイスタンブールで開催。フィアフ(国際映画製作者連盟)承認のコンペ部門を持ち、トルコ映画の新作だけでなく配給業者にとっても価値ある場をつくり出している。毎年の観客は10万人を数え、98年に17回目を迎えて、文学・音楽・舞踊などに関連する作品に焦点を当てたり、特集上映や国際的に評価を得た新作の紹介、トルコ映画新作など、ダイナミックなテーマで様々な映画を上映している。(98年4/18～5/3)

インド国際映画祭

1月に毎年開催される。かつてはインターナショナル・コンペ部門を設けたり、アジアの女性映画監督に焦点を当てたコンペを行っていたが、最近ではノンコンペ。各国からの新作映画に加えて、回顧上映も行われている。そして、ヒンディ、ベンガルなど地方によって言語の違う自国インドの数多い新作の数々が各州から集められ、英語字幕にて紹介されるのでインド映画研究者にとっても有意義な催し。運営は役所である映画振興公社により、年によって開催が各都市の持ち回りになる。(98年1/10～20)

ヴァンクーヴァー国際映画祭

98年で17回目を迎えて、大きな成長を遂げてきた映画祭。世界中からの250本もの作品に、観客は13万人となり、加えて自然の美しいカナダの都市の魅力が招待ゲストに一層の喜びをもたらしてくれる。東アジアからの映画、自国カナダ新作、ドキュメンタリー作品には特に力を入れていて、長編1・2作目の劇映画を対象にしたドラゴン&タイガー賞が設立されて、ヤングシネマを応援している。(98年9/25～10/11)

ヴィエンナーレ(ウィーン)

オーストリアのこの映画祭は、〈映画祭の中の映画祭〉と題して諸外国からの新作映画、ヤングシネマ、創造的なドキュメンタリー作品を始め、ミッドナイト上映や世界プレミア上映作品も集めている。またオーストリア映画のパノラマや、アウトサイダー的に扱われてきた監督・俳優・プロデューサーたちのための特集上映、幅広いテーマの歴史的な回顧上映も行われる。(98年10月)

ヴェネツィア国際映画祭

前任者であるイタリアの映画監督ジロ・ポンテコルヴォの指揮下から、97年よりフェリーチェ・ラウダディーオにバトンタッチされて、マーケット部門を新たに充実させるなど、リド島の古き良き趣に新たな息吹が吹き込まれて、新体制での試みが進められている。コンペ、批評家週間、特別招待、特集上映、に加えて展示会、付随した会議などが街中至る所で行われる。1932年からの開催で98年で55回目を迎えた、世界で最も歴史のある映画祭。グランプリには金獅子賞が与えられる。

ウェリントン(ニュージーランド映画祭)

100本の長編、50本の短編が招待作品として上映される。98年で28回目を迎えた。オークランドと共にニュージーランドでのプレミア上映を行い、ディレクターのビル・ゴスデンが切磋琢磨している。前回ではウェリントンで51000人、オークランドで75000人の観客を記録した。ノンコンペ。(98年7月)

ウプサラ短編映画祭

スウェーデンで短編映画専門の唯一の映画祭。98年に17回目を迎える。幅広い作品を集め、20分以内のフィクション、20分から60分以内のフィクション、アニメーション、ドキュメンタリー、実験映画、児童映画の6つの部門でコンペを競う。別に特集上映やセミナーも行われ、世界各国から集められた児童映画には特別に子供たちが審査員となって賞が贈られる。(98年10月)

ウメア映画祭

スウェーデンでのプレミア上映を含む70本の長編、150本の短編を集めたノンコンペの映画祭。女性監督による作品や児童映画にも焦点を当てて、国やジャンルを絞った最近の作品を特集したり、復元版や当時評価の高くなかったクラシック作品を改めて見直すプログラムには、人気が高まってい

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1996 (平成8年)	渥美清が肺ガンで死去。これにより「男はつらいよ」シリーズが第48作「寅次郎紅の花」を最後に幕を閉じる。 「愛のめぐりあい」のヘア修正についてヴィム・ヴェンダースとフランス映画社が映倫に抗議し、完全版上映が許可される。 細野辰興監督「シャブ極道」のビデオ・タイトルがビデ倫により変更される。 「Shall we ダンス?」、「スーパーの女」、「スワロウテイル」ヒット。 93年に倒産したにっかつが社名を「日活」に戻し再スタート。 ヘラルド・エースが日本ヘラルド映画から角川書店の資本参加を得て独立、新会社「エース・ピクチャーズ」を設立。 映画興行が不振を極め、過去最低の記録となる。 大島渚監督が新作「御法度」の準備中に脳こうそくで倒れる。 小林正樹、フランキー堺、武満徹、高橋悦史、小林昭二、沢村貞子、宮城千賀子、飯島正、山本恭子、滋野辰彦、増渕健、進藤光太、藤子・F・不二雄、横山やすし、遠藤周作、司馬遼太郎、大藪春彦、飯干晃一、宇野千代死去。	「インデペンデンス・デイ」大ヒット。 外資系興行会社が日本進出。米AMCが福岡市に13スクリーン、英UCIが大津市に7スクリーンのマルチプレックスをオープン。 ウォルト・ディズニー社傘下のブエナビスタが徳間グループと提携、スタジオジブリ作品などの世界配給、ビデオ販売を行うことを決める。 ルネ・クレマン、マルセル・カルネらフランスの巨匠監督が相次いで死去。 マルチェロ・マストロヤンニ（伊）、ジーン・ケリー（米）、クローデット・コルベール（米）、グリア・ガースン（米）、ベン・ジョンソン（米）、マーゴ・ヘミングウェイ（米）、クシシュトフ・キェシロフスキ（ポーランド）、アナベラ（仏）、マリア・カザレス（仏）、マルグリット・デュラス（仏）、ルチオ・フルチ（伊）、トゥーバック・シャクール（米）死去。	ペルーの首都リマの日本大使公邸にゲリラが篭城。 英国のチャールズ皇太子とダイアナ妃が離婚。 全斗煥元大統領に死刑判決。 アトランタ・オリンピック。有森裕子銅メダル。 橋本内閣発足、社会党が社会民主党に党名変更、民主党結成。 輸入血液製剤でエイズウイルスに感染した血友病患者達がミドリ十字らを相手取りHIV訴訟。 大腸菌O−157が大阪・堺市を中心に猛威をふるう。 厚生省の岡光序治次官が収賄容疑で辞任、逮捕。 住専問題。 沖縄米軍基地の整理・縮小を問う県民投票。
1997 (平成9年)	宮崎駿監督「もののけ姫」が配収100億円を超える大ヒット。森田芳光監督「失楽園」も23億円のヒット。海外での大量受賞もあり、久々に日本映画が話題となる。 アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」大ブーム。テレビ東京の人気アニメ「ポケット・モンスター」放送中に、それを見ていた約750人の子供が発作を起こし病院に運ばれる事故が起きる。 松竹が新レーベル「シネマジャパネスク」を発足するが、不調。 名画座・文芸坐が閉館。 神戸の連続殺人事件の影響で「スクリーム」が2か月公開延期。 伊丹十三監督が飛び降り自殺で死去。 三船敏郎、勝新太郎、萬屋錦之介、西村晃、杉村春子、葦原邦子ら映画黄金期から活躍していたスターが相次いで死去。 清水晶、田山力哉、筈見有弘ら映画評論家が相次いで死去。 藤田敏八、古沢憲吾、大庭秀雄、野田幸男ら有名監督が相次いで死去。 黛敏郎、田中友幸、田村孟、姫田真左久、木下蓮三、村木忍、池田満寿夫、趙方豪、一条さゆり、可愛かずみ、藤沢周平、埴谷雄高、死去。	アメリカ映画が史上初めて興収60億ドルを突破する。 「イングリッシュ・ペイシェント」が米アカデミー賞で9部門獲得。 周防正行監督「Shall we ダンス?」が全米大ヒット。しかし日本で既にテレビ放映されていたことから、アカデミー賞ノミネートの資格を与えられなかった。（米） 北野武監督「HANA-BI」がヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞を、今村昌平監督「うなぎ」がカンヌ国際映画祭でパルム・ドールを、河瀬直美監督「萌の朱雀」が同じくカンヌでカメラ・ドールを、市川準監督「東京夜曲」がモントリオール国際映画祭で最優秀監督賞を受賞。 ジェームズ・スチュアート、ロバート・ミッチャムら往年のハリウッド・スターが相次いで死去。 フレッド・ジンネマン（米）、サミュエル・フラー（米）、マルコ・フェレーリ（伊）、ボー・ヴィーデルベリ（スウェーデン）、ジャック=イヴ・クストー（仏）、ナルシソ・イエペス（スペイン）、ジョン・デンバー（米）、ウィリアム・S・バロウズ(米)、アレン・ギンズバーグ(米)死去。	中国最高指導者、鄧小平死去。 リマの日本大使公邸にペルーの特殊部隊が突入、テロのメンバー14人を全員射殺。 ダイアナ妃、自動車事故で死去。 ブレア、英国首相に就任。 神戸で14歳の少年による連続児童殺人事件。 永山則夫死刑執行、宮崎勤死刑判決。 友部達夫参院議員、オレンジ共済組合の破綻問題で逮捕。 茨城県東海村の再処理工場や福井県敦賀市の新型転換炉「ふげん」の放射能漏れと、動燃の相次ぐ事故。 山一証券が事実上倒産。 土井隆雄、日本人初の宇宙遊泳に成功。 サッカーくじ、可決。

(Text by 森直人)

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1994 (平成6年)	ビートたけしがバイク事故で重傷を負う。 安達祐実あてに届いた小包に仕掛けてあった爆弾が日本テレビ内で爆発。 シネマコンプレックス型の劇場が新設され増館ラッシュ、東京ではミニシアターが続々と設立される。 アニメーションが日本映画の配収50%以上を占める。 松竹が資金募集システム「映画ファンド」を発足。 松竹「RAMPO」が意見の対立から奥山和由監督版と篤りんたろう監督版の2ヴァージョンで公開となる。 崔洋一監督「月はどっちに出ている」がベルリン映画祭でネットパック賞を受賞。 松竹「忠臣蔵外伝四谷怪談」ＶＳ東宝「四十七人の刺客」の忠臣蔵対決が話題になるが、両作とも不入り。 東映はＧＷ公開の「首領を殺った男」が不入りのため、ヤクザ映画路線からの撤退を余儀なくされる。 東京国際映画祭が初の京都で開催、観客13万3千人を動員。 「さらば、わが愛　覇王別姫」などアジア映画がヒット。 内田栄一、斎藤博、高木功ら名脚本家が相次いで死去。 乙羽信子、東野英治郎、中条静夫、高品格らベテラン俳優が死去。野口久光、片岡仁左衛門、吉行淳之介、香川登枝緒、胡桃沢耕史死去。	MCAユニヴァーサルの反動に揺れる松下電器、ヒット作が生まれず巨額の損失を出したソニーなど、ハリウッド・ビジネスに乗り出した日本企業が経営難に。 元アメフト・スターで俳優のＯ・Ｊ・シンプソンが殺人罪で逮捕される。 「シンドラーのリスト」が米アカデミー賞で7部門受賞、スティーヴン・スピルバーグが初の監督賞を受賞。 ディズニー映画「ライオン・キング」が手塚治虫「ジャングル大帝」の盗作ではないかと騒がれる。(米) 北野武監督「ソナチネ」が英国BBC放送選出「映画史上ベスト100」に溝口、小津、黒澤作品ともどもランクされる。 リンゼイ・アンダーソン、テレンス・ヤング、デレク・ジャーマンら英国の名監督が死去。(英) バート・ランカスター(米)、ジュリエッタ・マシーナ(伊)、ジェシカ・タンディ(米)、ジョゼフ・コットン(米国)、ジャン=ルイ・バロー(仏)、メリナ・メルクーリ(ギリシャ)、ヘンリー・マンシーニ(米)、チャールズ・ブコウスキー(米)、ウージェーヌ・イヨネスコ(仏)、ジョン・キャンディ(米)、ラウル・ジュリア(米)死去。	NATOがボスニア、クロアチア内を空爆。 向井千秋、宇宙へ。 長野県松本市でサリン発生、7人が死亡。 村山自社さ連立内閣発足。 関西空港開港。 ルワンダへPKO自衛隊第1陣出発。
1995 (平成7年)	阪神大震災の影響で神戸三宮地区にある多くの映画館が被害を受ける。 松竹「鎌倉シネマワールド」がオープン。 火災にあって以来、変則的活動を続けていた国立フィルムセンターが、かつてと同じ京橋に再度開館。 映画生誕100年に合わせ様々なイベントが開催されるが、一般には浸透せず。 是枝裕和監督「幻の光」がヴェネツィア映画祭のオゼッラ・ドゥオロ賞他、数々の賞に輝く。 高畑勲監督「平成狸合戦ぽんぽこ」がフランスのアヌシー国際映画祭アニメーションフェスティバル長編動画部門でグランプリを受賞。 戦後50年にちなみ多くの戦争映画が製作・公開。 新藤兼人監督「午後の遺言状」が中高年の観客を集めヒット。 「Love Letter」「Undo」がヒットし、岩井俊二ブームが起こる。 東宝とびあが"ＹＥＳレーベル"を発足。 群馬県が全額出資した小栗康平監督「眠る男」が完成、群馬県で先行公開。 神代辰巳、入江たか子、岡田英次、金子信雄、野添ひとみ、浜村純、高杉早苗、山田康雄、山口瞳、高羽哲夫死去。	「フォレスト・ガンプ　一期一会」が米アカデミー賞6部門獲得、トム・ハンクスが前回の「フィラデルフィア」に続いて2年連続主演男優賞を受賞する。 松下電器がMCA社に対する持ち分の80%の株式をシーグラム社に譲渡する。(米) ルイ・マル(仏)、フランク・ペリー(米)、ジャック・クレイトン(英)ら有名監督が死去。 ジンジャー・ロジャース(米)、マッティ・ペロンパー(フィンランド)、アイダ・ルピノ(米)、ディーン・マーティン(米)、テリー・サザーン(米)、ウルフマン・ジャック(米)死去。	フランス、中国が核実験。 イスラエルのラビン首相が暗殺される。 全斗煥韓国元大統領が逮捕、盧泰愚韓国前大統領が起訴される。 Ｏ・Ｊ・シンプソンに無罪判決。 阪神大震災。死者6000人以上。 東京都内でオウム真理教による地下鉄サリン事件。 オウム真理教、科学技術庁長官・村井英夫が、徐祐行容疑者に刺され死亡。 オウム真理教、教祖・麻原彰晃が逮捕される。 東京都知事に青島幸男、大阪府知事に横山ノック当選。 米兵による沖縄女子小学生暴行事件。 野茂英雄投手、米大リーグで大活躍。 福井県敦賀市の動燃高速増殖炉「もんじゅ」から初のナトリウム漏れ事故。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1992 (平成4年)	民事介入暴力をテーマにした「ミンボーの女」を監督した伊丹十三が暴力団に襲われ重傷を負う。 ディレクターズ・カンパニーが10億円の不渡り手形を出し、事実上倒産する。 伊藤大輔監督の幻の名作「忠次旅日記」のプリントが広島で発見される。 ヘアー論争を受け、映倫管理委員会が審査基準見直しに対する見解を発表。 周防正行監督「シコふんじゃった。」が各国内映画賞を総ナメ。 松竹が「外科室」で千円興行を実施、成功させる。 太地喜和子が車ごと海に転落、水死。 小川紳介、厚田雄春、岡田嘉子、若山富三郎、五社英雄、近江俊郎、深澤哲也、武市好古、大黒東洋士、三宅邦子、我王銀次死去。	シャロン・ストーン主演「氷の微笑」が社会現象に。(米) マレーネ・ディートリッヒ(独=米)、アルレッティ(仏)死去。 ネストール・アルメンドロス(仏)、リチャード・ブルックス(米)、ジョルジュ・ドルリュー(仏)、サタジット・レイ(インド)、ジョン・スタージェス(米)、アンソニー・パーキンス(米)、デンホルム・エリオット(英)死去。	アフリカで今世紀最悪の干ばつ。 佐川急便の渡辺広康前社長ら逮捕。 暴力団対策法施行。 PKO協力法が成立。 新幹線「のぞみ」登場、山形新幹線開業。 毛利衛、宇宙へ。 学校5日制開始。
1993 (平成5年)	株式会社にっかつが負債総額497億円で事実上の倒産となる。 角川書店社長・角川春樹が麻薬所持で逮捕。 伊丹十三監督「大病人」上映中に、大悲会会員と名乗る男が日劇東宝のスクリーンを切り裂く。 ジャン=ジャック・ベネックス監督が「ベティ・ブルー　インテグラル」のR指定規制上映に対して来日、日本の映倫に抗議を申し込む。 配給会社アルゴプロジェクトがアルゴ・ピクチャーズ株式会社と社名変更し、再スタート。 6月にフランス映画社副社長・川喜多和子が、7月に母親・かしこが死去。 笠智衆、マキノ雅広死去。 西村潔監督が入水自殺で死去。 大和屋竺、本多猪四郎、南俊子、安部公房、服部良一、岡俊雄、戸浦六宏、井伏鱒二、安部徹、ハナ肇、成島東一郎、野田真吉、益田喜頓、中井英夫、植草圭之助死去。	「ジュラシック・パーク」が全世界興行収入記録を塗り替える大ヒットを記録し、スティーヴン・スピルバーグ監督作品がアメリカ史上興収上位10本のうち4本を占める。 クリント・イーストウッド監督・主演「許されざる者」が西部劇としては初の米アカデミー4部門を受賞。 「ドラキュラ」で石岡瑛子が米アカデミー衣装デザイン賞を受賞。 リヴァー・フェニックス(米)がコカイン中毒で急死。 フェデリコ・フェリーニ(伊)、オードリー・ヘップバーン(米)、リリアン・ギッシュ(米)ら超大物が死去。 ジョセフ・L・マンキウィッツ(米)、エディ・コンスタンチーヌ(仏)、シリル・コラール(仏)、ゴードン・ダグラス(米)、ヴィンセント・プライス(米)、アレクサンドル・トローネル(仏)死去。	EC市場統合。 クリントン、第42代米大統領に就任。 釧路沖地震、北海道南西沖地震発生。 Jリーグが開幕、日本中がサッカー・ブームに。 皇太子御成婚。 初の外国人横綱・曙が誕生。 細川内閣発足。衆院議長に初の土井たか子女性議長。 田中角栄元首相が死去。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1989 (昭和64年)	NHKが衛星放送を開始。 美空ひばり、手塚治虫、松田優作死去。 配給会社アルゴ・プロジェクト結成 勝新太郎監督・主演「座頭市」のロケで真剣が使用され、俳優兼殺陣師・加藤光雄が立ち回り中に死去 芥川也寸志、大坂志郎、菊島隆三、殿山泰司、森一生、井手雅人、浦辺粂子、丸山誠治死去。 北野武、和田勉、鴻上尚史、椎名桜子など、映画界以外から著名人が多数監督業に乗り出し、空前の新人監督ラッシュとなる。 東急グループが渋谷にＢＵＮＫＡＭＵＲＡをオープン。 ビデオレンタルにも陰りが。	ワーナー・ブラザース資本の黒澤明監督「夢」、日本出資のジム・ジャームッシュ監督「ミステリー・トレイン」(米)、日本出資の張芸謀監督「菊豆」(中)など、映画製作の国際化が進む。 ソニーが米国の大手映画会社コロムビアを買収。 ローレンス・オリヴィエ(英)、ベティ・デイヴィス(米)、シルヴァーナ・マンガーノ(伊)、リー・ヴァン・クリーフ(米)らベテラン俳優が死去。 ジョン・カサヴェテス(米)、アンドレ・カイヤット(仏)、ジャック・スターレット(米)、セルジオ・レオーネ(伊)、ヨリス・イヴェンス(蘭)、フランクリン・Ｊ・シャフナー(米)、アーヴィング・バーリン(米)、グレアム・チャップマン(英)死去。	中国・北京で天安門事件。 ルーマニアの金メダリスト、コマネチが亡命。 ブッシュ、第41代米大統領に就任。 昭和天皇崩御、新元号を「平成」に。 消費税が実施される。 東京・江東区の幼女誘拐殺人事件で宮崎勤が逮捕される。
1990 (平成２年)	勝新太郎、麻薬所持で逮捕。 東映に続き、松竹、にっかつ、東芝、TBSらも一斉にオリジナルビデオ映画に参入。 角川映画15周年記念映画「天と地と」が500万枚を超える空前の前売りを記録、前売りシステムがより顕在化する。 奥山和由が松竹・取締役に就任。 黒澤明が米アカデミー特別名誉賞を受賞、また「夢」がカンヌ映画祭のオープニング上映作品に選ばれる。 小栗康平監督「死の棘」がカンヌ映画祭でグランプリを受賞。 高嶺剛監督「ウンタマギルー」がナント映画祭とハワイ映画祭でグランプリを受賞。 「ニュー・シネマ・パラダイス」「コックと泥棒、その妻と愛人」など単館公開作品が軒並み劇場記録を更新。 ビデオシアター“ニューシネマシステム”が松竹と松下電器産業によりスタート。 各地で名画座の閉館が相次ぐ。 高峰三枝子、木暮実千代、初井言榮、山根寿子、志賀暁子らベテラン女優が死去。 藤山寛美、岡本忠成、藤田進、成田三樹夫、北川冬彦、池波正太郎、石田達郎、中野英治、大塚和、三浦朗、久松静児死去。	デヴィッド・リンチのTVシリーズ「ツイン・ピークス」が10月からスタート、大ブームに(米)。 松下電器産業がユニヴァーサル映画を傘下にもつ米娯楽企業MCAを買収。 東映の協力でモスクワに映画村誕生。 グレタ・ガルボ(米)、ポーレット・ゴダード(米)、アーサー・ケネディ(米)、バーバラ・スタンウィック(米)、エヴァ・ガードナー(米)、サミー・デイヴィスJr.(米)、デルフィーヌ・セイリグ(仏)、ジョーン・ベネット(米)らベテラン俳優が死去。 マイケル・パウエル(英)、フレッド・タン(香)、デクスター・ゴードン(米)、ジム・ヘンソン(米)、セルゲイ・パラジャーノフ(ソ)、マヌエル・プイグ(アルゼンチン)、アルベルト・モラヴィア(伊)、アート・ブレイキー(米)、レナード・バーンスタイン(米)、ジャック・ドゥミ(仏)、ザヴィア・クガート(米)、セルジオ・コルブッチ(伊)死去。	ベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが統一。 南アフリカ政府が終身刑により服役中だったマンデラ黒人解放指導者を解放。 花の万博が大阪で開幕。 礼宮新王御成婚。 本島等長崎市長が右翼団体員に銃で撃たれ重傷。 東京放送の秋山豊寛記者が世界初の宇宙特派員となる。
1991 (平成３年)	東京国際映画祭で「美しき諍い女」「プロスペローの本」などが上映されたのを契機にヘアー論争が起こる。 竹中直人監督「無能の人」がヴェネツィア映画祭で国際批評家連盟賞を受賞。 ミニシアター・ブーム、オリジナルビデオ・ムービー・ブームに陰りが。 邦画のヒット作の上位がすべてアニメで占められる。 俳優として初めて森繁久彌が文化勲章を受章。 「七人の侍」完全版がリバイバル上映。 ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメントが発足。 日本衛星放送(JSB)本放送、ハイビジョン試験放送がスタート。 今井正、上原謙、小川徹、八木正生、竹中労、ディック・ミネ、虫明亜呂無、河野基比古、岡田晋、春日八郎、依田義賢、山根成之死去。	ケヴィン・コスナー初監督作「ダンス・ウィズ・ウルブズ」が米アカデミー賞７部門獲得。(米) フランク・キャプラ(米)、ドン・シーゲル(米)、デヴィッド・リーン(英)、トニー・リチャードソン(英)、ゴーヴィンダン・アラヴィンダン(印)ら名監督が死去。 セルジュ・ゲンズブール(仏)、イヴ・モンタン(仏)、グレアム・グリーン(英)、カーマイン・コッポラ(米)、マイルス・デイヴィス(米)、アーウィン・アレン(米)、クラウス・キンスキー(独＝米)死去。	ソビエト社会主義共和国連邦崩壊。 湾岸戦争勃発、終結。 美浜原発２号機冷却水漏れ事故。 横綱・千代の富士引退。 雲仙普賢岳が噴火、火砕流で死者・不明者43人。 トリカブト殺人容疑者逮捕。 バブル、はじける。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1986 (昭和61年)	フジテレビ製作の「子猫物語」が配収54億円の大ヒット。 レンタルを含めたビデオ産業が急成長。 都市部でミニシアターの活動が活発に。 大映京都撮影所が閉鎖。 篠田正浩監督「鎗の権三」がベルリン映画祭で特別賞を受賞。 神山征二郎監督「春駒のうた」がタシケント映画祭でグランプリを受賞。 滝田洋二郎監督「コミック雑誌なんかいらない!」がメジャーによって黙殺されるものの、国際的に大好評を得る。 増村保造、島耕二、今村太平、古川勝巳、藪下泰司、天草四郎死去。	「エイリアン2」、「トップガン」が大ヒット。 第59回米アカデミー賞で「乱」が監督賞をはじめ4部門でノミネート、うち衣装デザイン賞でワダ・エミがオスカー獲得。 ジェームズ・キャグニー（米）、オットー・プレミンジャー（米）、ヴィンセント・ミネリ（米）、ケイリー・グラント（米）、アンドレイ・タルコフスキー（ソ連）死去。	チェルノブイリで原子力発電所が大事故。 東京サミット開幕。 アイドル・岡田有希子が自殺。 日本で一般献血者からエイズ抗体を検出。 三井物産の若王子信行マニラ支店長誘拐事件。 伊豆・三原山が209年ぶりに噴火。 年末よりバブル景気が始まる。
1987 (昭和62年)	レンタルビデオの影響で若者層の劇場離れが進み、映画興行に深刻な影をおとす。 東宝が東京・日比谷地区を再開発し、東宝日比谷ビル（シャンテ）をオープン。 ミニシアターの全国編成が活発になるが、映画館の都市部集中、ローカル減少傾向はますます顕著になる。 熊井啓監督「海と毒薬」がベルリン映画祭で銀熊賞を受賞。 三国連太郎監督「親鸞」がカンヌ映画祭で審査員賞を受賞。 原一男監督「ゆきゆきて、神軍」、伊丹十三監督「マルサの女」が評判に。 市川準、馬場康夫など、新人監督が多数登場。 石原裕次郎、鶴田浩二、川口浩ら日本映画全盛期のスターが相次いで死去。 亀井文夫、戸田重昌、斎藤正治、トニー谷、有島一郎、栗島すみ子、深沢七郎、南部圭之助、梶原一騎死去。	アカデミー賞作品「プラトーン」に続き、「ハンバーガー・ヒル」「友よ、風に抱かれて」、「フルメタル・ジャケット」など、ベトナム戦争映画が多数作られはじめる。 ランドルフ・スコット、ダニー・ケイ、リタ・ヘイワース、フレッド・アステア、リー・マーヴィンら往年のハリウッド名優が相次いで死去。 アンディ・ウォーホル（米）、ダグラス・サーク（独=米）、イブ・アレグレ（仏）、アンリ・ドカエ（仏）、ポーラ・ネグリ（独=米）、ジョン・ヒューストン（米）、ボブ・フォッシー（米）、リノ・ヴァンチュラ(仏)、ジョルジュ・フランジュ(仏)、ラルフ・ネルソン(米)死去。	世界人口50億を突破。 南氷洋での商業捕鯨が終了。 ＪＲ新会社がスタート。 日本、対外純資産世界一など経済部門で三冠王。 日本国内で初めて女性エイズ患者が認定される。
1988 (昭和63年)	「敦煌」が大ヒットし、東宝がブロックブッキング（邦画系）で年間配収100億円突破。 フジTV「優駿」、TBS「いこかもどろか」、NTV「またまたあぶない刑事」などテレビ局がらみの作品がヒット。 にっかつがロマン・ポルノ路線に終止符を打ち、新路線ロッポニカをスタートさせるものの苦戦、事実上、製作配給から撤退する。 「ベルリン・天使の詩」などのロングラン・ヒットで、本格的なミニシアター・ブームに。 宇野重吉、加藤嘉、小沢栄太郎、信欣三らベテラン俳優が死去。 佐藤重臣、清水俊二、荻昌弘、井手俊郎、武智鉄二、堀江しのぶ、東八郎死去。	「ラストエンペラー」が米アカデミー賞で9部門獲得し、うちオリジナル作曲賞を坂本龍一が受賞。 ウィリアム・キャグニー（米）、トレヴァー・ハワード（英）、エメリック・プレスバーガー（英）、ディヴァイン（米）、Ｉ・Ａ・Ｌ・ダイアモンド（米）、ジョシュア・ローガン（米）、ジョン・キャラダイン（米）、ハル・アシュビー（米）死去。	イラン・イラク戦争、停戦。 世界最長の青函トンネル開業。 東京ドーム完工式。 瀬戸大橋開通。 リクルート疑惑発覚。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1983 (昭和58年)	「E.T.」が史上空前の配収94億円達成。さらに「南極物語」「探偵物語」「時をかける少女」の大ヒットで映画人口が1億7000万人台に復帰。 東京映画、ユナイト日本支社が閉鎖。 富士映画、松竹富士と社名変更。 今村昌平「楢山節考」がカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞。 「ふるさと」の加藤嘉がモスクワ映画祭で、「天城越え」の田中裕子がモントリオール映画祭で主演賞を、市川崑「細雪」がアジア太平洋映画祭で金賞を受賞。 邦画各社のビデオ部門が大幅増収、本格的なビデオ時代到来。 寺山修司、山本薩夫、安田公義死去。	「E.T.」大ヒットし、米アカデミー賞に9部門ノミネートされ、4部門受賞したものの主要部門は獲得できず。「ガンジー」が主要8部門獲得。 ジョージ・キューカー（米）、ルイ・ド・フュネス（仏）、モーリス・ロネ（仏）、グロリア・スワンソン（米）、デヴィッド・ニーヴン（英）、ルイス・ブニュエル（スペイン）、ロバート・アルドリッチ（米）死去。	ポーランド「連帯」のワレサ委員長、ノーベル平和賞受賞。 中学生が横浜の公園・地下街で浮浪者を殺害。 NHK朝の連続テレビ小説「おしん」大流行。 秋田沖で大地震、死亡・行方不明が102人。 三宅島が大噴火。 日本初の体外受精児が誕生。
1984 (昭和59年)	国立近代美術館フィルムセンターで火災発生、貴重なフィルムが大量焼失。 有楽町センタービル（マリオン）がオープン。 西武、シネセゾン創立。 伊丹十三「お葬式」、和田誠「麻雀放浪記」で監督デビュー。 黒澤明にフランスのレジオン・ドヌール勲章が授与される。 川喜多かしこにフランスの文芸勲章の最高賞（コマンドール）が授与される。 83年に1億7000万人台に復帰した映画人口が大幅に減少する。 イタリア映画祭、スペイン映画祭、アフリカ映画祭など各国映画祭が開催される。 長谷川一夫、大川橋蔵、中川信夫、森谷司郎、有吉佐和子死去。	「フットルース」「バーブルレイン」「ストリート・オブ・ファイヤー」などレコード・セールスを狙う映画製作が顕著に。 「ゴーストバスターズ」「インディ・ジョーンズ／魔宮の伝説」ヒット。（米） ジム・ジャームッシュ監督「ストレンジャー・ザン・パラダイス」発表。（米） フランソワ・トリュフォー（仏）、サム・ペキンパー（米）、ジョセフ・ロージー（英）、ユルマズ・ギュネイ（トルコ）ら名監督が相次いで死去。 リチャード・バートン（英）、リリアン・ヘルマン（米）、トルーマン・カポーティ（米）死去。	インドのガンジー首相、暗殺される。 日本人の平均寿命が男女共に世界一に。 「かい人21面相」によるグリコ・森永事件起こる。 植村直己、マッキンレーで消息を絶つ。 長野県西部地震発生。死者29人。 大沢商会倒産。
1985 (昭和60年)	第1回東京国際映画祭開催。相米慎二監督「台風クラブ」がヤングシネマ85でグランプリ受賞。 東京国際映画祭で特例によりヘア限定解禁。 黒澤明が映画界初の文化勲章を受勲。 ポール・シュレーダー監督「MISHIMA」完成、諸問題により日本公開は見送り。 にっかつロマンポルノ、新路線ロマンXがスタート。 「リュミエール」「シネアスト」創刊。 加藤泰、浦山桐郎、牛原虚彦、千葉泰樹、渡邊祐介ら監督が相次いで死去。 夏目雅子、永田雅一、藤原釜足、大友柳太朗、宮口清二、小池朝雄、天知茂、たこ八郎、坂本九、笠置シヅ子、津村秀夫死去。	「アマデウス」が米アカデミー賞8部門獲得。 CIC、UIPと社名変更。 「ランボー・怒りの脱出」「ポリス・アカデミー2」「マッド・マックス　サンダードーム」など、シリーズ企画が増加。（米） ロック・ハドソン（米）がエイズで死去。 オーソン・ウェルズ（米）、ユル・ブリンナー（米）、アン・バクスター（米）、シモーヌ・シニョレ（仏）、ヘンリー・ハサウェイ（米）、レナート・カステラーニ（伊）、アド・キルー（ギリシャ／仏）死去。	ギリシャとアルバニア、第2次大戦以来初めて国境閉鎖を解除。 チェルネンコ・ソ連書記長死去。後任にゴルバチョフ。 筑波で科学万博が開幕。 厚生省、エイズ患者第1号を確認。 NTTとJTが誕生。 男女雇用機会均等法が成立。 豊田商事・永野一男会長が刺殺される。 日航ジャンボ機墜落。520人死亡。 ロス疑惑深まり、三浦和義逮捕。 テレビ朝日"やらせリンチ"事件。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1979 (昭和54年)	藤本真澄、死去。東宝、藤本賞を制定。 黒澤明、「影武者」の主役を勝新太郎から仲代達矢に替える。 佐々木史朗、ATG新社長に就任。 東京地裁、「愛のコリーダ」(シナリオ、写真集) 裁判で大島渚に無罪判決。 今村昌平、「復讐するは我にあり」で8年ぶりに監督復帰。 長根本悌二、にっかつ社長就任。	フランシス・コッポラ「地獄の黙示録」発表、カンヌ映画祭でグランプリと国際批評家連盟賞を受賞。 米アカデミー賞でベトナム戦争もの「ディア・ハンター」「帰郷」に脚光。 「スーパーマン」が8千1百万ドルで配収1位。(米) ジョン・ウェイン(米)、ニコラス・レイ(米)、ダリル・F・ザナック(米)、ジーン・セバーグ(米)、ジャン・ルノワール(仏)死去。	サッチャー女史、英首相就任。 韓国朴大統領、暗殺。 国公立大学、初の共通一次試験実施。 ウォークマン初登場。 東京サミット開催。 江川卓、巨人に正式入団。
1980 (昭和55年)	黒澤明監督、「影武者」でカンヌ映画祭グランプリ受賞。 シネマ・プラセット、仮設ドーム特設映画館で鈴木清順「ツィゴイネルワイゼン」を公開、ロングランに。 山口百恵「古都」を最後に引退、三浦友和と結婚。 稲垣浩、渋谷実、越路吹雪、死去。	「スター・ウォーズ/帝国の逆襲」が1億3千4百万ドルで配収1位に。 ジョン・レノン射殺される。(米) アルフレッド・ヒッチコック(英)、スティーヴ・マックイーン(米)、ルイス・マイルストン(米)死去。	韓国、光州事件。 「イエスの方舟」事件。 巨人・王貞治、西武・野村克也が現役引退。長島茂雄、巨人監督辞任。 ドラえもん、ルービック・キューブ、竹の子族ブーム。 二浪の予備校生が金属バットで両親を撲殺。
1981 (昭和56年)	12月1日より"映画の日"の入場料半額興行が準全国規模で行われ、大成功。 「エレファント・マン」大ヒット。 ATGが年間3、4本のペースで"一千万円映画"製作を復活。 パイオニア、ビクターがビデオの製作に乗り出す。 「影武者」の黒澤明監督が日本アカデミー賞をボイコット。 川喜多長政、五所平之助、伊藤大輔、芥川比呂志死去。	ロバート・レッドフォード初監督作「普通の人々」が米アカデミー賞で作品賞、監督賞他、計4部門を獲得。 第1回アメリカン・フィルム・マーケットがLAで開催。 MGM、UA、パラマウント、ユニヴァーサルのメジャー4社が共同で新配給組織"UIP"を設立。(米) ルネ・クレール(仏)、ウィリアム・ワイラー(米)死去。	レーガン、米大統領に就任。 ミッテラン、仏大統領に就任。 ポーランド「連帯」盛り上がる。 神戸ポートアイランド博覧会開幕。 パリ人肉事件で佐川一政逮捕。 千代の富士、横綱に。 福井謙一がノーベル化学賞受賞。 新種の鳥、ヤンバルクイナ発見。
1982 (昭和57年)	「E.T.」の話題がマスコミを席巻、前売券が爆発的に売れる。 「愛のコリーダ」裁判は無罪で結審。 村野鐵太郎「遠野物語」がサレルノ映画祭でグランプリを受賞。 伊藤俊也「誘拐報道」がモントリオール映画祭で審査員特別賞を受賞。 "映画の日"の半額デーが年1回から、6月、9月を入れ年3回に拡大。 ディレクターズ・カンパニー、フィルムワーカーズ、ユニットファイブ、こぶしプロなど、監督たちの結集体が続々設立。 黒澤明監督がフランス資本で「乱」の製作を開始。日・中初の本格的合作映画「未完の対局」が完成、好評。 アベル・ガンスの「ナポレオン」がフル・オーケストラつきで上映される。 衣笠貞之助、斎藤寅次郎、志村喬、佐分利信、岸田森、三波伸介死去。	コカコーラがコロムビア映画を買収、ハリウッドは完全に大資本の傘下に入る。 グレース・ケリー(米=モナコ)が交通事故死。 ヘンリー・フォンダ(米)、イングリッド・バーグマン(スウェーデン=米)、ウォーレン・オーツ(米)、ロミー・シュナイダー(独=仏)ら名優が相次いで死去。 ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー(西独)、キング・ヴィダー(米)、ヘンリー・キング(米)、ヴァレリオ・ズルリーニ(伊)、ジャック・タチ(仏)、マルセル・カミュ(仏)ら有名監督が相次いで死去。	フォークランド紛争。 東京・赤坂ホテル・ニュージャパン火災。死者32人。 日航機墜落事故。死者24人。 産業スパイ容疑で日立製作所、三菱電機の社員がFBIに逮捕される。 世界初のリニアモーターカー有人浮上走行に成功。 CD発売。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1974 (昭和49年)	東宝社長、松岡辰郎、山本嘉次郎監督、死去。 徳間康快社長、大映映画株式会社発足。 エキプ・ド・シネマ発足。 「日本沈没」「砂の器」ヒット。 MGM日本支社閉鎖。 田坂具隆死去。	ブルース・リー主演「燃えよドラゴン」、世界的ヒット、カラテ・ブームが生まれる。 映画検閲の廃止により、ポルノ製作増加。 「エマニエル夫人」ヒット。(仏) ヴィットリオ・デ・シーカ、ピエトロ・ジェルミ死去。(伊)	ルバング島の元陸軍少尉小野田寛郎、30年ぶりに帰国。 ウォーターゲート事件関与のため、ニクソン米大統領辞任。 三木武夫内閣成立。 春闘史上最大のゼネスト起こる。 佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞。 巨人・長島茂雄、現役引退、監督就任。
1975 (昭和50年)	村上覚、日活社長就任。 「タワーリング・インフェルノ」大ヒットにより、邦画、洋画の配収比率が逆転、初の洋画上位となる。 黒澤明「七人の侍」、内田吐夢「飢餓海峡」リバイバル。 第1回城戸賞発表。 三隅研次死去。	「JAWS・ジョーズ」、「タワーリング・インフェルノ」の大ヒットで、パニック映画ブームとなる。 米映画「ヒストリー・オブ・ザ・ブルー・ムーヴィー」、世界初ポルノ完全解禁第1号。(米) テオ・アンゲロプロス「旅芸人の記録」発表。(ギリシャ) ピエル・パオロ・パゾリーニ、ローマ郊外で撲殺される。(伊)	日本赤軍がクアラルンプールの米領事館、スウェーデン大使館を占拠、過激派7人の釈放を要求。 天皇、皇后初の訪米。 エリザベス英女王夫妻来日。 3億円事件、時効成立。 沖縄国際海洋博覧会開催。
1976 (昭和51年)	映倫、R指定(一般映画と成人映画の中間)を新設。 角川春樹、「大神家の一族」で映画製作に参画。 大島渚、フランス資本で「愛のコリーダ」製作、発表。 「JAWS・ジョーズ」、51億円の配収、史上最高のヒットを記録。 黒澤明、映画人初の文化功労者となる。 山路ふみ子文化財団設立、山路ふみ子賞創設。	「大統領の陰謀」が3千万ドルの大ヒット、ロバート・レッドフォードがマネー・メーキング・スターのトップとなる。(米) マーティン・スコセッシ「タクシー・ドライバー」発表、カンヌ映画祭グランプリを受賞。 ルキノ・ヴィスコンティ(伊)、キャロル・リード(英)、フリッツ・ラング(西独)、ジャン・ギャバン(仏)死去。	中国、周恩来首相、毛沢東主席死去。 ロッキード事件、田中角栄前首相逮捕。 河野洋平、新自由クラブ設立。 カーター、米大統領就任。 三木首相辞任、福田赳夫内閣成立。
1977 (昭和52年)	「八甲田山」邦画配収新記録樹立、角川映画「人間の証明」大ヒット。 "猥褻か? 芸術か?"をめぐり大島渚「愛のコリーダ」裁判。 鈴木清順、10年ぶりに「悲愁物語」でメガホンをとる。 CIC、アラブ・ゲリラを描く「ブラックサンデー」の公開を延期。 松岡功、東宝社長に就任。 田中絹代、豊田四郎、城戸四郎死去。	「ロッキー」大ヒット、一躍シルベスター・スタローン人気高まる。 「スター・ウォーズ」が1億6千5百万ドルの配収で興行成績1位、「未知との遭遇」が7千7百万ドルで2位に(米)。 チャールズ・チャップリン(米)、ハワード・ホークス(米)、アンリ=ジョルジュ・クルーゾー(仏)、ロベルト・ロッセリーニ(伊)死去。	中国、文化大革命終結。 ワシントンで日米首脳会談開催。 巨人・王貞治、世界新記録756号ホーマーを達成。 日本初の国産静止衛星「きく2号」打ち上げ。 山下泰裕、最年少の柔道日本一となる。
1978 (昭和53年)	第1回日本アカデミー賞開催。 「スター・ウォーズ」「未知との遭遇」により、SFブームが起こる。 大森一樹「オレンジロード急行」、石井聰亙の「高校大パニック」と、8ミリ出身の監督が商業映画デビュー。 日活、にっかつに社名変更。 大島渚「愛の亡霊」がカンヌ映画祭最優秀監督賞を受賞。	ジョン・トラボルタ主演「グリース」、「サタデー・ナイト・フィーバー」が興行成績1位、2位を独占。 ユナイト映画を追放された経営陣が新会社オライオンを設立。(米) シャルル・ボワイエ、2日前に亡くなった夫人のあとを追い睡眠薬自殺。(仏)	「赤い旅団」がイタリアのモロ前首相を誘拐し、殺害。 世界初の試験管ベビー、イギリスで誕生。 日中平和友好条約調印。 成田、新東京国際空港開港。 大平正芳内閣成立。 巨人、江川卓と抜き打ち契約。 植村直己、北極点単独到達。 キャンディーズ引退。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1969 (昭和44年)	20世紀フォックス、製作中の「トラ・トラ・トラ!」の黒澤明監督を一方的に解約し、舛田利雄、深作欣二両監督を起用。 東京高裁、「黒い雪」事件の地裁判決を支持、武智鉄二、村上覚、両被告に無罪判決。 「男はつらいよ」シリーズ、スタート。 市川雷蔵、成瀬巳喜男死去。	「イージー・ライダー」「明日に向って撃て!」などアメリカン・ニュー・シネマ増々隆盛。 ロマン・ポランスキー監督夫人、シャロン・テート惨殺事件。 パラマウント、ユニヴァーサルの海外共同配給会社、CIC設立。(米) ゴダール「東風」、コスタ・ガブラス「Z」発表。(仏)	米アポロ11号、月面着陸に成功。アームストロング船長、月に人類第1歩を記す。 ウッドストック開催。 ニクソン、米大統領に就任。 ホー・チ・ミン北ベトナム大統領死去。 東大安田講堂の封鎖解除に機動隊8500人導入。 東名高速が全通。 日本のGNP、世界2位に。 日本初の原子力船「むつ」が進水。
1970 (昭和45年)	大阪万国博覧会で、第1回日本国際映画祭開催、20カ国が参加。 国立近代美術館内、フィルムセンター開館。 大映、日活両社による合併配給会社、ダイニチ映配設立。 「反逆のメロディー」「野良猫ロック」など日活ニュー・アクション、ヒット。 円谷英二、榎本健一、内田吐夢、月形竜之介死去。	MGM、英国のEMIと提携、共同で撮影所、配給会社を設立。(米) S・マックィーン、B・ストライサンド、P・ニューマン、S・ポワチエが、ファースト・アーティスツ・ピクチャーズ(FAP)創立。 ジェーン・フォンダ、ベトナム反戦運動に参加。(米)	大阪で日本万国博覧会開催。 三島由紀夫、自殺。 赤軍派、日航機よど号ハイジャック。 植村直己と松浦輝夫、エベレスト登頂。 日本初の人工衛星「おおすみ」打ち上げに成功。
1971 (昭和46年)	日活、ダイニチ映配から撤退、"ロマンポルノ"へ転向し製作再開。 大映倒産、累積赤字58億円。 東映社長、大川博死去、岡田茂常務が社長に就任。 日活社長、堀久作辞任、堀雅彦が新社長に就任。 松竹、会長に城戸四郎、社長に大谷隆三就任。 黒澤明監督、自殺未遂。	ダリル・F・ザナック、277億ドルの赤字の責任を取り、20世紀フォックス退社。 「パットン大戦車軍団」が米アカデミー賞7部門獲得。 S・キューブリック「時計じかけのオレンジ」、W・フリードキン「フレンチ・コネクション」、S・スピルバーグ「激突!」発表。(米)	日米、沖縄返還協定調印。 徳川夢声、死去。 ニクソン・ショック。 中華人民共和国、国連に加盟。 天皇・皇后両陛下、欧州7ヵ国訪問。 日本のマクドナルド1号店、銀座にオープン。
1972 (昭和47年)	東京地裁、日活ロマンポルノ、映倫を起訴。 日本映画見本市、ワルシャワにて開催。 日本映画輸出進行協会解散。 文化庁が優秀映画に対し、製作奨励金1億円の交付を決定。 藤純子、引退。 川頭義郎、死去。	チャップリン、20年ぶりに米に入国。 「ゴッドファーザー」の世界的大ヒットにより、マフィア映画ブーム、ブレイク。(米) M・マルタン、「エクラン」創刊。(仏) アンドレイ・タルコフスキー「惑星ソラリス」発表。(ソ連)	札幌冬季オリンピック開催。 浅間山荘事件。 沖縄返還、沖縄県発足。 田中角栄内閣成立。 グァム島の残留日本兵、横井庄一帰国。 川端康成、自殺。 ウォーターゲート事件。 ミュンヘンオリンピック開催。
1973 (昭和48年)	東映、「仁義なき戦い」シリーズのヒットで実録路線成功。 東宝、「人間革命」大ヒット。 映倫、反社会的テーマを新規準に追加。 日活ロマン・ポルノ関係者の公判、東京地裁で開始。 文化庁、優秀映画製作奨励金交付(1千万)第1回受賞作品(年間10作品)を発表。	「ラストタンゴ・イン・パリ」、「エクソシスト」世界的大ヒットを記録。 「ラストタンゴ・イン・パリ」に出演したマーロン・ブランドとマリア・シュナイダーがポルノ裁判で有罪宣告を受ける。(伊) 黒澤明、ソ連映画「デルス・ウザーラ」の撮影開始。(ソ連) ブルース・リー(香港=米)、ジョン・フォード(米)死去。	パール・バック、パブロ・ピカソ死去。 ベトナム和平協定調印。 金大中氏拉致事件。 日本大使館、中国大使館がそれぞれ北京、東京に35年ぶりに開設。 日・東独の国交樹立。 石油ショック。 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1963 (昭和38年)	国産テレビアニメ第1号「鉄腕アトム」放送開始。 東映「人生劇場・飛車角」ヒット、東映やくざ路線スタート。 今村昌平「にっぽん昆虫記」、浦山桐郎「非行少女」発表。 小津安二郎、川島雄三死去。	「アラビアのロレンス」が米アカデミー賞7部門獲得。 70ミリ映画製作隆盛。 エリザベス・テイラー、「クレオパトラ」で史上最高の百万ドルの出演料獲得。(米) ゴダール「軽蔑」、ベルトラン・ブリエ「ヒットラーなんか知らないよ」発表。 ジャン・コクトー死去。(仏)	ケネディ米大統領暗殺。ジョンソン、米大統領に就任。 坂本九「スキヤキ」が全米大ヒット。 初の日米間テレビ衛星中継実験に成功。 狭山事件。 松川事件、最高裁判決で全員無罪確定。 第三次池田勇人内閣成立。 力道山、やくざに刺されて死亡。
1964 (昭和39年)	映連理事会、旧作のテレビ放映を決定。 内田吐夢「飢餓海峡」、勅使河原宏「砂の女」、武智鉄二「白日夢」「紅闇夢」発表。 東映「越後つついし親不知」、松竹「香華」一本立興行成功。 戦後初、外国映画の輸入自由化実施。	「野のユリ」のシドニー・ポワチエ、黒人初の米アカデミー主演男優賞を受賞。(米) ゴダールのアヌーシュカ・フィルム・プロ、アラン・ドロンのデルボー・プロなど、監督・俳優によるプロダクション創立が続く。(仏) マカロニ・ウェスタンが続々と製作され、世界マーケットへ出回る。(伊)	東京オリンピック開催。 東海道新幹線が開通。 日本人の海外旅行が自由化。 「ガロ」創刊。劇画ブーム。 第一次佐藤栄作内閣成立。 中国、初の原爆実験。
1965 (昭和40年)	長編記録映画「東京オリンピック」完成、日本体育協会会長河野一郎が市川崑の演出方法を批判。その3カ月後、国際批評家協会賞受賞。 武智鉄二監督と村上覚日活配給部長「黒い雪」の、わいせつ物陳列罪で起訴される 松竹、大船撮影所従業員300人にレイ・オフ(自宅待機)を発令。	「サウンド・オブ・ミュージック」大ヒット。(米) ヌーヴェル・ヴァーグ衰退と共に、コメディ、スパイ・アクション人気高まる。(仏)	米、ベトナム戦争に介入。 チャーチル元英首相、花柳章太郎、江戸川乱歩、谷崎潤一郎、死去。 南海・野村克也、プロ野球初の三冠王達成。 モンキー・ダンス、ブレイク。 朝永振一郎、ノーベル物理学賞受賞。
1966 (昭和41年)	黒澤明、東宝と契約解消し、独立。 社団法人日本映画輸出振興協会発足。 松竹、希望退職者募集、162名が退社。 映連、若松孝二「壁の中の秘事」事件未解決のためベルリン映画祭ボイコット。 清水宏死去。 第1回スウェーデン映画祭開催。	MPAAのプロダクション・コード改訂で、セックス描写の規制緩和。 バスター・キートン、モンゴメリー・クリフト、ウォルト・ディズニー死去。(米) トリュフォー「華氏451」、クレマン「パリは燃えているか」など、フランス映画がアメリカ映画会社との提携活発になる。(仏)	中国、文化大革命開始。 ビートルズ来日。 サルトル、ボーヴォワール来日。 ボーイング727他、航空機事故が相次ぐ。 NHKドラマ「おはなはん」人気。 早大授業料値上げ反対闘争。 日本総人口1億人突破。
1967 (昭和42年)	「黒い雪」事件の武智鉄二と村上覚、無罪判決となる。 20世紀フォックス、黒澤明「トラ・トラ・トラ!」の製作を発表。 日本映画懇談会、日本映画全体会議開催。 轟由起子、死去。 ベルリン映画祭、2年ぶりに参加。	アメリカン・ニュー・シネマ(「俺たちに明日はない」「卒業」など)台頭。(米) クリス・マルケル、ゴダールら「ベトナムから遠く離れて」製作。(仏) ジュリアン・デュヴィヴィエ(仏)、アンソニー・マン(米)死去。	中東戦争勃発。 チェ・ゲバラ、射殺される。 羽田闘争、京大生・山崎博昭死亡。 第二次佐藤内閣成立。非核3原則を言明。 イタイイタイ病、ぜんそくなど公害が深刻化。 日米首脳、共同声明で小笠原諸島返還を発表。
1968 (昭和43年)	日活、「殺しの烙印」を最後に鈴木清順監督との専属契約を一方的に破棄する。 三船、石原プロ製作「黒部の太陽」公開、大ヒット。 小川紳介、「三里塚の夏」発表。 ATG"一千万円映画"第1作、大島渚「絞死刑」公開。 田中栄三、死去。	コロムビアがコロムビア・ピクチャーズ・インダストリーズに改称、映画、音楽、テレビの総合産業となるヌーヴェル・ヴァーグ派監督。(米) カンヌ映画祭、五月革命に同調するゴダール、トリュフォーらヌーヴェル・ヴァーグ派監督の反対運動で中止。 ゴダール、ジガ・ヴェルトフ集団結成。(仏) 第1回アジア・アフリカ国際映画祭開催。(ソ連) スタンリー・キューブリック「2001年宇宙の旅」発表(米=英)。	東欧5ヵ国軍がチェコ領侵入。 黒人運動指導者マーティン・ルーサー・キング暗殺される。 三億円事件。 川端康成、ノーベル文学賞受賞。 米原子力空母エンタープライズ佐世保入港で、全学連と警官隊衝突。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1957 (昭和32年)	東宝創立者、小林一三死去。 日活、映連に加盟、五社協定は六社協定となる。 日本初のシネマスコープ、東映「鳳城の花嫁」公開。 東宝会館、有楽町に新築。 東宝専務、マキノ光雄死去。	映画産業不況の波を受けRKO閉鎖、リパブリック映画テレビへ転向。(米) 「フランケンシュタイン」(31年)の監督、ジェームズ・ホエールがプールで溺死体となって発見される。(米) ルイ・マル、「死刑台のエレベーター」で監督デビュー。 「レクスプレス」誌のF・ジルー、初めて"ヌーヴェル・ヴァーグ"の呼称使う。(仏)	ソ連、人工衛星打ち上げ。 イギリス、初の水爆実験。 NHK、日本テレビ、カラーテレビ放送に成功。 南極「昭和基地」発足。 岸信介内閣成立。 第29回国際ペンクラブ大会、東京で開催(川端康成が議長を務める)。
1958 (昭和33年)	稲垣浩「無法松の一生」がヴェネツィア国際映画祭でグランプリを受賞。 映画人口が史上最高の12億2745万人を記録。 東映、日本初の長編アニメ「白蛇伝」公開。 映画産業振興会が映画産業団体連合会(映団連)と改称。 「嵐を呼ぶ男」公開、石原裕次郎ブームの口火を切る。	ラナ・ターナーの愛人、ターナーの娘に刺殺される。 「戦場にかける橋」が米アカデミー賞7部門獲得。「サヨナラ」のミヨシ・梅木が助演女優賞を受賞。(米) フリー・シネマ「怒りをこめてふり返れ」「年上の女」公開。(英) アンジェイ・ワイダ「灰とダイヤモンド」発表。(ポーランド) タイロン・パワー(米)、アンドレ・バザン(仏)死去。	インドネシアと平和条約。 米、人工衛星「エクスプローラー」1号打ち上げ。 関門国道トンネル開通。 フルシチョフ、ソ連首相就任。 第二次岸内閣成立。 1万円札発行。 東京タワー完成。
1959 (昭和34年)	第2回フランス映画祭、デュヴィヴィエ・ドモンジョ来日。 日仏合作「二十四時間の情事」公開。 日活、小林旭主演、渡り鳥シリーズ、ヒット。 小林正樹「人間の条件」第一・二部公開。 大島渚、「愛と希望の街」で監督デビュー。	セシル・B・デミル、チャールズ・ヴィダー、プレストン・スタージェス、ウィリアム・ウェルマン死去。(米) 米ソ文化協定により、アメリカ映画「マーティ」とソビエト映画「戦争と貞操」が交流上映される。(米=ソ連) 第1回モスクワ映画祭開催。(ソ連) ヌーヴェル・ヴァーク隆盛。(仏)	皇太子御成婚。 鳩山一郎、死去。 「朝日ジャーナル」創刊。 ドゴール、仏大統領に就任。 永井荷風、死去。 カストロ、キューバ首相に就任。 フルシチョフ・ソ連首相訪米。 チベット反乱起こる。
1960 (昭和35年)	大島渚、吉田喜重、篠田正浩ら松竹ヌーヴェル・ヴァーグ若手監督活躍。 大島渚「日本の夜と霧」、4日で上映打ち切り。 東和映画、中央映画が合併、東和株式会社設立。 第7回アジア映画祭、東京で開催。 東映が第二東映を発足。	「ベン・ハー」、米アカデミー賞11部門獲得。 映画のテレビ放映権をめぐって映画脚本家組合、映画俳優組合、初のストライキ。(米) ルネ・クレール、映画人初のアカデミー・フランセーズ会員となる。(仏) フェリーニ「甘い生活」、ヴィスコンティ「若者のすべて」発表。(伊)	デモ隊と警官隊の衝突で東大生・樺美智子死去。 社会党委員長・浅沼稲次郎、刺殺される。 池田勇人内閣成立。 ダッコちゃんブーム。 テレビのカラー放送始まる。 ローマ・オリンピック開催。
1961 (昭和36年)	古川緑波、赤木圭一郎、死去。 新東宝が映画製作中止、不渡手形を発行し、倒産。 アート・シアター・ギルド(ATG)創立。 大映、日本初の70ミリ映画「釈迦」公開。 日本ヘラルト映画株式会社創立。 加山雄三主演「若大将」シリーズ、スタート。	ゲイリー・クーパー、死去。(米) アラン・レネ「去年マリエンバートで」、アンリ・コルビ「かくも長き不在」、トリュフォー「突然炎のごとく」、ゴダール「女は女である」発表。(仏) パゾリーニ、「乞食」で監督デビュー。(伊)	ケネディ、米大統領就任。 ソ連、初の人間衛星船「ヴォストーク」打ち上げ成功。 三島由紀夫「宴のあと」、元外相にプライバシー侵害で訴えられる。 ヘミングウェイ、死去。
1962 (昭和37年)	日本俳優協会発足。 松竹映配株式会社(社長、塩次秀雄、後に城戸四郎)創立。 日本初のドライブ・イン・シアターが砂川町にオープン。 日本映画見本市、ミラノにて開催。 植木等主演「ニッポン無責任時代」公開。	「ウエスト・サイド物語」が米国アカデミー賞10部門獲得。 007シリーズ開始、第1作は「007は殺しの番号(ドクター・ノオ)」。 マリリン・モンロー、トッド・ブラウニング、マイケル・カーティス死去。(米) クリス・マルケル「美しき五月」、ゴダール「女と男のいる舗道」、アニエス・ヴァルダ「五時から七時までのクレオ」発表。(仏)	室生犀星、死去。 アルジェリア独立。 堀江謙一、ヨットで太平洋横断成功。 東京都の人口1000万人突破。 ヘルマン・ヘッセ死去。 ファイティング原田、世界最年少のボクシング世界フライ級チャンピオン。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1952 (昭和27年)	溝口健二「西鶴一代女」がヴェネツィア映画祭で国際賞受賞。 「羅生門」、米アカデミー最優秀外国映画賞受賞 大映、日米合作映画「いついつまでも」「二人の瞳」製作。 小林正樹の「壁あつき部屋」が米軍基地批判と見受けられ公開無期延期となる。 国立近代美術館内にフィルム・ライブラリー設置。	ニューヨークで「これがシネラマだ」公開。 チャップリン、非米活動委員会の喚問を拒否し、渡欧。(米) ルネ・クレマン「禁じられた遊び」、ヴェネツィア映画祭グランプリ受賞。 ジャン・ルノワール、米より帰国。(仏) 長編カラー記録映画「緑の魔境」公開。デ・シーカの「終着駅」以下132本製作される。(伊)	英、エリザベス女王即位。 メーデー事件。 第四次吉田内閣成立。 白井義男、日本人初世界フライ級チャンピオン。 アイゼンハワー、米大統領就任 アメリカ、水爆実験。イギリス、初の原爆実験。 ヘルシンキ・オリンピック開催。
1953 (昭和28年)	阪東妻三郎、死去。 日活、調布に撮影所設立。 松竹、東宝、大映、東映、新東宝、スターの引き抜き防止のため五社協定に調印。 第1回フランス映画祭開催。 シネマスコープ第1作「聖衣」(20世紀フォックス)が有楽座で公開。	20世紀フォックス、3D映画第1作「ブワナの悪魔」、シネマスコープ第1作「聖衣」公開。 ディズニー、ブエナ・ヴィスタ配給設立、世界配給に乗り出す。 米アカデミー賞のテレビ中継開始。「静かなる男」のジョン・フォードが4度目のアカデミー監督賞。(米)	アイゼンハワー米大統領(共和党)就任。NHK、日本テレビ、放送開始。 第五次吉田内閣成立。 スターリン(ソ連首相)、死去。 ソ連、水爆保有発表。 朝鮮休戦協定調印。
1954 (昭和29年)	大映「地獄門」がカンヌ映画祭グランプリを受賞。 日活撮影所完成、第1作「国定忠治」「かくて夢あり」を公開。 東映「笛吹童子」ヒットで中村錦之助、東千代之介ら一躍スターに。 東京で第1回東南アジア映画祭開催。 「七人の侍」「ゴジラ」公開。 城戸四郎、松竹社長就任。	パラマウント、ヴィスタヴィジョン第1作「ホワイト・クリスマス」完成。 アメリカン・インターナショナル・ピクチャーズ(AIP)設立。(米) シネマスコープ第1作「水色の夜会服」完成。(仏)	アルジェリア解放戦争開始。 米、ビキニで水爆実験。第五福竜丸事件。 青函連絡船「洞爺丸」転覆 ジュネーヴ極東平和会議開催 インドシナ休戦協定調印。 鳩山一郎内閣成立。 「思想の科学」「カッパ・ブックス」「漫画読本」創刊。
1955 (昭和30年)	「紅孔雀」五部作ヒット、東映に二本立興行定着。 シネラマ第1作「これがシネラマだ」、帝国劇場、大阪・OS劇場で公開。 米映画「暴力教室」に対し、教育団体が上映禁止運動を起こす。 イタリア映画祭開催。日伊合作「蝶々夫人」公開。 トニー谷の息子が誘拐される。 大谷竹次郎、文化勲章受賞。	ジェームズ・ディーン、死去。 トッドAO方式による70ミリ映画の第1作「オクラホマ!」公開。(米) サタジット・レイ「大地のうた」発表。(インド) イギリス初のヴィスタヴィジョン「リチャード三世」、初のシネマスコープ「愛情は深い海のごとく」公開。(英) ルネ・クレール、カラー第1作「夜の騎士道」製作。(仏)	坂口安吾、死去。ワルシャワ条約調印。自由民主党結成。 第三次鳩山内閣成立。 広島で第1回原水爆禁止世界大会。 東京通信工業(後のソニー)が初めてトランジスタラジオを発売。 米英仏ソ4巨頭会談。アジア・アフリカ会議。
1956 (昭和31年)	S・ゴールドウィン来日。 溝口健二、死去。 三浦光雄、死去。 日活「太陽の季節」など、太陽族映画流行が社会問題となり、新映倫発足。 第1回「映画の日」制定。	ヘイズ倫理規程改訂。 エルヴィス・プレスリー、「やさしく愛して」で映画デビュー。(米) ブリジット・バルドー、「素直な悪女」で一躍スター女優に。(仏) リンゼイ・アンダーソン、カレル・ライス、"フリー・シネマ"結成。(英)	石原慎太郎、「太陽の季節」で芥川賞受賞。 「週刊新潮」創刊。 ソ連共産党大会でスターリン批判。 ハンガリー事件、スエズ動乱起こる。 高村光太郎、死去。 マナスル初登頂成功(槇有恒隊長)。 売春防止法公布。 石橋湛山内閣成立。 メルボルン・オリンピック開催

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1948 (昭和23年)	東宝、1200名解雇により大争議に突入。撮影所は閉鎖され、ストライキに武装警官2千人、米占領軍から戦車7台、飛行機3機、第一騎兵師団一個中隊が出動。 ニッポン・シネマ・コーポレーション（NCC、62年日本ヘラルド映画と合併）、フランス映画輸出組合日本事務所、英国映画協会設立、ヨーロッパ映画の輸入再開。 新東宝映画製作所、東宝から独立、株式会社新東宝に改組。 大映、三益愛子主演「母」がヒット。三益の“母もの”が続々と作られる。 美空ひばり、横浜国際劇場で11歳の歌手デビュー。 米映画「我等の生涯の最良の年」大ヒットを記録。	MGM、パラマウント、20世紀フォックス、RKO、ワーナーの5社に対し、最高裁が独禁法により製作・配給の分離を判決。（米） 英米映画協定調印。国家映画製作委員会創立。（英） フランス映画保護法成立。 リュミエール死去、ハイ・リュミエール賞創設。（仏） D・W・グリフィス（米）、セルゲイ・エイゼンシュテイン（ソ連）死去。 ヴィットリオ・デ・シーカ「自転車泥棒」発表、伊ネオレアリズモの頂点と評される。（伊）	東京裁判判決。東条英機死刑。 国連、世界人権宣言採択。 インド、ガンジー暗殺される。 イスラエル共和国、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国成立。 帝銀事件。 菊地寛死去。太宰治、玉川上水で山崎富栄と入水自殺。 主婦連結成。 プロ野球初ナイター（巨人対中日）が横浜ゲーリック球場で行われる。 片山内閣総辞職し、芦田均連立内閣が発足するがまもなく総辞職、第二次吉田内閣発足。
1949 (昭和24年)	日本映画監督協会創立。 映画倫理規程管理委員会（映倫）発足。 東京映画配給株式会（現・東映）創立。 日本映画社、科学映画の製作により朝日文化賞受賞。 東宝、自主製作を打ち切り、新東宝に製作を一年間依頼する。 米本卯吉、東宝社長に就任。 新東宝の自主配給宣言により、東宝と問題発生。 米映画雑誌「フォトプレイ」日本語版発刊。 美空ひばり、「のど自慢狂時代」で映画デビュー。 朝日新聞、石坂洋次郎の連載小説「青い山脈」が池部良と杉葉子主演で映画化。 イタリアフィルム社創立、戦後初の伊映画「戦火のかなた」公開。	ハリウッド、コミュニストの追放運動激化。 独禁法によりコロムビア、ユニヴァーサル、ユナイト3社が配給禁止となる。（米） イングリッド・バーグマン、家庭を捨てロッセリーニ監督と大恋愛をし、結婚。ハリウッドから追放される。（米＝伊） 国家映画金融公庫設立。 キャロル・リード「第三の男」大ヒット。（英） モスフィルム、50年度より全作品のカラー化を決定。（ソ連） ジャン・コクトー「オルフェ」発表。（仏）	法隆寺壁画焼く。 下山事件、三鷹事件、松川事件。 北大西洋条約調印、NATO発足。 ドイツ連邦共和国（西独）、ドイツ民主主義共和国（東独）、中華人民共和国成立。 日本国有鉄道、日本専売公社設立。 古橋広之進、アメリカ水上選手権大会で1500、800、400メートル自由形の世界新記録を樹立。 湯川秀樹、日本人初のノーベル賞を受賞。
1950 (昭和25年)	レッド・パージ（共産分子追放）により東宝など各映画会社から109名が追放される。 吉村公三郎、新藤兼人、近代映画協会設立。 城戸四郎、森岩雄ら以下29人の公職追放解除。 岩波映画製作所創立。 「腰抜け二挺拳銃」（48年）がヒット、ボブ・ホープが人気に。 東宝自主製作を再開。東宝、新東宝、両社完全離別。 小林富佐雄、東宝社長に就任。 戦後初の日米親善使節、田中絹代が帰国。	最高裁でハリウッド・テン（ジョン・ハワード・ローソン、ダルトン・トランボ、アルバート・マルツ、アルヴァー・ベッシー、サミュエル・オーニッツ、ハーバート・J・ビバーマン、エドワード・ドミトリク、エイドリアン・スコット、リング・ラードナー・ジュニア、レスター・コール）に対し、有罪判決。 テレビの普及率が高まり、映画人口30億人に減少。（米） デュヴィヴィエ、パリ二千年祭記念映画「巴里の空の下セーヌは流れる」を製作。（仏） アントニオーニ「ある恋の記録」、フェリーニ「寄席の脚光」でデビュー。（伊）	インド共和国成立。 朝鮮戦争勃発。 第1回ミス日本に山本富士子が選ばれる。 千円札発行。 地方公務員法公布。 金閣寺、放火のため全焼。 日本労働組合総合評議会（総評）発足。 マッカーサー、国連軍最高司令官に就任。
1951 (昭和26年)	黒澤明「羅生門」がヴェネツィア国際映画祭でグランプリを受賞。 松竹、フジカラーでカラー映画「カルメン故郷へ帰る」製作。 松竹と大映が「自由学校」競作。 大泉スタジオ、東横、東映3社のトラスト成立。東映株式会社創立。	ハリウッドの赤狩り第2回聴聞会が開かれ、3年間に324名が追放となる。（米） フランス初のカラー映画「青ひげ」完成。 「カイエ・デュ・シネマ」創刊。ジャン・ヴィゴ賞創設。（仏） 第1回ベルリン映画祭開催。（西独）	林芙美子、死去。 マッカーサー連合軍最高司令官解任。 朝鮮休戦会談始まる。 第1回プロ野球オールスター戦開幕。 日本航空株式会社創立。 三原山大爆発。 日本コロムビアが日本初のLPレコード発売。 サンフランシスコ講和条約調印。日米安全保証条約調印。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1943 (昭和18年)	黒澤明「姿三四郎」、木下恵介「花咲く港」でデビュー。 稲垣浩「無法松の一生」ヒット。 学生の自由な映画観賞が禁止される。	戦時下を反映させたウィリアム・ワイラー「ミニヴァー夫人」が米アカデミー賞6部門獲得。 一方、軽いミュージカル、アクション、コメディも製作される。 クラーク・ゲーブル、ジェームズ・スチュアートらスター男優が応召される。(米)	カイロ会談、テヘラン会談開催。 ムッソリーニ逮捕、ファシスト党解散。
1944 (昭和19年)	決戦非常体制が内閣で決定、東京の多くの劇場が閉鎖、取り壊しとなり、フィルム不足で配給停止も増加。 残存映画館に対する取り締まりも強化。	ハリウッドのスタッフ400名近くが戦線へ召集される。(米) マルセル・カルネ「天井桟敷の人々」発表。(仏)	防空法による疎開命令発令。 連合軍、ノルマンディー上陸作戦開始。 レイテ沖海戦に神風特攻隊出陣。
1945 (昭和20年)	園井恵子、原爆で死去。 GHQ下の米軍情報頒布部が13項目から成る制作禁止条項を発表。映画法廃止。 敗戦一週間後、五所平之助「伊豆の娘たち」公開。 「宮本武蔵」など228本が非民主主義的を理由に上映禁止。	アメリカ映画協会(MPAA)、アメリカ映画輸出協会(MPEA)会長にエリック・ジョンストン就任。(米) ロベルト・ロッセリーニ「無防備都市」発表、ネオ・レアリズモのきっかけとなる。(伊)	ナチス・ドイツ無条件降伏。広島、長崎に原爆投下。ポツダム宣言受諾。 日本、無条件降伏。第二次世界大戦終結。 国際連合成立。
1946 (昭和21年)	日本映画演劇労働組合(日映演)創立。 大河内傳次郎、長谷川一夫ら日映演脱退、「十人の旗の会」設立。 日本での映画配給機構、セントラル・モーション・ピクチャー・エクスチェンジ(C・M・P・E)をアメリカ映画メジャー9社が設立。戦後初、5年ぶりのアメリカ映画「春の序曲」「キューリー夫人」が公開される。 「キネマ旬報」再建第1号発刊。 伊丹万作死去。 東宝、第1回ニューフェイス募集、三船敏郎など48名が採用される。	スター、監督が戦線から帰還、ハリウッドに活気が戻り、製作本数425本に達する。 「失われた週末」が米アカデミー賞4部門獲得。 アメリカでテレビの本放送開始。(米) 第1回カンヌ映画祭開催。 ハリウッドからクレール、デュヴィヴィエら帰国。(仏) 「イワン雷帝」第2部「大いなる生活」など芸術批判起こり、上映禁止。(ソ連)	天皇人間宣言。 東京裁判開廷。 財閥解体。 ロンドンで国連第1回総会開催。 パリ平和会議開催。 チャーチル"鉄のカーテン"演説。 幣原内閣総辞職、吉田茂内閣発足。 ニュールンベルグ軍事裁判判決。 新選挙法による第22回(戦後1回)総選挙実施、婦人39名が当選。 日本国憲法公布。
1947 (昭和22年)	日本映画連合会創立。 外国映画公開に向けて初の丸の内スバル座がロードショー・システムを採用。第1回は「アメリカ交響楽」を公開。 東横映画株式会社創立、第1回作品「こころ日のごとく」公開。 映画人31名、公職追放を受ける。 菊地寛が大映社長を辞任、永田雅一が新社長に就任。 東宝争議後結成された第三組合を中心に株式会社新東宝映画製作所が設立、東宝から新東宝へ478人が移籍。 渡辺銕蔵、東宝社長に就任。 戦後初のヨーロッパ映画「第七のヴェール」(英)を公開。	ハリウッド、赤狩りの時代に突入。 米アカデミー賞の最終投票がアカデミー会員に限る規約になる。 共産主義映画人(ハリウッド・テン)を下院非米活動委員会が追放。 チャップリン「殺人狂時代」製作、右翼の上映反対運動を受ける。(米) アメリカ映画の輸入増加に対し、監督、プロデューサーらから成る映画防衛委員会結成。(仏) 初の長編立体映画「ロビンソン・クルーソー」製作。(ソ連) エルンスト・ルビッチ死去。(独=米)	日本国憲法施行。 第1回国会開く。 二・一スト、GHQより中止命令。 インド連邦成立。パキスタン分離独立。 マーシャル・プラン発表。 日本ペンクラブ再建。 刑法改正で不敬罪、姦通罪廃止。 百万円宝くじ発売。 東京地裁判事の山口良忠、配給食糧生活による栄養失調のため死亡。 吉田内閣総辞職、片山哲連立内閣発足。

Digitized by Google

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1933 (昭和8年)	映画国策建議可決、映画法など国家統制開始。 山中貞雄、日本映画株式会社設立。 大沢商会、大泰発声株式会社設立。	世界大恐慌の煽りを受け、パラマウント、リパブリックス、RKO、フォックスなど映画館の3分の1が閉館。 20世紀映画社創立。(米)	ナチス・ヒトラー政権確立。 日本、国際連盟脱退。 ルーズベルト、米大統領就任。 大阪中央放送局開局。
1934 (昭和9年)	内務省、映画統制委員会創設。 日比谷映画劇場、五十銭均一の新方式で開館。 永田雅一、第一映画社創立。	三色テクニカラー第1作「クカラチャ」完成。 国家産業復興法(NRA)により映画界産業危機脱出。 カトリック系映画浄化連盟の抗議により、成人映画を区別。(米)	ヒトラー、大統領と兼任で総統と名乗る。 全インド会議派社会党結成。 ソ連の粛清始まる。
1935 (昭和10年)	極東映画創立。 財団法人大日映画協会創立、機関誌「日本映画」創刊。 新興キネマが阪妻プロ、市川右太衛門プロ吸収。	テクニカラー初の長編映画「虚栄の市」公開。 20世紀映画社とフォックス映画が合併し、20世紀フォックス映画社となる。 リパブリック社、セルズニック・インターナショナル会社設立。(米)	フィリピン共和国成立。 ドイツ、ヴェルサイユ条約の軍事条項を破棄。
1936 (昭和11年)	松竹、蒲田から大船へ撮影所を移転。 東京宝塚、PCL、JOが合併し、東宝映画配給株式会社となる。	チャップリン、トーキーを一部使用した「モダン・タイムス」を製作。 「沙漠の花園」「丘の一本松」などカラー作品の製作が増える。(米)	ベルリン・オリンピック開催。 二・二六事件。 阿部定事件。
1937 (昭和12年)	松竹株式会社設立。 松竹、日活、全勝、新興から成る、東宝映画不上映連盟結成。 戦時体制に入り、外国映画の輸入が制限される。	ディズニー、テクニカラー長編アニメ「白雪姫」公開、大ヒットとなる。(米) ジュリアン・デュヴィヴィエ「望郷」「舞踏会の手帖」発表。(仏)	蘆溝橋事件を機に日中戦争起こる。 日独伊防共協定成立。
1938 (昭和13年)	岡田嘉子、杉本良吉、ソビエトに亡命。 映画法により脚本の検閲、ニュース映画の強制上映が行われる。 山中貞雄、中国で戦死。 内務省令により外国映画の輸入が許可制となる。	米政府がパラマウント、MGM、20世紀フォックス、RKO、ユナイト、ワーナー、コロムビアのメジャー8社を独占禁止法で告訴。(米) レニ・リーフェンシュタール「民族の祭典／美の祭典」発表。(独)	ドイツ、オーストリアを併合。 国家総動員法発令。 陸軍新聞班、情報部と改名。
1939 (昭和14年)	亀井文夫、「戦ふ兵隊」が上映中止。 日本映画俳優協会、日本映画人連盟、日本映画美術監督協会創立。	テクニカラー大作「風と共に去りぬ」公開。 ダグラス・フェアバンクス死去。 全映画館を閉鎖。(米)	ノモンハン事件。 独ソ不可侵条約調印。 第二次世界大戦突入。
1940 (昭和15年)	六大都市でニュース映画、文化映画が強制上映され、後に全国的に広がる。 国策映画、歴史物の増加に比例し、文芸映画衰退。	チャップリン「独裁者」を発表。(米) ヴェネツィア国際映画祭、伊、参戦のため中止。(伊) ルノワール、デュヴィヴィエ、クレールら仏映画人渡米。(仏=米)	日独伊三国同盟結成。 英、チャーチル内閣成立。 パリ陥落し、ペタン内閣成立。 対独降伏が決定。
1941 (昭和16年)	内務省、映画製作本数を制限。 映画雑誌が4社9誌に統合される。 情報局、川面隆三「民間に回すフィルムーフィートもなし」の発言に業界騒然。	米の第二次大戦参戦により、ハリウッド準戦時体制に突入の中、ディズニー「ファンタジア」を製作。 「市民ケーン」でオーソン・ウェルズ、デビュー。(米)	太平洋戦争開戦。日本、真珠湾を攻撃。 日ソ中立条約調印。 中国、日独伊に宣戦布告。
1942 (昭和17年)	新興キネマ、大都映画、日活製作部が合併し、大映創立。 松竹、東宝、大映の3社に映画製作会社が統合される。 戦記物が流行し、「ハワイ・マレー沖海戦」大ヒット。	米政府、映画を戦時重要産業に指定し映画部を設置、フランク・キャプラ、ウィリアム・ワイラー、ジョン・フォードらが参加する。(米) 映画人の渡米が続く中、仏の巨匠マルセル・カルネ「悪魔が夜来る」を製作。(仏)	日本軍、マニラに進駐、ビルマ、シンガポールに進撃。 ミッドウェイ海戦。 ドイツ軍、スターリングラードへ進撃。 アメリカ、日本本土に爆撃開始。

Digitized by Google

映画界年表

年数	日本映画	外国映画	世界の動き
1924 (大正13年)	日活、松竹、帝キネ、マキノの四社で日本映画製作者協会を設立。 城戸四郎、松竹蒲田撮影所所長に就任。 帝キネ「籠の鳥」大ヒットを記録。	チャップリン、キートン、ロイドらのコメディ、ジェイムズ・クルーズの西部劇などが人気。 コロムビア・ピクチャーズ・コーポレイション、メトロ・ゴールドウィン・メイヤー(MGM)創立。(米)	中国で第一次国共合作。 レーニン死去。 皇太子裕仁御成婚。 東京放送局設立。
1925 (大正14年)	牧野省三、マキノプロ設立。 直木三十五、立花寛一、聯合芸術協会創立。衣笠貞之介、「月形半平太」製作。 帝キネ撮影所争議で従業員大量解雇の上、会社解散。	チャップリン「黄金狂時代」(米)、エイゼンシュテイン「戦艦ポチョムキン」(ソ)発表。 パラマウント、MGM、ドイツのUFA社とパルファメト協定締結。(米=独)	欧州7か国、ロカルノ条約調印。 治安維持法、普通選挙法公布。 東京放送局放送開始。
1926 (大正15年)	衣笠貞之介、衣笠映画聯盟を設立、「狂った一頁」製作。 伊藤大輔、聯合芸術協会に参加。 阪妻立花ユニヴァーサル映画創立。 日活の尾上松之助、死去。	パルファメト協定により、グレタ・ガルボ、エミール・ヤニングス、エリッヒ・ポマーらハリウッド入り。 ワーナー、パート・トーキー「ドン・ファン」公開。(米)	ドイツ、国際連盟加入。 NBC創立、ネットワーク放送開始。 日本放送協会(NHK)創立。
1927 (昭和2年)	皆川芳造、トーキー「黎明」製作。 松竹蒲田撮影所、時代劇部廃止。 伊藤大輔監督、大河内傳次郎主演「忠次旅日記」3部作大ヒットを記録。	ワーナー・ブラザース、世界初のオール・トーキー「ジャズ・シンガー」公開。 映画芸術科学アカデミー創立。(米) 英国、映画法制定。(英)	リンドバーグ、大西洋無着陸横断飛行に成功。 トロツキー、ソ連共産党を除名。 芥川龍之介自殺。
1928 (昭和3年)	河合徳三郎、片岡千恵蔵、嵐寛寿郎、各々プロダクション設立。 東条政生、日本トーキー株式会社設立。 川喜多長政が東和商事映画部設立、ヨーロッパ映画の輸入開始。	RCA、トーキー興行会社RKO設立。 ディズニー「蒸気船ウイリー」、ワーナー「ニューヨークの灯」などハリウッド各社トーキー製作開始。(米) ブリティッシュ・トーキングピクチャー、トーキー企業化に着手。(英)	パリで15ヵ国が不戦条約調印。 ソビエト、第一次五ヵ年計画実施。 イタリア、ファシスト党大評議会が国家機関に。
1929 (昭和4年)	アメリカ・トーキー「南海の唄」「進軍」日本初公開。 日本プロレタリア映画同盟(プロキノ)創立。 マキノ省三死去。	第1回米アカデミー賞授賞式開催。作品賞「つばさ」。(米) ヒッチコック、トーキー第1作「恐喝(ゆすり Ⓥ)」製作。 RKOラジオ映画会社創立。(英)	ニューヨーク株式相場大暴落、世界大恐慌始まる。 イギリス、インドに円卓会議提案。
1930 (昭和5年)	帝キネ「何が彼女をさうさせたか」の封切で傾向映画全盛。 松竹、日活、帝キネが時代劇プロ吸収。 宝塚映画創立。	ハリウッド、ほとんどがトーキーに切り替わる。 エイゼンシュテイン、ハリウッドと折り合わず、メキシコへ。 「西部戦線異状なし」が米アカデミー作品・監督賞。(米)	ロンドン海軍軍縮会議開かれる。 イギリス・イラク同盟条約締結。 浜口首相、東京駅で狙撃される。
1931 (昭和6年)	初の日本語字幕がアメリカ映画「モロッコ」につき、公開。 松竹の土橋式トーキー「マダムと女房」公開。PCL創立。 東活映画、不二映画、新興キネマ創立。 「映画之友」創刊。	キネトスコープの発明者、エジソン死去。(米) ルネ・クレール「自由を我等に」(仏)、エリック・シャレル「会議は踊る」(独)発表。	満州事変起こる。 万宝山事件。
1932 (昭和7年)	弁士らの反トーキー・ストライキが起きる。 チャールズ・チャップリン来日。 新映画社、正映マキノプロ、富塚映画社、宝塚キネマ創立。	第1回ヴェネツィア国際映画祭開催。(伊) ディズニー、三色テクニカラー・アニメ「シリー・シンフォニー」の「森の朝」公開。(米) ルネ・クレール「巴里祭」発表。(仏)	五・一五事件で犬養毅首相暗殺される。 上海事変起こる。 イギリス帝国経済会議開催。

Digitized by Google

▲石井隆監督(左)と語り合う映画祭ディレクター、Pierre(左から4人目)、スタッフたち。

るテイストの作品の選択で新たな観客を集め、北米の配給会社からも一目置かれる存在になった。私自身は第1回から日本のコーディネーターをしているが、彼らの日本映画に対する知識と愛情は豊かで、どうしてこんな作品を観たことがあるのかと時々驚かされる。そこでも威力を発揮しているのが、全世界の映画オタクのネットワークなのだ。情報だけではなく、時には、海賊版のコピーがそのネットワークを駆け巡り、面白いものはあっという間に評判になる。全世界共通のコアなマーケットがそこに存在している。この映画祭では、新作は勿論だが、旧作の上映も積極的に行っており、プリント上映が難しいものもビデオ・ポスプロ会社の利点を生かし、高品質なビデオ・プロジェクターによる字幕付き上映なども可能だ。また、日本の着ぐるみ系怪獣&アクション作品も人気が高く、ウルトラマン・シリーズは毎年上映され、ウルトラマン自身も既にファンタ・アジアの会場に2年続けて現れ、モントリオールっ子達にも人気抜群。96年の1回目は香港映画が全盛だったが、そこで紹介された『オネアミスの翼』『メモリーズ』などの極めて質の高い日本のアニメーションが話題となり、翌年から日本の作品にかなり重点が置かれるようになってきた。そして昨年は『PERFECT BLUE』がここでワールドプレミアを行い、観客賞を受賞、すぐその時から世界中の映画祭、配給会社から注目を集めることとなり、ほとんど世界中のセールスを達成した。また、今年、ますます日本の作品への関心が高まる中、初めて日本から石井隆、岩井俊二両監督がゲストとして招待され、熱狂的な歓迎を受けた。石井監督の『GONIN』『GONIN2』『黒の天使』の3作品も監督の滞在中に上映されたが、どの回も満員の観客から熱い拍手と歓声が沸き起こり、大好評。石井監督自身、かつてロカルノ映画祭で『GONIN』が上映された際に、テーマが理解されることなく、暴力的な描写のみが話題にされてしまった苦い経験を持つが、今回は『GONIN』が今、海外で評価されているので是非と招待されても、飛行機は苦手だし、半信半疑で参加したのですが、日本でもなかった観客のビビッドな映画を楽しもうとする姿勢に感動し、これらの映画が確かに観る人達の心に届いているという達成感と、撮る勇気を与えてもらった気がしました」そして、「日本にもいるであろうそういった観客層の開拓のために、作品にあった映画祭を選び、参加してその成果を反映することが大切だ」と、語ってくれた。

また、配給会社として石井監督と共に初めて参加した松竹・加倉井さんも「映画祭はプロモーションとして利用できないと参加は難しい。特に、ファンタ系はプラスになる材料が少ないと敬遠していたが、今回監督と一緒に参加してみて、観客の熱い反応を実感し、それをキチンと国内のプロモーションに反映していければ、ファンタ系の映画祭も多いに利用価値がある。いかに映画祭を巧く日本のプロモーションにつなげるかを配給会社が見直す必要があることを再確認した」という。そして、今年も観客賞は『スワロウテイル』が受賞。

毎年観客数が120%ずつ増えてきて、今年は30日間80作品102回上映7万人の動員をしているこの映画祭は、今年新たにトロントでも同時期に開催され話題を呼び、北米におけるファンタ系作品のショーケースとしての役割を終え、来年からは期間を短くし、国際映画祭としての第1歩を踏み出す予定だ。

現在、ファンタ系の作品がメジャーでもメインストリームに成りつつあり、ファンタ系映画祭の位置付けも変化してきているので、本当に作品にふさわしい映画祭を選んでいき、プロモーションをキチンとしていけば、日本独自のファンタ系の作品も国際的な新たなマーケットを開拓するチャンスがまだまだあるはずだ。

Aihara Hiromi
海外ファンタ系映画祭のコーディネイターや日本のインデペンデント映画を海外に紹介する〈New Cinema from Japan〉のスタッフとして活動。現在、KUZUIエンタープライズにて日本映画の企画制作を進めている。

Digitized by Google

めの映画祭だという点だ。かく言う私も、前述の塚本作品で行ったことがきっかけで、その楽しさに魅了され、日本映画の紹介を依頼されたことから、今日の海外のオタクなネットワークに足を踏み入れることになった訳だ。映画祭の開催時には、各種ファンタ系アーティストによる作品展が併設されると共に、特殊メイクやボディペイント・コンテストも行なわれ、若いアーティストがその才を披露する場が提供されている。日本からはかつて特殊メイク・アーティスト原口智生さんが偶然映画祭の開催時にいたことから、特殊メイク・コンテストに参加し受賞、98年に「ガメラ2」で参加の際にはコンテストの審査員としてまた参加しているが、原口さん自身もここの映画祭のファンの一人だ。また、あまり知られていなかったことだが、大林宣彦「異人たちとの夏」(88)や須川栄三「飛ぶ夢をしばらく見ない」(90)が既にこの映画祭で受賞、塚本作品受賞の前から既に日本のファンタ系作品に興味を持っていてくれたようだ。また、海外の映画祭に出掛けていって一番嬉しいことは、観客とゲストが一緒に出会える場所あって、気軽にゲストの大監督とも話をするのが可能なことだ。ブリュッセルでは、上映後に会場内に設けられたスペースで名物のビールを安く飲みながらゲスト達や時にはファンタ映画の大ファンで映画を観にやってくるこの国のプリンスにまで会えてしまうという、アットホームな雰囲気がたまらない。日本ではスペースの問題など制約が多いのかも知れないが、ゲストのために派手なパーティを開くよりもこんなスペースを造ってゲスト同士あるいは観客と気軽に交流できる場を設けるほうがよっぽど招かれたほうも嬉しいと思うのだが……?

前述したように、アニメの台頭とともに著しくなってきた、ここ最近の日本“オタク”文化全世界侵略(!?)の一端を伺い知ることのできる映画祭がもうひとつある。96年から始まり、今年で第3回を迎えたモントリオールの「FANT*ASIA(ファンタ・アジア)」がそれで、文字どうりアジアのファンタ系作品を1ヵ月間にわたり上映するショーケース的な映画祭だ。かつて92年に1度だけ開催はされたが、主催者が詐欺を働き、多くの経費が未払いのままで、ゲストと配給会社が多大な被害を被ったという前代稀なモントリオール・ファンタスティック映画祭というものがあった。運悪く参加していた私は、参加作品「鉄男II」が受賞した賞とは違うトロフィを渡されたり、交通費の払い戻しがされないという被害を被ったが、その時に知りあった日本の怪獣映画の熱狂的ファンが、汚名挽回とばかりにあらためて始めたのが、このファンタ・アジアだ。北米ではあまり上映される機会のなかった、香港アクション映画と日本の怪獣・アクション&B級テイスト映画の熱狂的ファンが、自分たちが大好きな作品を何とかしてみんなに観せたい、上映できる機会を持ちたいと言う単純だが熱い想いでこの映画祭は始まった。もともと、カナダという地域は、映画のセールス・テリトリーでいうと北米に含まれ、カナダのみで映画の権利が売買されることは、テレビ作品を除いて少ない。そして、ビジネス的には当然アメリカが先になるため、最初にアメリカで公開された作品が不評であれば、カナダでは上映されることはないというのが実状だ。モントリオールは、ニューヨークに近いことと、都市としてもフランス語圏であり、ヨーロッパ文化の色濃い知的な層の多い街であるため、しばしばハリウッド作品のテスト・マーケットが行われるが、やはり公開に関してはアメリカの成績次第となる。そんなことも含め、ハリウッド作品には食傷気味だった彼らが、もっと自分たちで見つけた面白い作品を独自に上映していきたいと、大好きなアジア映画に目を向けたわけだ。地元の大手ビデオ・ポストプロダクション会社を経営する、日本映画オタクの若い社長(Pierre Corbeil)をスポンサーに、まずは、アジアの作品の面白さを知ってもらい、既にあると感じていたマーケットをより開拓していき、将来的な夢としてカナダ配給権の獲得とその公開を目指し、本当の意味での北米唯一の国際映画祭にしていこうという狙いが彼らにはあった。実際、ヨーロッパにはかなりの数のファンタ系映画祭があるが、北米には何故かひとつもなかったので、狙いは最初の年から大当たり、すぐ後に控えたWorld Festivalと同じ会場を使いながら、全く異な

モントリオール/Fant★Asid会場のイベリアル・シアター。

Digitized by Google

の功績もあってか、近年世界各地の一般映画祭の中で、ファンタ系映画を上映するために、ミッドナイト・プログラムを設けるところも増えてきている。98年からは新たにオランダの〈The Amsterdam Festival of Fantasy〉、ルクセンブルグの〈Cinenygma〉、フィンランドの〈Espoo Cine International〉、スウェーデンの〈Fantastik Film Festival〉がこの映画連合に加わった。現在、世界的にもファンタ系映画がメインストリームになりつつある中、ファンタ系映画祭も増加の傾向にあり、オタクなテイストがいよいよ世界中を席捲し出したかのようだ。

▲注目の新人監督たちと原口智生さん(右)。

ファンタ系映画祭の面白さは、何と言っても若い作家が出てきやすいため、いち早く新しい稀有な才能に出会えることでもある。日本のピンク映画がかつてそうであったように、海外の新人にとってはホラー、アクションなどの分野が低予算で好きなことができる場であるため、そこから思わぬ掘り出しものに出会える幸せがある。

ファンタジー系映画好きの評論家・塩田時敏さんは、やはり新しい才能の発掘の場として、88年のこれまた今は亡き〈パリ・ファンタ〉を皮切りに、〈ローマ〉〈アボリアッツ〉〈シッチェス〉他数々のファンタ系映画祭を観て回っている。特に80年代後半から90年代はここから新しい才能が多く生まれており、中でもビガス・ルナ、ガスパー・ノエ、アレックス・デ・ラ・イグレシアなどが印象的だったが、どこの映画祭にも必ず顔を見せて自作の宣伝をこまめに行っていたあの「悪魔の毒々モンスター」のトロマ社長&監督ロイド・カウフマンも忘れられないという。

日本でもファンタ系映画祭として東京が85年、ゆうばりが90年から始められており、国内では確実なファンを摑んでいて、海外でもよく尋ねられもするが、海外の映画祭に比べてどうしても海外からの全くの新作が紹介される機会が少ないのが何とも残念だ。というのも、大きな理由は日本語字幕を入れる必要性があるからで、大概の作品が英語字幕版は作っていても、さらに日本語翻訳、字幕入れ版の製作となると費用がかかり過ぎてしまうため、結局配給が決まっている作品が優先になってしまうという苦しい実情がある。ヨーロッパのファンタ系映画祭でも同じような悩みを抱えているところもあるが、プリントや字幕のコストが安いことで救われていたり、電光掲示板のような〈エレクトロニクス・システム〉の使用などの工夫が見られる。特にこの〈エレクトロニクス・システム〉は、翻訳だけして、プリントを傷つけずにそのシステムで放映するので、映画祭にとってはなかなか画期的で重宝なシステムだ。字幕は画面の下に入るケースが多いが、上下両方に入るものもあったりして、劇場にもよるが、そんなに見にくいものでもない。このシステム自体の貸出しは行なわれているが、日本語の場合はやはり漢字なのでそのシステムをそのまま使用するわけにはいかない。現在、電光掲示板は日本国内でもたくさんあるのだから、どこかこの字幕用システムを開発してみようなんて奇特な会社はありませんかね。

さて、そのファンタ系映画祭だが、元祖・シッチェス映画祭が一般映画祭としての傾向を強めつつある中、現在ではベルギーのブリュッセル・ファンタ映画祭がその牙城となっていて、毎年3月、国際映画祭としては最長期間の約15日間にわたる熱狂的なお祭りが繰り広げられる。ここの特徴は、他の映画祭や映画見本市などで徹底的に作品を探し回る、本当に熱心なスタッフ(Annie & Freddy Bozzo,Georges & Guy Delmote両仲良し兄弟による運営/ヨーロッパ・ファンタスティック映画祭連合の中心メンバーとして、その布教に務めている)によるきめ細やかな作品選びと、観客、ゲストが一体になって楽しむファンタ系映画好きによるファンタ系映画好きのた

Digitized by Google

侮るなかれ、恐るべし『ファンタスティック映画祭』

相原裕美

世界中にいったいいくつの映画祭があるのだろうか？まさに星の数ほどあって、それぞれが毎年新しい才能を輩出してきている。その中で一般的な映画祭よりも一段低く見られがちなファンタスティック映画祭（以後、ファンタ系と省略表記）だが、そこにはいわゆる一般映画祭よりももっと新しいキラ星達がひしめき合っている。

ファンタ系映画祭といえば、最古の歴史を持つのはスペインのシッチェス映画祭だが、やはり一番有名だったのは、何といってもスピルバーグの傑作「激突！」ほか多くのファンタスティック!!　な作品を世に紹介したフランスのアボリアッツ映画祭だ。残念ながら、93年を最後にファンタ系ではなくフランスの国内作品のみの映画祭になってしまったが、92年ここで、当時製作・宣伝でかかわっていた塚本晋也監督「鉄男II/BODY HAMMER」ほか塚本作品3本が上映されたことが、私がファンタ系の映画祭に日本映画を紹介するきっかけだった。初めて日本からやってきたヘンな映画は、既に東京とゆうばりファンタ映画祭をやっていた小松沢陽一さんに紹介された関係者を始め、そこに来ていた別の映画祭のスタッフやファンタ系雑誌の記者、評論家に熱く迎えられ、次々と今まで聞いたこともなかったファンタ系映画祭に招待されることになった。またそこで出会う人々からロコミで次の映画祭へと“オタクなネットワーク”に支えられて、世界中を駆け巡ることになったのだ。“オタク”という言葉は、今やカラオケ、アニメと共に世界を席捲しており、スリラー、ホラーやアクション、カルトな作品などを深い知識と共に愛している人々に付けられた名称で、タランティーノの映画オタクぶりが有名なように、日本での自閉症的なイメージよりはもっと社会性もあり、豊富な特殊知識を持っている人として周囲から認められていたりする。

そんな人々が運営し集うファンタ系映画祭が、どんなに楽しいものかは日本では意外にも知られていないので、今回、その一端を紹介したいと思う。

ファンタ系映画祭の開催はヨーロッパがその舞台となっており、その数も多いが、一般的に異端児扱いをされがちだっだファンタ系の4映画祭、ポルトガルの〈Fantasporto〉、スペインの〈Festival International de Cinema Fantastic de Sitges 改め、98年よりFestival International de Cinema de Catalunya〉、ローマの〈Fantafestival〉、ベルギーの〈Brussel International Festival of Fantasy,Science-Fiction and Thriller Films〉が、1987年に〈The European Federation of Fantasy Film Festival（ヨーロッパ・ファンタスティック映画祭連合）〉を結成。彼らは、自分たちの映画祭をもっと一般に知らせると共に、ファンタジー映画自体の面白さをもっと伝え、市民権を獲得することを目的にしており、1995年からは最も素晴らしいヨーロッパのファンタ系作品に対して与えられる〈The Golden Melies（ゴールデン・メリエス賞）〉を創設した。これは各4映画祭で選ばれた〈A Silver Melies（シルバー・メリエス賞）〉を持ち寄り、その中から毎年12月に映画のプロフェッショナルを審査員としてNo.1を選出、選ばれた作品は、その後1年間4つの映画祭で必ず上映され、プロモーションをしてもらえる。96年の第1回は、アレックス・デ・ラ・イグレシア監督の「ビースト/獣の日」、97年第2回は、Jose Luis Guerin監督の「Tren De Sombras」（Train of Shadows）がそれぞれ受賞した。なお、そんな彼ら

▲ガメラを贈られて大喜びの映画祭ディレクター、Freddy（左）&Georges（右）。

Digitized by Google

優賞、プレス審査員賞、若手審査員賞、観客賞を独占し、95年にはテサロニキ国際映画祭で最優秀監督賞、国際映画批評家連盟賞、ナント三大大陸映画祭では最優秀女優賞を受賞しています。

▲「FOCUS」

ロカルノは98年の今年、清水浩監督「生きない」がキリスト協会賞を受賞しました。この映画祭では95年に塚本晋也監督の「東京フィスト」がヤング審査員特別賞を受賞しています。「東京フィスト」は96年にはブリュッセル国際ファンタジースリラー映画祭では特別賞を受賞しています。

ヴェネツィアは「HANA-BI」の前は58年の「無法松の一生」と51年の「羅生門」があります。大賞ではありませんが95年に是枝裕和監督が「幻の光」で金のオゼッラ賞と国際カトリック協会賞、イタリア映画産業界賞を受賞しています。この年是枝監督はヴァンクーバーで新人グランプリを、シカゴ国際映画祭でグランプリであるゴールドヒューゴ賞を受賞しています。

北野武監督はヴェネツィアの後サンパウロ国際映画祭（ブラジル）で国際批評家賞を第10回ヨーロピアン映画祭で外国映画国際銀幕賞を受賞しました。

95年には新藤兼人監督「午後の遺言状」がモスクワ映画祭ロシア映画批評家審査員賞を、中嶋莞爾監督「はがね」がフィゲイラ・ダ・フォス市賞を、渡辺孝明監督「アリスサンクチュアリ」がマンハイム・ハイデルベルグ国際映画祭批評家連盟賞を四ノ宮浩監督「忘れられた子供たちスカベンジャー」が同映画祭記録映画部門でグランプリを石井聡互監督「エンジェル・ダスト」がバーミンガム国際映画祭でグランプリを取っています。

海外で配給のついた周防正行監督の「Shall we ダンス？」はワシントンのD．C．国際映画祭で観客賞を、クリーブランド国際映画祭ではロクサーヌ・ミラー最優秀映画賞を、シアトル映画祭では新人監督部門で審査員賞を受賞しました。アメリカの映画祭ばかりなのは海外配給会社がアメリカの会社だからでしょうか。

97年は本当に受賞作の多い年で、第30回ヒューストン映画祭ではファミリー部門で中田新一監督「PiPiピピと呼べないホタル」が金賞を、コメディー部門では細谷佳文監督「Sleepy Head」が銀賞を受賞しました。第17回ハワイ映画祭では矢口史靖監督「ひみつの花園」が審査員特別賞の中の主演女優賞（西田尚美）を受賞、第1回アィディリワイルド国際映画祭ではすずきじゅんいち監督の「秋桜コスモス」が最優秀作品賞を受賞しています。

98年はベルリンの「SADA」以外に「Shall we ダンス？」が米国内の批評家賞を、熊切和嘉監督「鬼畜大宴会」がタオルミナ映画祭のグランプリを、清水浩監督「生きない」がロカルノ映画祭でキリスト協会賞を、岩井俊二監督「スワロウテイル」がファンタジアで観客賞を、平山秀幸監督「愛を乞うひと」がモントリオールで国際批評家連盟賞を受賞しています。

今年はあといくつ受賞作品が出るのでしょうか、各国の映画祭は常に新しい才能に注目しています。また、おしくも受賞こそ逃したけれど、コンペティション部門に参加している日本映画も実はたくさんあるのです。

▲「スワロウテイル」

Hamano Fumiko
1967年東京生まれ。法政大学卒。92年より財団法人日本映画海外普及協会（ユニジャパン・フィルム）勤務。

Digitized by Google

HANA-BIの影で、まだまだあります日本映画受賞作

浜野史子

1997年はカンヌ、ヴェネツィアの二大映画祭を日本映画で制覇しましたが、他にも沢山の受賞作がありました。

カンヌでカメラドール（新人監督賞）を受賞した河瀬直美監督「萌の朱雀」は1月の第26回ロッテルダム国際映画祭で国際批評家賞を受賞しています。この映画祭では96年に橋口亮輔監督「渚のシンドバッド」が、95年には風間志織監督の「冬の河童」がそれぞれ新人監督賞を受賞しています。「萌の朱雀」はこの後多数の映画祭をまわり、第10回シンガポール映画祭で主演女優賞（大野眞知子）を、第35回ウィーン国際映画祭で観客賞、フランスのアミアン国際映画祭でゴールデンユニコーンアワード（グランプリ）を受賞しています。

同じくロッテルダムでネットパック賞（ベストアジアフィルム賞）を受賞した諏訪敦彦監督「2／デュオ」は第16回ヴァンクーバー国際映画祭では新人賞にあたるドラゴン＆タイガーアワードを受賞、ウィーン国際映画祭では批評家賞を受賞しています。

毎年2月に開催されるベルリン映画祭は作家性の強い日本映画にいつも注目しています。98年の今年こそコンペ部門に参加した、大林宣彦監督「SADA」の国際批評家賞受賞のみでしたが97年はヤングフォーラム部門で、井坂聡監督「FOCUS」がネットパック賞とベルリン新聞記者賞をダブルで受賞、小栗康平監督「眠る男」が国際映画連盟賞を受賞、96年にはコンペ部門で東陽一監督「絵の中のぼくの村」が準グランプリの銀熊賞を、ヤングフォーラムでは岩井俊二監督の「PICNIC」がベルリン新聞記者賞、篠崎誠監督「おかえり」のヴォルフガングシュタウテ賞（最優秀新人賞）、大木祐之監督「ヘヴン6ボックス」ネットパック賞、95年利重剛監督「エレファント・ソング」ネットパック賞があります。大賞は63年の「武士道残酷物語」まで溯ります。

井坂聡監督「FOCUS」は4月に開催されたイタリアのシャドーライン映画祭でコンペ部門でグランプリを、6月に開催されたソチ国際映画祭（ロシア）ではヤングコンペでグランプリを受賞しています。この時、石井聰亙監督「夢の銀河」はオスロー南国際映画祭でグランプリも獲得しています。ソチでは95年に奥山和由監督「RAMPO」が国際批評家連盟賞を受賞しています。

変わったところでは3月に開催されたイタリア風刺とユーモア映画祭で細山智明監督の「お天気お姉さん」が主演女優賞を水谷ケイで受賞、短編映画では松永敏郎監督「ロベルトのように」が第30回ハンボルト国際映画祭で審査委員賞、ウプサラ国際短編映画祭と第2回フィクション国際映画祭でグランプリを受賞しています。短編では96年に伊藤高志監督「ZONE」がオーバーハウゼン国際短編映画祭で準グランプリを、95年には天野天街監督が「トワイライツ」がグランプリ受賞しています。「トワイライツ」はメルボルン国際短編部門グランプリも取りました。

5月のカンヌは「うなぎ」以前では、90年の「死の刺」、83年の「楢山節考」、80年の「影武者」、54年の「地獄門」が大賞を受賞しています。

▲「萌の朱雀」

7月に開催されたカナダのファンタジアも日本映画に注目していて97年は「PERFECT BLUE」が観客賞を取りました。

8月はカナダのモントリオール映画祭とロカルノ映画祭、そしてベネチア映画祭があります。97年モントリオールではコンペ部門で市川準監督「東京夜曲」が最優秀監督賞を、96年には篠崎誠監督「おかえり」がコンペ外ですが国際映画批評家連盟賞と新人監督グランプリを受賞しています。95年は熊井啓監督「深い河」がエキュメニック賞を受賞しています。「おかえり」は96年、ダンケルク国際映画祭でグランプリを「渚のシンドバッド」と分けあい、最優秀女

Digitized by Google

第70回 アカデミー賞	第55回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第50回 カンヌ国際映画祭	第47回 ベルリン映画祭
タイタニック (ジェームズ・キャメロン)	(ド)**タイタニック** (ジェームズ・キャメロン) (ミ/コ)**恋愛小説家** (ジェームズ・L・ブルックス)	**HANA-BI**(日) (北野武)	**うなぎ**(日) (今村昌平) **桜桃の味**(イラン) (アッバス・キアロスタミ)	**ラリー・フリント**(米) (ミロシュ・フォアマン)
ジェームズ・キャメロン (タイタニック)	**ジェームズ・キャメロン** (タイタニック)		**ウォン・カーウァイ** (ブエノスアイレス/香港)	**エリック・オイマン** (ポート・ドジェマ)
ジャック・ニコルソン (恋愛小説家)	(ド)**ピーター・フォンダ**(ユリーズ・ゴールド)(ミ/コ)**ジャック・ニコルソン**(恋愛小説家)	**ウェズリー・スナイプス** (ワン・ナイト・スタンド/米)	**ショーン・ペン** (シーズ・ソー・ラヴリー/米)	**レオナルド・ディカプリオ**(ロミオ&ジュリエット/米)
ヘレン・ハント (恋愛小説家)	(ド)**ジュディ・デンチ**(Her Majesty Mrs.Brown)(ミ/コ)**ヘレン・ハント**(恋愛小説家)	**ロビン・タニー** (ナイアガラ、ナイアガラ/米)	**キャシー・バーク** (ニル・バイ・マウス/英)	**ジュリエット・ビノシュ**(イングリッシュ・ペイシェント/米)
ロビン・ウィリアムス (グッド・ウィル・ハンティング)	**バート・レイノルズ** (ブギー・ナイツ)			
キム・ベイシンガー (L.A.コンフィデンシャル)	**キム・ベイシンガー** (L.A.コンフィデンシャル)			
(オ)**ベン・アフレック、マット・デイモン**(グッド・ウィル・ハンティング)(色)**ブライアン・ヘルゲランド、カーティス・ハンソン**(L.A.コンフィデンシャル)	**ベン・アフレック、マット・デイモン**(グッド・ウィル・ハンティング)	**ギーユ・トーランド、アンヌ・フォンテーヌ** (ドライ・クリーニング/仏)	**ジェームズ・シェイマス** (アイス・ストーム/米)	
ラッセル・カーペンター (タイタニック)				
キャラクター/孤独な人の肖像(オランダ) (マイク・ファン・ディム)	**ぼくのバラ色の人生** (ベルギー) (アラン・ベルリネール)			

▲「もののけ姫」

▼「L.A.コンフィデンシャル」

▲「タイタニック」

Digitized by Google

第71回 キネマ旬報賞	第52回 毎日映画コンクール	第40回 ブルーリボン賞	第21回 日本アカデミー賞	
うなぎ（今村昌平）	もののけ姫（宮崎駿）	バウンス ko GALS（原田眞人）	もののけ姫（宮崎駿）	作品賞
望月六郎（鬼火、恋極道、無国籍の男 血の収穫）	今村昌平（うなぎ）	原田眞人（バウンス ko GALS）	今村昌平（うなぎ）	監督賞
役所広司（うなぎ、失楽園）	原田芳雄（鬼火）	役所広司（うなぎ、失楽園、CURE）	役所広司（うなぎ）	主演男優賞
桃井かおり（東京夜曲）	桃井かおり（東京夜曲）	桃井かおり（東京夜曲）	黒木瞳（失楽園）	主演女優賞
西村雅彦（マルタイの女、ラヂオの時間）	田口トモロヲ（うなぎ、鉄塔武蔵野線）	西村雅彦（マルタイの女、ラヂオの時間）	西村雅彦（ラヂオの時間）	助演男優賞
倍賞美津子（東京夜曲、うなぎ）	倍賞美津子（東京夜曲、うなぎ）	倍賞美津子（東京夜曲、うなぎ）	倍賞美津子（うなぎ）	助演女優賞
三谷幸喜（ラヂオの時間）	三谷幸喜（ラヂオの時間）		三谷幸喜（ラヂオの時間）	脚本賞
	木村大作（誘拐） 田村正毅（萌の朱雀、2/デュオ）		木村大作（誘拐）	撮影賞
秘密と嘘（英）（マイク・リー）	イングリッシュ・ペイシェント（米）（アンソニー・ミンゲラ）	タイタニック（米）（ジェームズ・キャメロン）	タイタニック（米）（ジェームズ・キャメロン）	外国語映画賞

ヴェネツィアで北野武の「HANA-BI」が金獅子賞を、カンヌでは「うなぎ」がパルム・ドールを、河瀬直美の「萌の朱雀」がカメラ・ドールを、「東京夜曲」の市川準がモントリオール映画祭最優秀監督賞を、さらには「Shall we ダンス？」がアメリカで公開され、ヒットするなど、これまでになく日本映画が海外で注目を浴びた。

国内でも「失楽園」、「新世紀エヴァンゲリオン」の劇場版2本が大ヒット、社会現象にまでなり、「もののけ姫」に至っては国内配収新記録を達成、監督では望月六郎、三池崇史等が、頭角を現してきた。

洋画の配収結果は上位こそ「インデペンデンス・デイ」、「ロスト・ワールド」、「スピード2」と大作が並んだが、アカデミー賞では九部門で受賞した「イングリッシュ・ペイシェント」や前年のカンヌ・パルム・ドール受賞作「秘密と嘘」などのイギリス出身監督の作品や「シャイン」、「ファーゴ」、「奇跡の海」（前年のカンヌ・グランプリ作）といった日本でも単館公開でヒットした作品が話題を集めた。

「フィフス・エレメント」のリュック・ベッソン、カンヌ監督賞受賞作「ブエノスアイレス」のウォン・カーウァイ、11月の東京国際映画祭で来日したレオナルド・ディカプリオ、あるいはブラッド・ピットの人気は相変わらず凄まじい。

この年はキン・フー、萬屋錦之介、フレッド・ジンネマン、杉村春子、マルコ・フェレーリ、勝新太郎、ロバート・ミッチャム、ジェームズ・スチュワート、藤田敏八、サミュエル・フラー、伊丹十三、三船敏郎等多くの映画人が死去した。

「スター・ウォーズ」三部作が特別編として装いも新たにスクリーンに登場した他、「COFY/コフィー」(73)、「秘密の子供」(79)、ホロコーストの全容に迫った9時間半の大長編ドキュメンタリー「SHOAH」(85)、「エピデミック」(87)、「命は安く、トイレットペーパーは高い」(89)、「ライフ・イズ・スウィート」(91)、「愛の誕生」(93) といった旧作が初公開された。

Digitized by Google

第69回 アカデミー賞	第54回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第49回 カンヌ国際映画祭	第46回 ベルリン映画祭
イングリッシュ・ペイシェント (アンソニー・ミンゲラ)	(ド)**イングリッシュ・ペイシェント** (アンソニー・ミンゲラ) (ミ/コ)**エビータ** (アラン・パーカー)	**マイケル・コリンズ** (米) (ニール・ジョーダン)	**秘密と嘘**(英) (マイク・リー)	**いつか晴れた日に**(米) (アン・リー)
アンソニー・ミンゲラ (イングリッシュ・ペイシェント)	**ミロシュ・フォアマン** (ラリー・フリント)		**ジョエル・コーエン** (ファーゴ/米)	**イム・ホー**(太陽に耳あり) **リチャード・ロンクレイン**(リチャード三世/英)
ジェフリー・ラッシュ (シャイン)	(ド)**ジェフリー・ラッシュ** (シャイン)/(ミ/コ)**トム・クルーズ**(ザ・エージェント)	**リーアム・ニーソン** (マイケル・コリンズ/米)	**ダニエル・オートゥイユ、パスカル・ディケンヌ** (八日目/仏)	**ショーン・ペン** (デッドマン・ウォーキング/米)
フランシス・マクドーマンド (ファーゴ)	(ド)**ブレンダ・ブレッシン**(秘密と嘘)/(ミ/コ)**マドンナ**(エビータ)	**ヴィクトワール・ティヴィソル**(ポネット/仏)	**ブレンダ・ブレッシン** (秘密と嘘/英)	**アヌーク・グランベール** (私の男/仏)
キューバ・グッディング・ジュニア(ザ・エージェント)	**エドワード・ノートン** (真実の行方)	**クリス・ペン** (フューネラル/米)		
ジュリエット・ビノシュ(イングリッシュ・ペイシェント)	**ローレン・バコール** (マンハッタン・ラプソディ)			
(オ)**イーサン・コーエン、ジョエル・コーエン**(ファーゴ)/(色)**ビリー・ボブ・ソーントン** (スリング・ブレイド)	**スコット・アレクサンダー、ラリー・カラゼフスキー** (ラリー・フリント)		**ジャック・オディアール** (慎み深い英雄/仏)	
ジョン・シール (イングリッシュ・ペイシェント)				
コーリャ/愛のプラハ (チェコ) (ヤン・スヴィエラーク)	**コーリャ/愛のプラハ** (チェコ) (ヤン・スヴィエラーク)			

▲「Shall we ダンス？」

▲「イングリッシュ・ペイシェント」

▼「秘密と嘘」

▼「KYOKO」

Digitized by Google

1996 平成8年

第70回 キネマ旬報賞	第51回 毎日映画コンクール	第39回 ブルーリボン賞	第20回 日本アカデミー賞	
Shall we ダンス? (周防正行)	**Shall we ダンス?** (周防正行)	**岸和田少年愚連隊** (井筒和幸)	**Shall we ダンス?** (周防正行)	**作品賞**
小栗康平 (眠る男)	**周防正行** (Shall we ダンス?)	**北野武** (キッズ・リターン)	**周防正行** (Shall we ダンス?)	**監督賞**
役所広司 (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	**役所広司** (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	**役所広司** (Shall we ダンス?、眠る男、シャブ極道)	**役所広司** (Shall we ダンス?)	**主演男優賞**
原田美枝子 (絵の中のぼくの村)	**高岡早紀** (KYOKO)	**該当者なし**	**草刈民代** (Shall we ダンス?)	**主演女優賞**
渡哲也(わが心の銀河鉄道 宮澤賢治物語)	**吉岡秀隆** (学校II)	**渡哲也**(わが心の銀河鉄道 宮澤賢治物語)	**竹中直人** (Shall we ダンス?)	**助演男優賞**
草村礼子 (Shall we ダンス?)	**草村礼子** (Shall we ダンス?)	**岸田今日子** (学校の怪談2、八つ墓村(1996))	**渡辺えり子** (Shall we ダンス?)	**助演女優賞**
周防正行 (Shall we ダンス?)	**周防正行** (Shall we ダンス?)		**周防正行** (Shall we ダンス?)	**脚本賞**
	丸池納 (眠る男)		**栢野直樹** (Shall we ダンス?)	**撮影賞**
イル・ポスティーノ(伊) (マイケル・ラドフォード)	**ユリシーズの瞳**(仏) (テオ・アンゲロプロス)	**セブン**(米) (デイヴィッド・フィンチャー)	**イル・ポスティーノ**(伊) (マイケル・ラドフォード)	**外国語映画賞**

渥美清が亡くなり、「男はつらいよ」シリーズが第48作「寅次郎紅の花」を最後に幕を閉じたこの年、中高年の客層をメインに「Shall we ダンス?」が16億という配収を収め、大ヒット。主演の役所広司が「眠る男」、「シャブ極道」での力演も重なり大きな注目を集める。

一方、若い観客には「スワロウテイル」がその主題歌と共に広く受け入れられ、監督岩井俊二という名前が完全に一つのブランドとなり、北野武はカンヌに「キッズ・リターン」を出品、「ガメラ2 レギオン襲来」や「岸和田少年愚連隊」等の興味深い作品もあった。

配収一位は邦画では「ゴジラVSデストロイア」、洋画では「ミッション・インポッシブル」、また、ブラッド・ピット主演の「セブン」のヒットにより、サイコ・サスペンス・ブームが起こった。

オスカーでは5部門を制した「ブレイブハート」の影で、作曲賞の受賞のみに終わったイタリア映画「イル・ポスティーノ」、あるいは、「ユージュアル・サスペクツ」といった小粒な作品にも多くの観客が集まった。

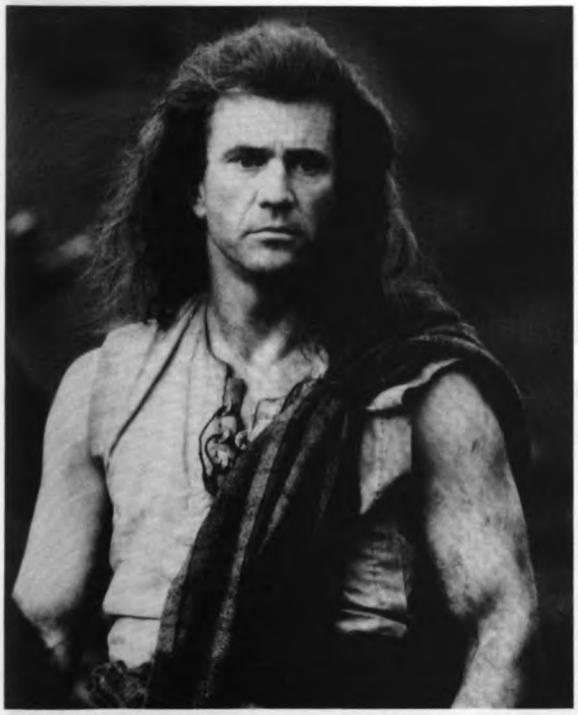
人気に乗じ、旧作「楽園の瑕」も公開されたウォン・カーウァイは「天使の涙」でさらに刺激的な映像を求めた。また、ヴィム・ヴェンダース監督から再審査を要請された映倫は新審査基準を設け、「愛のめぐりあい」の完全版の上映を認めた。

ジーン・ケリー、武満徹、クシシュトフ・キェシロフスキ、ルネ・クレマン、フランキー堺、クローデット・コルベール、アナベラ、マルチェロ・マストロヤンニ、小林正樹、マルセル・カルネが死去。

「周遊する蒸気船」(35)他ジョン・フォード監督作2本、「アルチバルド・デラクルスの犯罪的人生」(55)、「修道女」(66/69)、「ケス」(69)、「家庭」(70)、「万事快調」(72)、「ママと娼婦」(73)、「O侯爵夫人」(75)他エリック・ロメール監督作品4本、「逃げ去る恋」(79)、「嵐が丘」(85)、「恐怖分子」(86)、「デカローグ」(88)等の旧作が初公開された。

Digitized by Google

第68回 アカデミー賞	第53回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第48回 カンヌ国際映画祭	第45回 ベルリン映画祭
ブレイブハート (メル・ギブソン)	(ド)**いつか晴れた日に** (アン・リー) (ミ/コ)**ベイブ** (クリス・ヌーナン)	**シクロ**(仏=ヴェトナム) (トラン・アン・ユン)	**アンダーグラウンド** (仏) (エミール・クストリッツァ)	**ひとりぼっちの狩人たち**(仏) (ベルトラン・タヴェルニエ)
メル・ギブソン (ブレイブハート)	**メル・ギブソン** (ブレイブハート)		**マチュー・カソヴィッツ** (憎しみ/仏)	**リチャード・リンクレイター**(恋人までの距離〈ディスタンス〉/米)
ニコラス・ケイジ (リービング・ラスベガス)	(ド)**ニコラス・ケイジ** (リービング・ラスベガス) (ミ/コ)**ジョン・トラヴォルタ**(ゲット・ショーティ)	**ゲッツ・ゲオルグ** (殺人者)	**ジョナサン・プライス** (キャリントン/英)	**ポール・ニューマン** (ノーバディーズ・フール/米)
スーザン・サランドン (デッドマン・ウォーキング)	(ド)**シャロン・ストーン** (カジノ) (ミ/コ)**ニコール・キッドマン**(誘う女)	**サンドリーヌ・ボネール、イザベル・ユペール** (La Cérémonie/仏=独)	**ヘレン・ミレン** (英国万歳！/英)	**ジョセフィン・シャオ** (女人、四十/香港)
ケヴィン・スペイシー (ユージュアル・サスペクツ)	**ブラッド・ピット** (12モンキーズ)	**イアン・ハート** (ナッシング・パーソナル/英)		
ミラ・ソルヴィーノ (誘惑のアフロディーテ)	**ミラ・ソルヴィーノ** (誘惑のアフロディーテ)	**イザベラ・フェラーリ** (Romanzo di un giovane povero/仏=伊)		
(オ)**クリストファー・マックァーリー**(ユージュアル・サスペクツ) (色)**エマ・トンプソン** (いつか晴れた日に)	**エマ・トンプソン** (いつか晴れた日に)		**ミシェル・ブラン** (他人のそら似/仏)	
ジョン・トール (ブレイブハート)				
アントニア(オランダ) (マルレーン・ゴリス)	**レ・ミゼラブル**(仏) (クロード・ルルーシュ)			



▲「ブレイブハート」

▲「午後の遺言状」

▼「リービング・ラスベガス」

Digitized by Google

1995 平成7年

第69回 キネマ旬報賞	第50回 毎日映画コンクール	第38回 ブルーリボン賞	第19回 日本アカデミー賞	
午後の遺言状（新藤兼人）	**午後の遺言状**（新藤兼人）	**午後の遺言状**（新藤兼人）	**午後の遺言状**（新藤兼人）	作品賞
新藤兼人（午後の遺言状）	**新藤兼人**（午後の遺言状）	**金子修介**（ガメラ　大怪獣空中決戦）	**新藤兼人**（午後の遺言状）	監督賞
真田広之（写楽、EAST MEETS WEST、緊急呼出し/エマージェンシー・コール）	**役所広司**（KAMIKAZE TAXI）	**真田広之**（写楽、EAST MEETS WEST、緊急呼出し/エマージェンシー・コール）	**三國連太郎**（三たびの海峡）	主演男優賞
杉村春子（午後の遺言状）	**杉村春子**（午後の遺言状）	**中山美穂**（Love Letter）	**浅野ゆう子**（蔵）	主演女優賞
ミッキー・カーチス（KAMIKAZE TAXI） **竹中直人**（EAST MEETS WEST、GONIN）	**松方弘樹**（蔵）	**萩原聖人**（マークスの山）	**竹中直人**（EAST MEETS WEST）	助演男優賞
乙羽信子（午後の遺言状）	**鳳淵晴子**（遥かな時代の階段を、平成無責任一家/東京デラックス、眠れる美女）	**中山忍**（ガメラ　大怪獣空中決戦）	**乙羽信子**（午後の遺言状）	助演女優賞
新藤兼人（午後の遺言状）	**橋口亮輔**（渚のシンドバッド）		**新藤兼人**（午後の遺言状）	脚本賞
	鈴木達夫（写楽）		**鈴木達夫**（写楽）	撮影賞
マディソン郡の橋（米）（クリント・イーストウッド）	**ショーシャンクの空に**（米）（フランク・ダラボン）	**マディソン郡の橋**（米）（クリント・イーストウッド）	**ショーシャンクの空に**（米）（フランク・ダラボン）	外国語映画賞

フランスのリュミエール兄弟がシネマトグラフを発明してからちょうど百年目に当たるこの年、ヴェネツィアで是枝裕和の監督第一作「幻の光」が金のオゼッラ賞を獲得、また、「Love Letter」の公開がきっかけとなり、若者の間で岩井俊二ブームが巻き起こり、戦後50年にちなんで製作・公開された多くの戦争映画が低調だったのとは対照的に健闘した。

一方、老人問題を扱った（監督新藤兼人の妻・乙羽信子の遺作である）「午後の遺言状」は中高年の観客を多く集めた。前年のロンドン映画祭でプレミア上映され、好評を博した北野武の「みんな～やってるか！」が公開されるが、批評・興行共に不振に終わった。

邦画の配収一位は「耳をすませば」だったとはいえ、それまで配収の大きなシェアを占めていたアニメの勢いに翳りが見えてきた。それは「ダイ・ハード3」「スピード」、そして、トム・ハンクスの二年連続主演男優賞を含む6つのオスカーをもたらした「フォレスト・ガンプ　一期一会」や「マディソン郡の橋」、あるいはフランス映画「王妃マルゴ」といった大作がヒットしたからである。

また、ウォン・カーウァイ監督の「恋する惑星」のように、今までに一度も香港映画を見たことのない層にまで大きくアピールした作品もあった。

この年の物故者は、神代辰巳、ジンジャー・ロジャース、ラナ・ターナー、岡田英次、ルイ・マル、ディーン・マーティン等。「帽子箱を持った少女」(27) 他ボリス・バルネット監督作品2本、「マンハント」(41)、「オーソン・ウェルズ　イッツ・オール・トゥルー」(42/93)、「真珠湾攻撃」(43)、「スコピオ・ライジング」(63) 他ケネス・アンガー監督短編数本、「勝手に逃げろ／人生」(79)、「動くな、死ね、蘇れ！」(89)、ここ数年注目を浴びているイランのアッバス・キアロスタミ監督の「クローズ・アップ」(90) 他旧作3本が、そして「エド・ウッド」の公開を受けてエド・ウッド監督自身の代表作も初公開された。

Digitized by Google

第67回 アカデミー賞	第52回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第47回 カンヌ国際映画祭	第44回 ベルリン国際映画祭
フォレスト・ガンプ 一期一会 (ロバート・ゼメキス)	(ド)**フォレスト・ガンプ 一期一会** (ロバート・ゼメキス) (ミ/コ)**ライオン・キング**(ロジャー・アレーズ、ロブ・ミンコフ)	**愛情萬歳**(台湾) (ツァイ・ミンリャン) **ビフォア・ザ・レイン** (英=仏=マケドニア) (ミルチョ・マンチェフスキー)	**パルプ・フィクション** (米) (クエンティン・タランティーノ)	**父の祈りを**(アイルランド) (ジム・シェリダン)
ロバート・ゼメキス (フォレスト・ガンプ 一期一会)	**ロバート・ゼメキス** (フォレスト・ガンプ 一期一会)		**ナンニ・モレッティ** (ぼくの日記/伊)	**クシシュトフ・キェシロフスキ**(トリコロール/白の愛/仏=ポーランド)
トム・ハンクス (フォレスト・ガンプ 一期一会)	(ド)**トム・ハンクス** (フィラデルフィア) (ミ/コ)**ヒュー・グラント** (フォー・ウェディング)	**シャ・ユウ** (陽のあたる日々/中国=香港)	**ゲン・ユー** (生きる/中国=香港)	**トム・ハンクス** (フィラデルフィア/米)
ジェシカ・ラング (ブルースカイ)	(ド)**ジェシカ・ラング** (ブルースカイ) (ミ/コ)**ジェイミー・リー・カーティス**(トゥルーライズ)	**マリア・デ・メディロス** (三人兄弟/ポルトガル)	**ヴィルナ・リージ** (王妃マルゴ/仏)	**クリシー・ロック** (レディバード、レディバード/英)
マーティン・ランドー (エド・ウッド)	**マーティン・ランドー** (エド・ウッド)	**ロベルト・チトラン** (イル・トロ/伊)		
ダイアン・ウィースト (ブロードウェイと銃弾)	**ダイアン・ウィースト** (ブロードウェイと銃弾)	**ヴァネッサ・レッドグレイヴ**(リトル・オデッサ/米)		
(オ)**クエンティン・タランティーノ、ロジャー・エイヴァリー**(パルプ・フィクション) (色)**エリック・ロス**(フォレスト・ガンプ 一期一会)	**クエンティン・タランティーノ** (パルプ・フィクション)		**ミシェル・ブラン** (他人のそら似/仏)	
ジョン・トール (レジェンド・オブ・フォール/果てしなき想い)				
太陽に灼かれて(ロシア) (ニキータ・ミハルコフ)	**カストラート**(ベルギー) (ジェラール・コルビオ)			

▲「フォレスト・ガンプ　一期一会」

▲「忠臣蔵外伝四谷怪談」

▼「全身小説家」

▼「パルプ・フィクション」

Digitized by Google

第68回 キネマ旬報賞	第49回 毎日映画コンクール	第37回 ブルーリボン賞	第18回 日本アカデミー賞	
全身小説家（原一男）	**全身小説家**（原一男）	**棒の哀しみ**（神代辰巳）	**忠臣蔵外伝四谷怪談**（深作欣二）	作品賞
原一男（全身小説家）	**神代辰巳**（棒の哀しみ）	**神代辰巳**（棒の哀しみ）	**深作欣二**（忠臣蔵外伝四谷怪談）	監督賞
奥田瑛二（棒の哀しみ、極道記者2・馬券転生篇）	**奥田瑛二**（棒の哀しみ、極道記者2・馬券転生篇）	**奥田瑛二**（棒の哀しみ、極道記者2・馬券転生篇）	**佐藤浩市**（忠臣蔵外伝四谷怪談）	主演男優賞
高岡早紀（忠臣蔵外伝四谷怪談）	**吉永小百合**（女ざかり）	**高岡早紀**（忠臣蔵外伝四谷怪談）	**高岡早紀**（忠臣蔵外伝四谷怪談）	主演女優賞
中井貴一（四十七人の刺客）	**中村敦夫**（集団左遷）	**中村敦夫**（集団左遷）	**中井貴一**（四十七人の刺客）	助演男優賞
室井滋（居酒屋ゆうれい）	**室井滋**（居酒屋ゆうれい）	**室井滋**（居酒屋ゆうれい）	**室井滋**（居酒屋ゆうれい）	助演女優賞
田中陽造（居酒屋ゆうれい、夏の庭 The Friends）	**田中陽造**（居酒屋ゆうれい、夏の庭 The Friends）		**古田求、深作欣二**（忠臣蔵外伝四谷怪談）	脚本賞
	栢野直樹（800　TWO LAP RUNNERS）		**石原興**（忠臣蔵外伝四谷怪談）	撮影賞
ピアノ・レッスン（オーストラリア）（ジェーン・カンピオン）	**さらば、わが愛/覇王別姫**（香港）（チェン・カイコー）	**パルプ・フィクション**（米）（クエンティン・タランティーノ）	**シンドラーのリスト**（米）（スティーヴン・スピルバーグ）	外国語映画賞

7年ぶりの作品で批評家に高く評価され、ドキュメンタリーの可能性をあらためて思い知らせた原一男、神代辰巳、"忠臣蔵"を題材に「四十七人の刺客」の市川崑と対決した深作欣二といったベテラン監督が健在ぶりを示した。だが、日本映画の配収の50%以上が「平成狸合戦ぽんぽこ」を頂点とするアニメ作品という結果に終わった。

アメリカでは「シンドラーのリスト」がオスカー7部門で受賞、スティーヴン・スピルバーグが初の監督賞を手にした。また、アンナ・パキンに史上最年少の助演女優賞をもたらした「ピアノ・レッスン」には三つのオスカーが与えらえた。

この作品と共に前年のカンヌでパルム・ドールを分け合った「さらばわが愛／覇王別姫」や「風の丘を越えて／西便制」、ティエン・チュアンチュアンの「青い凧」（前年の東京国際映画祭、東京グランプリ受賞作）など作品的に評価の高かったアジア映画が興行的にも好成績を収めた。

この年のカンヌのパルム・ドールは賛否両論を巻き起こした「パルプ・フィクション」、全米の批評家からは絶賛された。「父の祈りを」が金熊賞を獲得したベルリンでは「月はどっちに出ている」にネットパック賞が贈られた。「みんな　やってるか？」がロンドン映画祭でジャーナリスト等に絶賛され、前作「ソナチネ」が、溝口、小津、黒澤作品共々英国BBC選出の映画史上ベスト100にランクされるなど、国際的評価が高まる一方の北野武がオートバイを酒気帯び運転の末、ガードレールに激突し、重傷を負った。

「スワンプ・ウォーター」(40)、「レディ・イヴ」(41)、「サリヴァンの旅」(42)、「ざ・鬼太鼓座」(81)、「映画というささやかな商売の栄華と衰退」(86)、「ゴダールの映画史第1章・第2章」(89)、「ギターはもう聞こえない」(91年ヴェネツィア銀獅子賞)等が正式に日本に紹介された。

ジョゼフ・コットン、デレク・ジャーマン、ジュリエッタ・マシーナ、ヘンリー・マンシーニ、バート・ランカスター、乙羽信子が死去した。

Digitized by Google

第66回 アカデミー賞	第51回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第46回 カンヌ国際映画祭	第43回 ベルリン国際映画祭
シンドラーのリスト (スティーヴン・スピルバーグ)	(ド)**シンドラーのリスト** (スティーブン・スピルバーグ) (ミ/コ)**ミセス・ダウト** (クリス・コロンバス)	**ショート・カッツ**(米) (ロバート・アルトマン) **トリコロール/青の愛** (仏) (クシシュトフ・キェシロフスキ)	**ピアノ・レッスン**(オーストラリア) (ジェーン・カンピオン) **さらば、わが愛/覇王別姫**(香港) (チェン・カイコー)	**香魂女/湖に生きる** (中国) (シェ・フェイ) **ウェディング・バンケット**(中国＝台湾) (アン・リー)
スティーヴン・スピルバーグ (シンドラーのリスト)	**スティーヴン・スピルバーグ** (シンドラーのリスト)		**マイク・リー** (ネイキッド/英)	**アンドリュー・バーキン** (ルナティック・ラブ-禁断の姉弟/英＝仏＝独)
トム・ハンクス (フィラデルフィア)	(ド)**トム・ハンクス** (フィラデルフィア) (ミ/コ)**ロビン・ウィリアムス**(ミセス・ダウト)	**ファブリッツィオ・ベンティヴォリオ** (A Soul Torn in Two/伊)	**デイヴィッド・シューリス** (ネイキッド/英)	**デンゼル・ワシントン** (マルコムX/米)
ホリー・ハンター (ピアノ・レッスン)	(ド)**ホリー・ハンター** (ピアノ・レッスン) (ミ/コ)**アンジェラ・バセット**(ティナ)	**ジュリエット・ビノシュ** (トリコロール/青の愛/仏)	**ホリー・ハンター** (ピアノ・レッスン/オーストラリア)	**ミシェル・ファイファー** (ラブ・フィールド/米)
トミー・リー・ジョーンズ(逃亡者)	**トミー・リー・ジョーンズ**(逃亡者)	**マルチェロ・マストロヤンニ**(一、二、三、太陽/仏)		
アンナ・パキン (ピアノ・レッスン)	**ウィノナ・ライダー**(エイジ・オブ・イノセンス　汚れなき情事)	**アンナ・ボナイユート** (あなたはどこ？私はここ/伊)		
(オ)**ジェーン・カンピオン**(ピアノ・レッスン) (色)**スチュアート・サイリアン**(シンドラーのリスト)				
ヤヌス・カミンスキー (シンドラーのリスト)		**スワロミール・イジャック**(トリコロール/青の愛/仏)		
ベルエポック(スペイン) (フェルナンド・トルエバ)	**さらば、わが愛/覇王別姫**(香港) (チェン・カイコー)			

▲「シンドラーのリスト」

▲「月はどっちに出ている」

▼「学校」

Digitized by Google

第67回 キネマ旬報賞	第48回 毎日映画コンクール	第36回 ブルーリボン賞	第17回 日本アカデミー賞	
月はどっちに出ている（崔洋一）	**月はどっちに出ている**（崔洋一）	**月はどっちに出ている**（崔洋一）	**学校**（山田洋次）	作品賞
崔洋一（月はどっちに出ている）	**市川準**（病院で死ぬということ）	**滝田洋二郎**（僕らはみんな生きている）	**山田洋次**（学校）	監督賞
真田広之（僕らはみんな生きている、眠らない街・新宿鮫）	**岸谷五郎**（月はどっちに出ている）	**真田広之**（僕らはみんな生きている）	**西田敏行**（学校）	主演男優賞
ルビー・モレノ（月はどっちに出ている）	**ルビー・モレノ**（月はどっちに出ている）	**ルビー・モレノ**（月はどっちに出ている）	**和久井映見**（虹の橋）	主演女優賞
岸部一徳（僕らはみんな生きている、水の旅人・侍KIDS、教祖誕生、病院で死ぬということ、帰って来た木枯し紋次郎、空がこんなに青いわけがない）	**田中健**（望郷）	**所ジョージ**（まあだだよ）	**田中邦衛**（学校、虹の橋）	助演男優賞
桜田淳子（お引越し）	**桜田淳子**（お引越し）	**香川京子**（まあだだよ）	**香川京子**（まあだだよ）	助演女優賞
崔洋一、鄭義信（月はどっちに出ている）	**崔洋一、鄭義信**（月はどっちに出ている） **松山善三**（虹の橋、望郷）		**山田洋次、朝間義隆**（学校）	脚本賞
	浜田毅（僕らはみんな生きている）		**斎藤孝雄、上田正治**（まあだだよ、虹の橋）	撮影賞
許されざる者（米）（クリント・イーストウッド）	**許されざる者**（米）（クリント・イーストウッド）	**ジュラシック・パーク**（米）（スティーヴン・スピルバーグ）	**ジュラシック・パーク**（米）（スティーヴン・スピルバーグ）	外国語映画賞

この年には、にっかつが倒産し、角川春樹が麻薬取締法違反で逮捕され、伊丹十三監督作「大病人」上映中のスクリーンが切り裂かれるといった衝撃的な事件が続いた。「ソナチネ」が受賞を逃したカンヌでプレミア上映された「まあだだよ」が予想外の不入りで、製作費を回収できなかった。

邦画の配収一位は「ゴジラVSモスラ」、人気テレビ・ドラマを映画化した「高校教師」も話題となったが、各映画賞を独占したのは「月はどっちに出ている」だった。また、石岡瑛子が「ドラキュラ」でアカデミー賞衣装デザイン賞を受賞、作品・監督賞を含む四部門でオスカーを手にしたのはクリント・イーストウッドの「許されざる者」だった。「ジュラシック・パーク」が映画史上に残る成績を残し、「ボディガード」もロングラン・ヒットとなった。

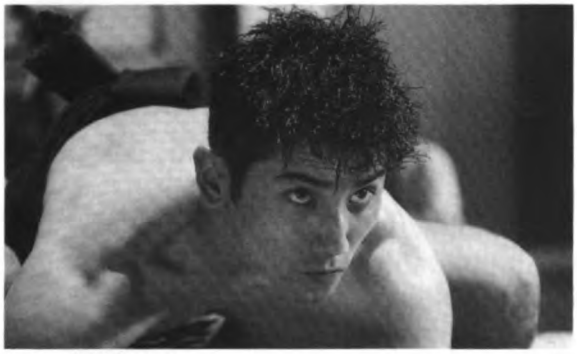
前年のヴェネツィアで「秋菊の物語」が金獅子賞、女優賞に輝き、今回のカンヌでは「戯夢人生」が審査員賞を、ベルリンではシェ・フェイの「香魂女　湖に生きる」とアン・リーの「ウェディング・バンケット」が金熊賞を獲得、中国語圏映画が完全に世界市場へ進出した。また、アッバス・キアロスタミ監督作品の相次ぐ公開によりイラン映画の存在も認知されることとなった。

「ボリシェヴィキの国におけるウェスト氏の異常な冒険」(24)、中国映画「十字路」(36)、「この空は君のもの」(43)、「一年の九日」(61)、「パリところどころ」(65)、「スウィート・スウィートバック」(71)、「セリーヌとジュリーは舟でゆく」(74)、「こわれゆく女」(75)他ジョン・カサヴェテス作品3本、「傷ついた男」(83)等の旧作も初公開された。

大和屋竺、オードリー・ヘップバーン、ジョゼフ・L・マンキーウィッツ、リリアン・ギッシュ、「野性の夜に」のシリル・コラール、ヴィンセント・プライス、マキノ雅広、フェデリコ・フェリーニ、リヴァー・フェニックスが死去した。この年に没後10年を迎えた寺山修司、また、生誕90周年の小津安二郎が再び注目を浴びた。

Digitized by Google

第65回 アカデミー賞	第50回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第45回 カンヌ国際映画祭	第42回 ベルリン国際映画祭
許されざる者 (クリント・イーストウッド)	(ド)**セント・オブ・ウーマン　夢の香り** (マーチン・ブレスト) (ミ/コ)**ザ・プレイヤー** (ロバート・アルトマン)	**秋菊の物語**(中国＝香港) (チャン・イーモウ)	**愛の風景**(スウェーデン＝デンマーク) (ビレ・アウグスト)	**わが街**(米) (ローレンス・カスダン)
クリント・イーストウッド (許されざる者)	**クリント・イーストウッド**(許されざる者)		**ロバート・アルトマン** (ザ・プレイヤー/米)	**ヤン・トロエル**(キャプテン/スウェーデン＝フィンランド＝デンマーク)
アル・パチーノ (セント・オブ・ウーマン 夢の香り)	(ド)**アル・パチーノ**(セント・オブ・ウーマン 夢の香り)／(ミ/コ)**ティム・ロビンス**(ザ・プレイヤー)	**ジャック・レモン** (摩天楼を夢みて/米)	**ティム・ロビンス** (ザ・プレイヤー/米)	**アーミン＝ミュラー・スタール** (マイセン幻影/英＝独＝伊)
エマ・トンプソン (ハワーズ・エンド)	(ド)**エマ・トンプソン**(ハワーズ・エンド)／(ミ/コ)**ミランダ・リチャードソン** (魅せられて四月)	**コン・リー** (秋菊の物語/中国＝香港)	**バルミラ・アウグスト** (愛の風景/スウェーデン＝デンマーク)	**マギー・チャン** (ロアン・リンユィ/阮玲玉/香港＝台湾)
ジーン・ハックマン (許されざる者)	**ジーン・ハックマン** (許されざる者)			
マリサ・トメイ (いとこのビニー)	**ジョーン・ブロウライト** (魅せられて四月)			
(オ)**ニール・ジョーダン**(クライング・ゲーム) (色)**ルース・プラワー・ジャブヴァーラ**(ハワーズ・エンド)	**ボー・ゴールドマン** (セント・オブ・ウーマン 夢の香り)			
フィリップ・ルースロ (リバー・ランズ・スルー・イット)				
インドシナ(仏) (レジス・バルニエ)	**インドシナ**(仏) (レジス・バルニエ)			



▲「シコふんじゃった。」

▲「ハワーズ・エンド」

▼「許されざる者」

▼「セント・オブ・ウーマン夢の香り」

Digitized by Google

1992 平成4年

第66回 キネマ旬報賞	第47回 毎日映画コンクール	第35回 ブルーリボン賞	第16回 日本アカデミー賞	
シコふんじゃった。(周防正行)	シコふんじゃった。(周防正行)	シコふんじゃった。(周防正行)	シコふんじゃった。(周防正行)	作品賞
周防正行(シコふんじゃった。)	東陽一(橋のない川)	周防正行(シコふんじゃった。)	周防正行(シコふんじゃった。)	監督賞
原田芳雄(寝取られ宗介)	長塚京三(ザ・中学教師、ひき逃げファミリー)	本木雅弘(シコふんじゃった。)	本木雅弘(シコふんじゃった。)	主演男優賞
大竹しのぶ(死んでもいい、復活の朝、夜逃げ屋本舗)	藤谷美和子(寝取られ宗介、女殺油地獄)	三田佳子(遠き落日)	三田佳子(遠き落日)	主演女優賞
村田雄浩(おこげ、ミンボーの女、ゴジラVSモスラ)	村田雄浩(おこげ、ミンボーの女)	室田日出男(修羅の伝説、死んでもいい)	竹中直人(シコふんじゃった。)	助演男優賞
藤谷美和子(寝取られ宗介、女殺油地獄)	乙羽信子(濹東綺譚)	藤谷美和子(寝取られ宗介、女殺油地獄)	藤谷美和子(寝取られ宗介、女殺油地獄)	助演女優賞
石井隆(死んでもいい)	丸山昇一(いつかギラギラする日)		周防正行(シコふんじゃった。)	脚本賞
	川上皓市(橋のない川)		長沼六男(おろしや国酔夢譚)	撮影賞
美しき諍い女(仏)(ジャック・リヴェット)	JFK(米)(オリヴァー・ストーン)	JFK(米)(オリヴァー・ストーン)	JFK(米)(オリヴァー・ストーン)	外国語映画賞

周防正行の「シコふんじゃった。」が各映画賞を総ナメしたこの年、映画人口が史上最低となったことを反映してか、松竹とフジテレビが提携し、第一、二部をテレビで放映し、完結編を劇場公開するという方式や、「外科室」のように入場料金を千円に設定した興行形態がとられたりもした。邦画の配収トップは「紅の豚」だった。

また、前年のカンヌ・グランプリに選ばれた「美しき諍い女」の公開に際して、ヘア論争が巻き起こり、映倫は審査基準の見直しをはかった。

洋画配収の上位は、「フック」、「エイリアン3」と続き、「氷の微笑」の大ヒットにより、シャロン・ストーンが一躍人気スターになった。そして、「ナイト・オン・ザ・プラネット」、レオス・カラックスの「ポンヌフの恋人」、リュック・ベッソンの「アトランティス」、「仕立て屋の恋」のヒットにより、単館興行が完全に定着した。

また、前年の東京国際映画祭で上映された「欲望の翼」のウォン・カーウァイ、「牯嶺街少年殺人事件」のエドワード・ヤンといったアジアからの二人の才能が確かに認められた。「ウルガ」は前年のヴェネツィア・グランプリ受賞作、ジョディ・フォスターが「羊たちの沈黙」で二度目のアカデミー主演女優賞に輝いている。

「国境の町」(33)他ボリス・バルネット監督作品2本、「赤い手のグッピー」(42)、「賭博師の娘」(51)、「エドワールとキャロリーヌ」(51)、「夏の遊び」(51)他ベルイマン監督作品2本、「河と死」(54)、「ムーンフリート」(55)、「ローラ」(60)、「ショック集団」(63)、「I LOVE YOU」(86)、「ヘンリー」(86)等の旧作が公開された。

「忠治旅日記」のプリントが広島で発見され、国立近代美術館フィルム・センターに寄贈される。また、「ミンボーの女」の伊丹十三監督が暴力団に襲われ、重傷を負うという事件もあった。

小川伸介、若山富三郎、サタジット・レイ、マレーネ・ディートリッヒ、五社英雄、アンソニー・パーキンス、厚田雄春が死去した。

Digitized by Google

第64回 アカデミー賞	第49回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第44回 カンヌ国際映画祭	第41回 ベルリン国際映画祭
羊たちの沈黙 (ジョナサン・デミ)	(ド)**バグジー** (バリー・レヴィンソン) (ミ/コ)**美女と野獣** (ゲーリー・トゥルースデイル、カーク・ワイズ)	**ウルガ**(ソ連=仏) (ニキータ・ミハルコフ)	**バートン・フィンク** (米) (ジョエル・コーエン)	**House of Smiles** (伊) (マルコ・フェレーリ)
ジョナサン・デミ (羊たちの沈黙)	**オリヴァー・ストーン** (JFK)		**ジョエル・コーエン** (バートン・フィンク/米)	**リッキー・トニャッティ** (Ultra/伊)/**ジョナサン・デミ**(羊たちの沈黙/米)
アンソニー・ホプキンス (羊たちの沈黙)	(ド)**ニック・ノルティ**(サウス・キャロライナ 愛と追憶の彼方)/(ミ/コ)**ロビン・ウィリアムス**(フィッシャー・キング)	**リヴァー・フェニックス** (マイ・プライベート・アイダホ/米)	**ジョン・タトゥーロ** (バートン・フィンク/米)	**メイナード・エジアシ** (ミスター・ジョンソン/英)
ジョディ・フォスター (羊たちの沈黙)	(ド)**ジョディ・フォスター**(羊たちの沈黙)/(ミ/コ)**ベット・ミドラー**(フォー・ザ・ボーイズ)	**ティルダ・スウィントン** (エドワードII/英)	**イレーヌ・ジャコブ** (ふたりのベロニカ/仏=ポーランド)	**ヴィクトリア・アブリル** (アマンテス、愛人/スペイン)
ジャック・パランス (シティ・スリッカーズ)	**ジャック・パランス** (シティ・スリッカーズ)		**サミュエル・L・ジャクソン** (ジャングル・フィーバー/米)	
マーセデス・ルール (フィッシャー・キング)	**マーセデス・ルール** (フィッシャー・キング)			
(オ)**カーリー・クォーリ** (テルマ&ルイーズ) (色)**テッド・タリー** (羊たちの沈黙)	**カーリー・クォーリ** (テルマ&ルイーズ)			
ロバート・リチャードソン (JFK)				
エーゲ海の天使(伊) (ガブリエーレ・サルバトレス)	**ヨーロッパ**(デンマーク=仏=独=スウェーデン) (ラース・フォン・トリアー)			

▲「羊たちの沈黙」

▲「あの夏、いちばん静かな海。」

▼「息子」

Digitized by Google

第65回 キネマ旬報賞	第46回 毎日映画コンクール	第34回 ブルーリボン賞	第15回 日本アカデミー賞	
息子 (山田洋次)	**息子** (山田洋次)	**あの夏、いちばん静かな海。** (北野武)	**息子** (山田洋次)	**作品賞**
山田洋次 (息子)	**山田洋次** (息子)	**北野武** (あの夏、いちばん静かな海。)	**岡本喜八** (大誘拐　RAINBOW KIDS)	**監督賞**
三國連太郎 (息子)	**永瀬正敏**(息子、喪の仕事、アジアンビート　アイ・ラブ・ニッポン)	**竹中直人** (無能の人)	**三國連太郎** (息子、釣りバカ日誌4)	**主演男優賞**
北林谷栄 (大誘拐　RAINBOW KIDS)	**北林谷栄** (大誘拐　RAINBOW KIDS)	**工藤夕貴** (戦争と青春)	**北林谷栄** (大誘拐　RAINBOW KIDS)	**主演女優賞**
永瀬正敏 (息子)	**三浦友和**(仔鹿物語、無能の人、江戸城大乱)	**永瀬正敏** (息子)	**永瀬正敏** (息子、喪の仕事)	**助演男優賞**
和久井映見 (息子、就職戦線異状なし)	**風吹ジュン** (無能の人)	**風吹ジュン** (無能の人)	**和久井映見** (息子、就職戦線異状なし)	**助演女優賞**
三谷幸喜と東京サンシャインボーイズ (12人の優しい日本人)	**三谷幸喜と東京サンシャインボーイズ** (12人の優しい日本人)		**岡本喜八** (大誘拐　RAINBOW KIDS)	**脚本賞**
	高羽哲夫 (息子)		**斎藤孝雄、上田正治** (八月の狂詩曲)	**撮影賞**
ダンス・ウィズ・ウルブス(米) (ケヴィン・コスナー)	**ダンス・ウィズ・ウルブス**(米) (ケヴィン・コスナー)	**羊たちの沈黙**(米) (ジョナサン・デミ)	**ダンス・ウィズ・ウルブス**(米) (ケヴィン・コスナー)	**外国語映画賞**

カンヌに招かれた黒澤明、岡本喜八、鈴木清順(「夢二」)といったベテランが揃って新作を発表、新人監督のデビューも50人を突破し、竹中直人の初監督作品はヴェネツィアで国際批評家連盟賞を与えられた。「あの夏、いちばん静かな海。」と「王手」は共に監督3作目となるが、映画評論家の興行的影響力のなさを指摘した北野武作品は読者選出では一位に輝いている。

邦画の配収上位は「おもひでぽろぽろ」をはじめとするアニメ作品で占められた。洋画では「ターミネーター2」が記録的な大ヒットとなり、「ホーム・アローン」、「プリティ・ウーマン」、「トータル・リコール」と共にその後に続いた「ダンス・ウィズ・ウルブス」はオスカー7部門を制した。ミニシアター・ブームに翳りが見えてきた中で、前年のカンヌのパルム・ドール受賞作「ワイルド・アット・ハート」が話題を集め、テレビ放映された「ツイン・ピークス」のヴィデオ発売も重なり、デヴィッド・リンチ・ブームが起こった。また、翌年にオスカーを手にすることになるジョナサン・デミ、コーエン兄弟、パトリス・ルコント、アキ・カウリスマキ、ジェーン・カンピオン等既に過去に数本の監督経験のある人たちが脚光を浴びた年でもある。

そして、「アタラント号」(34)、「われらの恋に雨が降る」(46)他ベルイマン監督作品が3本、「神の道化師フランチェスコ」他ロベルト・ロッセリーニ監督作品が2本、「黄金の馬車」(53)、「ナサリン」他ブニュエル監督作品4本、「ひなぎく」(69)、「保護なき純潔」(68)他ドゥシャン・マカヴィエフ監督作品二本、「ざくろの色」他セルゲイ・パラジャーノフ監督作品2本、「ありふれた愛のストーリー」(78)、「冬の旅」(85年ヴェネツィア・グランプリ受賞作)、「タキシード」(86)、「愛に関する短いフィルム」(88)、「いますぐ抱きしめたい」(88)等多くの旧作も公開された。

フランク・キャプラ、依田義賢、イヴ・モンタン、今井正、土原謙が死去した。

Digitized by Google

第63回 アカデミー賞	第48回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第43回 カンヌ国際映画祭	第40回 ベルリン国際映画祭
ダンス・ウィズ・ウルブス (ケヴィン・コスナー)	(ド)**ダンス・ウィズ・ウルブス**(ケヴィン・コスナー) (ミ/コ)**グリーン・カード**(ピーター・ウィアー)	**ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ**(英) (トム・ストッパード)	**ワイルド・アット・ハート**(米) (デイヴィッド・リンチ)	**つながれたヒバリ** (チェコ) (イジー・メンツェル) **ミュージック・ボックス**(米) (コンスタンチン・コスタ=ガヴラス)
ケヴィン・コスナー (ダンス・ウィズ・ウルブス)	**ケヴィン・コスナー** (ダンス・ウィズ・ウルブス)	**マーティン・スコセッシ** (グッドフェローズ/米)	**パーヴェル・ルンギン** (タクシー・ブルース/ソ連)	**ミヒャエル・ヴァーホーヴェン** (ナスティ・ガール/西独)
ジェレミー・アイアンズ (運命の逆転)	(ド)**ジェレミー・アイアンズ**(運命の逆転)/(ミ/コ)**ジェラール・ドパルデュー**(グリーン・カード)	**オレグ・ポリソフ** (たったひとりの目撃者/ブルガリア)	**ジェラール・ドパルデュー**(シラノ・ド・ベルジュラック/仏)	**イアン・グレン** (Silent Scream/英) **モーガン・フリーマン** (ドライビング・ミス・デイジー/米)
キャシー・ベイツ (ミザリー)	(ド)**キャシー・ベイツ**(ミザリー)/(ミ/コ)**ジュリア・ロバーツ**(プリティ・ウーマン)	**グロリア・ミュンヒメイヤー** (La luna en el espejo/チリ)	**クリスティナ・ヤンダ** (尋問/ポーランド)	**ジェシカ・タンディ** (ドライビング・ミス・デイジー/米)
ジョー・ペシ (グッドフェローズ)	**ブルース・デイヴィソン** (ロングタイム・コンパニオン)			
ウーピー・ゴールドバーグ (ゴースト　ニューヨークの幻)	**ウーピー・ゴールドバーグ** (ゴースト　ニューヨークの幻)			
(オ)**ブルース・ジョエル・ルービン**(ゴースト　ニューヨークの幻)/(色)**マイケル・ブレイク**(ダンス・ウィズ・ウルブス)		**ヘレ・リスリンゲ、ペーター・ポエンセン** (Sirup/デンマーク)		
ディーン・セムラー (ダンス・ウィズ・ウルブス)		**マウロ・マルシェッティ** (Ragazzi fuori/伊)		
ジャーニー・オブ・ホープ(スイス) (クサバー・コラー)	**シラノ・ド・ベルジュラック**(仏=ハンガリー) (ジャン・ポール・ラプノー)			

▲「櫻の園」

▼「死の棘」

▲「ダンス・ウィズ・ウルブス」

Digitized by Google

1990 平成2年

第64回 キネマ旬報賞	第45回 毎日映画コンクール	第33回 ブルーリボン賞	第14回 日本アカデミー賞	
櫻の園 (中原俊)	**少年時代** (篠田正浩)	**少年時代** (篠田正浩)	**少年時代** (篠田正浩)	**作品賞**
中原俊 (櫻の園)	**市川準** (つぐみ)	**篠田正浩** (少年時代)	**篠田正浩** (少年時代)	**監督賞**
岸部一徳 (死の棘)	**古尾谷雅人** (宇宙の法則、パチンコ物語)	**原田芳雄** (浪人街、われに撃つ用意あり)	**岸部一徳** (死の棘)	**主演男優賞**
松坂慶子 (死の棘)	**松坂慶子** (死の棘)	**松坂慶子** (死の棘)	**松坂慶子** (死の棘)	**主演女優賞**
石橋蓮司(浪人街、われに撃つ用意あり)	**石橋蓮司**(浪人街、われに撃つ用意あり)	**柳葉敏郎** (さらば愛しのやくざ)	**石橋蓮司**(公園通りの猫たち、浪人街、われに撃つ用意あり)	**助演男優賞**
香川京子 (式部物語)	**つみきみほ** (櫻の園)	**中嶋朋子** (つぐみ)	**石田えり**(釣りバカ日誌2、釣りバカ日誌3、飛ぶ夢をしばらく見ない)	**助演女優賞**
じんのひろあき (櫻の園)	**山田太一** (少年時代)		**山田太一** (少年時代)	**脚本賞**
	斎藤孝雄、上田正治 (夢)		**安藤庄平** (死の棘)	**撮影賞**
非情城市(台湾) (ホウ・シャオシェン)	**非情城市**(台湾) (ホウ・シャオシェン)	**フィールド・オブ・ドリームス**(米) (フィル・アルデン・ロビンソン)	**フィールド・オブ・ドリームス**(米) (フィル・アルデン・ロビンソン)	**外国語映画賞**

前年のヴェネツィアでの「非情城市」金獅子賞受賞をきっかけに、アジア映画が純粋に作品として、また、商品として評価される存在となり、「菊豆」のように日本の資本で撮られる作品も出てきた。また、「夢」がオープニング上映されたカンヌでは「死の棘」が、カンヌ・グランプリ90を受賞、各映画賞は「櫻の園」が総なめにした。また、批評家に総スカンを食った桑田佳佑初監督作「稲村ジェーン」が話題を集めた。

配収一位は角川春樹が四年ぶりにメガホンを取った「天と地と」、洋画では「バック・トゥ・ザ・フューチャーPART 2」。「ゴースト　ニューヨークの幻」、「ダイ・ハード2」もヒットした。前年のアカデミー賞で予想外の作品賞を受賞した「ドライビング・ミス・デイジー」、オリヴァー・ストーンが二度目の監督賞を手にした「7月4日に生まれて」、「マイ・レフトフット」も封切られた。ベルリンでは、社会主義体制を批判しているとして、69年の制作時以来上映が禁じられていた「つながれたヒバリ」の公開が解禁され、金熊賞に輝いた。「天国は待ってくれる」(43)、「揺れる大地　海の挿話」(48年ヴェネツィア国際賞)、「狩人の夜」(55)、「マンハッタンの二人の男」(58)、「獅子座」(59)、「裸のキッス」(64)、75年モスクワ映画祭で金賞に輝いた「あんなに愛しあったのに」(74)、「バロッコ」(76)、「オープニング・ナイト」(78年ベルリン主演女優賞)、「アマチュア」(79年モスクワ映画祭金賞)、「監督ミケーレの黄金の夢」(81年ヴェネツィア審査員特別賞)、「ホワイト・ドッグ」(82)、「自由、夜」(84年)、「冬冬の夏休み」(84)、「風櫃の少年」(84)、「ランデブー」(85)、「霧の中の風景」(88年ヴェネツィア銀獅子賞他受賞多数) 等の旧作が初公開された。

エヴァ・ガードナー、マウケル・パウエル、高峰三枝子、セルゲイ・パラジャーノフ、デルフィーヌ・セイリグ、ジャック・ドゥミが死去した。

Digitized by Google

第62回 アカデミー賞	第47回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第42回 カンヌ国際映画祭	第39回 ベルリン映画祭
ドライビング・ミス・デイジー (ブルース・ベレスフォード)	(ド)**7月4日に生まれて** (オリヴァー・ストーン) (ミ/コ)**ドライビング・ミス・デイジー** (ブルース・ベレスフォード)	**非情城市**(台湾) (ホウ・シャオシェン)	**セックスと嘘とビデオテープ**(米) (スティーヴン・ソダーバーグ)	**レインマン**(米) (バリー・レヴィンソン)
オリヴァー・ストーン (7月4日に生まれて)	**オリヴァー・ストーン** (7月4日に生まれて)		**エミール・クストリッツァ** (ジプシーのとき/ユーゴ)	**ドゥシャン・ハナーク** (アイ・ラブ、ユー・ラブ/チェコ)
ダニエル・デイ・ルイス (マイ・レフトフット)	(ド)**トム・クルーズ** (7月4日に生まれて) (ミ/コ)**モーガン・フリーマン** (ドライビング・ミス・デイジー)	**マルチェロ・マストロヤンニ、マッシモ・トロイージ**(Che ora é?/伊＝仏)	**ジェームズ・スペイダー** (セックスと嘘とビデオテープ/米)	**ジーン・ハックマン** (ミシシッピー・バーニング/米)
ジェシカ・タンディ (ドライビング・ミス・デイジー)	(ド)**ミシェル・ファイファー** (恋のゆくえ/ファビュラス・ベイカーボーイズ)/(ミ/コ)**ジェシカタンディ**(ドライビング・ミス・デイジー)	**ジェラルディン・ジェームズ、ベギー・アシュクロフト** (おかえりなさい、リリアン/英)	**メリル・ストリープ** (クライ・イン・ザ・ダーク/オーストラリア)	**イザベル・アジャーニ** (カミーユ・クローデル/仏)
デンゼル・ワシントン (グローリー)	**デンゼル・ワシントン** (グローリー)			
ブレンダ・フリッカー (マイ・レフトフット)	**ジュリア・ロバーツ** (マグノリアの花たち)			
(オ)**トム・シュルマン** (いまを生きる) (色)**アルフレッド・ウーリー** (ドライビング・ミス・デイジー)	**オリヴァー・ストーン、ロン・コヴィック** (7月4日に生まれて)	**ジュールス・ファイファー** (お家に帰りたい/仏)		
フレディ・フランシス (グローリー)		**ヨルゴス・アルベニティ**(オーストラリア/ベルギー＝仏＝スイス)		
ニュー・シネマ・パラダイス(伊＝仏) (ジュゼッペ・トルナトーレ)	**ニュー・シネマ・パラダイス**(伊＝仏) (ジュゼッペ・トルナトーレ)			

▲「黒い雨」

▲「7月4日に生まれて」

▼「恋のゆくえ／ファビュラス・ベイカーボーイズ」

▼「どついたるねん」

Digitized by Google

1989 平成1年

第63回 キネマ旬報賞	第44回 毎日映画コンクール	第32回 ブルーリボン賞	第13回 日本アカデミー賞	
黒い雨 (今村昌平)	**黒い雨** (今村昌平)	**どついたるねん** (阪本順治)	**黒い雨** (今村昌平)	作品賞
今村昌平 (黒い雨)	**舛田利雄** (社葬)	**舛田利雄** (社葬)	**今村昌平** (黒い雨)	監督賞
三國連太郎 (利休)	**三國連太郎** (利休、釣りバカ日誌)	**三國連太郎** (利休)	**三國連太郎** (利休、釣りバカ日誌2)	主演男優賞
田中好子 (黒い雨)	**田中好子** (黒い雨、ゴジラVSビオランテ)	**田中好子** (黒い雨)	**田中好子** (黒い雨)	主演女優賞
原田芳雄(どついたるねん、出張、キスより簡単、夢見通りの人々)	**原田芳雄**(どついたるねん、出張、キスより簡単、夢見通りの人々)	**坂東英二** (あ・うん)	**坂東英二** (あ・うん)	助演男優賞
相楽晴子 (どついたるねん)	**相楽晴子**(どついたるねん、ハラスのいた日々)	**南果歩**(夢見通りの人々、せんせい、蛍、226)	**市原悦子** (黒い雨)	助演女優賞
依田義賢 (千利休・本覚坊遺文)	**松田寛夫** (社葬)		**石堂淑朗、今村昌平** (黒い雨)	脚本賞
	森田富士郎 (利休)		**川又昂** (黒い雨)	撮影賞
ダイ・ハード(米) (ジョン・マクティアナン)	**ニュー・シネマ・パラダイス**(伊＝仏) (ジュゼッペ・トルナトーレ)	**ダイ・ハード**(米) (ジョン・マクティアナン)	**ダイ・ハード**(米) (ジョン・マクティアナン)	外国語映画賞

北野武や阪本順治が早くもそのデビュー作で確かな才能を示したこの年は、カンヌでも26歳のスティーヴン・ソダーバーグの初監督作品にパルム・ドールが贈られ、審査員特別賞を受賞した「ニュー・シネマ・パラダイス」は、「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」、「バグダット・カフェ」、「バベットの晩餐会」(88年アカデミー外国語映画賞受賞)と共に単館ロードショウ作品としてヒットを記録した。カンヌでは今村昌平が「黒い雨」で高等技術委員会賞を手にしている。

また、四百年遠忌にあわせ、千利休を題材に撮られた二本の映画のうちの一本「千利休・本覚坊遺文」がヴェネツィアで銀獅子賞を獲得。邦画では「魔女の宅急便」、洋画では「インディ・ジョーンズ／最後の聖戦」が配収第一位となった。前年のベルリン・グランプリの「赤いコーリャン」、「童年往時　時の流れ」「恋恋風塵」が公開され、台湾映画が一挙に注目され始めた。ジョン・カサヴェテスが亡くなったこの年、「ドゥ・ザ・ライト・シング」のスパイク・リー、「ミステリー・トレイン」(カンヌ最優秀芸術貢献賞)のジム・ジャームッシュ等が勢いづく一方、アメリカの一大メジャー、コロムビアが33億ドルで日本のソニーに買収され、変化の波が押し寄せたが、アカデミー賞ではオリヴァー・ストーンが二度目の監督賞を手にした。以外にもキネ旬外国映画ベストテンの一位に輝いたのは、アクション大作「ダイ・ハード」だった。「スミス夫妻」(41)、「生きるべきか　死ぬべきか」(42)、「ジーグフェルド・フォリーズ」(46)、「賭博師ボブ」(55)、「革命前夜」(64)、「クレールの膝」(70)、「WR・オルガニズムの神秘」(71)、「さすらい」(76)、「バイバイ・モンキー　コーネリアスの夢」(77)等の旧作が正式に初公開され、セルジオ・レオーネ、美空ひばり、ローレンス・オリヴィエ、ベティ・デイヴィス、松田優作が死去した。山形国際ドキュメンタリー映画祭が初めて開催された。

Digitized by Google

第61回 アカデミー賞	第46回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第41回 カンヌ国際映画祭	第38回 ベルリン映画祭
レインマン (バリー・レヴィンソン)	(ド)**レインマン** (バリー・レヴィンソン) (ミ/コ)**ワーキング・ガール** (マイク・ニコルズ)	**聖なる酔っぱらいの伝説**(伊) (エルマンノ・オルミ)	**ペレ**(デンマーク=スウェーデン) (ビレ・アウグスト)	**紅いコーリャン**(中国) (チャン・イーモウ)
バリー・レヴィンソン (レインマン)	**クリント・イーストウッド** (バード)	**テオ・アンゲロプロス** (霧の中の風景/ギリシア=仏)	**フェルナンド・E・ソラナス**(スール　その先は……愛/アルゼンチン)	**ノーマン・ジュイソン** (月の輝く夜に/米)
ダスティン・ホフマン (レインマン)	(ド)**ダスティン・ホフマン** (レインマン)/(ミ/コ)**トム・ハンクス**(ビッグ)	**ドン・アメチー、ジョー・マンティーニャ** (週末はマフィアと!/米)	**フォレスト・ウィティカー** (バード/米)	**イェルク・ポーゼ、マンフレッド・メック**(Bear Ye One Another's Burdens/東独)
ジョディ・フォスター (告発の行方)	(ド)**ジョディ・フォスター**(告発の行方)**シャーリー・マクレーン**(マダム・スザーツカ)**シガーニー・ウィーヴァー**(愛は霧のかなたに)/(ミ/コ)**メラニー・グリフィス**(ワーキング・ガール)	**イザベル・ユペール**(主婦マリーがしたこと/仏)**シャーリー・マクレーン**(マダム・スザーツカ/英)	**バーバラ・ハーシー、ジョディ・メイ、リンダ・ムブシ** (ワールド・アパート/英)	**ホリー・ハンター** (ブロードキャスト・ニュース/米)
ケヴィン・クライン(ワンダとダイヤと優しい奴ら)	**マーティン・ランドー** (タッカー)			
ジーナ・デイヴィス (偶然の旅行者)	**シガーニー・ウィーヴァー**(ワーキング・ガール)			
(オ)**ロナルド・バス、バリー・モロー**(レインマン)/(色)**クリストファー・ハンプトン**(危険な関係)	**ナオミ・フォーナー** (旅立ちの時)	**ペドロ・アルモドヴァル** (神経衰弱ぎりぎりの女たち/スペイン)		
ピーター・ビジュー (ミシシッピー・バーニング)		**ワジム・ユソフ** (Cherni Monakh/ソ連)		
ペレ(デンマーク=スウェーデン) (ビレ・アウグスト)	**ペレ**(デンマーク=スウェーデン) (ビレ・アウグスト)			

▲「告発の行方」

▲「異人たちとの夏」

▼「敦煌」

▼「レインマン」

Digitized by Google

1988 昭和63年

第62回 キネマ旬報賞	第43回 毎日映画コンクール	第31回 ブルーリボン賞	第12回 日本アカデミー賞	
となりのトトロ（宮崎駿）	**となりのトトロ**（宮崎駿）	**敦煌**（佐藤純彌）	**敦煌**（佐藤純彌）	作品賞
黒木和雄（TOMORROW・明日）	**大林宣彦**（異人たちとの夏）	**和田誠**（快盗ルビイ）	**佐藤純彌**（敦煌）	監督賞
真田広之（快盗ルビイ）	**ハナ肇**（会社物語）	**ハナ肇**（会社物語）	**西田敏行**（敦煌）	主演男優賞
桃井かおり（TOMORROW・明日、木村家の人びと、噛む女）	**小泉今日子**（快盗ルビイ）	**桃井かおり**（木村家の人びと、噛む女、TOMORROW・明日）	**吉永小百合**（つる、華の乱）	主演女優賞
片岡鶴太郎（異人たちとの夏）	**大地康雄**（マルサの女2、バカヤロー！、ほんの5g）	**片岡鶴太郎**（異人たちとの夏）	**片岡鶴太郎**（異人たちとの夏、幼女の時代）	助演男優賞
秋吉久美子（異人たちとの夏）	**秋吉久美子**（異人たちとの夏）	**秋吉久美子**（異人たちとの夏）	**石田えり**（嵐が丘、ダウンタウン・ヒーローズ、華の乱）	助演女優賞
荒井春彦（待ち濡れた女、噛む女、リボルバー）	**鎌田敏夫**（いこかもどろか）		**市川森一**（異人たちとの夏）	脚本賞
	林淳一郎（嵐が丘、郷愁）		**椎塚彰**（敦煌）	撮影賞
ラストエンペラー（伊＝英＝中国）（ベルナルド・ベルトルッチ）	**戦場の小さな天使たち**（英）（ジョン・ブアマン）	**ベルリン・天使の詩**（西独＝仏）（ヴィム・ヴェンダース）	**ラストエンペラー**（伊＝英＝中国）（ベルナルド・ベルトルッチ）	外国語映画賞

日活がロマン・ポルノに終止符を打ったこの年、「TOMORROW／明日」、「火垂るの墓」、「さくら隊散る」といった戦争をテーマにした映画が目立った。また、各テレビ局が競うように映画製作にかかわり、ヒット作「優駿」を製作したフジテレビは若手監督の育成に着手し、滝田洋二郎の「木村家の人々」が生まれた。配収トップは邦画では「敦煌」、洋画では、前年のアカデミー賞で作品賞、坂本龍一に与えられたオリジナル作曲賞を含む9部門で賞をとった「ラスト・エンペラー」だった。このころからアメリカを中心とする海外で伊丹十三作品の人気が沸騰した。

「ウォール街」、「月の輝く夜に」（88年ベルリン監督賞も）といった前年のオスカー受賞作、あるいは同年にカンヌ・グランプリに輝いた「悪魔の陽の下に」、ヴェネツィア金獅子賞受賞作「さよなら子供たち」も封切られた。この87年にカンヌで監督賞をとった「ベルリン　天使の詩」が単館で30週に渡って上映され、記録的なヒットとなり、ヴィム・ヴェンダースが注目されることになった。

ミニ・シアターの隆盛により、「タバコ・ロード」（41）、「ハイ・シエラ」（41）、「偉大なるアンバーソン家の人々」（42）、「キャット・ピープル」（42）、「ストーミー・ウェザー」（43）、「恐怖省」（44）、「夜の人々」（49）、「浜辺の女」（48）、「イタリア旅行」（53）、「殺し」（62）、「捕えられた伍長」（62）、「モード家の一夜」（68）、「ラストムービー」（71）、「都会のアリス」（74）、「ブロンテ姉妹」（78）、「ポゼッション」（80年カンヌ主演女優賞）、「ピショット」（80）、「パルジファル」（81）、遺作「ファスビンダーのケレル」（82）、「マカロニ」（85）、「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」（85）、「汚れた血」（86）等数多くの旧作が初公開された。

89年の正月興行より一般入場料が1700円に値上げされた。

宇野重吉、加藤嘉、エメリック・プレスバーガーが死去した。

Digitized by Google

第60回 アカデミー賞	第45回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第40回 カンヌ国際映画祭	第37回 ベルリン映画祭
ラストエンペラー (ベルナルド・ベルトルッチ)	(ド)**ラストエンペラー** (ベルナルド・ベルトルッチ) (ミ/コ)**戦場の小さな天使たち** (ジョン・ブアマン)	**さよなら子供たち**(仏) (ルイ・マル)	**悪魔の陽の下に**(仏) (モーリス・ピアラ)	**テーマ　田舎の出会い**(ソ連) (グリエイブ・パンフィーロフ)
ベルナルド・ベルトルッチ (ラストエンペラー)	**ベルナルド・ベルトルッチ** (ラストエンペラー)		**ヴィム・ヴェンダース** (ベルリン・天使の詩/西独・仏)	**オリヴァー・ストーン** (プラトーン)
マイケル・ダグラス (ウォール街)	(ド)**マイケル・ダグラス**(ウォール街)/(ミ/コ)**ロビン・ウィリアムス**(グッドモーニング・ベトナム)	**ジェームズ・ウィルビー、ヒュー・グラント** (モーリス／英)	**マルチェロ・マストロヤンニ** (黒い瞳/伊)	**ジャン・マリア・ヴォロンテ** (首相暗殺/伊)
シェール (月の輝く夜に)	(ド)**サリー・カークランド**(アンナ)/(ミ/コ)**シェール**(月の輝く夜に)	**カン・スヨン** (シバジ／韓国)	**バーバラ・ハーシー** (或る人々/米)	**アーナー・ベアトリス・ノウゲイラー** (Vera/ブラジル)
ショーン・コネリー (アンタッチャブル)	**ショーン・コネリー** (アンタッチャブル)			
オリンピア・デュカキス(月の輝く夜に)	**オリンピア・デュカキス**(月の輝く夜に)			
(オ)**ジョン・パトリック・シャンリー**(月の輝く夜に)/(色)**ベルナルド・ベルトルッチ、マーク・ペプロー**(ラストエンペラー)	**ベルナルド・ベルトリッチ、マーク・ペプロー** (ラストエンペラー)			
ヴィットリオ・ストラーロ (ラストエンペラー)				
バベットの晩餐会(デンマーク) (ガブリエル・アクセル)	**マイライフ・アズ・ア・ドッグ**(スウェーデン) (ラッセ・ハルストレム)			

▲「マルサの女」

▲「さよなら子供たち」

▼「ラストエンペラー」

▼「ゆきゆきて、神軍」

Digitized by Google

1987 昭和62年

第61回 キネマ旬報賞	第42回 毎日映画コンクール	第30回 ブルーリボン賞	第11回 日本アカデミー賞	
マルサの女 (伊丹十三)	**マルサの女** (伊丹十三)	**マルサの女** (伊丹十三)	**マルサの女** (伊丹十三)	**作品賞**
伊丹十三 (マルサの女)	**原一男** (ゆきゆきて、神軍)	**原一男** (ゆきゆきて、神軍)	**伊丹十三** (マルサの女)	**監督賞**
時任三郎 (永遠の2/1、ハワイアン・ドリーム)	**津川雅彦** (マルサの女、別れぬ理由)	**陣内孝則** (ちょうちん)	**山崎努** (マルサの女)	**主演男優賞**
宮本信子 (マルサの女)	**十朱幸代** (夜汽車、螢川)	**三田佳子** (別れぬ理由)	**宮本信子** (マルサの女)	**主演女優賞**
津川雅彦 (マルサの女、別れぬ理由)	**三船敏郎** (男はつらいよ・知床慕情)	**三船敏郎** (男はつらいよ・知床慕情)	**津川雅彦** (マルサの女、夜汽車)	**助演男優賞**
桜田淳子 (イタズ-熊-)	**石田えり** (ちょうちん)	**秋吉久美子** (夜汽車)	**かたせ梨乃** (極道の妻たちII、吉原炎上)	**助演女優賞**
伊丹十三 (マルサの女)	**伊丹十三** (マルサの女)		**伊丹十三** (マルサの女)	**脚本賞**
	五十畑幸男 (映画女優)		**姫田真左久** (螢川)	**撮影賞**
グッドモーニング・バビロン！(伊＝仏＝米) (パオロ＆ヴィットリオ・タヴィアーニ)	**バウンティフルへの旅** (米) (ピーター・マスターソン)	**アンタッチャブル**(米) (ブライアン・デ・パルマ)	**プラトーン**(米) (オリヴァー・ストーン)	**外国語映画賞**

この年、レンタルビデオ等の影響で、若者の劇場離れが進み、映画興行に深刻な影を落とした。そんななか、「極私的エロス・恋歌1974」以来13年ぶりの作品で興行的にも成功を収めた「ゆきゆきて神軍」、「1000年刻みの日時計・牧野村物語」、高畑勲の「柳川掘割物語」といったドキュメンタリー、CM界からデビューした新人監督市川準の「BU・SU」といった作品が脚光を浴びた。

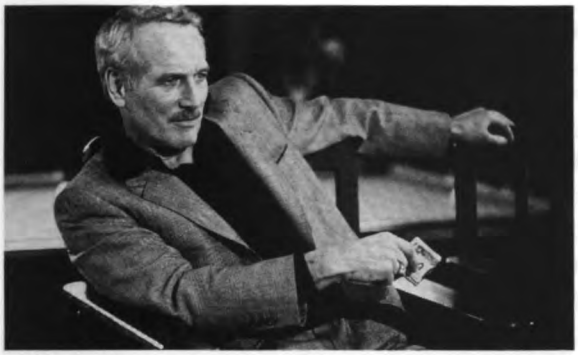
「女衒」と共にカンヌに出品された三國連太郎の初監督作品「親鸞・白い道」が審査員特別賞を受賞、ベルリンでは「海と毒薬」に銀熊賞が贈られた。配収の一位は邦画では「ハチ公物語」、洋画では「トップガン」だった。前年のアカデミー賞で、作品賞を含む4部門で受賞した「プラトーン」が評判となり、大ヒットを記録、3部門で受賞の「眺めのいい部屋」、同じく3部門の「ハンナとその姉妹」、「愛は静けさの中に」、等の同賞受賞作も封切られた。「右側に気をつけろ」がプレミア上映された第二回東京国際映画祭の初のコンペティション部門では、グランプリを中国映画「古井戸」が受賞した。

「男たちの挽歌」(86)がヒット、従来の香港映画と異なる魅力を持った“香港ノワール”として評判になった。アンドレイ・タルコフスキー監督の遺作「サクリファイス」(86年審査員特別グランプリ)、「死刑執行人もまた死す」(43)、「紳士協定」(47年アカデミー作品賞、監督賞、助演女優賞)、「エル」(52)他ルイス・ブニュエル監督作品四本、「アメリカの友人」(77)、「溝の中の月」(82)、「デッドゾーン」(83)、「満月の夜」(84)、「ブラッド・シンプル」(84)、「マイ・ビューティフル・ランドレット」(85)、等の旧作が初公開された。

ハリウッド生誕百年のこの年、ダグラス・サーク、アンディ・ウォーホル、亀井文夫、リタ・ヘイワース、鶴田浩二、フレッド・アステア、石原裕次郎、ジョン・ヒューストン、リー・マーヴィン、ボブ・フォッシー、リノ・ヴァンチュラが死去した。

Digitized by Google

第59回 アカデミー賞	第44回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第39回 カンヌ国際映画祭	第36回 ベルリン映画祭
プラトーン (オリヴァー・ストーン)	(ド)**プラトーン** (オリヴァー・ストーン) (ミ/コ)**ハンナとその姉妹** (ウディ・アレン)	**緑の光線**(仏) (エリック・ロメール)	**ミッション**(英) (ローランド・ジョフィ)	**シュタムハイム**(西独) (ラインハート・ハウフ)
オリヴァー・ストーン (プラトーン)	**オリヴァー・ストーン** (プラトーン)		**マーティン・スコセッシ** (アフター・アワーズ/米)	**ゲオルギー・シェンゲラーヤ** (若き作曲家の旅/ソ連)
ポール・ニューマン (ハスラー2)	(ド)**ボブ・ホスキンズ** (モナリザ) (ミ/コ)**ポール・ホーガン** (クロコダイル・ダンディー)	**カルロ・デッレ・ピアーネ** (クリスマス・プレゼント/伊)	**ミシェル・ブラン**(タキシード/仏)**ボブ・ホスキンズ**(モナリザ/英)	**トゥンセル・クルティズ** (子羊のほほ笑み/イスラエル)
マーリー・マトリン (愛は静けさの中に)	(ド)**マーリー・マトリン** (愛は静けさの中に) (ミ/コ)**シシー・スペイセク** (ロンリー・ハート)	**ヴァレリア・ゴリノ** (愛の物語/伊)	**バーバラ・スコヴァ** (ローザ・ルクセンブルク/西独) **フェルナンダ・トアーレイス** (いつまでも私を愛して/ブラジル)	**シャルロット・ヴァランドレイ**(赤い接吻/仏) **マルセリア・カルターホウ**(星の時間/ブラジル)
マイケル・ケイン (ハンナとその姉妹)	**トム・ベレンジャー** (プラトーン)			
ダイアン・ウィースト (ハンナとその姉妹)	**マギー・スミス** (眺めのいい部屋)			
(オ)**ウディ・アレン**(ハンナとその姉妹)/(色)**ルース・プラワー・ジャブヴァーラ**(眺めのいい部屋)	**ロバート・ボウルト** (ミッション)			
クリス・メンジス (ミッション)				
追想のかなた(オランダ) (フォウンズ・ラディメイカーズ)	**追想のかなた**(オランダ) (フォウンズ・ラディメイカーズ)			



▲「ハスラー2」

▲「火宅の人」

▼「海と毒薬」

▼「眺めのいい部屋」

Digitized by Google

1986昭和61年

第60回 キネマ旬報賞	第41回 毎日映画コンクール	第29回 ブルーリボン賞	第10回 日本アカデミー賞	
海と毒薬（熊井啓）	**海と毒薬**（熊井啓）	**ウホッホ探検隊**（根岸岸太郎）	**火宅の人**（深作欣二）	作品賞
熊井啓（海と毒薬）	**熊井啓**（海と毒薬）	**熊井啓**（海と毒薬）	**深作欣二**（火宅の人）	監督賞
内田裕也（コミック雑誌なんかいらない！）	**奥田瑛二**（海と毒薬）	**田中邦衛**（ウホッホ探検隊）	**緒方拳**（火宅の人）	主演男優賞
秋野暢子（片翼だけの天使）	**いしだあゆみ**（火宅の人、時計Adieu l'Hiver）	**いしだあゆみ**（火宅の人、時計Adieu l'Hiver）	**いしだあゆみ**（火宅の人、時計Adieu l'Hiver）	主演女優賞
植木等（新　喜びも悲しみも幾歳月）	**植木等**（新　喜びも悲しみも幾歳月、愛しのチィパッパ）	**すまけい**（キネマの天地）	**植木等**（祝辞、新　喜びも悲しみも幾歳月）	助演男優賞
いしだあゆみ（火宅の人、時計Adieu l'Hiver）	**村瀬幸子**（人間の約束）	**大竹しのぶ**（波光きらめく果て）	**原田美枝子**（火宅の人、国士無双、ブルシアンブルーの肖像）	助演女優賞
森田芳光（ウホッホ探検隊）	**内田裕也、高木功**（コミック雑誌なんかいらない！）		**神波史男、深作欣二**（火宅の人）	脚本賞
	山崎善弘（人間の約束、離婚しない女）		**木村大作**（火宅の人）	撮影賞
ストレンジャー・ザン・パラダイス（米）（ジム・ジャームッシュ）	**カイロの紫のバラ**（米）（ウディ・アレン）	**カラーパープル**（米）（スティーヴン・スピルバーグ）	**バック・トゥ・ザ・フューチャー**（米）（ロバート・ゼメキス）	外国語映画賞

レンタルも含めたビデオ産業が急成長を遂げ、地方では映画興行を圧倒する勢力となり、レイトショー、早朝興行など興行形態にも多様化の様相を示したこの年、時代劇のメッカと言われた大映京都撮影所が閉鎖、一方松竹大船50周年記念映画「キネマの天地」が作られた。

アカデミー賞では、「乱」が監督賞をはじめ四部門でノミネートされたが、そのうちワダ・エミが衣装デザイン賞を手にした。配収のトップは洋画では「バック・トゥ・ザ・フューチャー」（前年12月封切り）、邦画ではフジテレビの大量なテレビ・スポットが功を奏した「子猫物語」だった。例によって前年に賞をとった「愛と哀しみの果て」（スピルバーグの「カラー・パープル」と各賞を争い、結果的に作品賞以下アカデミー賞7部門制覇）、「パパは出張中！」（カンヌ・グランプリ）、「カイロの紫のバラ」（カンヌ国際批評家賞）が封切られた。

また、ジム・ジャームッシュ監督の「ストレンジャー・ザン・パラダイス」（84年カンヌ・カメラ・ドール受賞）、「ダウン・バイ・ロー」が話題となり、NYインディーズが注目され、「ピンク・フラミンゴ」（72）に代表されるカルト映画の年になった。

「ヒズ・ガール・フライデー」（40）、「ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ」（42）、「オーソン・ウェルズのフォルスタッフ」（66年カンヌ映画祭20周年記念特別賞、高等技術委員会賞）、「やさしい女」（69）、「放蕩息子の帰還」（76）、「群れ」（78）、「アレクサンドリアWHY」（78）、「パーマネント・バケーション」（80）、「ある女の存在証明」（82年カンヌ映画祭35周年記念特別賞）、「ゴダールのマリア」（83）、「ラルジャン」（83年カンヌ監督賞、全米批評家協会監督賞受賞作）、「黄色い大地」（84）、「シテール島への船出」（84年カンヌ国際批評家連盟賞）等の旧作が初公開された。

オットー・プレミンジャー、ヴィンセント・ミネリ、増村保造、ケーリー・グラント、アンドレイ・タルコフスキーが死去した。

Digitized by Google

第58回 アカデミー賞	第43回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第38回 カンヌ国際映画祭	第35回 ベルリン映画祭
愛と哀しみの果て (シドニー・ポラック)	(ド)**愛と哀しみの果て** (シドニー・ポラック) (ミ/コ)**女と男の名誉** (ジョン・ヒューストン)	**冬の旅**(仏) (アニエス・ヴァルダ)	**パパは出張中！**(ユーゴ) (エミール・クストリッツァ)	**ウェザビー**(英) (デイヴィッド・ヘア) **女と見知らぬ男**(西独) (ライナー・ジーモン)
シドニー・ポラック (愛と哀しみの果て)	**ジョン・ヒューストン** (女と男の名誉)		**アンドレ・テシネ** (ランデヴー/仏)	**ロバート・ベントン** (プレイス・イン・ザ・ハート/米)
ウィリアム・ハート (蜘蛛女のキス)	(ド)**ジョン・ヴォイト**(暴走機関車)/(ミ/コ)**ジャック・ニコルソン**(女と男の名誉)	**ジェラール・ドパルデュー** (ソフィー・マルソーの刑事物語／仏)	**ウィリアム・ハート** (蜘蛛女のキス/ブラジル＝米)	**フェルナンド・フェルナン＝ゴメス** (Stico/スペイン)
ジェラルディン・ペイジ (バウンティフルへの旅)	(ド)**ウーピー・ゴールドバーグ**(カラーパープル) (ミ/コ)**キャスリーン・ターナー**(女と男の名誉)		**ノルマ・アレアンドロ** (オフィシャル・ストーリー/アルゼンチン) **シェール**(マスク/米)	**ジョー・ケネディ** (Wrong World/オーストラリア)
ドン・アメチー (コクーン)	**クラウス・マリア・ブラウンダウアー**(愛と哀しみの果て)			
アンジェリカ・ヒューストン(女と男の名誉)	**メグ・ティリー** (アグネス)			
(オ)**アール・W・ウォーレス、ウイリアム・ケリー**(刑事ジョン・ブック 目撃者)/(色)**カート・リュードック**(愛と哀しみの果て)	**ウディ・アレン** (カイロの紫のバラ)			
デイヴィッド・ワトキン (愛と哀しみの果て)				
オフィシャル・ストーリー(アルゼンチン) (ルイス・プエンソ)	**オフィシャル・ストーリー**(アルゼンチン) (ルイス・プエンソ)			

▲「蜘蛛女のキス」

▲「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」

▼「愛と哀しみの果て」

Digitized by Google

1985昭和60年

第59回 キネマ旬報賞	第40回 毎日映画コンクール	第28回 ブルーリボン賞	第9回 日本アカデミー賞	
それから（森田芳光）	**乱**（黒澤明）	**乱**（黒澤明）	**花いちもんめ。**（伊藤俊也）	作品賞
森田芳光（それから）	**黒澤明**（乱）	**森田芳光**（それから）	**澤井信一郎**（早春物語、Wの悲劇）	監督賞
北大路欣也（火まつり、夢千代日記、春の鐘）	**北大路欣也**（火まつり、春の鐘）	**北大路欣也**（火まつり）	**千秋実**（花いちもんめ。）	主演男優賞
倍賞美津子（生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言、恋文、友よ、静かに暮れ）	**倍賞美津子**（生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言、恋文、友よ、静かに暮れ）	**倍賞美津子**（友よ、静かに暮れ、恋文）	**倍賞美津子**（生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言、恋文、友よ、静かに暮れ）	主演女優賞
小林薫（それから、パラダイスビュー）	**井川比佐志**（乱、タンポポ）	**小林薫**（それから、恋文）	**小林薫**（それから、恋文）	助演男優賞
藤田弓子（潮降り物語、さびしんぼう）	**藤真利子**（薄化粧）	**藤田弓子**（さびしんぼう）	**三田佳子**（Wの悲劇、春の鐘）	助演女優賞
筒井ともみ（それから）	**中上健次**（火まつり） **加藤祐司**（台風クラブ）		**松田寛夫**（花いちもんめ。）	脚本賞
	前田米造（それから、CHECCKERS in TANTANたぬき、野蛮人のように）		**前田米造**（それから、CHECCKERS in TANTANたぬき、野蛮人のように）	撮影賞
アマデウス（米）（ミロシュ・フォアマン）	**田舎の日曜日**（仏）（ベルトラン・タヴェルニエ）	**刑事ジョン・ブック目撃者**（米）（ピーター・ウィアー）	**アマデウス**（米）（ミロシュ・フォアマン）	外国語映画賞

56年の自作をリメイクし、この年市川崑、黒澤明、イングマル・ベルイマン（82年にアカデミー賞4部門に輝いた「ファニーとアレクサンドル」）、デイヴィッド・リーン等巨匠の作品が相次いで公開。また、第一回東京国際映画祭が開催され、特例により、ヘア限定解禁された。ヤング・シネマ・グランプリ85は「台風クラブ」。

また、多くの映画祭が企画される一方で、劇場未公開作が盛んにビデオ・ソフト化され、そこからスプラッター・ムービーに人気が集まった。

日本公開こそ見送られたが、ポール・シュレーダー監督の「MISHIMA」の美術を手掛けた石岡瑛子にカンヌで芸術貢献賞が贈られた。前年の同映画祭でグランプリ及び国際批評家賞受賞の「パリ、テキサス」、ベルトラン・タヴェルニエが監督賞を獲得した「田舎の日曜日」、前年のアカデミー賞受賞作「アマデウス」、「プレイス・イン・ザ・ハート」、「キリング・フィールド」も封切られた。配収第一位は洋画では「ゴーストバスターズ」（封切りは前年12月）だった。

「黒い神と白い悪魔」(64)、「アンナ・マグダレーナ・バッハの日記」(67)、「ミツバチのささやき」(73)、「インディア・ソング」(75)、「三人の女」(77)、「光年のかなた」(80年カンヌ審査員特別賞)、「血の婚礼」(81)、「ル・バル」(82)、「路」(82年カンヌ・グランプリ作)、「海辺のポーリーヌ」(83年ベルリン監督賞)、「エル・スール」(83)、「愛の記念に」(83)、「ラヴ・ストリームス」(84年ベルリン金熊賞）等の旧作が正式に公開され、日本ではほとんど無名に近かった監督の作品が興行的にも成功するようになった。

加藤泰、「夢千代日記」が遺作となった浦山桐郎、夏目雅子、永田雅一、ルイーズ・ブルックス、シモーヌ・シニョレ、ロック・ハドソン、オーソン・ウェルズ、ユル・ブリンナーが死去。

Digitized by Google

第57回 アカデミー賞	第42回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第37回 カンヌ国際映画祭	第34回 ベルリン映画祭
アマデウス (ミロシュ・フォアマン)	(ド)**アマデウス** (ミロシュ・フォアマン) (ミ/コ)**ロマンシング・ストーン　秘宝の谷** (ロバート・ゼメキス)	**太陽の年** (ポーランド＝西独＝米) (クシシュトフ・ザヌーシ)	**パリ、テキサス**(西独) (ヴィム・ヴェンダース)	**ラヴ・ストリームス** (米) (ジョン・カサヴェテス)
ミロシュ・フォアマン (アマデウス)	**ミロシュ・フォアマン** (アマデウス)		**ベルトラン・タヴェルニエ** (田舎の日曜日/仏)	**エットーレ・スコラ** (ル・バル/仏)
F・マーレイ・エイブラハム (アマデウス)	(ド)**F・マーレイ・エイブラハム**(アマデウス)(ミ/コ)**ダドリー・ムーア**(ミッキー＆モード)	**ナスィールッディーン・シャー** (Paar／インド)	**アルフレッド・ランダ、フランシスコ・ラバル** (無垢なる聖者/スペイン)	**アルバート・フィニー** (ドレッサー/英)
サリー・フィールド (プレイス・イン・ザ・ハート)	(ド)**サリー・フィールド**(プレイス・イン・ザ・ハート)、(ミ/コ)**キャスリーン・ターナー**(ロマンシング・ストーン 秘宝の谷)	**パスカル・オジェ** (満月の夜／仏)	**ヘレン・ミレン** (キャル/英)	**モニカ・ヴィッティ** (Flirt/伊)
ハイン・S・ニョール (キリング・フィールド)	**ハイン・S・ニョール** (キリング・フィールド)			
ベギー・アシュクロフト(インドへの道)	**ベギー・アシュクロフト** (インドへの道)			
(オ)**ロバート・ベントン**(プレイス・イン・ザ・ハート)/(色)**ピーター・シェーファー**(アマデウス)	**ピーター・シェーファー** (アマデウス)		**テオ・アンゲロプロス、テオ・ヴァルティノス、トニーノウ・グエッラ** (シテール島への船出/ギリシア)	
クリス・メンジス (キリング・フィールド)				
La diagonale du fou(スイス) (リチャード・デンボー)	**インドへの道**(英) (デイヴィッド・リーン)			

▲「お葬式」

▲「プレイス・イン・ザ・ハート」

▼「アマデウス」

▼「Wの悲劇」

Digitized by Google

1984昭和59年

第58回 キネマ旬報賞	第39回 毎日映画コンクール	第27回 ブルーリボン賞	第8回 日本アカデミー賞	
お葬式（伊丹十三）	Wの悲劇（澤井信一郎）	瀬戸内少年野球団（篠田正浩）	お葬式（伊丹十三）	作品賞
伊丹十三（お葬式）	伊丹十三（お葬式）	伊丹十三（お葬式）	伊丹十三（お葬式）	監督賞
山崎努（お葬式、さらば箱舟）	山崎努（お葬式、さらば箱舟）	山崎努（お葬式、さらば箱舟）	山崎努（お葬式、さらば箱舟）	主演男優賞
吉永小百合（おはん、天国の駅）	吉永小百合（おはん、天国の駅）	薬師丸ひろ子（Wの悲劇）	吉永小百合（おはん、天国の駅）	主演女優賞
高品格（麻雀放浪記）	高品格（麻雀放浪記）	高品格（麻雀放浪記）	高品格（麻雀放浪記）	助演男優賞
三田佳子（Wの悲劇）	三田佳子（Wの悲劇、序の舞）	三田佳子（Wの悲劇）	菅井きん（お葬式、必殺！）	助演女優賞
澤井信一郎、荒井春彦（Wの悲劇）	荒井晴彦、澤井信一郎（Wの悲劇）		伊丹十三（お葬式）	脚本賞
	宮川一夫（瀬戸内少年野球団）		宮川一夫（瀬戸内少年野球団）	撮影賞
ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ（米）（セルジオ・レオーネ）	ドレッサー（米）（ピーター・イェーツ）	ライトスタッフ（米）（フィリップ・カウフマン）	ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ（米）（セルジオ・レオーネ）	外国語映画賞

伊丹十三と和田誠の二人の非職業監督の活躍が目覚ましかったこの年、有楽座、日比谷映画、丸の内ピカデリー等の老舗洋画上映館が50年の歴史に幕を閉じ、東京銀座有楽町の旧日劇跡に有楽町センタービル（マリオン）が建てられ、映画館複合化の時代を迎えた。9月には国立近代美術館フィルムセンターの倉庫内で火災が発生し、内外の貴重なフィルムの数々を消失した。

邦画の配収成績は、角川映画が相変わらずの強さを見せ、「里見八犬伝」（前年12月封切り）、「愛情物語」と「メイン・テーマ」の二本立てが一位と二位を占めた。新人監督の処女作、第二作ラッシュが続く中で、澤井信一郎の「Wの悲劇」が大好評、撮影所出身監督の意地と実力を見せた。洋画の配収トップは「インディ・ジョーンズ　魔宮の伝説」、二、三位には「キャノンボール2」、「プロジェクトA」が並び、ジャッキー・チェン人気が上昇、核爆発の前後数日間を描き、米ABC-TVで放映され、高視聴率をマークした「ザ・デイ・デイ・アフター」が劇場公開され、話題を集めた。

また、前年のヴェネツィア・グランプリ受賞作「カルメンという名の女」、同年のオスカーで作品賞以下五部門で受賞の「愛と追憶の日々」、リンダ・ハントが助演女優賞をとった「危険な年」、同じくカンヌでアンドレイ・タルコフスキーに監督賞が贈られた「ノスタルジア」も封切られた。

中川信夫、ジョセフ・ロージー、リチャード・バートン、フランソワ・トリュフォー、サム・ペキンパーが死去、黒澤明にフランスからレジオン・ドヌール勲章が授与された。

「銀河」(68)、「マーラー」(74)、「ラ・パロマ」(75)、「セブン・ビューティーズ」(75)、ブニュエルの遺作「欲望のあいまいな対象」(77)、「特別な一日」(77)、「ハンガリアン狂詩曲」(78年カンヌ審査員特別賞)、「パッション・ダモーレ」(80) 等の旧作が初公開され、「カルメン」(84) の興行的成功がミニ・シアター・ブームに火をつけた。

Digitized by Google

第56回 アカデミー賞	第41回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第36回 カンヌ国際映画祭	第33回 ベルリン映画祭
愛と追憶の日々 (ジェームズ・L・ブルックス)	(ド)**愛と追憶の日々** (ジェームズ・L・ブルックス) (ミ/コ)**愛のイエントル**(バーブラ・ストライサンド)	**カルメンという名の女**(仏) (ジャン=リュック・ゴダール)	**楢山節考**(日) (今村昌平)	**Ascendancy**(英) (エドワード・ベネット) **La Colmena**(スペイン) (マリオ・カミュ)
ジェームズ・L・ブルックス (愛と追憶の日々)	**バーブラ・ストライサンド** (愛のイエントル)		**ロベール・ブレッソン**(ラルジャン/仏)**アンドレイ・タルコフスキー**(ノスタルジア/ソ連)	**エリック・ロメール** (海辺のポーリーヌ/仏)
ロバート・デュヴァル (テンダー・マーシー)	(ド)**ロバート・デュヴァル**(テンダー・マーシー)**トム・コートネイ**(ドレッサー)/(ミ/コ)**マイケル・ケイン**(リタと大学教授)	**マシュー・モディーン、マイケル・ライト、ミッチェル・リヒテンシュタイン、デイヴィッド・アラン・グリア、ガイ・ボイド、ジョージ・ズンザ**(ストリーマーズ　若き兵士たちの物語/(米) **ダーリン・レジディムス**(マルチニックの少年/仏)	**ジャン・マリア・ヴォロンテ** (La Mort de Mario Ricci/伊)	**ブルース・ダーン** (栄光の季節/米)
シャーリー・マクレーン (愛と追憶の日々)	(ド)**シャーリー・マクレーン**(愛と追憶の日々)/(ミ/コ)**ジュリー・ウォルターズ**(リタと大学教授)		**ハンナ・シグラ** (ピエラ　愛の遍歴/西独)	**イフゲーニヤ・グルーシェンコ**(Vlublen po sobstvennomu Zelanij/ソ連)
ジャック・ニコルソン (愛と追憶の日々)	**ジャック・ニコルソン** (愛と追憶の日々)			
リンダ・ハント (危険な年)	**シェール** (シルクウッド)			
(オ)**ホートン・フット** (テンダー・マーシー) (色)**ジェームズ・L・ブルックス** (愛と追憶の日々)	**ジェームズ・L・ブルックス** (愛と追憶の日々)			
スヴェン・ニクヴィスト (ファニーとアレクサンデル)		**ラウール・クタール** (カルメンという名の女/仏)		
ファニーとアレクサンデル(スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)	**ファニーとアレクサンデル**(スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)			

▲「天城越え」

▲「戦場のメリークリスマス」

▼「愛と追憶の日々」

Digitized by Google

1983 昭和58年

第57回 キネマ旬報賞	第38回 毎日映画コンクール	第26回 ブルーリボン賞	第7回 日本アカデミー賞	
家族ゲーム（森田芳光）	**戦場のメリークリスマス**（大島渚）	**東京裁判**（小林正樹）	**楢山節考**（今村昌平）	作品賞
森田芳光（家族ゲーム）	**大島渚**（戦場のメリークリスマス）	**森田芳光**（家族ゲーム）	**五社英雄**（陽暉楼）	監督賞
松田優作（家族ゲーム、探偵物語）	**緒形拳**（楢山節考、陽暉楼、魚影の群れ、オキナワの少年）	**緒形拳**（楢山節考、陽暉楼、魚影の群れ、オキナワの少年）	**緒形拳**（楢山節考、陽暉楼、魚影の群れ）	主演男優賞
田中裕子（天城越え）	**田中裕子**（天城越え）	**田中裕子**（天城越え）	**小柳ルミ子**（白蛇抄）	主演女優賞
伊丹十三（家族ゲーム、細雪）	**ビートたけし**（戦場のメリークリスマス）	**田中邦衛**（逃がれの街、居酒屋兆治）	**風間杜夫**（陽暉楼、人生劇場）	助演男優賞
永島暎子（竜二）	**由紀さおり**（家族ゲーム）	**永島映子**（竜二）	**浅野温子**（陽暉楼、汚れた英雄）	助演女優賞
森田芳光（家族ゲーム）	**大島渚**（戦場のメリークリスマス） **森田芳光**（家族ゲーム）		**高田宏治**（陽暉楼）	脚本賞
	椎塚彰（南極物語）		**森田富士郎**（陽暉楼、伊賀忍法帖）	撮影賞
ソフィーの選択（米）（アラン・J・パクラ）	**ソフィーの選択**（米）（アラン・J・パクラ）	**フラッシュダンス**（米）（エイドリアン・ライン）	**愛と青春の旅立ち**（米）（テイラー・ハックフォード）	外国語映画賞

この年には「南極物語」(59.5億円)、「E.T.」(96億円) という日本の映画配収史上に残る記録的なヒット作が、邦洋双方から生まれた。さらに「スター・ウォーズ　ジェダイの復讐」、「フラッシュダンス」「007オクトパシー」「ランボー」「愛と青春の旅立ち」等のヒット（異色作「食人族」(81)もその中に含まれる）により、前年には一億五千万人台に落ち込んでいた映画人口が一億七千万人台に復帰し、映画界を大いに活気づけた。

「戦場のメリークリスマス」と共にカンヌに出品された「楢山節考」がグランプリを獲得、日本映画健在を世界に知らしめ、興行的にも成功した。森田芳光、崔洋一、相米慎二、川島透、「神田川淫乱戦争」の黒沢清といった新勢力が一挙に脚光を浴びると共に、長編ドキュメンタリー「東京裁判」も好評を博した。また、「ふるさと」の加藤嘉がモスクワ映画祭で主演男優賞を、ロカルノ映画祭で松田優作に特別奨励賞が贈られるなど、海外の映画祭で日本映画の受賞が相次いだ。

前年のオスカー受賞作「ガンジー」（作品賞を含む八部門）、「ソフィーの選択」、「トッツィー」も封切られている。また、東急、西武が映画館進出を果たし、ミニ・シアターにも人気が集まり、前年のカンヌで監督賞を受賞した「フィツカラルド」や審査員特別賞に輝いた「サン・ロレンツォの夜」等のヨーロッパ映画が高い評価を集めた。

「ポケットの中の握り拳」(65)、「アギーレ・神の怒り」(72)、「赤い影」(73)、「ミラレパ」(73)、「天国の日々」(78年アカデミー撮影賞、カンヌ監督賞)、「エボリ」(79年モスクワ映画祭金賞)、「ディーバ」(81)、「隣の女」(81) といった旧作も正式公開された。

この年には寺山修司、金子正次、山本薩夫、ジョージ・キューカー、ルイ・ド・フュネス、モーリス・ロネ、グロリア・スワンソン、デイヴィッド・ニーヴン、ルイス・ブニュエル、ロバート・アルドリッチが亡くなっている。

Digitized by Google

第55回 アカデミー賞	第40回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第35回 カンヌ国際映画祭	第32回 ベルリン映画祭
ガンジー (リチャード・アッテンボロー)	(ド)**E.T.** (スティーヴン・スピルバーグ) (ミ/コ)**トッツィー** (シドニー・ポラック)	**ことの次第**(西独) (ヴィム・ヴェンダース)	**ミッシング**(米) (コンスタンチン・コスタ=ガヴラス) **路〈みち〉**(トルコ) (ユルマズ・ギュネイ)	**ベロニカ・フォスのあこがれ**(西独) (ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー)
リチャード・アッテンボロー (ガンジー)	**リチャード・アッテンボロー** (ガンジー)		**ヴェルナー・ヘルツォーク** (フィツカラルド/西独)	**マリオ・モニチェッリ** (グリッソ侯爵/伊)
ベン・キングスレー (ガンジー)	(ド)**ベン・キングスレー** (ガンジー)/(ミ/コ)**ダスティン・ホフマン**(トッツィー)		**ジャック・レモン** (ミッシング/米)	**ミシェル・ピコリ**(Une Etrange affaire/仏)**ステラン・スカルスガールド**(Den enfaldige Mördaren/スウェーデン)
メリル・ストリープ (ソフィーの選択)	(ド)**メリル・ストリープ**(ソフィーの選択)/(ミ/コ)**ジュリー・アンドリュース**(ビクター/ビクトリア)		**エドヴィガ・ヤンコフスカ**(Another Look/ハンガリー)	**カトリン・ザス** (Bürgschaft für ein Jahr/東独)
ルイス・ゴセット・ジュニア(愛と青春の旅だち)	**ルイス・ゴセット・ジュニア**(愛と青春の旅だち)			
ジェシカ・ラング (トッツィー)	**ジェシカ・ラング** (トッツィー)			
(色)**コンスタンチン・コスタ=ガヴラス、ドナルド・スチュアート**(ミッシング)/(オ)**ジョン・ブライリー**(ガンジー)				
ビリー・ウィリアムズ、ロニー・テイラー (ガンジー)				
Volver a Empezar (To Begin Again) (スペイン)	**ガンジー**(英) (リチャード・アッテン・ボロー)			

▲「蒲田行進曲」

▲「ガンジー」

▼「トッツィー」

Digitized by Google

1982昭和57年

第56回 キネマ旬報賞	第37回 毎日映画コンクール	第25回 ブルーリボン賞	第6回 日本アカデミー賞	
蒲田行進曲（深作欣二）	**蒲田行進曲**（深作欣二）	**蒲田行進曲**（深作欣二）	**蒲田行進曲**（深作欣二）	作品賞
深作欣二（蒲田行進曲）	**深作欣二**（蒲田行進曲）	**深作欣二**（蒲田行進曲）	**深作欣二**（蒲田行進曲）	監督賞
根津甚八（さらば愛しき大地）	**西村晃**（マタギ）	**渥美清**（男はつらいよ・寅次郎あじさいの恋、同・花も嵐も寅次郎）	**平田満**（蒲田行進曲）	主演男優賞
松坂慶子（蒲田行進曲、道頓堀川）	**松坂慶子**（蒲田行進曲）	**夏目雅子**（鬼龍院花子の生涯）	**松坂慶子**（蒲田行進曲、道頓堀川）	主演女優賞
平田満（蒲田行進曲）		**柄本明**（男はつらいよ・寅次郎あじさいの恋、道頓堀川）	**風間杜夫**（蒲田行進曲）	助演男優賞
小柳ルミ子（誘拐報道）		**山口美也子**（さらば愛しき大地）	**小柳ルミ子**（誘拐報道）	助演女優賞
				脚本賞
				撮影賞
		E.T.（米）（スティーヴン・スピルバーグ）		外国語映画賞

「愛のコリーダ」裁判、控訴審で無罪確定、検察側は上告を断念。この年、にっかつが70周年、東宝が50周年、ATGが20周年を迎え、特にATGは「TATOO〈刺青〉あり」、「九月の冗談クラブバンド」、「生きている小平次」の記念作品を公開し、高く評価された。また、若松孝二、和泉聖治らピンク映画で活躍した監督が一般映画に進出、独立プロの製作が目立ち、その製作本数は大手と肩を並べるようになった。そして、日中国交回復十周年のこの年、初めて本格的な合作映画「未完の対局」が製作・公開され、ヒットを記録した・配収の一位は、邦画では「セーラー服と機関銃」、洋画では「ブッシュマン」、「少林寺」も一大ブームとなった。

この年のアカデミー賞の科学技術部門では富士フィルムが開発した映画用好感度フィルム「フジカラーネガフィルム」A250に賞が贈られた。老夫婦を演じたヘンリー・フォンダとキャサリン・ヘップバーンに揃って男女優賞が与えられた「黄昏」、作品賞を獲ったイギリス映画「炎のランナー」、外国語映画賞を贈られたハンガリー映画「メフィスト」といった前年のオスカー受賞作も封切られた。前年のカンヌではこの「メフィスト」に国際批評家賞が、「鉄の男」にグランプリが与えられたが、この年には「ミッシング」（主演男優賞も）が「路」とグランプリを分けあった。

ロミー・シュナイダー、ジョン・ベルーシ、ウォーレン・オーツ、ライナー・ウェルナー・ファスビンダー、ヘンリー・フォンダ、イングリッド・バーグマン、グレース・ケリー、佐分利信、ジャック・タチが死去。「ゲームの規則」(39)、「未知への飛行」(64)、「熊座の淡き星影」(65年ヴェネツィア金獅子賞受賞)、「鏡の中の女」(75)、「1900年」(76)、「ハンガリアン」(77)、「デュエリスト　決闘者」(77)、「父　パードレ・パドローネ」(77年カンヌ・グランプリ、国際批評家賞)、「アレクサンダー大王」(80)、「終電車」(80) 等の旧作も正式公開された。

Digitized by Google

第54回 アカデミー賞	第39回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第34回 カンヌ国際映画祭	第31回 ベルリン映画祭
炎のランナー (ヒュー・ハドソン)	(ド)**黄昏** (マーク・ライデル) (ミ/コ)**ミスター・アーサー** (スティーヴ・ゴードン)	**鉛の時代**(西独) (マルガレーテ・フォン・トロッタ)	**鉄の男**(ポーランド) (アンジェイ・ワイダ)	**急け、急げ**(スペイン) (カルロス・サウラ)
ウォーレン・ベイティ (レッズ)	**ウォーレン・ベイティ** (レッズ)			
ヘンリー・フォンダ (黄昏)	(ド)**ヘンリー・フォンダ** (黄昏)/(ミ/コ)**ダドリー・ムーア**(ミスター・アーサー)		**ウーゴ・トニャッティ** (ある愚か者の悲劇ⓥ/伊)	**ジャック・レモン**(マイ・ハート マイ・ラブ/米) **アナトリ・ソロニツィン**(Dwadzat' Schesr dney is shisni Dostojewskogo/ソ連)
キャサリン・ヘップバーン (黄昏)	(ド)**メリル・ストリープ**(フランス軍中尉の女)/(ミ/コ)**バーナデット・ピーターズ**(ベニーズ・フロム・ヘブンⓥ)		**イザベル・アジャーニ** (カルテット、ポゼッション/仏)	**バルバラ・グラボフスカ** (Goraczka/ポーランド)
ジョン・ギールグッド (ミスター・アーサー)	**ジョン・ギールグッド** (ミスター・アーサー)		**イアン・ホルム** (炎のランナー/英)	
モーリーン・ステイプルトン(レッズ)	**ジョーン・ハケット** (泣かないで)		**エレナ・ソロヴェイ** (Fakt/ソ連)	
(オ)**コリン・ウェランド**(炎のランナー) (色)**アーネスト・トンプソン**(黄昏)	**アーネスト・トンプソン** (黄昏)		**イシュトヴァーン・サボー、ペーター・ドバイ**(メフィスト/ハンガリー)	
ヴィットリオ・ストラーロ (レッズ)				
メフィスト(ハンガリー) (イシュトヴァーン・サボー)	**炎のランナー**(英) (ヒュー・ハドソン)			

▲「レッズ」

▼「泥の河」

▲「駅 STATION」

▼「黄昏」

Digitized by Google

1981 昭和56年

第55回 キネマ旬報賞	第36回 毎日映画コンクール	第24回 ブルーリボン賞	第5回 日本アカデミー賞	
泥の河（小栗康平）	**泥の河**（小栗康平）	**泥の河**（小栗康平）	**駅 STATION**（降旗康男）	**作品賞**
小栗康平（泥の河）	**小栗康平**（泥の河）	**根岸吉太郎**（遠雷、狂った果実）	**小栗康平**（泥の河）	**監督賞**
永島敏行（遠雷、幸福）	**田村高廣**（泥の河）	**永島敏行**（遠雷）	**高倉健**（駅 STATION）	**主演男優賞**
倍賞千恵子（駅 STATION）	**倍賞千恵子**（駅 STATION、男はつらいよ・浪花の恋の寅次郎）	**松坂慶子**（青春の門、男はつらいよ・浪花の恋の寅次郎）	**松坂慶子**（青春の門、男はつらいよ・浪花の恋の寅次郎）	**主演女優賞**
中村嘉葎雄（陽炎座、ラブレター）		**津川雅彦**（マノン）	**中村嘉葎雄**（ブリキの勲章、陽炎座）	**助演男優賞**
加賀まりこ（泥の河、陽炎座、ラブレター）		**田中裕子**（北斎漫画、ええじゃないか）	**田中裕子**（北斎漫画、ええじゃないか）	**助演女優賞**
倉本聰（駅 STATION）	**倉本聰**（駅 STATION）		**倉本聰**（駅 STATION）	**脚本賞**
	木村大作（駅 STATION）	**安藤庄平**（スタッフ賞＝泥の河、遠雷の撮影に対して）	**安藤庄平**（泥の河）	**撮影賞**
ブリキの太鼓（西独）（フォルカー・シュレンドルフ）		**ブリキの太鼓**（西独）（フォルカー・シュレンドルフ）	**ブリキの太鼓**（西独）（フォルカー・シュレンドルフ）	**外国語映画賞**

各国の映画祭で絶賛され、注目を浴びた「泥の河」の小栗康平、「の・ようなもの」の森田芳光、「野菊の墓」の澤井信一郎ら前年にも増して、新人監督の擡頭が目立った。「連合艦隊」が邦画配収一位となり、「二百三高地」に続いて成功を収め、戦争ものの企画も増えていった。百恵・友和コンビにかわり、たのきんトリオ主演作がシリーズ化され、人気を集め、「ツィゴイネルワイゼン」の余勢を駆って、「陽炎座」も同じ形態で今度は全国縦断上映された。黒澤明は、日本アカデミー賞をボイコット、同賞の意義、運営について再び論争が巻き起こった。にっかつロマン・ポルノが十周年を迎える一方、「愛のコリーダ」裁判の第二審が始まった。

前年にロバート・レッドフォードが監督第一作にしてオスカーを手にした「普通の人々」、ロバート・デ・ニーロに初のオスカーをもたらした「レイジング・ブル」が封切られたが、アメリカ映画の興行的な低調が続いた。本国ではこの年に現在のサンダンス映画祭の前進となるUSフィルム・フェスティヴァルが初めて開催されている。

「ベリッシマ」(51)、「世代」(54)、「皆殺しの天使」(62年カンヌ国際批評家連盟賞)、五時間のテレビシリーズを劇場公開用に再編集した「ある結婚の風景」(73)、「ダーク・スター」(74)、「約束の土地」(74年モスクワ映画祭金賞)、ヒューマン大作として大々的に公開され、予想に反し、この年の年間最高配収を樹立した「エレファント・マン」の大ヒットをきっかけにデイヴィッド・リンチのデビュー作「イレイザーヘッド」(77)、「チェスをする人」(77)、「秋のソナタ」(78)、「ブリキの太鼓」(79年カンヌ・グランプリ受賞作)、「ストーカー」(79)、「ジェラシー」(79) 等の旧作が正式公開された。

五所平之助、伊藤大輔、中村登、伴淳三郎、アベル・ガンス、ウィリアム・ワイラー、ルネ・クレール、ウィリアム・ホールデン、ナタリー・ウッドが死去した。

Digitized by Google

第53回 アカデミー賞	第38回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第33回 カンヌ国際映画祭	第30回 ベルリン映画祭
普通の人々 (ロバート・レッドフォード)	(ド)**普通の人々** (ロバート・レッドフォード) (ミ/コ)**歌え！ロレッタ・愛のために** (マイケル・アプテッド)	**グロリア**(米) (ジョン・カサヴェテス) **アトランティック・シティ** (カナダ) (ルイ・マル)	**影武者**(日) (黒澤明) **オール・ザット・ジャズ**(米) (ボブ・フォッシー)	**Heartland**(米) (リチャード・ピアース) **Palermo oder Wolfsburg**(西独) (ヴァーナー・シュレーダー)
ロバート・レッドフォード (普通の人々)	**ロバート・レッドフォード** (普通の人々)		**クシシュトフ・ザヌーシ** (コンスタンス/ポーランド)	**イシュトヴァン・サボー**(コンフィデンス 信頼/ハンガリー)
ロバート・デ・ニーロ (レイジング・ブル)	(ド)**ロバート・デ・ニーロ**(レイジング・ブル)(ミ/コ)**レイ・シャーキー**(アイドル・メーカー)		**ミシェル・ピコリ** (Salto nel Vuoto/仏)	**アンジェイ・セベリン** (Dyrygent/ポーランド)
シシー・スペイセク (歌え！ロレッタ・愛のために)	(ド)**メアリー・タイラー・ムーア**(普通の人々) (ミ/コ)**シシー・スペイセク** (歌え!ロレッタ・愛のために)		**アヌーク・エーメ** (Salto nel Vuoto/仏)	**レナート・クロスナー** (Solo Sunny/東独)
ティモシー・ハットン (普通の人々)	**ティモシー・ハットン** (普通の人々)			
メアリー・スティーンバージェン(Melvin and Howard)	**メアリー・スティーンバージェン**(Melvin and Howard)			
(色)**アルヴィン・サージャント**(普通の人々) (オ)**ボー・ゴールドマン**(Melvin and Howard)				
ジョフリー・アンスワース、ギスラン・クローケ(テス)				
モスクワは涙を信じない(ソ連) (ウラジミール・メニショフ)	**テス**(イギリス) (ロマン・ポランスキー)			

▲「普通の人々」

▼「グロリア」

▲「影武者」

Digitized by Google

1980 昭和55年

第54回 キネマ旬報賞	第35回 毎日映画コンクール	第23回 ブルーリボン賞	第4回 日本アカデミー賞	
ツィゴイネルワイゼン（鈴木清順）	影武者（黒澤明）	影武者（黒澤明）	ツィゴイネルワイゼン（鈴木清順）	作品賞
鈴木清順（ツィゴイネルワイゼン）	黒澤明（影武者）	鈴木清順（ツィゴイネルワイゼン）	鈴木清順（ツィゴイネルワイゼン）	監督賞
渡瀬恒彦（神様のくれた赤ん坊、影の軍団・服部半蔵、震える舌）	仲代達矢（影武者）	仲代達矢（影武者、二百三高地）	高倉健（動乱、遥かなる山の呼び声）	主演男優賞
大谷直子（ツィゴイネルワイゼン）	倍賞千恵子（遥かなる山の呼び声）	十朱幸代（震える舌）	倍賞千恵子（遥かなる山の呼び声、男はつらいよ・寅次郎ハイビスカスの花）	主演女優賞
山崎努（影武者）		丹波哲郎（二百三高地）	丹波哲郎（二百三高地）	助演男優賞
大楠道代（ツィゴイネルワイゼン）		加賀まりこ（夕暮まで）	大楠道代（ツィゴイネルワイゼン）	助演女優賞
				脚本賞
				撮影賞
クレイマー、クレイマー（米）（ロバート・ベントン）		クレイマー、クレイマー（米）（ロバート・ベントン）		外国語映画賞

黒澤明の「影武者」が、カンヌ映画祭で「オール・ザット・ジャズ」（前年のオスカー4部門で受賞）と共にグランプリを分け合い、この年の邦画配収一位となった（二位は読者選出ベスト・テン一位の「二百三高地」、三位は初の南極ロケを敢行した「復活の日」）。その一方で、大森一樹や石井聰亙や橋浦方人といった自主映画出身の監督の活躍が目覚ましく、「純」の横山博人や「翔んだカップル」の相米慎二といった新人監督が大挙してデビュー。長年続いた日活ロマン・ポルノ裁判も東京高裁で一審無罪が確定した。

「スター・ウォーズ／帝国の逆襲」がトップとなった洋画配収上位十作品には、様々な波紋を投げかけた「地獄の黙示録」、アメリカのアダルト誌「ペントハウス」初製作の成人映画「カリギュラ」も入った。また、NBCTVで放映され好視聴率を上げた「将軍」の劇場版も話題を集めた。前年のオスカーで作品賞以下五部門で受賞した「クレイマー、クレイマー」も、ダスティン・ホフマン、メリル・ストリープのオスカー受賞演技が好評により、ヒットを記録した。

アルフレッド・ヒッチコック、稲垣浩、ピーター・セラーズ（遺作となった「チャンス」で前年のアカデミー助演男優賞を獲得）、嵐寛寿郎、スティーヴ・マックイーン、渋谷実、ラオール・ウォルシュが死去。

公式授賞作品の選出をしばらく取りやめていたヴェネツィアで、68年以来となる久々の金獅子賞はジョン・カサヴェテス監督の「グロリア」に贈られた。「ルードウィヒ　神々の黄昏」(72)、「ミーン・ストリート」(73)、「鏡」(75)、「カサノバ」(76)、ポーランドの情勢下で反響を呼んだ「大理石の男」（77年カンヌ国際批評家賞）等の旧作が正式公開された。

製作～上映の“産地直送方式”をめざすシネマ・プラセットが銀色ドームによる特設映画館で「ツィゴイネルワイゼン」をロングラン。山口百恵が三浦友和との結婚で「古都」を最後に引退したのもこの年だった。

Digitized by Google

「中国の鳥人」in　サンフランシスコ映画祭

中沢敏明

『中国の鳥人』を最初に海外の人にご覧いただいたのはサンフランシスコ映画祭でした。

フランシス・F・コッポラやロビン・ウィリアムズなどが居を構えるサンフランシスコを、映画自体が産業となっているLAより、映画人口とインテリジェンスの絶対数が多い都市だと言う人もいます。確かにサンフランシスコの人口は、リベラルな観客として映画に体する関心が高いということを、この映画祭で私たちも実感しました。

街外れの倉庫で行われた前夜祭のパーティはディスコの中でいろいろなパフォーマスが繰り広げられる斬新でアイディアにあふれたものでした。

私が最もおもしろいと思ったのは、前夜祭や各上映前に必ずかけられるこの映画祭のスポットでした。それは、あるバーに入ってきた誰か（カメラ）に、カウンターに坐っているいわくありげな客たち（ショーン・ペンなど個性的な俳優ばかり）が一人ずつ（カメラに）振り向いて何か言い、最後にカウンターの中に貫禄ある初老の黒人のウェイターがにっこりと笑って「Welcome to San-Francisco International Film Festival」というものでした。そのウェイターが映った途端、どの会場でも拍手がわき歓声が上がります。聞けばそれはサンフランシスコの市長なのだそうです。日本では考えられないこの洒落っ気、うらやましい限りでした。

サンフランシスコ映画祭は今年で41回を迎え、毎年世界各国1600〜1700本の候補作品から約60本が選ばれて上映されるそうです。

私たちは『中国の鳥人』が初めて上映される朝（3日間で計3回上映）、打ち合わせのために映画祭事務局に向かいました。まだ上映まで1時間以上もあるのに、会場の前には長蛇の列がありました。そして何より驚いたのは人々が手にしている新聞でした。そこには「羽をつけた本木雅弘」が大きく一面に出ていたのです。

私たちが事務局に着くと、この映画祭のプログラマーのチーフのラシェル・ローゼンンさんがにこにこしながらやって来て、

「あなた方のチケットを返して欲しい。今日の分も、27、28日の分も完売してしまったので」

と、私たちに言いました。

会場は1000人以上収容できる大きさにもかかわらず、私たちが入った時には通路にまで人が坐っていました。日本で試写は何度かやりましたが、こんなにたくさんのそれも日本人ではない人々といっしょにこの映画を見るのは私にとっても初めてです。セリフの特徴が伝わるだろうか、サラリーマンとヤクザの気質、習性を理解してもらえるだろうが、いろいろな意味でドキドキしました。でもそんな心配は全く不要でした。ここぞという箇所箇所ではじけるように笑ってくれ、上映終了後割れるような拍手と歓声が会場を包みました。その後のQ&Aでも内容のこと、中国のこと、技術的なこと、今後の予定までなかなか鋭い質問が飛んできました。

▲新聞の一面を飾った「中国の鳥人」

会場を出ても声をかけてくれる人たちがおり、その中の一昨日ゲストで来ていたウェイ・ワンの通訳をしていたという中国の青年が駆け寄ってきて、

「夢は叶うんですね。美しい景色と『飛ぶ』ところでは涙が出た」

と、私たちに微笑みました。私はその青年と握手をしながら私の方こそ涙が出そうになりました。

7月中頃にサンフランシスコ映画祭事務局から、電話帳半分ほどのものがおくられてきました。それはサンフランシスコ映画祭で上映された『中国の鳥人』の記事が掲載された全ての新聞や雑誌のコピーでした。もちろん我々が特別頼んだわけではありません。上映した全ての映画に同じ作業をやっていると思うと、頭が下がります。事務局の若いスタッフたちが忙しそうにそれでいて笑顔で走り回っていた姿が思い出されます。同封されていた手紙の最後には、「あなたの新しい作品と共にまた来年来てくれることを望みます」と書かれていました。お決まりの文言なのですが、心にしみる気がしました。

Nakazawa Toshiaki
映画を企画、製作。大学卒業後、三船プロに入社、海外勤務後、退社。93年(株)セディックインターナショナルを設立。「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」「会社物語」「無能の人」「傷だらけの天使」「岸和田少年愚連隊」「アンドロメディア」「たどんとちくわ」「完全なる飼育」など。99年2月には「双生児」（主演：本木雅弘、監督：塚本晋也）がクランクイン。

Digitized by Google

サンダンス・フィルム・フェスティバル

犬童一心

「二人が喋ってる。」はすでに完成して一年を過ぎようとしていた。会社員としてCM作りに日々邁進していたある日、電話がかかってきてグランプリだという、グランプリ？　サンダンスの今年の日本のグランプリはあなたですという。そうだ、そう言えば僕は映画を作ってたんだよな、気がついたら10日間の休みをとって飛行機の中にいた。

空港からサンダンスまでの道のりはまさに「シャイニング」のあのオーバールックホテルへと向かうあの感じ、はねられた鹿の死体をよけて車は進んでいく。ホテルに到着し、静かな夜にちらほらと雪が降り、何やら人形の街のようなそこにいると、そう言えば何でこんなところにいるんだろうと思ったりする。大阪の街で漫才師の話を作っていたころにはそのせいでまさかこんなところに来るとは思いもしない雪と山、ジェレマイア・ジョンソンが熊を追いかけていたのはどのへんか？　アメリカ進出の野望があるわけでもない物見遊参の人間としては、ぽっかりと開いてしまった不思議な時間。

日が昇り街へ出てみると、防寒具に身を包んだ人たちが時につるつると滑り、転ぶのを気にしながら映画を見るために右往左往。自分の映画のポスターを貼るために街を歩き回る、貼るそばから更にその上に貼られていく別のポスター。

作る人間、見る人間、見せる人間、金を使う、金を儲ける、ビジネスと理想、様々な情熱がそんな自分のほんの少し先でぐるぐると回っている。

携帯電話を持って映画を見まくり、夜はしゃれたイタリアンレストランでミーティングを開く人々、映画祭の用意した無料のビスケットとコーヒーの回りにたむろして、これから生まれるかもしれない映画について語る見るからに金に縁のなさそうな人々、その映画の多くは言葉の中でふくらみいつしか静かに消えていくのだろう、ただもしかすればそのイタリアンと無料のビスケット、二つの会話が結びつくこともあるのだろう。その結びつきが大きな幸福を生み出すことをここにいると素直に望めるのだった。

▲「大いなる勇者」

世界のいたるところに無数の撮影されることを待つ映画があるんだな、そんなにみんな映画を作りたいですか？

「Shall we ダンス？」に送られた鳴りやまない拍手、周防監督の笑顔。作り手と観客がともに分かつ幸福な時間、それは何かがこれから始まる予感の中にある。いくつかのそんな時間がきっとここであったのだろう。その時間が常に始まりの中にあることがこの映画祭の大きな幸福なのだろう。

レッドフォードはおめでとうと言ってくれた、そう言えばあなたはジェレマイア・ジョンソンですね、僕はあの映画がとても好きで大学のころ何度も見直したのですと言おうとする間もなく、彼は次のゲストへと行ってしまった。

▲「二人が喋ってる。」

Inudou Isshin

1960年東京生まれ。東京造形大学在学中より自主製作を始め、79年「気分を変えて？」でPFFに入選。85年、朝日プロモーションに入社。CM、プロモーションビデオの企画演出を行う傍ら、作品を撮り続け、93年「金魚の一生」でキリンコンテンポラリーアワード最優秀作品賞を受賞。96年キリンビールの製作援助を得て製作した「二人が喋ってる。」によりS.F.F.I.T.でグランプリを受賞し、サンダンス・スカラシップの権利を獲得する。

Digitized by Google

第52回 アカデミー賞	第37回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第32回 カンヌ国際映画祭	第29回 ベルリン映画祭
クレイマー、クレイマー (ロバート・ベントン)	(ド)**クレイマー、クレイマー** (ロバート・ベントン) (ミ/コ)**ヤング・ゼネレーション** (ピーター・イェーツ)		**ブリキの太鼓**(西独) (フォルカー・シュレンドルフ) **地獄の黙示録**(米) (フランシス=フォード・コッポラ)	**David**(独) (ペーター・リリエンソール)
ロバート・ベントン (クレイマー、クレイマー)	**フランシス=フォード・コッポラ** (地獄の黙示録)		**テレンス・マリック** (天国の日々/米)	**アストリド・ヘニング・ヤンセン** (Winter-Children/デンマーク)
ダスティン・ホフマン (クレイマー、クレイマー)	(ド)**ダスティン・ホフマン**(クレイマー、クレイマー) (ミ/コ)**ピーター・セラーズ** (チャンス)		**ジャック・レモン** (チャイナ・シンドローム/米)	**ミケーレ・プラシド** (エルネスト-美しき少年-/伊)
サリー・フィールド (ノーマ・レイ)	(ド)**サリー・フィールド**(ノーマ・レイ)/(ミ/コ)**ベット・ミドラー**(ローズ)		**サリー・フィールド** (ノーマ・レイ/米)	**ハンナ・シグラ** (マリア・ブラウンの結婚/西独)
メルヴィン・ダグラス (チャンス)	**メルヴィン・ダグラス**(チャンス) **ロバート・デュヴァル**(地獄の黙示録)			
メリル・ストリープ (クレイマー、クレイマー)	**メリル・ストリープ** (クレイマー、クレイマー)			
(オ)**スティーヴン・テシック**(ヤング・ゼネレーション) (色)**ロバート・ベントン**(クレイマー、クレイマー)	**ロバート・ベントン** (クレイマー、クレイマー)			
ヴィットリオ・ストラーロ (地獄の黙示録)				
ブリキの太鼓(西独) (フォルカー・シュレンドルフ)	**Mr.レディ Mr.マダム**(仏=伊) (エドアール・モリナロ)			

▲「ノーマ・レイ」

▲「クレイマー、クレイマー」

▼「もう頬づえはつかない」

Digitized by Google

1979 昭和54年

第53回 キネマ旬報賞	第34回 毎日映画コンクール	第22回 ブルーリボン賞	第3回 日本アカデミー賞	
復讐するは我にあり（今村昌平）	**あゝ野麦峠**（山本薩夫）	**復讐するは我にあり**（今村昌平）	**復讐するは我にあり**（今村昌平）	作品賞
今村昌平（復讐するは我にあり）	**長谷川和彦**（太陽を盗んだ男）	**今村昌平**（復讐するは我にあり）	**今村昌平**（復讐するは我にあり）	監督賞
若山富三郎（衝動殺人・息子よ、遠い明日）	**若山富三郎**（衝動殺人・息子よ）	**若山富三郎**（衝動殺人・息子よ）	**若山富三郎**（衝動殺人・息子よ）	主演男優賞
桃井かおり（もう頬づえはつかない、男はつらいよ・翔んでる寅次郎）	**桃井かおり**（もう頬づえはつかない）	**桃井かおり**（もう頬づえはつかない、男はつらいよ・翔んでる寅次郎、神様のくれた赤ん坊）	**桃井かおり**（もう頬づえはつかない、男はつらいよ・翔んでる寅次郎、神様のくれた赤ん坊）	主演女優賞
三國連太郎（復讐するは我にあり）		**三國連太郎**（復讐するは我にあり）	**菅原文太**（太陽を盗んだ男）	助演男優賞
小川真由美（復讐するは我にあり、配達されない三通の手紙）		**倍賞美津子**（復讐するは我にあり）	**小川真由美**（復讐するは我にあり、配達されない三通の手紙）	助演女優賞
馬場当（復讐するは我にあり、遠い明日）	**馬場当**（復讐するは我にあり）		**馬場当**（復讐するは我にあり）	脚本賞
	小林節雄（あゝ野麦峠）		**姫田真左久**（復讐するは我にあり）	撮影賞
旅芸人の記録（ギリシア）（テオ・アンゲロプロス）		**ディア・ハンター**（米）（マイケル・チミノ）	**ディア・ハンター**（米）（マイケル・チミノ）	外国語映画賞

主役が勝新太郎から仲代達矢へという交代劇が起きた「影武者」で黒澤明が10年ぶりに、「衝動殺人・息子よ」で木下恵介が古巣の松竹で15年ぶりに、「復讐するは我にあり」で今村昌平が8年ぶりにメガホンを取るというようにベテラン監督が久々に始動したとはいえ、大作の作品的枯渇、プログラム・ピクチュアの激減も重なり、不況にあえぐ一年だった。そんな中で「もっとしなやかに、もっとしたたかに」「赫い髪の女」「太陽を盗んだ男」が作品的に好評をはくし、「もう頬づえはつかない」に出演した桃井かおりが注目された。また、「愛のコリーダ」のシナリオと写真集を巡る裁判で全員無罪の判決が下されたが、再押収されるという事件が起きた。配収一位は、邦画ではアニメ大作「銀河鉄道999」、洋画では、6億円という宣伝費を投じたものの、アメリカほどのヒットには至らなかった「スーパーマン」。アメリカ映画が低迷し、「Mr.Boo!ミスター・ブー」(76)、「ドランク・モンキー　酔拳」(78)、「スネーキー・モンキー　蛇拳」(76)等の香港コメディが人気を集めた以外洋画は低調そのもの、宝塚歌劇でヒットした「ベルサイユのばら」は、日本のテレビ局が製作にタッチした。

カンヌでは「地獄の黙示録」が上映され、賛否両論を巻き起こすが、グランプリと国際批評家連盟賞に輝いた。また、前年に作品賞以下五部門でアカデミー賞に輝いた「ディア・ハンター」に対して、反ヴェトナム・人種主義映画と国際的抗議が起こった。

ジャン・ルノワール、ニーノ・ロータ、ジョン・ウェイン、ニコラス・レイ、ディミトリ・ティオムキン、ジーン・セバーグ、ダリル・F・ザナック、リチャード・ロジャースが死去。

ルキノ・ヴィスコンティ監督の「郵便配達は二度ベルを鳴らす」(42)、「逃走迷路」(42)、「奇跡」(55年ヴェネツィア金獅子賞)、「暗殺のオペラ」(71)、「イノセント」(75)、「旅芸人の記録」(75年カンヌ国際批評家連盟賞）等の旧作が初公開された。

Digitized by Google

第51回 アカデミー賞	第36回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第31回 カンヌ国際映画祭	第28回 ベルリン映画祭
ディア・ハンター (マイケル・チミノ)	(ド)**ミッドナイト・エクスプレス** (アラン・パーカー) (ミ/コ)**天国から来たチャンピオン** (ウォーレン・ベイティ)		**木靴の樹**(伊) (エルマンノ・オルミ)	**優れた作品を出品したスペインに対して**
マイケル・チミノ (ディア・ハンター)	**マイケル・チミノ** (ディア・ハンター)		**大島渚** (愛の亡霊/日＝仏)	**ゲオルギ・ジュルゲロフ** (Avantage/ブルガリア)
ジョン・ヴォイト (帰郷)	(ド)**ジョン・ヴォイト**(帰郷) (ミ/コ)**ウォーレン・ベイティ** (天国から来たチャンピオン)		**ジョン・ヴォイト** (帰郷/米)	**クレイグ・ラッセル** (Outrageous/カナダ)
ジェーン・フォンダ (帰郷)	(ド)**ジェーン・フォンダ**(帰郷)、**エレン・バースティン**(Same Time, Next Year)/(ミ/コ)**マギー・スミス**(カリフォルニア・スイート)		**イザベル・ユペール** (ヴィオレット・ノジェール/仏)**ジル・クレイバーグ**(結婚しない女/米)	**ジーナ・ローランズ** (オープニング・ナイト/米)
クリストファー・ウォーケン(ディア・ハンター)	**ジョン・ハート**(ミッドナイト・エクスプレス)			
マギー・スミス(カリフォルニア・スイート)	**ダイアン・キャノン** (天国から来たチャンピオン)			
(オ)**ナンシー・ダウド、ウォルド・ソルト、ロバート・C・ジョーンズ**(帰郷) (色)**オリヴァー・ストーン**(ミッドナイト・エクスプレス)	**オリヴァー・ストーン** (ミッドナイト・エクスプレス)			
ネストール・アルメンドロス (天国の日々)				
ハンカチのご用意を (仏) (ベルトラン・ブリエ)	**秋のソナタ** (スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)			

▲「サード」

▲「ディア・ハンター」

▼「秋のソナタ」

▼「事件」

Digitized by Google

1978 昭和53年

第52回 キネマ旬報賞	第33回 毎日映画コンクール	第21回 ブルーリボン賞	第2回 日本アカデミー賞	
サード（東陽一）	事件（野村芳太郎）	サード（東陽一）	事件（野村芳太郎）	作品賞
東陽一（サード）	野村芳太郎（事件）	野村芳太郎（鬼畜、事件）	野村芳太郎（鬼畜、事件）	監督賞
緒形拳（鬼畜）	緒形拳（鬼畜）	緒形拳（鬼畜）	緒形拳（鬼畜）	主演男優賞
梶芽衣子（曽根崎心中）	梶芽衣子（曽根崎心中）	梶芽衣子（曽根崎心中）	大竹しのぶ（事件、聖職の碑）	主演女優賞
渡瀬恒彦（事件、赤穂城断絶）		渡瀬恒彦（事件、赤穂城断絶）	渡瀬恒彦（事件）	助演男優賞
大竹しのぶ（事件、聖職の碑）		宮下順子（ダイナマイトどんどん、雲霧仁左衛門）	大竹しのぶ（聖職の碑）	助演女優賞
新藤兼人（事件）	新藤兼人（事件）		新藤兼人（事件）	脚本賞
	川又昂（事件、鬼畜）		川又昂（事件、鬼畜）	撮影賞
家族の肖像（伊）（ルキノ・ヴィスコンティ）		家族の肖像（伊）（ルキノ・ヴィスコンティ）	家族の肖像（伊）（ルキノ・ヴィスコンティ）	外国語映画賞

入場料1500円で初めての興行となった「スター・ウォーズ」（洋画配収一位）、「未知との遭遇」が公開され、SFブームが訪れ、また、「愛と喝采の日々」、「グッバイガール」、「結婚しない女」、「ジュリア」といった“女性”を主人公とした作品が公開された。ヴェトナム戦争を題材にした「ディア・ハンター」と「帰郷」の2作品が、オスカー主要部門を分け合う傍ら、オリヴァー・ストーンが「ミッドナイト・エクスプレス」で脚色賞を受賞、ジェーン・フォンダも二度目の主演女優賞を手にした。また、日本のサンリオ製作の「愛のファミリー」がドキュメンタリー長編部門で受賞したが、この年に記録的なヒットとなった「さらば宇宙戦艦ヤマト」や「キタキツネ物語」も映画界以外の製作者による作品だった。

一方、カンヌでは「愛の亡霊」で大島渚が最優秀監督賞を受賞、邦画の配収上位には「野性の証明」、「宇宙戦艦ヤマト・愛の戦士たち」、「柳生一族の陰謀」が並んだ。この年には「オレンジロード急行」の大森一樹、「高校大パニック」の石井聰亙と8ミリ出身の監督が一般映画にデビュー。特に後者は、「人妻集団暴行致死事件」が作品的に高く評価された日活が、非ロマンポルノ路線として「帰らざる日々」と共に発表したものだった。なお、日活ポルノ裁判では第一審で全員無罪の判決が出た。

この年には、この「帰らざる日々」、「サード」、「事件」に出演した永島敏行が脚光を浴びた。「ワン・オン・ワン」(68)、「すべて売り物」(68)、「ピロスマニ」(69)、ロベール・ブレッソン監督の「白夜」(71)、「遠い雷鳴」(73年ベルリン映画祭金熊賞受賞)、「家族の肖像」(74)、「オーソン・ウェルズのフェイク」(75)、「ヒア&ゼア　こことよそ」(76)、前年のアカデミー外国語映画賞受賞作「ブラック・アンド・ホワイト・イン・カラー」(76)等の旧作が初公開された。

シャルル・ボワイエ、ジャック・L・ワーナー、中平康、田宮二郎が死去した

Digitized by Google

第50回 アカデミー賞	第35回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第30回 カンヌ国際映画祭	第27回 ベルリン映画祭
アニー・ホール (ウディ・アレン)	(ド)**愛と喝采の日々** (ハーバート・ロス) (ミ/コ)**グッバイ・ガール** (ハーバート・ロス)		**父/パードレ・パドローネ**(伊) (パオロ・タヴィアーニ、ヴィットリオ・タヴィアーニ)	**The Ascent**(ソ連) (ラリーサ・シェピチコ)
ウディ・アレン (アニー・ホール)	**ハーバート・ロス** (グッバイ・ガール)			**マヌエル・グティエレス** (Black Litter/キューバ)
リチャード・ドレイファス (グッバイガール)	(ド)**リチャード・バートン**(エクウス)/(ミ/コ)**リチャード・ドレイファス**(グッバイガール)		**フェルナンド・レイ** (Elisa, Vida Mia/スペイン)	**フェルナンド・フェルナン=ゴメス** (The Anchorite/スペイン)
ダイアン・キートン (アニー・ホール)	(ド)**ジェーン・フォンダ**(ジュリア)/(ミ/コ)**マーシャ・メイソン**(グッバイ・ガール)		**シェリー・デュバル**(三人の女/米)**モニク・メルキュール** (J.A.Martin Photographe/カナダ)	**リリー・トムリン** (The Late Show/米)
ジェイソン・ロバーズ (ジュリア)	**ピーター・ファース** (エクウス)			
ヴァネッサ・レッドグレイヴ(ジュリア)	**ヴァネッサ・レッドグレイヴ**(ジュリア)			
(オ)**ウディ・アレン、マーシャル・ブリックマン**(アニー・ホール)/(色)**アルヴィン・サージェント**(ジュリア)	**ニール・サイモン** (グッバイガール)			
ヴィルモス・ジグモンド (未知との遭遇)				
これからの人生(仏) (モーシェ・ミズラヒ)				

▲「ジュリア」

▲「幸福の黄色いハンカチ」

▼「アニー・ホール」

▼「愛と喝采の日々」

Digitized by Google

第51回 キネマ旬報賞	第32回 毎日映画コンクール	第20回 ブルーリボン賞	第1回 日本アカデミー賞	
幸福の黄色いハンカチ（山田洋次）	**幸福の黄色いハンカチ**（山田洋次）	**幸福の黄色いハンカチ**（山田洋次）	**幸福の黄色いハンカチ**（山田洋次）	**作品賞**
山田洋次（幸福の黄色いハンカチ）	**山田洋次**（幸福の黄色いハンカチ）	**山田洋次**（幸福の黄色いハンカチ）	**山田洋次**（男はつらいよシリーズ、幸福の黄色いハンカチ）	**監督賞**
高倉健（幸福の黄色いハンカチ、八甲田山）	**高倉健**（幸福の黄色いハンカチ）	**高倉健**（幸福の黄色いハンカチ、八甲田山）	**高倉健**（幸福の黄色いハンカチ、八甲田山）	**主演男優賞**
岩下志麻（はなれ瞽女おりん）	**岩下志麻**（はなれ瞽女おりん）	**岩下志麻**（はなれ瞽女おりん）	**岩下志麻**（はなれ瞽女おりん）	**主演女優賞**
武田鉄矢（幸福の黄色いハンカチ）		**若山富三郎**（姿三四郎、悪魔の毛玉唄）	**武田鉄矢**（幸福の黄色いハンカチ）	**助演男優賞**
桃井かおり（幸福の黄色いハンカチ）		**桃井かおり**（幸福の黄色いハンカチ）	**桃井かおり**（幸福の黄色いハンカチ）	**助演女優賞**
山田洋次、朝間義隆（幸福の黄色いハンカチ）	**山田洋次、朝間義隆**（幸福の黄色いハンカチ）		**山田洋次**（男はつらいよシリーズ、幸福の黄色いハンカチ）	**脚本賞**
	宮川一夫（はなれ瞽女おりん）		**宮川一夫**（はなれ瞽女おりん）	**撮影賞**
ロッキー（米）（ジョン・G・アヴィルドセン）		**ロッキー**（米）（ジョン・G・アヴィルドセン）		**外国語映画賞**

前年の「犬神家の一族」の大ヒットに刺激され、横溝正史の小説の映画化が相次ぎ、野村芳太郎や市川崑といったベテラン監督も「八つ墓村」や「悪魔の手鞠唄」のように大ヒットが保証された作品を手掛けた。また、「HOUSE　ハウス」の大林宣彦以外商業映画にデビューした新人監督はゼロという停滞状況の中、鈴木清順が10年ぶりにメガホンをとった。一本立て時代が到来し、配収上位には「八甲田山」、「人間の証明」とベストセラー小説の映画化作品が並び、洋高邦低にピリオドを打った。五年越しの日活ポルノ裁判が論告求刑段階へ至ったと入れ代わるように、大島渚が「愛のコリーダ」の書籍で起訴された。

洋画では「キングコング」（前年12月封切り）が配収一位で、「サスペリア」、「エクソシスト2」や「エアポート'77」といったオカルト、パニック映画、あるいは「アドベンチャー・ファミリー」や「がんばれベアーズ　特訓中」といったファミリー映画に多くの観客が集まった。アメリカではこの年のマネー・メイキング・スターだったシルベスター・スタローンの出世作「ロッキー」、「ネットワーク」（主演助演男女賞を総なめ）といったオスカー受賞作が揃って上映された。

「素晴らしき放浪者」(32)、「糧なき土地」(33)、「ピクニック」(36)、「第三逃亡者」(37)　、「上海から来た女」(47)、「ジョン・フォード／ギデオン」(59)、「鬼火」(63)、「密告の砦」(65)、「惑星ソラリス」(72年カンヌ審査員特別賞)、「自由の幻想」(74) 等の旧作が、また、世界に先駆けて「戦艦ポチョムキン」の完全版が公開され、さらに、同時代のドイツ映画も精力的に紹介された。

アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー、アンリ・ラングロワ、田中絹代、ロベルト・ロッセリーニ、ビング・クロスビー、豊田四郎、チャールズ・チャップリン、ハワード・ホークスが死去。「ブラック・サンデー」は、アラブの政治問題にからみ、脅迫を受け、公開直前に突然上映中止となった。

Digitized by Google

第49回 アカデミー賞	第34回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第29回 カンヌ国際映画祭	第26回 ベルリン映画祭
ロッキー (ジョン・G・アヴィルドセン)	(ド)**ロッキー** (ジョン・G・アヴィルドセン) (ミ/コ)**スター誕生** (フランク・ピアスン)		**タクシー・ドライバー** (米) (マーティン・スコセッシ)	**ビッグ・アメリカン**(米) (ロバート・アルトマン)
ジョン・G・アヴィルドセン (ロッキー)	**シドニー・ルメット** (ネットワーク)		**エットーレ・スコラ** (Brutti, Sporchi, Cattivi/伊)	**マリオ・モニチェッリ** (いとしのミケーレ/伊)
ピーター・フィンチ (ネットワーク)	(ド)**ピーター・フィンチ** (ネットワーク) (ミ/コ)**クリス・クリストファーソン**(スター誕生)		**ホセ=ルイス・ゴメス** (Pascual Duatte/スペイン)	**ゲルハルト・オルシュウスキ** (失われた人生/西独)
フェイ・ダナウェイ (ネットワーク)	(ド)**フェイ・ダナウェイ** (ネットワーク) (ミ/コ)**バーブラ・ストライサンド**(スター誕生)		**マリー・トロシク** (Deryne, Holvan ? /仏)	**ヤドヴィガ・バランスカ** (夜と昼/ポーランド)
ジェイソン・ロバーズ (大統領の陰謀)	**ローレンス・オリヴィエ** (マラソンマン)		**ドミニク・サンダ** (L'Eredita Ferramonti/伊)	
ビアトリス・ストレート (ネットワーク)	**キャサリン・ロス** (さすらいの航海)			
(色)**ウイリアム・ゴールドマン**(大統領の陰謀) (本)**バディ・チャイエフスキー**(ネットワーク)	**バディ・チャイエフスキー** (ネットワーク)			
ハスケル・ウェクスラー (ウディ・ガスリー わが心のふるさと)				
ブラック・アンド・ホワイト・イン・カラー (アイヴォリー・コースト) (ジャン=ジャック・アノー)				

▲「タクシー・ドライバー」

▼「青春の殺人者」

▲「ロッキー」

▼「ネットワーク」

Digitized by Google

1976昭和51年

第50回 キネマ旬報賞	第31回 毎日映画コンクール	第19回 ブルーリボン賞	
青春の殺人者（長谷川和彦）	**不毛地帯**（山本薩夫）	**大地の子守歌**（増村保造）	作品賞
長谷川和彦（青春の殺人者）	**山本薩夫**（不毛地帯）	**山根成之**（さらば夏の光よ、パーマネント・ブルー　真夏の恋）	監督賞
水谷豊（青春の殺人者）	**渡哲也**（やくざの墓場・くちなしの花）	**渡哲也**（やくざの墓場・くちなしの花）	主演男優賞
原田美枝子（青春の殺人者）	**秋吉久美子**（あにいもうと）	**秋吉久美子**（さらば夏の光よ、あにいもうと）	主演女優賞
大滝秀治（あにいもうと、不毛地帯）		**大滝秀治**（不毛地帯、あにいもうと）	助演男優賞
太地喜和子（男はつらいよ・寅次郎夕焼け小焼け）		**高峰三枝子**（犬神家の一族）	助演女優賞
田村孟（青春の殺人者）			脚本賞
			撮影賞
タクシー・ドライバー（米）（マーティン・スコセッシ）		**タクシー・ドライバー**（米）（マーティン・スコセッシ）	外国語映画賞

角川書店が映画製作に進出、自社の出版物を映画化し、書籍・映画の両面から大々的に宣伝（配給は東宝）を展開することにより「犬神家の一族」が邦画としては「続・人間革命」に次ぐ配収を得た。また、人気漫画の映画化で日活の一般映画「嗚呼!!　花の応援団」も大ヒットとなった。新人監督のデビュー作としてキネ旬日本映画ベスト・テン史上初めて一位になった「青春の殺人者」、「大地の子守唄」等で好演した原田美枝子や東映の脇役陣である川谷拓三とピラニア軍団が話題を集め、元大映の永田雅一が「君よ憤怒の河を渉れ」でカムバックした。一方「日本の性のタブー破壊として製作した」大島渚監督の「愛のコリーダ」がカンヌの監督週間で上映され、高く評価されたが、その後、芸術か？　ワイセツか？　をめぐって騒動が起こった。グランプリの「タクシー・ドライバー」はオスカーを一部門も制することができなかったが、「カッコーの巣の上で」（五部門で獲得）、「バリー・リンドン」、「狼たちの午後」、「ナッシュビル」はどれも前年のアカデミー賞受賞該当作である。配収面では前年12月封切りの「ＪＡＷＳ　ジョーズ」が洋画配給史に残る記録的なヒットとなったのを先頭に、“ライオンが人を食う”「グレート・ハンティング」、“悪魔の子供”「オーメン」、“クマが人を襲う”「グリズリー」、“本当に(?)人を殺す”「スナッフ」（この年に設定された”一般映画制限付（R）”に指定された初の洋画、邦画では「任侠外伝・玄海灘」）と残酷描写が売りの刺激的な作品が並んだ。また、「バルカン超特急」（38）、「海外特派員」（40）、「恐るべき子供たち」（49）、「オール・ザ・キングスメン」（49年のオスカー作品賞受賞作）、「詩聖タゴール」（61）、「大都会」（63）、「フェリーニの道化師」（70）、「明日に処刑を」（72）等の旧作が初公開された。ルキノ・ヴィスコンティ、キャロル・リード、フリッツ・ラング、ジャン・ギャバンが死去した。

Digitized by Google

第48回 アカデミー賞	第33回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第28回 カンヌ国際映画祭	第25回 ベルリン映画祭
カッコーの巣の上で (ミロシュ・フォアマン)	(ド)**カッコーの巣の上で**(ミロシュ・フォアマン) (ミ/コ)**ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ**(ハーバート・ロス)		**Chronique des Années des Braises** (アルジェリア) (モハメッド=ラクダール・ハミナ)	**養子縁組**(ハンガリー) (マールタ・メサーロシュ)
ミロシュ・フォアマン (カッコーの巣の上で)	**ミロシュ・フォアマン** (カッコーの巣の上で)		**ミシェル・ブロー** (Les Ordres/カナダ)	**セルゲイ・ソロヴィヨフ** (子供時代の後の百日間/ソ連)
ジャック・ニコルソン (カッコーの巣の上で)	(ド)**ジャック・ニコルソン** (カッコーの巣の上で)/(ミ/コ)**ウォルター・マッソー**(ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ)		**ヴィットリオ・ガスマン** (Profumo di Donna/伊)	**ウラディミール・ブロドスキ** (嘘つきヤコブ/東独)
ルイーズ・フレッチャー (カッコーの巣の上で)	(ド)**ルイーズ・フレッチャー** (カッコーの巣の上で)/(ミ/コ)**アン=マーグレット**(トミー)		**ヴァレリー・ベリン** (レニー・ブルース/米)	**田中絹代** (サンダカン八番娼館 望郷/日)
ジョージ・バーンズ (ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ)	**リチャード・ベンジャミン** (ニール・サイモンのサンシャイン・ボーイズ)			
リー・グラント (シャンプー)	**ブレンダ・ヴァッカロ** (いくたびか美しく燃え)			
(色)**ローレンス・ハウベン、ボー・ゴールドマン**(カッコーの巣の上で)/(本)**フランク・ピアスン**(狼たちの午後)	**ローレンス・ハウベン、ボー・ゴールドマン** (カッコーの巣の上で)			
ジョン・オルコット (バリー・リンドン)				
デルス・ウザーラ (ソ連) (黒澤明)				

▲「デルス・ウザーラ」

▼「男はつらいよ・寅次郎相合い傘」

▲「カッコーの巣の上で」

Digitized by Google

1975昭和50年

第49回 キネマ旬報賞	第30回 毎日映画コンクール	第18回 ブルーリボン賞	
ある映画監督の生涯－溝口健二の記録（新藤兼人）	**化石**（小林正樹）	**化石**（小林正樹）	**作品賞**
新藤兼人（ある映画監督の生涯－溝口健二の記録）	**新藤兼人**（ある映画監督の生涯－溝口健二の記録）	**深作欣二**（仁義の墓場、県警対組織暴力）	**監督賞**
佐分利信（化石）	**佐分利信**（化石）	**菅原文太**（県警対組織暴力、トラック野郎）	**主演男優賞**
浅丘ルリ子（男はつらいよ・寅次郎相合い傘）	**浅丘ルリ子**（男はつらいよ・寅次郎相合い傘）	**浅丘ルリ子**（男はつらいよ・寅次郎相合い傘）	**主演女優賞**
原田芳雄（祭りの準備）		**原田芳雄**（祭りの準備、田園に死す）	**助演男優賞**
大竹しのぶ（青春の門）		**倍賞千恵子**（男はつらいよ・寅次郎相合い傘）	**助演女優賞**
中島丈博（祭りの準備）	**中島丈博**（祭りの準備）		**脚本賞**
	岡崎宏三（化石、吾輩は猫である）		**撮影賞**
ハリーとトント（米）（ポール・マザースキー）		**レニー・ブルース**（米）（ボブ・フォッシー）	**外国語映画賞**

この年の洋画配収トップとなった「タワーリング・インフェルノ」が火付け役となり、“パニック映画ブーム”が到来、「大地震」「エアポート'75」が相次いで公開され、12月封切りの「JAWS　ジョーズ」でその勢いはピークに達し、公開作品の50%以上がアメリカ映画となった。また、アラン・ドロン主演作「個人生活」「アラン・ドロンのゾロ」、あるいはファッショナブルな映像美を前面に押し出した「エマニエル夫人」が多くの女性客を集め、興行界ではこの年初めて洋画配収が邦画配収を上回り〈洋高邦低〉と呼ばれた。邦画では、この年から始まった「トラック野郎」シリーズ第二作「トラック野郎・暴走一番星」以下、「絶唱」他山口百恵主演作数作がヒットし、読者のベスト・テンでは「新幹線大爆破」が一位に選ばれたが、劇映画の不振が叫ばれた結果（「化石」はテレビで放映されたものを再編集した作品だった）、キネ旬ベスト・テンでは49回目にして初めてドキュメンタリー作品が一位となり、「田園に死す」や密室劇「実録阿部定」等も評価された。また、ベルリン映画祭では「サンダカン八番娼館　望郷」の田中絹代に女優演技賞が与えられた。外国映画ベスト・テンには、黒澤明がソ連のモスフィルムに招かれて製作、モスクワ映画祭グランプリ、アカデミー外国語映画賞をとった「デルス・ウザーラ」、前年のオスカー受賞作である「ゴッドファーザーPART II」（作品賞以下6部門）、「ハリーとトント」（アート・カーニーに主演男優賞）、「アリスの恋」（エレン・バースティンに主演女優賞）といった作品が並んだ。また、「愛の歌」（50）、「冬の光」（52）、「魔術師」（58）、「夜の儀式」（59）、「チャルラータ」（64）、フランスでの大ヒット作「バルスーズ」（73）等の旧作が初公開され、ピエル・パオロ・パゾリーニ監督が殺害され、ミシェル・シモンが死去した。そして、衣笠貞之助監督の「十字路」が発見され、テレビ放映された。

Digitized by Google

第47回 アカデミー賞	第32回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第27回 カンヌ国際映画賞	第24回 ベルリン映画祭
ゴッドファーザー PART II (フランシス=フォード・コッポラ)	(ド)**チャイナタウン** (ロマン・ポランスキー) (ミ/コ)**ロンゲスト・ヤード**(ロバート・アルドリッチ)		**カンバセーション…盗聴…**(米) (フランシス=フォード・コッポラ)	**グラヴィッツおやじの年季奉公**(カナダ) (テッド・コッチェフ)
フランシス=フォード・コッポラ(ゴッドファーザー PART II)	**ロマン・ポランスキー** (チャイナタウン)			
アート・カーニー (ハリーとトント)	(ド)**ジャック・ニコルソン** (チャイナタウン)/(ミ/コ)**アート・カーニー**(ハリーとトント)		**ジャック・ニコルソン** (さらば冬のかもめ/米)	
エレン・バースティン (アリスの恋)	(ド)**ジーナ・ローランズ** (こわれゆく女)/(ミ/コ)**ラクエル・ウェルチ**(三銃士)		**マリー=ジョゼ・ナット** (Les Violons du Bal/仏)	
ロバート・デ・ニーロ (ゴッドファーザー PART II)	**フレッド・アステア**(タワーリング・インフェルノ)			
イングリッド・バーグマン (オリエント急行殺人事件)	**カレン・ブラック** (華麗なるギャツビー)			
(色)**フランシス=フォード・コッポラ、マリオ・プーゾ**(ゴッドファーザー PART II)/(本)**ロバート・タウン**(チャイナタウン)	**ロバート・タウン** (チャイナタウン)		**スティーヴン・スピルバーグ** (続・激突!カージャック/米)	
フレッド・コーネカンブ、ジョゼフ・バイアロク(タワーリング・インフェルノ)				
フェリーニのアマルコルド(伊) (フェデリコ・フェリーニ)				

▲「ゴッドファーザー PART II」

▲「アリスの恋」

▼「サンダカン八番娼館　望郷」

Digitized by Google

第48回 キネマ旬報賞	第29回 毎日映画コンクール	
サンダカン八番娼館 望郷（熊井啓）	砂の器（野村芳太郎）	作品賞
熊井啓（サンダカン八番娼館 望郷）	野村芳太郎（砂の器）	監督賞
萩原健一（青春の蹉跌）	三國連太郎（襤褸の旗）	主演男優賞
田中絹代（サンダカン八番娼館 望郷）	田中絹代（サンダカン八番娼館 望郷、三婆）	主演女優賞
		助演男優賞
		助演女優賞
橋本忍、山田洋次（砂の器）	橋本忍、山田洋次（砂の器）	脚本賞
	岡崎宏三（華麗なる一族、ねむの木の詩がきこえる）	撮影賞
フェリーニのアマルコルド（伊）（フェデリコ・フェリーニ）		外国語映画賞

▲「砂の器」

▼「青春の蹉跌」

米映画「燃えよドラゴン」の爆発的なヒットにより、年初から空前の“カラテ映画”ブームが巻き起こり、次々に香港製のカラテ映画（千葉真一や志穂美悦子主演の和製物もヒットした）が封切られると思いきや、夏以降は「エクソシスト」（前年にアカデミー脚色賞を受賞）を筆頭に“オカルト映画”が大流行した。前年に続き、実録路線「仁義なき戦い　頂上作戦」や「山口組外伝・九州侵攻作戦」は快調だったが、山口組との癒着を指摘された東映は「山口組・激突編」の制作を中止した。

「日本沈没」「ノストラダムスの大予言」「華麗なる一族」といったベストセラーの映画化が成功を収め、月六本の封切り体制が定着したロマン・ポルノに加え、藤田敏八監督、秋吉久美子主演の「赤ちょうちん」「妹」等の“新青春路線”も打ち出された。

サン・セバスチャン映画祭で「津軽じょんがら節」に国際カトリック賞が、前年封切りの「戦争と人間　完結編」はカルロヴィ・ヴァリ映画祭でリディチエのバラ賞を贈られた。日本からは篠田正浩の「卑弥呼」が出品されたカンヌでは「カンバセーション…盗聴…」がグランプリを獲得、コッポラ製作によるジョージ・ルーカスの監督第二作「アメリカン・グラフィティ」、スピルバーグの劇場長編デビュー作「続・激突　カー・ジャック」、フランス映画ながら、前年のオスカー外国語映画賞をはじめアメリカで数々の賞に輝いた「映画に愛を込めて　アメリカの夜」も公開され、その同じ年にオスカー7部門を制した「スティング」や「華麗なるギャツビー」といった30年代の時代感覚溢れる作品も観客を集めた。「少女ムシェット」(67)、「叫びとささやき」(72年ニューヨーク映画批評家協会賞五部門他受賞)、「私のように美しい娘」(72)，「最後の晩餐」(73) 等の旧作も初公開された。

サミュエル・ゴールドウィン、フランソワーズ・ロゼー、バット・アボット、ヴィットリオ・デ・シーカ、ピエトロ・ジェルミが死去した。

Digitized by Google

第46回 アカデミー賞	第31回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第26回 カンヌ国際映画賞	第23回 ベルリン映画祭
スティング (ジョージ・ロイ・ヒル)	(ド)**エクソシスト**(ウィリアム・フリードキン) (ミ/コ)**アメリカン・グラフィティ**(ジョージ・ルーカス)	開催中止	**スケアクロウ**(米) (ジェリー・シャッツバーグ) **The Hireling**(英) (アラン・ブリッジス)	**遠い雷鳴**(インド) (サタジット・レイ)
ジョージ・ロイ・ヒル (スティング)	**ウィリアム・フリードキン**(エクソシスト)			
ジャック・レモン (Save the Tiger)	(ド)**アル・パチーノ**(セルピコ)/(ミ/コ)**ジョージ・シーガル**(ウィークエンド・ラブ)		**ジャンカルロ・ジャンニーニ**(Film d'Amore e d'Anarchie/伊)	
グレンダ・ジャクソン (ウィークエンド・ラブ)	(ド)**マーシャ・メイソン**(シンデレラ・リバティー)/(ミ/コ)**グレンダ・ジャクソン**(ウィークエンド・ラブ)		**ジョアン・ウッドワード** (The Effect of Gamma Rays on Man-in-the-Moon Marigolds/米)	
ジョン・ハウスマン (ペーパー・チェイス)	**ジョン・ハウスマン** (ペーパー・チェイス)			
テイタム・オニール (ペーパー・ムーン)	**リンダ・ブレア** (エクソシスト)			
(色)**ウィリアム・ピーター・ブラッティ**(エクソシスト)/(本)**ディヴィット・S・ウォード** (スティング)	**ウィリアム・ピーター・ブラッティ** (エクソシスト)			
スヴェン・ニクヴィスト(叫びとささやき)				
映画に愛をこめてアメリカの夜(仏) (フランソワ・トリュフォー)				

▲「スティング」

▼「スケアクロウ」

▲「エクソシスト」

Digitized by Google

第47回 キネマ旬報賞	第28回 毎日映画コンクール	
津軽じょんがら節（斉藤耕一）	**津軽じょんがら節**（斉藤耕一）	作品賞
斉藤耕一（津軽じょんがら節）	**山田洋次**（男はつらいよ・寅次郎夢枕、同・寅次郎忘れな草）	監督賞
菅原文太（仁義なき戦い、同・広島死闘篇、同・代理戦争）	**丹波哲郎**（人間革命）	主演男優賞
江波杏子（津軽じょんがら節）	**賀来敦子**（青幻記）	主演女優賞
		助演男優賞
		助演女優賞
笠原和夫（仁義なき戦い、同・広島死闘篇、同・代理戦争）	**山田洋次、宮崎晃、朝間義隆**（男はつらいよ・寅次郎忘れな草）	脚本賞
	坂本典隆（津軽じょんがら節）	撮影賞
スケアクロウ(米)（ジェリー・シャッツバーク）		外国語映画賞

▲「津軽じょんがら節」

▼「仁義なき戦い」

大ヒット作「ゴッドファーザー」にヒントを得て、組織の内部抗争を描いた「仁義なき戦い」がヒット、すかさずシリーズ化され、“実録路線”が“任侠路線”に取って代わった。映倫はこの年、反社会的なテーマを扱った映画にも基準を設けた。さらに、撮影監督成島東一郎の監督第一作「青幻記　遠い日の母は美しく」あるいはエロスを通して特異な手法で歴史を記述した「四畳半襖の裏張り」といった独創的な作品が生まれた。また、「戒厳令」のようにいかにもATGらしい作品から「津軽じょんがら節」や「股旅」のように大手で製作経験のある監督を起用し、新たな展開を見せた。

日活ロマン・ポルノ映画事件の公判が行われる一方、主演のマーロン・ブランドとマリア・シュナイダーがイタリアのポルノ裁判で有罪判決を受けた「ラスト・タンゴ・イン・パリ」が公開され、芸術か？　ポルノか？　で話題を振りまき、シリーズ第8作「007／死ぬのは奴らだ」、「ゲッタウェイ」、「バラキ」に続くヒット作となった。本来はTV映画ながら日本では劇場公開されたスティーヴン・スピルバーグの「激突！」等と共にヒットを記録した。

配収一位は洋画では「ポセイドン・アドベンチャー」、邦画では「人間革命」。ベストセラー小説の映画化「恍惚の人」、同名の人気劇画を映画化、由美かおるを一躍スターにし、“同棲”ブームを巻き起こした「同棲時代　今日子と次郎」もヒットした。

カンヌ・グランプリの「スケアクロウ」、「ビリー・ザ・キッド　21歳の生涯」等でアメリカン・ニュー・シネマの成熟がうかがわれた。前年のベルリン金熊賞受賞作品「カンタベリー物語」や「フリッツ・ザ・キャット」が公開される一方、「街の灯」「独裁者」といったチャップリン作品のリヴァイヴァルも話題となった。

エドワード・G・ロビンソン、ジャン＝ピエール・メルヴィル、ジョン・フォード、アンナ・マニャーニ、森雅之、早川雪舟、ブルース・リーが死去した。

Digitized by Google

第45回 アカデミー賞	第30回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第25回 カンヌ国際映画賞	第22回 ベルリン映画祭
ゴッドファーザー (フランシス=フォード・コッポラ)	(ド)**ゴッドファーザー**(フランシス=フォード・コッポラ) (ミ/コ)**キャバレー** (ボブ・フォッシー)	公式受賞作品の選出はなし	**黒い砂漠**(伊) (フランチェスコ・ロージ) **労働者階級は天国に入る**(伊) (エリオ・ペトリ)	**カンタベリー物語**(伊=仏)(ピエル・パオロ・パゾリーニ)
ボブ・フォッシー (キャバレー)	**フランシス=フォード・コッポラ** (ゴッドファーザー)		**ヤンチョー・ミクローシュ** (Meg Ker a Nep/ハンガリー)	**ジャン=ピエール・ブラン** (La vieille fille/仏)
マーロン・ブランド (ゴッドファーザー)	(ド)**マーロン・ブランド** (ゴッドファーザー) (ミ/コ)**ジャック・レモン** (お熱い夜をあなたに)		**ジャン・ヤンヌ** (Nous ne vieillirons pas ensemble/仏)	**アルベルト・ソルディ** (Detenuto in Attesa di Giudizio/伊)
ライザ・ミネリ (キャバレー)	(ド)**リヴ・ウルマン** (The Emigrants) (ミ/コ)**ライザ・ミネリ** (キャバレー)		**スザンナ・ヨーク** (Images/アイルランド)	**エリザベス・テイラー** (Hammersmith Is Out/米)
ジョエル・グレイ (キャバレー)	**ジョエル・グレイ** (キャバレー)			
アイリーン・ヘッカート (バタフライはフリー)	**シェリー・ウィンタース** (ポセイドン・アドベンチャー)			
(オ)**ジェレミー・ラーナー** (候補者ビル・マッケイ) (色)**マリオ・プーゾ、フランシス=フォード・コッポラ**(ゴッドファーザー)	**マリオ・プーゾ、フランシス=フォード・コッポラ** (ゴッドファーザー)			
ジョフリー・アンスワース (キャバレー)				
ブルジョワジーの秘かな愉しみ(仏) (ルイス・ブニュエル)				

▲「キャバレー」

▼「ポセイドン・アドベンチャー」

▲「ゴッドファーザー」

Digitized by Google

第46回 キネマ旬報賞	第27回 毎日映画コンクール	
忍ぶ川（熊井啓）	忍ぶ川（熊井啓）	作品賞
熊井啓（忍ぶ川）	斉藤耕一（約束、旅の重さ）	監督賞
井川比佐志（故郷、忍ぶ川） 伊佐山ひろ子（白い指の戯れ、一条さゆり濡れた欲情）	地井武男（海軍特別少年兵、どぶ川学級） 栗原小巻（忍ぶ川）	主演男優賞 主演女優賞
		助演男優賞 助演女優賞
神代辰巳（白い指の戯れ、一条さゆり濡れた欲情） 長谷部慶次、熊井啓（忍ぶ川）		脚本賞
		撮影賞
ラスト・ショー（米）（ピーター・ボグダノヴィッチ）		外国語映画賞

▲「忍ぶ川」

▼「ラスト・ショー」

「濡れた唇」、「一条さゆり・濡れた欲情」、「白い指の戯れ」、藤田敏八の「エロスの誘惑」などの秀作を発表、多くの新人監督を輩出し、その人気に火がつき、大学生を中心に一大ブームとなった日活ロマン・ポルノが警視庁に摘発され、映倫も起訴された。それに対し、映倫管理委員会がポルノ・ブームに対して新審査基準を発表した。

任侠映画にあきが出始め、劇画の映画化作品であるヒット作「女囚701号・さそり」や「子連れ狼」シリーズ、「軍旗はためく下に」など新鮮な暴力描写が顕著な作品が登場、独立プロ作品でありながら「忍ぶ川」も大ヒットした。

配収のトップは邦画では「男はつらいよ・寅次郎恋歌」、洋画ではアカデミー賞3部門を制した「ゴッドファーザー」。この映画のヒットにより、マフィア・ブームが起こったが、主演男優賞に輝いたマーロン・ブランドは受賞を拒否、授賞式にも出席しなかった。「キャバレー」には主演女優（ライザ・ミネリ）、監督他全部で8つのオスカーが与えられた。さらに、前年の同賞で作品賞他3部門で受賞した「フレンチ・コネクション」、助演男女優部門でダブル受賞した「ラスト・ショー」、賞こそとれなかったものの、世界中に衝撃を与え、読者のベスト・テンで一位になった「時計じかけのオレンジ」（二位はクリント・イーストウッドを一躍スターダムにのしあげた「ダーティハリー」）も日本に入ってきた。

また、ジョセフ・ロージー監督の「恋」がグランプリをとった前年のカンヌで主演男優賞が与えられた「死刑台のメロディ」(70)、「暗殺の森」(70)、審査員特別賞を受賞したミロシュ・フォアマン監督の渡米第一作「パパ／ずれてるゥ！」、イエジー・スコリモフスキー監督の「早春」(70)、モンテ・ヘルマン監督の「断絶」(71) も公開された。リバイバル作品が増える中、チャップリン作品が連続上映され、「モダン・タイムス」がヒットを記録した。

Digitized by Google

第44回 アカデミー賞	第29回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第24回 カンヌ国際映画賞	第21回 ベルリン映画祭
フレンチ・コネクション (ウィリアム・フリードキン)	(ド)**フレンチ・コネクション**(ウィリアム・フリードキン) (ミ/コ)**屋根の上のバイオリン弾き**(ノーマン・ジュイソン)	公式受賞作品の選出はなし	**恋**(英) (ジョゼフ・ロージー)	**悲しみの青春**(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ)
ウィリアム・フリードキン (フレンチ・コネクション)	**ウィリアム・フリードキン**(フレンチ・コネクション)			
ジーン・ハックマン (フレンチ・コネクション)	(ド)**ジーン・ハックマン**(フレンチ・コネクション) (ミ/コ)**トポル**(屋根の上のバイオリン弾き)		**リカルド・クッチョッラ**(死刑台のメロディ/伊)	**ジャン・ギャバン** (Le cat/仏)
ジェーン・フォンダ (コールガール)	(ド)**ジェーン・フォンダ**(コールガール) (ミ/コ)**トゥィッギー**(ボーイフレンド)		**キティー・ウィン** (哀しみの街かど/米)	**シモーヌ・シニョレ** (Le cat/仏) **シャーリー・マクレーン** (Desperate characters/米)
ベン・ジョンソン (ラストショー)	**ベン・ジョンソン** (ラスト・ショー)			
クロリス・リーチマン (ラストショー)	**アン=マーグレット** (愛の狩人)			
(色)**アーネスト・タイディマン**(フレンチ・コネクション) (オ)**バディ・チャイエフスキー**(ホスピタル)	**バディ・チャイエフスキー** (ホスピタル)			
オズワルド・モリス (屋根の上のバイオリン弾き)				
悲しみの青春(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ)				

▲「フレンチ・コネクション」

▼「屋根の上のバイオリン弾き」

▲「コールガール」

Digitized by Google

第45回 キネマ旬報賞	第26回 毎日映画コンクール	
儀式（大島渚）	**沈黙**（篠田正浩）	作品賞
大島渚（儀式）	**篠田正浩**（沈黙） **山田洋次**（男はつらいよ・純情篇、同・奮闘篇、同・寅次郎恋歌）	監督賞
佐藤慶（儀式、日本の悪霊）	**勝新太郎**（いのちぼうにふろう、顔役、狐のくれた赤ん坊、新座頭市・破れ！唐人剣）	主演男優賞
藤純子（緋牡丹博徒・お命戴きます、その他のシリーズ）	**藤純子**（緋牡丹博徒・お命戴きます）	主演女優賞
		助演男優賞 助演女優賞
大島渚、田村孟、佐々木守（儀式）	**大島渚、田村孟、佐々木守**（儀式）	脚本賞
	岡崎宏三（いのちぼうにふろう）	撮影賞
ベニスに死す（伊）（ルキノ・ヴィスコンティ）		外国語映画賞

▲「いのちぼうにふろう」

日活が製作体制を縮小し、アクション映画から“ロマン・ポルノ”に転向、大映が倒産し、30年の歴史に幕をおろすことにより、実質的には大手三社という体制になった。そこに、黒澤明の自殺未遂事件が重なり、日本映画界は激動の年を迎えた。そんな中、大島渚は「儀式」で日本の戦後26年の歴史を独自の方法で切り開いて見せたり、寺山修司が「書を捨てよ町へ出よう」で映画監督としデビューし、サンレモ映画祭でグランプリに輝いたり、小川紳介の「三里塚・第二砦の人々」や土本典昭の「水俣」等の傑出したドキュメンタリーが生まれたりもした。モスクワ映画祭で「裸の十九才」に金賞が贈られ、アカデミー外国語映画賞に「どですかでん」がノミネートされた。

また、前年の同賞の候補にもなった「ファイブ・イージー・ピーセス」や「バニシング・ポイント」のように閉塞感の強い体制からの離脱をテーマにしたニュー・シネマが評価される一方で、「栄光のル・マン」、主演のマーク・レスターを人気者にした「小さな恋のメロディ」、「エルビス・オン・ステージ」、「狼の挽歌」といった本国や海外では未公開あるいは興行的に失敗した作品が日本だけで大ヒットする現象がこの頃から顕著になってきた。

洋画の配収一位は「ある愛の詩」。大胆な性器描写により世界中に検閲の是非論争を巻き起こしたスウェーデン映画「私は好奇心の強い女」（67）の公開と共に洋画ポルノが大量に上陸したが、そんな中で監督のルキノ・ヴィスコンティにカンヌ映画祭25周年記念特別賞が与えられた「ベニスに死す」のように意外にも興行が不振に終わった作品もあった。

「袋小路」（66）、ゴダールの二作品「メイド・イン・USA」（66）と「ブリティシュ・サウンズ」（69）等の旧作が公開された。藤純子が婚約、映画界引退を発表したのもこの年だった。

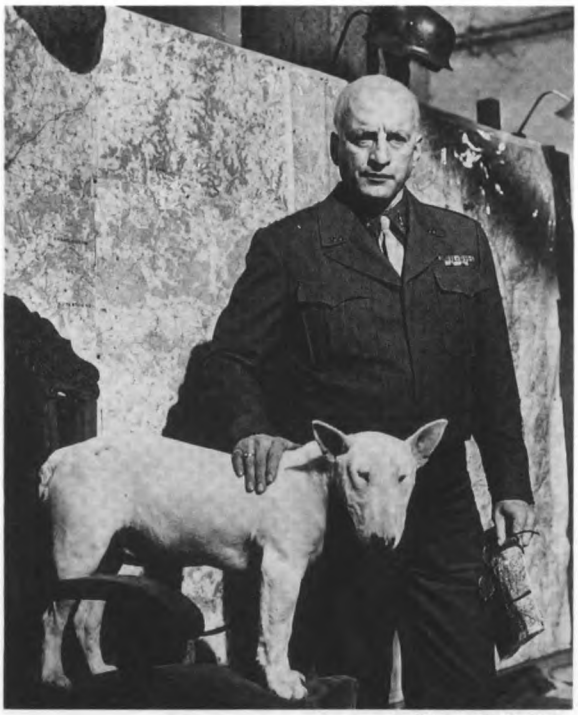
▲「ベニスに死す」

Digitized by Google

第43回 アカデミー賞	第28回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第23回 カンヌ国際映画祭	第20回 ベルリン映画祭
パットン大戦車軍団 (フランクリン・J・シャフナー)	(ド)**ある愛の詩** (アーサー・ヒラー) **(ミ/コ)M★A★S★H** (ロバート・アルトマン)	**公式受賞作品の選出はなし**	**M★A★S★H**(米) (ロバート・アルトマン)	**公式受賞作品の選出中止**
フランクリン・J・シャフナー (パットン大戦車軍団)	**アーサー・ヒラー** (ある愛の詩)		**ジョン・ブアマン** (Leo,the Last/英)	
ジョージ・C・スコット (パットン大戦車軍団)	(ド)**ジョージ・C・スコット** (パットン大戦車軍団) (ミ/コ)**アルバート・フィニー** (クリスマス・キャロル)		**マルチェロ・マストロヤンニ** (ジェラシー/伊)	
グレンダ・ジャクソン (恋する女たち)	(ド)**アリ・マッグロー** (ある愛の詩) (ミ/コ)**キャリー・スノッドグレス** (わが愛は消え去りて)		**オッタヴィア・ピッコロ** (わが青春のフロレンス/伊)	
ジョン・ミルズ (ライアンの娘)	**ジョン・ミルズ** (ライアンの娘)			
ヘレン・ヘイズ (大空港)	**カレン・ブラック**(ファイブ・イージー・ピーセス)/**モーリーン・スティプルトン**(大空港)			
(色)**リング・ラードナー・ジュニア**(M★A★S★H)/(オ)**フランシス・F・コッポラ、エドマンド・H・ノース**(パットン大戦車軍団)				
フレディ・ヤング (ライアンの娘)				
殺人捜査(伊) (エリオ・ペトリ)				

▲「ある愛の詩」

▼「ジェラシー」



▲「パットン大戦車軍団」

Digitized by Google

第44回 キネマ旬報賞	第25回 毎日映画コンクール
家族（山田洋次）	家族（山田洋次）
山田洋次（家族）	山本薩夫（戦争と人間）
井川比佐志（家族、どですかでん）	井川比佐志（家族）
倍賞千恵子（家族、男はつらいよ・望郷篇）	倍賞千恵子（家族、男はつらいよ・望郷篇）
	笠智衆（家族）
	奈良岡朋子（地の群れ、どですかでん）
山田洋次、宮崎晃（家族、男はつらいよ・望郷篇）	山田洋次（家族） 宮崎晃（男はつらいよ・望郷篇）
	中井朝一（赤頭巾ちゃん気をつけて）
イージー・ライダー（米）（デニス・ホッパー）	

▲「家族」

▼「どですかでん」

作品賞

監督賞

主演男優賞
主演女優賞

助演男優賞
助演女優賞

脚本賞

撮影賞

外国語映画賞

オスカー候補にあがった「パットン大戦車軍団」の主演男優賞のジョージ・C・スコットが「俳優を競争させるのは堕落である」と言って拒否、皮肉なことに賞は彼のものだったが辞退ということになってしまった。7個の受賞もいささか話題がスコットに集中したのは否めない。全般的に地味な式典になった。

カンヌ映画祭は参加を申し込んだ作品が拒否されるという事件も起きた。その中でアメリカの「M★A★S★H」がグランプリを獲得。

この年大阪で万博が開かれた。が映画界は斜陽の道を歩んでいた。大映、日活が配給系統で共同会社を設立。邦画は4系統になった。キネ旬の1位は山田洋次の「家族」が取りヴェテランの山本薩夫、黒澤明が次に続き健在を示している。外国映画部門では前年からの流れで「イージー・ライダー」が大差でトップ、「明日に向って撃て！」「M★A★S★H」「いちご白書」等の作品が注目を浴びた。

▲「M★A★S★H」

Digitized by Google

第42回 アカデミー賞	第27回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第22回 カンヌ国際映画祭	第19回 ベルリン映画祭
真夜中のカーボーイ (ジョン・シュレシンジャー)	(ド)**1000日のアン** (チャールズ・ジャロット) (ミ/コ)**サンタ・ビットリアの秘密** (スタンリー・クレイマー)	**公式受賞作品の選出はなし**	**if もしも・・・**(英) (リンゼイ・アンダーソン)	**Rani Radovi**(ユーゴ) (ツェリミール・チルミニク)
ジョン・シュレシンジャー (真夜中のカーボーイ)	**チャールズ・ジャロット** (1000日のアン)		**グラウベル・ローシャ**(アントニオ・ダス・モルテス/ブラジル) **ヴォイチェク・ヤスニ**(Vsichni Dobri Rodaci/チェコ)	**ペーター・ツァデク** (Ich bin ein Elefant,Madame/西独)
ジョン・ウェイン (勇気ある追跡)	(ド)**ジョン・ウェイン** (勇気ある追跡) (ミ/コ)**ピーター・オトゥール** (チップス先生さようなら)		**ジャン=ルイ・トランティニャン** (Z/仏)	
マギー・スミス (ミス・ブロディの青春)	(ド)**ジュヌヴィエーヴ・ビュジョルド**(1000日のアン) (ミ/コ)**パティ・デューク** (ナタリーの朝)		**ヴァネッサ・レッドグレイヴ** (裸足のイサドラ/英)	
ギグ・ヤング (ひとりぼっちの青春)	**ギグ・ヤング** (ひとりぼっちの青春)			
ゴールディー・ホーン (サボテンの花)	**ゴールディー・ホーン** (サボテンの花)			
(色)**ウォルド・ソールト**(真夜中のカーボーイ)/(オ)**ウィリアム・ゴールドマン**(明日に向って撃て!)				
コンラッド・ホール (明日に向って撃て!)				
Z(アルジェリア=仏) (コンスタンチン・コスタ=ガブラス)	**Z**(アルジェリア=仏) (コスタンチン・コスタ=ガブラス)			

▲「サボテンの花」

▲「ミス・ブロディの青春」

▼「真夜中のカーボーイ」

Digitized by Google

第43回 キネマ旬報賞	第24回 毎日映画コンクール
心中天網島（篠田正浩）	**心中天網島**（篠田正浩）
篠田正浩（心中天網島）	**山田洋次**（喜劇・一発大必勝、男はつらいよ、続・男はつらいよ）
渥美清（男はつらいよ、続・男はつらいよ、喜劇・女は度胸）	**渥美清**（男はつらいよ、続・男はつらいよ、喜劇・女は度胸）
岩下志麻（心中天網島、わが恋わが歌、赤毛、日も月も）	**岩下志麻**（心中天網島、わが恋わが歌）
	中村賀津雄（わが恋わが歌、尻啖え孫市、新選組）
	小山明子（少年）
田村孟（少年）	**田村孟**（少年）
	岡崎宏三（御用金）
アポロンの地獄（仏）（ピエル・パオロ・パゾリーニ）	

▼「心中天網島」

アメリカの若者たちはヴェトナム戦争、人種差別、麻薬と種々の問題に揺れていた。ハリウッドではヒッピーの教祖にシャロン・テイトが惨殺されるというむごたらしい事件が起こった。公開作品はニューシネマが多くオスカーも「真夜中のカーボーイ」「明日に向って撃て！」が6部門を占めた。ヴェテラン、ジョン・ウェインの主演男優賞もデヴューしてから40年目の快挙だった。また永遠の二枚目ケイリー・グラントも縁の無かった一人だったが名誉賞をもらい大喜びだった。前年大荒れの末、中止になったカンヌ映画祭は本選とは別に監督週間を設けた。審査委員長はルキノ・ヴィスコンティが勤めた。またヨーロッパで初のテレビ中継が行われた。

遂に観客動員三億人を割ってしまった日本映画界は新鋭の篠田正浩、浦山桐郎、大島渚が上位に、松竹のドル箱となった「男はつらいよ」が2本がベスト・テン入りしているのが凄い。

外国映画部門は「真夜中のカーボーイ」「Ifもしも…」「ウィークエンド」と新しい波が押し寄せている。

▲「続・男はつらいよ」

Digitized by Google

第41回 アカデミー賞	第26回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第21回 カンヌ国際映画祭	第18回 ベルリン映画祭
オリバー！ (キャロル・リード)	(ド)**冬のライオン** (アンソニー・ハーベイ) (ミ/コ)**オリバー！** (キャロル・リード)	**Artisten in der Zirkuskuppel : ratlos**(西独) (アレクサンデル・クリューゲ)	**(五月革命)のため中止**	**Ole dole doff**(スウェーデン) (ヤソ・トロエル)
キャロル・リード (オリバー！)	**ポール・ニューマン** (レーチェル レーチェル)			**カルロス・サウラ** (Peppermint Frappe/スペイン)
クリフ・ロバートソン (まごころを君に)	(ド)**ピーター・オトゥール** (冬のライオン) (ミ/コ)**ロン・ムーディ** (オリバー！)	**ジョン・マーレー** (Faces／米)		**ジャン=ルイ・トランティニャン** (L'Homme qui ment/仏)
キャサリン・ヘップバーン(冬のライオン)**バーブラ・ストライサンド**(ファニー・ガール)	(ド)**ジョアン・ウッドワード** (レーチェル レーチェル) (ミ/コ)**バーブラ・ストライサンド**(ファニー・ガール)	**ラウラ・ベッティ** (テオレマ／伊)		**ステファーヌ・オードラン** (女鹿/仏=伊)
ジャック・アルバートソン (The Subject Was Roses)	**ダニエル・マッセイ** (スター)			
ルース・ゴードン(ローズマリーの赤ちゃん)	**ルース・ゴードン** (ローズマリーの赤ちゃん)			
(オ)**メル・ブルックス** (プロデューサーⓥ) (色)**ジェームズ・ゴールドマン**(冬のライオン)				
バスクアーレ・デ・サンティス (ロミオとジュリエット)				
戦争と平和(ソ連) (セルゲイ・ボンダルチュク)	**戦争と平和**(ソ連) (セルゲイ・ボンダルチュク)			

▲「冬のライオン」

▲「オリバー！」

▼「ファニー・ガール」

Digitized by Google

第42回 キネマ旬報賞	第23回 毎日映画コンクール
神々の深き欲望（今村昌平）	**神々の深き欲望**（今村昌平）
今村昌平（神々の深き欲望）	**岡本喜八**（肉弾）
三船敏郎（山本五十六、黒部の太陽、祇園祭）	**寺田農**（肉弾）
若尾文子（不信のとき、積木の箱、濡れた二人）	**乙羽信子**（藪の中の黒猫、強虫女と弱虫男）
	嵐寛寿郎（神々の深き欲望）
	山岡久乃（眠れる美女、カモとねぎ、女と味噌汁）
田村孟、佐々木守、深尾道典、大島渚（絞死刑）	**今村昌平、長谷部慶次**（神々の深き欲望）
	黒田清巳（藪の中の黒猫、強虫女と弱虫男）
俺たちに明日はない（米）（アーサー・ペン）	

▲「肉弾」

▼「強虫女と弱虫男」

作品賞

監督賞

主演男優賞
主演女優賞

助演男優賞
助演女優賞

脚本賞

撮影賞

外国語映画賞

ヴェトナム戦争、黒人問題等多くの問題を抱えるアメリカだったが、アカデミーは会場をドロシー・チャンドラー・パヴィリオンに移しイングリッド・バーグマン以下10人のリレー式司会によって華やかに行われた。全般的に作品は地味な感じであったがハイライトは女優賞で何とキャサリン・ヘップバーンとバーブラ・ストライサンドの２人が受賞するという珍事件だった。これは過去に１度男優賞であっただけである。

カンヌではもっと大変な騒動が起こっていた。いわゆる「５月革命事件」である。このため会期途中で審査に当たる人たちが次々と辞任、結局中止と言うことになった。

日本映画界は小予算で質の高い作品を製作すると言うことでＡＴＧが活動を活発化させた。「肉弾」「絞死刑」「初恋・地獄篇」がベスト・テン入りを果たした。監督も新旧交代の時期が来たことを思わせる。外国映画はニューシネマ派の作品が１位の「俺たちに明日はない」、６位の「卒業」と入り、やがて来る全盛の時代を予感させる。

▲「神々の深き欲望」

Digitized by Google

第40回 アカデミー賞	第25回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第20回 カンヌ国際映画祭	第17回 ベルリン映画祭
夜の大捜査線 (ノーマン・ジュイソン)	(ド)**夜の大捜査線** (ノーマン・ジュイソン) (ミ/コ)**卒業** (マイク・ニコルズ)	**昼顔**(仏) (ルイス・ブニュエル)	**欲望**(英) (ミケランジェロ・アントニオーニ)	**Le départ**(ベルギー) (イエジー・スコリモウスキー)
マイク・ニコルズ (卒業)	**マイク・ニコルズ** (卒業)		**フェレンツ・コーシャ** (Tizezer Nap/ハンガリー)	**ジヴォジン・パヴロヴィチ** (Bodjenda Pagova/ユーゴ)
ロッド・スタイガー (夜の大捜査線)	(ド)**ロッド・スタイガー** (夜の大捜査線) (ミ/コ)**リチャード・ハリス** (キャメロット)	**リュビサ・サマルジッチ** (Jutro/ユーゴ)	**オデッド・コトラー** (Trois Jours pour un Enfant/イスラエル)	**ミシェル・シモン** (老人と子供/仏)
キャサリン・ヘップバーン (招かれざる客)	(ド)**エディス・エヴァンス** (The Whisperers) (ミ/コ)**アン・バンクロフト** (卒業)	**シャーリー・ナイト** (Dutchman/英)	**ビア・デーゲルマルク** (みじかくも美しく燃え/スウェーデン)	**エディス・エヴァンス** (The Whisperers/英)
ジョージ・ケネディ (暴力脱獄)	**リチャード・アッテンボロー** (ドリトル先生の不思議な旅)			
エステル・パーソンズ (俺たちに明日はない)	**キャロル・チャニング** (モダン・ミリー)			
(色)**スターリング・シリファント**(夜の大捜査線)/(オ)**ウィルアム・ローズ**(招かれざる客)			**アラン・ジェシュア** (殺人ゲーム/仏) **エリオ・ペトリ、ウーゴ・ピロ**(悪い奴ほど手が白い/伊)	
バーネット・ガフィー (俺たちに明日はない)				
Closely Watched Trains (チェコ)				

▲「卒業」

▲「欲望」

▼「華岡清州の妻」

▼「夜の大捜査線」

Digitized by Google

第41回 キネマ旬報賞	第22回 毎日映画コンクール	
上意討ち-拝領妻始末-（小林正樹）	**上意討ち-拝領妻始末-**（小林正樹）	作品賞
小林正樹（上意討ち-拝領妻始末-）	**今村昌平**（人間蒸発）	監督賞
市川雷蔵（華岡清州の妻、ある殺し屋）	**田中邦衛**（若者たち）	主演男優賞
岩下志麻（智恵子抄、あかね雲、女の一生）	**岩下志麻**（智恵子抄、あかね雲）	主演女優賞
	山本圭（若者たち、君が青春のとき、陽のあたる坂道）	助演男優賞
	左幸子（女の一生、春日和）	助演女優賞
橋本忍（上意討ち-拝領妻始末-、日本のいちばん長い日）	**山内久**（若者たち）	脚本賞
	竹村博（惜春、智恵子抄）	撮影賞
アルジェの戦い（仏＝アルジェリア）（ジロ・ポンテコルヴォ）		外国語映画賞

▲「昼顔」

▼「人間蒸発」

アメリカン・ニュー・シネマの波が起こり「俺たちに明日はない」を筆頭に若い製作者たちの力が大いに発揮された年であった。40回を迎えたアカデミーは暗殺されたキング牧師の葬儀のため２日延期されて開催された。「夜の大捜査線」が作品賞を始め５部門を取り、旋風の目となった「俺たちに明日はない」は結局１個しか取れず、同じく下馬評ではかなり取るであろうと言われた「卒業」も監督賞だけの受賞だった。

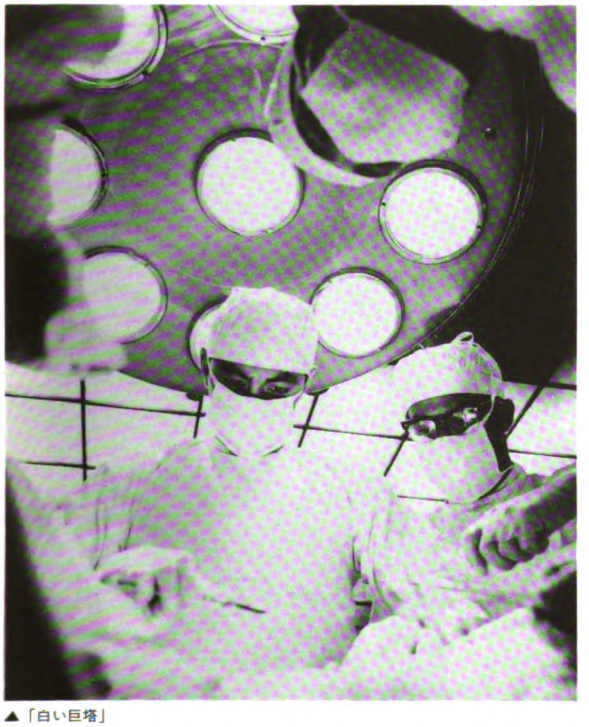
カンヌ映画祭はイタリアの監督アレッサンドラ・ブラセッティが審査委員長を務め、相変わらずのもめ事はあったが、アントニオーニの「欲望」がグランプリに輝いた。ロベール・ブレッソンが満場一致で特別表彰を受けた。

キネ旬のベスト・テンでは日本映画は大接戦となり「上意討ち」「人間蒸発」「日本のいちばん長い日」「乱れ雲」が僅差で競り合った。外国映画の方は「アルジェの戦い」が文句なしの１位に、アントニオーニの「欲望」、アラン・レネの「戦争は終わった」、ゴダールの「気狂いピエロ」といった反体制派が目立った。

▲「智恵子抄」

Digitized by Google

第39回 アカデミー賞	第24回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第19回 カンヌ国際映画祭	第16回 ベルリン映画祭
わが命つきるとも (フレッド・ジンネマン)	(ド)**わが命つきるとも** (フレッド・ジンネマン) (ミ/コ)**アメリカ上陸作戦** (ノーマン・ジュイソン)	**アルジェの戦い**(伊=アルジェリア) (ジッロ・ポンテコルヴォ)	**男と女**(仏) (クロード・ルルーシュ) **蜜がいっぱい**(伊) (ピエトロ・ジェルミ)	**袋小路**(英) (ロマン・ポランスキー)
フレッド・ジンネマン (わが命つきるとも)	**フレッド・ジンネマン** (わが命つきるとも)		**セルゲイ・ユトケーヴィッチ**(Lenin v Polyshe/ソ連)	**カルロス・サウラ** (La Caza/スペイン)
ポール・スコフィールド (わが命つきるとも)	(ド)**ポール・スコフィールド** (わが命つきるとも) (ミ/コ)**アラン・アーキン** (アメリカ上陸作戦)	**ジャック・ペラン** (Un Uomo a Meta/伊、La Busca/スペイン)	**ペール・オスカルソン** (Sult/デンマーク)	**ジャン=ピエール・レオ** (男性・女性/仏)
エリザベス・テイラー (バージニア・ウルフなんかこわくない)	(ド)**アヌーク・エーメ** (男と女) (ミ/コ)**リン・レッドグレイヴ** (ジョージー・ガール)	**ナターリャ・アリンバサローワ**(Le Premier Instituteur/ソ連)	**ヴァネッサ・レッドグレイヴ** (モーガン/英)	**ローラ・オルブライト** (Lord Love a Duck/米)
ウォルター・マッソー (恋人よ帰れ！わが胸に)	**リチャード・アッテンボロー** (砲艦サンパブロ)			
サンディ・デニス(バージニア・ウルフなんかこわくない)	**ジョスリン・ラ・ガード** (ハワイ)			
(色)**ロバート・ボルト** (わが命つきるとも)/(オ)**クロード・ルルーシュ、ピエール・ユテローヴァン**(男と女)				
(B/W)**ハスケル・ウェクスラー** (バージニア・ウルフなんかこわくない)/(C)**デッド・ムーア**(わが命つきるとも)				
男と女(仏) (クロード・ルルーシュ)	**男と女**(仏) (クロード・ルルーシュ)			



▲「白い巨塔」

▲「男と女」

▼「わが命つきるとも」

Digitized by Google

1966昭和41年

第40回 キネマ旬報賞	第21回 毎日映画コンクール	第17回 ブルーリボン賞	
白い巨塔（山本薩夫）	**白い巨塔**（山本薩夫）	**白い巨塔**（山本薩夫）	作品賞
山本薩夫（白い巨塔）	**山本薩夫**（白い巨塔）	**山田洋次**（運が良けりゃ）	監督賞
小沢昭一（「エロ事師たち」より・人類学入門）	**小沢昭一**（「エロ事師たち」より・人類学入門）	**八ナ肇**（運が良けりゃ）	主演男優賞
司葉子（紀ノ川、ひき逃げ、沈丁花）	**司葉子**（紀ノ川）	**司葉子**（紀ノ川）	主演女優賞
	三橋達也（女の中にいる他人）	**中村賀津雄**（湖の琴）	助演男優賞
	坂本スミ子（「エロ事師たち」より・人類学入門）	**乙羽信子**（本能）	助演女優賞
橋本忍（白い巨塔）	**橋本忍**（白い巨塔）	**橋本忍**（白い巨塔）	脚本賞
	飯村雅彦（湖の琴、一万三千人の容疑者）		撮影賞
大地のうた（インド）（サタジット・レイ）		**男と女**（仏）（クロード・ルルーシュ）	外国語映画賞

セックス描写が緩和されたニュースが伝えられる一方、ハリウッドのスタジオは経営不振で他企業との合併が伝えられた。アカデミーの式典は今回からカラーで放送される事になった。それを祝ってアステアとロジャースのダンス等、派手な演出がされて会場は盛り上がった。「バージニア・ウルフなんかこわくない」が13個のノミネートで、エリザベス・テイラーとリチャード・バートン夫妻の同時受賞に期待がかかったがバートンは落選した。結局は5個で「わが命つきるとも」が6個を受賞。そんな中で助演賞のウォルター・マッソーが長い下積みの上の受賞で大きな感動を会場にもたらした。

カンヌ映画祭はソフィア・ローレンが審査委員長で行なわれグランプリにオスカー受賞作でもある「男と女」と「密がいっぱい」（未）が選ばれた。

日本映画は景気の悪さから映画館に来る観客は減少した。ベスト・テンでは新旧の監督たちが火花を散らし「人類学入門」「他人の顔」「白昼の通り魔」等の新世代が奮闘した。

外国映画部門では製作後長く未輸入だった「大地のうた」と「市民ケーン」が1，2位を占め映画ファンを喜ばせた。

▲「バージニア・ウルフなんかこわくない」

Digitized by Google

第38回 アカデミー賞	第23回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第18回 カンヌ国際映画祭	第15回 ベルリン映画祭
サウンド・オブ・ミュージック (ロバート・ワイズ)	(ド)**ドクトル・ジバゴ** (デイヴィッド・リーン) (ミ/コ)**サウンド・オブ・ミュージック** (ロバート・ワイズ)	**熊座の淡き星影**(伊) (ルキノ・ヴィスコンティ)	**ナック**(英) (リチャード・レスター)	**アルファヴィル**(仏=伊) (ジャン=リュック・ゴダール)
ロバート・ワイズ (サウンド・オブ・ミュージック)	**デイヴィッド・リーン** (ドクトル・ジバゴ)		**リビィウ・チューレイ** (Padurea Spinzuratilor/ルーマニア)	**サタジット・レイ** (チャルラータ/インド)
リー・マーヴィン (キャット・バルー)	(ド)**オマー・シャリフ** (ドクトル・ジバゴ) (ミ/コ)**リー・マーヴィン** (キャット・バルー)	**三船敏郎** (赤ひげ/日)	**テレンス・スタンプ** (コレクター/英)	**リー・マーヴィン** (キャット・バルー/米)
ジュリー・クリスティ (ダーリング)	(ド)**サマンサ・エッガー**(コレクター)(ミ/コ)**ジュリー・アンドリュース**(サウンド・オブ・ミュージック)	**アニー・ジラルド** (マンハッタンの哀愁/仏)	**サマンサ・エッガー** (コレクター/英)	**マドファー・ジェフリー** (Shakespeare Wallah/インド)
マーティン・バルサム (A Thousand Clowns)	**オスカー・ウェルナー** (寒い国から帰ったスパイ)			
シェリー・ウィンタース (いつか見た青い空)	**ルース・ゴードン** (サンセット物語)			
(色)**ロバート・ボルト** (ドクトル・ジバゴ)/(オ)**フレデリック・ラファエル**(ダーリング)			**La 317 ème Section**(仏) **丘**(米)	
(B/W)**アーネスト・ラズロ** (愚か者の船)/(C)**フレディ・ヤング**(ドクトル・ジバゴ)				
The Shop on Main Street(チェコ)	**魂のジュリエッタ**(伊) (フェデリコ・フェリーニ)			

▲「ドクトル・ジバゴ」

▲「ナック」

▼「赤ひげ」

Digitized by Google

1965 昭和40年

第39回 キネマ旬報賞	第20回 毎日映画コンクール	第16回 ブルーリボン賞	
赤ひげ（黒澤明）	**赤ひげ**（黒澤明）	**赤ひげ**（黒澤明）	作品賞
黒澤明（赤ひげ）	**内田吐夢**（飢餓海峡）	**山本薩夫**（にっぽん泥棒物語、証人の椅子）	監督賞
三國連太郎（にっぽん泥棒物語）	**三國連太郎**（飢餓海峡、にっぽん泥棒物語）	**三船敏郎**（赤ひげ）	主演男優賞
若尾文子（清作の妻、妻の日の愛のかたみに、波影）	**左幸子**（飢餓海峡）	**若尾文子**（清作の妻、波影）	主演女優賞
	伴淳三郎（飢餓海峡）	**田村高廣**（兵隊やくざ）	助演男優賞
	奈良岡朋子（証人の椅子）	**二木てるみ**（赤ひげ）	助演女優賞
熊井啓（日本列島）	**鈴木尚之**（飢餓海峡、冷飯とおさとちゃん）	**鈴木尚之**（飢餓海峡）	脚本賞
	宮島義勇（怪談）	**岡崎宏三**（六条ゆきやま紬）	撮影賞
8½（伊）（フェデリコ・フェリーニ）		**メリー・ポピンズ**（米）（ロバート・スティーヴンスン）	外国語映画賞

「サウンド・オブ・ミュージック」と「ドクトル・ジバゴ」の2本がそれぞれ8部門に、「愚か者の船」が6部門、「ダーリング」が5部門にノミネートされる近来にない激しい接戦になった。そして結果は「サウンド・オブ・ミュージック」と「ドクトル・ジバゴ」のそれぞれ5個ずつの受賞。長年、司会者として活躍、今回で12回を数えるボブ・ホープが名誉賞を受賞した。日本から監督賞で初めてノミネートされた「砂の女」は惜しくも落選した。

カンヌ映画祭では初の女性審査委員長に往年のハリウッド女優オリヴィア・デ・ハヴィランドを選び話題に。「ナック」がグランプリ、小林正樹の「怪談」が審査員特別賞を受けた。

製作時点から問題のあった「東京オリンピック」が賛否両論の中で興行的には大ヒット、キネ旬でも2位にランクされた。外国映画部門では久しぶりにアメリカ映画が躍進2位以下だが6本が入選した。

▲「サウンド・オブ・ミュージック」

Digitized by Google

第37回 アカデミー賞	第22回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第17回 カンヌ国際映画祭	第14回 ベルリン映画祭
マイ・フェア・レディ (ジョージ・キューカー)	(ド)**ベケット** (ピーター・グレンヴィル) (ミ/コ)**マイ・フェア・レディ** (ジョージ・キューカー)	**赤い砂漠**(伊) (ミケランジェロ・アントニオーニ)	**シェルブールの雨傘** (仏) (ジャック・ドゥミ)	**野生のもだえ**(トルコ) (イスマエル・メンチ)
ジョージ・キューカー (マイ・フェア・レディ)	**ジョージ・キューカー** (マイ・フェア・レディ)			**サタジット・レイ** (大都会/インド)
レックス・ハリソン (マイ・フェア・レディ)	(ド)**ピーター・オトゥール** (ベケット) (ミ/コ)**レックス・ハリソン** (マイ・フェア・レディ)	**トム・コートネイ** (銃殺/英)	**アンタール・バーゲル**(Pacsirta/ハンガリー)**サーロー・ウルツィ**(誘惑されて棄てられて/伊)	**ロッド・スタイガー** (質屋/米)
ジュリー・アンドリュース (メリー・ポピンズ)	(ド)**アン・バンクロフト** (女が愛情に渇くとき) (ミ/コ)**ジュリー・アンドリュース** (メリー・ポピンズ)	**ハリエット・アンデショーン** (愛する/スウェーデン)	**アン・バンクロフト**(女が愛情に渇くとき/英)**バーバラ・バリー**(わかれ道/米)	**左幸子** (彼女と彼、にっぽん昆虫記/日)
ピーターユスティノフ (トブカピ)	**エドモンド・オブライエン** (5月の7日間)			
リラ・ケドローヴァ (その男ゾルバ)	**アグネス・ムーアヘッド** (ふるえて眠れ)			
(色)**エドワード・アンハルト**(ベケット)/(オ)**S・H・バーネット、ピーター・ストーン、フランク・ターロフ**(がちょうのおやじ)				
(B/W)**ウォルター・ラッサリー**(その男ゾルバ)/(C)**ハリー・ストラドリング**(マイ・フェア・レディ)				
昨日・今日・明日(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ)	**イタリア式結婚行進曲**(伊)			

▲「マイ・フェア・レディ」

▲「シェルブールの雨傘」

▼「甘い汗」

Digitized by Google

1964 昭和39年

第38回 キネマ旬報賞	第19回 毎日映画コンクール	第15回 ブルーリボン賞	
砂の女（勅使河原宏）	**砂の女**（勅使河原宏）	**砂の女**（勅使河原宏）	作品賞
勅使河原宏（砂の女）	**勅使河原宏**（砂の女）	**勅使河原宏**（砂の女）	監督賞
山村聡（傷だらけの山河）	**西村晃**（赤い殺意）	**小林桂樹**（われ一粒の麦なれど）	主演男優賞
京マチ子（甘い汁）	**京マチ子**（甘い汁）	**岩下志麻**（五瓣の椿）	主演女優賞
	三木のり平（香華）	**西村晃**（赤い殺意、ほか）	助演男優賞
	楠侑子（赤い殺意、おんなの渦と淵と流れ）	**吉村実子**（鬼婆、ほか）	助演女優賞
水木洋子（甘い汁、怪談）	**八木保太郎**（越後つついし親不知、愛と死をみつめて）	**国弘威雄**（幕末残酷物語）	脚本賞
	姫田真佐久（赤い殺意）	**黒田清巳**（鬼婆）	撮影賞
かくも長き不在（仏）（アンリ・コルピ）		**野のユリ**（米）（ラルフ・ネルソン）	外国語映画賞

オリンピックが東京で開催されたこの年ハリウッドは興行が立ち直りを見せ活況を呈した。オスカーナイトも新旧取り混ぜてジョーン・クロフォード、マール・オベロン、フレッド・アステアからアラン・ドロン、クラウディア・カルディナーレまで多くのスターが久しぶりに集合、大いに盛り上がりをみせた。「マイ・フェア・レディ」（8個）、「メリー・ポピンズ」（5個）とミュージカルが健闘した。

カンヌ映画祭は審査委員長にフリッツ・ラングを迎えグランプリ（この年から名称変更）にミュージカル「シェルブールの雨傘」が選ばれた。日本の「砂の女」が審査員特別賞を受賞。日本では「砂の女」はキネ旬を始めとして1位を独占した。「怪談」「香華」「赤い殺意」「飢餓海峡」と見応えのある大作が以下に続いた。

外国映画部門はフランス映画の「かくも長き不在」「突然炎のごとく」「去年マリエンバードで」「軽蔑」の4本が、アメリカ映画は1本という寂しさだった。

▲「砂の女」

Digitized by Google

第36回 アカデミー賞	第21回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第16回 カンヌ国際映画祭	第13回 ベルリン映画祭
トム・ジョーンズの華麗な冒険 (トニー・リチャードソン)	(ド)**枢機卿** (オットー・プレミンジャー) (ミ/コ)**トム・ジョーンズの華麗な冒険** (トニー・リチャードソン)	**Le Mani Sulla Citta**(伊) (フランチェスコ・ロージ)	**山猫**(伊) (ルキノ・ヴィスコンティ)	**武士道残酷物語**(日) (今井正) **Il diavolo**(伊) (ジャン=ルイジ・ポリドーロ)
トニー・リチャードソン (トム・ジョーンズの華麗な冒険)	**エリア・カザン** (アメリカ・アメリカ)			**ニコス・コンドゥロス** (春のめざめ/ギリシア)
シドニー・ポワチエ (野のユリ)	(ド)**シドニー・ポワチエ** (野のユリ) (ミ/コ)**アルベルト・ソルディ** (To Bed or Not to Bed)	**アルバート・フィニー** (トム・ジョーンズの華麗な冒険／英)	**リチャード・ハリス** (孤独の報酬/英)	**シドニー・ポワチエ** (野のユリ/米)
パトリシア・ニール (ハッド)	(ド)**レスリー・キャロン** (The L-Shaped Room) (ミ/コ)**シャーリー・マクレーン** (あなただけ今晩は)	**デルフィーヌ・セイリグ** (ミュリエル／仏=伊)	**マリナ・ヴラディ** (女王蜂/伊)	**ビビ・アンデショーン** (älskarinnan／スウェーデン)
メルヴィン・ダグラス (ハッド)	**ジョン・ヒューストン** (枢機卿)			
マーガレット・ラザフォード (予期せぬ出来事)	**マーガレット・ラザフォード** (予期せぬ出来事)			
(色)**ジョン・オズボーン**(トム・ジョーンズの華麗な冒険) (オ)**ジェームズ・R・ウエッブ**(西部開拓史)			**アンリ・コルピ** (Codine／ルーマニア))	
(B/W)**ジェームズ・ウォン・ハウ**(ハッド) (C)**レオン・シャムロイ**(クレオパトラ)				
8½(伊) (フェデリコ・フェリーニ)	**トム・ジョーンズの華麗な冒険**(英) (トニー・リチャードソン)			

▲「にっぽん昆虫記」

▲「トム・ジョーンズの華麗な冒険」

▼「8½」

Digitized by Google

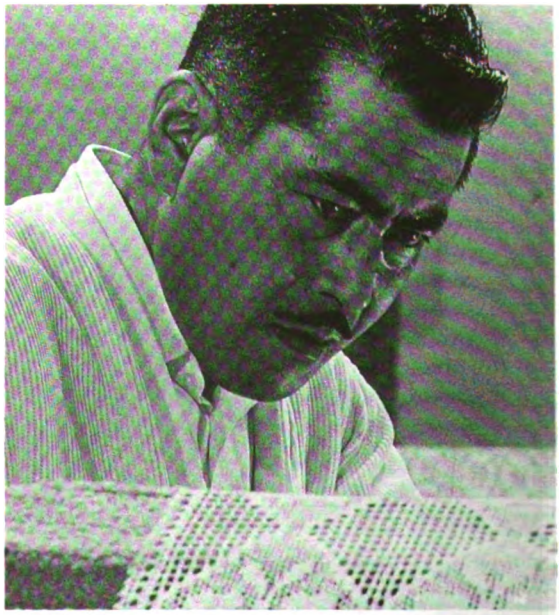
1963 昭和38年

第37回 キネマ旬報賞	第18回 毎日映画コンクール	第14回 ブルーリボン賞	
にっぽん昆虫記（今村昌平）	**天国と地獄**（黒澤明）	**にっぽん昆虫記**（今村昌平）	作品賞
今村昌平（にっぽん昆虫記）	**今村昌平**（にっぽん昆虫記）	**今村昌平**（にっぽん昆虫記）	監督賞
勝新太郎（悪名シリーズ、座頭市シリーズ）	**小林桂樹**（白と黒、江分利満氏の優雅な生活）	**中村錦之助**（武士道残酷物語）	主演男優賞
左幸子（にっぽん昆虫記、彼女と彼）	**左幸子**（にっぽん昆虫記、彼女と彼）	**左幸子**（にっぽん昆虫記、彼女と彼）	主演女優賞
	長門裕之（古都）	**河原崎長一郎**（五番町夕霧楼）	助演男優賞
	中村玉緒（越前竹人形）	**南田洋子**（競輪上人行状記、サムライの子）	助演女優賞
今村昌平（にっぽん昆虫記、サムライの子、競輪上人行伏記）	**小国英雄、菊島隆三、久坂栄二郎、黒澤明**（天国と地獄）	**今村昌平、長谷部慶次**（にっぽん昆虫記）	脚本賞
	成島東一郎（古都）	**成島東一郎**（古都）	撮影賞
アラビアのロレンス（英）（デヴィッド・リーン）		**シベールの日曜日**（仏）（セルジュ・ブールギニョン）	外国語映画賞

ケネディ大統領の暗殺、人種差別の問題でアメリカは大きく揺れ動いていた年、アカデミー賞はジャック・レモンの司会で始まり、黒人として39年以来2度目となるオスカーを手にしたのは「野のユリ」のシドニー・ポワチエだった。そのスピーチは大変重みのあるものだった。作品賞は「トム・ジョーンズの華麗な冒険」が監督、脚色、作曲を含む4部門を、対抗馬の「クレオパトラ」も撮影、美術、衣裳、特殊効果の4部門で部門的に見て前者に凱歌があがった。

カンヌ映画祭はルキノ・ヴィスコンティの「山猫」がパルム・ドールを、日本から参加の小林正樹の「切腹」が審査員特別賞を取った。日本映画界は最盛期の半分以下に観客は減り映画館も6000館余と激しく落ち込んだ。不振の日活にあって今村昌平の「にっぽん昆虫記」で、市川崑は「太平洋ひとりぼっち」、浦山桐郎は「非行少女」でがんばった。

キネ旬の外国映画部門では「アラビアのロレンス」が配収もよく堂々の1位を獲得、オスカー関連では「アラバマ物語」が15位、「ハッド」が23位に入っている。



▲「天国と地獄」

Digitized by Google

第35回 アカデミー賞	第20回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第15回 カンヌ国際映画祭	第12回 ベルリン映画祭
アラビアのロレンス (デイヴィッド・リーン)	(ド)**アラビアのロレンス** (デイヴィッド・リーン) (コ)**ミンクの手ざわり** (デルバート・マン) (ミ)**Music Man**	**家族日誌**(米=伊) (ヴァレリオ・ズルリーニ) **僕の村は戦場だった** (ソ連) (アンドレイ・タルコフスキー)	**サンタ・バルバラの誓い**(ブラジル) (アンセルモ・ドゥアルテ)	**或る種の愛情**(英) (ジョン・シュレシンジャー)
デイヴィッド・リーン (アラビアのロレンス)	**デイヴィッド・リーン** (アラビアのロレンス)			**フランチェスコ・ロージ** (シシリーの黒い霧/伊)
グレゴリー・ペック (アラバマ物語)	(ド)**グレゴリー・ペック** (アラバマ物語) (ミ/コ)**マルチェロ・マストロヤンニ** (イタリア式離婚狂想曲)	**バート・ランカスター** (終身犯/米)	**マレー・メルヴィン**(蜜の味/英) **ラルフ・リチャードソン、ジェイソン・ロバーズ、ティーン・ストックウェル** (Long Day's Journey into the Night/米)	**ジェームズ・スチュワート** (H氏のバケーション/米)
アン・バンクロフト (奇跡の人)	(ド)**ジェラルディン・ペイジ** (渇いた太陽) (ミ/コ)**ロザリンド・ラッセル** (ジプシー)	**エマニュエル・リヴァ** (Thérèse Desqueyroux/仏)	**リタ・トゥシンハム**(蜜の味/英) **キャサリン・ヘップバーン**(Long Day's Journey into the Night/米)	**リタ・ガム、ヴィヴェカ・リンドフォース** (出口なし)
エド・ベグリー (渇いた太陽)	**オマー・シャリフ** (アラビアのロレンス)			
パティ・デューク (奇跡の人)	**アンジェラ・ランズベリー** (影なき狙撃者)			
(オ)**エンニオ・デ・コンチーニ、アルフレッド・ジャンネッティ、ピエトロ・ジェルミ**(イタリア式離婚狂想曲)/(色)**ホートン・フート**(アラバマ物語)				
(B/W)**ジャン・ブールグワン、ウォルター・ウォティッツ**(史上最大の作戦)/(C)**フレディ・ヤング**(アラビアのロレンス)				
シベールの日曜日(仏) (セルジュ・ブールギニョン)	**イタリア式離婚狂想曲**(伊) (ピエトロ・ジェルミ)			

▲「キューポラのある街」

▲「アラビアのロレンス」

▼「今年の恋」

▼「奇跡の人」

Digitized by Google

1962昭和37年

第36回 キネマ旬報賞	第17回 毎日映画コンクール	第13回 ブルーリボン賞	
私は二歳（市川崑）	**切腹**（小林正樹）	**キューポラのある街**（浦山桐郎）	作品賞
市川崑（私は二歳）	**市川崑**（破戒、私は二歳）	**市川崑**（私は二歳、破戒）	監督賞
仲代達矢（椿三十郎、切腹）	**殿山泰司**（人間）	**仲代達矢**（切腹）	主演男優賞
岡田茉莉子（今年の恋、鴛子の運命）	**岡田茉莉子**（今年の恋、秋津温泉）	**吉永小百合**（キューポラのある街、ほか）	主演女優賞
	東野英治郎（キューポラのある街、秋刀魚の味、ほか）	**伊藤雄之助**（忍びの者）	助演男優賞
	岸田今日子（破戒、秋刀魚の味、忍びの者）	**岸田今日子**（破戒、秋刀魚の味）	助演女優賞
新藤兼人（青べか物語、しとやかな獣、当りや大将）	**和田夏十**（破戒、私は二歳）	**橋本忍**（切腹）	脚本賞
	原田雄春（秋刀魚の味）		撮影賞
野いちご（スウェーデン）（イングマル・ベルイマン）		**怒りの葡萄**（米）（ジョン・フォード）	外国語映画賞

8月マリリン・モンローの謎の死は世界中を驚かせた。ハリウッドのスタジオはお抱えスターを手放し、古くからの撮影システムが崩壊、新しい時代を迎えていた。そんな中、力作が多く製作され注目を集めたが、オスカーはデイヴィッド・リーンの「アラビアのロレンス」が7部門を受賞。「奇跡の人」で女優賞を受賞したアン・バンクロフトはニューヨークの自宅で感激の吉報を聞いた。

また5回目のノミネートでやっと念願を果たしたグレゴリー・ペックもうれし涙にくれた。カンヌ映画祭は審査委員長に元駐仏大使の古垣鉄郎氏にフランソワ・トリュフォーも初めて審査員として加わり行われた。日本からは「キューポラのある街」が参加した。その「キューポラのある街」はその年、キネ旬では2位、「切腹」「破戒」「椿三十郎」と巨匠たちは健在、「秋刀魚の味」は小津安二郎の遺作となった。前年1位になったイングマル・ベルイマンは「野いちご」で連覇を達成した。

▲「切腹」

Digitized by Google

第34回 アカデミー賞	第19回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第14回 カンヌ国際映画祭	第11回 ベルリン映画祭
ウエスト・サイド物語 (ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンズ)	(ド)**ナバロンの要塞** (J・リー・トンプソン) (コ)**A Majority of One** (マーヴィン・ルロイ) (ミ)**ウエスト・サイド物語** (ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンズ)	**去年マリエンバートで**(仏) (アラン・レネ)	**ビリディアナ**(スペイン) (ルイス・ブニュエル) **かくも長き不在**(仏) (アンリ・コルピ)	**夜**(伊) (ミケランジェロ・アントニオーニ)
ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンズ (ウエスト・サイド物語)	**スタンリー・クレイマー** (ニュールンベルグ裁判)		**ユーリア・ソーンツェワ** (戦場/ソ連)	**ベルンハルト・ヴィッキ** (Das Wander des Malachias/西独)
マクシミリアン・シェル (ニュールンベルグ裁判)	(ド)**マクシミリアン・シェル** (ニュールンベルグ裁判) (ミ/コ)**グレン・フォード** (ポケット一杯の幸福)	**三船敏郎** (用心棒／日)	**アンソニー・パーキンス** (さよならをもう一度/米)	**ピーター・フィンチ** (ジョニーへの愛なし)
ソフィア・ローレン (ふたりの女)	(ド)**ジェラルディン・ペイジ** (肉体のすきま風) (ミ/コ)**ロザリンド・ラッセル** (A Majority of One)	**シュザンヌ・フロン** (Tu ne tueras pas／仏=ユーゴ)	**ソフィア・ローレン** (ふたりの女/伊)	**アンナ・カリーナ** (女は女である/仏)
ジョージ・チャキリス (ウエスト・サイド物語)	**ジョージ・チャキリス** (ウエスト・サイド物語)			
リタ・モレノ (ウエスト・サイド物語)	**リタ・モレノ** (ウエスト・サイド物語)			
(色)**アビー・マン**(ニュールンベルグ裁判) (オ)**ウィリアム・インジ**(草原の輝き)				
(B/W)**ユージーン・シュフタン** (ハスラー) (C)**ダニエル・L・ファップ** (ウエスト・サイド物語)				
鏡の中にある如く (スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)	**ふたりの女**(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ)			

▲「おとうと」

▲「ウエスト・サイド物語」

▼「去年マリエンバートで」

Digitized by Google

1961 昭和36年

第35回 キネマ旬報賞	第16回 毎日映画コンクール	第12回 ブルーリボン賞	
不良少年（羽仁進）	**人間の条件・完結篇**（小林正樹）	**豚と軍艦**（今村昌平）	作品賞
羽仁進（不良少年）	**小林正樹**（人間の条件・完結篇）	**伊藤大輔**（反逆児）	監督賞
三船敏郎（用心棒、大阪城物語）	**仲代達矢**（人間の条件・完結篇）	**三船敏郎**（用心棒、価値ある男）	主演男優賞
若尾文子（女は二度生まれる、妻は告白する）	**高峰秀子**（名もなく貧しく美しく、永遠の人）	**若尾文子**（女は二度生まれる、妻は告白する、婚期）	主演女優賞
	三國連太郎（はだかっ子、飼育）	**山村聡**（あれが港の灯だ、河口）	助演男優賞
	新珠三千代（小早川家の秋、南の風と波）	**高千穂ひづる**（背徳のメス、ゼロの焦点）	助演女優賞
水木洋子（婚期、もず、あれが港の灯だ）	**松山善三**（人間の条件、名もなく貧しく美しく、二人の息子）	**松山善三**（名もなく貧しく美しく、二人の息子）	脚本賞
	宮島義勇（人間の条件・完結編）		撮影賞
処女の泉（スウェーデン）（イングマル・ベルイマン）		**ふたりの女**（伊）（ヴィットリオ・デシーカ）	外国語映画賞

ケネディが大統領に就任、華やいだ雰囲気の中「ウエスト・サイド物語」が10部門のオスカーを獲得、会場はウエスト・サイド一色に塗りつぶされた。画期的なこのミュージカルは世界的にヒット、若者たちの人気となった。女優賞のソフィア・ローレンは会場には来ずローマで朗報をケイリー・グラントから聞いた。いまだに良く聞かれる「ムーン・リバー」もこの年の歌曲賞を受賞した。

カンヌ映画祭は「去年マリエンバートで」の出品拒否（ヴェネツィアではグランプリを受賞）や「尼僧ヨアンナ」へのヴァチカンからの抗議など相変わらず波乱含みのものであった。日本映画界は新東宝がついに製作を中止。キネ旬ベスト・テンは新人、羽仁進の「不良少年」が1位、以下「用心棒」「永遠の人」「人間の条件・完結篇」「名もなく貧しく美しく」が続いた。俳優陣では三船敏郎、仲代達矢、高峰秀子、若尾文子がいろいろな所の賞に輝いている。外国映画部門ではオスカー作品「ウエスト・サイド物語」が4位、1位から3位はまたしてもヨーロッパ北欧勢にさらわれてしまった。

▲「ふたりの女」

Digitized by Google

ヴェネツィア映画祭

照本良

▲「HANA-BI」

1997年9月6日、7日間の滞在最終日。僕らの「いちばん長い日」は前日通りの慌ただしいインタビュー・ラッシュで始まった。17ヶ国、72個目の最後のお仕事が終わって、スタッフは夜の授賞式まで各自それぞれ勝手に時間を潰すことになっていた。結果は夜、メイン会場のサラ・グランデの授賞式までわからない、と固く信じていたのは監督だけで、僕らはpm1時のプレス向け発表に神経をとがらせていた。それというのも前夜に事務局から入る筈の「内定」の連絡がなく、監督以外は寝苦しい一夜を過ごしていたからだ（その年から組織の形態も、規定も一新され、ついでに「内定」連絡も廃止されたことは帰国後に知った）。

pm1時20分、プレス・センターに詰めていたスタッフから電話連絡があった。『獲った！　獲っちゃった！　グランプリです、金獅子賞ですよ!!』。「HANA-BI」と確かに審査委員長のジェーン・カンピオンが宣言したと確認したその瞬間に、感情が込み上げてきた。自分でも芸がないと思いつつ、オウム返しに『獲っちゃった！　金・獅・子!!』を連呼するだけで監督の部屋にいる森プロデューサーへ通報、受話器越しにどっと沸き上がる歓声に混じって『えっ、ホント？』と裏返った監督の声を聞いて涙があふれてきた。

おかげさまで『HANA-BI』はヴェネツィアを含めて24の国際映画祭に参加、27ヶ国で公開され、日本でもミニ・シアター公開作品では破格の興行成績もあげた。いまではヴェネツィア受賞は、当然で計算尽くのような持て囃され方だが、出発前の心境はそんな悠長なものではなかった。結果は神のみぞ知る、受賞に絶対の保障があるわけではないのだ。計算したのは「何も獲れなかった場合」の対処法で、これについては深謀遠慮の森プロデューサー以下、徹底的にしたつもりだ。目指す終着点はあくまでも、4カ月後の日本のロードショー公開。しかも話題も流行も、全てが変わる年末・年始という大関門を間に挟んでいる。ヴェネツィア参加は公開＝大ヒットまでの長い道程の実質的な立上がりという位置付けだった。

といいながら「予感」めいたものは確かにあった。到着の夜にプレス向け試写があって、その翌朝からホテルのロビーや、ビーチに面したベランダで、浴びる視線に熱気がこもって来たこと。殺到するインタビューの追加申し込みに、現地のパブリシスト（同年のカンヌGPX、『カンゾー先生』の今村昌平監督も担当した）が嬉しい悲鳴を上げていたこと。

3日の夜の、一般上映後の観客の反応については監督が帰国後のインタビューで語り尽くしているのでここでは多くは語らない。ただ、日本語字幕とほとんど間をあけない笑いやすすり泣きという暗闇を通して皮膚感覚で感じた反応……あの日の感動が素直によみがえる。宣伝プロデューサーとしての務め＝東京への連絡を終え、監督の部屋へ飛び込み、手招きされるまま記念のツー・ショット撮影（思わず抱き付いてしまった）。素晴らしい瞬間に居合わせたことを僕は、一生忘れない。

▲「カンゾー先生」

Ryo Terumoto

映画・映画祭宣伝プロデューサー。北野作品の宣伝は91年、「あの夏、いちばん静かな海。」から。『Kids Return』（96）で「カンヌ映画祭・監督週間」、『HANA-BI』（98）で「ヴェネツィア映画祭」「釜山映画祭」に同伴参加、サングラスごしに光る「涙」をこの目で確認（本人は「汗」と言ってるが）。8本目の監督作品（タイトル未定）は99年初夏の全国公開が決定、キタノ・ショックが再び世界を席巻する！

Digitized by Google

塚本晋也作品と映画祭

朱京順

▲「鉄男」

「鉄男」が初めて海外の映画祭で上映されたのはイタリアはローマのファンタスティック映画祭である。1989年、同じコンペ部門にはケン・ラッセルの作品も入っていたが、日本から送られてきた名もない監督の作品に会場の観客（殆ど10代、20代の若者たち）はヤンヤの喝采をおくり、堂々のグランプリ。海外で今ある塚本晋也の評価のきっかけを作ったのは世界的にもそれほど数が多くない〝ファンタスティック映画祭〟であったと言える。

「鉄男」は既成の映画的文法、話法を逸脱して作られていて、どのジャンルにもしっくりはまらない作品だ。むしろ〝テツオ〟というジャンルを作ってしまったといえば、大げさか？　自身、油絵を勉強していたという監督のバックグラウンドと無手勝流で作った作品は、プリントに様々な加工を施すSF作品、ホラー系統の作品たちとその作法で似通っているため、一般の映画祭というよりいわゆる〝ジャンル〟作品を主だって上映するファンタスティック系の映画祭に何の違和感もなく受け入れられた。

しかし、一方で〝ファンタスティック〟系の映画祭は一般の映画祭関係者から末流扱いを受けていたり、中には〝ゲットー〟と公言してはばからない某主流映画祭のディレクターもいる。続く「鉄男Ⅱ・BODY HAMMER」では同じ流れを汲む作品として、日本でも有名なアボリアッツ映画祭のコンペ部門に出品された。結果としては賞を逸したが、これをきっかけにいわゆる主流の映画祭関係者の目にとまるようになる。ベルリン映画祭のヤング・フォーラムは気に入ってくれたが、既にアボリアッツに出品していることを理由に結局セレクションされず、〝噂〟によるとカンヌの監督週間もアボリアッツがなければ入っていたとか。

しかし相変わらず塚本作品はファンタスティック系映画祭には人気で、世界規模的に大きなものだとオポルト（ポルトガル、2月）ブリュッセル（3月）、ローマ（6月）、シッジェス（スペイン、10月〜11月）を順繰りに万遍なく上映されていった。これらの映画祭の観客は圧倒的に若い。しかも映画祭同士のつながりもあるため、情報の伝達が早い。これは作品を海外配給するにはとても理想的な環境であって、コア層のファンを射止めた結果は着実に配給の輪を広げていく実績に繋がっていった。

「東京フィスト」からは少し流れが変わってきている。ヨーロッパでも新人監督の登竜門であるロカルノ映画祭でのコンペ出品を機に、いわゆる主流の映画祭からの注目度が上がってきた。これらの映画祭は作品セレクションに際して良くも悪くも保守的な傾向がある。

今まで観たこともない映画的文法で作品を語られることにある種の拒絶反応がありつつも、塚本作品から様々な映画の引用がくみ取られ、また特異な作家性も評価されて、新作の情報にも必ずリストに入れるようになってきている。その結果が97年に審査員も務めたベニス映画祭で、その翌年、新作「BULLET BALLET」(98)がプロスペッティブというセクションに選ばれ正式上映されたことだ。末流から主流へ。"末流的話法"がいかに主流として認められていくのか、今後の展開が更におもしろくなる。

▲「東京フィスト」

Shu Kyojun

ニューヨーク市立大学ハンター校卒、映画製作専攻。情報出版関連の会社で編集に携わったのち、日本の映画を海外に紹介、配給する仕事につく。塚本晋也監督作品を手始めに、小栗康平監督の「眠る男」など主に日本のインデペンデントの作品を扱う。97年に、日本の作品を海外でより広くプロモーションする目的で作られた〝ニューシネマ・フロム・ジャパン〟に参加。日本映画の海外での可能性を多角的に追求中。

Digitized by Google

第33回 アカデミー賞	第18回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第13回 カンヌ国際映画祭	第10回 ベルリン映画祭
アパートの鍵貸します (ビリー・ワイルダー)	(ド)**スパルタカス** (スタンリー・キューブリック) (コ)**アパートの鍵貸します** (ビリー・ワイルダー) (ミ)**終わりなき唄**	**ラインの仮橋**(仏=西独) (アンドレ・カイヤット)	**甘い生活**(伊) (フェデリコ・フェリーニ)	**El lazarillo de Tormes**(スペイン) (セザール・アルダビン)
ビリー・ワイルダー (アパートの鍵貸します)	**ジャック・カーディフ** (息子と恋人)			**ジャン=リュック・ゴダール** (勝手にしやがれ/仏)
バート・ランカスター (エルマー・ガントリー)	(ド)**バート・ランカスター** (エルマー・ガントリー) (ミ/コ)**ジャック・レモン** (アパートの鍵貸します)	**ジョン・ミルズ** (Tunes of Glory/英)	**該当なし**	**フレドリック・マーチ** (風を受けて/米)
エリザベス・テイラー (バターフィールド8)	(ド)**グリア・ガーソン**(ルーズベルト物語)/(ミ/コ)**シャーリー・マクレーン**(アパートの鍵貸します)	**シャーリー・マクレーン** (アパートの鍵貸します/米)	**ジャンヌ・モロー**(雨のしのび逢い/仏)**メリナ・メルクーリ**(日曜はダメよ/ギリシア)	**ジュリエット・メニエル** (Kermesse/西独)
ピーター・ユスティノフ (スパルタカス)	**サル・ミネオ** (栄光への脱出)			
シャーリー・ジョーンズ (エルマー・ガントリー)	**ジャネット・リー** (サイコ)			
(色)**リチャード・ブルックス**(エルマー・ガントリー) (オ)**ビリー・ワイルダー、I・A・L・ダイアモンド**(アパートの鍵貸します)				
(B/W)**フレディー・フランシス** (息子と恋人) (C)**ラッセル・メティ** (スパルタカス)				
処女の泉(スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)	**処女の泉**(スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)			

▲「アパートの鍵貸します」

▲「甘い生活」

▼「おとうと」

▼「雨のしのび逢い」

Digitized by Google

1960 昭和35年

第34回 キネマ旬報賞	第15回 毎日映画コンクール	第11回 ブルーリボン賞	
おとうと（市川崑）	おとうと（市川崑）	おとうと（市川崑）	作品賞
市川崑（おとうと）	市川崑（おとうと、女経・第二話）	市川崑（おとうと）	監督賞
小林桂樹（黒い画集・あるサラリーマンの証言）	小林桂樹（黒い画集・あるサラリーマンの証言）	三國連太郎（大いなる旅路、ほか）	主演男優賞
山本富士子（女経、濹東綺譚）	岸恵子（おとうと）	岸恵子（おとうと）	主演女優賞
	森雅之（おとうと、悪い奴ほどよく眠る）	織田政雄（笛吹川、濹東綺譚）	助演男優賞
	田中絹代（おとうと）	中村玉緒（ぼんち、大菩薩峠）	助演女優賞
橋本忍（黒い画集・あるサラリーマンの証言、悪い奴ほどよく眠る）	橋本忍（黒い画集・あるサラリーマンの証言、いろはにほへと）	該当者なし	脚本賞
	宮川一夫（おとうと）	宮川一夫（おとうと）	撮影賞
チャップリンの独裁者（米）（チャールズ・チャップリン）		渚にて（米）（スタンリー・クレイマー）	外国語映画賞

オスカーの授賞式は毎年ハリウッドで行われていたが今回はサンタ・モニカで開催された。何かと話題の多いエリザベス・テイラーが「バターフィールド8」で念願の女優賞を獲得、一時は生死をさまよう大病を克服しての出席だった。「アパートの鍵貸します」は5部門の受賞、対抗馬だった「アラモ」はわずか1個に終わった。名誉賞には往年の2枚目スター、ゲイリー・クーパーとコメディアン、極楽コンビの1人スタン・ローレル、子役のヘンリー・ミルズの3人に。

カンヌ映画祭では審査にまたもめ事が起こり紛糾したがフェリーニの「甘い生活」がパルム・ドールと決まり一件落着。

テレビが500万台を突破したが、映画館の数は戦後最高を記録した。キネ旬ベスト・テンでは2位の「黒い画集・あるサラリーマンの証言」を大きく引き離し市川崑の「おとうと」がトップを取り他の賞も独占した。7位と10位に「豚と軍艦」の今村昌平と「日本の夜と霧」の大島渚がいる。

▲「息子と恋人」

Digitized by Google

第32回 アカデミー賞	第17回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第12回 カンヌ国際映画祭	第9回 ベルリン映画祭
ベン・ハー (ウィリアム・ワイラー)	(ド)**ベン・ハー** (ウィリアム・ワイラー) (コ)**お熱いのがお好き**(ビリー・ワイルダー) (ミ)**ポギーとベス**(オットー・プレミンジャー)	**ロベレ将軍**(伊) (ロベルト・ロッセリーニ) **戦争**(伊) (マリオ・モニチェリ)	**黒いオルフェ**(仏) (マルセル・カミュ)	**いとこ同志**(仏) (クロード・シャブロル)
ウィリアム・ワイラー (ベン・ハー)	**ウィリアム・ワイラー** (ベン・ハー)		**フランソワ・トリュフォー**(大人は判ってくれない/仏)	**黒澤明** (隠し砦の三悪人/日)
チャールトン・ヘストン (ベン・ハー)	(ド)**アンソニー・フランシオサ**(果てしなき夢) (ミ/コ)**ジャック・レモン**(お熱いのがお好き)	**ジェームズ・スチュワート**(或る殺人/米)	**ディーン・ストックウェル、ブラッドフォード・ディルマン、オーソン・ウェルズ**(強迫/ロープ殺人事件(T)/米)	**ジャン・ギャバン** (Archimède le clochard/仏)
シモーヌ・シニョレ (年上の女)	(ド)**エリザベス・テイラー**(去年の夏突然に) (ミ/コ)**マリリン・モンロー**(お熱いのがお好き)	**マドレーヌ・ロバンソン** (二重の鍵/仏)	**シモーヌ・シニョレ** (年上の女/英)	**シャーリー・マクレーン** (恋の売り込み作戦/米)
ヒュー・グリフィス (ベン・ハー)	**スティーヴン・ボイド** (ベン・ハー)			
シェリー・ウィンタース (アンネの日記)	**スーザン・コーナー** (悲しみは空の彼方に)			
(オ)(原)**ラッセル・ラウズ、クラレンス・グリーン**/(色)**スタンリー・シャピロ、モーリス・リッチリン**(夜を楽しく)/(色)**ニール・パタースン**(年上の女)				
(B/W)**ウィリアム・C・メラー**(アンネの日記)/(C)**ロバート・L・サーティーズ** (ベン・ハー)				
黒いオルフェ(仏) (マルセル・カミュ)	**黒いオルフェ**(仏) (マルセル・カミュ) **野いちご**(仏) (イングマル・ベルイマン)			

▲「キクとイサム」

▲「ベン・ハー」

▼「野火」

▼「アンネの日記」

Digitized by Google

1959 昭和34年

第33回 キネマ旬報賞	第14回 毎日映画コンクール	第10回 ブルーリボン賞	
キクとイサム（今井正）	キクとイサム（今井正）	キクとイサム（今井正）	作品賞
今井正（キクとイサム）	山本薩夫（荷車の歌、人間の壁）	市川崑（鍵、野火）	監督賞
船越英二（野火）	船越英二（野火）	長門裕之（にあんちゃん、ほか）	主演男優賞
新珠三千代（人間の条件　第1・2部、私は貝になりたい、千代田城炎上）	北林谷栄（キクとイサム）	北林谷栄（キクとイサム）	主演女優賞
	宇野重吉（人間の壁）	小沢昭一（にあんちゃん）	助演男優賞
	吉行和子（才女気質、にあんちゃん）	新珠三千代（人間の条件、私は貝になりたい）	助演女優賞
和田夏十（鍵、野火）	水木洋子（キクとイサム）	水木洋子（キクとイサム）	脚本賞
	宮島義勇（人間の条件）	小林節雄（野火）	撮影賞
十二人の怒れる男（米）（シドニー・ルメット）		十二人の怒れる男（米）（シドニー・ルメット）	外国語映画賞

前年に立てられたオスカー新記録の9個をいとも簡単に更新したのが11個の受賞に輝いた「ベン・ハー」だ。監督のウィリアム・ワイラーは3個目、女優賞は珍しくフランスのシモーヌ・シニョレがイギリス映画「年上の女」で受賞した。「アンネの日記」「尼僧物語」はそれぞれ8部門にノミネートされていたが前者が1個しか取れないと言う皮肉な結果になった。往年のコメディアン、バスター・キートンが名誉賞を受け会場の暖かい祝福を受けた。ヴェネツィア映画祭では久々に地元の「ロベレ将軍」がグランプリに輝いた。

カンヌ映画祭は今回から見本市が併催されるようになった。パルム・ドールは「黒いオルフェ」だが大きな話題はヌーベル・バーグの旗手フランソワ・トリュフォーの「大人は判ってくれない」の監督賞受賞だった。

前年の観客動員を割った日本映画界は斜陽化の影がでてきた。大手の作品より独立プロの作品が今井正の「キクとイサム」を始めとして「荷車の歌」「第五福竜丸」と地味ながら台頭してきた。外国映画部門でもオスカー記録の「恋の手ほどき」は22位にランク、相変わらずヨーロッパ作品が9本も占めている。

▲「にあんちゃん」

Digitized by Google

第31回 アカデミー賞	第16回 コールテン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第11回 カンヌ国際映画祭	第8回 ベルリン映画祭
恋の手ほどき (ヴィンセント・ミネリ)	(ド)**手錠のまゝの脱獄** (スタンリー・クレイマー) (コ)**メイム叔母さん** (モートン・ダコスタ) (ミ)**恋の手ほどき** (ヴィンセント・ミネリ)	**無法松の一生**(日) (稲垣浩)	**戦争と貞操(鶴は翔んでゆく)**(ソ連) (ミハイル・カラトーゾフ)	**野いちご**(スウェーデン) (イングマル・ベルイマン)
ヴィンセント・ミネリ (恋の手ほどき)	**ヴィンセント・ミネリ** (恋の手ほどき)		**イングマル・ベルイマン** (女はそれを待っている/スウェーデン)	**今井正** (純愛物語/日)
デイヴィッド・ニーヴン (旅路)	(ド)**デイヴィッド・ニーヴン** (旅路) (ミ/コ)**ダニー・ケイ** (五つの銅貨)	**アレック・ギネス** (The Horse's Mouth／英)	**ポール・ニューマン** (長く熱い夜/米)	**シドニー・ポワチエ** (手錠のまゝの脱獄/米)
スーザン・ヘイワード (私は死にたくない)	(ド)**スーザン・ヘイワード** (私は死にたくない) (ミ/コ)**ロザリンド・ラッセル**(メイム叔母さん)	**ソフィア・ローレン** (黒い蘭／米)		**アンナ・マニャーニ** (野生の息吹き/米)
バール・アイヴス (大いなる西部)	**バール・アイヴス** (大いなる西部)			
ウェンディ・ヒラー (旅路)	**ハーミオン・ジンゴールド**(恋の手ほどき)			
(色)**アラン・ジェイ・ラーナー** (恋の手ほどき) (オ)**ネイサン・E・ダグラス、ハロルド・ジェーコブ・スミス** (手錠のまゝの脱獄)			(オ)**マウロ・ボロニーニ** (Giovani Mariti／伊)	
(B/W)**サム・リーヴィット** (手錠のまゝの脱獄) (C)**ジョゼフ・ルッテンバーグ**(恋の手ほどき)				
ぼくの伯父さん(仏) (ジャック・タチ)				

▲「悪女の季節」

▲「恋の手ほどき」

▼「旅路」

Digitized by Google

1958 昭和33年

第32回 キネマ旬報賞	第13回 毎日映画コンクール	第9回 ブルーリボン賞	
楢山節考（木下恵介）	**楢山節考**（木下恵介）	**隠し砦の三悪人**（黒澤明）	作品賞
木下恵介（楢山節考）	**木下恵介**（楢山節考）	**田坂具隆**（陽のあたる坂道）	監督賞
市川雷蔵（炎上）	**小林桂樹**（裸の大将）	**市川雷蔵**（炎上、弁天小僧、ほか）	主演男優賞
田中絹代（楢山節考）	**淡島千景**（螢火、鰯雲）	**山本富士子**（白鷺、彼岸花）	主演女優賞
	中村鴈治郎（鰯雲、炎上）	**中村鴈治郎**（鰯雲、炎上）	助演男優賞
	岡田茉莉子（悪女の季節）	**渡辺美佐子**（果しなき欲望）	助演女優賞
橋本忍（隠し砦の三悪人、張込み、夜の鼓）	**橋本忍**（張込み、鰯雲、夜の鼓）	**橋本忍**（張込み、鰯雲、ほか）	脚本賞
	伊佐山三郎（陽のあたる坂道）	**宮川一夫**（炎上、弁天小僧）	撮影賞
大いなる西部（米）（ウィリアム・ワイラー）		**老人と海**（米）（ジョン・スタージェス）	外国語映画賞

人工衛星が空を飛ぶ時代となり、赤狩り旋風も終わりを告げたこの年のアカデミー賞は久しぶりに登場したイングリッド・バーグマンを迎え会場は華やいだ。MGMミュージカル「恋の手ほどき」がなんと9個を受賞、批判の声も聞こえたが新記録には違いなかった。不思議なことに出演俳優たちはノミネートもされずモーリス・シュバリエが名誉賞をもらっただけだった。

カンヌ映画祭は初めての日本人の審査委員として朝吹登喜子さんを送り込んだ。アメリカとイタリアから肉体派のジェーン・マンスフィールドとクラウディア・カルディナーレの2人が乗り込み席巻した記録がある。ソ連の「戦争と貞操」がパルム・ドール。

日本の映画人口がピークの12億2千7百万人となった。各社毎週2本立て興行を堅持した。しかしテレビの影響はだんだんその圧力を増してきていた。巨匠たちは相変わらずコンスタントに作品を撮っていて1位の木下恵介の「楢山節考」は社会的にも話題となった。「隠し砦の三悪人」「彼岸花」「炎上」「張り込み」等バラエティに富んでいる。

外国映画部門は「大いなる西部」でアメリカ勢が久しぶりに1位を取り4本がベスト・テン入り。

▲「私は死にたくない」

Digitized by Google

第30回 アカデミー賞	第15回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第10回 カンヌ国際映画祭	第7回 ベルリン映画祭
戦場にかける橋 (デイヴィッド・リーン)	(ド)**戦場にかける橋** (デヴィッド・リーン) (ミ/コ)**魅惑の巴里** (ジョージ・キューカー)	**大河のうた**(インド) (サタジット・レイ)	**友情ある説得**(米) (ウィリアム・ワイラー)	**十二人の怒れる男**(米) (シドニー・ルメット)
デイヴィッド・リーン (戦場にかける橋)	**デイヴィッド・リーン** (戦場にかける橋)		**ロベール・ブレッソン** (抵抗/仏)	**マリオ・モニチェリ** (父と息子/伊)
アレック・ギネス (戦場にかける橋)	(ド)**アレック・ギネス** (戦場にかける橋) (ミ/コ)**フランク・シナトラ**(夜の豹)	**アンソニー・フランシオサ**(夜を逃れて/米)	**ジョン・キッツミラー** (平和の谷/ユーゴ)	**ペドロ・インファンテ** (Tizoc/メキシコ)
ジョアン・ウッドワード (イブの三つの顔ⓥ)	(ド)**ジョアン・ウッドワード**(イヴの三つの顔ⓥ) (ミ/コ)**ケイ・ケンドール**(魅惑の巴里)	**ジドラ・リテンベルグス** (Malva/ソ連)	**ジュリエッタ・マシーナ** (カビリアの夜/伊)	**イヴォンヌ・ミッチェル** (Woman in Dressing Gown/英)
レッド・バトンズ (サヨナラ)	**レッド・バトンズ** (サヨナラ)			
ミヨシ・梅木 (サヨナラ)	**エルザ・ランチェスター** (検察側の証人)			
(色)**ピエール・ブール、マイケル・ウィルソン、カール・フォアマン**(戦場にかける橋)/(オ)**ジョージ・ウェルズ**(バラの肌着)			(オ)**グリゴーリ・チュフライ** (女狙撃兵マリュートカ/ソ連)	
ジャック・ヒルドヤード (戦場にかける橋)				
カビリアの夜(伊) (フェデリコ・フェリーニ)	**黄色いカラス**(日) (五所平之助)			

▲「サヨナラ」

▲「戦場にかける橋」

▼「米」

▼「十二人の怒れる男」

Digitized by Google

1957 昭和32年

第31回 キネマ旬報賞	第12回 毎日映画コンクール	第8回 ブルーリボン賞	
米（今井正）	**米**（今井正）	**米**（今井正）	作品賞
今井正（米）	**今井正**（米、純愛物語）	**今井正**（米、純愛物語）	監督賞
フランキー堺（幕末太陽伝）	**三船敏郎**（蜘蛛巣城、下町、どん底）	**フランキー堺**（幕末太陽伝、倖せは俺等のねがい）	主演男優賞
山田五十鈴（蜘蛛巣城、どん底、下町）	**高峰秀子**（喜びも悲しみも幾歳月、あらくれ）	**望月優子**（米、うなぎとり）	主演女優賞
	三井弘次（気違い部落、正義派、どん底）	**三井弘次**（気違い部落、正義派、どん底）	助演男優賞
	田中絹代（女体は哀しく、地上、異母兄弟）	**淡路恵子**（女体は哀しく、下町）	助演女優賞
	依田義賢（大阪物語、異母兄弟）	**菊島隆三**（気違い部落）	脚本賞
	長岡博之（気違い部落、正義派）		撮影賞
道（伊）（フェデリコ・フェリーニ）		**道**（伊）（フェデリコ・フェリーニ）	外国語映画賞

一時持ち直したハリウッド各社も大きく落ち込んだこの年アカデミーは30周年を迎えた。司会もボブ・ホープ、ジャック・レモン、デイヴィッド・ニーヴン、ロザリンド・ラッセル、ジェームズ・スチュワートの5人が当たる豪華版。この時ノミネートされていた2人の女優エリザベス・テイラーは夫マイケル・トッドを事故で亡くし、ラナ・ターナーは娘が殺人事件を起こすという不運に巻き込まれた。作品賞を始め7個のオスカーをもらったのは「戦場にかける橋」のイギリス勢だった。また女優助演賞に日本のミヨシ・梅木が入った。カンヌ映画祭はジャン・コクトーを名誉審査委員長に選び行われたが政治的な工作で「友情ある説得」が受賞し、後味の悪さを残した。

日本映画もいよいよ大型スクリーン時代に入り各社が競い合う展開となった。キネ旬を始めとして今井正の「米」が賞レースを制した。2位も今井正の「純愛物語」だった。

以下「喜びも悲しみも幾年月」「幕末太陽伝」「蜘蛛巣城」と充実。外国映画部門は「道」「宿命」を含み7本がヨーロッパ作品であった。

▲「イヴの三つの顔」

Digitized by Google

第29回 アカデミー賞	第14回 コールテン・クロープ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第9回 カンヌ国際映画祭	第6回 ベルリン映画祭
八十日間世界一周 (マイケル・アンダースン)	(ド)**八十日間世界一周** (マイケル・アンダーソン) (ミ/コ)**王様と私** (ウォルター・ラング)	**該当なし**	**沈黙の世界**(仏) (ジャック＝イヴ・クストー、ルイ・マル)	**舞踏への招待**(米) (ジーン・ケリー)
ジョージ・スティーヴンズ (ジャイアンツ)	**ベビー・ドール** (エリア・カザン)		**セルゲイ・ユトケーヴィッチ** (オセロ/ソ連)	**ロバート・アルドリッチ** (Autumn Leaves/米)
ユル・ブリンナー (王様と私)	(ド)**カーク・ダグラス** (炎の人ゴッホ) (ミ/コ)**カンティンフラス** (八十日間世界一周)	**ブールヴィル** (La Traversée Paris／仏)		**バート・ランカスター** (空中ぶらんこ/米)
イングリッド・バーグマン (追想)	(ド)**イングリッド・バーグマン**(追想) (ミ/コ)**デボラ・カー** (王様と私)	**マリア・シェル** (居酒屋／仏)	**スーザン・ヘイワード** (明日泣く/米)	**エルザ・マルティネッリ** (Donatella/伊)
アンソニー・クイン (炎の人ゴッホ)	**アール・ホリマン** (雨を降らす男)			
ドロシー・マローン (風と共に散る)	**アイリーン・ヘッカート** (悪い種子)			
(原)**ジョン・リッチ**(黒い牡牛)(色)**ジェームズ・ボー、ジョン・ファーロー、S・J・ベレルマン**(八十日間世界一周)／(オ)**アルベール・ラモリス**(素晴らしい風船旅行)				
(B/W)**ジョセフ・ルッテンバーグ**(傷だらけの栄光) (C)**ライオネル・リンドン**(八十日間世界一周)				
道(伊) (フェデリコ・フェリーニ)	**リチャード三世**(英) (ローレンス・オリヴィエ) **Roses On The Arm**(日)			

▲「居酒屋」

▲「八十日間世界一周」

▼「真昼の暗黒」

Digitized by Google

第30回 キネマ旬報賞	第11回 毎日映画コンクール	第7回 ブルーリボン賞
真昼の暗黒（今井正）	**真昼の暗黒**（今井正）	**真昼の暗黒**（今井正）
今井正（真昼の暗黒）	**今井正**（真昼の暗黒）	**今井正**（真昼の暗黒）
佐田啓二（あなた買います）	**佐田啓二**（あなた買います、台風騒動記）	**佐田啓二**（あなた買います、台風騒動記）
山田五十鈴（猫と庄造と二人のをんな、流れる）	**山田五十鈴**（流れる、猫と庄造と二人のをんな、母子像）	**山田五十鈴**（母子像、猫と庄造と二人のをんな、流れる）
	東野英治郎（夜の河、あやに愛しき、夕やけ雲）	**多々良純**（鶴八鶴次郎、あなた買います、台風騒動記）
	沢村貞子（赤線地帯、太陽とバラ、現代の欲望、妻の心）	**久我美子**（夕やけ雲、女囚と共に、太陽とバラ）
	橋本忍（真昼の暗黒）	**橋本忍**（真昼の暗黒）
	三浦光雄（白夫人の妖恋、猫と庄造と二人のをんな）	**三浦光雄**（白夫人の妖恋、猫と庄造と二人のをんな）
居酒屋（仏）（ルネ・クレマン）		**居酒屋**（仏）（ルネ・クレマン）

作品賞
監督賞
主演男優賞
主演女優賞
助演男優賞
助演女優賞
脚本賞
撮影賞
外国語映画賞

アカデミー賞は初めて大型映画の「八十日間世界一周」が作品賞を始め5部門で受賞、音楽賞のヴィクター・ヤングは長いキャリアの作曲家だったが初受賞が亡くなった後だった。女優賞のイングリッド・バーグマンは二度目の受賞でパリで感激の涙を流しアメリカに復帰した。

前年に事故死したジェームス・ディーンも再度「ジャイアンツ」で死後ノミネートとなった。日本からの「ビルマの竪琴」は惜しくも「道」に破れた。

カンヌ映画祭は「夜と霧」の上映問題で大きく揺れ動いた。結局映画祭の外の上映となり関係者の無能振りがあからさまになった。受賞した「沈黙の世界」はフランソワ・トリュフォーによって辛辣な批判を受けた。

前年世界最高の本数を生み出した日本映画界はこの年も今井正の「真昼の暗黒」が賞を総なめ、15位に入った「赤線地帯」は溝口健二の遺作となった。外国映画部門では10本のうち7本がヨーロッパ作品で占められ中でも短編の「赤い風船」の6位が目を引いた。

▲「追想」

Digitized by Google

第28回 アカデミー賞	第13回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第8回 カンヌ国際映画祭	第5回 ベルリン映画祭
マーティ (デルバート・マン)	(ド)**エデンの東** (エリア・カザン) (ミ/コ)**野郎どもと女たち** (ジョゼフ・L・マンキーウィッツ)	**奇跡**(ベルギー=デンマーク) (カール・テオドール・ドライヤー)	**マーティ**(米) (デルバート・マン)	**Die Ratten**(西独)(ロベルト・ジオドマク)/**汚れなき悪戯**(スペイン)(ラディスラオ・バホダ)/**カルメン**(米)(オットー・プレミンジャー)/**パンと恋と夢**(伊)(ルイジ・コメンチーニ)/**Drei Manner in Schnee**(西独)(クルト・ホフマン)/**ひろしま**(日)(関川秀雄)/**The Divided Heart**(英)(チャールズ・クライトン)/**若い恋人たち**(英)(アンソニー・アスキス)/**Papa,maman la bonne et moi**(仏)(ジャン=ポール・ル・シャノワ)/**Animal Farm**(英)(以上、長編劇映画賞)
デルバート・マン (マーティ)	**ジョシュア・ローガン** (ピクニック)		**ジュールズ・ダッシン** (男の争い/仏) **セルゲイ・ワシーリコフ** (Geroi Shipki/ソ連=ブルガリア)	
アーネスト・ボーグナイン (マーティ)	(ド)**アーネスト・ボーグナイン**(マーティ) (ミ/コ)**トム・イーウェル** (七年目の浮気)	**ケネス・モア**(愛情は深い海のごとく/英)**クルト・ユルゲンス**(悪の決算、Des Teufels General/仏)	**スペンサー・トレイシー** (日本人の勲章/米)	
アンナ・マニャーニ (バラの刺青)	(ド)**アンナ・マニャーニ** (バラの刺青) (ミ/コ)**ジーン・シモンズ** (野郎どもと女たち)	**該当者なし**		
ジャック・レモン (ミスタア・ロバーツ)	**アーサー・ケネディ** (アメリカの戦慄)			
ジョー・ヴァン・フリート (エデンの東)	**マリサ・パヴァン** (バラの刺青)			
(原)**ダニユル・フェークス**(情欲の悪魔)/(色)**バディ・チャイエフスキー**(マーティ)/(オ)**ウィリアム・ルードウィッグ、ソーニャ・レヴィン**(わが愛に終りなし)				
(B/W)**ジェームズ・ウォン・ホウ**(バラの刺青) (C)**ロバート・バークス**(泥棒成金)				
宮本武蔵(日) (稲垣浩)				

▲「マーティ」

▲「野郎どもと女たち」

▼「浮雲」

▼「エデンの東」

Digitized by Google

1955 昭和30年

第29回 キネマ旬報賞	第10回 毎日映画コンクール	第6回 ブルーリボン賞	
浮雲（成瀬巳喜男）	**浮雲**（成瀬巳喜男）	**浮雲**（成瀬巳喜男）	作品賞
成瀬巳喜男（浮雲）	**成瀬巳喜男**（浮雲）	**豊田四郎**（夫婦善哉）	監督賞
森雅之（浮雲）	**森繁久弥**（夫婦善哉、渡り鳥いつ帰る、警察日記、人生とんぼ返り）	**森繁久弥**（夫婦善哉）	主演男優賞
高峰秀子（浮雲）	**高峰秀子**（浮雲）	**淡島千景**（夫婦善哉）	主演女優賞
	小林桂樹（ここに泉あり）	**加東大介**（血槍富士、ここに泉あり）	助演男優賞
	左幸子（おふくろ、人生とんぼ返り）	**山田五十鈴**（たけくらべ、石合戦）	助演女優賞
	八住利雄（夫婦善哉、浮草日記、渡り鳥いつ帰る）	**菊島隆三**（男ありて、六人の暗殺者、など）	脚本賞
	楠田浩之（野菊の如き君なりき、遠い雲）	**楠田浩之**（遠い雲、野菊の如き君なりき）	撮影賞
エデンの東（米）（エリア・カザン）		**エデンの東**（米）（エリア・カザン）	外国語映画賞

新星ジェームス・ディーンが悲惨な交通事故で世を去り世界中のファンを悲しませた。オスカーの司会はジェリー・ルイスが務め、翌年結婚のため引退するグレース・ケリーがスターとして最後の仕事、プレンゼンターとして登場した。前年に引き続き作品賞はワイドスクリーンの作品4本とスタンダード作品1本の劣性を見事にひっくり返し「マーティ」が主要4部門をさらった。ノースターで脚本も監督もテレビ畑の人というのも話題を呼んだ。主演男優にノミネートされた故ジェームス・ディーンは惜しくも賞は取れなかった。外国語映画賞は稲垣浩の「宮本武蔵」が受賞、衣裳の「雨月物語」は惜しくも落選した。

モナコのレーニエ国王とグレース・ケリーをゲストに盛り上がったカンヌ映画祭はオスカーとおなじ「マーティ」がパルム・ドールの栄冠に輝いた。

500本近くの本数を製作する日本映画界は好調で成瀬巳喜男の「浮雲」が各賞の1位にランク、豊田四郎、黒澤明、木下恵介、今井正、田坂具隆とそうそうたる監督たちが良い仕事をしている。外国映画部門は「エデンの東」がダントツの1位、「マーティ」は7位。

▲「ミスタア・ロバーツ」

Digitized by Google

第27回 アカデミー賞	第12回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第7回 カンヌ国際映画祭	第4回 ベルリン映画祭
波止場 (エリア・カザン)	(ド)**波止場** (エリア・カザン) (ミ/コ)**カルメン** (オットー・プレミンジャー)	**ロミオとジュリエット** (伊) (レナート・カステラーニ)	**地獄門**(日) (衣笠貞之助)	**大いなる希望**(伊) (ドゥイリオ・コレッティ)
エリア・カザン (波止場)	**エリア・カザン** (波止場)		**アレクサンデル・フォルド**(Piatka z Ulicy Barskiej/ポーランド)	**ヘルムート・コイトナー** (最後の橋/西独)
マーロン・ブランド (波止場)	(ド)**マーロン・ブランド**(波止場) (ミ/コ)**ジェームズ・メイソン** (スタア誕生)	**ジャン・ギャバン** (現金に手を出すな、われら巴里っ子/仏)	**該当者なし**	
グレース・ケリー (喝采)	(ド)**グレース・ケリー**(喝采) (ミ/コ)**ジュディ・ガーランド**(スタア誕生)	**該当者なし**	**マリア・シェル** (最後の橋/オーストリア)	
エドモンド・オブライエン (裸足の伯爵夫人)	**エドモンド・オブライエン** (裸足の伯爵夫人)			
エヴァ・マリー・セイント (波止場)	**ジャン・スターリング** (紅の翼)			
(原)**フィリップ・ヨーダン**(折れた槍)/(色)**ジョージ・シートン**(喝采)/(オ)**バッド・シュルバーグ**(波止場)	**ビリー・ワイルダー、サミュエル・テイラー、アーネスト・レーマン** (麗しのサブリナ)		**アンドレ・カイヤット、シャルル・スパーク** (洪水の前/仏)	
(B/W)**ボリス・カウフマン** (波止場) (C)**ミルトン・クラスナー** (愛の泉)	(B/W)**ボリス・カウフマン**(波止場) (C)**ジョセフ・ルッテンバーグ**(ブリガドーン)		**N・ポール・ケンワージ・ジュニア、ロバート・H・クランドール** (砂漠は生きている/米)	
	二十四の瞳(日) (木下恵介)			

▲「二十四の瞳」

▲「波止場」

▼「嘆きのテレーズ」

Digitized by Google

第28回 キネマ旬報賞	第9回 毎日映画コンクール	第5回 ブルーリボン賞
二十四の瞳（木下恵介）	**二十四の瞳**（木下恵介）	**二十四の瞳**（木下恵介）
	木下恵介（二十四の瞳）	**溝口健二**（近松物語）
	山村聡（山の音、黒い潮）	**該当者なし**
	高峰秀子（女の園、この広い空のどこかに、二十四の瞳）	**高峰秀子**（二十四の瞳、女の園、この広い空のどこかに）
	宮口精二（七人の侍）	**東野英治郎**（黒い潮、勲章）
	久我美子（女の園、この広い空のどこかに、悪の愉しさ、億万長者）	**望月優子**（晩菊）
	木下恵介（二十四の瞳、女の園）	**木下恵介**（二十四の瞳、女の園）
	小原譲治（愛と死の谷間、鶏はふたたび鳴く）	
嘆きのテレーズ（仏）（マルセル・カルネ）		**恐怖の報酬**（仏）（アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー）

作品賞
監督賞
主演男優賞
主演女優賞
助演男優賞
助演女優賞
脚本賞
撮影賞
外国語映画賞

大型映画時代を本格的に迎えたハリウッドだったが、この年の作品賞は皮肉にも黒白スタンダードの「波止場」だった。8個のオスカーは前年と同じタイ記録だった。なかでもやっと受賞にたどり着いたマーロン・ブランドはうれしそうで、この後からの批判が信じられないくらいのはしゃぎようだった。「喝采」のグレース・ケリーも「スター誕生」のジュディ・ガーランドを破っての栄冠だった。

カンヌ映画祭では日本映画界にとって初めてのグランプリが衣笠貞之助の「地獄門」に与えられた。この年、日活が製作再開。キネ旬1位，2位を「二十四の瞳」「女の園」で木下恵介は独占。「七人の侍」「近松物語」「山椒太夫」と相変らず力の入った秀作が多い。外国映画部門ではヨーロッパの三作品が上位を占めていて強さを発揮している。

▲「喝采」

Digitized by Google

第26回 アカデミー賞	第11回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第6回 カンヌ国際映画祭	第3回 ベルリン映画祭
地上より永遠に (フレッド・ジンネマン)	**聖衣** (ヘンリー・コスター)	**該当なし**	**恐怖の報酬**(仏) (アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー)	**路上の夜**(西独) (ルドルフ・ユーゲルト／ドイツ映画大賞)
フレッド・ジンネマン (地上より永遠に)	**フレッド・ジンネマン** (地上より永遠に)			
ウィリアム・ホールデン (第十七捕虜収容所)	(ド)**スペンサー・トレイシー** (The Actress) (ミ/コ)**デイヴィッド・ニーヴン** (月蒼くして)	**アンリ・ヴィルベール** (Le bon dieu sans confession／仏)	**シャルル・ヴァネル** (恐怖の報酬/仏)	**クラウス・ビーデシュテット**
オードリー・ヘップバーン (ローマの休日)	(ド)**オードリー・ヘップバーン** (ローマの休日) (ミ/コ)**エセル・マーマン** (Call Me Madam)	**リリー・パルマー** (The Fourposter／米)	**シャーリー・ブース** (愛しのシバよ帰れ/米)	**バーバラ・リュッティング**
フランク・シナトラ (地上より永遠に)	**フランク・シナトラ** (地上より永遠に)			
ドナ・リード (地上より永遠に)	**グレース・ケリー** (モガンボ)			
(原)**アイアン・マクレラン・ハンター** (ローマの休日)／(色)**ダニエル・タラダッシュ**(地上より永遠に)／(オ)**チャールズ・ブラッケット、ウォルター・ライシュ、リチャード・ブリーン**(Titanic)	**ヘレン・ドイッチ** (リリー)		**ルイス・ガルシア・ベルランガ**(スペイン) Bienvenido Mr.Marshall	
(B/W)**バーネット・ガフィー**(地上より永遠に) (C)**ローヤル・グリッグス**(シェーン)				

▲「地上より永遠に」

▲「恐怖の報酬」

▼「にごりえ」

▼「ローマの休日」

Digitized by Google

1953 昭和28年

第27回 キネマ旬報賞	第8回 毎日映画コンクール	第4回 ブルーリボン賞	
にごりえ（今井正）	**にごりえ**（今井正）	**にごりえ**（今井正）	作品賞
	今井正（にごりえ）	**今井正**（にごりえ、ひめゆりの塔）	監督賞
	上原謙（妻、夫婦）	**該当者なし**	主演男優賞
	望月優子（日本の悲劇）	**乙羽信子**（縮図、欲望、女の一生）	主演女優賞
	芥川比呂志（煙突の見える場所）	**進藤英太郎**（女の一生、祇園囃子）	助演男優賞
	杉村春子（にごりえ、東京物語）	**浪花千栄子**（祇園囃子）	助演女優賞
	木下恵介（日本の悲劇、まごころ、恋人）	**木下恵介**（日本の悲劇、恋人、まごころ、愛の砂丘）	脚本賞
	宮島義勇（夜明け前、蟹工場）	**三浦光雄**（煙突の見える場所、雁）	撮影賞
禁じられた遊び（仏）（ルネ・クレマン）		**禁じられた遊び**（仏）（ルネ・クレマン）	外国語映画賞

ハリウッドにとってこの年は大型画面のシネマスコープの登場で大いに沸いた年であった。代表作の「聖衣」は大ヒットした。オスカー授賞式は2元中継で行われ女優賞のオードリー・ヘップバーンはニューヨークで受賞した。最大の話題は「地上より永遠に」のフランク・シナトラだ。不振から必死にはい上がってきての熱演は高く評価されての助演賞だった。この作品では全部で8個取り、「風と共に去りぬ」と並んだ。

カンヌ映画祭ではジャン・コクトーを審査委員長に“親切な映画祭”を宣言。「恐怖の報酬」がグランプリ、ピカソや若き日のブリジット・バルドーが観客の目を楽しませた。ヴェネツィア映画祭では「雨月物語」が国際賞を、ベルリン映画祭では「煙突の見える場所」が入賞。前年に続き健闘した。

日本映画も年間の製作本数が300本を越える活況を呈した。キネ旬の1位の「にごりえ」は毎日映画コンクールとブルーリボンも受賞した。他にもベテラン勢が揃って上位を占め「東京物語」「雨月物語」「煙突の見える場所」「あにいもうと」と映画史に残る名作がひしめいている。外国映画部門でも同じような現象で「禁じられた遊び」を筆頭に「ライムライト」「探偵物語」「シェーン」と素晴らしい。オスカーのタイ記録の「地上より永遠に」は16位にいる。

▲「第十七捕虜収容所」

Digitized by Google

第25回 アカデミー賞	第10回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第5回 カンヌ国際映画祭	第2回 ベルリン映画祭
地上最大のショウ (セシル・B・デミル)	(ド)**地上最大のショウ** (セシル・B・デミル) (ミ/コ)**わが心に歌えば** (ウォルター・ラング)	**禁じられた遊び**(仏) (ルネ・クレマン)	**2ペンスの希望**(伊) (レナート・カステラーニ) **オセロ**(モロッコ) (オーソン・ウェルズ)	**春の悶え**(スウェーデン)(アルネ・マットスン/大衆投票1位)
ジョン・フォード (静かなる男)	**セシル・B・デミル** (地上最大のショウ)	**溝口健二** (西鶴一代女/日)	**クリスチャン=ジャック** (花咲ける騎士道/仏)	
ゲイリー・クーパー (真昼の決闘)	(ド)**ゲイリー・クーパー** (真昼の決闘) (ミ/コ)**ドナルド・オコナー** (雨に唄えば)	**フレドリック・マーチ** (セールスマンの死/米)	**マーロン・ブランド** (革命児サパタ/米)	
シャーリー・ブース (愛しのシバよ帰れ)	(ド)**シャーリー・ブース** (愛しのシバよ帰れ) (ミ/コ)**スーザン・ヘイワード** (わが心に歌えば)	**該当者なし**	**リー・グラント** (探偵物語/米)	
アンソニー・クイン (革命児サパタ)	**ミラルド・ミッチェル** (白昼の脱獄)			
グロリア・グレアム (悪人と美女)	**カティ・フラドー** (真昼の決闘)			
(原)**フレデリック・M・フランク、シオドア・セント・ジョン、フランク・キャヴェット**(地上最大のショウ)/(色)**チャールズ・シュネイ**(悪人と美女)/(オ)**T・E・B・クラーク**(The Lavender Hill Mob)	**マイケル・ウィルソン** (五本の指)	**ナナリー・ジョンスン** (Phone Call from a Stranger/米)	**ピエル・テッリーニ** (Guardi e Ladri/伊)	
(B/W)**ロバート・サーティス**(悪人と美女)/(C)**ウィントン・C・ホーク、アーチー・スタウト**(静かなる男)	(B/W)**フロイド・クロスビー**(真昼の決闘)/(C)**ジョージ・バーンズ、J・ベイブレル・マーレー**(地上最大のショウ)	**該当なし**	**杉山公平** (源氏物語/日)	

▲「禁じられた遊び」

▲「真昼の決闘」

▼「生きる」

▼「地上最大のショウ」

Digitized by Google

第26回 キネマ旬報賞	第7回 毎日映画コンクール	第3回 ブルーリボン賞	
生きる（黒澤明）	**生きる**（黒澤明）	**稲妻**（成瀬巳喜男）	作品賞
	渋谷実（現代人、本日休診）	**成瀬巳喜男**（稲妻、おかあさん）	監督賞
	佐分利信（慟哭、お茶漬の味）	**該当なし**	主演男優賞
	山田五十鈴（箱根風雲録、現代人）	**山田五十鈴**（現代人、箱根風雲録）	主演女優賞
	加東大介（おかあさん、決闘鍵屋の辻）	**加東大介**（決闘鍵屋の辻、おかあさん）	助演男優賞
	中北千枝子（おかあさん、丘は花ざかり）	**中北千枝子**（丘は花ざかり、稲妻）	助演女優賞
	黒澤明、橋本忍、小国英雄（生きる）	**斉藤良輔**（本日休診）	脚本賞
	宮川一夫（西陣の姉妹、千羽鶴）	**宮川一夫**（千羽鶴）	撮影賞
チャップリンの殺人狂時代（米）（チャールズ・チャップリン）		**チャップリンの殺人狂時代**（米）（チャールズ・チャップリン）	外国語映画賞

シネラマ、立体映画、とテレビに対抗するため映画界は頑張った。が今回からそのテレビでオスカーの授賞式が中継された歴史的なときでもあった。25周年でもあり往年の大スター、メアリー・ピックフォード、グロリア・スワンソンたちが集まり華やかさを増した。この日ジョン・ウェインはゲイリー・クーパーとジョン・フォードの代理で2個のオスカーを受け取った。フォードは4回目の受賞で今も残る記録だ。

カンヌ映画祭では「源氏物語」の撮影で杉山公平が受賞、ヴェネツィア映画祭では溝口健二の「西鶴一代女」が監督賞を受賞して世界の注目を浴びた。

キネ旬のベスト・テンも復興日本映画を証明する力作が並ぶ。1位の「生きる」を始めとして「稲妻」「真空地帯」「西鶴一代女」とどれが1位でも良いくらいだ。

外国部門でも「風と共に去りぬ」「巴里のアメリカ人」「欲望という名の電車」「アフリカの女王」が圏外という今だったらあり得ない事がおこっている。

▲「悪人と美女」

Digitized by Google

第24回 アカデミー賞	第9回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第4回 カンヌ国際映画祭	第1回 ベルリン映画祭
巴里のアメリカ人 (ヴィンセント・ミネリ)	(ド)**陽のあたる場所** (ジョージ・スティーヴンズ) (ミ/コ)**巴里のアメリカ人** (ヴィンセント・ミネリ)	**羅生門**(日) (黒澤明)	**ミラノの奇蹟**(伊) (ヴィットリオ・デ・シーカ) **令嬢ジュリー** (スウェーデン) (アルフ・シェーベルイ)	**Sans laisser d'adresse** (仏)(ジャン=ポール・ル・シャノワ)/**裁きは終わりぬ**(仏)(アンドレ・カイヤット)/**ジーブの四人**(スイス)(レオポルド・リンドベルグ)/**ビーヴァーの谷**(米)(ウォルト・ディズニー)
ジョージ・スティーヴンズ (陽のあたる場所)	**ラズロ・ベネデク** (セールスマンの死)		**ルイス・ブニュエル** (忘れられた人々/メキシコ)	
ハンフリー・ボガート (アフリカの女王)	(ド)**フレドリック・マーチ** (セールスマンの死) (ミ/コ)**ダニー・ケイ**(夫は偽者)	**ジャン・ギャバン** (夜はわがもの/仏)	**マイケル・レッドグレーヴ** (The Browning Version/英)	
ヴィヴィアン・リー (欲望という名の電車)	(ド)**ジェーン・ワイマン** (青いヴェール) (ミ/コ)**ジューン・アリソン**(Too Young to Kiss)	**ヴィヴィアン・リー** (欲望という名の電車/米)	**ベティ・デイヴィス** (イヴの総て/米)	
カール・マルデン (欲望という名の電車)	**ピーター・ユスティノフ** (クオ・ヴァディス)			
キム・ハンター (欲望という名の電車)	**キム・ハンター** (欲望という名の電車)			
(原)**ポール・デーン、ジェームズ・バーナード**(戦慄の七日間)/(色)**マイケル・ウィルスン、ハリー・ブラウン**(陽のあたる場所)/(オ)**アラン・ジェイ・ラーナー**(巴里のアメリカ人)	**ロバート・バックナー** (Bright Victory)	**T・E・B・クラーク** (The Lavender Hill Mob/英)	**テレンス・ラティガン** (The Browning Version/英)	
(B/W)**ウィリアム・メラー**(陽のあたる場所)/(C)**アルフレッド・ギルクス、ジョン・オルトン**(巴里のアメリカ人)	(B/W)**フランク・ブラナー**(セールスマンの死)/(C)**ロバート・サーティース、ウィリアム・V・スコール**(クオ・ヴァディス)	**レオンズ・アンリ・ビュレル**(Le journal d'un curé de campagne/仏)	**ルイス・マリア・ベルトラン** (La balandra Isabel Llego estatarde/ベネズエラ)	

▲「陽のあたる場所」

▲「羅生門」

▼「麦秋」

Digitized by Google

1951 昭和26年

第25回 キネマ旬報賞	第6回 毎日映画コンクール	第2回 ブルーリボン賞	
麦秋（小津安二郎）	**麦秋**（小津安二郎） **めし**（成瀬巳喜男）	**めし**（成瀬巳喜男）	作品賞
	成瀬巳喜男（めし）	**小津安二郎**（麦秋）	監督賞
	笠智衆（命美わし、海の花火）	**三船敏郎**（馬喰一代、女ごゝろ誰が知る）	主演男優賞
	原節子（めし、麦秋）	**原節子**（麦秋、めし）	主演女優賞
		笠智衆（我が家は楽し、麦秋、命美わし）	助演男優賞
	田村秋子（自由学校、少年期）	**杉村春子**（麦秋、めし、命美わし）	助演女優賞
	木下恵介（カルメン故郷に帰る）	**田中澄江**（我が家は楽し、少年期、めし）	脚本賞
	玉井正夫（めし）	**厚田雄春**（我が家は楽し、あの丘越えて、麦秋）	撮影賞
イヴの総て（米）（ジョゼフ・L・マンキーウィッツ）		**サンセット大通り**（米）（ビリー・ワイルダー）	外国語映画賞

テレビの攻勢の前に苦悩を続けるハリウッドではあったけれど、スタジオは名作を数多く送り出し観客の期待に応えた。人気コメディアンのダニー・ケイの司会でオスカーの授賞式は行われた。「陽のあたる場所」「欲望という名の電車」を押さえて「巴里のアメリカ人」が作品賞他6個の受賞、男優賞はオスカー批判論者のハンフリー・ボガートが受賞した。何と言っても今回は外国映画部門で黒澤の「羅生門」が日本映画初の栄えある栄冠に輝いたことだろう。

カンヌ映画祭は上映会場も整備され2年振りで行われ「ジープの四人」が政治的な問題で上映中止され、グランプリはイタリアの「ミラノの奇蹟」とスウェーデンの「令嬢ジュリー」の2本で分け合った。ヴェネツィア映画祭でも「羅生門」がグランプリを取り黒澤の名前は一躍世界的になった。ベルリン映画祭が始まったのもこの年である。

日本映画界も小津、成瀬、吉村、木下というところが秀作を発表して気を吐き安定した年となった。外国映画部門も新旧入り交じって質の高いものとなった。

▲「欲望という名の電車」

Digitized by Google

第23回 アカデミー賞	第8回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭
イヴの総て (ジョゼフ・L・マンキーウィッツ)	**サンセット大通り** (ビリー・ワイルダー)	**裁きは終りぬ**(仏) (アンドレ・カイヤット)
ジョゼフ・L・マンキーウィッツ (イヴの総て)	**ビリー・ワイルダー** (サンセット大通り)	
ホセ・フェラー (シラノ・ド・ベルジュラック)	(ド)**ホセ・フェラー** (シラノ・ド・ベルジュラック) (ミ/コ)**フレッド・アステア** (土曜は貴方に)	**サム・ジャフェ** (アスファルト・ジャングル/米)
ジュディ・ホリデイ (Born Yesterday)	(ド)**グロリア・スワンソン** (サンセット大通り) (ミ/コ)**ジュディ・ホリデイ** (Born Yesterday)	**エリナー・パーカー** (Caged/米)
ジョージ・サンダース (イヴの総て)	**エドマンド・グウェン** (Mister 880)	
ジョゼフィン・ハル (ハーヴェイ)	**ジョゼフィン・ハル** (ハーヴェイ)	
(原)**エドナ&エドワード・アンハルト**(暗黒の恐怖)/(色)**ジョゼフ・L・マンキーウィッツ**(イヴの総て)/(オ)**チャールズ・ブラケット、ビリー・ワイルダー、D・M・マーシュマン・ジュニア**(サンセット大通り)	**ジョゼフ・L・マンキウィッツ** (イヴの総て)	**ジャック・ナタンソン、マクス・オフュールス** (輪舞/仏)
(B/W)**ロバート・クラスカー**(第三の男) (C)**ロバート・サーティース** (キング・ソロモン)	(B/W)**フランク・プラナー** (シラノ・ド・ベルジュラック) (C)**ロバート・サーティース**(キング・ソロモン)	**マルティン・ボディン** (Bara en Mor/スウェーデン)

▲「自転車泥棒」

▲「また逢う日まで」

▲「裁きは終りぬ」

▼「サンセット大通り」

Digitized by Google

1950昭和25年

第24回 キネマ旬報賞	第5回 毎日映画コンクール	第1回 ブルーリボン賞	
また逢う日まで（今井正）	**また逢う日まで**（今井正）	**また逢う日まで**（今井正）	作品賞
	吉村公三郎（偽れる盛装）	**今井正**（また逢う日まで）	監督賞
	佐分利信（執行猶予、帰郷）	**山村聡**（宗方姉妹、ほか）	主演男優賞
	京マチ子（偽れる盛装、羅生門）	**淡島千景**（てんやわんや、ほか）	主演女優賞
	山村聡（帰郷、宗方姉妹、大利根の夜霧）		助演男優賞
			助演女優賞
	新藤兼人（偽れる盛装）	**黒澤明、橋本忍**（羅生門）	脚本賞
	三村明（暁の脱走）	**中井朝一**（偽れる盛装、ほか）	撮影賞
自転車泥棒（伊）（ヴィットリオ・デ・シーカ）			外国語映画賞

赤狩りがピークに達したハリウッドでは落ち着いてアカデミー賞授賞式をやっていられる雰囲気ではなかったが名ダンサー、フレッド・アステアの軽妙な司会のもとに始まった。ノミネートされた人がニューヨークに多くいたためラジオの電波を使い2元中継のような形になった。奇しくもハリウッドの裏を描いた「サンセット大通り」の9個とブロードウェイの裏を描いた「イヴの総て」の14個の対決となったが6対2で「イヴ」の圧勝に終わった。

新人のマリリン・モンローがプレゼンターとして初めて舞台に立ったのもこの年だった。カンヌは劇場の問題で中止。

アメリカ映画の独占配給機構セントラル・モーション・ピクチュア・エックスチェンジは解散。翌年から自主配給となる。キネ旬のベスト・テンはこの回だけ変則で点数式でおこなわれた。その結果満点で今井正の「また逢う日まで」が1位になった（この年スタートのブルーリボン賞にも選ばれた）。黒澤明の「羅生門」は5位に入っている。

▲「偽れる盛装」

Digitized by Google

ロッテルダム映画祭

橋口亮輔

オランダのアムステルダムから列車で約一時間の所にロッテルダムはある。先の大戦で空爆を受け古い町並は破壊されたということで、新興住宅地の様に似たようなビルが立ち並ぶ。また、ヨーロッパ最大の港町とも聞いた。

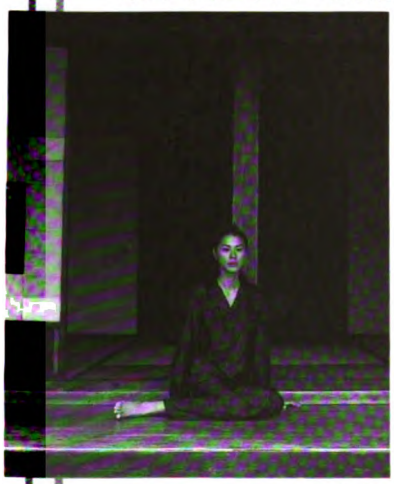
2年前、僕がロッテルダム映画祭を訪れた時は2百年ぶりの寒さということで常に零下。

道沿いの運河は凍り、子供たちがその上で雪遊びをしていた。一緒に行っていた塚本晋也監督と、河にいた魚は凍ってしまったんだろうか？　春になり凍りが溶けたら魚はまた泳ぎだすのだろうかなどと笑っていたりした。

他に「幻の光」の是枝監督とも一緒になり同世代ということもあり楽しく過ごせた。映画祭のいいところは、日本で出会っていたら妙に構えたり牽制しあったりしがちな映画界の方達とすんなり打ち解け合えることだったりする。

僕が当時出品していたのは「渚のシンドバッド」。コンペティションへの参加だった。

カンヌやヴェネツィアほど規模は大きくないが、25年目を迎えていたロッテルダム映画祭は他の映画祭に追いつき追い越せとばかりに今までで最大規模の開催を目指して作品だけでなくゲストも200名近くを招待で迎えていた。また、若い作家やアジアの作品群の発掘に力を注ぎ何とか独自の特色を出そうとする熱気にあふれ、僕も心地よい高揚感を感じた。ただコンペの発表が近づくにつれ、もう逃げ出したいばかりでどうも落ち着かず関係者に「もう帰りたい」「ホテルに一人でいる」などと情けないことを連発。結局、グランプリを頂いたのだが、ほっとしたのと同時にやはり嬉しかった。



▲「幻の光」

それは賞を取ったということよりも、作品を理解してもらったということの方が大きい。日本公開後の受賞だったのだが、日本での批評の中にはいくつか耳を疑うようなこともあって、例えば「役者もいい、撮影もいい、

▲「渚のシンドバッド」

でも同性愛は分からない」とか「その種の人にはいいけど、私たち普通の人間には分からない」等々。自分とは違う性、違う人種、違う価値観を持つ他者のことが分からないと平然と言い切るのなら批評家なんてやめてしまえと思ったりしていた。だから、映画祭の審査員から「これは男と男、男と女、女と女という普遍的な問題を描いている。決してゲイムービーではない」という公評をもらったときは、自分の本来の意志が伝わったという感慨を受けた。

僕にとっては思い出深い映画祭になったが、この前年ヴェネツィアで「幻の光」が受賞し、インディペンデント作品「おかえり」などが数々の映画祭などで注目を集めるなどしていただけに、風が日本映画に向いてきているということを実感。このあと、東陽一監督の「絵の中のぼくの村」がベルリンで受賞。「今、日本映画が熱い」などと雑誌が特集を組む前から熱かったのだ。

Hashiguchi Ryosuke

1962年長崎県生まれ。大阪芸術大学在学中より8ミリ製作を始め、89年「夕辺の秘密」でPFFグランプリを受賞。93年にはPFFスカラシップ作品として初の劇場用映画「二十歳の微熱」を発表し、ベルリン国際映画祭を始め、各国の映画祭から招待を受け話題を呼ぶ。95年「渚のシンドバッド」ではロッテルダム映画祭コンペティション部門グランプリ獲得の他、多数受賞。国内外で注目される若手監督の一人である。

Digitized by Google

裸の島から午後の遺言状へ

新藤兼人

『裸の島』で1961年モスクワ国際映画祭へ行った。当時ソ連は鉄のカーテンの国といわれ、多少緊張ぎみだったが、鉄のカーテンはどこにもなく、モスクワは美しい煉瓦と石畳の都だった。

百十数ヶ国の映画人が集まっていた。どぎもをぬかれたのはクレムリン宮殿での大パーティだった。またある日はモスクワ河に遊覧船を浮かべての船上パーティで、甲板ではオーケストラでダンスだった。

国威宣揚の意図もあったかと思うが、これが社会主義国家の姿かと目をうばわれたものだ。帝政ロシアのツア文化が街の隅々に残っていた。

『裸の島』は思いもしなかったグランプリを得て、わたしは各国とのショーバイに駆けずりまわり、ろくに観光もできなかったが、夜の街に出て罪と罰の少女娼婦ソーニヤに出会えたらと思ったが、小説が現実になるはずはなかった。

『裸の島』は世界じゅうに売れて、倒れかけていたわたしたちの独立プロは立ち直ることができた。映画祭終了後レニングラードに招待され、ネバ河には革命に参加した戦艦オーロラ号がつながれていた。

それから1971年『裸の一九才』（金賞）で再度訪れ、目的であったフィルムライブラリーを見学した。美しい白樺の森に三万本のネガフィルムが兵士に守られていた。『イントレランス』を見たいというと、直ちにスクリーンにかけられた。

三度目の1977年『竹山ひとり旅』（ソ連映画人同盟監督賞）では、ドムキノ（映画人の家）でエイゼンシュテインを観賞した。

▲「午後の遺言状」

▲「裸の島」

そして1995年『午後の遺言状』（ロシア批評家協会賞）で四度目のモスクワを訪問した。ソビエトは解体しロシアになっていた。モスクワの映画人たちは健在だったが映画祭のスポンサーはコダックで、映画祭の委員長はアメリカの俳優リチャード・ギアだった。

モスクワは一変した。ロシアの建物はおおむね灰色という印象だが、クレムリンの赤の広場には、アメリカの赤の色彩がながれ、コカコーラ、コダック、マルボロ、ラッキーストライクの赤、赤、赤が覆いつくし、マクドナルドには若ものが群れていた。

『竹山ひとり旅』のときは、国営百貨店のウインドーも寂しかったが、いまは品物があふれ、人があふれ、とぶようにものが売れていた。反面年金生活者はインフレに追いつめられ、街頭で装飾品を立ち売りしていた。

さらに目を見はらせたのは若い女性の変貌だった。長いスカートを脱ぎすてミニスカートとなった。何がどう変化したのか部外者が知るところではない。

当然ロシア映画も嵐の中にあった。だが案外かれらは落ちついていた。大きな国の映画人の動きはのろいが、しっかりとした足腰をもっているのだ。

Shindo Kaneto

1912年広島県生まれ。36年新興キネマ入社後溝口健二に師事し、39年シナリオライターに転向。42年興亜映画を経て、44年松竹に移籍。50年吉村公三郎らと近代映画協会を設立。翌年「愛妻物語」で監督デビューを果たし、公私共に終生のパートナーとなる乙羽信子を見いだす。以後、独立映画作家として活躍を続け、60年「裸の島」でモスクワ映画祭グランプリを獲得し世界へ進出。95年乙羽の遺作となった「午後の遺言状」で多数受賞。

Digitized by Google

第22回 アカデミー賞	第7回 コールテン・クローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第3回 カンヌ国際映画祭
オール・ザ・キングスメン (ロバート・ロッセン)	**オール・ザ・キングスメン** (ロバート・ロッセン)	**情婦マノン**(仏) (アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー／サン・マルコ金獅子賞・以後同名称)	**第三の男**(英) (キャロル・リード)
ジョゼフ・L・マンキーウィッツ (三人の妻への手紙)	**ロバート・ロッセン** (オール・ザ・キングスメン)	**アウグスト・ジェニーナ** (Cielo sulla palude／伊)	**ルネ・クレマン** (鉄格子の彼方/伊＝仏)
ブロデリック・クロフォード (オール・ザ・キングスメン)	**ブロデリック・クロフォード** (オール・ザ・キングスメン)	**ジョゼフ・コットン** (ジェニーの肖像／米)	**エドワード・G・ロビンソン** (他人の家/米)
オリヴィア・デ・ハヴィランド (女相続人)	**オリヴィア・デ・ハヴィランド** (女相続人)	**オリヴィア・デ・ハヴィランド** (蛇の穴／米)	**イザ・ミランダ** (鉄格子の彼方/伊＝仏)
ディーン・ジャガー (頭上の敵機)	**ジェームズ・ウィットモア** (戦場)		
マーセデス・マッケンブリッジ (オール・ザ・キングスメン)	**マーセデス・マッケンブリッジ** (オール・ザ・キングスメン)		
(原)**ダグラス・モロー**(甦る熱球)/**ジョゼフ・L・マンキーウィッツ**(三人の妻への手紙)/(オ)**ロバート・ピロシュ**(戦場)	**ロバート・ピロシュ** (戦場)	**ジャック・タチ** (のんき大将脱線の巻/仏)	**ヴァージニア・シェーラー、ユージン・リング** (Lost Boundaries/米)
(B/W)**ポール・C・ヴォーゲル**(戦場)/(C)**ウィントン・ホーク**(黄色いリボン)	**フランク・ブラナ** (チャンピオン)	**ガブリエル・フィゲロア**(La malquerida/メキシコ)	**ミルトン・クラスナー** (罠/米)
	自転車泥棒 (ヴィットリオ・デ・シーカ)		

▲「女相続人」

▲「第三の男」

▼「晩春」

▼「オール・ザ・キングスメン」

Digitized by Google

第23回 キネマ旬報賞	第4回 毎日映画コンクール	
晩春（小津安二郎）	**晩春**（小津安二郎）	作品賞
	小津安二郎（晩春）	監督賞
	志村喬（静かなる決闘、野良犬）	主演男優賞
	原節子（青い山脈、晩春、お嬢さん乾杯）	主演女優賞
		助演男優賞
	木暮実千代（青い山脈）	助演女優賞
	野田高梧、小津安二郎（晩春）	脚本賞
	中井朝一（野良犬、青い山脈）	撮影賞
戦火のかなた（伊）（ロベルト・ロッセリーニ）		外国語映画賞

▲「青い山脈」

アメリカではテレビの伸びが急速で800万台をかぞえた。映画館に行く人たちもめっきり減少して送り出された作品も地味なものが多く、唯一ロッセリーニとバーグマンの不倫の恋が大スキャンダルとなり世界を駆けめぐった。ノミネートはされなかったが「死の谷」「白熱」「窓」「摩天楼」「罠」といった個性的な作品が印象的だった。興行面でも製作と配給が分離された。

再開されたカンヌ映画祭は受賞方式が変わり現在の形となった。そしてキャロル・リードの「第三の男」がグランプリとなった。

日本映画界では自主規制機関として映倫を発足させた。各社ともやっと戦後の混乱期から落ち着きを取り戻し小津安二郎の「晩春」、今井正の「青い山脈」、黒澤明の「野良犬」、木下恵介の「破れ太鼓」とそうそうたる作品が並んだ。外国映画部門でも、秀作が多くベスト・テンに入らなかった中にも「打撃王」「ニノチカ」「汚名」「腰抜け二挺拳銃」といった良い作品が並んでいる。

▲「三人の妻への手紙」

Digitized by Google

第21回 アカデミー賞	第6回 コールテン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭
ハムレット(英) (ローレンス・オリヴィエ)	**黄金** (ジョン・ヒューストン)	**ハムレット**(英) (ローレンス・オリヴィエ/グランプリ) **Sotto il sole di Roma** (伊) (レナート・カステラーニ/最優秀イタリア映画賞)
ジョン・ヒューストン (黄金)	**ジョン・ヒューストン** (黄金)	**G・W・パブスト** (Der Prozess/オーストリア)
ローレンス・オリヴィエ (ハムレット)	**ローレンス・オリヴィエ** (ハムレット)	**エルンスト・ドイッチュ** (Der Prozess/オーストリア)
ジェーン・ワイマン (ジョニイ・ベリンダ)	**ジェーン・ワイマン** (ジョニイ・ベリンダ)	**ジーン・シモンズ** (ハムレット/英)
ウォルター・ヒューストン (黄金)	**ウォルター・ヒューストン** (黄金)	
クレア・トレヴァー (キー・ラーゴ)	**エレン・コールビー** (ママの想い出)	
(原)リチャード・シュヴァイツァー、デビッド・ウェクスラー(山河遥かなり)/**(脚)ジョン・ヒューストン**(黄金)	**リチャード・シュヴァイツァー** (山河遥かなり)	**グレアム・グリーン** (落ちた偶像/英)
(B/W)**ウィリアム・ダニエルズ**(裸の町)/(C)**ジョセフ・ヴァレンタイン、ウィリアム・V・スキャル、ウィルトン・ホーク**(ジャンヌ・ダーク)	**ガブリエル・フィゲロア** (真珠)	**デスモンド・ディキンスン** (ハムレット/英)

▲「ジョニイ・ベリンダ」

▲「ハムレット」

▲「黄金」

▼「山河遥かなり」

▼「キー・ラーゴ」

Digitized by Google

第22回 キネマ旬報賞	第3回 毎日映画コンクール	
酔いどれ天使（黒澤明）	**酔いどれ天使**（黒澤明）	作品賞
	木下恵介（女、肖像、破戒）	監督賞
	笠智衆（手をつなぐ子等、生きている画像）	主演男優賞
	田中絹代（夜の女たち、風の中の牝鶏）	主演女優賞
	宇野重吉（わが生涯の輝ける日、破戒）	助演男優賞
		助演女優賞
	伊丹万作（手をつなぐ子等）	脚本賞
	伊藤武夫（酔いどれ天使）	撮影賞
ヘンリー五世（英）（ローレンス・オリヴィエ）		外国語映画賞

▲「肖像」

アカデミー賞の授賞式も各社がお金を出し渋り存続に関わる問題となった。折からのテレビの急速な普及で映画観客の落ち込みが激しいのもその理由のひとつだった。この年の明るい話題は親子の受賞だった。「黄金」で監督、脚色賞を取ったジョン・ヒューストンと同じ映画で助演賞をとったウォルター・ヒューストンでこれはオスカー史上初めてのこと。主演女優賞を取ったのが元大統領ロナルド・レーガン夫人(当時)のジェーン・ワイマンだった。カンヌ映画祭は資金の問題で中止になる。ヴェネツィア映画祭のグランプリはオスカーとおなじでイギリスの「ハムレット」が栄冠を。

東宝は長引いた争議のなか黒澤明の「酔いどれ天使」を送り出しキネ旬、毎日で1位を獲得。ヨーロッパ映画の輸入が再開されイギリスの「ヘンリー五世」「逢びき」フランスの「海の牙」「旅路の果て」等がベスト・テン入り。

▲「酔いどれ天使」

Digitized by Google

第20回 アカデミー賞	第5回 コールテン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第2回 カンヌ国際映画祭
紳士協定 (エリア・カザン)	**紳士協定** (エリア・カザン)	**Siréna**(チェコ) (カレル・シュテクリー)	**幸福の設計**(仏)(ジャック・ベッケル)／**海の牙**(仏)(ルネ・クレマン)／**ジーグフェルド・フォーリーズ**(米)(ヴィンセント・ミネリ)／**十字砲火**(米)(エドワード・ドミトリク)／**ダンボ**(米)(ウォルト・ディズニー)／**ポーランドの洪水**(ポーランド)(E・ポサック)
エリア・カザン (紳士協定)	**エリア・カザン** (紳士協定)	**アンリ=ジョルジュ・クルーゾー** (犯罪河岸／仏)	
ロナルド・コールマン (二重生活)	**ロナルド・コールマン** (二重生活)	**ピエール・フレネー** (聖バンサン／仏)	
ロレッタ・ヤング (ミネソタの娘)	**ロザリンド・ラッセル** (Mourning Becomes Electra)	**アンナ・マニャーニ** (L'Onorvole Angelina／伊)	
エドマンド・グウェン (三十四丁目の奇蹟)	**エドマンド・グウェン** (三十四丁目の奇蹟)		
セレステ・ホルム (紳士協定)	**セレステ・ホルム** (紳士協定)		
(原)**ヴァレンタイン・ディヴィス**(三十四丁目の奇蹟)／(オ)**シドニー・シェルダン**(独身者と女学生)／(色)**ジョージ・シートン**(三十四丁目の奇蹟)	**ジョージ・シートン** (三十四丁目の奇蹟)		
(B/W)**ガイ・グリーン**(大いなる遺産)／(C)**ジャック・カーディフ**(黒水仙)	**ジャック・カーディフ** (黒水仙)	**ガブリエル・フィゲロア** (真珠/メキシコ)	

▲「ミネソタの娘」

▲「紳士協定」

▼「三十四丁目の奇蹟」

Digitized by Google

第20回 キネマ旬報賞	第2回 毎日映画コンクール	
安城家の舞踏会（吉村公三郎）	**今ひとたびの**（五所平之助）	作品賞
	黒澤明（素晴らしき日曜日、わが青春に悔なし）	監督賞
	森雅之（安城家の舞踏会）	主演男優賞
	田中絹代（結婚、不死鳥、女優須磨子の恋）	主演女優賞
		助演男優賞
		助演女優賞
	植草圭之助（素晴らしき日曜日）	脚本賞
	三浦光雄（今ひとたびの）	撮影賞
断崖（米）（アルフレッド・ヒッチコック）		外国語映画賞

▲「不死鳥」

この年の秋、ハリウッドは赤狩り旋風に巻き込まれた。そんな中、社会派のエリア・カザンが撮った「紳士協定」が作品賞を取る予想外の展開があり、それがアカデミー会員たちの抵抗であると評価された。賞自体は20周年を迎えたにしては全般的に地味で男女主演賞のロナルド・コールマンとロレッタ・ヤングの2人だったのを見ても判るだろう。

カンヌ映画祭はジャンル別の審査が行われ、恋愛心理部門は「幸福の設計」、冒険推理部門は「海の牙」、社会派部門は「十字砲火」、ミュージカル・コメディ部門は「ジーグフェルド・フォリーズ」、アニメ部門は「ダンボ」がそれぞれ受賞した。部門によっては一作品しかないという変な選考であった。

解放された日本映画界は映画館の新規オープンブームで活況を呈し、製作の方もフィルム不足、電力事情の悪さ等の悪条件のなかで頑張り96本が封切られた。キネ旬のベスト・テンも今回から邦、洋とも10本ずつが選出された。

▲「わが青春に悔なし」

Digitized by Google

第19回 アカデミー賞	第4回 ゴールデン・グローブ賞	ヴェネツィア 国際映画祭	第1回 カンヌ国際映画祭
我等の生涯の最良の年 （ウィリアム・ワイラー）	**我等の生涯の最良の年** （ウィリアム・ワイラー）	**南部の人**（米） （ジャン・ルノワール／最優秀劇映画賞）	**田園交響楽**（仏）ジャン・ドラノワ／**失われた週末**（米）ビリー・ワイルダー／**達びき**（英）デイヴィッド・リーン／**地球は赤くなる**（デンマーク）ポディル・イプセン、ラウ・ラウリッツェン／**下の街**（インド）チェタ・アナンド／**無防備都市**（イタリア）ロベルト・ロッセリーニ／**白き処女地**（メキシコ）エミリオ・フェルナンデス／**試煉**（スウェーデン）アルフ・シューベルイ／**最後のチャンス**（スイス）レオポルド・サントブルク／**翼のない男たち**（チェコ）ヨゼフ・キャップ／**決定的な曲り角**（ソ連）フレデリック・エルムレ
ウィリアム・ワイラー （我等の生涯の最良の年）	**フランク・キャプラ** （素晴らしき哉！人生）		**ルネ・クレマン** （鉄路の闘い／仏）
フレドリック・マーチ （我等の生涯の最良の年）	**グレゴリー・ペック** （仔鹿物語）		**レイ・ミランド** （失われた週末／米）
オリヴィア・デ・ハヴィランド （遙かなる我が子）	**ロザリンド・ラッセル** （世界の母）		**ミシェル・モルガン** （田園交響楽／仏）
ハロルド・ラッセル （我等の生涯の最良の年）	**クリフトン・ウェッブ** （剃刀の刃）		
アン・バクスター （剃刀の刃）	**アン・バクスター** （剃刀の刃）		
（原）**クレメンス・デイン**（Vacation from Marriage）／（オ）**ミュリエル・ボックス、シドニー・ボックス**（第七のヴェール）／（色）**ロバート・E・シャーウッド**（我等の生涯の最良の年）			**ボリス・チルスコフ** （ソ連）
（B/W）**アーサー・ミラー**（アンナとシャム王）／（C）**チャールズ・ロシャー、レナード・スミス、アーサー・アーリング**（小鹿物語）			**ガブリエル・フィゲロア** （メキシコ）

▲「素晴らしき哉／人生」

▲「仔鹿物語」

▼「剃刀の刃」

Digitized by Google

第20回 キネマ旬報賞	第1回 毎日映画コンクール	
大曽根家の朝（木下恵介）	**或る夜の殿様**（衣笠貞之助）	作品賞
	今井正（民衆の敵）	監督賞
		主演男優賞 主演女優賞
		助演男優賞 助演女優賞
	久保栄二郎（大曽根家の朝）	脚本賞
	立花幹也（檜舞台）	撮影賞
我が道を往く（米）（レオ・マッケリー）		外国語映画賞

▲「大曽根家の朝」

復員兵の物語ウィリアム・ワイラーの「我等の生涯の最良の年」は7部門で受賞、中でも助演賞のハロルド・ラッセルは戦争で両手を無くし、義手で登場し会場を感動させた。

いかにも戦争直後のオスカーの授賞式だった。この年フランスのカンヌ映画祭が華々しく幕を開けた。19カ国の49作品が参加したがグランプリはアメリカ、フランス、イギリス、インド、メキシコ、スイス、チェコ、ソ連、デンマーク、スウェーデンと各国で仲良く分け合った。この中でもロベルト・ロッセリーニの「無防備都市」とルネ・クレマンの「鉄路の闘い」がひときわ目立った存在だったらしいのは納得できる。中断されていたヴェネツィア映画祭も再開されジャン・ルノワールの「南部の人」が受賞した。

日本映画界も戦火の中から復活に向けて歩み始めた。アメリカ映画も5年振りに上映が再開され「キューリー夫人」「春の序曲」で華々しくスタートを切った。戦災で500館あまりの劇場を無くしたが終戦の次の日から撮影に取りかかった東宝、松竹、大映3社は娯楽に飢える人たちへ娯楽作品の供給を始めた。久しぶりでキネマ旬報本誌が3月に復刊し、再開したキネ旬のベスト10は木下恵介の「大曽根家の朝」が1位、2位には黒澤明の「わが青春に悔なし」が入り戦後の日本映画を背負う2人の今後の活躍に希望の灯がともった。この年は8位までという変則。選者も14人だった。また毎日映画コンクールもこの年からスタートした。

▲「或る夜の殿様」

Digitized by Google

第18回 アカデミー賞	第3回 ゴールデン・グローブ賞
失われた週末（ビリー・ワイルダー）	**失われた週末**（ビリー・ワイルダー）
ビリー・ワイルダー（失われた週末）	**ビリー・ワイルダー**（失われた週末）
レイ・ミランド（失われた週末）	**レイ・ミランド**（失われた週末）
ジョーン・クロフォード（Mildred Pierce）	**イングリッド・バーグマン**（聖メリイの鐘）
ジェームズ・ダン（ブルックリン横丁）	**J・キャロル・ナイシュ**（A Medal for Benny）
アン・リヴィアー（緑園の天使）	**アンジェラ・ランズベリー**（ドリアン・グレイの肖像）
(原)**チャールズ・G・ブース**(Gメン対間諜)/(オ)**リチャード・シュヴァイツァー**(Marie Louise)/(色)**チャールズ・ブラケット、ビリー・ワイルダー**(失われた週末)	
(B/W)**ハリー・ストラドリング**(ドリアン・グレイの肖像)/(C)**レオン・シャムロイ**(哀愁の湖)	

▲「失われた週末」

第2次世界大戦がようやく終結、日本は8月15日に終戦、無条件降伏を受諾した。

この年のオスカーは石膏から従来の黄金像に戻り久しぶりに華やいだ雰囲気の中、戦地から戻ったジェームズ・スチュワートとボブ・ホープの2人によって司会進行が行われた。主演女優賞のジョーン・クロフォードは風邪で病床にあり家での受賞となった。5部門にノミネートされたMGMミュージカル「錨を上げて」は音楽賞のみの受賞となった。

4部門の受賞で気を吐いたのがビリー・ワイルダーの「失われた週末」だった。

日本では戦争末期に当たり、映画の製作本数も減り、稲垣浩が上海ロケで撮った「戦火は上海に揚がる」、衣笠貞之助の「間諜海の薔薇」等が製作された。終戦後1週間で封切られたのが五所平之助の「伊豆の娘たち」だった。映画の検閲はGHQの機関に移行された。

▲「ブルックリン横丁」

Digitized by Google

1944昭和19年

第17回 アカデミー賞	第2回 ゴールデン・グローブ賞	
我が道を往く（レオ・マッケリー）	**我が道を往く**（レオ・マッケリー）	作品賞
レオ・マッケリー（我が道を往く）	**レオ・マッケリー**（我が道を往く）	監督賞
ビング・クロズビー（我が道を往く）	**アレクサンダー・ノックス**（Wilson）	主演男優賞
イングリッド・バーグマン（ガス燈）	**イングリッド・バーグマン**（ガス燈）	主演女優賞
バリー・フィツジェラルド（我が道を往く）	**バリー・フィツジェラルド**（我が道を往く）	助演男優賞
エセル・バリモア（None but the Lonely Heart）	**アグネス・ムーアヘッド**（バーキントン夫人）	助演女優賞
（原）**レオ・マッケリー**（我が道を往く）/（オ）**ラマー・トロッティ**（Wilson）/（色）**フランク・バトラー、フランク・キャヴェット**（我が道を往く）		脚本賞
（B/W）**ジョセフ・ラ・シェル**（ローラ殺人事件）/（C）**レオン・シャムロイ**（Wilson）		撮影賞
		外国語映画賞

▲「ガス燈」

ハリウッドの映画人が次々と戦地へ赴いた。監督たちは積極的に軍に協力、ドキュメンタリー映画の製作にあたった。ウィリアム・ワイラー、フランク・キャプラ、ジョン・フォード等の大物が取り組んだ。初めてＡＢＣラジオが全国ネットで放送したのもオスカー史上特筆されることだった。この回から今のようなショウアップされた形で、お馴染みボブ・ホープの司会で行われた。10個ずつノミネートされたレオ・マッケリーの「我が道を往く」とヘンリー・キングの「Wilson」（未公開）の一騎打ちとなったが７部門対５部門で前者の勝利。前年に引き続いてノミネートされたイングリッド・バーグマンが「ガス燈」で見事雪辱。ハリウッドの外人記者協会の選ぶ「ゴールデン・グローブ賞」はこの年から始まった。

日本映画界は深刻なフィルム不足に悩まされ、劇場は次々と閉鎖や取り壊しがすすみ、興行に対して課せられた上映回数、入場料等の問題も空襲の激化で有名無実となった。

木下恵介の「陸軍」、山本嘉次郎の「加藤隼戦闘隊」、稲垣浩の「狼火は上海に揚がる」、阿部豊の「あの旗を撃て・コレヒドールの最後」と相変わらず戦争映画が多いことにきずく。

▲「我が道を往く」

Digitized by Google

第16回 アカデミー賞	第1回 ゴールデン・グローブ賞
カサブランカ (マイケル・カーティス)	**聖処女** (ヘンリー・キング)
マイケル・カーティス (カサブランカ)	
ポール・ルーカス (ラインの監視)	**ポール・ルーカス** (ラインの監視)
ジェニファー・ジョーンズ (聖処女)	**ジェニファー・ジョーンズ** (聖処女)
チャールズ・コバーン (The More The Merrier)	**エイキン・タミロフ** (誰が為に鐘は鳴る)
カティナ・パクシヌー (誰がために鐘は鳴る)	**カティナ・パクシヌー** (誰が為に鐘は鳴る)
(原)**ウィリアム・サロイヤン**(町の人気者)/(オ)**ノーマン・クラスナ**(カナリヤ姫)/(色)**ジュリアス・J・エプスティン、フィリップ・G・エプスティン、ハワード・コッチ**(カサブランカ)	
(B/W)**アーサー・ミラー**(聖処女)/(C)**ハル・モア、W・ハワード・グリーン**(オペラの怪人)	

▲「カサブランカ」

英米連合軍がカサブランカに奇襲作戦を敢行した直後に、タイミング良く「カサブランカ」が封切られて大いに盛り上がりを見せた。世界は戦争一色となりミュージカルやコメディがもてはやされた。こんな時局の中、主要部門で8つもノミネートされていた「誰が為に鐘は鳴る」を押さえて「カサブランカ」が作品賞を含み3個,「聖処女」が4個受賞した。

日本映画界は戦後の映画を引っ張っていくことになる黒澤明と木下恵介の二人がデヴュー作を撮り注目された。稲垣浩の名作である「無法松の一生」は無惨にもカットされての公開となった。戦争テーマの作品は田坂具隆の「海軍」、島耕二の「シンガポール総攻撃」、今井正の「望楼の決死隊」等が注目された。学生の映画鑑賞禁止という訳の分からない指令が文部省から出されたのも事件だった。

▲「誰が為に鐘は鳴る」

Digitized by Google

1942 昭和17年

第19回 キネマ旬報賞	第15回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭
ハワイ・マレー沖海戦（山本嘉次郎）	**ミニヴァー夫人**（ウィリアム・ワイラー）	**Bengasi**（伊）（アウグスト・ジェニーナ／イタリア映画賞）
	ウィリアム・ワイラー（ミニヴァー夫人）	**フランチェスコ・デ・ロベルティス**（Alfa Tau／伊）
	ジェームズ・キャグニー（ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ）	**フォスコ・ジャケッティ**（Un Colpo di pistola、Bengasi、Noi vivi-adio kira／伊）
	グリア・ガーソン（ミニヴァー夫人）	**クリスティーナ・ゼーダーバウム**（Die goldene Stadt、偉大なる大者／独）
	ヴァン・ヘフリン（Johnny Eager）	
	テレサ・ライト（ミニヴァー夫人）	
	（原）**エメリック・プレスバーカー**（潜水艦轟沈す）／（オ）**リング・ラードナー・ジュニア、マイケル・ケニン**（女性No1）／（色）**アーサー・ウィンペリス、ジョージ・フローシェル、ジェームズ・ヒルトン、クローデイン・ウェスト**（ミニヴァー夫人）	
	（B/W）**ジョセフ・ルッテンバーグ**（ミニヴァー夫人）／（C）**レオン・シャムロイ**（海の征服者）	
日本は太平洋戦争に突入したため、外国映画の選考はとりやめ		**偉大なる王者**（独）（ファイト・ハーラン）

作品賞
監督賞
主演男優賞
主演女優賞
助演男優賞
助演女優賞
脚本賞
撮影賞
外国語映画賞

戦争も日に日に世界各地に広がりを見せ、ついに黄金のオスカー像も石膏の像に変わらざるを得なかった。この年はウィリアム・ワイラーの「ミニヴァー夫人」が6部門を受賞して、主演女優のグリア・ガースンの1時間近くのスピーチが大きな話題となった。暗黒街もので有名なジェームズ・キャグニーが愛国精神を歌い上げるミュージカル「ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ」で受賞したことも大いに盛り上がった。また「スイング・ホテル」で主題歌賞をとった名曲「ホワイト・クリスマス」も永遠のヒット曲として今も全世界で唄われている。

ヴェネツィア映画祭は前年と今年は伊独映画祭として開催され43，44年はついに中止に追い込まれた。

日本映画界は軍の情報局により日活、新興、大都の3社を合併させ、大映を作りますます発言力を強めた。東宝の戦記物「ハワイ・マレー沖海戦」は大ヒット、戦記物は数多く製作された。

▲「ミニヴァー夫人」

Digitized by Google

1941 昭和16年

第18回 キネマ旬報賞	第14回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭
戸田家の兄弟 (小津安二郎)	**わが谷は緑なりき** (ジョン・フォード)	**La Cotona di ferro**(伊) (アレッサンドロ・ブラゼッティ／イタリア映画賞)
	ジョン・フォード (わが谷は緑なりき)	**G・W・パブスト** (Komedianten／独)
	ゲイリー・クーパー (ヨーク軍曹)	**エルメーテ・ザッコーニ** (Don Buonaparte／伊)
	ジョーン・フォンテイン (断崖)	**ルイゼ・ウルリッヒ** (Annelie／独)
	ドナルド・クリスプ (わが谷は緑なりき)	
	メアリー・アスター (偉大な嘘)	
	(原)**ハリー・シーガル**(幽霊紐育を歩く)/(オ)**ハーマン・J・マンキーウィッツ、オーソン・ウェルズ**(市民ケーン)/(色)**シドニー・バックマン、シートン・I・ミラー**(幽霊紐育を行く)	
	(B/W)**アーサー・ミラー**(わが谷は緑なりき) (C)**アーネスト・バーマー、レイ・レナハン**(血と砂)	
日本は太平洋戦争に突入したため、外国映画の選考はとりやめ		**世界に告ぐ**(独) (ハンス・シュタインホフ)

▲「断崖」

12月にはアメリカもついに第2次世界大戦に参戦、ハリウッドの俳優たちも男優は兵役に、女優陣は前線慰問にと戦時体制にはいっていった。オスカーも一時は中止かとも言われたが地味な形式をとって行われた。ジョン・フォードの「わが谷は緑なりき」が5部門で受賞、意外だったのが9部門にノミネートとされたオーソン・ウェルズの「市民ケーン」が脚本賞のみというのも話題だった。「ヨーク軍曹」でゲイリー・クーパーが初の栄誉。主演女優賞はオリヴィア・デ・ハヴィランドとジョーン・フォンティンの姉妹が激しい争いの末、妹のジョーンが獲得した。

キネ旬ベスト・テンでもこの年から戦時下の影響で外国映画部門の選出を中止、昭和21年に再開されるまで5年の空白期間がある。日本映画界もますます軍の圧力を受け、作家たちは体制に迎合するか、歴史物、明治を背景にした物、農村の問題を扱った物を撮るか、とテーマ選びに苦労しているのが良く分かる。

▲「戸田家の兄弟」

Digitized by Google

1940昭和15年

第17回 キネマ旬報賞	第13回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭	
小島の春（豊田四郎）	**レベッカ**（アルフレッド・ヒッチコック）	**L'asedio dell'Alcazar**（伊）（アウグスト・ジェニーナ／イタリア映画賞）	作品賞
	ジョン・フォード（怒りの葡萄）		監督賞
	ジェームズ・スチュワート（フィラデルフィア物語）		主演男優賞
	ジンジャー・ロジャース（恋愛手帖）		主演女優賞
	ウォルター・ブレナン（西部の男）		助演男優賞
	ジェーン・ダーウェル（怒りの葡萄）		助演女優賞
	（原）**ベンジャミン・グレイザー、ジョン・S・トルディ**（嘆きの木陰）／（オ）**プレストン・スタージェス**（The Great McGinty）／（色）**ドナルド・オグデン・スチュアート**（フラデルフィア物語）		脚本賞
	（B/W）**ジョージ・バーンズ**（レベッカ）／（C）**ジョルジュ・ペリナール**（バグダッドの盗賊）		撮影賞
民族の祭典（独）（レニ・リーフェンシュタール）		**白夜の果て**（独）（グスタフ・ウチツキー）	外国語映画賞

前年の9月に始まった第2次世界大戦は映画界にも影響は徐々に表れ始めた。それでもアメリカは参戦していなくアカデミーの式典は華やかに行われた。前年事前に受賞者の名前が漏れたことをふまえ、今回から密封された封筒に入れるという現在も行われている方式に改められた。この年も「レベッカ」の受賞に対して「海外特派員」「フィラデルフィア物語」「凡てこの世も天国も」「我らの町」「怒りの葡萄」「恋愛手帖」「チャップリンの独裁者」「月光の女」「果てなき船路」がノミネートされていた激戦であった。主演女優賞は踊りでは大いに認められたジンジャー・ロジャースがシリアスな演技で受賞。彼女は大感激、涙、涙だったとか。チャップリンは3部門で候補になったがハリウッド人種に嫌われていた彼は受賞を逸した。このあと72年に特別賞を受けるまで縁がなかったわけである。

この年を最後にキネ旬の外国映画のベスト10は戦後の昭和21年に再開されるまで中断される。1位が「民族の祭典」5位が「美の祭典」というのが何か象徴されるようだ。

でも暗い世相のなか一番アメリカを感じる「駅馬者」やアステア、ロジャースのミュージカル「カッスル夫妻」が入選しているのが嬉しい。

映画法というものが施行され事実上軍と官僚のもとに統括される事態になった。事実2位に「西住戦車長伝」8位に「燃ゆる大空」が入っている。製作本数も制限され国策映画を増やすほうに力が注がれていく。戦争の影響で反ナチをテーマにした物や戦場を舞台にした作品が増えてきた。

▲「フィラデルフィア物語」

Digitized by Google

1939昭和14年

第16回 キネマ旬報賞	第12回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭
土 (内田吐夢)	**風と共に去りぬ** (ヴィクター・フレミング)	**Abuna Messias**(伊) (ゴッフレード・アレッサンドリーニ)
	ヴィクター・フレミング (風と共に去りぬ)	
	ロバード・ドーナット (Goodbye, Mr. Chips)	
	ヴィヴィアン・リー (風と共に去りぬ)	
	トーマス・ミッチェル (駅馬車)	
	ハティ・マクダニエル (風と共に去りぬ)	
	(原)**ルイス・R・フォスター**(スミス都へ行く) (色)**シドニー・ハワード**(風と共に去りぬ)	
	(B/W)**グレッグ・トーランド**(嵐が丘)/(C)**アーネスト・ハラー、レイ・レナハン**(風と共に去りぬ)	**ウバルド・アラタ** (Dernière jeunesse/伊)
望郷(仏) (ジュリアン・デュヴィヴィエ)		**該当なし**

▲「風と共に去りぬ」

この年のハリウッド映画は空前の傑作、秀作のラッシュであった。この激戦の中8個のオスカーを受けたのは「風と共に去りぬ」でこれは新記録である。ちなみに作品賞にノミネートされた物を挙げてみると「駅馬車」「オズの魔法使」「スミス都へ行く」「愛の勝利」「廿日鼠と人間」「嵐が丘」「邂逅」「Goodbye, Mr. Chips」「ニノチカ」の10本でどれがとってもおかしくない。特筆すべきは助演女優賞で初めての黒人俳優ハティ・マクダニエルの受賞だろう。この後29年間黒人の受賞者はいない。司会は今まで18回も勤めているボブ・ホープの記念すべき第1回目であった。

97年めでたく50回を祝ったカンヌ国際映画祭もその歴史を紐解くと、本来はこの年に第1回が開催される予定だったのである。参加は仏、米、英等7ケ国、名誉審査委員長には映画の発明者のルイ・リュミエールが勤める事が決まっていた。初日の1本目が上映されただけでドイツのポーランド侵攻が始まり映画祭どころの話でなくなりやむなく中止に至った。ヴェネツィア映画祭も戦争の影響をもろに受け開催はされたが政治色が強くなり批判をあびた。

日本映画界も戦時色を強め文芸作品にも色々国策が加えられ暗い影が忍び寄ってくる。

「土」「残菊物語」「兄とその妹」等が上位を占めるが亀井文夫の「戦う兵隊」が陸軍から上映禁止処分にあうという受難の時代の始まりであった。

▲「望郷」

Digitized by Google

1938昭和13年

第15回 キネマ旬報賞	第11回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭	
五人の斥候兵 (田坂具隆)	**我が家の楽園** (フランク・キャプラ)	**民族の祭典/美の祭典** (独) (レニー・リーフェンシュタール) **空征かば**(伊) (ゴッフレッド・アレッサンドリーニ)(ムッソリーニ杯)	**作品賞**
	フランク・キャプラ (我が家の楽園)		**監督賞**
	スペンサー・トレイシー (少年の街)	**レスリー・ハワード** (ピグマリオン/英)	**主演男優賞**
	ベティ・デイヴィス (黒蘭の女)	**ノーマ・シアラー** (マリー・アントワネットの生涯/米)	**主演女優賞**
	ウォルター・ブレナン (Kentucky)		**助演男優賞**
	フェイ・ベインター (黒蘭の女)		**助演女優賞**
	(原)**ドア・シアリー、エリナー・グリフィン**(少年の町)/(色)**ジョージ・バーナード・ショウ**(ピグマリオン)(潤)**W・P・リスコム、セシル・リュイス、イアン・ダルリンプル**(ピグマリオン)		**脚本賞**
	ジョセフ・ルッテンバーグ (グレート・ワルツ)		**撮影賞**
舞踏会の手帖(仏) (ジュリアン・デュヴィヴィエ)		**該当なし**	**外国語映画賞**

常連の司会者としてお馴染みになるボブ・ホープが初めてプレゼンターとして登場、会場を沸かせ、スペンサー・トレイシーが主演男優賞として「少年の町」で再びノミネートされ、前年の女優賞に続いて2年連続受賞を成し遂げた。脚本賞「ピグマリオン」のバーナード・ショウも皮肉に満ちたコメントを残したが本心では大変喜んだということだ。

特別賞は子役として人気抜群だったミッキー・ルーニーとディアナ・ダービンの2人に与えられた。長編アニメ第1作として製作された「白雪姫」は作品賞候補にはならなかったけれどディズニーには7人の小人を配したスペシャルな像を贈った。

5回目を迎えたヴェネツィア映画祭は世界の戦争の影をバックに当時全盛のムッソリーニが介入「民族の祭典」「美の祭典」と「空征かば」に賞が与えられた。

日本映画界は戦争モードに突入。このことがこの年のベスト・テンの1位に田坂具隆の「五人の斥候兵」となって表れる。記録映画「上海」もその一環としてある。

子役として活躍した高峰秀子が主演の山本嘉次郎の「綴方教室」、田坂具隆の文芸大作「路傍の石」、豊田四郎の「鶯」「泣虫小僧」があるのがほっとする。

▲「五人の斥候兵」

Digitized by Google

1937 昭和12年

第14回 キネマ旬報賞	第10回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭
限りなき前進（内田吐夢）	**ゾラの生涯**（ウィリアム・ディターレ）	**シビオネ**（伊）（カルミネ・ガローネ／最優秀イタリア映画賞）
	レオ・マッケリー（新婚道中記）	**ロバート・フラハティ、ゾルタン・コルダ**（カラナグ／英）
	スペンサー・トレイシー（我は海の子）	**エミール・ヤニングス**（支配者／独）
	ルイーズ・ライナー（大地）	**ベティ・デイヴィス**（札つき女、倒れるまで／米）
	ジョゼフ・シルドクラウト（ゾラの生涯）	
	アリス・ブラディ（シカゴ）	
	（原）**ロバート・カースン、ウィリアム・A・ウェルマン**（スタア誕生）／（色）**ノーマン・ライリー・レイン、ハインツ・ヘラルド、ゲイザ・ヘアツェグ**（ゾラの生涯）	**サシャ・ギトリー**（Les perles de la couronne/仏）
	カール・フロイント（大地）	**アルフレッド・サンテル**（目撃者/米）
女だけの都（仏）（ジャック・フェデー）		**舞踏会の手帖**（仏）（ジュリアン・デュヴィヴィエ）

▲「ゾラの生涯」

▲「我は海の子」

この年9月に蘆溝橋事件が起こり日中戦争へと発展、国際情勢は悪化の一歩を辿ってるがアメリカ映画は好況でメジャー各社は次々と作品を送り出していた。

前年、あまり良くない噂もあったルイーズ・ライナーが「大地」で連続受賞というビッグニュースだった。主演男優賞は「我は海の子」のスペンサー・トレイシー、盲腸で入院中で夫人が代理で受け取った。「ゾラの生涯」で再びノミネートされたがポール・ムニは連続受賞にはならなかった。この年からのアービング・タールバーグ賞の第1回は20世紀フォックスのプロデューサー、ダリル・F・ザナックに与えられた。

「水の風車」でウォルト・ディズニーはなんと6回連続受賞を果たした。

日本映画界は順風満帆で各スタジオが力ある作品を次々と送り出していた。が戦時体制に向かっていたのも事実で外国映画輸入制限も実施された。しかし作品自体にはまだ戦争へのテーマはあまり取り上げられていない。しかし、1位の「限りなき前進」を撮った内田吐夢も出征し、7位の「人情紙風船」山中貞雄も戦病死している。

外国映画部門ではジャック・フェデが前年に引き続き1位に輝き2，3位も相変らずデュヴィヴィエ、ルノアールが占めている。ハリウッドからウィリアム・ワイラーの「孔雀夫人」、レオ・マッケリーの「明日は来たらず」が4，5位にランクされている。

▲「女だけの都」

Digitized by Google

1936昭和11年

第13回 キネマ旬報賞	第9回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭	
祇園の姉妹（溝口健二）	**巨星ジーグフェルド**（ロバート・Z・レナード）	**リビア白騎隊**（伊）（アウグスト・ジェニーナ／ムッソリーニ杯イタリア映画賞）	作品賞
	フランク・キャプラ（オペラ・ハット）	**ジャック・フェデー**（女だけの都／仏）	監督賞
	ポール・ムニ（科学者の道）	**ポール・ムニ**（科学者の道／米）	主演男優賞
	ルイーズ・ライナー（巨星ジーグフェルド）	**アナベラ**（戦ひの前夜／仏）	主演女優賞
	ウォルター・ブレナン（大自然の凱歌）		助演男優賞
	ゲイル・ソンダーガード（風雲児アドヴァース）		助演女優賞
	（原）（色）共に **ピエール・コリングス** **シェリダン・ギブニー**（科学者の道）		脚本賞
	ガーエターノ・ゴーディオ（風雲児アドヴァース）	**ムッツ・グリーンバウム**（Tudor Rose／英）	撮影賞
ミモザ館（仏）（ジャック・フェデー）		**カリフォルニアの皇帝**（ルイス・トレンカー／独・ムッソリーニ杯外国映画賞）	外国語映画賞

アカデミー賞は、会員が全員で選ぶのではなくて5部門の委員会で選定すると言う方式にこの年から改められた。この年は主演男女優ともヨーロッパ勢の受賞で、作品賞も取った「巨星ジーグフェルド」のルイーズ・ライナーは賞を取るには役が軽すぎるといった非難の声も上がった。ポール・ムニは地味ではあるがその的確な味わい深い演技で受賞した。「科学者の道」以降も伝記物の達人としての好演が多い。この年から助演賞が新設されその第1回に「大自然の凱歌」のウォルター・ブレナンと「風雲児アドヴァース」のゲイル・ソンダーガードが選ばれ記念楯をもらった。漫画賞のウォルト・ディズニーの5年連続受賞が光っている。

日本映画界はこの年東宝が設立、1月に竣工なった老舗松竹の大船撮影所、前年にできた日活多摩川撮影所も加え活気ある製作が行われた。ベスト・テンを見渡すと1，3位には溝口健二の傑作「祇園の姉妹」「浪華悲歌」が、内田吐夢の「人生劇場（青春編）」、小津安二郎の「一人息子」、伊丹万作の「赤西蛎太」等、正に黄金期を見る思いがする。

キネ旬の外国映画部門はジュリアン・デュヴィヴィエが2本「白き処女地」「地の果てを行く」で4，5位、ハリウッドからはフランク・キャプラの「オペラ・ハット」、ウイリアム・ディターレの「科学者の道」等があるがこの年のオスカー作品賞は見あたらない。

▲「祇園の姉妹」

Digitized by Google

1935昭和10年

第12回 キネマ旬報賞	第8回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭
妻よ薔薇のやうに（成瀬巳喜男）	**南海征服（戦艦バウンティ号の叛乱）**（フランク・ロイド）	**おもかげ**（伊）（カルミネ・ガローネ／最優秀イタリア映画賞）
	ジョン・フォード（男の敵）	**キング・ヴィダー**（結婚の夜／米）
	ヴィクター・マクラグレン（男の敵）	**ピエール・ブランシャール**（罪と罰／仏）
	ベティ・デイヴィス（青春の抗議）	**パウラ・ヴェッセリ**（女ひとり／オーストリア）
	（原）**ベン・ヘクト、チャールズ・マッカーサー**（生きているモレア）（色）**ダドリー・ニコルズ**（男の敵）	**ジョン・フォード**（男の敵／米）
	ハル・モール（真夏の夜の夢）	**ジョセフ・フォン・スタンバーグ**（西班牙狂想曲／米）
最後の億万長者（仏）（ルネ・クレール）		**アンナ・カレニナ**（米）（クラレンス・ブラウン）

▲「青春の抗議」

▲「男の敵」

スクリーン・ライターズ・ギルドとのごたごたで式がボイコットされると言う事態に追い込まれ、アカデミー協会の呼びかけもあまり功を奏せず、式自体は映画の父と言われたD・W・グリフィスに特別賞を授与する事で盛り上げをはかった。女優賞は前年にもめたベティ・デイヴィスが「青春の抗議」で受賞したが同情票であるとの噂も飛び交い彼女にとっては素直に喜べない物となった。「男の敵」で脚色賞のダドリー・ニコルズが辞退するという事件も起きた。これが最初の受賞拒否である。前年新設の音楽賞に続いてダンス監督賞が新設されたが僅か2年で廃止された。

キネ旬の10は相変わらずヨーロッパ映画が強く上位を占め、中でもヴィリ・フォルストの「未完成交響楽」、ゲザ・フォン・ボルヴァリの「別れの曲」は圧倒的なファンの支持を受けた。日本映画はこの年過半数がトーキーとなり新たな時代を迎えた。

成瀬巳喜男が「妻よ薔薇のやうに」「噂の娘」で1，8位、山中貞雄が「街の入墨者」と「国定忠治」で2，5位と、この頃は1人の監督が2本テン入りする事は今と違ってそんなに珍しいことではなかった。

▲「妻よ薔薇のやうに」

Digitized by Google

1934昭和9年

第11回 キネマ旬報賞	第7回 アカデミー賞	ヴェネツィア 国際映画祭	
浮草物語（小津安二郎）	**或る夜の出来事**（フランク・キャプラ）	Teresa Confalonieri（伊）（グイド・ブリニョーネ／最優秀イタリア映画賞）	作品賞
	フランク・キャプラ（或る夜の出来事）	**グスタフ・マハティ**（春の調べ／チェコ） **ヨゼフ・ロヴェンスキ**（ながれ／チェコ）	監督賞
	クラーク・ゲーブル（或る夜の出来事）	**ウォーレス・ビアリー**（奇傑パンチョ／米）	主演男優賞
	クローデット・コルベール（或る夜の出来事）	**キャサリン・ヘップバーン**（若草物語／米）	主演女優賞
			助演男優賞
			助演女優賞
	（原）**アーサー・シーザー**（男の世界） （色）**ロバート・リスキン**（或る夜の出来事）	**ヴィリ・フォルスト**（たそがれの維納／オーストリア）	脚本賞
	ヴィクター・ミルナー（クレオパトラ）		撮影賞
商船テナシチー（仏）（ジュリアン・デュヴィヴィエ）		**アラン**（英）（ロバート・フラハティ）	外国語映画賞

この年からアカデミー対象の作品が1月1日から12月31日迄に公開されたものとなった。大きな話題は「痴人の愛」のベティ・デイヴィスがノミネートリストにはずれたことで、抗議により大騒動に発展、結局受賞の道が開かれた、世論はデイヴィスに傾いたが、結局受賞したのは「或る夜の出来事」のクローデット・コルベールだった。ところが彼女もベティの受賞を信じてニューヨークに向けて旅立とうと駅に向かっていた。あわてた係員がコルベールを探しだし会場に無事連れてきたという、今では絶対信じられないようなエピソードであった。この作品は作品、監督、男優、脚色の5部門を制覇、初の快挙である。又会場を大いに沸かせたのは6才の天才子役シャーリー・テンプルの特別賞の受賞だった。

キネ旬のベスト・テンでは外国映画部門で3年続けてヨーロッパ作品が1位になった。特にこの年は「商船テナシチー」「会議は踊る」「にんじん」がベスト3を占めた。当時の映画ファンのヨーロッパ嗜好が伺える。10位には初のカラー作品「クカラチャ」が入っている。

日本映画部門は島津保次郎の「隣の八重ちゃん」、村田実の「霧笛」等に混ざり「北進日本」という記録映画が6位に、戦争の足音が聞こえてくるようだ。

ヴェネツィア映画祭は2回目を開催され主演男女優賞にアメリカの2人ウォーレス・ビアリー、キャサリン・ヘップバーンが選ばれている。

▲「或る夜の出来事」

Digitized by Google

1932昭和7年			1933昭和8年	
第5回 アカデミー賞 31-32	ヴェネツィア 国際映画祭	第9回 キネマ旬報賞	第6回 アカデミー賞 32-33	第10回 キネマ旬報賞
グランド・ホテル (エドマンド・グールディング)	**自由を我等に**(仏) (ルネ・クレール) **マデロンの悲劇**(米) (エドガー・セルウィン) **ジキル博士とハイド氏**(米) (ルーベン・マムーリアン)	**生れてはみたけれど** (小津安二郎)	**カヴァルケード** (フランク・ロイド)	**出来ごころ** (小津安二郎)
フランク・ボーゼージ (バッド・ガール)	**ニコライ・エック** (人生案内／ソ連)		**フランク・ロイド** (カヴァルケード)	
フレドリック・マーチ (ジキル博士とハイド氏) **ウォーレス・ビアリー** (チャンプ)	**フレドリック・マーチ** (ジキル博士とハイド氏／米)		**チャールズ・ロートン** (The Private Life of Henry Ⅷ)	
ヘレン・ヘイズ (マデロンの悲劇)	**ヘレン・ヘイズ** (マデロンの悲劇／米)		**キャサリン・ヘップバーン** (勝利の朝)	
(原)**フランセス・マリオン**(チャンプ) (色)**エドウィン・バーク**(バッド・ガール)			(原)**ロバート・ロード**(限りなき旅)／(色)**セーラ・Y・メイスン、ヴィクター・ヘイアマン、セイラ・Y・メイスン**(若草物語)	
リー・ガームス (上海特急)			**チャールズ・ブライアント、ラング・ジュニア** (戦場よさらば)	
	該当なし	**自由を我等に**(仏) (ルネ・クレール)		**制服の処女**(独) (レオンティーネ・ザガン)

で行われ男優賞が2人と言う大変珍しいケースが誕生した。その2人とは「ジキル博士とハイド氏」のフレドリック・マーチと「チャンプ」のウォーレス・ビアリーである。足りなくなったオスカー像をあわてて取りに走ったと内幕話が伝えられている。この年から短編部門が設けられウォルト・ディズニーが記念すべき1回目を「森の朝」で獲得した。

キネ旬の日本映画1位は、またサイレントに。小津安二郎の「生れてはみたけれど」が選ばれた。4位の伊藤大輔「お誂次郎吉格子」、6位の伊丹万作「国士無双」、8位の山中貞雄の「抱寝の長脇差」と時代劇が相変わらず強い。

1933年（昭和8年）

この年司会をしたのがユーモリストとして大変人気のあったウィル・ロジャース、満場を沸かせたが肝心の主演賞の2人が欠席。チャールズ・ロートンはロンドンにいるから、キャサリン・ヘップバーンは公の場所が嫌いと、今では考えられないような理由である。助監督賞が新設されるが37年迄で廃止された。現在と異なり作品賞にノミネートされるのが10本と多く、文芸もの、ミュージカル、コメディ、シリアスドラマと多彩、選ぶ方の苦労も大変だったろう。

キネ旬の方は小津安二郎の「出来ごころ」を筆頭に溝口健二「滝の白糸」、成瀬巳喜男「夜毎の夢」、五所平之助「伊豆の踊子」等々映画史にその名前を残す名監督が並んでいて壮観である。外国映画ではルネ・クレールの「巴里祭」、エドマンド・グールディングのオスカー作「グランド・ホテル」等に挟まれて4位にディズニーの「シリー・シンフォニー」が入っているのが目をひく。これは短編のアニメシリーズでこの年に公開された何本かがその対象になったのだろうと思われる。前年スタートしたヴェネツィア映画祭は行われなかった。

▲「西部戦線異常なし」

Digitized by Google

1930 昭和5年		1931 昭和6年		
第3回 アカデミー賞 29-30	第7回 キネマ旬報賞	第4回 アカデミー賞 30-31	第8回 キネマ旬報賞	
西部戦線異状なし (ルイス・マイルストン)	(現)**何が彼女をさうさせたか** (鈴木重吉) (時)**続大岡政談・魔像篇第一** (伊藤大輔)	**シマロン** (ウェズリー・ラッグルズ)	**マダムと女房** (五所平之助)	作品賞
ルイス・マイルストン (西部戦線異状なし)		**ノーマン・タウログ** (スキピイ)		監督賞
ジョージ・アーリス (Disraeli)		**ライオネル・バリモア** (自由の魂)		主演男優賞
ノーマ・シアラー (結婚双紙)		**マリー・ドレスラー** (惨劇の波止場)		主演女優賞
				助演男優賞
				助演女優賞
フランセス・マリオン (ビッグ・パウス)		(原)**ジョン・モンク・ソーンダーズ**(暁の偵察) (色)**ハワード・エスタブルック**(シマロン)		脚本賞
ウィラード・ヴァン・ダー・ヴィーア、ジョゼフ・T・ラッカー (バード少尉南極探険)		**フロイド・クロスビー** (タブウ)		撮影賞
	(発)**西部戦線異常なし**(米) (ルイス・マイルストン) (無)**アスファルト**(独) (ヨーエ・マイ)		**モロッコ**(米) (ジョセフ・フォン・スタンバーグ)	外国語映画賞

1930年（昭和5年）

サイレント時代のスターたちもいよいよセリフを喋らなくてはいけない事態に追い込まれグレタ・ガルボ、グロリア・スワンソン、ロナルド・コールマンはこの年にいずれも喋ったことによりノミネートされたわけである。この年から新たに録音賞が加わり、まさにトーキー時代へ対応していった訳である。

キネ旬はこの年、日本映画部門は〈現代映画〉と〈時代映画〉に分け、外国映画部門は〈無声〉と〈トーキー〉に分けるという極めて変則的な事を試みた。それも各3本選出と言う変なかたちだった。しかしこの方法は1年だけでまた元に戻った。外国トーキー部門でこの年のオスカー作品「西部戦線異常なし」が1位となった。

1931（昭和6年）

映画の生みの親の1人である発明王トーマス・エジソン（彼はアカデミー賞の生涯会員でもあった）の死を悼むことから始まった式は副大統領のスピーチもあり1800人の多くの列席のもと華やかに行われた。この年の話題は主演女優賞のマリー・ドレスラーの62才と言う高齢の受賞だろう。また今回から科学・技術部門が新設された。

キネ旬のベスト1には日本初のトーキー作品、五所平之助の「マダムと女房」が選出され日本映画もトーキー時代を本格的に歩み始めた。しかしまだサイレント作品はかなり製作されていて翌年のベスト・テンの中にも多くの作品が顔を見せている。

外国映画1位の「モロッコ」の特筆すべき出来事は初めて日本語字幕がつけられたことである。それまでは弁士（映画説明者）がスクリーンの横で喋るのが普通のスタイルだった。2位，4位のルネ・クレールの「巴里の屋根の下」、「ル・ミリオン」も永遠の名作。

1932（昭和7年）

この年一つの国際映画祭が生まれた。イタリアの「ヴェネツィア国際映画祭」である。この後世界中で数多くの映画祭が生まれるが世界の映画を検閲もなく完全な形で上映して賞を与えるというコンペティションの基となった歴史を持つものである点が高く評価される。

5回目を迎えたアカデミーは大不況に見舞われた中

Digitized by Google

1928 昭和3年		1929 昭和4年	
第5回 キネマ旬報賞	第1回 アカデミー賞 27-28	第2回 アカデミー賞 28-29	第6回 キネマ旬報賞
浪人街・第一話 (マキノ正博)	**つばさ** (ウィリアム・A・ウェルマン)	**ブロードウェイ・メロディ** (ハリー・ボーモント)	**首の座** (マキノ正博)
	フランク・ボーゼージ (第七天国)	**フランク・ロイド** (情炎の美姫)	
	エミール・ヤニングス (肉体の道、最後の命令)	**ワーナー・バクスター** (懐しのアリゾナ)	
	ジャネット・ゲイナー (第七天国、街の天使、サンライズ)	**メアリー・ピックフォード** (コケット)	
	(原)**ベン・ヘクト** (色)**ベンジャミン・グレイザー** (字)**ジョゼフ・ファーナム**	**ハンス・クレイリー** (The Patriot)	
	チャールズ・ロッシャー、カール・ストラス (サンライズ)	**クライド・デ・ヴィンナ** (南海の白影)	
サンライズ(*) (F・W・ムルナウ)			**紐育の波止場**(*) (ジョセフ・フォン・スタンバーグ)

キネ旬のほうは伊藤大輔の名作時代劇「忠治旅日記(信州血笑編)(御用編)」の2本が1，4位に入り気を吐いた。外国映画部門ではキング・ヴィダーの「ビッグ・パレード」、ジャック・フェデーの「カルメン」が3，9位に。

1928年（昭和3年）

第1回、記念すべきアカデミー賞受賞式は5分足らずの物であったと記録されているが目出度く主演男女優、作品、監督等全13部門（特別賞を含む）が授賞された。

主演男優賞のエミール・ヤニングスはすでに国のベルリンに帰っていて不在。サイレントの名残である字幕賞が珍しい。これは1回限りで翌年から廃止された。

キネ旬の方ではマキノ正博が「浪人街」「崇禅寺馬場」「蹴合鶏」で1，4，7位を制覇。伊藤大輔も「新版大岡政談（第三編解決編）」と「血煙高田馬場」で3位，10位、衣笠貞之助の問題作「十字路」も同点で10位（これは現代劇）に入り、この年は時代劇が圧倒的に強かった事を感じ取ることが出来る。外国映画ではサイレント末期の傑作群、ジョセフ・フォン・スタンバーグの「暗黒街」、チャップリンの「サーカス」、ウィリアム・A・ウェルマンのオスカー受賞作「つばさ」等が上位を占めた。

1929年（昭和4年）

アメリカ映画は一気にトーキー時代に突入。作品賞は一番力を入れて製作されたサウンド重視のミュージカル「ブロードウェイ・メロディ」が取り、サイレントは僅か一作品脚本賞のみの受賞となった。又今回の式からラジオで実況が行われることになった。

主演男優賞の「懐しのアリゾナ」のワーナー・バクスターは歌声も含めて声の良さで大いに点数を稼いだと言われている。

キネ旬の方は前年から好調を持続しているマキノ正博が「首の座」で1位、「浪人街（第三話　憑かれた人々）」で4位と気を吐いた。他に内田吐夢の「生ける人形」、牛原虚彦の「大都会（労働編）」等が入賞。外国映画部門は本国より遅れて公開されるのでまだサイレント。F・W・ムルナウの「四人の悪魔」、ウィリアム・A・ウェルマンの「人生の乞食」、フリッツ・ラングの「メトロポリス」等。

Digitized by Google

1924 大正13年	1925 大正14年	1926 大正15年	1927 昭和2年	
第1回 キネマ旬報賞	第2回 キネマ旬報賞	第3回 キネマ旬報賞	第4回 キネマ旬報賞	
		足にさはった女 (安部豊)	**忠次旅日記・信州血笑篇** (伊藤大輔)	作品賞
				監督賞
				主演男優賞
				主演女優賞
				助演男優賞
				助演女優賞
				脚本賞
				撮影賞
(芸)**巴里の女性**(米) (チャールズ・チャップリン) (娯)**幌馬車**(米) (ジェームズ・クルーズ)	(芸)**嘆きのピエロ**(仏) (ジャック・カトラン) (娯)**バグダットの盗賊**(米) (ラオール・ウォルシュ)	**黄金狂時代**(米) (チャールズ・チャップリン)	**第七天国**(米) (フランク・ボーゼージ)	外国語映画賞

1924年（大正13年）

キネマ旬報のベスト・テンがこの年からスタートした。最初は対象が外国映画のみで、それも芸術的に最も優れた映画と娯楽的に最も優れた映画に分けて選出されていた。

今考えると大変難しい分け方で当時の選考委員もさぞかし悩んだことと想像するが、この分け方も翌年にもう一回だけ続けられ三回目から今の形に戻っている。

もちろんサイレントだったわけで日本は独特の弁士の説明による上映だったので、弁士の上手、下手も作品の価値を高めたりまた、低めたりしたこともあったであろう。

1925年（大正14年）

後年ディートリッヒとコンビで活躍するジョセフ・フォン・スタンバーグが「救ひを求める人々」でフリッツ・ラングが「ジークフリード」と「クリームヒルトの復讐」で〈芸術部門〉での3，4，5位をしめた。

また〈娯楽部門〉では喜劇王ハロルド・ロイドの「猛進ロイド」、ミュージカル化されて話題になった怪奇映画の古典ロン・チャニーの「オペラの怪人」、笑わないコメディアン、バスター・キートンの「荒武者キートン」等の作品が目につく。

1926年（大正15年）

キネマ旬報のベスト・テンは、この年から今までのスタイルを一新して、日本映画部門も新設されて現在行われている形になった。日本映画の10を見てみると衣笠貞之助の「狂った一頁」、若き日の溝口健二の「紙人形春の囁き」が4，7位にランクされている。外国映画部門にもF・W・ムルナウの「最後の人」、ヘンリー・キングの「ステラ・ダラス」、アベル・ガンスの「鉄路の白薔薇」等の映画史に今も残る作品が並んでいる。

1927年（昭和2年）

年号も大正から昭和へ改まり、アメリカではサイレント時代からトーキー時代へと流れは急展開していく。この年の10月「ジャズシンガー」が本格的なトーキー第1作として公開された。同年ハリウッドでは業界の大物たちが集まりハリウッドのイメージアップ作戦としてアカデミー賞の設立に向けての話し合いが行われた。

Digitized by Google

年度別　受賞一覧

アカデミー賞
ゴールデン・グローブ賞
ヴェネツィア映画祭
カンヌ映画祭
キネマ旬報賞
ブルーリボン賞
毎日映画コンクール
日本アカデミー

Text by　福田千秋
小林雅明

凡例
掲載にあたり、作品に示してある簡略化した表記について、以下に記す。
(芸)＝芸術的優秀映画、(娯)＝娯楽的優秀映画、(現)＝現代映画、(発)＝発声映画、(無)＝無声映画、(ド)＝ドラマ部門、(ミ/コ)＝ミュージカル／コメディ部門、〈アカデミー脚本賞、(現)原案、(色)＝脚色、(潤)＝潤色賞、(オ)＝オリジナル脚本〉、(字)＝字幕賞、(C)＝カラー、(B/W)＝白黒、(恋)＝恋愛心理映画賞、(冒)＝冒険探偵映画賞、(ミ)ミュージカル映画賞、(感)＝最も感動的な映画、(独)＝最も独創的な想像力に富む映画。
未公開作品は極力原題を表記するようつとめたが、一部訳題のものは（未）を付した。

ヴェネツィア映画祭については、イタリア映画賞の他、ムッソリーニ杯を作品賞の欄に記載。グランプリのある年はその作品を、1949年からは、サン・マルコ金獅子賞を記入。1940、41、42、46年のヴェネツィア国際映画祭の回数については諸説あるために記入していない。また、ブルーリボン賞の中、技術賞の部門で撮影が受賞した場合には、撮影賞欄に記載した。

Digitized by Google

映画祭は生きている
――参加するための、始めの一歩――

林　加奈子

映画祭に参加するには、いろいろな立場がある。一般に開かれている映画祭の場合には自分でその場所に行ってチケットを購入し、観客として映画を見ることも出来る。プレス・ジャーナリストとして、正式にパス申請をして、プロとして出席する場合には、記事を書くという当然の責任が伴うが、記者会見やインタビュー取材が出来る。配給会社のスタッフが行く場合には、商談を進めるなり、日本からのマスコミ対応に追われる事になる。様々の業界上のミーティングに利用する事も出来る。審査員としてなら全てに優遇されるが、大変な重責が待ち構える。

さて、もう一つの参加者。作品をエントリーする立場として出席する場合がある。あなたが監督か、プロデューサーか、その他の製作スタッフである時だ。参加をトライするのは、お金は掛かるが自由である。では、どうしたらいいのか。最も簡単なのは、マーケットに出す事だ。これはお金を支払えば出せる。しかしこれからお話するのは、正式招待の上映作品として出す場合の事である。

国際映画祭といっても千差万別なので、一概に述べるのは難しい。その上、映画祭は流動的で年ごとに様変わりしている。規定が変わる事もあるし、担当者が変われば また趣向が一変する。映画祭についての<決定版>の書籍がなかなか作られないのは、決定版の情報自体が無いからだ。書いたインクが乾かないうちに、また違った様相を見せる。それが映画祭なのである。

まず、映画祭にはディレクター、プログラマー、という作品選考の責任者がいる。所によってはセレクション・コミッティー（選考委員会）があって、複数による合議制で選考を行う所もあるし、責任者が他の何人かに依頼して、地域ごとに担当を分けて選んでいる所もある。とにかく、基本的には彼らに作品を見てもらって、選ばれれば、映画祭への切符を手にすることが出来る。

では、どうやって見てもらうか。第一に選考に掛ける素材を用意する事だ。完成作品に英語字幕版を付けたもの、そのヴィデオ、英文でのプレス資料を整える。そして映画祭と連絡を取る際の窓口を設定する。メジャーの場合には国際部があるけれど、独立プロだとエントリー・フォームからファックスやメイルのやり取りまで、かなりの手間と時間が掛かる事を覚悟しなくてはならない。コストも侮れない問題だ。素材のみならず、通信費や送料もかかる。いざ選ばれてプリントを送ることになっても、負担は参加者側の場合も少なくないし、本上映にはフランス語やイタリア語版を改めて作らなくてはならない事もある。

それぞれの映画祭には規約があって、受け付ける作品の上映時間、カテゴリー、プリントのフォーマットなどに条件がある。自分の映画に合った所を探さないといけない。つまりどんなに「もののけ姫」が傑作でも、カンヌのコンペにアニメーションは入らないし、16ミリの短編をベルリンコンペに出そうとしても無駄ということだ。自分たちの作品の状況を知ること。これは物理的には簡単でも、また別の大変な問題があるのだが。

希望する映画祭事務局に連絡を取って、指示に従ってプリントかヴィデオを事務局に送って選考に掛けるか、日本に担当者が来日するのなら何処で見てもらえるのかを確認して、そこに素材を送る。数多くの映画祭の担当者が皆来日しているわけではないが、来られる場合、だいたい映画祭開催の4カ月前頃にアジア歴訪をしていることが多い。映画祭自体の締め切りは、およそ開催期日の2カ月前だから、来日に間に合わなければ、現地に素材を送って見てもらう事も出来る。

ここで何の為に映画祭に出そうとするのか、自分たちの中でじっくり確認しておくことが重要だ。映画祭の活用法はいろいろある。賞を取りたいとか賞金が欲しいなら、賞金の出るコンペに出さねばお話にならないし、日本での公開のプロモーションの為なら時期を考えないといけない。世界での公開を目指すなら、あらかじめエージェントを探すか買ってもらうためにバイヤーが多く集まる映画祭に出すべきだし、単にタダで映画祭に行きたいのなら、スタッフ招待が付く映画祭を狙うべき。皮肉に書いてしまったけれど、作品が世界で通用するのか、確かめたいというのが基本だと思う。

作品がどのレベルにあるのかを、作り手が自ら判断するのは難しい事かも知れない。映画祭に選ばれる作品が、いつも必ずしも良い映画、質の高い作品とイコールで結ばれているわけではないのだから（私は強くそう思います）対象とする映画祭に合うかどうかという問題です。まあ対策としては、まず日本でいろいろな人に見てもらって味方を増やしていく事だ。映画祭側は情報網を張って映画を探している。日本で評判が盛り上がっている作品は、あちらも見ようとしてくれている。映画祭に積極的に参加して、それぞれの特色や好みをご存知な関係者もいらっしゃる。寝ていても果報は訪れない。納得のいく作品を作る事、そして出来上がったら動きだすこと。道はひらかれる、かも、しれない。

Hayashi Kanako
映画祭コーディネーター。ただいまフリーで、しばらくは香港在住。86年から97年まで川喜多記念映画文化財団に勤務。のべ60の国際映画祭へゲスト参加。

Digitized by Google

の日本映画界で最も話題を集めたと思われる作品と個人を投票してもらう《話題賞》が設けられた。その最初の受賞は、作品部門がアニメーション映画『銀河鉄道999』、個人部門が松坂慶子。ファンの投票による話題賞の第1回受賞作品がアニメであったことは、現在のアニメ主体たる日本映画界の興行を早くも示唆していたともいえよう。以後、一般の人々が日本アカデミー賞に参加する唯一の機会であるこの賞は、その時折の映画ファンの声を反映させるユニークなものとなっていく。84年の第7回での話題賞個人部門は、なんと『南極物語』で活躍した犬のタロとジロであり、作品部門『戦場のメリークリスマス』の大島渚監督が2匹の犬と共に壇上に並ぶ姿は、微笑ましくもあった。

▲「Shall Weダンス?」

81年の第4回では、鈴木清順監督作品『ツィゴイネルワイゼン』が最優秀作品賞を受賞する。どちらかといえばメジャーが主体となりがちな日本アカデミー賞の流れの中で、こうしたインディペンデント作品が受賞したことは、特筆して良い。82年の第5回からは《新人俳優賞》も創設された。ただしこの賞は正賞ではなく外賞であるため、最優秀を決めるのではなく、その年に活躍した新人（映画初出演でなくても、主演・助演クラスの大役を演じたのが初めてという意味）男女数名を選び、その全員にブロンズ像ではなく記念品と賞状を贈呈するというものである。

外賞としてはその他、85年の第8回より、《特別賞》が企画部門とスタッフ部門（後に特殊技術部門も加わる）として随時贈られるようになるが、88年の第11回からはスタッフ部門より《編集賞》が独立し、新たに正賞に加わることになった。さらに特別賞は後に《協会特別賞》と《特別賞》と分かれて贈呈されるようになる。87年に死去した石原裕次郎と鶴田浩二に対して贈られたことに始まる《会長特別賞》や《栄誉賞》《会長功労賞》《協会栄誉賞》と、功労賞的意味合いの強い外賞も、その年の状況に応じ随時設けられていった。

92年の第15回は、授賞式の場を日本映画発祥の地である京都に移し、好評を得た（95年の第18回も京都にて開催）。97年の第20回では、外国作品賞を除く全ての正賞を、『Shall weダンス?』が独占したことも話題を集めた。またこの回から、アニメーション映画も作品賞部門のみ邦・洋共に選考対象となったが、早速98年の第21回では配収100億を越す97年度のメガヒット作品『もののけ姫』が最優秀作品賞を受賞した。

あまたある映画賞の中で、日本アカデミー賞は毎年TV・ラジオ中継されることもあり、今では“映画人のお祭り”として一般の認知度は高い（ただし、TVではスタッフの受賞風景を中継しないのが未だに解せない。即刻改善すべきだ）。会員数も5100人を越す。一方、現在は授賞式が3月ということもあり、日本アカデミー賞の授賞式が終われば、その年度の賞レースが終わるという風に“毎年の映画賞のトリ”としても扱われているようだ。

Digitized by Google

日本アカデミー賞

的田也寸志

「日本映画人の日本映画人による祭典」これが日本アカデミー賞の最大の特徴である。それまでの日本国内の映画賞は、ジャーナリストや映画評論家などの運営、選考によるものばかりで、映画人が主体となるアメリカのアカデミー賞のような映画賞はなく、また監督や俳優以外の技術スタッフにスポットが当てられることも少なかった。こうした中から、1977年晩秋から「日本にもアカデミー賞を作ろう」という声が上がり、早速日本アカデミー賞協会が発足、翌78年4月の第1回日本アカデミー賞授賞式に向けて慌ただしい準備が進められていったのだ。

協会の創設にあたっては「映画産業のより一層の発展と振興、さらには映画界に携わる人々の親睦の機会を作る事を目的とし、映画人の創意を結集して、映画人による映画人のための賞とする」と、その主旨が述べられた。また、日本アカデミー賞名誉会長に就任した今日出海氏は、2月6日の帝国ホテルにおける創設記者会見の席で、「この賞が日本映画界にあって、最高の権威と栄誉を持つものに育つことを念願すると同時に、協会は年1回の日本アカデミー賞授与式をはじめ、我が国映画界の核となる諸作業を育成すべく最善の努力を続けていきたい」と挨拶。そして4月6日、早くも帝国劇場にて第1回日本アカデミー賞授賞式が開催されるに至った。

日本アカデミー賞の対象作品は、原則としてその前年の1月1日から12月31日までの間に、東京地区における商業映画劇場にて、有料で35ミリもしくは70ミリのフィルムで初公開され、1日3回以上上映し、通常の宣伝の下に1週間以上継続して公開された、40分以上の作品（モーニング・レイトショーは含まない。また記録映画、40分未満の短編映画、再上映、回顧上映、映画祭のみの上映を除く）を行った劇場用映画全作品となっている。当初の選考方法は、日本アカデミー協会組織委員会により委嘱されたノミネート委員によってノミネートされた(優秀賞)ものを、当時約1200名の日本アカデミー賞協会会員（原則として劇映画の仕事に最低3年以上従事している映画業界人を前提とする）によって投票し、最優秀賞を決めるというものであった。

第1回目の授賞式は、土砂降りの雨の中、菅原洋一の歌う日本アカデミー賞のテーマ曲《虹をかけよう》からスタートした。司会は岡田真澄。アメリカからは米アカデミー賞協会を代表してロック・ハドソンが出席し、野際陽子の通訳で米アカデミー賞協会会長ハワード・W・コッチ氏からのメッセージが読み上げられた。受賞者へ贈呈されるトロフィーのブロンズ像は、本体の高さ29センチ、台座が9.1×9.1センチ、台座を含めた高さが31.7センチ、重さは2.3キロである。

この年は『幸福の黄色いハンカチ』が作品賞をはじめ多くの賞を独占、主演男優賞を受賞した高倉健は一言「胃が痛くなりそうです」と、さすがの名スピーチを残した。しかしその一方で、発足から授賞式までのあまりの時間のなさも災いし、日本人には不慣れなショーアップ形式や、TV中継にかっちり合わせた時間進行、スタッフを公平に扱うと謳いつつ《技術賞》なる1部門のみでそれらを総括してしまったことなど、その内容には不満も多く、「一部の広告代理店やテレビ局主導の賞ではないか」といった批判など、多くの課題を残すこととなり、以後回を重ねる毎にそれらの改善が試みられていくことになる。

79年の第2回目より、式は食事をしながらの発表という形式となり、前年度の部門受賞者がその年の部門ノミネート（優秀賞）と最優秀受賞者を読み上げるという、本場アカデミー賞に倣った発表スタイルも取られるようになった。そして80年の第3回目より、日本アカデミー賞は大きく様変わりする。まずスタッフに与える技術賞が大きく改善し、《音楽賞》《撮影賞》《照明賞》《美術賞》《録音賞》が設けられ、その選考方法もノミネート段階から全会員の投票で行われるようになった。

さらにこの回より、ニッポン放送ネットの人気番組『オールナイトニッポン』で一般聴取者より、その年

Digitized by Google

日本視聴覚教育協会、日本映画監督協会、シナリオ作家協会、日本映画俳優協会、日本映画テレビ技術協会、国立近代美術館フィルムセンター、ニュース映画製作者連盟、外国映画輸入配給協会といった団体の代表者で構成されている。運営委員会は各賞選定委員会が選んできた受賞を承認し、その段階で賞が確定する。

個人賞はⅠ部門とⅡ部門に分けられている。個人賞Ⅰ部門は男優主演、女優主演、男優助演、女優助演、田中絹代賞、スポニチグランプリ新人賞を討議で選定する。個人Ⅱ部門は監督、脚本、撮影、美術、音楽、録音の各賞を選定する。このほか記録文化賞部門、アニメーション映画・大藤信朗賞の選定委員会が設けられている。

▲「もののけ姫」

討議による選定委員会は、毎日映画コンクールの特色の一つと言えよう。各賞選定委員会には十数人から二十人の選定委員が属していて、あらかじめ郵便投票でノミネートを行い、真剣に討議する。選定委員の多くは映画評論家だが、特に個人Ⅱ部門では映画カメラマン、美術、証明、録音スタッフなども選定委員に加わっている。以前には作品賞の投票を東京と大阪で行い、結果を電話で集計しあったこともあった。新聞社の映画賞としての独自色を出しながら今日に至っている。

毎日映画コンクールの楽しみ、それは授賞式とそれに続くパーティーだろう。ここ数年は芝の東京プリンスホテルで華やかに開催されてきた。授賞式では壇上にずらりと受賞者が並び、ブロンズ像や表彰状を受け取る。副賞も多く、時計やクリスタル花瓶などもあって持ちきれないほどだ。特に田中絹代賞は下関市が後援していて、副賞も50万円出している。下関市は田中絹代ゆかりの地で、記念館建設の動きもあり、市長がわざわざ上京してプレゼンターとなる。

田中絹代賞は、前年の受賞者が新しい受賞者に花束を贈ることが恒例となっている。美しいベテラン女優が、新たに選ばれた受賞女優に優雅な仕種で花を渡して挨拶をする光景は絵になる。このほかに新人賞の若手人気女優も注目の的だ。52回には「20世紀ノスタルジア」の広末涼子と「瀬戸内ムーンライト・セレナーデ」の吉川ひなのが同時受賞となって脚光を浴びた。こうした受賞者と一般の招待客が入り交じって杯を交わし合うパーティーも、いやが上にも盛り上がる。

選考委員にとって、個人賞などの選定委員会のディスカッションは骨も折れるが楽しい作業でもある。映画評論家の白井佳夫さんは、侃々諤々の議論の後、「これが毎日映画コンクールの良さなんだよ」といつも言われる。投票でもなかなか決着つかないことがある。「この人にだけは賞をあげたい」という気持ちが互いに火花を散らすこともある。日本映画を愛する人たちの真剣勝負の場であると思えることが多い。

長年このコンクールに携わってきて、"映画は時代を写す鏡"との思いを一層強くしている。映画界には花の時代も氷の時代もあった。だが日本映画が作られ続ける限り、毎日新聞がある限り毎日映画コンクールが果たす役割は大きいと信じる。

Digitized by Google

毎日映画コンクール

野島孝一

「毎日映画コンクール」は、全国紙の毎日新聞が主催する伝統と権威を誇る日本を代表する映画賞である。創設されたのが戦後間もない1946年（昭和21年）で、まだ日本は灰塵の中にあった。荒廃からフェニックスのように立ち上がろうとしていた日本映画を後押ししようという心意気で始められた。混乱期ではあったが、人々は娯楽に飢えており、娯楽の王者と言われた映画に注がれる視線は熱く、このため毎日映画コンクールの誕生は極めて好意的に受け止められた。

第１回の受賞を見ると、日本映画賞（作品賞）は、衣笠貞之助監督による「或る夜の殿様」（東宝）で、これは大衆賞も受賞している。監督賞は今井正監督の「民衆の敵」（東宝）、脚本賞は「大曽根家の朝」の小沢栄太郎、撮影賞は「桧舞台」（東宝）の立花幹也、音楽賞は「民衆の敵」の早坂文雄だった。

この受賞からも分かるように、毎日映画コンクールの特徴の一つにスタッフに対する賞が挙げられる。ちなみに現在の毎日映画コンクールの各賞は次のようになっている。

「日本映画大賞」これはグランプリに相当する作品賞である。「日本映画優秀賞」は、「日本映画大賞」に準じるもので、数作品に与えられる。「監督賞」「脚本賞」も注目される賞だ。

演技賞は、第７回から男優主演賞、女優主演賞、男優助演賞、助演女優賞という現在の形となった。新人に与えられる「スポニチグランプリ新人賞」は第38回（1989年）から新設された。この年の新人賞は原田知世（「時をかける少女」）、崔洋一（「十階のモスキート」＝監督）だった。

スタッフ賞には「撮影賞」「美術賞」「音楽賞」「録音賞」がある。「記録文化映画賞」は短編と長編がそれぞれ選ばれる。「アニメーション映画賞」は第44回（1989年）から新設されたが、これはその前年に「となりのトトロ」が日本映画大賞に選ばれたことで、運営委員会で大論争があって新設が決まったいきさつがある。アニメに対しては、「大藤信朗賞」が第17回（1962年）から設けられているが、これは故大藤信朗氏の功績を称え、芸術的、実験的なアニメーションに対して与えられている。

「外国映画ベストワン賞」は「スポニチグランプリ新人賞」と同じ第38回から設けられた。また「日本映画ファン賞」「外国映画ファン賞」は読者の投票によって決められている。

「田中絹代賞」は第40回（1985年）に新設された新しい賞だが、今や毎日映画コンクールの華やかな“顔”としてアピールしている。吉永小百合、倍賞千恵子、三田佳子、岩下志麻、十朱雪代、岸恵子、樋口可南子、大竹しのぶ、香川京子、久我美子、浅丘ルリ子、松坂慶子、淡島千景といったそうそうたる女優たちが、田中絹代の功績を受け継ぐにふさわしい女優として選ばれた。

時代とともに消えていった賞もあった。「ニュース映画賞」である。第６回（1951年）に新設されたこの賞は、ニュース映画の終焉とともに役割を果たして姿を消していった。第43回（1988年）が最後の受賞となった。

毎日映画コンクールは、原則として選定委員の投票によって各賞が決定される。まず、日本映画大賞、日本映画優秀賞、外国映画ベストワン賞は作品賞部門委員と運営委員による投票によって決められる。その数は百人以上に及ぶ。

運営委員会は部門選定委員会の上部組織で、邦画各社の宣伝部長、映画評論家、毎日新聞、スポーツニッポン新聞社関係者のほか、映倫、日本映画製作者連盟、日本映画プロデューサー協会、映像文化製作者連盟、

Digitized by Google

▲「バウンス KO GALS」

長で「ブルーリボン復活準備委員会」が発足された。新聞社の上層部に掛け合い、新聞協会の了解を得るのに2年かかったという。

こうして、76年1月8日。スポーツ各紙に「復活」の文字が踊った。中断から10年ぶりのことであった。第18回（1975年度）は、第1回と同じく銀座の並木座で、ハナ肇（故人）の司会で行われ、映画界も「ブルーリボン賞」の復活を歓迎した。進行役を努めたハナは、ちょうど10年前の第17回（1966年度）、「運が良けりゃ」で主演男優賞を受賞。司会も10年越しとなったが、大いに盛り上げてくれた。ハナは「会社物語」で第31回（1988年度）の主演賞も受賞したが、自宅に前回受賞の万年筆をブルーのリボンで巻いたまま飾ってあり、記者を感激させた。

山あり谷ありの歴史を刻んできたブルーリボン賞も1998年度で第41回を迎える。前年度、「うなぎ」「失楽園」「CURE」で主演男優賞に輝いた役所広司と「東京夜曲」で主演女優賞をさらった桃井かおりが司会の大役を担う。

今年2月の授賞式では、「Shall we ダンス?」で96年度の主演男優賞を受賞し、司会を努めた役所が、自らの名前を呼びあげるという微笑ましいひとコマもあって、アットホームな式が続いた。

そして感動的な新人賞発表。新聞記者の先取り精神が一番生かされてきたのが同賞で、過去に三国連太郎（第2回）、石原裕次郎（第8回）、今村昌平（第9回）、大島渚（第11回）、岩下志麻（第12回）、熊井啓（第16回）、渡哲也（第17回）、原田美枝子（第19回）らをいち早く発掘してきた。

97年度は「バウンス ko GALS」の佐藤仁美と「ラヂオの時間」を演出した三谷幸喜を選出したが、のちのち別な賞で戻ってきてくれるのを記者会一同が願っている。

今年も後半戦に突入し、映画レースの行方が気になりだし始める頃。来年2月には、どんな顔がイイノホールに並ぶのか。映画記者も充実の時期を迎える。

Digitized by Google

ブルーリボン賞

佐藤雅昭

「ブルーリボン賞」は在京のスポーツ7紙（スポーツニッポン、日刊スポーツ、サンケイスポーツ、スポーツ報知、東京中日スポーツ、デイリースポーツ、東京スポーツ）の映画担当記者が運営する東京映画記者会が主催し、その年度に顕著な活躍をした映画人を表彰する賞だ。

1998年現在、正会員は23人。会員申請をしている記者が8人。計31人で構成されている。例年1月4日付の各紙でノミネートを発表し、同15日の成人の日に選考会を実施。①作品　②監督　③主演男優　④主演女優　⑤助演男優　⑥助演女優　⑦新人　⑧外国映画の各部門を討論と投票で選定。作品に関しては、邦画、外国映画ともベスト10を発表し、また監督や俳優だけでなく、映画にかかわったスタッフやムーブメントを起こした事情などに特別賞を贈るケースもある。

これを受けて、2月半ばに都内（最近は東京・内幸町のイイノホールが多い）で表彰式を開催、受賞作品の上映会を行っている。数ある映画賞の表彰式と際立って違うのは、「手作り」という点。司会進行役を前年度の主演男女優に依頼し、花束は各新聞社の記者が受賞者に手渡す。賞品は賞状と副賞のモンブランの万年筆だけ。賞状を収めた箱にブルーのリボンを巻き、創設の精神を脈々と受け継いでいる。

「あの夏、いちばん静かな海。」で作品賞と監督賞をW受賞した北野武監督（ビートたけし）が第34回（1991年度）の授賞式で、「賞状1枚に万年筆なんて入学式じゃないっていいたいけれど、この賞は本当に欲しかった。どうもありがとう」とスピーチで沸かせたように、「手作りのブルーリボン賞」を喜んでくれる映画人は少なくない。

先輩記者によれば、「映画記者が1年間を振り返り、議論、総括することで、お互い勉強し、その成果を発表しよう」が創設の趣旨。こうして現場の記者発の賞がスタートした。1950年度（昭和25年度）の産声だった。

ちなみに当初は、「日本映画文化賞」と名乗り、記念すべき第1号は初の国産カラー映画「カルメン故郷に帰る」の製作に対して贈られた。亡くなった黒澤明監督と橋本忍氏が「羅生門」で脚本賞を受賞している。

表彰式は、銀座の並木座を無料で貸してもらった。賞状をありあわせの青いリボンで結んで贈ったことから「ブルーリボン賞」の名が起こり、これが第3回から正式名称として使われるようになった。また、副賞として横山泰三画伯に依頼した石膏製の裸婦像が添えられたが「欠けてしまった」などとの苦情が多かったという。

それでも、新聞記者が選ぶ「ブルーリボン賞」は回を重ねるごとに認知度を高め、1960年代には20部門近い数の賞が設けられた。

映画賞として年々、大きな成長をみせたものの、記者会を大きな激震が襲う。1961年のことだった。美空ひばりが「大衆賞」欲しさに事前運動を行ったという噂が流れたのが発端だった。「スポーツ紙記者の票数が賞を左右するのは納得できない」とした、朝日、産経、東京、日経、読売の一般紙と共同通信が記者会を脱退。記者会は分裂し、第12回から「ブルーリボン賞」はスポーツ紙記者の主導で行われることになった。

そして1967年。レコード大賞に絡む「黒い霧」事件が映画の世界にも飛び火した。「賞取りのために金が動く」という風評に、各新聞社の上層部が「新聞記者による賞の廃止」を新聞協会を通じて厳命してきたものだ。当時を知る先輩記者によれば、記者会は「商業主義のレコード大賞と、ささやかな賞を一緒にされては困る」と抵抗したが、66年度の第17回をもって中断を余儀なくされた。

復活へ動きだしたのは73年秋。映画界が不況にあえいでいた時期だった。総会の席上、「映画復興のためにも、いまこそ、ブルーリボン賞が必要な時ではないだろうか」と復活コールが沸き上がる。そして、スポニチの村田達郎委員長、日刊スポーツの石坂昌三副委員

Digitized by Google

東」)、女優賞に高峰秀子(「浮雲」)、男優賞に森雅之(「浮雲」)が選ばれている。内外の監督賞は、ベスト・ワンになった作品の監督に自動的にあたえられることになっていた。

1957年には、それまでの4賞に脚本賞が加えられた。八住利雄が「爆音と大地」「雪国」「智恵子抄」の3作で初受賞している。

こうして今日の〈キネマ旬報賞〉の基礎ができた。現在(1997年度)のキネマ旬報賞は、キネマ旬報の〈映画ビデオイヤーブック1998〉によると、「日本映画黄金時代を迎える昭和30年に、キネマ旬報ベスト・テンより独立した賞」と注記されていて、左記のようににぎやかなものになっている。

▲「うなぎ」

●日本映画作品賞「うなぎ」
●外国映画作品賞「秘密と嘘」
●文化映画作品賞「ルイズ　その旅立ち」
●日本映画監督賞　望月六郎(「鬼火」「恋極道」「無国籍の男　血の収穫」)
●外国映画監督賞　該当者なし
●脚本賞　三谷幸喜(「ラヂオの時間」)
●主演男優賞　役所広司(「うなぎ」「失楽園」)
●主演女優賞　桃井かおり(「東京夜曲」)
●助演男優賞　西村雅彦(「マルタイの女」「ラヂオの時間」)
●助演女優賞　倍賞美津子(「東京夜曲」「うなぎ」)
●新人男優賞　鳥羽潤(「瀬戸内ムーンライト・セレナーデ」)
●新人女優賞　佐藤仁美(「バウンス ko GALS」)
●読者選出日本映画監督賞　宮崎駿(「もののけ姫」)
●読者選出外国映画監督賞　マイク・リー(「秘密と嘘」)
●キネマ旬報読者賞　大高宏雄(『映画戦線異状なし』)

昔はベスト・テンを選ぶだけで事足りた。しかし、時代が大きく変わった。映画ジャーナリズムだけの問題ではない。文学界でいえば、芥川賞と直木賞に肩を並べるように各出版社が文学賞を制定する。大新聞が揃って芸術賞や文化賞を出す。さまざまな財団が顕彰事業を積極的に行う。キネマ旬報のイヤーブックによれば、1997年度の〈国内の主な映画賞・映画祭〉には、キネマ旬報賞から日本映画プロフェッショナル大賞にいたるまで、31の顕彰イヴェントが挙げられている。多いか少ないか。皆さんの判断にお任せしたい。

ともあれ、現代は、祭りと顕彰の時代なのだ、ということなのであろう。私は、賞が増えれば、相対的に賞の権威は低下するのではないかと思っていたが、必ずしもそうではないようだ。むしろ、賞や選奨事業全体に一種の相乗効果のようなものが生まれ、そこから活気が生まれる。意地悪くいえば、最初は仕掛けられたから騒いだかもしれないのだが、それがいつの間にかしっかりした内容を持つように育っていく。だから、私は、賞が多すぎると主張する気はない。

Digitized by Google

キネマ旬報賞

品田雄吉

日本では、映画界の１年の成果の総括として、その年のベスト・テンを選ぶのが、恒例の行事として定着している。外国でもこうした総括の仕方は行われているようだが、日本ほど盛んではないようだ。たとえば、アメリカでも、ニューヨークの批評家協会がその年のベスト・テンを選んでいるし、タイム誌などでも担当記者によるベスト・テンが掲載される。が、日本のキネマ旬報ベスト・テンのように、多数の評論家によるベスト・テン選出は、私が知っているかぎりないようだ。

そう、日本におけるベスト・テンの選出は、キネマ旬報が創設し、今日の形にまでスケール・アップしてきたのである。このキネマ旬報ベスト・テンに刺激を受けて、さまざまなベスト・テン選出が行われるようになった。

たとえば、つい先日亡くなった黒澤明監督の「羅生門」(1950年)はヴェネツィア国際映画祭でグランプリ（金獅子賞）を受けたことで知られるが、この作品は、しかし、1950年のキネマ旬報ベスト・テンでは５位だったではないか、という人がいる。それくらい、キネマ旬報のベスト・テンは一つの権威であり、判断の基準にすらなっていたのである。

たしかに、キネマ旬報の1950年日本映画ベスト・テンは、①また逢う日まで　②帰郷　③暁の脱走　④執行猶予　⑤羅生門　⑥醜聞　⑦宗方姉妹　⑧暴力の街　⑨細雪　⑩七色の花、となっている。

ただし、「戦後キネマ旬報ベスト・テン全史」によると、「この年のみ選考方法が改められた。まずノミネート作品を選んで、その中から各自10本ずつ選出、第１作に100点、第10位に71点以上をつけ、投票のなかった予選通過作品にも70点（資格点）を与え、総得点を委員数で割った平均点で順位を決定。また同点の場合は投票者数の多いものを上位とした。」という注がついている。このやり方は１年だけだった。ちなみにこの年の日本映画の選考委員は、双葉十三郎、飯島正、大黒東洋士、滋野辰彦、登川直樹、上野一郎、津村秀夫の７人で、この年の外国映画の選考委員が15人だったのにくらべてたいへん少ない。

そんなわけで、「羅生門」が５位になったのは、特別な選考方法のせいだったといえるかもしれないし、あるいは相対評価として必ずしも間違ったものではなかったといえるかもしれない。１位の「また逢う日まで」は、選考委員全員が満点の100点をあたえている。パーフェクトの１位だった。

翌1951年のベスト・テン選考は、がらりと変わる。日本映画の選考委員は38名、外国映画のそれは40名と、前年にくらべて飛躍的に増加している。現行のキネマ旬報ベスト・テンは、1951年に基礎が築かれたのである。

もともと、1924年（大正13年）度に始まったキネマ旬報ベスト・テンは、キネマ旬報の同人による選出行事だった。キネマ旬報は映画ファン（高級な）のグループが創刊した月３回発行の旬刊同人雑誌だった。

それが、次第に映画業界のオピニオン・リーダー的な雑誌に成長していく。第二次世界大戦中は政府による出版統制でその名が消えるが、戦後の再出発からキネマ旬報は業界誌と評論誌の性格を併せ持った半月刊誌として着実に地歩を築き上げていく。

それとともに、キネマ旬報のベスト・テンも、同人誌的な仲間内の選出から、映画評論家、マスコミの映画記者、さらには映画に関心のある文化人を加えて、映画ジャーナリズム全体の行事としての性格とスケールを持つようになっていく。

私事になるが、私は1953年にキネマ旬報の編集部員に採用された。ちょうど、キネマ旬報社が、日本の映画ジャーナリズムの代表的な出版社として上昇していく時期に当たっていた。

キネマ旬報ベスト・テンが、単に内外の長編や短編映画のベスト・テン選出にとどまらず、個人に賞をあたえるようになったのは、1955年からだったようだ。

1955年には、日本映画監督賞に成瀬巳喜男（「浮雲」）、外国映画監督賞にエリア・カザン（「エデンの

Digitized by Google

か日本、ヨーロッパでも大ヒットした。さらに、ジューン・ラボにやって来たひとりの青年と彼の脚本に、指導に参加していたハーヴェイ・カイテルが着目し、実現に向けて支援することになった。クエンティン・タランティーノという若者の「レザボア・ドッグス」が91年に発表されると、ハリウッド映画にはない斬新な作風が高い評価を受けた。そして、ソダーバーグ、タランティーノを輩出したサンダンスの存在はがぜんクローズ・アップされるようになった。

このころから、ハリウッドはサンダンス映画祭に多くのスタッフを送り込むようになった。カヨ・ハッタの「ピクチャーブライド」(95)はミラマックス、エドワード・バーンズの「マクマレン兄弟」(95)はフォックス・サーチライト、トム・ディチロの「リビング・イン・オブリビオン　悪夢の撮影日誌」(95)はソニー・クラシックス、といったようにメジャー・スタジオのアート系映画の配給部門が配給権を獲得していった。

▲「シャイン」

さらに、スコット・ヒックスの「シャイン」(95)にいたっては、その獲得をめぐってファイン・ラインとミラマックスの担当者が暴力沙汰にまで発展する騒ぎとなった。結局アメリカはファインライン、ヨーロッパがミラマックスで落着したが。そして、エドワード・バーンズは第2作「彼女は最高」(96)をメジャーの20世紀フォックスで作ることができた（興行は不本意な結果になったが）。

日本でいう自主映画作家だったバーンズの次回作が、いきなりハリウッド映画という、まさにアメリカン・ドリームである。

こうして、今やサンダンス映画祭は、アメリカの若い映画人の夢の実現の場となってしまった。サンダンスで上映されれば、誰かが目を付けてくれると多くの若い映画人が考えるようになった。ここ数年、毎年700本を越える作品が応募に寄せられ、そこから100本弱が選ばれる。ところが、応募が増えるほどに、発足当時の理念から離れていくという。多くの応募者がハリウッドを志向し、第2のタランティーノになろうとしている。この傾向に、サンダンス映画祭のディレクター、ジェフリー・ギルモアをはじめ首脳スタッフは、あまりこころよくは思っていない。

サンダンス映画祭はさまざまな面から過渡期を迎えている。映画祭はソルトレイク・シティからクルマで1時間半ほどにあるパークシティという小さな街で開催されている。この街に映画祭期間中には5万人ほどの参加者および映画ファンがつめかけ、スクリーンもホテルも足りず、今、新たに映画館、ホテルの建設が始まっている。この規模の巨大化も当初の理念からは離れたものだろう。

応募者のハリウッド志向については、レッドフォードは「ずっとインディペンデントでいる人もいれば、ハリウッドを目指す人もいる。いろんな人がいていいと思う」と言っている。しかし、98年の映画祭では、上映作品は本来の姿に若干、軌道修正されたように思える。映画作りの理想を追及する理念と、アメリカ映画界が才能と商品の発掘の場として寄せる期待の間で、サンダンスは揺れている。ハリウッド映画が年々、大作化し企画も画一的になるなかで、映画本来の面白さを追及するサンダンスの役割は、今後もますます重要なものになるだろう。

Digitized by Google

サンダンス映画祭

掛尾良夫

サンダンス映画祭は、俳優のロバート・レッドフォードが、若手映画人、特にインディペンデントのフィルム・メーカーを支援するために、80年にアメリカ、ユタ州のロッキー山脈の麓に、私財を投じて設立したサンダンス・インスティテュート(サンダンスはレッドフォードが主演した傑作「明日に向って撃て！」の彼の役名）がそもそもの始まりである。ここに、若いフィルム・メーカーたちを集めて、脚本の執筆から演出技術を学んでもらうというものだった。レッドフォードの理念は、商業主義に毒されない、若い映画人の育成であった。

そのころ、ユタの州都、ソルトレイク・シティでUSフィルム・フェスティバルというインディペンデント・フィルム・メーカーの映画祭が開催されていた。しかし、この映画祭の維持が財政的に困窮しており、レッドフォードがこれを引き継ぐことになった。そして、インスティテュートのメンバー、アメリカのインディペンデント・フィルム・メーカーたちの作品の御披露目の場として、85年から新たにサンダンス映画祭としてスタートすることになった。

サンダンス映画祭は、32年にスタートしたヴェネツィア、46年のカンヌ、51年のベルリンといった各映画祭に比べて、85年の始まりと、まだまだその歴史は短い。しかし、最近、その重要度は、先行するベルリンを追い越すほど、急速に増している。

第一の理由は、近年の世界の映画マーケットでは、映画祭に出品されるアート系の映画といえども「ピアノ・レッスン」のように大きなビジネスになり、さらに英語映画のほうが商品力があることから、そういった作品があつまるサンダンスにハリウッド・メジャーが注目するようになったからだ。

そして、第二の理由はその開催時期にある。5月のカンヌ、9月上旬のヴェネチアの間にはほどよい間隔があるが、1月下旬のサンダンスと2月中旬のベルリンの間隔はあまりにも短い。さらに3月には、ミュフェッド（ミラノ）と並ぶ映画の売り買いの場となる、AFM（アメリカン・フィルム・マーケット）が控えている。そこで、新しい才能、商売になる作品を求めるハリウッドのプロデューサー、バイヤーたちは、AFMの前に、サンダンスで青田買いをしてしまおうというのがここ数年の傾向である。そして、ハリウッドの人間にとって、ベルリンは、相対的に距離も関心も遠いものになっていくようだ。一方、ヨーロッパの映画人にしても、2月上旬には、柳町光男監督やジム・ジャームッシュの「ストレンジャー・ザン・パラダイス」の第1部を上映し、サンダンス以前から世界の若手映画人を紹介してきたロッテルダム映画祭（オランダ）があり、ユタは遠い場所かもしれない。

サンダンス映画祭が始まった初期のころは、本来のインディペンデント・フィルム・メーカーが作った作品を上映する、地味な映画祭だった。サンダンス・インスティテュートには6月に行なわれるジューン・ラボという約1カ月の若手育成のワークショップがある。全米(日本からも)から選ばれたフィルム・メーカーが集まり、シドニー・ルメット、シガニー・ウィーバーといった実力を認められた監督やスターたちから直接、映画のてほどきを受ける。そんな彼らの作った作品が上映されていた。83年には、あのウェイン・ワンが「チャン・イズ・ミッシング」（USFF時代）で審査員特別賞を得ている。さらに、85年にはコーエン兄弟の「ブラッド・シンプル」がグランプリに輝いている。その後、才能を開かせる無名の作家を着実に育成していた。

このサンダンスが89年から大きく変わっていった。サンダンスからでたスティーブン・ソダーバーグの「セックスと嘘とビデオテープ」がカンヌ映画祭でパルム・ドール（グランプリ）を受賞し、アメリカばかり

Digitized by Google

▲「HANA-BI」

1968年のヴェネツィア映画祭は大荒れに荒れた。同じ年の5月のカンヌ映画祭がゴダールやトリュフォーらによって中止に追い込まれたことは有名だが、ヴェネツィアの方はあまり知られていない。映画祭が中止にならず例年通り賞も出たからだろう。

だが、当時の記録によると開催前からボイコット運動が起きるなど大変だったらしい。カンヌがブルジョア映画祭粉砕！　のキーワードで理解しやすいのと違って、ヴェネツィアの場合はさまざまな主張が入り乱れ、プロデューサーたちと若手監督たちの対立、それに学生運動が絡んだり、警官隊の導入やファシストたちの暴力、リド島住民の介入などもあって紛争のさなかにいる者たちにも全貌を把握することが容易ではなかった。

紛争の核になった一つはピエル・パオロ・パゾリーニ監督の「テオレマ」上映問題である。ミラノのブルジョア一家をテレンス・スタンプ扮する“彼”が訪れ、さまざまな波紋をまき起こす。父親は資本家であることをやめて、工場を労働者に渡し、一家のメイドは聖女となって自ら土に埋められる――こうしたアレゴリーが提起するのは何か？　消費主義と順応主義の支配するイタリア社会への警鐘か？　「テオレマ」が物議をかもすであろうことは早くからうわさになっていた。時の映画祭ディレクター、ルイジ・キアリーニは出品を望んだ。パゾリーニは承諾したが、警官隊の導入は断るという条件つきだった。ところがファシズムの暴力を恐れてか左翼学生運動家を恐れてか、映画祭は警官たちに守られることになった。

そこでパゾリーニが「テオレマ」上映に対してNO！と叫び、人々に上映会場に入らないよう訴えた。これに対して討論会が行われ、他にも色々あって、とにかくコンペティションは映画作家の創造活動とは関係なし、従ってやめるべきだという監督たちの主張が優勢となって翌1969年からコンペティションが途絶え、1980年にジョン・カサヴェテス監督の「グロリア」で復活する。

映画祭の賞は、カンヌやベルリンや他の大小さまざまな映画祭にも当てはまると思うが、不純なところがある。だが、賞を出さないと、映画祭は活気を失い、優れた作品が集まってこなくなる。現にパゾリーニはヴェネツィアを拒んだ後でベルリン映画祭に出品してコンペティションに復帰。「デカメロン」で銀熊賞、「カンタベリー物語」でグランプリの金熊賞を受賞している。

「HANA-BI」は1997年のヴェネツィアで、実際一番批評家たちを熱狂させた。北野武監督のもてはやされぶりは大変なものだった。しかし、この年はよい作品に恵まれないというのが映画ジャーナリズムの大方の論調である。

戦後から今日までのヴェネツィア映画祭の特色をいえば、反ファシズムと作家性の尊重である。このモットーを守るためにハリウッドの大作は、コンペティションの外におかれるが、一般の人気はハリウッドに傾きがちだ。また、映画の売買のためのマーケット部門は最近始まったばかりであまり機能していないこともカンヌに太刀打ちできない弱点と見なされている。コンペティション以外の部門や賞の名称がくるくる変わるのも落ち着きがない。それがまたいかにもイタリアらしい。

(注) 第1回の1932年当時は第1回と数えていたが、現在、それは試みとしての扱いとなり、回数から外されている。戦争中のヴェネツィア映画祭はイタリア・ドイツ映画週間となった時もあり、それも回数から除外。戦後第1回の1946年は第7回だが、これは欠番。コンペティションをとりやめた1969年から1979年までは番号が不確か。1980年を第37回とし、1998年は第55回である。

Digitized by Google

ヴェネツィア映画祭

田中千世子

世界最古の映画祭として始まったヴェネツィア映画祭は、映画祭というものを発明した名誉をもっと誇っていい。フランスがリュミエール兄弟のシネマトグラフの発明を誇るように——。

ただ、時期が悪かった。ムッソリーニのファシズム全盛期。後発ながら“自由”の理念をかかげたカンヌ映画祭が王者然と世界に君臨しているのに対して、ヴェネツィア映画祭は過去にふれたくない弱みがある。

しかし、1932年の第1回は、ファシズム体制とは関係なく純粋に芸術の祭典として美術のビエンナーレ展に組み込まれたのである。映画を美術と同じ芸術の地位におしあげ、7ヶ国から優れた作品を集めた国際性は高く評価されていい。2回目は1934年。国の主催となり、コンペティションが始まる。外国映画には「最優秀外国映画ムッソリーニ杯」が、イタリア映画には「最優秀イタリア映画ムッソリーニ杯」が贈られる。ムッソリーニの名前がついていることがファシズムの国の映画祭であることをはっきり示している。そして、外国映画と国産映画を分けて同等の賞を出していることが、やはりファシズムである。国際映画祭は本来自国と他国の別の基準を設けるべきでない。

第二次大戦の途中で連合軍と休戦協定を結んだイタリアは、ナチス・ドイツの侵略を受けながらパルチザンが勇敢な戦いぶりを見せてやがて解放の1945年を迎える。映画祭は1943年から1945年まで中止となり、1946年から再開。黒澤明監督の「羅生門」がグランプリに輝くのが1951年だ。

ヴェネツィアのグランプリは、「レオーネ・ドーロ(金獅子)」賞と呼ばれるが、この呼称が始まったのは1949年、アンリ＝ジョルジュ・クルーゾ監督の「情婦マノン」が受賞した時である。獅子はヴェネツィア島、サン・マルコ広場にそびえ立つ獅子像が有名だが、ヴェネツィアの守護聖人サン・マルコゆかりの聖獣なのである。

カンヌやベルリンの映画祭が開催時期の変化があったのとは対照的に、ヴェネツィアは一貫して8月から9月にかけて開かれてきた。世界からの観光客でにぎわう夏は、ヴェネツィアが一番光り輝く季節である。ゴンドラ競漕(レガッタ)のあるのも9月はじめで、この時、海はレガッタに占領される。

映画祭の本会場はパラッツォ・デル・チネマ(映画宮殿)。サン・マルコから外海を通ってヴァポレットで20分ほどのリド島にある。リド島はヴェネツィア島と違って車の行き交う広い通りがあるのが特色だ。

夏のヴァカンツァを利用してヴェネツィアに行く時には一日ぐらい映画祭見物にあててもいいかもしれない。というのもカンヌ映画祭がジャーナリストも映画ファンも誰も彼も事前登録していないと、映画一本見るのも困難なのに比して、ヴェネツィアでは多くの上映が入場券で見られる仕組になっているからである。もっとも、入場券を売って収益をあげることばかり考えているといった批判が1997年にはあった。

そうした批判を一身に受けるのは映画祭ディレクターと呼ばれる映画祭責任者だ。批判はイタリアの日刊紙が最も激しい。映画祭が終わってから出る総括ばかりか、映画祭期間中もその開催前も容赦なく批判は行われる。そうした記事を目にするたびに、おお、イタリアだ、と思う。あけっぴろげなのである。

面白いことにファシズム時代も日本とは比較にならないほどイタリアはあけっぴろげのところがあった。

1937年にジャン・ルノアール監督の「大いなる幻影」がグランプリをとらず、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督の「舞踏会の手帖」に渡ったことは当時からスキャンダル視されてきた。「大いなる幻影」の反戦思想がイタリアに不都合だからといって偉大な映画を不当に扱ってよいのか。審査員の意志を覆してまで——。ただ、デュヴィヴィエの映画もファシズム好みではなかったようだ。デカダンなフランス映画と見なされたからだ。

Digitized by Google

ン。ここはユニセフが協力して子供たちが審査員になって賞を選ぶ。ベルリンの小学生たちの課外授業として認められている独特な部門だ。そして旧作の回顧上映であるレトロスペクティヴ。毎年生唾ものの企画で、新作を追いかけなくてはならないバイヤーたちにも誘惑の手を差し伸べる興味深い、お楽しみ部門。映画祭に華やかで賑やかな輝きを付け足してくれている。もちろん自国ドイツ映画の新作を、まとめて紹介してくれている部門もある。諸外国からの他の映画祭ディレクターにとっても、ドイツ映画のえり抜き作品を選ぶ、絶好の機会が設けられている。

あとは、正式上映外のマーケット上映も活発だ。これは主にバイヤー向きの商売の場。エントリー料金を支払って、別の試写室で数多くの作品が上映されている。シネ・センターという場所には、それぞれの配給会社や国からの出先機関がブースを作って資料を置いたり、連絡先窓口となって、所狭しと商談を成り立たせるのに必至で動いている。記者会見やプレス対応を別会場に集約して、シネセンターでは比較的人を捕まえやすくなっているのだが、2000年からはどうなる事か。

正式上映は、ドイツ語字幕での上映。コンペのプレス試写は、英語でやったり、パノラマも英語字幕でも受け付ける。フォーラムも例外はあるが、基本的にドイツ語版。会場には英、仏などの同時通訳イヤーホーンが整えられている。日本語は無い。

カンヌに比べて決定的に違うのは、大いに一般に開かれている点。ドキュメンタリーもエントリー出来て、作品の許容範囲も広い。加えて、寒いし、カンヌのゴージャス、かつリゾートチックな雰囲気から比べると、映画を離れた部分での他の誘惑は少なく、多少地味な感じ。

作品は場所柄、スカンジナビア諸国や東欧の作品も目立って多い。ナチス関係のドキュメンタリーも然り。アジアからの作品も積極的に上映されている。最近のコンペ部門の作品の傾向をひと言で言い表すのは難しいが、大雑把に言ってしまえば、ヨーロッパ作品はむしろカンヌを狙いたいところで、最強の切り札を望むのは簡単ではない。それに比べてアメリカ映画は、アカデミー賞のオスカー・ノミネーションの時期とちょうど重なり、力強いものが集まりやすい。しかし、さすがにヨーロッパの映画祭。そう易々と毎年オスカーと受賞がダブっても悔しい。審査員の毎年悩む姿が、目に見えるようだ。

配給会社といった商業的な売り買いをしている人々にとっては、カンヌがまずは外せない所だけれど、このごろではカンヌで見て、走って行って買いつけるというより、作品の完成前に商談が成り立っているケースも少なくない。そこで、ベルリンは年明け最初の大映画祭として、まず新年のご挨拶、製作状況の確認、ネゴなどに活用されるし、買い付けへの大穴狙いも当然出てくる。ヨーロッパ公開を控えたアメリカ映画などは、プロモーションの場として大いに利用しているし、前後に行われるサンダンス、ロッテルダム、そしてアメリカン・フィルム・マーケットなどと連動させて、激しくも賑やかに盛り上がる。

記者会見ではライトのまぶしいコンペとは違って、フォーラム部門では、監督を呼んでの上映後の観客とのディスカッションを大切にしている。これは私がフォーラムで、コンサルタントのメンバーに名前を連ねているから、というわけでは決してなく、ひいき目では無くて、フォーラムの雰囲気はどの部門よりもずっと温かい。ちなみにフォーラムの組織母体は、普段はシネマテーク常設館を運営している所である。コンペのスポットライトに赤絨毯やブラックタイを選ぶか、商業的な成功は二の次にしても映画をしみじみ味わうか。まあ、見る方も選ばれる側も、参加者の思惑はそれぞれでも、ベルリンは目的に合った過ごし方の許される映画祭なのである。

さて、日本映画についての過去の受賞結果は、別頁の表をチェックして頂くことにするにしても、受賞の有無にかかわらず、今まで沢山の作品が各部門で上映されてきている。97年からは、有志が立ち上がり国際交流基金のサポートを受けて、日本の独立プロ作品を中心に紹介するマーケット・ブース〈アップ・トゥ・ナウ〉も開設された。数多くの作品が定期的に紹介されて来た結果として、日本映画への注目度が確かに高まって来ているのが感じられる。映画祭自体が好意的とも言えるけれど、ベルリンは日本映画にとって世界の窓に活用できるチャンスの場なのである。

Digitized by Google

ベルリン国際映画祭

林　加奈子

今年98年２月に行われたベルリンでは、11本もの日本映画が上映された。日本映画には比較的好意的であるという噂もあるベルリンだけれど、果たして本当だろうか。

ベルリンは、1951年から毎年行われている映画祭。今年で48回目を迎えた。カンヌ、ヴェネチアと並んで３大映画祭の一つに数えられている。効率よく機能的であることで、その運営体制の良さには定評がある。当初は６月から７月という夏に行われていたが、5月のカンヌのすぐ後では作品選考に不利だということで、1978年から開催期日がカンヌの前の２月に行われるようになっている。

会場は、ベルリン中心地にあるツォー駅を中心とした地区。ツォー・パラストという映画館が開催中の開会式、閉会式およびコンペ作品の正式上映会場となっているが、2000年の第50回目からは、旧東側のポツダム広場へ映画祭全体が移転する計画が進行している。今、ベルリン映画祭は、真新しい新会場へ向かって大きく様代わりしようとしているのである。町中の便利なところから映画祭の為の巨大な新しい＜街＞への会場移転は、ベルリンをどう変えるのか見離せない。

少しばかり歴史を紐解くと、世界の平和と友愛をテーマに、1951年当時のベルリン市長で後の西ドイツ首相となったウィリー・ブラントの肝入りでスタートし、アルフレッド・バウアー教授が長年リーダーシップを取っていた。当初は国際情勢によって、共産圏の国の作品は上映されず、いち早く新人監督第一作への賞を設けたり、観客投票を行ったり、青少年映画祭を平行して行ったりもしていたという。日本からの出品も、かつては映連を通していたりしていたが、今は全くフリー。現在の責任者は、フォーラム部門だけはウルリッヒ・グレゴール氏、その他の部門はモーリッツ・デ・ハーデルン氏が統括している。

コンペ作品の選考は、審査員によってグランプリの金熊賞(熊はベルリンの市章)を始めとする各賞が選ばれる。監督賞、女優賞、男優賞、などは銀熊賞と名付けられている。そのほか国際批評家連盟（フィプレッシィ）賞、エキュメニック賞、テディベアー賞、などなど様々な団体がそれぞれに出す賞もいろいろで、ベルリンの最終日には受賞結果の分厚い冊子が出来上がる。つまりコンペ外でも、何か賞を取る可能性があるということ。

部門は、まず正式出品作品となる、長編劇映画を対象とするコンペ（短編コンペもあり、同じ審査員によって審議される）部門。メディアの注目は、華やかな

▲「ラリー・フリント」

この部門に注がれる。賞結果の表では、コンペの作品が記録に残るだけだが、実はコンペ外が、それぞれ特色ある部門に分かれていて、ベルリンの面白さを演出してくれているのが現実だ。

一つは作家性の強いクセのある作品を集めたパノラマ部門。ここは、ゲイ関連作品も多く、アート＆エッセイと銘打ってある部分もある通り、短編やドキュメンタリーも紹介される。次に運営が全く別のフォーラム部門。ここは始まって今年で28回目で、商業的な作品でなく、作家の独創性、創造性に重点を置いて選ぶニューシネマ部門。原則として60分以上の作品が対象だが、ドキュメンタリー、実験的な作品、作家の年齢や製作本数にこだわらずに若い感覚の新しい作品を集めている。それから児童映画部門のキンダーセクショ

Digitized by Google

節考』がパルム・ドールを取った1983年には、監督賞を超える特別賞として、タルコフスキーの『ノスタルジア』とブレッソンの『ラルジャン』に「創造的映画グランプリ」が与えられている。

もともとカンヌは、その年によって特別賞を創設するなど目配りの効いた柔軟な対応をする映画祭だ。1987年には40回記念賞がフェリーニの『インテルビスタ』、1992年には45回記念賞がジェームズ・アイヴォリーの『ハワーズ・エンド』に、1997年には50回記念賞がユセフ・シャヒーンの全作品に贈られている。

現在は、パルム・ドール、グランプリ、監督、女優、男優、脚本、これに審査員賞２本（例えば芸術貢献賞というように、審査員が内容を決定できる）が、公式審査員による賞として規定されている。同位受賞は原則として一つの賞だけに限られる。１作品のダブル受賞は出来ない（ただし俳優の賞は別扱い）という規定もある。これはポランスキーが審査委員長をつとめた1991年、コーエン兄弟の『バートン・フィンク』がパルム・ドール、監督賞、男優賞の三つを独占したことがきっかけで付け加えられた。こうしたバランスと公平への気配りと処理の仕方は、さすが老練なものである。

▲「うなぎ」

なお、短編のコンペにもパルム・ドールと審査員賞があるが、これは1998年から長編コンペとは別建てで専任の審査員が選ばれて担当することになった。この短編審査員は、この年から新設された「シネ・フォンダシオン」(映画学校の卒業製作中短編を対象とする)の審査員も兼ねている。この第一席に選ばれた監督は、長編第１作を作るとカンヌ映画祭で上映して貰えるのだ。映画監督のマイナー・リーグ創設みたいなもので、若いフィルムメーカーにとっては魅力的な新機軸、文字通りの登竜門である。

カンヌの主な賞としては、このほか新人監督第１作対象のカメラ・ドール（1978年創設、賞金30万フラン）賞と、コンペ出品作の映像音響技術を対象にした高等技術委員会（ＣＳＴ）技術グランプリ（1990年創設）がある。いずれも公式コンペとは別に選ばれた専門審査員が選考に当たる。映画祭の最終日、リュミエール大劇場で授賞が発表され登壇してプレゼンターのスターからトロフィーや賞状を受け取る栄誉に恵まれるのは、以上の賞の受賞者に限られる。

カンヌ映画祭で賞といえば、古い歴史を持つ国際批評家連盟賞（映画祭創設以来。国際批評家連盟賞は各映画祭にあるが、カンヌのそれが一番注目度が高い）やエキュメニック賞（1974年以来）を別にすれば、公式コンペ出品作でなければ貰えっこないという感じが強かったが、近年になって、スポンサー付きの新しい賞が次々と現れてきた。長続きしているのは、青少年スポーツ省が1982年に創設したプリ・ドゥ・ラ・ジュネッス、これは若い世代の賞。審査員はフランス、ヨーロッパから選ばれた若者たちで、フランス映画とその他の国の映画とに分けて２本の受賞作が審査決定される。若い世代の動きを探る上で注目されつつある重要な賞だ。コンペ外だったセルタン・ルガール部門にも、受賞作のフランス配給を引き受けた会社に20万フランを補助するという極めて実効的な賞がある。

Digitized by Google

カンヌ映画祭

河原畑　寧

黒澤明監督の『羅生門』がヴェネツィア映画祭グランプリに輝いたというニュースを知らされた永田雅一大映社長（当時）は「グランプリ？　グランプリてなんや!?」と叫んだという。1951年のことであった。これをきっかけに、国際映画祭で最優秀作品に与えられる賞を「グランプリ」と呼ぶのだという常識が、わが日本でも定着するに至る。

やがて国際映画祭の数が増え、映画祭同士の対抗意識が高まってくるにつれ、ただの「グランプリ」では紛らわしいから、公式名称としての使用を控えようという国際映画製作者連盟だかの申し合わせが出来て、カンヌでは「パルム・ドール（黄金の棕櫚）」、ヴェネツィアは「リオーネ・ドロ（金獅子）」というように固有の名前を前面に押し出して使うようになったのだという話を、聞かされたことがある。あれは1960年代の末ごろだったろうか。

第1回のカンヌは、仏、米、英、伊、カナダ、ソ連などから一国5～7本の長編がエントリーされ、グランプリ（正式にいうとグランプリ・デュ・フェスティヴァル・アンテルナショナル・デュ・フィルム、フェスティバル・アンテルナショナル・デュ・フィルムというのはカンヌ映画祭の主催団体の名称）受賞作が11本という総花的な選考法が取られた。1947年第2回にはグランプリは無く、代わりに「恋愛・心理映画」「冒険・推理映画」「社会」などジャンル別に賞を出している。

これが一年休んだ後の1949年第3回になると、ほぼ現在と同じ選考法が取られるようになって、長編部門ではグランプリ、監督、女優、男優、脚本、それにミュージカル、美術の賞があり、短編では主題、編集、撮影、色彩、ルポルタージュと職能的な区分の賞が出ている。1950年を休んで第4回の1951年から春の開催となり、新しく審査員特別賞が加わった。これはグランプリに次ぐ扱いの賞。ちなみにこの年のグランプリは『ミラノの奇蹟』と『令嬢ジュリー』の同位受賞で、審査員特別賞は『イブの総て』。

「グランプリ」が「パルム・ドール」になるのが1955年で、これが1964年にまたもや「グランプリ」に戻り、さらに1975年から「パルム・ドール」となって、そのまま今日に至っている。審査員特別賞は、1967年から審査員特別グランプリと、名前が格上になり、さらに1990年には「グランプリ」となる。正式には「グランプリ・カンヌ・1990」で、小栗康平監督『死の棘』がイドリッサ・ウエオドラオゴ『掟』と同位受賞。ところが1992年になると、「特別」は取れたがまたもや「審査員グランプリ」となり、1997年にはまた「グランプリ・カンヌ・1997」、1998年は同じく「グランプリ・カンヌ・1998」であった。ややこしくてしょうがない。

なぜ、カンヌはこんなにまで「グランプリ」という呼称にこだわるのか？

規則では、パルム・ドールが最優秀作品賞、グランプリは「最高に独創性を発揮した」作品に与えられるのだが、なんとかこれを同等に評価して欲しい、と願っているからだと思う。つまり、メインストリームの映画の最高がパルム・ドール、意欲的な芸術映画の最高がグランプリと、世間に認めて貰いたいのだ。ヴェネツィアには金獅子と銀獅子、ベルリンには金熊と銀熊があるが、カンヌにはパルム・ドールはあってもパルム・ダルジャンはない。カンヌのコンペには世界最高の作品が集まるのであり、他の映画祭より遙かに格上、パルム・ドールとグランプリと、最高が二つあっても良いのではないかと自負しているのかもしれぬ。

ずっと昔、『影武者』と『オール・ザット・ジャズ』がパルム・ドールを同位受賞した1980年、カーク・ダグラスを長とする審査委員会は、審査員特別グランプリの『アメリカの伯父さん』を加えた「3本が同水準と評価する」と添え書きを付けたことがあった。『楢山

Digitized by Google

下さったのは日本人唯一の会員である成田陽子さん。もともとがヨーロッパから来た記者たちによって始められただけにアジア人の記者は少なく、それではあまりに偏っているということで最近になってコリアン、中国系の会員を加えたが、アジア系だけでなくアフリカ系の会員（黒人）も少ないようだ。現在の会員数は前述のように85人ほど（ちなみに映画に関する評論、報道、出版、放送などの活動に従事する人たちが参加する日本映画ペンクラブの会員は200人を越えている）。事務局はビバリーヒルズのラシェネガ通りとウイルシャー通りが交差するところにある。

受賞者に与えられるトロフィーは、フィルムを絡ませた金色の地球が同じ金の台で支えられ、それが大理石の台の上に乗っている形。地球を支える金の台には外国記者協会（HOLLYWOOD FOREIGN PRESS ASSOCIATION）の頭文字が刻まれている。

賞の授賞式が毎年1月下旬であるところから、その後に行なわれるアカデミー賞の前哨戦的意味を持つようになってきて近年はアカデミー賞の賞の行方を占う賞として注目されるようになってきた（ただし、多くのスターの中にはゴールデン・グローブ賞を受賞してしまうと肝心なアカデミー賞が受賞できなくなる、と縁起を担ぐ人もいるそうで、「下手にお祝いを言っちゃだめよ」と教えて下さったのは映画評論家の小森和子さんだった。小森さんはお祝いを言って某有名スターから露骨にイヤな顔をされた経験をお持ちだそうだ）。

そういうこともあるようだが、97年度の最優秀作品賞が『タイタニック』、監督賞がジェームズ・キャメロン、脚本賞が『グッド・ウィル・ハンティング』のマット・デイモンとベン・アフレック、というあたりはアカデミー賞と同じだし、スターたちも主演賞のジャック・ニコルソン、ヘレン・ハントもコメディー部門で主演男・女優賞を受賞している、というようにアカデミー賞と重なっている人たちは少なくない。しかし、その一方では重ならないことも多く、アカデミー賞では惜しくも受賞を逃したベテランのピーター・フォンダがドラマ部門の主演賞を受賞して古くからの彼のファンを喜ばせた。そして、アカデミー賞ではこちらも破れたバート・レイノルズが助演男優賞を受賞したのは、よく言われているように、スターと、一票を投じる会員たちの付き合いの長さがものをいっているのかもしれない。レイノルズといえば、いまでは忘れかけられているとはいえ70年代を代表するスターであり、記者たちのなかには親しくしていた人も多いはずなのだ。

さて、賞の選び方だが、投票は、賞狙いの作品が出そろう毎年12月15日に締め切られる。翌年の1月初めに投票された作品の中から候補が絞られ、そのリストが送られてきて、投票。なにしろ会員数が少ないから話は早いし融通もききそうだ。そして1月下旬の授賞式で発表される、という手順。会員数が5000人にものぼるアカデミー会員の選ぶ賞と違い、会員個人の意志も反映されるのが会員にとっては嬉しいところだろう。授賞式の会場は、近年はもっぱらビバリー・ヒルトンのボウル・ルームが使われているが、これは授賞式がディナーショー形式でおこなわれ、食事つきだから。ビバリーヒルズ近辺でディナーショーの出来るほど大きな会場といえばこのボウル・ルームをおいてほかにはない。ディナーショーの始まる前にはカクテル・タイムがあり、スターと親しく話せるのとアカデミー賞より警備もゆるやかなため気楽な雰囲気があり、年々参加スターの数も増えて賑やかになっているという。

会員のメリットとしては、年間300回ほど行われる試写への招待と、取材のための記者会見や、ラウンド・テーブル形式で行われることが多いスター・インタビューへの招待があること。受賞式の放映権をTVに売ったところから会としての資金が潤沢にあり、会員たちは毎年二回、自分たちの決めた世界の映画祭に協会の費用負担で参加出来るというから羨ましい。

Digitized by Google

ゴールデン・グローブ賞

渡辺祥子

ハリウッド駐在の外国人記者たち、ほとんどがヨーロッパから来た記者だったそうだが、彼らは行く先々で出会う機会が多く、また取材でスターの家に出入りするうちに顔見知りも増えたことから「外国人記者が選ぶ賞があってもいいだろう」、というような話が出てきて誕生したのがゴールデン・グローブ賞だった。だからゴールデン・グローブ賞は、ハリウッド在住の外国人記者が選ぶ賞ということになる。外国からアメリカに来て本国に記事を送っている記者の選ぶ賞なので、記者たちは、べつに映画が専門とは限らない。映画の記事も書くが、他の取材もする人たちが多く、それが賞に反映して映画のプロ的な選択は少ない傾向にあると言えるかもしれない。

第1回目は1943年。最優秀作品賞は『聖処女』。会員数50人ほどで始まった。1998年の今年は第55回を数え、会員もだいぶ増えて85人ほどになったが、まだ決して多くはない人数だ。もともとが仲間同士のつきあいから生まれた賞だけにそれほどうるさい決まりはないようだし、アカデミー賞と違って受賞したからといってギャラが上がるという話も聞かないが、それでもいまではNBCTVが放映するまでに大がかりなものになったところから、年を追う毎に華やかさが増し、授賞式に参加するスターもふえている。

この賞の目指すところはハリウッドの真の姿を世界に伝えることと、優れたエンターテイメントの発掘と紹介だ。アカデミー賞と違って選出部門も多くはなく、技術関係の部門はない。その代わりにあるのがテレビ部門であり、なによりもユニークなのは、1951年からスタートしたのだが、最優秀作品賞がドラマ部門とミュージカル／コメディー部門の二つに別れていることだろう。最初の51年にはドラマ部門が『陽のあたる場所』、ミュージカル／コメディー部門は『巴里のアメリカ人』がそれぞれ受賞している。このおかげで多くのファンがお気に入りだった軽いコメディーの人気スターが、演技はうまいかもしれないが無名に等しい俳優に破れて悔し涙を飲む、というようなアカデミー賞受賞式で見られるような結末はほとんどない。実力のある名優と観客に愛されるスターの両方の側に寄った賞である、批評家的であるより映画ファン的姿勢が大切にされている賞、と言っては言い過ぎか。たしかに映画マニア的な片寄りが少なく、普通の観客にとって納得いくことが多い賞なのだ。

功労賞的な賞としては『十戒』などのスペクタクル史劇で知られる監督セシル・B・デミル功労賞があって、映画のために功績のあった人におくられる。97年

▲「恋愛小説家」

度の受賞者はシャーリー・マクレーンだった。

TV部門もドラマ・シリーズの最優秀作品賞とミュージカル／コメディー・ドラマの最優秀作品賞に別れ、どちらにも主演男・女優部門があるが助演賞部門はなく、ミニ・シリーズ／TVムービー部門だけに主演男・女優賞と助演男・女優賞の部門がある。このTV部門だけでなく、映画部門も男・女優助演賞はドラマとミュージカル／コメディー部門は一緒になっている。

賞の名前である《ゴールデン・グローブ》は《金の地球》という意味だが、賞を発足させた人たちが地球的規模の賞だから、ということで命名した、と教えて

Digitized by Google

初めから会員全員の投票で5本が決まり、これがノミネート作品ということであらためて全会員の投票で選出されることになる。

最終の受賞者は全会員の投票によって決められ、授賞式で発表されることになるが、ドキュメンタリー、短編映画、外国語映画などの賞の選出は、特別の上映会に出席した者だけに投票権がある。

▲「タイタニック」

2月の上旬に発表されるノミネーションの後は、いよいよ会員全員の投票ということになるが、集計はプライス・ウォーター会計事務所が担当してプレゼンターが当日の会場で読み上げるまで絶対に判らないことになっている。でも、ひょっとすると判っている人がいるのかもしれない、とか、どこかで、不正が行われているかもしれない、という声は常に聞こえてくるが、そういう声が聞こえるということは、それだけアカデミー賞というのがアメリカの映画人にとって気になる重要な賞だということの証でもある。

ノミネーションの発表から、普通は3月の第4月曜日に行われる授賞式までの間に候補作の試写が何度かおこなわれ、3月上旬には投票用紙が郵送されて20日前後が締め切り。結果は授賞式で、ということになる。

作品賞の対象になるのは英語映画。だから英語を喋った『ラストエンペラー』は作品賞の対象になって受賞したが、もしも、ベルナルド・ベルトルッチ監督の母国語であるイタリア語で作られていたら外国語映画賞の対象になり、アカデミー賞の中でも最高の賞と言われる最優秀作品賞を受賞することはできなかったはず。英語以外の言葉を喋る作品を対象とする外国語映画賞は、製作国のしかるべき機関の推薦（日本の場合は映連）をえて検討され、特別上映会に参加した会員の推薦で決まるのだが、1国1作品が原則。外国語映画でも主演賞や撮影、美術、衣裳デザインなど、作品賞以外の部門は資格条件さえ整っていれば国籍は関係なく受賞の対象になる。

この他に質の高い作品を作った製作者に贈られるアーヴィング・タールバーグ賞、人道的努力をした映画人に贈られるジーン・ハーショルト友愛賞、映画産業に技術的貢献をした人に贈られるゴードン・E・ソーヤー賞などがあるが、これは該当者がいるときだけの賞でオスカー像は贈られない。日本の黒澤明監督が贈られたのは特別名誉賞で、これは映画作りに特別の功績があった監督、俳優のどちらにも贈られる賞。ビリー・ワイルダー、ジェームズ・スチュアートなど、世界の映画ファンに愛される受賞者がいて、こちらはオスカー像が贈られる。

授賞式の会場は、近年は3千席を越えるキャパシティを持つドロシー・チャンドラー・パビリオンやシュライン・オーディトリアムで行われることが多い。

で、《OSCAR Goes To……》の結果、受賞作の観客は増え、俳優のギャラはアップ。惜しくも受賞を逃しても、候補に挙がったというだけでもかなりの効果が期待できるのだそうである。それくらい大きな力があるのがアカデミー賞（アメリカの……）なのである。

Digitized by Google

アカデミー賞

渡辺祥子

世界中に映画賞は数え切れないほどあるが、アカデミー賞がさまざまな映画祭やコンクールなどの賞と基本的に違うのは、批評家や権威ある審査員、選ばれた一般人、のような客観的視点を持った審査員が選ぶのではなく、映画人が同業の映画人を讃えるために、選ぶハリウッド映画業界の仲間うちでの賞だというところだろう。過去1年間に映画界の各分野でめざましい活躍をした人物や作品を讃えて表彰するこの賞は、もちろん質の高い作品や優れた仕事をした人物を選び出すことにその目的があるわけだが、質の高さや、優れた仕事というのは必ずしも芸術的である必要はなく、娯楽性、ビジネスも重視される。選出にあたっては、ハリウッド映画業界内での信用や人気がものをいうことも多いので人気投票的な側面もあるし、ニューヨークを中心に活躍する人たちは分が悪い、と言われたりもする。もともとがメジャー会社から生まれた賞だからインディーズ系に冷たいところがあり、外国人より自国の映画人が優位だったが、96年には珍しくもインディーズ系の作品が4本ノミネートされ、そのうちから『イングリッシュ・ペイシェント』が受賞してメジャー会社を慌てさせることになった。ハリウッドも変わり、アカデミー賞もまた変わっていくのである。アカデミー賞の受賞作はその時代の意識を反映し、映画界の主流をあぶり出したりするのも興味深いところだ。

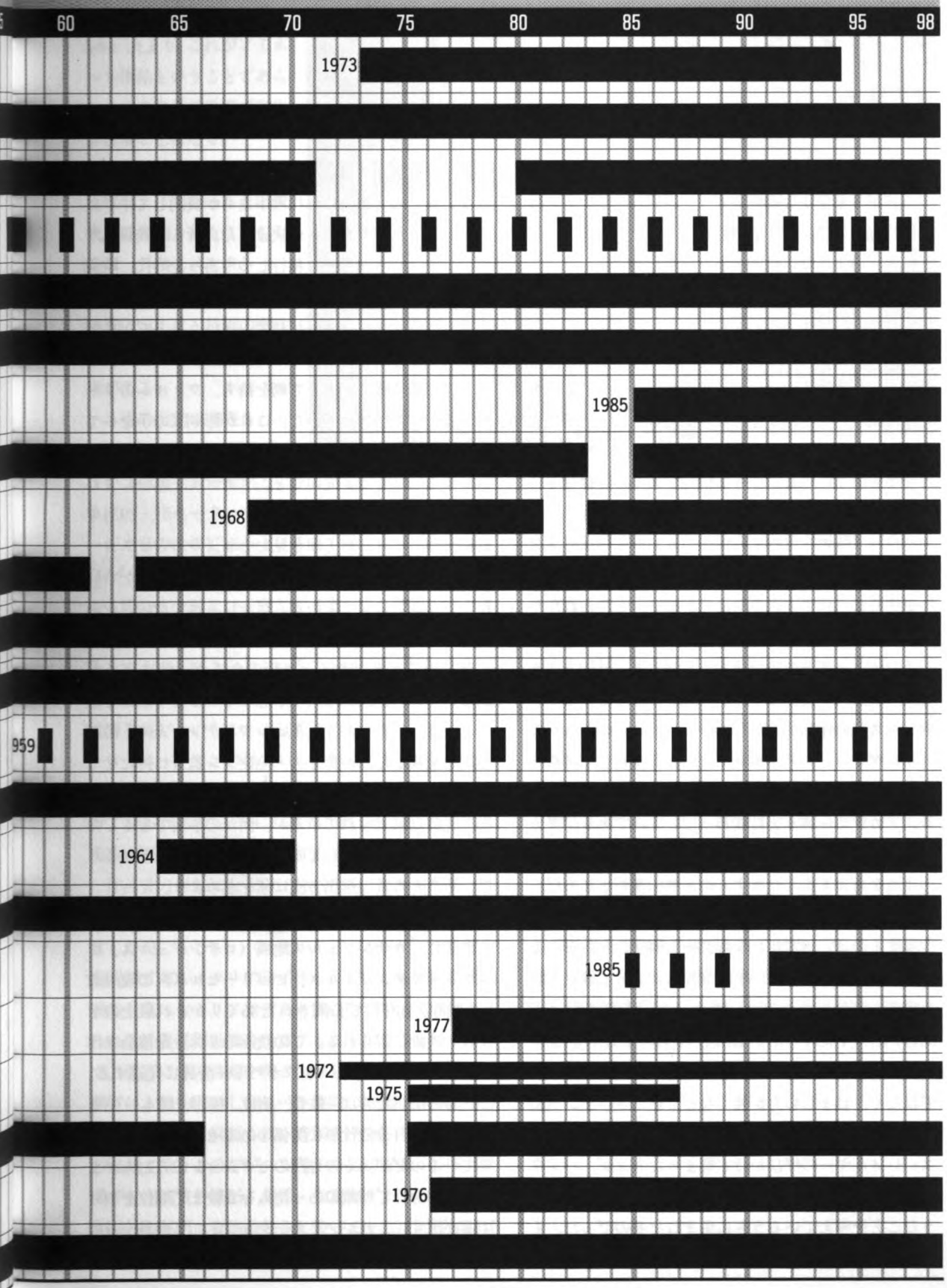
1998年にちょうど70回目を迎えたアカデミー賞を主宰するのは、1927年に映画芸術と科学の向上を主な目的としてハリウッドの映画業界人によって設立された映画芸術科学アカデミー協会（ACADEMY OF MOTION PICTURE ARTS AND SCIENCES）だ。この協会は、べつに賞を贈るために作られたものではなく、日ましに力が強くなっていくユニオン（組合）対策に頭を痛めていたMGM撮影所の帝王ルイス・B・メイヤーの呼びかけで集まった人々が、ハリウッドのイメージアップのために何かしよう、というようなことを考えているうちに生まれたものだった。その直後に初代会長に選ばれた人気俳優のダグラス・フェアバンクスが「目立った業績に対して賞を贈ろうではないか」と提案、これに理事たちが賛同してすぐに賞が設定され、スタートが決まった。折しも映画はサイレントからトーキーに移行しつつあった時代、映画館には観客が溢れていた。

賞には盾かトロフィーが必要、ということでMGMの美術監督セドリック・ギボンズにデザインは一任され、彼は裸の戦士が両手で剣を持ち、フィルムのリール缶の上に立つ絵を描いた。これが彫刻家の手をへて燦然と輝くオスカー像になるのだが、オスカーという名がつくのはもっと先のこと。アカデミー協会によれば、協会事務員のマーガレット・ヘリックが、1931年に初出勤してはじめて像を見たとき、「うちのオスカーおじさんにそっくり!」と言ったことからその名がついたということになっている。ほかにも幾つかの説があるようだが、協会が認定しているのはこの説だ。

錫と銅で出来た金メッキ製のオスカー像は高さが34センチ強、重さは約5キロ。思っているよりずっと重いことは、私自身が『L.A.コンフィデンシャル』の脚色賞を受賞したカーティス・ハンソン監督に持たせていただいて確認した。1941年にはコピーライト権を獲得、売買は禁じられているが、何かの事情でなくした時は実費で作ってもらえるそうだ、――というところで、そろそろ賞の選出方法に話を進めよう。

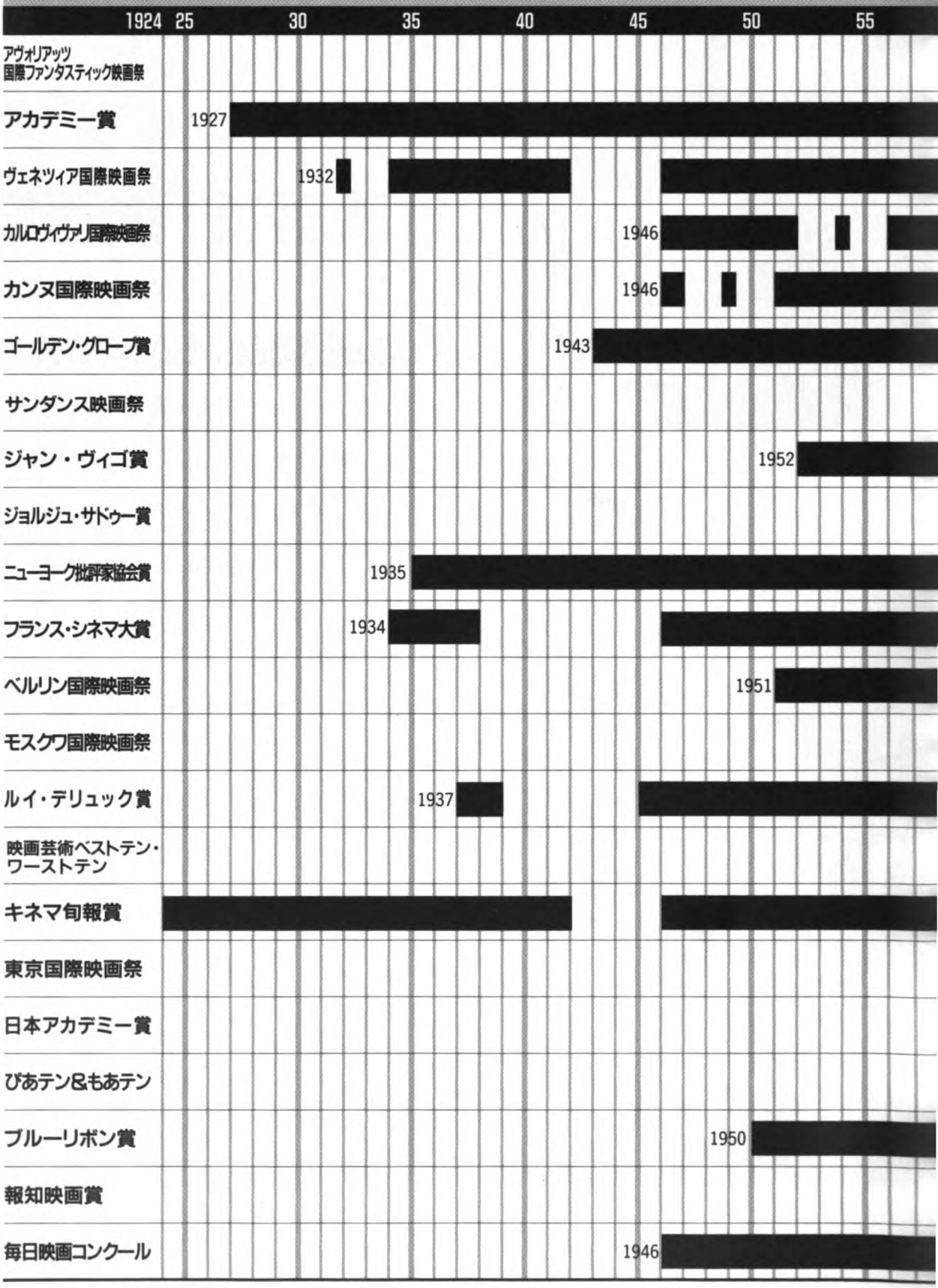
対象となる作品は、1月1日から年末の12月31日までの間に、ロサンジェルス地域（ロサンジェルス、ウエスト・ロサンジェルス、ビバリーヒルズ）の映画館で1週間以上有料で公開された35ミリかそれ以上のサイズの映画に限られる。この映画のリストを協会は作成、現在5000人ほどいるアカデミー会員に発送する。これらの会員たちは、監督、演技、撮影、脚本……というように自分の仕事に関係のあるセクションに所属しているのだが、その専門のセクションの人たちがまず自分の分野で功績のあった人を5位まで順位をつけて選び出す。これがノミネーションとして会員全員の投票の対象になるのだ。ただし、最優秀作品賞だけは

Digitized by Google



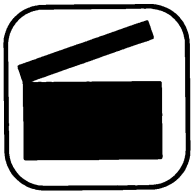
Digitized by Google

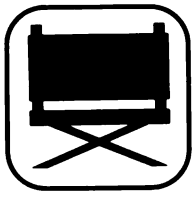
世界の主な映画賞・映画祭



Digitized by Google

世界の主な映画賞・映画祭





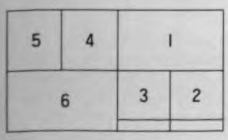
アカデミー賞
ゴールデン・グローブ賞
カンヌ映画祭
ベルリン映画祭
ヴェネツィア映画祭
サンダンス映画祭
キネマ旬報賞
ブルーリボン賞
毎日映画コンクール
日本アカデミー

Digitized by Google

1
2

1.20th.日本アカデミー賞。
2.21th.日本アカデミー賞。

Digitized by Google



1.97年度キネマ旬報賞。今村昌平（日本映画作品賞）。
2.望月六郎（日本映画監督賞）と片岡礼子。
3.佐藤仁美（新人女優賞）。
4.西村雅彦（助演男優賞）。
5.桃井かおり（主演女優賞）。
6.三谷幸喜（脚本賞）と奥貫薫。
（撮影：谷岡康則）

Digitized by Google

Digitized by Google

Digitized by Google

6	3	1
	4	
7	5	2

1.96年度キネマ旬報賞。原田美枝子（主演女優賞）。
2.渡哲也（助演男優賞）。
3.役所広司（主演男優賞）。
4.安藤政信（新人男優賞）。
5.立川志らく（キネマ旬報読者賞）とミッキー・カーチス。
6.周防政行（脚本賞）。
7.小栗康平（日本映画監督賞）。
（撮影：吉岡誠）

Digitized by Google

Digitized by Google

4		1	
5		3	2

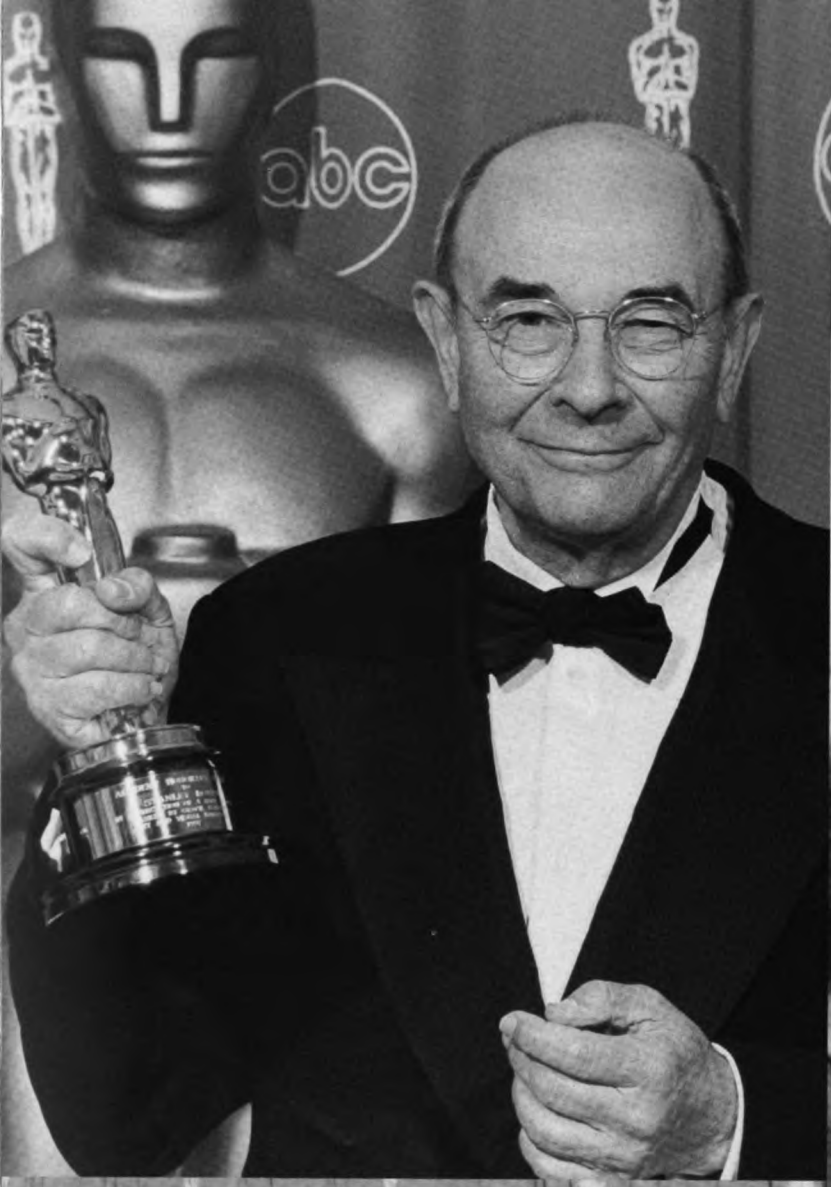
1.50th.カンヌ国際映画祭でパルム・ドールに輝いた「うなぎ」の役所広司。カトリーヌ・ドヌーヴ、アッバス・キアロスタミと。
2.54th.ヴェネツィア国際映画祭「HANA-BI」で金獅子に輝いた北野武。
3.47th.ベルリン映画祭で金熊賞（生涯功労賞）受賞のキム・ノヴァク。
4.55th.ゴールデン・グローブ賞、作品・監督賞を「タイタニック」で受賞したジェームズ・キャメロン。ケイト・ウィンスレット、レオナルド・ディカプリオと。
5.55th.ゴールデン・グローブ賞主演男優賞受賞のピーター・フォンダ。
© AP／WWP

Digitized by Google

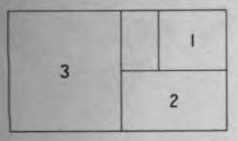
2	1
3	

1.主演男優賞受賞のジャック・ニコルソン。
2.名誉賞受賞のスタンリー・ドーネン監督。
3.「恋愛小説家」で主演男・女優を獲得した、ニコルソンとヘレン・ハント。

Digitized by Google



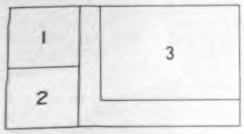
Digitized by Google



1.70th.アカデミー賞、名司会者ビリー・クリスタル。
2.助演男優賞受賞で大はしゃぎのロビン・ウィリアムス。
3.助演女優賞受賞のキム・ベイシンガー。

Digitized by Google

Digitized by Google



1.69th.主演女優賞、フランシス・マクドーマンド。
2.69th.主演男優賞、ジェフリー・ラッシュ。
3.70th.アカデミー賞受賞者の面々。

Digitized by Google

Digitized by Google

3		1	
5	4		2

1.96年、68th.アカデミー賞功労賞をスピルバーグから受け取るカーク・ダグラス。
2.「デッドマン・ウォーキング」で主演女優賞を受賞したスーザン・サランドン。夫であり、監督でもあるティム・ロビンスと。
3.左から、ニコラス・ケイジ、スーザン・サランドン、ミラ・ソルヴィーノ、ケヴィン・スペイシー。
4.「ブレイブハート」で監督賞を受賞したメル・ギブソン。
5.司会進行を務めた、ウーピー・ゴールドバーグ。

Digitized by Google

Digitized by Google

© A.M.P.A.

Digitized by Google

CONTENTS

10 世界の主な映画賞・映画祭

20……世界の主な映画賞・映画祭　一覧表
22……アカデミー賞　渡辺祥子
24……ゴールデン・グローブ賞　渡辺祥子
26……カンヌ映画祭　河原畑寧
28……ベルリン国際映画祭　林加奈子
30……ヴェネツィア映画祭　田中千世子
32……サンダンス映画祭　掛尾良夫
34……キネマ旬報賞　品田雄吉
36……ブルーリボン賞　佐藤雅昭
38……毎日映画コンクール　野島孝一
40……日本アカデミー賞　的田也寸志

43 年度別　受賞一覧

44…1924~29　46…1930~33
48……1934　49……1935
50……1936　51……1937
52……1938　53……1939
54……1940　55……1941
56……1942　57……1943
58……1944　59……1945
60……1946　62……1947
64……1948　66……1949
70……1950　72……1951
74……1952　76……1953
78……1954　80……1955
82……1956　84……1957
86……1958　88……1959
90……1960　94……1961
96……1962　98……1963
100……1964　102……1965
104……1966　106……1967
108……1968　110……1969
112……1970　114……1971
116……1972　118……1973
120……1974　122……1975
124……1976　126……1977
128……1978　130……1979
134……1980　136……1981
138……1982　140……1983
142……1984　144……1985
146……1986　148……1987
150……1988　152……1989
154……1990　156……1991
158……1992　160……1993
162……1994　164……1995
166……1996　168……1997

176 映画界年表

176 世界の主な映画祭

176 映画祭早見表

アカデミー賞…198／ヴェネツィア国際映画祭…201
フランス・シネマ大賞…204
ニューヨーク映画批評家賞… 205
ルイ・デリュック賞…208
ゴールデン・グローブ賞…209
カンヌ国際映画祭…212
カルロヴィヴァリ国際映画祭…215
ベルリン国際映画祭…217
ジャン・ヴィゴ賞…219／モスクワ映画祭…220
ジョルジュ・サドゥール賞…222
東京国際映画祭…223
アヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭…223
サンダンス映画祭…224／キネマ旬報賞…225
毎日映画コンクール…228
ブルーリボン賞…231
映画芸術ベストテン・ワーストテン…233
びあテン&もあテン…234
報知映画賞…235／日本アカデミー賞…236
横浜映画祭…237

コラム

42…映画祭は生きている／林加奈子
68…裸の島から午後の遺言状へ／新藤兼人
69…ロッテルダム映画祭／橋口亮輔
92…塚本晋也作品と映画祭／朱京順
93…ヴェネツィア映画祭／照本良
132…サンダンス・フィルム・フェスティバル／犬童一心
133…「中国の鳥人」inサンフランシスコ映画祭/中沢敏明
170…HANA-BIの影でまだまだあります日本映画受賞作／浜野史子
172…侮るなかれ、恐るべし「ファンタスティック映画祭」／相原裕美

Digitized by Google

FILM FESTIVAL & MOVIE AWARD DATA BOOK

映画賞・映画祭データブック

キネマ旬報社

Digitized by Google

キネマ旬報社

映画プロデューサーが面白い

世界各国で注目されつつある日本のインディペンデント映画。それらの作品の製作に尽力を尽くすプロデューサーたちにスポットを当て、映画製作の秘密について多角的に迫ったHow To & ドキュメント。巻末には、映画館・入場者数の推移、各年度興業記録、10大ニュース、キネマ旬報ベスト10なども収録し、資料性も高い本となっております。

プロデューサー業総論 ―原正人（「乱」「不夜城」）
日本映画プロデューサーの現在
増田久雄（「ラヂオの時間」）
仙頭武則（「萌の朱雀」「リング」「らせん」）
西村隆（「20世紀ノスタルジア」）
桝井省志（「Shall we ダンス？」「がんばっていきまっしょい」）
森昌行（「キッズ・リターン」「HANA－BI」）
国際映画をプロデュースする日本人
井関惺（「クライング・ゲーム」「スモーク」「始皇帝暗殺」）
独立プロダクションの経営とは ―桝井省志
ドキュメント　映画「完全なる飼育」プロデュース密着取材
1970年以降の日本映画プロデューサー ―大高宏雄・黒井和男
サンダンス・フィルム・フェスティバル・イン・トーキョー97
インディペンデント・プロデューサー・セミナー講演録
アメリカのインディペンデント・フィルム・メーカーの状況
期待されるプロデューサー像

キネマ旬報社編
好評発売中
A５判■240頁
定価2000円＋税

株式会社キネマ旬報社　お求めの際は、お近くの書店もしくは小社営業部（03-3815-7131）までご注文ください。

THE 2nd KINEJUN PRODUCER SEMINAR
第２回キネマ旬報　プロデューサー・セミナー

1998年11月29日（日）9：00～18：00　池袋コミュニティカレッジ

参加パネラー

井関惺「始皇帝暗殺」　一瀬隆重「リング２」　河井真也“Peach”「BEAT」
佐谷秀美「アンラッキーモンキー」　李鳳宇「のど自慢」

「のど自慢」上映／インディペンデント作品「のど自慢」にみる、大映画興行会社との関係／国際合作プロデュースの実際／映画を中心としたソフトの企画開発／参加者企画のデベロッティング／交流パーティ

キネマ旬報社では、プロデューサーを目指す方々の為に、「第２回キネマ旬報　プロデューサー・セミナー」を開講します。このセミナーは、昨年の“サンダンス・フィルム・フェスティバル”に続くもので、内外で活躍するプロデューサーを講師に招き、映画製作の現状、ケース・スタディの具体例を解説すると共に、参会者の企画の検討も行うなど、新しいタイプのセミナーです

参加お申し込み及びお問い合わせは、キネマ旬報社・映像事業部まで　TEL 03-3815-7131/ FAX 03-3815-7139

Digitized by Google

キネマ旬報社・編

FILM FESTIVAL & MOVIE AWARD DATA BOOK

映画賞・映画祭データブック

キネマ旬報
臨時増刊
キネマ旬報
1998年11月2日号
No.1270

映画祭・映画賞　受賞一覧
アカデミー賞
ゴールデン・グローブ賞
カンヌ映画祭
ベルリン映画祭
ヴェネツィア映画祭
キネマ旬報賞
ブルーリボン賞
毎日映画コンクール
日本アカデミー賞

FILM FESTIVAL & MOVIE AWARD DATA BOOK

映画界年表
世界の主な映画祭
映画祭早見表
フランス・シネマ大賞
ニューヨーク映画批評家賞
ルイ・デリュック賞
カルロヴィ・ヴァリ映画祭
ベルリン国際映画祭
ジャン・ヴィゴ賞
モスクワ映画祭
ジョルジュ・サドゥール賞
東京国際映画祭
アヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭
サンダンス映画祭
映画芸術ベストテン・ワーストテン
ぴあテン&もあテン
報知映画賞
横浜映画祭

キネマ旬報社

Digitized by Google

平成10年11月15日 発行 第1271号（月2回1日15日発行）通巻2085号 昭和25年11月25日第3種郵便物認可

インタビュー：永瀬正敏／ジョージ・クルーニー 来日！

キネマ旬報

KINEJUN

11 1998 NO.1271 11月下旬号

EAC
JAN - 5 1999
HOOVER

巻頭特集

X-ファイル ザ・ムービー

インタビュー
クリス・カーター、ロブ・ボーマン

「X-ファイル」は
何故アメリカで大ヒットしたか

対談　品川四郎×渡辺麻紀

「X-ファイル」を知るキーワード
事件・TVシリーズ完全データ ほか

トゥルーマン・ショー

インタビュー
ピーター・ウィアー監督、
ジム・キャリー、エド・ハリス

落下する夕方

インタビュー
合津直枝監督

始皇帝暗殺

インタビュー
葛悧、陳凱歌監督、李碧華、
張曼玉、王志文

ジェラール・フィリップ映画祭

まだまだ続く 踊る大捜査線 THE MOVIE

第55回ヴェネツィア国際映画祭レポート
齋藤敦子

FACE：永瀬正敏

インタビュー：尾藤桃子／長曽我部蓉子／
ハーモニー・コリン／野村恵一／
たむらしげる／大河内奈々子／吉行由実

好評連載：橋本 治
「嘘つき映画館 シネマ・ほらセット」

連載対談　和田 誠×三谷幸喜
「これもまた別の話」：「薔薇の名前」（後編）

Digitized by Google

世界が震撼、衝撃のNo.1大ヒット!

謎につつまれた
想像を絶する、もう一つの未来。

Xファイル™
ザ・ムービー

20世紀フォックス映画提供
デイビッド・ドゥカブニー
ジリアン・アンダーソン
音楽マーク・スノー
製作／脚本クリス・カーター
監督ロブ・ボーマン

真実は映画館で明らかになる　12月5日(土)、東京日比谷映画 大阪梅田スカラ座他全国ロードショー

最強の敵、最後の変身。
新モスラ3部作完結篇

最高の恋のお相手は、意外な人
ジェニファー・アニストン　ポール・ラッド

私の愛情の対象

製作総指揮ニコラス・ハイトナー　脚本ウェンディ・ワッサースタイン
製作ローレン

Digitized by Google

Digitized by Google

映画屋

その男は、スタッフから離れて一人ぼんやりと立っていた。野球帽にくたびれたジャンパー、私の目に映った彼は暇な見物人だった。その夜、都内の屋外スタジオで私達は、炎の影を映す車の撮影に入っていた。アングルが決められ、リハーサルが進み、いよいよ火を入れるその時、私は彼が暇な見物人ではなかったと知った。スタッフの指示にすばやく火を起す男、"火付け師"。映画の廻りには実に様々な人々がいる。私は少々の驚きと敬意で彼の働きを見ていた。そしてその後、私の中に彼を強く印象づける出来事は起った。「火が全然足りないなー」カメラマンの一声でスタッフの動きが止まった。幅10メートル、高さ2メートルを越す炎である。だがしかし、車に映る炎の影にはその勢いはない。「これ以上は無理ですよ、許可取ってないし……」チーフが返す。若い監督は許可が必要なことさえ知らなかったのだ。スタジオであっても、火薬や強い炎の撮影時には、警察、消防へ予め届け出なければならない。大きな炎を起せば火災と見誤られ消防へ通報が行く。まして住宅の密集する都内のスタジオでは、この火力が限界だろう。申し込んでも許可など下りるはずもない。全ての作業が振り出しに戻った。重い沈黙と疲労がスタッフを包む。「やりましょうよ」彼がぽつりと言った。「やれますよ。なあに、消防や警察が来たら私が2、3日留まってきますよ」彼の目が輝いていた。空気が変わった。"やるか"スタッフ全員の目が彼に応えている。「よし、やろう」監督は決断を下した。夜明けまであと2時間、その場の全員が彼の指示で慌ただしく動く。車を染める烈しい炎を夢見て。1時間後、スタジオの大屋根を越す炎が出現した。私には、炎の前の彼の姿が、やけに大きく見えていた。

「日本映画学校 入学案内」(無料)送ります。

案内書の請求は、住所・氏名・学年(年令)・希望科(映像科・俳優科)明記の上、〒215-0004川崎市麻生区万福寺1-16-30 日本映画学校 キネ旬係まで、ハガキかFAXでお申し込み下さい。TEL.044-951-2511(代) FAX.044-951-2681

学校法人 3年制専門学校
理事長：今村昌平　学校長：佐藤忠男

日本映画学校

学校紹介ホームページ http://www.kawasaki.tao.or.jp/iip/wg/n-eiga/home.html

Digitized by Google

キネマ旬報 1998 NO.1271 11月下旬号

目次

ピンナップ チョウ・ユンファ

巻頭特集 ―― 26

Xーファイル ザ・ムービー

「Xーファイル」は何故アメリカでヒットしたか 池田敏／対談 品川四郎×渡辺麻紀／クリス・カーター インタビュー 訳・構成 小林雅明／ロブ・ボーマン監督インタビュー 鷲巣義明／作品評 田沼雄一／「Xーファイル」人物相関図 平和歌子／「Xーファイル」キーワードAtoX みのわあつお／「Xーファイル」シリーズとUFO事件・映画の系譜 山口直樹／TVシリーズ データ 平和歌子＋編集部／コラム 平和歌子

FACE ―― 15

永瀬正敏●寺本直未

HOT SHOTS ―― 118

ジョージ・クルーニー来日 中西愛子／尾藤桃子 寺本直未／「共犯者」撮影現場ルポ 的田也寸志／ロバート・デ・ニーロとカイル・イーストウッド 細越麟太郎／長曽我部蓉子 中村勝則／「残侠」撮影現場ルポ 山根貞男

特集

トゥルーマン・ショー ―― 52

作品評 黒田邦雄、山田やよい／ピーター・ウィアー監督、ジム・キャリー、エド・ハリス インタビュー 佐藤友紀

落下する夕方 ―― 60

作品評 春岡勇二／映画を訪ねて・番外編 田沼雄一／合津直枝監督インタビュー 編集部

始皇帝暗殺 ―― 79

インタビュー 蒙俐 石子順／作品評 西脇英夫／張凱歌監督インタビュー 石子順／李雪健、張豊毅、王志文インタビュー 石子順

ジェラール・フィリップ映画祭 ―― 99

ジェラール・フィリップの魅力 石原郁子／ジェラール・フィリップ映画への誘い 中条省平／アニエス・ヴァルダによるG・フィリップ 山中陽子

KINEJUN CRITIQUES ―― 66

地球は女で回ってる ●きさらぎ尚

ネネットとボニ ●おかむら良

迷い猫 ●石原郁子

リーガル・エイリアン ●吉田真由美

インタビュー

ハーモニー・コリン ●筒井武文 ―― 72

野村恵一 ●北川れい子 ―― 74

たむらしげる ●寺村摩耶子 ―― 76

大河内奈々子 ●斎藤芳子 ―― 78

吉行由実 ●森山夏之 ―― 183

スペシャル・レポート

「TOKYO EYES」ができるまで（前） ●吉武美知子 ―― 90

ソクーロフ助監督日誌（前） ●宮岡秀行 ―― 92

第55回ヴェネツィア国際映画祭 ●斎藤敦子 ―― 162

パゾリーニ展準備中（1） ●田中千世子 ―― 180

Digitized by Google

GOLDEN CINEMA

ゴールデン洋画劇場　毎週土曜　ヨル9時

フジテレビ

ジョン・F・ケネディの暗殺を
止められなかった男がいた。
そして、暗殺の歴史に新たな
1ページを加えようとたくらむ男がいた。
二人の運命の闘いが、いま、始まった!!!

11.7
ON AIR

ザ・シークレット・サービス
IN THE LINE OF FIRE

ILLUST
eico
nunokawa

（監督）ウォルフガング・ペーターゼン
（出演）クリント・イーストウッド　ジョン・マルコヴィッチ　レネ・ルッソ　ディラン・マクダーモット　ゲーリー・コール　フレッド・ダルトン・トンプソン　ほか

ールデン洋画劇場をご案内する
つのジャンル別キャラクター。

LOVE ROMANCE

COMEDY

HUMAN DOCUMENT

SUSPENSE ACTION HORROR

ANIMATION AND OTHERS

Digitized by Google

新連載・第2回 ── 130
嘘つき映画館　シネマ・ほらセット
橋本治

連載対談 ── 136
これもまた別の話
和田誠×三谷幸喜　「薔薇の名前」（後編）

連載
カミング・オン・スクリーン　日野康一 ── 117
デビュー作の風景　野村正昭 ── 118
百年の夢　山田宏一 ── 120
イラストレーターのいる映画館
第9回・阿部真理子 ── 123
立川志らくのシネマ徒然草　立川志らく ── 127
リレー・エッセイ映画と私　水道橋博士 ── 128
オールモスト・クール　芝山幹郎 ── 132
映画を訪ねて　田沼雄一 ── 134
電影森林　第33回・中島哲也篇 ── 142
映画戦線異状なし　大高宏雄 ── 158
私の映画日誌　井上一馬 ── 166
日本映画時評　第130回「サンセバスチャンの成瀬巳喜男」
山根貞男 ── 168
ちょっとイギリスびいき　大森さわこ ── 175
映画より面白い　西脇英夫 ── 187
TVトラベラー　樋口尚文 ── 191
その場所に映画ありて　田中眞澄 ── 202
ガクノススメ　牧野守 ── 213

キネ旬コラム ── 98
●浅野潤／浦崎浩實
ワールド・レポート98 ── 147
●U.S.A.　濱口幸一　●ON THE PRODUCTION　井口健二
●ASIA　暉峻創三　●JAPAN　●映画界ニュース
映画街 ── 156
●興行短信　竹入栄二郎　●スポットライト　内田達夫
キネ旬ロビイ ── 160
読者の映画評 ── 176
文化映画　渡部実 ── 178
映画の本 ── 186
●山田太一
TVレポート ── 188
●池田敏／豊崎岳彦／望月信夫
サントラ・ハウス ── 192
●賀来卓人
VIDEO, L D & DVD GARDEN ── 194
ケン・ローチ　杉原賢彦　●公開作＆未公開作　丸山尚輝　●2001年ビデオの旅　吉川明利　●アジアのピンキリ　望月美寿　●OVこだわりチェック　中村勝則　●アニメーション＆吹替版　米田由美　●ヴォイス大百科　弓家保則
9月の公開作品
日本映画 ── 206
外国映画 ── 212

キネ旬インフォメーションランド ── 216
シネ・ガイド
劇場招待券プレゼント＆上映スケジュール
愛読者プレゼント

短期連載
「踊る大捜査線　THE MOVIE」
捜査報告書
ＥＸ　撮影日誌・番外編　●進藤良彦 ── 88
映画祭へ向かって ── 143
第７回　国際映画祭での日本映画上映　●林加奈子

COMING　SOON［新作紹介］── 107
●アウト・オブ・サイト
●ダークシティ
●ナイトウォッチ
●宋家の三姉妹
●恋の秋＜四季の物語＞
●キュリー夫妻　その愛と情熱
●カフェ・ブダペスト
●第４回アートドキュメンタリー映画祭
●知らなすぎた男
●ブリーチング
●かさぶた
●７本のキャンドル
●ハードメン
●N.Y.殺人捜査線
●インフィニティ無限の愛
●フレデリック・ワイズマン映画祭
●鯨捕りの海

試写室 ── 170
闘う映画人の記録　山口猛

劇場公開映画批評 ── 171
プライベート・ライアン　森卓也、鬼塚大輔
原色パリ図鑑　野村梓
アイス・ストーム　中西愛子
マルセイユの恋　杉原賢彦
狂わせたいの　森直人
学校Ⅱ　佐藤忠男
ベル・エポック　村岡良昭

日本映画紹介 ── 203
愚か者　傷だらけの天使
しあわせになろうね
ＢＥＡＴ
岸和田少年愚連隊・望郷

外国映画紹介 ── 207
ザ・グリード
シークレット　嵐の夜に
草原とボタン
ドレス
ノーウェア
ブギーナイツ
北京のふたり

今号の執筆者紹介 ── 214
次号予告＆編集後記 ── 222

Digitized by Google

文藝春秋の話題作〈好評発売中〉

吉永小百合と渡 哲也。
これがこの男と女にとって
「最後の恋」に
なるかもしれない。

11月14日(土)より
東映系にて
全国ロードショー!
●監督　澤井信一郎
●主演　吉永小百合、渡 哲也

時雨(しぐれ)の記

文藝春秋刊行の原作

時雨の記〈新装版〉

中里恒子

単行本●本体価格1262円
文春文庫●本体価格438円

二十年ぶりの再会が二人の心に火を灯した——。
初老の実業家と、夫と死別して独りで生きる女性。
命を限りに燃え上がる恋を美しく典雅に描く

ダークでパワフルな〈'50年代ロス裏面史〉

LAコンフィデンシャル上下

ジェイムズ・エルロイ

小林宏明＝訳
単行本●本体価格各2136円
文春文庫●本体価格各571円

映画化話題作!

暴力、猟奇殺人、密告……悪と腐敗が渦巻くクレイジーな街の現実を三人の警官を通して描くハードボイルド連作!

第三次大戦勃発の恐怖。恐るべき真実の物語

敵対水域

ビデオ化話題作!

ピーター・ハクソーゼンほか

三宅真理＝訳
●本体価格1714円

十二年前バミューダ沖で火災を起こして沈んだ旧ソ連原潜事故の真相を旧乗組員が明かす衝撃のノンフィクション

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23 TEL.03(3265)1211(代) 文藝春秋 ●数字は本体価格です。定価は別途消費税がかかります

Digitized by Google

心で、愛しぬく。

吉永小百合
佐藤友美
原田龍二
天宮　良
岩崎加根子
細川直美
裕木奈江
林　隆三
渡　哲也

吉永小百合と
渡　哲也。

これがこの男と女にとって
「最後の恋」に
なるかもしれない。

企画　黒澤　満
村上光一

全国東映系公開

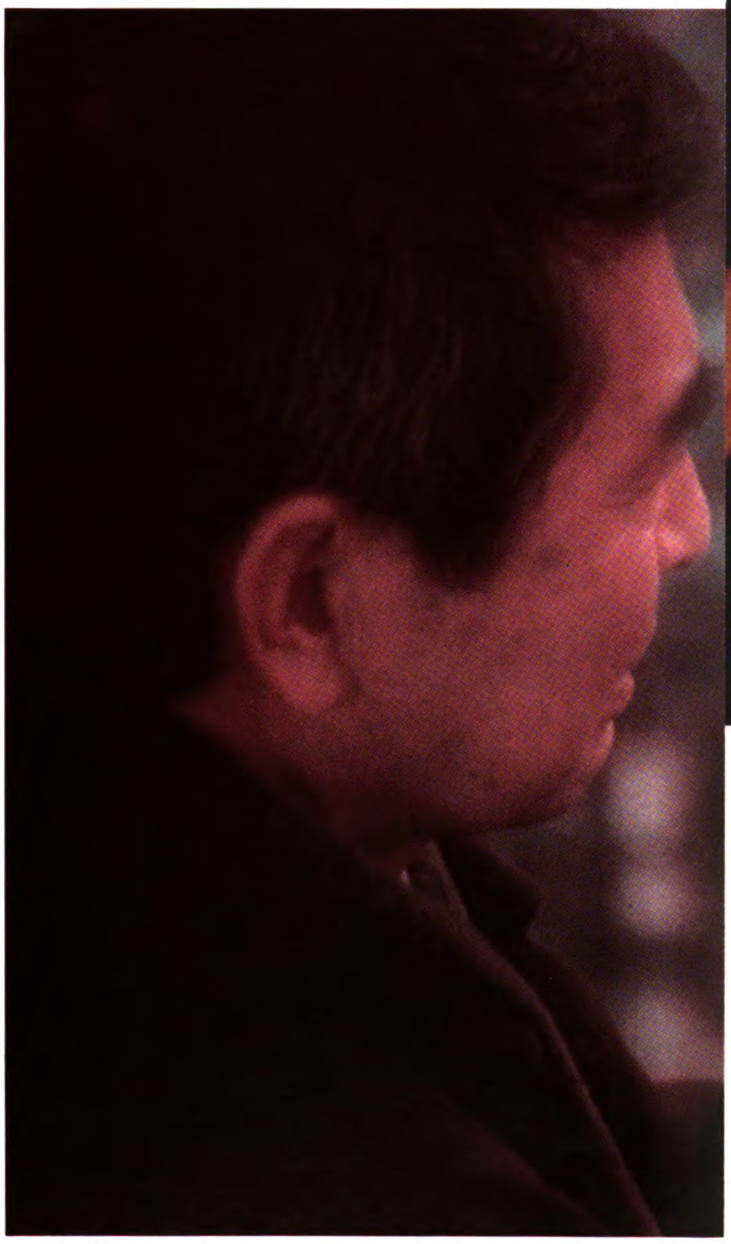
Digitized by Google

時雨の記

しぐれのき

監督　澤井信一郎

原作　中里恒子（文藝春秋刊）



脚本　伊藤亮二
　　澤井信一郎
撮影　木村大作
美術　桑名忠之
音楽　久石　譲（オリジナルサウンドトラック日本コロムビア）
製作　セントラル・アーツ
　　フジテレビジョン
　　東映ビデオ
配給　東映

11月14日(土)

Face

永瀬正敏

何も言わない何もしない男のただならぬ存在

インタビュアー　寺本直未
撮影　吉岡誠

「誘拐」(97)以来、実に1年半ぶりに、永瀬正敏の出演作が公開されるのである。その間、初監督作品(「KUTSU TAKE2」)を撮って、それがイメージフォーラムに出品されたり、クリストファー・ドイルの被写体(写真)としてL.A.へ渡ったり、アレックス・コックス監督の「スリー・ビジネスマン」にゲスト出演する等の活動は窺えたものの、やはりスクリーンで対峙できることは、特別に嬉しい。

「中島(哲也)監督とは『J-PHONE』のCMで組んでいて、感覚的に通じる人だな、という印象を持っていました。とても映画的なCMでしたし。監督の前作『夏時間の大人たち』も大好きで、思わず見終えた直後に、鉄棒へ逆上がり

Digitized by Google

（劇中のエピソード）をしに行ったほど（笑）。素直に感動しましたね」

とはいうものの、「夏時間の大人たち」と「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ Ｓｕｎｄａｙ」は、全く方向性の異なる作品である。

「強くてたくましい女、弱くてみじめな男」（プレスの中島監督メッセージより）というキャラクターの骨格は共通しているものの、この新作の方が、より中島哲也という人の変化球のなせる技を追及して、観客を選ぶタイプの作品に仕上がっている印象を受ける。

「昨年末、この「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ Ｓｕｎｄａｙ」の脚本とともに、出演依頼のお話しをいただきました。ホンの第一印象は、実に広介という男は何もしないんだな、ということと、普通は次にこう来るでしょう、みたいなところが、全てハズされている、ということですか……。あとは、キャスティングにもとても魅かれました。山崎努さん、ヨネヤママコさん、岸部一徳さんというメンバーですから。芝居で絡むところが残念ながらなかったんですけど、気になって仕方がなかったですね」

永瀬さん演じる広介は、子供向けの特撮ＴＶ番組の構成作家、という役どころで、仕事する場面はチラリとも登場せず、倦怠感の漂う妻（尾藤桃子）との会話もさしてないまま、ひたすらボーッとした日常を送るのである。グランドホテル形式、とでもいうか、東京のとあるマンションの奇妙な住人のエピソードが一室ごとにくり広げられるこの映画の中で、全体のトーンを決定するのは、永瀬さんと尾藤さん演じる夫婦だといえるだろう。

「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ Ｓｕｎｄａｙ」11月21日より
渋谷シネ・アミューズ イースト／ウェストにて

「クランク・イン前に、監督と尾藤さんと、食事をしながらじっくりと話し合う時間を持ちました。中島監督は、現場では特に細かい指示をされるということは、自分にはなかったように思います。細かな芝居より心の動きを大事にされる方です。ただ、尾藤さん以外の方との芝居の絡みがほとんど無かったので、確かに出来上がりを見るまで、ある種の不安はありました。上がりを見て、納得というか、僕はとても面白い、と思いました」

残念ながら私は現場へ伺えなかったのだけれど、足を運んだ編集者Ｓ氏によれば、映画初出演で果敢に演じることと格闘する尾藤さんのかたわらで、永瀬さんは揺らぐことなく彼女をリードしている印象があったそう。

「夫婦者を演じるのは、初めてなんです。会話の〝間〟はこの作品のポイントだと思ったんですが、尾藤さんはミュージシャンだし、その辺りのセンスに長けていて、とても良かったと思います。僕自身が難しかったのは、中村久美さん（広介を誘惑する怪しい大家）の部屋に入る下りですね。（彼女を）振り切って出る間合いのところは、やや考えました」

役作りって、気持ちをつかむしかない

永瀬さんにしては珍しく、この作品では長髪である。「たまたま伸びていた」のに加えて、やはり仕事をしていない構成作家、と考えると、これでいった方が似つかわしいと判断されたそう。微妙な間をユーモラスに生かす演技は、ジム・ジャームッシュ監督の「ミステリー・トレイン」（90）の彼がふと蘇った。ただいる、という芝居の何げなさは難しいと想像できるが、セットの中で動く中島監督や、美術さんの気配り（部屋の壁のトーンひとつとってもセンシティブだ）を見ているうちに、自然とどうするのかが固まっていったそうだ。

「役作り、ってよく聞かれますけど、まあ、気持ちをつかむしかないですよね。広介は30歳位で妻がいて、というところは自分にも共通しているし、夫婦でいる、という空気みたいなものはわかりますから。それから仕事がない構成作家、みたいな雰囲気の人は周りにもいますから（笑）、そこはわりとわかりやすいですよね。ただ、広介が奥さんに対して、何か言い出すんじゃないか、という気持ちはずっと抱きながら演じていました。でも、何も言い出さない（笑）。その代わりに、ラジオから音楽が流れていたりする訳ですけど、その選曲のセンスもいいんですよね」

筆者は「我が人生最悪の時」（94）の頃から、作品ごとに永瀬さんに取材する機会を得ているが、今回は彼のまなざしが今までと違う、という印象を抱いた。今までの彼は、シャイで自分のことを語る時には口が重い、というタイプと思っていたが、いつもより饒舌で、意気込みみたいなものがひしひしと伝わってくるのだ。この作品にノッていることと、もうひとつには短篇作品を撮ったことが、何かの変化を永瀬さんにもたらしたのではないだろうか。竹中直人さんと映画を見まくり、毎日映画談義にふけっていたことは有名なエピソードだが、いつか永瀬さんは監督をやるに違いない、と思っていたら、ひっそりと、それも軽々とこなしてしまった！

「イメージの断片みたいなものを撮ったんですが、たまたまイメージ・フォーラムの方の目に留まって、出品しないかと声をかけていただいて。嬉しかったですね、はずかしいけど」

この短篇作品はバンクーバー映画祭にも招待されたという。

「まもなく、オーストラリアの女性監督クララ・ロウの作品（豪州で撮影）に入ります。ここのところ間がありましたから、今後は働きますよ（笑）」

Digitized by Google

'66年、宮崎県出身。83年にデビューし、「ミステリー・トレイン」(90)"濱マイク"シリーズ(94〜96)「コールド・フィーバー」(95)「誘拐」(97)など国籍を問わず多彩な作品に出演。音楽・写真の分野でも活躍。

Face

Digitized by Google

INTERVIEW

ジョージ・クルーニー

40年代のハリウッド映画を彷彿とさせる「アウト・オブ・サイト」主演！

ストーリーよりもキャラクターを重視した小説の性質上、映画化は難しいといわれつづけたエルモア・レナード作品だが、「ゲット・ショーティ」「ジャッキー・ブラウン」と、90年代半ば頃から原作のテイストをうまくとりこんだ傑作が生まれている。そのリストに間違いなく加わる一本「アウト・オブ・サイト」をひっさげて主演のジョージ・クルーニーが来日した。

「僕自身レナードの大ファンで彼の作品はほとんど読んでるよ。一番好きなのは『スティック』。映画はいまひとつだったけどね。『アウト・オブ・サイト』は、まずスコット・フランクの脚本がすばらしかった。キャグニーとかボガードが出ていた40年代のハリウッド映画を彷彿とさせるんだ。今、映画はイベント化されてしまってこのての作品がつくられるのは珍しい。キャラクターにも惹かれたし、ぜひ挑戦したかった」

昨年話題を呼んだバットマン役は映画俳優へのブレイクではあったけど、本当は好きじゃなかった、と明かすクルーニー。今回はシナリオ、監督、共演者三拍子そろって恵まれ、最高の仕事ができたようだ。

「スティーヴン・ソダバーグは、撮影中自分のビジョンを全然話さないんだ。どんなふうになるのかさっぱりわからず演技して、出来上がってみるとすばらしいものになってる。彼はディレクターというより真のフィルムメーカーだね。僕も監督をやってみようかな、なんて思ってたんだけど、彼と組んでみてとても自分には無理だと思ったよ。ジェニファー・ロペスはアル中でね（笑）。というのは冗談で、年齢よりもずっとしっかりした賢い女性だよ。彼女と車のトランクに閉じこめられるシーンや、バーで会話を交わすシーンがロマンティックで気に入っている。僕は女優運がすごくいいんだと思う」

冗談をあちこちに散りばめて茶目っ気たっぷりのクルーニーに、セクシーぶりを讃える女性記者がその秘訣を質問すると、君飲んでるね、とジョークを一発。さらに、秘訣はいいパブリシストをもつことさ、と答え場内を笑わせた。ハリウッドの第一線へ躍りでるまでに長い下積み時代を過ごした遅咲きのスターは、今の輝かしいポジションをどう受けとめているのだろう。

「僕が33歳でブレイクできたのはひとえにラッキーだったから。ちょうどその頃、僕の年齢にあう役がうまくあいていたんだ。既に活躍中の人たちは10歳くらい上なわけだからね。自分がどうこうしたいとか、時代がどうこう変わったとかいうんじゃなくって、これはもうタイミング、運だよ。今、これだけチャンスが巡ってきてるんだから、この数年は一週間七日休みなく働いて、がんばってるよ。バケーションなんて僕のキャリアが終わってから考えればいいんだし。多分もうすぐだろうけど」

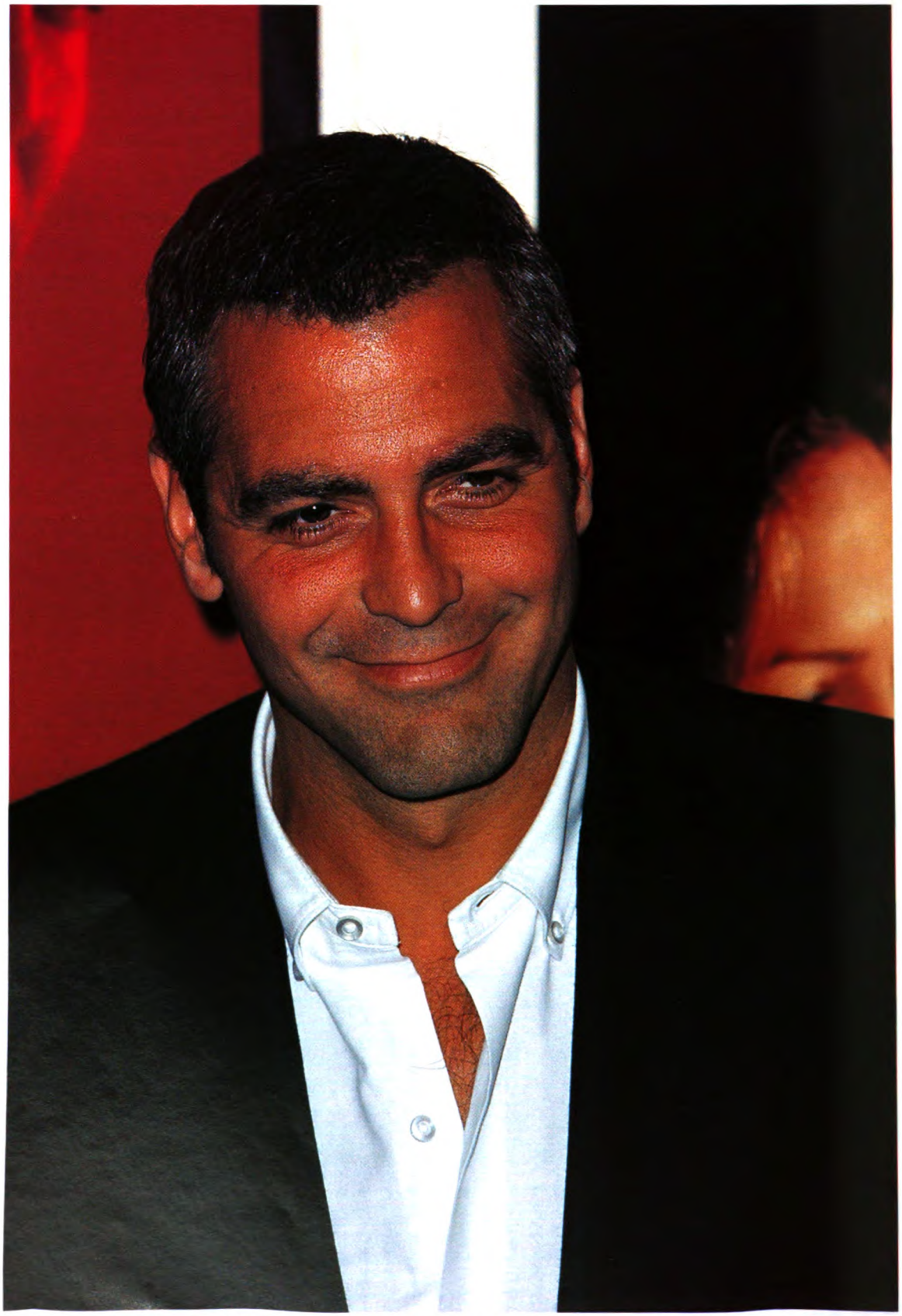
クルーニーのジョークには自分自身をちゃかすものが多い。次作「THREE KINGS」というブラック・コメディでは、サイコパス役に挑戦。これでキャリアも終わりかな、などと受け狙いで言葉尻にそえるあたり、ハリウッドの綱渡りを楽しんでいるようでもある。苦労人ならではの気遣いとおおらかな物腰が印象的だった。

［中西愛子］

「アウト・オブ・サイト」11月21日より日劇プラザほか東宝洋画系にてロードショー

撮影／池田英俊（左）

Digitized by Google



1961年生まれ。祖父のホセ・フェラーをはじめ芸能一家に生まれる。「ER 緊急救命室」で人気者に。代表作は「素晴らしき日」「バットマン&ロビン」ほか。

Digitized by Google

INTERVIEW

尾藤桃子

「Beautiful Sunday」で主演デビュー!!

撮影／吉岡誠

75年生まれ。高校時代から音楽活動を始め、9月には『Ru Tu True』でCDデビューを果たした。CMでも活躍中。

複雑なニュアンスが魅力の「Beautiful Sunday」で、堂々と映画初出演をこなした尾藤桃子さん。お名前や顔立ちからうかがえるように、歌手・俳優の尾藤イサオさんのお嬢さんで、中学生の時にNHKのドラマに出演、高校時代はソウル系のバンドを組んでいた、という、まさに芸能家庭に育った申し子のような才気を感じさせてくれる。

「中学生の時にドラマに出た段階で、歌も芝居もやりたい、という思いはあったんですが、当時は父に反対されました。(学業と仕事を)両立できる性格ならいいんですが、私はのめり込む性質なので、『とりあえず学業を! やりたいことは、後々やればいいから』と言われたのを覚えています」

映画好きで音楽好きなお父さんからは、多大な影響を受け、やることなすこと似ていらっしゃるそう。現在23歳の尾藤さんは、『Ru Tu True』でCDデビューされた他、CMでも活躍中だ。

「中島監督に初めてお会いしたのは、去年の11月ですが、とにかく第一印象は存在感の大きい方で、目の前にいるだけで圧倒されたことが印象に残っています。

中学生の時は役作りなど、なにも考えずに、ただ言われたままにやっていましたから、今回初めて、小夜子という人物が、何を考え、どんなトーンの人間なのか、ということを考えました。わからないことだらけで、台本を読めば読むほど、頭の中がゴチャゴチャになったんです。クランク・インの前に監督と永瀬さんとお食事をした時に私は質問攻めにしたんですが(笑)、おふたりからいわれて肩の荷が下りたのは、『こういうことに、正しいとか、間違っているとかはない』という言葉でした。現場に入ってからは、とにかく好きに演らせていただいたと思います」

中島ワールドのオフ・ビートなリズムを、尾藤さんは実に上手く掴み、体現したと思う! 今後の活動にも注目の個性派なのだ。

[寺本直未]

「Beautiful Sunday」11月21日よりシネ・アミュース イースト／ウエストにて

Digitized by Google

現場ルポ

「共犯者」

竹中直人、小泉今日子、内田裕也主演作の熱気

「BE-BAP HIGHSCHOOL」「鉄と鉛」に続く俊英きうちかずひろ監督の最新作「共犯者」が、現在順調に製作されている。これは、きうち監督の実質的監督デビュー作である東映Vシネマの快作「カルロス」の主人公、ブラジル出身殺し屋カルロスを銀幕にて大暴れさせようというハードボイルド・アクションで、カルロス役の主演・竹中直人の熱烈なラブコールによって実現したものでもある。しかも共演は、ふとしたことからカルロスと知り合い、行動を共にすることになる人妻に小泉今日子、カルロスの命を狙う殺し屋に内田裕也という豪華な布陣だ。

9月23日、都内の撮影現場にて行われた記者会見では竹中、小泉、きうち監督の3名がそれぞれ抱負を語った。

竹中「きうちさんとどうしてもアクション映画をやりたかった。今回のカルロスは以前より大人。小泉さんと裕也さんがご一緒だから、大人にならないと（笑）。理想のキャティング、完璧です。静かに進行している現場の中、拳銃を日常にしていく作業が面白い」

小泉「今までやったことのない普通の主婦役、ぜひやってみたかった。恋愛とは違う信頼を感じあえるカルロスは存在感ありますし、竹中さんはかっこいい」

きうち「今まで女性の出て来ない作品ばかりでした。『JOKER』（東映Vシネマ）も“女性”というより“相棒”という感じでしたので、今回はびびりながら入ったんですけど、小泉さんのおかげで助かってます。全体として痛みを感じる作品に仕上がれば」

後日、冒頭に特別出演のマコ岩松さんのコメントもいただけた。「『秀吉』を観ていたので、竹中さんのことは知っていました。今回少しだけど彼と共演できて嬉しい。これからも日本映画に積極的に出演していきたい」とのこと（既に篠田正浩監督の「梟の城」に秀吉役で出演が決まっている！）。

「共犯者」は現在クランクアップし、年内完成、来年4月東映系にて公開予定。

［的田也寸志］

Digitized by Google

INTERVIEW

親孝行なふたり

ロバート・デ・ニーロとカイル・イーストウッドの来日。

『ロバート・デ・ニーロ・シニア展』の案内をもらった時まで、あのデ・ニーロの父親が画家だなんて知らなかった。10月2日午後4時、会場の銀座8丁目の吉井画廊でパーティがあるので行ってみた。驚いたことに、俳優で息子のロバード・デ・ニーロが、ちゃんと会場にいて、客たちに絵の説明をしているのであった。それは「ヒート」や「ディア・ハンター」の役者というよりは、真摯な画商を演じている男であった。ジョン・フランケンハイマーの新作「ROININ」がヒットしているので、そのことを尋ねると、彼はわたしを壁のところまで案内して「悪いけど今日は父のパーティなんだ。映画のことは別の時にしてくれないか」と小声で囁いた。わたしは失礼を詫び「大いなる遺産」ですね、と言うと、彼は人指し指でシーッと言い、わたしを指差して「シュア!」と笑ったのである。

クリント・イーストウッドの長男がジャズのベーシストだということも知らなかった。初アルバム『フロム・ゼア・トゥ・ヒア』の発売キャンペーンで来日したので恵比寿のウェスティン・ホテルで会ってみた。父親同様の長身にして好漢である。「クリントのことを尋ねてもいいか?」と訊くと「シュア!」と、こちらは平気であった。「だってジャズの道に入ったのも父の影響だし……」と素直である。「子供の頃から父の映画にも何度も出てるんだ」と言うので「息子の見た父のベストは?」と訊ねたら「アウトロー!」と即答した。

[細越麟太郎]

画商として来日したロバート・デ・ニーロ。

クリントの長男、カイル・イーストウッドはジャズ・ベーシストとして活躍中。

Digitized by Google

撮影／雪松覚

「迷い猫」

INTERVIEW

長曽我部蓉子

新作「迷い猫」に主演

73年2月22日生まれ。95年、「獣たちの性宴・イクときいっしょ」でデビュー。近作に「のど自慢」「リング2」など。

この11月7日より渋谷ユーロスペースにて一般公開されるサトウトシキ監督作品「迷い猫」で、人妻と娼婦という二面性を持つヒロイン・桂子役に扮している長曽我部蓉子。ここ2年で多数のOVやピンク映画で頭角を現わし始め、まさに知る人ぞ知る個性派女優として注目の彼女だが、実は本格的な映画主演は今回が初めて。もともと本作はサトウ監督が長曽我部蓉子への“あて書き”として始動させた企画でもある。

「ごく普通の主婦が何も満たされない毎日に疲れて主婦売春に走り、あげく夫殺しに走ってしまうんですけど、でも桂子は決して異常な環境で生きているわけじゃなく、日常生活もごく普通の女の人と変わりないと思うんです。そんな桂子の日常を考えながら演じたんですけど、やはり人を殺したことがないというのが私の中で大きくあって、それでどこまで桂子に迫れるかというのが今回の課題でしたね」

物語は雑誌記者（平泉成）のインタビューを受けるという対話形式で、桂子自身によって語られていくわけだが、それが進むにつれ変わっていく長曽我部蓉子の表情も魅力的だ。「撮影している時はあまり意識しなかったんですけど、顔が変わっていくよねって言われて、私も完成した作品を見て初めて知ったんです（笑）。なかでも平泉さんとの喫茶店の対話シーンは順を追って撮っていたので、今にして思えばそれで自然に桂子になれたのかなって気がします。特に自分が罪を犯したことへの確信に触れていくくだりでバナナジュースの話しをするところがあって、そこは桂子の気持ちが切り替わっていく部分も含まれているので私の中でも強く残ってますね」

どちらかといえば、これまで陰のあるシリアスな役を演じることが多かった彼女だが、「機会があればコメディにもぜひトライしたい」とのこと。またそこで長曽我部蓉子の新たな一面が見られることにも期待したい。 ［中村勝則］

※「迷い猫」は11月7日よりユーロスペースにてレイト

Digitized by Google

現場ルポ

任侠映画という夢に賭ける

「残侠」の撮影現場を訪ねて

あの俊藤浩滋プロデューサーが五年ぶりに新作をつくった。それも正真正銘の本格的な任侠映画を。

いきなり〝あの〟と書いても話が通じないかもしれないが、俊藤浩滋は一九六〇年代から七〇年代にかけて一世を風靡した東映任侠やくざ映画の生みの親である。鶴田浩二の「博徒」「博奕打ち」シリーズ、高倉健の「日本侠客伝」「昭和残侠伝」シリーズ、藤純子の「緋牡丹博徒」シリーズなどなど、ファンを熱狂させた映画は、すべてこの人の采配で生まれた。その後、東映が〝実録路線〟に移行してからも、「日本の首領」シリーズなど独自の作品をつくりつづけてきた。これまで手がけた映画はざっと三百本。〝やくざ映画のドン〟とも呼ばれる所以である。

いま、そんな伝説のプロデューサーがあらためて本格任侠映画を世に出す。

題して「残侠」。

タイトルから明らかなように、任侠道に生きる男と女をめぐる闘いのドラマで、さきほど挙げた六〇年代の鶴田浩二や高倉健や藤純子の主演作に連なる。

度胸も腕っぷしも人一倍の若者が、戦中から敗戦直後にかけての京都で、渡世の修行を重ねて一家を構え、宿敵と闘いつつ、任侠の男として成長してゆく。古典的な侠客物語だが、それを彩る細部がスゴイ。きっちり作法どおりに切られる仁義。一宿一飯の恩義のために敵陣へ一人で斬り込む一匹狼。その陰で涙をこらえる身重の女房。貧しさと差別に対して怒る任侠心。父の仇を探して流浪する女博奕打ち。彼女と主人公の無言の愛。ひたすら主人公を信じる妻。残忍非道な流れ者。どこまでも卑劣な悪玉一味。敵味方にわかれつつも闘いのなかで心を通わす男と男。そしてラストは壮絶な殴り込み……。

初夏、撮影現場を訪れようとシナリオを一読して、呆れた。いやはや、みごとにコテコテの任侠映画、ほとんどアナクロニズムさえ感じさせる映画ではないか。わたしは興味津々で東映京都撮影所へ出かけた。

まずセットで、一匹狼の中井貴一が悪玉の加藤雅也一味に単身斬り込むシーンの撮影を見た。事務所兼キャバレーのなか刺青を背にした中井貴一が、着流しに黒眼鏡の加藤雅也たちを相手に長ドスで暴れ回り、関本

Digitized by Google

中井貴一とアドバイスする俊藤浩滋プロデューサー

郁夫監督のもと、佐々木原保志キャメラマンが二台のキャメラでそれを追う。

おなじみの場面ではあるが、何かが違うとわたしは思った。任侠映画の定型シーンであり、珍しくはない。だが、血みどろになってゆく中井貴一やクールな悪玉役の加藤雅也の長身の軽やかな動きを見ていると、〝いま〟が感じられる。古めかしいドラマに新しい空気が吹き渡っているのである。

翌日、鴨川土手のロケで主役の高嶋政宏の姿を見たときにも、同じことを感じた。土手に建てられた闇市のセット周辺で、主人公が仲間とともに無法な一団と闘う。その素早さと精悍さには、敗戦直後の若者を演じる高嶋政宏の〝いま〟が沸き立っていた。

闇市のおでん屋の屋台で、高嶋政宏が目を輝かせて語る。

「ボクらには一種の時代劇ですね。この映画は。ただ、本格的な侠客をやりたかったんですよ。何か、こう、日常的なものへの不満があって。だから楽しいし、そこがお客さんに伝わってほしい」

中井貴一は「激動の1750日」「極道戦争・武闘派」と俊藤作品に出ているが、それらは現代の暴力団抗争劇で、やはり侠客ものをやりたかったと語る。

「組織化されたやくざではなく、任侠道に生きるやくざを、ね。俊藤さんのつくられた任侠映画をビデオで見て、見返りを期待しない思いやりに感動した。現実にはありえない男の美学で、だからカッコいい。まあ時代劇ですからテレないで楽しくやれますね」

一週間後、ふたたび現場を訪れた。大ステージの一角に奴蔵があり、中に賭場がつくられている。まるで緋牡丹お竜のような姿の天海祐希が博奕の札を操り、ビートたけし・そのまんま東・本田博太郎の悪党三人組みがインチキをやらかし、彼女や高嶋政宏相手に立ち回りをくりひろげる。そこにも新しい空気が面白く吹き渡っていた。

撮影現場にはいつも俊藤浩滋プロデューサーがいる。片隅に静かに座って。そして、ときおり立って関本監督に近寄り、小声で意見を言う。何かが微妙に変わってゆく。

俊藤プロデューサーは語る。

「今回のシャシンは、暴力団の殺し合う実録ものとは違うて、正統派やくざの任侠ドラマです。古いと感じられるかもしれんが、映画の原点、夢とロマンがあるはず。それを任侠映画の匂いのない人たちでやってみた。高嶋政宏君や中井貴一君がビデオで任侠映画を見て感動しているように、いまの若い人にも面白がってもらえると思う。ああ、ええなあ、と感じるのは、いつの時代も同じではないでしょうかね」

任侠映画という夢に賭ける名プロデューサーの情熱が、さて、どんな反響を巻き起こすか。

「残侠」は、俊藤浩滋の率いる藤映像コーポレイションの作品で、来春二月に東映系で封切られる。出演はほかに松方弘樹、高橋かおり、水野真紀、中条きよしなど。[山根貞男]

Digitized by Google

Digitized by Google

ＵＦＯ、地球外生命体、政府の陰謀、軍事機密、心霊現象、超能力、民間伝承――既存の常識や科学でははかり知れない様々な事件の解明に取り組む、アメリカ連邦捜査局（ＦＢＩ）の特別セクション〈Ｘ－ファイル〉課。全米を、日本を、そして世界を興奮させたＴＶシリーズ「Ｘ－ファイル」が、より壮大なスケールとなって、スクリーンに登場する。これまで未解決であった謎がこの映画版で明らかになっているという噂は、果たして本当なのか。いや、そもそもこんなにも熱狂的なファンを生み出した「Ｘ－ファイル」とは、一体どんな作品なのか。映画版とＴＶシリーズの両方の世界にアプローチする。

Digitized by Google

「X-ファイル」なぜ
アメリカでヒットしたか

“リアリズムの構築”が90年代のキーワード

池田敏

わが国ではセンセーショナルに語られるTVドラマ「X-ファイル」だが、本国アメリカのTV界でも番組開始当初はまずカルト番組と位置づけられた。事実、まだ第1シーズンの平均視聴率は、わが国で報じられたような高視聴率どころか、むしろ低視聴率にとどまっている。それでも「セカンド」に継続されたのは、第四の全米ネットワークをめざした（そして今や定着した）新参局FOXのバクチだった。それでもわが国と異なり、月～木曜に人気番組が編成される全米TV界で、「X-ファイル」はまず金曜夜に編成された。

そして「セカンド」の年、エンターテインメント・ウィークリー誌から年間ベストTV番組に選ばれ、ゴールデン・グローブ賞TV部門でドラマ・シリーズ作品賞を受賞したあたりから、全米の「X-ファイル」人気はマニア層から一般にまでぐんぐんと拡大した。ここでは「X-ファイル」がアメリカでヒットした理由を、あくまでアメリカTV事情に絞って考察したい。サイコ・スリラー、ニュー・エイジ、コンスピラシー・セオリストといったアメリカのブーム・社会現象と関連づける試みは、もう語り尽くされただろう。

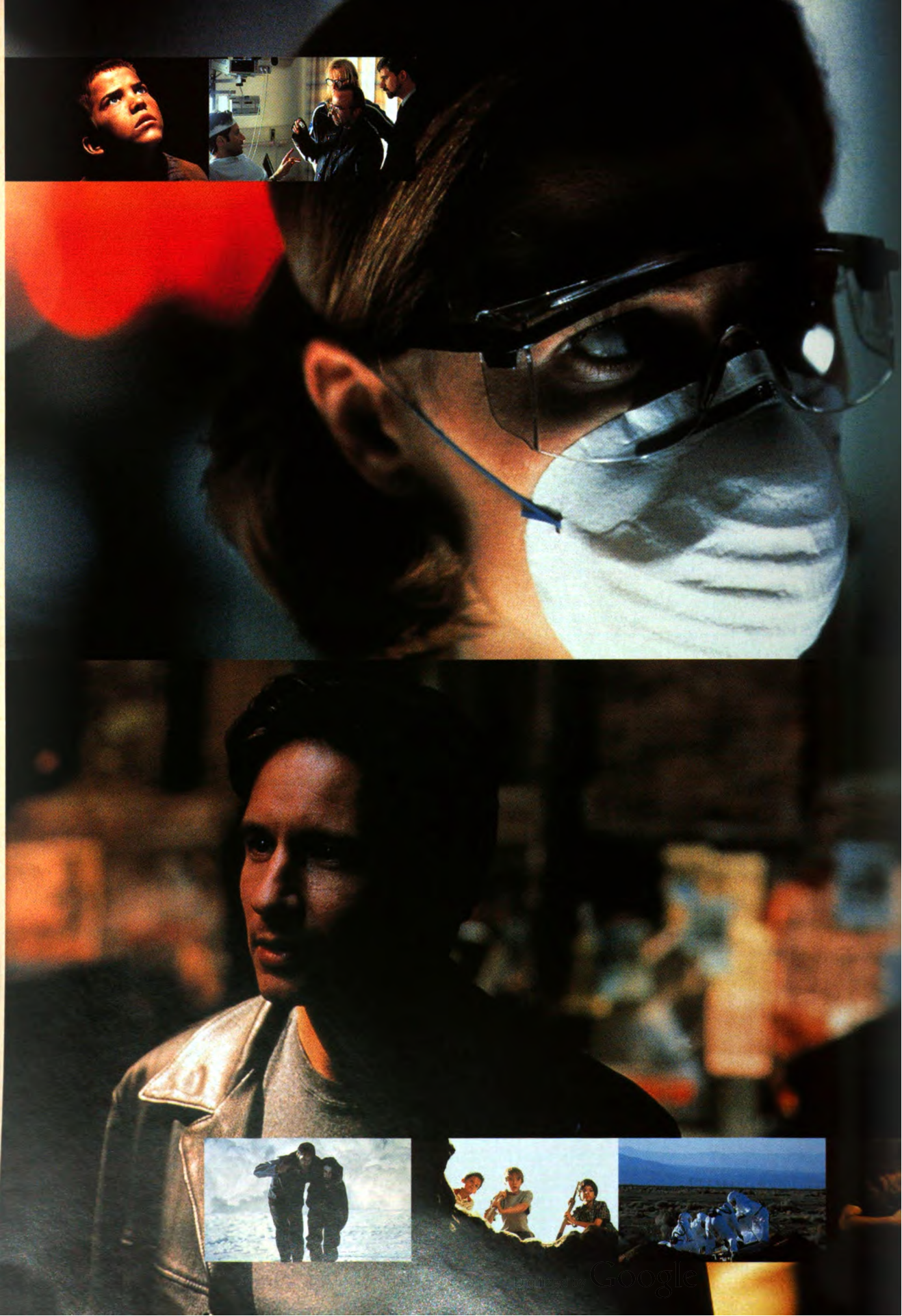
まず80年代のアメリカTV界を見渡すと、〝リアリティ・ショー〟といわれるジャンルの台頭が見逃せない。これは現実の事件・現像を題材にしたエンターテインメント番組を指すもので具体例を挙げると実際の犯罪を再現して容疑者逮捕の協力を視聴者に呼びかけた「アメリカズ・モースト・ウォンテッド」〝America's Most Wanted〟（88年～）、家庭用ビデオの映像で微笑ましい市民生活を紹介する投稿番組「アメリカズ・ファニエスト・ヴィディオウズ」〝America's Funnies Home Videos〟（90年～）などがある。いずれも軽量で廉価なビデオカメラが作られてこそ成立した番組だ。これらは映像ジャーナリズムとも結びつき、ニュース専門局CNNも大成功した。つまり80年代以降、全米のお茶の間には従来のハリウッド産ドラマの人工的な映像と一線を画する、生々しい、リアルな映像が横溢するようになったのだ。

さらにFOXは前出「アメリカズ・モースト・ウォンテッド」の他にも、ジョニー・デップ主演の「21ジャンプ・ストリート」〝21 Jump Street〟（ビデオ題「ロックド・アウト」他）や「ビバリーヒルズ高校（青春）白書」といった青春ドラマ、ブラックユーモアたっぷりのホーム・アニメ「ザ・シンプソンズ」でも、全米で話題になった社会現象を題材に次々に採り入れ、リアリズムに対して最も積極的なチャンネルとなった。

こうしたリアリズムの流行は、80年代の警察もの「ヒル・ストリート・ブルース」に始まる、リアリズム重視型ドラマの隆盛も後押しした。筆者は90年代のアメリカTV界を語る最大のキーワードは〝リアリズムの構築〟だと確信する。93年から「ホミサイド／殺人捜査課」「NYPDブルー」（共に93年～）、「ER／緊急救命室」「シカゴホープ」（94年～）、そして「X-ファイル」（93年～）という、リアリズムが鮮烈な意欲作が立て続けに誕生したのは単なる偶然ではないだろう。

一方、「X-ファイル」はファンを引きつけるディテール・魅力を盛り込んだ快作だが、FBIに極秘の部署があるという

Digitized by Google



Digitized by Google

●1998年・アメリカ・カラー・シネスコ・ドルビーSRD・SDDS・DTS・2時間1分
●監督／ロブ・ボーマン　製作総指揮／ラタ・ライアン　製作／クリス・カーター、ダニエル・サックハイム　共同製作／フランク・スポットニッツ　脚本／クリス・カーター　撮影／ワード・ラッセン　プロダクション・デザイナー／クリストファー・ノワック　編集／スティーブン・マーク　音楽／マーク・スノー　衣装デザイナー／マーリーン・スチュワート　特殊メイクアップ効果／アレック・ギリス、トム・ウッドラフ・ジュニア　視覚効果スーパーバイザー／マット・ベック
●出演／デイヴィッド・ドゥカブニー、ジリアン・アンダーソン、ジョン・ネビル、ウィリアム・B・デイビス、マーチン・ランドー、ミッチ・ピレッジ、ジェフリー・デマン、ブライス・ダナー、テリー・オクィン、アーミン・ミュラー＝スタール、ルーカス・ブラック、ディーン・ハグランド、ブルース・ハーウッド、トム・ブレイドウッド、グレン・ヘドリー
●製作／テン・サーティーン・プロ　提供／20世紀フォックス
●配給／20世紀フォックス
●12月中旬より日劇プラザ他全国東宝洋画系にてロードショー公開
●本誌関連記事／7月下旬号スペシャル・セクション、9月下旬号「『ER』と外国テレビ映画研究」特集、11月上旬号プレ特集「プロダクション・ノート＆スタッフ、キャスト　インタビュー」

ハッタリに、もっともらしい怪奇ネタをまぶした、と書くと意地悪だが、まるでキワ物ドキュメンタリーのような一面もある（わが国のビデオ・メーカーが本当の事件をそっくり再現したかのように誇張したのはウマい宣伝）。だがキワ物の匂いに大衆は敏感であり、こうして惹きつけられた感心が特に95年秋の「サード」全米スタート時、大衆誌までが特集記事を組むほどの国民的ブームに爆発していったのだ。

つまりこの番組はカルトなSFファン向けドラマのようでいて、入口の広いキワ物ドキュメンタリーの要素を併せ持っているという、それが世界的ヒットの最大の理由ではないだろうか。わが国の場合、ゴールデンタイムで放送される海外ドラマが少ないとはいえ、90年代に10%を超える高視聴率を獲得した海外ドラマを、筆者は「X-ファイル」と「新・刑事コロンボ」以外に思いつかない。

後は製作陣を率いるクリス・カーター以下、エンタテイナー精神にみちたスタッフの腕のふるいどころだ。シーズンの最終エピソード（毎年5月頃放送）は〝続く〟で幕を閉じる「X-ファイル」だが、全米の場合、他の番組が9～10月に再開するなか、さらにファンをじらして11月頃、新シリーズは幕を開ける（今年は11月8日）。見どころ・展開も放送まで伏せられ、視聴者のカタルシスは〝解決編〟で一気に頂点へ高められる。そのテクニックはあざやかだ。「シーズン・ファイブ」の年間全米視聴率は全シリーズ番組中・第11位（1時間ものドラマとしては第3位）で、毎週全米1千7百万世帯がこの番組を楽しんだ。

THE X FILES

TM and ® Twentieth Century Fox Film Corporation. All Rights Reserved

Digitized by Google

X－ファイル　ザ・ムービー対談　品川四郎×渡辺麻紀

映画版はクリス・カーターへのプレゼントだった!?

全世界に熱狂的支持者をもつヒットテレビシリーズ「X－ファイル」。放送開始から5年の歳月を経た1998年、ついにファン待望の「ザ・ムービー」が登場する。果たしてこの映画版は「X－ファイル」の研究家である二人の目にはどう映ったのだろうか。映画版の話を皮切りに、「X－ファイル」のディープな世界を大いに語っていただいた。

(注意！　この対談では映画の謎に触れています。初見時のサプライズを大切にする方は作品を観てからお読みください)

雪の中の猿人はモルダーとスカリーの祖先？

品川　注目の映画版ですが、あの瞑想トレーニングみたいなテーマ曲が、胸を張って流れると思ってたら、一小節の半分流れるだけでしたよね、冒頭にさらりと。わざとなんだろうけど、あれは残念だった。

渡辺　タイトル前に猿人の場面で始まるけど、あれには驚かされましたね。新しい人類の話かと思っちゃうよね、未来の。

品川　また、そのシーンが延々と続くでしょう。あの猿人は、モルダーとスカリーの遠い遺伝子の祖先なんですよね。違いますか？　だって、あの時代に猿人が食生活を満たす以外に好奇心を燃やすというのは……。

渡辺　しかも、雪の中を走ってねえ(笑)。

品川　どう考えてもモルダーとスカリーが走って来たとしか思えない。

渡辺　クライマックスも南極の雪ですしね。雪で始まり雪で終わる。3万年前と1998年がホワイト一色で見事につながる。

品川　すべては一編の詩であったと。

渡辺　美しいですねえ。……本当かなあ(笑)。全体的にはどうでした？

品川　決して嫌いではないけど、実はあんまり燃えてもいない。適当な等距離を置いてる感じですね。3週間分の連続スペシャルのような気がして。

渡辺　確かに、テレビのパイロット版の雰囲気はぬぐえないな。私の捉え方は、いままで頑張ってきたスタッフと私たちファンに対するフォックスからのプレゼントという気がするんです。きっとお金をかけてやりたかったんだろうSFXも、6500万ドル以内なら好きなようにやってくれ、文句はいわないとフォックスは言った。どうですか、このよみは？

品川　なるほど。南極は〝サンタクロースの贈り物〟に掛かっていたわけか(笑)。SFXにはどれくらい遣ったんでしょうかね。2千万ドルくらい？　でも、アマルガメイテッ

Digitized by Google

ド（・ダイナミックス）がSFXやってると、雰囲気はもう後期「エイリアン」だね。

渡辺　アマルガメイテッドは、スケジュール的にかなり無理したみたいよ。だけど「X―ファイル」のファンだから仕方なく引き受けた。分かるなあ、その気持ち。今回の私みたい（笑）。

編集部　どうもすみません（笑）。

品川　バーテンダー役のグレン・ヘドリーの特別出演にもびっくりしました。熱狂的なファンだったんで、自らクリス・カーターに売り込んだとか。

渡辺　「ER」のキートン先生が、いきなり出て来て驚いた。「カーター、ピザでも食べない？」って言い出すかと思っちゃった。ブライス・ダナー、グゥイネス・パルトロウのママさん、の場合は出演依頼があったとき「X―ファイル」の大ファンの息子が、〝ママ、出てーっ、出てーっ〟って（笑）。

品川　そんな人たちばかり出てますね。しょうがないなあ。

渡辺　テレビシリーズを見てない人はどうかという話をよく聞きますが、テレビシリーズを一度も見てない私の知り合いは、〝なんのことやらさっぱり〟といってましたね。

品川　確かに閉じてますよね。

渡辺　でも閉じたままで映画が作られるというのもすごい人気だなと思います。アメリカ国内だけで興収8000万ドルいったわけでしょう。おまけに初登場第1位。オンエア中に映画を作ったのは「0011　ナポレオン・ソロ」ぐらいじゃない。

アパートの廊下のシーンはこれぞ「X―ファイル」って感じがしましたね

渡辺麻紀

品川　でもあれはテレビシリーズのエピソードを編集した映画版ですからね。

渡辺　そういう意味では「X―ファイル」が初めてのパターンですか。

品川　「スパイ大作戦」は？　オリジナルストーリーの「薔薇の秘密指令」があったでしょう。確かあれはテレビシリーズ続行中だった。

渡辺　それ、知らないな。でも1位にはならなかったでしょう。

品川　そんな頃の興行の話なんか、分からないよ（笑）。テレビシリーズを露骨に引きずったつくりといえば、「スター・トレック」と同じですね。あれは1作目で失敗したんで、「2」からテレビ路線に変えた。

渡辺　「X―ファイル」もキャラクターにはまってる人には楽しめる箇所が多い。

品川　モルダーのアパートの廊下でおでこにキスするシーン（笑）。

渡辺　そしてキスしそうになる瞬間、蜂に刺されて倒れる。これぞ「X―ファイル」って感じがしましたね。〝ちょっと鼻血が出そう〟みたいな（笑）。さらに、倒れたスカリーにモルダーが人口呼吸をするでしょう。そのやり方でお茶を濁すというのも上手いですね。キスとも取れるし。第6シーズン第5話では反対のパターンがあるんですよ。これはインターネットでの噂なんですけど。

品川　蜂に刺されたスカリーが自らを分析するのも面白い。「運動神経が麻痺してるわ」とか。

渡辺　あの蜂って「支配者」（第4シーズン第1話）で出て来た蜂と同じもの？　それと黒いウニョウニョは「アポクリファ」なんかに出てきたブラック・オイル？　それとも似ているけど別のものなの？

品川　イコールかどうか分からないけど、関係してるものなんでしょう。子供がたかられたときに目が黒くなったでしょう。

渡辺　でも、ブラック・オイルは洗脳するだけで殺さなかったよね。入りこむけどまた出て行く。「ツングースカ」（第4シーズン第9話）でモルダーも実験台にされたりしてね。

品川　そこら辺りのつながりが中途半端なんだよね。シリーズのファンを突き放しているわけでも、完璧に喜ばしているわけでもない。

渡辺　変だったのは、スキナー（ミッチ・ピレッジ）がFBI副長官だという紹介が一切ないこと。私たちは知っているけど。

品川　あれじゃ、ただの審問会の一員だもんね。

渡辺　モルダーとスカリーとは信頼関係でつながっているのにね。

品川　審問会に遅れているスカリーを心配して部屋を出たり入ったりする描写でわからなくもないけど。

渡辺　モルダーが倒れたとき、病院でスキナーといっしょにローン・ガンメンも出てきましね。これも説明なしだった。

品川　ところで、ガンメンとスキナーって面識あったんでしたっけ？

渡辺　あっ、ない！

品川　ないでしょう。一緒に同じ空間にいたらヤバイんじゃないの、立場的にも。FBI副長官と政府の情報を盗聴する民間人なんだから。もし面識が生まれることがあったら、

Digitized by Google

何か重要なエピソードで関係を描いておくぐらいの風呂敷を敷いといてしかるべきでしょう。しかもガンメン、公の場に現れてた。

渡辺　彼ら、友達いないから（笑）。

「それを信じるのがモルダーなんだ」

渡辺　作品としては、結局何も進展しなかったですね。もしかしたら、先の展開を何も考えてないんじゃないのかと思っちゃうくらい。

品川　映画版で初めて登場するマーティン・ランドー（アルビン・カーツウェル）も死んじゃうし。

渡辺　情報をリークする医者の役だけど、そういう人物を出すのはテレビなら許せるけど、映画では禁じ手でしょう。

品川　しかも、最後には死んでしまう。殺さないで以降のシリーズに出してもよかったんじゃない？

渡辺　でも死体は見せてない。

品川　それを言ってしまえば、みんな解釈でどうとでもできるけど、一応は決着がついたでしょう。ジョン・ネヴィル（ウエル・マニキュアード・マン）も死んじゃったしね。これも死体は見せてないけど、車が爆発しているから引田天功じゃないかぎり、普通は死んでる（笑）。

渡辺　ランドーが書いた謎を暴く本に対して「あんな変な本を信じる奴はいないだろ」「いや、それを信じるのがモルダーなんだ」というセリフは、シリーズのファンとしては嬉しかった。でも、モルダーならとっくに読んでるんじゃないの（笑）。

品川　ランドーは死んだけど、本は残ってるわけだ。それだけでも今後出せば面白い。いつの間にかモルダーの部屋にランドーの本がちゃっかり並んでるとか（笑）。

渡辺　いいですねえ。でも、映画版はオタク心をくすぐる箇所は意外と少なかった。短期間で作らなくちゃならなくて、余裕がなかったのかな。

品川　ストーリーの原案を練り始めたのは第2シーズンの頃だと言ってますけど。

渡辺　でも、テレビシリーズも同時に考えなきゃいけないから、楽々というわけではなかったみたいよ、辻褄も合わせなくちゃならないし。

品川　そういえば、テリー・オクイン（ミッショー捜査官）も死んでしまった。あの事件はもっと突き詰めなきゃいけないんじゃないの。ただ座ったままで死んでしまって。

渡辺　ほとんど顔見せ。でも、あの爆破シーンはすごかったですね。

品川　「GODZILLA」のビルを手掛けた連中ですよ。

渡辺　ああいうのは、やっぱりテレ

Digitized by Google

ビシリーズではできない。それからラストの「ID4」もどきの円盤も。また、スカリーが見てないというのがシリーズのお約束でしたね。

品川　しかし、随所随所に無理な展開があったよね。クライマックスにしてもモルダーは一体南極まで短時間でどうやって行ったんだよ。

渡辺　それで、クレバスにはまった、だけでスカリーがとらわれている場所に行きつくでしょう。あそこは円盤だったの？　それとも基地だったの？　位置関係が分かりづらい。

品川　基地だとすれば、そのまま潜入できたわけ？　円盤だったとすると排気口だった？　どっちにしても気密性がない（笑）。

渡辺　あんな広い氷原で一発で当たるというのも、ちょっとね……と思うけど。

品川　それは良しとしても、スカリーを救出して、心身喪失状態のまま担いで地上まで昇れるのだろうか、つまらない突っ込みですか（笑）。

渡辺　私も思った。おまけにスカリーはちゃんとソックス履いているし。

品川　裸足のはずなんだから。

渡辺　それどころか、本当はスッポンポンでしょう。ところが、逃げ出すときには洋服を着ている。

品川　羽織ってただけじゃない？

渡辺　きちんと着てた。あれはアメリカでも突っ込まれたみたいで、モルダーは〝僕は3枚重ねで服を着ていた〟って苦しい言い訳をしたそうで。

「X―ファイル」がテレビシリーズの面白さを久々に味わわせてくれた

品川四郎

品川　FBIの新兵器、緊急用防寒着か（笑）。それにワクチン一本打ったくらいで目覚めちゃうし。

渡辺　それはいいんじゃない？（笑）

なぜ映画版はテレビシリーズを捨て切れなかったのか？

渡辺　「X―ファイル」は、「ER」と違って、話が単発というのが売りだったでしょう。だから、モルダーとスカリーとあのテーマ曲を使って、テレビシリーズと全く違う新しい話がいくらでも作れる。でも、映画版はテレビシリーズを捨て切れず、続きをつくってしまった。フォックスもそれをOKした。そこがクリス・カーターへのプレゼントという感じがするんですよ。

品川　テレビシリーズが大ヒットした御祝儀。

渡辺　視聴率がよくない「ミレニアム」が第3シーズンに続くっていうのも御祝儀だと思うのよ。嬉しいですけどね。

品川　まるで「タイタニック」がヒットしてボーナスをもらった（ジェームズ・）キャメロンみたい（笑）。テレビシリーズを捨てた方が初めて見る人にも満足できたのに……。

渡辺　全然違うネタで見たかったですよね。

品川　シリーズが続いている内に作る映画なんだからこそ、それができる。そして映画版は、これからのテレビシリーズのどのストーリーに関係してくるのかとか、あるいはいままでの過去のどれにつながっているのかとか、そういう楽しみができたのに……。しかし、これほど予備知識が必要な映画もないよね。

渡辺　でも私、モルダーのファンだからいいの。……モルダー、可愛い。

品川　……僕、帰ります（笑）。昔から好きだったんですか？　デイヴィッド・ドゥカヴニーは。

渡辺　好みの顔なのよ。あのボーッとした感じ。バンクーバーで本人に取材したんだけど、モルダーそのままの人だった。雰囲気から喋り方、ジョークの言い方まで。〝似てきちゃった〟といってた。

品川　では、渡辺さんが「X―ファイル」にはまったのは、モルダーの魅力で？

渡辺　うん。そうでしゅ。

品川　……ハッ（笑）。

渡辺　呆れないように。いや、最初

Digitized by Google

は全然興味なかったの。某誌で特集するからって、ビデオでパイロット版と「氷」（第1シーズン第7話）を見たんだけど、二つともつまらなかった。

品川　「氷」って「遊星からの物体X」ですね。今回の映画版も「物体X」だったけど。

渡辺　だから、宣伝で煽るほどいいのかねっと思いながら見続けたら、結構面白くなってきて、いつの間にかはまってしまった（笑）。「スクィーズ」（第2話）とか「宇宙」（第8話）はよかったなあ。それと「炎」（第11話）。あれはモルダーのシルクのトランクス姿まで見せる大サービスぶり（笑）。品川さんはどのあたりから？

品川　僕も初めは全然ノーチェック。そうしたら、某誌で紹介することになって、それがきっかけで初めて見たんですけど、やっぱり面白くない（笑）。何も解決しないじゃないのって。「氷」だって、サンダー・バークレーが出てるなんてことで喜んでた。そうしたら、段々モルダーとスカリーのやりとりが面白くなってきた。どうしてここまで素っ気ないのかなと。例えば、事件のきっかけのビデオを見てたりする。モルダーが「これは××××のビデオだよ」と意気揚々と話しかけると、スカリーは鼻にかかった声で"What is it?"って。「あんた、そんなもん買ったの？　郵便代も含めてもったいない」とニコリともしない。

渡辺　この二人の関係は最高。

品川　だからキャメラが回っていないときの現場はさぞ楽しかろうと。映画の中でコンビ組んで5年っていうセリフがあったけど。

渡辺　テレビシリーズのスタートは93年からですから、あってます。私はメインストリームの話より番外編の方が好きなんです。本命話はどうどうめぐりで進まないから。最初はそれもよかったんだけど、そのうちじれったくなっちゃって（笑）。

品川　第5シーズンなんてまさにそうですね、足踏みしている状況。第2、第3のころは少しずつ展開できたけど、これ以上進んだら話が終わってしまう。

渡辺　テレビシリーズは、映画と違っていつまで続くかわからないからね。噂では、第7シーズンまでこのふたりの主人公でつくって2000年の夏に、また映画版が登場すると。「X－ファイル　ザ・ムービー・インベージョン」。だけど、フォックスにとって「X－ファイル」は目玉商品だから、キャラクターを変えて続ける。モルダーの弟と噂されるクリス・オーウェンズが主役になるという話もある。

品川　モルダーと共にFBIがなくなるわけじゃないから可能ですよね。

渡辺　「X－ファイル」は「ER」と違ってはオタク心をくすぐるのよね。例えば、奥さんと上手くいってないスキナーの指から、ある日突然指輪がなくなってる。やっぱり離婚したのかななんて。そういう楽しみがあるでしょ。

品川　「ER」は小さなエピソードがやがて必ず本流の話になってくる。さりげない描写をファンがこっそり楽しむという作りではないからね。逆にいえば、だからあれだけ面白いともいえるんだけど。

渡辺　〝知る人ぞ知る〟という要素は「X－ファイル」の方が多いよね。スカリーが誘拐される「黙示」（第3シーズン第11話）では、犯人の顔が同じフォックスの「ザ・シンプソンズ」のパパによく似てるというセリフがあって、もう大ウケ。私、最低な見方だよね（笑）。

品川　そういう意味では「ツイン・ピークス」と似てますね。

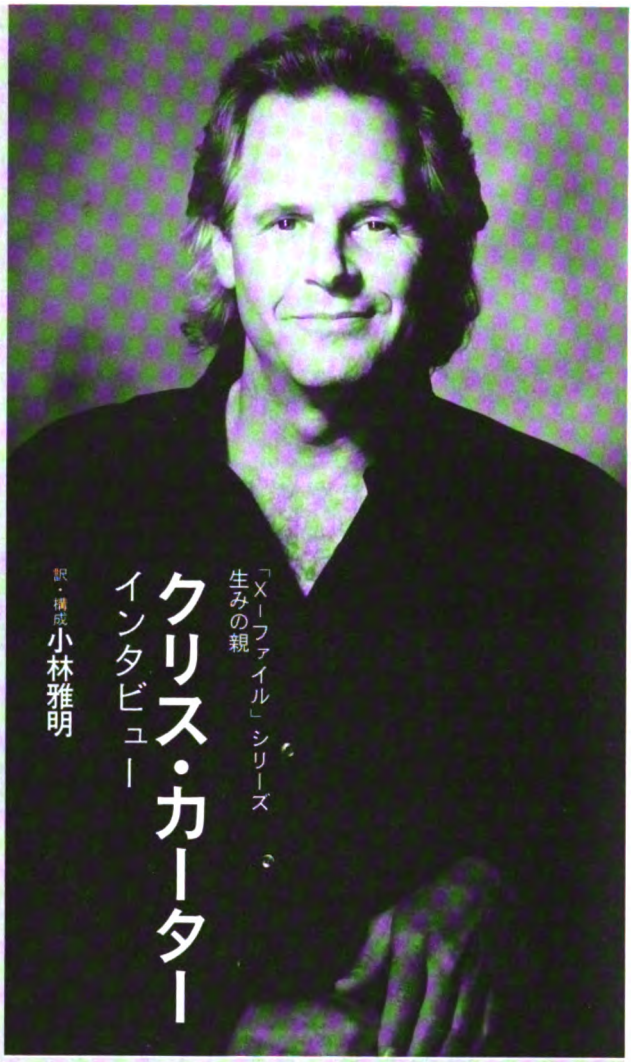
渡辺　久々だったんですよ。テレビシリーズを楽しみに見続けるのって。おそらく、「X－ファイル」があったから、「ER」も日本でブレイクしたんじゃないかな。

品川　何しろ、日本で海外のテレビシリーズがプライムタイムで放送されるのは、すごく久しぶりのことですからね。80年代前半は死んでたわけですよ、海外輸入ものって。深夜枠で少ししかやらなかった。それで「ツイン・ピークス」はビデオ先行だったけど、徐々に復活してきた。そして、「X－ファイル」がテレビシリーズの面白さを久しぶりに味わわせてくれた。

渡辺　最後までついていきましょうね（笑）。

クリス・カーター

Digitized by Google



「X－ファイル」シリーズ
生みの親

クリス・カーター インタビュー

訳・構成 小林雅明

"政府の陰謀"がシリーズの核心になっている

このTVドラマの続きは映画館でお楽しみ下さい――数年前にこんな企画で撮られた日本映画があった。いったいそれはどういうこと？　当初から計画されていた「X－ファイル」の映画化が具体化した今から2年前に、この人気TVドラマの生みの親であるクリス・カーターから、同作の第5シーズンの最終回ではストーリーを完結させずにおきたい、そう言われた20世紀フォックスは大いに慌てたという。「X－ファイル」ファン以外の観客のことは何も考えていないのか？　映画の公開時の段階で第5シーズンが放映されていない諸外国のマーケットのことは考えていないのか？

これは、シリーズの第4シーズンさえオンエアされていない日本で、ブラウン管を通じて「X－ファイル」をろくに見たこともない映画ファンが「X－ファイル　ザ・ムービー」の公開に際して、当たり前のように考えることでもある。

「現在続行しているストーリーに新たな観客を取り込みつつも、TVの熱烈な視聴者をがっかりさせたくない」。かといって「映画では熱烈なファンだけに意味のあるような答えばかり出さないよう気をつけている。みんなが模索しているような段階から始めるんだ。TVの『X－ファイル』は一端終わって（映画が始まろうとして）いるわけだから、映画館に行った人は、モルダーとスカリーの姿を初めて見ることになる。二人はFBIの文字の入ったジャケットを着たりしてるし、別の任務についている。だから、新たな観客もファンも同じスタート地点に立っているというわけなんだ」

というわけで、従来のファンにとっても、そして、初めて「X－ファイル」を観る観客にとっても初めて目にするキャラクターもいる。例えば、ブライス・ダナー演じる気丈なFBI捜査官がそれだ。カーターに言わせれば「スカリー捜査官がX－ファイルに転属されていなかったら、こうなっていただろう」という役柄だそうだ。

「観客にもそのあたりを汲み取ってほしい。映画は映画で独自に展開する。とはいっても、TVシリーズにも映画にも常に忠実でありたい。歴史の中で今もって続いている出来事についての自分の考えに忠実でないとね。登場人物についてもそうさ」

いずれにしても、不特定多数の観客を惹きつけるには、核となるストーリーに何らかの普遍性がなければならない。

「FBIにはきっと超常現象を扱う班があるはずだ、ふとそう思ったんだ。さらに、男性と女性のキャラクターを創り上げて、性別による紋切り型を入れ換えてみた。それから、色々といじり始めたんだ」

また、「X－ファイル」は、現在41歳のカーターが、約25年前に観たときに「怖い」と思ったと同時に「コルチャックという人物が気に入った」というTVシリーズ『Kolchak:The Night Stalker』に触発されたことも認めている。主人公の記者コルチャックは、沼地の怪物、ゾンビ、魔女、そして、宇宙人といった超常現象と対峙するが、それ

Digitized by Google

を記事に書くたびにボツにされてしまう。

「彼がそういったものを目撃しているのに、誰も彼のことを信じないというアイデアにはまってしまったんだ」

確かに「Xーファイル」では、主人公は二人ともFBI捜査官でありながら、フォックス・モルダー（デイヴィッド・ドゥカヴニー）が自分の妹が宇宙人に拉致されたと信じて疑わないのとは逆に、ダナ・スカリー（ジリアン・アンダーソン）のほうはまず超常現象を疑ってかかる。そして、ドラマのコンセプトとその根底に流れる暗く陰謀の渦巻く雰囲気は、ウォーターゲイト事件などにより、政府が国民に嘘をつくことが可能だという事実が暴露されたこととも大いに関係している。

「この映画が政府の陰謀に沿って展開してゆくことはわかっていた。それがこのシリーズの核心になっているから」

とはいえ、TV版同様、この映画にもFBIが手を貸している。

「『Xーファイル』が、FBIを好意的に描いていると思われているんだ。結果的にたくさんの人たちが就職を希望したし。でも、入った途端にXーファイルなんてどこにもないじゃないか、と言ってるだろうね」

「確かに映画作りは大変だ、時間がかかるからね。照明一つとっても、物理的にもかなりの時間がかかる、俳優はそれ以上の時間をトレーラーの中で過ごしている。身体を動かしたり、そこから飛び出したくてうずうずしているのさ。TVにすっかり慣れているところにきて、映画では短い時間で覚えなければならないことがたくさんある。おまけに、映画も返上で仕事をするのだから」

映画の撮影を終え、TVの第6シーズンに戻ったドゥカヴニーとアンダーソンに再び映画版「Xーファイル」に取り組む意欲はわき上がるのだろうか？　それにはまず続編の企画が持ち上がらなければはじまらない。

「〝続編〟という言葉にはしり込みするけど、〝過去編〟ならまったくそんなことはないよ」

Chris Carter／1956年、カリフォルニア州ベルフラワー生まれ。85年にショウビズの世界に転じ、ディズニー・サンデー・ムービーの脚本家として製作に携わる。92年にフォックスTVと契約、93年9月から始まった「Xーファイル」と96年10月から始まった「ミレニアム」という2大人気TVシリーズで製作者兼脚本家を務め、注目を集める。

27

コラム

「ミレニアム」と「Xーファイル」

クリス・カーターが産んだ2つのグレイな世界

編集部

――「エイリアン2」でアンドロイドを演じていた人……。

「ミレニアム」で主人公のフランク・ブラック（ランス・ヘンリクセン）を見ると、まずそう思ってしまう人がほとんどではないだろうか。

さて、この「ミレニアム」と「Xーファイル」は産みの親が共にクリス・カーターであるためよく引き合いに出されるが、同じFOX・TVで、しかも「Xーファイル」がスタートした金曜日の夜9時という同じ放映枠で始まったことからも視聴者層は重なるという見方があったようだ。

しかし「Xーファイル」と違って「ミレニアム」にはUFOもエイリアンも政府の陰謀も登場しないので、その手のエピソードを期待する向きにはやや物足りないかもしれない。このシリーズは、猟奇的な事件を通して人には見えないものが見えてしまう特殊能力を持ち、それゆえにFBI捜査官から元警察関係者を中心に結成される頭脳集団ミレニアムの一員となって犯人を捜し出すことにかけるフランクが自らの宿命と葛藤する物語である。

「Xーファイル」ではモルダーやスカリーの家族が本筋と関係ないところではほとんど描かれないのに対し、「ミレニアム」ではフランクの最愛の妻キャサリンと愛娘ジョーダンがそんなフランクを支える大きな力になっている。フランクを執拗に脅迫しつづけてきたストーカーによってキャサリンが誘拐された事件以来、そんな一家も一度は崩壊の危機を迎えるが、徐々にその絆を取り戻しつつある。

家族の再生に向け、サード・シーズンも決まった「ミレニアム」は「Xーファイル」のシーズン・シックスと共にこれからもずっと目が離せないドラマになりそうだ。

Digitized by Google

ロブ・ボーマン監督
インタビュー

インタビュアー 鷲巣義明

撮影／谷岡康則

Rob Bowman／82年からスティーブ・キャンネルのプロダクションで第2ユニット監督からキャリアをスタート。85年"Stingray"で監督デビュー。93年にメル・ギブソン主宰のアイコン・エンタテインメントでサーフィンがテーマの青春映画"Airborne"を監督して注目される。「Xファイル」には第1シーズンのエピソード「性を曲げるもの」の監督から参加。以降24話を手がけシリーズ中最も充実した手腕を発揮する。

エイリアンの方がリアリスティックな脚本が書けるね

TVでありながらずっと映画の感覚で撮ってきた

TVシリーズと映画版を手がけたロブ・ボーマン監督は、ドラマの内容と同様、ミステリアスな部分に包まれている。彼の指向の一端となる映画版について尋ねてみた。

――「Xファイル」のクリエイターであり、製作総指揮のクリス・カーターとは、どのような出会いをしたんですか。

「まず『Xファイル』のパイロット版『序章』を見て大変気に入ったんだよ。エージェントを通して、私はどうしてもこのシリーズをやりたいんだと立候補したんだ。既に劇場用で、サーフィンの青春映画"Airborne"を監督していたことが大きかったね」

――SFミステリーを題材にしたのは、「Xファイル」が初めてだったんですか。

「ホラー・ファンに人気があったTVシリーズの"House of Dark Shadows"なんかも撮っていて、リアリスティックで超自然なものに情熱を抱いていたんだよ。『13日の金曜日』シリーズみたいな荒唐無稽なホラーには興味がなくて、『エクソシスト』『ジョーズ』みたいなものだったら興味はあるけどね。それに『チェンジリング』の1作目は怖かったよね。実は現在、第6シーズンを撮影中で、第6話には『チェンジリング』の赤いボールが階段を転がるシーンのオマージュがあるんだ」

――TVシリーズには、政府の陰謀ものと、超自然現象を描いた2タイプのドラマがありますが、やはり後者の方がお好みですか。

「超自然といっても、エイリアン系は好きなんだけど、吸血鬼や狼男といったモンスター系は好きじゃないんだよ。エイリアンの方がリアリスティックな脚本が書けるからね。それに政府の陰謀や政府への不審を絡めることで、さらに面白くなると思わないかい？　そこに『Xファイル』の魅力があると思うよ」

――TVシリーズをやってきて、エイリアンの侵略や政府の陰謀に対して、実際に自分の考えは変わりましたか。

「自分のアイデアをドラマ化するプロセスに過ぎないので、自分自身の考えが変わるっていうわけじゃないんだ。確かにリサーチしてストーリーに絡めるけど、だからといって、自分が政府に対して不審を抱くわけではない」

――「Xファイル　ザ・ムービー」の監督に、早くからボーマン氏の名前があがりましたが、その理由はどこにあると思いますか。

「アメリカの言葉で言えば《封筒のはじを引っ張る……》みたいな表現方法があるんだけど、つまり私は、無理をしてまでも限界ぎりぎりまで大きくしてドラマを作ってきたんだ

Digitized by Google

よ。テレビでありながら、撮影の構図にしても、ストーリーにしても、映画の感覚で撮ってきて、それをクリス（カーター）が評価してくれたんじゃないかな。それと私が、最初の頃からTVシリーズ（一番最初に監督したのは、第1シーズンの第13話『性を曲げるもの』）に参加してきたから、そのご褒美として監督に推薦してくれたんじゃないかな」

少なくとも2〜3本の映画版が出来る要素はあるんじゃないかな

――モルダー&スカリー・ファンの映画版の一番の関心事は、2人のキス・シーンです。一応、建前は人工呼吸ですが……。

「その前にあった養蜂所のシーンで、蜂がこなかったら、あの2人はキスしていたわけだよね。ただし『X-ファイル』の心情としては、いつも視聴者及び観客に《与えようと見せかけて与えない……見せると見せかけて見せない》といった具合にね。これが『X-ファイル』のやり方なんだ。だから普通のキスよりは、人工呼吸のキスとして見せる方が緊張感があっていいし、上手い処理法だと思ったんだ。あの人工呼吸の味は《ビタースウィート（甘くて苦い）》なんだよ（笑）」

――酔っ払ったモルダーが立ちションする際、その壁に「インデペンデンス・デイ」の文字が書いてありますが、その意図は……。

「『ID4』が公開された時、クリスが一緒に見に行こうと誘ってくれたんだ。その時、私は、スピルバーグとビリー・ワイルダーが半年間綿密に打ち合わせして撮った映画ならともかく、そうでない限り、私は見に行かないよと皮肉を込めて言ったんだよ。結局クリスだけが見に行って、それで私がどうだったと聞くと、ひどかったよと言うんだ（笑）。薄暗い壁に書かれた文字は、軽い遊びとして受け取ってくれればいいんだよ。私たちのちょっとした復讐だね」

――モルダーとスカリーによる「X-ファイル」のTVシリーズが終了したら、映画版に移行するというのは本当ですか。

「『X-ファイル』には、映画化する要素がいっぱい詰まってるんだ。その可能性は『スター・トレック』以上だと思うし、少なくとも2〜3本の映画版は出来るんじゃないかな」

――現在製作が進んでいる第6シーズンでは大きな変化が起きますか。映画版が製作されたことで大きな変化は。

「第6シーズンでは、X-ファイルのオフィスが焼かれてしまい、モルダーとスカリーは、くだらない仕事を次々と任されることになる。上にとっては2人の嫌気を誘い、辞職させるような雰囲気に持っていくんだけど、モルダーはもちろんネバーギブアップだから、必死でしがみつくんだけどね。スカリーが彼を助けていく形で描かれるのが第8話まで、第11話から、再び『X-ファイル』らしいドラマに戻っていくんだ。誘拐されたモルダーの妹についても大きな変化が見られるけれど、実は映画版でも、妹に関するシーンがあったんだよ。ダイアローグだけのシーンで、最終的にはカットしてしまったけどね。映画版のビデオソフトでは見ることが出来るよ。実はクリスが、妹に関しては映像として明確に解明を与えたいということで、第6シーズンで描かれることになるよ。他に残された謎の多く、例えば石油と長老たちの関係は、クリスはいつか解明したいと考えているんだ」

と言うボーマンだが、真に謎が解明するのか、不安と共に興味は尽きないのである。

「X-ファイル　ザ・ムービー」のさまざまな楽しみ方

平和歌子

〝アメリカ発の人気TVシリーズが映画化された〟となると、どうしても予備知識の心配をしてしまいがちだが、その必要はない。なぜなら、製作国と同時進行でTVシリーズを観られる人々がどれだけいるのか、冷静に考えれば答えが出る。下世話かった」という感想を持つのが間違いという訳ではない。観客の反応は、製作側の意図を必ずしも反映するとは限らないのだ。〝映画〟とは、もともとそうしたものではなかったか。

さて。〝地球外生命体〟にまつわる巨大な陰謀に挑むのが、主人公であるFBI捜査官たちの目的……であるはずなのだが、それ以上に多種多様な〝謎〟で、メインテーマの輪郭さえも曖昧にぼかされてくる。

例えば、〝変わり者〟モルダーと、〝現実主義者〟スカリー。常に全てを疑わねばならない立場に置かれながら、なぜあれほどまでのパートナーシップに到達できたのか？　ひょっとしたら〝恋愛感情〟などとっくに超越したところに、今の2人の〝絶対的信頼関係〟があるのかもしれない……などと考えていたら、人間の心すら、不可解で一番身近な「X-ファイル」だということに気付く。どうやら、映画から更なる宿題を頂戴したようだ。

ながら、登場キャラクターの関係を完全に把握していなければ理解できないなら、わざわざリスクの大きい映画にせず、TVのスペシャル版で公開すればすむことだ。

とは言うものの、「オリジナルを知らないから、内容がよくわからな

Digitized by Google

作品評

大作エンターテイメントとしての大いなる楽しみ

田沼雄一

〈ザ・ムービー〉である。

高視聴率をほこったTVシリーズの人気を受けての映画化だが、TVシリーズの熱烈ファンだけに向けて創られた映画ではもちろんない。アメリカ映画のスゴいところは、たとえば十人の観客がいるとして、その八人はごくたまに映画を観る人たち、残り二人が熱心に観続けているファンと想定し、八人の〈普通の人々〉のために企画を、物語を創ることだ。完璧なマーケットリサーチが成されている。二人の熱烈なファンは放っておいても映画館に来てくれる、普通の人々をいかに映画館に来させるか、そういう発想だ。

「X－ファイル」の仕掛け人、製作者兼脚本家のクリス・カーターに取材したおりこんな風に映画化への抱負を話してくれた。

「TVシリーズのファンもそうでない人たちも驚かせるようなストーリーが欲しい。そうでもしなければ映画化は無理なんだ。TVのファンだけを相手では映画化する意味はない。観てくれた人たち全員が興奮してくれるストーリー、それを探しているんだ、考えているんだ」

十人のうち普通の八人を興奮感動させる企画、物語をクリス・カーターも探していた。そしてまんまと見つけてしまった。それがこの〈ザ・ムービー〉である。

驚いた、ここまで大きな映画になっていたとは、本当に驚いた。大作である。「タイタニック」や「アルマゲドン」クラスのような超の字の付く大作ではないが、少なくとも「ダイ・ハード」や「エイリアン」などのシリーズものに匹敵する大作だ、スケールを持っている。

冒頭の太古の時代のエピソード、次いで描かれる現代のテキサス州の小さな町で起こるなんとも不気味で不可解な事件、この二つで観る人はたぶん画面に釘づけになることだろう。たとえTVシリーズを観ていなくても釘づけになるだろう。むしろ、TVシリーズの熱烈ファンにとっても初めて体験する巨大で不気味な影がひしひしと迫ってくる、そんな興奮に震えるはずだ。そのときの気持ちは「エイリアン」に初めて接したとき〈何が起こるか分からない〉怖さに似ている。また、「ダイ・ハード」を観たとき〈なんだかスゴいことになりそうだ〉と感じた思いに似ている。

二つのエピソードのあと、ダラスの高層ビル群が映し出される。とあるビルの屋上にモルダーがいる、彼を探してスカリーがやって来る。ここで二人の性格が丁寧に描写される。モルダーは神経質そうで何か得体のしれないものへ執拗にこだわっている。スカリーはモルダーとFBI内での自分たちの立場が危なくなっていることに神経質になっている。

Digitized by Google

二人がいままで人がやらないような捜査をしてきたことがはっきり分かる。FBIでも異端扱いされていることが伝わってくる。

そしてダラスのあるビルの大爆破が画面に炸裂する。

二つのエピソード、モルダーとスカリーの二人の性格描写、ビル大爆破。たたみかける演出で映画版「X－ファイル」は観る者の心臓をワシ掴みする。

ビル大爆破に謎が隠されていたことを二人は突きとめる。ここから映画は急展開、謎を解明するためなら地の果てまでも行ってしまう二人の行動をスピーディに描写する。一方でスカリーに左遷命令が下り、それをきっかけに医師としてのキャリアに戻ろうと考え始める彼女の苦悩が描かれる。モルダーは謎をなんとか解明しようと必死。対照的な二人の心理。が、やがてあるトウモロコシ畑のド真ん中、奇妙な建物に迷い出たとき、二人は「自分たちはいま何か巨大な謎の中にいる」ことを自覚する。夜のトウモロコシ畑、ヘリコプターがサーチライトをともし二人を追う、建物の中に入った二人を待っていたものは……いやぁここから先は書けません。その展開には心底驚いた。テンポの良さ、次から次へとくり出される仕掛けのスゴさは「エイリアン」と「ダイ・ハード」とついでに「ツイスター」を含めて、ここ数年のアメリカン・エンターテイメントの面白さと魅力をホウフツさせる。そうしたブロックバスター・ムーヴィーに匹敵するものがこの映画にある。ヘリコプターに追われながらトウモロコシ畑の中を必死に逃げ惑う場面は「ツイスター」のスピード感を想起させる。

クライマックスでは二人はなんと南極大陸まで行ってしまう。謎を解明するためなら地の果てまでも……まさに地球の果てまで行ってしまったのだ。

このスケールの大きさ、テンポの良さ、これはもう充分にエンターテイメントの大作である。ダラスからどこかのトウモロコシ畑、そして南極大陸。そこにはTVシリーズでは観ることのできない規模のデカさ、スケールの大きさがにじみ出ている。クリス・カーターを始めロブ・ボーマン監督らスタッフにTVシリーズに執拗にこだわる姿勢はない。単独の「X－ファイル」のスタンスで勝負している。十人のうち八人を興奮させて満足してもらうように創っている。

それにしても南極大陸で大クライマックスを迎えるとは考えてもみなかった。そのノリは「遊星よりの物体X」ではなくて「遊星からの物体X」をホウフツさせる。

モルダー役のデイヴィッド・ドゥカヴニー、スカリー役のジリアン・アンダーソンの二人に魅了される人が多いと思う。新たなファンを獲得する、これも映画ならではの良さである。

モルダー＝デイヴィッド・ドゥカヴニーのインテリでスブーキー（奇人変人）なところに心惹かれる人もいるだろう。スカリー＝ジリアン・アンダーソンの知的で放っておけない愛らしさにウットリする人もいるだろう。

おそらくクリス・カーターの抱負（計算）の中にデイヴィッド・ドゥカヴニーとジリアン・アンダーソンを映画でも売り出そうという考えはあると思う。

それが映画である。TVシリーズでは最初からのイメージを大切にする。でも映画ではちょっと大胆なこともできる。モルダーにビルの爆破の責任を取らせ精神的に追いつめる、スカリーを左遷させFBIを辞めようとまで追い込む。映画では主人公たちは必ず一度は厳しい状況へ落ちる。そこから這い上がってくるときスゴいドラマが待っている。「エイリアン」のリプリーも「ダイ・ハード」のマクレーンもそうだった。〈ザ・ムービー〉である。この際「エイリアン」や「ダイ・ハード」を観るときのような気持ちで大いに楽しんでほしい。クリス・カーターもロブ・ボーマンもそう願っているに違いない。

Digitized by Google

「X-ファイル ザ・ムービー」人物相関図

作成 平和歌子

ウェル・マニキュアード・マン
ジョン・ネヴィル

モルダーとスカリーに影響を及ぼす、権力者グループ“エルダーズ”の幹部。このグループもまた、秘密事項や陰謀を保持する謎の集団だ。一連の“地球外生命体”にまつわる事件に関わり、モルダーの父ともつながりがあった。モルダー自身とは敵対するというよりも、時折“真実”を語ろうとする姿勢が見える。今回は、彼の素顔がわずかに描かれた。

シリーズの中にも、高貴な姿で登場。実際に“サー”の称号を持つ英国紳士だ。

コンラッド・ストラグホールド
アーミン・ミューラー＝スタール

影のシンジケートのリーダー格。謎の実験施設をいたるところに所有するらしい。X-ファイル課の再開にあたり、今後の措置について指示が仰がれる。ちなみに、異星人の実験に関する政府の極秘文書に記された場所の名が“ストラグホールド鉱山”。ここにはモルダー（妹サマンサの名に訂正されていたが）とスカリーの名が記されたファイルが保管されていた。名前らしい名を持つ、謎の人物が更に追加登場した。映画で初登場。

シガレット・スモーキング・マン
ウィリアム・B・デイヴィス

別名“キャンサー・マン（肺ガン男）”。政府のスパイとも、ストラグホールドの部下とも見える謎の人物。過去、モルダーの父ウィリアムと同僚であった。その妻、モルダーの母親とも親しくしていたらしき背景が見え隠れしている。モルダーとは常に敵対関係にあり、「X-ファイル」の存在や、父親との関わりさえも否定している。TVでは“モルダーの父親説”まで飛び出す、謎のレギュラーを怪演中。

捜査官ミッショー
テリー・オケイン

連邦ビル爆破事件で爆死。後に、ビル内から彼以外の死体が発見されたことから、機密保持のために意図された事故であることが露見していく。ストラグホールドのシンジケートに関わりがあったらしく、“捨てゴマ”となった可能性が高い。TVでは第2シーズンの「オープリー」に刑事役でゲスト出演。

ウィリアム（ビル）モルダー
ピーター・ドナット

映画には現れないが、物語のキーパーソン的存在。フォックス・モルダーの父親で、サマンサ失踪事件の真相を握っていたとされる。ストーリー中に出現する様々な謎の人物たちとは、その全てに、過去につながりを持っていた。政府機密に深く関わることで家族を失い、最終的には“真実”を語ることなく、自らの生命も絶たれた。既に過去の人物ながら、時折エピソードに出現する、不思議なレギュラー・キャラ。

ウォルター・スキナー副長官
ミッチ・ピレッジ

モルダーとスカリーの直属上司。組織に従属しながらも、部下の働きを助け、X-ファイル課の復活に尽力したこともある。しかし、部下たちへ理由も告げぬままに独自の措置を図るなど、彼の思惑が何に根差しているのかは理解に苦しむ。また、ベトナム戦争時期から“幻影”に悩まされるという背景を持つ。TVシリーズでは「リトル・グリーンマン」のエピソードより登場し、別居中だった妻を思いやるなど、家族人の一面も見せている。

キャシディ
ブライス・ダナー

ダラスでの連邦ビル爆破事件で死傷者が出たことに対し、スカリーとモルダーを査問する。冷静沈着ながら、2人をスケープゴートに仕立てたがっているようにも見受けられる。【補足】女優グウィネス・パルトロウの実母。「X-ファイル」ファンの子供たちの強力な薦めもあって、役のオファーを受け出演を決めたという。

アルビン・カーツウェル
マティン・ランドー

ワシントンで産婦人科を営むが、機密を公表しようとする者として組織に追われ、逃亡生活を送る。モルダーの父とは友人であった。モルダーへ連邦ビル事件の真相を語る。後にモルダーは、自分のアルバムに貼られたバーベキュー・パーティの写真に、彼の姿を発見。映画で初登場。【補足】TVシリーズは「スパイ大作戦」が有名。アカデミー賞助演男優賞受賞経験者。

フォックス・モルダー
デイヴィッド・ドゥカヴニー

オックスフォード大学出身の心理学者。FBIの行動科学班に勤務した後、X-ファイル課へ転属を希望する。超常現象全般に対しても肯定的な姿勢を見せたり、物証よりもカンを頼るなど、“スプーキー（変わり者）”の異名を持つ。12歳の時に妹・サマンサが失踪。実は、異星人らしきものに拉致されたという事件に執着し、その“真実”を探ることが、「X-ファイル」に関わることとなった直接の動機だ。紅緑色盲である。【補足】シリーズのプレイクにより、モルダー同様、無機質な表情のセクシー・ガイ役作品が次々とビデオ化されている。また、「ツイン・ピークス」のFBI捜査官役では見事な“美女”ぶりを発揮した。

ダナ・スカリー
ジリアン・アンダーソン

メリーランド大学で物理学を専攻。同大学では医学博士号も取得したが、医学の道へは進まずFBIへ。訓練アカデミーの教官として着任した後、モルダーの監視役としてX-ファイル課へ転属。科学的・理論的立場を崩さず、パートナーとは対立関係にあったが、様々な事件に関わるうちに、絶対的な信頼を得るようになる。「X-ファイル」に関わるようになってからは、姉のメリッサが身代わりの死をとげたり、彼女自身の身も危険にさらされるなど不可解な事件が続発している。【補足】3000人の候補者の中からスカリー役を射止めた強運の持ち主。パンク少女時代を過ごし、グラビア誌ではセクシー・ショットを披露するなど、役柄とのギャップが魅力。

Dr.ブロンシュワイグ
ジェフリー・デマン

テキサス州ブラックウッドの地下で、極秘プロジェクトに従事。発見されたエイリアン・ウィルスの監視中に、研究対象物が消えているのに気付く。やがて何者かの攻撃を受けると共に、機密もろとも地中に葬られる。

バーテンダー
グレン・ヘドリー

内部調査会にかけられ、苦悩するモルダーが立ち寄ったバーで、話し相手役となるボーイッシュな女性。映画のみの登場。【補足】あるお作には自分から売り込んだかのようなバーテ[illegible]

ローンガンメン

バイアーズ（右）
ブルース・ハーウッド

ラングリー（左）
ディーン・ハグランド

フロハイク（中）
トム・ブレイドウッド

異星人の存在を隠蔽しようと画策する、陰の組織や政府の動向を調査するマニアック集団。モルダーの心強い味方たちである。映画では顔みせ的に登場。

バイアーズ＝元連邦通信委員会の広報担当。軍事情報通であり、豊富な化学知識を持つ。**ラングリー**＝録音マニア。国防省の情報システムへ簡単に侵入してしまうハッキングの腕は超一流。**フロハイク**＝[illegible]真と調査・分析を担当。スカリーの大ファンでもある。

スティービー
ルーカス・ブラック

テキサス州ブラックウッドに住む、普通の少年。穴掘り遊びの最中に地下空洞へ落ち、エイリアン・ウィルスに感染してしまう。【補足】TVシリーズ「アメリカン・ゴシック」に主演。映画でも更なる[illegible]と期待される。

ru.tinyurl.com/ydhzzvb9

「X-ファイル」AtoXキーワード

●みのわあつお

A

AMERICAN GOTHIC

「X-ファイル」は、93年9月10日に、FOX・TVの金曜夜9時のレギュラー番組としてスタートした。それまでのFOX・TVの金曜夜9時の枠は、ドキュメンタリー関係の番組が多かったが、ドラマの枠の新規開拓として「X-ファイル」が鳴り物入りで登場（ぼくがアメリカ旅行中に、「X-ファイル」の第1回を観たのも、番組宣伝スポットの大攻勢につられたからだった）。当初は10%を越えるくらいの視聴率だったが、面白さが広まるにつれ視聴率も20%を突破、96年10月4日スタートのシーズン4から、日曜夜8時の枠に移行した。

「X-ファイル」のブレイクで、怪奇スリラー番組がブームとなり、FOX・TVは、「X-ファイル」の金曜夜9時の後番組として、クリス・カーターの製作総指揮・脚本などによる「ミレニアム」をスタートさせた。ほかに、サム・ライミ製作総指揮の「アメリカン・ゴシック」もある。その「アメリカン・ゴシック」で主人公のケイレブ少年役に扮したルーカス・ブラックは、「X-ファイル　ザ・ムービー」で突然変異に襲われる少年スティービー役を演じている。

C

CHRIS CARTER

85年に、NBCの「ザ・ディズニー・サンデー・ムービー」の脚本家を経て、92年にFOX・TVと契約する。「大統領の陰謀」に決定的な影響を受け、政府が隠し通そうとする陰謀とその真実の追求ということをテーマにして、「X-ファイル」の脚本と製作総指揮などを手がける。「X-ファイル　ザ・ムービー」でも、ストーリー原案・脚本・製作を担当している。

CIGARET-SMOKING MAN（またはキャンサーマン）

謎に満ちた男だが、FBIや国防省に自由に出入り出来る特権を持っている。シガレット・スモーキング・マンを主人公にしたエピソード「紫煙」によると、40年8月にルイジアナ州に生まれたという。共産主義者の父親はスパイとして処刑され、母親は肺ガンで死去した。孤児院で育ち、一時消息不明となるが、アメリカ海軍に入隊。上層部の密令を受け、63年11月22日、テキサス州ダラスに出現。その時、ダラスではJFK暗殺事件が起こった。68年4月には、テネシー州メンフィスにも現れる。その時、TVは、ロバート・ケネディの演説を放送していた。92年、スカリーの〝X-ファイル〟転属の面接にも立ち会う。そのスカリーの父親とは海軍時代の仲間でもあり、モルダーの一家とはショッキングな関係にある。〝闇の世界〟で暗躍する人物だ。

D

DANA SCULLY

FBI捜査官。メリーランド大学で物理学の学士課程を終了後、医学の学位も習得。〝X-ファイル〟課転属時（92年）での上司との面接では、〝医学生時代にFBIから引き抜かれた〟とスカリー自身が語っている。彼女の医学生としてのキャリアは、数々の事件でも生かされ、「X-ファイル　ザ・ムービー」でも、スカリーの医学的アプローチによって、変死体とエイリアン・ウィルスの関係が明らかになる。64年生まれ。

DANIEL SACKHEIM

「X-ファイル　ザ・ムービー」のプロデューサー。「X-ファイル」では監督も務め、「ディープ・スロート」「宿主」などのエピソードは、サックハイムの演出によるもの。過去に「ピッチコック劇場」や「マイアミ・バイス」などにも関わり、人気番組「NYPD BLUE」の監督もしている。

DAVID DUCHOVNY

EBI捜査官フォックス・モルダー役。大学の卒論は〝現代小説における魔法とテクノロジー〟というテーマだった。「ツイン・ピークス」の女装趣味のFBI捜査官デニース役や、「カリフォルニア」（93年）の犯罪を研究する作家の役なども演じている。「X-ファイル」では、原案（エピソード「アナサジ」）、脚本（「入植PART1」、「タリサ・クミ」＝これはクリス・カーターとの共同）なども手がけている。

F

FRANK SPOTNITZ

「X-ファイル　ザ・ムービー」の共同製作者であり、「X-ファイル」の共同製作者でもある。また、「X-ファイル」では脚本も執筆。「入植PART2」「ツングスカPART1、2」「腫瘍」などは、スポットニッツによる脚本だ。クリス・カーターの名パートナーとして、「ミレニアム」でも共同製作総指揮・脚本家としてクレジット

Digitized by Google

されている。

FOX MULDER

FBI特別捜査官。オックスフォード大学で心理学を学び、FBIに入る。難事件を解決して、凶悪犯罪のアナリストとして名を挙げる。その一方では〝変人（スプーキー）モルダー〟とも呼ばれる。「X－ファイル ザ・ムービー」でも、自分は変人だとぼやき、ヤケ酒を飲むシーンがある。72年に、妹サマンサが謎の光に包まれて失踪、その時、モルダーは全身がマヒ状態となり妹を助けられなかった。以来、妹の失踪はエイリアンによるものだと思っていたが…。妹の失踪と〝X－ファイル〟との出会いがきっかけとなって、91年に〝X－ファイル〟課に希望転属する。モルダーの捜査は上層部によって妨害されるが、彼と議会とのコネのおかげで捜査を続けられている。61年生まれ。

G

GILIAN ANDERSON

FBI捜査官ダナ・スカリー役。300人のオーディションを勝ち抜き、スカリー役を射止めた。「X－ファイル」の美術監督エロール・K・クロッツと結婚、一女の母親となるが、97年に離婚してしまった。タフなヒロインであるスカリーのキャラクターは、ジリアン自身もあこがれているという。

K

KOLCHAK：THE NIGHT STALKER

怪奇スリラーのTV番組「事件記者コルチャック」。クリス・カーターが夢中になった番組であり、「X－ファイル」のコンセプトにも多大な影響を与えている。シカゴのインディペンデント通信社の事件記者コルチャックが、様々な怪奇現象のリポートに挑む。切り裂きジャックを始め、殺人ロボット、スポティニアス・コンバッション、ゾンビ、吸血鬼、地底怪獣、怪物ワニトカゲ、蘇生したミイラなどが登場した。コルチャックは身の危険も顧みずリポートをするが、彼のリポートは影の権力によってもみ消されてしまう。74年にabc・TVでスタートしたが、カルト人気にとどまり、20エピソードで終了した。しかし、「X－ファイル」の人気にともない、再評価されている（CICビクターより、シリーズ10巻がビデオ化された）。

L

LONE GUNMEN

政府の行動を監視し、〝ローン・ガンメン〟という雑誌を発行している3人組。元連邦通信委員会の広報担当で、情報システムの軍事機密と化学に精通しているバイヤース、天才的コンピュータ・ハッカーのラングリー、写真及び映像の解析のエキスパートのフロハイクの3人だ。この3人は民間としてのスタンスを生かし、神出鬼没の行動力で情報を収集する。「X－ファイル ザ・ムービー」でも、彼らの力が大きくものを言っている。「アンユージュアル・サスペクツ」のエピソードによると、彼らとモルダーを結びつけたのは、89年の事件だった。SWAT隊がある倉庫に突入した時、彼らの前に、錯乱状態のモルダーとローン・ガンメンが現れた。バイヤースによると、政府が極秘に人体実験を行っていたというのだ。この事件をきっかけに、ローン・ガンメンはモルダーの親友となり、裏情報を提供するようになる。なお、フロハイクはスカリーの大ファンだが、彼も含めたローン・ガンメンは、スカリーから信用されていない。ちなみに、フロハイク役のトム・ブレイドウッドは「X－ファイル」の第1班の助監督としてもクレジットされている。

R

ROB BOWMAN

「X－ファイル ザ・ムービー」の監督。TV版ではシーズン5まで24エピソードを監督している。カルト教団を描く「性を曲げるもの」でシリーズの監督としてデビューし、以降、サイコ・キラー物の「オーブリー」、エイリアンとクローン、そしてモルダーの妹の謎の失踪を描く「入植PART1、2」、「X－ファイル ザ・ムービー」と同じく、未知のウィルスを題材にした「幼虫」、エイリアンと人間の交配実験のドラマ「731」、モルダーが連続殺人鬼として対決する「プッシャー」（後にKITSUNEGARI～「狐狩り」というエピソードに発展する。狐狩りとは、FOX HUNT、フォックス・モルダー狩りのこと）、航空機とUFOの接近遭遇の「MAX PART1」など、「X－ファイル」を形成する主な題材に取り組んでいることから、映画版の監督に最適の人物。

ROMANCE

「X－ファイル」のマニアなら、「X－ファイル ザ・ムービー」で確実にドキリとさせられるシーンがある。失意のモルダーと

Digitized by Google

「X-ファイル」AtoXキーワード

スカリーが瞳を見つめ合い、そして、モルダーが唇を寄せるシーンだ。この後は、観てのお楽しみ。モルダーとスカリーは、二人が衝突を繰り返しながらも助け合い、お互いの仕事に対する意識と正義感を高めていくという関係にある。キャラクターにしても、モルダーは、いかなる事件にも果敢に立ち向かっていくが、〝変人モルダー〟の顔が出てしまい、暴走しがちだ。一方、スカリーは理論的であり科学的に物事を考え、行動する。そんな二人のキャラが、TV版の初期では火花を散らした。また、スカリーは〝X-ファイル〟の科学的分析を命じられて、〝X-ファイル〟課に転属になったのだ。しかし、モルダーは、スカリーを上層部のスパイだと見なしてしまう。「X-ファイル ザ・ムービー」でも、モルダーはスカリーに向かって、〝キミはぼくの監視役なんだろう〟というようなことを言う。ちなみに、「X-ファイル」には、モルダーとスカリーのそれぞれの元恋人が登場するエピソードもある。「炎」の、ロンドン警察からやってきた女性刑事フィービー・グリーンは、モルダーの学生時代の恋人だ。フィービーとグリーンは10年前に別れたが、久しぶりの再開で、ちょっとラブラブな場面を見せる。そんな二人のラブラブぶりを見たスカリーが、ついキレてしまうのも面白い。一方、スカリーの元恋人ジャック・ウィリスは、「ラザロ」に登場する。スカリーはFBIのアカデミー時代に、教官だったジャックと出会い恋に落ちた。その後、1年間だけ付き合い、別れている。「ラザロ」のジャックは、FBI特別捜査官として登場。ちなみに、モルダーは、スカリーとジャックの過去の関係について、深くはツッこんでいない。

W

WALTER SKINNER

モルダーとスカリーの上司で、FBI副長官という設定の人物。「X-ファイル」の初期では、モルダーとスカリーに対して無理解のような上司として描かれたこともあった。だが、シリーズが進むにつれ、キャラクターの方向性が定まり、モルダーとスカリーの良き理解者として登場する。規律に厳しくカタブツであるという性格が、当初のスキナーのイメージを悪くしていたのかもしれない。

WELL-MANICURED MAN

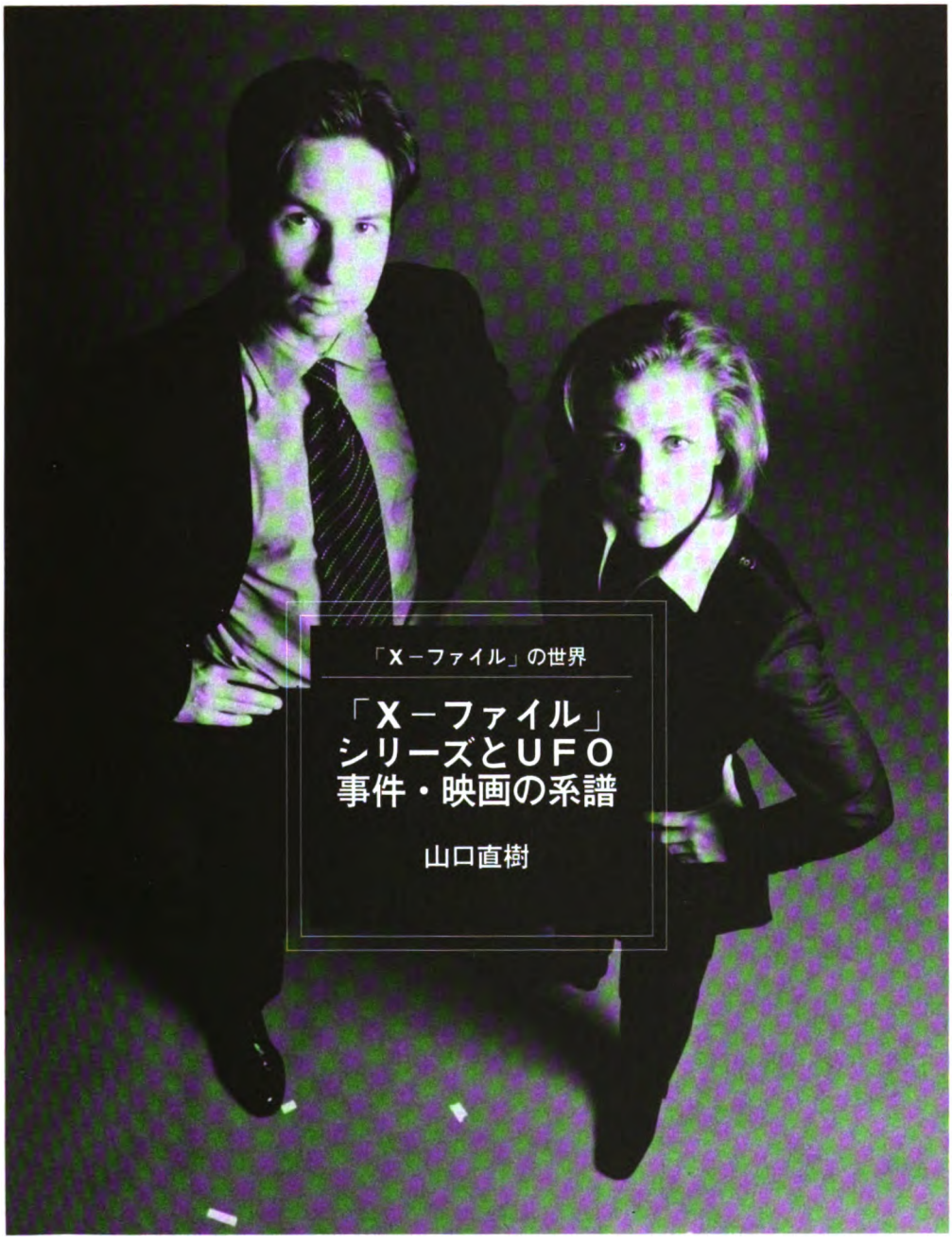
シーズン3から登場したキャラクター。謎の政府の上層組織の中心人物だが、組織の過激なやり方に批判的でもある。モルダーの言動に好意的な姿勢を示し、情報を提供することもある。「X-ファイル ザ・ムービー」では、ウェル・マニキュアド・マンをめぐる衝撃的なエピソードが用意されている。

X

X-FILES

〝X-ファイル〟とは、ワシントンDCのFBI本部に保管されている、現代の科学では解明出来ないような怪事件・現象などをリポートした極秘文書のこと。その内容は、エイリアンとUFO、DNA操作と人体実験、ポルダーガイスト現象、突然変異などが主だ。そんな怪事件と超常現象の解明に取り組んでいるのが、〝X-ファイル〟課という設定なのである。現実に〝X-ファイル〟と呼ばれるものは存在しない。しかし、「X-ファイル」にも度々登場する、〝ロズウェル事件〟などに関するFBIの機密文書は存在するらしい。なお、「X-ファイル」のシーズン5の「ジ・エンド」では、モルダーのオフィスが何者かに放火され、すべてが灰になってしまった……。

Digitized by Google



「X－ファイル」の世界

「X－ファイル」シリーズとUFO事件・映画の系譜

山口直樹

それは、ロズウェル事件からはじまった

「X－ファイル」の待望の映画版「X－ファイル　ザ・ムービー」は、予想どおりUFOと異星人をめぐる超国家シンジケートの陰謀の物語だった。が、残念ながら、すべての謎が解明されるわけではない。シンジケートが、異星人の地球植民計画に手を貸し、人間を異星人化するエイリアン・ウィルスを培養、ハチを媒介にしてばら蒔いていたという驚くべき事実が明かされるにとどまっている。

振り返ってみれば、UFOにまつわる政府の陰謀は、「X－ファイル」の根底に流れるテーマ。現実にUFOの謎が解明されない限り、たとえ、シリーズが幕を降ろすことになっても、その全貌が明かされることはないだろう。「X－ファイル」は、現実に起きたUFO事件を巧みに取り込んで展開してきたのだ。

まず、シリーズの発端となった「X－ファイル」とは、FBIが、最新の科学捜査をもってしても解明できなかった超常現象事件の記録をまとめた極秘資料という設定だった。

しかし、残念ながら、実際にはそうした謎の事件の捜査記録が「X－ファイル」としてまとめられているという事実はない。が、FBIが、UFOに関する調査資料を隠していたことは、すでにわかっているのだ。

アメリカでは、1974年に情報自由化法が施行された。これは「アメリカの安全保障に影響を与えない情報は、市民の請求があった場合には公表しなければ

Digitized by Google

ならない」という趣旨の法律である。この情報自由化法に基づき、民間のUFO研究団体が、FBIやCIAが調査したUFO事件に関する資料の公開を要求する裁判を起こした結果、78年に、それまでは存在が否定されていた膨大な量のUFO資料が公表されたのである。

しかも、「国家の安全保障にかかわる情報は公開できない」との規定があるため、重要な部分を黒く塗り潰した文書が多く、FBIやCIAが、UFOについて重大な秘密を握っていることが明らかになったのだ。

そればかりではない。UFO事件史上最大の謎とされ、「X－ファイル」でもしばしば触れられてきたロズウェル事件に関しても、なんとも興味深いFBI文書が発見されている。

「遊星よりの物体X」（上）「地球の静止する日」（下）

「UFOについての事実を米政府は隠している」という疑惑は、すべて、47年7月にニューメキシコ州の片田舎で起こったロズウェル事件に始まる。なにしろ軍が、一度は墜落したUFOの残骸を回収したと発表しながら、観測気球の誤認とあわてて訂正したからだ。

しかし、情報自由化法によって公開された47年7月10日付け（軍の発表の2日後）のFBIの秘密文書には「墜落した円盤は軍の実験ではなかった」と、記されていたのである。

UFOブームと50年代のUFO映画

それでは、ロズウェル事件と、その後のUFO事件史を辿りながら、映画でUFOがどのように描かれてきたかを振り返ってみよう。

ロズウェル事件が起こった47年は、UFOがはじめて知られた記念すべき年でもある。6月24日、アメリカ、ワシントン州を自家用機で飛んでいたケネス・アーノルドが、正体不明の9つの円盤状の飛行物体を目撃。このニュースは、すぐさま世界中に報道され〝空飛ぶ円盤出現！〟と、騒がれたのである。

そして、この興奮が覚めやらぬ7月2日に、ロズウェル事件は起こったのだ。その夜、ロズウェル北方で牧場を経営するウィリアム・ブレーゼルは、雷鳴にまじって奇妙な爆発音を聞いた。翌朝、馬で牧場へと出掛けたブレーゼルは、1キロ四方にわたって散乱している見たこともない金属片を発見。当時、ブレーゼル家には電話がなかったため、5日後の7日にようやく保安官に届け出た。

保安官は、ロズウェル陸軍航空基地に連絡。ただちにジェシー・マーセル小佐らが現場へ向かい、謎の金属片を採取した。そして翌8日午前、基地報道官は「墜落した空飛ぶ円盤の残骸を回収」とマスコミに発表。が、その数時間後、一転して「気象観測気球の誤認だった」と訂正し、騒ぎは収まったのである。

しかしながら、UFO目撃はその後も頻発。翌48年1月7日には、ケンタッキー州上空でUFOをP－51戦闘機で追跡したトーマス・マンテル大尉が、謎の墜落を遂げた。事態を重く見た米空軍は、1月22日、UFO調査機関プロジェクト・サイン（後にプロジェクト・ブルーブックと改称）を設立したのである。

こうして巻き起こったUFOブームを受け、50年代に入ると、盛んにUFO映画が撮られるようになった。まず51年、異星人との遭遇を本格的に描いた初の映画が2本登場。北極に墜落したUFOから怪物が現れる「**遊星よりの物体X**」（クリスチャン・ナイビー監督）と、人類に警告を与える平和の使者が飛来する「**地球の静止する日**」（ロバート・ワイズ監督）である。

特に、「遊星よりの物体X」の異星人は、その思考がわからず、まさに人間の理解を超えた知的生命体として描かれ、言い知れぬ恐怖を与えた。当時、欧米諸国は、鉄のカーテンに遮られ、その行動が読めない共産圏の脅威にさらされていた。こうした現実の恐怖をUFOに重ね合わせ、以後、次々と異星人の侵略映画がつくられるようになったのである。

そして53年、当時の最高の特撮技術で火星人の攻撃を生々しく描き、「**インデペンデンス・デイ**」（96年、ローランド・エメリッヒ監督）の元になった「**宇宙戦争**」（バイロン・ハスキン監督）が登場。56年には、「**マーズ・アタック！**」（96年、ティム・バートン監督）でパロディー化された「**世紀の謎・空飛ぶ円盤地球を襲撃す**」（フレッド・シアーズ監督）が撮られたのである。

しかしながら、60年代になると、世界は激動の時代に入る。また、米空軍のUFO調査機関によるUFOの実在を否定する見解も相次ぎ（最終的には、69年12月に、UFOを完全否定してプロジェクト・ブルーブックは閉鎖される）、UFOへの関心は薄れ、UFO映画はほとんどつくられなくなってしまう。

Digitized by Google

MJ－12文書とエリア51

ところが77年、UFOをファンタジックに描いたスティーヴン・スピルバーグ監督の「**未知との遭遇**」が公開されるや、事態は一変する。

スピルバーグは、実際の目撃例に即して、UFO接近時に停電したりラジオがなりだすなどの電磁効果や、UFOを間近に見た人々が日焼けするといった現象を、リアルに描写。まさに、UFOとの遭遇を観客に体験させた。

さらに、クライマックスでは、光輝く荘厳なマザーシップ（母船）を登場させ、実際の目撃証言に基づいた〝胎児〟を思わせる異星人も映像化して見せたのである。

この「未知との遭遇」の大ヒットで、再びUFOブームが勃発。先述したUFO秘密文書の公表もあって、熱心なUFO研究家がロズウェル事件の再調査を開始。20年以上にわたり、軍の圧力で沈黙を守っていた関係者たちから、次々と証言を得たのだ。

たとえば、マーセル少佐は「金属片は未知の物質だった。銀紙のように薄かったが、折ることも切り裂くことも、傷をつけることもできなかった」と断言。上司から命令されて「気球の誤認」という偽りの発表をさせられた事実を暴露。また、墜落UFOから回収された異星人の遺体を見たという軍関係者や、検視に立ち会った医師や看護婦の証言も得られ、軍の隠蔽工作が明るみに出されたのだ。

94年にカイル・マクラクラン主演で撮られたテレビ映画「**ロズウェル**」（ジェレミー・ケイガン監督）は、これらの証言をもとに同事件の真相を描いたものである。

しかし、当然のごとく、こうした疑惑を軍はいっさい無視。軍を追及する有力な手掛かりも得られず、真相究明活動は行き詰まる。

が、87年5月、米政府の極秘文書「MJ－12文書」が公表され、一気に軍や政府のUFOに関する陰謀がクローズアップされるのだ。

著名なUFO研究家ウィリアム・ムーアのもとに匿名の人物が送りつけてきたその文書は、52年11月18日、トルーマン大統領が、次期大統領アイゼンハワーに送ったUFO問題の概要を説明する超極秘文書であった。

そこには、ロズウェルで墜落UFOと異星人の死体4体を回収したこと。そして、国家の存亡にかかわるUFOを極秘に調査・研究するため、47年9月24日付けで〝MJ－12（マジェスティック・トゥエルブ）〟を組織したと記されていたのだ。しかも、その12人のメンバーは、ロックフェラー大統領特別顧問をはじめ、そうそうたる顔ぶれだったのである。

さらに、「MJ－12文書」の真偽について論争が巻き起こったさなかの88年5月、またも驚くべき告発書が発表された。元海軍将校ミルトン・クーパーが、軍在職中に偶然知った政府の恐るべき陰謀を暴露したものである。

この、クーパー文書と呼ばれる告発書によると、54年2月20日、アイゼンハワー大統領はグレイと呼ばれる異星人を統括する全権大使との会見を実現。そのとき異星人は、一般市民を誘拐し、検査や実験を行うことを黙認するよう、要求してきた。大統領らは、異星人の進んだ科学知識の提供を受けることを条件に、この要求を受け入れたというのである。

事実、この密約説を裏付けるかのように、アメリカでは、80年代後半から、異星人に誘拐され体内に異物を埋め込まれた（インプラント）と主張する人々が続出しているのだ。

こうした状況を受け、実際に異星人に生体検査を受けた被害者の証言に基づき、91年に「**コミュニオン／遭遇**」（フィリップ・モーラ、ダン・アリンガム監督）、92年に「**イントルーダース／第四の遭遇**」（ダン・カーティス監督、Vのみ）、93年に「**ファイアー・イン・ザ・スカイ／未知からの生還**」（ロバート・リーバーマン監督、Vのみ）が製作されたのである。

一方、異星人による人間誘拐事件の多発とともに、90年代に入ると、米政府と異星人が共同で研究を行っている秘密基地の存在も噂にのぼるようになった。「インデペンデンス・デイ」に実名で登場した「エリア51」である。

ネバダ州南西部、広大なネバダ実験場内にある「エリア51」と呼ばれる区域の地下に秘密基地があり、異星人の協力を得て、軍がUFOをつくっているというのだ。

事実、エリア51では、頻繁にUFOが目撃されている。ただ、エリア51は山並みに囲まれているため、実験場の外からは直接見ることはできず、UFOも光体にしか見えない。

が、光体は、通常の航空機では考えられない異常な動きを見せるのだ。

そればかりではない。エリア51で働いていたという物理学者ロバート・ラザー博士が、政府の隠蔽政策に不満を覚え、異星人から譲られた円盤形UFOの未知のテクノロジーを分析、研究していたと暴露。さらに、CIAのエージェントが持ち出しという、ニューメキシコ州の秘密基地で行われている異星人の培養実験の様子を記した極秘文書も公表され、政府と異星人の密約説に関して、さまざまな憶測が飛び交うようになったのだ。

さて、こうしてUFO事件とUFO映画の流れを振り返ってみると、「X－ファイル」の巧妙さがわかるだろう。「X－ファイル」は、実際のUFO事件や、UFOに関するさまざまな噂を、そのまま描いてはいない。エピソードとして採り入れ、巧みに再構成している。

それゆえ、現実と虚構の境目が不鮮明となり、不思議なリアリティーに包まれるのだ。

Digitized by Google

X—ファイル　TVシリーズ　データ

★シリーズの本筋。これだけは観ておきたい。☆モルダーやスカリーのプライベートな部分が垣間見られる、あるいはおすすめのエピソード。

「X－ファイル」第1シーズン　データ

	タイトル	原題	監督	備考
PILOT	序章		ロバート・マンデル	★科学主義者スカリー、変人モルダーに会う。Xファイル課に名コンビ誕生。
No. 101	ディープ・スロート	DEEP THROAT	ダニエル・ザックハイム	★鍵を握る最初の情報提供者、ディープ・スロート（「密告者」）登場。
No. 102	スクィーズ	SQUEEZE	ハリー・ロングストリート	☆ゲストのダグ・ハッチンソンの怪演が見物。後に続編も。
No. 103	導管	CONDUIT	ダイニル・ザックハイム	★シリーズの要、宇宙人に誘拐されたモルダーの妹サマンサの話に注目。
No. 104	ジャージー・デビル	THE JERSEY DEVIL	ジョー・ナポリターノ	
No. 105	影	SHADOWS	マイケル・キャトルマン	
No. 106	機械の中のゴースト	GHOST IN THE MACHINE	ジェロルド・フリードマン	
No. 107	氷	ICE	デヴィッド・ナッター	☆25万年前から生きる寄生虫をめぐりモルダーとスカリーの間に緊迫が走る。今もファンに人気の高い一作。
No. 108	宇宙	SPACE	ウィリアム・グラハム	
No. 109	堕ちた天使	FALLEN ANGEL	ラリー・ショウ	★ここでも政府によるUFO飛来の事実隠蔽工作が…。
No. 110	イヴ	EVE	フレッド・ゲルバー	★超人類育成へ、遺伝子操作実験が行われている最初のエピソード。
No. 111	炎	FIRE	ラリー・ショウ	☆モルダーの昔の恋人登場。いつも冷静なパートナーのスカリーは……。
No. 112	海の彼方に	BEYOND THE SEA	デヴィッド・ナッター	★スカリーの父が急死。スカリーはショックから立ち直れず……。
No. 113	性を曲げるもの	GENDER BENDER	ロブ・ボーマン	☆自由に性転換できる異星人出現。俗世間から隔離された宗教集団に属する彼らは敵か、味方か。
No. 114	ラザロ	LAZARUS	デヴィッド・ナッター	☆今度はアカデミー時代のスカリーの元恋人も登場。
No. 115	再生	YOUNG AT HEART	マイケル・レンジ	☆老化のメカニズムとは？　遺伝子操作の実験発覚。
No. 116	E. B. E	E. B. E	ウィリアム・グラハム	★ローン・ガンメン現わる。ディープ・スロートの目的も判明。
No. 117	奇跡の人	MIRACLE MAN	マイケル・レンジ	
No. 118	変形	SHAPES	デヴィッド・ナッター	
No. 119	闇	DARKNESS FALLS	ジョー・ナポリターノ	☆モルダーとスカリー、絶体絶命の危機に。
No. 120	続スクィーズ	TOOMS	デヴィッド・ナッター	☆「スクィーズ」に続き、食人鬼トゥームズが再び登場。
No. 121	輪廻	BORN AGAIN	ジェロルド・フリードマン	
No. 122	ローランド	ROLAND	デヴィッド・ナッター	
No. 123	三角フラスコ〈終章〉	THE ERLENMEYER FLASK	R. W. グッドウィン	★ディープ・スロート死す。すべての証拠が消えた今、X－ファイルの行方は。

「X－ファイル」第2シーズン　データ

	タイトル	原題	監督	備考
No. 201	リトル・グリーン・マン	LITTLE GREEN MAN	デヴィッド・ナッター	★X－ファイル課開設後の初仕事で、モルダーは妹が攫われた夜を追体験する。
No. 202	宿主	THE HOST	ダニエル・ザックハイム	
No. 203	血液	BLOOD	デイリン・モーガン	
No. 204	不眠	SLEEPLESS	ボブ・バウマン	★クライチェック、モルダーの新パートナーとして登場。
No. 205	昇天 PART1	DUANE BARRY	クリス・カーター	★スカリーが誘拐され、シリーズ最大の見せ場に。後の伏線にも。
No. 206	昇天 PART2	ASCENSION	マイケル・ラング	★クライチェックの正体が判明。スモーキング・マンとの関係も明らかに。
No. 207	トリニティ	"3"	デヴィッド・ナッター	☆スカリー不在の捜査中モルダーは謎の美女に惹かれる。
No. 208	昇天 PART3	ONE BREATH	ロバート・グッドウィン	★瀕死のスカリーが病院に出現。真相を求めてモルダーはスモーキング・マンと対決する。
No. 209	地底	FIREWALKER	デヴィッド・ナッター	
No. 210	レッド・ミュージアム	RED MUSEUM	ウィン・フェルブス	☆田舎町で起きた誘拐事件の背後には、宇宙人とも関わる政府の陰謀が……。
No. 211	不老	EXCELSIS DEI	スティーヴン・サージク	
No. 212	オーブリー	AUBREY	ロブ・ボーマン	☆爆弾魔や「ミレニアム」でお馴染みのテリー・オクインが刑事役でゲスト出演している。
No. 213	フェチシズム	IRRESISTIBLE	デヴィッド・ナッター	
No. 214	呪文	DIE HAND DIE VERLETZT	キム・マナーズ	

Digitized by Google

No. 215	新鮮な死体	FRESH BONES	ロブ・ボーマン	
No. 216	入植 PART1	COLONY	ニック・マーク	★モルダー、妹のサマンサに再会。地球植民地化計画とは……。
No. 217	入植 PART2	END GAME	ロブ・ボーマン	★モルダーは事件の発端になった北極海の飛行物体墜落現場へ向かう。
No. 218	恐怖の均整	FEARFUL SYMMETRY	ジェイムズ・ホィットモア・ジュニア	☆エイリアンは、実は動物をさらって実験していた…!?
No. 219	歪み	DON KALM	ロブ・ボーマン	☆ノルウェー沖の駆逐艦で奇怪な老衰現象がモルダーとスカリーを襲う。
No. 220	サーカス	HUMBUG	キム・マナーズ	
No. 221	カルサリ	THE CALUSARI	マイケル・ヴェジャー	☆悪魔に憑かれた少年を助けたモルダーの身にも、災いはふりかかるのか。
No. 222	幼虫	F. EMASCULATA	ロブ・ボーマン	
No. 223	影踏み	SOFT LIGHT	ジェイムス・カントナー	☆密室で起きた失踪事件でスカリーの教え子刑事が二人に応援を要請。
No. 224	カニバル	OUR TOWN	ロブ・ボーマン	
No. 225	アナサジ	ANASAZI	ロバート・グッドウィン	★UFOの機密文書を手に入れたモルダー。かつてそれにかかわった彼の父は口封じのためクライチェックに暗殺される。

「X－ファイル」第3シーズン　データ

	タイトル	原題	監督	備考
No. 301	祈り	THE BLESSING WAY	クリス・カーター	★モルダーを探すスカリーにウェル・マニキュアド・マンが近づく、一方、スカリーの身代わりになって姉のメリッサが殺される。
No. 302	ペーパー・クリップ	PAPER CLIP	ロブ・ボーマン	★復活したモルダーは父親の過去を探り、人体実験の真相に迫る。鉱山の名前をチェックしておきたい。
No. 303	D. P. O	D. P. O	キム・マナーズ	
No. 304	休息	CLYDE BRUCKMAN' S FINAL REPOSE	デヴィッド・ナッター	
No. 305	名簿	THE LIST	クリス・カーター	
No. 306	胃液	2SHY	デヴィッド・ナッター	
No. 307	歩兵	THE WALK	ロブ・ボーマン	
No. 308	土牢	OUBLIETTE	キム・マナーズ	★誘拐経験を持つ女性を見るとモルダーは妹のことを思わずにはいられない。
No. 309	二世	NISEI	デヴィッド・ナッター	★すべては一本の怪しげな通販ビデオ「異星人の解剖」から始まった。
No. 310	7 3 1	731	ロブ・ボーマン	★ハンセン病隔離病棟で行われた人体実験を二人がそれぞれの方法で暴く。
No. 311	黙示	REVELATIONS	デヴィッド・ナッター	☆不思議な現象を信じやすいモルダーと懐疑的なスカリーがこの回では逆転。
No. 312	害虫	WAR OF THE COPROPHSGES	キム・マナーズ	☆特殊な金属でできたゴキブリが登場。その名前に注目しよう。
No. 313	星	SYZYGY	ロブ・ボーマン	☆ふだんは冷静沈着なスカリーの、星の影響下で変貌したキャラクターが見もの。
No. 314	グロテスク	GROTESQUE	キム・マナーズ	☆再び信輪は戻るか。モルダーの元上官バターソン登場。
No. 315	海底	PIPER MARU	ロブ・ボーマン	★放射能に被曝した調査船を調べるモルダーの前に再びクライチェックが……。
No. 316	アポクリファ	APOCRYPHA	キム・マナーズ	★スキナー撃たれる。モルダーから渡されたクライチェックの内部にはブラック・キャノサー（隕石の生物）が入り込む。
No. 317	プッシャー	PUSHER	ロブ・ボーマン	
No. 318	骨董	TESO DOS BISHOS	キム・マナーズ	
No. 319	賭博	HELL MONEY	タッカー・ゲイツ	☆民族の血は組織のしがらみよりも濃く、事件を追う刑事も例外ではない。
No. 320	執筆	JOSE CHUNG' S FROM OUTER SPACE	ロブ・ボーマン	☆異星人によるカップル誘拐事件の真相についての謎解きが展開。キーワードは"黒服の二人組の男たち"。
No. 321	化身	AVATAR	ジェイムズ・チャールストン	☆スキナー副長官の私生活が初公開された特筆すべき回。
No. 322	ビッグ・ブルー	QUAGMIRE	キム・マナーズ	
No. 323	電波	WETWIRE	ロブ・ボーマン	☆電波にマインドコントロールされたスカリー、窮地に。
No. 324	タリサ・クミ	TALITHA CUMI	R. W. グッドウィン	★敵か味方か。姿を自在に変えられる謎の男ジェレマイア・スミスにモルダーはすべてを賭ける。

「X－ファイル」第4シーズン　データ

	タイトル	原題	監督	備考
No. 401	支配者	HERRENVOLK	R. W. グッドウィン	★ミスター　Xは殺され、その役目は国連性表補佐官のJ・バールビアスに引き継がれる。キーワードは"蜂と農場"。
No. 402	アンルーヘ	UNRUHE	ロブ・ボーマン	
No. 403	ホーム	HOME	キム・マナーズ	

Digitized by Google

No. 404	メラニン	TELIKO	ジム・チャールストン	
No. 405	追憶	THE FIELD WHERE I DIED	ロブ・ボーマン	☆絆は時間をも超えて……モルダーは南北戦争で戦った兵士だった前世の自分を見出す。
No. 406	整形	SANGUINARIUM	キム・マナーズ	
No. 407	紫煙	MUSINGS OF A CIGARETTE SMOKING MAN	ジェームズ・ウォン	★スモーキング・マンも実は被害者だったのか。初めて彼の過去と素顔が明かされる。
No. 408	ペーパー・ハート	PAPER HEARTS	ロブ・ボーマン	☆人間の記憶は常に"真実"なのか。自らをも疑わねばならなくなったモルダーは……。
No. 409	ツングースカ PART1	TUNGUSKA	キム・マナーズ	★隕石中の生物の謎を求めてモルダーはクライチェックと共にロシア・ツングスカ地方に向かった。
No. 410	ツングースカ PART2	TERMA	キム・マナーズ	★実は二重スパイだったクライチェックに再び裏切られたモルダーは、ブラック・キャンサーの実験台に。
No. 411	カビ	EL MUND GIRA	タッカー・ゲイツ	
No. 412	魂のない肉体	KADDISH	キム・マナーズ	
No. 413	タトゥー	NEVER AGAIN	ジョン・シバン	☆スカリーは入れ墨をしているエドという男に出会い好意を持つ。しかし邪魔はまったく思わぬところからやってきた。
No. 414	腫瘍	LEONARD BETTS	キム・マナーズ	☆癌細胞を食べて生きる男にターゲットにされたスカリー。この回は彼女の行く末を暗示するかのように終わる。
No. 415	メメント・モリ	MEMENTO MORI	ロブ・ボーマン	★スカリーの脳から現在の医療技術では治療困難な癌腫瘍が発見され、スカリーは悲痛な思いで死を覚悟する。
No. 416	P. O. W	UNREQUITED	マイケル・ラング	
No. 417	MAX PART1	TEMPUS FUGIT	ロブ・ボーマン	★墜落事故で死んだUFO研究家マックスはモルダーに何かを届けようとしていたらしい。
No. 418	MAX PART2	MAX	キム・マナーズ	★軍の妨害を受けながら核心に迫る二人。しかしマックスはもう帰ってこないのだ。
No. 419	凍結	SYNCHRONY	ジム・チャールストン	
No. 420	スモール・ポテト	SMALL POTATOES	クリフ・ボウル	☆モルダーとスカリーがこんなふうにツー・ショットしてくれたら…と願うファン必見の遊び心いっぱいの回。
No. 421	ゼロ・サム	ZERO SUM	キム・マナーズ	★スキナーは味方ではなかったのか。2人の関係に暗雲が。
No. 422	哀歌	ELEGY	ジェームズ・チャールストン	
No. 423	フラッシュバック	DEMONS	キム・マナーズ	★誘拐されたサマンサの夢にうなされてモルダーは無意識下の記憶を蘇えらせていく。
No. 424	ゲッセマネ	GETHSEMANE	R. W. グッドウィン	★今まで信じてやってきたことはなんだったのか。すべてに絶望したモルダーは銃口を自分の頭に向け……。

「X－ファイル」第5シーズン　データ

	タイトル	原題	監督	
No. 501	帰還　Part1	Redux	R. W. グッドウィン	★モルダーは生きていた!?　4年前から続いていた衝撃の事実が明らかに。
No. 502	帰還　Part2	Redux 2	キム・マナーズ	★死の床にいるスカリーは助かるのか。一大展開のこの回は絶対に見逃せない。
No. 503	アンユージュアル・サスペクツ	Unusual Suspects	キム・マナーズ	☆ローンカンメンとモルダーの出会いのすべてがここに。
No. 504	迂回	Detour	ブレット・ドゥラー	
No. 505	プロメテウス	Post-Modern Prometheus	クリス・カーター	☆Xファイル初のモノクロ画面に、ティム・バートンばりの世界が広がる。
No. 506	クリスマス・キャロル	Christmas Carol	ピーター・マークル	★死んだはずの姉メリッサからスカリーにメッセージが。電話の発信元にはエミリーという少女が待っていた。
No. 507	エミリー	Emily	キム・マナーズ	★DNA鑑定の結果、エミリーはスカリーの娘と判明。出産を諦めていたスカリーの感情が揺れ動く。
No. 508	狐狩り	Kitsunegari	ダニエル・ザックハイム	☆あの強敵"ブッシャー"が刑務所を脱走した。再び勃発した怪事件はモルダーへの復讐の幕開けなのか。
No. 509	分裂	Schizogeny	ラルフ・ヘネカー	
No. 510	ドール	Chinga	キム・マナーズ	☆S・キングが脚本を担当したモダン・ホラーの秀作。休暇中に遭遇した悪魔的事件にスカリーが単独で挑む。
No. SP 9840	インサイド　X－ファイル	Inside the X Files	グレン・キャスパー	★TV版でカットされた未公開映像やNGシーン、キャストのエピソードも。劇場版を観る前に観ておきたい。
No. 511	キル・スイッチ	Kill Switch	ロブ・ボーマン	☆肥大化した人工知能がモルダーたちと想像を絶する闘いを展開。ウィリアム・ギブスンの脚本も冴える。
No. 512	吸血	Bad Blood	クリフ・ボウル	☆吸血鬼は本当にいたのか。モルダーとスカリーがそれぞれの観点から事件の顛末を語る構成がユニーク。
No. 513	ペイシェントX	Patient X	キム・マナーズ	★以前スカリーがアブダクトされた山頂でマイクロチップを装着された大量の焼死体が発見。戦争開始か。
No. 514	赤と黒	The Red and the Black	クリス・カーター	★暗躍するクライチェックがモルダーに異星人による地球の植民地化が始まり抵抗か服従しかないことを告げる。
No. 515	旅人	Travelers	ビル・グラハム	★1952年、"赤狩り"で捕らえられた連邦局員に異変が。若き日のモルダーの父が鍵を握る人物として登場。
No. 516	マインド・アイ	Mind' s Eye	キム・マナーズ	
No. 517	万霊節	All Souls	アレン・クールター	☆信仰と倫理の板挟みになって苦しむスカリーを死んだエミリーのビジョンが導く。
No. 518	アンダーカバー	The Pine Bluff Variant	ロブ・ボーマン	★極右テロ組織に潜入したモルダーは政府が秘密裏に開発した生物化学兵器の脅威を目の当たりにする。
No. 519	幻妖	Folie A Deux	キム・マナーズ	
No. 520	ジ・エンド	The End	R. W. グッドウィン	★X－ファイルを解明できる超能力少年をめぐり、いよいよクライマックスへ。昔のモルダーのパートナーも登場。

Digitized by Google

作品特集 トゥルーマン・ショー

THE TRUMAN SHOW

●1998年・アメリカ・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビー DTS、SRD、SR ・1時間43分
●監督／ピーター・ウィアー　脚本／アンドリュー・ニコル、製作／スコット・ルーディン、アンドリュー・ニコル、エドワード・S・フェルドマン、アダム・シュローダー　撮影／ピーター・ビジウ　プロダクション・デザイナー／デニス・ギャスナー　編集／ウィリアム・アンダーソン、リー・スミス　音楽／バークバード・ダールウィッツ　衣装／マリリン・マシューズ　スペシャル・デザイン・コンサルタント／ウェンディ・スティテス
●出演／ジム・キャリー、エド・ハリス、ローラ・リニー、ノア・エメリッヒ、ナターシャ・マケルホーン、ホランド・テイラー、ブライアン・ディレイト
●配給／ UIP
●製作／スコット・ルーディン・プロダクション
●11月14日より丸の内ピカデリー1ほかにてロードショー
●本誌関連記事／9月下旬号、11月上旬号新作紹介グラビア

●ご注意！
本特集では作品の結末に触れています。物語の性質上、映画をご覧になってから読まれることをおすすめします。

Digitized by Google

作品評

情報社会の行き着く先

黒田邦雄

映画「トゥルーマン・ショー」のオリジナル脚本の舞台がニューヨークだったと知り、なるほどと思った。かれこれ二十年程前、初めてニューヨークのマンハッタンで数日をすごした時、ここは映画スタジオではないかと思ったことを鮮やかに記憶していたからだ。水の中に浮かんだ小さな島に、世界の頂点と底辺が凝縮して収まっているのはいかにも不自然で、まさに人工的に作られた街という印象だった。本当のマンハッタンは別の所にあって、私が連れてこられたのは観光客専用の偽マンハッタンだったとしたら……。そこで体験した出来事が、すべて巧みな演出によるものであったとしたら……。そして、もし街中にビデオカメラが設置されていて、私の行動が逐一誰かに見られていたとしたら……。

ニューヨークを舞台にした「トゥルーマン・ショー」もぜひ観たいものだが、ピーター・ウィアーは脚本を書いたアンドリュー・ニコルと相談して、マンハッタンとは全く異なる美しく静かな新興タウンに舞台を変更した。しかし、周囲を海に囲まれた小さな島、という設定はマンハッタンと同じで、つまり、周囲が水で囲まれた街という設定は変更不可能だったのだ。ここに映画の大きな秘密があり、感動のラストシーンを盛り上げる要素となる。この結末はフランク・ペリーの傑作「泳ぐひと」のオチに似ており、手法は違うものの両作品ともアメリカの裏面を暴露した点で共通している。

全世界十七億人の視聴者を誇るアメリカの超人気テレビ番組〈トゥルーマン・ショー〉は、しかしこの街ではオン・エアされていない。東洋の島国ですら人気沸騰の番組が、である。もちろん、それには理由があるわけで、この番組を絶対観せてはならない人物がこの島に住んでいるからだ。その人物こそ、映画「トゥルーマン・ショー」の主人公であり、テレビ番組〈トゥルーマン・ショー〉の主人公であるトゥルーマン（ジム・キャリー）その人である。

映画の初めのところで、この番組の創案者でテレビ・プロデューサーのクリストフ（エド・ハリス）が登場して、〝視聴者は作り物に飽きている。もっとホンモノの番組が要求されているのだ〟というようなことをコメントする。つまり、映画のネタを割っているのだが、それでもなお全体の構図をつかませないところに、この映画の卓越した構成力がある。意外な結末まで知らぬ存ぜぬを通すのではなく、ジグソーパズルのピースのごとき断片をちらつかせてなお、なかなか全体像をつかませないというわけだ。何となく見当はついていても、〝まさかここまでは〟と思ってしまう常識のワクをついたところがこの映画の勝因だろう。

そう、〝まさかここまでは〟というくらいにやらないと何事も受けない、今はそんな時代なのだ。しかし、この映画が素晴らしいのは、これほどの物語を編み出しながら、それを無邪気に楽しませるための映画にしていないこと。映画の姿勢は〝こんなことでいいのか〟にあり、〝ここまでやる〟という過激さをウリにした映画ではないのである。より過激なものを求め続ける観客に対して、近年のアメリカ映画はほとんど無節操なまでに応えてきた。今や映画と言うよりゲームであり、世界のすべてをゲーム化してしまおうというアメリカの本能的な作戦に、映画も巻き込まれていることは疑いない。フランスの著名な脚本家ジャン＝クロード・カリエールは、〝とりわけ視聴覚分野において顕著だが、アメリカの商業攻勢を前にして各民族はアイデンティティを失いつつある〟と語っている（『GQジャパン』）が、アメリカの商業活動そのものがゲーム化していることは、先だってのヘッジファンドによるマネー暴走騒ぎで暴露されたばかり。映画も経済もコンピュータ操作の巨大ゲームお化けとなり、世界を徘徊しているというのが実情なのだ。

〈トゥルーマン・ショー〉が全世界に二十四時間生中継されているという設定は重要で、全世界の人々が同じように熱狂している姿を映し出すところに、ウィアーの強烈なメッセージが感じとれる。それも、覗き見きわまれりの暴露ショーを、である。大衆の興味の行き着くところは、他人の人生を覗き見することであり、出来ればそれを操ることにある。日本のテレビでもワイド・ショーなどでそんな要求に応えているが、スターであれ犯罪者であれ、大衆の興味を引きそうな人物をクローズアップして、生い立ちから現在の私生活に至るまで、徹底して暴いてみせるのだ。こんな映像に慣らされた人々が、その覗き見趣味をエスカレートさせるのは当然のことで、出来ればセックスまでも見たいと思って不思議はない。

さあ、そこでクリストフが演出する〈トゥ

Digitized by Google

ルーマン・ショー〉だが、彼は神をも恐れぬアイデアを実現させていく。何と、最初のカメラは妊娠した母親のおなかの中に入り、この世に出てくる前の男の子、トゥルーマンをテレビに映し出すのだ。誕生したトゥルーマンは、四方を海に囲まれた街シーヘヴンで育てられ、少年から若者になり、今やかわいい妻メリルとしあわせな家庭を営んでいる。しかし、実はこの街はすべてセットであり、周囲の海までも作りものだった。トゥルーマン以外の人間はすべて俳優が演じており、妻も両親も親友も、みんな俳優である。トゥルーマンの行動は町に設置された数千台の隠しカメラにとらえられ、クリストフの演出で全世界に生放送される。性的行為はさすがにカットされているようで、番組のファンの証言によると、〝寝室になるとカメラが切り替わり、風に揺れるカーテンがとらえられる〟とのこと。

観客に高見の見物をさせない アメリカ映画の新しい傾向

街を照らす大きな満月も、雷鳴も、太陽の輝きも、朝・昼・夜の空の変化も、みーんなコンピュータ仕掛けで、知らぬはトゥルーマンばかりなり。いくらなんでもそんなバカなと思うのだが、「プライベート・ライアン」の戦場シーンを、映画であることを隠して後世の若い人に実写フィルムだといって見せたとしたらどうだろう。多分、それを信じてしまう者は少なくないのではあるまいか。人間はいったんそう思い込んでしまったものを、途中で訂正することは至難の技である。まして、赤ん坊の時から虚構の世界しか見ていないトゥルーマンが、その不自然さを見破ることは不可能に近い。満月はこんなものと思い込んでいるわけだし、雨が不自然に降っても不自然と感じる判断材料を持たされていないのだから。

こんな作られた自然の中で育てられ、絵に描いたようなしあわせ生活しか経験のないトゥルーマンが、人間的にシンプルであるのは当然である。彼のわざとらしい陽気さも殆どCF的なノリなのだが、つまり、彼が育ってきたのは、人間や社会の影の部分を取り除いたCF的世界だったということ。それを考えると、ジム・キャリーの起用がいかに適切なものかがわかってくる。彼は内面を無視して表面だけで人間を演じようとする点で斬新な俳優だが、そんな演技法がここで実にうまく生かされているのだ。どうもおかしいと気づき始める後半からの演技では、顔面演技も極力押さえ、観客の同情をひっぱる役割に徹して神妙に演じているのもいい。

〈トゥルーマン・ショー〉の壮大なドラマのクライマックスは、トゥルーマンがこの巨大セットの外に出られるかどうかである。セットの外に出るには、大きな海を越えねばならない。しかし、トゥルーマンはトラウマによる水恐怖症で、海に近づけないようにされている。最後の最後、自分に仕組まれた罠を知ったトゥルーマンは、水恐怖症を克服して小さなヨットで大海に乗り出す。それを知ったクリストフがあの手この手でそれを阻止しようとするのだが、このクライマックスにおけるウィアーの演出はお見事というしかない。満月の中のスタジオに陣取ったクリストフは、海上のトゥルーマンに向かって〝君は逃げられない！〟と叫ぶ。嵐を起こしヨットを転覆させ、夜を朝に変えるクリストフは、シェイクスピアの戯曲に出てきそうな人物だ。テレビ・スタジオから響き渡るクリストフの声はまさに天の声のようで、現代の天の声はテレビ・スタジオから届けられるという皮肉が背筋を凍らせる。

情報社会の行き着く先は、自分だけ知らされていないのではという恐怖感の増幅だろう。〈トゥルーマン・ショー〉が超人気番組になったのも、クリストフが言うように視聴者が究極のリアリティ・ドラマを求めたからだけでなく、二十四時間放映についていかなければ社会の落伍者になるという恐怖感からではないか。テレビに釘づけになっている人々を見ていると、二十四時間休まないマネー・マーケットを追う投資家の姿とだぶってくる。テレビとマネーは確実に人々の二十四時間を支配し、人生を支配しつつあるのだ。つまり、トゥルーマンは実は視聴者及び観客自身なのである。

ディヴィッド・フィンチャーの「ゲーム」では、マネーゲームで財産を築いた投資家の人間精神復活のために、壮大な人生ゲームが仕掛けられるのだが、あの映画と「トゥルーマン・ショー」はかなり似ている部分がある。フィンチャーの言葉を借りれば、〝ドラマ構成は凄く複雑なんだけど、エンディングを知ってしまえば何ともシンプル〟であるところとか、〝どうなってるのかわからなくなるのは主人公だけでなく、観客もまたそういう状況に陥れられる〟ところとか、〝画面では見えないもうひとつのドラマを観客の頭の中に描かせる〟ところとか……。つまり、観客に高見の見物をさせない映画、ということだが、このあたりがアメリカ映画の新しい傾向と言えるのではないか。面白がらせるためには何でもやる、のではなく、面白がらせる限界を示唆したこれら映画は、明らかにアメリカ映画のあるべき姿を模索しているように見えるのだ。

Digitized by Google

視聴率競争の本当の犠牲者

山田やよい

なんと哀しい映画なんだろう。「トゥルーマン・ショー」を観終わって地下鉄に乗るとこらえきれずに涙がこぼれた。テレビという大きな影響力を持つメディアの制作に携わったことのある人間にとっては、これはあまりにも切なくおかしく辛い映画だ。

しばしば私は、テレビの画面をとおして架空の現実を見せられているのではないかという夢ともつかぬ思いを抱くことがある。とりわけ私達がニュースなどで見ている世の中は、もしかしたら作られた世界なのかもしれないと。すべてフィクションだと明示されたドラマにも現在のさまざまな情報が取り入れられ、いたるところで目にする光景も、ふと、作り物ではと感じる時もある。まるで幻覚を見ているような気分だが、あながちあり得ない事だと言いきることもできない。本誌（No.1261）でジャーナリズムの在り方について触れたが、マスメディアというものは、報道に限らず、何者かによって少なからずコントロールされた情報のうえに成り立っていることを考えると、「トゥルーマン・ショー」の世界にも身近などこかで起こった事実のような現実感を覚えずにはいられない。

テレビ番組の制作側から映画ライターに転向した頃、テレビなんてねえ、という声をよく耳にした。テレビは質より視聴率だというわけだ。映画製作と同じように、テレビ番組制作者にとって、質と視聴率の両方が高い番組を作れたらどんなに嬉しいことか。しかし、不特定多数の視聴者からはね返ってくる視聴率という魔物は、それほど甘くない。視聴者は退屈するとすぐにリモコンでチャンネルをかえてしまう。視聴率の低迷した番組は即座に打ち切りだ。そこでスタッフは、知恵を寄せ合い体力を酷使して日夜視聴率と闘うことになる。皆、面白い番組を作ろうと必死なのだ。それが度を超してしまい、やらせ事件やオウム真理教と坂本弁護士一家に関する報道など大きな問題をひき起こし、制作者のモラルが問われたりもしたが、その背景には、次々と過剰な刺激を追い求める視聴者のモラルの欠如があることも確かだ。

際限のない視聴率との闘いに歪みが生じ、その歪みの中で犠牲者が生まれる。放送回数がなんと1万回を超え常に高視聴率をキープし続けている〝トゥルーマン・ショー〟という超お化け番組の本当の犠牲者は、実はプロデューサーなのではないかと私は思う。彼こそがマスメディアの強大な力に踊らされ自分を失ってしまった人間なのだ。トゥルーマンが真実に気付き必死の逃避行を企てたとき、今こそが番組の山場だ、自分の力の見せ所だ、と見てとったプロデューサーは、あらゆる手段を駆使して番組を盛り上げてゆく。ここぞという場面で忘れずにお涙頂戴の音楽を演奏者にキュー出しもする。その冷静で真剣な眼差しに、そして、あたかも親離れしてゆく子供に接する父親のように（確かに彼は国民的スーパー・アイドルの生みの親だが）トゥルーマンに語りかける口調に、私はたとえようのない哀しさを感じた。彼は何をもって「アイム・ア・クリエイター」と言いきれるのか。

この番組のあっけない終了と同時に、それまで30年近くトゥルーマンの身の上に何が起こるのかと固唾を呑んでテレビの画面に釘付けになっていた視聴者は、何事もなかったかのように一瞬にして全てを忘れ去る。彼らの興味は、もう次の対象へと移っているのだ。視聴者なんてこんなもの、そしてこれがテレビの宿命、と観る者を冷たく突き放したまま、番組と同じくこの映画もいともあっさりと幕を下ろす。脚本を書いたアンドリュー・ニコルの力量を痛感させられるのは、お金さえあれば実現可能かと思われるほど視聴率獲得の方法論に叶った画期的な番組を考え出したばかりでなく、巨大に膨れあがってゆくテレビ産業の脆弱さと、電波をただ興味本位に受け取るだけの視聴者の無責任さの両面を、皮肉なユーモアで覆い隠しながらラストの数カットで見事に描ききっているところだ。

さらにニコルは、天地創造の神や既存の宗教観にも疑問を投げかけている。「アイム・ア・クリエイター」と語りかけるプロデューサーの声は、トゥルーマンにとってはまさに天から響く神の声だ。神は自分に背き自由な意志を持った人間に、容赦なく裁きを下す。トゥルーマンの乗ったヨットがセットの壁にコツンと当たったとき、その神の創った世界がいかにちっぽけなものであったのかに気付かされる。そこで生きる人間はクローンのようだ。番組終了後、彼らは一体どうするのだろう。もしかしたら私達だって……。ユニークなエンド・クレジットを見ながら、さまざまな想いが頭の中を駆けめぐった。テレビの熾烈な視聴率競争の果てにある、こうした幾重にも重なる哀しさを増幅させているのが、ジム・キャリーのくったくのない明るさであることは、言うまでもない。

Digitized by Google

ピーター・ウィアー監督インタビュー

誰にでも、自分の決断で、心地いい世界から飛び出さなければならない瞬間がある

インタビュアー・佐藤友紀

「そうだった、そうだった！　あの時はけっこうな額の金を払ったんだ。それでも絶対あそこのシーンでは、『最後の四つの歌』が欲しかったからね。ちゃんと払ったよ（笑）」

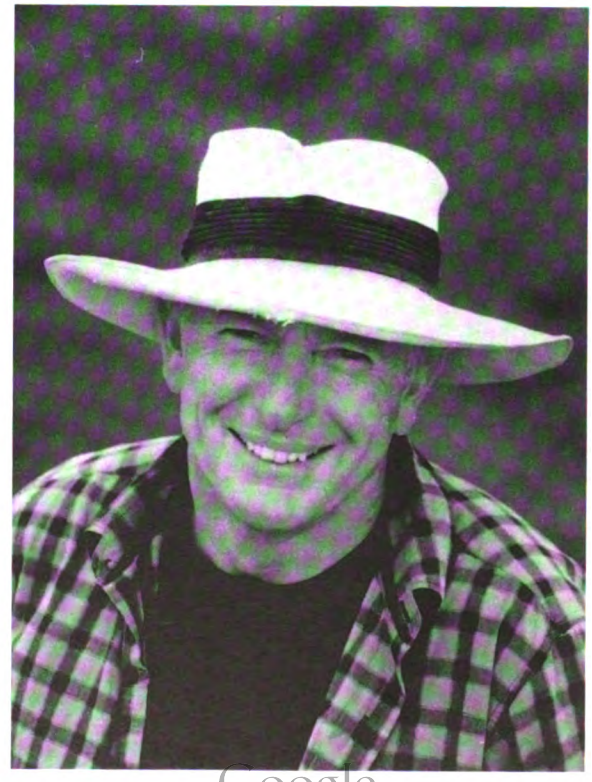
ピーター・ウィアー監督が「あそこのシーン」と言うのは、もちろん「危険な年」でリンダ・ハントがある決意をするクライマックス。リヒャルト・シュトラウスの歌曲が強烈な印象を残すが、この『最後の四つの歌』、実は使用料が高くてNYのフェルド・バレエ団（映画「ウエスト・サイド物語」でベビー・ジョンを演じていたエリオット・フェルド主宰のバレエ団）が公演した時は、なんと値段の折り合いがつかず、音楽なしの演目になってしまったくらいだ。

ウィアー監督は、撮影中、いや準備段階から「かなり音楽の力を借りる」という。

「その時その時で気に入ったCDやテープを現場に持ち込んでね。本番以外はずっと音楽を流している。もちろんそれらの曲は、撮り終わったフィルムにつける音楽とは無関係の場合が多いんだけど、今回は最初からピッタリはまったな。なぜか気分はフィリップ・グラスだったし（笑）、ショパンのピアノ曲を聞きたくてね。ずっと後になってだよ、映画でも使ったあの部分に〝ロマンス〟と副題が付いていて、ちょうどショパンが去ってしまった恋人を思って作曲したものだと知ったのは。すごい偶然だと小躍りしたよ（笑）。フィリップ・グラスは、なんと本人が音楽をやってくれることになった。試写室で、グラス本人の後ろに座って、次々に僕の持っているグラスのCDを〝このシーンにはこんなの、どうだろう？〟と尋ねるというのも変わった体験だったなあ」

監督作品「ガタカ」を見てしまった今ならなるほどとうなずけるが、アンドリュー・ニコルの最初のシナリオは、もっともっとダークだったという。

「しかも、物語の舞台はニューヨークだったんだ。きっと『メトロポリス』的なものをアンドリューはイメージしていたんだろうね。でも、それだとあまりにもはまりすぎるというか、逆にイメージが固定されてしまう。しかも、ニューヨークのようにあらゆる情報がとびかっているところで外界と接触しないで生きるなんて不可能に近いし。で、嘘のように美しいフロリダのシーヘヴンに舞台を変更したんだよ。今回は、いろんな意味でチャレンジングだった。というのは、観客がトゥルーマンと同じ視点で映画を見てくれて、次第に〝ん？　何か変だな〟と思い始めるのが理想だったんだが、仕掛けを全然語らないでくれ、と言うのはムリだよね。だとしたら、その〝奇妙な感じ〟を、どの段階でどの程度出していけばいいのか。あるいは、僕が最も感じてもらいたいのは、〝誰にでも、自分の決断で、心地いい世界から飛び出さなければならない瞬間がある〟ということなんだけど、このストーリー自体を〝トゥルーマンという特別な人間にだけ起こったこと、と受け取られないようにするにはどうしたらいいか、とかね。エド・ハリスが演じるクリストフも、即ジョージ・オーウェル的なものと結びつけられるが、彼自身、あの番組以外の外界をほとんど知らないというパラドックスもある。そして、クリストフとトゥルーマンの関係は、どこか父と息子といった側面も持っているし、その意味で言えば、状況こそ特殊でも、テーマとしては普遍的なものを内包していると言



PETER WEIR　1944年、オーストラリアのシドニー生まれ。シドニーのテレビ局ATNを経て手掛けたオムニバス映画の一編"Michael"と"Homesdale"でオーストラリア映画協会賞グランプリを受賞。75年の「ピクニック・アット・ハンギング・ロック」で注目され、以後「誓い」(81)「刑事ジョン・ブック／目撃者」(85)「モスキート・コースト」(86)「いまを生きる」(89)「グリーン・カード」(91)「フィアレス」(93)を発表している。

Digitized by Google

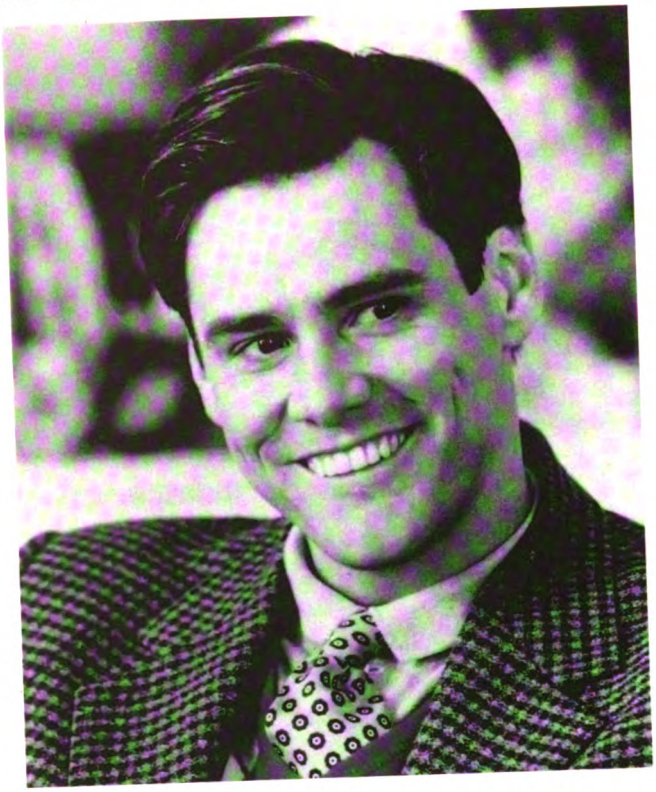
えるんじゃないかな」

してみると、当初デニス・ホッパーが予定されていたというクリストフ役が、エド・ハリスに落ち着いたのはかえって新鮮だったかもしれない。

「そうだね。今回のジム・キャリー、そしてエドなんかについても言えるけど、僕は一回現場で築いた信頼関係は絶対に崩れないという確信を持っているんだ（笑）。それは、その作品が例えば誰かにオスカーをもたらしたとか、そんなチャチなことが原因じゃない。監督である僕が、映画っていうものはクリエイティブな全てのことに対して、常にドアを開けてあると思い、スタッフ、キャストもそれを信じて〝自分たちの映画〟と思ってくれれば、そこには最もピュアな共犯関係が生まれるんだ。『いまを生きる』に出てくれた若者たちなんて、最も多感な時代だったせいもあるのかな。ま、イーサン（ホーク）が旗振りをすることが多いんだけど（笑）、ロバート・ショーン・レナードやジュード・ロウといった仲間たちと、非営利の『ゴドーを待ちながら』を上演する時などにも、律義に僕を呼んでくれてね。場所がテキサスというんで、妻も僕も謹んで御辞退したんだが（笑）。今回の『トゥルーマン・ショー』も、これからいろんな形で発酵していけたら嬉しいね」

クリストフの役について、複数のジャーナリストからヒットラー的だ、いやそれを言うなら宣伝相だったゲッペルスの方だろう、といった指摘を受けたとウィアー監督は言う。

「わざわざ50年以上逆上らなくても、オーストラリアにはポーラ・ハンソンという、白豪主義をかかげて人気を得ている政治家もいるし、マニュピュレートの怖いところは、誰もが最初は〝ああ、こんな過激なことを言う奴も、とりあえず存在してるのも面白いかな〟と自分より下に見ているうちに取り込まれてしまうことにある。日本にだって、ポーラ・ハンソンのような人間はいるはずだしね。『トゥルーマン・ショー』にも、その恐怖を見出せるはずだよ」



ジム・キャリー インタビュー

トゥルーマンは僕自身、あるいは僕の父の延長線上にあるキャラクターなんだ

インタビュアー・佐藤友紀

ウィアー監督の「どんどん自分のアイディアを出してくれ！」という言葉は、自分でネタを考えるスタンダップ・コメディアン出身のジム・キャリーにとっては、「天の声にも等しかった」とか。

「トゥルーマンが隣人に毎朝呼びかける〝おはよう、こんにちは、ただいま、おやすみ！〟なんていう挨拶が一番いい例かな。トゥルーマンというキャラクターを、実は僕は、自分自身、あるいは僕の父の延長線上として考えたんだよ。特に父のことを思い描いた。父は世の中がどんなに困難な状況になっても、〝大丈夫だよ！〟という人だった。僕は父を愛しているし、尊敬もしているけど、一見、楽天的な父の、人とぶつかるのを嫌がったり、常にニコニコしている姿が時には腰抜けに見えたこともある。本質は、他人を傷つけない繊細な人間だというのにね。そういう僕の父みたいな人間にとっては、ただ〝おはよう！〟と言うだけじゃ足りないんだ。みんながその日一日幸せであってほしい、と思うはずだから、そういう気持ちを表す表現が浮かんできたんだよ。しかもトゥルーマンは、他人には毎日同じに見えるのに、一日一日が特

Digitized by Google

JIM CARREY　1962年、カナダのオンタリオ州生まれ。15歳からトロントのクラブに出演し、81年ＬＡへ。90年からコメディ・ショー『リビング・カラー』に出演して人気を得る。94年に主演した「エース・ベンチュラ」が大ヒット、以後「マスク」(94)「ジム・キャリーは Mr. ダマー」(95)「バットマンフォーエバー」(95)「ケーブルガイ」(96)「ライアーライアー」(97) などに次々に大ヒットを飛ばしている。次回作は "Man in the Moon"。

別だと考えている。だからこそ彼は、一日中、人に挨拶をして、ニコニコしっ放しなのさ(笑)」

トゥルーマンのファッションもそうだが、ジム・キャリー自身が大ファンだというジェームズ・スチュアートの影響が、そこここに見られると本人は分析する。

「だって『スミス都へ行く』なども政治と腐敗を描いているだろ。『トゥルーマン・ショー』は、ある意味でジミー・スチュアートやフランク・キャプラ的なもののパロディと言ってもいいんじゃないかな。つまり、この作品は、もし現実にあったらいいなと思う価値と、無知であることに恐怖を抱くという現実味とがうまく混ざり合っていると思う。この映画で描かれているようなことが現実に起こりうるかと聞かれれば、〝あり得ることだ〟と僕は言うだろうね。今、現実に起きている。はっきりと自覚できる形ではなくとも、確かに類似したことはあるし」

そんなジム・キャリーの、シーヘヴン生活の感想がユニークだ。

「アハハ、宝探しをして迷っていると、突然髄骨に出くわすみたいな感じだったかな。泡がわき出る水槽みたいなものだよ。そんな感じで、人が幸福に住んでいる本物のような町を作ったんだから、あれは驚異的だね。そうそう、『スター・トレック』のエピソードに、壷の匂いを嗅ぐと、いきなり全ての問題が解決する話があったけど、シーヘヴンがまさにそういうイメージだな。幸せといえば、あれで幸せなんだろう。けど、黒人はいなかったぞ(笑)。クリストフの描く、ノーマン・ロックウェル風な悪夢。やっぱり、すごく変だよ」

誰もが意外に思ったトゥルーマン役との遭遇も、キャリーにとっては必然だったようである。

「最初からピーターは僕に演じさせたいと思っていたみたいだし、トゥルーマンはジム・キャリーでもあるんだよ。僕の現実の人生に照らしても身近に思えるんだ。僕は奇跡を信じる男だが、それは、サイコロを振ってツキを呼ぶようなものじゃ絶対にない。そんな人間は基本的にはまやかしでね。そこそこの仕事を得て、それで問題なしというのも、僕はなぜか満足できないんだ。少なくとも、そういう状態がこれまで三度はあった。どこに自分が向かっているかはわからなくても、とにかく進む。全てを整理してしまって、自動車暮らしになったこともあるよ。コメディで舞台に立つようになり、毎晩、拍手喝采で客に受けて、かなり稼いでいた時期に、思い切ってラスヴェガスから離れたんだ。生気をなくしたままでいるより、死んだ方がいいと思ったからね。一度コメディを捨てて、何もない状態でステージに立つ。そして、何かを見つけるまで、ただ朗読していたんだよ。でも、これこそが『トゥルーマン・ショー』という映画のメッセージだと思わないかい？　人が何を言おうと、あるいは、〝今さら愛する人を探す必要なんてないじゃないか。君の周りには君を愛している人間が既にいるんだし〟とどんなに言われようと、一緒に生きていく人間は自分で探さなくちゃ意味ないし、それ一つとっても、僕自身に深い教訓となった映画作りだったよ」

子供時代、トゥルーマンのような秘密の宝箱を持っていたか？　と尋ねたら、

「ギャグに使う道具を入れる小道具箱ならね(笑)。そいつをいつも持ち歩き、いろんな人間になって遊んだよ。それが得意芸となり、自分の才能を信じるようになったんだ」とか。生まれながらのコメディアン、役者と言えそうだ。

Digitized by Google

エド・ハリス インタビュー

クリストフは、神やキリストの側面もあるくらいに大きな存在なんだ

インタビュアー・佐藤友紀

「クリストフのいで立ちが、エリッヒ・フォン・シュトロハイムからインスパイアされてるだって!? ピーターは一度もそんなこと言ってなかったぞ（笑）」

スクリーンでお馴染みのブルーアイが鋭く光る。思わずビビリそうになると、次の瞬間白いレースのカーテンの向こうを見つめ、詩を朗読するかのように「ダーク・ボガードが見つめていたヴェニスの海だな」。このギャップがおかしくて、吹き出しそうになったくらいだ。

「ヴェニスに来たのは初めてでね。昨日、グッゲンハイム美術館にジャクソン・ポラックの絵を見に行ったら、全作品、どこかの展覧会用に貸し出されていたよ（笑）。今、ジャクソン・ポラックについての映画を撮ろうとしてて、かなり進行中だから、彼のことは全て知っていたかったんだけどね」

「トゥルーマン・ショー」のクリストフは、もちろん重要な役だが、エド・ハリスが撮影所にいたのは二週間に過ぎないという。

「それだけ密度が濃かったということだよ。クリストフとトゥルーマンの関係は、実はとても複雑なんだ。クリストフはトゥルーマンが成長するのをずっと見守ってきて寝室の秘密まで知っている。父と息子という関係もあるし、それ以上に大きな意味も持ち、彼はトゥルーマンが存在していることに責任を感じてさえいる。ってことは、神やキリスト的な側面もあるくらいに、クリストフは大きな存在だ。トゥルーマンが脱出しようとすると、最初は怒って彼を殺しかけるんだが、生きていることがわかると、ついにはそんなトゥルーマンを誇りに思うようになる。つまり、クリストフは邪悪な人間なんかじゃないんだよ。確かに何かが欠けているとは思うけど、僕は彼を、職人のような面を持つ男としてとらえてみたよ」

ジム・キャリーとは逆に、エド・ハリスがウィアー監督に進言したアイディアは「即、却下されてしまった」と苦笑いする。

「自分でも面白い解釈だと思ったんだけどなあ（笑）。つまり、クリストフを背中にこぶがあるような男にしたらどうか、と考えたんだ。ピーターは嫌がったけど（笑）。カジモドのような感じだよね。大人になって治っても、子供時代に同年代の子と遊んだことのない、真の孤独を知る男。そんな男が創り出す世界は、往々にして現実には存在しないものだろう？ 自分の寂しかった少年時代の代わりにトゥルーマンを通して完璧な人生を歩ませようとする。背中のコブは諦めたけど、クリストフの起源としては、この考えが常に頭にあったよ」

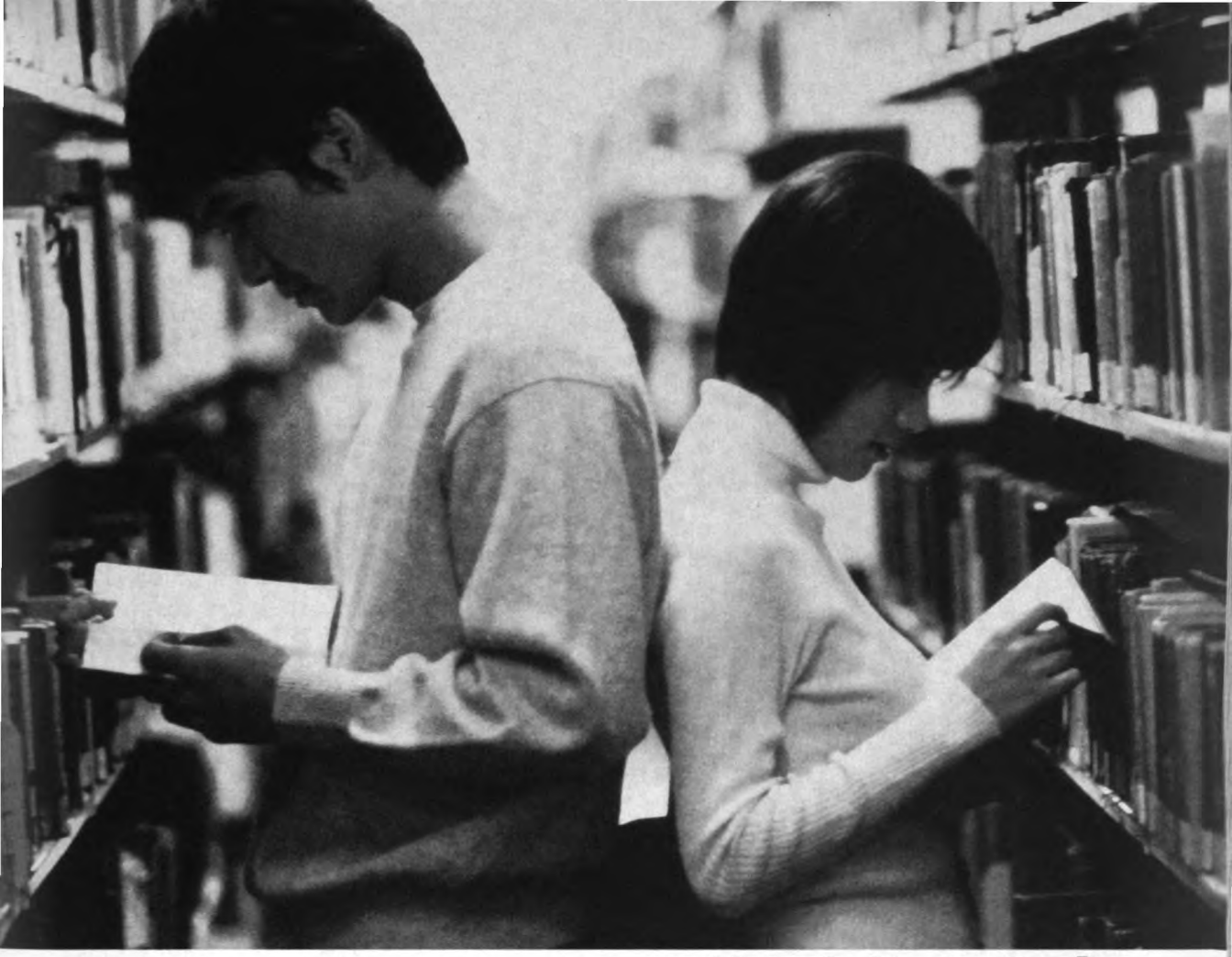
これまで出演した映画では「ジャック・ナイフ」の演技が一番満足しているという意外な答え。

「意外と言えば、先月トロントで、ミュージカル『成功の甘き香り』のワークショップに参加したよ。人前で歌うのなんて、20年ぶりだったけど（笑）。本当に楽しかったな。と言っても、自分ではミュージカルはほとんど見ないんだけどもね（笑）。マーヴィン・ハムリッシュの音楽、ジョン・グエアの脚本に興味を持って、わざわざトロントまで恥をかきに行ったわけさ（笑）」

かつて『キャメロット』の舞台にも立ったハリス。きっと渋い歌声だろう。

ED HARRIS 1950年、ニュージャージー州生まれ。大学で演劇と美術を学ぶ。LAの小劇団などで舞台に立った後、78年「コーマ」で映画デビュー。現在も舞台で活躍しているが、映画出演作には他に「ライトスタッフ」(83)「プレイス・イン・ザ・ハート」(84)「ジャックナイフ」(89)「ウォーカー」(87)「アビス」(89)「サ・ロック」(96)「目撃」(97) などがあり、95年の「アポロ13」ではアカデミー助演男優賞にノミネートされた。

Digitized by Google



作品特集 落下する夕方

●1998年・日本・カラー・ヴィスタサイズ・1時間46分
●監督・脚本／合津直枝　製作／鎌島喜夫　プロデューサー／合津直枝、当摩寿史　原作／江國香織　撮影／中堀正夫　音楽／西村由起江　照明／丸山文雄　録音／木村暎二　美術／富田麻友美　編集／大島ともよ
●出演／原田知世、渡部篤郎、菅野美穂、国生さゆり、田邊季正、初瀬かおる、木内みどり、大杉漣、日比野克彦、浅野忠信、中井貴一
●製作／松竹、テレビマンユニオン、衛星劇場
●配給／松竹　配給協力／テレビマンユニオン
●11月7日よりシネスイッチ銀座ほかにて順次ロードショー
●本誌関連記事／11月上旬 Face ：原田知世、11月上旬号新作紹介グラビア、4月上旬号現場訪問ルポ

Digitized by Google

敏腕プロデューサーがやり残したこと

合津直枝監督は律義な人だ。そして、この映画もまた律義な作品に仕上がっている。

人間関係がどんどん稀薄になり、それでいて傷つくことの多い現代において、心の〝癒し〟と〝再生〟がとても重要なテーマであることは今さら言うまでもない。合津監督が映画で初めてこの問題と向き合ったのは、彼女が企画・プロデュースした3年前の作品「幻の光」だった。このときは監督に当時33才の気鋭演出家、是枝裕和を起用、自身はプロデューサーに徹した。宮本輝の同名小説を映画化したこの作品は、夫を突然亡くした若い人妻が、再婚先の能登に赴き、そこで喪失感から立ち直って心の再生を果たすまでを、淡々としたタッチのなかにも力強く描き出し、ヴェネツィア映画祭で金のオゼッラ賞を受賞するなど国際的な評価を得た。主演した江角マキコの役者としての認知度を一気に高めたほか、是枝監督、合津プロデューサーの仕事ぶりも高く評価された。だが、合津プロデューサーが実はすっかり満足していたわけではなかったことが、彼女自身が脚本を書き、初監督したこの「落下する夕方」を観てわかった。

原作は江國香織の同名小説。20代後半の女性が、4年間同棲していた男性から突然別れを切り出される。彼女は男性を責めも、泣きもわめきもせず、仕事も休まない。ただ心に大きな空白が生まれただけだ。その空白を埋める未練から、二人で暮らした部屋から離れずにいたら、なんとそこへ別れの原因となった少女が飛び込んできてそのまま居ついてしまう。こうした奇妙な三角関係が成立し、やがてヒロインはその三角関係を通して失くした恋を静かにみつめ、空白を埋める未練を少しずつ取り除いていく。そして三角関係が終りをつげたときに再生の第一歩を踏み出していく。テーマは〈喪失と再生〉。つまり「幻の光」と同じである。では、なにが違うのか。

作品評

より身近で今日的な問題として再構築された《喪失と再生》

春岡勇二

「幻の光」のヒロインの味わう喪失感は、なにかに魅入られたかのような原因不明の突然の夫の死だった。「落下する夕方」ではこれが同棲相手からの一方的な別れの宣言となる。また、ヒロインの住む環境が、都会の下町から荒々しい自然の能登へと急激に変わり、それが喪失から再生への心の旅を促していった「幻の光」に対して、「落下する夕方」はヒロインのいる場所も仕事も変わらない。ヒロインは以前と同じ暮らしを続けながら少しずつ少しずる恋を失っていくのだ。つまり、劇的要素の多かった「幻の光」で描いた〈喪失と再生〉を、より身近で今日的な問題として再構築したのがこの作品なのだ。それが合津監督のやり残したことだったのだ。

しかし、そう考えてくると、恋敵と共同生活を送るという設定はいかにも作りものめいている。それではいかに今日的に描こうともリアルさを失っているのではないか、そう思いながらこの作品と対峙したのだが、しばらく観ていくうちにそれが杞憂であったことがわかった。合津監督はちゃんとある仕掛けを持って、一人の女性が恋を失っていく様子をみつめさせていることがわかったのだ。ヒロインのリカを演じているのは原田知世。転がり込む少女・華子は菅野美穂。この二人が実は、同じ人物の表と裏として造形されているのだ。

華子とリカ。二人の関係を示す〝月〟

これから作品を観るという読者も多いだろうから、あまり詳しく書くのもどうかと思うので、二人の関係を示すのは〝月〟とだけ記しておこう。華子はうさぎの耳をつけて、リカの同棲相手、渡部篤郎演じる健吾の前に現れたという事例に始まって、何度も登場する半月、満月、十三夜。それを少しだけ気にしてみれば、それが符牒であることに気がつくはずだ。なにしろ合津監督は実に丁寧にそのことを示してくれているのだから。また、リカの母親を木内みどりが、華子の父親を大杉漣が演じていることも、「幻の光」ではこの二人が、ヒロイン・ゆみ子の両親を演じていたことと考えあわせれば、リカ＝華子の一つの証しとみるのも、いささか強引ながら無理ではないだろう。

では、リカ＝華子の意味は何なのか。つまりはそれが、健吾によって傷つけられたリカの〝癒しの術〟なのだ。健吾の見るリカは、やさしく、料理も歌もうまい、優等生的な女性だが、実はそれは、自分が表に出している半面でしかないことをリカは知っている。見せていない半面には自由奔放で、天衣無縫にふるまうもう一人の自分がいるのだ。健吾に去られたリカは、もう一人の自分である華子を同居人として呼び出し、例えば華子によってボロボロにされる健吾を作り出すことによって、喪失感からの脱出を図っていく訳だ。そして、ついに心の再生を果たした彼女が、それによって、以前からのもう一つのトラウ

Digitized by Google

映画を訪ねて［番外編］

「落下する夕方」の空が近いベランダのマンションといちょう舞うお寺に行く

田沼雄一

マをも克服するところには、女性のたくましさがみごとに表されている。

そして、この作品で注意して見ると、おもしろいものがもう一つ。それは、健吾が家を出るまでの開巻部分と、終盤、リカと華子が湘南に出かけるところあたりからラストまでの画面構成である。それは例えば障子の桟や襖によってタテに隔てられていたら、その画面にいる人物たちは対立的立場にあり、水平線や石垣などによってヨコに結ばれていたら、その画面では友好的な心情を抱きあっているのだ。これは決して合津監督独自のスタイルというのではなく、いわば表現の基本でもあるのだが、ここまできっちり行われているのを見たのは久しぶりだった。ラスト近くで、恋の形見として預かっていたラガージャージを健吾に返すリカが、服のボーダーをヨコからタテにして返すのには驚いた。こんなところにも、監督の律義さがうかがえる。

こうやって見てくると、この作品が身近で今日的な《喪失と再生》というテーマを語るのに、いかに細かく丁寧に作られているかがわかる。しかし、だからといって問題がないわけではない。その一つが健吾のキャラクターである。この作品は、あくまでも女性の心の《喪失と再生》を描こうとするものだから、男性がおのずと狂言回し的な立場に置かれるのは仕方がないが、それにしても健吾のキャラクターは掘り下げが浅く、フニャフニャし過ぎている。これでは男女どちらからも感情移入できないだろう。そして、テーマに向かってあまりに律義に整然と作られているのも、作品の印象を小さくしている気がする。合津監督がもう少し野放図に、わがままに映画に取り組んだとき、そこにはかなり力強い表現が生まれると思う。期待したい。

リカは健吾の、

「引越そうと思う」

のひと言に

「持ち家？　まさかだよね」

と笑みこぼしながら答える。一瞬、健吾からの正式なプロポーズを期待して「持ち家」と反応したのだと思う。

しかし健吾の「引越そう」は自分ひとりでのことだった。つまりリカはフラれたわけである。同棲中だった二人。いっしょに暮らし始めて四年になる。つい二週間前、健吾はひと目惚れしたという、「ウサギの耳」をつけていた女性に。それでリカと離れて暮らす決心をした。

「持ち家？　まさかだよね」

と答える前、リカは健吾といっしょに暮らしている部屋のことをこう言っている。

「……今度のマンションすごく気に入っていたでしょ。ベランダから空がうんと近いって」

ベランダから空が近い、いい言い方だなぁ。マンションの最上階あたりに住んでいるのだろう。そういうマンションから「引越そう」

ベランダがとても広いリカのマンション

Digitized by Google

リカ、健吾、中島が歩いた山門の坂道

浄智寺の境内。華子が遊んだ場所かもしれない

とする健吾、彼にそう言わせた女性って誰？「落下する夕方」は冒頭でいきなり主人公の、しかもヒロインの失恋を見せる。江國香織の同名小説もそうだが、ちょっとドキッとさせられる。

なんだかリカが可哀想。彼女が健吾と暮らしていた「空に近い」ベランダのあるマンションを訪ねてみたくなった。できればリカを励ましたい。

「リカのマンションに行ってみようと思う」

健吾に会ったらそう言いたかった。

リカのマンションは新宿区新宿七丁目にある。JR山手線・新大久保駅から戸山方面に向かって歩く。明治通りとぶつかる交差点を渡り、左に都営戸山ハイツのマンション群と緑豊かな公園を見ながら、右側の小さな坂道を下る。ほどなく右へ曲がる。すると前方左手に独特の形をしたベランダがとても印象的な瀟洒なマンションが見えてくる。リカは新宿副都心と早稲田大学に近い新宿・戸山地区に住んでいた。ベランダでちょっとしたガーデニングを楽しみ、健吾といっしょに空を見上げていたに違いない。「空に近い」ベランダのある部屋は真南向き。二階からピラミッド型で最上階まで同じような広さのベランダが姿を見せている。その界隈でもひときわ目立つベランダ。副都心の高層ビルはもちろんのこと、最上階あたりなら晴れた日はもっと遠くまで見えるはず。

そんな素敵なベランダのある部屋を健吾は出ていった。「ウサギの耳」をつけていた女性といっしょになりたいために。なんということをしたんだ健吾は、とちょっと叱りたくなる。リカが可哀想。健吾のためにいろいろしてあげたのに、ウサギの耳をつけた女性のために生活が一変してしまった。ひとりぼっちになってしまった。いったいウサギの耳の女性って誰なんだよ。

名を華子といった。二八歳のリカと比べればまだ子どものような人。実際、つい昨日まで高校生だったみたいな女の子だ。それでも二一歳だという。あどけなさを残す女性である。健吾といっしょに暮らすわけでもなく、ある日リカのマンションに転がり込んでくる。部屋代割りかん。「動物も飼っていないし、ピアノも弾かない」それでいっしょに暮らそうという。華子はちょっと強引な女性。というより、子どものような人だから行動が突拍子もない。予測不可能。たぶん華子自身も気がついているけど、どうにもならないと諦めているに違いない。

リカのような女性がいるのと同じように、華子のような女性もいる。どこかに定住したいのだけどできない、人には言えない苦痛とか苦しみを持っているけどそれを表に出せない。悶々とするところをわざと明るく軽く振る舞おうとする。それでかえって誤解される。華子と同じ世代の女性たちは多かれ少なかれ、心のどこかに生き苦しさを感じながら、〈自分を作らなければ〉ならない日々を送っているはず。

新宿七丁目のリカのマンションに転がり込んできた華子は、じつは鎌倉の育ち。JR東海道線、戸塚で鎌倉・横須賀方面行きに乗り換える。二つの目の北鎌倉駅下車。駅前の「浄智寺」方面という看板に沿って歩く。約五分ほど。浄智寺の小さな山門が見えてくる。華子の実家、根津家は浄智寺のすぐ近く。彼女はお寺の山門、境内を庭代わりにしてスクスクと奔放に、でもそれなりに苦悩を秘めながら育ってきたのだろう。

浄智寺は鎌倉五山の一つ、第四位の金宝山にひらかれた寺。北鎌倉駅前の円覚寺の宗派で、古く一三世紀末に北条時頼の三男・宗政の夫人によって開基された。

深まりゆく秋の気配を感じながら、華子が歩いた、遊んだ、走った浄智寺の境内、二つの山門を観てまわった。普段の生活からかき消されてしまった音、風の音、葉が揺れる音、虫の鳴き声が聞こえてくる。それは華子の音かもしれない。彼女はそういう音を愛していたに違いない。だからときたまリカにも健吾にも行方を告げずにぶらっと姿を隠し、北鎌倉に帰ってきていた

浄智寺にはリカと健吾は一度行っている。華子の葬儀のために。華子はひとりぼっちで寂しく死んだ。湯船の中で眠るようにして息を引き取った。突然の死だった。

リカと健吾は葬儀にかけつけ、中島という男と知り合う。華子が最後にいっしょにいた男性。三人はそれぞれに、

「あの子、小さいときから変わっていました

Digitized by Google

ね……」
「気まぐれだから……」
「……寝てばかりいて」
と思い出を話しながら浄智寺の山門の道を歩く。秋の優しい日差しが三人を照らす。秋日和。そんな風景の中、華子はどこか遠くへ行ってしまった。永遠に戻ってこない。
三人の間を一陣の風が過ぎていく。いちょうが舞った。風は華子だったかもしれない。三人に最後のお別れをいいに風に乗ってきたのだろう。
華子の故郷から戻ったリカは「空が近い」ベランダのマンションから引っ越すことを決意する。
「私、引越そうと思う」
今度はリカが健吾に言った。
引っ越しの日、リカはこういって自分を励ました。
「あれから夕方が好きになりました。夕方になるととても心が澄んできます。そして心が満ちてきます」
華子にあてた思いかもしれない。健吾が引越し、華子が転がり込んできたベランダのマンション。そこから見える夕方の風景。陽は落ちるけど、リカの思いはいま新しく昇り始めたばかり。
リカ、その後元気でやっていますか？
ところで健吾の引っ越し先、知っていますか。知っていたら教えてください。

合津直枝監督インタビュー

2回目はさらに面白い

インタビュアー・編集部

最大の強みは生活者であること

「落下する夕方」では、8月の終わりに恋人から別れを告げられた女性が、12月初旬までの約3カ月をかけて、ゆっくりと恋を失い、また再生していく様が描かれる。失愛を描いた映画は数多いが、振られた女性の側から、しかもセンセーショナルに、でなく描かれたものは少ない。監督の合津直枝は、この映画のために驚くほど明確な設計図を用意した。ゆえに、撮影現場ではスタッフや俳優からの様々な質問に淀むことなく（しかも実に楽しそうに）答えていた合津監督。このインタビューにも明快に即答して下さった。「脚本を書き始めた時には、監督まですることになろうとは思いもよらなかった」と微笑しつつ。
「脚本は、江國香織さんの原作を読んでいるうちに、いつのまにか写経のように書き始めていたんです（笑）。その頃物凄く落ち込んでいたんですけど、書いているうちに荒んでた気持ちがどんどん穏やかになっていった。そのうちに日常の中で再生していく女性の映画を、女性の視点で構成するスタイルの映画を作る、というプロデューサー的な構想がムクムク浮かんできて、ついには画まで浮かんでくるようになった。では監督をどうするか？誰よりもヒロインの気持ちがわかっている、脚本も書いた合津に演出させるのが、この映画にはベストなんじゃないかということで、監督まですることになったわけです」
自分が監督することの最大の強みは、生活者であることだと合津監督は言う。
「失恋は大事件ではあるけれど、特殊な状況下ではなく、日常の中で起きるもの。だから、日常性を大事にしたかった。ヒロインが28歳のリアルな生活者である限り、失恋をしても、会社を休んだり、突飛な行動を重ねたりはしないはず。それでは映画に心の揺らぎが映らないのでは？　という心配もありましたが、これは合議で作る映画ではないと思ったので、そのまま貫かせていただきました」
だからこの映画には、ヒロインが泣きながら雨の中を走ったり、無断欠勤して港で佇むような場面はない。代わりに美容室で髪を洗髪してもらうショットが淡々と挿入される。
「脚本には、『洗髪してもらってるリカ。"毛髪が弱ってますね"』と美容師に言われる。椅子

撮影／吉岡誠

合津直枝（ごうづ・なおえ）　早稲田大学卒業後、テレビマンユニオンに参加。音楽番組、ドキュメンタリー番組の制作を経て、テレビドラマをプロデュース。中でも『真昼の月―續・病院で死ぬということ』（井上靖央演出）は放送文化基金賞、ＡＴＰ賞、ギャラクシー賞の３賞受賞。92年の『奇跡の人』など舞台制作他にも力を注ぎ、95年、是枝裕和監督「幻の光」で映画をプロデュース。ヴェネツィア映画祭の金のオゼッラ賞を始め、海外でも高い評価を受けた他、自身もその年に活躍したプロデューサーに贈られる第15回藤本賞、日本女性放送者懇談会賞を受賞した。本作では、監督、脚本、プロデュースの３役を手掛ける。

Digitized by Google

を起こされると頬に涙が伝う』とだけ書かれている場面。ここを削って、次の場面に飛んだ方がテンポがいいんじゃないか、という意見もあったけど、完成してみるとこのシーンが妙に心にしみると言って下さる方が多かった。髪のケアをしてもらいながら、実は心もケアしてもらってる。共感して下さる女性が多かったみたい」

そう、この映画は女性の生理にリアルなのである。それと時代の体温にも。

「私が捉えようとした若者像には、現実と直面しないで済むなら、それでもいいと考えてるような節があった。それは無自覚にということなんですけど。だから主人公の喪失感も、単に失恋によるものではない。私はこの映画で失恋からの再生のみを描きたかったのではなく、向き合えないことでできた心の空白……。それら全てと対峙し、乗り越えるまでを描きたいと思ったんです」。監督は、ヒロイン・リカの登場シーンのブルーのプールに、メランコリーや沈静などとともに、羊水の意味も込めた。「羊水の中では、誰しも自分と向き合わねばならない。その時、リカは一番避けたいと思っていた現実と向き合うんです」。リカには、自分のささやかなおねだりから起きた事故を始め、向き合えない現実がたくさんある。ブルーの画面は、ゆっくりと寛容をイメージさせるオレンジへと変わっていく。

冷蔵庫を持たすかどうか死ぬ程悩んだ

映画は現実を映す鏡ではない。リアルといっても、ある種のテーマを観客に伝えるために、作家によっていろいろな策が講じられる。「リカと健吾が住むアパートは、築25年。六角形を半分にしたような妙な形のマンション。室内はセットで、外観はロケです。あのお菓子の家のような空疎さが面白かった。その方が現実感が薄い、言わばアンリアルなリアリティという時代の体温みたいなものを表現できると思ったので、特に汚しもかけませんでした。気づいた方は少ないと思うんですけど、ダイニングの椅子は全部違うんです。二人は、家具を揃いで買わずに、気に入ったものをひとつずつ足していった。たぶん座る場所も自然と決まっていた。（原田）知世さんにそう話たら、『私はこういう人だったんだね。こうやって二人は買いたしていったんだね』と納得していた。その椅子に華子がドンと座ってしまう。観客にどこまで伝わるかは別として、役者さんたちにそこで生きてもらうために空間を作ったんです。そういう意味ではうるさい監督だったかもしれません（笑）」

健吾の新しい部屋にも、様々な配慮がある。「居心地の良さで言えば、二人で暮らしていた部屋の方がいい。でも他に好きな人ができたからには一緒には住めないと、健吾は不動産屋に飛び込んで決めた。彼は優柔不断に見えてしまうほど、不器用で正直な良い奴。本だけ持って出て、ベッドは新調した。カーテンは買わなかったけど、西陽が入るからシーツを洗濯挟みでカーテンレールに留めてある。そういう落ちぶれた気分。冷蔵庫は……。二人が暮らしていた部屋には、ビール用の小さいのと、食料品用の大きいのと二つあった。たぶん同棲を始める時にそれぞれが持ってきたもの。出て行く健吾に、この冷蔵庫を持たせるべきかどうか死ぬほど悩んだんです。女性スタッフの間から、こういう状態で冷蔵庫を持って行ったら嫌みじゃないかという意見も出て、（健吾役の）渡部（篤郎）君に電話して訊こうか？　と思うくらい考えた（笑）。冷蔵庫はないと差し当たり困る。それにきっとリカなら持たせると考えて健吾の部屋に置いた。リカの部屋には今まであったものがスポットとない空間ができた。結果的にはそれで良かったと思っています」

映画作りの殆どを掌握していた合津監督にも、勝手のわからないものがあった。それはカメラ割り。監督か、カメラマン以外は、これを考える機会はほぼないのだから仕方ない。「中堀正夫カメラマンのお嬢さんが、大学で撮影を勉強されていると聞き、教科書をコピーさせて貰おうかとも（笑）。でも、よく考えたら既に考えていたんですよ。脚本を書きながら。それを画にしていけばいいんだと」

ゆえにセオリー通りではないカットも。だが確固たる思いでつながれたそのシーンは、むしろ効果的に情感を紡ぎ出し、くしくもゴダールも真っ青な試みとなったのである（どのシーンかは見つけて下さい）。

「お鮨を食べるリカと健吾のシーンで、ブルーのテーブルクロスの上を穴子とイクラが行き交う俯瞰。あそこは私の中ではどうしても俯瞰でなければならなかったんです。だってあれは男女の間の深い川だから（爆笑）」。様々な所に、ものすごい仕掛けが用意されている。「リカと華子がいつも画面の両端にいるのは、近くて遠い関係だから」とか。「意味を手繰り寄せるように見て、2回目が良いと言って下さる方が多いんです、この映画」と監督も言う通り、1回目は物語を、2回目以降は監督からのメッセージを追うとさらに面白い映画だと思う。

Digitized by Google

地球は女で回ってる

DECONSTRUCTING HARRY

●1997年・アメリカ・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビーSR・1時間36分
●監督・脚本／ウディ・アレン　製作／ジーン・ドゥマニアン　共同製作／リチャード・ブリック　共同製作総指揮／ジャック・ロリンズ、チャールズ・H・ジョフィ、リティ・アロンソン　製作主任／J・E・ボケール　撮影／カルロ・ディ・パルマ　美術／サントー・ロクワストー　編集／スーザン・E・モース　衣装／スージー・ベイシンガー　配役／ジュリエット・テイラー
●出演／キャロリン・エアロン、ウディ・アレン、カースティ・アレイ、ホブ・バラバン、リチャード・ベンジャミン、エリック・ボゴジアン、ビリー・クリスタル、ジュディ・デイヴィス、ヘイゼル・グッドマン、マリエル・ヘミングウェイ、エイミー・アーヴィング、ジュリー・カヴナー、エリック・ロイド、ジュリア・ルイー＝ドライファス、トビー・マグワイア、デミ・ムーア、エリザベス・シュー、スタンリー・トゥッチ、ロビン・ウィリアムス
●配給／松竹富士
●提供／松竹富士、テレビ東京
●10月31日より恵比寿ガーデンシネマにて上映中
●本誌関連記事／10月上旬号新作紹介グラビア

ウディ・アレンの神経症的キャラクターの復活

きさらぎ尚

今度のウディ・アレンは欲張りだ。ストーリーには細かいエピソードが盛りだくさん。物語のうえで現実と虚構が交錯する。だから登場人物も多いし、当然ながら俳優も大陣容。それも大物の個性派がずらり顔を揃えている。俳優だけに限っていえば「ウディ・アレンの影と霧」に並ぶ豪華版である。ここ数年の「ブロードウェイと銃弾」「誘惑のアフロディーテ」「世界中がアイ・ラヴ・ユー」といった、どちらかといえばシンプルで楽しいウディ・アレンのコメディに親しんだ人は少なからず驚くだろう。

それというのはウディ・アレンが自作自演する売れっ子作家ハリーに、かつての神経症的キャラクターが復活している。なんでも現実と小説の世界の区別ができなくなっているとかで、スランプの真っ只中にある。小説の中の人物が現れたり、小説の中の出来事に悩まされたりして、仕事はさっぱりはかどらないらしい。もっか書きかけの短編『俳優』は、一人だけどうやってもピントがボケて写る俳優（ロビン・ウィリアムス）の話なのだが、筆がさっぱり進まない。例によってかかりつけの精神分析医に窮状を訴えるも、心中を暴かれて、気持ちは益々落ち込むばかり。すでに決めている――この俳優の家族は仕方がないのでピンボケ防止のメガネ（そんなものがあるのかしら？）をかける――オチを話したら、分析医に「周囲が自分に合わせることを期待している」という診断を下されてしまったのだ。

また女性との関係も悩みの種になっている。3度の結婚歴があり、2度目の妻ジョーン（カースティ・アレイ）は精神分析医だったことからして、よほど分析医がお好きらしい。彼女との間には息子がいる。3度目の妻ジェーン（エイミー・アーヴィング）とは、ハリーの女性問題が原因で離婚。その相手が妻の妹ルーシー（ジュディ・デイヴィス）というのだから、どうもおだやかではない。そのうえ彼は著作のネタに私生活を使っているので、ネタにされた方はたまらない。妻と妻の妹との関係を精算して、偶然に出会ったファンの女学生との新しい恋に走る小説家を描いた新作では、ルーシーに怒鳴り込まれている。

このシチュエイションとエピソードは自作のパロディである。私生活暴露は「マンハッタン」を思い出す。この時はメリル・ストリープの妻が女性と浮気をしたことが離婚の原因だった。元妻は大胆にも自分たちの結婚生活の一部始終、そして離婚の真相を本にして作家としてデビューすると言い張ってきかないので、ウディ・ウレンの元夫はおおいに困惑していた。義妹との不倫は「ハンナとその姉妹」である。ハンナの夫（マイケル・ケイン）は妻の妹（バーバラ・ハーシー）と、外で密会を重ねていた。ただ離婚問題に発展はしなかったが。

アレン本来の手法・作風に立ち返る試み

自作のパロディということをさらにいえば、現実と小説の世界の区別がつかない、つまり現実と虚構の混同は「カイロの紫のバラ」で見せた手法である。ミア・ファローのウェイトレスが映画に没入するあまりに、その主人公がスクリーンを抜け出して、二人は恋をするというお伽話だった。だから同じ混同では

Digitized by Google

あっても、ウェイトレスとハリーとでは違う。むしろ正反対でハリーは自虐趣味なのであり、これもウディ・アレンがかつて得意としたキャラクターだ。

なにしろハリーのキャラクターは哀れっぽい。別れた恋人（エリザベス・シュー）が冒険家（ビリー・クリスタル）と結婚すると聞けば、未練たっぷり、嫉妬もする。母校で表彰されることが決まっても、晴れの表彰式に同伴してくれるパートナーはいない。思い余って自宅で出張サービスを受けた娼婦（ヘイゼル・グッドマン）に、日当を払ってその役を頼まなければならないまでになさけない。母校への道すがら異父姉の家に寄っても歓迎はされない。

こうした現実に加えて、著作の中の人物たちも、（前述した虚構世界の物語として）私生活を題材にした小説をすでに何冊も発表しているハリーの家族幻想や性的妄想を刺激して混乱させる。自身をモデルにしたと思しき初期の作品の小説家を目指す主人公（トビー・マグワイア）のエピソード――妻との関係が冷えきった友人の留守宅に娼婦を呼ぶ――は、いまだ性への関心が尽きないハリーの心象を物語る。異父姉と2度目の妻を合成した人物として登場する手ごわい精神分析医ヘレン（デミ・ムーア）はユダヤ教、そして家族問題の悩ましさを象徴する。さらにハリーの代表作とされているロマンチックな恋愛小説から登場する人物たち――日々平穏な文筆業とビオラ奏者の夫婦（リチャード・ベンジャミンとステファニー・ロス）だが、夫が義妹（ジュリア・ルイー＝ドライファス）と不倫をしている――は、破綻した3度目の結婚への後悔とノスタルジーがにじむ。ついには酒池肉林の妄想に発展する……。

ハリーのこれらの幻想は「スターダスト・メモリー」、あるいは「アニー・ホール」といった、ウディ・アレンの過去の作品で自作自演した主人公のキャラクターと女性たちとの関係を彷彿とさせる。

自分の作品のパロディを始めたらもうお終いだとは巷間いわれることだが、ではこれがウディ・アレンの後退現象かというと、そのようにはみえない。盛りだくさんのエピソードと大勢の登場人物、加えて現実と虚構を交錯させたことで、確かにいささかまとまりには欠けている。しかしアレン映画ファンの身としては、これをアレン本来の手法・作風に立ち返る試みと思いたい。なぜなら、クラリネット奏者でもあるアレンのヨーロッパ・コンサート・ツアーをドキュメントした「ワイルド・マン・ブルース」には、私生活の噴飯もののトラブルを乗り越えて本来の落ち着きを取り戻した姿がある。また声の出演をしたCGアニメ「アンツ」では、悲観主義で皮肉屋の主人公アリZを、ときにスタンダップ・コメディの舞台に立っているアレンをイメージさせるかのように、実に巧な話芸で演じている。こうしたことからしても、「地球は女で回ってる」を試みとみる。シンプルで楽しいコメディももちろん上手いし、見ていてハッピーではある。でもやはりウディ・アレンのコメディは皮肉が効いていなくては寂しい。キャラクターに神経症的な側面がないまま終わると、どこか物足りない。久々にそれらの復活を見せたのがなによりも嬉しい。

Digitized by Google

ネネットとボニ

NENETTE ET BONI

●1996年・フランス・カラー・ヴィスタサイズ・1時間43分
●監督／クレール・ドゥニ　製作総指揮／フランソワーズ・ギュグリエルミ　製作／ジョルジュ・ベナユン　脚本／ジャン＝ポール・ファルジョー、クレール・ドゥニ　撮影／アニエス・ゴダール　助監督／ガブリエル＝ジュリアン・ラフェリエール　録音／ジャン＝ルイ・ウゲット　セット／アルノー・モレロン　衣装／エリザベス・タベルニエ　編集／ヤン・ドゥデ　音楽／ティンダースティックス
●出演／グレゴワール・コラン、アリス・ウーリ、ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ、ヴィンセント・ギャロ、ジャック・ノロ、ジェラール・メイラン、アレックス・デスカス、ジャミラ・ファラ
●配給／キネティック
●シネマスクエアとうきゅうにて上映中
●本誌関連記事／10月下旬号新作グラビア

女性の視点から見つめた19歳の青年の父性愛

おかむら良

死んだ母を思慕する兄と行動力のかたまりのような妹

水が青い色を反映するプールに、Tシャツを着た長い髪の少女が浮かんでいる。ゆらゆらと揺れる髪と、曲がって見えるタイルのつなぎ目が、水が流れているような錯覚をおこさせる……。「ショコラ」や「パリ、18区、夜。」で知られるフランスの女性監督クレール・ドゥニの新作「ネネットとボニ」は、こんなファンタジックなシーンで始まる。

ドゥニ作品の特徴というかおもしろさは、作品の核には社会的な視点を持ちながら、このオープニングに象徴されたように映像はどこかファンタスティックだ。それは「パリ、18区、夜。」が実在した殺人者ティエリー・ポーランをモチーフにしながら、映像はとてもおしゃれだったことと似ている。これはドゥニの持ち味であるとともに、処女作「ショコラ」から組んでいる女性撮影監督アニエス・ゴダールの持ち味でもある。ドゥニとゴダールが組んでいるのは、そのへんの相性がいいからに違いない。

物語の主人公は、19歳のボニことボニファス。彼は、死んだ母が残した小さな家にひとりで住み、伯父さんからもらったライトバンで移動ピザ屋として暮らしを立てている。そんな彼のところに、寄宿学校にいた15歳の妹ネネットがころがりこんでくる。すでに妊娠5カ月になっている彼女の世話をするうち、ボニは父性にめざめていく……。

さらにセリフを通して、ふたりが置かれている情況が説明されていく。両親が別居したとき、ボニは母に、ネネットは父に、それぞれ引き取られて育ったこと。ネネットが母の葬式に来なかったことを、ボニが今も恨んでいること。そんなささいなことが、兄弟の愛憎の原因になっているのだ。どんなに仲よく見える家族でも、大なり小なり問題を抱えているものだし、さまざまな感情の行き違いがある。それが普通なのだと開き直れるのは、苦い思いを繰り返した後のことで、感受性の強い十代のボニにとって怒りや恨みはきっと激しい。

ボニの若くて激しい感情は、近所のパン屋のグラマーな奥さんにも向けられる。彼は奥さんに憧れるのではなく犯したいと思い、日記にもその決意をえんえんと書いている。ところが問題の奥さんとお茶を飲むチャンスがきても、告白することも、手を握ることもできない。ふがいない自分への怒りにまかせ、柔らかいピザ生地をこねまわし、ついに生地に顔をつっこむシーンがリアルである。

「これはなんか、すごいことになってる」という感じで、平凡なセックスシーンなどかなわない迫力だった。彼にとって白くて柔らかなピザ生地や、パン屋の奥さんの柔らかそうな胸は、本人が意識しないまま求めている、家族の絆の温かさを象徴している。言いかえればそれはボニを残して死んだ、母親への愛情にほかならない。

こんなボニに比べると、妹のネネットはずっと行き当たりバッタリで衝動的だ。オープニングシーンでプールに浮かんでいたのがネネットである。ある朝ネネットはボニの家の前に立つのだが、彼が入れてくれないとわかると、留守中に友だちの手を借りてさっさと侵入してしまう。行動力があるというか、罪悪感がないというか……。だがそんなところは、殺人者のお金を奪って自分の夢のために駆け出していった、「パリ、18区、夜。」のヒロインのダイガのようだ。何かのとき開き直

Digitized by Google

るのは、ドゥニ作品のヒロインが共通して持っている資質かもしれない。

ひとり暮らしをしているときからボニは、ペットとしてウサギを飼っている。このウサギはピザ生地やパン屋の奥さんの胸と同じようにふわふわと柔らかく、ボニが求めている家族の温かさの代用品なのだと気づく。そしてウサギを上手に育てるボニだからこそ、妊娠したネネットのめんどうをみてやり、彼女が生んだ赤ん坊を育てられるかもしれない、と思える伏線になっていた。

男性の父性愛に向けた、女性の願望

フランスのコリーヌ・セローが85年に監督した「赤ちゃんに乾杯！」以後、父性愛を描く作品は少しずつ増えているし、その種のシーンも目につくようになった。最近のことで言えば、ニコラス・ハイトナー監督の「私の愛情の対象」でゲイの青年ジョージがルームメイトのニーナの妊娠・出産を通して、子育てに積極的に関わっていこうとするプロセスが興味深かった。

もちろん「ネネットとボニ」の場合は、子育てに関わるという消極的なものではなく、子育てを丸ごと引き受ける話である。これは「男性にも父性愛というものがあり、子育てができる」と考え、そうあってほしいと思っている女性の願望の映像化なのだ。そんなところにドゥニ監督の女性としての視点が、はっきりと感じられる。

「ドゥニが監督したテレビ映画『US GO HOME』に出た後、彼女が僕を想定して1本作品を書くといってくれた。だからこの作品に出ることは94年から決まっていたが、思ったより時間がかかった。『US GO HOME』はオーディションで選ばれたが、今回は最初から主役だった。フランスの監督で僕に興味を持つ人がそう多いとは思えないので、ドゥニの言葉はうれしかった」

これはボニを演じたグレゴワール・コランをインタビューしたときの言葉である。コランとドゥニを結びつけた『US GO HOME』は、フランスにアメリカ軍が駐留していた年を舞台に、米兵と恋に落ち初体験をするフランス人少女の物語だ。ヒロインの少女を演じたのがネネットを演じたアリス・ウーリで、コランは少女の兄を演じた。「テレビだけどいい作品だった」とコランが言うドラマの主役と監督と兄弟という設定が、「ネネットとボニ」に移行している。

「僕がもっとアドバイスや演技指導をして欲しいと思っても、ドゥニは俳優に任せるタイプの監督だから何も言ってはくれない。そんなときは叫びたくなった」

コランはドゥニの演出を、こう語った。彼は、アグニェシュカ・ホランド監督の「オリヴィエ、オリヴィエ」では少年娼婦、ミルチョ・マンチェフスキー監督の「ビフォア・ザ・レイン」では修道僧など、いつも複雑なキャラクターを演じてきた。ボニは年令的には近いけれど（コランは現在23歳）、父性の実感がなくて一筋縄でいかなかった。だが脚本に参加しているドゥニが、最初からボニにコランを想定しただけに、クシャクシャのシーツの中で目覚める登場シーンから、ピザ生地をこめるシーンまで見せ場は多い。

「ネネットとボニ」はクレール・ドゥニとグレゴワール・コランの幸福なコラボレーションから生まれた、女性の視点で父性を見つめた作品である。

Digitized by Google

迷い猫

●1998年・カラー・ヴィスタサイズ・モノラル・1時間10分
●監督／サトウトシキ　企画／森田一人、朝倉大介　プロデューサー／衣川仲人、福原彰　脚本／小林政広　撮影／広中康人　照明／高田賢　助監督／坂本礼　音楽／山田勲生
●出演／長曽我部蓉子、本田菊雄、寺十吾、平泉成、白鳥さき、藤沢みずえ
●製作／国映　配給／国映、新東宝
●11月7日よりユーロスペース、シネヌーヴォ梅田にてレイトロードショー
●本誌関連記事／11月上旬号新作グラビア、今号 HOT SHOTS（長曽我部蓉子インタビュー）

愛する価値のない男と日常を捨てた潔い女

石原郁子

奇妙な影のような染みのある壁の前に、桂子（長曽我部蓉子）が佇つ。もともとは夜勤の夫の不在をもてあまして、夫の勤め先の近くまできて待っていたのだが、夜の女と間違えられて男に声をかけられて以来、売春をしていた。ある夜、彼女は真二に買われ、彼に特別な絆を感じて関係を深めていくが、その頃から夫が彼女を暴力的に求めるようになる。夫を拒んで殴られた翌日、桂子は夫をバットで撲殺し、死体を浴室に置いて海を見にゆく……そんな話を、逃亡中の桂子が、とある喫茶店で、淡々と雑誌記者（平泉成）に語る。

すべては桂子の一方的な言葉だ。嘘かほんとうか、大筋はほんとうだとしても部分的には嘘（というより、思い込み）もあるのかは、分からない。たとえば、夫を殺したのが、夫に暴力を振るわれたときでなく、それから一日経っていて、しかも団地で拾った金属バットを持って夫の帰りを待っていたにもかかわらず、彼女は「衝動的に殺した」と言う。その矛盾を記者に問われても、やはり「衝動的だった」という答えを変えない。

だが、彼女は自分にとって有利なように話を運んでゆくわけではない。逆に、聞く者を戦慄させるような事柄を、淡々とした語り口を変えずに語る。図太いとか無神経とかいうのではなく、むしろきまじめに、自分自身の学術的な記録を明確にしておこうとでもいうふうに。つまり、実際に起こったことはどうあれ、彼女は記者に対して、自分にとって動かしようもなく真実であることを語っている。金属バットでは一撃では殺せないので、何度も何度も殴りつけたこと。死体をばらばらにして遠くの公園に捨てたこと……。「わからない」「同情できない」と記者は率直に言うが、桂子も、わかってもらおうとか同情されようとか思ってはいない。

潔い女。映画も潔い。へんに観客の情動を誘おうとする技巧はいっさいない。それでいて、一気に見せる力をもっている。静かで端正で不思議な明るさに溢れた力。

だから、「迷い猫」というタイトルではあるが、彼女は、迷っているというよりは、自分の道ははっきり知っており、ただそれが今のところどこにあるのかわからないのだが、見つけようとしている、というふうだ。染みのある壁に背に佇む桂子は、お金がなければ夢もてない現代の都会生活者の孤独や倦怠や疲れを、陰鬱な情念としてからみつかせていて、それも〈今〉を鋭く切り取る表情になっているのだが、やがてその姿はもっと強い意志に満ちたものに見えてくる。ちっぽけなマイホームの夢や、愛する価値の無い男たちへの依存を捨て、むしろ孤独を引き受けようとする、つまり小市民的な幸せの幻想にアナーキーなまでに挑戦する姿勢。真二と最後に会うホテルの場面、そしてまっすぐに前を見つめて大股で歩いてゆくシーンの、さっそうたるかっこよさ。ラストは観客の解釈に任されるが、私は、彼女は既に警察が持つ論理を超えてしまっていると思う。

名手サトウ監督の映画を観たいと思いながら機会の無かった人々、ことに女性たちにとって、今回のユーロスペースでの上映は（レイトだが）絶好の機会だ。セックスも暴力も、必然性の感じられない無意味なシーンはない。金属バットのぶつかる音はいつまでも耳に強烈に焼きつくが、それは、飽和しふやけた日常に浸かって半ば眠り込んでいる私たち自身を打つ音として、強烈なのだ。

Digitized by Google

リーガル・エイリアン

●1997年・日本・カラー・ヴィスタサイズ・モノラル・1時間28分
●監督・製作／辻谷昭則　脚本／辻谷昭則、カーミット・カーヴェル
撮影／権藤秀和　音楽／片倉三起也　編集／ルーリー・オブライエン
出演／マイケル・ネイシュタット、ジュリー・ドレフュス、クリス・ペプラー、キャサリーン小林、ロン・ホルトン
●配給／ゼアリズ
●10月24日より中野武蔵野ホールにてレイトロードショー中
●本誌関連記事／今号新作紹介グラビア

ガイジンを描く、すなわちフツーの日本人を描くこと

吉田真由美

タイトル（「リーガル・エイリアン」）がキャッチー。惹句（「のんきなにっぽん。かなしいボクたち。」）がオシャレ。主人公は横浜の女子大で英語教師をしているアメリカ人男性で、ドキュメンタリーではなく、ドラマである。

彼、ピーター（マイケル・ネイシュタット）は悩んでいる。僕はアクター。ブロードウェイの舞台に立つのが夢だったはずなのに、いつの間にか滞日8年。昇進をオファーされるほど教師職がイタにつき「アンタはもうアクターじゃない」と捨てゼリフを投げつけてガールフレンドは出て行った。

入れ替わりにともいえるタイミングで、彼がアクターであると知った教え子のマリ（キャサリーン小林）が「演技を教えて！」と激しく急接近してくる。さらには、月に1回仲間とクラブのステージに立っている、その店で、広告代理店勤務のフランス人女性イザベル（ジュリー・ドレフュス）と知り合い、CMのオーディションに誘われたことから、恋が芽生える。イザベルは精力的に関係者を次々と紹介してくれ「俳優業に本腰を入れるべき」と決断を迫る。ピーターは親友（クリス・ペプラー）に悩みを打ち明ける。

つまり、ピーターの悩みは、受け入れられないことではなく、歓迎されすぎること。適応できない悩みではなく、過剰適応の悩み。モテない悩みではなく、モテすぎる悩み。なんたって彼は、異邦人であり、演技する人であり、決断しない人なのだから（モテる男の3大条件を兼備している）。

楽しいモラトリアムも、8年も続けば悩みに転化するってことか。日本における集団モラトリアムの社会的装置であるところの大学生も在籍期限は8年間だったような……。

しかし、ピーターには、帰るべき心の故郷つまり追い求めるべき夢が、ある。

ほんとうの悩みとは、夢がないこと、夢を描けないこと、ではないかしらね。ピーターとは逆に日本社会への不適応症状が過激な友人（ロン・ホルトン）でさえ「故郷に帰りたい！」という欲求が人生の目的と化しているという点で〝切実な夢がある〟ように見える（悪夢の渦中にいるように描かれているが）。

要するに――揺れるアイデンティティ、モラトリアムからの脱却、アイデンティティの再選択というテーマを描いた（と思われる）作品が、登場人物たちではなく、彼らが置かれている背景のそのまた遠景に位置する観客側の、フツーの日本人の――アイデンティティの希薄さ、帰属するものに実体がないことを見て見ぬフリすることによって維持されている平和と繁栄の脆弱さを、痛感させる結果となっている。これをもってインターカルチュラル効果というのかしら？

監督&脚本&製作はロンドン・インターナショナル・フィルムスクール卒業生で、本作が長編2作目（1作目は「エレーナ」）の辻谷昭則、共同脚本は彼の友人のカーミット・カーベル。お互いの（ロンドンと、日本における）リーガル・エイリアン体験を映画化したくて始まったプロジェクトだが、主演のマイケル・ネイシュタット（実際に役者でありNHKラジオ英会話のセンセでもある）はじめ主演陣の各々の体験や意見も肉付けされた〝超インディペンデント手作りムービー〟（監督の弁）。

Digitized by Google

INTERVIEW

人生も映画もプロットはクソ食らえって感じ

ハーモニー・コリン

「Gummo／ガンモ」で衝撃的な監督デビュー

インタビュアー 筒井武文

撮影／吉岡誠

たぶん「Gummo／ガンモ」は評価が真っ二つに分かれる映画だろう。僕自身、見た直後の感想が「映画は嫌いだけど、映画への方向性は気に入った」というものだった。ホテルの部屋で、彼ハーモニー・コリンは床一面に撮った写真を並べ、何やら手にハサミをもって切り抜きをしながら、あげくの果てにはギターを鳴らせながら、対話を続けた。まさに全身が感覚器官のようなものだが、不思議と嫌みがなく、さわやかさすら感じられた。

映画は暗闇から浮かび上がるイメージを繋げていくもの

——とても東京を楽しんでるようですね。

「ええ。いろんなものを消費したいから。2カ月後に竹石ギャラリーで展覧会を行うので、ドローイングとか写真のミックスメディアを東京にいる間に作る約束なんです」

——絵も本格的に描かれるんですか？

「そう。ちょうどロサンジェルスで展覧会を開いたばかりです。一風変わったストレンジなキャラクターだとか、マイケル・ジャクソンがペプシのタトゥーをしたりとか、ウディ・アレンがクー・クラックス・クランのコスチュームを着ているものだとか……」

——それは「ガンモ」のキャラクター優先の映画作りと似てますね。

「全てはキャラクターだと思っています。僕にとっての映画とは、キャラクターがシーンと一緒に動いていくもので、プロットは重要じゃない。イメージが常にずーっと続いている、自分の人生に似た感賞がすごく好きで、初めも終わりも中も無いんです」

——「ガンモ」は「KIDS」を大嫌いな人が撮った映画のようでした。

「どうして？」

——物語を解体する、その方法が。逆に「KIDS」は古典的な物語映画でしょう。

「ああ、『KIDS』はラリー・クラー

HARMONY KORINE／1974年カリフォルニア州に生まれ、5歳で東海岸に移り住む。19歳の時に、写真家ラリー・クラークに見出され、彼の初監督作「KIDS」の脚本を手掛けたことで世界中から注目を浴びた。97年「GUMMO／ガンモ」で監督デビュー。現在は新作であるオムニバス作品を準備中。

Digitized by Google

クのための脚本だから。あのときは有機的なストーリーテリングをしようとした。でも僕としては、形式を弄んだり新しい美意識を遊戯感覚でいれたりとか、構成に関しては解体したところから始めたい。僕の中で映画とは、目を閉じた時に暗闇の中から浮かび上がってくるイメージを繋げていくものです」

――次回作はどんな方向を目指すのですか？

「次の世紀にとって新しい映画とは何か？　というマニフェストを書いたんです。グリフィスから始まった映画の歴史の流れは百年経っても、まだ子供だと思う。次の作品ではスパイのようにデジタルカメラを使って、すべて即興、役者にカットを一切かけない。自分としては目撃者としてそこにいるけれど、振りは一切なし。撮ったものを再び写真や35ミリで撮り直したりして、ただそこに存在したということの証明を、自分なりの美学で伝えたい。それが今までの映画の歴史を一歩先へ進めることになると思う」

――「ガンモ」冒頭の竜巻シーンも細工を重ねてますね。

「最初は74年の竜巻をホームビデオで撮った人を探して、それを自分の部屋でモニターに映して、35ミリで撮ったのをスーパー8で撮り直して、それをもう一度35ミリで撮ったりと、そんなプロセスを通じて、あの画質を得たんです」

「Gummo／ガンモ」シネマライズにて絶賛上映中

最高峰のフィルム・メーカー？ヴェルナー・ヘルツォーク！

――なぜ、撮影に（ジャン＝イヴ・）エスコフィエを起用されたのですか？

「彼の『ポンヌフの恋人』を見たときに、15分でもって光、特に自然光の扱いを誰よりも知っていると思った。それは誰にも真似できるものではなく、彼自身がゴーストを持っているような感じ。僕は完全にアメリカのアーティストなので、ヨーロッパ的なシネマトグラファーが欲しかった。なぜなら『ガンモ』の舞台は、僕の生まれ育ったナッシュビル中部ですが、ヨーロッパ人である彼には別の目で見れますよね」

――「ガンモ」が他の映画と違っているところは……、

「（質問とは関係なく『キネマ旬報』の『ツインタウン』特集を読み出し）ケヴィン・スミスの首をとっていいくらい最悪の映画だね。フィルムを汚している。何で皆が誉めるのか分からないな」

――（笑）。普通の映画だと物語に支配されるのに、「ガンモ」は場面場面が一つずつ浮かび上がってくるという不思議な体験でした。

「その点で、僕はカサヴェテスに非常に影響を受けている。構成に関して、全ては純粋にエモーショナルな方向でやるということ。ストーリー・ラインを先行させれば、それぞれのシーンが共鳴しあうようにはならない。悲劇も喜劇もホラーもラヴも、全ての要素が一つの中に狭いラインで入っているわけで、それをストーリー的に区別して説明することなんかできない。もしそれを言葉でもって説明したら、自分は失敗してしまう」

――シーンとシーンが微妙に関係あるとも、ないとも言えない編集が素晴らしい。

「次から次へとシーンがただ続くようにしたんです。それが驚くべき結果となって自分としては満足しています。ほとんどはタイミングとセットアップの問題です。自分にとっての編集作業とは、ボクシングのようにリズムとペースを作ることです」

――クロエ・セヴィニーさんが出演以外に衣裳も担当されていますね？

「（突如ギターを大音響でかき鳴らし始める）クロエは自分なりのスタイルを持っているし、『KIDS』以来のつきあいなので、よく僕の心を読んで、どうしたいかを分かってくれる」

――ケヴィン・スミスを敵だと言いましたが、現在味方だと思える人は？

「僕は一匹狼だから。世界的に面白いフィルムメーカーは5人くらいで、他はすべてどうでもいい。いいのはラース・フォン・トリアーやレオス・カラックス。巨匠になってしまったけれどゴダール、中でも『ゴダールの映画史』。でも生きている人で最高峰はヴェルナー・ヘルツォーク！　ちょっと時代遅れと言われているし、作品もこのところ作っていないけれど、僕にとってはヒーローで、今はもう友達です。彼は映画のヘミングウェイだな」

――ところで、プロットを全く無視した映画は不可能ではないでしょうか？

「僕にとってプロットというのは観客を洗脳するような、つまりA地点からB地点へと動かしてやるもので、ストーリーとは違います。ストーリーは重要です。とにかく、映画を終わらせることを目的に、観客を一方的に引っ張るということが嫌いなんです。僕は人生そのものもプロットで考えるということを一切したくない。プロットはクソ食らえって感じです」

――それを続けるのは大変ですね。

「ええ。でも、もうそれは自分の肩にしょっているものですから。僕は〝軍隊の最後の歩兵〟だから（笑）」

Digitized by Google

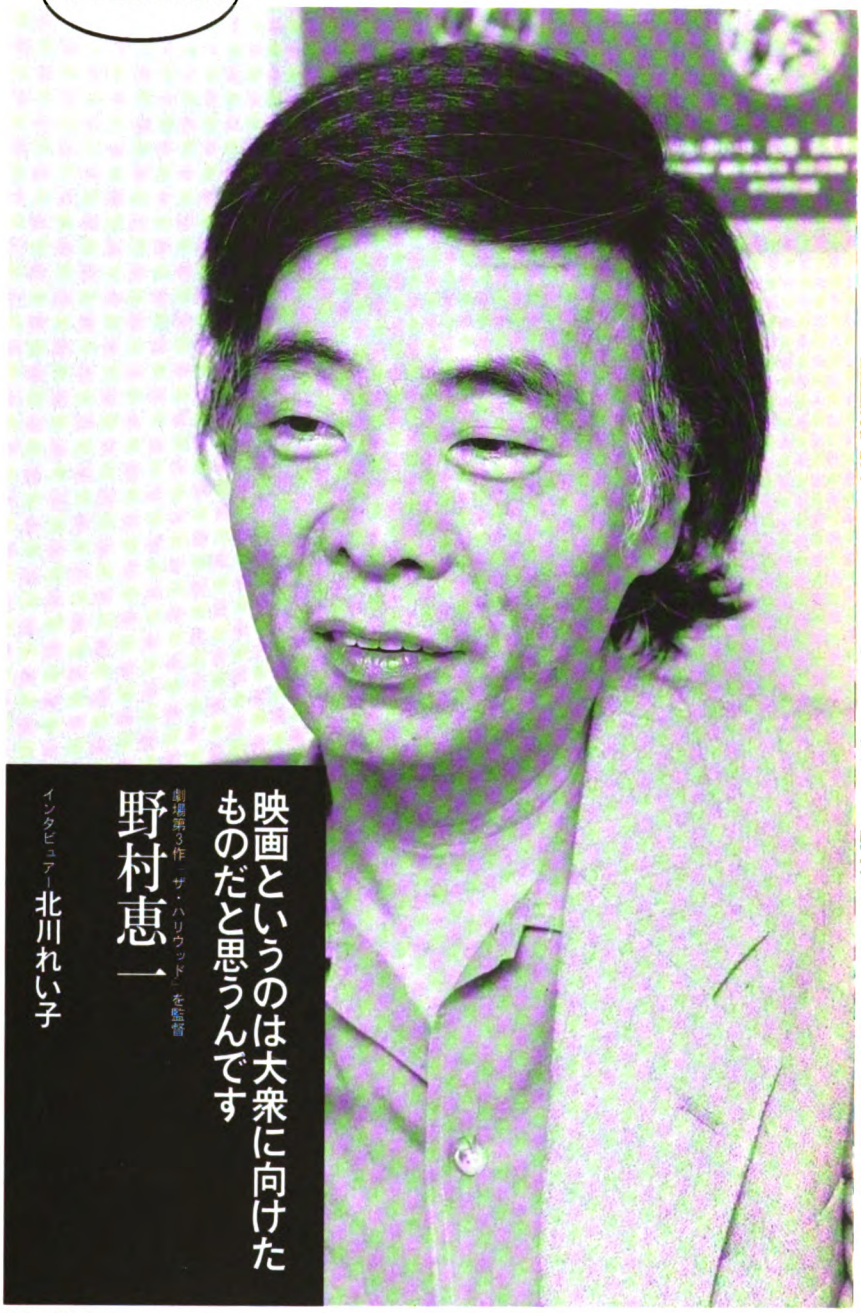
INTERVIEW

映画というのは大衆に向けたものだと思うんです

野村恵一

劇場第3作「ザ・ハリウッド」を監督

インタビュアー 北川れい子



撮影／吉岡誠

映画への愛と夢がぎっしり詰まった「ザ・ハリウッド」。京都在住の野村恵一監督が、夫人である小笠原恭子と共同で脚本を書き、自主製作をしたとびきりの〝映画玉手箱〟である。劇場用映画は今回で3作目で、好評だった前作「真夏の少年」（91）以来、7年ぶり。京都のレンタル・ビデオ店〈ハリウッド〉を舞台に、映画への愛をそれぞれの人生に重ねたもので、決して大きな作品ではないけれど、映画ファンの心をくすぐらずにはおかない佳作に仕上がっている。中でも嬉しいのは、「あなたの一番大切な映画は？」というビデオ・カメラによる街頭インタビューと、往年の時代劇スター、東千代之介の特別出演。

製作にまつわる話を野村監督から伺う。

ぼくらが住んでいる日常的な京都をそのまま撮りたかった

——映画と京都への愛がストレートに感じられ、気持ちよく見せて戴きました。製作のきっかけは……。

野村 劇場用の一作目「森の向う側」（88）も前作も自主製作でしたので、今回はできたらスポンサー付きの映画をと。いくつかの企画もあったんですが、バブルの崩壊とか不況とか、結局ポシャッてしまって。でもどうしても撮りたい。けれども資金は少ない。偶々（たまたま）、うちの近所にマニアックな作品を揃えたレンタル・ビデオ店があって、インディズ系の外国映画から邦画の古いのまでいろいろ並んでいる。あ、むかしの名画座が今ここにある、と……。

——実質的にそうなっていますね。

野村 そこに通っているうちに店員さんと親しくなって。映画にハマッた京大・法学部の10回生（笑）。でその人がビデオ店を辞めて日本映画の宅配ビデオを始めた。彼が個人的に集めた850本ほどの邦画ビデオを使ってね。日本映画見る人は年配者が多いから宅配の方が喜ばれるだろうと……。その話を聞いた時、ビデオ店と宅配を一緒にしたら、映画の歴史なり、さまざまな思いなりが描けるのではと思って脚本を書き出したんです。

——劇中のビデオ店でバイトをしている

のむら・けいいち／1946年生まれ。京都出身。日本大学芸術学部映画学科卒業後、大映京都撮影所に助監督として入社。大島渚、山本薩夫、森一生、三隅研次監督などに師事。71年の大映倒産後、企業映画や広報映画を手がけるようになる。88年、「森の向う側」で劇場映画デビュー。91年に第2作「真夏の少年」を作る。本作が劇場映画3作目となるが、その他に「木挽職」で94年日本産業映画グランプリを受賞している。

Digitized by Google

外人留学生が日本映画の大ファンという設定で、彼のアパートには邦画ビデオがズラッと並んでいましたね。

野村　モデルとなった人の部屋をそのまま使わせてもらったんです。

――映像がとても良かった。晩秋の京都の、よそ行きでない光景。

野村　カメラは京都の人で、東映出身のフリーのカメラマン。ぼくも京都ですから、東京のスタッフが来て撮るような京都とは別の、ぼくらが住んでいる日常的な京都もそのまま撮りたかった。細工などせずに。

――若い主人公が自転車で宅配する、その走る風景に日常的な京都が見えるわけですが、一方でここに片岡千恵蔵さんが住んでいたとか、中村錦之助が結婚してここに住んだとか、或いは今はマンションが建っている大映太秦界隈なども出てきて、あらためて、かつて日本のハリウッドと言われた京都・太秦の在りし日を思いました。

野村　資金の関係でロケ場所は自分の家から半径2キロ以内にしようと。映画の話と近所の話と、ほとんど個人的な思い込みの映画です。

――宅配を通してさまざまな人との出会った若い主人公が、ラスト、ビデオ店の棚を前にして「この棚には8426本の夢が並んでいる」と言いますね。そうだ、そうだと思う反面、ビデオ店の棚というところがちょっと皮肉だなと思ったりも。

野村　これはビデオ店というよりも、映画という存在自体を象徴したことです。

車を降りた時から大スター、空気が張り詰めた東千代之助さん

――街頭インタビューの挿入はとても効果的で面白かった。最初から考えていたのですか。

野村　思い込みの強い映画でしたから、1人1人に「人生の大切な1本」を聞いてみようと。そうしたらインタビューに答えてくれる人のイメージと、その人が挙げる作品が予想外だったり（笑）。みんなが自分のベスト1を持っていて、それも全員が違う映画なんですね。やっぱり映画って、凄いな、と。そして、その映画を言う時の顔が、みな嬉しそうで（笑）。

――本当にその映画が大切なんだ、ということが伝わってきますね。

野村　逆にぼくらが言うベスト1とかベスト10とか言うのがおかしいのかもしれない。それぞれの心の中に生きている映画が大切なのであってね。で、そう思った時、ビデオ店の棚に並んだ8426本の夢とダブってきて、テーマ的にも筋が通るし、ちゃんとインタビューをして劇中に入れれば作品の全体像も見えてくるのではと思ったんです。

――挿入の仕方もドラマの流れを乱すことなく自然で良かった。インタビューは何人ほど。

野村　100人ぐらい。映画に入っているのは70人ほどです。皆さん、非常に協力的でしたね。

――ただ自分のベストの映画に日本映画を挙げている人が10人足らず……。

野村　そうなんです。そこが一番残念です。時代的にも「幸福の黄色いハンカチ」（77）が一番新しく、あとは50年代、60年代の作品で……。ただノスタルジーみたいなことに関してはぼく自身持っている。ぼくは大映が倒産する3年前に助監督として大映に入社したんですが、日本映画の黄金期に育ってきたぼくとしては、映画はもうすでにノスタルジーに近いものがある。映画が生きているのは人の心の中だと。もし日本映画が再生されるのであれば、記憶に残る映画の中からしか再生できないのではないか、と思うんです。

――古典を如何にして未来につなげるか、と言うことだと思いますが、私は映画は常に現在、そして未来に向いていると思いたいですね。現に「ザ・ハリウッド」も現在の映画ですし、しかも舞台はレンタル・ビデオ店。その辺の矛盾は……。

野村　一つには地域の違いがあると思います。東京は映画の最先端都市ですが、京都ですら新しい日本映画は見ることができない。ぼくらはちょっと皮肉って先端の日本映画を東京映画とネーミングしているんですが、そういう作品はほとんど見られない。ビデオ化されてもビデオ店には並ばない。でも逆にマニアックになり過ぎていいのかなっていうのもあるんですよ。映画というのはある程度は大衆に向けたものだと思うんです。

――作家の映画でも普遍性のある作品もありますが、なかなか一般の観客には浸透しないというのも事実ですね。それと東千代之介さんがご本人を連想させる時代劇スターという役で出演なさったのは感動的ですね。

野村　ダメモトで出演をお願いしたら二つ返事でOKして下さって。で逆に慌ててしまって（笑）。おまけに撮影現場はぼくの家。スタッフが寝泊まりしてましたから家中ひっくり返っている（笑）。でも何も仰らず、羽織、袴持参で踊って下さったんです。もう車を降りた時から大スターって感じで、空気がピーンと張り詰める。感動しましたね。今回、東映のスタッフや東映映画村の人たちもボランティア的に協力して下さって、皆さんの映画への情熱を凄く感じました。嬉しかったですね。

「ザ・ハリウッド」（配給＝ゼアリズ）

Digitized by Google

INTERVIEW

動かない時間のおもしろさをどうやって映像にするか

新作「クジラの跳躍」ほか監督作が劇場公開

たむらしげる

インタビュアー 寺村摩耶子

漫画にした時から、いつかは映像化したいなあと

ひとりの少年が甲板に立って望遠鏡を覗いている。

「何か見えるかい？」「……トビウオの群れが見えるよ」「きっと何か大きな魚に追われているんだ……」。高らかに鳴り響く汽笛の音。カメラが少年の視線から、船から、しだいに遠ざかっていったかと思うと、ふいに時間がカチリと凝固したかに見え、気がつくと目の覚めるようなエメラルドグリーンのガラスの海の上に老人が立っている。冒頭、観る者がふわりと異世界へ誘い出される瞬間だ。ガラスの時間が流れる世界。そこでは少年が見たトビウオの群れはオブジェのように空中で静止し、老人の涙は一粒の美しいガラス玉になり、「半日かけた」クジラの跳躍は、人々に驚きや懐かしさやさまざまな夢を思い出させながら、ゆるやかに時空をも超えていく。懐かしさがどこまでも未来へとつながっていて、どこまでもつきぬけていくかのような……この不思議な心地良さはいったい何なのだろう。

「よろこびとか悲しみとか、美とかちょっと醜いものとか、そんないろいろなものがいりまじって、最後にはプラスマイナスで消し合って無になるというか、不思議な思い出になって残るような、そんなものがつくれたらなあと思っていました」

ゆっくりと穏やかに語るたむらさんは、船の甲板で望遠鏡を覗いていた、夢見るような少年のイメージそのままのようなひとだ。

絵本作家として今までに三十六冊もの絵本を手がける一方、「銀河の魚」（九三年）やCD－ROM「ファンタスマゴリア」（九十五年）などの映像作品でも知られるが、作品が劇場公開されるのは意外にも今回の「クジラの跳躍」が初めてとなる。原作はやはり三年前に出された同タイトルの絵本だ。

「それより前に、小説新潮の増刊号で12ページほどの漫画を描いたんです。それはモノクロだったのですが、自分では気

たむらしげる／1949年東京生まれ。桑沢デザイン研究所卒。絵本を中心にイラストレーション、漫画、CD－ROM、アニメーションと多彩な表現分野で活躍。映像作品としては「銀河の魚」（93）でモントレー国際エレクトロニック・シネマフェスティバル特別賞、大藤賞を受賞。CD－ROM作品「ファンタスマゴリア」（95）でAMDアウォードグランプリ郵政大臣賞、マルチメディアグランプリエンターテインメント作品賞を受賞。主な絵本に『よるのさんぽ』『ダーナ』『ロボットのくにSOS』などがある。

Digitized by Google

に入って、いつか映像化したいなあと思っていました。もちろんその頃は夢のまた夢だったんですが……。そのうちに『銀河の魚』がある程度の評価をいただいたので、次にするならこれを、と」

そしてまず絵本をつくった。「漫画に色がついて、ワイドな画面になったらどうなるか」。私たちが「原作」だと思っていた絵本は、じつは「映像のためのテストだった」のだ（！）。

「絵本をアニメ化したもので、絵本の魅力を超えたものはなかなかない。たとえば丁寧に描かれた鉛筆画の質感も、セル画になると全部のっぺりした別のものになってしまう。だから『クジラ』では、映画のための絵を全部描きおろしました。アニメ化というよりは、映像化ですね」

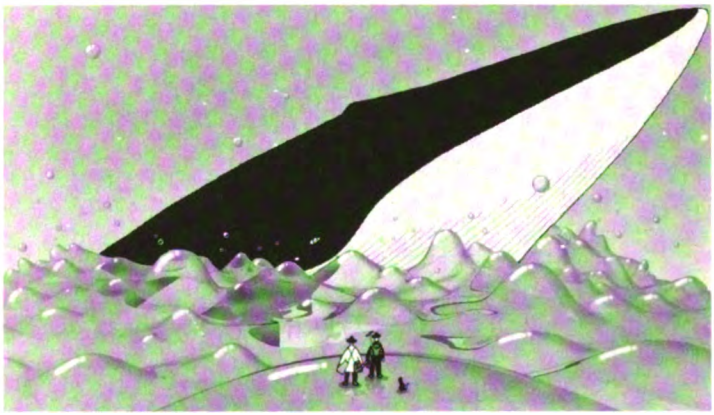
イラストレーションの映像化。だがそれだけではまだ映画は生まれなかった。

「動かない時間のおもしろさをどうやって映像にするか。そんな時間や空間が、観た人の中にきれいで忘れがたい、いい思い出として残るようにするにはどうしたらいいか。それをつきつめて考えていくうちに、ガラスの海の質感がいちばん重要なこととしてでてきたんです」

どこまでも透きとおっていて、硬質で、同時に脆さをも秘めたガラスの海。無限のグラデーションの中に幾層にもうねる時空間をあらわすかのようなガラスの海は、3DCGでしか表現することのできないものだったという。その質感を追求するため、プロダクションでは一年近くもさまざまな試行錯誤を繰り返してきた。

今度は空気感のようなものに挑戦してみたい

「あくまでもたむらさんのイラストレーションの温かさを生かしながら、その上に3DCGを重ねていくのが大変でした」というのは、たむら氏の映像作品をつねに手がけてきた潮永光生プロデューサーだ。「3DCGというよりも、立体イラストレーションというとらえ方なんです」といいながら、「ま、技術的なことはもういいですよ」（笑）。



「クジラの跳躍」©たむらしげる
11月14日より銀座テアトル西友にてレイトロードショー

「ですから、たむらさんからすると映画の製作期間は三年ほどかかっているわけです。今回のカット数は全部で86。つまり映画のために1600近くもの絵を一から描きおろして、それだけで一年近く。そのあとガラスの海の質感を研究するのに、さらに一年間。そこからようやく具体的な作業が始まったという感じで。

漫画、絵本、イラストレーション、3DCG……。様々な表現手法を旅しながら、ふくらみつづけてきた「クジラの跳躍」はこうしてついに、つくり手の「予想を遥かに超えた」映画となってスクリーンにその巨体をあらわすことになった。

それにしても……さまざまな表現の次元を軽々と超越しながら、なおも追い求めつづけずにはいられないイメージの、なんという強さだろう。豊かさだろう。

「小学生のときに一枚の写真を見たんです。それはプールか何かのところでアシカが顔を出している写真で、水の色がたしかグリーンで……。高速カメラで写すと、一粒一粒の水が静止して見えて、アシカにまとわりついている水がキラキラとガラス状に輝いていた。それが『ガラスの海』のもとの映像です」

一瞬、モノクロームの映像の中に、望遠鏡を覗く少年の姿が見えた気がした。

ガラスの海。水晶の町。天体に泳ぐ魚。人間のようなロボットや、壊れた時計、サーカスやお祭り……。たむらさんの作品の中に繰り返し登場してくるイメージはどれも、遠い記憶の底から少しずつ結晶化されてきたものだったに違いない。これからいったいどんな冒険が待ち受けているのだろう。たむらワールドという不思議な惑星の入口にようやく立ったばかりの私たちは、早くも次の航海への予感に胸を膨らませている。

「もしまた映画をつくるとしたら、今までとはまったく違ったもの、いい意味で期待を裏切るようなものにしたいですね。たとえば今度は空気感のようなものに挑戦してみたい」

「でも空気感とか質感を映画にするのって、いちばん難しいんですよね」という編集者のことばに、

「そうなんですよね。色も、フィルムだとグリーンが出にくいんですよね。黄色が赤かったり」と嬉しそうに答えるたむらさんだった。

（一九九八年十月八日・阿佐ヶ谷にて）

映画プログラム通販！

パンフレットリスト
（プログラムリスト）
雑誌リスト　各切手400円
テレホンカードリスト

ポスターリスト
スチールリスト　各切手500円
チラシリスト

通信販売のみしています　営業時間 12時～18時

映通社　〒154-0024 世田谷区三軒茶屋2-14 ロイヤルマンション三軒茶屋1階 TEL 03-3411-9772

映画パンフ・ポスターフェア
10／31（土）～11／8（日）
Bunkamura 1Fギャラリー
パンフ・ポスター・チラシ
スチール写真・雑誌 他
3万点以上、展示即売

映画パンフ・テレカ展示即売
10／17（土）～11／10（火）
Bunkamura 6Fシネマショップ

Digitized by Google

INTERVIEW

おおこうち・ななこ／1977年生まれ。東京都出身。雑誌『セブンティーン』のモデルとしてデビュー後、女優活動を始める。「岸和田少年愚連隊」（96・井筒和幸監督）でヒロインを演じて以来、テレビ、CM、写真集と仕事の場を広げている。主な作品に「ルーズソックス」（97・今関あきよし）「ズッコケ三人組　怪盗X物語」（98・鹿島勤）など。

撮影／谷岡康則

〝生きる〟という意味を問いかけるきっかけになった

清水浩監督「生きない」のヒロイン役

大河内奈々子

インタビュアー 斎藤芳子

ダンカン・脚本主演「生きない」（監督／清水浩）で、大河内奈々子さんが演じているのは、元気で前向きな女子大生・美つき。2泊3日の沖縄初日の出ツアーのバスに最後に乗り込んで来た美つきは、急遽伯父の代わりでやって来たのだ。彼女は参加者の中で唯一、このツアーの真の目的を知らない……。

「自分以外はみんな自殺したい人達だということは、私自身脚本を読んで知っています。でもそれを忘れて一人明るく楽しそうに振る舞うのは、想像以上に大変でした」

美つき以外の参加者12人は皆、多額の借金を抱えている。実はこのツアー、事故死に見せかけた保険金目当ての自殺集団なのだ。彼女にとっては〝不可解〟な、しかし他の参加者からすれば〝もっとも〟な、ツアーの重苦しい空気。美つきはなんとか雰囲気を盛り上げようとする。休憩時間に買ったお菓子をバス内で配る場面は印象的だ。参加者一人一人に丁寧に声を掛けながら手渡す美つき。ところが自分の分がない。お菓子は人数分より1個少なかったのだ。

「美つきが一言〝あっ、私のがない〟と言えば、このシーンは崩れてしまいます。自分の分がなくなっても満足そうな美つき。彼女らしさがよく出ていますよね。彼女はこの旅をいい思い出にしようとしている。でも周りの人たちは落ちている。そこには本当に大きな気持ちの差があります」

お菓子と一緒に美つきのやさしさも受け取る参加者たち。彼らの心の中で何かが揺らめく。

夜。非情にも美つきにこのツアーの本当の目的を伝える添乗員の新垣（ダンカン）。このシーンを撮る前日、大河内さんは清水監督と時間をかけて話をした。

「監督から〝生きるってどういうこと？〟と聞かれました。それに対して答えるのは本当に難しかった。何で生きているのか？　と、私は、今まで疑問を持ったことがなかったからです。だって生きているのが当たり前だと思っていましたから」

大河内さんは自分なりに考えた答えを言葉にしようとした。

「人それぞれ違うと思う。私は〝それ〟を見つけようとしているから〝生きている〟。だから楽しい。夢があるからとか、どんどん答えが出てきて、どれも正しいなと思えました。でも一体どれが本当の答えなのかは、分かりませんでした」

このシーンは本当に大変だったそう。堪えても堪えても大河内さんの目に涙が浮かんでくる。

「監督には〝泣かないでやって〟と言われました。でも涙が止まりませんでした。美つきにはやりたいことがたくさんあるだろうし、将来への希望もある。本当は逃げたい、しかし彼女はそうはせず何とか説得しようとします」

作品の内容に深く触れることなので、ここでの具体的な記述は控えたいが、ダンカンさんはこの作品のラストを〝優しい〟と表現したそうだ。それに対して大河内さんは〝悔しい〟と語る。

「私とは違う考え方ですが、ダンカンさんの意見もなるほどなと感じました。私とは〝物の見方〟が異なるんですね」

大河内さんはこの「生きない」に出演して、「ただ〝生きている〟だけじゃなくて、〝生きている〟ことに、もっともっと貪欲になりたい。死ぬ時に〝生きてきてよかったな〟と思えるようになりたい」と考えるようになったという。「生きない」に出演したことが、〝生きる〟ということの意味を自分自身に問いかけるきっかけになったようだ。

Digitized by Google

The First Emperor
始皇帝暗殺

陳凱歌 監督作品

●1998年・日本＝中国＝フランス＝アメリカ合作・カラー・ヴィスタ・ＤＴＳサウンド・２時間48分
●監督／陳凱歌　製作総指揮／韓三平、角川歴彦、古川博三　製作／陳凱歌、高秀蘭、井関惺　脚本／陳凱歌、王培公　撮影／趙非　美術／居居華　監督補／張進戦　録音／陶経　編集／周新霞　音楽／趙季平　衣装／莫小敏　主題歌プロデュース／小室哲哉　主題歌／Ｒｉｎｇ
●出演／鞏俐、張豊毅、李雪健、孫周、呂暁禾、王志文、陳凱歌、顧永菲、趙本山、丁海峰
●製作／角川書店、北京映画製作所、ル・ステュディオ・カナル十、日本ヘラルド映画
●配給／日本ヘラルド映画
●11月14日より、丸の内ルーブルほか全国松竹東急洋画系にてロードショー
●本誌関連記事／５月上旬号、６月上旬号、７月上旬号「製作ルポ」（村山雅美）、10月下旬号「新作紹介グラビア」

Digitized by Google

撮影／吉岡誠

鞏俐（コン・リー）インタビュー

陳監督は登場人物を血の通った人間にとらえることを主張していました

インタビュアー 石子順

Digitized by Google

たとえ失敗しても困難に向きあっていくヒロインへの共感

三年前に鞏俐のささやかな評伝を書いたものとして、鞏俐にインタビューできるのは最高だった。目の前の鞏俐は芯の強さを秘めた感じで、もの静かに語る人だった。

「始皇帝暗殺」――これは愛情と憎悪、野望と宿願、献身と裏切り、狂気と理性、権力者と暗殺者の葛藤を雄大、繊細に描いて、シェイクスピアの史劇、悲劇の再来を彷彿とさせる大作である。

この男たちの闘争に、みずからの意志で身を投じ、国を救うために行動する女性・趙姫を演じるのが鞏俐。権力者秦王・政（のちの始皇帝）に愛されながら、それを倒そうとする荊軻を愛してしまうという複雑な役であり、重要な役柄であった。

「あの時代の政治とか社会とかは、昔のことでしょう。現代とはちがいますので、そこに生きる女性は性格的にはっきりしていて、それを演じるということではとてもリラックスしてやることができたんですよ……」

とさらりと言われた。

ただ役づくりの苦労というのはあって、

「趙姫は、登場してからあとになるにしたがって変化していきます。この変化していく過程を、どのような表情で、しぐさで演じていけばいいのかという工夫をこらすのに苦心しました。趙姫の変化は、彼女自身が生み出したものではなくて、まわりの状況の変化によって生じていくものなのです」

状況がきびしく変化したとき、人間はどのような反応を示すのか、とりわけ女性はどう対応し、どう新しい状況とたたかっていくのか。趙姫がわが顔に罪人の烙印を焼きつけてまでわが意志を示し男たちを動かしていく。こういうときの鞏俐は、かつて張芸謀が彼女の女優としての資質を「『感情型』の人間」といったことを思い出させるほど直情的であり、それだけ強烈な印象を与える。

「映画一般でいえばそこに出てくる女性の多くは男性の思いの反映であり、男性にとって奇麗に見えるように撮られていますね。」

この作品ではことさら女性を美しく見せようとする場面はなかった。だから、

「趙姫という女性は好きですね。困難に向きあっていき、たとえ失敗しても自殺などしないで生きていくあたりが……」

そういえば鞏俐がこれまで演じてきた女性は、「秋菊の物語」などをのぞいて、死んだり自殺していくことが多かった。歴史上には存在しなかった人物でありこの映画のために創造された女性なのに、趙姫が自分の意志で生きぬき、信念をもって生き残るところに現代的でリアリティを感じさせ、それがまた重い感動をもたらすのだろう。

俳優ならだれでも陳監督と一緒に仕事をしたいと思います

鞏俐が陳監督と仕事をしたのはこんどで三作目になる。陳監督は今回、ひとまわりもふたまわりも大きくなり、より厚みのある演出力を見せてくれた。鞏俐の目に映った監督はこの作品を、

「商業映画ではなく文芸大作を撮ろうとしていました。一般民衆が見てもわかる映画を目指して、人物はみんな血が通っている人間にとらえることを重視していました。現実を反映しつつ歴史を見つめ、そして美しく撮ろうとされたんだと思います」

で、陳監督とは？

「得難くてまじめな監督です。教養が高くて、……どの作品もそれぞれ変化に富んでいてどれも異なった映画ですね。俳優ならだれでも

The First Emperor
始皇帝暗殺

Digitized by Google

一緒に仕事をしたいと思いますがそれは容易ではないんですね」

では現代の中国映画について。

「八〇年代末ごろまでは開放になってからのいろいろなスタイルの映画が生まれました。現在では中国は経済中心の社会になって、だれもがお金をめあてに働くようになってしまいました。小説家でもいい仕事をしていた人が、小説をやめて会社をやったり、商売熱心になっています。そのためいい文芸作品が出なくなっているんですね。監督は小説をもとに脚本を書くことが多いのですから、そういうものが欠けてくると映画は困るわけです。いまはいい作品を捜し出すのが難しいですね」

と映画界の困った現実に批判も。

「でも中国映画界には前途のあるわかい才能やベテランはまだまだいます。チャンスがあればいい仕事をしてくれる人がいるんですよ」

と、希望はそこにあることをも強調してたのもしい。

ところで鞏俐には現代中国の都会での女性の生き方を描く映画はまだない。

「そのとおりですよね。いい脚本があれば私もそういう映画に出会いたいという気持ちでずっといました。じつは次回作が都会映画なんですよ。監督は『始皇帝暗殺』で燕の太子を演じている孫周なの」

孫周といえば「心の香り」の監督として日本でもよく知られている。

「かれはまだ若いけれど才能のある監督です。俳優としても素晴らしいわ。陳監督が今度の作品で出演しているから、孫周も熱演しているんですよ」

と孫周との次回作が待ち遠しいという感じだ。古代の趙姫から一転して現代のリストラで自宅待機させられる女子労働者という役どころらしい。これは楽しみである。

鞏俐は一九九六年に結婚した。「上海ルージュ」以来長年の協力者だった張芸謀作品には出ていない。張芸謀監督とこれからも仕事をするか気になるところだ。

「もしかれにその気持ちがあれば、機会があれば出たいですね」

しんみりとしたその口ぶりに、ホッとして嬉しくなった。

鞏俐は全国政治協商会議委員（日本の参議院議員にあたる）である。このインタビューのあとに水害対策の緊急会議開催という連絡を受けて急遽帰国した。中国映画を代表する映画女優鞏俐はまた政治活動もするキャリアウーマンとして中国に根づいている感じを強くした。

演出中の陳凱歌監督

The First Emperor
始皇帝暗殺
陳凱歌監督作品

Digitized by Google

芸の力、演出の妙を味わう中国製“シェークスピア劇”

作品評 西脇英夫

陳凱歌と「始皇帝暗殺」、どう考えてもミスマッチのような気がした。確かに凱歌は、これまでにも「黄色い大地」「大閲兵」「さらば、わが愛／覇王別姫」といった、歴史的なスケールの大きな作品に優れた力を発揮してきた。しかし、それらの主人公は一介の農民や兵士、京劇の役者にすぎず、その他でも「子供たちの王様」の貧しい青年教師、「人生は琴の弦のように」の盲目の旅芸人、「花の影」の生まれの卑しい上海マフィアのジゴロなど、歴史の陰に埋もれてしまいそうな苦汁の市井の徒を、好んで描いてきた。そうしたものが彼の創作意欲をかりたて、反骨精神を満足させるのだと思っていたので、そんな凱歌が、中国史の中でも屈指の圧政者である始皇帝を、積極的に描くだろうかと懐疑的だったのだ。

しかし、作品を見てなるほどと思った。これはまさに中国製の“シェークスピア劇”であり、凱歌自身の歴史観をまざまざと示すものであった。まずオープニングの暗殺者・荊軻による一家皆殺しの、暗く陰湿なイメージから始まり、戦場での若き始皇帝の姿も、勇壮というよりはむしろ戦いの悲愴さの方が強調されている。

続いて、今回の映画のために創作された女性・趙姫が登場し、始皇帝の権力を肥大化させ、周辺の国々を統合することによって戦争を終わらせようという変則的な陰謀が、趙姫と始皇帝暗殺計画へと進展し、ドラマは、あくまでも壮大な戦国絵巻などではなく、執拗にして徹底した人間対人間による陰湿な策謀劇へと深化していくのだ。しかも、始皇帝の身内では、自らの出生の秘密や実母の愛人との確執など、まるで「ハムレット」のような骨肉の相克が渦巻き、次第に内部分裂を起こしていく。

やがて、これら外からの肉体的圧迫と、内からの精神的崩壊がぶつかりあい、荊軻による始皇帝暗殺の劇的クライマックスを迎えるというわけだが、凱歌は、こうした悲劇的な人間関係を、深い絶望と丹念に積み上げた憎悪によって描こうとした。このため、重厚な風格をもった作品ながら、全体的には暗く沈み、その暗さゆえに硬質で救いのない映画に仕上がっているのも否定できない。

この荊軻の始皇帝暗殺未遂事件は、司馬遷の著した『史記』の中の〈刺客列伝第二十六〉の終わりの方に出てくるエピソードであり、監督の凱歌が役者として演じている始皇帝の真の実父と思われる人物・呂不韋については、その前の〈呂不韋列伝第二十五〉に記載され、その中に、始皇帝の出生の秘密や実母と宦官の嫪毐との乱行など、骨肉の争いが述べられている。さらに、秦の通史については、〈世家篇〉の中ほどあたりに書かれている。というように、趙姫以外のすべては『史記』の中にあるわけで、この原作が驚くほどよくできているだけにそれに相応して人的動員やセットなども、ここまで本腰を入れなければ映画として完成度は期待できないだろう。そういう意味でも作品は完璧といえる。

それにしても、登場する男たちはおしなべてジジむさく、おまけに小太りで薄汚い。失礼だが田舎のオッチャンという感じで、香港映画の美男を見慣れた眼には、おせじにも二枚目とは言い難く、そこがリアルといえばそんな気もしないではないが、映画が進行していくにつれ、みんなキラキラと輝きだしてくるのは、やはり芸の力、演出の妙というべきだろう。いずれにしろこれまでにも、『三国志』『水滸伝』などを題材にした中国製作の歴史絵巻をいくつか見てきたが、そのスケール、重厚さ、芸術性などすべての点で、最高水準にあることは間違いない。

Digitized by Google

陳凱歌監督インタビュー

この作品を通してアジアの精神を表現したいと思った

石子順

「始皇帝暗殺」で呂不韋に扮した陳凱歌監督

自分自身の長い間の夢を今回の映画の中で実現した

二年前、「花の影」で会ったときとくらべると、陳凱歌監督はぐーんと大きくなったように感じられた。「黄色い大地」で監督デビュー以来、わずか十四年、七作目でのこの貫禄、いかに「始皇帝暗殺」の撮影が大変であったかということをうかがうことができると同時に、さまざまな困難を乗り切ってこの大作を完成させた自信と充足感がにじみ出ているようだ。

今回の作品は最初の構想から十一年たっており、セットの準備とか、衣裳、大道具小道具などの準備で三年以上かかって、ロケ地などでの撮影に六ケ月半ついやして完成させた。脚本作りにぼう大な資料を漁り、研究、考証を重ねて秦王・政などの人間像がねり上げられた。こうまでねばったのは、

「私は監督としてこの作品を通してアジアの精神といったことを表現したいと思ったからです。中国の戦国時代というのはヨーロッパではギリシャ・ローマ時代と比較できるかと思いますが、英雄伝というのはヨーロッパだけに出現したわけではなくアジアにも出現したのです。そういう考えにもとづいて、自分自身の長い間の夢を今回の映画の中で実現させていただきました」

始皇帝暗殺というのは中国の歴史上の実話である。司馬遷の『史記』などにも描かれている。これは秦王・政が始皇帝と名乗ることになる六年前のB・C227年に起こった。暗殺者荊軻も実在した。こういう人物たちの中に趙姫という実在しない女性を配した。

「こういった大規模な作品になりますとどうしても女性の存在が必要です。この作品には異なった二つの勢力が出てきます。一つは支配者側、もう一つは民衆です。支配者側は国家を統一して一つの国にまとめあげようとします。この時に趙姫という女性が大きな役割をしていくのです」

趙姫は宮廷の生活より民衆の生活を好んでいる。幼なじみの秦王・政にむかって王になったら逆につまらないというあたりにその意志があらわれている。趙姫は荊軻にも影響を及ぼしていく。自分の生きる道を見失っていた荊軻は趙姫の愛によって人生の道を見いだしていった。

「どのような作品でも人道主義ということは欠かすことができない要素だと思っております。荊軻と趙姫にこの要素を表しているのであり、この要素こそが支配者に対する民衆の力、人道主義なのです。趙姫がそのその顔に焼きごてをあてて傷をつけます。この火傷の痕こそ、ある意味では支配者側の暴力を象徴しているのです」

趙姫に対する支配者秦王・政と暗殺者荊軻のそれぞれの愛がそのまま両者の激突につながっていく。それほど趙姫の存在は大きい。秦王・政は趙姫にむかって全国統一の夢を語るときは目を輝かし理想に燃えている。しかし趙姫を失ったとき、人間性も失い、暴虐の限りをつくす。一方荊軻は盲目の少女を殺して人間性を喪失した。それが趙姫の愛に目覚めたとき正義感にふるいたち、その愛情の結果として秦王・政暗殺に生命を燃やす。

秦王・政の趙姫への愛は、趙姫によって荊軻が自分に襲いかかってきたことを知っても趙姫を許してしまうほどすさまじい。このような人間の根源的な愛憎の対比を浮かびあがらせて、二〇〇〇年以上も昔の時代を描きながら、現代に肉迫してくる陳監督の演出力は重厚で説得力があり、衝撃的でさえある。

二人の間にある分かち難い溝を象徴しているのです

陳監督は監督として采配をふるうと同時に、この映画では俳優として出演している。共演した李雪健が「かれの演技は非常にいいと思いますよ。すばらしい芝居を見せてくれました」と感心するほど。呂不韋という難しい役

Digitized by Google

チェン・カイコー（CHEN KAIGE）／1952年北京生まれ。映画監督の父・陳懐皚（チェン・ホアイアイ）とシナリオ編集者の母を持つ映画一家で育ち、66年から始まった文化大革命の時代に少年期を過ごす。78年に北京電影学院を張芸謀、田壮壮らと同期で入学し、卒業後、「黄色い大地」（84）で監督デビュー。一躍世界的な注目を浴びる。88年にはアメリカに渡りニューヨークの大学で映画講義をしたりプロモーションビデオの監督をするなど、幅広い活動を見せる。中国を代表する世界的な監督の一人として活躍中。

［フィルモグラフィー］
84　黄色い大地
85　大閲兵
87　子供たちの王様
91　人生は琴の弦のように
93　さらば、わが愛／霸王別姫
96　花の影
98　始皇帝暗殺

を演じたわけは。

「じつは呂不韋と同じ年ぐらいのベテランの俳優にお願いしていたところ、いろいろ問題が生じてダメになったのです。べつの俳優を探すともっと時間がかかることがわかったので、それじゃあともかく自分がやろうか……ということになったのです。なんといっても自分が演じればギャラもいりませんしね。

もう一つの理由は、私自身この呂不韋という人物が好きだったということです。私はこの映画で呂不韋を演じながら自分の父親を思い出していました。つまり文化大革命の時期に私と私の父との間に発生した事柄ですね。……政治的圧力のもとである時期、やむをえず、私は父親を批判したことがあるわけです。ですからそういうことを思いだしながら呂不韋を演じました……もしも私が演じた呂不韋がある程度のできになっているとお感じになったとしたら、それは私に芝居の才能があったのではなく、いまいったような感情を持ちながら演じたからだと思います」

あの時、陳凱歌はつるし上げ大会に引きずり出された父親（陳懐皚＝「青春の歌」などの映画監督）にむかって紅衛兵の一人としてスローガンを叫びながらこずいたのである。そのことを思いおこしながら、呂不韋が自分の父だと知って秦王・政が呂不韋を難詰する場面を演じたということは、文化大革命で受けた傷が三十年以上たってもなおうずいているということなのか。

今回の作品では橋が象徴的に出てくる。秦王・政の命で嫪毐（ろうあい）が城壁の間に渡された板を渡る。そして荊軻が秦王・政の前に出るには池のなかからせり上がってくる橋を渡らなければならない。

「これはつまり人の間のコミュニケーション、あるいは逆に二人の間にあるわかちがたい溝というものを象徴しているのです。秦王・政と趙姫にしろ、秦王・政と荊軻にしろ橋をはさんででむかい会う関係にしかなりえないといった意味をこめているのです」

橋のない人間同士の関係、絶対的な対立関係の支配者と民衆、あるいは父と子との亀裂に、それを超越していく人間愛というものはないのかという問いかけをここに見ることができる。

陳監督の演出は容赦しない。王志文は防御装置なしで高い所に渡された板の上を六〇回くらい行ったり来たりした。運動をしない体質ながら李雪健ははじめて馬に挑んで何回落馬したかわからない。ラストの水の中での李雪健と張豊毅の決闘シーンは一月の最も寒い日に濡れねずみ状態で延々と撮られた。

「役者にきびしく要求する監督ほど役者を愛しているんだと思います」

と監督は笑った。

これに対して出演者たちは、

「非常にまじめで仕事に没頭する人ですね。映画こそかれの生命ですね」と李雪健、「映画を撮っているときとそうでないときとは別人のようだなあ」と張豊毅、「一人一人の個性、演じ方を尊重してくれるひとです」と王志文、鞏俐も「得難い監督です」といった。

「黄色い大地」で鮮烈に中国映画ここにありと世界に宣言した陳凱歌が、いまここに前世紀を世紀末に再現して、二十一世紀にむかって人間の生き方を問いかけているのである。

Digitized by Google

李雪健（リー・シュエチエン）・張豊毅（チャン・フォンイー）・王志文（ワン・チーウエン）インタビュー

中国の三大男優たちの力強い三重奏

インタビュアー　石子順

秦王の子供っぽさを表現するよう陳監督は要求してきた——李雪健

現代中国の三大男優李雪健、張豊毅、王志文が一堂に会した。それだけでも絵になり壮観であったが、話し出すとそれぞれの個性がひびき合って力強い三重奏を聞かせてくれるものだからしばしその音色に酔ってしまった。

李雪健は、「四十不惑」、「青い凧」などで政治闘争に明け暮れた世代を演じてきたが、今回、秦王・政役では弱さをおし隠した権力者を時にはコミカルに時には凶暴に演じた。これはなぜなのだろう。李雪健は理路整然と主旋律を奏でる。

「秦王・政は全国統一という理想を実現していくなかで矛盾した心理状態にあったのです。人々に平和な日々をすごさせようとして、受け入れがたい残酷さで統一をなしとげていったのですから……。人に思いつかないことをかれは思いついた。全国統一です。それを思いついたのはかれが小さいときから戦争の苦難を体験し、肉親から切り離されて人質となって他人から残忍なあつかいを受けてきたためです。この映画は秦王・政が六国を平定し統一という理想を実現しようとするその過程を描いています。秦王・政の人間の個性の成長と歴史背景は密接に結びついています。個性の成長のしかたは小さかったころの苦難の日々が影響しています。ですから陳監督はそれを表わすためにかれの童心、子供っぽさを表現するように私に要求してきました……」

李雪健の演じる秦王・政が権力者としての威厳をみせつつどこか子どもっぽくて、残忍でどこか滑稽にも見えるのは、完全に大人になりきれないまま権力を握った男の屈折感のあらわれである。

秦王・政にもうひとつ重要な影響を与えているのは愛情である。

「趙姫がそばにいるときにはかれは正常でおだやかでした。ところが彼女がそばにいなくなってから性格が変わっていきます。気弱さから残酷に走る。趙姫とはともに幼いときをすごし小さいときから助けられた。強い依頼心を抱いてきた秦王・政の人格形成上趙姫は決定的な役割を果たしたのです」

李雪健は、秦王・政を愛に飢えた人間として演じきった。そのために残虐な面と純情な面、強さと弱さの間に揺れ動く不安定な人間性を見せつける。愛の裏返しとして憎悪が激しい。母と嫪毐の関係を知ってその反逆心をわざとあおって倒していくあたり、残忍な行為に酔い痴れる権力者のすさまじさがあふれ、李雪健が絶妙にその恐さを演じた。

荊軻の出現でその強さにかなわないと思い、秦王・政は男の誇りを傷つけられる。荊軻の剣は秦王・政を倒せなかったが、趙姫が荊軻を愛してしまったことを知ったとき、秦王・政はその愛の変化によって精神的に暗殺されてしまったのである。

単純すぎる荊軻にどのような色どりを添えるか苦労——張豊毅

その暗殺者荊軻を演じた張豊毅は、かつて老舎の小説の映画化「駱駝の祥子」の車引き役でデビューした。陳監督作品は「さらば、わが愛／覇王別姫」以来二度目の出演であり、蜚俐とも二度目の共演になる。スキンヘッドで現れた張豊毅は、荊軻という人物について、

「人間として単純すぎるね。人間関係も秦王・政のようにいろんな人物にとり囲まれているわけではないし、いろんな事件が起こっていくわけではないからね」

といって豪快にもう一つの旋律を加えてくる。

「荊軻って人物は、もともと頭脳で考える人間でなく、肉体的に殺人術にたけているだけでひたすら殺人マシーンとして生きてきたんだ。それが一家皆殺しのあげく盲目の少女まであやめてしまってから、良心の痛みを感じ、プロの殺し屋としての生き方を失ったわけだ。

廃人のようになった荊軻が趙姫に出あいその愛を受けて、民衆や子供に目をむけはじめる。趙姫への愛、正義感、燕と子どもを守るための行動を起こす。秦王・政を殺しても殺さなくても生きることはできない、死ぬことであるとわかっていても死地におもむくわけで——」

Digitized by Google

撮影／谷岡康則

王志文（ワン・チーウェン） 1966年上海生まれ。TVドラマ「南行記」で全国的に認められる。「デッドエンド 最後の恋人」(94)「べにおしろい」(94)「朱家の悲劇」(95) などに主演し、"千の顔を持つ二枚目"と評されている。

張豊毅（チャン・フォンイー） 1956年北京生まれ。北京電影学院在学中、映画初出演を果たした「駱駝の祥子」で一躍トップ・スターとなる。「さらば、わが愛／覇王別姫」ではレスリー・チャン扮する京劇の女形の相役を演じた。他に「北京の想い出」(83) など。

李雪健（リー・シュエチエン） 1954年山東省生まれ。空軍政治部話劇団に入団し、81年「天山行」で映画初主演。「鼓書芸人」(88)「四十不惑」(92)「青い凧」(93)「上海ルージュ」(95) などで知られる名優にして人気俳優。

荊軻が燕の信頼に応じ、趙姫の愛のために行動していくことは人間復活なのである。このあたり単純であっても、その役づくりはむづかしかった。

「単純すぎる荊軻にどのような色どりをそえていくのかということで逆に苦労したんだ」

荊軻は口数が少ない。それだけ表情や動きで心情をいい表さなくてはならなかった。秦王・政と荊軻が対決するクライマックスはまさに舞台上の名優同士の立ち回りのように壮絶だった。

で、荊軻は抵抗者か暗殺者なのか。

「かれは英雄だよ」

張豊毅は断固たる口ぶりで即答した。

なぜなら荊軻は死ぬことを知りながら暗殺におもむき、身体を張って玉器のように砕けた。その玉が割れる音によって、天下にむかって、こういう残酷なことをやってはいけないと秦王・政を目覚めさせようとし、そしてまた人々にむかって、その残虐行為を告発したからだと張豊毅は早口になった。

いかにして伏線の人物として主人公をひきたてるか——王志文

やや高い音声で歌いあげるようにしてここに加わったのは王志文である。

「私が演じた嫪毐はおそらく中国においてのみ出現する人物でしょう。宮廷内で高位の人物につかえる宦官というのは中国独特のものです。どんな映画でもそうですが、メインの線と伏線というのがからまってストーリーは展開していきます。秦王・政と荊軻はメインであり、私の嫪毐とか燕の丹太子とかはサブのラインです。もし難しさがあるとすれば、やはりいかにして伏線の人物としてこの映画の主人公たちを引き立てていくか、いかにしてこの映画のテーマをきわだたせていくか、というそのための工夫にありました」

王志文は「べにおしろい」や「朱家の悲劇」などで、やさ男でありながら不気味なほど冷静に悪事を働くという役どころで見る者を引きつけた。今回もニセ宦官という役だ。後宮にあって秦王・政の母と通じ、二人の子どもまでもうけて、最後には秦王・政に反乱を起こすという大胆不敵に面従腹背する人物で強烈な衝撃を与える。

「嫪毐の果たした役割は、劇中の人物にも、観客に対しても、秦王・政のその出生の秘密を暴露していくという重要な役割ですね。

この男はいうこと、やることと、腹の中で考えていることとがいつも違うわけですね。このあたりに役者としての意欲と興味を感じて演じましたね」

もの静かでいつも笑みを絶やすことなくそこにあって主役を食ってしまうような俳優である。今回も思う存分その役をやりとげたという快感に似たものを、その不敵な笑顔からうかがうことができたのである。この伏線、この傍役があってこそ、この大作は成り立った。

この映画の見どころをひとことでいうと？李雪健「男性であれ女性であれ、みなさんに正義、愛情、理想を感じていただけるということでしょうか」

張豊毅「秦王・政の暴力・残虐行為をとおして覇権主義に反対するというテーマかなぁ」

王志文「二〇〇〇年前とか現代とか関係なくどの人間の運命もよく描かれているあたりを見てほしいです」

——見事なアンサンブルであった。

Digitized by Google

MAKING OF RHYTHM AND POLICE THE MOVIE

踊る大捜査線 THE MOVIE 捜査報告書

FILE.Ex

Text by 進藤良彦

番外編 君はもう見たか？「踊る大捜査線 THE MOVIE」を！

ついに姿を現した「踊る大捜査線 THE MOVIE」の全貌を、すでにスクリーンで確認された方も多いことだろう。まだご覧になっていない方は一日も早く劇場に駆けつけていただきたい。本誌では前号の巻頭大特集まで6号にわたって、この秋最大の話題作とも言える「踊る大捜査線」の魅力を追い続けてきたが、この連載もいよいよ「ラストダンス」を迎え、番外編として「踊る」公開直前の周辺状況をレポートする。

10月6日(火) 杉並区某所

『秋の犯罪撲滅スペシャル』のオンエア日。本誌特集の合間にポッカリとできた休息日にあたり、自宅でノンビリと『秋SP』を見る――はずだったのだが、結局いろいろあって前半は落ち着いて見られなかった。内トラ（スタッフのエキストラ出演）の出過ぎも気になって、室井の本格的登場まではどうにもドラマにのめり込めず。しかし、後半は完璧。シナリオを読んだ時に気になっていたドラマ的カタルシスに背を向けたオチのつけ方が、ちゃんと着地しているのにも安心した。尺の関係で、いくつかの魅力あるシーンがカットされてしまったのが残念だが。ビデオはそれらが復活する完全版で出るらしいので、そちらにも期待。

10月9日(金) 東宝撮影所

通い慣れた第8ステージではなく、第3ステージに新たに建てられた刑事課会議室のセットで、スリーアミーゴス主演の深夜ドラマ『深夜も踊る大捜査線／湾岸署史上最悪の三人！』の収録。10分枠、月～金の帯で全5回というミニドラマだが、北村総一朗、小野武彦、斉藤暁の三氏が顔を揃え、脚本・君塚良一、演出・本広克行、技術もテレビの『踊る』スタッフという豪華版だ。君塚さんから、このミニドラマの話を聞いたのが9月25日。「これからホンを書くんですよ」とおっしゃっていたが、小野さんに伺ったところ、印刷された台本を受け取ったのが前々日とのこと。今日一日で撮影して、明日が編集、明後日がMA（音楽や効果音をつけて完成品を作る作業のこと）、その翌日（12日）から第1話が放送されるという、超タイトなスケジュールである。

セットを訪れた時にはすでに第1話のリハーサル中だったが、カメリハ、ランスルーとテストが重ねられ、やがて本番が始まった。4台のキャメラがスリアミの姿を追う。基本的に芝居を割らず、1話分まるごとをワンテイクで撮影。1カメの長回しではなくスイッチングでカットを割っているので、途中でNGが出ても頭から撮り直すわけではない。編集でカットを割れるところまでをOKとし、それ以後からをリテイクしていくテレビ・ドラマのやり方で収録は進む。何度かNGが出たが、6テイク目で完全にOK。俳優三氏はすぐさまセットから出てきて、VTRチェックのためにモニター前にやって来る。この時の三人の姿がすでにオカシイ。

「これは、あれ、NGの方？」

誰に聞くともなく北村氏がモニターを見ながらつぶやく。署長のまんまだ。

「そうです。この後の方が」と監督。いつ斉藤氏が「おっしゃる通りで」と言い出さないかと、こちらは笑いをこらえるのに必死。前にもこの連載で書いたが、出番を待つ間の三人の姿はまさに役柄そのものという感じで、素のままでも絶妙の大喜利が展開される。かと思うと、突然真面目な表情で芝居の自主トレが始まったりもする。ホント、見ているだけで飽きないっす。

収録の合間、「台詞が多くて」と小野氏がボヤく。筋を次々とふっていく役どころの袴田課長は、当然のことながら台詞の量も多くなる。「歳取ると台詞覚えるのに時間がかかるのよ」と、小野氏は自主トレを欠かさない。セットの片隅で台詞をつぶやいていた小野氏に、北村氏が受けの台詞を答えてやり取りが始まると、ちょっと離れたところでお茶を注いでいた斉藤氏が慌ててその後の台詞を続ける。やっぱり絶妙のチームワークだなあ。世間ではアドリブだらけと思われているスリアミの芝居だが、実はそんなことはない。ちょっとした受けの台詞、仕草、立ったり座ったりの動きに、プラスワンを常にいろいろ考えているということはあるが、台詞に関してはほぼ完璧にシナリオ通りなのである。「ホンが良い時には、俳優はその通り演じればいい」。おそらく三人が考えているのはそんなことなのだろう。その上で、そこにどれだけのものを重ねられるか。それが俳優の力量である。

▲ついに主役！の3アミーゴス。お忙しい中、丸一日かけての撮影でした

Digitized by Google

「レベルの高い笑い」を要求されるスリアミの場合、そのプレッシャーはなおさらだ。

第3話の撮りが終わったところでスタジオをあとにしたが、「これがホントに最後の『踊る』になるんだな」という感慨で後ろ髪ひかれる思いだった。

10月12日(月) 五反田IMAGICA

いよいよ待ちに待った「踊る大捜査線 THE MOVIE」完成の日、IMAGICAの試写室で0号試写が行われた。スタッフに混じって、僕も完成品を見させてもらう。すでに劇場でご覧になった方には、いまさらくどくどと感想を述べる必要もないだろうが、野暮を承知で言えば、やはりとんでもない傑作に仕上がって、内心ホッとしている。撮影中から別に危惧もしていなかったが、従来の日本映画にはないスケールの一大エンターテインメントとして、あとはただひたすら大ヒットを願うだけだ。IMAGICAの音の良さのせいもあって、出だしのシークエンスなんて映像といい音楽といい、まるでハリウッド映画。どうかみなさん、できるだけ音響設備のいい劇場で見て下さい(同業ライター諸氏、および評論家のみなさま、東宝試写室では「踊る」の音響演出の全てを堪能したと言い切れません。ぜひ、大劇場のスクリーンでもう一度ご覧下さい)。

少し真面目なハナシをすれば、多少、編集のリズムにぎくしゃくしたところを感じたのも事実。音楽の乗せ方に違和感を覚えたところも一、二箇所あった。前半、笑いのテンポに乗れなかったところもあったが、いずれも瞬間的に消えていく思いのようなもので、イコールそれがダメなところというわけでもない。あえて言えば、というところか。音が良すぎるおかげで台詞と音楽のバランスがちょっとどうかな、と首を傾げてしまうところもあったけれど、これはのちに東宝の試写室で見たら何の問題もなかった。

翌13日も同じIMAGICAで初号試写。今度はキャストに混じって見る。不思議なもので、先に挙げたいくつかの違和感が、2度目に見た時にはきれいさっぱり消えていた。『秋SP』を最初に見た時にもそうだったが、中途半端に舞台裏を知っていると、肝心のおハナシよりも内トラとかハイパーリンクの遊びの方が気になってしまって、物語にのめり込めなくなってしまうようだ。昨日は途中から無理矢理気持ちを切り替えて、メインのお芝居を見るように心掛けたのだが、2度目は素直にハナシが楽しめた。結果、編集も音楽もノー問題。2時間があっという間にすぎていく。次から次へとハイテンポで物語が転がっていくだけに、1時間半くらいにしか感じない。娯楽映画はこうでなくちゃ!

10月19日(月) 渋谷区某所

「踊る」スタッフ・キャストが集結しての大打ち上げ大会。ずうずうしくもお邪魔させてもらった。とても誌面では書けない話の応酬で、しかもこれがベラボウに面白い。現場ではずーっと眉間に皺を寄せていた柳葉(敏郎)さんが、ここぞとばかりにハジケていた姿とか、相変わらずハイテンションで場を盛り上げるユースケ(サンタマリア)さんの挨拶をみんなで寄ってたかって邪魔するところとか(北村さん曰く「ねえ、長いんだよ、きみの挨拶は」、「おっしゃる通りで」と斉藤氏)、爆笑ものの挨拶が続く中、「こういうところで笑いのひとつも取れるようになるよう、これからも頑張ります」と、しっかり笑いを取っていた水野(美紀)さんとか、抱腹絶倒の3時間あまりだった。

10月22日(木) 有楽町・日劇東宝

ついに迎えた完成披露試写。場内の半分は一般の『踊る』ファン。爆笑に次ぐ爆笑、そして号泣、あまりに狙い通りのリアクションを返してくれる観客に、プロデューサーの堀部さんは「いやあ、いいお客さんたちだ!」と興奮していた。それはやっぱり作品の出来がいいからでしょう。また亀山さんに「褒め過ぎだ」と叱られるかもしれないけど。これに先立ち帝国ホテルでは完成披露記者会見も行われた。ここで聞き逃せない重要なコメントを織田(裕二)さんがポロリ。「まだやり残したことがあるかな、という感じがして」。亀山さんは「その言葉、しっかり覚えておきます」と受けて、その後で控えめに「映画のパート2」の可能性を示唆した。

▲完成披露記者会見でのショット——シャンパンで乾杯。

完成披露試写終了後は、メイン・キャストがズラリと顔を揃えての舞台挨拶。その数なんと11人。敬称略で全員紹介してしまおう。織田、柳葉、深津(絵里)、水野、いかりや(長介)、ユースケ、北村、斉藤、小野、佐戸井(けん太)、筧(利夫)、加えて本広、君塚、亀山の豪華版。さらに場所を移して、関係者だけのパーティーも行われた。そこでの織田さんの挨拶。

「自分の芝居という意味でやり残したことがあったかなという気がして、さっきはそう言ったんですが、試写を見ていたら、そうでもないかなという気がして。不覚にも自分の顔のアップで泣いてしまいました」

深津さんも「これで燃え尽きました。映画がラストダンスです」と亀山さんを牽制する。亀山さんは「今は続編は考えていません」と、あくまで映画で完結を強調したが、「やれと言われればやります」と付け加えることも忘れない。続きを見たいような見たくないような、僕自身、ファンとしても複雑な心境なのだけれど、ひとつだけはっきりしていることがある。亀山プロデューサーが会見でも舞台挨拶でも言っていたことだが、『踊る』が映画にまでなったその原動力は、亀山氏をはじめとするスタッフ・キャストの熱意もさることながら、なによりも『踊る』を愛したファン一人一人の声だった。フジテレビの上層部を動かしたのは、「僕らの企画書ではなく、インターネットのホームページ上や、手紙やハガキでのファンの生の声だった」(亀P談)のである。

まずは、「踊る大捜査線 THE MOVIE」を映画館で見ること。そこからはじめよう。

ビデオ(TVシリーズ全4巻、歳末特別警戒スペシャル、番外編)はすべてポニーキャニオンより発売中
『秋の犯罪撲滅スペシャル 完全版』は11月18日発売

Digitized by Google

「TOKYO EYES」ができるまで(前)

吉武美知子

ジャン＝ピエール・リモザン監督との13年

ヘヌガメ・パナヒの登場

「TOKYO EYES」を監督したジャン＝ピエール・リモザン（以下JPL）と初めて会ってから13年余りになる。私が独り立ちして仕事を始めるきっかけを作って下さった当時ATGの社長だった佐々木史朗さんが、第一回東京国際映画祭のヤングシネマ部門のディレクターを務めることになり、作品選択でヨーロッパにいらした時に、強力に押したのが、JPLとアラン・ベルガラが共同監督した「逃げ口上」だった。私はこの素人っぽい作品が本当に好きだった。素人っぽく見えるのは低予算ゆえの物理的理由だろうが、そのタッチが、作品のオフビートな資質と妙にマッチしていた。映画祭への出品が決まったJPLの2度目の来日に同行した。1度目は、寺山修司が絡んだヴィデオのワークショップに参加した時らしい。マイナーな作品「逃げ口上」を一人でも多くの人に観て欲しくて、めいっぱい口コミに専念した。当時、日本の映画批評界に新しい切り口でなぐり込みをかけていた蓮實重彦現東大学長がすっかり気に入って下さって、以来JPLと学長は熱き友情（!?）で結ばれている。もし、JPLの知名度が本国フランスでより日本で高かったとしたら、それはひとえに学長のなせるワザである。次作「夜の天使」（86）も「天使の接吻」（88）も、ちゃんと日本で公開された。

しかし「天使の接吻」は、本国で商業的に大コケして、とんとん拍子に来たJPLの監督歴に陰を落とし、結果として10年のブランクを生む要因になった。この冬の時代、JPLはTV向きのドキュメンタリーを撮ったりしていたが、本編の企画は胸中にいつも暖めていた。フランスの最も真っ当な（?）製作手段は、①CNC（国立映画センター）の製作援助制度のコミッションにシナリオを提出、審査を通れば、製作費の一部に対するCNCからの借り入れが約束される。②それをベースに不足分を、SOFICA（映画投資銀行みたいな組織）やTV局（放映権の前売りor製作投資）や配給会社からのMGをかき集める。

たった一作の躓きで、厚いカーテンがJPLの前に引かれ、中々①②を突破できない。当時のJPLもそうだったのだろうが、フランスの殆どの映画人が余りにこのシステムの中にどっぷり浸かっていて、他の製作方法を考える発想力が萎えてしまっているのだ。他の手段を考えついたとしても実行に移すだけのエネルギーが枯渇してしまっているのだ。

ここに一人の女性が登場する。後の「TOKYO EYES」の仏側プロデューサー、ヘヌガメ・パナヒだ。ベルギーで育ったイラン人で、映画やTV作品の海外セールスを生業とする。もちろん彼女は商才に長けているが、一方で自分が入れ込んだ作品や監督に対して、中途半端なことはしない情熱家だ。彼女が、フリーのセールス・エージェントからセルロイド・ドリームスという会社を設立してパリに居を構えた頃、巷の映画ファンの間ではアッバス・キアロスタミという監督の名前が囁かれ始めていた。この監督の新作「そして人生はつづく」の海外セールスをヘヌガメが扱うことになった。同作品を日本で配給することになるユーロスペースの代表、堀越謙三とヘヌガメは、最初、キアロスタミ作品をめぐる買い手と売り手という立場で92年のカンヌ映画祭で出会った。それから多分1年後のカンヌだったと思う。ヘヌガメがJPLの次回作を合作しないかという話を切り出した。ユーロは92年の「アンモナイトの囁き」を皮切りに少しづつ製作を手がけるようになっていて、93年にはスイス・ドイツ・ロシアとタジキスタン映画「恋はロープウェイに乗って」を合作、94年の「エンジェル・ダスト」の海外セールスはヘヌガメに委ね、「スモーク」をデヴェロップメント中だった。というわけでNDFの井関社長も巻き込み、ヘヌガメの申し出に、日本側の二人は二つ返事でOKした。その心は、前述のようなフランスの製作システムを身を持って経験する良い機会だと考えたからだ。日本との合作の約束は取り付けたものの、仏側の製作態勢が中々固まらない。その後2年間、毎年カンヌで同じような余り進展のない話し合いが行なわれている。突然物事が動いたのは、95年末だった。JPLが、この映画は全て日本で撮ると言い出したのだ。

脚本とロケハンの苦労

そもそも「TOKYO EYES」のオリジナル脚本「Humain, trop humain !（人間的、余りに人間的な！）」はパリを舞台にした、仏人キャストで描く仏語のフツーの（!?）フランス映画だった。JPLは「パリの町並みにオーディションも兼ねて役者を配してヴィデオを回し

Digitized by Google

てみたが、何かがしっくり行かなかった」と最近のインタヴューで語っている。とにかく、日本で撮るという発想の転換が、アート面でもファイナンス面でも作品を窮地から救い出したのだ。加藤智陽君という映画留学生に白羽の矢が当たり、先ず仏語の脚本の邦訳が出来上がった。その邦訳を、今時の東京の若者が喋っても違和感のないものにする翻案作業を脚本家の坂元裕二氏に委ねた。一方、監督は、ロケハンと配役の為に96年春、仏側プロデューサー共々東京へ向かった。監督は加藤君が持ち込んだ日本の雑誌で既に吉川ひなのをマークしていた。一方K役には、脚本を読んだ日本側の誰しもが武田真治を推した。果たして吉川ひなのに会ってみて予想以上の彼女のキャラクターに圧倒された監督は、以降もう彼女以外は考えられなくなった。役名までHinanoにしてしまったくらいだ。問題は、K役だった。運悪く武田真治は、この年、サックスのコンサートツアーが組まれていて体が空かない。オーディションを繰り返したが、全員、ひなのの存在感を前に萎縮してしまって彼女と対等に張り合える者が現われない。ロケハンの方はというと、蓮實学長夫人に案内された下北沢の、フランスではとんとお目にかかれない独特の活気に魅せられ、監督はこの街を主要舞台にすることを決め、脚本の手直しを始める。現場の制作の仕切は、ユーロが既に「エンジェル・ダスト」で世話になっているツインズにお願いした。

キャメラマンだけフランスから連れて来る。監督がドキュメンタリー作品で組んで絶対的な信頼を寄せているジャン＝マルク・ファーブル（以降ＪＭ）だ。その他のスタッフ・キャストは全て日本人。合作だからって仏人の出演場面を付け加えたり、仏語の台詞をワザと入れたり、そんな陳腐なことは一切しない。Kが決まらないまま、後をツインズに任せて、監督は一端パリに引き上げる。この一端が、長引いた。王家衛の「天使の涙」を観た監督は、Kに金城武なんて言い出し、ブレイクし始めた彼を捕まえようとするうちに、どんどん時間が過ぎて行く。秋になり冬が来る頃になって、私は本当にヤバイと思った。せっかくここまで来たのにこのままでは全てが流れかねないという強迫観念が襲った。元天井桟敷の森崎偏陸氏から戴いた舞台『身毒丸』のヴィデオを監督に観て貰って武田真治案を再浮上させることに成功した。改めてホリ・プロに連絡を入れる。運良く、今ならスケジュールを取れるかも知れないという返事。97年1月13日に武田真治に会う為に、我々は正月明け早々東京に飛んだ。全てはまた急速度で動き出した。Hinanoの親友Naomiの役には、昨春のオーディションの時に内定していた水島かおり、難航していたHinanoの兄の役には、本誌に載っていた「ビリケン」の時の写真のお陰で杉本哲太が決まった。

結局、現場の監督付き演出パートの通訳を私が、キャメラマン付きの技術パートの通訳を、蓮實ゼミOBの森田祐三君がやることになった。ちなみにJPLもJMも日本語はからきし駄目だ。しかし、こういう場合の障害というのは言葉だけに留まらない。文化風習の違いから始まり、制作現場も似て否なるものという場面に我々は度々遭遇することになる。私的に一番苦労したのは、脚本。フランス人は言葉にやたらこだわる人種で、とりわけJPLのランゲージは（言葉と言葉の間に、殆ど誰にも分からない彼なりの秘密の意味が隠されているらしく）独特だ。坂元氏から戻って来た日本語版を説明すると監督はフンフンと聞いてはいるが、最終的に仏語の原案に戻そうする。そしたら直訳になってしまって、台詞を言う人にも観る日本の客にもチョー違和感だ。外国語を習得した経験のない人にはピンと来ないかも知れないが、翻訳というのは同じ意味をもつ言葉に置き換えれば済むという問題ではない。JPLは極端な語学音痴で英語もおぼつかない。置き換えは不可能であるという私の説明を理解しないのか、しても聞き入れたくないのか…。とにかく私は、もう仏語と日本語、こんなにかけ離れた言語を翻訳するなんて所詮不可能だと何度もプッツンしそうになった。それでも根気よく坂元vsJPLの永遠に続くかと思われた応酬に付き合った。あまり私がブースカ言うので、最後には学長が「いいんですよ。フランスと日本で違う映画を観ることになっても」とまたラディカルなことを言って下さったお陰で少しは気が楽になった。しかし、白紙でこの映画を観る観客に「変な日本語じゃありませんでしたか？」と私は訊きたい……。森田的に一番苦労したのはロケハンだろう。制作部が見つけて来るロケ場所が、ことごとく監督のお気に召さない。制作部は「許可取りとかの問題があるので妥協してくれ」と説得にかかるが監督は譲らない。ヌーヴェル・ヴァーグの血を引くJPLは許可取りが何だとばかりにゲリラ的撮影を主張する。ツインズは、悪例を作ると、今後、他の撮影隊にも迷惑がかかるから映画界の仁義としてそういう事はしたくないと粘る。監督は記録は自分がやるから要らないと言う。そんなことをしたら後で混乱を招くから、そんなところで人件費をケチるなと制作部は言う。人件費が問題なのではなく、本当に僕の映画にスクリプトは不必要だから言ってるのだと監督。

（以下次号）

「TOKYO EYES」（配給＝ユーロスペース）

Digitized by Google

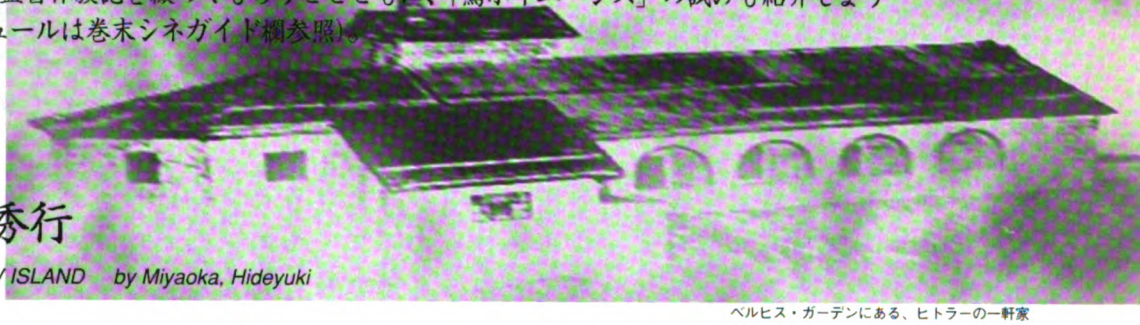
助監督日誌

ソクーロフ・アイランド「現地レポート・前編」

“Molx”（マロープ）

Molx：マロープ＝モレク＝メーンク（ヘブライ語）。セム族が子どもを人身御供にして祭った神。旧約聖書18章21には“モロク”と書かれている。悲惨な禍。戦渦のシンボル。小文字で始まる場合は無害なトゲトカゲを指す。

この夏、ひとりの日本人が、サンクト・ペテルブルクへと旅発った。目的はアレクサンドル・ソクーロフの下で助監督をするため。自主映画「セレブレートシネマ101」、映画的企み「鷲ポイエーシス」など次々と野心的な試みを行うこの男、宮岡秀行氏にソクーロフの下での助監督体験記を綴ってもらうとともに、「鷲ポイエーシス」の試みも紹介しよう（スケジュールは巻末シネガイド欄参照）。



ベルヒス・ガーデンにある、ヒトラーの一軒家

宮岡秀行

SOKUROV ISLAND　by Miyaoka, Hideyuki

トランジション

アドルフ・ヒトラーをソクーロフが撮るからロシアまで駆けつけたいと思ったところで、全ての条件が整う筈はないのだから、とにかく投び込むようにして行ってしまおう。

まずは、そこから書き始めることにしたい。

僕がソクーロフの現場に参加するまでには、およそ二年という歳月を要した。最初の出会いは彼とロシア語翻訳者の児島宏子さんを広島に招待したことだ（註1）。当時、仕上げに苦しんでいた僕の作品『セレブレート シネマ101』（註2）に、彼を参加させることが出来るかも知れないという僕の思惑と、ソクーロフ側の条件が上手く噛み合い、数日間共に過ごすことになったのだ。その段階で僕が見ていた作品は「ロシアン・エレジー」と併映された他1本のみで、未だにその題名が思い出せない程、僕の記憶は不鮮明で抽象的なものだった（『ユリイカ』のソクーロフ特集号に寄稿するためブラウン管で「精神の声」を観たが、これは勘定に入れないとして）。後にパンフレットを介して知ることになるレンフィルムという名も、この時点では僕にとって架空のものでしかない。ソクーロフの映画というよりも、まずは彼自身に惹きつけられた僕は、その後様々な機会に、彼と、彼が全幅の信頼を置く宏子さんと疎通を図る事になる（註3）。

宏子さんから、彼が劇映画を撮るときには僕を呼ぶつもりだと聞いたのは、随分と前の話だ。それが実現することを待ち望みはしたが、自分の仕事とのタイミングなどを考えると、もう不可能かという想いの方が強くなっていた。だがその間にも刻々と変化する状況や体勢を通して、特に“建築”というテーマを深めることによって、自分自身の中で彼の映画に対する興味が具体化していった。

“建築”と云っても専門的な知識があるわけではなく、ぼんやりと分かる程度で、もしかしたら僕にも作れるかもしれない小さな家、一軒家と僕の映画へのスタンスにおけるアナロジー（類推）――。これには建築家の鈴木了二さんからの影響が大きい。ソクーロフがとりわけ好きな新藤兼人監督「裸の島」の舞台となった宿祢島（すくねじま）が眼前に見える“佐木島コテージ”（鈴木了二設計）にソクーロフを泊めたのが、広島での第一日目だった。僕は鈴木さんの建築と映画の見方に惹かれ、この頃から彼の映画を少しずつ“建築”の側に移動させて捉えるようになっていた。そしてその後、決定的とも云える作品と出会うことになる。「ストーン」。他にはビクトル・エリセの映画からしか感じることのなかった一軒家の持つ辺境性と、それ以上に辺境と化している外の世界へのゆるやかな帰還を、この作品からも享けとったのだ。更に「ストーン」の製作日誌の体裁を持つ『チェーホフが蘇える』（書肆山田）が、この広島の旅から回想されることもあって、僕の気持ちは次第にロシアへ行くことを決めていた。

Digitized by Google

特別企画 ソクーロフ

【宮岡秀行　プロフィール】
1967年広島生まれ。映画作家、スタジオ・マラパルテ主宰。ビクトル・エリセやロブ・ニルソンなど、世界の映画作家9人が参加した「セレブレート・シネマ101」を自ら企画して撮り、映画100年を独自の視点から祝う。
'97年晩夏発売の『映画芸術』の企画・監修として参画。蓮實重彦、アレクサンドル・ソクーロフ、青山真治、太田省吾などを招待したプロジェクト〈映画零年宣言〉を実現させ評価を受ける。映像作品に「アンナの光」（天王洲アイル〈詩の外出〉出品）、「VIDE（/）映画史」（広島シネツイン〈シネマ／ソナタ〉シリーズ連続上映など。

ヨーゼフ・ブロッキーの家の前でのアクレイ・ゾービンと筆者（撮影／ジェニャ・タラン）

そして新作"Moux"のユーリイ・アラボフ（註4）による文学台本が、宏子さんの訳によって送られてきた。一読したとき、"建築"というテーマとチェーホフの『イワーノフ』の世界が僕のなかでオーヴァー・ラップした。後はもう、ソクーロフとたっぷり愛を交わせば良いではないかという、信頼する小説家の励ましの言葉と共に、いつものごとく多くの忘れ物を詰めた鞄一つ、身一つで航空機に飛び乗ったのだった（最大の忘れ物はロシア語である……）。

渡露の初日には、日本側の出資者（プロデューサー）で"ふゅーじょんぷろだくと"の社長、才谷さんと編集／映画担当の堤さん、そして別件でサンクト・ペテルブルク入りした宏子さんやエッセイストのみやこうせいさんがジョイントした。このタイミングがなければ、やはり僕のロシア行きの実現可能性は少なかったように思う。映画製作に付きもののポリティカル・ラインを越えるためには、僕の勝手な思い込みだけではどうにもならないのだ。そういった意味でも恵まれていたのかも知れない。実際みやさんは「あなたは今年、幸せなことばかりじゃないの」といつもの惚け顔で、彼にとってのトランジション（中継点）、サンクト・ペテルブルクを後にしたのだった。

建築 ソクーロフとの接線

新作"Moux"は、ヒトラーとエヴァ・ブラウンがベルヒス・ガーデンにある山頂の一軒家で過ごした最期の二日間を扱ったものであるということは、以前彼にインタヴューした際に聞いていた（註5）。ただそれが、"ある建築空間に囚われた心理（サイコロジカル）ドラマ"として提示されるというのを知ったのは、ロシアにやってきてからだった。

今年の5月21日にクランク・インしたこの作品は（註6）、一部ドイツ・ロケを含め、この一軒家での出来事を様々な角度から捉えようとしている。レンフィルム内に用意されたセットも建築内部の創作的な再現と云えばいいのか、既に4ステージが費やされ（最終的には全部で5ステージとオープン・セット1ステージである）、ミニチュア（といっても全長2メートルはある）も含めると、この一軒家が占める空間は作品全体の受け皿となっている。レンフィルムの一角にある"Moux"の製作室には、7、8回は推敲されたとおぼしきセット・デザインのエレベーション（立面図）や、絨毯、ガラス、壁紙に至るまでのサンプルが所狭しと貼られている。おそらく時代考証の為に訪れた戦争博物館での様々な道具類の写真は、美術部の手によって正確に再現されるか、それ相当のものが探し出され、監督の目を通るようになっている。

美術監督の画家セルゲイ・ココーフキンが見せてくれた彼の作品集の中には「日陽はしづかに発酵し…」の室内空間にインスピレーションを得たという絵など

【脚註】
註1／ソクーロフとの出会いについては「局地戦の風景―空間映像論序説」（『シネティック』第3号）参照のこと。
註2／世界の数カ国の監督が今映画を撮ることの意味を、ヴィデオ作品として提示した、映画生誕百年を祝福した作品。ビクトル・エリセ、ロブ・ニルソン他7名の監督が参加。
註3／例えば、筆者が監修した『映画芸術』383号にはソクーロフによる書き下ろし「セミョン・アラーノヴィチの思い出」を掲載、また『FRONT 特集武満徹』97年12月号では、インタビュー「音、沈黙、魂…」をコーディネート。
註4／デビュー作「孤独の声」から、多くのシナリオをソクーロフに提供する、ソクーロフ・グループの一人。現在モスクワに在住。
註5／「アレクサンドル・ソクーロフ・インタビュー：『地球年代日記』の語り手は落ちた天使」（『シネティック』第3号）参照。
註6／5月21日にクランク・インしたものの、セットの色彩の問題で6月4日より改めて撮影がスタートした

Digitized by Google

撮影中のソクーロフ
（ペノアの建築内にて）

がある。今回は逆にソクーロフが彼の絵画からヒントを得、次第に山荘の一軒家を構築していった。同じくセルゲイの手によるエヴァの部屋のデッサンを見ても、かなり突飛な想像力に富んだものでありながら、その細部に描き出された空想的な側面を殺すことなく現実の側へ差し向ける空間把握の仕方は、かなり大胆である。

撮影直前（まさにキャメラが廻る寸前）まで、何度も“汚し”がかけられるセットの中には、ソクーロフ自らが一時間もかけてつくった“生け花”もあって、植物に人間性を込めようとする彼の画面づくりには、偶像化する以前のヒトラーを理解したいという意志すら感じられる。また、あれだけ作り込まなければ生まれない空間にキャメラを指し向けると同時に、撮影が終わると壊されていく様を見ていると、セット撮影は何と抽象的なものだろうかと思わずにはいられない。キャメラの眼にさらされた後には、なんの痕跡も残さずステージから消え去ってしまうのだ。

ソクーロフはこれらのセットが組まれたステージを、いつも限界まで使いきって撮影する。ミニチュアのセットの前に彼が一日中座り込み、もう撮影しないんじゃないかと心配した日があった。まるで自然の盲目性を相手に立ち向かっている、小さな人間のようなその姿勢を、彼はスタジオにある人工物相手に始めるのだ。またある時は壁に張り付くようにクレーンで持ち上げられたキャメラが思い通りに動かず、何度も失敗して「飛行機じゃないんだぞ」とキャメラマンのアレクセイ・フョードロフを怒りちらす場面もあった。結果ソクーロフが、そのポジションを断念したとき（このような瞬間を、その後何度か目の当たりにすることになる）、次に決めたキャメラ・ワークの簡素さ、単純さは、さらにより良い結果となっている。

この空間とキャメラの度合に関しては、特にcolonades（バルコニー）の場面に注目してみてもいいかもしれない。かつて溝口健二監督が「元禄忠臣蔵（前・後篇）」（41・42年）、「楊貴妃」（55年）などで試みた、人工物としての廊下や明かりが、触知されがたい撮影角度の中に実に自然に浮かび上がっていたように、ここも、ある時は深い奥行きをもち、またあるときは狭く密閉された場所として現れている。

僕たちはよく、映画を“見る”という。そしてある人は、ソクーロフに“見る”ことの復権を感じると云うが、本当にそうだろうか？

彼の映画では、左はいつも左なのか。光線は決まってその位置から降り注いでいるのだろうか。

高速度で回転する映画を相手に、それらの問いはあらかじめ無効であることを、ソクーロフは既に良く知っている。僕たちの恣意的な視線では、人工物と自然が、そのまま全く別々であったり、時にはなんの疑いもなく同居してしまうことも。彼はまるで建築家がそうするように—異質な面同士が接合されてある空間を形成してゆき、長きにわたって自然に眺められる箱（一軒家）となるまで—空間をその都度つくりだしていく。

そして、そこで僕たちが眼にするのは、あの歴史的人物ヒトラーと同一人物であり、彼がかつて本当に住んでいた灰色の一軒家、そして彼が見上げたと同じ黄昏なのである……。「神々の黄昏」？

Death is no solution

先にも書いたが、僕がソクーロフの映画で最も惹きつけられる一本に「ストーン」がある。ヤルタにある実際のチェーホフの家で撮影されたという、この家へ

Digitized by Google

レニー・バウチ自筆のスケッチ
（ヒトラーとチェーホフ）

の理解が“Monx”では受け継がれているように思う。

チェーホフとヒトラーとでは、あまりに違いすぎるという意見もある。しかしチェーホフはイワーノフを、どこにでもいる普通の人間であるという明証性ゆえの空想や、幼児性を引きずった存在として描き出し、それを破産した社会活動との葛藤から露呈させていた。そしてソクーロフはヒトラーという独りの人間のなかに、視覚のファシスト的な幻想と大衆心理のよく似た関係が、どのような精神構造を生み出してしまったかを見ようとしている。

今回の文学台本、そして改訂された撮影台本が、何処かで、そのイワーノフとの通底があるとしたら、それは人間のある側面への理解の度合い、ここでは“自殺”という悪意のない行為への、深い理解から来ているのだと思う。

もちろん、この男が死を意識してゆく過程を段階的に描くのではない。もはや、他者と共有する言葉を生み出し得ない精神の病をかかえた存在を、「我々の内なるファシズム」（みやこうせい）に見ているのだ。それはもしかして、地上の生と永遠の生との襞に触れることを意味するのかも知れない。

僕たちはこれを見て笑えるだろうか、或いは噛み殺すことが……。

ルビッチやラングがナチの将校を描いたときは、僕たちはただ笑えば良かった。そこではヒトラーはヒトラーであって、彼の心理やそれを演じる役者は、僕たちとは何の関係もなかった。

アメリカ映画の唯一の〈他者〉たるソクーロフを想像すること？……

僕は銀幕に浮かんだこのヒトラーと、ソクーロフのヒトラーとの間に、映画が喪失した一つの様式（アメリカ映画？）を見た気がした。しかしそれは、決して悲しむべきことだけではない、ということも。

ソクーロフのヒトラー役への激しい要求は、この舞台俳優であるレオナード・モズゴヴォイことレニー・バウチが「ストーン」でチェーホフを演じたときからのものだと聞いたのは、レニーの家に遊びに行った時のことだ。彼はレンフィルムにほど近い、かつてコージンツェフやトラウベルといった巨匠達が住んでいた通りに面したアパートの一室に、ひっそりと一人で暮らしている。日本人の生活水準からすれば、低いとさえいえるその一室は、実は彼の一人芝居用の舞台にもなる。“FUNNY”というドストエフスキーをモチーフにした芝居を、この場所で十人から十五人の観客を相手に、既に百回以上上演しているという。たった一つの窓と、ろうそくの明かりのみというこの家は、僕がロシアで見た最も美しい空間だった。決してふき取られることのない埃やペチカの中の灰、ハーフ・ミラーを利用して作られたコクトー的な鏡の間、何枚もリサーチして自分で張り替えたという壁紙の質感を見ていると、僕はもう既に、このスペクタクルの囚われであることに気付く。ソクーロフも見に来るというこの小さなスペクタクルは、決して多くのお金で成立するものではない。

映画が一つの黄金時代を越え、こういう場所との通底を可能としたのならば、僕たちはこの「不幸」な〈喪失の様式〉から何かを作り出して行かなくてはならない。

おそらくソクーロフが、チェーホフやロベール・ユベール、そしてヒトラーという歴史上の人物達や、それらを囲う家に思い出す「不幸」とは、このようなものを云うのかもしれない。「不幸」をあえて「幸せな人生」と問い直し、それを僕たちの仕切り直しとして見せること。

帰り際、中庭に出た友人のジェニャと彼のガール・フレンドと僕は、最上階から響いてきたドイツ語を耳にし、笑い転げる。僕はレニーが届けてくれる声のスペクタクルに耳を澄ませながら、「ドイツ語は十四年前に学んだのだが…」といった時に見せた、彼の苦笑を思い出していた。

サンクト・ペテルブルクにて、
98年8月4日。

（つづく）

Digitized by Google

【ロブ・ニルソン　プロフィール】
Rob Nilsson　西海岸を拠点に、インディペンデントの映画作家として活動。主な作品に"Nothern Lights"（78）、「シグナル７」（86）、「ヒート＆サンライト」（87）、"ChalkZ"（96）など。

ロブ・ニルソンとの対話

宮岡秀行 *Miyaoka, Hideyuki*　通訳：前重明子、撮影：tazz

ソクーロフの下での助監督を終えた宮岡氏が、この11月に新たに展開する「鷲ポイエーシスII　transition」。そのメインゲストとなるインディペンデント映画作家ロブ・ニルソンとの対話が行われた。そのぶつかり合いの中から生まれでるものを見次回につなげてみよう――。

世界の証人として

宮岡　あなたは映画監督として名が通っていますが、ホームレスの人々と共に活動する活動家としても知られています。その二つのバランスを、どのように保たれていますか。

ロブ・ニルソン（以下　RN）　気持ちの上では、私の職業は「証人」だと思っています。窓や鏡です。一種の表層として私自身を見る。そして表層が消え、世界を見ます。私は証人として報告するのです。私が見た事や感じた事、感動した事を。映画監督と呼ばれるのはそんなに大切ではありません。色々な事をしていますからね。私は、そうしたもの全てを自らの人生に結びつけようとしているのです。私の職業は、世界の証人なのです。

宮岡　それでも、職業を訊かれたら？

RN「映画監督」でも何と呼んでくれても構いません。ロバート・クレイマーに対する手紙［註1］で私が言いたかった事なのですが、自分を自らの種族から切り離して見ている人達がいますね。鳥が上からものを見るように、自分の属する種族の群を見ている。一方、別の態度をとる人達、つまり、上からではなく同じ場所に立とうとする人達もいます。誰が重要で誰が重要でないかという見解もない。アーティストの仕事は、人間の本質的な感情を用いる事です。私はこれらの感情を解放すべきだと思っています。歓喜、絶望、そして怒り。これらは、アーティストがその活動に使うべき人間の計り知れない衝動なのです。ある種の洞察力を持った人の目を通して、自然の力を観察し翻訳するという仕事なのです。人間というものは目の前にあるものしか見えない。つまり私の職業はこの領域、この範疇にあるという事です。確かに映画を作ってはいますが、アーティストでありたいと思っています。

宮岡　クレイマーとの距離について、もう少し話して下さい。

RN　彼は対象との「正しい距離」について語ろうとしていました［註2］。彼の考えは、確かに正しいのでしょう。しかし「正しい距離」というのは、ある意味では、一つの方法でしかない。アーティストは、自身が歓喜の高まりを、つまりそこに自身が達するほどの容量を持っているべきだと思っています。深い怒りやそれに替わるものも知っておかなければならないのです。更に私達は悲しみと恐れという感情を持っています。アーティストの仕事は動的なものなのです。あの印象的な手紙にあるクレイマーの言葉は私も好きです。しかし距離を置くよりも、もっと内在した方がいいのではないかと言いたいのです。

宮岡　"chalk"でホームレスとビリヤードという距離のある世界を選んだのは？

RN　ワークショップのメンバーが、自分達のほとんどがホームレスなのに、わざわざホームレスの映画を作る必要などない、それよりも医者や弁護士など、もっと焦点を絞った「ホームレス」の映画を作ろうと言ったのです。この国には沢山のホームレスな医師がいますから。それで"Hopeful the Whole Days"という脚本を書き始めました。これがテンダーロイン・アクション・グループで初めて取り組んだプロジェクトです。テンダーロインの存在があったので、ダニー・グローヴァー、ウーピー・ゴールドバーグなど有名な俳優達が出演を承諾してくれていました。しかし関係者（スポンサー）が納得せず、出資しなかったのです。それで独自に映画を作る事にしました。それが"chalk"です。ビリヤードを選んだのは、私が前から興味があったからです。共同執筆者のドン・バジェマが、その脚本を書き直しました。普通ビリヤードは都会的で、低所得者層やブルーカラーには不似合いなものだと思われています。だから面白いと思ったのです。

「フラッシュ・ポイント」

宮岡　そうしたパブリックなレベルで最も遠くにあるものを一つに結びつけるというのは、アメリカ映画のフィクショナルな力ですね。では逆に、次の映画であなた自身の娘を起用する事については？

RN　人間の感情がある頂点に達してバランスを崩す時、私はそれを「フラッシュ・ポイント」と呼んでいます。私は映画の中で、人間の感情がどのように成長し、表出するところにまで達するのか、もしかしたら危険かもしれないその瞬間を捉えて、表現してみたいのです。あるいはその感情が救われるところも。ワークショップの中で、本来の感情を見い出

Digitized by Google

せるかどうか、そして大勢の前で娘が感情を表出する事を、恐れないで見ていられるかどうか。挑戦でしたし恐ろしくもありました。最初は娘も恐れていましたが、やがて彼女は「怒り」の持つ機能を理解し、身体を使って表現しました。生活の中でも、芸術の中でも「怒り」は大きな力なんです。ワークショップの中で彼女が示した事、私の見た事を基に、そこから発展させて映画を撮ってみようと思うのです。誰もがそういう体験をしている。それこそがワークショップで問題としている事です。

宮岡　「シグナル7」で使用されたオデッツの『レフティを待ちながら』も、民衆の怒りを扱った戯曲でした。この戯曲を初演したグループシアターの存在は意識されましたか。

RN　グループシアターは芸術を、私が話してきた種類の直感として考えていましたし、また、労働者や日常の人々を取り上げてきたと思います。更に新たなアクティング・メソッドを用いていました。彼らは大変にダイナミックで精力的で実働的で熱意に溢れたアーティスト達でした。カザン、ストラスバーグ、ジョン・ガーフィルドといった人達です。本当に珍しい、たぶんアメリカ芸術の最も力強い一時代でしょう。私はあの時代をもう一度復活させて、我々は、相変わらず同じ問題に面しているのだと言いたかったのです。人類は未だに皮膚に囚われていて、本来あるべき最大限の姿になれる内的な場所を探しているのだ、と。私にとって、グループシアターは、創造の大きな源なのです。

宮岡　今振り返って、赤狩りでのカザンの行為をどう思いますか。

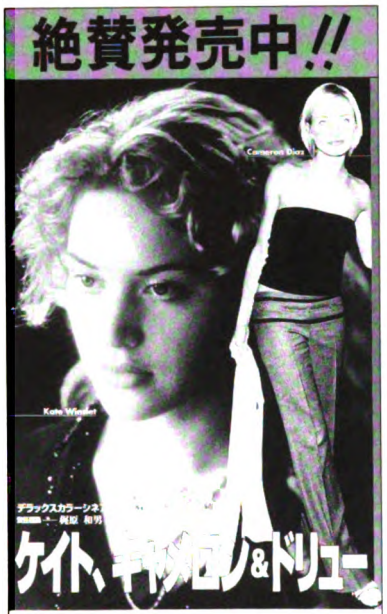
RN　本当に危険な事だったと思います。例えばワークショップでは、サークルの中にいるメンバーが守られ、安全であると感じられるようにしています。ワークショップでは各々が自分自身の事を、かなり内面深くに入り込んで見つめ直すわけですから。メンバーには「事の詳細や実際の出来事を説明しなくてもいい、ただその時の感情と表現方法だけに焦点を絞って」と言っています。というのは、もし何か特別な事を犯した上での感情だった時に、私自身それを許せるかどうかという心配があるからです。それはまた違った意味での恐れです。だからこそ、皆が安全な状態であるという事をワークショップの中では保障したい。しかし、完全に安全な状態で何かを創造する事はできません。多少のリスクは負わなければならない。内面の奥深くに手を伸ばして、探求するのは恐ろしい事です。自分自身を知る事が危険な場合だってあるでしょう。しかし、それでも人間は「フラッシュ・ポイント」を知りたいという情熱を持っています。

宮岡　プライベートとパブリックの侵犯は、アーティストや共に働く人達にとってどういう事を意味しているのですか。

RN　政治的、個人的、心理的な面で、とにかく安全でなければいけないのは確かです。私は仲間達がそうあるように心掛けていますが、同時に、リスクを負える程に成長してほしいと思っています。カザンには、もっと大切な事をする必要があった筈です。名前が既に知られていたので、名前を語ろうが語るまいが違いはなかった。問題は彼らが大切に扱われたかどうかなのです。他人の信用を裏切ったという事が間違いだと、世間は言うでしょう。しかし仕事をしていく上で、もっと大切な事が見つかる事もある。それに従わなければならない時もあるのです。いずれにしても難しい問題です。自分自身にも仲間にも誠実であるにはどうしたらいいか。一番大切なのは状況や背景を正しく理解する事だと思っています。

サンフランシスコにて　9月9日

註1／ロブ・ニルソンによる書簡『Nine at Night』（『sagi times』01号）
註2／ロバート・クレイマーによる書簡「映像のマウス・トゥ・マウス」（『映画芸術』383号）



デラックスカラーシネアルバム84

ケイト、キャメロン&ドリュー

梶原和男編　『タイタニック』のケイト・ウィンスレット、『普通じゃない』のキャメロン・ディアス、そして『スクリーム』や『世界中がアイ・ラヴ・ユー』のドリュー・バリモア。20代なかば、今、最も人気がある3人の女優は個性も実力もあり、新作にも期待がかかっている。3人の全作品を網羅する詳細データ、魅力を引き出すカラー・アルバムによって、それぞれのファンを満足させる内容とした。アメリカで大ヒット中のキャメロンの『メリーに首ったけ』、ドリューの『ウェディング・シンガー』など新作も入った豪華オムニバス・アルバム。B5判・総104頁／カラー48頁**2200円**〔本体価格〕

■既刊発売中

83 **マクレガーとホークの世代**

石原郁子編　いま最も人気のある若手男優、ユアン・マクレガー、スティーヴン・ドーフ、イーサン・ホーク3人のアルバム。**2200円**〔本体価格〕

芳賀書店 haga shoten

東京都千代田区神田神保町2-7☎(3263)1956

Digitized by Google

関西映画界いまむかし㉚

杉山平一（詩人・映画評論家）

浅野潜

関西での精神的、理論的指導者が杉山平一さんである。滝沢一さんが亡くなってから六年、余計にその色彩が強くなった。

詩人であり映画評論家で、学者。かつてお父さんのあとを継いで会社を経営していたとはとても思えないほどに身近からは柔和な感覚がただよう。一度でも話をすると、その魅力にとりつかれてしまうのは不思議なようだが、殺伐としてきた最近の社会では珍しいし貴重でもある。

なにしろ、経歴が凄い。三好達治が主宰した「四季」の同人だし、東大の美学を卒業後、昭和16年（41年）に早くも第二回中原中也賞を受賞している。その時27歳。代表作「夜学生」はいまでも詩を志す人たちの教科書として愛されているのだ。

映画評は「映画も詩もモンタージュだから同じ発想」というだけあって学生時代から書き続けてきた。『映像言語と映画作家』（九芸出版）や『今村太平』（リブロポート）など第一回出版作『映画評論集』（第一芸文社）とともに古い映画ファンの愛読書だった。

最近では大阪府が主催した「なにわ塾」での16人の塾生への講演をまとめた『詩と映画と人生』（プレーンセンター）が名著だ。若くして亡くなった作家東秀三氏の名司会で行われた5回の講義を基本にしたこの本は50冊を越えるなにわ塾叢書の中でも最高の名著になっている。映画や詩だけではなく、親子関係をはじめ、人と人とがどう心のつながりを築いていくかの指針までが見事にとらえられているから凄い。発行元プレーンセンターの稲田紀男社長にとっても自慢出来る出版物だし、自作の詩をまとめた上下二冊の『杉山平一詩集』を昨年出版したばかりの杉山さんにとっては、もう一本の軸である映画評論について胸を張れる近著といえるだろう。

それにしても八十歳をすでに越えた杉山さんの若々しさはどこからきているのだろう。

私にとっては亡くなった父親（彫刻家）の友人に当る人だが、全く老いを見せないし、作品にもそれを感じさせないのは驚異だ。

関西の映画人が集まってはじめた同人誌『FB』でも毎回トップを飾る原稿を発表しているし、亡くなった梨木一昭氏が発行した『映画サークル』機関誌にも一度の休載もなく毎号コラムを連載している。とくにこのコラムには映画を見るうえでの視点の大切さがゆるぎない高さと鋭さで維持されており、詩人らしい選び抜かれた言葉の美しさが生み出す表現は、他人には真似の出来ない味で読む人の胸をうつ。まだまだ活躍しつづけて欲しい人だし、燃えつきない若さはみんなが見習っていきたいところだ。

映画人の墓碑銘㊶

小池朝雄の巻

浦崎浩實

「アルレッティの肉体はフォンテーヌブロー派の絵画の女神のようだが、声はまるでドブネズミ。反対に、ジェラール・ドパルデューは農民のような体つきなのに、声はほとんど女性のそれだ」とJ＝P・グレディという劇作家が評しているらしい（エドマンド・ホワイト著、中川美和子・訳『パリでいっしょに』白水社98年刊に拠る）。

ドブネズミにはマイったが、ドパルデューの個所は、小池朝雄に置き換えられそうな気がする。ピーター〝コロンボ〟フォークの吹き替えで発揮された小池朝雄の声の魅力。それは画面を観る者を耳人間に変えてしまう〈みやび〉な声の魅力であり、ドパルデューが意外であるように、我々は小池朝雄の声の魅力にそれまで特に留意していなかったように思うのだ。

氏の演技者としての間口の広さ。「器用な役者のようでいて不器用な面白さも出」し、「若いくせに座談の名人」で、「人の話をすると、そのデッサンの確かさと、漫画化の巧みさのために、まだ見ぬ人物に親しみを抱かせるほどだ。これが多分、彼の演技術の基本である」（三島由紀夫）と評されたのは小池朝雄25歳ごろだが、それは彼から終生失われなかった美質を突きながらも、その声の魅力は未だ言及されざる秘境だったのだ。

小池朝雄は昨年が早いもので13回忌だった。氏の眠る専光寺は京王線千歳烏山駅東口から徒歩20分ほどの寺町通りにあり、門を入るとすぐ、樹齢百年を越える欅の巨樹が天を突くように幹を伸ばしている。そういえば小池朝雄の所属した現代演劇協会（三百人劇場を持つ）は発足時、六本木の今のIBMビルの場所にあり、大きな欅が守り神のように植わっていたという。

小池家の墓は朝雄の祖父、恒太郎の建立。遺骨も骨壺から出して直接土に埋められるのです、と朝雄と一つ違いで幼なじみとおっしゃるご住職が教えて下さった。塋域の土は雨水がしみ込みやすそうな柔らかさで、文字通り人はここで土に還るわけだが、何だか遺骨を踏んづけているようで畏れ多い。

墓石の文字や塔婆の一つ一つに注意を払ってみると、小池朝雄はむろん本名だが、母方の姓であり、母は朝雄を生んで一月足らずで死亡、「行年二十歳」に胸を突かれた。小池朝雄を評し、「人生について隠された大きな悲しみ」を抱えたような人と山崎正和が悼んでいるが（「新劇」85年5月号）、その〈悲しみ〉の一端がこれなのか。

Digitized by Google

Gérard PHILIPE, les films INEDITS

特集 ジェラール・フィリップ映画祭Ⅱ 初公開されるフランス映画の貴公子

永遠の貴公子、フランス映画の歴史にその名を燦然と刻む俳優ジェラール・フィリップ。36歳の若さで夭折した彼の、いまだ日本には紹介されていない作品が、ようやくその姿を現そうとしている。——ジェラール・フィリップ映画祭Ⅱ、今年の10月末に開催されるジェラール・フィリップ展、そして11月から東京・新宿、大森、その後全国上映の運びとなっているそれらの作品をここに紹介しながら、フランス映画永遠の貴公子の魅力をたどり直してみよう——。

（映画祭スケジュールについては、巻末のシネガイド欄を参照）

1922年フランスのカンヌ生まれ。幼い頃にはジェジェの愛称で呼ばれる甘えっ子だった。父の希望もあり、ニースの法律学校へと進むが、第2次対戦下、南仏に疎開してきていたマルク・アレグレ監督に見いだされ演劇の道へ。42年に初舞台を踏み、その後、映画にもデビュー。45年のジョルジュ・ラコンブ監督作"Le Pays sans etole"で初主演。47年の「肉体の悪魔」でその名を確かなものとする。59年、肝臓ガンのため36歳の若さで死亡。妻はニコル（のちにアンヌ）・フールガード。

Gérard PHILIPE, les films INEDITS

Digitized by Google

人・俳優　ジェラール・フィリップの魅力

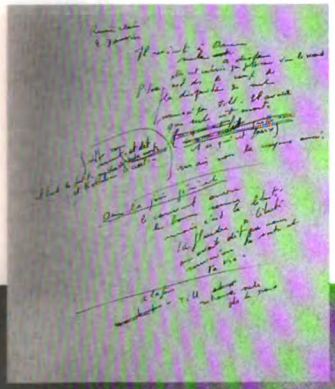
軽やかで清冽な〈弱さ〉の誘惑

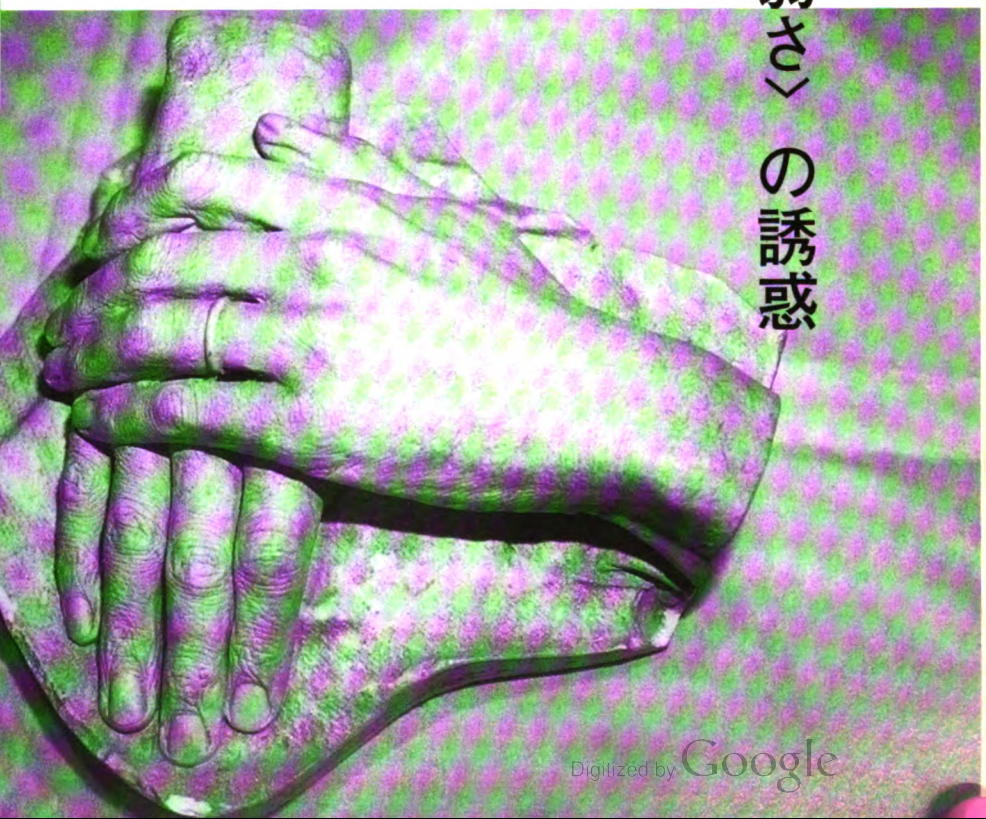
●石原郁子

誰の心の中にも一つはある、これだけは汚れの無いままとこしえに大切に守りたいと願わずにはいられない、美しい夢。G・F（ジェラール・フィリップ）はそんな夢に似ている。いや、そもそものはじめから、彼は夢だった。フィルモグラフィを見れば、彼が現実・現在の生身の青年としてスクリーンに現われたことはほとんどなかったことがわかる。世界的な文学の映画化、つまり人々が予め聖なる刻印を与えて〈夢〉見、到来を待ちかねていた主人公の、〈視覚化〉としての「白痴」「肉体の悪魔」「パルムの僧院」「赤と黒」「勝負師」「危険な関係」。伝説の主人公を演じたファンタスティックな「悪魔の美しさ」や「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」。それ以外の作品も多くが時代劇だ。「輪舞」「花咲ける騎士道」「夜の騎士道」。時代劇とまではゆかないが、十九世紀中ごろを時代背景とする「奥様ご用心」や、一九一九年前後の物語「モンパルナスの灯」。そして、「愛人ジュリエット」「夜ごとの美女」「七つの大罪」などは、文字どおり夢やつくりごと（見世物）の世界だ。こうなると、稀な現代（当時の）劇であるたとえば「しのび逢い」のような作品までが、（これも原作はあるのだが）、彼がそれ以前に演じてきた〈夢〉のセルフ・パロディの遊びのように見えてくる。

だから、同時代の観客にとってさえ、彼は既に夢だった。舞台での最初の当たり役が、ジロドゥの『ソドムとゴモラ』の天使であり、映画で彼を一躍有名にしたのが「白痴」のムイシュキン公爵（もちろんキリストあるいは天使の面影をもつ）だったように。聖なる役ばかりではない。「悪魔の美しさ」の悪魔にも、「狂熱の孤独」の無精髭のアル中にも、その純粋さが、逆にいっそう激しく研ぎ澄まされて現われる。美しすぎて現世の人ではないようだったし、彼自身映画の中で、現世の人であるふりはしなかった。まして、早すぎた死の後に彼の映画に出会った観客にとっては、彼は二重三重の夢になる。早世という言葉の痛さにひるんでも、現代の私たちは否応なくその悲痛なフィルターを通してしか彼を想うことが出来ず、いわば、私たちの身勝手で残酷な欲望にとって、早世も彼の魅力の一部なのだ。そして不思議なことに、この早世の痛ましさだけが、反転して、遠く儚い夢の存在である彼を、一瞬確かな肉体をもったものとして、まざまざと感じさせもする。

さっそうと軽快な身のこなし。明朗ですがすがしい気品。さわやかでありながら深い余韻を残す口跡。そしてあの、どこまでも明るく澄んだ無邪気な少年のような瞳。早世する前から既に彼は〈永遠の青年〉だっ





Digitized by Google

た。「肉体の悪魔」で、24歳で高校生を演じ得たように、彼は、〈青年〉の特権を縦横に駆使し、「純粋すぎてちょっと現実に生きてゆくには頼りなげなのだが、それがなんとも誘惑的」であるキャラクターをスクリーンに刻んだ。甘えっ子の風情を見せながら、からりと澄明でべたつかない。儚いほど軽やかなのに、薄っぺらなところがまるでない。まったく独自の、〈弱さを素直に清冽に表現してしまえる魅力〉とでもいうものが、そこにある。

抱いてやりたくなる男

だから、ひところ〈抱かれたい男〉という表現が流行ったが、彼はいわば女性たちにとって〈抱いてやりたくなる男〉だ。その美貌とエレガンスとは当然彼に、多くの女性に愛されるロマンチックなキャラクターを演じさせたが、プレイボーイにせよ純情青年にせよ、彼はどこか現実の中で足元が危なっかしく、女性に対して受け身でいるのがよく似合う。欺瞞的な社会に苦しむ二人の女性を救おうとしながら、彼自身がいちばん無力で、二人のあいだでただ打ち拉がれているしかない「白痴」。年上の女性へわがままに情熱をぶつける「肉体の悪魔」。母親代わりの伯母に愛され庇護される「パルムの僧院」。「すべての道はローマへ」のお人好しの学者は、ちゃっかりした女に振り回される。「狂熱の孤独」「夜の騎士道」の相手役のM・モルガンは、大人になり切れない困った万年青年じみた彼に対して、年上の落ち着きをもった〈大人の女性〉。「モンパルナルの灯」の彼も、あたかも寄る辺ない少年のようで妻に優しく見守られていた。女性遍歴を繰り返す「しのび逢い」では、上司と同棲してこき使われたり、娼婦のヒモにしてもらったり、金持ち妻の財産に寄生していたりして、自信たっぷりなプレイボーイではなく、逆に、なんとも情けない頼りなさに潜む妙な可愛らしさが女心をかきたてる。

今回の映画祭に関連して開かれるジェラール・フィリップ展の出品物の中に、実物大の手型があるが、そのほっそりとした指の一本一本のかたちのよさ、そしてその手の重ね方のいかにも自然な優美さには、驚嘆させられてしまう。たんに容姿だけでなく、仕草のすべてが綺麗な人だったのだなあと、つくづく思わずにはいられない。彼の手書きの手紙も展示され、まるで美術品のようなその文字の繊細さ端正さにも目をみはらせられる。彼は、もっともマスコミに非協力的な俳優に贈られるシトロン賞を何度ももらうほど、断固として私生活を人々の目から守りつづけたが、映画を離れたところでもその優美、繊細高雅な気品は変わらなかったのだ。

それにしても華奢すぎる。折れてしまいそうな細さ(デビュー当時の記録では、一八三センチ、六五キロ)。もちろん

ジェラール・フィリップの、遺された美しい手形（前頁）、その上はルネ・クレールに宛てて書かれた手紙。さらにその左隣は、ジェラール愛用のエルメスの手帖。その下には、舞台衣装が爆然と輝く。いちばん左は、「しのび逢い」で使われた衣裳。

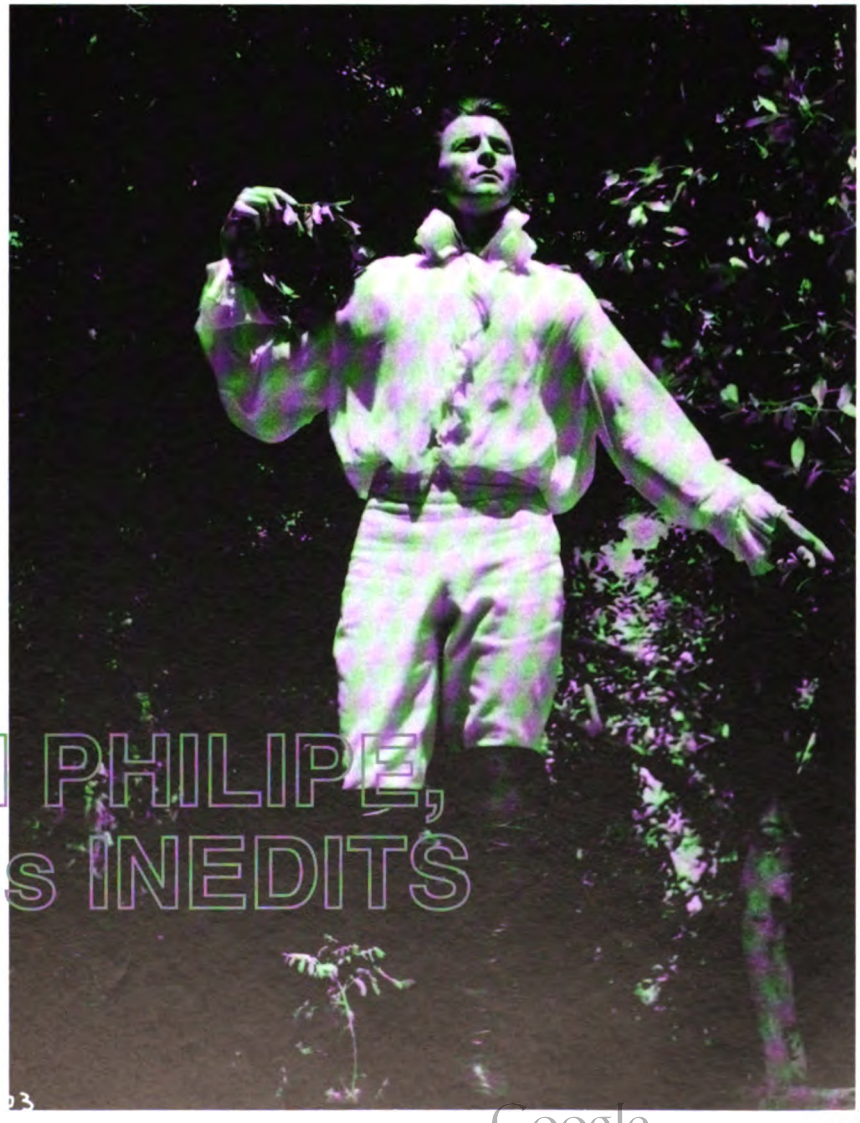
©Association Jean Vilar, Collection Bibliothèque du film, Collection Cinémathèque française musée du cinéma

Digitized by Google

「花咲ける騎士道」では、それがすばらしい溌剌とした動きとなって、新鮮な驚きと喜びを私たちに与える。「すべての道はローマへ」や「夜ごとの美女」「夜の騎士道」での軽快なコメディ・センス、いたずら心をバネに圧制と闘う「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」の活力も、その生き生きとしなやかな身体の躍動から生まれた。だがたとえば「パルムの僧院」で、獄に囚われ、愛する娘を窓から見つめながらどうすることも出来ない無力な痛ましさ。「肉体の悪魔」の、雨の中を情熱につき動かされて恋人の元へ忍んでゆく、濡れ鼠の姿。「白痴」の、どこかこの世の人々のリズムから微妙にズレた、もの悲しく弱々しい動き。「狂熱の孤独」の、アルコール欲しさの狂ったような奇怪な舞踊。「モンパルナスの灯」の、苦しみから隠れようとするように長身を丸めて縮こまる姿勢。一方で軽やかな明るさ、一方でほとんど自虐的にも見える凄惨な痛ましさ。彼が映画で表現した〈弱さ〉には、そんな二つの魅力がある。そして、いずれにせよ、強欲さとか狡さとか権力とか、そうしたものは重すぎて、その細い身体には耐えられないとでも言うふうに、彼は純粋で典雅で透明だったのだ。

だが、弱さを素直に表現することは、逆に、自分のなかに確固たる芯の強さがなければ出来ないことだ。「白痴」にせよ「パルムの僧院」にせよ「愛人ジュリエット」にせよ、彼は現実の中で弱く無力だが、あくまでも一途でありつづけ、そこには高貴な威厳が生まれる。それは、あるいは舞台のほうでより発揮されていたかもしれない。経歴の初期から彼は舞台に立ってきたが、「白痴」「肉体の悪魔」で映画俳優としてポピュラーな人気を得たのち、質の高い演劇を求めて名演出家ジャン・ヴィラールと組み、彼が主宰するアヴィニョン演劇祭に主演。ヴィラールがシャイヨ宮の国立民衆劇場の支配人に任命されると、その座員となり、映画とは比べものにならない小額の演出料で、命を削るような忙しさとさまざまな困難の中（実際それらが命取りとなったのだろう）、舞台出演をつづけ、俳優組合の委員長としても誠実に働いた。ヴィラールと組んでから彼が演じた戯曲は、『ル・シッド』『公子ホンブルク』などの古典劇から前衛的な新作劇まで幅広く、J（ジャンヌ）・モローやP（フィリップ）・ノワレ、G（ジョルジュ）・ウィルソン（ランベールの父）たちとともに仕事をしている。この辺の経緯は、『アニエス・ヴァルダによるジェラール・フィリップ』（小社刊）の、渡辺淳氏のあとがきにまとめられている（さらに詳しく知りたい方は、筑摩書房『ジェラール・フィリップ／伝記』をどうぞ）。

そしてこの、ヴィラールによる舞台で



アニエス・ヴァルダが舞台の合間にとらえた、ジェラール・フィリップの姿。衣装は『ホンブルク公子』のときのもの。

Digitized by Google

の彼の写真のほとんどを撮ったのが、まだ映画作家になる前のアニエス・ヴァルダだった。現在の私たちにはもはや、舞台に於ける彼を見るすべはないが、その面影はこの写真集で偲ぶことができる。そこには、映画とはまた異なった彼の顔がある。小柄なヴァルダ（一五〇センチくらい）は、長身のG・Fを、多くの場合ことさら下から仰ぐような角度で撮影し、明暗を強調し、共演者と並んだ写真には彼らのあいだに強い遠近感をつけている。それはほとんど、この稀有な被写体を自分の〈作品〉にしようとするヴァルダと、自らの存在で写真家を圧倒しようとするG・Fとの、二人の創造者の力のせめぎあいであり、同時に熱烈な愛の交換だ。そのため、舞台衣裳とメイクアップの効果もあいまって、そこには映画よりさらに踏み込んで表現された人物の内面の陰影、痛切なまでの激情、なにか恐ろしいものに迫ってゆく瞬間の険しい緊張、そしてそれらのすべてを超える高貴な威厳までが、くっきりと刻まれている。

そして、私たちが永遠に見つづけたい〈夢〉である彼は、実は誰よりも深く〈夢見る人〉だった。彼はどの映画でも常に、あの大きな湖のような瞳で、うっとりと、あるいは奇妙な熱に浮かされたように、どこかこの世ならぬ憧れの世界を見つめている。私たちは彼の純真でひたむきな情熱に導かれて、その瞳が映し出す彼方の世界へともに憧れずにいられない。それから彼は、自らの見る夢にゆっくりと溶け入って、永遠に美しい〈あちら側〉の住人になるのだ。

■パルムの僧院〈完全版〉
LA CHARTREUSE DE PARME(47)
監督／クリスチャン＝ジャック　共演／マリア・カザレス、ルイ・サルー、ルネ・フォール
スタンダールの同名小説をもとにしたコスチュームプレイ。その美貌ゆえに女ごころを惑わす、罪作りな主人公ファブリス役は、まるでジェラールのために誂えられていたものかのよう。マリア・カザレスがその高貴な美しさで、伯母サンセヴェリナ侯爵夫人を演じる。

■白痴　L'IDIOT(46)
監督／ジョルジュ・ランパン　共演／エドヴィージュ・フイエール、ジャン・ドビュクール
ドストエフスキーの同名小説をもとにした大作であると同時に、ジェラールにとっても役者としての試金石となった大役。無垢であるがゆえに、「白痴」と呼ばれ、人々から蔑まれるムイシュキン公爵。将軍の娘アグラーヤに一途な愛を捧げるジェラールの姿が痛ましいほど。

■愛人ジュリエット
JULIETTE OU LA CLEF DES SONGES(50)
監督／マルセル・カルネ　共演／シュザンヌ・クルティエ、イヴ・ロベール
恋人のために、勤める店の売り上げ金を盗んでしまった青年が、恋人を想うあまり浮かされたように見る夢。永遠の貴公子の面目躍如といったロマンティックな筋立てに用意されたラストの悲劇……。カルネとの名コンビで知られる撮影監督アンリ・アルカンの映像も美しい。

■すべての道はローマへ
TOUS LES CHEMINS MENENT A ROME(48)
監督／ジャン・ボワイエ　共演／ミシュリーヌ・プレール、マルセル・アルノル、ルヴィニ
二枚目のジェラールが、「肉体の悪魔」での成功とは一転、コミカルな役に挑戦した。若き数学者に扮したジェラールが、たまたま聞いてしまった電話の内容を勘違いし、機密文書をめぐる追いかけっこに巻き込まれ、ドタバタと駆け回る姿が抱腹絶倒もの。

■夜の騎士道
LES GRANDS MANOEUVRES(55)
監督／ルネ・クレール　共演／ミシェル・モルガン、ジャン・ドザイー、イヴ・ロベール
「夜ごとの美女」（55）に続く、ルネ・クレール監督との3作め。ジェラール扮する騎兵隊の将校が、「夜ごとの美女」同様に、派手な色恋ざたを繰り広げる。ひとりの女を1カ月以内に口説き落とすことができるかどうか、友人の将校たちと賭けをしたはずのジェラールだが……。

■しのび逢い　MONSIEUR RIPOIS(53)
監督／ルネ・クレマン　共演／ヴァレリー・ホブソン、ナターシャ・パリー
稀代のプレイボーイに扮したジェラールが、その魅力を思う存分に発揮したラヴコメディ。資産家の娘と結婚しなに不自由ない生活を送りながらも、女と見れば口説かずにはおれない男リポワ。親友の妻を口説き落とすため、狂言自殺まで図る姿が、コミカルに描かれる。

■ティル・オイレンシュピーゲルの冒険
LES AVENTURES DE TILL L'ESPIEGLE(56)
監督／ジェラール・フィリップ、ヨリス・イヴェンス　共演／ジャン・カルメ、ジャン・ヴィラール
シャルル・ド・コステルの同名小説を、ジェラール自身が映画化（ただしヨリス・イヴェンスの名も共同監督としてクレジットされている）。中世ドイツの英雄としてしられるティル・オイレンシュピーゲルの、手に汗握る冒険の数々を軽快なテンポで描く。

■肉体の悪魔　LE DIABLE AU CORPS(47)
監督／クロード・オータン＝ララ　共演／ミシュリーヌ・プレール、ジャン・ドビュクール
ジェラールの名を不滅のものにした出世作。レーモン・ラディゲの恋愛小説の傑作を、オータン＝ララ監督が忠実に映画化している。第1次対戦下、年上の人妻との許されざる恋が、あくまでロマンティックに、そして悲劇的に綴られてゆく。

Digitized by Google

ジェラール・フィリップ映画への誘い

褪せることのない輝きを放つ、稀少な4作品

●中条省平

「ジェラール・フィリップ映画祭II」には、「肉体の悪魔」（C・オータン＝ララ監督、47年）、「愛人ジュリエット」（M・カルネ、50）、「夜の騎士道」（R・クレール、55）、「モンパルナスの灯」（J・ベッケル、57）など、名監督によるフィリップ主演映画の定番も並んでいるが、ここでは稀少価値の作品をとくに紹介しよう。

本邦劇場初公開の「白痴」と「ティル・オイゲンシュピーゲルの冒険」、劇場公開版より25分も長い完全版「パルムの僧院」、そして、1950年に初めてわが国でフィリップの姿をスクリーンに映しだしながら、40年以上も劇場で上映されていない「すべての道はローマへ」という4作である。

いうまでもなくジェラール・フィリップは舞台役者として出発し、36歳の生涯の終わりまで、舞台役者と映画俳優のキャリアを両立させつづけた。彼が一般の観客にも注目されるようになったのは、アルベール・カミュの戯曲『カリギュラ』で急遽、主役の代役をつとめた折りのことだった。しかし、この大役をこなしながら、フィリップは映画でも初めての主演を張る。ドストエフスキーの原作による「白痴」（G・ランパン、46）のムイシュキン公爵の役である。公爵の役は当初ジャン＝ルイ・バローの配役が予定され、相手役のナスターシャも、バローの伴侶であるマドレーヌ・ロバンソンが演じるはずだったが、結局フィリップとエドヴィージュ・フィエールのコンビが演じることになったのである。かつてフィエールが主演したジャン・ジロドゥの劇『ソドムとゴモラ』で、フィリップは天使を演じて一部の識者から絶讃されたことがあった。

「白痴」に主演したとき、フィリップは弱冠24歳で、精神と肉体のエネルギーに溢れていた。昼間は撮影所でムイシュキン公爵を演じ、夜は舞台でローマ皇帝カリギュラを演じていたのだ。ムイシュキンは現世では生きえない無垢の天使であり、一方、カリギュラは恐怖と虚無の力をふるう悪の化身である。前者こそ、フィリップの持ち味となるべき役柄であり、若き彼の美貌は、あまり似あわぬ顎鬚の陰からも、褪せることのない輝きを放っている。だが、いかんせん、監督の力量はドストエフスキーのスケールと思想性に遠く及ばなかった。「白痴」は、24歳のフィリップの若々しい気品と、相手役のフィエールの確かな演技力を堪能すべき一篇といえよう。

続く「肉体の悪魔」で、早くもジェラール・フィリップは国際的な名声を獲得する。不道徳だというカトリック勢力のこの映画に対する非難のなか、フィリップはブリュッセル国際映画祭で演技賞を授与されるからだ。

いまに至るも「肉体の悪魔」はフィリップの代表作たるを失わないが、その勢いに乗って主演した次作が「パルムの僧院」（クリスチャン＝ジャック、47）である。スタンダールの原作どおり、全篇

Digitized by Google

右下：「すべての道はローマへ」、左下：「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」撮影中スナップ。そして上右は「白痴」、上左は「パルムの僧院」完全版

を国外のイタリア・ロケで通すという豪華な時代劇大作だった。

フィリップは、スタンダール流の生きる歓びを体現する自然児ファブリス・デル・ドンゴを生き生きと演じ、のちに同じクリスチャン＝ジャック監督とのコンビでユーモアと冒険活劇の色を濃くする「花咲ける騎士道（ファンファン・ラ・チューリップ）」の原型ともいうべきヒーロー像を作りあげる。

美術のドーボンヌと衣裳のアンネンコフは、その後、マックス・オフュルス監督の「輪舞」「快楽」「たそがれの女心」「歴史は女で作られる」で最高の成果を挙げる天才的なコンビであり、撮影のニコラ・エイエは、ジャン・コクトーの「オルフェ」やJ＝P・メルヴィルの「いぬ」を撮ることになる名手である。技術的にも当時のフランス映画界の最良の人材を起用した映画だといってよい。

ファブリスを愛するサンセヴェリナ公爵夫人の役はマリア・カザレスが演じており、フィリップとカザレスはすでに舞台で共演したことのある仲間同士だった。しかし、半年におよぶイタリア・ロケで、フィリップとカザレスは男女の関係を結ぶことになる。互いに本当の恋人がいながら生じた、旅の気の迷いともいうべきこの一時的な関係は、マリア・カザレスの回想録のなかで明らかにされた。

この翌年、「美しい小さな浜辺」に次いで、ジェラール・フィリップはハリウッド流の軽喜劇「すべての道はローマへ」（J・ボワイエ、48）に挑む。フィリップが演じるのは、ぼさぼさの髪の毛で近眼の幾何学者、おまけに推理小説と冒険の愛好家という、いかにもコミカルな役どころで、高飛車な姉とローマへ向かう道すがら、とんだ誤解からヒロイン、ローラを暗殺者から守る気になり、追いつ追われつの珍道中とドタバタ喜劇が開幕する。

ローラを「肉体の悪魔」の相手役、ミシュリーヌ・プレールが演じるところが見どころで、スクリューボール・コメディ風にソフィスティケートされたフィリップとプレールの演技は一見の価値がある。フィリップは上品なダニー・ケイ、プレールはいくぶんキツめのクローデット・コルベールといった感じなのである。これで監督が、ルビッチやホークスは無理だとしても、プレストン・スタージェスの爪の垢でも煎じるくらいの気概があれば良かったのだが、切れ味がどうしても不足している。だが、レアな珍品であることは間違いなく、ジェラール・フィリップ・ファンはこの「可愛い」フィリップに狂喜することだろう。

さて、8年後の56年、ジェラール・フィリップは念願の映画監督に乗りだす。彼はかねてから、16世紀のフランドル地方をスペインの支配から解き放った英雄ティルに惚れこんでおり、脚本、監督、主演という入れこみようで、「ティル・オイゲンシュピーゲルの冒険」を作りあげたのである。共同監督には、ティルと同じネーデルランド出身の記録映画の名匠ヨリス・イヴェンスが付いて、フィリップの初監督を補佐した。

物語は「花咲ける騎士道」を彷彿とさせるユーモラスな歴史活劇仕立てだが、フランドルの寒さを演出するためにわざわざ極寒のスウェーデンに赴き、セット撮影ではうって変わって南仏ニースのヴィクトリーヌ・スタジオへと取って返し、次いでドイツで戦闘場面を収録するという大車輪の撮影が5か月間続いた。カラーの画面は、フランドル絵画のブリューゲルの色調と雰囲気を模したといわれており、確かに見応えがある。しかし、このおとぎ話のような時代劇はちょうどハンガリー動乱のさなかに公開され、共産党の圧制に抗議するフランス全体の空気は、共産主義シンパと見なされたフィリップにとって不利に働き、興行的な失敗の一因となったことは否めない。

ジェラール・フィリップは陽気なトリックスター、ティル・オイゲンシュピーゲルを、ときに悪のりとも思える快活さを全身に漲らせつつ演じている。彼の死がわずか3年後に迫っていることを、いったい誰が予測できたであろうか。

Digitized by Google

アニエス・ヴァルダによるジェラール・フィリップ——あとがきにかえて

●山中陽子

この世にこれ程美しい人が存在するだろうか。男性に対してこの言葉を掛け値なしに、衒いもなく使える人。動くとチャーミングで自然かつ軽やかなのだが、静止した写真のG・フィリップは息がつまるほどに美しい。美しいもの、貴いものは一人でも多くの人に見てほしい。私がG・フィリップを紹介し続ける原点はこれである。更に詳しく知ると彼の人間性、品性、知性、俳優としての奥深さ等の裏付けがあるからこそこの美しさが不変性を持つのだということに気付くのだ。私たちは動いて話すフィリップをいつでも映画の中に見ることができる。しかし、映画と同じくらいに情熱を注いでいた舞台で演じるフィリップを見ることは残念ながら決してできない。もはや私たちは写真によってのみ舞台俳優だった彼を知るほかないのだ。

しかし幸いなことにG・フィリップの俳優人生の最も大切な位置を占めるTNP（国立民衆劇場）での活動は写真家アニエス・ヴァルダによって見事な写真として残されているのだ。彼女は今でこそ女性映画監督の大御所だが、20代の頃はジャン・ヴィラール率いるTNPの専属カメラウーマンとなり鋭い才能を発揮して活躍していた。G・フィリップの書物はフランスでは何十種類も出版されている。そのどの本もが俳優G・フィリップの生涯を映画と舞台に分けて写真を年代順に並べ紹介するといったものでそれらの本の中に必ずヴァルダが撮ったTNPの舞台での写真が何枚か散りばめられている。それらは緊張感と写真の強さ、主張を持っていた。数年前から私はこのヴァルダの素晴しい写真がどの本でも中途半端に映画のスチール写真と交互に使われていることに不満を持ち、きちんとした形で『アニエス・ヴァルダによるジェラール・フィリップ』という一冊の写真集にすべきではないかと考えだした。

日本でのオリジナル企画となるためヴァルダ本人との交渉を始めようとしたが、周りの人々からヴァルダが交渉ごとに手強い相手だと釘をさされた。実際彼女に接触してみて、すぐにこの企画は儚い夢となる予感がした。交渉は長引き度々滞り、年齢を感じさせない超人的に元気なヴァルダは超多忙を極め飛び回っていた。彼女との電話連絡一つにも何日も要し、たまに電話に出ても一方的にしゃべられて切られたことが何十回もあった。パリのオフィスにも訪ね、カンヌ映画祭中にも会った。結局足掛け3年の月日が流れ、彼女は私の顔を見る度に「あなたはG・フィリップのことしか考えてないのね」と溜め息をつきながら映画製作で忙しい合間をぬって5回に1回は私の相手もしてくれた。

しかしこの写真集のコンセプトには賛同を得られ、写真も数百枚以上ある中より自由に選ばせてもらえた。写真集の試作が出来上がったところで彼女に見てもらったが、私が顔のアップばかり選んだため、もっと舞台の空間を感じられるものを混ぜて選ぶようになど、なるほどと思える的確なアドバイスをくれた。そして一枚一枚の写真に自らキャプションを書き込んでくれた。その一枚ずつの写真をめくりながら彼女は時に「ここのジェラールのセリフはこうよ」と大声でセリフを暗唱してくれた。

素晴しい思い出を持ち続けているヴァルダに敬愛の念を抱かずにいられず、それは彼女が書いた写真集の序文の中でも感じられた。彼女がG・フィリップという被写体をどんなに敬い愛していたかが伺われる。

この写真集は全てヴァルダの写真で構成されるのが前提だが、彼女は最後のページにフィリップと自分が一緒に写っている写真を載せることを思いつき、「確か一緒に写したものがあるはず」と書斎に入りこんで探し始めた。一時間後に出てきた彼女は「素晴しいのを見つけたわ」と一枚の写真を差し出した。写真集の最後を飾ったこの写真は、二人のアーティストの出逢いを象徴している。

ヴァルダの愛がこれらの芸術を生み出したと言えるだろう。そこに〝愛〟がないと真の芸術は生まれないのだから。そして、三年間ひたすら刊行を夢見てきた私も、今は、感無量である。

アニエス・ヴァルダが撮った休暇中のジェラール

Gérard Philipe par Agnès Varda　ジェラール・フィリップ舞台写真集
小社刊／税抜定価3800円

Gerard PHILIPE
les films NEDITS

Digitized by Google

COMING SOON

新作紹介

アウト・オブ・サイト
OUT OF SIGHT

STORY
エルモア・レナードの犯罪小説を、スティーヴン・ソダバーグがスタイリッシュな映像で仕上げた新感覚ラブ＆クライム・ストーリー。銀行強盗歴20年のジャック・フォーリーはフロリダの刑務所に収容され30年以上の刑期をくらっている。ついに脱獄を決行するが、逃走車で待ちかまえていた仲間バディに近づくや、凄腕の女連邦保安官カレン・シスコの阻止がはいる。慌てたふたりは彼女も車に乗せて逃走。なぜかジャックとカレンはお互い異性として意識するのだった。一方、世間はこの脱獄事件で大騒ぎになっており……。

DATA ●監督／スティーヴン・ソダバーグ　製作／ダニー・デヴィートほか　脚本／スコット・フランク　撮影／エリオット・デイヴィス　出演／ジョージ・クルーニー、ジェニファー・ロペス、ヴィング・レイムズ、アルバート・ブルックス　配給／ＵＩＰ　●11月21日より日劇プラザほか全国東宝洋画系にて（98年・米・203分）

ジョージ・クルーニー　61年ケンタッキー州生まれ。80年代前半からＴＶを中心に活躍し、94年スタートの『ＥＲ／緊急救命室』で全米の人気者に。「素晴らしき日」（96）「バットマン＆ロビン　Mr. フリーズの逆襲」（97）「ピースメーカー」（97）などに主演。

Digitized by Google

STORY

「クロウ／飛翔伝説」で闇に沈む都市の恐怖を描いたアレックス・プロヤスによる、あらたなるディザスターＳＦ大作。決して太陽の昇らない街、ダークシティ。マードックは安ホテルのバス・ルームで目覚めた時に、完全に記憶をなくしていた。財布の中の身分証をたよりに自宅をつきとめるが、まもなく新聞で自分が連続殺人事件の容疑者にあがっていることを知り愕然とする。行方不明の夫を探していた妻エマと鉢合わせる彼だが、マードックには彼女が妻だとは分からない。確かな手掛かりはないものの、疑惑をはらすため、彼はわずかな記憶をもとに事件を追いはじめる。全ての謎の鍵となる場所へ辿り着いたマードックが見たものは……。

ダークシティ
DARK CITY

DATA ●監督・製作・脚本／アレックス・プロヤス　製作／アンドリュー・メイソン　撮影／ダリウス・ウォルスキー　出演／ルーファス・シーウェル、ウィリアム・ハート、キーファー・サザーランド、ジェニファー・コネリー　配給／ギャガ、ヒューマックス
●11月中旬より渋谷東急ほか全国松竹東急洋画系にて（98年・米・100分）

STORY

デンマークの大ヒットホラー映画「モルグ」のオーレ・ボールネダル監督が、ユアン・マクレガー主演で自作をリメイク。ロサンゼルスでは娼婦たちがナイフで惨殺される事件が頻発。そんな時、大学院生のマーティンはガールフレンドの反対を押しきって屍体置場の夜警（ナイトウォッチ）のアルバイトについてしまう。蛍光灯の光の中に浮き上がる数々の屍体に囲まれる職場で、おずおずと巡回をつづけるマーティンだが、ようやくこの仕事にも慣れてきた頃、屍姦された美女を発見する。ネクロフィリア（屍体愛好者）と思われる誰かが死者たちの眠りを邪魔しているのだ。連続殺人の第一容疑者とされてしまったマーティンは真相をさぐりだすが……。

ナイトウォッチ
NIGHTWATCH

DATA ●監督・脚本／オーレ・ボールネダル　製作／マイケル・オーベル　脚本／スティーヴン・ソダバーグ　撮影／ダン・ラウストセン　出演／ユアン・マクレガー、ニック・ノルティ、パトリシア・アークエット　配給／松竹富士
●12月5日より丸の内ピカデリー2ほか全国松竹東急洋画系にて（96年・米・102分）

Digitized by Google

宋家の三姉妹

宋家皇朝／THE SOONG SISITERS

DATA ●監督／張婉婷（メイベル・チャン） 製作／呉思遠（ン・シーユエン） 脚本／羅啓鋭（アレックス・ロー） 撮影／黄岳泰（アーサー・ウォン） 出演／張曼玉（マギー・チャン）、楊紫瓊（ミシェール・ヨー）、鄭君梅（ヴィヴィアン・ウー） 配給／東宝東和 ●11月28日より岩波ホールにて（97年・香港＝日本・145分）

STORY

「誰かがあなたを愛してる」のメイベル・チャン監督が、5年の歳月をかけ激動の中国近代史を生き抜いた伝説の3姉妹を描く大河ロマン。今世紀初頭の中国、大富豪・宋家の三姉妹は古い因習にとらわれない父の下で育った。長女・靄齢（アイレイ）は財閥の御曹司・孔祥熙夫人へ、次女・慶齢（ケイレイ）は一族の反対を押しきって革命家・孫文夫人へ、三女・美齢（ビレイ）は野心あふれる若き軍司令官・蔣介石夫人となり、それぞれ全く異なった人生を送ることになる。だがそれぞれの信念と揺れる時代は、姉妹の強い絆と国さえも引き裂いていくのだった。歴史と運命に翻弄され傷つきながらも、誠実につきすすむ彼女たちの生きざまが熱い感動を呼ぶ。

マギー・チャン　準ミス香港を経て「欲望の翼」（90）ほかのウォン・カーウァイ作品で脱アイドル化。以降「ロアン・リンユィ／阮玲玉」（92）、「イルマ・ヴェップ」（97）などで世界的評価を集める。最新作は、カーウァイ監督の「北京之夏」が予定される。

恋の秋〈四季の物語〉

CONTE D'AUTOMNE〈CONTE DES QUATRE SAISONS〉

DATA ●監督・脚本／エリック・ロメール 製作／マルガレート・ネメゴース 撮影／ディエーヌ・バラチェほか 出演／マリー・リヴィエール、ベアトリス・ロマン、アラン・リボル、ティティエ・サンドル、アレクシア・ボルタル 配給／フランス映画社 ●11月下旬よりシャンテ・シネにて（98年・仏・112分）

STORY

「春のソナタ」（89）に始まる、エリック・ロメール監督〈四季の物語〉最終章。“コート・デュ・ローヌ”産地として知られるアヴィニョンを舞台に、恋の錬金術師ロメールの手腕が冴えわたる。子供も巣立ち、今や農作業とワイン作りに精を出すマガリ。だが年来の友人イザベルと、マガリの息子の恋人ロジーヌは、独り身の彼女が気掛かりでならず、恋のおせっかいを焼き始める。かつて付き合っていた教師とマガリをくっつけようと画策するロジーヌ。一方のイザベルは、新聞の恋人募集広告に応募した男性を、マガリの恋人候補に仕立てあげていく。かくしてイザベルの娘の結婚式当日、それぞれの思惑を抱いて屋敷に集った男女は……。

Digitized by Google

STORY

大成功を収めた舞台劇『シュッツ氏の勲章』を、「ラ・ブーム」シリーズで知られるクロード・ピノトーが映画化。伝説の物理学者としてでなく、人間・キュリー夫人を周囲の人間たちに絡ませながら軽快なタッチで描く。19世紀末。パリ物理化学学校の研究室で実験に勤しむピエール・キュリーのもとへ、ポーランド出身のマリーが助手としてやって来る。まもなく結婚し研究を共にするふたりだが、名誉第一の俗物校長シュッツに無理難題の研究をつきつけられる。彼らの成果によって自分は勲章を頂こうというのが魂胆であった。ピエールとマリーはそうしたプレッシャーをバネにし研究をすすめ、それはついに"ラジウムの発見"につながり……。

イザベル・ユペール　55年パリ生れ。クロード・シャブロル監督の「Violette Noziere」(79)でカンヌ国際映画祭の主演女優賞を獲得。「天国の門」(79)「主婦マリーがしたこと」(88)「ボヴァリー夫人」(89)「沈黙の女」(95)他で国際スターの地位を確立。

キュリー夫妻　その愛と情熱

LES PALMES DE M.SCHUTZ

DATA　●監督・脚本／クロード・ピノトー　製作／エマニュエル・シュランベルジュ　脚本／ジャン＝ノエル・ファンウィックほか　撮影／ピエール・ロム　出演／イザベル・ユペール、フィリップ・ノワレ、シャルル・ベルリング　配給／アルシネテラン　●11月21日よりシャンゼリゼにて（96年・仏・104分）

STORY

世界中を熱狂に巻き込んだ社会主義の崩壊。これまで移動の自由を奪われていた『東』の者たちは『西』に向かい、また『西』の者たちも新天地『東』を求めて動きはじめる。そうした若者たちが行き交う街、ハンガリーの首都ブダペストを舞台に6人の男女の邂逅を不思議なタッチで描く。1990年、夏。ユーラとワジムは祖国ソ連をとびだしブダペストにやって来る。そこには、日常にあきたらない機械工のセルゲイ、イギリスの個人主義に不満をかんじたマギー、アメリカ人のスーザン、押し寄せる若者たちを当て込み安宿を営む中年女性エルジがいた。やがて、それぞれがエルジの宿で顔を合わせることになる。街の熱気と旅の興奮は彼らの心を解放し……。

カフェ・ブダペスト

BOLSHE VITA

DATA　●監督・脚本／フェケテ・イボヤ　撮影／サライ・アントラーシュ　出演／ユーリ・フォミチェフ、イーゴリ・チェルニエヴィッチ、アレクセイ・ゼレブリャコフ　配給／エスパース・サロウ　●11月28日より新宿東映パラス2、12月26日より大阪シネ・ヌーヴォにて（95年・ハンガリー＝独・101分）

Digitized by Google

第4回アート・ドキュメンタリー映画祭

COMING SOON Topics

第4回を迎える「アート・ドキュメンタリー映画祭」が、今年もユーロスペースで開催される。ファイン・アート、写真、ダンス、音楽、建築、文学、ファッション、サブカルチャー…等、現代芸術の先端と、それを捉えた先鋭な映像に触れる絶好の機会。さらに石井聰亙監督ほかのトークも予定されるのでぜひ足を運んでほしい。期間中は、以下のA～Gプログラムを日替わりスケジュールで上映。

●Program A

「ルー・リード：ロックンロール・ハート」（98年・米・75分）

ニューヨーク・パンクの先駆者ルー・リードの、ヴェルヴェット・アンダーグラウンド時代から最近のロック・オペラまで、30年におよぶキャリアが、デイヴィッド・ボウイほかさまざまなミュージシャンたちのインタヴューとともに展開される。

●Program B

「ピエール&ジル：ラブ・ストーリー」（97年・仏・58分）

20年来のパートナーである写真家ピエールと画家ジルが創りだすアート世界を1年間密着して探る。

「ボーイ・ジョージの肖像」（93年・英・52分）

82年、カルチャー・クラブのリード・シンガーとして登場したボーイ・ジョージ。同性愛、富と名声、ドラッグの日々。マスコミバッシングによる転落から復活まで、ひとりの青年の記録がつづられる。

「ルー・リード：ロックンロール・ハート」

●Program C

「椅子の回廊」（97年・仏・15分）

木材や板を使うインスタレーション作品に挑む美術家・川俣正と、フランス人監督ジル・クデール。二人のコラボレートから生まれた、礼拝堂に積まれた椅子のパフォーマンスを納める表題のほか2作を一挙公開。

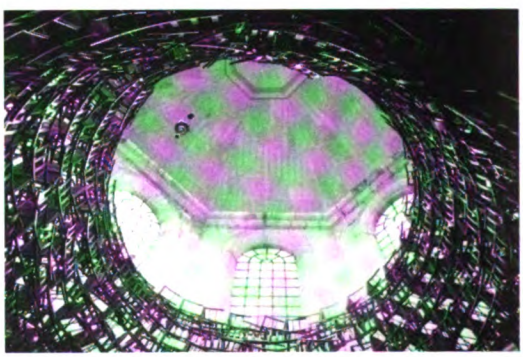
●Program D

「エンター・アキレス」（96年・英・50分）

ダンスを越えて人間のムーブメントを素材にした演劇集団DV8フィジカル・シアター。彼らが英国のパブで戯れる8人の男たちの姿を、残酷でユーモラスに描きだしていく表題作ほか1本上映。

●Program E

「ジェルジ・リゲティ」（93年・仏＝ベルギー・63分）



「椅子の回廊」

トランシルヴァニア地方に生まれ、ドイツで才能を開化させた前衛作曲家の波乱にみちた音楽人生をたどる。

●Program F

「ポール・オースター」（97年・英・60分）

「スモーク」原作者にして初監督作「ルル・オン・ザ・ブリッジ」が待たれる現代アメリカ作家ポール・オースターが、自らの小説テーマを語り自作を朗読する。ほか1本上映。

●Program G

「田中敦子：もうひとつの具体」（98年・日・45分）

ハプニングの先駆者と評された田中敦子。今も奈良のアトリエで絵画製作を続ける彼女の自由で大胆な創作活動と苦難の日々を追う。ほか御法川修によるライブ映像等2本上映。

「エンター・アキレス」

※上映スケジュール（上記A～Gプログラムを連日ー12時／14時／15時30分／17時30分／19時／21時の順で上映）

●11月28日ーB／E／F／G／トーク／A●29日ーD／トーク／C／A／B／F●30日ーG／E／D／C／F／B●12月1日ーF／A／B／E／D／G●2日ーD／C／F／A／G／E●3日ーB／E／G／C／A／D●4日ーD／A／F／E／C／B●5日G／C／B／A／F／トーク●6日ーF／E／B／C／G／D●7日ーD／C／G／A／B／F●8日ーG／A／F／C／D／B●9日ーB／E／D／A／G／F●10日ーG／C／F／E／A／D●11日ーD／E／G／C／B／A　問合せ：ユーロスペース☎03-3461-0211

Digitized by Google

STORY

アメリカ人喜劇俳優ビル・マーレーが、英国製スクリューボール・コメディで大暴れ。ヒッチコックばり巻き込まれ型サスペンスの奇想天外な展開に注目。ビデオ屋に勤めるウォレスは、自分の誕生日を祝ってもらうためアイオワ州から銀行員の弟ジェームズが住むロンドンへやって来る。風変わりな兄の突然の登場に、その日大事な晩餐があったジェームズは困りはて、プレゼントと称して参加型演劇体験ゲーム“ライブ劇場”に兄を参加させた。俳優志望だったウォレスは大喜びで体験ゲームに加わるが、どうもはじめから何かがおかしい。ひょんな偶然で本物の暗殺計画に絡んでしまったのだ。ウォレスはそんなことなどつゆ知らず……。

ビル・マーレー　76年から80年まで人気TV番組『サタデー・ナイト・ライブ』に出演し、84年「ゴーストバスターズ」でコメディ俳優としてブレイク。以後「3人のゴースト」(88)「恋はデジャ・ブ」(93)「エド・ウッド」(94) 他で個性派アクターぶりを発揮。

©1998 Warner Bros. All Rights Reserved

知らなすぎた男

THE MAN WHO KNEW TOO LITTLE

DATA ●監督／ジョン・アミエル　製作／アーノン・ミルチャンほか　脚本／ロバート・ファラーほか　撮影／ロバート・スティーブンズ　出演／ビル・マーレー、ピーター・ギャラガー、ジョアン・ウェイリー　配給／ワーナー・ブラザース
●11月21日よりシネマ・カリテにて（98年・米・94分）

STORY

ロンドンのセクシュアル・アンダーグラウンドを舞台にし、良識派をきどる人々の偽善を暴いてみせるエロティック・エンタテイメント。コンピュータ技術者のピーターは、敬虔なクリスチャンで、将来政治家になるのを夢みる野心的な若者でもあった。そんな彼に、超保守派の国会議員パーティングのスタッフとなるチャンスが舞いこむ。モラル粛正キャンペーンの一環で、SMクラブを調査し猥褻行為の証拠をつかむ仕事を課せられたピーターは秘密クラブに侵入。嫌々ながらスパイをつづけるが、クラブのオーナー兼セックスの女王タニヤに気に入られ、新しい奴隷として身近におかれるようになる。嫌悪感を抱いていたピーターも次第にタニヤに惹かれ……。

プリーチング

PREACHING TO THE PERVERTED

DATA ●監督・製作・脚本／スチュワート・アーバン　製作／キース・ハイレイ　撮影／サム・マッカーディ　出演／グィネヴィア・ターナー、クリスチャン・アンホルト、トム・ベル、ジュリー・グラハム、ジョルジーナ・ホール　配給／アート・キャップ
●11月21日より銀座シネパトスにて（97年・英・100分）

Digitized by Google

かさぶた
SCABIES

STORY
アッバス・キアロスタミ監督らの活躍により、俄然世界から注目を浴びるイラン映画から届いた、もう一つの真実のストーリー。本国では依然上映禁止が続くアボルファズル・ジャリリ作品は、苛酷なイランの現実に翻弄されながらも、決して絶望することのない少年たちの姿を赤裸々に描き、どれも清冽な感動を呼び起こす。反政府的なチラシを配ったとして少年院送りとなった文盲の少年ハメット。名前の替りに番号で呼ばれる新生活が始まり、同室の少年たちと喧嘩やいたずらを繰り返しながらも、一日一日を必死に生き抜いていく。ところがある日、"かさぶた"と呼ばれる発疹ができた少年は、みんなから隔離されていくのだった……。

DATA ●監督・脚本・美術／アボルファズル・ジャリリ　撮影／アタ・ハヤティ　出演／メヒディ・アサディ、アスガル・ゴルモハマッデ、ホセイン・マルミ　配給／ビターズ・エンド
●11月21日よりシネ・ラ・セットにて（87年・イラン・86分）
※「7本のキャンドル」と入れ替え上映

7本のキャンドル
DET, MEANS GIRL

STORY
アボルファズル・ジャリリ監督自身の少年時代の体験に基づいて製作された、神秘的でリリシズムに満ちた佳作。95年のヴェネチア国際映画祭では"金のオゼッラ賞"を獲得した。都市の工場で働く少年シュアンは、原因不明の全身麻痺に陥った妹を引き取る。治療と生活のために奔走するシュアンと父親だが、病院でも祈祷士にも彼女の原因は分からずになすすべもないのだった。そんなある日、シュアンを密かに慕っていたマスメの右手まで動かなくなる奇病に罹ってしまい……。説明的な台詞を極力排し、巧みに構成された映像を積み重ねていくジャリリ監督固有のスタイルを確立した1作。

DATA ●監督・脚本・美術／アボルファズル・ジャリリ　撮影／メヒディ・マジッド・バズィリ　出演／ゼイナブ・バルバンディ、ナビ・ジャリリアン、ホセイン・サキ　配給／シネカノン
●11月21日よりシネ・ラ・セットにて（94年・イラン・83分）
※「かさぶた」と入れ替え上映

Digitized by Google

STORY

マシュー・ブロデリックが舞台脚本家にして演出家でもある母と組み、監督・主演一人二役に初挑戦。1934年、N.Y.郊外。若き科学者リチャードは、音楽を愛する美しい女性アーリーンに一目惚れし、やがてふたりは激しく愛しあうようになる。だが、彼らに突然の悲劇がおそう。アーリーンは回復の見込みのないホジキン病と診断されたのだ。リチャードは悩みながらただの熱病だとアーリーンをなだめるが、真実を問いつめる彼女の気迫に負け、本当のことを告げるのだった。しばらくして、病気がホジキン病ではなく当時不治の病とされていた結核と判明する。試練に直面したリチャードとアーリーンは、残された時間の中で愛を深めていく。

マシュー・ブロデリック　62年、NY生れ。高校卒業と同時に舞台に立ち、81年『トーチ・ソング・トリロジー』でトニー賞を受賞。83年「ウォー・ゲーム」で映画スターに。「ケーブル・ガイ」(96)「恋におぼれて」(97)「GODZILA ゴジラ」(98) 他に出演。

インフィニティ　無限の愛

INFINITY

DATA ●監督・製作／マシュー・ブロデリック　製作・脚本／パトリシア・ブロデリックほか　撮影／トヨミチ・クリタ　出演／マシュー・ブロデリック、パトリシア・アークエット、ピーター・リーガート、ドリー・ブレンナー　配給／ギャガ、ゼアリズ
●11月13日よりシネマ・カリテにてレイト
(96年・米・117分)

STORY

N.Y.市警に実在した伝説的な刑事ボウ・ディートルの物語を、スティーブン・ボールドウィン主演で送る本格的フィルム・ノワール。N. Y. のスラム街で育ったボウは、マフィアの親友や隣人をもちながら、暴力を憎み、刑事になる道を選んだ。7月のある日、イタリア人街の教会で尼僧が暴行され切り刻まれる異常殺人事件がおこる。捜査が困難を極めるなか、ボウと相棒デュークは知り合いのマフィアのコネで犯人に少しづつ近づいていく。しかし、当局はボウのマフィアたちとの関係を厳しく追及するのだった。一方、デュークとマフィアがおこした騒ぎの仲介に入ったボウは親友の愛人オハラに出会い、いつしか心を奪われ……。

N.Y.殺人捜査線

ONE TOUGH COP

DATA ●監督／ブルーノ・バレット　製作／マイケル・ブレグマンほか　脚本／シェレミー・イアコーネ　撮影／ロン・フォーチュナート　出演／スティーブン・ボールドウィン、クリス・ペン　配給／ギャガ、ゼアリズ
●12月5日より銀座シネパトス、99年正月より大阪ホクテンザにて (97年・米・90分)

Digitized by Google

STORY
脚本家として活動を続けてきたJ.K.アマローが、退廃したロンドンを舞台に、タランティーノばりのスタイルとバイオレンスで描いた初監督作品。真っ赤なロールスロイスでロンドンを駆け巡る、トーン、ベア、スピードの3人組。彼らは今夜も、基金集めと称した強奪に繰り出すが、その最中にトーンは自分が父親になったことを知って狂喜する。足を洗ってマトモになりたいと掛け合う彼の言葉に、ボスのポップスは苛立ち、残りの二人に向かって密かにトーンを殺すように命じるのだった。いつものようにトルコ・レストランのカウンターに並んだ3人組。仲間を見殺しにするジレンマにキレかけた男たちと、彼らの陰謀を知り抜いた男の戦いが始まり……。

hard men／ハードメン
HARD MEN

DATA ●監督・製作・脚本／J．K．アマロー　製作／ジョルジュ・ベナユン　撮影／ニック・ソイヤー　出演／ヴィンセント・リーガン、ロス・ボートマン、リー・ロス　配給／日本スカイウェイ　●11月下旬よりシネ・アミューズにてレイト（96年・英・85分）

フレデリック・ワイズマン映画祭

アメリカン・ドキュメンタリーの第1人者として、67年のデビュー作「チチカット・フォーリーズ」以来、精神病院や軍隊、裁判所などを舞台に組織と個人との関係を活写する優れた作品を発表し、今なお旺盛な活動を続けるフレデリック・ワイズマン。11月20日より草月ホールと横浜美術館（11月27日～12月6日）で行われる『フレデリック・ワイズマン映画祭』では、30作を越える彼の作品群から選りすぐりの14作品を回顧上映する。さらに、20日の初日には、ワイズマン監督自ら来日！　講演も予定される。秋らしく現代社会における人間と文化をテーマに考えてみては？

●上映作品
「チチカット・フォーリーズ」（67）
「高校」（68）
「法と秩序」（69）
「病院」（70）
「福祉」（75）
「軍事演習」（79）
「モデル」（80）
「ストア」（83）
「競馬場」（85）
「聴覚障害」（86）
「臨死」（89）
「動物園」（93）
「バレエ」（93）
「パブリック・ダンシング」（97）
※スケジュール等の問合せはワイズマン映画祭事務局（☎03―5562―4422）まで

「チチカット・フォーリーズ」

「軍事演習」

「聴覚障害」

Digitized by Google

STORY
「絵の中のぼくの村」で助監督をつとめた梅川俊明が初監督として挑んだ長編記録映画。近年、反捕鯨論がさかんに語られる論拠としては、鯨類の絶滅を懸念する科学的な見方と、“知能の高い”鯨を殺すのはかわいそうだという情緒的な見方があげられる。果たしてこうした見解は正しい情報にもとづいているのだろうか。また、実際の捕鯨現場ではどのようなことがおこっているのだろうか。日本近海や南氷洋では現在も捕鯨がつづけられている。無駄なく分配・利用し、鯨を食文化のひとつにとらえてきた日本人。鯨ではなく、鯨捕りたちの力強い労働と伝統的な捕鯨技術の記録を通して、私たちの食文化の本質に迫る。

鯨捕りの海
Whalers and the Sea

DATA ●監督／梅川俊明　製作／山上徹二郎、庄幸司郎　撮影／一之瀬正史　録音／弦巻裕　音楽／林英哲　ナレーター／山川建夫　製作・配給／シグロ　●11月27日より12月5日までアテネ・フランセにて（98年・85分）

COMING SOON Topics

「JUNK FOOD／ジャンクフード」&〈四季の物語〉リバイバル上映

●「JUNK FOOD／ジャンクフード」凱旋上映決定！

「てなもんやコネクション」（90）「アトランタ・ブギ」（96）を生み出した異能の天才・山本政志監督が、秩序からはみ出して生きる都会のジャンクたちを綴った衝撃的ストリート・ムービー「JUNK FOOD／ジャンクフード」が凱旋上映される！　早朝に牛乳を買いに行く老婆に始まり、ジャンキーOL、一触即発のチーマー、売春婦、ミュージシャン等など、ドキュメントと見紛うリアルな姿がニューヨーク上映でも話題となり、現在も全米10都市で連続上映されている。この熱を受け、再び「ジャンク」が当地日本でもお目見えすることになったので、未だその洗礼を受けていない人も受けた人もぜひ足を運ばれたし。11月21日より新宿ジョイシネマにて。

●ロメールの四季、一挙連続上映

「恋の秋」で、ついに〈四季の物語〉を完結させたフランチ・ラブ・ストーリーの名手エリック・ロメール。その芳醇な作風と成熟は、もはや何者の追随を許さない感があるが、ユーロスペースでは、「恋の秋」を除く〈四季の物語〉を一挙上映。

運命の恋人と離れ離れになってしまった男女に訪れる愛の奇跡を描く「冬物語」。偶然の出会いから、父親と女教師を結び付けようとする少女のキューピッドぶりが恋の哲学談義とともに語られる「春のソナタ」。バケーションで出会う少女たちを追い求める、今時ぼんやり青年の恋の顛末を綴った「夏物語」。

どれもロメールならではのウィットと観察眼に溢れ、四季を通して初めて見える発見があるはず。11月7日より冬〜春〜夏を週替りで上映。

「春のソナタ」

「JUNK FOOD／ジャンクフード」

Digitized by Google

「赤い靴」

「ヒズ・ロードシップ」

●マイケル・パウエルの「ヒズ・ロードシップ」His Lordship（1932）「赤い靴」The Red Shoes（1948）

text by **日野康一**

東京国際映画祭協賛企画、英国映画祭はいま面白いイギリス映画30本を上映する。クラシックに大目玉がある。10月上旬号本欄「血を吸うカメラ」のマイケル・パウエル監督（1905〜1990）の二作だ。後輩のローレンス・オリヴィエ、デイヴィッド・リーン、キャロル・リードとともに戦後のイギリス映画ルネッサンスを築き、他人が手を出さぬ題材に独創画期的な心躍る映画表現を実行した。日本ではもっと評価されるべき人だ。エメリック・プレスバーガーと製作・脚本・監督コンビを組み、「赤い靴」をはじめ、イギリス人とドイツ人気質「老兵は死なず」（43年）、生と死の問題の色分け「天国の階段」（46年）、異郷における尼僧の性的衝動「黒水仙」（47年）はイギリス・カラー映画の象徴である。

BFI（ブリティッシュ・フィルム・インスティテュート）の映画TVアーカイヴは「愛すべき行方不明フィルム100本の発掘キャンペーン」を行い、ヒッチコックの助監督出身、パウエル27歳の監督第8作「ヒズ・ロードシップ」（UA32年、69分2秒）を発見、昨年のロンドン映画祭にロスから未亡人の編集者セルマ・スクーンメイカー＝パウエルを招いて上映した。セルマはUCLAで指導に当たり、スコセッシの全作を手がけ、「レイジング・ブル」（80年アカデミー編集賞）のときスコセッシと来日、彼は尊敬のあまり頭が上がらなかった。

「ヒズ・ロードシップ」は気取らぬソング&ダンスの青春ミュージカル、日本では知られない30〜40年代イギリス映画の典型だ。貴族の身分を隠すロンドンっ子のボケ作（ジェリー・ヴァーノ＝「赤い靴」では楽屋番）の素姓を知ったアメリカ男は、女優の妹と結婚させれば妹は貴族の一員になる。結婚話でひと儲けしようと企むイギリス籍ユダヤ人カモリ屋2人組と過激なロシア人映画スターがからみ、事態は混乱するばかり。

30年代初頭のロンドンにタイムスリップし、いかにもイギリス的なダサさがうれしい。ハンチングと三つ揃いに懐中時計の鎖をちらつかせる庶民、バーバリーのコートに中折れ帽のカメラマンといった風俗をリアルタイムで体験し、草創期のヘリコプターも登場する。トーキー初期にしては新作より明快にセリフを録音し、人種、階級をアクセントで区別する。

テクニカラー芸術「赤い靴」（ランク＝アーチャーズ48年、134分17秒）をはいたバレエ・ダンサーは死ぬまで踊りつづけねばならない。バレエ団に加わった社交界の令嬢（モイラ・シァラー＝現在は新聞の舞踊コラムニスト）と若い作曲家が恋におち、クールな団長は「芸術か、恋か」の決断を迫る。13分のシネ・バレエ「赤い靴」は映画とバレエが結婚して、CGもなかった時代に驚異のVFX合成を見せる。アカデミー・カラー美術、ミュージカル音楽、オリジナル作曲賞。世界はバレエに燃えた。東京・有楽座は全階指定席が2か月半満席の大ヒット。バレエ・スクールに通った少女たちは今日のバレエ界をリードしている。私事ながら「赤い靴」は、筆者が映画界に飛び込むきっかけを作ってくれた。

以上2本は11月8日1時に渋谷公会堂で上映。

Digitized by Google

デビュー作の風景

野村正昭

イラストレーション・宮崎祐治

㊸澤井信一郎「野菊の墓」（81）

大人の男女の恋愛を、衒いのない正攻法で描いて好評の、澤井信一郎監督の三年ぶりの新作「時雨の記」公開を機に、監督の『デビュー作の風景』について伺った。

伝統的に培われた撮影所の技術は澤井映画にどう継承されているのか興趣は尽きないが、「中学時代から映画はよく見ていたが、本当に好きでよく見るようになったのは高校時代から。浜松には邦洋混成の銀映座という名画座があり、そこで名画と呼ばれる古い映画を沢山見た」ことが映画の原風景だという。

大学入学後も「大映、東映、松竹混成の巣鴨映画という二番館があって三本立てで入場料70円。日活は巣鴨駅前の封切館で、新東宝は7時以降入場料は30円で殆どカバーしていた。全部面白かったね」。最初は新聞記者になりたいという気持ちもあったが「4年の夏休みが終って学校に行くと、そういう願書の受付は全部終ってるんだよ。当時学校（外語大）には東映の就職指定校の枠があって、それで受けたら入ることができたんだ」。

61年同期入社には、岡本明久、深尾道典、脚本家の野波静雄、京撮所長の佐藤雅夫、TV部に行った小沢啓一郎の各氏。「東映の場合は事務職、技術職、芸術職というのがあって、事務職は総務や経理の一般事務職。技術職は撮影や照明、美術などの専門職。芸術職はプロデューサー、脚本家、助監督志望で、それぞれ応募も試験問題も別。僕は芸術職に合格したのだけれど、当時の大川博社長の方針で、4月に本社に全員集められて、営業部とは興行部とは何をする部署かと担当重役に映画会社のシステムを教わり、それが終ってから最先端のお客さんがどんな風に映画を見て喜ぶのかと劇場に配偶されて実習するんですよ。僕は京都に行った佐藤さんと浅草東映で2カ月実習してから大泉撮影所に配属されたんです。お蔭で劇場の実際がよく分かったよね」。

最初に就いたのは、小沢茂弘監督「ヒマラヤ無宿・心臓破りの野郎ども」（61年）。5人の新人助監督が製作課長の机の前に並び「君はこれ、君はこれ」と無作為に順番に割りふられた。「俺は一番運が悪かったんだ。なぜかというと主演の片岡千恵蔵さんは当時東映の重役俳優で、先輩助監督の中には失礼があって配転させられた人もいるというし、『御大』と呼べとか、いろいろ制約があるし、これはエライ所に就いたと（笑）。当時の小沢監督は怒鳴りまくりで、その後つきうようになったけどね」。この時のチーフは小西通雄、セカンド竹本弘一、サード明比正行の各氏で、澤井さんはフォースだった。

この作品から「動乱」（80年）まで、石井輝男、小西通雄、村山新治、佐藤純彌、鷹森立一、降旗康男、深作欣二、鈴木則文監督ら55本の作品に助監督として就くが、本誌82年3月下旬号『若手監督アンケート』で、澤井監督は〝最も影響を受けた映画人、もしくは小説家〟にこう答えている。『マキノ雅裕と中野重治の二人です。文体、語り口が作家の思想にまで高められている例は大変稀ですが、この

Digitized by Google

「野菊の墓」

東映＝サンミュージック作品　製作／高岩淡、相澤秀禎　原作／伊藤左千夫　撮影／森田富士郎　出演／松田聖子、桑原正、村井国夫、赤座美代子、樹木希林、丹羽哲郎　公開／1981年8月8日（91分）　同時上映／鈴木則文監督「叱えろ鉄拳」

［さわい・しんいちろう］1938年、静岡県生まれ。東京外語大卒業と同時に東映に入社、東京撮影所でマキノ雅弘、佐藤純彌、降旗康男監督らの下で20年にわたる助監督生活を送り、シナリオ・ライターとしても注目される。81年に監督デビュー。以降「Wの悲劇」（84）で毎日映画コンクール大賞ほか、「早春物語」（85）で日本アカデミー賞最優秀監督賞を立て続けに受賞する。その後、「めぞん一刻」（86）「わが愛の譜・滝廉太郎物語」（93）「日本一短い「母」への手紙」（95）など叙情性豊かな作品を発表し、11月14日からは吉永小百合と渡哲也主演の新作「時雨の記」が公開される。

二人は、その稀の中での見事な到達点です』――。「未だに俺はそう思っているよ。中野重治の本もよく読むし」。

初チーフ作品は、マキノ監督「日本侠客伝・花と龍」（69年）。部分的にマキノ監督に演出を任されるようになった経緯を訊ねると「例えば『昭和残侠伝』シリーズで（高倉）健さんと池部（良）さんが殴り込みに行く。そうすると殴り込まれる親分の家は広いから、向こうで健さんが立ち回りして、こっちでは池部さんが若い衆と立ち回りをして、二つのセットで同時に撮る。マキノさんが健さんを撮って、池部さんは俺が撮るわけだ。マキノさんが両方撮ってたんじゃ間に合わない。殴り込みは一日で撮り終えることになってたからね。健さんの刺青は描くのに、すごく時間がかかるから二日に亙ると全部刺青を入れ直さなくちゃいけない。朝早くから描いて、昼12時に始められるかどうかだからね。向うが本番の時にはこっちがシーンとなって、こっちが本番の時には向うがシーンとする。こっちがちょっとモタモタすると、マキノさんが『澤井、早く撮れ――！』って（笑）」。

降旗監督の「捨て身のならず者」（71年）で脚本家としてデビュー。同監督の「ごろつき無宿」（72年）や、「トラック野郎」シリーズの「御意見無用」「爆走一番星」（75年）「望郷一番星」「度胸一番星」（76年）の脚本を共同執筆して、この頃、筆者は澤井さんのことを新進脚本家かと思っていたほどだ。監督昇進のチャンスは何度かあった。「ひとつは劇映画じゃないんだけど『エルビス・オン・ステージ』風に『健さん／オン&オフ・スクリーン』というか、健さんのメイキングと私生活――どこでコーヒーを飲み食事をしているか――を一緒にした映画を作ろうかという企画があった。誰かが途中で、やっぱり大スターは私生活を見せちゃいけないって言い出して流れて、他に具体的な作品もあったけれど、それぞれ気に入らなくて断わったりしたんだよ」。

「野菊の墓」（81年）の企画は最初、市川崑監督に持ち込まれていたらしい。松田聖子主演というだけでは当時はまだ成立には覚束かず、市川監督が山口百恵主演「古都」（80年）を手がけた時期でもあり「作品的な安定感とアイドルとの組み合わせの面白さ」をプロデューサーは目論んだが、ギャラの点で市川監督と折り合わず、「それで俺は当時東映の社員で、作品手当てが20万円だったからね（笑）」。

「監督のオファーとしては、これが最後だろう。これで断わったら、もうダメだろうなと思った。それで『野菊の如き君なりき』は題材として嫌いじゃないから、現代劇を撮るより、こういうちょっと古い話の方が俺には合うかなと思ってね。とにかく一本やってダメならダメでいいや、20年助監督をやったんだから、一遍監督というものになってみようと思ったわけ」。

木下恵介監督「野菊の如き君なりき」（55年）は何度も見た。「あんな名作をなぞるんじゃ、適いっこないなと思ったけど、まあ、新人らしさが出ればいいやと。新人とはいえ、もう42歳だから、映画作りは下手だけど新人らしいエネルギーがあるって言われたんじゃダメだなと思ってた。エネルギーなんか、もう無くなってる年齢だからね」。

撮影期間は約2カ月。松田聖子の出演日数は、そのうち19日間だったが「新人にしては、余裕のあるスケジュールを組んでくれたよね」。前記のアンケートにも澤井監督は『五、六月の撮影時期に、一体、野菊があるのだろうかと、そんな心配をした事だけは、はっきりと憶えています』と書かれているが、野菊に関しては沖縄に栽培を頼み、クローズアップの時には本物を使い、他の時には葉っぱに串を刺した造花を使って撮ったという。一番大変だったのは「演技指導だったね。どうしても学芸会風になるから、うまいとまでは言わないけれども、学芸会風ではなく、下手ではないように見せるというか、恥ずかしくない段階まで持っていくのが大変だった。まだしも桑原（正）君の方が自然だったからね。これには本当にエネルギーが要ったなあ」。

そうした努力の甲斐もあって、本誌ベスト・テンでは第15位にランクされ、続く「Wの悲劇」（84年）では毎日映画コンクール大賞、本誌脚本賞などを受賞。「早春物語」（85年）では日本映画監督協会新人賞を受賞し、その実力の程が認められるに至る。新人に限らず俳優たちから素晴らしい存在感を引き出す澤井監督の演出術は、新作「時雨の記」までますます磨きがかかり、健在といえる。

Digitized by Google

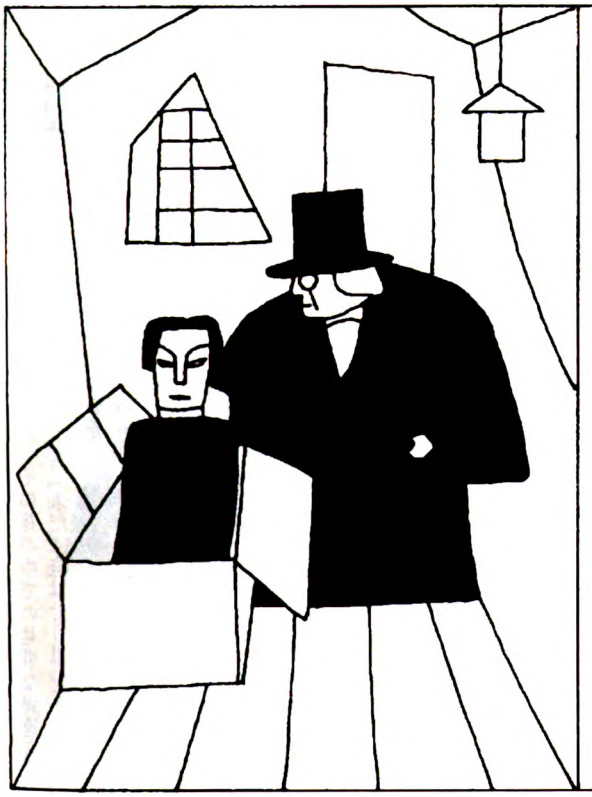
百年の夢

山田宏一

連載第83回

アッバス・キアロスタミのフェイク

――『桜桃の味』



タイトルカット：和田　誠

東京・渋谷の片隅の映画館とも試写室ともつかぬ小さなスクリーンで見たのが数カ月前のことだが、つい昨日のような鮮烈な記憶が感動とともにうずく。プログラムを買ったら、野上照代さんが「親愛なるキアロスタミ様へ」という手紙形式の、これがまた映画にまさるとも劣らぬ感動的な文章を書かれていて、さらに上野昂志さん、園田恵子さんのすばらしい文章がつづくのだが、じつによくできたプログラムで、ビデオといっしょにこのプログラムを紹介するほうがいいと思えるほどだ。

『桜桃の味』

アッバス・キアロスタミ監督の一九九七年作品。イラン映画だが、そんなレッテルや国籍を越えたユニークな映画だ。「キアロスタミ監督の演出は世界中探しても誰一人、真似のできる監督はいないでしょう」と野上さんがずばり仰有られるとおりだ。

座右の書ならぬ座右の映画として、ときにつけ見たい一本だ。それがビデオになった。とびついた。

すばらしい。「初めて『桜桃の味』をプレミア試写会で観せていただいた時、私は映画が終わってもすぐに席を立つことはできませんでした」と野上さんは書かれているが、私もまた、いや、初めてでなく二度目でも、そしてビデオでも、ただもう打ちのめされたと言うほかない。

ラストののどかな撮影風景に、ここだけはビデオ映像ということでボンヤリとして鮮明ではないのだが、それだけにのんびりとした感じで、心地よい風がそよぎ、一面に緑したたるうららかな春の祭典のイメージにもかかわらず、まるで葬送行進曲のように涙にくれながらも礼儀正しく、ゆるやかに荘重に、むせび泣くように、ディキシーランド・ジャズの名曲（といっても原曲はイギリスの古い民謡だったそうである）、「セント・ジェームズ病院」が流れだすと（♪今日もあの娘の亡骸に／会いに来たのさ　セント・ジェームズ病院……とかつて浅川マキが歌っていたのを思いだす）、胸がつまってくる。もう映画は終わりなのに、席を立てない。

映画の魅惑などという、そんななまやさしいものではない。大げさに言えば（気恥ずかしいけれども）、人生観が変わってしまうほどの衝撃なのである。しかも、映画はじつにさりげなく、何事もなく、大げさなところがまったくないのだ。

「とるに足らない物でも詩的な目で見れば、詩的価値を持つようになる」とキアロスタミは「ある旅行者」（土肥悦子訳）と題するエッセイのなかで書いているが（「そして映画はつづく」、晶文社）、キアロスタミの映画の秘密がそこに集約されているかのようだ。誰もが詩人になれるわけがないのに、誰もが詩人になれるのだと、キアロスタミは催眠術師のようにささやき、どんな素人をもプロの俳優以上の演技者にしてしまう――詩人という名の演技者に。

『桜桃の味』の自殺願望の主人公に、

Digitized by Google

生きる歓びを、人生の味わいを、桜桃の味を、思いださせようとして、たくまずしてその人生哲学を語るトルコ人の老人が、なかでも最高の演技者だ。

人間は痛みがあると医者に相談する。病院に行き、医者に痛むところを伝えて直してもらおうとする。「あんたはトルコ人じゃないから、一つ笑い話をしよう」と老人は語りはじめる。

「トルコ人が医者のところへ行って、訴えた。〝先生、指で体をさわると、あらゆるところが痛い。頭をさわると頭が痛い。足をさわると、足が痛い。腹も痛い。手も痛い〟。

医者は男を診察して、こう言った。〝体はどこも何ともない。ただ、指が折れてる〟と」。

なんという見事な「笑い話」だろう。抱腹絶倒の小咄(コント)だ。そして人生の知恵を凝縮した哲学的コントでもある。

老人はそこから教訓をひきだす。自殺願望の主人公に、きみもこの笑い話のトルコ人のように指が折れているだけだ、痛いのは体じゃなくて指だけだ、だから指を直せばいい、病気なのは考えかただけ、ものの見かただけだ、だから考えかたを、ものの見かたを変えればいい、と諭すのである。

「見かたを変えれば、世界が変わる。しあわせな目で見れば、しあわせな世界が見える」。

思えば、キアロスタミは、メヘディス・アハヴァン・サレスという老詩人の「無欲な静謐さ」について、こんな文章を書いている（「ある旅行者」、前出）。

「彼の詩の一節を思い出した――『誰が言えよう、葉の落ちた庭が美しくないなどと』――もし彼がこの詩しか書かなかったとしても、彼は充分に偉大な詩人たりえただろう。この詩はひとつのメッセージであると同時にひとつの示唆でもある。彼は提言し、提示する。それはダイレクトで明確だ。この詩はひとつの〈声明〉だ。彼は言う、〝葉の落ちた庭〟と。そして問いかける、〝誰が言えよう、葉の落ちた庭が美しくないなどと〟と」。

『桜桃の味』

まるでこの美しい一文の映画化でもあるかのように、『桜桃の味』のトルコ人の老人の話すことも、いや、出現のしかたも存在そのものも、深く静かな啓示にみちて、感動的だ。

自殺願望者に老人は問う――「すべてを拒み、すべてをあきらめてしまうのか？　桜桃の味を忘れてしまうのか？」。

これこそひとつのメッセージであると同時にひとつの示唆でもあるとは言えないだろうか。それはダイレクトで明確だ。ひとつの〈声明〉だ。だが、声高に叫ぶことはない。

老人を乗せた自動車がはるかかなたの道を走っていく――山の路の中ほどに、地と空とのあいだに留められている土地を。「樹木のほとんどない黄ばんだ土で覆われた丘の間の道を走るロングショット」のことを上野昂志さんも書いている「このロングショットは〔映画の〕後半にいくに従って頻度を増すのである」（『キアロスタミが提示する視角』、『桜桃の味』プログラム）。

そして、実際、このロングショットとともに、「世界が見えて」くるのであるバディというのがホマユン・エルシャディの演じる自殺願望の主人公の名だが、「死への道しかないと思い詰めて同じ道を走りつづけるバディに、別の光景も広がっていることが示唆される」ことを園田恵子さんも指摘する（「ゆるやかに、うねる坂道がつづく、赤い砂の――」、同プログラム）。

出口なき人生の象徴のようなジグザグ道のその旅路の果てに、突如、街の灯がはるか丘のかなたにひろがる夜景が見えてくる。死の風景にしてはなつかしく、美しすぎる。たしかに、それは死とは「別の光景」なのかもしれない。たとえ、すでに不吉な雷鳴が轟きはじめているとしても――。

Digitized by Google

そうではない、雷鳴は雨をよびおこし、雨は春をイメージするものなのだとキアロスタミ監督は一九九七年のカンヌ映画祭の記者会見で語っている（『桜桃の味』プログラム）。

「映画は雨が降る夜の闇で終わっています。それは〝生〟を喚起する春なのです」。

その前に、夕陽が沈む前に、飛行機雲が青空にあざやかに白い線をひいていく美しいカットがあり、主人公の願望はしだいに死から生へ転換しつつあるかにみえる。

奇妙なことだが、私たちはこの自殺願望の主人公に同化したり感情移入したりすることを最初から禁じられている。同情などもってのほかだ。だいいち、「あの他人を寄せつけない無表情さは、観客の興味をそそる自殺の理由などのお節介な憶測を受けつけない効果があります」と野上昭代さんも書いている。上野昂志さんも、「男の態度は、ひどく尊大」で「傲慢」であることにおどろいている。とても人にものをたのむ——それも自殺の手伝いを依頼する——態度ではないのだ。依頼どころか、相手を追究したり責めたりする。お礼に大金を払うからというだけでは説明のつかない高飛車な姿勢だ。

これはキアロスタミ監督の代弁者なのだなと私たちは思い至る。そう思わないと納得がいかない。『クローズ・アップ』（一九九〇）であれほど見事に嘘をつき、世界中をだました監督である。こんども自殺志願をよそおって、いろいろな人間たちの反応をためしてみようとしているにちがいない。

芸術家は真実を浮き彫りにするために嘘をつく——というのはキアロスタミにかぎったことではないのかもしれない。映画監督は詐欺師なのだとオーソン・ウェルズは言った。

魔術師でもあったオーソン・ウェルズさながら、キアロスタミも巧妙に人をあざむくあの手、この手を使う。画面では対話をしている二人の人物がじつは一度も顔を合わせたことがないという『オーソン・ウェルズのフェイク』（一九七五）のように、いや、それ以上に徹底的に精緻な見事さで（というのも、じつにさりげなく、いともやすやすと）、キアロスタミ監督は車を運転するイラン人の男と助手席に乗るクルド人の若い兵士やアフガン人の神学生やトルコ人の老人との仮空の会見を実現させてしまうのだ。じつは監督のキアロスタミが一人ひとりにインタビューをしたあと、運転席の主人公と助手席の相手がいかにも話し合っているかのように編集したのであろうことはなんとか察せられるものの、まるでキャメラを切り返して交互に二人を撮っているという生々しい印象を与えるので、観客はじつに快くその術中にはまってしまうのだ。

ゆるやかに走る車とともに外の風景もゆるやかに動きつづける。そこにも、キアロスタミ流のモンタージュの秘訣があるのかもしれない。映画がはじまったときには、すでに主人公の車はゆるやかに走っていて、そのままずっとリズムをくずさず、スピードもゆるめずに、映画そのものが走りつづけているのである。ヒッチコック映画の列車のシーンのような快感があることはたしかだ。

『桜桃の味』を観せて下さって、ありがとうございました——と野上昭代さんとともに私もまた感謝の気持ちでいっぱいなのである。

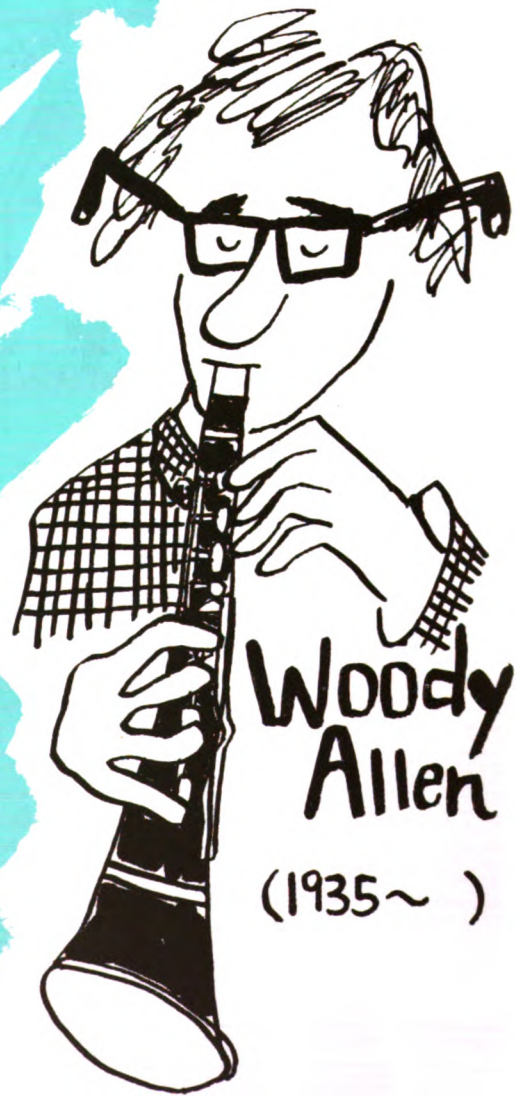
『桜桃の味』

『桜桃の味』
発売元／ユーロスペース、日本スカイウェイ
¥15,800（税抜）

Digitized by Google

阿部真理子

ウディ・アレンが、知的なニューヨーカーとして市民権を得たのは、「アニー・ホール」からでしょう。でも私は、ゴチャゴチャしていて、言いたいことといっぱい!!　くだらなくてバカバカしい「アニー・ホール」以前の作品も、けっこう好きなんです。白タイツの精子キャラクターや、「スリーパー」の風船男（？）なんかサイコー!!　私ってずいぶん古い話をしているカナァ。先日、どの監督作品を一番多く見ているかチェックしてみたら、全作品を見ているティム・バートンなんか本数では足元にも及ばず、第1位は、多作のウディ・アレンでした。そこで、ウディの作品を古い順から見ていくと、そういやあこういう作品あったよねぇって、思い出して、今回、描いてみたというわけです。



Digitized by Google

Digitized by Google

LOVE and Death

『愛と死』
1975年作品
ウディ・アレン
(監督・脚本・主演作品)
日本未公開

Digitized by Google

この作品は、日本劇場未公開の作品なんです。初めて見たのは、10年前の昼下りのテレビだったでしょうか？　さすがに劇場未公開なだけあって、ストーリーは、困ったモノ。作品の全体のクオリティも低かった。共演のダイアン・キートンは、次回作「アニー・ホール」でブレイクする前で、パッとしないし。

しかし、そんな数々の破綻をも凌駕する、キラリと光ったシーンあり!!

森の中に置かれたたくさんの柩から、ウェイターが出てきてワルツを踊ったり（現代美術のインスタレーションのように、フシギでおもしろい!!）、ハリボテ・ウディ人形が、大砲で発射されて、空飛ぶところだったり、大きなカマを持った死神も大好きだったナァ。

ここで大いなる野望を打ち明けるならば、ぜひ大劇場の、大スクリーンで、これらのシーンを見てみたいッということです。新作山盛り、目白押しのウディ作品と共に、今こそこの未公開作品に劇場デビューを!!

Digitized by Google

シネマ徒然草

立川志らくの

56

「志らくが演劇をやるぞ！その名もつけたり～宇宙日和～」

私、来年、演劇をやる事になりました。脚本と出演でごんす。本当は演出もやりたいところだが、映画ほどに演劇は観賞ていないので、村木藤志郎氏に任せた次第で。この村木藤志郎氏とはあの高田文夫先生に「東京の喜劇はお前に任せた」と言わしめた天才である。だから私も「演出は彼に任せた！」のである、とちと偉そうだな私。村木様、ひとつお願げぇしますよ、イヒヒヒヒって、そんなに卑屈になる事もないが。で、志らくと村木が手を組んだそのプロジェクト名がなんと「東京スケアクロウ」！ かっこイイでしょ。私、大好きなんですの「スケアクロウ」って映画が。尻切れとんぼのラストが震えるほど素敵だし、アル・パチーノが魅力的なんだよなぁ。まぁ、「スケアクロウ」の話はどうでもよくって、その演劇である。内容はSFお茶の間コメディ。橋田ファミリー的なホームドラマにSFの要素を入れ込んだら面白かんべぇ七人の侍の志村喬（わかりづらい洒落だなぁ）という発想です。題名は『宇宙日和』。出演者は、落語家さんに舞台役者、Vシネ女優に映画俳優に映画監督……って統一性がなくてよろしい。ちなみに、けんもち聰監督の「いつものように」の主演俳優の二人も出るんだぞ。

そんな訳で、演劇をやるからには色々と演劇を観賞ておかなくてはと思っていたのだが、いやはや、私が現在最もお気に入りの三人の女優が奇しくも同時期に舞台に出演ていたのです、まるで私を演劇の道にいざなうかのように。一人は当コラムで、もはやレギュラーとなった薬師丸ひろ子（勝手にレギュラーにしてすみません）。『雨に唄えば』に続くミュージカル第二弾『シュガー』！ これはご存じの通り名匠ビリー・ワイルダーの「お熱いのがお好き」の舞台版。その昔、由美かおるが限りなくマリリン・モンローを意識してシュガーを演じたそうだが、薬師丸ひろ子の場合は全然違ったシュガーであった。実にコケティッシュなシュガーで、豊満なボディを武器にしていない分、かえって現代にマッチした知的なシュガーになっていた。馬鹿な女ほど可愛いんだよという御仁がいるが、現代の時代、馬鹿が多すぎるので知的な方が絶対に魅力的である。もし、ビリー・ワイルダーが薬師丸ひろ子のシュガーを見たら、拍手をするに違いないと思う。ワイルダー信者の私がそういうのだから間違っていないのだ！

薬師丸ひろ子

もう一人は大林宣彦作品の常連、柴山智加だ。彼女は泪目銀座主催の『バカの王様』に出演していた。面白い芝居でした。石丸謙二郎や左時枝の上手いこと！ 演出も素晴らしいし、文句のつけようのない芝居でした。そして肝心の柴山智加だが、華がある。華がありすぎて花粉症の私は鼻がむずついたぐらいだ。彼女ほど役者として華があると、上手い役者を食ってしまうんですね。その食い方はまるで「ザ・グリード」のタコの化物の如くだ、って例えがよく分らなくてすまんのう。

三人目は板谷祐三子だ。薬師丸ひろ子は別格であるが、この三人がトリオを組んでキャンディーズみたいになったら、私は狂喜乱舞して彼女達の追っ掛けとしてその半生を費やしてしまうであろう（何のこっちゃ？）。板谷祐三子の芝居はW—INPACT主催の『カノン』。前半ははっきり言ってつまらなかったのだが、途中から俄然迫力が出てきて面白くなる。暴力場面なんかは、映画を観賞ているかと錯覚するほどの緊迫感で観賞側を圧倒する。またこの芝居の演出の森岡利行ってお方は、よほどの映画好きだと見た。一般的ではないが、映画ファンには堪らない映画のパロディがたくさん出てくるのだ。「ムトゥ 踊るマハラジャ」のタオルのヌンチャクだとか、「デスペラード」の酒場の場面とか、極め付けがラストの「ひまわり」である。唸りましたよ、おもわず。で、板谷嬢だが、美しい！ 美しいだけに悲劇のヒロインではもはや物足りない。とんでもない悪女をやらせるべきだ。「危険な情事」なんかいいと思う。グレン・クローズは癖がありすぎてあまり怖くなかった。板谷祐三子がやったらイイぞ！ その時は私がマイケル・ダグラスの役をやってヒィーヒィー言いたい、って馬鹿か私！

とにかく、この素晴らしき三代女優を生涯追い掛けます。いつの日にか一緒に仕事してちょうだいね、とこびを売る私でした。

Digitized by Google

リレー・エッセイ

映画と私

86 漫才師 水道橋博士（浅草キッド）

キネマ旬報に原稿を書くってことは、オレ的には20年ぶりの出来事である。しかも編集者に依頼されて原稿を書くなんて（おそれおおくて一度は断ったが）なんともコウエイなことである。なにしろ、昔はキネ旬の『読者の映画評』なんかに、頼まれもしない、しかも載りもしないのに、国語辞典を引きながら、投稿していたクチなのだから。

そんなオレだが、一度だけ本誌に掲載されたことがある、それが今から20年前、中学生の頃か、当時のキネ旬『ロビー・エッセイ』に採用されたのである。当時公開された映画で、ジョン・ミリアス監督の「ビッグ・ウエンズデー」と藤田敏八監督の「18歳、海へ！」を比較して、邦画の方の、そのスクリーンの暗さへの思い入れと共感を実に青臭〜く、バカ丸出しで書き綴っていたわけだ。

今読むとコッ恥ずかしい限りだが、でもねぇ、ああ、あの頃は本当に切なく、純粋にスクリーンに向かい合っていたものなのだ。

そういえば、家の近くの映画館（千秋座ってところだった）でバイトもしていた。ずいぶん時給が安かったが、只で映画が見れるだけで満足だった。それにオレには、欠伸とため息の連続の毎日に、友達と映画館に通うことだけが、唯一の正常な呼吸ができる時だったのかもしれない。

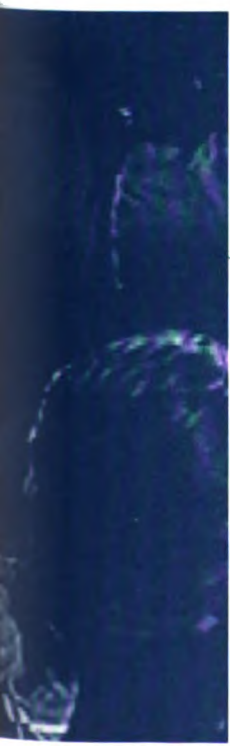
あの頃は、スクリーンにガツガツとしたオレの欲望を煽られたし、まだ見ぬワクワクした物語があった。そして冷めやらぬ興奮に、映画と日常の境目がわからなくなるような妄想にかられた。ふと、今見ている映画は創り話だが、現実にオレはオトナになったとき、何をしてるのだろう？　子供心に思ったものだ。一日中、陽の当たらぬ客席に身を沈めて、なんだが、フツフツと止めどなく湧き上がる様々なこの妄想をどこに、ぶつけていいものか〜わからなかったのだ。

当時に比べたら、今は映画の物語にビンビンとくることはなく、不感症で、映画のワンシーンにドキドキすることなど少なくなった。劇場に足を運ぶことも、億劫になった（ビデオのせいだけど）。

よく言われる台詞だけど、現実の事件の方が、映画や小説より突拍子もないドラマチックな出来事であるって事が、多くなりすぎた。その中で、今年、劇場で見た映画の中では、3年間を費やしてオウム教団のその後を追いかけたドキュメンタリー「A」がオレにとって抜群にオモロい映画だった。この映画を見ている時、オレの妄想とオレの記憶がうごめいた。

中学時代の同級生に「N」という男がいた。中学時代は、オレたちは国立大学の付属校の進学校で、やたらと勉強することが人生を切り開けることだと頭に植え付けられていた。「N」は理想主義者だった。勉強も出来たが、当時から、子供のくせに社会正義などを口にする男だった。社会の中に自分が主役の物語を作ることを夢見ていた。そんな「N」と中学を卒業して以来、一度も会っていなかった。「N」の名前を目にしたのは、その17年後である。オレは、昔の仲間とはすっかり音信不通になり、中学時代から秘かに心酔していた尊師ビートたけしの下に身を寄せ、たけし軍団などという、人騒がせな教団に潜りこみ、いつのまにか漫才師となり、テレビに出る人になっていた。

平成7年、地下鉄サリン事件が起こり、一斉捜査があり、逃亡犯



「A」

すいどうばしはかせ／本名小野正芳。1962年、岡山県生まれ。86年ビートたけしの弟子となり、浅草フランス座の修行を経て、玉袋筋太郎と漫才コンビ「浅草キッド」を結成、ライブ・テレビ・ラジオで活躍中。『水道橋博士の異常な愛情』をはじめ著書多数。現在のレギュラーは、ライブ「浅草お兄さん会」、ビートたけしとのラジオ「ビートニックラジオ」ほか。またCS「北野チャンネル」では、11月8日まで「浅草キッドスペシャル」を放送中。

Digitized by Google

の手配の写真や、名前がテレビや雑誌で報道されていた。そのなかに、「N」らしき人がいた。麻原尊師の主治医として、教団の大幹部であった。

これが、あの「N」だと確かめる方法はないものか？

中学時代の共通の知人に連絡をつけた。

「おい、今、テレビで話題になっているオウムの『N』って、オレたちの中学時代の同級生の『N』じゃないの？」

知人は、それまでの声色を替えて、叫んだ。

「失礼な事を言うな！『N』さんは、既に『N』ではない。『N』さんは、偉大なるボージサットバ・バジラティッサ師だ！」とスラスラと小難しいホーリーネームを暗証した。なんで、そんなに詳しいのだ？

確かめると、その知人は、なんとオウムの在家信者だった。おまえは、既にマスコミ側の人間だ。マスコミの一方的な報道をなんとか正して欲しい。同級生として力を貸してくれ。～なんて言われても、オレは困る。なんだか、ミイラとりがミイラになった。

連絡先を聞かれたが、奴等はサリンをもって逃げ回ってるのだ～教えるのはマズイと思ったが、教えなくて逆恨みされのも困る、そこでとっさに、大川興業の江頭2：50の家の住所と電話番号を教えた。

こうなったら毒をもって毒を制する作戦だった。

案の定、オーム教団の連中は江頭宅にまで来た。当時大川興業は、タブーであったオウムをネタにしたお笑いをどこよりも過激にやっていた。その信者を江頭も迎え撃った。

「おまえら尊師の超能力なんて全部オレはできるぞ」と大見えを切ったのだ。まず、空中浮遊対決（大川興業の連中は全員これが訓練によって出来る）。当然、信者より、江頭は高くぴょんぴょんと飛んだ。

自分の妄想をどこにぶつけていいのか、わからなかった頃

続いて水中クンバカ対決、その頃の江頭は『浅ヤン』という番組で『江頭グラン・ブルー』というコーナーを持ち、日本のジャック・マイオールとして、水中無呼吸、芸能界記録を打ち立てていた。お互い洗面器に顔をつけ、江頭は信者より長く水に潜った。

とうとう、信者は「江頭さんは尊師よりスゴイ人だ」と感心してしまった。

それだけではない、信者は江頭に乞われるまま、2万円のお金を貸した。オウムから、お布施をせしめた唯一の男～最後の伝説の芸人・江頭の肩書きが増えた。

～このお話は、オレたちは、舞台の漫才でしている。オレはオレが主役として舞台に立ち、笑い話やホラ話を作って客前で披露する職業についた。今にして思えばようやく自分の妄想のぶつけ先がわかったのだろう。

BOX東中野って映画館でドキドキと「A」を見ながら、オレの中学時代やそんなことを思いだしていた。

「N」はあの頃、どんな映画を見ていたのだろう。

Digitized by Google

嘘つき映画館 シネマ・ほらセット

第2回
橋本治
ポスター制作 若林伸重

アメリカン・クイーン

今月ご紹介いたしますのは、「ヒラリー・クリントンの出現を予言した」と後の話題になった1989年製作のワーナー、コロンビア合作による超大作映画、シドニー・ルメット監督作品「アメリカン・クイーン」であります。199×年、民主党が大統領候補の一人としてカリフォルニア州選出の女性上院議員を選びそうだというところから、話は始まります。これを聞きつけたのが、「女キッシンジャー」の異名をとるハーバード大学の国際政治学教授、「民主党のカリフォルニア女、ときに負けてなるものか」と、ニューヨークの広告代理店の女社長を担き出し、強引に予備選の中へ飛びこんで行くのでありますが、これはもうとんでもなくすごいオールスターキャストの、これ以上のキャストは二度と組めないだろう、いやもう二度と組みたくないと大騒ぎになった大周題超大作なのであります。このドロドログチョグチョの「ビッチ！」と「アイ・ヘイト・ユー！」が飛び交う映画のキャストをご紹介するだけでページは埋まってしまうのでありますが、しょうがないので紹介します。

配役は、民主党女性大統領候補にメリル・ストリープ、共和党大統領候補の「女キッシンジャー」にバーブラ・ストライサンド、バーブラと組む辣腕の女広告代理店社長にフェイ・ダナウエイ。もうこれだけで十分恐ろしいのでありますが、ここに共和党の副大統領候補としてシャーリー・マクレーン、民主党の副大統領候補にマイケル・ケイン、民主党のメリル・ストリープ側の広告代理店社長にロバート・レッドフォードが加わるのであります。バーブラ・ストライサンドとフェイ・ダナウエイは、憎み合いながらも、敵を追い落とすためにはありとあらゆる汚いことを平気でやり、一方メリル・ストリープの側は、ロバート・レッドフォードを利用するだけ利用するために、レッドフォードの社長追い落としを画策する悪い部下ミッキー・ロークと裏でこっそり手を結ぶという、とんでもない悪辣ぶりを発揮するのであります。

この映画の見所は、誰がどう泣くかでありまして、ロバート・レッドフォードは泣きます。二人の大統領候補とテレビ討論会をやる現職大統領夫人のオードリー・ヘプバーンは、バーブラとメリルにいじめられて泣きます。任期を終えてホワイトハウスを去る大統領のチャールトン・ヘストンも泣きます。「虐げられた女の時代は去るのね」と言って、副大統領候補のシャーリー・マクレーンはバーブラの腕にすがって泣きますが、バーブラは泣きません。母の愛に飢えて育ったと思っているメリル・ストリープは、老いた母を怒鳴りつけて、母親のオリビア・デ・ハビランドも、メリルの妹役のシェリー・デュヴァルも泣きます。「男の悪を告発するためだ」とバーブラに言われ、暴力をふるう共和党上院議員の夫クリストファー・リーブを告発する、妻のミア・ファーローも泣きます。民主党上院議員のジーン・ハックマンは、娘のソフィー・マルソーと近親相姦になっていて、これが告発されてすべてを失いますから、一人で泣きます。泣かないのは、「いい夫」を演じている半アル中のバーブラの夫ドナルド・サザーランドで、いつも笑っています。笑うと言えば、大統領選のバカ騒ぎを嘲笑う南部の女になったティナ・ターナーの笑い方は迫力です。ティナ・ターナーはゲラゲラ笑い、フェイ・ダナウエイはほくそ笑み、メリルとバーブラは怒鳴り、そして最後、共和党の女性候補に入れ込んだテキサスの石油王の未亡人は、どういうトチ狂い方をしたのか、「可愛さ余って憎さ百倍」のノリで、バーブラを射殺します。このエリザベス・テイラーの怒り方はアカデミー助演女優賞ものだと評判になりましたが、ノミネイトはされませんでした。

このテの映画につきもののお遊びとしては、ジェーン・フォンダとクリント・イーストウッドが、アメリカを代表する人物として、自分自身の役で出て来ます。ジャクリーン・オナシスとおぼしき女性役を、カレン・ブラックがいとも濃厚に演じています。民主・共和両党の資金集めパーティーのシーンでは、共和党側の上流夫人にローレン・バコール、キャロル・チャニング、グエン・バートン、アン・マーグレット、キャンディス・バーゲン、リブ・ウルマン、レスリー・キャロン、デボラ・カー、民主党側にはアン・バンクロフト、ジュリー・アンドリュース、デビー・レイノルズ、キャロル・バーネット、エレン・バーンスティン、ジェラルディン・チャップリン、ア

Digitized by Google

ンジー・ディッキンスン、ルイーズ・フレッチャーが特別出演です。「私は民主党支持じゃない」「共和党なんか嫌い」と、ミス・キャストを呪った女優達は、「たっぷりとやなやつを演じなさい」との監督の指示に嬉々として従っていたそうですが、そこで一番厄介だったのは、「なんで私が共和党の候補よ!」と怒ったバーブラ・ストライサンドでした。

この映画がなぜ完成したかは謎ですが、この映画をつまらなくさせた元凶は分かります。バーブラが、「私は民主党候補として演じる」と言ったからです。やれやれ。

STAFF

監督　シドニー・ルメット
脚本　ロバート・アルトマン
音楽　ジェリー・ゴールドスミス
製作　ワーナー、コロンビア合作
原題　AMERICAN QUEEN
　　1990年公開作品

CAST

メリル・ストリープ
バーブラ・ストライサンド
フェイ・ダナウエイ
シャーリー・マクレーン
マイケル・ケイン
ロバート・レッドフォード
ミッキー・ローク
ほかオールスター・キャスト

Digitized by Google

オールモスト・クール 132

『ビッグ・リボウスキ』の「ぐうたら礼賛」に一票を投じたい——その二

芝山幹郎 Mikio Shibayama

（承前）

予感はほどなく的中する。人ちがいによって意外なトラブルに巻き込まれた「ぐうたらデュード」の「ぐうたら冒険」は、やはりはじまったばかりだったのだ。ボウリング場からもどってきた彼を待っていたのは、留守番電話に吹き込まれたブラントからのメッセージである。「ぜひとも来てくれ、重大な話がある」というブラントの声を無視しきれず、デュードはふたたびパサディナに足を向ける。そこで彼が目撃したのは、Strong men also cry. とつぶやきながら暖炉の前で涙を流しているビッグ・リバウスキーの姿だ。

「私は障害を克服して成功への道を歩んできた。そして妻のバニーはわが人生を照らす光だった。そのバニーが……」

リバウスキーは苦痛を隠しきれぬ様子で、デュードに脅迫状を見せる。雑誌の文字を切り抜いた手紙には《バニーを誘拐した。印のついていない二十ドル札で百万ドルを用意しろ》と書かれている。デュードは、秘書のブラントに身代金の受渡しを依頼される。デュードを襲撃した二人組が犯人の一味だとしたら、その顔を知っているあなたが適任だと思う、とブラントはいい、二万ドルの報酬を約束するとつけくわえる。文なしのデュードに断わる理由はない。かくて「ロサンジェルス郡きってのぐうたら男」は、にわかフィリップ・マーロウに変身し、ギムレットならぬホワイト・ラシアンを口に運びながら陰謀渦巻く夜の海へ舟を漕ぎ出す羽目となる。ではこのあと、『ビッグ・リボウスキ』は、フィルム・ノワールのお約束を守る形で前へ進んでいくのだろうか。

だがおあいにくさま、そうなったあとも映画のテンションはいっこうに上昇しない。観客の期待をはぐらかすかのように、コーエン兄弟がつぎに用意するシーンは、ふたたびだらけきった空気の瀰漫するボウリング場である。しかも、そこには、デュードの相棒のウォルターやドニー以外の変人が登場する。紫のシューズ、紫の靴下、ポリエステルでできた紫のジャンプスーツ。足もとから這い上がっていくキャメラがとらえるのは、コーエン映画の常連ジョン・タトゥーロの姿ではないか。その長い黒髪はヘアネット（！）でまとめられている。そして、ジャンプスーツの胸には「ジーザス」の文字。フルネームはヘスス・クインターナというようだが、この男はヘススを英語読みしたジーザスという名で通っている。そして彼は、八歳の少年の前でパンツの前をひらいてみせたことで悪名をとどろかせている。カメレオンのようにボールをぺろりと舐めたあとでストライクをとった彼は、くるりと身体をまわし、怪しげに腰をくねらせて不気味なステップを踏む。バックに流れるのは、ジプシー・キングスがスペイン語で熱唱する『ホテル・カリフォルニア』！

このあたりから、コーエン兄弟の「逸脱」にはいよいよ拍車がかかってくる。『ファーゴ』だったら、ひとつフェイクをはさんで話の本筋へもどるところなのだが、『ビッグ・リボウスキ』の場合はそうではない。「バニー誘拐事件」の本筋は棚上げされ、このあともつぎつぎと珍妙な人物や珍妙なできごとの描写がつづくのだ。「逸脱その二」は、ウォークマンでCCRのテープを聴いていたデュードがいきなりあごを殴りつけられて失神し、空飛ぶ絨毯に乗ってロサンジェルス上空を飛びまわる描写だ。このときの音楽は、ボブ・ディランの『ザ・マン・イン・ミー』。だが、心地よく空を飛んでいたデュードは、手に持っていたボウリングの球が重石となって、まっさかさまに地上へ墜落してしまう。

デュードをのばして敷物を奪ったのは、ジュリアン・ムーアが扮するモードだ。すぐにわかることだが、モードはビッグ・リバウスキーの娘で、亡き母のあとを継いで〈めぐまれない子供たちに奨学金を贈る財団〉の理事長をつとめるかたわら、フルクサス（アクション・ペインティングの一派）の流れを受けたヴァギナ的絵画の製作にいそしんでいる。モードは、父の後妻におさまった色情狂のバニーが、かつてポルノ映画で共演したニヒリストのユーリやプロデューサーのジャッキー・トリーホーン（ベン・ギャザラ）と組んで誘拐事件をでっちあげ、百万ドルを奪おうとしたにちがいないと考える。「そもそもあれは、父のお金じゃなくて財団のお金なの。とりかえしてくれたら一割を払うわ」——こういわれて、デュードはまたもや動揺する。動揺するのも無理はない。じつは、彼女のアトリエをたずねるすこし前、彼はウォルターとともに身代金の受渡しにシミ・ヴァレーへおもむき、とんでもないエラーをしでかしていたのだ。

『ビッグ・リボウスキ』

Digitized by Google

とまあ、こんな具合に、入り組んだ人脈の全貌はしだいに明かされてくる。が、錯綜する人間関係や複雑なプロットこそ正調フィルム・ノワールと共通するものの、この映画はけっしてそこに焦点を絞らない。なるほど、「迷路に深入りすればするほど、どこへも行き着けなくなる」というフィルム・ノワール的な構造が認められるのは事実としても、ぐうたら男が平気で信号無視をするのと同様、この映画は陰謀や策略や陥穽などといった要素をまったく気にかけないのだ。これは正調フィルム・ノワール愛好家にとっては、由々しき事態かもしれない。「薄汚れた街を歩む卑しい男のなけなしの正義感」にひとかたならぬ思い入れのある観客ならば、デュードの言葉はもとより、こんなデュードをヒーロー候補に選んだ『ビッグ・リボウスキ』という映画そのものを許しがたいと思うことだろう。

だが、またしてもおあいにくさま。デュードが入り込んでいくのは、邪悪というよりも奇怪で突飛な世界である。眼前に現われる陰謀や策略の数々も、彼自身から見れば、お気楽で怠惰な生活をさまたげる障害以外の何物でもない。うざったいなあ、おれは葉っぱを吸ってボウリングをしていられれば、それでいいんだよ——明言するわけではないが、デュードはことあるごとにそういう態度をちらつかせる。まったく、このデュードにくらべれば、ジェームズ・クラムリーの小説に出てくる酔いどれ探偵のミロや、アルトマン映画でフィリップ・マーロウに扮したエリオット・グールドさえも品行方正でストイックな男に見えてしまうではないか。

とはいえ、デュードはかつて人権擁護を主張するポート・ヒューロン宣言に署名したシアトル・セヴンのひとりだった。ぐうたらを決め込んでいる現在にしても、ちょっとしたはずみで「もと理想主義者」の横顔をのぞかせる瞬間がないわけではない。ジョン・フォガティやキャプテン・ビーフハートの音楽は好きでも、タクシーの中で『ビースフル・イージー・フィーリング』が流れてくると「今日は災難つづきだったんだ。イーグルスなんて聴きたくない」と苦情を垂れるあたりにも、そのテイストはうかがうことができる。ただしその行動は、モラルや理性に支配されているというよりも、本能や無意識にみちびかれているというほうがふさわしい。そう、筋金入りの三十年寝太郎といいかえてもよいのだが、デュードは戦っているよりも寝ている時間がはるかに長い男なのだ。

このふしぎなこわれ具合は、ジョン・グッドマンが演じるウォルターにもうかがわれる。かつてヴェトナムで戦い、ユダヤ系の女と結婚して改宗した彼は、離婚後もユダヤ教徒にとどまり、サバス（安息日）にはいっさい活動しない（I don't roll on Shabbas）ことを信条としている。この一事からも知れるように、彼のとんちんかんぶりは、デュードのぐうたらぶりに匹敵する。すこし注意すれば気づくことだが、この男はことごとくといってよいほど状況を読み誤り、自信満々の態度で誤爆をくりかえす。だとすれば、このコンビがチーチ&チョンの色彩に接近し、クルーゾー警部的なしくじりをかさねるのも当然のなりゆきだろう。身代金の受渡しにおもむいたウォルターが、車の運転席から飛び降りたとたん、もっていた機関銃が転げ落ち、暴発しながら路面を滑っていく場面。風呂に入っているところをニヒリストの一団に襲われたデュードが、浴槽にマーモット（水陸両棲の齧歯類。なんでも噛みちぎる）を放り込まれてあわてふためく場面。こういった場面にさしかかると、コーエン兄弟の演出は俄然冴えを見せはじめる。いや、ここだけではない。冗談としか思えないほど下手くそなモダンダンスを踊るデュードの大家（ジャック・ケーラー）。突拍子もない声で高笑いをするビデオ・アーティスト（デヴィッド・シューリス）。すでに紹介したブラントやジーザスやユーリはもとより、コーエン兄弟は、いつにもまして変態男どもの描写に心を砕く。さして特徴のない色褪せたロサンジェルスを背景に選んでいるのも、じつは彼らの変態度を際立たせるための戦術ではないだろうか。

それにしても、ぐうたら男を主人公に選び、さしたるテーマを設けないまま、一見のんべんだらりとした映画を撮るのにはかなりの度胸と技が要る。コーエン兄弟は、この映画に劇的なクライマックスを用意していない。まぬけで滑稽な暴力は散見されても、シリアスな暴力シーンは皆無といってよい。話の筋はどちらかといえば散漫だし、大団円や大逆転を期待する人は肩透かしにあったような印象をおぼえるかもしれない。だが、ひとつのシーンからもうひとつのシーンへの転換や、そこで挿入される音楽の選択、あるいはそこで変化する美術などにつきあっているうち、私はしだいになごみはじめた。緻密なはずの語りが骨抜きにされ、残酷なはずのギャグが微妙にずれ、変貌するかに見えたキャラクターがいっこうに変貌しないおかしさ。もしかすると、コーエン兄弟は、この作品で初めて「ナンセンスの楽しさ」を堪能しているのかもしれない。枝葉の部分に才気を追いやり、話をふわりと軟着陸させるぐうたらぶりに触れて、私は久々にこの兄弟と握手をかわしたくなった。

Digitized by Google

田沼雄一 映画を訪ねて

その五七 「マークスの山」の南アルプス・北岳山頂にアタックする

麓から2時間ほど二俣から見る［北岳］はまだ遠い。

いろいろと欠陥の多い映画だが「マークスの山」への思いは強い。

主人公・裕之（萩原聖人）が少年時代に一家心中から辛うじて助かった場所、愛する女性（名取裕子）を殺されたのち彼女への思いをその胸に秘めつつ一人、孤独に死んでいった場所、南アルプスの北岳。「マークスの山」は日本映画史上、本格的に北岳にロケーションした映画である。

もちろん、めざすは北岳山頂だ。こう見えても登山は得意なのだ。

と言いつつも、じつは簡単に取材が済む方法はないか、と考えたこともあった。劇中、小林稔侍扮する弁護士・林原が裕之と待ち合わせ、裕之を殺害しようとした場所を見に行こうと思った。林原が学生運動にアツくなっていた時代を回想するエピソード、内ゲバで仲間を殺してしまう場面も同じ場所で撮影されている。

JR中央線・国分寺駅から徒歩およそ十分、中央線に面して建つ［東京経済大学］（年配の方には旧大倉高商といったほうが分かりは早いでしょう）の構内で撮影されている。林原ら内ゲバをくり広げるくだりは各クラブの部室となっている半地下のフロアの表で撮られている。林原と裕之が激しく闘い合う場面は図書館と研究塔の間の広場で行われている。

同大の卒業生でもないのになぜそう詳しいかというと、じつはもうかれこれ二五年前になるが、二年ほど同大の生活協同クラブでアルバイトをしていたからだ。書籍部にいた。本の配達もあってよく構内をウロウロしていた。図書館をつかわせてもらい、レポートを書いたこともあった。

まぁそんなこともあって、二五年ぶりに東京経済大学を訪ねてもいいなぁと思った。しかし、それではいくらなんでも安易すぎますよね。取材で楽してはいけない。映画を語るとき楽してはいけない、絶対に！　そう自分に言い聞かせ、「マークスの山」と言えばやはりタイトル通り〈山〉でしょ。裕之や林原のいばらの人生の象徴になっている［北岳］に行くしかないでしょ。裕之が絶命した、合田刑事（中井貴一）があとを追った、登山者たちがせっせと積み上げてきた小石の山を見に行くしかないでしょ。

北岳アタックしかない！　そう決心し、一路、中央自動車道・甲府昭和へ走る。北岳は山梨県と長野県の境に位置する、南アルプス最高峰。標高3192メート

Digitized by Google

登頂から約5時間半、ラストシーンの小石の山にたどり着く。写っているのは私です。

ル。深田久弥が選んだ〈日本百名山〉にも数えられている。

甲府市内から国道56号線、南アルプス街道に入る。その街道をひたすら北上することおよそ一時間半、険しい頂きが続く南アルプスの山々が見えてくる。

南アルプス街道の終点、広河原、そこから北岳登山道に入っていく。

万が一に備えてフル装備で挑む。山を侮ってはいけない。天候はいつ急変するか知れない。十月初旬とはいえ北岳周辺には冬の足音がもうすぐのところまで聞こえていた。山頂付近で身動き取れなくなったときは頂上下の「肩の小屋」に泊まる必要もある。そういうあらゆることを想定して、いざ出発。

北岳は頂きからすり鉢状に険しく、厳しい絶壁がそそり落ちるタフな山である。昔はかなりのベテランしか登っていかれなかったそうだ。現在は登山道がしっかり整備され、中級者あたりでも充分楽しめる山になっている。

岩がゴロゴロしている。歩きにくい。滑り易い。登り初めて二時間ほどで二俣に出る。左に行くと西側の稜線から山頂にアタックすることになる。合田刑事ら捜索隊はこの左アタックだと思われる。

右へ行く。お花畑を通り、メチャメチャ険しくタフで厳しい岩稜を登って山頂下の肩の小屋に出るルート。昔ながらの、オーソドックスな道である。

岩山特有の急な登り道。麓からおよそ五時間ほどで肩の小屋に出る。頂上まであともう少しだ。しかし北岳はじつはここからが本当の試練、本当の闘いが始まるのだ。山頂は手の届く位置にある。が真の北岳の登り、ほとんど崖と言えるような岩稜が行く手に待ち受けている。

気合を入れ直して、いざ最後のアタックだ。残りは二百メートルちょっと……三〇分ほどでちょっとした広場のような場所に出る。山頂直下のもうひとつの肩だ。登り出た右に小石の山があるのを発見。(あぁここだったのか……)

そこはまさしく裕之が絶命していた場所。合田刑事らが駆けつけてきた場所だった。(本当の山頂ではなかったんだ)でも感無量。突然「マークスの山」のラストシーンの場所に出てしまったから少し驚いてしまったけど、自分の足でそこまでのぼってこれたことに小さな感動を憶えた。小石の山に佇む合田をとらえたヘリコプターからのショット。考えてみれば大勢の人たちが駆けつけてくる場面である。ある程度の広さのある場所でなければ撮影できない。山頂では絶対に無理だ。

小石の山は画面から感じるような大きさではなかった。撮影のために少し大きくしたのかもしれない。直径一メートルほどの小山である。小山の向こう、標高二九六七メートルの甲斐駒ケ岳が美しく、くっきりと姿を見せていた。裕之はあの山を見ないで死んでいったんだろうなぁ。そう思うと彼が急に可哀相に思えてきた。せめて甲斐駒ケ岳の美しさだけは教えてあげたかった。

裕之は山頂下、積み上げられた小石の山で絶命していた。

合田刑事らが裕之を追って北岳山頂へアタックを開始する。

Digitized by Google

和田誠　三谷幸喜の映画対談

これもまた別の話

●今月のお題「薔薇の名前」――後編

ミステリーの定番のようなトリックがたくさん出てきます

和田　次の日、本を持って逃げたベレンガーがいなくなる。探すんだけど見つからなくて、修道僧たちの間にも不安が募ってくる。

三谷　アドソはまた黙示録の予言の通りになって、ベレンガーが溺れて死んでるんじゃないかって言います。勘なんですけどね。

和田　「馬鹿なこと言うな」ってウィリアムは言うけど、セヴェリーノに呼ばれて風呂場に行ってみると、ベレンガーが風呂桶の中で死んでる。

三谷　あれも見立て殺人？

和田　お風呂で死んだので、偶然そうなったということじゃないですか。ミスディレクションで。ベレンガーも指と舌が黒くなってる。ここでベレンガーが左利きだったことと、炙り出しの筆跡も左利きだったことが分かる。それから、豚小屋で死体が発見されたヴェナンツィオを運んだ足跡が、ベレンガーの靴と一致することも。

三谷　左利きの人が書いたものって、本当に見分けがつくんでしょうか。

和田　独特の癖があるのかもしれない。ここでウィリアムはたちまち推理してしまう。ベレンガーがホモだってことは、修道院の中では周知の事実だった。彼が禁書で美青年のアデルモを釣って、たぶらかした。あの焙り出しは禁書のありかをアデルモに伝える暗号だったんですね。でもアデルモはベレンガーのオカマの相手をさせられたことをはかなんで、自殺してしまった。死ぬ前に、ヴェナンツィオに焙り出しの紙を渡した。その暗号を解読して禁書を手に入れたヴェナンツィオは、その本を読んでいるうちに死んだ。それを発見したベレンガーは、自分が疑われることを恐れて死体を豚小屋に運んだ。そして、自分でも問題の本を読んだんですね。「三人とも、本に殺されたか、本が原因で殺されたんだ」とウィリアムは院長に迫ります。

三谷　カットバックで、それが再現されますよね。ミステリー映画って、再現シーンが大抵あるじゃないですか。「オリエント急行～」もありました。「ナイル～」は再現ではなくて、ポワロが容疑者に「あなただって殺せたはずだ」と推理するところで、イメージの殺人シーンが出てくる。でも観客は、あとで本当の殺人再現シーンが出てくるのを知ってるので、同じシーンが二度出てくるはずはないから、この人は犯人じゃないなって分かってしまう。

和田　映画ファンもミステリーの読者も、慣れてくるといろいろ先読みできるから、作る方も難しいですよね。

三谷　『古畑任三郎』の時は、再現シーンは絶対出さないって決まりを作ってるんですよ。何故かというと、再現シーンとか回想シーンになると、その間、本来のドラマの時間が止まるわけですよね。それがリズムとして気持ち悪いなと思って。テレビの2時間ドラマのサスペンスって、よく最後ずっと回想が続くでしょう。あれが嫌なんです。崖の上で30分位、延々語り合ったりしますからね（笑）。

和田　これは本当に一瞬で、推理したことをあっさり見せてますね。

三谷　あまり速すぎて分からない位（笑）。

和田　ベレンガーは自分も具合が悪くなってきたことに気づいて、薬草入りの風呂に入ったけど、間に合わなくて死んでしまった。

三谷　結局、皆、指を舐めながら読むから、禁書についてる毒が回るってことですよね。

和田　最初の方にも二度ほど、指を舐めてページをめくってるシーンが出て来る。

三谷　僕はやらないんですけど、なんで舐めるんですか。

Digitized by Google

和田　めくりやすいから。全然やったことないですか？

三谷　ないです。スーパーのビニール袋とか、ゴミを出す時のあの袋は開く時舐めますけど。

和田　そうそう。やりますね。子供の頃読んだ本で、王様を毒殺するのに王様の愛読書の隅に毒を塗っておく、というのがあったんですよ。やっぱり王様が舐めながら読んで、段々弱っていくところが物凄い描写で書いてあるんです。童話なんだけど、凄く怖かった覚えがある。今思うと、挿絵がビアズレーだったみたいで、オスカー・ワイルドの小説だったんじゃないかと思うんですけど。「薔薇の名前」も殺人の動機だけはユニークだけど、方法としては割とオーソドックスな手を使ってる。

三谷　そういえばこの映画って定番というか、少年向けミステリー読本なんかに出て来そうなトリックが多いですよね。舐めるっていうのもよくありましたからね。切手の裏に毒を塗っておくとか。犯人は左利きだ、というのも必ずある。

和田　そうこうしてるうちに、異端審問官のベルナール・ギーが到着します。院長はもう死んだ修道士のことはこれ以上騒ぎにしたくなくて、証拠の焙り出しの紙を燃やして、ギーの出迎えに行ってしまう。ウィリアムとアドソの二人は、また塔の文書庫を調べに行くんですね。

三谷　柩みたいな重そうな箱が置いてある部屋に行く。その箱についてる骸骨の中で、どれが一番怖いか、ウィリアムはアドソに聞きます。この謎めいた感じもいい。

和田　怖い骸骨の目の穴を押すんですね。それには誰も手を出さないだろうということなんでしょうね。すると柩が動いて、文書庫に通じる地下道の入り口になる。

三谷　でも秘密の抜け穴っていうのも、凄く初歩的なミステリーの定番。

和田　少年小説っぽいですね。『トム・ソーヤー』みたいな。

三谷　この辺はエンターテインメントしてます。ドアがカチッと開いたり。

和田　「インディ・ジョーンズ」風。ここでネズミが出て来て、ネズミの後をついていけば目的地に行けるいうのが、またいい伏線になってるんですね。それでついに文書庫の中に入る。そこで禁書の山が見つかる。アドソが「どうして本が隠してあるんですか」って聞くと、「キリスト教の思想と異なるからだ」と答える。「疑問は信仰の敵だ」って。『お楽しみはこれからだ』にもいくつか書いたけど、この映画には名台詞が沢山あってね。

三谷　本を見つけた時、ウィリアムが凄く喜ぶじゃないですか。

和田　キャーキャー言ってましたね。

三谷　あれが良かったですね。まるで「子供のようにはしゃぐ」ってト書きが見えるようです。ただ難しいんですよね、子供のようにはしゃぐのって。

和田　確かに難しいと思います。この文書庫は迷路みたいになってて、ウィリアムとアドソはちょっとしか離れてないのに、もうお互いがどこにいるのか分からなくなるくらい、複雑に入り組んでる。

三谷　姿は見えなくてもお互いの声は聞こえるんですね。ウィリアムが「迷った時は左手で壁を触って行くと出られる」って言うんですけど、これは僕、本当に子供の頃に先生に教えてもらったんです。巨大迷路なんかに入って出られなくなった時は、とにかく左右どちらかの壁に手をついてそのまま伝って行くと、遠回りになるかもしれないけど必ず出口にたどり着くって。それを思い出しました。

和田　やってみました？

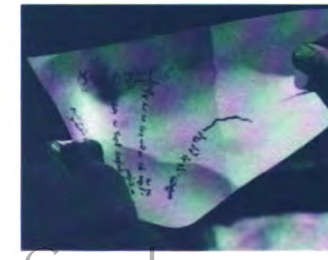
三谷　いえ、巨大迷路にはまったことがないので。でも理屈で考えると分かるんですよね。

つい「サリエリ」と呼んでしまうF・マーレイ・エイブラハム

和田　アドソは、自分のマントの毛糸みたいのを解いて、自分の居場所が分からなくならないようにそれを結びつけてから進んでいく。彼は初めて自分の考えでそれをやったんですね。

三谷　これは後でウィリアムに褒められる。

和田　さっき院長が燃やした暗号の紙は、ちゃんと写しがとってあるんだ、とウィリアムがメモを取り出します。「彫像の上に手を置き、四の一番目と七番目を押せ」って書いてあるんだけど、何の彫像か分からない。最後の



Digitized by Google

扉の開け方がどうしても分からないんですね。

三谷　暗号もミステリーの定番じゃないですか。ここまでくるともう、作者は凄く遊んでるというか、楽しんで書いてる感じがする。

和田　そうですね。初歩的な手を一通り全部使ってる。ここでおかしかったのは、何かガタガタ音がするんで、ウィリアムが「何だ」って言うと、アドソが「私の歯です」（笑）。

三谷　凄い音なんですよ、これが。

和田　結局暗号は解けなくて、何かがありそうな肝心の部屋には入れない。ウィリアムは迷路みたいな塔からの脱出方法をここで初めて考えるんだけど、アドソが糸を結んできていたので、これを伝って帰れることが分かる。ここで褒められるんですね。一方、食糧庫では、サルヴァトーレと例の娘が揉めてて、ランプをひっくり返して小屋が火事になる。そこに異端審問官のギーが来て、娘とサルヴァトーレは悪魔の儀式をしていたと言われて捕らえられてしまう。

三谷　サルヴァトーレと女の子が揉めてる時に、何回聞いても日本語で「ダメだダメだ」って言ってるように聞こえるんですけど（笑）。本当は何て言ってるんでしょうか。

和田　聞かないで下さい（笑）。さっき来たばかりなのに、ギーは凄く威張ってますね。

三谷　ギー役のF・マーレイ・エイブラハム（註①）は、「アマデウス」（84）のサリエリですよね。サリエリ役でメジャーになったし、僕が知ってるのもその頃からなんですけど、ビデオで昔の映画を見ると……。

和田　結構出てるんですよね。

三谷　沢山出てますよ。ニール・サイモンの「サンシャイン・ボーイズ」（75・V）には自動車修理工で出てくるし、「二番街の囚人」（75・未公開）っていうのにもタクシー運転手役で出てきて。ニール・サイモン系の映画にいっぱい出てるみたい。

和田　元々舞台俳優だから、ニール・サイモンの舞台に出てたのかも知れないですね。

三谷　でもその頃を見ると、今の彼が想像つかない。

和田　若くて？

三谷　というより華がないというか（笑）。オーラが全く感じられない。よくこの人をサリエリ役に抜擢したと思います。

和田　舞台でもサリエリを演じてたから。この人、サリエリ役でアカデミー賞もらって、オスカーを持ったまま地下鉄に乗ってたそうです、嬉しくて（笑）。

三谷　でもサリエリの印象が強すぎて、その後はあんまり……。

和田　そうですね。その後はこれと「誘惑のアフロディーテ」（95）くらいしか知らない。

三谷　あと可哀想なのは、この人名前が長いから、いまだに皆「サリエリ」って言う。日本だけかも知れないけど。

和田　（笑）。塔から出て来たウィリアムとアドソは火事になってる食糧庫に行って、ギーに捕まった娘とサルヴァトーレを見る。娘に罪はないのに何もしてやらないウィリアムを見て、アドソは文句を言います。「あなたは冷たい、娘を憐む心はないのか」って。すると「憐みで人は救えない」。

三谷　ああ言えばこう言う。

和田　（笑）。ここで初めてウィリアムは過去を明かします。昔、異端のギリシャ語を翻訳した男に無罪の判決を出したために、自分が投獄された。そこで拷問を受けて、自分の判決を撤回したっていう。その時彼を陥れたのが、ギーだったんですね。だから二人は敵対してる。

三谷　今度は派手な赤い服を着た教皇使節が到着します。よっぽど凄い論争が始まるのかと思ったら、「キリストの服はキリストの財産か」っていうテーマで……。

和田　その問題のために世界中から代表が集まってくる。彼らにとっては重要なテーマなんでしょうね。そうこうしてるうちに、植物学者のセヴェリーノがウィリアムを呼びにくる。前にベレンガーがどこかに持って行った禁書が見つかったんですね。

三谷　顔なじみの解剖医みたいな人。彼が実験室に帰ってくると、部屋が荒らされてるじゃないですか。でも肝心の本は置いてある。あの状況がよくわからなかった。

和田　セヴェリーノが急に帰ってきたからかな。彼は手袋をしますよね。ということは、本に毒が塗ってあることを、セヴェリーノも分かってたんですね。やっぱりスリラーの常套だけど、部屋のカーテンの陰に隠れてる人の足が見える。

三谷　その人にいきなり殴られるんですけど、何なんですか、あの凶器は。凄く痛そうです。

和田　天体儀みたいな、金属でできたやつでガシャーンと。

三谷　あれだったら、むしろ鈍器みたいなもので殴られたい。

和田　天体儀って言えば、話は戻りますけど、ショーン・コネリーが部屋に何か持ってるでしょう。院長がくるとパッと布で隠したりして。あれは何でしょうね。丸い、金属の。

三谷　あれで外を見てましたよね。

和田　天体観測でもしてたのかな。人に見られるとまずいことなのかな。

三谷　彼らは天動説だから……。

和田　そうか、地動説を唱えちゃいけないんですね。天体観測も異端ってことなのか。

三谷　サリエリの人が演ってるベルナール・ギーなんですけど、見た目もいかにも悪い奴っぽいし、資料にも「悪の化身」なんて書いてあるんですけど、どこがどう悪いのかがよく分からなかったんです。異端審問官ということ自体、かなり恐れられてるってことですか？

註①　F・マーレイ・エイブラハム（1940～）ペンシルヴァニア州ピッツバーグ生まれ。65年にLAの舞台にデビューし、数々のブロードウェイ、オフ・ブロードウェイの舞台に立つ。70年代に映画にも進出、「セルピコ」（74）「大統領の陰謀」（76）「スカーフェイス」（83）などに出演。84年の「アマデウス」で舞台でも演じたサリエリ役に挑み、アカデミー賞主演男優賞を受賞。以後の映画出演作には「虚栄のかがり火」（90）「ラスト・アクション・ヒーロー」（93）「サバイビング・ゲーム」（94）などがある。

Digitized by Google

和田　そうだと思う。怪しい奴はすぐに捕まえて火炙りにしたりするわけだから。ゲシュタポみたいなものじゃないですか。

三谷　顔も「フラッシュ・ゴードン」(80)でマックス・フォン・シドーがやった東洋風の宇宙人(註②)みたいなメイクでかなり怖い(笑)。

考えるのが難しい謎が解けるきっかけ

和田　会議が終わって、今度は審問会が開かれる。サルヴァトーレと、あの娘。それから娘と通じていた食糧庫のレミージョが殺人の罪を被せられて、裁かれるんですね。

三谷　ギーは、わざとウィリアムを裁判補佐官に指名します。憎々しい芝居をするんですよ、サリエリの人が。

和田　アドソは娘を助けて下さいとマリア様に祈ってる。ギーは皆どんどん異端者だってことにしちゃうんだけど、反対すると自分も異端者にされちゃうから、もう一人の補佐官である院長は仕方なく有罪に賛成する。ウィリアムは「ミレージョは罪深い男だが、殺人は犯していない」と主張するんだけど、ギーに反対することになるんで、具合が悪い。

三谷　判決に異議が出た場合は被告本人の自白が必要だから、ミレージョを拷問にかけるとギーが言いますね。ただこんなに思慮深いウィリアムなのに、ここで自分が異議を唱えたらミレージョが拷問にかけられるかも知れないってことに気づかなかったんでしょうか。彼もちょっと先走ったなって感じがしました。結局、ミレージョは拷問にかけられるのは嫌なもんだから、ギーの言うことを認めちゃうんですね。

和田　その辺の言い訳として、最後に「彼が好奇心のために行きすぎた罪を、神も許してくれるだろう」ってナレーションが出てくるのかな。

三谷　その最後のナレーション、どのことを言ってるのかなと思ってたんですけど。

和田　僕もちょっと分からなかったんだけど、今の話でこのことかな、と思って。

三谷　そうかも知れない。でもウィリアムが異議を唱えなかったとしても、結局ミレージョは異端ということで火炙りになってたんですけどね。

和田　三人の火炙りの準備が進んでる最中、今度は文書庫の司書、マラキーアがお祈りの最中に崩れ落ちて死ぬ。

三谷　彼が死ぬ前、裁判でウィリアムが「また殺人が起こる。今度死ぬ男も指と舌が黒くなってる」って言うんですけど、その通りに死んだので、今度はウィリアムが疑われる。

和田　ギーがそう解釈するんですね。

三谷　この辺りで、派手な格好の教皇が帰りますよね。その時、フランチェスコ会の人が「ウィリアムはああいう奴ですから」みたいなことを言うんですよ。感じのよかった人なのに、随分いやらしいこと言うんで、余計嫌な印象を受けたんです。

和田　それでもう、最後の部屋に行くんですね。前に扉の暗号が解けなかった部屋。

三谷　ここはどうして暗号が解けるんでしたっけ。

和田　二人が部屋でずっと暗号を考えてるでしょう。

三谷　ミステリーって、名探偵が真相に辿り着く時、必ず何かきっかけがあるじゃないですか。

和田　ここでは、マラキーアが死んで騒ぎになってる間にウィリアムとアドソが文書庫に向かう。歩きながらウィリアムがアドソに暗号を解明して見せますけど、きっかけってあったっけ。

三谷　このピンとくる瞬間って考えるのが難しいんですよ。たまたま聞いた言葉とか、たまたま見た何かとか、どうしてもご都合主義って感じがするんですよね。いつも苦労するんです。

和田　『古畑任三郎』の時もそうですか？

三谷　そうですね。何か必然性がないと。でも実生活で何かを見てハッと気づくことって余りないんですよね。いろんなことが総合されて、ある時、そうかって分かるのが普通なんです。全然ドラマチックじゃないんです。

和田　ここでもピンとくる瞬間はありませんでしたね。「四という言葉の一文字目と七字目を押せばいいんだ」とウィリアムが言う。「FOURには四文字しかない」とアドソが言うと、ラテン語だと四はQUATTUORだ」って。もう一つ分からなかった「アイドル」という言葉は、〝偶像〟の意味じゃなくてギリシャ語の〝鏡に映った像〟だと気づく。

三谷　この辺はもう一度見ないとよく分からないですね。記号論の人だから整合性があるのかも知れない。

和田　やっと暗号を解いて文字を押すと、カチャッと何か安っぽい音がして、扉が開く(笑)。

三谷　入ると、盲目のホルヘがいるじゃないですか。ついさっきまで下の部屋にいたような気が……(笑)。凄い勢いで裏を回ってここに来たんでしょうか。

和田　下で説教してましたもんね。

三谷　目は絶対見えてますね(笑)。

和田　それと、ここまでずっと白目だったのに、この時だけ瞳孔が見えた気がする。

三谷　何か近道があったのかも知れませんね。

和田　秘密のエレベーターとか(笑)。ホルヘは、「お前が探してるものは何だ」とウィリアムに聞きます。「『詩学』の第2部です」と答えると、「お前の勝ちだ」と言って本を出す。

三谷　ウィリアムは、すべての原因が、喜劇

註②「フラッシュ・ゴードン」のマックス・フォン・シドー

Digitized by Google

のことを書いた『詩学』という本だということが分かってたんですね。

和田　最初の方の台詞に出てくる、喜劇のことを書いた幻の本。ホルヘはこれを読ませてウィリアムも殺そうとするんですね。でも「手袋をしてるから、毒がついていても大丈夫だ」と言われて、ばれたことに気づく。ここでホルヘが急に身軽になるでしょう（笑）。突然、身を翻して逃げようとする。

三谷　追いかけて行って、ここでなぜホルヘがそんなに笑いを恐れるのか、という話になるんですよね。「笑いは恐れをなくす。恐れなくして信仰は成り立たない」とホルヘが言うと、ウィリアムは「書物を隠したところで、笑いはなくならない」と言う。

和田　アリストテレスの本には「俗悪な人間の滑稽さの中に真実を見いだす。それが喜劇である。彼らの欠点を良しとせよ」と書いてあるんですね。

三谷　ためになりますねえ。でも実は、前に一回見てるのに、この部分を全然忘れていて、ちょっと情けなかった。

和田　これの影響で『笑の大学』を書いたとは思わないけど、こういう思想が根本にあるから、それでこの対談で「薔薇の名前」を取り上げましょうって三谷さんが言ったのかと思った。

三谷　忘れてました。

和田　僕は台詞までは覚えてなかったけど、一番核になるのが笑いだってことは覚えてましたよ。

三谷　だけど、まさかこういう話になるとは思わないじゃないですか。僕はもう、とにかく変な顔がいっぱい出て来たということと、クリスチャン・スレーターが女に犯されるところ位しか（笑）。今回観直してよかったです。

和田　とにかく、ホルヘがベネディクト派の教えを守るために、教義に反する本を読もうとする人間を毒殺していたわけですね。ホルヘが逃げる時に本で燭台を叩き落として、文書庫を火事にしてしまう。塔は燃えるわ、向こうの火炙りにされてる方も燃えるわで大変なことになっちゃう。あっちもこっちも、っていうのは記号論なのかな（笑）。

三谷　そうかも知れない。火炙りになりながら、サルヴァトーレは歌を歌うんですよね、いい声で。

和田　火をフーフー吹いたりしてた。

三谷　おかしくて悲しいシーン。

和田　火炙りにされる人が三人も出て、修道院も燃えてるんで、民衆の動きが不穏になってくる。そうするとギーはすぐに馬車で逃げ出すんだけど、民衆に襲われて崖から馬車ごと落ちるんですね。ギーはただ落ちるだけじゃなくて、下にあった農耕機具か何かに突き刺さってましたね。

三谷　民衆がいきなり暴動を起こすのは、あの娘が火炙りになるから？

和田　今まで教会による圧政があったんでしょうね。娘が自分たちの仲間だからということもあるのかな。

三谷　燃えてる塔から先にアドソが脱出して、後からウィリアムも出て来る、どうやって逃げたかは説明せずに、ただネズミを見せるだけ。ここは上手いですよね。

和田　もっと前に、ネズミについていけば正しい場所に出られるっていうのがチラッと出て来たからね。あれが伏線になってたんですね、その時は気づかないけど。

日本で見立て殺人ミステリーを作るとしたら？

三谷　本はほとんど燃えちゃったんですけど、ウィリアムは火事の中から何冊か本を抱えて出てくる。

和田　火事場の馬鹿力で。

三谷　世界に一冊しかない本だったら、僕もやりますよ。でもアリストテレスの本は、ホルヘが燃やしちゃったんですね。

和田　本の毒がついてる部分を、自分でちぎって食べてたけど。その後、マントに火がついて本と一緒に燃えてました。

三谷　横溝正史ものも、犯人は大抵最後は自分で毒を飲んで死ぬ。

和田　見てるのかな、エーコは。

三谷　監督が市川崑さんの映画を見てるのかも知れない。回想のフラッシュバックも似たところがあったし。

和田　そうそう。早いフラッシュバック。そして、ウィリアムとアドソは修道院を後にする。村外れであの娘と出会って、アドソはちょっと振り向くけど行ってしまう。それでロングショットになって、「ウィリアムは別れる時に眼鏡をくれた」というナレーションが入る。「いま、その眼鏡をかけて書いている」っていうことは、アドソはもう老人になってるわけですね。

三谷　ナレーションの声は、クリスチャン・スレーターじゃなかった。

和田　もっと年とった役者がやってますよね（註③）。そして「彼女のことは忘れられない。だが私は彼女の名前も知らない」っていうナレーションの後に、「薔薇の名前」の文字が出てくる。非常にシンプルに考えれば、「彼女の名前も知らない」というのと「薔薇の名前」がひっかかってるから、彼女のこととも取れる。

三谷　どういう意味なんですか？

和田　記号論（笑）。解説には、これは中世の詩だと書いてありましたね。これは最後にラテン語でしか出ないでしょう。字幕では日本語で訳されてましたけど。「薔薇は神の名付けたる名　我々の薔薇は名もなき薔薇」って。

三谷　ラテン語って、アメリカとかイギリス

註③　ナレーションはドワイト・ウェイスト。ラジオ・ドラマや映画のナレーションを主に手がけた俳優。

註④　ルビイ・マーティンスン
ヘンリー・スレッサー原作『快盗ルビイ・マーティンスン』の主人公。このミステリー小説は和田誠監督「快盗ルビイ」の原作でもある。

Digitized by Google

の人は、どのくらい判読できるものなんでしょう。

和田　昔は、教養としてラテン語をやらされたんでしょう。

三谷　日本の古文みたいな。

和田　そうそう。漢詩を覚えるとか。ラテン語で、そのまま諳になってるのとか、あるんじゃないですか。小説の題がラテン語っていうのは結構ありますよね。

三谷　ファイロ・ヴァンスとかエラリー・クイーンとか、インテリの名探偵はやたらラテン語を会話に混ぜて博学なところを見せるんですよ。ちょっとイヤ味な感じがする。

和田　ルビイ・マーティンスン（註④）にも出て来ますね。医者には読める、っていうのが。

三谷　「薔薇の名前」では、結局アリストテレスの本は焼けてしまったけど、喜劇は世界に広まったということですね。

和田　ウィリアムがこの後、世界に喜劇を広めた（笑）。

三谷　そういうことなんですか。

和田　アドソと別れて、その後の消息は知らないけど、実はあのまま喜劇役者になったのかもしれない（笑）。

三谷　ポランスキーの「吸血鬼」（66・註⑤）みたいですね（笑）。

和田　この映画が面白いのは、ミステリーだからですね。記号論とか宗教とかを全部外すと、割合シンプルな謎解きものでしょう。

三谷　むしろ、陳腐と言った方がいいような（笑）。ミステリーの要素をいっぱい詰め込んで。でもそれは茶目っ気ということのような気もしますけど。

和田　そうですね。もともと難しい映画を作ろうという気はなかったでしょうね。壮大に重厚に作ってはいるけど。

三谷　暗号もあれば秘密の通路もあるし、見立て殺人もある。一人二役以外は全部ありますね。

和田　見立て殺人のミステリーには、『そして誰もいなくなった』とか『僧正殺人事件』なんかがありますね。

三谷　マザーグースものですね。

和田　『誰がロビンを殺したか』っていう小説もありました。

三谷　『悪魔の手毬唄』では、日本にマザーグースがないのでオリジナルで手毬唄を作ったらしいです。『獄門島』では俳句を使ってました。日本のミステリーの中で、自分が映画を作るんだったら、僕は『獄門島』か、夏樹静子さんの『Wの悲劇』をやりたい。両方とも映画になってるんですけど（註⑥）、原作と犯人が違うでしょう。

和田　「Wの悲劇」は原作を舞台化する劇団の話にしてある。

三谷　映画としては嫌いじゃないんですけど、勿体ない話だと思う。あの話こそちゃんと作ってほしい。

和田　僕は『本陣殺人事件』が面白いと思う。昔、片岡千恵蔵がやったし、ATGでも映画になってますけど（註⑦）。

三谷　あのトリックは映像でないと分かりにくい。

和田　現実にトリックが文章に書いてあるようにうまくいくかっていうのは難しいところですけどね。

三谷　話を戻しますけど、見立て殺人って、例えばマザーグースとか俳句とか、もとになってるものを知らないと面白さが分からないじゃないですか。

和田　そうですね。

三谷　だから、「薔薇の名前」は黙示録を使ってますけど、馴染みのない僕には、本当の面白さは分からないんじゃないかと思って。

和田　僕もそうなんです。恐らく、キリスト教徒の多い国だと、受け入れられ方が違うんじゃないかな。「セブン」（95）も七つの大罪を基にしてるでしょう。あれも欧米だと誰でも知ってることだと思うんですよね。

三谷　十戒くらいは知ってるんですけど。エラリー・クイーンの『十日間の不思議』は、十戒の全てを破っていく見立て殺人でした。映画になってるらしいけど僕は観てません（註⑧）。

和田　僕も知らなかった。日本だったら、誰でも知ってるようなものって何かな。流行歌かな。お伽話かな。でも『桃太郎殺人事件』なんて難しいでしょう。

三谷　猿とか雉とかに、どう見立てるか（笑）。

和田　『カチカチ山』ならできるか。舟を沈める。『さるかに合戦』で臼が落ちてくるとかね（笑）。

註⑤　ロマン・ポランスキー監督・脚本・主演のヴァンパイア・パロディ映画「吸血鬼」では、吸血鬼退治に乗り出した教授と助手が、結局自分も襲われて吸血鬼になってしまう。

註⑥『獄門島』は77年に市川崑監督、石坂浩二主演で、『Wの悲劇』は84年に澤井信一郎監督、蓬師丸ひろ子主演でそれぞれ映画化されている。

註⑦『本陣殺人事件』は、47年に松田定次監督・片岡千恵蔵主演で（映画のタイトルは「三本指の男」）、また75年に高林陽一監督、田村高廣主演で映画化されている。

註⑧『10日間の不思議』はクロード・シャブロル監督、オーソン・ウェルズ主演、"La decade prodigieuse"のタイトルで72年に映画化されている。日本未公開。

●次回の映画は…
「タイタニック」

Digitized by Google

チネットジャングル
ペーパーバージョン
このページは、so-netソネットのサイト、cinetチネットと連動しています。

電影森林

Bi-weekly Jungle

最終回　中島哲也・篇

http://www.so-net.or.jp/cinet/

●このページは、毎回、異なる若手映画監督が、自ら好奇心の対象をレポートしたり、インスピレーションを形にしたりする、ホームページ・チネットのひとつです。イラストは三留まゆみさん、宮崎祐治さんが交互に担当します。

「Beautiful Sunday」11月21日より渋谷シネ・アミューズにてロードショー

「Beautiful Sunday」という映画の話。1組の若い夫婦が登場する、ある日曜日の物語です。夫婦仲は良くありません。気晴らしに2人はキャッチボールをしようと思いたちますが、近所にはキャッチボールができる場所もありません。グローブとボールを持った2人はフラフラと町内をうろつきます。黙ったまま……話すことなど何もないのです。些細なことがきっかけで、死にそうな目にもあいます。最悪の日曜です。アメリカ映画なら、これからひと盛り上がりもふた盛り上がりもするところですが、この映画はこの時点で1時間をすでに10分ほど過ぎており、あと15分ほどでエンディングを迎えねばならない、さてどう終わるか!? これがプロデューサーに頭をかかえさせ、トロント映画祭ではボストン美術館のボー・スミス氏に「Masterpiece」と叫ばせ、岸部一徳さんに「監督は勇気がありますね」と言わしめた私の新作です。さてさて……どう、終わるのか。

案1・あっさり死ぬ。邦画においては結構メジャーなエンディングです。

案2・突然、歌い出す。なんだか映画的です。ラストが急にミュージカルになるというのは、アメリカのインディーズ映画なんかにもあって、ラストを無理矢理まとめるにはいいかも。

案3・ゲラゲラ笑う。リアリズムです。不幸な2人が顔を見合わせ、お互いの不幸顔に思わず笑う。涙を流すよりはましです。

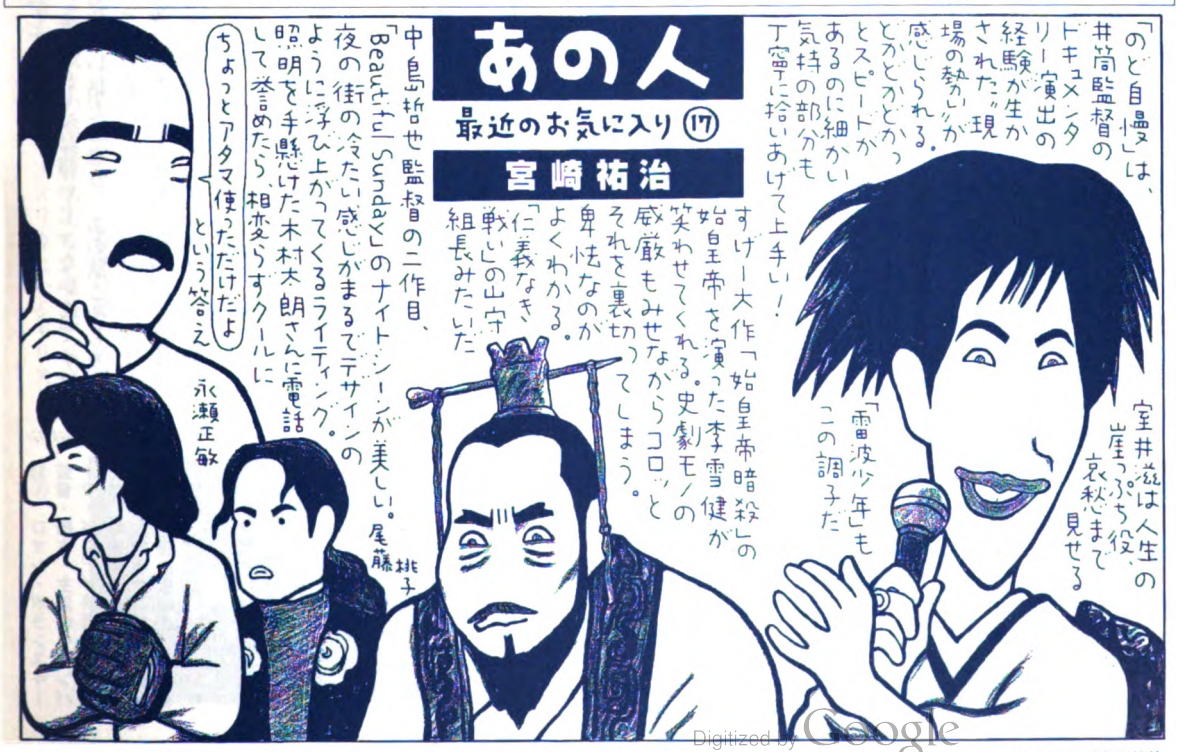
まあ、実際私がどんなエンディングにしたかは劇場でお確かめ下さい。

あっ、それから私の長編第1作「夏時間の大人たち」のビデオが12月21日に発売されます。「Beautiful Sunday」とはまったくタイプの違う映画です。あなたはどちらがお好みでしょうか。もしどっちも嫌いと言われたら、私には死ぬか歌うか、リアリズムで笑うかしかない。

あの人

最近のお気に入り⑰

宮崎祐治



イラスト／宮崎祐治

Digitized by Google

世界の映画祭へ向かって
国際映画祭での上映のために

林　加奈子

⑦国際映画祭での日本映画上映

1　映画祭行脚

いつでも初めて行く映画祭は、実はものすごく不安だ。まず気候が分からないので、支度をする時にどんな服を持っていったら良いのか、悩む。気候だけでなく、映画祭の雰囲気によってのドレスコード（フォーマルなのかカジュアルなのか）も、悩む。着いた後には、ホテルと会場の位置関係や、運営の状況を掴むだけでも時間がかかるし、日本映画がどのような感じで受けとられているのかも心配だし、映画祭のスタッフを知らないと、誰に何を聞いたら良いのかなかなか馴染めないので、不安で一杯になる。ああ、小心者。情けないがそんな、私。

でも、私が行ってみないで、誰が行くって言うんだ、くらいの開き直りで突き進むしかない。次に出席する事になる監督や関係者が、出発前に私が感じた不安を少しでも解消できるのなら、行けるチャンスを無駄にするのはあまりにもったいないから（幸運な事に私が今まで出席できた映画祭は、ゲストとして私などにまで、航空渡航費も宿泊費も出してくれた所がほとんど9割5分以上だったので）。同じ映画祭も2回目、3回目になってくると、サバイバルの方法も分かってきて能率良く仕事ができる。年とともに変わっていく映画祭の有り様を目のあたりにすることも出来る。

私は、映画祭にはランクが無いはずだと思っている。もちろん、規模という点からすれば、カンヌが最大だし、ベルリン、ヴェネチアと続くわけだが、映画祭の質そのものがカンヌが一番上で、ベルリン、ヴェネチアと続くわけではない。その作品が、何処をプレミアにしたら、最も海外で紹介される時に生かされるのか。大事な事は、そういう事だと思う。器である映画祭だけが重要なのではなくて、映画そのもの、そして映画が伝わる事こそがもっとも大切なものはずだからである。

もちろん、現実はそう単純なものではなくて、状況が分からないプロデューサーほど取り敢えずカンヌ、とおっしゃる。配給会社にとっては、日本での公開の時期というタイミングがあるので、プロモーションの助けになるように、それまでに間に合う映画祭に出したいと願う。これは、まあ当然。日本の映画産業が、今こうある限りは仕方の無い事だ。字幕を付けたり、英語のプレスを作成したり、海外で上映するための費用を捻出する事、それ自体がそれぞれのプロダクションにとっては、大変な事だからだ。

映画祭にとっても、映画業界でのステータスを上げていくためには、プレミア上映をする事で、発見の場として評価されるのだから、新しい作品が欲しい。でも、映画祭が開かれる地域に住む一般の人々にとっては、カンヌで紹介済みだろうと、プレミアだろうと、自分たちにとっては、そこが発見の機会なのである。映画祭は、そこのところの作品選考のバランスが難しい。国際映画祭というのは、国内での地域との密接な関係があって、それに加えて国際的な触覚も必要不可欠なので、ディレクターの役割というのは、ただ映画を見て面白い作品を集めるだけでは十分ではない。それだって、ものすごく大変な事だけれど。資金面、運営面での調整でも、相当な力量を要求される。

一年の内に素晴らしい作品がたくさん作られていれば良いのだが、大傑作はそう何十本も同時期に出来ないし、仮にあったのだとしても、全ての映画を映画祭ディレクターが選考できるわけでも無いから、映画祭どうしで取り合いになってしまうことも少なくない。それぞれの場所と土地に合った「ならでは」の作品が集められれば成功なのだが、日本映画も最近では両方には出せない映画祭から招待を受けて、どちらにしようか、うれしい悩みを抱える作品が出てきている。

2　日本映画プロモートの現状

ここで、日本では、映画祭に出すにあたっての体制が整っているのか、という切実な問題が思い起こされる。私が他の国々の自国映画を紹介（プロモート）している人々から話

Digitized by Google

を聞いている限りでは、日本は相当、かなりに立ち遅れた体制だと、いや体制その物が無いに等しいと言わざるを得ない。

カナダならテレフィルム・カナダ、スイスならスイス・フィルム、オーストラリアならオーストラリア・フィルム・コミッション、またはインドやトルコ、釜山映画祭のように国際映画祭が自国の映画紹介に熱を入れて、積極的に活動している所もある。スウェーディッシュ・フィルム・インスティテュートの以前部長を務めていた人と、ベルリン映画祭で会った時に聞いたところによれば、スウェーデンではフランスのように、入場料金のフィードバック・システムが確立しているそうだ。外国映画、国内での製作映画に関わらず、チケットの数パーセントが、自動的にプールされて、その年間での合計金額に加えてそれと同額の国家予算を加えた総額が（つまりダブルコストになって）、次年度の自国映画の海外プロモーションのための経費に当てられる。ということは、とにかく映画の観客が増えれば、海外プロモーションの費用が自動的に増えるという仕掛けなわけだ。日本から見たら、夢のようなシステムである。

スウェーデンで一年に製作される映画の本数は、長編でもおおよそ20～30本ほどで、脚本の段階からフィルム・インスティテュートが関わって、製作費そのものへの援助もあるので、日本とは基本的に状況が違って、今何処で何が作られているか、フィルム・インスティテュートでほとんど全ての製作状況を把握出来ている。どの作品をどの映画祭に出したら良いのかの権限まで彼らが持っていて、映画祭から選ばれて参加が決まれば、プロモーション費、現地でのレセプション経費、監督の渡航費用などまで一切は、スウェーディッシュ・フィルム・インスティテュートが負担する。もちろんそこを頼らないで独自に映画祭に出す事も自由だが、その場合には出品が決まっても費用は自前になるそうだ。機関はプロモーションするのが仕事なのだから、映画祭へのトライにあたっては、意地悪するわけもなく、映画祭が選びやすいような情報なり状況なりを整えてくれる。

日本でも海外でのプロモーション費用を、国が援助できるような、つまり現実に参加上映が決まった時に使うための費用がプール出来るようなシステムが出来たら、どんなに生かされる事だろう。言うまでも無いが、外国を真似するのが正しい道だとは思わない。でもこれだけの現在の国際映画祭への関心と、それに応じて海外からの日本映画への注目の高まりを目の当たりにすると、何か対応策が無いものかと、期待されても当然だと思う。

ずっと以前には、日本映画は各メジャー会社が製作しているものがほとんどだったから、大会社には国際部が存在するけれど（そこだって海外プロモーションの経費が十分あるところは無い）、特に最近では、独立プロの作品が映画祭に歓迎される事が多いので（それも製作費一億円以下の）、外国へ出すノウハウが、システム化されていないという決定的な問題が立ちはだかっているのが現状だ。

3　製作への援助

製作そのものにしても、ヨーロッパの幾つかの国々で行われているような、政府が製作に積極的に資金援助するシステムは、まだまだ整っていない。無いとは言いませんが。一度、ベルリン映画祭のフォーラムのティーチインの時に、これについては興味深い話し合いが持たれた事があった。日本の場合には「製作援助が無いにも関わらず、それでも良い作品が出来るのか、それとも製作援助が無いから、それだからこそ良い作品が次々と出来るのか」。これはなかなか面白い命題だ。

ドイツの映画監督や製作者にとっては、日本映画の状況から、こんな事をきっかけにして政府からの資金援助が少なくなったり絶たれたりされては、かなわない。それに日本にとっても政府が出してくれるのなら、それに越した事はないのだから（まあ、どう出すかが問題なのですが）、この場で結論を出す事は危険（不可能）だったのだが、確かに経済的にギリギリで作るからこそ、本当に作らなくてはならない気持ちが、製作者側からもギリギリの状態で発揮されて、後戻り出来ない四面楚歌の状況の中から、スゴイ作品が生まれてくる事もあり得る（回りくどい書き方）。注文を受けて、ただこなして出来上がった作品には、作家性もテーマへの深い取り組みも、期待できなかったりする。もちろん、政府にもそのギリギリのギリギリ加減を理解して、製作援助してくれる事が出来るのなら、問題ないのだが。しかし、現実には審査やら手続きやら見識者とやらの選考も、機能するまでには様々の難関がある。

4　映画祭の動向

今まで繰り返して述べてきたように、映画祭はナマモノである。生きているのでどんどん変わっていく。多少運営が混乱していても、作品選考が魅力的なら、参加者は満足してしまうのだが、去年まで素晴らしくても次の年に空回りしてしまったり、逆に、観客も少なかったような映画祭が、いきなり熱気を帯びたりというのも珍しくない。

例えば、ギリシャのテサロニキ国際映画祭

世界の映画祭へ向かって　目次
8月下旬号
「第1回　映画祭への橋渡し」
9月上旬号
「第2回　各国映画祭の状況（1）」
・モントリオール世界映画祭
・トロント国際映画祭
・ヴァンクーヴァー国際映画祭
・ベルリン国際映画祭
・ロッテルダム国際映画祭
9月下旬号
「第3回　各国映画祭の状況（2）」
・エーテボリ国際映画祭
・テサロニキ国際映画祭
・トリノ国際映画祭
・ブエルトリコ国際映画祭
・香港国際映画祭
・シンガポール国際映画祭
・インド国際映画祭
・シドニー国際映画祭
10月上旬号
「第4回　各国映画祭の状況（3）」
・カンヌ国際映画祭
・ナント三大陸映画祭
・ヴェネチア国際映画祭
・ロカルノ映画祭
・タオルミーナ国際映画祭
10月下旬号
「第5回　各国映画祭の状況（4）」
・ハワイ国際映画祭
・モスクワ国際映画祭
・カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭
・イスタンブール国際映画祭
・サン・セバスチャン国際映画祭
・メルボルン国際映画祭
・オーバーハウゼン国際映画祭
・ヘルシンキ国際映画祭
・サンパウロ国際映画祭
・ミュンヘン国際映画祭
・ウェリントン国際映画祭
・ニュージーランド国際映画祭
・シカゴ国際映画祭
11月上旬号
「第6回　各国映画祭の状況（5）」
・ロンドン映画祭
・釜山国際映画祭
・サンフランシスコ国際映画祭
・クレルモン・フェラン国際映画祭
・ニューヨーク映画祭
・エルサレム映画祭
・アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭
・フィゲラ・ダ・フォス国際映画祭
・ペザロ国際映画祭
・ソチ国際映画祭
・ラ・ロシェル映画祭

Digitized by Google

では、32回目までは国内の作品だけを集めたドメスティックな映画祭であったのだが、33回目から国際映画祭となってヤングシネマのコンペ部門も設けられた。私は33回、35回、37回と出席したが、前2回は映画祭の規模は割と大きいのに、観客動員数は少なくて劇場はどちらかと言えば閑散としていたのだった。ところが36回に出席した「おかえり」の篠崎誠監督が、テサロニキは観客が多かったとおっしゃるではないか。37回目に参加してみて、その言葉は本当だと実感した。少し各国映画祭の状況の所でも触れたが、これはディレクターのミッシェル・デモプーロス氏が、第一回目の釜山国際映画祭に出席して、その熱狂的な若い観客に刺激を受けて、大学などにも告知を働きかけ、広報に力を入れて、見事に課題を克服したのだった。映画祭は互いに影響し合っている。そして変化していく。

ここで釜山国際映画祭を再び例にとって、国際映画祭の成り立ちと動向を追ってみたい。今年3回目にして21万5千人の観客を動員し、日本からも200人以上もの関係者が押し寄せた釜山映画祭だが、事の始めはそう簡単では無かったのだ。

最初に正式な形での話があったのは、96年の2月。ベルリン映画祭でのことだった。スイスのバーゼルに住む韓国人で、パリのシネマテーク・フランセーズでの韓国映画大特集上映でもコーディネートをなさったイム・アンジャさんからキム・ジソク氏を紹介された。彼は温厚な紳士で大学の教授だが、彼がプログラマーとして作品選考をする、日本にも選びに行きたいので協力して欲しいということだった。その時点で問題となったのが、果たして日本映画が映画祭で上映される事が本当に可能かどうかという事だった。日本に選考には行きたいけれどもまだ正式な承諾が取れていないので、もしその後駄目になったら、私からも日本のプロダクションに説明して代わりに謝って欲しい、と頼まれた。私としては承諾を一刻も早く取って、上映を前提とした選考に来て欲しいと頼み返したのだが、どうやらニワトリ・タマゴ論になってしまいそうで、とにかくコマを進めなくてはと、彼の来日を快く受け入れる事にした。だって、選考する人が魅力ある日本映画を見て下さってそれらの作品を何としても上映したいという熱意が具体的になればなるほど、成就の可能性が強くなると思ったからだ。トラブルは誰でも嫌だが、突き進むしか道は開けない。真剣に誠実に、信じる事をやっていれば、そしてその事が良い事ならば、やがて人が道を開いてくれる時が必ずくるはずだと信じたかったのだ。

さて、何を見て頂くか。9月の開催と言えば、トロント、アジアフォーカス福岡、ヴァンクーヴァー、ニューヨークとも微妙に重なる。東京国際映画祭の直前でもあった。一回目からいきなり日韓問題を題材にしている作品ばかりを、おもむろに紹介するのもナンセンスだ。国際映画祭なのだから、日本映画で国際的に評価を得ている作品を堂々と見てもらって、選んでもらえばいい。

釜山が敢えて映画祭の集中している9月末に開催を決めたのには、釜山市側の事情があった。韓国ではお月見の季節が大事な休日で、

ときめいて
《映像のプロへ》
一直線

■映像科 創作科 技術科 美術科
■俳優科
■声優科（三科とも全日制2年）

日活芸術学院

入学願書受付中

キャンパスガイド〈体験入学〉
11/8(日)
11/22(日)
12/6(日)

参加ご希望の方は事務局K係宛ハガキ、電話、FAXなどでお申し込み下さい。

〒182-0023 東京都調布市染地2-8-12日活撮影所内
日活芸術学院 事務局K係
TEL:0424-85-2443 FAX:0424-87-1210
http://www.nikkatsu.com/school.htm

入学資料（無料）をお送りします。上記宛ハガキ、電話またはFAXでお申込み下さい。

日活製作第三弾
『きみのためにできること』
'99新春公開!!
監督：篠原哲雄　原作：村山由佳（集英社刊）
出演：柏原崇・真田麻垂実・川井郁子・岩城滉一
■日活芸術学院協力作品

Digitized by Google

その頃一斉に秋の新作映画の公開が出そろう。だからまずその時期より前でないと、市内の劇場が借りられない。また夜の野外上映では、この時期を遅らせると雨も多くなり寒くなるので、集客が難しい。つまり福岡や東京に宣戦布告したわけではなかったのだった。

日本側のプロダクションにしても、韓国では日本映画公開の確約が出来なかった（今や、過去形！）ので、映画祭の時にだけ上映してもらっても、その後の配給・公開に直ぐに結びつくわけでないし、第一初めての映画祭とあれば、それだけでも引いてしまいがちだった。そんな所に出して何か良い事あるのか、と疑心暗鬼でいらした担当者も少なくなかった。今となっては笑い話だけれど、実際調整は大変だった。

釜山映画祭にとっても、アジアでの国際映画祭として行うからには、日本映画を入れられなければ国際的にも立場がない。最終的にはオーケーも出て、日本からは「おかえり」（篠崎誠）「眠る男」（小栗康平）「お日柄もよくご愁傷さま」（和泉聖治）「東京フィスト」（塚本晋也）「渡り川」（森康行、金徳哲）「水の中の八月」（石井聰亙）「MEMORIES」（大友克洋、森本晃司、岡村天斎）「甲殻機動隊」（押井守）「沈黙の艦隊」（高橋良輔）そして短編も含めて15本が上映された。特にアニメーションは物凄い人気で前売り券だけでソールド・アウトになってしまった程だった。

釜山映画祭の第1回目は大成功をおさめて、その噂はたちまちに広がり、2回目はさらに多くのゲストが集まったのは、キネマ旬報でも、また新聞などでも報道された通りだ。毎年の審査員の顔ぶれがまた魅力的で、あの人たちなら何をどう選んでくれるのかと、ワクワクしてしまうようなメンバーで構成されている。セルゲイ・ホドロフ、アッバス・キアロスタミという監督たちも、これから韓国で積極的に紹介していくべきと、映画祭側がタイミングを考えて、戦略を持って人選している。そうなると、その盛り上がりを高く評価して、釜山市が積極的に参加する姿勢も見えてきた。釜山近郊からの参加者だけでなく、年を重ねるごとに、首都ソウルや他の都市から、映画祭目当ての一般の参加者も増えてきた。今年12月にはシネマテークも開館が予定されている。映画祭が年に一度の一過性のイヴェントに終わらず、長期的な文化振興と映画産業への活性化を目指しているのだ。

そうなると、どこの国でも同じようなもので、どこかが一度成功すると、他でも別の映画祭を計画し始める。その後韓国では、女性映画祭、児童映画祭、ファンタスティック映画祭などなどが企画されて、我も我もと動きだした。でも釜山の成功には並ならぬ努力が水面下であったのだ。例えば、映画祭のプロである海外からのアドヴァイザーを雇ったり、何年も前から真面目に他の幾つもの映画祭を研究したり、韓国の人たちが一丸となって下準備をしていたのを、私たちは知っている。だからこそ皆が協力したのだし、海外からも多くのキー・パーソンが参加したのだ。次に続いて映画祭を行おうとする人たちが、その苦労を見ずに美味しい結果だけを見て、成功だけを欲しがっているのだとしたら、無理な話だ。いや、これは他人事ではない。

映画祭に作品を出そうとする側にとっては、何のために映画祭に出すのか、出すことでどうしようとしているのか、という明確なビジョンが必要不可欠だ。このことについては、具体的に次回から引き続いて述べていくつもりである。映画祭側にとっても、何を目指して映画祭を行うのか、その動向がハッキリ感じられる映画祭は、その未来がまぶしい。出そうと思う側からもアプローチしやすい。もちろん簡単に選んでもらえるとか、アプローチが容易だということではなくて、どう挑戦すべきか戦略を立てやすいという意味である。

（次号は「映画祭上映のプロセス」）

今年の釜山映画祭で大盛況となった「のど自慢」の野外上映（◎撮影＝裵昭）

Digitized by Google

World Report 1998

「ラッシュアワー」

from U.S.A.

CONTENTS

from U.S.A.
●Rush Hour
●Ronin
●A Soldier's Daughter Never Cries
●Urban Legend
●Pecker
●One True Thing
●Touch of Evil
●99年の夏は少数精鋭？
●PFE売却の交渉経過
On the Production
●メル・ギブソン、テレビシリーズの映画化作に主演 "Hogan's Heroes"
●キートンの「セブン・チャンス」リメイク "The Bachelor" と "I Walked With a Zombie" リメイク
●"Supermann Lives" 続報
ほか
from ASIA
●台北映画祭㈠ 1998台北電影奬結果
from JAPAN
●「刑法三十九条」
●アジアを代表する3人の監督のプロジェクト
●「GUNDRESS」
●「制覇」

ジャッキー・チェンの本格的アメリカ映画主演作

ジャッキー・チェンとクリス・タッカー共演の「**ラッシュアワー**」**"Rush Hour"**（ブレット・ラトナー監督）が、9月18日にニュー・ラインの配給で公開され、9月封切りの作品としては90年代有数の大ヒットとなっている。

リー（チェン）は、香港で活躍中の凄腕の刑事で、中国の駐米大使の娘の誘拐事件の捜査のために呼ばれる。しかし、これを越権行為と受け取ったFBI側は、リーを事件から遠ざけるべく、ロサンゼルス市警から預かっていた迷惑者のカーター刑事（タッカー）と組ませる。

コンビと言うには、息の合わないことおびただしいリーとカーターではあったが、言うまでもなく、彼らが事件の解決の中心となっていくのである。

出来については、ニューヨークの批評家からの反応は厳しく、ほとんどが否定的見解になっている。チェンに関しても、以前の彼の作品を知る者にとっては不満を感じるだろうとの指摘が見られたりする。

だが最初に記したように、興行の面では9月公開の作品として特筆すべきスタートを飾っている。具体的には、最初三日間で三三〇〇万ドル、一週間では四二八三万ドル余の興収で、これは9月の新作の出足としての新記録になる。

どうしても9月は、サマー・シーズンの後の一段落あるいは停滞の時期になることが多く、90年代において9月の新作は、5本しか累計興収五〇〇〇万ドルを突破していない。このことを考えれば、いかに「ラッシュアワー」の出足が並外れているかがご理解いただけるだろう。

しかも第二週においても、四割弱の減とは言え、二六六九万ドル弱の売り上げを追加し、封切りから二週にわたり首位に君臨している。ほぼ間違いなく、「セブン」と「ファースト・ワイフ・クラブ」に次ぐ、90年代9月公開の、興収一億ドル突破のメガヒットとなるはずである。

ジャッキー・チェンがアメリカ資本の映画に主演するのは、決して今回が初めてではないが、彼の主演作品としては、これがアメリカ最高のヒットとなることであろう。

現代の浪人たち

働く機会を奪われた各国の諜報員、すなわち現代の浪人たちを主人公としたタイトルもズバリの「**ローニン**」**"Ronin"**（ジョン・フランケンハイマー監督）が、9月25日にMGMの配給で公開された。

モンマルトルに、CIAに勤

Digitized by Google

めていたサム（ロバート・デ・ニーロ）が到着する。彼は、アイルランド人のディードル（ナターシャ・マッケルホーン）に呼ばれて来たのだが、約束の場には、フランス人のヴィンセント（ジャン・レノ）、ドイツ人のグレゴール（ステラン・スカースガード）などがいた。

サムを含めた全員が諜報活動の経験者で、今では働く場所をなくしていた。そんな彼らが集まったのは、アイルランドのテロリストとロシアのマフィアが取り引きするブリーフケースの奪取という、依頼人不明の仕事のためである。

各自は、それぞれの特殊技能の発揮が期待されていたのだが、いざ始めると裏切り者が現われ、

「ローニン」

フランス全土にまたがるチェイスへと発展していく。

タッチとしては60年代の作品を思い出させるとも言われているが、ニューヨークの批評家からは、まずまずの好評を集めている。ただし、せっかくの顔ぶれの活用が不十分との見方もあるにはある。

興行の方は、最初三日間の興収が一二七〇万ドル弱で、二週目の「ラッシュアワー」に次ぐ成績となっている。これは、ここ最近のジョン・フランケンハイマー作品の中では、飛び抜けた数字で、まだまだ健在であると認知されるといいのだが。

ジェームズ・アイヴォリーの新作

「日の名残り」や「サバイビング・ピカソ」のジェームズ・アイヴォリー監督の新作「ア・ソルジャーズ・ドーター・ネヴァー・クライズ」"A Soldier's Daughter Never Cries"が、9月18日にオクトーバーの配給で公開された。

いつも通りイスマイル・マーチャントが製作を担当し、ケイリー・ジョーンズの原作小説からの脚色には、アイヴォリーと共にルース・プローワー・ジャブヴァーラが当たっている。なおケイリーは、「地上より永遠に」で知られるジェームズ・ジョーンズの娘である。

フランスのパリに暮らすアメリカ人のウィリス家の物語である。父のビル（クリス・クリストファーソン）は、太平洋戦線での経験をひきずってはいたが、妻のマルチェラ（バーバラ・ハーシー）は快活で、一人娘のチャンヌ（子供時代はルイザ・コンロン、成人後をリーリー・ソビエスキー）はビルに厚い信頼を寄せている。

こんな一家に、六歳の男の子ベノイト（サミュエル・グルエン）が養子としてやってくる。未婚の母から手放された形だが、それまでに何度か養子先でトラブルを起こしてきた彼は、いつでも出ていける用意をしていた。一方で彼の存在は、チャンヌに嫉妬を抱かせることとなり、ウィリス家に二人の問題児が生まれる結果となる。

とは言え、次第にベノイトは一家に馴染むようになり、ビリー（ジェシー・ブラッドフォード）として、掛け値なしの家族の一員に成長していく。ところがその一方でビルが健康を害し、治療のために一家はアメリカに戻っていく。そこでチャンヌとビリーそれぞれが思春期を迎えるのであった。

このように、本作は十年以上にわたる家族の一代記なのだが、かなり原作者自身の体験が反映されているそうである。それはともかく、映画化版についてのニューヨークの批評家の評価は、おおむね肯定的だが、絶賛というほどではない。

興行の方は、五館から五十館というペースで限定規模から広げられているが、「日の名残り」のような浸透はむずかしそうだ。

キャンパスが舞台のホラー

9月25日、「ラストサマー」と同じ製作会社による新たなホラー映画「アーバン・レジェンド」"Urban Legend"（ジェイミー・ブランクス監督）が、ソニー（トライスター）の配給で公開された。

舞台はペンドルトン大学、ここでは25年ほど前に錯乱した教授による学生の大虐殺があったとされているのだが、現在ではその痕跡は見つけられない。ただ、仲のいい好奇心あふれる学生たちは話題にしている。

そんな彼らは、ウェクスラー教授（ロバート・イングランド）の授業で、新たにできる言い伝えは、現代の戒めなのだと教えられる。斧を持った男が車の後部座席に隠れているという話にも意味があるとのことだが、何とそれにそっくりな殺人事件が起きてしまう。そして、次々と言い伝えが現実化していくのだ。

こういった本作へのニューヨークの批評家の評価は厳しく、ほとんどが否定的見解である。興行では最初三日間で一〇五一万ドル余の興収だが、「ラストサマー」には及ばないだろう。

ジョン・ウォーターズの新作

「ピンク・フラミンゴ」のジョン・ウォーターズ監督の新作「ペッカー」"Pecker"が、9月25日にファイン・ラインの配給で公開された。

ボルティモアのサンドイッチ店で働くペッカー（エドワード・ファーロング）は、仕事のかたわら、趣味として客や近隣の様子をカメラに収めていた。彼の一家は変わり者ぞろいではあるが、まあまあ平穏な生活を送っていた。

ところが、ニューヨークのアート・ディーラーのロレイ（リリ・テイラー）が、なぜかペッカーの写真を気に入り、展示会の開催を進言してくる。さらにそれが、どういうわけか大歓迎され、ペッカーは一躍名士になってしまう。そして……。

かつてのウォーターズ作品を知る者には、パワーの低下を感じさせるとも言われているが、ニューヨークの批評家の評価は、おおむねで好評である。ただ興

Digitized by Google

行の方は、一八四館という公開規模で最初三日間の興収が五四万ドル余と、あまり勢いを感じさせるスタートではない。

●M・ストリープ、R・ゼルウィガー共演作

レニー・ゼルウィガーとメリル・ストリープが母娘役で共演の「ワン・トゥルー・シング」"One True Thing"（カール・フランクリン監督）が、9月18日にユニヴァーサルの配給で公開された。

エレン（ゼルウィガー）は、ニューヨークでライターとしてのキャリアに邁進しているが、父のジョージ（ウィリアム・ハート）から、母のケイト（ストリープ）が癌の手術を受けるので、家に戻ってきてほしいとの連絡を受ける。

おりしも、ボーイフレンドとの仲がこじれていたエレンは、気分転換になるだろうと応じるが、仕事は続けるつもりであった。だが彼女の思惑に反して、実家での滞在は長くなっていく。母の家事を手伝わざるを得ないような状況だったのである。

何よりもエレンにとっての困難は、母との時間の共有を、どうこなしていくかであった。というのもエレンは、文芸評論家で大学教授の父には憧れと尊敬の念を抱いていたが、典型的な主婦として過ごしてきた母のようにはなりたくないと考えていたからである。

とは言え、強いられたような形の母との日常生活を過ごすうちに、次第にエレンは両親の本当の姿に気付いていくのである。

この作品は、ニューヨーク・タイムズのコラムニストであった女性の小説を映画化したものだが、仕上がりについてはニューヨークの批評家から歓迎され、大多数の肯定的見解を集めている。特に、アカデミー賞の受賞経験のあるストリープとハート両名を相手とした、ゼルウィガーの演技は高い評価を得ている。

ただ興行の方は、地味な内容ということもあってか、最初三日間の売り上げが六六一万ドル弱と、やや期待を下回るスタートとなっている。その後の維持も厳しいようである。

「ワン・トゥルー・シング」

●「黒い罠」完全版公開

オーソン・ウェルズ監督の最後のアメリカ映画とも言われている「黒い罠」の完全版が、9月11日より、オクトーバーの配給で一般に公開されている。

今回のニュー・ヴァージョンは、ウェルズが書き残していた映像と音の両面にわたる編集メモにそったもので、上映時間は一時間五一分と、やや従来の版よりも長くなっている。

とは言え、目立って新しいシーンが追加されているわけではなく、変化が認められるのは、幾つかの場面におけるサウンド処理である。

中でも際立っているのが、ロング・テイクで有名な、冒頭の爆弾を仕掛けられた車の移動シーンで、ヘンリー・マンシーニによる音楽の代わりに、その場の様々な音が優先されている。また、画面に重ねられていたタイトルが除去され、いっそうカメラワークが堪能できるようになったとのことである。

さらに、全般に会話部分が明瞭になり、映像も鮮明になっているそうで、早く日本でも公開してもらいたいものである。

●99年のサマーシーズンは少数精鋭？

気の早い話と思われるだろうが、99年のサマー・シーズンの見通しが伝えられてきたので、紹介しておきたい。ここ二、三年は夏と言えば、多額の予算をかけた（メガバジェットの）超大作が次々と公開されて市場は大混雑というのが通例だったのだが、どうやら来年は異なった様相になるようである。

言いかえれば、封切り本数は減って、特撮に頼った作品からストーリー重視の映画が用意されるということになる。あるいは、低予算のホラーや子供向け映画が増えるだろうと見られてもいる。

とりあえず、変更は当然あるものと思われるが、9月末の段階で予定されている、来年夏のスケジュールを以下に掲げみよう。

"Deep Blue Sea"
監督レニー・ハーリン
（ワーナー）
5月7日

"The Mummy"
主演ブレンダン・フレイザー
監督スティーヴン・ソマーズ
（ユニヴァーサル）
5月21日

「スター・ウォーズ／エピソード1 The Phaotom Menace」
主演ユアン・マクレガー
監督ジョージ・ルーカス
（二十世紀フォックス）
6月4日

"The Muse"
主演シャロン・ストーン
監督アルバート・ブルックス
（オクトーバー）
6月11日

"Thomas Crown Affair"
主演レネ・ルッソ
ピアース・ブロスナン
（MGM）

「オースティン・パワーズ2」
主演マイク・マイヤーズ
（ニュー・ライン）
6月18日

"Tarzan"（長編アニメーション）
声の出演トニー・ゴールド・ウィン
グレン・クローズ
監督ケヴィン・リマ
クリス・バック
（ブエナ ビスタ）

"Ride with the Devil"
主演スキート・ウールリッチ
監督アン・リー
（ユニヴァーサル）

"Guy Gets Kid"
主演アダム・サンドラー
監督ラジャ・ゴスネル

Digitized by Google

（ソニー）

7月2日

"The Wild Wild West"

主演ウィル・スミス

監督バリー・ソネンフェルド

（ワーナー）

7月9日

"Garrie, Say You're Sorry"

「キャリー」の続編

主演エイミー・アーヴィング

監督ロバート・マンデル

（MGM）

7月16日

"Eyes Wide Shut"

主演トム・クルーズ

ニコール・キッドマン

監督スタンリー・キューブリック

（ワーナー）

"Inspector Gadget"

主演マシュー・ブロデリック

監督デイヴィッド・ケロッグ

（ブエナ ビスタ）

7月23日

"Bowfiger's Big Thing"

主演スティーヴ・マーティン

エディ・マーフィ

監督フランク・オズ

（ユニヴァーサル）

8月については、もし間に合えば13日の金曜日に**"Freddy vs Jason"**が、ニュー・ラインから公開されるらしいのだが、何よりも99年の夏は、新しい「スター・ウォーズ」が中心になることは間違いないだろう。

●PFE売却の交渉経過

ここ最近たびたび報告しているPFE（ポリグラム・フィルムド・エンタテインメント）の売却であるが、その買い手側が出揃い、9月18日にそれぞれのオファーが提示された。

この時点まで残っていた買収希望者は、カナル・プリュス、カールトン・コミュニケーションズ、アーティザン・エンタテインメントで、これらはいずれも、PFEの現状通りの製作会社としての存続ではなく、同社が権利を保有する一五〇〇本ほどのライブラリーなどの、資産を最大の目的にしていると観測されている。

ちなみに、10月下旬号の本欄で触れた、PFE側が期待していたEMIは9月の初めに買収を断念し、MGMについてはカーコリアンは個人的に興味を失っていないものの実質的には動いていない。

肝心のオファーなのだが、売る側のシーグラムとして不本意なほどに低額ばかりだったらしく、逆に改めての申請の機会を設定する方向で検討中とのこと。まだまだ結末は見えてこない。

〔濱口幸一〕

on the Production

●テレビシリーズの映画化にメル・ギブソン主演

今回は、当時のファンの僕としてはちょっとニヤリとしたこのニュースから紹介しよう。

8月上旬号で紹介したパラマウントが計画している往年のテレビシリーズ**"Hogan's Heroes"**（邦題・0012捕虜収容所）の映画化で、メル・ギブソン主宰のアイコン・プロダクションが共同製作を申し入れ、ギブソンのホーガン大佐役で進める計画が公表された。

このホーガン大佐役をオリジナルのシリーズで演じたのはボブ・クレーンという俳優だが、実は彼の風貌にはギブソンと似たところがあって、前回の記事を書いた際にも希望のキャストとしてギブソンの名前を出そうかどうか迷ったものだった。そんな訳で今回の発表には思わず納得してしまったのだが、前回も書いたように、元々この計画はワーナーで進められていた時期もあり、ワーナーに近い関係のギブソンが早くから目を付けていた可能性はありそうだ。

一方、ギブソンはワーナーとパラマウントに対して同等の契約を結んでいるのだそうで、実際この夏の「リーサル・ウェポン4」をワーナーに出したギブソンの次回作にはパラマウントの**"Payback"**が来年の2月公開で予定されており、その後にはワーナーで**"Fahrenheit 451"**の監督が予定されているという具合に、実に律儀に約束を守っているのだ。ただしこの予定で行くと、今回の"Hogan's Heroes"の映画化は来年の秋以降ということになりそうだが、まだ脚本家も選考中ということなので、準備を含めるとちょうど良いタイミングになるかも知れない。

なお計画が実現すると、ギブソンにとっては94年にワーナーで主演した「マーヴェリック」以来の往年のテレビシリーズの映画化への出演になる。またパラマウントでは、今年も新作が登場する「スター・トレック」を始め、「アダムス・ファミリー」から「ミッション・インポッシブル」まで実に多彩なテレビからのヒットシリーズを擁しており、今回の計画もその一環となる訳で、当然シリーズ化も狙われているようだ。

メル・ギブソン

ところでギブソンの計画としては、前々回のこの欄で、アイコン・プロダクション製作、ヴィム・ヴェンダース監督の新作**"The Million Dollar Hotel"**への出演の情報を紹介したが、これも決定になったようだ。

この作品でギブソンは、「プライベート・ライアン」のジェレミー・デイヴィス、「フィフス・エレメント」のミラ・ジョヴォヴィッチの相手役を務めることになるが、このような役柄で彼が映画に出演するのは、自身の監督作品「顔のない天使」以来のことになる。またこの作品でギブソンは、ホテルでの殺人事件を追う探偵の役を演じるが、この役作りのため彼は頭を丸めるそうだ。撮影は来年1月から、原案を提供したU2のリードシンガーのボノも出演し、サウンドトラックの一部をU2が担当することになっている。

●キートンの「セブン・チャンス」リメイク

続いては、リメイクの話題を

Digitized by Google

2つ紹介しよう。

まずは、サイレント時代の名コメディアン、バスター・キートンの25年作品「**セブン・チャンス**」を、クリス・オドネルの主演で再映画化する計画がニュー・ラインから発表された。

33歳までの結婚を条件に、祖父から1億2000万ドルの遺産を受け取ることになった独身の青年が、その条件をクリアするために悪戦苦闘する姿を描いたこの作品は、キートンの最高傑作の一つともいわれているものだが、今回はこのリメイクの脚本をスティーヴ・コーエンという脚本家が**"The Bachelor"**の題名で執筆し、実は1年半ほど前に発表されたこの脚本は、このときニュー・ラインがワーナーと争った末に7桁の金額で獲得していた。なおオドネルは、当初はワーナー側の主演に予定されていたが、ニュー・ラインはそれも含めて契約に成功したというもの。もっとも両社は当時から提携関係にあったはずだから、その辺で取り引きがあったのかも知れないが、それにしても脚本のみで7桁の契約金はかなり大きいほうだ。

ところがこのコーエンの脚本が、実は25年に公開されたオリジナルの著作権が切れる前に発表されたということで、当然その権利の継承者から今回の計画に対して製作差し止めの提訴が出されてしまった。しかしようやくそれがクリアになったということで、今回の発表が行われたようだ。監督にゲイリー・シノア、共演には「ザ・エージェント」のレニー・ゼルウィガーを迎えて、撮影は12月から行われる予定になっている。

もう1本は以前にも一度紹介した、43年製作のRKO映画**"I Walked With a Zombie"**のリメイクが、ディメンションの製作、「デイライト」のロブ・コーエンの監督で行われることが発表された。

この計画は、以前の紹介ではRKOの単独で行うものだったと思うが、今年の1月にRKOとミラマックスとの間で、本作を含めた旧作12作品をリメイクする契約が結ばれ、その契約に基づいて傘下のディメンションでリメイクが行われることになったものだ。

『セブン・チャンス』

なおオリジナルは、カート・シオドマクの脚本、ジャック・トゥールヌールの監督で作られたものだが、今回の監督に決まったコーエンによると、「オリジナルは私の大好きな作品の一つだが、当時はハイチの文化についてもあまり判らないまま作られており、ヴードゥーについても不正確な描写が多い。自分は、ウェス・クレイヴン監督が『ゾンビ伝説』を作ったときにハイチに行った数少ない映画人の一人で、その経験に基づいて納得の行く作品を作りたい」と話している。ただしコーエンはこの他にも3本の予定を抱えており、その内のどれが次回作になるかは定かでないようだ。

●新「スーパーマン」再開ほか

後半は短いニュースをまとめておこう。

ティム・バートンの計画が空中分解してしまった**"Superman Lives"**で、なんとか計画再開の目途がついてきた。この映画化については原作を出版するDCコミックスが強く要望しているものだが、このため製作者のジョン・ピーターズは、脚本家に「フリージャック」やデニス・ホッパー監督の「逃げる天使」を手掛けたダン・ギルロイと契約、すでに脚本のリライトは完成しているようだ。なおこのリライト版をバートンが監督する可能性は低そうだが、ニコラス・ケイジは出演に興味を持っているそうで、またバートンの計画では1億4000万ドルに上った製作費は、ワーナーに安心を与える1億ドル以内に抑えられるということだ。

次の計画も以前に紹介しているが、子供向けのテレビ番組の人気キャラクター、ドクター・ゼウスの映画化がユニヴァーサルで進められることになった。この計画では、以前にはトライスターで"Oh the Place You'll Go"という作品が進められていたものだが、ゼウスことセオドア・ジゼルの執筆する脚本がなかなか完成せず、半ば断念の形となっていた。その計画が復活するものだが、ユニヴァーサルでは、ジゼルが別に執筆していた**"How the Grinch Stole Christmas"**という作品を元に、ロン・ハワードのイマジンが製作を担当するものだ、すでに複数の脚本家が参加してリライトが行われているということだ。なおジゼルの脚本は元々アニメーション用に書かれたものだが、イマジンではこれをハワードの監督で実写で映画化する計画で、グリンチ役にはジム・キャリーが考えられているそうだ。

後はキャスティング情報。

ビリー・ボブ・ソーントン監督のコロンビア作品**"All the Pretty Horses"**で、マット・デイモンと一緒に旅をする仲間の役にヘンリー・トーマスが発表された。トーマスの出演は、最近ではブラッド・ピットの弟役を演じた「レジェンド・オブ・フォール」があるが、やはり代表作は「E.T.」だろう。

ヤン・デ・ボン監督のドリームワークス作品**"The Haunting of Hill House"**で、主演にリリ・タイラーが契約したことが発表された。インディ映画の女王と呼ばれているタイラーが、メイジャーの作品に主演するのは初めてのことだ。この作品では、他に「マスク・オブ・ゾロ」のキャスリン・ゼータ＝ジョーンズの共演も発表されている。

最後に、いよいよ公開が半年後に迫ってきた「**スター・ウォーズ**」の新3部作で、その第1作の題名で、**"Star Wars:Episode I-The Phantom Menace"**に決まったようだ。また全米公開は99年5月21日と発表された。

〔井口健二〕

Digitized by Google

from Asia

★台北映画祭（一）

9月から10月にかけての台北は、図らずも例年にない映画的な熱気に溢れかえっていた。事前にもプログラムの一部や傾向を紹介した台湾国際ドキュメンタリー映画祭と台北映画祭の連続した開催に加えて、近年はあまりの製作本数激減ぶりにより台湾映画のロードショウにさえしばしば一本たりともお目に掛かれないシーズンの多いなか、例外的に侯孝賢の「フラワーズ・オブ・シャンハイ」と蔡明亮の「洞（ザ・ホール）」という国際級の注目作二本が台北映画祭会期中に同時公開される（更にジャッキー・チェンの「ラッシュアワー」も）という幸運が重なったからだ。

今回はその中で、一番の注目のイベントだった台北映画祭（台北電影節）について報告する。

金馬奨やアジア太平洋映画祭など中華圏、アジア太平洋圏の映画を対象とした映画賞、映画祭があったのみで、いわゆる「国際映画祭」を名乗れる規模のコンペティション形式の映画祭は開かれてこなかった台湾で、9月25日から10月5日にかけて開催されたこの映画祭は、その直前に開催された台湾国際ドキュメンタリー映画祭とともに、ついにその長い歴史に終止符を打った記念碑的イベント。第一回目の開催、それも国の主催ではなく、この種のイベント経験のない台北市の主催ということで、事前の段階ではどことなく危うげな雰囲気もあったが、結果はひとまず成功裏に終わったと言える。

この映画祭には、作品の上映以外にも様々なイベント、活動が含まれていたのだが、その最大のハイライトとなったのは、10月4日の晩に開催された授賞式だろう（クロージングの前日に式が開催されるという若干変則的なスケジュールでもあった）。まずはそのコンペティションの結果から。

〔1998台北電影奨〕

●台湾商業映画部門

〔グランプリ〕
「魔法阿媽」（王小棣監督）

〔最優秀監督賞〕
侯孝賢（「フラワーズ・オブ・シャンハイ」）

〔最優秀俳優賞〕
劉若英（ルネ・リウ）（「徵婚啓事」）

〔推薦新人賞〕
六月（ジューン・ツァイ）（「JAM」）

〔審査員特別賞〕
「洞」（蔡明亮監督）

〔最優秀芸術指導賞〕
黄文英（「フラワーズ・オブ・シャンハイ」）

「フラワーズ・オブ・シャンハイ」

●台湾非商業映画部門

〔グランプリ〕
「在山上下不来」（陳碩儀）

〔台北特別賞〕
「畢業紀念冊」（楊力州）

〔最優秀映画賞〕
「破輪胎」（黄明川）

〔最優秀動画賞〕
「末日世界」（林浩溥）

〔最優秀実験映画賞〕
「1998很難過之高跟鞋」（關文勝）

〔最優秀記録映画賞〕
「労資趣味競賽」（羅興階）

●インターナショナル・コンペティション部門

〔グランプリ　独立精神賞〕
「West Beyrouth」（Ziad Doueiri）

〔審査員特別賞〕
「SECRETOS DEL CORAZON」（Montxo Armendariz）

〔台北映画祭特別賞〕
「Historias de Futbol」（Andres Wood）

この授賞式とその結果は、台北映画祭自体の性格、指向を理解する上でもなかなか興味深いものであった。意識的にかどうかは判らないが、様々な意味で、権威と伝統を誇ってきた国家肝入りの映画賞、金馬奨と対比的な性格を滲ませていたからである。

抽象的な形容で語るならば、そうした伝統、権威や、盛大さ、重厚長大性で特徴付けられる金馬奨授賞式に対して、台北電影奨のそれは、若々しさ、簡素さ、フレンドリーさで終始特徴付けられるイベントだった。

それはまず授賞式会場の設定からして表面化していた。金馬奨は、多くの場合、中華民国建国の父とされる孫文を記念して建造された「国父記念館」が会場である。その建物の姿を見ればその性格は一目瞭然。中国宮殿スタイルの外観に、二千人収容級の大ホールを擁し、中華民国建国の歴史や、反共の砦としての台湾の紹介などが常設展示されたそこは、そのまま金馬奨の性格、歴史を物語りもする。その大ホールで、金馬奨の授賞式は国家要人級の参加者も含む二千人規模の参列者を得て、荘厳に、盛大に、開催されてきた

Digitized by Google

のだ。

片や台北映画祭の授賞式は、地理的には奇しくも国父記念館にほぼ隣接しているとも言える、台北市庁舎（台北市政府）が会場。しかしその雰囲気は、極度に対象的だ。会場の選択自体は、国家的イベントの金馬奨に対して、台北市主催のイベントである台北映画祭であることを考えれば当り前のことと言えなくもない設定だが、その様々な演出からはかなり意図的な（政治的な意味も含めて）興味深い設定にも見えてくる（実際、市の主催であっても盛大さ、権威を演出しようと思えば、国父記念館を会場にすることだってできた）。

まず会場の設営だが、市庁舎を使っているとはいっても、それは国父記念館の大ホールのような仰々しい場所とは大違い。通常は市民なら——いや市民でなくとも——誰でも自由に通行できる市庁舎エントランス・ホールに仮説の舞台や照明装置、衝立、テーブル等を設営しただけの、極めて簡素な会場なのだ。収容人数も、最大で三百人程度といったところ。参列者の服装規定も、ネクタイ着用を含め盛装が求められている金馬奨に対して、こちらは「随性盛装（スマート・カジュアル）」という、どうにでも解釈できる曖昧な要求。実際には受賞者の多くはきちんとした格好をしていたが、受賞者ではない参列者たちの中には、かなり簡素な服の者も目立つし、それに違和感はない。

式の形態も、金馬奨を始め多くの映画祭で採用されている授賞式とは形式が違い、会場に所狭しと並べられた中華料理で使われる円卓を囲んで、各自自由に飲酒喫煙しながら授賞式は進められていく。そして全受賞者への授賞が終わったところで、それらのテーブルに中華のコース料理がふるまわれていくという進行だ。またこの間の様子は、市庁舎前の広場に設営された大スクリーンにも生中継されており、通りがかりの市民たちも、その様子を眺めることができるようになっている（これ以外にもちろん、テレビやラジオの中継放送も行われている）。さらに授賞式が一段落して料理がふるまわれ始めると、参列していた芸能人たちの内の歌手陣たちが一人また一人と広場の舞台に登場し、市民の前で各自二曲前後歌も歌ってくれ（参列者で歌を歌ったのは、賞のプレゼンターとして参加していたカレン・モク——侯孝賢の「フラワーズ・オブ・シャンハイ」台湾公開版のテーマソング歌手でもある——、プレゼンター兼受賞者でもあった劉若英らだが、これ以外に、式自体には参加していないものの、陳昇（ボビー・チェン）、乱弾（今台湾で注目のバンド）らも出演した）。

そして一番の金馬奨との違いは、式の進行自体の簡素さ、スピード感。金馬奨授賞式にも何度か出席している筆者だが、その最大の問題は、式があまりにも退屈かつ長大なこと。授賞それ自体に加えて、来賓の挨拶、ゲストの演芸披露などが合間合間に挟まれるその式典は、更に受賞者たちの（台湾、香港人ならではの？）多弁さも相まって、多くの場合優に二～三時間はかかるイベントとなってしまう（因みに今年末に開催されるそれは、アジア太平洋映画祭と合同の授賞式となることもあって、三時間半はかかる恐れがあるそうだ）。これに最初から最後まで立ち会うのは、ほとんど至難の業。それに対して、台北映画祭の授賞式の方は、所要時間わずか四〇分。これは当初から意図されていた短さ。司会進行の伊能静から各プレゼンター、受賞者に至るまで、けっして長演説をしないよう事前に充分指導をされていた気配が窺われる、実にスピード感溢れる進行ぶりだった。もちろん来賓挨拶とか、合間の芸能披露なども一切なし、伊能静が「ただ今より授賞式を始めます」とアナウンスすると、何も余分な世間話も挟まず、いきなり商業映画部門各部門賞の発表が始まったのだった——。

（以下次号）

〔暉峻創三〕

男性が読んでも面白い！

カルチャー情報満載で女性のオフタイムを応援する!!

Pause

月刊パウゼ12月号
10月23日発売

定価 400円（税込み）

特集
25歳！そろそろ揃えたい「器」特集

CINEMA
トゥルーマン・ショー
作品論／P・ウィアー論／他

インタビュー
「アウト・オブ・サイト」ジョージ・クルーニー
「リプレイスメント・キラー」チョウ・ユンファ
「落下する夕方」原田知世

短期特別連載
小林千絵の"もっと映画を見ようよ！"
第8回ゲスト　高橋ひとみ

話題作を試写で先取り
"Pause CINE CLUB"

Vol.70「アンツ」
Vol.71「イン&アウト」
Vol.72「エディー・マーフィ ドクター・ドリトル」
Vol.73「マイ・フレンド・メモリー」

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX.
詳細は本誌をご覧ください

試写会ご優待など特典がいっぱいの
"Pauseクラブ会員"募集中！
（入会金・年会費などいっさい無料）

全国有名書店・一部コンビニエンスストアで
毎月23日発売
〒153-0043 東京都目黒区東山2-6-4 東京学参ビル2F
東京学参株式会社
☎03-3794-3151（編集）03-3794-3159（販売）

Digitized by Google

from Japan

●森田芳光監督 今度はサスペンス大作

森田芳光監督が配収23億円の大ヒットを記録した「失楽園」(97)以来1年半ぶりにメガホンをとったサスペンス大作「**刑法三十九条**」(製作：光和インターナショナル、松竹)が、来年1月に完成する。

作品は、猟奇殺人事件をめぐる容疑者と女性精神鑑定人との対決を描くサスペンス。動機、決定的な証拠の無い男が犯人として逮捕される。最初は容疑を認めていたが、裁判が始まると謎の言葉を発言。弁護士は精神鑑定を申請。その結果、解離性同一性障害という診断がくだされ、容疑者は〝刑事責任能力なし〟と言われる。その結果に疑問をもった女性精神鑑定人と容疑者との息づまる法廷劇が描かれていく。

「刑法三十九条」は「バカヤロー！」シリーズや「免許がない！」等、コメディの製作を手掛けてきた光和インターナショナルの鈴木光代表が自らの体験をもとに企画。「お墓がない！」の大森寿美男がオリジナルシナリオを執筆した。

キャストは、主人公の精神鑑定人・小川香深に鈴木京香、容疑者に堤真一。他に樹木希林(弁護士)、江守徹(検事)、岸部一徳(刑事)、杉浦直樹(大学教授)らが共演。作品は6月から7月にかけて撮影、来年1月に完成する。公開は99年春の予定。

なお、タイトルの刑法三十九条は、〝心神喪失者の行為は罰しない〟という条項から付けられた。

●アジアを代表する3人の映画プロジェクト発足

第3回釜山国際映画祭(9月24日～10月1日)において、エドワード・ヤン(台湾)、岩井俊二(日本)、スタンリー・クワン(香港)というアジアを代表する3人の監督による世界マーケットを視野に入れた映画プロジェクトの製作発表が、3監督及び河井真也プロデューサーの出席のもと行われた。

このプロジェクトの名称は「Three Bugs of Y2K」。「Y2K」「Bugs」ともにコンピューター用語で、前者は〝遠くない未来〟、後者は〝進歩したゆえの欠陥〟の意味がこめられている。3人の監督は、人類が21世紀へと引きずって向き合わなければならないこれら〝負の遺産〟に対する問題意識を共通テーマに、それぞれが〝近未来の物語〟を1本の独立した長編映画として製作するもの。日本での公開は、来年秋、3作品同時上映の予定。

▽エドワード・ヤン企画「SCISSORS:She cuts like a knife」(仮題)＝台湾屈指の富豪の家の娘、18歳のオードリーを主人公に描くドラマ。

▽岩井俊二企画「The Garden Guard Guards」(仮題)＝現在構想中で「未来の話であり、暗い内容」(岩井)となる。

▽スタンリー・クワン企画「S-TONE STORY」(仮題)＝近未来を舞台に、偶然ある島に囚われてしまった人々を描く。

なお、日本での製作主体はポニーキャニオンが担当する。

●SFアニメーション「GUNDRESS」

「攻殻機動隊」で知られる士郎正宗が総設定協力、新進作家集団ORCA(オルカ)が原作・脚本を担当したSFアニメーション映画「**GUNDRESS―ガンドレス―**」(製作：「ガンドレス」製作委員会／企画制作：サンクチュアリ)が、東映配給で来年春休み・洋画系で公開される。

作品は、近未来の横浜ベイサイドシティを舞台に、法律では裁ききれない犯罪者から都市を守るため、銃と人型装甲メカ〈ランドメイト〉を駆使して闘う6人の女たちの活躍を描くSFアドベンチャー・アニメ。監督は「機動戦士ガンダム」などを手掛けてきたサンライズ出身の谷田部勝義が担当し、アニメ界の精鋭スタッフが結集。製作は、日活、パナソニック・デジタル・コンテンツ、インナーブレイン、イヨンズ・コーポレーションの4社が製作委員会を組織。サンクチュアリが企画を担当し、制作にあたる。作品は99年2月完成予定。

●極道アクション「制覇」

「ハッピーピープル～劇場版」でデビューした鈴木浩介監督が第2作としてメガホンをとるヤクザ映画「**制覇**」(製作：大映／製作協力：フィルムシティ)の製作が進められている。

作品は、生まれながらにして〝極道の帝王〟になるべき宿命を背負った一人の男と彼の周りの非情なアウトローたちの、激しく鮮烈な生きざまを描く極道アクション。脚本は「雀鬼」「首都高速トライアル」の斉藤猛。

キャストは、〝極道界制覇〟という大きな野望を秘めて暴力地盤を各地に拡大していく主人公・都城勇地に竹内力。都城の弟・恵地に山口祥行。他に菅田俊、飯島大介、志賀勝、高松英郎らが共演。

作品は11月に完成。公開は99年春の予定。配給は大映。

〈**変更**〉

10月下旬号で紹介した「MABUI」(監督：松本泰生)の脚本は、青木邦夫氏の単独脚本になりました。

Digitized by Google

映画界ニュース

●ブエナ ビスタ99年以降のラインアップ

ブエナ ビスタの99年以降のラインアップは次のとおり。

「スネーク・アイズ」監ブライアン・デ・パルマ 出ニコラス・ケイジ＝新春第2弾

「バグズ・ライフ」監ジョン・ラセッター 声デイヴィ・フォーリー＝99年春

「エネミー・オブ・ザ・ステイト」監トニー・スコット 出ウィル・スミス、ジーン・ハックマン＝99年GW

「マイティ・ジョー」監ロン・アンダーウッド 出ビル・パクストン、シャーリーズ・テロン＝99年GW

「双子の天使（仮）」監ナンシー・メイヤーズ 出デニス・クエイド、ナターシャ・リチャードソン＝99年初夏

「イル・チクローネ（原）」監出レオナルド・ピエラッチーノ＝99年夏

「サンタに化けたヒッチハイカーは、なぜ家をめざすのか？」監アーリーン・サンフォード 出ジョナサン・テイラー・トーマス

「ザ・ミスト」監ジョン・マクティアナン 出アントニオ・バンデラス＝99年秋

「ホーリー・マン」監スティーヴン・ヘレク 出エディ・マーフィー、ジェフ・ゴールドブラム＝99年

「マイ・フェイバリット・マーシャン（原）」監ドナルド・ペトリー 出ジェフ・ダニエルズ＝99年

「サイモン・バーチ（原）」監マーク・スティーヴン・ジョンソン 出イアン・マイケル・スミス＝99年

「ターザン」監ケヴィン・リマ、クリス・バック 声トニー・ゴールドウィン、グレン・クローズ＝99年

「愛されし者」監ジョナサン・デミ 出オフラ・ウィンフリー、ダニー・グローヴァー＝99年秋

「トイ・ストーリー2」製ジョン・ラセッター、スティーヴ・ジョブズ 声トム・ハンクス、ティム・アレン＝2000年

「ランナウェイ・ブライド（原）」監ゲーリー・マーシャル 出ジュリア・ロバーツ、リチャード・ギア＝99年

「インスペクター・ギャジェット（原）」監デイヴィット・ケロッグ 出マシュー・ブロデリック、ルパート・エヴェレット

「ファンタジア2000」監ヘンデル・ブトイ、エリック・ゴールドバーグ、ドン・ハーン他

「インスティンクト（原）」監ジョン・タートルトーブ 出アンソニー・ホプキンズ

「ジ・アザー・シスター（原）」監ゲーリー・マーシャル 出ジュリエット・ルイス、ダイアン・キートン

「ザ・ネクスト・ベスト・シング（原）」監ジョン・シュレシンジャー 出マドンナ、ルパート・エヴェレット

「ブリンギング・アウト・ザ・デッド」監マーティン・スコセッシ 出ニコラス・ケイジ、パトリシア・アークエット

「ザ・シックス・センス」監M・ナイト・シャイアマラン 出ブルース・ウィリス

●大谷図書館、移転にともない休館

㈶松竹大谷図書館は、松竹本社ともに東劇ビルに移転するため、98年11月20日から99年5月9日まで休館する。再開は5月10日の予定。

▽新住所＝〒104－0045 東京都中央区築地4－1－1 東劇ビル ☎03・5550・1694（従来のまま）

訃報

仁礼功太郎氏（にれ・こうたろう／本名＝渡辺銀次郎／俳優）9月13日、心不全のため死去。98歳。市川九蔵一門の市川若猿の内弟子となり、市川若三郎の名で浅草で舞台を踏む。27年市川右太衛門プロに入社し、春日陽二郎の名で「笑ふな金平」で映画デビュー、30年に仁礼功太郎と改名して多くの作品に出演した。代表作は「春秋一刀流」36、「鞍馬天狗 滝攘虎搏の巻」38、「宮本武蔵・一乗寺決闘」42など。

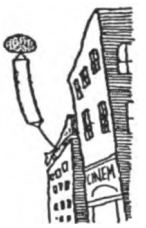
須川栄三氏（すがわ・えいぞう／映画監督）10月2日、心不全のため死去。68歳。50年大学卒業後、東宝撮影所に入社。成瀬巳喜男に師事し、58年「青春白書・大人には分らない」で監督デビューし、続く「野獣死すべし」59で高く評価される。以後「愛と炎と」61、「僕たちの失敗」62、「君も出世ができる」64、「けものみち」65、「日本一の裏切り男」68、「野獣狩り」73などを撮り、74年「野獣死すべし・復讐のメカニック」を最後に東宝を退社。その後も「日本人のへそ」77、「螢川」86、「飛ぶ夢をしばらく見ない」90で活躍した。夫人は女優の真利明美。

関光夫氏（せき・みつお／本名＝清水光雄／映画・音楽評論家）10月3日、肺炎のため死去。77歳。ワーナー映画宣伝部を経て、映画音楽のDJや解説者、ニュース映画解説者として活躍した。著書多数。

Digitized by Google

興行短信

竹人栄二郎



「メンズ・デイ」があってもいいじゃないか

外資系のシネマコンプレックス等には「レディース・デイ」という割り引き入場制度がある。レディース・デイがあるなら、「メンズ・デイ」があったっていい（レディースなら〝メンズ〟ではなく、〝ジェントルメン〟だろう、という意見もあろうが、まあまあ）。

で、あった「メンズ・デイ」が。

全興連は昨年3月から全国の映画館1701館を対象に各種割り引き入場制度の実態調査をしてきた。興行界は、外資系の流入もあって、目まぐるしく変化している。映像の世界も多用化しているが、それを受け入れる映画館も、鑑賞する観客も、急激に変化している。新しい興行業の展開に全興連（会長佐々木良一氏）は、いろいろな面で対応しなければならない。今回の調査はその一環ともいえ、その結果がまとまった。

割り引き入場制度には、全国で91％の実施率である「映画の日」の他に、レイトショー、レディース・デイ、ファースト・ショー、情報誌割り引き、会員割り引き、駐車場割り引きなど各種があり、「映画の日」、会員割り引き等いわば長い習慣の中で続いているものが当然実施率も高いが、新時代に対応し、あるはい外国から導入されたり、生活環境の変化からの必然性で誕生したのが、レイトショーやレディース・デイ等だ。レディース・デイには、女性の客を増やしてクチコミの浸透、拡大を狙った意図もある。

ならばメンズ・デイも、となるとのは当然の要求かもしれないが、その実施率となると、レディース・デイを100％実施している外資系（ワーナー・マイカル、AMC、UCI等）では、なんと0％だった！　では、どんな映画館がメンズ・デイを実施しているか。

今回の全興連の調査では、映画館の種類を洋画系9大都市ロードショー、9大都市以外の洋画系ロードショー、邦画専門館、シネコンA（外資系）、シネコンB（邦人系）及びC（自己申告でシネコンと記載した劇場）、その他に分類したが、メンズ・デイを最も多く実施していたのはシネコンBC（34％）だった。外資系は、男の客に冷たく、女には温かい。男も厚遇してくれるのは邦人系のシネコンということになるのか。

しかも興味深いのは、何曜日に実施し

区分		全国平均	RS	ローカル	シネコンA（外資系）	シネコンBC（邦人系ほか）	邦画専門
窓口料金	¥1,800	60.0%	99.0%	82.0%	27.0%	77.0%	71.0%
	¥1,700	26.0	1.0	17.0	60.0	23.0	21.0
映画の日		91.0	100.0	96.0%	100.0	94.0	94.0
レイトショー		34.0	40.0	36.0%	100.0	35.0	16.0
レディース・デイ		58.0	32.0	76.0%	100.0	90.0	53.0
メンズ・デイ		5.0	3.0	5.0%	0	34.0	2.0
ファースト・ショー		18.0	49.0	19.0%	42.0	5.0	19.0
情報誌割り引き		50.0	32.0	60.0%	27.0	63.0	61.0
会員割り引き		80.0	85.0	86.0%	92.0	85.0	83.0
駐車場割り引き		45.0	39.0	69.0%	47.0	40.0	49.0

Digitized by Google

ているかで、レディース・デイは毎週水曜日に実施しているのが全体の48%、毎週金曜日が31%。それに対し、メンズ・デイの実施曜日は毎週月曜日というのが全体の81%に達していること。毎週水曜日は僅か9%、金曜日は2%に過ぎない。女は水か金、男は月、という区別は何に由来してるのか、どなたか教えて下さい。

この他、今回の調査で顕著になったことをピックアップすると、外資系のシネコンは「映画の日」、レイトショー、レディース・デイとも実施率100%なのに対し、情報誌割り引きが27%と他の上映系統に比べて極端に低いこと、邦人系シネコンは63%と対照的に高い。ファースト・ショー割り引き（平日の第1回目の割り引き）は、逆に外資系は42%と多いのに対し、邦人系は5%と低い。かつての早朝割り引きともいえるが、その実施曜日は金曜日が全体の55%と過半数を占め、他に月曜日が8%、その他はまちまち。

またレイトショーは、全国平均34%に対し、洋画系ロードショー、ローカル、シネコンA、同BCとも全国平均を上回っているのに、邦画専門館のみは16%という低さ。映画人口の種類の生活環境まで、この調査は示していることになる。

情報誌割り引きは全国平均でちょうど半分50%の実施率だが、その情報誌名は、全国平均で『ぴあ』が36%、『トーキョー／カンサイ／キューシュー／トーカイの各ウォーカー』が24%、地元情報誌36%。

なお、割り引きに関係ない窓口料金は1800円が全体の60%だが、シネコンAのみ1700円が多いのが意外だった。

スポットライト 内田達夫

「プライベート・ライアン」が腰の強い興行になった理由・後編

9月26日から日本劇場系で公開されているスティーヴン・スピルバーグ監督の「プライベート・ライアン」（UIP）が絶好調だ。〝興行的に難しい〟と言われたこの作品が、大ヒットになった陰には、どんな宣伝方針があったのだろう。前回に続き、UIP映画宣伝部長の三苫雅夫氏に話を聞いていく。

実は、初めてこの作品のポスターを見た時、あまりのストレートさにちょっと驚いた。4人の兵士の姿、内容をシンプルに説明した惹句、スピルバーグの名前——そこには女性の観賞欲を煽る文句も、感動を煽る言葉もない。つまり、〝戦争映画〟というだけで女性に対してアピールが弱いのに、それをクリアするための工夫がなにもなされていないように思えたのだ。

「女性を動員しなければヒットしないのは確かだし、興行関係者やマスコミからは〝凄い作品だけどこれじゃ女性を引けない〟って言われました。だけど、私はその根拠になった〈女性がラブ・ストーリー等のいわゆる女性ものと言われる作品しか観ない〉っていうのは、業界で続いてきた錯覚だと思うんです。世間を見れば分かりますが、映画だけに限らず、いろいろな物のクオリティを正確に見極める目を持っているのは女性の方なんですよ。だから、いつもなら女性を意識した甘めの宣伝コピーをつけたかもしれませんが、この作品については〝クオリティの高さを売ろう〟ということで、思い切って正面勝負の宣伝方針を決めました。ヘタにいじくり回すよりも本音でいけばきっといけると思ったわけです。それについてはみんなにいろいろ言われましたよ。でも〝大丈夫、大丈夫〟って。もちろん、少し不安はありましたけど（笑）」

正論。ただ、それが通用しないのが興行の難しさだ。だがこの作品に限り、三苫氏が思い切った正面勝負を決心したのにはもう一つ理由があったようだ。

「宣伝方針を決める前、若い女性関係者の何人かに観てもらったら、口を揃えて〝私は感動したけど、残酷なシーンがあるから普通の女の子はどうかな〟と。これは〝いける〟って思いましたね。女性の怖いもの見たさと好奇心は凄いですから。〝私は良かったけど残酷なシーンがあるからあなたには無理よ〟なんて言われたら、〝何よ。私だって大丈夫!!〟って思うでしょ（笑）。〝観ない方がいい〟なんて、まるで逆手の口コミですが、女性のプライドをくすぐるって意味では効果大ですよ」

配収38億円の「フォレスト・ガンプ／一期一会」の110%の出足となったこの作品。単純計算すれば「配収45億円前後」になる。達成されれば、男臭い内容をストレートに売った作品としては画期的な成績だ。今後の動員推移を楽しみに見ていきたい。

「プライベート・ライアン」

Digitized by Google

「愛を乞うひと」で考える

映画戦線

大高宏雄

9月26日から公開された邦画の中で私は、「ベル・エポック」という作品の興行成績に特に釘づけになった。都内はシャンテシネ1とシネマ・カリテの公開。最近増えている単館系興行の小拡大公開作品だったのだが、あまりの興行成績の悪さに思わず呆気にとられたのである。フジテレビの単独製作で、石田ひかり、鈴木京香、鷲尾いさ子らが出演している。この製作パッケージなら、充分メジャー公開されてもいい作品のように初めは見えた。もちろん今回の単館系興行はそうした作品の外観以前に、明快に中身の在り方に拠っていたのだろう。だから製作母体や俳優の布陣でメジャー公開させなかったのは正解だったと思うが、それにしてもランクを下げたマーケットでの数字の低さは只事ではない。最近よく、メジャー公開されて興行が失敗した場合、単館系で公開した方がよかったと言われるケースが時々ある。しかし「ベル・エポック」の興行を見れば、事態はそんな簡単なことではないのがわかる。酷な言い方をしてしまえば、興行的にダメなものはとことんダメになっているのである。

同日公開の邦画の中で「ベル・エポック」以上に私が関心をもっていたのは、もちろん「愛を乞うひと」の興行であった。この作品は公開前から、出演の原田美枝子の演技が評判になっていた。新聞、雑誌はじめ、マイナー系作品をもち上げることに異常な執着心を見せる評論家筋からも賞賛の声が挙がり、クオリティ的にも申し分ないとの評価で大方の一致を見ていたと覚しい。そして公開直前、モントリオールの映画祭で賞をとり、それは宣伝的にも大きなポイントとなって、一気に秋の秀作という構えができ上がっていった。では結果はどうであったか。目標配収の5億円には遥かに及ばず、配収2億円前後となりそうだというのが公開ほぼ2週間段階での目算。これははっきり言って、惨敗に近い成績と判断される。前号で、日本映画はアニメであると屈折した言い方をせざるをえなかった状況の、これは裏返しの厳しい現実そのままの姿であろうか。メジャーもマイナーもいったい実写の日本映画、どうなってしまっているのか。

今回私は内容には一切触れない。一般の世評とともに、私もまたこの作品に深い感慨を覚えたからで、作品の存在を全面的にまず認めてしまうことを許していただきたい。そしてその上に立って私は「愛を乞うひと」の興行で、とりあえず3つのことを指摘してみたい。1つ目は公開マーケットの問題。2つ目は宣伝の問題。そして3つ目は製作費の問題。まず公開マーケットで言えば、邦画系の100館以上で公開された「愛を乞うひと」の興行の在り方は当然問題視されていいだろう。これは断じて結果論ではなく、邦画系のブロックブッキングそのものの問題と大きくリンクしていると言っていい。例えばその公開マーケットを作る今年の東宝系の作品の流れを見てみる。「モスラ2」→「リング」「らせん」→「ドラえもん」→「クレヨンしんちゃん」→「卓球温泉」→「絆―きずな―」→「GODZILLA」→「スプリガン」→「愛を乞うひと」。どう考えても、この流れからは「絆―きずな―」と「愛を乞うひと」が異質な作品と映る。ブロックブッキングは作品によって公開館数は微妙に違っているが、それでも全国100館以上というのが基本となっている。だから大枠で、それらの作品群のある一つの固定化したマーケットの中で公開されていると見ていい。館数が微妙に違うとはいえ、ジャンルも中身も全く異質なアニメと「絆―きずな―」「愛を乞うひと」が同一線上のマーケットで公開されるというのは随分おかしなことだと言えないだろうか。昔はそうしたゴッタ煮を受け入れる観客側の素地があったと思うが、現在はよほどマーケットをデリケートにしないと、観客は逃げていってしまう気がする。

作品の流れということでさらに言えば、東宝邦画系の劇場にかかる前2作品の予告編が、アニメや「GODZILLA」の上映時に流されてもとても効果的と思えない。予告編とはただ作品をPRできる基本的でとても重要な宣伝の形なのだが、そもそもその手のジャンルや中身に全く関心のないアニメなどの観客にそうした予告編を見せても有効性があるわけがない。「愛を乞うひと」などの予告編は邦画系劇場より、アダルト層を集めている洋画系劇場でこそ集中して流すべきだろう。もちろん洋画系でも、東宝作品のパッケージ風（串ざし風とも言う）の予告編は流れているが、「愛を乞うひと」のような作品の場合は、1本の独立した予告編としてじっくり見せつくす必要があると思う。反対に、アニメ上映劇場ではそうした予告編ははずしてしまってもいい。こうした作業はちょっと頭を切り替えれば、難しいことではない。い

Digitized by Google

かにその作品にふさわしい層に向けて情報を発信するか。予告編程度の問題でさえ、今のブロックブッキングはうまく機能していないように見える。

では「愛を乞うひと」は単館系公開がふさわしいのかというと、もちろんそんなことはありえない。メジャー公開が無理ならマイナー公開という二者択一の安易なやり方が最も危険な判断であって、作品の中身に合せたマーケットがそこでは当然求められる。「愛を乞うひと」の場合、私は「L・A・コンフィデンシャル」のように都内メジャー系劇場3館前後、全国は70館前後でスタートするのが一番いい方法だったのではないかと思う。

「愛を乞うひと」

異状なし

前述した単館系の小拡大マーケットで成功した邦画には「Love Letter」や「東京日和」などがあるが、意外や「L・A・コンフィデンシャル」スタイルの興行展開で成功した邦画は少ない。「愛を乞うひと」は、内容の厚みや一般性を考えて、そのマーケットで興行チャレンジをすべき作品だったのではないか。邦画ブロックブッキングは、昨年の「失楽園」に見られたとおり、一度はまると全国型のヒット傾向を作り、ふだん映画を観ない人たちが大挙して劇場に来るケースがある。中でも地方で特に効力を発揮するのが特徴的で、これを私はブロックブッキングの数ある功罪のうちの功の部分と捉えている。作品に少しだけ引っかかりがあれば、劇場のカラー、立地条件、設備など全く無関係に〝お客さん〟が来てくれるのである。ただこれは、本当に偶然性が強い。「愛を乞うひと」はそうした偶然性に頼らないで、配給側が確実な戦略をもって観客層を想定し、興行を行う作品のように私には見えた。

宣伝で言えば、これは幾分結果論めくが、早い時期での予告編に強烈に織り込まれていた虐待シーンがやはり人々の拒否反応を示したことは、ここではっきり指摘しておかなくてはならない。私はその予告編を観て、15年前洋画系でヒットした「積木くずし」を思い出したのだが、「愛を乞うひと」と「積木くずし」では作品の傾向がそもそも全く違っている。ある種の通俗性をもっていた「積木くずし」には、当時の時代性もあって人々に関心を抱かせるテーマ性があった。しかし「愛を乞うひと」の虐待シーンは、時代性との関連というより、そのシーンのみが突出していたように見えた。相互関連的に虐待シーンが意味づけられるのではなくて、そのシーンのみが浮き上がることで、予告編を観た人々は各々の生理に負の感情を植えつけられた、と今思えば幾分結果論的に考えられる。公開が近くなるにつれ、予告編の中で虐待シーンは影をひそめていくのだが、宣伝のスタート時点でイメージされた突出的な虐待シーンは、最後まで情報の浸透の上でマイナスの影響力を付与していたように私には思えた。

1つ目の公開マーケットの問題と大きく関わってくるのが、3つ目の製作費の問題である（ただしアニメは別）。「愛を乞うひと」は、製作費が4億1千万円と言われる。それだけ製作費がかかっていれば、まず経済的な面から単館系や単館系の小拡大程度のマーケットでは収支が合わない。だから一足飛びに、邦画ブロックブッキングの100館以上という公開規模にいきつく。ただこれは、製作、配給側の意向であって、一般観客には何の説得力もない。その作品にいかに製作費がかかっているかというのはもちろん観客側にも重要な場合があるが、「愛を乞うひと」は観る立場からすれば、その作品の中のテーマ性や中身の充実度のみが劇場に行くか行かないかの判断基準となる。だから安易に製作費の故にマーケットを決定していくのは、多分に当事者のみの一人よがりになってしまう。だから、公開マーケットは製作費云々ではなく、あくまで内容によって決めていくものだというのは、ここで強く言っておかなければならないと思う。

ただ私は、「愛を乞うひと」の場合は、製作費を下げてもっと小じんまりとした製作体制をとり、小マーケットにして安定した興行を築いていくべきだという考えには組みしない。4億1千万円という製作費にして、あの映画の世界が見事に構築されたのであり、その貴重な試みが経済原則の中で否定されるようなことは断じてあってはならない。不可能性の中で、いかに可能性を見出していくか。10%、20%の可能性に賭けていく道。これが「愛を乞うひと」の興行では問われたと思う。

Digitized by Google

キネ旬 KINEJUN LOBBY ロビイ 読者スクランブル

●アート系劇場がやってきた

祝・シネ・リーブル博多オープン!! ようやく福岡でもアート系の映画が観られるようになりました。話題の「ムトゥ 踊るマハラジャ」も上映され、うれしいかぎりです。大人の街・中洲（?）の奥地は女一人では少しこわいけど……。いい映画のためなら通います!（山口華代・福岡県春日市・学生・20歳）

●この映画見たい!にさせる人

「キッズ・リターン」以来、注目していた安藤政信君がついに『キネ旬』のFaceに登場。思わず買ってしまいました。若手の中では柏原崇、藤原竜也と並んで将来が楽しみな人です。ただ美しいだけでなく危うさと毒を合わせ持った（?）ところが魅力的だなあと思うのですが……。この人が出ているなら見てみようかなという気にさせる（主役でなくても）人ですよね。（田川百合香・東京都世田谷区・主婦・44歳）

●深い味わい

新作の公開のあわせて、S・スピルバーグ監督のインタビュー記事などをよく見かけます。映画史に残る傑作を何本も創造できるのは高い志と優れた技術があればこそだなあなんて改めて感心していますが、TVで気になる発言をしていました。現在を描く作品をあまり多く作っていない理由として、「現代人は自己中心的な世代であり、簡単に満足を得ようと躍起になっている。ちょっとかじるだけで深く味わおうとしない。過去の人は価値あることを行い、世界を変えて良くした。今、恵まれているが、それに値することをしているだろうか……」。スピルバーグ監督が、これほど世の中を憂い、冷めた目で現代人をみているとはちょっと驚きましたが「プライベート・ライアン」にはじっくり対峙してみることにしよう。（島貫誠・神奈川県横浜市・公務員・41歳）

●力作揃いの映画祭

先日ジュリエット・ルイスに会いに（!?）LAインディペンデント・フィルムフェスティバルに行って来ました。私が鑑賞したのはショート・フィルムの回だったのですがどれも力作ばかりで1つ1つに笑、涙、感動まで凝縮されて良い機会に恵まれた。でもちょっと残念に感じたのはお客の入りの悪かった事……。大々的に宣伝をされなかったせいもあるのでしょうが、もう少しPRをして多くの人に望で、経験、年齢など一切問いません。映画好きな方、興味のある方、連絡下さい。（〒222-0025 神奈川県横浜市港北区篠原西町24-32-201 佐々木公彦）

■北野武監督の「キッズ・リターン」が本っ当に好きです。パンフレットや関するものをお持ちの方、どうか譲って下さい。お願いします。どうしても欲しいんです。連絡お待ちしております。（〒308-0126 茨城県真壁郡関城町関本町1125 倉持真純）

■インターネットの映画ホームページ“MOVIE Watch”を覗いてみて下さい。E-mail:dela@cup.com. 私も時々出没しております。（東京都新宿区 松村清志）

■あなたも詩作してみませんか。その日から新しい人生が始まります。初心者向き同人詩誌『雲と麦』を発行。見本誌は切手600円分同封。（〒133-0057 東京都江戸川区西小岩3-33-20 雲と麦詩人会 工藤一麦）

ロビイ読者伝言板

■「あぶない刑事」のTVシリーズLD、またはビデオ未収録話（「あぶ刑事」37 51話、「もっとあぶ刑事」25話中15話）の録画テープを探しています。お持ちの方は貸して、あるいは適価でゆずっていただけないでしょうか? ご連絡お待ちしています。（〒243-0816 神奈川県厚木市林717-27 河野由紀子）

■エンターテインメント作品の映画ファンです。映画を見て、その熱い思いや感激を語りませんか? 仲間の輪を広げましょう。返信用切手同封の上、ご連絡下さい。（〒271-0062 千葉県松戸市栄町西3-1091-4 伊藤一直）

■金城武さんに完全にはまっています。ファンクラブ等あったら教えて下さい。それから以前とんねるずの番組の食わず嫌いのコーナーに出演した時、ビデオ録画されている方いませんか? 他にもデビュー当時やそれ以降の映画出演のビデオとか何でもいいです。お持ちの方、是非是非、ご連絡下さい。心よりお待ちしています。（〒673-1431 兵庫県加東郡紅町社120-1 森本雅子）

■社会人のための映画サークル〝シネマディクト〟では、ただ今会員募集中です。当サークルは20年以上活動しており、現在会員は約70名。老若男女問わず20歳代～60歳代まで幅広い年齢の会員と、洋画、邦画、アニメまでオールジャンルの話ができる層の厚さが魅力のサークルです。月刊会報の発行と月2回の集会が活動の中心。なお、今回は日比谷近郊で行われる例会に月一回くらいは来られる、という方を募集します。返信用80円切手を同封の上、下記までご連絡をお待ちしております。（〒124-0023 東京都葛飾区東新小岩5-14-16 新小岩ハイツ403 牧静香）

■我々、映像制作集団『DP映像』では次回制作作品に向けて新メンバーを募集しています。スタッフ、キャストどちらか希

Digitized by Google

楽しんでもらえれば良かったのにと残念に感じました。でも本当に楽しかったです。来年もあればいいナ。（石沢直子・東京都世田谷区・会社員・28歳）

●DVDか？　LDか？

キネマ旬報10月上旬号の『DVD検証』、竹中氏の言われるように映画好きLD派の私もこれから買い求めるLDの処理に困ってます。DVDとの同時発売なら9分9厘DVDを買うでしょう（実際に「デビル」以来LDは買い控え中）。「ジャケットデザインも」と本文中にありました。「確かに」と大きく手を叩きました。DVDに不足しているのは（私個人としても）そこの部分です。逆に、LDで2カ国語音声が可能なのに、そうしないメーカーに、苛立ちさえも感じます。DVDではあたり前のように二カ国です。皆さんはどう思われますか？（稲垣要・愛知県名古屋市・会社員・31歳）

●知らない街の見知った光

都内の名画座が消えていくせいで、今まであまり行かなかった街へ行く事が多くなりました。三軒茶屋シネマもそのひとつ。私の街からは片道1時間以上かかりますが、〝映画は映画館〟という意気込みで通ってます。少し前に音響も改善され、また休憩時間にかかるJAZZがいいのです。いつまでもがんばって下さい。（安西明・千葉県柏市・会社員・46歳）

●象徴的なある終焉

単なる偶然なのかもしれないけど並木座の閉館と黒澤明の死、何か象徴的に思えるのは私だけでしょうか。リアルタイムで黒澤明の映画を見てない私にとって並木座と黒澤明の映画は切っても切れない（文芸坐でも見ましたけど）。作品は永遠に残るけど、並木座も経営上の問題ではないというし、文芸坐も休館だし、甦ってほしいです。（桟真理子・東京都世田谷区）

●インタビューの意図は？

最近、テレビを見ていて思わずムッとしてしまったのは、黒澤明を扱ったニュース・バラエティ番組です。顔の黒い眉の細い、安い価格で大量生産されたような女子高生たちに「黒澤明を知っているか」とインタビューしているのです。当然ながら彼女らが知っているはずもありません。このインタビューの意図って何なのでしょう。世界の黒澤といえども若い世代には全く無名だと主張したいのでしょうか。黒澤なんて過去の存在だと言いたいのでしょうか。この番組の製作者でディレクターが映画を全く理解していないばかりか、実のところ軽蔑しているのは明らかです。もちろん私だって全てのマスコミが映画の理解者だと思っているわけではありません。でも、理解できないのなら謙虚になればいいではありませんか。女子高生を引き合いに出して、自分たちの無教養と無感覚を正当化するような真似はやめて頂きたいものです。黒澤は生前、日本のマスコミに対する不信感をたびたび口にしましたが、亡くなった後もまだ頭の悪い連中に愚弄されなければならないなんて……。結局、日本という文化後進国はクロサワという巨大な存在を見殺しにしたのかもしれません……。そんなことを思ってしまいました。（梶谷恵子・愛知県名古屋市・学生・18歳）

●そんな私は不謹慎!?

東海テレビの連続昼メロ『緋の稜線』。なにやら登場人物が苦悩ばかりしている。このクサさは〝約束ごと〟なのだけれども、クローズアップでのシンコクな表情の連発に「なにも、そないに気張らなくても」と腸がよじれるほど笑ってしまう私は不謹慎。ムチャクチャ大仰な脚本といい、度外れな熱演者たちといい、ギャグ効果バツグンの爆笑劇と感じる自分は不真面目かな。ご贔屓の若林志穂ちゃんが相当ブスに撮られているところも愉快だし、屈折した鑑賞に持ってこいのTVシリーズ……。でも、そのまま真剣に観ている方もいるのでしょうね。もし大半の視聴者がそうだったら、ちょっと怖いな……と考える私はやはり不道徳？（岩貞昌行・和歌山県和歌山市・42歳）

●田中純一郎氏の偉功

戦後に一時期、キネマ旬報の編集責任者をなさった映画評論家田中純一郎氏が亡くなられて10年。田中氏を生んだ群馬県新田町で開かれた〝第一回田中純一郎記念・日本映画史フェスティバル〟の最終日に、新装となった新田町文化会館エアリスホールへ行ってきました。展示場内では、田中氏が映画に賭けた生涯をまとめた「〜人と仕事〜」のビデオが繰り返し放映されたほか、野村芳亭、飯島正、市川崑氏から田中氏に宛てた書簡などが展示され、注目させられました。この日の上映は25年東亜キネマ製作の珍品「孝女白菊」ほか2本。岡山映画資料館主幹の松田完一氏が端正な調子で弁士をつとめられました。来年、第二回の映画史フェスティバルが開かれたら、また行きたいと思います。（市川栄一・埼玉県秩父市・自由業・68歳）

●宝くじが当たったら

もしクサル程お金を持っていたら、自分で映画館を建てて好きな作品を上映する――なんてのも映画ファンの夢の一つだと思う。たまに、そういう場合、自分ならどんな劇場を造るかと考える事があります。まず傾斜をつける、シネマライズなみに。女子トイレを多くする。これは新しく造るミニシアターなら基本だと思う。それから全席指定なんてのはどうだろう？　入口に大きなタッチパネルを置いて座りたい席に触れる。そのマスが色が変り、空席状況が分る。椅子は幅を広くとって、隣が気にならないようにする。そして好きな作品を2〜3本立てで。さて宝くじが何枚当たればいいんだろ？（入江洋史・神奈川県相模原市・アルバイト・32歳）

Digitized by Google

第55回ヴェネツィア映画祭

55 Mostra internazionale d'arte cinematografica

イタリア映画の復興とゆがめられた受賞結果

齋藤敦子

多数のゲスト・スターを迎え、派手に開幕したが……

今年のヴェネツィア映画祭は9月3日、オープニング作品「**プライベート・ライアン**」で開幕。地味な印象に終始した昨年とうってかわって、スピルバーグ監督以下、トム・ハンクスら主要キャストをゲストに揃え、おもいっきり派手に始まった。その後も引き続きハリウッド映画主導で、イタリアで「太陽がいっぱい」のリメイクを撮影中のマット・デイモンが、ジョン・ダールの「**ラウンダース**」の上映に合わせて登場したり、アメリカ国内での大ヒットでコンペ部門を辞退し、結局〈夜と星〉部門に移されたピーター・ウィアーの「**トゥルーマン・ショー**」ではジム・キャリー、エド・ハリスらが登場。「**ブルワース**」のウォーレン・ベイティ、「**ローニン**」のロバート・デ・ニーロと、最後までスターが会場をにぎわした。

ところが、そのままアメリカ映画主導で映画祭が終わるかと思いきや、意外などんでん返しが待っていた。最終日13日の午後の記者会見、昨年は審査委員長のジェーン・カンピオンから北野武グランプリの嬉しいニュースを聞いた同じ会場。ところが今年は審査委員長エットーレ・スコラの姿はなく、賞の発表を聞きに集まったジャーナリストを前に、映画祭ディレクターのフェリーチェ・ラウダディオが今年の任期が切れたら、来年はディレクターを引き受けないかもしれないと発言。なんとなく奥歯に物のはさまったような言葉に業を煮やしたイタリアのジャーナリスト達が突っ込んで質問すると、ようやく受賞結果に政府の圧力があったらしいことを、〝うっかり口をすべらした〟という形で漏らした。実は、何年か前にカンヌでも文化相が、〝フランス映画が大賞をとれないような映画祭に政府が予算を出す必要はない〟と発言して問題になったのだが、まさか審査の独立性が本当に破られるとは思わなかった。

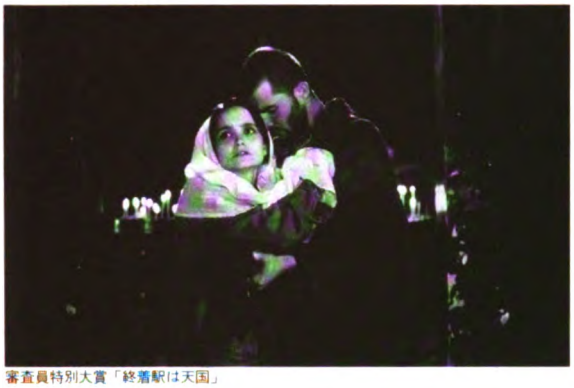
その夜の授賞式で、もっとも拍手が多かったのは当然のことながら女優賞のカトリーヌ・ドヌーヴ。肝心のグランプリ授与では〝イタリア映画の復興がなった〟この瞬間を待っていたはずのイタリア人からの拍手も少なく、感激しているアメリオだけが妙に浮いているという後味の悪さだった。

では、イタリア映画復興はなってないのかはいえば、かなり回復傾向にあるという感触は受けた。こんな形で賞をゆがめられることがなければ、もっと素直にイタリア映画に注目が集まったのではないかと思う。

今年、コンペに出品されたイタリア映画はジャンニ・アメリオの「**このように笑っていた**」、フランチェスカ・アルキブジの「**梨の木**」、ダニエレ・ルケッティの「**小さな教師達**」、アレッサンドロ・ダルトリの「**エデンの園**」の4本。コンペ外正式招待作品のタヴィアーニ兄弟の「**あなたは笑った**」、ミケーレ・プラチドの「**失われた愛**」、アルベルト・ソルディの「**禁じられた出会い**」の3本と合わせて、どれも水準の作品だったことは確かだ。

グランプリを受賞した「**このように笑っていた**」はシチリア島から北イタリアのトリノへ勉強に来た弟フランチェスコ・ジュフリダと、弟を追って出稼ぎにきた兄エンリコ・

Digitized by Google


審査員特別大賞「終着駅は天国」

グランプリ「このように笑っていた」

女優賞（カトリーヌ・ドヌーヴ）「ヴァンドーム広場」

マストロヤンニ賞（ニコロ・センニ）「梨の木」

ロ・ヴェルソの、58年から64年までの6年間の関係を、ランダムに抜き出した6日間で描くというもの。弟を溺愛し、いつか学問で身を立てると信じる兄と、期待に応えられずに都会に染まっていく弟の苦い兄弟愛がテーマ。決して悪い作品ではないのだが、せっかくのエモーションが6つの時間ごとに分断され、どうしても映画の中に入っていけない。見終わったときに冷たいしこりのようなものを感じた。

主役のニコロ・センニが今年から設けられたマストロヤンニ賞を受賞した「**梨の木**」は、母親ヴァレリア・ゴリーノの使った麻薬の注射針で誤ってエイズに感染したかもしれない幼い妹のために、頼りにならない大人達に代わってニコロ少年が奮戦するという物語。痛々しい時代の雰囲気を的確に掴んでいて、パンチには欠けるがアルキブジらしい良心的な映画だった。

期待したダニエレ・ルケッティの「**ちいさな教師達**」は、第二次大戦末期にレジスタンスに身を投じた学生達の姿を描いたベストセラーの映画化。ルケッティの演出のうまさは認めるが、「プライベート・ライアン」と並んで第二次大戦を聖戦のようにとらえる傾向が出てきたことを疑問に思う。「**エデンの園**」は死海文書の新解釈によるキリスト伝で、キム・ロッシ・スチュアートがキリストを演じた。公開に合わせたパブリシティを狙って、無理矢理コンペに突っ込んできたのだが、黒澤明の死でニュースがすっ飛んでしまったことは既報の通り。

むしろ私が好きだったイタリア映画はコンペ外のもの。例えば「カオス・シチリア物語」の続編ともいえるタヴィアーニ兄弟の「**あなたは笑った**」。30年代のローマと現代のシチリアの2つの編から成る作品だが、特にシチリア人の稼業である誘拐をテーマにした後半の哀切な物語に心を打たれた。また、プラチドの「**失われた愛**」は、村の司祭に弟子入りさせられた少年が、村人から迫害を受けながら子供達の教育に打ち込む女教師（ヴィットリオ・メッゾジョルノの娘ジョヴァンナ、この映画は夭逝したヴィットリオに捧げられている）に恋心を抱くという物語で、衒いのない、真摯な話法が映画に合ってとてもよかった。他にも、〈パースペクティヴ〉部門のマテオ・ガローネの「**ゲスト**」は、私は見逃してしまったが評判がよかったし、〈批評家週間〉のクラウディオ・カリガリ「**夜の匂い**」もよく出来たフィルム・ノワールで楽しめた。この映画で、警官から強盗に転身する主役のレモ役を演じたヴァレリオ・マスタンドレアはジョージ・クルーニーを土臭くした感じ。「梨の木」でニコロの父親役を演じていたセルジョ・ルビーニやキム・ロッシ・スチュアート、セルジョ・カステリットなど、イタリア映画に見応えのある男優が揃ってきた。

クストリッツァ、ロメールらベテラン達が受賞

では、賞の順にコンペに出品された作品を紹介していこう。

審査員特別大賞のルシアン・ピンティリエの「**終着駅は天国**」は、豚飼いのミトゥとウェイトレスのノリカが恋に落ち、男は兵役、女は年の離れた婚約者から逃げだすというル

Digitized by Google

「ラウンダース」

脚本賞（エリック・ロメール）「恋の秋」

塚本晋也監督

マット・デイモン

エミール・クストリッツァ監督

ーマニア版「ゲッタウェイ」。ベテラン演出家であるピンティリエは映画祭の常連だが、どうも私の肌に合わず、この人の映画は常に映画祭の苦行だったのだが、これは割と見やすくてホッとした。

監督賞（銀獅子賞）のエミール・クストリッツァはすでにカンヌで二度、ヴェネツィアで一度大賞を獲得している賞の常連。こんなに受賞が多くなかったら、この「**黒猫、白猫**」もきっとグランプリになったかもしれない。「アンダーグラウンド」で祖国の苦渋に満ちた歴史を描いた後なので、今度は人生＝生命を手放しで謳歌したかった、というクストリッツァの言葉通り、ジプシーの村の生命力あふれる人々の生命力あふれるせめぎ合いを描いた、そのまま祝祭劇のような映画だった。

上院議院メダルはモフセン・マフマルバフの「**サイレンス**」。この作品は東京国際映画祭で上映されるので詳細は割愛する。今度はタジキスタンで撮った作品だが、次はぜひイランに戻って撮って欲しい。

男優賞は**ショーン・ペン**がカンヌに続いて受賞（ただしレオ・ペンの葬儀のため、ヴェネツィアには登場せず）。アンソニー・ドレイザンの「**ハーリーバーリー**」は、ハリウッドという虚飾の世界で、女と素直に関係を結ぶことができない男達の酒とドラッグの日々を描いたディヴィット・レイブ（「ストリーマーズ」）の戯曲の映画化。映画にみっちり詰めこまれた実体のない言葉の氾濫を、ショーン・ペン、チャズ・パルミンテリ、ケヴィン・スペイシー、ロビン・ライト、メグ・ライアン（なんと娼婦役）が見事にさばいていて、スターの実力を思い知らされた。

ヴァンドーム広場といえば高級宝飾店やホテル・リッツの並ぶパリのハイソな街。ニコール・ガルシアの「**ヴァンドーム広場**」は、そんな宝石店のひとつを舞台に、急死したオーナーの妻カトリーヌ・ドヌーヴが夫の遺した謎のダイヤモンドをさばこうとして、過去の男ジャック・デュトロンと対決する物語。ほとんどアル中で廃人同様だった女が次第に生気を取り戻していく様をドヌーヴが貫禄で演じていて、ガルシアの丁寧な演出と相まって見応えのある映画になっていた。

脚本賞のエリック・ロメール「**恋の秋**」は、批評家の間では一番評価の高かった作品だが、後で審査委員長のエットーレ・スコラが未見だったことが発覚。もしスコラが見ていれば絶対にもっと大きな賞になったはずだ。巨匠の緩急自在な演出で、四季のコント・シリーズ中もっとも明るく楽しい笑劇に、見ている方も思わずのせられてしまう。音楽賞のフェルナンド・ソラナス「**雲**」は、なぜかすべてが逆行するブエノスアイレスが舞台で、資金がついて取り壊しが迫った芝居小屋と、芝居を愛する人々の日常をスケッチ風に描いた作品。南米独特のシュールな感覚とピアソラに捧げられたタンゴがノルタルジックなムードを作り出していて、前作にはのれなかった私だが、「雲」にはすっぽり巻込まれてしまった。

賞にはからまなかったが、アベル・フェラーラの「**ニュー・ローズ・ホテル**」、パット・オコナーの「**ダンシング・アット・ルナサ**」にはそれぞれ監督の個性がよく出ていた。特にフェラーラは彼の最近の傑作だと思う。

日本映画は〈パースペクティヴ〉で塚本晋

Digitized by Google

也の「**バレット・バレエ**」が、〈批評家週間〉で宮本亜門の「**BEAT**」が上映された。「鉄男」の成功でイタリアにファンの多い塚本晋也は、昨年の審査員でもあり知名度は抜群。映画の受けもよく、記者会見での受け答えも堂々としていて感心した。

個人的に好きだったのは、〈パースペクティヴ〉に出たラドゥ・ミハイレアヌの「**命の列車**」とセドリック・カーンの「**アンニュイ**」。

「**命の列車**」は、ナチスがユダヤ人を列車に乗せて強制収容所へ連れていくという噂を聞きつけた東欧のあるユダヤ人村人達が知恵を出し合い、自分達で偽の列車を仕立てて迫害から生き残ろうとするホロコーストのお伽話。「**アンニュイ**」はモラヴィアの小説の映画化で、妻に去られた大学教授シャルル・ベルリングが、老画家ロバート・クレーマーの遺したモデルの少女とのセックスに溺れていく。同じセックスに溺れるといっても「ドライ・クリーニング」のような不快さはなく、軽みのあるところがとてもいい。カーンはアルノー・デプレシャン、パスカル・フェランらと共に、確実に次代のフランス映画を担っていくだろう。

なお、開幕早々の6日に黒澤明死去のニュースが伝えられた際、映画祭が見事に対応したことに関しては、黒澤追悼号に書いた原稿と重複するので、ここでは触れなかった。

第55回ヴェネツィア映画祭受賞結果

●金獅子賞
「このように笑っていた」（ジャンニ・アメリオ）
●審査員特別大賞
「終着駅は天国」（ルシアン・ピンティリエ）
●銀獅子賞（監督賞）
「黒猫、白猫」（エミール・クストリッツァ）
●上院議院金メダル
「サイレンス」（モフセン・マフマルバフ）
●ヴォルピ杯（男優賞）　ショーン・ペン
「ハーリーバーリー」（アンソニー・ドレイザン）
●ヴォルピ杯（女優賞）　カトリーヌ・ドヌーヴ
「ヴァンドーム広場」（ニコール・ガルシア）
●マルチェロ・マストロヤンニ賞（新人俳優賞）
ニコロ・センニ
「梨の木」（フランチェスカ・アルキブジ）
●オゼッラ金貨賞（脚本賞）　エリック・ロメール
「恋の秋」（ロメール）
●オゼッラ金貨賞（撮影賞）　ルカ・ビガッツィ
「このように笑っていた」（アメリオ）
「梨の木」（アルキブジ）
●オゼッラ金貨賞（音楽賞）　ゲラルド・ガンディーニ
「雲」（フェルナンド・ソラナス）
●短編部門・銀獅子賞
「小銭」（ドリット・ハキム）
〈本賞外の主な賞〉
●FIPRESCI（国際映画批評家連盟賞）
1位「パウダー・ケグ」（ゴラン・パスカルジェヴィッチ）
2位「命の列車」（ラドゥ・ミハイレアヌ）
●批評家週間賞
「孤児達」（ピーター・ムラン）

キネマ旬報社の本

キネマ旬報・臨時増刊

映画賞・映画祭データブック

映画賞・映画祭　受賞一覧○映画界年表
世界の主な映画祭○映画祭早見表

アカデミー賞／ゴールデン・グローブ賞／カンヌ映画祭／ベルリン映画祭／ヴェネツィア映画祭／キネマ旬報賞／ブルーリボン賞／毎日映画コンクール／日本アカデミー賞／フランス・シネマ大賞／ニューヨーク映画批評家賞／ルイ・デリュック賞／カルロヴィ・ヴァリ映画祭／ベルリン国際映画祭／ジャン・ヴィゴ賞／モスクワ映画祭／ジュルジュ・サドゥール賞／東京国際映画祭／アヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭／サンダンス映画祭／映画芸術ベストテン・ワーストテン／ぴあテン＆もあテン／報知映画賞／横浜映画祭

定価2500円（税込）
■B5判■240頁

Digitized by Google

私の映画日誌

The Eye of Kazuma ㉔

井上一馬

サンドラ・ブロックのメッセージ

ここ数年のうちに私が見た映画の中で、いちばんズシンと心に残ったのは、『この森で、天使はバスを降りた』という作品だった。

この映画では、刑期を終えて刑務所から出てきたアリソン・エリオットが、小さな町で食堂を営む、息子を失った老婦人のもとで、人生をやり直そうとする。

心に傷を負った人、足りない部分がある人、不完全な人、人とは違う部分をもった人、そうした人々がお互いに助け合い、癒し合いながら生きていく。

癒しという言葉には、今では使われすぎてすっかり手垢がついてしまった感があるが、やはり私は、不完全な人々がお互いを助け合って癒し合うところにこそ、人生の感動があるのだと思っている。

サンドラ・ブロックが主演する**『微笑みをもう一度』**も、そんな映画のひとつである。

高校時代、学園の女王だったバーディ（ブロック）は、同じ高校の花形クォーターバックだった恋人と結婚し、幸せな結婚生活を送っていた。

だが、夫の不倫からその生活は脆くも崩れていき、彼女は娘を連れて、逃げるようにして故郷の町へ帰ってくる。

だが、かつて華やかな学園の女王だったが故に、バーディはまわりの人々から好奇の目で見られる。もちろん彼女自身にもプライドがあるので、おいそれと新しい恋に踏み出すこともできない。おまけに娘は父親のもとへ帰りたがっている。

しかし、それでもバーディはしだいに、母や、かつての同級生との絆の中で自分を取り戻し、新しい人生を歩み始める準備を整えていくのである。

「子供時代は悲しい思い出ばかりだし、人生の最後は寂しい。肝心なのはその中間。自分を見つけたら、希望を忘れずに生きていく」

これが、『微笑みをもう一度』の脚本に惚れ込み、自ら製作総指揮にも当たったサンドラ・ブロックの、私たちへのメッセージである。

この映画の監督を務めたのは、アフリカ系アメリカ人のフォレスト・ウィティカー。

実力派の俳優としても広く知られる彼は、監督としてのデビュー作に当たる『ため息つかせて』で、これまでのような下層階級ではなく、中産階級のアフリカ系アメリカ人の日常生活をリアルに描いて、ブラック・ムービーの世界にまったく新しい地平を切り拓いた。そしてその結果としてウィティカーは、監督としても非凡な才能をもっていることを証明したが、この映画では、白人の世界を描いているせいか、前作ほど彼の本領が発揮されているようには私には思えなかった。

ウィティカーはこの映画では、白人の登場人物や、彼らの苦しむ姿を、あまりにも醒めた目で見すぎているのである。彼らの悩みや苦しみを、まるで他人事のように冷たく突き放してしまっているのだ。

もちろんウィティカー自身にはそのような意識はないのだと思うが、心の深い部分では、やはり彼はこの映画に監督としてのめり込むことができなかったのではないだろうか。

私にはそんな気がしてならなかった。

馬と人間のはざまで

ロバート・レッドフォードが、『リバー・ランズ・スルー・イット』と同じモンタナの大自然を舞台に監督・主演した**「モンタナの風に抱かれて」**も、心に傷を負った人々の癒しをテーマにした映画である。

『イングリッシュ・ペイシェント』のクリスティン・スコット・トーマスが演ずるアニーは、ニューヨークの最先端をいく雑誌の編集長を務めている。夫のロバート（サム・ニール）は、成功した弁護士だ。

だが、二人のあいだに生まれた十三歳の娘グレース（スカーレット・ヨハンセン）は、乗馬中に事故にあい、片脚を切断しなければならなくなってしまう。その事故で彼女は、心にも大きな傷を負った。

と同時に、彼女の愛馬ピルグリムも心と身体に痛手を負い、人間への恐怖心と敵意をむき出しにする馬になってしまうのだ。

母親のアニーは獣医からピルグリムの安楽死を勧められるが、心を閉ざす娘グレースのために、彼女はこの馬を元のピルグリムとして甦らせようと決意する。

そんなときにアニーが耳にしたのが、

Digitized by Google

ホース・ウィスパラーという言葉だった。
ホース・ウィスパラー。それは馬と対話し、馬の耳元で何か特別の言葉をささやくことで馬を手なずけることのできる不思議な能力をもったカウボーイのことだった。
アニーは、現代のホース・ウィスパラーといわれるモンタナのトム・ブッカー（ロバート・レッドフォード）に連絡を取り、ピルグリムの治療を依頼する。そして、娘と馬を連れて、はるばるモンタナまで出かけていくのだ。
だがそこで、ブッカーとモンタナの自然の力で癒されるのは、ピルグラムよりもむしろ、娘のグレースと母親のアニーのほうだった。
ここに、この映画のひとつの問題点が存在する。
この映画の原作は、イギリス人の作家ニコラス・エヴァンスの書いた『ホース・ウィスパラー』という小説で、脚本にはまず『フォレスト・ガンプ／一期一会』でオスカーを取ったエリック・ロスが起用された。
だが彼は、監督のレッドフォードと方針が合わずに、途中で降板する。
ロスはこの映画を、
「アニーとブッカーのラブ・ロマンスにしたい」
と考えていた。
だがレッドフォードは、
「この映画の主役はあくまでもグレースとピルグリムだ」
と考えていたのである。

ロスは、山の上でアニーとブッカーが愛し合うシーンを含めたいくつかの草稿を用意したが、レッドフォードにはそれは受け入れがたいものだった。
その結果ロスが降りたあと、脚本を引き継いだのは、『マディソン郡の橋』の脚本家リチャード・ラグラベニーズだった。
レッドフォードはラグラベニーズをユタ州にある自宅に招き、西部の映画として自分の気に入っている『シェーン』を彼に見せながら、こう言った。
「子供の頃にこの映画を見て私が思ったのは、主人公があまり話をしないということだった。彼がさまざまな過去をもっていることは、見るだけでわかる。無口なのは、アメリカの牧童生活の最大の特徴なんだ。そして控え目なこともね」
レッドフォードのこの方針に沿って、『モンタナの風に抱かれて』では、ブッカーの話す言葉は可能なかぎり削ぎ落とされ、必要最小限にとどめられている。そして彼の態度も、どこまでも控え目に終始する。
その点はレッドフォードの目論見どおり、この映画では成功したといえるだろう。
だが、アニーとブッカーのラブ・ロマンスを中心に据えたロスの脚本と、グレースとピルグリムを中心に据えたラグラベニーズの脚本が合体した結果、この映画が全体として、どっちつかずの印象をもってしまったことは否めないように私には思われる。

都会と自然

ロバート・レッドフォードは都会の生活と、自然の中の生活の両方を愛している。
「私はニューヨークで過ごす都会の生活も、ユタやモンタナの自然の中で過ごす生活も、両方とも愛している」
そうレッドフォードは言う。
そして彼は、西部の男を、「物事を自分でコントロールしない人間、自分をもっと大きな秩序の中の一部だと考えている人間」だと規定し、都会人に関しては、「物事を自分の力でコントロールできると思っている人間」だと考えている。
レッドフォード自身の中では、この両方の要素が複雑に絡み合っている。
そしてその両方の要素が、映画にもまたもろに反映してしまっているように私には思えた。
その結果、この作品はどっちつかずの印象をもってしまったのである。
ブラット・ピットを一躍有名にした『リバーランズ・スルー・イット』は、私のとても好きな映画のひとつだが、この映画や、『普通の人々』のように、レッドフォードはもしかしたら自分の監督する映画には出ないほうがいいのではないだろうか。
レッドフォードはシャイな人間だが、いっぽうで自己顕示欲は非常に強い人間である。だから映画の中で、自分を傷つけたり、自分の意志に反したりすることはできない。そのために、レッドフォードが監督と主演を兼ねると、どうしても彼の複雑な人間像が映画にも反映してしまい、観客にどっちつかずの中途半端な印象を与えてしまうのである。

愛すべき無名の労働者たち

『微笑みをもう一度』や『モンタナの風に抱かれて』が、癒しの映画として、とても大切に、念入りに作られた、いわば真綿にくるまれたダイヤモンドのような作品（おとぎ話）だとすれば、
「すべての無名の労働者に捧げる」
という勇ましい献辞のついた『**ブロヴァンスの恋**』は、むき出しの石炭のような映画だといえる。
舞台は、今、北アフリカや中東からの移民の窓口になっているフランスのマルセイユ。
その街の長屋のようなアパートメントで暮らす人々の日常生活と心模様を、この映画は描いてみせる。
そこに住んだりやってきたりする人々は、スーパーで働くジャネットにしても、セメント工場の守衛を務めるマリウスにしても、あるいはそれ以外の人々にしても、みな人間として、家族の一員として、足りない部分、欠けた部分をもっている。
だがそれでも彼らは、長屋アパートメントでお互いを助け合い、癒し合いながらたくましく生活を続け、中庭にはいつも笑いが絶えないのである。
無名の労働者のしたたかさ、しぶとさ、力強さを見せつけくれる思いのする映画である。

Digitized by Google

日本映画時評 130

サンセバスチャンの成瀬巳喜男

山根貞男

成瀬巳喜男特集の組まれたスペインのサンセバスチャン国際映画祭に参加した。

映画祭は九月十七日から二十六日までで、サンセバスチャンには前日の夕方に着いた。霧雨が降っていた。すぐ事務局と連絡を取ると、内輪の夕食会をするという。夕食会といっても、夜十時からである。ホテルへ迎えにきたタクシーに乗ると、同乗者がいて、紹介された。アボルファズル・ジャリリ。いま注目のイランの新鋭監督にいきなり会って、興奮したあと、レストランへ着くと、これが四十人ほどの盛大なディナーで、なんと、ジャンヌ・モローを中心とする会だった。しかも同じテーブルに割り当てられ、それだけでも幸福なのに、やや遅れてわたしが着席するや、大女優のほうから声を掛け、握手の手を差し伸べてくれた。あの我が青春時代における衝撃の一作『エヴァの匂い』のヒロインが。

こんなふうにサンセバスチャンでの日々は思いがけない喜びから始まった。ろくに言葉も話せないのに、これだから海外の映画祭へ行くのはやめられない。

オープニングの日はみごとな快晴で、以後、夜に小雨の降る日はあったが、秋晴れがつづいた。といっても、スペイン北東部のフランス国境に近い海辺の街、サンセバスチャンでは、日中は真夏同様に暑く、わたしの住む湘南より何倍もきれいな浜辺には、朝から水泳と日光浴を楽しむ人々がいっぱいいた。すべての上映は夕方からなので、一緒に成瀬巳喜男特集の準備をした蓮實重彦夫妻と、海辺の光景を眺め、旧市街まで足を伸ばし、中世に迷い込んだかのような街の石畳をぶらつく。はずれに複合映画館のビルがあり、成瀬巳喜男作品もそこで上映される。午後四時、蓮實重彦はオープニング・セレモニーのリハーサルに向かい、わたしは成瀬巳喜男特集の一本目『君と別れて』上映に立ち合った。

サンセバスチャン国際映画祭は今年が第四十六回で、公式コンペティション、世界から集めた新作の特別上映のほか、四大特集を組んだ。成瀬巳喜男、テリー・ギリアム、戦後イタリアのコメディ映画、そしてスペイン語圏の映画一九九八である。成瀬巳喜男については三十九作品(これほどの本数は日本を含めて世界初!)が、スライド映写によるスペイン語と英語の字幕つきで、各二回ずつ上映される。年代順に、今日、ある映画館で上映したものを、明日は別の映画館で、というふうに日程をズラして。

二百本近い作品が上映されるから、見たい映画、この機会に見ておかないとめったに見られそうにない映画が、ぞろぞろある。しかし断固、成瀬巳喜男最優先に決めた。スペインのサンセバスチャンという見知らぬ街で異国の人々と一緒に成瀬映画を見るなんて経験は、めったにあるものではなかろう。

ふたつの映画館を行き来して、成瀬作品の上映に立ち合う。正直いって初めは不安だったが、百五十席から二百席くらいの映画館には熱心な観客が初日から詰めかけた。その数が日毎にどんどん増えてゆく。たとえば『噂の娘』や『まごころ』の二回目の上映が行列になったのは、きっと一回目を見た人たちによるクチコミのせいにちがいない。二日目の午後だったか、チケット売り場で、大著『ニコラス・レイ』の日本版がさきごろ刊行されたフランスの映画評論家、ベルナール・エイゼンシッツにばったり会った。成瀬を見に来たと言い、戦前の作品の素晴らしさを讃える。パリで若者に人気のロックと映画の週刊誌「レザンロックプティブル」の記者や「カイエ・デュ・シネマ」の編集者とも、成瀬作品の会場で再会した。どちらも、昨年、ロカルノ国際映画祭での加藤泰特集のとき、初めて見た加藤泰作品の魅力に興奮していた青年である。アメリカからは成瀬巳喜男論の著書のあるオーディ・ボックが来ていた。

特集のうち、成瀬巳喜男、テリー・ギリアム、スペイン語圏の映画一九九八に関しては、分厚いカタログが出版された。映画祭全体のカタログとは別に。成瀬巳喜男とギリアムを同時に特集する感覚がまずスゴイが、それぞれ中身の濃い豪華な書物を出す映画的実行力に感嘆する。成瀬巳喜男カタログは蓮實重彦とわたしの編集によるもので、わたしたちのほか、ダニエル・シュミット、ジャン・ピエール・リモザン、楊德昌、吉田喜重、ジャン・ドゥシェ、オーディ・ボックなどによる成瀬論が、成瀬映画の関係者の発言やフィルモグラ

レイアウト・鈴木一誌

Digitized by Google

フィとともに収録されている。

今回のサンセバスチャン国際映画祭ではふたりの人物が注目を集めた、と、さきほどの「レザンロックプティブル」の映画記者がのちに同誌に書いた。コンペ作品『マスク・オブ・ゾロ』とともに母国スペインに帰ってきたアントニオ・バンデラスと、成瀬巳喜男である。この取り合わせもケッサクではないか。バンデラス人気は凄まじく、彼のホテルの前には昼も夜も、まさに四六時中、ファンが垣根をつくっていた。あるとき、蓮實重彦が同じホテルに帰ろうとしたら、女の子のなかから、なぜか「ミキオーッ!」という掛け声があがった。間違われた本人の喜んだのなんの。『女人哀愁』上映前のスピーチもその話から始めた。

蓮實重彦はオープニングで成瀬特集について挨拶をすることになり、先述のようにリハーサルに出かけた。ところがわたしが『君と別れて』を見て外に出たら、彼が微妙な表情で待ち受けている。リハーサルが早く終わったので映画を見て、その感動の表情かなと思ったが、どうも違う。聞けば、フランス語で予定していた挨拶をスペイン語でやることになったという。さあ、たいへん、と、成瀬特集について映画祭との連絡役を務めたスペイン映画の専門家、金谷重朗が、ただちに隣のバルでスペイン語の発音の特訓を始めた。いやあ、まさか東大総長の家庭教師をすることになるとは、と金谷青年の興奮することしきりであった。

サンセバスチャンは独立運動の盛んなバスク地方の中心で、海鮮料理がおいしい。日刊映画祭新聞のインタビューをレストランで受けたさい、成瀬巳喜男のことや映画祭の印象を語ったあと、バスク料理を激賞したところ、そこがとりわけ美味なバスク料理店で、カメラマンはすぐにわたしを厨房へ連れていって、コックの格好をさせ、フライパンを手にする姿を撮った。翌日、その写真がデカデカと掲載され、気がつくと、映画館周辺で出会う人たちがわたしの顔を見てニヤニヤしている。おかげでその日の『山の音』上映前のスピーチは満員になった。

今回の映画祭では、是枝裕和の『ワンダフルライフ』がコンペに出品され、高橋陽一郎の『水の中の八月』が特別上映作品に含まれていた。後者はハイビジョン作品で、今春、わたしはたまたまNHK-BSで見て感心したが、サンセバスチャンでは、中身以上に、それをフィルムに起こしたものの画質に興味津々であった。大きなスクリーンで見て驚いた。微細な部分で気になるところもあるが、何の遜色もなく、それより、引き気味のキャメラの多い画面の豊かさがテレビで見たものの優に二倍は迫ってきた。

結果、『ワンダフルライフ』は国際映画批評家連盟賞を、『水の中の八月』は新人監督賞に輝いた。出品された日本映画が二本とも受賞したわけである。前者の賞状は途中から釜山映画祭に発った是枝裕和のかわりにわたしが、後者は出演者の柳愛里が代理で受け取った。柳愛里はクロージング・セレモニーでメダルを渡されたあと、やはりスペイン語で挨拶をしなければならなかったが、特訓に励み、晴れの舞台では、カタカナ・スペイン語を口にするや、満場にドッと歓声があがって大受けに受けた。

新人監督賞の審査員のひとり、ポルトガル・シネマテークの副館長、ホセ・マヌエル・コスタが式の直前、柳愛里とわたしに話しかけてきた。『水の中の八月』は文句なしに素晴らしく、数本しか見られなかったけれど、どの成瀬作品も感動的で、今年のサンセバスチャンは日本映画の年だった、と。

成瀬巳喜男作品は映画祭のあと、マドリッドのフィルモテカ・エスパニョーラで二回ずつ上映される。その上映スタートに立ち合ってきた金谷重朗によれば、やはり盛況で、ビクトル・エリセが連日のように見にきていたという。

そもそも今回の成瀬巳喜男特集は、フィルモテカ・エスパニョーラの館長、ホセ・マリア・プラドが昨年の東京国際映画祭の「ニッポン・シネマ・クラシック」で『まごころ』を見て、ぞっこん惚れ込んだことから始まった。昨年は予算がなく、英語字幕をつけられなかったが、それにもかかわらず。

今年の「ニッポン・シネマ・クラシック」では、わたしは蓮實重彦と相談して、伊藤大輔と内田吐夢と溝口健二の生誕百年記念の特集を中心にプログラムを組んだ。十六作品のフィルムの手配を完了し、スペインへ発つ直前、チラシに使う十六作品の惹句を書き、カタログ編集部と打ち合わせて、解説原稿の手配を済ませ、一部は自分で書き終え、三人の巨匠についてサンセバスチャンで蓮實重彦と対談してテープを日本へ送る手筈まで整えた。ところが出発の三日前、プログラムは映画祭首脳部によって黒澤明監督追悼全作品上映に差し替えられてしまった。

わたしは気重に日本を発ち、サンセバスチャンの前にマドリッドで泊まり、フィルモテカ・エスパニョーラを訪れた。そこでは小津安二郎の特集を催していた。同じころ、パリのシネマテーク・フランセーズでは加藤泰特集の真最中であった。

写真はサンセバスチャン国際映画祭の成瀬巳喜男カタログ

Digitized by Google

試写室

山口猛

闘う映画人の記録
来なかったのは軍艦だけ

清島利典監督
日本ドキュメントフィルム製作

東宝争議は、日本映画界で最大の労働争議であるとともに、映画という広範な娯楽の世界での争議であるだけに、読売争議同様、いやそれ以上にきわめて社会的な影響力が強かった。

そのために当時日本を占領していたGHQも放置することができず、特に大争議と呼ばれた48年の第三次争議では、最終的にGHQは、その政治方針転換の中で日本の警察に任せきれず、自ら解決に乗りだしたのだった。

そして、その頂点ともいえる8月19日には、戦車、飛行機まで繰り出し、亀井文夫監督が言うように「来なかったのは軍艦だけ」という事態にまで陥るほどとなり、衝突には至らなかったものの、この年の暮れになってようやく解決したのだった。

私が東宝争議と関わったのは、いや関わったというと余りに僭越なことだが、今年の2月に亡くなった名キャメラマンの宮島義勇氏を通してだった。83年12月から、ほぼ3年間に渡って小誌に連載した「宮島義勇回想録」の中で、半ば強制的に教わったというのが正しいかもしれない。

宮島氏は、この東宝争議にあって、終始指導的な立場をとっていた。掲載したその貴重な文章を本来は生前に単行本にしようとして、出版社も決まっていたが、本人が固辞したために実現せず、来年、やっとのことで出版の運びになる。

この東宝争議の記録映画のことを知ったのは、そんなときだった。

ここには当時の「日本映画演劇労働組合」、いわゆる「日映演」の執行委員長だった伊藤武郎氏、日映演の情報宣伝部長である宮森繁氏、プロデューサーの能登節雄氏、女優の岸旗江氏など、のべ16人の証言がビデオ撮影によって綴られている。

それだけではなく、合間にはこれまで見ることのできなかった東宝争議の様子を写したニュース映像が挿入され、はなはだ貴重な記録となっている。

こうした映像を見ながら思うのは、こうした記録が残されてよかったという反面、もう少し早い時に、こうした試みが出来なかったかという慚愧の念である。もちろん、それは製作費の捻出を含め、やっとの思いで作り上げた映画の当事者に対していささか無責任なことと承知したうえでも、この間に亡くなった人々が余りに多すぎて、もし彼らが生きていたらという思いがあるからだ。

それでも、日映演と共産党との関係をも含めて、彼らの証言はいきいきとしていて、当事者ならではの具体的な話は実に面白い。とりわけ兄弟ではありながら、まったく顔から性格まで違う照明の久米成男、光男の発言は興味深い。

また宮森氏の話から、日映演内部でも、たとえば宮島氏との関係が必ずしも一致していないことも伺われ、それはこうしたドキュメンタリー映画ならではのものであろう。

ただ記録映画としてみた場合、多少の不満が残ることも確かである。ここではインタビュアーとして女性を立てているのだが、とても東宝争議に関心のある人物とは思えない。何より肝心の質問事項にしても、もう少し考えて、と思う部分が余りに多すぎる。

また、東宝争議は第一次から第三次争議まであり、しかもその都度、東宝従業員組合といった会社の御用組合もできていて、おまけに新東宝という副産物まで生み出している。だが、東宝争議に関心のある人々はともかく、この映画によって東宝争議を知ろうという向きには、それらがいささか分かりにくい。

貴重な記録であるのだから、時代の流れとその都度起きた問題を簡単な表かナレーションでも説明した上で証言を被せた方が親切だし、せっかくの記録映画が途中で尻切れトンボになっている部分もあり、編集の上で一考の余地があろう。

山口猛

Digitized by Google

劇場公開映画批評

森卓也／鬼塚大輔／野村梓／中西愛子／杉原賢彦／森直人／佐藤忠男／村岡良昭

フライヘート・ライアン

SAVING PRIVATE RYAN
UIP配給
9月26日公開

〝引き算〟の演出ができるようになれば、映画監督も一流と言えよう。とりわけ昨今のアメリカ映画の、これでもかこれでもかという〝加乗（過剰）〟描写だらけの中では、なおさらだ。「プライベート・ライアン」で、演出が冴えるのは、オマハ・ビーチ上陸の場面。機銃弾が水を貫き、海中の兵士に命中する描写は、初めて見た。

そして、フィルムをコマ抜きし、そのぶんコマ伸ばしした、つまりスピードは正常で動きがパラつく画面。これはオプチカル処理で今や自由自在だから、TVを含めて大乱用。私は、コマ伸ばしスローモーション同様、それ自体はむしろ嫌いである。

だが、それが、炸裂音でトム・ハンクスが難聴状態になったのを示す音の一人称描写とシンクロすると、ありふれた形容だが、まさに悪夢。四方八方でドンパチ鳴り響いていたデジタル・サウンドが、気圧が急減したときのように歪んで遠くなり、それが走り倒れる兵士たちの姿のストロービングとシンクロすると、極限の恐怖と、敵への憎悪を実感させる。これぞ〝減〟と〝除〟の技巧。その後の、両手を挙げたドイツ兵を、アメリカ兵が反射的に射殺する場面が、観客を納得させてしまうのも、戦闘シーンの凄味ゆえだろう。

つい先頃まで〝天才的新人〟だったスティーヴン・スピルバーグも、今や五十代。名実共に名匠でありたいとの思いも、一段と強まって不思議はない。

いや、すでにアカデミー賞を獲得し、95年にはAFIから功労賞も受けたスピルバーグ、今さら名匠巨匠症候群でもあるまいに、と、はた目には思うのだが、当人としては、たとえばJ・フォードは四十代半ばで「怒りの葡萄」「わが谷は緑なりき」をつくり、W・ワイラーは三十代後半で「嵐が丘」「偽りの花園」を発表しているのに——そして、自分の作品が、往年の巨匠たちに較べて、どうも貫禄、風格に乏しいのが、内心はがゆいのではなかろうか。でなければ、ライアン二等兵の母が戸口を開ける逆光のショットが「捜索者」を思わせたり、戦死の公報を覚った母が、ポーチにくず折れる後姿をとらえた構図が、〝まるでワイラー〟だったりすることもあるまい（そう言えば、カバーゾ二等兵が撃たれるくだりは、「七人の侍」の菊千代のイメージか）。

今さっき讃めたばかりでなんだけど、戦車の不気味な重圧感は、S・ポラックの「大反撃」が圧倒的だったし、戦闘シーンのストレートな迫力において、そしてテーマにおいても、S・ペキンパーの「戦争のはらわた」を凌駕する作品は、生まれていないのではないか（ペキンパーの編集の的確さにも、改めて注目してほしい）。

そう言えば、「プライベート・ライアン」で、命乞いをしたドイツ兵が、目隠しして後方へ歩かされる姿が、「砂漠の流れ者」のストローザ・マーティンを連想させるのも、あながち偶然ではないのかも。

つまり、スピルバーグの弱点は、憧憬の名匠巨匠を、絵的に〝足し算〟してしまう、ファン丸出しの素直さにあるようだ。

その素直さは、テーマの単純さにもつながる。かつての大日本帝国でさえも赤紙は基本的に次男三男からだった。そもそも一家の子供全員に召集令状なんて、ミスにしても重大すぎる。

マーシャル将軍よ、命令だけ出して温情気分に浸っとらんと、おのれが救出に行かんかい。そうでのうても手が足らんのに。

森卓也

フライヘート・ライアン

ヴェトナム戦争以降にアメリカで作られた戦争映画のほとんど全ては、どの戦争を背景としていても「ヴェトナム戦争の」映画でなければ「ヴェトナム戦争についての」映画である。数少ない例外が自らの第二次大戦での体験を基にサミュエル・フラーが撮った「最前線物語」であり、実際にD—デイを戦ったフラーは「リアルな戦争映画を撮る唯一の方法は実際に観客席の後部から機関銃を撃ちまくることだ」との至言を遺している。

スピルバーグの新作である「プライベート・ライアン」は実際に観客に向かっての機銃掃射こそないものの、最新の特殊効果及び音響、そしてなによりも「そこにいる者の視点」に固執することで、おそらく映画史上もっともリアルな戦闘シーンをスクリーンに刻みつけている。

激しい戦闘場面で敢えて「音」を消してみせるテクニックに黒澤の「乱」の影響を指摘する批判をいくつか読んだが、

Digitized by Google

「乱」の落城場面は、「神」の目で人間たちの愚行を突き放して描写するものであり、「プライベート・ライアン」でスピルバーグは「当事者」の目にこだわり続ける。いくつかの場面ではカメラのレンズに血しぶきや水滴が付き、戦闘場面での手持ちカメラの映像は不安定に揺れ続ける。登場人物の視点と併用される、この「TVクルー」の視点はヴェトナム戦争以降のものだ。兵士たちの体をあくまでも物質的に描くのもしかり。

スピルバーグの80年代以降の作品は、テクニックが勝ちすぎて空間が人工的に見えすぎるきらいがあった。そのことが「カラーパープル」や「アミスタッド」で、感動が直接響いてくることを阻害していた。ドキュメンタリー・タッチがその壁を成功裏にうち砕いているのは「シンドラーのリスト」の時と同じだ。

たった一人の兵士を救うために命を賭す兵士たちのドラマには、ヴェトナム戦争中の莫大な数の戦闘中行方不明者（M.I.A.）へのアメリカ人のトラウマがあらわれている

「プライベート・ライアン」は「ヴェトナム戦争についての」映画の傑作だ。だが、スピルバーグはいつか「ヴェトナム戦争の」映画を作らなければならないはずだ。

鬼塚大輔

原色パリ図鑑

LA VERITE SI JE MENS
アート・キャップ配給
11月7日公開

パリの2区、ヴァンドーム広場から伸びるエティエンヌ通りの一角、サンティエ地区が物語の舞台だ。ここは生地屋を始めとした洋服の付属品などを扱う問屋街。ちょうど日本橋は馬喰町か浅草橋のような界隈に、原宿の猥雑さがプラスされた感じの活気にあふれたアパレルの街。だが、変化の激しいこうした業界につきものの、ちょっとしたいかがわしさも同時に息づいている。

この界隈をふらついていたエディ（リシャール・アンコニナ）は失業中。いかさま賭博にひっかかり喧嘩となるが、通り掛かったヴィクトール（リシャール・ボーランジェ）に助けられる。

エディを同じユダヤ系と誤解した彼は、自分の経営する生地屋の発送係として雇ってくれるという。仕事の欲しいエディはこの誤解をあえてとかないまま仕事を始める。というのもここの人々はみなユダヤ系という事情があったからだ。

人柄のいいエディは、直ぐ仕事仲間とも意気投合。一緒に遊ぶのはもちろん、ついには彼等の家に招待されるまでの親密な友情が芽生える。みんなご多分にもれず女の子に夢中だが、エディは社長の娘サンドラに一目惚れ。だが、彼女には彼の上司でもあるモーリス（アンソニー・ドロン）という恋人がいた。

エディとその仲間を描くことで、映画はパリのユダヤ社会の在り方、その世界に生きる若者の日常、夢、考え方など、等身大の彼らの姿を映し出す。

彼女を射止めようと発奮した彼は新アイデアを提言するが昔気質の社長と衝突、独立を決意する。しかし命運を掛けたその品物が輸送中強盗に襲われ盗まれてしまう。窮地に立つエディ。

こうしたエピソードと共に、華僑にも通じるユダヤ人組織の存在と、華やかな業界の裏側が垣間見えるのも興味深い。

親友ドーブに救われた彼は、思惑が当たり事業に成功、サンドラも手に入れるというハッピーエンド。アメリカ映画のような歯切れの良さで憂鬱な気分を吹き飛ばしてくれる青春映画だ。

と同時にトマ・ジル監督は、モードの裏側と、多民族を抱えて生きる生身のパリの姿を描き出してみせる。

野村梓

アイス・ストーム

THE ICE STORM
ギャガ配給
9月26日公開

台湾出身監督アン・リーの第5作目は、これまでの喜劇調とはうってかわってとびきりシリアスなホーム・ドラマである。70年代のアメリカ東海岸コネティカット州。典型的な白人中流階級家庭として傍目には幸せそうに見えるフッド家と近隣のカーバー家。しかし、73年という時代のうねりは彼らの生活と精神を大きく揺り動かしていた。50年代の強きアメリカを奪われ、今新しい価値観に挑む親たち。暗中模索する社会と大人たちの間で成長期を迎える子供たち。映画は、当時日常の中で華やいでいた原色を基調にしつつ、どこかざらついた冷ややかなトーンを漂わせて、時代のターニング・ポイントに生きる人々の姿を丹念に映しだす。

東海岸はアメリカの保守性の核となるプロテスタンティズムが深く根をおろした地域として知られる。この映画の大人たちはWASPという裕福な層に属することからも窺えるように、厳しい躾を受けて育ったにちがいない。彼らがそうしたモラルに作られた人間だからこそ、70年代の新しい要請はそれを受け入れた彼らの精神にダブル・バインドを生むのである。アン・リーはこの二律背反に引き裂かれたアメリカ人の内なる叫びを、どこまでも微妙なニュアンスで伝えようとする。子供たちの性の氾濫を目撃した動揺の表情に、スワッピング・パーティーでふと浮かべる不安と失望の表情に、節度をかなぐり捨てたあとに見せる後悔の表情に、彼らの心の隙間はちらりちらりと露呈され降りつもっていく。

自己嫌悪が生む重苦しい空気を静謐にくゆらせ、やがてフィルム全体に充満させる演出は、アン・リーの新境地としてきちんと讃えられるべきである。

「スカーレット・レター」（95）のように、ピューリタンが彫りこんだごく珍しいアメリカの陰影を容赦なく蹂躙するハリウッド映画が登場してしまう現在、この監督の冷静な視点と繊細にして的確なアプローチはアメリカ映画にとってたいへん貴重なものといえよう。時代や場所の変化に適応せんとする人間のエネルギーを、自らアメリカ人になったアン・リーは表現方法を一歩一歩確実に深めながら辛抱強く探りあてている。

中西愛子

Digitized by Google

マルセイユの恋

MARIUS ET JEANNETTE
シネカノン配給
10月10日公開

南仏――たとえばトニー・ガトリフ監督の「ガスパール 君といた夏」や「モンド」の、陽射しのやさしさを、この作品のなかに見つけよう。めぐり逢う人々の笑顔の屈託のなさを、あるいは開っ広げでいながらもどこかに孤独を匂わせる人々のチャーミングさを、この作品のなかに拾おう……。

「マルセイユの恋」は、決して気負うことのない、普段着のままの、そんな人々の姿が描かれていく。

主人公となるのは、もう若くはない、年ごろの少女とやんちゃ盛りの少年の子どもふたりを抱える、どこか少女の面影を残した中年の女・ジャネット。そして、ふとしたきっかけで彼女と出会い、そのペースに巻き込まれてゆく中年の男・マリウス。南仏訛り丸だしでまくしたて、ときにはケンカするふたりを中心に、その隣人たち、子どもたちを巻き込んで、恋をする日常がさらりと語られてゆく。

たとえばそれは、こんなふうだ。物語の冒頭、ペンキ職人らしいマリウスが暮らすだだっぴろいセメント工場跡の敷地に、不要のペンキを失敬しようと忍び行ったジャネットの、なんの緊張感も感じられない振る舞い。それを見とがめたマリウスが、右足を引きずりながら彼女を追い出す。が、その翌日、足を引きずりながら、わざわざ彼女にペンキを届けるのだ。

さらにその翌日、ふたりが部屋のペンキの塗り替え作業をしているシーンにキャメラは忍び寄る。「オー・ソレ・ミオ」の調べを口笛で吹くマリウスに、それに唱和するジャネット、ふたりを交互にとらえるとき、キャメラは不意に、ジャネットが裸足であることに気づく。その屈託がなく、まるで微笑えむように投げ出された裸足に、ふたりが恋をしていることをドキドキしながら感じとる。

これが日本初お披露目となる南仏人ロベール・ゲディギャン監督の眼差しは、まるで少年のようにときめきながら、このシークェンスを切り取る。

だが、と同時にゲディギャン監督の視線は、ふたりを中心にした登場人物たちが直面する、〈政治〉の問題にも触れないわけにはいかない。英エンドウを剣くその下には、『ユマニテ』紙がふと敷かれ、その傍らでは『ル・モンド』紙が読まれるのだ（ちなみに、南仏でもっとも代表的な新聞は『ニース・マタン』紙だが、保守中道寄り、娯楽的要素の強いこの新聞は、ここに登場することはない）。

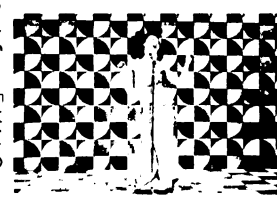
少年のような想いと、そして現実の問題と。このふたつの要素のなかで揺れ動くように展開していく恋の物語。それを彩るのが、南仏の夏の陽射しだ。ギラつく刺すような光ではない。温かさをそのまま封じ込めたような南仏の陽射し。色彩をくっきりと目覚めさせる光（緑、青、赤という三原色を基調とした色彩設計は、夏の風景と、登場人物たちの個性を際だたせる）が、決して豊かとはいえない人々の暮らしを縁どってゆく。

俯瞰と、そして手持ちのキャメラによる映像を多用し、狭苦しい下町の、幾重にも入り組んだ路地を見つめる眼差し。ロベール・ゲディギャンは、パリでもブルターニュでも、あるいはギャングが闊歩した犯罪都市としてのマルセイユでもない、市井の人々の、生活感あふれる恋を、日々を、そっと差し出す。お伽話。そう、この映画についてゲディギャンは語っているが、童心に返って描いた大人たちの恋物語と言ってもいいのではないだろうか。

杉原賢彦

狂わせたいの

石橋プロダクション配給
10月10日公開



す、素晴らしい！「はじめよか～」の掛け声を合図に、意味なく腰をフリ続けるサイケな姉ちゃん×2のタイトルバック映像が火をつけ爆発する、夜と朝のあいだに起こった平凡な会社員の地獄めぐり。サニーデイ・サービスがはっぴいえんどやジャックスの、ゆらゆら帝国がニュー・ロックの、そして汀（渚）ようこが昭和40年代歌謡曲の魅力的なパスティーシュ（模倣品）を歌い、演奏しているように、石橋義正監督は、つげ義春、石井輝男、寺山修司、横尾忠則、江戸川乱歩、山本リンダなどを〈素材〉として合体させた、日本製アングラ（人気はメジャーでも心がアングラならOK！）の究極のアマルガム（混合物）を、スクリーンに叩きつけていく。しかもそういった濃い趣味性が〝内側〟に向けてディープに沈み込んでいくのではなく、まるで「オースティン・パワーズ」（97）のように、ベタベタの笑いの魂によって〝外側〟に開放されているのが何ともサワヤカなところだ。そう、本作の意匠のポイントが〈日本製アングラ〉なら、精神のポイントはズバリ〈関西〉であろう。

とにかく本作には、誰もが偏見も真実も交えてイメージする〈関西〉が戦略的に充満している。僕も〈関西〉を離れて2年弱、今ではすっかり洗練されたが（ウソ）、麦茶をラッパ飲みしながら「お前、きしょい（気色悪い）んじゃ、はよ帰ってクソしとけ」と絶叫する〈タクシー女〉を見た時には、思わず標準語のすべてを忘れてしまった。また冒頭に登場する〈電車女〉が、突如陰毛丸出しで踊り狂ったのはショックだった。まさか女性が「裸」をギャグにするとは……。久本雅美やモリマンでもここまではやれるまい。

また、本作のワケの分からないセット／空間造形には、表現主義やシュルレアリスムの影響がモロにうかがえるのだが、それが決してアカデミックな文脈での使用ではなく、単なる「ウケネライ」と直結しているのが、まさしく黄金の〈関西〉であり、同時に「芸術」の本質を正しく感じさせる。モノクロなのに印象としてはケバイという光の感覚も天才的だ。わずか60分の小品だが、98年、最も突き抜けていた大傑作である。

森直人

Digitized by Google

狂わせたいの

松竹配給
10月17日公開

不景気の深刻な世相に取り組んで心やさしい涙と笑いの物語をくりひろげる映画である。もっと深刻な不景気時代だった一九三〇年代には、松竹蒲田撮影所で小津安二郎や五所平之助の同じようなキャラクターと主題と語り口による小市民映画と呼ばれる秀作が連続的に作られていたものである。蒲田撮影所はこの「学校Ⅲ」の大船撮影所の前身であり、撮影所の伝統というものがそこにくっきりとした連続として存在することを改めて思わせる。ただし、かつての小市民映画がかなりの大きな流れとして成立したのに較べると今回の不況に取り組んだ目ぼしい作品はまだこれひとつしかない。不況といっても一九三〇年代に較べれば日常的に感じる深刻さはそれほどではないのか、あるいは映画界の時事的な問題に即応する感度や応答が鈍ったということか。

もうひとつ、昔の小市民映画との比較で言うと、映画づくりにおける取材や調査が発達してルポルタージュ的な興味は増している。まず各種の企業におけるリストラの実態のあれこれが紹介され、次いで中高年の失業者のための公立の職業訓練校のあり方が示される。こうして失業した中高年者たちの学校で出会った大人同士の恋物語という物語の本筋に入ってゆくことになるが、その一方の大竹しのぶの演じる中年の女性に自閉症の息子（黒田勇樹）がいて、これまで映画では「レインマン」ぐらいでしか見たことのない、自閉症者の生活が描かれる。いずれも決して特異なことではなく、われわれが日常いつ自分のこととして出会ってもおかしくない出来事であり施設であり人々であるが、じつは私など、どう対応していいのかよく知らない。だから珍しいと同時に、もし自分がこういうことになったら、という身につまされる要素がある。そして、知識として知っておいたほうがいいと思うことがマニュアルのようにしてドラマのなかにたくさんちりばめられている。たとえば近頃では首切りのときは経営者は解雇する人々に「すまない」とかなんとか言ってはならず、全てを経営コンサルタントにまかせるのだとか。これはマニュアル化された社会の悪夢だ。さすがこの映画でその立場に立たされた小企業の経営者はそこまで不人情にはなれず、山田洋次作品の登場人物らしくうろたえる。さらにマニュアルとして聞いてよかったと思うセリフもいくつかある。自閉症の息子が事故で怪我をしたときに母親が看護婦さんに頼んで言うセリフで、「幼児語で話しかけないようにして下さい。この子にもプライドがありますので」という意味の言葉があり、これは大いに勉強になり、いい知識を得たことで感動した。私は自閉症の人とのつきあい方を知らないし、この映画のトミーと呼ばれる青年の描き方がどこまで一般性のあるものと言えるのかの判断もつかないが、黒田勇樹の好演で良い印象を与えられているうえに、大竹しのぶのそこだけちょっと、きっぱりとした表情と口調でそう言われると、そうか、なるほど、良く分かった、という気持ちになる。

本筋の職業訓練学校の学習のほうはあっけないほどさらさらと進むし、大竹しのぶの元小企業事務員と小林稔侍の元証券会社の猛烈社員との中年の恋もウェルメイドに気持ちよく出来ているが、なんといってもトミーと彼をめぐる人々のエピソードがきれいごとを超えて素晴らしい。

佐藤忠男

狂わせたいの

東宝配給
9月26日公開

前作「私たちが好きだったこと」では、大人になろうとしている〈大人〉たちの世界を、また「トイレの花子さん」では、自分の中に芽生えつつある大人の心を育てようとする〈子供〉たちの世界を優しく見守ってきた松岡錠司監督。

今回の新作では、そのどちらの世代にも属する事のない、大人のフリをしている〈若者〉たちの世界を描いている。

社会に出たてのやる気に漲る若手ではない。かと言って、周りに慣れてしまい、落ち着いてしまった熟練者でもない。いわば、最初に掲げた目標を見失ってしまい、時の状況に合わせて曖昧に流されている。そんな世代の物語である。

雑誌の副編集者に、アイドル歌手。そして小説家などと、確かに石田ひかりを筆頭とする本作のヒロインたちは、平凡な生活を営む私たちとは、一味も状況が異なる〈作られたキャラクター〉である。

されど、この人物たちが劇中で抱える多くの悩みは、決して私たちが持つ悩みと変わらない。ここが松岡映画の重要な点だ。

ようやく築き上げた自分の城に自信が持てないで苦悩するヒロインの姿は、観ている者の姿も投影している。

誰もが自分の世界を大切にしようとする。しかし、それを貫き通して生きるには、一人では余りにも辛すぎる。本作のヒロインたちはその事実に気付きだしている時期なのだ。だからこそ、より以上に他人を求めて生きようとする。五人のヒロインがそれぞれ自分のパートナーを見つけていく過程には、そんな思いが籠められている。

この荒みきった都会の街並みを優しくとらえる松岡監督は、強いフリをして脆いヒロインを通して、私たちに語りかけてくれるのであった。〝決して、一人ではない〟と。

奇しくもそれぞれの異なる世代を描いたこの三作は、そのまま配給をした〈東宝・東映・松竹〉の個性を表わしているようだ。さらに、その事はどの世代に対しても、今こそが〝美しい世代（ベル・エポック）〟である事を述べている。それは素直な心を持って他人に接すれば、いつだって美しくなれるという意味なのだ。

村岡良昭

Digitized by Google

大森さわこ

ちょっとイギリスびいき

⑭英国では“古典”となった「パフォーマンス」が遂に公開

60年代に撮影されたニコラス・ローグ監督の幻の映画「パフォーマンス」が遂に日本で正式に公開されることになった。まずは10月24日から始まった英国映画祭で上映されたが、12月には東京の三百人劇場で公開される。ずうっと昔から「パフォーマンス／青春の罠」という題名でビデオ・リリースされていたが、劇場公開は今回が初めてだ（以前、ニコラス・ローグ映画祭で上映されたことはある）。日本では埋もれているが、実は海外での評価は異常なまでに高い。

つい最近もこの映画を激賞する人に会った。「ベルベット・ゴールドマイン」を監督したトッド・ヘインズである。9月にインタビューした時、彼は「2001年宇宙の旅」や「時計じかけのオレンジ」などと並び、自分が青春時代に最も影響を受けた作品の一本にあげていた（彼はローグのファンだった）。

「パフォーマンス」と、映画が撮影されたマンション

また、本国イギリスでははもや〝古典〟になっているようだ。手元に『アー・ナイト・アト・ザ・ムービーズ／英国映画の100年』（コロンバス・ブックス、編者のひとりは「ラブ&デス」の原作者でもあるギルバート・アデア）という85年に英国で出版された本がある。そこで21人の選者が〝英国映画ベストテン〟を選んでいるが、「パフォーマンス」は「第三の男」や「黒水仙」などと並び、テンの1本に選ばれている（ローグとマイケル・パウエル作品の人気が高い）。

そういえば、日本でも以前放映されたスティーヴン・フリアーズが監督したBFI制作の映画の生誕100年を祝うドキュメンタリーでも、新しい映画の流れを作った作品としてとり上げられていた。

筆者が思うに、この「パフォーマンス」はアメリカ映画の「イージー・ライダー」に似たところに位置する作品ではないかと思う。映像はラフだが、異様な時代のエネルギーが感じられる。

ひとりのギャング（今は名優の風格さえ漂う「日の名残り」のジェームズ・フォックス）が抗争に巻き込まれ、身の危険を感じて、ある屋敷に迷い込む。そこで出会ったのは引退したロッカーのターナー（若き日のミック・ジャガー）だった。両性具有的な不思議な官能性を漂わせたターナー。彼はギャングが体現するバイオレントな外の世界に憧れ、ギャングの方はロッカーの妖しい内面世界に興味を持つ。ふたつの対極の世界がこうして出会う。異文化の同士の葛藤。これは「美しき冒険旅行」、「地球に落ちてきた男」、「ジェラシー」など、他のローグ作品にも通じるテーマである。それが一種独特のアンダーグラウンド感覚で描かれていく。短いカットを多用した、まさに〝ローグ・マジック〟とでも呼びたいジグソー・パズルのよう映像（このあたりが「ベルベット・ゴールドマイン」に影響をあたえているようだ）。少年のような体をしたミック・ジャガーの危うい雰囲気。物語を見る映画ではなく、映像や雰囲気を体全体で感覚で受け止めるべき作品だろう。

以前、ロンドンでこの映画を撮影したマンションを見に行ったことがある（写真参照）。スローン・スクエアから歩いてすぐのところにあった。スローン・スクエアといえば、デパートのハロッズやデザイナーズ・ブランドの店が並んだ高級なイメージも強いが、この撮影に使われたマンションはそうした店の裏の方にある。ひっそりしていて、こざっぱりしたビルが並んだ地域だ。

玄関に花など飾って、感じのいいビルだったが、映画の中では外見の静かさとはうってかわって、屈折した心理劇がくり広げられる。映画のイメージが強烈なせいか、その静かなビルが（静けさゆえに）なんだか不気味に思えたものだ。

Digitized by Google

読者の映画評

●応募要項　住所・氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字前後で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募下さい（レポート用紙不可）。〒112－8502　東京都文京区小石川1－21－14小石川吉田ビル　キネマ旬報編集部『読者の映画評』係まで。

森田祐子／大西茜／竹澤融／林雅人

プライベート・ライアン

「言葉」と「音」――この2つの語りが全く異なるセンスを帯びて表出している事の違和感。これが第一印象である。本作における安直な「言葉」の使用は、主題の重さに比して余りに軽々しい。軍最高首脳が悲劇の母親に送る通知とリンカーンの手紙の引用。年老いたライアンが墓地で語る人生観。これらの「言葉」がまったく空疎に響くのは、直截な表現と感傷的な音楽で事足れりとするハリウッドの常套に甘んじた、作り手の鈍重な感性が露呈しているためである。

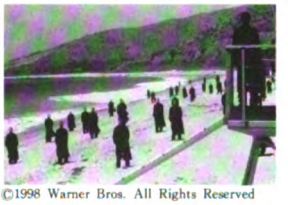
しかし、こうした安易な見せ場とは対極をなす、映画的表現の優れた描写が本作に混在している事は周知の通りである。特筆すべきは、やはりあの冒頭の戦場シーンであろう。オマハビーチの描写には観念や理想を語る「言葉」は無い。あるのは砲撃と爆裂音、機銃掃射、銃弾が肉体を貫く音、水しぶきといった圧倒的な「音」である。その「音」の洪水の中で人間が次々と肉塊と化していく迫真の映像には言葉による説明など不要だった。また水中のシーンや恐怖に泣き出す者、溢れ出る内蔵を押さえてあえぐ兵士を捉えた挿入ショットなどでは「音」が意図的にカットされ、逆に見る者に強烈な心象を与える仕掛けとなっていた。或いはライアン救出に向かう小隊が、空挺師団と合流し、死体から取った認識標を渡される場面。この中にライアンの名を見つけようと確認していく際の、落ちていく標のカランカランという乾いた音。失われた命のなんという軽さ。ここでもやはり「音」の恣意性が効果を発揮していた。

これらの傑出した表現力と「言葉」に対する無神経さとのギャップが、作品の主題にも連動していたように思う。戦争の大義名分などまやかしに過ぎないと喝破してみせる大殺戮のリアルな再現がある一方で、ミラー大尉には「部下の死はその何十倍の命を救ったと思って割り切る」という価値観を語らせる。第二次大戦はやはり正義の戦いだったと言うのか。この言葉の裏に、原爆が数百万の命を救ったと言うアメリカの欺瞞が透けて見えてしまった。

人間に対する真摯な姿勢と偽善。――本作に感じた違和感は実はこのギャップに因っていたのかもしれない。

森田祐子
神奈川県横須賀市・社会福祉施設勤務・33歳

シティ・オブ・エンジェル



©1998 Warner Bros. All Rights Reserved

かつて、恋した天使が堕ちた話は、十年前のベルリンで一篇の詩となった。世界が激変し、けれども閉塞感はつのるばかりの今日、天使は文字通りロスアンジェルス――天使たちの街にいる。そして、「ベルリン・天使の詩」から「シティ・オブ・エンジェル」への、この時間と空間の隔たりは、必然的に映画そのものの主題を変容させずにはおかなかったのである。

ベルリンで、モノクロームの世界に暮らす天使たちは、人間を見守りながらもひたすら無であり続けた。愚かしい戦争の傷か東西分断の壁に厳しく残るこの街では、人々の内なる声にはどこか引き裂かれた者の悲しみがやどり、天使たちはただ彼らに寄り添ってその憂愁を聞くしかなかったのである。そんな中で、サーカスの空中ブランコ乗りのマリオンに初めて色を見い出し、恋をして人間になる天使ダミエルの話は、あくまで美しい挿話であり、傷つき疲弊した社会にも起こり得る、清々しい希望の姿であった。詩人ホメロスの登場を待つまでもなく、この映画は全体が人間の生きる社会を歌った「詩」だったのである。

けれど九十八年の今、ベルリンの壁は既になく、人々は外の世界よりも自らの内側に目を向ける。ロスアンジェルスで天使たちが聞く人間の声にも、歴史の影がさすことはない。そして、このような時代の日常を守護するがゆえに、天使セスの関心もまた、「人間の持つ感覚を知りたい」という個人的な自己追求へと向かわざるを得ないのである。全てを見守る第三者から、自ら感じる主体への変容。かくて彼の恋は、映画の中核を占める当事者の出来事となって、もはや一挿話のレベルになど留まりはしない。

迫力ある街の俯瞰を初めとした映像の美しさ、天使から人間への変化で質感までも変えてみせるニコラス・ケイジの妙演、たとえ一瞬でも燃焼しつくすものを持ち得る人間の生への讃歌。この映画が伝える素晴らしいものは沢山ある。けれども私には、同じ天使の恋を描いてこうも別物になった両映画が、映画の個

Digitized by Google

性という以上に、この十年で社会が辿ってきた道を暗示しているように思えてならないのである。なるほど映画は、時代を映す鏡。……などと思わぬ考察にはまり込むことになった自分自身が、本当のところは美しいラブ・ストーリーにまさしく「個人的な」癒しを期待して見に行ったのだという事実を、最後に告白しておこう。　**大地茜**
兵庫県伊丹市・講師・35歳

新生トイレの花子さん

この映画には二つの側面がある。封印を解き放たれた悪霊との戦いという単にオカルト映画的側面。もうひとつは孤独を嫌う現代人の意識をトイレの花子さんという素材を使って描いたという見方だ。オカルト映画として観るなら「ヘル・ハウス」等、類似の物が多々あり何ら目新しいものはないと言えよう。

この映画の悪霊は自ら好んで出てきたわけではなく間宮悦子等この世の人間の〝ひとりぼっちはイヤ〟という希求が誕生させたものだ。こっくりさんをしたり社をあばいたりしなければ霊は眠ったままでいられたのだ。こっくりさんという霊も呼び出す行為そのものがカラオケボックスで歌い興じるのと何ら変らぬ仲間内での遊戯である。悦子は友だちが欲しかったがために悪霊を呼び出してしまう。里美の姉への思いも同様である。現実に復活した里美の姉、そして玲子の友達でもあるかおりの霊は悪霊という形をとって彼女らの前に姿を現す。

所狭しと動き回る花子さんから私に伝わってきたものは他者との心のつながりを求める孤独な魂である。里美や悦子が希求したもの（友情）が今度は逆に花子さんの側から求めてくるのである。姿をなかなか現さなかったり足音をパタパタさせているところなど仲良しの友達とかくれんぼをして遊んでいるかのようではないか。花子さんは里美たちに対等の関係を望もうとして誘いをかける時は柔和な表情であるがいったん拒否されると邪悪な表情に変り獰悪な手段に訴え霊界への道連れを強制するのである。仲良くしてほしいから猫なで声を出し拒否されれば腹を立てる。トイレの花子さんは普通の人間と全く同じ感情を表明しているにすぎないのである。その花子の心情が理解出来るからこそ主人公達は花子の埋葬で涙することができたのである。

「トイレの花子さん」は他人に理解されたがっている、他人を理解したがっている現代人の哀しみを恐怖映画のコードで描いた人間ドラマである。　**竹澤融**
東京都文京区・公務員・34歳

大怪獣東京に現わる

この映画の画面には怪獣は全く出てこない。マスコミの画面情報や人々から洩れる言葉から推測されるのみである。しかしながら、東京湾から出現した怪獣は背びれがあり、火を吐くことなどから「ゴジラ」、福岡ドームに出現した回転しながら空を飛ぶカメ怪獣は「ガメラ」と、日本人なら容易にイメージさせられる。

この二大怪獣と登場人物たちが織り成す関係、そしてその関係の上に複雑な多様体として形成される「場」の状況にこそ、最大の見所がある。二大怪獣との物理的・心理的距離によって、人々がどのように考え反応するか、どのように異様な「場」が形成されたのか、を焦点に据えているのだ。

怪獣が日本に上陸し、他県をかすめながら地元福井に近付くにつれ、人々の反応は時間とともにも変動していく。怪獣と人との物理的・心理的距離が縮まるにつれ、そこに一つの「場」が形成され、壊され、また新しい「場」が形成されていく。たとえば、最初は他人ごとのようにテレビを見ていた主婦が買い出しに走ったかと思えば、考えた末に荷物をまとめて自宅から逃げ出す。冷静に怪獣出現を受け止めていたかに見えた教師が、どうせ死ぬならと欲望の赴くままに女装し生徒を襲う。一組のカップルは、怪獣出現を契機に子供を生んで育てる決意をする、などである。

最終的には登場人物のそれぞれが、「原発に行けば安全だ」「原発の放射能汚染を防ぐため、軍隊が絶対守ってくれる」などという奇妙な結論を導き出し、実際その結論通りに行動する。これは一つの「場」の状況でもあるのだ。そして、原発の傍らでバーベキューをしながら見物の最中、誤射された北朝鮮のミサイルに巻き込まれてしまうのだ。この事件を、翌朝のニュースでアナウンサーは「どうして30人もの人々がそこにいたのか不明だ」と伝えるのである。

この映画は奇妙な「場」が形成される状況を描いた点では画期的だが、残念なことに、映画の緊迫感を伝えきることはできていない。映画の観客を画面の異様な「場」の状況に巻き込んでいないからだ。怪獣が矢印でしか表示されないこと、近くに怪獣がいても地響きすら聞こえないことなど、描写が不十分なことはどうしても説得力に欠けるものなのだ。

後日そこに事件があったかのように大げさに煽り立てるワイドショー的手法。確かにそれが演出家の意図なのかもしれないが、観客のもつステロタイプのイメージを喚起させるだけではもの足りない。映画の観客も飲み込んでしまうような「場」の状況形成もまた映画に必要な要素であろう。　**林雅人**
愛知県名古屋市・会社員・29歳

●第一次選考通過者
（応募総数１０３通）
「プライベート・ライアン」丸哲也、進藤雪路、渡辺一弘、「仮面の男」須田総一郎、「ＣＵＢＥ」皆川ちか、「七人の侍」夢野四十郎、「ＨＡＮＡ－ＢＩ」清水康雄、「愛を乞うひと」周磨要、木村昌資

Digitized by Google

文化映画

渡部　実

コガヤとともに 世界文化遺産登録記念

民族文化映像研究所作品

【スタッフ】製作・姫田忠義、小泉修吉、演出・姫田忠義、撮影・伊藤碩男、澤幡正範、小原信之、演出助手・青原慧水、吉野奈保子、調査・小川久美子、水野慶子、伊藤孝一、調査協力・岐阜県飛騨農業改良普及所、製作デスク・佐藤由紀子、題字・松本碩之、録音・東京テレビセンター、現像・ヨコシネ・ディーアイエー、作画・たくみ映画、ネガ編集・中根編集室、助成・日本芸術文化振興会。企画・岐阜県白川村教育委員会。完成・97年、16ミリ54分。

【内容】この映画は1995年12月に世界文化遺産に登録された「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の記録である。舞台となるのは岐阜県白川村荻町である。この土地は富山県平村相倉・上平村菅沼とともに合掌造り民家と集落の歴史的景観の環境によって世界文化遺産として認められた。

白川村荻町は飛騨山地を流れる庄川の河岸段丘にひらける集落である。ここには約180棟の合掌造り建築が村人たちの手によって維持、温存されている。特に白川では合掌造りの民家の屋根カヤを確保していくための様々な技術と努力がある。この映画ではここでのカヤの文化に着目し、白河在郷の鈴口茂さんを中心とした村人たちのたゆまない仕事ぶりが描かれる。

題名のコガヤ（標準和名カリヤス）とは白川特有の名前で、オオガヤ（ススキ）と比べ、細身で茎の中が空洞という性質を持ち、オオガヤと比べ屋根が長持ちするという特徴がある。だが、昭和50年代ごろより、自然でのコガヤの確保が難しくなってきたため、鈴口さんらはコガヤを再び自給できるように新しくカヤ場を作ろうと考えた。

まず冒頭に目を奪われるのは、コガヤの運搬方法である。特に雪の時期に行われるヒキギリという方法は前年に刈り取っておいたカヤを大きく束ねて、それを連結して雪の山の斜面を滑り降ろすのである。一束だけではなくいくつもの束を列車のように連結して滑られる様子は壮観である。このヒキギリは昭和30年代半ばまで行われていたものでこれは運搬方法の再現であるが、そこには厳しい自然の中での村人たちの営みが痛感させられる。

鈴口さんはカヤの造成にまったく新しい方法を取り入れた。今までカヤ場の造成は焼き畑農耕と深いかかわりをもってきた。それは焼畑に2～3年作物を作った後にカヤ穂を飢えてカヤ場とするものであったが、鈴口さんは、いきおいそこにすでにカヤ場を発芽させて苗に育てたものを植えたのである。その移植作業によって焼畑と別の土地でそれぞれに新しいカヤの芽吹きを成功させたのである。

映画では焼畑の際に地中に温度センサーを埋め込み、地表や地中にどれほどの温度変化があるかをデータをとったりする様子も記録している。またカヤ刈り、カヤ場の管理、カヤ干しの技術などいずれにしろカヤの自給自足にあたって村人たちは並々ならぬ努力を行ってきた。

民族文化映像研究所によるこの記録は95年5月から翌年の4月に行われ、自然に生きる村人たちの生活とその財産ともいえる合掌造りの建築の意味をよく映像記録から語っている。

たまはがね 子どもがひらいた古代製鉄の道

民族文化映像研究所作品

【スタッフ】製作・姫田忠義、小泉修吉、演出・姫田忠義、撮影・伊藤碩男、澤幡正範、東正一郎、演出助手・水野慶子、青原慧水、吉野奈保子、製作デスク・佐藤由紀子、音楽・姫田蘭、録音・東京テレビセンター、現像・ヨコシネ・ディーアイエー、作画・たくみ映画、映像技術・㈱PPL、ランドサット映像／RESTEC、企画・製作・民族文化映像研究所、助成・芸術文化振興基金、ドラゴンリバー交流への会、㈶河川環境管理財団「河川整備基金」。協力・今立町南中山小学校・幼稚園、南中山小学校・幼稚園PTA、砂鉄と木炭で鉄をつくろう会。完成97年。16ミリ・85分。

【内容】同じ民族文化映像研究所の映画でも本編は理科の楽しさに満ちた作品である。舞台となるのは福井県今立郡今立町。この土地にある今立町立南中山小学校は校長先生の発案と地域のPTAや大人たちの協力で身辺にある川の砂鉄から古代の鉄を作った。この映画はその子どもと大人が一体となって鉄を作る作業を記録した作品である。

越前の国は古代から出雲とならび称せられる製鉄の土地であった。また越前は越前和紙や越前漆器で知られるように上質の

Digitized by Google

和紙や漆器を生み出す山地でもある。

鉄作りの発端は南中山小学校の大橋校長先生の抱く自然界の鉄に向けるロマン豊かな思いから始まった。大橋先生は生徒たちに鉄はどこから来たものでしょう、という問いかけをして、それは宇宙からの贈り物であると同時に人間の体の中の血液にもあり、その鉄が酸素を運んでくれる。だから皆さんがこうして生きていられるのは鉄のおかげである——という説明をするのである。そして鉄はこの土地に多く存在することから、ひとつ皆さんで鉄——身近な砂鉄から作られる直径数ミリの銀色に輝く鉄の玉——たまはがね（玉鋼）を作りましょうという発案をした。

「コガヤとともに」

撮影は1996年春から夏にかけての4ヶ月間、学校の休日と放課後に自由参加で行われた。また再確認のために同年の秋に行われた第2次作業の記録から成っている。

鉄作りと言えば一般には堅い印象があるが、もともと小学校の生徒たちの自主的な活動から始まった鉄作りであるので、その模様は見ていて楽しい。最初は川での砂鉄の採取である。学校区には2つの川が合流する場所がある。砂鉄を採るといっても採取道具は極めて簡単なビニール袋に磁石を入れたものである。川を洗って砂鉄が磁石に付くというものである。はじめ子どもたちは熱心に作業をしているが、磁石での吸引作業は何十回、何百回と行わなくてはならないので、作業をしては他に遊びに行き、遊びに飽きるとまた帰ってきて作業を行うという自由さである。ここいらには教室での理科の授業のような閉塞感はなく、自然のもと自分たちの故郷の地質を調べ、そこから鉄を作るという単純ではあるがなかなかに意味深い作業が行われている。集められた砂鉄は何度も磁石を当て、より鉄分の多い砂鉄が餞別される。

「たまはがね」

次にその鉄分の純度の高い砂鉄は木炭の粉を混ぜられて叩かれ、煎餅のようになる。いわゆる砂鉄煎餅が出来上がる。そしていよいよ砂鉄を溶かす作業に入る。これは高温（1400度）となる作業で子どもだけでは無理なので、炉の製作は大人たちが行う。炉の燃料になる炭も切られ、子どもたちも炭を炉に入れる作業を手伝う。砂鉄煎餅と木炭が交互に入れられ、風が送られる。

炉は現代の材料で製作されるが、砂鉄煎餅の溶解は古代の方法である。それはまた同じく鉄を作るタタラとも微妙に異なるようである。点火の火も古代の摩擦で火を起こした。炉の温度が1400度を越えた時、炉の中からドロドロに溶けたノロ（鉱滓）が取り出される。それを冷やして割ってみると中からキラキラと輝く小豆粒ほどの玉が出てた。これがたまはがね（玉鋼）である。

鉱物の固まりの中から実に玉のような球形の玉鋼が出てくる。それはさすがに神秘的な雰囲気を持っている。また玉鋼は走査電子顕微鏡で分析されこの玉は鉄分を95パーセントも含有していることが判明する。

映画は全編にわたって作業の進展に即しながら、大橋校長先生と姫田氏が、古代の製作方法について、また越前の風土について興味深い対話を進めていく。その実際の鉄の具体的な製作を前に今までの歴史の定説とこの実践の結果との差異なども浮き上がってくる。

この映画は鉄を作るというひとつの実践から宇宙の神秘、自然界の謎、そして今、生きている人々の鉄に向ける思いと認識を改めて教えてくれたような印象がある。本編は同研究所の101本目という新たな出発ともいうべき作品となった。広く教養としても勧められる作品である。（2作品への問い合わせ＝民族文化映像研究所TEL03・3341・2865）

Digitized by Google

パゾリーニ展準備中（1）

田中千世子

99年に日本各地で開催されるパゾリーニ展

ローマから届いたFAX

こんな筈ではなかった。

と、アッカットーネは思ったに違いない。自分はもっと羽振りよく暮らすべきだ。汗を流して働くのなんぞちっとも似合っていない、と。ところが純朴な乙女に恋しちまったアッカットーネ。彼女に売春させてヒモ天国に安住することはできなかった。かといって肉体労働はまっぴら。ヒョイと盗みの片棒かつぎ。折りしも警察は売春強要容疑でアッカットーネを追っていた。追われて逃げて事故を起こして死んでゆく。アッカットーネの目に映ったローマの空は晴れていた。

そのローマからFAXが届いたのは一九九七年十月半ば。

「私たちはまだ生きています。相変わらず奮闘しています」

サインはパゾリーニ財団のラウラ・ベッティさん。パゾリーニの「テオレマ」で空中に浮かぶ聖なるメイドを演じた個性派女優。パゾリーニの精神的伴侶だった人だ。現在も女優業を続けながら財団の仕事に打ち込んでいる。

パゾリーニ展準備中

一九九九年に向けてピエル・パオロ・パゾリーニ展が計画されている。主な会場は東京・川崎・高知・名古屋となりそうだ。

映画の回顧上映だけではなく、パゾリーニの全貌に少しでも近づくための展示や講演会、シンポジウムが映画と文学の両方から用意されるだろう。このパゾリーニ展は、実はだいぶ前からいろんな日本人（私もその一人）がローマのパゾリーニ財団と話し合っては振られてきた企画である。なかなか実現しなかったのはローマが乗る気ではなかったからだ。日本は極東。イランよりもインドよりも遠い。

ところが急にローマの心変わり。ラウラ・ベッティさんの嬉しい心変わりだ。というのも一九九七年秋に香港でパゾリーニ展が開かれたから。せっかく香港でやったのだからそのまま日本にムーヴオーバーしてもよかった。ベッティさんはそう思ったらしい。俄然日本で、東京でパゾリーニ展を。妙に愛想のいいFAXが私のところに届いたのが一九九七年十月。九八年にでも開催したいかの性急さだ。

まさに好機到来。十一月にトリノ映画祭に行く途中でローマに寄ってベッティさんとしっかり心を通わせ合った。前に三度ほど会った時は鬱陶しがられたのに、何という変化。パゾリーニのお導きだろうか。やっとパゾリーニ神社のベッティ巫女の目が日本に向いたのだ。

パゾリーニ展が今まで日本の都市で全く開かれなかったことは、大きな声で言いたいが、相当な恥である。文化の成熟度のバロメーターというわけではないが、オペラハウスがなかったことよりもっと本質的に恥ずかしいことだと私は思う。ベッティさんの心変わりと書いたが、周到な下準備とビッグな予算で映画上映やシンポジウムの計画が進められ、映画や芸術方面ばかりでなく文学や語学の研究者や大学やあらゆる組織が率先して、是非東京で、是非京都でパゾリーニ展をと誘えばもっと早く実現していたかもしれないのだ。そうならなかったのは私も含め、パゾリニアーノ（パゾリーニを讃える熱心な信奉者）を自認する者の怠慢や非力が原因のひとつだが、それよりパゾリーニと言っても「それは何？」という反応しかかえってこない空気がたれこめている日本を、それでよしと諦めていた、パゾリニアーノたちの順応主義が問題なのだ。

すこぶるこれは矛盾である。パゾリーニが激しく憎んだ順応主義（コンフォルミズモ）にパゾリニアーノが染まっていたとしたら、もうパゾリニアーノではあり得ない。だから一九九九年に向けてのパゾリーニ展開催はパゾリニアーノたちの自己懐疑からの大いなる脱却。

ところで九〇年代末に於けるパゾリーニとは何？

勿論、今のイタリアの若者にとってパゾリーニは決してポピュラーではない。名前は知っているが、読んでないという学生も多い。パゾリーニの映画を見る機会も多いわけではない。

しかし、若者が興味を持たないからと言ってパゾリーニの名前がイタリアの新聞や雑誌から遠くのではなく、そういうことと関係なく文化の日常としてパゾリーニは頻繁に登場するのだ。それほどパゾリーニがイタリア社会に与えた影響は強い。パゾリーニの著作や発言はイタリアの政治や社会、思想と深く結びついていた。

ところでローマ、ミラノ以外

Digitized by Google

のパリやニューヨークやポーランドのクラカウやサンフランシスコやオタワなど世界の四〇以上の都市でパゾリーニ展が開かれてきたのは一体どうしてだろう。パゾリーニが直接的な影響をそれらの都市に及ぼすというより、それらの都市がパゾリーニを欲したのだとは言えないだろうか。それが文化の成熟度である。

七〇年前後のパゾリーニ映画ブームの後、二〇年以上もパゾリーニを欲しないできた日本の都市はパゾリーニが激しく憎んだ順応主義にどっぷりつかってきたのではなかろうか。

目を覚ましてもいい頃だ。

パゾリーニ展とは？

パゾリーニ展というのは、繰り返すが、パゾリーニの映画の回顧上映だけではない。

回顧上映も含むが、もっと多角的にパゾリーニの業績を顕賞し、理解しようとするイヴェントである。パゾリーニの小説や詩は個々で読めばいいという考えもあるだろうが、パゾリーニの詩の響きをラウラ・ベッティさんの朗読で聴き、その響きを心にとめながら処女作の「アッカットーネ」を観れば、セリフの響きがパゾリーニにとって詩であり、同時に映像もまた新しい形式の詩なのだという発見もあるかもしれない。それはパゾリーニがそう言っているからという知識から得られるものとは違って、自分の感覚で体験し、認識する生きた発見なのだ。

まだ翻訳されていない夥しい著作。それらの重要性を来日ゲストから具体的に指摘されるだけでも日本の個々のパゾリーニ研究に弾みがつくというものだ。研究に弾みがつけば翻訳も増え、それを手掛かりに映画の鑑賞も一層豊かなものになるだろう。

たとえば、パゾリーニが左翼系の週刊誌の読者からの質問に答えたコラム（かなり長い時もある）を中心に編纂した八〇〇頁の『対話（I dialoghi）』がある。一九九二年に出版されたものだ。とても興味深い。読者からの手紙は若者が多いが、主婦や年金生活者からのものもある。小説『生命ある若者』に感動したこと、ダヌンツィオをどう評価するか、マルクス主義と信仰のこと、あるいは自分は貧しく本も買えないので援助してほしいこと等、内容は多彩。パゾリーニは質問に答えて教え導くような時もあれば、「あなたは根っからのファシストです」と激烈な調子で臨む時もある。この『対話』を辞書をひきひき読んできたが、一番興味深いのはファシズム（ファシズモ）についてのパゾリーニの考えだ。ファシズムはムッソリーニ時代の体制ばかりではない。左翼ファシズムもあれば戦後イタリアの指導勢力となったキリスト教民主党のファシズムもある。そして個々人の無意識的行動や発言のファシズムもある。この個々人のファシズムについてのパゾリーニの洞察が鋭い。その箇所を一気に紹介しよう。

ファシズムとは？

左翼系の週刊誌『新しい道（Vie nuove）』一九六二年九月六日号にトリノのミケーレとダニエーレ（連名）の質問がとりあげられた。

「パゾリーニさん、なぜ多くの若い知性がファシズムの危険な思想にひき付けられてしまうのでしょう。若者社会に生きる私たちはこの疑問を抱きましたが、答えがわからないのです」

パゾリーニは今の世の中は似非文化（プセウド・クルトゥーラ）であり、そのなかで生きる自分は、まるで仮面劇の仮面をつけさせられているようだと、嘆く。詩人として、また小説家として名をなしたパゾリーニだが、同時に非難や訴訟やスキャンダルもつきまとっていた。そうした宿命に戦いを挑む自分はまるでドン・キホーテのようだとパゾリーニは言う。それから個人的なエピソードを彼は語る。マスコミのインタヴューを嫌っていた時期のことだ。

「私は長く（取材に）抵抗した。それから取材拒否をやめた。ちょっと弱気だった（私は断固好

パゾリーニ財団の壁に貼られたパゾリーニ展のポスター

財団のあるピアッツァ・カヴール

Digitized by Google

意を拒むことはできない性質だ）せいもある。また、ちょっと単純な（私はよくものごとは予見したよりだんだんよくなるものだという幻想を抱きやすい）せいもある。そういうわけで私はある女性ジャーナリストのインタヴューに応じた。まだ若く、顔はやや青白かったが、きりっとした顔立ちだった。田舎出の独り者の職業婦人の典型のような女性である。

私は彼女にいい印象を持った。彼女に敬意を感じた以上、型にはまった冷ややかで計算された答え方はできなかった。私は女友達とおしゃべりするように彼女と話した。ちょうど私の休暇の最初の日だった――『マンマ・ローマ』のダビング（これには長くかかった）を終えたばかりだ。そのため比較的気分もよかった。そこで彼女を家まで送っていった」

彼女の家はオスティア近くにあり、ふたりはここで水浴を楽しみ、文学や映画のこと、そして自分たちのことを語りあう。オスティアは一九七五年十一月二日早暁パゾリーニの死体が発見された場所だ。パゾリーニがホモセクシャルだったことは有名だが、彼は女友達も多く、決して女性嫌いではなかった。知り合ったばかりの女性ジャーナリストは聞き上手な人であったらしい。パゾリーニはいろんなことを話す。そして彼女も身の上を語り始める。

彼女の目下の心配事は十四歳の息子がファシストであることだった。

「何故彼はファシストなのか。多分彼女に対して抗議するため。それは子供が親に対してする永遠の論争である。その時、親は何らかの方法で、基本的で無意識の倫理的有罪判決の対象になっているのである。あるいは、（彼がファシストになったのは）高級住宅地に住んでいる無関心な女校長や金持ちで愚かで、事実上誰もがファシストのそういう学校の仲間に長い間おもねって自分を放棄した結果かもしれない」とパゾリーニは思う。

息子のことを心配する彼女は、母親の権威を振りかざすことなく息子と戦っているようだった。パゾリーニはますます感心する。

それから数週間後、彼女の書いた記事がグラビア雑誌に載る。パゾリーニに対してひどく攻撃的な文章だった。ジャーナリストとしてレベルが高く、教養もあり、敬意さえ感じた女性が、今までパゾリーニに対して世間がかぶせた仮面をそのまま押し付ける。そしてパゾリーニのことを「暴力の経験」を持つ「呪われた詩人」だときめつける。そうした田舎風で無教養な審判は、あの日彼女自身軽蔑してみせたのだが。

「ここにファシズムの作用がある。しかし、それは底深く、魂の秘密の物置に置かれたファシズムである。イタリアはエゴイズムと愚かさと非文化と陰口や道徳や強制や順応主義の繁栄の道を行進してきた。そして何らかの仕方でこの腐敗に貢献したのである。今やファシズム到来だ。宗教的呪縛から解き放たれた自由人ということは何の意味もなさない。もし、その人が甘くて残酷な掟で成り立っている世界に参加したいと思う誘惑に打ち勝つ道徳的な力がないなら――。狂気じみて馬鹿げた形をとるファシズムに力強く立ち向かう必要はない。力強く立ち向かうべきは、正常さを装い、陽気で現世的で社会的に選ばれたような（一見よいことづくめの）集大成であって、その底に社会の野蛮なエゴイズムがあるようなそういうファシズムなのである。

つまり彼女の息子は母親ほどファシストではない。少なくとも彼のファシズムにはどこか高貴ささえある。そのことを彼ははっきりとは自覚していないが、彼の場合はひとつの抗議であり、怒りなのだから。思春期の正直さで、彼は理解しているのだ。彼が生きている世界はその底に残忍さを持っているということを。そしてファシズムの考えを持つ少年に対するスキャンダルの力によって彼はそうした世界に飛びかかろうとしているのである。ところが、彼の母親のファシズムは道徳的な敗北である。ネオカピタリズモ（ネオ資本主義）がそれによって力をたくわえようとする思想の人工的陰謀の片棒をかつぐことなのだから」

パゾリーニの発言は今なお真実だ。イタリアに負けず劣らず順応主義におかされてきた日本だからこそ、パゾリーニ展が切実に必要なのである。

パゾリーニ展ではパゾリーニが高校時代の友人と座談したり、詩人のエズラ・パウンドと対話したり、母が登場したりするドキュメンタリー・ビデオも上映されるだろう。

財団の代表ラウラ・ベッティさん

財団の資料室兼図書室

Digitized by Google

INTERVIEW

知識を詰め込んでいるような映画は撮りたくない

吉行由実

ピンク四天王の次の世代を担う

インタビュアー　森山夏之

96年にデビューして以来4本のピンク映画の監督作を持つ33歳の女性監督――プロフィール的な紹介の仕方をすればこうなるが、皆さんは吉行由実という若手監督の存在を御存じだろうか。

7月15日から東京・亀有名画座で行なわれた「監督作3本の特集上映」に連動する形で、男性週刊誌、夕刊紙、『ぴあ』『宝島』等でその紹介記事が集中的に掲載されたこともあり、映画は観ていなくてもそちらから吉行の存在を知られた方も多いかもしれない。

しかし、彼女の監督作をすべて観ている私としては、その紹介のされ方にいささか不満を抱かずにはいられなかった。というのが、その記事の多くが「ピンク映画に100本以上の出演歴を持つ女優が、監督作を作りピンク映画ファンの人気を集めている」「自作で自らヌードとなりセックスシーンを熱演している」という内容ばかりだったからだ。

ここで断言しておくが、吉行由実は現在の日本映画の中において、北野武、黒沢清、周防正行、中田秀夫、石井隆といった第一線で「映画演出の可能性」を追求している監督たちと比べても決して見劣りすることのない才能の持ち主で、映画評論的にも今後、厳密な分析を施していかなければならない映像作家なのだ。

もちろん吉行由実を論じる上で、今年5月に公開された初の一般作準主演映画「D坂の殺人事件」（実相寺昭雄監督）の妖艶かつ確かな力を感じさせる演技力、今年7月まででちょうど100本の出演歴を誇るピンク映画での女優としての経歴についても本当であれば詳しく述べなければならないのだが、多分「D坂」での演技が今年色々な映画賞で評価されるであろうから、このインタビューでは吉行の映画監督としての才能に迫ってみたいと思う。

ピンク映画の常識に対する挑戦という部分はあった

よしゆき・ゆみ／1965年8月19日生まれ。福島県出身。獨協大学経済学部卒。大手企業に勤めるも役者を志望して1年で退社し、93年に知り合いの紹介でピンク映画にデビュー。同年のピンク映画大賞・新人女優賞に選ばれ、また94年から3年連続同賞の女優賞を獲得。96年、初の監督作「まん性発情不倫妻」で第9回ピンク映画大賞の新人監督賞を受賞。以後「姉妹どんぶり・抜かずに中で」（97）、「発情娘　糸ひき生下着」（98）、初のゲイ映画「乙男たちの素顔」（98）を監督。女優としても、98年には「D坂の殺人事件」「大怪獣東京に現わる」など一般映画に意欲的に出演。

Digitized by Google

——96年のデビュー作「まん性発情不倫妻」でいきなりピンク映画大賞の新人監督賞、2作めの「姉妹どんぶり・抜かずに中で」が今年5月のピンク映画大賞の監督賞と、ピンク映画関係者の間では「女・周防正行」とか「四天王の次の世代を担う旗手」ということで注目を集めているわけですが。

吉行　もともとは監督になろうとは思っていなかったんです。女優としては自分なりに才能に自信があったんで、そちらの方面で活躍できればと思い活動をしていたんですが、26歳になってもエキストラばかり。それで、ピンクなら演技ができると決心して、93年に知り合いの紹介でピンクの世界に入ったんです。もともとフィルムの質感が好きだというのはあったんで。監督デビューのキッカケは、自分で貯めていたお金で友だちと自主映画を作ろうとしていたのを、大蔵映画の関係者に話したら、「それなら、ピンクを撮ってみろ」という話になったんです。監督の事に関しては、やると決まった時はそれなりの自信はあったんですけど、ここまですぐに評価してもらえるとは考えていませんでした。

——作品設定上の特徴を考えてみると、次の4点が挙げられると思います。昔の良質なロマンポルノのような、言い換えれば北川悦吏子のドラマや桜沢エリカのマンガのような、どこにでもいる男女の恋愛体験をもの静かに丁寧に描いていくストーリー展開。オシャレ、きれい、上品な人物あるいはストーリー設定。観客が感情移入できるセックス描写。作品全体の底を流れている人の心を包み込むような優しいムード。よく考えてみれば、この4点は四天王が登場したピンク映画の映画の主流だった。AVに負けないハデなセックス演出や暗いストーリー展開、登場人物に感情移入できないセックス描写という3点とまったく対照的です。

吉行　ピンク映画の女優をやっていつも疑問だったわけですよ。セックスに至るまでの設定が不自然だし、登場人物の心情にもリアリティーを感じない。なんで、心の交流もなくセックスしてるのみたいな。ストーリーも現実味がないし、観ていて楽しくない。もちろん、北沢幸雄監督とか何人か優れた監督はいますよ。けど、極論で言ってしまえば、観客のことはあまり考えないで自分の自己満足な映像演出を追求している監督や、その逆で何でもいいや的な映画監督としての美意識の感じられない監督が少なくない。そのどちらの立場にも、私は強い反発心があった。だから、私の作品は今のピンク映画の常識に対する挑戦という部分はありました。

野外撮影などの面で妥協はしたくなかった

——デビュー作「まん性発情不倫妻」が5角関係、「姉妹どんぶり」が5角関係、「発情娘」が4角関係と、4作目のゲイ映画「乙男たちの素顔」が3角関係と吉行映画では登場人物がいずれも3角関係以上の危うい肉体関係を持っているわけです。そして、その微妙な心理バランスが吉行映画の魅力でもあるわけです。フランソワ・トリュフォーとかエリック・ロメールの恋愛映画の魅力と通底する部分が多いと感じるのですが、彼等の作品に影響を受けたとかはあるんですか。

吉行　もちろん私個人も映画ファンなので、フランス映画、アメリカ映画、日本映画と色々観ていて、ロメールもトリュフォーも何作か観ていますが、意識的に彼らの作品を参考にしているとかはありません。まあ、恋愛映画は好きなのでつまらない作品でも観たりします。ストーリーはどっちかというと、自分の恋愛体験をもとに考えているんです。6割は自分の体験、残りは願望とか外国映画にヒントを得て。ストーリーがリアルなのはその効果だと思うんです。恋愛体験は豊富なので、発想は色々と浮かんでくるんです。

——フランス・ヌーベルヴァーグの影響についてお聞きします。吉行映画は野外撮影のシーンがとても印象的で、「姉妹どんぶり」でいえば、渋谷のモヤイ像の前とか銀座線乗り場、パルコの前やスペイン坂で日中に人がたくさん通っている時、「乙男たちの素顔」では原宿で役者に演技をさせて撮影をしてるわけです。ヌーベルヴァーグの監督たちが、パリの街角のゲリラ撮影にこだわったのと同じ意志を感じるのですが。

吉行　ヌーベルヴァーグに関しては、それほど系統だてて勉強しているわけではないのであまり評論めいたことは語りたくないんですが、こうは言えると思います。ヌーベルヴァーグというのは、それまでの良質と言われていたフランス映画（脚本家が考えぬいたきれいなセリフ、人気スターを使った美男美女の恋愛話、セット撮影と完璧な照明）に対する挑戦だったと私はとらえているわけです。映画ってもっと自由で凶暴なものじゃない

Digitized by Google

のという感覚ですか。野外撮影のことについて言えば彼らにとってパリという町がとても自分の感覚にリアルだったんだと思うんです。その部分に関しては私も同じで、渋谷や原宿が私にはとてもリアルだったので、どうしてもそこで撮りたかったんです。ピンク映画の場合、予算が限られているのであの手の野外撮影は自殺行為的な部分があることは分かっているのですが、絶対にそういうとこで妥協はしたくないんです。そうでないんなら、私がその作品を監督している理由はないですから。

――ヌーベルヴァーグに関連したことで言えば、登場人物が自転車を漕ぐシーンをよく使ったり、その時の空気やそよ風を画面に写し込もうという意志を強く感じるのですが。「姉妹どんぶり」で主人公の男の部屋に貼ってあったポスターはトリュフォーの「突然炎のごとく」でした。主人公の女の子が恋人を映画に誘うとき「ロメールの『夏物語』に行こうか」と言ってたりしますよね。

吉行　私が他の監督の映画を観ていて一番嫌なのが、演出や構図に凝り過ぎている映画なんです。自分の映画の知識をそこに詰め込んでいるような。観ていて、圧迫されるし、息苦しいし、恥ずかしい。私はそんな映画は撮りたくないんです。だから、私は自分が日常生活を営んでいて、素直に気持ちいいと感じる、風とかきれいな空気とか、自転車を漕いでいる気の心地よさを自分の映画になるべく取り入れようということなんです。映画オタク的な演出をするのは好きではないんで、そのことに関してはかなり意識的に注意しています。

女優としては監督よりも才能があると考えている（笑）

――今後のピンク映画の構想、あるいは一般映画の構想について教えて下さい。

吉行　ピンク映画でいえば、林由美香の女優としての才能を買っているので、彼女主演で石井隆チックなヘビーな話をやってみたいと考えています。一般映画に関してなんですが、話が具体的に決まればすぐにでもやりたいと思っています。自分と同じくらいの年齢の女性を主人公にした恋愛映画を作りたい。33歳くらいの女性が主人公の映画って日本ではあまりないじゃないですか。一番将来に不安を感じていたりする、映画の題材としてはおもしろい年頃なんですが、その心情をリアルに描く映画を撮ってみたいですね。そのテーマでやれるのなら今の私にしかできない、何かをやれる自信はあります。

――もちろん、女優としての吉行さんの活躍にも期待していきたいのですが、今後は女優としてどんな役なやりたいとかありますか。もしかして、監督業に専念するために、女優業はやめるとか。

吉行　もちろん女優としては自分では監督よりも才能があると考えていますので、これをキッカケに仕事がたくさんこないかってひそかに期待してるんです（笑）。やってみたい役は、石井隆監督のナミ、「東京日和」の中山美穂の役とか、微妙な感情表現を要求される役をやりたいです。演技のことに関しては別に映画にこだわっているわけでなく、TVドラマにも興味があるんです。昼メロの主人公をイジめる役とか、着物を着るのが好きなので次代劇とか、コメディー的な演技をやるなら三谷幸喜さんのドラマとか。あと大林宣彦監督のファンなので、大林さんの映画に1度出てみたいというのはあります。「さびしんぼう」は100回以上観ている好きな映画なので、あの10年後を描く映画の主人公役を大林さんの演出で演じられたらというのが今の私の役者としての夢なんです。

キネマ旬報社の本

香港映画で学ぶ広東語・第二弾！

『香港電影的広東語 續集』

名作・名シーン・名セリフ集

陳敏儀著／236頁／2、000円＋税

レスリーの、黎明の、小春のセリフの本当の意味は何だったのか……。
香港映画のあの感動の名場面を再現。広東語・日本語完全対訳付で解説。

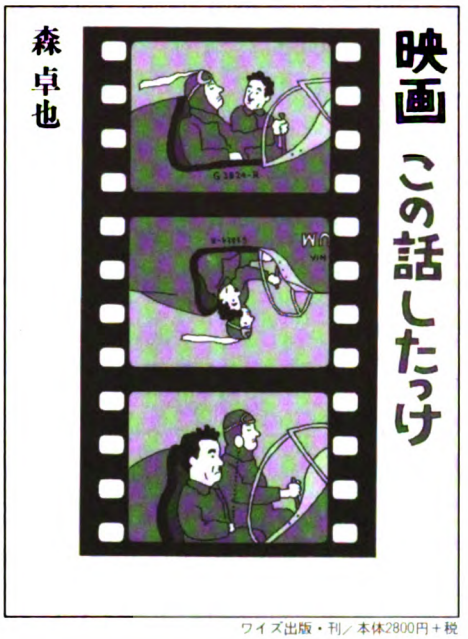
[収録作品]
■恋する惑星 ■君さえいれば
■月夜の願い ■ポリスストーリー3
■欲望の街 ■008 皇帝ミッション
■女人、四十。■ラヴソング

Digitized by Google

映画の本 BOOK REVIEW

『映画 この話したっけ』

熱中しながら気持がいいくらい醒めている好著



ワイズ出版・刊／本体2800円＋税

森卓也・著
文＝山田太一

著者は十代、二十代にアニメーションにのめりこみ「熱狂そのもの」であったという。そうでなければ『アニメーションのギャグ世界』のような目の詰った上質な本が生まれようもなかったが、五冊目のこの本でそうした熱中への嫌悪を語っている。アニメならなんでもほめると思ったらとんでもないよ、と怒っている。とっくにクールだよ、アニメの催しを振って八代目文楽の「船徳」を聴きに行ってるんだ、あの頃からもう熱狂なんかとは無縁だったんだと胸をはっている。なんだかおかしい。

この本の魅力は、いまは冷静だといいながら、アニメーションについても劇映画についても、熱狂と紙一重のところを綱渡りしてしまうきわどさにある。

わたしはもうおだやかなもんだとすましていても、ポール・グリモーがなくなりましたね、と水を向けるともう止まらない。大抵の人はグリモーが何者かも知らないのだが、あれよあれよとくわしくなり枝葉がひろがり、関係ない「アビス」から「ラスト・エンペラー」から「牯嶺街少年殺人事件」まで出て来てしまう。この過剰さがなんともいえない。大抵の文章がもっと書きたい、もっと読みたい、え、終り？　というようになってしまう。背後の語らない蘊蓄をぎっしり感じてしまう。

しかし、落ちない。綱から落ちない。文楽の「船徳」の枕ではないけれど、もう「道楽」が「道落」にならない。熱中しながら気持がいいくらい醒めている。

早い話、これだけ初期からの映画についての知識、体験を語りながら、見事にノスタルジイと無縁の本もめずらしい。

「あの映画を見て夜の町へ出たら霧雨で煙っていて、濡れながら金もなくあてもなく」などというナルシシズムが全くない。映画への評価も共感できるもの（ばかり、ともいえないが、大半は握手したいくらいに共感できるもの）だった。

たとえば野村芳太郎の「張込み」をほめて「砂の器」を冗長な凡作とする目、「ビルマの竪琴」にどうして二作とも市川崑モダニズムがないのかという指摘、ロビン・ウィリアムスの「いまを生きる」の嫌らしさなどへの言及、まったく同感（私も「いまを生きる」を試写で見て、どう無理をしてもこのような映画をほめることは出来ないと広告用讃辞を断った記憶がある）で、勝手ないい草にはちがいないが、この人は信用できると改めて思った。

中でもきわめつけは「ニュー・シネマ・パラダイス」評である。私はこの世評高い映画を見た時、なんともバカにされたような気持になり、こういう映画をいいと思う人は信用できないとひそかに思った。手軽でセンチメンタルで甘ったれた作品だと感じた。

勝手な基準をつくって、その尺度に合うか合わないかで人間を二分するなどということはとうにやめているつもりが「こんな映画にだまされる奴はロクなもんじゃない」とおさえようもなく思った。それだけ嫌らしさが濃いからこそ好きな人も多いのだろうが、著者の否定の理由が素晴らしい。私のように「思った」「感じた」などという我儘なゴタクではなく、印象批評めいたことは、一言もいわずに、作品の中の映写室の嘘に徹底してこだわり、あざやかに裁いている。こんな真似のできる人は他にいないだろう。半端ではない熱狂の日々があったからこその森卓也節である。

いや「あったからこそ」というのは、留保を要するからもしれない。実のところ著者の現在の醒めた熱中も相当なものである。

「もののけ姫」の音の大きさに触れたところで「私が適正と思われる音を聞けたのは（略）五度目に見たときだった」と事もなげに書いている。六十代で五度も見てしまうというのが凄い。元がかかっている。

こういう本は軽々には生れない。好著、お見逃しなく――。

Digitized by Google

⑱③『エビータ』

ジョン・バーンズ著／牛島信明・訳／新潮文庫

西脇英夫

映画より面白い

内助の功という点では〝エビータ〟ことエバ・ペロンは、山内一豊の妻の比ではない。なにせ、内助どころか外助もいとわず誠心誠意を尽くして、夫を国の最高権力者、アルゼンチンの大統領に仕立て上げたのだから。ただし、エビータの活躍した期間は、第二次大戦の終わった1945年から52年までの僅か7年。中南米の諸国のほとんどは常時政治的に不安定で、アルゼンチンもまた軍事クーデターや労働争議で、今日に至るまで何だかんだと揺れ動いている。

そんななかで、貧しい家庭の私生児として生まれた田舎娘のエバが、ペロンという一介の、ただし、野心的な陸軍将校に出逢ったことから、エバもまた野望を燃やし、数年にしてファーストレディの地位にのぼりつめ、しかも民衆から絶大な支持を得て、33歳の若さで末期癌により急逝した際には聖女にまでまつりあげられた、その波瀾の人生が注目されないはずはない。

しかし、政治的複雑さから、長い間、ペロン・エバ夫妻のことはタブーとされ、その名を口にするだけで死罪となった時期もあったのだ。とくに76年から83年の軍事独裁政権時代には、彼らのことに関して決して話題にしてはならないとされていた。そんな78年、ロンドンでミュージカル『エビータ』が上演され、人気を呼んでロングランしたことは、アルゼンチン政府にとって、当然ながら苦々しい出来事であり、そのミュージカルのカセットを持っていた学生が逮捕され、危険分子として投獄されるということもあったという。

96年に公開されたアラン・パーカー監督による映画『エビータ』も、このミュージカルをもとにして作られていて、本書は厳密には原作というのではなく、ミュージカルが上演された同じ78年に出版された、エビータ関係の著作の一つであり、「エバ・ペロンの伝記」の副題がつけられている。

しかし、かたやミュージカル、かたやノンフィクションとその形態にはかなりの違いがあるものの、互いに非常に近い感じをうける。それというのも映画における狂言回し、アントニオ・バンデラスの存在が大きいからだ。ミュージカルといっても、ただひたすら彼女の感動の人生を詠いあげるのではなく、随所にバンデラスによる彼女の行動に対する分析、批判、皮肉がこめられていて、それはまさにノンフィクションの構成そのものなのだ。

本書はまずエバの母親の貧しい生い立ちから始まり、14歳で地主の妾となって5人の私生児を産み、やがて四女のエバが15歳で女優になろうと決心し、村にきていたタンゴ歌手に付いてブエノスアイレスへ向かい、24歳でペロンに出逢うというように、政治的情況を解説しながらも、映画とほとんど変わらぬ展開で進行していく。

アルゼンチンという国は第二次大戦の際、ドイツに味方し、戦後もファシズム独裁政権を維持した国だが、エバとペロンの時代は、いろいろ批判はあるものの、民衆の支持も強く、経済的にも比較的安定した時期であったといえる。エバがなくなった後も、ペロンは3年ほど大統領の地位にあったが、55年の軍事クーデターで国外へ追放されることになる。そして、何とその18年後の73年、再び軍部に乞われて政権に復帰したものの、大した力を発揮することなく、一年足らずで亡くなってしまった。エバのいないペロンは、所詮ただの軍人にすぎなかったのだ。

新刊紹介

『ハリウッド・スター130』『世紀末サイコ・サスペンス劇場』シネマハウス発行／晶文社発売／本体1700円＋税

〝ビデオをもっと愉しむための特集形式の書き下しビデオ面白ガイド〟を目指して始まった、映画ガイドブック『CH（シネマハウス）ビデオ年鑑』シリーズ。ハリソン・フォードやシュワルツェネッガーらビッグ・スターからディカプリオまで、男女優130人をピックアップした第1弾『ハイウッド・スター130』と、「サイコ」から「セブン」「ファーゴ」までを網羅した第2弾『世紀末サイコ・サスペンス劇場』が既発売中。ビデオライブラリーに並べられるよう、いずれもビデオパッケージと同じ判型になっている。

Digitized by Google

池田　敏

映画ファン的にバハマで楽しむ

米国のＴＶドラマを見まくる、マニアックな個人旅行を、今年は９月下旬～10月上旬の約10日間にわたって敢行した。その間、クレア・デーンズ嬢が入学したイェール大学に立ち寄り（ストーカー風？）、ワシントンＤＣ（ホワイトハウスって意外と小さい一軒家）、シカゴ（『ＥＲ』のモデルの病院にも潜入）と渡り歩き、夜はとにかくＴＶを見た（どんな番組を見たかはまた別の機会にご紹介を）。

さて米国の航空会社は周遊チケットが充実。１都市行くのも４都市行くのも同じ値段なんてザラ。そこでもう１都市、バハマのナッソーに行って、現地のＴＶ事情を体験してみることにした。マイアミから飛行機で約１時間なので、米国から電波がスピル・オーヴァーしているチャンネルや米国のディジタルＣＳ放送位は見られると予想はしていたが……。

いや、驚きました！　多くの家に大きなアンテナが建っていて、何とダイレクトに海外のＴＶ電波を受信しているのだ。さらに、泊まったホテルではケーブル・バハマズというＣＡＴＶが見られたが、その約40チャンネルは全米４大ネットやＣＮＮといった米国の人気チャンネルに加えて、フランスのＴＶ５、ドイツの Deutsche Welle、カナダのＮＴＶなど、米国以外の局までやっているのだ。しかもＮＨＫの米国支局が日本に送っている電波まで見られて（日本のスタジオで編集される前の生々しい映像！）、いきなり電波傍受マニアになった気分。

帰国後調べると、これら米国以外の“国際局”は様々な衛星を使って世界中に配信しており、実はわが国でも必要な機材さえあれば手軽に見られるとか。例えば75cmクラスのＣＳアンテナも、普段と異なる向きに変えるだけで別の衛星のＴＶ電波が拾えたりすることがあるという。そう考えるとバハマの一件は勉強不足の私がはしゃぎ過ぎただけなのかも。

それにしても、いつどこで海外の映画やＴＶドラマが見られるか分からない、トンデモない時代になったものだ。ただしバハマは映画館も無く、書店やビデオ店も少なかったりで映画ファン的には……（リゾート天国でそんなことを気にする私が変？）。

ＮＨＫ衛星第２『夜更かしシネマ缶』『ミッドナイト映画劇場』は９～13日の深夜、５日間連続で故キン・フー監督の名作を放送。「残酷ドラゴン血斗竜門の宿」（９日）、「侠女・第一部」（10日）、「侠女・第二部」（11日）、「空山霊雨」（12日）、「天下第一」（13日）というラインナップで、以前のＷＯＷＯＷでの特集に無かった「空山霊雨」「天下第一」

「侠女」

が加わっているのが見どころ。香港・台湾映画を初めて世界に認めさせ、ブルース・リーが世界に飛び出す布石を敷いたキン・フー作品の魅力については本誌でも繰り返し取り上げられており、その魅力を確認するには絶好のチャンスだ。ところで筆者はジャッキー・チェンのハリウッド再進出作「ラッシュアワー」を渡米中に鑑賞した。向こうの観客がジャッキーに歓声を送っているのを見てひと安心すると共に、彼がこれ以上アメリカナイズされないかちょっと心配してしまった。まずは夢を果たせなかった大々先輩、キン・フーの分までがんばれ！　また、ＮＨＫ衛星第２は15日夜11時45分から、終幕したばかりの第11回東京国際映画祭をリポートする特別番組を編成。映画祭の見どころや豪華なゲスト陣の顔ぶれがまんべんなく分かり、コンペティションの結果速報もあるというので、映画祭に足を運んだファンも行けなかったファンも楽しみ。

ＷＯＷＯＷは15・23日、ディズニー・アニメの名作「白雪姫」を製作から61年、ついにわが国で初めてＴＶ放送。大人の映画ファンも童心に返って、七人のこびとと名曲「ハイ・ホー」を歌おう（!?）。ＷＯＷＯＷ『ヨーロッパ・コレクション』枠は11月、“ルイ・マル監督特集”。「死刑台のエレベーター」（７日）、「恋人たち」（14日）、「地下鉄のザジ」（21日）、「鬼火」（28日）、「好奇心」（12月５日）と、初期の代表作がずらりと並んだ。

シネフィル・イマジカの日本初公開作デー『シネフィル・プレミア』の９・17日は97年フランス作品「愛を憎んで」。ＨＩＶ陽性の青年と、自分がＨＩＶに感染していると誤解した男優。２人の患者に悩まされるヒロインの姿をサスペンスフルにつづる。16・24日は95年イギリス作品「苦難を分かつ兄弟たち」。1960年代のイギリスの田舎町。故郷パキスタンに妻子を置いて不法入国した男性とその仲間たちの生活を、ヒューマンなタッチで描いたドラマ。

Digitized by Google

豊崎岳彦

DRAMA&SPECIAL

日本映画の新黄金期を思う

ＮＨＫ教育で９～10月に放映された『ＥＴＶ特集』は、原一男＆今村昌平という師弟コンビの相変わらず“しぶとい”近況を伝えたかと思えば、仙頭直美の新しい監督作を流すなど、意欲的に邦画ネタに取り組んだ。またフジが深夜に放映した、故浦山桐郎監督に関する長いドキュメンタリー（こちらも原一男監督の新作）も、筆者を朝の４時まで画面の文字通り釘づけにする好企画であった。思えばここ数年、海外の映画祭での御墨付きを逆輸入する形で注目を集める若い才能が台頭し、テレビやＯＶやアダルト・ビデオで口に糊しながらその枠をはみ出す作品を撮る叩き上げ監督たちが真価を発揮、そしてクロサワを始めとする旧世代が次々と退場するという３つの動きが交錯するあり様は、否応のない“邦画の代替わり”を印象づけた。日本映画史の第１期である無声時代、第２期の大撮影所時代に続く、いわば金看板の“三代目襲名”を終えた邦画はどこに向かうのか。そのヒントはやはりこれまでの映画が、主流派とその真逆のものが拮抗する形で進展してきたという事実の中にあるだろう。そう、モダンな「第８芸術」派がいたからこそ歌舞伎など先行する演芸の美学が色濃く残った無声期であり、そこからメジャーの支配に対抗するバルチザン映画（松竹＆日活ヌーベルバーグやＡＴＧ、ロマンポルノ＆ピンク映画などがこれに当たる）が次々作られた……というのが撮影所時代から現在までの大きな流れになるか。“クレオール映画”という形容が矛盾であるように、“邦画”はさらに矛盾をはらみ、映画が今後ますます無国籍化することは自明である。筆者はその時、長く誤って仮想敵扱いされてきた即時・即物的な「テレビ的なるもの」こそが、“こことよそ”を結ぶ現代映画の映画たる所以＝即ち“代紋”になるのではないかと考えている。テレビこそが真の映画であるという逆説は、物語至上主義が悪しき還元を始めている現状をして邦画復活だなどと軽々しく礼賛する者への戒めの言葉にはならないか。

話はがらりと変わって、最後にニュース関連を急ぎ足でまとめてみたい。先頃、松下がディジタルビデオ「ＤＶＣ　ＰＲＯ」の開発で、ソニー・ハイデフィニションセンターがテレシネ技術でそれぞれ米エミー賞を受賞した。この手の技術に対する顕彰は地味ながら本当に偉い。映画とは発明（あるいは魔術）の異名であるはずなのに、藝術と芸術が表記としてすら混同され、今もって旧態依然の作品評価しかできない映画賞なぞ、もはやその使命を終えているのではないか。そういえば、その米国では、11月から地上波テレビのディジタル放送が開始される。当初の26局予定から増えて計41局が足並みを揃えるが、現行の10倍超になるという高価な受像機の前に普及までの道のりはまだまだ前途多難だ。翻って日本では、ディレクＴＶが年内にも150チャンネル体制になるというし、存続の危機にあったＣＡＴＶは衛星ネットワークの始動によって息を吹き返しつつある。後攻めを逆手に取った新たな展開に期待したい。

ＴＶフィーチャー旬報1998年10月　上旬

◆君の手がささやいている第二章
（10.1／テレ朝20：00～21：54）
作＝軽部潤子／監＝新城毅彦／脚＝岡田惠和／出＝武田真治、菅野美穂、高樹紗耶、木内みどり、本田博太郎、中村麻美、加賀まりこ、斎藤陽一郎、小松みゆき、佐久間由枝＊「聴覚障害者の私が一人前の母親になれるだろうか…子供の泣き声も聞こえない・でも…私は産みたい」

◆山村美紗サスペンス　赤い霊柩車９
（10.2／フジ21：00～22：54）
作＝山村美紗／監＝合月勇／脚＝長野洋／出＝片平なぎさ、神田正輝、若林豪、山村紅葉、小高恵美、村上聡美、大村昆、宮崎小枝子、池田裕成

◆草椅子の井護士水島威
（10.3／テレ朝21：00～22：51）
監＝山本邦彦／脚＝今井詔二／出＝宇津井健、池上季実子、田中広子、岡本麗、湯江健幸、薬師寺保栄、石井光三、藤堂新二＊「狙われた美人マラソンランナー・おんな検事の秘密捜査は盗聴されていた！」

◆烏賊（からすごい）
（10.5／ＴＢＳ21：00～22：54）
監＝山泉脩／脚＝池端俊策／出＝松本幸四郎、松たか子、永作博美、高橋惠子、三木のり平、西田敏行、白井晃、竹内靖司、米山信之

◆踊る大捜査線　秋の犯罪撲滅スペシャル
（10.6／フジ21：00～23：14）
監＝沢田鍾作／脚＝君塚良一／出＝織田裕二、柳葉敏郎、深津絵里、大塚寧々、水野美紀、小野武彦、佐戸井けん太、ユースケ・サンタマリア、北村総一朗、浜田晃、小林すすむ、池内万作、筧利夫、いかりや長介

◆ショムニ　スペシャル
（10.7／フジ21：00～23：14）
監＝土方政人／脚＝高橋留美／出＝江角マキコ、宝生舞、京野ことみ、桜井淳子、戸田恵子、高橋由美子、戸田菜穂、石黒賢、森本レオ、伊藤俊人、高橋克実、柏島一之、北原一咲、田辺綾子、橋爪浩一、衣笠友章、市川勇、久保晶、山崎満、須永慶、宮沢美保、野際陽子

◆ナースな探偵　幽霊は復讐する
（10.9／フジ21：00～23：07）
監＝伊藤寿浩／脚＝橋本似蔵／出＝高島礼子、七瀬なつみ、さとう珠緒、荻原流行、中丸忠雄、寺田千穂、梅垣義明、円城寺あや、菅野美寿紀、前田喜作、木下浩之、小林すすむ、中島陽典、青木堅治、大橋哲治、今井雅之、西村和彦＊「病院旧館の閉ざされた手術室…夢の向こうに隠された血ぬられた過去とは？嵐の夜に起こるエリート医師惨殺事件の謎」

◆和久峻三サスペンス　赤かぶ検事７
（10.10／テレ朝21：00～22：51）
作＝和久峻三／監＝岡屋輪一／脚＝吉田剛／出＝橋爪功、渡辺哲、藤田弓子、高田万由子、林泰文、三谷昇、ヨースケ、土倉有貴、谷村昌彦、中村久美、小久保丈二、石田登星、レッツゴー正司＊「永見線雨晴海岸から消えた女・カタツムリが見た飛騨９億円遺産相続殺人」

◆七人の刑事　最後の捜査線
（10.12／ＴＢＳ21：00～22：54）
監＝和田旭／脚＝早坂暁／出＝芦田伸介、岸本加世子、佐藤英夫、天田俊明、高田万由子、赤井英和、角野卓造、風間杜夫、鷲尾真知子、不破万作、大森暁美、梅沢昌代、大鹿次代＊「執念が迫る!!元老刑事たちは異常殺人鬼を伊豆温泉郷に追う」

◆転勤刑事４
（10.13／日テレ21：03～22：54）
監＝増田天平／脚＝石倉保志／出＝渡辺えり子、渡辺美佐子、吉田日出子、奈良本浩樹、高橋克明、久松夕子、山路和弘、岡まゆみ、碇由貴子

Digitized by Google

望月信夫

NEW MEDIA

ACME社提訴事件を追う

アメリカ本国の yahoo で、Entertainment → Comics and Animation → Characters とたどっていくと、「セーラームーン」と「シンプソンズ」のダントツの人気がうかがわれる。テレビ物にはかなわないという感がするのだが、そんな中、劇場用作品でひとり気をはいているのがワーナー勢。「ルーニー・チューンズ」がカテゴリーとして成立しているし、その中に含まれるサイト数も62と、けっこうな数字になっている。

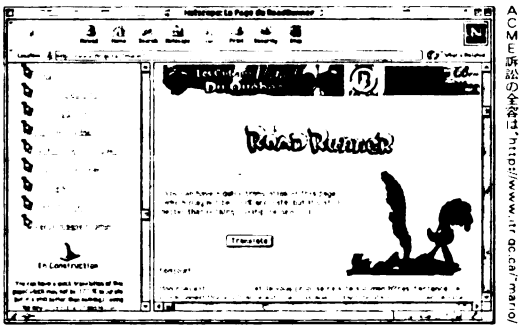
62のうち15がこのシリーズ全体に目を向けたもので、残りが個々のキャラクターに的をしぼったもの。バッグス・バニーが4、ダフィ・ダックが2という数字にたいし火星人マービンの25という数が際だっているが、ワイル・E・コヨーテも健闘していて、その数7と相棒たるロードランナーの1を大きく引き離している。で、このコヨーテについてのページを眺めていたら、遂にというべきか、コヨーテがACME社を訴えた裁判の冒頭陳述書が見つかった。

いつもいつも欠陥品をつかまされながら、コヨーテの購入先は、いつもACME社。いくらアリゾナの砂漠の真ん中とはいえ通信販売に応じてくれるのがACME社だけではないだろうと常々思っていたし、コヨーテの使い方にも問題がなしとはいえないが、それにしてもACME社の製品は欠陥が多すぎる。コヨーテの、この提訴は遅すぎの感さえある。

アリゾナ州テンペの連邦地方裁判所における原告コヨーテ、被告ACME社とする裁判にのコヨーテの代理人ハロルド・ショッフによる冒頭陳述の始めには、コヨーテ氏は合衆国法典、タイトル15、47章、セクション2072に基づきデラウェア州のACME社に損害賠償を求める、とある。

ここで、すぐさまWWWの威力が発揮される。検索エンジンで United States Code と入れてみると、コーネル大学法学部の合衆国法典を検索できるページが見つかる。そこにとびタイトルとセクションの欄に上記の数字を入れれば、セクション2072「損害賠償訴訟」の全文が表示される。コヨーテが選んだにしてはショッフ氏、めずらしくも、まともな弁護士であるようだ。

コヨーテ氏はACME社（以下、被告という、とある）から85回に渡って購入行為を行ったが、その時のセールス・スリップを証拠Aとして提出する。これらの伝票に記載された品々によってコヨーテ氏はプレデターとしての生存を脅かされるにいたる損害を被ったからである、と続く。



ACME訴訟の全文は"http://www.ifr.qc.ca/~mario/

以下、85回の購入で手にしたロケットソリ、バットマン・スーツ、強力スプリング付き靴、さらには地震錠といったものが、いかに欠陥品であるかをカリフォルニア大サンタバーバラ校における検証結果（証拠D）までも動員して語られる。

よって、コヨーテ氏は、被告に対し製造者責任（PL法ですな）に鑑み（難しい漢字！）75万ドルの支払いを求める、とある。コヨーテの悲惨な姿を目の当たりにしている私なんぞ、しごくもっともな要求だと思うのだが、判決やいかに……。このページに、この裁判の判決文の全文が登場することを願って止まない。

ちなみに、このホームページでは「スター・トレック」のカーク船長の航海日誌も併せて公開されている。スターデイト54324.5から54345.2に至るもので、内容はエンタープライズがロードランナーに遭遇した顛末。こちらもファン（特にトレッキー）には必読の文章である。

この URL、http://....qc.ca/ とある。ケベック州からで、ということは英語圏の中にぽつんと存在するフランス語地域から発信されていることになり、コヨーテの冒頭陳述書とカーク船長の航海日誌は英語で書かれているが、他の部分はフランス語である。筆者には扱い兼ねるページのはずだが、Altavista の翻訳サービスを経る作りとなっていて、クリックひとつで英語に変換してくれる。

この翻訳サービス、英独仏伊西の5言語の相互変換が可能で、他の言語から変換した英文を読む限りは、対日本語への場合の、ギャグの対象でしかないでき上がりとは異なり、充分に実用の範囲に収まっている。WWWでは、英語ひとつを知っていれば、世界の5大言語を読めることになり、それは言語能力に優れない筆者のような者にとっては、情報収集の範囲が飛躍的に拡大されることを意味する。アリガタイことです。

Digitized by Google

テレビ・トラベラー

ぼくらのTVカルチャー史　樋口尚文

㊸ドキュメントの愛情と批評

評判は耳にしていた関西テレビの『映画監督浦山桐郎の肖像』を、ようやく見ることができた。黒澤明監督の追悼番組で語る関係者たちが妙によそゆきの発言ばかりで退屈なのに対して、浦山を回顧する人びとは実によくしゃべり、番組もゆうに2時間を越す分量でありながら、その長さをまったく感じさせなかった。しかもここにあるのは決して饒舌の羅列ではなく、かつて助監督として浦山の人となりを知る原一男の、的確な取捨選択がはたらいている。実際、この番組からこぼれた部分までを含めたインタビュー集『映画に憑かれて　浦山桐郎』（現代書館）と対照すると、テレビ版のエッセンシャルな発言の選択は浦山像をかなりわかりやすく輪郭づけている。

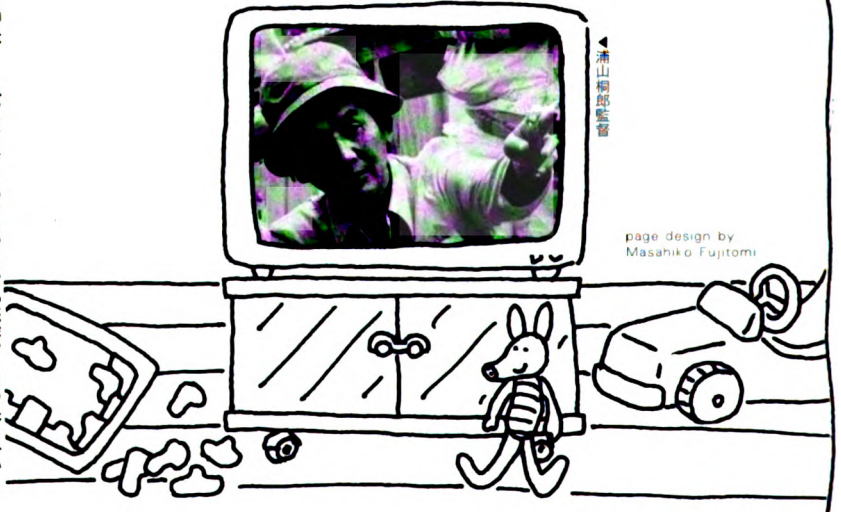
まず浦山の肉親たちが語るその生い立ちからは、育ちのいい裕福で文化的な家庭が父親の自殺で大きく揺らいだこと、そして浦山が継母や女きょうだいたちによって大切にされるがあまり、女性に対する依存性めいたものが身についてしまったことが見えてくる。相生の生家から仰ぐ父の飛び降りた崖と、大切に後年まで持ち歩いていたという継母の写真。このふたつの印象的な映像は浦山の作家的な資質の原点を端的に見せてくれているだろう。

こうした原点から歩み出した浦山について、例えば高校時代のガールフレンドであった女性たちと西河克巳監督が、それぞれ違う言葉ではあるが、浦山は「決められない」性格だと評しているのがまた面白い。実生活ではいわゆる本妻と本妻以外のパートナーとの間を「決められない」ままに過ごして双方のもとで子どもさえつくってしまった浦山の性格ゆえ、例えばどうしてほしいという具体的な指示をぬきに「違う」「違う」とずっとうじうじ女優にダメ出しを続けるのである。和泉雅子の回想するそのうじうじぶりには笑いを禁じ得ないし、彼女本人の天真爛漫さゆえにそれも今は「浦サンに育てられた」という解釈に至っているが、小林トシ江の場合の浦山のだだっ子的なダメ出しぶりは（「私が棄てた女」のミツという特異なキャラクターへの強烈な思い入れゆえ）度を越したものがあったようで、今もって小林は「あのミツは浦サンのもので、あくまで私のやろうとしたものではない」と一拍おいて語る。

こうした女優への粘着が、たしかに初期の浦山作品の硬質なリアリズムには貢献していたと思うのだが、それだけに「私が棄てた女」あたりからのディテールでの前衛趣味はいかにももったいない気がした。それがフェリーニ・ショックゆえのものであって、テレビ版『飢餓海峡』のラストのヴァギナ幻想などスタッフの大反対を押し切って浦山が挿入したのだという話は、やはりそういうことだったのかとたいそう興味深かった。

これに加えて、浦山は「青春の門」で原作にはない継母の話を、「太陽の子」では自殺した父の話を持ち込むなど、きわめてレアなかたちで映画と自らの接点を設けようとしていた点も含めて考えると、ひじょうにクラシックな、どちらかと言えば映画監督というよりも永遠の文学青年といったほうが近いのではなかろうか。そんな無垢な「芸術家」である浦山を長谷川和彦は「花瓶にむかってヨーイハイ！　と怒鳴ってた」と愛をこめて語るのだが、一方で浦山の擁護者だった早坂暁は、その浦山の「芸術家」ぶりが招いた後年の現場での孤立、そして自分が「キューポラのある街」で育てあげたと思っていた吉永小百合に「この台詞は言えません」と固辞された際のショックを振り返る。

この番組は逝ける浦山をむやみに美化するのではなく、むしろその作家としてのさらなる転回があり得なかったことを惜しみながら、浦山の映画的資質のどうにも未成熟であった部分をきちんと掘り下げた点において、作家への正しい愛情を感じさせるのであった。



◀浦山桐郎監督

Digitized by Google

DISC REVIEW

サントラ・ハウス

賀来 卓人

仮面の男

♪ニック・グレニー＝スミス
◎ＢＭＧジャパン
7月23日発売／定価2500円
BVCZ-24004

今年は「ホーム・アローン3」もあって意気上がるニック・グレニー＝スミスだが、単独登板作品が続いて喜んでいるのは、何も盟友ハンス・ジマーばかりではないだろう。上り坂にある作曲家の勢いは、それだけで聴く者にさわやかな刺激を与えてくれる。まして題材が歴史劇ともなれば、どうしたって興味が湧く。

チームメイトの一人、マーク・マンシーナが「モル・フランダース」で衣裳劇に先乗りしたことも作用したのか、これまでになく力の入った仕事だ。ヘンデルのスタイルを取り入れた舞踏音楽に始まり、剣の戦いのスリルを模した金管＆打楽器の打ち鳴らしに至るまで、堂々の弾みである。無論、例によってシンセサイザーの導入が濃厚につき、それゆえの現代的な軽さもぬぐえないのだが、弦は終始流麗であり、コーラスの挿入も崇高さをにじませて悪くない。わけても老いた四銃士たちに対するヒロイズムの創出については評価していい。グレニー＝スミスの可能性はまた大きく広がった。

ウェルカム・トゥ・サラエボ

♪エイドリアン・ジョンストンほか
◎東芝ＥＭＩ
7月8日発売／定価2548円
TOCP-50617

現代イギリス映画界のホープ、マイケル・ウィンターボトムが内戦のサラエボに目を向けた。「日蔭のふたり」のような文学作品は例外として、現代に題材を求めた場合、とかく選曲による音楽手法で空気感を出そうとする新鋭は、ここでもまた既成曲を多く活用するに至った。

ディスクには、ヴァン・モリソンを筆頭に、ザ・ストーン・ローゼス、ハウス・オブ・ラブ、ボビー・マクファーリン、ハッピー・マンデイズ、ブラー、J・ダド・ジュアンらのポップナンバー9曲を収録。「ジャッカル」を始め、最近映画づいているマッシヴ・アタックは、ウィンターボトムの熱望で新曲を書き下ろしている。作品での効果とは別に、ファンにはうれしい仕掛けだろう。

また劇中では、アルビノーニの《アダージョ》が頻繁に顔を出す。目新しい選曲、挿入法ではないが、「日蔭のふたり」の良きパートナー、エイドリアン・ジョンストンの弦＆ピアノ音楽と相まって、戦場の悲壮感をうまくくみ取っている。

フラワース・オフ・シャンハイ

♪半野喜弘
◎FLAVOUR OF SOUND
9月21日発売／定価2548円
TFCC-87602

19世紀末の上海を舞台にした侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督作品。以前には、立川直樹を音楽プロデューサーとして仲介に立たせ、センスを「悲情城市」に招いたりした同監督であるが、この新作ではヒップホップ畑出身の若手を抜擢した。意外な顔合わせにも映るが、前作「憂鬱な楽園」で台湾のロック・アーティスト林強（リン・チャン）を起用したことを思えば、ある意味で自然な音楽担当の選択だったともいえるか。

音楽そのものにも無理はない。石笛、フルート、ウッド・パイプなどの民族色豊かな木管が緩やかな調べで全体を導き、これに弦、アコーディオン、ギター、シンセサイザーなどが続く構成となっている。結果生まれるのは、時代色というよりは地域色であり、それ以上に精をつむぐ品のよい旋律だった。半野の背景を思えば、サンプリングを交えた種々の打楽器による、ややもノイジーで前衛的な無調の音楽にその特徴がうかがわれるか。ピアノの響きも美しく、作家性を崩すことく進められた幸運な仕事だろう。

Digitized by Google

サ・フライ&II

♬ハワードショア、
クリストファー・ヤング
◎カルチュア・パブリッシャーズ
6月25日発売／定価2100円
CPC8-5021

人気ホラーの正編、続編の音楽をカップリングしたお徳用サントラ。ディスクの収録時間の関係上、公開時のアルバムに比べて数曲カットされているが、作曲家の才気を知るには何ら問題はない。

ハワード・ショアが手掛けた第1作は、金管部の豪快なユニゾンによって幕を開ける。鋭く悲哀を奏でる弦もさすがだが、楽曲全体からにじみ出るダイナミズムはどうだ。異形の混合生物のためのスペクタクルを現出させるそれは、実のところモンスター映画の味わいである。心理描写に長けた繊細な仕事の多い作曲者だけに、一際ユニークな作品となった。

第2作のクリストファー・ヤングも分厚いオーケストラ音楽でブランドル父子の悲劇を彩った。感傷的な作品ゆえに、悲哀という点では前作よりも強調された仕事だが、だからこそヤングの独壇場でもあった。感情表現を枠を越えるほどに哀しすぎる旋律の美しさは、メロディメーカーとして売る作曲者の骨頂だろう。その凄まじさを体験してほしく、必聴。

SF サムライ・フィクション

♬布袋寅泰
◎東芝EMI
7月29日発売／定価3059円
TOCT-10200

ギタリストの布袋寅泰が映画音楽に挑戦した。作品は、自らも主演する新感覚時代劇。既にミュージック・クリップの仕事で顔見知りとなっている中野裕之との銀幕における初コラボレーションでもある。気がおけない仲間との新たな冒険には、力みなど微塵もなかったろう。

冒頭から心地よい疾走感にあふれた仕上がりだ。太鼓を思わせるパーカッシヴな電子音がリズミックな躍動感を呼び、嫌みのない時代劇の香りも誘う。やがて掛け声にも似たヴォーカルやドラムも交じり、当然のことながらギターの独壇場へとなだれ込んでいくそれは、ほぼ打ち込みによる内容と併せて、至極現代的な響きに終始しているといっていい。その意味では、時代劇の香りの正体は映画的な記憶に裏打ちされた「気分」の産物だろう。その一方での「軽み」は無論、喜劇音楽のそれでもある。布袋は道を踏み外していない。この「うまさ」が来るテリー・ギリアムとの仕事にどう結実しているかが目下の楽しみだろう。

SF サムライ・フィクション

♬カーター・バーウェル
◎カルチュア・パブリッシャーズ
5月25日発売／定価2100円
CPC8-5017

コーエン兄弟の初期2作品を収めたお徳用サントラが日本登場。今やハリウッドの大作を任されるようにもなったカーター・バーウェルのデビューの具合を振り返るには最適の一枚だ。ほぼ打ち込みの仕事だが、心地よい躍動感に富む。

死霊のはらわた 完全盤

♬ジョセフ・ロドゥカ
◎カルチュア・パブリッシャーズ
6月25日発売／定価3990円
CPC8-5023 ～ 5025

ブルース・キャンベル＝アッシュ受難劇三部作が3枚組セットで再リリース。サム・ライミとは旧知のジョセフ・ロドゥカによる音楽は、一貫してアコースティックな響きにこだわりぬき、第3作で見事な開花を迎えるのだった。

ウェルカム・トゥ・サラエボ

♬梅林茂
◎カルチュア・パブリッシャーズ
9月25日発売／定価2800円
CPC8-3008

松田優作の一声で、テレビ映画『断線』で顔を合わせた崔洋一と梅林茂が、銀幕で共同作業にいそしんだ青春ミステリー。ギター、ドラムス、シンセなどから成る音楽は、作品以上に鋭い。俳優デビューを飾った白竜のヴォーカル曲もいい。

友よ、静かに暮れ

♬梅林茂
◎カルチュア・パブリッシャーズ
9月25日発売／定価2800円
CPC8-3009

崔&梅林のコラボレーション第2弾。概して打ち込みによる内容だが、マンドリン、女性ヴォーカルを絡めた主題曲を始め、得も言われぬ悲哀と味わいを醸す魅力的な楽曲が並ぶ。さらに踏み込んだ両者の充実が手にとるようだ。必聴。

Digitized by Google

VIDEO, LD&DVD GARDEN

ケン・ローチ作品が続々とリリース！

慈愛に満ちた生命への眼差し

杉原賢彦

「レディバード・レディバード」

「ケス」

どれほど待たされたことだろう。ケン・ローチ作品の、まるで堰を切ったようなヴィデオ・リリースが始まった。

「**ケス**」……ようやくヴィデオ・リリースされたこの作品は、ケン・ローチの69年の作品として、また代表作として有名だ。イギリスの労働者階級を代弁する映画作家、そして政治によって正義が踏みにじられようとするときそれを守ろうと必死の抵抗を試みる正義。大きく分けてふたつの流れをもつローチの作品のなかでも「ケス」は、労働者階級の、それもローチが得意とする少年を追う作品だ。

そこでは、もうひとつの流れの作品のように、ことさらに正義や大義を叫ばない（近年の「大地と自由」のような気恥ずかしさは、ここでは無縁だ）。あるのは、少年をじっと見つめる、視線のたおやかさ、せつないまでのやさしさ――。

冒頭、アルバイト先の新聞配達店まで、黒ずんだ街を駆け抜けていく少年をキャメラが追いかけるリズムの軽やかさ。秋の、冷たさが忍び込もうとする草原へ向かう少年を囲む緑のやさしさ。ただ、そこに現前するだけのこれらのものが、ローチの視線により、特定のベクトルをもつことなく切り取られてゆく。それらの映像を見るとき、わたしたちは、その奥底ににじみ出るような豊かさに気づすがにはいられない。世界にはまだ、写し出されるに値するものが存在しているのだと。

ローチの眼差しは、いまだ発見されることなくたしかに現前する、これらの美しさへと注がれる。そして、やがてそれは、少年が飼うことになる1羽の隼＝ケスへと注がれてゆく――。

ある日ふと、隼の雛を手に入れ、それまで読んだこともなかった本（猛禽類にかんするものだ）を手にし、たどたどしく文字を追ってゆく少年のひたむきな貌。壊れかかった家庭生活、渋々ながらの学校生活と切り放されて、それまでおどおどとしていた少年の鷹に向ける瞳はまるで、未知だった自分自身に向けるかのように真摯で、必死だ。とそれは、ローチが少年に向ける眼差しにも重なる。

「夜空に星があるように」（67）で監督デビューしたばかりのローチが、まるでこの作品で、自身が撮るべきものを見つけたとでもいうように（実際、「ケス」はローチにとって劇場用長編の第2作になる）。

そう、朝まだきの林を駆け、蒼い空にブリティッシュ・グリーンに覆われた草原を抜けてゆく少年の姿はそのまま、ローチそのものでもあるかのようだ。

Digitized by Google

2001年 ソフトの旅

吉川明利

『キャッツ』初ソフト化 マルチアングル活用を！

女性のお客様を中心にして、こういった質問をよく受ける。「ミュージカルのビデオはありますか？」。かなりアバウトな質問で、ちょっと困りつつも、もしかしたらフレッド・アステアのファンかも知れずと思って「ミュージカル映画ですか？」と問い返すと100%といってよい程「いいえ、『オペラ座の怪人』とかの舞台ものです」と答え。こうしたお客様はミュージカル＝ステージであり、そのほとんどがアンドリュー・ロイド＝ウェバー系という偏り具合で、残念ながらコール・ポーターもボブ・フォッシーもソンドハイムも無視である。

希望は充分にわかるのだが、ミュージカルに限らず商業演劇そのもののソフト化は著作権、肖像権といった権利関係上発売は難しく、出ていないのが現状なのである（日本の小劇団は除く、そして蜷川演劇も廃盤がほとんど）。しかしようやく12月に『キャッツ』のオリジナル・ロンドンキャスト版がVT、LD、DVD同時発売となるというニュースが飛び込んで来た。

これはミュージカルファンだけでなく映画ファンにも興味あるソフトだろう。そしてDVDの同発がウレシイ。実はDVDこそこうした舞台物にはうってつけのフォーマットなのだ。今回の『キャッツ』にはそれがないようだが、本来DVDにはマルチアングル機能があり、それを活用出来るのは映画ではなく、ライヴステージものである。今後もし『レ・ミゼラブル』や『ライオンキング』などがソフト化になる際にはぜひマルチアングルを生かしてもらいたい。絶対にDVDの普及にひと役買う筈である。

さらに来年には以前から海外のビデオ市場で大ヒットを飛ばして、一部のファンから国内版の発売が待たれていたアイリッシュダンスミュージカル『リバーダンス』も、来日公演に合わせた形でリリース決定だ。海外レーベルと同じソニーピクチャーズの発売なのだから、DVDも同発してマルチアングルを生かしたソフトにしてくれることを期待したいのだが……。

ひとりで隼の雛を飼い訓練し、やがて思うがままに飛び回らせられるようになるそのとき、ローチのキャメラは微笑みを投げかける。少年と隼だけの、誰にも邪魔されない純粋な世界を切り取るときキャメラは、しっとりとした静謐さをたたえ、まるでターナーの風景画のような色彩と自然との交感をたどるだろう（撮影はドキュメンタリー作品などに力を見せるクリス・メンジース。「ケス」が劇場用作品では初めての仕事となる）。

ローチの眼差しは、細やかなものを見るとき、もっともそのやさしさを増す。だが、決してそれだけではないことを、わたしたちは知っている。「ケス」のなかでも、労働者階級の日常の生活がまざまざと切り取られ、その、ざらついた、としか言いようのないさまが、容赦なくフィルムに焼きつけられてゆくのだ（やがてくる、悲劇を予感させるかのように……）。

ケン・ローチのフィルモグラフィは（BBCでの活動——主にドキュメンタリー作品の制作とともに）、ふたつの側面をもつことは先に述べた通りだ。決して多作家とはいえない彼だが、90年以降は1年に1作のペースで作品を送り出し続けている。それらの作品が、いま、続々とヴィデオ・リリースされている。

8月には91年の「**リフ・ラフ**」と、96年の「**カルラの歌**」（ケン・ローチのもうひとつの側面を代表する作品だ）が、9月には93年の「**レイニング・ストーンズ**」が、そして10月には94年の「**レディバード・レディバード**」が、次々にリリースされた。「カルラの歌」を除きこれらはいずれも、イギリスの労働者階級に焦点を当て、その無様なまでにキラキラと生命をたたえた姿を描いていく——「リフ・ラフ」のヒロイン、エマ・マッコートの音ハズレな〝ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンド〟のいとおしさ、「レイニング・ストーンズ」の冒頭での、豚を泥まみれになりながら追う男たちの滑稽なかなしみ、あるいは「レディバード・レディバード」の、肝っ玉母ちゃんの子を思う迫力——。ローチの眼差しがとらえるのは、不器用な人々の、それでも懸命に輝こうとする生命の光だ。しっかり生きようとする人々の心の奥底の輝きにほかならない。

ようやくリリースされた「ケス」は、ローチの原点を覗かせてくれると同時に、自身のなかにある生命のいとおしさを、ふと思い出させてくれた。清冽な生命の息づかいを、「ケス」は心のなかで喚びつづけるだろう——。

「リフ・ラフ」
●シネカノン（13000円）

「カルラの歌」
●クロックワークス（15800円）

「ランドアンドフリーダム 大地と自由」
●クロックワークス（15800円）

「レイニング・ストーンズ」
●シネカノン（13000円）

「レディバード・レディバード」
●シネカノン（13000円）

「ケス」
●69年（公開）●製作 トニー・ガーネット 原作 バリー・ハインズ 出演 デヴィッド・ブランドレー、コリン・ウェランド ●WHVより11月1日リリース

※価格は全て税抜き

Digitized by Google

公開作&未公開作

●丸山尚輝

TRUCKS　トラックス

98年（未公開）●監督／クリス・トムソン　出演／ティモシー・バスフィールド、ブレンダ・バーキ
●大映（99分）
11月13日リリース

〝恐怖小説の帝王〟の異名を持つ天才S・キング原作によるSFスリラーの映画化作品。86年にはS・キング自らがメガホンを取り「地獄のデビルトラック」というタイトルで日本でも劇場公開されたが、今回は現代的なアレンジを加えてはいるものの、前作のリメイクというよりは正統派な出来といった仕上がりを見せている（因みに、前作で登場したような強面てのトラックは出てこない）。監督は「ヒッチハイカー」や「SWIMSUIT: THE MOVIE」のC・トムソン。キャストには「ガンヘッド」のヒロイン役を演じたB・バーキが出演しているが、日本ではまだあまり馴染みのない名前ばかり。それでも充分に楽しめる娯楽作品だ。

舞台は、ロズウェル事件との関連で知られるエリア51に近い小さな田舎町・ルナー。普段は静かなこの町で、ある日突然、無人のトラックが工場のオーナーである老人を轢き殺すという事件が発生する。続いて、冷凍車輌が運転手を冷蔵庫に閉じ込め暴走、また化学薬品を積載したトラックが操縦不可能となって変電機に衝突、爆発炎上してしまう。これによって陸の孤島となったルナーの住人は、一軒のドライブインに集結。意志を持ちはじめた謎のトラック集団と、命をかけた戦いを強いられることになるのだが…。

GHOST FEVER　ゴースト・フィーバー

86年（未公開）●監督／アラン・スミシー　出演／シャーマン・ハムスレー、ルイス・アバロス、デボラ・ベンソン
●CICビクタービデオ（86分）
10月23日リリース

まぬけな刑事コンビが、お化け屋敷と噂される館を舞台に繰り広げる騒動を、笑いとお色気と愛とボクシングとゴーストとSFXと…、とにかくいろいろ混ぜて描いたおバカ映画。

くだらなさが命のこの映画、「内容は無いよう」ともうオヤジも言わないギャグをぶちかましたい作品だが、それよりも面白いのが監督だ。クレジットされているアラン・スミシーとは架空の人物で、アメリカ監督協会に所属している監督が自分の名前をクレジットして欲しくない時に使う名前なのである。最近では「ヘルレイザー4」にその名前を見ることが出来るが、本作もなるほど名前を隠したくなるような映画だなと思わず納得しちゃいました。キッチュな映画ファン必見の作品です（因みに本当の監督はリー・マッデン）。

THRILL　スリル　―ジェットコースター爆発計画―

96年（TM）●監督／サム・ピルズバリー　出演／アントニオ・サバト・Jr、ステファニー・クラマー
●アートポート＝マイピック（90分）
10月30日リリース

こう見えても私、大の絶叫アトラクション好きで、今年の夏もキネ旬の近くにある後楽園のリニアゲイルで大声を張り上げてきたのですが、そんなアミューズメント・パークを舞台にしたパニック映画がこれ。明らかに「スピード」系ノリを狙ったのが見え見えながら、ご覧になる際にはシートベルトの着用をオススメしたい作品であります。

華やかさと楽しさとは裏腹に経営が困難になっている遊園地で、人気のジェットコースター〝スリル〟が暴走するという事故が発生。その後、遊園地の売却を進める女園長に脅迫電話がかかってきた。初めは悪戯だと取り合わなかった園長だが、犯人は次々にいやがらせを開始し、最後にスリルに爆弾を仕掛けてしまう。園長は弟と共に、遊園地を守ろうとするが…。

ビデオ新譜

※＝廉価版、（R）＝レンタル

●アクロス
1/6「ア・ラ・モード／誘惑の曲線」
●アスミック
1/6「シーズ・ソー・ラヴリー」
●アルバトロス
1/7「トラック・ダウン」「ユナイテッド・トラッシュ」
●IMPACT
1/5「バニシング・エアー」
●SPO
1/6「キングダム　第1章」※「キングダム　第2章」※「キングダムⅡ　第3章」※「キングダムⅡ　第4章」※
●HRSフナイ
1/6「ベルニー」
●KOKUEI
1/10「告白団地妻売春クラブ（新宿？日記／迷い猫）」
●ジュネス企画
1/10「ゼンダ城の虜（ジョン・クロムウェル監督版）」※「鎧なき騎士」※
●大映
1/13「赤胴鈴之助　一本足の魔人」※「赤胴鈴之助　三つ目の鳥人」※「赤胴鈴之助　黒雲谷の雷人」※「赤胴鈴之助　どくろ団退治」※
●東映ビデオ
10/21「Dr. スランプ　アラレちゃん／んちゃ！ペンギン村より愛をこめて」※「ドラゴンボールZ／銀河ギリギリ!!ぶっちぎりの凄い奴」※
1/3「安藤組外伝　群狼の系譜2」（R）「新選組鬼隊長」（R）「壮烈新選組　幕末の動乱」（R）「幕末残酷物語」（R）「不夜街　危険な天使たち（欲望の街・純愛篇／紅い疾風）」（R）「ボディ・カウント」（R）「友情　Friendship」（R）
●東宝
1/3「ジャッカル」（R）
●徳間ジャパンコミュニケーションズ

Digitized by Google

望月美寿の

アジアのピンキリ
ーそのまたキリー

来日台風一過で ビビアン・スー再び

10月下旬号でビビアン・スー三部作の紹介を始め、ラストで「詳しくは次号を待て！」などとブチあげておきながら、11月上旬号ではチョウ・ユンファ来日ネタに走ってしまい失礼致しました。いやーそれにしてもユンファと前後してメイベル・チャン&アレックス・ロー、アニタ・ユン、ケリー・チャン、カーク・ウォンがわらわらと来日したのには参った。まるで台風一過のようであった。

さて、「ビビアン・スーのロマンシング・ドラゴン」であるが、前述したとおり、実質上の主役は推定7～8歳のガキンチョ二人組にして、今回は主題歌も歌っている。リー・リンチェイの小型版ともいうべきシー・シウロンはいつも少林寺の少年修行僧役。おデブで食いしん坊でズル賢いがまぬけなハオ・シャオウェン（実写版クレヨンしんちゃんともいえる）は、今回はみなし子役。台湾の映画事情に詳しい方、この子たちが何者なのかどうか私に教えて下されもっとも子役二人の怪演だけではさすがに話がもたないので、ユン・ピョウ扮する正義の考古学者兼冒険家（つまりインディ・ジョーンズ）が登場。実の兄で闇古美術商のボス、チョイ・カムコンとその愛人のクララ・ウェイを相手どった国宝級の仏頭争奪戦がストーリーの中心となる。ビビアンはといえば、万里の長城で悪人に搾取されスリを働くかわいそうな少女役。裕木奈江風さがり眉に岡本夏生風のH系コスチュームが何かへん。生臭坊主役でロー・ガーイェンも出て来て笑わせる、となかなか豪華なキャストなのだが、いまいちアホらしさにノレないのはテンポに難があるせいか。撮影は「ブレード／刀」のカムシン、武術指導は「男たちの挽歌」のトンワイと一流どころといえど、こういう珍品が出てくるのがさすが台湾娯楽映画、奥が深い。

ビビアン・スーのロマンシング・ドラゴン
龍在少林／Little Shaolin Dragon
96年●製作／ブイテー・ホイ、ンヨン・ホイ・ウォン・ウホン・カム・ユン・シ・シビビケラー・サウ・ウ・ハ・シ・ビ・イ監督／ンピョウ・ウェン・ハオ・シェンピョウ・ウェン・ハオ・シェン・スーアイ撮影／ンピョウ・ウェン・ハオ・シェンピョウ・ウェン・ハオ・シェン・スーアイ出演／シー・ウェン・ハオ・シェンピョウ・ウェン・ハオ・シェン・スーアイ●エスエスエムー（89分）
9月25日発売

RAJU BAN GAYA GENTLEMAN

ラジュー出世する

92年（公開）●監督／アズィーズ・ミルザー 出演／シャー・ルク・カーン、ジュヒー・チャーウラー
●新日本映画社（159分）
10月30日リリース

核実験による世界的非難もなんのその、インド映画と言えばサタジット・レイ監督の映画しか知らなかった日本で大ブレイク中なのが、「ムトゥ 踊るマハラジャ」を初めとする歌と踊りをフィーチャーしたインド娯楽映画の王道的作品群。そして、その火付け役となった映画がいよいよビデオリリースされるのだ。ブームに乗り遅れて焦っているあーた、急いでビデオ屋さんへ走るべし！

ダージリンの大学を卒業し、一旗上げるためにボンベイにやってきた若者・ラジュー。恋仲になったレヌの紹介でゼネコンに入社できた彼は、そこで次々に業績をあげていき出世街道をまっしぐらに進んでいくのであった。だが、彼の出世を妬むライバルたちによって、ラジューは窮地に立たされてしまうのであった…。

ABERRATION

アベレーション

97年（未公開）●監督／トム・ボクセル 出演／パメラ・ギドリー、サイモン・ポッセル、ヘレン・モウルダー
●マイピック（93分）
11月6日リリース

幼い頃に住んでいた北米の山小屋へやってきたエイミー。彼女はそこで新しい暮らしを始めようとするが、その周辺で次々に原因不明の事件が起こる。やがて、山の生態系を調査しにきた若き学者・マーシャルと知り合った彼女は、それが雪山になど生息するはずのない大トカゲの仕業であることを知らされる。しかしそれが分かった時は既に遅く、エイミーとマーシャルは吹雪に見舞われた山小屋に閉じ込められてしまうのだった。果たして、繁殖するトカゲの攻撃からふたりは逃げることが出来るのか!?

生物の突然変異＝アベレーションによる恐怖を描いたモンスター・パニック映画。ただただ怖いだけでなく、ところどころに笑いを散りばめたあたりが好感を持てる。コンパクトでテンポの良さも◎。

LD新譜

W＝ワイド・スクリーン、D＝デジタル DD＝ドルビー・デジタル

●パイオニア

1/23「ダンテズ・ピーク」（THX、W）

1/6「シーズ・ソー・ラヴリー」（W、D）「スターシップ・トゥルーパーズ」（W、DD）「リトル・マーメイド」（THX、W、DD）

1/10「ジャッキー・チェン初期傑作選Vol.1（成龍拳）「クレイジー・モンキー」など全4作）「バイリンガル・コレクション／スター・トレック（劇場版6作）」「コレクターズセット／大空港シリーズ」

1/6「コールド・アイズ」

●日活

1/6「大江戸㊙おんな医者あらし」※「影なき声」※「死の十字路」※「㊙大奥外伝淫業（ほれぐすり）おんな狂乱」※

●日本ヘラルド映画

1/18「堕ちてゆく女」「コピーキャット」※「ザ・ファン」※「ステラ」※

●ブエナビスタホームエンターテインメント

1/6「ジャイアント・ピーチ」（「ヴィンセント」併録）」※「スターシップ・トゥルーパーズ」「ナイトメアー・ビフォア・クリスマス」（スペシャル限定BOX）

1/18「ナッシング・トゥ・ルーズ」

●ポニーキャニオン

1/18「アナコンダ」※「クイック&デッド」※「BE MY BOY／ビー・マイ・ボーイ」「フランケンシュタイン」ケネス・ブラナー監督版）※「ワグ・ザ・ドッグ（ウワサの真相／ワグ・ザ・ドッグ）」

●マイピック＝テレビ東京＝シネマテン

1/18「シューティング・フィッシュ」

Digitized by Google

SECOND IMPACT セカンド・インパクト

THE SECOND CIVIL WAR

97年（未公開）●監督／ジョー・ダンテ 出演／ボー・ブリッジス、ジェイムズ・アール・ジョーンズ
●イメージファクトリー・アイエム（95分）11月6日リリース

製作総指揮にバリー・レビンソン、監督に久々の登板のジョー・ダンテときたら、映画ファンには期待するなという方が無理。タイトルからしても「ディープ・インパクト」を想像して、こりゃ一級のSFエンターテインメントだなと思ってしまうが、内容はちょっと違う。近未来のアメリカを舞台に、第二次南北戦争を想定して描いた社会派作品なのである。だからといってつまらないと言っている訳ではなく、売りと先入観のギャップの違いを注意しておきたいのだ。

200X年、インド・パキスタンで紛争が勃発。難民となった孤児たちが、大勢アメリカに避難してきた。ところが、アイダホ州知事がこの受け入れを拒否したことから、押さえられていた人種問題に火がついてしまう…。

ブレストマン 豊胸外科医

BREAST MAN

97年（TM）●監督／ローレンス・オニール 出演／デイヴィッド・シュウィマー、クリス・クーパー
●インタラクティブ・シネマ（96分）11月18日リリース

女性団体の抗議が怖いが思い切って紹介しちゃいます。ズバリ、女性の胸を大きくする豊胸手術を扱った実話を基にしたお話です。

60年代のアメリカ。ある日、形成外科医のケヴィンとラーソンは、女性たちの永遠の悩みである豊胸手術に着手することを決める。人体に無害とされるシリコンゼリーを使い、見事手術に成功したふたりは独立し、開業。クリニックに訪れる女性たちに、救いの手を差し伸べるのであった。ところが、いつの頃からか名声欲にとりつかれたふたりの間に亀裂が生じると共に、手術による弊害が明るみになるのであった。

あくまでも「豊胸手術」という事実を真面目に描いた作品で、覗き趣味的なものではない。だからと言って、「陰茎増大手術」ものが作られるのは勘弁ね。

サスピション 殺意の香り

THE LAND LADY

97年（TM）●監督／ロブ・メイレンファント 出演／タリア・シャイア、ジャック・コールマン
●グランドスラムインターナショナル（96分）10月23日リリース

絵に描いたような理想の家庭を夢に見るあまり、浮気をした夫を殺害してしまった主婦が繰り広げる、狂信的な愛の犯罪を描いたスリラー。主演は「ロッキー」のT・シャイア。今までの彼女のイメージを覆す演技は映画ファン必見。

フリー・スラッピー

SLAPPY AND THE STINKERS

97年（未公開）●監督／バーネット・ケルマン 出演／B・D・ウォン、ブロンソン・ピンショット
●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（78分）10月23日リリース

タイトルもストレートな、アシカ版「フリー・ウィリー」なファミリー向け娯楽作品。5人の悪ガキたちが、水族館のアシカ、スラッピーを海に帰そうと奮闘する。監督は「ER」のB・ケルマン。吹替版も同時リリースされる。

ミストライアル

MISTRIAL

97年（未公開）●監督／ヘイウッド・グールド 出演／ビル・プルマン、ロバート・ロッジア
●アスク（95分）10月30日リリース

レニー・ハーリンとジーナ・デイヴィスの夫婦コンビが製作を担当した法廷ドラマ。ある警官殺人事件解決に命を燃やす捜査官・ドナヒューは、無罪判決を下した法廷を占拠してしまう…。監督は「カクテル」のH・グールド。

インタビュー ウィズ ディカプリオ

LEONARDO DICAPRIO THE INTERVIEWS I & II

98年（ドキュメンタリー）●出演／レオナルド・ディカプリオ、ロバート・デ・ニーロ、ジェイムズ・キャメロン
●HRSフナイ（60分）11月6日リリース

「タイタニック」のヒットで、世界のトップスタアになった刑事（デカ）プリオ、もといディカプリオのインタビューを中心に構成されたビデオ。ゲストや秘映像なども収録され、お楽しみいっぱい。「ポートレイト・オブ～」も同時リリース。

DVD新譜

●松竹ホームビデオ

10/21「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」（W、DD）「張り込み」（W、DD）

●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

10/23「ペギー・スーの結婚」（W、DD）「ボーイズ、ン・ザ・フット」（W、DD）「恋愛小説家」（W、DD）「愛さずにはいられない」（W、DD）「アサイナメント」（W、DD）「ア・フュー・グッドメン」（W、DD）「ウルフ」（W、DD）「オンリー・ユー（ノーマン・ジュイソン監督版）」（W、DD）「グース」（W、DD）「グローリー」（W、DD）「クローンズ」（W、DD）「ケーブルガイ」（W、DD）「恋はデジャ・ブ」（W、DD）「ザ・インターネット」（W、DD）「ザ・エージェント」（W、DD）「ザ・クラフト」（W、DD）「ザ・シークレット・サービス」（W、DD）「ジュマンジ」（W、DD）「スタンド・バイ・ミー」（W、DD）「ブルース・ウィリス／スリー・リバーズ」（W、DD）「タクシー・ドライバー」（W）「ダブルチーム」（W、DD）「デスペラード」（W、DD）「デビル」（W、DD）「トゥルー・ナイト」（W、DD）「ドラキュラ（フランシス・フォード・コッポラ監督版）」（W、DD）「博士の異常な愛情 又は私は如何にして心配する（「大空港」「エアポート'75」など全4作）「ATG映画傑作選（書を捨てよ街へ出よう」など全3作）「小林旭〝渡り鳥〟全集①（「南国土佐を後にして」など全5作）「鈴木清順日活傑作選 活劇篇（「野獣の青春」「殺しの烙印」など全3作）

Digitized by Google

オリジナルビデオこだわりチェック

中村勝則

「新任女…」シリーズ 今度は“女囚プリズン”だ！

「新任女教師」「新任女医」など「新任女…」シリーズといえば、もはやTMCの定番タイトルとなった感もあるが、今回はこれまでの身近な職業路線から一変した女囚プリズンもの。このところエロティック系OVの新ジャンルとして密かな人気を集めているようだが、本作はエロティック描写のみならず、心理サスペンスの要素を大いに取り入れているのがミソ。

舞台は若い女囚だけを収監した女子医療刑務所。精神科医の美和（藤崎彩花）は、両親を殺害して服役しているエリカ（桃井マキ）の精神分析と、多くの疑問が残る事件の真相を探るべくこの刑務所にやってくるわけだが、そこではサディスティックな女所長（小川真実）による女囚たちの虐待が行われている。そんな退廃した所内でエリカのカウンセリングを行う美和だったが、ひたすら無表情なエリカは彼女の質問に応えず、逆に美和へと問いかけてくる。

それによって美和は逆に自分がマインドコントロールされているかのような錯覚に陥っていくわけだが、そんな美和とエリカの精神的葛藤が後半の大きなキーポイントとなるのだ。

美和はかつて義父（佐野和宏）にレイプされたという忌まわしい過去をもっていることが明らかになるわ、その追い打ちをかけるかのように好色な刑務官からレイプされてしまうわ、そして美和をレイプした義父がエリカの実父でもあることが明らかになるわと、とにかくスピーディなストーリー展開は見もの。

監督の七里圭は「MINDGAME」で監督補を務め、これまでテレビ東京の深夜ドラマなどの演出も手掛けていたそうだが、本格的にはこれがデビュー作とのこと。今後の活躍にも注目したいところ。

新任女刑務官 檻の中の花芯（めしべ）

98年／本／脚本／撮影／美術／藤崎彩花／水上高哲／小川真実／佐野和宏／梅津義孝／中村和彦／●七里圭／監督／脚色／撮影／出演／桃井マキ／●TMC（71分）11月21日リリース

ゲイザー ディレクターズ・カット版

98年（TM）●監督／清水厚、上野勝仁 原作／七月鏡一 脚色／神尾亮、羽原大介 出演／吹石一恵、須藤温子 ●マグザム（128分）11月6日リリース

今年の8月から9月にかけて放映された美少女ホラーが、128分のディレクターズ・カットとしてリミックスされた作品。連続殺人犯に両親を殺された女子高生・萌。だが、その事件をきっかけに彼女の隠蔽された過去の秘密が明らかに…。

HOSTILE ENVIRONMENT ネイビーストーム

98年（未公開）●監督／デイヴィッド・ブライアー 出演／ブリジット・ニールセン、マティアス・ヒューズ ●アートキャップ（89分）11月6日リリース

有毒廃棄物によって海が汚染された近未来。水の浄化システムを搭載した戦艦を牛耳る女支配者と、反乱軍の戦いを描くアクション。主演には、久々の登場ながら相変わらず強い女を演じて魅力たっぷりのB・ニールセン。

BLACK JACK ブラックジャック

98年（TM）●監督／ジョン・ウー 出演／ドルフ・ラングレン、ケイト・バーノン、フィリップ・マッケンジー ●アミューズビデオ（113分）11月10日リリース

今やハリウッド・アクション映画監督として活躍するJ・ウーが演出を手がけたテレビ・フィーチャーの最新作。元連邦捜査官のシークレット・サービス、ジャックは、サイコ殺人鬼に狙われているスーパーモデルの警護に就くが…。

A BREED APART ダブル・リアクション

97年（未公開）●監督／H・ゴードン・ブース 出演／アンドリー・マッカーシー、ロバート・パトリック ●ポリグラム（98分）11月18日リリース

武装兵士によって政府要人が暗殺された。FBI捜査官ベンは、殺し屋・レオの協力を得て、人間兵器を製造する謎の組織壊滅に挑むが…。甘いマスク健在のA・マッカーシーとR・パトリック主演による本格アクション。

のを止めて水爆を愛するようになったか」（W）「バッドボーイズ」（W）「フィラデルフィア」（W、DD）「プリティ・リーグ」（W、DD）「ベイビー・トーク」（W、DD）「ベスト・フレンズ・ウェディング」（W、DD）「マキシマム・リスク」（W、DD）「マンハッタン・ラブソディ」（W、DD）「めぐり逢えたら」（W、DD）「ラスト・アクション・ヒーロー」（DD）「ラリー・フリント」（W、DD）「ルームメイト」（W、DD）「レジェンド・オブ・フォール」（W、DD）「レナードの朝」（W、DD）「若草物語（ジリアン・アームストロング監督版）」（W、DD）「ワン・モア・タイム」（W、DD）

●東芝EMI

10/25「スカーレット・レター」（W、DD）「リトル・ブッグ」（W、DD）

●日本コロムビア

10/21「背徳小説 ノーカット完全版」「背徳小説 第2章／完全版」

●パイオニアLDC

11/25「カリートの道」（W、DD）「サイコ」（W、DD）「7月4日に生まれて」（W）「スティング」（DD）「スニーカーズ」（W、DD）「ブラバー」（W、DD）「めまい」（W、DD）「Uターン」（W、DD）

●ビームエンタテインメント

10/25「アンドレイ・ルブリョフ」（W）「汚れなき悪戯」「真珠湾攻撃」「バルスーズ」「火の馬」「ピロスマニ」「道」「雪の女王」

●ポニーキャニオン

10/21「愛の選択」（DD）「イン・ザ・ネイビー（替望鏡を上げろ）」（DD）「死の標的」（DD）「スピード2」（DD）「ライジング・サン」（DD）「ラピッド・ファイアー」（DD）

Digitized by Google

アニメーション&吹替版

●米田由美

BEAUTY AND THE BEAST:THE ENCHAINED CHRISTMAS　美女と野獣　ベルの素敵なプレゼント

97年●監督／アンディ・ナイト　声／ベイジ・オハラ●ブエナ　ビスタ（71分）11月13日リリース　3600円（二カ国語版、吹替版もあり）

王子とベルが暮らす城で、ポット夫人が前年のクリスマスについて語り出す。それはまだ王子が呪われた野獣だったときのこと。城の仲間たちと仲良くなったベルは、野獣を励ましそうとクリスマスの準備を始める。だが、パイプオルガンと化した宮廷音楽家のフォルテがその計画を阻止しようとしていた。音楽によって主人を慰めるという役割を奪われたくないフォルテは、ベルを罠にかけ、野獣の心に怒りの火を灯してしまう。こうして野獣は再び心を閉ざしてしまうのだった…。

呪われた城に囚われの身となったベル。やがて冬が過ぎ野獣の呪いは解けるが、その間にクリスマスがあった。もしかしたら、こんなエピソードがあったのかも…という着想によるオリジナルストーリーだ。これまでにも『アラジン』『ライオン・キング』などシリーズ化されたものは多いが、続編という形でないのが興味深い。お馴染みのキャラクターに加え（米国のボイスキャストがオリジナルメンバーなのも嬉しい）、陰気な悪役フォルテ（オールCGによるキャラクター）に宝飾係アンジェリークといった魅力的な新キャラも登場。さらにレイチェル・ポートマン作曲による新曲や、ロバータ・フラックによる歌声も魅力だ。ビデオ再発売リクエスト1位に輝く名作の世界を、もう1度堪能してみよう。

カッタ君物語

95年●監督・脚本／吉田憲二　声／佐藤智恵、林勇、西村知美、大滝秀治、掛川裕彦●東映ビデオ（75分）11月13日レンタルリリース

山口県宇部市。ここには人工孵化によって誕生し、人の手で育てられたペリカンのカッタ君がいた。人間が大好きなカッタ君は、特に動物好きの翔君と大の仲良し。やがてカッタ君は翔君といっしょに幼稚園に通うことになり、一躍みんなの人気者になるのだった。そんなカッタ君と翔君の前に、意外な障壁が現れて…。

どこかで聞いたような話だと思われるかもしれない。そのとおり、これはニュースを始め、感動映像のスペシャル番組などでも取り上げられて、日本中に知られたペリカンの実話。このエピソードを募金によってアニメ化したという、貴重な作品なのである。すでに、ゆうばり国際冒険ファンタスティック映画祭で上映されたのでご存じの人も多いだろうが、教育的にも価値があるのでぜひチェックを。

マシンガーZ　メモリアル

72年～●原作／永井豪とダイナミックプロ　監督／芹川有吾、他　声／石丸博也、松島みのり●東映ビデオ（80分）11月21日リリース　3800円

永井豪原作による巨大ロボットアニメの金字塔的作品。放映から26年が経過したが、その世界を愛し続けている人は多い。マジンガーZ誕生秘話や機械獣たちとの名勝負など、47話を一気に再構成したメモリアルビデオに仕上がった。

serial experiments lain lif.02

98年●監督／中村隆太郎　脚本／小中千昭　声／清水香里、大林隆、五十嵐麗●パイオニアLDC（75）発売中　6800円（LD同発）

自殺した同級生からEメールを受け取った少女・鈴音（レイン）が不可思議な出来事に巻き込まれていくサイコアニメ。1巻発売時に紹介できなかったが、実験的映像の応酬など、見どころの多い注目作である。ゲームソフトと同時展開中。

CATS DON'T DANCE　キャッツ・ドント・ダンス

96年●監督／マーク・ディンダル　声／スコット・バクラ●WHV（75分）11月20日リリース　2480円（二カ国語版、吹替版もあり）

ジーン・ケリーに捧げるとして製作されたミュージカルアニメ、待望のビデオ化だ。スターを夢見てハリウッドにやってきた子ネコが、成功をつかむまでを歌と踊りで描き上げる。N・コールの歌、映画界の舞台裏の描写など、楽しさ満点。

STAR TREK　宇宙大作戦　完全版

66年●監督／ジェード・オズワルド、他　声／ウィリアム・シャトナー（矢島正明）●CIC・ビクター（各101分）発売中　各2900円

往年のSFシリーズ「スター・トレック」の第1シーズンを、日本放映時のオリジナル吹き替えで贈るファン必携版。クラシカルな味わいが漂うビジュアルや、名優が揃った吹き替えなど、魅力が満載。既発の6本に続く注目の6タイトルだ。

※本ページの価格表示は全て税抜です

Digitized by Google

ヴォイス大百科 弓家保則

—第十七回—

内海賢二［後編］

まず形からでも何かしようじゃないか

前回からのゲストは、内海賢二さん。九州から上京し、洋画の吹替を始め、その中で出会ったのがスティーヴ・マックイーン。吹替を演じる役者さんから見たマックイーンについて、もう少しお話を聞いてみた。

「マックイーンの声自体にはあまり特長がないので、彼の持っている雰囲気を出そう、と努力しました。僕は、大声で怒鳴るような役の方が得意だったので、彼みたく、感情をあまり出さず、クールにしゃべる、というのは、けっこう難しかったですね。ただ、何本かやっていくうちに、段々わかってくるんです。彼は、意外と芝居をしているようで、してない。ところが、オートバイや馬に乗ったりすると、動きがとてもカッコいい人です。だから、こちらの方がオーバーに表現すると、画面と合わないことがあるんです。『タワーリング・インフェルノ』でも抑えた芝居をしている。2枚目なんだけど、単純に奇麗な2枚目の声では合わないんです。マックイーンの芝居で一番好きなのは『パピヨン』です。あの時は本当に『すごい役者だな』と思いました。そんな苦労をして作り上げていったマックイーンだけど『アラレちゃん』の千兵衛さんやった後は、誰も僕をマックイーンとは言ってくれなくなってしまいましたね（笑）」

「パピヨン」

マックイーンを演じる一方で、ビリー・ディ・ウィリアムスやミスター・Tといった役者も数多く演じている。

「声の質や響きが多少黒人に似ているのかな。昔は黒人を演じる時、酒を飲んで、煙草を吸って、ガラガラ声にしてスタジオに入ったりしていました（笑）。特に『ルーツ』のチキン・ジョージ役は、印象に残っています。少年時代から60代まで演じたので、すっかり役にのめりこんで、最後は泣きながら演じていました。そこまでのめりこんで演じられる作品もなかなかないですね。ただ、吹替は、のめりこんでいくことがいいのか、悪いのか、ということがありますね。僕の場合、どちらかというと、役を自分に引っ張りこんでやる。その役を自分に引っ張りこんで、自分なりに消化して、内海賢二がやっている○○というやり方です。だから、西部劇であれば、西部劇のような格好でスタジオに行き、ギャングを演じる時は、スーツを着て行く。まず、形からでも何かしようじゃないか、ということですね」

実は、内海さん、映画の予告篇もかなり手掛けられている。映画館で、その名調子に魅せられて、映画を見に行った方も大勢いるのではないだろうか。

「予告篇というのは、その作品の一番いいところを見せるわけですから、それに合わせたナレーションというのは難しい。難しいと言えば、キューブリック監督の『フルメタル・ジャケット』の予告篇をやった時は大変でした。まず、仮で日本語のナレーションを録るんです。それを向こうに送って、監督が聞いて、OKとなると、もう一度日本で録り直す。監督自身は、日本語の意味はわかんないんだけど、ニュアンスで聞くんでしょうね。普通は、助監督がやるんだけど、キューブリック監督は、それだけこだわる方なんですね」

現在、東京・新宿のシアターサンモールで舞台をやっている真最中の内海さんだが、役者の楽しみについてうかがってみた。

「舞台も年に2本ぐらいはやりたいですね。役者の楽しみは、自分の人生以外の人生を経験できること。それは、どんなジャンルでも同じことで、そこから自分の生き方が変わっていくこともあるんです。僕はすぐに影響されてしまう方ですね（笑）」

うつみ・けんじ　1937年8月26日、福岡県生まれ。九州NHK放送劇団を経て、未来劇場に入団。その後、昭和59年に"賢プロダクション"を設立。吹替の主な出演作は「荒野の七人」「タワーリング・インフェルノ」「パピヨン」（スティーヴ・マックイーン）「大いなる眠り」「三銃士」（オリヴァー・リード）等。その他の出演作は『狼少年ケン』『Dr.スランプ　アラレちゃん』（アニメ）『今夜は好奇心』『目撃！　ドキュン』（ナレーション）等がある。また、新宿・シアターサンモールにて舞台『煙が目にしみる』に出演中（11月4日～11月15日）。

Digitized by Google

その場所に映画ありて

田中眞澄

39 不適切な関係をめぐって

（前回、黒澤明の死に反応するため、順序が狂ってしまった。今回は時間をしばらく前へ戻す。）

八月の半ば過ぎ、久しぶりで札幌の古本屋を十数軒巡り歩いた。それでも市内にある店の何分の一か。

古本屋歩きは楽しい。その時々の興味の赴くまま、ジャンルを問わず、廉価な雑本を買って読む。それが古本屋歩きの醍醐味である。結果を求めるよりは、行きあたりばったりの出会いこそが、精神の運動を刺戟してくれる。

札幌駅前から南下する通り、薄野の手前あたりの成美堂は、一階が新刊、二階が古書部になっている。その二階に上がってみたら、左右に二等分されていて、古書の売場が半分になっていた。もう半分はというと、《植草甚一ワンダー・ランド》なる展示スペース。年譜、写真、生原稿（晩年のもの）、著名人からの書簡類（江戸川乱歩、飯島正、淀川長治、谷口千吉、羽仁進・左幸子、五木寛之、井上ひさし等々）などのショーケースやパネル。奥に再現のつもりかベッドがしつらえられ、蔵書のほんの一部が飾られている。

小さいながらもJ・Jおじさん記念室といった趣で、大の古本蒐集家、アメリカ雑本狂だった故人を偲ぶ場が、古本屋に常設されたのは、適切な措置に思えた。

しかし、純然たる東京っ子だった植草甚一を記念するのに、なぜ東京でなく札幌なのか。おそらく店主が親しかったのか、熱狂的な植草ファンだったのか、などと想像して店員にいきさつを訊ねてみた。すると意外なことに、生前の関係も個人的な思い入れも何もなく、ただ二年前、開店六〇周年記念に、他から勧められて作ったとのこと。これではとても適切な関係とはいいかねる。

そういえば、このごろは当人とあまり縁がなさそうなところで、記念館などが企画される例がある。山中湖畔の三島由紀夫。佐賀の黒澤明また然りではないか。〝不適切な関係〟はホワイトハウスばかりではないらしい。

札幌から隣りの小樽に足を伸ばす。戦後、北の領土との交通を失って発展から取残された小樽の町には、明治以来の建造物が今も多く、近年のレトロ・ブームで観光地として復活した。しかし、小樽運河あたりの観光客の賑わいが消える夜間ともなると、〝幽鬼の街〟に変貌しそうな気配を秘めている。

ここの観光名所の一つ、石原裕次郎記念館に行ってみた。小樽と裕次郎はそんなに縁が深いのだろうか。確かに彼は幼年期の数年間をこの地で過ごした。だが、その後は湘南の逗子で成長した。彼には湘南の海がよく似合う。やはりそちらの方が記念の場所としてはより適切に思えるのだが。小樽も港町だが、太陽族には寒すぎよう。記念館も町外れの埠頭に近く、やや孤立した印象がある。この埠頭から、その昔、のちに伊丹万作と名乗る池内義豊が樺太に渡ったのか。とにかく小樽と裕次郎——適切なのか不適切なのか。

記念館の展示は、映画・TVスターの彼、歌手としての彼、私生活という順に巡って、三、四〇分で排出される仕組み。裕次郎マニアには楽しいだろうし、単なる観光なら話のタネにはなるだろう。中学時代の通信簿や高校時代に描いたペン画があるかと思えば、愛車のベンツ300SLやロールスロイスが鎮座して度肝を抜く。一九七八年の運転免許証もあり。「俺は待ってるぜ」主題歌の最初のレコードがSP盤という時代である。

しかし、映画ファンとしては少々物足りない。「黒部の太陽」の坑内セット再現とか、「栄光の5000キロ」で使った車とかはあったが、ポスターは本物が一枚もなく全部スライドだし、台本も一冊ぐらいはあっていい。彼を撮影した芸能ニュースの類は数多くあったのだから、そういうものが見たいと思う。

何しろここでは裕次郎の映画は見られない。映像ホールがあるのだが座席がない。背もたれが並んでいて、ヒット・メロディに各場面を重ねた七分程のヴィデオ上映を立見するだけ。映画など上映したら、お客がスムースに回転しないということか。ここでたまに裕次郎映画が上映されてこそ、記念館にふさわしい、適切なあり方だろうに。

小樽はやはり石原裕次郎よりは、小林多喜二と伊藤整の町である。小樽文学館で《伊藤整の『日本文壇史』展》を開催していて、充実した内容に感心した。予告によれば、次回は《鋼の画人——小林正樹展》（一一月一日まで）。なるほど小林正樹は小樽生まれ。これこそ適切な企画といいたい。東京からそうたびたびは行けないので、せめて観覧者の報告を期待したい。

因みに、小樽では古本屋は三軒回った。

石原裕次郎記念館を見たその晩には帰京して、翌日は府中の森芸術劇場の「チェリビダッケの庭」（九六）に出かけた。クラシック音楽ファンには見逃せない、巨匠の息子イオアン・チェリビダッキ初監督のドキュメンタリー。でも、この音楽映画の配給が、どうしてキネマ句報社なんだろう。

Digitized by Google

日本映画紹介

製作会社　配給会社　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ／EK＝コダック／A＝アグファ）BU＝ブローアップ　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ　EV＝ヨーロピアンヴィスタ　CS＝シネマスコープ　D＝ドルビー／DSR＝ドルビーSR　上映時間　フィルムメートル数　映倫審査（青少年映画審議会推薦　R指定／成人指定）封切代表館　M＝モーニングショー／L＝レイトショー

愚か者／傷だらけの天使■しあわせになろうね■BEAT■岸和田少年愚連隊・望郷

愚か者 傷だらけの天使

吉本興業＝丸紅作品（製作協力＊セディックインターナショナル＝КИНО）／東京テアトル＝CAMARADE 配給　98・6・27　C（EK）・V　91分　シネ・ヴィヴァン六本木

［STAFF］監督＝阪本順治　製作＝木村政雄／古里靖彦　企画＝中沢敏明　企画協力＝平田道弘／清水敬之　プロデューサー＝椎井友紀子　応援製作＝黛威久／田島啓次　製作担当＝鈴木勇　脚本＝阪本順治／田村竜　撮影＝笠松則通　応援撮影＝田沢美夫　照明＝市川元一　応援照明＝小林敦　編集＝深野俊英　録音＝志満順一　美術＝原田満生　装飾＝田口貴久　衣裳＝宮本まさ江　音楽＝井上堯之　音楽補＝長谷川雅大　スクリプター＝川野恵美　スチール＝佐藤ヒデキ　応援スチール＝浜田孝一　音響効果＝佐々木英世　助監督＝堀口正樹／高橋正弥／中村有孝　主題歌＝井上堯之「愚かだね」

［CAST］石井久…真木蔵人　桝井勝…鈴木一真　桝井ちか子…大楠道代　DJマキ…坂上みき　桝井達雄…大杉漣　木田満…豊川悦司　大家…二宮さよ子　寿司職人…飯田まさと　チンピラ…和泉義晴　子供…孝太郎　昇ちゃん…田村泰二郎　育子…山村美智子　育子の夫…泉谷勇　責任者…中沢青六　上司…さとうこうじ　先輩…加納勝正　郵便局員…川屋せっちん　勘太郎…山岡一　赤ら顔のオッチャン…井上堯之　カナ子…小林麻子　カナ子の男…門脇学　雨宮…有福正志　パートのオバチャン…根岸清子／林京子　保安士…石垣光代　店員…三浦景虎　木下…朝倉杉男　木下の妻…阿部朋子　警官…田中要次　管理責任者…よこやまよしひろ　刑事…大槻修治　久の父…太田洋一郎　久の母…山野よしえ　女性スタッフ…伊藤博子　段ボール住人…佐野栄一　ミック（善二郎）…Mick Esakado

［解説］世間では通用しない愚かな若者二人の姿を人情味豊に描いたコメディで、昨年公開された「傷だらけの天使」の主人公・満と久が出会う以前の物語。監督は「傷だらけの天使」の阪本順治。脚本は田村竜と阪本監督の共同。撮影を「傷だらけの天使」の笠松則通が担当している。主演は「Dolphin Through」の真木蔵人と「女刑事RIKO　聖母の深き淵」の鈴木一真。

［略筋］〝人がいい〟ことだけが取り柄の青年・石井久は、東京・西新宿のオンボロアパートに独り暮らしをしている。写真家を夢見て九州から上京し専門学校にも通ったのだが続かず、ビルのガラス・クリーニングの仕事も同僚との喧嘩が原因でクビになってしまった。収入が途絶えた彼は、ある日、万引きの常習犯の主婦・桝井ちか子に行方不明の息子・勝を探して欲しいと頼まれる。人探しなどしたことのない久はその申し出を一度は断るが、背に腹は代えられぬとばかり仕事を引き受けることにした。しかし、勝の手がかりは彼が幼い頃にハーモニカで吹いていた「港」という曲だけ。半分やけくそでFMラジオのDJ・マキに曲をリクエストしてみるも、消息がつかめる筈もない。ところが久が勝探しを諦めかけた時、勝の方から久の前に姿を現したのである。久は勝に家へ帰るように忠告するが、逆に勝に報酬の前金をナイフで脅して巻き上げられてしまう。その上、勝は家には帰らずに久につきまとい始める始末。関わりたくないと思いながら、久はいつしか勝のペースに巻き込まれていく。そんなある日、彼はマキから不倫相手の男を殴ってきて欲しいという依頼を受ける。金の為に仕事を引き受ける久だったが、偶然現場に居合わせた警官に御用となって大騒ぎ。そこへ現れた勝が彼を助けてくれたものの、警官の銃を奪って逃げたことから更に騒ぎは大きくなってしまう。ふたりが向かったのは新潟の港。ロシアに渡って札幌ラーメンのチェーン店を開くことが夢だと語る勝は、そこからロシアへ渡るつもりなのだ。しかし、久の手錠を車のホイールで切断中、ジャッキが外れて勝は大怪我を負ってしまう。結局いつになってもロシア船は来ず、久は怪我をした勝を連れて東京へ戻ることになる。だが、東京で彼らを待ち受けていたのは、張り込み中の警察だった。ちか子に勝を引き渡そうと連絡をとった久は、その直前に警官たちに逮捕されてしまう。それから数日後、釈放されてアパートに帰ってきた久は運転代行の仕事に就き、心機一転真面目な生活をスタートさせようとしていた。ところが、怪しげな男・満に車をめちゃめちゃにされ、またもクビの危機にさらされてしまう。そして、これが久と満の出会いであった。

Digitized by Google

しあわせになろうね

ケイエスエス作品（制作協力＊シネマハウト）／ケイエスエス配給　98・9・12
C（F）・V　115分　シャンゼリゼ
［STAFF］監督／脚本＝村橋明郎　製作＝仁平幸男　企画＝石田幸一／佐々木啓　プロデューサー＝廣瀬雄／野津修平　プロデューサー補＝八木欣也　制作担当＝矢島進　撮影＝栢野直樹　照明＝上田なりゆき　編集＝菅野善雄　録音＝堀内戦治　美術＝藤原慎二　衣裳＝各務康子　音楽プロデューサー＝須藤晃／橋いづみ　スクリプター＝甲斐哲子　スチール＝桜井和昭　効果＝帆苅幸雄　助監督＝森宏治　主題歌＝橋いづみ「しあわせ」
［CAST］山室正弥…渡瀬恒彦　木内真太郎…風間杜夫　深沢恭平…哀川翔　山室りえ…有森也実　大滝善造…六平直政　横山寛明…天宮良　福島千賀子…真田麻垂美　宮島勇太…中西良太　道岡敬司…大久保貴光　平塚六郎…伊武雅刀　武山宗太朗…鈴木清順　元井誠…山田辰夫　菊池夏子…児島美ゆき　小川恵子…朝岡実嶺　高田良平…伊藤大輝　山崎桃子…松下安里　里中裕子…大島蓉子　スナックの美女…小沢美貴　マサ…奥田智彦　ケン…水木英昭　カズヤ…関野昌敏　ツネ…宮下学　オサム…根本ヒロナリ　ヒロシの声…高城剛　レポーター…高村智庸

［解説］解散を翌日に控えた、あるヤクザの事務所で巻き起こる24時間の騒動を描いたコメディ。監督・脚本は「CAB」の村橋明郎。撮影を「ズッコケ三人組　怪盗X物語」の栢野直樹が担当している。出演は、「鉄と鉛」の渡瀬恒彦、「SF　サムライ・フィクション」の風間杜夫ら。

［略筋］解散式を翌日に控えた山室組の事務所。組長の山室を初め、最後まで残った5人の組員は新しい人生に向けてそれぞれに準備を整えていた。結婚して寿司職人になる恭平、やくざを続けていくという大滝と宮島と道岡、田舎に帰って母親孝行をするつもりの木内、そして組長は愛妻のりえと悠々自適な生活を夢見ている。みんな、それぞれに幸せになるつもりだった。ところが、偶然つけたテレビから敵対する笹島組組長が何者かに殺害されたというニュースが流れたことから事態は一変する。解散には笹島組との和解が条件なのだ。笹島組長が死んだとなれば、解散は無効になってしまう。しかも、若い組員のヒロシから「男になる」という謎めいた電話がかかってくる始末。もし、ヒロシが笹島組長を殺ったのなら解散はおろか、抗争になってしまうだろう。せっかくヤクザを辞めて堅気になるつもりでいた組長は、笹島組との仲裁人である武山総長に相談を持ちかける。すると武山総長は、山室組長の首か一億の現金を明日の朝までに用意しろと言ってきたのである。解散を目前に控えまさか首なんか出せない、かと言って不景気の折から一億もの大金なんてそう簡単に出せる筈もない。そうこう山室が悩むうちに、刑期を終えて出所してきた横山が事務所に戻ってきた。血の気の多い彼は、幹部の大滝と共に笹島組と闘うことを提案する。やはり抗争を覚悟しなければならないのか。しかし、今の事務所には武器などひとつもありゃしない。マルボーの刑事・平塚やら暴力団追放運動が次々に押しかけてきて組の方針が決まらないまま、夜を迎える山室組。タイムリミットは迫る一方だ。そこへ、武山組長から条件の変更を伝える電話が入る。新しい条件は、幹部一人の首と三千万の現金だった。ホッと胸を撫で下ろす山室。そして、木内が覚悟を決めた…。だがその時、笹島組が総攻撃をしかけてきたのである。次々に撃ち込まれてくる銃弾。しかし、笹島組の組員は全員、その機会を狙っていたとしか思えない警察に逮捕されてしまうのであった。どうやら、今回の騒動は武山総長と平塚が仕組んだ笹島組撲滅計画だったらしい。翌日、無事解散式を迎えられた山室組のメンバーは、それぞれの幸せを求めて第二の人生を歩み始める。

BEAT

PeacH作品／松竹配給　98・9・15
C（F）・V・DSR　101分　丸の内松竹
［STAFF］監督／脚本＝宮本亜門　プロデューサー＝河井真也／一瀬隆重　アソシエイト・プロデューサー＝石原真　オメガアシスタント・プロデューサー＝陶山明美　PeacHアシスタント・プロデューサー＝久保田修／春名慶　製作担当＝久家量　ストーリー協力＝又吉栄喜　脚本協力＝天願大介／真喜屋力／銀木久美子／Vem F. Dietsche／Kayoko K. Dietsche　シネマトグラファー＝長谷川元吉　水中撮影＝長田義夫　ライティング・デザイナー＝森谷清彦　編集＝阿部浩英　録音＝柿澤潔　プロダクション・デザイナー＝都築雄二　アート・ディレクター＝いしいわお　装飾＝小池直実　コスチューム・デザイナー＝前田文子　衣裳＝江橋綾子　スタイリスト＝日下部慶子　音楽＝中村通宏　音楽ディレクター＝梅田典克　音楽プロデューサー＝有福千春　音楽スーパーバイザー＝吉田関人　音楽コーディネーター＝鈴木雄一　スクリプター＝西岡容子　スチール＝竹内健一　特撮監督＝佛田洋　撮影効果＝奥田悟　特殊撮影＝高橋政千／中根伸治／鈴木敬造　特殊照明＝林方谷／米澤滋高　特殊効果＝鈴木昶／中山亨　デジタルエフェクト・スーパーバイザー＝尾上克郎　サウンドエフェクト＝柴崎憲治　特殊美術＝上松盛明／竹内俊介／松浦芳／高木友善　助監督＝足立公良　主題歌＝tohko「It's all about us」
［CAST］タケシ…真木蔵人　ミチ…内田有紀　少年…平田直人　ライアン…Dean Stapleton　マリア…本村ジュディ　カズオ…永澤俊矢　リー…川原亜矢子　ママ…松永てるほ　京子…喜舎場泉久子…新納凉子　サンダース…Steve Maddux　グラント…Carrie Harris　ジョー…Mark Bunnell　三絃爺さん…嘉手苅林昌　奈美…星川なぎね　タマエ…加藤めぐみ　会長…玉城満　子分…玉寄長政　チンピラ…玉城幸二／玉城栄二　占い女…兼嶋麗子　トンネルの男…平良進　老婆…平良とみ　アンマー…山本彩香　向かいのバーのママ…金城葉子　その隣のバーのママ…玉城乃野　おかま…

Digitized by Google

たぼ美　シェーカー…川満聡　新人ホステス…泰川修衣

［解説］米軍統治下になった60年代の沖縄を舞台に、エネルギッシュに生きる一組の男女の恋愛模様を描いたドラマ。監督は、国内のみならず海外でも著名な舞台演出家で、本篇はこれが初演出となる宮本亜門。脚本も宮本自身が執筆。撮影を「激しい季節」の長谷川元吉が担当している。主演は、「愚か者　傷だらけの天使」の真木蔵人と「CATS　EYE」の内田有紀。

［略筋］米軍統治下におかれていた、60年代のOKINAWA。いつの間にかこの地に暮らすようになっていたタケシは、かつての恋人・ミチの勤める米兵相手のバー・SEKAIでバーテンダー兼用心棒として働いていた。ミチは、黒人兵士にレイプされた過去を持ち、その時はらんだマリアという混血児を出産。そして今、未婚の母となった彼女は、逃げ出したタケシの代わりにマリアの父親になってくれる黒人の男を探している。ある夜、灯火管制訓練を照明弾を打ち上げて邪魔したタケシは、空から落ちてきた少年と出会う。タケシを兄のように慕い、彼の後ろをついてまわる少年には、ゴキブリを退散させるという不思議な力が備わっていた。その力で金儲けに成功したタケシは、いつしかミチとよりを戻すようになり、少年とマリアの4人で暮らすようになる。やがて、ベトナム戦争が激化すると共に、OKINAWAも大きく揺れ始めた。SEKAIは本国から送り込まれてくる兵士たちのお陰で毎晩のように大賑わい。タケシとミチは大金を摑み、明るい未来を夢見るようになっていた。ところが、ミチに想いを寄せる米兵でタケシの親友・ライアンが、ミチの気持ちを無理矢理惹こうとマリアを誘拐したのである。マリアを取り戻すべく、ライアンの後を追うタケシであったが、彼の目の前でマリアはライアンに傷つけられてしまうのだった。マリアを助けられなかったことで深く傷ついたタケシは、その日を境にミチたちの前から姿を消し、OKINAWAから逃げ出すことを考えるようになる。そして、時の首相・佐藤総理大臣が訪沖した日、遂に彼はOKINAWAと別れを告げようとする。そんなタケシに再会したミチは、彼が再び自分の前から逃げ出すのを責めた。「幸せよね、いつも逃げられる人は。でもね、自分からは逃げられないよ！」だが、そんな言葉を浴びながらもタケシはミチとは違う道を歩き出そうとする。その時、少年とマリアが打ち上げた照明弾が夜空を彩った。それぞれ違う場所で同じ光景を見上げるタケシとミチ。彼らの目には、同じ未来が映っていた…。

岸和田少年愚連隊 望郷

吉本興業＝丸紅＝松竹作品（製作協力＊セディックインターナショナル＝M.M.I.）／松竹配給　98・9・26　C（EK）・V　92分　松竹セントラル2

［STAFF］監督＝三池崇史　製作＝木村政雄／古里靖彦／中川滋弘　企画＝中澤敏明　企画協力＝平田道弘／清水敬之　プロデューサー＝室岡信明　原作／中場利一　脚色＝NAKA雅MURA　撮影＝山本英夫　照明＝豊見山明長　編集＝島村泰司　録音＝小原善哉　美術＝石毛朗　衣裳＝磯井篤郎　音楽＝遠藤浩二　音楽プロデューサー＝十川夏樹　スチール田部井満　音響効果＝柴崎憲治　助監督＝加藤文明

［CAST］中場リイチ…長田融季　中場俊夫…竹中直人　中場江美子…鳥丸せつこ　伊藤先生…高岡早紀　中場三好…笑福亭松之助　小鉄…今井一輝　ガス…小野浩史　定…安田義紀　中村…清水あきひろ　アケミ…栗原早記　雷天のオッサン…山之内幸夫　中場好一…シーザー武志　港の男…中場利一

［解説］60年から70年へ変わろうとする激動の時代を背景に、大阪・岸和田に暮らすごんたくれ親子の日常を、ノスタルジックに描き出したコメディ。監督は「BLUES　HARP」の三池崇史。中場利一による原作を、「中国の鳥人」のNAKA雅MURAが脚色。撮影を「BLUES　HARP」の山本英夫が担当している。主演は、新人の長田融季と「ANDROMEDIA」の竹中直人。

［略筋］1957年、東の果て・岸和田にひとりの赤ん坊が生まれた。名前は中場リイチ。ごんたくれのお父んが麻雀でリーチをかけた時につけた名だ。そんなリイチが小学校6年生になった1969年は、アポロが月面に着陸するなど、まさに激動の時代だった。そして、リイチもまた時代にとり残されたような町でケンカや悪さに明け暮れる激動の少年時代を送っていた。頭の中はいつも男と女のモジャモジャのことで一杯、酒を飲んでは授業中に吐き、急遽家庭本文にやってきた美人の伊藤先生の前では平気で親子喧嘩を始める始末。ある日、ストリッパーのアケミを連れて酔って帰ってきたお父んに愛想を尽かしたお母んが家を出ていってしまった。平然としているお父んとお祖父んに、リイチも家を飛び出して伊藤先生のアパートへ押しかける。ところが、彼はそこで先生が恋人のことで悩んでいる姿を見て、立派な男になることを決意すると、悪友の小鉄とガスと3人で四国の足摺岬へ修行の旅に出るのだった。しかし、あまりの遠さにあっさり断念。家出していた筈のお母んに迎えに来てもらうことになってしまう。何かでかいことをしなければいけない。リイチは、川でクレヨンを探す小鉄のボケた祖母の為に夏休みの工作を始めた。一等の金賞にはクレヨンが授与されるのだ。宿敵・定を丸め込み、大きなアポロの模型を完成させたリイチたちは、見事金賞を勝ち取る。しかし、商品のクレヨンを渡そうとした時、祖母は既に亡くなってしまった後だった。年が明けて1970年、リイチが脅迫したお陰で（？）伊藤先生も恋人とうまくいっているようだ。そんな時、東京で学生運動に参加していたお父んがふらりと家に帰ってきた。しかしその後すぐ、またしてもお母んが家を出ていってしまう。「男と女のモジャモジャはまっこと分からない。何度同じことを繰り返すのだろうか」そんなリイチも、やがてチューボーとなった。何も変わらないようで、リイチも岸和田も何かが確実に変わりつつあった……。

Digitized by Google

9月の公開作品（日本映画）封切り表

（注）封切日は東京中心。＊＝地方のみ公開作品　P＝プロデューサー　EP＝エグゼクティブ・プロデューサー　CP＝チーフプロデューサー

封切日	題名（配給会社）	製作所	脚本（脚色）	監督（監修）	出演	上映時間	紹介	批評	グラビア
9.5	**SPRIGGAN**（東宝）	小学館＝バンダイビジュアル＝TBS＝東宝＝STUDIO4℃	（川崎博嗣）（伊藤東洋）［構成 大友克洋］	川崎博嗣［総監督 大友克洋 演出 須藤典彦 キャラクターデザイン 江口寿志 作画監督 江口寿志 熊谷哲矢 松田勝己 清水保行 遠藤正明］	（アニメーション）森久保祥太郎・相ケ瀬睦史 城山　聖・子安　武人	90	1269	1263（特）	1263
9.12	**あぶない刑事フォーエヴァー THE MOVIE**（東映）	「あぶない刑事」製作委員会	柏原　寛司 大川　俊道	成田　裕介	舘　ひろし・柴田　恭兵 浅野　温子・加藤　雅也	105			1266
9.12	**しあわせになろうね**（ケイエスエス）	ケイエスエス	村橋　明郎	村橋　明郎	渡瀬　恒彦・風間　杜夫 長川　翔・有森　也実	115	1271		1266
9.12	**フリージア 極道の墓場**（大映）	大映	（TAKE）（加藤祐司）	渡辺　武	三浦　友和・萩原　聖 初瀬かおる・奥田　智彦	106			1265
9.15	**BEAT**（松竹）	PeacH	宮本　亜門［ストーリー協力 又吉栄喜］	宮本　亜門	真木　蔵人・内田　有紀 Dean Stapleton 平田　直人	101	1271		1266
9.19	**Heavenz**（ぺんてんムービー）	映画「Heavenz」製作委員会	井出　良英［脚本協力 アイヤマ・ノイス］	井出　良英	山下　徹大・関谷　理香 東儀　秀樹・つぐみ	86	1269		1266
9.26	**犬、走る DOG RACE**（シネカノン）	東映ビデオ	瀧　洋一 郷　義信	瀧　洋一	岸谷　五朗・大杉　漣 香川　照之・高樹　真	110			1265
9.26	**怯える**（映画技術美学講座）	映画技術美学講座	古澤　健	古澤　健	鈴木　卓爾・長門かおり 太田ゆき江・高橋　洋	34		1267（ク）	1267
9.26	**はるのそら**（映画技術美学講座）	映画技術美学講座	松本　知恵	松本　知恵	水高　ニキ・鹿角　優邦 川崎　桜・平岡　直子	38		1267（ク）	1267
9.28	**岸和田少年愚連隊 望郷**（松竹）	吉本興業＝丸紅＝松竹	（NAKA雅MURA）	三池　崇史	竹中　直人・長田　融季 高岡　早紀・島丸せつこ	94	1271		1266
9.26	**大怪獣東京に現わる**（松竹）	吉本興業＝丸紅＝東急エージェンシー	NAKA雅MURA	宮坂　武志	横井かおり・本田博太郎 高松　英郎・角替　和枝	102			1266
9.26	**愛を乞うひと**（東宝）	東宝＝角川書店＝サンダンス・カンパニー	（郷　義信）	平山　秀幸	原田美枝子・野波　麻帆 國村　隼・中井　貴一	135		1267（特）	1266
9.26	**生きない**（日本ヘラルド映画＝オフィス北野）	バンダイビジュアル＝TBS＝TOKYO FM＝日本ヘラルド映画＝オフィス北野	ダンカン	清水　浩	ダンカン・大河内奈々子 尾美としのり・村野武範	100		1266（特）	1265
9.26	**銃爪**（ビジョンスギモト）	アーバンタイムス＝ビジョンスギモト	橋場　千晶	佐々木正人	清水宏次朗・萩原　流行 長島　壮造・松田　千奈	75			1266
9.26	**ベル＊エポック**（東宝）	フジテレビジョン	（松岡錠司）（福田卓郎）	松岡　錠司	石田ひかり・鷲尾いさ子 鈴木　京香・白鳥　靖代	129		1267（ク）1271	1267

（成人映画）

封切日	題名（配給会社）	製作所	脚本（脚色）	監督（監修）	出演	上映時間	紹介	批評	グラビア
9.5	**OL奴隷監禁 もらす**（大蔵映画）	関根プロダクション	片山　圭太	関根　和美	桜井　倫子・杉本まこと やまきよ・浅倉　輝	60			
9.5	**女子プロ志願 乳固め卍くずし**（大蔵映画）	国沢プロ	国沢　実 樫原　辰郎	国沢　実	七月もみじ・相沢　知美 原田なつみ・獣　治	60			
9.16	**性愚女 茂みのぬくもり**（大蔵映画）	セメント・マッチ	五代　暁子	池島ゆたか	工藤　翔子・篠原さゆり かわさきひろゆき・樹かず	60			
9.25	**ザ・痴漢教師2 脱がされた制服**（新東宝映画）		福俵　満	池島ゆたか	立川　みく・篠原さゆり 水原かなえ・杉本まこと				
9.25	**痴漢の指 背徳の美人秘書**（新東宝映画）		竹橋　民也	神野　太	里見瑤子・佐々木ユメカ 伊藤　まき・江端　英之				
9.28	**蛮いじり名器天国**（大蔵映画）		渡路　遥	渡邊　孔嗣	西藤　尚・竹村　祐貴 入保　新二・十日市秀悦	60			

＊毎月の「公開作品（日本映画）封切り表」は、今号のみ下旬号掲載となってしまいましたが、今後は毎月上旬号に上記のような書式で掲載致します。なお、その他のスタッフも含めた詳細な封切り表は、従来通り2月下旬決算号に掲載致します。

Digitized by Google

外国映画紹介

製作国＊製作会社　配給会社　製作年　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／CS＝シネスコ　D＝ドルビー・ステレオ　U＝ウルトラ・ステレオ　DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル　DTS＝デジタル・シアター・システム　SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド　SR＝スペクタクル・レコーディング　上映時間　EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー（製作総指揮）

ザ・グリード■シークレット　嵐の夜に■草原とボタン■ドレス
ノーウェア■ブギーナイツ■北京のふたり

ザ・グリード

DEEP RISING〔不可解な暴動〕

米＊ローレンス・マーク・プロダクション作品／東宝東和提供・配給　98＝98・10・17　C・S・D／DTS／SDDS　107分　字幕＝岡田芷平

〔STAFF〕監督・脚本＝Stephen Sommers　製作＝John Baldecchi／JLaurence Mark　製作総指揮＝Barry Bernardi　共同製作＝Howard Ellis　撮影＝Howard Atherton　音楽＝Jerry Goldsmith　美術＝Holger Gross　編集＝Bob Ducsay／John Wright　衣装＝Joseph A. Porro　クリーチャー・デザイン＝Rob Bottin　CG＝Dean Cundey　視覚効果＝Dream Quest Imagesod Industrial Light & Magic (ILM)

〔CAST〕John Finnegan…Treat Williams／Trillian St. James…Famke Janssen／Joey Pantucc…Kevin J. O'Connor／Leila…Una Damon／Simon Canton…Anthony Heald／The Captain…Derrick O'Connor／T-Ray Jones…Trevor Goddard／Vivo…Djimon Hounsou

【解説】海に浮かぶ豪華客船を舞台に、未知の巨大モンスターが大暴れする最新のデジタルSFXを駆使したパニックアクション。監督・脚本は『ハックフィンの冒険』（未）のスティーブン・ソマーズ。製作総指揮は「ハロウィン」のバリー・ベルナルディ。製作は「恋愛小説家」のローレンス・マークと「カットスロート・アイランド」のジョン・バルデッチ。クリーチャーデザインは「トータル・リコール」でアカデミー特殊視覚効果賞を獲得したロブ・ボッティン。視覚効果はアビス」のドリーム・クエスト・イメージズ社と「ディープインパクト」のインダストリアル・ライト・アンド・マジック社が担当している。撮影は「バッド・ボーイズ」のハワード・アサートン。音楽は「L.A.コンフィデンシャル」ほか多数の映画音楽を手がけてきた巨匠ジェリー・ゴールドスミス。出演は「プリンス・オブ・シティ」のトリート・ウィリアムズ、「ゴールデンアイ」のファムケ・ヤンセン、「アミスタッド」のケヴィン・J・オコーナー、「ストリート・ファイター」のウェス・ストゥディほか。

【略筋】3000人もの乗客を乗せた超豪華客船アルゴノーティカ号が南シナ海に処女航海に出ていた。オーナーのキャントン（アンソニー・ヒールド）が、着飾った乗客たちに挨拶をして回っている。女スリ、トリリアン（ファムケ・ヤンセン）は客船の金庫までたどり着くが、船長に捕まり食糧庫に監禁されてしまう。すると突然、船は何物かに衝突して強い衝撃がパーティー開場を直撃する。逃げ惑う客たちで船の上は修羅場と化す。時を同じくして、密輸船サイパン号が南シナ海を航行していた。船長のフィネガン（トリート・ウィリアムズ）は、傭兵たちを海図にない島まで届ける仕事を請け負っていた。無事、目的地に向うはずが、モーターボートと衝突してしまう。船が破壊される寸前に航行中のアルゴノーティカ号を発見、避難するが、客船内には不気味なほど人気がない。乗客で生き残っていたのは、オーナーのキャントンと客船の船長、女スリのトリリアンの3人だけ。巨大な怪物が襲ってきて皆殺しにされたという。実はアルゴノーティカ号は建造に巨額の費用がかかり、オーナーは破産寸前で、窮余の策として傭兵たちに客船を沈没させ、保険金をせしめ船の金庫を襲わせる計画だったのだ。だが、巨大怪物の出現で何もかもがメチャクチャになってしまった。怪物は何本にも枝分かれした触手で船内の狭い通路を猛スピードで突進し、船体を壊しながら1人、また1人と餌食にしていく。結局、船の爆破で怪物を倒し、危機一髪で脱出したフィネガンとトリリアン。ふたりは浜辺まで泳ぎ着き、キスをかわすのだった。

シークレット　嵐の夜に

A Thousand Acres〔広大な農場〕

米＊P・T・アンダーソン・ピクチャーズ作品（ニュー・ライン・シネマ提供）／ギャガ・コミュニケーション配給　97＝98・9・15　C・CS・DSD／SDDS　155分　字幕＝古田由紀子

〔STAFF〕監督＝Jocelyn Moorhouse　製作＝Marc Abraham／Steve Golin／Lynn Arost／Kate Guinzburg／Sigurjon Sighvatsson　EP＝Armyan Bernstein／Thomas A. Bliss　原作＝Jane Smiley　脚本＝Laura Jones　撮影＝Tak Fujimoto　音楽＝Richard Hartley　美術＝Dan Davis　編集＝Maryann Brandon　衣装＝Ruth Myers

〔CAST〕Rose Cook Lewis…Michelle Pfeiffer／Ginny Cook Smith…Jessica Lange／Larry Cook…Jason Robards／Caroline Cook…Jennifer Jason Leigh

Digitized by Google

〔解説〕大農場で暮らす三人姉妹と、その父親の確執を中心に据えた人間ドラマ。監督は「キルトに綴る愛」のジョセリン・ムーアハウス。製作は「エアフォース・ワン」のマーク・アプラハム、「ゲーム」のスティーヴ・ゴリン、リン・アロスト、ケイト・ギンズバーグ、「バスキア」のシガルジョン・サイヴァトソン。製作総指揮は「エアフォース・ワン」のアーミアン・バーンスタインとトーマス・A・ブリス。原作はジェーン・スマイリーのピューリッツァー文学賞受賞の長編（邦訳『大農場』中公文庫刊）で、ストーリーはシェイクスピアの『リア王』が下敷きとなっている。脚本は「ある貴婦人の肖像」のラウラ・ジョーンズ。撮影は「羊たちの沈黙」のタク・フジモト。音楽はリチャード・ハートレー。美術はダン・デイヴィス。衣裳は「エマ」のルース・マイヤーズが担当。出演は「素晴らしき日」「デンジャラス・マインド　卒業の日まで」のミシェル・ファイファー、「ブルースカイ」のジェシカ・ラング、「フィラデルフィア」のジェニファー・ジェイソン・リー、「チューズ・ミー」のキース・キャラディンほか。

〔略筋〕広大な農場の主ラリー・クック（ジェイソン・ロバーズ）は、ある日農場を株式会社にして子供たちに株を分け与えると提案する。農場を手伝う長女ジニー（ジェシカ・ラング）と次女ローズ（ミシェル・ファイファー）は賛成するが、三女で弁護士のキャロライン（ジェニファー・ジェイソン・リー）は反対。腹を立てたラリーはさっさと農場をジニー夫婦とローズ夫婦に譲ってしまう。しかし、生き甲斐だった農場を失ったラリーは、やがてジニーとローズを憎むようになり、ある嵐の夜、娘たちを罵り、荒れ狂って家を飛び出す。その夜、ローズは、父が少女だったジニーを犯し、さらにローズとも寝ていたという衝撃の事実をハッキリとした記憶のないジニーに告げる。父の暗い一面を知らないキャロラインは、父の言い分を鵜呑みにして、姉たちが父の土地を不当に奪ったとして訴訟を起こす。姉妹は近隣の者たちに非難の目で見られるが、ジニーの夫タイ（キース・キャラディン）はキャロラインの味方をする。隣家の息子ジェス（コリン・ファース）はジニー、そしてローズとも関係を持った優男だったが、ローズの夫ビート（ケヴィン・アンダーソン）は妻の不倫を知って泥酔して溺死。そんな中、裁判は開かれ、ラリーが精神錯乱の状態だったため、土地は合法的な譲渡だと判決は下りる。全てに未練のなくなったジニーは一人で都会へ出て生活を始めるが、ローズが乳ガンを再発して入院したことを知り、帰郷。深い絆を持つ妹の死を見とったジニーは、ローズの二人の娘と共に生きることを決意するのだった。

草原とボタン

War of the Buttons〔ボタン戦争〕

英＊フジテレビ＝ワーナー・ブラザース作品／日本ヘラルド映画配給（フジテレビ＝ポニーキャニオン提供）　95＝98・1・15　C・V・D　SR　95分　字幕＝稲田嶺裕里

〔STAFF〕監督＝John Roberts　製作＝David Putnam　脚本＝Colin Welland　撮影＝Bruno De Keyser　音楽＝Rachel Portman　美術＝Jim Clay

〔CAST〕ファーガス…Gregg Fitzgerald／Geronimo…John Coffey／Mary…Eveanna Ryan／Gorilla…Paul Batt／GeronimoのO父…Colm Meaney／校長…Liam Cunningham

〔解説〕南アイルランドの美しい風景をバックに、少年たちのユーモラスな対決と爽やかな友情を描く作品。監督はこれが長編デビュー作となるジョン・ロバーツ。製作は「ミッドナイト・エクスプレス」「炎のランナー」「ミッション」など多数の国際映画祭受賞作を手掛け、映画界で最も高く評価されているプロデューサーの一人、デイヴィッド・パットナム。脚本は「炎のランナー」のコリン・ウェランド。撮影は「ラウンド・ミッドナイト」のブルーノ・ドゥ・ケイゼル。音楽はレイチェル・ポートマン。美術は「クライング・ゲーム」のジム・クレイ。出演はグレッグ・フィッツジェラルド、ジョン・コフィー、エヴィーナ・ライアン、ポール・バットらオーディションで選ばれた子役のほか、「スナッパー」のコルム・ミーニー、「白馬の伝説」のリーアム・カニンガムほか。

〔略筋〕アイルランド南西部の小さな町バリーに住む子供たちは、隣町キャリックとの戦いに備え、みんな上から下まできっちり服のボタンをかけている。学校が終われば戦闘開始だ。バリーの子供たちによる"バリーズ"は、小競り合いの末、敵の先陣ゴリラ（ポール・バット）を捕虜にした。そしてリーダーであるファーガス（グレッグ・フィッツジェラルド）の指示に従って、ゴリラの服のボタンを全部もぎ取ってしまう。ボタンこそは男の子たちの戦利品なのだ。しかし次の対決でこの不名誉を被ったのはファーガスであった。ボロボロにされた上着のせいで継父に怒られたファーガスは、ある名案を思いつく。ジェロニモ（ジョン・コフィー）率いる"キャリックス"が待ち受ける岩山に、バリーズは素っ裸で現れた。これならボタンは取られない。そしてマリー（エヴィーナ・ライアン）ら少女たちの加勢により、バリーズは勝利した。こうして両軍の戦闘は日々続いていく。だがある日、バリーズの面々がボート小屋を改造した基地で勝利の宴に酔っていた時、仲間外れになった少年がジェロニモをそそのかして反撃にやってきた。少年は父親のトラクターで基地を潰し、トラクターも壊れてしまう。この事件の張本人だと大人たちから思われたファーガスは、少年院行きを恐れ森に隠れた。彼と継父の険悪な関係を知っているジェロニモがそれを追ってきた。大人たちが追跡を始め、ファーガスとジェロニモは崖を登り出す。やがてジェロニモが足を滑らせた。ファーガスが彼に手を差し伸べ助けるが、二人はつかまってしまった。そしてファーガスは少年院送りに。しかしジェロニモも同じくそこへ送られており、二人は仲良くじゃれ合うのだった。

Digitized by Google

ドレス

De Jurk〔ドレス〕

蘭＊Granier Film作品／エースピクチャーズ配給（アスミック・エース エンタテインメント提供） 96＝98・10・31 C・V・D 103分

字幕＝菅原教子

〔STAFF〕監督＝Alex van Warmerdam 製作＝Alex van Warmerdam 脚本＝ 撮影＝Marc Felperlaan 音楽＝Vincent van Warmerdam

〔CAST〕Johanna…Ariane Schluter／Van Tilt…Henri Garcin／Van Tilt…Henri Garcin／Marie…Olga Zuiderhoek／Chantalle…Ricky Koole／De Smet…Alex van Warmerdam／Stella…Elizabeth Hoytink

〔解説〕 一枚のドレスが人間の隠された欲望に次々と火を点けていく様を描いた、ユーモラスでブラックな異色作。監督・脚本は「アベル」のアレックス・ファン・ヴァーメルダム。製作はマルク・ファン・ヴァーメルダム。撮影はマルク・フェルバーラン。音楽はヴィンセント・ファン・ヴァーメルダム。出演は舞台やテレビで活躍しているアリアーヌ・シュルター、「アベル」「八日目」のアンリ・ガルサン、「アベル」のオルガ・ツイダーフク、『De Kersenpluk』のリッキー・クール、そしてアレックス・ファン・ヴァーメルダム監督自身が車掌の役で出演している。96年ヴェネチア国際映画祭国際批評家連盟賞を受賞。

〔略筋〕 恋人には逃げられ、仕事のデザイン案は不採用になってしまうという最悪の朝を迎えていた生地デザイナーのクレーマーは、やけくそで偶然外にいたイランド人女性のドレスの柄をそのまま登用し、新しいデザイン案として提出する。クライアントのローマン既製服社では、その新しいデザイン案をめぐって社長と重役のファン・ティルト（アンリ・ガルサン）が意見を対立させていた。けっか、社長はクレーマーのデザインを採用、ファン・ティルトはクビになった。そしてそのドレスが完成。最初にそれを買ったのは61歳の女性ステラ（エリザベス・ホイティンク）だった。しかしそのドレスを着たステラは突如性的に興奮しはじめ、息を引き取ってしまった。ステラの死を見届けるようにして、風に飛ばされていくドレス。次にドレスを着たのはヨハンナ（アリアーヌ・シュルター）だった。そして列車の車掌デ・スメット（アレックス・ファン・ヴァーメルダム）が、ドレス姿の彼女を見て激しく欲情してしまう。デ・スメットはヨハンナが画家の恋人ヘルマンと暮らす家に忍び込み、ヨハンナを脅し、翌日のデートを約束させる。次の日、間一髪でデ・スメットから逃げたヨハンナは、今度はバスの運転手に襲われる。何とか逃げ帰ったヨハンナは、汚れたドレスをリサイクルに出してしまった。そのドレスを少女シャンタル（リッキー・クール）が買った。彼女もまたデ・スメットに襲われる。翌朝、デ・スメットから逃れたシャンタルは、ドレスの入った荷物をホームレスの女（オルガ・ルイダーフク）に盗まれる。このマリーに思いを寄せていたのが、ろーまん既製服社の元重役ファン・ティルトであった。やがてマリーはドレスと共に死んでしまう。ある日の美術館。その一角にヘルマンの作品が飾られている。その絵の中には、例のドレスを着た女が描かれていた。そこに現れたのがあの車掌デ・スメット。彼はナイフでドレスの部分を切り取ろうとし、警備員たちに連行されていくのだった。

ノーウェア

Nowhere〔どこにもない〕

米＊デスペレート・ピクチャーズ＝ブラーコ＝ホワイ・ノット・プロダクションズ作品（ファイン・ライン・フューチャーズ提供）／バイオニアLDC配給 97＝98・8・3 C・V・U 81分 字幕＝高橋結花

〔STAFF〕監督＝Gregg Araki 製作＝Gregg Araki／Andrea Sperling EP＝Nicole Arbib／Pascal Caucheteux／Gregoire Sorlat／Ilene Staple 脚本＝Gregg Araki 撮影＝Arturo Smith 音楽＝Budd Carr 音楽監修＝Peter M. Coquillard 美術＝Patti Podesta 編集＝Gregg Araki 衣装＝Sara Jane Slotnick

〔CAST〕Dark…James Duval／Mel…Rachel True／Montgomery…Nathan Bexton／Kriss…Chiara Mastroianni／Kozy…Debi Mazar／Lucifer…Kathleen Robertson／Alyssa…Jordan Ladd／Egg…Sarah Lassez／Cowboy…Guillermo Diaz／Barr…Jeremy Jordan／Lilith…Heather Graham／Elvis…Thyme Lewis／Dark's Mom…Beverly D'angelo／おしゃべり娘…Traci Lords

〔解説〕 愛を求めてドラッグや暴力、倒錯したセックスにはしる世紀末の若者たちの姿を、異色のタッチで描いた青春映画。監督・脚本・製作・編集は「リビング・エンド」「ドゥーム・ジェネレーション」などの作品で知られるインディーズの旗手、グレッグ・アラキ。アラキと共同で製作に当たったのはアンドレア・スパーリング。製作総指揮はニコール・アービブ、パスカル・コーシュチューク、グレゴール・ソラット、イレーヌ・スタップル。撮影はアルトゥーロ・スミス、音楽製作指揮はバッド・カー、音楽監修はピーター・M・コワイルラード、美術は「ジュラシック・パーク」のパッティ・ポデスタ、衣装は「ジョンズ」のサラ・ジェーン・スロトニック。主演は「ドゥーム・ジェネレーション」のジェームズ・デュバル。共演は「ザ・クラフト」のレイチェル・トゥルー、本作でデビューのネイサン・ベクストン、マルチエロ・マストロヤンニの娘で現在新進女優のキアラ・マストロヤンニ、「シーズ・ソー・ラヴリー」のデビ・マザー、TV『ビバリーヒルズ青春白書』のキャスリーン・ロバートスン、「ブギー・ナイツ」のヘザー・グラハム「シリアル・ママ」のトレイシー・ローズほか。

〔略筋〕 南カリフォルニアのどこか。映画学科の学生ダーク（ジェームズ・デュバル）は黒人女性の恋人メル（レイチェル・トゥルー）とつきあっているが、メル自身にはレズビアンの恋人ルシファー（キャスリーン・ロバートスン）がいる。そんなダークもまた、同じ学生のモンゴメリー（ネイサン・ベクストン）に同性愛的な感情を抱いていて、朝もシャワー室で彼を思い浮かべながら自慰行為をしていると、母親（ビバリー・ダンジェロ）

Digitized by Google

に早く出ろと怒られる始末。学校のカフェテリアに行くとダークの仲間たちが集まっていた。メル、カウボーイ（ギレルモ・ディアズ）、エッグ（サラ・ラセズ）、アリッサ（ジョーダン・ラッド）といった面々である。みんな今夜のパーティを楽しみにしている。カウボーイは恋人のバート（ジェレミー・ジョーダン）を誘うが、彼は断り、家に一人閉じこもってしまった。エッグはトイレで出会ったアイドルスターの男とデートすることになる。しかし優しかった男は、ホテルに行くと本性をあらわし、エッグを暴行した。エッグは必死で逃げ帰って、部屋に閉じこもった。アリッサは恋人のエルビス（タイム・ルイス）とセックスする。エルビスはマゾヒストだった。一方、ダークは昼間、トカゲ型の宇宙人が三人の女（トレイシー・ローズら）を光線銃で消してしまう光景を見る。夕方。ダークはメルを家に呼んでセックスする。ダークはメルに結婚を申し込んだ。上機嫌の二人は待ち合わせの野球場へ行き、仲間たちと缶蹴り遊びをする。だがその最中、モンゴメリーがトカゲ型宇宙人に姿を消されてしまう。同じ頃、部屋に閉じこもってTVの宗教番組を見ていたバートが、姿を消していることは誰も知らなかった。夜になるとパーティが始まった。そこは怪しげな仮装をした若者であふれていた。そこでダークはメルが自分以外の男の誘いを受けているのを目撃した。メルは誰とでも寝る女だった。絶望したダークが外で煙草を吸っていると、エッグの姿が消え、部屋が血まみれになっている知らせが入った。会場に戻ると、トカゲ型宇宙人の姿がまた見えた。薬のやりすぎかとヤクの売人と話していると、エルビスが現れ、いきなり売人に殴りかかった。うんざりして家に帰ったダークは、ビデオカメラに向い、自分たちは世紀末に生きているのだと語りかけた。そこへ消えたはずのモンゴメリーが現れ、ダークのベッドに入ってきた。彼はダークに好意を持っていることを告げる。と、突然モンゴメリーの体が弾け飛び、巨大な虫になって去った。あとには血まみれになったダークだけが残った。

ブギーナイツ

Boogie Nights〔ブギー（音楽の一形式）の夜〕

米＊P・T・アンダーソン・ピクチャーズ作品（ニュー・ライン・シネマ提供）／ギャガ・コミュニケーション配給　97＝98・10・10　C・CS・DSD／SDDS　155分　字幕＝石田泰子

〔STAFF〕監督＝Paul Thomas Anderson　製作＝Lloyd Levin/John Lyons/Paul Thomas Anderson／Joanne Sellar　ｅｘｐ＝Lawrence Gordon　脚本＝Paul Thomas Anderson　撮影＝Robert Elswit　音楽＝Michael Penn　音楽観衆＝Karyn Rachtman　美術＝Bob Ziembicki　衣装＝Mark Bridges

〔CAST〕Eddie Adams(Dirk Diggler)…Mark Wahlberg／Jack Horner…Burt Reynolds／Amber Waves…Julianne Moore／Rollergirl…Heather Graham／Reed Rothchild…John C. Reilly／Little Bill…William H. Macy／Floyd Gondolli…Philip Baker Hall／Kurt Longjohn…Ricky Jay

〔解説〕1970年代後半から80年代にかけての、ポルノ産業に従事する人々の心の葛藤と業界の裏側を描く人間ドラマ。監督・脚本は『ハード・エイト』（V）のポール・トーマス・アンダーソン。製作はアンダーソンと『イベント・ホライゾン』のロイド・レヴィン、『ハード・エイト』のジョン・ライアンズとジョアン・セラー。製作総指揮は『ダイ・ハード』シリーズや『デビル』のローレンス・ゴードン。撮影は『トゥモロー・ネバー・ダイ』のロバート・エルスウィット。音楽は『ハード・エイト』のマイケル・ペン。音楽監修はカリン・ラットマン。美術はボブ・ジンビッキ。衣装は『未来は今』のマーク・ブリッジズ。出演は『バスケットボール・ダイアリーズ』のマーク・ウォールバーグ、『素顔のままで』のバート・レイノルズ、『ロスト・ワールド』のジュリアン・ムーア、『スウィングガーズ』のヘザー・グラハム、『BOYS』のジョン・C・ライリー、『エアフォース・ワン』のウィリアム・H・メイシー、『死の接吻』のフィリップ・ベイカー・ホール、『トゥモロー・ネヴァー・ダイ』のリッキー・ジェイほか。

〔略筋〕1977年のロサンゼルス郊外、サン・フェルナンド・ヴァレー。ディスコで皿洗いのバイトをしているエディ・アダムス（マーク・ウォールバーグ）は、ファラ・フォーセットとブルース・リーに憧れる普通の17歳の高校生。だが、一つ普通と違っていたのは優に35センチはあろうかという巨大なペニスだ。ある日、それを見込んだポルノ映画監督ジャック・ホーナー（バート・レイノルズ）が、ポルノ男優にならないかとスカウトしにきた。初めて他人から認められる幸せを噛みしめたエディは、美少女ローラーガール（ヘザー・グラハム）とのオーディションで早速実力を発揮する。エディは冷たい実家を飛び出し、ポルノ業界に飛び込んだ。ジャックの妻でポルノ界きってのスーパーヒロイン、アンバー・ウェイブス（ジュリアン・ムーア）や、プロダクション・マネージャーのリトル・ビル（ウィリアム・H・メイシー）、男優のリード（ジョン・C・ライリー）らに導かれ、またたく間にポルノ業界のスーパーヒーローに登り詰めていくエディ。名前もダーク・ディグラーと改め、次々と主演作をヒットさせ、ポルノ界の各賞を総ナメにしていった。しかしそんな彼をドラッグという罠が待ち受けていた。次第にドラッグの快楽に溺れていくエディ。頼みのイチモツもだんだん使い物にならなくなってきた。そんな時、若くハンサムな新人ポルノ男優が現れた。あせったエディは皆に八つ当たりし、勢いでジャックの元から飛び出してしまう。それからのエディは堕ちる一方。同時に80年代に入ってからビデオ時代、そしてレーガン時代の到来などで、ポルノ映画産業は急速に冷え込んでいく。元ポルノ俳

Digitized by Google

優達は社会の偏見や就職問題に苦しみ、華やかだったジャック邸も今では誰もいなくなってしまった。そんな状況の中、最低のところまで落ちぶれたエディが、ジャックの元へ帰ってくる。やはり自分にはポルノ業界しかないと鏡を見つめるエディだが、そこに希望の光はなかった。

北京のふたり

Red Corner〔赤い街角〕

米＊アブネット＝カーナー・プロダクション作品（メトロ・ゴールドウィン・メイヤー映画提供）／U＝P配給　97＝98・10・10　C・V・D（SR）／DTS　123分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Jon Avnet　製作＝Jon Avnet／Jordan Kerner／Charles B. Mulvehill／Rosalie Swedlin　u.p.＝Wolfgang Petersen／Gail Katz　脚本＝Robert King　撮影＝Karl Walter Lindenlaub　美術＝Richard Sylbert　編集＝Peter E. Berger　衣装＝Albert Wolsky　音楽＝Thomas Newman

〔CAST〕Jack Moore…Richard Gere／Shen Yuelin…Bai Ling／Bob Ghery…Bradley Whitford／Lin Dan…Byron Mann／David McAndrews…Peter Donat／Ed Pratt…Robert Stanton／Chairman Xu…Tsai Chin／Lin Shou…James Hong／Hong Ling…Jessey Meng／General Hong…Li Chi Yu

〔解説〕異国の地、北京で殺人の罪を着せられたアメリカ人男性と、古い因習を断ち切って彼の弁護を引き受ける中国人女性との心の交流を描いた法廷サスペンス・ドラマ。監督は「アンカーウーマン」のジョン・アブネット。製作はアブネットとジョーダン・カーナー、チャールズ・B・マルベヒル、ロザリー・スウェドリンの共同。製作総指揮は「エアフォース・ワン」などの監督で知られるウォルフガング・ペーターセンと、同じく「エアフォース・ワン」の製作者であるゲイル・カッツ。脚本はロバート・キングのオリジナル。撮影は「ジャッカル」のカール・ウォルター・リンデンラウブ。カリフォルニアにリアルな北京の街並を再現した美術は「ディック・トレイシー」などのベテラン、リチャード・シルバート。編集はピーター・E・バーガー、衣装はアルバート・ウォルスキー。音楽は「フェノミナン」のトーマス・ニューマン。主演は「ジャッカル」のリチャード・ギアと、この作品がハリウッド本格的デビューとなるバイ・リン。共演は「フィラデルフィア」のブラッドレー・ホイットフォード、「ストリート・ファイター」のバイロン・マンほか

〔略筋〕米中間初の衛星放送契約のため、北京を訪れたアメリカ人ジャック（リチャード・ギア）は、ラジオ映画テレビ省の大臣の息子ダン（バイロン・マン）から接待を受け、ナイトクラブに案内される。その店の女リン（ジェシー・メン）に魅かれたジャックは彼女を自分のホテルに誘い、一夜を過ごす。翌朝、ジャックは部屋に踏み込んできた警官隊に殺人犯として逮捕される。傍らには血まみれになったリンの死体が転がっていた。その日からジャックは拘置所の独房に入れられ、人権無視の尋問を受ける。ジャックは無実を訴え、アメリカ人の弁護士を要求するが、中国の法廷では認められないと拒否される。アメリカ大使館にも助けを求めるが、大使は出張中。おまけに殺されたリンは軍の権力者ホン将軍（リ・チ・ユー）の娘だった。そんな最悪の状況の中、裁判が始まった。ジャックの法定弁護人ユーリン（バイ・リン）はいきなり有罪を申し立てる。撤回を求めるジャックに、ユーリンは、この国では死刑を免れるには有罪を認めるほかないと説明する。必死のジャックは同僚ボブ（ブラッドレー・ホイットフォード）に差し入れてもらった中国の司法書を読み、次の日の法廷で自ら弁護する権利を得る。ジャックはリンの死体から首飾りのロケットが消えていることを主張した。しかしその夜、ジャックは拘置所で明らかに誰かに雇われた囚人たちから命を狙われる。一方、ユーリンはリンの生前のビデオからロケットの存在を確認、ジャック有罪の確証が揺らいだ彼女は、三日目の裁判で申し立てを有罪から無罪に切り替えた。そして翌日保釈申請を出し、ジャックを自宅へ連れて行った。お互いの過去を語り合うジャックとユーリン。その後、事件現場のホテルを訪れたジャックは、リンがその夜に携帯電話で誰かと話していたことを思い出す。さっそく電話局で記録を調べるが、すでに真犯人の手によって抹消されていた。結局何もつかめず、パトカーで拘置所へ戻るふたり。と、またしてもそこを何者かによって拳銃で襲撃される。反撃に転じたジャックは手錠のままパトカーから逃走、無事アメリカ大使館へ逃げ込むことに成功した。面会に来たユーリンはジャックから真実を叫ぶことの大切さを教わり、「今はあなたの無実を信じている」と語った。しかし保釈中にジャックを逃がした罪で警官に連行されるユーリンを見たジャックは、大使館を飛び出し自ら拘置所へ戻るのだった。そして、いよいよ裁判の最終日。ユーリンたちが証人を喚問しても裁判長（ツァイ・チン）は却下するばかり。さらに裁判の途中でユーリンは連れ出され、検事局長や軍の上層部から取引を持ちかけられる。ユーリンは強く拒否するが、その間にも裁判は進んでいく。ジャックは自分自身を弁護しなければならない。そんなとき、警察からリンのロケットが渡され、ロケットの中からダンの写真が出てくる。おまけに携帯の電話番号はダンの父親ショー（ジェイムズ・ホン）のものだとわかった。ダンは別会社と有利な融資契約をするためにジャックを陥れたのだった。自分の息子の悪事を恥じたショーは、ダンを目の前で射殺した。ジャックは釈放された。帰国の日。ジャックとユーリンは空港で別れを惜しみ、抱き合ったのだった。

Digitized by Google

9月の公開作品（外国映画）封切り表

（注） 封切日は東京中心。●＝白黒作品　★＝パートカラー　＊＝地方封切作品　※完全版など

公開日（製作国）	タイトル	年度	監督	出演	配給（上映時間）	紹介	批評	グラビア
9.5（米）	**フラッド** **Hard Rain**	98	ミカエル・ソロモン	クリスチャン・スレイター／モーガン・フリーマン／ライディ・クェイド／ミニー・ドライヴァー	東宝東和（97）	1267	1266（ク）1268	1265
9.5（米）	**ヒューゴ・プール** **Hugo Pool**	96	ロバート・ダウニー	アリッサ・ミラノ／ロバート・ダウニー・Jr／マルコム・マクダウェル	東北新社（93）		1265 1268	1265
9.5（英）	**クライム・タイム** **Crimetime**	96	ジョルジュ・シュツイツァー	スティーヴン・ポールドウィン／ビート・ポスルウェイト／セイディ・フロスト	K2エンタテインメント（提供／マイビック＝フジクリエイティブコーポレイション＝メディアリング／K2エンタテインメント）（117）		1266（ク）	1266
9.6（印）	**沈黙の旋律** **Mouna Ragam**	86	マニラトナム	チャンドラ・クマール／ディヴィヤ／マノーハル	アジア映画社（146）			1259
9.12（米）	**シティ・オブ・エンジェル** **City of Angels**	98	ブラッド・シルヴァーリング	ニコラス・ケイジ／メグ・ライアン／デニス・フランツアンドレ・ブラウアー	WB（114）	1268	1265（特）1268	1265
9.12（米＝英）	**スライディング・ドア** **Sliding口Doors**	97	ピーター・ホーウィット	グウィネス・パルトロウ／ジョン・ハンナ／ジョン・リンチ／ジーン・トリプルホーン	KUZUIエンタープライズ（100）	1268	1266（ク）	1263
9.12（蘭）	**キャラクター** **孤独な人の肖像** **Karakter**	97	マイケル・ファン・ディム	フェジャ・ファン・フェット／ヤン・デクレール	アルシネテラン（125）		1267	1266
9.12（加）	**CUBE** **CUBE**	97	ヴィンチェンゾ・ナタリ	モーリス・ディーン・ホワイト／ニコール・デボアー／ニッキー・ガーダグニー	クロックワークス＝ポニーキャニオン（提供／ポニーキャニオン）（132）		1266（ク）1268	1265
9.12（メキシコ）	**ミル・マスカラス　愛と宿命のルチャ** **La Verdad De La Lucha**	88	フェルナンド・ドゥラン・ロハス	ミル・マスカラス／ドス・カラス／ドラゴンⅠ＆Ⅱ	イーサン（90）	1269		1266
9.12（印）	**瞳目** **Thalaseathi**	91	マニラトナム	ラジニーカント／マンムーティ／アラヴィンドスワーミ	アジア映画社（165）			1259
9.15（米）	**シークレット** **嵐の夜に** **A Thousand Acres**	97	ジョセリン・ムーアハウス	ミシェル・ファイファー／ジェシカ・ラング／ジェイソン・ゴバーツ／ジェニファー・ジェイソン・リー	ギャガ＝ヒューマックス（提供／ギャガ＝ヒューマックス＝ビームエンタテインメント＝東北新社）（105）	1271	1267	1266
9.19（米）	**イヤー・オブ・ザ・ホース** **Year of the Horse**	97	ジム・ジャームッシュ	ニール・ヤング・アンド・ザ・クレイジー・ホース／ジム・ジャームッシュ	アスミック（提供／アスミック・エース エンタテインメント）（107）	1268	1265（特）1266	1263
9.19（伊）	**雨上がりの駅で** **Compagna di Viaggio**	96	ピーター・デル・モンテ	アーシア・アルジェント／ミシェル・ピコリ	アルシネテラン（104）	1268		1266
9.19（香港）	**裏街の聖者** **流氓醫生** **Mack The Knife**	95	リー・チーガイ	トニー・レオン／アンディ・ホイ	エース・ピクチャーズ（提供／アミューズ＝アスミック・エース エンタテインメント）（99）	1268	1267（ク）	1263
9.23（米）	**スピーシーズ2** **Species Ⅱ**	98	ピーター・メダック	マイケル・マドセン／ナターシャ・ヘンドリッジ	UIP（93）	1269		1266
Ⅱ9.26（米）	**プライベート・ライアン** **Saving Private Ryan**	98	スティーヴン・スピルバーグ	トム・ハンクス／トム・サイズモア／エドワード・バーンズ／マット・デイモン	UIP（170）	1269	1267（特）	1265 1267（特）
9.26（米）	**ムーラン** **Mulan**	98	トニー・バンクロフト／バリー・クック	（声の出演）ミント・ウェン／エディ・マーフィ／B・D・ウォン	ブエナビスタ（87）	1269		1266
9.26（米）	**アイス・ストーム** **The Ice Storm**	97	アン・リー	ケヴィン・クライン／シガーニー・ウィーヴァー／ジョアン・アレン	ギャガ・コミュニケーションズ（113）	1269	1265（ク）	1263
9.26（豪）	**ラスト・ウェディング** **Under the Lighthouse Dancing**	96	グレーム・ラディガン	ジャック・トンプソン／ジャクリーン・マッケンジー／エデン・ジレット	シネマテン（94）		1265（ク）	1265

＊毎月の「公開作品（外国映画）封切り表」は、上記のような書式で毎月下旬号に掲載致します。なお、その他のスタッフも含めた詳細な封切り表は、従来通り2月下旬決算号に掲載致します。

Digitized by Google

ガクノススメ

第一〇八話

台湾ドキュメンタリー映画祭への旅（中篇）

牧野　守

（承前）当台湾ドキュメンタリー映画祭は九月十九日の開幕式典に始まり、翌二十日から本格的な上映が五つの会場で行われたが、会期も半ばの二十二日正午に到着したわたしたち一行は、ホテルに荷物を置くや、メイン会場である新光三越百貨店信義店の六階ホールに向かった。名前の通り日本の三越が台北市に進出したもので、最近オープンした近代的なデパートである。旧市街の中心地にも三越があり、よくタクシーの運転手も間違えることがあるほどで、まだ一般には馴染みが薄いようであった。この六階に仮設の上映会場があり、それに隣接して映画祭の受付カウンターが設けられている。簡単な事務机を前に応対するのは、学生ボランティアらしきスタッフ二人。ここで事務的な手続きのすべてが済まされると期待していたが、海外からの参加者に対して余りスムーズな対応とはお世辞にも言えなかった。

国際的イベントに付き物のプレスセンターも設置されておらず、人もまばらで、日本で申請していたIDカードを受け取る段になって、やっと安心することが出来た。わたしたちはプレスの部門で書類を提出し、カードにはメディアと分類されていたが、後日聞いた話では、この部門で申請した外国人はわたしたち三人の他に一名だけの計四名だったという。すでに先着の山形映画祭のスタッフと、このインフォメーションセンターで連絡を取り合うことになっていたが、それも要領を得ないままに諦めた。しかし、同じフロアの一角に広い喫茶室もあって、その一隅に映画書籍のコーナーが設けられ、約三〇〇点近い図書、雑誌、パンフが山積みされていた。映画祭会期中に併せて国家電影資料館による『出版品特価大回饋』の書展で、安いものは定価の半額であった。

ほぼこの十年間に出版された、多分野にわたる映画書誌が資料館発行は勿論のこと、他の出版社の刊行物も展示され、中々の壮観である。九〇年代になって台湾の映画研究は急速にレベルアップしたのだが、その実態を直接目にすることが出来たのであった。やはり来ただけのことはあったと、早速一冊一冊を手にしてその手応えを実感。とは言ってもここで購入することは控えることにした。出発前の家人との約束で、今回は映画祭を一目体験するだけ、夜は六時にホテルに戻りすべて自宅での療養日課を守る、そして一切の荷物、つまり映画資料の持ち運びはしない、のである。さらに本人だけでは心もとないと思ったのか、同行の二人にも直接頼み込む念の入れ方であった。ところが情況は思いがけない方向に進展していったのである。

当ホールの上映会場で山形映画祭の事務局長の矢野さんを見いだし、さらにそこで宮沢、藤岡の二人とも合流。宮沢さんとは渡航前に連絡を取り、現地で意見交換をしようと話し合っていて、急遽、彼らのスケジュールに基づいて国家電影資料館に赴くことになった。実はわたしにとって、訪台の主要目的の一つが、当館の幹部に面接して今後の交流を進めることにあったので、村山さんを通じて手配をお願いしてあったのである。

国家電影資料館は、映画祭会場から少し離れた市の中心部、中正区の青島東連絡街に面している古びたビル街の雑居ビルの四階にあった。ガラス張りの正面入り口を入ると、フロアー全体が資料館で、入り口の両側にも映画祭会場と同様に映画書籍の展示、即売コーナーが設けられ、イベントに合わせたディスカウント・セールが行われている。内心これはグッドチャンスだ、これを逃すことはできないと決心。館長室に通されると、黄建業(EDMOND K.Y.WONG)館長始め、幹部の皆さんが待ち受け、当館の活動の実情や今回の映画祭について長時間にわたる質疑応答が行われた。今年の三月まで早稲田大学の院生であった洪さんも通訳として参加し、遅れて張さんも加わった充実した会談となった。当館は国家レベルの公的施設ではなくて、会員制で維持されている自主的な運営組織であること、今回の映画祭の運営にも企画から実行にいたるまで中心的な役割を果たしていること、さらに海外にも広く開かれたユニークな上映活動を持続していて、ケン・ローチ作品の特集上映や、日本文学と映画の関係を作品で実証する企画など意欲的なプログラムを組んできている。丁度、九月六日に逝去した黒澤明監督の作品三十本中の二十三本が回顧上映され、「姿三四郎」から「まあだだよ」までが同十六日から十月十八日までの一カ月間で一挙上映されている最中であった。黄館長をはじめ、幹部の皆さんは台湾を代表する研究者、評論家、教育者、又はジャーナリストとして第一線で活躍する存在で、ここ十年でその国際的地位を確立した台湾ニューウェイブの理論的指導者である。

台湾における大学レベルの映画教育が目を見張るような充実ぶりを示しているのも、彼らの意欲的な活躍の結果なのであった。結局その日だけでは話が尽きず、翌日も当館を訪問することになった。つまり映画祭は二の次になってしまったのである。

（以下次号）

Digitized by Google

今号の筆者紹介

（　）は掲載ページ数

寺本直未　ライター。マラリアのような高熱の後「故郷」の熱海取材へ。淡島千景さんの華と温泉のおかげで全快。（15）

中西愛子　物書き。髪を伸ばす決意をした。中途半端で悲惨な今をのりこえることができるのか？（18）

的田也寸志　ライター。「ナデシコ」熱が高じて、ついにトレカ収集に突入。34番がどうしても手に入らない！（21）

細越麟太郎　映画評論家。ジャン＝ルイ・トランティニアンの最新作「愛する者よ、列車に乗れ」で彼に再会！（22）

中村勝則　シネマライター。「のど自慢」を見て以来、日曜の正午ついNHKを見てしまうのは私だけだろうか？（23）

山根貞男　映画評論家。というわけで今年の東京国際には一観客としてジャリリ監督との再会が楽しみ。（24）

池田敏　ライター。先日の米国旅行で一番の感激は、ワシントンDCで見た本物のシークレット・サービス！（28）

小林雅明　文筆業。フレデリック・ワイズマン映画祭では「クール・ワールド」も上映して欲しかった！（36）

鷲巣義明　映画文筆家。マクノートン監督の「ワイルド・シングス」はどんでん返しよりも二人のヒロインがいい。（38）

平和歌子　このところ、眠らなくても平気な自分がコワかった。FBI捜査官が二人、訪ねてくるだろうか？（39）

田沼雄一　映画評論家。11月に報知新聞社から『スポーツ映画キネマ館』が出ます。（40）

みのわあつお　ポップ・カルチャー評論家。今年は毎日メジャーリーグをTV観戦していた一年でした。（43）

山口直樹　ライター。映画版「X―ファイル」の監督とのインタビューではUFO談義で盛り上がってしまった。（46）

黒田邦雄　映画評論家。上手な映画「アイ　ウォント　ユー」、下手な映画「ルル・オン・ザ・ブリッジ」。（52）

山田やよい　ライター。特に好きな俳優はと問われて真剣に考えた。やはりマイケル・ケインの右に出る者なし。（55）

佐藤友紀　フリーライター。ピナ・バウシュとニコール・キッドマンの舞台を見に突如旅立つ。山本耀司の快演も！（56）

春岡勇二　ライター。恒例の南港維新派公演。今年は暖かと思ったら急に寒くなり、屋台のホット・ラムが旨かった。（60）

きさらぎ尚　映画評論家。W・アレンの新作"Celebrity"に期待が大きく膨らむ。見るのを楽しみにしている。（66）

おかむら良　映画評論家。原作も荒唐無稽で大好きな「梟の城」をどうやって映画化するのか、今から楽しみです。（68）

石原郁子　映画評論家。小口容子の"テレクラムービー"が凄い！　タフでユーモラスで虚実一重のアヤしさ。（70）

吉田真由美　一回の引っ越しで半年分寿命が縮むという。ということは私は今回で計14年分…。死期は近い。（91）

筒井武文　映画監督。週末は鈴鹿F1へ。東京映画祭にとって返して、その後はスコリモフスキの来日が楽しみ。（72）

北川れい子　映画評論家。11月21日TAMA映画祭で「愛を乞うひと」の上映後トークの司会をします。乞ご来場。（74）

寺村摩耶子　65年生まれ。映画会社勤務を経て97年より絵本の書評やアニメーション、ファンタジーについて執筆中。（76）

斎藤芳子　ライター。三池組「LEY LINES」の現場を訪問。バイオレンスで悲しい物語に北村一輝初主演！（78）

石子順　中国映画研究家。北京電影学院倪震教授と会食。第五世代、後の中国映画の模索状態を聞く。活字にしたい！（79）

西脇英夫　映画評論家。久しぶりに日本映画が活気づいている。ベスト・テンが難しそうだ。（83）

進藤良彦　ライター。「踊る」の劇場版パート2があるとしたら、また密着しなきゃいけないのかなあ……。（88）

浅野潤　映画評論家。同人誌『FB』の再生への努力が上倉阪大教授を中心にはじまった。継続への苦しみ。（98）

浦崎浩實　文筆業。早大演劇博物館（図書館）が休館だった一年余、不便をかこつ。祝リニューアルオープン！（98）

中条省平　仏文学者。ロメールの「恋の秋」は連作の最後を飾る傑作。愛育社刊の『四季の物語』も楽しみ。（103）

山中陽子　セテラ代表。展覧会。写真集、そして映画祭と、今秋から来年は150%G・フィリップに捧げてます。（105）

日野康一　映画評論家。埼玉県の人口4万の大井町に7スクリーンのワーナーマイカル誕生、動員目標年間77万人。（117）

野村正昭　映画評論家。山形まで「警視庁物語」を見に行き、偶然、村川透監督と遭遇、さっそく取材交渉をする。（118）

阿部真理子　イラストレーター。池澤夏樹氏とのコラボレーション本『メランコリア』を光琳社より近々刊行予定。（123）

立川志らく　落語家。10月27日19時～新宿紀伊國屋サザンシアターにて『志らく。たい平・喬太郎のちんちろりん』。（127）

橋本治　作家。『双調平家物語』全十二巻刊行開始。ここだけの話、書くのが大変で、私はともかく周りはパニック。（130）

芝山幹郎　翻訳家。締切に追われてワールド・シリーズは現地観戦ならず。テレビで野球のリアリズムを堪能する。（132）

和田誠　イラストレーター。イマジカのカレンダー制作の季節です。今年はどんな映画を選びましょうか。（136）

三谷幸喜　脚本家。ライターの望月美寿さん（次頁参照）に偶然会いました。脚本家の北川悦吏子さん似の方です。（136）

林加奈子　映画祭コーディネーター、在香港。早くも来年前半の映画祭選考がスタート。香港映画新作もボチボチ。（143）

濱口幸一　嬉しいというよりもホッとした10月8日。あとの日本シリーズは気楽に見ていられる、わけないか。（147）

井口健二　SF映画評論家。故郷平塚ベルマーレの応援に乗り換えた自分だが、横浜ベイスターズの優勝には感慨。（150）

暉峻創三　映画評論家。劉若英から腕時計をもらう。が、それは陳國富が彼女にプレゼントしたもののようだ。（152）

竹入栄二郎　興行通信記者。誰の携帯電話も「圏外」と出る山形県の山奥、木造四階建て銀山温泉で浮世を忘却。（156）

内田達夫　シネマライター。ドリームワークスのLD化が見送られている。クオリティが論点らしい。解せない。（157）

大高宏雄　映画記者。卒論でミニシアターを取り上げる女子大生。2年連続相談を受けたが成果はどうなのだろう。（158）

斎藤敦子　映画評論家。カタロニア映画祭の打ち上げで呑んだくれてるB・レンフロの隣で呑んだくれてきました。（162）

Digitized by Google

井上一馬　エッセイスト。夏の疲れが出たのか。少し元気のない日々を過ごしています。（166）

山口猛　映画評論家。松田優作が逝って10年。長男・龍平の映画俳優デビュー（大島渚監督「御法度」）が決まった。（170）

森卓也　NHKBS放送の『ハリウッド・アルバム』は、パートカラーの「パベトーン」部分も黒白で、残念。（171）

鬼塚大輔　www2.shizuokanet.or.jp/usr/onisuka/　ウィリアム・A・ウェルマンの実録ビデオを堪能。至福の時。（171）

野村梓　映画評論家。ロバート・ワイズマン回顧上映。できるだけ取り零しのないように見たいと計画中ですが…。（171）

杉原賢彦　サイバージャーナリスト。今年前半の週末をつぶしデータ校正した『ワイン・ディレクトリ』が発売！（171）

森直人　文筆仕事。妹の結婚式の為、しばし大阪へ。しゃべる桂三枝キーホルダーを購入しました。（171）

佐藤忠男　日本映画学校校長。海外の映画祭などで好評の学生作品「ファーザーレス」の劇場版が完成。傑作です。（171）

村岡良昭　映画祭一番の楽しみは「エクソシスト」。こんな風に書くから〈ホラー映画〉マニアに勘違いされる。（171）

大森さわこ　映画評論家。執筆参加の大型本『人物20世紀』（講談社）が出版。モンローやバーグマンが新鮮に思えた。（175）

渡部実　映画評論家。11月のフレデリック・ワイズマン映画祭は、今年一番の好企画で期待が募ります。（178）

田中千世子　映画評論家。佐藤雅彦の短編映画集「キノ」が面白い。日本くさくも東欧くさくもなく人間くさい傑作。（180）

森山夏之　ライター。36歳。吉行由美の作品の魅力にとりつかれ4年ぶりに映画記事を執筆。（183）

山田太一　脚本家。近作『大丈夫です、友よ』（フジ）、『いちばん綺麗なとき』（NHK）、実録・浅川巧（TBS）。（186）

豊崎岳彦　売文家。旧友たちが次々と一本立ちする17年目の秋。あの頃を少し思い出して、手酌で乾杯しました。（189）

望月信夫　映画評論家。津から鶴橋まで近鉄アーバンライナーでひと駅。（今更ながら）大阪は心に残る町でした。（190）

樋口尚文　映画批評。また今年も山根貞男さんと日がな試写室にこもって神奈川映像コンクール審査を開始。（191）

賀来卓人　文筆家。劇団黒テントの「ヴォイツェック」を鑑賞。荻野清子さんの音楽、演技は良かったですよ。（192）

丸山尚輝　ライター。とにかく今は部屋の掃除がしたいしたいしたい、それだけです。（196）

吉川明利　タワーレコード渋谷店勤務。映画版「踊る大捜査線」に激燃え。そして再びビデオで第一話から見直した。（196）

望月美寿　保育園児を持つ共働きライター。最近なぜか多い土曜祝日の記者会見。子供の預け先に悩み結局諦める。（197）

米田由美　田舎暮らし実行中ライター。某教育関係誌の仕事でドリアン助川氏に会う。う〜む、貴重な体験でした。（200）

弓家保則　役者&ライターetc.　野沢雅子さんが主宰する劇団の舞台を見る。行き届いたきめ細かい演出を堪能。（201）

田中眞澄　無知の技法。ディーナ・ヨッフェを最前列で聴く宿望を、ショパン忌に鎌倉美術館で果たす。（202）

牧野守　日本映画史研究。映画文献資料研究会の第5回聞書は、大河内傳次郎研究家の梶田幸氏です。（213）

《チケット・セゾン メンバーズ大募集!!》

この指とまれ

エンタテイメントNo.1クラブ
これであなたも満足

コンサートや演劇、スポーツ観戦が大好きな
あなたの強い味方…それが
チケット・セゾンメンバーズなのです。

メンバーズだけの優先予約や優待特典

一般発売前にメンバーズだけが予約できる…それが優先予約。
超人気公演の獲得チャンスが2度あるのはメンバーズだけってこと。
ほかにも優待割引など毎月たくさんの優先・優待特典をご用意。

WAVEでCDがメンバーズ優待価格で

取り扱い店：WAVE六本木店・池袋店・渋谷店・吉祥寺店・錦糸町店（吉祥寺・錦糸町は97年5月1日よりサービス開始）

チケット情報満載の会員誌「tj」が毎月お手元に

エンタテインメント情報が満載の
本格的情報誌「tj」が毎月お手元に。
優先予約や優待などウレシイ情報を
はじめ、あなたが知りたいことを
バッチリ教えてくれます。そして
なんといっても簡単予約でおなじみの
Sダイヤル（プッシュホン自動予約）コード付きがウレシイ。

《セゾン》カードをお持ちの方は入会金が無料に

チケット・セゾン会員募集中！
入会金510円　年会費3365円（税込）
入会の手続きは簡単！便利！電話1本でOK
お申し込みは、チケット・セゾン会員センター
03-5276-4145〜6（土日祝休み 10時〜17時）
または、〈チケット・セゾン〉カウンターまで。

TICKET SAISON

Digitized by Google

『イメージフォーラム・フェスティバル』一般公募部門作品募集！

アジアで唯一の実験映像を対象にしたコンペティション、『イメージフォーラム・フェスティバル』が一般部門でのコンペティション参加作品を募集します。

ジャンルを問わず広く、斬新で実験性に富んだ多くの作品の多数応募を期待しています。

〈募集要項〉

●応募資格＝プロ・アマ不問。国籍不問。ただし、日本国内またはアジア諸国在住者に限る。

●応募規定＝作品の時間、テーマは自由。1998年1月以降に制作されたフィルム（8ミリ、16ミリ）、ビデオ（VHS、S−VHS、ベータカムSP、3／4インチ、Mini−DV、8ミリ、Hi−8）作品。音声をつける場合はフィルムに録音のこと。物理的に上映、展示が不可能と思われる作品に関しては審査対象外となる。一人につき何点でも応募可。

●出品料＝一点につき1000円。

●募集期間＝98年12月1日（火）〜99年1月22日（金）。消印有効。

●応募方法＝応募用紙（要請求）に必要事項を記入のうえ、作品、出品料共に郵送もしくは直接持参。郵送の際、出品料は切手1000円分に替えて同封のこと。

●審査＝第1次、第2次審査の結果、優秀作品には左記の賞が授与される。

・大賞／全作品の中から1点（賞金30万円、トロフィー、賞状）

・審査員特別賞／全作品の中から2点（賞金各10万円、賞状）

・特選／全作品から4点（賞金8万円、賞状）

・入選／全作品3点（賞金3万円、賞状）

●結果発表＝第1次審査の結果は1999年3月上旬、第2次審査の結果は、4月上旬に発表。

●作品の権利＝応募作品の権利は出品者にある。ただし大賞以下受賞作品は、受賞後1年間はフェスティバル主催者に使用優先権がある。受賞作品は本フェスティバルに関連する広報用に、無償で使用、複製できるものとする。応募作品は全て結果発表後に返却されるが、郵送での返却を希望する場合、送料は出品者の負担となる。

●応募＝〒160−0004　東京都新宿区四谷3−5　不動産会館6F　イメージフォーラム・フェスティバル1999事務局

●問合せ＝03・3357・8223

驚ポイエーシスⅡ　Transfiction 参加者募集

ロブ・ニルソン監督

瀬戸内の海に浮かぶ佐木島の緩やかな時間と風土のなかで、参加者全員共同で映像作品を制作する映画ワークショップの合宿参加者を募集。〝Transfiction〟をテーマに、ロブ・ニルソン氏（映画監督）、豊島重之氏（演出家）とモレキュラーシアターや諏訪敦彦氏（映画監督）らを講師に迎え、島の人々をも巻き込み、カメラの背後と前とをトランスしながら、ひとつの「虚構」を作り上げていく。

日時＝11月21日（土）〜23日（月）

講師＝ロブ・ニルソン（映画監督）、豊島重之（演出家、精神科医）＋モレキュラー・シアター、崎山政毅（神戸外語大学助教授）、澤野雅樹（明治学院大学助教授）、樋口泰人（映画評論家、編集者）加藤修（美術家、音楽家）、諏訪敦彦（映画監督）

定員＝50名

料金＝35000円（宿泊・食費込み）

場所＝広島県三原市佐木島・さぎしまセミナーハウス

申し込み・問合せ＝082・248・4322

東北

■第7回なみおか映画祭

11月20日（金）〈オープニング挨拶〉10時「モデル」10時05分「セレブレートシネマ101」13時「FISHING WITH JOHN」14時15分「ダウン・バイ・ロー」17時15分〈シネマ・フォーラム〉19時30分

11月21日（土）「プラン9・フロム・アウタースペース」10時「鋼鉄の巨人（スーパージャイアンツ）怪星人の魔城」11時30分「マタンゴ」13時「美女と液体人間」14時45分「妖星ゴラス」16時30分「ダーク・スター」18時15分〈シネマ・フォーラム〉19時45分

11月22日（日）「恋」10時「エヴァの匂い」12時45分〈シンポジウム〉16時45分「非情の時」15時「ジョセフ・ロージー／四つの名を持つ男」18時〈シネマ・フォーラム〉19時45分

11月23日（月）「龍門客桟」10時「春秋一刀流」12時30分〈芝山幹郎氏講演〉14時「忠烈圖」15時15分「天狗飛脚」17時15分〈シネマ・パーティー〉18時45分

料金＝1800円／パーティー券付き四日間通し券4500円（前1500円）

会場＝浪岡町中世の館ホール

問合せ＝0172・62・1020

■山形国際ドキュメンタリー映画祭99プレ・イベント

〈インド映画祭1998〉

上映作品＝A「この命踊りに捧げて」B「黒いダイヤ」C「カランとアルジュン」D「ガンジスの流れる国」E「1942・愛の物語」F「雨季」G「母がクリスマスに帰るとき」

11月7日（土）①A③B

11月8日（日）①C③D

11月9日（月）①E③F

11月10日（火）①B③A

11月11日（水）①D③C

11月12日（木）①F③E

11月13日（金）①②③G

時間＝①15時②17時③19時

料金＝1回券1000円／3回券2400円（前1回券700円／3回券1800円）

会場＝七日町シネマ通り・ミューズ

問合せ＝023・624・8368

関東

■東京国立近代美術館フィルムセンター

11月5日（木）①「雲の上団五郎一座」②「おトラさんのお化け騒動」

11月6日（金）①「ジャコ萬と鉄」②「価値ある男」

11月7日（土）①「天国と地獄」②「或る剣豪の生涯」

11月10日（日）①「赤ひげ」②「日本海大海戦」

11月11日（月）①「本覺坊遺文　千利休」②「ジャコ萬と鉄」

11月12日（火）①「或る剣豪の生涯」②「日本海大海戦」

11月13日（水）①「天国と地獄」②「本覺坊遺文　千利休」

11月14日（木）①「赤ひげ」②「価値ある男」

11月17日（金）①「飢餓海峡」②「女囚

Digitized by Google

701号　さそり」
11月18日（土）①「非行少年　陽の出の叫び」②「赤ちょうちん」
11月19日（日）①「十八歳、海へ」②「がめつい奴は損をする」
11月20日（月）①「われに撃つ用意あり」②「非行少年　陽の出の叫び」
時間＝①15時②18時30分、土祝①12時30分②16時
料金＝410円／学生250円／小人180円
問合せ＝03・3272・8600
NTTハローダイヤル

■フレデリック・ワイズマン映画祭
11月20日（金）「パブリック・ハウジング」13時「チチカット・フォーリーズ」16時30分〈ワイズマン監督講演『アメリカの組織を記録する』〉18時
「法と秩序」19時30分
11月21日（土）「高校」11時「病院」13時「福祉」15時「聴覚障害」18時
11月22日（日）「モデル」12時「ストア」14時30分「バレエ」17時
11月23日（月）「臨死」13時
料金＝1回券1300円／7回券8000円（割1回券1000円／7回券6000円）
会場＝草月ホール
問合せ＝03・5562・4422

■彩の国さいたま芸術劇場〈国際女性映画特集～映像が女性で輝くとき〉
11月6日（金）
「クリスマスに雪はふるの？」19時15分
トークゲスト＝小藤田千栄子氏（映画評論家）、大竹洋子氏（国際女性映画週間ディレクター）
11月7日（土）
「マザー・アローン」14時「第七官界彷徨―尾崎翠を探して」17時
トークゲスト＝高野悦子氏（岩波ホール支配人）、浜野佐知氏（映画監督）
料金＝1プログラム1000円
会場＝彩の国さいたま芸術劇場・映像ホール
問合せ＝048・858・5511

■自由が丘武蔵野館レイトショー〈なんでもあり香港ムービーズ〉
～11月6日（金）
「君さえいれば　金枝玉葉」
11月7日（土）～13日（金）
「夜半歌聲　逢いたくて、逢えなくて」
11月14日（土）～20日（金）
「上海グランド」
時間＝20時50分
料金＝1300円
問合せ＝03・3717・6341

■新宿武蔵野館シネマ・カリテ〈ハリウッド・クラシックス〉
11月14日（土）～20日（金）
「オズの魔法使」
11月21日（土）～27日（金）
「おもいでの夏」
11月28日（土）～12月4日（金）
「三つ数えろ」
12月5日（土）～11日（金）
「ロング・グッドバイ」
12月12日（土）～18日（金）
「オペラは踊る」
12月19日（土）～25日（金）
「オーシャンと11人の仲間」
問合せ＝03・3354・5670

■ジェラール・フィリップ映画祭Ⅱ〈テアトル新宿〉
11月7日（土）～13日（金）
「パルムの僧院」
11月14日（土）～20日（金）
「愛人ジュリエット」
11月21日（土）～23日（金）
「すべての道はローマへ」
※11月25日（水）16時30分より「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」特別上映とトークショー有。
11月28日（土）～12月4日（金）
「白痴」
12月5日（土）～11日（金）
「夜の騎士道」
12月12日（土）～18日（金）
「しのび逢い」
問合せ＝03・3352・1846
11月14日（土）～20日（金）〈キネカ大森〉
11月14日（土）～20日（金）
「夜ごとの美女」「パルムの僧院」
11月21日（土）～27日（金）
「赤と黒」「愛人ジュリエット」
11月28日（土）～12月4日（金）
「モンパルナスの灯」「すべての道はローマへ」
※12月4日（金）13時より「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」の特別上映とトークショー有。
12月5日（土）～11日（金）
「肉体の悪魔」「白痴」
12月12日（土）～18日（金）
「悪魔の美しさ」「夜の騎士道」
12月19日（土）～25日（金）
「花咲ける騎士道」「しのび逢い」
問合せ＝03・3762・6000

■青山ブックセンター・サイン会〈とり・みきサイン会〉
11月20日（金）17時
会場＝ルミネ2店
※当日朝8時より先着200名に整理券配布
問合せ＝03・3340・2420
〈安彦良和サイン会〉
11月21日（土）17時
会場＝六本木店
※六本木店にて『我が名はネロ・上巻』

キネマ旬報社の本

黒澤明をめぐる幻の名著ついに復刻！

キネマ旬報復刻シリーズ

黒澤明コレクション

●黒澤明の全貌に迫る
「黒沢明〈その作品と顔〉」
●ファン垂涎の
「〈黒沢明・三船敏郎〉二人の日本人」
●黒澤映画関係者60人の証言
「黒澤明ドキュメント」

3冊セット［分売不可］
定価8,000円+税
好評発売中

Digitized by Google

買い上げ先着80名に整理券配布
問合せ＝03・3479・0479
〈山本直樹サイン会〉
11月23日（月）17時
会場＝ルミネ2店
※最新刊『学校』発売日より先着200名に整理券配布
問合せ＝03・3340・2420

関西

■コミュニティ・ラボ・めふ上映会&公開セミナー
11月21日（土）
「白痴」10時／13時／18時15分
※16時より公開セミナー『黒澤明　音と映像』講師・西村雄一郎氏（映画評論家）
11月22日（日）・23日（月）
「ビヨンド・サイレンス」10時30分／12時50分／15時10分／17時30分
料金＝1作品券1300円／学生1000円／小人800円（㊗1作品券1000円／小人700円）／セミナー参加費1000円（要電話予約・50名）
会場＝コミュニティ・ラボ・めふ
問合せ＝0797・84・2931

■奈良シネマクラブ
11月20日（金）・21日（土）
「エマ」
時間＝20日19時、21日10時
料金＝1000円／入会金1000円
会場＝観光会館・地下劇場
問合せ＝0745・78・5799

■メイシアター
11月20日（金）
「裸の島」14時／19時
料金＝1000円（㊗800円）
会場＝吹田市文化会館メイシアター
問合せ＝06・380・2221

■中華民国（台湾）電影会
11月14日（土）
「戀戀風塵」
時間＝18時30分
料金＝500円（ウーロン茶付き）
会場＝大阪市立北市民教養ルーム
問合せ＝06・371・1833

■シネ・ヌーヴォ
〈メルヴィル・そのフィルム・ノワールの世界〉
上映作品＝A「影の軍隊」B「仁義」C「リスボン特急」
11月7日（土）①B③A⑤B
11月8日（日）①A③B⑤A
11月9日（月）①B③A⑤B
11月10日（火）①A④B⑥C
11月11日（水）①A④B⑥C
11月12日（木）①A④C⑤B
11月13日（金）①C②B⑤A
時間＝①13時②15時20分③15時40分④16時⑤18時15分⑥18時50分
問合せ＝06・582・1416

■第3回神戸100年映画祭
〈神戸朝日ホール〉
11月14日（土）
「ジャンヌと素敵な男の子」13時30分
「シェルブールの雨傘」16時〈オープニングセレモニー〉「枕の上の蓋」18時30分
〈神戸市立博物館〉
11月15日（日）①「百一夜」②「幸福」③〈トーク・イベント～アニエス・ヴァルダファミリーを迎えて〉
11月17日（火）②「モンパルナスの灯」③「ポンヌフの恋人」
11月18日（水）②「ジャック・ドゥミの少年期」③「大人は判ってくれない」
11月19日（木）②「化石」
時間＝①11時②13時③15時
〈神戸朝日ホール〉
11月21日（土）①「大人は判ってくれない」②〈川本三郎氏他、対談『パリのひみつを語りましょう』〉「地下鉄のザジ」③「キスーキスーキスー」④「デザンシャンテ」
11月22日（日）①「死刑台のエレベーター」②「陽だまりの庭で」③「アラ・モード」④「シングル・ガール」
11月23日（月）①「アンジェリク」②「キュリー夫妻」③「ラブetc」④「パリのレストラン」
時間＝①11時②13時30分③16時④18時30分
料金＝1回券1200円／3回券2500円／シルバー、小中生800円（㊗1回券1000円）
問合せ＝078・232・3281

中国

■周南シネマクラブ
11月13日（金）・14日（土）
「中国の鳥人」
時間＝13日19時30分、14日14時／16時30分／19時
料金＝1500円／大生1300円／中高生1000円／入会金（2ヶ月）1000円
会場＝徳山市市民館ホール
問合せ＝0834・22・5079

■広島市映像文化ライブラリー
〈特集・1930年代の日本映画〉
11月5日（木）「東京の合唱」
11月6日（金）「上陸第一歩」
11月7日（土）「伊豆の踊子」
11月8日（日）「君と別れて」
11月21日（土）「夜ごとの夢」
11月22日（日）「出来ごころ」
時間＝10時30分／14時／18時
料金＝大人440円／小人220円
問合せ＝082・223・3525

四国

■小夏の映画会
11月7日（土）
「こころの山脈」
時間＝16時／18時30分
料金＝カンパ
会場＝平和資料館草の家
問合せ＝0888・71・6792

九州

■幻の怪談映画レイトショー
11月13日（金）・15日（日）・16日（月）
「沖縄怪談逆吊り幽霊／支那怪談死棺破り」
11月17日（火）～19日（木）
「生首情痴事件」
11月23日（月）～26日（木）
「怪談バラバラ幽霊」
時間＝21時
料金＝1000円
会場＝福岡オークラ劇場
問合せ＝092・291・3854

■福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
〈成瀬巳喜男監督特集〉
11月5日（木）①「稲妻」②「山の音」
11月6日（金）①「浮雲」②「妻よ薔薇のように」
11月7日（土）①「めし」②「稲妻」
11月8日（日）、川本三郎講演会　13時30分②「浮雲」
11月11日（月）①「めし」②「稲妻」
11月12日（火）①「山の音」②「浮雲」
11月13日（水）①「妻よ薔薇のように」②「めし」
11月14日（木）①「稲妻」②「山の音」
11月15日（金）①「浮雲」②「妻よ薔薇のように」
〈申相玉監督と60年代韓国映画〉
11月18日（水）①「成春香」②「離れの客のお母さん」
11月19日（木）①「常緑樹」②「米」
11月20日（金）①「ロマンス・パパ」②「荷馬車」
11月21日（土）①「帰らざる海兵」②「雨のめぐり逢い」
11月22日（日）①「成春香」②「ロマンス・パパ」
11月23日（月）①「常緑樹」②「離れの客とお母さん」
時間＝平日①14時②19時、土日祝①11時②15時
料金＝500円／大高生400円／小中生300円
問合せ＝092・852・0600

Digitized by Google

※劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけ下さい。（10月21日現在）＊印は次回作品。

ご愛読者劇場招待券プレゼントのスケジュール

●ご招待券ご希望の方は本誌挟み込みの（試写会ハガキ）でお申込下さい。
しめきりは11月20日消印有効。プレゼントは12月中有効の招待券（ペア）です。

	劇場名	TEL	招待組数	11/5 木	6 金	7 土	⑧ 日	9 月	10 火	11 水	12 木	13 金	14 土	⑮ 日	16 月	17 火	18 水	19 木	20 金	21 土	㉒ 日	㉓ 月	24 火	25 水
銀座	丸の内松竹	03(3214)3366	2	学校Ⅲ																		＊ショムニ		
	丸の内ピカデリー1	03(3201)2881	2	シティ・オブ・エンジェル									トゥルーマン・ショー											
	丸の内ピカデリー2	03(3201)2881	2	相続人									シティ・オブ・エンジェル											
	丸の内ルーブル	03(3214)7761	5	始皇帝暗殺																	＊6デイズ／7ナイツ			
	松竹セントラル1	03(5550)1631	2	ダイヤルM																	＊ダーク・シティ			
	松竹セントラル2	03(5550)1631	2	沈黙のジェラシー																	＊ターニング・ラブ			
	松竹セントラル3	03(5550)1631		学校Ⅲ																				
	東劇	03(3541)2711	3	フラワー〜	ジャングル・ジョージ／Mr.マグー																			
	有楽町スバル座	03(3212)2826	5	リプレイスメント・キラー																	＊私の愛情の対象			
	銀座シネパトス	03(3561)4660	5	スライディング・ドア																				
				サソリ・女囚701号／殺す天使																				
				仮面の男	闇を見つめる瞳																			
	シネ・ラ・セット	03(3212)3761	5	マルセイユの恋	生きない																＊かさぶた／7本のキャンドル			
新宿	新宿ピカデリー1	03(3352)1771	5	シティ・オブ・エンジェル									トゥルーマン・ショー											
	新宿武蔵野館	03(3354)5670	5	L.A. コンフィデンシャル																				
	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	シティ・オブ・エンジェル									トゥルーマン・ショー											
				相続人									シティ・オブ・エンジェル											
				リプレイスメント・キラー																				
	テアトル新宿	03(3352)1846	10	生きない	〔ジェラール・フィリップ映画祭Ⅱ〕																			
	新宿昭和館	03(3352)2471	10		新極道の妻たち／ならず者／網走番外地・決斗零下30度						宮本武蔵・般若坂の決斗／影の軍団・服部半蔵							緋牡丹博徒・お竜参上／昭和残侠伝・唐獅子仁義／日本侠客伝・血門の決斗							
渋谷	渋谷松竹セントラル	03(3770)1990	2	学校Ⅲ																		＊ショムニ		
	渋谷ジョイシネマ	03(3462)2539	10	東京国際映画祭	相続人								シティ・オブ・エンジェル											
	渋谷シネパレス	03(3461)3534	10	フラワー〜	ジャングル・ジョージ／Mr.マグー																			
	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	ブギーナイツ																				
				犬、走る	ハーフ・ア・チャンス																			
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	ダイヤルM																	＊ダーク・シティ			
				シティ・オブ・エンジェル									トゥルーマン・ショー											
				学校Ⅲ																		＊ショムニ		
				カンゾー先生									時雨の記											
				モンタナの風に抱かれて																				
				プライベート・ライアン																				
	テアトルダイヤ	03(3983)9793	5	踊る大捜査線　THE MOVIE																		＊モスラ3		
	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	ディープ・インパクト									アンツ											
				マスク・オブ・ゾロ									シティ・オブ・エンジェル											
浅草	浅草松竹	03(3841)2022	5	学校Ⅲ																		＊ショムニ		
	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	ジャッカル／ザ・クリーナー									フラッド／普通じゃない										GODZ ILLA／他	
	浅草名画座	03(3841)3028		釣りバカ日誌10／日本女侠伝・血斗みだれ花／新座頭市物語・笠間の血祭り						網走番外地・北海道篇／斬る（東宝）／極悪坊主・飲む打つ買う						マークスの山／極道の女たち・最後の戦い／ミナミの帝王10								
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	10	アルビノ・アリゲータ／真夜中のサバナ					ミツバチのささやき／世界の始まりへの旅								ポネット／クリスマスに雪はふるの？							
	中野武蔵野ホール	03(3389)3301	5	大往生																阿片戦争				
	自由が丘武蔵野館	03(3717)6341	10	踊る大捜査線　THE MOVIE																		＊モスラ3		
	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	HANA-BI ／不夜城									ガタカ／チェイシング・エイミー											
	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	スウィートヒアアフター	ウェルカム・トゥ・サラエボ								アルテミシア											
	バウスシアター	0422(22)3555	2	始皇帝暗殺																	＊6デイズ／7ナイツ			
	バウスシアター2	0422(22)6631		ダイヤルM																	＊ダーク・シティ			
	大井武蔵野館	03(3771)4934	10		お早よう／早春				東京暮色／秋刀魚の味				娘・妻・母／安城家の舞踊会					青い山脈／続・青い山脈／お嬢さん乾杯			女ごころ／愛情の決算			

Digitized by Google

	劇場名	TEL	招待組数	11/5 木	6 金	7 土	⑧ 日	9 月	10 火	11 水	12 木	13 金	14 土	⑮ 日	16 月	17 火	18 水	19 木	20 金	21 土	㉒ 日	㉓ 月	24 火	25 水
東京	キネカ大森	03(3762)6000	5	踊る大捜査線　THE MOVIE																				
				リディキュール／スペシャリスト		髪結いの亭主／他							パルムの僧院							愛人ジュリエッタ				
						〔香港電影明星世界Ⅲ〕														チャイニーズ・ゴースト・ストーリー・スーシン				
	亀有名画座	03(3601)3350	10	〔上半期ピンク傑作選 vol.4〕			序の舞／東雲楼　女の乱								寒椿／姐御									
横浜	横浜日劇	045(251)1815		ウワサの真相／スクリーム２／ TAXi											気まぐれな狂気／メジャーリーグ３／アルビノアリゲーター									
	シネマ・ジャック	0120(198)009		釣りバカ日誌 9/10		顔		眼の壁				影なき声				波の塔				かげろう絵図				
						点と線				張込み				黒い画集・あるサラリーマン～			黒い画集・ある遺言				黒い画集・寒流			
	シネマ・ベティ	0120(198)009	2	ヒロイン！		バンド・ワゴン／パーフェクト・サークル														ムトゥ　踊るマハラジャ				
	関内アカデミー劇場	045(261)8913		ライブ・フレッシュ																		＊TOKYO EYES		
	関内アカデミー２	045(261)8913		ミステリアス・ピカソ　天才の秘密																				
弘前	弘前マリオン	0172(33)3365	2	普通じゃない		スウィートヒアアフター							グラスハープ　※18は休館							ねじ式				
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530	5	ハムレット		スライディング・ドア														〔シネ・ウインド創立13周年祭〕				
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	踊る大捜査線　THE MOVIE																		＊モスラ３		
静岡	静岡ミラノ１	054(253)8758		マーキュリー・ライジング																				
	静岡ミラノ２	054(253)2713	2	リプレイスメント・キラー																				
	静岡ミラノ３	054(253)2713		ダイヤルM																				
	静岡オリオン座	054(252)3652		プライベート・ライアン									始皇帝暗殺											
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	アンジェリク									裏街の聖者											
	ヘラルドシネプラザ１	052(241)1581		ムーラン																		＊アンツ		
	ヘラルドシネプラザ２	052(241)1581		ザ・グリード															＊リプレイスメント・キラー					
	ヘラルドシネプラザ３	052(241)1581	10	生きない																		＊ TOKYO EYES		
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815		ブギーナイツ																		＊ハーフ・ア・チャンス		
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815				ダロウェイ夫人																		
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5	昼は休映		ヴィゴ							勝手にしやがれ／アタラント号							鬼畜大宴会				
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	学校Ⅲ																				
	今池国際劇場	052(732)1880	5	踊る大捜査線　THE MOVIE																				
大阪	テアトル梅田	06(359)1080	10			CUBE																＊ニルヴァーナ		
						CUBE							ムトゥ　踊るマハラジャ											
	シネ・ヌーヴォ梅田	06(365)0094	5	イノセントワールド																エデンへの道				
	国名小劇	06(213)9229	3	アベンジャーズ									ターニング・ラブ											
	シネ・ヌーヴォ	06(582)1416	5	〔インド映画祭〕		〔J・P・メルヴィル特集〕							ネネットとボニー											
	第七藝術劇場	06(302)2073	5	〔小津安二郎映画祭〕									浮き雲／愛しのタチアナ							ラヴィ・ド・ボエーム／レニングラード・カウボーイスキーゼ～				
近畿	朝日シネマ１	075(255)6760	5	ウィゴ／生きない〔入替制〕									ダロウェイ夫人											
	朝日シネマ２	075(255)6760		パーフェクト～		〔味覚の街・パリ〕							すべての些細な事柄							ザ・ハリウッド				
	祇園会館	075(561)0160	5	〔祇園をどり〕			ロザンナのために／アンナ・カレーニナ																	
	アサヒシネマ１	078(251)9877		キャラクター　孤独な人の肖像																				
	アサヒシネマ２	078(251)9877	5	相続人																				
	アサヒシネマ３	078(251)9877		SF サムライフィクション／恋するシャンソン					〔入替制〕				スウィートヒアアフター											
広島	広島サロンシネマ１	082(241)1781		L.A.コンフィデンシャル																ボンベイ				
	広島サロンシネマ２	082(241)1781	10	ウェルカム・トゥ・サラエボ																犬、走る／キリコの風景／ヒロイン！〔入替制〕				
	広島シネツイン	082(241)7711		ムトゥ		〔アジア映画フェスティバル'98〕							プルガサリ　伝説の大怪獣							北京のふたり				
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10	ニューヨーク・デイドリーム																ねじ式				
	シネサロン・パヴェリア	092(852)5650	10	がんばっていきまっしょい									生きない											

◆次の各劇場へ今号の本誌挟み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●高知松竹●あたご劇場●高知にっかつモデル劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●グランド松竹●ライオンカン●高松東宝（高松キネ旬友の会協力）　【松山】シネ・リエンデ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡松竹ピカデリー●ニュー大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場●西新アカデミー（福岡キネ旬友の会協力）

Digitized by Google

Present

モンタナの風に抱かれて

**ダンガリーシャツ&
オリジナルフォトブック**

モンタナの大自然の美しい映像と美しい物語で、観客をも癒してくれるロバート・レッドフォード監督作の公開を記念して。映画のロゴ入りダンガリー・シャツと、CD－ROM付き、スチール写真満載のオリジナル・フォトブックをセットで。

〈ブエナ　ビスタ提供〉

5名

試写会

のど自慢

**■東京　虎ノ門ホール
■11月17日(水)
■6時開場／6時30分開映**

町にのど自慢がやってくる！あの晴れ舞台に立つまでの3日間に、様々な思いを抱いた人々の熱いドラマが交錯する。室井滋主演、井筒和幸監督。官製ハガキに郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、性別を明記の上、〒104－0061 東京都中央区銀座2－12－18　富士火災シネマ・プレビュー「のど自慢」キネ旬係まで。11月8日消印有効。

30名(15組)

試写会

マイ・フレンド・メモリー

**■東京　九段会館
■11月25日(水)
■6時開場／6時30分開映**

ケタ外れに大柄だが気の弱い少年マックスの隣に引っ越してきた同い年のケヴィンは、頭脳明晰ながら体も小さく、骨の成長が止まる病気に冒されていた。二人は大の親友になるが…。ピーター・チェルソム監督の感動の物語。出演はシャロン・ストーン、キーラン・カルキン。11月15日必着。〈松竹富士提供〉

50名(25組)

ベラ・マフィア［完全版］ファミリーの女たち

WOWOWオリジナル番組テレカ

ヴァネッサ・レッドグレイヴ、ナスターシャ・キンスキーら豪華俳優が競演した、マフィア版「極道の妻たち」を思わせるラブ&バイオレンス・クロニクル。アメリカCBSで昨年放送されて話題となったドラマが、12月5日・6日にWOWOWの「無料放送　いっき40時間」で放送されるのを記念して。

〈WOWOW提供〉

5名

史上最大！アメリカ横断ウルトラクイズのすべて

オリジナルTシャツ

77年に史上最大のクイズとしてスタートした日本テレビの『ウルトラクイズ』。その第1回から第16回まで、数々の名場面をダイジェスト編集したビデオが登場。6年ぶりの復活となる第17回の放送に先駆け、11月11日に発売されるのを記念して（オンエアーは11月22日・23日）。　〈バップ提供〉

3名

ジャッキー・ブラウン

カンゴール・キャップ

タランティーノが伝説の女優パム・グリアーを主役に迎え、エルモア・レナードの小説に挑んだ話題作。11月27日にビデオ・リリースされるのを記念して、劇中サミュエル・L・ジャクソンが被っていたカンゴールのキャップを（商品提供／金剛商会）。

〈アミューズ・ビデオ／松竹富士提供〉

3名

●プレゼントの応募は本誌綴じ込みハガキでどうぞ。11月20日必着です。

編集部だより

■11月下旬号「踊る大捜査線」特集54ページ「第10話　凶弾・雨に消えた刑事の涙」の演出家のお名前を澤田鎌作氏に、また同62ページのスタッフコメント集中の衣裳部の方のお名前を小原雄一郎氏に訂正させていただきます。読者ならびに関係者の皆様にお詫び申し上げます。

出版事業部だより

■現在テアトル新宿にて行われているジェラール・フィリップ映画祭Ⅱ。その開催を記念して小社より、アニエス・ヴァルダが撮ったフィリップの舞台写真集を発売致しました。TNP（国際民衆劇場）時代の貴重な写真満載です。ファンの方、必見の一冊です。

営業部だより

■小社に直接バックナンバー等をお申し込みいただく際、宅配便等で商品を発送する場合もございますので、お送り先のご住所は、番地、ビル（建物）名までお書き下さい。到着遅延防止のため、お手数ですがよろしくお願い致します。

Digitized by Google

キネマ旬報
平成10年11月下旬号
No.1271

発行人
土橋寿男（黒井和男）

編集主幹
植草信和

編集長
青木眞弥

副編集長
関口裕子

編集スタッフ
金田裕美子
前野裕一
志水邦朗

広告部長
柳澤茂喜

広告スタッフ
島崎智朗

表紙デザイン
峰岸孝之

レイアウト
島岡進
梅津由子

発行
株式会社キネマ旬報社
〒112-8502
東京都文京区小石川1-21-14
小石川吉田ビル　2F
TEL　03-3815-7131
FAX　03-3815-7140
振替東京00100-0-182624

印刷・製本
凸版印刷株式会社

ISSN　1342-5412

本誌記事・写真の無断転載を禁じます。

編集後記

■「ガンモ」が面白い。内容を説明するのが困難な作品の好例だけれど、映画の文法はさておいて、歪んだ画面から暴力性とイノセンスが迸ってる！　「鬼畜大宴会」の熊切監督といい、彼ら20代半ばの監督たちは、映像やメディアを摂取し始めた時期といい時間といい、これまでの世代とは感受性も感性も全く違うんだろうなあ、とインタビューそっちのけに写真の切り抜きを熱心にするハーモニー・コリンを前にして嘆息。　**志水**

■「映画は時代を映す鏡」という言葉がありますが、かつて時代を鋭く描いてきた監督たちでさえ過去に題材を求めている現状をみると、近年の日本映画はその力が弱くなっていると言わざるを得ない（そのような映画ばかりになっても面白くないのですが）。そんな中で、山田洋次監督の「学校Ⅲ」は例外で、現代と真っ正面に向き合った力作。作者がこめた（であろう）ラストの田中邦衛のセリフに落涙してしまいました。　**前野**

■多くの人に是非見て欲しい、でもどんな映画かと聞かれると説明できなくてフラストレーションのたまる「トゥルーマン・ショー」。映画が終わった後、物語の登場人物たちがどうなったと思うか、記者会見でピーター・ウィアーが語った言葉が面白くて、是非披露したいのだが、映画を見た人じゃないとその面白さは分からないし、事前には教えられないので、またまたフラストレーションがたまる……。とにかく早く見て下さい。**金田**

■"ポール・スミス"デザインのシンボル揚々と、現在開催中の英国映画祭。この記者会見で聞いた、英国政府の同国映画へのファイナンスとファウンデーションの話が面白かった。宝くじによる映画基金。商業映画に投資し、非商業映画（芸術映画）に補助金を出す。それで商業的利益を上げ、今後はスクリプトや宣伝、配給に助成金を出す計画。プロジェクトへの直接出資ではないが、文化・産業両方に目を配った良い制度だ。　**関口**

■東京国際映画祭がちょうど開催中だが、山根貞男氏の連載でも控え目に触れてある通り、毎年好評のニッポン・シネマ・クラシック部門が「黒澤明監督作品追悼上映」に差し替えとなってしまった。これについては朝日新聞などでもコラムに書かれ（10月4日付）、学芸部の深津さんによるその意見に全く同意するのだが、伊藤大輔・内田吐夢・溝口健二の生誕百年特集など本来予定されていたプログラムが中止されたことは、それが日本映画界の沈滞をことあるごとに嘆いていた黒澤監督に対する本当の追悼となるのかと、大いなる疑問を感じざるを得ない。これは一体何が問題なのだろう。一つにはもちろん、映画の歴史に対する認識や敬意に欠けた映画界全体の問題なのだろうが、日本全体が、自国の映画を、産業としても文化としても歯牙にも掛けないでいるという現状があるのではないかと考えると、暗澹たる気持ちになってくる。

■その東京国際映画祭の協賛企画として英国映画祭も開催されているが、最近の英国映画の元気さ、面白さは言うまでもない。その背景には国が誇りを賭けての映画支援がある。何もそれは英国だけに限らないのは、映画関係者なら誰でも知っていることだ。まあしかし、泣き言をいうわけではない。そういう現状認識の上に立って、さてどういうことが僕たちに出来るのかということを考えていこう。**青木**

次号予告

12月上旬号［No.1272］／11月20日発売／定価820円（税込）

巻頭特集●個性派俳優特集
2大対談：真田広之×役所広司、大杉漣×田口トモロヲ／復活！　ニッポン個性派時代座談会

98年度キネマ旬報ベスト・テン投票リスト＆応募はがき

作品特集●「ビッグ・リボウスキ」「宋家の三姉妹」「ドクター・ドリトル」
企画特集●「アンツ」とCG3Dアニメ特集／ソクーロフ助監督日誌・後編
イラスト●沢田としき　映画と私●泡坂妻夫

Digitized by Google

THE 2nd KINEJUN PRODUCER SEMINAR

第2回キネマ旬報 プロデューサーセミナー

参加者募集のご案内

98年11月29日(日)9：00～18：00

池袋コミュニティ・カレッジ

参加パネラー（予定）

井関　惺「始皇帝暗殺」　一瀬隆重「リング2」　河井真也"Peach"「BEAT」

佐谷秀美「アンラッキーモンキー」　李　鳳宇「のど自慢」

「のど自慢」鑑賞／インディペンデント作品「のど自慢」にみる、大映画興行会社との関係／国際合作プロデュースの実際／映画を中心としたソフトの企画開発／参加者企画のデベロッティング／交流パーティ

キネマ旬報社では、プロデューサーをめざす方々の為に、「第2回キネマ旬報・プロデューサー・セミナー」を開講します。このセミナーは、内外で活躍するプロデューサーを講師に招き、映画製作の現状、ケース・スタディの具体例を解説すると共に、参加者の企画の検討も行うなど、新しいタイプのセミナーです。

（開講概要）
主催：キネマ旬報社　協力：池袋コミュニティ・カレッジ（西武百貨店）
会場：池袋コミュニティ・カレッジ（上映のみ池袋地区映画館）
受講料：15,000円（税別）［交流パーティは別途料金］
申し込み先：キネマ旬報社映像事業部　〒112-8502（弊社専用郵便番号）
TEL03-3815-7143　FAX03-3815-7140
申し込み受付期間：98年10月5日（月）～98年11月20日（金）
受講料に含まれる内容：セミナー受講、「のど自慢」鑑賞（交流パーティは別途料金）
交流パーティ：参加希望の方は下記の申込表にご記入ください。参加費は3500円で受講料振り込み時にご一緒にお送り下さい。

（セミナー・プログラム）
前説・試写「のど自慢」（映画館）
セミナー・プロデュース企画意図（以下、池袋コミュニティ・カレッジ）
インディペンデント作品「のど自慢」にみる、大映画興行会社との関係
パネラー 李 鳳宇
国際合作プロデュースの実際 パネラー 井関惺
映画を中心としたソフトの企画開発パネラー 河井真也
パネルディスカッション
これからのプロデューサーに求められる能力とは
河井真也、一瀬隆重、佐谷秀美
参加者企画のデベロッティング
河井真也、一瀬隆重、佐谷秀美
交流パーティ

参加申し込みの方は、下の申込用紙に必要事項をご記入の上、FAX又は郵便にて事務局までお送り下さい。おり返し、受付確認のご連絡をいたします。ご不明な点がありましたら、事務局までご連絡ください。なお、定員になり次第、締め切りとさせて戴きますのでご了承ください。
お問い合わせ先：キネマ旬報社プロデューサー・セミナー事務局
TEL 03-3815-7143　FAX 03-3815-7140
〒112-8502 東京都文京区小石川1-21-11小石川古田ビル

フリガナ 氏 名		年齢	
住所(郵送先)		交流パーティ	参加　不参加
会社・学校名		参加希望人数	
電話No.		FAXNo.	

Digitized by Google

フィルムメーカーズ①『リュック・ベッソン』／リュック・ベッソン完全データ他

●1238・11月上旬号　☆820円
東京日和／萌の朱雀／バウンス ko GALS／黒い十人の女／「ラヂオの時間」撮影現場レポート②

●1239・臨時増刊　☆2200円
〈中華電影完全データブック〉
中国語圏映画全封切リスト／中華電影人名録

●1240・11月下旬号　☆820円
ラヂオの時間／ＮＹ検事局／喝采の扉［虎度門］／時をかける少女／中国映画祭97／インタビュー：北野武

●1242・12月下旬号　☆820円
セブン・イヤーズ・イン・チベット／スリング・ブレイド／阿片戦争／インタビュー：松田美由紀・大林宣彦

●1243・臨時増刊　☆1600円
〈天晴れ！時代劇〉
萬屋錦之介メモワール／勝新太郎メモワール／時代劇を生きた人々

1998

●1244・1月上旬号　☆860円
新春中華圏映画大特集／ＣＵＲＥキュア／ピースメーカー／北京原人ーWho are you？／インタビュー：ブラッド・ピット

●1245・1月下旬号　☆820円
ＨＡＮＡ－ＢＩ／桜桃の味／ラブ&ポップ／グリッドロック／城戸賞受賞シナリオ「砂の蝶」／インタビュー：吉岡秀隆

●1246・2月上旬号　☆820円
フェイス／オフ／ハムレット：映画とシェイクスピア／Ｇ．Ｉ．ジェーン／コップランド

●1247・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ②『北野武』
対談：北野武×淀川長治／北野映画大事典他

●1248・2月下旬号〈決算特別号〉☆1300円
97年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1249・3月上旬号　☆820円
映画の用心棒　追悼：三船敏郎／「ユキエ」とこわれゆく女たち／アミスタッド／台湾映画祭／PERFECT BLUE

●1250・3月下旬号　☆820円
俳優が監督するとき／追悼　伊丹十三の記録／グッド・ウィル・ハンティング旅立ち／銀河鉄道９９９エターナルファンタジー／Ｆ

●1251・4月上旬号　☆860円
エイリアン４／オスカー・ワイルド／ドーベルマン／エンド・オブ・バイオレンス／シーズ・ソー・ラブリー

●1252・4月下旬号　☆820円
ジャッキー・ブラウン／ＳＡＤＡ／恋愛小説家／マッド・シティ／上海グランド／ジャンク・フード／ロッテルダム国際映画祭

●1253・増刊　☆4400円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1998〉
'97年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果

●1254・5月上旬号　☆820円
第70回アカデミー賞のすべて／スターシップ・トゥルーパーズ／ディアボロス　悪魔の扉／連載対談再開：和田誠×三谷幸喜

●1255・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ③『クエンティン・タランティーノ』／タランティーノ大事典他

●1256・5月下旬号　☆820円
ブルース・ブラザース2000／バタフライ・キス／友情Friend Ship／絆／ソウル・フード

●1257・6月上旬号　☆820円
シネ・チャイナ・ビッグバン／バリー・レヴィンソン研究／「プライド　運命の瞬間」をめぐって／ボクサー／ラブ・レター

●1258・6月下旬号　☆820円
レインメーカー／中国の鳥人／大いなる遺産／真夜中のサバナ／ツイン・タウン／ライアー／スペイン映画の魅力

●1259・7月上旬号　☆860円
普通じゃない／インド映画特集／Ｌ．Ａ．コンフィデンシャル／ディープ・インパクト／愚か者　傷だらけの天使／愛の破片

●1260・7月下旬号　☆820円
GODZILLA（ゴジラ）／ブルガサリ／ねじ式／アンラッキ・モンキー／キリコの風景／追悼：フランク・シナトラ、前田陽一

●1261・8月上旬号　☆820円
「仮面の男」と新世紀映画の旗手《俳優》／ニュー・エイジ・ホラー再考／ウェルカム・トゥ・サラエボ／ディカプリオ・ピンナップ

●1260・臨時増刊　☆2100円
〈黒澤明と木下恵介〉
特別対談：山田洋次×佐藤忠男／初公開未映画化シナリオ「どら平太」他

●1263・8月下旬号　☆860円
ガンダム20年あるいはアニメーション1998／踊る大捜査線撮影現場レポート①／TAXi／ＳＦ　サムライ・フィクション

●1264・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ④『ジェームズ・キャメロン』／ジェームズ・キャメロン完全データ

●1265・9月上旬号　☆820円
ボーダーレス・アクターズ：金城武、チョウ・ユンファ他／リメイク映画を愉しむ方法／イヤー・オブ・ザ・ホース／踊る大捜査線②

●1266・9月下旬号　☆820円
『ＥＲ』と外国ＴＶ映画の現在／現代ピンク映画考：ブギーナイツ、夢翔る人　色情男女／生きない／踊る大捜査線③

●1267・10月上旬号　☆820円
プライベート・ライアン／愛を乞うひと／従妹ベット／がんばっていきまっしょい／ＤＶＤ徹底検証／踊る大捜査線④

●1268・10月下旬号　☆860円
追悼　黒澤明／フラワーズ・オブ・シャンハイ／犬、走る　DOG RACE／踊る大捜査線⑤

●1269・11月上旬号　☆820円
踊る大捜査線　THE MOVIE／モンタナの風に抱かれて／リプレイスメント・キラー／カンゾー先生／学校Ⅲ／ハーフ・ア・チャンス

■Ｘ－ファイル

●1266・'98・9月下旬号　☆820円
Ｘ－ファイルを楽しむために知っておきたい５つの事柄

■始皇帝暗殺

●1254・'98・5月上旬号　☆820円
「始皇帝暗殺」製作ルポ①

●1257・'98・6月上旬号　☆820円
「始皇帝暗殺」製作ルポ②

●1259・'98・7月上旬号　☆860円
「始皇帝暗殺」製作ルポ③

■落下する夕方

●1251・'98・4月上旬号　☆860円
撮影現場訪問

■本欄掲載以外の号の内容リストもございますので、御希望の方は100円切手を同封の上お申し込み下さい。
■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または本誌挟み込みの郵便振替用紙にて、御希望の号数、御住所、御氏名を明記のうえ、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店の映画書コーナーにてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

札幌市　パルコＢＣ冨貴堂
東京都　八重洲ＢＣ本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・三省堂書店渋谷店・大盛堂書店・パルコＢＣ渋谷店あおい書店六本木店・ブックストア談原宿店・芳林堂書店池袋本店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋本店・紀伊國屋新宿南店・アイブックス成城店・パルコＢＣ吉祥寺店・阪急ブックファースト渋谷店・シネシティ
横浜市　有隣堂書店横浜東口ルミネ店・有隣堂書店イセザキ本店
名古屋　ちくさ正文館本店・パルコＢＣ名古屋・ヴィレッジヴァンガード生活倉庫店
京都市　駸々堂京宝店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ
金沢市　ＧＲＯＯＶＥ！金沢本店
神戸市　ジュンク堂書店サンパル店・駸々堂神戸三宮店
広島市　パルコＢＣ広島店
福岡市　リブロ福岡店

Digitized by Google

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価　送料は各120円
2／下、臨時増刊は160円

1986

●942・8月下旬号　☆735円
松竹創立90周年記念号

1989

●1000・1月上旬号　☆840円
1000号記念／日本映画史上ベスト・テン
●1001・1月下旬号　☆840円
1000号記念／外国映画史上ベスト・テン

1994

●1125・2月下旬号〈決算特別号〉☆1223円
93年度ベスト・テン／公開作品リスト
●1136・臨時増刊　☆1529円
〈小津と語る〉シナリオ「瓦版かちかち山」「お茶漬の味」「月は上りぬ」「青春放課後」
●1138・8月上旬号　☆836円
平成狸合戦ぽんぽこ・スタジオ・ジブリ8年の歩み／80年代と90年代のゴダール／青いパパイヤの香り
●1140・9月上旬号　☆836円
トゥルーライズ／ウディ・アレン研究／北朝鮮映画事情
●1142・10月上旬号　☆866円
四十七人の刺客／二大監督研究・ジャン・ルノワールとロバート・オルトマン
●1149・12月上旬号　☆836円
トリュフォー特集／今そこにある危機／オリーブの林をぬけて
●1150・12月下旬号　☆836円
河童／酔拳2／34丁目の奇跡

1995

●1152・1月下旬号　☆836円
フォレスト・ガンプ／東京兄妹／東京デラックス
●1154・2月下旬号　☆1325円
94年度ベスト・テン／公開作品リスト
●1157・4月上旬号　☆866円
白い馬／クイズ・ショウ／中国映画の全貌
●1164・7月上旬号　☆866円
ダイ・ハード3／学校の怪談＆トイレの花子さん／ポール・ニューマン特集／レニ
●1166・臨時増刊　☆1529円
〈宮崎駿・高畑勲とスタジオジブリのアニメーションたち〉押井守語る／全作品解説
●1167・8月上旬号　☆836円
ウォーターワールド／ポカホンタス／レッド・ブロンクス／エドワード・ヤンの恋愛時代
●1168・臨時増刊　☆1529円
〈戦争映画大作戦〉史上最大の作戦／コンバット／想い出の戦争映画を語る
●1170・9月上旬号　☆836円
マディソン郡の橋／野球映画特集／幻のオーソン・ウェルズ映画
●1173・臨時増刊　☆1631円
〈世界映画オールタイムベストテン〉
映画生誕100年記念特別号①
●1174・10月下旬号　☆836円
クリムゾン・タイド／スモーク／東京フィスト／眠れる美女
●1176・臨時増刊　☆1631円
〈日本映画オールタイムベストテン〉
映画生誕100年記念特別号②
●1178・12月上旬号　☆836円
恋愛映画大特集／特別企画リュミエールとメリエス

1996

●1184・2月下旬号〈決算特別号〉☆1325円
95年度ベスト・テン／公開作品リスト
●1185・3月上旬号　☆836円
ニクソン／ジェラール・フィリップ映画祭／ＫＹＯＫＯ／愛と哀しみの邦題
●1186・3月下旬号　☆836円
ブロークン・アロー／トイ・ストーリー／ダニエル・シュミット監督研究
●1190・増刊　☆4282円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1996〉
'95年公開映画全記録／米国・日本配収ベストテン／映画祭受賞結果
●1192・5月下旬号　☆866円
スクリーンを彩る若手女優たち／アンカーウーマン／ピクチャーブライド／ルネ・クレマン、クシシュトフ・キェシロフスキ追悼
●1193・6月下旬号　☆866円
スクリーンで闘う若手男優たち／いつか晴れた日に／必殺！主水死す／白い嵐／和田誠×三谷幸喜／林海象×ジェームス小野田
●1194・6月下旬号　☆836円
フロム・ダスク・ティル・ドーン／映画業界就職ガイド／ゲット・ショーティ／女人，四十。／カンヌ国際映画祭レポート
●1199・8月下旬号　☆866円
上半期映画決算／イレイザー／シクロ／ジャパニーズ・ホラー／パトリス・ルコント
●1200・9月上旬号　☆836円
ＡＣＲＩ／愛のめぐりあい／栄光と狂気／八つ墓村・撮影現場豊川悦司／石井竜也監督インタビュー／日本映画プロデューサーは今
●1201・9月下旬号　☆866円
追悼・瀧美清／ウォン・カーウァイ監督大研究／リービング・ラスベガス
●1202・10月上旬号　☆836円
スワロウテイル／ザ・ロック／ティン・カップ／訣別の街／恋の力学／東京国際映画祭
●1205・11月上旬号　☆866円
八つ墓村／豊川悦司ピンナップ／関西映画ガイド／クロッシング・ガード／ザ・ファン
●1206・11月下旬号　☆836円
インデペンデンス・デイ／ファーゴ／ルイ・マルの軌跡／パリのレストラン／弾丸ランナー／アトランタ・ブギ
●1207・12月上旬号　☆836円
日本映画は越境する／クリスマス黙示録／クライング・フリーマン／追悼　藤子・Ｆ・不二雄／天海祐希インタビュー／ブラック・ジャック
●1208・臨時増刊　☆1020円
〈ＳＵＮＤＡＮＣＥ／レッドフォードの映画に賭ける夢〉サンダンス・フィルム・フェスティバル大特集
●1209・増刊　☆3262円◇送料380円
〈アニメ・データ・ブック1996〉テレビ・オリジナルビデオ・映画の1995年のアニメーションのすべてを網羅
●1210・12月下旬号　☆836円
アル・パチーノのリチャードを探して／シェイクスピア・ブーム／追悼　小林正樹／誘惑のアフロディーテ

1997

●1211・1月上旬号　☆866円
虹をつかむ男／デイライト／花の影／秘密と嘘／竹中直人／アンナ・パキン
●1213・2月上旬号　☆836円
マイ・ルーム／エビータ／クラッシュ／ある清掃人の肖像
●1214・2月下旬号　決算特別号　☆1325円
96年度ベスト・テン／公開作品リスト
●1215・増刊　☆2450円◇送料380円
〈戦後キネマ旬報ベスト・テン全史〉
1946年度～1996年度まで収録
●1216・3月上旬号　☆836円
マーズ・アタック！／ジャック／聖週間／ユメノ銀河／追悼・マルチェロ・マストロヤンニ
●1218・3月下旬号　☆836円
新世紀エヴァンゲリオン劇場版　シト新生／ジャン・ルノワール映画祭／シャイン
●1219・4月上旬号　☆866円
ロミオ＆ジュリエット／スリーパーズ／そして僕は恋をする／太陽の少年
●1221・5月上旬号　☆850円
傷だらけの天使／ゴールデン・ウィーク映画ガイド／第69回アカデミー賞／田口トモロヲ隔号新連載開始／香取慎吾インタビュー
●1222・増刊　☆4300円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1997〉
'96年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果
●1223・5月下旬号　☆820円
スター・ウォーズ　ルネッサンス／失楽園／八日目／瀬戸内ムーンライト・セレナーデ
●1224・6月上旬号　☆820円
ザ・エージェント／目撃／「うなぎ」と今村昌平監督／追悼・杉村春子・田中友幸・田村孟・田山力哉
●1225・6月下旬号　☆820円
誘拐／ピーター・グリーナウェイの枕草子／東京夜曲／蔦屋錦之介・追悼と再発見
●1227・臨時増刊　☆1800円
〈テレビの黄金伝説　外国テレビドラマの50年〉ジャンル別年代史／ＴＶ映画人物事典
●1228・7月下旬号　☆820円
20世紀ノスタルジア／ロスト・ワールド／ラリー・フリント／追悼　キン・フー③／インタビュー：ブラッド・レンフロ／西田尚美
●1229・8月上旬号　☆820円
アニメーション1997・夏：もののけ姫、ジャングル大帝他／作家研究：マイケル・チミノ学校の怪談3／カンヌ映画祭レポート
●1230・臨時増刊　☆1800円
〈ブルース・リー・リターンズ・龍人伝説〉
「燃えよドラゴン」シナリオ完全収録／インタビュー：チャウ・シンチー、ドニー・イェン他／対談・平岡正明×内藤誠
●1231・8月下旬号　☆860円
上半期映画界決算／スピード2／セドリック・クラピッシュ監督研究／追悼：役者魂　勝新太郎／追悼・苦見有弘
●1232・9月上旬号　☆820円
フィフス・エレメント／インタビュー岸谷五朗／追悼特集　アメリカの心と魂：ジェームズ・スチュアートとロバート・ミッチャム
●1233・臨時増刊　☆1600円
〈宮崎駿と「もののけ姫」とスタジオジブリ〉対談：宮崎駿×佐藤忠男／宮崎アニメのヒロインの系譜／スタッフインタビュー他
●1234・9月下旬号　☆820円
ブエノスアイレス／世界中がアイ・ラヴ・ユー／私たちが好きだったこと／愛する
●1235・10月上旬号　☆860円
Lie lie Lie ／「マルタイの女」と伊丹十三監督／ウォン・カーウァイ監督インタビュー
●1236・10月下旬号　☆820円
「フェイク」＋選ばれし男たち／ボルケーノ／マーティン・シャーマンの世界／三谷幸喜監督作「ラヂオの時間」撮影現場レポート①
●1237・増刊　☆1600円◇送料380円

Digitized by Google

KINEMA JUNPO CINEMA DATA BASE

CD-ROM

キネマ旬報　シネマデータベース シリーズ

Macintosh & Windows

アメリカ篇 AMERICA

- ●約11,000タイトル収録
- ●動画9タイトル収録
- ●スチル写真500枚収録
- ●音楽10曲収録

各8925円（税込）

アジア・ヨーロッパ篇 ASIA&EUROPE

- ●約6,000タイトル収録
- ●動画10タイトル収録
- ●スチル写真約1000枚収録
- ●音楽10曲収録

多彩な検索機能で様々な角度から映画が探せます！

お求めの際はパソコンショップまたは、小社までご注文ください。
基本的に書店では取り扱っておりませんのでご注意ください。
小社にご注文の際は、本誌挟み込み振替用紙、または現金書留で、住所・氏名・希望機種（MacまたはWin）を明記の上、税込金額8925円を同封のうえ、下記までお申込ください。

株式会社キネマ旬報社　営業部
〒112　東京都文京区小石川1－21－14　小石川吉田ビル
TEL 03-3815-7131 ／ FAX 03-3815-7139

●動作環境

【Macintosh版】
- ●CPU：68030　16MHz以上またはPower PC
- ●メモリ：5MB以上の空きメモリ
- ●ディスプレイ：640×480ドットで256色表示以上（3200色以上推奨）
- ●ハードディスク：5MB以上の空き容量（10MB以上推奨）
- ●CD－ROM：倍速ドライブ以上
- ●OS：漢字Talk7.1以上

【Windows版】
- ●CPU：i486TMS×33MHz以上（66MHz以上推奨）
- ●メモリ：Windows3.1の場合　7.6MB以上（9.6MB以上推奨）
- ●メモリ：Windows95の場合　12MB以上（16MB以上推奨）
- ●グラフィック：640×480ドットで256色表示以上（3200色以上推奨）
- ●サウンド：PCM
- ●ハードディスク：5MB以上の空き容量（10MB以上推奨）
- ●CD－ROM：倍速ドライブ以上
- ●OS：Microsoft Windows 95 3.1（Windows95オートプレイ対応）

資料提供・製作協力：（株）キネマ旬報社　製作・開発・発売：NECインターチャネル（株）

Digitized by Google

ブルース・ウィリスvsリチャード・ギア！全米NO.1サスペンス・アクション

史上最高の暗殺ゲーム。

BRUCE WILLIS

RICHARD GERE

Jackal

ジャッカル

丸紅・東宝東和ANDミューチュアル・フィルム・カンパニーANDユニヴァーサル映画　提供／アルファビルプロダクション
マイケル・ケイトン=ジョーンズフィルム　"THE JACKAL"　シドニー・ポワチエ　ダイアン・ヴェノーラ　音楽／カーター・バーウェル　サントラ盤／ユニヴァーサル ビクター　衣装／アルバート・ウォルスキー　編集／ジム・クラーク
プロダクション・デザイナーマイケル・ホワイト　撮影／カール・ウォルター・リンデンロウブ、B.V.H　製作総指揮／テレンス・クレッグ　ハル・リーバーマン　ゲーリー・レビンソン　マーク・ゴードン
原案脚本／チャック・ファーナー　製作／ジェイムス・ジャックス　ショーン・ダニエル　マイケル・ケイトン=ジョーンズ　ケビン・ジャール
監督／マイケル・ケイトン=ジョーンズ

「ジャッカル」ビデオリリース記念クイズ・キャンペーン

伝説の暗殺者"ジャッカル"を追え！抽選で3組6名様を"ジャッカル"始動の地／カナダを巡る旅にご招待！

A賞 カナダ周遊の旅／3組6名様
B賞「ジャッカル」オリジナルTシャツ／100名様
C賞「ジャッカル」テレホンカード／100名様

問題●ブルース・ウィリス／リチャード・ギア主演
「ジャッカル」のビデオレンタル開始は　月　日です。

応募要領●クイズの答え（ひらがな数字2つ）・住所（〒）・氏名・年齢・電話番号
ご希望の賞品（A.B.C）いずれかをご記入の上、下記までご応募下さい。

〒104-0061
東京都中央区銀座2-6-4プレイガイドビル 東和ビデオ
「ジャッカル」キャンペーン係

締切●1999年12月25日（当日消印有効）
当選者は12月末頃の上旬発表を決定、入賞については直接ご連絡致します。
B賞／C賞の発表は賞品の発送をもって代えさせて頂きます。
発行責任●1999年2月を予定（都合により変更になる場合がございます）

発行元●（株）電象交通社、新東宝映画、東和ビデオ　東和大阪営業所ヘ1-2-18（型・日本放送）東和会館

11/13 RENTA RELEAS

TH4871R（字幕スーパー版）TH7070R（日本語吹き
カラー・125分／スタンダード／HiFiステレオ／ドル
©1997 Mandalay・TOHO-T

TOHO VIDEO

Digitized by Google

あの激動の時代——愛を信じ、生きた、3人の女性の大河ロマン…

- ベルリン国際映画祭/正式招待作品
- トロント国際映画祭/正式招待作品
- 東京国際映画祭女性映画週間/参加作品
- あいち国際女性映画祭/参加作品
- 香港アカデミー 金像賞6部門受賞
- 中国 金鶏賞/特別賞受賞/百花賞受賞
- 台湾 金馬賞3部門受賞

中国に伝説となった三人の姉妹がいた。
ひとりは金を愛し、
ひとりは権力を愛し、
ひとりは国を愛した——

「誰かがあなたを愛してる」の
メイベル・チャン監督作品

東宝東和創立70周年記念作品
岩波ホール創立30周年記念作品

宋家の三姉妹

THE SOONG SISTERS

マギー・チャン　ミシェール・ヨー　ヴィヴィアン・ウー

ウィンストン・チャオ　ウー・シングォ　ニウ・チェンホワ　エレイン・チン　特別出演:チャン・ウェン

音楽●喜多郎&ランディ・ミラー　衣装●ワダエミ　脚本●アレックス・ロー　製作総指揮●レイモンド・チョウ　製作●ウー・シーユエン　製作補●アレックス・ロー

ゴールデン・ハーベスト/ポニーキャニオン/フジテレビジョン製作　ポニーキャニオン/フジテレビジョン提供　東宝東和配給

特別協賛　日本航空　©1997 MORE TEAM INTERNATIONAL LTD.

11月28日(金)より 岩波ホールにてロードショー ▶ひきつづき

名古屋 ゴールド劇場　大阪 パラダイスシネマ　福岡 TNCシネサロン パヴェリア　京都 朝日シネマ　札幌 三越名画劇場

雑誌 20723-11/15 Printed in Japan　定価820円　本体781円　T1120723110820

Digitized by Google

平成10年12月1日発行 第1272号（月2回1日15日発行）通巻2086号 昭和25年11月25日第3種郵便物認可

保存版：1999年をリードする映画スター特集第1弾［日本映画編］

キネマ旬報

KINEJUN

12 1998 NO.1272 12月上旬号

EAC
FEB 12 1999
HOOVER

新個性派時代

特別対談2本立 役所広司×真田広之／大杉 漣×田口トモロヲ
インタビュー 竹中直人／西村雅彦／寺島 進／真野きりな ほか

ニッポン・ジャーニー

［巻頭特別企画］がんばれ！日本映画

ビッグ・リボウスキ／宋家の三姉妹
ドクター・ドリトル／アンツ

イラストレーターのいる映画館：沢田としき

連載対談 和田 誠×三谷幸喜「これもまた別の話」：「タイタニック」（前編）

あなたの1票で決まる！ 98年度読者が選ぶベスト・テン投票要項発表

Digitized by Google

Pioneer

RELEASE INFORMATION 12

1998 DECEMBER

スピルバーグ永遠の名作をTHX&DDによる 決定版ディレクターズ・カットで!
本編より長い特典映像が、今、作品のすべてを明らかに!

未知との遭遇 コレクターズ・エディション <THX&DD／ワイド>

11/25発売 ¥14,000 (税抜)

PILF-7384 <3枚組6面>
●予告編付 ●チャプター付

DOLBY DIGITAL THX

<発売元:ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント>
©1977,1980 Columbia Pictures Industries,Inc. All Rights Reserved.

収録内容
1. 決定版ディレクターズ・カット本編(137分)
2. 高画質THXニューマスター(本編のみ)
3. ドルビーデジタル音声(本編のみ)
4. 関係者へのインタビューによるメイキング
5. オリジナル予告編
6. PR用短編 "Watch the Skies"
7. 削除されたシーン
8. 静止画(ストーリーボード、撮影スナップ、資材、その他)

ダン・エイクロイド　ジョン・グッドマン

ブルース・ブラザース2000 <DD／ワイド>

ヤツらが帰ってきた!
超豪華ミュージシャンも続々登場!

12/10発売 特別価格 ¥4,700 (税抜)

DOLBY DIGITAL

PILF-2672
●予告編付 ●チャプター付

「逃亡者」から5年、今度はジェラード連邦保安官が主役!
トミー・リー・ジョーンズ　ウェスリー・スナイプス　ロバート・ダウニーJr.

逃亡者 <DD／ワイド>

12/1発売 特別価格 ¥4,700 (税抜)

PILF-2650
●予告編付●チャプター付

DOLBY DIGITAL

Design©1998 Warner Home Video.
Artwork & Photography©1998 Warner Bros. All Rights Reserved.

「勝手にしやがれ」

ヌーヴェル・ヴァーグの金字塔「勝手にしやがれ」ほか、
ゴダール初期の傑作をBOXで!

J=L・ゴダール 傑作選 Vol.1

収録内容
1.勝手にしやがれ('59)
2. 女は女である('61)
3. 女と男のいる舗道('62)

12/10発売 ¥18,000 (税抜)

PILF-7379 <3枚組6面>
<発売元:パノラマ・コミュニケーションズ> ■Vol.2 '99年2月発売予定

初回限定生産

「生まれてはみたけれど」

日本映画ギャラリー

世界に誇る巨匠・小津の戦前
松竹作品をLD-BOX2巻に網羅

小津 安二郎 戦前作品集1

収録内容
1.若き日('29) 2.大学は出たけれど('29)
3. 朗らかに歩め('30) 4. 落第はしたけれど('30)
5.その夜の妻('30) 6.淑女と髯('31)
7.東京の合唱('31) 8.生まれてはみたけれど('32)
9.青春の夢いまいづこ('32)
10.東京の女('33)

12/10発売 ¥45,000 (税抜)

初回限定生産

PILD-1163 <9枚組18面> ■第2巻 来春発売予定

LDIBOX先行ご案内

12/22 発売

◆ディレクターズカット 燃えよドラゴン コレクターズボックス 2500組限定生産
PILF-2656 ¥12,000 (税抜)

◆松本清張・推理の世界1 PILD-1156 ¥20,000 (税抜)
収録作品:「顔」(57)「眼の壁」(58)「張込み」(58)「波の塔」(60)
初回限定生産

◆鈴木清順 日活傑作選 [任侠篇] PILD-1151 ¥20,000 (税抜)
初回限定生産

◆ミステリー・ゾーン傑作選 VOL.6 PILF-2669 ¥15,000 (税抜)
初回限定生産

◆奥様は魔女LDボックス第3集 PILF-7372 ¥22,000 (税抜)
初回限定生産

12/23リリース ◆スクリーム デラックス版<DD／ワイド>
PILF-2674 ¥7,800 (税抜)

革命的3次元音響を誇るDTS-LDの魅力を、
余すところなく紹介したチェック・ディスクがついに登場!

DIGITAL dts SURROUND

このマークは、Digital Theater System, Inc.の登録商標です。

DTS EXPERIENCE

PILW-1258 ●DTS視聴システム調整解説書付
●チャプター付

収録内容
1. DTSテクノロジー紹介
2. DTS視聴システム調整用信号
3. 映像調整用信号
4. DTSサラウンド体験版

12/18発売 ¥6,700 (税抜)

総合監修:麻倉怜士
制作協力:Digital Theater System, Inc.

⚠注意 DTSサラウンドを体験するには、DTSに対応したプレーヤーとDTSデコーダーが必要です。

11月25日発売!各¥6,800(税抜)

ロスト・ワールド JURASSIC PARK <THX&DTS／ワイド> PILF-2635

フラバー <DTS／ワイド> PILF-2666

◆キャスバー<THX & DTS／ワイド> PILF-2637
◆フェノミナン<THX & DTS／ワイド> PILF-2665
◆シャドー<DTS／ワイド> PILF-2638
◆さまよう魂たち<DTS／ワイド> PILF-2676

11/20 ◆タイタニックの最期 PILF-2675 ¥4,700 (税抜)

12/1 ◆真夜中のサバナ<DD／ワイド> PILF-2649 ¥4,700 (税抜) 特別価格

11/25発売
◆リスボン物語<ワイド> PILF-2594 ¥4,700 (税抜)
◆ウェス・クレイヴンズ ウィッシュマスター<ワイド> PILF-2653 ¥4,700 (税抜)
◆ナッシング・トゥ・ルーズ<DD／ワイド> PILF-2664 ¥4,700 (税抜)
◆キューブリック・コレクション 現金(げんなま)に体を張れ PILF-2660 ¥4,700 (税抜) 12/22発売
◆キューブリック・コレクション 突撃 PILF-2661 ¥4,700 (税抜) 12/22発売
◆キューブリック・コレクション 非情の罠 PILF-2662 ¥4,700 (税抜) 12/22発売
◆ブルガサリ／伝説の大怪獣 PILF-2673 ¥4,700 (税抜)
◆美女と野獣／ベルの素敵なプレゼント 二カ国語版 PILA-3016 ¥4,700 (税抜)

12/10発売
◆パーフェクトブルー スペシャルコレクション PILA-9002 ¥18,000 (税抜) 12/22発売
◆ザ・ワイルド<DD／ワイド> PILF-2663 ¥4,700 (税抜)
◆ツイン・タウン<ワイド> PILF-2667 ¥4,700 (税抜)
◆ナポレオン・ソロ傑作選VOL.2 PILF-2587 ¥22,000 (税抜) 初回限定生産
◆バイリンガル・コレクション スター・トレック劇場版 I~VI PILF-2439 ¥35,000 (税抜)
◆ジャッキー・チェン初期傑作選 VOL.2 PILF-7378 ¥20,000 (税抜)
◆小林 旭 "渡り鳥"全集2 PILD-1155 ¥25,000 (税抜) 初回限定生産
◆ミレニアム セカンドBOX VOL.3 PILF-2598 ¥18,000 (税抜) 初回限定生産

DVD VIDEO

11/25発売

◆セブン・イヤーズ・イン・チベット PIBF-7012 ¥5,300 (税抜)
◆太陽と月に背いて PIBF-7011 ¥4,700 (税抜)
◆ダンデズ・ピーク PIBF-1031 ¥3,800 (税抜)
◆サドン・デス PIBF-1039 ¥3,800 (税抜)
◆ハード・ターゲット PIBF-1047 ¥3,800 (税抜)
◆シー・オブ・ラブ PIBF-1052 ¥3,800 (税抜)
●ミッドナイト・ラン PIBF-1069 ¥3,800 (税抜)
●危険な動物たち PIBF-1071 ¥3,800 (税抜)
●バード・オン・ワイヤー PIBF-1074 ¥3,800 (税抜)
●ペートーベン2 PIBF-1078 ¥3,800 (税抜)
●ハウスシッター 結婚願望 PIBF-1079 ¥3,800 (税抜)
●オレゴン魂 PIBF-1080 ¥3,800 (税抜)
●大地震 PIBF-1081 ¥3,800 (税抜)
●数と戯/パルの素敵なプレゼント PIBA-3003 ¥4,700 (税抜)
●ふしぎの国のアリス PIBA-3004 ¥4,700 (税抜)
●ダークマン PIBF-1058 ¥3,800 (税抜)
●荒野のストレンジャー PIBF-1055 ¥3,800 (税抜)
●スパルタカス PIBF-1054 ¥3,800 (税抜)
●カリートの道 PIBF-1048 ¥3,800 (税抜)
●スティング PIBF-1046 ¥3,800 (税抜)
●ツインズ PIBF-1045 ¥3,800 (税抜)
●スニーカーズ PIBF-1043 ¥3,800 (税抜)

12/22発売

◆パーフェクト ブルー PIBA-3001 ¥7,800 (税抜)

※●印は発売延期です。

「タイタニックLD発売記念」クイズ実施中!
クイズに正解した方の中から10名様にパイオニアLD/DVDコンパチブルプレーヤーをプレゼント!
詳しくは「New Disc FLASH '99年1月号」及び、インターネットホームページをご覧ください。

このマークはレーザーディスクの統一マーク。●ドルビーデジタル及び DD は、ドルビーラボラトリーズライセンシングコーポレーションの商標です。

MOVIE・LD・DVD インターネット・ホームページ http://www.pioneer.co.jp/pldc/movie-LD

■当社商品のお問い合わせは、お客様相談センターTEL.03(5721)9876まで。 パイオニアLDC株式会社

Digitized by Google

LaserDisc PLUS DVD VIDEO NEW

あの永遠の旅を、あなたのものに。

TITANIC

LaserDisc

絶賛発売中
レーザーディスク
<THX&DD/ワイド>
¥7,800

タイタニック
TITANIC

アカデミー賞®11部門
最優秀作品賞含む
受賞

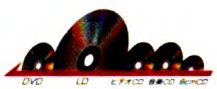
PILF-2580 ●チャプター付

THX DOLBY DIGITAL CC

*Twentieth Century Fox ©1997 Twentieth Century Fox and Paramount Pictures. All Rights Reserved. Academy Awards® and Oscar® are the registered trademarks and service marks of the Academy of Motion Picture Arts and Sciences. Academy Awards® Year:1997.
©1998 Twentieth Century Fox Home Entertainment, Inc. All Rights Reserved. "Twentieth Century Fox", "Fox" and their associated logos are the property of Twentieth Century Fox Film Corporation and are used under license.

Pioneer

DVDもLDも、高画質&高音質で楽しめる実力派、デビュー。



DVD/LDコンパチブルプレーヤー

DVL-919 新製品

標準価格 115,000円（税別）

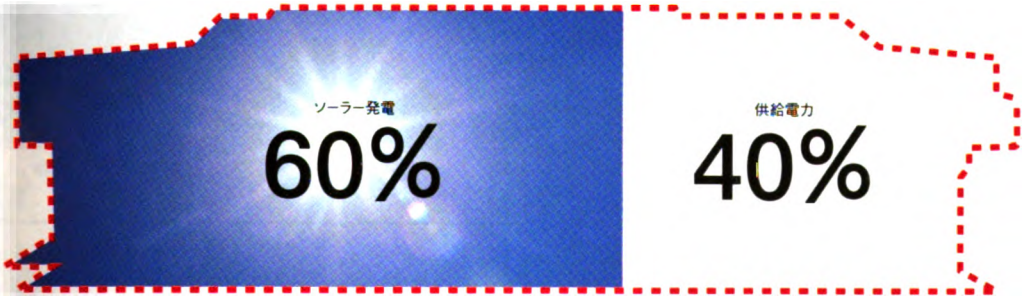
自照式ジョグシャトル付GUIコントロールリモコン付属

- DVDの高精細画像を忠実かつ高品位に再現する【10bit/27MHz処理＆10bit映像DAC&ビデオノイズリダクション】
- デジタルサウンドをありのままに美しく再生する【96kHz/24bit D/Aコンバーター】
- 臨場感あふれる最新シアターサウンドを実現する【DTSデジタル出力】

パイオニア株式会社

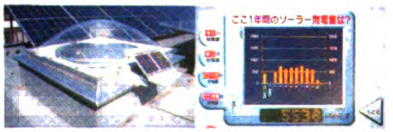
Digitized by Google

ファミリーマートの実験店「エコショップ」では照明用電力の約60%をソーラー発電で、まかなっています。



ファミリーマートでは、省エネ、省資源、環境保全に関して、実験店「エコショップ」で実践的に研究。すべてのお店への実用化に向けて、さまざまな実験を繰り返しています。その一つが、無限でクリーンな太陽エネルギーを活用した「ソーラー発電」です。一日の最大発電量13.92キロワット。曇りの日でも発電できるソーラーパネルが威力を発揮、お店の照明用電力(日中)の60%もまかなっています。また、日の出から日の入りまで、太陽の動きを自動的に追って、効率よく明かりを取り入れる「太陽光採光システム」を、バックヤードの昼間照明として採用。21世紀に向けて、大きな可能性を秘めたソーラーパワーという新しいエネルギーで省エネを実現。発電と採光という二つの方法で、照明用電力を節減しています。

この他、販売期限切れの弁当・惣菜などを再利用する「生ゴミ・リサイクルシステム」。オゾン層に優しいノンフロン触媒の冷凍・冷蔵庫、空調機器の設置。空き缶、ペットボトルの圧縮回収・リサイクル等。その一部は、環境にやさしいお店作りをめざして、すでに実験段階を終え実用化しています。さらに、戸田総合センターの配送車から、順次、低公害CNG車(天然ガス自動車)へ切り替えるなど、「エコショップ」に限らず、ファミリーマートは、環境保全に総合的、積極的に取り組んでいます。



●昼間のバックヤードを明るくするソーラーパワーの明かりとり。 ●年間、月間、日の発電量が一目でわかるディスプレイ。

地球規模の環境問題は、待ったなし。できることから、少しでも実現すること。ファミリーマートの"バージョンアップ"は、環境活動のあらゆる分野にも及んでいます。

FamilyMart

Digitized by Google

「ファーゴ」のコーエン兄弟が贈る、最高に面白いスクリューボウリング・エンタテインメント

人生は
最高に
おもしろい

ビッグ・リボウスキ

天使の街 ロサンジェルス。二人のリボウスキの遭遇は、大いなる災厄の始まり

[ファーゴ]
監督・脚本＊ジョエル・コーエン｜製作・脚本＊イーサン・コーエン
ジェフ・ブリッジズ＊ジョン・グッドマン＊ジュリアン・ムーア＊スティーヴ・ブシェーミ＊ジョン・タートゥーロ

The Big Lebowski
1998年アメリカ｜ポリグラム・フィルムド・エンタテインメント提供｜ワーキング・タイトル・プロダクション作品｜サウンドトラック＊マーキュリー
メイキング・ブック＊ソニー・マガジンズ｜提供＊アスミック・エース、テレビ東京｜配給＊アスミック ©PolyGram Filmed Entertainment. All Rights Reserved.

11|21(土)より 待望のお正月ロードショー!

全国順次ロードショー

▼12月中旬～
大阪 テアトル梅田 06-359-1080

▼12月26日～
京都 みなみ会館 075-661-3993

▼1月16日～
神戸 アサヒシネマ 078-221-0898

▼12月12日～
名古屋 シネプラザ4 052-241-0936

▼1月15日～
福岡 シネテリエ天神 092-781-5508

▼12月26日～
札幌 シアターキノ 011-231-9355

▼12月26日～
新潟 シネウインド 025-243-5530

▼1月30日～
金沢 グランドスカラ座 076-221-3063

▼2月上旬～
函館 シネマアイリス 0138-31-6761

▼2月13日～
青森 弘前マリオン劇場 0172-33-3355

広島 サロンシネマ 082-241-1781

岡山 シネマクレール 086-232-2281

松山 シネマルナティック 089-933-9230

山形 山形フォーラム 023-632-3220

岩手 盛岡フォーラム 019-622-4703

福島 福島フォーラム 024-533-1515

福島 郡山アートパレス 0249-33-4749

大分 シネマ5 0975-36-4512

熊本 Denkikan Cinema 096-352-2121

宮崎 宮崎シネサロン 0985-27-0596

シネマシネマライズ 03-3464-0051 rise@cinemarise.com

映 像 塾

受講申込み
受付中！

《1ヶ年講座》受講生募集

映像科/シナリオ科/俳優科

○定員になり次第締切ます。お申込はお早めに！

■詳しい案内書（無料）は、下記までハガキまたはFAXで（住所・氏名・年令・職業・電話を明記）ご請求ください。

〒171-0033 東京都豊島区高田3-5-3 第3布施ビル
FAX：03-5391-4335 ☎03-5391-4330

映 像 塾 入塾K係

Digitized by Google

キネマ旬報 1998 NO.1272 12月上旬号

目次

ピンナップ「ビッグ・リボウスキ」

巻頭特別企画 ――22

がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

対談　役所広司×真田広之／大杉漣×田口トモロヲ
インタビュー　竹中直人／西村雅彦／寺島進／真野きりな
座談会「ニッポン個性派時代から20年」　秋本鉄次×内海陽子×尾形敏朗×野村正昭／コラム
室井滋／伊藤歩／原田美枝子／山崎まさよし／村上淳／遠藤憲一／松尾れい子／西田尚美／奥貫薫／柳愛里／黒木瞳／近藤芳正／梶原善／阿部寛／うじきつよし／宇梶剛士／小沢仁志／大河内浩／絢華栄／天海祐希／大河内奈々子／川上麻衣子／石橋凌／金山一彦／神戸浩／木下ほうか／かとうあつき／菊池麻衣子／喜多嶋舞／甲田益也子／小林聡美／小松みゆき／坂上香織／佐藤浩市／北村康／國村隼／斎藤洋介／四方堂亘／杉本鉄太／滝沢涼子／土屋久美子／洞口依子／中井貴一／諏訪太朗／鶴見辰吾／内藤剛志／夏生ゆうな／中村麻美／原田知世／初瀬かおる／葉月里緒菜／広田レオナ／長塚京三／生瀬勝久／成瀬正孝／吹越満／真木蔵人／益岡徹／町田康／三上博史／水上竜士／桃井かおり／水本薫／南果歩／山本未来／光石研／宮坂ひろし／六平直政／余貴美子／渡辺真起子／渡辺えり子
■取材・執筆　野村正昭／的田也寸志／金澤誠／塩田時敏／斎藤芳子／石原郁子／轟夕起夫／佐藤友紀／北川れい子／進藤良彦／編集部■構成補助　森直人

HOT SHOTS ――18
「踊る大捜査線」初日　進藤良彦／第11回東京国際映画祭／「御法度」2度目の製作発表　川村章子／ピート・ポスルスウェイト／ポール・オースター来日／「Beautiful Sunday」現場ルポ　野村正昭／「ニンゲン合格」現場ルポ　斎藤芳子

特集
ビッグ・リボウスキ ――77
作品評　細越麟太郎／ジョエル＆イーサン・コーエン監督　インタビュー　金原由佳
宋家の三姉妹 ――84
対談　ワダ・エミ×ヴィヴィアン・ウー／作品評　おかだえみこ／メイベル・チャン監督論　大和晶
アンツ ――95
作品評　細越麟太郎／ティム・ジョンソン、エリック・ダーネル監督は語る　永野寿彦／CGアニメーションいろいろ
ドクター・ドリトル ――100
作品評　田中千世子／ペティ・トーマス監督インタビュー　宇田川清一

KINEJUN CRITIQUES ――114
ダークシティ　●大場正明
かさぶた／7本のキャンドル　●石原郁子
カフェ・ブダペスト　●村川英

インタビュー
クリス・タシマ　●前田秀一郎 ――92

スペシャル・レポート
ソクーロフ助監督日誌　●宮岡秀行 ――108
「TOKYO EYES」ができるまで（後）　●吉武美知子 ――198
完全放映される「カウボーイビバップ」　●水民玉蘭 ――200

Digitized by Google

文藝春秋の話題作〈好評発売中〉

吉永小百合と渡 哲也。
これがこの男と女にとって
「最後の恋」に
なるかもしれない。

11月14日(土)より
東映系にて
全国ロードショー!
●監督／澤井信一郎
●主演／吉永小百合、渡 哲也

時雨(しぐれ)の記

文藝春秋刊行の原作

時雨の記〈新装版〉

中里恒子

単行本●本体価格1262円
文春文庫●本体価格438円

二十年ぶりの再会が二人の心に火を灯した——。
初老の実業家と、夫と死別して独りで生きる女性。
命を限りに燃え上がる恋を美しく典雅に描く

ダークでパワフルな〈'50年代ロス裏面史〉

LAコンフィデンシャル上下

ジェイムズ・エルロイ

映画化話題作!

小林宏明＝訳
単行本●本体価格各2136円
文春文庫●本体価格各571円

暴力、猟奇殺人、密告……悪と腐敗が渦巻くクレイジーな街の現実を三人の警官を通して描くハードボイルド連作!

第三次大戦勃発の恐怖。恐るべき真実の物語

敵対水域

ピーター・ハクソーゼンほか

ビデオ化話題作!

三宅真理＝訳
●本体価格1714円

十二年前バミューダ沖で火災を起こして沈んだ旧ソ連原潜事故の真相を旧乗組員が明かす衝撃のノンフィクション

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23 TEL.03(3265)1211(代) 文藝春秋 ●数字は本体価格で表示。定価は別途消費税がかかります

Digitized by Google

短期連載
映画祭へ向かって——159
第8回　映画祭出品のノウハウ（前）　●林加奈子

連載対談——152
これもまた別の話
和田誠×三谷幸喜　「タイタニック」（前編）

連載
カミング・オン・スクリーン　日野康——133
デビュー作の風景　野村正昭——134
百年の夢　山田宏一——136
イラストレーターのいる映画館
第10回・沢田としき——139
立川志らくのシネマ徒然草　立川志らく——143
リレー・エッセイ映画と私　泡坂妻夫——144
可愛い少女たちとの恋愛、それと映画
それ以外は消えうせてもいい、醜いんだから
田口トモロヲ——146
オールモスト・クール　芝山幹郎——148
映画を訪ねて　田沼雄一——150
映画戦線異状なし　大高宏雄——178
私の映画日記　井上一馬——182
撮影時評　渡辺浩——184
ピンク映画時評　切通理作——191
ちょっとイギリスびいき　大森さわこ——196
その場所に映画ありて　田中眞澄——197
映画より面白い　西脇英夫——205
TVワンダーランドの怪人たち　武市憲二——209
ガクノススメ　牧野守——229

キネ旬コラム——94
●浅野潤／大城英司
ワールド・レポート98——163
●U.S.A. 濱口幸一　●ON THE PRODUCTION　井口健二
●EUROPE　吉武美知子　●ASIA　喰峻創三　●JAPAN　●映画界ニュース
TOPIC JOURNAL——172
●川端靖男／指田洋／鈴木元／青木眞弥
映画街——176
●興行短信　竹入栄二郎　●スポットライト　内田達夫
キネ旬ロビイ——180
読者の映画評——192
文化映画　渡部実——194
映画の本——204
●関根忠郎／水民玉蘭
TVレポート——206
●池田敏／豊崎岳彦／杉原賢彦
サントラ・ハウス——210
●賀来卓人
VIDEO,LD&DVD GARDEN——212
●「盲獣」「黒蜥蜴」　磯田勉　●2001年ビデオの旅　吉川明利　●公開作＆未公開作　丸山尚輝　●アジアのピンキリ　望月美寿　●OVこだわりチェック　中村勝則　●アニメーション＆吹替版　米田由美　●ヴォイス大百科　弓家保則
10月の公開作品（日本映画）——223

キネ旬インフォメーションランド——232
シネ・ガイド
劇場招待券プレゼント＆上映スケジュール
愛読者プレゼント

1998年度
キネマ旬報ベスト・テン応募
要項と対象作品リスト——119

COMING SOON［新作紹介］——123
●私の愛情の対象
●アルマゲドン
●スモール・ソルジャーズ
●6デイズ／7ナイツ
●イン＆アウト
●鳩の翼
●ラブ＆デス
●ルル・オン・ザ・ブリッジ
●ラスト・ゲーム
●ラブ・ゴーゴー
●ミスター・フリーダム
●パパラッチ
●モーテル・カクタス
●187
●T-REX
●ショムニ
●たどんとちくわ
●あ、春

試写室——186
尾崎翠を探して　第七官界彷徨　石原郁子

劇場公開映画批評——187
トゥルーマン・ショー　田中千世子、新藤純子
アウト・オブ・サイト　秋本鉄次
ハミルトン　宇田川清一
相続人　鬼塚大輔
沈黙のジェラシー　鬼塚大輔
知らなすぎた男　村岡良昭
ポルノスター　森直人

日本映画紹介——220
SF　サムライ・フィクション
鬼畜大宴会
あぶない刑事フォーエバー
大怪獣東京に現わる

外国映画紹介——224
アウト・オブ・サイト
アンツ
キャメロット
ダイヤルM
ダライ・ラマ
トゥルーマン・ショー
フラワーズ・オブ・シャンハイ
モンタナの風に抱かれて

今号の執筆者紹介——230
編集後記＆次号予告——238

Digitized by Google

遠藤久美子
河合美智子
小林麻子
濱田マリ
小松政夫
松重　豊
上田耕一
渡辺いっけい
ザ・キングトーンズ
樹田吉彦（友情出演）
佐藤　允
高島礼子

製作：野村芳樹
原作：安田弘之
（講談社／モーニングKC）
脚本：一色伸幸
音楽：ファンキー末吉
監督：渡辺孝好

ホラ吹きで関西弁のOL
徳永佳代子

魔性のOL
宮下カナ

自己鍛錬するOL
丸橋由美子

悪魔のOL
坪井千夏

つまらないOL
塚原佐和子

会社をナメたら意外とアマイ!!

おまたせ！映画になりました!!
ぱわふる・むーびー

ショムニ

主題歌
「TENJIKUへ行こう」
～Trust yourself～
（眼）夜総会BAND
（日本クラウン）

製作・配給：松竹株式会社
http://www.shochiku.co.jp/

11/28（土）より 全国松竹系にてロードショー!!

特別鑑賞券好評発売中!
一般：¥1,500／ペア：¥2,800（税込）

正月映画の決定版。

こらえられないおかしさ、爆笑につぐ爆笑!

世界を笑いの渦に巻き込んで
遂に日本上陸!

エディ・マーフィー ドクター・ドリトル

世界で一人、
不思議な能力で幸せを運ぶ男。

EDDIE MURPHY
DR. DOLITTLE

20世紀フォックス映画提供　デイビス・エンターテインメント・カンパニー/ジョセフ・M・シンガー・エンターテインメントプロダクション　ベティ・トーマスフィルム
エディ・マーフィー"ドクター・ドリトル"オシー・デイビス　オリバー・プラット　音楽リチャード・ギブス　エグゼクティブ・プロデューサー ジョン・ファーハット　編集ピーター・テッシュナー　撮影ラッセル・ボイド,A.C.S.
原作ヒュー・ロフティング　脚本ナット・モールディンANDラリー・レビン　製作ジョン・デイビス、ジョセフ・M・シンガー、デイビッド・T・フレンドリー
DOLBY DIGITAL　サントラ盤:東イーストウエスト・ジャパン　監督ベティ・トーマス　www.foxjapan.com　原作:ポプラ社刊

12月19日(土)より 東京日劇プラザ 大阪三番街シネマ他全国東宝洋画系ロードショー

男と女の関係は、常識だけでははかれない

ジェニファー・アニストン　ポール・ラッド

私の愛情の対象

製作総指揮ニコラス・ハイトナー　脚本ウェンディー・ワッサースティン
DOLBY DIGITAL　製作ローレンス・マーク　監督ニコラス・ハイトナー

12月《スバル座》他ロードショー

Digitized by Google

全世界大ヒット!お

世紀末最大の謎

想像を絶する恐怖に、世界が震撼!
人類vs異星人の隠された真実とは…

未来と闘え。

Xファイル™
ザ・ムービー

真実は映画館で明らかになる

20世紀フォックス映画提供 テン・サーティーン・プロダクション デイビッド・ドゥカブニー ジリアン・アンダーソン "X-ファイル ザ・ムービー"
マーチン・ランドー フランス・タンナー AND アーミン・ミューラー=スタール 音楽マーク・スノー 編集スティーブン・マーク 撮影ワード・ラッセル
製作総指揮フランク・ライアン 製作クリス・カーター AND ダニエル・サックハイム 脚本クリス・カーター ストーリークリス・カーターANDフランク・スポットニッツ
監督ロブ・ボーマン ノベライゼーション:角川文庫刊
www.foxjapan.com

12月5日(土)より 東京日比谷映画 大阪梅田スカラ座 他全国ロードショー

Digitized by Google

新作

「踊る大捜査線」公開！

3200人がマリオン前に長蛇の列

去る10月31日、この秋最大の話題作「踊る大捜査線 THE MOVIE」が、全国で一斉に公開され、有楽町の日劇東宝では主演の織田裕二をはじめ、柳葉敏郎、深津絵里、水野美紀、ユースケ サンタマリアのメイン・キャスト5人と本広克行監督、脚本の君塚良一、亀山千広プロデューサーによる舞台挨拶が行われた。劇場のあるマリオンには前々日の午後から一番乗りの観客が並びはじめ、徹夜組は最終的に2500人、始発電車が動いてから訪れた人々を含め、早朝5時半の時点で3200人ものファンがマリオンを取り囲んだ（ちなみに「もののけ姫」の2300人を上回る新記録。その時の徹夜組は600人だった）。劇場側は急遽11階の日本劇場も開放し、午前8時の一回目の上映と舞台挨拶を2館で行うことで2310人の観客を収容したが、それでも足りずに11時の回の上映前にも舞台挨拶を行っている。日劇東宝はおろかマリオン始まって以来の記録的なヒットに、東宝関係者も「これほどの混雑は記憶にない」と驚きの色を隠さない。

また公開直前、本広監督がインターネットなどを通じて、観客にエンディング・テーマの『Love Somebody』に合わせてみんなでクラップ（手拍子）をしてほしいと呼びかけたため、詰めかけた観客の興味は映画の内容もさることながら、監督自ら「最後の演出」と呼ぶその一点にも向かっていた。舞台脇から場内の様子をこっそり伺っていた映画スタッフたちは、クラップが始まった瞬間に思わずガッツポーズ、満場の観客がみな『Love Somebody』を口ずさみながら手を叩いていることに感動を覚えていた。取材と言いながらも、実はクラップに参加するために日劇東宝にやって来た僕は、あまりの混雑に映画を見ることは断念したが、最後のクラップだけはスタッフとともに慌てて参加した。映画が終わり、大拍手に包まれた舞台に本広監督が登場した時、監督は一体どんな顔をするのだろうと楽しみだったが、涙に霞んでそれはよく分からなかった。

【進藤良彦】

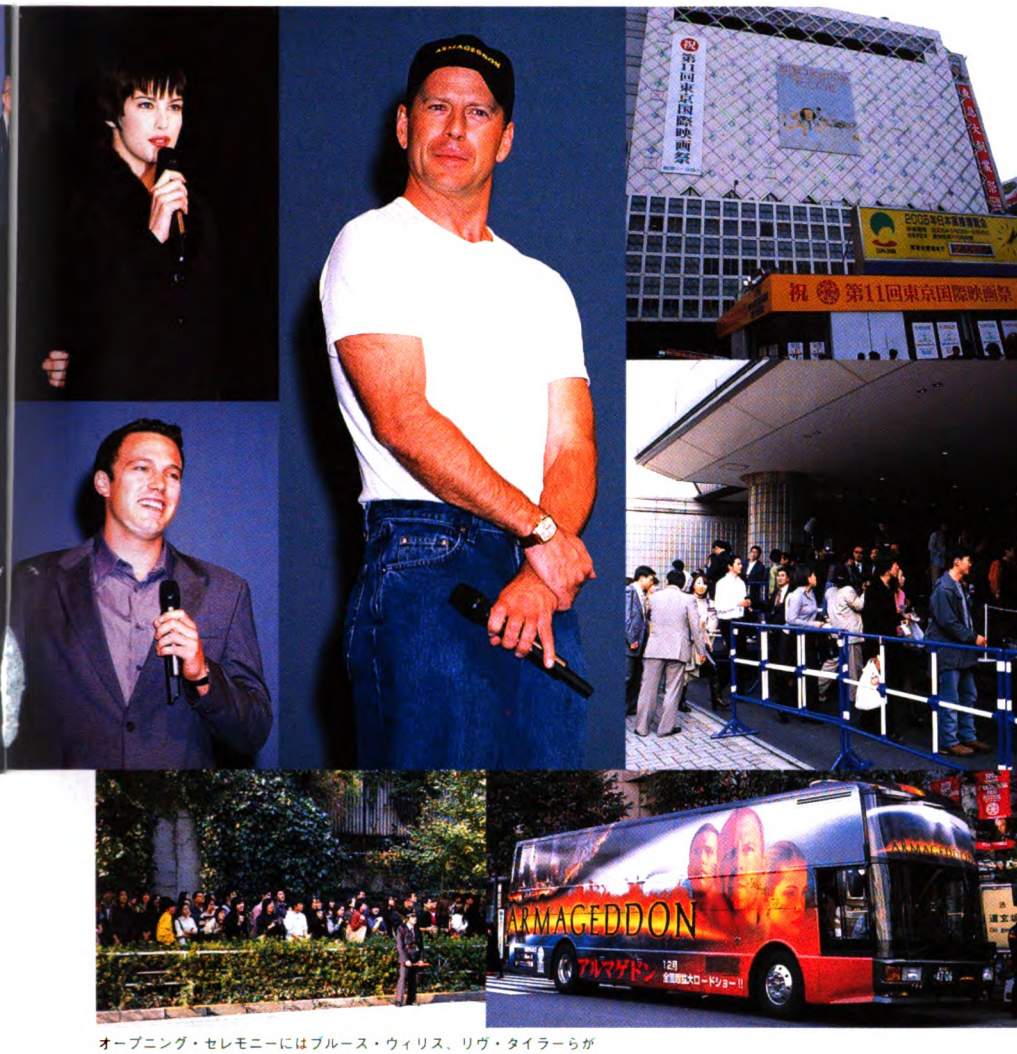
HOT SHOTS

Digitized by Google

INTERVIEW

第11回東京国際映画祭開幕

今年はブルース・ウィリス、ブラッド・ピットらが来日



オープニング・セレモニーにはブルース・ウィリス、リヴ・タイラーらが来日。渋谷駅前と映画祭会場を結ぶ"アルマゲドンバス"も運行された。

今年で11回目を迎えた東京国際映画祭が10月31日から11月8日までの9日間、東京・渋谷のBunkamuraを中心に開催された。

昨年がメモリアルな10回目で、従来以上に様々な企画が行われたこともあるのだが、今年は予算もダウンして小振りになった。まず、例年までインターナショナル・コンペティションとヤング・シネマ・コンペティションと二つの部門に分かれていたコンペ部門の上映が、今年はひと括りになってしまったというのが大きい（賞じたいは二部門ともあるが）。全体に上映作品数が減ったし、去年までは発行されていたデイリーニュースも今年からは中止となるなど、様々な面で予算縮小を反映した形となってしまった。

その一方、オープニングとクロージングの話題性という点で見れば、去年のレオナルド・ディカプリオ、ハリソン・フォードなどの来日に続き、今年もオープニングでは「アルマゲドン」が上映されブルース・ウィリスやリヴ・タイラーが来日、クロージングでは「ジョー・ブラックによろしく」の上映でブラッド・ピットも来日。いずれもチケットが発売早々30分で売り切れるほどの盛況となり、上映会場のオーチャードホールは満席となり、入れなかったファンが回りを囲むなど、いかにも"お祭り"らしい雰囲気となった。

また、上映本数は減ったものの、そのためかえって上映された作品全体のクオリティは一定以上のものが揃ったという感がある。新しい作品との出会いという点に関していえば、特に「シネマ・プリズム」部門をはじめとするアジア映画を中心に、多くのうれしい発見があったし、協賛企画であるジャックスカード国際ファンタスティック映画祭やカネボウ国際女性映画週間などの人気も相変わらず。さらに今年は英国映画祭も行われファンを喜ばせた。これら協賛企画も含めての全体の入場人員数は15万1951人。前年比108・42%となった。

オープニングセレモニーでは、さる9月6日に亡くなられた黒澤明監督の黙祷から始まったが、毎年好評のニッポン・シネマ・クラシック部門も今年は趣きを変え、黒澤作品特別追悼上映となり、黒澤監督の全30作が上映された。もちろん、それ自体は誠に意味のある貴重なプログラムではあるが、この特別上映のために当初予定していたプログラムを中止したことは今後に議論の余地を残すことになるだろう。

なお、受賞結果は次の通り。

Digitized by Google

撮影／吉岡誠

ジャックスカード東京国際ファンタスティック映画祭

今年で14回目を迎える東京ファンタは、ジョン・カーペンターズ監督の新作「ヴァンパイア・最期の聖戦」をオープニングに、小松沢陽一プロデューサーの掛け声のもと華やかに始まった。オールナイトのホラー映画特集では、主演女優の名前が秘密にされていた「富江」（及川中監督）を上映、正体を明かされたヒロイン役の菅野美穂らも舞台挨拶に立った。その他、"永井豪漫画家生活30周年記念オールナイト"、"大インド極楽映画桃源郷"特集などで盛り上がった。

東京グランプリ＝「オープン・ユア・アイズ」（監督アレハンドロ・アメナーバル）
審査員特別賞＝「枕の上の葉」（ガリン・ヌグロホ）
最優秀監督賞＝ガイ・リッチー（「ロック・ストック&トゥー・スモーキング・バレルズ」）
最優秀女優賞＝宮本真琴（「おもちゃ」）
最優秀男優賞＝ブラッド・レンフロ（「ゴールデンボーイ」）
最優秀芸術貢献賞＝「レッド・バイオリン」（フランソワ・ジラール）、「スモーク・シグナルズ」（クリス・エア）
東京ゴールド賞＝「故郷の春」（イ・グァンモ）
東京シルバー賞＝「カサバ町」（ヌリ・ビルゲ・ジェイラン）
アジア映画賞＝「ダンス・オブ・ダスト」（アボルファズル・ジャリリ）
アジア映画賞スペシャル・メンション＝「ニンゲン合格」（黒沢清）、「ベシュケンピール」（アクタン・アブディカリコフ）

Digitized by Google

新作

大島渚監督、ついに始動!!

「御法度」2度目の製作発表

大島渚監督が12年ぶりにスクリーンに帰ってくる。

96年1月に製作発表が行われたが、その一カ月後に大島監督が脳梗塞で倒れたため、製作が延期となっていた新作「御法度」。製作開始が待たれていたその新作の2度目の製作発表が10月21日に行われ、大島監督はつえを使っていたものの、元気に現れた。

「一朝一夕で治る病気ではないので、撮影もリハビリの一種だと思っています。12年ぶりとはいっても自分では休んでいたという気持ちは全然ないです。病気をしたことで監督としてどう変わったか興味がありますね」と力強く語った。

「御法度」は、故司馬遼太郎の『新選組血風録』の中の一編『前髪の惣三郎』が原作。幕末の江戸、新選組に美ぼうの青年剣士・加納惣三郎が入隊したことから巻き起こる男同士の愛情、友情、対立などが描かれる。

「今の世の中に欠けているのは〝時代に対する殺気〟だと思う。新選組の持っている若者の殺気というものを描きたい。僕の体は弱っているけれども、2年半前に思っていた作品よりも、激しく強い映画にしたい」という。

そして、「一目見て、これはいけると決めた」と監督が主役の惣三郎に大抜擢したのは、故松田優作さんの長男・松田龍平。現在、都内の中学に通う15歳の松田について監督は「(病気で製作が)遅れたおかげですばらしいキャストに出会えた」と大絶賛。「松田くんは未知数が魅力。僕自身も幼くして父を失ったけれど、彼にも一人で生きてきた人間の持っている強さと優しさがあると思う」と大きな期待を寄せている。これが俳優デビューとなる松田も「父親がすごい人だったので、父親のようになりたいと思った。顔は似ているかもしれないけれど、中身はまだ甘えた感じなのでこれから自分の中で育てていきたい」と意気込みを語った。

松田以外のキャストは選考中ということだが、大物が登場という話もあり、目が離せない。また、巨匠の新作とあって大島監督の元には、各国の映画関係者から激励や出資の申し出が届いているとか。松田の高校受験もあり、クランクインは来年春以降、公開は全国松竹系で夏以降の予定。どんな作品が生まれるのか完成が待ち遠しい。

【川村章子】

Digitized by Google

TOPIC

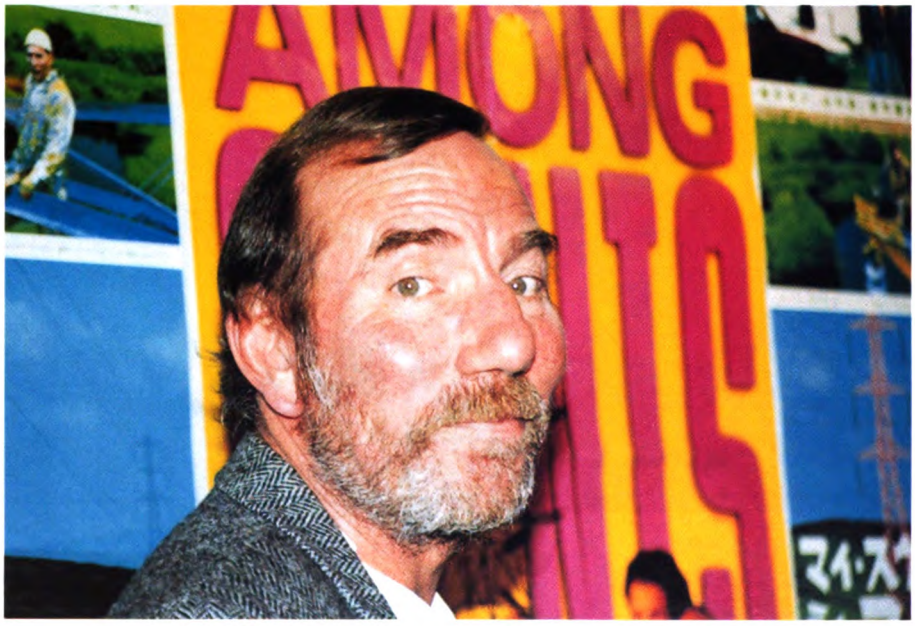
ポール・オースター来日「ルル・オン・ザ・ブリッジ」

現代アメリカを代表する作家であり、「スモーク」の原作・脚本、「ブルー・イン・ザ・フェイス」の共同監督を手掛けたポール・オースターが、初の単独監督作「ルル・オン・ザ・ブリッジ」のキャンペーンで来日した。重傷を負い演奏ができなくなったサックス奏者が、不思議な蒼い石を偶然手にしたことから始まる、幻想的で切ないラブ・ストーリー。ハーヴェイ・カイテルがサックス奏者を、ミラ・ソルヴィーノが彼と恋に落ちる女優の卵を演じる。「映画と小説はストーリーテリングという意味では同じだが、テクニカルな違いがある。この物語は初めから映画として頭に浮かんできた。映像の方が現実と夢を区別して表現しやすいしね」。

公開は12月中旬より恵比寿ガーデンシネマ、シネスイッチ銀座ほかにて。

TOPIC

ピート・ポスルスウェイト新作「マイ・スウィート・シェフィールド」



45年生まれ。「ユージュアル・サスペクツ」「ブラス!」「ロスト・ワールド」ほかで活躍。

ピート・ポスルスウェイトが珍しくラブストーリーに挑んだ新作「マイ・スウィート・シェフィールド」を携え、英国映画祭で来日。「イギリスは7～8年前まで映画が作れないほどのスランプでしたが、今は技術力と共に上向きになりました。52歳にして初めて6トンの水が流れる中でラブシーンをやってみて、とてもファンタスティックで開放されましたね。ほとんど凍えましたけど（笑）」。ハリウッドとイギリス映画の違いについて、「監督がスピルバーグであろうと、いかに映画を愛し、プロとして最高の瞬間を35ミリに焼き付けるという情熱は同じ」。確固たる口調に、昨今の活況を呈するイギリス映画の底力を見る気がする。12月23日よりシネ・ラ・セットにてロードショー。

Digitized by Google

INTERVIEW

「Beautiful Sunday」ついに公開！

都会の人間模様を濃厚に描きたい。

静寂の中で小夜子（尾藤桃子）の「しゃべって！」という声が響く。沈黙。広介（永瀬正敏）は小夜子の「じゃあ……歌って」という声に、ようやく「ある日、森の中、熊さんに出会った」と歌い出す。98年3月1日、調布の大映撮影所第6ステージに、中島哲也監督「Beautiful Sunday」のマンションの部屋のセットが建てられ、ラストシーンの広介と小夜子のやりとりが撮影されていた。外は大雪。冷気がセットの中にも深々と忍び寄ってくる。壁には「セット撮影は本日で全て終了です」と紙が貼られている。

前作「夏時間の大人たち」（97年）に続いて中島監督が挑むのは、日曜日という限定された時間の中で、マンションに住む各部屋の人々の奇妙な佇いだ。キャッチボールというコミュニケーションの手段すら封じこめられた広介と小夜子の夫婦。ハーフのガリ勉小学生（松本レイカ）、怪しい大家（中村久美）、宇宙人と自称する老婦人（ヨネヤマママコ）部屋中鏡だらけのナルシスト（菜木のり子）、ナゾの殺し屋（山崎努）らの日常の断片が、世紀末の迷宮へと観客を導く。この日の撮影も、実に淡々としたペースで進められ、山奥のファクトリーを思わせる静けさの中で、しかも濃密な空気がセット一杯に漂っていた。

永瀬正敏と中島監督は「J-PHONE」のCMでコンビを組んでいるが、中島監督は「彼にはCMの撮影が一段落した時に、シナリオを渡し（出演を）快諾してもらった。基本的には要らないものを全部外し、消去法で撮影している。例えば街を撮る時も、歩いてる人はいないし、塀とか道だけを撮っていて、要らないものは写さない。そういう世界観の映画だし、要るものだけを写すという撮り方で奇妙な感じを出したい。リアリズムの方向ではなく都会の人間模様を濃厚に描きたい」と意欲的に語ってくれた。98年2月5日クランクイン、3月2日アップ。11月21日より渋谷シネ・アミューズにてロードショー公開。

【野村正昭】

Digitized by Google

演出中の黒沢監督（写真上）。共演は役所広司、菅田俊、麻生久美子、袁川翔、洞口依子ほか。99年1月中旬公開。

現場ルポ

「ニンゲン合格」

黒沢清監督の最新作は家族のドラマ

「脚本を読んだ時、まず“（この役を）やってみたい”と思いました。脚本を読んだだけでそう感じるのは滅多にないこと。“匂い”に魅かれました」と語る主演の西島秀俊。昨年「CURE」で国内のみならず海外でも高い評価を受けた黒沢清監督。その最新作「ニンゲン合格」は“生きること”と“家族”という存在を、自ら脚本を手掛ける黒沢監督独自の視点でとらえた作品である。ある日、10年の眠りから目覚めた一人の若者とその家族。しかし10年は、彼らの環境や状況を変化させるには十分な歳月だった…。

7月4日、東日本橋のロケ現場を訪問した。撮影されるのは、14歳で事故に遭い、目覚めた現在は24歳になった主人公・豊（西島）がブティックで働く母親（りりィ）を訪ねる場面だ。彼が移動に使用しているのは黒沢監督が「町で見かけて使いたいなと思った」というエンジン付きスケボー。“少年と青年の間”という印象の豊にピッタリの軽やかな乗り物だ。しかしこの日はエンジンの調子が悪く「本番！」の声がかかった途端に止まってしまうというアクシデント発生。スタッフがエンジン点検をする“スケボー待ち”の間に黒沢監督と西島秀俊に話を伺うことにする。「一見、今までの作品とは違うと思われがちですが、“根”は変わっていません。“家族”が題材の一つになると考えたのは最近です。ある人間の生きざまを描くためのモチーフとして使えるなと思ったんです。他人から見たら普通であっても、その人自身にとってはかけがえのない“一度きりの人生”を描きたいという思いがありました」（黒沢監督）。また西島秀俊は「こんなに充実した現場は初めてです。豊がどんな人間か？ ということよりも、その瞬間その場に、どれだけきちんとその状態でいることができるかに注意を払ってやっています」と言う。「異常な出来事は起きませんが、映画全体を観た時にある種の“驚き”に満ちた作品にしたいと考えています」（黒沢監督）。 [斎藤芳子]

Digitized by Google

Digitized by Google

“日本映画は面白い、そしてもっとその面白さを様々に知ってもらいたい”というテーマのもと、96年5月下旬号・6月上旬号の2号にわたって巻頭企画で行った「若手女優・男優特集」以来、不定期に続けてきた「がんばれ！日本映画」特集。今回お送りするのは、“今、この人の存在感があるからこそ映画が引き立っている”“この俳優で映画を選ぶ”という、主演・助演、脇役・怪役おりまぜての“個性派俳優”特集です。ところが、そういう俳優をアンケート結果も参考にしてリストアップしていったのだが、何とたくさんいることか。はっきりいってとても1冊ではフォローしきれない。今回は基本的には（例外もありますが）「若手女優・男優特集」や、かつて本誌の人気企画であった「ニッポン個性派時代」「ザ・インタビュー」で紹介した方々を除いて、ここにお届けします。「そうそう、この人がいる」「いや、あの人がいない」等々の感想がきっと出ることでしょうが、そういう確認と発見と議論の一端になっていれば幸い——。

巻頭特別企画 がんばれ！日本映画

ニッポン新

Digitized by Google

真田広之

意外な役を提示された時に、半分不安を抱えながら演じるのもスリルがあって面白い

対談

いいチャンスの波が来てるのかなという気がする

——役所さんも真田さんも現在の日本映画を担う役者さんであり、ここ数年は二人で交互に主演男優賞受賞の状態が続いていますが。

役所　いや僕なんか最近一寸いただいてるだけで。

真田　でも、授賞式とかでお会いすると嬉しいですよね。たまたま僕がプレゼンテーターの年にお会いしましたよね。

——TVや舞台と比較すると、映画での取り組み方にちがいはありますか。

役所　どれも精神的には一緒ですが、TVと映画を比べると、どうしてもTVの企画には制限がありますから、いろんなバリエーションという意味では映画の仕事は楽しいですよ。

Digitized by Google

役所広司

TVの企画には制限があるから、いろんなバリエーションという意味では映画は楽しい

司会・構成 野村正昭　取材撮影 池田英俊

――映画への出演の取捨選択の基準というと。

役所　それは脚本と監督が良ければ、それに越したことはないですが、やっぱり脚本ができる前に決定しなきゃいけないことが多いので、殆ど監督でということになります。

真田　まず脚本ありきで、できれば、そうありたいと思いますけど、その時に組みたい人で、ある程度の企画さえしっかりしていれば、それを信じて飛びこんでやっていく。そういうものがあればちがいますし。

――こういうタイプの役柄というのは。

真田　とりあえず今までやったことのないものには全て興味がありますし、自分で（こういう役を）やりたいなと思ってる時に偶然来た話がそうだと、それこそ有難いんですが、逆に自分の発想って限られてるじゃないですか。それよりも、むしろあいつにこんな役をやらせたらどうなんだろうと面白がってくれる人から、自分でも意外な役を提示された時に、できるかなあと思いつつ、できたら面白いだろうなあと、半分不安を抱えながら演じるのもスリルがあって面白い。まあ、ひとり作業じゃないですから、そういう出会い

Digitized by Google

は大事にしたいと思いますけどね。

——海外でも日本映画は映画祭などを通じて盛んに上映されたりする機会は増えましたね。

役所 すごくマイナーな作品でも、向うのジャーナリストの方はよく見ていますよね。フランスのバレンシエンヌ映画祭に「KAMIKAZE TAXI」の上映で行ったんですが、観客に、あなたの作品を見たと言われて「Shall we ダンス?」のことだろうなって思ったら、「シャブ極道」だって言われて、これには驚きましたね（笑）。とても嬉しかったです。

真田 映画に関わることの誇りというか、見る側もすごく文化として扱ったり、それこそ国の捉え方がちがうんじゃないですか。その辺にも日本の鎖国状態を感じますよね。アジアの中でも日本は出遅れていますから、そういう意味では、いいチャンスの波が来てるのかなという気がします。でも、やっぱり「Shall we ダンス?」のように、まず日本人が認めたもので、向うでも認められるのが一番嬉しい形で、勿論向うでウケてその威光でというのも、日本人は弱いですけど。そういう海外向けの顔が、作り方の定番になってしまうと恐いかなという気がしますが。

二人がどっぷり一緒にできる作品をぜひやりたい

——市川準監督の新作「たどんとちくわ」で、お二人は初共演ということになりますか。

役所・真田 そうですね。

——今までには全く機会がなくて。

真田 ええ。映画を拝見して、いつか御一緒したいですねって言いながら全然機会がなかったんです。何度かパーティですれちがって、一緒にのみましょうとか話してたんです。今回も同じ映画には出ているけど、オムニバスだから共演はできないと言われて、くやしかったから、せっかくだから最後に二つのエピソードが交叉して偶然出会うという手はないんですかってお願いして、二稿、三稿目でワンシーンだけ作って下さったんです。

実写との合成シーンでは教習所のシミュレーションをやってるみたいでした

役所広司

——最初は共演シーンは、なかったんですか。

役所 最初は別々でしたね。原作も全く別な話ですし。

——撮影も一日だけで。

真田 数時間ですよ（笑）。

役所 それも殆ど待ってるだけ（笑）。

真田 （カメラが）回り出したらワンカットでずーっと。それほど入念なリハーサルもなく、お互い背負ってきたものが、そこで偶然に交叉したら、どうなるかという流れだけ決めて、あとはそれぞれという感じでしたね。本当にその一日だけだったので、食事の時間と待ち時間ぐらいでね。

役所 殆ど、根津（甚八）さんの釣りの話を聞かされてましたね。

真田 写真も見せてもらって（笑）、釣りの話で終わっちゃいましたね（笑）。

——役所さんは「KAMIKAZE TAXI」と同じ、タクシーの運転手役ということで、やり辛さとかはありませんでしたか。

役所 いや全然ちがいますからね。僕は何のやり辛さもなかったんですが、市川監督は「KAMIKAZE TAXI」以来タクシーの運転手役は二度目だから、今回はこれぞタクシーの運転手という感じの扮装にしようと言われましたね。

——タクシーと実景の合成には、通常では様々な工程を経て行う合成作業を一台の機械で可能にする合成機器「ドミノ」が、劇映画では初めて長時間にわたって駆使されたとか。

役所 ええ。僕は外での撮影は一日か二日位で、殆どセットの中の座席に座って、モニターを相手に運転していたんです。

真田 僕は一日見学に行ったんですが、モニターが10台位並んでて、すごかったですよ。

役所 僕がセットに入る前、照明部の人が、あらかじめ撮った実景に合わせて動くライティングを、手分けしてセットしてるんですよ。

真田 ワンカット回ったら帰ろうなんて思っていたら、全然終わらなくて、ずーっと見てましたからね。タクシー一台の周りを機械がズラーッと囲んでい

「たどんとちくわ」12月5日よりシネマスクエアとうきゅうにて

Digitized by Google

て、ここはハリウッドかいと思ったほど（笑）。

——完成した映画を見ると、とてもセットで撮ったとは思えない効果になっていますね。

役所 高価なだけのことはあるというか、東北新社さんだけが持っているんだそうですね。

真田 日本で一台ですものね。

——実際に運転するよりも難しいんですか。

役所 難しいですね。最初は厄介だねと思いましたよ。モニターばかり見ていてもいけないし、何回かテストをしているうちに、ハンドルを回すタイミングとかは摑めるようになって、慣れてきましたけど。教習所のシミュレーションをやってるみたいでした。

——役所さんは最先端デジタルでしたが、真田さんは、その逆だったとか（笑）。

真田 超アナログですよ（笑）。

——動くちくわの仕掛けも、手作業だったとか。

真田 ハリウッドだったら、ちくわも動くマペットでしょうが、助監督さんが下から針金で操作してた（笑）。

——一番苦労された点というと。

真田 妙なダンスを踊るシーンがありますが、前日に浅見（真田さんの役名）の踊りを考えてきて下さいって監督に言われて、浅見の踊りって（笑）、あいつらしい踊りって何だろう、タンゴ系かなアラビア系かなと考えながら、殆ど眠れずに（現場に）行って、一分半位でお願いしますって、監督はポツッとで、ホッとしたんです。監督からポツンと言われる宿題は意外に大変で、こっちにとっては嬉しい悩みだから、楽しく悩ませていただきましたけどね。

——真田さんと市川監督は「つぐみ」以来ですが、あの時と比べてどうでしたか。

監督から言われる宿題は意外と大変でしたが楽しく悩ませていただきました

真田広之

言って行っちゃたんですよ。相手役の女優さんとは初対面だったんですけど、とりあえず隅っこに呼んで、僕はアドリブでやりますから、僕のやったのをオウム返しで真似して下さいって大体それだけ決めて、テストをしたら、監督に意外とウケたんました。

——役所さんは、市川監督とは初めて？

役所 いえ、二年位前にCMで一度。オールドの夏バージョンで御一緒して、その時にいつか映画をやろうねと言って下さったんです。

——他の監督とちがう特長というと？

役所 真田さんもおっしゃっているように、抽象的ではあるんだけど、微妙なニュアンスを大事にする監督ですね。やはり30秒のCMで勝負するには、一寸した表情にせよ言葉もせよ、ニュアンスを大事にされるんでしょうね。何度も（カメラを）回して、今度はこんな感じでやりましょうと撮られるし。

——真田さんは、撮影は昨年でしょうが、「リング」や「らせん」「D坂の殺人事件」それにこの「たどんとちくわ」で、ノーマルな役柄ではない作品が続いていますが（笑）。

真田 もう、カルト街道驀進中（笑）。ついにここでキレた。でも平凡な役より面白い。

——役所さんも「CURE」「絆」「大往生」「たどんとちくわ」に、公開は来年扱いになりますが、「ニンゲン合格」と出演作が目白押し。

役所 でも、やっぱり映画監督は現場にいる時が一番元気ですよね。「うなぎ」の時の今村（昌平）さんも、現場ではいきいきされていましたし。

——お二人の本格的な共演作も、ぜひ見てみたいです。

真田 これを機会に、役所さんとどっぷり御一緒できる作品をぜひやりたい。これをお読みの映画関係者の方に、ひとつよろしくお願いします。今回はセリフを交わすこともなく、一瞬のすれちがいでしたからね。

役所 僕も全く同感です。

真田広之

さなだ・ひろゆき　1960年10月12日生まれ。東京都出身。子役として芸能界入り。78年の「柳生一族の陰謀」で本格的映画デビュー。80年の初主演作「忍者武芸帖　百地三太夫」以後、「魔界転生」（81）を始めとする数々のアクション映画で確固たるスターの地位を築く。82年の主演作「道頓堀川」で初めてアクション抜きのラブ・ストーリーに挑戦。徐々に芸の幅を広げ、84年「麻雀放浪記」で新境地を開く。以後、様々な役に意欲的に挑戦、多くの映画賞を獲得し、ドラマや舞台でも高い評価を得ている。最新作は「たどんとちくわ」（12月5日公開）、「リング2」他。

役所広司

やくしょ・こうじ　1956年1月1日生まれ。長崎県出身。区役所勤めを経て俳優の道へ進む。無名塾出身。大河ドラマ「徳川慶喜」（80）の信長役で脚光を浴びる。ここ数年映画での活躍はめざましく、「KAMIKAZE TAXI」（95）で95年度の毎日映画コンクールの男優主演賞を受賞。「Shall we ダンス？」「眠る男」「シャブ極道」でキネマ旬報日本映画主演男優賞をはじめ96年度の映画賞を総なめする。97年度も「うなぎ」「失楽園」「CURE」で日本アカデミー賞最優秀主演賞をはじめ多くの主演男優賞を受賞。「CURE」では東京国際映画祭の最優秀男優賞を受賞している。

Digitized by Google

たけなか・なおと 1956年3月20日生まれ。「ぎんざNOW」など素人参加番組で人気を博し、やがて「シコふんじゃった。」(92)「ヌードの夜」(93)「Shall we ダンス？」(96) などの映画やNHK大河ドラマ「秀吉」(96) の豊臣秀吉役などのTVドラマへの多数の出演を経て俳優としての独自の地位を固めていく。91年には「無能の人」で映画監督としてもデビュー。その後も「119」(94)「東京日和」(97) と手がけ、高い評価を得ている。

Digitized by Google

「完全なる飼育」

竹中直人インタビュー

インタビュアー **金澤誠**　取材撮影 **谷岡康則**

映画は自分が何かを吸収できる場なんです

今年の俳優・竹中直人の活躍は凄い。「アンドロメディア」「岸和田少年愚連隊　望郷」と出演して、「のど自慢」「完全なる飼育」が公開間近。さらには小泉今日子と共演した「共犯者」も控えている。その中でも公開直前なのが、和田勉が10年ぶりに映画のメガホンをとった、「完全なる飼育」。竹中扮する中年男が"完全な愛"を求めて、小島聖の女子高生を誘拐。自分と心と身体が完璧に結ばれたセックスをする女性へと、彼女を飼育して変えようとするもの。ボロアパートの一室で展開される男と女の愛のドラマ。とくれば、往年の"日活ロマンポルノ"の匂いが漂うが？

「僕も日活ロマンポルノが、久しぶりにできるかなと思ったんです。それと、自分が監督だと恥ずかしくて撮れない"日本人のセックス"というのを、この題材なら出来るんじゃないかという気がしたんですね。でも、和田監督の狙いというのはそこではなくて、あくまで純愛を描くという方向性でした」

とはいえ、オープニングの誘拐シーンなどは、ドキュメントっぽい撮り方で、ロマンポルノ風の手触りもある。

「あそこは、結構好きですね。誘拐するという行為のドキドキした感じが出ていてね。そこから後のドラマについては、小島さんの女子高生というのは、監禁されているのがボロアパートですから、逃げようと思えば逃げられる訳です。原題は"少女はなぜ逃げなかったのか"でしたし、彼女が逃げないというのを分からせなきゃいけないという感じはありましたね。完成したものを観ると、逃げない理由が想像できるものにはなっていると思います」

主人公の中年男は、変質者なのだろうか？

「オープニングだけは変質者風にやってみたんですけれど、あとはけっこう普通にやりました。この男の変質者的な部分と、そうじゃない部分のバランスの取り方は考えましたね。最初に職場の女をレイプしちゃうわけですけれど、その行為に喜劇的な部分を入れることで、ある種浄化させようと思ったりしてね。和田監督は、特に何もおっしゃらないんです。その言わないことによる、強引なガサツさというのが出た、妙な味の作品になっていますね。映画というのは、自分というものを放出していっちゃって、なくなってしまうTVとは違って、逆に自分が何かを吸収できる場なんです。そういう意味では、ここまで何も言われない現場というのは初めてでしたし、体験したことのない現場だと感じましたね」

今年は、俳優に徹していろんなことを感じたという。

「全体として、どの仕事もけっこう真面目にやっちゃいました(笑)。きうちかずひろ監督の『共犯者』は、前にVシネマでやった『カルロス』の続編的作品です。前のノリで"わしゃ、ブラジリアン・マフィアのドン・カルロスじゃ"っていう感じでやると、今回はもっと抑えてと監督に言われました。前は狂気を出していたんですが、今回は疲労感を背負った男という雰囲気になっています。三池崇史監督の新作にも出たんですけれど、これは上海人の役で、とにかくソバが好きな男。この時も、もっと何かムチャクチャやろうとすると、三池監督が"そこまでは"って言うんですね。そういう感じで、皆真面目にやっちゃったなと思うんです(笑)。『のど自慢』は僕がモミアゲを付けて歌うと、井筒監督が"もっとやれ"って喜んでくれましたけれど」

気になる監督作については？

「何かムチャクチャで"好きだぜ、この映画"っていうものをやりたいんですよ。今までは自分で監督すると、丁寧に撮ろうというのが先に立って、そういうものが出来なかったんですが、次々回作ではやろうと思っています。その前に、脚本家の丸内敏治さんの自伝を題材にした、静かな家族の話を来夏に監督する予定です。それとね、いつか中山美穂さんの駒子で『雪国』を撮ってみたい。それが、僕の夢ですね」

来年も監督そして俳優として予定が目白押し。シリアスな演技者とコメディアンの資質。彼の持つ両方の振り子のバランスがとれた俳優の演技が見られることを期待したい。

Digitized by Google

室井　滋

室井滋をみていると嬉しくなってくる。自主映画出身の監督たちが現在の日本映画界を支えているのは言うまでもないが、彼女や内藤剛志をみていると、俳優の世界もそうなって来てるんだなと嬉しくなってしまう。

自主映画とは、様々な意味で、良くも悪くも等身大の世界だ。室井滋は多くの自主映画で等身大のヒロイン、山川直人監督の快作ふうに言うなら"100%の女の子"を演じていた。本格的に映画デビューしてからも、その等身大のスタンスは変わらない。

TVの深夜枠や雑誌のエッセイなど等身大が活きるメディアで、だから、等身大を生きる女性たちから絶大な支持を受けるのは至極当然なのだ。100%気分の伝わる友達の自分として。

この等身大、商業映画の世界ではどうしても助演というポジションにとどまりがちだが、ここへ来てついに、主演作が連発されるようになったのがなにより嬉しい。客足とだえた商店街で酒屋を切り盛りするシングル・マザーが、ママさんバレーで成金夫人に挑む「ヒロイン！」も、等身大の女優・室井滋なればこそ。卓球する女性とは一味も二味も違うのだ。

そして「のど自慢」、室井滋は100%の女優になった。これが売れてる演歌歌手じゃ話にならず、売れない歌手がさらにシロートの舞台におりてくるところに等身大が活きる。この、観客と同じ身の丈こそが、見る者に底知れぬ元気をもたらしてくれるのだ。彼女の出演しているCMふうに言うなら、室井滋は役者のヴィダー・イン・ゼソー、元気の出る女優である。

そこには、むかし香港のメシ屋で大騒ぎしながら自主映画仲間と食べていた女の子の顔がある。新宿の飲み屋で暴れたあげくつぶれる監督に手を焼きながらも面倒をみる女の顔がある。70年代末から80年代へ、あの自主映画の時代を同時代に生きてきた筆者のような世代にとっては、室井滋という存在は女優を越えて、ひとつのメルクマールなのだ。だから室井滋をみていると勇気がわいてくる。

塩田時敏

むろい・しげる　1960年10月22日生まれ。富山県出身。早稲田大学在籍中から自主映画製作に参加、100本に及ぶ作品に出演する。81年「風の歌を聴け」で商業映画デビュー。以後「ロビンソンの庭」(87)、「SO WHAT」(88)、「グッバイ・ママ」(91)、「ワイルドサイド」(93)、「ヒロイン！」(98) など出演作多数。94年の「居酒屋ゆうれい」で、本賞助演女優賞など各賞を受賞している。99年新春には最新主演作「のど自慢」が公開。

Digitized by Google

フィルムの中に"永遠の少女像"を刻んできた女優たちがあいる。「セーラー服と機関銃」の薬師丸ひろ子、「時をかける少女」の原田知世、「さびしんぼう」の富田靖子などがそうだ。伊藤歩は、デビューこそ「水の旅人」だが、彼女の存在を決定づけたのは、「打ち上げ花火、下から見るか？　横から見るか？」「Love Letter」「スワロウテイル」と続く、一連の岩井俊二作品における少女像だろう。彼女のすっきりとした透明感のある眼差し、その"静"と"清"の混在する"聖"なる雰囲気は、特に男性が少女に抱くイメージの具現化であった。「スワロウテイル」ではそれに、ある種の生命力と母性までが加わる。その"生身"っぽさよりも"虚像"が先行する少女像を演じきった彼女は、逸材であるに違いない。しかし、逆に言えば、岩井作品を超えるイメージをその後作れるかどうかという、大きな課題を彼女は背負ったとも言える。

その伊藤歩が、井筒和幸監督の「のど自慢」に出演した。ここでの彼女は、地方都市に生きるカラオケ大好きな、普通の女子高生。同級生にモーションをかけられれば軽くあしらい、母親と口喧嘩もする"生身"の女の子である。その子が、不倫の果てに妊娠し、相手の男とおそらくは辛い新婚生活に入る姉を思って"のど自慢"で歌うのが、喜納昌吉の曲「花」。等身大の高校生が、自分にできる唯一の姉へのたむけとして"いつの日にか、花を咲かそうよ"と、直球の感情で歌うところに、観ている方もグッとくる。岩井作品の"聖"なる少女とは違う、地に足のついたキャラクターがここにはある。伊藤歩の持つイメージが、この作品によって幅が生まれたのは間違いないだろう。面差しが、以前よりふっくらしてきたが、これは吉永小百合から薬師丸ひろ子まで、だれもが10代後半にはそうだった。そこをくぐり抜けたとき、少女は女へと、そしてさらに輝きを増した女優へと変貌するのである。これから先の伊藤歩が、今から楽しみでならない。

金澤　誠

伊藤　歩

いとう・あゆみ　1980年4月14日生まれ。東京都出身。93年「水の旅人」で映画デビュー。以後「女ざかり」(94)、「スワロウテイル」(96)、「カンゾー先生」(98)、「のど自慢」(99年新春公開予定)とコンスタントに映画出演を続けている。97年度日本アカデミー賞では新人俳優賞と優秀助演女優賞、同年度高崎映画祭最優秀新人女優賞を受賞。TVドラマ出演には97年のNHKハイビジョン・ドラマ「水の中の八月」などがある。

Digitized by Google

1960年12月12日生まれ。富山県出身。『まさかり先生の愛と冒険』（87）から『罠』（94）までの東京サンシャインボーイズ全公演に参加。同劇団主宰の三谷幸喜が脚本を手がけた『振り返れば奴がいる』以来ＴＶドラマにも出演。『警部補古畑任三郎』の巡査・今泉慎太郎役で人気を博した。映画「マルタイの女」「ラヂオの時間」（97）で、本誌助演男優賞ほか数々の賞を受賞。ＴＶ、ＣＭ、舞台等で多彩な活躍を続けている。12月中旬にはコレクションをキーワードに撮影現場や楽屋風景、過去の舞台写真などをギッチリつめこんだ初のビジュアル集『Collection's』と、99年オリジナル・カレンダーが発売される（問い合せ＝ENBUゼミ　03-5366-7588）。

Digitized by Google

今まで演じたことのないような役を、映画でやってみたいですね

西村雅彦インタビュー

インタビュアー 編集部
撮影 池田英俊

「マルタイの女」「ラヂオの時間」の2作で、キネマ旬報助演男優賞をはじめ、昨年はあちこちの映画賞を射止めた西村雅彦だが、残念なというか意外というか、とうとう今年、映画出演作は1本もなかった。

「慌ただしく過ぎた1年でしたね。今年も映画はやりたかったし、お話しは幾つかあったんですが、うまくタイミングが合わなかったんです」

映画出演はなかったが、彼の活躍ぶりは、TV、CM、舞台など様々なジャンルで見ることが出来た1年だった。主役から脇役まで多彩な役どころが出来る人ではあるが、なかでもTVドラマでは『今夜、宇宙の片隅で』(CX)『あきまへんで!』(TBS)とキャラクターの異なる作品が続いた。

「連続ドラマを立て続けにやらせてもらうというのはとても大きな経験になりました。特に『今夜〜』は、長い間一緒に仕事をしている三谷幸喜が自分をモデルにしたという役柄で、彼の実体験を踏まえて書いた脚本でしたから、感慨深いものがありましたね。彼がこんな恋愛体験を経てきたのだと考えると、つくづく切ない男だなあと(笑)。実際、あれはつらい役どころで、最終回のバーのシーンの撮影以外は、鬱々として解放的になれない日々を過ごしましたよ。三谷も毎週のように現場に来てましたから、やりにくくてしょうがなかった(笑)」

そう言いながらも、「前から一つのシチュエーションの話を書かせれば天下一品だと思っていましたが、磨きがかかった完成度の高い台本を読んで、改めて才能あるなと思いました。どこまで昇りつめていくんでしょうね」と、その三谷幸喜の才能を誰よりも評価しているのが、西村雅彦に他ならない。TV以外にも、今年は三谷脚本・西村出演の舞台『笑の大学』の再演もあったが、「ラヂオの時間」に続く、このコンビによる新作映画も待ち遠しいところ。

さて、そういった様々なジャンルで、色々な役柄を、それぞれにまさにハマリ役という感じで演じている西村雅彦だが、役づくりへ取り組む時、どのような準備をしているのだろうかと聞いてみると、「他の方がどうか分からないので比較は出来ませんが、そんなに準備はしてないと思います」という答え。

「NHKの大河ドラマ『秀吉』で徳川家康を演じた時は、初めての大河ドラマだし、周りの方にご迷惑をかけてもいけないので、さすがに何冊か家康に関する本を読んだりしましたが、基本的には、たとえ歴史上の人物を演じる際にも、資料を読みあさって完璧に役づくりをしていくということはないんです。台本を読んで、あくまでもその中から膨らませていくことが重要だと思っています。頭でっかちになって現場に入ってしまうと切り換えが効かないというか、柔軟性がなくなるでしょう。監督の要求にも臨機応変に応えられなくなると思うんですよ」

この"柔軟性"というのを改めて意識したのは、ひょっとしたら「マルタイの女」の現場だったのかも知れない。とにかく「マルタイ〜」の現場は、「前日考えて持ってきたものを当日の現場で全否定され、それから頭をフル回転させるのに答えが見つからない、ということがしばしばありましたね」というほど、ある意味でつらかったという。

「伊丹監督は、僕の今までとは違う面を見せたかったんだとおっしゃっていました」。そしてそれは、見事に結実していると思う。

「映画の良さは、何よりも暗闇の中で大きなスクリーンを、見ず知らずの人と一緒に見るということだと思うんですよ。だからこそ記憶に残る。それがいいと思うんです」と言う、"映画館主義者"の西村雅彦。

「来年すぐこういう役がやりたいというのはないんですが、今までTVや舞台でやったことのないような役を映画でやれたらなあと思いますね。非道だがクールな殺人犯とかね(笑)」

若い映画監督たちの作品にも出てみたいとも語ってくれた。来年は是非スクリーンでの活躍を見たいものだ。

「マルタイの女」　「ラヂオの時間」

Digitized by Google

はらだ・みえこ　1958年12月26日生まれ。東京都出身。74年「恋は緑の風の中」で映画デビュー。77年「大地の子守歌」「青春の殺人者」により本誌主演女優賞、ブルーリボン賞新人賞など9賞を受賞する。以後も「あゝ野麦峠」(79)、「もどり川」(84)、「乱」(85)、「火宅の人」(87)、「式部物語」(90)、「絵の中のぼくの村」(96) など代表作多数。本年度の「愛を乞うひと」に続き、現在CXドラマ「眠れる森」に出演中。また、「虹の岬」が来春公開予定。

原田美枝子

昔、加賀まり子がある映画で助演女優賞をもらったときに、「やはり主演で賞もらいたいわよ」と冗談めかして言ったことがある。それはそうだろう。賞がどうこうではなく、主演女優であることの意味は大きい。しかし日本映画では、現状の中で女優が主演であり続けられる〝大人の映画〟が少ないのである。そんな中で、黒澤明、深作欣二、熊井啓などの巨匠との仕事をこなしてきた原田美枝子は、主演女優としての力量を、20代から30代にかけて身につけていった。彼女が、演技に厚みをもつキッカケとなったポイントの作品は、「乱」であろう。ここでの鬼気迫る楓の方役では、黒澤明の徹底したリハーサル・システムによって、ひとつの演技が完成していく凄みを、観る観客もそうだが、彼女も感じたと思うのである。

以降の仕事の原田美枝子は、たとえそれが脇に回った主婦役であろうが、常に〝特別〟の印象を与える女優になった。そして、今まで積み重ねてきたキャリアを、全てぶつけたかのような「愛を乞うひと」が今年登場した。愛し方を知らない母親と、愛されたいと思いながらも叶わない娘。その二役を演じた彼女の、演じ分けの見事さ。客観視すれば、あまりに激しく暴力的な母親像は、リアリティを失いかねないキャラクターだ。それを演技によって映画的人物として作り上げてしまう力は、並の女優には持てないものだ。

10代の頃、周りから見える彼女は、若き演技派ではあるものの、製作や脚本にも手を出し、挑戦的で肩に力が入っていた。それが巨匠たちとの現場をくぐり抜けることで、思いのみが先行する肩の力が抜け、確かな実力と魅力へと結びついていった。言わば、それは原田美枝子が大輪の花となるための〝修行期間〟だったのだろう。「愛を乞うひと」は、そういうプロセスを経てきた彼女の、新たな一歩となる気がする。願わくば、心身共に充実した彼女が、その魅力を全開できる〝大人の映画〟が、今後も作られていってほしい。彼女の準備は、全て整っているのだから。

金澤　誠

Digitized by Google

山崎まさよし

やまざき・まさよし　1971年12月23日生まれ。山口県出身。93年上京。アルバイトの傍らライブ活動で腕を磨き、95年ポリドールレコードと契約。9月、映画主題歌にもなったデビューシングル『月明かりに照れされて』を、96年にはデビューアルバムをリリース。97年、篠原哲雄監督「月とキャベツ」に主演。口コミで評判が高まり尻上がりにヒット。現在「奇跡の人」（ＮＴＶ）に主演。3枚目のフルアルバムの発売も待たれる。

「月とキャベツ」で鮮烈な映画主演デビューを飾ったシンガーソング・ライター、山崎まさよしは、根っからのリズム感を演技にも繁栄させ、スクリーンに躍動感をもたらした。群馬の山奥、「眠る男」も撮影された静かな環境で撮られた静謐でミステリアスなラブ・ストーリーに、躍動感を与えるなんて！さじ加減を間違えると気恥ずかしいことになりかねないこの冒険（本人は無意識だと思うが）を成功させたことは、お世辞ではなく、この映画に、ひいては日本映画界に新しい可能性をもたらしたと言って過言ではない。再び演技する彼を見たいと思っていたら、ドラマ『奇跡の人』（ＮＴＶ）が始まった。映画でも是非もう一度。篠原哲雄監督も希望してたことだし。**編集部**

村上淳

むらかみ・じゅん　1973年7月23日生まれ。「のぞき屋」(95)、「ありがとう」(96)、「バウンス ko GALS」(97)、「元気の神様」(98）など立て続けに映画出演。今後も「ランデブー」(山本浩資監督)、「ナビィの恋」(中江裕司監督）などが新作として控えており。またこれから後撮影予定の作品として「dead BEAT」(仮題・安藤尋監督)、「インナーポリス」(仮題・高橋栄樹監督）がある。ＴＶドラマにも多数出演している。

撮影／北野尚子

「KAMIKAZE TAXI」を観て、出演を熱望したという原田眞人監督作品「バウンス ko GALS」で、いまどきの若者と思いきや、実は一本芯の通った心根の優しいビデオ・スカウトマン、サップを好演した村上淳。そう、彼は、甘いマスク（古い？）の見かけによらず、けっこう硬派で男気の役者なのだ。でもそれを前面には出さない。その押さえたキャラクター作りが彼の魅力を倍増する。現在上映中のニュー・メキスコでロケした短編ロード・ムービー「謎のＦＬＹＩＮＧ ＳＡＵＣＥＲ」は、そんな村淳の新しい一面を引き出した作品。彼は待たない。自分から仕掛けていく。その努力が結実した時、どんな変貌を遂げるか、本当に楽しみだ。**編集部**

遠藤憲一

えんどう・けんいち　1961年6月28日生まれ。東京都出身。83年のＮＨＫドラマ「壬生の恋歌」で俳優デビュー。88年「メロドラマ」で映画初出演。以後「その男、凶暴につき」(89)、「オルゴール」(89)、「月はどっちに出ている」(93)、「N45°ワンダー・ラビッシュ」(94)、「マークスの山」(95)、「きけ、わだつみの声」(95）、「嗚呼!!花の応援団」(96)、「DOG RACE　犬、走る」(98）などに出演。ＯＶ、ＴＶドラマ出演作品も多数。

「悪役が大好き」と公言する遠藤憲一。先頃公開になった崔洋一監督作品「犬、走る」では新宿歌舞伎町に君臨する韓国人ヤクザ・権田を演じ、まさに本領発揮の感有り。自分を裏切った上海美女を殺害し、死体を平気で他人の家にほうり込むその悪党振り。不気味な存在感と確かな演技力で強烈なインパクトをスクリーンに残した。映画だけでなく、ＯＶ、2時間ドラマ、時代劇等犯人役や敵役は数知れず。〝生まれついての悪党〟を演じることが多かったが、来年1月公開予定の長崎俊一監督作品「ドッグス」では運命に翻弄され殺人を犯してしまう小心者の銀行員を演じて新境地を開いている。〝受け〟の芝居も実に上手い。　斎藤芳子

Digitized by Google

松尾れい子

まつお・れいこ　1978年10月20日生まれ。佐賀県出身。93年、ソニー・ミュージックグループの『ちょっとそこまでオーディション』でグランプリを受賞し、芸能界デビュー。95年「水の中の八月」で映画初出演。以後「ユメノ銀河」(97)、「プープーの物語」「がんばっていきまっしょい」(共に98)、「楽園」(99年新春公開予定)と出演。11月28日にはNHKドラマ『青い花火』(脚本・鎌田敏夫　22時40分〜)がオンエアされる。

デビューは、石井聰亙監督の「水の中の八月」。そして「ユメノ銀河」と続いたが、この両作ではどちらかと言えば主演の小嶺麗奈の影に隠れていた感じがある。今年「プープーの物語」に主演し、インタビューする機会があったが、自分の方向性をしっかりと〝女優〟と見定めている女性だという印象を受けた。「プープーの物語」では〝無敵のフウ〟という、パワフルでありながらナイーブな心を持つ女の子を、非常にファンタジー性の強いこのロードムービーの中で、生き生きと演じていた。虚構性の強い作品への出演が続いているが、実際の彼女の可愛さを等身大に出した映画も、このへんで観てみたい。

金澤　誠

西田尚美

にしだ・なおみ　1972年2月16日生まれ。広島県出身。CF、TVドラマ出演を経て、95年「ゲレンデがとけるほど恋したい。」で映画デビュー。以後「学校の怪談」2、3作(96、97)に出演。97年の「ひみつの花園」でハワイ国際映画祭主演女優賞、日本アカデミー賞新人俳優賞、日本プロフェッショナル大賞を受賞している。今年は「愛を乞うひと」とドラマ「世界で一番パパが好き」に出演。99年には新作「ナビィの恋」が公開予定。

「ひみつの花園」の西田尚美を観たとき、ついに日本にもスラップスティック・コメディの似合う女優が登場してくれたと確信し、嬉しくなってしまった。お金探しのためになりふり構わず猛進する姿は、しかし、だからこそすこぶるすがすがしい。それは一見どてっとしているようで実は彼女が天性で備え持つ品の良さと美しさが、スクリーンから巧みに醸し出されるからではないか。またドラマ『世界で一番パパが好き』の中、周囲とワンテンポずれたユーモラスな言動は、正に彼女ならではの微笑ましい魅力であろう。実はシリアス劇も似合うはずだが、今はコメディ路線をひた走って極めてもらい、輝く明日のお星様になりましょう。的田也寸志

奥貫　薫

おくぬき・かおる　1970年11月22日生まれ。東京都出身。89年「バトルヒーター」のヒロイン役で映画デビュー。以後ワーナーランバート「クロレッツ」CFなどを経て、97年、三谷幸喜監督作品「ラヂオの時間」で大いにステップアップする。「恋のバカンス」(97)『ニュースの女』『星に願いを』(共に98)など、TVドラマ出演も多数。現在、CX系列水曜日のドラマ『板橋マダムス』(22時〜)に出演中。

「彼女の良さは素直な素朴な演技と、何か清潔なものを感じさせるというようなところだと思う(略)街のそこここでみかける娘さんという感じだ」。これは成瀬巳喜男監督が香川京子について語った言葉だが、奥貫薫の魅力もまさにこの言葉に言い表されている。「ラヂオの時間」で、一癖も二癖もある個性的な人物の間を右往左往しながら〝普通の人〟を演じて、「あゝこういう人っているよなあ」と思わせる。これぞ、彼女の魅力！　そう、奥貫薫は、香川京子、倍賞千恵子らに通ずる、普通の人の中にある〈さりげない輝き〉を表現できる女優なのだ。こういう人こそ、日本の映画で観たい。三谷幸喜監督、市川準監督、次回作はぜひ彼女主演で。前野裕一

Digitized by Google

柳　愛里

不思議な顔だ。私たちの郷愁の中のアジアと言ったら、不用意な発言になるだろうか。かすかな畏怖を伴う懐かしさの深奥へ私たちを遥かに牽引してゆく、既視であってしかも新鮮な顔。整ってはいるが、パッと目を惹く華やかさや愛らしさはなく、その辺にいるごくふつうの女の子のように見える。だがそれでいて、ほのかに揺曳する微妙な〈情〉が、驚くほど豊かな美しさでその顔を彩り輝かせるのだ。「2／デュオ」で何度か見せる、目も鼻も一緒にくしゃくしゃになった、泣き顔のような笑顔。家に招いた友人たちの前でサラダを作りながら次第に自制がきかなくなってゆく、その崩れる一瞬前の必死に耐えている顔。「尾崎翠を探して　第七官界彷徨」で、隣家の娘に惹かれている従兄の三五郎を、密かな想いを込めてみつめるときの顔。兄の友人から「僕の好きな詩人に似た女の子に何か買ってやろう」と言われて「くびまき」と答える瞬間の顔。いや、息をのむほどに美しいのは〈顔〉ではなく〈表情〉のほうだ。そして、美しいときの彼女は、ほんとうに〈特別〉で、少し怖い。

姉・柳美里原作の「家族シネマ」への主演は、かつての慎太郎～裕次郎の臆面もないダブル・ナルシシズムのお気楽さとはまるで無縁な、危険な賭けになるはずだが（ならなければ意味がない）、彼女は勝つだろう。未成熟な可愛らしさがもてはやされる世界にあって、彼女はおとなびて、たおやかで、物静かにツッパリつづける。未成熟なものがあるとすれば、それは敢えて頑固に成長を拒んで守ろうとする部分であり、可愛らしさを狙ってのことではない。そして、柔らかな優しさの中に、かすかな狂熱を孕んで強靭に燃える内核がある。それは周囲の空間にまで感染し、私たちは、彼女の周辺で画面が突然色を変えたり光を帯びたりするのを見る。独特の強度をもつ目つき、イーッをする形に裂けるように開いてゆく不思議な微笑。いたずらするように画面にただ舞っているだけの淡さでいて、印象は深く、長い余韻になる。

石原郁子

ゆう・えり　1971年12月21日生まれ。神奈川県出身。姉は作家の柳美里。東京キッドブラザースを経て、94年「修羅の帝王」で映画デビューを果たす。以後「新宿黒社会　チャイナ・マフィア」(95)、「2／デュオ」(97)などに出演。神代辰巳監督の遺作OV「淫らな関係　インモラル」(95)にも主演している。今年11月には姉の原作による主演映画「家族シネマ」が、韓国で初の日本語映画として公開が決定している。

Digitized by Google

対談

大杉漣 田口トモロヲ

司会 的田也寸志　取材撮影 吉岡誠　構成 森直人

巻頭特別企画 ニッポン新個性派時代 がんばれ！日本映画

Digitized by Google

僕ら、アングラの子供たち

田口 大杉さんと初めてお会いしたのは、廣木（隆一）監督の「さわこの恋」（90年）の時でしたよね。

大杉 そうです。

田口 シーンは全然別だったんですけど、ロケバスの中で一緒になって。もちろん僕は大杉さんのことは既に知っていました。転形劇場（註①）の芝居や主演のピンク映画も観ていましたし、『ZOOM—UP』（註②）もずーっと読んでいましたから。

大杉 あの映画、〝ばちかぶり〟（註③）のメンバーも出ていたんだよね。僕もトモロヲ君の名前は知っていました。

田口 大杉さんは、すごく好きな俳優さんでしたから、僕のこと知っていて下さって、感激しました。

大杉 トモロヲ君がミュージシャンであることに興味があった。僕はその随分前ですけど、泉谷しげるさんと仕事やっていたんですよ。ディレカン（ディレクターズ・カンパニー）で「ハーレム・バレンタイン・デイ」（82年）を作る前の、自主映画っぽいやつで。その時、ミュージシャンの方っていうのは、イエス・ノーをハッキリ言うから面白いなと思ったんですよね。俳優さんって、答えは自分の中に持っているはずなんだけど、イエス・ノーという形でハッキリ言わない。わりと、考えの過程が言葉として出てくる感じですね。もちろんミュージシャンの方もダラダラと悩んでいるはずなんだけど、まずイエス・ノーを言っちゃうという潔さがある。それが気持ちよくて、僕は好きなんですよね。

ミュージシャンの方って、まずイエス・ノーをハッキリ言うのが潔くて面白い。僕は好きですね。

大杉漣

——お二人は、「さわこの恋」以降90年代をずっと突っ走ってこられたわけですよね。

田口 大杉さんのほうが、くらべものにならない程キャリア長いですよ。僕は「さわこの恋」の時に、ようやく「ああ、こういうことをやっていこうかな」と思い始めたばかりでしたから。小劇場でも、転形劇場という由緒正しいところの出身で……。

大杉 いやいや（笑）。

田口 僕は転々と劇団たらい回し状態でしたから。フィールド分けするのは変なんですけども、一応同じアングラ出身という気持ちはありますが。

大杉 うん、あるね。

田口 アングラの一番初期っていうと、状況劇場（註④）があるじゃないですか。

大杉 そう、元祖ね。

田口 ある意味じゃ、僕らはその子供達ですね。

職業欄には〝自営業〟って書くんですよ

——それにしても最近、お二人とも、出演本数がものすごいですよね。

大杉 まあ、でもありがたいですよね、いろんな監督が呼んでくれて。

——あと、90年代にはビデオが普及したせいで、日本映画の本数自体が増えているんですね。それもインディペンデント系から大作まで雑多に。ですから、お二人の活動は90年代の日本映画を象徴しているように思えるんですけれども。

田口 ただ僕ら、（こういう場では）たくさん本数出ていてスゴイですねって言われるんですけども、悔しいことに意外と一般には、これだけ日本映画が作られていることを知られてないんですよ（笑）。こんなに出るほどあるんですかって驚かれる。でも昔、僕が観て育った殿山泰司さん、小沢昭一さん、田中邦衛さんとか、当時、ものすごい出演本数だったじゃないですか（笑）。それがある種、当たり前だったというか。僕なんかはそれがカッコイイなあと思って観てたわけだから、別に特別なこ

「LEY LINES」（仮題）

註1 太田省吾が旗上げしたアンダーグラウンド劇団。88年解散。
註2 ピンク映画を対象とした賞を主催していた幻の映画雑誌 白夜書房刊。
註3 田口氏がヴォーカルを担当していた伝説のパンク・バンド。
註4 唐十郎が結成したアングラ演劇集団。[illegible]した小劇団。87年解散。

Digitized by Google

大杉漣（おおすぎ・れん）　1951年徳島県出身。74年より88年の解散まで転形劇場に所属。78年「緊縛いけにえ」で映画デビュー。以後、「変態家族・兄貴の嫁さん」「無能の人」「地獄の警備員」「幻の光」「ポストマン・ブルース」を始めとする多数の映画、OV、テレビドラマに出演。名バイプレイヤーとして知られる。「ソナチネ」以降の北野武監督作品に出演し、「HANA-BI」で高い評価を得る。

田口トモロヲ（たぐち・ともろを）　1958年東京都出身。83年「俗物図鑑」で映画デビュー。演劇、漫画家、ヴォーカリストとしてマルチな才能を発揮。近年ではドラマの演出も手掛ける。87年、塚本晋也主催のテント劇団"海獣シアター"に参加。8ミリ作品や16ミリ作品「鉄男」に主演。『夢魔』「君といつまでも」「弾丸ランナー」等で、その個性を印象づけ、97年「うなぎ」「私たちが好きだったこと」他で毎日映画コンクール助演男優賞受賞。

ととい う感覚はないんです。

大杉　まあ、僕らはあくまで選んでもらう側ですからね。それが基本姿勢としてあって、その中で自分をどう表現するかってことだと思う。それに僕はだいたい（出演）OKなんですよ、スケジュールさえあえば。もちろんホンも読みますけど、読みながらもう具体的なことを考えちゃってる。その具体的なことが出てこないと、ちょっとツライなっていうのはありますけどね。……だから乱暴な言い方をすると、仕事は行き当たりばったり。それが一番いいと思うし、大事なことだと思うけどね。あんまり自分の中で戦略的なことを考えても、物事はそう都合よく進まないですよ。だから僕は掛け持ちもやりますよ。自分の体の中に二つも三つも役を入れて、その混乱を楽しんでいる。自虐的なんですかね、僕は（笑）。

田口　いや、大杉さんは、本当にスゴイと思います。ある意味、全網羅じゃないですか（笑）。

大杉　でも忙しい忙しいって言いつつ、結構のんびりやってるんですよ。だって本数は多いけど、僕、ベタで出ているのって……。

田口　あ、僕もそうなんです。

大杉　ね、そうだよね。四シー

Digitized by Google

ンとか五シーンを二日とか三日で撮って、それでも一本じゃないですか。本数だけ見るとこれも出てる、あれも出てるってなるけど、実はウダウダやってます、ハイ（笑）。これはキッチリ言っとかないとね。

田口 そう、一本で稼げないものですから（笑）。いわば、品揃えで勝負のドン・キホーテ（註⑤）のような状態（笑）。

大杉 ドン・キホーテかい、俺達（笑）。

田口 コンビニのような、24時間開いてますという（笑）。

大杉 だから俳優っていうのは、基本的に不安なんですよ。表現の部分でもそうだし、役者っていう職業を選んでいることも不安だし。孤独だしね。じゃあ何が支えかっていうと、監督だったり、作品だったり、あるいは友人である田口トモロヲ君が頑張っている姿であったり。それが挫けない為の力になる。

田口 不安っていうのはやっぱり、基本にありますよね。実体のない職業というか……まあ大きなことを言ったら、そもそも人間自体の実体は何なんだということになりますけど（笑）。現場だったり映像だったり、役者はその中にしか生きていない。しかもその同じ時に、（自分は）別の人間を演じていたりするという……迷宮的状態？考えていると、いつもそういうことに突き当たる。それにスポーツと違って、役者はハッキリした結果が出ないじゃないですか。演技は、人の数だけあるし。ジャッジする人も無数にいる。だから、ものすごくアバウトな言い方ですけど、俳優っていうのは不安を表現する職業かもしれない。……で、そう思いつつ、ハーヴェイ・カイテル（註⑥）のインタビューを読んでいたら、同じことを言ってたんですね（笑）。あっ、やっぱし！と、あたしゃ思いまして。ああ良かったな、って安心してちゃ、まだいけないんですけど（笑）。

大杉 だから、俺はこんなこと言ってるけど、ホンマかいな、大杉、本当にお前そういうふうに思っているのかって、いつも自分に問うわけですよ。結局、何か言えば言うほど自分に跳ね返ってくる。だからきっと、ハーヴェイ・カイテルもそう言い切りつつ、また自分に戻るんだよね（笑）。その繰り返しだと思う。

田口 そう、本当に、俳優って何だろうって思いますね。僕、職業欄には〝自営業〟って書くんですよ（笑）。〝自由業〟とも書けない。そんな自由とも思えないし（笑）。

大杉 俺、〝現場者〟って書いて怒られたことがある（笑）。日雇いなんですか？って聞かれたから、まあそんなもんですとか答えたら、じゃあ日雇い労働者って書いて下さいって言われた。そうか、〝自営業〟があったか（笑）。

困った時には現場。最終的には現場しかない。

——先程の〝不安〟ってことに関してですけど、それが（撮影）現場の力で解消されるというのはありますか。

田口 いやもう、現場主義者ですから。

大杉 そう〝現場者〟ですよ。

田口 何はともあれ現場、何はなくとも現場。

大杉 ハハハ（笑）。

田口 困った時には現場（笑）。だって行かないと分からないですよ、他のところで何考えていても。いくら周到に準備しても、最終的には現場しかない。例えばドラマの中ですごく普遍的なシーンが出てきたとしても、実はそれって、現場の、その時、その瞬間にしか撮られてないライブなわけですよ。僕、自分が映画を観ている側の時は、こういうふうに撮られていると思わなかったんです。時間の余裕がもっとあって、順々に重ねられた上、ラスト・シーンがあると思っていたんですけど、必ずしもそうじゃない。夜中で皆クタクタで、体調がベストじゃなくても、残りを撮らなきゃならなかったり。でもそれがその場の〝現実〟ですよね。それをスクリーンに映すと、普遍的なものが出てきたりする。これが映画のマジックっていうか。

大杉 現場で学んだりすることって大きいよね。僕なんか転形劇場でずっと芝居やってた時に、演劇論や演技論とかを読んだり教えてもらったりしたんだけど、いくらそれを頭で理解していても、体を通した時にウソになっちゃう時がある。だから僕にとって〝何とか論〟っていうのは、もう〝現場論〟でしかありえないんですよ。

田口 ああ、僕もそんな感じです。

大杉 まず〝論〟から入っていくということが、僕の中ではとっくに敗北しているんですよ。だから、まず現場に自分の体を置いてみることが重要だと思いますね。

田口 日雇いですから、僕ら（笑）。現場に出て、自分で知っていくしかないんですよ。それはすごく楽しいことですしね。

ものすごくアバウトな言い方ですけど、俳優っていうのは不安を表現する職業かも

田口トモロヲ

註5 食料品、家電、下着、GUCCI、エルメスまで売ってる摩訶不思議なディスカウント・ショップ。

註6 お2人は愛する俳優ハーヴェイ・カイテルにちなみ〝バージー・駅・カイテルズ〟を結成！ この対談が初仕事!?

Digitized by Google

撮影／吉岡誠

くろき・ひとみ　1960年10月5日生まれ。福岡県出身。宝塚を経て、86年「化身」で本格的に映画デビューを飾る。以後「姐御」(88)、「動天」(90)、「渋滞」「略奪愛」(共に91年)、「怖がる人々」「四十七人の刺客」(共に94)、「蔵」(95)、「SADA」(98)などに出演。97年の「失楽園」は社会的現象となる大ヒットを記録し、彼女も日本アカデミー賞最優秀主演女優賞などを受賞している。詩集、エッセイの分野でも才能を発揮している。

黒木　瞳

黒木瞳というと"宝塚の娘役出身女優の脱ぎっぷりの良さ"とか"大胆な熱演"という、いかにも紋切り型の評がよく言われる。確かに、「化身」での中年文芸評論家の若き愛人、「姐御」での殺された夫の復讐に燃える極道の妻、「略奪愛」での親友の夫を奪い取るヒロイン、極めつけは流行語にまでなった「失楽園」での美しい人妻――と、彼女の演じた役柄を見ていくと、そういう形容がされやすいヒロイン像の映画が並ぶ。

実際、本人も「必要なら脱いでもいいと思っていた」(本誌98年2月上旬号「THE FACE」)といった発言をさらりとするのだが、じゃあ彼女が、いわゆる"体当たり演技派の女優"かと言うと、全くそんな感じがしない。黒木瞳が演じていると、いい意味で体当たりという感じがないのだ。その種の演技によくあるような、演技だけ一人よがりしてしまって映画の流れの中から突出している、ということが全くなく、自然にドラマの流れの中に収まっているという感じがするのである。

一つには彼女に品の良さや可愛らしさが備わっているからで、それが単なる体当たりにはならない幅の広さにつながっている。黒木瞳だからこそ「SADA」においてあの阿部定をあんなにも可愛いらしく演じられたのだし(14歳の定すら自分自身で演じて、それが全く違和感ない)、「失楽園」の人妻・凛子に品の良さがなければ、よくある不倫映画ものとして、あれだけの話題にはならなかっただろう。

大胆な熱演を必要としないようなシーンにこそ、彼女の色っぽさが、それ故の人を虜にしてしまう怖いぐらいの魅力が表れる、というのは、例えば和田誠監督のオムニバス映画「怖がる人々」の中の、いちばん怖かった「火焔つつじ」のエピソードを思い出せば納得できるだろう。

観る者をゾクッとさせるそういう役をもっと見てみたいと思う一方、今まで見たことのない、文字通りのアクションとか、いっそ下品なキャラクターにも挑戦してほしい、と可能性を想像してしまうのである。　編集部

Digitized by Google

覚えやすい顔である。もっとはっきり言ってしまえば「とっちゃん坊や」顔である。しかし、この近藤芳正はもしかしたら〝織田裕二〟になっていたかもしれない男なのだ。どういうことか？　彼はTV『踊る大捜査線』の第1話で不審者として事情聴取を受けながら、青島刑事（織田裕二）のグチを聞く営業マンを演じた。が、実は犯人で、後にあっさりと自首し、元サラリーマンの青島刑事に「僕はアイツになっていたかもしれない……」と嘆息させてしまうのだ。

というわけで逆もまた真なり。TV『勝利の女神』の進学塾のプロフェッショナルな講師のように、いろいろ矛盾は感じていてもやることはやるキャラがピッタリ。作・三谷幸喜の舞台『笑の大学』では戦時下、検閲を掻い潜り、本を面白くしようと悪戦苦闘する喜劇作家を巧演。つまり『踊る』の青島刑事以上に頑張るキャラクターなのだ。

このギャップこそが近藤芳正。「ラヂオの時間」では、台本の内容とそれを書いた妻の素姓を混同し、オロオロする夫。これは織田裕二には決して出来ない役である……近藤芳正にしか！

轟夕起夫

近藤芳正

こんどう・よしまさ　1961年8月13日生まれ。愛知県出身。三谷幸喜主宰による東京サンシャインボーイズに客演、以降多くの舞台に出演。映画はやはり三谷脚本による91年の「12人の優しい日本人」からで、以後「トカレフ」(94)、「遥かな時代の階段を」(95)、「ラヂオの時間」(共に97)、「ベル・エポック」(98)、「のど自慢」などに出演している。舞台は99年2月7日よりパルコ劇場にて「第二章」に出演。

梶原　善

かじはら・ぜん　1966年2月25日生まれ。岡山県出身。85年から94年まで、東京サンシャインボーイズに所属し、多くの舞台に出演。映画出演は「12人の優しい日本人」(91)からで、以後「我が人生最悪の時」(94)、「遥かな時代の階段を」(95)、「鬼」「ガメラ2　レギオン襲来」(共に96)、「ラヂオの時間」(97)と出演を続けている。「王様のレストラン」(95)などドラマ出演も多数。「出前一丁」CFのパパの声も演じている。現在CXドラマ「ニュースの女」出演中

梶原と書いて、かじはらと読むらしい。現在、30年の活動休止期間に入っている劇団『東京サンシャイン・ボーイズ』の復帰作『リア玉』の主演は、どうやら彼が演じるらしい。

「12人の優しい日本人」では、「十二人の怒れる男たち」でJ・ウォーデンが演じた陪審員番号七番のタイル職人を（舞台でも）憎めない奴として演じた。「ガメラ2・レギオン襲来」の冒頭では、螢雪次朗との絶妙な掛け合いを見せ、絶品の悲鳴を聞かせた。「ラヂオの時間」の寡黙なAD大田黒が、宇宙船の効果音を作り出す様はキュートだった。『王様のレストラン』のお菓子を褒められて泣いてしまう、臍曲がりなパティシエも食べてしまいたいほど魅力的だった。

要するに、彼は短い登場時間で強い印象を残す役者なのだ。彼が好きだと言っていた「ウォレスとグルミット」同様、短いセンテンスと微妙な表情で物語を語り、見る者にインパクトを与える。その彼が主役を演じるとなれば、やはり見ないではおれないではないか。30年間も待つ身も辛いが、期待され続ける役者の心境もいかばかりか……。映画の新作も期待してます。

編集部

Digitized by Google

「鮫肌男と桃尻娘」

巻頭特別企画 がんばれ！日本映画

ニッポン新個性派時代

Digitized by Google

「"出会い"の積み重ねなんです。自分は本当に"出会い"に感謝しています」

俳優・寺島進が今日あるのは、すべて"出会い"のおかげなのだと彼は言う。

寺島進にとっての"出会い"。その筆頭に挙げられるのはやはり北野武監督だろう。

「よく常連なんて言われますけれど、すごく照れ臭いんですよ。『その男、凶暴につき』からずっとやらしてもらって"よく使ってくれるな"と心から感謝していますから。北野監督は素材の活かし方が上手いんです。"あんな下手な芝居、こんなに良く使ってもらって申し訳ない。いい映画にして下さってありがとうございます"って、いつも思っています。現場では常に緊張しています。もっと普通でありたいと思う反面、その特別の緊張感が"画"に映るのかもしれませんね。すべて委ねられるというか、信頼感を感じます」

寺島進は北野監督以外にも何人もの素敵な監督に出会った。初主演作「おかえり」の篠崎誠監督。黒沢清監督、青山真治監督、サブ監督。そして石井克人監督、是枝裕和監督。

年明けにはその石井監督作品

「ワンダフルライフ」

寺島進インタビュー

インタビュアー 斎藤芳子　取材撮影 夏野苺

"出会い"に感謝しています。

「鮫肌男と桃尻女」と是枝監督作品「ワンダフルライフ」が相次いで公開となる。「鮫肌～」は痛快コミック活劇、そして「ワンダフル～」は人生を丁寧に見つめた作品だ。

「全然タイプが違う映画ですね。『鮫肌～』で僕の演じた沢田というヤクザは原作にはない役で脚本も書いている監督が作ってくれました。一直線なキャラクターではなくて、内面的に悩んでいる男。抽象的な芝居というか、何げない空気というか、沢田の生理的な部分は観客に想像してもらえばいいですね」

一方の「ワンダフル～」は天国の入り口にやってきた人たちに"人生で一番大切な思い出は何か？"を問う物語だ。

「是枝監督とは『おかえり』でロンドン映画祭に行った時、初めてお会いしました。監督と話をして"ああ、この人は人間的に信用できるな"という感覚を持ちました」

是枝組の現場は自然な空気が流れていて、本当にいい雰囲気だったそう。

「キャストやスタッフの中には映画の現場は初めてという人も多かったし、ベテランの方もいらっしゃいました。大先輩とご一緒できたのはとても勉強になったし、また新しい人たちを見ていると何もないからこそ生まれるシンプルさを感じました。そんな中で自分は世代的にもキャリア的にもちょうど真ん中。映画はやはりバランスが大事と考えた時に、僕はその"橋渡し"をする役割だったんですね。それとこの映画自体がノンフィクションとドキュメンタリーの間、死後の世界と現実的な部分という要素があって妙な"浮遊感"がありました。そして一般の方たちの存在感や生きざまも目の当たりに見ることができました。この作品に参加できたことは僕にとって尊い経験になったし、心の財産になりました」

お話を伺っているとなるほどいい"出会い"をしているのだなと実感させられるが、では出会うことを目指して常に行動を起こしてきたのか？　それとも一つ一つの現場をきちんとやってきた結果が次につながっていったのだろうか？

「うーん、その両方ですね。その時その時をちゃんとがんばっていないと出会えないし、あとはアンテナを張っていると発信受信できるし、噂を聞いてピーンを来るものがあるし。でも実際に会ってみなければ分からないので、自分から会えるように働きかけます」

動いていないと何も始まらないし、歩いていないと何も起こらないと言う。今後は、

「基本的には映画ベース、映画俳優でやっていきたいですね。映画は残っていくものだから、それだけに選択する時ストイックになる部分もありますけど」

寺島進は俳優である以前に、一人の人間としてきちんと生きている人だった。だからこそ素敵な"出会い"を呼び込んだり、それに感動することができるのだろう。「人の気持ちの分かる人間でありたい」「人間は弱いけれど、ちゃんと自分の力で立っていなければね」という言葉が印象に残った。

Digitized by Google

ヒット作「がんばっていきまっしょい」の東高ボート部員の一人を演じた真野きりなは、当時十九歳。五人のボート部員中、最年長だった。「オーディションに受かって単純に喜んでたら、方言やボート漕ぎはあるし、共演の子たちともうまくやっていかなきゃいけないと、よく考えたら喜んでる場合じゃなかった（笑）。撮影中は、三人部屋ひとつと、個室ふたつを、五人でローテーションして合宿しました。三人部屋ではケンカしたり、励まされたり、いろんな個性を発見できて面白かった。本物のボート部の子たちもこうやって頑張ったんだろうなって。だから映画を見た時は、自分のことより、まず他の子に目が行って。ああ頑張ってる、頑張ってるって嬉しくなりました」

この映画は、彼女が女優でやっていくことを決めた最初の作品。モデルをしていた高校在学中は、実は演じることに積極的に取り組めなかったのだと言う。

「高三で進路を決める時、何をしたいのか改めて考えたんです。その時に、映画に出たい、演じたいという気持ちがあることに気づいた。モデルの仕事も楽しいけど、何か違う。自分以外の人になるのはエネルギーがいるし、なりきれはしない。でもそれを経験することで、何か変われるかもしれないと思った。そこに賭けたんです。親友にその話をしたら、やりたいことが見つかって羨ましい。頑張りなって言われました。高校生の頃は、仕事は多めのお小遣いを貰うような気分だったし、辛いことがあっても、本業は学生だからと逃げられた。でももう後戻りできないので前向きに行きます」まだ三日ヒマな日が続くと、落ち着かない気分になると言う。プロの女優となった彼女は、今後この時をどう過ごしていくのだろう等と考えつつ、公開待機中の彼女の魅惑的な出演作、塚本晋也監督「BULLET BALLET」、「ピーター・グリーナウェイ監督「8½の女たち」(仮題)、矢口史靖監督「アドレナリン・ドライブ」の話を聞く。彼女が一足飛びに成長していったことを実感した。　編集部

真野きりな

まの・きりな　1978年7月28日生まれ。神奈川県出身。95年から98年まで集英社セブンティーン専属モデルを務める。96年「学校Ⅱ」で映画デビューを果たし、97年「ユメノ銀河」、98年「がんばっていきまっしょい」ではボート部部員の一人を好演。塚本晋也監督「BULLET BALLET」、ピーター・グリーナウェイ監督「8½の女たち」(仮題)、矢口史靖監督「アドレナリン・ドライブ」が公開待機中。まもなく「dead BEAT」の撮影に入る予定。

Digitized by Google

座談会

「ニッポン個性派時代」から20年。あの頃から、個性派が面白かった

秋本鉄次
内海陽子
尾形敏朗
野村正昭

司会 的田也寸志
構成 森直人

連載第1回（77年10月上旬号）

巻頭特別企画 がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

今回の特集タイトルのヒントとなったのは、実は本誌で1977年10月上旬号から100回にわたって連載された、「ニッポン個性派時代」という俳優へのインタビューであった（別表のラインナップ参照）。当時、この連載を担当したインタビュアーはそれぞれ映画評論家としてデビューしたばかりの秋本鉄次、内海陽子、尾形敏朗、野村正昭、藤田眞男の5氏。藤田氏のみこちらの不手際で連絡つかなかったのだが、残る4人の皆さんに集まっていただき、20年前と現在との“個性派俳優”について語っていただいた。

第1回目からいきなり酒盛り

――皆さんは本誌の「読者の映画評」欄の御出身なわけですが、そこからどう「ニッポン個性派時代」にまでつながっていったのでしょうか。

秋本 初めてお便りします、みたいな感じでネットワークを持ったのではなかったね。

内海 個人的に積極的なタイプではなかったから（笑）。その頃、秋本さんとか今日はいらっしゃらない藤田眞男さんとか、大森一樹監督とか、今はマンガ評論家をやられている村上知彦さんとかがミニコミを出していまして、川本三郎さんがそれを面白がっておられたんですよね。

尾形 だから（「ニッポン個性派時代」は）川本さんと小藤田千栄子さんの共著の『脇役グラフィティ』、あれの日本版をやるっていうことだったのかな。

内海 そうそう。実際私たちを動かしていたのは（当時の編集部の）酒井良雄さんや冷泉さとしさんだったけど、バックの応援席にいたのは川本さんですね。

野村 あと、僕と内海さんが、読者による現場ルポという企画で「HOUSEハウス」（77年）の現場に行ったことがあって、そこから酒井さんが（「ニッポン個性派時代」のメンバーを）芋づる式に引っ張ってきたんです。

秋本 とにかく、初めて読者ではない形でプロの仕事をさせてもらうわけでね。あの本（『シネマ個性派ランド』）の後ろにも書きましたけど、町内の草野球のピッチャーがいきなりプロのマウンドに立つようなもんじゃないですか。その意味では緊張しましたよ。

――第1回の担当が秋本さんですね。

秋本 そう、高橋明さんを。その頃、ロマンポルノとかで非常に活躍されていた方です。今でも覚えてますよ、取材の後、自宅におじゃまして酒盛りになったのを。

Digitized by Google

内海　いきなり酒盛り（笑）。

秋本　だから「こういうもんなのか」と思ってしまって（爆笑）。びっくりしましたよ。まあそれだけ、取材された側も嬉しかったのかな、という部分もあるし。その後も撮影所にチラッと行った時なんか、高橋さんの方から御挨拶いただいたりしましたね。

尾形　その頃って「ピラニア軍団」の川谷拓三とか、脇役や悪役が結構スポットを浴びていたんですけど、彼らだけじゃなくて、例えば日活ロマンポルノにも同じくらいスゴイ脇役の人はいるんだぞ、みたいな意気込みもありましたよね。

――確かに川谷さんはインタビュー・リストに入ってないですね。

尾形　そうでしょう。室田日出男は、僕が後半にやったけれども。

内海　（コーナーの）人気が出てから、多少派手めな人も入れようってなったんですよね。（笑）

尾形　新人の方とかね。

内海　そう。それに売り込みが多くなってきた。そこからどんどん盛り上がっていきましたね。

基本はこちらが会いたい人

――皆さんの方からの希望という形はあったんですか。

内海　もちろんありましたよ。私は結構好き放題、美形の人を選んで（笑）。でもその時に、主役級以外の役者さんは中々取材されるチャンスがない、っていうことがすごく分かりましたね。とても一生懸命答えてくれて。

秋本　当時、脇役級の人が一人で何ページも、なんていうインタビュー記事はほとんどなかったもんね。

尾形　風間杜夫さんは、僕で確か（取材は）2回目だった。柄本明さんは初めてみたいでしたね。

秋本　そういう意味で、取材する側もされる側も、両方初々しかったんじゃないですか。だから営業用の受け答えは余りなかったかな。マネージャ側からも「この発言は困ります」とかの注意もなかったし。

尾形　ちょっと思い出したけど、確か「こちら、読者の尾形さんです」って紹介されてから、インタビューを始めていた記憶がありますよ。プロじゃないんだからお手やらかに、と（笑）。

内海　カマトトぶっていた気もしますね、今は通用しないけど（笑）。でもこちらがすごく聞きたがっている態度を取ると、やっぱり向こうは喜んでくれましたよね。

あきもと・てつじ　1952年5月29日生まれ。山口県出身。広告代理店、情報誌編集を経てフリーランスに。現在は「キネマ旬報」のほか、「ザ・テレビジョン」「日刊ゲンダイ」「EQ」「優駿」などに連載。最近は趣味の競馬を生かして「別冊宝島」などに競馬原稿も執筆。生活のモットーは"飲む、打つ、観る"。映画は俳優（特に女優）で見る!!

うちうみ・ようこ　1950年8月22日生まれ。東京都出身。会社勤務を経てフリーランスに。相米慎二監督「あ、春」の意外でいて当然な職人芸にニヤリとしつつ、新人・大谷健太郎監督「アベック・モン・マリ」にエールを送れる今をありがたいと思う。「もう書きたいことは書いたから引退したい」と口走り、酒井良雄さんに「いつテビューしたの」と切り返された日を恥ずかしく思い出す。なるべく謙虚に行きたいものです。

尾形　基本はこちらが会いたい人ってことだったから、聞きたいことも心の底からありましたし。

秋本　だから取材というより、ファンとしてお目にかかれて光栄です、みたいなノリでしたよね。

内海　野村さんなんかは結構カワイコちゃん狙いで、しっかりと次のことまで考えて売り込んでいたような記憶がありますよ（笑）。

野村　そんなことないですよ（笑）。ただ、当時ですら余り知られていなかった桜井浩子を何とか通してからは、完全に好みで選んでるかな（笑）。

秋本　僕も露骨ですね、夏純子、山口美也子、永島暎子……（笑）。

内海　でも、そういうワクワクした感じを出すのは大事でしたよね。

秋本　そう、客観ではなくあくまで主観で書きたいということでしたから。

意外な人、印象に残る人

――実際会ってみて、持っていた印象と違ったという人はいましたか。

内海　意外にすごく二枚目だと思ったのは、山西道弘さん。あと森川正太さん。えらくセクシーなタイプでしたよ。

一同　へえ～。

内海　艶っぽい人が多い。やっぱり俳優さんは、脇役でも、心では俺が主役だと思っているんでしょうね（笑）。結局、真ん中にいたいというのが本音だと思います。

尾形　山本麟一さんなんかはね、えんえんしゃべり止まらなかったんですよ。3時間も4時間もしゃべっていただいて、こっちは俳優さんって忙しいものだと思っているから、こんなに（時間を取って）いいのかなという感じでした。もう途中でテープがなくなっちゃって、後半はメモを取りながらでね（笑）。で、そこから山本さんが亡くなった後に奥さんから聞いたんですが、あの日、山本さんはとても機嫌良く家に帰られたらしいですよ。

秋本　思いの丈をしゃべれた、ってことなのかな。

尾形　でしょうね。だからその時、質問は逆に出来なかった。でも、ああ、役者さんって本当にいろんなことを考えているんだなって思いましたね。いわゆるインテリっていう感じではないんだけれど、体で覚えたものから（思考が）出てくる。あと、奥さんの話では、阿藤海さんが線香をあげにいらした時に、阿藤さんは山本さんことを「おじさん」って言ってるんですけど、「俺がおじさんと同じ本に出ている」って嬉しそうにおっしゃっていたそうです。

Digitized by Google

内海　それはいい話ですねー。阿藤さんは私が取材したんですけど、忘れられない方でした。忘れられないと言えば、森本レオさんなんか、先生みたいでしたよ（笑）。私と担当編集者が二人でマヌケなやり取りをしていると、「大丈夫かな、このコたち」って感じで（笑）。講義を受けているみたいでした（笑）。

尾形　それは「オレンジロード急行」（78年）に引っかけての取材だったのかな。

内海　そうですね。こちらからも希望したんですけど。

尾形　しかし野村さんは、女ばっかりですね。

野村　そんなことないよ（笑）。本間優二だって、原田芳雄だって、原田大二郎だって、小松方正だってやってるんだ（爆笑）。

内海　でも梅津栄さんとか、野村さんが押さえたかなりシブめの方って、今もずっと生き残ってらっしゃいますよね。

野村　そうですね。あと、桑山正一さんなんてのは個人的な事情があって、彼の息子が僕の中・高校生時代の同級生なんですよ。今は映画のプロデューサーをやっていて、「マタギ」（82年）とか「オーロラの下で」（90年）とか熊井啓さんの作品とかの。だから子供を通じていろいろ話を聞いていたので、何だか近しい感じがして、企画を出したのを覚えています。すごくやりやすかったですね、打ち解けてくれて。それから最終回の三國連太郎さんの時なんですけど、これ僕、「セーラー服と機関銃」（81年）のパブリシティということで東映を通したのね。それなのに原稿が膨大な量になっちゃって、結局（本文には）「セーラー服と機関銃」のセの字も入れなかったの（笑）。それで皆からすっごく怒られた記憶がある（笑）。で、当時、ちょうど佐藤浩市さんが映画に出始めていた頃で、三國さんはその質問を覚悟して取材に来たようだったんですけど、そうしたら僕が子供のこと全然聞かないから、終わったあと三國さんが僕を追っかけてきて、「マノン」（81年）のうちの息子はどうでしたか、って聞くんですよ（爆笑）。

尾形　それ可笑しいなー（笑）。

野村　何を呼んでるんだろうと思って（笑）。引き返しましたけど。何かその時、動物的な愛情というのを三國さんからひしひしと感じましたね。

個性派が見つけにくい時代

――その三國さんで最終回ですか。

野村　そう、ちょうど100回でね。

尾形　その後、少し間があいて「ザ・インタビュー」が始まったでしょう。

「ニッポン個性派時代」のインタビューからピックアップしてまとめた単行本化「シネマ個性派ランド」（81年刊　残念ながら絶版）

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画

ニッポン新個性派時代

野村　そう、黒田邦雄さんと僕が担当。ちょっとページを増やして、個性派じゃなくメインどころを攻めようという企画で。1年くらいやったかな。

尾形　でも「ニッポン個性派時代」をやって良かったと思うのは、当時そんなに映画の本もなかったし、こういう脇役の人達ってなかなか本に残らないじゃないですか。それをこういう形で残せたっていうのは、やっぱり良かった。僕や野村さんはよくフィルムセンターに行ってたんですけど、そこで戦前の松竹映画なんか観ると、僕の知らなかった脇役の人達がスゴイですよね。だから別に使命感に燃えていたわけじゃないけど、誰かがこの人のことを言っておかなくちゃならない、とか、そういう気持ちはありました。

秋本　あの頃はアメリカですらこういう本はほとんどなかったはずですよ。だから『脇役グラフィティ』の方なんだけど、サム・ペキンパーが来日した時に誰かがあの本を見せたら、「日本にはこんなクレイジーな本を作る奴がいるのか」って驚いたらしいですよ。ですから、増してやそれを邦画でやったっていうのは、やっぱり貴重だったと思いますよ。今だと分からないですけど。取材する側もされる側も嬉しいというね、幸せな蜜月がかつてあった。まあとにかく、初々しい時代だったですよ。今はわりとね、媒体が多いこともあって、脇役、個性派の人達も露出してますから、一度や二度の取材で襟を開いてくれることは余りないですけれども。

尾形　昨日ね、野村さんと「明日、何話そうか」って電話でしゃべってたんですよ（笑）。そこで出たのがね、最近、俳優の名前が覚えられない、ということ。

秋本　うん、うん。

尾形　やっぱりあの当時は、まだ一応プログラム・ピクチャーがしっかり機能していて、少なくとも東映、日活、松竹、まあ東宝はちょっとニュアンスが違ったけれども、そのへんの脇役はキッチリ追うことが出来たんですよね。で、だんだん台詞が増えるとか（笑）、俳優さんたちの昇格の様子も同時進行で見れたから、僕としては彼らの名前も覚えやすかったし、応援しやすかったですよ。今は媒体がいろいろ増えてきて、こちらもいろんなところに網張らないといけない状況ですから。

――製作、公開の時差もバラバラになってきていますしね。

秋本　そう、テレビの2時間ドラマもVシネマも、何が先で後なのか分からないし。でも今だって、いい脇役さんはいっぱいいますから、ちゃんと注目しないと。

尾形　でも見つけにくくなってるんだよね。

秋本　それはあるよね。余りに（媒体が）広範囲になってるから、どこで

Digitized by Google

「ニッポン個性派時代」（本誌77年10月上旬号～81年11月下旬号）に登場した俳優たち

高橋　明
下條アトム
佐藤蛾次郎
常田富士男
池波　志乃
尾藤イサオ
風間　杜夫
桜井　浩子
小倉　一郎
樹木　希林
鈴木ヒロミツ
丹古母鬼馬二
地井　武男
森本　レオ
根岸とし江
風吹ジュン
三浦　洋一
草野　大悟
舘　ひろし
夏　純子
森下　愛子
中条　静夫
山本　麟一
永島　敏行
山口美也子
梅津　栄
長谷　直美
赤塚　真人
竹田かほり
桑山　正一
岸田　森
永島　暎子
寺田　農
財津　一郎
室田日出男
深江　章喜
南条　弘二
蟹江　敬三
篠　ひろ子
亜　湖
石橋　蓮司
絵沢　萌子
舟倉たまき
戸浦　六宏
松尾　嘉代
谷　ナオミ
小林　稔侍
峰岸　徹
真行寺君枝
平田　昭彦
萩尾みどり
藤　真利子
奥田　瑛二
青木　義朗
藤岡　重慶
柄本　明
水原ゆう紀
高橋　悦史
阿藤　海
清水　宏
根津　甚八
森川　正太
粟津　號
古手川祐子
岩城　滉一
草薙幸二郎
熊谷美由紀
神崎　愛
古尾谷雅人
鶴田　忍
名高　達郎
夏目　雅子
佐藤　允
三谷　昇
山谷　初男
菅貫　太郎
真田　宏之
南原　宏治
加賀まり子
浅野　温子
志穂美悦子
高橋　長英
小松　方正
いしだあゆみ
原田大二郎
山西　道弘
原田　芳雄
佳那　晃子
小池　朝雄
本間　優二
赤座美代子
中村嘉葎雄
吉行　和子
浜村　純
津川　雅彦
田中　裕子
三国連太郎

「ザ・インタビュー」（82年8月上旬号～85年3月下旬号）に登場した俳優たち

千葉　真一
緒形　拳
萩原　健一
仲代　達矢
岩下　志麻
渡瀬　恒彦
宮下　順子
藤　竜也
江波　杏子
夏八木　勲
秋吉久美子
倍賞千恵子
酒井和歌子
永島　敏行
平　幹次朗
伊丹　十三
夏目　雅子
石坂　浩二
水谷　豊
岸　恵子
内田　裕也
伊東　四郎
長門　宏之
三浦　友和
加藤　剛
倍賞美津子
藤田まこと
田中　邦衛
乙羽　信子
西郷　輝彦
石田　えり
山城　新伍
多岐川裕美
岡田　真澄
浅丘ルリ子
杉浦　直樹
岡田茉莉子
植木　等
小川真由美
夏木　マリ
名取　裕子
池上季美子
時任　三郎
山崎　努
菅原　文太
星　由里子
北大路欣也
大竹しのぶ
美保　純
樋口可南子
加藤　治子
宮本　信子
三田　佳子
小林　麻美
平田　満
佐藤　浩市
中村　雅俊
原田美枝子
鹿賀　丈史
吉川　晃司

「がんばれ！日本映画～スクリーンを彩る若手女優たち」（96年5月下旬号）に登場した俳優たち

粟田　麗
一色　紗英
石田ひかり
石堂　夏央
内田　有紀
江角マキコ
大賀　智子
緒川たまき
奥菜　恵
片岡　礼子
河合美智子
菅野　美穂
工藤　夕貴
後藤久美子
小嶺　麗奈
酒井　美紀
佐伯日菜子
清水　美紗
白島　靖代
鈴木　京香
鈴木　砂羽
鈴木保奈美
鈴木　蘭々
高岡　早紀
高島　礼子
高橋かおり
田畑　智子
鶴田　真由
戸田　菜穂
富田　靖子
中江　有里
中嶋　朋子
中嶋ひろ子
中谷　美紀
中山　忍
中山　美穂
夏川　結衣
西山　由海
羽田美智子
浜崎あゆみ
深津　絵里
藤井かほり
牧瀬　里穂
南野　陽子
宮沢　りえ
森崎めぐみ
山口　智子
裕木　奈江
吉野　公佳
和久井映見
鷲尾いさ子

「がんばれ！日本映画～スクリーンで闘う若手男優たち」（96年6月上旬号）に登場した俳優たち

浅野　忠信
阿部　寛
池内　万作
伊崎　充則
今井　雅之
内野　聖陽
大沢　樹生
大森　嘉之
緒形　直人
岡田　義徳
織田　裕二
柏原　崇
風間トオル
加勢　大周
加藤　雅也
上川　隆也
唐沢　寿明
岸谷　五朗
木村　一八
草野　康太
椎名　桔平
ＳＭＡＰ
反町　隆史
高嶋　政伸
高嶋　政宏
高橋　和也
田口　浩正
武田　真治
田辺　誠一
塚本　耕司
筒井　道隆
堤　真一
寺島　進
豊川　悦司
永澤　俊矢
永瀬　正敏
仲村トオル
西島　秀俊
野村　宏伸
野村　祐人
袴田　吉彦
萩原　聖人
林　泰文
原田　龍二
堀　真樹
松岡　俊介
的場　浩司
本木　雅弘
柳ユーレイ
大和　武士
山本　耕史
吉岡　秀隆
渡部　篤郎

Digitized by Google

どう素敵なことをやっているかが分かりにくい。僕もVシネ全部観てるわけじゃないし。

——取材をやっても、映画だけ観てるんじゃ通用しない。そう考えると怖いですよね。

秋本 そう。あの頃はプログラム・ピクチャー含めて年間200数十本ですか。まあ、頑張れば網羅出来ない数字じゃないですよね。

——今は劇場公開数は200本弱で、当時よりは多少減っていますけど、Vシネを入れると350から400本くらいになっちゃいますからね。俳優さんの方から「あれ、観ましたか」とか言われて、ドキッとすることも時々あって……。

内海 小さくても愛している作品があるんでしょうね。

秋本 そうだね。ほとんど自主製作みたいなものとか。

個性派のその後、今の個性派

——今、皆さんがもう一度「ニッポン個性派時代」をやられるとして、まず取り上げてみたい俳優さんは誰ですか。

秋本 そうですね……誰だろ。

野村 僕、結構たくさんいますよ。女だったら真野きりな、男だったら神戸浩（笑）。

尾形 僕は古田新太とかね。彼は大阪で劇団☆新感線のトップ・スターですから、あの舞台の勢いが映画でもっと活かせないものかとね。山本政志監督の作品や「極妻」なんかに出てるけど、本当はもっとスゴイ人だと思うんだよね。あとは、モロ師岡とか。女優だったら同じ愛媛県出身の片岡礼子と「おもちゃ」の宮本真希。

秋本 片岡礼子は大きいのをやって欲しいよねえ。

尾形 それから今、西村雅彦がブレイクしているじゃないですか。あれは三谷幸喜と共に売れてきたわけでしょう。だから今後、個性派で出てくるのはね、劇団系の中に結構いるんじゃないかと思うんだよね。

内海 市川準さんなんか、小劇場の俳優さんをよく使ってらっしゃいますよね。

尾形 そうそう。

内海 私が好きなのは木下ほうかとか、あともう有名になっちゃいましたけど、香川照之さんとか。「犬、走る／DOG RACE」を観たら、無性にお会いしたくなりましたね。

秋本 僕は、女優さんなら下心付きでいくらでも挙げられるんですが（笑）。

おがた・としろう 1955年1月23日生まれ。愛媛県出身。「ニッポン個性派時代」の連載が始まったとき、まだ学生でした。本業はCMディレクター。発売中のムック「黒澤明の世界」に評伝を書いています。2年前から転勤で大阪に住んでいますが、大阪は吉本ばかりか、ふつうの人まで個性派ぞろいで面白い。いま大注目は藤山直美。舞台のパワーは、父・寛美を超えるいきおい。

のむら・まさあき 1954年山口県生まれ。映画会社宣伝部、広告代理店勤務を経て映画評論家に。最近ではフィルムセンター追悼上映や、フレデリック・ワイズマン映画祭、大井武蔵野館や浅草東宝土曜ナイトでの邦画旧作上映などに出没中。今春に続き、99年5月開催の「第2回ゆふいん文化・記録映画祭」に協力し、年末年始は忙しくなりそう。

ただ、以前やった人でもう一回会ってみたい方がいまして、それが小林稔侍さん。あの時は「冬の華」（78年）の板前役で少し注目されたばかりの頃でしたから、そこからネーム・バリューが上がったという意味では、この人が一番なんじゃないかなあ。あれから20年たって今や主役級、「学校Ⅲ」もそうだったし、もちろんテレビでも人気者だし。（本人は）何も変わっていないのかもしれないけれど、少なくとも状況は変わったわけじゃないですか。そのへんの心境を聞けたらなあと思いますね。

尾形 「その後のニッポン個性派時代」（笑）。

秋本 そういうのもアリかなあと思ったりしますけどね。

尾形 柄本明さんなんて、今村昌平映画の主役をはるまでになるとは思わなかったもんね。

秋本 当時新人だった人が、今は中堅の俳優さんになられているわけじゃないですか。例えば、古尾谷雅人さんとかね。その間の20年をフォロー出来たら、それはそれで面白いんじゃないですかね。

野村 僕は加賀まりこにもう一度会いたい（笑）。

一同 （笑）。

野村 いや、この人とはすっごく巧くいったの。最初は彼女がガードを固くしてたんだけど、話し込んでいくうちに、ものすごくいろんなことを話してくれて。それから後でテレビをつけたら、僕にしゃべったことをそこでまたしゃべってるの。そんなのを2回ぐらい目撃したから（笑）、もっと深いところまで引き出せたんじゃないかなと思ってね。

尾形 やっぱり、大ファンだっていうのが分かったんだね。

野村 ああ、そうかもねー。

内海 私がもう一度やりたいのは、永島敏行さんかな。当時デビューしたばかりでね、もう陽気が出るくらい可愛い男のコだったんですよ（笑）。立派になっちゃった今でも、昔のナイーブな持ち味が見え隠れするじゃないですか。

野村 話し好きな人ですよね。

内海 あ、そうですか。個人的にその後も2、3度お会いしているんですけどね。ちゃんとした取材っていうのはやってませんから。

尾形 風間杜夫さんとは10年ほど前にCMの仕事を一緒にやったんですけど、覚えていてくれてね。

——もうお亡くなりになった方もたくさんいらっしゃいますよね。岸田森さんなんか、僕らが取材したくても、もう出来ない。

秋本 そう、だからナマ夏目雅子（野村担当）とかを見られたわけですよ（笑）。そう考えると、スゴイことですよね。

Digitized by Google

阿部寛

あべ・ひろし　1964年6月22日生まれ。モデルとして活躍し、87年「はいからさんが通る」で映画デビュー。以後「孔雀王　アシュラ伝説」(89)、「凶銃ルガーP08」(94)、「ヤマトタケル」(94)、「人でなしの恋」(95)、「タオの月」(97)、「フレンチドレッシング」(98)などに出演。つかこうへいの舞台「熱海殺人事件～モンテカルロイリュージョン」は93年より毎年上演を続けている。99年は大河ドラマ「元禄繚乱」に堀部安兵衛役で出演。

「凶銃ルガーP08」の日プロ大賞受賞打上げの席で、今後も息子をよろしくお願いします、と阿部寛の御両親に挨拶された事がある。とてもきちんとした親御さんだった。やりましたよ、息子さんは。御両親にはちょっと理解不可能な役かもしれませんが、「フレンチドレッシング」の男子生徒をレイプし、改造拳銃造りに精出すアウトサイダー教師は映画史に残る特筆すべきキャラクターですよ。長身の二枚目という、これまでの作品にありがちで、ともすればステレオタイプな持ち味が、ここでは逆にこれってかなりヤバくない？　というキャラに、今風で倒錯した奇妙なリアリティを付与しているのです。阿部寛の演技力が遂にバケました。**塩田時敏**

うじきつよし

うじき・つよし　1957年9月18日生まれ。東京都出身。73年に子供ばんどを結成し、ヴォーカル&ギターを担当。89年「226」で映画デビュー。以後「陽炎」(90)、「女殺油地獄」(92)、「7月7日、晴れ」「八つ墓村」(共に96)、「CURE」(97)、「OTSUYU 怪談牡丹燈籠」「愛を乞うひと」(共に98年)などに出演。現在テレビ朝日「チェンジ！」、CX「食卓から愛をこめて」に出演中。来春のNHK連続テレビ小説「すずらん」への出演も決定している。

子供ばんどから俳優へと転身しての初作品が「226」。陽性の好ましいイメージはその頃から今も全く変わらない。気のいい兄貴的役柄をやらせたら天下一品だから、OV「右向け左！自衛隊へ行こう」のようなミリタリー・コメディもよく似合うが、そうしたイメージを逆手にとって成功したのは、やはり「CURE」だ。淡々と静かに狂わされていく彼の役柄は、その木訥とした個性ゆえに悲劇的残酷さを一層際立たせていた。今や伝説といっていい怪作OV「フルメタル極道」でのぶっとんだアナーキーさも、彼ならではのものだろう。話は変わるが、やはり伝説のクイズ番組『カルトQ』好きでした。復活してくれないかなあ。　**的田也寸志**

宇梶剛士

うかじ・たかし　1962年8月15日生まれ。東京都出身。83年に舞台デビュー、87年「パッセンジャー　過ぎ去りし日々」で映画デビューを果たす。以後「押忍!!空手部」(90)、「はいすくーる仁義2」(92)、「SCORE」(95)、「陽炎3」(97)、「JOKER　疫病神」(98)などに出演。現在ドラマ「ウルトラマンガイア」「じんべえ」にレギュラー出演中。公開待機作に「SCORE 2:THE BIG FIGHT」(小沢仁志監督)、「SLANG 黄犬群」(小沢和義監督)がある。

188センチの長身から醸し出される豪快かつ鋭いイメージは「SCORE」の黒幕役で見事に活かされた。来春公開「SCORE2: THE BIG FIGHT」のキレた刑事もさらにおっかない。かと思うと同じく公開待機中の「SLANG 黄犬群」では何とオカマ役で、アクション満載の劇中、ホロリと哀愁を漂わせてくれる。現在は『じんべえ』でコミカルに、『ウルトラマンガイア』ではいかにも子供たちの憧れとなりそうなカッコ良さで、共にTVレギュラー出演中だ。正に変幻自在だから、いつも目が離せないナイスガイ。先日朝のTV『花まるマーケット』に出演したときの照れまくりの素顔も好ましかった。舞台の作・演出も手掛ける才人である。　**的田也寸志**

Digitized by Google

小沢仁志

おざわ・ひとし　1962年6月19日生まれ。東京都出身。84年に映画デビューし、87年より「ビーバップ・ハイスクール」シリーズにレギュラー出演。95年「SCORE」で注目された後、「殺し屋&嘘つき娘」(97)、「SCORE 2：THE BIG FIGHT」(99年陽春公開)、「くノ一忍法帖　柳生外伝」(98)と3作品連続で監督&主演。OVは「喧嘩組」2作（ケイエスエス）がリリース。「仁義17」(徳間ジャパン)、「三匹の竜」(東映ビデオ）も待機中である。

一貫してアクション映画にこだわる熱い男。その情熱は「SCORE」で見事に報われたが、本人の意欲はそこに止まることなく、ビビアン・スー共演の「殺し屋&嘘つき娘」、昨年の東京ファンタのプレミア上映で渋谷パンテオンを満杯にした「SCORE2:THE BIG FIGHT」(ようやく来春劇場公開が決定！)、初の時代劇で単身京都に乗り込んだ「くノ一忍法帖　柳生外伝」と立て続けに監督・主演作を披露し、才腕ぶりを発揮。一方で盟友・寺島進のため「おかえり」で愛娘とともにエキストラ出演するなど、仲間との絆を大切にするナイスガイ。映画にこだわる者は誰でもウェルカムの姿勢が、若手映画人たちのアニイと呼ばれる所以だ。　的田也寸志

大河内浩

おおこうち・ひろし　1956年5月11日生まれ。愛知県出身。88年に舞台デビュー。同年の「マルサの女2」以来、伊丹十三監督作品の常連となる。91年の「12人の優しい日本人」でクローズアップされ、以後「シーズン・オフ」(92)「結婚」「眠らない街・新宿鮫」(共に93)、「怖がる人々」(94)、「君を忘れない」(95)、「爆走！ムーンエンジェル－北へ」(96）などに出演。「悪魔のKISS」(93)など、ドラマ出演も多数。

「マルサの女2」以降の伊丹十三作品の常連として、そして何といっても「12人の優しい日本人」で協調性のカケラもない陪審員6号を飄々と演じて、映画ファンの印象を深く決定づけた。以降、その飄々としつつどこか繊細そうな魅力をフルに活かし、どんな小さな役であれ、いつもその場をさらってくれる。特に中堅幹部クラスのちょっと嫌みなサラリーマンを演じさせたら右に出る者はいないだろう。当然シリアスからコミカルなものまでジャンルも問わない、今の日本映画界になくてはならない名バイプレイヤー。しかしこういう人だからこそ、時には主演作も観てみたいもの。大船調人情喜劇で娘を嫁がせるパパ役など似合いそう。　的田也寸志

翁　華栄

おう・ふぁーろん　1962年11月6日生まれ。宮崎県出身。東京壱組の創立に参加し、86年その旗揚げ公演で初舞台を踏む。91年「ワールド・アパートメント・ホラー」で映画デビュー。以後「学校」(93)、「BE-BOP HIGHSCHOOL」(94)、「東京兄妹」(95）などに出演。96年「トキワ荘の青春」では若き日の漫画家つのだじろうを演じた。これからの新作には「たどんとちくわ」(市川準監督）と「LEY-LINE」(三池崇史監督）がある。

94年までは舞台と映像の両方で活躍していたが、それ以降は映像のみで活躍している。「ワールド・アパートメント・ホラー」のとぼけた中国人や「免許がない！」の教習所の変な生徒。そして「トキワ荘の青春」のつのだじろう役など、さりげなく飄々とした空気感を醸し出す数少ないタイプの俳優。「没個性が僕の個性」とはご本人の弁だが、36歳にしていろいろな色に染まれる可能性を持った俳優は実に貴重。今後出会う演出家によってどんな顔を見せてくれるのか大いに楽しみだ。日本語と同等に使いこなせる北京語と上海語と英語。そして自ら脚本も手掛ける。これらの特技や才能をフルに活かし、なお一層活躍の場を広げてほしい。斎藤芳子

Digitized by Google

天海祐希

あまみ・ゆうき　8月8日生まれ。東京都出身。宝塚トップスターとして活躍した後、95年に退団。96年「クリスマス黙示録」で映画デビュー。97年には「MISTY」に出演。現在CXドラマ「殺る女」出演中。「必殺仕事人　三味線屋Yu-ji」（石原興監督・12月）「残侠」（聞本郁夫監督・99年2月）「黒の天使vol.2」（石井隆監督・99年陽春）が公開待機中である。99年1月のパルコ劇場を皮切りに舞台「マヌエラ」に出演する。

「私、やっぱりデッカイわあ！」自分の出演したテレビ・ドラマを見て、天海祐希がこうもらしたことがある。舞台、それも宝塚歌劇団の男役としては有効な武器である長身が、画面ではそうとばかり言えないことに自ら初めて気づいた感慨。確かに日米合作を称する「クリスマス黙示録」そして「MISTY」と、彼女は〝大型女優〟でなかったなら、ぎこちなさも増幅されずに済んだだろう。ただし周囲の雑音をよそに、天海には「舞台より先に映画を好きになった」愚直な程の思い入れがある。「いい作品でオリジナルなものなら端役だって嬉しい」という純粋さも。陳凱歌監督も興味を持った遅咲きの大器。何かが起こりそう。

佐藤友紀

大河内奈々子

撮影／谷岡康則

おおこうち・ななこ　1977年6月5日生まれ。東京都出身。96年「岸和田少年愚連隊」ヒロイン役で映画デビュー。以後「ルーズソックス」（97）、「ズッコケ三人組怪盗X物語」「生きない」（共に98）に出演。ドラマ出演も多数。12月14日オンエアのTBS月曜ドラマスペシャル「プロデューサー麻生一平の事件ファイル」に出演。NHK・BSの情報トーク番組『新　真夜中の王国』毎週火曜日のレギュラー司会も務めている。

今年は「ズッコケ3人組」で実年齢以上の先生役を違和感なく演じきり、「生きない」では〝死〟に満ちあふれた静かな世界観を損なうことなく、しかも唯一〝生〟を感じさせるヒロイン像の構築に成功している。そう、「岸和田少年愚連隊」のヒロイン・デビューから数年、その爽やかなイメージは全く変わらないまま、作品の数が連なるごとに存在感に磨きがかかっていく成長ぶりが、リアルタイムに作品及び彼女を見守っている側としてもすごく嬉しい。何よりもコンスタントに映画出演を続けている姿勢が頼もしい限りだが、そもそも立ち姿の憂いある美しさからして、すこぶる映画的な彼女だから、全ては当然の帰結であった。

的田也寸志

川上麻衣子

かわかみ・まいこ　1966年2月5日生まれ。スウェーデン出身。帰国後、芸能活動を始め、81年「幸福」で映画デビュー。以後「火まつり」（84）、「うれしはずかし物語」（88）、「その男、凶暴につき」（89）、「天使のはらわた　赤い閃光」（94）などに出演。「でべそ」（96）で日本映画プロフェッショナル大賞主演女優賞受賞。現在CX深夜バラエティ番組「志村〝X〟天国」に出演中。NHK・BS「ラブレター」もオンエア待機中である。

実は私、川上麻衣子のデビュー当時、彼女の所属事務所でファンクラブの会報〝マイマイ〟編集の仕事をしてた事あるんです。そんなわけで、彼女の成長はひとかたならず気にはなっておりました。単なるアイドルで華を散らさず、息長く芸能界を渡ってこられて、まずはなにより。脇でちょくちょく顔を見る度、嬉しくなったものです。それがどんと華開いたのが望月六郎監督「でべそ」。下世話なタイトルと裏腹に、彼女扮するストリッパーは神々しいまでに輝いていたものだ。ラスト、池に入ってゆく彼女の裸身は本当に美しい。スウェーデン出身というだけでファンには特別な想いを抱かせるが、いよいよイイ女に磨きをかけて欲しい。塩田時敏

Digitized by Google

石橋　凌

いしばし・りょう　1956年7月20日生まれ。福岡県出身。A.R.Bのヴォーカルとして活躍しながら、82年「さらば相棒」で映画デビュー。86年「ボクの女に手を出すな」で本誌新人男優賞ほか、89年「A・サインデイズ」でヨコハマ映画祭主演男優賞を受賞。96年公開の「クロッシング・ガード」ではジャック・ニコルソンと共演するに至る。今年、松田優作の死と共に長年封印していたA.R.Bの音楽活動を再開した。

"ちゃっぷいちゃっぷい、どんとぽっちい"とつぶやき、いきなり便所でシャブを打っていた「新・悲しきヒットマン」。中年の身体にムチ打って、延々ジャンプしつづけるラストの「冷たい血」。どれをとっても強烈なインパクトを残している。それから主演作はむろんのこと、脇でもその存在感は限りなく重い。「キッズ・リターン」での中華料理を食っているヤクザ。「チンピラ」でのソバを食っているヤクザ。前者はただメシをおごるだけのシーンで忘れ難い存在感を残し、後者では九州の唄を口ずさむだけ（ではない強力なリンチもあるが）で痛烈な存在感を残している。今日本映画で、主役といわず脇役といわず、これほど重い存在感を残す役者は他にいないのではないか。それも若い監督、新しい才能とキッチリとコラボレーションした上でスクリーンに刻印しているふうなのが、たまらなくいい。近年は、日本映画の製作傾向上、どうしてもヤクザや極道に類する役に偏りがちで、それは本人も嘆いてはいるが、しかし同じヤクザ役でこれだけ違う個性を引き出せるのは凄いものだ。明らかに東映任侠映画の頃のそれとは違うワザである。**塩田時敏**

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画

ニッポン新個性派時代

コラム 個性派

ミュージシャンから個性派へ

的田也寸志

歌手、いわゆるアーティストが映画出演したとき、往々にして成功例が多いのは、音楽で養った天性的カンや既成の俳優にはない荒々しさを理由にすることは多い。二昔前の歌謡映画の時期を抜けた70年代、萩原健一や沢田研二に始まり、泉谷しげる、内田裕也、石橋凌、白竜、陣内孝則、長渕剛、柳葉敏郎、木根尚登、山崎まさよし、世良公則、大友康平などなど、いわゆるロック系出身は特に映画と相性がいいようで、もはや類居に暇なく彼らの存在を無視しては、今の日本映画を語れなくなっている。名バイプレイヤー岸部一徳もGS出身。最近では「シャ乱Qの演歌の花道」でのつんくの活躍に目を見張った。「モスラ2」では悪役（？）だった奥野敦士にも頑張ってほしいところ。また昨年の「30 thirty」にはペニシリンのHAKUEIが主演していたが、今後ヴィジュアル系アーティストの活躍も、次第に増えていくのだろう。アイドル出身に目を向けても、本木雅弘、石田ひかり、中山美穂、中山忍、小泉今日子、南野陽子など、完全に俳優へと転身した者もいれば、歌手活動と同時進行の者とさまざま。結局俳優であれ歌手であれ、パフォーマーという点では同じであり、後はその人が映画というメディアに合っているかいないか、もしくは映像表現に対して貪欲になれるかなれないかなのだ。その意味では「アンドロメディア」をSPEEDの映画ではなく島袋寛子の映画とした作り手側の方法論は、それはそれでひとつの見識だったのだろう。その他、今年は声優系シンガーの國府田マリ子が「Looking for」で映画初主演するなど、とにもかくにもボーダレスが当たり前の現在。そう考えると、歌一筋のイメージの強い演歌系も、舞台の座長公演やヤクザものだけでなく、もっと本格的に映画出演してよいのではないか。今なら演ドルの林あさ美など狙い目だと思うし、あの天童よしみ主演でスラップスティック・コメディをやったら、きっと楽しい……はずだ。

「のど自慢」の大友康平

「アンドロメディア」の島袋寛子

Digitized by Google

金山一彦

かなやま・かずひこ 1967年8月16日生まれ。大阪府出身。85年のドラマ「気になるあいつ」で芸能界デビュー。映画出演は87年の「シャコタン・ブギ」からで、95年「無頼平野」と「新・悲しきヒットマン」でヨコハマ映画祭&大阪映画祭の助演男優賞を受賞。同年の「ふうせん2」では音楽も手掛けている。待機中の新作に「必殺　三味線屋勇次」（石原興監督・12月公開予定）がある。

貧しく冴えない気のいいお兄ちゃん（「ねじ式」）から、秘めた思いを胸に愛する人のために命を落とす青年（「激しい季節」）、そして極悪非道なヤクザ（「野獣の肖像」）まで。幅広い役柄を自分の色で演じ、しかも主役も脇もこなす貴重な個性派俳優である。金山一彦には〝哀愁〟という言葉が良く似合う。彼がスクリーンに登場し、そして去った後には何か物悲しい余韻が残る。年齢を重ねる程に、もっともっと人生の悲しみや心の痛みを表現できる役者になっていくことだろう。また筆者は本誌の取材を通じ、社会の問題点や矛盾に常に目を向けている彼の姿勢を知り大いに感心した。内面的にとても魅力的な人である。　斎藤芳子

神戸浩

かんべ・ひろし　1963年5月28日生まれ。82年より北村想主宰の劇団プロジェクトナビを経て、現在に至る。86年「ビリィ・ザ・キッドの新しい夜明け」で商業映画デビュー。91年「無能の人」で報知映画最優秀助演男優賞受賞。また「学校」（93）以降、「男はつらいよ　寅次郎紅の花」（95）、「学校Ⅱ」「虹をつかむ男」（共に96）など、90年代山田洋次監督作品の常連としても活躍している。

演じるというよりも、存在するバイプレイヤー、神戸浩。松山が舞台の「がんばっていきましょい」でも、ローカル線の駅員という役でしっかり存在していたが、どんな役を振り当てられても画面にすっーと馴染んでリアルに存在する神戸浩は、実に貴重で重宝な存在だ。それだけに「学校Ⅱ」で準主役の障害児を演じた時は、いささか存在しすぎて逆につらいものがあったのだが、神戸浩の独特のエロキューションとその個性的風貌は、役の大小に拘らず、その映画の彩りとなりそれは計算してできるものではない。ぎこちなく不器用に存在し続ける神戸浩は、キャスティングされた段階でもう既にその役を生きている不思議な存在だ。北川れい子

木下ほうか

きのした・ほうか　1964年1月24日生まれ。大阪府出身。高校在学中の81年に「ガキ帝国」に出演し、映画デビューを飾る。その後吉本興業を経て、89年に東京へ進出。90年「ポップコーンLOVE」以降、「風、スローダウン」（91）、「いつかギラギラする日」（92）、「ゴジラVSスペースゴジラ」（96）、「チャカ」（98）などに出演。新作は今月公開の「ショムニ」、井筒和幸作品の常連であり、99年1月公開の「のど自慢」にも出演。

「マルタイの女」では事件を引き起こす新興宗教の信者、「絆」では陰りのある板前、「犬、走る」では突然犯人扱いされ逆上するバイクの男、そして「あ、春」では佐藤浩市に路上で絡む〝切れた〟会社員と、最近の日本映画の秀作に次々出演。ここ一番という場面にいつも違った役どころで登場する木下ほうか。抜群の瞬発力と男っぽい面構えに加え持前の関西ギャグセンスで、シリアスもコミカルもこなす今が旬のバイプレイヤー。井筒和幸監督作品「ガキ帝国」でデビューし「岸和田少年愚連隊」にも出演。また「のど自慢」では徳井優とコンビを組み「あずさ2号」で予選突破を狙う職人役を熱演。今や井筒組には欠かせない常連俳優だ。　斎藤芳子

Digitized by Google

かとうあつき

かとう・あつき　1973年5月31日生まれ。東京都出身。神代辰巳監督の遺作OV「インモラル」でデビューを飾る。以後「くノ一忍法帖　自来也秘抄」(95)、「平成名探偵阪田京介」(97)、「レディースMAX」(97)、「バブルと寝た女たち」「サソリ」(共に98)などがある。OV出演も「魔界転生」「DONOR」「喧嘩組」など多数。今年は10月にプレイステーション・ゲーム「御神楽少女探偵団」オープニングテーマで歌手デビューも果たした。

初めてかとうあつきに魅せられたのは、OV「鏡の中の欲情」でストーカーに監禁されつつ、その男を愛してしまう女子高生役の、文字通り体を張った迫真の演技であった。「くノ一忍法帖　自来也秘抄」では時代劇の似合う女優であることも知る。つい先頃、「御神楽少女探偵団」ゲーム主題歌で歌手デビューも果たし（いい歌です）そういう技も持っていたかと驚いた。最新作「サソリ」やOV「喧嘩組」を観てもわかるが、どんな役でも体当たり。しかもたとえ品のないスレた役を演じても、それゆえに作品の品は高まる。もちろん清純な役も見事に並行して演じられるのだから、実に希有で素敵な存在、今後も期待の若手女優なのだ。　的田也寸志

菊池麻衣子

きくち・まいこ　1974年7月19日生まれ。東京都出身。「薄れゆく記憶の中で」のオーディションに合格し、92年映画デビュー。以後「シーズ・レイン」(93)、「RAMPO」「忠臣蔵外伝四谷怪談」(共に94)、「リストラ代紋」(96)などに出演。96年のNHK朝の連続テレビ小説「ふたりっ子」主演で、全国的に注目される。現在「CLASSY」誌で連載中。99年1月9日よりオンエアのNHK・BSドラマ「活動写真の女」(20時～)にも出演。

ニッポン新個性派時代

菊池麻衣子のイメージといえば、一般的にはTV『ふたりっ子』であることは間違いない。しかし、それ以前に彼女の映画デビュー作「薄れゆく記憶の中で」を観ている者ならば、国民的女優くらい当り前サ、などと思わず周囲に強がった発言もしたくなってしまう。それほどまでにあの作品の中での彼女は輝いており、であるがゆえに観る側の胸を切なく締めつけてもくれたのだ。第2作「シーズ・レイン」も鮮やかな印象を残してくれた。しかし、以後の映画出演が「リストラ代紋」ヒロイン役以外に本格的なものがないのが、映画びいきとしては寂しい限り。デビュー作の映画的記憶が薄れゆかないうちに、映画の新作出演を望みます。　的田也寸志

喜多嶋　舞

きたじま・まい　1972年8月11日生まれ。神奈川県出身。両親は女優・内藤洋子と作曲家・喜多嶋修。86年に芸能界デビュー。映画出演は93年の「部屋とYシャツと私」から。以後「望郷」(93)、「コト師株式会社Ⅲ」(94)、「誘う女」(95)、「GONIN 2」「八つ墓村」(共に96)などに出演。俳優の大沢樹生と結婚、出産でしばらく休養していたが、99年1月公開の「おもちゃ」(深作欣二監督)でカムバックを果たした。

母親は、永遠の東宝青春スター、内藤洋子。デビュー当時は二世女優として、華々しく売り出した感があったが、逆に母親の面影をダブらせて見られたところがあって、彼女独自のイメージを作りづらかった。これまでの代表作と言えばOVの「静かなるドン」シリーズや、「大江戸浮世風呂　卍舞」といったところで、出演作の選び方にも迷いが出ていた気がする。その彼女が、結婚、出産によって2年間女優を休業。復帰作となった新作「おもちゃ」では、あっけらかんと〝金〟目当てに男を渡り歩いていく芸妓・染丸を演じている。ここでのハイテンションの演技には、何かふっ切れたような明るさがある。新生・喜多嶋舞の誕生だ。　金澤　誠

Digitized by Google

甲田益也子

こうだ・みやこ　獨協大学在学中、「花椿」の表紙モデルとしてデビュー。卒業と同時に「an an」の専属モデルとなり、独特な容姿と存在感で若い女性の支持を得、時代のカリスマとなる。83年、バンド“dip in the pool”を結成、作詞とヴォーカルを担当する。89年、周防正行監督「ファンシイダンス」で映画デビュー。99年には手塚眞監督、坂口安吾原作「白痴」でタイトル・ロールを演じる。音楽活動を中心に他方面で活躍する。

来年公開予定の主演作、手塚眞監督「白痴」の撮影現場の焼け跡に、甲田益也子はくっきりと、かつ嫋やかに立っていた。焼け跡のインパクトに負けない、圧倒的なオーラを放ちながら。妙齢の女性ならファッション誌『anan』の専属モデルとしての彼女を知らぬ者はいないだろう。彼女は、単なるファッションリーダーとしての存在を越え、ライフスタイルや考え方にも影響を与える、若きカリスマだった。その彼女が映画初出演作「ファンシイダンス」(89)で演じた役は、お坊さん。墨染の衣のなんとしっくりと来ることか。そう甲田益也子は地に足を着けた覚者（悟りを啓いた人）なのだった。彼女が表現するものは無限である。　編集部

小林聡美

こばやし・さとみ　1965年5月24日生まれ。東京都出身。79年のドラマ「3年B組金八先生」を経て、82年「転校生」ヒロイン一美役で映画デビュー。以後「廃市」(84)、「さびしんぼう」(85)、「恋する女たち」(86)、「永遠の1/2」(87)、「ゴジラVSモスラ」(92)などに出演。今年は「てなもんや商社」「キリコの風景」と主演作を連打した。TVドラマも多数。特にCX『やっぱり猫が好き』は今なお語り継がれる伝説の人気番組となった。

撮影／吉岡　誠

今年は「てなもんや商社」「キリコの風景」と、主演作が続いた彼女。CMに切れ目なく出ているせいか、久しぶりという感じはしないが、実は映画は92年の「ゴジラVSモスラ」以来の出演である。既に30歳を超え、人妻でもあるのだが、彼女の場合、そのイメージや面差しまで、全く時間の経過を感じさせない。その証拠に「てなもんや商社」では、20代の大学出たてのOL役だし、「キリコの風景」では年齢不詳ながら、30代とおぼしきバーのママ。どの役も自然に自分のものにしてしまうキャパシティの広さは大したものである。「転校生」の頃から一貫して変わらない、彼女が発散する〝活力〟が、その力の源なのだろう。　金澤　誠

小松みゆき

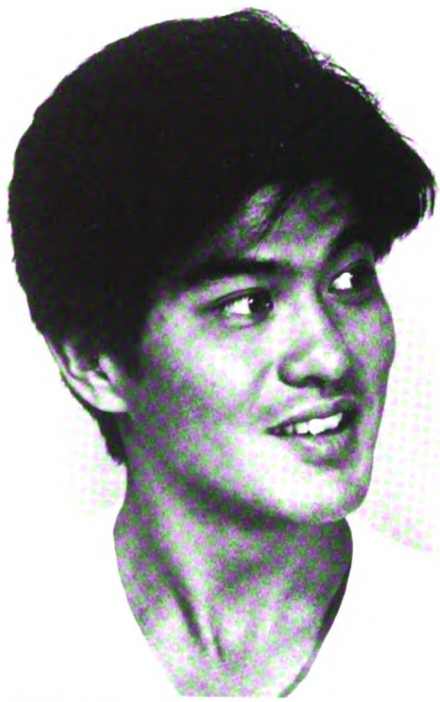
こまつ・みゆき　1971年6月5日生まれ。福島県出身。グラビアなどのモデルを経て、92年「福本耕平かく走りき」で映画デビュー。以後「やくざ道入門」(94)、「クレイジー・コップ　捜査はせん！」(95)、「ガメラ2　レギオン襲来」「イグナシオ」(共に96)、「かっ鳶五郎」「北京原人」(共に97)などに出演。「イグアナの娘」(96)、「君の手がささやいている」(98)などTVドラマ、「スウィート・ルーム」(93)などOV出演も多数。

映画デビュー作「福本耕平かく走りき」での、薄幸を装いながら寂しく孤立している女子高生の姿は、今も忘れられない。「クレイジー・コップ　捜査はせん！」の無表情刑事もキュートだったが、OV「スウィートルーム」での新米編集者には、思わず声をかけてあげたくなったほど。そう、小松みゆきの健気な頑張りぶりは、いつも観る者の心を和ませる。それは何物にも変えがたい彼女ならではの魅力であり、「イグナシオ」「かっ鳶五郎」「北京原人」と、出演作品が連なるごとに、応援したいモードは高まっていくのだが、その一方で、そろそろ淡々としたラブストーリーのヒロイン姿なども観てみたいとも思ってしまうのだ。　的田也寸志

Digitized by Google

スクリーン・デビューが、大作・東映版「青春の門」二部作の主演である。以降、彼は80年代に「敦煌」を始めとする数々の大作に出演して、巨匠と呼ばれる監督たちと仕事をしてきた。それらの作品は、確かに観応えはあったが、佐藤浩市という俳優にスポットを当てれば、大作時代をくぐり抜けてからの方が、格段に素晴らしい。特に阪本順治監督と組んだ「トカレフ」では、セリフによる説明を極力取り去った中で、映像と俳優とが五分に向き合う凄みを見せてくれた。「忠臣蔵外伝四谷怪談」での、悪に染まり切れない、心のわだかまりを抱えた野性的な民谷伊右衛門像も新鮮だった。そして新作は、「魚影の群れ」以来久々に相米慎二監督と本格的に組んだ「あ、春」。いきなり父親と名乗る男が現れて、右往左往する中年男の波立つ心情が、抑制された彼の演技によって、見事に引き出されている。さらに言うなら、どこかギラギラとしていた80年代の演技とは違った、全体のアンサンブルの中で、自らの役を活かすさじ加減が利いている。〝強烈個性〟の父・三國連太郎とは、別の方向性が明確に出てきたようだ。

金澤 誠



佐藤浩市

さとう・こういち　1960年12月10日生まれ。東京都出身。父は俳優の三國連太郎。80年のドラマ「続・続事件月の景色」でドラマ初出演し、81年「青春の門」で映画デビューを飾る。以後「道頓堀川」(82)、「魚影の群れ」(83)、「犬死にせしもの」(86)、「チャイナシャドー」(90)、「トカレフ」「忠臣蔵外伝四谷怪談」(共に94)、「GONIN」(95)、「美味しんぼ」(96)などに出演。最新作は「あ、春」(12月公開予定)。現在CX『タブロイド』に出演中。

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

コラム 個性派

メガホンをとる個性派

的田也寸志

異業種監督という差別用語もようやく使われなくなった現在、俳優が監督する機会もどんどん増えてきている。そもそも昔から佐分利信、山村聰、田中絹代、三船敏郎、丹波哲郎などのスターがメガホンを取ることはあるにはあったのだが、80年代の伊丹十三の監督デビューあたりから徐々に本格的な動きが見え始める。そして90年代に入ると一挙に北野武、竹中直人、サブ、小沢仁志など、監督辞典にその名が載って何の違和感もない当たり前の、優れたツワモノがぞくぞく登場してきている。その他監督志向の強い俳優は結構いて、実はその機会を窺っているという話はしばし聞く。田口トモロヲも昨年オムニバス・ドラマ『恋、した』の1エピソードを演出したし、今年も豊川悦司がつげ義春原作のドラマ『退屈な部屋』他を演出した。佐野史郎も「カラオケ」でメガホンをとった。永瀬正敏も短編を撮ったとのことだが、そのうち長編デビューを果たしそう。ピンク映画では吉行由実が二足の草鞋で活躍中。彼女の一般映画監督作品もぜひ観てみたい。兄・仁志に負けじと、弟の小沢和義も「SLANG 黄犬群」を完成させた。その他、坂上忍「30 thirty」、田口浩正「マインド・ゲーム」、武田鉄矢「プロゴルファー織部金次郎」シリーズ、あがた森魚の「オートバイ少女」も加えていいだろう。OVでもビデオ上映も行われたぜんじろう「Sun Run Gun」もある。それにしても、彼ら彼女らを演出に駆り立てるものは何なのか。自分の個性を最大限に活かせる役を、いっそ自分自身で演出したいという欲求ゆえの者もいれば、そもそも監督業が目標だった者もいればと、理由はさまざまだろう。ただし俳優であれ何であれ、最終的にはその人自身の意欲と才能がモノを言う世界なのだから、撮れるチャンスが増えてきただけいい時代なのではないかと思う。どんな分野であれ誰であれ、撮れる者は撮った方がいい。撮ったもん勝ちなのである。

「HANA-BI」撮影中の北野武監督

「ポストマン・ブルース」撮影中のサブ監督

Digitized by Google

北村一輝

撮影／夏野 寿

きたむら・かずき　1969年7月17日生まれ。大阪府出身。北村康の芸名で本格的に俳優活動を開始し、「LUNATIC」(96)、「鬼火」「岸和田少年愚連隊　血煙純情篇」(共に97)「JOKER　疫病神」(98)やOV「新・悲しきヒットマンⅡ」「フルメタル極道」(共に97)などで強烈な印象を与える。今年、芸名を北村一輝と改めた。来春公開予定作品に「完全なる飼育」「共犯者」「皆月」などがある。三池崇史監督の新作「LEY-LINES」では主演に抜擢。

「新・悲しきヒットマンⅡ」や「喧嘩の花道」「フルメタル極道」と、90年代後半のOV界がにわかに活気づいた時期があった。それは、前述の作品に出演し、観る者をゾクゾクさせるエキセントリックな演技を披露し脅威の若手・北村康の登場に因るところが大きい。映画の方も並行して望月六郎、三池崇史監督作品など精力的に出演。今年は名も〝一輝〟と改め、ますますもって本格的活動が開始された。三池監督の新作「LEY-LINES」ではついに主役に抜擢。彼の本領は正にこれからといったところだ。実際の彼は二枚目の好青年。時にはそのマスクを活かし、ノン・エキセントリックな甘い役柄もちと見てみたい気がする。　的田也寸志

國村隼

撮影／谷岡康明

くにむら・じゅん　1955年11月16日生まれ。大阪府出身。舞台出演を続けた後、81年「ガキ帝国」で映画デビュー。以後、「月はどっちに出ている」(93)「ビリケン」(96)、「セラフィムの夜」(96)、「人間椅子」(97)、「萌の朱雀」「WILD LIFE」(共に97)、「ブーブーの物語」(98)などに出演。「ブラック・レイン」(89)、「さらば英雄」(90)、「ハードボイルド」(91)など、国際的にも活躍中。最新作は山仲浩充監督作品「流★星」(99年1月公開予定)。

「ガキ帝国」や「王手」など、特に関西弁を駆使した諸作での、アクの強い素晴らしい存在感。一方、素朴な自然体の雰囲気のまま、出演シーンの場をさらう達人でもあり、今年も「愛を乞うひと」で、気弱ゆえの哀れさと狡猾さが見え隠れする夫の役が印象深かったが、やはり一般公募の者たちと交じりながら、いわゆる〝演じる〟ことを禁じられた「萌の朱雀」での、淡々と静かに絶望に向かって進んでいく父親像の構築は、彼ならではの圧巻の〝演技〟だった。彫の深い顔立ちは、アクション映画もよく似合う。「さらば英雄」「ハードボイルド　新・男たちの挽歌」など国際的活動でも見せた渋さには、毎回男惚れしてしまうのだ。　的田也寸志

斉藤洋介

さいとう・ようすけ　1951年7月11日生まれ。愛知県出身。劇団青俳、大江戸新喜劇を経て、80年「ヒポクラテスたち」で映画デビュー。以後「ブリキの勲章」(81)、「トットチャンネル」(87)、「郷愁」(88)、「カンヘッド」(89)、「われに撃つ用意あり」(90)、「寝盗られ宗介」(92)、「コジラVSスペースゴジラ」(94)、「ドリームスタジアム」(97)、「絆」(98)などに出演。近年は「SMAP×SMAP」などヴァラエティ番組でも活躍中。

今のTV『SMAP×SMAP』を観ている10代は、ドラマ『男たちの旅路』(79)の中での障害児役や、「ヒポクラテスたち」の医大生役の斉藤洋介は知らないだろう。今では〝モアイ〟の異名をとるその特異な風貌は広く親しまれているが、かつてはその強烈な個性によって、コンプレックスを背負った男や、悪役などを振り当てられることが多かった。しかし今では、それが彼の〝味〟として、自然に活かされてきた気がする。今年の「絆」などを観ても、自分の稼業に多少疲れてきたやくざの男を、ほのかに哀愁をにじませながら好演している。バイプレイヤーとしての資質を、たとえ1シーンの出演だとしても出せる稀な個性派である。　金澤 誠

Digitized by Google

四方堂亘

しほうどう・わたる　1962年12月9日生まれ。福岡県出身。ミスターCBSソニーグランプリを受賞して芸能界デビュー。映画出演は92年の「一杯のかけそば」からで、以後「NOBODY」(94)、「渡世無頼」(95)、「エコエコアザラクⅡ」「弾丸ランナー」(共に96)、「猫の息子」「ポストマン・ブルース」「私たちが好きだったこと」(共に97)、「アンラッキー・モンキー」(98)などに出演。99年の新春12時間ドラマ「赤穂浪士」には高田郡兵衛役で出演。

デビューは80年代半ば。さまざまなキャリアを積んできて、この数年は脇役ながらも"光る"俳優になってきた。例えば「エコエコアザラクⅡ」では、主人公・黒井ミサを護る謎の男。その陰影のある二枚目ぶりと、ミステリアスな役柄がうまく溶け合い、見事にホラー映画の美型ヒーローになっていた。かと思えば「ポストマン・ブルース」では、徹底して勘違いする刑事役。そして「猫の息子」では、根は気のいいマッチョマンのやくざと、いずれも一色に染まらない役柄を演じながら、さりげなく自分を出してみせる。二枚目イコール没個性という俳優とは違い、引き出しの多い美男俳優なのである。

金澤　誠

杉本哲太

すぎもと・てった　1965年7月21日生まれ。神奈川県出身。ロックバンド紅麗威酔（グリース）のメンバーとして芸能界デビュー。83年「白蛇抄」で映画デビューし、日本アカデミー賞新人賞を受賞。以後「人間の約束」(86)、「式部物語」(90)、「ひかりごけ」「橋のない川」(共に91)、「深い河」(94)、「罠」「ビリケン」「Mogura」(共に96)などに出演。99年度NHK大河ドラマ「元禄繚乱」に不破数右衛門役で出演が決定している。

各時代の俳優／ニッポン新個性派時代

撮影／谷岡康則

ここ数年の杉本哲太の目覚ましい活躍ぶりには目を見張る！思うにストライクゾーンが広いのだ。「ビリケン」「キリコの風景」の2大特異キャラがあり、TV『将太の寿司』『ミセス・シンデレラ』の敵役があり、更には『笑っていいとも』等バラエティでの独特の佇まいがある。で、共通するのは"全部ギリギリのストライク"である事。大阪通天閣の神様「ビリケン」にしても「キリコ～」の透視力ともいうべき不思議な力を持った男にしても、「それもありだな」と審判（＝観る者）にジャッジさせる。そう、彼は微妙にミットを動かしボールもストライクにする"天性の捕手"なのだ。出てみたいという北野映画。ぜひとも実現してほしい。

轟夕起夫

鈴木一真

すずき・かずま　1968年10月8日生まれ。静岡県出身。モデルを経て、95年「ゲレンデがとけるほど恋したい。」で映画デビュー。以後「12」(96)、「狼の眼」「不機嫌な果実」「冷たい血」(共に97)、「女刑事RIKO　聖母の深き涙」「愚か者　傷だらけの天使」「heat after dark」(共に98)などに出演。NHK朝のTV小説『天うらら』(98)など、ドラマ出演も多数。YAMAHA「Drag Star Classic」CFにも現在出演中。

俳優生活4年目を迎えた鈴木一真にとって、今年は飛躍の年だった。以前から憧れていたという阪本順治監督に出会い「愚か者　傷だらけの天使」に出演。真木蔵人と共に愛すべき"愚か者"の姿を、時におかしく、時に悲しく、時にかわいらしく演じ若手の注目株に。またNHK朝の連続テレビ小説『天うらら』に出演し、その顔が一挙に全国に知れ渡った。素顔は物静かでやさしい青年、いつの間にか一緒にいる相手をリラックスさせてしまう不思議な魅力の持ち主。そして内面には確かな情熱と熱いハートを宿す。現場での真摯な姿勢に加えて勉強熱心、今日もきっと彼はどこかの試写室か映画館でスクリーンを見つめていることだろう。

斉藤芳子

Digitized by Google

坂上香織

さかがみ・かおり　1974年7月29日生まれ。長崎県出身。87年に芸能界デビューし、88年「…これから物語少年たちのブルース」で映画初出演。90年「押忍!!空手部」、91年「電影少女」とヒロインを演じ、井筒和幸監督の「罪と罰」「突然炎のごとく」(共に94)でステップアップ。以後「花より男子」(95)、「藪の中」(96)、「HAPPY PEOPLE」(97)などに出演。「卍」(98)などOV出演も多数。最新作は井筒監督「のど自慢」。

「押忍!!空手部」や「電影少女」などのアイドル時代から注目はしていたが、やはり「罪と罰」での井筒和幸監督との出会いが、彼女を女優へと脱皮させたようだ。特にコンビ2作目でもある秀作「突然炎のごとく」での、幼さと大人びたポーズとを違和感なく同居させたヒロイン像は、モノクロームの画面に見事映えていた。そうした新たな個性は「藪の中」でも活かされており、OV「アナザーXXマトリの女」「卍」では、さらに磨きのかかった妖艶さに驚いた。ヤクザものでの小悪魔的存在もよく似合う。まもなく公開「のど自慢」では、久々に井筒監督作品への出演を果たし、初々しさはそのままに、気丈な姿を見せてくれます。**的田也寸志**

滝沢涼子

たきざわ・りょうこ　1969年1月1日生まれ。神奈川県出身。92年「青春デンデケデケデケ」で映画デビュー。以後「乳房」「エンジェル・ダスト」(共に93)、「夜逃げ屋本舗Ⅲ　大夜逃」「さわこの恋2」(共に94)、「GONIN」(95)、「弾丸ランナー」(96)、「ポストマン・ブルース」(97)などに出演。今年は「女刑事RIKO」映画とOV2作でヒロインを演じている。TVドラマ出演も多数。96年には「マクベス」で舞台にも挑戦している。

うだつの上がらぬ男が走って走って走り抜く「弾丸ランナー」。その先頭をゆく元カレ(田口トモロヲ)の回想で、ボロくその言葉を投げつける滝沢涼子はいや〜な女の役だったが、しかしその強さは痛快だったなあ。このキリッとした強さを活かしたのが「女刑事RIKO　聖母の深き淵」だ。2歳児を抱えたシングル・マザー刑事の体臭が匂う作品だった。しかしこれ、実は続編で、出産前のパート1の方が面白いのに、何故か前編は劇場公開されず、ビデオのみの発売となった。レズあり妊娠の腹ボテありと、働く女の匂いよりもハードボイルドの匂いが強いパート1。両作で女性の両面の強さを演じたのに未公開じゃ浮かばれないね。**塩田時敏**

土屋久美子

撮影／谷岡事則

つちや・くみこ　1969年10月16日生まれ。埼玉県出身。モデルを経て、90年「バタアシ金魚」で映画デビュー。以後、松岡錠司監督作品の常連として、「きらきらひかる」(92)、「トイレの花子さん」(95)、「私たちが好きだったこと」(97)に出演。現在オンエア中の「ルミネ」CMも松岡演出によるもの。他、「ハネムーンは無人島」(91)、「ナースコール」「夜逃げ屋本舗Ⅱ」(共に93)、「写楽」(95)、「お墓がない!」「絆」(共に98)に出演。

今年「絆」で事件の発端を作る女性を演じた彼女だが、僕にとっての土屋久美子は、松岡錠司作品に欠かせない女優である。「バタアシ金魚」の、主人公カオルに思いを寄せるプー役は、無愛想な中にも女心を感じさせ、印象に残るキャラクターだった。彼女を語る上で〝無愛想〟は外せないキーワードである。「きらきらひかる」でも、アル中の主婦を演じた薬師丸ひろ子に、表情を変えず何杯も酒を運ぶウェイトレス役の彼女がいい。〝無愛想〟とは、一見何も感情的に語らないことのように思えるが、彼女の〝無愛想〟は、場面によってさまざまな思いを観る者に伝える。こういう個性を出してきた女優は、他にいないだろう。**金澤　誠**

Digitized by Google

後から思うと、もっと多くの人に観てほしかったという作品が、1年の内に何本かある。森崎東監督の「ラブ・レター」はまさにそんな作品であった。何といっても、中井貴一の好演が光る。その場しのぎの生活を送る中年のチンピラが、ほんのひとときに出会った中国女性から送られる真情に涙する。半端者の男を、かつては好青年を演じ続けた中井貴一が、その座標を自らズラして見事に表現してみせた。思えば、こういう役柄には「お引越し」のときに、既に布石が打たれていた。その作品での彼が演じた父親も、どこかで家庭にしっくりとはまらない、やはり妻や子とズレを持つ男だった。社会や家庭の営みからはみ出してしまうキャラクターというのは、近年の中井貴一が出してきた〝味〟のひとつだろう。一方で、時代劇のような様式美の世界も、ちゃんとこなせるのが彼の凄いところ。「四十七人の刺客」での悪役ぶりは、高倉健を向こうに回して貫録を感じさせた。新作「梟の城」では、原作の忍者アクションをどのような演技で見せてくれるのだろうか。来年大期待の1本として、その完成を心待ちにしている。

金澤 誠

中井貴一

なかい・きいち　1961年9月18日生まれ。東京都出身。父は俳優の佐田啓二。81年「連合艦隊」で映画デビュー。以後「父と子」(83)、「ふしぎな國　日本」(83)、「ビルマの竪琴」「食卓のない家」(共に85)、「キネマの天地」(86)、「東京上空いらっしゃいませ」(90)、「お引越し」(93)など多数映画出演。今年は「ラブ・レター」「愛を乞うひと」「落下する夕方」と連打。94年「四十七人の刺客」で本誌助演男優賞受賞など、受賞歴も多数。

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

コラム 個性派

OVから生まれる個性派

的田也寸志

劇場公開すればそれは全て映画なのか、ではオクラ入りしてビデオ・リリースのみの作品の立場はどうなる、などと議論し始めたらきりがない90年代オリジナル・ビデオの隆盛（？）は、かつてのプログラム・ピクチュアに成り代わり、作り手に演じ手と、新たな人材を輩出するメディアとして、日本映画界に確実に大きな影響を与えてきている。哀川翔、竹内力、清水宏次朗などOV界のビッグとなって久しい者もそうだが、アクション路線がOVの主流であることは、必然的に多くの若手個性派男優を生み出していった。椎名桔平もブレイクする前は映画とOVの境にあるスタンスの作品で頑張っていたし、小沢仁志をはじめとするSCORE軍団も、OVで幾度となく殴り殴られ殺し殺されながら、のし上がってきた面々なのだ。最近では北村一輝（康）の活躍に目を見張るが、このたびついに主演作品が決定した。一方、OVのもうひとつの主力たるエロティック路線。その個々の作品で輝いている女優は多々見受けられるのだが、そこから飛躍するのはなかなか難しいようだ。それはやはり彼女たちに脱ぐことのみを要求し、それ以外を期待しない周辺の偏見も挙げられるだろう。かつてのロマン・ポルノにしても、実はそうした偏見に打ち勝ち、現在も活躍している女優は数えるほどしかいない。しかし裸ではなく、あくまで女優としての魅力ゆえでファンとなる者も必ずいるのだから、現在その手のジャンルOVで頑張っている彼女らの中から、やがて宮下順子や白川和子、伊佐山ひろ子的存在となる女優を待望したい。とにかくOVに出演する若手たちに共通するのは、低予算&過密スケジュールの現場に耐えつつ、俳優として成り上がろうとする野心や、アナーキーな魅力の発露である。それこそ映画にすこぶる似合っている事実、野心をなくすとただのタレントになり下がる事実は、かつてのあの名優たちがTVで晒す現在の姿を見れば、一目瞭然であろう。

映画「やわらかい肌」の栗林知美

映画「チャカ」の竹内力

Digitized by Google

内藤剛志

ないとう・たかし　1955年5月27日生まれ。大阪府出身。日大芸術学部在学中、同級生の長崎俊一らと共に自主映画の製作を始め、様々な自主映画に出演。80年「ヒポクラテスたち」で商業映画デビュー。以後「九月の冗談クラブバンド」(82)「美加マドカ　指を濡らす女」(84)「赤と黒の熱情」(92)「幻の光」(95)と活躍。最新作は「ワンダフルライフ」。現在テレビ朝日「外科医夏目三四郎」とテレビ東京「食卓より愛をこめて」に出演中。

70年代後半、長崎俊一や山川直人の自主映画に主演していた内藤剛志と、今のTVのバラエティやドラマで大活躍している彼とは、すぐには結びつかない。自主映画から日活ロマン・ポルノ、そして様々な映画の脇役をやっていた"青年・内藤剛志"は、おそらく一般的な観客の中では欠落しているだろう。彼が注目されたのは"バンディカム"のCMを始め、"おじさん・内藤剛志"を主張し出してから、危なさと人の良さ、両面が同居するそのおじさん像には、いろんな事を知っていそうな奥行きを感じさせる。その奥行きを作ってきたのが、実は青年時代の諸作なのである。できればTVだけでなく、映画にももっと出てほしいのだが。**金澤　誠**

諏訪太朗

すわ・たろう　1954年8月9日生まれ。東京都出身。演劇活動を経て、長崎俊一、内藤剛志らと共に自主映画製作を始め、以後多くの自主作品に出演。商業映画デビューは長崎監督「九月の冗談クラブバンド」(82)。92年、黒沢清監督のドラマで本格的初主演を飾る。主な作品に「DOORⅢ」「Helpless」(共に96)などがある。99年も「死国」「ニンゲン合格」「白痴」「アドレナリン・ドライブ」、北野武新作など話題作が続々待機中。

撮影／北野尚子

どんな映画どんな役であれ、飄々とした風貌で映画にインパクトを与えてくれる、映画にとって実に頼もしい存在である。映画を作る者ならば、絶対一度は出演してもらいたいと思う俳優のひとりだろう。それは自主映画時代から始まる映画への愛情が、図らずして体躯から滲み出ているからに相違ない。その自主映画時代からの縁もあってか、黒沢清作品や青山真治作品では一段とその個性が際立つ。「冷たい血」での相棒刑事役は、ピンと張り詰めた作品トーンの中、その存在がふと息を抜けるゆとりにもなっていた。今年は「汚れた女（マリア）」で堂々主演。ふてぶてしくユーモラス、それでいてはかない哀しさは、圧倒的なものだ。**的田也寸志**

鶴見辰吾

つるみ・しんご　1964年12月29日生まれ。東京都生まれ。中一で子役デビュー。ドラマ「3年B組金八先生」で注目される。80年「翔んだカップル」で映画主演デビュー。87年の「名門！多古西応援団」辺りからはバイプレイヤーとしての魅力も発揮。同年「卒業プルーフ」を初プロデュース。95年「GONIN」で示したバイオレントな持ち味は、最新作「鮫肌男と桃尻女」でグレードアップされた。主な作品は「月とキャベツ」(96)他。

『3年B組金八先生』第1シリーズで杉田かおる、「翔んだカップル」では薬師丸ひろ子が相手役と、当時の男子中高生の羨望を一手に集めていた若手も、今や善から悪まで何でもござれの個性派となって久しい。特に石井隆監督作品では毎回強烈なインパクトを与えてくれる。「GONIN2」に至っては何とモヒカン頭で登場し、その残虐な殺し屋ぶりを際立たせてくれていた。以前は映画製作の方にも意欲的で「卒業プルーフ」をプロデュースしていたが、現在はどうなのだろう。今ならもっと上手くやれるのではないか。俳優としても映画人としても、最近の鶴見辰吾を観ていると、映画的な機がどんどん熟してきているように思える。**的田也寸志**

Digitized by Google

洞口依子

どうぐち・よりこ　1965年3月18日生まれ。東京都出身。85年、黒沢清監督の「ドレミファ娘の血は騒ぐ」で主演デビューし、以後「危ない話」(89)、「地獄の警備員」(92)、「勝手にしやがれ!!」シリーズ(95〜96)、「CURE」(97)、そして最新作「ニンゲン合格」など黒沢作品の常連として活躍。その他「タンポポ」(85)、「君は裸足の神を見たか」(86)、「ザ・ギャンブラー」(92)、「あした」(95)、「スワロウテイル」(96)、「ラブ・レター」(98)などに出演。

デビュー作「ドレミファ娘の血は騒ぐ」から最新作「ニンゲン合格」まで、黒沢清作品になくてはならない、正にビーナスのような存在である。特に「ニンゲン合格」でのシンボリックな登場は、黒沢映画の真骨頂。ここまで来ると、次は洞口依子主演のホラー映画を黒沢監督にお願いしたくなってくる。一方では伊丹十三作品の常連でもあった。こちらはエロティックな魅力を開花させてもいたが、最近は等身大の女性を演じる機会も増えてきたようで、それもまた一段と好ましい。今はキャリアウーマンが似合う風貌。某栄養剤のCMで、自動改札にぶつかる彼女の姿を見て、思わずウンウンと共感してしまった者は多いはずだ。　的田也寸志

夏生ゆうな

なつお・ゆうな　1975年8月25日生まれ。96年の「ありがとう」で映画初出演を果たす。公開順では先になった同年の「男たちのかいた絵」では、主演の豊川悦司の相手役を務めた。以後「WiLd LIFe」(97)、「TOKYO BEAST」「恋　極道」(共に97)、「OTSUYU　怪談牡丹燈籠」(98)に主演、もしくはヒロインを演じている。また97年暮れと98年1月には、林海象監督による中編映画「乙女の祈り」が特別上映されている。

日本人俳優には希有な透明感。体を張った演技を披露しても、どこか自然体。愛らしくもあり、それでいて深入りすると火傷しそうな激しい個性も見え隠れする。夏生ゆうなを観るたびに、そうした印象がリフレインされてしまう。そのフォトジェニックな風貌ゆえに、それまではどちらかというと欧風のイメージを抱いていたのだが、初の時代劇「OTSUYU　怪談牡丹燈籠」では日本髪も着物もぴたりとはまり、和風も十分いけることを証明してくれた。個人的には「Wild Life」のようなおきゃんなかしまし娘の役をもっと観たい。そう言えば、デビュー以来これまでの作品は全てヒロイン扱いの主役クラスばかり。これまた驚異的な事実だ。　的田也寸志

中村麻美

なかむら・あさみ　1979年1月14日生まれ。神奈川県出身。95年、荒戸源次郎初監督作品「ファザーファッカー」で鮮烈な主演デビューを果たす。96年には「こんな私に誰がした」(CX)でTV連続ドラマも経験。「クロネコヤマトの宅急便」などCMでも活躍する。99年公開の及川中監督、伊藤潤二原作のホラー・ムービー「富江」では、恐怖の体験をするヒロイン・月子を演じる。

5000人近い人の頂点で輝くというのは、どういう状態なんだろう。競争に勝ち抜くことに縁のない筆者には想像もつかないが、中村麻美はそうやって「ファザーファッカー」のヒロイン・静子役を手に入れ、映画主演デビューを飾った。ロケ地、長崎県諫早市にある塀と、スタッフやキャストの大人たちに囲まれた中で、彼女は必死に、女優として、一人の大人として立とうとしていた。その様があまりに鮮烈で、荒戸源次郎監督が独特の色づかいで描いた映画同様、くっきりと印象に残った。そんな彼女が4年ぶりに主演するホラー映画「富江」が公開される。ヒロイン月子を演じる中村麻美。今度はどんな色で、そこに現れるのだろう。　編集部

Digitized by Google

原田知世

撮影／吉岡誠

はらだ・ともよ　1967年11月28日生まれ。長崎県出身。82年角川映画大型新人募集で特別賞を受賞し、ドラマ『セーラー服と機関銃』でデビュー。83年「時をかける少女」で映画主演デビュー。以後「愛情物語」「天国にいちばん近い島」(共に84)、「早春物語」(85)他角川映画の看板女優として活躍。87年独立。同年の「私をスキーに連れてって」で同年代の女性の支持も獲得。アーティスト活動も盛ん。最新作は「落下する夕方」(98)。

まるで"寅さん"のようだが、原田知世という女優は、80年代に青春を送った世代の男性にとって、ある種のマドンナなのである。「時をかける少女」「早春物語」「私をスキーに連れてって」と連なる、彼女の80年代の代表作は、いずれも恋の入口に立つ女性が主人公。この入口にポツンとたたずんで、誰かを待っている女性像というのは、愚かなる男性にとっては非常に魅力的なのだ。新作「落下する夕方」の彼女は、さすがに違う。同棲していた男に去られ、その空虚な心を埋めようとする女性の心の悶え。ここに描かれるヒロインは、恋の出口で苦しんでいる。入口から出口へと飛んだ彼女が、次に見せてくれるのは何だろう。

金澤　誠

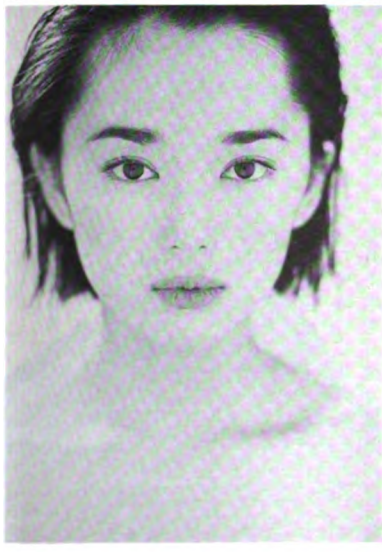
初瀬かおる

はつせ・かおる　1973年1月3日生まれ。鹿児島県出身。88年、本名・川越美和で歌手デビュー。女優としてもTBS『時間ですよ平成元年』他、多数のドラマに出演。91年「カレンダー　if just now」で映画デビュー。「男ともだち」(94)、「BeRLiN」(96)に出演後、芸名を初瀬かおるに変え「クリスマス黙示録」(96)に出演。大人と少女が交錯する微妙な表情の演技を見せた。新作は「落下する夕方」(98)と「のど自慢」(99)。

「クリスマス黙示録」は、宝塚を退団した天海祐希の映画初主演作で、日米合作、全編シアトル・ロケと、当時、結構話題になった作品。天海祐希目当てで行ったこの映画で、思いがけない収穫があった。その収穫とは、川越美和改め初瀬かおるのこと。彼女の演じた留学生・香織のけだるい表情は、映画のハードボイルドな空気に生きる切なさを加味させた。以降、彼女の活躍はめざましい。「落下する夕方」では1エピソードのみの出演で、その家庭が辿ってきた歴史を語り、「のど自慢」では姉妹の姉として、彼女たちの物語を対比で見せた。「フリージア　極道の墓場」ヒロインも印象的。多くの期待を込めて称賛したい。

編集部

葉月里緒菜



はづき・りおな　1975年7月11日生まれ。ハイスクールまでアメリカで過ごす。93年『丘の上の向日葵』(TBS)で女優デビュー。CMや『夢見る頃を過ぎても』(TBS)などドラマで活躍し、第32回ゴールデンアロー賞放送新人賞を受賞する。95年「写楽」の花魁役で堂々映画デビュー。以降、「パラサイト・イヴ」「まむしの兄弟」(共に97)、「黒の天使vol.1」(98)に主演。来年は「梟の城」の公開が予定されている。

「黒の天使Vol.1」が石井隆監督作品の中でも転機となる作品に思えたのは、やはり主役が葉月里緒菜だったことが大きい。ここで彼女が演じたヒロインは、それまでの石井映画の女性像とは異なり、己の運命にまで銃口を向ける激しさと、前向きで弾けた軽やかさに満ちていたからだ。今彼女のように銀幕で軽やかな情念を発散できる女優は少ない。「パラサイト・イヴ」出演の際は3役を演じわけるため、成瀬巳喜男作品に接するなど勉強熱心さを知るに至り、もっと彼女の新作に接したいと思う。新作「梟の城」も大期待。彼女が大ファンだというチョウ・ユンファとの共演作品もいつか観てみたい。彼女ならば、それも夢ではないはずだ。的田也寸志

Digitized by Google

「櫻の園」

「SCORE」

コラム
個性派

個性派を楽しむ映画

的田也寸志

最近のニッポン個性派総出演映画のごくごく一部をご紹介。まずは、やはり小沢仁志はじめ宇梶剛士、小沢和義、水上竜士、宮坂ひろし、山下真広、江原修と命知らずどもがフル活躍する「SCORE」。その後もこの面々「殺し屋&嘘つき娘」「くノ一忍法帖 柳生外伝」「THE GROUND 地雷撤去隊」「ろくでなしブルース98」と組み合わせを微妙に変え、松山鷹志、殺陣剛太、西守正樹、稲宮誠など新たな者も加えながら、アクション路線をひた走り。昨年の東京ファンタを爆裂させた「SCORE2 THE BIGFIGHT」もめでたく来春公開が決定。小沢和義の映画初メガホン作「SLANG 黄犬群」の正式公開も待ち遠しい。

女優陣ではやはり今や伝説の名作「櫻の園」。あの頃の少女たちも今や大人となり、中島ひろ子、白島靖代、つみきみほ、白鳥智恵子、永椎あゆ美など現在第一線で活躍中。つい先日もドラマ『ショムニ スペシャル』を観ていたら、宮沢美保の姿を見つけて嬉しくなってしまった。「ひめゆりの塔」も新人女優発掘映画として観ると、一味違う魅力あり。95年版を振り返っても、酒井美紀に馬渕英里何など多数出てます。現在公開中の秀作「がんばっていきまっしょい」は、主演の田中麗奈だけでなくボート部部員全員の頑張りにこそ目を向けてほしいもの。清水真実、葵若菜、真野きりな、久積絵夢、みんなこれからも、がんばってーいきまーっしょい！（しょい）

怪獣の姿は映らなかったが、ツワモノたちが大挙映りまくっていた「大怪獣東京に現わる」は、正に現代の個性派総出演集団劇だった。田口トモロヲ、吉行由実、西山由海、奥野敦士、柏谷享助、田京恵などなど、さらにはモニター上で水上竜士や松山鷹志らがチラリと映ったりと実に贅沢極まりなく、もちろん桃井かおりと本田博太郎の夫婦姿もユニーク。高松英郎の名演も観られれば、何と竹内力が神様役だったりもする。そして沢木麻美のブルーが入ったヒロイン！

室内劇は集団ドラマとなりやすく、個性派も登場しやすい。今年は「しあわせになろうね」が渡瀬恒彦を囲んで有森也実、風間杜夫、哀川翔、六平直政、真田真垂美、天宮良、中西良太などなどクセ者たちが楽し気に丁々発止の演技合戦を展開してくれていた。また西村雅彦や戸田恵子などの「ラヂオの時間」や豊川悦司や上田耕一などの「12人の優しい日本人」と、三谷幸喜脚本作品も集団ドラマの代表として忘れられない。

集団とくればヤクザ映画、特に和泉聖治監督作品は、その人望から多くの俳優たちが毎回結集している。「新宿愚連隊物語 実録・新宿の顔」など、大作並に蠢く人の数に驚く。主演の的場浩司から未だ名前のわからぬ猛者どもまで全て、画面の奥からこちらを睨みつけるその迫力よ。

「大怪獣東京に現わる」の角替和枝、桃井かおり、本田博太郎

「鮫肌男と桃尻女」の島田洋八と若人あきら

俳優監督作品は、やはり出演者の個性を活かしてくれる。特にサブ監督の「弾丸ランナー」「ポストマン・ブルース」「アンラッキー・モンキー」は、堤真一、清水宏、山本亨、鈴木一功、四方堂亘、ダイヤモンド☆ユカイ、平泉成などなど個性派の宝庫だ。「無能の人」「119」「東京日和」と、竹中直人監督作品も負けてない。しかもこちらは俳優のみならず塚本晋也や故・神代辰巳などの監督を俳優として起用し、毎回成果を収めている。

これから公開の作品では、浅野忠信主演の「鮫肌男と桃尻女」を挙げておく。岸部一徳のすっごく変なヤクザを筆頭に、真行寺君枝と鶴見辰吾のすっごく変な姉妹、さらに高杉亘、堀部圭亮、津田寛治、田中陽次、関根大学などなど、ついには寺島進までみんなすっごく変でカッコいい！ もちろん島田洋八も変だし、止めは盗聴オタクの殺し屋を演じる若人あきらだ！

その他、90年代個性派勢揃い作品は、もはやここに記し切れないほど多数ある。それは即ち、日本映画界の俳優層が実はどんどん厚くなってきている事実に外ならないのだ。

Digitized by Google

長塚京三

ながつか・きょうぞう　1945年7月6日生まれ。東京都出身。在仏時に仏映画「パリの中国人」でデビュー。「宇宙の法則」で91年アジア太平洋映画祭助演男優賞、「瀬戸内ムーンライト・セレナーデ」で98年日本アカデミー賞主演男優賞を受賞。他の代表作には「絵の中のぼくの村」(96)や「東京夜曲」(97)など。来年も連続ドラマ、映画、8月には94年に読売演劇優秀賞を受賞した「オレアナ」の再演など、多彩な活動が予定されている。

俳優としては、かなり遅咲きの人である。ナイスな上司、ユニークな父親像に代表されるように、男としての機が熟してから一気に火がついた。が、主演作は三連打されるし、今年はいくか！　という矢先に超人的な役所広司にもっていかれてしまったり、いささかアンラッキーな人ではある。だがしかし、悩みたもう事なかれ。我々は「ザ・中学教師」におけるアンドロイドのような冷徹な教師を、「ひき逃げファミリー」におけるマイカーのように解体されてゆく父親を、決して忘れる事はない。どちらかといえば、過去よりも来るべき時代の日本の男像を感じさせるその予感的な演技は、もうすぐ大輪の花を開かせるに違いない。　**塩田時敏**

成瀬正孝

なるせ・まさたか　1950年2月27日生まれ。長崎県出身。東映の第13期ニューフェイスとして映画界入り。NHK「武田信玄」(87)などのTVドラマや舞台、多数のOVで活躍しつつ、映画では「天と地と」(90)、「やくざ道入門」(94)、「安藤組外伝　群狼の系譜」(98)など、主に時代劇とヤクザ映画に出演。きうちかずひろ監督作「鉄と鉛」(97)では、渡瀬恒彦の相手役を好演した。来年公開予定の出演作に「残侠」「共犯者」などがある。

「将軍家光の乱心　激突」で幼君を護送する用心棒集団の中、冷めたぶっきらぼうな言動に拘わらず〝やるときはやる〟そんな男を好演して、ひときわ印象に残ったのが成瀬正孝だった。そもそも70年代伝説のピラニア軍団のひとり（当時は成瀬正）。東映作品には欠かせない筋金入りのバイプレイヤーだ。昨年の隠れた傑作「鉄と鉛」では渡瀬恒彦を監視しつつ、いつしか彼の男気に魅かれてゆく準主役のヤクザを、カラリと心地よい情感で演じてくれた。来年は同じきうちかずひろ監督の「共犯者」で、かつて自分の命を狙った殺し屋カルロスに仕事を依頼するという、ドラマの要となる役で出演。またまた男気を感じさせてくれそうだ。　**的田也寸志**

生瀬勝久

なませ・かつひさ　1960年10月13日生まれ。兵庫県出身。同志社大学在学中に劇団そとばこまちに入団。88年には4代目の座長となる。劇団の活動と並行して、読売テレビ「週刊TV広辞苑」を始めとする関西の深夜バラエティ番組に多数出演し人気を得る。映画では「トキワ荘の青春」(96)で鈴木伸一役を演じた他、「新・居酒屋ゆうれい」(96)、「恋と花火と観覧車」(97)などに出演。現在、舞台「こどもの一生」の全国公演中である。

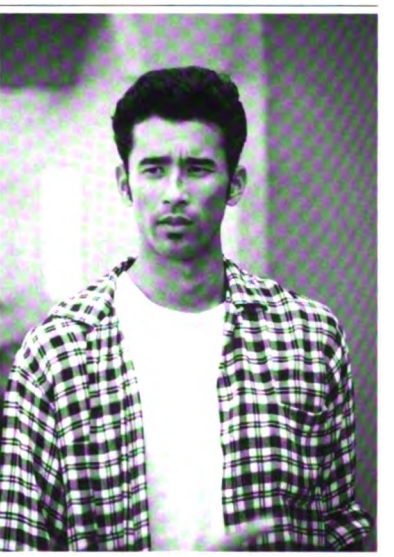
劇団「そとばこまち」の座長である彼は、映画俳優としてはまだ未知数の存在だ。「トキワ荘の青春」(96)「新・居酒屋ゆうれい」(96)「恋と花火と観覧車」(97)が主な出演作だが、中では小劇団の俳優たちが大勢出た「トキワ荘…」での、漫画家・鈴木伸一役が印象的。特に本木雅弘演じる寺田ヒロオと別れるシーンでは、しみじみとした情感を出した。「新・居酒屋ゆうれい」は前作で豊川悦司が演じたヤクザ役をやっているが、どうも前のイメージがあるのでしっくりこなかった気がする。シリアスからコメディまで、何でもこなせる技量のある人だけに、これから40代に向けて、映画でもこれぞ生瀬勝久だという役柄を早く見せて欲しいのだが。　**金澤誠**

Digitized by Google

吹越満

ふきこし・みつる　1965年2月17日生まれ。青森県出身。84年10月よりWAHAHA本舗に参加。映画出演作には「つぐみ」(90)、「ガメラ2　レギオン襲来」「お日柄もよくご愁傷さま」(共に96)、「ご存知！ふんどし頭巾」(97)、「ラブ&ポップ」(98)など。今年の「SF　サムライ・フィクション」では大役をこなした。舞台、CM、ドラマ、バラエティ、さらにはCDやライヴビデオのリリースなど、多数の媒体で活躍。現在CX「殴る女」出演中。

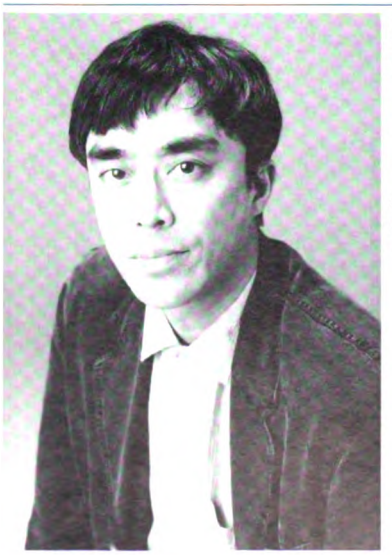
最初に彼を観たのが〝ロボコップ芸〟だったもので、完全にお笑いの人かと思っていた。もちろん〝WAHAHA本舗〟の一員であるから、それも全く外れではないのだが、吹越満はもっと多彩な演技をこなす俳優である。「LUNATIC」のゲイの麻薬密売人も印象的だったし、「ガメラ2」のNTT職員という、一般人の視点と能力で宇宙怪獣に立ち向かう役柄もはまっていた。今年の「SF　サムライ・フィクション」では、剣の実力はないくせに意志だけは強い、中野裕之監督に言わせれば〝バカ〟な主人公を好演。「ガメラ2」や「SF」を観ると、この人はどこか〝マイペース〟で生きる人物をやると、実にうまい。　金澤　誠



真木蔵人

まき・くろうど　1972年10月3日生まれ。東京都出身。88年、「ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー」で映画主演デビュー。89年「あ・うん」で日本アカデミー賞新人賞を受賞し、91年の「あの夏、いちばん静かな海。」では聾唖の青年を演じ絶賛を浴びる。その後ブランクがあったが、97年の「傷だらけの天使」で復帰し、今年は「蘇える金狼」「愚か者」「BEAT」、そして原案も兼ねた「ドルフィン・スルー」と主演作を連発。

20代の映画俳優と言えば、誰もが真っ先に彼の名を挙げるだろう。阪本順治監督作品「愚か者　傷だらけの天使」では本年度公開の日本映画において屈指の情けなさを誇る主人公を見事に演じ、大きな評判を呼んだ若手実力派俳優・真木蔵人。昨年、前作「傷だらけの天使」で5年振りの銀幕復帰。「阪本組はこれからの俳優生活の土台」との本人の言葉通り、前作の外伝となる「愚か者～」ではその一生懸命さが観客を笑わせる独自の石井久キャラクターを確立させた。また今年は「蘇える金狼」でアクションに初挑戦、「ドルフィン・スルー」では原案も担当、そして沖縄オールロケの「BEAT」と様々なタイプの映画に主演した。　斎藤芳子



益岡徹

ますおか・とおる　1956年8月23日生まれ。山口県出身。早稲田大学卒業後、80年に無名塾に入塾。映画デビューは翌81年の「謀殺・下山事件」。以降、「マルサの女2」(88)、「夜逃げ屋本舗」シリーズ(92～95)、「毎日が夏休み」(94)、「マルタイの女」(97)などの映画の他、TVドラマにも多数出演。今月21日より公開の中島哲也監督作「Beautiful Sunday」、来年公開予定の中原俊監督作「コキーユ～貝殻」にも出演している。

益岡徹の、慌てふためく顔が見たい。うーんと困った顔がもっと見たい。あのギョロっとした目ん玉が右往左往する程、シーンのボルテージが上がっていくというのは「マルサの女2」以来変わらない法則だ。何ならダニのような男を憎々しく演じ、ラストいきなり刺されちゃうTV『悪魔のKISS』みたいなパターンもOK。女装もアリの「夜逃げ屋本舗」シリーズや、ヒーローものフェチ「七人のおたく」の情けなさも捨て難いけれど、三谷幸喜作の舞台『厳流島』の翻弄され放しの佐々木小次郎は最高でしたな。そういえば新作「コキーユ～貝殻」でも小林薫に思いっきり殴られてました。「困った顔×作品の面白さ」比例の法則は健在だ。轟夕起夫

Digitized by Google

町田 康

まちだ・こう　1962年1月15日生まれ。大阪府出身。町田町蔵の名で70年代末から音楽活動を行う。82年「爆裂都市　Burst City」で映画初出演。「ロビンソンの庭」(87)、「水の中の八月」(95)や舞台等に出演し、「エンドレス・ワルツ」(95)では実在した天才的サックス奏者・阿部薫に扮して話題に。95年に本名の町田康に戻し、近年は作家として注目されている。著書に「くっすん大黒」「夫婦茶碗」「屈辱ポンチ」(12月刊)などがある。

パンクロッカーで小説も書く。朝日新聞に連載までしている。そのうえ石井聰亙とか山本政志とか若松孝二とか佐藤寿保とか、爆裂監督たちの爆裂映画に出演。なんと「熊楠KUMAGUSU」の主演者でもあるらしい。おまけにびっくりするような美青年。かすかな翳を帯びつつ気品のある顔だち、透明に澄んだ瞳。そこに、はぐれものの憂愁が、少年のような甘い抒情が、そしてはちゃめちゃな暗い破壊の情念が、ミラーボールの光のように移ろう。爆裂監督たちのアヤしい欲望のままに動かされている彼の儚げかつアブなげな浮遊感、そしてそれがいつしか逆に監督たちの欲望をアヤしくそそる危険な幻惑となる一瞬が、たまらなくスリリングだ。　石原郁子

三上博史

撮影／谷岡康則

みかみ・ひろし　1962年7月23日生まれ。東京都出身。寺山修司監督作「草迷宮」(83)で主演デビュー。以来「ビリィ・ザ・キッドの新しい夜明け」(86)、「私をスキーに連れてって」(87)、「二十世紀少年読本」(89)、「遠き落日」(92)、「屋根裏の散歩者」(94)、「スワロウテイル」「宮澤賢治ーその愛ー」(共に96)、「パラサイト・イヴ」(97)など多数の映画の他、TVドラマ、舞台でも主演をこなす。また歌手としても活躍し、著書も多数。

「遠き落日」「宮澤賢治　その愛」と、共にありきたりな教科書的伝記映画にならず、一癖も二癖もある人間ドラマに仕上がったのは、やはり三上博史の、役柄の本質を見事につかんだ演技の賜であろう。日本映画の新たな才能に敏感で、「スワロウテイル」など絶えず挑戦を繰り返しながら、一方で先の二作のようなオーソドックスなものを両立させるその姿勢には頭が下がる。また「パラサイト・イヴ」のようなSFX作品にも興味を示してくれているのも、ジャンル・ファンとして頼もしい限りなのである。個人的に一番好きな彼の役柄は「ビリィ・ザ・キッドの新しい夜明け」。そう、やはり彼には銀幕のヒーローもよく似合うのだ。　的田也寸志

水上 竜士

みずかみ・りゅうし　1964年12月26日生まれ。富山県出身。85年より状況劇場～唐組に6年在籍。以後「教祖誕生」(93)、「SCORE」(95)、「くノ一忍法帖　柳生外伝」(98)などの映画やTVドラマ、OV、そして作・演出も務めた「豊饒の月」(94)など舞台に多数出演。来年公開の映画にテレンス・マリック監督「The Thin Red Line」、三池崇史監督「LEY-LINES」、山仲浩充監督「流★星」小沢仁志監督「SCORE 2 :THE BIG FIGHT」などがある。

「SCORE」「SCORE2:THE BIG FIGHT」ではキレまくり情け知らずのワルを、「SLANG　黄犬群」ではクールな殺し屋を残忍極まりなく演じきる。「くノ一忍法帖　柳生外伝」でのイッてしまったお殿様役は、もはや彼以外に演じられる者はないだろうというくらいのド迫力であった。しかし実際のご本人は、むしろおとなしめの優しいタイプ。そうした素の部分を活かして、OV「亡霊学級」では襲いくる亡霊たちになす術もない記者役を淡々と演じこなしていた。舞台の作・演出もこなす才人でもあり、今は映画脚本にも意欲的である。実は殺陣もできる。今度時代劇に出るときは、ぜひともチャンバラの腕も披露してもらいたいものだ。　的田也寸志

Digitized by Google

田口トモロヲが言うには、かつて憧れの不良女優が我らのバカ映画に帰って来てくれた、というわけだ。なるほどなるほど。「赤い鳥逃げた？」のいつもトップレスの姐ちゃんマコ、「青春の蹉跌」の家庭教師のカーディガンの袖をダラ〜ッと引っぱってテレテレ歩く登美子。何度繰り返し繰り返し見た事か。本当に我らが憧れ焦がれた不良女優だ。その後、まごう事なき日本を代表する大女優となったが、再び我らの女優として戻って来てくれたのは「木村家の人びと」あたりからか。特にここ最近はそれに加速度がついた。コギャルの使用済みパンツを買って説教たれる店主。「バウンス KOGALS」のあの役は、二十数年の時代の流れを感じさせて、桃井かおりだから良かったのだ。そして「大怪獣東京に現わる」の、何故か菓子ばかり食っている専業主婦、あっぱれ。とてもSKⅡ（CMやってます）使ってるとは思えないオバちゃん役への体当たりは見事だ。この映画、怪獣は出ないが桃井かおりが出るからこその重みとリアリティがある。かつて不良女優に憧れた奴らが今、最前線で映画を撮っている。更なるバカ戦線への参加を切に願う。　塩田時敏

撮影／雪松　覚

桃井かおり

ももい・かおり　1952年4月8日生まれ。東京都出身。71年「あらかじめ失われた恋人たちよ」で注目され、以後「赤い鳥逃げた？」(73)、「青春の殺人者」(76)、「疑惑」(82)、「ファザーファッカー」(95) など代表作は数え切れず、受賞歴も多数。本誌では77年「幸福の黄色いハンカチ」で助演女優賞、79年「もう頬づえはつかない」他と88年「木村家の人びと」「噛む女」「TOMORROW　明日」、97年「東京夜曲」で主演女優賞をそれぞれ受賞。

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

コラム 個性派

個性派を好む監督たち

的田也寸志

時代を問わず、洋の東西を問わず、どんな監督の作品にも常連の俳優がいる。主演クラスは当たり前、脇の隅々までくまなく、その監督作品ならではの常連俳優を見つけて楽しんでこそ映画ファンってなもんである。往年の黒澤明、小津安二郎、岡本喜八、深作欣二監督作品などは古き良き撮影所の専属俳優システムに守られながら、正に〝一家〟といった感じを形成していたが、それらが崩壊した現在でも、例えば大林宣彦作品を観ると、尾美としのり、峰岸徹、入江若葉、林泰文、岸部一徳などなど常連俳優によって多くを占められ、新たに参入してきた者も必ずといっていいほど次回作以降の常連となっていく。山田洋次作品も常連多数で、「学校Ⅲ」では田中邦衛、ケーシー高峰、笹野高史といった山田組なじみの面々が結集しており、それだけでもう映画の醍醐味を感じることができたのだ。こうしたファミリーの拡大は観る側にも、あの俳優は次にどんな役をやるのかという期待を募らせることになるのだ。周防正行作品は竹中直人を筆頭に田口浩正、宮坂ひろしなど、井筒和幸作品は木下ほうかや徳井優など、大森一樹作品では上田耕一や斎藤洋介など、原田眞人作品はミッキー・カーチスや矢島健一など、青山真治作品は光石研や斎藤陽一郎などなど、その他各組の代表は記しきれない。サブ作品に至っては、毎回多数の個性派たちが、怒涛のように現れては演技合戦を繰り広げ、個性派ファミリーの輪を1作ごとに拡大させているのだ。しかしその元祖は、やはり今は亡き伊丹十三だろう。主役から脇の脇まで、伊丹作品は絶えず俳優の個性をこそ活かしながら創作を続けていた。そんな中、大杉漣や諏訪太朗、田口トモロヲ、六平直政などのように、いろいろな組に絶えず出入りしながら仁義を通す助っ人も多数おり、いやはや日本映画界ははるか昔から、さながらヤクザ映画のような様相を呈してきているのである？

「学校Ⅲ」

「マルタイの女」

Digitized by Google

広田レオナ

ひろた・れおな　1963年3月7日生まれ。北海道出身。78年ベルギー国立芸術学校MUDRAの日本人初の生徒となる。クラシックバレエを学ぶが、練習中に腰を痛め断念。帰国後、82年「だいじょうぶマイ・フレンド」で映画デビュー。91年「夢二」「王手」の2作品で注目を浴び、ヨコハマ映画祭助演女優賞受賞。以降、「エンドレスワルツ」(95)、「薔薇ホテル」(96)に主演し強烈な印象を与える。最新作は仏映画"Mille Bornes"。

広田レオナはふわぁ～っとしてていいなぁ。私と同郷の札幌出身というのもいい。札幌出身の女優ってあんまりいないのだ。それはともかく、鈴木清順「夢二」の夢二ガール、阪本順治「王手」のストリッパー照美(テルビ)の印象は今だに強いが、彼女のイメージを最も上手く活かしているのは、一連の廣木隆一監督作品ではないかと思う。「さわこの恋」で田口トモロヲをそそのかす兄妹みたいにホワァーッとした婚約者。これは魅力的だった。この関係はOV「魔王街」のモヤァーッとした夫婦に発展。そして「MIDORI」での妖しいパーティを催す怪しい新興宗教家である。ちょっと得体の知れない宇宙人感性が「薔薇ホテル」以上にハマった。　塩田時敏

水木　薫

みずき・かおる　1959年6月16日生まれ。神奈川県出身。ヨコハマ映画祭助演女優賞を受賞した「ゲンセンカン主人」(93)、おおさか映画祭助演女優賞を受賞した「無頼平野」(95)、そして今年の「ねじ式」と、近年の石井輝男監督作には欠かせない存在である。他の映画出演作には「きけ、わだつみの声」「学校の怪談」(共に95)など。『3年B組金八先生』などのTVドラマにもレギュラー出演。得意の英会話を活かした著作もある。

水木薫がロマンポルノを脇で支えて来た才媛であった事は言うまでもない。その彼女との久々の再会がゲンセンカンの天狗湯、その湯けむりの向こうであった。もう、湯あたりしたようなエロティシズムに佐野史郎ならずともクラクラ。しかも、聾唖の女将とあって、台詞も発せず声も出せずの難どころを、表情豊かな肉体表現で、石井輝男のまがまがしいアクション演出に応え、再び三たび惚れ直したものだ。「ゲンセンカン主人」以降、石井組の常連で、とりわけ「ねじ式」で浅野忠信の濡れ場童貞を奪う女医役は女性ファンのやっかみを買ったろう。見てばかりいないで(ヨコハマ映画祭の良きお友達だ)、もっと映画に出なさいよ。　塩田時敏

南　果歩

みなみ・かほ　1964年1月20日生まれ。兵庫県出身。84年、小栗康平監督作「伽倻子のために」でデビュー。翌85年からはTBSドラマ「五度半さん」のヒロインを演じ　86年には「ロミオとジュリエット」(坂東玉三郎演出)で舞台にも進出。以後、映画出演作には「TOMORROW 明日」(88)、「夢見通りの人々」(89)、「エンジェル・ダスト」(94)などがあり、新作には「OPEN HOUSE」、来春公開予定の「おもちゃ」がある。

「伽倻子のために」でいきなり主役デビューしたとき、既に演技派の片鱗を見せていた。その後も「日本殉情伝　おかしなふたり…」のヒロインタ子役や、「TOMORROW　明日」の好演などが光ったが、その役柄はシリアスな女性が多かったように思う。しかし近年は「OL忠臣蔵」で見せた会社乗っ取りの首謀者、あるいは新作「おもちゃ」での、客の男を仲間の芸妓と殴り合っても奪おうとする女など、より強烈な個性をフィルムにぶつけるようになってきた。そういう意味でも、かつてのどちらかといえば"清楚"なイメージに押し込められていた彼女の多面性が解放されていくのは、これからだという気がする。　金澤　誠

Digitized by Google

光石 研

みついし・けん　1961年9月26日生まれ。福岡県出身。78年、「博多っ子純情」のオーディションに合格し、主役デビュー。以後「セーラー服と機関銃」(81)、「キネマの天地」(86)、「Love Letter」(95)、「スワロウテイル」(96)など多数の作品に出演し、「Helpless」(96)からは青山真治監督作品の欠かせぬ顔となる。96年には英国作品「ピーター・グリーナウェイの枕草子」にも出演した。新作に「のど自慢」(99年1月公開)。

「博多っ子純情」での荒っぽくも木訥快活な主人公役でデビューしてから早20年、「ピーター・グリーナウェイの枕草子」に出演したときの経験で、初心に戻ろうと思ったとのことだが、そうした謙虚な姿勢ゆえか、このところの彼には目を見張るものが多い。特に「Helpless」「チンピラ」「Wild Life」そしてOV「わが胸に凶器あり」といった青山真治作品では、監督の色をもっとも深くダークに反映させた代弁者として、異彩を放つ存在となっているのだ。また岩井俊二作品の常連でもあり、どんな小さな役であれ、彼が登場するシーンではほのかに画面の空気が動く。最新作は「のど自慢」。硬軟取り混ぜての活躍ぶりは嬉しい限り。　的田也寸志

宮坂ひろし

みやさか・ひろし　1963年8月29日生まれ。大阪府出身。「ファンシイ・ダンス」(90)、「シコふんじゃった。」(92)、「Shall we ダンス」(96)と、周防正行監督作品には欠かせない存在。高橋伴明監督作「修羅の帝王」(94)では主演のひとりを務めている他、「SCORE」「極道の妻たち 赫い絆」(共に95)などにも出演。NHK・BS「龍～RON～」、NTV「ムーンスパイラル」、CX「SPぴんぴん物語」など、TVドラマにも多数出演。

ニッポン新個性派時代

「SCORE」での小沢仁志との壁をへだてた一騎打ちは、本家に勝るとも劣らぬ名シーンだった。OV「DOG TAG」でも、同系統のクライマックスが小沢和義とともにリフレインされる。「くノ一忍法帖　柳生外伝」では何と厚化粧のお公家様風いでたちで、柳生十兵衛とまたも一騎打ち。マカロニ・ウェスタン風のそれもまた名勝負であった。そう、宮坂ひろしには名勝負がよく似合う。そして主人公と敵対するライバル役にうってつけの人物なのだ。そういえば常連である周防正行作品でも、いつも憎々しいライバル役を好演してくれている。「Shall we ダンス？」ダンスシーンで竹中直人の髪をクルリと回すタイミングもナイスでした。的田也寸志

六平直政

むさか・なおまさ　1954年4月10日生まれ。東京都出身。武蔵野美術大学彫刻科大学院を中退後、状況劇場を経て、87年新宿梁山泊「パイナップル爆弾」の旗揚げに参加。以後、「ジャス大名」(86)、「鉄男」(90)、「シコふんじゃった。」(92)、「眠らない街　新宿鮫」(93)、「忠臣蔵外伝四谷怪談」(94)、「写楽」(95)、「スーパーの女」(96)、「マルタイの女」(97)、「卓球温泉」「アンラッキー・モンキー」(共に98)など数多くの作品に出演。

一度観たら絶対に忘れないその風貌は、正に個性派。しかも「シコふんじゃった。」のおっかないOBでも、「現代仁侠伝」のヤクザでも、さらにはドラマ『ショムニ』の京野ことみのお父さん役でも、どんな役を演じても不思議とピタリとはまってしまう。そのあまりの存在感ゆえ、どれが良かったあれが良かったと一口で語るのも難しいほどだが、90年代深作欣二監督の映画・TV含めた諸作品、特に「忠臣蔵外伝四谷怪談」の卓悦役は、その狡猾さが作品そのものインパクトをさらに際だたせていた。今年は「卓球温泉」でのトラック運転手役も微笑ましい好演。「しあわせになろうね」で連打したビンタ、当たったらさぞ痛かろう。的田也寸志

Digitized by Google

山本未来

撮影／谷岡康則

やまもと・みらい　1974年11月4日生まれ。東京都出身。92年「喜多郎の十五少女漂流記」でデビュー。96年には日中合作ドラマ『東京の上海人』に出演し、今年は「不夜城」のヒロインを演じて注目される。他、TV、CMと幅広く活躍し、現在テレビ朝日のドラマ「外科医・夏目三四郎」に出演中。来年公開予定の映画には森田芳光監督「刑法三十九条」、ジャッキー・チェン主演の「WHO AM I?」があり、後者ではヒロインを演じる。

「喜多郎の十五少女漂流記」の時は何の印象もなかったが、昨年の夕張ファンタ「三毛猫ホームズの推理」で本人に逢った時はググッと来た。酔った山本未来も素敵だったが、大人っぽさ、そして男っぽさ（!?）の成長に手応えを感じたものだ。思えば「三毛猫～」で共演の葉月里緒菜との不思議な因縁で出演した「不夜城」で、マニッシュさが見事にハマった。原作のファンからはミスキャストの声もないではない。だが違う。このマニッシュなファム・ファタルぶりこそが猥雑なアジアの熱気と対等に拮抗し得ているのである。と同時に、金城武との激しいからみで見せるオンナの肢体。この多面性の中に、大型新人・山本未来の未来がある。　塩田時敏

余貴美子

よ・きみこ　1956年5月12日生まれ。神奈川県出身。76年から84年まで自由劇場に所属。『上海バンスキング』のリリー役などの代表作を経て、85年に劇団東京壱組を結成。数多くの舞台を踏むが、87年の「ちょうちん」以降、映画にも精力的に出演。93年「ヌードの夜」のヒロインで圧倒的な名演を見せつけた。以後「GONIN2」(96)、「20世紀ノスタルジア」(97)などに出演。現在「学校Ⅲ」が公開中。まもなく公開の作品に「あ、春」がある。

現役の女優たちの中で抜群に婀娜っぽい余貴美子。代表作は「ヌードの夜」の名美役だろうが、自虐的に堕ちていくヒロインをかったるさと潔さを漂わせて演じきった彼女は、哀しいほど女を感じさせた。「眠らない街　新宿鮫」のような、どこか暗い秘密を持つ女の役が似合うのも、「うみ・そら・さんごのいいつたえ」の男に失敗した子持ちの女がリアルなのも、彼女の雰囲気の中にふてくされているような色気と、ある種の倦怠感があるからだろう。「ザ・ハリウッド」ではビデオ店主の別れた妻をサラリと演じていたが、ここでも男にうんざりしたような不思議な色気があった。ただ最近太ったみたい。あまり健康的にならないで。　北川れい子

渡辺真起子

わたなべ・まきこ　1968年9月14日生まれ。東京都出身。高校在学中からモデルを始め、CMに出演する一方でファッションモデルとして活躍。蜷川幸雄演出「ルネッサンス　スタジオ　93春」など舞台活動も行い、またOV「XX（ダブルエックス）美しき獲物」(95)に主演。以後「GONIN」(95)、「Mogura」(96)、「林檎のうさぎ」「2／デュオ」(共に97)などの映画作品に出演。来年公開予定の映画「M/OTHER」に主演。

マッキーとは、まだ彼女が本格的に女優デビューする前、ピンク映画が特集上映された年のロッテルダム映画祭で初めて逢った。世界のとんがった若い才能を発掘するこの映画祭の雰囲気に刺激されたか、マッキーは日本のとんがり映画で気を吐く新進女優となった。OV「XX美しき獲物」で真梨邑ケイを相手にハードなレズシーンも大奮闘で、個人的にはこの路線にもドンと突き進んで欲しいが、梅林茂初監督「Mogura」のチェリスト、そして脚本なしで俳優が作り上げてゆく諏訪敦彦「2／デュオ」のヒロインの友人と、とんがり映画でそのシャープな個性を磨いているのだ。今後も意欲的な作品へのチャレンジに期待。　塩田時敏

Digitized by Google

舞台の演出家兼女優としては知られていたが、〝映画女優・渡辺えり子〟の名前を知らしめたのは、やはり「Shall weダンス？」(96)だろう。この作品での、やたら口うるさいが、死んだ夫を思ってダンスをするおばさん役には、圧倒的な存在感があった。思えば、近年の映画での彼女は〝夫に先立たれた〟役が多い気がする。「恋は舞い降りた。」(97)では、夫を亡くして女手ひとつで託児所をやっている女性、新作「完全なる飼育」でも、これまた夫がいなくて若いボクサーに肩入れしているアパートの管理人。設定自体は普通のおばさんでありながらも、ひとり身であることで、どこかに〝女〟の可愛さやいじらしさを覗かせる役柄が続いている。ともすればそういうおばさんの中にある〝女〟の部分は、嫌らしくなりがちだが、彼女が演じると、決してそうはならない。その辺のバランス感覚というのは、渡辺えり子という女優の天性のものだという気がする。個人的には、ドラマの『豆腐屋直次郎の裏の顔』(90～92)での、萩原健一の夫にベタ惚れしている、豆腐屋のおかみさんが、喜劇的な可愛さが出ていて、特に好きだった。

金澤誠

渡辺えり子

わたなべ・えりこ　1955年1月5日生まれ。山形県出身。78年に劇団3○○を結成、主宰・劇作家・演出家・女優の4役を兼ねる。83年「ゲゲゲのげ」で岸田戯曲賞受賞。同年「青春かけおち編」で映画デビューも果たす。以後「いこかもどろか」(88)、「怖がる人々」(94)などに出演し、96年の「Shall we ダンス？」で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞。「バカヤロー！」(88)では監督もこなした。今年は「カンゾー先生」に出演。

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

コラム 個性派

ベテランの個性派たち

進藤良彦

スクリーンで気になる個性派俳優は、なにも若い人たちばかりではない。出演本数一、二を争う大杉漣（1951年生まれ）に代表される熟年俳優たちの活躍も、見逃せない映画の醍醐味だ。名脇役として高い評価を受けながら、今や堂々と主演もこなす「カンゾー先生」の柄本明（48年）や「大安に仏滅!?」の橋爪功（41年）、90年代に入ってキネ旬の主演賞と助演賞を両方獲っている岸部一徳（47年）などは、すでに個性派俳優というワクにとどまらず、日本映画界を代表する俳優といっても差し支えないだろう。これに続くところでは、大杉と同世代の大地康雄、本田博太郎（ともに51年）、三浦友和（52年）、萩原流行（53年）らがいるが、彼らは近年、必ずしもその個性を活かす作品にめぐり逢えていない。力を持ったこうした熟年俳優たちの活躍の場が、今の日本映画界には少ないのである。

むしろ彼らの世代が活況を呈しているのはTVドラマの世界だ。『踊る大捜査線』で一躍ブレイクした〝スリー・アミーゴス〟こと北村総一朗（37年）、小野武彦（42年）、斎藤暁（53年）の3人や、16クール連続出演継続中の内藤剛志（55年）を筆頭に、森本レオ（43年）、平泉成（44年）、角野卓造（48年）、中丸新将（49年）、斎藤洋介、田山涼成（51年）、金田明夫（54年）、升毅（55年）など熟年俳優のオンパレード。彼らはTVドラマを主戦場にしながら、自由なフットワークで各メディアを横断している。

しかしその一方で、「KAMIKAZE TAXI」の怪演が今も強烈に印象に残るミッキー・カーチス（38年）や、「シャ乱Qの演歌の花道」に続き来年公開の「のど自慢」でも強い個性を発揮している尾藤イサオ（43年）のほか、蟹江敬三（44年）、長塚京三（45年）、西岡徳馬（46年）、渡辺哲（50年）、ベンガル、螢雪次朗（51年）らが、それぞれのポジションで継続的な活躍を見せている。スクリーンの熟年パワーからも目が離せそうにない。

「KAMIKAZE TAXI」のミッキー・カーチス

「大安に仏滅!?」の橋爪功

Digitized by Google

今年の３月上旬号で読者の皆様にお願いしました
「主役を喰う役者」というアンケート。
企画の趣旨に少々変化があったため、
そのままアンケートを反映させることはできませんでした。
ここでは、そのアンケートで挙げていただいた
俳優の皆様のお名前と、
そのかたが出演されて印象的だった映画を
列挙させていただきます。

上川隆也「東京夜曲」
神威杏次「GOING WEST／西へ…」「タオの月」「うなぎ」
川谷拓三「県警対組織暴力」
北大路欣也「日本任侠道・激突篇」
衣笠健二「極道ステーキ」三部作（ov）
斎藤達雄「東京の合唱」
斎藤陽一郎 青山真治監督作品
酒井美紀「Love Letter」
名古屋章「マルタイの女」
浪花千栄子「二十四の瞳」「猫と庄造と二人のをんな」「悪名」
西島秀俊「マークスの山」「1000マイルも離れて／さわこの恋」「藏」「セラフィムの夜」「2／デュオ」「アートフル・ドヂャース」
倍賞美津子「うなぎ」
萩原聖人「CURE」
原田甲子郎「十三人の刺客」
藤原釜足「青い山脈」
フランキー堺「ダイナマイトどんどん」
星十郎「瞼の母」
真木蔵人「傷だらけの天使」
松風雅也「ガードドック」（ov）
宮口精二「七人の侍」「人間の條件」
牟田悌三「星空のマリオネット」
室田日出男「野獣死すべし」
山本昌平「暴力街」
山本緑「新宿愚連隊物語 実録・新宿の顔」
柳ユーレイ「トキワ荘の青春」
山口剛「武闘派仁義　完結篇」
吉岡秀隆「学校Ⅱ」
山崎邦正「ファンキー・モンキー・ティーチャー」シリーズ
渡辺謙「瀬戸内少年野球団」
渡辺哲「極道の門／実録・大阪頂上作戦」「武闘派仁義・全面抗争篇」

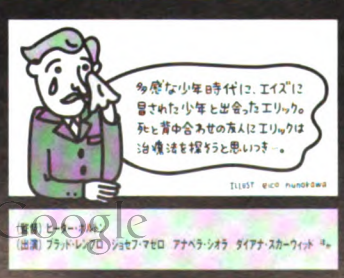
天本英世「日本でいちばん長い日」
石橋蓮司「竜馬暗殺」
伊藤雄之助「生きる」
上田吉二郎「虎の子作戦」
遠藤憲一「その男、凶暴につき」
大泉滉「二十世紀少年読本」
大楠道代「ツィゴイネルワイゼン」
大河内伝次郎「大菩薩峠」
大竹しのぶ「青春の門」
奥田瑛二「眠らない街・新宿鮫」
蟹江敬三「十九歳の地図」

巻頭特別企画　がんばれ！日本映画
ニッポン新個性派時代

山茶花究「氷壁」「悪名」「続・悪名」
嶋田加織「日本製少年」
島村日出人「嗚呼!!花の応援団」
志村喬「鶯鳶歌合戦」「わが青春に悔いなし」「天狗飛脚」
下元史朗「襲られた女」
ジョニー大倉「遠雷」
菅井一郎「どぶ」「鍵」
杉崎浩一「MISTY」
須藤正裕「行き止まりの挽歌・ブレイクアウト」
千石規子「醜聞」
高倉健「駅／STATION」
高瀬實乗「丹下左膳余話・百萬両の壺」
高知東生（東急）「極つぶし」
高峰三枝子「あの波の果てまで」
土屋嘉男 東宝特撮影シリーズ
出川哲郎「キネマの天地」
でんでん「極道黒社会」「ザ・ヒットマン」（ov）
豊嶋稔「飢狼伝」
中村玉緒「大菩薩峠」

GOLDEN CINEMA　ゴールデン洋画劇場　毎週土曜　ヨル9時　フジテレビ

11.21 ON AIR
マイ・フレンド・フォーエバー
THE CURE



Digitized by Google

作品特集

ビッグ・リボウスキ

THE BIG LEBOWSKI

●1998年・アメリカ・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビーＳＲＤ、ＤＴＳ、ＳＤＤＳ・１時間57分
●監督／ジョエル・コーエン　製作／イーサン・コーエン　脚本／ジョエル・コーエン、イーサン・コーエン　製作総指揮／ティム・ビーヴァン、エリック・フェルナー　撮影／ロジャー・ディーキンズ　プロダクション・デザイン／リック・ハインリクス　衣裳／メアリ・ゾフレス　音楽／カーター・バーウェル　編集／ロデリック・ジェインズ、トリシア・クーク
●出演／ジェフ・ブリッジス、ジョン・グッドマン、ジュリアン・ムーア、ステーヴ・ブシェーミ、ピーター・ストーメア、デイヴィッド・ハドルストン、フィリップ・シーモア・ホフマン、フリー、リオン・ラッサム、サム・エリオット、タラ・リード、ジョン・タトゥーロ、デイヴィッド・シューリス　ベン・ギャザラ
●提供／アスミック・エース、テレビ東京
●配給／アスミック
●11月21日よりシネマライズにてロードショー

Digitized by Google

僕たちの話は
言ってみればアメリカのお伽話なんだ！

チャンドラー同様、僕達もハリウッドを避けたのさ

「ビッグ・リボウスキ」の脚本を書くにあたり、ジョエル&イーサン・コーエン兄弟はレイモンド・チャンドラーを参考にしたと公言している。が、フィリップ・マーロウに代表されるクールでタフガイの主人公描写と「ビッグ・リボウスキ」のデュードの情けないキャラクターにはかなりの違いがある。

兄ジョエル・コーエン（以ドJ）「例えばロマン・ポランスキーの「チャイナタウン」はチャンドラーが住んでいた頃のロスを描いたもので、ハードボイルドの伝統そのものを受け継いでいる。『ビッグ・リボウスキ』はチャンドラーの世界をもっとルースに解釈したもので、ハードボイルドの形式に倣ってはいるけれど、キャラクターの描写としてはヒーロー的な行動をしないと設定することの方が魅力的だったんだ」

弟イーサン・コーエン（以ドE）「あくまでも僕たちの話はコメディなんだ」

J「僕たちの映画はむしろロバート・アルトマンがチャンドラーの『長いお別れ』を映画化した『ロング・グッドバイ』に近いと思う。あの映画はいろんな意味でコメディなんだけど、他の映画監督たちがチャンドラーを映画化したものと比べても、コメディの要素が強い。『ビッグ～』のスピリットはそれに近い」

「ビッグ・リボウスキ」の時代設定は1991年、湾岸戦争の真っ只中のロサンゼルスを舞台にしている。コーエン兄弟にとって、舞台となる土地が物語上、どれだけ重要な意味合いを持つかはこれまでの作品が証明しているが、今回も例外ではない。

J「僕たちの映画の殆どが毎回、特定した地域のアメリカ人を描いている。それは僕たちがシナリオを執筆する上で、キャラクターがどこに住み、どういう暮らしをしているかイメージするためにとても重要なことなんだ。しかも『ビッグ～』の場合は、ロスでしか存在し得ないようなキャラクターがオンパレードで登場する」

E「マーロウ的な役割を果たす主人公、デュードがナレーターとして、ロスの様々な場所を訪れるという設定になっている。彼はいろんな場所にいくことによって、いろんな種類のキャラクターと会うんだ」

J「面白いのは、この映画はチャンドラーが表現したような誰でも知っているロスの名所ではなく、ロスの外ればかり出てくるんだ。大富豪の住むパサディナの住宅地や、ヒッピー崩れのデュードが住んでいるサンタモニカのヴェニス・ビーチ。デュードが通っているボーリング場があるサン・フェルナンド・ヴァレー（註※）。ポルノ産業で一儲けした男が住むマリブ・ビーチはハリウッド映画ではお馴染みの場所だけど、その他の殆どが映画や書物で表現されない場所なんだ」

E「チャンドラーがハリウッドを描くのを避けたと同様、僕たちもハリウッドを避けたってわけなんだ」

彼らは舞台に選んだ場所が生み出した人間やカルチャーを事細かに描写することによって、原色人間図鑑を作成している面持ちかもしれない。さしずめアメリカ人図鑑を。

J「それはあるかもしれないね。君が映画を見終わった後、恐怖におのかない程度のアメリカ人であることを願うけど（笑）。キャラクターの住む場所を戦略的に使っているのは、アメリカという国が住んでいる場所によってはっきりとクラス分けされているからだ。そして細分化されたクラスが互いに交流することは滅多にない。特にロスはそれが顕著だ。ビバリーヒルズにスラム街がないようにね」

E「僕たちは『赤ちゃん泥棒』『ファーゴ』、そして今回と三回〝誘拐〟というモチーフを使っている。それは誘拐映画を撮りたかったわけじゃなく、本来は出会わない違う社会、違うクラスに所属する人間を遭遇させる（クラッシュという言葉を使った）ためなんだ。それはドラマとして大きな意味を持つんだよ」

彼らの言う〝ミックス〟の試みはこの映画のあらゆるところで見受けられる。例えば、70年代はヒッピーで反戦主義者だったはずの主人公デュードと、ベトナム戦争を経験した元軍人でことあるたびに戦争経験の話を持ち出す攻撃的な男ウォルターが、数十年たって今や親友という状況。コーエン兄弟はこれまでも「赤ちゃん泥棒」で婦人警官が犯罪者と結婚するなど、常識ではあり得ない組み合わせを展開させている。

J「ウォルターとデュードは戦争についても、政治についても、精神的にもまったく両極端な立場にいる。そういう設定の方が面白い。例えば警官が犯人と結婚する。僕たちの奇抜なアイディアはフィクションの中で現れる。信じられない話のギリギリのところで、実際存在し得るような人間をキャストすると、まったく信じられない話にはならないんだ」

E「物語を映画の中で表現するということが、既に物語をフィクションにするんだよ。『ファーゴ』は実話という形をとっているので、僕らの作品の中でも特別だけどね。ともかくキャラクターの現実性の中にちょっと非現実的な要素を加えることによって、ビビッドでドラマティックな効果を上げることが出来る」

J「『ビッグ～』は映画の構造として、潜在意識が描かれる話と受け取れるようになっている。言ってみればアメリカのお伽話なんだよ。普通の人の人生よりちょっと大きく、ち

※ここは昔からポルノ産業の盛んな場所で最近では「トゥー・デイズ」や「ブギーナイツ」の舞台となっている。

Digitized by Google

ジョエル&イーサン コーエン兄弟インタビュー

インタビュアー金原由佳

よっと不思議。だからサム・エリオットがアメリカ文化の伝統的な物語を語っているという表現にしたんだ」

太れと言ったわけじゃない、ジェフがそう解釈したのさ

今回の過剰なキャラクターたちにはそれぞれ実在のモデルが存在しているという。兄弟の友人にして、ジャーナリストであるウィリアム・プレストン・ロバートソンが製作過程を丹念に取材した『コーエン兄弟の世界 ビッグ・リボウスキ』(ソニー・マガジンズ)はその辺りに詳しく言及していて、デュードは「コナン・ザ・グレート」の監督ジョン・ミリアスとベトナム反戦運動での学生戦士「シアトル・セブン」の一人だったジェフ・ダウドなどの合成だという指摘がある。

J「今回に関しては、物語よりもキャラクター設定の方が先だったね。僕たちはジョン・グッドマンのために何か面白いストーリーを書いてやろうと思い、身近にいいモデルがいたことを思い出したんだ。そこで、デュードとウォルターのキャラクター作りから始まった。60年代に青春を過ごしたという設定上、彼らの年齢が決まり、二人の性格を際立たせるために湾岸戦争という時空間に置くことが効果的だと感じたんだ。91年という時代背景はハリウッドから見れば全然、時流に乗っていないけど、それはあまり気にならない」

E「とにかくいつも物語より、描くべき人間が先に来るんだ。モデルが実際にいるのは今回だけの特徴だけどね。俳優がきっかけとなって物語が膨らむことはしょっちゅうだ。例えばジョン・グッドマンやスティーヴ・ブシェーミに次は何を演じさせるか考えることがストーリーの展開に大きく関係していく」

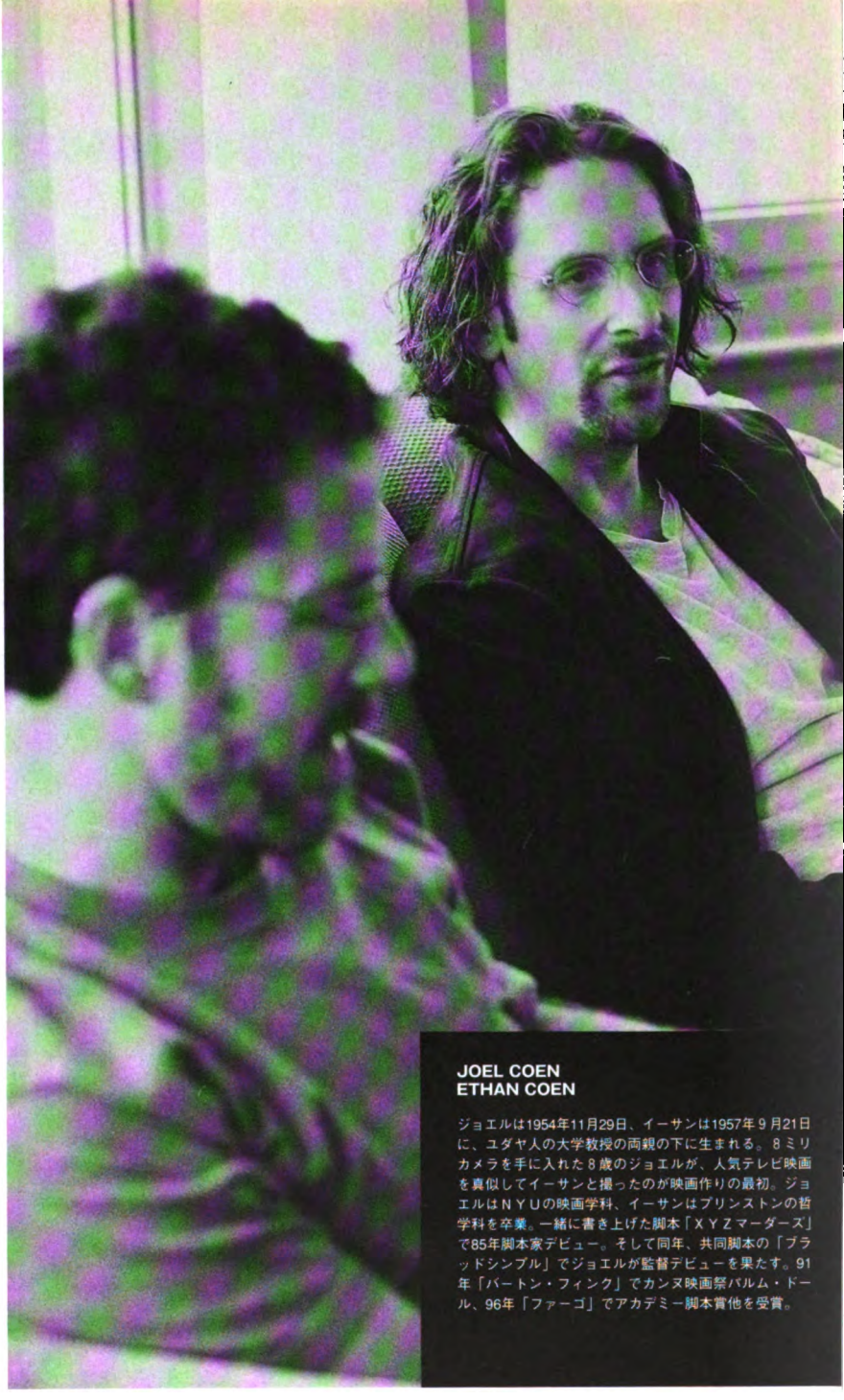
J「告白するとメンタルな部分で誰か特定の人物を想定しているパートと、そうでない部分があるんだ。そうでない部分は伝統的な映画における役回りに基づいて書いているかな」

――ボーリングもモデルから来たものですか。

J「撮影監督のロジャー・ディーキンスのアイディアが多分に入っているんだ。彼は『バートン・フィンク』以降、ずっと僕らの映画に携わっている。モデルたちはソフトボール好きだったんだけど、ボーリングの方がビジュアル的にデザインしやすいので変えたんだ」

E「僕らはドリームシークエンスが大好きなんだ。物語が展開する上で突如、まったく違うシーンを挿入することができるからね。ストーリーボードを担当してくれているJ・トッド・アンダーソンの手に掛かるとビジュアルがとても幻想的に仕上がるんだ。僕らはシンメトリックでコラージュっぽい場面が大好きだ。とくにダンスシーンはケニー・ロジャース&ザ・ファーストエディションの曲が流れてとてもグルービーな感じだよね」

Digitized by Google



JOEL COEN
ETHAN COEN

ジョエルは1954年11月29日、イーサンは1957年9月21日に、ユダヤ人の大学教授の両親の下に生まれる。8ミリカメラを手に入れた8歳のジョエルが、人気テレビ映画を真似してイーサンと撮ったのが映画作りの最初。ジョエルはNYUの映画学科、イーサンはプリンストンの哲学科を卒業。一緒に書き上げた脚本「XYZマーダーズ」で85年脚本家デビュー。そして同年、共同脚本の「ブラッドシンプル」でジョエルが監督デビューを果たす。91年「バートン・フィンク」でカンヌ映画祭パルム・ドール、96年「ファーゴ」でアカデミー脚本賞他を受賞。

J「そしてボーリングはとてもアウトな感じがする。彼らがこういう取り残されたスポーツにぞっこんということが大切なんだ」

――例えば今回、ジェフ・ブリッジスは非常に太っていますよね。あれは役作りで？

J「太れと命令したわけじゃない。モデルとなった友人を紹介したら、そいつが太っていて、それでジェフは向こう3ヵ月間好きなものを食べられると解釈したようだ。あそこまでやってくれるとは思わなかったよ(笑)」

E「それはデュードのキャラクターとして非常に重要なことだったからとても良かったね。ロサンゼルスはヘルス・コンシャスの街だ。デュードはそういうことにまったく興味がない、だから取り残されている人間だということをジェフがすぐさま理解したということだ」

J「ジェフは自分のイメージよりも仕事のことを先に考える役者なんだよ。ジョン・タトゥーロもディスカッションを必要としない役者。君は〝スペイン系の異教徒〟を演じるんだと説明して、衣裳を与えるだけで彼はキャラクターになりきるんだ」

二人の映画作りには「ジャンル映画の踏襲」と、「ジャンル映画へのアンチテーゼ」という相反する言葉が付きまとう。

E「『赤ちゃん泥棒』と『バートン・フィンク』はジャンル映画じゃないと思うよ」

J「批評家たちは作品によって、ジャンル映画といってみたり、そうじゃないと見方を変えているようだ。僕たちとしては分類できない作品を作っているつもりだけど。批評する上では、いい映画、悪い映画、違う映画と分けてもらう方がフェアなような気がするね」

ハリウッドとは一線を画しているコーエン兄弟がエルモア・レナードの原作を撮るという噂が流れた。

E「脚本の依頼が来たから書いたんだ。単なるライティング・ジョブで本意じゃない」

J「次回作は、ハリウッドでは閉鎖的で端正な役ばかり演じさせられているエド・ハリスに、床屋に勤めてはいても、理髪師になりたくない男を演じさせる」というから、またまた期待が高まってしまう。

イーサンは「コンセプト主流のハリウッドに於いて、僕らが好きな映画を撮れるのは、低コストで映画を製作しているから。『未来は今』の製作費は大きかったけれど、それでもハリウッドのスタンダードに比べてずっと安い。あれ以外の作品なんてすごい安い製作費でそこそこ成功したから、スタジオは好きなことを自由にやらせてくれるんだ」というが、こういう絶妙なスタンスがとれるのも彼らの徹底したリサーチとさり気ない描写がなせるわざなのだろう。

Digitized by Google

作品評

好調コーエン兄弟の映像球戯

細越麟太郎

かくも軟弱なコーエン・ブラザースが見せるヒーロー像

ジョエルとイーサン・コーエン兄弟の作品は、いつも映画的なこれまでの伝統に対して、それぞれに別の視点を見せようとしている。それはハリウッドの歴史にアゲインストだというのではなくて、彼らなりの新しいユーモラスな感性で映像に転化して見せる。

そのアイデアの面白さ、奇抜さ、新鮮さが、彼らの個性である。

一見すると、それは茶化しのようであるが、ただのコメディを作ろうとしているのではなく、確実に新しいタイプのエンターテイメントへの挑戦と見てとれる。

今回の「ビッグ・リボウスキ」のアプローチは、古典的なアメリカン・ヒーローの見直し、とでも言った方がいいだろうか。その底辺には、あのレイモンド・チャンドラーが完成させたフィリップ・マーロウの幻影がある。これは恐れ入った発想である。

映画のストーリー展開が、あの「三つ数えろ」の原作でもある『大いなる眠り』に酷似しているのは、見るまでもなくコーエン兄弟が言明している事実である。

「ビッグ・スリープ」と「ビッグ・リボウスキ」は直接には何のシャレにもなっていない。「大いなる眠り」というのは〝死〟のことであり、それはチャンドラーのテーマ。人間たちの欲望と裏切りと陰謀によって頻発する〝死〟という名のドラマである。

主人公のフィリップ・マーロウは私立探偵だ。富豪の家に呼び出された仕事というのは、その家の次女の失踪と、それに絡む脅迫の真相を探ることであった。

単純なように見えた事件は、意外なことに、その依頼人の家に棲息していた家族の問題と陰謀だったのである。これは、俗に言うハードボイルド小説のセオリーでもある。犯罪者によって引き起こされた事件ではなく、大抵の場合は家族の崩壊や、家族制度の難点にその問題は起因していることが多い。そのスタイルをチャンドラーが提起して、ロス・マクドナルドや、ジェームズ・エルロイ、ジェームズ・クラムリーなどが継承している。

つまり、ハードボイルド小説は、男性のマチズモの誇示だけではなく、偶発する暴力に対しての正義のあり方を、スタイリッシュに書いている小説表現なのである。

さて、話がウサン臭くなってきたようだ。今ここで語ろうとしているのは、コーエン・ブラザースが「ビッグ・リボウスキ」で描こうとしたテーマなのである。

主演のジェフ・ブリッジスは、いい年をして特に正業を持たない風来坊を演じる。たまたまリボウスキという名前だったので、同じ名前の富豪と間違えられて暴漢に脅迫を受ける。これは全くの「間違えられた男」である。憤慨したジェフは、その富豪の家にクレームをつけるのだが、それがきっかけとなり、その妻の誘拐事件にからんだ身代金の引渡しを引き受けることになる。これが「三つ数えろ」の導入と同じなのである。

案の定、深夜の現金引渡しは失敗に終わり、バッグに入っていた筈の大金は消えてしまう。さぁ、どうする。名探偵マーロウは単身で事件の核心に切り込んでいくのだが、ジェフはさらさらその気がない。ベトナムでキレてしまったジョン・グッドマン、それに心臓の弱いスティーヴ・ブシェーミらと、毎晩のようにボーリングに興じていて、そのトーナメントの方が大事なので、富豪の誘拐事件なんて他人事なのである。

面白いのは、暴漢に殴られて失神した時に見るイメージの広がりである。これがロバート・ミッチャムやディック・パウエルのマーロウならば、頭上の扇風機が脳裏で暗転して、結局は底深い漆黒の地獄へと転落していくのである。

ところがコーエン・ブラザースが描く失神のイメージは、盗まれた絨毯に乗ってロサン

Digitized by Google

ゼルスの空を飛ぶ映像であったり、バズビー・バークレーのミュージカルのような、華麗なラインダンスと一緒に踊ったり、バイキングのスタイルをした抽象画家のジュリアン・ムーアと戯れる悪夢なのである。そして手にはいつもボーリングの重いボールを持っているので、あっという間にその重みで現実の世界に落下してしまう。

つまり、この映画でコーエン兄弟は、フィリップ・マーロウとその事件をモチーフにしながらも、実はそこにあるヒロイズムを解体して見せるのである。マーロウは、無類のタフガイであり、ワイアット・アープの正義感を現代に引き継いだアメリカン・ヒーローの偶像であった。しかし、それはせいぜいが60年代までのお話。

警察の組織が強化されて、それに比例して犯罪が複雑で凶悪になってからは、ダーティ・ハリーを最後にして、ヒーローはパワーを失ってしまった。最近のハードボイルドに登場する探偵は、アルコール依存症であったり、妻に逃げられてバイ・セクシュアルに走ったり、恋路にうつつを抜かすヤワな商売人ばかりになってしまった。

これが時代なのだ、と作者が嘆くように、マーロウのようなタフ・ガイは消滅してしまった。ここでコーエン・ブラザースが見せるヒーローは、かくも軟弱なのである。

73年に、ロバート・アルトマンはレイモンド・チャンドラーの最高傑作の「ロング・グッドバイ」を映画化した。エリオット・グールドが演じたフィリップ・マーロウはニコチン中毒の気弱な男で、事件そのものは原作の『長いお別れ』を描いていたものの、そこにはマーロウのヒロイズムは、まったく姿を消していた。このことは、当時のファンを大きく裏切り、失望させたものである。批評もさんざんであった。

しかしアルトマンは、その時点で、すでにヒロイズムの崩壊を予言していたのかも知れない。ニヒリスト・アルトマンとすれば、当然の解釈だったのだろう。

84年にコーエン兄弟は「ブラッドシンプル」で、依頼殺人をジェームズ・M・ケインの硬質なスタイルから、いささか無計画な不完全犯罪として描いて見せた。それはタランティーノやエルモア・レナードのユーモアとは別の、失態のドラマであった。

スタイリッシュな「ミラーズ・クロッシング」に次いで「バートン・フィンク」では、ハリウッドのライターの迷走ぶりをシュール・リアリズムな感覚を取り入れて、かなりカリカチュアライズして描き、「未来は今」ではフランク・キャプラの「群衆」を、ヴィジュアルの強調によって現代化して見せた。これには賛否が分裂した。

そして96年の「ファーゴ」では、地方犯罪の異常さと滑稽さを独特の映像世界として表現して、ご存じのようにアカデミー賞の多くの部門でノミネートを受け、脚本賞の栄誉に輝いたのは、つい最近のことである。かくして、コーエン兄弟のクリエイティヴィティは、インデペンデントの資質を保持しながらも、メジャーの評価を正当に受けたことになる。

この映画を見て、身代金の行方などに気を取られてはいけない

イメージの昇華と、その遊戲感覚ではメル・ブルックスや、ウディ・アレンに共通する部分もあるのだが、基本的に彼らと違うのは、こうした発想の展開を、単にコメディとしての笑いに留めようとしているのではなく、彼らの狙いの中には新しいシニシズムがあるようだ。単に嘲笑というのではなく、そこには皮肉と痛烈な風刺がある。

それは、映画の冒頭に登場するタンブルウィードの動きや、ボーリング・ボールの回転をボールの穴から見ようとした、奇想天外な同一視覚にも表れている。

こんなことは、いったい他に誰が発想するのだろうか。馬鹿げた苦労、と笑わば笑え、そんなハタの意見などは絶対に耳を貸さない、彼らにはその自信があるのである。

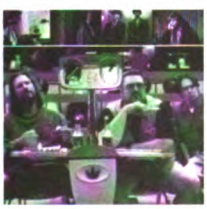
だから、この映画を見て、身代金の行方などに気を取られてはいけない。

あんなものは始めから存在しないもの。もともと依頼人が浮気な妻を殺すために仕組んだ偽装殺人が発端なのだし、その顚末はチャンドラー・ミステリーのいつものレトリックなのである。むしろそうした推理小説のカラクリを、冗談とカリカチュアで茶化しきったジョエル・コーエンの演出意図に注意を向けた方が面白い。

冒頭のナレーションから、この映画のストーリーを先導しているサム・エリオットのカウボーイは、ボーリング場のバーでウロウロしている怪人物である。昔の西部劇の扮装で

新刊案内

フィルムメーカーズ5
コーエン兄弟



責任編集／ロバート・ハリス
A5判／208ページ／1600円（税込）
新世代の映像作家を語るフィルムメーカーズ・シリーズの第5弾。責任編集には、J—WAVEのナビゲーターとしても活躍中のロバート・ハリス氏を迎え、各界著名人による評論や対談などの各種記事にインタビューやデータも交え、コーエン兄弟の魅力を徹底研究した、小社発行の最新刊ムック本。好評発売中。

Digitized by Google

大げさな口髭をたくわえたこのストレンジャーは、ジェフにしか見えない亡霊である。

曰くあり気に語る台詞には、それほど大した意味はない。しかしこの男は、西部伝来の「ゴースト・ライダーズ」なのである。ジョン・ヒューストン監督の「ロイ・ビーン」にも登場したことのある、この幻のカウボーイこそが、この作品で姿を見せようとしなかった、かつてのアメリカン・ヒーローそのものの幻影なのであろう。

そうでなかったら、どうしてボーリング場を徘徊していたのだろう。

ホワイト・ロシアンに酩酊しているジェフ・リボウスキの目には、彼はいつも偉大なるヒーローの姿として見えている。つまり、本当のヒーローというのは幻なのだ。それは偉大なるフロンティアの祖先かも知れないし、ワイアット・アープなのかも知れない。

ジョン・グッドマン、スティーヴ・ブシェーミ、ジュリアン・ムーアの怪優たちに加えて、常連のジョン・タトゥーロが紫色のコスチュームに身を包んだ変態ボーラーを演じている。こうしたコーエン組の連中の間で、ジェフ・ブリッジスは困惑しきった表情でホワイト・ロシアンをがぶ飲みしていた。これも、キレてしまった常連達のなかでの、精一杯の抵抗だったのかも知れない。お気の毒なことである。

さぁ、あなたはこの際、どちらのサイドにつけるか。それによって、この作品の楽しさと価値観はまったく別のものになるのである。コーエン・ブラザースの毒のあるジョークに平気で付き合えるかどうか。それがこの作品の真価を決定している。

芸術文化を支援します

平成11年度助成活動募集

日本芸術文化振興会では、芸術・文化の振興を図るために芸術文化振興基金による助成活動と文化庁「アーツプラン21」の補助金による舞台芸術振興事業の助成活動を募集します。平成11年4月1日から平成12年3月31日までの期間に行われる、芸術・文化に関する団体等が自ら主催して行う活動が対象となります。
詳しくは募集案内をご請求ください。

芸術文化振興基金

芸術文化振興基金
■映画の製作活動応募受付
劇映画(長編)　年3回
劇映画(短編)・記録・アニメ映画は年2回の募集
第1回目は3分野とも平成11年2月

文化庁HPアドレス　http:www.bunka.go.jp
新国立劇場HPアドレス　http:www.nntt.jac.go.jp

■問い合わせ先　日本芸術文化振興会基金部
〒102-8656 東京都千代田区隼町4-1
TEL.03-3265-7411(代) FAX.03-3265-7474

Digitized by Google

作品特集

宋家の三姉妹

宋家皇朝／THE SOONG SISTERS

●1997年・香港＝日本・カラー・シネマスコープサイズ・ドルビーデジタル・2時間25分
●監督／メイベル・チャン（張婉婷）　脚本・共同製作／アレックス・ロー（羅啓銳）　製作総指揮／レイモンド・チョウ（鄒文懷）　製作／ン・ンーユエン（呉思遠）　撮影／アーサー・ウォン（黄岳泰）　音楽／喜太郎、ランディ・ミラー　衣裳　ワダエミ　プロダクション・デザイン／ジェームズ・レオン（梁華生）、エディ・マー（馬鑾超）
●出演／マギー・チャン（張曼玉）、ミシェール・ヨー（楊紫瓊）、ヴィヴィアン・ウー（鄔君梅）、ウィンストン・チャオ（趙文瑄）、ウー・ンングォ（呉興國）、チャン・ウェン（姜文）、エイレン・チン（金燕玲）、ニウ・チェンホウ（牛振華）
●製作／ゴールデン・ハーベスト、ポニーキャニオン、フジテレビ
●配給／東宝東和
●11月28日より岩波ホールにてロードショー
●本誌関連記事／11月下旬号新作グラビア

Digitized by Google

対談 ヴィヴィアン・ウー×ワダ エミ

内面を作る役者にとって、いかに衣裳が大切か

中華民国の建国に端を発し、たび重なる革命や内戦、そして世界戦争を迎える激動の中国近代史の中、あたかも映画のヒロインのごとく光彩を放ち続けた伝説的三姉妹――宋靄齢、慶齢、美齢。今なお人々に語り継がれる彼女たちを、壮大な大河ドラマとして蘇らせたメイベル・チャン監督の「宋家の三姉妹」は、歴史が一巡りした今こそ見る者を圧倒し、魅了するだろう。

本作で、蔣介石の元に嫁ぎ、立場の違いから姉・慶齢と対峙しかかる三女・美齢を熱演したヴィヴィアン・ウー。そして本作の衣裳で、2度目の香港金像奨最優秀衣装デザイン賞を獲得したワダ　エミは、ともに前作「ピーター・グリーナウェイの枕草子」(96)から間をおかずして、本作の撮影に入った。2つの戦場をともにした彼女たちの対話を以下に採録したい。

エミさんがいなかったらナギコと宋美齢を演じ分けられなかった

ワダ　ヴィヴィアンと出会ったのは「ピーター・グリーナウェイの枕草子」のほうが先でしたね。ヴィヴィアンがナギコ役に決まって、まず彼女の身体のサイズが私の手元に届いたんです。それを基にファッション・ショーの衣裳を作りまして、実際の彼女に着てもらったらどこも直すところがなかったんですよ。

ヴィヴィアン　「枕草子」は初めてスクリプトを読んだときから興味を持っていたんです。それもグリーナウェイ監督とワダ　エミさんが参加するというので是非にと思いましたが、ヌード・シーンなどがあって迷ったんです。それと普段から着物を着ることもありませんから、着こなせるかも自信なくて。役者にとって衣裳というのは非常に大事なものですし、役柄も衣裳によって決まってくる部分もあるわけですから。でも、その衣装合わせの最中に、ワダさんが「あなた『宋家の三姉妹』の撮影をしているはずじゃないの？」(笑)。

ワダ　「枕草子」はグリーナウェイとわたしと4年越で暖めていた企画だったのですが、ちょうど「宋家の三姉妹」と撮影が同じ時期になってしまって。メイベル・チャン監督もヴィヴィアンを指名したし、グリーナウェイも彼女を指名したので、私たちは2作続いてコンビを組むことになったんです。でも、とても幸せな一年でしたね。

ヴィヴィアン　私もそうでした。衣裳の方と2本も続けて仕事をするのは、本当に初めてだったんです。エミさんは私が役になりきる上で、「これはあなたのものよ」というふうにすごく自信をつけてくれるんですよ。すると私も、役柄を演じるのに力も入るし勇気も出る。

ワダ　「枕草子」が終わって、私の方が先に「宋家の三姉妹」のために北京に入ったのです。ヴィヴィアンはルクセンブルグから北京入りして、一番最初のコスチュームは、蔣介石のコートでした。彼の軍用コートをそのまま彼女に着せたら、美齢のキャラクターが出るんじゃないかと考えたんです。最初は監督も反対だったけれど、ラッシュを見たらすごくうまくいっていて、映画のなかでも宋美齢というキャラクターがクリアになった。

ヴィヴィアン　そうなんです。宋美齢もナギコも非常に強いキャラクターを持っていて、今まで演じた中でも特にナギコは強い女だと思います。その彼女から美齢になるのにわずか3日間で頭を切り替えなくてはならず、移動する飛行機の中でもずっと頭を悩ましたんですよ。セットに着いてヘアメイクをしてもらって、外見は美齢なんですけれど、やはり自分のなかではナギコをどこか引き摺っている。どうしようかと思っている時、エミさんがわざわざ日本から作って持ってきてくれたウェディング・ドレスなどを着ているうちに、だんだん美齢というキャラクターが自分に伝

Digitized by Google

撮影／雪松　覚

ワダエミ／72年“Marco”で衣装デザイナーとなり、以降黒澤明監督「乱」(85)「夢」(90)や「利休」(89)、ピーター・グリーナウェイ監督の「プロスペローの本」(91)「ピーター・グリーナウェイの枕草子」(96)ほかを手掛ける。「乱」により第58回アカデミー賞衣装デザイン賞を受賞。本作で「白髪魔女傳」(93)に続く、2度目の香港金像奨賞最優秀衣装デザイン賞を受賞した。

ヴィヴィアン・ウー（鄔君梅）／66年、上海生まれ。女優である母の影響で幼少の頃から歌とダンスを学び、16歳で本格的に女優を目指す。87年、ベルナルド・ベルトリッチ監督「ラスト・エンペラー」で注目を浴び、以降ハリウッドを拠点に活躍。「チャイナ・シャドー」(90)「天と地」(93)「ジョイラック・クラブ」(93)などを経て、96年「ピーター・グリーナウェイの枕草子」の主演に抜擢。次作もグリーナウェイの「8½の女たち（仮題）」に出演する。

Digitized by Google

わってきました。エミさんがいなかったら、あれだけ短時間のうちに、強い人格の女性を演じ分けることはできなかったと思います。

内面を作っていく役者 外側を作っていく衣裳デザイン

ワダ 宋美齢に関しては、ヴィヴィアンは15歳から83歳までの彼女を演じたでしょ。撮影はもちろん順番にはいきませんから、ヴィヴィアンに「今日は15歳、今日は80歳、今日は30歳よ」と、始まる前に毎日やったんですよね（笑）。

ヴィヴィアン もちろん、役者は内面をどう作っていくかということが仕事ですけれど、エミさんは衣裳だけではなく髪型から口紅の色まで全体を見てくれるので、完全に外側を任せることができたんです。自分自身を顧みると、私は可愛いアイドルスターではないし、質素で平坦なタイプの女優ではないかと思うんです。そこが長所でもあり、だからこそメイクや髪形、衣裳で変わっていけるんですね。美齢も一人の人物でありながら、15歳から80代まで色んな年代を演じ分けていくので、「枕草子」と、この映画によって、女優として非常に嬉しい経験をさせてもらいました。

エミさんとの仕事で何が楽しいかというと、エミさんが与えてくれる衣裳によって、どう対応していけばいいか、もう体が自然にリアクションしていることなんです。結婚したことがなくてもエミさんからハンカチやら衣裳やらをもらうと、自然に振舞える。役柄にとって、いかに衣裳が大事かを実感させられました。

ワダ 私は長く俳優さんと仕事をしてきたけれど、ヴィヴィアンは天性の女優だと思う。

ヴィヴィアン そういうことを言ってくれるから、また仕事をしたくなる（笑）。エミさんの目を見ると、私の演技が上手くいっているかどうかが分かるんです。

ワダ 彼女の最初の演技を見たのは、ファッション・ショーのモデル役なんだけれど、リハーサル無しの一発本番でパーフェクトに動くのを見て、非常に感動しました。それに女王様のようなこの首。日本人でこういう首を持っている女優はほとんどいませんよ。

ヴィヴィアン 上手く動けたのは、衣裳が自分のものになっていたからですよ。

「宋家の三姉妹」を終えて、私はロスに移って時間が経ってますから、ある意味アメリカ式の撮影法に甘やかされていたとも思うんです。向こうでは普通自分のトレーラーがありますが、中国ではみんな一緒。スケジュールも西洋の方はキチキチっと決まったもので行くけれど、香港スタッフは遅くなっても、翌日もその分遅いスタートになって……と、どんどんズレるのがすごくつらかった。でもアメリカに帰ったら、香港でみんなが一緒にいる現場が懐かしく思えました。どちらの世界でも自分が調節していけばいいことなんですが。

宋美齢は今も生きていらしゃるし、中国人ならみんなよく知っている人物なわけです。その人を演じた時、見た人からここが実物とは違うとかって言われるプレッシャーが今はものすごくあるんです。あまり映画をこうだと決め込まないで、体で受けて楽しんでほしいですね。（96年東京国際映画祭にて）

Digitized by Google

作品評

見せ方、納得のさせ方を心得た堂々たる娯楽大作

おかだえみこ

このお話から　あのお話へ
はじまりがあっても　終りはないわ
お目々があっても　歯はないの
口を開けたら　目を閉じる
目を開けたら　口を閉じる…

ふしぎな歌を歌いながら、かわいい少女たちがかくれんぼのように遊んでいる。分厚い壁に半円形に囲まれて、枯れ草に覆われて、歌声が反響するここは、おや、墓地だ。石の十字架。それもかなり立派な。お墓の数が少ない。特別の、ある一族だけの墓所なのか。しかし花を手に墓地で遊ぶ少女たちとは？

宋慶齢（マギー・チャン）危篤、その知らせがニューヨークの宋美齢（ヴィヴィアン・ウー）に伝わる緊迫した導入部に続くこの象徴的な墓地と少女たち、その後もくり返し現われる夢のような回想場面は一気に観客の心を摑む。少女たちの歌うはかなげで不気味な歌もおもしろい。何がはじまるのだろう？

その人生がまさに今世紀とぴったり重なる宋家三姉妹と激動の中国・日本近代史については解説が別にあると思うので、ここでは純粋にアレックス・ロー脚本、メイベル・チャン演出の堂々たる娯楽映画に拍手を送ることにしたい。魅力ある登場人物たち、いい意味で通俗な人情劇、主役を包んでうねる激動の時代の大河ドラマ。味わいが近いのは北杜夫原作の往年の傑作テレビシリーズ「楡家の人々」（65年、脚本／宮本研・福田善之、演出／大山勝美）、または劇団四季のミュージカル「李香蘭」（作・演出／浅利慶太）だろうか。

80年以上の時の流れは、テレビシリーズなら一週間ごとに読み切り形式で時代を飛べるが、一気に見せる映画はシークエンスごとの時間配分や時代の変化の表現に工夫が要る。この映画はそのあたりの呼吸が実にうまい。新総統の肖像プラカードを掲げたパレードが階段を移動するシーンの反復で時代の転換を示す演出などは特に才気を感じさせる。劇的な誇張や変更は随所にあるが、肩に力が入りすぎることなく、わかりやすく、各登場人物の性格は明快に示され、感情移入しやすい（作者は違うが「上海グランド」も同じことが言える）。こういう作劇術で思い出されるのは菊田一夫だ。彼の作る舞台は常に客を飽かさず、興味をそらさなかった。観客への見せ方、納得のさせ方が、泣かせ方も含めて圧倒的にうまかった。はっきり言って今、こうした正調メロドラマの演出法による観客の納得させ方が日本映画界では忘れられているのでは。

導入部のふしぎな歌と共に、三姉妹の父、アメリカ育ちのチャーリー宋（チャン・ウェン）の愛唱歌『峠のわが家』（作詞ブリュースター・ヒグリー、作曲ダン・ケリー、一八七三年発表、現在カンザス州の州歌）が効いている。チャーリーが少年の日にアメリカで覚えた歌としてふさわしく、くり返し部分の

"Where seldom is heared
a discouraging word
and the skies are not cloudy all day"

（気弱な言葉なき地、曇りなき大空の地）は彼の抱く新生祖国への願い、夢ともとれる。

中国近現代史と宋家関連（※）年譜

1840　アヘン戦争勃発
1842　南京条約で香港割譲
1884　清仏戦争勃発
1886　※アメリカから帰国したチャーリー宋　布教活動を開始
1890　※長女・霭齢誕生
1893　※次女・慶齢誕生
1894　日清戦争勃発
1897　※三女・美齢誕生
1900　義和団の乱
1904　※霭齢、アメリカに留学
1907　※慶齢・美齢、アメリカに留学
1911　辛亥革命
1912　清朝滅び、中華民国成立
　※孫文大統領に就任。袁世凱に追われ日本へ亡命。彼を追った慶齢が秘書に
1913　※霭齢、孔子の子孫の孔祥熙と結婚
1914　第一次世界大戦勃発
1915　日本「二十一ヶ条要求」
1918　※慶齢・孫文と結婚
1919　※チャーリー宋没
　五・四運動等、抗日運動高まる中、孫文が中国国民党結成

アルバム「宋慶齢在上海」より

Digitized by Google

幼い娘たちと雪の庭園の迷路で遊びながら歌う場面、彼女たちをアメリカ留学へと送り出す港で、船を見送りつつ歌うシーン。「芙蓉鎮」「紅いコーリャン」のチャン・ウェンが前半を引っ張る。しかしうまい人ですね。

長女の靄齡（ミシェール・ヨー）が大財閥の御曹司と結ばれ、結婚披露宴はワダエミの花嫁以外全員白の衣裳設計がすばらしい。しかし次女慶齡はチャーリーの同志であり親友の、親子ほど年の違う孫文（ウィンストン・チャオ）と結婚してしまう。怒りにまかせて親子の縁を切ったものの、臨終の床に駆けつけた慶齡に父は最後の力をふりしぼって花嫁衣裳を贈る。泣かせるいい場面である。

『峠のわが家』、冒頭の少女たちの歌、三姉妹が合奏する小曲、対日戦の前線で慰問の歌手が歌う『蘇州夜曲』（作詞／西條八十、作曲／服部良一、一九四〇年）など、映画は大事なシーンを平易な曲や周知のメロディーで強調し、印象づける。それもまた菊田一夫的なのだが、こうした演出は前提として『峠のわが家』や『蘇州夜曲』が観客によく知られていなければならない。しかし昨今どうだろうか。ポピュラーすぎる曲なのに、学校で教えず家でも誰も歌わないため『埴生の宿（ホーム・スイート・ホーム）』を知らずに育ち、そのため「ビルマの竪琴」も「火垂るの墓」も、この曲が流れる場面の演出意図がまるで通じない若者が多数、現実にいるのだ。『峠のわが家』も『蘇州夜曲』もてんで初耳という観客には、この映画はどう映るのだろうか。

女流監督ならではのこまやかさあふれる名場面

後半、野心満々の若き蔣介石（ウー・シングォ）が登場、三女美齡と結ばれる。姉妹の母はチャーリーの遺品の聖書を蔣に贈り、どこかに書き込みがある、それを自分で見つけてほしい、と伝える。かつて地下運動時代、チャーリーは水で濡れると字が現われる（あぶり出しの逆である）機密文書の作り方を幼い姉妹にも教えていた。これが伏線になる。

家族が顔を揃えた仲秋名月の月見の宴があいにくの大雨になる。留学経験者の姉妹が内輪の話を英語でやりとりし、「ここは中国だ」と蔣がいらだつ。客間の天窓を流れる雨。口論のあげく蔣と慶齡が決定的に仲違い、全員気まずく散ったあと雲間から月が出る。こうしたシーンや国外に去る慶齡を母が見送る港、幼い姉妹が遊んだ墓地での慶齡と美齡の静かな対決、蔣と美齡の遠乗りデートなど、ああ、監督は女性だ、と思えるこまやかさのあふれる場面が多い。一方最後のクライマックス、西安で張学良に監禁された蔣を美齡が特使となって救出、小型機で南京上空まで帰ったものの滑走路の照明が日本軍に破壊されて着陸不能、というスリルたっぷりの場面。ここで靄齡が見せ場を作る。このシーンやその後の三姉妹の最前線慰問シーンなどはぐっとスケールが大きく、メイベル・チャンの引き出しの多さを改めて感じさせる。また、これは返還直前の最後の香港映画（日本と合作）であり、中国・香港・台湾のスタッフが制作に参加し、ストーリーには公開時にそれぞれの国で問題となる点が含まれている。当然周辺からの横槍も制約もハードルも多かったであろう、と想像できる（事実、上映する国により異なるバージョンがあるらしい）。それでいて少しも腰の引けたところがなく、裏の苦労を感じさせない作品にのびのびと仕上げた柔軟さ。余談だが日本ロケで現われる京都嵯峨野の化野念仏寺などは「時雨の記」よりはるかに強く「そうだ、京都行こう」と思わせてくれるのだ。

終幕、慶齡はついに死去、ニューヨークで車椅子の美齡が雨の庭で昔をしのぶ。ひろげた聖書に雨が降りそそぎ、見返しが濡れ、みるみる現われるチャーリーの文字（果たして蔣介石はこの文字を読んだのだろうか？）。何と書いてあったかは、スクリーンで見てほしい。ため息が出るほど満ち足りる、見事なラストシーンである。

それから23年、今年宋美齡は一〇一歳の誕生日を迎えたという。はじまりがあっても終りはないの……三姉妹の物語はまだ終っていないのだった。

21 中国共産党結成
25 五・三〇事件
※孫文没
26 国民党北伐開始
27 上海クーデターにより、国共分離する
※蔣介石と対立した慶齡、モスクワへ渡る
28 ※美齡、蔣介石と結婚
31 中国統一。蔣介石が国民政府の主席に
柳條溝事件・満州事変が始まる
34 ※母の死で慶齡帰国
共産党の長征開始
36 西安事変
※蔣介石が軍閥により監禁
37 盧溝橋事件・日中戦争始まる
39 第二次世界大戦勃発
40 ※宋家三姉妹、抗日・難民救済に従事
41 太平洋戦争開始
※美齡、アメリカを訪問、人気を博す
45 日本敗戦
46 国共合作崩壊し、再び内戦へ
48 ※靄齡、NYへ移住
49 中華人民共和国成立
※慶齡が新中国の副主席に就任。蔣介石は台湾へ逃れ、中華民国総統に
65 文化大革命始まる
75 ※靄齡没
※蔣介石没
81 ※慶齡没、名誉国家主席に
97 香港返還

Digitized by Google

メイベル・チャン監督論
中国と欧米社会の間で揺れる自己への問いかけ

大和晶

自分は何なのか、香港人としてどうあるべきか？

メイベル・チャン監督が80年代に手がけた〈移民三部作〉の一本「誰かがあなたを愛してる」（87年）の日本公開時（89年）、来日インタビューの際に彼女はこう語っている。

「3作品に共通しているのは、二つの世界＝中国と欧米社会の間で揺れ動く人間の悲喜劇です。それはそのまま、97年中国返還を目前にした今の香港の状況と言えるでしょう」

二つの世界＝東洋と西洋の間で揺れ動く人間の姿。その意味では、「宋家の三姉妹」の三人のヒロインも同様である。彼女たちは、幼少の頃にアメリカに渡り、西洋の知性と教養と近代的思想を身につけて、20歳過ぎに祖国に戻ってきた、いわゆる帰国子女。だが、20世紀初頭の中国はまだまだ封建的な社会であり、三姉妹に備わった〝西洋的なるもの〟を受け入れる素地は十分に培われていなかった。つまり三姉妹は、自分の母国に居ながら「誰かが――」のニューヨークに住む主人公たちと同じように〝異邦人〟の心許なさ、アイデンティティの揺らぎに悩まざるを得なかったのである。そして、「誰かが――」がメイベル監督自身のニューヨーク体験を元にしているように、「宋家の三姉妹」もまた、89年に生まれて初めて中国に足を踏み入れた時に監督が覚えた驚き、ショックから生み出された作品であった。監督は言う。

「自分のルーツでありながら、私は中国のことを何も知らず、中国もまた私のことを全く理解していなかった。中国において私という存在は、〝異邦人〟でしかなかったのです」

その自分と中国のギャップを埋めるために、中国について学びはじめ、その過程でメイベル監督は宋家の三姉妹に遭遇したという。そこで彼女は気がついた。かつて三姉妹が向き合っていた問題――西洋的知識を駆使して新しい中国を築こうという理想とその現実的困難性――が、今日、香港および香港人が抱えているものと非常に類似していたのである。

「私は、一人の映画作家として宋家の三姉妹を描きたい、描くことで、自分は何なのか、香港人としてどうあるべきかを発見できるのではないかと思いました」

ところで、メイベル監督はとてもハートのある人物ではあるが、決して自分の

Digitized by Google

感情に流されて独りよがりな映画を作るタイプではない。事実この「宋家の三姉妹」においても、三姉妹を見つめる監督の眼差しは、キメ細やかにして情にあふれてはいるけれど、あくまでも客観性を失わず、過度の思い入れは巧みに排除されている。それが、至ってドラマティックなストーリーテリングにもかかわらず、淡々と史実を綴っていく歴史大作のような印象を受けるゆえんかもしれない。とはいえ、100%思い入れを取り去ることは誰にだって不可能だろう。面白いのは、脚本を担当したアレックス・ローが最も魅力を感じたのは、蒋介石と結婚した三女の美齢らしいのだが、完成した映画を観る限り、次女・慶齢を中心に物語は進んでいくように見えることである。それに、筆者のひいき目半分にしても、慶齢を演じたマギー・チャンの放つ存在感は、美齢に扮したヴィヴィアン・ウーの比ではない。

「私は二人とも好きだけど、何と言っても慶齢は誰よりも理想主義者でロマンティスト。あの時代に、親子ほども年の離れた既婚者である孫文と家族の反対を押し切って結婚した勇気ある素晴らしい女性だと思う」

と語るメイベル監督は、強固な意志力に支えられた慶齢のあり様は、現代で譬えるならミャンマーのスー・チー女史のイメージに近いと付け加えている。が、思えばメイベル監督も意志の女性。少くとも、中国の検閲局に入ったきりになっていたフィルムを一年がかりで取り戻し、自分が意図していた通りの完全版まで持っていけたのは、彼女の慶齢に劣らぬ意志の力の賜にちがいない。

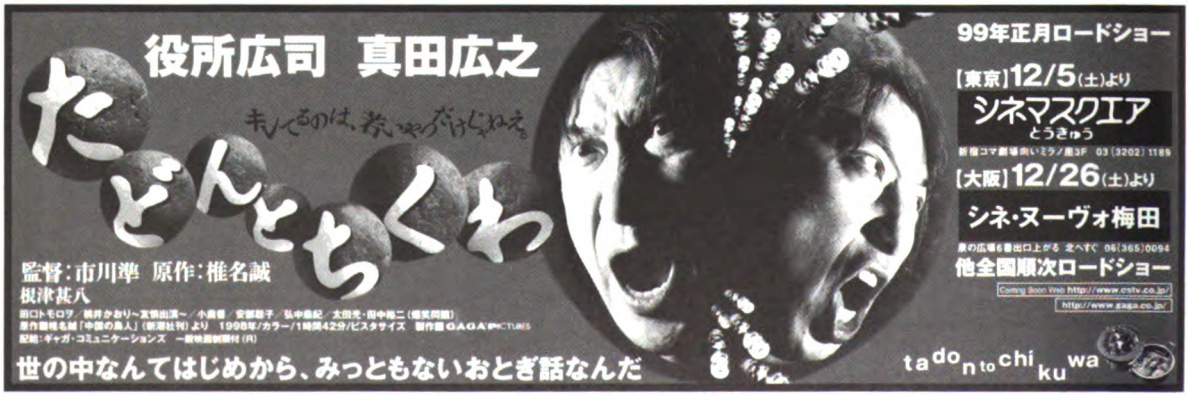
香港返還が投げかけた波紋と祖国中国への複雑な思い

それはそうと、「宋家の三姉妹」は、細部に至るまで神経の行き届いた丁寧な造りの作品である。換言すれば、何気ないカットにも何かしら意味が込められているということ。例えば〝靴〟は、三姉妹が〝纏足〟という中国女性が強いられた古い慣習から解放された女性であることを象徴する一方で、〝近づきつつある革命の足音〟を暗示してもいるのだ。あるいは色調。前半、三姉妹がまだとても仲が良く無邪気に明るい未来を信じていた頃は、彼女たちのファッションも白やピンクが基調で華やかだ。けれど、それぞれの人生を歩みはじめ主義主張の相克が深まるにつれ、彼女たちが身につける服装も含め、画面はダークな色合いを強めていくのである。一つ、ほんとに些細なことながら興味を引かれたシーンがある。孫文の死後、権力を握った蒋介石と対立関係にあった慶齢を除く宋一族の食事の場面。大きなダイニングテーブルを囲んだ彼らは、フォークとナイフを手に洋食を食べている。ところが、蒋介石だけは、彼の前にのみ並べられた中国料理の品々を箸でつまんでいるのである。西洋ならぬ日本に留学しその軍国主義を叩き込まれた生粋の軍人、蒋介石。宋家の人々とはあまりにも違う彼の資質を、うっかりすると見逃しそうなワンカットで端的に語ったメイベル監督の演出の細やかさ、妙味を改めて思い知らされた一瞬であった。

考えてみると、中国人であると同時にイギリス領香港に生まれ育った自己を絶え間なく問いただすメイベル監督は、クリスチャンであった蒋介石に対する「中国的キリスト教の理解」なる認識しかり、自分で思う以上に〝中国〟がよく見えているのではないだろうか。そんな彼女の祖国中国への思いは、そう単純なものではない。

「香港に生まれ、西洋の音楽を聴きハリウッド映画を観て育った私たち香港人にとって、いきなり祖国は中国ですよ、中国に帰りますよ、という中国返還は戸惑い以外の何ものでもない。ちょうど、両親はこの人と信じてきたのに、突然、違いますよ、産みの親はこっちですよ、と言われるようなもの。香港と中国では、民主主義や人権についての考え方がまるで違うわけですし。とはいっても、中国には秀れた文化があり、その一員であることはうれしく誇らしいことでもある。と思いつつも、西洋的生活は捨て難いし、イギリスが残してくれた法律や思想はやはり大きいのです」

そうした複雑な思いを込め、検閲局から勝ち取ったラストシーン。そこに鮮やかに浮かび上がる一文こそ、メイベル監督の嘘偽りない気持ちにちがいない。いわく、「革命とは愛である、愛もまた革命である」。



Digitized by Google

INTERVIEW

こんなに撮影が順調にいくのはもう二度とないでしょう

クリス・タシマ

アカデミー短編賞受賞作「ビザと美徳」監督・脚本・主演

インタビュアー 前田秀一郎

今年の第70回アカデミー賞で、見事短編映画実写部門賞に輝いた「ビザと美徳」は、アメリカに住む日系の映画人たちが協力して作り上げた26分の劇映画だ。第二次世界大戦中の1940年、リトアニアの日本総領事館代理理事だった杉原千畝が、ナチスから逃れようとした2000人のユダヤ人のために、日本の外務省に背いてビザを発行した。1枚のビザが家族全員の渡航を許可したため、実際には6000人以上もの命を救った杉原は、「日本のオスカー・シンドラー」と呼ばれ、今なお多くの人々の間で語り継がれている。この作品は、杉原領事が苦悩の末、ビザを発行し続けた1カ月を描いた感動の短編劇映画だ。7月の「第12回福岡アジア映画祭」の記者会見で、この映画の監督・主演を務めたクリス・タシマが製作について語った。

多くの人に杉原千畝のことを知ってもらおうと

——この作品を作るきっかけは？

クリス・タシマ（以下タシマ） 1995年の秋にティム・トヤマ氏から舞台で〝杉原千畝〟を演じてみないかという話がありました。その時に、日本人の中にもこんなに素晴らしいことをした人がいたんだということを知って大変興奮しました。私は小さい頃は日本人というものに誇りを持っていましたが、いろいろと戦争中の残虐行為などについて知っていくうちに、否定的になっていきました。ところが、この杉原氏のことを聞いて光がサアーッと差し込んで来たのです。舞台で演じているうちに、もっと多くの人にこのことを知ってもらおうと映画にすることにしたんです。

——初めての映画ですが。

タシマ 高校の頃から映画製作には興味があり、カリフォルニア大学サンタクルズ校の時には短編2本を作ったこともあります。舞台で演じていて、日本に対するこの思いを世界に向けてメッセージに

Chris Tashima ／1960年3月ロサンゼルス生まれ。カリフォルニア大学サンタクルズ校で映画製作について学び、『デルタの子供たち』『オールド・シューズ』の2本の短編映画を監督。その後も短編映画製作、舞台のプロデュース、セットデザインなどを手がけ、俳優としてもイーストウエストプレイヤーズでの『羅生門』『ミシマ』をはじめ多くの舞台や、『ストロベリー・フィールズ』などの映画、TV等に出演。初の本格的な映画の監督・脚本・主演となった「ビザと美徳」で98年の第70回アカデミー賞短編実写賞を受賞した。日系三世。

Digitized by Google

したかったんです。映画作りは大変だということは承知していましたので、最初はあまり真剣には受け止めませんでした。しかし、ある時、これは素晴らしい短編映画になるのではないかという閃きが頭の中で光を放ちました。そして戯曲を映画用脚本にしてトヤマ氏に見せたところ、やる気満々になってきました。そこで資金の話をしたところ、興奮していた彼は、なんと自分のクレジットカードを提供してくれました。私はこれでゴーサインが出たと認識し、製作に取りかかりました。あとは、日系やアジア系のコミュニティなどものすごくたくさんの方々に寄付をしていただきました。

――撮影のヒロ・ナリタ氏は「ロケッティア」や「ジャイアント・ピーチ」などハリウッド映画で有名な撮影監督ですね。

タシマ　全く面識はありませんでした。しかし、ナリタ氏のエージェントに電話してシナリオを送ったら、その台本が届かないうちに〝杉原氏についての作品なら是非参加したい〟という返事をもらいました。このナリタ氏のように、多くの人がこの映画製作に協力してくれたのは、杉原氏の話を世間に伝えることの重要性を私と同じように感じていたからです。クオリティの高い映画を作らなければだめだと思っていましたので、ナリタ氏の力は絶大なものでした。撮影にかけられる費用や日数の少なさをいろいろなアイデアを出してカバーしてくれました。

監督をしながら出演もするのは大変ではないかと、よく聞かれますが、この映画に関してはそんなに難しいことではありませんでした。既にこの作品を舞台で上演していましたので、俳優に対する監督の仕事というのは終わっていましたし、ヒロ・ナリタ氏や多くのプロの人たちが協力してくれたので、制作はとてもスムースにいき、そのため監督としての仕事は大してありませんでした。他の人々が撮影を進行するのを、私はただ現場に座って眺めているだけ、という場面もよくありました。そんな場合、私は「カット」と言えばそれで良かったんです。そういうわけで、撮影はとても楽しい経験で、こんな状況は二度とないだろうと思います。こんなに映画撮影が順調にいくのは珍しいことだと思っています。

「ビザと美徳」

映画を支えてくれた全員にサンキューを言いたかった

タシマ　撮影は7日間で、予定よりも早く終わり、そのあとポストプロダクションに入りました。音響は観客に臨場感を与えるので、映画制作においてとても重要な部分です。ですから、音声、音楽、編集などに予算の半分を使いました。

大体において、映画監督は作りたい映画の構想があっても実際にはそれの60%くらしか達成できないものです。でも、私の場合、見せ方や撮り方についてあまり厳格ではなく、多くの人と共に作っていきました。編集者しかり、ナリタ氏しかり。経験豊富なプロ集団と仕事をしているわけですから、それらの多くの意見を受け入れました。この映画は「監督による映画」ではなく、ストーリーが中心であって、それを生かすための意見は積極的に取り入れました。それらの多くは私の描いていたものとは違っていましたが、結果については満足していますし、この作品、この物語に有効なアイデアはどんどん取り入れようと思いました。

――アカデミー賞については？

タシマ　ノミネートされることは期待していました。毎年アカデミーでは2月に候補作品の記者発表をします。これは警備もかなり厳しく、ビバリーヒルズで朝の5時半から始まるんです。私もその日、記者会見に入れるかどうか見るためにアカデミーへ行ってみましたが、警備員が関係者までも入場制限をしていたので、私は入れませんでした。でも、記者会見では22か24ある部門のうち、わずか9部門の分しか発表しないので、会見は10分で終わりました。そこで、5時45分頃会場に入り、リストを見て自分の作品が候補に入っていることを確認しました。

発表の時は本当に緊張して頭痛がするほどでした。自分にとっては人生のハイライトでした。受賞式のスピーチは30秒と決められていました。それは（プロデューサーの）クリス・ドナヒューと2人で分けるには短すぎました。本当は寄付などをして、この映画を支えてくれた全員の分、621回のサンキューを言いたかったんです。

――次回作は？

タシマ　第二次世界大戦中、強制収容所で結成された日系アメリカ人野球チームがテーマの作品に取り組んでいます。まだクランク・インなどの目処はたっていませんが、これまで取り上げられなかった内容なので、なんとかまとめたいと思っています。

この「ビザと美徳」は26分という短編なのだが、ネガティブなイメージの多かった日本人について、精一杯アピールしたいという制作者側の態度が痛いほど伝わってきて、感動させられる。目を真っ赤にした多くの観客がタシマ監督に握手を求める。

この作品をもっと多くの日本人に見て欲しい。そして日本人であるということを再認識してほしい。

「ビザと美徳」今後の全国上映スケジュール　1月27日（土）福岡県春日市クローバープラザ、12月8日（火）北九州市女性センター・ムーブ　来年には劇場公開される。フィルム貸し出しに関する問い合せはTEL092-733-0949　福岡アジア映画祭ユニット（e-mail:faff@gol.com）まで

Digitized by Google

関西映画界いまむかし㉛

景山理（映画新聞・シネヌーヴォ）

浅野潜

景山理は九条だけではなく、梅田にまで映画館を作ってしまった。宝塚市が新築する映画館のプロデュースまで依頼がきているのだから来年はとうとう三館を運営することになる。三年前までは想像も出来なかった話なのだが、時代そのものの移り変わりが激しいのだから、個人の運命が変わっても別に不思議ではない。

それにしても最初は夢のような話だった。

ある日突然、まだ会社勤めをしていた私の社にあらわれた景山理はとうとうと説明しだした。相手がどう考えているのか、そのあたりの配慮は全くない。

「今度、映画館をはじめようと思うんです。大阪にはあまりにも映画館が少ない。だから東京では封切られても、大阪で上映する館がなくて、評判の映画を関西で見る機会がシャット・アウトされてしまうケースもある。これでは映画ファンに与える不利があまりにも大きすぎると思う。なんとか東京と同じチャンスを関西のファンに与えたいし、そのことが観客組織を造ってきた私のつとめだと考えはじめたんだ」

狙いは良いし、目的は正しい。だが肝心なのは事業をはじめるために一番必要な資金面の裏付けなのだが、思いこみの激しい景山にはその点が一番欠けている。

最初は出資依頼ぐらいと考えていたのだろう。

独身で勝手気ままに生きてはいても、仕事がらそんな余裕はない。思いつくままに話したのが、出資者を集める方法で、責任逃れの気持ちもあってひょいと口走った。

「出資者を広く集めるしか方法はないだろう。いまの時代、どこかから資金を引っ張ってくるのは無理だな」

バブルがはじけ、金の流れが底をつきはじめている時に、儲けにもならない映画館への出資など支援してくれるところはないのは想像出来た。景山の夢のような話に、こちらも夢で答えたのだから、まさか実現するとはそれこそ〝夢にも思わなかった〟のだ。

忘れるともなく忘れた頃、景山があらわれた。

「良く考えてみんなにも相談したんですが、〝市民の映画館〟というのはどうでしょう。株式を発行して資本を集めれば出来ると思うんです」

一株十万円で公募し、いわば〝市民の映画館〟を造ろうというのだ。しかも景山の凄いところは、あれよあれよという間にそれを実現した点だ。映画新聞を13年間も独力で発行しつづけ、学生時代から京都に観客組織を造った行動力である。「シネヌーヴォ」は九条に生まれ、翌年梅田に第二館が誕生した。まさに関西でも珍しい行動力のひと、景山理の中に流れているものこそ異星人の血なのかもしれない。

大城英司、バンクーバーを行く①

大城英司

8月初旬、「ある探偵の憂鬱」（矢城潤一初監督作品）がバンクーバー国際映画祭・新人監督部門コンペティション（THE ALCON DRAGONS&TIGERS AWARD FOR YOUNG CINEMA）に招待が決まった。

この映画祭、全世界から約300作品が招待され、そのうち賞を競うコンペに該当する作品は約100作品、かなり大規模なものである。

我々が招待を受けたこのコンペは、東アジア地区から8作品が選ばれ、新人監督賞を競うというもの。日本からは、「ある探偵の憂鬱」、「これまでのあらすじ」（原田一平）の2作品。過去、この新人監督賞を受賞した日本映画は、「この窓は君のもの」「幻の光」の2作品。

日本からの招待は21本（うちアニメが7作品）で、主な作品は「中国の鳥人」「ドッグス」「生きない」などがあった。

私の旅費は出ないということだったが、これが初主演作品。張り切って出かけることにした。

10月6日（火）バンクーバー入り。

この日は映画祭の本部でパスカード、プログラムなどを貰い、インターナショナルな雰囲気を味わせてもらった。夜7時から「中国の鳥人」を観る。会場は大入りで、日本映画に関する関心の高さを感じた。我々の上映もこうなってくれればと思いつつ……時差ボケで寝てしまった。三池監督、ゴメンナサイ。この後、矢城監督はもう1本観ると言い（なんとタフな）、私はホテル（自前の）に帰って爆睡。

我々の映画「ある探偵の憂鬱」の上映は8日午後7時、10日午後12時30分の2回である。

10月8日（木）

さて、いよいよ第1回目の上映日。映画祭の本部では、私は少々興奮気味で酒を飲まずにはいられなかった（毎日、ゲストのために簡単な食事と飲み物が用意されている。それに私は基本的に酒が好き）。監督も同じ様子だったが、「ここまで来たら腹をくくるしかないですよ」と淡々としたいつもの口調。この方の心理はなかなか読めない。

こちらに来た最大の理由は、この映画にどんな反応があるのか自分の目で見て、肌で感じることだった。それがいよいよ、1時間後には一般の、それも異国の人々の目に触れるのである。どんな反応があるのか、楽しみでもあり、怖くもある。

6時45分、劇場入り。既に半分の席が埋まっている。

そしてトニー・レインズ氏からの説明。まず、本篇の前に2本の短編が上映され、その後監督と私の紹介、挨拶がありスタートするということ。終了後、お客さんとのディスカッションがある。ちなみに2本の短編は、北野武監督のミュージックビデオ（娘さんのデビュー曲）と、ウォン・カーウァイ監督のコマーシャルフィルム（浅野忠信主演）、それぞれ5分ほどのものだった。（次回は1月上旬号）

Digitized by Google

作品特集「アンツ」

未だかつてない驚異の映像
豪華スター夢の競演
3DCGアニメの決定版、ここに登場！

●1998年・アメリカ・ヴィスタサイズ・ＤＴＳほか・１時間23分
●監督／エリック・ダーネル、ティム・ジョンソン　製作／ブラッド・ルイス、アーロン・ワーナー、パティ・ウートン　製作総指揮／ペニー・フィンケルマン、サンドラ・ラビンス、カール・ローゼンダール　脚本／トッド・アルコット、クリス・ウェイツ＆ポール・ウェイツ　音楽／ハリー・グレグソン・ウィリアムス、ジョン・パウエル　美術／ケンタル・クロンクハイト
●声の出演／ウディ・アレン、シャロン・ストーン、シルヴェスター・スタローン、ジェニファー・ハックマン、ダン・エイクロイド、ダニー・クローヴァー、アン・バンクロフト、クリストファー・ウォーケン、ジェニファー・ロペス、ポール・マザースキー、ジョン・マホニー
●製作／ＰＤＩ、ドリームワークス
●配給／ＵＩＰ
●11月14日よりニュー東宝シネマ１ほか全国東宝洋画系にて上映中
●本誌関連記事：11月上旬号新作紹介グラビア

Digitized by Google

作品評●細越麟太郎

アリ達にとっての「天国と地獄」

躍進めざましいドリームワークスの手になる。まさに夢のような成果である。

アニメーションの世界は、ウォルト・ディズニーという定評があったのだが、その独壇場ともいえた領域に、このところ「アナスタシア」や「キャメロット」が進出して、それなりの評価を得ている。これはスティーヴン・スピルバーグらが中心となっているドリームワークスの独特のクリエイティブ・ワークによって完成した驚異的なアニメ。

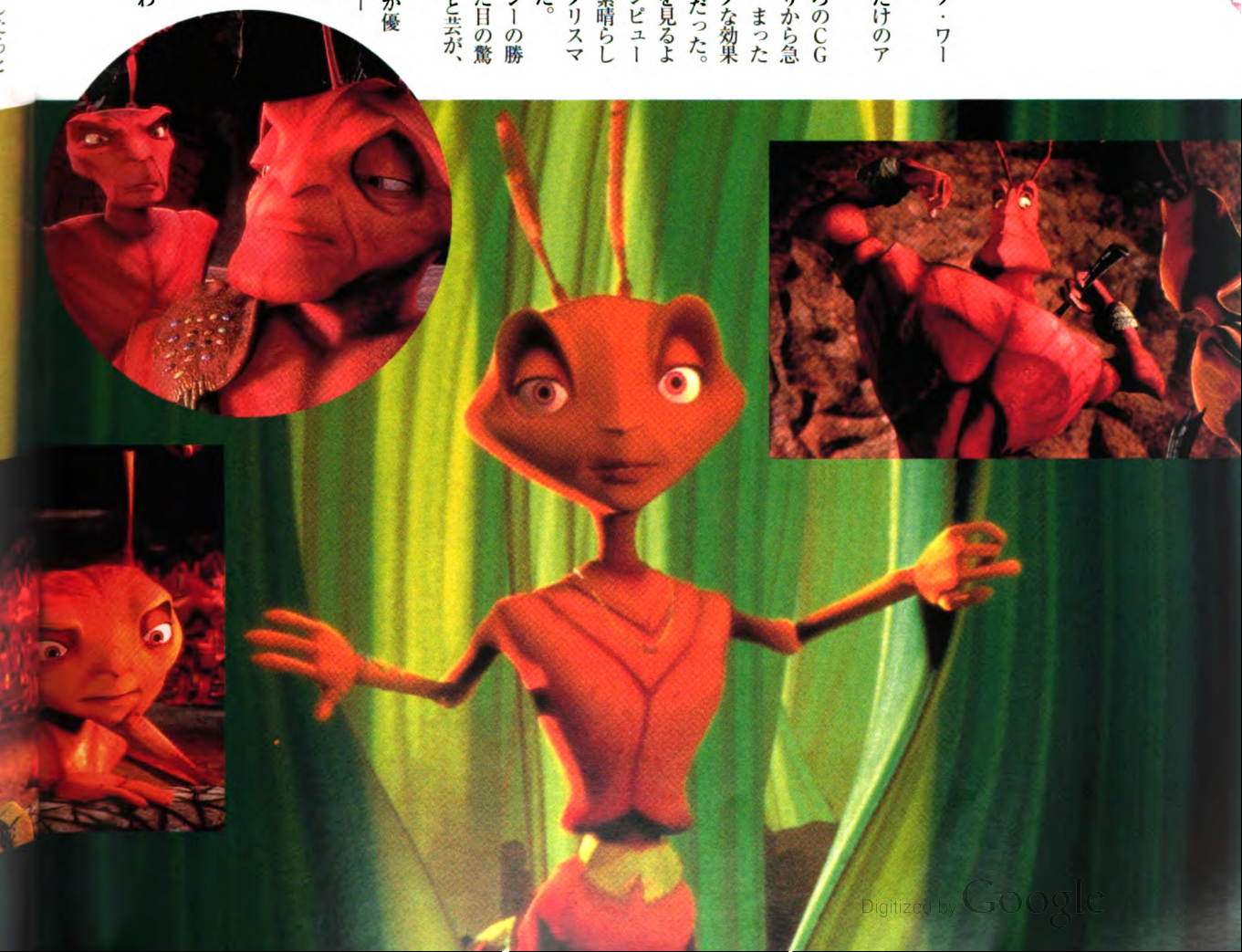
さすがは老舗の牙城を震撼させるだけのアイデアと新技術が目と耳を圧倒する。

従来の平面的な漫画が、このところのCGの開発によって「美女と野獣」の辺りから急速に、その動きやアングルの角度に、まったく普通の劇映画のようなドラマチックな効果を発揮しだしたのは、ごく最近の筈だった。この「アンツ」では、まるで人形劇を見るような立体感と、顔の微妙な表情のコンピュータ・グラフィック処理が、とにかく素晴らしい。あの「ナイトメア・ビフォア・クリスマス」の記憶が、一瞬遠退いてしまった。

それだけならば、ただのテクノロジーの勝利なのだが、この作品の成功は、見た目の驚き以上に、声優たちのキャラクターと芸が、かなり前面に出ているところである。

とかくアニメの作業では、映像美が優先されがちの傾向があり、ディズニーの場合は、そこに美しい主題歌を流してドラマの効果を上げてきた。それはそれで素晴しい。多くのアカデミー主題歌賞曲がスタンダードとして残っている実績は偉大である。

しかし「アンツ」の場合は、そうしたディズニー・アニメの傾向は追わ



Digitized by Google

ずに、主人公たちの声を有名俳優に委ねて、しかも彼らならではの持味をフルに魅力にしている。

Z（ズィ）という働きアリは、強制的な過剰労働の日常から脱出すべく、いろいろと知恵を働かせているのだが、このメイン・キャラクターを、あのウディ・アレンが演じている。もともとウディは声優として漫談のステージでデビューしたコメディアンなので、あの独特の話し方は他に類を見ない個性である。そんな彼をこの作品の中心に置くということは、ただの声をアニメに合わせるという作業ではなく、まずウディの話し方が優先されなくては面白味が出ないだろう。ごく当たり前のことである。

もし従来の手法で、こんな作業をしたらとんでもないリスクを背負うことになっただろうが、そこは3D・CGキャラクター制作にかけてはトップとも言えるPDI社が、信じられないような表情の変化をつけて、声による台詞の抑揚を優先させているのである。だから映画ファンにとっては、シャロン・ストーン、ジーン・ハックマン、シルヴェスター・スタローン、クリストファー・ウォーケン達の個性を見失うことなく楽しめる。

これがこの映画の強烈なインパクトになっている。ハテ、気がついたら、このそうそうたるスターたちは、全員がかつてウディ・アレンの映画に出演したことのあるメンバー。これもキャスティングのおしゃれなのかも知れない。

9大スター競演!!

「アナスタシア」のメグ・ライアン、「ムーラン」のエディ・マーフィ等々、アニメーションの声優に有名スターやベテラン俳優を起用するのは当節、当たり前のこと。ところがこの「アンツ」、ケタはずれにすごい。劇映画では実現不可能であろうウディ・アレン、シャロン・ストーン、シルヴェスター・スタローン、ジーン・ハックマンら豪華キャストの競演、ボイスアクターぶりに耳を傾けるのもこの映画の大きな楽しみ方なのである。

ウディ・アレン

シャロン・ストーン

シルヴェスター・スタローン

ジーン・ハックマン

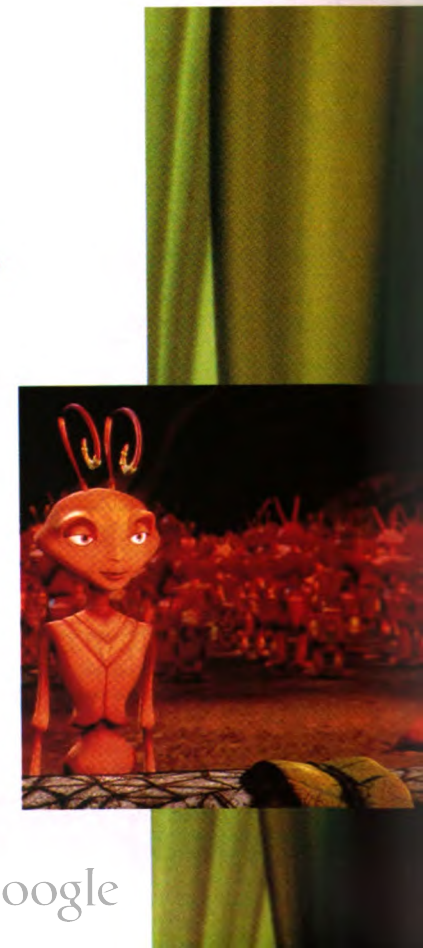
ジェニファー・ロペス

ダニー・グローヴァー

ダン・エイクロイド

クリストファー・ウォーケン

アン・バンクロフト



Digitized by Google

ティム・ジョンソン、エリック・ダーネル監督は語る●永野寿彦

まさか、本当にウディ・アレンが演じてくれる なんて考えてもみなかったよ！

「私たちは日本のアニメの大ファン。この作品を日本で公開できて幸せです。」

と、サービス精神丸出しの挨拶をしたのは、デジタル・アニメ会社パシフィック・データ・イメージ（以下PDI）のクリエイター、ティム・ジョンソンとエリック・ダーネル。スピルバーグ率いるドリームワークスと手を組み、「トイ・ストーリー」（95年）以来のフルCG長編アニメ「アンツ」を作った監督コンビである。

――日本のアニメのファンということですが、どんな作品を観てますか？

ティム（以下T）「子どもの頃から『ジャングル大帝』や『マッハGO！GO！GO！』などを観てた。ちなみに、私のコンピュータの名前は『マッハGO！GO！GO！』に出てきたキャラクター、レーサーX（笑）。『AKIRA』にも大きな影響を受けたね。この『アンツ』を作る時に、大人の観客のためのアニメも可能だということを示してくれた作品だから。今、アメリカでは日本のアニメはホントに人気があるんだよ」

――「アンツ」のキャラクター・デザインがディズニー作品などとは一線を画しているのも、大人の観客を意識しているせい？

T「ホンモノの昆虫を観察すると、凄く恐ろしい顔をしてるでしょ。だからまず、リアル・タイプはナシってことに。でも、だからといって、ディズニー作品のようなキュートなキャラクターにはしたくない。魅力はあるけれど、決して可愛いだけのものではない、ユニークなものにしたい、と。ドラマの演出的にはクローズアップも多用しようと思っていたので、顔の表情を豊かに表現できる、微妙な演技が可能なキャラクターということで、ああいうデザインになったんだ」

――声優陣も大人向けならではの豪華さ。特に、ウディ・アレンにはビックリしました。

エリック（以下E）「地下のコロニーで暮らす一匹のアリが、どうも自分はそこにうまく溶け込めず、どこかに自分に合った違う世界があるんじゃないかと考える。こういうコンセプトに決まった時、ウディ・アレンみたいなキャラクターだな、とは思っていた。でも、まさか、本当にウディ・アレンが演じてくれるなんて考えてもみなかったよ！」

T「ウディ・アレンを説得するために、彼の『バナナ』（71年）の台詞に合わせて、彼が昆虫になったようなサンプル・アニメをPDIで作った。それを見せたら、凄く興味を持ってくれて、出てくれることになったんだ」

E「でも、声の録音はやっぱりニューヨークでやることになった。しかも、彼が指定するスタジオでね（笑）。これだけの大スターの顔が揃ったことは、私たちにとってもうれしいこと。なにしろ、それだけで注目されるんだから。でも、彼らをキャスティングしたのは、あくまでも演技ができるからなんだ。彼らの演技によってキャラクターにリアリティが加わり、観客がアリたちの存在を信じられるようになるのさ」

――アメリカでも大ヒットを記録しましたね。そのことについては？

E「観客に評価されたということが何よりもうれしい。アメリカでも大人が楽しめるアニメを作ることができる、ということを証明できたと思うよ」

――今後も大人の観客を狙ったアニメを作っていくことになりそうですね。

E「ドリームワークスと長期契約し、4本の映画を作ることになっている。今、進行中なのは『シュレック』というタイトルの作品。沼地に住んでいるゴブリンが冒険の旅に出るというお話で、主人公の声をマイク・マイヤーズ、友人のロバ役をエディ・マーフィが演じる予定になっているよ」

Digitized by Google

ヤツらが来るぞ！ CGアニメーションいろいろ

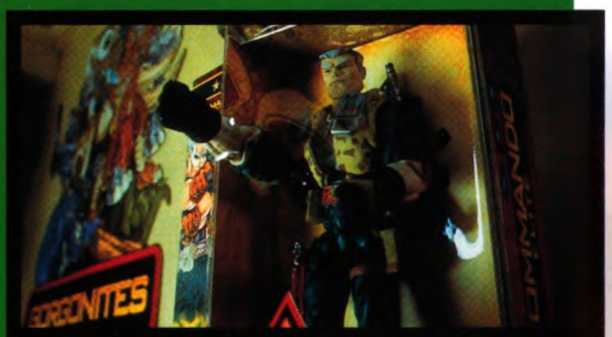
映画版ビースト・ウォーズスペシャル 超生命体トランスフォーマー

1995年、タカラがハスブロ社と提携して開発した変身ロボット玩具。動物（ビースト）からロボットへと変身するその玩具の人気は、まずアメリカで火がつき、日本でも品切れの玩具店が続出というくらいの熱狂ぶりで迎えられた。そのオモチャと並行して作られたのがアニメーション「ビーストウォーズ　超生命体トランスフォーマー」。現在テレビでアニメ版が放送中だが、劇場にはCG版が登場する。イオン、ALLIANCE&MAINFRAMEENTAINMENT作品。12月19日公開。東映配給。

©1998 T.P.C/Takara/ビーストウォーズ映画製作委員会

VISITOR 謎の生命体に脅かされる地球の危機を救うべく、派遣会社のOL二人が宇宙に派遣された!?　日本初のフル3CDCGフィギュアアニメーションで描くSF冒険活劇。脚本は「攻殻機動隊」「ガメラ」の伊藤和典。監督はこれがデビュー作となる徳田淳。CD－GAGAプロジェクト第一回作品。

プリンス・オブ・エジプト 「アンツ」のドリームワークスが創設以来長年暖めてきた「プリンス・オブ・エジプト」がついに完成。かつてディズニーで「美女と野獣」「アラジン」を世に送り出したジェフリー・カッツェンバーグが才能と情熱をかけてモーセを描く人間ドラマのアニメーション。声の出演が、ヴァル・キルマー、レイフ・ファインズ、ミシェル・ファイファー、サンドラ・ブロック、ジェフ・ゴールドブラム、ダニー・グローヴァー、スティーブ・マーチン、マーチン・ショート、そして主題歌がマライア・キャリー＆ホイットニー・ヒューストンと豪華絢爛。日本公開は来年夏。UIP配給。（これは3DCG作品ではありません）



スモール・ソルジャーズ 「もしも、オモチャが自分で動けたら……」という発想でつくられた“スモール・ソルジャー”。ところが、そのオモチャたちが本能の赴くままに動き始めたから、さあ大変。ジョー・ダンテ監督が、実写とアニメーションの合成で描くファンタジー・アクション。CGを駆使してオモチャに生命を吹き込んだのは、「ジュラシック・パーク」を手掛けたスタン・ウィンストンとILM。出演はグレゴリー・スミス、キルスティン・ダンスト。声の出演にはトミー・リー・ジョーンズ、アーネスト・ボーグナイン、ジョージ・ケネディらベテラン当たっている。ドリーム・ワークス＆ユニヴァーサル作品。12月下旬より公開。UIP配給。

バグズ・ライフ／トイ・ストーリー2

世界初にして名作となった3DCGアニメーション「トイ・ストーリー」。そのスタッフたちが再び結集した！　「アンツ」と同じくアリの世界を描くものだが、こちらは冷酷なキリギリス一味から仲間を守るために立ち上がったアリの活躍を描く。監督はジョン・ラセッターとアンドリュー・スタントン。来春公開。

そして、2000年には「トイ・ストーリー2」が登場!!　ウッディとバズの活躍が再び繰りひろげられる。声の出演はもちろん、トム・ハンクスとティム・アレン。2本ともにウォルト・ディズニー＆ピクサー・スタジオ作品。ブエナ　ビスタ配給。

ファイナル・ファンタジー

全世界で1700万本以上の売上を誇るゲームソフト『ファイナル・ファンタジー』がフルCGで映画として登場する。現在ハワイ・ホノルルのスタジオに、20ヶ国以上から集められたクリエーターが、2001年の公開に向けて製作中。

監督は『ファイナル・ファンタジー』シリーズを手掛けて、映画はこれがデビューとなる坂口博信、脚本は「アポロ13」でオスカーにノミネートされたアル・ライナーが執筆する。すでに全米2000館をはじめ、ソニー配給により全世界公開が決定している。日本の配給はギャガ。（写真は開発中ビジュアルの一部）

©FF. FILM PARTNERS

Digitized by Google

作品特集

ドクター・ドリトル

わかりたくないのに

動物の言葉がわかっちゃう？！

現代のドリトル先生は、動物と話ができることを忘れていた!?

美しい妻と可愛い二人の娘と共に幸せに暮らしている人間のお医者さん、ドクター・ジョン・ドリトル。ある日、車で野良犬を轢きそうになった彼は、自分の耳を疑った。起き上がった犬が「気をつけろ、マヌケ野郎！」と怒鳴ったのだ。それ以来、動物たちの言葉を理解できるようになっ

Digitized by Google

てしまい、右往左往するジョン。だが彼の当惑をよそに、動物の言葉を解するドクターの出現を聞き付けた山羊、ペンギン、ニワトリ、ハト、豚、猫、猿など、いろいろな動物が続々とドクターのもとに診察を求めてやってくる……。

ロフティングの名作小説を現代風にアレンジした、爆笑と感動のファミリー・ムービー。主演はエディ・マーフィ、監督は「プライベート・パーツ」(V)で高く評価されたベティ・トーマス。

ファミリー・ピクチャーで新境地を開いたエディ・マーフィ

「48時間」(82)、「大逆転」(83)、「ビバリーヒルズ・コップ」シリーズ(84・87・94)など、80年代前半に、マシンガン・トークとスピーディなアクションで屈指のマネー・メイキング・スターとなったエディ・マーフィ。90年代前半はいま一つヒット作に恵まれなかったが、近年では、恋よりも実験に夢中な教授を演じた「ナッティ・プロフェッサー／クランプ教授の場合」(96)や声の出演をした「ムーラン」(98)、そして本作と、ハートウォーミングなキャラクターで成功を収めている。本人も「『ナッティ・プロフェッサー』の大ヒットで、家族向きの映画に、僕の新しい演技領域が開拓できたのは本当に嬉しい」と語っており、実生活でも二児のパパになるなど、公私ともに充実している様子。今後も「ホーリー・マン」や"Bowfinger's Big Thing"など楽しみな作品が待機している。

●1998年・アメリカ・カラー・ヴィスタサイズ、ドルビーSRD、1時間24分
●配給／20世紀フォックス
●12月19日よりみゆき座ほか全国東宝洋画系にてロードショー
●本誌関連記事／10月上旬号スペシャル・セレクション

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

Digitized by Google

CAST

ドクター・ジョン・ドリトル ……エディ・マーフィ
アーチャー・ドリトル ……オシー・デイヴィス
ドクター・マーク・ウェラー …オリヴァー・プラット
キャロウェイ ……ピーター・ボイル
ドクター・ジーン・レイス ……リチャード・シフ
リサ ……クリスティン・ウィルソン
ドクター・フィッシュ ……ジェフリー・ダンボー
マヤ ……カイラ・プラット
シャリース ……レーヴェン＝シモーネ
ドクター・リトバック ……スティーヴン・ギルボーン

声優

ラッキー（犬）……ノーム・マクドナルド
ジェイク（虎）……アルバート・ブルックス
ロドニー（モルモット）……クリス・ロック
ネズミ＃1 ……レニ・サントーニ
ネズミ＃2 ……ジョン・レグイザモ
雌ハト ……ジュリー・カヴナー
雄ハト ……ゲリー・シャンドリング
年老いたビーグル ……ブライアン・ドイル・マーレイ
酔っ払いサル ……フィル・プロクター
フクロウ ……ジェンナ・エルフマン
ヤギ ……フィリス・カーツ
太った雌犬 ……アーチー・ハーン
あなぐま ……ポール・ルーベンス

STAFF

監督 ……ベティ・トーマス
製作 ……ジョン・デイヴィス
……ジョセフ・M・シンガー
……デイヴィッド・T・フレンドリー
脚本 ……ナット・モールディン
……ラリー・レヴィン
原作 ……ヒュー・ロフティング
製作総指揮 ……スー・バーデン・バウエル
……ジェンノ・トッピング
撮影 ……ラッセル・ボイド
プロダクション・デザイナー ……ウィリアム・エリオット
編集 ……ピーター・ティッシュナー
視覚効果スーパーバイザー ……ジョン・ファーハット
音楽 ……リチャード・ギブス
衣裳デザイナー ……シャレン・デイヴィス
アニマトロニック・クリーチャー
……ジム・ヘンソンのクリーチャー・ショップ

作品特集
ドクター・ドリトル

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

Digitized by Google

EDDIE MURPHY DR. DOLITTLE

作品評

エディ・マーフィの軽妙な持ち味を生かしたウェルメイド・コメディ

田中千世子

人間と動物の両方の視点のある面白さ

狂言の『盆山』は、知り合いの某の家に盆山を盗みに入った男を某が見つけ、あれは犬だ、犬なら鳴きそうなものといって、男に次々動物の声のまねをさせてからかう話である。

ナンニ・モレッティ監督・主演の「親愛なる日記」の第二部でモレッティが友人の家に電話をすると、子供が出てライオンの鳴き声をやってよと、これまた果てしなくものまねを要求する。動物の鳴き声（言葉）は人間がまねるのが普通だ。

「ドクター・ドリトル」では犬が「このマヌケヤロウ！」と、ドクター・ジョン・ドリトル（エディ・マーフィ）に悪態をつく。レックス・ハリソン主演の「ドリトル先生不思議な旅」のドクター・ドリトルと動物たちの友愛に満ちた上品さからほど遠いが、新旧のドリトルが動物の言葉を理解する点は共通だ。

ジョン・ドリトルが聞いた動物の言葉を観客は人間の言葉として聞く。厳密に言えばジョンがそう聞いたように観客もまた聞くわけだ。さらに厳密にいえば、ジョンはそう聞いたのではなく、そういう意味の犬言葉をとっさに英語で理解したのだ。

ジョンは馬やハトやネズミとも会話できる。つまり動物言葉と人間言葉のバイリンガル。だからひっきりなしにいろんな言葉が耳に入ってたまらない。動物の言葉が理解できて愉快とか新鮮と言うのでなく、うるさくてノイローゼになりそう。都会に住んでいると人間の言葉だけでもかなりうるさい。これに交通課の警官を乗せた馬のおしゃべりや汚いネズミの俗語も交じるわけだ。ジョンが逃げ出したくなるのももっともである。ところが静かな湖畔に来てみれば、森のかげからいろんな動物の鳴き声ならぬ言葉の洪水。

人間の言葉を聞けてしゃべれる『じゃりン子チエ』のネコ、小鉄はその能力を表に出さない。もし小鉄が人前で話すとしたら、チエだけでなく、誰にでも通じる人間言葉を話すのだろう。ジョン・ドリトルの場合は動物にとっては能力を見せてしまった人間界の小鉄のようなものだ。だから病気やケガの動物たちが押しかけてくる。症状を訴えて治してもらおうというわけだ。人間と同じ発想である。実際動物の側の理論が非常によく組み立てられており、それが面白い。人間にとっての動物と、動物にとっての人間の両方の視点がある。

多分、それは脚本の思想なのだろう。動物だけでなく、ジョン・ドリトルの家庭の描写でも子供の側の気持ちや論理をていねいに描いている。

子供時代のジョンは犬とばかり話すので、父親が彼を異常ではないかと心配して犬を引き離し、ジョンは動物と会話することを禁じられた。大人になり、医師になり、父親になったジョンには娘がふたりいる。下の娘マヤは白鳥の卵の孵化に熱心だ。普通の少女と違

Digitized by Google

うことをマヤも少し気にしている。ジョンはマヤに昔の自分を見るのだろうか、マヤのやることを理解しながら、普通の子供がやることと違うことはやめさせた方が彼女のためかもしれないと思い迷っている。

しかし、マヤがある時、真剣な顔をしてジョンに言う。

「パパは私を愛してくれるけど、私のことを好きじゃないわ」

このセリフは誰が考えたのだろう。

思わぬところで親子愛についての深い洞察。脚本はふたりいるが、ナット・モールディンだろうか。そう思うのはデンゼル・ワシントン主演の「天使の贈りもの」をモールディンが書いており、この時も子供の感情をとても心こまやかにすくいあげていた。人望のあつい牧師の息子と仲のよかった子が引っ越してしまう。元気のなくなった息子を見て、妻は父親こそ今の息子を慰め、支えになってやらねばいけないのにと思う。少年期の子供にとって親友がどれほど大きい存在か。親友がそばからいなくなってしまったらその空白を父親が埋めてやるべきだという大人の考えにアメリカのヒューマニズムの伝統を見る。「天使の贈りもの」も過去の白人主演映画をアフリカ系の出演でリメイクしたものだ。

こまやかに描かれる親子の愛情と感情

LOVEとLIKEで娘が父親の愛情と感情について思っていることを言い表した時、ジョンはハッとさせられる。実験精神旺盛な娘のことを心配こそすれ、好きではないという感情を持ったおぼえなど彼にはないからだ。

映画を見ている私たちも、ああ、これは娘の誤解だと思う。

だが、LOVEとLIKEは必ずしも一緒ではない。リーアム・ニーソンとメリル・ストリープが共演した「判決前夜」でも殺人罪に問われた息子と彼を救おうとする父親の関係にジョン・ドリトルの娘が抱いたのと同じ思いが息子の側に見てとれる。この映画では客観的にも父親が性格の弱い息子を好いていないということはわかる。ところが息子が殺人の容疑者とされていることを知ると、父は夢中になって証拠を消す。裁判が始まってからはすすんで偽証もする。彼が息子を自分の身にかえても助けようとしていることは明白だ。父は息子を愛している。と、映画を見ている私は確信する。そして父が息子を嫌っていたことはどうでもよくなる。こんなに愛しているのだから、と。

しかし、LOVEとLIKEを兼ねないのだ。愛されるだけでなく、やっぱり好いてほしい。そういう子供たちの願いがこの娘のセリフに実によくあらわれている。

また、他者と違うことが個性を貴ぶアメリカ社会で異端になる様がジョン・ドリトル精神病院入院という事態まで引き起こすのが興味深い。汚いネズミの口に人間の口から息を吹き込むのは動物愛護にあらず、異常行為なり。と、周囲は思う。それほど今のアメリカ社会にゴチゴチの保守主義が蔓延しているのだろうか。もっともそうした試練をくぐり抜けて我は我なりという結論に達していくところがさすがにアメリカ精神ではある。

家のなかに押し寄せた動物たちや彼らの傍若無人ぶりにてんてこ舞いするジョン・ドリトルのおかしさが、この映画の基本的な持ち味であろう。それがエディ・マーフィの軽妙

ロフティングの原作と映画「ドリトル先生不思議な旅」

「ドクター・ドリトル」の原作は、いわずと知れたイギリスの作家ヒュー・ロフティングの童話『ドリトル先生』シリーズ。1920年初頭に第1作が出版されて以来、ほとんど毎年1作のペースで第9作まで発表され、47年のロフティングの死後も未発表の遺稿をまとめてさらに3作が刊行されたという人気童話だ。その中の『ドリトル先生航海記』をミュージカル化した映画がリチャード・フライシャー監督、レックス・ハリソン主演の「ドリトル先生不思議な旅」(67)。500もの動物の言葉を話すドリトル先生が、伝説のピンクの大海カタツムリを探して世界中を旅するこの物語は、70ミリ、2時間32分という超大作だった。「ドクター・ドリトル」は、設定がイギリスから現代のアメリカに移されているためかなり違った印象を受けるが、ドリトルがもとは人間の医者だったことや、動物の言葉を解するがゆえに精神病院に送られそうになる(今回は送られてしまう)原作のエピソードはしっかり生かされている。

Digitized by Google

な演技と、表情あり、しゃべりありの動物たちのSFXで倍増されていく過程がベテランのベティ・トーマス監督によって家族そろって楽しめるウェルメイドのコメディになっていく。自殺願望に悩むサーカスの虎の病気を発見して手術するくだりにもう少し工夫がほしい。それからSFXの見事さに堪能する一方で、どんな動物とも話せるというジョン・ドリトルのオールマイティぶりを逆手にとったアイロニーがひとつふたつあってもいい。狂言の『盆山』では、某が盆山どろぼうに「あれは鯛だ」と言って困らせ、窮した男が「タイタイ」と鳴いて終わるオチがつく。

C 1998 TWENTIETH CENTURY FOX

日本語版制作スタッフ募集

アシスタント（未経験者）：20歳〜24歳迄
来春新卒者も応募可

プロデューサー（経験3年以上）：25歳〜30歳迄

※電話連絡の上、下記住所まで履歴書（写真貼・職種明記）・職務経歴書をご郵送下さい。追ってご連絡致します。

プロセンスタジオ株式会社

業務内容：映画・TV・ビデオ・マルチメディアの日本語版制作
〒107-0051 東京都港区元赤坂1-4-2 知性ビル3F
TEL：03(3404)4880 担当：蓮見（ハスミ）

当社デジタルコンポーネント編集室

http://member.nifty.ne.jp/procenstudio/

Digitized by Google

ベティ・トーマス監督インタビュー

弱者が強者に勝つというテーマを常に心がけたい

インタビュアー・宇田川清一

90パーセント、本物の動物を使って撮影しています

“元気なお母さん”といった感じのベティ・トーマス。話し始めるとなかなか止まらない。身振り手振りを織りまぜて、機関銃のように喋りまくる。彼女の勢いあるトークには、さすがのエディ・マーフィもタジタジだったのではないだろうか。

「ニュージャージーのエディ・マーフィの豪邸に行きました。そしたら、エディってとっても恥ずかしがり屋さんで、おとなしいの。彼が音楽好きなのは知ってるでしょ。家にはスタジオもあるんだから。喋る時もギターを離さないの。ギター弾きながら喋るのよ。まるで、ギターを鎧にみたてて、その後ろに隠れているみたいだったわ」

それって、トーマス監督に恐れをなしてたんじゃないのかな。

ベティ・トーマスといえば、過激な内容の放送で全米メディアを征服した問題児ハワード・スターンの生きざまを描いた「プライベート・パーツ」を撮り、一躍脚光を浴びた女性監督。今回の「ドクター・ドリトル」は全米の興収1億ドルを軽々と突破した。

「今年は、ミミ・レダー監督の『ディープ・インパクト』も大ヒットして、1億ドル突破の作品を手がけた女性監督が2人という画期的な年になりました。今後も、私たちに続く女性監督が出てくることを期待しています」

ドリトル先生役のエディ・マーフィ、実は大の動物嫌い。プレス資料にはエディの言葉として「映画を通して、どの動物も好きになったよ」とあるが、これは大嘘らしい。

「今でも動物好きとは言えないわ。ラッキー（ドリトル先生の飼っている犬）だけには馴れたみたいだけど。エディったら、あんなに小さくて可愛いモルモットが一番怖いっていうんだから、おかしいでしょ。とにかく、動物がいると居心地悪いみたいね」

それほど動物嫌いなのに、エディ・マーフィは、なぜこの企画を受け入れたのだろう。

「直接聞いたわけじゃないから推測だけど、エディ自身も2人の子供の父親ということで、映画でも父親役をやりたかったんじゃないかしら。それに、自分の子供たちが見て楽しめる映画を作りたかったんだと思うわ」

ま、それも一つの答えだとは思うけどね。新作「ホーリー・マン」の興行成績がイマイチだったように、エディ・マーフィの名前だけではなかなか客が呼べないという厳しい現実がある。でも、その名前にSFXの面白さが加わった「ナッティ・プロフェッサー／クランプ教授の場合」がバカ受け。それなら、動物がいっぱい出てきて、しかも喋るという話題性があれば、ヒットすること間違いなしとエディは踏んだに違いない。そのためには大嫌いな動物たちとも共演しようじゃないのと決意したんだろう。てなわけで、映画には100匹近い動物たちがワサワサと登場する。

「『ベイブ』とは違って、90パーセントは本物の動物を使っています。パペットを使っているのはほんの一部、CGIも数少ないですよ。でも、調教するのが大変で、悪夢のような撮影でした。とにかく、実際に動物たちにおかしなパフォーマンスをしてもらうことに重点を置いていたんです。撮影には20人の調教師がいて1シーンに3、4日かかることもありました。ドリトル先生のキッチンを動物たちが占領するシーンには、30～40の動物がいましたね。そこでエディも台詞を言わなきゃいけないけど、動物たちもそれぞれに演技をしなければいけない。ところが、それぞれの動物たちへのきっかけの合図が違うんです。鳥の調教師はヒューヒュー口笛を吹く、犬の調教師はパチパチ手を叩く、ゴムのおもちゃをプープー鳴らして合図する調教師もいるといった具合で、それはもう大騒ぎ。エディが喋ろうとするとあちこちから色んな音が聞こえてくるの。これには、エディも苦労したようで、笑いだして撮影にならないこともありました」

ねずみ同士が闘うシーンもCGじゃないと聞いてビックリ！　でも、CGだと思って見

BETTY THOMAS／1947年、ミズーリ州セントルイス生まれ。ダン・エイクロイドやビル・マーレイを輩出したシカゴの即興劇団セカンド・シティでコメディエンヌとして活躍。『サタデー・ナイト・ライヴ』のホストを務めたこともある。ドラマシリーズ『ヒルストリート・ブルース』で女優としても人気を得た。映画監督作に「オンリー・ユー」(91・V）や“The Brady Bunch Movie”(95)、絶賛された「プライベート・パーツ」(97)などがある。

Digitized by Google

ていたシーンも多く、本物の動物を使った努力がいまひとつ報われていないかもと、ふと思った。

男性でも女性でも、監督の仕事の大変さは同じ。でも……

それしても、ヒュー・ロフティングの原作とは似ても似つかぬ内容。67年製作の映画版（レックス・ハリソン主演）ともまるで違う。「初めから主演はエディ・マーフィに決まっていました。それが、私の引き受けた理由でもあります。最初の脚本はもっとファンタジー色が強くて、ディズニー映画みたいでした。でも、それじゃエディには似つかわしくないでしょ。だから、もっとコメディ色を強くしたんです。67年製作の映画はとてもじゃないけどヒットと呼べるものじゃなかった。フォックスを危機的状況に追い込むほどでしたからね(笑)。私としては、その二の舞だけは絶対にイヤだった。だから興行的に成功するものにしようと努力したんです」

エディ・マーフィが主演という時点で、原作とはまるでイメージ違うものなぁ。因みに、僕にとって、原作の挿絵から浮かぶイメージはヒッチコック監督の若い頃。

「続編の企画は動き出しているようです。でも、私はやるつもりはありません。同じことを二度やりたいと思う人がどこにいるでしょう。『ドクター・ドリトル』に関しては、もうアイディアを出しつくしてしまいました」

原作じゃ、ドリトル先生、あちこち旅するし、月にまで行っちゃうんだから、まるきり1作目とは中身の違う続編も可能だと思うんですけどね。

「これからもコメディ映画をとことん突き詰めていきたいですね。それから、弱者が強者に勝つというテーマも常に心がけたい。サミー・ソーサとマクガイヤのホームラン競争も、ソーサを応援してたんですよ。私はいつも弱者の見方なんです。次回作としてはドラッグや飲酒運転で捕まった人々の通うリハビリ・センターを舞台にした『28日間』、野球の遊撃手が二塁手に恋する『ドレフュス・アフェア』（日本でも『二遊間の恋』で原作が出ている。面白い）という2つの企画があります」

女性監督としての立場に関して質問を向けると……。

「ペニー・マーシャルやランダ・ヘインズと共に月に一度くらいパネルセッションに招かれて、女性監督の苦労について話しくれって頼まれるんだけど、もう聞かないでくれって感じですね」

と、うんざりした顔をしたものの、それまでよりも熱の入った口調で話し始める。

「だって男性にとっても監督という仕事は大変なわけだし、それは女性監督にとっても同じでしょ。だけど確かに、同じポジションを得るのに男性の10倍努力が必要だし、女性監督の成功は男性に比べてずっと少ない。製作者は大金を女性にまかせたくないみたいね。ジェームズ・キャメロンがもし女だったら、映画会社はあの企画に、あれだけのお金を出してくれたとは思えないですからね」

Digitized by Google

助監督日誌

ソクーロフ・アイランド「現地レポート・後編」

“Molx”（マローフ）

Molx：マローフ＝モレク＝メーンク（ヘブライ語）。セム族が子どもを人身御供にして祭った神。旧約聖書18章21には“モロク”と書かれている。悲惨な禍。戦渦のシンボル。小文字で始まる場合は無毒なトゲトカゲを指す。

この夏、ひとりの日本人が、サンクト・ペテルブルクへと旅発った。目的はアレクサンドル・ソクーロフの下で助監督をするため。自主映画「セレブレートシネマ101」、映画的企み「鷺ポイエーシス」など次々と野心的な試みを行うこの男、宮岡秀行氏にソクーロフの下での助監督体験記を綴ってもらうとともに、「鷺ポイエーシス」の試みも紹介しよう。

宮岡秀行

SOKUROV ISLAND　by Miyaoka, Hideyuki

PRIOZJORSK

サンクト・ペテルブルクから北へ150㎞程行ったところに、プリオジェスクという元フィンランド領の街がある。僕たちはそこをドイツ（ベルヒス・ガーテン）に見立てて撮影を行った。6月に行われた5日間のドイツ・ロケは、主に山荘の室内外を中心に、ヒトラーとエヴァの行動を追った少数先鋭によるロケだったのに比して、プリオジェスクでの15日間のロケは、70名からなるロケ隊がこの街で生活し、撮影をするという大変大がかりなものだった。

ここでの山場は、ヒトラー、エヴァ、ゲッペルス、マグダ、ボルマン、ピッケルといったヒトラーの側近達が、ピクニックをするという場面で、文学台本の中でも、特にエキサイティングな箇所である。

全てのロケ隊が到着する4日前に現地入りしたソクーロフ、キャメラマンのフョードロフ、照明のアナトレ・アンドレビッチ他10数名は、この舞台となる場所を探し求めて、山中を歩き廻った。まだ少し白夜が残っていて、僕たちは朝の9時から夜の10時ぐらいまで、日の光によって動き廻ることができた。ある程度は当たりを付けていたのだろうが、初日は空振りで、帰りの車中ソクーロフが「少し車を遅めて……」と云った辺りが、明日へ持ち越された。

その場所は所々岩が露出した、草と木に覆われた空き地と云った風だった。一望したところ何ら変哲のない自然の一部なのだ。その場所でソクーロフとフョードロフは、ヴュー・ファインダーを片手に動き廻る。球場が1つは出来そうなこの空き地から、一体何が生まれるのだろう。ただ眺めていた僕は、次の瞬間にはスコップ片手に地面を掘り起こしている。そして10人程の部隊で、3日間かけて作り上げたこの場所から、殆どの木や土や草が取り除かれ、露出した岩にブラシをかけていく。そのかけ方が半端ではない。岩が元々宿している起伏やカーブが出るまで、丁寧にブラッシングして行くのだ。このようにして出来た空間に、更に山奥から薄緑色の〈こけ〉を採ってきて、人工雪と共に要所要所に配置していく。

大雑把に書いても、これぐらいの手を入れて初めて撮影可能となるのが、ソクーロフの空間なのだ。彼の自然描写に手が入れられていることはとても大変重要な事で、キャメラが廻る前に、目の前のものを出来る限り体系化し、実際の撮影（ショット）が変わる度に、更に手を入れていく。だから空間はどんどんデコラティブになっていく。しかしその都度レンズを通してみると、この空間は驚くほど滑らかな線を露呈し、見事に圧縮されているのだ。

宇野邦一さんが、僕たちの小冊子『sagi. times 01』号に書いて下さった文章の中で、アルトーのメーテルリンクの言葉（註1）を引用して云っている「精神の高み」、そこに開けるプラトー（台地）とは、このような場所の事を云うのかもしれない。

ある日皆よりも早く到着した、僕とソクーロフとフョードロフとアシスタン

Digitized by Google

特別企画 ソクーロフ

【宮岡秀行　プロフィール】
1967年広島生まれ。映画作家、スタジオ・マラパルテ主宰。ビクトル・エリセやロブ・ニルソンなど、世界の映画作家9人が参加した「セレブレートシネマ101」を自ら企画して撮り、映画100年を独自の視点から祝う。
97年晩夏発売の『映画芸術』の企画・監修として参画。蓮實重彦、アレクサンドル・ソクーロフ、青山真治、太田省吾などを招待したプロジェクト〈映画零年宣言〉を実現させ評価を受ける。映像作品に「アンナの光」（天王洲アイル〈詩の外出〉出品）、「VIDE(/)映画史」（広島シネツイン〈シネマ／ソナタ〉シリーズ連続上映など。

ペルヒス・ガーテンにて、エヴァ・ブラウンに扮するレナ

ト・ディレクターのアレクセイ・ゾービンは、思い思いの場所に散って、岩に腰かけていた。ラジカセからチャイコフスキーの曲が流れるこの空間の雲の眺めを、僕は忘れることはないだろう。このとき、音楽が空に、空が音楽に変容を遂げ、ノスタルジーとしか呼べない感情が僕を貫いたのだ。故国へのノスタルジーでも、そこに残してきた数々のものへのノスタルジーでもない。この空の動き、それを見ていて出てきた、この時間の接触との別れ。周囲に目をやると、フョードロフもアレクセイも眠っていた。ただソクーロフが遠くから、じっと僕を見つめていた。僕が彼の視線に気付いてあらぬ方向へ目を向けると、彼はすぐに目を伏せた。結局、僕たちのイマジナリー・ラインが結ばれたかどうかは判らない……。

その夜は、アナトレ・アンドレヴィチの妻でメイキャップのジャン・セルゲイの誕生日だった。こちらの伝統では、スタッフの誕生日には盛大なセレブレーションを行う。数々のスピーチ、歌、そしてダンス。例によって役者たちが様々なアトラクションを考え、盛り上げる。マグダ役の美しい女優レナとかなりクレイジーなダンスを披露した僕は、ジャン・セルゲイの娘カーチャと、この場を抜け出す。遠くに横たわる黄昏の微かな明るさをたたえる夜の湖畔を片言の英語でコミュニケーションを交わしながら、僕たちは真暗な森を、湖面の反射光（リフレクト）を頼りに彷徨う。汽笛と虫の音のみが響く空間で、この21才の少女が口ずさんだのは、アレクサンドル・ブロークの詩と彼女の故郷、コーカサスの子守歌だった。そこに眠れないのか、ソクーロフが一人、タバコを吸いながらやってきた。両親が映画界に勤めるカーチャのことを赤ん坊の頃から知っているソクーロフは、この森の静寂と同じ声色で、いつになく親密に、何か彼女にささやいていた。後でカーチャが「この時はあなたや私の人生で二度とない」と彼の言葉を伝えてくれたとき、僕は昼間のあの空を見つめていた。

トランジションⅡ

7月一杯をプリオジェスクに費やしたロケ隊は、5日間の撮休の後、A・ベノワの建築した病院でロケを行う。ここサンクト・ペテルブルクでは大変有名な芸術家ベノワ一族が栄えたのは、1750年から1908年までだと云う。いかにもソクーロフの好きそうな調度と質感をそなえたここを借りて、ピッケルとボルマンの場面を撮る。

室内でピッケルがオペラについての記述をするという2つのショットを撮るのに1日が費やされた。ピッケル役のセルゲイが来るまで、僕がダブルをすることになる。キャメラ・ワークを決め、卓上の小道具と椅子の配置を、正に数センチ単位で変えていく。特に僕（セルゲイ）の背後にある、ガラス棚のアトモスフィアーへのこだわりと、そこに置く品々のコンポジション（構成）は、アナトレ・アンドレヴィチの古典的なライティングが上手く行った例だと思う。暖色系のかなり柔らかい光を好むアナトレとソクーロフの要求が、これまで必ずしも合致していたと思えないのは、キャメラマンのフョードロフが必ずしも光への確信を持っていないからだとも云える。実際このように、小道具を厳密に配置する場合は、キャメラマンへの要求は相当厳しくなる。しかも、かなり旧式な機材を使っての撮影なので、ここでのフレーミングはほとんど不可能だとも思えるのだが、フォーカス係のイーグル、特機係のアンドレの集中力に満ちたチームワークが、何とかソクーロフの要求に応えていく。〈創造〉が足りないところは〈労働〉で補うというのが、ソクーロフ・グループのポイントである。

厨房の描写での、10人以上のエキストラが動き続ける場面などでは、更に複雑になってくる。小道具類に比して（スモークをたくタイミングも含まれる）、役者には出来る限りの自由を与えるソクーロフは、フットマークを使うことはあまりない。どちらかと云うと、キャメラの側がその都度、即興でついて行かなくてはならない。台本では数行でしかないボルマンの場面だが、この厨房の空間の仕切

Digitized by Google

レニー・パウチ(ヒトラー役)、
彼の家(劇場)にて
(撮影／ジェニャ・タラン)

プリオジェスク・ロケ　使用前（上）と使用後（下）

り方にも、やはり独特なものがある。決して画面では強調されることのないエキストラのコック(本物)や女中たちの動きが誘発する、空間の様々な変容は、例えばグリナーウェイの有効なエレメントからなる構築空間や、北野武のコンテで割ってそこに色彩と人物を配していく奥行きを欠いた空間の連続とも違う。それは遥かに濃度を持ち、〈猥雑さ〉に満ちた場所として振り付けられている。特に苛立たしい白をベースにした室内を、葉の緑を沢山配することにより〈色温〉に変化を付けるあたりは、ファスビンダーに近い印象すら受けた。

これは映画における色彩の問題と云った技術的、美学的な習得の事ではなく、映画の速度に歪みをもたらす、画面上の〈振動(ノイズ)〉のようなものとして考えると、撮影中ソクーロフがチェックをするモニターが、何故白黒に変換されているかが見えてくるはずだ。

今日で200カットを越え(僕が来たときはまだ40カット位だった)、100カット越えるごとのセレブレーションが行われた。この日のスピーチはフョードロフ。「僕は時にいいキャメラマンかも知れないけど、多くの場合悪いキャメラマン……。その悪いキャメラマンにとって、アレクサンドル・ニコライヴィチ(＝ソクーロフ)の要求する映画言語は大変難しい……」という自己認識を踏まえた素晴らしいものだったと、後でスティル・カメラマンのジェニャが教えてくれた。

ただ最後に「今日で撮影は終わりかも知れない……」と付け加えたとも。……。

その夜、こちらでの生活を様々な形で手助けし、厚遇してくれている山田夫妻の家に行った。そこで8月7日付けの『The St.Petersburg Times』を受け取る。レンフィルムが経済的に殆ど破産していると、トップで伝えていた。

Lenfilm Nearing Financial Collapse

レンフィルムの所長セルゲイエフが辞任をほのめかした表明は、ラジオ・ペテルブルク、チャンネル5等、様々なメディアを介して報じられた。元映画監督でもあるセルゲイエフは理由として、ゴスキノ(ロシアの映画助成機関)の契約違反を掲げている。レンフィルムに対して、政府は約束していた資金の9%しか払っていないというものだ。しかも、モスクワで作られている(例えばミハルコフ)ロシア映画とは一線を画すレンフィルム製作による映画は、マフィアの投資の対象にすらならない場合が多いという。映画史的にみても明確に分かれるモスクワ対ペテルブルクの製作スタイルを把握して行かないと、この映画は空中分解してしまうかもしれない……実際、ベノワの建物での撮影以後、製作費が底をついてしまったという理由で、撮休の日がつづいている。ソクーロフが今となっては、「ノース・ファンデーション(註2)もこれで解散するだろう」と言うに至ったからには、本当に危機的な状況なのだろう。或る日レンフィルムの中庭で、ソクーロフはアレクセイ・ゲルマン(註3)と随分長く立ち話をしていた。本来唯一のライバルである筈の彼に、このことを打ち明けていたのだろうか。

その翌日、僕はソクーロフと製作状況を具体的に話し合うために独断で通訳を雇い、すぐに日本へ打診することにした。このときの僕の心境は、ソクーロフに撮り続けさせたいという思いもあったが、それ以上に、自分が責任をとれる範囲(言うまでもなく日本)へ向けて発言すると言うことだった。それはもちろん、日本でこの映画に出資し、この映画に賭けている人たちに、具体的な状況を伝えることが出来るのは、僕だけだからという思いもあった。

実際、「ふゅーじょんぷろだくと」の堤さんに電話して、ここまでの段階的な説明や、極めて契約概念の浅いロシアの映画制作事情を話し、さらに支援する可能性をさぐってもらった。ただこれまでにもかなりの出資をしている「ふゅーじょんぷろだくと」に不利にならないように、新たな条件を付け加えるようにもしようとも、話し合った。映画作りで、全ての

Digitized by Google

The St Petersburg Times

The Thinking Woman's Label

City's Prostitutes Work Hassle-Free

Manufacturing Giant Digs In

Lenfilm Nearing Financial Collapse

State Set To Battle Regional Protests

LENFILM

Night Club • Restaurant • Casino • Bar

『The St. Petersburg Times』
1998年8月7日　フロントページ

筆者、最後の日。ソクーロフとともに
（撮影／ジェニャ・タラン）

条件は整う筈はないのだからとは僕の弁だったが、ロシアは僕以上に、そのことをよく弁えているのである。これは可能態で考えたい問題ではないのだが、ゲルマンが新作を完成させるのに7年をかけ、年毎にサンクト・ペテルブルクの銀行に通い出資を仰いでいたという破天荒なエピソードを聞くと、数週間で映画を撮り上げてしまうシステムこそ、「特殊」なのかもしれない。

救い、守りたまえ

日本から新たな出資の目処がたち、半分まで完成していた客間のセットがやっと完成し、手つかずで残されていたエヴァの部屋も形を成してきた。映画はここで息を吹き返したように、アクティブにイメージへと交換されていく。9日間の撮休の間にも、ソクーロフは働きづめだ。役者との大変時間をかけたディスカッション。この映画は現場でもドイツ語で撮られ、最終的にドイツの俳優が吹きかえを行うのだが、ソクーロフが重視するのは、ロシア人俳優がドイツ語を発声するときに起こす、身ぶりと言葉のズレだ。大概はプロンプターのように、ドイツ語教師のマリーナがドイツ語で台詞を読み上げ、その後を追うようにして、俳優たちは発声するのだが、確かに計算された動きと、計算がある程度までしか効かない台詞とのギャップは大きい。特に、大変芝居がかった身ぶりと、そのパリトンの声を見事に使い分けたと云われるヒトラーのような人物を作り上げるには、このイントネーションはドイツ語でなければならないだろう（ただ残念なのは、仕上がったフィルムから、マグダ役のレナの美しい声が消えてしまうことだ……）。

とりわけ、エヴァの動きをなぞるようにしてリアクションしていくヒトラーの動きと、エヴァから言葉を引き出そうとするヒトラーの激しい言葉の応酬を見ていると、このヒトラーが、エヴァの想像上に生まれた何者でもない人物に見えてくる。彼が特別な人物ではなく、僕たちと同じくある「不幸」を背負って生きた人、ただそこに大衆の無数の心理が投影（プロジェクション）されたが為に、特権的なる人の物語として、語り継がれることになった人。

1939年、映画史に夜が入り込んだとしたら（註4）、僕たちの曖昧で幸せな投影自体が彼を追い詰めていったのだ。

映画製作とは、危うい磁場である。撮影の〈緊張（テンション）〉とオフの〈退屈〉。それは決して人から学ぶものではなく、自ら学ぶ術を求めてゆくものだ。そしておそらく、共に生きることは、もっと難しい。

僕たちは、ヒトラーの一軒家に張り巡らされた、無数の想像上の線に何を見るだろうか？　それが少なくとも〈歴史〉やその〈記念建造物（モニュメント）〉ではないこと、そしてそれらに、もう一つの「意見」を付け加えることではないことを祈りたい。

僕はこの街での2ヶ月半に及ぶ生活の中から、この映画に少し関わり、そして自分の〈ポイエーシス（制作）〉へと帰っていく。それは何処か、島から島へ移動するのに似て、ゆるやかな帰還だ。

彼らは後10日ほど撮影を続けるという。いつものように。

僕はこのソクーロフ・アイランドで人生の一時期を過ごせたことを、幸せに思う。

ソクーロフ・アイランド、それは永遠に洋上に浮かぶ幻想曲（ファンタジア）の別名である。

サンクト・ペテルブルクにて、

98年8月25日

【脚註】

註1／「精神の高みにある領域は、広大な森の空き地（clairite）のように安らぎをもたらす台地をもっている。」

註2／ソ連邦解体後、ソクーロフを中心にクリエイティブな仕事をする10人の仲間で結成した非商業組織。

註3／1938年サンクト・ペテルブルク（旧レニングラード）生まれ。67年『7番目の道づれ』で監督デビュー。ペレストロイカ以後、レンフィルムを代表する監督として世界中の脚光をあびる。98年カンヌ映画祭で新作を公開。

註4／筆者による文章「night and day」（ermプックス『ヴィム・ヴェンダース』所収）、ならびにビクトル・エリセ「ウェルズ1939年」（『季刊　リュミエール』10号）を参照

Digitized by Google

ロブ・ニルソン監督 "Chalk" より

鷺ポイエーシス レポート 諏訪敦彦

新たな創造の空間をダイレクトに造り出す試み。

関係こそが創造の場である

五月のある日、広島の三原からフェリーに乗り継ぎ、瀬戸内海に浮かぶ佐木島という島に降り立った。人口千三百あまり、新藤兼人が「裸の島」を撮った島を間近に臨む小さな島。そこに建つ鈴木了二氏設計の佐木島コテージという建物で「映画と建築の接線」をテーマとするセミナーが催された。

出演者は、柄谷行人氏や建築家の鈴木了二氏をはじめ詩人の吉増剛造氏、『戦争論』を書いた西谷修氏、フランス思想の小林康夫氏、「百年の絶唱」を監督した井土紀州氏と私。閉じられた〈映画界〉では出会うことのない人々だ。しかも、出演者や全国から集まった参加者の間に、分かり易い接点が、予め用意されているわけではない。〈単なるセミナーではない、これはポイエーシス（＝制作）の場である〉という、主催者である映像作家宮岡秀行の呼びかけに共鳴し、反撥し、戸惑いながらみなバラバラの期待を持って、この島に集まって来てしまった。何が起こるかわからないが、行くべきだという直感があった。

佐木島コテージは、小さな海岸道路を隔てて海岸に面して建っている。海に向かって開かれた中庭には、特設のスクリーンが海と対峙して建てられていた。もちろんそのコテージは本来劇場空間を意識して建てられたものではない。柱の間の小さなスペースにスッポリと映写機が収まっているのを見て、設計者の鈴木氏自身が驚く。「ここが映写室になるとは……」そこは、無理矢理に仕立て上げられた映写空間で、映画を上映するには条件の良い場所とは言いがたい。もちろん夜の闇がなければ映写することはできないし、打ち寄せる瀬戸内海の穏やかな波の音や、映写機の機械音が、作品に絶えず浸入してくる。ここでは映画は映画館という胎内に守られていない。逆に、建築のほうも映画という空間に浸入されており、互いを異物として意識する緊張と不安を空間自体が孕む。そのむきだしにされた関係性が、このセミナー全体の基調となった。観客も出演者も、上映される映画も、建築も、とにかくここで暴力的に関係を結ばされてしまった。

その後二日間にわたり、ここに映し出された映像作品、鈴木了二の「物質試行35」、宮岡秀行の「セレブレートシネマ1001」、造形作家岡崎乾二郎の「回想のヴィトゲンシュタイン」、「百年の絶唱」、ソクーロフの「ロベール　幸せな人生」、ベケットのシナリオによるアラン・シュナイダーの「フィルム」、どれも映画の守られた制度に対する距離が強く意識されており、この空間が孕む緊張と同質の不安や戸惑いを伴う。そして、上映の前後に行なわれる言葉どうしの断絶。言葉と映像、音と映像、それらのズレと共鳴。あるいは、壇上の出演者とパイプ椅子の上で聞き入る参加者とのズレと共鳴。全ての関係の中に、この不安と戸惑いが浸入する。それは映画が（人が）、他者と関係を生み出そうとする瞬間のざわめきだと、私は勝手に思う。このセミナーには物語はない。関係があるだけだ。しかし、関係こそが創造（＝ポイエーシス）の場であるということを宮岡秀行は立ち上げようとしていることに気づく。

映画の作者は誰なのか？

私は自分の最初の作品「2／デュオ」と共に、あちこちと旅を続けた。その中で私につきまとっていたある違和感がある。それは、映画監督とは誰か？　映画における作者とは何か？　という素朴な疑問だった。

「2　デュオ」は〈私〉の映画だ。私はそのことを受け入れ、作者として観客の前に立ち、質問を受け、可能な限りそれに答える。しかし、私は「私の映画」と発音するときの、一瞬の戸惑いをいまだに消すことができない。作者とは私個人ではない。私が関わることで制作を共有する全ての人の間に生まれる〈関係〉が作者ではないのか？　しかし、映画祭や映画を巡るシンポジウムで、そのような関係が議論されることはまずない。監督は常に壇上に奉り上げられ、作者から観客への一方向のコミュニケーションに映画作品を押し込める。しかし、そこで語られるどのような言葉も、実は「映画」によって守られており、映画外部との交信を絶たれている。映画の作者とは何

Digitized by Google

か？　その問いは、映画を創造するとはどういうことなのか？　という問いに繋がるはずだ。そのことを考えるには映画の外側に出るしかない……私は、何度かの宮岡秀行との雑談の中で、漠然とそう感じていたのだった。

宮岡秀行の企みは、この映画の自閉的なネットワークに小さな穴を開け、そこから映画を建築、音楽、詩、美術、文学、あるいは日常生活といった、外側の〈他者〉に向かって関係性を開き、その穴をクルリと反転させて、新たな創造＝ポイエーシスの空間をダイレクトに造り出してしまおうとするものである。

その企みは、すでにユニバーサルなものだ、と思う。彼は、このコテージを2001年には本格的な映像研究所として出発させるという。映画館も無かった小さな島を、世界的な映像文化の発信地にするという「鷺ポイエーシス」の宣言は、決して無謀ではない。そこに参加する創り手も、観客も（いずれ、そのような関係も消え）〈関係〉を造り出すことの戸惑いや不安を意識することで、互いに鍛え合う真の創造空間が出現するはずだ……。

セミナーは吉増剛造氏の朗読『火の映画～岡田隆彦へ古代天文台』で幕を閉じた。

今月行なわれる二回目の「鷺ポイエーシス」は、アメリカのインディペンデント作家ロブ・ニルソンと、モレキュラーシアターを主宰する演出家豊島重之氏を招き、〈トランスフィクション〉と題した映画と演劇の実践的なワークショップを行なう。それに先がけて、先月、広島シネツインで行なわれたプレイベントでは、ロブ・ニルソンとロバート・フランクの作品がオールナイトで上映された。サンフランシスコで最も危険な地区と言われるテンダーロイン地区で、ホームレスや様々な階層の人間とのワークショップを通して作品を作り上げるロブ・ニルソンは、まさに〈関係〉を創造の場に仕立て上げることを日常的に実践している。一方、ロバート・フランクの新作"The Present"は、自らの日常生活の断片を捕らえ、徹底的に〈私〉という主体にこだわった個人作家だ。〈関係〉と〈私〉。二人の作家のアプローチは大きく隔たっており、その隔たりの間で観客はまたも戸惑い、それらの映像をどのように結びつけるべきか考える。その圧倒的な独自性の前では、映画と観客の守られた関係は崩れ去り、一人一人が自分自身で考え、新たな〈関係〉を創り出す不安に足を踏み入れる。しかし、そこにこそ創造があるのだということが、やがて佐木島で明らかにされることだろう。

作者とは〈私〉であると同時に〈関係〉である。終わりはない。関係を持続すること。それが創ること＝ポイエーシスなのだ。

宮岡秀行の、「鷺ポイエーシス」の試みのなかから生まれたきたのが、この1冊の小冊子『sagi times 01』だ。映画と建築、詩、美術、さらには音楽を横切ってぶつかり合い、創造の原点へと向かう言葉たち――和田忠彦氏がマラパルテについて語り、松浦寿夫氏と鈴木了二氏が語り合い、丹生谷貴志氏が講演し、あるいは樋口泰人氏が音楽を書く……。

それらは、「鷺ポイエーシス」の刺戟的な場の現在を伝えるとともに、そこから生まれ出ようとしているものを見守る。11月、「鷺ポイエーシス」の第2回の試みはさらに、さまざまなものを生み出すはずだ……。

なお、「鷺ポイエーシス」の第2回の詳細については巻末のインフォメーション欄を参照されたい。『sagi times』についての問い合わせ先は、スタジオ・マラパルテ（TEL 082-248-4322）まで。

さらに、ソクーロフ映画祭が東京・ユーロスペースにて開催中だ。この機会を逃すな！

ハリウッド映画音楽の巨匠、待望の初来日公演
ジェリー・ゴールドスミス
Jerry Goldsmith in Concert

あの名作が、あの大作が、
作曲者自身による指揮で、
この冬、蘇る

作曲＆指揮：ジェリー・ゴールドスミス
Composed & Conducted by Jerry Goldsmith
演奏：神奈川フィルハーモニー管弦楽団
The Kanagawa Philharmonic Orchestra

横浜公演
12月11日（金）19時開演
横浜みなとみらいホール
S席：¥6,000 A席：¥5,000 B席：¥4,000

東京公演
12月16日（水）19時開演
五反田ゆうぽうと簡易保険ホール
S席：¥7,000 A席：¥6,000 B席：¥5,000
プレミア席：¥10,000

★演奏曲目★
オスカーファンファーレ／スター・トレック9
砲艦サンパブロ／チャイナタウン
いつか見た青い空／ポルターガイスト／パピヨン
氷の微笑／風とライオン／エイリアン
トワイライトゾーン／エアフォース・ワン
グレムリン／猿の惑星／ムーラン
L.A.コンフィデンシャル／ロシア・ハウス
パットン大戦車軍団／マッカーサー
スモール・ソルジャー／フォーエヴァー・ヤング
トゥルー・ナイト

チケットは、チケットぴあ　チケットセゾン、
神奈川フィル・チケットサービスで発売中

お問い合わせ：
神奈川フィル・チケットサービス ☎045-331-6699
ヨシノ音楽事務所 ☎03-5562-9352

Digitized by Google

ダークシティ
DARK CITY

●1998年・アメリカ・カラー・シネマスコープ・SRD、DTS、SDDS・1時間40分
●監督／アレックス・プロヤス　製作／アンドリュー・メイソン、アレックス・プロヤス　製作総指揮／マイケル・デ・ルーカ、ブライアン・ウィッテン　原案／アレックス・プロヤス　脚本／アレックス・プロヤス、レム・ドブス、デイヴィッド・S・ゴイヤー　撮影／ダリウス・ウォルスキー　美術／ジョージ・リドル、パトリック・タトプロス　音楽／トレヴァー・ジョーンズ　編集／ドブ・ホーニグ　衣装／リズ・キーオー　特殊効果監修／タッド・ブライド　視覚効果監修、制作／マラ・ブライアン、アーサー・ウィンダス、アンドリュー・メイソン　視覚効果監督／ブルース・ハント　ミニチュア監督／ブルース・ハント、アンドリュー・メイソン
●出演／ルーファス・シーウェル、ウィリアム・ハート、キーファー・サザーランド、ジェニファー・コネリー、リチャード・オブライエン、イアン・リチャードソン、ブルース・スペンス、コリン・フリールズ、ジョン・ブルーサル、ミッチェル・ブテル
●配給／ギャガ＝ヒューマックス
●製作／ミステリー・クロック
●11月28日より渋谷東急ほか全国松竹東急系にてロードショー
●本誌関連記事／11月下旬号新作紹介グラビア

現実に近い虚構と虚構に近い現実

大場正明

「ダークシティ」は、オーストラリア映画界から頭角を現し、「クロウ／飛翔伝説」でハリウッド・デビューを果たしたアレックス・プロヤス監督の新作だが、ぼくにはこの映画が、ピーター・ウィアー（というよりもオリジナル脚本を書いたアンドリュー・ニコル）の「トゥルーマン・ショー」と同時期に公開されるというのが非常に興味深いことのように思える。この二本の映画では、それぞれに主人公をとりまく世界が実は作り物であることが明らかになり、個人の現実が崩壊していくという共通点があるばかりではなく、双方の映画から浮かび上がるヴィジョンは見事にコインの表裏をなしているからだ。

その表裏の出発点となるのは、都市とサバービア（郊外住宅地）の関係だ。都市とサバービアは現代社会のなかで対極にある空間であり、ふたつの空間をめぐる感情は映画における都市とサバービアのイメージを開拓し深化させる力の源ともなっている。たとえば、アメリカで郊外化が激しい勢いで進行した戦後から五〇年代にかけて、フィルム・ノワールが量産され、暴力とセックスに満ちたミッキー・スピレインのマイク・ハマー・シリーズが爆発的な人気を博したのは偶然ではない。人々は、すべてが真新しく、明るく清潔、安全で健康的なサバービアの生活を謳歌したが、一方で彼らの抑圧された欲望がフィルム・ノワールやスピレインにダークな世界の刺激を求めていたからだ。

バーバンクのサバービア育ちであるティム・バートンは、「シザーハンズ」でパステルカラーに統一された家並みが明るいというよりは非現実的にも見えるサバービアのはずれにゴシック的な屋敷を作りあげ、どこにいても他者の目がとどく死角のないサバービア空間のなかで影を求める子供の心理をその屋敷に象徴した。そしてもちろん、この象徴的な屋敷は、バートンが「バットマン」シリーズで作りあげたゴッサム・シティの世界につながっている。

映画のなかのサバービアと都市は、それぞれに人々の表層と深層を表象し、前者が明るければ明るいほどに後者は深い闇に包まれていくといってもいいだろう。そして、「ダークシティ」と「トゥルーマン・ショー」では、ある種共通するSF的なアイデアを駆使することによってこの深層と表層それぞれに大胆なひねりが加えられ、ユニークな視点から掘り下げられていくことになる。

サバービアの世界を描く「トゥルーマン・ショー」については、アンドリュー・ニコルがこの作品の前に監督／脚本を手がけた近未来SF映画「ガタカ」を観ると、その主題の深さというものがよくわかる。「ガタカ」の近未来世界では、裕福な夫婦は遺伝子操作によって優れた子供を作ることができる。しかしいかに優れた子供とはいえそれは遺伝子工学というテクノロジーの産物であり、誰もが同じことをやれば子供は画一化していき、自分から何かを変えようという意志すら持たなくなる。それはサバービアの世界に通じるものがある。裕福な家庭が人工的で完璧なサバービアの世界で子供を育てようとすれば、結果として子供は画一化していくということだ。「トゥルーマン・ショー」の主人公トゥルーマンは、そんな究極の人工的世界で純粋培養されていることになる。そこにはどこにも影

Digitized by Google

はなく、すべては表の世界である。この番組を制作したプロデューサーは、たとえすべてが虚構であることが主人公に露見しても彼は虚構を受け入れて生きていくと確信している。安全な世界を放棄する人間などいるはずがないと考えているからだ。そして映画は、そんな確信をめぐって主人公の表層からはとらえられない部分を見つめていくことになる。

「トゥルーマン・ショー」と共鳴するもの

アレックス・プロヤスの世界というのは、このニコルの世界とは見事に対照的である。コミックを映画化した前作の「クロウ」でも闇に包まれた都市が際立っていたが、「ダークシティ」でも陽がのぼることがなく闇が支配する都市が浮かび上がり、フィルム・ノワールが幕をあける。主人公マードックは、とあるホテルのバス・ルームで、場所も時間も自分の正体もわからない完全な記憶喪失状態で目覚める。彼は真実を求めて街をさまようが、その足跡は連続殺人事件の現場に重なっていく。しかし次第に、トゥルーマンがサバービアならではのホーム・ドラマという虚構を生きていたように、マードックもこの都市ならではの虚構を生きていることが明らかになっていく。

この主人公や街全体を操っているのは、宇宙から新天地を求めてやってきた〝異邦人〟たちだ。彼らは、精神科医を手先として住人たちの記憶を自在に入れ替え、彼らの深層を引きだすような虚構を構築して人間を観察し、魂の所在を突き止めようと腐心している。その異邦人たちのイメージは、この都市で巻き起こっている深刻な状況に照らすとひどく浮いていて滑稽でもあるが、もちろん映画の見所は別なところにある。

プロヤスの前作「クロウ」では、冥界から甦った主人公エリックが、不死身の力を肉体に宿しているだけではなく、他人に触れることによって相手の記憶を読み取ることができる能力を備え、記憶が彼を復讐に駆り立て、ラストでは読み取った記憶が窮地に陥った彼を救うという展開が印象的だった。しかしこの「ダークシティ」では、その記憶さえもが完全に操られるばかりか、異邦人たちの特殊な能力によって都市は夜毎変貌する。そんなふうに深層が危うい地平へと追いやられていくなかで、主人公がいかにして虚構の世界から逃れ、出口を見出すことができるのかというところに関心が向かうわけだ。

そして、その結末には「トゥルーマン・ショー」とどこか共鳴するものがある。「トゥルーマン・ショー」のラストには、仮に主人公が脱出をとげたとしても、それは限りなく現実に近い虚構が限りなく虚構に近い現実に変わるだけであるという含みがあり、その含みにこそサバービアの不気味なリアリティがある。「ダークシティ」の場合は、物語がSF的な展開にかなり踏み込んでしまうために、表現はいささか極端になってしまうのだが、ラストにはタルコフスキーの「惑星ソラリス」のそれを思わせる世界の顚倒があり、やはり現実と虚構の境界が曖昧なものになっていくのである。

Digitized by Google

かさぶた／7本のキャンドル

SCABIES／DET, MEANS GIRL

「かさぶた」
●1987年・イラン・カラー・スタンダードサイズ・1時間26分
●監督・脚本・美術／アボルファズル・ジャリリ　撮影／アタ・ハヤテイ　美術／モハマッド・タギ・ジャリリ　編集／レザ・ホズイ　録音／フェレイドゥ・ボルハニ、アリ・サレヒ　製作担当／アハメッド・ルスタ
●出演／メヒディ・アサデイ、アスガル・ゴルモハマッデ、ホセイン・マルミ、モフセン・バナヒ、ホセイン・バナヒ、ファテメ・ナギャビ
●11月21日よりシネ・ラ・セットにて
●配給／ビターズ・エンド
●本誌関連記事／11月下旬号新作グラビア

「7本のキャンドル」
●1994年・イラン・カラー・スタンダードサイズ・1時間23分
●監督・脚本・美術・編集・衣装／アボルファズル・ジャリリ　撮影／メヒディ・マジッド・バズィリ　録音／アリ・サレヒ、ゴラム＝アッバス・ギャンバリ
●出演／ゼイナブ・バルバンディ、ナビ・ジャリリアン、ホセイン・サキ、アディビファル、バフマン・マルフィ
●11月21日よりシネ・ラ・セットにて
●配給／シネカノン
●本誌関連記事／11月下旬号新作グラビア

祈るようにして撮影された、イラン映画の衝撃

石原郁子

「かさぶた」の沸き立つ生命力と説明を排した強烈なシーンの繋がり

イラン映画からまたしても現われた衝撃。96年の東京国際映画祭アジア秀作映画週間で評判を呼んだ傑作の、ようやくの公開だ。ヴェネツィア映画祭で金のオゼッラ賞を受賞した「七本のキャンドル」、ロカルノ映画祭銀豹賞の『DANCE OF DUST』（日本未公開）など、国際的に高い評価を得ながら、イラン国内ではすべての作品が上映禁止となっている（その理由は、作品を見れば一目瞭然だが）アボルファズル・ジャリリ。

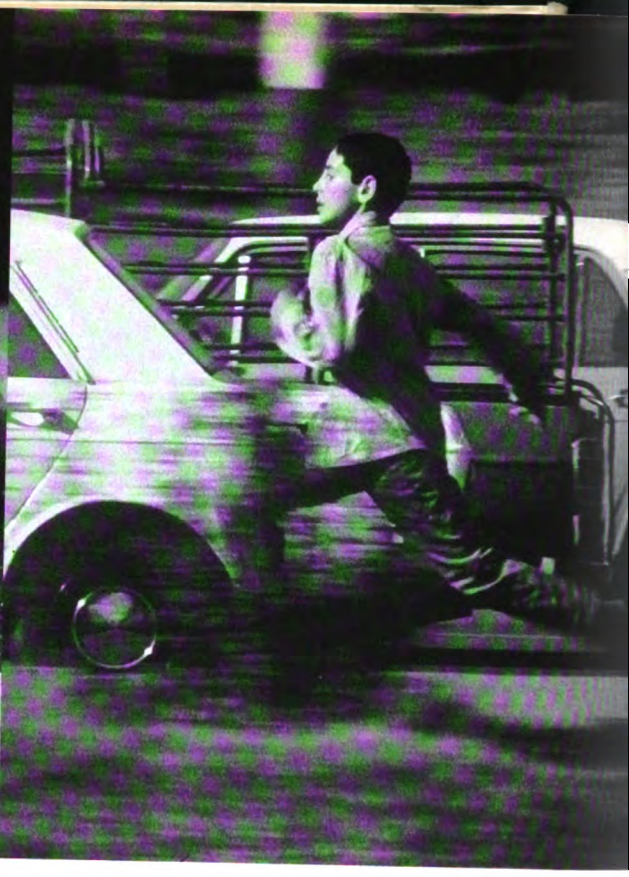
反政府的チラシを配ったかどで逮捕された少年ハメッド（彼は文盲でチラシを読めないのだが）。裁判をまつあいだ、少年院に拘留された彼は、怒鳴りちらし暴力をふるう看守たち、生煮えのじゃがいもがごろりと出るような食事、看守の威を借りて横暴にふるまう室長、などを体験してゆく。強大で得体の知れない体制という壁の中に捕えられて、ときに身動きもならずとまどい怯え、ときに激しく反発しながらも、一方ほのかな友情や優しさをみつけ、自由に街を駆けることを夢見つつ、やがて彼は裁判に引き出されるが……。

ジャリリの名を一躍有名にした長編三作目の「かさぶた」は、ドキュ・ドラマと批評家たちが名付けることになるきわめて独自のやり方で撮られている。出演者は実際の少年院の少年たち。監督・スタッフとわずかなプロの俳優は、少年院の収容者として6ヵ月ともに少年たちと生活し、撮影にこぎつけたという。見るからにすさんで人相の悪い少年、やせこけた栄養不良の少年、さまざまな障害を負った少年たち。喧嘩、体罰、裏切り、苛酷な労役。絶えず彼らが晒されている一触即発の緊張。残酷なまでにカメラの前に剝き出しにされ、ありのままに直視される彼らのすべて。それだけでもこの映画は充分に衝撃で在り得たろうが、さらにそこに、そうした時間をふいに突き破って、ぎらぎらと立ち上がってくるシーンがある。シャワーに入るために半裸で一団となって歓声をあげながら走る少年たち。そしてプールに入るときには、歓声も走る迅さも極限に達する。「もう上がれ」と看守が命じても、少年たちは飛び込みをつづけ、脱走を企てた罰にプール掃除を命じられてさえ、光る矢のように一直線に汚れた水に飛び込んでゆく。映画が、誰に抑えようもない力できらめき沸き立つ生命体であるような瞬間。「操行ゼロ」のあの枕投げのシーンにも匹敵する、奇蹟のシーン。

それにしてもこの映画は、まったく何も説明しない。まるで前後に繋がらない、ぶっきらぼうなシーンの置き方。たとえば、皆が庭に整列して、猫の鳴き声のような赤ん坊が泣いているような、奇妙な音を発する一人の少年の〝芸〟らしきものを聴くシーンがある。それはきわめて強烈な印象を与えるが、そのシーンが一体何であるのか、まったく説明はない。題名の「かさぶた」についてすら、私たちはほとんど何の情報も与えられない。それは皮膚に現われる病気で、それを発症すると少年はどこかに隔離されるのだが、それがいったいどんな皮膚病なのか、連れ去られた少年はどうなるのか、一切語られない。あるいは、それは実際の病ではなく、なにかを象徴するもののようにも思えるが、謎めき、そ

Digitized by Google

「7本のキャンドル」



「かさぶた」

れだけ痛いほどに心に残る。

「7本のキャンドル」に溢れる音と神話へと連なる象徴性

この象徴性は「7本のキャンドル」ではさらに強くなる。貧しい村からテヘランへ出て、ある工場で同郷の出稼ぎ労働者たちの賄いをしている少年。故郷の妹が、不思議な流行り病に感染して全身が麻痺し、父が彼女を医師に見せるためにテヘランへ連れてくる。少年と父とは懸命に病院を回り、さまざまな科学的治療が功を奏さないと、まじないや民間療法も試み、モスクで七本のろうそくを立てて祈る。貧しい仲間たちも、誰もが彼らのために心配し、彼らに手をさしのべ、ともに祈ってくれる。ひそかに少年に好意をもっている近所の女の子の気持ちを、少年は拒んでしまうが、やがて温かいものが彼らのあいだに通い合う。だが、あらゆる手を尽くしても妹はよくならず、父は彼女を列車で村へ連れ帰る。その夜、少年は妊婦を助けて赤ん坊が産まれ、妹は列車の中で兄の名を呟く。

妹の病気が、人々が置かれている現在の社会状況の象徴であることは明らかだろう。だがそれは、貧しく慎ましい善意の人々によっていつかは変わってゆくのかもしれない。そうした神話めいた物語を、やはりプロの俳優ではない人々が、ひっそりと支えてゆく。治療法を求めて、街路をあちらへこちらへと、毎日のように歩きつづける少年の、その懸命な歩み。礼儀正しく誠実な労働者たちの挨拶。妹が治った日のために買われる白い靴。少年の祈りを見守る女の子の優しい瞳。

そして、その全体を豊饒な〈音〉が繋いでゆく。「かさぶた」でも赤ん坊の泣き声をする少年をはじめ、少年たちが歌ったり踊ったりする場面がいくつかあるが、「7本のキャンドル」では〈音〉はさらに人々の生活にぴったりと寄り添って、いたるところから溢れ出る。貧しい出稼ぎの男が捧げるアッラーへの祈り。二本しか指のない手が奏でる美しいピアノの響き。迷子の子牛を探す、おまなじないのような、童唄のような、呼び声。その子牛が聴いていたヴァイオリン。病気を治す力があるという笛の音。結婚を祝う宴会。人々は何かあるとすぐ弦楽器を奏で、太鼓をたたいて、歌い、踊り出す。音楽も歌声も舞踏も、楽しく、美しく、神へと繋がる聖らかさを帯びて、画面と共鳴する。

素人を使い、説明せず、それでいていつしか、素人たちがたんに〈自然なもの〉ではなく、何か日常を超えたきらめきを放つような高みにまで到達している映画。淡々と寡黙な、あるいは感情を表わすことに痛々しいほど不器用な（つまり、カメラの前ではにかみ、感情を普段以上に隠してしまう）人々に、深い畏敬の念を抱かずにはいられない映画。それはブレッソンを想起させるが、じつはジャリリは映画を撮り始めるまでの人生でわずか60本ほどの作品しか観ておらず、もちろんブレッソンも（ヴィゴも）観たことはなく（その後観たらしいが）、その手法はまったく独自に彼の内側から作り出されていったものだと言う。自己表現の手段としてというよりは、むしろ自己を捧げものとして、祈りのように映画を撮る作家。今、新たな映画の可能性は、模索しつつ信じることを諦めない、そんな魂の深みから現われるのかもしれない。

Digitized by Google

カフェ・ブダペスト

BOLSHE VITA

●1995年・ハンガリー＝ドイツ・カラー・ヴィスタサイズ・1時間41分
●監督・脚本　フェケテ・イボヤ　撮影　サライ・アンドラーシュ　製作／ダールダイ・イシュトヴァーン　音楽／ユーリ・フォミチェフ、ムク・フェレンツ　編集／マヨロシュ・クラーク
●出演／ユーリ・フォミチェフ、イーゴリ・チェルニエヴィッチ、アレクセイ・セレブリャコフ、マール・アーグネシュ、ヘレン・バクセンデール、キャロリン・ロンケ、レオニード・マクシーモフ
●配給／エスパース・サロウ
●11月28日より新宿東映パラス2にて
●本誌関連記事／11月下旬号新作グラビア

混沌にある人間らしさと重さ

村川英

この映画は、96年のソチ映画祭でグランプリ受賞ということだが、ソ連崩壊後、西側に飛び出したロシアの若者と、東側に魅せられた女性たちの出会いを描いて、出色の映画になっている。一九九五年に出来上がったこの映画は現在から見れば、いささかタイム・スリップした感もあるが、ロード・ムービーの形を取りながら、これだけの洞察を見せる監督の力量は、生半可ではない。

さらに言えば、この映画に、六〇年代後半から七〇年代、『何でも見てやろう』と世界に飛び出した旧世代と、現代のヒッピー世代を二重写しに見ることが出来て、非常に興味深かった。しかも若い世代に所属するであろう女性監督フェケテ・イボヤの視点が、ドラッグ・カルチャーなどの現象的な面を強調した旧世代のヒッピー映画などと違って、対象との距離の取り方が成熟している。六〇年代から現代までのさまざまなムーブメントが、もろもろのセンスの中にうかがえるのも面白い。そしてこの映画の登場人物が魅力的なのも特筆に値する。大衆化社会状況の中で世界に飛び出した大量の七〇年代の若者と、現代の東側からブダペストに飛び出した彼らの違いは、ユーラやワジムがやはり、エリートであるということ。つまり、衝動的に飛び出す若者にも、先頭を切るエリートと後から加わる大衆の違いがある。サキソフォンを吹くワジムの格好のいいこと！　またこの映画には、さまざまな国の検閲所風景とか自由市場の風景が随所に切り取られ、ドキュメンタリーとフィクションを噛み合わせているが、人物構築の明快さ、混沌とした状況をこれだけの物語に仕立てる脚本の巧みさは、やはりフィクションの監督だろう。さて、美形の男たちに比べて、女たちは痛快な行動力と存在感で画面を圧倒する。あまりにも個人主義になりすぎたイギリスの生活に嫌気を覚え、ブダペストの喧騒に人間らしさを感じるマギーや、ルーマニアの革命騒ぎに血のざわめきを覚えるアメリカ人のスーザン。あるいは東側からの旅人を当て込んで安宿を営むハンガリーの中年女性のエルジ。この女性たちのあっけらかんとした決断力と行動力には、フェミニズムの時代を経て一皮むけた女性たちの強烈な自意識を感じる。七〇年代の女性映画は、試行錯誤した末の難産の果てでの強さだったが、この映画の女性たちに迷いなどは見られない。この映画の中で、ワジムを捨てて、タシケントで待つ婚約者に向かって、颯爽と旅立つスーザンの人物像など、その最たるものだろう。

ただ、この映画を見る限り、ウジウジ、もたもたして迷い、挙げ句の果てには、土地のヤクザに殺されてしまうセルゲイも含めて、男たちの弱さにも限りなく魅力を感じる。強さだけが魅力ではない。それからハンガリー人の監督にとって一九五六年のハンガリー事件や、東側の人間にとっての国境の検閲所などの重い意味をつきつけてくる。そしてその延長上にある混沌の重さ。そこにはロシアの青年と英語圏の女性の意思疎通の問題があるが、私には言葉のコミュニケーションの難しさと断絶に、マジャール人の監督の感じる異文化への感性も見た。一見現代を描いた若者映画に見えるが、この映画の持つ多層の構造に深い魅力を感じる。ただ不満は崩壊から現在へ貫く、監督としての視点が感じられないこと。その意味で古典的作品になっている。

Digitized by Google

1998年度 キネマ旬報ベスト・テン選考用
日本映画・外国映画 公開作品リスト

このリストは97年12月1日から98年11月30日までの公開作品を対象とする「キネマ旬報ベスト・テン」選考資料のため全ての封切り作品は網羅していません。完全な封切りリストは1999年の2月下旬号（2月5日発売）に掲載いたします。

●てなもんや商社
●流れ者図鑑
●百年の絶唱
●友情　FRIENDSHIP
●プライド　運命の瞬間
●ラブ・レター
●恋、した　花椿の秘密
●恋、した　千話喧嘩
●ドコニイルノ？
●冷ややかな乳白色
●黄落
●黒の天使　Vol. 1
●Cocco　クムイウタ
●JOKER　疫／病／神
●とつぜん！ネコの国
　バニバルウィット
●秘祭
●ベイビークリシュナ

6月
●不夜城
●鯨捕りの海
●絆－きずな－
●ジョセフ・ロージー　四つの名を持つ男
●中国の鳥人
●明日も遊ぼうね
●クールバナナ
●みちくさ日和
●巴里の柳の下のうなぎ
●元気の神様
●ジューンブライド　6月18日の花嫁
●いつものように
●安藤組外伝　群狼の系譜
●愚か者　傷だらけの天使

7月
●怪奇短編集　トライリュージョン
●THE GROUND　地雷撤去隊
●借王（シャッキング）3
●借王（シャッキング）4
●ズッコケ三人組　怪盗X物語
●新生　トイレの花子さん
●三宮金次郎物語　愛と情熱のかぎり
●BLUE FAKE　ブルーフェイク
●アンドロメディア
●くノ一忍法帖　柳生外伝
●BLUES HARP
●冷血の罠
●こころのうた
●KALK（C12）

3月
●ドラえもん　のび太の南海大冒険
●ザ・ドラえもんズ
　ムシムシぴょんぴょん大作戦！
●帰ってきたドラえもん
●銀河鉄道９９９　Galaxy Express
　エターナルファンタジー
●極道三国志　総長への道
●修羅がゆく７　四国烈死篇
●F［エフ］
●ウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナ
　光の星の戦士たち
●ウルトラニャン２～ハッピー大作戦～
●四月物語
●バブルと寝た女たち
●LOOKING FOR
●伊藤高志映画作品集
　イルミネーション・ゴースト
●八月の光

4月
●大安に仏滅!?
●HOW TO　柔術
●ブーブーの物語
●MIND GAME
●関係者以外
●無氣味ナ悲鳴
●蜘蛛の瞳
●ＳＡＤＡ
●THE DETECTIVE WAS BORN
　代官山物語
●映画クレヨンしんちゃん
　電撃！ブタのヒヅメ大作戦
●JUNK FOOD　ジャンク　フード
●Dolphin Through　ドルフィン・スルー
●名探偵コナン　14番目の標的
●OTSUYU　怪談牡丹燈籠
●女刑事RIKO　聖母の深き淵
●仙人物語（そまうどものがたり）
●MAZE☆爆熱時空　天変脅威の大巨人
●蓮如物語
●新宿少年探偵団
●ようこそロードス島へ！

5月
●「A」
●野獣の肖像
●夜９時30分のワンピース
●卓球温泉
●D坂の殺人事件

日本映画

97年12月
●金田一少年の事件簿　上海魚人伝説
●モスラ２　海底の大決戦
●ちんなねえ　BORN TO BE BABY
●ルーズ・ソックス
●冷たい血　AN OBSESSION
●北京原人　Who are you？
●るろうに剣心－明治剣客浪漫譚－
　維新志士への鎮魂歌
●ＣＵＲＥ　キュア
●虹をつかむ男　南国奮斗篇
●売春暴力団
●D#1～プロローグ・倒錯～

98年1月
●ラブ&ポップ
●エコエコアザラクⅢ
　MISA THE DARK ANGEL
●極道の妻たち　決着（けじめ）
●すきなんやこの町が
　1995・神戸・ある避難所の記録
●アートフル・ドヂャース
●一生、遊んで暮らしたい
●ＨＡＮＡ－ＢＩ
●もう、ひとりじゃない
●緑の街
●やわらかい肌
●リング
●らせん
●汚れた女（マリア）

2月
●お墓がない！
●陽炎4
●狼たちの復讐
　THE REVENGE OF THE WOLVES
●Break Heat　～バクの胃袋を開け！～
●プロゴルファー織部金次郎５
　－愛しのロストボール－
●三毛猫ホームズの推理
　ディレクターズ・カット
●ユキエ
●極道懺悔録
●蘇える金狼
●蛇の道
●PERFECT BLUE
●Body Thrill　ボディ　スリル
●ヤマトナデシコ

Digitized by Google

●グリッドロック
●背徳小説　第2章
●ビースメーカー
●この森で、天使はバスを降りた
●草原とボタン
●デッドサイレンス
●ワイルドパンチ
　アルバム・イン・モンタージュ
●ハムレット
●ブレーキ・ダウン
●カルラの歌
●ミミック
●マッド・ドッグス
●ブレード／刀
●アリッサ・ミラノの堕落の園
●G.I.ジェーン
●桜桃の味
●欲望の街・外伝　ロンリー・ウルフ
●パラダイス！

2月
●アムステルダム・ウェイステッド！
●ジャングル2ジャングル
●チャイニーズ・ボックス
●同居人　背中の微かな笑い声
●ゲーム
●シャドウビルダー
●ラブソング
●ステキな彼女
●クロノス
●スポーン
●トゥー・デイズ
●ラブetc.
●風が踊る
●ナムヌの家Ⅱ
●ファイナル・ファイター
●ニル・バイ・マウス
●ジャンク・メール
●テクノ
●アミスタッド
●フェイス／オフ
●コップランド
●川のうつろい
●a.b.c.の可能性
●アルビノ・アリゲーター
●HHH侯孝賢
●欲望の街・純愛篇　紅い疾風

3月
●マウス・ハント
●グッド・ウィル・ハンティング　旅立ち
●バンドワゴン
●あなたに言えなかったこと
●傷心　ジェームズ・ディーン　愛の伝説
●アーリーバード
●アンデントの正体
●愛してる…愛してない!?
●アダム
●トゥモロー・ネバー・ダイ
●ナイスガイ
●大往生
●学校Ⅲ
●かわいいひと
●カンゾー先生
●ザ・ハリウッド
●ヒロイン！
●チャカ　LONELY HITMAN
●リーガル・エイリアン
●踊る大捜査線　THE MOVIE
●サソリ　女囚701号
●サソリ　殺す天使

11月
●新・極道渡世の素敵な面々
　～女になった覚えはねぇ！
●迷い猫
●落下する夕方
●時雨の記
●クジラの跳躍
●Beautiful Sunday
●ショムニ

外国映画

97年12月
●ロンドンの月
●秘密の子供
●メン・イン・ブラック
●ボンデージ・ゲーム
●肉の蝋人形
●オーメン18エンジェル
●いちばん美しい年令（とし）
●朱家の悲劇
●フル・モンティ
●セブン・イヤーズ・イン・チベット
●タンゴ・レッスン
●スペース・トラッカー
●ノーマ・ジーンとマリリン
●阿片戦争
●ロザンナのために
●Kitchen キッチン
●クリスマスに雪はふるの？
●死にたいほどの夜
●ラヴィアン・ローズ
●火の鳥
●タイタニック
●ハッピィブルー
●スリング・ブレイド
●恋人たちのポートレート
●キャリア・ガールズ
●私家版
●プラス！
●リック
●のら猫の日記
●ジャガー

98年1月
●ワイルド・ガン
●スウィート　エンジェル　マイン
●SLOW
●アンラッキー・モンキー
●風の歌が聴きたい
●神様の愛い奴　神軍平等兵の凱旋
●ねじ式
●劇場版ポケットモンスター ミュウツーの逆襲
●"ピカチュウ"のなつやすみ
●それいけ！アンパンマン　てのひらを太陽に
●おむすびまんとおばけやしき
●クリームパンダとおかしの国
●キリコの風景
●フレンチドレッシング
●修羅がゆく8　首都血戦
●A NEW HOME TOWN
●ラーマーヤナ　ラーマ王子伝説

8月
●機動戦士ガンダム　第08MS小隊
　ミラーズ・リポート
●新機動戦記ガンダムW　Endless Waltz
　－特別篇－
●ネプチューン in どつきどつかれ
●激しい季節
●ルイズ　その旅立ち
●SF　サムライ・フィクション
●鬼斎大宴会
●機動戦艦ナデシコ
●スレイヤーズごぅじゃす
●釣りバカ日誌10
●酔夢夜景
●麗猫伝説（劇場版）
●'hood
●ろくでなしBLUES '98

9月
●SPRIGGAN
●あぶない刑事　フォーエヴァー
　THE MOVIE
●しあわせになろうね
●フリージア　極道の墓場
●BEAT
●HEAVENZ
●犬、走る　DOG RACE
●怯える
●はるのそら
●岸和田少年愚連隊　望郷
●大怪獣東京に現わる
●愛を乞うひと
●生きない
●銃爪
●ベル・エポック

10月
●死臭のマリア
●鼻の穴
●イノセント・ワールド
●がんばっていきまっしょい
●狂わせたいの
●ポルノ・スター
●謎のFLYING SAUCER

Digitized by Google

●GODZILLA
●キングダムⅡ　第3章・第4章
●ラブ・ジョーンズ
●暗黒街　若き英雄伝説
●L.A.コンフィデンシャル
●グランドコントロール　乱気流
●ジュリアン・ポーの涙
●オープン・ユア・アイズ
　エリーの不思議な世界
●ウィッシュマスター
●ホーム・アローン3
●チェイシング・エイミー
●ウェルカム・トゥ・サラエボ
●スパイス・ザ・ムービー
●スウィート・ヒアアフター
●ボンベイ

8月

●リーサル・ウェポン4
●オースティン・パワーズ
●恋するシャンソン
●ヴィゴ
●I, DOLL
●ノーウェア
●仮面の男
●ダロウェイ夫人
●ニューヨーク・デイドリーム
●河
●ゴダールのリア王
●夏の夜の夢
●キスト
●ミミ
●スクリーム2
●TAXi
●ダライ・ラマ
●アナスタシア
●気まぐれな狂気
●ライブ・フレッシュ
●夢翔る人　色情男女
●アンナ

9月

●ミドル・オブ・ザ・モーメント
●フラッド
●ヒューゴ・プール
●クライム・タイム
●沈黙の旋律
●シティ・オブ・エンジェル
●スライディング・ドア
●キャラクター　孤独な人の肖像
●〔CUBE〕
●ミル・マスカラス　愛と宿命のルチャ
●頭目
●シークレット　嵐の夜に
●イヤー・オブ・ザ・ホース
●雨上がりの駅で
●裏街の聖者
●スピーシーズ2
●アイス・ストーム
●プライベート・ライアン
●アサシンズ
●ナッシング・トゥ・ルーズ
●スフィア
●アサインメント
●絶体×絶命
●裸足のトンカ
●ウワサの真相　ワグ・ザ・ドッグ
●モンタージュ　証拠死体
●初恋
●ドライ・クリーニング
●ブルース・ブラザース2000
●ザ・ワイルド
●ファイアーストーム
●ラストサマー
●ツイン・タウン
●シングル・アクション
●東宮西宮
●内なる傷痕
●グラスハープ　草の竪琴

6月

●メジャーリーグ3
●遥かなる帰郷
●モル・フランダース
●孤独の絆
●キングス・オブ・クレズマー
●ボクサー
●ソウル・フード
●追跡者
●カドリーユ
●Uターン
●ザ・ウィナー
●ムトゥ　踊るマハラジャ
●愛の破片
●宇宙ステーション　ミール
●ディープ・インパクト
●大いなる遺産
●ジャッカル
●ライアー
●ポスト・モーテム　死への彩り
●すべての些細な事柄
●フランク・ロイド・ライトと日本の美術
●ピースキーパー
●ダウンタウン・シャドー
●コレクター
●普通じゃない
●レインメーカー
●ボディ・カウント　ヤバい奴ら
●ボスニア
●アパッショナート

7月

●真夜中のサバナ
●オスカーとルシンダ
●アルテミシア
●ユナイテッド・トラッシュ
●ブルガサリ　伝説の大怪獣
●Jam
●ザ・ブレイク
●悪魔を憐れむ歌
●エンド・オブ・バイオレンス
●D3　マイティ・ダックス
●FISHING WITH JOHN
●ゲット・オン・ザ・バス
●ソルジャー・ドッグス
●スタントウーマン　夢の破片（かけら）
●ポストマン
●オスカー・ワイルド
●デストラクション　制御不能
●シーズ・ソー・ラヴリー
●ビーン
●世界の始まりへの旅
●女優マルキーズ
●ウィッカーマン
●台北ソリチュード
●フラバー
●ブレイブ
●TOUCH　タッチ
●草の上の月

4月

●堕ちてゆく女
●サブタウン
●革命の子供たち
●恋愛小説家
●ドーベルマン
●アンナ・カレーニナ
●ディアボロス　悪魔の扉
●ディディエ
●上海グランド
●パーフェクト・サークル
●リビング・シー
●アフリカ・セレンゲッティ
●エイリアン4
●ジャッキー・ブラウン
●ジェファソン・イン・パリ
　若き大統領の恋
●炎のアンダルシア
●BE MY BOY
●ウインター・ゲスト
●アルレット
●ア・ラ・モード
●ベルニー
●ブラックアウト

5月

●アンジェリク　はだしの女侯爵
●ガタカ
●スターシップ・トゥルーパーズ
●十二夜
●バタフライ・キス
●だれも私を愛さない！
●ビヨンド・サイレンス
●南京1937　南京大虐殺
●ザ・クリーナー
●マッド・シティ
●非情の時
●カフェ・オ・レ
●ラスト・ホリデイ
●シューティング・フィッシュ

Digitized by Google

●トゥルーマン・ショー
●N.Y. 殺人捜査線
●hard men. ハードメン
●ニキ・ド・サンファル－美しい獣－
●アウト・オブ・サイト
●知らなすぎた男
●ダークシティ
●ナイトウォッチ
●ビッグ・リボウスキ
●ブリーチング
●かさぶた
●7本のキャンドル
●シークレット・エージェント
●チャイニーズ・ゴースト・ストーリー
●カフェ・ブダペスト
●恋の秋〈四季の物語〉
●宋家の三姉妹
●白痴
●ノック・オフ
●ラブ&デス
●ダイヤルM
●沈黙のジェラシー
●TOKYO EYES
●従妹ベット
●地球は女で回ってる
●血を吸うカメラ
●ドレス
●ネネットとボニ
●リプレイスメント・キラー

11月

●ハミルトン
●原色パリ図鑑
●ジャングル・ジョージ
●Mr. マグー
●ニルヴァーナ
●ハーフ・ア・チャンス
●ぼくのバラ色の人生
●闇を見つめる瞳
●アンツ
●インフィニティ　無限の愛
●キャメロット
●キュリー夫妻　その愛と情熱
●始皇帝暗殺
●ターニング・ラブ
●ムーラン
●ラスト・ウェディング

10月

●エクセス・バゲッジ　シュガーな気持ち
●ブギーナイツ
●アベンジャーズ
●エベレスト
●ピガール
●ピョンヤン・ダイアリー
●北京のふたり
●リバース
●ワイルド・マン・ブルース
●イヴの秘かな憂鬱
●マーキュリー・ライジング
●マスク・オブ・ゾロ
●マルセイユの恋
●友情の翼
●エデンへの道　ある解剖医の一日
●クロスゲージ
●ザ・グリード
●相続人
●フラワーズ・オブ・シャンハイ
●モンタナの風に抱かれて
●GUMMO　ガンモ

99年2月5日発売の2月下旬ベスト・テン特別号に発表される「日本映画・外国映画読者ベスト・テン」に今号綴じ込みの葉書でご投票を！

注・対象期間は1997年12月1日から1998年11月30日までです!

●毎年恒例となっております読者ベスト・テンの投票の季節がいよいよやって来ました。

●これは選考委員の方々によるベスト・テン選出とは別に、本誌読者の皆さまから広く投票を募り、今年度に公開された映画の中からベスト・テンを選出して頂き、有効投票の全てを1位10点、2位9点、3位8点……10位1点という加点方法で集計してベスト・テン作品を決定するというものです。その結果は99年2月下旬決算特別号（2月5日発売）誌上に「読者のベスト・テン」として発表させて頂くとともに、投票の中から何人かの方々のベスト・テンとその感想を抽出し、活字化させて頂きます。

●毎年レギュラーで参加されている方も、今年度初めてという方も、皆さんどうぞふるってご参加下さい。

●選考対象となる作品は1997年12月1日より1998年11月30日までに公開された日本映画と外国映画の全作品です（旧製作年度の劇場初公開作品も対象内です）。また短編作品、ドキュメンタリー、アニメーションも選考対象に含まれますが、リバイバル作品は最初の公開年度の対象作品になっているため、除外致します。さらに、先に公開された作品を新バージョンで新たに公開する場合も、オリジナルと新バージョンの区別が結局恣意となる可能性があり、この混乱を避けるため、先に正式公開された以外のものは除外致します。

●「第11回東京国際映画祭」などの映画祭のみの短期間上映作品は除外致します。ただし7日間以上公開された作品は対象内となります。

●投票は、今号綴じ込みの投票葉書によるもののみを有効とさせて頂きます。また日本映画、外国映画両方、或いはどちらか一方の投票でもけっこうですが、必ず1位から10位まで選出して下さい。選出してない場合は無効となります。

●投票葉書のオモテ面にある「この1年間のキネ旬で最も面白かった記事のタイトルをひとつ」の欄は、98年1月上旬号から12月下旬号までに、キネマ旬報に掲載された記事の全てが対象となります。「連載記事・コラム」の項は集計させて頂き、最高得票を「キネマ旬報読者賞」とさせて頂きます。

●投票締切は1998年12月10日（消印有効）です。

Digitized by Google

COMING SOON
新作紹介

私の愛情の対象
THE OBJECT OF MY AFFECTION

STORY
男女の愛はセックスなしでも成立するか、という永遠(?)のテーマを「英国万歳」「クルーシブル」のニコラス・ハイトナーがユーモラスに描くロマンティック・コメディ。小学校教師ジョージは近ごろゲイの恋人に振られ落ちこんでいたが、そんな時、パーティで出会った精神カウンセラー、ニーナのすすめで彼女のアパートにしばらく滞在することになる。ニーナにとっては押しつけがましい恋人ヴィンスより、ゲイのジョージといた方が楽しいのだ。まもなくニーナはヴィンスの子を宿すが、父親役にはジョージを求め……。

DATA ●監督／ニコラス・ハイトナー　製作／ローレンス・マーク　脚本／ウェンディ・ワッサーステイン　撮影／オリバー・ステイプルトン　出演／ジェニファー・アニストン、ポール・ラッド、ティム・デイリー、ナイジェル・ホーソーン　配給／20世紀フォックス
●12月5日より有楽町スバル座ほか全国東宝洋画系にて（98年・米・112分）

ジェニファー・アニストン　父を俳優にもち11歳で演技の勉強を始める。演劇学校を卒業後ブロードウェイに出演。TVドラマ『フレンズ』にレギュラー出演するほか、「彼女は最高」(96)など映画界にも進出。ブラッド・ピットの恋人として話題を呼んでいる。

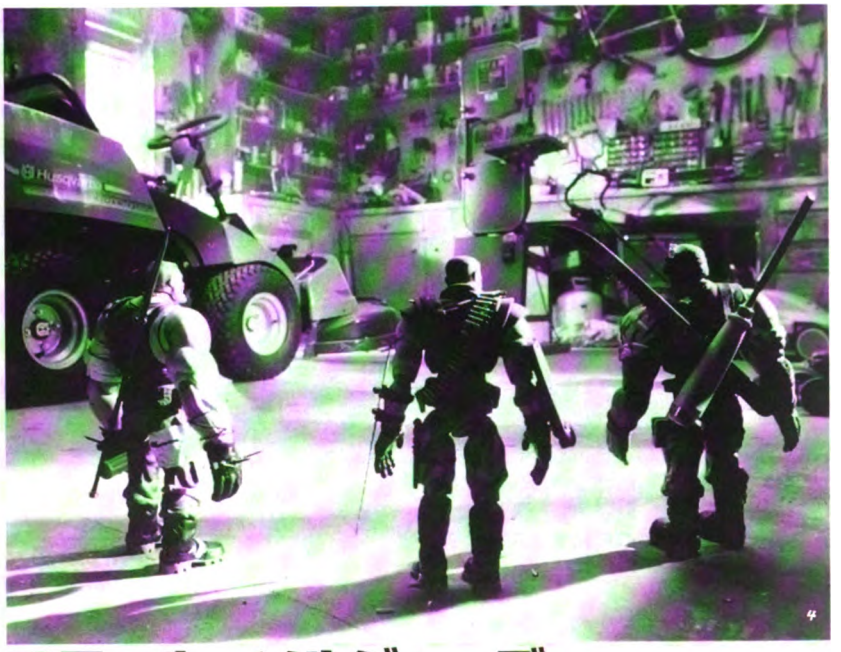
Digitized by Google

アルマゲドン
ARMAGEDDON

STORY
人類が直面する壮大な戦いを、最新鋭の映像テクノロジーとブルース・ウィルスほか豪華キャストで送るヒューマン・アドベンチャー。巨大なアステロイド（小惑星）が、猛烈なスピードで地球に接近していた。衝突すれば地球の滅亡は間違いない。終焉へのカウントダウンがはじまった頃、6人の宇宙飛行士たちと宇宙に旅立つのは、アステロイドの地表を掘削して軌道を変えるよう指令をうけた石油採掘のプロたちだった。プロ中のプロ、ハリー・スタンパー率いる8人の精鋭たち。過酷な訓練を受けた後、ついに旅立ちの瞬間がやって来る。果たして人間は、起こりうる悲劇を自らの手で回避できるのか……。

©TOUCHSTONE PICTURES

DATA ●監督／マイケル・ベイ　製作／ジェリー・ブラッカイマーほか　撮影／ジョン・シュワルツマン　出演／ブルース・ウィルス、ビリー・ボブ・ソーントン、ベン・アフレック、リヴ・タイラー　配給／ブエナ　ビスタ
●12月12日より日本劇場ほか全国東宝洋画系にて（98年・米・150分）※11月28日先々行オールナイト、12月5日先行オールナイト上映



スモール・ソルジャーズ
SMALL SOLDIERS

STORY
オモチャたちの反乱を最新のＣＧＩを駆使して描いた、ドリームワークス製作のエンターテイメント巨篇。最先端軍事産業のグロボテック社は、新たなマーケットとして玩具会社を傘下におさめ、“永久電池”を組みこんだフィギュア“スモール・ソルジャーズ”を誕生させた。ところが、デザイナーのひとりが軍事用高性能コンピュータ・チップをフィギュアに内臓してしまったため、オモチャたちは本能におもむくまま起動を開始する。平和を愛するグループ<ゴーゴナイト>と、彼らの壊滅を目的とするグループ<コマンドー・エリート>。しかし、小さな軍隊さながらのコマンドーはやがて暴走状態に突入して、人間までも標的にしはじめたのだ。

DATA ●監督／ジョー・ダンテ　製作／コリン・ウィルソン　出演／グレゴリー・スミス、キルスティン・ダンスト　声／トミー・リー・ショーンズ、ブランク・ブランシェラ、アーネスト・ボーグナイン　配給／ＵＩＰ
●12月下旬よりニュー東宝シネマ１ほか全国東宝洋画系※吹替版はシャンテ・シネほかにて（98年・米・110分）

Digitized by Google

6デイズ／7ナイツ
SIX DAYS SEVEN NIGHTS

DATA ●監督・製作／アイバン・ライトマン　製作／ウォリス・ニシタほか　脚本／マイケル・ブラウニング　撮影／マイケル・チャップマン　出演／ハリソン・フォード、アン・ヘッシュ、デイヴィッド・シュワイマー　配給／ブエナ　ビスタ
●12月下旬より丸の内ルーブルほか全国松竹東急洋画系にて（98年・米・101分）

STORY
南の孤島に不時着した男女の冒険を、久々にワイルドな魅力全開のハリソン・フォード主演で送るロマンティック・サバイバル・ストーリー。ニューヨークの雑誌副編集者ロビンは、恋人フランクとマカテア島へ夢のバカンスに発つ。しかし、豪華ホテルで幸せ気分を満喫している時、タヒチへ取材に飛んでほしいと仕事先から連絡がはいる。渋々フランクをのこしてタヒチにいくことになるが、この島のパイロットは口も態度も最悪な男クインしかいないのだった。なんとか説得して離陸したものの、天候状況が悪化、雷にやられて無人島に不時着してしまう。互いに勝ち気でわがままなふたりは、協力しあってこの危機をのりこえねばならないのだが……。

ハリソン・フォード　66年「現金作戦」の端役で映画デビューするが、その後役に恵まれず一時は俳優を断念。73年「アメリカン・グラフィティ」で復帰し、77年「スター・ウォーズ」で大ブレイク。今では誰もが認める映画スター。次回作は「ランダム・ハーツ」。

©TOUCHSTONE PICTURES

イン&アウト
IN & OUT

DATA ●監督／フランク・オズ　製作／スコット・ルーディン　脚本／ポール・ラドニック　出演／ケヴィン・クライン、ジョーン・キューザック、マット・ディロン、トム・セレック　配給／ギャガ　東京テアトル
●12月中旬より銀座テアトル西友、シネセゾン渋谷ほか全国にて（97年・米・90分）

STORY
本作でアカデミー賞助演女優賞にノミネートされたジョーン・キューザックと、全米きってのコミカル・アクターのケヴィン・クラインが主演するラヴ・コメディ。結婚式を3日後に控えた人気教師のハワード。ところが、人気映画スターとなった元教え子のキャメロンがオスカー受賞式で「ハワード先生はゲイだ」と大放言したことから、そのケもないのにカミング・アウトするはめに!?　必死で噂を打ち消そうとする彼をよそに、報道は日を追って過熱していき、ハワードは一躍マスコミの寵児に祭り上げられてしまうのだった。呆れ果てる婚約者のエミリーを必死に説き伏せて、全米が注目する結婚式当日を迎えるハワードだが……。

Digitized by Google

STORY

文豪ヘンリー・ジェイムズ晩年の代表作を、「バック・ビート」のイアン・ソフトリーがスリリングに描きあげた心理劇の傑作。20世紀初頭、ロンドン。上流階級の叔母に養われるケイトは貧しい新聞記者マートンと恋愛関係にあるが、彼との結婚は今の豊かな生活を失うことを意味し、繰りかえされる求婚に応えられずにいた。そんな時、アメリカから大富豪の娘ミリーが社交界にやって来る。マートンに恋をし無邪気で明るいミリーだが、病は彼女の命を蝕んでいた。偶然その事実を知ってしまったケイトの心に暗い企みが浮かびあがる。やがて、ミリーに誘われるままケイトとマートンはヴェニスへ向かう。ある危険な思惑をかかえて……。

ヘレナ・ボナム・カーター　84年「レディ・ジェーン／愛と運命のふたり」で注目され、「眺めのいい部屋」(86)「ハワーズ・エンド」(92) で実力を発揮。「誘惑のアフロディーテ」(96)「十二夜」(96) 他に出演。先頃「THEORY OF FLIGHT」の撮影を終えた。

鳩の翼

THE WING OF THE DOVE

DATA　●監督／イアン・ソフトリー　製作／デイヴィッド・パーフィットほか　脚本／ホセイン・アミニ　撮影／エドゥアルド・セラ　出演／ヘレナ・ボナム・カーター、ライナス・ローチ、アリソン・エリオット　配給／エース　ピクチャーズ　●12月12日よりＢｕｎｋａｍｕｒａル・シネマにて（97年・英・101分）

STORY

映画評論家にして作家でもあるイギリスの鬼才ギルバート・アデアの小説を原作に、青春映画スターに恋をした英国紳士の姿をユーモラスに描く。お堅い小説家とて知られるデアスは、Ｅ・Ｍ・フォスターの文芸作を観ようと映画館にはいったところ、なぜかアメリカン・ティーン・ムービー『ホットパンツ・カレッジ２』が上映されていた。憤然とするデアスだが、ひとりの出演者に目が釘づけとなってしまう。端麗なヤング・アクター、ロニー・ボストックである。その日からデアスはビデオやティーン雑誌を買いあつめオタッキーなコレクター道一直線。やがて、実物のロニーに会おうと彼の住むアメリカ、ロングアイランドへ飛び……。

ラブ&デス

LOVE & DEATH ON LONGISLAND

DATA　●監督・脚本／リチャード・クウィートニオスキー　製作／スティーヴ・クラーク＝ホールほか　撮影／オリヴァー・カーティス　出演／ジョン・ハート、ジェイソン・ブリーストリー、フィオナ・ロウイ、シーラ・ハンコック　配給／エース　ピクチャーズ　●11月28日よりシネスウィッチ銀座にて（97年・英・93分）

Digitized by Google

ルル・オン・ザ・ブリッジ
LULU ON THE BRIDGE

DATA ●監督・脚本／ポール・オースター　製作／ピーター・ニューマンほか　撮影／エイリック・サカロフ　出演／ハーヴェイ・カイテル、ミラ・ソルヴィーノ、ウィレム・デフォー、ジーナ・ガーション　配給／日本ヘラルド
●12月中旬より恵比寿ガーデンシネマにて
(98年・米・104分)

STORY
「スモーク」「ブルー・イン・ザ・フェイス」の脚本・共同監督を経て、現代米人気作家ポール・オースターがついに自らメガホンをとった初監督作品。サックス奏者のイジーは、演奏中に一発の流れ弾をうけて、二度と演奏のできない体になってしまう。絶望に苦しむ彼は、ある日、見知らぬ死体とでくわし、気が動転したままそばにあった箱をもちかえると、中には不思議な石と電話番号の書かれたナプキンがあった。番号の先は女優志望セリアのもとで、ふたりはまもなく激しい恋におちていく。セリアはついに映画『パンドラの箱』の主役ルルに選ばれひとりアイルランドへ撮影に向かうが、その間マンハッタンにのこされたイジーの身に危険がふりかかり……。

ハーヴェイ・カイテル　68年、M・スコセッシの「ドアをノックするのはだれ？」で映画デビューし以後同監督の常連となる。特に90年代の活躍はめざましく「レザボア・ドッグス」(91)「ピアノ・レッスン」(93)「ユリシーズの瞳」(95) ほか代表作がつづく。

ラストゲーム
HE GOT GAME

DATA ●監督・製作・脚本／スパイク・リー　製作／ジョン・キリク　撮影／マリク・ハッサン・セイード　出演／デンゼル・ワシントン、レイ・アレン、ミラ・ジョヴォヴィッチ、ニール・ジョーダン　配給／クロック・ワークス
●12月19日よりシネマミラノ、シネ・アミューズにて (98年・米・134分)

STORY
ブラックムービーの旗頭にして、バスケ・フリークのスパイク・リーが、朋友デンゼル・ワシントンを迎えて描く、感動のヒューマン・ドラマ。その天才的なバスケット・プレイにより、高校生にして早くもマスメディアから注目を集めるジーザス。巨大ビジネスと化したプロ・バスケットの世界から引く手あまたの彼だが、そんな彼の前にある時、妻を殺した罪で6年の刑に服していた実の父・ジェイクが現れる。自らの果たせなかった夢を息子に託そうとするジェイクだが、母親を殺した彼を憎み続けるジーザスの間には深い溝が横たわる。やがて親子は、それぞれの夢と希望をかけて、再びコートで戦うことになるのだが……。

Digitized by Google

©TOUCHSTONE PICTURES

ラブゴーゴー
愛情来了

STORY
ハート・ウォームでお可笑な誘拐劇「熱帯魚」で、監督デビューを果たしたチャン・ユーシュンが台北の様々な愛を3部構成で描いた新作。パン屋で平凡な毎日を送るアシェンは、小学校の同級生リーファに再会し、自分のことなど覚えていない彼女に恋してしまう。ある時思い立った彼は、歌番組を通じて気持ちを伝えようとする。夢見がちなおデブのリリーは、ボーイフレンドのいない生活にうんざり。偶然ポケベルを拾った彼女は、何度もコールしてくる“彼”が気にかかり……。痴漢撃退グッズを売り歩くアスンは、内気な性格のために売上がちっとも伸びない。ある時イメージチェンジを図ろうと飛び込んだのは、リーファが経営する美容院だった。

DATA ●監督・脚本／チェン・ユーシュン（陳玉勲） 撮影／ツァイ・チェンタイ(蔡正泰) 出演／タン・ナ（甯娜）、チェン・ジンシン（陳進興） 配給／アジア映画社、扇町ミュージアムスクエア、オフィスサンマルサン ●12月12日よりユーロスペース、下旬より扇町ミュージアムスクエアほかにて（97年・台湾・113分）

ミスター・フリーダム
MISTER FREEDOM

STORY
写真集『ニューヨーク』で56年に衝撃的なデビューを飾った著名な写真家ウィリアム・クラインが、オムニバス映画「ベトナムを遠く離れて」につづき放った長編劇映画。アメリカの秘密組織からパリへ送りこまれたミスター・フリーダムは、アメフト選手のようなコスチュームをまとい日夜<自由>のために戦っている。ある日、パリの共産主義者どもをやっつけろ、との緊急指令が入り、早速仲間たちと活動を開始する。フランスの諜報組織スーパー・フレンチマンに協力を求めるが逆に手下たちに襲われる始末。難を切りぬけ次々と敵を倒した後、ようやく仲間の女スパイ・マリーのもとに逃げこむが、マリーの息子はミスター・フリーダムを恐れ……。

DATA ●監督・脚本・デザイン／ウィリアム・クライン 撮影／ピエール・ロム 音楽／セルジュ・ゲンスブール 出演／ジョン・アビー、デルフィーヌ・セイリグ、フィリップ・ノワレ、ドナルド・プレザンス、サミー・フレイ 配給／大映 ●12月5日よりシネ・ヴィヴァン六本木にて（68年・仏・92分）

Digitized by Google

パパラッチ
PAPARAZZI

STORY
ダイアナ妃の死をきっかけに一躍世界中に広がったその言葉“パパラッチ”。スクープのためなら金も時間も惜しまないパパラッチの疾走を描くアクション・コメディだ。警備員のフランクは大のサッカー・ファン。仕事をさぼって試合を観戦していたところ、不倫中のスターの前にすわったがためスクープ写真にばっちり顔が写ってまう。おかげでさぼりが会社にばれて仕事はクビ。怒ったフランクは雑誌社へ賠償請求を訴える。ところが、逆にパパラッチ稼業のミシェルからスカウトをうけ、パパラッチの世界に足をふみこんでしまう。やってみれば結構楽しい仕事で、しかもリッチな生活が後につづいた。もはや以前のフランクの面影はなく……。

DATA ●監督／アラン・ベルベリアン　製作／オリヴィエ・グラニエほか　脚本／ダニエル・トンプソンほか　撮影／ヴィンセンツォ・マラーノ　出演／パトリック・ティムシット、ヴァンサン・ランドン、カトリーヌ・フロ　配給／K2エンタテインメント
●12月19日より銀座シネパトスにて（98年・仏・111分）

モーテル・カクタス
MOTEL CACTUS

STORY
監督デビューとなるパク・キヨンが、撮影の名手クリストファー・ドイルと組んで作りあげた4つのオムニバス・ストーリー。モーテル・カクタス407号室を舞台に、若い男女の孤独があぶりだされていく（一話）。いまどきの少女チェは誕生日に恋人イとカクタスで一晩過ごすことを望むが、イは彼女を窮屈に感じ……（二話）。ビデオ撮影をするためカクタスを借りたソン。ところがカメラマンは現れず……（三話）。バーで時間をつぶしていたキムは唯一の客チェと酔った勢いでカクタスになだれこむ。ふたりはバカ騒ぎに明け暮れ……（四話）。再会したかつての恋人ミンをカクタスで待つキム。ミンは別れた時彼の子供を身ごもっていたと打ち明け……。

DATA ●監督・脚本／パク・キヨン　製作／チャ・スンジェ　脚本／ポン・ジュンホ　撮影／クリストファー・ドイル　出演／ジン・ヒギョン、チョン・ウソン、キム・スンヒョン、ハン・ウンス、ジン・ヒギョン　配給／アート・キャップ
●12月26日よりキネカ大森にて（97年・香港＝韓国・91分）

Digitized by Google

STORY

ロサンゼルスの荒れ果てたハイスクールの日常を、スタイリッシュな映像とマッシヴ・アタックをはじめとするクールなサウンドで描きだしたパワフルな人間ドラマ。落第させた生徒たちの逆恨みをかって重傷を負った高校教師ガーフィールド。心の傷は癒えぬまま15ケ月がたった頃、それでも教師を天職と信じる彼に代用教員の声がかかる。赴任先のアダムス高校は、ドラッグと暴力がはびこる廃墟同然の学校だった。しかも、ガーフィールドがうけもつクラスは、問題児があつまる“バンガロー”組。中でもセイザーたち4人グループは彼に敵意をむきだしにした。ある日、グループの一員が謎の死をとげると、ガーフィールドに犯人の疑いがもたれ……。

187

ONE EIGHT SEVEN

DATA ●監督／ケヴィン・レイノルズ　製作／ブルース・デイビーほか　脚本／スコット・イェイジマン　撮影／エリクソン・コア　出演／サミュエル・L．ジャクソン、ジョン・ハード、ケリー・ローワン　配給／ギャガ

●12月5日より松竹セントラル2ほか全国松竹洋画系にて（97年・米・119分）

STORY

アイマックスシアターの巨大スクリーンから飛だすかのように、3D映像の恐竜がど迫力で迫りくる桁はずれの映像体験。世界的に有名な古生物学者のドナルドを父にもつアリ。彼女もまた6500万年以上も前に絶滅した恐竜の謎に魅かれているのだった。父と助手が持ち帰った化石がティラノサウルスの卵ではないかと浮足立つ彼女だが、そんな時、博物館で起きた事故によって、現代と過去が融合してしまい、アリはたったひとりで恐竜たちが闊歩する原始の世界へと溯ってしまうのだった。自在に時を超える彼女は、過去の恐竜画家や学者たちと白亜紀の謎へと旅だって行くのだが……。

T—REX

T-REX／BACK TO THE CRETACEOUS

DATA ●監督／ブレット・レオナード　撮影／アンドリュー・キズナック　出演／ピーター・ホートン、リズ・スタウバー、カリ・コールマン　配給／アイマックス・ジャパン

●12月12日よりアイマックス・シアターにて（98年・米・45分）

Digitized by Google

ショムニ

STORY
週刊モーニングの連載に次いで今春放映のテレビドラマで一大ブレイクした、あのショムニが、「居酒屋ゆうれい」の渡辺孝好監督によって映画化。満帆商事経理課に勤務するフツーのＯＬ・塚原佐和子。彼女は男にフラれた明くる朝、O-157中毒で欠員の出た庶務２課へ急遽派遣されるが“ショムニ”こと庶務２課は、落ちこぼれＯＬの隔離病棟と呼ばれる社内の極北。抵抗むなしくショムニの扉をたたく佐和子だが、そこには、口汚い行動派の千夏や人の家庭を壊すのが生きがいの魔性女・カナ、愛猫をなでるだけが取り柄の井上課長など、噂に違わぬツワモノが待ち受けるのだった。果たして彼女は、悪夢のような一日を過ごすことになるが……。

DATA ●監督／渡辺孝好　原作／安田弘之　脚色／一色伸幸　出演／遠藤久美子、河合美智子、小林麻子、濱田マリ、高島礼子、小松政夫、佐藤允　製作・配給／松竹　●11月28日より全国松竹系にて（98年）

たどんとちくわ

STORY
「ときわ荘の青春」「東京夜曲」などの市川準監督が、椎名誠の原作をもとに、これまでとは一味も二味も違う超バイオレントなオムニバス巨編を完成。職業柄孤独な毎日を過ごすタクシー運転手の木田。ある日「たどん屋」を名乗る乗客に自分の身の上を語り始めた彼は、しだいに狂気の淵をさ迷いはじめ、ついには……（「たどん」）。都会の夜をさ迷う小説家の浅見は、なじみの料亭へとたどり着く。だが、自分が見つめられているような奇妙な感覚に襲われ、出された料理は箸の中で奇妙に動き出した！　トイレに駆け込みチャックを降ろした彼は、自分のイチモツが無いことに戦慄し……（「ちくわ」）。

DATA ●監督・脚本／市川準　原作／椎名誠　製作／山地浩　企画／中沢敬明　脚本／佐藤信介、ＮＡＫＡ雅ＭＵＲＡ　出演／役所広司、真田広之、根津甚八、田口トモロヲ、桃井かおり　配給／ギャガ　●12月５日よりシネマスクエアとうきゅうにて（98年・102分）

Digitized by Google

STORY

「かわいいひと」の総監督を務めながらも、自作では「夏の庭」からすでに4年の時がたった相米慎二監督が、現代の家庭の脆さと暖かさをみつめた待望のヒューマン・ドラマ。証券会社に勤める働き盛りの韮崎紘。彼は幼いころから父親は死んだと聞かされて育ち、今や良家出のまだあどけない妻との間に一人の息子をもうけていた。毎日の生活に何ら不満のない紘だが、ある日、浮浪者のような男に呼び止められ、「俺はお前の父親だ」と告げられる。混乱する紘を他所に、以来男は家に住み着いてしまい、彼がこれまで築いてきた人生を揺さぶり始めるのだった。

あ、春

DATA ●監督／相米慎二　製作／中川滋弘　脚本／中島丈博　プロデューサー／榎望、矢島孝　撮影／長沼六男　出演／佐藤浩市、斉藤由貴、山崎努、余貴美子、原佐知子、河合美智子、三浦友和、笑福亭鶴瓶　●12月19日よりテアトル新宿にて（98年・100分）

COMING SOON Topics

井土紀州作品「百年の絶唱」「猫耳」ほかリバイバル

●井土紀州監督「百年の絶唱」

ピンク四天王のひとり、瀬々敬久監督の脚本で知られる井土紀州が初監督（単独）した「百年の絶唱」。ひとりの失踪者をめぐって、虚ろな毎日を送る青年が遭遇する非日常を幻想的イメージで綴り、各方面で絶賛を得た佳品が、スクリーンに帰ってくる。ほかに瀬々監督による脚本作「来たるべき光景」（96）、榎本敏郎監督の脚本作「スローモーション」（96）、そして92年に吉岡文平と初共同監督した、「百年の絶唱」のプロローグともいえる「第一アパート」を連続レイト・ショー。

11／28～12／5　「百年の絶唱」
12／6・7　「来たるべき光景」
12／8・9　「スローモーション」
12／10・11　「第一アパート」
※中野武蔵野ホールにて21時より。

「百年の絶唱」

●ネオ・アバンギャルド「猫耳」

93年のロッテルダム映画祭を皮切りに各国映画祭で上映され、イアン・ケルコフなどから絶賛された日本のアンファン・テリブル＝黒澤潤監督の「猫耳」。ハーモニー・コリンの「GUMMO／ガンモ」を先取りしていたかのような痛々しくもイノセントなイメージの羅列は、今も鮮烈な印象を残す。今回のリバイバル上映では、「東京天使病院」ほかの黒澤潤短編作品集や、MTVステーションID作品で注目を集めるアニメーター黒坂圭太の作品集を連続上映。

11／21～12／4　「猫耳」
12／5～12／11　黒澤潤短編作品集
12／12～12／18　黒坂圭太作品集
※BOX東中野にてレイトショー

「猫耳」

Digitized by Google

「ドン・ファン」のNY前夜祭

サウンド版ディスク（ほかの映画）のレーベル、周囲の数字に注意。

●「ドン・ファン」 DVDの特典世界最初の音楽映像 Don Juan（1926）

text by **日野康一**

1926年8月8日、ニューヨークで自前の音声をもつ最初の長編劇映画「ドン・ファン」が公開された。映画音楽を収めたレコードを映写機とシンクロナイズさせるディスク式（CD—ROMを同期させるDTSのルーツ）サウンド版、音楽だけでセリフはサイレント形式の字幕、声はない。レコードは大きな46センチ、昔のSPと同じ材質で落とすと割れる。LPと同じ33 1/3回転、片面10分強。全編のべつまくなしのオーケストラ曲。トーキーとは自前の声でしゃべり歌う発声映画を言い、翌年、アル・ジョルスンが歌い語りかける最初のディスク式トーキー「ジャズ・シンガー」が作られた。

サイレント末期のスーパー美男アクション・スター、ジョン・ギルバートの主演作。スペインの城主の息子ドン・ファンは愛の貴公子だ。女性に殺された父親は「気にいった女は笑顔で受け入れ、すぐに忘れろ」と遺言した。ローマ女性の半分は彼にのぼせあがり、政権を狙うボルジア家の悪女に利用されて破滅し、クライマックスは牢獄を脱出してチャンチャンバラバラの大アクションになる。メアリー・アスター、マーナ・ロイ共演、アラン・クロスランド監督。新興会社ワーナーはこの大ヒットで破産を免れた。「キネマ旬報」ベスト・テン10位。

本編前に世界最初の音楽映像と思われるミュージック・クリップ8本が収録されて大正末期にタイム・スリップする。保存されている音楽、映画、オーディオ史上貴重な文化的遺産であろう。同内容のビデオのパッケージはひとことも触れず、価値観を忘却している。

アメリカ映画製作配給協会会長ウィル・ヘイズ（厳しい映倫制度を作って悪名高い）が音をもつ意義を説くスピーチは唇が完全に同期するトーキー。本編の音楽も受け持つヘンリー・ハドレイ指揮ニューヨーク・フィルのワーグナー「タンホイザー序曲」にはじまる。圧巻は日本でも人気が高かった伝説的なヴァイオリニスト2人の絶頂期の名演。甘美な音色で音楽ファンを陶酔させたミッシャ・エルマンの「ユーモレスク」「ゴセック」と、エフレム・ジンバリスト（ジュニアは俳優になりTV「サンセット77」に主演）が弾く「クロイツェル・ソナタ」。メトロポリタン・オペラの若きプリマのアリア、ポップス系では弦の魔術師の曲芸演奏、ダイナミックなスパニッシュ・ダンスなど特典映像は57分30秒。72年前と思えぬ周波数帯域の広さと、歴史に名高い人の姿と演奏に接した驚き。フィルムとディスクをひとつのモーターで駆動し、口と音をぴたり合わせたRCAの技術は凄い。ダイナミック・レンジは狭くオーケストラ録音はきつい。同じ条件で録音したはずの本編は聞き劣りした。

サウンド版ディスクのシェラック素材は摩滅する。レーベルに1から40の数字が印刷され、一回映写するごとに数字を消し、40回で破棄する。音楽映像の部分はRCAが保存していたと聞く。

〈データ〉ビーム・エンターテインメント発売、モノクロ、本編1—11分15秒。DVD＝11月25日新発売、片面1層、3800円。ビデオ＝発売中、上下2巻、各3800円。

Digitized by Google

デビュー作の風景

野村正昭

イラストレーション・宮崎祐治

㊹那須博之「ワイセツ家族・母と娘」(82)

98年夏、東映Vシネマ『新・湘南爆走族／荒くれKNIGHT3』(99年1月リリース)『同4』の撮影現場を取材に、茨城県波崎海岸に出かけた時、那須監督に「『デビュー作の風景』でお話を聞かせて下さい」と頼むと「俺のはスゴイよ」。以前、金子修介監督にも「那須さんの『デビュー作』は面白いよ」と断片的に聞かれされていたが、実際に伺うと、いやはや聞きしにまさる面白さ。どこまで誌上に再現できるか分からないが、まずは高校時代の話から。

「学生運動とかやってたけど、ゴダールとかよく見たし、原将人が、うちの高校に来たりして、いろいろ映画を見に行くようになったんだ」。20歳の頃「ちょうど高度経済成長期のど真ん中に、大金持ちの家のお嬢さんと駆け落ちした上に結婚しちゃうんだよ」。何しろ彼女の貯金だけでも6千万円！　親元が興信所を総動員して二人の居場所を見つけ、彼女はロンドン郊外の城に幽閉されるが「ポンド紙幣をかき集めて救出に行き連れて逃げたわけ」。とりあえず隠れ家に棲むが、結局発見され、大企業の跡目を継ぐように説得される。「今なら即OKだけど、70年代前後だから、資本家の言いなりになるのはどうかってなもんで」泣く泣く別れる。「その時に、すごい喪失感があって、必然的に本を読んだり映画を見るようになり、特に映画は重要なものだと思いはじめた」。出版社やTV局に就職しようとしたが、「どれも全然ダメでさ、日活の募集が2月頃にあって、ようやく受かったんだ」。同期入社には、中原俊、堀内靖博、加藤文彦監督らがいた。

最初に見習いで就いたのは、曽根中生監督「淫絶未亡人」(76年)。「白バックの前で全裸の絡みがあって、照明をピカピカに当てて、それはまだ目に焼き付いてるよ。いきなり山科ゆりに芝居をつけろなんて言われて、1時間30分位時間をくれたりした。そういう会社だったんだね」。最初から最後まで完璧に就いた初めての作品は、長谷部安春監督「暴行切り裂きジャック」(76年)。「セカンドの時は曽根、田中登、澤田幸弘の3人が多かった。曽根さんからは、ごんたくれの精神。田中さんからはカット割り。澤田さんからは、『高校大パニック』(78年)などでアクションを教えられた。ただ、その3人は、そうしょっちゅうは撮らないから、ちょうどいい位の感じ。あれだけたくさん本数を撮った西村昭五郎監督には1本しか就いてない」。

初チーフは根岸吉太郎監督「朝はダメよ！」(80年)。「あんまりチーフをやっても仕様がないなと思い」、セントラルアーツに出向してTV『探偵物語』のセカンドに就く。その頃、正月にインドに旅行して帰国したら「医者に肝炎と診断されて大騒ぎになり、にっかつが消毒されたりした。3カ月位休んで、イメージフォーラム誌に評論を投稿したりしていた(笑)」。虎の門病院を紹介されて行くと「全然大丈夫、酒を飲んでも平気だと言われて、また現場に復帰すると、3カ月の間に会社の俺に対するイメージが変わっ

Digitized by Google

「ワイセツ家族・母と娘」

にっかつ作品　プロデューサー／佐々木志郎、山田耕大　脚本／那須真知子　撮影／杉本一海　出演／志麻いづみ、森村陽子、汐路章、阿藤海　公開／1982年5月14日　同時上映／斉藤信幸監督「黒い下着の女」

［なす・ひろゆき］1952年生まれ。76年、東京大学卒業と同時に日活に助監督として入社。曾根中生、澤田幸弘、田中登監督らに就いた後、82年に監督デビュー。同年の第2作「セーラー服百合族」に続いて、フリーとなってからも“ピー・バップ・ハイスクール”シリーズ（85〜88）を大ヒットさせ、以降「紳士同盟」（86）「新宿純愛物語」（87）「右曲がりのダンディー」（89）など、新人やアイドルを主演に迎えた快作を発表。「ろくでなしBLUES」「地獄堂霊界通信」やOV「リップスティック・堕ちていく女」（すべて96）を経て、99年1月8日にはOV新作『新・湘南暴走族　荒くれKNIGHT3』をリリースする。

てきたらしい」。当時、にっかつが生撮りビデオでAVを撮ることになり、監督会と助監督会に声をかけた。監督会で手を上げたのは、小原宏裕監督だけで、小原監督が2本撮り、那須さんが3本。「製作費100万で40分。まあベッドがありゃいいんだから、セットを使って撮影期間は1日、キャメラは2台で撮る。1日で撮らないと予算オーバーするから、朝8時から夜8時までに撮っちゃうんだよ（笑）」。これは結構売れたが、製作担当者がそのノウハウを持って退社したため、生撮り路線は続かず、いよいよ本篇を1本撮ることになる。さすがにチーフをやっておかないと格好がつかないだろうと、白鳥信一監督「女事務員・色情生活」（82年）、藤井克彦監督「女新入社員・5時から9時まで」（82年）に就いた。

「ワイセツ家族・母と娘」（82年）は「AVを100万で撮ったんだから、500万もあればいいだろうと言われて、5日で撮った。ロマン・ポルノの中では安い！　安い！　半日位実景を撮って、2時間ドラマ用の豪邸のセットを使った。企画の山田耕大もブニュエル風にやろうかと言って、すっぽんの首を斬り、その血で乾杯する件りがあったし、草原で食事をするラストシーンでは、ローストチキンにハエが集ってるけど、汚いから集るんじゃなくて、おいしいから集ってると、そんな感じでいこうぜと撮ったんだよ」。完成した作品を見て上層部は激怒。「30分に切れとか、編集をやり直せとか言われ」、撮影所内では、すっぽんの祟りだと大騒ぎになった。その後、撮影所の事業部で、カラオケビデオを撮ったりしたが、「会社としては給料が勿体ないから、森田芳光監督『㊙噂のストリッパー』（82年）のチーフをやれって言うんだよ。にっかつは伝統的に外部の監督に冷たくて、鈴木則文監督が『堕靡泥の星・美少女狩り』（79年）を撮った時にも、演出部は誰も就かなかったんじゃないかな」。千葉の浦安で摘発されて休業中のストリップ劇場にスタッフが泊りこみ「夜の8時からファックシーンを撮ったんだけど、夏だし暑いしさ。森田さんに何カットだって聞いたら、彼はちゃんとカット表を持ってて32カットあるって言うんだよ。32カットなんて大変だし、終らないじゃない。そうしたらベテランの水野尾（信正）キャメラマンが、俺に任せとけって。レールを敷いて、カットを割らずに効果的に撮れるって、キャメラマンに実際そう言われると、森田さんも、ああ、こういう風にして撮るんですか、いいですねって。これはシメシメと（笑）」。仕上げのダビングの時にチーフ助監督はつきあわなくてもいいという慣例があり「それで俺も行かなかったわけ！（仕上げに）行かずに、鈴鹿の8時間耐久レースに行って、せっかく鈴鹿まで来たんだから、その後そのまま下関に行って、フェリーに乗って韓国に渡ったんだよ」。

韓国には結局2週間滞在。「戻ったら金子（修介）とか新津（岳人プロデューサー）が来て、会社で大変なことになっていますよって。渋々、撮影所に行くと、製作部の課長に事実関係の調書をとられて、会議室に重役とか組合の幹部が全員揃って、査問委員会が開かれ、労働協約上9時から5時までいなきゃいけないと。最後に営業本部長が立ち上がって判決文を読むんだよ（笑）。自衛隊なら、これは反逆罪だってね。1週間後に撮影所の所長室に呼び出されると、演出部が全員集められて、今後は9時から5時まで来るように、今までのように遊んではおれないと。会社に対して謝れって言うんだよ。これを機に、そういう体制にすると」。

その頃、渋谷でブラブラしていたら、かつて日活のプロデューサーで、当時キティ・フィルム社長の伊地智啓氏にバッタリ会い、「どうしたらいいですか」と訊ねると「今すぐ、すっぱりやめた方がいい」と言われる。入社時の撮影所長だった黒澤満氏にも電話で相談すると「やめてもどうしようもない。我慢した方がいいぞ」と言われる。考えたあげく、辞表を郵送するが「そうしたら新津が飛んできて、また会社で大騒ぎになっています。やめられたら困ります」と言われ、なしになったが、二作目の「セーラー服百合族」（83年）がヒットして、シリーズ化され大逆転。85年、にっかつを離れてフリーになってからも「ピー・バップ・ハイスクール」（85年）が大ヒットして、これもシリーズ化されたのだから、つくづく強運の人だと思わざるをえない。鈴鹿→下関→韓国の話といい、日本列島を縦断し、はみ出すスケールの大きい行動力には圧倒されるばかりだ。

Digitized by Google

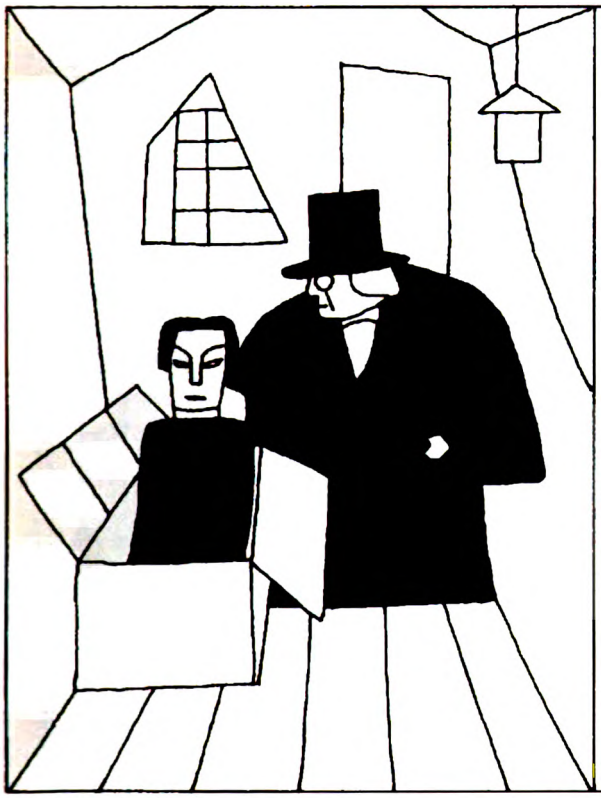
百年の夢

山田宏一

連載第84回

スコリモフスキ来たる！

――『出発』



タイトルカット：和田　誠

やっぱりジャリ（ジャリリではない、為念）の「ユビュ王」の名せりふの引用からはじめなければならない。ジャン＝リュック・ゴダール監督の『男性・女性』（一九六六年の作品だが、きれいなプリントで目下東京では上映中である）で、ジャン＝ピエール・レオーがスプレーで壁に「ドゴール＝Ub……」と書きかける独裁者のシンボル、愚者の暴力性そのものといった不条理演劇の元祖の名言である。それは「この話の舞台はポーランド、つまり、どこでもない」というのである。

ポーランドの映画作家、イェジー・スコリモフスキの作品の特徴をひとことで言ってのけたような名せりふだ。『特徴なし』（あるいは『身分証明書』）というのがスコリモフスキ監督のデビュー作のタイトルでもあった。

そのイェジー・スコリモフスキが来日するのだ――それもベルギー映画の監督として！

『出発』

スコリモフスキ監督が一九六七年に――ということは三十一年前に！――ベルギーで撮った作品だ。白黒映画である。その日本公開に先立つ来日である。

たしか一九六五年のカンヌ映画祭の「批評家週間」に当時二十七歳のポーランドの新鋭イェジー・スコリモフスキ監督の第二作である『不戦勝』が出品されたとき、まだシャロン・テートと結婚する前の、ということはまだアメリカで『吸血鬼』（一九六七年の作品である）を撮る前の、たぶんイギリスでカトリーヌ・ドヌーヴ主演の『REPULSION　反撥』（一九六五）を撮った直後の、ロマン・ポランスキー監督が、真昼間から大酒をくらって泥酔したまま、映写会場のジャン・コクトー・ホールに現われ、というのも、彼は後輩でもあり仲間でもあるスコリモフスキの映画について一席ぶつことになっていたわけなのだが、何を言うかと思ったら、いきなり、「ワイダとスコリモフスキと俺のあいだには噂されているようなホモ的な三角関係などあったわけではない」というようなことを大声でしゃべりはじめたので、小ホールの客席が度胆を抜かれたように一瞬シーンとしてしまい、それからドッと笑い声が上がったことを思いだす。

詩人でボクサーでもあるという変わったキャリアの持ち主である一九三八年生まれのスコリモフスキは金髪の美男子で、『不戦勝』ではボクサーの役で主演もしており、アンジェイ・ワイダ監督とは『夜の終りに』（一九六一）で、ロマン・ポランスキー監督とは『水の中のナイフ』（一九六二）で、それぞれシナリオライターとして仕事をしていた。『夜の終りに』では出演もしていたが（ロマン・ポランスキーや作曲家のクシシュトフ・T・コメダも傍役で出演している）、一九八〇年にワイダ監督が『大理石の男』（一九七七）の公開に合わせて来日したときにインタビューをするチャンスがあり、スコリモフスキのこともちょっときいてみた。

――戦後のポーランド映画、のちに『ポーランド派』とよばれる映画作家のグループあるいは世代には、ちょっとフランスのヌーヴェル・ヴァーグに似た連帯意識のようなものがあったのでしょうか。『世代』（一九五四）や『夜の終りに』には、ワイダさんの仲間たち、といってもワイ

Digitized by Google

『出発』

ダさんよりはずっと若い人たちですが、ロマン・ポランスキーやイェジー・スコリモフスキや作曲家のクシシュトフ・T・コメダが友情出演をしていますね。

ワイダ そう、あの連中はわたしよりもずっと年下だからね。同じ世代ではない。ときによって、それぞれ別々の映画で仕事をしました。スコリモフスキが現れたのはわたしが『夜の終りに』を撮るころで、あの映画にチョイ役で出てくるのも、そんなわけからです。あの映画の台詞は彼が書いたのです。

――スコリモフスキは当時まだ二十二、三歳ですね。

ワイダ そう、彼は若い詩人でした。そして映画をつくりたがっていました。

――『夜の終りに』に出てくる若者たちはワイダさんの青春の姿、あるいはむしろポーランドの戦後の青春群像だったのでしょうか。

ワイダ たしかにわたしの青春そのものでした。しかし、わたしの世代そのもの、戦後のポーランドの青春群像のイメージと言えるかどうか。あの当時の仲間たちは……そう、だいいち、そんな大人数ではなかった。一部の連中が『夜の終りに』の人物たちのように、あの一九五〇年代にジャズにうつつをぬかしていたな。

――たぶん、そんな前衛的グループのなかから、クシシュトフ・T・コメダのようなすばらしいジャズの作曲家が生まれるわけですね。

ワイダ そう、あの当時、ジャズはご法度だったから、連中はどこかに隠れてこっそり演奏していた、地下運動みたいにね（笑）。当局に言わせれば、アメリカ音楽など退屈の極、腐敗した西側の象徴だったから。わたしの映画、『夜の終りに』の音楽もそうだが、とくにポランスキーの映画の作曲を担当したコメダが、たしかに、その「退廃」と「腐敗」のジャズメンの筆頭だったんじゃないかな。

私たちがクシシュトフ・T・コメダの魅惑のジャズを初めて聴いたのはロマン・ポランスキー監督の珠玉の短篇『タンスと二人の男』（一九五八）の前に『夜の終りに』を見たときだったと思う。そして、時を超え、世代を超えて、『夜の終りに』と『出発』をつなぐものが、クシシュトフ・T・コメダの音楽、ジャズでもある。「耳で映像のリズムを決める」とコメダ仕込みのジャズ狂のスコリモフスキは語る。『出発』はミシェル・ルグランの妹（だったか、姉だったか）、クリスチァーヌ・ルグランの歌うささやくような、嘆くようなスローなバラードとともにはじまる。

因みに、クシシュトフ・T・コメダはその後、ロマン・ポランスキーとともにハリウッドに行き、ポランスキー監督の『ローズマリーの赤ちゃん』（一九六八）の音楽をほとんど最後に（遺作がもう一本あると思う）クリストファー・コメダとして、交通事故でこの世を去ることになる。

スコリモフスキ監督の長篇映画第一作は、すでに述べたように、一九六四年の『特徴なし』（または『身分証明書』）だが、これはウージの国立映画学校を出るときの卒業制作だったそうで、しかもこの作品がつくられるまでのいきさつには天才的な早業を思わせるこんなエピソードがある。在学中につくらされた五分とか十分とか三十分とかの短篇習作を卒業のときに一本につないだら見事な長篇映画に出来上がったというのである。自作自演であった。

ポーランド政府はさっそくスコリモフスキに第二作目の製作費を提供した。こうして一九六五年、『不戦勝』がつくられ、カンヌ映画祭の「批評家週間」に出品されるや、ジャン＝リュック・ゴダールの熱狂的な支持もあって、フランスのアート・シアター（シネマ・ダール・エ・デッセー）で配給されることになり、スコリモフスキはフランスで一躍、新しい映画のアイドルになった。そのころ、私はパリにいて、スコリモフスキの映画を見る幸運に恵まれたのだった。

第三作『パリエラ』（一九六六）もヨーロッパの若いファンたちを熱狂させ、スコリモフスキは「映画の詩人」とよばれるに至った。『不戦勝』と『パリエラ』は東京・青山の草月ホールで上映されたことがあり（この上映には当時私もかかわっていたが、志やよし、後味は悪しの思い出のみである）、その後、一九八五年に、『パリエラ』は自主上映グループ「シネマテーク・ジャポネーズ」により自主配給された。『パリエラ』と日本初公開（といっても、スプラッシュとよばれる二番館の二本立て公開だった）の『早春』（一九七一）を見て狂ったのは私だけではないはずだ。

『出発』はスコリモフスキ監督の長篇第四作で、初めて外国で、ベルギーで、撮ることになった――その後の亡命と無国籍（というか、多国籍というか）のキャリアの予兆となる作品である。

主演のジャン＝ピエール・レオーとカトリーヌ＝イザベル・デュポール改めカトリーヌ・デュポール、それに撮影のウィリー・クラント（ベルギー人のキャメラマンである）は、ゴダールの『男性・女性』のスタッフ・キャストであった。

映画はストップモーションになった画面からはじまり、黒い徳利のセーターを着こむジャン＝ピエール・レオーが急に動きだす。フランソワ・トリュフォー監督の『大人は判ってくれない』（一九五九）の少年、アントワーヌ・ドワネルが、『二十歳の恋』（一九六二）のあと、また失恋して引越したのか――だが、そこはパリではなく、ベルギーの見知らぬ都市である。

Digitized by Google

コートを着て小さなリュックサックを背負って暗い表にとびだしたジャン＝ピエール・レオーは、スクーターのエンジンがかからないと知ると、いきなり走りだす。まるで『夜霧の恋人たち』（一九六八）から『逃げ去る恋』（一九七八）に至るアントワーヌ・ドワネルの冒険に向かって出発するかのように――だが、『出発』は『夜霧の恋人たち』の前年に撮られた作品で、監督は「ポーランドのゴダール」の異名をとった若き俊才、イェジー・スコリモフスキだ。

そして、ジャン＝ピエール・レオーもまた、一時的ながら、トリフォーから離れてゴダールに限りなく接近して『男性・女性』の主役を演じ、ゴダールの製作によるジャン・ユスターシュ監督の『サンタクロースの眼は青い』（一九六七）にも出たあとだった。

『夜霧の恋人たち』以後のアントワーヌ・ドワネルは、むしろ、トリュフォーばなれしたジャン＝ピエール・レオーが、ゴダール／ユスターシュ／そしてスコリモフスキ体験をへて、ある意味ではその攻撃的な姿勢を内向型から外向型に転換させ、大きくふくらみ、飛躍したと言ってもいいイメージだったのである。

イタリアのベルナルド・ベルトルッチのように、スコリモフスキもゴダール映画に魅せられ、刺激されて、決定的に映画づくりにのめりこんだことを告白している。ジャン＝リュック・ゴダール監督の『男性・女性』のジャン＝ピエール・レオーとカトリーヌ・デュポールを『出発』に起用したのも明らかにゴダールへのオマージュであり、あたかも『男性・女性』の続篇のようなものを意図したかにすらみえる。因みに、カトリーヌ・デュポールもまた、ジャン＝ピエール・レオーのように、トリュフォーの映画（『二十歳の恋』、『柔らかい肌』、一九六二）からゴダールの映画をへてきた女優であった。マルクスとコカコーラの申し子ならぬヌーヴェル・ヴァーグの申し子である二人の共演だったのである。少なくとも、『出発』の共演にはゴダールとスコリモフスキの交遊とまではいかずとも共感のようなもの、親密な付き合いが感じられる。

当時、ゴダールに共鳴する各国の新進気鋭の映画作家たちがゴダールの周辺にむらがり集まって、過激な、ときには過剰なまでの「新しい映画」の神話が息吹きはじめていた。スコリモフスキにベルトルッチ、西ドイツのジャン＝マリー・ストローブ、ブラジルのグラウベル・ローシャといった俊英、鬼才が、ゴダールを中心に、親交を結び、刺激し合うという状況が生まれていた。

スコリモフスキ監督の第五作『手を挙げろ！』（一九六七）はスターリニズム批判のかどでポーランド政府からにらまれて公開禁止になった。一九六九年に私はポーランドに行き、国営の映画会社（と言うべきか、政府機関と言うべきか）フィルム・ポルスキを訪ねて、『手を挙げろ！』について聞いたところ、そんな映画はかつてわが国でつくられたことはないと代表（製作部長だったか？）が断言したものである。

スコリモフスキが、先輩のポランスキーにならって、亡命映画作家として、世界各国をさまよいはじめるのは、この事件のあとだ。まず、チェコで短篇（オムニバス映画の一話らしい）『対話』（一九六八）、次いでイタリアに行って、イギリスとスイスとイタリアの合作による『ジェラールの冒険』（一九七〇）、ロンドンとミュンヘンでイギリスと西ドイツの合作による『早春』（一九七〇）、西独とアメリカの合作による『キング、クイーン、ジャック』（一九七二）、そしてイギリス映画『ザ・シャウト』（一九七八）を撮るあたりまでロンドンに住みつき、そのあと、アメリカで『ムーンライティング』（一九八〇）、『出世が最高の復讐』（一九八四）、『ライトシップ』（一九八五）を撮って、現在までアメリカに定住、といったあたりの事情は来日したおりにより詳細に明かされることになるだろう。

『ライトシップ』は何年か前にたしか東京・新宿の東映パラスの一館で一日だけ（だったと思う）上映されたことがある。ロバート・デュヴァル主演で、スコリモフスキの若き日にそっくりなスコリモフスキ・ジュニアが出演していた。どんな映画かを一と口では言えないが、ただもう息を呑む傑作だったことはたしかだ。

『出発』はこれから封切られる映画だ。評価はこれから見る人が決めることになる。ここでは、ただ、できるだけ多くの人を映画に誘うべく二言、三言述べさせていただく。

『出発』は、明らかに低予算で早撮りのモノクロの小品ながら、あの、鮮血のしたたるような青春映画の珠玉の傑作『早春』を――薄汚ない中年の欲求不満のブルジョワ婦人のイメージも少年が立ち食いをするホットドック屋のギャグもふくめて――すでに予告するスコリモフスキならではの世界だ。そして、『早春』のように、『出発』もまた、少年の人生への出発、その修行時代を描く。ジャン＝リック・ゴダール監督の『中国女』（一九六七）のギョーム／ヴィルヘルム・マイスターのように、ジャン＝ピエール・レオーほど修行時代、人生の見習いを見事に（永遠に、というよりもずばり、いつまでたっても）体現するにふさわしい俳優はいないだろう。

『出発』のジャン＝ピエール・レオーは、走る。映画がはじまるやいなや、夜の街を走りに走る――バスター・キートンさながらに。

映画そのものも走りつづける。

「キャメラが詩人の眼になるときにのみ真の傑作が生まれる」というオーソン・ウェルズの映画の定義を心に刻み、座右の銘としてきたというポーランドの「失われた世代」の最後の映画作家は、詩人でもありボクサーでもありスピード狂でもあった。そして、「走る列車から飛び降りてリングに駆けこむボクサーのように」映画を撮ることを心がけ、「アントニオーニのようにのろのろとした退屈な映画だけはつくるまい」と豪語していた。

『出発』は息せき切って走りつづけるアナーキーな青春そのものだ。ジャン＝ピエール・レオーはドジでおっちょこちょいで、そんな自分にいらだちながらもおどけてみせるサイレント・クラウン的なズッコケぶりだ。空威張りの陽気なピエロだ。

初夜の儀式のように緊張感とともに親密感あふれるラストシーンは、もちろん、これから見る人のためにあまりバラさないように、そこではジャン＝ピエール・レオーが思いかけず、というのも、いざとなると、女の子の前では恥ずかしがりで無器用なところを見せ、しかもカトリーヌ・デュポールのかたわらで――そう、彼女のかたわらで――寝過ごしてしまうのだとだけ言っておこう。

Digitized by Google

沢田としき

UNDERGROUND

アンダーグラウンド

EMIR KUSTURICA

エミール・クストリッツァ監督

GORAN BREGOVIC

ゴラン・ブレゴヴィッチ 音楽

Digitized by Google

TIME OF THE GYPSIES

ジプシーのとき

EMIR KUSTURICA

エミール・クストリッツァ監督

GORAN BREGOVIC

ゴラン・ブレゴヴィッチ音楽

「アンダーグラウンド」より前の作品で、同じくエミール・クストリッツァ監督と音楽ゴラン・ブレゴヴィッチ コンビのこの映画も好きだ。ジプシーのオルガン弾きペルハン少年の片側が白い紙でふさがっているメガネというキャラクターを見ただけで、なぜかとってもうれしくなってしまう。

Digitized by Google

Digitized by Google

URGA

ウルガ

NIKITA MIKHALKOV

ニキータ・ミハルコフ監督

EDUARD ARTEMIEV

エドワルド・アルテミエフ音楽

オルガンといえば、「ウルガ」を思い出す。モンゴルの大平原に暮らす遊牧民ゴンボー家とロシア人の長距離トラック運転手セルゲイの出合いから始まる物語。草原を吹き渡る風のような音楽とセルゲイの背中に彫られた入れ墨の楽譜を長女がオルガンで弾くシーンがいい。時々、思い出しては口ずさむ。

Digitized by Google

シネマ

立川志らくの 徒然草 57

「ヴァンパイアのどうでもいい話」

どうも吸血鬼って奴は分からない。制約が多すぎるんだよね。だいたい自分の姿が鏡に映らないって何なんだい？　という事はですね、吸血鬼は己の顔を知らないって事になるわな、鏡に映らないんだから。それから大蒜が嫌いというのもよく分からん。じゃあ、吸血鬼は韓国には存在しないのかね。理屈からすると存在しない事になるよね。あと十字架が恐いってぇのも変だ。ただ十字架が恐いだけでなく、棒やなんかで十字架の形をされるだけで「ヒーィッ」なんて驚いたりする。ならば血液をたくさん保管してあるであろう赤十字を訪れる事は出来ないし、案山子を見たって「ヒーィッ」と腰を抜かす事になる、って雀か！　更に吸血鬼のだらしないのはお天道さまに当たると溶けてしまうところだ。「あっしは日陰者でござんす。まともにお天道さまを拝む事は出来やせんよ」と鶴田浩二が呟くのとはわけが違う。渡世人だって日光浴ぐらいは出来る。だけど吸血鬼は溶けちゃうんだから情けない。塩をかけられたら溶けてしまうナメクジを悪く言えない。こうやって考えてみると吸血鬼は本当にお気の毒だ。

で、何が言いたいかというと、吸血鬼なんて恐れるに足らない野郎だって事です。そう思いながらジョン・カーペンターの新作「ヴァンパイア／最期の聖戦」を観賞した。いやあ、驚きました。私の吸血鬼に対する長年のフラストレーションを見事にこの映画はとっぱらってくれやした。これに出てくる吸血鬼は大蒜も十字架も恐がらないのだ。弱点はお天道さまだけ。それすら因縁のある十字架で儀式をすれば解消出来るってんだから大変だ。まあ、贅沢を言わせてもらえれば、やはり吸血鬼はクリストファー・リーみたいな方がいいなぁ。今風なんですよ、これの吸血鬼は。まるで河村隆一みたいでやんの。やっぱり「巨人軍は紳士たれ！」と同様、「吸血鬼は紳士たれ！」でなくてはいけません。でも、最近の吸血鬼物としてはイイ部類に入ると思う。コッポラの「ドラキュラ」は嫌だったなぁ。頭がデコボコしてるんだもの、大きなお世話だけど。

私はジョン・カーペンターはあまり好きな監督ではないが、結構観賞ているんだよね。何だか気になるカールの新製品みたいで、所詮カールなんて（カールってお菓子のカールね）どれだって同じようなものなのだが、うす塩味だとかお好み焼き味なんてぇのが出ると思わず買ってしまうじゃないですか、それと近いのよ、ジョン・カーペンターの映画って。結局は「ハロウィン」と「遊星からの物体X」を超えるものはないんだけど、でもついつい食指が動いてしまうのだ。

「ヴァンパイア／最期の聖戦」

しかし何でもいいけれど、「遊星からの物体X」という題名はひどいやね。これはクリスチャン・ナイビー監督の「遊星よりの物体X」のリメイクなのだが、〝より〟を〝から〟にしただけじゃないの。ややっこしいんだっつの！「ダイヤルM」も「ダイヤルMを廻せ！」から〝を廻せ！〟を取っただけだし、「サブリナ」も「麗しのサブリナ」から〝麗しの〟を取っただけで、だから何だちゅうんだ！「ヴァンパイア最期の聖戦」も何とかならなかったのかなぁ。「最期の～」は「インディ・ジョーンズ」で使ったもの。やはりここは「もの凄く強いヴァンパイア」なんてぇのはどうだろうか（ダメに決まっている！）。それに近頃は原題のままが多いというのも知恵のないはなしだよ。日本語の美しさを大切にしなきゃ。奥が深いんだぞ、日本語は。「おひけぇなすって」なんかアメリカの吹き替えでやられたら「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ」だぞ（何の話をしているのやら）。私なんか「LAコンフィデンシャル」をいまだにちゃんと言えないもの。「ユージュアル・サスペクツ」なんぞ舌を噛みそうで恐ろしい。「インデペンデンス・デイ」を観賞に行った時なんか切符売場で前のおじさんが「えーと、インデ、インデペ、インデパン、いや、インデを一枚下さい！」と言ってたのを私は目撃している。

俳優の名前も何故かここのところ難しくなっている。ディカプリオなんて本来色男の名前ではない。新しい乳製品みたいだ。グウィネス・パルトロウもヘンテコな名前だ。まるで呪文だよ。ウィノナ・ライダーのウィノナって何なんだい……って名前だけど。

ところで「月の輝く夜に」のシェールって女優は名字は無いのかね。まるで江戸時代の町人だ……あはっ、失礼しました。

Digitized by Google

リレー・エッセイ

映画と私

87 作家 泡坂妻夫

一番数多くの映画を観た時期は、高校生のときであった。

そのころ、戦争のため長い間洋画が輸入されなかったのが、続続と公開されるようになり、それが名画座に流れていた。いずれ劣らぬ名画揃いで、なにを観ても感激の連続であった。

最高記録は一日に五本。二本立ての名画を二軒梯子し、あと一軒の最終回に滑り込んだ。深夜興行のないときだったから、これが限界だった。

ただ映画ばかりではない。歌舞伎ではのちに人間国宝となった先代の中村吉右衛門が健在だったし、寄席では先代桂文楽、古今亭志ん生、先代桂三木助、三遊亭円生などが、いずれも脂が乗った盛りだから見逃すわけにはいかない。日曜日になると勇み立って、いつもより早起きをして家を飛び出るのだった。

映画は入場料の関係で、封切館を敬遠していたのだが例外はある。黒澤明の「白痴」のときで、完成作品はなんと四時間以上の上映時間、一般の封切りは二時間余にカットされるという。半分に切るならフィルムを縦に切れ、と黒澤明が激怒した問題作である。このノーカット版が封切りに先立って、特別興行されることになった。このときだけは、入場料のことなど言っている場合ではなかった。

名画座各館にはいろいろな思い出が残っているが、中でも忘れられないのは新宿の帝都名画座である。

帝都座は伊勢丹の前にあり、戦後はじめて「額縁ショウ」というストリップを公演して話題になった。その五階が帝都名画座で、しばらくすると帝都座は日活のものとなり新宿日活と名を変え、名画座も日活名画座となった。

この名画座の経営は意欲的で、たとえば日曜日の上映前にサンデーモーニングプレゼントを設け、蘆原英了や高橋忠雄を呼び、その人たちの解説でシャンソンやタンゴのレコードを聞かせていた。

上映する映画の選び方も、ただ漫然と名作を並べるだけではなく、名画座コレクションとして、名優のおもかげ集や、監督の全集、イタリアではじまったネオ・リアリズモ大鑑などが随時組まれていた。このお蔭でつい見逃していた映画と出会うことができたり、思わぬ拾いものをして狂喜したりした。

圧巻はジュリアン・デュヴィヴィエ全集の十六本で、これによって彼の全作品を観ることができた。拾いものの方は、レオニイド・モギイ作の「美しき争い」やルイ・ジュヴェ出演の「二つの顔」などであった。

また、名画座ではしばしば「日本最後の上映」と謳うことがあった。中には最後の上映が最後でないこともあり、ルネ・クレール作の「最後の億万長者」は三度も付き合ってしまった。というのは、クレールは最も好きな監督だったからだ。

クレールの作品はどれも大好きだ。そこにはいつも上質な笑いがある。クレールの映画はだいたい喜劇の系列に入るが、普通の喜劇とはかなり味わいが違う。

まず、クレールの笑いは出演者の芸に頼らない。クレールは個性的な俳優を多く使うが、

「自由を我等に」

泡坂妻夫
あわさか・つまお　1933年東京生まれ。東京の紋章上絵師の家に生まれる。家業をつぎ、紋章上絵師としての仕事をこなす傍ら、推理小説を書き、76年雑誌「幻影城」に「ＤＬ２号機事件」を発表。78年「乱れからくり」で日本推理作家協会賞を、88年「折鶴」で泉鏡花文学賞を、90年「藤枯梗」で直木賞を受賞している。マジシャンとしての腕も高く評価されており、創作奇術で石田天海賞受賞。

Digitized by Google

その人たちに面白い芸をさせて観客を笑わすわけではない。

次に、諷刺性が強いとよく言われるが、クレールの諷刺は少しも攻撃的ではない。社会諷刺というより、人間社会に対する感想といった方がふさわしい。日本の川柳の「穿ち」とどこか通じるところがある。

加えて、あまり言葉では笑わせない。強烈なギャグを連発するわけでもない。

これと正反対なのがチャップリンの喜劇映画だろう。彼の映画の中心はいつもチャップリンで、さまざまな芸を披露している。彼のギャグは過激で、ときには観客に向かって大演説をぶったりもする。

クレールの笑いのエッセンスは「自由を我等に」の中にぎっしりと詰め込まれている。この映画は笑いの主題が「自由を我等に」というタイトルに示されている傑作だ。冒頭が刑務所内の作業所で、服役者がベルトコンベアーの前で働いている。

刑務所の生活に自由はなく、更にベルトコンベアーの流れ作業にも自由は宥されない。クレールはまず二重の不自由状態を設定し、その秩序が破壊するときに生じる笑いを企んでいるのである。

たとえば、制服を着た人たちの整然とした行列の中で、一人がふらりとその秩序を崩すと、これがたまらなくおかしいのだ。

刑務所内でのベルトコンベアーの場面は、次にレコード工場内でのベルトコンベアーの場面に対応する。冒頭での場面が見事な伏線となって、ちょっとした人間的な脱線が秩序を乱し、工場内は大騒ぎになってしまう。

秩序といえば、音楽も整然とした音階やリズムを持っていなければならない。クレールはその音楽でさえ、しばしば中断させたり、狂わせたりしている。そのことが笑いを呼ぶという、ちょっと信じられない手も使っている。

ルネ・クレールの笑い

制服やベルトコンベアーは、人間が人間の自由を奪うために作り出したものだ。「自由を我等に」の中で登場するタイムレコーダーや上流社会のマナーも同じ。

人間は否応なく杓子定規の生活を強いられているわけで、無意識のうちいつも息苦しさを感じている。だから、整然とした秩序が乱れたり、人工的なものが脱線したりするとほっとし、快い笑いを感じるらしい。

自然界には完璧なものはなに一つとしてない。砂丘の風紋も均一ではないし、完全な縞模様のシマウマもいない。

にもかかわらず、あくまで秩序を作ろうとする人間への不可解が、クレールに数数の傑作を生み出させたのである。

Digitized by Google

女たちとの恋愛、それ以外

それ以外は消えうせろ！

美女を背に無防備すぎるぞ、ゴルゴ!?

菅野美穂さん、中村麻美さんの美女を間に、夢見心地のミー、伊藤潤二さん、及川監督のなんともファンタスティックな図!?

先月報告した、怒涛の如く撮影中の三池崇史監督新作「LEY LINES(仮題)」！ 憎っくき天候不順で当初のスケジュールが後までズレこみ、平均睡眠2～3時間の撮影隊が迎えた最終日、朝一番から開始して終了したのは夜中の4時近くだった!? お、お疲れさまでしたっ!! さ、更に、このわずか3時間後には次の作品の撮影に出発する三池監督!? アンビリーバボー!? す、凄すぎる！ "男の仕事"を黙々と全うし続けるその背中に、同じ男として武者震いを感じずにはおれないっ!!

ウォッシャ～っ！ サミュエル・フラーじゃないけど、ここにも映画という名の戦場を次々と渡り歩くカッドウ兵士共がいる！ 金もコネもなく、自分の腕一本を武器に進み続けるザ・マ～ン！ ここは一歩一歩が勝負の終わりなきサバイバル・ロードだ!? 「だってぇ～、汗臭いのニガテなんだもぉ～ん」などとのたまう輩にゃ、一生分かんなくていいっ!? 風呂に入らないのが何だ！ 靴下が臭いのが何だ！ 行くぞ～ワシも！ たとえそれが闇雲でも!! お疲れさまを言ったら、すぐさまおはようございます、だ!! 目指せリー・マーヴィンの毛穴の開いた鼻っ！ ウォーレン・オーツの酒臭い息っ！ ハリー・ディーン・スタントンのヒビわれた皺っ！ 女だって、ケリー・リンチの剥き出しな体毛っ！ エレン・バーキンのねじ曲がった唇っ！ ウォォー～っ、この戦場は男気と女気の宝庫ダーッ!? なんだか分からんがモーレツに感動してるぞ～オレはあぁぁ!?

あまりの興奮度に鼻血すら流しちまった私ですが……興奮→血、とくればホラー？ ホラーといえば東京ファンタ（かなり強引（笑））!? てなわけで、今年もやって来ましたファンタの季節！ 奇しくもハロウィンの日と重なった98国際ファンタスティック映画祭オープニング・デイ、恒例のオールナイト上映第一弾に小生も出演の及川中監督作品「富江」が公開されました（祝）!! コミック・ファンならいわずもがな、伊藤潤二さん原作の人気SFホラーの映画化で、「日本製少年」の及川監督が久々に放つ青春モダンホラーだっ！ 少女達の微妙に浮遊する心情を、ホラーという枠組でリリカルに描いた「日本製少女」ともいえる（？）ファンタジー・ムービー！ 主演は菅野美穂さん、中村麻美さん、洞口依子さんら美女ずくめ♥ 小生は殺されてバラバラにされても、残された細胞から再生して、男達を狂わさずにはおかない謎の美少女を追う刑事役!? どちらかと言えば犯罪者系の多い僕（笑）、なにやら珍しい役柄？と思いきや、事件を追いながら何気に犯人に魅かれていくヤッパリな奴!? かどうかは、観てのお楽しみだっ！

及川監督と僕は、昨年、様々な映像監督に撮っていただいたテレビ東京のレギュラー・ドラマ「恋、した。」のひとつで御一緒したことがありました。その時は時間的に慌ただしくて、ユックリ話をする機会がなかったのですが、今回、打ち合わせで監督のフェイバリット・ムービーは「ジョーズ」（！）だとか、意外や意外な話が聞けたりして、実に嬉しかったのでした！

ファンタ祭の「富江」上映前後、舞台挨拶に登場した及川組の面々&伊藤潤二さん！ ドでかスクリーンでの上映に興奮気味な僕のアガリ&浮かれ調子なアイサツも（いつもじゃン!?）、暖かい拍手で包んでくれた客席と及川組のみなさんに、感謝感激も一つ感謝っ!!

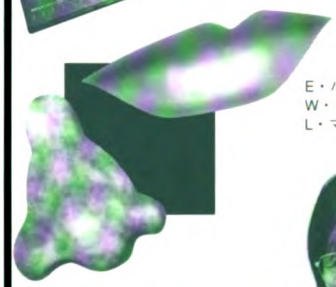
画面のテメーの姿を見るのは、いつになってもどーにもこーにもド恥ずかしかったりしちゃいますが、今時の世間を眩しく感じちゃうテメーとしちゃ、映画館の怪しい暗闇のスクリーンにだけ、ヒッソリと生息し続けられたらいいのになぁ……な～んて、センチメン

Digitized by Google

田口トモロヲ
TAGUCHI TOMOROWO

1957年11月30日東京都生。漫画家、演劇人としてアングラ・インディペンデントシーンでの活動を経て、伝説のパンクバンド・ばちかぶりのボーカリストとして注目される。「鉄男」(89)に主演したことから俳優を生業とすることを決意。以後、様々な映画作品で活躍中。96年日本映画プロフェッショナル大賞功労賞、97年毎日映画コンクール男優助演賞を受賞。

超レアな(?)マイお宝ビデオ「ニュージャック&ベティ」他…、「性遊戯」持ってる人、ダビングさせて下さい!



E・バーキンの匂っ!?
W・オーツの臭い息!?
L・マーヴィンの鼻っ!?

タル・オヤジーになっちまったこの日この時ファンタの日でした!?

ガラにもなく僕をこんな気分にさせたのは、オールナイト興行ってやつ? あぁぁ、胸がキュンとしちゃうわオールナイト!? 思い出します、映画館だけが友人だった若かりし頃を。明日のことも考えず、通い続けた名画座ナイト! 今は亡き文芸坐地下で見まくった〝無頼〟〝野良猫ロック〟シリーズ! 浅草東宝で全網羅した〝クレージー〟〝日本一〟シリーズ! 自由が丘武蔵野推理劇場のピンク映画時代の高橋伴明監督&尖鋭的ピンク監督作品集! キング・オブ・アングラの名に相応しい新宿蠍座の若松孝二監督特集! そこで、強烈な出会いをした足立正生監督の「性遊戯」、沖島勲監督の「ニュージャック&ベティ(モダン夫婦生活讀本)」! ほかにも、ATGや日活ロマンポルノに東映実録モノからB面映画のオールナイト・ロ〜ング……ホントお世話になりました! ビデオなき時代、名画座が僕の先生でした! いーことも悪いことも、み〜んな教わったのだ!? はっきし言って、僕は映画館に人生かどわかされましたっ(笑)!!

数カ月程前、情報誌で〝ロマンポルノ名作特集〟の文字を発見した僕は、も〜シンボーたまらなくなって、かつての名画座の薫り残す高田馬場ACTミニシアターに行っちゃいました! 上映作品は村川透監督「白い指の戯れ」!! いつ見ても超クールだぜ荒木一郎さん! やっぱりフィルムの中に住みつけば、何十年たってもクールでいられるのだ!? ソー・クールな脚本は御存知、故・神代辰巳監督っ!! 実は僕、過去に一度だけ神代監督と仕事をさせていただいたことがあります。93年、TVの2時間ドラマ「盗まれた情事」です。脚本荒井晴彦さん&高木功さん、主演三浦友和さん、余貴美子さん、高島礼子さんという贅沢すぎる顔ぶれ! 僕は、現場で酸素ボンベの管を鼻に通した姿で演出する神代監督の迫力に緊張しっぱなしで、頭の中ではタイムリーに見続けてた「青春の蹉跌」「悶絶!! どんでん返し」「嗚呼! おんなたち・猥歌」……大好きな映像達がグルグルしている!? そして、回転するメリーゴーランドの周りを走りながら会話する1シーン1カットや、女性の足&指先に微妙に触れつつクドく演技など、監督の大胆な演出に驚きっぱなしの連続! これぞ体感する神代節! たった一度でしたが、神代ワールドの住人になれた自分はしあわせ者でしたっ!!

しかし、不運にもこの作品、内容的に過激で暗いという理由(らしい?)で、オクラ入りしてしまい、ようやく2年後、神代監督が亡くなられてから追悼の意を込めて放送されたのでした……。撮影後の現場で、ホンのちょこっとですが監督とお話し出来た経験は、今も僕の宝物の一つです、ありがとうございましたっ!!

何度死んでも、人々が心のどこかで望む限り、再生し増殖する永遠の美少女が「富江」ですが、映画も、たとえ個人(=作品に関わる人々)は死んでも、フィルムに生息し続ければ、映画館の暗闇のスクリーンに何度でも再生することが出来る!? 「富江」の男達が、危険を感じながらもことごとく少女に魅かれていくよーに、映画も永遠だからこそ、体の弱い僕すら闇雲に走らせてしまうのかも…? ってことはヤバイじゃん!? 体にだけは気をつけよーっと(笑)!?

神代監督「盗まれた情事」、宝物です!!

映画にかどわかされて……!?
宝物は戦場にある!

隔月連載第20回

可愛い少女たちとの恋愛それと映画それ以外は消えうせてもいい醜いんだから

Digitized by Google

Almost Cool

オールモスト・クール 133

『トゥルーマン・ショー』のグッド・デザインと映画的想像力の暗殺

芝山幹郎 Mikio Shibayama

最初にひらかれた札はスペードの2だ。それを見て、こちらはハートの3をひらいておく。つぎに相手はダイヤの4をひらいてくる。こちらもそれに応じて、クラブの6あたりをひらいておく。手がかりは、いまのところない。彼がどんな手を作ろうとしているのか。あるいは、どんな手に向かっているところなのか。なにしろ、ひらかれた札は2と4だけなのだ。ただし、キングやエースといったハイ・カードは手の内に隠されているかもしれない。印の異なる2や4が伏せられている可能性だって十分に考えられる。いずれにせよ、ファイヴ・カード・スタッドならば、配られるカードはあと二枚、セヴン・カード・スタッドならば、残りは四枚ということになる。話をあまりややこしくするのもなんだから、ここではとりあえず、ファイヴ・カード・スタッドということにしておこう。いうまでもないだろうが、これはポーカーの一種である。

さて、三枚目がひらかれたところで、雲行きはにわかに怪しくなってくる。彼はいきなり、ダイヤの2を切り出してきたのだ。予測される範囲内とはいえ、こちらはいささか虚をつかれる。いきなりワン・ペアをさらしてくるというのは、手の内にもう一枚の2かもう一枚の4がひそんでいるからだろうか。それとも、なにか別の意図があってのことなのか。前者のケースならば、彼はすでに三枚の2をもっているか、2と4のツー・ペアができていることになる。後者のケースならば、ブラフということも考えられる。この手は大きいぞと見せかけておいてこちらの戦意をそぎ、早目の脱落を狙う。だとすれば彼は、自分の手がさほど伸びないことを、前もって察知しているのかもしれない。その真意はわからないが、ここは思案のしどころだ。

四枚目の切り出しに入ると、事態はいよいよ波乱ぶくみとなる。相手はなんと、クラブの2をひらいてきたのだ。表に見えているだけで、2が三枚。これはとりもなおさず、最低限フルハウスが……いや、ことによると2のフォー・カードができていることを意味する。ただし、伏せられた最後の札が2でも4でもなければ、その手は2のスリー・カードでとまっているわけだ。通常の状況ならば、こちらはここでドロップするのが妥当な線だろう。だが、仮にこちらも手の内のカードをふくめて、3と6のフル・ハウスがすでに完成しているとしよう。もし相手が2と4のフルハウスならば、勝利はこちらのものとなる。この場合は、降りたくないと考えるのが人情というものだ。相手は、こちらの心理的ゆれを見透かしたように賭け金をレイズしてくる。さあ、こちらとしてはどう出るべきか。

ピーター・ウィアーの新作『トゥルーマン・ショー』を見終えたあと、私は思わずこんな連想にふけってしまった。理由は追い追い説明しよう。いや、すでにこの映画をごらんになった方には説明するまでもないかもしれない。まったく、この映画のウィアーときたら、そして脚本と製作にたずさわったアンドリュー・ニコルときたら、シンシナティ・キッドも顔負けのポーカー・プレイヤーぶりを見せてくれるのだ。

『トゥルーマン・ショー』の主人公は、トゥルーマン・バーバンク（ジム・キャリー）という三十歳の男である。トゥルーマンはシーヘイヴンという海辺の町に暮らしている。ここは、新築の建売住宅が新品の入れ歯のように立ちならぶ町だ。水色の屋根。ベージュやピンクやアイヴォリーの壁。白い垣根。プラスチック時代のユートピアにありがちなことだが、建材にはここぞとばかり煉瓦やガラスが選ばれている。そして要所要所には、いかにもつくりものめいたネオ・ヴィクトリア風の装飾……。

トゥルーマンは保険会社のセールスマンをしている。本日は快晴。空には白い雲が浮かび、かもめが数羽ゆったりと舞っている。彼は会社へ出かける準備をする。白いパンツ。草色に白いストライプの入ったシャツ。クリーム色のヴェスト。焦げ茶のタイ。淡い茶色のグレンチェックの上着。サラリーマンにしてはずいぶんカラフルな服装だが、海辺のリゾート地を思わせるこの町ではさほど不自然な感じを与えない。出かけるトゥルーマンを見送るのは妻のメリル（ローラ・リニー）だ。メリルは町の病院で看護婦をしている。色白の金髪にピンクの頬。一見おしとやかな主婦のようだが、その眼にはときおり底意地のわるい光がよぎる。近所に暮らすトゥルーマンの母親（ホランド・テイラー）は、孫の誕生を心待ちにしているようだ。

外に出たトゥルーマンに、隣家の住人がおはようと声をかける。眼と耳の垂れたダルメシアンも、人なつこくつきまとう。トゥルーマンも愛想よくそれに答える。Good morning. And in case I don't see ya, good

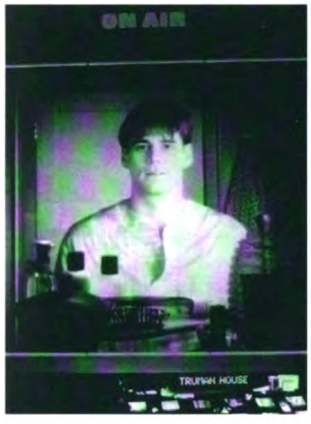
『トゥルーマン・ショー』

Digitized by Google

afternoon, good evening and good night.（おはよう。あ、このあと会えないかもしれないから、ついでにいっとくね。こんにちは、こんばんは、おやすみなさい）

このあたりは、いかにもふだんのジム・キャリーだ。ただし、ゴムのお面を思わせる得意の百面相は披露しない。白い歯を出してニカッと笑い、フェリーの船着き場に設けられたキオスクで新聞とファッション雑誌を買い、保険会社の前で双子のセールスマンと握手をかわし……。いや、じつをいうと、今日の彼は出勤の途中、妙なできごとに遭遇している。家を出てまもなくのことだが、空から照明器具のような物体が降ってきたのだ。ん？　なんだ、これは？　トゥルーマンは首をかしげる。すると、その不安を拭おうとするかのように、カーラジオから流れるニュースがこんなことを伝える。《先ほど、故障した人工衛星が部品を脱落させたという情報が入りました。落下地域はシーヘイヴン周辺と思われます。ご注意ください》

ここまでが、『トゥルーマン・ショー』の導入部分だ。だが、この場面を眼にする前に、われわれは一風変わったクレジット・シークエンスを見せられている。さりげなく現われさりげなく消えるそのシークエンスには、奇妙な特徴がある。役名はともかく、演じる俳優の名前が、まったく見おぼえのないものなのだ。そして、もうひとつ意表をつかれることがある。クレジットの第一行にならんでいるのはTruman Burbank as himself という文字ではないか。



先ほどのポーカーを例に引くなら、ピーター・ウィアーは（というより彼とアンドリュー・ニコルのふたりは）、この段階で早くもスペードとダイヤの2を切り出している。ワン・ペア完成。するとわれわれは、反射的にとまどう。身構える、というほどおおげさなものではないが、空気中にただようかすかな異臭を嗅ぎつける。なんだ、このワン・ペアは？　なぜ、わざわざ、こんな手札をわれわれの前にひらいてみせるのだ？　そう感じた瞬間から、われわれは『トゥルーマン・ショー』の仕掛けを意識しはじめる。そういえば、ピーター・ウィアーのデビュー作とは、二十年前に公開された『ピクニック・アット・ハンギング・ロック』だったはずだ。そして、アンドリュー・ニコルの監督処女作は、近未来のDNAディストピアを舞台にした『ガタカ』だったではないか。どちらの映画も、虚実の糸をこまめに織り上げ、怪しい感触のテクスチャーをつくりだすことに腐心した作品といってよい。そんなふたりが手を結んだとあれば、『トゥルーマン・ショー』の構造も一筋縄でいくわけはない。しかも主演俳優は『ライアー、ライアー』のジム・キャリー。これだけのポーカー・プレイヤーがそろえば、どんな手が打たれてもおどろくにはあたらない。

そんな気持をあざわらうかのように、彼らはつぎつぎと妙なカードを切り出してくる。たとえば、先にも紹介したトゥルーマンの衣裳がある。自宅でくつろぐときは、水色のポロシャツと藍脂色の半袖セーター。シーヘイヴンの町を離れようとするときは、黄色のシャツに灰色のチェックのタイを締め、赤地に白のボーダー・ストライプが入ったプルオーバーをかぶり、黒い二本線が腕の部分に入ったクリーム色のスタジアム・ジャンパーを着込む。ノーマン・ロックウェルの絵をコミカルに誇張したようなその服装は、どこか日常的な色彩感覚からずれたものを感じさせる。

あるいは、突然スケールに狂いが生じたような映像に首をかしげる人がいてもおかしくはない。絵葉書に出てくるようなサンセット。アニメーションを思わせる異様にサイズの大きな月。その月を浜辺で見ていたトゥルーマンの頭上にのみ降りそそいでくる雨。しかもその雨は、彼がよけると、スポットライトのようにそのあとを追いかけてくる。ウィアーはこれらの映像を、キャメラの遊戯のように観客の前に提出する。

だが、「ずれ」の創出は、これだけにとどまらない。たとえば、台所に立つメリルが、万能キッチンナイフを使う際、微妙に声の質を変えるのはなぜだろうか。あるいは、ビールのシックス・パックをもったマーロン（ノア・エメリック）が、その銘柄をことさらキャメラに向けるのは不自然に感じられないだろうか。

これらはすべて、「露出された断面」にほかならない。いいかえれば、ニコルとウィアーは二枚もしくは三枚の「2」を、かなり早い段階からわれわれの前にひらいてみせる。これをどう解釈するかは、われわれ見る側の観察力や洞察力にかかってくる。ニコルとウィアーは、観客に対してかなり手のこんだ知能テストを挑んでいる。つまりこの挑発は、自分たちの「デザイン」がどこまでわれわれの視力に耐えうるかをためすと同時に、その「デザイン」をどれほど遠くまで発展させられるかという問いをはらんでいる。

ただ、私はここでちょっとひっかかるものをおぼえる。この手口――ヴァーチャル・リアリティの発想やメタフィクションの定石といいかえてもよいが――には、どこか寒い部分がある。ざっくばらんにいうなら、想像力と観察力のあいだには、そして想像力と洞察力のあいだには、微妙だが決定的な距離がある。この事実を、ふたりの作家は意図的に黙殺したのではないか。それとも彼らは、ゲームのデザインに熱中するあまり、そこに現われる肉体や言語までをもゲームに奉仕させ、映画的想像力の暗殺を図ったのだろうか。話の構造といい、衣裳といい、装置といい、『トゥルーマン・ショー』はじつによくデザインされたゲームだ。だが残念ながら、映画の快楽とゲームの楽しみは、断じて同じものではない。私は彼らとのポーカーを楽しむことはできたけれど、彼らの「映画を見た」と実感することはできなかった。

Digitized by Google

田沼雄一 映画を訪ねて

その㊱ 「F［エフ］」のヒカルと郁矢が愛を誓った音楽堂を見に行ったのだが……

鉄格子の冷たいゲートの間から撮る［日比谷公園野外音楽堂］。

「シティ・オブ・エンジェル」（九八年）を観たとき、こういう映画を日本でやるとしたらぜひ金子修介監督にやってもらいたい、と思った。「F［エフ］」（九八年）のようなタッチで。少しオーバーかもしれないけど、ニコラス・ケイジがメグ・ライアンに触れる場面のジワ～ッと伝わってくる優しさと、熊川哲也が二度、羽田美智子を抱き寄せるその優しさには共通する温かさを感じる。

「F」はマスコミ各紙（誌）にあまり多く書かれなかったちょっと可哀相な映画だ。今年早々の松竹お家騒動の余波をもろにかぶってしまったみたいで、冷たい扱いを受けたような気がする。作品の名誉回復を願いたい。イイ映画なんだけどなぁ。

ヒロインは荻野ヒカル（羽田美智子）。二〇代半ば。独身。中学時代から同級生、久下章吾（野村宏伸）と付き合っているのだが、なかなか結婚にふみ切れない。そんな彼女を見てバツイチの同級生、江島有加（村上里佳子）がイラつくのが可笑しい。久下役の野村宏伸の〈煮え切らない〉演技も好印象を残している。

ヒカルは中学時代、両親を亡くす。落ち込んでいた。そんなある日、下校途中の公園の音楽堂で一人バレエの練習に励んでいる少年のひたむきな姿を見て励まされ、「元気が出てきた」と笑顔を取り戻す。

それから一二年後、イギリスのロイヤルバレエシアターでプリンシパルを務めている古瀬郁矢（熊川哲也）が足の骨折の治療のため一時、帰国する。古瀬はヒカルがあのとき見た〈バレエ少年〉だった。

古瀬役の熊川哲也は実際にロイヤルバレエ団で日本人として初めてプリンシパルとなった名ダンサー。もちろん映画初出演である。

ある日、偶然からヒカルと古瀬は出会う。お互い、なんとなく惹かれ合う。運命の出会い、いや再会。でも二人はかつて公園の音楽堂で出会っていたことなど知るよしもない。

話はど～んと飛んで、ラストで一人、公園の音楽堂のベンチに座り落ち込んでいるヒカルの前に郁矢がやって来る。あのときと同じように郁矢はバレエを踊る。ヒカルを舞台に上げ、そこで優しくしかし力強く抱きしめる。もう絶対に離れない、いや離さない。二人が結ばれることを予感させて映画は終わる。郁矢がグイッとヒカルを抱き寄せるショットの美し

Digitized by Google

ヒカルの住む秋葉原［オギノデンキ］のビルは取り壊されていた！

さにウットリとなる。名ラストシーンだ。

ヒカルと郁矢の出会いの場、そして永遠の愛を誓い合う舞台となったのは東京・日比谷公園内の［日比谷公園野外音楽堂］。日比谷の野音、である。

かつてここでどしゃぶりの雨の中、頭脳警察のライブ（当時はそんなシャレた言葉を誰も使わなかった、単にコンサートと言っていた）にアツくなった。キャロルのコンサートのときも確かどしゃぶりで、かぐや姫のコンサートのときは雷雨だった。日比谷の野音といえばどしゃぶりの雨のイメージだ。

ここ十何年、行っていない。「F」を観て久しぶりに行きたくなった。ヒカルと郁矢の愛の場所という新しい思いを持って訪ねてみたのだが、冷たい鉄格子のような黒いゲートが行手を阻み、音楽堂の中に入れなかったのだ。コンサートがない日くらいはゲートを開けておいてほしい。写真を撮りたくてやって来る人間もいるんだからさ。だいいち「F」の中でヒカルは下校途中に章吾と有加とぶらっとやって来たし、ラストでも一人ベンチに座っている。誰でもいつでも入れる音楽堂であってほしい。コンサートが行われる日だけ厳しいチェック態勢を取ればいいのだ。市民の憩いの場として開放しておいてほしい。

日比谷公園野外音楽堂でくり広げられるラストの名場面。

日比谷の野音に入れない悔しさを胸にヒカルの住む［オギノデンキ］へ向かうことにした。画面から彼女の住んでいるビルの前の大通りに［万世橋］という表示板を見ることができた。万世橋と言えば電気街で有名な秋葉原。表示板が立っている大通りは万世橋警察署のまん前。JR山手線・有楽町駅から秋葉原へ（ヒカルと章吾、有加は下校途中、秋葉原からわざわざ日比谷に出たのか。スゴい中学生だな）。

郁矢のFM番組を通じてヒカルは運命の出会いを果たす。

万世橋は秋葉原電気街の外れ、神田駅寄りに位置している。警察署のすぐ横を神田川が流れ万世橋が架かっている。ヒカルの住むビルはその万世橋、神田川の手前にある。ビルの前にちょっとした緑地の植え込みがある。秋葉原駅から徒歩一分ほど。すぐ見つかる、はずだった、本来ならば。

なっなんとヒカルの住んでいるビル、オギノデンキの入っているビルは取り壊されていたのだ！　こんなことがあっていいのか、これだから映画の舞台となった場所には早く行っておいたほうがいいのだ。

現在新しいビルの建設が始まっている。ラオックス万世橋ビル、が建てられるという。近くにいた工事関係者の方に、古いビルはいつ頃取り壊されたのか訊いてみた。

「九月頃だったと思いますよ。新しいビルの建設がはじまったのは一〇月に入ってからですからねぇ」

わずか一月足らずの差でヒカルの住んでいる（た）ビルを写真に収めることができなかった。悔しい。日比谷の野音に入れず、ヒカルのビルもこの眼で見ることもできなかった。なんだか余計「F」という映画が可哀相に思えてきた。

ヒカルはどこへ引っ越してしまったのだろう。ひょっとしたら郁矢といっしょにロンドンへ行ってしまったのかもしれないなぁ。

Digitized by Google

和田誠　三谷幸喜の映画対談

これもまた別の話

●今月のお題「タイタニック」――前編

船が真っ二つに割れたタイタニック映画は初めて見ました

和田　「タイタニック」は、封切って間もなく見に行ったんですけど混んでて全然入れなくて、それきり何か月も諦めてて、この間やっと観たんですよ。土曜日の一回目ですぐ座れたけど次の回はもうズラッと並んでた。

三谷　まだ混んでるのか。僕は最初、去年の東京国際映画祭のオープニングで見たんです。ちょうど「ラヂオの時間」(97)の上映の前日にやったので見せてもらって。その日はディカプリオが舞台挨拶したんですけど、次の日に同じ舞台で挨拶したっていうのが、僕のちょっとした自慢だったんですけど(笑)。その後、妻がどうしても観たいと言うので劇場に観に行って、その後飛行機の中でやってたのをたまたま観て。都合三回観てるんです。

和田　飛行機の中の小さい画面で観るとどうですか?

三谷　僕は二回観てたから良かったですけど、あれで初めて観た人はちょっとかわいそうですね。やっぱり大画面じゃないと。そもそも、あれって飛行機の中で観る映画じゃないと思うんですよ、乗り物パニック物っていうのは(笑)。嫌な気持ちになりますよね。

和田　飛行機事故じゃないからまだいいけど。飛行機の中では「大空港」(70)とか「エアフォース・ワン」(97)みたいな、飛行機事故やハイジャック物はやらないものでしょう。

三谷　「ディープ・インパクト」(98)はやってました。「乱気流」(97)とか、逆に飛行機で観てみたい気もしますけど(笑)。これ以上の臨場感はない。

和田　豪華船では上映しないのかな、「タイタニック」は。

三谷　イベントとしては最高ですね。屋形舟もいいですよね。ドライブイン・シアターみたいに沢山集めて、大画面で。

和田　タイタニック物の映画というのは過去にも何本かあって、僕も「SOSタイタニック」(58・註①)なんかを観てるんですけど、あんまり印象がないんです。

三谷　僕、結構観てるんですよ、タイタニック物は。「失われた航海」(79・註②)とか。昔から好きだった。密室物だからかな。「SOSタイタニック」は、今回改めて観直したら脚本がエリック・アンブラー(註③)なんですね。意外な感じがしますけど。映画の脚本も沢山書いた人なんですか?

和田　僕はスパイ小説しか知りません。

三谷　僕もそのイメージしかなかったのでびっくりしました。アンブラーの力かどうか分からないですけど「SOSタイタニック」は面白かったですよ、やっぱり。

和田　面白かった記憶はあるけど、ディテールをほとんど覚えてないんです。主役がケネス・モアだったことくらいしか。

三谷　タイタニック物って、恋愛がらみの物語が多いんですよ。「失われた航海」もそうだったし。でも「SOSタイタニック」はドキュメンタリー・タッチなんです。タイタニックにまつわるあらゆるエピソード、多分実話だと思うんですけど、それが出てくる。あの楽隊のエピソードなんか、昔観た時は涙が止まらなかった。

和田　船が沈み始めてもずっと最後まで演奏してるっていう話ですね。今回の映画にも出て来ますね。

三谷　有名な話なんでしょうね。

和田　今回はあまり活躍しなかったけど、キャシー・ベイツ(註④)がやったモリー・ブラウンっていう乗客がいて、この人を主人公

註1「SOSタイタニック」監督／ロイ・ベイカー　出演／ケネス・モア

註2「失われた航海」監督／ビリー・ヘイル　出演／デイヴィッド・ジャンセン

註③　エリック・アンブラー(1909〜1998)
イギリスの小説家。『あるスパイの墓碑名』『ディミトリオスの棺』『インターコムの陰謀』などの作品があり、『怒りの海』(53)『メリー・ディア号の難破』(59)『トブカピ』(64)など映画の脚本も手掛けている。

註4　キャシー・ベイツ(1948〜)
テネシー州生まれ。71年「ババずれてるぅ!」で映画デビュー。90年に「ミザリー」でアカデミー主演女優賞を受賞。主な出演作は「ぼくの美しい人だから」(90)「フライド・グリーン・トマト」「迷子の大人たち」(92)「ノース／小さな旅人」(94)「悪魔のような女」(96)など。

註⑤「不沈のモリー・ブラウン」監督／チャールズ・ウォルターズ　出演／デビー・レイノルズ
コロラドの貧しい田舎娘から金山王夫人となり、タイタニック号事故では勇名を称えられたモリーの半生を描く。

註6「タイタニックの最期」監督／ジーン・ネグレスコ　出演／バーバラ・スタンウイック、クリフトン・ウェッブ

Digitized by Google

にした「不沈のモリー・ブラウン」(64)っていうミュージカル映画もあった(註⑤)。

三谷 それはタイタニックが沈むシーンもあるんですか?

和田 僕は観てないんです。大地真央の舞台は見ました。タイタニックものでは他に、クリフトン・ウェッブが出てるのもあったでしょう。

三谷 「タイタニックの最期」(53・註⑥)。

和田 あれは日本では劇場公開してなくて、僕もテレビで見たんだと思うんです。

三谷 最近ビデオが出たんですよね。最近ではテレビ映画の『ザ・タイタニック』(96・註⑦)っていうのもあって、これは船長をジョージ・C・スコットがやってるんです。結局、四種類のタイタニック物を観たんですけど、必ず出てくるのが船長と造船会社の社長のイズメイと設計士のアンドリュース、それからモリー・ブラウン。それぞれ似たような俳優さんがやるんです。モリー・ブラウンが活躍する映画もあって、救命ボートの中で皆を盛り上げたりする。エヴァ・マリー・セイントとかクロリス・リーチマンとか、気の強そうなおばさん系の女優さんがやってました(註⑧)。それを思うとキャシー・ベイツは活躍しそうでしなかったので勿体ないなと思ったんですけど。

和田 あんまり活躍しちゃうと主役が霞むから、わざとそうしたのかな。タイタニックを引き揚げる「レイズ・ザ・タイタニック」(80・註⑨)っていうのもありましたね。

三谷 あの頃はまだ、タイタニック号が半分に折れて沈んだということが解明されてなかったんで、綺麗な形で揚がってくるんですよね。そういえばキャメロンの「タイタニック」以外で、あんな風に真っ二つに割れた映画はなかったですね。

和田 今回が初めてなんですか?

三谷 そうみたいです。折れたって分かったのが最近ですから。

和田 僕はタイタニックものよりも、タイタニックをヒントにした別の映画の方が印象に残ってる。「歴史は夜作られる」(37・註⑩)とか。「最後の航海」(60・註⑪)は海難ものとして非常によくできてたでしょう。

三谷 あれは面白い。あれ観た人少ないんですよ。ビデオにもなってないし。幻の名作ですよね。

和田 僕もそう思うんですよ。それからゲイリー・クーパーの出てた「海の魂」(37)とかタイロン・パワーの「二十七人の漂流者」(56・註⑫)。大作では「ポセイドン・アドベンチャー」(72・註⑬)。船が真っ逆さまになるっていうのがいいアイディアでしたね。

三谷 「ポセイドン〜」もいいんですよね。むしろ「タワーリング・インフェルノ」(74)よりも僕はこっちが好きです。原作も読んだんですけど、映画の方が面白かったですね。もともと映画的なんですよね。逆さになった船内の様子とか。トイレで便器が天井についてたり。映画の方は登場人物も整理されてて、すごく良く出来てた。原作では一緒に逃げる人がもっと大勢いるんです。

和田 いい役者が揃ってましたよね。ジーン・ハックマン、アーネスト・ボーグナイン……。

三谷 シェリー・ウィンタースとか最近亡くなったロディ・マクドウォールも。個人的にはボーグナインの奥さん役のステラ・スティーヴンスが好きでした。

和田 ウィンタースも良かったですね。あれでアカデミー助演女優賞にもノミネートされたし。そう言えば、細野晴臣さんのお祖父さんが、タイタニックに実際に乗ってたっていう話も凄いですよね。

三谷 どの辺に乗ってたんでしょう。

和田 二等客室だったという話ですけど、二等はこの映画ではほとんど描かれないですね。カメラは一等と三等ばかり行き来してて。

三谷 大体どの映画でもそうですね。一等の人達の優雅なパーティと三等のパブの対比は必ず出てくるし。

特殊メイクかと思ったお婆さんになったローズ

三谷 実は僕、ジェームズ・キャメロン(註⑭)ってあまり好きな監督じゃないんですよ。

和田 僕は「ターミネーター」(82)は好きですよ。二作目も視覚的によく出来てたと思

註⑦『ザ・タイタニック』監督/ロバート・ライバーマン 出演/ピーター・ギャラガー

註⑧ セイントは『ザ・タイタニック』で、リーチマンは「失われた航海」でモリー・ブラウンを演じた。

註⑨「レイズ・ザ・タイタニック」監督/ジェリー・ジェイムソン 出演/ジェイソン・ロバーズ

海底に沈むタイタニック号に核戦略に重要な鉱石が積まれていたことが判明、極秘の引き揚げ作戦が始まる。

註⑩「歴史は夜作られる」監督/フランク・ボセージ 出演/シャルル・ボワイエ、ジーン・アーサー

豪華客船の氷山衝突事故には、妻に去られた海運王の嫉妬が関係していた、というロマンティック・ドラマ。

註⑪「最後の航海」監督/アンドリュー・L・ストーン 出演/ロバート・スタック、ジョージ・サンダース

豪華客船で火災が発生、洋上で爆発の危機を切り抜けようとする乗組員や乗客たちの姿を描くスペクタクル。

註⑫「海の魂」監督/ヘンリー・ハサウェイ 出演/ゲイリー・クーパー、ジョージ・ラフト

奴隷船で爆発事故が発生、船員たちは船と運命を共にしようとするが……。

Digitized by Google

うけど、やっぱり一作目が面白かった。

三谷　でもなんかタイムパラドックスの基本的な部分が気になるんです。何か納得いかなかった。どこが変かは覚えてないんですけど、納得いかなかったことだけは覚えてる。

和田　SF的見地から分析すると、おかしいかもしれない。

三谷　「バック・トゥ・ザ・フューチャー」(85)は、そういうことを感じなかったんですけど。多分シナリオ的にうまく騙してくれたんだと思うんです。「ターミネーター」は話は面白いけど、タイムパラドックス物を表面だけなぞってる感じがして。実は「タイタニック」も、本当はこんなこと言うと熱烈ファンに起こられそうなんで怖いんですけど、嫌いじゃないんですよ、嫌いじゃないんですけど、納得いかない部分が沢山あって。キャメロンって何かあざとい感じがしちゃうんです。あと、力技でねじ伏せられちゃったみたいな。

和田　力技とCGと。「タイタニック」は仕掛けも凄いけど、キャメロンの映画の中では一番メロドラマの要素が大きいですね。

三谷　メロドラマならメロドラマでいいんですよ。でもそうなると余計な部分があり過ぎるような気がするんです。

和田　それは僕も感じます。特に前後の現代のシーン。あってもいいけど、もう少しさらっといかないものかなと思って。

三谷　そうですよね。とりあえず映画を頭から追いながらいきましょう。長い作品だから早く本題に入らないと、二回で終わらないかも知れない。

和田　まずタイタニックの古い映像が出て、海面の映像にタイトルがかぶるんですね。それから潜水艇が暗い海を潜っていって沈んだタイタニックを調べてる現代のシーンになる。

三谷　本篇に入る前にちょっと前置きを持ってくる形式ってあるじゃないですか。モーパッサンの小説なんか、ほとんどそうで、額縁小説って呼ばれてるそうですけど。最初に語り手の話があって、本篇があって、また最後に現代に戻ってくる、というような。

和田　前回の「薔薇の名前」も。

三谷　「プライベート・ライアン」(98)もこの形式ですね。で、そのセオリーでいくと、これは本題に入るまでがいくら何でも長すぎませんかね。確かに現代から入る手法はありだと思うし、成功してると思うんですけど、それにしても長い。潜水艇がタイタニックの船内から金庫を引き揚げるんですけど、あんなに丁寧に描く必要はあったのかな。

和田　彼らは学術的な目的よりも、一獲千金を狙ってタイタニックを探査してるんですね。〝碧洋のハート〟っていう高価な青いダイヤモンドが金庫にあるはずなんだけど、出て来たのは碧洋のハートを身に着けた女の人のヌードの絵だった。

三谷　それをテレビのニュースで見たお婆さんが「あれは私だ」って言い出すわけですね。

和田　そんなに上手な絵じゃないんだけど(笑)、あれはキャメロンが自分で描いてるんだそうです。

三谷　そうなんですか。

和田　で、お婆さんがヘリコプターで探査船にやってくる。

三谷　その辺りの手際の悪さがどうもイライラするんです。探査船の中だけで話が進むかと思ったら、一度お婆さん側の話になっちゃうし……。何かもたもたしてるんですよ。おまけに僕はあの男が嫌いなんです。探査グループのリーダー。何でしたっけ、ビル・パクストン(註15)。あの人が出てくるとB級映画って感じがする。

和田　「ツイスター」(96)の人ですね。

三谷　あとほら、お婆ちゃんになったローズの側に若い女がいるじゃないですか。あれも何だかよく分からない。

和田　あれはローズの孫でしょう。お婆さんに付き添って来たんですよ。

三谷　ドラマ的な彼女の役割がよく分からないんです。妙に色っぽいのも気になるし。何であんなに艶っぽくなきゃいけないんだろう。

和田　思わせぶりですよね。あのお婆さんは、僕はてっきり特殊メイクで若い女優がやってると思ってたんですよ(笑)。

三谷　あ、僕もそうです。ケイト・ウィンスレット(註16)って女優さん、よく知らなかったもんですから。

和田　後から分かったんですけど、あのお婆さん役のグロリア・スチュアート(註17)の出てる映画は見てたんです。「透明人間」(33)とか、30年代に沢山出てるでしょう。映画では101歳って設定だけどかなりリアルですよね。

三谷　本当はこの時87歳だから、細かく言うと老け役なんですよね。老けメイク。

和田　特殊メイクを使うんだったらウィンスレットでやればいい(笑)。ダスティン・ホフマンだって「小さな巨人」(70)で百何歳かの老人をやったんだから(註18)。でも痩せたお婆さんにするのは無理か。この女優さんは、ローズの役にはちょっとふくよか過ぎるような気がしませんか。

三谷　個人的には好きなんですけど、レオナルド・ディカプリオ(註19)と組み合わせた時にどう考えても年上の姐御って感じが……。

ワクワクする沈没CGシュミレーション

和田　バランスがね。

三谷　思ったんですけど、お婆さんの初登場のシーンはヘリコプターから降りて来るとこ

「二十七人の漂流者」
監督／リチャード・セイル
救命ボートに乗った27人のサバイバルと人間模様を描く。

註13「ポセンドン・アドベンチャー」
監督／ロナルド・ニーメ
大晦日に大波を受け、逆さに転覆した豪華客船ポセイドン号で、上の方――船底へ向かう人々の冒険を描くスペクタクル大作。

註14　ジェームズ・キャメロン(1954～)
カナダ生まれ。ロジャー・コーマンのニュー・ワールド・ピクチャーズに入り、特撮や第2班監督など様々な仕事をこなした後、「殺人魚フライング・キラー」(82)で監督デビュー。自ら脚本を書いた「ターミネーター」(84)と「エイリアン2」(86)の大ヒットで一躍人気監督に。以後、「アビス」(89)「ターミネーター2」(91)「トゥルーライズ」(94)と、メガヒットを連発している。

註15　ビル・パクストン(1955～)
テキサス州生まれ。ニュー・ワールド・ピクチャーズで18歳の時にキャメロンと知り合い、共に下積み生活を送る。後に俳優に転向。「ターミネーター」「エイリアン2」「トゥルーライズ」などキャメロン作品の常連でもある。他の主な作品は「アポロ13」(95)「ツイスター」(96)など。

Digitized by Google

ろがいいな。その前にお婆さんを見せないでおいて、「どんな人がやって来るんだろう」って思わせてくれた方がワクワクする。

和田　こういう構成のお話だから言ってもしょうがないんですけど、あのお婆さんがそこにいるってことは、彼女は最後絶対に助かるってことですよね。だからあまりハラハラさせない。彼女が助かるとすると、バランスから言ってディカプリオの方が死ぬんだろうって読めちゃう。お話の作り方としては弱いと思うんです。

三谷　物語が全部終わって最後、エピローグでお婆さんがヘリコプターでやって来るというのもありますよね。その時は回想の物語という形にはならないですけど。

和田　そうするとあの話を知ってる人はいないことになっちゃう（笑）。やっぱりローズに語らせなきゃいけないし難しいところですね。

三谷　見てる途中思ったのは、途中でローズが死んじゃって、あれっと思ったら実はあのお婆さんは偽者だったって、そういう風にならないかなってちょっと期待したんですけど（笑）。

和田　まともにいきましたね。メロドラマの作り方としては、上手いけど典型的でしょう。新鮮味がないっていうか。ヒーローと対立する婚約者が嫌な奴で。

三谷　まあ、絵に描いたような話ですからね。

和田　ヒロインがディカプリオに会えば絶対に恋愛するのが最初から分かってる。まあ、だから安心して見られるし、それがこれだけ観客を動員したことにもつながるのかな。

三谷　脚本としては、「SOSタイタニック」の方が上手いと思うんです。地味な作品だし、今見ると特撮なんかは凄くちゃちですけどね。確かに今度の「タイタニック」はスケールも大きいし、時代考証もしっかりしてるし、見世物としてはとても優れた映画だとは思います。ちなみにこの海底のシーンは、本物の映像なんですか？

和田　本当のタイタニックの映像だそうです。上手いというか見ててワクワクするのは、沈んでるタイタニックに寄っていくと、手摺りが昔の綺麗な姿になっていって、バーッとカメラが引いていって物語が始まるところ。こういうのは今の特撮技術じゃないとできないから新しい感じがしました。それで僕は騙されたんだ。お婆さんの目のアップから、若い頃のローズになるところがあるでしょう。あれで同じ人の特殊メイクだと思っちゃった。

三谷　どの辺で違うって分かりました？

和田　変だなと思って、見終わってからプログラム買って確かめたんです。家に帰って「透明人間」のビデオを見て、そういえばどこか似てるな、と。

三谷　若い頃はケイト・ウィンスレットと似てましたか？

和田　あまり似てませんね（註㉑）。でも面長だから、大きく二つのタイプに分ければ似てるのかも知れないけど。お婆さんといえば、昔活躍したシルヴィア・シドニー（註㉒）って女優さんが「マーズ・アタック！」（96）に出てるでしょう。同じ位の年のお婆さんでも彼女は丸顔だからローズの役はできないですね。

三谷　「マーズ・アタック！」のどの人？有名な人ですか？

和田　ラストで鍵になるレコード聞いてるお婆さん。有名な人ですよ。今はもう見る影もないけど、昔は綺麗な人で。

三谷　そうなんだ。お婆さんになったローズが凄い量の荷物を持ってきて、船室に写真を飾ったりするじゃないですか。「オリエント急行殺人事件」（74）のロシアの侯爵婦人みたいな感じ。

和田　船の人は最初はお婆さんを信用してないでしょう。アナスタシアと同じだ、とか言って。でも「なくなったダイヤの保険金を受け取ったのは私の婚約者だったホックリーという人でしょう」とか、当事者じゃないと知らない筈のことを言うんで信用するんですね。

三谷　この探査船のシーンで、タイタニックがどういう風に沈んだかCGのシュミレーションを見せますよね。これは効果的ですよね、このシーンにキャメロンの相当な自信を感じた。こんなの見せられたら、観客はいやが上にも期待する。でも期待するってことは同時に期待外れになる危険もはらんでいるわけで。自信がないとこんなシーンは作れませんよ。

和田　ここで説明しておかないと、実際に沈むシーンで、船がどういう状態になったのか、なぜそうなるのか理解できないですもんね。

三谷　CGを見た後、お婆さんが「私の経験はそんなものじゃなかった」って言うもよかった。これはかなりワクワクします。相当なことが始まるぞって予感させますからね。

和田　それもあるし、実際に乗ってた人はどうしてあんな風に沈んだかっていうのは分からないですからね。で、85年前のことをお婆さんが話し始めます。

三谷　ここまでで20分位。それでやっと本題に入ってタイタニックの全景がまず映って、それに乗り込むローズと母親、婚約者のキャルが車から降りてくる。

和田　一方、レオナルド・ディカプリオの演じるジャックは、酒場で賭けをしてる。本来ジャックは船に乗るはずじゃなかったんだけど、賭けに勝って切符を手に入れたんですね。上手いなと思うのは、人の切符だからジャックの名前は乗船名簿にはないんですね。

三谷　だからああいう事実があっても、記録には何も残ってない。こういうのは上手いで

註⑯　ケイト・ウィンスレット（1975～）
イギリスのリーディング生まれ。11歳から地元のドラマ・スクールに学び、舞台やテレビドラマで人気を得る。94年「乙女の祈り」で映画デビュー。「いつか晴れた日に」（95）ではアカデミー助演女優賞にノミネートされた。主な出演作は「日蔭のふたり」「ハムレット」（96）。

註⑰　グロリア・スチュアート（1910～）
30年代、「透明人間」や「虎鮫島脱獄」（36）「ゴールド・ディガーズ」（33）「大学三人男」などに出演。40年代以降はスクリーンを離れていたが、82年「My Favorite Year」で復帰。

註⑱「小さな巨人」（監督／アーサー・ペン）で121歳の老人を演じたダスティン・ホフマン

註⑲レオナルド・ディカプリオ（1974～）
ロサンゼルス生まれ。14歳でCMに出演し、テレビシリーズにレギュラー出演するようになる。93年ロバート・デ・ニーロと共演した「ボーイズ・ライフ」で注目を集め、「ギルバート・グレイプ」でアカデミー助演男優賞候補とな

Digitized by Google

すよね。あと、ここで出てくる婚約者の執事。デイヴィッド・ワーナー（註㉒）が演じてるせいもあってかなり印象的じゃないですか。最初思ったのは、一見取っ付きにくそうな男だけど、実は主人公たちの良き相談相手になるみたいな儲け役なのかって。でもそうじゃなかった。

和田　最後まで嫌な奴で（笑）。

三谷　ジャックの相棒のファブリッィオをやってるダニー・ヌッチ（註㉓）っていう俳優は「クリムゾン・タイド」（95）に出てました。ドラマの鍵を握るかなりいい役で。「ザ・ロック」（96）にも出てた。でも今回は活躍しそうでしなかった。

和田　そうそう。一緒に賭けに勝って乗船した友達なんだから、もうちょっといい見せ場があってもいい筈ですけどね。

三谷　恋愛話でいくんだったら、登場人物にはそれぞれ主人公たちに何か影響を及ぼすように作って欲しかった。でも何の影響も与えずに皆勝手に死んでいくじゃないですか。勿体ない気がした。

和田　映画はお婆さんの回想として進んでいくんだけど、酒場で賭けしてる場面なんてローズは見てない筈なんですよね（笑）。

三谷　そうなんですよね。細かいこと言うと、回想の話なんで、基本的にはローズのいないシーンは描いちゃいけないことになる。でも僕はそこまで厳密にはならなくてもいいと思うんです。ただ、少なくともジャックかローズのどちらかは話の中心にいて欲しいんですよ。スミス船長とか造船会社の社長とか、楽隊の人たちのエピソードはアメリカでは凄く有名なんだと思うんです。その誰でも知ってる歴史上の人物に、フィクションの世界の住人であるあの二人が出会っていく面白さは確かにあると思うんです。だから、二人のいないところで歴史上の人物だけが出てくるところは、本来は描いてはいけなかったシーンだったんじゃないかと思うんです。タイタニックといえばこれだっていう名場面が沢山あるから、それをお金をかけたセットでもう一度やりたくなる気持ちは分かるんですけど。でも全部詰め込んじゃったせいで、ちょっと焦点がぼけちゃった気がする。

和田　そうですね。でも楽隊の話はやっぱりいいですね。あれ、二人が側で見ていればよかったのに。

三谷　こじつけでも常にその場にいた方が良かった。バンドマンとも知り合いになって。

和田　彼らは二人とは関係なく描かれてますもんね。

三谷　船が沈むところで老夫婦が船室で死を待つシーン、ああいうのも涙を誘うし、確かに僕もぐっと来たんですけど、でも本当はいらないんですよね。あれを描くんだったらそこにローズがいるべきなんです。

和田　いないとお婆さんは語れないわけですもんね。主観になったり客観になったりが、割合曖昧なんですね。

三谷　思い出したのが、『黄金の日々』（74）っていう市川森一さん脚本、幸四郎さん（当時は市川染五郎）主演の大河ドラマ。あれは主人公の架空の人物、呂宋助左衛門の目から見た戦国時代が描かれるんですけど、彼は信長と知り合い、秀吉と知り合い、比叡山の焼き討ちにもいるし、本能寺の変にも居合わせる。そんなわけないんですけど、彼がありとあらゆる歴史上の事件に遭遇して、彼の視点からあの時代を描いていて凄く斬新な感じがしたんです。

和田　「フォレスト・ガンプ」（94）も、ガンプが各時代の事件に遭遇したり、大統領と会ったりしますね。

三谷　「タイタニック」もそういう形に徹してくれるときっともっと面白かったと思う。そうじゃなかったら、いっそのこと主人公なんか置かないで客観的描写に徹するか。

和田　サミュエル・フラーの「最前線物語」（80）も、イタリア戦線から、ノルマンディ上陸作戦から、アウシュビッツの解放から、主人公が全部体験するんですよ。それも主人公の目で描いてて面白かった。フラーはインタビューで、全部自分が立ち会って本当に見たと言ってるんです。本当かどうか分からないけど（笑）。

悪い奴は最後まで悪い奴のまま

三谷　で、二人がそれぞれ乗船します。早く先へ進めましょう。とにかく今号で氷山にぶつかるとこまではいかないと。

和田　出航するとき、俯瞰で船がダーッと映るでしょう。CGが大活躍して。

三谷　これは最初、びっくりしました。船の先端からずっとカメラが後ろに回ってというのはどうやって撮ったんだろうと思った。ここまでタイタニックを全部見せた映画は他にないですからね。

和田　今までは不可能だったわけだから。

三谷　凄いですね。ああいうのはやっぱり映画でしか味わえない気がします。

和田　でも前半の船の映像は、動いてる人が凄くCGっぽいんですよね。人形がカクカク動いてるみたいで。

三谷　僕は最初全然気づかなかった。

和田　そうですか。僕は凄く気になったんですよ。クライマックスは力を入れてるのか、気にならなかったんですけど。CGって丁寧にやればやる程時間もお金もかかるし、前半はそんなに凝らなかったのかも知れない。ま

註⑳　若い頃のグロリア・スチュアート

註㉑　シルヴィア・シドニー（1910〜）
30年代ハリウッドを代表する女優の一人。主な出演作に「市街」（31）「激怒」（36）「暗黒街の弾痕」（37）があり、「ビートルジュース」（88）「迷子の大人たち」（92）に出演するなど、現在も活躍している。

註㉒　デイヴィッド・ワーナー（1947〜）
イギリスのマンチェスター生まれ。王立演劇アカデミー卒。主な出演作は「トム・ジョーンズの華麗な冒険」（63）「砂漠の流れ者」（70）「わらの犬」（71）「スター・トレック5」（89）「妻の恋人、夫の愛人」（96）など。

註㉓　ダニー・ヌッチ（1968〜）
オーストリア生まれ。他の出演作は「イレイザー」（96）など。

Digitized by Google

あそれも贅沢な見方で、昔は飛行機が飛んでても上に糸がついてたり（笑）、そんなのはいくらでもあったわけだから。

三谷　和田さんは「怖がる人々」（94）でCGを使った経験もあるし、そういうところに自然と目が行くんじゃないですか？

和田　というよりもともとアニメが好きだし、映画の特撮にも関心があるから。「ジュラシック・パーク」（93）なんかは、作り物だと思って見ても粗が見えないんです。人間とか波は、恐竜より難しいんだろうと思う。

三谷　このシーン、ジャックが舳先のところで「アイム・ザ・キング・オブ・ザ・ワールド」って叫ぶんですけど、これと同じ台詞を、キャメロンがオスカーを獲った時に言ったじゃないですか。ちょっと客席は引いてたけど。映画観てない人は、何て大それた奴なんだって思ったはずですよ。

和田　難しいジョークだった。この後ジャックが一等甲板にいるローズに見とれちゃうんですね。彼女は婚約者が煩わしくて一人で甲板に出て来てた。この婚約者がいかにも嫌な奴で。このビリー・ゼーン（註㉔）って俳優は他に何に出てましたっけ。

三谷　資料によると「バック・トゥ・ザ・フューチャー」のビフの子分（笑）。3D眼鏡かけてる奴かな、それしか覚えてないけど（註㉕）。

和田　あの時はもっと若いだろうけど。こういう役をやると、この後も続けて憎まれ役を頼まれちゃうんじゃないですかね。

三谷　印象強いですもんね。でもジャックの方は、どうもディカプリオの役じゃない気がするんですよ。もっといろいろ渡り歩いてきたというか、自分の知恵だけで生き抜いてきたみたいな男だと思うんですけど。例えば、まあこれは絶対ない線だけどジョン・マルコヴィッチとか。日本で言えば唐沢寿明かな、ちょっと老けてるけど。ディカプリオは修羅場をくぐってきた割にはちょっと線が細い。

和田　純情な少年みたいな感じがしますね。こういう三角関係ドラマって、もう一人の相手が嫌な奴だと気が楽というか、話として当たり前じゃないですか。彼も凄くいい奴なのに、こっちの男とできちゃう、という方がドラマが深くなるような気がするんです。

三谷　そうですね。婚約者がジェームズ・スチュアートみたいな奴だったら、かなり葛藤がありそうですもんね。

和田　「卒業」（67）も「ピクニック」（56）も、嫁にいくはずの女の子が違う相手とくっついちゃうけど、婚約相手が必ずしも嫌な男じゃないですもんね。

三谷　今回はハーレクイン・ロマンス的世界に徹したんでしょうね。でもそれにしてもキャラクターが記号的というか。ディカプリオもジャックはやりにくかったんじゃないかな。

和田　「ギルバート・グレイプ」（94）を観て、あの子供がこうなるとは思わなかったけど（笑）。まああの映画も、いくら高い所に上っても頭の良さそうな感じはしましたね。

三谷　本来はもっと芝居のできる人だと思うんです。だからそもそもルックスで売る人じゃないと思うんですよ。きっと本人もそう思ってるんでしょう。芝居が上手な人なんで、シーンごとには的確な演技をしてるんですけど、全体を通して見るとジャックという人物が描き切れてない。でもこれはディカプリオのせいじゃなくて、キャメロンでしょう、やっぱり。アカデミー賞にノミネートされなかったのも脚本のせいだと思いますね。

和田　ケイト・ウィンスレットとお婆さんはノミネートされたのにね。キャメロンって、あまり細かい芝居はつけない感じはしますね。特撮とか、どうやったら観客をびっくりさせるかってことは頑張りそうだけど。

三谷　これまでの映画も主役が機械だったりしますもんね。

和田　これでアカデミー監督賞も獲ってますけど、監督として相当評価されたってことですね。脚本もキャメロンが自分で書いてるんですよね。

三谷　それはノミネートされてないですけど。そういうとこがアカデミーも偉いと思う。

和田　ジャックとローズの出会いのシーン。ローズが泣きながら三等の甲板に降りて来て、一番後ろの柵を乗り越えて飛び込もうとすると、ジャックがそれを止めるんですね。「水が冷たいぞ」とか「君が飛び込んだら僕も飛び込まなきゃいけない」とか言って。

三谷　ここは甲板の寒い感じが凄く良く出てましたね。見てて寒かったもん。

和田　そうですね。それから、水面から甲板

註㉔　ビリー・ゼーン（1966〜）
シカゴ生まれ。「バック・トゥ・ザ・フューチャー」で映画デビュー。主な出演作は「メンフィス・ベル」（90）「山猫は眠らない」（92）「トゥームストーン」（93）「オンリー・ユー」（94）「真夏の出来事」（96）など。

註㉕　「バック・トゥ・ザ・フューチャー」では子分の一人、マッチ役だった。

三谷幸喜さん

和田誠さん

Digitized by Google

までのあの高さも。

三谷　ここで「僕を信頼しろ、手を離すな」っていう伏線になる台詞があります。

和田　ローズを引っ張り上げるんだけど二人は甲板に倒れ込んで、ローズの悲鳴を聞いて探しに来た人たちには男が襲ってるように見えるんでジャックが捕まっちゃう。

三谷　彼女が「落ちそうになったのを彼が助けてくれた」と言うので解放されるんですけど、執事だけは疑うんですよね。「どうして靴の紐がほどけてるんだ」とか言って。

和田　だから執事だけは分かってて、二人にいい方に絡んでくるのかと思うと……。

三谷　何でもない（笑）。一瞬いい奴なのかと思いますもんね、ここは。でもこの映画では悪い奴は最後まで悪い。で、ローズを助けたお礼に、婚約者はジャックを翌日のディナーに招待します。

和田　その夜、婚約者がローズにルイ14世が持ってたとかいう〝碧洋のハート〟を贈るんですね。彼女の心が離れてると思って、これで心を開いてくれと。「僕を拒まなければ何でも与える」って。

三谷　ここもなあ、婚約者がずっと悪人という感じで演じられてるから、同情できないんですよね。それでもいいのかな。

和田　この辺はまだ、そんなに嫌な奴に見せる必要はないはずなのにね。

三谷　悪人顔ですから。

和田　それで損してるところもある。自分というものがありながら彼女が他の男に関心を持つってことに嫉妬して、徐々に嫌な奴になっていった方が面白いのに。

三谷　その方が見ててハラハラする。翌日、ジャックとローズが一等のデッキを散歩する。そこでジャックは自分の絵を見せる。その絵をキャメロンが描いてるんですね。

和田　ローズは「上手いじゃない」なんて言う。彼女が絵に関心があることは、彼女の部屋にピカソとかドガの絵があるのが伏線になってます。ピカソなんてまだ一般には知られてない頃だから、彼女には絵を見る目があったってことですね。

三谷　でもあの絵をキャメロンが自分で描いてたと思うと、何かいやらしいな……。

和田　（笑）。ちゃんとした画家に描かせればいいのにね。船会社の社長のイズメイが船長に「君の最後を飾る航海だから、最短航海記録を作れ」って言うシーンもこの辺ですね。

三谷　これも実際の話みたいですよ。大事なシーンかも知れないけど、でも本当はここを描くなら、ジャックかローズが同席すべきだというのが僕の意見です。

和田　そうですね。いるのも変だけど（笑）。

三谷　今回、タイタニック物を観比べて分かったんですけど、船の乗客や乗組員って、どの映画でも似たようなタイプの俳優がやってるんですよ。「失われた航海」ではイアン・ホルムがイズメイをやってました。その印象が強かったので、「エイリアン」（79）を観た時に、あいつがどうも怪しいと思った（笑）。

和田　「歴史は夜作られる」の社長はコリン・クライヴですから、「フランケンシュタイン」（31）の博士をやってた人なんですよ。これも物凄く怪しい（笑）。

三谷　大抵どの映画でも悪役はイズメイで、タイタニックの良心は設計士のアンドリュース、その間で悩むのが船長っていう図式がある。それはもう決まりみたいですね。

　ということで、結局氷山にぶつからずに前半は終わってしまいました。長い映画です。

（以下次号）

TITANIC
1997年　アメリカ　日本公開1997年

●スタッフ
監督・脚本……ジェームズ・キャメロン
製作……ジェームズ・キャメロン
……ジョン・ランドー
製作総指揮……レイ・サンキーニ
特殊視覚効果……デジタル・ドメイン
撮影……ラッセル・カーペンター
プロダクション・デザイナー……
……ピーター・ラモント
編集……コンラッド・バフ
……ジェームズ・キャメロン
……リチャード・A・ハリス
衣装デザイナー……デボラ・L・スコット
音楽……ジェームズ・ホーナー
音楽監修……ランディ・ガーストン
特殊効果コーディネーター……
……トーマス・L・フィッシャー
視覚効果スーパーバイザー……ロブ・レガート

●キャスト
ジャック・ドーソン…レオナルド・ディカプリオ
ローズ・デウィット・ブカター……
……ケイト・ウィンスレット
キャル・ホックリー……ビリー・ゼーン
モリー・ブラウン……キャシー・ベイツ
ルース・デウィット・ブカター……
……フランシス・フィッシャー
ブロック・ラヴェット……ビル・パクストン
E・J・スミス船長……バーナード・ヒル
J・ブルース・イズメイ……ジョナサン・ハイド
トーマス・アンドリュース……
……ヴィクター・ガーバー
スパイサー・ラヴジョイ……
……デイヴィッド・ワーナー
ファブリツィオ・デ・ロッシ……ダニー・ヌッチ
ローズ・カルバート……グロリア・スチュアート
リジー……スージー・エイミス

●上映時間　3時間9分

●1997年度アカデミー賞　作品賞、監督賞、撮影賞、作曲賞、主題歌賞、美術・装置賞、衣装デザイン賞、編集賞、音響賞、音響効果賞、視覚効果賞受賞　ノミネート：主演女優賞、助演女優賞、メイクアップ賞

●ストーリー
85年前に沈没した豪華客船タイタニック号を探査していた船が“碧洋のハート”と呼ばれる高価なダイヤモンドを身につけた若い女性の肖像画を発見。その絵のモデルは自分だと名乗り出た101歳の老婆が探査船にやってくる。

1912年4月10日、イギリスのサウザンプトンから世紀の豪華客船タイタニック号が出港。一等乗客のローズは母親の決めた婚約者キャルと共に乗船したが、気の進まない計略結婚に心は虚ろ。一方賭けで切符を手に入れた画家志望のジャックは友人と共に三等に乗船した。12日の夜、海に身を投げようとしているローズを偶然ジャックが救う。翌日れを言いに来たローズはジャックの絵を見、また三等のパーティで共に踊り、急速に彼に惹かれていく。それを知ったキャルは激怒。だがローズはジャックを部屋に呼び“碧洋のハート”だけを身に着けて肖像画を描いてもらう。そして二人は貨物室に忍び込み、初めて結ばれる。その直後、船が氷山に接触。海水が船内に入り込み始めた頃、ジャックがキャルの罠にはめられて宝石泥棒に仕立てあげられ、警備室に手錠で繋がれる。船の沈没が確実になり、一旦救命ボートで避難しようとしたローズは彼が気掛かりで引き返し命懸けで救出する。パニック状態に陥った船はついに沈没。大勢の人々と共に冷たい海中に投げ出される二人。やがてジャックはローズを励ましながら息絶える。ローズは奇跡的に救出された。

101歳になったローズは、自らの体験を探査員たちに話し終えると、“碧洋のハート”をジャックの眠る海に沈めた。

ビデオは20世紀フォックスより（3890円）、LDはパイオニアLDCより（7800円）発売中。

Digitized by Google

世界の映画祭へ向かって
国際映画祭での上映のために

林　加奈子

⑧映画祭への出品ノウハウ（上）

国際映画祭に出してみよう、是非出さねばならない、出してやろうじゃないか、出られるものなんだろうか、などなど考えている方々へ。少しばかり、ご参考まで。

1　何のために映画祭に出すのか

良いものをめざして、出来上がった作品の作り手の人々なら、その作品の海外での評価を問うてみたいと考えるのは自然なことだ。監督は、様々な国の沢山の人々に自分の作品を見てもらいたいと考えるし、もちろん賞などもらえたらうれしいし、プロデューサーとしてなら、大きな映画祭に出して賞をというだけでなく、日本での公開の際に、どこかの映画祭での正式上映が決まっていれば、ジャーナリストの関心も違ってくるし、海外配給でもつけば世界で上映されるチャンスが訪れることだってある。映画祭にトライするのは、誰でも自由なのだから、積極的に海外へ出していくことに関心を持つのは素晴らしいことだと思う。

でも、現実はそんなに生易しいことではない。

国際映画祭側が求めている日本映画は、一言で言えば映画祭側から見た良い映画である。良い映画とは何か。それはもちろん、それぞれの映画祭によって違うのだけれど、原則としてその年の映画として、新しい試みが見られるもの。今までの映画と違うもの。創造性にあふれ、独創的なもの、そしてテーマをしっかりと持ち、それをどう描くかに独特の力が感じられるもの。そう書きながら、言葉で説明すること自体に無理があると思うことに気づく。とにかくここで問題になるのは、日本映画の製作意図そのものが、必ずしも前述の姿勢に当てはまるものが多いとは言えないということだ。

最近国際的な映画祭に出ている映画に、独立プロ系の作品が多いのは、そんな理由からでもあると思う。彼らには、少なくともテレビで名がちょっと知れたCM俳優たちを使う予算もないし（あっても使う気もないかも知れない）、公開だって決まらないままに作っていることが多いけれど、この題材をどうしても映画化しようと必死になる熱意はある。自分の作品として、世に出していこうとする意識がある。そんな祈りに似た願いが、時に作品にポジティヴに投影されれば、作家性の感じられる映画として、力を持つ作品を生むことへつながっていくことがあるのだと思う。もちろん独りよがりな場合もないことはないのだけれど。

ここで、間違えてはいけないのは、映画祭に出る映画が、偉いわけではないということだ。映画祭に選ばれるから、その作品が、映画としての高い価値を持つわけではないと、私は確信をもって言っておきたい。だって、映画祭っていったって、たかだか映画のお祭りじゃないの。それに映画祭側は、当たり前のことだがあくまでも彼らの欲しい作品を選ぶ。合わない映画祭にトライして選ばれなかったからって、その映画の価値とは関係ないはずだ。

でも、少なくとも映画祭に出そうとするならば、そのことを狙うのならば、それなりの覚悟と自覚を持って臨まないとならない。ちょっと作ってみたからと安易に考えて相談に来るプロデューサーや監督が多いが、映画祭をナメてはいけない。

製作者によっては、どこかをもう少し切って短くしたら、映画祭に認められるかなんて真剣に聞いてくる人も多いが、本当に呆れてしまう。私にはそんなこと答えようがありません。もっと真剣に作って下さい。映画祭のためになんかで、短くしたり長くしたりしようなんて変えられる映画なら、最初っから作らないで下さい。私は、映画を作るということはもっと神聖なことだと信じていたい。

ただ、現実的な問題として、国際映画祭についての情報が、日本語で丁寧に書かれているものは、本当に少ない。知っている人も、限られている。そういう私にも、まだまだほとんどよく分からない。なぜなら映画祭はナマモノで、その評価や重要性は刻々と変わっ

Digitized by Google

ていくし、それよりも何よりも、それぞれの作品にとって相応しい映画祭（最もその作品が活かされるであろうところ）が、まちまちだからだ。製作・完成の時期もあるし、映画祭の規定もある。だからとりあえず、最大公約数的な情報として、以下に心得というと高飛車だが、覚悟というか状況を、書き綴っておくことにしてみようと思う。今後はインターネットが活用されたり、横文字アレルギーも減って、もっと情報がたやすく入手できるようになれば、もっともっと日本映画がタイミング良く海外に紹介されることを祈って。

2　注意すること

基本的には製作者の方々には、作りたいものを思う存分作っていただきたい。そんなことは私ごときに言われるまでもないか。まあ、幾つか注意すべき点を取り上げておきたい。

まず、映画祭の締め切りについて。日本にまで選考に来るディレクターのスケジュールは、映画祭によってまちまちだが、だいたい開催の4カ月前には来ていると考えておいて下さい。だから、プリントで見せたいのなら、その頃までには字幕版まで完成していることが望ましい。現地にヴィデオやプリントで送る場合には、2カ月前がおおよその締め切りと考えて、まずは英語字幕のついた素材を、プレス資料とともに送って選考にかけてもらうこと。

日本で公開済みかどうかは、海外の国際映画祭の場合には原則として問題ではない。ただし大映画祭では、世界初上映を歓迎する。カンヌとヴェネチアのコンペ両方に出すことは出来ないし、ロカルノやモントリオールに出てからカンヌ、ベルリン、ヴェネチアのコンペに出ることもない。でもロカルノのあとモントリオールのコンペ外に出たり、モントリオールのあとベルリンのフォーラムには出られる。とにかくまずは、それぞれの選考担当者が上映を決めてくれないことには、つまり先方が気に入って彼らのプログラムに入れたいと決めてくれないことには正式上映は不可能だ。ここがマーケットとの違いである。マーケット上映は、お金を出してしかるべき手続きをすれば上映出来るというわけだ。

ここで、考えなくてはいけないのは、どの状態で選考にかけるかということだ。製作者にとって、中途半端な状態で選考されるのは悲しいに違いないし、駄目だったときにも諦めきれないはずだ。ヴィデオで送って見てもらうというのも、抵抗があることと思う。かといって、映画祭に間に合わせるために、製作過程そのものを短くしたりするのも難しい。言うまでもないことだが、まずは良いものを、つまり納得のいくものを作ることが大前提だ。映画祭の担当者はプロである。あちらもいち早く良いものを見つけて手に入れたいので、彼らなりに情報網を張って新作の状況を摑もうとしてくれている。そして、こちらからもいつできてどんな形で送られるか、エントリーにはどうしたら良いか、積極的に扉を叩くことが大切だ。誠意を持って進めれば、キチンとした映画祭ならそれなりの対応が必ず返ってくるはずだ。

私は、東京にいた間は、製作者側と話し合って、無理のない範囲で、見せていただけるものなら現像所にでも編集所にでも行って、まずは見せてもらうことにしていた。初見をヴィデオにするのだけは、よほどのことがない限り断わらせていただいていた。だってスクリーンで上映されることを想定して作っているものを、ヴィデオで見て良いの悪いのと言うのは、やっぱりいくら何でもおこがましすぎるから（とはいえ、香港在住になってしまうと物理的にこの基本がずれて辛い限りです）。でも映画祭の選考担当者はプロだ。他国からの作品もヴィデオや字幕無しや様々な条件下で選考していかなくてはならない。現実に即した柔軟な対応が大事。

3　予算

（1）字幕製作

まず、35ミリのプリントを字幕版用に一本焼いて、字幕翻訳、スポッティング、打ち込みもしくはレーザーでの焼き付け、という作業をすると、ラボの混雑具合にもよるのだが3週間くらいで、100万から150万円程度の費用がかかる。これは、実に大雑把な概算で、実際には作品の上映時間やセリフの長さなどによって変わってくる。またビデオ撮影したものをプリントにトランスファーしたり16ミリから35ミリへブローアップしたりすれば、コストはまた変わってくる。映画祭に出そうとするならば、とにかくまずは原則として、英語版を作って選考にかけなくてはならない。

カンヌ、ベルリン、ヴェネチア、といった大きな映画祭では、本上映の際にはそれぞれの言語の字幕を付けたプリントでの上映が規約にうたわれている。だから、選ばれた後にフランス語、ドイツ語、イタリア語の字幕を改めてつけなくてはならない。ダブルコストを覚悟しておくことが必要。モントリオールなら、英仏どちらかの字幕が入っていれば、現地でエレクトリック・サブタイトル（プリントを傷つけずに下に電光字幕が設置される）がもう一つ、現地での上映の際に付けられる。タオルミナのコンペは、イタリア語字

世界の映画祭へ向かって　目次
8月下旬号
「第1回　映画祭への橋渡し」
9月上旬号
「第2回　各国映画祭の状況（1）」
・モントリオール世界映画祭
・トロント国際映画祭
・ヴァンクーヴァー国際映画祭
・ベルリン国際映画祭
・ロッテルダム国際映画祭
9月下旬号
「第3回　各国映画祭の状況（2）」
・エーテボリ国際映画祭
・チサロニキ国際映画祭
・トリノ国際映画祭
・ブエルトリコ国際映画祭
・香港国際映画祭
・シンガポール国際映画祭
・インド国際映画祭
・シドニー国際映画祭
10月上旬号
「第4回　各国映画祭の状況（3）」
・カンヌ国際映画祭
・ナント三大陸映画祭
・ヴェネチア国際映画祭
・ロカルノ映画祭
・タオルミーナ国際映画祭
10月下旬号
「第5回　各国映画祭の状況（4）」
・ハワイ国際映画祭
・モスクワ国際映画祭
・カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭
・イスタンブール国際映画祭
・サン・セバスチャン国際映画祭
・メルボルン国際映画祭
・オーバーハウゼン国際映画祭
・ヘルシンキ国際映画祭
・サンパウロ国際映画祭
・ミュンヘン国際映画祭
・ウエリントン国際映画祭
・ニューシーランド国際映画祭
・シカゴ国際映画祭
11月上旬号
「第6回　各国映画祭の状況（5）」
・ロンドン映画祭
・釜山国際映画祭
・サンフランシスコ国際映画祭
・クレルモン・フェラン国際映画祭
・ニューヨーク映画祭
・エルサレム映画祭
・アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭
・フィゲラ・ダ・フォス国際映画祭
・ペザロ国際映画祭
・ソチ国際映画祭
・ラ・ロシェル映画祭

Digitized by Google

幕だが、事務局のスタッフが兼務しているイタリアのテレビ局に売る形で字幕の製作費用を負担してもらえることもあると聞く。ベルリンは、フォーラム部門に限っては運営組織母体がアルゼナールというシネマテークを運営しているので、非営利での上映用に一本買い取る形でドイツ語版の製作費用を出してもらえる。サン・セバスチャンも、スペイン語での上映が原則で、事務局がスペインや南米での配給会社を探すことに最善を尽くす方向で、スペイン語版製作費用に援助の体制を示しているが、確約とは言いがたい。

よほどの自信があるのならば、初めからカンヌ用にはフランス語、ヴェネチア用にはイタリア語の字幕だけを付けて、選考にかけてもらってもいい。これは、どうしてもその映画祭に出したいんだという気迫を、先方に伝える実質的な手段にもなる。でもギャンブルだし、現実にはカンヌ、ヴェネチア、ベルリンなどに選ばれるくらいの作品なら、他の映画祭からの招待もくることになる（ことが多い、まあほとんどは）ので、いずれにしても英語版は必要になってくる。

国際映画祭に出そうとするならば、字幕の付いた状態で、少しでもより良く作品を分かってもらえるような状態にしておくことが、基本だ。先方の選考にかけるのだから、ヴィデオやプリントで現地に送る際には、字幕が付いていないと選考してくれないと規約に書かれてある映画祭もある。でも、選ばれなければ、字幕を付けても無駄になる。

現在のところ、日本では映画祭に決まる前に、日本の機関で字幕の製作費用を援助してくれるところを、私は知らない。ただし映画祭への上映が決まれば、条件によってはないこともない。

(2) プレス資料、スチル写真、ポスター

まず選考のために、資料を英語版で作る必要がある。これは原則として、日本でのプレスシートに似たものでよいが、欲を言えば、監督のバックグラウンドとその作品が何作目にあたるかをきちんと明記すること。シノプシスは詳しく、キャストよりスタッフをより詳しく、その映画を世界に出すにあたっての ポイント（だと考えられること）を書き加えて、出来れば日本でどのように受け止められているか、批評の翻訳を付けることが望ましい。それから、海外の窓口である担当者と連絡先を一カ所に統一して、明らかにしておく。選考のためのプレスは、あくまでも資料なので、カラーで特にお金をかけた物を作る必要はない。ワープロのコピーでも十分だ。

上映が決まったら、事務局にカタログ用のスチル写真、監督顔写真、シノプシス、監督のバイオグラフィーなどのプレス資料をすぐに発送する。大映画祭はジャーナリスト用に何千という単位でプレス資料、スチル写真が必要になるので、油断ならない。この時用意するプレスは、予算次第だが、カラーなども使って目立つ方がいい。

ポスターは日本で公開したもので代用できれば予算的には無理がないが、少なくてもタイトルと監督名だけは横文字で判るようになっている必要がある。日本公開用のポスターに英語タイトルをシールで貼るという手もある。海外のポスターは、日本の物よりサイズが大きいので、海外用のものを別に作ろうというするならば、大きいものの方がいい。

(3) 映画祭期間中のプレスアタッシェの起用

ジャーナリストの選別をしたり、新聞への記事を書いてもらうように動いたり、現地でも事情を判っているアタッシェをつけるのには、大映画祭の場合にはそれなりの大きなメリットがあるが、当然費用はかかる。上映される映画祭の状況と、その作品の状態、プロダクションの覚悟によって、慎重に対応を決める必要がある。

(4) 通訳

コンペに出品する場合には、少なくとも記者会見の通訳と上映後にリクエストがある場合の個別インタビューに対応する通訳は、不可欠。映画祭に紹介を頼むと、よほど運がいい場合を除いて、とんでもない人（開催地に日本人が少ないことが多いので、映画なんてほとんど見ない隣町のカラテの先生が来るなんてこともある。これは悲劇。日本語が出来るといっても、しれている場合も）があてがわれてしまう場合も、少なくない。さりとて、日本からわざわざ専門の通訳を連れていくのは大変な出費となる。幾つかの映画祭では、毎年、日本映画の通訳をしてくださる実力のある方々がいるので、要相談。映画祭に頼む場合には、かなり早い段階からリクエストを出しておくこと。あちらも出来る限りの手当ては考えてくれる。

(5) レセプション

参加者側が、映画祭期間中にパーティーを開くことは、自由である。来るか来ないかは別として、審査員を呼んで、ジャーナリストや映画祭ゲストを招待して、交流を図るのはパーティーが良いチャンスを作る。招待者のリスト作り、発送、レストランとの打ち合わせ等は、期間中インタビューやプロモーショ

Digitized by Google

ンの合間をぬって行うのだから大変な労力になるし、第一お金がかかる。費用については、規模や場所によってさまざま。どこでも日本料理に人気があるので、招待状の回収率はかなり高いとみていい。呼ばれなくても来る人もいるくらいだ。パーティーなんか開かなくても、作品が良ければ評判になるし、審査員もきちんと見てくれる。これはあくまでもオプションだ。

(6) 服装

監督が男性の場合には、大映画祭へならブラックタイを用意してもらった方がベター。記者会見も、ジャケットとタイという姿が一般的だ。開会式・閉会式は、フォーマルになる。カンヌ、モントリオール、モスクワ、ベルリンあたりのコンペなどでは、かなり格式ばった用意をしておいても、後悔はないと思う。女優は和服だと喜ばれるが強制ではないし、映画の内容にもよる。それに対して、ロカルノ、ロッテルダム、ヴァンクーヴァー、ベルリン・フォーラムなど、ヤングシネマを対象とする映画祭は、レセプションでもかなりカジュアルだ。独立プロの新しい感覚の製作者たちは、服装にも自分たちの個性を思う存分に出せばいい。ただし、回りに不愉快な思いを抱かせたりしないようにするのが、常識。

(7) その他

ファックスなどの通信費、ポスターやプレス、スチルの送料、そしてプリント送料というのも、なかなか侮れない。大映画祭では、往復のプリント送料・保険等も含めて一切は参加者負担となる。35ミリで2時間ほどの長編の場合には、送る場所にもよることは当然だが、通関料・国内輸送料など含めてざっと20万円はかかってしまう。映画祭によっては、片道を負担してくれるところや全額負担してくれるところもあるので、その年の規約書をしっかり確認する必要がある。

4 選考のされかた

それぞれの映画祭には作品選定の責任者である、プログラム・ディレクターがいる。映画祭は、彼らの映画を見る目で決まるといってもいい。少々運営がいい加減でも、予算なんか足りなくても、いろいろ問題があっても、そこに集められた映画が素晴らしければその映画祭の評判は高くなる。

そこの映画祭が、設立当初からずっと続けてプログラム・ディレクターをしている人もいれば、変わったり、他の映画祭へ移ったりすることもある。例えば、今現在ロカルノのディレクターであるマルコ・ミュラーは、はじめイタリアのペザロ映画祭にいて、オランダのロッテルダム映画祭に移り、その後ロカルノを担当している。あるいはベルリン・コンペのモリッツ・デ・ハーデルンは、以前はロカルノを担当していて、ベルリンを担当するようになってからも夫人とともに、スイスのニヨン国際ドキュメンタリー映画祭にも携わっていた。ロッテルダムを担当しているサイモン・フィールドは、イギリス人で、ロンドンでICAという非営利の劇場を運営していた人だ。ディレクターが変わると、映画祭の色もかなり変わってくる。

人が選ぶものだから、その人の個性と情報ネットワーク、そして上映都市の観客の状況などによって、関心のもたれる作品はそれぞれだ。合わないところに無理やり出そうとしても徒労を重ねるばかりだし、万が一上映が決まってもかえって上映の際に黙殺されたり、不評をかったりしてしまう。

今まで日本にまで選考のために担当者がほとんど毎年来る映画祭は、ベルリンのコンペ、パノラマ、フォーラム部門それぞれに、モントリオール、ヴァンクーヴァー、トリノ、ロカルノ、トロント、テサロニキ、シドニー、ロッテルダム、エーテボリ、ウエリントン、ヘルシンキ、香港、シンガポールなどで、毎年ではないが、来ることがある映画祭は、ミュンヘン、ナント、サンパウロ、ニューヨーク、ロンドン、ハワイあたりだ。来日者は、ありがたいことに増えている。日本映画への関心が高まってきていることを、素直に喜びたい。

日本にまで選考に来てくれない（来られない）映画祭には、字幕の付いたプリントか、もしくはヴィデオテープを、資料と一緒に事務局に送って選考してもらう。ほとんどの映画祭は、マルチシステムのヴィデオ設備を備えているので、日本で普及しているNTSCの2分の1カセットを送って問題ない。選考に登録料がかかる映画祭は少ない。これらは正式にはそれぞれの映画祭のその年の規約書を確認すればいい。

（以下次号）

Digitized by Google

World Report 1998

「奇跡の輝き」

from U.S.A.

ロビン・ウィリアムズの新作

ロビン・ウィリアムズが死後の世界の旅人となる、「**奇跡の輝き**」**"What Dreams May Come"**（ヴィンセント・ウォード監督）が、10月2日にポリグラムの配給で公開された。

クリス（ウィリアムズ）とアニー（アナベラ・シオラ）のニールセン夫婦は、二人の子供を失って以後、さらに深い絆で結ばれていたが、クリスが自転車事故で亡くなってしまう。自身の葬儀を見ていることしかできない死後の彼であったが、案内人のアルバート（キューバ・グッディング・ジュニア）に、奇妙だが美しい世界に連れていかれるのであった。

そこは、アニーが復元したり彼女自身が描いていた絵画が立体化されたところで、先立たれていた愛するペットとも再会する。さすがに、アニーと一緒というわけにはいかないが、思い出の中に浸ることはできた。

ところが、そんなクリスに驚くべき知らせがもたらされる。アニーが絶望のあまりに自殺をはかり、その結果としてクリスとは異なる世界、すなわち地獄に行くというのである。

クリスは何とかアニーを取り戻すべく、地獄の入り口へと向かい、渡し守であるザ・トラッカー（マックス・フォン・シドー）に懇願するのだが……。

このように、ストーリーとしては各国の神話に見られるもの（欧米圏の人々にとっては、エウリディケを救おうとするオルフェウス）だが、中心となる死後の世界の映像化が、大きな見どころであるのは間違いない。例えば地獄においては、古今の軍艦が海の墓場にひしめいているといった具合だそうだ。

ただし作品に対する評価は、ニューヨークの批評家の判定によれば概して厳しく、ほとんどが否定的なものとなっている。とはいえ、興行の方では最初三日間の売り上げが一五八三万ドル余、一週間では二〇三三万ドル余の興収と、同時期にスタートした「アンツ」にひけをとらない滑り出しとなった。

ただ、翌週以後のスタミナでは「アンツ」に伍すことはできず、二週目は最初の週に比べて三割減との結果になっている。作品としての生命力の維持は、かなり難しそうである。

エディ・マーフィの新作

メガヒットになった、「ドクター・ドリトル」に続くエディ・マーフィの新作、「**ホーリー・マン**」**"Holy Man"**（スティーヴン・ヘレック監督）が、10月9日にブエナ ビスタの配給で公開された。

テレビのホーム・ショッピン

CONTENTS

from U.S.A.
- What Dreams May Come
- Holy Man
- The Mighty
- Clay Pigeons
- Antz
- A Night at the Roxbury
- The Imposters
- PFE売却に一定の決着

On the Production
- 「サイレント・ランニング」のリメイク
- 「ツイスター」「カサブランカ」「ドクター・ドリトル」の続編
- "American Psycho" ディカプリオの新作 "The Beach"

from EUROPE
- Le Comptoir
- Lautrec
- La classe de neige
- Chacun Pour Soi
- Chat noir Chat blanc
- Place Vendôme
- Cantique de la racail

from ASIA
- 台北映画祭（二）

from JAPAN
- 「鉄道員」
- 「皆月」
- 「SERENDIB 神様からの贈り物」
- 「新宿やくざ狂犬伝・一匹灯」

Digitized by Google

グ番組を担当しているリッキー・ヘイマン（ジェフ・ゴールドブラム）は、新たな上司から二週間以内に成果を出せと言われ、頭を抱えていた。さらに不運にも、フリーウェイを走行中にタイヤがパンクし立ち往生となってしまう。

ところが、ちょうどそんなところに、G（マーフィ）と名乗る不可思議な人物が現われる。車が行き交う中を泰然自若としているGだったが、リッキーが自分の車に乗せると気を失う。

これは暑さに参ったというだけのことなのだが、行き掛かり上、リッキーは自宅でGの面倒を見るようになる。このGなる人物は、人生を達観した一種の導師で、テレビ局の幹部に知られるや、番組で使ってみようといった決定が下される。

ところが、オン・エアーとなるや、Gは段取りなどを一切無視した突飛な行動と発言を繰り返す。それを目の当たりにして覚悟を決めたリッキーであったが、案に相違して大好評となっていくのだった。

テレビというメディアの影響力と、その視聴率競争で自己を見失う個人の検証と、まとめられるような作品ではあるが、仕上がりに対するニューヨークの批評家の評価は総じて厳しく、ほとんどが否定的なものとなってしまっている。

興行の方も、最初三日間の興収が五一一万ドル弱にとどまり、次の週末にはその半減となるなど、低調な数字のまま早々にスクリーンから退場することになりそうな展開である。

どうやら、80年代のようにエディ・マーフィ映画なら何でもヒットとはいかないようで、最初に触れたメガヒットの次は不発という結果である。

それにしても単なる偶然だろうが、「ナッティ・プロフェッサー」の次で不振だった「ネゴシエーター」も、ブエナ ビスタが扱った作品であった。こういう相性もあるのだろうか。

●シャロン・ストーンの新作

シャロン・ストーンが障害を持つ子の母親を演じる「**マイ・フレンド・メモリー**」"**The Mighty**"（ピーター・チェルソム監督）が、10月9日にミラマックスの配給で公開となった。

グエン（ストーン）の息子ケヴィン（キーラン・カルキン）は、背骨が湾曲する進行性の難病で、徐々に体の自由がきかなくなっていくという状況にあった。しかし彼は、気持ちは前向きで、引っ越し先の隣人の少年マックス（エルデン・ヘンソン）の読書相手をつとめる。

このマックスは、父が重罪犯で文盲という状態だったのだが、ケヴィンとの交流が新しい世界を知るキッカケとなっていくのであった。

ストーンの新作と言っても、この内容から推察できるように彼女は脇役である。ともかくも「氷の微笑」のことを考えれば、役の幅は広がったものである。

作品に対する評価は、概して好意的であるが、興行となると、限定規模でのスタートをどれほど拡大していけるものか、一定の限界があるようではある。

●ホアキン・フェニックス主演のサスペンス

リドリー・スコットがプロデュースに当たった「**クレイ・ピジョンズ**」"**Clay Pigeons**"が、9月25日にグラマシーの配給で公開された。監督はこれがデビュー作となるデイヴィッド・ドブキンで、脚本のマット・ヒーリーにとっても初作品である。

モンタナに暮らす青年クレイ（ホアキン・フェニックス）は、親友であるアール（グレゴリー・スポーレダー）の妻アマンダ（ジョージナ・ケイツ）と関係を持っていた。うまく彼の目を盗んでいたつもりだったが、アールは知っており、射撃練習中に銃口を向けられてしまう。

しかし意外にもアールは、クレイの目の前で自殺する。自分が殺したかのように見られる状況に、クレイはアマンダに助けを求めるが、逆に彼女は彼が逮捕されるのを望む始末。それだけではなくアマンダは、クレイに手を貸そうとしたウェイトレスのグロリア（ニッキー・アーリン）を射殺し、これまたクレイが疑われるような状況に追い込んでいく。そこでクレイが出会うのが、行きずりのトラック運転手というレスター（ヴィンス・ヴォーン）で、クレイには救いの神のように見えた。ところが実はレスターは連続殺人魔で、他ならぬアマンダを手にかけていく。言うまでもなく、クレイは全てを独力で解決していかなければならないはめになる。

タイトルは、クレー射撃で使われる円盤型の的を意味するが、主人公の名前からすると一応の裏のニュアンス（間抜けなクレイ）も含めているのかもしれない。なおレスターを演じるヴォーンは、公開を控えた「サイコ」のリメイク版で、ノーマン・ベイツ役を演じる。

作品に対するニューヨークの批評家の評価は、文字通り賛否半々きれいに分かれている。この作品のストーリーを説得力のあるものと受け取れるかどうかが、最大の分岐点のようだ。

興行の方は、十九館でのスタートで、まずまずの水準での売り上げとなっている。ただ翌週からの規模拡大にともない、当然ながら売り上げの数字は伸びているものの、スタミナ不足も明らかになりつつある。

●「アンツ」の評判

日本でも公開の始まった、全編がコンピュータ・グラフィックによる（CGI）長編アニメーション「**アンツ**」だが、アメリカでは10月2日、ドリームワークスが配給する最初のアニメーション作品として封切られた。ストーリー内容や声の出演者の豪華さはここで繰り返すまでもないだろうから、本国での評判にしぼってまとめておく。

まず批評家からの評価だが、ニューヨークをはじめとした、ロサンゼルス、シカゴなどの大都市いずれにおいても、圧倒的好評を集めている。実際、否定的見解は皆無という状態である。

そして興行は、最初三日間で一七二〇万ドルの興収、翌週の週末も一四七一万ドル余の売り上げで、二週連続のトップとなっている。週単位としては、ほぼ二〇〇〇万ドルずつという、落ちの少ない展開である。

実は「アンツ」は当初の予定を早めて、11月公開のディズニーのCGI長編アニメーション第2弾の先手を打つ形でスター

Digitized by Google

トさせたのだが、結果は相当な健闘と言えるだろう。

PFEの売却に一定の決着

本棚でたびたび取り上げてきた、ポリグラム・フィルムド・エンタテインメント（PFE）の売却に一定の決着が着いた。その結果は、PFEの経営陣が望んでいたような全体としての存続ではなく、ライブラリーの先行売却という、事実上の解体につながるようなものとなった。

具体的には10月22日、96年3月までに封切られていた劇場用映画作品のライブラリーを、二億五〇〇〇万ドルでMGMが購入することが発表された。前号では、MGMは具体的に動いていないと報告したが、10月初旬に名乗りを上げ、先行の他社を上回る資金力で獲得に至った。

一方、PFEにはテレビ作品のライブラリーもあるのだが、こちらも一億三〇〇〇万ドルでカールトン・コミュニケーションズに落ち着く見通しである。

ライブラリーとは、一定の売り上げが確実に見込める資産だけに、その喪失は、つまりPFEの今後の映画製作の一つの支えが奪われることを意味する。それでもPFE経営陣は、あきらめてはいないそうである。

〔濱口幸一〕

on the Production

「サイレント・ランニング」のリメイク

またまたリメイクの話題から始めることにしよう。

68年公開の「2001年宇宙の旅」で名を上げ、77年の「未知との遭遇」や82年の「ブレードランナー」を手掛けて映像の魔術師とまで呼ばれた特撮マンのダグラス・トランブルが、72年に監督としてのデビューを飾った作品「サイレント・ランニング」"Silent Running"がリメイクされることになった。

オリジナルの舞台背景は西暦2000年。地球上は環境破壊によって植物が育たない環境になっていた。そんな状況の中で地球政府は、環境が元に戻る日までの保存の目的で、最後に残った森林全体を温室に入れ、宇宙に打ち上げる。しかしその温室ステーションでドローンと呼ばれる作業ロボットと共に植物を育成する任務に就いていた主人公は、ある日、地球政府からの帰還命令を受け取る。それは地球原産の植物を全滅させることを意味するものだった。

オリジナルの脚本は、「ダブル・ボーダー」のデリク・ウォッシュボーンを始め、マイケル・チミノ、スティーヴ・ボッコらが手掛け、音楽をフォークの女王ジョーン・バエズが提供したというもので、この顔触れからも見て取れるように、社会問題を真向から見据えた硬派の作品。ましてや30年近くも前に環境問題を先取りした作品という訳だが、まあ正直な話は先取りし過ぎて公開当時はあまり理解もされなかったという面もあった。日本では当時の劇場公開はなかったが、初回のテレビ放送では事前の問い合わせが最も多かったともいわれており、テレビで見ても、ステーションが土星の輪をくぐるシーンなどは、トランブルの視覚効果とあいまって、素晴らしく感動的なシーンだったと記憶している。

「サイレント・ランニング」

その作品を今回は、「コン・エアー」のサイモン・ウェストの監督でリメイクするもので、ウェストは映画化権を保有するユニヴァーサルの首脳と共にオリジナルを再見したが、その際に「SF映画だから気に入ったが、正直言って物凄いノスタルジアを感じた」と語っている。しかし同時に「（オリジナルの公開）当時より今日的な作品だし、今のほうがずっと環境問題に深い理解を得られるだろう」ということだ。

リメイクの脚本は、ルディー・ゲインズと、前回"Superman Lives"の項でも名前が出たデニス・ホッパー監督の「逃げる天使」を前回のギルロイと共に手掛けたジョン・ライスが担当。なおライスは、最近話題のアメリカンコミックスの映画化"Silver Surfer"の脚本も手掛けている。出演者などは未定だが、ウェストとしては、自ら製作にもタッチすると同時に、脚本が完成されたら某大物プロデューサーに協力を仰いで、この作品を大作に仕上げたいという意向のようで、かなりの作品が期待できそうだ。

「ツイスター」「カサブランカ」の続編

お次は続編の話題がいくつか届いている。

まずは、以前から紹介している「ツイスター」の続編"Twister 2"で脚本家が発表された。発表されたのはダレン・レムケという新人で、彼がマイケル・クライトンの原案から脚本を執筆するということだ。なおレムケは、タッチストーンのスタッフライターから脚本家に転身、現在ドリームワークスで進められているCGI作品の"XO"や、マーク・ロマネク監督予定の"Paladise Falls"、またフォックスで"The Reckoning"という作品も手掛けている。

ところでこの作品のオリジナルは、ワーナーとユニヴァーサル、それにアンブリンが共同で製作、配給したものだが、続編でもその体制は維持されているようだ。ただし続編の製作はワーナーが中心になっているようで、今回の脚本家の名前もワーナーから発表されている。製作者は前作と同じキャスリーン・ケネディとイアン・ブライス、それにクライトン。ヘレン・ハント、ビル・パクストンらの出演者と、監督のヤン・デ・ボンが続編にも絡むかは未定だが、製作者の意向では、出演者は前作のままで行きたいということだ。

続いては、43年のオスカー作

Digitized by Google

品賞を受賞した名作「**カサブランカ**」の続編となる小説が発表された。オリジナルは"Everyone Comes to Rick's"と題された舞台劇を映画化したものだそうだが、第二次世界大戦の最中に製作され、ハンフリー・ボガートとイングリッド・バーグマンによる戦時下のはかないロマンスに、当時のアメリカを支えていた反ナチズムの思想が見事に融合されて大ヒットを記録、アカデミー賞では作品賞を始め監督賞、脚色賞も獲得した。

そして今回は、この映画の続編がマイケル・ウォルシュという作家の手で書かれたもので、発表された小説の題名は**"As Time Gose by"**。映画の主題歌のタイトルでもあり、主人公たちの心情を表わしたこの言葉が、続編の題名に採用されている。なお映画のキャラクター権はオリジナルを製作したワーナーが所有しており、今回の小説も姉妹会社のワーナーブックスが全世界の出版権を持っている。因にすでに14カ国で出版権が契約されているそうだ。となれば、この続編の映画化もワーナーで行われることになる訳だが、さてボガートとバーグマンの役を誰が演じるのか、楽しみな作品になりそうだ。

「カサブランカ」

続編の話題の最後はこの夏の公開作品で、全世界の興行収入ですでに2億5000万ドルを稼ぎ出しているエディ・マーフィ主演「**ドクター・ドリトル**」**の続編**が計画されている。まあこれだけ大ヒットだし、ヒュー・ロフティングの原作にもシリーズがあるから、続編は問題ないところだが、すでにマーフィも再出演の意向を示しているということで、現在は脚本家の選考に入っているそうだ。ただし前作を監督したベティ・トーマスは続編への参加を希望しておらず、監督の選考は改めて行われることになる。

なお、マーフィは、一昨年に大ヒットした「**ナッティ・プロフェッサー**」**の続編**も来年2月の撮影開始で予定されており、ちょっと続編づいているようだ。

ディカプリオの新作ほか

後半は短いニュースをまとめておこう。

何度も紹介した**"American Psycho"**で、メアリー・ハロン監督が希望していたクリスチャン・ベイルの主演が契約された。この作品では一時期レオナルド・ディカプリオの主演が発表され、それに反対したハロン監督の交替が発表されるなどごたごたが続いていたが、結局もとの鞘に納まったということだ。ただし製作費はディカプリオのおかげ（？）で多少増額され、現在は1500万ドルの予算が組まれているようだ。また共演者には、相手役の女性にドリュー・バリモアとリヴ・タイラー、また主人公を追う探偵役にはジャン・レノが交渉されているということで、それなりに大きな作品になってきそうだ。

一方、ディカプリオに関しては、フォックスから、**"The Beach"**という作品が来年1月の撮影開始で予定されている。この作品は、アレックス・ガーランドとうい作家の同名のベストセラー小説を映画化するもので、タイ国の沖にあるという理想の海岸を目指して旅をする3人の若者を主人公にしたロマンティック・ストーリー。「トレインスポッティング」などのジョン・ホッジの脚色、ダニー・ボイルの監督で、製作費は400万ドルが計上されている。なおディカプリオの相手役には、近く公開される"En Plein Coeur"というフランス映画に主演したヴィルジニー・ルドワイヤンとギヨーム・カネという2人のフランス人俳優が抜擢されている。来年1月にはタイで現地ロケが行われるということだ。

最後はまたまた「**スター・ウォーズ**」**新3部作**の話題で、来年5月21日の全米公開が発表されているその第1作の音響に、Dolby Digital-Surround EXという新システムが採用されることが発表された。この新システムは、ドルビーとルーカスフィルムのTHXサウンドが合体したもので、従来の5・1チャンネルのドルビーサラウンドにさらに観客席の後ろ中央からの音響が加わった6・1チャンネルのシステム、これにより臨場感にあふれた音響が再現できるということだ。なおこの発表は、オスカー受賞者でスカイウォーカーサウンド代表のゲイリー・ライドストロームが行ったが、実は以前に彼が来日して本誌でインタビューをさせてもらったときには、彼はTHXに関しては専門ではないということで、同伴した女性エンジニアの方に説明してもらったもので、それを思い出して懐かしくなった。

〔井口健二〕

from Europe

ソフィ・タチシェフ初監督作

ソフィー・タチシェフ、この名前ピンと来ませんか？　そうです、かのジャック・タチの娘さんです。お父さんの「プレイタイム」で編集助手に付いてから彼女は、ずっと映画の裏方として編集やサウンド・エディターの仕事をしてきた。94年には「のんき大将脱線の巻」のカラー・ヴァージョンを仕上げた。

「**カウンター**」**"Le comptoir"**は彼女が初監督した長編だ。木造のどっしりとしたバーのカウンターを軸に、家業のカフェを継いで生涯独身で過ごした女性（ミレイユ・ペリエ）の個人史と、彼女の廃業にともないそのカウンターを引き取った若い女性二人の心の変化を交錯させながら描く。舞台となるブルターニュ地方の風景が印象的なホンノリする作品。このそこはかとないホンノリ感は、やはり父親

Digitized by Google

譲りか…？

●ロートレックの伝記映画

「ロートレック」"Lautrec"は、画家、トゥールーズ・ロートレックの伝記映画。ベルエポックと言われた時代のパリと地方貴族（ロートレックは貴族の出）の生活振りをお金をかけて再現し、内容も、多分とても事実に忠実に描いていると思われる。遜色のない映画ではあるが、こういう伝記映画というもの自体がなんかレトロな存在だ。

小さい頃の大病で身体の成長が止り非常に小柄だったロートレックを、レジス・ロワイエというそっくりさんが演じる（なかなか好感がもてる男優だ）。ロートレックの愛人、シュザンヌ・ヴァラドンにはエルザ・ジルベルシュタイン。ヴァラドンは、モンマルトルの画家達のモデル、本人も画家、そしてユトリロの母だ。こういったモンマルトルの美術界のキーパーソン達、例えばルノワール、ヴァン・ゴッホ等も登場し、またフレンチ・カンカンで一世を風靡したムーラン・ルージュに象徴される時代の空気を伝える。

監督は、舞台演出家のロジェ・プランション、3作目の映画作品となる。

「カウンター」

●クロード・ミレール監督のスリラー

「なまいきシャルロット」「小さな泥棒」……とむしろ成長期の少女に目を向けて来た感があるクロード・ミレールが、初めて少年に目を向けた。しかも、父親を乗り越えねばならぬ少年心理、西洋心理学風に言えばオイディプス・コンプレックスがテーマだ。それを悪夢と現実の境界線が見えないスリラー仕立てで描いたのが「スキー教室」"La classe de neige"。今年のカンヌで審査員賞を受賞した。家庭から外に出て普段とは違った環境に置かれた時に、深層心理は発覚するのか、集団生活を背景にしているという点では、同監督のデビュー作「一番うまい歩き方」とも共通している。

大人しい外見の中に悪魔性を秘めた主人公の少年、ニコラを演じたクレマン・ヴァン・デン・ベールは、子供のくせに（失礼！）抑えた演技を心得ている。同名の小説でフェミナ文学賞を受賞している若手小説家、エマニュエル・カレールが脚本にも参加している。

●ボンツォラキス監督作

ブリューノ・ボンツォラキス監督の「それぞれの道」"Chacun pour soi"は今月の掘り出し物だ。

ニコラとティエリーは幼い頃からの親友で、兵役も一緒に過ごした（フランスも徴兵制度は廃止されることになったが）片時も離れたことがない仲。さて社会に放り出されると何の取り柄もない二人には失業者というレッテルが待っていた。直にニコラにはフランソワーズという堅気の恋人が出来て新生活が始まる。ティエリーの気持ちは複雑だ。親友をさらわれたみたいで寂しい。ティエリーが警備員の仕事を見つけてカップルが住む町に越して来た頃から、ニコラとフランソワーズの関係にヒビが入り始める……。

人間関係の綾を描く一方で、社会という現実にうまく立ち向かえない男達の姿を描く。無名の俳優達の演技に真実味があり、映画というフィクションを観ているという距離感がない。この監督の前作「家族を憎む」"Familles, je vous hais"も同様に印象的だった。地味な作品ばかりを撮りつづけるであろう地味な監督だから、ブレイクすることはないだろうが、注目に値する。何作品かまとまった時に、ほ〜って感心されそうな監督だ。

●クストリッツァ監督の新作

このヴァイタリティは何なんだ!? やっぱりエミール・クストリッツァはスケールが違う。本人も大きいけど、作品の懐の深さも段違いだ。「アンダーグラウンド」のあと一度廃業宣言をした。嘘だとは思っていたが案の定「黒猫くん、白猫くん」"Chat noir Chat blanc"で早々復活。誠にめでたい。やっぱりこういう稀有な才能を眠らせておくのは社会の損失だ。

本人いわく「自然体の生命に対する僕の愛と情熱を描きたかった。光とカラーに溢れた人生に僕は回帰したんだ。悲劇とはおさらばだ。それが証拠に、今度の映画の中では死者だって蘇る」というわけで、今回の作品は「ジプシーの時」に戻って、ジプシー達が主演する。クストリッツァは、ジプシーという民族が有するエキセントリックとまで言える直情的な感情の吐露に強く惹かれている。彼等は自分の気持ちを臆することなく表現する。だから映画も彼等のそんなエネルギーそのまま。猥雑で過剰な笑いと音楽でどんどん押しまくり、観る者を否応なく彼等の世界に運び込む。自分の感情を露にするのは、はしたないことだというような教育を受けて来た者は、最初かなり戸惑うが、いつの間にか、まんまとあっちのペースに乗せられている。恋する男女の、ひまわり畑での追っかけっことか、映画的カタルシスも待っている。底抜けな映画だ！ そんじょそこらの映画とランクが違う。

●カトリーヌ・ドヌーヴの新作

「ヴァンドーム広場」"Place Vendôme"は良く出来たそんじょそこらの映画である。パリのヴァンドーム広場は有名宝石店が軒を並べていることで有名。この界隈を舞台に、つまり宝石商の世界を背景に、過去の傷を引きずる女（カトリーヌ・ドヌーヴ）、彼女の若い頃を踏襲しているような野心的な娘（エマニュエル・セニエ）、そしてドヌーヴをかって傷つけた男（ジャック・デュトロン）とボロボロになりそうな彼女に接近する男（ジャン＝ピエール・バクリ）と四者間のパズルを解くよ

Digitized by Google

うに物語は構成されている。

なんと言っても〝マドモワゼル〟ことカトリーヌ・ドヌーヴの独断場。その貫禄たるや大したものである。この演技で9月のヴェネチア映画祭で女優賞を獲得した。エマニュエル・セニエがポランスキーのマスコットガールではなく立派な女優であることを証明している。監督は、女優のニコル・ガルシア。だから、役者の演技を引き出すのに長けているか？　これで3本目の監督作。壊れそうな女を描くのが巧い。

フロール文学賞受賞小説の映画化

小説家のヴァンサン・ラヴァレックが、94年にフロール文学賞を受賞した自らの同名の小説を映画化した「ごろつきの賛美歌」"Cantique de la racaille"は今月の異色作。

とにかく社会で成功したい男、ガストン（イヴァン・アタル）が主人公。彼は、17歳の娘、マリー・ピエール（新人のヴィルジニー・ラヌー）を自分の幸運の女神と信じて放さない。ガストンには何のバックもないので、事業を興す為の最初の一歩は、資金作りの為の窃盗である。その高級車泥棒に成功した彼は、その後とんとん拍子で事業を拡大して行く。といっても事業内容は盗んだビデオデッキやTVを売りさばくことなのだが……。

半年足らずで世間体は青年実業家、にわか成金の彼は郊外に家を借り、マリー・ピエールは妊娠、と何もかも思い通りだ。しかし、余りに首尾良く行き過ぎるので、不安も芽生えてくる。そのガストンの被害妄想的な予感がだんだん現実になり始めて、彼は瞬く間に天国と地獄を見るハメに……。しかしどんなに下まで突き落とされても、彼は夢見る。今の自分は仮の姿、また事業を興して成功するのだ。テーマの独自性が光る。イヴァン・アタルが作り上げたガストン像、ヴィルジニー・ラヌーのマリー・ピエール、共に説得力のある人物像だ。他に「TAXi」でブレイクしたサミー・ナセリも顔を出している。

〔吉武美知子〕

「ヴァンドーム広場」

from Asia

★台北映画祭（二）

前回は、台北映画祭の授賞式を取り上げ、そこにとりわけ象徴的に表面化していた様々な意味での金馬奨との対比的性格——つまり伝統、権威で特徴付けられる金馬奨に対して、若々しさ、簡素さで特徴付けられる台北映画祭——について、まずは紹介した。

だがもちろん、このような対比的性格は何も授賞式だけに表れていたものではない。むしろそれは、この映画祭全体、その企画発足の当初から良い意味で運命的に纏わされていた性格でもある。台北映画祭の開催が正式に決定し、準備作業が開始されたのは去年のことだが、その金馬奨との予め運命付けられた対比的性格は、それより遙か昔から図らずもすでに用意されていたとも言えるのだ。そのことを理解するためには、およそ一〇年の月日を遡る必要がある——。

一九八八年、台湾・香港映画界の一年を総括するイベントとして長らく君臨してきた金馬奨に、強力なライバルが出現した。即ち「中時晩報電影奨」の発足である。それは台湾の代表的新聞「中国時報」系列の一夕刊紙である「中時晩報」が主催する映画賞で、表面的にのみ見れば、別に金馬奨にとっては気に止めるまでもなかろう小さな出来事に見えたかもしれない。だが、それまでの台湾映画界の流れを知る者にとっては、実際のところそこには大きな意味が込められていた。というのも、この毎年金馬奨直前に発表される賞こそ、実は金馬奨への大いなる批判的意識を持って始められたものだったからだ。

一九八八年と言えば、既に例えば侯孝賢は台湾を代表する作家として国際的に絶大な評価をされていた時代である。だがその当時まで、彼は地元の金馬奨では一度たりともグランプリや最優秀監督賞の栄誉を得たことがなかった（その頃の金馬奨での評価の低さに対する彼の気分は、香港の舒琪が監督したドキュメンタリー「SUNLESS DAYS」で彼自身の口から正直に語られている）。このことに象徴されるように、当時までの金馬奨は今と較べても遙かに保守的、あるいは非映画的とも言える評価基準で賞の選考が行われていた（因みに、その後侯孝賢は「悲情城市」でついに金馬奨最優秀監督賞を受賞したが、今日に至るまで未だグランプリは受賞した試しがない）。そして、そうした状況に対し、一群の批評家、映画監督たちが反旗を翻す形で始めたのが、この中時晩報電影奨だったわけだ。その第一回の審査員は映画監督の楊徳昌（エドワード・ヤン）を始め、台湾ニューウェイブの潮流の影の実力者としてニューウェイブ以前の古い映画人や映画業界を過激に攻撃してきた焦雄屏（ペギー・チャオ）、黄建業、張昌彦ら国内で絶大な影響力を誇る批評家たち。たとえ賞の名に歴史も権威も予め備わってはいないにしても、そこで下された映画の評価に対する信頼性という面では金馬奨よりむしろこちらの方が決定的な説得力を持つに充分な陣容だった。

そして侯孝賢や楊徳昌らに対する評価はもちろん、更に蔡明亮や王家衛ら新世代の才能の発見、評価も金馬奨に先んじて行っていくことになる中時晩報電影奨は、翌89年からは非商業映画部門、つまり自主製作映画に

Digitized by Google

対する賞も併せ持つようになる。主に学生たちによって作られた作品が評価の対象となるこの部門を持つことで、中時晩報電影奬は金馬奬に対してますますヤング・ジェネレーション寄りの賞としての存在感を増していくことになったのだ。その後、この商業映画部門と非商業映画部門という二本柱で安定的に開催されてきた同賞だが、97年、大きな変貌を遂げた。その一つが即ち中時晩報電影奬という名称の廃止。代わって、この年から台北電影奬という名称が使われるようになる。その理由は単純なことだった。台北市が主催に名乗りを上げたからである。そして名称の変更にとどまらず内実面でも大きく変化し、賞の対象となるのは非商業映画のみということになる。

そしてこの流れが、同じく台北市の主催になる98年の台北映画祭に結実したわけだ。映画祭の名称としては「台北映画祭（台北電影節）」でありながら、そこで出される賞の名称は「台北電影奬」と、微妙に名前が異なっているのも、ここまでの経緯を知れば理解できるはずである。つまり過去の台北電影奬というイベントが、上映を伴う映画祭へと発展したのに伴い「台北電影節」と改称されると共に、その一部門として存在する賞関係のイベントは、そのまま「台北電影奬」という名称が引き継がれた。そしてその台北電影奬で、今回から再び非商業映画に加えて台湾の商業映画を対象とする部門が設定され、また更に外国映画に対する賞も新たに作られたのである（ただし商業映画に対する賞は、中時晩報電影奬時代のように香港映画までは対象としてはいない）。

前回、台北電影奬の各部門受賞作を紹介した際にはスペースの関係で、上映作、ノミネート作までは記載しなかったが、実はその部分で一つ、記しておくべき重要な事柄がある。というのは、この台北電影奬は、大部分の他国の映画祭での賞と、根本的に違う部分があるからだ。一般的に、映画祭でのオフィシャルな賞の受賞作品は、その映画祭での上映作品、厳密に言えばコンペ部門での上映作品から選出される。それに対して、台北映画祭での台北電影奬受賞作は、必ずしも映画祭で上映された作品から選ばれているわけではないのだ。

そのような一般的な選出のされ方、つまり上映作からの選出がされているのは、インターナショナル・コンペティション部門のみ。今回の台北映画祭での海外からの上映作品は、コンペ対象作とそれ以外とに分かれており、そのコンペ対象上映作から各受賞作は選ばれている（とはいえプログラム・ブック内や上映会場の上ではコンペ部門作品かどうかは明確に区別されてはいなかったので、一般観客はどれがコンペ部門作品でどれがそうでないか、ほとんどわからなかっただろう）。

一方、その他の部門、つまり台湾商業映画部門と非商業映画部門に関しては、一部の受賞作品が上映プログラムに入ってはいたものの、決して上映作品がつまりノミネート作という関係にあったわけではない。例えば商業映画部門について言えば、グランプリの「魔法阿媽」こそ偶然映画祭のクロージング上映作でもあったものの、あとは六月（ジューン・ツァイ）が推薦新人賞を受賞した「JAM」が上映プログラムに含まれていたのみ。それ以外の各賞受賞作やノミネート作は、どれも映画祭では上映されていないのだ（もっとも最優秀監督賞、美術賞受賞の「フラワーズ・オブ・シャンハイ」と審査員特別賞受賞の「洞」は、幸い映画祭期間中にロードショウが開始されていた）。また非商業映画に関しては、ノミネート作としては一本たりともプログラムに含まれてはいない。

この一見不可思議で理解に苦しむ賞と上映作品の関係も、〝今回新しく発足した台北映画祭とその一部門として受け継がれた台北電影奬〟という歴史的経緯を知れば、理解するのはそれほど困難ではないだろう。つまりインターコンペ部門以外の各部門は、いずれもこれまでの中時晩報電影奬と台北電影奬の選考方式がそのまま持ち越されているのだ。即ち、商業映画部門は、過去一年間に完成した作品が全て対象、非商業映画に関しては前回の台北電影奬締切り以降に完成し応募された作品が対象であり、この映画祭で上映されているか否かとは直接の関係はない。そして商業映画部門に関しては、受賞作だからといって急遽上映するわけではない。これはいずれにせよ台湾映画は、いつかはロードショウされ、見る機会が持てるから、ということだろう。一方、非商業映画部門の受賞作に関しては、各受賞作が映画祭の最後の数日を使って上映されるという具合だ。この部門に関しては、広く一般向けに上映される機会はこの場をおいて他にはそうそうないための配慮だろう。

またインターコンペ部門は、他の映画祭のように受賞作を授賞式の場で初めて発表する方式が取られていたのに対し、その他の部門は授賞式当日を待たずに全受賞作を発表していたが、これも旧来の中時晩報電影奬と台北電影奬のやり方の踏襲。台湾映画関係の賞に関しては、授賞式当日は単に受賞者が賞を受取りに来る晴れ舞台という位置づけであり、金馬奬のように各部門ノミネート者が息を詰めて発表を待つという性格のものではそもそもない。

台北映画祭と今回からその一部門となった台北電影奬は、表面的、公式的にはそれが約一〇年前にニューウェイブ系、アンチ金馬奬勢力の血気盛んな連中によって組織された行動の延長であることはどこにも謳われていない。しかし、前号で紹介した授賞式自体の様子とともに、こうした他国の映画祭の賞とは趣を異にする台北電影奬の映画祭内でのあり方からは、やはりそれが金馬奬とは対比的指向を持つものであることが、わかる人にはわかる形で示されているのだ。

（以下、次号）

〔暉峻創三〕

Digitized by Google

from Japan

「鉄道員（ぽっぽや）」の主演 高倉健に決定！

浅田次郎の第117回直木賞受賞作を映画化する東映製作「鉄道員（ぽっぽや）」の主人公・佐藤乙松役に高倉健の出演が決まった。高倉の映画出演は「四十七人の刺客」（94年／監督市川崑）以来5年ぶり、古巣東映作品の主演としては「動乱」（80年／監督森谷司郎）以来実に19年ぶりとなる。

同社の高岩淡社長は「主人公・乙松は高倉健しかいないと思っていたし、健さん一人に絞って交渉してきた。東映としては20年ぶりにお迎えできて大変喜んでいる。東映としては絶対ヒットさせなければいけないし、会社一丸となって頑張りたい」との異例の談話を発表している。

作品は、廃線が決まった北海道の、かつては炭坑の町として栄えた幌舞の駅を1人で守る定年間近かの駅長・佐藤乙松の人生を雄大な自然を背景に、詩情豊かに描くもの。原作（集英社刊）は97年出版以来、幅広い世代に共感を呼び100万部を超える大ロングセラーを記録している。

メインスタッフは、「冬の華」（78）、「駅 STATION」（81）、「あ・うん」（89）など高倉健主演作品を多く手掛けて来た監督降旗康男、キャメラ・木村大作が担当し、脚本を向田邦子賞受賞などベテランの岩間芳樹が務める。

作品は99年1月上旬クランクイン、北海道ロケを中心に撮影し、4月下旬完成。公開は6月全国東映系150館以上で拡大上映の予定。

高倉健

望月六郎監督 最新作「皆月」

「鬼火」でキネマ旬報監督賞をはじめ97年度の数々の映画賞に輝いた望月六郎監督の新作「皆月」（製作・配給：日活）が、10月25日都内ロケからクランクインした。

作品は、『ゲルマニウムの夜』で第119回芥川賞を受賞した花村萬月の純愛と新たな出発を描いた同名小説（吉川英治文学新人賞／講談社刊）の映画化。ある日突然妻に蒸発されてしまった橋梁設計士で冴えない中年男・諏訪徳雄が、チンピラの義弟、ソープ嬢の由美と共に妻探しに出る物語。「ひとひらの雪」「絆」の荒井晴彦の脚本を得て、望月監督が「恋 極道」以来メガホンをとる。

キャストは、主人公の冴えない中年男・諏訪徳雄役に「恋極道」で望月監督とコンビを組んだ奥田瑛二。チンピラの義弟に北村一輝、ソープ嬢・由美に吉元多香美、蒸発する妻に荻野目慶子が共演する。

作品は、東京・新宿、能登半島・皆月等でロケを行い11月中旬クランクアップ、12月下旬完成。公開は来年夏の予定。

スリランカ独立50周年記念の合作映画

スリランカ独立50周年を記念して日本・スリランカ合作映画「SERENDIB（セレンディブ）神様からの贈り物」（製作：トムコーポレーション）が製作される。

作品は、スリランカ独立50周年をキッカケに日本とスリランカとの文化交流を目的に企画されたもので、実話にもとづく映画化。1942年、英国東洋艦隊の基地セイロン島（現スリランカ）のコロンボ湾を爆撃して負傷した日本兵・木村進と彼を助けた現地女性・ラリサの恋物語を56年後、ラリサの孫アンナと木村の無二の親、大垣夫妻の回想形式で描くもの。

製作・監督の藤井智憲は、桂千穂とともに脚本も担当。共同プロデューサーはスリランカのジャンタ・ジャヤシラカが務める。

キャストは、主人公の海軍兵士・木村進に『天才たけしの元気が出るTV』でデビューし、今回映画初出演で初主演となる松田信行。木村の親友・大垣夫妻に長門裕之、南田洋子夫妻。他にスリランカのトップ女優、ヨショーダ・ウィマラダルマが木村の恋人、ラリサとその孫アンナの二役を演じる。

11月9日千葉・松戸戸定邸（徳川慶喜邸）でクランクイン、同18日より12月下旬までスリランカロケを敢行する。作品は99年2月完成、夏に全国上映の予定。

「新宿やくざ 狂犬伝・一匹灯」

「大安に仏滅!?」や「友情FriendShip」など精力的に映画製作を繰り広げる和泉聖治監督の新作「新宿やくざ狂犬伝 一匹灯」（製作・配給：大映／製作協力：ムービーブラザース）が完成した。

作品は、平成元年のバブル絶頂期に関東、関西それぞれの勢力がしのぎを削る繁華街・新宿で、自分の信じた者にだけ仁義を守りとおそうとする一匹狼・春日洋一の抗争を描く。脚本は「借主（シャッキング）」シリーズの香月秀之。

キャストは、主人公の春日洋一に「新宿の顔」「代絞」シリーズの的場浩司。春日に誘われる藤吉組組長に室田日出夫、その若頭・戸村に村野武範、他に萩原流行、志賀勝、梅宮辰夫、武本裕史、山口仁、でんでん、中野英雄らが共演。

公開は、来年1月16日よりシネマカリテにてレイトショー。

Digitized by Google

映画界ニュース

●ユニバーサル・スタジオが大阪にオープン！

アメリカ本国で絶大な人気を誇る映画をテーマにしたアミューズメント・テーマ・パーク「ユニバーサル・スタジオ」。ハリウッド、フロリダに続いて、外国では初となる第3号「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」が大阪に2001年春オープンする。詳細は次のとおり。

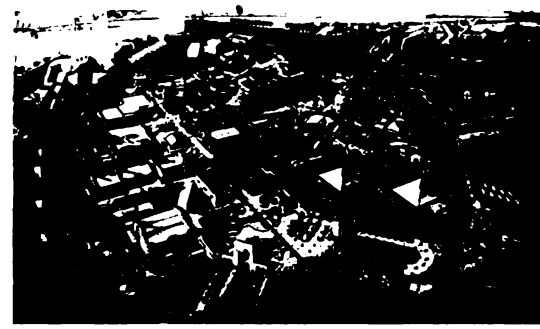
▽大きさ＝全体54ha、パーク面積39ha、駐車場15ha（ハリウッドより大きく、フロリダとほぼ同じ規模）

▽施設＝アトラクション施設18、飲食・物販施設45

▽場所＝大阪府大阪市此花区西部臨海地域

▽アクセス＝JR桜島線、桜島駅

▽スケジュール＝今秋に建設工事の着工、2001年春にオープン予定。



「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」完成予想図

Universal Studios Japan & ©Universal City Studios,Inc

●第21回PFF募集概要

インディペンデント映画のための映画祭「ぴあフィルムフェスティバル　PFFアワード」。今回で21回を数えるPFFアワード'99の、応募受付が11月2日よりスタートしている。詳細は次のとおり。

▽資格＝97年7月19日以降に完成したフィルム、ビデオ作品であればジャンル、上映時間、作者の年齢、職業、国籍は問わない。

▽応募要項＝1作品につき1枚の指定応募用紙が必要（用紙はPFF事務局に請求）。

▽応募期間＝98年11月2日～12月24日（消印有効）

▽経過＝99年4月上旬に決定、99年夏に開催される「第21回ぴあフィルムフェスティバル」で上映。

▽問合せ＝☎03・3265・1425（事務局）

●山路ふみ子賞決まる

1998年度の「山路ふみ子賞」（山路ふみ子文化財団）は次のとおり。

▽映画賞＝平山秀幸（「愛を乞うひと」）

▽功労賞＝照明技師・増田悦章

▽文化賞＝三谷幸喜（「ラヂオの時間」）

▽特別賞＝日活撮影所スタジオセンター

▽福祉賞＝大林宣彦（「風の歌が聴きたい」）

▽女優賞＝大竹しのぶ（「学校Ⅲ」）

平山秀幸監督

▽新人賞＝田中麗奈（「がんばっていきまっしょい」）

授賞式は11月27日、新橋ヤクルトホールにて。

訃報

李学仁氏（韓国／イ・ハギン／映画監督、原作者）98年9月22日、肺がんのため死去。52歳。韓国慶尚南道出身。東宝、日活などで蔵原惟繕、神代辰巳らに師事し、75年、在日韓国人が初めて日本で手掛ける劇映画「異邦人の河」で監督デビュー。続いて「詩雨おばさん」78、「赤いテンギ」79（未完）を監督。79年からは漫画の原作を執筆するようになり、『蒼天航路』では第22回講談社漫画賞を受賞した。

ジェームズ・ゴールドマン氏（米／劇作家、脚本家）。10月28日に死去。71歳。61年に"The Might Be Giant"や「冬のライオン」の原作となった"A Family Affair"（共同）などの戯曲を発表。「冬のライオン」は映画化脚本も手掛け、アカデミー賞脚色賞を受賞した。他に映画作品は、「ニコライとアレキサンドラ」71、「ロビンとマリアン」76、「ホワイトナイト」85などがある。脚本家のウィリアム・ゴールドマンは実弟。

河内桃子さん（こうち・ももこ／本名＝久松桃子／女優）11月5日、大腸がんのため死去。66歳。53年、東宝第6期ニューフェイスとして「女はひと筋に」でデビューし、「坊ちゃん社員」54、「ゴジラ」54、「奥様は大学生」56などに出演する。56年にはこれまでの演技に疑問をもち、俳優座養成所に入り演技の勉強をやり直す。以後、映画に出演しながら俳優座の女優として活躍した。『判決』62～66、『沿線地図』79、『もうひとつの道』80などTV作品も多数。晩年は舞台が主な活動場だったが、95年には「ゴジラVSデストロイア」に出演して映画ファンの話題となった。

Digitized by Google

川端靖男●指田 洋●鈴木 元●青木眞弥（本誌）

韓国で日本映画が解禁!! その可能性を検討する

「踊る大捜査線」が驚異の大ヒット

A 10月31日より公開となった「踊る大捜査線 THE MOVIE」（東宝）がすごい勢いだね。

B 東宝の発表で配収25億円。フジテレビとしても久々に10億突破作品になった。

C 前売り券の売れ行きもよくて、その状況を考えて、東宝もはりきって劇場館数200館を越えるブッキング。邦画系で200館以上は珍しいから、東宝もそうとう期待はしていたのだろう。

A そして、期待以上の結果となった。

D テレビドラマとの連動は、同じパターンで「あぶない刑事フォーエヴァー」がついこの間あったが、スタートはよくて7～8億以上、10億の可能性もあるといわれていたのだが、2週目に入ったとたんに落ちて、結局は4億どまり。それに比べると「踊る大捜査線」は腰の強い興行になりそうだ。作品の評価も上々だし。

B 僕はテレビシリーズはまったく観てなくて、映画版を初めて観たんだけど、初心者でも素直に楽しめた。警視庁と所轄の関係を描く発想が新鮮で、これを映画屋さんがつくると高村薫の小説のように重くなってしまう。

C 『踊る大捜査線』はハリウッド映画のエンタテインメントような作品。なぜ東宝（うち）では、このような種類の作品がつくれないんだ」と松岡東宝会長も話していた。

B 東宝がつくると、どうしても「誘拐」や「絆」といった重い作品になってしまう。それが悪いとはいわないが、観客は来なかった。

D しかし、「踊る大捜査線」だっていきなり観客がつめかけたわけじゃない。テレビシリーズが11本あって、スペシャル版が3本あって、そして映画になった。テレビがなくて、いきなり映画「踊る大捜査線」という企画だったら、まず通らないだろうし、通ったとしてもこれほどまでの大ヒットにはならなかっただろう。たとえ同じ内容、同じキャストの企画でも。

A まずタイトルからして、駄目だったんじゃないか、「踊る～」では。

D もともとテレビシリーズの視聴率はスタート時は芳しくなかったが、尻上がりに伸びてきて、10月6日に放送されたスペシャル版が25・9パーセント。そして10月31日の映画。そういう展開が成功したのだろう。

C 日本映画のドラマでは今年一番、全体でも「ポケットモンスター」（41億）に次いで第2位、第3位が「ドラえもん・のび太の南海大冒険」（20億5千万）。こうしてみると、ヒットするのは、テレビの映画化ばかりだ。

A 現時点ではスタート状況しかわからないので、この話題は次回にも掘り下げて語ることにして次に移ろう。

「踊る大捜査線 THE MOVIE」

Digitized by Google

「ビーストウォーズ」が正月映画一番の大穴!?

A　今年の正月興行はどうだろう。

C　日本映画は、東宝がシリーズ完結篇「モスラ3」、松竹が「花のお江戸の釣りバカ日誌」、東映がアニメ「ビーストウォーズ」といった対決。外国映画が、日劇系で「アルマゲドン」（BV）、日劇プラザ系「ドクター・ドリトル」（FOX）、日比谷映画系「X―ファイル　ザ・ムービー」（FOX）、ピカデリー1系「ジョー・ブラックをよろしく」（UIP）、ピカデリー2系「マイ・フレンド・メモリー」（松竹富士）、渋谷東急系「ロスト・イン・スペース」（ヘラルド）、ルーブル系「6デイズ／7ナイツ」（BV）といったところが主なチェーンの番組だ。

D　化ける可能性があるとしたら、東映の「ビーストウォーズ」かな。前売りがいい。

B　いま、小学生の間ですごい人気だよ。日本はまずおもちゃから入った。またよくできてるんだ、これが。

C　東映はその新商品を一般販売に先行して劇場で売る作戦をとる。「映画館を玩具屋にする」といっているよ。

A　そして、東映は次回作も「おもちゃ」か（笑）。

B　「モスラ3　キングギドラ来襲」は手堅く、前年並の10億前後じゃないか。ただ、ゴジラとキングギドラの戦いは見たいけど、モスラとでは……、という心配はあるけど。

A　松竹の時代劇版「釣りバカ日誌」の「花のお江戸の釣りバカ日誌」は？

D　夏の「釣りバカ日誌10」が5億。少なくとも昨年の「虹をつかむ男　南国奮斗篇」（3億7千万）以上はねらえるだろう。華やかだしね。

C　今年の正月作品は、年配層の観る映画が少ないから、かつて正月に「男はつらいよ」を楽しみにしていた観客を集めるのではないか。

B　しかし、なんといっても洋画の大作「アルマゲドン」が中心になって、全体を引っ張らないと。ブエナ　ビスタは60億をねらうといっている。

D　そこまでは……。

C　心配なのは、隕石が落ちてくる話は分かっているけど、内容が浸透してない。すると、夏に「ディープ・インパクト」を観た人は、もういいと思ってしまう。というのは、日本人は平均して1年間で1～2回しか映画館にいかない。そんな中で、1年のうちに同種の作品を2本も観ようと思う人が多くいるとは考えにくい。しかも、「ディープ・インパクト」は最終的に45億以上は確実、50億までいくというほど大ヒットしたからね。

A　ブラッド・ピットの「ジョー・ブラックをよろしく」もある。「X―ファイル　ザ・ムービー」はどうかな。熱狂的ファンが多くて、ビデオも売れているけど。

D　ただ、ビデオファンというのはテレビ視聴者と違って、ビデオで満足している部分が大きい。果たして劇場まで足を運ぶか、どうか。作品的にも、おもしろくて話題になっているというわけではないから苦戦を強いられるのでは……。

C　問題は「X―ファイル」に限らず、今年の作品で大台にのるものがあるかどうか。

A　ただ、メジャーの作品はこれからの宣伝がどう展開できるかにかかってくると思うよ。

D　頭角は「アルマゲドン」だろうけど、全体的に低いレベルでどんぐりの背くらべにならなければいいが……。

B　「ジョー・ブラックをよろ

「アルマゲドン」

© Touchstone Pictures

Digitized by Google

しく」は、ブラッド・ピットの人気、作品評価の高さからみて、正月興行のトップになるという声もある。ただ3時間の長呎が気にかかるけど。

A 昨年の「タイタニック」だって、公開前には大ヒットするなんて言われてなかった。東京国際映画祭で初めて上映された時には、「長すぎる」「『ロミオ&ジュリエット』だ」「正月から沈没船の話なんか見たくない」等いろいろ言われて、必ずしもいい評判ではなかった。でもフタをあけたらあのとおり。「ジョー・ブラックをよろしく」大ヒットの可能性も十分ありうるのではないか。

C しかし全体的にみると、どう転んでも「タイタニック」(130億)「メン・イン・ブラック」(33億)「エアフォース・ワン」(20億)「セブン・イヤーズ・イン・チベット」(15億)があった昨年のような結果にはならないよ。

韓国で日本文化解禁

A 韓国の日本文化解禁の話題に移ろう。

C 9月下旬に釜山映画祭に行ってきたんだけど、そこでの日本映画の人気はすごいものがあった。3回目になる今回は「のど自慢」と「カンゾー先生」が約5000人を収容できる野外劇場で上映された。すごい熱気だったよ。

A もともと、韓国では日本映画が人気あるとか。

B これだけ近いから衛星放送も簡単に入る。地域によっては、北海道より近いんだから(笑)。

C 釜山映画祭では、出品作品もそうだけど、インディペンデント作品が受けてたね。結局、若者は日本人といっしょで、「四月物語」の岩井俊二監督の人気はすごい。

D 3月にソウルで行われた映画祭にも招待された阪本順治監督から聞いた話なんだけど、〝山口智子みたいなトレンディ女優をどうやって「ビリケン」で起用することができたんですか?〟という質問を受けたそうで(笑)。

A よく知ってるねえ(笑)。

C 映画祭開催時期とちょうど入れ替えで金大中大統領が来日して、映画を含めた日本文化を段階的に、すみやかに開放していくと話して、政府が正式に発表した。対象作品は、カンヌ、ベルリン、ヴェネツィア映画祭などで受賞した評価の高い作品、日韓合作作品、日本人俳優が出演した韓国映画、政府主催の日韓共同映画祭で上映されたもの等々。だから、「HANA—BI」「影武者」「愛の黙示録」「三たびの海峡」などが候補となっている。

D 10月27日に輸入申請を出したものの中で、「愛の黙示録」の認可がおりた。

A では、これが第1号?

D いや、公開はいつになるのかわからない。配給会社としては12月に公開したいとのことだけど。

B 監督は韓国人だが、日本で撮影され100パーセント日本語による韓国映画「家族シネマ」が11月28日に封切りだと聞いている。

C 「愛の黙示録」は、12月1日に石田えりと日本での上映を手伝ったボランティア団体の人、約150人が、映画の舞台になったノッポに行って、祝賀会を行う。そして、12月中頃からソウル1館を皮切りにして、韓国国内で展開する予定で、これに関しては〝「愛の黙示録」を世界に送る会〟という会があって、その団体の韓国本部が自主上映組織をつくって、劇場公開をしていくようだ。

B 北野武監督の「キッズ・リターン」と「HANA—BI」

「愛の黙示録」

Digitized by Google

の配給会社はすでに決まっていると聞いたが……。

C そう。他に「うなぎ」「ポストマン・ブルース」「ラヂオの時間」「四月物語」「Love Letter」も決まったようだ。

A 新聞によると、「極妻」シリーズの問い合わせが多いとか。

D ほかにもいろいろとあるんだけど、ほとんどは仮契約の段階で、すべての金銭の授受が成立してるのは「失楽園」だけ。

A でも、市場としては微々たるものなのではないか。

C 韓国には韓国映画優遇制度というのがあって、自国の映画を1年間の4分の1上映しなくてはならない。

D だから、日本映画は4分の3の枠をハリウッド映画をはじめとする外国映画と争わなくてはならない。これはなかなか大変なことで、市場が期待されるといっても、「Shall weダンス?」や「もののけ姫」とった日本でもヒットしたクオリティの高い作品に限定されるんじゃないか。日本映画だからなんでもかんでもOKというのは甘いだろう。

C 現状では、アメリカ映画の市場が50パーセンを越えてしまっている。

D それに、認可制だからどんどん輸出できるわけではない。いずれ本数規制が出来てくるだろうし。

A 日本映画が素晴らしいとなれば、そんな枠も取っ払うことだって可能性としてはあるんじゃない?

C そういう意味でも、最初に公開される作品が、何に決まるのかは注目すべきだろう。「愛の黙示録」が公開になっても、大ヒットにはならないよ。意義はあるけど。

A 娯楽映画じゃないからね。それこそ「踊る大捜査線」の方がウケるんじゃないか(笑)。

C そう。結局、文化が開放されても、それが娯楽になっていかないと根づいていかない。

B しかし、いきなりエンタテインメントにはならないだろう。

C 韓国で日本映画が公開されたら、最初は話題になるだろうし、ブームにもなる。そして、それをどう続けていくのかということが、これからの重要な課題になっていくのだろう。

山中貞雄作品集

日本映画史上に不滅の光芒を放ち、
僅か二十九歳で逝った天才監督の全貌!

監督 山中貞雄

【全一巻】
現在収録し得る限りの全シナリオを収録し、詳細な解題を付す。

■A5判上製函入・定価各(本体9500円+税)

千葉伸夫編
処女作品から遺作までの作品評及び人物評、思い出などを収録。

実業之日本社 TEL03-3535-4441
〒104-8233東京都中央区銀座1-3-9

Digitized by Google

映画街

興行短信

竹入栄二郎

「竹入さん！これはホンモンだよ
こりゃあホンモンだ！」

亀山千広プロデューサーは視聴率が20％超えたら劇場用映画化してもいい、という許可を上司から貰った。フジテレビの連続テレビドラマ「踊る大捜査線」は97年1月7日（火）からスタートした。3月18日にその1クール目が終わったが、平均視聴率は18・2％、最高は23・1％と出た。この時点で劇場用映画として製作することが決定した。東宝配給で98年秋に公開することが決まったのは、半年以上も後の97年10月であった。

本誌11月上旬号の本欄に、「『あぶ刑』VS『踊る大捜査線』／日テレとフジの戦い」という恐ろしいタイトルの短信を書いた。東映／日本テレビ「あぶない刑事フォーエヴァー」が9月13日に公開され、高岩淡、岡田裕介東映社長、営業担当を歓喜させたダッシュを示し、配収は6億円は確実とされたが、果たして、東宝／フジテレビが組んだ刑事アクションは、東映／日本テレビ勢にどう挑むかが、1か月半前の興味だった。

「踊る大捜査線」の前売り実績やテレビ特番の視聴率などから、「あぶ刑」を凌ぐのは確実というのが、公開直前の盛り上がり方だったが、出足は、「正月や夏休みならまだしも、平月に業界中で日本映画がこんなに華やかな話題になったのは何年ぶりか」だった。

第11回東京国際映画祭が開幕する10月31日の午前11時頃、道玄坂の途中までくると渋東シネタワーの中山圭一支配人が、顔を火照らして「竹入さん！　これはホンモンだよ。こりゃあホンモンだ！」って大声で近づいてきた。「1回目、全部入っちゃって、高校生がさ、学校に欠席の電話するのに、ロビーの電話じゃ賑やかで、バレちゃうから外行っていいかってさ」。ご当人が高校生みたいに声を弾ませているのだ。

聞くと、初日前日の10月30日、有楽町マリオンには徹夜の列が出来はじめ、午前0時、2100人。開場直前には3200人。因みに「もののけ姫」では同時刻2300人だったという。午前8時日本劇場と日劇プラザ2館に1716人を入れて札止め。舞台挨拶を諦めた若者たちは、新宿へ、渋谷へと向かい、かくて中山圭一支配人を紅潮させた。

東宝の発表によると初日・2日目の全国公開劇場230館の合計は動員41万2401人、興収5億5181万7500円。これを、同じフジテレビ／東宝「ヒーローインタビュー」（平成6年9月3日公開、配収13億4千万円）に比べると、

「踊る大捜査線 THE MOVIE」

初日前夜、徹夜の列は有楽町マリオンを囲んだ！

Digitized by Google

動員で179%、興収165%になるという。公開期間は6週間。となると最終配収は幾らになるか。

「踊る大捜査線」は、東映／日本テレビと同様、テレビでの特番の結末を映画館で、派手に、鮮やかに、気持ち良く、すっきりと、痛快に、どんでんがえしも盛り込んで解決するという方法をとった。

フジテレビの特番は、昨年12月に第1回を放送し、フジテレビの年末特番全部の中のトップの視聴率26%をあげた。今年6月と10月の2回の特番も25%以上の視聴率をあげ、むしろ当事者をびっくりさせた。

かくして、東映／日本テレビVS東宝／フジテレビの軍配は、後者に上がることが確実となったが、ここで注目すべきは両者の映画館の客層である。年齢層は、

	東宝／フジTV	東映／NTV
14才以下		28・7%
15～17才	10%	23・0%
15～19才		
18～21才	35%	20～24才 23・3%
22～29才	26%	25～29才 10・7%
30～39才	11%	30才以上 14・3%

となっており、両者の年齢の分けかた等が異なるため厳密ではないが、東宝の15～29才の合計と東映の15才から29才までの合計とが大差ないことである。

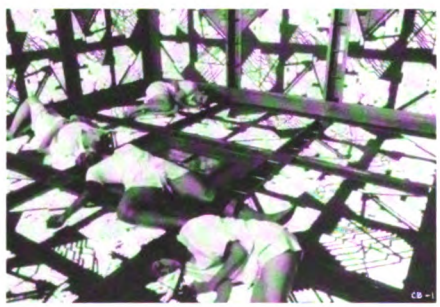
話は最初に戻る。亀山プロデューサーは、映画化に当たって、視聴率23%以上、東宝の公開規模は230館、しかして配収は23億円、とは数字語呂合わせも成った、とか。

スポットライト 内田達夫

ロール・プレイング・ゲーム感覚の映像で「CUBE」がヒット!!

9月12日からシネ・ヴィヴァン・六本木で公開（10月17日～30日はレイト興行。同期間中の昼間興行はシネセゾン渋谷へ拡大）されたヴィンチェンゾ・ナタリ監督の「CUBE」（ポニーキャニオン＝クロックワークス）が記録的大ヒットとなった。その勢いはシネ・ヴィヴァンのオープニング動員記録と本年度単館系公開作品の第1週目興収記録を更新。その上、公開4週目で劇場動員記録まで更新してしまったのだ。そこで、クロックワークス配給宣伝プロデューサーの田中尚美氏に、宣伝展開を中心に話を聞いた。

「ロール・プレイング・ゲーム感覚のストーリーとCGを多用したデジタル感覚の映像で、ファンタスティック系作品のファンやコンピュータ関係者を動員することは可能だと思いました。ただ、その層が動いただけでヒットするのは難しいですからいろいろと展開を考える必要があったんです。とは言ったものの、〝カナダの新人監督の低予算作品で、出演者はほとんど無名の人ばかり〟ということで、とにかく悩みましたよ。頼みの綱は試写室がいつも満杯になる、作品の面白さだけでしたから。そこで考えた手が、〝作品の面白さ〟を基本に、露出媒体の性格で少しずつ切り口を変えた宣伝方針を立てるということでした。例えば〝カナダ政府が後援、地元CG会社が最新技術を無料提供〟という話題性で新聞に、〝現代社会の閉塞感を象徴したストーリー〟で男性誌に売り込んだんです。作品の性格上一番売り込みにくいけど、ヒットのためには落とせない女性誌には、〝若くてルックスがいい監督の作品ですから、ぜひ〟で売り込みました（笑）。結果、かなりの数のパブリシティを確保することができたんです」


「CUBE」

そして始まった興行は、「幅広い観客層を集める」大ヒットになった。「劇場の方が驚くぐらいだったんです。しかも〝普段の客層と違う〟って。来ると分かってた観客層はもちろん、普段は単館作品を観そうにない若いカップルまで入り乱れての大混雑になったんです」

作品カラーから言えば、〝一部の熱狂的ファンから一般観客へ〟と口コミが広がる興行が普通の成功パターンだと思うから凄い広がり方だ。その要因についてどう考えているのだろう？

「まず作品が良かったこと。作品を気に入ったマスコミや芸能人の方が、面白さを積極的に紹介してくださいました。そして、社会がどんどん閉塞的になる時代性を捉えた上で、ゲーム感覚の刺激がある分かりやすい娯楽性を持っていたこと。それらが宣伝と上手く絡み合って幅広い層にアピールしたんだと思います」

「今の調子なら東京だけで興収1億円を狙える」動員となったこの作品。単館系のヒット作が渋谷に集中する中で、どこまで成績を伸ばすか楽しみだ。

Digitized by Google

映画戦線

大高宏雄

スター映画が動き始めた

数年前、この国の男性の肉体的な価値基準を判断するのに、ショーユ顔とソース顔という区分け方があった。それは俳優、タレントといった範囲から、広く一般の男性像にまで浸透していて、そこでは明らかにショーユ顔の方が優位であるという価値基準ができ上がっていた。これはもちろん、その価値基準を判断する女性側の好みによっていた。ショーユ顔はアクがなく、あっさりしていて造型にギラギラした感じがない。ソース顔はその反対である意味では脂ぎり、造型はとことんこってりしている。女性側は明らかに前者の方を好ましいととった。それは男らしさといった価値基準が、女性たちの間で大きく変化したことを表した。というより、男らしさといった言い回しさえ彼女らの中では意味不明の言葉になってしまったと言っていい。男臭さ、男の中の男、言ってみれば男性優位主義を表すマチズモを女性たちは拒否し始めたのである。ソース顔は明らかにマチズモの表徴であった。

こうした価値基準ができ上がっていくには、幾つかの原因が考えられる。以下述べる大雑把な状況判断から、まず女性側の嗜好性の在り方。ここ10年あるいは20年といったスタンスで見ていいと思うが、女性たちは社会的にも生活的にも男性と対等の立場で物事を考え、行動するようになった。女性たちはこうした相対的な地位の底上げによって、男女の役割分担に疑問をもち始める。従来、様々な局面で受け身の立場に甘んじてきた女性たちは、男女関係においても旧来型の立場を逆転させ、積極的にイニシアチブをとろうとした。男臭さ、男の中の男といった男性像は、ここに至って女性たちには魅力的なものと映らなくなっていく。それは役割分担がはっきりしていた旧来型の男女関係の中でこそ魅力的ではあったが、意識を大きく変化させた日本の女性たちにとってはもはや過去の価値感になり果ててしまった。ソース顔の荒々しい、いかにも男性を感じさせる造型より、ソフトでどちらかというと女性的、いかにも対等な男女関係が築き上げられそうなショーユ顔の方が、女性たちには好ましくなったのである。

情報伝達の在り方も、見逃せない原因の一つだろう。俳優、タレントの価値判断は、当然ながら現代ではテレビというメディアが大きな役割を果す。ドラマであれ、バラエティであれ、そしてCMであれ、テレビ画像という各家庭内に小ぢんまりと収まったフレームの中で、俳優、タレントの価値判断は定まっていく。このフレームは誰もが見知っているように、私たちの日常性の中でこそ生き生きとその威力を発揮するようになっている。そしてこの日常性は、知らず知らずのうちに私たちにある価値感を作っていくように見える。視覚的な効果ということで言えば、それは人間の造型にスケール感を求めないし、極端に異物性というものに拒否反応を示していく。これは、私たちの日常性を深く考えてみれば理解できる。テレビが日常性の只中に置かれていることによって、そこで繰り返し映される像はアクが強くては視聴者の支持が得られない。つまりあっさりしたショーユ顔への愛着とは、テレビの独自性が視聴者に強いた嗜好性という言い方もできるのだ。で、やっと本題に入る。

「金城武って何か好きじゃないのよね。テレビでも何か良くなかった」「恐いイメージがあるよね。でも映画はいいみたい」「ふ〜ん、映画向きの人なのかな」

これは金城武のあるCMポスターを見ながらしゃべっていた女子高校生2人の会話。これを聞きながら私は、何とうまくこの女子高校生は金城武の資質を言い当てているのだろうと、びっくりしてしまったのである。おそらく金城武は、純然たるソース顔の俳優ではないが、女子高校生にある種の恐さを植えつける程度にはソース顔の分類に入るのだろう。そして女子高校生は、テレビでは好きじゃなく（恐い）、にもかかわらずその資質を映画向きとしたところに見事な着眼点がある。ショーユ顔が絶対的な優位性をもっていた数年前なら、「金城武、嫌い」で終っていただろう。しかしこの98年の時点においては、「嫌いだけど」「映画はいいみたい」「映画向きの人」と会話が進んでいく。この女子高校生の会話を、私はスター映画のある転回点を見事に言い当てたものと判断した（スター映画とは、題材と同等かあるいはそれ以上に主演者のバリューが興行上の成否を握る映画ととってもらいたい）。

2年前、私はこの欄で豊川悦司出演の「男たちのかいた絵」について触れ、スター映画の現在的な在り方を論じたのを思い出す。それは確か、単館系興行でさえスター映画の枠組みが求められ、それさえも絶対的な興行上の保証をするものではないという論旨であった。絶頂期の豊川悦司にして、単館系で突出した観客

Digitized by Google

異状なし

動員を果すことが困難であり、その年の全国マーケット作品である「八つ墓村」で豊川のスター・バリューは結果が出るだろうと結論づけた。結果は周知のとおりだが、豊川がスター映画を作り上げられなかったのは題材上の問題以上に、豊川自身の資質に大きな原因があったのだと思う。スクリーン上における一種の華のようなもの。豊川は、これがどこかでしぼんでしまうタイプの俳優だったように見える。日常性の中で、お茶の間の視聴者にふさわしい好ましさを見せる俳優、タレントと違って、スクリーンにおける俳優はテレビ的フレームとは全く次元の違う資質を観客に提示しなければならない。豊川の持ち味を重々評価しながらも、私はスクリーン上では彼に資質の華やかさは感じることがなかった。これは、日本の男優全般に見受けられる大きな問題でもある。

豊川悦司にスター映画の夢を描き、それがどうにも結実しなくなって2年。スター映画なる概念も頭に浮かばなくなった矢先、**ブラッド・ピット**の「セブン・イヤーズ・イン・チベット」、**レオナルド・ディカプリオ**の「タイタニック」や「仮面の男」、金城武の「不夜城」、そして**アントニオ・バンデラス**の「マスク・オブ・ゾロ」などが今年登場し始めて私は、もう一回スター映画の在り方について思いをめぐらしてみたい誘惑にかられた。そして頭をよぎったのが、数年前のショーユ顔とソース顔の分類であり、その区分け方はまさにスター映画の根本を言い当てているのではないかと思い立ったのである。テレビ的フレームではない、映画の中でこそ真に魅力を発揮して人々を劇場へと誘ってやまないスター映画の存在。それはひょっとしてソース顔の俳優が作り始めているのではないか。もちろん私は、数年前に見られた前者の優位性をここで逆転させようというのではない。そうではなくて、ショーユ顔とともにソース顔もまた女性たちの間で認知され始めたのであり、それに伴って前出のスター映画が日本である価値観をもったのではないかと考えたのである。女子高校生の会話は、そのことをよく言い当てていた。

ショーユもソースもアジア人だから言えるのであって、白人には所詮そんな区分けは通じないと喝破したのは誰だったか。おそらくその伝でいけば、ピットやディカプリオにその区分けは不必要だし、しても意味がない。そこにはまさに、選ばれた白人俳優の問答無用のスター映画があるばかりであって、この2人の前では私が前段から述べてきた前提は、ただただ空疎に聞こえるだけだろう。しかし私はそうした突出した逸材はともかくとして、金城武やバンデラス、そして、この11月21日から公開される「アウト・オブ・サイト」の**ジョージ・クルーニー**らが、今日本の女性たちの確実な支持を受け始めたことが極めて興味深い（「不夜城」11億5千万円、「マスク・オブ・ゾロ」6億円、ともに配収）。この3者にはソース顔（！）俳優のスケール感やアクの強さが、非常に好ましい形で宿っている。内容が不評だった「不夜城」の金城にして、スクリーン上における彼の資質は凡百のテレビタレントとは雲泥の差があるというのは、誰もが認めるのではないか。スケール感と華やかさが、金城の場合は突出しているのだ。そして日本の女性が最も苦手なタイプに属するバンデラスの作品が、そこそこの当たり方をすることなど、数年前には考えられもしなかったのである。

ショーユ顔とソース顔の分類を決定づけているものに、もちろんセクシュアリティという要素がある。この場合は女性側から見て、という限定句つきだが、セクシュアリティの対象がここ数年で確実に変わってきた気がしてならない。それは、ソース顔にもセクシュアリティの要素を感じ始めたということであり、それが日本においては興行成績や俳優の人気に見えてきた。そしてそのセクシュアリティに付随した、古典的な意味における包容力の魅力もここには加味されている。歴史は繰り返すというより、映画の面白さがここにあるのだ。

金城武

アントニオ・バンデラス

Digitized by Google

キネ旬 KINEJUN LOBBY ロビイ 読者スクランブル

●5回目の映画祭

10月23日～25日、第5回函館山ロープウェイ映画祭に初めて参加して来ました。今回は盛況だったと見え、プロデューサーである、あがた森魚が幾度か感激のあまり声を詰まらせる場面もあり、彼の映画祭にかける想いが伝わって来る、とても良い映画祭でした。上映作品の中で、ひときわ良かった作品が、大谷健太郎監督の劇場長編デビュー作「アベックモンマリ」でした。今までの日本映画にない、というよりも、この映画がとても日本映画らしくなく（他の上映作品が、殆ど日本映画そのものだったのに対して……）ロメールやルビッチの作品を見ている様にリアルな日常の会話が繰り返され、本当にアッという間に終ってしまった。上映後のティーチ・インで大谷監督は、次回作を現在執筆中との事で、内容は明かさなかったが、自分の世界を引き続き描いて行きたいという事だった。東京での来春公開に向けて、ボランティアが宣伝を手伝っている様なので、ぜひ地道に丁寧に頑張ってもらい、この作品が一人でも多くの人に観てもらえる様望んでいます。今後の作品を追いかけて行きたいと思う、大谷監督に巡り合えた貴重な映画祭体験でした。（藤田敏夫・東京都八王子市・会社員・35歳）

●知った以上もう待てない

11月上旬号で腰が抜けるほどオドロイタのは『その場所に映画ありて』に記されていた「明日を創る人々」のプリントが存在するということでした。にわかに信じられないほど。だってもはや地上には存在しないとばかり思われていたのだから。いずれ確実に公開されると思いますが、あると知ってしまった以上、待たされる我々の身にもなって下さい。フィルムセンター様。（岩崎進司・東京都新宿区・アルバイト・27歳）

●かつてあった文化の風景

野村正昭さんの『デビュー作の風景』11月上旬号にアートシアター新宿文化に実相寺監督「無常」を観るため、成人指定をものともせず潜入した旨があり、懐しき日々を想い出しました。当時、高校生の小生は学割より安価な均一料金で入場できるアートシアター会員であり「その種」の心配をせず観たものです。その頃、即ち1970年前後は文芸坐はもちろんシネマ新宿、新宿日活名画座、新宿高の片思い』など、『透明人間』以前のもののビデオを持ってる方、ご連絡下さい。80円切手はお返しいたしますので、よろしくお願いします。（〒563－0029　大阪府池田市五月丘3－4－2　中岡美香）

■シネマ・エッセー集『NEW・映画と私』（VOL．1）をこの程発行致しました。今号の特集テーマは「心に残る一本の映画」。ノンフィクション作家の久田恵さん、活動弁士の澤登翠さんを始め、22人の執筆者によるホットなシネマ・エッセー集です（A5版96ページ、800円）。購読をご希望の方は、送料共1000円（切手代用可）を添えて以下へ申し込み下さい。（〒339－0056　埼玉県岩槻市加倉1－22－11　藤岡成一）

ロビイ読者伝言板

■本誌で活躍中の森直人氏と、インターネット映画ホーム・ページ"Movie Watch"に出没中の松村清志、「読者の映画評」常連投稿家の木村昌資他、有志数名の執筆による、ミニコミ誌『MOVIE ON』が、第3号を発行しました。今回は、〝女性映画〟特集として、木村の「あいち国際女性映画祭98」レポート、森直人氏の「女性監督映画を語る」、桑島まさきのエッセイ「シネマ再考～女たち」、萩田明子の「ベスト・フレンズ・ウェディング」評、松村の「普通じゃない」評等を収録した、B5判全30ページの冊子です。一部定価200円、送料160円の、計360円でお分け致します。読んでみようと思われる方は、同額切手をお送り下さい。（〒169－0074　東京都新宿区北新宿1－29－11－309　松村清志）

■映画サークル「ムービーファン」では会員を募集しています。現在会員13名。活動は3カ月ごとの談話会と年4回の会報発行です。参加希望者は下記の宛て先までハカギでご応募ください。案内書を送付いたします。（〒222－0011　神奈川県横浜市港北区菊名2－24－12グロリア初穂201　高崎雅明）

■福岡映画観賞会では、一緒に映画を語り合う仲間を募集しています。活動内容は月一回の定例会（福岡市内）と会報発行。興味のある方は、切手同封でご連絡下さい。（〒830－0103　福岡県三潴郡三潴町高三潴160－4　石橋真由美）

■50年前からの映画パンフ、専門店よりなるべく安く売ります。リストは80円切手3枚同封で。（〒349－0213　埼玉県白岡町高岩1955－5　岡野章夫）

■私は『踊る大捜査線』が大好きです。しかし、住んでるところが大阪なので、10月12日～16日に東京で放送された『深夜も踊る大捜査線』が放送されませんでした。すべて、録画された方、ご連絡ください。80円切手は、お返しいたしますので、よろしくお願いします。（〒563－0029　大阪府池田市五月丘3－4－2　中岡美香）

■私は深津絵里の大ファンです。しかし、ファンになったのが、最近なので、昔のドラマを観ていません。『二十歳の約束』『最

Digitized by Google

ローヤル、有楽シネマ（今のシネ・ラ・セット）等の名画座や三番館では均一料金のことが多く、当然年齢チェックはなく、当時としてはおおらかな解放区でした。特に有楽シネマで羽仁進監督「初恋・地獄篇」を観た時は「これこそ中学生の観るべき映画だ。なぜ成人映画なのだ！」と怒る中学生でしたが、これも社会的差別の一種であることを知り得ました。ところで深夜映画は常に均一料金ですが、僕らの中～高生時代、新宿東宝は18歳未満チェックが厳しく、新宿大映は一応確認はするものの、こちらが「19歳」と言うとモギリのおじさんがニヤッと笑って入れてくれたイキな小屋でした。上記劇場の殆どは今は無し。かつてあった「新宿文化の世界」の記憶です。（織笠昭・神奈川県秦野市・大学教員・46歳）

●贅沢なリクエスト

ハリウッドのリメイク映画ブームにあやかった訳でもなかろうが、来年の目玉番組として松竹が「日本沈没」を再映画化するという。デジタル特撮のなんでも有りの映像にも、そろそろ"慣れ"を感じ始めているであろう多くの観客に対して、この松竹版リメイクがいかなるインパクトを与えてくれるのか今から楽しみではある。脚本・監督があの大森一樹ということだから、かっての東宝版のような重厚壮大型映像化ではなく軽妙なタッチの全く異質な「日本沈没」を想像してしまうのだがいかがだろう。あえてまだ見ぬ大森脚本に注文を付けさせてもらえるなら、ぜひとも訳知り顔の政治家や科学者（そしてもちろんフィクサー的人物も）らが主要キャストとして登場しないホンにしてもらいたい。そしてもうひとつ、沈没する日本を何処から眺めるかという点で我儘なリクエストをお願いしたいのだ。最期にカメラが立つ場所は日本アルプスの頂上であってほしい。例えば北穂高岳と槍ヶ岳の間（大キレット）を海が断ち切ってゆく。その時、向かい合ったそれぞれの山小屋には逃げ込んで来た鳥や獣と共に残ることを決めた人々が居る。彼らは無線で別れの言葉を交わす。遂に槍の穂先は水没してしまうのか、それともかろうじて海上に姿をとどめるのか。なんと沈没をまぬがれた山頂はそのまま新生日本の唯一の領土となり、その200海里経済水域をめぐって、米、中、露、韓、各国の日本争奪戦が開始されるのだ――おっといけない話がワープしてしまった。とにかく大森監督、面白い作品を作ってください。松竹さん、ぜひともシネマスコープ、DTSの採用をお願いしますよ。（間瀬知洋・愛知県名古屋市・会社員・44歳）

●ヒットの理由

「シティ・オブ・エンジェル」が大ヒットしている原因はやはりあのポスターでしょうね。シネコンでどれにしようか迷っているカップルは、ポスターを見て女の子の「これにしよ！」のひとことで、次々と「シティ～」が上映されている扉へと吸いこまれていきます。作品も、とてもヴィジュアルがよかったとうちのワイフが申しておりました。（清水宏昭・滋賀県長浜市・教員・44歳）

●参加できたらなお嬉しい

東京国際映画祭クロージングの「ジョー・ブラックをよろしく」いやあ電話のつながらないこと、つながらないこと。結局2時間リダイアルを押し続けてあきらめました。来年は抽選にでもしてもらいたいですね。でも昔は発売日に1時間も前に並べば、クロージングは買えたものので（もちろん作品が地味だったりしたけど）、映画祭の盛り上り的には昨年や今年の様な感じが良いのかも知れないですね。（入江洋史・神奈川県相模原市・アルバイト・33歳）

大好評発売中

■追悼　巨匠黒澤明監督

黒澤明 音と映像 ◎ 西村雄一郎

■遺作30本＝完全収録版！　新事実ぞくぞく発見！

映像とせめぎあうサウンドの秘密を全解明した完全版を世に問う！巨匠と超一流の作曲家と黒澤組のスタッフたちとの濃密なかかわりと苦闘の全記録を収録した名著。

（四六・上製　本体定価2600円＋税）

リップウ 立風書房 ショホウ
〒153-8572目黒区上目黒5-5-8
☎03-5721-0561
振替00150-4-74493
■書店にない場合は直接小社へ■

Digitized by Google

私の映画日誌

The Eye of Kazuma ㉕

井上一馬

ロメール映画の魅力

エリック・ロメールの映画、好きだな。人間に対する優しい眼差し。奇跡を信じる少年の心。それがロメールの映画に温かみを与えている。

ロメールはまた、一見ありふれた紋切り型とも思える話を、登場人物たちの微妙な心理の綾を丹念に描くことで、絶妙な人間ドラマに仕立て上げる。

その手腕には、本当に舌を巻くばかりだ。

『春のソナタ』（1989）『冬物語』（1991）『夏物語』（1996）に続く、〈四季の物語〉の完結編『恋の秋』も、そんな絶妙なロメール作品のひとつである。

物語はやはり、一見どこにでもあるようなありふれた話だ。南フランスのアヴィニョンの北五十キロ、ローヌ川沿いの小さな町サン・ポール・トロワ・シャトーにある、父から受け継いだ農園でワイン造りに打ち込むマガリ（ベアトリス・ロマン）。

「恋の秋」

このマガリのために、親友のイザベル（マリー・リヴィエール）と、マガリの息子の恋人ロジーヌ（アレクシア・ポルタル）が、恋人を見つけようとする。それが、この映画のメインストーリーだ。

もちろんそこには、それぞれの登場人物が抱えている人間関係が複雑に絡んでくるわけだが、基本的には、何の変哲もない話を、ロメールは、ユーモアとウィットを交えて、ここでも心温まる映画に仕上げていく。

一九二〇年生まれというから、ロメールは、この映画を撮った九八年には七十八歳ということになるが、老人力がついてきているのか、その手腕にはますます磨きがかかるばかりである。

ロメールがあの秀作『緑の光線』を撮ったのは、一九八六年、六十六歳のときのことだから、彼の場合にはむしろ年をとってから味が出てきた映像作家だといえるのかもしれない。

『恋の秋』には、『緑の光線』にも出たマリー・リヴィエールが出演しているが、『緑の光線』ではあれほど神経質そうな若い女性だった彼女が『恋の秋』では、親友を気遣う落ち着いた中年の女性の役を見事に演じている。

彼女がこんなにいい女性、こんなに素晴らしい女優になるなんて思いもよらなかったから、これは私にとってとても嬉しい驚きだった。

マリー・リヴィエールも、親友役のベアトリス・ロマンも、ロメール映画ではお馴染みの女優で、二人ともロメールの映画はこれが六本目の出演である。

〈四季の物語〉の完結編

ロメールの〈四季の物語〉の中では、私はこの『恋の秋』がいちばん好きだ。マリー・リヴィエールが出ていることもあるが、作品としてもストーリーにいちばん無理がなく自然に仕上がっている。

次が『冬物語』。

ブルターニュの海岸で出会って愛を誓い合いながら、住所を書き間違えたことで別れ別れになってしまった恋人との再会を待ち続けるフェリシーの話。

この物語には最後に奇跡が起こるが、起こるはずのない奇跡をあっさりと起こしてしまうところに、エリック・ロメールの手腕がある。

Digitized by Google

『春のソナタ』もよかった。
パーティで知り合った高校の教師と、自分の父親を結びつけようとするピアニスト志望の少女。
この少女の企みを、黒澤の『羅生門』的にさまざまな角度から見ることで、作品にふくらみをもたせている。
『夏物語』は、ブルターニュの海岸で夏を過ごす青年が、三人の女性に振り回される話だが、女性たちがあまりにも勝手なのと、青年があまりにも優柔不断なのとで、私には今ひとつ説得力に欠けるように思えた。
やはりロメールは、大人の世界を描くのに長けた映画監督なのだろう。
そんなことを、私は『恋の秋』を見ながら考えていた。

『メリーに首ったけ』

いやはや、とんでもない才能が現われたものだ。
『メリーに首ったけ』を撮ったピーターとボビーのファレル兄弟には、とにかく初めから終わりまで笑わされっぱなしだった。
ファレル兄弟は、『ジム・キャリーはMr.ダマー』『キングピン　ストライクへの道』に次ぐ三作目のこの作品で、コメディ映画の傑作を作り上げた。
コメディ映画を見てこんなに笑ったのは本当に久し振りのことだ。『ペテン師とサギ師　だまされてリビエラ』（1988）を見て以来のことではなかろうか。

「メリーに首ったけ」

アメリカにはシスケルとエバートというベテランの有名な映画評論家コンビがいて、各作品の評価に関してはかなりの影響力をもっている。たとえばビデオのパッケージなどにも、二人が勧める映画については、親指を二本上げた「トゥー・サムズ・アップ」マークがついている。
そのシスケルとエバートにもこの『メリーに首ったけ』は大受けで、シスケルは一時この映画について話し出したら止まらないほど入れ込んでいた。
当然、興行的にもアメリカでは大成功で、一九九八年夏の超ヒット作のひとつになった。
ストーリーは単純明快だ。
明るくて、美人で、グラマーで、屈託のないひとりの若い女性メリー（キャメロン・ディアス）に、三人の男が首ったけになる。
その三人の男には、お調子者の私立探偵にマット・ディロン、一途な片思いの作家にベン・スティラー（『リアリティ・バイツ』を監督した人だ）、あぶないジンマシン男にクリス・エリオットが配されている。

キャメロン・ディアス

この映画の魅力は、二つに尽きる（ミュージック・ナレーター役のジョナサン・リッチマンとトミー・ラーキンスのユニークさを入れると三つだが）。
ひとつは、全編にちりばめられたギャグの数々。
性的なギャグが多いのだが、下品で押しつけがましくないので、とにかく大笑いさせられてしまうのだ。中には、本当は笑ってはいけない動物虐待のギャグもあるのだが、ついつい笑いを誘われてしまう。
スパームのギャグなど紹介したいのは山々だが、ギャグをいちいち説明するのは野暮なことこのうえないので、これはもう自分で見てもらうしかない。
この映画のもうひとつの魅力は、主演のキャメロン・ディアス（一九七二年、カリフォルニア州サンディエゴ生まれ）だ。
このディアスに関しては、私は、オーディションを受けて役を手に入れたという『マスク』（1994）を見たときから魅力的な女性だと思っていたが、そんな彼女の魅力と才能がこの映画でついに大きく開花したという感じだ。
ディアスは、『ベスト・フレンズ・ウエディング』にも出ていて、この映画でジュリア・ロバーツの恋敵の役を演じたときもよかったけれども、やはりこの『メリーに首ったけ』にはかなわない。この作品こそ、彼女の当たり役、はまり役である。
身体全体からほとばしり出るセクシーさと、屈託のない豪快な笑い。
この二つが彼女の最大の魅力だと思うが、その魅力がこの映画では二つながら最大限に生かされているのだ。
ファレル兄弟は、メリーの役をどうしてもキャメロン・ディアスにやってもらいたくて撮影の開始を遅らせ、彼女のスケジュールが空くのを待ってから撮影に入ったのだそうだが、その選択は大正解だった。
『メリーに首ったけ』はおそらく、キャメロン・ディアスにとっても、ファレル兄弟にとっても、生涯の最高傑作のひとつになるだろう。

Digitized by Google

撮影時評

渡辺　浩

木村大作、「おもちゃ」で祇園を撮る

「ダイヤルM」を見ました。ご存知ヒッチコックの名作「ダイヤルMを廻せ！」のリメイクです。道具立てやストーリーが、現代風にしつらえてあり、それなりに面白いのですが、やはりヒッチコックの演出力にはかないません。私情をはさめば、グウィネス・パルトロウより、グレース・ケリーの方が綺麗に撮れていたと思っています。

拾いものはDPのダリウス・ウォルスキー（ASC）の技術です。戸外も室内も安定したトーンで、時には大胆に暗く、時には隅々まで見やすいルックを作り上げています。

セックス・シーンから始まるパルトロウの美しさも際立ちます。彼女は肌の状態があまりよくないようで、トップからのライトを避け、ふんわり落ち着く正面めのライトで処理しきっています。どこの国でも、スターのライティングは苦労しているんだなあと感じました。

ダリウス・ウォルスキーは、ポーランドから一九七九年にアメリカに来た人で、もっぱらドキュメンタリーやローバジェットの劇映画をやっていましたが、「クリムゾン・タイド」や「ザ・ファン」の頃から、めきめき力を発揮してきました。今月は、彼を取り上げようと思っていたのですが、「おもちゃ」を見て、こちらを取り上げたくなりました。まったく、私の祇園と木村大作への興味のせいですが、お付き合い下さい。

祇園に生きる女性を描く

祇園を描いた映画は、溝口健二の「祇園の姉妹」（三木稔撮影）と、そのオマージュとして、溝口の弟子・新藤兼人が脚本を書いた、吉村公三郎の「偽れる盛装」（撮影中井朝一）が有名です。「おもちゃ」も新藤兼人の脚本で、かなり前に書かれたものだそうです。出てくる置屋が、「偽れる盛装」では静乃家、主人公は君蝶、「おもちゃ」は藤乃家、姉さん芸妓が、照蝶、君竜と酷似しています。あるいは、別の用途のため、同時期に書かれたものかも知れません。映画の出来からいうと、やはり「偽れる盛装」の方が上でしょう。封切りが一九五一年で、祇園の内幕物がめずらしかったせいもあって、面白く見た記憶があります。

「偽れる盛装」は「おもちゃ」を撮った木村大作の師匠・中井朝一の撮影です。キャメラマンとしても、いい仕事でした。中井は黒澤明との仕事のせいで、ダイナミックで白黒のくっきりした画が好きな人だと思いがちですが、帝キネ長瀬の出身で、ソフト・トーンが好きだと言っていましたから、祇園に生きる女性を描く話は乗り気で撮ったことでしょう。

この「おもちゃ」は、最初田村正毅が撮影していましたが、撮影休止の期間があったためか、木村大作と交代しました。理由は知りませんが、田村正毅のリアリズム祇園物も見たい気はします。しかし作品の狙いからいえば、木村大作で正解でしょう。木村なら祇園の雰囲気を残しながら、女性達もそれなりに美しく撮ることに長けているからです。

私が知っている昭和三〇年前後の祇園の置屋は、「おもちゃ」の藤乃屋を小ぶりにした部屋の配置でした。実際の寸法ではキャメラが引けず撮影できないので、ちょっと広く作ったのでしょう。太陽が部屋まで差し込んでくる家はほとんどなく、坪庭に申し訳程度にあるひだまりからの反射光が、全体を照らす中での生活です。二階の住み込みの芸妓達の部屋は、表の露地向けの窓があり、すだれがつってあったりしますが、太陽を拝むことはまずありません。おちょぼ（住み込みの雑用係）の部屋などは窓もないでしょう。風呂場は早くいたむせいか、作りかえる家が多いようですが、「おもちゃ」のように、ゆったりした明るい浴室ではありません。こういった昼でも電灯がほしい家屋での、〝おかあさん〟を中心にした女性だけの生活なのです。

「おもちゃ」は中学にも貧乏で行けず、この置屋で、おちょぼになった宮本真希（時子）が、十七歳で北山の山持ちの爺さんに水揚げされて舞妓になるまでの話です。撮影時評の本旨からやや離れて申し上げると、祇園、もしくは、宮本真希のプロモーション作品として考えると成功でしょう。私が好意を持ったのは、新藤兼人はともかく、西岡善信、深作欣二、木村大作といった手だれの仕事師達が、祇園、そしてそこに生きる女達への偏愛をより所に、ディテールまで

Digitized by Google

「おもちゃ」

ないがしろにせず作ったと見てとれるからです。

木村大作の仕事

実は私は、ここ数年の木村大作の仕事を見て、もっと狙っていったらいいのにとか、プロダクション力学に組み入れられた仕事だなあと歯がゆく思うことが多かったのです。しかしこの「おもちゃ」は、画に魅力がありますし、丹念な仕事だし、監督をよく助けています。

まず情景カットが手を抜いていません。祇園、時子の実家のある西陣とも、いい場所を探しています。特に冒頭の八坂神社のあたりから、歌舞練場、祇園甲部一帯を見下ろす早朝の情景は気に入りました。京都に行きたくなったくらいです。次にくるおちょぼ・時子の朝の仕事ぶりも、テンポ、サイズ、トーンともいう事はありません。時子の寝ている部屋は明るすぎると思いますが、朝の感じを強調したかったのだと、好意的に見ましょう。

藤乃屋では、土間廻りのくっきり落ち着いた調子がよかったと思います。入口向けで夜、里江（富司純子）が心ならずも百万円のため、三上という男とホテルに行って雨の中を帰ってきます。家の中に入ると、後ろのガラス戸がヘッドライトが通り過ぎる感じで明るくなるのですが、これはやめた方がいい。暗く沈んだ黒光りのするたたずまいの中に帰ってきたという風にした方がよかったのではないでしょうか。主人公の心理を追って、バックのガラス戸が光るといった手法は、新人にまかせた方がいいと思います。

おかあさん・里江の部屋が明るくなるのは避けられないでしょう。ここを暗くして、里江や姉さん芸妓達の顔だけ浮かせて明るくはもっていけないからです。置屋の雰囲気と配光の形を残しながら、人物ライトは正面からいくという選択で、善戦しています。

しかし「おもちゃ」での木村大作の最大の功績は、まったく今風で背が高くプロポーションのいい宮本真希を、昭和三〇年代のまだ日本の少女達が短足胴長だった頃の典型的なタイプに見せていることです。本人も慣れない畳での所作、下駄で小走りで行ったりするのは大変だったでしょう。監督も厳しく言ったのでしょうが、画で見せるのは大変です。

ラストの入浴シーンでのヌードになると、これはどう隠しようもなく、現代風八等身で長い足は日舞よりバレエが似合いそうです。ここも木村はアングルとサイズで逃げていますが苦戦です。

このラストの花万での水揚げシーンは、芝居もリアルでなく見せていきます。画も、フレームの周辺をふりそそぐ光の流れでボカして見せます。これはクレアモントのフィルターや普通写真用のSQ・ZSフィルターでも出来ますが、撮影所で育った細工好きの木村のことですから、自分でグリースかポマードをレンズ前のガラスに塗って作ったのでしょう。しかしラスト一巻全カットはやりすぎです。

最後にトリビアルなことを言うと、キャメラを上下左右に振るパンのタイミングとスピードがいい。最近の日本映画で「おもちゃ」の木村ぐらいうまくパンしているキャメラマンを見たことがありません。彼もそろそろ六〇歳でしょうが、気力体力ともに衰えていないようです。初めて東映京都で仕事をし、「理不尽キャメラマン」と言われた頃と同じような心構えと、「八甲田山」の執念を持続しながら円熟していってほしいと思っています。

Digitized by Google

試写室

石原郁子

第七官界彷徨
尾崎翠を探して
浜野佐知監督

尾崎翠は一八九六年鳥取生まれ、一九七一年故郷で死去。十八歳頃から文壇期待の才女として注目され上京、三〇代半ばで最高傑作『第七官界彷徨』を発表して花田清輝らを驚嘆させるが、直後、常用していた鎮静剤の副作用で激しい幻覚症状などに陥り、故郷へ連れ戻され、以後筆を断って、妹の子供たちの世話をするなどして過ごした。死の一年前に花田や平野謙らにより再評価され、さらに近年、加藤幸子や矢川澄子らに再々評価されて、現在では密かにだが熱心な尾崎ファンがあとを断たない。この映画は、そんな尾崎の実人生を、次第に時間を遡行して描きながら、尾崎自身が映画化を切望していたという『第七官界彷徨』の小説世界をそこに絡ませ（尾崎は非常な映画ファンで、チャップリンを讃えた詩などもある）、幻想的な詩情を醸し出す。尾崎を演じるのは白石加代子。親友の松下文子に吉行和子、文壇仲間の林芙美子に宮下順子など。男性陣では、尾崎が結婚を考えて十日間だけともに住んだ高橋丈雄に原田大二郎、長兄に下元史朗。小説世界のヒロイン・小野町子は柳愛里、彼女をめぐる男性たちに井筒森介、室井誠明、佐藤一平ら。祖母役で漫才の内海桂子が面白い味を見せる。

尾崎の小説は、人間関係に不器用な内気で繊細でちょっと調子外れな人々を、滑稽味と哀愁とをつき混ぜた独自の文体で描き出すが、実人生での尾崎は、おおらかなたくましさも持っていたらしい。東京の大学にゆき文壇の名声も経験した彼女は、故郷でもミシンをかけながら英語の唄を唄うような女性であり、晩年老人ホームに一時入ったときには、同室者から「本など読んで」と非難されるなど、地方の町では浮いた存在だったろう。だが彼女は、雑巾を縫って売り歩いたり、甥を相手に塩を煮たりしながら、あくまで堂々とマイペース。自ら恃むところがあったらしく、今休筆しているのは「黄金の沈黙」とでもいうものだ、とエッセイに書いている。作り手たちは、尾崎の残した未刊行の文章までを丁寧に調査した上で、従来〝悲劇〟として考えられていた尾崎の後半生を、決して不幸なものではなかったと、力強く主張する。とは言え、長兄が迎えにきて故郷へ連れ戻される無念の場面、「ホームに入るのはいや、もう一度東京へゆきたい」と松下に訴える場面などは、痛切に胸に突き刺さるのだが。白石の演技は立派すぎ迫力がありすぎる気もするが、それが、「男性的だった」と伝えられ、かつどこかやはりこの世離れしたところのあったであろう尾崎らしい〈周囲からのときに奇怪なまでの浮きかた〉をくっきりと見せる。

それに対して、若い俳優たちがかたちづくる「第七官界」の世界は、はかなげにもの悲しく、かつ完璧にヘンでオカシイ。精神病院の医師である長兄・一助、肥料の研究をして蘚と二十日大根を育てている農学者の次兄・二助、そして音楽学校受験を目指す従兄の三五郎が、三人で借りている東京の家に、炊事係として田舎から上京した妹・町子。彼女は「人間の第七官にひびくような詩」を書きたいと密かに願ってはいるものの、赤っぽいちぢれ毛を「たいへん遠慮に思っていた」内気な少女で、三五郎につつましい恋をする。二助の机の上で蘚たちが始める恋愛にも似た、ひめやかだが「一途」で「殉情」な恋。だが、町子ととても仲がよかった三五郎なのに、隣に引っ越してきたやはり内気な女学生を愛してしまい、失意の町子は、一助の友人・柳浩六から「僕の好きな異国の詩人に似ている」と言われ、三五郎にみたててもらうはずだった「くびまき」を彼に買ってもらう。

学者らしく難しい医学用語や科学用語を駆使しながら、実は他愛ない恋愛論を懸命に闘わせる、一助、二助、浩六らの会話のおかしさ。決して「好き」とは言わないまま、例えば三五郎が、二助の煮る肥料の匂いに閉口して町子の部屋で寝ると、町子は黙って三五郎の蒲団で寝る、それだけの無言の場面がそこはかとなく醸し出す情感。微妙にズレた人々の言動の〈間〉が紡ぐ、非現実めいた陰影。すべては淡い夢のように、優しく、哀調を帯びつつ、冬の夜の温かい飲み物のように静かに魂に沁みる。ベテラン・浜野佐知監督の、尾崎への深い理解と敬意と共感とに満ちた、しっとりと芳醇でしかも力強い生命をその底に感じさせる演出、そして、尾崎の繊細な美しい文章を要所要所に的確にはめ込みつつこの困難な世界を見事に再構築した、脚本・山崎邦紀の勝利だ。

Digitized by Google

劇場公開映画批評

田中千世子／新藤純子／秋本鉄次／宇田川清一／鬼塚大輔／村岡良昭／森直人

トゥルーマン・ショー

THE TRUMAN SHOW
UIP配給
11月14日公開

アメリカの映画撮影専門誌が「これはあなたの人生」、と見出しをかかげてメディアが個人を徹底的に包囲している状況からテーマを説明するように、多くの媒体で「トゥルーマン・ショー」とメディアの関連が力説されている。私自身はメディアに振り回されている実感が薄いせいか、メディアは単につじつまあわせの気がする。

「テレビ（メディア）が自分を取り巻いている」ことと、「周りの人間や状況は自分をだますために存在するにせものだ」ということをいちはやく結び付けて映画にしたのはフェデリコ・フェリーニだったのではないかと思う。「ボイス・オブ・ムーン」に登場する元知事は主人公の若者と連れ立って歩きながら、行き会う人々を何々のふりをしているが実はにせものと言い続ける。にせものの海やにせものの世界はフェリーニ映画の特徴だ。フェリーニはにせものが好きなのだろうが、好きだという気持ちと、世界は全部にせものかもしれないという不安は共存する。にせものというテーマをあえてテレビに結び付けてネガティヴに扱ったのは、フェリーニ自身の不安やオブセッションのあらわれと言えるだろう。

このオブセッションは自意識が過剰な子供時代に誰もが経験しているのではないだろうか。本当は自分は王女様、早く亡くなった父親は実は宇宙人となって生きていて、いつの日か自分に会いにきてくれると思ったり、あるいは自分の回りの世界は自分のためにだけあって、今歩いている街の通りも人々も自分がいなくなれば、みな消えてしまうというややルーナティックな想像。

「トゥルーマン・ショー」は、見方を変えれば、私たちが子供時代に抱いたオブセッションの記憶の壮麗な具現化と言えよう。純真なトゥルーマンが赤ん坊の時からテレビの生番組ドラマの主人公にさせられて、世界中の人々に見られていた――という構図がひっくりかえって、自分以外の家族も隣人も街も道路も海もすべてにせもの、すべて自分のために演技していたことが露見した快感。世界全体でなくひとつの街という規模が子供感覚にはちょうどよい。トゥルーマンに子供がいなくて、父親になっていないことは、彼が永遠の子供のオブセッションを代表しているからであろう。

ピーター・ウィアー監督は来日記者会見でモンティ・パイソンのような毒のあるアイロニーを狙ったことを語っていたが、トゥルーマンの人生をテレビで見て楽しむ世間の残酷さは、エド・ハリスがウド・キアーとアンソニー・ホプキンスの中間の線で演じたテレビ演出家の残酷さ以上である。そうした世間をサラッと描くところが粋だ。

イギリスにはピーターパンもいる。原作童話によればこれは事故で死んだ赤ん坊の話である。トゥルーマンにもそうした不幸な赤ん坊の面影がある。だからこそ明るい街にジム・キャリーの明るさを置くことでバランスをとったのだろう。街はディズニーランドのように明るいが、撮影監督にはシリアス・ドラマを得意とする「ミシシッピー・バーニング」のピーター・ビジウを選んだのが面白い。

トゥルーマンがテレビドラマだということを先に示して、その主人公が実はドラマの主人公であることを知らなかったという虚構の仕掛けぐあいがうまい。だから全てがにせものだったことのカタルシスが快感となる。メディアは装飾に過ぎない。

田中千世子

トゥルーマン・ショー

映画のなかば、トゥルーマン（ジム・キャリー）が昔の恋人（ナターシャ・マケルホーン）を思い出すシーンで唐突に流れ出す音楽がある。ショパンのピアノ協奏曲第一番第二楽章。ピアニストは鍵盤の王様とうたわれた巨匠アルトゥール・ルービンシュタイン。若い頃は血気盛んな情熱的な演奏を聴かせたこのピアニストが、七十歳代にして初めて到達した音楽は、俗世間の塵芥をすべて洗い流すような神の音楽である。

この神の音楽に対比されるものがエド・ハリス扮するテレビのプロデューサー、クリストフであることは明らかだ。巨大なドームの中にセットを造り、一人の人間の誕生から三十年後の現在までを全世界に生放送のショーとして見せる彼は、神になろうとする男である。実際、エド・ハリスがあまりにも上品に、エレガントにこの男を演じているので、本物の神だと錯覚しそうになる。神になろうとする人

Digitized by Google

間のいやらしさを感じさせないハリスの演技はみごとだ。

クリストフは高度なテクノロジーを駆使してドームの中の世界に雨を降らせ、風を起こし、太陽の光を注ぐ。昼も夜も思いのまま。トゥルーマン以外の人はすべて雇われた俳優なので、彼の意のままに動く。それを全世界の視聴者が喜んで見る。このショーの世界では、彼はまさに神そのものである。

しかし、ドームの外にはトゥルーマンの知らない本物の世界がある。そこでは本物の太陽が輝き、本物の風が吹き、本物の雨が降り、そして、演技ではない本物の人間の生活がある。ドームの中は安全な楽園、トゥルーマンにとっては子宮のような場所だが、彼もいつかは外の世界を発見し、そこへ出て行かなければならない。

神になろうとする人間と、その神に逆らい、子宮のような場所から外の世界へ出て行こうとする人間——これは人の心の深いところに触れる普遍的なテーマだ。それをメディアという新しい枠組みの中で描いているのだが、メディア批判としてはこの映画は弱い。飽きっぽい視聴者が同じドラマを三十年間も見続けるとは思えないし、英語のドラマでは全世界の視聴者が生で見るとは考えにくい（それとも、同時通訳者が繁盛しているのだろうか）。

映画の中心にあるものはメディア批判よりももっと情緒的なもの、かつてレイ・ブラッドベリがSF小説の中で描いたテクノロジーの発達に対する漠然とした不安感のようなものではないかと思う。ブラッドベリはイヤホンでラジオを聞きながら歩いている人を見てショックを受け、「華氏451」を書いたという。高度なテクノロジーで仮想現実の部屋を造り、その中でのみ生きている子供の話もある。ウォークマンやテレビゲームができるずっと以前の話だ。

ブラッドベリと同じように、この映画も高度なテクノロジーで造られた人工の世界を批判し、自然な世界を賛美している。外の世界の神を象徴するルービンシュタインのピアノはアナログ時代の名演だ。だが、忘れてならないのは、私たちはもう、テクノロジーのない世界では生きられないということである。この映画のような発想の話はSF小説などでは五〇年代、六〇年代にすでに書かれているが、これほどのリアルな映画は現代の高度なテクノロジーがなければ実現できない。そうした自己矛盾のはざまに、この映画の面白さと魅力がある。

新藤純子

アウト・オフ・サイト

OUT OF SIGHT
UIP配給
11月21日公開

早くも死語になっているのかも知れないが〝アウト・オブ・眼中〟という流行語があったっけ。で、この映画、かたや「ピースメーカー」のジョージ・クルーニー、こなた「Uターン」のジェニファー・ロペスという当代のフェロモン男女優の共演とあらば〝アウト・オブ・眼中〟というわけには行くまい。

男女の出会いのパターンは星の数ほどあるが、ダンディーな強盗とセクシーな女刑事（正式には連邦保安官補佐）が出会ったのは、押し込められた車のトランクの中！　という本作は、それだけでユニーク度〝星3つ〟である。暗いトランクの中で、なぜか話は映画の趣味にまで及び、三人はシンパシーを感じ始め、恋の花咲くこともある。

そんなゾクゾクする設定と前出のフェロモン男女優の相乗効果と攪拌作用で引っ張られてゆくこの犯罪ラブロマンは、映画化が多い割には成功率が意外と低いレナード原作のイヤなジンクスを一応は振り切ったといえる。とにかく、レナード原作の映画化は死屍累々だった。レナード自ら脚本に参加したのに「キャット・チェイサー」は凡庸だったし、ややマシな「ゲット・ショーティ」も苦戦だったし、「TOUCH　タッチ」に至っては、まさしく〝アウト・オブ・眼中〟って出来だった。

結局、会心に近いのは「ジャッキー・ブラウン」一本のみである。作品順に言うと、アベル・フェラーラは自身の恐らく最低作を生み出し、バリー・ソネンフェルドもソツのなさだけが取り得となり、ポール・シュレイダーも意外な無能ぶりをさらけ出し、今回のスティーヴン・ソダーバーグもどこか頭でっかちなところが気にかかる。鬼才よりも、才匠よりも、アホ丸だしのタランティーノが一番エルモア・レナードと相性が良かったのは皮肉でも何でもない。彼は〝首から下〟の感性でレナード原作に挑戦したのだ。面白ければ映画の勝ち。ソダーバーグのこの映画も決して〝負け〟ではない。ただしその〝勝因〟の貢献ポイントは、主演のフェロモン男女優二人に献上。もちろん、他にゾロゾロ出て来るヘンな魅力的な脇役も含めてだ。

「素晴らしき日」のミシェル・ファイファーとも、「ピースメーカー」のニコール・キッドマンとも良かった。クルーニーは美女との丁々発止がホントによく似合う。冒頭シーンで、銀行窓口の女子行員を言葉巧みに丸め込むようにして脅迫し、まんまと血も汗も流さず金を奪う鮮やかな手口は、彼のために用意されてるようなシーンだった。

一方、ジェニファー・ロペスも負けてはいない。敏腕でセクシーだけど、どこか危なっかしい、見ていてハラハラするようなヒロインを好演してくれる。僕の悪趣味でいえば「Uターン」の〝ゲス女〟がベストだが。

いずれにしても、クルーニーとジェニファーは〝肌が合う〟ってヤツ。実際、撮影中、クルーニーのトレーラーハウスにジェニファーが入って来て『ねえ、ラブシーンのリハーサルしない♥』と口説いて、『えっ、もうラブシーンの撮影は全部撮り終えたのに、まっいいか』とクルーニーが応じて、ウソかマコトか、最低でも数回〝熱戦〟になったそうな。そんな下世話な裏話が味付けになるのも俳優の魅力あればこそ。

よく〝映画は結局監督のもの〟と俳優たちは卑屈にいうけど、少なくともこの作品は原作も監督も二の次で、断然〝俳優のもの〟である。

秋本鉄次

Digitized by Google

ハミルトン

HAMILTON
クロックワークス配給
11月2日公開

近頃、最も気になっていた脇役俳優がピーター・ストーメアである。「ファーゴ」の寡黙なスカンジナビアの殺し屋に扮して以来忘れられない顔となった次第。「ロスト・ワールド」「マーキュリー・ライジング」などでクセモノぶりを発揮しているのを見て喜び、「アルマゲドン」では一風変わったロシアの宇宙飛行士の役ですっかり場面をさらっているのには感心した。

「ハミルトン」は、ストーメアの祖国のスウェーデンで撮影された珍しいアクション映画。ハリウッドではクセのある脇役ばかり演じている男がいきなり硬派のヒーローなんぞできるのかいなと当然思う。ところが、これがきっちりと様になっているから見事。見ようによっちゃ、ブルース・ウィリスを縦長にしたような顔みたいだなと常々思っていたのだが、本家ウィリスのような逞しさも、したたかさもないのが新鮮である。

ツンドラ地帯で発見された核兵器の密輸部隊がバイトの学生を集めたような素人集団だったという意外なオープニングからストーリーに引き込まれる。有無を言わさず彼らを射殺し、その死体をバラバラに切り刻んでから火に放り込むという行動は、あまりにも冷酷。しかし、ストーメアのしょぼしょぼとした目もとと、哀愁漂う表情からは後悔の念さえも漂っている。人間的な弱さを持ちながら、任務を忠実に遂げるためには殺人マシンにもなってしまうという、この複雑な個性が、後半になると影を潜めてしまうのは惜しい。

ロシアからの核流出というテーマは「ピースメーカー」と同じだが、こちらの緻密に練り上げられた構成に比べると、あちらは子供の漫画という趣き。見せ場だけでつなぐのではなく、主人公の人間関係、国と国との微妙な駆け引きなどもしっかり織り込んで、ドラマを盛り上げている。ただ、その分、間延びしてしまった印象も否めない。

画面からヒシヒシと冷たい空気が伝わってくるのはお国柄のせいか。爆発炎上、銃撃戦など派手なアクションもあるが、全編に静かな緊張感がピンと張りつめている。ハリウッドのアクション映画とは一味違うクールな演出をしっかりと堪能した。

宇田川清一

トゥルーマン・ショー

THE GINGERBREAD MAN
ヘラルド配給
10月17日公開

陸続と映画化が続くグリシャムのリーガル・サスペンス、ただし今回は書き下ろしのオリジナル・ストーリーで原作小説はない。

この作品の舞台となっているのはジョージア州のサバナ。イーストウッドが映画化したノンフィクションで日本でもその名が知られるようになったこの街は、サザン・ゴシック小説の大御所フラナリー・オコナーの生誕地でもある。そのせいか「相続人」も怪しげな美女、奇怪な教団、迫り来るハリケーンとおどろおどろしい道具立てが満載のミステリーになっている。ただし、道具立てが派手なのはけっこうだがミステリーとしては案外底が浅い。親切すぎる邦題もあってミステリー小説や映画が好きな人なら、ごく早い段階で筋立てが読めてしまうだろう。この作品の一番の弱みは主人公の弁護士がどうにも魅力のないキャラクターに描かれていることだ。「油断大敵」を意味する「ジンジャーブレッドマン」が原題だが、それにしてもこの男は頭が悪すぎる。それほど巧妙とも言えない罠にまんまとひっかかって周囲にたいへんな迷惑をかけるこの御仁に感情移入することはなかなか困難で、そのぶんドラマとして盛り上がらなくなる。そもそも好感の持ちにくい人物であるという設定なのでなおのことだ。

それでもどうにか観ていられるのは主人公を演じるケネス・ブラナーを始めとして、ダリル・ハンナ、ロバート・ダウニーJr.、トム・ベレンジャー、ロバート・デュヴァルらキャストが賑やかだからである。特にダウニーJr.はハードボイルドによく出てくる三流私立探偵像を気持ちよさげに、しかも魅力的に演じている。

充実したキャストと手慣れた演出のおかげですいすいと観られるのはけっこうだが、それにしてもクライマックスのアクション・サスペンスの演出は粘りがなさ過ぎるし、エンディングもどうにもあっけない。

結局この作品の最大のミステリーは、なぜこの題材をロバート・アルトマンが手がけなければならなかったかということである。この謎だけは「相続人」を最後まで観賞しても明かされることはない。

鬼塚大輔

沈黙のシェラシー

HUSH
ソニー・ピクチャーズ配給
10月24日公開

またまた登場の異常心理サスペンスである。今回は一人息子を溺愛する母親（ジェシカ・ラング）が、妊娠した嫁（グウィネス・パルトロウ）をいびりまくり命まで奪おうとする。

基本的には「何がジェーンに起こったか？」以来一時流行した「大女優隠し芸大会」ホラーでのジョーン・クロフォード、ベティ・デイヴィス、オリヴィア・デハヴィランドらの怪演技をオスカー女優のラングが再現してみせるのが売り物の作品ということになろう。ところがそうなると「何がジェーンに……」にあったようなキャンピーなユーモアの不在が苦しい。ラングの力演ぶりは伝わってくるのだが、ひたすら陰にこもる一方なのである。モンスターを演じてみせるのだという覚悟が半端なのか。

またこの手のサイコものでは、ヒロインの周辺の人物が次々と殺されていくことでサスペンスを盛り上げていくのが常道なの

Digitized by Google

だが、この作品では誰も殺されない。ヒロインに親切な老婦人とか、人のよい老医師とか、ヒロインの親友とか、殺されるのに打ってつけのキャラクターには事欠かないのにだ。親友役のデビ・メイザーなど面白い個性の女優なのに、出演している意味が全くない。筆者とてどうしても人が死ぬところを観たいわけではないので、死人無しでサスペンスを盛り上げてくれるのならまことに結構なのだが、これが一向に盛り上がらないのである。

それでもどうにかこの作品を観ていられるのは、グウィネス・パルトロウが健闘しているからである。「鬼姑」と対決したパルトロウが「鬼嫁」に変身するクライマックス、ベテランの大女優ラングと対決して一歩も引けを取らない。ここに至るまでのていたらくからすると、監督／脚本のジョナサン・ダービーの手柄だとはどうしても思えないので、これはパルトロウの女優としての大きさだろう。「あの」ジェシカ・ラングがこんな珍品に出た、そして近い将来パルトロウが大女優となったとき振り返って、「あの」パルトロウがこんな怪作に出ていた、という意味ではなんらかの意味を持ちうるかもしれない。そんな作品である。　**鬼塚大輔**

ハミルトン

THE MAN WHO KNEW TOO LITTLE
ワーナー・ブラザース配給
11月21日公開

© 1998 Warner Bros. All Rights Reserved.

アルフレッド・ヒッチコック監督の名作「知りすぎていた男」ではなく、「知らなすぎた男」とは、実にシャレが効いているタイトルだ。

いくら、ジェームズ・スチュアート並みに、ヘアーを整えてみても、演じるのが〝お騒がせ男〟ビル・マーレーなのだから、それけで展開が想像できる。

ヒッチコック映画お得意の巻き込まれ型ストーリー。秘密諜報員に間違えられた主人公が、英国・ロシア間に渦巻くテロ活動を阻止する内容だ。

ソール・バスを思い出すようなお洒落なタイトルロゴを筆頭に、あちらこちらにヒッチコック映画を連想するシーンが散りばめられている本作は、それを見るだけでも楽しい。

さらに、その枠がヒッチコック映画だけに止まらず、「シャイニング」や、「ダーティハリー」の物真似までにも至り、いつしかWB映画自体の紹介になっているから面白い。

ジョン・アミエル監督は、かつてメル・ブルックスが「新サイコ」で見せたような、大げさに真似た演出はないものの、時限爆弾をアップにして、そこから全体を映し出すといったヒッチコック特有の演出をさり気なく拝借して敬意を示している。

それでは、本作はヒッチコック映画をよく熟視している〝映画マニア〟にしか楽しめない作品なのかと言えば、決してそうではない。そのスタイルにビル・マーレー十八番のアクの強いキャラクターが、観客の笑いを大いに誘う。

確かに、マーレーは器用な（演技面で）役者ではない。一本調子で押し切る傾向が多分にある。それでも独自のスタイルを持つ役者は、どんな題材であろうと、きちんとそれに合わせる事が出来るのだ。ヒッチコック映画を真似ながらも、自己スタイルを突き通したマーレーの実力を評価しても良い作品だと思う。

そして、本作では妙に説明だけを求める今の風潮を嘆いているのではないか。〝知らない〟事を武器にして、次から次へと事を成し遂げるマーレーを観ているとそんな気がしてきた。それはまた古き良き時代のノスタルジイ。どこか懐かしい匂いがする作品である。　**村岡良昭**

アウト・オフ・サイト

リトル・モア配給
10月10日公開

「プープーの物語」「Jam」に続く〝リトルモアMOVIES〟第3弾だが、僕はこの「ポルノスター」を今までの中では最も買う。とりあえず、お笑いの舞台とは違ってほとんどしゃべらない千原浩史が、いわば裏の本領といえる、アウトサイダー青年の〝文学性〟なるものを魅力的に見せつけているだけでも賞賛に値するはずだ。ブランキー・ジェット・シティやニルヴァーナが好きな千原浩史は、本業のネタを見ても分かるように、尾崎豊的なもの（素朴さ）を批評的にヒネった位置に心の本質を持っている。それはいかにも、グランジから酒鬼薔薇聖斗に至る90S型虚無のイメージを体現するたたずまいであるのと同時に、アウトサイダー青年特有のリリシズムも強く感じさせる微妙な表情を形作る。よってここではその資質に沿い、まず〝ナイフ〟〝渋谷〟〝スケボー〟という時代の象徴記号をベタベタに貼りまくり、「いらんやん」と自分にとって不快な人間をブチ殺すラスコーリニコフ的殺人哲学、墓碑銘にこだわるセリーヌ的心情、鬱屈した上京者という永山則夫的精神など黄金の〝文学性〟をそれに絡ませ、90S版「十九歳の地図」とでもいうべき青春像を作り出すことに成功している。千原と三池崇史のセンスのズレが問題点としてあった「岸和田少年愚連隊／血煙り純情篇」（97）に比べても、本作は千原と豊田利晃監督の共闘だという感じがした。

しかし、ならばこの映画は、豊田監督は新しいのかと聞かれれば、僕はイイエと答えたいのである。例えば本作のヤクザ描写は〝北野武以前〟の匂いを放つし、また前言撤回のごとく聞こえるかもしれないが、〝90Sの既成イメージ〟が見えた時点で表現としてはもう古い気がする。素材「千原浩史」を飛躍、更新させるほどの映画表現を模索して欲しかったけど、音楽のジャストな鳴り方はよかったので、今後に期待はしておこう。

尚、写真家のホンマタカシ氏が監督した「謎のFLYING SAUCER」なる短編が本作と併映されている。安い円盤が飛ぶ激チープなアホSFだが、坂井真紀と村上淳が出現した時点で「続く」となった。続編に期待するしかなかろう。**森直人**

Digitized by Google

ピンク映画時評

切通理作

ムショ帰りの男が電車で痴漢した女。

彼女は社長と愛人関係を持つ美人秘書・美保（里見瑤子）。

社長に女の悦びを教えこまれるが、自分の意志がままならない彼女の心の穴を埋めるのは痴漢の指。

女は、映画の後半になるまで男の顔を見ていない。痴漢は寂しい生き物さ。だから顔は見せない。だけどアンタも同類なんじゃあないのか。男はそう言ってどんどん大胆に。

神野太監督、竹橋民也脚本の**「痴漢の指　背徳の美人秘書」**がポルノ的なワイルドで押す。強引な科白とポルノ描写のみで成り立っているのがイイ。

やがて研は、強姦で捕まっていたが刑務所を脱走した兄貴分とともに彼女を篭絡し、美保と愛人関係にある社長から他社との契約金として用意されていた一億五千万円を奪う。

契約の場所だった山梨の温泉からの逃避行が開始されるが、美保は男二人を罠にかけて殺す。一時期は男たちと共犯関係にあった美保だが、金とカラダだけが目当ての者たちなど、結局裏切り裏切られる運命でしかない。

ラスト、車を乗り捨てた彼女は列車で東京へ帰ろうとするが、ボックス席の隣に座り、忍び寄る手はあどけない中学生。男ってしょうがないわねえとされるがまま、やがて自らリードし始め、官能列車は一路東京へ。かくて、旅の途中で物語は終わる。

瀧島弘義監督の**「人妻スチュワーデス　官能昇天」**は、結婚退職が決まったスチュワーデス涼子が空港からの帰り道、陽光照らされる下、オナニーを始める。飛行機の轟音が彼女の五感をノックしたらしい。

画面はホワイト・アウトして、結婚後の旦那とのすれ違いが描かれる。「私にはあなたしかいないの。私以上に、あなたは私を愛して愛して愛し抜くの」と、まるで増村保造の映画のごとくちょっと硬い科白廻しで自分の精神状態を語っていくのが、原田美枝子似のヒロイン・川村千里。増村保造といえば、かの『スチュワーデス物語』も増村監修だったね。

涼子は、旦那が交通事故を起こした為に被害者から示談金を強請り取られている。倦怠気味の心理状態で、実は当たり屋だった彼らに尾いていくヒロイン。

赤毛の吉行由美が、刹那的なジャンキー夫婦の片割れを演じていてカッコイイ。ジャンキーといっても、彼女がトリップするのは車に跳ねられ、飛び上がる瞬間。全身生傷だらけ、各部に包帯を巻いたままで男とセックス。豊満な肉体がゴロンと転がり、肩ひじ立てて喋るのをお尻から捉えたショットにはドキッとした。

一方、ヒロインの方も、常に飛行の夢に捉われていた。神社の境内の中、両手を広げて走る幼い少女。そんな遠い日の憧れは、スチュワーデスを辞めた今も残留していた。

自らも当たり屋になった彼女は、車にはね飛ばされる瞬間、意識を飛ばせる。そう説明しなくても、イメージが伝わってくる演出は的確だ。赤いスカーフのスチュワーデスの制服を着たまま旅を続ける彼女。

だが、指名手配された彼らはやがて追いつめられ、放浪の旅が逃避行に変わる中で吉行は去り、男と二人になったヒロインはデッド・エンドでセックスに耽り、丘の上から「跳んで」みせるが……こっちの方のヒロインは、白昼夢としばしの決別をつけて、日常に帰っていくラストを迎える。幼い頃の自分が、幻想の中で手を振っている。

深町章監督**「未亡人の下半身濡れっぱなし」**は、赤毛の吉行由美がそのままの出立ちでフツーの主婦ミユキ役。この一家、しばらく前から大学教授の夫が失踪中であることが説明される。

そんなことは一見関係なく高校生の娘（麻生みゅう）と息子は彼氏彼女を家に連れ込みやりまくりの毎日なのだが、ミユキ自身の身持ちは固い。

夫との共通の友人・シンスケ（杉本まこと）が訪ねてきても危ない関係にはならない。

シンスケは映画監督。彼が助監督で夫が助教授だったとき、どっちの「助」が先に取れるかなどと笑い合っていた過去を振り返るミユキ。そう。彼らもまだ「夢の途中」の人生なのだ。

劇中設定は四十歳で、もう若くないのにもかかわらず。

武田浩介の脚本は、娘や息子の会話やセックス場面などに現代風の味つけをほどこし、非日常の中に日常を見せていく。娘がフト父の不在に涙を流すさりげなさもいい。

やがて、夫の死が確認される。その晩は、ミユキがシンスケに会いに行き、唇が重ね合った初めての晩でもあった。

「言った？　あの人に。私とキスしたって」と、焼香に来たシンスケに言うミユキ。あの晩、キス以上はなく、二人はまだプラトニックだったことがわかる。

夫の写真を後ろ向きにし、初めて結ばれた二人。窓を開けると雪が降っていた。「まあ雪……」。そこで映画は終わる。

映画も人生も、未完成で結論なんてない。降り注ぐ雪は逆に室内の温かさを示し、旅の途中のぬくもりを感じさせてくれる。

Digitized by Google

読者の映画評

●応募要項　住所・氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字前後で、縦書き、原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募下さい（レポート用紙不可）。〒112-8502 東京都文京区小石川1－21－14小石川吉田ビル キネマ旬報編集部「読者の映画評」係まで。

皆川ちか／須田総一郎／吉川北京波／長閑卯月

愛を乞うひと

世紀末の世を反映してか、相変わらず巷ではヒーリング系映画がにぎわっている。恐らくオーストラリア映画「シャイン」を皮切りに始まったこのブームは、しかし大半は視点が一つに固まったものだった。

その視点とは、主人公が受けた困難の大元から救われること、解決されることをメインテーマにしているところだ。いわば、どれほどの苦しみと傷を背負ったとしても、それでもその原因を癒すことはできる、とまるで自然治癒能力にも似た「癒し」を大前提としている点だ。逆に言えば、多くのヒーリング作品で無視されてきた面とは、苦しみの元凶を解決できない者の、別な方法での救済のことだ。その点、「シャイン」はまさに画期的だったのである。

そこでは、主人公は父親との確執関係を結局は解決できない。だが別な方法（例えば女性の愛）によって復活を遂げる。解決できないものはできない、とありのままに描くこと、その真摯なまなざしがこの作品を傑作に押し上げた。

「愛を乞うひと」は、「シャイン」と対照的に、母と娘の物語である。また同様に、親子間の愛憎に満ちた壊れた関係を「愛」や「絆」で無理やり修復させようとはしていない。母の虐待が凄まじければ凄まじいほど、その裏に隠れた愛情も強い、なんてわけはない。ただひたすら娘を折檻するだけで、そこに理由などはいらないのだ。これは、ラストシーンで癒されるために、主人公が傷を受ける物語ではなく、傷ついた主人公が自ら生き延びる道を勝ち取ってゆく話だ。

故に娘は自分の方から母親に会いに行き、手切れ金のように金を手渡す。そしてそこで、いくら血のつながりのある間といっても、修復不可能なつながりは確かにあることを示し、「愛」の見極めすらつけている。抱き合うばかりがハッピーエンドではない。決別を告げることによって報われる、この作品はそんな解決もあることを証明してみせた。「愛」の一言での安直な「癒し」を選択しなかった。素晴らしい、そして厳しい。

皆川ちか
埼玉県戸田市・無職・21歳

愛を乞うひと

本作は、母親が一方的に暴力をふるうという無残で悲劇的な母子関係に擬して、日本と台湾の戦前から現在に至る苦渋に満ちた歴史を、目をそむけたくなるほど過激なアクションで描いた衝撃作である。

母はなぜこのように我が子を折檻するのか。台湾人の父親は美しくも傷ついた日本人女性に惹かれて結婚する。しかし、やがて女の本性に気付き、娘を守るべく豪雨の中脱出を図るが、力尽き倒れてしまう。哀れなのは残された一人娘に象徴される台湾人である。犠牲的な幼年時代を余儀なくされ、心も体もボロボロにされてしまう。同じ肌と同じ顔を持つ東洋人でありながら日露戦争に勝利し欧米と肩を並べた日本に対する、他のアジア人の期待と裏切られた口惜しさ、無慈悲さに対する憤りを感じさせる。幼子が生き抜いていくためには親である支配者の言うなりにならないといけないのかも知れないが、「おまえは一人で食っていけないだろ」という言い方は、「アジアの民族を解放する」という、日本のかつての主張と近いものがある。

このような設定を裏付けるのが、継父と傷痍軍人のふりをして「施し」を受けるシーンである。「実の母」であるのにわざわざ「継母」という札をつけ、本当の傷痍軍人ではないのに通行人から金をもらうのは、事実と異なることをお客に見せ感動や同情を誘う本作の存在自体につながっている。この作品が単に母子関係を描いているのではなく、戦争で傷ついた人々を語っていることを示す重要なシーンだ。

父親が手鏡を使って家の中に明かりを反射させ、天井や壁に映った光を台湾と呼ぶのは謎かけである。部屋の中のように暗く、悲惨なストーリーの中に気が付かれないように台湾の歴史と存在を浮かび上がらせようとしている。父親の面影を追って手鏡で反射された光を追う照恵の姿が哀れで愛おしい。この手鏡を最後まで母親に奪わせないのは、台湾人が民族の誇りをギリギリのところで保ってきたことを表している。

冒頭の激しい雨や母子の再会シーンにそぼろ降る雨が、照恵の心理を象徴しており印象的だ。言葉を交わした二人が別れた後

Digitized by Google

は気持ちが吹っ切れたようにさっぱりと雨があがり、母との関係が長い時間の末やっと精算されたことを示す。ラストにおける風が爽やかに揺らすサトウキビ畑と台湾の青い空が美しい。ここにおいて台湾人は父たる祖国に心の安住の地を求めることができた。戦後50年が経過し、安定した関係と落ち着いた感情を保つことが出来るようになった両国の人々が、お互いの立場を尊重するのは当然である。しかし、母親に象徴される旧支配者は年老いてもなお、日本の片隅、もしくは人の心の中に生きている。アジア民族は、かつての抑圧者を心の奥底では許していないのだろうか。隠されたストーリーの中に歴史の積み重ねとそれに巻き込まれた人々の悲劇を内包する奥の深い作品である。

須田総一郎
東京都目黒区・会社員・43歳

学校III

長男トミーを「自閉症」と設定したところに鍵がある。字面からの印象で、「内向的」と大差ないように誤解されやすい。「自閉症」とは"健常者と同じようには自分の意志を様々なアクシデントに際して臨機応変に他者に伝達することが出来ない脳の発達障害"である疾病であり、原因不明で遺伝や親の愛情不足で起こるといった情緒的レベルのものでは決してないのである。新聞配達をしている位だからトミーの程度は軽い、と言える。

だが、外見上で健常者と見分けのつかない知的障害者では病気そのものの苦難と共に、家族へは良識的家庭人から無知を背景とする悪意なき制裁が加わる。映画ではこの部分を丹念に描いて、さりげなく見事と言うほかない、前作「学校II」でも、山田洋次は劇映画として知的障害者を描く試みに挑み腐心した。しかし気球のラストシーンで物語を一転メルヘンへと収束させたため、いかにも性急で結果は残念なものとなった。しかし、甘いと言われようと私には、"もはやくつがえすことが出来ない障害という現実"を前に山田洋次が、作家としての方法論よりも人間としての選択を優先させたのではないか、と思えてならない。いわば人間としての資質に関わる選択であったのだ、と。「きれいな女の人の髪の毛を触りたがる」トミーが主人公の髪を撫でるシーンは、彼が恋を得て輝いている自分の母親の中の「女性」をはっきりと受け止めていることが判る重要な脚本上の見せ場のひとつである。儀式的とも形容される"自閉症患者の安定を望む姿勢"の踏み込みがあるだけに、卒業式前夜の母の説明を聞き入れないトミーのパニックが「母子二人だけの生活(リズム)がかき乱されるかもしれない不安」から由来していることが察せられるのである。平明の語りつつ、細部に説明的とならない工夫がこめられていて、これは稀に見る日本映画の熟達の傑作であると痛感する。「家族」から二十八年、山田洋次の弱者を見つめる眼差しはいよいよ本格的となり、黒澤明の後継者としての先頭に在ることを全身で感じる幸福感が何より嬉しい。

吉川北京波
大阪府堺市・医師・44歳

学校III

「人を殺してまで死にたいとは思いません」と叫ぶ神田（小倉一郎）の生真面目で切羽詰まった台詞に爆笑した。しかし、その台詞は彼の性格を物語っているようで、ながく胸に残り、笑いがやがて哀しみに変わる。この台詞と対極にあるのが、「みんな生きようよ」、「生きなくちゃダメだよ」という美つき（大河内奈々子）の台詞だ。こんな台詞を真顔でしつこく叫ばれると、たとえ死ぬ理由など欠片ほどなくても、「いいや、生きない。生きませんとも！」とむきになりたくなってしまうのだ。古今東西、正論を声高に叫ぶ者ほど胡散臭いものはない。健全極まりない美つきというのは、実はまきぞえをくった可哀想な犠牲者などではなく、自殺ツアーを仕切る死神である新垣（ダンカン）の仕込み――死に逝く者たちのために用意されたツアーのオプション――に他ならないのだと結論する。それが証拠に、彼女は「私は死にたくない」という割に生きのびることに少しも必死ではない。折り鶴なんぞ折ってる暇があったら、新垣を殴り倒してでもバスを止めるだろうし、何もしないで死ぬくらいなら、一か八かバスの窓から飛び降りたっていい。しかし彼女はそんなことはしない。"とばっちりなんかで殺されてたまるか"と抗う風はなく、あくまでも"もう一度、みんなで生きよう"というたいへん立派な姿勢を崩さないのである。それは、彼女自身も自分の役割――平安な死の演出――を熟知していて、その任務をきちんと遂行しているからに違いない。いくら頭で納得していたとしても、死にたくて死ぬのではなく、死ななければならなくて死ぬのならば、簡単に踏ん切りなどつかないのは当然である。どうせつかないものならば、つかぬまま死んでもらうのが、確かに一番平和的解決に思える。そうして、彼女の活躍によって、「自殺ツアー」はその主旨を遵守しながら、本物の「事故」として終結し、それまでニコリともしない新垣の満面の笑顔で物語が終わる。

どうせなら、エンドロールに在りし日のみんなの笑顔を並べたりせずに、スクールバスに子供達を先導している美つきに「僕らはみんな生きている」を歌わせてほしかった。

長関卯月
東京都武蔵野市・会社員・35歳

●第一次選考通過者
（応募総数185通）
「愛を乞うひと」池田統
「カンゾー先生」富井淑夫
「学校III」内田務
「桜桃の味」山本公
「CUBE」周磨要
「プライベート・ライアン」
粟井政房、加納翔子

Digitized by Google

文化映画

渡部　実

文楽への誘い

日本独特の文楽の世界

今回ご紹介する映画は、日本の伝統芸能である文楽についての記録映画である。人形劇は世界のどの民族もそれぞれの歴史の中に持っているといわれる。日本で来日公演される各国の人形劇を観ると各国の地理、風土、歴史を反映した実にさまざまな形のものがあり、人形のみならず、その舞台を見ることも楽しい（例えばインドネシアのジャワ島の影絵人形、フランスのギニョールといわれる片手遣い人形など）。

日本での人形劇は古来に大陸から渡来した芸能的なもの、またそれ以前に日本に存在した宗教的、呪術的な意味も含め大漁、豊作を祈願する目的で行われていたと推測される人形劇があった。主にそれらは平安時代に生まれた職能集団で各地を放浪する傀儡子（くぐつ）と呼ばれる人形集団によって行われ、広く人々たちに浸透していた。やがて傀儡子は神社や仏閣の周辺に定住するようになり、室町時代になると猿楽や幸若舞も演じられた。またその一方、日本には古来から語り物を語る伝統があり、その代表として「平家物語」を語る分野があった。これは始め琵琶法師の専業であったが、やがて時代とともに物語の種類も広がっていく。その中でも「十二段草子」といわれるものが人気を博し、曲節を浄瑠璃と呼んで他の作品にも流用するようになった。

この人形浄瑠璃という名称はもともと浄瑠璃の語りにあわせて人形が演じられる種類の全般を指しているが、具体的には義太夫節を使うものとされる。義太夫はそれまでの浄瑠璃の長所を集大成したもので、その元祖は京都、大阪で活躍した竹本座の竹本義太夫である。加えて作者に近松門左衛門らを起用し、大阪の人気を独占した。やがて次第に他派の浄瑠璃は姿を消していったこともあり、義太夫は浄瑠璃の代名詞となった。人形浄瑠璃と歌舞伎は約400年の歴史の中でお互いに影響を与えあって発展してきた。語り物としての浄瑠璃と三味線、操り人形が一体となった人形浄瑠璃が誕生したのは16世紀の終わりであった。

しかも人形浄瑠璃（文楽）は人形を一人ではなく3人が操るという世界でも類を観ない日本独自のものとして発展を遂げた。

この映画はそのような人形浄瑠璃の現代に至る姿を見つめている。まず冒頭に観られるのは、近松門左衛門の代表作として名高い「平家女護島」（別名「俊寛」）の舞台である。俊寛とは平家を滅ぼす陰謀に加わったが為に、九州の果ての鬼が島に島流しになった人物。俊寛は赦免船が来て都に帰れる機会があったが、島の娘の身代わりとなって結局、島に残ることになった。舞台は登場人物の瀬尾と俊寛の立ち回りの姿、俊寛の見送りの姿が紹介される。この英雄、俊寛の悲劇を切々と伝える。

次に映画は元禄時代の操り人形浄瑠璃の図から始まり、竹本義太夫と近松門左衛門の2人を紹介していく。竹本、近松らの肖像画や石碑、京都の万太夫座の錦絵などこの頃、浄瑠璃がいかに隆盛を誇っていたかが伝えられる。

京の四条で歌舞伎や浄瑠璃の作者となった近松門左衛門はもともと武家の出身であったため、公家奉公から得た豊富な知識と歌舞伎での執筆体験から竹本義太夫に作品を提供する。

1684年に竹本義太夫は大阪道頓堀に竹本座を創設。そしてこの竹本座と豊竹座の2座が競い合う形で人形浄瑠璃は全盛期を迎えた。そして1703年（元禄16年）近松51歳の時の作で今日まで名作として上演される「曾根崎心中」が大当たりをとる。「曾根崎心中」は神話などではなく、実際に起こった事件を元にしたリアリスティックな作品、当時の現代劇であり、元禄時代の大阪の町人の姿を描いた画期的なものであったという。近松は生涯に100編にも及ぶ作品を書いたが、名もない市井の町人を主人公にした世話物を沢山残した。

注目すべき文楽の構成

この映画はなかなか欲張りである。文楽のほぼすべてを見せようとする。次に描かれるのは太夫と三味線の稽古風景である。義太夫の太夫の語りは単なる描写や説明の次元ではなく、人物の心を表し人情の機微を伝える。場面には義太夫の太夫が使う、床本（ゆかほん）のクローズアップが見られる。竹本住太夫の語る姿。太夫は登場人物のすべての言葉、その情景から事件の背景の説明までを一人で語り分ける。しかも一場をたった一人で語るのが原則である。太棹三味線と協力して語る太夫の語りは声の質感、発声の技量など独特のものが感じられる。また三味線も時にはリードをしながら太棹三味線の持つ深い音色で人物の心を表現していく。

そしていよいよ人形の登場である。近松の時代には人形遣いは一人であったが、江戸の中期ほどから一体の人形を3人で操

Digitized by Google

るという独自の方法が採られたのである。まず画面には「曾根崎心中」の道行きを一人遣いによって見せる。そして変わって現在の形である3人遣いの様子を見せる。3人遣いの時には裸の人形でそれを見せていく。それによって人形の動きが具体的によく分かる。文楽の人形は結構、背丈がある。首、手、顔、顔の細やかな表情がしかけによって動く有り様はやはり生々しい。主遣いは左手で人形を支え、首を操作し、右手で人形の右手を使う。左遣いは、両手で人形の両足を操る。足遣いは両手で人形の足を操る。面白いことは主遣いは足遣いがやりやすいように高い下駄をはいていることである。その舞台も舞台前方を沈めた船底舞台という特異なもので、船底の原型をした舞台に手摺りがあり手摺りの線を基準にして人形が遣われるのである。

さらに映画は人形に接する、高度の技術を持った裏方さんたちの存在を紹介する。人形たちに接する彼らのエピソードは興味深い。人形細工師は人形の首を作るが新たな公演のたびに補修がなされ、新しい化粧も施される。床山は鬘を作り髪を結い上げる。衣装方はこれまでに公演された衣装の付け帳を参考に、これまた公演ごとに新しい衣装を揃えるのである。小道具も人形のサイズに合わせたものをその都度、遣い手がやり易いように小ぶりに作る。衣装が出来上がると、主遣いが彼自身で襟や襦袢、着物、帯などを縫い合わせ、着付けをする。これを人形ごしらえと呼んでいる。

これまでの画面を見ると人形は上演の準備は人間の歌舞伎役者と変わらない配慮がなされていることに気づかされる。しかもこの映画では人形を裸にしてその構造までを大胆に見て解説を施しており、これは注目すべき面白さだった。

映画は最後に「曾根崎心中」の天満屋の段・天神の森の段を見せる。舞台は曾根崎新地の天満屋。平野屋の手代である徳兵衛と天満屋の遊女、お初が心中の覚悟を決める悲壮な場面である。やがて2人の道行き、死出の旅立ちという悲劇が描かれる。

本編には平成9年12月と平成10年2月に国立劇場で上演された「平家女護島」「曾根崎心中」の2つの舞台公演の模様が記録されているが、わけても「曾根崎心中」には人間国宝の竹本住太夫、同じく人間国宝の人形遣い吉田玉男、吉田蓑助の演じる徳兵衛、お初という、当代最高といわれるコンビが名演を披露していることも魅力である。劇場内の暗い照明にもかかわらず人形をくっきりと捉えた撮影も良い。文楽に初めて接する観客にも分かりやすく、魅力に溢れた一作である。

文楽への誘い

桜映画社作品

【スタッフ】製作・村山和雄、脚本・原村政樹、村山正実、演出・村山正実、撮影・西山東男、山屋恵司、木村光男、撮影助手・藤江潔、田中龍雄、今野聖輝、照明・本橋俊男、工藤晃、タイトル・菁映社、編集・吉田栄子、ネガ整理・加納宗子、選曲・山崎宏、録音・堀内戦治、アオイスタジオ、現像・イマジカ。ナレーター・和田篤。出演・人形浄瑠璃文学座。協力・㈶文楽協会。資料提供・早稲田大学演劇博物館、東京大学付属図書館、東京大学教養学部図書館、サントリー美術館、大東急記念文庫、大阪市立博物館。企画・監修・日本芸術文化振興会、国立劇場。完成・98年5月。16ミリ34分。問い合わせ先＝桜映画社TEL03・3478・6110

ときめいて
《映像のプロへ》
一直線

■映像科 創作科 技術科 美術科
■俳優科
■声優科（三科とも全日制2年）

日活芸術学院

入学願書受付中
キャンパスガイド〈体験入学〉11/22(日) 12/6(日) 12/23(祝)
参加ご希望の方は事務局K係宛ハガキ、電話、FAXなどでお申し込み下さい。

〒182-0023 東京都調布市染地2-8-12日活撮影所内
日活芸術学院 事務局K係
TEL:0424-85-2443 FAX:0424-87-1210
http://www.nikkatsu.com/school.htm

入学資料(無料)をお送りします。上記宛ハガキ、電話またはFAXでお申込み下さい。

『きみのためにできること』
'99新春公開!!
監督：篠原哲雄 原作：村山由佳(集英社刊)
出演：柏原崇・真田麻垂実・川井郁子・岩城滉一
■製作・配給 日活 ■日活芸術学院協力作品

Digitized by Google

大森さわこ

ちょっとイギリスびいき

⑮グラム・ロックに興味がない人にも見て欲しい野心作「ベルベット・ゴールドマイン」

遂に10月24日から始まった英国映画祭。日本で英国映画祭が開催されるのは今回が初めてではないが、それにしてもこれほど大規模なものはなかった。つくづく、英国映画はメジャーになったものだと思う。観客の入りは作品によって、バラつきはあるものの、なかなか好調だと聞く。

今回の映画祭のメイン作品の一本でもある野心作「ベルベット・ゴールドマイン」（チケットはすぐに売り切れになったそうだ）。なんと、この映画のシナリオ・ブックの翻訳を担当した。

実はこの仕事をいただく前にたまたまシナリオに目を通していたが、これが実におもしろい！　今回の本は前に見たシナリオとは少し違い、映画にないカットも入っている。どちらのシナリオも、とにかく、ト書きがやたらと詳しい（こんなに指示が細かいシナリオも珍しい）。もちろん、内容がいいから、最後はすっかり主人公たちになりきってゴールドの世界をトリップする。

「ベルベット・ゴールドマイン」

デイヴィッド・ボウイに代表される70年代初頭のロンドンのグラム・ロックの世界を描いた作品、というと、音楽ファン以外は「あ、関係ない」とパスしてしまうかもしれないが、実はドラマとしてもよく出来ている。キャラクター描写がとてもいい。

美意識あふれる幻想的な映像も素晴らしいが、訳者として感心したのがその映像に負けない言葉の美しさだ。ミュージシャン映画につきものの、4レター・ワーズなんて、ほとんど出てこない。冒頭場面からふるっている。幼いオスカー・ワイルドが登場し、こう言ってのけるのだ――「僕はポップ・スターになりたい！」。そう、グラム・ミュージシャンのルーツはオスカー・ワイルドだった、というコンセプトで撮られた作品なのだ。

劇中、パロディ的にワイルドの言葉も引用される。たとえば、ユアン・マクレガー演じる（イギー・ポップをモデルにした）カート・ワイルドは、オスカー・ワイルドの小説の言葉をアレンジしたとおぼしきセリフを喋る。いかにもあんちゃん風のユアンに格調高い福田恆存の訳文をあてることなどできず、これはぐっとひらいた訳に変える。ワイルド以外にも、文学者、劇作家、ミュージシャンの言葉を借用したと思われるセリフがいっぱい。監督・脚本のトッド・ヘインズの博識ぶりに圧倒された（同時に教養欠乏症のわが身を恥じた）。そして、付録の（記号論まで出てくる）ヘインズのインタビュー。アメリカ人の知人も「これはネイティブ・スピーカーにもむずかしい内容ね」と一緒に頭をかかえてくれた。

しかし、これだけのシナリオを書き上げることのできるトッド・ヘインズの才能はたいしたものだ。やや自己満足的な部分もなくはないが、とにかく、描写が細かいので、何度見ても新しい発見がある。逆に、一度見ただけではとてもとらえきれない作品だ。ほら話風のユーモアも痛快。

「ポイズン」で知られるヘインズはニューヨークの監督。どうしてアメリカ人がグラム・ロックを、と思う人もいるだろう。おまけに彼はグラムを同時代で体験するには少々若すぎる……。でも、結果的には、対象とやや距離のあるヘインズが撮ったからこそ、グラムを知らない人にも分かりやすい作品になった。グラム・スターの栄光と挫折というテーマは、実は他のジャンルのスターに置き換えることもできるのだ（オペラ歌手でも、映画スターでも成り立つ物語だ）。

そして、これまでの音楽映画と異なり、ミュージシャンの視点という以上に、ファンの視点で撮っているところも新鮮だ。絶頂期から10年後にグラム時代を調査する記者。〝失われた時を求める〟彼の視点を通じて、ポップ・ミュージックが一般の人にあたえる影響力についても言及される。何より〝イメージ〟が先行する時代を見つめる視点が鋭い。そして、フェイク感覚の美意識の向こう側に見える青春の切なさにも（70年代世代の筆者は）妙に胸を打たれてしまった……。

Digitized by Google

その場所に映画ありて

田中眞澄

40 明日待子よ永遠なれ I

フィルムセンター恒例の《逝ける映画人》特集が、八月二五日から続いている（一二月四日まで）。昨一九九七年に死去した人々に因む映画が六五本。昨年は錦ちゃん、勝新、ミフネが次々に世を去った年で、幸か不幸か例年になく充実した番組だが、六五本中、六四本が戦後の作品という点に、戦後という時代、用語が確実に過去形、歴史の問題になったとの感が深い。戦後も遠くなりにけりか。

「女を忘れろ」（五九、舛田利雄）とか「不良番長」（六八、野田幸男）とか、大井武蔵野館向きの映画がここに登場するのは、以前には考えられなかったことだから、それだけフィルムセンターも進化したということでもあろう。来年は堺左千夫を偲んで「お嬢さん登場」（五六、山本嘉次郎）を、須賀不二男を偲んで「『婦警日記』より・婦人科医の告白」（五七、岩間鶴夫）を、ぜひここで見直したいものである。

しかし、もちろん映画は初めて見る時が楽しい。その意味で、私は今回の特集では「スタジオは大騒ぎ」（五六、水野治）と「春爛漫狸祭」（四八、木村恵吾）を楽しみにしていた。そして大いに楽しんだ。

「スタジオは大騒ぎ」は大映京都撮影所紹介映画で、当時の大映現代劇スター・システムの布陣を表示するの観がある。スター紅白歌合戦での高松英郎の芸には大笑い。だがこの映画の真の感興は、市川和子や川上康子の地位が翌年の野添ひとみ大映入社で急速に失墜する悲哀に、思いめぐらすところに生ずるであろう。

それにもまして、「春爛漫狸祭」は貴重な映画。フィルムセンター今年の大ヒットと評して過言ではない。といっても、映画作品として見る限りは、ただの娯楽商品。ありきたりの狸御殿映画にすぎない。

狸御殿ものは、映画俳優だけでなく、歌手や舞台のコメディアンなども登場させ、ヴァラエティ風に仕組んだ、いわばミュージカルの日本化として成功したジャンル。新興キネマのお家芸が大映に受け継がれた。「春爛漫狸祭」もその一つで、ストーリィは童話の『白雪姫』の翻案か。明日待子のお姫様、喜多川千鶴の王子様。他に……一々解説し始めたらどこまで続くぬかるみぞ。

そこで涙を呑んで本来追悼の対象たる喜多川千鶴以下全員割愛。話題を明日待子一人に絞ろう。要するにこの映画の価値は、昭和一〇年代のアイドル明日待子の、たった三回の映画出演の一本という点にあるのだから。

新宿国際劇場――今は成人映画の上映館のその場所に、一九五一年五月まで、屋上で赤い電飾の風車が回るムーラン・ルージュ新宿座があった。開館は一九三一年の大晦日。その名を巴里の本場から頂いたのは、創立期の文芸部顧問でモダン派作家の吉行エイスケ（あぐりの夫で淳之介・和子・理恵の父）の発案という。座主の佐々木千里は元浅草オペラ役者であった。

ムーランといえば、何回か前に書いた利根はる恵がここの出身。だが彼女は、戦後に俳優の宮阪将嘉（旧名ムサシノ漸、妻は三崎千恵子）や作者の中江良夫が中心で再建したムーラン戦後派。ムーラン・ルージュ全盛期はやはり戦前で、その時期を代表するシンボル的存在が明日待子だったのである。客席で「明日待子バンザーイ」と叫んで出征していった若者たちが、生き残っていれば七〇代後半以上だろう。遅れて来た世代の我々は、この映画でようやく伝説の少女にめぐり会った。

岩手県釜石に住む彼女が上京してムーランの踊り子になったのは一九三三年、一三歳のとき。一座の俳優有馬是馬の発見といわれる。幼い彼女の将来に期待して《明日待子（あしたまちこ）》と名付けられた。お下げ髪を切ってモダンなおかっぱ頭に仕立てたのが、先輩の望月美恵子（のち優子）たち。父は尺八、母は義太夫が好きという家庭で、五歳から三味線と踊りを習っていた彼女は、父を亡くしてからは芸事で身を立てたい希望があった。ムーランでは踊りの他に、芝居で男の子役をふられることが多かった。子供のない座主夫妻の養女となり、望月ら先輩たちの去ったムーランの看板娘に成長する。

一九三八年には、批評家から映画製作の現場に転じた岸松雄の最初の（そして最後の）監督作品「風車（かざぐるま）」に請われて、『伊豆の踊子』風娘役で出演（東宝作品だから出現の可能性あり）。しかし戦前の映画出演はこの一本だけで、出入りの激しいムーランの舞台を守った。ただ、新聞・雑誌には常にとり上げられ、さまざまな広告媒体に使われ、特にラジオにしばしば出ていたから、彼女の人気は全国に浸透していただろう。

明るい美貌で、年齢とともに娘役に成長しても、いつまでも小さくてかわいい明日待子であり続けた彼女のイメージは、二八歳になっていた「春爛漫狸祭」でもまるで変わらず、共演する喜多川千鶴より十歳年上とは信じられない（狸だから化かされたのかな）。とはいえ彼女はこの翌年には札幌に嫁いで、家庭の人になったのである。

（この項続く）

Digitized by Google

「TOKYO EYES」ができるまで(後)

吉武美知子

〝まっさらな視線〟がこの映画の鍵

日本人ならしない掟破り

次は何処で現像するかでまた一揉めあった。監督は未現像のままフランスに送って向こうで焼いてキャメラマンの助手にチェックさせると言う。制作部は日本のスタッフも、途中でラッシュを見て、自分のパートをチェックしたいだろうし、全く見せないというのは失礼であると反論する。監督はいずれにしろラッシュは見ない主義。俳優にも見せない。何故ならラッシュを見たことで彼等の演技に動揺を招く恐れがあるから。事故も不都合も全ては自分が責任を取ると断言する。結局この問題は、フランスで焼いた方が安上がりだという経済的理由をもって一件落着した。

撮入は97年3月3日に決定。キャメラマンのジャン＝マルク(以下JM)は3週間前に日本に到着した。監督と協議の末、全編をステディカムに積んだスーパー16で撮ることが決定していた。鎧のようなものにキャメラを着装すると総量25キロにもなるステディカムの操作は特殊技術で専門家が機材と共に派遣されて来るのが普通だが、JMはこの際、自分でステディカムを担ぐ決心をしていた。先ずは体力作り。スタッフルームを兼ねるビルの7階にあるユーロスペースのオフィスまで足で昇り降りし、キャメラを担いで仕事中の社員の間を練り歩く。監督は、主演の二人を中心にした本読みを始めた。かつてフランスで映画を撮る時にはしたことがないメソッドの導入である。日仏対訳が見開きに記載された台本の、日本語に全部ローマ字で音声表記をした。TVドラマ等で目にする日本のタレントの、パターン化された感情表現とその誇張だけは、自分の映画の中で演って欲しくない。これが監督の願いだ。言葉は分からなくても的確な演技か否かは判ると監督は言う。困った場面に遭遇したら、かって自分が体験した困った時の事を思い出して重ね合わせてみよという、スタニスラフスキーかストラスバーグかといったような内面の演技法を指導する。これにはちょっと驚いた。ジャン＝ピエール・リモザン(以下JPL)のフンワカした映画のタイプと、こういった演技は直には結びつかない気がしたが、これは浅はかな私見だ。

撮影の初日は底冷えのする曇天。Hinanoが、下北沢駅前の雑踏の中で、Kが現われるのを待つシーンである。晴れ待ちで、下北にセッティングされたKのアパートの表で、地面に落ちる小物のアップとか天候に差し障りのないインサートカットを撮ってお茶を濁すが、相変わらずの天気。致し方なく駅前決行を決意し、いざ出陣。人払い(東京人はクールなので意外と溜まらないのだが……)と広告塔から聞こえて来るアナウンス(これも自然でOKなのだが、公衆電話からNaomiに電話するHinanoの声に被るとちょっと……)と寒さ(ホカロン支給)と闘いながら、この日は余り粘らず早々に「お疲れさま」となる。が、ここで今日が終わったわけではない。まだ決まっていない場所のロケハン、脇役のオーディション、美術さんとの打ち合わせ、と撮りながらも未解決部分の作業が平行して進む。この残業(!?)から解放されることは殆ど最後までなかった。メインの4人の役者さん回り以外は未確定要素ばかりで、3日後に迫ったシーンの配役、その衣裳合わせは撮影前日なんてことも珍しくなく、なかなかの突貫工事であった。シーンの改訂も出るので、訳して坂元氏に連絡を取り、戻って来たものを監督に伝えるというピンポン作業も続いた。

最大の未確定要素は〝ビートたけし〟だった。僅か2シーンの出演ではあるが、後半の展開の鍵となるヤクザの役に、誰もが彼を熱望した。このシーンを白紙委任された坂元氏は彼を想定してこの場面を書いた。仏側プロデューサー、ヘヌガメは「キッズ・リターン」以降のオフィス北野製作映画の海外セールスを担当している関係から、同社の森社長に直談判に乗り込んだ。問題は「HANA-BI」の撮入が間近に迫っていて、ビートたけしはTVの溜め撮りのため超過密スケジュール。おまけに雪があるうちに新潟だけ撮るというのであちらのインが早まった。選択を迫られた……。ヤクザ役は、他の役者さんで行くか? ビートたけしの体が空く7月に改めてこのシーンの為だけに出直すか? 監督はTVのCMで見て覚えた一高倉健ならいいが、彼が駄目ならたけしを待つ」と、日本人なら口にも出来ないようなことを平気で言う。悩みに悩んだ末に日仏両プロデュサーの英断は下った。

監督の〝日本人なら絶対にしない掟破り〟は他にもあった。Hinanoが人混みの中をブラブラ歩いていると、Kが反対側から現われて彼女の手をさっと取るシーン。これを、日曜日

Digitized by Google

の表参道の歩行者天国で撮ると言って聞かないのだ。全員が口を酸っぱくしてどうせ撮れない、徒労に終わるから止めろというのを強行に押し切った。監督のご随意のままに！ 鉄則である。映画は監督のもの。誰も逆らえない。監督は、目立たないように何気なくやれば、意外と人は見過ごすものだ。大袈裟に構えるからいけないんだ。と、日本のスタッフの過敏な応対に日頃から見せていた反撥を、ここでいっきに逆証明したいのか、単に日本の野次馬を甘くみていたのか……。確かに何気なく現われた吉川ひなのをワンテイクすることは出来た。しかし、ひなのを目撃し、キャメラの存在を知った日曜の原宿のお上りさん達は「おっ！ 何かあるぞ」と立ち止まり動かない。間をおいて、十数メートル離れた歩道に武田真治を配置するや否や、彼の周りに文字どおり黒山の人垣が出来てしまってにっちもさっちも行かなくなった。後はもう、この状態からどうやってひなのと真治を無事に脱出させるかだけだった。この騒ぎはいざ知らず、日本人ならしないこと、日本人なら撮らないこと、我々にとっては常識過ぎて意識の底に埋没してしまっている事に対するガイジンJPLの〝まっさらな視線〟がこの映画の鍵だ。

フランスでは〝日本映画〟

朝から小雨の降りつづく97年4月5日、渋谷界隈を移動しながら、歩きつづけるKとHinanoを撮りまくって深夜の横断歩道橋の上で撮影はアップした。感慨に浸る暇もなくJPL、JM、ヘヌガメ、そして私もパリへ帰った。それから2ヶ月余り謎の沈黙があった。監督から何の連絡もない。一体ポスプロは進んでいるのだろうか？ 6月11日に初めて編集室に呼び出された。アヴィッドも使わず、唸りを上げてモーターが回転しカタカタとフィルムを装塡する古びた編集台に、白手袋をした編集のダニエルが向かっていた。もちろん彼女も日本語は解さない。しかし、驚くべき正確さでシーンとシーンはしっかり繋がっていた。私の出る幕は余りなかった。テイクのチョイスとかで彼女が迷った時のアドヴァイス、それも彼女の選択は大体いつも正しいので、太鼓判を押して彼女の不安を解消して上げる程度のことだ。

実は、「TOKYO EYES」には蓮實学長が主演する（？）シーンがあった。Kがついに殺人を犯してしまったのではないかと心配で眠れぬ夜を過ごしたHinanoが朝一で朝刊を買いに行く。そこのキオスクの主人役で、Hinanoとの間に一悶着あり、かなりきわどい台詞を言われる。このシーンは「映画全体のリズムにそぐわない」というJPLの判断で編集台の上でばっさりカットされ、幻のシーンとなった。7月にはビートたけし様を本当に撮りに行った。夏休みも返上してつづいた編集作業が上がったのは秋も深まった頃だった。その間に「TOKYO EYES」より遅く撮入した「HANA-BI」がヴェネチアで金獅子賞を受賞した!!

フランスの配給は Haut et Court という最近メキメキ頭角を表わして来た若手の会社に決まった。ここのスタッフのノリも手伝って音楽構成や予告編作りはルンルン進む。実は1月に既に5月のカンヌ映画祭〝ある視点〟部門での上映が内定した。作品に対する最初の手応えだった。箝口令が引かれていたので人には言えなかったが、気分は弾む。この箝口令が公式に解かれるのが、映画祭がラインナップを発表する記者会見。今年は4月23日だった。国籍別の参加本数を発表する際「日本2本」という……「カンゾー先生」の他に日本映画があっただろうか？ あっ、「TOKYO EYES」のことか……。実は「TOKYO EYES」はフランスでは仏国籍を持たぬのだ。こんな純な合作映画に対して、フランス国は、自国の決めた勝手な制度のポイント（作品に参加したキャスト&スタッフのポストで点数を加算）を満たさないことを理由に国籍をくれない。おまけに日仏間には合作協定がないので優遇措置も効かない。まあ国籍なんてどうでも良いと言えば良いのだが、可哀想なのは仏側プロデューサーだ。フランス映画に与えられる様々な恩恵から外されてしまうのだから。それより私達は、この映画が、合作だからこそなし得た内容的な高い評価を誇りに思うことにした。実際、フランスのジャーナリズムの絶賛振りはちょっと凄かった。かいつまむと「物語展開的に最初に与えられた情報がはぐらかされて行く快感。物語自体も、それを追う観客も〝追いかけっこ〟になる。計算ずくの部分に即興を交えた綱渡りのような構成の面白さ。現実を見たいHinanoの視線、仮想の世界しか見たくないKの視線、相反しながら両方で一対をなす恋人達の視線。そしてJPLの東京を見る視線。『勝手にしやがれ』『ローラ』『ブエノスアイレス』同様、実は全てはこの町を撮る為のJPLの口実だったのかも知れない。映画が生きた言語たり得ることを立証した数少ない作品の一つ」云々……。

98年9月9日のフランス公開に向けての応援に来てくれた武田真治とマネージャーの松浦さんが「この映画に関われて本当に良かった」と言ってくれたのが嬉しかった。私は、エンドのタイトルロールが、ウチの今この原稿を打ってるマックから出たそのままの字体でスクリーンに表われる度に妙な感慨にとらわれる。エンドタイトルも日仏語併記にしようと言うわけで、活躍の場を得たのである。

Digitized by Google

完全放映される「カウボーイビバップ」

水民玉蘭

新しいスタイル目指した「カウボーイ〜」

1クール分未放映という珍事

ジャズ好きな方には改めて説明の必要もないと思うけれども、植草甚一氏の言葉を借りれば、踊るためのジャズ（スウィング）から聴くためのジャズ（モダン・ジャズ）へとシフトするきっかけになったバップ革命は、1940年代の初めごろ、ニューヨークはハーレムのクラブ「ミントンズ・プレイハウス」で発生した。ディジー・ガレスピーやチャーリー・パーカーなど、斬新なサウンドを模索するジャズ・メンたちは、ミントンズで一堂に会し、互いに刺激し合うことによって、新しい時代へと先鞭をつけることになった。

このジャズ革命が行われてから約60年が経った今、唐突にビバップの名をタイトルに冠したテレビアニメが放映されて話題を呼んでいる。それが「カウボーイビバップ」（以下「ビバップ」と表記）だ。

ところで、詳細は後述に回すけれども、このアニメは、半ば計画的に、半分は図らずして、現在のテレビアニメのあり方に一石を投じる作品となってしまった。「ビバップ」というタイトルからは、往年のジャズ・メンたちに倣って、アニメを変革しようとするスタッフたちの野心が感じられるのは明らかだが、それが守勢に回ろうとするテレビ局との間に齟齬をきたし、今年の4月から始まった放映では、2クール26話のうち1クール分13話がまるまる未放映という珍事になってしまったのである。

この顚末については、既にアニメ誌や一般誌などで触れられており、すっかり98年の映像メディアを代表する事件の一つになってしまった感があるが、とにかく、「新世紀エヴァンゲリオン」のヒットが招来した空前のアニメブームと、「ポケモン」事件以降のアニメ状況を象徴する作品であることだけは確かなようだ。

新しいスタイルの作品を作ろうとして、結果的にアニメの限界を映し出す鏡となってしまった「ビバップ」とは、どんなアニメなのだろうか。そして、その鏡からは、一体どのようなアニメの「いま」が見えるのか。

「とにかく従来のジャンルでは特定できないような作品を作りたかった。ロボットものとかサスペンスとか、そういう枠で括れる作品って先が読めるから、観ていてつまらないでしょう。だから、来週は何が起こるかわからない、そんなスリルのある作品にしたかったんです」と、「ビバップ」の監督である渡辺信一郎は言う。そうした、従来の枠を外すような試みは、作品のあらゆるところに認めることが出来る。

製作元は「ガンダム」などを送り出したサンライズだが、スタッフの中心になっているのは、同社の若手やフリーのクリエイターたちであり、とくに最近のアニメには顕著なプロダクション・カラーが抑えられ、自由な空気にあふれている。

また、そのタイトルに相応しく、ビバップやアシッドなどモダンジャズのメロディが流れるが、更にテクノやアンダーグラウンドなどのジャズの発展形やブルース、ロック、エスニックまでが複雑に絡むというもので、とても一言でジャンルを特定出来るようなものではない曲ばかりだ。

ストーリーに関して言えば、企画書やプレス資料には、いちおう「スペース・ジャズ・アクション」と書かれている。位相差空間という亜空間の航行が発達し、人類が他惑星やスペー

Digitized by Google

ス・コロニーに移住することが可能になった、約70年後の未来を舞台に、札つきの犯罪者を捕らえる賞金稼ぎたちの織りなす、この「ビバップ」のドラマは、洒落た台詞まわしや気だるいほどのデカダンスな雰囲気に満ちあふれていて、たしかに、一見ハードボイルド・アクションのタッチが濃厚だが、しかし、これも決して一筋縄ではいかない。

シリーズ構成は『白線流し』など実写ドラマでも活躍する信本敬子が担当しているが、基本的には、まったく毛色の違う若手シナリオライターの競作という形をとっているため、毎回様々なバリエーションが生まれるのである。こういう競作形式になったのは、一つには、毎回一話完結のシリーズという構成上、話にバラエティを持たせるために複数のライターを必要とするという演出上の理由もあるのだろうが、何よりも、まったく異種の才能を寄せ集めることにより、ジャム・セッションのようにドラマを展開させようとする意図があったのだという。

「宇宙船『ビバップ』に集まった賞金稼ぎの連中は、自由に、好きなようにプレイし、（中略）スタイルを打ち破り、新しいドラマと、新しい映像を作るだろう」と、渡辺監督は本作の企画書で語っている。さまざまな音楽、さまざまな世界観、さまざまな才能をごった煮状態にしてぶつけ合うという試みは、新しいジャンルを生み出すために、意図的に選択されたものだったというわけだ。

そうした戦略の影には、もちろん、飛び入り演奏自由のミントンズに集ったジャズ・メンたちのセッションがビバップ革命に結実したことに対する、渡辺監督のオマージュもある。ミントンズのジャム・セッションとは、「ジャンルの中で新しい曲を作ったのではなくジャンルそのものを作ってしまった」（企画書）ものであると彼は認識しており、その方式をアニメで試みようとしたもの、それが「ビバップ」なのである。

そうした体制の自由さは、作画にも顕著に表れている。「ビバップ」で初めてテレビシリーズの作画監督を務めた川元利浩氏は、渡辺監督も演出として参加した「機動戦士ガンダム0083・STARDUST MEMORY」や、飯田馬之介監督の「おいら宇宙の探坑夫」など、今まで主にビデオ作品で作画監督を務めてきたが、制作期間に比較的余裕のあるビデオでは、どうしても緻密で描き込んだ作画が主流となり、動きを含めて全ての作業の複雑さがエスカレートしたという反省から、「ビバップ」では、「ルパン三世」などに倣い、キャラクターやメカニックの線を減らし出来る限りラフにして、動きに適した絵に仕上げていった。結果、出来上がった映像は最近のアニメには珍しく動きのダイナミズムに溢れているが、こうした絵柄は、緻密に描き込まれた画がもてはやされる昨今のリアルなアニメに一石を投じているようだ。

また、CGの多用も「ビバップ」の特色の一つである。サンライズは、96年の「勇者王ガオガイガー」あたりから、デジタル処理や2D・3Dワークスを多用するようになったが、「ビバップ」では、従来のセル・アニメとは違う質感を出すために、出来る限り多くの画面でCGを使い、かつセルとの合成も頻繁に行ったのだという。「制作期間と本数の多いテレビアニメだからこそ、色々な実験が出来るんです」と渡辺監督は語る。つまり、テレビアニメならもし失敗しても、シリーズの流れのなかで何度でもやり直しがきくし、成功すればまた新しい実験に挑むことも出来るという考え方が根底にあるわけだが、こうした意欲的な姿勢も、テレビアニメのあり方に重要なメッセージを投げかけている。

実験的手法へのおそれ？

ところで、このように、新しいアニメ、新しいジャンルを作ろうと作り手たちが模索する背景には、どのような状況があるのだろうか。

渡辺監督は、「風の谷のナウシカ」や「うる星やつら2／ビューティフル・ドリーマー」などが次々と公開され、アニメの新しい可能性が提示された80年代の前半に、この世界に入った。もともとは「タクシー・ドライバー」や「ゴッドファーザー」に興奮するような映画少年で、映画監督希望だったが、「実写よりもアニメのほうが早く演出につけるということだったし、

原画より

「カウボーイビバップ」©サンライズ　12月18日からバンダイビジュアルよりLD、DVD、VIDEOが順次発売

Digitized by Google

当時のアニメ・ブームは、色々なことが出来そうな熱気を持っていた」という理由で、アニメ業界を選択したのだという。

ところが、いざアニメ業界に入ってみると、そこはむしろ頑なに既成のジャンルを堅守しようとする空気が濃厚であり、外で騒がれているアニメ・ブームとの間には、あまりのギャップがあった。また、需要に供給を追いつかせるために、どうしても作業が簡略化され、事務的になってしまうことにも疑問を感じるようになる。「例えば、絵コンテを書くときに、パンのところでは矢印を一本引くだけ。そういうのもおかしいと思った。だから、背後にどんな風景があり、人物がどんな動きをしているかを細かく書き込んだんですが、そしたら、これだけの動きを作るのにどれだけ作画枚数が必要だと思っているんだと、アニメーターに怒られてしまった」こともあったという。従って、そうした長年の疑問とフラストレーションをぶつけた作品が、渡辺監督にとっては初の監督作品となる、この「ビバップ」ということになるのだろう。

この作品の直接の制作母体となったのは、サンライズの第2スタジオである。このスタジオは、先述したようにサンライズという老舗の中にあって、比較的フリーのクリエイターと若手スタッフが多く、そのせいもあって、同社のカラーにこだわらず、自由で実験的な作品を作ることで知られているが、「ビバップ」では、渡辺監督の希望に応えて、ベテランと新進気鋭のスタッフを混成して、まったく従来のジャンルにこだわらない作品作りを目指すことになった。

しかし、新しい方向性を模索しようとするこのアニメに対して、テレビ局の対応は極めて弱腰だったようだ。

「ビバップ」は、今年の4月からテレビ東京系で夕方6時台に、半年間の放映が予定されていた。アニメの放映枠が激増した現在ならば深夜アニメとしても放映できる作品だったが、それを避けたのは、「ちょっと背伸びをして大人の世界を見るワクワクする感覚を、子供の時間帯に復活させて、あらゆる年齢層が楽しめるようにしたい」という制作サイドの要望があったからだった。だが、サンライズ側プロデューサーの南雅彦氏によれば、昨年12月に発生したポケモン事件以後、局から内容に対して様々なクレームがつき、今年の2月に入ると、2クールのうち半分は放映不可という結論に達したのだという。

川元利浩総作画監督

渡辺信一郎監督

南雅彦PD

「最初はそれでも、何とか完全放映する形で努力していたのですが、局側の注文はだんだんエスカレートしていって、ナイフが出ているからダメ、血が流れているからダメ、という具合にチェックが入り、最後には作品や演出の意図そのものにも関わるような事態になったんです。で、そのシーンを削除すれば、今度は作品の出来を損なう恐れが出てくるので、それでは放映する意味がない。で、結局何とか1クール分だけOKをもらってやっと放映に漕ぎ着けた」と南プロデューサーは語る。

しかし、流血や暴力シーンということならば、同時期に同局で放映された「サイレントメビウス」や「ロスト・ユニバース」にも同様のシーンがある。奇形生物に変身した人間が、警官や流れ者に殺戮されるような内容を持つこの両作品は、暴力性ということに限って言えば「ビバップ」に遙かに勝る。テレビ東京側は『ビバップ』には、殺人や暴力、麻薬など、家族が揃ってテレビを観る夕方6時という時間帯には、明らかに相応しくない内容を持っていた」という見解を示しているが、一方では暴力満載の刺激的なアニメが何のお咎めもなしに野放し状態になっている事実を考えると、「ビバップ」の受難は、単に暴力や刺激といった理由に止まらないのではないかと思えてくる。

フリッカという、アニメ製作者にとってはとうの昔に定着していた技法が、実はとんでもない危険性を孕んでいたことを実証してみせた昨年12月の「ポケモン事件」以後、急に「ビバップ」のみが槍玉に上げられたというのは、暴力や犯罪描写などによるものではなく、実は、単に若手スタッフによる実験的手法満載のアニメということを恐れたのではないだろうか。

『月刊ニュータイプ』98年7月号には、テレビ東京映画部・岩田圭介副部長のコメントが掲載されている。この記事は、「アニメ番組の映像効果に関する製作ガイドライン」が成立したことを受けて岩田氏にインタビューしたものであり、直接「ビバップ」とは関係ないものの、氏は、クリエイターがどんどん新しい映像表現を編み出してくることに、ガイドラインが対処しきれないのではないかという不安を露にしており、それは、「ビバップ」にたいしてテレビ東京が見せた不可解な対応にも相通じるところがあるようだ。

「いちばん怖いのは、ガイドができたときに『じゃあ、それさえしなきゃ何をやってもいいのね』っていうことになったとき。でも、実際にはそうじゃなくて、いま、たまたまこれ（ガイド）があるだけで、本当はどうなのかということをちゃんと認識して研究していかないとダメなん

Digitized by Google

です」と岩田氏は、同誌で語る。だか、それを警戒することは、必然的に映像表現の抑制を求めることに繋がる。もっとも、現在は制作サイドにもこのガイドラインに対応するスキルが蓄積され、ポケモン事件直後のような暗中模索の状態はとりあえず回避されているが、まだガイドラインも成立しておらずポケモン事件の真相さえ定かでない時期に放映準備段階にあった「ビバップ」が、極度に神経質になったテレビ局からどのような扱いを受けたかは想像に難くないだろう。

結局、新しい映像表現を模索したこのアニメは、その意志こそが問題とされ、不本意なカットを受けることとなった。同様の事態が今度を発生するかどうかはわからないが、テレビ局がアニメに対して守勢に回りつつあることだけは確かだ。

テレビアニメのあり方を問う

そのような中で、今年の4月から自社製作アニメの放映に踏み切ったWOWOWが「ビバップ」の全話放映を決定したことは、現在の消極的なテレビアニメ状況に、僅かながら風穴を開けたようだ。

アニメ・ブームを受ける形で、WOWOWでは、今年の1月に「新世紀エヴァンゲリオン／DEATH（TRUE）&REBIRTH」を放映、4月からは自社作品として富野由悠季監督の新作「ブレンパワード」のスクランブル放映に踏み切り、一方、放映枠を他社に売る形のノン・スクランブル枠では、3本のアニメを一時間枠で放映する「アニメスクランブル」を月曜の夕方7時台に、「熱砂の覇王ガンダーラ」を金曜の深夜0時にそれぞれスタートさせるなど、今年に入ってアニメに力を入れるようになっている。

「誰もが視聴可能な地上波と違って、特定の加入者を対象とするWOWOWの場合、関連商品販売など周辺展開はやりにくいが、その分、作品本位の宣伝に力を注ぐことが出来る」と、WOWOWのアニメ路線を積極的に推し進める海部正樹映画部長は語る。「ビバップ」の放映にあたっては、地上波で放映された作品をWOWOWで再放送する形となるのではないかという反対の声も社内では上がったが、海部氏は「地上波で完全放送できなかった作品をWOWOWで放映することにこそ意義がある」として放映に踏み切った。

『ビバップ』は、本当は『ブレンパワード』と同じ頃に企画が提出されたんです。しかし、WOWOWとしては最初の自社アニメという点から、監督のネームバリューや話題性などを考慮して『ブレン』に決定しました。その後の『ビバップ』の扱いを考えると、ウチでやらなかったことは残念ですが、完全放映ということで、WOWOWでやる『ビバップ』こそ本放映であるという意気込みでいます」と海部氏は言う。テレビ東京では問題視された表現面での問題についても、海部氏は「WOWOWも民放連の一員なので放送コードに従わなければならないのですが、このコードというのは本来理念を謳っているものであり、それをどう運用するかということは各局の認識に任されています。WOWOWのコード解釈は決して緩やかなものではありませんが、それでも『ビバップ』には何の問題もありません。むしろ優良な作品であると言えます」と太鼓判を押す。

ただ、自社作品に出来なかったことと深夜枠（金曜深夜1時）しか空いていなかったことに悔いが残るというが、話題作の完全放映はWOWOWにとってプレミアになると自信満々だ。

アニメ表現の新しい可能性を模索した作品の、本来歓迎されるべきその新しさが規制をうけるという事態は、テレビアニメを革新することが如何に困難であるかという現状を如実に語っているが、その一方では、それを引き受けることによって、テレビ放送のあり方をラディカルに問い直す局が登場する。「カウボーイ・ビバップ」は、あらゆる意味で、今後のテレビアニメ、テレビ番組のあり方を問う試金石となるだろう。

男性が読んでも面白い！
カルチャー情報満載で女性のオフタイムを応援する!!
Pause
月刊パウゼ1月号
11月21日発売
定価 400円（税込み）
時集
DIVA（歌姫）伝説
CINEMA
イン&アウト
作品論／F・オズ　論／他
インタビュー
「6デイズ/7ナイツ」ハリソン・フォード
「アルマゲドン」リブ・タイラー
短期特別連載
小林千絵の"もっと映画を見ようよ！"
第9回ゲスト　役所広司
話題作を試写で先取り
"Pause CINE CLUB"
Vol.74「スモール・ソルジャーズ」
Vol.75「精霊の島」
Vol.76「のど自慢」
Vol.77「メリーに首ったけ」
Vol.78「レ・ミゼラブル」
©1998 TWENTIETH CENTURY FOX.
詳細は本誌をご覧ください
試写会ご優待など特典がいっぱいの
"Pauseクラブ会員"募集中!
（入会金・年会費などいっさい無料）
全国有名書店・一部コンビニエンスストアで
毎月23日発売
〒153-0043 東京都目黒区東山2-6-4 東京学参ビル2F
東京学参株式会社
☎03-3794-3151（編集）03-3794-3159（販売）

Digitized by Google

『「映画ファン」スタアの時代』

渡部保子・著／筑波書房・刊／本体1800円

映画評論家・渡部保子姐の力作『映画ファン・スタアの時代』を二日がかりで読み了えた。肩の凝らない映画芸能読み物の割には、えらく時間を費やしてしまったが、これは別に著者のせいではなく、読み手の私が途中で何度も本を閉じては他愛ない物想いにふけってしまったからである。のっけから私事で甚だ恐縮の至りだが、私は一九五〇年代の後半に東映に入社し、まもなく東京大泉の撮影所に転勤して、映画の宣伝マンを五年ほど経験したことがある。つまりかつてスタアのメッカとも言われた撮影所で働きながら、そのスタアさんと多少の接触を持ったことがあるので、文字通りスタアを語るこの本の一章一章に、ついつい自分の感慨を重ねてしまったのである。

前置きが長くなった。目次を追おう。

巻頭は、〝日本映画全盛期を飾った四大スタア〟と題して、中村錦之助（のちに萬屋錦之介）、美空ひばり、石原裕次郎、大川橋蔵との関わり合い、交流ぶりが、当時の日本映画の華やいだ雰囲気と共に、屈託なく語られて、懐かしさを誘う。スタア四人のそれぞれの人となりも過不足なく描かれている。

次なる章は、〝会津の田舎町から銀座の世界映画社へ〟というタイトルで、〝わたしと映画――会津に生まれた少女が映画の道にすすむまで〟が語られ、次いで〝「映画ファン」記者時代〟〝世界映画社の歴史〟、そして〝昭和二十八年〟から同〝三十四年〟の休刊までの雑誌「映画ファン」の全容へと筆が進められる。表紙やグラビアを飾るスタアの選定、特集企画記事のテーマ選び、スタアとファンの交流ページ等々、その撮影・取材エピソードの数々が、几帳面に綴られ、まことに微笑ましい限り。今から思えば、あの時代、本当に大らかだったのである。

最後の章と、〝映画人生でめぐり逢ったすばらしき人々〟。著者がこよなく敬愛する淀川長治先生をはじめ雑誌関係の諸先輩たちに触れ、お世話になった感謝の言葉が暖かい。加えて鶴田浩二、渥美清、勝新太郎、中村玉緒、江原慎二郎、中原ひとみ、池部良、司葉子、高倉健、山田真二、津川雅彦らスタアさんたちとの、それぞれの仕事、あるいは私的なおつき合いの様ざま。これこそスタアさんたちとジカに接し、マジな交流を重ねた人でなければ書けないエピソードの数々である。

それにしてもあの時代、なんと多くのスタアたちがワンサカ居たことだろう！　映画全盛期の一端が自ずと偲ばれる一冊。

関根忠郎

『イデオンという伝説』

中島紳介・斎藤良一・永島収・著／太田出版・刊／本体1900円

個性を出したいね、自分自身のオリジナルの言葉で話したいね。そんなクサいセリフを真面目ぶって吐いていた時期があった。だが、この『イデオンという伝説』を読むと、では、オリジナルとは一体何だという気持ちが湧き起こってくる。

「イデオン」というのは、正確には『伝説巨神イデオン』という、1980年の5月から10カ月にわたって放映されたテレビアニメだ。原作・監督は、その直前に『機動戦士ガンダム』を完成させてアニメ表現の可能性を広げた、富野喜幸（現・由悠季）である。

ところが、疑似家族的共同体の肯定という、極めて受容しやすいハッピー・エンドに終わった『ガンダム』から一転、『イデオン』は、おそらくテレビアニメとしては初めて、登場人物を含めた全人類が滅亡する暗いドラマを目指した。

本書を書いた中島紳介ほか2名の著者は、『イデオン』の当時からアニメ・ジャーナリズムやファン活動をしていた人たちだが、その彼らにしてみても、『ガンダム』から『イデオン』への変遷というのは意外だったらしく、この本は、その疑問をテーマにして、作品を内（関係者・監督インタビュー、作品分析）と外（アニメブームの検証）の二方向から突っ込んでいく。

そして、そこから見えてくるのは、旧来の制作体制を壊そうと、あえて過激で厳しい物語を模索する作者たちの姿勢だ。

テレビアニメの場合、スポンサーなど製作サイドは、内容は二の次、アニメはあくまでも玩具を売るための広告としてしか期待していない。そうした理解のなさは、『イデオン』の厳しい結末を拒否し、富野は結局この最終回の発表の場を、映画館に求めざるを得なくなる。

しかし、それでもなお、現場にいる作り手にとっては、作品の内容がすべてである。

富野由悠季の仕事とは、コマーシャリズムの中で、表現者としてどれだけ独自性を貫き通すことが出来るかという、常に矛盾し、緊張したものであったということが、この本の監督インタビューからは感じ取れて、その労力と暗中模索を目の前にする時、それは、作品を作ることの意味、それを仕事にすることの意味を暗に問い掛けてくる。

この本は、コマーシャリズムの歯車でしかないテレビアニメの作り手たちが、作家としての自己を獲得するまでの記録である。オリジナルを獲得するにも覚悟が要る。そう思うと、普段この言葉を安易に吐く自分が恥ずかしい。

水民玉蘭

Digitized by Google

⑱④『ドクター・モローの島』

H・G・ウェルズ著／能島武之・著／角川文庫

西脇英夫

映画より面白い

1895年、『タイムマシーン』でデビューしたウェルズは、翌年には本作品を発表し、さらに『透明人間』『宇宙戦争』と次々と傑作をものにしていった。つまり、初期の作品にもかかわらず、すでに旺盛な想像力と円熟した構成技術が結実していたのだ。

南米ペルー沖で帆船が遭難し、独り生き残った男は、通りがかった商船に救助され、乗船していた英国人と共に、とある孤島で降ろされる。その島では、モロー博士という有名な生理学者が獣を人間に変える実験を行っていて、英国人もそれを手伝っていた。男はその実験によって造られた奇怪な獣人たちと触れ合ううち、博士のおぞましい研究に恐怖し、憎悪する。やがて男と博士、さらに野獣との三つ巴の争いに発展、ついには男独りを残してそのほとんどが死んでしまうという悲惨な結末を迎える。

名付けようもない奇想天外な物語だが、このなかで、獣とはいえ、生体解剖で体の各部位や臓器を移植することにより、肉体だけでなく精神機能まで変わっていると述べられているのが興味深い。ただし、百年以上も前の医学をもとにして書かれているので、映画化にあたっては当然ながら、時代によってそれ相応の脚色がなされている。

まず、1932年に『獣人島』が作られたが、これは最初だけに獣人の実験については、原作をほとんどそのまま踏襲していたようだ。しかし、第二作の『ドクター・モローの島』（77／ドン・テイラー）では、脳髄から採取した液を蒸留して獣に注射することで、染色体を移植し、獣人に造り変えるといった解釈がなされている。さらに第三作の『D・N・A・』（96／ジョン・フランケンハイマー）では、獣に人間の遺伝子を融合させるというような説明がなされ、遺伝子注入された獣人の母胎から胎児を取り出すといった、不気味なシーンも挿入されている。

それにしても、第一作がチャールズ・ロートン、第二作がバート・ランカスター、第三作がマーロン・ブランドと、怪奇SF映画とはいえ、モロー博士にいずれも当時の大物俳優を起用しているのはさすがだ。なお、二作と三作で共通しているのが、女っけのない原作に、モローの娘として美女をひとり加えていること。ただし実はこれも後に、獣人に変わっていくという悲しいオチが用意されている。

また、原作では後半、獣人化した者たちが博士から離れて集団生活していくうち、次第にもとの獣に戻ってしまうという、原点帰りの描写に力点が置かれているが、映画化ではそれぞれ別の工夫がなされている。

第二作では、島を脱出しようとした主人公が獣人たちに捕らえられ、逆に人間を獣化する実験台にされかかるという、皮肉な挿話が付け加えられている。また、第三作では、博士が獣人によって殺された後、助手の英国人が代わって獣人を支配しようとして、結局これも殺されてしまい、最後に残った獣人たちが狂気乱舞するバイオレンス・アクションにパワー・アップされている。

ただし第三作では、人間と獣を隔てているものは何かという、原作における最大のテーマに対し、それなりの解釈がなされているのは取柄。なお、原作の最後の方で、またも独り生き残った主人公が、獣人と暮らすうち、次第に獣化していく自分に気付いて恐怖するというくだりがあるが、実はここが一番恐い。

新刊紹介

『映画館1』高瀬進・著／冬青社・刊／本体1500円

著者の高瀬進氏は、日本全国の映画館の写真を撮り続けているという人で、本書はその作品の中から、明治45年に建てられたという望月川西座に始まり、松本中劇シネサロン、新世界公楽座、飯田橋ギンレイホールなどなど、いずれも趣のある映画館の風景を収めた40ページほどのモノクロ写真集である。内屋敷保、大高宏雄氏らの寄稿、高瀬氏自身の文章が添えられている。ノスタルジックな感じがするのは文芸坐、並木座など今はなき（！）映画館の写真も収められているからであり、そういう意味でもささやかだが貴重な写真集だと思うが、一方では国名小劇、九条シネヌーヴォなど、名画座の役割も果たす新しいミニシアターの姿も。背表紙に「1」とあるからには是非2弾、3弾と続けてほしいものだ。

Digitized by Google

池田　敏

ワイドショーの存在意味

前号に続いて、米国でテレビを見まくって考えたことを。日本のＴＶを見ていて、筆者もいま一つ分からないのがワイドショーだ。

米国はどうなっているかというと、厳密には無いというか、話題が各専門番組に散っているというのが実情に近い。芸能ニュースなら『Entertainment Tonight』『Extra!』、ＣＮＮの『Showbiz Today』を見ればいいし、話題のゲストを招くトーク番組にはオプラ・ウィンフリー（日本では知名度が低いが億万長者でもある）が司会の番組がある。社会性の高い話題なら、ゴールデンタイムの『60 Minutes』（日本では『CBSドキュメント』として放送）だ。

そうして考えると“日本のワイドショーって本当に必要なのか？”と思う。実は黒澤明監督が亡くなった次の日、原稿を書く仕事で一日中家にいた私はＴＶをつけっぱなしでいたが、朝のワイドショーこそ情性でつきあったが、それにしても司会者・リポーター陣はデータや映画用語の間違いがひどい。しかも昼２時頃からの番組ともなると朝と同じネタの使い回しで、さすがに私はＴＶを消してしまった。

仮に米国のＴＶならどうするかを考えると、まずはそんなに急がずとも（急ぐことで情報の鮮度を保っても事実に誤りがあれば意味は無い）、各専門番組がそれぞれの切り口に合わせた、密度の濃い報道の仕方をするのではないかと思う。何より今回の日本のワイドショーのような取り上げ方（特にデータ類の間違い）は、故人に対して余りに失礼だ。

ではワイドショーが存在する意義は、弔問に現れた有名人のコメントを紹介することか。けどそれって急ぐ？　司会やリポーターがまともに映画用語を使えない（興収と配収が区別できないとか）なら、そんな番組はいらない。やめちまった方がいい。何でもかんでも米国のＴＶ界が良いとは言わないが、それにしても日本のワイドショーはひど過ぎる。もう少し映画を勉強しなよ、と思った次第である。

ＮＨＫ衛星第２『土曜映画劇場』は12／５、ラース・フォン・トリアー監督の話題作「奇跡の海」をＢＳ初放送。純粋だが過激な愛の世界を描いた問題作だけに、この時間帯でのオンエアは快挙である。同じく『ミッドナイト映画劇場』は11／22の深夜、大川橋蔵主演の時代劇を三本立てオンエア。長谷川安人監督「右京之介巡察記」、加藤泰監督「風の武士」、中島貞夫監督「旗本やくざ」と、いずれもビデオ未発売or廃盤なので貴重なチャンス。個人的な意見だがこうしたジャンルの作品、例えばエアチェックが苦手な私の父親など寝ないで見るしかなく、年寄りの夜ふかしが心配な家族としましては（苦笑）、深夜ではなく午前中あたりに放送していただきものです、ＮＨＫさん？　そのほか『夜更かしシネマ缶』では12／７・８・９の深夜、音楽映画の異色作をラインナップ。７日「アンナ・マグダレーナ・バッハの日記」（貴重作！）、８日「ワーグナーとコジマ」、９日「マーラー」と、映画ファンのみならず音楽ファンも楽しめる。

「アンナ・マグダレーナ・バッハの日記」

ＷＯＷＯＷは12／５、無料放送枠で黒沢清監督／役所広司・荻原聖人主演の問題作「CURE／キュア」をＢＳ初放送。鬼才・黒沢監督による会心のサイコ・スリラーだが、昨年12月公開ということで映画賞・ベストテンで大暴れするのはこれからだろう。健闘を祈りたい。筆者は絶対に「リング」よりこちらの方が圧倒的に怖い映画だと思う。あと、ＷＯＷＯＷの無料放送デー、５日の午後はオリジナルビデオの人気シリーズから「パチプロ浪花梁山泊６／起死回生の逆転劇」も登場。とにかくレギュラー・キャストのノリのよさが絶妙で、シリーズ物ならではの楽しさがある。こちらも筆者オススメなのだ。『シネマ・コレクション』枠（火曜）の12月は“カーク・ダグラス特集”。「悪人と美女」（１日。ビデオ未発売！）、「脱獄」（８日）、「危険な道」（15日）と、ダグラスの代表作とはいえないが粒の揃ったラインナップなので期待したい。

シネフィル・イマジカの貴重作デー『シネフィル・プレミア』の11／23と12／１は97年フランス作品「イエスの日常」。無教養で無職で、バイクの暴走やセックスに毎日が明け暮れる青年の姿を通じ、ブリュノ・デュモン監督が現代の若者の自由に迫った。11／30と12／８は95年イラン作品「サラーム・シネマ」。映画史百年を記念する映画のオーディションに集まってきた俳優たちを捉える、モフセン・マフマルバフ監督の異色ドキュメンタリー風作品。

Digitized by Google

豊崎岳彦

DRAMA&SPECIAL

恋愛ドラマに異変あり!?

去る11月上旬、西暦2000年の放映開始を予定しているBSディジタル衛星テレビの認定事業者が正式に決まったので、まずはご報告しておきたい。結果は、本稿でも再三お伝えしてきた通り、高精細放送（HDTV）には、在京の民放主要5局がそれぞれに作る新会社と「WOWOW」の計6社。現行テレビと同じ水準の標準放送には、お馴染みの映画放送「スター・チャンネル」が入った。民放各局のチャンネル名称は、日本テレビが「BS日本」、TBSは「ジャパン・デジタル・コミュニケーションズ」、フジテレビは「FNSスペース・スター」、テレビ朝日は「BS朝日」、テレビ東京は「BSジャパン」となっている（本稿執筆時それぞれ設立準備中で、仮称を含む）。ただし、それぞれ「仏作って……」の伝ではないが、肝心要の番組の方をどうするのかと言えば新会社のトップの発言が「地上波で人気のスポーツ番組の続きを完全中継したい」と、いういかにもなものでちょっぴり心許ない。既に開始まで2年ないというのに、またもお得意の見切り発車ですな!?

話は変わって、仙台のテレビ局・東日本放送（テレ朝系）が昨年、「あなたの恋愛体験をドラマにしませんか」と謳って多くの反響を呼んだ年末のドラマ特番『杜の都　恋物語～あの光の中の君～』。今年はその第2弾として、同局が再び体験談の公募キャンペーンを実施した。結果、海外始め全国26都道府県に住む15～88歳の計417人からの応募があったそうだが、これが現代の恋愛事情を如実に表していてなかなかに興味深い。同局が出した分析によると、女性が恋愛を主導するタイプのストーリーが計164編あったのに比べ、男性主導の方は120編に過ぎず、しかもいずれの場合も別れを決めるのは、ほとんどが女性とくる。内容的には、時代を反映して遠距離恋愛を扱ったものが64編、不倫ものが21編あるという。出会いのパターンは「会社やアルバイト先」がトップで、以下「知人を通じて」「声を掛けられて」の順となる。“あなたの恋愛体験”というだけにギクッとするほどリアルだが（ちなみに入選作は全員匿名です。当たり前か？）、なんか最近の人たちは安手のドラマ見すぎじゃない？　という気がしなくもない。いやしかし、いつまでも「いや～ん」とばかりは言ってない筋肉質の女性たちと、粗暴と繊細が霜降り肉になってる男性の姿はここでもはっきりしている。してみると、最近のフニャけた恋愛映画に出てくるモデル崩れみたいな優しい男子像は、婦女子にはリアルなんだな。けど、オッサン道を曝進する筆者には、あれらが自分と同族とはにわかに納得し難いものがあるのも事実。何はともあれ、優秀作10編を原案にした今年の『杜の都　恋物語』は12月23日に全国放映されます。詳細は http://www.khb-tv.co.jp/ を見てください。

最後に、最近目が離せないNHKドラマ館の『さよなら五つのカプチーノ』は、公共放送でこっそり強盗ものなどをやらかしていて笑った。深夜の再放送もパターン化してきたので、今後も楽しみ。

TVフィーチャー旬報1998年10月　下旬

◆生保レディ刑事
（10.16／フジ21:00～22:54）
監＝伊藤寿浩／脚＝羽原大介／出＝岡江久美子、野村昭子、光浦靖子、北村総一朗、つぶやきシロー、あき竹城

◆無人霊柩車、美人女将の死体を乗せて函館の夜を走る
（10.17／テレ朝21:00～22:51）
作＝小林久三／監＝山本迪夫／脚＝小林薫二／出＝神田正輝、高橋惠子、篠田三郎、柳川慶子、景山仁美

◆観察医薮野善次郎6　死体は知っている
（10.19／TBS21:00～22:54）
作＝上野正彦／監＝杉村六郎／脚＝大久保昌一良／出＝山城新伍、加賀まりこ、床島佳子、小松みゆき

◆身辺警護2
（10.20／日テレ21:03～22:54）
監＝山本厚／脚＝奥村俊雄／出＝勝野洋、とよた真帆、山本学、渡辺裕之、尾美としのり、島山明子、大林丈史＊「“マルタイの女”は5年前殺人容疑者の男を無罪にした敏腕弁護士」

◆年の差カップル刑事
（10.23／フジ21:00～22:52）
出＝高橋由美子、森本レオ、伊東四朗、柴田理恵＊「お父さんは許しません・23歳違いの婚書と大学教師…ガンコ親父の上京で隠れ同棲発覚!?華やかな菓子職人界を襲う童謡見立て殺人」

◆夢の途中
（10.24／NHK総合21:00～22:15）
監＝岡田理史／脚＝岡田惠和／出＝三上博史、有森也実、香川照之、松村邦洋、渡辺いっけい、清水ミチコ、渋谷琴乃、森本レオ、宇梶剛志

◆作家、小日向説介の推理日記
（10.24／テレ朝23:00～24:52）
監＝長谷部安春／脚＝石倉保志／出＝里見浩太朗、沢田亜矢子、野村真美、仲谷昇、秋本祐希、中野英雄、西田健、円谷浩、堂雪次朗

◆浅見光彦シリーズ11　蜃気楼
（10.26／TBS21:00～22:54）
作＝内田康夫／監＝山内宗信／脚＝石原武龍／出＝辰巳琢郎、加藤治子、村井国夫、小田茜、沢村一樹、杉山亜矢子、織本順吉、竹内都子、小宮孝泰、川原和久、大場泰正、井上彩名、湯浅実、有川博

◆同姓同名
（10.27／日テレ21:03～22:54）
作＝清水一行／監＝松島哲也／脚＝いずみ玲／出＝大島さと子、益岡徹、田中美奈子、中本賢、並樹史朗、田山涼成、尾形大作、穂積隆信＊「私の夫は被害者？加害者？同じ名前を持った二人の妻の同情と憎悪」

◆七曲署捜査一係'98
（10.30／日テレ21:03～22:54）
監＝村田忍／脚＝柏原寛司／出＝舘ひろし、吉田栄作、天海祐希、多岐川裕美、小西博之、中村繁之、浜田学、斎藤晴彦、池田政典＊「ついにボスが殉職か？“太陽にほえろ！”復活第2弾」

◆さよなら五つのカプチーノ
（10.31／NHK総合21:00～22:15）
監＝吉川邦夫／脚＝鈴木聡／出＝宮本信子、伊武雅刀、稲垣吾郎、鈴木砂羽、金田竜之介、大杉漣、中野竜雄、中島陽典、大島蓉子

◆法医学教室の事件ファイル　死体が、自殺する!?
（10.31／テレ朝21:00～22:51）
監＝山本邦彦／脚＝今井詔二／出＝名取裕子、宅麻伸、西村和彦、結城しのぶ、五十嵐めぐみ、水木薫、及川似造、沖直未＊「女医が目撃した不倫OL飛び降り心中の謎！おもちゃの人形にヒントが」

Digitized by Google

杉原賢彦

NEW MEDIA

新・映像の設計

すでに報じられていることではあるが、シーグラム社傘下となっていたポリグラム・フィルムド・エンタテインメント（PFE）社のライブラリは、2億5000万ドルでMGM社が買い取った。最終的に、またもカーク・カーコリアンが目当てのものを手にしたわけであるが、この買収劇において、意外な人物が暗躍していた。意外な人物とは、世界最大のコンピュータ関連会社マイクロソフト社の元副会長、ポール・アレン（世界で第3位の富豪と、米『フォーチュン』誌は形容している）だ。

現在、彼は投資家としてさまざまな方面に手を伸ばしているのだが、そのなかでも目立っているのが、テレビネットワークをはじめとする、通信、放送分野への出資だ。おもしろいのは、そうした分野へ出資を続けてきたアレンが、なぜ映画のライブラリ購入に動いていたかということだ。

おもしろいといえば、先日、NTTのヴィデオフォン（要するにテレビ電話）・システム「フェニックス」を使った、臨床麻酔学会のワークショップ中継実験を見学してきた。テレビCMなどでも紹介されているこの「フェニックス」だが、ISDN回線を使用して、毎秒15フレーム（テレビは30フレーム／秒、映画はもちろん24フレーム／秒）の映像を送りだすことによって、臨場感あふれる動画を作り出すことができる。その映像の質は、おせじにも優れているというべきものではないのだが、意外にスムースな動画再生など、インターネット上での動画再生を見慣れた目には、驚くべきものとして映る（関西、京阪奈地区で行われてきたマルチメディア実験時と比べても、格段の進化が見られるのだ）。実用上ほとんど遜色のないものだった。

むしろこれからの問題点となるのは、ヴィデオフォン（あるいはテレビ会議システム）に合わせた、映像の設計となるであることを予感させている。

だが、ヴィデオ会議時代は、確実に始まっている。実際に公開実験で使われたのは、電話器に小型モニタを加えたセットだったが、それを応用し手持ちのテレビモニタと接続して、リモコン操作により双方向的に映像を見ることができるシステムも、すでに開発されているのだ（「フェニックス　ワイド」と、NTTでは呼んでいる）。双方向というだけでなく、最大1000カ所までの地点を結んでの、テレビ会議システムを構築することができるのが、このシステムのウリとなっている。しかもすでに、ISDN 3回線分を束ね、毎秒30フレーム、映像も現行のテレビ放送並の品質を確保した高速システムも開発されているという（ただし、このシステムの接続は、現在のところ最大で16カ所となってしまうが）。

フェニックス　ワイドの本体

ヴィデオフォン（テレビ電話）が目指すところは、ただし、こうした単純なテレビ会議システムではない。もうお気づきのように、現状のセットですら、有線による簡易放送システムが、組めてしまえるのだ。現在、ハリウッドの最大のライヴァルと目されているのが、放送ではなく、電話会社であるとされる理由が、見えてくるだろう。

先ごろ、アメリカ最大（つまりは世界最大）の電話会社AT&Tが、CATVの最大手、テレ・コミュニケーションズ社との提携を発表したのは、なにも偶然の産物ではない。通信が放送と同等となることを見越してものといえるだろう。現在すでにインターネットが電話線なくして考えられないように、コンピュータ通信網を使っての、日常生活情報サーヴィス、エンタテインメント・サーヴィスが、電話線によって提供される可能性が、十分に高くなってきているのである。

ポール・アレンの動きは、この流れを読んでのものといえる。『フォーチュン』誌は、昨年4月の記事でアレンを、「投資家の殿堂入りするような人物ではないが、先読みできないほど鈍いわけでもない」と評言しているが、PFE社のライブラリ買収の動きを見ている限り、すでにハリウッドの潮流は、カーコリアン的な時代を過ぎ去ろうとしていることを感じざるを得ない。

11月1日より開始された、全米での地上波ディジタル放送は、PBS（パブリック・ブロードキャスティング・サーヴィス）とインテル社（もちろん、世界最大の中央演算回路製造会社）との提携という、意外な産物を生み出している。エンタテインメント、放送、そして通信（電話）の融／競合へと、映像の設計の変化を感じないわけにはいかない。

Digitized by Google

TVワンダーランドの怪人たち

視聴率戦争の舞台裏で

武市憲二

㊻警告！テレビ最前線現場に異常あり

東京オリンピックが開催され、王貞治がホームラン55本の新記録を作り、名馬シンザンが3冠馬になった昭和39年に誕生したテレビ東京が開局35年を迎える。開局記念ドラマ『明日ある道』の助監督として参加した僕は、監督と一緒に東京タワー下にあった東京12チャンネル（現在のテレビ東京）へ見学に行った。当時のドラマは16ミリフィルムで撮影し、テレシネという機械にかけて電波に変換して放送していたのだ。むろんモノクロ画面で、精度が良くないから白色はハレーションをおこしたように見づらくなる。そこで、技術上の打ち合わせを兼ねて訪問したのだ。

初めて見るテレビジョンの世界。それは僕にとって強烈なカルチャーショックであり、同時に運命の出会いであった。

「これからはテレビが主役になる時代がやってくるぞ！」その日の夜、当時貧乏だった僕にメシを奢ることを生きがいにしていたガールフレンドの前で熱っぽくしゃべったのを覚えている。頭が良いくせに何故か僕の前では理屈一つ言わず、聞き役に徹してくれていたそのガールフレンドとどうして疎遠になったのかは忘れてしまったが、自分がしゃべった内容だけはよく覚えている。新もの好きということもあったかもしれないが、僕の本能的触覚が、テレビジョンの明るい未来を捉えていたのだ。その年巷では、♪幸せなら手をたたこう♪がヒットし、みゆき族が銀座を徘徊していた。今、渋い中年役者となった藤竜也がデビュウしたばかりで、彼が運転するオープンカーに乗せてもらい、これまた新人女優だった吉永小百合に給仕してもらった日活食堂の定食を食っていた時代のことである。

テレビ東京の歴史と僕のテレビ人としての歴史は同じだ。全身からオーラを発散させて、恐いもの知らずで過ごした20代から30代。そして脂の乗り切った40代半ばまで、僕は自分の「内なる怪人」を信じ、突っ走って来た。

業界の各分野に怪人がいた。「武いっちゃん、ここの編集は甘いね！」録音ミキサーのNさんは僕を叱ってくれた。そして、僕のコンテより良い映像を撮って、無言のプレッシャーをかけてくれたカメラマンのYさん。その他多数の職人怪人がいて、自社他社を問わず、若い人間を育ててくれたのだ。皆、鬼籍の人になってしまった。テレビ局には当時の生き残り組がいるが、仕事の場を取り上げられ、残り少ないテレビ人としての余生を送っている。いや、数少ない現役怪人がテレビ東京にいる。テレビ東京の常務から子会社「プロテックス」の社長になったKさんだ。Kさんが映画部長だった頃に、忘れられない出来事があった。

三木のり平さんを起用して映画番組の前枠を撮っていたスタジオに顔を出したK部長は、僕の中途半端な演出に怒り、自らスーツを脱ぎワイシャツの袖を捲って演出をはじめたのだ。前代未聞の出来事だった。スタッフが困惑の目線で僕の顔色を伺っていた。その目線を意識しながら僕はKさんの演出ぶりを見つめていた。怒りはこれっぽっちも抱かなかった。それよりもKさんの怪人ぶりに感心していたのだ。演出の内容に大きな違いはない。だが、決定的な違いがあった。喜劇界の大御所・のり平師匠をも従わせる迫力である。

「役者に現場を仕切らせてはいけない。仕切るのは演出家なのだ」。怪人Kさんの信念である。仕切るためにはそれなりの確信に満ちた準備がいる。撮影現場は真剣勝負の場なのだ。そのことを教えてくれたKさんと今、新しい企画を話し合っている。「旅」と「食い物」と「鑑定団」を凌ぐ画期的な企画である。近々実現の見通しが立ったらその企画の顛末をリポートする。

今、テレビ制作の最前線に異常が起こっている。テレビを玩具にしているとしか思いようのない経営者が支配する局や、管理体制強化がもたらしたサラリーマン化の進んだ局の最前線現場は悲惨だ。内容は問わず、視聴率の高い番組が良い番組とされる世界は異常だ。企画を多数決で決めることによって、誰も責任をとらない編成局を持つ局の現場は、203高地の戦いに等しい。戦ったことのない指揮官に命令される兵士は惨めだ。権力志向の強い経営者は、無能な部下を側近にする。だが、サラリーマン化した兵士達は、誰も「あっ、王様は裸だ！」とは言わない。世紀末ゆえの異常なら幸いなのだが……。

視聴の王様は誰だ！

Digitized by Google

DISC REVIEW

サントラ・ハウス

賀来 卓人

サ・クリート

♬ジェリー・ゴールドスミス
◎ポリグラム
10月1日発売／定価2548円
PHCF-3508

いよいよ齢70の入り口も見え始め、巨匠の呼び声も違和感なく映ってきているゴールドスミスであるが、その現在は依然として駆け出しの60年代さながらの勢いである。古今の同年輩の作曲家なら裸足で逃げ出すような作品に真っ向からぶつかっている姿を見るにつけ、失笑にも近いほほ笑ましさと頼もしさを覚えるのは、一握りのマニアだけではなかろう。

というわけでゴールドスミス、海洋モンスター映画への登板である。監督のスティーヴン・ソマーズとは事実上、初顔合わせとなるが、実は同監督の前作「ジャングル・ブック」の当初の音楽担当者といえば、ゴールドスミスその人であった。思いを果たせなかったソマーズからの猛烈なプッシュがあったゆえの結果と容易に想像がつくところだが、それでも引き受けてしまうベテランの寛容さ、懐の広さに、まず涙がにじむところだ。

冷ややかな海洋イメージに重低音のトロンボーン、戦慄を呼ぶ弦の響きが重なるオープニングから引き込まれる。暗く陰鬱とした恐怖演出が随所にちりばめられ、そういった部分における重々しい金管部、弦部は明快な旋律を示すものではない。しかるに全編を通して音楽の弛緩を許されざる状況に義務づけているのは、やはり作曲者ならではのリズミックな躍動感が貫かれている所以だろう。結局のところ、ホラーというよりもアクション味豊かな対決の構造をとっている作品にあって、そういった音楽面の律動感は強く要求される側面であった。その中心的な役割を担ったのが、シンセサイザーを多用した厚いパーカッション部の設定である。時にショック演出の手段ともなるそれらの、あまりといえばあまりの弾み具合、あるいは金管と重なる際の怒濤のダイナミズムをどう例えようか。ある瞬間においては思わずプッと吹き出しかねないほどの爆裂的な音のうねりであり、その果てに浮かび上がってくるヒロイックな高揚感には圧倒されるばかりだ。

いうなれば、70年代の活劇音楽に80年代の電子音楽エキスをまぶした仕上がり、となろうか。粗暴というよりは、どこか「踊らにゃ損々」となっている音の開き直りは、そんなかつてのベテランの姿を思い出させる。しかし、それは退行を意味するものではない。最前線を行く現役選手としての勢いが変わらず存在していることの証左だろう。腑に落ちない作品の選択も、つまるところ、そういう作曲者の精神の表れにほかなるまい。ソマーズとは「ミイラ再生」のリメイクも待機中なのである。円熟は、ない。必聴。

サ・クリート

♬バークハード・ダルウィッツ、フィリップ・グラス
◎BMGジャパン
9月25日発売／定価2548円
BVCM-31008

ピーター・ウィアーらしい皮肉の効いたコメディは、同時にウィアーらしい音楽の盛り付けが楽しめる一本となった。

全体のドラマ音楽にバークハード・ダルウィッツ、トゥルーマンをめぐるTV中継音楽にフィリップ・グラスを配したそれらが、一様に電子音楽に統一されている点がまず興味深い。その昔、モーリス・ジャールに電子音楽を作るよう強く説得した背景を思えば、ウィアーの電子音楽好きは念が入っている。役割分担こそ違えど、ダルウィッツとグラスの音楽性は非常に近く、いずれも透明感に満ちた仕上がりだ。ダルウィッツの楽曲が少々パーカッシヴに仕上がっている辺りに同作曲家の個性が見えなくもないか。

しかし最も驚くべきは、劇中の節々にグラスの過去の映像音楽がちりばめられていることだろう。主人公の新たな人生の夜明けに「MISHIMA」が流れるとはだれが予想したか。好きな音楽を使うためなら映画の垣根すらないのか。ウィアーの発想こそ予想がつかない。

Digitized by Google

勝新太郎コレクション

「勝新太郎コレクション」
♬鏑木創、斎藤一郎、冨田勲ほか
◎キングレコード
9月4日発売／定価3800円
KICA-3028～3029

キングレコード発〈カツライスの音楽世界〉は、「サウンドトラック・ルネッサンス・シリーズ」のサブ・タイトルに紛うことなく、実に深みのあるラインアップを築きあげた。中でも、大映京都の看板スター二人の名を冠にし、彼らの代表作の音源を一気に集めた2枚組アルバムは、ヴォリュームもセレクションも半端なシロモノではない。

まず、カツこと勝新太郎の作品集には、既に単独の作品集としての発売済みの「座頭市」シリーズを除く23作品が収録されている。「座頭市」と並ぶ勝の代表的シリーズ「悪名」「兵隊やくざ」を一枚目に、そのほかの主演作14本の楽曲を2枚目に収めている。「悪名」「兵隊やくざ」がまとめて聴ける面白さもさることながら、勝版「ブラック・ジャック」とも一部で形容される「酔いどれ」シリーズ3作品の音楽が並んでいる辺りがファンにはうれしいところか。大映の音素材の保管状態にも感心する。もっとも、一番の興味は、それらの楽曲がいずれも勝新太郎という名物男の個性を裏打ちするかのような豪放さに満ちている点だろう。勝のキャラクターそのものが映画であり、それを彩る音楽だった。その意味では、「駿河遊侠傳・破れ鉄火」における伊福部昭の音楽が、後の「ゴジラVSメカゴジラ」の主題曲に酷似しているのは象徴的やもしれない。勝の放つエネルギーは、もはや怪物的ですらあったのだ。

俳優の個性が音楽に映しだされるという点では、ライス＝市川雷蔵の主演作品においても同じことがいえるだろう。勝に比べ女性人気が高かった不世出の美男子を取り巻く楽曲は、鋭く豪快な金管の響きに満ちようとも、節々に弦の優しくも繊細な香りが混じる。2枚組のディスクには、27作品の音楽を収録。塚原哲夫、伊福部昭、斎藤一郎、林光、渡辺岳夫らの仕事が眺望できるが、個人的には鏑木創の「剣鬼」、黛敏郎の「炎上」、芥川也寸志の「破戒」を面白く聴く。わけても「炎上」には、後の《涅槃交響楽》にも通じる黛節が見えて、実に興味深い。

市川雷蔵コレクション

「市川雷蔵コレクション」
♬鏑木創、塚原哲夫、伊福部昭ほか
◎キングレコード
9月4日発売／定価3800円
KICA-3030～3031

カンゾー先生

♬山下洋輔
◎ポリドール
8月1日発売／定価3000円
POCJ-1416

坂口安吾の『肝臓先生』を映画化した今村昌平の念願の企画。今村といえば、近年では池辺晋一郎との共同作業が麗しいが、ここではジャズ・ピアニストの山下洋輔を音楽担当に招いた。他薦の末の決定とはいえ、実は今村は山下のエッセイの愛読者。その意味ではどこか必然的にも映る両者の顔合わせではある。

主人公の「走り」に動機を見いだした音楽のリズミックな躍動感がまず魅力的だ。明朗な律動感とも例えられようか。ピアノ、ドラムス、サックスが開業医の韋駄天走りに合わせて跳ねる跳ねる。決して後ろ向きにならないそんな主題の設定が、作品に健康的な生命力、温もりを与えることに成功している。アーバンな山下ジャズは、かつて岡本喜八の「ジャズ大名」にその独特の勢いを露にしていたが、戦中日本の「重喜劇」においても威力を失わなかった。人間臭い物語に対してムーディな香りが強いとの声も聞くが、最近にない今村作品の新味としてここは前向きに受け止めるべきだろう。

がんばっていきまっしょい

♬リーチェ、竹田元
◎東芝EMI
9月23日発売／定価2548円
VJCP-25421

ボートレースに青春を懸けた少女たちが一心不乱にオールを漕ぐ。きらめく波光、流れ落ちる汗の滴。ドラマの要所要所を締めるリーチェの伸びやかで透明感をたたえたヴォーカルは、そんな登場人物たちへの応援歌であり、思春期の純粋の代弁者であった。

主題歌《オギョディオラ》はリーチェのかねてよりの持ち歌であるが、磯村監督の熱意も手伝って、映画用のアレンジで新しく生まれ変わった。その点では単なる既成曲の流用ではなく、作品の性質をにじませた一種のオリジナル曲であろう。映画の随所を飾る楽曲に、さらなるその昇華がうかがえるはずだ。基本的には歌曲のバリエーションに過ぎないのだが、ヴォーカル・ナンバーの世界観を打ち込み中心による簡潔にして繊細な雰囲気の中に落ち着かせている。既成曲を映画に取り込む際の理想的な形として、見逃せない仕事だろう。少女たちの輝きと歌手リーチェの麗しさが同等に生きているのは決して相性の問題ではない。

Digitized by Google

VIDEO, LD&DVD GARDEN

マニアを唸らす究極のビザール

「盲獣」「黒蜥蜴」初LD化

磯田勉

BSやCSの普及により、名画座や特集上映でも滅多にお目にかかれない旧作の名作や珍品が頻繁に放映されるようになったことは喜ばしいと思う。ただし、某局のようにエアチェックをさせまいとするかのような姑息な努力（？）を重ねたり、プリントのコンディションに問題があったりと、衛星放送といえど必ずしも最良のコンディションでお目当ての作品を視聴者に届けてくれるわけではない。

しかも、まだ若いメディアであるがゆえの混乱だろうが、ソフトに対する送り手側の来し方（アティチュード）の面で疑問を感じることは少なくない。たとえば、現在流布している局発行の番組表や一般の番組ガイド誌における映画（とりわけ旧作）の扱いはどうだろう。題名さえ列挙すれば事足れりといった態度は不親切極まりないし、第一、ソフトに対する知識の貧困さはなんとも歯がゆい。こうした事例もメディアの成熟とともに徐々に改善されていくと思うが……（そうなることを期待したい）。

こうした放送メディアで気軽に触れるのもよいが、お気に入りの作品の場合、パッケージソフトとして所有する愉しみがある。BSやCSでは望みえない最良の高画質でお気に入りの作品を眺めるときの喜びは何物にも替えがたい、映画マニアの至福のひと時だろう。DVDはその利点ばかりが喧伝されているが、少々経済優先の原則が露骨すぎて、こうした愛好家たちのニーズにまで応えてくれるのかどうか。特に邦画のマニアックな旧作の場合、様々な問題が山積みして当分は期待できそうもない。やはり、真にユーザーのことを念頭に置いているのはレーザーディスクというメディアということになろう。作り手の愛情が伝わってくるソフトに接したとき、ユーザーは本当にうれしいものなのだ。

前置きが長くなったが、パイオニアLDC〈スーパー・プレミアム・コレクション〉は、「これまでなぜか未LD化だった作品」「ファンのリクエストの多い作品」「LDで永久保存したいプレミア性の高い作品」をモットーにしているだけに、ツボを押さえたタイトルがマニアの購買意欲をそそる。第1次ラインナップには大映の6作が並び、今回第2回発売は江戸川乱歩原作の2作がLD初登場。

「黒蜥蜴」（62年）は、美しいものを愛してやまない女賊・黒蜥蜴と名探偵・明智小五郎の知力の限りを尽くした死闘を描く娯楽作品。乱歩の同名長編を基に三島由紀夫が56年に執筆した戯曲を、さらに新藤兼人が脚色。監督には井上梅次があたった。〝OSAKA〟〝TOKYO〟と地名を英字表記する泥臭いモダニズムに象徴される、徹底した人工的な作りが現在の目から見ても楽しい。「犯罪が近づくと、夜は生き物になるのです」「たしかにあらゆる犯罪には絹のような、レースのような、或る優雅なものがあります。そしていくらか古くさい、大げさなところがあります」といった台詞は、大ロマンを志向する作り手たちのマニフェストなのだ。三島の戯曲にもない、あっと驚くセミ・ミュージカル仕立ての作風は「素晴らしき男性」（58年）や「嵐を呼ぶ楽団」（60年）な

「黒蜥蜴」

ビデオ新譜

※＝廉価版、（R）＝レンタル

●アート・キャップ
12/4「女優マルキーズ」
●IVC
11/25「チャイコフスキー」※「モスクワは涙を信じない」※
●アスミック
11/27「ツイン・タウン」
●アップリンク
11/25「クルシメさん」※「ライダウン・ウィズ・ドッグス」
●アミューズビデオ＝松竹富士
11/27「ジャッキー・ブラウン」
●彩プロ＝ステップバイステップ＝J・V・D
11/27「デス・レース2000年（デス・レース2000）デジタルリマスター版」※
●イメージファクトリー・アイエム
12/4「DEAD BODY／デッドボディ」
●エキスプレス
11/25「アンナ・カレーニナ（バーナード・ローズ監督版）」
●角川書店
12/4「不夜城」
●カルチュア・パブリッシャーズ
11/25「そして僕は恋をする」※「魂を救え！」※「二十歳の死」※「ポゼッション（アンジェイ・ズラウスキー監督版）」※
●キングレコード
11/27「ラヴ&ポップ」※
●クロックワークス
12/4「ブレイブ」
●ケイエスエス
10/23「ドルフィン・スルー」（R）
11/27「草の上の月」（R）「激しい季節」（R）
●ケイツーエンタテインメント
12/4「ノー・ウェイ・ホーム／孤独の絆」
●CICビクタービデオ

Digitized by Google

2001年ソフトの旅

吉川明利

デジタルの「タイタニック」かアナログのレッドフォードか

上映前の劇場内にこんなアナウンスが流されていたので、あわてて耳をそばだてた。「この作品はシネマスコープですが、製作者の意向により、前半30国分はビスタサイズでの上映となります。ご了承下さい」。

映画は「モンタナの風に抱かれて」である。一本の映画の本編中に上映サイズが変わることは、アベル・ガンスの「ナポレオン」や、SF映画「ブレインストーム」など、全く無い事ではなかった。しかしこれだけソフト化全盛の現代ではやはりこの上映方法は異質に感じると共に、どうしてもソフト化する時のことを考えてしまうのである。

TVサイズ版には最初から関係ないけど、スクィーズ収録でのワイドはどう対応されるのか(でもブエナ作品だからDVDでもスクィーズじゃないかもしれない)とか、LDのワイドはシネスコ基準だと前半がさらに小さな画面になってしまうなどの問題もつきまとうのだ。

ひとつだけ断言できるのは、こうしたソフト化における諸問題すべてが、実はいかにレッドフォードがソフトに媚びていないかの証明だということ。ビスタのNYからシネスコのモンタナへ、広大な風景の中で設計された馬と人間の距離感、これぞ映画の醍醐味だ。多数の映画がデジタルの極限へ向って走る中、何故かレッドフォードはアナログという名の砦を守ろうとしていると感じるのである。

ではデジタル側を走るトップランナーはと言えば、これはもうJ・キャメロンにつきるだろう。常にソフト化をにらんでの製作姿勢は揺がず、お騒がせの「タイタニック」ではTVサイズ版に絶対の自信を見せた。メーカー側の売りも得意のスーパー35方式における上下のマスキングはずしを、劇場では写っていなかった部分が見られるといったところにスリ変えてしまった。キャメロンにとっての劇場での上映サイズとその構図はソフト化にする為の一手段にすぎない様だ。この対極に位置する2人の監督は21世紀ではどんな仕事をするのだろうか大いに楽しみである。さて本当に生き残れるのはどっちだ。

どを作り続けたプログラム・ピクチュアの職人、井上監督の面目躍如たるところがある。音楽は、のちに本格的ミュージカル「君も出世ができる」(64年)も担当する黛敏郎、挿入歌の作詞は三島自身が手掛けている。

主演は京マチ子で、艶っぽさとレビュウシーンの踊りの華やかさは、さすがはSKD(松竹歌劇団)出身。対する明智役は大木実。日本一の名探偵と自惚れる自意識過剰ぶりは見もので、「がんばれ日本一!」と自らを鼓舞する珍演には思わず失笑。この映画の記憶があると、石井輝男監督のカルト映画「江戸川乱歩全集恐怖奇形人間」(69年)が楽しく観られる。

盲獣
69年(公開)●ワイド 発売/大映
[DALP 0227] 税抜6000円

黒蜥蜴
62年(公開)●ワイド 発売/大映
[DALP 0225] 税抜6000円

一方の「盲獣」(69年)は、盲目の男と彼によって暗闇のアトリエに閉じ込められた女のビザールな愛を描いた異色の傑作。同名中編を、監督・増村保造+脚本・白坂依志夫の名コンビが映画化した。閉塞状況における現代の人間像を一貫して描き続けてきた増村の密室志向がもっとも純化され、象徴的に描かれた作品でもある。原作を大きく改変するにあたり、ウィリアム・ワイラー監督の「コレクター」(65年)を念頭に置いたという。

登場人物は触覚芸術論を主張する盲獣と呼ばれる男に船越英二、その母親に千石規子、母子に幽閉されるモデルに緑魔子のたった三人という大胆な実験作。とりわけ「増村組や市川崑さんにキタえられていて、変な演出の注文も見事にコナす」(白坂発言)、盲獣役の船越が意外なハマリ役。増村組の美術監督、間野重雄が腕を奮った巨大なオブジェがひしめく異様な美術セットが圧巻だ。シナリオ、関係者へのインタビューなどで構成された単行本『日本カルト映画全集7/盲獣』(ワイズ出版)は本作の副読本として最適だ。

両作ともデジタルニューマスターでのLD化、予告編付き。

1/21「スヌーピーとチャーリー・ブラウン/がんばれ!スヌーピー」※「スヌーピーとチャーリー・ブラウン/ヨーロッパの旅」※

1/27「絶体×絶命」「ブルース・ブラザース2000」

●JVD

1/27「バニシング IN TURBO(デジタルリマスター版)」※

●ジェイ・シー・エイ=日本スカイウエイ

1/28「ブルガサリ/伝説の大怪獣」

●小学館

1/18「ドラえもん/のび太と竜の騎士」※「ドラえもん/のび太とブリキの迷宮(ラビリンス)」※「ザ★ドラえもんズ/怪盗ドラパン!謎の挑戦状!」※

●松竹ホームビデオ

1/21「英国万歳!」※「男優シリーズ/上原謙」「男優シリーズ/佐分利信」「男優シリーズ/佐野周二」「ラブ・レター」

●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

1/20「愛情物語(ジョージ・シドニー監督版)」※「あなたに降る夢」※「或る夜の出来事」※「いつか晴れた日に」※「オンリー・ユー(ノーマン・ジュイソン監督版)」※「気まぐれな狂気」「殺人魚フライングキラー」※「ベスト・フレンズ・ウェディング」※「未知との遭遇/永久保存版」(THX)※「めぐり逢えたら」※

●タキコーポレーション

1/27「乱気流 グランドコントロール」

●東映ビデオ

1/21「ア・ホーマンス」※「俺達に墓はない」※「銀河鉄道999/エターナル・ファンタジー」※「新選組鬼組長」※「壮烈新選組/幕末の動乱」※「ロ、スランプ アラレちゃん/ほよよ!助けたサメに連れられて…」※「幕末残酷物

Digitized by Google

公開作&未公開作

●丸山尚輝

DATING THE ENEMY　月に願いを

96年（未公開）●監督／ミーガン・シンプソン・ヒューバーマン　出演／ガイ・ピアース、C・カーヴァン　●アートポート（104分）11月27日リリース

「プリシラ」で3人のドラッグクイーンのひとり、フェリシア役を演じメジャー進出を果たし、今夏公開の「L．A．コンフィデンシャル」ではエリート警官のエド役を好演したG・ピアースが、96年に出演したファンタジックなラヴ・コメディ。ひょんなことから体が入れ替わってしまったカップルの騒動の顛末を描く、「転校生」の大人ヴァージョンといった作品だ。共演はオーストラリアでは演技派として知られるC・カーヴァン。また、編集に「ベイブ」でオスカーにノミネートされたマーカス・ダーシーが参加しているほか、音楽を「シャイン」や「スライディング・ドア」のデイヴィッド・ハーシュフェルダーが担当している。

音楽番組の司会者として人気が出始めていたブレットと、新聞社に勤める科学ジャーナリスト、タッシュ。この環境も趣味も性格も全く正反対のふたりが、恋に落ちてしまった。ところが、一年も経つとプレイボーイで他の女性たちからモテモテのブレットに、タッシュは不安感を隠せなくなってくる。「彼が少しでも私の気持ちを理解してくれたら…」果たして、彼女の願いが叶えられ、ある朝、ふたりの体は入れ替わってしまう。とんでもない状況に陥ったふたりは、なんとかその困難を乗り越えようとするうち、お互いの気持ちを理解し始めるのだが…。

THE MYTH OF FINGERPRINTS　家族という名の他人

©Hollywood Pictures Company

97年（未公開）●監督／バート・フレインドリッチ　出演／ロイ・シャイダー、ブライス・ダナー　●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（91分）11月20日リリース

久しぶりに故郷に集まった家族の崩壊を描いたヒューマン・ドラマ。R・シャイダー、B・ダナーのほか、「ER」のノア・ワイリーなど新旧の実力派が顔を揃えている注目作だ。〝家族〟という人間関係の脆さ、難しさ、はたまた強さ、といった様々な問題について、改めて考えさせられる内容になっている。

ウォーレン、ミア、ジェイク、リーの兄弟が、3年ぶりに故郷であるニューイングランドの実家に感謝祭を祝いに集まった。ミアとジェイクはそれぞれに恋人を同伴してきていたが、厳格な父・ハルはそれがあまり気に入らない。そんなこともあって、上辺では和やかな雰囲気の家庭に次第にぎちこなさが蔓延していく。そして、彼らの関係が既に崩壊していたという事実が露呈するのだった…。

SHRIEKER　シュリーカー

97年（未公開）●監督／ビクトリア・スローン　出演／タニヤ・テンプシー、ジェイミー・ギャノン　●ABC出版（80分）11月20日リリース

フィギュア・マニアならもう既にご存知かもしれないが、8月にフルムーン・トイズから発売されたシュリーカーというキャラが登場するホラー映画が、いよいよビデオリリースされることになった。48年の秋、カリフォルニア州の病院で起こった未解決猟奇殺人事件に材を取った内容に、サブリミナル・サウンド・レコーディング・システムを導入。新しくも本格的な恐怖映画に仕上がっている。

勉強に没頭できる環境を求めて、5人の学生と廃墟となった病院に住み込むことになった女子大生・クラーク。ある夜、奇妙な悲鳴を耳にした彼女は、地下で見知らぬ青年・ロバートと会う。そして、彼がシュリーカーと呼ぶ悲鳴の主の正体を調べるうち、彼女は50年前に病院で起きた殺人事件を知る…。

語」※「暴力教室」※「ヨコハマBJブルース」※

●東宝

12/4「絆」（R）「マタンゴ」（R）

●東北新社

12/27「海辺のホテルにて」※「女ともだち」※「限りなく愛に燃えて」※「過去をもつ愛情」※「華麗なる女銀行家」※「スエーデンの城」※「すぎ去りし日の…」※「抱きしめたい（パリ風亭主操縦法）」※「夏に抱かれて」※

●日活

12/27「借金王4」

12/4「愛欲生活／夜よ、濡らして」※「女新入社員／5時から9時まで」※「忠臣蔵赤垣源蔵／討入り前夜」※「髑髏銭／総集編」※

●日本スカイウェイ＝コムストック

12/22「イレイザーヘッド／完全版」※「カンニング・モンキー　天中拳」※「クレイジー・モンキー　笑拳（未）※「ジャッキー・チェン　成龍拳」※「デューン　砂の惑星（砂の惑星）」※「デューン　スーパープレミアム／砂の惑星・特別篇（上下巻）※「ブルーベルベット／無修正最終版」※

●日本コロムビア

12/21「美空ひばり／リンゴ園の少女」※

●パイオニアLDC

12/21「ウィッシュマスター」

●パップ

12/21「カップルズ」※

●ファイブ・ウェイズ

12/22「あおずけ」※「上方苦界草紙」※「KOYA／澄賢房覚え書」※「棒の哀しみ」※

●ブエナビスタホームエンターテイメント

12/4「エアフォース・ワン」※

●フォックスホームエンターテイメント

12/20「タイタニック（THX・W）※「ザ・ワイルド」

Digitized by Google

望月美寿の

アジアのピンキリ
ーそのまたキリー

ビビアン・スー真打ち 第3弾だっちゅーの!?

第52回テレビタレントイメージ調査の〈女性タレント人気度〉5位にビビアン・スーがランクされた（ちなみに山口智子、飯島直子、中村玉緒、室井滋ときてビビアン）。いやあ驚いた、世間一般でそんなに認知されてたのね!?

さて「ビビアン・スーのパイレーツの逆襲」だが、既発売の「恋しくて…」「ロマンシング・ドラゴン」同様、真の主役はおでぶ&マルコメのちびっこ2人組。ビビアンはおとぎの国の島娘役で、なま足むき出し往年のフィービー・ケイツ風〝健康的なお色気〟をふりまく。いうなればこってこての中華味ファミリー・ファンタジーなのだ。

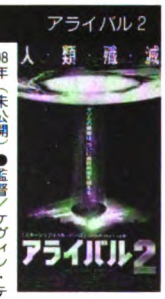
小学生のティン（ハオ・シャオウェン）はいつも一人ぼっち。父（出た！ン・マンタのダメおやじ）は競馬、母は麻雀、兄は発明に夢中でかまってもらえない。ある日浜辺で不思議なゲームCDを拾ってスイッチオンすると、突然家の中に嵐が巻き起こり兄とともにゲームの世界へ引きずりこまれてしまう。着いた先は黄金島という離れ小島で、クンフー自慢の少年守護神シウロン（シー・シウロン）と美しい島娘（ビビアン）たちが、フックもどきの船長（「ファイナル・プロジェクト」の好漢ジャクソン・ルーのバカ演技）率いる海賊たちと日夜闘いをくり広げていた――。監督はあの「八仙飯店の人肉饅頭」のハーマン・ヤウと「ロマンシング・ドラゴン」のサウホン・ハーとの共同。今まではチンチンにレンガぶるさげてふりまわすなど、赤面下半身ネタを得意としてきたシャオウェン君だが、さすがに恥ずかしくなってきたのか、もうやってくれないのが残念。一方、シウロン君はラストで初めて髪の毛ありバージョンを公開する。ほんとにこの子はクンフーはできるし美形だし、将来が楽しみだ。

ビビアン・スー
パイレーツの逆襲

超級中國龍／Adventurous Treasure Island 96年●製作／プイヨイ・ホイ、テ・ウォン 監督／ハーマン・ヤウ、サウホン・ハー 出演／ハオ・シャオウェン、シウロン・マンタ●ケイエスエスエムイー（81分）11月27日発売

アライバル2

THE SECOND ARRIVAL



98年（未公開）●監督／ケヴィン・テニー 出演／パトリック・マルドーン、ジェーン・シベット●日活（105分）11月27日リリース

チャーリー・シーン主演でヒットを飛ばしたSF「アライバル―侵略者―」の続編。オゾン層を破壊し、地表の温度を上昇させることで地球侵略を企むエイリアンと、それを阻止しようとする若き科学者の闘いを描く。

エイリアンの地球乗っ取り計画を世界に暴露したゼインが、何者かに殺された。その後、ゼインが送った一通の封書を受け取り、エイアリンによる地球侵略の証拠を知った弟のジャックは、同じように封書を受け取っていた新聞記者・ブリジットと組み、エイリアンの地球侵略を阻止すべく立ち上がろうとするが…。

前作に比べ、映画の規模が縮小されたことは歪めないが、建築物の撮り方など「ウルトラセブン」のような雰囲気が楽しめる通向きの作品になっている。

ダーティ・トークス

TALKIN' DIRTY AFTER DARK

91年（未公開）●監督／トッパー・カレウ 出演／マーティン・ローレンス、ジョン・ウィザースプーン●エムスリイエンタテインメント（87分）11月27日リリース

「ドゥ・ザ・ライト・シング」「ブーメラン」と順調にキャリアを重ね、「ナッシング・トゥ・ルーズ」で日本でもその名を広めたM・ローレンスが、91年に主演したヒップホップ・コメディ。人気コメディ・クラブを舞台に、ユーモラスでセクシーで多分にお下劣、脳みそ全部海綿体な人々が繰り広げる一夜の騒動が描かれる。

売り出し中のコメディアン、テリーは、今日も人気のコメディ・クラブ〝デューキーズ〟で得意のエロネタで観客をわかしていた。そんな彼にゾッコンなのが、店のオーナー、デューキーの妻・ルビーだ。夫の目を盗んではテリーと密会を重ねる彼女。テリーも仕方なくその相手をしているが、一方デューキーは人気コメディエンヌのアレサにメロメロで…。

LD新譜

（W）＝ワイド、（D）＝デジタル、（DD）＝ドルビー・デジタル

●アミューズビデオ
1/27「ジャッキー・ブラウン」（W）
●キングレコード
10/23「CAT'S EYE」（W）「東京日和」（W）
1/27「ラブ&ポップ」
●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
1/20「気まぐれな天使」（W、DD）
●大映
1/21「卓球温泉」
●日本コロンビア
1/21「ウォン・カーウァイ プロデュース／初恋」（W）「ラヴソング」
●パイオニアLDC
1/20「タイタニック」（THX、W、DD）「タイタニックの最期」
1/25「ウィッシュマスター」（W、D）「キャスパー」（THX、W、D）「現金に体を張れ」「さまよう魂たち」（W、D）「シャドー」（W、D）「突撃」「ナッシング・トゥ・ルーズ」（W、DD）「非情の罠／
●ポニーキャニオン
12/2「遥かなる帰郷」「深い河」
●マクザム
12/4「サソリ／女囚 701号」「82分署」（後藤大輔監督版）」※
●ユーロスペース＝日本スカイウエイ
11/22「いちばん美しい年令」
●ワーナー・ホーム・ビデオ
11/20「偉大な生涯の物語」※「陰謀のセオリー」※「キング・オブ・キングス（ニコラス・レイ監督版）」※「クオ・ヴァディス」※「ソロモンとシバ女王／完全版」（W）※「追跡者（ステュアート・ベアード監督版）」「ロリータ（新マスター版）」※
12/1「真夜中のサバナ」

Digitized by Google

THE SCOLD'S BRIDLE　鉄の枷

97年（TM）●監督／デイヴィッド・サッカー　出演／ミランダ・リチャードソン、ボブ・ペック
●大映ビデオ（105分）
11月27日リリース

資産家の老女・マチルダが浴槽の中で失血死しているのが発見された。しかも、彼女の頭には中世の拷問器具「鉄の枷」が被せられていたのである。警察は自殺と他殺の両面から捜査を開始するが、彼女の主治医のセアラはそれが他殺であると判断した。彼女はマチルダが自殺するような性格の人物ではないことを熟知していたのである。ところが、マチルダの遺した遺書により、莫大な遺産がセアラに相続されることになって彼女は、微妙な立場に立たされてしまう。

「氷の家」「女彫刻家」に続く、女流作家、ミネット・ウォルターズによるミステリーのテレビ・ドラマ化第3弾。今回は演技派、M・リチャードソンを主演に、ある資産家老女の死を巡る謎と歪んだ人間関係が描かれる。

EDEN　幽体離脱

97年（未公開）●監督／ハワード・ゴールドバーグ　出演／ジョアナ・ゴーイング、ティラン・ウォルシュ
●CICビクタービデオ（108分）
11月27日リリース

持病と夫からの束縛に悩む主婦が、幽体離脱を体験する異色のドラマ。主演は新星J・ゴーイング、彼女の夫役に「コンゴ」のD・ウォルシュ。

65年。多発硬化症による脚の麻痺にくるしむ主婦・ヘレンは、大学予備校の名門エデンで教鞭をとる夫・ビルとふたりの子供に囲まれて幸せな日々を送っていた。ある日、彼女は下宿生で落ちこぼれのデイブを励ましてやったことから教育への興味を持ち始める。ところが、伝統と格式、規律を重んじるビルは、そんなヘレンの行為に否定的な見解を示す。夫に理解されない苦しみ、そして不自由な体を抱える彼女は、やがて魂の自由を求めて幽体離脱を体験するようになる。

目新しいテーマではあるが、魂の自由と幽体離脱をくっつけるのはどうか…。

A CALL TO REMEMBER/RESCUERS:STORIES OF COURAGE "TWO COUPLES"　生きてゆく理由／レスキュアーズ　戦火に燃えた勇気

97年（TM）●監督／ジャック・ベンダー　出演／ブライス・ダナー、ジョー・モンターニャ
●CICビクタービデオ（110分）
11月27日リリース

97年（TM）●監督／ティム・ハンター、リンネ・リットマン　出演／デイナ・テラニー、リンダ・ハミルトン
●CICビクタービデオ（107分）
11月27日リリース

CICビクタービデオが連続してリリースする、人種問題を扱ったドラマ・シリーズ。今回は、ホロコーストによる悲劇を描いた「生きてゆく理由」と、8月にリリースされたオムニバス・ドラマ「レスキュアーズ」の第2弾の2本が登場する。「生きてゆく～」は、〝生還者〟と呼ばれるホロコーストの生き残り夫妻の子供への愛を巡るドラマ。「レスキュアーズ」は、ナチスの猛威が吹き荒れるヨーロッパを舞台に、二組の夫婦の勇気ある行動を綴った実話ドラマだ。

THE OPPOSITE OF SEX　熟れた果実

97年（未公開）●監督／ドナルド・ロス　出演／クリスティーナ・リッチ、マーティン・ドノバン
●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（100分）11月22日リリース

「アイス・ストーム」のC・リッチ主演のXジェネレーション・ムービー。義理の父の死をきっかけに家出をした16歳の少女・ディーディーは、ゲイで腹違いの兄・ビルの元を訪ねるが、そこで彼の友人の子を見ごもってしまう。

MEDUSA'S CHILD　核弾頭メデューサ

97年（TM）●監督／ラリー・ショー　出演／ヴィンセント・スパノ、ロリー・ローリン、ゲイル・オグラディ
●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（180分）11月20日リリース

J・J・ナンスの原作を基にした航空サスペンス。マイアミからワシントンDCへ飛び立った旅客機の貨物の中に、爆発すれば全米の電子機器を狂わす特殊な核弾頭が見つかった。機長を始め、乗組員は危機を回避すべく行動を起こすが…。

DVD新譜

●アプローズ
1/27「奇跡の海」（W、D）
●アミューズビデオ
1/27「南京の基督」（W、D）
●カルチュア・パブリッシャーズ
1/25「アナザー・カントリー」（DD）「ウディ・アレンの重罪と軽罪」「恋する人魚たち」「豪勇ロイド」「シー・デビル（スーザン・シーデルマン監督版）」「第七天国」「たそがれの維納（ウィーン）」「ダンス・ウィズ・ア・ストレンジャー」（DD）「血と砂（フレッド・ニブロ監督版）」「つばさ」「ドン・ファン（アラン・クロスランド監督版）」「眺めのいい部屋」（DD）「バグダッドの海賊（ラオール・ウォルシュ監督版）」「ハンナとその姉妹」「ビギナーズ」（DD）「ベテン師とサギ師／だまされてリビエラ」「モーリス／Restored Version」（DD）「民族の祭典／オリンピア・第1部」「美の祭典／オリンピア・第2部」「モロッコ」「ラジオ・デイズ」（DD）
●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
1/20「愛を殺さないで」（W、DD）
完全版」「フェノミナン」（THX、W、D）「フラバー」（W、D）「ブルガサリ／伝説の大怪獣」「コレクターズ・エディション／未知との遭遇」（THX、W、DD）「リスボン物語」（W、D）
●ビームエンタテインメント
1/25「オーケストラ・リハーサル」（W）「青春群像」
●ポニーキャニオン
1/18「上海グランド」（W、D）
●ポリグラム
12/2「名探偵コナン／14番目の標的（ターゲット）」

Digitized by Google

オリジナルビデオこだわりチェック

中村勝則

森次晃嗣が初めて映像で語る『ウルトラセブン』の世界

初放映から30年以上経った今もなお、SF特撮ドラマの金字塔として語り継がれている『ウルトラセブン』……おっと、8月下旬号と同じ出だしになってしまったが、そこで紹介した新作OVをはじめ、9月にはそのモロボシ・ダンこと森次晃嗣氏が当時の思いを綴ったエッセイ本『ダン』が出版されたりと、今年はあらゆる意味で『ウルトラセブン』が見直された年だったといえよう。

そしてその極め付けとして登場したのが本作。

故郷北海道を離れ、最初にたどり着いた場所でもある新宿をひとり歩きながらデビュー前の思い出を語る俳優・森次晃嗣。そんな彼をモロボシ・ダン役に抜擢した当時円谷プロ演技課の新野悟氏、『ウルトラセブン』誕生秘話を語る満田稔監督、そして円谷プロを訪れる森次…。

彼らにとって『ウルトラセブン』とは何だったのか？

本作は、森次氏をメインに、当時のスタッフ・キャストの証言や、欠番となった第12話（これはそのサブタイトルを口にすることすら許されないらしい）を除く全話の名場面を交えながら『ウルトラセブン』の魅力に徹底的に迫っていく。もちろんこれまで語られていなかった興味深い名珍エピソードも数多く、今やすっかり人気脚本家となった市川森一氏の証言、そして何よりダンとアンヌ（ひし美ゆり子）の再会シーンは感動的だ。

今年は新作OVで久びさにモロボシ・ダンを演じた森次氏だが、先日インタビューした際「実はこの30周年記念で映画を作りたかった。それが僕にとっての決着でもある」と熱く語っていたのが印象的だった。今度はぜひともスクリーンでモロボシ・ダンと再会したいと、これを見終わるときっと思うことだろう。

わが愛しのウルトラセブン（Ⅰ.Ⅱ）

98年●出演／森次晃嗣、円谷粲、ひし美ゆり子、新野悟、満田稔、市川森一、中野稔、毒蝮三太夫、加藤幹根
●パイオニアLDC（各75年）
11月25日リリース

THE GRASS HARP　グラスハープ―草の竪琴―

97年（公開）●監督／チャールズ・マッソー　出演／エドワード・ファーロング、ショーン・P・フラナリー
●オンリー・ハーツ（103分）
11月21日リリース

「ティファニーで朝食を」の作家T・カポーティの自伝的小説を映画化した感動作。心を閉ざした少年が、小母と森の〝樹の家〟で暮らすうちに成長していく姿を描く。P・ローリーやJ・レモンなど熟年俳優による競演必見。

ROAD TO NOWHERE　脅迫

93年（未公開）●監督／マイケル・マーフィー　出演／ジェイムズ・レイナード、ケイト・S・バイン
●トラスト・ピクチャーズ（91分）
11月21日リリース

人里離れた家屋でハネムーン・カップルを監禁し、歪んだ関係で結ばれている脱獄囚の兄と精神薄弱の妹。極限状態に追い込まれた彼らの狂気と暴走を描くサイコ・サスペンス。監督はM・マーフィー。主演にJ・レナード。

ユキエ

98年（公開）●監督／松井久子　原作／吉目木晴彦　脚色／新藤兼人　撮影／坂本善尚　出演／倍賞美津子
●ESSEN（93分）
11月27日リリース

戦争花嫁としてアメリカに渡り、夫からの愛を頼りに40余年を生き抜いてきた日本人女性・ユキエは、ある日突然アルツハイマーに冒されてしまう…。〝スロー・グッバイ〟という言葉が印象的な感動作。倍賞美津子がユキエを熱演する。

甜蜜蜜　LOVE SONG　ラヴソング

96年（公開）●監督／ピーター・チャン　出演／レオン・ライ、マギー・チャン、エリック・ツァン
●日本コロムビア（118分）
11月21日リリース

二大人気俳優を配し、10年に及ぶ男と女の愛の軌跡を描いたロマンス。本国はもとより、日本を始め全世界でヒットを記録&高い評価を得た。日本でも馴染みの深いテレサ・テンの名曲をモチーフにして作られている。

「顔のない天使」（DD）「気まぐれな狂気」（W、DD）「スクープ／悪意の不在」（W、DD）「第七の予言」（W、DD）「マネートレイン」（W、DD）「ミザリー」（W、DD）

●東芝

1/25「トゥームストーン」（W、DD）「勇気あるもの」（W、D）

●日活

1/6「女教師」（DD）「高校教師・成熟」（DD）「団鬼六／女教師縄地獄」（DD）「四畳半襖の裏張り」（DD）「ラブホテル」（W、DD）

1/4「女教師狩り」（W、DD）「白薔薇学園／そして全員犯された」（W、DD）「小松みどりの好きぼくろ」（W、DD）「団鬼六／縄責め」（W、DD）「女猫」（W、DD）

●日本ヘラルド映画

1/18「ザ・ファン」（W、DD）「ディアボロス（ディアボロス／悪魔の扉）」（W、DD）

●パイオニアLDC

1/25「オレゴン魂」（W、DD）「危険な動物たち」（DD）「セブン・イヤーズ・イン・チベット」（DD）「大地震」（DD）「太陽と月に背いて」（DD）「バード・オン・ワイヤー」（W、DD）「ハード・ターゲット」（W、DD）「ハウスシッター／結婚願望」（W、DD）「ふしぎの国のアリス」（DD）「ベートーベン2」（W、DD）「ミッドナイト・ラン」（DD）

●ビームエンタテインメント

1/25「イヴ・モンタンの枯葉／夜の門」（未）「鬼洗車T－34」「スピットファイアー」「スリ」「チャイコフスキー」（W）「白銀は招くよ」「冬の猿」（W）「モスクワは涙を信じない」「ヨーロッパの解放」（W）「森は生きている」

Digitized by Google

アニメーション&吹替版

●米田由美

アンドロイド・アナ　MAICO 2010

98年●原作／清水としみつ　監督／舛成孝二　声／丹下桜、緒方恵美、置鮎龍太郎●ポニーキャニオン（60分）11月18日リリース　5800円

時に西暦2010年。情報化社会はさらに進化を遂げ、時代は第4次メディアラッシュと呼ばれていた。そんな状況下で、存亡の危機にさらされたのがAMラジオ。各社生き残りをかけた企画合戦を展開する中、ニッポン放送はなんとアンドロイドのアナウンサーを起用するという前代未聞のプロジェクトを始動するのだった…。

ラジオ局が実名で登場したので「ン？」と思われる人もいるだろうが、この原作はニッポン放送「井手功二のゲルゲットショッキングセンター」内でオンエアされたラジオドラマなのだ。好評ゆえ「ヤングキング」でコミック連載が始まり、そしてアニメ化されてWOWOWでオンエアされたという次第。現在、アニメファンの多くが声優ファンであり、彼らをターゲットにしたラジオ番組は数え切れないほどある。作品内容とは異なり、ラジオは今やアニメファンをも取り込む注目のメディアなのである。それを踏まえ、実在ラジオ局を舞台にした社員奮戦記という虚実が交錯するドラマを楽しむのも一興ではないだろうか。

ビジュアルや演出に特に目新しいところはないが、設定のおもしろさや人気最高潮ボイスキャストの起用などが補って余りある魅力となっている。キャラクターたちの人間くさいやりとりも楽しい。

SHADOW SKILL　影技　Vol.1

98年●原作／岡田芽武　監督／須永司　声／林原めぐみ、松岡章夫、水谷優子、松本保典●バンダイ（50分）11月25日リリース　3800円

以前発売されたOAVの続編となるTVシリーズ。アクション作品を得意とする「ダーティペアFLASH」の須永司監督の起用により、ファンのイメージはそのままだが、ディテールにこだわったカッコいい特殊殺法シーンが楽しめるようになった。また男勝りの女性キャラは数多く存在するも、本作のエレは性別を越えた魅力的キャラとして深い印象を残すはずだ。

クルダは聖王国アシュリアーナの地方国家であり、傭兵の国としても知られている。クルダのトップに君臨するのは、セヴァール（修練闘士）と呼ばれる強靱な肉体と精神の持ち主。第59代セヴァールに選ばれたのは、クルダ流交殺法を自在に操る女エレ・ラグだ。こうしてエレと彼女を取り巻く仲間たちの冒険の物語が幕を開けるのだった。

それいけ！アンパンマン　てのひらを太陽に

98年●原作／やなせたかし　監督／永丘昭典　声／戸田恵子、中尾隆聖、山寺宏一、島本須美●バップ（55分）12月5日リリース

行方不明のシャイン王子を探すため、リナちゃんは大根役者一座を引き連れてくらやみ谷へ。ところがそこに現れたのは、ばいきんまんとドキンちゃん。彼らは谷で宝のつぼを見つけるが、つぼの中からシャイン王子の宿敵ブラック大魔王が現れたからサー大変。大根一座やばいきんまんまでが危険にさらされた。そしてアンパンマンがやってくるのだが…。

これで10作目を数える人気作の劇場版シリーズ。原作誕生から25周年ということもあって、いろいろな仕掛けなど見どころの多い作品に仕上がった。一時の勢いは衰えたが、やっぱり「アンパンマン」は子供に大人気だ。それを盛り上げるように、菊池桃子、福澤朗、山田まりやが大熱演を披露。顔出しが増えた戸田恵子の好演も健在だ。

20th anniversary　機動戦士ガンダムⅠ～Ⅲメモリアル限定 BOX SET

81～82年●監督／富野喜幸　監督・作画監督／安彦良和　声／古谷徹、井上遙、池田秀一●ソニー・ミュージック　11月21日リリース　8514円

ジオン王国と地球連邦軍との宇宙戦を背景に、ニュータイプと呼ばれる新世代の少年の成長を描く大ヒットアニメ。その記念すべき劇場用第1～3作に映像特典を加えたスペシャルバージョンが登場だ。そのヒューマニズムに改めて感心。

アキハバラ電脳組　VOL.1

98年●監督／ふじもとよしたか　キャラデザイン／きしもとせいじ　声／島涼香、浅川悠●キングレコード（50分）12月23日リリース　3700円

©KA・NON／講談社・TBS

21世紀の近未来のアキハバラを舞台に、恋に恋する女子中学生・ひばりとペットロボットのデンスケが巻き起こす夢と冒険のストーリー。子供向け作品のようだが、実力派スタッフがツボを押さえた作りを見せ、目が離せない仕上がりだ。

Digitized by Google

ヴォイス大百科 弓家保則

—第十八回—

山寺宏一［前編］

「火聖旅団ダナサイト999．9」（V・LD）60分●原作／松本零士　声／緒方恵美、桜井智●エイチエムピィより12月18日リリース

言葉では表わせない自分なりの〝何か〟

今回のゲストは、山寺宏一さんです。先頃、開催された〝東京国際ファンタスティック映画祭98〟において上映された松本零士氏の最新作『火聖旅団ダナサイト999．9』で、松本ワールドのヒーロー・キャップテン・ハーロックを演じている。

「先輩の井上真樹夫さんが演じていらした役で、僕も見ていたし、未だにファンの方が多いキャラクターですよね。それを自分が演じる上で、井上さんを意識しないでやるつもりでいても、心のどこかで意識してしまう。あれだけのキャラクターがカッコよく登場して、変な声で演じてしまったら、作品を台なしにしてしまうので、そこを壊さずに演じるというプレッシャーはありました。ただ、ありがちな2枚目にはしたくなかった。この業界で、僕より2枚目が似合ういい声の方はたくさんいます。その中で僕なりの、言葉では言えない〝何か〟を表現できればいいですね。その〝何か〟は未だにわかりませんが……。マイクの前に立つ時だけ『僕はハーロックだ』と思っているんです。だけど、演じた後は『今のでいいかな？　井上さんの方がいいと言われるかな？』と思いながらいつも演じています」

山寺さんは、ハーロックだけでなく、その親友・トチローの声も演じている。

「両方をやらせていただけるということは、とても幸せです。やはり、トチローもかつては、先輩の富山敬さんが演じていらした。エディ・マーフィも敬さんが演じていらして、その後に、僕がやらせていただいたんですが、こちらの方は、直接的に敬さんを意識したことはないんです。ただ『敬さんのこういう表現は面白かったな』というのが、時々、頭をよぎることはあります。ところが、トチローの場合は完全に『敬さんだったらこうやるだろうな』という気持ちが自然と生まれてくる。他人から『似てるね』と言われることは嫌ではないんです。トチローには敬さんの雰囲気が似合う、と僕は思っている。僕はどこかで色々な先輩の真似をしてきたし、今もそうしているんです。そういう積み重ねがあって、演じる時、無理やり作ったのではなく、雰囲気で演じていくと自然にそうなってしまうものに関しては、『それでいい』と思っています」

「火聖旅団ダナサイト999.9」より

富山さんが主人公・古代進を演じていた『宇宙戦艦ヤマト』を1度も欠かさず見ていた、と言う山寺さんだが、松本作品の魅力についても聞いてみた。

「松本先生の作品は、比べるものがないですよね。SFを描いている人は大勢いるけど、先生独自の描き方だと思うんです。国内だけでなく、ハリウッドの映画や海外の作品にも影響を与えているんでしょうね。ものすごくスケールが大きいけど、とても人間臭かったりする。キャラクターも独特で不思議ですよ。その世界の中で、こんなに重要な役をやらせていただいて怖いくらいです。松本先生は常に難しいことを考えていらっしゃるんだろう、と僕は思っていたんですが、先生とお話した時『今日より明日の自分はもっといいかもしれない、それでいいじゃないか。それが根底なんだ』と聞かされて、そういうことが言いたくて、あれだけスケールの大きな作品を描くのか、と感動したんです。それを聞いて、自分に何ができるだろう？　と考えた時、キャラクターを演じる上で、先生の思いを感じながら演じるべきなんだ、と思いました。日本のアニメーションは〝文化〟だと思うんです。それに携わっていけることはとても嬉しく、とても楽しいことですね」

やまでら・こういち　1961年6月17日、宮城県生まれ。吹替の主な出演作は『レインマン』『7月4日に生まれて』（トム・クルーズ）『ドク・ハリウッド』『ハード・ウェイ』（マイケル・J・フォックス）『ミセス・ダウト』『アラジン』（ロビン・ウィリアムス）『マスク』（ジム・キャリー）等。その他の出演作は『新世紀エヴァンゲリオン』『それいけ！アンパンマン』『男はつらいよ』（アニメ）等がある。また、11月26日には、オリジナル音楽アルバム『CUBE　9（キューブノキューブ）』をパイオニアLDCよりリリース。

Digitized by Google

日本映画紹介

製作会社　配給会社　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー（使用フィルム：F＝フジ，FK＝コダック／A＝アグファ）BU＝ブローアップ　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／EV＝ヨーロビアンヴィスタ／CS＝シネマスコープ　D＝ドルビー／DSR＝ドルビーSR　上映時間　フィルムメートル数　映倫審査（青少年映画審査会推薦　R指定，成人指定）　封切代表館　M＝モーニングショー／L＝レイトショー

SF／SAMURAI FICTION■鬼畜大宴会■あぶない刑事フォーエヴァー■大怪獣東京に現わる

SF　EPISODE ONE
SAMURAI FICTION

SF製作委員会作品（制作＊日光江戸村撮影所／制作協力＊PEACEDELIC STUDIO・McRAY）／シネカノン配給　98・8・8　PC（EK）・V・D　111分　シネ・ラ・セット

［STAFF］監督／脚色＝中野裕之　エグゼクティブ・プロデューサー＝伊藤満　プロデューサー＝江崎隆明／木村博人／林郁／高城剛／中野裕之　脚本＝斉藤ひろし　撮影＝矢島祐次郎　照明＝椎原教貴　編集＝宮崎清春／中野裕之　録音＝星一郎　美術＝望月正照　衣裳＝松田一雄／江木良彦　音楽＝布袋寅泰　スチール＝ITARU HIRATA／TAKAYUKI NUMAZAKI　音響効果＝帆苅幸雄　助監督＝藤田保行　主題歌＝布袋寅泰「SAVE ME」

［CAST］犬飼平四郎…吹越満　溝口半兵衛…風間杜夫　風祭蘭之介…布袋寅泰　溝口小春…緒川たまき　お勝…夏木マリ　犬飼勘膳…内藤武敏　影丸…谷啓　箪…ユキリョウイチ　赤影…桃生亜希子　吾助…神戸浩　鈴木真太郎…藤井尚之　黒沢忠介…大沢健　九頭見龍之介…藤井フミヤ　梶井…マルセ太郎　大工の熊…都家歌六　室戸…岩松了　八木…鈴木省吾　土井…きたろう　柴田…高木完　鬼松…田所豊　左吉…吉岡英明　丑松…高崎隆二　炎の三兄弟・鷲…赤星昇一郎　炎の三兄弟・まむし…中村和三郎　炎の三兄弟・蒿…真下茂俊　按摩の市…小林のり一　賭場の客…花田裕之／池畑潤二　木村伝兵衛…中島らも　木村雪江…星川なぎね　鮫島…中村有志　黒岩…緋田康人　荒木…ピエール瀧　馬場…梅垣義明　大岡…佐藤正宏　御前試合の審判…近藤房之介

［解説］剣の達人である素浪人に奪われた宝刀を取り返そうと奔走する若侍が、平和主義者の中年侍との出会いの中で成長していく姿を描いた新感覚の時代活劇。監督・脚色は、本作で本篇デビューを果たしたミュージック・ビデオ界のクロサワの異名を持つ中野裕之。脚本は「シャ乱Qの演歌の花道」の斎藤ひろし。撮影をミュージック・ビデオやCFなどで活躍中の矢島祐次郎が担当している。主演は、「ラブ&ポップ」の吹越満と「恋は舞い降りた。」の風間杜夫、ロックミュージシャン・布袋寅泰。

［略筋］1969年、300年かかって新しい体に転生した太平の世の若侍・犬飼平四郎の魂は、当時の自分を振り返る——。長島藩の家老である父・勘膳に勘当を解かれ、武芸の修業に赴いた江戸から久しぶりに国へ帰ってきた平四郎の耳に、殿様が刀番として雇った浪人あがりの風祭蘭之介なる侍が宝刀を盗んで姿を消したという知らせが飛び込んできた。このままではお家断絶は免れないだろう。しかし、剣の達人である風祭には誰ひとりとして敵う者はおらず、悩み抜いた藩の重役たちは宝刀の贋作を作って事件のもみ消しを図ろうとする。ところが、この周囲の及び腰に腹を立てた血気盛んな平四郎は、父の制止も聞かずに幼なじみの黒沢や鈴木と共に風祭を追って家を飛び出してしまう。果たして、風祭を見つけだす平四郎たちだったが、思っていた以上の相手の腕にあっけなく返り討ちに。そんな平四郎の危機を救ったのは、山で娘の小春と暮らす平和主義者の侍・溝口であった。溝口は平四郎の傷の手当をしてやりながら「人を斬るなんていけない。何か他に解決策がある筈だ」「あなたの腕ではむざむざ死にに行くようなものだ」と諭したり、平四郎の暴走を食い止めようと勘膳が送った忍者・隼たちと策を講じて平四郎を国へ帰そうとするのだが、平四郎がそんなへなちょこ侍の話を聞き入れる筈がない。傷の治るのを待って、彼は再び風祭を討つ機会を窺うのだった。一方その頃、風祭はある宿場町の女親分・お勝の賭場で用心棒になっていた。だがその安穏とした生活の中で、実は溝口が剣の達人であることを見抜いていた風祭は、いつか彼と一戦交えたいと念じるのであった。さて、傷も癒えいよいよ風祭を討とうと意気込む平四郎に、溝口は最後の手段として自分が人を斬らなくなった経緯を聞かせる。それはまだ、彼が剣豪であることを自信に思っていた若かりし頃の話だった。藩の領地争いでひとりの敵侍を斬った溝口は、幼い子供を自分に託して死んでいった敵侍の無念と人を殺めることの罪の重さを悟るにおよび、以来人を斬らなくなったというのである。そして、その子供というのが小春であった。ところが、その小春が風祭の手に落ちてしまった。これにはさすがの溝口も黙っている訳にはいかない。平四郎が見守る中、いよいよ溝口と風祭は剣を交えることになるが、溝口は見事な刀さばきで勝利を収め、負けた風祭は谷底の川へ身を投げてしまう。こうして宝

Digitized by Google

刀と小春を取り戻すことに成功した平四郎と溝口は、長島藩へ帰還。その後、平四郎は立派な侍となって小春を娶り、溝口は藩の右筆の職に就き、天命を全うするのであった——。生まれ変わった平四郎は、当時を思い返して言う。「人生で大切なのは、全力で命を燃やして生き続けることである」と。

鬼畜大宴会

鬼プロ作品／鬼プロ配給（提供＊松畜）98・8・8　C（8ミリ＋16ミリBU）・S　106分　成人指定　ユーロスペース

［STAFF］監督／脚本／編集＝熊切和嘉　製作＝森拳三郎　製作進行＝財前智広／熊切和嘉　撮影＝橋本清明　照明＝向井康介／熊切和嘉　音響＝財前智広　美術＝安井聡子　音楽＝赤犬　スクリプター＝前田隼人／金井亜由美　音響効果＝松本章　造型＝西山幸雄

［CAST］杉原…杉原敏行　藤原…小木曽健太郎　雅美…三上純未子　岡崎…澤田俊輔　山根…財前智広　相澤…橋本裕二　メンバー…平良勤／東野哲也／仙田学

［解説］カリスマ的リーダーを失った学生左翼組織の狂気の暴走の中に、人間の醜いエゴを描いた過激なバイオレンス・ドラマ。監督・脚本は、本作でPFFアワード'97準グランプリを受賞した熊切和嘉。撮影を橋本清明が担当している。尚、今回は監督自らが再編集したPFFでのヴァージョンより6分短い完全版での公開となっている。第48回ベルリン国際映画祭正式出品、第20回ぴあフィルムフェスティバルPFFアワード'97準グランプリ。

［略筋］学生運動全盛の頃、ひとつの左翼組織が薄汚い文化住宅の一室をアジトとして集まっていた。主なメンバーは、相澤の恋人で彼の不在中組織を仕切る雅美、年長者の山根、雅美が性のはけ口として利用している岡崎、フォークギターの名手・熊谷、ルームメイトというだけで熊谷に誘われ組織に参加した新入生の杉原、そして相澤の刑務所での友人・藤原らだ。彼らはカリスマ的存在のリーダー・相澤の信奉者で、今は獄中にいる相澤の出所を待ちながら、雅美の下、資金稼ぎや武器調達に奔走している。ところが、信念を持たない雅美のやり方に年長者である自分が指揮をとるべきだと山根が反発。勢い余って相澤をも批判したことから、怒ったメンバーは彼を組織から追放してしまう。それから数日後、相澤が獄中で割腹自殺を図った。この事態に、相澤への想いだけを頼りに繋がっていた組織は大きく揺れ始める。そして、彼らの不安感は相澤を批判し続ける山根に制裁を加えることへ向けられるのだった。山根を捕らえ、山へ入っていくメンバーたち。山根への凄惨なリンチが繰り広げられる中、狂気の集団となった彼らは次第に殺戮の暴徒と化していく。やがて、一貫して傍観者の立場をとっていた藤原は、そんな状況に終止符を打つべく彼らを日本刀で斬ると、自らの首にも刃をあてがうのだった……。

あぶない刑事フォーエヴァー THE MOVIE

「あぶない刑事フォーエヴァー」製作委員会（日本テレビ＝東映）作品（制作協力＊セントラルアーツ）／東映配給　98・9・12　C（EK）・V・DSR　105分　丸の内東映

［STAFF］監督＝成田裕介　製作＝漆戸靖治／石川一彦／細川知正／伊藤和明／大塚恭司／高岩淡　企画＝清水豊次／黒澤満／伊地智啓　プロデューサー＝奥田誠治／近藤正岳／服部紹男　製作担当＝大塚泰之／益岡正志　脚本＝柏原寛司／大川俊道　撮影＝仙元誠三　水中撮影＝山本英男　照明＝井上幸男　編集＝只野信也　録音＝柴山申広　美術＝山崎秀満／小林正義　装飾＝湯沢幸夫　衣裳＝斉藤昌美／野中美貴　スタイリスト＝小田島弘枝／橘陽子／堀田都志子／牧野純子　音楽＝Fuji-Yama（諸藤彰彦／山崎茂之）／鷺巣詩郎　音楽監督＝鈴木清司　音楽プロデューサー＝高桑忠男　スクリプター＝今村治子　スチール＝三村和仁　特撮監督＝佛田洋　特殊視覚効果＝大屋哲男　特殊効果＝羽鳥博幸　音響効果＝真道正樹／錦織真里　技斗＝高瀬将嗣／森聖二　助監督＝鳥井邦男　主題歌＝SING LIKE TALKING「Firecracker」／柴田恭兵「RUNNING S-HOT-SHOTGUN MIX」／舘ひろし with THE COLTS「CRY OUT ～泣いていいよ～」

［CAST］鷹山敏樹…舘ひろし　木下勇次…柴田恭兵　伊藤章一郎…加藤雅也　真山薫…浅野温子　深町新三…小林稔侍　町田透…仲村トオル　下村恵美…本上まなみ　城島誠…永澤俊矢　松村優子…木の実ナナ　田中文男…ベンガル　吉井浩一…山西道広　緒方雄一…西岡徳馬　津山徹…マイク真木　中村…中山秀征　谷村進…衣笠健二　山路瞳…長谷部香苗　佐伯真理…実田江梨花　愛川史郎…飯島大介　岸本猛…伊藤洋三郎

［解説］名コンビ刑事・タカとユージが、国際テロ組織を相手に繰り広げる活躍を活写したコメディタッチのポリス・アクション・シリーズ第6弾。最終章（？）となる今回はテレビと映画のメディアミックスとして製作され、8月28日に放映されたテレビ版を受けての後篇的内容となっている。監督は「復讐の帝王」の成田裕介。脚本は、「猫の息子」の柏原寛司と「あぶない刑事リターンズ」の大川俊道の共同。撮影を「極道の妻たち　決着」の仙元誠三が担当している。主演は、「新　居酒屋ゆうれい」の舘ひろしと「あぶない刑事リターンズ」の柴田恭兵。ゲスト出演として「破壊王　DRIVE」の加藤雅也が登場している。

［略筋］（**テレビ版**）金塊強盗団相手に大立ち回りを展開したタカとユージのお騒がせ刑事コンビ。その時に作った多額の借金返済の為に、ユージは夜間警備のアルバイトに行くことになる。ところが、そこは銃器密輸の現場だったのだ。銃器は押収したものの、国際指名手配中のテロリスト組織〝NET〟のメンバー・城島を取り逃がしてしまったユージは、ふたりを一緒に行動させまいとする深町課長の目を盗んでなんとか城島逮捕に成功する。しかし、逮捕劇で重傷を負った苦の城島は警察病院から逃亡し、横浜の街に姿を消してしまうのであった……。

（**映画版**）城島を追って外国人がたむろ

Digitized by Google

するプールバーに赴いたタカとユージは、またしても城島を逃してしまう。そして、いよいよ深町課長は騒ぎばかり起こすふたりを辞職に追い込めと県警本部長の緒方に言い渡されてしまうのだった。そのことを知った松村課長は、暫くおとなしくしているよう彼らにアドバイスするが、彼らにそんなことが出来る筈はない。城島たちから押収した銃器を運搬していた警察車輌が何者かに狙われているという情報を聞きつけると、ふたりは現場に急行。激しい銃撃戦の末銃器を守ることには成功するが、再び騒ぎを起こしたことで深町課長を激怒させ、NETの捜査から外されてしまう。その頃、成田空港にNETの作戦実行部隊のリーダー・伊達が到着していた。警察車輌襲撃事件で射殺した犯人たちの調査資料に伊達の名前を発見したタカとユージは、伊達が立ち寄ったポールスターのマスター・津山から彼の情報を聞き出そうとする。そして、伊達は津山が育てた優秀な傭兵だったことが判明した。ところが、そこへ伊達の部下が乱入。津山を殺害し、タカも怪我を負わされる。一方、深町課長によって解雇通告を喰らっていたユージは、タカからの連絡を受けて内密に城島逮捕に乗り出すことになる。だが、その城島も伊達によって消され、ポールスターのウエイトレス・恵美が誘拐されてしまう。そして、遂に伊達のプロジェクトが開始された。彼らは横浜港に停泊するタンカーをジャックすると、横浜市に100億円を要求。それを呑まなければタンカーを爆破するという。そうなれば横浜は一瞬にして壊滅状態だ。会議の末、要求を呑むことにした横浜市は、港署に現金受け渡しを一任する。ところが、そこへ覆面姿のタカとユージが現れ、現金を奪って逃走して行ってしまう。彼らはめぐみを救う為、伊達と裏取引することにしたのだ。伊達たちと接見するタカとユージ。だが、100億円と恵美の取引現場は銃撃戦になってしまう。そこで伊達に怪我を負わせたタカとユージは、逃げる伊達を追ってタンカーに潜入すると、伊達の計画を阻止し、恵美を助けることにも成功。更に山下公園に突っ込みそうになるタンカーの暴走も食い止め、横浜の危機を回避させるのだった。だが、おっちょこちょいのタカとユージは、時限爆弾を解除する賭けをしていて失敗。大爆発と共に、ふたりはトレードマークのサングラスを遺して海に消えてしまう……。

大怪獣東京に現わる

吉本興業＝丸紅＝松竹作品（製作協力＊セディックインターナショナル＝エクセレントフィルム）／松竹配給　98・9・26　C（EK）・V　102分　松竹セントラル2

［STAFF］監督＝宮坂武志　製作＝木村政雄／古里靖彦／渡邊惇　企画＝中澤敏明　企画協力＝平田道弘／清水敬之　プロデューサー＝辻裕之　原案／脚本＝NAKA雅MURA　撮影＝坂江正明　照明＝清野俊博　編集＝中村雅　録音＝塩原政勝　整音＝小峰信雄　美術＝武藤順一　音楽＝鈴木大介　音響効果＝柴崎憲治　助監督＝山村淳史

［CAST］田所君枝…桃井かおり　大沢彦二郎…高松英郎　田所継男…本田博太郎　森永伸子…角替和枝　小喜隆…上野潤　大沢桂子…沢木麻美　ジュン…奥野敦士　矢野悦子…西山由海　森永千恵子…倉前志保　堀道夫…田口トモロヲ　桜沢亮子…吉行由実　内海瞬也…柏谷享助　川岡朋美…田京恵　百太郎…竹内力　広岡克己…益子智行　広岡辰巳…益子和浩　森永寅吉…石山雄大　田所ハツ…花原照子　田所健一…平野勇樹　矢野孝治…崎山祐一　ローズ…斉藤りつ　コンタ…辻つん　ガンボ…中谷正道

［解説］東京に出現した怪獣の接近に揺れる、福井県の田舎町の住人の騒動を描いた怪獣の出ない怪獣パニック・コメディ。監督は、本作で本篇デビューを飾った宮坂武志。原案・脚本は、「岸和田少年愚連隊　望郷」のNAKA雅MURA。撮影を坂江正明が担当している。主演は「バウンス　ko GALS」の桃井かおり。

［略筋］ある日、正体不明の大怪獣が東京湾に現れ、首都・東京を壊滅状態に追い込んだ。一方その頃、福井県坂井郡三国町の住民たちは、そのニュースを報じるテレビ番組をどこか他人事のような感覚で見ていた。仲良し奥さんたちや家族と、食料を買い込んだり預金の心配をしたり怪獣について論じたりと大騒ぎの専業主婦・田所君枝。自分史「不死鳥の街に生きて」の完成を目前に控えて、追い込みをかけている老人・大沢彦二郎。遂に裁きの時がきたとばかり、布教活動に熱を入れる新興宗教の信者・桜沢亮子。そして、その勧誘にまんまとひっかかる三浪の受験生・小暮隆。更に、君枝の友人の伸子の娘・千恵子は怪獣騒動にキレた教師・堀に襲われ、東京からやってきたバンド、サマータイムのメンバーは福井見物に乗り出す始末。また、若いカップルの瞬也と朋美は、朋美の妊娠問題で怪獣どころの騒ぎじゃない。しかし、彦二郎の娘・桂子だけは東京にいる恋人の安否を気遣い気が気ではなかった。そんな矢先、怪獣が進路を変え、北上を始めたのである。このままでは福井にやってくる可能性が！　政府の要請でアメリカから送られてきた巨大空母・インディペンデンスも、時を同じくして発生した大地震による津波であえなく転覆してしまい、自国の自衛隊も頼りにならないことに気づいた三国町の人々は、漸く慌てふためく。ブラウン管を通しての恐怖は、もはや〝今そこにある危機〟となって三国町の住人に襲いかかってきた。とその時、九州は福岡県に突如亀の形をした第二の怪獣が現れ、ふたつの怪獣は琵琶湖付近で激しく戦い始める。これで一安心。胸を撫で下ろす住人たちであったが、暫くするとふたつの怪獣はそれぞれに行き先を変えて動きだし、しかも第一の怪獣が福井に迫ってきた。焦った住民は敦賀にある原発へ向かった。原発の近くにいれば、近隣の中国や韓国が守ってくれるだろう。だが、その読みは甘かった。東アジア三国が発射したミサイルは、誤って避難した住民たちの上に落ちてしまったのである。その後、ふたつの怪獣はそれぞれに海に消えていった。そして、生き残った三国町の住民は稲藁で作った怪獣を海に流し、その魂を鎮めるのだった。以来、その行事はこの地方の伝統祭事として20世紀に続いている。

Digitized by Google

10月の公開作品（日本映画）封切り表

（注）封切日は東京中心。＊＝地方のみ公開作品　P＝プロデューサー　EP＝エグゼクティブ・プロデューサー　CP＝チーフプロデューサー

封切日	題名（配給会社）	製作所	脚本（脚色）	監督（監修）	出演	上映時間	紹介	批評	グラビア
10.3	イノセントワールド INNOCENT WORLD（東京新社＝ゼアリズ）	フジテレビ＝ポニーキャニオン＝東北新社	（小川智子）	下山　天	安藤　政信・竹内　結子 豊原　功輔・伊藤かずえ	97		1267	1265
10.3	死臭のマリア（映画技術美学講座）	映画技術美学講座	伊藤　晋	伊藤　晋	横山　豊蘭・五郎丸典子 小栗えりか・三枝　晴美	27		1267（ク）	1267
10.3	鼻の穴（映画技術美学講座）	映画技術美学講座	稲見　一茂	稲見　一茂	菅原　光男・田中ゆかり 渋谷　実・吉川　琢也	30		1267（ク）	1267
10.10	がんばって　いきまっしょい（東映）	フジテレビジョン＝ポニーキャニオン＝アルタミラピクチャーズ	（磯村一路）	磯村　一路	田中　麗奈・真野きりな 松尾　政寿・清水　真実	120		1267（特）1268	1267
10.10	狂わせたいの（石橋プロダクション）	石橋プロダクション	石橋　義正	石橋　義正	岡本　孝司・分島　麻実 キララはづき・木村真東	60		1271	1267
10.10	大往生（劇団1980）	劇団1980＝秋田県二ツ井町	（藤田　傳）	藤田　傳	山本　陽世・相生千恵子 役所　広司・水　六輔	105			
10.10	謎の FLYING SAUCER FAKE OR LOVE?（リトル・モア）	リトル・モア		ホンマタカシ	坂井　真紀・村上　淳	70			
10.10	PORNOSTAR ポルノスター（リトル・モア）	リトル・モア	豊田　利晃	豊田　利晃	千原　浩史・鬼　丸 緒沢　凛・広田レオナ	98		1269（ク）1272	1267
10.17	学校　Ⅲ（松竹）	松竹＝日本テレビ放送網＝住友商事＝角川書店＝読売新聞社	（山田洋次）（朝間義隆）	山田　洋次	大竹しのぶ・小林　稔侍 黒田勇樹・ケーシー高峰	133		1269（特）1271	1268
10.17	ポッキー坂恋物語 かわいいひと（東京テアトル）	江崎グリコ	榎　祐平	総監督 相米　慎二		92		1268（特）	1268
	EPISODE　Ⅰ			村本　天志	奥菜　恵・安藤　政信				
	EPISODE　Ⅱ			冨樫　森	椎名　桔平・中村　綾乃				
	EPISODE　Ⅲ			前田　哲	吉川ひなの・鳥羽　潤				
10.17	カンゾー先生（東映）	今村プロダクション＝東映＝東北新社＝角川書店	（今村昌平）（大脇大介）	今村　昌平	柄本　明・麻生久美子 ACQUES CAMBLIN 松坂　慶子	129		1269（特）	1268
10.24	ザ・ハリウッド（ゼアリズ）	野村企画	野村　恵一［共同脚本 小笠原恭子 松下隆一］	野村　恵一	喜多見英明・マイケル・タバート・白　雪・余　貴美子	95		1268	1268
10.24	チャカ LONELY HITMAN（ビジョンスギモト）	ビジョンスギモト	（森岡利行）	渡辺　武	竹内　力・吉村　美紀 木下ほうか・相生　恵美	99			1267
10.24	ヒロイン！（大映）	関西テレビ放送＝オフィス・シロウズ	久保田　傑 三原　光尊	三原　光尊	宇井　滋・伊原　剛志 中川・安奈・上野　みさ	100			1268
10.24	LEGAL ALIENS リーガル・エイリアン（ゼアリズ）		辻谷　昭則［共同脚本 カーミット・カーベル］	辻谷　昭則	マイケル・ネイシュタット ジュリー・ドレフュス クリス・ペブラー キャサリーン小林	88			1268
10.31	踊る大捜査線 THE MOVIE 湾岸署史上最悪の3日間！（東宝）	フジテレビジョン	君塚　良一	本広　克行	織田　裕二・柳葉　敏郎 深津絵里・いかりや長介	119		1269（特）	1269
10.31	サソリ 女囚701号（ビジョンスギモト）	ビジョンスギモト	後藤　大輔	新村　良二	小松　千春・木内　美穂 坂上　忍・横須賀彩美	90			1268
10.31	サソリ 殺す天使（ビジョンスギモト）	ビジョンスギモト	後藤　大輔	新村　良二	小松　千春・唐澤　寿 坂上　忍・佐々木　愁	83			

（成人映画）

封切日	題名（配給会社）	製作所	脚本（脚色）	監督（監修）	出演	上映時間	紹介	批評	グラビア
10.9	女弁護士 強制愛撫（エクセス・フィルム）	ワン・ワン企画	関　良平	関　良平	冴島　奈緒・幸野　賢一 友松タケホ・相沢　知美	60			
10.9	暴行診察室 ―白衣なぶり―（エクセス・フィルム）	サカエ企画	岡　輝男	新田　栄	青山　りか・杉本まこと 風間今日子・丘　尚輝	60			
10.9	悩殺占い 巨乳摩擦（大蔵映画）	小川企画プロダクション	（水谷一二三）	小川　和久	杉本まこと・風間今日子 樽田オンまゆら・睦月影郎	60			
10.20	未亡人の性 しっぽり濡れて（大蔵映画）	多呂プロ	内藤　忠司	荒木　太郎	西藤　尚・今泉　浩一 坂本Q子・しのざきさとみ	60			

＊成人映画10月分残りについては次号で紹介します

Digitized by Google

外国映画紹介

製作国＊製作会社　配給会社　製作年　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／CS＝シネスコ　D＝ドルビー・ステレオ　U＝ウルトラ・ステレオ　DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル　DTS＝デジタル・シアター・システム　SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド　SR＝スペクタクル・レコーディング　上映時間　EP＝製作総指揮（エグゼクティヴ・プロデューサー）

アウト・オブ・サイト■アンツ■キャメロット■ダイヤルM■ダライ・ラマ
トゥルーマン・ショー■フラワーズ・オブ・シャンハイ■モンタナの風に吹かれて

アウト・オブ・サイト

Out of Sight〔もう最高〕

米＊ジャージー・フィルムズ・プロ作品（ユニヴァーサル映画提供）UIP配給　98＝98・11・21　C・V・D・DTS／SRD／SDDS／SR　123分　字幕＝菊地浩司

〔STAFF〕監督＝Steven Soderbergh 製作＝Danny DeVito／Michael Shamberg／Stacey Sher　製作総指揮＝Barry Sonnenfeld／John Hardy　原作＝Elmore Leonard　脚本＝Scott Frank　撮影＝Elliot Davis　音楽＝David Holmes　美術＝Gary Frutkoff　編集＝Anne V. Coates　衣装＝Betsy Heimann

〔CAST〕Jack Foley…George Clooney／Karen Sisco…Jennifer Lopez／Chino…Luis Guzman／Lulu…Paul Soileau／Adele…Catherine Keener／Buddy Bragg…Ving Rhames／Marshall Sisco…Dennis Farina／Glenn Michaels…Steve Zahn

〔解説〕「ジャッキー・ブラウン」の原作者エルモア・レナードのコミカルな犯罪小説を「セックスと嘘とビデオテープ」のソダーバーグ監督が映画化した、プロの銀行強盗と女保安官の恋愛を絡めたクライムアクション。製作は「ゲット・ショーティ」のダニー・デヴィート、「フィーリング・ミネソタ」のマイケル・シャンバーグ、「マチルダ」のスティシー・シェール。製作総指揮は「メン・イン・ブラック」のバリー・ソネンフェルドと「セックスと嘘とビデオテープ」ジョン・ハーディ。脚本は「ゲット・ショーティ」でもレナード小説を脚色したスコット・フランク。撮影は『Harvest 3000 Years』（未）のエリオット・デイヴィス。音楽はベルファスト出身のDJデイヴィッド・ホルムズ。編集は「ザ・シークレットサービス」でオスカー候補になったアン・V・コーテス。出演は「ピースメーカー」『ER　緊急救命室』（TV）のジョージ・クルーニー、「Uターン」のジェニファー・ロペス、「パルプ・フィクション」「ミッション・インポッシブル」のヴィンク・レイムス、「ゲット・ショーティ」のデニス・ファリーナ、「ブギー・ナイツ」のドン・チードルほか。

〔略筋〕銃を持たずに銀行を襲うプロの銀行強盗ジャック・フォーリー（ジョージ・クルーニー）は、逃走用の車の故障で運悪くフロリダの刑務所に収監される。ジャックは相棒のバディ（ヴィンク・レイムス）と脱獄し、刑務所内で知り合った株屋のリプリー（アルバート・ブルクッス）が自宅に隠し持つダイヤモンドの原石を盗んで足を洗うと計画をした。が、脱獄しようとしたところを、召喚のため刑務所に立ち寄った連邦保安官のカレン・シスコ（ジェニファー・ロペス）と鉢合わせ。ショットガンでジャックの脱獄を阻止しようとするカレンだが、バディに捕まりジャックとともに車のトランクに押し込められ逃走に付き合うはめに。ジャックとカレンは車のトランクの中で会話するうち互いに好意を抱き始める。カレンはハイウェイで2番目の逃走車を準備していたグレン（スティーヴ・ゼーン）の車に乗せられ、ジャックたちはまんまと逃走に成功。デトロイトへと向った。ジャックを追って来たカレンは、ホテルのバーでジャックと再開し、互いの立場の違いに戸惑いつつも互いに恋に落ちたことを認め、ベッドへ…。元刑務所仲間のスヌーピー・ミラー（ドン・チードル）とともにリプリーの屋敷へ盗みに入るが、スヌーピーの仲間たちのせいで大騒動になり、そこにカレンが現れた。迷いながらもジャックの足を撃ち逮捕するカレンだったが、刑務所へ護送するため2人はもう一度再会する。護送車にはジャックのほかに脱獄のプロも乗っており「9回脱獄した」と自慢する。ジャックたちの会話を聞きながらカレンは意味ありげに微笑むのだった。

アンツ

Antz〔アリ〕

米＊ドリームワークス作品／UIP配給　98＝98・11・14　C・V・DTS・SRD・SDDS・SR　83分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Eric Darnell／Tim Johnson 製作＝Penney Finkelman Cox／Sandra Rabins／Carl Rosendahl 脚本＝Todd Alcott／Chris Weitz／Paul Weitz 音楽＝Harry Gregson-Williams／John Powell 美術＝John Bell 編集＝Stan Webb 録音＝Lance Brown スーパーバイジング・アニメーター＝Raman Hui／Rex Grignon（PDI）

〔声の出演〕Z-4195…Woody Allen／Bala…Sharon Stone／General Mandible…Gene Hackman／Weaver…Sylvester Stallone／Queen…Anne Bancroft／Colonel Cutter…Christopher Walken／Azteca…Jennifer Lopez

Digitized by Google

【解説】フル3DCGアニメーションで描く昆虫のアリが主人公のファンタジーアドベンチャー。監督はMTVやCMの分野でアニメの腕を発揮してきたエリック・ダーネルと、「シンプソンズ　Homer3」のティム・ジョンソン。脚本は「カーテン・コール」のトッド・アルコットとクリス・ウェイツ、ポール・ウェイツ。リード・キャラクター・デザインとスーパーバイジング・アニメーターは香港出身のラマン・ヒュイと、「トイ・ストーリー」に参加したレックス・グリグノンが当たっている。音楽は「ザ・ロック」のハリー・グレグソン・ウイリアムスと「フェイス／オフ」のジョン・バウエル。声の出演は「地球は女で回っている」「ワイルドマン・ブルース」のウディ・アレン、「スフィア」のシャロン・ストーン、「クリムゾン・タイド」のジーン・ハックマン、「大いなる遺産」のアン・バンクロフト、「コップランド」のシルヴェスター・スタローン、「マウス・ハント」のクリストファー・ウォーケンほか。

【略筋】Z（声＝ウディ・アレン）は体力がないのにトンネル工事を強いられている働きアリ。自分の望む道は他にあると信じる夢想家でもある。Zの住むコロニーでは、マンディブル将軍（声＝ジーン・ハックマン）が独裁的に振舞っていた。甘やかされて育った王女バーラ（声＝シャロン・ストーン）はマンディブルと婚約していたが、将軍との結婚など考えたくもなかった。バーラはお忍びでバーへ行き、偶然Zと知り合う。バーラに魅せられたZは、親友の兵士アリであるウィーバー（声＝シルヴェスター・スタローン）と入れ替わり兵士として観兵式に出てバーラと再会しようとする。が、Zは精鋭部隊の兵士として白アリ軍団との戦いに駆り出されてしまう。戦いは壮絶なものとなるが、ひょんなことでZだけが生き残り、英雄として祝福される。しかしZが兵士アリでなく働きアリであることがバレてしまい、焦ったZはバーラをさらって逃亡してしまう。Zは勝ち気なバーラと衝突しながらも、幾度のトラブルも乗り越え昆虫の楽園インセクトピア（公園のゴミ箱）にたどり着く。いつしか心を通わせたZとバーラだが、バーラは追手に見付かりコロニーへ戻されてしまう。一方将軍はトンネル開通式の日に働きアリたちをトンネルに閉じ込めて水責めで殺し、独裁国家を作ろうと企んでいた。Zはコロニーへ戻って皆にマンディブルの陰謀を報せ、人柱ならぬアリ柱を作りトンネルから地上へ出ることに成功する。将軍を倒し、真のヒーローとなるとなったZは、バーラと結婚し、自分の望んだ道と思い直し、またコロニーで働きはじめるのだった。

キャメロット

The Magic Sword－Quest for Camelot
（魔法の剣―キャメロットへの探索―）

米＊ワーナー・ブラザース作品／ワーナー・ブラザース映画配給　98＝98・11・14　C・V・SRD／DTS／SDDS　86分　字幕＝石田泰子

〔STAFF〕監督＝Frederik Du Chau　製作＝Dalisa Cooper Cohen　原案＝Jacqueline Feather／David Seidler　脚本＝Kirk De Micco／William Schifrin／　音楽＝Patrick Doyle／David Foster(songs)／Carole Bayer Sager(songs)　美術＝Carol Kiefer Police／J. Michael Spooner　編集＝Stanford C. Allen　衣装＝Steve Pilcher

〔声の出演〕Kayley (voice)…Jessalyn Gilsig／Kayley (singing voice)…Andrea Corr／Garrett (voice)…Cary Elwes／Garrett (singing voice)…Bryan White／Ruber…Gary Oldman／Devon…Eric Idle／Cornwall…Don Rickles／Lady Juliana(voice)…Jane Seymour／Lady Juliana (singing voice)…Celine Dion／King Arthur(voice)…Pierce Brosnan／King Arthur (singing voice)…Steve Perry／Griffin…Bronson Pinchot／Bladebeak…Jaleel White／Sir Lionel…Gabriel Byrne／Merlin…John Gielgud

【解説】英国で語り継がれてきた『アーサー王伝説』が、ひとりの少女の物語として再現されたドラマティック・アニメーション。ベラ・チャップマン著『The King's Damosel』をもとに、ワーナー・ブラザース・フィーチャー・アニメーションが制作する初の劇場用長編アニメ映画。原案はTVでも活躍するデイヴィッド・サイドラーとジャックリーン・フェザー。製作は「顔のない天使」のダリサ・クーパー・コーエン。音楽は「ハムレット」でアカデミー賞候補に挙がったパトリック・ドイルで、過去にグラミー賞を14回獲得しているデイヴィッド・フォスターが楽曲を提供している。声の出演は「ジャックナイフ」のジェサリン・ギルシグ、「アナザー・カントリー」「ツイスター」のケイリー・エルウェス、「フィフス・エレメント」のゲイリー・オールドマン、「ネヴァー・セイ・ダイ」のビアース・ブロスナンほか。また、ケイリーの歌唱部分は「ザ・コミットメンツ」「エビータ」に出演したアンドレア・コーが、ギャレットの歌唱部分は数多くのプラチナ・ディスクを持つカントリー・ミュージックの大スター、ブライアン・ホワイトが担当した。

【略筋】はるか昔、ケルトの地に岩に突き刺さった魔法の剣を抜くことのできるただ一人の男がいた。その男こそキャメロット王国の主であるアーサー王（声＝ピアース・ブロスナン）であった。建国の日に生まれた少女ケイリー（声＝ジェサリン・ギルシグ）は円卓の騎士である父を尊敬していた。ある日、強欲な騎士ルーバー（ゲイリー・オールドマン）がアーサー王に斬りかかり、ケイリーの父はアーサー王をかばって絶命する。父の死を告げに来たアーサー王は、ケイリーの母に「城へ来た時にはいつでも歓迎する」と約束する。ケイリーが成人した時、あのルーバーが再び戻ってきた。大鳥獣グリフォンを操って魔法の剣を奪い、さらにはアーサー王の信頼の厚いケイリーの母をも誘拐する。しかし、魔法の剣は手違いで「禁断の森」へ落ちていた。ケイリーは、一人森へ向かう。そこには人食い植物やドラゴンがひしめいてたが、盲目の騎士ギャレット（声＝ケイリー・エルウェス）がケイリーに救いの手をさしのべた。恐ろしい巨人から剣を取り戻

Digitized by Google

したギャレットとケイリーだが、森を出た直後、ケイリーはルーバーに捕らえられる。それを知ったギャレットは、ケイリーを救うため城へ向かう。魔法の薬で剣を自分の身体と一体化したルーバーは、アーサー王を襲いかかる。ケイリーとギャレットは、ルーバーを挑発して、かつて剣が深く食い込んでいた岩を切らせる。すると、不思議な光が岩を包み、ルーバーは肉体ごと滅び去ってしまった。アーサー王は再び岩から剣を引き抜き、ギャレットとケイリーを円卓の騎士として称える。そして、お互いの愛を確信したギャレットとケイリーは口づけを交わすのだった。

ダイヤルM

A Perfect Murder〔完全なる犯罪〕

米＊コベルソン・エンターテイメント＝ワーナー・ブラザース作品／ワーナー・ブラザース映画配給　98＝98・10・24　C・D・DTS・SDDS　107分　字幕＝大田直子

〔STAFF〕監督＝Andrew Davis　製作＝Arnold Kopelson／Anne Kopelson／Peter MacGregor-Scott／Christopher Mankiewicz　ep＝Stephen Brown　原案＝Frederick Knott　脚本＝Patrick Smith Kelly　撮影＝Dariusz Wolski　音楽＝James Newton Howard　美術＝Philip Rosenberg　編集＝Dov Hoenig／Dennis Virkler　衣装＝Ellen Mirojnick　録音＝Lance Brown

〔CAST〕Steven Taylor…Michael Douglas／Emily Bradford…Gwyneth Paltrow／David Shaw…Viggo Mortensen／Det. Mohamed Karaman…David Suchet／Raquel Martinez…Santa Choudhury／Sandra Bradford…Constance Towers／Det. Bobby Fain…Michael P. Moran／Ambassador Alice Willis…Novella Nelson

〔解説〕アルフレッド・ヒッチコックの傑作スリラー「ダイヤルMを廻せ！」をリメイク、舞台をロンドンからニューヨークに移し、ストーリー、人物設定ともに現代風にアレンジした作品。監督は「チェーン・リアクション」「逃亡者」などを手がけたアンドリュー・デイヴィス。製作は「逃亡者」でデイヴィス監督と組み、17本の作品をアカデミー賞ノミネートに導いたアーノルド&アン・コベルソン夫妻と「バットマン&ロビン　Mr. フリーズの逆襲」のピーター・マクレガー＝スコット、「イレイザー」に出演しているクリストファー・マンキーウィッツ。製作総指揮は「セブン」のスティーヴン・ブラウン。脚本は、本作が映画化第一作目となるパトリック・スミス・ケリー。撮影は「クリムゾン・タイド」のダリウス・ウォルスキー。美術は「オール・ザット・ジャズ」のフィリップ・ローゼンバーグ。衣裳は「フェイス／オフ」、「スターシップ・トゥルーパーズ」のエレン・ミロジニック。出演は野心家の中年男性を演じさせたら天下一品、「ザ・ゲーム」のマイケル・ダグラス、「大いなる遺産」「スライディング・ドア」のグウィネス・パルトロウ、「G・Iジェーン」で鬼教官を演じたヴィゴ・モーテンセンほか。

〔略筋〕莫大な財産を持ち、米国大使の側近として働くエミリー（グウィネス・パルトロウ）は、自分を高価なアクセサリーのように取り扱う実業家の夫であるスティーヴン（マイケル・ダグラス）に愛情が持てなくなり、才能はあるが無名の画家であるデイヴィッド（ヴィゴ・モーテンセン）と人目を忍んで逢引を重ねていた。スティーヴンはすでにふたりの仲を知っており、デイヴィッドが前科者で、まだ露見していない犯罪があることも調べ尽くしてた。破産寸前のスティーヴンは、エミリーを殺して遺産を手にいれるため、デイヴィッドに50万ドルの報酬で妻殺しを依頼する。デイヴィッドは犯罪の露見を恐れてエミリー殺しを承知してしまう。スティーヴンはアリバイを作るためカードクラブに出かけ、夜10時にエミリーを電話口に呼び出しデイヴィッドに強盗を装って殺害させようと計画した。携帯電話から聞こえるエミリーの争う声に計画が成功したと確信したスティーヴンであったが、自宅へ戻ってみると死んでいるのはエミリーではなく、会ったこともない見知らぬの男だった。デイヴィッドも自分で手を下すことができず、他人に殺人を依頼していたのだ。スティーヴンはデイヴィッドにもう一度エミリー殺害を依頼するが、殺害依頼の会話を録音したテープをネタに報酬金をゆすり取られてしまう。怒ったスティーヴンはニューヨークを離れようとするデイヴィッドを列車内で殺害する。スティーヴンが自分を殺そうと企んでいたことに感づいたエミリーは、自宅に戻ったスティーヴンと争い、彼を射殺するが正当防衛だと認められる。三角関係の末、エミリーひとりが生き残ったのだ。

ダライ・ラマ

The Dalai Lama〔ダライ・ラマ〕

中国＊中国中央電視台（CCTV）作品／龍影配給＝98・8・22　C・S　90分

〔STAFF〕監督＝白丹　製作＝任一農／李佐民　顧問＝丹増／李佐民　撮影＝嚴学竹／熊田　録音＝陳衛軍

〔解説〕チベット問題の中国側からの見解を示したドキュメンタリー。数々の映像資料と当時者のインタビューから、チベットの歴史、ダライ・ラマの化身転生者認定からチベット脱出までを描いた中国中央電視台の作品。監督は白丹。製作は任一農と李佐民。撮影は嚴学竹と熊田の二人があたる。録音は陳衛軍。チベットの歴史におけるチベット仏教が貧農を搾取する封建社会の象徴でしかなかったこと、また、清から中華民国にかけての「中国」が、チベットに対していかに影響を与え、現在のダライ・ラマ選定にも中国が関わったかということ、その他により1950年の「チベット解放」を正当化しようとこの映画は試みる。そして、ダライ・ラマが1954年第1回中国人民大会に出席、全国人民代表大会常務委員会副委員長に任命される映像が写され、ここで彼ががいかに歓迎され、かつてあった中国とチベットとの良好な時代を提示する。そして1959年のダライ・ラマのチベット脱出は、1956年のインド訪問での影響が原因であると主張され、ダライ・ラマの人格を評価しつつも、彼はまわりに影響されやすいといった欠点を持つと主張する。

Digitized by Google

トゥルーマン・ショー

The Truman Show〔トゥルーマン・ショー〕

米＊スコット・ルーディン・プロ作品（パラマウント提供）／UIP配給　98＝98・11・14

C・V・DTS・SRD・SR　103分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Peter Weir　製作＝Edward S. Feldman／Andrew Nicool／Scott Rudin／Adam Schroeder　共同製作＝Richard Luke Rothschild　脚本＝Andrew Niccol　撮影＝Peter Bizilou　音楽＝Philip Glass／Burkhart von Dallwitz　美術＝Dennis Gassner　編集＝William M. Anderson／Lee Smith　録音＝Lance Brown　衣装＝Marilyn Matthews

〔CAST〕Truman…Jim Carrey／Meryl…Laura Linney／Marlon…Noah Emmerich／Lauren Garland/Sylvia…Natascha McElhone／Truman's Mother…Holland Taylor／Kirk Burbank…Brian Delate／Christof…Ed Harris

〔解説〕 ある男の生涯が、テレビの人気連続ドラマとして24時間ノンストップ生中継されていた…という異色作。監督は「刑事ジョン・ブック　目撃者」でハリウッドに進出、「いまを生きる」など次々と名作を発表するピーター・ウィアー。製作は「アダムス・ファミリー」などのヒット作を手がけたスコット・ルーディン、「ジャングル・ブック」のエドワード・S・フェルドマン、「ファースト・ワイフ・クラブ」のアダム・シュロエダー。脚本は「ガタカ」で脚本・監督もこなし、本作では製作も兼ねているアンドリュー・ニコル。撮影は「ミシシッピー・バーニング」「ダメージ」のピーター・ビジウ。美術は「バグジー」でオスカー受賞のデニス・ギャスナー。出演は本作で高い評価を受けた「マスク」「ライアーライアー」のジム・キャリー、「目撃」のエド・ハリス、「コンゴ」のローラ・リニー、「サバイビング・ピカソ」のナターシャ・マケルホーン、「コップランド」のノア・エメリッヒほか。

〔略筋〕 周りを海で囲まれ平和な離れ小島の町シーヘブン。ここに住む保険のセールスマン、トゥルーマン・バーバンク（ジム・キャリー）は看護婦でしっかり者の妻メリル（ローラ・リニー）や親友のマーロン（ノア・エメリッヒ）とともに平凡な毎日を送っている。ボート事故で父親を亡くした彼は水恐怖症で島から出たことはなかったが、大学時代に出会った忘れられない女性、ローレン（ナターシャ・マケルホーン）に会うためフィジー島へ行くというささやかな夢があった。ある日、トゥルーマンは、いつもと違う行動を取るとまわりの様子が落ち着かなくなることを発見。不安と疑問がつのり、妻のメリルに怒りをぶつけた末、メリルは家を出て行ってしまう。トゥルーマンは意を決し、地下室で寝ているふりをして海にボートで漕ぎ出して行く。実はトゥルーマンの家族や同僚は俳優で、住む島全体がロケセット、通行人はエキストラという、虚構の世界に生きており、生涯のすべてをテレビ放送されていたのだ。ディレクターの指示で彼の人生はコントロールされてきた。ディレクターのクリストフ（エド・ハリス）と会話を交わし、本当の人生を歩みたいを訴えるトゥルーマン。だが、虚構の世界へ戻るよう説得するクリストフは、装置を使って嵐を起こす。荒れ狂う波をくぐりぬけた果てに、トゥルーマンは虚構の世界＝ロケセットの終端部にたどり着く。そこには外への出口があった。クリストフの呼びかけを無視し、トゥルーマンは出口から出て行く。そしてテレビでその一部始終を見ていた観客たちはトゥルーマンの勇気に拍手を送るのだった。

フラワーズ・オブ・シャンハイ

海上花／Flowers of Shanghai（上海の花）

日本＊松竹＝台湾＊侯孝賢映像製作有限公司作品／松竹富士配給（フィーチャー・フィルム・エンタープライズ提供）　98＝98・10・17

C・V・DSR　121分　字幕＝小坂史子

〔STAFF〕監督／製作総指揮＝侯孝賢（ホウ・シャオシェン）　製作＝楊登魁（ヤン・ダンクイ）／市山尚三　原作＝韓子雲（ハン・チーユン）／張愛玲（チャン・アイリン）　脚本＝朱天文（チュウ・ティンウェン）　撮影＝李屏賓（リー・ピンビン）　音楽＝半野喜弘　美術＝黄文英（ホアン・ウェンイン）　録音＝杜篤之（ドゥ・ドゥージ）　編集＝廖慶松（リャオ・チンソン）

〔CAST〕王＝梁朝偉（トニー・レオン）／小紅＝羽田美智子／翠鳳＝李嘉欣（ミッシェル・リー）／双珠＝劉嘉玲（カリーナ・ラウ）／羅＝高擢（ガオ・ジェ）／恵貞＝魏筱恵（ウェイ・シャオホェイ）／黄＝潘迪華（レベッカ・パン）／双玉＝ファン・シュエン／金花＝伊能静／陶＝徐明（シュ・ミン）／小柳＝張瑞哲（トニー・チャン）

〔解説〕 19世紀末の上海における、清朝末期の高級遊郭で繰り広げられる男と女の愛憎劇を描いた文芸作品。監督は「悲情城市」「憂鬱な楽園」などで独特な映像美学を追究するホウ・シャオシェン。製作はヤン・ダンクイと市山尚三。原作は、ハン・チーユンが1894年に上海の遊郭に関する光景を蘇州語で客観的に描き出した奇書『海上花』を、中国文学の代表的女流作家チャン・アイリンが北京語に訳し、中国全土に一大ブームを起こした。脚本は「冬冬の夏休み」などでホウ監督と手を組むチュウ・ティンウェン。撮影は「女人、四十」のリー・ピンビン。音楽はジャパニーズ・ヒップホップの雄である半野喜弘で、これが映画音楽第一作目となる。美術は「好男好女」

映画プログラム通販！
パンフレットリスト
（プログラムリスト）
雑誌リスト
テレホンカードリスト
ポスターリスト
スチールリスト
チラシリスト
通信販売のみしています　営業時間 12時～18時
映通社

パンフレット即売会
12/1(火)～12/17(木)
津田沼パルコ
催事場
パンフ・ポスター
チラシ3万点以上
展示即売

Digitized by Google

のホァン・ウェンイン。録音は「カップルズ」のドゥ・ドゥージ。編集は「好男好女」のリャオ・チンソン。出演は「ブエノスアイレス」のトニー・レオン、「RAMPO」の羽田美智子、「天使の涙」のミッシェル・リー、「楽園の瑕」のカリーナ・ラウ、「憂鬱の楽園」のガオ・ジェほか。なお、本作は第51回カンヌ国際映画祭に正式出品された。

【略筋】清朝末期の上海。遊郭では高級官僚達が毎日のように宴を催している。王（トニー・レオン）は遊女小紅（羽田美智子）とは5年来のなじみであるが、惠貞（ウェイ・シャオホェイ）の元へも通い始めた。泣きやまない小紅を王は懸命になだめるが、対処しきれずただ戸惑うばかり。洪（ルオ・ツァイアル）の馴染みの遊女双珠（カリーナ・ラウ）は置屋の女将の実の娘であり、他の遊女らの相談相手。羅（ガオ・ジェ）の馴染みの遊女である翠鳳（ミッシェル・リー）は、借金しては男に貢ぐ女将、黄（レベッカ・パン）を軽蔑し、独立を願う。王が訪れる度に沈み込み不機嫌な小紅も、そんな自分自身を持て余し気味。必死になだめる王ではあるが、婚礼にも応じない小紅の真意がいまだ掴み切れない。ある宴席で泥酔した王が不意に小紅の部屋を訪れると、寝室には京劇役者の小柳（トニー・チャン）がいた。王は激怒し部屋の物を辺り構わず壊していく。それらは全て王からの贈り物であった。そんなある日、双珠の置屋の新入り双玉（ファン・シュエン）は、富豪の甥淑人（サイモン・チャン）の正妻として収まる方向に向かっていたが、それは彼のただの口約束であった。ショックを受けた双玉は、淑人の「夫婦になれないなら一緒に死のう」との言葉を信じ心中を図る。が、淑人は正体を現して逃げようとし、双玉に罵声を浴びせられる。事態の収拾を相談する淑人に、洪は独立資金と結婚持参金との名目で、淑人の家が双玉に賠償金を支払うよう提案する。時が過ぎ、広州に栄転が決まった王は、なじみのいなくなった小紅の噂を聞く。小紅を見限り惠貞を妾に迎えた王は、自分の甥とも関係をもった惠貞を追い出していた。王の顔に昇進の喜びはなく、悲しげに黙り込むのみであった。そして、小さな家に小柳と越した小紅は、何を思うのか、静かな微笑をたたえながら水パイプの掃除をしているのだった。

モンタナの風に抱かれて

The Horse Whisperer（馬に囁く人）

米＊ワイルドウッド・エンタープライズ作品（タッチストーン・ピクチャーズ提供）／ブエナ ビスタ インターナショナル ジャパン配給 98＝98・10・17 C・CS・DSD 167分

字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Robert Redford 製作＝Robert Redford／Patrick Markey w.p.＝Rachel Pfeffer 脚本＝Eric Roth／Richard LaGravenese 原作＝Nicholas Evans 撮影＝Robert Richardson 音楽＝Thomas Newman 美術＝Jon Hutman 編集＝Tom Rolf 衣裳＝Judy L.Ruskin

〔CAST〕Tom Booker…Robert Redford／Annie MacLean…Kristin Scott Thomas／Robert MacLean…Sam Neill／Diane Booker…Dianne Wiest／Grace MacLean…Scarlett Johansson／Frank Booker…Chris Cooper／Liz Hammond…Cherry Jones／Joe Booker…Ty Hillman

【解説】雄大なモンタナの大自然を舞台に、傷ついた少女と馬の癒しと再生、男と女の切ない愛の交わりを、美しい映像で綴っていくドラマ。監督・製作・主演はハリウッドを代表する名優ロバート・レッドフォード。「クイズ・ショウ」に続き、これが監督第5作目となる。共同製作はパトリック・マーキー。製作総指揮はレイチェル・フェファー。脚本は「ポストマン」のエリック・ロスと、「フィッシャー・キング」「マディソン群の橋」のリチャード・ラグラヴェニーズ。原作はニコラス・エヴァンスのベストセラー小説。撮影はオリヴァー・ストーン作品で知られるロバート・リチャードソン。音楽は「ショーシャンクの空に」のトーマス・ニューマン。美術はジョン・ハットマン。編集はトム・ロルフ。衣裳はジュディ・L・ラスキン。共演は「インングリッシュ・ペイシェント」のクリスティン・スコット・トーマス、「ホーム・アローン3」のスカーレット・ヨハンソン、「スノーホワイト」のサム・ニール、「バードケージ」のダイアン・ウィースト、「大いなる遺産」のクリス・クーパーほか。

【略筋】13歳の少女グレース（スカーレット・ヨハンソン）は乗馬中に巻き込まれた事故で親友と右足を失い、人生に深く絶望していた。また彼女の愛馬ピルグリムも、事故のショックで人間になつかない暴れ馬になっていた。ニューヨークで雑誌編集長として活躍しているグレースの母親アニー（クリスティン・スコット・トーマス）は、娘の心を回復させるにはピルグリムの全快が必要だと考え、モンタナで馬専門のクリニックを開業しているトム・ブッカー（ロバート・レッドフォード）の元へ、弁護士の夫ロバート（サム・ニール）を一人ニューヨークに残し、グレースとピルグリムを連れてトレーラーで旅立った。トムはアニーの強引な態度に呆れるが、グレースが協力するならばという条件つきでピルグリムの治療を引き受ける。トムの自然に逆らわない優しく誠実な治療法により、ピルグリムは徐々に回復し、グレースも少しずつ笑顔を取り戻していった。そしてアニーはトムに、またトムもアニーに、心惹かれはじめる。そんな時、アニーに会社から解雇命令が届いた。トムに恋していたアニーは、意外にも全くショックはなかった。あるキャンプの夜、二人はキスを交わすことになる。だがしばらくして、ロバートがニューヨークからやって来た。ロバートはすっかり元気になった娘の姿を見て、トムに心から感謝するが、アニーはそんな夫を見ているのがつらかった。やがてピルグリムはグレースを背に乗せ、歩けるまでに回復する。そろそろモンタナを去る時が来たようだ。ロバートはアニーのトムに対する感情に気づいており、すべてを彼女の決断にまかせることにした。アニーは悩んだあげく、恋心を引きずったまま、それでも夫と共にニューヨークに帰っていくのだった。

Digitized by Google

ガクノススメ

第一〇九話

台湾ドキュメンタリー映画祭への旅（後篇）

牧野　守

（承前）国家電影資料館を訪問して、沢山の映画文献がここ十年で集中的に刊行されていることを確認出来たが、特に注目したのは、戦前の日本統治下に於ける台湾映画研究が本格的に取り組まれていることであった。つまり以前の台湾映画史では国民党政権の意向を反映して、戦前の草創期から終戦に至る期間は大陸での上海や重慶などでの映画情況と、その台湾における影響が主体的な地位を占めていたのである。それが日本統治下の映画政策や、製作、配給、上映、受容といった歴史的事実が実証的に調査されてきていて、今後の日本映画史研究上でも、その空白を埋める貴重な資料を数多く見い出すことが出来た。さらに戦後から今日に到る五十年の歩みを年鑑などの基本文献を始め、当館刊行の各種データ、定期刊行物など、この機会に収集した台湾映画に関する書誌はダンボール箱二箱分に達した。海外の翻訳書、特に小津安二郎のシナリオや小川紳介の理論書など、日本のものも目立ったが省く。こうした選択の作業のために村山さんとわたしは翌朝も当館を再度訪れ、洪さんのサポートで半日掛りで資料閲覧に没頭。洪さんからは、この半年たらずで政府機関所蔵の総督府時代の映画雑誌などを発掘し、そのコピーを見せて頂いたが、より書誌的な裏付けによる歴史認識の分析が進んでいる手応えが感じられた。また洪さんの紹介で台湾大のキャンパス近くの台湾専門の書店、というより台湾の綜合的な文化センターとも称すべき処を訪ねた。書籍、雑誌は勿論、ビデオテープやCDなどの音楽、先住民族の工芸品などを販売していて、ここでも総督府時代の復刻版を数種入手。その日は村山さんとわたしの二人だけであったが、川村君もわたしたちの話に興味を抱き、翌日は三人でここを再度訪れ、その都度両手に抱え切れない冊数を購入。これに映画祭資料を纏めて持ち帰ることになるのだが、二人の協力で無事これらの資料は持ち帰ることが出来た。結局、黄館長の好意で寄贈頂いた資料館分は別途の船便で送って貰う手配となった。自分自身でも信じられない様なスムーズな展開になって、わたしにとって今回訪台の目的の半分は果したような充実感に満たされたが、同行の二人は映画祭本来の役目、つまり上映プログラムの追い掛けで目の色を変えていた。やはり、この機会を逃すとチャンスを失うことになる台湾ドキュメンタリーのレトロスペクティブ部門が目当である。それぞれ見たい作品の時間表を調節して、在台期間の四日間のプログラムを作成して行動するのだが（村山さんは最終日まで残ったが）、陳耀折の「劉必嫁」はスケジュールが無理で遂に断念する。いずれの作品も台湾の現状を反映した歴史的証言として、特にここ十年の多様な作品のテーマの変化には目を奪われたが、その反面、今回の台湾に於けるドキュメンタリー映画の製作上の困難さを垣間見る印象を抱く。時には同行の二人と共同行動をとったり、また別々になったりしながら、慌しい食事時間に顔を合わせて情報を交換したり、今見た作品の批評を語った。特にわたしは夜のフォーラムはマークしていて、二十三日の『記録映画製作』（パネラー　ユ・リュズウスキー、アート・ファロネン、フェン・ヤン、川口肇）二十四日の『ドキュメンタリー映画による異文化交流』（パネラー　メリック・リー、ダン・アトザィア、マリク・ジョンブロッド、スジョー・シン、アイリーン・ルーズィン）に参加した。このシンポジウムを契機に、昨年の山形ではマークしていなかった川口作品「位相」を見ることになった。それは川口の発言で、彼は実験映画作家でドキュメンタリー映画とは必ずしも軌道を一つにしていないと考えていると自己分析したことと関連している。「位相」の上映会場には沢山の若い観客が押しかけ、上映後の討論も熱気が感じられたが、やはり日本の実験映画に興味が集中する。わたしもその後、予定を変更して川口監督と長時間に話し合うことが出来た。実は昨年の山形映画祭の日本部門の八〇年代のテーマが〝集団製作から個人作家、実験映画〟であって、そのことに強い関心があったからである。日本ではすれ違いになっていても、この様な異郷で若い作家と特別な時間を持てるというのも、国際的なイベントならではの効用であろう。

村山さんを残し、わたしたち二人は閉会を待たずして帰国。日を置かずして洪さんに依頼しておいた映画祭事務局発表のデータが送られてきた。入場総数は一万七千人、ほぼ会場の収容力の一〇〇％に近い。そのうち学生が五〇％、一般が三〇％、映画関係者十五％、ゲストが五％、すべて入場料は無料であるのも珍しい。観客調査によると満足度は六〇％に達した。このイベントに活躍したボランティアは学生を中心に三〇人、こうして第一回は無事に終了した。コンペのグランプリは映画部門がロシアのアンドレ・オシポフ監督の「声」、ビデオ部門ではベルギーのマルセ・ヘンリー監督の「スターリン時代の映像」などでほかに日本からの出品「ナージャの村」（本橋成一監督）にNETPACの特別賞が与えられた。滞在中は連日ホテルに戻るのが12時過ぎで、同行二人は3時、4時が常であった。しかしこの充実感は残念ながら言葉で表すことが出来ない。

Digitized by Google

今号の筆者紹介

（　）は掲載ページ数

進藤良彦　ライター。12月からスカイパーフェクTV！761ch.で、バラエティ番組の演出をやることになりました。（15）

川村章子　ライター。楽しみにしていたG・クルーニーの記者会見の日に何と風邪でダウン。本当についてない……。（18）

野村正昭　映画評論家。ぴあ出口調査隊に捕まっては会社員、公務員、果ては学生と職業を詐称している今日この頃。（20）

斎藤芳子　ライター。「ワンダフルライフ」を観て感動。私の人生の〝一番大切な思い出〟はこれから作りたい。（21）

金澤誠　「鮫肌男と桃尻女」は、原作と違った面白さで、かなり好き。特に若人あきらの怪演には、大笑いした。（28）

塩田時敏　映画評論家。久々シッチェスカタルーニャ映画祭に参加。&祝ハージカイテルズ、キネ旬デビュー！（30）

的田也寸志　フリー。一体いつになったら抜けられるのかと悩むくらい、いまだ「ナデシコ」にハマってます。（36）

石原郁子　映画評論家。「ラブ・ゴーゴー」「パパラッチ」の非美青年のほうの味わいにハマッてます。（37）

森直人　文筆仕事。最近、左目の下あたりが時々ピクピクするのである。なぜであろうか。（38）

亀夕起夫　ライター。ガキの頃、関光夫さんのラジオ番組『スクリーン・ミュージック』、よく聴いてました。合掌。（43）

佐藤友紀　フリーライター。N・キッドマン、クアン・グレンが全裸で演じた舞台は噂通り高水準。大したもんだ！（54）

北川れい子　映画評論家。3時間の長々作「ジョー・ブラックをよろしく」。よろしくと言われても長すぎる。（56）

細越麟太郎　久しぶりに「現金に手を出すな」を銀幕で見て気を失いそうな感動だった。ありがとう、ル・シネマ！（78）

金原由佳　映画ライター。P・グリーナウェイ&ワダエミさんによるオペラ『K・コロンブス』を鑑賞してきました。（82）

おかだえみこ　アニメ研究家。梅川敏明初監督記録映画「鯨捕りの海」は、沿岸捕鯨・調査捕鯨を追った力作です。（88）

大和晶　映画評論家。新百合ヶ丘でツァイ・ミンリャンにインタビュー。隣には勿論リー・カンションが……。（90）

浅野潤　映画評論家。嵐山での会のあと常寂光寺を訪ねた。「時雨の記」の美しい紅葉を見たせいだが、素直に感動。（94）

大城英司　俳優。矢城潤一郎監督のデビュー作「ある探偵の憂鬱」で初主演を果たしました。（94）

永野寿彦　シネマ・イラストライター。「踊る」がマリオン初日記録更新。「踊る」応援団としてはうれしい驚き！（98）

田中千世子　映画評論家。来日した伊の批評家ジャコモ・ガンベッティ氏と歓談。氏は新藤兼人監督と会い、大感激。（103）

宇田川清一　映画評論家。日本版『RENT』はオリジナル版には遠く及ばないものの大健闘してました。（106）

諏訪敦彦　映画監督。新作「M／OTHER」仕上げ作業中。ロブ・ニルソンのワークショップをアシスト予定。（112）

大場正明　評論家。益子の秋の陶器市に行ってきた。安くてもお気に入りの器に盛った料理はやっぱり旨い。（114）

村川英　映画評論家。ロメール「恋の秋」に乾杯。巨匠の晩年はブレッソンといい、身辺雑記を映画的豊かさで見せる。（118）

日野康一　映画評論家。東京新聞で百回連載中の『映像20世紀』は60回を超えた。原則として日曜、月曜日朝刊。（133）

沢田としき　イラストレーター。ラピュタ阿佐ヶ谷へユーリー・ノルシュテインのアニメを観に行こうと思ってます。（139）

立川志らく　落語家。12月16日18時30分より、独演会「第50回スペシャル・志らくのピン」を国立演芸場で。（143）

田口トモロヲ　俳優。大杉漣さんとの〝バージー・カイテルズ〟、楽しく初仕事！皆さん、ありがとうございましたっ!!（146）

芝山幹郎　翻訳家。野球の季節はしばし休息。欧州サッカーを横目でにらみながら、長篇の翻訳をぼちぼちの日々。（148）

田沼雄一　映画評論家。『なにさまっ』『じんべえ』『殴る女』『タブロイド』日曜～水曜のドラマが楽しいです。（150）

和田誠　イラストレーター。三谷幸喜『今夜、宇宙の片隅で』のシナリオが本になります。わたくしが装丁担当。（153）

三谷幸喜　ミス・マープルことJ・ヒックソン逝去。ホームズのJ・ブレッドも亡くなったし、ポアロは大丈夫か。（153）

林加奈子　映画祭コーディネーター、在香港。香港映画も世界の映画祭へというおせっかいな野望が……。（159）

濱口幸一　10月19日、バスター・キートン未亡人エレノアさんが、亡夫と同じ肺癌にて逝去。ご冥福をお祈り致します。（163）

井口健二　SF映画評論家。雨中のJリーグ応援も醍醐味だが、PK戦まで4時間立ち通しはちょっときつかった。（165）

吉武美知子　中田英寿HPの『TAXi』が面白かった。仏語も耳障りじゃなかった」という投書に、色々考え込む。（167）

暉峻創三　映画評論家。東京国際映画祭では、マニラトナムがキュウリの漬物が好きであることを発見。（168）

竹入栄二郎　興行通信記者。第11回TIFF。北京旅行。師走が迫るのにシネコンの開場相次ぎ助けてくれー。（176）

内田達夫　シネマライター。休みが欲しいとボヤいてる内にTIFFに呑み込まれ、気づけば年末進行。辛すぎる。（177）

大高宏雄　映画記者。11月29日TAMA映画祭で司会。30日、12月1日夜NHKラジオで座談会。見て、聴いて下さい。（178）

井上一馬　エッセイスト。「メリーに首ったけ」の話を、会う人ごとにしている毎日です。（182）

渡辺浩　映像評論家。ミッチェルNCキャメラが、小道具に使われているのを見て動体保存はできないものかと思う。（184）

新藤純子　映画評論家。夭逝のピアニスト、ウィリアム・カペルのCD全集発売。

Digitized by Google

ピアノ愛好家はぜひご一聴を。（186）

秋本鉄次　映画評論家。競馬は秋のGIシーズン。初っ端の秋華賞万馬券を取り〝秋は秋本の季節〟と鼻息荒いが……。（187）

鬼塚大輔　勤務先の静岡英和短大で12／3に河井真也プロデューサーの特別講座あり。☎054・261・9201へ。（187）

村岡良昭　ファンタ「エクソシスト」。幻の〝スパイダー・ウォーク〟を観られて感激。そこで出逢ったN嬢にも。（187）

切通理作　文筆業。小中千昭著『lain』シナリオ集（ソニー・マガジンズ）に解説を書きました。（191）

渡部実　映画評論家。A・ジャリリ監督の「ダンス・オブ・ダスト」は子どもが神であることを描き感動した。（194）

大森さわこ　映画評論家。脚本の翻訳『ベルベット・ゴールドマイン／ストーリー・ブック』は11月末刊行。（196）

田中眞澄　六分の侠気。東京国際映画祭では映画的辺境とされていた国々の映画だけ見る偏狭スケジュール。（197）

水民玉蘭　ライター。来年キネ旬より『富野由悠季全仕事』という本を出します。よろしくお願いします。（200）

関根忠郎　無職渡世。昨年12月に東映を定年。窮々自適の一年を楽しみ来年からフリーでシゴトひと筋!?　乞仕事。（204）

西脇英夫　映画評論家。久しぶりの深作欣二監督作品「おもちゃ」（東映配給）、堪能しました。（205）

池田敏　ライター。年末年始特番の仕事（出演ではありません）で東京国際映画祭には一度も行けない？　つらい。（206）

豊崎岳彦　売文家。紅葉の始まった長野・車山高原にいそいそ出かけて久々にいい空気を吸う。生き返りました。（207）

杉原賢彦　サイバージャーナリスト。東京ファンタのインド映画3本立が圧巻。「LLDJ」が超イケました。（208）

武市憲二　TVプロデューサー。稀代の逃げ馬サイレンススズカが天皇賞の舞台で戦死。ケーキを貪り涙する。（209）

賀来卓人　出戻り文筆家。諸般の事情で、東京へリターン決定。名古屋の関係者の皆様、お世話になりました。（210）

磯田勉　すかんぴんウォーカー。森卓也氏の『映画この話したっけ』読了。映画とアニメに興味ある人、必読。（212）

吉川明利　タワーレコード渋谷店勤務。毎年棚卸しと重なる東京国際映画祭。今年は満足に通えませんでした。残念。（213）

丸山尚輝　ライター。久々に友人とカラオケに。彼らが酔って寝ているのをいいことに歌いまくってしまった。（214）

望月美寿　ライター。金城武の「アンナ・マデリーナ」は、三谷幸喜さんの『今夜、宇宙の片隅で』に途中までそっくり。（215）

中村勝則　シネマライター。天皇賞（秋）でのサイレンススズカの衝撃的な最後に涙。心よりご冥福お祈りします。（217）

米田由美　田舎暮らし実行中ライター。もともと稲垣吾郎ファンのわたしだが、今秋の『ソムリエ』は特にイイ！（218）

弓家保則　役者＆ライターetc。〝東京ファンタまんがまつり〟を見た。久しぶりに童心に帰って楽しめた。（219）

牧野守　日本映画史研究。10月6日、早稲田大国際会議場のドナルド・キーン氏特別講演（近松と私）に出席。（229）

キネマ旬報
KINEJUN

—最新情報から
作品研究まで—

映画ファンの
ための総合誌！

毎月5日・20日発売

◆年極購読のご案内◆

●月2回発行のため、忙しくて店頭で買えない方、近くに本屋のない方に毎号確実にお手もとへお届けする〝年極購読〟をおすすめします。お申し込みは本誌貼り込みの振替用紙をご利用下さい。

特典　小社発行の毎誌・書籍のご注文の送料は当方で負担します（代理部扱いのプログラム、書籍、ファイル等は除きます。ご注文の際には必ず会員番号をご明記下さい。）

購読料金

◇6カ月　12冊送付
……9,840円

◇1カ年　24冊送付
……19,680円

Digitized by Google

読売新聞北海道支社発刊40周年記念「チェリビタッケの庭」特別上映会

生の音をこそ大切にし、演奏の録音を頑なに拒み続けた伝説の指揮者セルジュ・チェリビタッケ。96年84歳で亡くなった彼の生前の姿を、息子で映画監督のイオアンが映像に残した。

ミュンヘンフィルとのリハーサル風景や学生への講義などに見える厳しい表情と別荘の庭園で犬と戯れる穏やかな眼差し、圧倒的なブルックナー第9番のコンサート、信奉する仏教について語る姿など、息子の目で追うチェリビタッケの素顔、ひとつひとつの場面が、彼の音楽観、世界観を伝える。

一人の人間の生き方に、しんと深い感動をあたえられる。

セルジュ・チェリビタッケ

〈旭川公開堂〉
12月4日（金）
〈函館芸術ホール〉
12月10日（木）
〈札幌教育文化会館〉
12月18日（金）
〈釧路生涯学習センター〉
12月22日（火）
時間＝18時
料金＝2000円
問合せ＝011・222・4568

関東

■第4回アート・ドキュメンタリー映画祭

上映作品＝A「ルー・リード：ロックンロール・ハート」B「ピエール&ジル：ラブ・ストーリー」「ボーイ・ジョージの肖像画」C「KAWAMATA PROJECTS BY GILLES COUDERT」「椅子の回廊」「椅子たちの旅」「トランスフェール」D「エンター・アキレス」「ストレンジ・フィッシュ」E「ジェルジ・リゲティ」F「ポール・オースター」「ジョン・ガリアーノ」G「KAKIBAKA：黒田征太郎」「パナマレンコ」「田中敦子：もうひとつの具体」

11月28日（土）①B②E③F④C⑤G⑥A
11月29日（日）①D②〈川俣正×ジル・クデールトーク〉③C④A⑤B⑥F
11月30日（月）①G②E③D④C⑤F⑥B
12月1日（火）①F②A③B④E⑤D⑥G
12月2日（水）①D②C③F④A⑤G⑥E
12月3日（木）①B②E③G④C⑤A⑥D
12月4日（金）①D②A③F④E⑤C⑥B
12月5日（土）①F②〈桜沢エリカ×生駒芳子トーク〉③B④C⑤〈町田康×石井聰互トーク〉⑥A
12月6日（日）①F②E③B④C⑤G⑥D
時間＝①12時②14時③15時30分④17時30分⑤19時⑥21時
料金＝1500円／学生1300円シニア1000円／3回券3600円（前）1300円／3回券3200円）／トークショー1000円
会場＝ユーロスペース
問合せ＝03・3461・0211

■TAMA CINEMA FORUM

〈第1会場・多摩市立関戸公民館ホール〉
11月21日（土）〈オープニング〉12時「愛を乞う人」12時10分〈平山秀幸監督×原田美枝子（女優）×北川れい子（映画評論家）トークショー〉14時40分「恋愛小説家」15時25分「HANA－BI」18時
11月22日（日）〈オープニング〉10時50分「グッド・ウィル・ハンティング」11時〈おすぎのシネマレクチュア〉13時30分「ビヨンド・サイレンス」15時10分「チェイシング・エイミー」17時25分
11月23日（月）「SF サムライ・フィクション」11時「アンラッキー・モンキー」13時20分〈シンポジウム〉14時30分「リング」16時05分「らせん」18時
11月25日（水）〈オープニング〉13時20分「盲獣」13時30分「妻は告白する」15時15分「しとやかな獣」17時20分「黒い十人の女」19時20分
11月26日（木）〈オープニング〉13時20分「しとやかな獣」13時30分「黒い十人の女」15時30分「盲獣」17時40分「妻は告白する」19時30分
11月27日（金）〈オープニング〉13時10分「ハムレット」13時20分「英国万歳！」18時10分
11月28日（土）〈オープニング〉12時「ブル・モンティ」12時10分「ブラスー」14時10分「キャリア・ガールズ」16時20分
11月29日（日）〈オープニング〉11時「普通じゃない」11時10分「ジャッキー・ブラウン」13時20分「オースティン・パワーズ」16時20分

〈第2会場・パルテノン多摩大ホール〉
11月28日（土）「ディープ・インパクト」11時「仮面の男」13時30分「007／トゥモロー・ネバー・ダイ」16時05分「ディープ・インパクト」18時30分
11月29日（日）「もののけ姫」10時「ポケット・モンスター ミュウツーの逆襲」12時45分「アンドロメディア」14時45分「もののけ姫」17時

〈第3会場・パルテノン多摩小ホール〉
11月27日（金）「太陽を盗んだ男」13時30分「幻の湖」16時20分〈水野晴郎〉19時30分「シベリア超特急」20時
11月28日（土）「この命踊りに捧げて」10時〈松岡環（シネマアジア代表）トーク『マサラ・ムービーの魅力ときらめくスターたち』〉13時「ボンベイ」13時55分「ラジュー出世する」16時40分
11月29日（日）「不夜城」11時「がんばっていきまっしょい」13時30分〈シンポジウム『ボーダレス時代の映画製作・配給システム』堀越謙三（ユーロスペース）×李鳳宇（シネカノン）×枡井省志（アルタミラ・ピクチャーズ）×大高宏雄（興行評論家）〉15時50分「犬、走る／DOG RACE」17時30分

〈第4会場・多摩市立公民館多目的ホール（ベイブ永山）〉
11月21日（土）「イみてーしょん、インテリあ」「灼熱のドッチボール」「走るぜ」12時「メロデ～ Melodies」14時10分「この窓は君のもの」16時10分〈古厩智之監督×風間志織監督トーク〉18時「冬の河童」19時10分
11月22日（日）「惜しみなく愛は奪ふ」「男☆青春伝説」12時「きままちゃんはあんたたちじゃないからのぼるのぼる」13時50分「セ・ブ・ン・ティーン」15時10分〈松梨智子（女優）〉16時40分「流れ者図鑑」17時40分
11月23日（月）「すきなんやこの町が」12時「新宿路上TV」「そこに街があった」14時15分「家族ケチャップ」15時30分「由美香」16時20分「神様の愛い奴（成人指定）」18時25分
料金＝第1会場～第3会場一般1400円／小人800円（前）一般1200円／小人700円）、第4会場一般1000円／小人800円（前）一般800円／小人700円）
問合せ＝042・337・6661

■ミュージカルバックステージ講座

12月12日（土）
講師＝三ツ矢雄二（声優・演出家）、樋口智恵子（声優）
※講座終了後、講師のお二人を囲んでの記念撮影会、サインの抽選有。
時間＝18時

Digitized by Google

料金＝3500円（定員40名）
会場＝池袋コミュニティ・カレッジ
問合せ＝03・3988・9281
■ジェラール・フィリップ映画祭
〈テアトル新宿〉
11月21日（土）～23日（月）
「すべての道はローマへ」
11月24日（火）～27日（金）
「肉体の悪魔」
※25日（水）16時30分から「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」の特別上映とトークショー有
11月28日（土）～12月4日（金）
「白痴」
12月5日（土）～11日（金）
「夜の騎士道」
問合せ＝03・3352・1846
〈キネカ大森〉
11月21日（土）～27日（金）
「赤と黒」「愛人ジュリエット」
11月28日（土）～12月4日（金）
「モンパルナスの灯」「すべての道はローマへ」
※12月4日（金）13時30分「ティル・オイレンシュピーゲルの冒険」特別上映
トークショー有。
12月5日（土）～11日（金）
「肉体の悪魔」「白痴」
問合せ＝03・3762・6000
■川崎市市民ミュージアム
〈アラヴィンダン映画展〉
11月28日（土）①「サハジャ」「黄金のシーター」②「サーカス」
11月29日（日）①「魔法使いのおじいさん」②「エスタッパン」
12月5日（土）①「黄昏」②「オリダット・あるところで」
12月6日（日）①「追われた人々」②「黄金のシーター」
時間＝①13時30分②16時
料金＝大人500円／小中生380円
問合せ＝044・754・4500
■無声映画鑑賞会
〈甦るあの頃、想い出の青春スター特集！〉
11月26日（木）「緑の騎手」「岐路に立ちて」「波浮の港」
弁士＝澤登翠
時間＝18時30分
料金＝1800円／学生1600円（㊍1500円）
会場＝門仲天井ホール
問合せ＝03・3605・9981
■BOX東中野レイトショー
〈ネオ・アヴァンギャルド〉
11月21日（土）～12月4日（金）
「猫耳」
時間＝21時20分
料金＝1500円（㊍1200円）
問合せ＝03・5389・6680
■青山ブックセンター・サイン会
〈平田弘史サイン会〉
12月6日（日）15時30分
※最新刊『平田弘史～傑作選』（／サリュート出版刊）をお買い上げ先着50名に整理券配布。
会場＝青山本店
〈韮沢靖サイン会＋原画・フィギュア展〉
12月13日（日）15時30分
会場＝青山本店
〈寺田克也サイン会〉
12月19日（土）15時30分
※最新刊『西遊奇伝・大猿王』（／集英社刊）お買い上げ先着100名に整理券配布。
会場＝青山本店
12月21日（月）18時30分
※『西遊奇伝・大猿王』お買い上げ150名に整理券配布。
会場＝ルミネ2店
問合せ＝青山本店03・5485・5511、ルミネ2店03・3340・2420
■『KON』刊行記念・市川崑トークショー
12月20日（日）14時
トークゲスト＝森遊机
会場＝青山ブックセンター本店内、読売カルチャーサロン青山
問合せ＝03・5485・5513
■フレデリック・ワイズマン映画祭
11月27日（金）「チチカット・フォーリーズ」12時30分「高校」14時30分「法と秩序」16時「モデル」18時
11月28日（土）「病院」11時「福祉」13時「軍事演習」16時「ストア」18時30分
11月29日（日）「競馬場」11時「聴覚障害」13時30分「パブリック・ハウジング」16時45分
12月4日（金）「臨死」12時30分
12月5日（土）「動物園」11時「バレエ」14時「チチカット・フォーリーズ」18時30分
12月6日（日）「法と秩序」11時「福祉」13時30分「モデル」17時
料金＝1回券1300円／7回券8000円（㊍1回券1000円／7回券6000円）
会場＝横浜美術館
問合せ＝03・5562・4422

甲信越

■第10回清水映画祭
上映作品＝「挑戦～この檜に手をそえて」「哀愁花火」「モスクワ・天使のいない夜」「女優マルキーズ」「愛の地獄」「いちばん美しい年齢」「ポストマン・ブルース」「アートフル・ドジャ

キネマ旬報社の本

香港映画で学ぶ広東語・第二弾！
『香港電影的広東語 續集』
名作・名シーン・名セリフ集
陳敏儀著／236頁／2、000円＋税
レスリーの、黎明の、小春のセリフの本当の意味は何だったのか……。
香港映画のあの感動の名場面を再現。広東語・日本語完全対訳付で解説。

[収録作品]
■恋する惑星 ■君さえいれば
■月夜の願い ■ポリスストーリー3
■欲望の街 ■008 皇帝ミッション
■女人、四十。■ラヴソング

Digitized by Google

ース」「バタフライ・キス」「クーリンチェ少年殺人事件」「永遠なる帝国」「ゲット・オン・ザ・バス」「ラヴィアン・ローズ」
料金＝1500円／学生1100円／小人800円（㊗1作品券1100円／3作品券2800円）
会場＝サールナートホール
問合せ＝054・273・7450

■シネウインド13周年祭
〈ムービーシアターズ・クラブナイトvol.2〉
11月20日（金）「SF　サムライ・フィクション」23時〈クラブ〉25時30分
〈インディーズムービー・フェスティバル〜あんたの映画をみせてやれっ一〉
11月22日（日）10時
〈マイブーム・シネフェスタ〉
上映作品＝A「攻殻機動隊」B「月とキャベツ」C「十三人の刺客」D「パリでかくれんぼ」E「周遊する蒸気船」F「世界の涯てに」G「エンド・オブ・バイオレンス」H「トラック野郎」
11月23日（月）A9時30分B11時C12時50分〈工藤栄一監督トーク〉D16時05分E19時05分F20時40分
11月24日（火）F10時G12時E14時15分A15時50分H17時20分B19時10分D21時
11月25日（水）G10時E12時15分C13時50分〈五街道雲助独演会〉19時
11月26日（木）C10時D12時15分A15時15分G16時45分B19時H20時50分F22時40分
11月27日（金）C10時A12時15分D13時45分H16時45分B18時35分F20時25分G22時25分
料金＝一般1700円／学生1400円（㊗1回券1300円／2回券2400円）
※「十三人の刺客」に限り、サムライの格好でご来場の方（和服、刀、ちょんまげの内2つ）は13人1300円（お一人100円）で入場可。
会場＝新潟シネウインド
問合せ＝025・243・5530

関西

■98びわ湖シネマフェスタ
〈大津市生涯学習センター〉
11月20日（金）「離婚のあとに」13時30分「セブン・イヤーズ・イン・チベット」14時40分「L・A・コンフィデンシャル」18時20分
11月21日（土）「永遠なる帝国」10時30分〈オープニングセレモニー〉13時「鞍馬天狗」14時30分「白い鳳船」16時30分「炎のアンダルシア」18時20分
11月22日（日）「離婚のあとに」10時30分「ユキエ」13時〈松井久子監督講演〉14時40分「ユキエ」16時「永遠なる帝国」18時
11月23日（月）「白い鳳船」10時30分「ユキエ」12時40分「L・A・コンフィデンシャル」15時「セブン・イヤーズ・イン・チベット」17時50分
〈草津・シネマハウス〉
上映作品＝A「レインメーカー」B「ロミオ&ジュリエット」C「グッド・ウィル・ハンティング」D「ギルバート・グレイプ」
11月21日（土）・25日（水）①A②B③C④D
11月22日（日）・26日（木）①D②A③B④C
11月23日（月）・27日（金）①C②D③A④B
11月24日（火）①B②C③D④A
時間＝①11時②13時40分③16時20分④19時
〈OTSU7シネマ〉
11月27日（金）「モロッコ」17時「雨に唄えば」19時
11月28日（土）「雨に唄えば」10時30分「モロッコ」12時30分
〈彦根ビバシティシネマ〉
11月28日（土）・29日（日）「ユキエ」
時間＝28日14時／20時30分、29日10時30分／12時30分
〈滋賀会館シネマホール〉
11月25日（水）〜29日（日）「ラジュー出世する」
時間＝25日・26日18時30分、27日14時／18時30分、28日・29日11時／13時55分／16時50分
料金＝1300円／シニア・高校生以下1000円（㊗1000円）
問合せ＝077・534・6403

■「ベイビー　クリシュナ」上映会
11月26日（土）
時間＝14時／16時／18時
会場＝大阪国際交流センター・小ホール
問合せ＝06・772・5931
12月6日（日）
時間＝11時／14時／16時／18時
会場＝コミュニティ・ラボ・めふ
料金＝1700円（㊗1400円）
問合せ＝0797・84・2931

■第3回神戸100年映画祭
11月21日（土）①「大人は判ってくれない」②「地下鉄のザジ」③「キスキスキスー」④「デザンシャンテ」
11月22日（日）①「死刑台のエレベーター」②「陽だまりの庭で」③「アー・ラー・モード」④「シングル・ガール」
11月23日（月）①「アンジェリク」②「キュリー夫妻」③「ラブetc.」④「パリのレストラン」
11月24日（火）①「かくも長き不在」②「死刑台のエレベーター」③「陽だまりの庭で」④「猫が行方不明」
11月25日（水）①「ラ・マルセイエーズ」②「凱旋門」③「シャレード」④「アー・ラー・モード」
11月26日（木）①「仁義」②「パリのレストラン」③「猫が行方不明」④「ラブetc.」
11月27日（金）①「凱旋門」②「愛と哀しみのボレロ」④「レ・ミゼラブル」
11月28日（土）①「シンプルライフ・シンドローム」②「マイフレンド・メモリー」④「想い出のマルセイユ」
時間＝①11時②13時30分③16時④18時30分（28日②14時）
料金＝1回券1200円（㊗1回券1000円／3回券2500円）
会場＝神戸朝日ホール
〈バントマイムフェスティバル〉
11月26日（木）
出演＝北京一、上海太郎、いいむろなおき、清水きよし、伝三・F、沖埜茎子、江ノ上陽一&SOUKI
時間＝14時／19時
料金＝3500円（㊗3000円）
会場＝神戸アートビレッジセンター
問合せ＝078・232・3281

中国

■広島映画サークル
12月6日（日）
「ビヨンド・サイレンス」
時間＝14時30分／17時
料金＝1500円／大学生1300円／中高生1100円
会場＝広島県立美術館
問合せ＝082・240・8035

九州

■幻の怪談映画レイトショー
11月23日（月）〜26日（木）
「怪談バラバラ幽霊」
11月29日（日）〜12月3日（木）
「新怪談色欲外道／お岩の怨霊四谷怪談」
12月6日（日）・7日（月）
「色欲怪談／発情女ゆうれい」
12月8日（火）〜10日（木）
「色欲怪談／江戸の淫霊」
時間＝21時
料金＝1000円
会場＝オークラ劇場2
問合せ＝092・291・3854

Digitized by Google

※劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけ下さい。(11月10日現在) ＊印は次回作品。

ご愛読者劇場招待券プレゼントのスケジュール

●ご招待券ご希望の方は本誌挟み込みの（試写会ハガキ）でお申込下さい。
しめきりは11月30日消印有効。プレゼントは12月中有効の招待券（ペア）です。

	劇場名	TEL	招待組数	11/20 金	21 土	22 日	23 月	24 火	25 水	26 木	27 金	28 土	29 日	30 月	12/1 火	2 水	3 木	4 金	5 土	6 日	7 月	8 火	9 水	10 木
銀座	丸の内松竹	03(3214)3366	2	学校Ⅲ								ショムニ												
銀座	丸の内ピカデリー1	03(3201)2881	2	トゥルーマン・ショー																＊ジョー・ブラックをよろしく				
銀座	丸の内ピカデリー2	03(3201)2881	2	シティ・オブ・エンジェル															ナイトウォッチ					
銀座	丸の内ルーブル	03(3214)7761	5	始皇帝暗殺																＊6デイズ／7ナイツ				
銀座	松竹セントラル1	03(5550)1631	2	ダイヤルM								ダークシティ			＊ロスト・イン・スペース									
銀座	松竹セントラル2	03(5550)1631	2		ちぎれ雲														187					
銀座	松竹セントラル3	03(5550)1631	2	学校Ⅲ																				
銀座	東劇	03(3541)2711	3	ジャングル・ジョージ／Mr. マグー																＊ノック・オフ				
銀座	有楽町スバル座	03(3212)2826	5	リプレイスメント・キラー																＊私の愛情の対象				
銀座	銀座シネパトス	03(3561)4660	5		ムトゥ　踊るマハラジャ																			
銀座	銀座シネパトス	03(3561)4660	5		ムトゥ　踊るマハラジャ																			
銀座	銀座シネパトス	03(3561)4660	5		プリーチング														N.Y.殺人捜査線					
銀座	シネ・ラ・セット	03(3212)3761	5		かさぶた／7本のキャンドル																			
新宿	新宿ピカデリー1	03(3352)1771	5	トゥルーマン・ショー																＊ジョー・ブラックをよろしく				
新宿	新宿武蔵野館	03(3354)5670	5	L.A.コンフィデンシャル																				
新宿	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	トゥルーマン・ショー																＊ジョー・ブラックをよろしく				
新宿	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	シティ・オブ・エンジェル															ナイトウォッチ					
新宿	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	リプレイスメント・キラー																				
新宿	テアトル新宿	03(3352)1846	10		すべての道はローマへ			肉体の悪魔				白痴							夜の騎士道					
新宿	新宿昭和館	03(3352)2471	10	緋牡丹博徒・お竜参上／日本侠客伝・雷門の決斗／他							野獣刑事／女囚701号　恨み節／他							東京流れ者／紅の流れ星／他						
渋谷	渋谷松竹セントラル	03(3770)1990	2	学校Ⅲ								ショムニ												
渋谷	渋谷ジョイシネマ	03(3462)2539	10	シティ・オブ・エンジェル															ナイトウォッチ					
渋谷	渋谷シネパレス	03(3461)3534	10	ジャングル・ジョージ／Mr. マグー																＊ノック・オフ				
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2		Beautiful Sunday															＊ラスト・ゲーム				
渋谷	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	ハーフ・ア・チャンス																＊のど自慢				
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	ダイヤルM								ダークシティ			＊ロスト・イン・スペース									
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	トゥルーマン・ショー																＊ジョー・ブラックをよろしく				
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	学校Ⅲ								ショムニ												
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	時雨の記																＊ビーストウォーズ				
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	プライベート・ライアン																＊アルマゲドン				
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5		タイタニック														X―ファイル					
池袋	テアトルダイヤ	03(3983)9793	5	踊る大捜査線 THE MOVIE																＊モスラ3・キングギドラ来襲				
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	アンツ																＊スモール・ソルジャーズ				
池袋	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	シティ・オブ・エンジェル																				
浅草	浅草松竹	03(3841)2022	5	学校Ⅲ								ショムニ												
浅草	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	フラッド／普通じゃない				GODZILLA／気まぐれな狂気											アベンジャーズ／エクセス・バゲッジ					
浅草	浅草名画座	03(3841)3028	5	マークスの山／極道の妻たち・最後の戦い／他				必殺！Ⅲ・裏か表か／居酒屋兆治　他						太平洋の嵐　東京キッド／人生劇場・飛車角と吉良常									元禄忠臣蔵 前・後篇　他	
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	10	クリスマスに雪はふるの？／ポネット											アベンジャーズ／オースティン・パワーズ									
東京	中野武蔵野ホール	03(3389)3301	5		阿片戦争																			
東京	自由が丘武蔵野館	03(3717)6341	10	踊る大捜査線 THE MOVIE																＊モスラ3・キングギドラ来襲				
東京	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10		TAXi／フラッド														マスク・オブ・ゾロ／仮面の男					
東京	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	アルテミシア								地球交響曲〈第一番〉							地球交響曲〈第二番〉					
東京	バウスシアター	0422(22)3555	2	始皇帝暗殺																＊6デイズ／7ナイツ				
東京	バウスシアター2	0422(22)6631	2	ダイヤルM								ダークシティ												
東京	大井武蔵野館	03(3771)4934	10	青い山脈　桃・青い・お嬢さん乾杯				女ごころ／愛情の決算			河内山宗俊　巨人伝			恋山彦　総集編／東海水滸伝　他				大江戸五人男／おまろ冠婚		牢獄の花嫁／影法師・貴水寺の血闘　他				

Digitized by Google

	劇場名	TEL	招待組数	11/20 金	21 土	22 日	23 月	24 火	25 水	26 木	27 金	28 土	29 日	30 月	12/1 火	2 水	3 木	4 金	5 土	6 日	7 月	8 火	9 水	10 木
東京	キネカ大森	03(3762)6000	5	踊る大捜査線 THE MOVIE																				＊モスラ3
					チャイニーズ・ゴースト・ストーリー・スーシン														誰かがあなたを愛してる					
					愛人ジュリエット							すべての道はローマへ							白痴					
	亀有名画座	03(3601)3350	10	寒椿／姐御					〔縄の女王・女優列伝 VOL.1〕					〔縄の女王・女優列伝 VOL.2〕										
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	気まぐれな狂気／メジャー・リーグ3／アルビノ・アリゲーター											未定									
	シネマ・ジャック	0120(198)009			かげろう絵図				ゼロの焦点				黄色い風土				風の視線				愛のきずな			
				黒い画集・ある遭難			黒い画集・寒流				けものみち					無宿人別帳				砂の器			霧の旗	
	シネマ・ベティ	0120(198)009			ムトゥ 踊るマハラジャ																			
	関内アカデミー劇場	045(261)8913		TOKYO EYES								ラブ&デス												
	関内アカデミー2	045(261)8913		ミステリアス・ピカソ				サバイビング・ピカソ							初恋									
弘前	弘前マリオン	0172(33)3365	2		ねじ式							ライブ・フレッシュ							ボンベイ ＊9日は休館					
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530	5	〔シネワイド13周年祭〕								ねじ式												
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	踊る大捜査線 THE MOVIE																				＊モスラ3
静岡	静岡ミラノ1	054(253)8758	2	アンツ																				
	静岡ミラノ2	054(253)2713		ダークシティ																				
	静岡ミラノ3	054(253)2713			アウト・オブ・サイト																			
	静岡オリオン座	054(252)3652		始皇帝暗殺																				
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	裏街の聖者								イノセントワールド							南京1937／プライド					
	ヘラルドシネプラザ1	052(241)1581	10	アンツ																				＊スモール・ソルジャーズ
	ヘラルドシネプラザ2	052(241)1581		リプレイスメント・キラー ＊スモール・ソルジャーズ〔日本語版〕																				
	ヘラルドシネプラザ3	052(241)1581		TOKYO EYES																				＊従妹ベッド
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815			ハーフ・ア・チャンス																			＊ぼくのバラ色の人生
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815			ダロウェイ夫人																			＊ルル・オン・ザ・ブリッジ
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5		鬼畜大宴会							中国女							男性・女性					
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	学校Ⅲ								未定												
	今池国際劇場	052(732)1880	5	踊る大捜査線 MOVIE																				＊モスラ3
大阪	テアトル梅田	06(359)1080	10	CUBE																				＊ニル・ヴァーナ
				ムトゥ 踊るマハラジャ								ハーフ・ア・チャンス												
	シネ・ヌーヴォ梅田	06(365)0094	5		エデンへの道														〔利重剛スペシャル〕					
	国名小劇	06(213)9229	3	ターニング・ラブ								イヴの秘かな憂鬱												
	シネ・ヌーヴォ	06(582)1416	5		ネネットとボニ																＊ニキ・ド・サンファル			
	第七藝術劇場	06(302)2073	5		ラヴィ・ド・ボエーム／レニングラード・カウボーイズ、モーゼに会う							エキゾチカ／タンゴ・レッスン							ザ・ウィナー／シーズ・ソー・ラヴリー					
近畿	朝日シネマ1	075(255)6760	5		ダロウェイ夫人							キャメロット												
	朝日シネマ2	075(255)6760			ザ・ハリウッド							キャラクター 孤独な人の肖像												
	祇園会館	075(561)0160	5	ロザンナのために／アンナ・カレーニナ								不夜城／絆												
	アサヒシネマ1	078(251)9877	5	スライディング・ドア ＊スモール・スルジャーズ〔日本語版〕																				
	アサヒシネマ2	078(251)9877		シティ・オブ・エンジェル															ナイトウォッチ					
	アサヒシネマ3	078(251)9877		スティートヒアアフター								ダロウェイ夫人												
広島	広島サロンシネマ1	082(241)1781	10		ボンベイ														ディープ・インパクト					
	広島サロンシネマ2	082(241)1781			〔日本映画発掘市〕							ラブ・フレッシュ							普通じゃない					
	広島シネツイン	082(241)7711			北京のふたり																			＊ダロウェイ夫人
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10		ねじ式							休館							アンナ					
	シネサロン・パヴェリア	092(852)5650	10	がんばっていきまっしょい								河												＊恋するシャンソン

◆次の各劇場へ今号の本誌扶み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●高知松竹●あたご劇場●高知にっかつモデル劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●グランド松竹●ライオンカン●高松東宝（高松キネ旬友の会協力）　【松山】シネ・リエンデ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡松竹ピカデリー●ニュー大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場●西新アカデミー（福岡キネ旬友の会協力）

Digitized by Google

Present

招待券

インフィニティ／無限の愛

■東京　新宿シネマ・カリテ
■公開中
■劇場招待券

若き科学者リチャードは理知的な女性アーリーンと知り合い恋に落ちるが、彼女は死に至る病に冒されていた。マシュー・ブロデリックが監督・脚本・主演した、物理学者ファインマンの伝記の映画化。P・アークェット共演。先着順。　〈ギャガ／ゼアリズ提供〉

10名(5組)

招待券

N.Y.殺人捜査線

■東京　銀座シネパトス
■12月5日(土)よりロードショー
■劇場招待券

スラム街に生まれ育ちマフィアの友人や隣人を持ちながらも刑事になる道を選んだボウ。だがマフィアのコネクションを使って捜査を進める彼はFBIに監視されていた。S・ボールドウィン、C・ペン、G・ガーション主演。11月27日必着。〈ギャガ／ゼアリズ提供〉

10名(5組)

試写会

おもちゃ

■大阪　梅田東映
■12月14日(月)
■6時30分開場／7時開映

京都の花街――貧しい西陣の機織り職人の娘が、芸者置屋で下働きしながら、やがて一人前の舞妓になるまでを軽快なテンポで描く、新藤兼人原作・脚本、深作欣二監督の話題作。当日は監督、宮本真希、富司純子の舞台挨拶も。12月4日必着。　〈東映関西支社提供〉

30名(15組)

JUNK FOOD

凱旋公開記念パンフレット

ヤク中のOL、中国人娼婦、チーマー、恋人を殺してしまったパキスタン人――現代日本のろくでなし達の一日を描く山本政志監督作。全米10都市で連続上映された本作が、11月21日から新宿ジョイシネマで凱旋上映されるのを記念して。

〈スタンス・カンパニー提供〉

5名

ラブ・レター

ビデオ発売記念原作本『鉄道員』

軽い気持ちで中国人女性・白蘭と偽装結婚した吾郎。そのまま殆ど会う事もなかったが、白蘭が死んだ時、彼女の遺留品の中から自分宛の手紙を見つける…。11月21日にビデオが発売されるのを記念して、日本中が涙した浅田次郎の原作『ラブ・レター』を収めた短編集『鉄道員（ぽっぽや）』（集英社刊）を。　〈松竹提供〉

5名

スウィート・エネミー　甘い媚薬

独占日本初放送記念ワイン

海外TVシリーズ専門CS放送局スーパーチャンネルで、ベネズエラの長編ドラマ・シリーズ『スウィート・エネミー／甘い媚薬』が放送開始されるのを記念して、南米産赤ワイン、コンチャイトロを。ハガキに住所、氏名、年齢、CS放送又はケーブルTV視聴の有無を記入の上、〒107－0052東京都港区赤坂3－5－2　スーパーチャンネル「スウィート・エネミー　ワインプレゼント」キネ旬係まで。

5名

●プレゼントの応募は本誌綴じ込みハガキでどうぞ。12月5日必着です。

編集部だより

■前号ハーモニー・コリン監督インタビュー中、竹石ギャラリーとあるのは、Taka Ishii GALLERY の誤りでした。訂正しお詫びします。

出版事業部だより

■昨年開催され、御好評を得たプロデューサーセミナーの第2回を、11月29日・池袋コミュニティ・カレッジにて開催いたします。ゲストには、井関惺、一瀬隆重、河井真也、佐谷秀美、李鳳宇、塚本晋也の各氏を予定。セミナー前には話題作「のど自慢」の上映もありますので、是非とも御参加下さい。詳細につきましては、☎03－3815－7143まで。また昨年のセミナーの内容に新たに取材を加えた『映画プロデューサーがおもしろい』も絶賛発売中です。こちらもよろしくお願いします。

営業部だより

■おかげさまで大好評で、売切店続出の『踊る大捜査線湾岸警察署事件簿』ですが、まだ若干在庫がございます。巻頭特集「踊る大捜査線THE MOVIE」の11月上旬号ともども、まだお求めでない方は、お近くの書店、または小社営業部までお問合せ下さい。

Digitized by Google

キネマ旬報
平成10年12月上旬号
No.1272

発行人
土橋寿男（黒井和男）

編集主幹
植草信和

編集長
青木眞弥

副編集長
関口裕子

編集スタッフ
金田裕美子
前野裕一
志水邦朗

広告部長
柳澤茂喜

広告スタッフ
島崎智明

表紙デザイン
峰岸孝之

レイアウト
島岡進
梅津由子

発行
株式会社キネマ旬報社
〒112-8502
東京都文京区小石川1-21-14
小石川吉田ビル　2F
TEL　03-3815-7131
FAX　03-3815-7140
振替東京00100-0-182624

印刷・製本
凸版印刷株式会社

ISSN　1342-5412

本誌記事・写真の無断転載を禁じます。

編集後記

■取材攻勢に明け暮れる東京国際映画祭も終わり、ホッと一息（にしても、毎年申し合わせたように映画祭期間とゲラの出る日が重なるのはなぜ？）。常々記者会見の席上にて思うのは、海外の記者から挙がる質問が概ね監督の社会的・政治的立場に集中するのに対して、日本勢からは作品内容についての質問が多いこと。どちらが好意的か一概に言えないけれど、前者はオタクとかカルト的土壌の防波堤になっていると思う。　**志水**

■「踊る大捜査線」「絆」「犬、走る」、そして海外TVの「ホミサイド／殺人捜査課」（傑作！）と刑事の描写だけ見てもそれぞれ別物だなと思う今日この頃で、目下の期待は現在映画化準備中の「レディ・ジョーカー」。あの膨大な量の原作をどう料理するかが楽しみですが、合田雄一郎役が誰に決まるのかも気になるところ。願わくば、「マークスの山」に続いて中井貴一さんに。いかがでしょうか、高村先生。　**前野**

■映画祭で大挙来日した俳優&監督の取材にいくつか立ち会った。それまで特に好きだったわけじゃないのに、間近に見て話を聞いていると急にファンになってしまう私は単なるミーハー？　好印象を持っていなかったブルース・ウィリスの会見での様子を見て、スタッフに絶大な人気があるというのも何となく納得。やっぱり魅力ある人たちだからこそ、俳優や監督として成功するんだろうなあと思ったのであった。　**金田**

■東京国際映画祭期間中、映画も観られず、ただムチャクチャ忙しかった。ルーティン・ワークに加え、来日映画人取材と企画特集取材。乗りつけないラッシュの電車に乗って、渋谷や溜池山王、六本木に通う時、カバンをラグビーボールよろしく小脇に走った通勤時代を思い出した。この期間、来日していたポール・イーさん、リンダ・ホーグランドさん、吉川さん、お会いできなくて残念。映画祭は東京以外に限ります。　**関口**

■映画祭も終わり、今号の編集も今日、明日で片づくという日に飛び込んできたのが淀川長治さんがお亡くなりになったというニュースだった。実は入院されているという話は伺っていたのだが、それでも突然という印象でショックだった（念の為に記しておくと、この欄を僕が書くのは他のスタッフより遅く本当に編集作業が終わる最後の時期なので、そのためこの悲しい出来事について今号の後記で触れているのは僕だけという次第なのである。全員驚き、悲しんだことは言うまでもない）。

■淀川さんとは出身が同じ神戸で、さらに高校の後輩にあたるということもあり（といっても淀川さんは旧制三中、僕は新制の長田高校で、しかも極めて不肖の後輩ではあるが）、キネマ旬報社に入って間もない頃にご挨拶した時から、何かと目をかけて下さった。最初にお会いした時に僕の実家が神戸市の垂水区だと言ったら「垂水ってとてもいい響きの地名だから好き」で、映画雑誌に投稿していた頃、お気に入りの女優だったアナ・クレアと合わせて、垂水クレアというペンネームを使っていたのよ」などという話をして下さった。まるで昨日のことのようだ。

■最後にお会いしたのが、実は黒澤監督の本誌追悼特集で山田洋次監督と対談していただいた日だった。今号が終わればお見舞いに行こうと思っていたのに……。本当に残念だ。　**青木**

次号予告

12月下旬号［No.1273］／12月5日発売／定価820円（税込）

巻頭特集●英国映画最新ガイド all about U.K. film（仮題）
「ベルベット・ゴールドマイン」「鳩の翼」ほか最新英国映画事情を完全網羅

企画特集●お正月映画完全ガイド

●B・ピット、B・ウィリスほか、豪華ハリウッド・スター　インタビュー

作品特集●「ジョー・ブラックをよろしく」「たどんとちくわ」
「恋の秋」「私の愛情の対象」「ラブ・ゴーゴー」

緊急特別企画●韓国・解禁される日本映画
映画祭ルポ●釜山映画祭／トロント映画祭／ロカルノ映画祭ほか

Digitized by Google

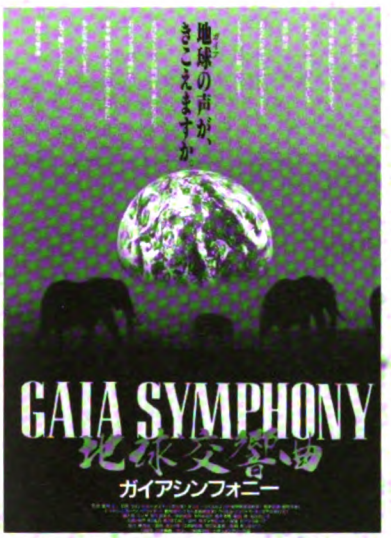
全国で132万人(1998年7月現在)が自主上映で観賞！

龍村　仁 監督作品

地球交響曲

ガイアシンフォニー

「地球の声が、聞こえますか。」という呼びかけで始まる映画『地球交響曲』は、地球環境の美しさ、大切さを訴えるだけでなく、一人一人の心の無限の可能性を言及する、「こころの映画」として、大きな反響を呼んでいます。

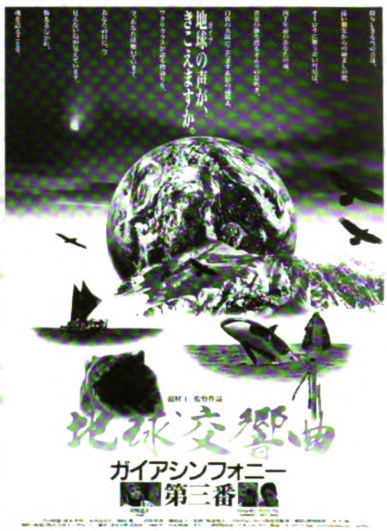


地球交響曲 第一番

R.メスナー(登山家)／野澤重雄(植物学者)／D.シェルドリック(動物保護活動家)／エンヤ(音楽家)／鶴岡真弓(美術史学者)／R.シュワイカート(元宇宙飛行士)

地球交響曲 第二番

ジャック・マイヨール(海洋冒険家)／14世ダライ・ラマ法王(チベット仏教最高指導者)／フランク・ドレイク(天文学者)／佐藤初女(森のイスキア主宰)



地球交響曲 第三番

星野道夫(写真家)／フリーマン・ダイソン(宇宙物理学者)／ナイノア・トンプソン(外洋カヌー航海者)

『地球交響曲』上映のご案内

第1番・第2番・第3番　連続上映決定！　下高井戸シネマ(Tel.03-3328-1008)

第1番　11／28～12／4　第2番　12／5～12／11　第3番　12／12～12／18

第1番の上映スケジュール(11月25日～12月末)

- ■11／25　亀山文化会館(TEL.052-322-7590 酒井)
- ■11／27　藤原町民文化センター(TEL.052-322-7590 酒井)
- ■11／29　一志町農村環境改善センタ(TEL.059-293-5111 中野)
- ■11／29　堺市総合福祉会館(TEL.072-299-2165 水谷)
- ■12／5　練馬区立南町小学校(TEL.03-3994-1064 高久田)
- ■12／15　ノバホール(TEL.010-404-3437 照井)
- ■12／23　山陽ハイツ(TEL.086-474-3783 すなみ)
- ■12／26　枚方市民会館(TEL.072-048-4166 中村)

自主上映のお申し込み・お問い合わせ

『地球交響曲 第一番』はキネマ旬報社ガイアシンフォニー事務局　03-3815-7143

『地球交響曲 第二番、第三番』はオンザロード　03-5771-2041

Digitized by Google

フィルムメーカーズ①『リュック・ベッソン』／リュック・ベッソン完全データ他

●1238・11月上旬号　☆820円
東京日和／萌の朱雀／バウンス ko GALS／黒い十人の女／「ラヂオの時間」撮影現場レポート②

●1239・臨時増刊　☆2200円
〈**中華電影完全データブック**〉
中国語圏映画全封切リスト／中華電影人名録

●1240・11月下旬号　☆820円
ラヂオの時間／ＮＹ検事局／喝采の扉［虎度門］／時をかける少女／中国映画祭97／インタビュー：北野武

●1242・12月下旬号　☆820円
セブン・イヤーズ・イン・チベット／スリング・ブレイド／阿片戦争／インタビュー：松田美由紀・大林宣彦

●1243・臨時増刊　☆1600円
〈**天晴れ！時代劇**〉
萬屋錦之介メモワール／勝新太郎メモワール／時代劇を生きた人々

1998

●1244・1月上旬号　☆860円
新春中華圏映画大特集／ＣＵＲＥキュア／ピースメーカー／北京原人ーWho are you？／インタビュー：ブラッド・ピット

●1245・1月下旬号　☆820円
ＨＡＮＡ－ＢＩ／桜桃の味／ラブ&ポップ／グリッドロック／城戸賞受賞シナリオ「砂の蝶」／インタビュー：吉岡秀隆

●1246・2月上旬号　☆820円
フェイス／オフ／ハムレット：映画とシェイクスピア／Ｇ．Ｉ．ジェーン／コップランド

●1247・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ②『北野武』
対談：北野武×淀川長治／北野映画大事典他

●1248・2月下旬号〈**決算特別号**〉**☆1300円**
97年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1249・3月上旬号　☆820円
映画の用心棒　追悼：三船敏郎／「ユキエ」とこわれゆく女たち／アミスタッド／台湾映画祭／PERFECT BLUE

●1250・3月下旬号　☆820円
俳優が監督するとき／追悼　伊丹十三の記録／グッド・ウィル・ハンティング旅立ち／銀河鉄道９９９エターナルファンタジー／Ｆ

●1251・4月上旬号　☆860円
エイリアン４／オスカー・ワイルド／ドーベルマン／エンド・オブ・バイオレンス／シーズ・ソー・ラブリー

●1252・4月下旬号　☆820円
ジャッキー・ブラウン／ＳＡＤＡ／恋愛小説家／マッド・シティ／上海グランド／ジャンク・フード／ロッテルダム国際映画祭

●1253・増刊　☆4400円◇送料380円
〈**映画ビデオイヤーブック1998**〉
'97年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果

●1254・5月上旬号　☆820円
第70回アカデミー賞のすべて／スターシップ・トゥルーパーズ／ディアボロス　悪魔の扉／連載対談再開：和田誠×三谷幸喜

●1255・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ③『クエンティン・タランティーノ』／タランティーノ大事典他

●1256・5月下旬号　☆820円
ブルース・ブラザース2000／バタフライ・キス／友情Friend Ship／絆／ソウル・フード

●1257・6月上旬号　☆820円
シネ・チャイナ・ビッグバン／バリー・レヴィンソン研究／「プライド　運命の瞬間」をめぐって／ボクサー／ラブ・レター

●1258・6月下旬号　☆820円
レインメーカー／中国の鳥人／大いなる遺産／真夜中のサバナ／ツイン・タウン／ライアー／スペイン映画の魅力

●1259・7月上旬号　☆860円
普通じゃない／インド映画特集／Ｌ．Ａ．コンフィデンシャル／ディープ・インパクト／愚か者　傷だらけの天使／愛の破片

●1260・7月下旬号　☆820円
GODZILLA（ゴジラ）／ブルガサリ／ねじ式／アンラッキ・モンキー／キリコの風景／追悼：フランク・シナトラ、前田陽一

●1261・8月上旬号　☆820円
「仮面の男」と新世紀映画の旗手《俳優》／ニュー・エイジ・ホラー再考／ウェルカム・トゥ・サラエボ／ディカプリオ・ピンナップ

●1260・臨時増刊　☆2100円
〈**黒澤明と木下恵介**〉
特別対談：山田洋次×佐藤忠男／初公開未映画化シナリオ「どら平太」他

●1263・8月下旬号　☆860円
ガンダム20年あるいはアニメーション1998／踊る大捜査線撮影現場レポート①／TAXi／ＳＦ　サムライ・フィクション

●1264・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ④『ジェームズ・キャメロン』／ジェームズ・キャメロン完全データ

●1265・9月上旬号　☆820円
ボーダーレス・アクターズ：金城武、チョウ・ユンファ他／リメイク映画を愉しむ方法／イヤー・オブ・ザ・ホース／踊る大捜査線②

●1266・9月下旬号　☆820円
『ＥＲ』と外国ＴＶ映画の現在／現代ピンク映画考：ブギーナイツ、夢翔る人　色情男女／生きない／踊る大捜査線③

●1267・10月上旬号　☆820円
プライベート・ライアン／愛を乞うひと／従妹ベット／がんばっていきまっしょい／ＤＶＤ徹底検証／踊る大捜査線④

●1268・10月下旬号　☆860円
追悼　黒澤明／フラワーズ・オブ・シャンハイ／犬、走る　DOG RACE／踊る大捜査線⑤

●1269・11月上旬号　☆820円
踊る大捜査線　THE MOVIE／モンタナの風に抱かれて／リプレイスメント・キラー／カンゾー先生／学校Ⅲ／ハーフ・ア・チャンス

●1270・臨時増刊　☆2500円◇送料380円
〈**映画賞・映画祭データブック**〉
世界の主要映画賞・映画祭年度別受賞一覧／映画祭早見表／映画界年表他

●1271・11月下旬号　☆820円
Ｘ－ファイル　ザ・ムービー／トゥルーマン・ショー／落下する夕方／始皇帝暗殺／踊る大捜査線撮影日誌番外編／ジェラール・フィリップ映画祭

■個性派俳優

●1192・'96・5月下旬号　☆866円
スクリーンを彩る若手女優たち

●1193・'96・6月上旬号　☆866円
スクリーンで闘う若手男優たち

■コーエン兄弟

●1206・'96・11月下旬号　☆836円
ファーゴ

■本欄掲載以外の号の内容リストもございますので、御希望の方は100円切手を同封の上お申し込み下さい。

■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または本誌挟み込みの郵便振替用紙にて、御希望の号数、御住所、御氏名を明記のうえ、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店の映画書コーナーにてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

札幌市　パルコＢＣ冨貴堂
東京都　八重洲ＢＣ本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・三省堂書店渋谷店・大盛堂書店・パルコＢＣ渋谷店あおい書店六本木店・ブックストア談原宿店・芳林堂書店池袋本店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋本店・紀伊國屋新宿南店・アイブックス成城店・パルコＢＣ吉祥寺店・阪急ブックファースト渋谷店・シネシティ
横浜市　有隣堂書店横浜東口ルミネ店・有隣堂書店イセザキ本店
名古屋　ちくさ正文館本店・パルコＢＣ名古屋・ヴィレッジヴァンガード生活倉庫店
京都市　駸々堂京宝店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ
金沢市　ＧＲＯＯＶＥ！金沢本店
神戸市　ジュンク堂書店サンパル店・駸々堂神戸三宮店
広島市　パルコＢＣ広島店
福岡市　リブロ福岡店

Digitized by Google

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価　送料は各120円
2／下、臨時増刊は160円

1986

●942・8月下旬号　☆735円
松竹創立90周年記念号

1989

●1000・1月上旬号　☆840円
1000号記念／日本映画史上ベスト・テン

●1001・1月下旬号　☆840円
1000号記念／外国映画史上ベスト・テン

1994

●1125・2月下旬号　決算特別号　☆1223円
93年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1136・臨時増刊　☆1529円
〈小津と語る〉シナリオ「瓦版かちかち山」「お茶漬の味」「月は上りぬ」「青春放課後」

●1138・8月上旬号　☆836円
平成狸合戦ぽんぽこ・スタジオ・ジブリ8年の歩み／80年代と90年代のゴダール／青いパパイヤの香り

●1140・9月上旬号　☆836円
トゥルーライズ／ウディ・アレン研究／北朝鮮映画事情

●1142・10月上旬号　☆866円
四十七人の刺客／二大監督研究・ジャン・ルノワールとロバート・オルトマン

●1149・12月上旬号　☆836円
トリュフォー特集／今そこにある危機／オリーブの林をぬけて

●1150・12月下旬号　☆836円
河童／酔拳2／34丁目の奇跡

1995

●1152・1月下旬号　☆836円
フォレスト・ガンプ／東京兄妹／東京デラックス

●1154・2月下旬号　☆1325円
94年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1157・4月上旬号　☆866円
白い馬／クイズ・ショウ／中国映画の全貌

●1164・7月上旬号　☆866円
ダイ・ハード3／学校の怪談＆トイレの花子さん／ポール・ニューマン特集／レニ

●1166・臨時増刊　☆1529円
〈宮崎駿・高畑勲とスタジオジブリのアニメーションたち〉押井守語る／全作品解説

●1167・8月上旬号　☆836円
ウォーターワールド／ポカホンタス／レッド・ブロンクス／エドワード・ヤンの恋愛時代

●1168・臨時増刊　☆1529円
〈戦争映画大作戦　史上最大の作戦／コンバット／想い出の戦争映画を語る

●1170・9月上旬号　☆836円
マディソン郡の橋／野球映画特集／幻のオーソン・ウェルズ映画

●1173・臨時増刊　☆1631円
〈世界映画オールタイムベストテン〉映画生誕100年記念特別号①

●1174・10月下旬号　☆836円
クリムゾン・タイド／スモーク／東京フィスト／眠れる美女

●1176・臨時増刊　☆1631円
〈日本映画オールタイムベストテン〉映画生誕100年記念特別号②

●1178・12月上旬号　☆836円
恋愛映画大特集／特別企画リュミエールとメリエス

1996

●1184・2月下旬号〈決算特別号〉☆1325円
95年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1185・3月上旬号　☆836円
ニクソン／ジェラール・フィリップ映画祭／ＫＹＯＫＯ／愛と哀しみの邦題

●1186・3月下旬号　☆836円
ブロークン・アロー／トイ・ストーリー／ダニエル・シュミット監督研究

●1190・増刊　☆4282円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1996〉'95年公開映画全記録／米国・日本配収ベストテン／映画祭受賞結果

●1192・5月下旬号　☆866円
スクリーンを彩る若手女優たち／アンカーウーマン／ピクチャープライド／ルネ・クレマン、クシシュトフ・キェシロフスキ追悼

●1193・6月上旬号　☆866円
スクリーンで闘う若手男優たち／いつか晴れた日に／必殺！主水死す／白い嵐／和田誠×三谷幸喜／林海象×ジェームス小野田

●1194・6月下旬号　☆836円
フロム・ダスク・ティル・ドーン／映画業界就職ガイド／ゲット・ショーティ／女人，四十。／カンヌ国際映画祭レポート

●1199・8月下旬号　☆866円
上半期映画決算／イレイザー／シクロ／ジャパニーズ・ホラー／パトリス・ルコント

●1200・9月上旬号　☆836円
ＡＣＲＩ／愛のめぐりあい／栄光と狂気／八つ墓村・撮影現場豊川悦司／石井竜也監督インタビュー／日本映画プロデューサーは今

●1201・9月下旬号　☆866円
追悼・渥美清／ウォン・カーウァイ監督大研究／リービング・ラスベガス

●1202・10月上旬号　☆836円
スワロウテイル／ザ・ロック／ティン・カップ／訣別の街／恋の力学／東京国際映画祭

●1205・11月上旬号　☆866円
八つ墓村／豊川悦司ピンナップ／関西映画ガイド／クロッシング・ガード／ザ・ファン

●1206・11月下旬号　☆836円
インデペンデンス・デイ／ファーゴ／ルイ・マルの軌跡／パリのレストラン／弾丸ランナー／アトランタ・ブギ

●1207・12月上旬号　☆836円
日本映画は越境する／クリスマス黙示録／クライング・フリーマン／追悼　藤子・F・不二雄／天海祐希インタビュー／ブラック・ジャック

●1208・臨時増刊　☆1020円
〈ＳＵＮＤＡＮＣＥ／レッドフォードの映画に賭ける夢　サンダンス・フィルム・フェスティバル大特集

●1209・増刊　☆3262円◇送料380円
〈アニメ・データ・ブック1996〉テレビ・オリジナルビデオ・映画の1995年のアニメーションのすべてを網羅

●1210・12月下旬号　☆836円
アル・パチーノのリチャードを探して／シェイクスピア・ブーム／追悼　小林正樹／誘惑のアフロディーテ

1997

●1211・1月上旬号　☆866円
虹をつかむ男／デイライト／花の影／秘密と嘘／竹中直人／アンナ・パキン

●1213・2月上旬号　☆836円
マイ・ルーム／エビータ／クラッシュ／ある婦人の肖像

●1214・2月下旬号〈決算特別号〉☆1325円
96年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1215・増刊　☆2450円◇送料380円
〈戦後キネマ旬報ベスト・テン全史〉1946年度～1996年度まで収録

●1216・3月上旬号　☆836円
マーズ・アタック！／ジャック／聖週間／ユメノ銀河／追悼・マルチェロ・マストロヤンニ

●1218・3月下旬号　☆836円
新世紀エヴァンゲリオン劇場版　シト新生／ジャン・ルノワール映画祭／シャイン

●1219・4月上旬号　☆866円
ロミオ＆ジュリエット／スリーパーズ／そして僕は恋をする／太陽の少年

●1221・5月上旬号　☆850円
傷だらけの天使／ゴールデン・ウィーク映画ガイド／第69回アカデミー賞／田口トモロヲ隔号新連載開始／香取慎吾インタビュー

●1222・増刊　☆4300円◇送料380円
〈映画ビデオイヤーブック1997〉'96年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果

●1223・5月下旬号　☆820円
スター・ウォーズ　ルネッサンス／失楽園／八日目／瀬戸内ムーンライト・セレナーデ

●1224・6月上旬号　☆820円
ザ・エージェント／目撃／「うなぎ」と今村昌平監督／追悼・杉村春子・田中友幸・田村孟・田山力哉

●1225・6月下旬号　☆820円
誘拐／ピーター・グリーナウェイの枕草子／東京夜曲／蔦屋錦之介・追悼と再発見

●1227・臨時増刊　☆1800円
〈テレビの黄金伝説　外国テレビドラマの50年〉ジャンル別年代史／ＴＶ映画人物事典

●1228・7月下旬号　☆820円
20世紀ノスタルジア／ロスト・ワールド／ラリー・フリント／追悼　キン・フー③／インタビュー：ブラッド・レンフロ／西田尚美

●1229・8月上旬号　☆820円
アニメーション1997・夏：もののけ姫、ジャングル大帝他／作家研究：マイケル・チミノ学校の怪談3／カンヌ映画祭レポート

●1230・臨時増刊　☆1800円
〈ブルース・リー・リターンズ・超人伝説〉「燃えよドラゴン」シナリオ完全収録／インタビュー：チャウ・シンチー、ドニー・イェン他／対談・平岡正明×内藤誠

●1231・8月下旬号　☆860円
上半期映画界決算／スピード2／セドリック・クラピッシュ監督研究／追悼：役者魂勝新太郎／追悼・苦見有弘

●1232・9月上旬号　☆820円
フィフス・エレメント／インタビュー岸谷五朗／追悼特集　アメリカの心と魂：ジェームズ・スチュアートとロバート・ミッチャム

●1233・臨時増刊　☆1600円
〈宮崎駿と「もののけ姫」とスタジオジブリ〉対談：宮崎駿×佐藤忠男／宮崎アニメのヒロインの系譜／スタッフインタビュー他

●1234・9月下旬号　☆820円
ブエノスアイレス／世界中がアイ・ラヴ・ユー／私たちが好きだったこと／愛する

●1235・10月上旬号　☆860円
Lie lie Lie ／「マルタイの女」と伊丹十三監督／ウォン・カーウァイ監督インタビュー

●1236・10月下旬号　☆820円
「フェイク」＋選ばれし男たち／ボルケーノ／マーティン・シャーマンの世界／三谷幸喜監督作「ラヂオの時間」撮影現場レポート①

●1237・増刊　☆1600円◇送料380円

Digitized by Google

新世代の映像作家を語るシリーズ第5弾
キネ旬ムック「フィルムメーカーズ」⑤

ジョエル&イーサン・コーエン
コーエン兄弟

責任編集 ロバート・ハリス

A5判／208ページ／1600円（税込）

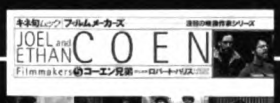
大好評「フィルムメーカーズ」シリーズの第5弾は、最新作「ビック・リボウスキ」でもその才能を余すところ無く発揮した“映像の魔術師”ジョエル&イーサンのコーエン兄弟。

今回の責任編集には、映画・音楽・文学・旅をこよなく愛し、J−WAVEのナビゲーターとしても活躍中の、アメリカン・カルチャーに詳しいロバート・ハリス氏を迎え、各界著名人などによる評論や対談、そして完全データなどにより監督・脚本の全作品を完全網羅。二人のインタビューも交えて徹底研究!!

「フィルムメーカーズ」シリーズ好評発売中

① リュック・ベッソン
② 北野 武
③ クエンティン・タランティーノ
④ ジェームズ・キャメロン

各巻1、600円（税込）



好評発売中

［主な内容］

コーエン兄弟インタビュー　by ロバート・ハリス

対談**石井聰亙×ロバート・ハリス**
コーエン兄弟の魅力を語る

座談会**クリス・ペプラー**＋**キャロル久末**＋**ロバート・ハリス**
アメリカ人的視点で観たコーエン兄弟

監督論**川口敦子**｜映像論**今野雄二**｜
脚本論**滝本誠**

コーエンワールドの住人たち―**イラスト役者図鑑**

コーエン兄弟映画事典｜**完全データ**

その他にも豪華執筆陣による多彩な記事で、
コーエン兄弟を徹底解剖

お問い合わせは、弊社営業部　電話03-3815-7131まで。

Digitized by Google

HOLLYWOOD CLASSICS 20

ハリウッド・クラシックス 20

'98 Nov.14(Sat.)~'99 Apl.2(Fri) ―――― ハリウッド映画史に輝く珠玉の20本連続公開

Vol.1

オズの魔法使
11/14(Sat.)~11/20(Fri.)

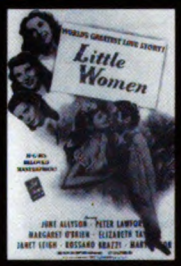
おもいでの夏
11/21(Sat.)~11/27(Fri.)

三つ数えろ
11/28(Sat.)~12/4(Fri.)

ロング・グッドバイ
12/5(Sat.)~12/11(Fri.)

オペラは踊る
12/12(Sat.)~12/18(Fri.)

オーシャンと11人の仲間
12/19(Sat.)~12/25(Fri.)



若草物語
12/26(Sat.)~'99 1/1(Fri.)

スティング
1/2(Sat.)~ 1/8(Fri.)

お熱いのがお好き
1/9(Sat.)~ 1/15(Fri.)

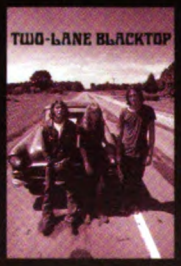
ガープの世界
1/16(Sat.)~ 1/22(Fri.)

Vol.2

北北西に進路を取れ
1/23(Sat.)~ 1/29(Fri.)

アニー・ホール
1/30(Sat.)~2/5(Fri.)

旅愁
2/6(Sat.)~2/12(Fri.)



断絶
2/13(Sat.)~2/19(Fri.)

ニノチカ
2/20(Sat.)~2/26(Fri.)

シャレード
2/27(Sat.)~3/5(Fri.)

熱いトタン屋根の猫
3/6(Sat.)~3/12(Fri.)

ケーブル・ホーグのバラード
3/13(Sat.)~3/19(Fri.)

ビッグ・ウェンズデー
3/20(Sat.)~3/26(Fri.)

雨に唄えば
3/27(Sat.)~4/2(Fri.)

配給:日本ヘラルド映画 HERALD

絶賛連続上映中!!

特別共通鑑賞券好評発売中! 一般券1300円／2回券2400円

当日料金(税込):一般1800円／大・高生1500円／中・小学生・シニア1000円

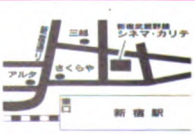
◆レディース・デイ 毎月曜日女性に限り1000円

各回入替制

新宿で初めてのクラシックス専門館

新宿武蔵野館 シネマ・カリテ3

03(3354)5670



Digitized by Google

the Ring.

リング2

'99
1月23日
東宝系ロードショー

製作 ■「リング2」製作委員会
製作協力 ■ アスミック・エースエンタテインメント
配給 ■ 東宝株式会社

リングの恐怖は、始まりにすぎなかった。

「リング2」の制作にあたっては、当学院がSFX・特撮の技術協力をしています。

スペシャル メイクアップ・アーティスト科

平成11年4月生/願書受付中

ビューティー・アートメイク科（共に修学2年）

学校法人 大矢学園グループ
認定CG教育校
（CG ARTS協会認定）

YAG 代々木アニメーション学院

0120-310-042（才能を世に）
FAX 0120-310-595（才能すごくいい）

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-20-3-KJ-11 代々木アニメーション学院
URL http://www.yag.ac.jp/ E-Mail yag_info@po.infosphere.or.jp

秘技！SFX・特撮術がまのあたりに。「SFXスペシャルセミナー PART 2」が12月20日(日)に大阪校にやって来る。

場所／YAG代々木アニメーション学院・大阪校
映画「リング」「らせん」TV「木曜の怪談」の和田卓也特撮監督をホストに、ビッグSFXアーティストとの（トークショー）&（サイン会）あり。

無料 入学案内書進呈中 ご希望の方は、ハガキに①住所 ②氏名（フリガナ）③TEL ④年令 ⑤学年（職業）⑥「スペシャル／ビューティー」と書いて、上記住所へどうぞ。

雑誌 20721-12/1 Printed in Japan 定価820円 本体781円 T1120721120820

Digitized by Google

平成10年12月15日発行 第1273号（月2回1日15日発行）通巻2087号 昭和25年11月25日第3種郵便物認可

保存版：1999年をリードする映画スター特集第2弾［英国＆ハリウッド］

キネマ旬報

KINEJUN

EA
FEB 2 3 1999
HOOVER

12 1998 NO.1273 12月下旬号

2大特別企画 その1

all about U.K. films

英国映画の熱い冬

「ベルベット・ゴールドマイン」「鳩の翼」「フェイス」
「ラブ＆デス」「マイ・スウィート・シェフィールド」他

2大特別企画 その2

WELCOME TO 1999
お正月映画ガイド＆ハリウッドスター HOT SHOTS

ブラッド・ピット、ブルース・ウィリス、リヴ・タイラー、ハリソン・フォード、
ゲイリー・オールドマン他 インタビュー
座談会 金子裕子×北川れい子×塩田時敏

ジョー・ブラックをよろしく／たどんとちくわ
恋の秋／私の愛情の対象／ラブゴーゴー

日本映画解禁となった韓国はいま
THE FACE：佐藤浩市 インタビュー：イザベル・ユペール、ベアトリス・ロマン
イラストレータ[illegible]いる映画館：矢吹申彦
連載対談 和田誠×三谷[illegible]また別の話」：「タイタニック」（後編）

Digitized by Google

よければ、
みなさん ご一緒に！

'99年
1/15(祝)
日比谷みゆき座他
東宝洋画系
ロードショー

佐々木すみ江
由利　徹
朝霧鏡子
笹野高史
光石　研
近藤芳正
田口浩正
徳井　優
木下ほうか
菅原大吉
坂上香織
りりィ
初瀬かおる
古尾谷雅人
岸部一徳

室井　滋
大友康平
尾藤イサオ
伊藤　歩
松田美由紀
竹中直人
北村和夫

（特別出演）
坂本冬美
大川栄策
金子辰雄

小林稔侍

監督：井筒和幸

製作：シネカノン／東宝
日活／ポニーキャニオン
企画・制作：シネカノン
配給：東宝／シネカノン

© 1998 シネカノン・東宝・日活・ポニーキャニオン

あの晴れ舞台に立つまでの、笑いと涙の物語。

のど自慢

DOLBY SR
cinequanon
Digitized by Google

時代劇
SAMURAI FIGURE
侍シリーズ
リアル・アクション・フィギュア 1/6 フル可動

サムライ三船敏郎 参上。

©三船プロ

年末リリース予定

予約受付中

限定版
2,500体
1体 15,000円

※写真は参考品の為、製品と異なる箇所が有ります。

■商品に関するお問い合わせ・ご予約は、(株)アルフレックス・SAMURAI係までお電話下さい。

REAL FACTORY SAMURAI

株式会社 アルフレックス
〒161-0033 東京都新宿区下落合1-5-18-405
Tel. 03-5330-0611 Fax. 03-5330-0610
ホームページ http://www.alles.or.jp/~alfx

侍 三船敏郎の発売にあたり
黒澤 明監督のご冥福を謹んで
お祈りいたします

Digitized by Google

映 像 塾

受講申込み
受付中！

《1ヶ年講座》受講生募集

映像科/シナリオ科/俳優科

○定員になり次第締切ます。お申込はお早めに！

■詳しい案内書（無料）は、下記までハガキまたはFAXで（住所・氏名・年令・職業・電話を明記）ご請求ください。

〒171-0033 東京都豊島区高田3-5-3 第3布施ビル
FAX：03-5391-4335　☎03-5391-4330
映 像 塾　入塾K係

Digitized by Google

キネマ旬報
1998
NO.1273
12月下旬号

目次

ピンナップ
ブラッド・ピット

巻頭特集 ——26
all about U.K. films
英国映画の熱い冬
新作グラビア／「ベルベット・ゴールドマイン」ジョナサン・リース・マイヤース&クリスチャン・ベール　インタビュー　佐藤友紀／トッド・ヘインズ監督インタビュー　大森さわこ／熱い冬を演出する英国映画たち　森直人／「鳩の翼」イアン・ソフトリー監督インタビュー　今井孝子／アリソン・エリオット　インタビュー　吉田真由美／最近英国映画事情　大森さわこ／「トレスポ」なんてつまんない？　杉原賢彦／英国映画界人脈図／「ラブ&デス」リチャード・クウィートニオスキー監督インタビュー　黒田邦雄　／英国映画界レポート　品田雄吉／英国ドキュメンタリー映画の系譜　上島春彦／リチャード・アッテンボロー監督インタビュー　萩尾瞳／最新英国映画界キーパースン録／英国映画インフォメーション

特別企画 ——95
99年正月映画ガイド&ハリウッド・スターHOT SHOTS
インタビュー　ブラッド・ピット　吉田真由美／ブルース・ウィリス　鉄屋彰子／ベン・アフレック　佐藤友紀／リヴ・タイラー　佐藤友紀／ハリソン・フォード　編集部／ジョーン・キューザック　あずまゆか／ゲイリー・オールドマン　横森文／マット・ルブランク／ジャック・ジョンソン／作品総解説／座談会　北川れい子×塩田時敏×金子裕子

FACE ——15
佐藤浩市　●内海陽子

HOT SHOTS ——118
アーノルド・シュワルツェネッガー　春岡勇二／ベアトリス・ロマン　杉原賢彦／「家族シネマ」撮影現場　春岡勇二／「あ、春」記者会見　持永昌也／望月六郎新作　斎藤芳子／「シンク」公開記念座談会／イザベル・ユペール　水原文人

特集
ジョー・ブラックをよろしく ——52
ブラッド・ピットの、ジョー・ブラック役への取り組み　佐藤友紀／作品評　大和晶
たどんとちくわ ——58
市川準監督インタビュー　野村正昭／作品評　田中千世子／新作「大阪物語」撮影現場ルポ　春岡勇二
恋の秋 ——64
エリック・ロメール監督インタビュー　佐藤友紀／プロデューサー　インタビュー　杉原賢彦／作品評　野崎歓
私の恋愛の対象 ——70
作品評　きさらぎ尚、黒田邦雄
ラブゴーゴー ——76
作品評　森卓也／チェン・ユーシュン監督インタビュー　大和晶

インタビュー
サミュエル・L・ジャクソン&ケヴィン・レイノルズ　●石井美由季 ——164

スペシャル・レポート
日本映画開放となった韓国はいま ——82
日本映画開放の現状　門間貴志／釜山国際映画祭レポート　青木眞弥／ソウルで日韓映画の未来を考える　植草信和

Digitized by Google

マイ・フレンド・フォーエバー

THE CURE

12.5 ON AIR

（監督）ピーター・ホルトン
（出演）ブラッド・レンフロ　ジョセフ・マゼロ　アナベラ・シオラ　ダイアナ・スカーウィット　ほか

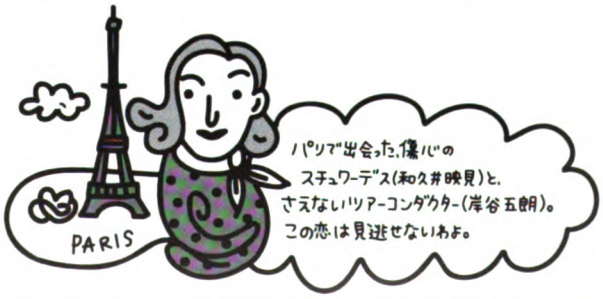
GOLDEN CINEMA

ゴールデン洋画劇場　毎週土曜　ヨル9時

フジテレビ

バースデイプレゼント

12.12 ON AIR
2時間15分でお送り致します。
文字多重放送でお送り致します。



（監督）光野道夫
（出演）和久井映見　岸谷五朗　鈴木杏樹　武田鉄矢　鈴木保奈美　ほか

ゴールデン洋画劇場をご案内する
5つのジャンル別キャラクター。

LOVE ROMANCE

COMEDY

HUMAN DOCUMENT

SUSPENSE ACTION HORROR

ANIMATION AND OTHERS

Digitized by Google

目次

短期連載
映画祭へ向かって——145
第9回　映画祭出品のノウハウ（下）　●林加奈子

好評連載・第3回——126
嘘つき映画館　シネマ・ほらセット
横本治

連載対談——132
これもまた別の話
和田誠×三谷幸喜　「タイタニック」（後編）

連載
カミング・オン・スクリーン　日野康——113
デビュー作の風景　野村正昭——114
イラストレーターのいる映画館
第11回・矢吹申彦——119
立川志らくのシネマ徒然草　立川志らく——123
リレー・エッセイ映画と私　梶研吾——124
オールモスト・クール　芝山幹郎——128
映画を訪ねて　田沼雄一——130
映画戦線異状なし　大高宏雄——160
私の映画日記　井上一馬——174
日本映画時評
第131回「映画の継走」　山根貞男——176
ちょっとイギリスびいき　大森さわこ——183
その場所に映画ありて　田中眞澄——192
映画より面白い　西脇英夫——195
TVトラベラー　樋口尚文——199
ガクノススメ　牧野守——225

キネ旬コラム——94
●浅野潤／浦崎浩實
ワールド・レポート98——149
●U.S.A.　濱口幸一　●ON THE PRODUCTION　井口健二
●ASIA　嘔峻創三　●JAPAN　●映画界ニュース
映画街——158
●興行短信　竹入栄二郎　●スポットライト　内田達夫
キネ旬ロビイ——162
読者の映画評——188
文化映画　渡部実——190
映画の本——193
●森卓也／杉原賢彦
TVレポート——196
●池田敏／豊崎岳彦／望月信夫／
川島雄三の世界　木全公彦
サントラ・ハウス——202
●賀来卓人
VIDEO,LD&DVD GARDEN——204
●「燃えよドラゴン」ディレクターズ・カット　金澤誠　●公開作＆未公開作　丸山尚輝　●2001年ビデオの旅　吉川明利　●アジアのピンキリ　望月美寿　●OVこだわりチェック　中村勝則　●アニメーション＆吹替版　米田由美　●ヴォイス大百科　弓家保則
10月の公開作品（外国映画）——224

キネ旬インフォメーションランド——228
シネ・ガイド
劇場招待券プレゼント＆上映スケジュール
愛読者プレゼント

追悼——139
追悼・淀川長治
双葉十三郎／日野康一／読者のおたよりから

トロント国際映画祭——90
総括　河原畑寧
日本映画とトロント映画祭　編集部
あいち国際女性映画祭98——116
北川れい子
第51回ロカルノ国際映画祭
●常石史子——166
第8回アジアフォーカス福岡映画祭
●友成純一——168
ヴェネツィア映画祭のゲストたちに聞く①——171
ケネス・ブラナー、レイチェル・グリフィス
●大久保賢一
ロッド・ガイガー●田中千世子

劇場公開映画批評——178
ぼくのバラ色の人生　きさらぎ尚
N.Y.殺人捜査線　細越麟太郎
キュリー夫妻　新藤純子
ベルベット・ゴールドマイン　森直人
Mr.マグー　鬼塚大輔
ジャングル・ジョージ　鬼塚大輔
ブギーナイツ　森直人
ラスト・ウェディング　中西愛子
リバース　村岡良昭
騙る大捜査線　北川れい子

キネ旬ニューウェーブ——184
SFサーガのあれこれ　周磨要

日本映画紹介——212
SADA
愛を乞うひと
怯える
はるのそら
イノセントワールド
死臭のマリア
鼻の穴

外国映画紹介——217
従妹ベット
恋の秋
ジャングル・ジョージ
地球は女で回ってる
TOKYO　EYES
ネネットとボニ
ハーフ・ア・チャンス
ビッグ・リボウスキ
マーキュリー・ライジング
Mr.マグー
リプレイスメント・キラー
ワイルド・マン・ブルース

今号の執筆者紹介——226
編集後記＆次号予告——234

Digitized by Google

映画屋

その男は、スタッフから離れて一人ぽんやりと立っていた。野球帽にくたびれたジャンパー、私の目に映った彼は暇な見物人だった。その夜、都内の屋外スタジオで私達は、炎の影を映す車の撮影に入っていた。アングルが決められ、リハーサルが進み、いよいよ火を入れるその時、私は彼が暇な見物人ではなかったと知った。スタッフの指示にすばやく火を起す男、"火付け師"。映画の廻りには実に様々な人々がいる。私は少々の驚きと敬意で彼の働きを見ていた。そしてその後、私の中に彼を強く印象づける出来事は起った。「火が全然足りないなー」カメラマンの一声でスタッフの動きが止まった。幅10メートル、高さ2メートルを越す炎である。だがしかし、車に映る炎の影にはその勢いはない。「これ以上は無理ですよ、許可取ってないし……」チーフが返す。若い監督は許可が必要なことさえ知らなかったのだ。スタジオであっても、火薬や強い炎の撮影時には、警察、消防へ予め届け出なければならない。大きな炎を起せば火災と見誤られ消防へ通報が行く。まして住宅の密集する都内のスタジオでは、この火力が限界だろう。申し込んでも許可など下りるはずもない。全ての作業が振り出しに戻った。重い沈黙と疲労がスタッフを包む。「やりましょうよ」彼がぽつりと言った。「やれますよ。なあに、消防や警察が来たら私が2、3日留まってきますよ」彼の目が輝いていた。空気が変わった。〝やるか〟スタッフ全員の目が彼に応えている。「よし、やろう」監督は決断を下した。夜明けまであと2時間、その場の全員が彼の指示で慌ただしく動く。車を染める烈しい炎を夢見て。1時間後、スタジオの大屋根を越す炎が出現した。私には、炎の前の彼の姿が、やけに大きく見えていた。

「日本映画学校 入学案内」(無料)送ります。

案内書の請求は、住所・氏名・学年(年令)・希望科(映像科・俳優科)明記の上、〒215-0004川崎市麻生区万福寺1-16-30 日本映画学校 キネ旬係まで、ハガキかFAXでお申し込み下さい。TEL.044-951-2511(代) FAX.044-951-2681

学校法人 3年制専門学校
理事長：今村昌平　学校長：佐藤忠男

日本映画学校

学校紹介ホームページ http://www.kawasaki.tao.or.jp/iip/wg/n_eiga/home.html

Digitized by Google

、ビッグスクリーンに登場！

いことがいっぱいだ！

画版

トウォーズ

スペシャル

ランスフォーマー

ボイ危機一髪！／CG版 ビーストウォーズメタルス

トウォーズ映画製作委員会 制作：イオン

新発売

ンスメタルス
ンス
00円

トランスメタルス
ライノックス
2,300円

トランスメタルス
コンボイ
3,650円

トランスメタルス
ワスピーター
2,300円

トランスメタルス
チータス
2,300円

東映系ロードショー

Digitized by Google

クリスマス豪華3本立て

映画館は楽しい

映

ビース

超生命体

CG版ビーストウォーズ
激突！ビースト戦士

／ビーストウォーズII
ライオコン

ビーストウォーズ映画製作委員会：東映・タカラ・イオン・テレビ東京　©1998 Transformer Production Company Inc.／Takara Co.,Ltd. ／ビース
CG:ALLIANCE／MAINFRAME ENTERTAINMENT　アニメーション協力：円谷プロダクション　配給：東映

12月19日よりトランスメタルスシリーズ劇場限定

12月19日(土)全国

Digitized by Google

佐藤浩市

楽だし、しんどい。そこが相米映画の現場のおもしろさ

インタビュアー　内海陽子
撮影　吉岡誠

最初に母親との関係をはっきりさせたかった

「『忠臣蔵外伝四谷怪談』の伊右衛門的なぎらつきかたを持っていてもいいし、『トカレフ』のように暗く冷たくカミソリみたいな触感を持っていてもいいし。ぎらついたイメージでばかり演るということほどつまらないものはないわけで。常に新鮮なイメージのものを演りたいという気持ちは強いです」

私が十数年ぶりにインタヴューする佐藤浩市さんは、豊かな髪に白いものがデリケートに混じって、美しくすすけたかんじがする。相米慎二監督「あ、春」のサラリーマン役は、まさに時宜を得た適役だろう。

「今回は、作品がどうなって行かなくち

Digitized by Google

ゃいけないのかとは考えないで、ある程度現場の中で演って、それを相米さんに任せて、彼がOKを取ったものはなんなのだろうと、そこからまた次を考えて。だから楽だし、しんどいし。まあ、そこがあの人の現場のおもしろいところだから。信頼できますし」

死んだと聞かされていた父（山崎努）の出現に混乱する男の姿にニュアンスがある。

「紘は、混乱するという意識もわからないんです。パニックにならなきゃいけないんだと思いながら、妙に醒めていて、どういう対応をしていいのかわからない。やみくもに受け入れるわけにもいかないし、かといって突き放すわけにもいかないし。それが彼の素直な気持ちでしょう」

母親役は富司純子。ドライブインでのワンシーン、ワンカットはいつもの相米節だ。

「あれが初日だったんです。あのシーンからはいれて僕はすごく助かった。最初に母親との関係をはっきりさせたかったんで。早くに父親を失った母子というのは、男女に近いかんじになる、とあるところである母子を見て思ったことがあって、富司さんの肩に手を回して暗闇にはいって行く時はそんな気分で。見てた連中が『コウイチ、なんかかんちがいしてないか』というんです。あ、うまくいったなと思った。あそこがちょっと男女っぽく見えて、そういう距離感が作れると、ほかの人との距離感の作りかたが楽だったんで」

アンサンブルに気を配る姿勢にもおとなの男を感じさせる。

「紘は女性三人（母、義理の母、妻）とうまく距離を取れる男なんです。そのへんの小狡さは、彼が育った環境の中で培われたもので、人との距離を測ることは決して下手ではない」

入院した父と病院の屋上で、残照の中、語り合うシーンがひとつのクライマックス。

「親であろうが友人であろうが、人を受け入れるということは〝血〟ではないんだ、ということを紘が確認した後のシーンなんです。もっとエモーショナルなものを観客に与えようとすれば、いくらでもそういう作りかたはできるわけですが、相米監督がそんなことを考えてるわけもないし、僕らもそういう形でやってるつもりはなかった。あそこはウェットなように見えて、実はすごく乾いているんです。きらいじゃないですね」

観てくださる方にしんどさがほそぼそと伝われば

演技に対する構えは慎重でまじめだ。九八年は、話題を呼んだホラー「らせん」でも若い父親を好演した。

「あれはデビッド・クローネンバーグの『デッドゾーン』まで行けるかなと思ったんですが、全然悲しくならなくて（笑）。ものすごく自分自身がいやで、映画に対して驕りを持っていたなあと感じさせられました。男女の怨念ではない悲しみが横たわっているところが特殊だと思ったんで、すごく演りたかったんです。だけどみごとに失敗しました」

テレビの連続ドラマでは役の〝根っこ〟が作れないのが苦労する点だという。

「そうはいっても自分が生きのびなきゃならないし。とりあえずトレンディ・ドラマであろうがCMであろうがテレビに露出していないと、今度は逆に映画にも出させてもらえないというジレンマがあって（笑）。たとえばインディペンデント映画を撮るにしたって、三千万円、四千万円を出してくれる会社の人がいたとして、その方たちが知っている顔でないとならない。自分のプロモーションもしていないと、映画も成立しなくなるんです」

そうはいっても、CMではかなりいい味を出している。佐藤浩市の多様なイメージの浸透に大きく貢献しているはずで、CMを見たサラリーマンに町で声をかけられたこともある。

「そんなバカなと思いながらも、（CMの中のサラリーマンが）やってしまう感覚が、彼らにも感覚的にわかるんでしょうね。現実的には、僕も相米さんもサラリーマン経験は一度もないし、今回の映画では、ふたりともサラリーマンをやったことがないのに、どうやって描くんだ？って笑っていましたけど」

でも生きているということは誰でも、どんな職業に就いていても、どこかで皆、しんどい思いをしているわけですから。

「それがどこかで出ていればいいですね。そのしんどさが、観てくださる方に、ほそぼそと伝わればいいなと思うんですけど」

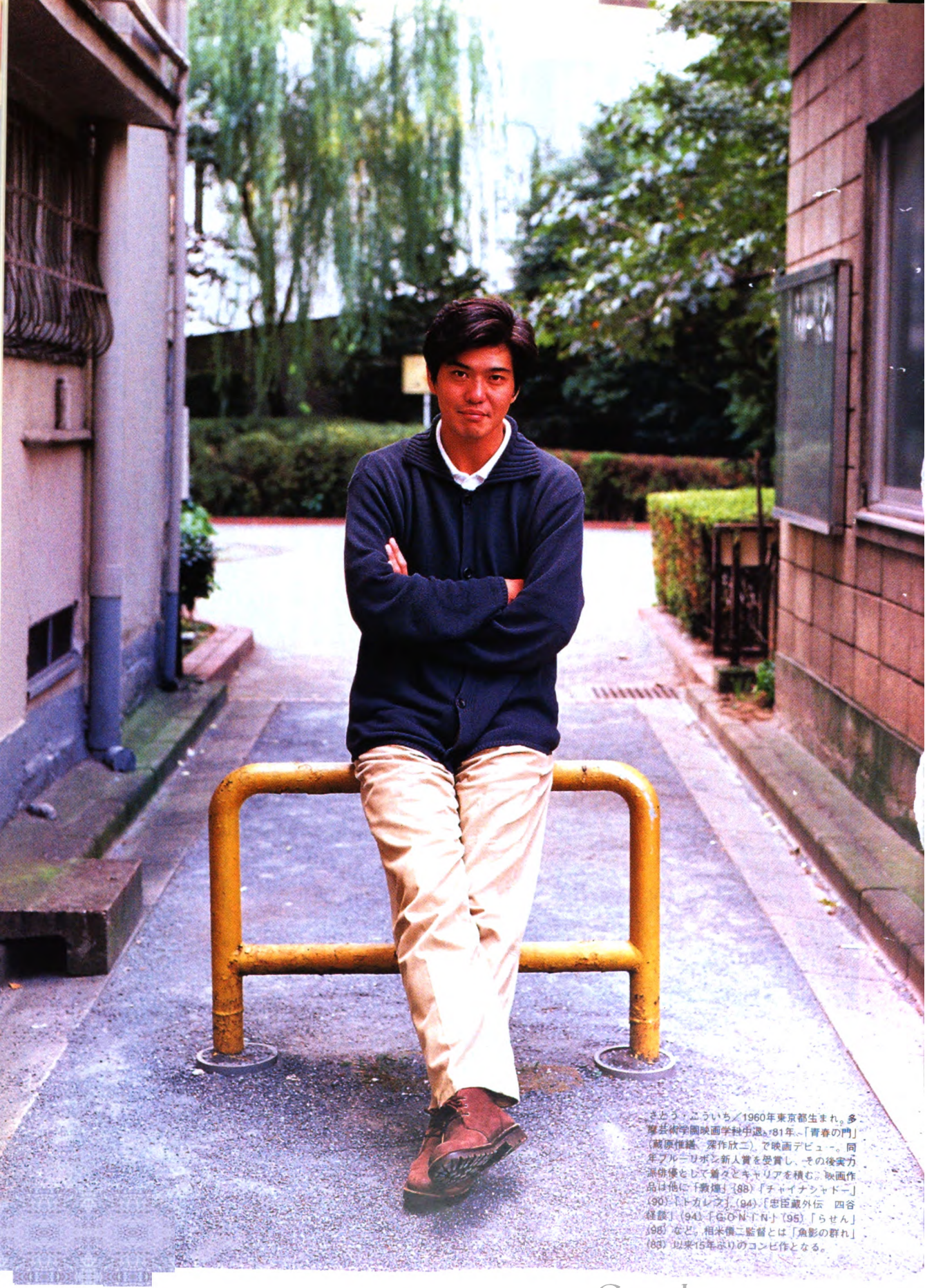
その〝ほそぼそ〟ぐあいといいますか、地味なところが「あ、春」の品の良さですね。

「ああ……そういっていただけると。きっとそれは相米監督の品性なのかもしれない」

彼の表情は、最愛の父を思いやる息子のそれであった。

「あ、春」12月19日よりテアトル新宿にて公開

Digitized by Google



さとう・こういち／1960年東京都生まれ。多摩芸術学園映画学科中退。'81年、「青春の門」（蔵原惟繕、深作欣二）で映画デビュー。同年ブルーリボン新人賞を受賞し、その後実力派俳優として着々とキャリアを積む。映画作品は他に「熱烈」（88）「チャイナシャドー」（90）「トカレフ」（94）「忠臣蔵外伝　四谷怪談」（94）「GONIN」（95）「らせん」（98）など。相米慎二監督とは「魚影の群れ」（83）以来15年ぶりのコンビ作となる。

Digitized by Google

TOPICS

アーノルド・シュワルツェネッガー

「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」地鎮祭に、シュワちゃん来たる

去る10月28日、ハリウッドのビッグ・スター、シュワちゃんことアーノルド・シュワルツェネッガーが大阪に現れた。といっても、新作映画のキャンペーンに訪れたのではない。2001年春、大阪にオープンする「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」の建設地鎮祭と起工式、さらにその祝典のスペシャル・ゲストとして来阪したのだ。

「ユニバーサル・スタジオ」といえば、ハリウッドとフロリダにある、映画をテーマにした世界有数のアミューズメント施設。「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」はその海外進出の第1号で〈ジュラシック・パーク・ザ・ライド〉や〈ジョーズ〉、〈バック・トゥ・ザ・フューチャー・ザ・ライド〉などのアトラクションがお目見えするのだが、さらにそれを凌ぐ目玉としてジェームズ・キャメロン製作の〈ターミネーター2・3D〉が登場、その主演がシュワルツェネッガーという訳だ。

午後4時半。建設予定地の此花区桜島にシュワルツェネッガーが到着。ちょうどその時、式場入口にいた僕は間近でその姿を見ることができた。第一印象は、もちろん大柄だけど、思っていたほど大きな人じゃないな、だった。映画ではアメリカそのものを体現するかのようなタフなヒーローを演じる彼のイメージから、かなりの巨漢を想像していたのだが、実際は日本人よりも一回りだけ大きいといった感じだ。ただ、がっしりとして均整のとれた体型は、さすが元世界一のボディ・ビルダーだ。

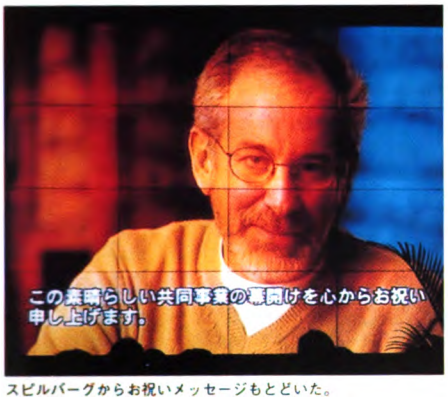
地鎮祭の式場はすでに参列者でいっぱいだったが、シュワルツェネッガーは、巫女さんに手をすすいでもらった後、最前列に。やがて雅楽の調べと共に住吉大社の宮司さんが入場。彼は式の間中、神妙な面持ちだった。「とても珍しく、荘厳な雰囲気が素晴らしかった。またプロジェクトに関わる全員が参加しているのがよく、夢が現実になる瞬間を記念する祭事として強い印象をうけた」と、式の感想を後の記者会見で語ってくれた。

続く起工式では、大阪市の磯村市長らと並んで"杭打ち"に参加。格式張った行事に華やかなムードを与え、午後6時半、会場を大阪港天保山のホテルに移して記念祝典が始まった。

夕闇迫る大阪の海を背景にした野外特設会場。スピルバーグからのビデオ・メッセージなどを交えた来賓挨拶の後、今度は皮ジャンのターミネーター・スタイルに変身したシュワルツェネッガーが、ロボット・ターミネーターと一緒にステージにせり上がり会場を大いに沸かせてくれた。ついでE.T.も登場し、多数の花火を夜の海に打ち上げてのフィナーレはエンタテインメントの本場を思わせる見事な演出だった。

「世界トップ・クラスのテーマ・パーク・プロジェクトに関わることができて、本当に幸せです。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンは、多くの人の夢の結晶です。そして、将来性豊かなビジネス・チャンスでもあります。また、大阪にとっても2008年オリンピック招致活動にいい影響を及ぼすはず。つまり、すべての人を幸せにするプロジェクトなのです」と、記者会見で終始笑顔で語っていた彼。そこには政界進出の噂も出る彼の一面が垣間見られた気がした。そして、オープン時にはまた来てくれますかの質問に「アイル・ビィ・バック!」と得意の台詞で決めてくれるあたりは、千両役者の風格だった。

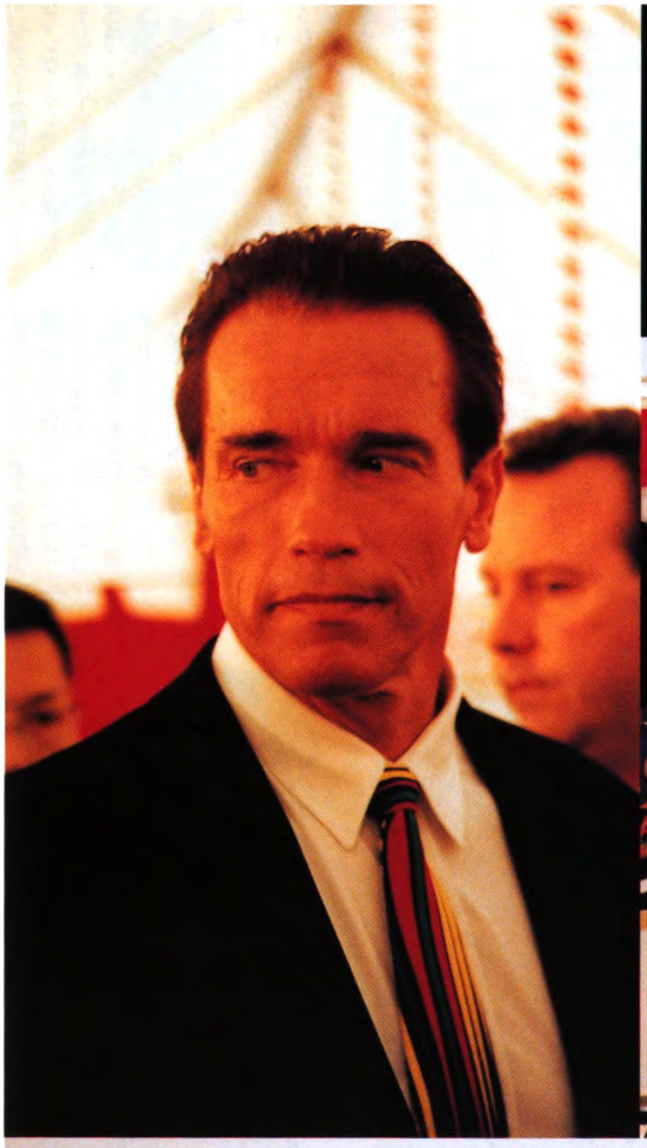
[春岡勇二]



スピルバーグからお祝いメッセージもとどいた。

Digitized by Google

撮影／春岡勇二



シュワルツェネッガーと並ぶキャシー・A・ニコルズ（ユニバーサル・スタジオ・クリエーション・グループ会長兼最高経営責任者）と
ロ[illegible]（ユニバーサル・スタジオ社長兼最高執行責任者）

Digitized by Google

ジプシーの歌が終わり、エンディング・クレジットも終わり、そして幕が上がる。現れたのは、妖精。ほんのいままで、恋のときめきを覚えた中年の女性を演じていたとは思えないほどに軽やかにリリカルに、壇上に踏み出したベアトリス・ロマン――。

「ロメールからシナリオを手渡されたのは、撮影の数カ月前。もうすでに最終的なセリフが書き込まれていました。ロメールは、映画のなかで実際の舞台となったブドウ園や、そこで作業する女性醸造家を写したヴィデオをシナリオとともに手渡してくれ、私たちはそれを見ながら、準備を始めたのです」

東京国際映画祭で「恋の秋」が上映された前日に行われたインタヴューに現れたロマンは、映画のなかの、意固地な、それでいてかわいい中年の女の貌(かお)ではなく、永遠の少女の雰囲気をたたえる。

「マガリ役を演じるにあたって、農夫らしく見えるようにするのに気を遣いました。たとえば、マガリが腕まくりをするところでは、肘の上まで袖をたくし上げました。ブドウ園の女性醸造家がやってたのと、同じように。マガリのライオンのたてがみのような髪も、私がロメールに提案したものです。あの髪によってマガリは、周囲から身を守っているのです。その臆病な心を」

ゆったりとしたリズムで語られるロマンの言葉。秋の陽射しのような、そんな心地よさを、その声にふと感じよう。

「ロメールの撮影現場は、いつも違っています。今回は、ほとんど丸一日をつぶして入念なリハーサルを行いました。イザベル役のマリー・リヴィエールとは、以前は本当に仲のよい友人だったのですが、その後、住むところも遠く離れてしまい、『緑の光線』以来。その頃の思い出をたぐり寄せながら、演じたのです」

ふたりの、ロメール女優たちに、秋の陽射しの赤ワインで乾杯しよう――。［杉原賢彦］

INTERVIEW

ベアトリス・ロマン

「恋の秋」で6度目のロメール体験

「恋の秋」シャンテ・シネにて上映中

撮影／吉岡誠

Beatrice Romand／「クレールの膝」(70) で初主演し、「美しき結婚」(82) ほかロメール作品の常連になる。

Digitized by Google

INTERVIEW

「家族シネマ」

韓国先行公開中の韓日合作映画

韓国で今、1本の作品が話題となっている。日本文化開放政策に伴い、11月28日から、朴哲洙（パク・チョルス）監督の「家族シネマ」が公開されているのだ。これは在日韓国人作家、柳美里（ユ・ミリ）の、芥川賞受賞作を映画化したもので、監督を初めスタッフは韓国人だが、撮影は奈良と大阪を中心にすべて日本で行われ、出演者は大半が日本人と在日韓国人という韓日共同作品。ほとんどの台詞が日本語で語られており、そういった作品としては韓国で初めての公開となる。

8月下旬の土曜日。奈良県で撮影中の現場を訪ねた。場所は田原本町駅から車で5分ほどの民家。原作者の妹で、主人公の一家の長女役で出演している柳愛里（ユ・エリ）にさっそく話を聞いた。

「姉の原作だからという訳ではなく、朴監督の作品に出られてとても嬉しい。監督も共演者の方たちも敏感な方ばかりで刺激的な体験を楽しんでます」とのこと。その共演者の中で、会えるのが楽しみだったのが、昔からファンだった伊佐山ひろ子。彼女は一家の母を演じている。

「うん、ほんとこの現場は刺激的。言葉は通じなくても、監督とはなんだか皮膚感覚で理解しあえるの。私も20年前のデビュー当時に戻ったみたいな新鮮な感覚を味わっているわ」と語ってくれた。

物語は、20年間バラバラだった一家が、俳優をしている次女のために再会し、家族で映画に出演してその在り方を見つめ直すもの。核となるのが父親で、これを「月はどっちに出ている」などの原作者としても知られる作家の梁石日（ヤン・ソギル）が演じ、「おもしろいけど、やっぱり大変」と言いながら、初出演とは思えない存在豊かな芝居を見せていた。

朴監督は「この仕事で、映画が世界言語であることを再確認できた。日本の俳優たちのフィーリングは素晴らしい。作品結果は観客が判断してくれればいいのだが、今、僕はとても充実しているし、自信もある」と力強く話してくれた。日本での公開が待ち遠しい。[春岡勇二]

（上）借りている民家を外から眺める朴哲洙監督　（中）監督の演出を見守る主演の一人、柳愛里　（下）映画監督役で出演するかたわら、両国のスタッフ・キャストの橋渡しの役目も果たしている、劇団「新宿梁山泊」の主宰者・金守珍（キム・スジン）と、主人公一家の妹役で出演する松田いちほ

Digitized by Google

（左より）相米慎二監督、藤村志保、斉藤由貴、佐藤浩市、富司純子。12月19日公開。

新作

「あ、春」完成披露記者会見

さる11月7日、相米慎二監督にとって4年ぶりの新作となる「あ、春」が東京国際映画祭の特別招待作品として上映された。村上政彦の小説『ナイスボール』を中島丈博が脚色した同作品は、親と子、そして夫と妻の心の結びつきを問いかける内容だが、目を惹くのはそのキャストの豪華な顔ぶれ。この日は欠席となった父親役の山崎努さんを加えると、まさに現在の日本映画界を代表する実力派俳優の共演が実現した作品といって過言ではないだろう。「素敵な俳優さんがこれだけ揃ってくれたので、普段はお客さんの入りまで気にしないけれど、今回はたくさん来てほしいと願っています」と、相米監督。新春にふさわしい、艶やかな作品だ。テアトル新宿ほかでロードショー。[持永昌也]

TOPICS

望月六郎、始動！新作「皆月」製作会見

昨年度多くの賞に輝いた望月六郎監督が一年振りにメガホンを取る「皆月」は、一人の男の"心の軋み"と"癒しがたい傷からの再生"を描いた物語。花村萬月の同名小説を荒井晴彦が脚本化、主演は奥田瑛二。「みんな月でした。がまんの限界です」。謎の手紙を残し忽然と消えた妻（荻野目慶子）。冴えない中年男（奥田）はヤクザの義弟（北村一輝）とソープランド嬢（吉本多香美）と共に妻を探す旅に出る…。「特に好きな作品を映画化できて嬉しい。3人だったらはい上がっていける、そんな"妙な明るさ"がいい」（望月）。奥田は「愛すべきおっさんを演じたい。『千利休』以来の"受け芝居"。いい作品にしたいし、自信があります」と撮影の意気込みを語る。[斎藤芳子]

（左より）北村一輝、吉本多香美、奥田瑛二、望月六郎監督。「皆月」は来年3月公開の予定。

Digitized by Google

撮影／池田英俊

INTERVIEW

97年PFFアワード・グランプリ受賞作

「シンク」公開記念

村松正浩監督、松崎ナオ、野田慶、光安稔 青春座談会

それは自由映画から始まった

「シンク」12月19日よりBOX東中野にてレイト・ロードショー。初日21:00より4人の舞台挨拶あり。1月23日よりは銀町ミュージアムスクエアでも公開。
松崎ナオ、フル・ファースト・アルバム「正直な人」発売中。

左から、光安稔71年生まれ（実役）監督、野田ともに東京造形大学の同窓生。野田慶71年生まれ（五月役）監督作あり。村松正浩72年生まれ（監督）「手の話」96年PFFキャスティング・技術賞受賞。松崎ナオ76年生まれ（クミ役）98年デビューの新進アーティスト。

女の子と二人の男。突然テレパシーのように会話できる能力が備わった男女三人を描く「シンク」は、村松正浩監督の大学卒業制作にして、97年PFFアワード・グランプリ受賞作品。主演三人＋監督の座談会は、監督の到着を待たず始まった。

光安　人を呼んでおいて、自分が遅れるのは彼の定番です。

野田　何様のつもりか知らんが。

光安　怒るなよ（笑）。

野田　僕は、大学の一年後輩なんですが、「ちょっとスタッフとして手伝ってよ」で、気が付くといつも主役級の役を演らされてた。「シンク」の時もそう。

光安　ふつう何本か撮るうちに離れていくんだけど…（笑）。

野田　僕が借りを作らないで済む、唯一の人だから（笑）。

光安　気持ち良く人に奉仕させる…一種の才能です。僕は同級生で、「次出てよ」「出る出る」って感じで出ました。前（「手の話」で）はスタッフだったから、次はお返しに出してやると。

野田　あの人の場合、本気でそう思ってる節がある（笑）。でもその思い込みが大切なのかも。今も撮ってるの村松君だけですから。僕らも映画撮ってたけど。

光安　松崎さんとは他の現場で会ったんですよね。「いい子に会った。でも考えてた線と違うから脚本を直す」って言ってた。

松崎　最初、江角マキコみたいな人を考えてたって聞いた。

野田　言ってた（笑）。

松崎　友達が撮ってたオムニバス映画で、村松さんがカメラやってた。で、映画を撮るって言うから、「出してみない？」って軽く言ったの。その頃、チャラが映画に出てて、いいなって単純に思ってたから（笑）。通行人のつもりだったんだけど、空いてた役が主役だった。

野田　あの人の手だよ（笑）。

松崎　デビューは決まってたけど、メチャクチャ暇だったから、友達に会いに行くノリで撮影に行ってた。皆に出会えたのも、すごくプラスだった（一同男泣き）。でも今は音楽に専念したいと思ってる。それは映画をやってるうちに、曲がかけなくなっちゃったから。意識してなかったけど、演技って曲作りと使うエネルギーが同じなのかも。

村松　（登場、前略）超能力という要素を取り入れたのは、この映画をエンターテイメントとして成立させるため。でも超能力映画にしないのは、それにロマンを感じないから。なぜなら映画や漫画で超能力ものをほぼ掌握してる僕らの世代には、もう組み替えしか残されてないから。でも今の若い子は、それすら考えない。既に全てがあるから。だから漫画も読まないし、ゲームもしない。僕らはロマンを求める最後の世代なのかも

［お詫びとお勧め］映画を見てない人にはわかりにくい記事になってしまい、申し訳ありません。彼らの煌きの上澄みを掬い取って並べてみたら、こんな座談会になっちゃいました。実物はもっと素敵な役者＆監督、そして映画です。舞台挨拶（1/26）で直に会い、映画を見て、実感して下さい。

Digitized by Google

イザベル・ユペール

「キュリー夫妻 その愛と情熱」でキュリー夫人を熱演

撮影／水原文人

「キュリー夫人は私のスターよ」イザベル・ユペールはそう言ってほほ笑む。「彼女はとても感動的な、傑出した人物。アインシュタインは彼女のことを、『栄光によって絶対に堕落しなかった唯一の女性』と言っているわ。大変な栄光だったはずで、当時はとても〝メディア化〟されていたのに、それでも本人はまったく純粋なままだったのよ」

「キュリー夫妻」のキュリー夫人役はユペールにとって、必ずしもよく演じているタイプの役ではない。「コメディというだけなら以前にもやっているけど、彼女はとてもポジティブで、エネルギッシュで――私はどちらかといえば複雑で、神経症的な役が多いけれど、マリー・キュリーはとても明快だわ」

ポーランド出身のマリーを、ユペールは見事なポーランド訛りで演じている。「知らない訛りのはずなのに、自然に出て来たの。ちょっと音を引く、歌うような響きで、マリー・キュリー自身、一生この訛りを保ち続けていた。彼女が晩年にアメリカで名誉学位を受け取ったときの録音が残っているけど、なぜかフランス語で、あの訛りでしゃべっているのよ。とても感動的だったわ」

監督はクロード・ピノトー、「ラ・ブーム」等で知られ、むしろ商業映画のイメージがある。ユペールが組むのは初めてだが「確かに私は純正コチコチの作家映画が多いけど（笑）、別に先入観はなかったわ。彼は優れた職人で、素晴らしいテクニシャン。いいコメディというのは、ノウハウの賜物でもあるわ」

「撮影はほとんどスタジオで、快適だったわ。（劇中の研究室で凍えてる設定と違って）とても暖かかったし（笑）。これは映画史に革命を起こす野心作じゃないけど、とても愛らしい映画だわ。それに勉強にもなる。キュリー夫妻がどう生き、彼ら

Digitized by Google

Isabelle HUPPERT‥1955年パリ生まれ。71年にニナ・コンパネーズ監督の「夏の日のフォスティーヌ」で映画デビュー。主演作に「パッション」(82)、「ボヴァリー夫人」(91)など。「キュリー夫妻　その愛と情熱」は銀座シャンゼリゼにてロードショー上映中。

がどう働いていたか――コメディに脚色されてはいるけれど、すべて事実を基にしているのよ」

「キュリー夫妻」は大ヒットした舞台劇の映画化。ユペール自身もロンドンで「メアリー・スチュアート」を演じるなど、演劇にも進出しているが、稽古で舞台を作り、何度も繰り返し上演することは「あまり好きじゃない、苦痛よ」と言う。撮影中のリハーサルも苦手で「繰り返しやることがあっても、いったん全部捨てて、カメラを回す時には新鮮であるようにはしている……でも何かが少し失われるわ」

リハーサル嫌いは「私が怠け者だから」と笑う。「いろいろ探ったり、厳密に役作りをしたり、長い台詞だとか、好きではないのよ。まあ演劇はそれが義務だから仕方ないけど。映画の方がリラックスできるわ。舞台は二、三年に一度ぐらいでいい。映画なら一年五本でもできるけど」。ちなみにロンドンの後にパリで「人形の家」を上演の予定だったが、出産のためキャンセルした。その長男、アンジェロ君の乳母はイギリス人で「彼女は英語しか喋らないの」。バイリンガルで育てるつもりなのだろうか？「それもあるけど、私自身の練習なのよ（笑）」。「メアリー～」はもちろん英語上演だったし、今後はその映画化や、「俺たちに明日はない」の巨匠アーサー・ペンの久々の新作にも出演する。

名コンビ、クロード・シャブロル監督との五作目"Rien ne va plus"も好評。シャブロルのことは「彼の映画も、その撮影法も、そして何よりも人物に対する道徳的な判断をしないところが大好き」と言う。「彼の人物たちは現実からそのまま取り出され、フィクションによって曇らされていない。彼らはしばしば犯罪性者であり、また社会の軋轢の反映でもある」。そんなシャブロル映画の中でも、「沈黙の女」は、「他の役柄は俳優であれば（実生活の自分から役に）近づくことはできるけど、大量殺人者というのは（笑）、やっぱり鏡の向こう側に留まってるわね」

「もちろん俳優なんだから、多少の想像力は使えるわ。それでも虐殺に至る心理を見つけるのは、難しかった。社会のシステムがあいう結果をもたらす可能性は理解できるけど、自分の中にそれを見いだせるかどうかは……賭けね。撮影の直前になって、気違いじみた笑いがねじれた方向に進んでしまうことを思いついたの。一種の狂気なのだけど、計算や意図でなく、極端な笑いから狂っていくこと」。その"狂った笑い"こそシャブロルの世界観だとユペールは考える。

「俳優であることを自分だけで自覚するのは難しい」と言う。「むしろ他人の眼差しの中に自分を俳優と見ているものがあって初めて、俳優になるのではないかしら。それに俳優になるのはしばしば、他にたいしたことが出来ないからなの。俳優業って、野心のゴミ箱みたいなものだわ（笑）。自分がダンサーにも、歌手にも、哲学者にもなれないと思い知らされたとき、それなら女優にでもなろうかしらって――それがたいていは上手くいっちゃうのよ（笑）」

［水原文人］

Digitized by Google

U.K. films

巻頭特集 英国映画の熱い冬

Digitized by Google

「トレインスポッティング」の大ブレイク以来、英国映画が絶好調だ。
1960年代末にモードとロックで世界を制覇し、70年代前半にはグラムロックで、さらにはパンクでと、世界を圧倒的な興奮で包んできた英国のカルチャー・シーン。そして90年代のいま、英国は映画で世界を制覇しようとしているかのようだ。
今年、英国年を迎えた日本はそのただ中にある。そしてこの冬、近年にない寒波の襲来が予測されるなかで、映画シーンは熱い冬を迎えようとしているのだ――！
今年のカンヌを騒がせた、グラムロック・シーンを描いた「ベルベット・ゴールドマイン」はじめ、ヘンリー・ジェームズの傑作をロマネスクあふれる映像へと移し変えた「鳩の翼」、美少年とインテリな男との愛憎を描いた「ラブ＆デス」、さらにはロバート・カーライルを主演に迎え犯罪に手を染めてしまった男たちの姿を織った「フェイス」、そしてひと組の男女の出会いと別れをさらりと描き、英国映画の深みを見せる「マイ・スウィート・シェフィールド」、いまや英国映画界でもっとも注目を集めるマイケル・ウィンターボトムの「アイ ウォント ユー」（本作については次号にて特集予定）などがこの冬、次々とロードショー公開されようとしている。冬を熱く彩る映画たちの勇姿。
これらの作品の監督たちすべてが、若き俊英たちなのだ。恐るべし、英国映画！

all about

本特集でおおくりするのは、この冬を熱くする、いや世紀末の世界を熱くするであろう英国映画の様態だ。英国映画、その隆盛はすでに、かつてから用意されていたのではなかったかという推測の下に、最新の英国映画界レポート、人脈図、キーパースン録、さらには注目すべき監督・俳優たちへのインタヴューなどなど、ホットな内容でお届けしよう。
英国映画の熱い季節が始まる。いま、この冬から、それは始まっているのだ――。

Digitized by Google

VELVET goldmine

ベルベット・ゴールドマイン
VELVET GOLDMINE

●1998年・イギリス・カラー・ヴィスタサイズ・2時間4分
●監督・脚本／トッド・ヘインズ　製作／クリスティーヌ・ヴァション　共同製作／オリヴィア・スチュアート　製作総指揮／サンディ・スターン、スコット・ミーク、マイケル・スタイプ、クリス・J・バール、ウィリアム・タイラー　撮影／マリース・アルベルティ　美術／クリストファー・ホッブス　音楽監修／ランドール・ポスター　音楽／カーター・バーウェル　衣裳／サンディ・パウエル
●出演／ユアン・マクレガー、ジョナサン・リース・マイヤース、クリスチャン・ベール、エディ・イザード、トニー・コレット、エミリー・ウーフ、リンゼイ・ケンプ
●配給／日本ヘラルド
●12月5日よりシネマライズにてロードショー公開

FACE

フェイス
FACE

●1997年・イギリス・カラー・ヴィスタサイズ・1時間40分
●監督／アントニア・バード　脚本／ローナン・ベネット　製作／エリノア・デイ、デイヴィッド・M・トンプソン　共同製作／ポール・タイヴァース、ヘレナ・スプリング　製作総指揮／アナント・シン　撮影／フレッド・タムス　美術／クリス・タウンセンド　音楽／ポール・コンボイ、エイドリアン・コーカー、アンディ・ロバーツ　衣裳／ジル・テイラー
●出演／ロバート・カーライル、レイ・ウィンストン、スティーヴ・スウィーニー、ジェリー・コンロン、レオン・ブラック、フィリップ・デイヴィス、デイモン・アルバーン、レナ・ヘディ、ピーター・ヴォーン、スー・ジョンストン
●配給／東北新社
●12月19日より恵比寿ガーデンシネマにてロードショー公開

U.K. film

Digitized by Google

マイ・スウィート・シェフィールド

スウィート・シェフィールド
LONG GIANTS

●1998年・イギリス映画・カラー・ヴィスタサイズ・1時間32分
●監督／サム・ミラー　脚本／サイモン・ボーフォイ　製作／スティーヴン・ガレット　撮影／ウィトルド・ストック　美術／ルアナ・ハンソン　音楽／ティム・アタック　衣裳／ステファニー・コリー
●出演／ピート・ポスルスウェイト、レイチェル・グリフィス、ジェームズ・ソーントン、ロブ・ジャーヴィス、レニー・ジェームズ、アンディ・サーキス、アラン・ウィリアムス、スティーヴ・ハンソン、シャロン・バウワー
●配給／シネカノン
●12月23日よりシネ・ラ・セットにてロードショー公開

LOVE & DEATH ON LONG ISLAND

ラブ&デス
LOVE AND DEATH
ON LONG ISLAND

●1997年・イギリス・カラー・ヴィスタサイズ・1時間33分
●監督・脚本／リチャード・クウィートニオスキー　原作／ギルバート・アデア　製作／スティーヴ・クラーク＝ホール、クリストファー・ジマー　撮影／オリヴァー・カーティス　美術／デイヴィッド・マクヘンリー　音楽／インセクツ＆リチャード・グラスビー＝ルイス　衣裳／アンドレア・ゲイラー
●出演／ジョン・ハート、ジェイソン・ブリーストリー、フィオナ・ロウイー、シーラ・ハンコック、モーリー・チェイキン、ゴーン・グレインジャー、ハーヴェイ・アトキン
●提供／フジテレビジョン、アスミック・エースエンタテインメント　配給／エース・ピクチャーズ
●銀座シネスイッチにてロードショー公開中

THE WINGS OF THE DOVE

鳩の翼
THE WINGS OF THE DOVE

●1997年・イギリス・カラー・スコープサイズ・1時間41分
●監督／イアン・ソフトリー　脚本／ホセイン・アミニ　原作／ヘンリー・ジェームズ　製作／スティーヴン・エヴァンズ、デイヴィッド・バーフィット　製作総指揮／ボブ・ウェインスタイン、ハーヴェイ・ウェインスタイン、ポール・フェルドシャー　撮影／エドゥアルド・セラ　美術／ジョン・ベアード　音楽／ガブリエル・ヤレド　衣裳／サンディ・パウエル
●出演／ヘレナ・ボナム・カーター、ライナス・ローチ、アリソン・エリオット、エリザベス・マクガヴァン、アレックス・ジェニングス、シャーロット・ランプリング
●提供／ポニーキャニオン、アスミック・エースエンタテインメント　配給／エース・ピクチャーズ
●12月12日よりBunkamuraル・シネマにてロードショー公開

all about

Digitized by Google

クリスチャン・ベール
Christian Bale

1974年ウェールズ・ペンブロークシャー生まれ。10歳のときにローワン・アトキンソンと舞台で共演したのをきっかけに「太陽の帝国」(87)の主人公の少年役に抜擢され名子役ぶりを披露。その後「スウィング・キッズ」(93)、「若草物語」(94)などで実力を発揮する。主な出演作に「ある貴婦人の肖像」(96)、「シークレット・エージェント」(96)など。99年は"A Midsummer Night's Dream"にも出演予定。

クリスチャン・ベール●ジョナサン・リース・マイヤース
christian bale●jonathan rhys meyers interview

インタビュアー
佐藤友紀
PHOTO
©J.L.TORNATO

ジョナサン・リース=マイヤース
Jonathan Rhys Meyers

アイルランド生まれ(生年未詳)。ニール・ジョーダン監督の「マイケル・コリンズ」(96)で暗殺者の少年を演じて印象を残す。イギリス=スペイン合作の"La Lengua asesina"(96)、"Nar Finber Forsvann"(96)、ティム・ハンター監督の"The Maker"(97)などを経て本作のスレイド役をゲット。99年には大作「タイタス・アンドロニカス」もひかえる。

Digitized by Google

●クリスチャン・ベール 70年代はもう、とことんやってやれ！って時代。

「90年代の今、過去を振り返ってみると、80年代はキンピカで野暮ったい時代だったことが分かる。例えば、夜通し大騒ぎしていたとするだろ。と、80年代は〈昨日はバカ騒ぎし過ぎたから、今日はジッとしてよう〉なんて考える奴らが多かったと思う。ところが70年代はもう、とことんやってやれ！　ってのかな。グラムロックによって、60年代の文化がもっと大きく開花していった気がするんだよ」

ジャーナリストとして、伝説のスター、ブライアン・スレイドの消息を追っていただけのことはある。アーサー役のクリスチャン・ベールは、この映画の時代背景についても独自の考えを持っている。

「ユアン・マクレガーやジョナサン・リース・マイヤースの化粧がさまになっているのに、僕の化粧が気持ち悪かったのは（笑）、意図的さ。あれ、自分でやったんだよ。というのは、70年代の奴らの写真や映像を見ると、みんなひどい顔になっている。その点、今のブームの70年代ファッションなんて、ちゃんとデザイナーの手が入った作り物で。当時の若者は、高い服なんか買えなかった。みんな自分で手直ししたオリジナルで、化粧法もでたらめ。でも僕の演じたアーサーと同じで、スター的なキラキラした存在に対する憧れの気持ちが表れていると思わないかい？」

アーサーは、スクープで生計を立てているから、ブライアン・スレイドの行方を必死で追う。

「追っているのは、〈現在の彼〉なのに、想いはどうしても〈過去〉へと戻っていく。今や現実には皮肉屋で、辛辣な人間になってしまった自分に気づく一方で、自分だけの青春時代が戻ってきた喜び。だからアーサーは、青春時代に出会った人達を捜し出していくうちに、昔の思い出をこわしたくないという相反する気持にもかられたと思うんだ。今回は、監督のトッド・ヘインズが、僕たちに即興で台詞を言ったりする自由をくれたのもうれしかったな。シェイクスピア劇でそれをやったら張り倒されちゃうだろうけど（笑）、トッドはとことん寛大だったんだよ」

●ジョナサン・リース・マイヤース トッドが「君は神のように美しく光り輝いてる」って言うんだ。

「ライオンキング」の演出家ジュリー・テイモアの監督映画「タイタス・アンドロニカス」に、「キャバレー」のアラン・カミングと共にキャスティングされていたジョナサン・リース・マイヤース。この3人の組み合わせの凄さがわかる人は、よほどのショー・ビズ通だ。

「でも、この長い髪はアン・リー監督の南北戦争映画のためのものさ。髪の毛をピタっとのりづけされて、まるで頭の上に赤ん坊がいるみたいな気がするよ（笑）」

それに比べたら、ブライアン・スレイド役の簡単さといったらなかったとか。

「何も意識しないで、ただケバケバしい人間になっていればいいんだから（笑）。まるで夢見る少年のように、僕は何にでもなれるんだ。女の子にだって、なろうと思えばなれる。つまり、どちらにもなりきれる自由さが僕の中にはあるからなんだよ。僕の内側が既にそうだから、表面的なところを変えていけば、僕にとって男と女なんて大差ないよ！」

とにかく撮影中に大変だったことは「朝早く起きることだけ」というジョナサン。

「でもさ、メイクして衣裳に着替えてセットに入って行くと、トッドがこう言うんだ。『ジョニー、君は神のように美しく光り輝いてる』ってね。その瞬間から、単純な僕は気分が良くなるというわけさ（笑）。僕は学校で訓練を積んだ俳優じゃないけど、自分なりのキャラクターへのなりきり方がある。それは、できる限り自分に忠実になるってこと。まず自分自身から一歩抜け出して、自分の心の中の鏡に自分を映し出してみる。そこに安堵感が得られ、自分の中に生きている何かがキャラクターの代わりに動き出す……。つまり、人間として自分が変わっていく気がするんだよ。僕の大好きな三船敏郎もそうだったんじゃないかな。メソッドなんてものに全然縛られないからこそ、彼の演技は自然で素晴らしいんだと思う。僕の目標の俳優だよ」

Digitized by Google

日本では小品「ポイズン」(91)しか公開されていなかったので、ニューヨークの個性派インディペンデント監督のイメージが強かったトッド・ヘインズ。今年はぐっとスケールアップした新作「ベルベット・ゴールドマイン」がカンヌ映画祭で芸術貢献賞を獲得し、その実力がやっと本格的に認知されてきた。来年は前作の「SAFE」(95)も公開されるようだ。

今回の映画では衣裳が一番の主役でもあるからね

今回の作品は70年代に英国でブームとなったグラムロックが題材となった。かつてグラム界のヒーローだったブライアン・スレイド(デイヴィッド・ボウイがモチーフになっている)の偽装暗殺から10年が過ぎ、ニューヨークのジャーナリストがその事件の謎を追うことになる。70年代の理想と挫折を独特の映像スタイルで描き、海外では「市民ケーン」と比較する人もいた。新しい映画作りの可能性を追求したパワフルな作品だ。9月にキャンペーンで来日したヘインズに会った。とにかく話題が豊富なお茶目な人だ。たまたま筆者が持っていた「ベルベット・ゴールドマイン」が表紙の映画雑誌『サイト&サウンド』にまず目をとめた。

——この雑誌に出ている主人公のメイクはまるでリンゼイ・ケンプの舞台のようですがケンプが振付けを?

「ケンプにはゲスト出演してもらっただけだ。でも、みんなとリンゼイのイタリアの豪華な屋敷で話を聞いた。いろいろな事をね」

——デイヴィッド・ボウイとの秘話も?

「そう、ぜーんぶね(笑)。ボウイとは師弟を越えた関係だったとか、そういうこともね。そういえば、今回の映画の衣裳デザイナーのサンディ・パウエルはリンゼイの舞台も担当している。どの俳優よりも先に彼女の参加が決まって、すごく興奮した。今回の映画では衣裳が一番の主役でもあるからね」

——もちろん、主役の若手男優たちも素晴らしい演技を見せています。

「カート役のユアン・マクレガーに関しては『トレインスポッティング』(96)を見て起用を決めた。彼なら動物的なステージ・パフォーマンスも演じきれると思った。ブライアン役のジョナサン・リース・マイヤースは歌までこなせると思わなかったが、見事に演劇的な要素も入った曲も歌ってみせた。アーサー役は『ある貴婦人の肖像』(96)を見てクリスチャン・ベールの起用を考えた。オーディションの時、彼は聞き役にまわろうとしていたので、インタビュアーの役にぴったりだと思った」

——あなたはアメリカのインディペンデント映画界から出てきたわけですが、今回の作品は英国映画ですね。作り方が違いますか?

「違うと思うね。英国の場合はまずテレビ局での映画作りが伝統的にあって、そこからケン・ローチやマイク・リーなども出てきた。すごく構造がしっかりしている。ジャーマンのように個性的な監督でも公的な資金で映画を撮ることができる。でも、アメリカの場合は変に貪欲で、組織的なベースがない。ジャームッシュの『ストレンジャー・ザン・パラダイス』が成功した時、新しい映画作りの可能性が注目されたが、そのうちだんだんすたれてしまった。タランティーノの場合はもっとスターが中心の映画を作っている。新しい才能が出にくいのが残念だと思う」

劇中の名セリフは全部ワイルドが書いている

——「ベルベット・ゴールドマイン」のアイデアはいつごろからあったのですか?

「映画のアイデアだけは89年ごろからあった。でも、すぐに映画化できず、共同脚本家のジェームズ・ライオンズとずうっと相談した。その間、僕はイギリスに行ってグラムに関する文献を読んだりと、リサーチを続けた。正式に脚本にかかったのは95年ごろからだったかな。でも、他の仕事と平行して進めた」

——昔からグラムロックのファンでした?

トッド・ヘインズインタビュー

大森さわ子

可能性に満ちた70年代は過ぎ、80年代は保守的で安全な時代になったということだ。

Digitized by Google

「最初にボウイたちのレコードを見たのは僕が10才くらいだったと思う。まだ幼かったから、店で見た時、なんだか変なかんじだった（笑）。そのうち学校でタバコを吸って髪を染めるような女の子に会って、圧倒されたものだ。僕はせいぜいエルトン・ジョンどまりだったからね」

——じゃあ女装なんてしなかった？

「それはないね（笑）。アメリカではグラムはあまり人気がなかった。まだ60年代のヒッピーたちの自然志向の影響が残っていたので、グラムの人工性はどこか奇異なかんじもあった」

——あなたの脚本には、主人公のブライアンは「〈ラブ&ピース〉世代のヒッピー的な偽善を嫌った」と書かれています。印象的なセリフですね。

「ありがとう。でも、それはたまたま僕のものだけど、劇中の名セリフは全部オスカー・ワイルドが書いている（笑）」

——ワイルドの伝説が映画では主軸になっていますが、彼のファンだったんですか？

「特にファンだったわけではないが、この映画では彼のことを知る必要があった。彼は既成の純粋な芸術観に疑問を投げかけ、表層的な要素をあえて提示した。アイリッシュ・アクセントを捨て、衣裳にもこだわり、独特の自己演出をしてみせた。そこがグラムロックと通じる部分がある。リチャード・エルマンが書いた伝記を始め、ワイルドに関するさまざまな文献を読んだよ」

——今回の映画のタイトルはデイヴィッド・ボウイの曲からとられていますが、彼の曲の使用許可が出なかったとか。

「最初は残念だったが、結果的にはボウイの曲を使わなかったおかげで人物の解釈が自由にできるようになったと思う。でも、脚本を読んでくれたし、ビデオで映画も見てくれた。この映画が気に入らなかったわけではなく、自分でグラム時代の映画のプランを練っていたから、提供したくなかったのだろう」

——映画の後半、80年代のボウイを非難しているとも思える描写がありますね。先鋭的な70年代に代わって、80年代は大型スタジアムでロックを演じる時代になった。

「ボウイ個人のことを非難している気はない。たとえば、ニューヨークのアンダーグラウンドで活躍していたミュージシャンたちも80年代には家庭を持ち、郊外で安定した生活を送るようになった。でも、そんな彼ら個人を非難する気はない。ただ言いたかったのは可能性に満ちた70年代は過ぎ、80年代は保守的で安全な時代になったということだ」

——音楽界といえば、80年代はMTVが出てきましたね。

「MTVも出てきた当初はすごく可能性があったと思う。でも、結局、クリエイティブな部分は失われ、曲を売るための道具になった。さらにMTVはすべての映画の歴史、音楽の歴史が長い年月かかって作り上げた大事な部分を〈盗んだ〉だけだ。今では何も知らない若者が映画を見て、逆にMTV的だと感じるようになってしまった」

撮影／吉岡誠

——今回の新作は「パフォーマンス」（70）のニコラス・ローグの映画の影響も感じられますね。

「ローグは僕の大好きな監督だ。彼はいつも違うことに挑戦しようとした。特に『パフォーマンス』は新しい映画言語に挑戦してみせた作品だと思う。この映画やキューブリックの『2001年宇宙の旅』（68）、『時計じかけのオレンジ』（71）などが作られた時代には映画はひとつの旅だった。観客は映画によって新しい世界に連れ去られてた。でも、最近はこれまでのヒット作をいくつか足したようなものばかりだね。『テルマ&ルイーズ』と『ターミネーター』の合体とか（笑）」

——この新作には見るたびに発見があります。

「今では昔のようなチャレンジ精神が消えてしまった。僕としては、だから、もう一度、そういう感覚を持つ作品を作りたかった。今の若い映画ファンが古い映画を見て再発見しなくなったのは本当に残念だと思っている」

トッド・ヘインズ
Todd Hains

1961年ロサンゼルス生まれ。ブラウン大学を卒業後の87年に撮った"Super Star: The Karen Carpenter Story"で認められる。91年に劇場用長編処女作「ポイズン」を発表、サンダンス映画祭にてグランプリを獲得し注目を集める。93年にはテレビ用作品"Dottle Gets Spanked"、そして95年には劇場用第2作「SAFE」（99年公開）を撮る。本作は劇場用長編第3作となる。

Digitized by Google

グラムロックする

「ベルベット・ゴールドマイン」

話題のグラムロック映画、トッド・ヘインズ監督による「ベルベット・ゴールドマイン」は、監督こそアメリカ人（LA出身）ながら、「いかにもイギリス的」な映画なのだ。むろん題材そのものがイギリスだし（ただしグラムロックの定義は、米国アンダーグラウンド・シーンからの流れもあるから結構難しくて、本作でもユアン・マクレガーが演じるカート・ワイルドのモデルは、デトロイト出身のイギー・ポップだったりする。デブ過ぎるイギーである）、モロにリチャード・レスター（彼もまたアメリカ・フィラデルフィア出身だ）節といえるタイトル・バックから始まり、オスカー・ワイルドよりの伝統というコジツケのもとに、「アナザー・カントリー」（84）や「モーリス」（87）に端を発するゲイの美青年映画（日本でいえばやおい系）の世界まで披露してくれる。そして何といっても、ポップ・ミュージックがガンガン流れ（劇中出てくる英国バンドには、レディオヘッドのトム・ヨークや元スウェードのバーナード・バトラーの姿も！）、それが登場人物それぞれの人生と切ないくらいに結びついている。まさしく、イギリス映画の魅力をできる限りツメ込んでみましたって感じの、サービス満点、英国ポップ丼といえよう。ちなみに物語の方は、〈グラム以降のデイヴィッド・ボウイ〉に真正面からイヤミをブチかました内容となっており、元ネタの詳しい事情を知っていれば楽しさが倍加する映画でもある。

そう、イギリス映画をもっと楽しみたいなら、何としてもポップ・ミュージックを知らなくてはならないのだ！　ボブ・ラフェルソンのモンキーヴィス・コステロの隠れた名曲の流用である。しかも、劇中一音たりとも流れないのにタイトルだけボウイの曲名からいただいている「ベルベット・ゴールドマイン」とは違い、本ナンバーはちゃんと劇中流れるのが嬉しい。この暴力的なまでに直接的な〈愛の飢え〉の歌がドラマと結合して激しく空回りする様こそが、本作のキーポイントであり、かつ圧巻の場面となっている。

音楽にセンシティヴなウィンターボトムが「ウエルカム・トゥ・サラエボ」で使ったバンド、ブラーのヴォーカリスト、デーモン・アルバーンが俳優に初挑戦している映画も話題だ。アントニア・バード監督作「フェイス」がそれ。内容は、「アスファルト・ジャングル」（50）、「現金に体を張れ」（56）、「レザボア・ドッグス」（91）らを踏襲した集団ギャング映画なのだが、裏に失業問題を始めとする社会状況がベッタリ貼りついているのが実にイギリスらしく（ロバート・カーライル演じる主人公なんか元コミュニストだ）、仕上がりもだいぶウェットである。肝心のデーモン君は随分ジミだったけど……。音楽は雑多な英国ポップの嵐！　今時クラッシュの「ロンドン・コーリング」がフルで流れるセンスはかなりクサイが、一応自覚もあったのだろうか、余り派手には鳴らなかったが。

ス的」な作品もまた、英国映画の豊かさをしっかり支え続けているっていうのも事実。

シニカル・ポップ英国派に

「ラブ&デス」

だが、「イギリス的」といって最も忘れてはいけないのが、モノをわざと斜めから見たような〈シニカルな視点〉ってヤツだろう。で、このテの英国映画は見逃さないという性格の悪いアナタにオススメしたいのが、リチャード・クウィートニオスキー監督による「ラブ&デス」である。内容は、ジョン・ハートが恍惚のおバカ演技を見せる、トーマス・マンもヴィスコンティもボットン便所に突き落とさんばかりの壮絶な「ベニスに死す」のパロディ映画であり、下品なパロディが大好きな僕のクダラナ系ツボを巧みに突いてくる逸品である。同時に本作で注目したいのが、ブリストルが

Digitized by Google

イギリス映画をもっと楽しむための、

ズ映画がレスター作ビートルズ映画のバッタモンだったように、「さらば青春の光」(79)や「トレインスポッティング」(96)が切実な青春映画になり得たように、昔も今もポップ・ミュージックと映画の関わりはイギリスが最も密接かつシリアスなのである(アメリカにはジャズがあるしね)。

鳩の翼から秘かにつながる

「フェイス」のホップの嵐!

「例えば、クランベリーズやらビョークやらトリッキー(彼は出演も)などをやたら劇中に流しまくっている、ひょっとしたら映画よりも音楽の方が好きじゃないのかと疑われる監督、マイケル・ウィンターボトムを語る場合にも、ポップ・ミュージックは当然欠かせない。ラース・フォン・トリアーばりのギラつく黄金色の風景の中、複雑な愛憎劇が繰り広げられる彼の野心的な新作「アイ ウォント ユー」なんぞは、タイトルからしてエル

英国定番料理、人情労働者には

マイ・スウィート・シェフィールド

ところでいうまでもなく、こういったワーキング・クラスの立場からモノを語る姿勢というのは、ビートルズからオアシスに至る英国映画ポップ・ヒーローの伝統でもあるワケなのだが、ポップ・ミュージックはほぼ使われなくても、サム・ミラー監督の第一作「マイ・スウィート・シェフィールド」は、そんな精神を体現している映画だ。「フル・モンティ」(97)の脚本家サイモン・ボーフォイ&「ブラス!」の主演俳優ピート・ポスルスウェイトによる、かつてのフリーシネマ〜キッチン・シンク映画のテイストを、ユーモアとペーソスあふれる人情モノに円熟させたタイプの流れに属する本作、サントラはカントリーが耳にこびりついて離れなかったりもするけど、ロック・ファンにも是非観て欲しい一本である。逆に「鳩の翼」は、シルバー・ビートルズ時代のビートルズを描いた「バック・ビート」(93)で監督デビューしたイアン・ソフトリーがガラリと顔を変えて放つ、ヘンリー・ジェームズ原作の20世紀初頭を舞台にした、繊細な上流階級心理劇。当然、時代考証を無視した音楽などは流れないし、労働者階級からすれば投石してやりたいような世界である。しかしこういった綺麗で良質な演出を見せる「イギリ

生んだ男女2人組のポップ・ユニット、ポーティスヘッドに、サポート・メンバーとしてついているクライヴ・ディーマーとジョン・バゴットが参加しているジ・インセクツが、音楽を担当していることである。ポーティスヘッドといえばウィンターボトム(またもや!)の「GO NOW」(96)でも使われていたけど、まずは短編映画の製作からキャリアをスタートさせた彼らのありようというのは、ポップ・ミュージックとの全面的なコラボレーションが目立つ最近のイギリス映画の傾向をミュージシャン・サイドから象徴しているみたいで興味深いし、それはレスター時代のアイドル映画のようなナイーヴな形を超えて、映画と音楽の新たな融合を探る表現の動きを示しているかにも思われるのだ。「ベルベット・ゴールドマイン」や「アイ ウォント ユー」が垣間見せる、〈微妙な新しさ〉も、その辺と無縁ではないはず、である。

Digitized by Google

イアン・ソフトリー監督インタビュー

今井孝子

当時のモダニズムを出来る限り強調してみたんだ。

気持ち良く晴れた日曜日の朝。ロンドンの高級住宅街にある大きな屋敷を借り切って「鳩の翼」の撮影は順調に進められていた。この日の撮影はジャーナリストのマートンがブルジョワなパーティーに姿を現わし、交際を断わってきたケイトの気を引くため、好きでもない女性とキスを交すシーン。イアン・ソフトリー監督はジーンズにTシャツという軽装でカメラの後ろからじっと演技を眺めている。

マートンを演じるのはライナス・ローチ。マートンのちょっと高慢ちきなガールフレンド、ケイトを演じるのがヘレナ・ボナム・カーター。余命いくばくもない金持ち娘を演じるのは、アリソン・エリオット。不思議だったのは　原作がヘンリー・ジェームズなのに、衣裳は今の時代に着ても十分に通用するようなモダンなものばかりということ。しかし、もっと不思議なことは「バック・ビート」(93)、「サイバーネット」(95) とトレンディーな映画を作り続けてきたイアン・ソフトリーがなぜヘンリー・ジェームズの文学作品を映画化するのかということだった。

脚本を書き直すことからこの映画の製作は始まった。

「映画界ではヘンリー・ジェームズが流行だという理由でこの映画を作ろうとしたわけではないんだ。『サイバーネット』を完成させた後、ちょっとブレイクが取りたくなった時に、次なるプロジェクトとしてこのヘンリー・ジェームズの『鳩の翼』の映画化の話が持ち上がったんだよ。最初の脚本というのが全く使い物にならなくて、脚本を書き直すことからこの映画の製作は始まった」

そこで彼はトーマス・ハーディーの『日蔭者ジュード』を現代的な感覚で見事に脚色化したホセイン・アミニに脚本を書き直してもらうことを思いついた。

「要素としてフィルムノワールや、スリラーっぽい緊張感とエキゾチックな感覚を盛り込んだらおもしろいだろうなと思ったんだ。正直言って撮影に入るまでの作業はたいへんだった。脚本家のホセイン・アミニとは全くの白紙の状態から脚本を書き始めることになったからだ。彼とはいろんなアイデアを出しあいながら、様々なシーンを作り出していった。だから僕としては脚本家と一緒にシナリオを書き上げたって気持ちが強いんだよ。もともとのコンセプトは僕ではなかったかもしれないけれど、それを拡大させていったのは僕自身だと思っている」

ソフトリー監督は撮影現場では実にアクティブに働く。怒鳴り声を張り上げることもなく、理路整然とした口調で語りかけられると、誰も逆らえなくなる。そこが彼の監督としての魔力なのかもしれない。

「今回は若い観客層をかなり意識しているので、原作よりももっとロマンチックでセクシーでエロチックな要素を強調してみたんだ。ルネサンスやデカダントなものに重点を置いている原作を離れて、もっと近代的な要素を取り入れてみたんだ。冒頭のシーンでは地下鉄を、ケイトがマートンにミリーを紹介するシーンではモダンな絵画を取り入れたりと、当時のモダニズムを出来る限り強調してみたんだ。マートンはジャーナリストで社会の変革を夢見ている。ラディカルな方向へと社会が向かおうとしている部分を表現してみたんだ。ケイトはとても現代的な女性だけれど、彼女が思い通り生きていくには社会が近代化されなくてはならない。ヴィジュアルな部分でもグラフィックな感覚を強調してみた。だから、今の若い子達にも通じる要素はたくさんあると思うよ」

ソフトリー監督の呪縛にかかったかのようにヘレナ・ボナム・カーターがライナス・ローチと大胆なラブシーンを演じたことも話題になったが、ヘレナの演技はアカデミーの主演女優賞にまでノミネートされたのだから、監督の魔力は大いにその効力を発揮したということだろう。

「僕のキャスティングのポリシーは有名だろうと無名だろうと、オーディションの時に一番よかった俳優を起用するということ。実を言うと、ケイト役をヘレナがオーケーしてきた時まさかって驚いたんだよ。彼女が、時代劇は今回が初めてという僕の作品に出演を承諾するということはかなり勇気のいる決断だったと思うね。それにしばらく映画の世界から遠ざかっていたライナス・ローチが出演を決めてくれたこともとてもラッキーだったね。アメリカのインディーズでおなじみのアリソン・エリオットがこうした時代劇に共演するのもとても新鮮な感覚があったんじゃないかと思うよ」

19世紀の価値観に縛られながら、20世紀を迎え入れていく人々の姿は、20世紀から21世紀へと突入していく現代社会の中でさまよう人々の姿と重なってくる。

イアン・ソフトリー
Iain Softley

イギリス生まれ（生年未詳）。ケンブリッジ大学クィーンズ校在学中から自主映画を撮り始め、卒業すると同時にCM、ミュージック・クリップ、短編映画等の監督として活動を始める。93年に長編第1作「バック・ビート」を発表し、注目される。その他の作品に「サイバーネット」（Vのみ。95）。本作は長編第3作にあたり、99年には"The Boathouse"の製作が予告されている。

Digitized by Google

アリソン・エリオット インタビュー

吉田真由美

「鳩の翼」のような映画では、互いに〈信頼〉し合ってないと、演技がウソになるもの。

撮影／吉岡誠

アリソン・エリオット
Alison Elliott

1970年サンフランシスコ生まれ。4歳から8歳までを東京で過ごし、その後サンフランシスコへ。14歳のころからモデルの仕事を始め、89年にテレビシリーズ"Living Doll"に出演し、注目を集める。94年の「ワイアット・アープ」で映画デビュー。主な出演作に「この森で、天使はバスを降りた」(96)、「蒼い記憶」(98)など。今後が期待される女優だ。

イギリス映画界からハリウッド映画への進出が定番コースとなっているなか――「若い記憶」(95)の悪女ヒロインと「この森で、天使はバスを降りた」(96)の天使のような娘役で注目を浴びたアメリカ映画界の新星アリソン・エリオットが、英国映画祭で上映された「鳩の翼」のため来日というのも、オツなもの。

「鳩の翼」で彼女が演じたのは、ヘンリー・ジェームズ(原作)お得意の〈英国貴族社会にやって来た財産家のアメリカ娘〉ミリーだが、病に冒されていて余命いくばくもない。

「私自身とはあまりにもかけ離れた役柄で最初はうまく把握できなかったけど、考えてみれば、人は誰でも、いつか必ず〈死ぬ〉んだわ、この私も、と思いあたった時、演れる！と感じた。ミリーは、死を目前にして不平不満をこぼさず、勇気を持ってそれを受け入れ、威厳を失わず、愛と友情を求める強ささえ持っている。脚本を読み込んでいくうちに尊敬と憧れを感じるようになった。ヘンな言い方かもしれないけれど、実際に病に冒されている人がこの映画を観て、病にあることを〈誇り〉に思ってくださるよう演じた」

ミリーに自分の恋人マートンをひきあわせ、2人が愛し合うように仕向け、マートンを通じてミリーの財産をせしめようと図るイギリス娘ケイトを演じたヘレナ・ボナム・カーターが(アカデミー賞こそノミネイトにとどまったものの)ゴールデン・グローブ賞はじめ各賞の主演女優賞総ナメだが。ケイトの方を演じたい気持ちはなかったのだろうか？

「もちろん演りたかった。ナイスで優しい、死にゆく女性よりは、策略家で人を操る能力に長け、行動力があって健康な女性の方が、演じるには楽しいもの(笑)。でも、冷静に考えて、イギリス人監督(イアン・ソフトリー)によるイギリス映画でイギリス娘にアメリカ人女優がキャスティングされる確率は極めて低いし、逆に、アメリカ娘であるミリー役が得られる確率は高いでしょ。だから、ミリー役でオーディションを受けたの。結果として、私のこれまでのキャリアのなかでベストの選択だったと思っている。ミリーを演じたことにより、心が豊かになり、ミリーから与えられたものの大きさに今は感謝している。

ミリー、マートン、ケイトの三角関係については「よくあるパターンではなく、AからB、BからCへと比重が移動してゆくダイナミックな脚本・演出が素晴らしいでしょ。誰が悪役、誰が被害者という決めつけもなく、3人が対等、同等なのも素敵。各々の立場から人生を考察できる」

そのような三角関係を自身で体験したことは？

「あるわよ。この映画のなかでね(笑)」

さすが〈なりきり演技派〉らしいお答えだが、ヘレナ・ボナム・カーターやライナス・ローチ(マートン役)とのコラボレーションは？

「お互いに意見を出し合い、よく話し合ったわ。相手の眼を見て演技する『鳩の翼』のような映画では、互いに〈信頼〉し合ってないと、演技がウソになるもの」

〈出演作ごとに別人〉ぶりを発揮してきたアリソン・エリオットだが、目の前の御本人はそれらのどの映画とも、また別人。今インタヴューを受けているのが〈地〉？

「えーっと〈英国映画祭キャンペーン用アリソン・エリオット〉かしら(笑)」

期待の若手演技派として今後の作品予定・進路計画は？

「『鳩の翼』の後、ホラー映画"Trance"で2役をやったわ。これまではいい役に恵まれ、充実したキャリアだったけど、これからが難しい時期ね」と、何やら思慮深げ。

子供時代に日本で暮らした経緯のある彼女は「SAKURAの美しさをよく憶えてる。代々木公園で自転車に乗ったことや、皇居の近くで猫にひっかかれて目の縁を3針も縫ったこと、墓地のお線香の香りや、路地の家々から匂ってくる夕餉の匂い……」と想い出を語ってくれているうちに、なんと！　ホテルの部屋の窓から、うっすらとではあるが〈富士山〉の姿がのぞめることを(本誌K嬢が)発見！　アリソンはロング・ヘアをサラサラと翻し「WOW！」と詠嘆。誠実で、真摯、さり気なく女優であった。

Digitized by Google

最近英国映画事情

大森さわこ

最近、イギリス映画がおもしろいという声をよく耳にするようになった。今年の10月下旬から11月上旬にかけてキャパシティがある劇場を使って英国映画祭も行われた。これまで小さな映画祭はいくつかあったが、ここまで大規模なものは初めてだ。もしも、今の英国映画に〈力〉がなければこれほど大きな規模で行われることもなかったはずだ。その〈力〉の源は一体どこにあるのだろう？

all about U.K. films

82年に起こったふたつの事件が英国映画を変えた

英国映画の最初の復活のきざしが見え始めたのは80年代前半からだ。82年、英国映画界にとって画期的ともいえるふたつの事件が起きている。ひとつはデイヴィッド・パットナム製作のイギリス映画「炎のランナー」(81)がアカデミー作品賞を受賞したこと。もうひとつは英国の第4のテレビ局、チャンネル4ができたことだ。これは国の援助も得ながら映画製作に力を入れることを念頭に置いて作られた局だ。この局の助力によって、当時はまったく無名だった新人監督たちが作品を作ることになったのだ。こうして82年に「英国式庭園殺人事件」のピーター・グリーナウェイ監督、「エンジェル」(ビデオ発売)のニール・ジョーダン監督、「アナザータイム・アナザープレイス」(日本未公開)のマイケル・ラザフォード監督らがチャンスをつかむ。

(メジャーな配給会社による)インターナショナルな英国映画「炎のランナー」とチャンネル4によるインディペンデントの小品群。それらの成功によって、英国映画は少しずつ復興していった。そして、そんな流れの中から、リチャード・アッテンボロー監督の「ガンジー」(82)やローランド・ジョフィ監督の「キリング・フィールド」(84)のような大作が生まれ、さらにジェームズ・アイヴォリー監督の「眺めのいい部屋」(86)や「モーリス」(87)のようなコスチューム・ドラマ、スティーヴン・フリアーズ監督の「マイ・ビューティフル・ランドレット」(86)のような社会派、デレク・ジャーマン監督の「カラヴァッジオ」(86)やピーター・グリーナウェイ監督の「ZOO」(85)のようなアート映画が作られ、日本でもミニシアターで支持されていった。さらに、ダニエル・デイ＝ルイスやルパート・エヴェレット、ゲイリー・オールドマン、ヒュー・グラント、ヘレナ・ボナム・カーターのような若手俳優たちが脚光を浴びるようになった。

しかし、この英国映画の新しいルネサンスともいえるスリリングな時代、クオリティはかなり高かったはずだが、今ほどの幅広い人気を獲得することができなかった。

しつつも、英国の個性をいかに出すか。それが今後の課題。

Digitized by Google

最近は観客のすそ野がもっと広がってきた。マイク・リー監督の「秘密と嘘」(96)、ダニー・ボイル監督の「トレインスポッティング」(96)、ピーター・カッタネオ監督の「フル・モンティ」(97)。こうしたヒット作が今の英国映画を代弁しているのだとすれば、80年代の作品とはどこかが違っている。

主人公たちの行動力によって乗り越えられた英国映画の壁

その分かりやすい例としてあげたいのがピーター・カッタネオ監督の「フル・モンティ」である(註:この作品、出資の関係で英国ではアメリカ映画に分類されるようだが、ここでは英国映画として取り上げる)。英国映画をずっと見てきた人には一目瞭然であるように、この作品で描かれた失業者の悲哀は、実はケン・ローチ監督が60年代から現在までこだわってきたテーマでもある。ドキュメンタリー的な作風で底辺に生きる人々を見つめ続けるローチ。テレビや映画界で地道な活動を続け、庶民の苦悩や感情を生のまま描いたローチ映画のパワーは英国の映画人に大きな影響をあたえ、マイク・リー監督やスティーヴン・フリアーズ監督などが80年代にこの路線を引き継いだ。フリアーズ監督は「マイ・ビューティフル・ランドレット」、リー監督の「ハイ・ホープス」(88、映画祭公開)を作ったが、「フル・モンティ」ほどの興行的成功は収めていない。当時のサッチャー政権への皮肉も込めて作られたこれらの作品は人間ドラマとして楽しめる内容ながら、一方で社会的なメッセージも色濃く投影されていたので、人によってはすんなり入れなかったようだ。

ところが、「フル・モンティ」の場合はもっとインターナショナルな感覚で受けた。従来の失業者ものを〈男のストリップ映画〉として成立させる。その発想の大胆さ。主演のロバート・カーライルはケン・ローチの「リフ・ラフ」(91)などで知られる男優だが、どこか頼りなくて、情けない役が得意だ。そんな彼が愚痴をこぼしつつも、最後に舞台で帽子を捨て〈フル・モンティ〉になる! フリアーズ、リー、ローチらの作品で描かれてきたワーキング・クラスの戸惑いやあきらめは、この時、行動力によって乗り越えられた。その庶民パワーの痛快さ、明快さ! カッタネオ監督はローチ映画に代弁される英国のおはこ芸=失業者映画を男のストリップというバカバカしいアイデアと合体させることで、このジャンルに風穴をあけてみせたのだ。主人公が悩みやコンプレックスを克服して晴れの舞台に立つ姿は涙ぐましくも感動的。人物の人間くささと性のアイデンティティの問題をクロースアップすることで、これまで英国映画になじみの薄かった人にも分かりやすい内容になった。だからこそ、アメリカでも空前の大ヒットとなった。

80年代のワーキング・クラス映画はどこか絶望的な影を引きずっていたが、近年のヒット作には吹っ切れたような明るさが出てきた。それは「フル・モンティ」だけでなく、ダニー・ボイル監督の「トレインスポッティング」にも当てはまることだ。こちらもスト

「炎のランナー」

「眺めのいい部屋」

「ZOO」

「マイ・ビューティフル・ランドレット」

all about U.K. films

インターナショナルな感覚をめざ

Digitized by Google

ーリーだけを見ると、ケン・ローチ映画で描かれても不思議のない絶望的な底辺の人々の物語ながら、その表現方法が全く違う。独特の映像センスによって内面の葛藤が見事にファンタジーになっている。かなりブラックな内容なのに、開き直ったような不思議なパワーがある。全編にある疾走感が痛快だ。

「フル・モンティ」や「トレインスポッティング」には、80年代の映画にはなかった明るさや前向きのエネルギーが感じられる。マイク・リー「秘密と嘘」にしても、80年代の「ハイ・ホープス」などにある（より辛辣な）アクの強さや社会的メッセージ性が抑えられることで、ようやく国際的な評価を手にすることができた。この作品がより一般的な成功を収めたのは、従来のリー作品よりも口あたりよく出来ていたせいだろう。

筆者はけっして80年代の英国映画が90年代よりも質的に劣っていたとは思わない。ただ、今よりもやや大衆性に乏しく、アメリカ映画に慣らされた一般の人にはとっつきにくかった気がする。英国映画は「暗い」ともよくいわれた。しかし、最近のものはあの頃の息づまるような閉塞感はなくなり、娯楽色が強まってきた。それは近年の英国の好景気を反映しているせいなのか。それとも低迷の70年代、回復期の80年代を経て、娯楽としてより成熟してきたのだろうか。たとえば、今年、日本でも公開されて好評だった新人ステファン・シュワルツ監督の「シューティング・フィッシュ」（97）など、80年代の英国映画では考えられないような明るく軽いタッチの作品だ。ハリウッド映画が好きな観客にも受け入れてもらえそうな普通の娯楽作品に仕上がっている。しかも、主人公たちはみんな身近で、そこいら辺にいそうな人ばかりだ。また、

「フル・モンティ」

「秘密と嘘」

「ダロウェイ夫人」

「トレインスポッティング」なんてつまんない!?

杉原賢彦

考えてもみてほしい。マイケル・パウエルには「血を吸うカメラ」（60）なんていうラジカルな快作があったし、デイヴィッド・リーンにしたって「超音ジェット機」（52）なんていう、巨匠のイメージから大きく離れた快作があった。英国映画のテロワールには、監督たちを冒険へと駆り立てるなにかがあるのだろうと、信じていた。

その想いを助長させたのが、60年代のイギリス映画だ。たとえば、ちょっとしたTVディレクターとして成功していたアメリカを追ん出て、イギリスへとやって来たリチャード・レスターが放ったビートルズ映画には、それまでの映画にはなかった冒険と野心とキッチュとお楽しみが、いっぱいに詰め込まれていた（ジョン・レノンがいきなりスクリーンのこちら側に話しかけてきたりなんて、10年後のウディ・アレン映画でようやくおなじみになるものだ）。

そして「ナック」（65）だ。女の子をゲットするため、涙ぐましい努力をする60年代の少年たち（というよりも、少年を過ぎてしまった男）。ジョン・バリーの、スローでジャジーな曲＋アップテンポな曲のチェンジに合わせて、場面がグルリと展開していくおかしさもさることながら、カット割りの大胆さはまったくもって前代未聞。狭い小路に入り込んだ車を写したショットが、クルっと切り換えされると、壁の上でその車をまたいでいる人物を写すなどなど、ポップで意表を衝く演出効果は自由自在に快刀乱麻。思いつくかぎりのイタズラ心を詰め込んでしまったようなお楽しみ感覚が、ぼくのなかに堆積されてしまったのだ。

こうした大胆すぎる試みは、たとえばあの生真面目なトニー・リチャードソン監督の「トム・ジョーンズの華麗な冒険」（63）で、カサノヴァにも負けない放蕩児のセックス・アドヴェンチャーが文字どおり華麗に繰り広げられたり、ニコラス・ローグ監督の「パフォーマンス」（70）では、ミック・ジャガーをフィーチャーしていきなりロック映画を作ってみた

Digitized by Google

日本で人気の高かった「ブラス！」（97）にしても、日本の炭鉱町にも置きかえられそうな素朴で普遍的な物語だ。近年の英国映画が世界的に注目されるようになったのは、以前よりも幅広い娯楽性、庶民性を獲得したおかげだろう。

等身大の映画もいいが、ひねり技の効いた映画も

80年代は英国映画というと、日本では特に「眺めのいい部屋」や「モーリス」のように美しい貴公子たちが出ている文芸映画に人気が集まり、現代のワーキング・クラスものは興行的には成功しなかったが、「フル・モンティ」などの登場によって、今では現代ものの方が人気を集めるようになってきた。俳優も貴公子路線のダニエル・デイ＝ルイスやヒュー・グラントより、人間くささが売りのワーキング・クラス派、ユアン・マクレガーやロバート・カーライルが支持される時代なのだ。やっと等身大の現代英国が映画ファンにも認知されてきたということだろう。

もちろん、文芸映画も失業者ものと並ぶ英国のおはこの路線なので、安定した動きを見せてはいる。「ダロウェイ夫人」（98）や「鳩の翼」（97、力作！）などが公開され、さらにケネス・ブラナーの大作「ハムレット」（96）も成功を収めているが、ケネス・ブラナーのシェイクスピア作品に関していえば、従来のどこか堅苦しい演劇映画とは異なり（いい意味で）庶民的な楽しさがある。彼の出現でシェイクスピア映画もより身近なものになった。

明るく、庶民的で、とっつきやすくなった英国映画。普段着の魅力を打ち出すことで、より幅広い人気を獲得しているようだ。

もっとも、こんな近年の動き、手ばなしで喜べることばかりではない。アート系の作品に関しては70年代のケン・ラッセルやニコラス・ローグ、80年代のピーター・グリーナウェイやデレク・ジャーマンのように強烈な個性を持った人があまりいないし、ドラマ路線の監督にしても、80年代のスティーヴン・フリアーズやニール・ジョーダンのように大人の感覚を持った骨太の人が減ってきた。90年代のマイケル・ウィンターボトムもダニー・ボイルも力はあるが、全体的に監督も俳優もやや粒が小さい気がする。

それに等身大の大衆的な映画もいいが、時には（日本では過小評価気味の）「英国万歳！」（94）のようなひねり技のものも見たい。風変わりで凝った映画も英国独自のお家芸なのだから。そんな中では（アメリカ人の監督作ながら）ジャーマンやラッセル映画のスタッフを使った新作「ベルベット・ゴールドマイン」の野心的な構成は、映像の新しい可能性を感じさせる。

何年か前まで50本ほどしか作られていなかった英国映画の製作本数は現在では100本を超えるという。宝くじの助成金など資金繰りも以前よりスムーズになったようだ。そんな中で商業性と芸術性の間でどうバランスをとるのか。インターナショナルな感覚をめざしつつも、英国の個性をいかに出すのか。それが好調といわれる英国映画界の今後の課題ではないかと思う。

「ナック」

「トレインスポッティング」

り、あるいはカレル・ライス監督の「フランス軍中尉の女」（81）では、劇中の恋の行方と主人公たちが演じる劇中内劇の恋の行方がシンクロされる、二重の物語を交錯させたりと、英国映画のひとつの愉しみとなっていた。もちろんその流れに、モンティ・パイソン一家が欠かせないのは言うまでもない。

こうしてぼくは、97年に「トレインスポッティング」と出会う。のだが、ぜんぜん笑えなかったし、切実でもなんでもなかった。……なーんだ、クスリでラリって、少しばかり大騒ぎしてるだけじゃない。使われている映像センスって、リチャード・レスターと同じ時代のものじゃない。90年代って、いったいどこにあるのだろう？……そんなことしか、ぼくの頭のなかには、湧かなかったのだ。

パウエルの「血を吸うカメラ」は、いまでも堂々のカルト作品たり得ているし、リーンの「超音ジェット機」も、もっとそれについて書かれねばならないカルト的作品だ。乱暴にも、リチャード・レスター〈以前／以後〉と英国映画を分類してみたら、そのどちらにも入らないような映画が、これらの作品なのだ。でも、「トレインスポッティング」は、〈以前〉に入れてしまえるのだ。

英国映画が好調だと伝えられても、なにがなんでも見たくなるような作品がないのは、なぜなのだろう。手堅く、ハリウッドにもウケのいい小品が多いような気がしてならないのだ。とんでもない怪作が、再び英国映画界に燦然と輝きまくってほしいと、願っているのだが……。

Digitized by Google

1990年代

all about U.K. films

英国映画界人脈交流図

作成 杉原賢彦

ロバート・カーライル

ピーター・カッタネオ

「フル・モンティ」

「トレインスポッティング」

ダニー・ボイル

ジム・シェリダン

「トレインスポッティング」

トッド・ヘインズ

ダニエル・デイ＝ルイス

ユアン・マクレガー

「ベルベット・ゴールドマイン」

「父の祈りを」

ピート・ポスルスウェイト

イアン・ソフトリー

アントニア・バード

「鳩の翼」

「司祭」

ライナス・ローチ

リチャード・クウィートニオスキー

「眺めのいい部屋」

「GO NOW」

ブラザース・クエイ

サリー・ポッター

エマ・トンプソン

ケイト・ウィンスレット

「日の名残り」

ケネス・ブラナー

「鳩の翼」

マイケル・ウィンターボトム

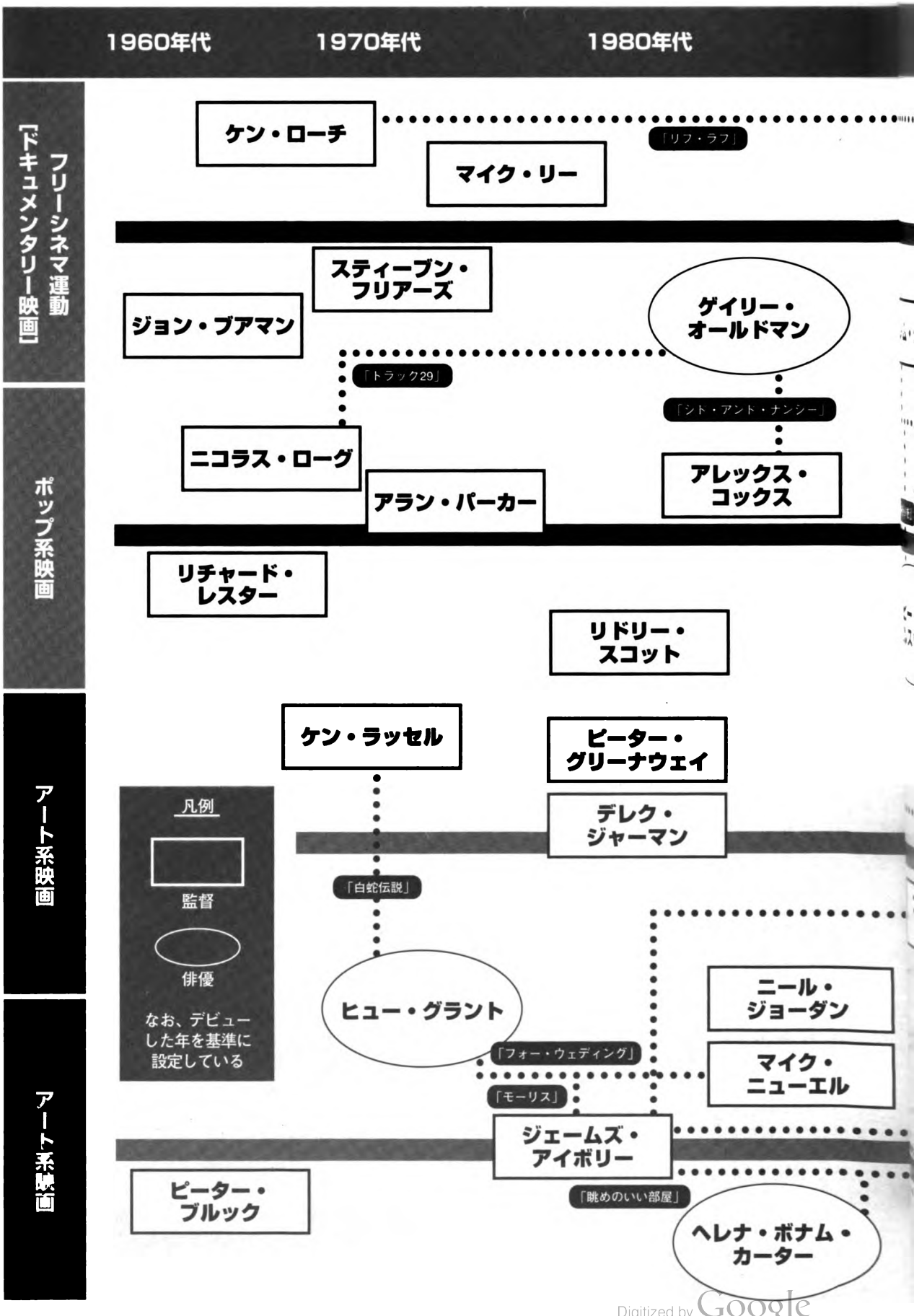
「鳩の翼」

アンソニー・ミンゲラ

レイフ・ファインズ

「イングリッシュ・ペイシェント」

Digitized by Google



Digitized by Google

崇高な理性で美を追求してきた音楽家が、年端もいかぬ美少年にこころを奪われ、自分の求めてきた美のもろさを思い知らされる――といえば、もちろんルキノ・ヴィスコンティの名作「ベニスに死す」である。イギリスの作家ギルバート・アデアが書いた『ラブ&デス・オン・ロングアイランド』はこの映画のパロディともいうべきもので、世情にうとい初老の英国作家が、偶然見てしまったアメリカ映画に出ていたアイドルスターにのぼせてしまう顛末がユーモアたっぷりに描かれている。この小説を映画化したのが「ラブ&デス」で、監督は本作がデビュー作になるイギリスのリチャード・クウィートニオスキー。1957年生まれというが、会ってみると青春真っ只中といった若々しさ。配給会社の人によると彼自身ゲイということだが、インタビューを読んでもらうとわかるとおり、ヴィスコンティのような耽美ゲイの時代は遠くなりにけりと思わせる、いかにも現代青年らしいさわやかさ。映画も当然、「ベニスに死す」とは趣を異にする。いま風の知的な映画であった。

ナボコフの「ロリータ」の方が意識にあった。

――デビュー作にこの原作を選んだのは？

「小説をそのまま映画化しようという気はなかったので、映画化するにあたっていろんな可能性が考えられる小説だったことが一番の理由かな。どんなふうにも料理できるパワーを感じたし、映画にふさわしい象徴性を持っていたことも気に入った。主人公の作家は人間ではなく、あるイメージに恋をするんだ。映画ではこの点をどんどん広げて、映画独特の象徴性に高めていくことを狙った」

――つまり、アイドルスターのロニー・ボストックは、英国作家デアスが頭の中でつくりあげた人物というわけだね。

「その通り。そういう作業の中で、デアスは今までと全く違う自分に変身していくわけなんだ。原作はデアスの一人称形式で書かれていて、すべてはデアスの目でとらえた物語になっている。セリフはなく、二人以外の登場人物もない。いわば心理主義的な小説に、映画としての現実を加えていくという作業があったわけ。ロンドンの場もロングアイランドの場も、映画として設定したものなんだ。前半のロニーはデアスの勝手な想像でつくりあげた人物であり、後半のロニーはそれとは全く違う現実の人物ということになる」

――「ベニスに死す」のパロディと言われているけど。

「原作者はそれを意図したようだ。今や完全にオリジナルなストーリーを考えることは不可能なのに、多くの作家はさもオリジナルであるフリをしている。ギルバート・アデアは正直でいい（笑）。ただし、映画化にあたっては、ほとんど意識していない。ナボコフの『ロリータ』の方が意識にあったね。ヨーロッパとアメリカの異質な文化を背景にした中年男の性夢というストーリーも、『ロリータ』の方が類似しているし」

――ヴィスコンティは好き？　デアスは「家族の肖像」の大学教授みたいなところも。

「彼は偉大な監督だし、美しい映像も気に入っている。だけど『ベニスに死す』は、ちょっと方向性を見失っている気がするな。彼の作品で好きなのは『山猫』と『イノセント』。あまりデカダンスに走ったものは好きじゃないんだ。デアスはデカダンスというより、自分の興味のないものに対して徹底して背を向けて生きてきた男でね。言い換えれば、自分の知らないことに恐れを抱いてしまう性質なんだ」

ホモセクシュアルから発想した物語でも映画でもない。

――保守的な英国紳士というのは言わばパターンとしてあって、そこにアメリカのポップ・カルチャーをぶつけるという手法も、それほど新鮮

リチャード・クウィートニオスキーインタビュー

黒田邦雄

映画監督は柔軟な姿勢を持つべきというのが、ぼくの考え方なんだ。

LOVE & DEATH ON LONGISLAND

Digitized by Google

とは思えないんだけど。

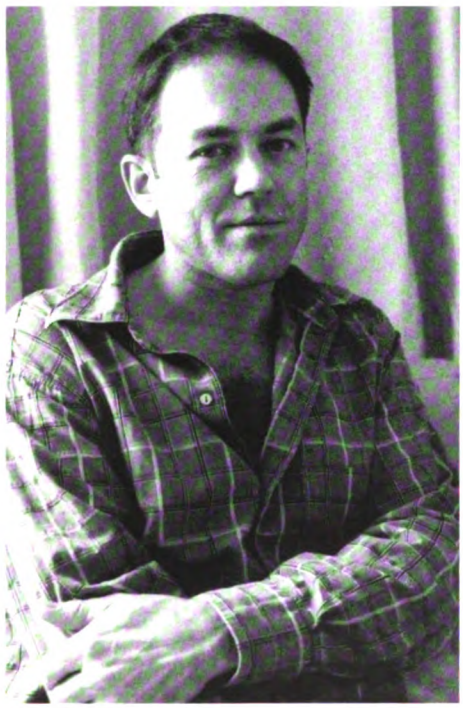
「その考えは間違ってる（笑）。この映画は何も英国紳士を風刺的に描いたものでも、ゲイのセクシュアリティを描こうとしたものでもない。自分の世界だけで暮らしていた人間が、その世界を一歩踏み出したらどうなるか、そこを描いたものなんだ。ゲイのセクシュアリティは今まで見たことのない不思議の国の扉を開けるキイであって、ゲイの心情や状況には全く立ち入っていない。この映画で描いていることは、誰の人生でも起こることだと思う。デアスの場合、人生の時間が残りわずかになった時にやってきたわけで、それだけにショックも大きかったのだ」

――人生の終りに自分の内なるゲイに目覚めるという特定のシチュエーションでないことはわかるけど、それでも良かったのでは？

「言えることは、この映画はホモセクシュアルから発想した物語でも映画でもないということ。ジョン・メイブリィの『愛の悪魔』（98）やトッド・ヘインズの『ベルベット・ゴールドマイン』（98）は、確かにホモセクシュアル的な発想があると思うけど、ぼくの作品はこれらの映画とは違う。デアスは同性に恋をするわけだけど、その行為はホモセクシュアルであるより、もっと普遍的なものだ。観客は彼を特別な人間と思わないだろうし、自分たちの体験と重ね合わすことが出来るだろう。この映画を見たゲイの人たちは、ホモセクシュアルがいかなる問題も引き起こさない映画ははじめて見たと言ってるよ。異質な二人の人間が出会ってお互いに成長していく物語であり、二つの異質な文化が対話をはじめる映画というふうに受け取って欲しい」

――つまり、世界中の人々が納得できる映画だというわけだね。

「そう、イギリス固有の問題やホモセクシュアル固有の問題ではなく、あらゆる人々に向けて開かれた映画作りをしたいんだ。特定の人のための映画や、特定のプロパガンダに寄りかかる映画には興味がないね。といっても、『イン&アウト』（98）のような映画はちょっとね（笑）。あそこに出てくるゲイこそリアリティ皆無で、愚かな存在としか見えないよ」



撮影／吉岡誠

――いま日本ではイギリス映画がちょっとしたブームになっているけど、若い監督にとって映画を撮りやすい状況なの？

「保守的なテーマの作品ならね。ビジネスのパターンに乗りにくい個性の強い映画は、やっぱり難しい。僕もその一人だけど、チャンネル4の支援で個性的な映画作家が輩出した。しかし最近はそれだけでなく、いろんなパターンで作家が登場してきている。ジョン・メイブリィは美術学校から出てきたしね。映画監督は柔軟な姿勢を持つべきというのが、ぼくの考え方なんだ。こうでなければならないというのではなく、いろんな状況に応じて映画を撮っていくべきだと思っている。最近はハリウッドに呼ばれる監督も多いけど、僕もワーナーからお声がかかっているんだ。ハリウッドだから喜んでとか、イヤだとかいうのではなく、違う自分が出せるような仕事ならやってみたい」

――映画はグローバルであるべき？

「映画館のために映画が作られるなら、ね」

リチャード・クウィートニオスキー
Richard Kwietniowski
1957年ロンドン生まれ。ケント大学とカリフォルニア大学に学び、87年に撮った処女短編"Alfalfa"がベルリン映画祭に出品され、好評を博し、一躍注目を浴びる。89年には同じく短編"Flames of Passion"で実力を見せつけ、テレビ界で仕事をするようになり、数々の番組および短編作品を監督。本作「ラブ&デス」は劇場用長編第1作となる。

Digitized by Google

品田雄吉

イギリス映画界の現実味あふれる攻防

「フル・モンティ」（97）の世界的なヒットなどで、今、イギリス映画に新しい興隆期がやってきたと注目されている。たしかに最近のイギリス映画は、ケン・ローチやマイク・リーといった監督たちを始めとして、「トレインスポッティング」（96）のダニー・ボイルや「日蘭のふたり」（96）や「ウェルカム・トゥ・サラエボ」（97）のマイケル・ウィンターボトムなどといった有望な監督が輩出しているし、ユアン・マクレガーやロバート・カーライルに代表される若手俳優たちの活躍も目立つ。女優ではケイト・ウィンスレットが大活躍だ。

一九九八年は、〈日本における英国年〉でイギリスにかかわるさまざまなイヴェントが催された。第十一回東京国際映画祭に協賛するかたちで十月二十四日から十一月八日にかけて東京で開催された〈英国映画祭〉もその一つだった。

駐日英国大使館から、イギリスに行ってイギリス映画好調の現状を見てきてくれないか、というお話があったのは、八月ごろだったと思う。喜んで行かせていただきますとお答えして、英国大使館のボブ・レイナー広報部長と〈英国祭UK98〉広報担当の森園さやかさんに会い、さらにブリティッシュ・カウンシルの駐日代表補佐でアーツ担当官のジェニー・ホワイトさん、アシスタントの湯浅真奈美さんに会って、九月末にイギリスに行かせていただくことにした。ブリティッシュ・カウンシルのほうからは、英国映画祭の中で催される第十一回東京国際映画祭自主企画・国際映像シンポジウム「英国映画、人気の秘密を探る！」で基調報告をし、モデレーターを務めることも依頼された。湯浅さんはギャガの宣伝部にいたことがあるという。

こうして九月二十日に成田を発ち、二十一日の月曜日から二十五日の金曜日まで、クリス・スミス文化・メディア・スポーツ大臣を始めとして二十数人の人々に会って、いろいろな角度からイギリス映画の現状や将来展望についての話を聞いてきた。

映画振興政策に力を入れる イギリス労働党内閣

イギリスに行く前に、ボブ・レイナーさんが、参考になると思うといって"A Bigger Picture"という本を送ってくださった。これは、スミス大臣の依頼を受けた〈英国政策踏査グループ〉が、イギリス映画の過去・現在を分析しながら、さらにイギリス映画を振興していくにはどうしたらいいかという提言をまとめた、かなり詳細なレポートである。イギリス訪問の前にこのレポートを読んで、たいへん参考になった。日本でも、文化庁あたりがこういうことをやればいいのではないかと思う。このレポートは、映画の企画・製作・配給の現状や問題点に触れているだけでなく、映画学校などによる将来の人材育成についてもかなり詳しく言及している。人材育成は、わが国においてもおおいに議論されなければならない重要な問題だと思う。

クリス・スミス大臣

もう六、七年前のことになるが、文化庁から派遣されて、フランスとイギリスの映画製作に対する援助や助成政策の調査をしたことがあった。そのときのイギリスは保守党内閣だったが、今度は〈ニュー・レイバー〉と呼ばれるブレア首相の労働党内閣で、映画振興政策にたいへん力を入れていることがわかった。

たとえば、前保守党内閣が始めた宝くじ（ロタリー）の売上金を映画製作に融資する制度は、スミス大臣の言によると「保守党内閣が実施した政策の中でたった一つのよい政策」だということだが、これもより効果が上がるように融資の仕方を考え直す気持ちがあるといっていた。それだけでなく、近く映画政策全体を抜本的に再編成するつもりだとも語っていた。

イギリス映画は、一九八九年には三十本しか製作されなかった。一九八〇年代は、どうやらイギリス映画にとって最悪の季節だったようである。"A Bigger Picture"によると、一九九〇年代前半はだいたい年五十本以上の映画が作られるようになり、一九九六年から現在までは、毎年百本以上の映画が製作されている。上映スクリーン数も倍加しているというし、たしかに今、イギリス映画は好調の波に乗っているように見受けられた。ただ、この好調の波がこれからも持続するかどうかについては、私が会った人々の中で意見が割れた。今回の訪問では、少しでも多く会いたいと思っていた監督に会えず、結局、会うことができたのは、英国映画祭で「フェアリーテイル」（97）が上映されたチャールズ・スターリッジ監督だけだったが、彼はイギリス

Digitized by Google

アメリカ映画の支配に立ち向かうための、

映画の先行きについてかなり悲観的だった。が、全体として見たとき、スターリッジのような悲観派は少数で、ワーキング・タイトルの製作者ティム・ベヴァンに代表される、強気で楽観的な将来展望の持ち主が多かった。ミラマックス・ハルという新会社を作ったばかりの製作者デイヴィッド・オーキンも強気の意見だった。オーキンは、チャンネル4でやり手のプロデューサーとして活躍してきた実績を持っている。

BBCとチャンネル4、テレビ局の映画への貢献

今回のイギリス訪問で、いちばん強い印象を受けたのは、BBCとチャンネル4の映画製作に対する積極的な姿勢だった。

公共放送のBBCと民間放送のチャンネル4がイギリス映画で大きな役割を果たしていることについては、私たちも日本で公開される映画を通してある程度知っている。たとえば、マイク・ニューウェルは民間放送のグラナダ・テレビで育った監督で、BBCで「魅せられて四月」(92)を監督し、これが意外なヒットとなったし、ティム・ベヴァンのワーキング・タイトルが製作した同監督の「フォー・ウェディング」(94)は世界的な大ヒットを記録した。

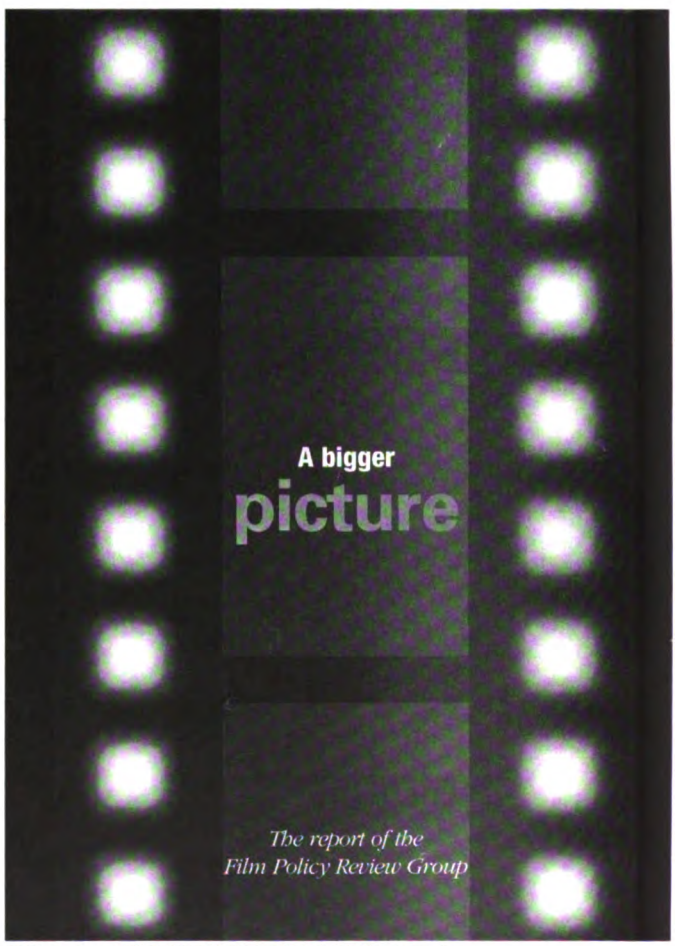
BBCは地味だが質のいい作品を製作し、チャンネル4の製作活動はより積極的だ。私が訪問したBBCの〈フィルム・アンド・シングルドラマ〉部門は、都心からちょっと離れた場所にあって、次々に増築したような雑然とした大きな建物の奥にあった。いっぽう、チャンネル4は、ロンドンの中心部にガラス張りのモダンなビルを構えていて、BBCとはいかにも対照的だった。くわしく調べる暇がなかったが、イギリスではチャンネル4のほかにもグラナダ・テレビやITCといったテレビが劇映画を製作しているということだった。

歴史的に見ると、BBCに代表されるイギリスのテレビは、たいへん多くの優れた才能を映画の世界に送り出してもいる。たとえば、一九五〇年代末に怒れる若い世代として「長距離ランナーの孤独」(62)などで華々しく世に出たトニー・リチャードソンは、BBCTVのプロデューサーとして素晴らしい実績を積んでいたし、ケン・ラッセルもBBCTVで優れたドキュメンタリー作品を作っている。

もともとイギリス映画は、ドキュメンタリー映画に誇るべき伝統を持っている。その伝統が、テレビ時代に入ってBBCTVの優れたドキュメンタリー番組に受け継がれ、そこからケン・ローチのような作品が生まれてきたということができると思う。ケン・ローチもまたBBCTVから出た監督なのだ。

現実味ある作品群が現在の英国映画の活力

そういえば、ウォータールー橋のたもとにあるナショナル・フィルム・シアター(日本



"A Bigger Picture" 英国映画事情がこれ1冊に完全網羅されている。

Digitized by Google

好調な英国映画界最大の問題点。それが自国製作映画の国内での配給であるというと、驚かれるだろうか。年間およそ120本前後製作される英国映画のうち、いわゆるロードショー公開される作品はそのうちの3分の1に過ぎないのだ。では、残りの映画はどこで見られるのか？　そう、『タイム・アウト』誌などの情報誌の映画欄をめくっていると発見できる、〈ICA〉や、各都市に存在する〈フィルムハウス〉などでなのだ。

ICAは、海外の、配給がつかない作品を1週間単位で上映したり、英国映画でも劇場を見つけられない作品を上映するフィルムテーク的な存在として知られる。また、フィルムハウスはちょっとした都市ならどこにでもある民間シネマテークとでもいったところ。

そのほか、ブリティッシュ・フィルム・インスティテュートやナショナル・フィルム・シアターでも定期的な映画の上映が行われており、要チェック！

以下に、英国における主な映画関連ホームページ情報を掲げておこう。

http://www.culture.gov.uk/
（英国文化・メディア・スポーツ省ＨＰ）

http://www.britfilms.com/
（英国でリリースされた映画リストＨＰ）

http://www.filmhouse.demon.co.uk/
（エジンバラのフィルムハウスＨＰ）

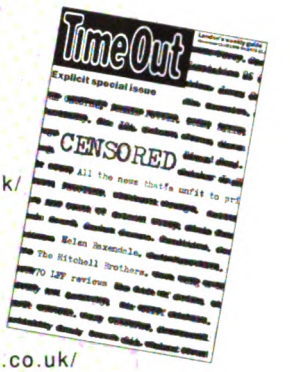
http://www.bfi.org.uk/
（ＢＦＩのＨＰ。ロンドン映画祭情報も）

http://www.channel4.com/
（チャンネル４のＨＰ）

http://www.scottishscreen.demon.co.uk/
（スコットランドにおけるＴＶ＆映画情報）

http://www.lea.org.uk/
（ヴィデオ＆ニューメディア情報ＨＰ）

http://www.nmsi.ac.uk/nmpft/
（映画、写真、ＴＶの国立博物館ＨＰ）



ティム・ベヴァン氏

日本でも、配給・興行の問題は、製作者や監督たちにとっていつも頭を悩ませるネックとなっているはずだ。そういった作品の公開の場となる映画館かホールのようなものがあっていいと思う。

今回、イギリスを訪問して感じたことの一つに、今のイギリス映画の活力になっているのは、「フル・モンティ」、「ブラス！」（97）、あるいは「トレインスポッティング」といった作品に代表されるように、失業、貧困、犯罪などを背景にした作品群だということだった。アメリカの娯楽映画とは、そこのところの現実味が違うように感じられた。そういう見地に立つと、ジェームズ・アイヴォリーの映画はむしろ例外的イギリス映画ということにもなる。実際、『タイム・アウト』という週刊情報誌に所属する若い映画評論家トム・チャリティは、「ジェームズ・アイヴォリーの映画は、見せ掛けのイギリスを描いているだけだ」といい捨てた。

にもこういうものが欲しい！）を訪れたとき聞いたのだが、ここでは古い作品の上映だけでなく、面白いことにアメリカ映画の新作の上映もやっている。それだけでなく、製作されたものの公開の場を持てない作品の上映も行なっていて、配給会社が見つからなかったケン・ローチの作品もここで封切られたことがある、ということだった。

結局、アメリカ映画の支配に立ち向かうためには、アメリカ映画的なるものに追随していてはだめだ、ということのようだ。ただそのいっぽう、ブリティッシュ・フィルム・コミッションでは、「スライディング・ドア」（98）が、ロンドン誘致に成功した例として挙げられた。「スライディング・ドア」は、地下鉄のある都市ならばどこでも成立する話だったのだが、それをロンドンで撮影させることに成功した、というのだ。これは、撮影誘致の成果だという。また、スティーヴン・スピルバーグ監督の「プライベート・ライアン」（98）はすべてイギリスで撮影されたし、同じくスピルバーグの「インディ・ジョーンズ」シリーズ全作品がイギリスで撮影されたといっていた。こういうことも、イギリス映画界を活気づける一つの力になっているらしい。

ワーキング・タイトルのティム・ベヴァンは、ポリグラムと協力して活動しており、最近ではコーエン兄弟の「未来は今」（94）、「ファーゴ」（96）、「ビッグ・リボウスキ」（98）、ティム・ロビンスが監督した「デッドマン・ウォーキング」（95）を手がけている。が、ちょうど私がロンドンに行ったとき、ポリグラムを買収したシーグラムがその映画部門を売りに出している、というのが大きな話題になっていた。ポリグラムの映画部門の帰趨は、協力関係にあるワーキング・タイトルだけでなく、イギリス映画全体に大きな影響をあたえるはずだ。そのことをティム・ベヴァンに尋ねたら、彼は次のように答えた。

「映画を作るのは私たちの頭だ。金じゃない」

Digitized by Google

英国ドキュメンタリー映画の系譜

60年代の英国映画が沈滞して見えたのは、TVドキュメンタリーを劇場公開するシステムがなかったからだ。

上島春彦

ジョン・グリアスンがロバート・フラハティの〈ドキュメンタリー〉映画「モアナ」を初めて見たのは1926年2月のニューヨーク、リアルト劇場においてである。

翌年帰国した彼は帝国通商局を拠点に教育及び宣伝を目的とした政府出資の映画を製作する機関を設立する。帝国通商局（EMB）映画班である。彼自身の監督作品としては北海のニシン漁船を取材した「流網船」（29）を残すのみだが、以後、製作者、企画者、脚本家として英国のドキュメンタリー映画界の最大のオーガナイザーとなる。その活動拠点はEMBの解散後は中央郵便局（GPO）映画班に移り、ハリー・ワットとベイジル・ライトの脚本・監督作品「夜間郵便」（36）を生むが、そこで音楽を担当するのは現代英国を代表する作曲家ベンジャミン・ブリテン、詩的なナレーションを書いたのはW・H・オーデンであった。ワット、ライトの同僚ポール・ローサの著作『ドキュメンタリー映画（文化映画論）』が世界の映画作家達に与えた衝撃は言うまでもない。

GPOはグリアスンからアルベルト・カヴァルカンティに引き継がれ、多様な成果を達成する。とりわけグリアスンの下ではその才能を十分に発揮できなかったハンフリー・ジェニングスに、戦時下、活動の機会を与えた点に注目しよう。カヴァルカンティがイーリング・スタジオに去った後、ジェニングスが脚本を書き監督した「火の手はあがった」（43）を代表作にあげておく。美術家であり編集者でもある彼にして初めて可能なセミ・ドキュメンタルな方法論が、やがて50年代末に起こるフリー・シネマの直接のインスピレーションである事をカレル・ライス、リンゼイ・アンダーソンも認めている。ライスの「我らランベスボーイズ」、アンダーソン「クリスマス以外の毎日」には、映画史的な行き方でなく日常の中からドラマをつかみ取るジェニングス＝カヴァルカンティ的伝統が生かされていたのだ。

グリアスンはカナダの国立映画局に局長として招かれ39年から45年までに三百本もの作品を製作している。

カナダ時代のグリアスンについてもう一つ特筆すべき事は、41年にニューヨークに亡命したものの失業状態だったキャメラマン・ボリス・カウフマンを映画局に招いた事だ。これは当のカウフマン自身が最も驚いたという。

50年～60年代にはTVドキュメンタリーの先駆者としてスコットランドTVで『この素晴らしき世界』を企画しているが、この時期の英国で最も優れた映像作家（作品）は映画ではなくTVから発信されていた事をここで思い出しておこう。ケン・ローチである。「その明らかな政治的立場の相違にも関わらず、ローチは今日における最も代表的な30年代ドキュメンタリー運動の継承者である」とある映画人辞典は記す。その運動の精神をグリアスン自身の言葉で書き留めておこう。「私は映画を戦闘機の操縦席と見なしている。私は宣教者としてそれを用いる。私がこのメディアに求めた働きは、鏡でなくハンマーなのだ」

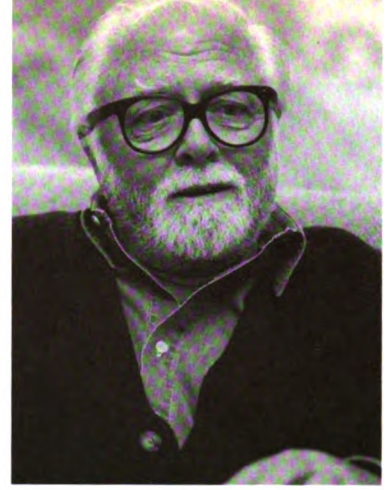
スティーヴン・フリアーズが演出したBFI製作によるTVドキュメンタリー『映画100年・イギリス映画編』においてマイケル・アップテッドは（自身もグラナダTVのディレクター出身だが）60年代の英国映画が沈滞して見えたのは、同時期の充実したTVドキュメンタリーを劇場公開するシステムがなかったからだ、と語る。60年代初頭BBCに入社し警察ドラマシリーズ『Z車』ですぐさま頭角を現したケン・ローチは、60年代末に自らのプロダクションで劇場用映画を撮り始めるまでの数年間、このBBCを拠点にして単発のドキュメンタリー（兼ドラマ）演出家として過ごす。アップテッド等が最も感銘を受けた作品が「キャシーよ、帰れ」（66）だ。家庭を捨てた少女のモノローグとポップスをBGMにした、長距離トラックの座席からの映像は大胆な望遠レンズの使用と相まって同時代英国の不安感を鮮やかに表象している。「夜間郵便」から30年を経て、英国ドキュメンタリーはより内面的な変質を遂げていたのだ。

「夜間郵便」

「我らランベスボーイズ」

all about U.K. films

Digitized by Google



リチャード・アッテンボロー
Sir. Richard Attenborough
1923年ケンブリッジ生まれ。12歳の頃より俳優を目指し、ロイヤル・アカデミー・オヴ・ドラマティック・アーツで学ぶ。18歳で初舞台を踏み、42年に"In Which We Serve"で映画デビュー。その後、「大脱走」(63)、「砲艦サンパブロ」(66)、「遠すぎた橋」(77)などに出演。82年の「ガンジー」では自らメガホンをとり、オスカー作品・監督賞も獲得。76年にナイトに称せられ、94年にはロードに。98年、世界文化賞受賞のため来日。

all about U.K. films

リチャード・アッテンボローインタビュー ●萩尾瞳

英国映画界は、いまニュー・ルネサンスを迎えていると言える。

「日本でも英国の映画は好調なんだって？」

と、リチャード・アッテンボロー監督の柔和な顔に笑みがあふれる。98年世界文化賞を受賞、授賞式出席のために来日したのだが、ちょうど英国映画祭にもぴったりのタイミングで、開会式に飛び入り参加したのだった。

「英国でも映画は最近復調しているよ。7、8年前は年間5000人だった観客が、いまは1・5倍にはなってる。おかげで、国内製作費を回収できるようになり、製作本数も増えている。以前はTV放映でなんとか回収する状態だったため低予算映画しか作れなかったが、いまはもっと多くの製作費をかけた映画も作れる状況になってきたんだ。つまり、映画が産業として順調に循環を始めているわけなんだよ。それと同時に、新政権になって文化や教育の予算が増えたことも大きい。観客増加と、予算拡大による文化の活性化が相乗効果を生んでいるといえるね」

なるほどサッチャー政権の頃は、文化予算がずいぶんと削減されてたっけ。

「やはり、文化と教育にはお金を注ぎ込むべきだ。先日、新国立劇場に案内してもらって、その設備の立派なことに圧倒された。でも、国立の演劇学校も映画学校もないと聞いて、驚いてしまったよ。英国の国立映画学校は、経費の60%を国が負担している。残り40%は企業や個人スポンサーだけど。世界でも五指に入る天才、黒澤監督の国なのに、国立の映画学校がないなんて信じられないよね」

と、笑顔でチクリ。それにしても、英国映画がいまウケる理由はなんだろう。

「英国映画の質が変わってきたね。これは世界的な傾向でもあると思うけれど、多くの国で自分の国の文化に根差した独自の映画を作るようになってきたようだ。英国でも50年代は国内映画の方が盛んだったのに、その後ハリウッドのマネばかりして質が落ちてしまった。そして、再び自分たちのスタンスを取り戻してきたんだね。英国映画は、いまニュー・ルネサンスを迎えていると言える」

映画の可能性を信じている人だ。

「映画は、コミュニケーションの強力な手段だ。世界中の人々が互いの生活習慣や文化を理解し合えば、未来はずっと素晴らしいはず。相互理解や国際交流には本や絵画なども有効だが、映画はもっと有効だ。映画は芸術でありながら娯楽。いわば、民衆の芸術だから」

まさに、社会派と呼ばれるにふさわしい発言。そういえば、次回作「グレイ・アウル」も、自然保護運動の先駆者を描いたものだ。

「30年代のカナダで活躍した実在の人物でね、ピアース・ブロスナンが演じている。ガンジーやビコー(『遠い夜明け』の主人公)もそうだが、社会を変革しようとした人間に興味があるし、映画にしたいと思うんだよ」

というわけで、その後に監督予定の作品も実在の哲学者トーマス・ペインが主人公。

「200年以上も前の人物とは思えないほどラジカル。当時すでに男女平等とか医療の無料化などを訴え、トーマス・ジェファーソンと一緒にアメリカ独立宣言も書いたし、フランスに渡ってフランス革命にも参加した。面白い素材だけど、製作費がかかり過ぎるのでなかなか集まらなくて。4年前にもう少しで映画化できそうになったときはダニエル・デイ＝ルイスの主演で撮るつもりだったんだけどねえ。多分、これより先に、聖書を題材にしたTV映画を撮ることになると思うよ」

75歳にして、ますます意気軒高だ。

Digitized by Google

イアン・ソフトリー
Iain Softley

生年未詳のイギリス生まれ。「バック・ビート」(93)、「サイバーネット」(95)から一転してロマネスクな「鳩の翼」を撮り、俄然、注目を集める。CM、ミュージック・クリップなど、多彩な才能を見せる彼だけに、今後の活躍も要注目。99年には"The Boathouse"の製作がひかえる。

ダニー・ボイル
Danny Boyle

1950年イギリス・マンチェスター生まれ。TVシリーズで頭角を現し、94年の処女作「シャロウ・グレイブ」が好評。そして「トレインスポッティング」(96)で大ブレイクしたのが彼。「普通じゃない」(97)も好評で、今年は"Alien Love Triangle"、さらに99年は"The Beach"がひかえる。

マイク・リー
Mike Leigh

1943年イギリス・ランカシャー生まれ。70年代よりBBCのドキュメンタリー作品などで活躍し始め、88年の「ハイ・ホープス」で映画監督デビュー。93年の「ネイキッド」でカンヌ・グランプリ。ケン・ローチらの後継者といえるが、96年の「秘密と嘘」で新たな方向を模索。99年には新作が。

マイケル・ウィンターボトム
Michael Winterbottom

1961年イギリス・ブラックバーン生まれ。TVシリーズから出発し、94年の"Family"、翌年の「GO NOW」で注目を浴びる。同じ年「バタフライ・キス」、96年には「日蔭のふたり」と次々と作品を発表。若手英国映画界の多作家だ。「アイ ウォント ユー」(98)ももうすぐ日本公開!

アントニア・バード
Antonia Bird

生年未詳。もともとは舞台女優として活躍していたが、その後、TVシリーズなどの監督へと転向。93年の中編"Safe"が認められ、94年には「司祭」、95年には「マッド・ラブ」でハリウッドにもデビュー。女性監督ながら、次々と作品を発表。次回作は"Without Apparent Motive"。

「鳩の翼」

「トレイン・スポッティング」

「秘密と嘘」

「アイ ウォント ユー」

「フェイス」

最新英国映画キーパースン録

リチャード・クウィートニオスキー
Richard Kwietniowski

1957年ロンドン生まれ。「ラブ&デス」(98)が劇場用長編第1作となる、これからが楽しみな新鋭(といってもウィンターボトムより年長)。カリフォルニア大学で学んだ経験を生かし今後ハリウッドなどでの活躍も期待される。最新作の予定は現在のところなし。

ユアン・マクレガー
Ewan McGregor

1971年スコットランド生まれ。「トレインスポッティング」(96)で一躍有名になった彼だが、「シャロウ・グレイブ」(94)にも出演。「ベルベット・ゴールドマイン」では、カート・ワイルド役を好演。99年には、ジェームズ・ジョイスを演じる"Nora"ほか出演作目白押しだ。

ロバート・カーライル
Robert Carlyle

1961年スコットランド生まれ。舞台俳優として活躍したのち、80年の「沈黙の叫び」で映画デビュー。ケン・ローチの「リフ・ラフ」(90)でも好演し、「トレインスポッティング」(96)、さらに「フル・モンティ」(97)で本領発揮。99年はアラン・パーカーの"Angela's Ashes"他に主演。

ピート・ポストルスウェイト
Pete Postlethwaite

1945年ロンドン生まれ。渋〜い英国労働者階級を演じさせたら、いまやこの人の右に出る者はいない。70年代より活躍を始め、88年の「遠い声、静かな暮らし」で父親役を演じ印象を残す。「父の祈りを」(93)、「プラス!」(96)などでも名演。名脇役として英国映画になくてならない存在。

ジョナサン・リース・マイヤース
Jonathan Rhys Meyers

生年未詳のアイランド生まれ。「マイケル・コリンズ」(96)で暗殺者の少年役を演じたのを皮切りに、さまざまな映画に出演し、「ベルベット・ゴールドマイン」で大ブレイク。今後が楽しみな、伸び盛りの俳優だ。99年は「タイタス・アンドロニカス」がひかえる。

「ラブ&デス」

「ベルベット・ゴールドマイン」

「フェイス」

「マイ・スウィート・シェフィールド」

「ベルベット・ゴールドマイン」

Digitized by Google

作品特集 ジョー・ブラックをよろしく

MEET JOE BLACK

●1998年・米・カラー・ビスタサイズ・DTS、SRD、SDDS：SR・3時間1分
●監督・製作／マーティン・ブレスト　製作総指揮／ロナルド・L・シュワリー　共同製作／デヴィッド・ウォーリー　脚本／ロン・オズボーン、ジェフ・レノ、ケヴィン・ウェイド、ボー・ゴールドマン　撮影／エマニュエル・ルベツキー　プロダクション・デザイナー／ダンテ・フェレッティ　編集／ジョー・ハッシング、マイケル・トロニック　衣装／オード・ブロンソン＝ハワード、デヴィッド・ロビンソン　音楽／トーマス・ニューマン
●出演／ブラッド・ピット、アンソニー・ホプキンス、クレア・フォラーニ、マルシア・ゲイ・ハーデン、ジェフリー・タンバー、ジェイク・ウェバー
●製作／シティ・ライト・フィルムズ・プロ
●配給／ＵＩＰ
●12月19日より丸の内ピカデリー１ほか全国松竹東急系にてロードショー
●本誌関連記事／今号「99年正月映画特集」、ピンナップ

Digitized by Google

俳優論

ブラッド・ピットのジョー・ブラック役へのアプローチ

佐藤友紀

危険な賭けともいえる異例の長い上映時間

「独特のクセがある」だの、「いかにも〝演技してる〟という感じが鼻につく」だの、何だかんだ言われることの多い大竹しのぶ。でも、特に舞台上の彼女を見ると、今や藤山直美の存在感ある演技などと共に「やっぱりうまいなあ」と、吐息をつかざるを得ない。

その大竹は、12月現在、デヴィッド・ルヴォーの演出で、ヴェデキント作の『ルル』の舞台に立っているが、稽古中、ルヴォーに指摘されて、「今さらながらに」目からウロコだったことがあるという。それは「自分で感情を作ろうとするな。演技の〝間〟を作ろうとするな。相手に素直に反応していれば、そういうものは後から自然に生まれてくる」という指摘。演技の本質と言っていいだろう。

この〝間〟のとらえ方は、そのまま「ジョー・ブラックをよろしく」の、最近のアメリカ映画では珍しいテンポ、リズム、長さにも関わってくる。次から次にクライマックスが用意されている大規模のディザスター映画ならともかく、この類の映画としては異例の長い上映時間。しかも「死」がある若者の身体を借りて「ジョー・ブラック」として登場するのだから当然と言えば当然なのだが、各々の人間のやることに対してのリアクションが、ジリジリするほど遅い。いきおい、画面上の人間たちと共に、我々、映画を見ている方もたっぷり気を持たせられ、筆者などいつの間にかこれが快感となって物語に感情移入してしまったが、けっこう危険な賭けではある。

それは、作り手側も危惧したらしく、今回『an an』誌でインタビューしたブラッド・ピットも教えてくれた。

マーティン・ブレスト監督（右）と

「実はもっと短いヴァージョンを作ろうとしたんだ。でも短くしてみると、不思議なことが起こった。実際よりも長く感じられるんだよ。つまり、その映画のテーマ、ストーリーの流れ、演技の質が要求する長さというのがあるんだろうね。今回の映画のトーン、感覚はすべてマーティン・ブレスト監督が求めたものだけど、テンポの早いものが求められ、MTV感覚のような速さが一般的になっている時代に、本当に勇敢だと思う。彼は何かなめらかなものを求め、心や魂を強調したかったんだ。そんなの、今や馬鹿げたことのように聞こえるかもしれないけど、僕はそういうアプローチは重要だと思うし、結局、短くしなかった本来の長さの版の方が、話の流れや一貫性もつかめるペースだし、息づかいも自然だったよ」

満足のいく脚本を仕上げるのに10年。撮影を終えてからの編集作業に、たっぷり1年。ブレスト監督の入念さを物語る一つの例としてブラッド・ピットがあげたのは、ポート・フォリオならぬ、古今東西のラブ・シーン大全。つまり、いろんな映画からとったラブシーンをつなげ、2本のテープにして、「どの映画のどのラブシーンが成功してる」だの「このラブシーンの撮り方は今イチだった」だの、研究しまくっていたというのだ。

Digitized by Google

撮影／谷岡康則

もっとも、そのテープを見せられたピットいわく、ラブシーンは話の流れの中で盛り上がるからこそ生きるのであって、即物的に取り出したものはほとんど感動できないだけでなく、間抜けにすら見える由。「ニュー・シネマ・パラダイス」のトルナトーレ監督なら、どう言うだろう？

「彼はただ無垢なものを感じたいんだ」

そのラブ・シーン、特にクレア・フォラーニ扮するスーザンとジョー・ブラックが初めてベッドを共にするシーン。

超クローズアップでとらえられ、〝初体験〟の感動が唇の震えにまで表われているのはなかなかのもの。ただし、「死」というのは、神と同じように、人間界のあらゆることを知っているのではなかったの？　という疑問も残る。この点、製作者側はそれほど深く考えていないのか、あるいは逆に、「○○が存在する」というより「存在というものが○○の形をとっている」という、哲学的な「存在」の命題になるのか。少なくとも、ジョー・ブラック役のブラッド・ピット自身は、こう考えているようだ。

「ジョー・ブラックは大きな力を持ち、あらゆることを知っていて当然なのに、ある面では純真無垢なところがある。初めて経験する感情を表わすような場面では緊張するし。その時、彼の頭にはどんな想いが浮かぶのだろうかと考えたりもしたよ。演じる僕だけでなく、そういう感覚を僕らはこの映画を撮っている間中、たえず大切にしていたんだ。死神という立場のパワーと無垢な面、そして生の感情とのバランスを常に保つように。ジョーは、自分の望むものを手にするために降りてくるけれど、必ずしもそれが彼の求める方法である必要はないんだ。彼はただ無垢なものを感じたいんだ。それは僕自身、よく理解できるよ」

件のラブシーンよりも、彼にとって大変だったのは「受け身の演技」と聞いて、思わず吹き出すところだった。というのは、ハリソン・フォードと共演した「デビル」が一番顕著だったが、彼の場合、それが意図的か無意識か定かではないけれど、一歩引く演技とは無縁で、どんどん前に出てくるタイプの演技者だと筆者は認識していたからだ。

この受け身の演技で、ピットは心底疲れ切ったという。「気が狂いそうなくらいだった」とまで言っていたから、これこそ彼自身にとっては初体験だったのだろう。ただ、最初のうちはけっこうぼやいていたらしいが、必然的にそう演じざるを得ないことに気づき、そのうち、フォラーニの演技の良さが自分の演技にも影響を与えていることにも思い当たった、とか。「オレがオレが」の前に出る演技をしなくても、共演者の演技をていねいに受

Digitized by Google

けることで、「互いにいい方向に作用する」のを知ったというブラッド。これが心底からの本音だとしたら、スターとしてだけではなく、演技者としての今後も楽しみだ。

同世代の映画監督たちと共に成長していけること

と、少々辛口の見方をしてしまったけれど、ブラッド・ピットには意外な素顔もある。教えてくれたのは、ヴェネツィア映画祭で取材した「ゴールデン・ボーイ」のブライアン・シンガー監督。呪われてしまった映画「デビル」が大モメにモメる前、ブラッド・ピット本人から電話があって、『デビル』を撮ってくれないか？」と頼まれたという。打合せのため食事を共にしたら、映画に対するセンスもなかなかいいので驚いたと、シンガーは言っていた。

確かに、最近好きだった映画を尋ねたら、シェカール・カプール監督、ケイト・ブランシェット、ジョセフ・ファインズ主演のコスチューム・プレイ「エリザベス」、「ベルベット・ゴールドマイン」、そしてニール・ラビュート監督、エイミー・ブレネマン、アーロン・エクハート、キャサリン・キーナー主演の「ユア・フレンズ&ネイバーズ」の名前が立ちどころにあがるのは、「映画はあまり見ない」というハリソン・フォードの対極にあるといってもいい。

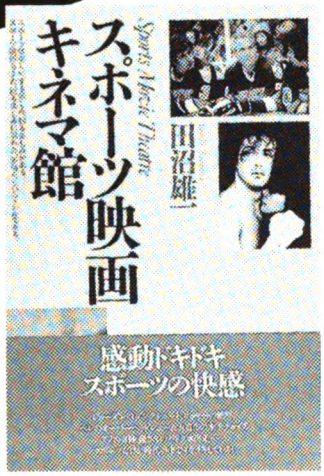
ついでに、好きな監督として教えてくれたのも、「ザ・ファイト・クラブ」で再び組んでいるデイビッド・フィンチャー。「彼の映像には脱帽だ。彼は新しい技術を見事に使いこなし、そのテクノロジーを駆使して創造性を高めていく才能といったら！」そして先にあげたブライアン・シンガー、ダニー・ボイル、チャルスキー兄弟、それと「ストーリー・テラーとしての才能が凄い」ショーン・ペンとシャープな映像作家の名前が並ぶ。

近年稀に見るほどつまらなかった『ヴァニティ・フェア』誌のカバー・インタビューで、「客が入らなかった映画が続いているから、あなたもよく考えなきゃね」とインタビューに余計なお節介をされていたブラッド・ピットだが、こうした個人的な映画の好みと、大スターとして立場との折り合いを、今後どのようにつけていくのか、理想としては、「自分も、そして自分と組む同世代の映画監督たちも共に成長していけること」だというが、友人のニール・ラビュートなどに関しては、先に有名になった自分がアナウンスすることで、人々の注目が集まるのなら、そうした助力は惜しまない。映画を見てもらえさえすれば、彼に才能があることは自明の理なのだから、と本当に自信を持って語る。

「ジョー・ブラックをよろしく」の撮影に入る前、なぜかずっとフィリップ・グラスの音楽を聴いていたという彼に「『トゥルーマン・ショー』のピーター・ウィアー監督と同じですね、グラスの音楽って、アーティストの創造力を喚起するものがあるのかな」と言うと、スクリーンでおなじみのあの笑顔で何度もうれしそうにうなずく。

いまだ試行錯誤と進化の途中——これを確認できただけでも、彼と言葉を交わした甲斐があった。

好評発売中
報知映画シリーズ
第4弾！



映画評論家 田沼雄一 著
スポーツ映画キネマ館
B6変・並製 定価2,100円（税込） 送料310円

ジョーダンのダンクシュート、ロッキーの絶叫、力道山の空手チョップ…。観る者をアツくしてくれる、感動を与えてくれるスポーツ映画の楽しさを凝縮した一冊。「日米野球映画キネマ館」の姉妹編。

●お求めは全国の書店、読売新聞販売店へ
報知新聞社＜出版販売部＞
〒108-8485 東京都港区港南4-6-49
☎03(5479)1285 FAX03(5479)1289

Digitized by Google

作品評

観客を酔わせ唸らせ陶然とさせたブラピに拍手

大和晶

いつも以上のナチュラルさで魅惑的な死神を演じるブラッド・ピット

なんとまァ、美しいのだろう、ジョー・ブラックは、いやブラッド・ピットは。サラリとした金髪、透明感のある薄いブルーの瞳、ふっくらとしたバラのつぼみのような唇……だけが美しいのではない。何気ない立ち姿が、フト顔を俯けた時の白く滑らかなうなじが、軽く組まれた、あるいは何か（誰か）に触れようと伸ばされるスラリとした手の様子が、つまりは彼の立ち居振る舞いから佇まい全てが、ホォとタメ息つきたくなるほど、ただただ見惚れざるを得ないくらい、美しい、のである。

もちろん、映画の冒頭、マンハッタンのあるコーヒーショップでヒロインのスーザンと偶然出会い彼女に一目惚れしてしまう、いわば〝ジョー・ブラック以前〟の普通の若者ブラッド・ピットも捨て難い。彼は、ニューヨークに出てきたばかりの、野心はあってもまだ海のものとも山のものとも知れない〝無名の人〟。着ているスーツもアカ抜けなく少々くたびれ気味だけれど、スーザンに向ける笑顔はあくまでもさわやかで屈託なく精悍でさえある。それに、「もう一杯コーヒー飲まない？」とスーザンを誘い、カウンターの中のコーヒーポットを取ろうと前に乗り出した際、さり気なくネクタイを押さえる仕草のエレガントなことと言ったら、そう、彼は決して、ネクタイをダラリとたらしてシミを付けそのこと自体に気付かないといった無神経で野暮なサラリーマンではないのである。だからこそ、恋に疎いスーザンさえも、〝後髪を引かれる思い〟で、立ち去る彼を何度も何度も振り返ったわけだけれど……。

とはいえやはり、ブラッド・ピットがそのミステリアスではかなげで浮き世離れした美貌を全開させて、スクリーンを凌駕するのは、〝死神〟ジョー・ブラックとして、先述の若者の肉体を借りて再登場してからである。なにしろ彼は、メディア王パリッシュをあの世へと誘う使命を負った、永遠の死を生きる闇の支配者だ。たとえ人間の姿形をしていたとしても、人間臭かったり通俗的だったりしようはずはなく（映画中、ジョー・ブラックの好対照として〝俗物〟の役を担っているのが、スーザンの婚約者ドリューである）、おぞましくも高雅で冷ややかにして甘美な気配がそこはかとなく漂っていなくてはならないのである。そうしたジョー・ブラックに不可欠の気配、雰囲気、存在感を、ブラッド・ピットは、何のけれん味もなく、それどころかで、ものの見ごとに演じきったのであった。

例えば、初めてパリッシュの前に形あるものとして出現したジョー・ブラックは、パリッシュの驚愕も死の恐怖も意に介さず、当然のことのように〝旅立ち〟前の数日間を自分の〝この世の案内人〟として過ごすよう彼に要求する。その態度は、本来はひどく傲慢で心ないもののはずなのだが、不思議とそうは映らない。何故ならジョー・ブラックには、どうにも抗し難いカリスマ性と同時に、何かをねだる幼子にも似た無邪気さ、相手に対する無防備の信頼が備わっているからである。

Digitized by Google

そしてそれは、言うまでもなくブラッド・ピットその人が譲し出すもの。換言すれば、誰でもないブラッド・ピットならばこその、とてつもなく魅惑的な死神ジョー・ブラック、なのである。

とろけるようなエロティシズムの初々しさと繊細さ、優美さ

さて、こうしてパリッシュ家の客人となったジョー・ブラックにとって、見るもの聞くもの触るもの全てが未知、初体験。一家のディナーの食卓に並んだフォークもナイフも料理の数々も、皆が皆、初めて目にし手にするものばかりである。彼は、もの珍しげにフォークとナイフを手に取り、皿の中味をまじまじと眺め、目をクリクリしながらワインの匂いを嗅いで……その一挙手一投足が、何とも可愛く微笑ましい。あるいは、鏡の前でネクタイを結ぼうと四苦八苦。結局自分では結べず、見かねて結んでくれたパリッシュの手際を感心したように見つめるあどけなさ。そうそう、パリッシュ家のキッチンで、ピーナッツバターを味見する名場面も忘れてはならない。ピーナッツバターをたっぷり乗せたスプーンをわたされて、まずは恐る恐る舌を近づけペロッ。これはイケるぞ、と思った途端、パクリとスプーンを喰わえて満面に笑みを浮かべる彼のその表情には、キッチンにいるパリッシュ家の使用人たちも観客も、思わず相好を崩さずにはいられないのである。

ところで、ジョー・ブラックが現世に興味を抱いたもともとは、パリッシュが愛娘スーザンに説いた〝恋の真理〟。彼いわく「恋とは雷に打たれるようなもの」。その衝撃を、身も心も焼き尽くす恋の情熱とは何たるかを知りたくて、ジョー・ブラックはこの世に舞い降りて来たのである。その一番の目的が、ついに実現する時がやって来る。彼のことを、あの朝コーヒーショップで知り合った青年本人と思い込んでいるスーザンの眼差しに、熱い何かを感じた一瞬、すれ違う彼女から発せられる甘やかな香りがキュンと胸を突いた瞬間、ジョー・ブラックは〝雷に打たれる〟衝撃を知るのだ。さらに、そっと重ね合わせた唇の、ピーナッツバター以上にまろやかで美味な味わい。ベッドへ彼を手招くスーザンの艶やかな微笑。絹のような肌の感触、全身を貫き押し寄せる欲望としびれるほどの快感、エクスタシー……。こうしたジョー・ブラックの文字通りの〝初体験〟を、カメラはごく間近から、めくるめくごとく映し出し、そのカメラの中でジョー・ブラックならぬブラッド・ピットは、驚くほどの初々しさと繊細さ、優美さで、とろけるようなエロティシズムを体現してくれたのである。

そもそも、死神と人間が〝交じわれる〟ものなのか？　とか（詳細は観てのお楽しみだが）、少々荒唐無稽すぎるハッピーエンドが納得できない！　とか、堅いことはこの際言うに及ばず。とにかく、もしかしたら一時半で十分語れてしまうかもしれない？　話を、ひたすらブラッド・ピットを追うことで3時間の大作に仕上げてしまったマーティン・ブレストの熱意と、その期待に応えて余りある魅力で、観客（とりわけブラピ・ファン）を酔わせ唸らせ陶然とさせたブラッド・ピットに拍手を贈りたい。映画ファンの皆さま、ブラッド・ピットをよろしく！

Digitized by Google

作品特集 たどんとちくわ

●1998年・日本・カラー・ヴィスタサイズ・1時間43分
●監督／市川準　原作／椎名誠　製作　山地浩　企画／中沢敏明　プロデューサー／板谷健一、川崎隆　脚本／市川準、佐藤信介（たどん）、NAKA雅MURA（ちくわ）　撮影／小林達比古　美術／間野重雄　録音／橋本康夫　照明／中須岳士　音楽／板倉文　音楽制作／小暮隆生　編集／三條知生　キャスティング／田辺博之　スチル撮影／北島元朗
●出演／役所広司、真田広之、根津甚八、田口トモロヲ、桃井かおり、小鹿番、安部聡子、弘中麻紀、太田光、田中裕二（爆笑問題）
●制作協力／セディック・インターナショナル、エクセレント　フィルム
●配給／ギャガ・コミュニケーションズ
●12月20日よりシネマスクエアとうきゅうほか全国にてロードショー

Digitized by Google

市川準インタビュー

市川準監督、新たな展開と予兆が垣間見える新作を語る

インタビュアー・野村正昭

〝役者が見事に演じる〟を見る快感があった

昨年2月に市川準監督から初めて「たどんとちくわ」の話を聞かされた時には驚いたものだった。「東京兄妹」(95年)や「東京夜曲」(97年)のイメージに、こちらが縛られていたせいかもしれないが、企画の始まりから、あらためて市川監督にお話を伺ってみた。

市川監督の劇場用映画デビュー作「BU・SU」(87年)をプロデュースした中沢敏明氏から話が持ちかけられたという。

「僕のキャラクターが、ここ最近少し固まりすぎちゃったということを中沢さんも思ったんでしょうし、それでこういうものをぶつけてきてくれたんでしょうね。最初は訳が分からないし断わろうかと思いましたけどね」。

椎名誠氏の短篇集「中国の鳥人」の中から、この映画の原作に「たどん」と「ちくわ」を選んだのは?「それは中沢氏が選んだんです。二つの短篇が何となく交じりあってみたいな形で出来ないだろうかと」。

「たどん」の主役に役所広司さん、「ちくわ」の主役に真田広之さんというのは?

「わりと早い段階から決まっていましたね。そのふたりが出てくれれば面白いものになるだろうなと思いました」。

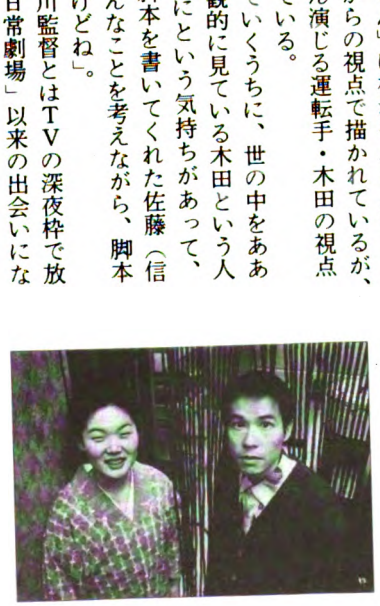
役所さんと市川監督とはCMで一度組んだことがあるそうだが、映画では初めての顔合わせになる。「役所さんは本当にうまいなあと感心しました。うまい役者を僕は嫌いなはずなんだけど(笑)。目線ひとつにしても、役柄に対する読解力があるというか、役をきちんと自分のものにする素晴らしさがあるし、それは真田さんの殺戮シーンの時にも感じましたが、役者さんがはまり役を見事に演じることを見る快感がありました」。

原作では「たどん」は根津甚八さん演じるタクシーの乗客からの視点で描かれているが、映画では役所さん演じる運転手・木田の視点からに変えられている。

「やっぱり考えていくうちに、世の中をああいう視点から客観的に見ている木田という人間の方を主人公にという気持ちがあって、『東京夜曲』の脚本を書いてくれた佐藤(信介)君と、いろんなことを考えながら、脚本を作ったんですけどね」。

根津さんと市川監督とはTVの深夜枠で放映された「東京日常劇場」以来の出会いにな

撮影/吉岡誠



Ichikawa Jun　1948年11月25日東京都生まれ。CF制作会社を経て、81年フリーに。『NTTカエルコール』『禁煙パイポ』『金鳥タンスにゴン』など時代を映すCMで話題を呼ぶ。87年「BU・SU」で映画監督デビュー。以後、「会社物語」(88)「ノーライフキング」(89)など常に話題作を発表し続け、「つぐみ」(90)「病院で死ぬということ」(93)「東京兄妹」(95)「東京夜曲」(97)では国内外を問わず多くの映画賞を受賞。次回公開作は「大阪物語」。

Digitized by Google

る。「心細いような、とまどっているような普通のサラリーマンを根津さんには演じてもらいましたが、いろんなことができる器用な人ですよね。喜劇的なセンスもある」。

「ちくわ」の真田さんと市川監督とは「つぐみ・TUGUMI」（90年）以来になる。

「徐々にねじれていくというか、キレていく過程を、今回の彼は楽しんでいたようです。それを見ている僕も楽しんでいて、全体的にとても楽しかった。真田さんは、このところカルト的な役が続いていますよね。やっぱり彼には色気があるし、いい男ですよ。ああいうきれいな人が狂気の中に入っていく過程というのは、すごく面白い」。

自分の世界を自分で模倣しているような感覚を払拭したかった

特に「たどん」のエピソード、タクシーの乗客の描写に、筆者は市川監督の「ノーライフキング」（89年）に見られたドキュメンタリーとの融合――というより、ドラマへの浸蝕を感じて興味深かった。「極まったというと、おかしいけれど、『東京夜曲』のような撮り方をしていくと、自分で自分の世界を模倣しているような気になって、自分を一度突き放してみたかった。そんな気持ちがどこかにあって、ワイドレンズの使用とか、短いカッティングとか、自分自身が禁じ手にしていた手法を随分使ったんです。一寸シュールというか現実離れしたことをやるんだという気持ちが、自分がやるとは思わなかったような禁じ手をやらせちゃったんじゃないかな」。

撮影していくうちに、映画作家としての自分が崩壊するのではないかという危惧を抱いたりはしなかったのだろうか。「それが快感で（笑）。漫画を作ってみようかみたいな気分だったんですが、自分がそういうものを嫌いじゃないんだというのを発見した。『ちくわ』の脚本は、NAKA雅MURAさんと作ったんですが、彼から〈極彩色の血〉というのが出てきた時から嬉しくなっちゃって、あの発想が面白かった。極彩色の殺戮シーンは撮っていても、すごく楽しかった」。

「たどん」ではタクシーと実景との合成に映像合成機器「ドミノ」が使用された。この「ドミノ」は通常様々な工程を経て行う合成作業を一台の機械で可能にしてしまうもので、日本には一台しかない。映画を見ている限りでは分からないが、実際の車に設置したビデオカメラで前後左右4面にわたり、あらかじめ撮影した映像をモニターで見ながら、スタジオ内セットの運転席に座った役所さんが様々な仕草をこなしたという。

「一日の時間帯の流れの中で、どういう状況があるかと考えて、アングルが大体決まったら、僕が実際に立ち会わなくても風景の量をいっぱい撮ってきてもらって、それを僕が見て決めていったんです。どういう時間帯のどういう風景で誰が乗っているか、そういう脚本での人間模様と背景とが決まらないと、ライティングの全体像の設計もできませんからね」。木蔭やビルの影など、照明もA～H位のアイテムが用意されたとか。

タクシーの乗客たちの会話や「ちくわ」の浅見（真田広之）のモノローグは、原作にはない部分だが、市川監督の普段考えている事や、耳にした言葉などがアトランダムに使用されている。「それに宇野イサム君が10代の時に出した詩集から、いくつかアレンジして使わせてもらっています」。

主人公たちが徐々にキレていく過程や、極彩色の殺戮シーンなどは、確かに最近の市川作品にはない新たなものかもしれない。しかし個人的には「たどん とちくわ」での市川作品の新しさは別のところにあると思う。「会社物語」（88年）公開後の頃だから、ちょうど10年前になるか。「BU・SU」や「会社物語」のラストで、主人公たちは決定的な挫折を余儀なくされてしまう。それはなぜなのかと市川監督に訊ねると「人生は、そんなにうまくいくものじゃないから」と、答えてくれたのを、よく覚えている。新作「たどん とちくわ」で、二つのエピソードの主人公たちは、実に能天気に虚構の中を交叉し、挫折することなく駈けぬけていく。ここに市川作品の新たな展開と予兆が垣間見えたと記すと、うがちすぎだろうか。

映画プログラム通販！
パンフレットリスト
（プログラムリスト）
雑誌リスト
テレホンカードリスト
各切手400円
ポスターリスト
スチールリスト
チラシリスト
各切手500円
通信販売のみしています
営業時間 12時～18時
映通社 〒154-0024 世田谷区三軒茶屋2-14 ロイヤルマンション三軒茶屋1階 TEL 03-3411-9772

パンフレット即売会
12/1(火)～12/17(木)
津田沼パルコ
催事場
パンフ・ポスター
チラシ3万点以上
展示即売

Digitized by Google

情念とか信念とかでできた七〇年代のおでんに加えられた凶暴な倫理のちくわ

田中千世子

市川準の映画から七〇年代が飛び出した。まるで暴れ馬のように——。

七〇年代は自分で意志を持ち、ひそかに世界の映画に入り込んでいるのだろうかと思うことがある。

たとえばドイツのクリストフ・シュリンゲンズィーフ。彼はブラック・アイロニーによって世界の支配構造とドイツ国家を批判し続ける。アフリカに派遣された国連軍のエキセントリックな指揮官（ウド・キアー）が独裁者となる「ユナイテッド・トラッシュ」（九四年）。これを初めて見た時、ああ、あるべき七〇年代がここに生きていると、襟を正して感動した。「ナイス・トゥ・ミート・ユー、プリーズ・ドント・レイプ・ミー」（95年）をつくったオランダのイアン・ケルコフまたしかり。

三〇歳代の彼らは体験的には七〇年代を知らない。だが、九〇年代の彼らのラディカルさは、反体制が主流だった七〇年代の芸術家のそれよりずっと強烈で、七〇年代のラディカリズムがこうであったらよかったと嫉妬したくなるほど生粋で真正なのである。

市川準は七〇年代を知っている。だが、彼のCFの痛烈さは、七〇年代型単細胞ラディカリズムから醒めている人間のものだ。今までの彼の映画にもシニカルなところはあったが、そのシニカルささえシニカルに扱って、七〇年代好みの激情とか情念からは最も遠かった。

ところがこの「たどんとちくわ」では一気に七〇年代。それも世界のファシズム構造を喝破したシュリンゲンズィーフやイアン・ケルコフのそれとは違って、きわめて原初的で情緒的な七〇年代。市川準の荒ぶる魂はこんなところにあった。

もっとも厳密に言うと前半の「たどん」は今風のキレる感覚に近い。タクシー・ドライバーの木田（役所広司）が客の言った「たどん屋だよ」に怒って凶暴になっていくプロセスは多分に神経症的だ。

一方真田広之演じる売れない作家、浅見のエピソードはここまでやればよかった七〇年代！　の印象が強い。というのも七〇年代の不徹底。成仏しない霊が、あたりを通りかかった諸国一見の僧の前に現れては、生前の恋の妄執や殺生の罪を語り、今地獄の責め苦にあっていることを訴えるのと同じである。七〇年代も成仏しない。それゆえに旅の僧ならぬ映画監督の脳裡に現れたりする。

七〇年代当時の七〇年代的なる情念より、霊となった七〇年代的なるものの方が鮮烈である。鬱々として日を送る作家の浅見が屋台のおでんやで、「ちくわはないのか」と怒鳴り始め、ついに自分のズボンの前をあけて、「ここにちくわがあるじゃないか」。何とシュールでラディカルで美しいシーンだろう。シュリンゲンズィーフだったらちくわはピストルになる。ケルコフだったら男のちくわを画面いっぱいにクロースアップで見せる。言葉で見せても画面で見せないところが七〇年代。ただ、七〇年代当時は被害者意識の方が強かったからちくわは見せるより、見せられて困惑するか、あるいは見せたことによってチョン切られるのがおちだろう。

浅見はあくまで攻撃的だ。屋台のおでんやでひとあばれした浅見は馴染みの店を久しぶりにたずねる。と、そこはやけにファッショナブルな店に変わっていて、居心地が悪い。浅見の方も店の主人夫婦や客たちを結構居心地悪くさせており、両方の居心地悪さがグロテスクにエスカレートしていった果てに血の雨が降る。この血の色が赤でも黒でもなくて、レインボーカラーのように明るいのがちょっとわからない。しょっちゅう幻覚を見る浅見の目にはまるでエイリアンの血のように見えたということだろうか。そう見えることは面白い？　映倫対策も兼ねたはぐらかし？　持ち前のシニカルさが顔を出したのかもしれない。あるいはどんなに血が真っ赤でもそれが昂じるとかえって興ざめな場合もあるから、興ざめよりはシニカルを選んだという風にも考えられる。

たどんとちくわが結び付くラストは、既に七〇年代とは無縁のフワッとシュールな今感覚である。これもレインボーカラーの血のように私にはあまりぴんとこない。いくつかぴんとこないが、屋台のちくわはあれは、本当にすごい。椎名誠の原作の映画化の話がきた時、市川準は面食らったらしい。映画を見ている時、私はそのことを知らなかったので、市川準は本当はこういうことをやりたかったのかと、嬉しくなってしまった。やった以上は、やはりやりたかったことなのだと思う。

「BU・SU」の教室風景でも倫理のラディカリズムが凶暴だった。それが私は好きだったが、その時は七〇年代とは関係ないと思っていた。どうなのだろう。情念とか信念とかぐだぐだしたものでできあがった七〇年代のおでんに足りなかったのは、凶暴な倫理のちくわだったのかもしれない。

Digitized by Google

「大阪物語」●撮影現場ルポ

いろいろあるけど家族で頑張ってる、その感じを描きたい

取材 春岡勇二

池脇千鶴ちゃんと相手役の南野公助くん。彼は市川監督が町で声をかけ、オーディションを受けさせた大学生。中学生の役もイケル

大阪各地を転々と移動しながら行われていた撮影現場を覗いてみた。

8月9日。大阪市西区靱公園〈うつぼ公園〉午後1時、撮影隊がやって来た。午前11時からの予定が雨で2時間遅れのスタートとなったのだ。

てきぱきと準備が進められる。公園のベンチに田中裕子が座り、頭に包帯を巻き、車椅子に乗ったままの沢田研二が並んで座る。ケガで入院した沢田研二演じる隆介と、つきそって面倒を見る、田中裕子演じる妻の春美が、病院の庭で語らうシーンだ。言うまでもないが、実生活でも夫婦の二人が並んだトゥーショットは、虚構の中で夫婦を演じていても、どこか自然なものが醸しだされている。撮影も一発OKで昼食となった。休憩時間を利用して、さっそく監督に話を聞いた。

「楽しいんだよ、すごく。昔から大阪の持つ独特な情緒とかに憧れていたから。芸人さんの世界にも興味があったし。でも、それを描こうというんじゃないんだ。どちらかというとその暮らしぶりだよね、見せたいのは。貧しいけれど健気で、いろいろあるけど家族で頑張ってる、その感じ。エリア・カザンの『ブルックリン横丁』かな。でも、ほんと出演者にも恵まれた。主役の女の子を演じているのは三井のリハウスのCMでみつけた池脇千鶴という娘なんだけど、この娘がいいんだ、スケール感があって。この一作でかなり成長すると思う。それに沢田さんと田中さんがやっぱりいいよね。二人に出てもらったことで、脚本には書かれていない〝力〟が加わった」と、ここまで聞いたところで、突然、脇から田中裕子が現れ、さっきのカットでメガネを忘れていたので、撮り直してもらいたいと申し出た。監督は「ええ、いいですよ。そうしましょう」と先に田中を行かせてから、「ね、こうやって田中さんも凄く熱心にやってくれるんだよ。だから、僕も自然にサービス精神旺盛になっちゃうんだよな。できあがった作品は、きっと僕の映画には珍しく、お客さんが寝ない映画になると思うよ」なんて言って、笑いながらキャメラの方に歩いて行った。

この日はたまたま脚本の犬童一心と、製作総指揮を執る吉本興業の横澤彪常務取締役が訪れていた。犬童は、すでに若手女性漫才師を題材にした「二人が喋ってる。」という佳作を発表している俊英監督でもある。

「ええ、もう一本漫才師を題材にしたものがやりたいなと思っていたところに、市川監督から声をかけていただいて。ぜひ一緒にやりましょうという感じでしたね。それでかなりまた勉強し直しました。沢田さんと田中さんは、売れない漫才師の感じをよくだしてると思いますね」と犬童が言うと、横澤プロデューサーも「うん、僕もそう思う、二人ともいい感

沢田さんと田中さんの出演で脚本にはない〝力〟が加わった

99年のお正月作品として話題の「たどんとちくわ」。これは市川準監督が、椎名誠の原作を元に〝キレル〟大人たちを描いたもので、シュールでブラックなテイストが、これまでの市川作品にない世界を展開しているとして注目を集めている。そして、それに続く市川作品が、実はすでに撮了しているのだ。それが、夫婦漫才師の娘の視点から〝大阪〟の風景と人間模様を描く「大阪物語」だ。その夫婦漫才師役を演じるのがジュリーこと沢田研二と田中裕子。撮影は97年11月頭から少しずつ進められ、春と夏をメインに、四季折々に撮影された。8月半ば、

Digitized by Google

じだよ。それにこの映画はやっぱり大阪弁がいいね。けっこうキツイところもある内容なんだけど、それを大阪弁がうまく包んでくれてるし、独特のテンポも映画にいいリズムを生んでる気がするな」と目を細めて、市川監督の演出ぶりを眺めていた。

隆介はしょーもない奴だけど、格好いい役より惹かれます

午後3時過ぎには、この場所での予定を終了して、次へ向かう。車に乗り込もうとしたとき、先程から話に出ていた主役の少女、若菜を演じる池脇千鶴ちゃんが合流した。目の大きな女の子だ。大阪出身だけあって気取ったところが全然なく、ナチュラルな魅力にあふれている。

田中裕子さんと沢田研二さん。夫婦漫才師を演じる

車の中では、横澤プロデューサーからさし入れの、大阪名物「北極のアイスキャンデー」を監督以下皆でなめて和気あいあいだ。やがて、車は中津のガード下に到着。酔いつぶれた隆介を、赤ん坊を背負った若菜が迎えにくるシーンだ。エキストラに交じって、近所のオバちゃんたちも沢田研二を見に来るが混乱はない。「役のせいで、ちょっとくたびれてはるけど、やっぱりええ男やねえ」などという声が聞こえる。ここで初めて千鶴ちゃんの芝居をみたが、気負いがなく、素直な演技だ。6時を回ったところで、次の現場へ移動したが取材はここまでにした。

補導員（！）の役で出演する作家の町田康氏（カッコイイ）

翌10日。十三のホテルに、宴会シーンを見に行く。どこかの会社の宴会で、営業で漫才をする隆介と春美。だが、客があまりに無視するので隆介が逆ギレする場面だ。

午前10時に入ったが、低い天井に小林達比古キャメラマンが苦労している。セッティングに手間取り、結局、撮影を始めたのはお昼近かった。沢田研二と田中裕子の漫才も入念にリハーサルが繰り返された。初めて二人の漫才を見たが、微妙にずれた間がいかにも売れない芸で、さすがだった。次の撮影までの間に沢田研二に話を聞くことができた。

脚本の犬童一心（中央）と横澤プロデューサー（左）

「僕は芸人さん大好きですからね。それも隆介は、しょーもない奴でしょ。こういうのが好きなんですよ（笑）。渋い、格好いい役よりも惹かれるところがありますよね。夫婦で共演するのも、ダメな男の役だったので意外にやりやすかったですね。逆に漫才のシーンなどは夫婦でやって面白いものができたと思うし。軽く、何事にも頓着しない、だけどその明るさが悲しい、そんな男だと思いますよ、隆介は。監督からはもう少しねじれて下さいって言われましたけどね（笑）。千鶴ちゃんは綿の花みたいな柔らかい感性が素敵な子で楽しい現場でした」と、暖かく語ってくれた。

8月16日、今度は池脇千鶴ちゃんに話を聞くために再び十三へ向かった。撮影も最後の追い込みで、独特の緊張感が漂っている。

「お芝居するの初めてでしたから、なにが難しかったっていうのもわからないんですよ、一生懸命やるだけで。でも、自分がこうじゃないかなって思ったことはどんどん言いました。沢田さんも田中さんも凄く気さくで、待ち時間に沢田さんが演歌とか歌ってくださったんですよ。ともかくラッキーなお仕事でした」。大阪の女の子らしいハキハキした口調だが、全然生意気に聞こえない。本当に素直な印象だ。最後にもう一度監督に話を聞いた。「『たどんとちくわ』で、それまで自分に禁じていた撮影をいろいろやってみたんだよね。そしたら気分的に凄く解放されたんだ。その解放感が、そのままこの作品に持ち込まれていると思うな」と、やはり楽しそうに語ってくれた。そういう意味では、この作品は「たどんとちくわ」で一回区切りをつけた、新しい市川ワールドの幕開けと言っていいかもしれない。スクリーンで早く観たいものだ。

Digitized by Google

作品特集 恋の秋

CONTE D'AUTOMNE〈CONTES DES QUATRE SAISONS〉

●1998年・フランス・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビーＳＲ・１時間52分
●監督・脚本／エリック・ロメール　製作／マルガレート・メネゴーズ
撮影／ディアーヌ・バラチエ、チエリー・フォール、フランク・ブーヴァ、ベトサベー・ドレフェス、ジェローム・デュク＝モジェ　録音／パスカル・リビエ、フレデリック・ド・ラヴィニャン、ナタリー・ヴィダル　編集／マリー・ステファン
●出演／マリー・リヴィエール、ベアトリス・ロマン、アラン・リボル、ディディエ・サンドル、アレクシア・ポルタル、ステファーヌ・ダルモン、オーレリア・アルカイス、マチュー・ダヴェット、イヴ・アルカイス
●配給／フランス映画社
●シャンテ・シネにて上映中
●本誌関連記事／11月下旬号新作グラビア、今号 HOT SHOTS（ベアトリス・ロマン　インタビュー）

エリック・ロメール監督

Digitized by Google

エリック・ロメール監督 インタビュー

〝この話、どうなる!?〟とワクワクさせながらも常に動いていく映画が僕のスタイル

インタビュアー・佐藤友紀

親しみやすさより真実かどうか

「僕の映画が、エミール・クストリッツァやエリック・ロメールの映画と同じカテゴリーに出品されるなんて……今も信じられないし、とんでもなく光栄なことだよ！」

ショーン・ペンに今年のベネチア映画祭最優秀主演男優賞をもたらした「ハリー・バリー」の監督アンソニー・ドレイザンの素直な感想である。パリで会ったロメール監督にこの言葉を伝えると、「うんうん」と頷いて、「僕も若い頃、憧れてやまない監督がいたからね。特にジャン・ルノワール監督と会った時のことは忘れられないよ。インタビューに行ったんだ（笑）。テーマはリュミエール兄弟について。いろいろ話してもらったな」。

こうした過去のエピソードを聞くと、78歳という年齢の重みを感じるが、インタビューしているうち、〈四季の物語〉シリーズ最終話「恋の秋」の軽快さも実は78歳の若さが生み出したものだというパラドックスに気づく。

「フィクション映画を作る時は、世の中にいっぱいある事象の中から一つのフィクションを取り扱うことになる。つまり、僕は〝40代の女性とは……〟といった社会学的な考察はできないし、あくまでも各々ケース・バイ・ケースで物事に向き合うだけなんだ。女性同士の友情ってことについても、同じように一般化はできないけど、日本などで〝女には真の友情が存在しない〟と言われているのと似た考え方はフランスにもあると思う。例えば、女性の方が物事に対して批判的、あるいは欠点を探し出す性質がある、と言われていたり。それと、伝統的に文学などでは〝女嫌い〟というジャンルがある。ほら、中世の大衆に語り継がれているものなどは、女のことを悪く言って、それをまた楽しむような風潮があるだろ。女の悪口を強調するとでもいうのかな。モリエールの『女房学校』なんかが典型で。とは言え、僕が映画化した『聖杯物語』のように、中世のものであっても、いい意味で女性を尊ぶフェミニズム的なものもあるからね。一概には言えないな」

常に女性に対する視点が鋭く厳しくも、慈しみに満ちているロメール。「日本ではどうだい？　溝口健二の映画なんか、ちゃんと女性を尊んでるだろう？」と反対にこちらに問いかけることも忘れない。

「映画によっては、俳優たちの即興を大いにとり入れるものもあるけど、ほとんど全部、台詞は僕の頭の中から生まれている。そのキャラクターがどんな風に見えるかは観客の見方次第、自由だし、僕は基本的には現場では俳優たちに勝手にやらせて、演出家としては介在しないんだ。だから、彼らの演じ方次第でその人物が感じよくも嫌いなタイプにもなる。よくあるのは、最初は感じいいのに、どんどん嫌な奴に変わってしまったり（笑）。ただ大事なのは、親しみやすいか否かより、それが真実かどうか。そこに表れたものが本当か否かなんだよ。フランスの俳優には――日本も同じかな――2種類あって、自分を解放できる俳優とそうじゃない俳優がいる。解放できる俳優は常に自然に振舞えるし、そうじゃないと、いつも内にこもってしまう。幸いなことに、僕の映画の俳優たちは、数年ぶりの仕事でも、即、自然になれる。見てると、俳優が演技してるというより、キャラクターそのものという感じだろう？」

俳優がそこまでオープンになれるというのは、もちろんロメールの書く台詞がとても自然で、それを助けているのだろうか。

「ま、僕もそう思ってるよ（笑）。何しろ、僕は本当に自然に台詞を書くんだ。どのくらい自然かというと、こうして喋るスピードと同じくらいの速さで書くんだよ（ロメール監督はかなりの早口）。だから、自分で書いたものを後で読み返すと字がグシャグシャでわ

ERIC ROHMER／1920年生まれ。50年代に《カイエ・デュ・シネマ》同人となり、ヌーヴェルヴァーグ隆盛期は編集長を務めた。59年「獅子座」で長編監督デビュー。62年から72年にかけて「モンソーのパン屋の娘」「愛の昼下がり」などの〈6つのモラルの物語〉を連続製作する。80年代前半には「飛行士の妻」「海辺のポーリーヌ」「満月の夜」ほか6作からなる〈喜劇とことわざ〉シリーズを、89年からは「春のソナタ」に始まり「冬物語」「夏物語」、そして「恋の秋」で締めくくられた〈四季の物語〉を発表。ヒッチコック論ほか著作も数多い。

Digitized by Google

からなくなったりもするけど（笑）。でも、とにかく喋りの呼吸で書いてみて、もう1回、検討してみるから、俳優たちにとっても、いかにも書くために書かれた台詞より、喋りやすいんじゃないかな。それと僕は俳優たちの理解力、感じる能力を信頼してるから、撮影現場では本当に彼らにイニシアチブをとってもらうんだ。彼らが〝ここの台詞、ちょっと言いにくいから変えちゃった〟というのにも反対はしないよ」

映画作りにおけるサスペンス

「恋の秋」は、台詞のやりとりはもちろん、タイミングというか、例えばパーティで主人公2人が喋っている時に話題の男ジェラルドが偶然通りかかるといった〝間〟が絶妙だ。この絶妙さは普通、俳優たちが何度もリハーサルをして生まれるものだが。

「この映画は〝動き〟がある映画だと僕は思う。ずっとストーリーが進んでいって流れができ、それを何かが中断したりはしてないだろう？　しかも最初からこの物語が一体どこに進んでいくのか見当もつかない。イザベルという中年女性が、親友で独身のマガリを結婚させたいというところから事は動き出すけど、それがどういう方向に行くのかわからない。これこそ、映画における〝サスペンス〟なんだよ。昔のアメリカのコメディには必ずあったサスペンス。残念ながら、今の映画監督はそれを忘れてしまっているようだが、僕としては映画を見ている間、観客がずっと〝いったい、この話、どうなっていくんだ!?〟とワクワクしながら見てくれる映画作りが常にしたくて、もちろん今回もそれを狙ったのさ。だから演技の〝間〟も、そうしたサスペンス作りの一助なんだよ」

今の映画監督たちがロメールの指摘するサスペンスを忘れた理由については、かつて優秀な映画批評家だったロメールらしい鋭い分析をしてくれた。

「たぶん60年代初頭くらいからかな。こういうサスペンスを持った映画を、ちょっと軽蔑するというか、下に見る傾向が表われ始めた。作家名で言うと、アントニオーニ、ゴダール、そしてヴェンダースなんかに続くわけだが、彼らはアヴァンギャルドで、逆にサスペンス味のない映画を作り出したんだよ。もちろんアントニオーニは偉大な映画作家だ。それは疑いようもない。ただ僕としては、ストーリーが前に進んで、常に動いている映画が自分のスタイルなんだ。何も起こらない映画は作れないんだよ」

映画作りにおけるサスペンスを大事にするロメール監督は、日常生活でもまた「時が変わっていく幸福！」を常に感じているという。だからこそ「午後5時の光線を撮る時は、ライトで人工的にそれを作り出したりはせず、ちゃんと午後5時まで待って、風もそのままカメラでとらえる。ちょっとぐらい、いやかなり雑音が入っても、マイクでもとらえる」といった姿勢になるのだろう。

「四季は全部好きだし、四季がはっきりしてない場所では僕は暮らせないと思う。ただ、暑い夏は苦手だね。ボードレールは秋のことを眠ってしまう季節とうたったが、僕は夏こそ眠っちゃうよ（笑）。で、僕にとっては秋が目覚めの時、となるわけさ。新学期（新学年）も秋だしね（笑）」

Digitized by Google

撮影／吉岡誠

interview with

マルガレート・メネゴーズ

インタビュアー・杉原賢彦

「恋の秋」はロメールが何年も俳優を待ち続けた賜物

MARGARET MENEGOZ／フィルム・デュ・ロサンジュ所属。「飛行士の妻」(81)以降、ほとんどのロメール作品の製作を手掛ける。

いまや、ロメール作品の代名詞ともなっている、フィルム・デュ・ロサンジュ。トリュフォーをフィルム・デ・キャロッスが支えたように、ロサンジュはロメール作品になくてはならない製作会社だ。そしてそのロサンジュを支える現在の女当主が、マルガレート・メネゴーズだ。

「〈四季のコント〉シリーズは、どれを最初に撮影するか、最初から決まっていたわけではありませんでした。結果として、春→冬→夏→秋となりましたが、ロメールが必要とする俳優がそろった順から撮っていったというほうが正しいでしょう」

深みのあるアルトの声。長年にわたりロサンジュを執り仕切ってきた女性プロデューサーにふさわしく、その堂々とした存在そのものが美しい。いや、彼女こそ、ロメールに次々と映画を撮らせ、そして送り出してきた張本人なのだ。

「ロメールは、ある映画にとりかかるとき、題材を温めながら、まずその俳優を頭のなかに思い描くのです。そして、ときにはその俳優のスケジュールが空くまで待ち続けるのです。『モード家の一夜』に際しては、ジャン＝ルイ・トランティニャンのスケジュールが空くまで、2年間も待ったほどです」

その後ロメールは著名な俳優をあまり起用しなくなり、ロメール組ともいうべき若手の俳優たちを起用して映画を作るようになる。

「ロメールは新人たちと働くのを好みます。それは彼自身、新しい発見を求めているからでもあります。彼は俳優志願の若手からの手紙を自分のデスクの引き出しのなかに大切にとっておき、映画のなかで必要があると、それにふさわしい俳優を、それらの手紙のなかから見つけだすのです。ときには3年も5年も経った手紙のなかから、目指す俳優を見つけだすこともあります。ですから、ロメールの作品に出たいという若手の俳優にはいつも、『ロメールに手紙を書きなさい。そして辛抱強く待ちなさい』と言っているんです（笑）。ロメールが俳優を選ぶに際して、他の人の手を煩わすことはありません。彼はすべてのキャストを自ら選びます」

そうして選ばれた俳優たちが、「恋の秋」ではベアトリス・ロマンであり、マリー・リヴィエールであり、アレクシア・ポルタル（その溌剌とした魅力はまさにロメール好み！）であり、アラン・リボルであったわけだ。

ところで〈四季のコント〉シリーズは、最初から明確な意図の下に撮られていったわけではない（「春」と「秋」、「冬」と「夏」が好一対となっているのがいまになって分かるが）。描かれてゆくうちに、次第に形を現し始めたと言ったほうがよさそうだ。

「ロメールは、こうしたシリーズによる製作を好む傾向にあることは確かです。2000年からは、また新たなシリーズを撮り出す予定になっています」

老いを知らぬロメールの新作シリーズ。そのテーマはいまだ明かされないが、プロデューサー、メネゴーズがそれを生み出してくれることは、確かなようだ——。

Digitized by Google

作品評

女こそ、ロメール映画の“全権大使”である。

野崎　歓

女優を全肯定するロメールと自然すら味方につけてしまう戦術

七十五歳の大ベテランが健在を示した作品というにとどまらず、ロメールの最高作の一つとして語り継がれるに違いない傑作である。とにかく面白く、おかしさに満ちた映画なのだ。このいきいきした感覚はどこからくるのか？　ヌーヴェルヴァーグ流撮影スタイルの鮮やかさはいうまでもない。ローヌ渓谷の晩夏の光、秋の風音をそのままとらえた素晴らしい臨場感は、それだけで観る者を恍惚とさせる力を持っている。友達の中年未亡人に伴侶となる男性を見つけてやろうと、女たちが勝手な世話を焼き始め、暴走気味に男たちを巻き込んでいくという脚本の設定は、意外な展開をはらんで飽きさせない。そしてなによりも、それぞれの個性をのびのびと発揮する女優たちのチャーミングさがこちらの心をときほぐしてくれる。

ロメール映画は、女たちにエゴを全開にさせ、好き勝手にやらせればやらせるほど面白くなる。「夏物語」と「恋の秋」を比べてみるだけでその事実は明らかだろう。気弱な青年を主人公に配した前者にはない勢いが、今回の作品にはある。マリー・リヴィエール演じる中年女性イザベルとアレクシア・ポルタル演じる女子大生とが、お節介を競い合い周囲の人間を振り回す姿は、男たちの呆然とした表情との対比でひときわ精彩を放ち、おおいに笑わせてくれるのだ。親友マガリの〝全権大使〟と称して勝手に男と面接するイザベルのふるまいは常軌を逸している。しかしその〝全権大使〟という表現は、この映画自体の、あるいはロメールの女優に対する態度をよく示してもいる。要するにここでは、女たちはいくらでも悪戯することが許されていて、ロメールは嬉々として彼女らを甘やかす。そこで彼女たちは楽しげな笑みを浮かべながら、とんちんかんな人助けに邁進する。

女優を全肯定してやろうというロメールの精神を示す、衝撃的とさえいえるワンショット。それはすべてのドラマの中心たるヒロイン、マガリを演じるベアトリス・ロマンの最初のクローズアップである。女だてらにブドウ園を切り盛りする彼女は、雑草を抜かず自然状態で栽培するのを好むというその方針に従ってか、自らの黒髪をまさに藪のようにぼうぼうと繁らせていて、およそエレガントとはいいにくい。だが彼女の顔立ちそのものはなかなかアップで示されない。やがて彼女に恋人を世話してやろうという情熱にとらわれたイザベルが、「あんたってまだまだ超きれいよ」とおだてあげる。そこで初めてわれわれはマガリの顔が、画面いっぱいのアップで捉えられるのを目撃するのだが、そのとき藪のようなボリュームの黒髪には秋の午後の美しい陽光がきらきらと降り注ぎ、マガリの容貌を何割増しにも引き立てるのだ。太陽の光まで女優の味方につけてしまうロメールの戦術である。そしてそのショットで、すっかりその気になって婉然とほほえんでみせるマガリの表情は爆笑を誘いながらも、同時に農園でくすぶる中年女がお茶目な少女へと変身する瞬間を伝えて感動的である。事実、ドラマの展開とともに、女子大生よりもマガリの方がずっと幼く少女っぽく、いとおしく見えてきてしまうのである。

Digitized by Google

ハッピーエンドを一捻りして深い余韻をかもし出した〝円熟〟

女のお節介やらわがままやらは、無論これまでロメールが繰り返し扱ってきたテーマだが、今回決定的に違うのはそこにいかなる苦々しさも見当たらないことだろう。エゴが罰せられるという局面がないのである。「男求む」の広告を本人に無断で新聞に出したイザベルなど、昔のロメール映画であればもっと手ひどいしっぺ返しを受けていいところだ。しかしロメールは彼女を責めようとしない。いつしか自分の身にもロマンスを夢見始めて胸をときめかす彼女の気持ちの揺れを、共感をこめて見守るばかりである。全編の最後をしめくくるイザベルのクローズアップが心憎い。夫の腕に抱かれながら少しだけ物足りなげな表情に、ロメールの登場人物に対する優しい眼差しがにじみ出ているからだ。ハッピーエンドを一捻りして深い余韻をかもし出す。これをしも「円熟」と呼ぶべきか。

だがもっとも「円熟」を感じさせるのは、新聞広告に応じて現れた男性の描き方である。アラン・リボル演じるこの中年独身男性こそは、これまでのロメール映画でついぞお目にかかったことのない滋味あふれる男のイメージを見せてくれる。約束のカフェに先にきてぽつんと座っている彼の姿を一目見た瞬間、われわれの胸には――イザベルと同様――彼に対する好意がいっぱいに広がる。その控えめで落ち着いた物腰、穏やかな口調に備わった品のいい善良さは、「新聞広告」を見て交際相手を探すという行為のいかがわしさ、侘しさをきれいに忘れさせてくれる。そのとき、この映画は現実のただなかで進行しながら、一編のおとぎ話のような愛らしさを獲得するのだ。アラン・リボルは若いころメルヴィルやリヴェットの映画に出演しながら、その後映画界と縁が切れてもっぱら舞台に出ていた人だという。「まるで十八歳のときみたいな気持ちだ」などというせりふを少しも厭味でなく、本当に幸せそうにいうことのできる役者を捜し出してきたロメールの炯眼はさすがである。

処女長編「獅子座」から約四十年。思えば、天の采配により巨額の遺産が転がり込むというあの処女作以来、ロメールの作品は多かれ少なかれ、つねにある種の「奇跡」を描いてきた。人間の意思とは隔絶したところから下される運命の瞬間が、ロメールのドラマをしるしづけてきたのであり、そこに彼の「カトリシズム」を見いだすこともできた。こちたき神学論争はともあれ、誰の目にも明らかなのは彼の世界を支える根本的なオプティミズムであり、楽観主義である。棚からぼた餅のような素晴らしい事柄が、人生にはきっと待っている。そんなロメールの肯定的な構えは、歳月とともにいっそうおおらかさを増し、ついに喜びあふれる「恋の秋」の境地にまでたどり着いた。繊細な心理描写の冴えをそのまま笑いへと押し広げ、観る者の胸を幸福感でいっぱいにしてくれる。比べるものとしてはジャン・ルノワール最晩年の作品しか思いつかないようなふくよかな充実に、今ロメールの映画は到達しようとしているのだ。

Digitized by Google

作品特集

私の愛情の対象

THE OBJECT OF MY AFFECTION

●1998年・アメリカ・カラー・ヴィスタサイズ・ドルビーＳＲＤ・１時間52分
●監督／ニコラス・ハイトナー　製作／ローレンス・マーク　脚本／ウェンディ・ワッサースティン　原作／スティーヴン・マコーリー　撮影／オリヴァー・ステイプルトン　美術／ジェーン・マスキー　編集／ダリック・アンワール　音楽／ジョージ・フェントン　共同製作／ダイアナ・ポコーニー　音楽スーパーバイザー／アレックス・ステイヤーマーク　衣裳／ジョン・ダン
●出演／ジェニファー・アニストン、ポール・ラッド、アラン・アルダ、ナイジェル・ホーソーン、ション・パンコウ、ティム・デイリー、アリソン・ジャニー、アモ・グリネロ
●配給／20世紀フォックス
●製作／ローレンス・マーク・プロダクション
●12月５日より有楽町スバル座、シネマ・カリテ他にてロードショー
●本誌関連記事／11月上旬号「カミング・スーン・スペシャル」

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

Digitized by Google

男女の間で性的な関係を伴わない愛情が成立し得るのか

きさらぎ尚

「恋人たちの予感」の説をくつがえし さらに核心の領域に踏み込んでいく

思えば現代は物語としての恋愛には、すこぶる困難な時代である。理由は単純だ。恋愛に不可欠な要素である障害が極めて少ないからに他ならない。民族対立はあるものの、国家間を隔てる壁は低く薄くなり、身分差にしてもナンセンス化し、人種や宗教の違いも絶対的な障害物としての役割は、もはや果たしえない。昨今このジャンルにリメイク、あるいは過去を題材にした映画が多いのは、こうした事情によるようだ。

ではそんななかで恋愛映画に有効な障害とは何か、と考えてみると、それはセクシャリティなのである。「私の愛情の対象」はそのセクシャリティを題材にしたロマンチック・コメディなのだ。

主人公はゲイの小学校教師のジョージ（ポール・ラッド）と、ストレートのソーシャル・ワーカー、ニーナ（ジェニファー・アニストン）。二人には互いに恋人がいる。ジョージの恋人は大学の文学教授ロバート（ティム・デイリー）で、一緒に暮らしている。ニーナの恋人は人権派の弁護士ヴィンス（ジョン・パンコウ）。ところがロバートに新しい恋人ができて、ジョージはアパートを出るはめに。それでパーティで知り合ったニーナのアパートに一時的に間借りすることにしたのであった。これが物語の起点である。

すなわちこの映画はゲイの男性とストレートの女性を同じ場所に立たせて物語を語るのだ。自立した女性であるニーナは〝一緒に暮らせばわずらわしくなる〟という理由から恋人との同居は断固拒否なのだが、同居人がゲイとあってそのわずらわしさは心配する必要がないというわけ。むろん同居を拒否されたヴィンスとしては、相手がゲイということが解ってはいても心おだやかではいられないが、それでもニーナとジョージはかなりスムースにいく。テレビで放映されている「雨に唄えば」を見ながら「ジーン・ケリーをセクシーと思うか」といったとりとめのない会話で盛り上がったり、ベッドに横になって初体験の話をしたり、また恋人にふられて傷心のジョージをニーナがダンス教室に誘ったりと、ルームメイトとしては理想に近い。ここから見えるのは性的な関係抜きで生活できる心地よさであり、「セックスが邪魔をして男女間に友情は成立しない」と頑なに信じていた「恋人たちの予感」のビリー・クリスタルの説をくつがえして、友情が成立することを証明したのである。

ここに止まっていずに、映画はさらに現実的な問題をとらえて、核心の領域に踏み込んでいく。ニーナがヴィンスの子供を妊娠したのだ。ジョージは心から祝福するが、彼女にしてみれば内心複雑だ。すべてに細かく、なにかと押しつけがましいヴィンスと結婚しても、幸せでないことは解っている。一緒に暮すのを避けてきた理由の実はそれである。子供の実父は実父として、その存在は大切だが、暮らしは別。だから妊娠を最初に打ち明けたのもジョージなら、産む決心を伝えたのも実父である恋人ではなく、ジョージなのである。ヴィンスが彼女の妊娠に気づいたのは、ジョージがニーナの身体を気遣うのを見てというのは、蚊帳の外に置かれた格好で可哀相な気もするが、子供とジョージと、三人で暮したいのがニーナの偽らざる気持ちなのだ。つまり〝子供のパパは自分で決める〟のが、ニーナ流の生き方である。

女性の視点に変えた見事なアイディア

そこで面白いのはジョージの嫉妬。妊娠に狂喜するヴィンスの姿を見て彼の家に移ったニーナに対して抱く、〝セックスのない愛情だってあるはずだ〟というのがそれ。こうした感情は少なくともこれまでは、女性の専売特許ではなかったか。そう、これが物語の核

Digitized by Google

心であり、この映画はこれまでのティピカルな男女の関係を洗い直して、再構築を試みているのだ。資料によればスティーヴン・マコーリーの原作は、ジョージの視点で書かれていたそうだ。それをプロデューサーのローレンス・マークのアイディアでニーナの視点に変え、女性劇作家のウェンディ・ワッサースティインに脚色を依頼したそうで、アイディアといい脚色といい、見事に功を奏している。

原作を読んでいないのでどこがどう変わったかは比較・分析できないが、ゲイということに限ってみても、これまでのラブストーリーは同性愛者同士の恋愛がほとんどである。ところがこの映画の場合は前述したように、ゲイとそうでない者を同じ場所に置いて愛を語っている点が目新しい。こうすることによって閉鎖の性としてのホモ・セクシャルを、一旦は解き放つ。ジョージは〝ときには男が恋しくなるが、ニーナが一緒にいれば寂しくない〟のだし、片やニーナは〝男でなく本当は自分を選んで欲しいのだが、ジョージが生まれてくる子供の父親役を引き受ける〟というところ、つまり性的関係抜きの愛情関係に落ち着く。だからジョージが新しい恋人ポール（アモ・グリネロ）をアパートに連れて来ることがニーナの気にならないわけではないが、自分たちの愛情はそれとは別のものだというわけだ。

そうしたうえでやはりといえばやはり、最後の難関、つまり友情と愛の間に立ちはだかる「セクシャリティ＝難攻不落の壁」に話をもっていく。言い方を変えれば、性的な関係を伴わない愛情が果たして本物かどうか、そして男女の間でそうした愛情が成立し得るのか、ということである。若くて美しいポールにふられた老演劇評論家ロドニー（ナイジェル・ホーソーン）がニーナに言う「三人のゲイ（ロドニー、ジョージ、ポール）が男を見つけたら君は一人取り残される」が、胸に突き刺さる（ベッドにいるジョージとポールを目にして深く傷つき、冷静さを装う場面のホーソーンは出色！）。性的な関係をコミュニケーションのひとつだとすれば、それをもち得ない関係は、やはり確かにどこか偽善の匂いが漂う。さしあたって不都合がなくとも、一生偽善の匂いを嗅ぎながら生きるのはなんとも寂しい。ゲイの男性を愛した女性の報われない愛といってしまえばそれまでだが、自分と同じ愛し方で、相手にも愛されたいと思うのは人情というものだ。物語は、ニーナを失いたくはないけれど自分を偽りたくないジョージの真情を受け止めて、生まれた子供をみんなで育てましょうというところに、ふわりと着地する。

監督のニコラス・ハイトナーは前二作、「英国万歳！」で英国王室の伝統と規範のなかで錯乱した国王を、「クルーシブル」では十七世紀の魔女狩りの事件を題材にしてその犠牲者を描いた。映画の演出では今回が初めての現代ものという以上に、主人公をはじめとした人物の関係がとても自然であり、また各人の感情の流れがなめらかにしてのびやかだ。同性愛を越えられる恋愛の障害物として、楽天的な結末に至るまで、終始和やかな雰囲気で描ききった点がなによりも好もしい。深刻な題材を、深刻に演出した上手い映画もそれはそれでいいけれど、同じ上手い映画なら和やかで楽天的なものの方がもっといい。

撮影中のニコラス・ハイトナー監督（右）

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

Digitized by Google

どんな人間関係でも苦痛は伴うということを描いた大人の映画

黒田邦雄

男たちは愛情の対象からはじきとばされてしまった

かつて、ハリウッド映画のヒロインたちは、自分の愛の対象に大いなる自信を持ち、とことんその愛を貫いたものだった。「モロッコ」のマルレーネ・ディートリッヒは、外人部隊の兵士ゲイリー・クーパーに恋をしてすべてを捨てて彼のあとを追った。「風と共に去りぬ」のヴィヴィアン・リーは、夫クラーク・ゲーブルに〝君を愛せなくなった〟と言われてなお、〝私に出来ることはあなたを愛することだけ〟と言ってのけた。「カサブランカ」のイングリッド・バーグマンは、再会した昔の男ハンフリー・ボガートにすべての運命を託してしまう。私の選んだ男に対する私の愛し方、というのが往年のハリウッド恋愛映画の基本パターンであり、女はしたたかに男を愛し、男はその愛を力強く受け止めたのである。

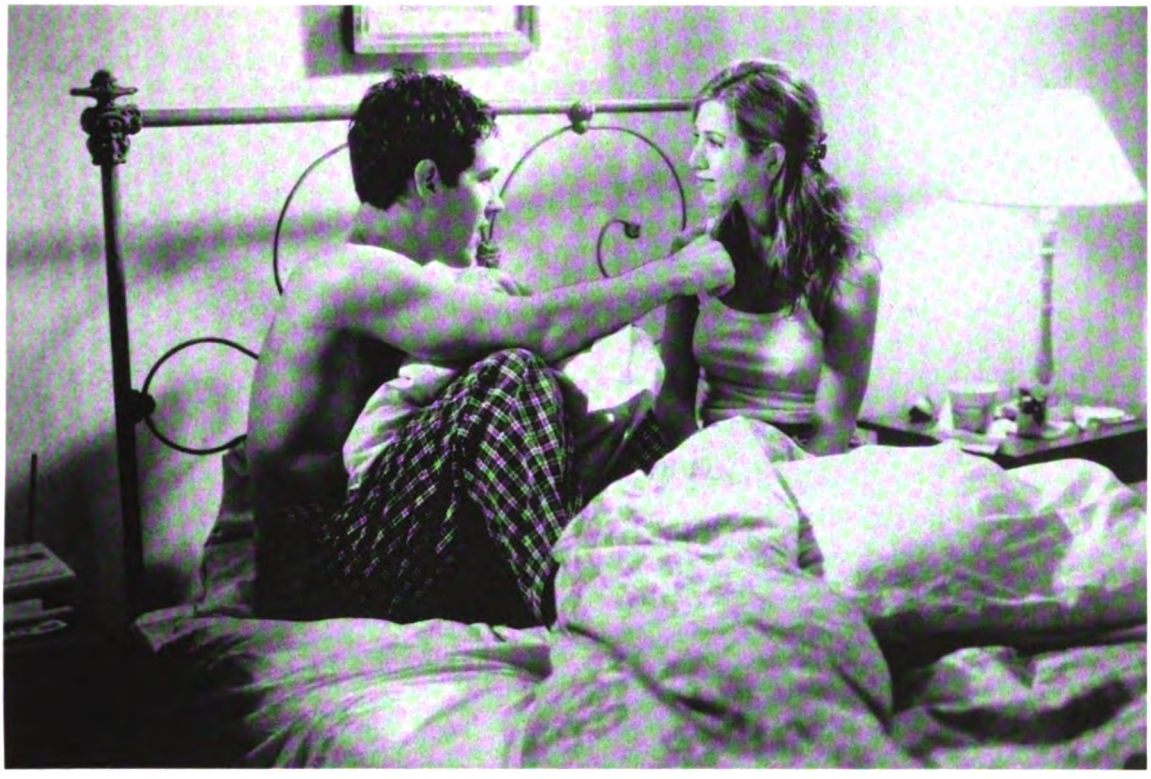
恋愛映画が女性主体で作られる限り、今もこの基本パターンは変わらないのだが、変わってきたのは男への信頼度だ。往年のヒロインが絶大な自信を持って選び抜いた男は、誠実で勇敢で色気があり、寛容と忍耐も兼ね備えているといった、いかにも女側に都合のいい完璧な男であった。そんな夢のような男の存在を信じられる時代がかつてあったわけだし、演じる男優たちも夢の男を見事に具現化してみせる力を持っていたのである。

しかし、今の時代はどうか。ハリウッド映画が夢を描く映画であることに変わりはないが、その夢の対象はSFXを駆使した宇宙的なるものへと変わり、夢のような男などトンと見かけなくなってしまった。その原因として、もはや男は女の愛の対象となるようなロマンチックな存在ではなく、生殖上あるいは生活上の必要悪とも言うべき存在に成り下がってしまった現実がある。夢を見るのが得意な女たちでさえ、今や男に夢を託すことがいかに空しい行為であるかを知ってしまったわけで、男たちは恋愛映画の愛情の対象からはじきとばされてしまった。しかし、恋愛映画というジャンルが消滅したわけではないから、ヒロインたちは早急に新たなるパートナー探しをする必要があった。そこで登場してきたのが、女にとって未知なる男たち、つまり、この世のものならぬ天使であったり、女を性欲の対象としないホモセクシュアルな男たちだったのである。

「シティ・オブ・エンジェル」の天使ニコラス・ケイジや「ジョー・ブラックをよろしく」の死神ブラッド・ピットは、生身の男ではないからこそ女たちの夢の条件を見事にそなえている。「タイタニック」でヒロインに殉じるレオナルド・ディカプリオも天使的な存在だし、「ワン・ナイト・スタンド」の末期エイズ患者ロバート・ダウニー・Jr.は、主人公のカップルを結びつける天使であると共に、彼自身はゲイである。近年、若い女たちが支持するのはきまって美青年タイプの男優だが、彼らは共通して男性性というものに乏しい。まだ男としての性に目覚める前の少年のような、どこかはかなげでうつろっているようなセクシュアリティ。「ジョー・ブラックをよろしく」で死神ピットに抱かれたクレア・フォーラニは、〝はじめて女を抱くみたいね〟とうっとりするのだが、この童貞性こそ女の夢をかきたてる正体ではないだろうか。

映画に登場するホモセクシュアルな青年も、天使と同じようにセックスレスで、およそ現実のゲイとは違う存在である。つまり、女たちは天使やゲイを相手に、〈異性愛〉ではなく〈少年愛〉を夢見ているように思われるのだ。美青年映画の多くが何やら少女劇画やハーレクイン小説に似ているのは多分そのせいだと思うが、男が成熟しないように、女も成熟しない時代になっているのだと思う。しかし、ハリウッド映画は夢を見させる一方で、

Digitized by Google



現実を映す鏡としての機能を持っていることも忘れてはならない。女たちの新しい夢のお相手として登場したゲイを、単なる〈少年愛〉の王子さまとしてではなく、リアルな存在感を持った男として描く映画が登場してきた。はじめて女とゲイの新しい関係を現実の中で描いたといっていい映画が、P・J・ホーガンの「ベスト・フレンズ・ウェディング」である。大学時代の恋人が結婚すると知って動揺するキャリア・ウーマンのジュリア・ロバーツが、本当に自分を理解してくれるのはその恋人ではなく、ゲイの親友ルパート・エヴェレットだったと悟る話だが、エヴェレットは意気消沈しているロバーツに、〝ぼくは君とセックスは出来ないけど愛することは出来る〟と高らかに宣言する。ゲイのセクシュアリティが男を愛するだけではなく、女にも開かれていることを示した画期的なセリフである。この映画によって、ヒロインとゲイがカップルという、新種の恋愛映画が成立したといっていいだろう。

セックスがなくても恋愛は出来るし夫婦にもなれる

ニコラス・ハイトナーの「私の愛情の対象」は、ロバーツとエヴェレットが一つ屋根の下に住むとどうなるか、というシミュレーションを見ているような映画である。ヒロインのニーナ（ジェニファー・アニストン）には、人権派の貧乏弁護士であるヴィンスという恋人がいるが、どうしても結婚に踏み切れないでいる。それどころか、一緒にいると息苦しいからという理由で、同棲生活も拒否しているのだ。といってもヴィンスの子を身ごもっているくらいだから、嫌いになったわけではない。ニーナ自身、自分の感情が把握出来ていないらしいのだが、小学校の先生をしているゲイのジョージ（ポール・ラッド）と出会ったことで、もやもやの原因を知ってしまう。つまり、ヴィンスと一緒にいても安らぎを感じない、というのが原因だったのだ。ヴィンスが独断的な言動でニーナの感情を無視するのに対し、ジョージはニーナの感情を理解し自分の感情を押しつけることもない。ジョージといると素直になれる自分に気づいたニーナは、ヴィンスに三下り半をつきつけ、ジョージに〝生まれてくる子供のパパになって〟と頼み、共同生活をスタートさせるのである。

セックスがなくても恋愛は出来るし夫婦にもなれる、とは何と大胆で現代的なテーマだろう。社会の変化に敏感な女たちが、いち早くセックスレスな関係を肯定しているらしいことは前述の通りだが、それはあくまでファンタジーで包み込むことが条件である。星の王子さまのように無垢で美しい男だからこそ、セックスレスを容認できるというわけだ。男の美しさが男とのセックスから得られる官能に勝ることを知った時、女たちは男から与えられるセックスにノーを突きつけたのである。しかし、当然ながら世の中は美しい男ばかりというわけもなく、容貌が並の男ともセックスレスな関係が可能かという問題にぶち当たる。生まれ持った美貌の代わりに女たちが求めたもの、それが女に安らぎを与えることができる資質であった。ニーナはパトカーの警官に、〝あなたはゲイじゃない？〟と問いかける。〝自分の意見を押しつけない男は大抵

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

Digitized by Google

ゲイよ〟というのが彼女の言い分なのだが、この警官はズバリ、ゲイであった。天使やゲイが女たちの愛情の対象に成り上がってきた原因は、まさにこのセリフに要約されているようだ。つまり、女たちが今最も嫌うのは、男性主義に何の疑いも持たない男たちであり、セックスレスの主張は男性主義への女たちの反乱といっていいのではあるまいか。

セックスレスなカップルという大胆なテーマを打ち出しながら、いたずらにセンセーショナルに陥ることなく、あくまで都会風俗もの らしい瀟洒なセンスでまとめ上げたハイトナーの演出は実にお見事。たくさんの登場人物の描き分けも巧みだし、その誰もが映画のテーマと綿密に絡んでいるのも感心してしまう。こういう非現実的とも思えるストーリーは、ともすると都会のファンタジーという枠に収まりかねないのだが、人間描写はかなり辛辣で鋭く、思いがけないほど現実的であることを知らされる。セックスレスな関係に同意しながらも、相手方のセックスには寛容になりきれないニーナとジョージの悩みなど、よくぞ描いたという感じである。ジョージがゲイの恋人を部屋に連れ込んできてニーナが眠れなくなるシーンなど、新しい人間関係の困難さが鮮やかに暴露されているのだ。

ゲイを等身大で描いていることも、この映画の手柄のひとつである。ゲイセックス描写というと、ファンタジックかスキャンダラスかのどちらかに偏って描かれる場合が多いのだが、ここではそのどちらでもなく、しごく当たり前の欲望として描かれている。ニーナとのセックスレスな関係をこなしながらも、若い男であるジョージとしてはセックスの欲望がないわけはない。当然、セックスの対象は同性ということになり、ニーナは二人の男がベッドで寝ている姿を見せつけられることになる。この時の二人のリアクションが対照的で、ジョージは当然という感じで平然としているのに対し、ニーナはまるで夫の浮気を見てしまったように動揺するのである。このズレは注目で、はしなくも男と女の本能が出てしまったシーンと言える。ゲイと男は別物と思いたい女が、ゲイも男なんだと思い知るわけだが、こういう演出をさらりとこなしてしまうハイトナーの感覚は素晴らしいし、リズム感のあるカメラワークもいい。

ともあれ、新しい風俗をこれみよがしに描く映画は感心しないが、この映画にはその手のイヤ味が全く感じられない。ハッピーエンドで終わらせてはいるものの、どんな人間関係にも苦痛は伴うということをはっきり描いている大人の映画である。しかし、どんな人間関係であれ必ず得るものはあるという、ハリウッド映画らしい人間賛歌も忘れていないしたたかさ。原作ではジョージの視点から描かれていたものを、女性ライターのウェンディ・ワッサーステインはニーナの視線に書き変えたという。このアイデアも映画の成功の一因だろう。

ときめいて
《映像のプロへ》
一直線

■映像科 創作科 技術科 美術科
■俳優科
■声優科（三科とも全日制2年）

日活芸術学院

入学願書受付中

キャンパスガイド〈体験入学〉
12/6(日) 12/23(祝) 1/17(日)

参加ご希望の方は事務局K係宛ハガキ、電話、FAXなどでお申し込み下さい。

〒182-0023 東京都調布市染地2-8-12日活撮影所内
日活芸術学院 事務局K係
TEL:0424-85-2443 FAX:0424-87-1210
http://www.nikkatsu.com/school.htm

入学資料（無料）をお送りします。上記宛ハガキ、電話またはFAXでお申込み下さい。

『きみのためにできること』
'99新春公開!!
監督：篠原哲雄　原作：村山由佳（集英社刊）
出演：柏原崇・真田麻垂実・川井郁子・岩城滉一
■製作・配給　日活　■日活芸術学院協力作品

Digitized by Google

作品特集 ラブゴーゴー

愛情来了

●1997年・台湾・カラー・ヴィスタサイズ・1時間53分
●監督・脚本／陳玉勲（チェン・ユーシュン）エグゼクティヴ・プロデューサー／鍾湖濱（チョン・フービン）、陳俊榮（チェン・シュンロン）、徐立功（シュー・リーコン）製作／邱順清（チウ・シュンチン）、陳俊榮（チェン・シュンロン）、徐立功（シュー・リーコン）プロデューサー／徐立功（シュー・リーコン）、撮影／蔡正泰（ツァイ・チェンタイ）照明／孟培雄（モン・ペイション）　録音／杜篤之（ドゥ・ドゥージー）、郭禮杞（グォ・リィチ）　美術／鄭國偉（チャン・グオウェイ）、王祺中（ワン・チイチョン）　衣装／王瑜（ワン・ユ）　編集／陳博文（チェン・ポーウェン）　音楽／王継康（ワン・チーカン）、徐禹（シュウ・ユ）
●出演／李娜（タン・ナ）、施易男（シー・イーナン）、廖慧珍（リャオ・ホェイチェン）、陳進興（チェン・ジンシン）、馬念先（マ・ニェンシェン）、邱秀敏（チウ・ショウミン）、黄子佼（ホアン・ツジャオ）
●製作／中央電影事業股份有限公司、春暉影業有限公司、縱橫國際影視股份有限公司
●配給／アジア映画社、麻町ミュージアムスクエア、オフィスサンマルサン
●12月12日よりユーロスペース、12月下旬より大阪・麻町ミュージアムスクエア、名古屋・シネマスコーレ他にてロードショー

Digitized by Google

作品評

平凡を新鮮に描く非凡さ

森卓也

ディテールの魅力で成立したストーリー

チェン・ユーシュンのデビュー作「熱帯魚」を見た方には、何も言うことはない。第二作「ラブゴーゴー」を見ないではいられないだろうから。

映画に関する文章は、事前には読まぬに越したことはない。一瞥して、見るに価するか否か、性に合うかどうかを判断したら、読むのは後廻しにした方がいい。よくできた映画は、内容が推理物でなくても、興味をそそるちょっとした伏線や、さりげない布石が効果的に組みこまれているものだからである。

短いオープニングに続いて、タイトルが黒バックに現れる。やがて、その黒の一部が楔型に外され、肥った青年の顔が見える。空間が広がるにつれて、それは、ケーキの切り分け作業を下からとらえた図で、流れているヘタな歌は、そのケーキ職人の歌声とわかる。

こういう奇抜なアングルで撮る監督は、市川崑か岡本喜八位のもので、それも若かりし頃のこと。いま、ちょっと思いあたらない。

だが、チェン・ユーシュンは、本来、斬新さを画面に出すタイプの人ではない。この場合は、ちょっとした意外性の工夫という態度なのだけれど、それが、サイレント時代に多用されたアイリス・インのヴァリエーションにも見えるところが嬉しい。

内容は、三話のオムニバス的構成だが、第一話にちょっと登場した人物が、第二話第三話にかかわってきたりする。その出し入れが鮮やかで、一ヵ所、完全に意表をつかれた。

まず、叔母（チウ・ショウミン）が経営するパン屋の職人アシェン（チェン・ジンシン）のエピソード。レモンパイを買いに来た小学校の同級生リーファ（タン・ナ）の、女盛りの美しさに、初恋を再燃させるアシェン。卒業式の前夜、「透明人間はブランコが好き」という噂を確かめるため、二人で夜の公園の地面に小麦粉を撒いて待った思い出もあるアシェンだが、リーファの方は彼を憶えていない様子。彼女は左足が不自由なのだが、いつ頃からかということは、回想シーンでもわからない（たぶん意図的に歩くところを見せなかったのだろう）。だから観客は、アシェンの方が一見してリーファと気づいたことで、彼女の足が子供の頃からなのだろうと推量することになる。チェン・ユーシュンの演出には、そういう味な部分がある。

リーファに見てもらうため、TVののど自慢番組に出演しようと思い立ったアシェンは、パン屋のビルの屋上につくられた（という設定らしい）、これも叔母が経営するアパートの隣室の、ミュージシャン志望のシュウ（マ・シェンシェン）に、歌のレッスンを頼む。もともと稼ぎのないシュウは、アシェンが持ち帰る売れ残りのパンを、当然のごとくあてにして、「クリームパンばかりかよ」と文句を言ったりしている。それに牛乳をつけ、さらにビールとつまみでレッスン三時間という交渉が成立。「超過一時間につきビール一本だぞ」とシュウ。登場人物のやりとりの、リアルで軽妙な可笑しさに、チェン・ユーシュン脚本・演出ならではの楽しさがある。

そのシュウが突然帰郷すると言い出す。父親の具合が悪いので、家業の水道屋を継がねばならないのだ。発つのはアシェンがTVに

Digitized by Google

出る金曜の晩だという。キャメラが向いのビルから切り返すと、新しいマンション立ち並ぶ中で、ひときわ古くて低いビルの屋上に並んで腰かけたアシェンとシュウの小さな姿。悪口友達の寡黙な情感がたまらない。

店へ来たリーファに、思いきって恋文を渡そうとするアシェン。後を追って表へ出たものの、駆け寄る度胸はない。肥ったアシェンの姿はこっけいだが、恋文を手にしたままの後姿の半身越しに、暮れ行く街へ少し足を引きずりながら歩み去るリーファをとらえたショットで、切なさがツンと来る。青年の顔ではなくて心が見る側に伝わるからだ。そして、アシェンの手から恋文を引ったくり（このショットだけ、編中唯一の目立たぬスローモーションなのが心にくい）、リーファに渡してくれるのは、いつも店でアシェンの歌声に閉口しているアルバイト？の少年なのである。

第二話は、タイピストのリリー（リャオ・ホェイチェン）のエピソード。同じアパート仲間の、アシェンのパンのにおいで現れるでぶちゃんである。彼女が雨の日に拾ったポケベルの番号に電話すると、「世界には五十億の人がいる。だから僕が君を知らなくても、電話をくれたのは何かの縁だと思う」てなキザな低音の留守番メッセージが流れる。持主がいきなり電話に出るのが、停電の夜という演出の妙。有頂天のリリーは減量大作戦を開始する。そんな彼女の脇に、Ich liebe Dich と記した特大のハート型クッションが置かれているのもいい。

ブラインド・デートの当日、動物園の象の前で待ち合わせるサングラスのリリー、同じ赤い風船を手に人待ち顔の好青年にドキッとなり、風船で顔を隠す。リリーのミタメで、画面が赤一色になる可笑しさいじらしさ。

第三話は、オープニングと第一話で姿を見せた、痴漢撃退グッズのセールスマンにしては押しが足りないアスン（シー・イーナン）のエピソード。豪華ビルの中の、リーファが経営する美容院を訪れたアスンが、セールスのきっかけを掴むためにヘアカットをしてもらっている途中で、女性客の一人がリーファに飛びかかる。彼女が夫と不倫しているというのだ。この修羅場を抑えるため、アスンの商品見本が咄嗟（とっさ）の役に立つ。

ビルの屋上で泣いていたリーファは、気をとり直し、その場でアスンの髪を仕上げる。代金はいらないというリーファのために、アスンは片隅に積まれたカラーパネルを並べ、屋上に巨大なバースデーケーキ模様をつくって見せる。「今日は僕の誕生日なんです！」

金曜の晩リーファは、アシェンの手紙にあったのど自慢を見るべく、急いでマンションへ帰り、TVを入れる。ふと見ると、机の上には「しばらく会わないことにしよう……」という手紙と、合鍵、そしていつもは彼のために買っていたレモンパイの、丸ごとの箱が置かれていた（この男を一切見せないのは、話がナマぐさくなるのを回避し、抽象化、普遍化するためだろう）。その手紙に涙を流すリーファは、画面のアシェンの歌の、あまりに思い入れたっぷりの下手さかげんに、しゃくりあげながら笑ってしまう。

そのあと、ハンバーガー屋でのリリーのエピソードと、新しいケーキ〝透明人間〟をつくったアシェンの姿。映画は終わるが、彼等の人生はまだまだ続く――。

ついストーリーを追ってしまったのは、そもそもがディテールの魅力で成立しているからだ。映画館で見たあと、ビデオが出たら、それを見ながら、この場面いいねえ、ここはこんな〝含み〟があるんじゃないかなあ、などと語り合いたくなる作品なのである。

気弱で善良な若者たちのリアルな存在

〝細部に神を宿らせる〟チェン・ユーシュンの資質は、すでに「熱帯魚」が証明している。誘拐という、現代の台湾の生々しい犯罪が、元警官の主犯の事故死という、予想もつかぬハズし方から話が転がり始める。とり残された根はお人よしの子分が、困ったあげく、誘

Digitized by Google

拐した二人の男の子を、郷里である中西部の、東石漁港あたりの村へ連れ帰る。彼の家族も、水門の故障のせいだという床上浸水の家で夕食をしているときは、ブラックユーモア的ムードなのだが、彼等が次第に明るく親切になるにつれて、水も引いてゆく。

終盤は、巻きぞえ誘拐された勉強ぎらいの中学生が〝あの子を高校統一入試に間に合わせて！〟というテレビのキャンペーンにふり廻される皮肉な光景だが、大騒ぎの入試の結果は描かれない。作者にとっても観客にとっても、それはどうでもいいことだからだ。

さりげなく描かれているのに心に残るのは、たとえばこういうくだりである。誘拐犯が最初の目標として捕らえた生意気なメガネの男の子は、家は金持だが後妻の連れ子で、その母も死に、義父に憎まれていたことがわかってくる。口をガムテープでふさいで転がされていてもベソをかく様子もなく、無表情に落着いているのは、もともと邪慳な扱いになれっこだからか、と納得できるのだ。

台北へ連れ戻される中学生に熱帯魚をあつらえた、誘拐犯一家の〝暗い〟少女は、高校を中退させられて勤めた高尾の工場で、好きになった男とその友達に犯されたことが、手紙のナレーションで簡潔に語られる。

「ラブゴーゴー」のアシェンも、中学二年のとき両親を交通事故で失い、ブランコの夜以来姿を消したリーファが〝透明人間〟となってつきそっていてくれるという空想が、心の支えだった。美しいリーファがまだ独身で、妻ある男と逢瀬を重ねていたのは、足の劣等感がからんでいたのかも。そして、あのチューインガム男（ホアン・ツシャオ）……。

そうした要素を正面きって描けば、エドワード・ヤンの「カップルズ」、ツァイ・ミンリャンの「河」等々になる。そんな風に、台北の若者の心の闇を描き（国際空港のある都会の汚れ方は、ふしぎに共通している）、〝リアルな衝撃〟を与えることの方が、今はむしろ容易で、現代的と評価されるのではなかろうか。気弱で善良で、はかない空想に生きる若者もまた、リアルな存在に違いないのに。

キャンペーンで名古屋へ来たチェン・ユーシュンに、少しインタビューできた。

——あなたの作品には、肥った人がよく出てきますね。「ぼくが肥ってるからです」

——ケーキに始まり、ケーキに終わる映画ですね。「ぼくがケーキを好きだからです」

——第三話の屋上で、泣いているリーファを慰めようがなくて途方に暮れたアスンが、なんとか喜んでくれないかと、ひっかかっていた凧を持って走るシーン、よかったです。

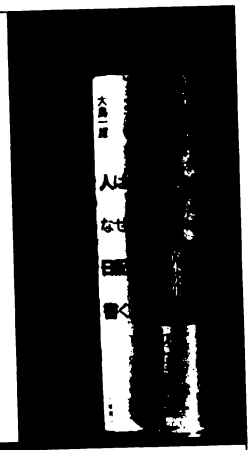
「ぼく自身、ああいう性格だから……」

——第二話で、リリーが風船で顔を隠すと、画面が赤一色になるシーン、大好きです。

「あれを思いついたとき嬉しくて、早く撮りたくてたまりませんでした」

タイトルバックがアイリス・イン風になるのも、全く意識していなかったという。こういう監督の方が、自作を滔滔と、観客が画面から汲みとれないことまで弁じ立てるタイプの監督よりも、えてして作家性が豊かなものだ。

平凡を新鮮に描く非凡。だれの想いも叶わぬのに、人の世も捨てたものではないなせるあたたかさ。次回作が待ち遠しい。



絶賛発売中

ヘンリー・ジェイムズ　青木次生

12月に公開される『鳩の翼』の原作者ヘンリー・ジェイムズは国際的な文学の先駆であり、『ある貴婦人の肖像』など名作も多い。『鳩の翼』の名訳で知られるジェイムズ研究の第一人者による論集。A5上製3000円

人はなぜ日記を書くか　大島一雄

カフカやアナイス・ニン、一葉や啄木が書いた日記は作品と同等かそれ以上の価値をもつ。あらゆる角度から〈日記〉を検証しつつ、フィクションのなかの日記、映画における日記をも考察する日記論。四六上製2400円

淀川長治集成

全4冊　戦前から現在にいたる淀川氏の批評のすべて。各2200円

芳賀書店 haga shoten

東京都千代田区神田神保町2-7☎(3263)1956

Digitized by Google

陳玉勲（チェン・ユーシュン）監督インタビュー

まだ若くて未熟な台湾は、無軌道だけど生命力がある

インタビュアー・大和晶

どんな人間でもヒーローやヒロインになれることを示したい

「僕はよくパンを買いに行く。パン屋はセブンイレブンと同じで、いろんな人がやって来ては、思い思いのパンを買って――パンが主食の人もいれば、おやつに食べる人もいるだろう――帰って行く。それを見て、その一人一人にそれぞれのストーリーがあってもいいんじゃないかと思ったんです」

と、監督チェン・ユーシュンが語る彼の劇場用映画二作目「ラブゴーゴー」は、その言葉通り、台北の街中にあるごくありふれたパン屋を中心にした恋の群像ドラマである。

メインとなる登場人物は四人。パン職人のアシェンに、彼の初恋の相手でパン屋の常連客のリーファ、アシェンと同じアパートに住むおデブの夢見る乙女リリー、それに気の弱い痴漢撃退グッズのセールスマン、アスンである。映画は、四人の心を焦がす四通りの恋の行方を、オムニバス形式で綴っていく。始まりはアシェン。彼が、ケーキを入れたガラスケースの陰からそっと見つめる、毎日レモンパイを買っていく女性客は、アシェンが小学生の頃ほのかな恋心を抱き、でもその思いを告げる間もなく、ある日転校して行ってしまった少女リーファだったのである。アシェンは、彼に気づかぬリーファに宛て、決して投函されることのないラブレターを、毎日せっせとしたためる。

「アシェンにとっては、彼女に手紙を書くその行為自体が、心の慰めなんです。言い換えれば、孤独解消の一手段。アシェンに限らず現代人は、多かれ少なかれ寂しさを抱えて生きていると思うしね」

一方リリーは、偶然拾ったポケベルの持ち主に、好奇心にかられて電話して、その留守電メッセージの声にすっかり心奪われてしまう。その声聞きたさに何度もダイヤルを回し、ついに声の主と直接コール。デートの約束までしてしまうが……。

「僕が思うに、リリーは、口で言うほどには恋愛経験の多くない、まだまだウブな女の子、そういう娘は、恋に恋するところがあって、恋心がどんどんロマンティックに膨らんでいく。でも、何度か裏切られたり挫折したりするうちに、恋愛の何たるかを知っていく。それが人間の成長の一過程だと思うんです」

事実ダイエットしてまで（失敗して逆に二キロ太ってしまうところがカワイイ）デートに臨んだリリーは、ひと目で、ポケベルの主が〝待ち望んだ白馬の王子〟ではないことを悟り、彼女の膨らみきった恋心は、風船のようにはじけ飛んでしまうのである。

ところで、若くして美容院を経営するリーファは、レモンパイが好物の既婚者と不倫の仲。その彼の本妻が、いきなり美容院に踏み込んで来て、リーファは居たたまれずに屋上へと逃げ出してしまう。その後を追うのが、パン屋に入れば痴漢撃退グッズを売り込む代りに大量のパンを買い、美容院に行けば、品物の入ったアタッシュケースを置いたまま洗髪台に座ってしまう、どうにも押しのきかないセールスマン、アスンである。

「僕の映画のキャラクターは、自分の周囲の人たちがモデルだったりする。その彼らは、決してスーパーマンでもなければ超美人でもない。サエない男だったりおデブちゃんだったり極端に気が小さかったり、皆何らかの欠点を持っているんです。大体、世の中に、完璧な人間なんていやしないと思う。だから、容姿も良く仕事も一応成功しているリーファを〝片足が不自由で少々引きずって歩く〟という設定にしたわけ。健康で能力もあってじゃあまりにも型にはまりすぎているからね。それに僕は、どんな人間だって、どんな人生を歩んでいようが、誰もがヒーローやヒロインになれるんだということを、はっきり示したかったんです」

なるほど、だからこそ歌が〝下手の横好き〟のアシェンだって、リーファへの想いに奮い立ち、テレビの人気歌番組のコンテストに出場。マイクの前で歌い〝ヒーロー〟になれたのだ。とはいえ、彼の音痴ぶりは、ちょっと度を超しすぎていると思えなくもないが……。

「本当は、アシェンを演じたチェン・ジンシ

陳玉勲／1962年、台北生まれ。淡江大学卒業後、王小棠監督の民心工作室に入り映像メディアを学ぶ。90年からテレビドラマのシナリオや演出を手がけ、95年「軟骨魚」で長編劇映画を初監督。同作はロカルノ映画祭ブルーレパード賞、国際批評家賞、金馬奨最優秀オリジナル脚本賞ほかを受賞し、世界各国で注目を集めた。「ラブゴーゴー」は金馬奨最優秀助演男優賞（陳俊輝）・助演女優賞（李琪珍）を受賞している。

Digitized by Google

ンは、演技も上手いし、歌だって練習すればアッという間に上達してしまう人。そこで、彼が一度も歌ったことのない曲を持ってきてリハーサルなしで歌わせた。これが効果覿面だったというわけです」

いずれにせよ、そのド下手なアシェンの歌声は、恋人が去ってしまった空虚な部屋で独り泣き崩れるリーファをなぐさめ、笑いを喚起し、同時に観客の胸に、何とも言えない暖かな情感を残してくれたのである。

毎日目の当りにしている世の中の悪は映画の中でまで描きたくない

それにしても、「ラブゴーゴー」ほど元気溌剌な映画は稀にもかかわらず、よくよく見れば、誰もハッピーエンドを迎えられない。どうしてだろう。

「言ってみれば、これは〝面白おかしい悲劇〟ってこと。僕は、人間は善である、と信じてはいるけれど、現実社会に対しては、かなりの悲観論者。全く期待していないんです。だから、面白おかしくはあるけれど、どの恋も成就しない。皆が悲しい結末を迎えるわけです」

それでも、観終った後に、得も言われぬ爽快感を覚えるのは、皆が皆、いつまでもメソメソしていないから。例えば、ポケベルの君に失恋し、ハンバーガーショップでヤケ食いするリリーが、目の前のテーブルに置き忘れられた携帯電話に気付き、目を輝かして手を伸ばすように、逞しく次なるハードルへと向っていくからである。

「それは、現在の台湾社会のあり様と関係しているかもしれない。僕は悲観主義だけど、僕に限らず今の台湾に住んでいて、毎日毎日腐敗した政治、腐敗した政治家を目の当たりにし、犯罪事件に接していたら、楽観的になれるわけがない。でもその反面、台湾では、まさかと思うような奇妙なことが起こり得る。その奇妙さ、荒唐無稽さが、元気を失わない、いつも元気でいられる一要因だと僕は思いますね。

もう一つは、台湾は、人間でたとえるなら〝若者〟。ヨーロッパは〝老人〟で日本は〝中年〟ってとこかな。で、まだ若くて未熟だから、台湾のやることは無原則で無軌道でトラブル続きだけど、その分生命力がある。ある意味では〝希望がある〟と言えるんじゃないかな」

とにかく、

「世の中の悪には、もう現実レベルでうんざりしているから、映画の中でまで描きたくないんです」

と語るユーシュン監督。そんな彼が紡ぎ出す映画の世界は、アシェンがリーファを想って作るレモンパイのように甘ずっぱく、チョコレートケーキのようにホロ苦く、だが、ダイエットして二キロ太るリリーのようにエネルギッシュでアイロニーすら清々しい、活力満々の〝元気ワールド〟なのである。

撮影／吉岡誠

Digitized by Google

特集

日本映画開放を迎えた韓国はいま

深ク静カニ潜航スル日本映画（イルボンヨンファ）韓国ニテ浮上開始ス

●門間貴志

「HANA-BI」が公開第1号

今年の10月20日、韓国政府は日本映画を開放する政策を公式発表した。実に歴史的事件である。かつての植民地支配に対する反発から、韓国では戦後からずっと日本文化が大きく制限され、日本映画の上映も禁じられてきた。しかし開放宣言がなされたこの時期、韓国ではまるで示し合わせたかのように日本映画の上映ラッシュが続いている。この数年、韓国では大小さまざまな映画祭が数多く開かれており、そういう限定的な場での日本映画上映はすでに可能になっていた。これまで〈女性映画祭〉〈人権映画祭〉〈ソウル・ドキュメンタリー映画祭〉〈ソウル独立映画祭〉〈富川（プチョン）ファンタスティック映画祭〉などが日本映画をとり上げてきた。中でも今年で3回目を迎えた〈釜山（プサン）国際映画祭〉での日本映画人気は、日本でも報道されてきたのでご記憶の方も多いだろう。

今回の開放に伴う認可の対象は、世界3大映画祭（ヴェネチア、カンヌ、ベルリン）とアカデミー賞での受賞作品、そして日韓合作映画（韓国人が監督あるいは主演した日本映画など）や日本人の出演する韓国映画に限られている。現在はこの条件に該当する映画が対象となるわけだが、世界3大映画祭で受賞した日本映画といってもそれほど本数があるわけではなく、またその全てがロードショウ公開に適したものとは言い難い（「羅生門」などはアート系のミニシアター単館

Digitized by Google

「HANA-BI」韓国で大きく開け
だけし邦画解禁1号
監督全7作品も一挙に特集上映へ
映画ビデオ出版から
邦画解禁、韓国の熱い視線
息の長い交流を模索

向きといったところだろうが……)。いずれ解禁の枠が拡がるのはそう先のことではないだろう。

10月27日、開放決定を受け、日韓合作映画「愛の黙示録」に輸入許可第1号が下り(この作品はこれまで日本映画として登録されていたためこのような形を取ることになったのだが、本来なら韓国映画としても扱われてしかるべきだったと私は考えている)、現在公開に向けて動いている。また朴哲洙(パク・チョルス)監督が日本人俳優を起用し、全編日本語のセリフで撮り上げた「家族シネマ」も11月28日から全国で公開された(今号「Hot shots」ページ参照)。しかし純粋に日本映画としてロードショウ公開される第1号は北野武監督の「HANA-BI」で、12月5日からソウルのピカデリー劇場ほかで上映されることになっている。韓国の劇場に日本映画の看板(それもペンキ絵の)が掲げられるのは実に53年ぶりのことである。ただ勘違いしてはならないのは、社会主義の崩壊が資本主義の勝利ではなかったように、日本映画の開放は日本文化の勝利ではないということである。

日本映画にとってもチャンス

韓国人がダブル・スタンダードな国民だと言うつもりはサラサラないが、日本文化に関しては本音と建前が見える。もちろん彼らとて日本映画に興味はあるのだが、いざ開放についての世論調査などがあると、つい「反対」や「時期尚早」に丸をつけてしまったりする。少なくとも「積極的に賛成」に丸をつけることには抵抗があるのだ。かつては愛国=反日という極端な時代もあったし、反日がインテリの証しだったこともある。親日派という言葉が売国奴と同義だったこの国では、手放しで日本文化開放に賛成することははばかられてきたのである。しかし、とにかく日本映画は開放されたのだ。大きな前進である。日本人は今回の韓国側の「英断」(これは英断である)を謙虚に受け止めるべきであろう。

少なくとも、日韓合作映画の上映に関して規制がなくなったことは、ある意味で日本映画にとってもチャンスではないかと思う。今年の釜山映画祭の折り、日本・香港・台湾の合作映画の製作発表があったが、韓国が参加できなかったのは残念だった。その時点では完成した作品が韓国で上映できないことがネックになっていたのだ。しかし今後はそのようなこともなくなる。以前、鄭智泳(チョン・ジヨン)監督が「垣根の下の鳳仙花」という従軍慰安婦をテーマにした劇映画を企画していたことがあり、「ホワイト・バッヂ」や「南部軍」など、韓国の現代史に取材した骨太な作品を発表してきた彼だけに、私は期待していた。日本人俳優に出演交渉し契約まで済ませていたのだが、映画自体は実現しなかった。先日、新作の試写会場で彼に会った際、今回の開放を機に再挑戦してみる気持ちはあるのだろうかと問いかけてみた。諦めたつもりはないので考えてみたいとの返事だった。韓国版「春婦伝」として話題作になることは間違いないし、ぜひ撮ってほしいと思う。

アジア映画同士の交流

この11月から12月にかけて韓国で開催された映画祭について少し述べてみよう。常に若者たちで賑わう街、大学路(チハンノ)にある東崇(トンスン)アート・センターでは、11月6日から3週間にわたって〈アジア・アートフィルム・フェスティバル〉が開かれた。韓国映画学会と東亜日報社の共同主催である。開会式では韓国映画人協会の理事長を務める女優の金芝美(キム・ジミ)氏や日本文化院の中根猛氏らがスピーチに立った。開会式に先立つシンポジウムでは、早稲田大学の岩本憲児教授や千葉大学の長谷正人教授がアジア映画について講演を行った。

この映画祭で上映されたのは、中国、台湾、日本の映画のうち3大映画祭でグランプリを受賞した作品で、日本からは「羅生門」「地獄門」「武士道残酷物語」「楢山節考」「うなぎ」「HANA-BI」の計6本が出品された。中国映画は「さらば、わが愛 覇王別姫」と「秋菊の物語」、台湾映画は「ウェディング・バンケット」と「愛情萬歳」の2本ずつなので、日本映画の割合はやや高い。韓国映画はまだ3大映画祭でグランプリを受賞したことがないため、今回は名作とされている中から、尹大龍(ユン・デリョン)監督の「検事と女先生」、金綺泳(キム・ギヨン)監督の「下女」、兪賢穆(ユ・ヒョンモク)監

Digitized by Google

「HANA-BI」

「羅生門」

「愛の黙示録」

「家族シネマ」撮影現場

督の「誤発弾」、金洙容（キム・スヨン）監督の「海辺の村」、そして林権澤（イム・グォンテク）監督の「風の丘を越えて」が上映された。

今回一番人気だった「HANA-BI」の上映をのぞいてみる。450席ほどの会場は満員である。反応はすこぶるよい。上映後、観客の何人かにロビーで感想を尋ねてみた。「日本映画を観たのはこれが初めてだが、とても面白かった。日本文化の開放は色々と問題もあるけれど、基本的にはいいことだと思う。この後『羅生門』も観るつもりだ」と、ある大学生は答えてくれた。日本映画は暴力とセックスに溢れた低俗なものというイメージが韓国にはあるが、実際に日本映画を観てどう思うかといった、いささか乱暴な質問も投げかけてみたが、韓国の映画ファンはそれほどナイーブではない。「HANA-BI」が暴力的な映画だという意見は聞こえなかった。来場していたベテランの映画監督朴商昊（パク・サンホ）氏は「日本映画の開放はむしろ遅すぎた」と語った。

「羅生門」の上映を待つ列にも声をかけてみるが、日本映画を観るのは初めてという人が多く、黒澤明の名前もよく知らないが日本のクラシック映画だという興味で来た人が大多数のようだ。かつて私は、韓国で日本映画開放のコンセンサスを得るなら、小規模でもよいから〈日本映画祭〉のような催しを継続して開くべきではと考えてきた。今回の映画祭はそういう意味では実に有意義な企画だと思う。ただ、開催直前に開放が発表されたのには驚かされたが……。

すでに始まっている開放

映画祭を主催した韓国映画学会の会長で漢陽大学教授の鄭用琢（チョン・ヨンタク）氏に話を伺った。同氏によると、この映画祭は日本映画開放とは関係なく、1年半ほど前から準備されていたとのことである。もちろん学会の中では日本映画開放に反対意見を持つ人がいないわけではないが、今回の映画祭にはアジア映画同士の交流や研究の促進という大きな意義もある。アジア全体をハリウッド映画が支配しているという状況の下、もっと協力し合い互いの作品に接する機会を作りたいというのが開催の趣旨でもある。日本映画の開放が韓国に与える影響については、アニメを別とすれば日本映画が韓国映画に大打撃を与えることはないだろうと同氏はみている。韓国には国産映画の上映日数を定めたスクリーン・クォーター制があり、日本映画は外国映画、特にハリウッドや香港の映画とシェアを取り合うことになる。日本映画もその年によって大作や話題作があったりなかったりもするだろうし、外国映画のうちの約20%ぐらい、韓国全体だと10%ぐらいに落ち着くのではないかと予測してみせた。また同氏は韓国内の輸入業者の競争によって日本映画の値段が極端にはね上がっていることを懸念している。「ブームが裏目に出なければいいのですが」。

同時期、ソウルで日本映画を上映していた映画祭はほかにもある。昨年に第1回目の開催が予定されていたが、政府の介入によって中止に追い込まれた〈ソウル・クィーア映画祭〉が、今年は無事開催にこぎつけた。儒教文化の濃厚な韓国では、同性愛に対する風当たりは厳しい。ディレクターの徐東振（ソ・トンジン）氏によれば、映画祭の経費は全て賛同者たちから寄せられたものだという。まだまだこうした企画をサポートする企業はないらしい。ここでは「大阪ストーリー」の中田統一監督の撮ったビデオ作品「ミノル&ミー」と、橋口亮輔監督の「渚のシンドバット」が上映された。

また日本文化院では〈黒澤明映画祭〉が開催された。こちらはビデオでの上映だが、きちんと製作会社の許諾を得て、地元の日本映画の研究グループが韓国語字幕を作成したというなかなかの催しである。観客の年齢層がやや高めだったのが印象的だった。そのほかにも11月の〈ソウル映画祭〉で「鬼火」や「我に撃つ用意あり」などが、12月の〈第2回富川（チョン）ファンタスティック映画祭〉では大林宣彦監督の作品などが上映される。

いや、こんなことで驚いてはいけなかったのだ。ソウルの大学に行ってみると、ついこの間までキャンパスにあれほど溢れていた学生運動の立て看板はすっかり姿を消し、日本文化研究会や日本映画研究会などといったサークルの看板が幅をきかせて並んでいるではないか。すでに日本映画開放は深く静かに始まっていたのである。この急激な変化に対する反動が少し心配なぐらいである。

Digitized by Google

第3回釜山国際映画祭レポート

●青木眞弥（本誌）

うわさ以上の面白さ

釜山国際映画祭は、第1回が開催された97年からずいぶん話題になっていた。既に11月上旬号の「Hot shots」欄や編集後記で触れたが、その評判に心誘われ、昨年の第2回、そして今年の9月24日から10月1日まで開催された第3回と続けて参加したのだが、うわさ以上の面白さなのである。

何よりもまず、映画を見に来る観客たちの熱狂ぶり。上映のメイン会場となる映画館が釜山の中心街であるナンポドンに集中し、街が映画祭一色という感じになっているのもいい。次から次へと監督への質問の手が挙がるティーチ・イン。それを終えたゲストが映画館を出た途端、何十人、何百人ものファンに取り囲まれるという風景も珍しくない。監督の代わりに上映作品の舞台挨拶に立った助監督も、上映後にサインを求められたというぐらいだ。

もちろん、そこまで盛り上がるには、そもそも韓国の人たちの映画に対して斜に構えず、素直にリアクションするという姿勢もある（これはひょっとしたら、日本以外はどこもそうなのかも知れない）。「生きない」の上映に立ち会った主演のダンカンに言わせると「幾らなんでもちょっと笑い過ぎじゃないかと思うくらい、シーンごとにウケていたよ」というぐらいの楽しみぶりなのである。確かに、満席の会場で一緒になって一喜一憂しながら「HANA-BI」（これは去年の話だが）や「愚か者　傷だらけの天使」を見ていると、改めてこれらの映画の面白さについて気づかせてくれるのである。

だが、何よりも釜山の魅力は、上映作品のラインナップの充実ぶりや、映画ファンと作り手を結びつける様々な企画があるということに尽きる。ナンポドンからは車で40分くらい離れたところにあるが、風光明媚なリゾート海岸であるヘウンデに設置されたもう一つの会場では、5000人は入る野外劇場での上映が連日行われているというのもその一つだ。

そしてこの釜山の上映作品の中でも、とりわけ日本映画に高い人気があるのである。今年も、合作を除いて全部で22本の日本映画が上映された。韓国からの出品数に次ぐ本数である。そのジャンルも、「カンゾー先生」（今村昌平）、「のど自慢」（井筒和幸）、「四月物語」（岩井俊二）、「愚か者　傷だらけの天使」（阪本順治）、「落下する夕方」（合津直枝）、「楽園」（萩生田宏史）といった日本でもまだ公開前となるものも含む最新の劇映画から、「A」（森達也）や「まひるのほし」（佐藤眞）といったドキュメンタリー、「くじらの跳躍」（たむらしげる）などのアニメ、自主製作作品など多彩で、それらが「ウィンドウ・オブ・アジアン・シネマ」「ニュー・カレンツ」（コンペ部門）「ワイド・アングル」「ドキュメンタリー・オブ・アワ・タイムズ」「ウーマン・ディレクター・イン・アジア」など、それぞれの上映部門にまんべんなく案配されて上映された。なお今年は、コンペの審査員として小栗康平監督が、FIPRESCI（国際批評家連盟）賞の審査委員長として佐藤忠男氏がそれぞれ任に

Digitized by Google

当たった。

公式には日本映画はまだ解禁されていなかったとはいえ、NHKの衛星放送は普通に見られるし、漫画や音楽、ファッションなど、日本の情報について知る機会は幾らでもある。「エヴァンゲリオン」についてのホームページが物凄い人気だという話も聞いた。そういった日本の、特にサブカルチャーについての関心には高いものがあり、それらの窓口としての日本映画に対する期待は大きいものがある。

PPPへの期待

今年は映画祭の前半、9月25日から27日にかけて、映画上映と並行して、アジア映画のネットワーク作りを目指す企画発表会とシンポジウムを合わせた、「プサン・プロモーション・プラン」（略称PPP）が、映画祭ゲストも多く滞在する市内のコモド・ホテルを使って開催された。

実は今回は後半からの参加だったので、釜山入りしたのはこのPPPが終了した次の日だった。そのためこれについては多くをレポートすることは出来ないのだが、26ケ国から275名の製作・配給などの映画関係者、放送関係者、マスコミなどが集まった、大規模なものとなり、意見交流の上でも、またビジネスの面でも、多くの収穫が得られたと聞く。それにしても連日朝9時から夜9時まで、びっしり詰まったプログラム。1日2つから3つのパネル・ディスカッションと、新作映画の企画プレゼンテーションが交互に行われるというものだ。

このPPPで紹介された企画はイラン、中国、マレーシア、韓国、フィリピン、日本などアジア各国から全部で16本あり、そのうち、石井聰亙監督の「五条霊戦記」が優れた企画に与えられるイルシン賞を受賞した。

PPPからはアジア映画のネットワークの発信・受信を釜山で行うという意気込みが感じられるが、韓国での日本映画の開放が始まった今（釜山映画祭の時点ではまだ正式には決まっていなかった）、同じく魅力的な映画祭を続けている香港と並んで、釜山がその役割を担うことが現実味を帯びてきたと言えるだろう。残念ながらメジャー会社主導で、インディペンデント作品に対する目配りが及んでいない東京国際映画祭では、その役割を期待されてはいるものの、応えきれていないというのが正直なところだろう。

日本映画の評判

上映作品について話を戻すと、今回いちばんの人気だったのは岩井俊二監督の「四月物語」だった。塚本晋也監督の「バレット・バレエ」と並んで、前売り券がすぐ完売となったらしい。実際「四月物語」は、いちばん観客の人気が高かった作品に与えられるPSB賞（スポンサーである放送局の名前）を受賞した。

他に、コンペ対象作品では、清水浩監督の「生きない」が、「死についての辛辣かつ優しいブラック・コメディ」の面が評価されて、FIPRESCI賞を受賞した。

個人的な感想としては「愚か者　傷だらけの天使」の上映とティーチ・インに立ち会ったのが印象的だった。真木蔵人扮する久のことあるごとの"愚か者"ぶりに、「あんな人物はリアリティがない」という男性の意見が出たかと思えば、「いや、とても共感できた」という女性の反論が起こったり、それに続けて「（あの愚かな主人公は）阪本監督ご自身なのですか」という質問が出たり。すかさず阪本監督は「そうです」と断言して場内を笑わせていた。

これらはいずれもナンポドンにある1500席ほどの劇場を中心に二回ずつ上映されたのだが、井筒和幸監督の「のど自慢」と、今村昌平監督の「カンゾー先生」は、5000席の野外上映会場で上映された。あいにくの小雨にも関わらず満席となった「のど自慢」では上映中に映写トラブルが起こり、修理を待つ間、ゲストとして舞台に立っていた出演者の大友康平、室井滋らが、座をつなげようと日本語で歌を歌い出し、観客もそれに混ざって本当に"のど自慢"大会になったというのはテレビの報道などでご存じの方も多いだろう。もちろんこの時点では、日本語の歌をパブリックな場で歌うことは禁じられていたのに。作品の魅力ということもさることながら、トラブルも逆風にしてしまう、それだけの勢いが

Digitized by Google

映画祭にあったということだろう。

一方「カンゾー先生」の方はクロージング作品として、閉会式の後に上映された。今村昌平監督と、出演者の一人である麻生久美子が舞台挨拶に立ち韓国語で挨拶をすると、場内では大きな拍手が巻き起こった。こうして質量ともに日本映画は、釜山映画祭において大きなウェイトを占めたのである。

釜山映画祭の今後

釜山映画祭に参加して思ったのは、日本映画に対する関心・期待、或いは日本に対する意識は、日本側が考えている以上のものかも知れないということだ。去年も今年もそうだったが、僕のようなマスコミの立場の者も韓国のテレビ局から取材を受け、釜山映画祭の感想を聞かれたりした。その時に決まって聞かれたのは、「日本映画と比べて、韓国映画はどう思うか」ということと、「釜山は東京国際映画祭と比べてどう思うか」ということだった。

韓国映画については、一部のファンや研究者を除き、韓国の一般的な映画ファンが日本映画に寄せる関心ほどは、日本の一般的な映画ファンは持っていないというのが現状だろう。だが、情報の伝達がスピードアップした今日、同じ世代における、流行に対する関心については、日本人も韓国人も、微妙な差異こそあれ共通するものは多くある。韓国での「エヴァンゲリオン」や岩井俊二監督人気などはその典型だろう。だとすれば、韓国で人気のある映画が、日本でウケていくという可能性は大いにある。韓国での日本映画開放と同時に、日本での韓国映画公開について、来年以降、大いに期待されていいと思っている。

また、釜山と東京との映画祭の比較については、同じレヴェルで考えることは出来ないのだが、東京は後発の釜山から学ぶことはたくさんあるのは確かだ。

ただし、今回の釜山映画祭で大いに気になったことがある。それは上映コンディションのひどさだ。「のど自慢」の映写トラブルについては（あってはならないのは当然だが）思わぬ効果となったものの、通常の劇場での上映に関しても、正直言ってスクリーンサイズや音響の面できちんと再現して上映されていなかった。監督やキャメラマンが映写室に駆け込んでもラチがあかないというケースを幾つか耳にし、目にしたものである。

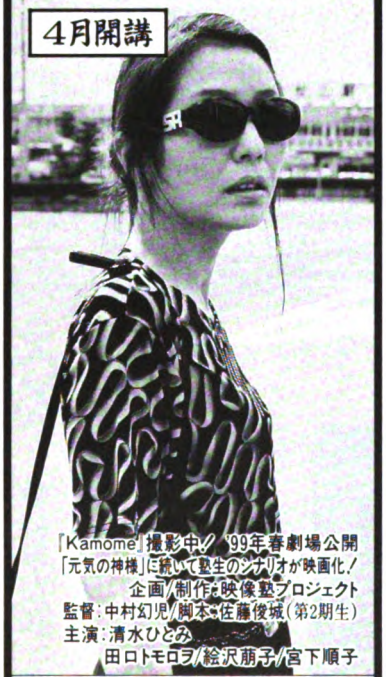
映画祭じたいもこのことは気がついていると思うが、"国際映画祭"と銘打つからには、まず上映コンディションをきちんとしたものにするべく注意していくべきだろう。それが保証されれば、釜山映画祭は、日本と韓国との映画交流という面も含めて今後ますます期待できる映画祭となっていくと思う。

映像塾

《1ヶ年講座》
受講生募集

一流の講師が実践指導の創造塾！

4月開講



『Kamome』撮影中！'99年春劇場公開
「元気の神様」に続いて塾生のシナリオが映画化！
企画/制作：映像塾プロジェクト
監督：中村幻児/脚本：佐藤俊城（第2期生）
主演：清水ひとみ
田口トモロヲ/絵沢萌子/宮下順子

受講申込み受付中！

○映　像　科
○シナリオ科
○俳　優　科

■詳しい案内書（無料）はハガキまたはFAXで（住所、氏名、年齢、職業、電話を明記）ご請求ください。

〒171-0033 東京都豊島区高田3-5-3
第3布施ビル
FAX 03－5391－4335
☎ 03－5391－4330
映像塾 入塾K係

Digitized by Google

ソウルで日韓映画の明日を考える

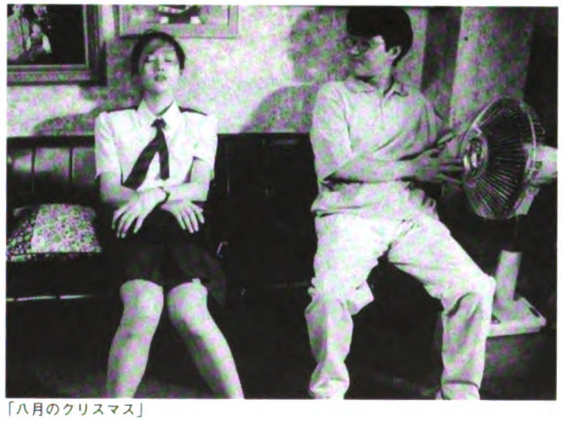
●植草信和（本誌）

最近見た二本の韓国映画

最近二本の風変わりな韓国映画を見た。一本は九月のアジアフォーカス福岡映画祭98で見た「八月のクリスマス」、もう一本は偶然ソウルの映画館で見た「乙女たちの食卓」だ。〝風変わり〟という表現についてはいささかの説明がいる。僕の数少ない韓国映画体験をとうしての韓国映画に対する認識は「感情表現の過剰さ」で、それに共鳴するときもあれば、ついていけないと思うときもある。すべての韓国映画がそのように二極分化されるわけではないが、それは韓国映画を見たときだけに感じる、いわく言いがたい感情だ。

「八月のクリスマス」（ホ・ジノ監督）はソウルの片隅の街角で写真館を営む青年が、不治の病を得て死に至るまでの春夏春冬を淡々と描いた青春映画。韓国で今人気No.1のハン・ソッキョが死を見つめながら、しかし笑みを絶やさずひっそりと生きる青年を好演している。従来の韓国映画ならば、テーマからいって「号泣」と「慨嘆」が横溢するような映画になっていたと思われるが、「八月のクリスマス」にはその片鱗もなく、物語は淡々と展開し、青年に思いを寄せていた少女のような女性が雪景色のなかの主を失ってひっそりとたたずむ写真館を訪れるというシーンで終る。その静謐な語り口が青年の死の悲しみを盛り上げ、深い感動をもたらしてくれる。

もう一本の「乙女たちの食卓」（イム・サンス監督）は、仲良しOL三人組の社会や異性、セックスに対する赤裸々な不平不満、欲求をまるで彼女たちの私生活を覗き見するような視点で描いた女性映画。「シバジ」のカン・スヨン主演で、女優が科白をしゃべるというよりもカン・スヨン自身の私生活を盗み撮りしているようなリアルさがある。セックス描写も過激だが、それを売り物にしているのではなく、乾いていてどこかユーモアが漂う。映画館は平日の昼間の回だというのに若い女性のグループやカップルで賑っており、ヒロインへの共鳴による笑いが溢れていた。僕自身も言葉が分からないので通訳をとうしての鑑賞だったが、韓国映画を見てこんなに笑ったのは初めてのこと。この映画をとうして韓国の若い世代の嗜好を知ることができて、その意味でもおもしろかった。


「八月のクリスマス」

これだけの体験をもってして、韓国映画が変わりつつあるとは言えないが、新しい感覚の映画が作られつつあることを肌で感じることができた。「釜山映画祭」での日本映画にたいする反応は別項のルポを読んでいただきたいが、ここで強調したいのは、「ラブレター」への熱烈な歓迎ぶりだ。ソウルで話した配給業者も監督もプロデューサーも、すべての映画人が「ラブレター」について興味を示していて、日本映画＝「ラブレター」という

「乙女たちの食卓」

일본영화 개방

Digitized by Google

感じなのだ。もちろん、旧世代にとって日本映画といえば黒澤明であり木下恵介だから、そんなところにも世代交代の波を感じる。

歴史的局面を迎えた日韓映画

10月22日、韓国の申楽均（シン・ナクキュン）文化観光相は「韓国での日本映画の一般公開を段階的に解禁する」と発言、「対象作品はカンヌ、ベネチア、ベルリンの三つの映画祭と米アカデミー賞受賞作、それに日韓共同製作の映画」と語った。その後の日本の新聞によれば10月27日、「愛の黙示録」（金洙容　キム・スヨン監督）と「HANA-BI」（北野武監督）が日本映画初登場の第一号に決定したという。

いうまでもなく前者は、日本の占領下にあった朝鮮・木浦でキリスト教の伝道師に嫁いだ実在の日本人女性田内千鶴子の半生を描いた女性映画。彼女は孤児たちのために共生園という孤児院を韓国人の夫と共に作り、夫が行方不明になった後も孤軍奮闘して第二次世界大戦や朝鮮戦争時も運営し、亡くなるまで三千人もの孤児を育て上げたというすばらしい足跡をしるした、韓国人にもっとも愛された日本人女性だ。その田内さんの生涯を描くべく、石田えり主演、中島丈博脚本、鄭一成撮影、金洙容監督の日韓混成チームが挑み作り上げた初の日韓合作映画が「愛の黙示録」だ。テーマ、完成度からいって文化交流の第一号にふさわしい映画ということができるだろう。

その金監督と鄭カメラマンは再びコンビを組んで「沈香」という新作に取り組んでいたが撮影を中断して滞在中のホテルを訪ねてくれた。「沈香」については全貌が分かり次第ご報告したいが、金監督に今回の日本文化の開放について聞いてみた。

金洙容監督

金洙容「僕は日本映画が好きで戦後のキネマ旬報をずっと読んできて、日本の映画事情と韓国の映画事情を他の人よりは少しは知っているつもりです。実は11月18日、『愛の黙示録』が日本映画第一号として〝等級賦興最終審議〟を通過したと、韓国公演芸術振興協議会が知らせてきました。95年末に映画が完成して3年間、待ちに待った快報です。私は何度も何度も『愛の黙示録』の韓国上映を政府側に嘆願しました。特に韓国国籍を持つ監督の映画までが上映禁止になる法的根拠に対して厳しく問い詰めました。そういうとき日本文化開放が政治的に解禁されて、この映画を作った人間としてホッといたしました。

私は政治・経済より文化芸術が、両国の苦しかった歴史を清算しよりよい隣国として親善を促すもの信じています。ただ『愛の黙示録』の製作母体がアマチュアなのでせっかく第一号と認定されても興行的に成功させられるかどうか、非常に不安です。しかし貴重なチャンスですから努力して成功させ、韓国と日本の映画の架け橋になりたいと思っています。ソウルの映画館街では昨日から『影武者』のポスターが貼られ始めました。もちろん上映許可を求めるデモンストレーションですが、韓国の若者たちはあまり興味を持っていないようです。彼らは半世紀以上もハリウッドの大作主義に洗脳され続けた結果そういった映画にしか興味をもてなくなってしまったのです。だから、ちゃんとした日本映画を見せ、その魅力を勉強させるところから始めないと、映画の文化交流は長く続かないと思います」

金監督によれば、日本の新聞報道は性急にいろいろ書き立てるが、今現在「愛の黙示録」以外の作品はまだ未定のようだ（11月20日現在）。最後に韓国の映画人の代表として〝映画振興公社〟社長の尹一峰（ユン・イルボン）の意見を紹介しよう。

尹一峰「衛星放送その他の通信の発達、それによる公式・非公式の交流の状況を考えれば、日本文化の開放の機は充分熟していると見るのは常識だろう。問題はその方法論だ。利潤追求の興行者の意見を優先させれば、単なるブームとして一過性で終わってしまうのは目に見えている。絶対そうさせないためにはどうすべきかの議論を今我々は積み重ねている。いちばん大切なことは日本映画の歴史を学び、一般大衆にその魅力を知らしめる努力をすることだ」

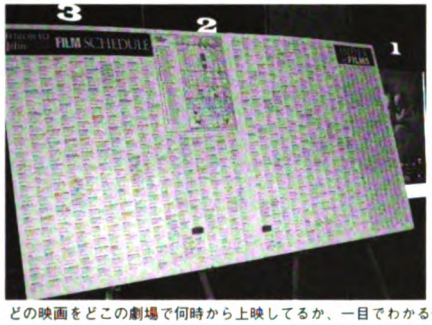
そのほか、朴哲洙（パク・チョルス）監督による柳美里（ユウ・ミリ）の芥川賞受賞作「家族シネマ」の公開、「プサン・プロモーション・プラン」（PPP）の発足など、注目すべき事がらが動き出している。新しい日韓映画の交流の歴史が始まろうとしているのだ。

Digitized by Google

第23回 トロント国際映画祭レポート

nineteen ninety eight TORONTO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

総括 **河原畑寧**



どの映画をどこの劇場で何時から上映してるか、一目でわかる表

独自の視点で編成された豊かなプログラム

トロント国際映画祭は、一九九八年で二十三回を迎えた。九月第一週の月曜日にモントリオール世界映画祭が終わると、その三日後の木曜に始まって次の週の土曜まで十日間がトロントの開催時期。前半分がヴェネチア国際映画祭と重なる。ヴェネチアと比べると、コンペがなく歴史も浅いトロントだが、特にアメリカでは急速に評判が高まっている。

カナダはアメリカ映画のドメスティック・マーケットである。映画館に掛かっている映画は、アメリカのそれと変わらない。そこで、商業配給網に掛からないけれども、第一線を行く最新の映画を広く世界から集めて地元の人たちに紹介する目的で始まった。世界の有名映画祭で評判になった映画を集めて上映する《フェスティヴァル・オブ・フェスティヴァルズ》を、四年前にトロント国際映画祭と改称したのは、独自の視点でプログラム編成するのだという積極的な意思の表明にほかならぬ。

今年の上映作品は五十三か国から長短編三百十一本。上映はアプタウン、ヴァーシティ、カンバランドという三つのシネ・コンプレックスを中心に、二つの大劇場での夜のガラ上映もあって、計十五スクリーン、朝九時から真夜中まで、びっちり組まれている。観客動員は二十五万人というから、世界でもトップクラスの大型映画祭である。

上映プログラムは、メインストリームの大作、話題作を見せるガラ、芸術性の高い有名監督作を並べたマスターズとスペシャル、世界の第一線監督を特集するコンテンポラリー・ワールド・シネマ、地元カナダ映画の新作を揃えたパースペクティヴ・カナダ、新人第一作のディスカヴァリー、ドキュメンタリーのリール・トゥー・リールなどに分かれている。ナショナル・シネマ、ある一国の映画にスポットを当てる部門は、今年《ニュー・ビート・オブ・ジャパン》という題名で最新日本映画の特集だった。

ビジネスの場としても期待されるT・I・F・F・（トロント国際映画祭）

「日本映画のルネッサンス」というキャッチフレーズで、選ばれたのは「ワンダフルライフ」「バレット・バレエ」「アンラッキー・モンキー」「鮫肌男と桃尻女」「卓球温泉」「ビューティフル・サンデー」「サンデー・ドライブ」「夏時間の大人たち」「裸足のピクニック」「鬼畜大宴会」「女刑事RIKO」「楽園」「CURE」「愚か者・傷だらけの天使」「ラヂオの時間」「筋肉インフルエンザ」「四月物語」「生きない」の十八本。特別参加が深作欣二監督のクラシック「仁義なき戦い」。是枝裕和、塚本晋也、黒澤清、井坂聡、山川元、中島哲也、石井克人、三谷幸喜ら監督たちも大挙出席した。

この日本特集のプログラマーは、ノア・カウアン。何年か前に、ゆうばりファンタスティック映画祭の審査員で日本に来たことがあるが、筆者とはカンヌでの古い顔なじみ。前年までミドナイト・マドネスというホラー特集のプログラマーとして有名なシネフィルだが、こっちは今年からコリン・ゲッデスが新しく担当している。

トロントの疎漏の少ない作品選択は、この人材豊富なプログラマーに依る所が大きい。映画祭ディレクターのピアース・ハンドリングからしてプログラマー出身で、ケイ・アーミテージ、

Digitized by Google

日本映画のルネッサンスとして紹介された
《ニュー・ビート・オブ・ジャパン》のちらし

映画祭エントリー作品の冒頭には、この彫刻が完成するまでのショート・フィルムが上映された

ディミトリ・エピデス、デイヴィッド・オーヴァービー、ジェームズ・クワントら、国際映画祭を股にかけて動いている専門家が、手分けして全世界から作品を探してくる。英語圏だから、英語の字幕スーパー付きプリントで用が足りる。日本語字幕作りに追われる東京国際映画祭の苦労とは無縁である。

もっぱら一般観客を相手に工夫を凝らし、地道に成長してきたトロントだが、ここ数年、業者や批評家、ジャーナリストから、不満の声が出ていた。上映に駆けつけても、チケットは売り切れ入場できなかったというのだ。買い手に作品を見せようと招待したが満員で断られたプロデューサー連からも文句が出た。もはや一般観客相手の催しに留まらず、映画業界のイヴェントとしても重要な位置を占めるに至ったということである。

その対応策として映画祭当局は、プレス／業界人向け試写（チケットなし、パスで入場できる）を大幅に増やした。今年などはプレス／業界人試写だけを追いかけていれば、重要な作品を見落とさずに済むようにスケジュールが組まれていた。試写といっても映画館で、大きなスクリーンで見るのだから有り難い。映画を見るだけなら、イタリア語字幕のヴェネチアよりトロントの方が、間違いなく気楽だと思う。

コンペがないから、同時期に開催されるヴェネチアやモントリオールの出品作をいちはやく上映できる。年初めのサンダンス映画祭以降のインデペンデント作品をチェックするチャンスでもある。ニューヨーク、シカゴの有名批評家が参加するのも、アメリカでの公開を狙う製作者、配給業者にとって無視できない要素だ。看板こそ出していないが、実質的にはマーケットの機能を果たしているから、ビジネスの場として今後ますます発展するに違いない。

NYタイムスに載ったトロント国際映画祭の記事

まだ残券がある上映の告知一覧表

Digitized by Google

第23回 トロント国際映画祭レポート

nineteen ninety eight TORONTO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

左から、石井克人監督、山川元監督、三谷幸喜監督、井坂聡監督、中島哲也監督、黒沢清監督、前列左からノア・カウアン（日本特集のプログラマー）、是枝裕和監督

ニュー・ビート・オブ・ジャパン参加作品のポスター

ニュー・ビート・オブ・ジャパンinトロント国際映画祭

編集部

今年のトロント国際映画祭ナショナル・シネマ部門に取り上げられたのは、日本映画。「日本は安全」というのがここ数年来の評価だったが、地下鉄サリン、中学生による無差別殺人などの事件によって、いまや日本の危険度ランクはアップ。ただ幸か不幸か、このことは国外にあまり知られていないようだ。ニュー・ビート・オブ・ジャパンのラインナップを鑑賞したカナダの評論家が、〝日本を安全な国だと思っていたら、実は……〟などという見出しをつけているくらい。

さて、その日本映画特集。結果から言えば、大変好評だった。多くのチケットがソールドアウトとなり、上映後に、質疑応答時間があることが特に告知されているわけでもないのに、多くの観客が、その映画の作り手と話すことを楽しみに劇場に残った。映画祭が発売するパンフレットやウィークリーのeyeというフリーペーパーぐらいしか告知がない中（地元紙や地元テレビ局でも前日に告知されていたが）、300本以上の上映作品から、いったいどうやってその映画の存在を見つけだしたのかと思うと不思議でしかたない。

上映を順番に覗いてみた。

山川元監督「卓球温泉」。たぶん「Shall we ダンス？」の時もそうだったのではないかと思われる激しい笑いの中で、映画は終了した。前列に陣取ったおばさんは、トートバックの中に直接いれたポップコーンを食べながら鑑賞。松坂慶子が夫とラリーをやり遂げた場面では、興奮のあまり周りの人に、頭からポップコーンを注いでいた。山川監督は「CMの撮影で訪れたカナダで妻と出会い、初めての国際映画祭参加もこのカナダ。縁を感じます」と挨拶。隣に通訳のごとく寄り添っていた女性を妻として紹介して、会場を沸かせた。なんとも日本人らしからぬスマートな一幕。

夜、塚本晋也監督「バレット・バレエ」。劇場のアップタウン・シアターに近づくと、長蛇の列。チケットを購入できず、窓口では取材の承諾をもらえなかったため、関係者の方に頼み込んで無理やり入場させてもらう。映画が始まると、まるでライブハウスのごとくリズムを取り始める観客たち。バイオレント（そうだろうか？）なために、海外での公開が難しい塚本作品ではあるが、タランティーノを始めとする、根強いビデオでのファンを持つ。そのファンたちが、映画祭ならではのスクリーン上映に待ち兼ねたかのような反応を見せたというわけだ。

翌日、是枝裕和監督「ワンダフルライフ」。海外タイトルは"After Life"。「幻の光」に続き、人の死をテーマにした作品だ。早朝の上映にも関わらず、場内は満席。見終えたあと、老婦人二人組みが、私の隣に座っていた友人の手を取り、「あなたは日本人なの？　日本語がわかって羨ましいわ。だってこの映画をより深く見ることができるじゃない」と興奮気味に語った。幸せな時間を共有した。

夜、中島哲也監督「Beautiful Sunday」。上映後の質疑応答には、映画の持つ静けさとは反対に、熱狂的に中島監督が迎えられた。「2作目なのにどうしてこんなに完璧なのか？」という質問に、監督は「デビューの時からうまかったんです。明日、その映画を見ていただければ、

Digitized by Google

それを証明できるでしょう」と答え、会場を沸かせた。続く『ミステリー・トレイン』の永瀬正敏さんを起用したのは？」の質問には、「日本の同世代の俳優さんの中で、永瀬さんはうまくて、頭が良く、勇気のある人だから」と答え、ジム・ジャームッシュのファンであるらしい質問者を満足げに頷かせていた。

翌朝、岩井俊二監督「四月物語」。なぜかアジア系観客が目立った。ゲストがないこともあって質疑応答はなく、残念ながら観客の感想を聞く機会も得られなかった（ちなみに岩井監督が来韓したプサン国際映画祭では、熱狂的なファンが大挙して押しかけ、圧倒的な人気を誇っていた）。

夜、三谷幸喜監督「ラヂオの時間」。間断なく笑いが続き、おかしい場面ではさらに笑いが大きくなる。日本人が受けるところはもちろん、シリアスになる場面もシニカルに笑い飛ばす。引き付けを起こしたかのように笑う老人を、私は死んでしまうのではないかと本気で心配した。ラスト（この映画は、クレジットの脇に、その人物が登場するワンシーンの画が添えられている）のクレジットの場面では、井上順さん、藤村俊二さんの二人に特別な拍手が贈られていた（もちろん全ての登場人物にも）。「こういうエピソードはどうやって考えるのか？」という質問に、「全部、実体験です」と真顔で答え、場内をシニカルな笑いで包んでいた。ここでは、特に請われてニューヨークからやってきた、通訳のリンダ・ホーグランドさんの活躍が際立った。国際映画祭において重要なのは、クオリティの高い字幕と、柔軟に微妙なニュアンスまで伝えてくれる通訳さんの存在だ。いくら映画が良く出来ていても、それが正確に伝わらなければ意味がない。

翌日、井坂聡監督「女刑事RIKO」。強い女性に共感が寄せられるここ北米。この映画も新聞に大きく写真が載ったことなどもあって、ソールドアウト&多くの女性観客を集めていた。「これは本当の話なのか？」と訊かれ、「違う。原作は、製作元の出版社が出している小説だ」などと英語で答えていた井坂監督。「この映画はそんなに低予算なのか！　なぜそんなに製作費をかけないのだ？」と尋ねる観客に、「（製作費を）回収できないから」と一言。活況を呈す日本映画の殆どが、安い製作費から生み出されることに、観客は皆、驚き、呆然としていた。

残念ながら4日間という短い滞在。これ以上、上映を追えなかった。トロントのある放送局から、「なぜ今日本映画はこんなに盛り上がっているのか？」という質問を受けた。即答は出来なかったし、答えも一つには絞れなかった。必然にかられて製作費を集め、映画を撮る。多分、そんな形で作られるインディペンデント作品が、日本映画の主流になっているからではないか、と思う。インディペンデントが主流、というのもおかしな話ではあるが、「いずれ、日本に取材に行くつもりです」と言う、その記者の気持ちを萎えさせないよう、今の主流の映画を見守り、応援していきたい。

New Beat Posters

国際映画祭においてなくてはならない存在の国際交流基金。ニュープリント現像に、字幕制作、フィルムの運搬、監督の招聘、告知。映画祭に参加すると一口に言うが、それにはかなりの資金が必要となる。そんな時、物理的、具体的にサポートしてくれるのが国際交流基金。そのトロント出張事務所であるトロント日本文化センターが、ニュー・ビート・オブ・ジャパンの開催を祝し、映画祭との共催企画「日本映画ポスター展を開催した。同特集参加作品のポスターは勿論、トロント映画祭傘下のフィルム・ライブラリーが所蔵する9000点以上の中からも、選りすぐりのポスターが展示された。開催直前に黒澤明監督が亡くなられたこともあり、追悼の意を込めて、急遽、黒澤作品の特別コーナーも設けられた。

トロント文化センターが制作したポスター展の広告

第23回トロント映画祭を沸かせたスターたち

ゲスト一番人気は、「メリーに首ったけ」でマネーメイキング・スターになったキャメロン・ディアス。その他、"Without Limits"をプロデュースしたトム・クルーズ、アイルランドの田舎に住むユニークな家族のヒューマンドラマ"Dancing at Lughnasa"のメリル・ストリープ、「アンツ」の声優組も人気だった。

本当にバッドな映画"Very Bad things"で共演したキャメロン・ディアスとクリスチャン・スレーター。質問はディアスに集中。

「いままでと違う映画に出てみたかった」と、ジョン・ウォーターズと組んだエドワード・ファーロング。グッド・チョイス！"Pecker"

Digitized by Google

関西映画界いまむかし㉜

大鋸厚生（読売）

浅野潜

旧ソ連時代、世界の注目を集めたルイセンコの学説では、人間は遺伝子ではなく環境によって性格が形成されていくと主張された。

DNAの存在が明確に証明されてしまった現代では、とても認められない学説なのだが、旧共産党政権、とくにスターリン時代には、既成の学界でのメンデルを否定することに主眼がおかれたせいもあって、新しい生物学界の定説になりかかった時期さえあったし、現に日本でも高校生を中心に若い生物教師などが熱心に教えたものだった。

大鋸厚生を見ていて、なんとなくルイセンコ学説を思い出したのは不思議ではない。

なにしろ漢籍の素養は大したものだし、第一、素晴らしい達筆である。誰かの会があって揮毫帳が回されてくると、なんのためらいもなく大鋸は筆を取りサラサラと名筆をふるった。

その名文句は、まさに会の主賓にぴったりで並んだ多くのサインの中では、ひときわ目立っていた。

父親は戦後の関西の演劇評論で三人の名筆とうたわれた大鋸時生氏。朝日の北岸、毎日の山口と並び、長い間評論を競った人で、共同通信の関西支社長を勤め、定年後も長い間、現役評論家として一時代を築いた人だった。

少年時代からそんな父親を見つめ、文章を読み、芝居や映画を見る目を養ってきたのだから生半可な教育では与えられない素養がたくわえられていったのは当然だろう。環境が人を造る——まさにその言葉どおりの半生を送ってきた。

もっとも現実はその素養がそのまま仕事の上に結びつかないのが難しいところである。

特に新聞記者という職業はタイミングが場合によってはものを言うし、上下左右の人と人との関係も微妙に反映してくる。場合によっては身についたものが逆にマイナスに働くこともある。大鋸厚生の場合も、もっと早い時期の映画記者なら批評のスペースもあったし、腕をふるうことも出来ただろう。

だが映画が紙面の片隅に追いやられ、批評が姿を消してしまった現在では、かえって豊富な知識が邪魔になっていく場合も生じてくる。たまにする紙面への批判が素直に受け取ってもらえず、うるさがられるケースも出てきたとしても不思議はない。

記事審査室への異動の発令には、周囲のこの人に対する評価がまさにあらわれている。朝出勤して各紙を読み、紙面を批判してレポートを書く。仕事は決して楽ではないが、あるいはこの人の性格と才能を現在の仕事は、まさに一番評価していたのかも知れない。十年早ければあるいは関西の映画記者で群を抜く名批評を書けた可能性のある人だったろう。

映画人の墓碑銘㊷

番外・スピルバーグ映画の墓

浦崎浩實

映画の世紀＝20世紀がみるみる遠のいていく。踵を接するように昨年今年、日本の代表的映画人の死が続き、ふと新聞の片隅を見ると、エドウィージュ・フィエールの死（11月13日）が小さく伝えられていた。享年91歳という長命に感慨があるが、舞台と映画の「双頭の鷲」（47）でコンビだったジャン・マレーの死もその数日前の11月8日。

現実の死は生々しく、重い。で今回は映画人でなく、映画中の墓を取り上げてみます。シェロー監督「愛する者よ、列車に乗れ」（98）や旧作で本邦劇場初公開のシャブロル監督「美しきセルジュ」（58）については他日に譲ることにして、米ABCニュースによれば、「プライベート・ライアン」中の戦没者墓地への米国人来訪者が、映画公開以来激増しているという（NHK・BS、11月11日朝）。

「シンドラーのリスト」（93）でもラストに、ユダヤ人の関係者遺族と映画中の配役が手を取りあってイスラエルの墓地に現われ、決定的感銘を与えたが、「プライベート・ライアン」でははるばるフランス・ノルマンディー海岸まで妻や子や孫まで一家10人を引き連れて来た老ライアンの墓参の切実さが胸を打つ。身なりや立ち居から、ライアンの裕福でないのが察せられ、生の（自然な）終りを迎えつつある彼は、みんなの犠牲に値しなかったという痛切な自己否定が死者への哀借の大きさにつながっていくのである。

墓地を〈神秘な羊の白い群れ〉と謳ったのはヴァレリーだが、ノルマンディーのそれは、まさに羊の白い群れ（掲出スチル）。そして海辺という立地の与える感銘がある。「レイズ・ザ・タイタニック」（80）も海辺の墓地から始まったはずで、沖縄の「平和の礎」もそうだが、海を抱いた墓地の説得力は大きい。

「海　永遠に　寄せてはまたかえし　ああ　一すじの思惟のちにかえりくるもの」（脚本家の池田一朗氏遺児・羽生真名＝訳、ヴァレリー「海辺の墓地」）。

さてノルマンディー作戦のうち、その倍以上の死傷者を出したベルギー／ドイツ国境のヒュルトゲンの森の死闘を描くジョン・アーヴィン監督「プライベート・ソルジャー」（99年2月5日リリース）のラストでは、〝竜の歯〟（敵の戦車を止めるブロック）の列をカメラが延々とナメていく。粉雪の舞う、その三角の〝歯〟は兵士の帰郷願望の心象であるクリスマスツリーであり、それが叶わなかった無念の墓標なのだった。

「プライベート・ライアン」より

Digitized by Google

©Touchstone Pictures

WELCOME TO 1999
お正月映画ガイド
&
ハリウッド・スター
HOOOOOT SHOTS!

ARMAGEDDON

MEET JOE BLACK

IN & OUT

3時間を超えてブラピの魅力全開の「ジョー・ブラックをよろしく」、タフガイ転じてタフ・パパとなったブルース・ウィリス&リヴ・タイラーの「アルマゲドン」、再びキレた「ロスト・イン・スペース」のゲイリー・オールドマン。ほかにもハリソン・フォード、ケヴィン・クライン、金城武、ケリー・チャン等々、スター俳優揃いの1999年お正月映画。正月こそスターで映画を見たい！魅せられたい！　そんなむきにハリウッド・スター最新インタビュー集&全お正月作品を一挙紹介。

©Touchstone Pictures

6DAYS, 7NIGHTS

Digitized by Google

Brad Pitt

ブラッド・ピット in「ジョー・ブラックをよろしく」

撮影／谷岡康則

めくってもめくってもブラピ。史上最美なブラッド・ピットを堪能させる3時間1分の「ジョー・ブラックをよろしく」。その宣伝のため御本人が来日した。以下、会見の触りをば。

本作に出演を決めたのは「以前からロマンチック・コメディをやってみたかったし、ボー・ゴールドマンの脚本も素晴らしく、美しいセリフがいっぱいあったから」。

3時間を超える長尺については「愛することと生きることと家族について、そして何より“喪失”という生きていくうえで避けることのできないテーマについて丁寧に描き込んでいるから、けっして退屈しないよね？」。

死神という役どころについては「事前にリサーチするにも相手がみつからないこともあり（笑）、“直感”で演じた。彼（死神）にとっては人間社会の全てが初体験。その“ディスカヴァリー”感覚がポイントだと、心して演じた」。

これまではダークな内面を強調するヒネった役柄を好んで演じてきたブラピが、本作では彼の“地”である無邪気さ・素直さを全開。その極致が、ピーナッツバターをスプーンでタテなめしてニッと笑う（おいちィ！）とろける名シーンだが、「あらかじめ脚本にあったんだよ。なめ方は好きにやらしてもらったけど（笑）」とのこと。

YAMAHAのギターを抱えての来日であったが、わずか2泊3日のスケジュールをこなし、デヴィッド・フィンチャー監督作『FIGHT CLUB』の撮影現場へと戻って行った。　［吉田真由美］

ジョー・ブラックをよろしく
MEET JOE BLACK

●監マーティン・ブレスト　出アンソニー・ホプキンス、クレア・フォラーニ　配ＵＩＰ　●12月19日より丸の内ピカデリー1ほか（98年・米・181分）

人気No.1スターのブラピが、地上の女性と恋に落ちる死神に扮したファンタジック・ラブストーリー。メディア王パリッシュを迎えに来た死神ジョー・ブラック。束の間人間として過ごす彼は、美しいスーザンと恋に落ちてしまうのだが…。

Digitized by Google

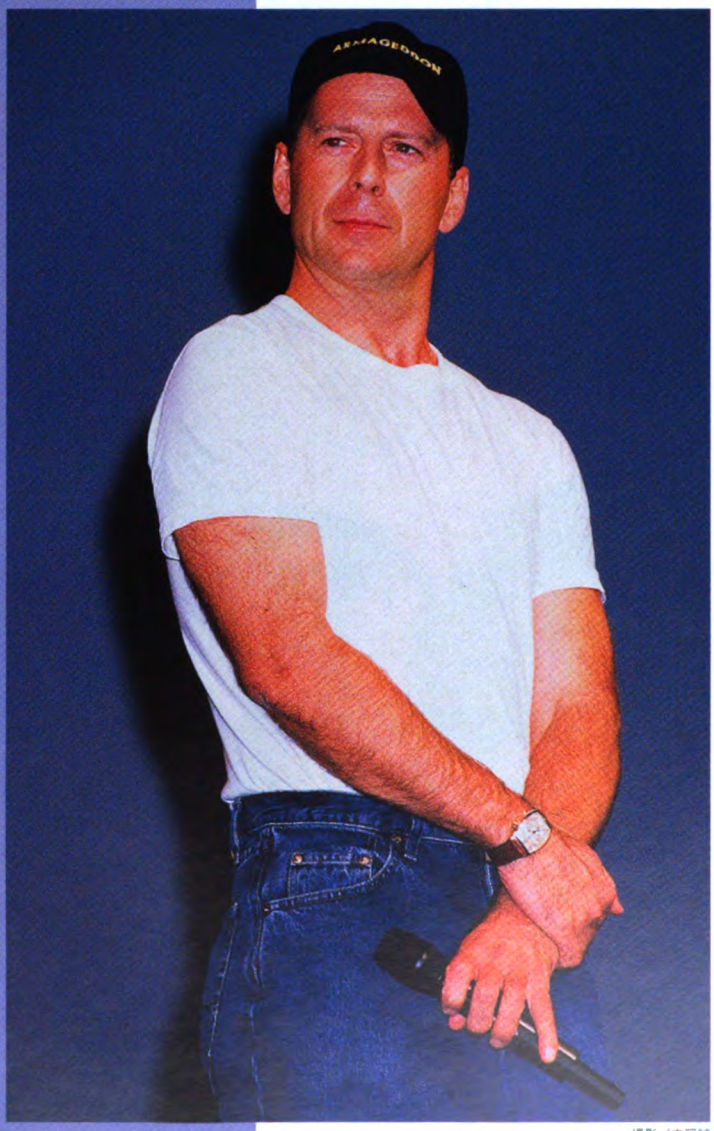
ブルース・ウィリス in 「アルマゲドン」

「過去4、5年は、この仕事をしたら楽しいだろうかということを基準にして役を選んでいるが、これは撮影が面白そうだった。いろんな機械を操作したり、宇宙船だの宇宙服を着てアステロイドに乗り込むだのといったことがね。それに共演者の顔ぶれが良いだろう」

『アルマゲドン』で人類の危機を救うヒーローを演じているブルース・ウィリスは実にクールだ。「成功が意味することの一つは、好きな映画や、演じたい役を選べるということ。気に入らなければ働く必要もない」ときっぱり。

今回はリヴ・タイラーという年頃の美しい娘がいるという設定。若い女性がいるのに恋愛関係にならない役だが、それも結構楽しんでいたようだ。「私が娘役にはできるだけ若い女優を要求したって？　それは面白い話だけどデマだよ。若い頃に生まれた子供と考えると不自然じゃない。ハリウッド映画だから拡大解釈をしなきゃいけないときもあるさ。これからずっと父親役を演じるつもりはないけどね」。

愛国心が全面に出た作品ですねと言うと、「これはエンターテイメントだということを忘れてはいけない。愛国心には善と悪が含まれる。アメリカという国は暴力が基になって確立された国だ。ヨーロッパからはじき出された人がここへ来て、インディアンから国を盗み、彼らを滅ぼそうとしたのだから」。B・ウィリスはクールというよりもシニカルな人なのだと納得した。　[鉄屋彰子]



撮影／吉岡誠

アルマゲドン
ARMAGEDDON

●監マイケル・ベイ　出ベン・アフレック、リヴ・タイラー　配ブエナ ビスタ　●12月12日より日本劇場ほか（98年・米・150分）

地球存亡の危機をかけた人類VS巨大隕石の闘いを、「ザ・ロック」のマイケル・ベイが描く壮大なヒューマン・アドヴェンチャー。隕石衝突まで18日を残されたＮＡＳＡは、巨大アステロイドを核爆破するために８人の男たちを宇宙へと送り込む。

©Touchstone Pictures

Digitized by Google

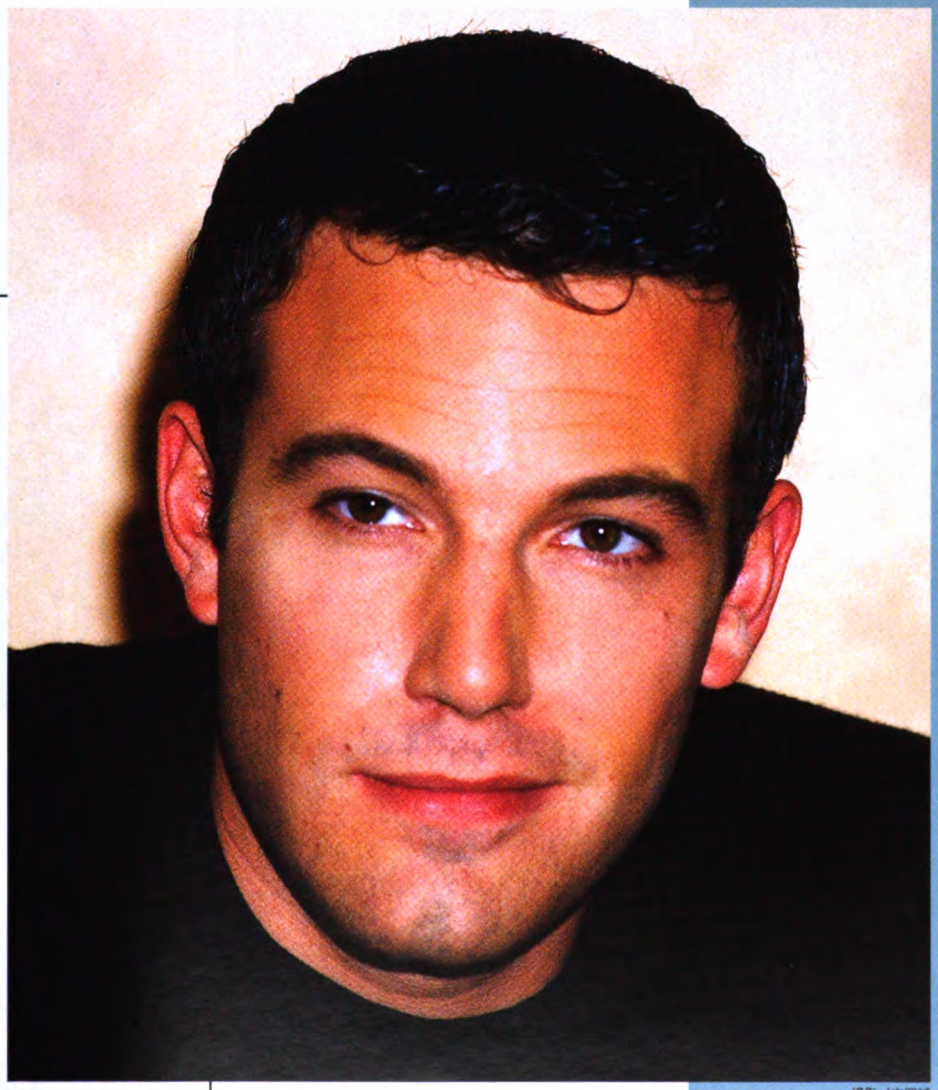
Ben Affleck

ベン・アフレック in「アルマゲドン」

「ベンってね、決めのひと言が効いてるの。『スピード2』の失敗で業界ではギャグの対象になっている私に、“君は、落ち込んでいる時が一番落ち着いていて素敵だ”って（笑）」。サンドラ・ブロックが教えてくれたベン・アフレックの逸話。確かに日本の印象を聞かれ「日本の映画ファンはセンスがいいことでアメリカでも知られているし」と嬉しいことを言ってくれる。付け加えれば、親友マット・デイモンも「ベンの何気ない、でも本質を突いた言語感覚は凄い！」とほめていた。

「あの黒澤明監督ですら、複数の才能ある脚本家と共同でシナリオを書いていたというのは、アメリカでも有名だし、高く評価されている。コラボレーションって、それだけ必要なんだよ。僕とマットも、ユーモアの感覚など似ているし、同じセンシビリティを持っているけど、やっぱり違う個性が合体することでいいものが生まれてくる。例えば僕は社交的だけど、マットはけっこうシャイで、人前で思ったことが言えない。なのに一旦怒ると、頭の中がパニクってしまって、もう後先考えずに思ったことを全部言ってしまったり（笑）。その点、僕はもっと政治的に立ち回るというか、周りのことを考えながら言う（笑）。つまり、お互いにないものを補い合うんだよ」

『グッド・ウィル～』のラスト・クレジットで謝辞を捧げてたテレンス・マリックが、昔からアフレック家と交流のある名付け親だったり、撮影監督ジャン＝イブ・エスコフィエを通じて、ヨーロッパ映画にも興味を持ち始めたり、まだまだ将来が面白くなりそう。 [佐藤友紀]



撮影／吉岡誠

Digitized by Google

リヴ・タイラー

撮影／吉岡誠

「ウフフ。『エンパイア・レコード』ですって？　あれ、アメリカでは劇場公開すらされなかったのよ。若い子たちにはそれなりに受けたけど、私にとっても3本目の映画で、それは彼女たちも同じくキャリア初期の映画だから、お互いビッグになるなんて考えもしなかったわ」

リヴ・タイラーはそう言うが、この作品、近いうちにお宝ビデオになるのは確実だ。レネ・セルヴェガー、そして昨年のベネチア映画祭で『ナイアガラ・ナイアガラ』で主演女優賞に輝いたロビン・タニーも出ているのだから。

「今まで私が出ていた映画と『アルマゲドン』って、あまりにも違うタイプだから、出演を躊躇したのは事実よ。ただでさえアクション大作って、女性の役に限らずキャラクターが深く描かれないことが多いし。でも監督とプロデューサーが、“絶対、このシナリオよりいいものにする！”って言うの。キャスティングもビリー・ボブ（ソートン）やスティーヴ・ブシェミなどが加わるうち緻密でリアルなものになってきたし。だから何事も偏見っていけないって身にしみたわ（笑）」

出世作『魅せられて』の初体験シーンにもどこか似ている原っぱでの、恋人ベン・アフレックとのラブシーン。でもトスカーナと違い、極寒のロケでは、薄いドレスの中に、厚手のもも引き、シャツを着込んでいたとか。「あそこ、父のスティーブン・タイラーの曲が入るのよね（笑）。父のこの映画への参加は後で聞いたんだけど、エキサイティングだったわ。いつか私の歌手デビューの話もあるのよ」

［佐藤友紀］

Harrison Ford

ハリソン・フォード in「6デイズ／7ナイツ」

撮影／山口昌利

プライベートではこのところ飛行機操縦に熱中しているというハリソン・フォード。南の島で気ままに暮らすパイロットという本作の役を引き受けたのも、そんなことが関係していた？

「それは違う。シナリオをまず気に入ったんだ。僕自身が笑いながら読んだ脚本なら、観客にも楽しんでもらえると思ってね。前作『エアフォース・ワン』の大統領とは全く違ったキャラクターだし、コメディも久しぶり。これは是非やりたい、と」

だが実際に、飛行シーンの半分は自ら操縦しているという。操縦しながら演技もする、というのは相当難しい技のように思うが……。

「演技は頭を使わないから（笑）。自分のすべき演技をはっきり分かっていれば、そう難しいことではない。操縦も何時間か練習すれば一つ一つ考えなくても自然にできるようになるし。操縦の素晴らしさを観客に伝えることは、飛行機に魅せられたこのキャラクターを理解してもらう上でも重要だと思ったんだ。ただ、撮影用の飛行機やヘリコプターがそばを飛んでいるわけだから、彼らと自分の動きを常に頭に入れておかないといけない。空中で予期せぬ動きすると危険だからね」

空中だけでなく、海、山、川、と大自然の中で盛り沢山のアクションが繰り広げられる本作。潜り込んだヘビを追い出すため、アン・ヘッシュの下着に手を突っ込むというシーンもあるが、あれは、実際にお手を……？

「イエス。それが私の仕事です」。　［金田裕子］

●監アイバン・ライトマン　出アン・ヘッシュ、デイヴィッド・シュワイマー　配ブエナ ビスタ　●12月19日より丸の内ルーブルほか（98年・米・101分）

肉体派スター、ハリソン・フォード主演のノン・ストップ・アドベンチャー。雑誌編集者モンローを乗せたクィンの飛行機は大嵐に巻き込まれ、地図にもない孤島に不時着する。だがそこには想像を絶した危機と予期せぬ敵が待ち受ける。

6デイズ／7ナイツ
SIX DAYS, SEVEN NIGHTS

©Touchstone Pictures

Digitized by Google

Joan Cusack

ジョーン・キューザック in「イン&アウト」

なんとなくファニーな顔つきで、特に大きな目のちょっぴりボケたような感じが良くて、いつも気になる女優だった。ジョーン・キューザックは、新作「イン＆アウト」での役柄で、2度目のアカデミー賞にノミネートされたばかりの大女優だ。

実際の彼女は、ほんわかした雰囲気を漂わせるお母さんという感じの女性だった。それもそのはず、彼女は出産4週間後の体で新作「イン＆アウト」のインタビューに応じてくれたのだ。

「この作品の撮影中に妊娠したの。撮影が終わったときには妊娠3カ月だった。ちょっぴり体型が変わり始めた頃にウエディングドレスを着たのよ」と、ジョーン。

ゲイの男性のために、ウエディングドレスを着るという役どころを演じた彼女。ケヴィン・クライン演じる婚約者はゲイだったのだ。彼とトム・セレックの男性同士の長いキスが、この作品にはお目見えする。

「試写をやってみて驚いたのは、あのキスシーンが観客に受けていたこと。あのシーンは私も楽しみにしていたのだけど、あれほど観客を笑わせるとはねえ」と、語るジョーンだが、もしかしたら一番大きな声で笑っていたのは彼女ではないだろうか。

何を言っても、何を聞いても、彼女は「アッハッハッハ、ムフフフフ」と一人で笑っていた。彼女独特の笑いは周りの人々を幸せな気分にさせる。

［あずま　ゆか］

イン＆アウト
IN & OUT

●監フランク・オズ　出ケヴィン・クライン、マット・ディロン　配ギャガ、東京テアトル　●12月19日より銀座テアトル西友ほか（97年・米・90分）

ケヴィン・クライン主演のハートウォーム・コメディ。アカデミー賞授賞式で、「先生はゲイ」と元教え子に放言されてハワードは呆然。以来テレビに纏わりつかれる彼は、町の人にも婚約者のエミリーにも疑われ…。

Digitized by Google

Gary Oldman

ゲイリー・オールドマン in「ロスト・イン・スペース」

ゲイリー・オールドマンは内面的な演技はもちろん、外面的にもかなりイメージが変化する。新作「ロスト・イン・スペース」では暗躍するドクター・スミスを演じているが、このスミス役の短髪、髭姿も実は自分で考えたものなのだとＰＲ来日時に語ってくれた。

「脚本を呼んでスミスのシルエットが浮かんだんだ。それの通りに外見を変えたのさ。衣装も自分で絵を描いてイメージを伝えたよ。実は『レオン』の時もダブルのスーツは自分で買ったものだったんだ。でも『ドラキュラ』みたいなのは別さ。イメージが先行して作られているからね。映画によってアプローチできるものはする。やっぱり外見、特に首から上は俳優のテリトリーだと思うからね」。そう自らの意見をゆっくり語るゲイリー。でも歯に衣を着せるような発言は１つもない。

「『ロスト・イン・スペース』に出演した理由？脚本が面白かったし、監督と気があったからだよ。あと正直に言えば、ギャラにも心をくすぐられた(笑)。俳優はアーティストではあるけれど、その反面、ビジネスマンでなくちゃいけないんだよ。わかる？」。もし仕事の目的がギャラでも演技力を100%を出しきるのがプロだとも。すごくクールな考え方の持ち主なのだ。そんな彼がギャラを度外視しても組みたい監督とは？「ウディ・アレンだね。本当は『セレブリティ』に出るはずだったけど撮影時期にいろいろやってて出られなかった。すごく残念だよ」。

[横森文]

撮影／吉岡誠

ロスト・イン・スペース
LOST IN SPACE

●監スティーヴン・ホプキンス 出ウィリアム・ハート、ヘザー・グラハム 配日本ヘラルド ●12月12日より渋谷東急ほか（98年・米・131分）

『宇宙家族ロビンソン』を、現代最高峰のＣＧ技術で描くＳＦ超大作。西暦2058年、移住計画の任を受け宇宙へと旅立ったロビンソン一家は、未踏の銀河系へと迷い込んでしまった!? 宇宙グモや時空の歪みを通り抜け、一家がたどり着いた星とは…。

Digitized by Google

Matt LeBlanc

マット・ルブランク

TVドラマ『フレンズ』でアメリカでは知らない人はいないほどの人気者マット・ルブランク。この映画ではロビンソン一家を宇宙に送り届けるウエイト少佐に扮している。

「今回の仕事は監督がクリアなビジョンを持っていたから、わりと言われた通りに演じたって感じだ。実は家でニンテンドー64の『スター・ウォーズ』ゲームをよくやっているんだけど、それがパイロットという役どころのイメージ作りに役に立ったよ。とにかく想像力を使うことが求められる現場だった。なにしろ宇宙グモにしても冒頭のバトル・シーンにしても何もないところで演じていたからね」。今回の作品をキッカケにこれからは映画方面にも活躍の場を移したいそうだ。［横森文］

Jack Johnson

ジャック・ジョンソン

撮影／吉岡誠（2点とも）

1987年生まれの11歳。でもインタビューに疲れた顔も見せず、ハキハキ答える。すごくしっかりしているところが『ロスト・イン・スペース』でロボットを操る少年、ウィル・ロビンソンのイメージとダブった。

「僕自身もメカを作るのとか、コンピューターをいじるのは大好き。でもウィルのように父親とは仲が悪くない。だから実体験を映画に活かしてるなんてことはないよ」。

4歳の時に知り合いの勧めで芸能界入り。主にCMで活躍してきたという。「映画は初めてだったけど、素晴らしい役者さんと仕事をすることでいろいろ学べた。将来はニコラス・ケイジみたいな幅広い演技のできる役者になりたい」と目を輝かせていた。［横森文］

Digitized by Google

David Duchovny

ディヴィッド・ドゥカヴニー

in「X-ファイル・ザ・ムービー」

Gillian Anderson

ジリアン・アンダーソン

●監ロブ・ボーマン　製脚クリス・カーター　配20世紀フォックス　●12月5日より日比谷映画ほか（98年・米・121分）

全世界で熱狂的ファンを持つTV「X-ファイル」が、衝撃的ストーリーで映画化。不可解な少年の死を発端に、全米では謎の怪事件が続発。捜査に当たったFBI捜査官モルダーとスカリーは手掛かりを追って南極大陸にまで飛ぶが…。

X−ファイル　ザ・ムービー
THE X FILES FIGHT THE FUTURE

©Twentieth Century Fox Film Corporation. All Rights reserved

Digitized by Google

私の愛情の対象
THE OBJECT OF MY AFFECTION

セックス抜きでも恋愛は可能？　そんな愛の謎に答えるヒューマン・ドラマ。共同生活を始めたニーナと、ゲイの小学校教師ジョージ。だがニーナが恋人との間に赤ん坊をもうけたことで二人の信頼も揺らぎ始める。ジョージは生まれくる赤ちゃんの父親になる決意を固めるが…。

●監ニコラス・ハイトナー　出ジェニファー・アニストン　配20世紀フォックス　●12月5日より有楽町スバル座ほか（98年・米・112分）

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

ドクター・ドリトル
DR. DOLITTLE

全米きってのコメディアン＝エディ・マーフィー主演によるハートフルな爆笑アニマル・コメディ。とあるきっかけで動物と話す能力を取り戻したドクター・ドリトル。以来彼の元には、心や体に悩みを持つ動物がおしかけ、愛する家族たちの生活を脅かし始めるのだった…。

●監ベティ・トーマス　出エディ・マーフィー、オシー・デイヴィス　配20世紀フォックス　●12月19日より日劇プラザほか（98年・米・84分）

©1998 TWENTIETH CENTURY FOX

スモール・ソルジャーズ
SMALL SOLDIERS

最新ＣＧＩから生まれた世界最小・最大のバトル・ムービー。軍事用ハイテク・チップが間違って内蔵されたフィギュア〈ゴーゴナイト〉を手にしたアラン。ところが、敵対するもう一つの〈コマンドー・エリート〉たちは、アランをはじめ人類を敵とみなし、戦闘を開始した!?

●監ジョー・ダンテ　出グレゴリー・スミス 声トミー・リー・ジョーンズ　配ＵＩＰ　●12月23日よりニュー東宝シネマ１ほか（98年・米・110分）

マイ・フレンド・メモリー
THE MIGHTY

シャロン・ストーン以下豪華キャストで生命の尊さを謳う感動のヒューマン・ストーリー。図体のでかさと裏腹に臆病者のマックスは、体は不自由だが勇気ある転校生ケヴィンと出会うことで、生きる自信を取り戻す。だが、病魔に冒されたケヴィンに残された時間は少なく…。

●監ピーター・チェルソム　出シャロン・ストーン、キーラン・カルキン　配松竹富士　●12月26日より丸の内ピカデリー２ほか（98年・米・101分）

Digitized by Google

鳩の翼
THE WINGS OF THE DOVE

文豪ヘンリー・ジェームズの代表作を、「バック・ビート」のイアン・ソフトリー監督がスリリングに描く。20世紀初頭のロンドン。令嬢ケイトと恋人の新聞記者マートンは、アメリカ大富豪の娘ミリーを翻弄する。

●監イアン・ソフトリー　出ヘレナ・ボナム・カーター　配エース ピクチャーズ　●12月12日よりBunkamuraル・シネマ（97年・英・101分）

アイ　ウォント　ユー
I WANT YOU

英国の俊英マイケル・ウィンターボトムによる、詩的で重厚な愛の物語。口のきけない少年、彼が憧れる美しいカレン、彼女の元恋人で仮出所したばかりのマーティン。再会した彼らに、痛ましい過去の傷が蘇える。

●監マイケル・ウィンターボトム　出レイチェル・ワイズ　配アスミック　●12月下旬よりシネスイッチ銀座（98年・英・87分）

マイ・スウィート・シェフィールド
AMONG GIANTS

「フル・モンティ」の脚本家サイモン・ボーフォイによるハートフル・ラブストーリー。北イングランド、シェフィールドで鉄塔のペンキ塗りに従事するレイ。彼は放浪中のジェリーと甘酸っぱい恋に落ちるのだが…。

●監サム・ミラー　出ピート・ポスルスウェイト、レイチェル・グリフィス　配シネカノン　●12月23日よりシネ・ラ・セット（98年・英・92分）

ベルベット・ゴールドマイン
VELVET GOLDMINE

妖しくも煌びやかなグラム・ロックの時代を、英国美形スター共演で描く音楽映画。70年代のロック界を席巻したブライアン・スレイド。後に狂言殺人で失墜した彼の実像を、一人の記者が追い求める。

●監トッド・ヘインズ　出ユアン・マクレガー、ジョナサン・リース・マイヤーズ　配日本ヘラルド●12月5日よりシネマライズ(98年・英・124分)

フェイス
FACE

「司祭」のアントニア・バード監督が、ロバート・カーライル主演で描くハードボイルド。“フェイス”という5人の武装強盗集団は、それぞれの思惑から金儲けの犯行にのぞむ。だが、一つの失敗が全てを壊し…。

●監アントニア・バード　出ロバート・カーライル　配東北新社　●12月19日より恵比寿ガーデンシネマ（97年・英・106分）

ルル・オン・ザ・ブリッジ
LULU ON THE BRIDGE

「スモーク」原作者ポール・オースターのラブファンタジー。事故で片肺を奪われたサックス奏者のイジーは、導かれるようにセリアと恋に落ちた。だが彼女が映画のヒロインに抜擢された頃から数奇な運命が幕を開く。

●監ポール・オースター　出ハーヴェイ・カイテル、ミラ・ソルヴィーノ　配日本ヘラルド　●12月19日よりシネスイッチ銀座ほか(98年・米・104分)

精霊の島
DEVIL'S ISLAND

アメリカ文化が押し寄せた戦後間もないアイスランドを、「コールド・フィーバー」のフレドリック・T・フリドリクソンが綴った詩情豊かな感動作。バラックに暮らす大家族を見舞う運命を、暖かな眼差しで見つめる。

●監フリドリック・トール・フリドリクソン　配ユーロスペース　●12月26日よりユーロスペース（96年・アイスランド・103分）

恋の秋
CONTE D'AUTOMNE

恋愛映画の名匠E・ロメールによる〈四季の季節〉シリーズ最終章。40代半ばの女性マガリ。息子レオやそのガールフレンド・ロジーヌ、はたまた親友イザベルが、マガリの恋のお相手探しに奔走するが、その結果は？

●監エリック・ロメール　出マリー・リヴィエール、ベアトリス・ロマン　配フランス映画社　●シャンテ・シネにて上映中（98年・仏・112分）

Digitized by Google

あ、春

4年ぶりにメガホンをとった相米慎二監督が、現代家族の風景を感動的に綴る。働きざかりのサラリーマン菲崎紘は、良家の妻と結婚し幸せに暮らしていたが、ある日、死んだとばかり思っていた父親がふらりと現れ…。

●監相米慎二　出佐藤浩市、斉藤由貴、山崎努、富司純子、余貴美子　配松竹　●12月19日よりテアトル新宿（98年・100分）

のど自慢

「岸和田少年愚連隊」の井筒和幸監督が、《のど自慢》に夢をかける人々の姿をさわやかに描く。売れない演歌歌手、運のない四十男、不器用な女子高生、ガンコな老人らが、心機一転、合格の鐘を目指し立ちあがる。

●監井筒和幸　出室井滋、大友康平、伊藤歩　配東宝、シネカノン　●1月15日よりみゆき座、シネ・アミューズほか（98年・112分）

たどんとちくわ

市川準監督がこれまでの静謐なスタイルを一変させ、“たどん”と“ちくわ”をキーワードに、ふたりのキレた男たちの暴走をシニカルに描く。クライマックスで飛び散る“極彩色の鮮血”をはじめ斬新な映像処理に注目。

●監市川準　出役所広司、真田広之、根津甚八、田口トモロヲ　配ギャガ　●12月5日よりシネマスクエアとうきゅうほか（98年・102分）

花のお江戸の釣りバカ日誌

舞台をお江戸に移した「釣りバカ日誌」最新作。趣味の釣りが災いして浪人暮らしの伝助は、夜釣りで出会った一之助が隠居を務める庄内藩に召し抱えられることに。ところが奥女中の美しい娘に心奪われた彼は…。

●監栗山富夫　出西田敏行、三國連太郎、黒木瞳、山田純大、市川團十郎　配松竹　●12月26日より全国松竹系（98年）

ビーストウォーズ スペシャル
超生命体トランスフォーマー

97年にアメリカから日本へ上陸し、瞬く間に少年たちを魅了した“ビーストウォーズ”シリーズ。現在テレビで放映中のCGアニメがついに劇場公開される。「激突！ビースト戦士」「ライオンコンボイ危機一髪！」ほか1本の豪華三本立て。

●監岩浪美和、西森章　声子安武人、山口勝平　●12月19日より全国東映系（98年・105分）

©1998 Transformer Production Company Inc./Takara Co., Ltd./ビーストウォーズ映画製作委員会

モスラ3
キングギドラ来襲

大怪獣のバトルと妖精たちの活躍で、愛と勇気の冒険をくりひろげてきた新モスラシリーズ完結篇。エネルギー源として子供たちをさらうキングギドラを倒すべく、モスラは1億3千万年前の白亜紀に向けて飛びたつ。

●監米田興弘　出小林恵、建みさと、羽野晶子、大仁田厚　松田美由紀　配東宝　●12月12日より全国東宝系（98年・99分）

大いなる完～ぼんの

元首相の田中角栄をモチーフにした原作漫画を、的場浩司、哀川翔、白竜という個性派俳優たちが熱く演じる。貧しい小作人に生れながら煩悩のままに突きすすむ男・鉄馬完は、やがて逞しく成り上がっていく。

●監高橋伴明　原本宮ひろし　出的場浩司、哀川翔、南野陽子、大塚寧々　配CIA　●12月19日より新宿トーア（98年・150分）

なぞの転校生

SF小説大家・眉村卓の世界を、お茶の間アイドル、新山千春、佐藤康恵主演で描いた話題作。香川翠のクラスに不思議な転校生・岩瀬真祐美が現れる。彼女は核戦争によって滅びた別次元からやって来たのだった。

●監小中和哉　出新山千春、佐藤康恵、妻夫木聡　配メディアボックス　●12月26日よりシネ・ヴィヴァン六本木（98年・95分）

Digitized by Google

ラストゲーム
HE GOT GAME

スパイク・リーが「マルコムX」以来6年ぶりにデンゼル・ワシントンを起用し、父と息子の愛憎を描く渾身の一作。天才バスケットボール・プレイヤー、ジーザスは、母を死なせた服役中の父と思いがけず再会する。

●監スパイク・リー　出デンゼル・ワシントン、レイ・アレン　配クロックワークス　●12月19日よりシネマミラノほか（98年・米・134分）

©TOUCH STONE PICTURES

ラブゴーゴー
愛情来了／LOVE GO GO

「熱帯魚」でデビューした期待の若手監督・陳玉勲の第二作。バン職人、ミュジシャン志望、おでぶな夢みる乙女、飛びこみセールスマンらが紡ぎだす台北の2週間を三部構成でユニークに描く。

●監陳玉勲（チェン・ユーシュン）出堂娜（タン・ナ）配アジア映画社　●12月12日よりユーロスペースにて（97年・台湾・113分）

宋家の三姉妹
宋家皇朝／THE SOONG SISTERS

激動の中国近代史に生きた伝説の三姉妹を、メイベル・チャン監督が描く大河ロマン。アメリカで新進的教育を受けた宋家の3姉妹、靄齢、慶齢、美齢。だが度重なる革命と内戦は姉妹の絆を引き裂いていく。

●監張婉婷（メイベル・チャン）出張曼玉（マギー・チャン）配東宝東和　●岩波ホールにて上映中（97年・日本＝香港・145分）

モーテル・カクタス
MOTEL CACTUS

期待の新人パク・キヨンが、撮影の名手クリストファー・ドイルと組んで作りあげた4つのオムニバス・ストーリー。モーテル・カクタス407号室を舞台に、都会にひそむ男女の孤独があぶりだされる。

●監パク・キヨン　出ジン・ヒギョン、チョン・ウソン　配アート・キャップ　●12月26日よりキネカ大森（97年・香港＝韓国・91分）

パフォーマンス
PERFORMANCE

ユニ・セックスの魅力で妖しい官能を放つ20代のミック・ジャガーを、「地球に落ちてきた男」のニコラス・ローグが退廃的な映像美の中にとらえる。伝説のカルトムービーが、ついに劇場正式上映。

●監ニコラス・ローグ　出ミック・ジャガー、アニタ・パレンバーグ　配ケイブルホーグ　●12月26日より三百人劇場（68年・英・105分）

パパラッチ
PAPARAZZI

スクープめがけて奔走するパパラッチたちの姿を描いたアクション・コメディ。会社を首にされた元警備員のフランクは、ふとしたことでパパラッチの世界へ足を踏みこみ、すっかりこの仕事に魅せられるが……。

●監アラン・ベルベリアン　出パトリック・ティムシット　配K2エンタテイメント　●12月19日より銀座シネパトス（98年・仏・111分）

ビッグ・リボウスキ
THE BIG LIBOWSKI

「ファーゴ」でひとつの頂点を極めたコーエン兄弟最新作。チンピラたちに自分の本名と同じ名の大金持ち“ジェフ・リボウスキ”と間違えられたヒッピーくずれのデュードは、思いもよらない災難に巻きこまれていく。

●監ジョエル・コーエン　出ジェフ・ブリッジズ、ジョン・グッドマン　配アスミック　●シネマライズにて公開中（98年・米・117分）

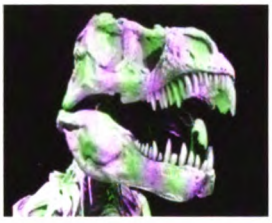
アンナ・マデリーナ
安娜瑪德蓮娜／ANNA MAGDALENA

金城武が、「世界の涯てに」のケリー・チャンと再共演。友人に思いをよせる女性を愛してしまった青年の切なさをバッハのピアノ練習曲『アンナ・マデリーナ』にのせて描く。レスリー・チャン、アニタ・ユンも出演。

●監奚仲文　出金城武、ケリー・チャン、アーロン・クオック　配東映、アミューズ　●12月19日よりシャンゼリゼほか（98年・香港・97分）

Digitized by Google

T-REX
T-REX/BACK TO THE CRETACEOUS



6500万年以上の恐竜時代を、アイマックスの３Ｄ＆超巨大映像が魅惑的に映し出す。博物館の事故によって少女アリは、遥かなる過去へと時空をさ迷い出す。なんとそこは、巨大恐竜が跋扈する白亜紀だった…。

●監ブレット・レオナード　出ピーター・ホーン　配アイマックス・ジャパン　●12月12日より東京アイマックス・シアター（98年・米）

ボーン・ダデイ
BONE DADDY

ルドガー・ハウアー主演の猟奇殺人ミステリー。生きたまま全身の骨を切り取る連続殺人犯を主人公にした、猟奇小説を上梓したばかりのバーマー。だがそのモデルとなった過去の猟奇殺人犯は、彼を付け狙い始める。

●監マリオ・アゾバルデイ　出ルドガー・ハウアー　配グルーヴコーポレーション　●12月12日より東映パラス２（98年・米・91分）

シンク

日常の中に隠されたささやかな世界を描き、97年度ぴあＰＦＦグランプリを獲得した感動作。ある日テレパシー能力を得たクミは、離れたまま会話を交わし続けた２人の仲間と出会うのだったが…。

●監村松正浩　出松崎ナオ、野田慶、光安稔　配スモールライト・ピクチャーズ　●12月19日よりＢＯＸ東中野にてレイト（97年・85分）

AQUARIUM
アクアリウム

人気漫画家・須藤真澄の原作を、幻想的でハートウォームな１作に仕上げたアクア・ファンタジー。愛する金魚を死なせてしまった杢子は、死体を水族館に連れて行くが、そこで“水の中の世界”へと引きずり込まれ…。

●監蜂須賀健太郎　出藤垣絵美、ミッキー・カーチス　配イリュージョン・ピクチャーズ　●12月19日より中野武蔵野ホール（98年・66分）

鮫肌男と桃尻女

望月峯太郎の同名コミックを、ＣＭ界の鬼才・石井克人がスタイリッシュに映像化。島田洋八、我修院達也（若人あきら）をはじめユニークなキャラクターたちが、現金目当てのバトルをオフ・ビートに繰り広げる。

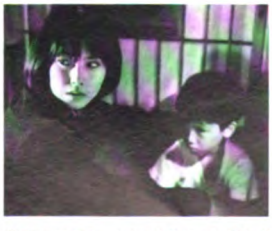
●監石井克人　監浅野忠信、小日向しえ、岸部一徳、寺島進、鶴見辰吾　監東北新社　●１月末よりシネセゾン渋谷ほか（98年・107分）

ニンゲン合格

「ＣＵＲＥ」で普通の人々に宿る闇を描いた黒沢清監督が、10年の昏睡状態から目覚めた青年を通して家族のあり方を独自の視点で見つめる。吉井豊は24歳のある日突如意識を取り戻すが、家族はバラバラになっていた。

●監黒沢清　出西島秀俊、役所広司、菅田俊、りりィ、麻生久美子、哀川翔、洞口依子　配松竹　●１月中旬より東劇ほか（98年・109分）

リング２



一大ブームを起こした「リング」「らせん」の続篇がついに登場。呪いの元凶だった“貞子”の遺体は、解剖の結果、１、２年前まで生きていたことが判明する。新たな謎が提議される中、呪いのビデオが次々と氾濫していく。

●監中田秀夫　出中谷美紀、佐藤仁美　深田恭子、真田広之、松嶋菜々子　配東宝　●１月23日より全国東宝系で「死国」と同時上映

おもちゃ

新藤兼人によるシナリオを、深作欣二監督がプロデュースも兼ねて監督。京都の芸者置屋で見習い修行を積みながら、やがて舞妓になっていく少女・時子。花街に生きる女たちの躍動をハイテンションに描く。

●監深作欣二　出宮本真希、南果歩、喜多嶋舞、魏涼子、富司純子、津川雅彦　配東映　●１月15日より全国東映系

Digitized by Google

お正月映画座談会'99

「ジョー・ブラックをよろしく」

塩田時敏 × 金子裕子 × 北川れい子

"ブラピ"踏めますか？

北川　今回のお正月映画は、内容的に春休み向きのプログラムが並んだ感じがしませんか？

金子　SFXやCGを売りにした映画がこんなにあるのも珍しい。そんな中「**ジョー・ブラックをよろしく**」が私の一番のお薦め。ブラッド・ピットの大いなるプロモーション映画で、ファンや女の子にはイチオシ。

北川　たっぷり3時間ブラピ御用達。けれど、マーティン・ブレスト監督は場面場面を丁寧に撮っていて飽きさせないわね。

金子　ブラピが遠くから歩いてくるのを、延々と長回しで撮ったり、とにかく間がある映画です。彼が滞在するのが富豪の家という設定なので、建物や寝巻も豪華で酔わせますよ。

塩田　それにしても3時間は長くない？　「アルマゲドン」も2時間半あるんだよ。なんだかハリウッド映画がインド映画化してるよなぁ最近（笑）。

北川　最近のハリウッドは、CGとか火薬を多用した騒々しい映画が多いから、これを観るとホッとしますよ。

金子　私も久しぶりに、ちゃんとしたロマンチック・ラブ・ストーリーを観た気がする。しかもブラピ主演。

北川（笑）「ジョー・ブラック～」は、ファンだけ3千円にして、そうじゃない人は千円にしてもいいんじゃない（笑）。

塩田　窓口の床にブラピの写真が貼ってあってね（笑）。踏んだら千円。

金子　踏めなかったら3千円。それでも私は踏まない！

北川「**アルマゲドン**」は大音響と激しいロック、絶叫台詞の中でストーリーが進むから、思考停止状態にはなっても長いとは感じませんよ。「ディープ・インパクト」と設定が全く同じだけれど、あちらはどちらかというとネガティブでしょ。

塩田「アルマゲドン」は別物。音のいい劇場で見るに限る。

北川　受けてたつぞ、というポジティブな展開で威勢がいいから、お正月映画としては普遍性があります。

塩田　でも僕は「**ロスト・イン・スペース**」を推す。これは壮大なSFの大ボラ、でもちょっといい話。いかにもニューライン・シネマ製作らしく、キッチュでポップなノリもある。

金子　宇宙ものなのに家族の描写がリアルですよね。

塩田『宇宙家族ロビンソン』と思いきや、全然違う。

金子　3人娘の末娘が、「アダムス・ファミリー」のクリスティーナ・リッチ的役割なの。

塩田　父子を巡る、ちょっと良い逸話も入っているしね。だからここには「マイ・フレンド・メモリー」的カンドー要素もあるし、宇宙ものという意味で「アルマゲドン」もある。ないのはブラピだけか？

金子　それは決定的よ（笑）。

ラブ・ストーリーさまざま

金子「**アンナ・マデリーナ**」は、金城武のボーッとした可愛らしさが良かった。

北川　今回は三角関係の振られ役。このタイトルはバッハの2度目の奥さんの名前に由来しているんですけど、先妻の子3人、自分も10人子供を生み、計13人育てたという……何て好き者（笑）。それを知っていると、なお可笑しい。

塩田　監督はそんなこと知らないって（笑）。

北川　今回ケリー・チャンのコメディっぽい演技も軽やか。元々、香港女優はみんな愛嬌があり過ぎるけれど、彼女にはちょっと違うものを感じます。

塩田　この映画は彼女のそんなナマイキなキュートさを充分に活かしてるね。

北川　後半にレスリー・チャンとアニタ・ユンも出てきて、旬のスターが5人も出演するという結構贅沢な作りですし。

塩田　世の中は運しだい、アンナ・マデリーナに会える人もいれば、会えない人もいる、でもそれもまた良しという、あの結論も東洋的でいいよね。

北川「**イン&アウト**」は、90分で気持ち良く笑えて、元気になれる、軽やかなコメディ。

金子　主演のケヴィン・クラインは本当に芸達者。

北川　彼の元教え子という設定で、マット・ディロンがアカデミー賞候補の俳優役で出ているでしょ。それも可笑しい。

金子　風貌がブラピそっくり。金髪に染めていて。

北川「先生はゲイだ！」って授賞式で言っちゃうけれど、非常に善良な役というのが嬉しいじゃないですか。

金子　でもケヴィン・クラインとトム・セレックのキスシーンはショックだった。

北川　あそこもパロディ風の作り。映画通なら要所要所でニヤリとさせられますよ。フランク・オズ監督は上手いですよね。

金子　同じくゲイを題材にした「**私の愛情の対象**」は同性愛に結論を出そうとしたけど、こちらはあくまでコメディ仕立て。

北川　アメリカの田舎街が舞台で、街中が知り合いという雰囲気も良いですね。古き良きアメ

Digitized by Google

リカ、フランク・キャプラとまで言ってしまうと大袈裟だけど、その雰囲気はあります。

塩田　ホモ版「卒業」というとホメ過ぎかな（笑）。

金子「**アイ・ウォント・ユー**」は、私には少し重た過ぎたんですが、ここ最近のイギリス若手監督たちは、こういう手法で愛を描きますよね。

北川　痛んだ人間の気持ちが底辺にあって、愛しているから平然と裏切ってしまうようなね。でも中編ミステリーのようで、私は面白かった。思い詰めたような映像もいいし。

金子　それが今のイギリスの若手監督が描くラブ・ストーリーの主流なんですよね。

北川　それとまた違うラブ・ストーリーが「**マイ・スウィート・シェフィールド**」。これはイギリス版「鉄塔武蔵野線」（笑）。小さな世界の話ですが、故郷に暮らす人達の、土地を愛しながらも、どこかへ行きたい気持ちが上手く出ている。

金子　主人公のピート・ポスルスウェイトがダンスまで踊って、結構サマになってます。

北川　〝父の祈り〟は、あそこにあった。若い女とダンス！（笑）。でもイギリス映画に出てくる俳優は、みんな生活感のある、良い顔をしてますよね。

金子　良い顔と言えば、ロバート・カーライルの「**フェイス**」も大好きな作品です。

北川　基本はフィルム・ノワールだけれども、イギリスのタッチがぷんぷん。とにかく主人公たちがやるせないですよ。

金子　そう。とくにカーライルは、やるせない演技が上手い。

北川　中心人物がみんな悪人だから、本来なら感情移入できるはずないのに、彼らを応援したくなってしまうんです。小さなエピソードや、端役の人達まで愛情ある描き方をしている。

金子　カーライルはユアン・マクレガーのようにハリウッドに行って欲しくないな。行けば一応主役だろうけど、下らない作品に出るはめになると思うの。

塩田　声かかっても行かないんじゃない。イギリスで頑張っている役者と、ユアン・マクレガーには境目がありますよ。

金子　でも「**ベルベット・ゴールドマイン**」を見ると、やっぱりユアン・マクレガーもイギリス映画に出ている時が一番良いよね。

北川　70年代が世紀末風に描かれて、ファッションにしろ主人公たちの生き方にしろ、セクシーでゾクゾクしました。

金子　でも、今流行りの70年代ものって、その渦中にいた身としては醒めてしまう部分もあるんですよ。この作品も時代のデフォルメより、あざとさが目立ってしまった。

コメディならこれ！

塩田「**ビッグ・リボウスキ**」では、70年代的雰囲気から抜け切らない男が主人公という逆転発想の大傑作。

北川　さんざん使い古されたチャンドラーのパロディをヌケヌケとやるコーエン兄弟の不敵さ。ミュージカル・シーンも笑ってしまう。

塩田　言うなれば、スクリュー・ボーリング・コメディ（笑）。

北川「**ルル・オン・ザ・ブリッジ**」は、お話の仕掛けがカンヌの短篇部門グランプリを獲ったロベール・アンリコ監督の「ふくろうの河」とそっくりだった。モノクロ28分の画期的に美しい映画だっただけに…。サックス奏者役のハーヴェイ・カイテルは良かったのですけど。

金子　美女のミラ・ソルヴィーノと野獣の恋愛が、ちゃんとはまっているんですね。私は見終って、監督のポール・オースターもハーヴェイ・カイテルの役も含め、男って可愛いなぁと思ったんですよ。みんな一生懸命遊んでいる。オースターも新しいオモチャを貰って楽しくて仕方がないという雰囲気が伝わる。

北川　しかも知的で大人向き。

金子　大人向けの傑作といえば「**恋の秋**」。

北川　おばさんの恋のロマンチックなすれ違いね。

金子　女は幾つになっても恋愛好き、という証明（笑）。

北川　さんざん周囲から恋のお節介を焼かれるワイン作りのおばさんが、本当に普通の人っぽいんですよ。

金子「私なんて、もう恋愛はいいの」何て言いながらも、実はワクワクしてる。もう一人お節介焼きの少女も含め、あの女3人の構図はロメール監督じゃなければ出来ない。

北川　数日間のドラマで格別の起伏があるわけじゃないけれど、人生の達人が撮った映画ね。

金子《四季の物語》はどれもお笑い路線で、私は見ているあいだ中クスクス笑ってました。

北川　ゲラゲラと大笑いなのが、「**ラブゴーゴー**」。落ちこぼれで、世間でいうまともな青春を送れない主人公達が、自己主張のために反乱を起こす。

塩田　オタクの反逆というと、「ポーキーズ」みたいだけど、そうじゃないんだよね。もっと心がある。

北川　前作「熱帯魚」の路線がさらに広がっているの。痴漢撃退装置とか小道具が活きていて、大袈裟な作りじゃないけれど大笑いできますよ。

「フェイス」

「イン＆アウト」

「アンナ・マデリーナ」

Digitized by Google

塩田　タイトル通り、落ちこぼれよイケイケ！　と応援する。

日本映画は家族回帰？

北川「たどんとちくわ」はいかがでした？

塩田「たどん」は、市川準が撮る意味がある映画ですけど、「ちくわ」はやっぱり合わないかな、という気がした。前半「たどん」は、核となる話に行くまで、タクシーの乗客たちの会話で延々と引っ張るでしょ。今回その内容がキレてる。その点、市井の人々のつぶやきという監督の持味と題材が合っているんだけれど、「ちくわ」のように妄想がデフォルメされていく話だと、もっと上手くできるのではと思ってしまう。

北川　キャスティングは、いつもの市川映画の常連なので、ファンにはにやりとさせますね。でも〝たどん〟なんて、若い人には分からないでしょう。

塩田　ちくわが真田広之のポコチ●を表しているから、たどんもはっきり金●と表現してよかった（笑）。

金子　トイレの落書きじゃないんだから（笑）。

塩田　それがたどんとちくわの意味するとこですよ。最近の市川作品では相当好きだけどな。

北川「あ、春」は、今年の日本映画の中で久しぶりに大人の味わい、渋みのある映画を見た気がします。3人の女優たち――富司純子と藤村志保と三林京子――の描き方など、小津作品を彷彿とさせるところもありますし。原作を大胆に作り変えた、中島丈博さんの脚本にも感心しました。

金子　現代版「父、帰る」ですね。

北川　そう。相米監督の近作では常に子供が中心に据えられていましたが、今回ずいぶん成熟したなと感心します。

塩田　大人が主人公なら成熟と言えるのか…。今までの強引とも言えるような長回しが、今回カットを〝あ、割る〟（笑）。割って普通になったのが、成熟と言えば言えるかも知れないけれど、ちょっと物足りない部分も出てくるんだよね。

北川「あ、春」もそうですが「のど自慢」や、黒沢清監督の「ニンゲン合格」も、家族や家族回帰がテーマ。元々家族は映画の中心的テーマでしたが、ここに来て、この路線はもっと増えそうですね。

金子　今はアメリカ映画でも家族ものが増えているんですね。家族の絆を、もう一度色んな形で考え直そうとしているように思えます。

塩田「のど自慢」は「Shall we ダンス？」ほど奥深くはなく、「シャ乱Qの演歌の花道」ほど大爆笑というのではないけれど、見て非常に元気が出る映画ですよ。台湾の「ラブゴーゴー」に近いエネルギーとハートがある。

北川　気持ちが良い笑いが一杯。松田美由紀のホンワカした雰囲気や、脇のキャラクターがイキイキしていて。井筒監督は巧くなりましたよね。

塩田　巧いというより肩の力が抜けていると思う。どこまで行っても洗練より活力が、監督の持味だと思うから。

北川　このレベルの娯楽映画が日常的に存在してほしい。作家性の強い優れた作品は外国以上にあっても、批評家だけ持ち上げて、一般に広がらないケースがあまりにも多いでしょ。

塩田　ならば「**鮫肌男と桃尻女**」、これが大傑作！

北川　私は主人公の薄汚さが苦手だった。無意味な暴力が繰り返されるところなんかも、オタク映画ふうだし、面白くも何ともない。

塩田　元々カルト狙いもあったとは思う、はっきりとではないけれど。タランティーノとリンチとモンキーパンチ、さらにコーエン兄弟を一緒に見る感じ。

北川　だったら、タランティーノもコーエンもすでにいるんだから、もういいじゃない。俳優も話のコクも違うんだし。

塩田　でも、今までその方向を目指した日本映画がなかったから、敢えて作ることで別の窓口を開こうとしている。これまで主流だった路線が行き詰まって、ではどこで若い目を邦画に向けるかといえば、この「鮫肌～」が一つの窓口になると思う。若い人達には薄汚れた浅野忠信はブラビに近い感覚で受けとめられるんじゃないかな？

北川　私には奇抜なキャラクターや衣装で、技術の無さを隠しているだけにしか思えない。

塩田　テイストとしてのチープさというのはありですけれど、決して安っぽくは見えないし、技術も見せびらかしてない。衣装からデザインから、お金をかけていないように見せて、実はかかっている。

北川　今年は「SF サムライ・フィクション」でも評価が分かれましたよね。映画を見続けている人にはもの足りなくても、若い人に受ける作品がどんどん出てきている。「鮫肌男と桃尻女」はタイトルには魅かれたんだけど……。

塩田　でも見続けてるから発見できる新しさも、ここにはある。ちなみに「～桃尻〝娘〟」じゃないからね。そこが世代の分れ道（笑）。

「恋の秋」

「たどんとちくわ」

「鮫肌男と桃尻女」

Digitized by Google

ミック・ジャガー

ジェームズ・フォックス

●「パフォーマンス」 Performance（1970）ケイブルホーグ配給

text by **日野康一**

日本の知名度は低いが、カラー映像のマジシャン、ニコラス・ローグ監督と、ローリング・ストーンズのリーダー、ミック・ジャガー（若い！）の映画デビュー作。かなり以前、ビデオが出ていた。ローグの「地球に落ちてきた男」（76）とともに英国映画祭で上映された。

ローグはアイヴォリー、ケン・ラッセルと同世代、英国では一流企業CMの第一人者。ジャック・カーディフに傾注してこの世界に入り、リドリー&トニー・スコット兄弟は後輩、アルジェントやデ・パルマには、はかり知れぬ影響を及ぼした。あまりにもエキセントリックで感覚ひとすじ、世間的なモラルに背を向けて〝まともな〟社会に悪態をついてコケにされ、カルト・ムービー全盛時代になってもてはやされるようになった。

現実と妄想が入り混じり、激しいセックス、倒錯とハシシ、妄執と執着、退廃的な人間関係のめくるめく迷宮にひきずり込み、独自のモンタージュ手法が不気味な雰囲気をかもしだす。彼の映画は赤が主題、赤が走ると死の影がよぎり、華麗な映像造形にはまり込んでゆく。このあとの映画は死の赤と嫉妬の緑を色分けして原色のパレットをスクリーンにぶちまけ、眩惑するようになった。

ミック・ジャガー、「地球に落ちてきた男」のデイヴィッド・ボウイ、「ジェラシー」（80）のアート・ガーファンクルのように、カリスマ的ミュージシャンを主役に迎えて妖しい魅惑を引き出す。

軍隊時代では映写技術者、ロンドンのエルストリー、シェパートン両撮影所で編集見習い、カチンコ係、照明マン、カメラ助手をつとめて現場から叩き上げ、デイヴィッド・リーン「アラビアのロレンス」「ドクトル・ジバゴ」の第2班や追加撮影、コーマン「赤死病の仮面」、トリュフォー「華氏451」、レスター「ローマで起きた奇妙な出来事」「華麗なる情事」の撮影監督を手がけた。監督作品はほかに「赤い影」（73）、「マリリンとアインシュタイン」（85）など。

暴行と恐喝を生業として男社会に生きる主人公のギャング（ジェームズ・フォックス）は、タイトル・バックから女とやりまくる。ボスに罪を着せようとした弁護士と依頼人を脅す仕事を片付け、つぎのターゲットは馬券屋。古い友人だったため私情をはさんでボスに叱責され、リンチを受けた馬券屋を殺す。ボスは主人公を抹殺するように組織に命じたため逃げ場を失い、行き詰まったロック・ミュージシャン（ジャガー）の部屋に飛び込む。顔に化粧をほどこし、取り巻きの女性たちと快楽にふける雰囲気に違和感を感じた主人公は、それまで知らなかった中性的な別世界にのめりこんでゆく。

ジャガーがギターの弾き語りで「メモ・フロム・アイ」を歌うほか、ランディ・ニューマンなど当時の曲多数。

「デモン・シード」の拳銃自殺したドナルド・キャメルが脚本と共同監督、撮影はローグ。性と暴力、ドラッグ描写が多くて英国では×、アメリカではR指定。

〈データ〉英＊グッドタイムズ＝英米配給WB（米公開70年8月）。テクニカラー、103分45秒。12月26日より1月15日まで三百人劇場で公開。

Digitized by Google

デビュー作の風景

野村正昭

イラストレーション・宮崎祐治

㊺原将人「おかしさに彩られた悲しみのバラード」(68)

68年、草月アート・センターが主催した『フィルム・アート・フェスティバル東京1968』は16ミリ作品のみを一般公募し、応募作品は74本。当時高校3年の原正孝（75年5月に将人と改名）が「おかしさに彩られた悲しみのバラード」で最優秀作品賞を受賞し、彼はいちやく時代の寵児となった。この連載でも彼と同世代の多くの映画監督たちが異口同音に〝原正孝の登場〟を原体験のひとつに挙げていることからも、いかにそれが大事件であったかが推察できる。当時中学生だった筆者から見ても、それは本当に眩しい風景だった。

大島渚監督「東京戦争戦後秘話」（70年）の脚本及び予告篇作りに続いて、渋谷ボーリエ・フォルトで毎週土曜日に上映された上映時間8～9時間にも及ぶ壮大な8ミリ叙事詩「初国知所之天皇」（73年）の体験――このプリントは76年11月16日、火事で原将人の自宅と共に焼失したという――が筆者にもたらした影響は計り知れぬ。「20世紀ノスタルジア」（97年）に続く新作「20世紀ソングス」を準備中の原将人監督に『デビュー作の風景』について、お話しを伺うことができた。

『おかしさに彩られた悲しみのバラード』は高2から高3の春休みにかけて作ったんです。（麻布高校には）映研がなかったので、友人を集めて有志で」製作した。実は前年にも8ミリ映画を一本作っていた。「高校の学園祭が5月にあるので、春休みに撮ると学園祭で上映できるんですよ。その時の8ミリは学校をさぼって街をうろうろしている男の子の話で、マイルス・デイヴィスの『SOMEDAY MY PRINCE WILL COME』という曲を使って、『いつか王子様が』というタイトルにしたと思います。30分位のものですが、18コマで撮って基本的にスピードが遅いんですよね。画面の質感も一寸気に入らなかったし、自分で作ってもあんまり面白くなかったんですよ。それでやっぱり16ミリで作りたいなと。その頃はみんな16ミリで作る時代になっていたんですよ」。

草月シネマテークやアメリカ文化センターなどでアメリカの実験映画が上映され、原さんもそれに通いつめていた。「普通の映画館で上映している映画も好きでしたが、ジョナス・メカスやスタン・ブラッケージやブルース・ベイリーの映画を見て、実験映画がすごく好きになって、自分でも作れるなあと思って。日本でも大林（宣彦）さんが『伝説の午後、いつか見たドラキュラ』（67年）を作ったりしていたし」。

最初はブニュエルの「黄金時代」（30年）に倣って「黄金時代'68」を撮ろうとしたが、それを解体して映画の中に組み込み、かくして、映画を作りたいのだが何を撮ったらいいのか分からない若者たちの日常を、「絞死刑」（68年）や「大人は判ってくれない」（59年）などへのオマージュやパロディをふんだんに持ち込んだ軽快な傑作が誕生した。12のエピソードから成るゴダール「女と男のいる舗道」（62年）に触発され、「第1章　地獄の季節」「第

Digitized by Google

「おかしさに彩られた悲しみのバラード」

1968年・16ミリ／モノクロ（13分）

［はら・まさと］1950年、東京都生まれ。麻布高校在学中に製作した16ミリ「おかしさに彩られた悲しみのバラード」によって、『第1回フィルム・アート・フェスティバル東京68』のグランプリを受賞。当時のアンダーグラウンド・シネマ運動に多大なる影響を与え、以後は松本俊夫監督の助監督などを経て、70年に「自己表出史・早川義夫編」を完成。翌71年からは、北海道から日本列島を南下するロードムービー「初国知所之天皇」に着手し、途中中断をはさみ73年に上映時間8～9時間を要する実験的大作を完成する。80年代は主にテレビ・ドキュメンタリーの演出に専念。93年の「百代の過客」を経て、97年にはアイドルの広末涼子を主演に初の商業映画「20世紀ノスタルジア」を発表。『はつくにしらすめらみこと』ほか著作やレコード制作も数多い。

2章　疎外された労働」「第3章　空虚感」「第4章　映画なんか人生じゃない」「第5章　再び疎外された労働、又は自ら売り渡した肉体」「第6章　黄金時代'68予告篇」「第7章　自己否定、又は主体を取り戻すこと」「第8章　再び自己否定、あるいはラストシーン」の8章立てで構成した。

「撮影自体は1週間。毎朝その日撮る分のシナリオを書いて撮っていました。16ミリだと直接見れるから、ビュアーが要らないわけで、とにかく3畳の部屋いっぱいに紐を張り巡らせて、それに洗濯バサミで何百というカットのフィルムを吊るして、2コマ、3コマと短くしながら編集していたんです。4月から7月まで4カ月位かけて、編集には夏までかかりました」。製作費は5万円。だが、当時の高校生には大金である。苦労して調達し、人に紹介された市ケ谷の現像所へ。「僕は何も知らなくて、自分でネガを編集するんだろうなと思っていたら、こっちでやってあげるからって（笑）。高校生ということもあって、すごく安くしてくれた」。

『フィルム・アート・フェスティバル』での上映時には評判が良く、「松本俊夫さん、武満徹さん、粟津潔さん、植草甚一さん、勅使河原宏さんが審査員でしたが、受賞できるかもしれないと思ったし、受賞式には学校が（麻布で）近かったせいもあって、僕が習っていた先生たちが随分沢山見に来てくれた」。

ビートルズをはじめ既成の曲を多数使用していたので「授賞式の時に、これだと上映できないからと、武満さんから、全部（曲を）付け直してあげるって言われたんですが、断っちゃったんです。今考えると残念ですけど、その時付けてもらっていれば武満さんのバージョンができていたのに、当時はやっぱりとんがっていたからね」。賞金は20万円だった。「それで光学の録音ができたんですよ。最初は本当にお金がなかったから、磁気テープにストライプを塗り、そこに直接録音していた」。

翌年の『フィルム・アート・フェスティバル　東京1969』は、開催反対派のゲバによって中止になる。団体で押しかけた一派もあったが、この時、原さんは単身草月ホールに突入を試みた。「69年当時は学生運動が一番盛り上がっていた時期で、万博の問題があり、草月のメンバーが、みんな万博に関わっていたこともあって、草月を粉砕したんです。そういう意味では僕も学生運動のシンパでしたから、やっぱり万博はいかんのじゃないかということで（フェスティバルの）中止を求めたんです」。前年68年にはゴダールらによってカンヌ映画祭が中止に追い込まれた。激動の時代だったのである。ソ連らワルシャワ条約機構軍が、事前通告なしにチェコに侵攻、〝プラハの春〟は戦車によって踏みにじられ、パリでは左派系学生によるド・ゴール政権打倒デモが起こり、五月革命が始まった。日本でも国際反戦デーに全学連が新宿駅を占拠し、国電がストップ、学生デモに初めて騒乱罪が適用され、734人が大量検挙された。

原さんは高校卒業後、松本俊夫監督「薔薇の葬列」（69年）の助監督に就く。「撮影現場を一寸見たかったんで、松本さんにお願いしたんですが、やっぱり商業映画の現場というのは、すごく時間がかかる。結局、松本さんも仕様がなくて使ってくれたんで（笑）、仕事があまりなかったんですよ。キャメラを据えてファインダーを覗かせてもらったりする程度でした（笑）。松本さんの現場で教わったのは、一度監督をした人間は助監督になるもんじゃないということで、自分は助監督の道を歩んで、商業映画を撮る道には向いていないなあと、よく分かりました（笑）」。

先日、横浜美術館で何度目かの「おかしさに彩られた悲しみのバラード」を久しぶりに見た。少年は、ああ、映画が撮りたいと呟き、家から追い出され、風に舞う1万円札を追う。ようやくフィルムを手に入れても、何を撮ればいいのか分からない。そうした切実な感情が、フィルムの彼方から、今でもこちらの胸に響く。ラストで「大人は判ってくれない」のジャン＝ピエール・レオのように海辺を走る少年は、次の瞬間、顔面にパイをぶつけられ、スタッフが画面に闖入し、たちまち劇画化される。スタッフら5人の記念写真がストップモーションになり、「1968年春、ぼくたちは映画を作りました」と、30年前の春の永遠の瞬間が、ここに捉えられている。以後、原監督の生き方＝映画をめぐる旅は、まさにここから出発する。

Digitized by Google

スペシャル・レポート

あいち国際女性映画祭98

女性映画と一般の観客が素直な感動で結ばれている……

●北川れい子

本数は減ったが観客は増加

勢いのある映画祭は観客の活気からして違う。いや、観客の活気が映画祭を熱くしていると言うべきか。

いずれにしても3回目を迎えた「あいち国際女性映画祭98」（9月11日～15日）は、じつに誇らしい映画祭だった。メイン会場の定員800人のウィルホールは、女性を中心にした幅広い年齢層の観客で午前中の上映回から何度も満席となった。

監督やゲストによる講演、トークも、満席、もしくはそれに近い。中には若い男性客が目立って多いゲスト・トークもあった。

そして観客の案内等を受け持つ延べ400人というボランティアの方々の親切な対応。

むろん、映画祭事務局、及び関係者たちの、まさに献身的としか言いようがない熱意と努力があればこその成功なのだが、女性映画と一般の観客が、かつての映画館のように素直な感動で結ばれているのを実感する嬉しさは、格別のものがあった。

ところでご存じない方のためにおさらいさせて戴くが、この映画祭は、96年6月にオープンした愛知県の女性総合センター〈ウィルあいち〉が主催する国際映画祭で、国内外で活躍する女性監督作品に焦点を当てた映画祭である。近年、女性監督は決して珍しくはないが、まだまだ少数派であることは事実。

「あいち国際女性映画祭」は、そういった状況にある女性監督を応援すると同時に、男性監督とは別の感性や視点を持つ女性監督の魅力に注目しようというもの。

趣旨的には先輩格の東京国際映画祭「女性映画週間」と共通するが、自治体主催であることと、映画祭の実質的なプロデューサーたちが男性ということもあり、フェミニズム的なものはほとんどない（でも上映作品を決めるポストに女性も入れてほしい）。

この映画祭が映画が本当に好きな人と、普段滅多に映画を見ない一般の人々と、その両方に浸透しつつあることは、〈ウィルあいち〉がモットーとする「男女共同参画社会」をアピールする上でも、素晴らしいと思う。

今回は昨年より更に予算がカットされ、上映回数も4回減っていたが、観客数は逆に昨年を上回り、それも嬉しい。

期間中のボランティアの方々は、〈ウィルあいち〉がこの初夏に開催した「ボランティア入門」セミナーの受講者の方たちや、一般公募の人たちだとか。セミナーでの学習の成果を、早速映画祭で実践してもらおうというワケだが、実際、皆さん、テキパキと親切だった。

「愛をこうひと」上映の議論

さて肝心の上映作品である。海外からは日本初上映5本を含めて10作品が参加、日本からは3作品、並行して〈家族〉をテーマにした日本映画の旧作4本と、中国ドキュメンタリービデオ2本も上映された。

そして更に1本、〈家族〉というテーマで特別上映された「愛をこうひと」。男性監督平山秀幸監督による、98年日本映画の屈指の傑作である。

しかし……。

この映画が特別に上映されると耳にした時、私は女性監督作品ではないことなど気にも留めず、一人でも多くの人に、その痛烈な内容と素晴らしい仕上がりを低料金（前売り500円。当日700円）で楽しんでもらえるいいチャンスだと、単純に喜んだのだったが、スタッフの間ではあくまでも女性監督作品の上映を、という反対意見が強かったらしい。それも当然である、女性監督を応援する映画祭なのであるから。

大島渚監督と共にこの映画祭の顧問をなさっている高野悦子氏も、「最近の女性監督の活躍に思う」と題した特別講演の中で平山作品の上映について触れ、きっぱりと反対の意見を述べていらっしゃった。

とはいえ、毎回テーマを設けて上映される日本映画の旧作は男性監督の作品が中心である。女性映画祭という〝祭〟を気楽に楽しみたいと思う単純な私は、平山作品の上映に疑問を持つスタッフの人の意見に同意しつつ、内心では融通のきく女

「幸福の街」

「遥か遠くで」

Digitized by Google

性映画祭というのもワルくないと思ったり。どうも私は、女性映画祭という認識が甘いのかも。

「幸福の街」「遥か遠くで」が収穫

おっと上映作品の紹介を急がねば。

作品の選定はベルリン他の映画祭にも出かけた木全純治ディレクターと、映画祭を企画、立ち上げた大野プロデューサーから昨年その任を引き継いだ伊藤克博プロデューサーが中心となり、約70本の作品を見て決めたそうだが、バラエティに富んだ作品が並んだ。

但し、昨年の東京国際の上映作「半生縁」（許鞍華＝アン・ホイ）や、すでに都内で単館公開された「ダロウェイ夫人」（マルレーン・ゴリス）や「ビヨンド・サイレンス」（カロリーヌ・リンク）、「カドリーユ」（ヴァレリー・ルメルシエ）、日本の「ルイズその旅立ち」（藤原智子）、映画祭の後に公開される「落下する夕方」（合津直枝）、来春公開予定の「女と女と井戸の中」（サマンサ・ラング）、映画祭では「スウェプト・フロム・ザ・シー」という題名で上映された「輝きの海」（ピーバン・ギドロン）などの作品紹介は、いずれも人気が高かったが省略させて戴く。

今回の収穫は中国「幸福の街」（李少紅＝リー・シャオホン）と、ロシア「遥か遠くで」（リディア・ボブロヴァ）の2作品。前者はリストラで職を失った夫を支える食肉解体工場で働く妻の話で、現代中国の厳しい現実と労働者階級の家族の絆が、愛とユーモアでリアルに綴られ、じつに親しみ易く面白い。

後者は北方ロシアの寒村を舞台にした群像劇で、飲んだくれてばかりの男たちや、そんな男たちを叱りとばしてたくましく生きる女たちや、大きなドラマこそないが、ロシアの農民の暮らしと喜怒哀楽を描いて素晴らしい。

「世界に轟いた銃声」は「誰がビンセント・チンを殺したか?」のクリスティン・チョイ監督が、92年に米パトンルージュで強盗と間違われて射殺された服部剛丈君の事件を記録したドキュメンタリー・ビデオ。取材が浅いので記録映画としてはもの足りないが、上映日には愛知県在住の服部君の母親も駆けつけ、舞台で挨拶。

「カリブは最高!」（マーサ・クーリッジ）はお茶目なコメディだったが、ただこれ、すでにビデオ化されてるんですよね。

観客のアンケート回答がダントツに多かったのは「わたしがSuki」（槙坪夕鶴子）。

ストレートな教育映画なので、私にはチトつらかったが、持病のために車椅子で舞台に登場した槙坪監督への拍手と、その内容に対する反応は凄いものがあった。女子高生たちの行動を通して、援助交際、クスリ、エイズ、レイプなどの実情を語るというもので、熱血教師をもと日活の片桐夕子が演じていたが嬉しい。

嬉しいといえばゲストと観客が自由に交流するパーティーで、母親と同伴で参加していた中学生の少女から監督になりたいと相談されたのも嬉しい事件だった。田中麗奈似の利発そうな少女。そう、夢を持てばいつかは……。

今年から映画祭のデイリーニュースが発行されるようにもなった。一度チケットを購入し、更に見たい作品の入場券と引き換えるという今回導入した二度手間システムは一考を要するが、回を重ねるごとに学習（!?）の成果が窺える「あいち国際女性映画祭」は、まさに熱気、勢いとも上昇気流にある映画祭だ。

Digitized by Google

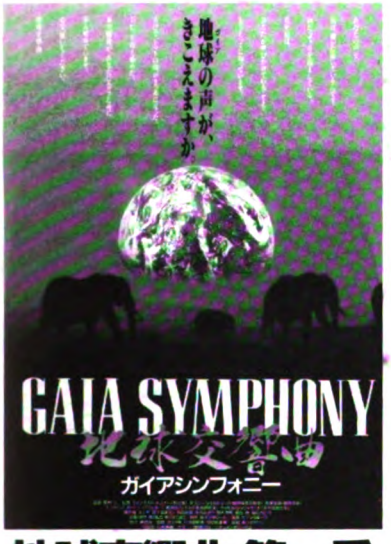
全国で132万人(1998年7月現在)が自主上映で観賞！

龍村　仁 監督作品

地球交響曲

ガイアシンフォニー

「地球の声が、聞こえますか。」という呼びかけで始まる映画『地球交響曲』は、地球環境の美しさ、大切さを訴えるだけでなく、一人一人の心の無限の可能性を言及する、「こころの映画」として、大きな反響を呼んでいます。

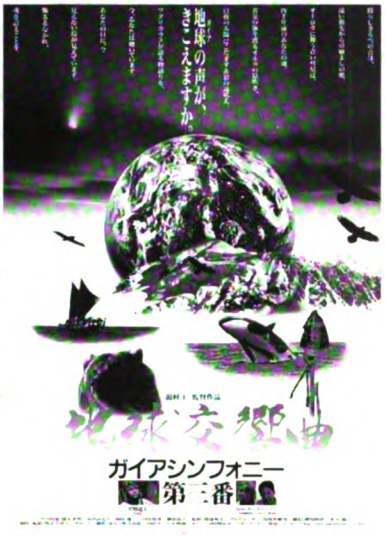


地球交響曲 第一番

R.メスナー(登山家)／野澤重雄(植物学者)／D.シェルドリック(動物保護活動家)／エンヤ(音楽家)／鶴岡真弓(美術史学者)／R.シュワイカート(元宇宙飛行士)

地球交響曲 第二番

ジャック・マイヨール(海洋冒険家)／14世ダライ・ラマ法王(チベット仏教最高指導者)／フランク・ドレイク(天文学者)／佐藤初女(森のイスキア主宰)



地球交響曲 第三番

星野道夫(写真家)／フリーマン・ダイソン(宇宙物理学者)／ナイノア・トンプソン(外洋カヌー航海者)

『地球交響曲』上映のご案内

第1番・第2番・第3番　連続上映決定！　下高井戸シネマ (Tel.03−3328−1008)

第1番　11／28〜12／4　第2番　12／5〜12／11　第3番　12／12〜12／18

第1番の上映スケジュール（11月25日〜12月末）

- ■11／25　亀山文化会館（TEL.052−322−7590 酒井）
- ■11／27　藤原町民文化センター（TEL.052−322−7590 酒井）
- ■11／29　一志町農村環境改善センタ（TEL.059−293−5111 中野）
- ■11／29　堺市総合福祉会館（TEL.072−299−2165 水谷）
- ■12／5　練馬区立南町小学校（TEL.03−3994−1064 高久田）
- ■12／15　ノバホール（TEL.010−404−3437 照井）
- ■12／23　山陽ハイツ（TEL.086−474−3783 すなみ）
- ■12／26　枚方市民会館（TEL.072−048−4166 中村）

自主上映のお申し込み・お問い合わせ

『地球交響曲 第一番』はキネマ旬報社ガイアシンフォニー事務局　03−3815−7143

『地球交響曲 第二番、第三番』はオンザロード　03−5771−2041

Digitized by Google

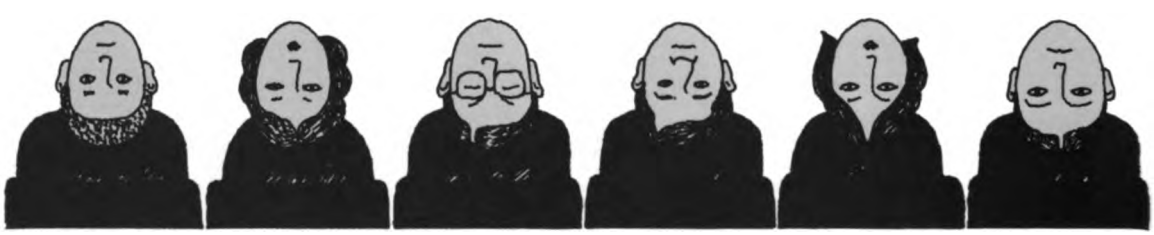
イラストレーターのいる映画館 —11

矢吹申彦

「大人は判ってくれない」Les Quatre Cents Coups

少年ジャン・ピエール・レオは、長じて、同じ顔のまま、トリュフォーの「恋のエチュード」やゴダールの「男性・女性」、「中国女」などに出演している。

ヌーヴェル・ヴァーグに洗われて



映画は子供の時から愉しみだった。

娯楽の少ない時代だから、当然と言えば当然だったが、映画館にあるゲンジツでない世界が好きだったようである。

映画に行くのは、父親に連れられてか、祖母にくっついてか、学校から団体で行くかに限られていた。あっ、もう一つ、校庭でやる野外映画会というのが時々あった。

父親は多く洋画活劇もので、ターザン、西部劇、SFもの。多くはオデオン座だったが、何故かここで「花の生涯」という時代劇を見ている。祖母はほとんど邦画の時代劇で、高田浩吉ものが多かった。そう言えば、ほんの時折り母親にも連れて行かれたが、これはゲイリー・クーパーの映画に限られていた。

学校から行くのは漫画映画（今ならアニメーション）か自然界もので、多くはディズニー映画だった。なのに一番印象深いのは「やぶにらみの暴君」。小学五年生の時からヘソ曲りであったらしい。

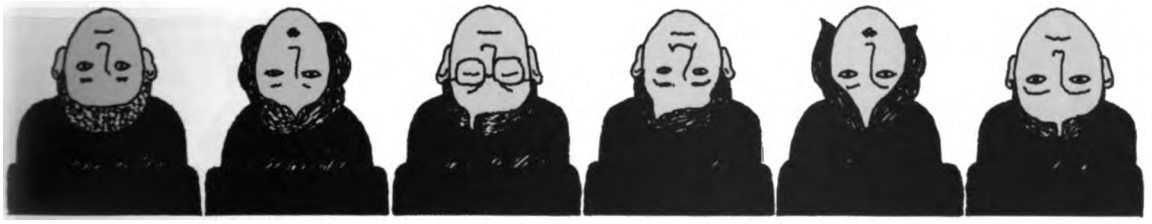
長じて、と言っても小学校の半ばあたりになると、友達だけで行くようになる。「笛吹童子」や「紅孔雀」、「ゴジラ」は小学四年生の時。同じ年の「二十四の瞳」は学校から行った。友達と行った多くは東映、大映の時代劇であったが、それも次第に面白味を感じなくなる。

中学生になると山登りが映画に取って変わる。「カラコルム」とか「マナスルに立つ」が影響したのかしらん。ともかく、映画は時々、それもほんの時々見るものになっていった。

Digitized by Google

「勝手にしやがれ」A Bout de Souffle

「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」と叫びながら新聞を売り歩くパトリシア。てっきりロゴ入りのTシャツだと思っていたら、スチールでは半袖のリヴセーター。Tシャツ姿は長袖のボーダーだった。



その山登りも、高校一年生ぐらいで止して、今度は街が愉しくなった。

モダン・ジャズ、映画、芝居、展覧会、よほど忙しくなったが、その忙しさが愉しかった。映画に限れば、初めは邦画が多かったが、中では「豚と軍艦」がピカ一だった。その内、子供ゆえに見逃していた少し前の名画を見なければと、名画座通いが始まる。例えば日活名画座は、長い階段を登らなければならなかったが、そこは登山で鍛えてある。それに、なにより安いので助かった。

そこで出逢ったのが〝ヌーヴェル・ヴァーグ〟である。

先ず「死刑台のエレベーター」は、ジャズを聴き始めて、ぜひとも見たかった映画。「危険な曲り角」、「恋人たち」、「灰とダイヤモンド」……。ここまでがヌーヴェル・ヴァーグ前夜だと思っている。そして、クロード・シャブロルの「いとこ同志」、フランソワ・トリュフォーの「大人は判ってくれない」、ジャン＝リュック・ゴダールの「勝手にしやがれ」の三本が、初めて出逢ったヌーヴェル・ヴァーグだった。いや、これに「死刑台の〜」と「恋人たち」のルイ・マルを加えたのが、と言ってもいい。そしてどれもが中学時の公開で、名画座がなければ出逢えなかった映画である。

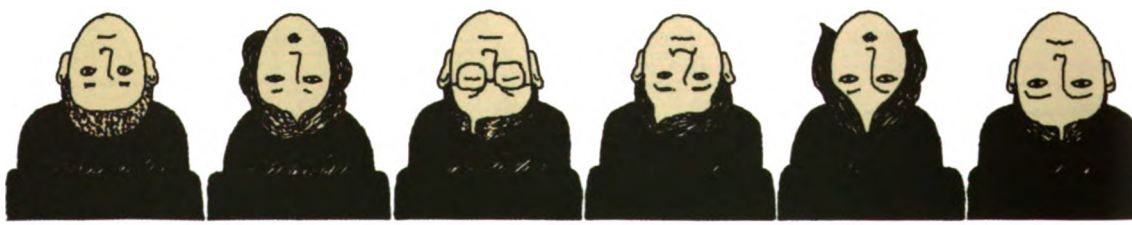
その開かれた目で「地下鉄のザジ」や「土曜の夜と日曜の朝」や「スリ」を同時代的に見られるようになった。同時代的と言えば、〝アート・シアター〟が誕生したのもこの頃だった。

Digitized by Google

「突然炎のごとく」Jules et Jim

葉巻をふかすカトリーヌ役のジャンヌ・モローと、ジュール&ジムのアンリ・セール、オスカー・ウェルナー。

記憶では、確かカトリーヌは髭を描いていた。



そのアート・シアターで見たのは「尼僧ヨアンナ」とか「ウンベルトD」とか、「野いちご」とか「夜行列車」とか「5時から7時までのクレオ」……。「土曜の夜と日曜の朝」もそうだったかしらん。

もちろん、そういう映画ばかり見ていたわけではない。同時代的にと言えば、「太陽がいっぱい」も「ウエスト・サイド物語」も「ティファニーで朝食を」も愉しく見ている。ただし、どれもロードショーではなく、二番館か三番館で。

ともかく、名画座のおかげですっかりフォロー出来たヨーロッパ映画、特にフランス映画の中でも、やはり惹かれたのはヌーヴェル・ヴァーグの監督で、その極めつけがトリュフォーとゴダールの両人であった。

巷の勉強にあけくれて、ようやく高校は出たものの、そのまま浪人。巷の勉強が増々忙しくなった頃には、二人の新作が待ち遠しくて仕方なかった。特に「大人は判ってくれない」でイカレて、短編「あこがれ」で参ってしまったトリュフォーが待ち遠しかった。

「ピアニストを撃て」が公開されたのは確か63年である。これは「大人は〜」の直ぐ後の60年の製作だが、当時はそんな些細なことは関係なく、トリュフォーの新作（?）を喜々として見た覚えがある。これは「勝手にしやがれ」同様のアメリカのギャング映画へのオマージュとパロディが混合した、それでいながら飄々とした、フランス＝ヌーヴェル・ヴァーグならではの映画だった。

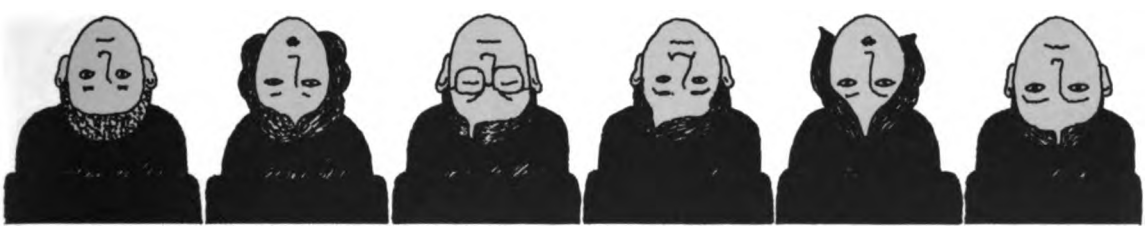
Digitized by Google

「あこがれ」Les Mistons

「あこがれ」は、1957年の製作。少年達の恋愛に対する好奇心とあこがれを描いたトリュフォーの処女作と言われてきた短篇だが、正しい監督デビューは55年の短篇「ある訪問」。

主演のベルナデッド・ラフォンは、共演の恋人役ジェラール・ブランの製作当時の夫人。典型的なフランス娘だったが、その後の消息は不明……？映画は婚約中の恋人が死んで、ベルナデッドの喪服姿を少年達が見送るところで終わるが、喪服姿で自転車に乗るシーンはない。

これは、映画の印象を描いた拙作「あこがれ」の架空シーン。



同じ年にゴダールの「女と男のいる舗道」も公開されている。ゴダールは61年に「女は女である」を見ていたから、トリュフォーほどではなかったが、アンナ・カリーナは待ち遠しかった。

そして翌64年「突然炎のごとく」が公開される。ゴダールが「勝手にしやがれ」なら、トリュフォーは「突然炎のごとく」。公開こそ64年だが、これは61年の製作でこれぞヌーヴェル・ヴァーグという意味である。ラストの湖水に自動車が飛び込むシーンは、数ヶ所から撮ったショットを繰り返して終わる。技法的に新しいわけではないが、見事な説得力を持って、これで初めてドラマも完結する。そして、それは「勝手にしやがれ」のラスト・シーンの手持ちカメラが移動しながらミシェルを俯瞰するショットと奇しくも同じ意味を持つ。ヌーヴェル・ヴァーグがヌーヴェル・ヴァーグと呼ばれる一つの象徴だろう。

同じ64年にはゴダールの「軽蔑」も公開された。その後は、トリュフォーは「柔らかい肌」から「暗くなるまでこの恋を」まで（つまり60年代の作品）を、ゴダールは「恋人のいる時間」から「ウィークエンド」までと、70年代に入って「メイド・イン・USA」などを見続けていたが、その身が真にヌーヴェル・ヴァーグに洗われていたのは「突然炎のごとく」とこの「軽蔑」あたりまでだとするのは、遅れてきた映画少年の勝手な思い込みだったのかしらん。でも、その想いは今も少しも変わらない。

Digitized by Google

シネマ

立川志らくの 徒然草 58

「恋愛日記〜弁慶の泣き所篇」

最近、巷の男性諸氏の間ではフェチが流行っているらしい。胸フェチ、脚フェチ、尻フェチ等。婦人はそれに対し露骨に嫌な顔をし、彼等を変態呼ばわりする。しかし、フェチは本当に変態なのだろうか？　人間には誰しも好みというものがある。寿司屋でやたらひかりものばかり食べる人とか、焼肉ならばカルビじゃなければ嫌だとか、洋服だってそうだ、やれシャネルだなんだって。これらはフェチと違うのか？　ひかりものフェチ、カルビフェチ、シャネルフェチではないのか？　これだけヌードが氾濫している世の中だ。裸体そのものが珍しい時代ならいざ知らず、ヘアまでもが拝める御時勢なのだから、男性が女性の身体のパーツにより興味を惹かれてしまうのは当然といえば当然であろう。

実はかく言う私もその種の好みがあり、女性の身体の中で一番好きなのは弁慶の泣き所なのである。だから私は言ってみれば弁慶の泣き所フェチなのだ。そんなフェチがあるのかと言われるかも知れないが、あるのだから仕方ない！　何故、女性の弁慶の泣き所が好きになったのかと言うと、古い映画の所為だと思う。昔の映画はまずSEX場面は出てこない。女優が裸になる事もほとんどない。色気のある場面はせいぜいスカートからチラリ見える脚線美、それも太股が出る事はそうはなく、もっぱら弁慶の泣き所。私は子供の頃からそんな映画ばかり観賞していたので、いつしか女性の色気＝弁慶の泣き所になってしまったのだ。だから初体験の時も、胸よりも弁慶の泣き所ばかり気になって訳が分からなくなってしまったものよ、チッチチ（何で気取っているんだ！）。で、私は長年、自分は相当な変態だと悩んでいたのだが、ある時、トリュフォーの「恋愛日記」なる映画を観賞て、同じような人がいるんだなぁと安心したのだ。この映画は女性の脚にメロメロになり、それが為に命を落としてしまう男を描いた悲喜劇である。まぁ、この映画の男の場合は単なる脚フェチで、私は弁慶の泣き所だからちょっとばかり奥が深い（何のこっちゃ）。

では、全国の弁慶の泣き所フェチの方々にとっておきの弁慶の泣き所フェチ映画を御紹介いたそう。なに、「氷の微笑」のシャロン・ストーンだって？　甘いね。あんな露骨なのは我々カメラ小僧にはさして魅力はないのさ、っていつからカメラ小僧になったんだよ。脚線美と言えば直ぐに思い出されるマレーネ・ディートリッヒだが、確かに「嘆きの天使」のおみ脚は美しいし、「モロッコ」のチラリズムなどは芸術品ではあるが、彼女の脚線美は顔とのアンバランスがいいのであって、単独ではどうかと思う。少々前置きが長くなったが、まず私がお薦めするのは「ウエスト・サイド物語」のナタリー・ウッドだ。彼女が恋人に会いに行く為に踊りながら着替える場面でカーテン越しに脚をひょいっと伸ばすのだが、これが国宝級の弁慶の泣き所だ！　私はこの場面を観賞ると、木村拓哉のCMの「くびれぇ！」と同様、「弁慶の泣き所ぉ！」と叫んでしまう。続いては「ザッツ・エンタテインメントPART3」の中のデビー・レイノルズ！　『Love Melvin』という映画の一場面なのだが、いやはや映画史上最高に美しい場面と言っても過言ではない。いいなぁ、デビー・レイノルズ、実は私の理想の女性なのです。顔と弁慶の泣き所、両方100点の女性は世界中に彼女しかおりません。新作映画の中からも御紹介しようかな。「疑惑の幻影」のメラニー・グリフィス。女弁護士の役で、スーツに黒のヒールが弁慶の泣き所を引き立てていて堪らない。それから「愛のトリートメント」のジョージナ・ケイツ。娼婦の役で、これまた見事な弁慶の泣き所。ヒロインのジュリー・デルピーを喰ってしまっているよ。

「ウエスト・サイド物語」

さあ、それではNo.1弁慶の泣き所クイーンを発表いたそう。プレストン・スタージェス監督「レディ・イヴ」のバーバラ・スタンウィックだ！　ヘンリー・フォンダが彼女に靴を履かせる場面での弁慶の泣き所の美しいこと。これこそが世界最高の弁慶の泣き所である。私はなろうことなら、晩年まゆ毛が伸びたってヘンリー・フォンダになりたいくらいだ。

ちなみに伴田良輔著の『脚線美伝説』の中ではラナ・ターナーが美しい弁慶の泣き所を披露しているから御覧下され。しかし、何も弁慶の泣き所と言わなくても、脛と言えばいいんだけどね……。

Digitized by Google

リレー・エッセイ

映画と私

88劇画作家 **梶 研吾**

男に弱い。

ただひたすら、映画の中に出てくる男達に弱い。

(むろん、実際は女にも弱い。特に強い美女には限りなく弱い。しかし、それはまた、別の次元での話になってしまうので、次の機会に譲ろうと思う)

とにかく、ほとんど条件反射といってもいいほど、スクリーン上の男達に涙してきた。何度観ても必ず泣いてしまうのが、アラン・ラッドがタイトルそのままのガンマンを、一世一代の名演で魅せた「シェーン」。

特に、映画のクライマックス、友の妻への忍ぶ恋を胸に秘め、たった一人で敵地へ乗り込むシェーンの姿には、今こうして思い出すだけでも、泣けて泣けてどうしようもない。

敵陣の中には、これまたジャック・パランスが異様なまでに強烈な存在感で張り合う、冷酷非情な黒ずくめの凄腕ガンマンが待ち受けている。

男の理想像は、鞘の中の刃が常に必殺の実力に満ちて研ぎ澄まされてさえいれば、無暗にそれを抜いて振り回す必要もなし——とはよくいわれるところだ。

シェーンは、まさにその理想像の、完璧といってもいい具現のヒーローだった。

不遜な自信に満ち溢れた黒ずくめのガンマンを、ほとんど瞬きする間に一蹴してしまうシェーンのガンさばき、そのわずか0・コンマ数秒の中には、男のロマンが凝縮されている。

そして、平穏な暮らしにも、暖かい人情にも背を向け、傷ついた身の孤影のみをひきずって、彼はまた一人、おそらくは死地へと旅立ってゆく。

なぜ、という問いに対してはそこに答えは一つしかあり得ない。

彼が、男だからである。

「シェーン」と同じく、もう一本、やはりラストで涙を禁じ得ないのが、いわゆるアメリカン・ニューシネマの代表作に数えられる「明日に向かって撃て!」だ。

ここに登場する銀行強盗のならず者二人組、ポール・ニューマン演じるブッチ・キャシディと、ロバート・レッドフォード演じるサンダンス・キッドは、シェーンとは一見、まったく正反対のベクトルを持った、泣かせる男達である。

彼ら二人は、シェーンほどの悲壮感や孤独感、そしてストイックなオーラを、少なくとも表面上はまとっていない。

おのれの純粋な欲望に忠実であり、晴れの空みたいに楽天的であり、きわめていい加減で不真面目である。

先の喩えでいうなら、ロクに手入れもしていないボロ刀を、鞘に納めておくどころか、ずっと抜き身で振り回し続けている印象のほうが強い。

それでいながら、彼ら二人は、絶対に諦めない。退かない。挫けない。懲りない。

「シェーン」

かじ・けんご　1961年三重県生まれ。「子連れ狼」で知られる小池一夫氏の私塾、劇画村塾を修了後、劇画作家としてデビュー。「"殺医"ドクター蘭丸」「交通事故鑑定人・瞳倫一郎」「宇宙の大空」等、青年誌から少年誌まで多数の連載作品を持つ。テレビシリーズ「エコエコアザラク」の脚本原案及び監修より本格的に映画界との繋がりを深め、「週刊ヤングジャンプ」では映画人インタビューを担当。現在、LAを舞台にオールアメリカ人クルーによる映画をプロデュース中。

Digitized by Google

まともな目で見れば、あまりにも愚かで、恥ずかしいとさえ思えるほどの夢を追い続け、決して得をするはずがない生き方を貫いて行く。

結局、一つとして望み描いた夢を実現させることもできず、傷だけを負い、凄まじい数の銃口に取り囲まれてしまう。

そんなドン詰まりに至ってなお——

彼ら二人は夢を捨てない。

そして、間違いなく死ぬと心の奥底ではわかっていながら、あえて此の世の楽園オーストラリアを目指して、集中砲火の中に飛び込んで行くのだ。

そのブッチとサンダンス、二人の姿がストップモーションとなり、彼らに浴びせられる圧倒的な銃撃の音が遠く鳴り響くラストシーンは、やはり思い浮かべただけで涙涙涙涙涙である。

どうしてそんなバカなことを、という問いに対する答えは、また同じでしかない。

彼ら二人が、男だからである。

それ以後も、様々な男達の映画で、泣かされ続けて来たが（「パピヨン」のスティーブ・マックィーン然り、「ゴッドファーザーPART2」のロバート・デ・ニーロ然り、「男たちの挽歌2」のチョウ・ユンファ然り）、この二作品から与えられた鮮烈なインパクトには、今一歩及ばない。

テレビの洋画劇場を通じてのファースト・コンタクトだったにせよ、人並みに多感な十代後半という時期が、多分に影響していることも確かだろう。

男たちの挽歌

大抵の少年達がそうであるように、僕自身、わけのわからない苛立ちを全身で感じながら、自分は何者であるのか、どこへ向かうべき人間なのか、まず何をなせばよいのか、惑いに惑っていた。

窒息しそうな田舎町、それに輪をかけた学校という名の牢獄、軽蔑するにさえ値しない教師達に、その答えを求めても無駄なことは、どんな青二才の目にも明らかだった。

だが——

映画の中の男達が、渾身の魂をもって教えてくれたのだ。思わず涙するほどの感動と共に教えてくれたのだ。

惑う前にさえ、まず男であれと——。

その教えに、現在の僕が、ほとんど応えられてはいない現実が、今はただただ情け無い。

Digitized by Google

嘘つき映画館 シネマ・ほらセット

第3回
橋本治
ポスター制作
若林伸重

マタ=ハリ

ティム・バートン監督による白石加代子主演の『アダムズ・ファミリー3』が遂に完成したと、外電は報じております。ラウル・ジュリア亡き後は、ダニー・デ・ビートであります。どういうわけだか、ハリウッドでの白石加代子嬢は、独身であるはずなのに「マダム白石」で通っていて、日本人ならみんなマダム・バタフライにしてしまうのはハリウッドの悪いところではありますが、デビュー前からマダム白石の大ブレイクは間違いなしなのであります。なにしろ次回作は、〝宿敵〟デミ・ムーアとの共演による『カラスの仮面』であります。かつてブルース・ウィリスとの夫婦共演の『レベッカ』で、タイトル・ロールのレベッカをデミ・ムーアが演じたまではよかった。そこに、先代の奥様付きの家政婦に扮した白石加代子が、「奥様、お待ちしておりました」と言って姿を現した瞬間、「勝負はあった」と言われて完敗してしまったデミ・ムーアであります。それ以来の因縁のライバルが、天才少女スター姫川亜弓と天才演劇少女北島マヤになって再度激突するのであります。「私は一度だってあの人（＝北島マヤ）に勝ったと思ったことはないのよ」という姫川亜弓の劇中のセリフを読んで、思わずデミ・ムーアの全身は震えたという話でありますから、これはもう楽しみであります。共演は、姫川亜弓の母・大女優姫川歌子にローレン・バコール、ブロードウェイの幻の名作『紅天女』上演に命を賭ける往年の大女優・月影千草にキャサリン・ヘプバーン、〝紫のバラの人〟速水真澄にキアヌ・リーブスという、すごいんだかいびつなんだかよく分からない豪華キャストであります。呼び物は、格闘派デミ・ムーアと情念派白石加代子の両ヘレン・ケラーによる劇中劇『奇跡の人』の競演で、それがあるもんだから、アン・バンクロフトはこの姫川歌子役を熱望したんだそうであります。ああ、階段からゴロゴロ転げ落ちた白石加代子の言う、「見ていて下さい紫のバラの人、これが私のヘレンです」ってセリフを早く聞きたい、見てみたい。早くしないと、キャサリン・ヘプバーンが死んでしまうでしょう。

というわけで、今月はハリウッドでの大ブレイク確実なマダム白石のイギリス時代の作品、ニコラス・ローグ監督による『マタ=ハリ』であります。

かつてはグレタ・ガルボ、ジャンヌ・モローによって演じられた女スパイ、マタ=ハリが、日本の誇る名花・白石加代子嬢によって、昔懐かしい白黒画面（一部カラー）に再現されるのであります。共演は、白石加代子の女スパイを操る悪いオランダ総領事に、「ハリウッドじゃ芽が出ない」と思ってイギリスに帰って飲んだくれになっていた時期の名優アンソニー・ホプキンズ。まだオスカーを取る前の、「なんとなく地味だからちょっとイギリス行って修業でもしてこよう」時代のニコラス・ケイジがスパイとは知らずにマタ=ハリとの恋に落ち、ついでにやっぱり命まで落としてしまう純情なアメリカ青年に扮しております。なんでパリのムーラン・ルージュで活躍するドイツの女スパイにアメリカ青年が惚れなきゃいけないのかという話もありますが、やっぱりここにはロスト・ジェネレイションの『雨の朝巴里に死す』が入っているんでしょう。この役、初めはフランス人青年の設定で、それがイギリス人の設定になって、ニコラス・ケイジだとやっぱりどうしてもアメリカ人にしかならないので、それでアメリカ人青年にしちゃったんだそうですが、「ま、いいか」というようなもんであります。

なにしろ、ニコラス・ケイジはそれほどこの役に入れ込んでいた。ニコラス・ケイジの役は、ドイツの大金持ちの未亡人――『英国式庭園殺人事件』のジャネット・サズマンに囲われる青年の役なんだが、それがムーラン・ルージュの舞台で踊るマタ=ハリに一目惚れをしてしまう。「こんなに濃厚な女性がこの世の中にはいたのか……」というのは、劇中のニコラス・ケイジのセリフでありますが、〝女性〟を〝女優〟に変えれば、これはもうニコラス・ケイジ自身の本音でもありましょう。悪徳総領事アンソニー・ホプキンズをマタ=ハリの愛人と勘違いした純情なアメリカ青年は、その〝恋敵〟の操るまま、自滅への道を辿り、生涯にただ一度の真実の愛を知った美貌の女スパイ、マタ=ハリもまた刑場の露と消えるのであります。ニコラス・ケイジが、恋に死ぬ純情青年を一世一代の大熱演で演じれば、アンソニー・ホプキンズは、

Digitized by Google

もうそれに輪をかけたような憎々しさで大悪党を大熱演して、ジャネット・サズマンはいるだけでもこわいのだが、しかしそんな中で、妖艶なる女スパイに扮した我が白石加代子嬢は、群を抜いていた。

マタ=ハリの踊るジャワダンスの振り付けをしたのは、彼のトワイア・サーブなのでありますが、これが白石加代子の身体感覚に目を剥いて、逆に教えを乞うたという話さえもある。この部分だけがパートカラーになっておりますが、これはもう圧巻で、こわいぐらいというか、真実こわいというか。お代は見てのお帰りかもしれません。

STAFF

監督　ニコラス・ローグ
音楽　ジョージ・フェントン
振付　トワイア・サーブ

原題「マタ=ハリ――暁の瞳」
1988年／イギリス映画

CAST

白石加代子
ニコラス・ケイジ
アンソニー・ホプキンズ
ジャネット・サズマン

Digitized by Google

Almost Cool

オールモスト・クール 134

S・ソダーバーグが『アウト・オブ・サイト』で見せた意外な技倆と体質——その一

芝山幹郎 Mikio Shibayama

エルモア・レナードの小説を映画化するのはむずかしい——この神話は、すいぶん長く言い伝えられてきた。しかし、バリー・ソネンフェルドが一九九五年に『ゲット・ショーティ』を発表して以来、状況はいささか変わった。よろこばしいことだ。

レナードの小説を映画化するのがむずかしいのは、俗にいう「原作の重圧に負ける」ことが原因ではない。そもそも、ドストエフスキーやバルザックの作品とは異なり、レナードの小説は「重圧」など感じさせないようにできている。それどころか、彼は不必要な重々しさやおおげさな身ぶりを厭う作家だ。ひねりにひねったプロット。辛辣でスパイシーなダイアローグ。余白を生かした描写。だれの眼にもあきらかなこの特色は、しかし、たいへん手のこんだプロセスから生み出されている。そう、上質なコンソメを連想していただくとよいかもしれないが、彼はさまざまな材料を複雑に調理して透明でコクのあるスープをつくりだす。だが、微熱を伴うこの透明感とコクが曲物だ。いいかえれば、レナードの小説は、対象となる世界を切り裂いたりこじあけようとしたりしない。むしろ彼は、脂肪をそぎおとした言葉と無頓着な気配のなかに、対象となる世界をふわりと封じ込めてみせる。そして、筋立てや趣向にばかり気をとられていると、この「タッチ」は指のあいだからするりと抜け落ちてしまうのだ。『キャット・チェイサー』にせよ『グリッツ』にせよ、レナードの小説をベースとした映画は、ことごとくこの罠にかかっていたといって過言ではないだろう。

『ゲット・ショーティ』や『ジャッキー・ブラウン』は、この罠をかろうじて切り抜けた。クールでとぼけた登場人物。意図的に急所をはずしたダイアローグ。ひねったプロットに対応するクロス・カッティングの活用。ソネンフェルドは省略を利かせて映画にそよ風を吹きわたらせ、タランティーノは癖の強い登場人物をくりかえし交錯させて映画にコクのあるくつろぎをもたらす。作法こそまったく異なるものの、これはどちらもかなり考え抜かれた処方箋だったといってよい。なるほど、この手があったか、と私は感心した。どちらの映画にも弱点はいくつか見受けられたが、両者はそれぞれの体質を自覚しつつ、レナード世界に特有の微熱やくつろぎや図太さを、かなりの精度でスクリーンに定着させたのだった。

では、スティーヴン・ソダーバーグが監督した新作『アウト・オブ・サイト』はどうだったろうか。じつをいうと、映画を見るまでの私は半信半疑だった。理由は述べるまでもあるまい。『セックスと嘘とビデオテープ』や『KAFKA／迷宮の悪夢』といったこれまでの作品を見るかぎり、ソダーバーグとレナードは体質的に水と油といってよい。思いきり乱暴に裁断してしまえば、ソダーバーグは、作家意識が過剰で、笑いやエロティックな感覚に欠けるやや生硬な映画監督のひとりである。すくなくとも、私の眼にはそう映っていた。そんな彼が、酸いも甘いも噛み分けた平談俗語の達人であるレナードの世界に挑めるのだろうか。下手をすればこれは、哲学科の学生が古今亭志ん生の噺を解釈するような惨状を呈するのではないか。いささかおおげさにいうなら、およそこのような疑念が私の頭をかすめたのである。

だが、この危惧は気持よく裏切られた。結論からいうと、ソダーバーグはめざましい健闘を見せている。意外、といっては失礼にあたるかもしれないが、この人は自身の作家性にこだわるよりも「雇われ監督」としてある種の制約下におかれたほうが、その腕を存分にふるえるのではないだろうか。ふとそんな感想をいだいてしまったほど、『アウト・オブ・サイト』のソダーバーグはいきいきとしている。彼の特性ともいうべき神経症的な潔癖細心が、登場人物の言動に刷り込まれた猥雑や狂躁と化学反応を起こし、なにやら肉感的な気配を醸し出しているのだ。行けるじゃないか、この映画。私は暗闇のなかで思わずつぶやいていた。

『アウト・オブ・サイト』の主人公は、銀行強盗のジャック・フォーリー（ジョージ・クルーニー）と連邦捜査官のキャレン・シスコ（ジェニファー・ロペス）である。冒頭の舞台はマイアミのダウンタウン。白昼、オフィス・ビルを出てきた背広姿のジャックが締めていたタイを道路に叩きつける。すぐそばに見えるのは〈サン・トラスト・バンク〉の看板だ。ジャックは、迷わず銀行に足を踏み入れ、窓口へ歩み寄る。だがその前に彼は、支店長と商談にいそしんでいるビジネスマンの姿を見落としていない。窓口係の前に立った彼はやわらかな表情で「にっこり笑って金を出しな」とささやきかけ、こうつけくわえる。「騒がないほうがいい。

『アウト・オブ・サイト』

Digitized by Google

支店長と話している相棒の姿が見えるだろ」

ジャックの態度に、凄みや脅しの色はまったくうかがわれない。レナード作品の悪党にふさわしく、彼はクールでノンシャラントな態度を崩さない。作戦はあっけなく成功し、ジャックは札束を手に悠々と銀行をあとにする。だが、そのあとがいただけない。近所の駐車場にとめてあったホンダ・シビックのエンジンがどうしてもかからないのだ。あっけなく成功した掠奪をなぞるかのように、ジャックはあっけなく逮捕されてしまう。

ここまでが導入部だ。じつをいうと、この導入部には、映画のサブプロットと軽く接触する描写が隠されている。だが、そのことはとりあえず忘れていただくことにしよう。つぎのシークエンスに出てくるのは、フロリダの湿地帯にある刑務所から脱獄を図ろうとしているジャックの姿だ。ジャックはもと妻のアデルに連絡をとり、車を二台用意させる。迎えに出向くのは旧友のバディ（ヴィング・レイムズ）だ。バディはショッピング・モールの駐車場で、買物を終えた中年女の手助けをするふりをして、車をあっさり調達する。

キャレンが登場するのは、第三のシークエンスだ。私立探偵をしている父親のマーシャル（デニス・ファリーナ）は、彼女の誕生日に三八口径のシグを与え、「FBIなどやめて私の事務所ではたらけ」と説得する。理由はふたつある。ひとつは、FBIが圧倒的な男社会であること。もうひとつは、キャレンがなぜかワイルドな妻帯者とばかり恋に落ちることだ。環境がわるいからそうなる、と父親は信じ込んでいる。現在の恋人は、これまたFBIに勤務するレイ・ニコレットという男。聞いたことのある名前だと思ったら、やはりあの男だった。『ジャッキー・ブラウン』をごらんになった方なら、レイの姿を見たとたん、吹き出してしまうにちがいない。

さて、話はこれから本筋に入る。レイに会いにいく途中、刑務所に立ち寄ったキャレンが車をとめたその瞬間、脱獄を敢行したばかりのジャックが眼の前に出現するのだ。当然のことながら、ジャックとバディはキャレンを人質にとり、彼女の車で逃走を図る。キャレンは車のトランクに押し込まれる。ついで、ジャックもその隣にもぐりこむ。ふたりは狭い空間で背中合せに密着する。この設定が、ふたりの今後の運命と深くかかわってくる。男は、今度挙げられたら懲役三十年を覚悟しなければならない身の上である。女は、連邦捜査官として地の果てまで犯罪者を追いつめていく職務を負っている。呉越同舟などと呑気なことをいっている場合ではない。両者は「不倶戴天の敵」なのだ。だがなんとしたことか（いや、さすがはレナードというべきか）ふたりはそこで映画談義をはじめてしまう。話題は『俺たちに明日はない』からはじまって、フェイ・ダナウェイの主演映画へと飛び火する。『ネットワーク』の彼女は迫力があったね。そういえば、『コンドル』の彼女だってわるくなかったわ……。

背中合せで動きのとれないふたりは、たがいの顔が見えない。密閉された空間に、テールランプの赤い光がにじむ。マイアミまで七十四マイルという標識が車の外を飛び去る。ふたりの肉体的距離はゼロに近いのに、その心理的距離は果てしなくかけはなれている。ところが会話をかさねるうち、無限大だったはずの心理的距離は急速に縮まりはじめる。「脱獄囚とその人質になった捜査官」という相容れない関係にはいつしか水が沁み込み、なにやら親密でエロティックな蒸気さえそこに立ちのぼりはじめてくるではないか。

私は反射的に『或る夜の出来事』のあまりにも有名な一場面を思い出した。そう、クラーク・ゲイブルとクローデット・コルベールが、満室のモーテルでやむなく一部屋をシェアするあの場面だ。新聞記者のゲイブルと富豪の跡取りであるコルベールのあいだには、初めのうちなんの接点もない。それどころか、ほぼ敵対する立場にあるふたりは、ことあるごとに反発しあう。モーテルの一室で一夜を明かす羽目になったときも大騒ぎだ。コルベールはふたつのベッドのあいだをシーツで仕切り「これはジェリコの壁よ」と宣言する。だが、けっして越えられないはずのシーツの壁をはさんで語り合ううち、ふたりの心理的障壁は徐々に崩れていく。

とはいうものの、ジャックとキャレンの関係は、この写し絵とはいえない。『赤ちゃん教育』で描かれるケイリー・グラント（考古学者）とキャサリン・ヘプバーン（女相続人）の間柄や、『女性No.1』で設定されたスペンサー・トレイシー（スポーツ記者）とキャサリン・ヘプバーン（国際政治記者）の関係をもちだしても、やはり事情に変化はない。三〇年代のロマンティック・コメディにあっては、異なった境遇という名の障壁は意外にあっけなく崩れるのが常道だった。しかし『アウト・オブ・サイト』は、九〇年代の犯罪映画にほかならない。むしろここでは、タランティーノが（レナードを露骨に意識して）脚本を書いた『トゥルー・ロマンス』の男女関係を連想するほうが妥当と思えるかもしれない。だが、それはちがう。レナードはこの原作で、「地獄の底までついていく」といった男女関係を設定していない。脚本を書いたスコット・フランク（『ゲット・ショーティ』もこの人の脚本）やソダーバーグも、そういった関係におもむこうとはしていない。もっとふわりとした関係、それでいながらもっとせつない関係――この発想が頭に宿った瞬間から、『アウト・オブ・サイト』の男女関係はふしぎな香りを放ちはじめたのではないだろうか。（この項つづく）

Digitized by Google

田沼雄一 映画を訪ねて

その㊇ 「卓球温泉」の園子が家出し卓球大会を開いた温泉地に向かう

［蓬莱屋］となった田沢温泉の木造三階建ての［ますや旅館］玄関。

「犬神家の一族」（七六年）のロケ地めぐりで初めて長野県上田市を訪ねて以来、すっかり上田の町が気に入ってしまった。数々の映画のロケが行われていることも気に入った理由の一つだが、なにより風景がいい。美しい町並みが心和ませてくれるのだ。あるときぶらっと行ってみたい町。そこに行くと心落ち着けられる町である。

松坂慶子主演の「卓球温泉」（九八年）は上田市内で大々的にロケされた映画。タイトルにある〈温泉〉は上田市内から車で三、四〇分のところにある名湯［別所温泉］と［田沢温泉］のことである。

深まりゆく秋、もうすぐそこまで冬の気配を感じられるようになった十一月中旬、二つの温泉地を訪ねてみた。秋から冬にかけては、なんたって温泉でしょ！

上田市内で撮影された映画のことは上田市役所の浅野之宏さんに訊くことにしている。熱心な映画ファンで、この「卓球温泉」についても撮影中からインフォメーションをいただいていた。浅野さんに撮影場所を教えていただき、二つの温泉地を歩いた。

家を飛び出した園子（松坂慶子）。山道で数人の中年男性と出会う。彼らはバブルが弾けて以来、すっかり客足が遠のいてしまった竜宮温泉の旅館の主人たち。もともとは「たつみや」と呼んでいたのだが、いつからか「りゅうぐう」と呼ばれるようになった。園子はさらに浦乃かなえ（牧瀬里穂）という女性と知り合う。かなえは、園子がいつも聴いているラジオ番組のDJ。じつは番組で呼びかけるかなえの言葉に刺激されて、園子は家出を決心したのだ。

かなえは竜宮温泉の老舗旅館［蓬莱屋］のひとり娘だった。家業を継ぐ気はさらさらない。廃業させてラジオの仕事を続けていく気だった。少なくとも園子と知り合うまでは……。

園子はかなえの世話で蓬莱屋に泊まることになる。その蓬莱屋となったのが田沢温泉の［ますや旅館］。木造三階建ての豪奢な旅館である。山合いの静かな里湯、といった感じの佇まいを見せている。

ますや旅館は島崎藤村ゆかりの旅館でつとに有名。藤村はこの旅館を好み、よく投宿していたという。作品も書いている。一度はゆっくりくつろいでみたい宿である。ますや旅館のはす前に［富士屋ホテル］という宿がある。竜宮温泉の旅館の主人らが考え出した仰々しい［うた

Digitized by Google

［別所温泉］北向観音のゲートの横に［竜宮温泉］のアーチが組まれた。

せ湯」の大オープンセットはここに建てられたそうだ。

蓬莱屋は園子の思い出の温泉だった。新婚当初、夫・哲郎（蟹江敬三）と投宿したことがあった。そのとき遊技場で卓球をした。昔の温泉といえば、なにはなくともまず卓球だった。園子は埃だらけとなってしまった卓球台を見つける。それが事の始まりだった。

園子が、自分を取り戻していくきっかけとなった蓬莱屋ことますや旅館のある田沢温泉と、主要な場面が撮影されていった［別所温泉］はちょっと離れている。車で約十五分ほどといった感じ。

別所温泉は、かつて五所平之助監督、小津安二郎監督が親しんだ温泉地。信州の名湯である。

園子の車が［竜宮温泉］と表示された

卓球大会の場面は［旧西塩田小学校］体育館で撮影された。

［蓬莱屋］（ますや旅館）の三階を掃除するシーンの松坂慶子に演技をつける山川元監督。

鄙びたアーチをくぐっていく場面が印象的。アーチは温泉街のほぼ真ん中あたり、［北向観音］へ続く石段の手前あたりに建てられた。別所温泉の本当のアーチはもっと手前の、上田交通別所線［別所温泉駅］の前にある。

別所温泉は寺町のような温泉郷である。北向観音を始め常楽寺、石造り多宝塔（重要文化財）、夫婦道祖神、薬師堂、そして国宝に指定されている八角の三重塔がある安楽寺が点在している。老舗旅館［亀屋］の大旦那（桜井センリ）の勧めで園子と卓球をすることになる［高田屋］の公平（山中聡）らがトレーニングのために温泉街を走る場面は八角三重塔の安楽寺前で撮影されている。

小津安二郎監督が親しんだ温泉、と書いたが、じつは「卓球温泉」のクライマックスはまさにその小津監督を遠く偲ばせるものだったのだ。かなえの母校、そして園子の発案で造られる卓球センター、卓球大会の会場、それらの撮影が行われたところが、小津監督ゆかりの場所だった。これは意外だった。

別所温泉駅手前の信号を左折、しばらく行くと両側に学校の建物が見えてくる。新しい校舎、昔から建つ校舎。撮影が行われたのは古い校舎のほう。校舎のうしろ、険しい山々がそびえている。山合いの校舎。思わずアメリカ・フォークソングの父母と言われているカーター・ファミリーが残したフィールド・フォークの名曲『丘の上の校舎』のメロディが聞こえてきそうな感じ。

現在はその役目を終え生涯学習などの行事に使われているという［旧西塩田小学校］である。明治時代に建てられた校舎。小津監督が三六年に手がけた、小津監督初のトーキー映画「一人息子」。あの映画で飯田蝶子の子どもが通っていた学校が旧西塩田小学校だったのだ。映画のオープニング・ショット、西塩田小学校の全景が映し出される。

「一人息子」の学校内でかなえが作文を読み、体育館で園子や公平、駆けつけてきた哲郎らが卓球にアツくなっていったのだ。小津映画ゆかりの小学校がスポーツ、卓球大会の会場になっていったこと、案外知られていないのではないか。ひょっとして「卓球温泉」のスタッフも知らなかったりして……な、わけないか。

Digitized by Google

和田誠　三谷幸喜の映画対談

これもまた別の話

●今月のお題「タイタニック」――後編

舳先のラブシーンは近年まれに見る名場面

和田　ジャックはモリー・ブラウンに、息子のだというタキシードを借りて、一等の晩餐会に行きます。食事の時も堂々といろんな話をしてましたね。ここにグッゲンハイムとかメイシーズのデパートの創始者とか、有名なお金持が出てくる。

三谷　その中に、アメリカのテレビドラマ・ファンには見逃せない顔が二つあります。一人はエリック・ブレーデン（註①）。やたらテレビシリーズのゲスト出演が多い人で、映画は「新・猿の惑星」（71）で人間の博士をやってます。『事件記者コルチャック』の「満月に出る狼男の恐怖」というエピソードで狼男を演じてました。これが舞台が豪華客船なんですよ。それとバーナード・フォックス（註②）。『奥様は魔女』のドクター・ボンベイ役の人です。この人も『刑事コロンボ』の「歌声の消えた海」というエピソードで豪華客船の乗組員を演じてるんです。これってキャスティングのお遊びなのか……。それにしてはマニアックすぎるから偶然なんでしょうね。

和田　（笑）。テレビには弱いんで、僕はお手上げです。食事が終わると、葉巻とブランデーの時間になるんだけど「君は政治の話は分からないだろう」とか言われて、ジャックは食堂を出て行きます。ローズに「時計の下で待ってる」ってメモを渡して。そこで「本物のパーティに連れていってやる」と言って、三等のパーティに行って大騒ぎをする。二人を執事がつけてくるんですね。

三谷　執事役のデイヴィッド・ワーナーは、怪奇スターの印象が強い。

和田　他にはどんな映画に出てます？

三谷　「タイム・アフター・タイム」（79）の現代の切り裂きジャック。「オーメン」（76）では車にはねられて凄い死に方をする人です。

和田　ガラスで首が飛んじゃう人？

三谷　ええ。今回発見したんですけど「失われた航海」にも出てるんです。つまり二回タイタニックに乗ってるんです（註③）。このパーティのシーンでローズが踊るじゃないですか。爪先で立ったり。これは後半、ピンチの時に絶対何かの役に立つと思ったのにな。火の中を爪先立ちで逃げるとか。ちょっと面白すぎるか。

和田　ここだけでしたね。つまり彼女はバレエができる上流の人ということなのかな。

三谷　あの重さであれができるのが凄い（笑）。この日はどうしていろんなところでパーティをやってたんでしょう。それとも毎日やってるということ？

和田　そうじゃないですか。船は退屈だから。これは何日目の夜ですか？

三谷　三日目。四日目の夜、沈むんです。

和田　次の朝、婚約者がローズに怒ります。「昨日の夜待ってたのに、お前は下で騒いでた」って。テーブルを引っ繰り返したりしてね。お手伝いさんがオロオロしてましたね。

三谷　ショックを受けてるローズに、お母さんが「うちはお金がないんだから婚約者と仲良くして」って言うんですよね。

和田　金持ちのように見えるけど、政略結婚をしないとやっていけない貧しい貴族なんですね。これは昔からよくあるパターンですね。日本の商業演劇みたいな設定で。お母さんにそう言われて、一旦ジャックのことは諦めるんですね。甲板を婚約者とアンドリュースと散歩してる時、何気ない会話で救命ボートが

註①　タイタニックに乗船した英国系アメリカ人一の富豪、ジョン・ジェイコブ・アスター役。

註②　アーチボルト・グレイシー少佐役。

註③「失われた航海」では、女性教師と恋におちる二等乗客の役。

Digitized by Google

乗船してる人数分ないことが分かる。

三谷　ここは良かった。そうそう、こういう感じがもっと欲しいんです。

和田　ここはちょっとハラハラする伏線ですからね。救命ボートを人数分揃えてないけど、沈まないから必要ないって言うんですね。デッキの外観が悪くなるからとも言ってた。

三谷　別の映画では「タイタニック自体が救命ボートなんです」っていう台詞もありました。甲板でローズをジャックがそっと捕まえて、「もう会わない」って言う彼女に「君は蜘蛛の巣に引っ掛かってる蝶だ」とか「君が飛び込む時は僕も飛び込む」とか何とか言って気持を自分の方に向けさせようとします。

和田　ローズは「あなたとは付き合えない」って行っちゃう。でもやっぱり上流社会に嫌気がさして気が変わって、ジャックのところに戻ってくる。それで例の舳先のシーンになるわけですね。ジャックがローズを舳先の手摺りに上らせて後ろから支える。ローズが両手を離して「飛んでる」って言うと、カメラがバーッと引く。ここもうまく出来てますね。ちょっと気障だけど、やっぱり名シーンですね。

三谷　名シーンって最近見てなかった気がするんですよ。今パロディにされるようなシーンを持ってる映画って意外にないですからね。

和田　そうですね。「地上より永遠に」(53)の砂浜のラブシーンとか、必ずこのスチールが使われるっていうようなのはね。

三谷　今「フライング・ハイ」(80)を作ったら、このシーンが絶対出てきますね（笑）。アカデミー賞授賞式でもビリー・クリスタルがパロディやってましたもんね。この前、ドラマで西村雅彦もやってた（註④）。

和田　その名シーンの後に舳先が映るんだけど、それがそのままモーフィングで今沈んでるタイタニックの舳先になって、現代シーンに戻る。「これがタイタニックが見た最後の夕焼けだった」っていう老いたローズの台詞が入ります。

三谷　その後、部屋で二人きりになって、ジャックがローズのヌードの絵を描くんですね。例のダイヤモンドだけ着けてあとは裸で。

和田　ちょっと納得いかないんですけど、あのダイヤモンドは嫌な男との間の象徴でしょう。それを変に大事にしてる。ジャックにヌードを描かせるのは彼への愛情の証しなのに、そこでダイヤモンドを着けるっていうのは、僕はよく分からないんですよ。ああいう富の象徴は、ジャックと会う時は外さないといけないんじゃないかと思う。

三谷　そうなんですよ。してたのをここで外すんだったら分かるんですけど。

和田　ローズが服をパラリとやると、ジャックが少しのけぞる（笑）。

三谷　何に対してのけぞったんでしょう（笑）。女の裸なんか見慣れてる筈なのに。本当は、ジャックは相当遊んでいて、彼女の方は無垢っていう設定なんですよね。

和田　そうじゃなきゃいけないのに逆に見える（笑）。

三谷　ちょっと納得いかないです。

和田　ここでまたお婆さんに戻って、「私たちが一線を超えたか知りたいんでしょう。がっかりさせて悪いけど、彼はプロフェッショナルだった」って台詞があります。

三谷　ここでは確かにそうですけど、結局何のことはない、後で超えてるんですよね。そんなに偉そうに言うことじゃないです（笑）。これを言うからには、彼とは最後まで一線を超えずに別れて欲しかったな。

和田　そうですよね。二人は戻ってきた執事に見つかって逃げるんですね。追いかけっこみたいにして、船底まで行ってボイラー室を通って。

三谷　エンジンルームも凄いですよね。ああいう質感は今までのタイタニック物にはなかった。

和田　フェリーニの「そして船は行く」(82)も、ああいうところを上手く撮ってましたよ。（註⑤）。

註④　TBSで放送中の「あきまへんで！」、相手役は内田有紀だった。

註⑤「そして船は行く」のボイラー室。

Digitized by Google

三谷　あそこで働いてる人の中に粋なおじさんがいて、二人に気を利かせてくれるとか、そういうのをすぐ期待しちゃうんですけど。「わんわん物語」(55)のスパゲティ屋のおやじさんみたいな人（註⑥）。

和田　でもここの人は「二人はあっちへ行ったぞ」なんて簡単に教えちゃう(笑)。で、二人は積み荷の車に乗り込んで、一線を超える、と（笑）。一昔前の映画だったら、ここは一線を超えないと思うんですよ。今だと超えない方が不自然に見えるってことなのかな。

三谷　でもやっぱり超えない方がドラマチックな感じがしますけどね。

和田　お婆さんもせっかくああ言ってるんだし（笑）。

三谷　まあ、お婆さんが本当のことを言ってるかどうかは分からないですけど（笑）。もう一つ納得いかないのは、婚約者がヌードの絵を発見するじゃないですか。そしてそのまま、しまっちゃうじゃないですか。

和田　一度破ろうとはしますけどね。

三谷　普通、破るでしょう。破らないにしても何で綺麗にしまっちゃうんだろう。

和田　しまわないと、後でキャメロンが困るから(笑)。

三谷　何か、この辺は話に無理があるような気がしてならない。観てるうちは気にならなかったくせに、後で文句言ってる自分がちょっとイヤですけどね。

タイタニック映画の定番感動的な楽隊のエピソード

和田　いよいよ船が氷山にぶつかります。見張り番が目の前にある氷山に気づいて、あわててマイクで知らせる。「面舵いっぱい」っていう知らせがきて、スクリューも逆に回すんだけど、間に合わない。

三谷　ここまでで1時間40分です(笑)。正面からぶつかるっていうより、氷山をちょっと擦った感じですよね。

和田　これだけCGを使って凄い特撮を見せるのに、この映画の氷山ってあんまり迫力がなかったように思うんですよ。今までの映画の方が氷山自体が怖かった気がする。

三谷　モノクロだと、より怖いかも知れないですね。大きさも違うのかな。

和田　三角で白くて。今度のは泥の固まりみたいに見えました。

三谷　よりリアルに作ってるんでしょうね。リアルな方が怖くないのかも知れない。

和田　それはよくあることですね。ぶつかってすぐ船底の方の浸水が始まって、どんどん水が流れ込んでくる。防水壁が閉まっていくところを、船底の乗組員たちが逃げるところは迫力ありましたね。

三谷　甲板では、何も知らないお客さんが氷山の破片を蹴って遊んだりしてます。これも、他の映画でも出てくるシーン。

和田　氷をカクテルに入れたりね（註⑦）。ジャックとローズは船がぶつかって危険な状態にあることを母親と婚約者に知らせに行くんだけど、そこで罠にはめられちゃう。

三谷　婚約者がダイヤモンドをジャックのポケットに入れておくように仕組んで、ジャックが盗んだみたいに見せかけるんですね。

和田　ジャックは捕まって、船員室に手錠で繋がれちゃう。

三谷　あれはどうなんだろう。何も手錠で繋がなくても。どっちみち船から外には出られないんだから。何だか、船が沈むということが大前提にあってのお仕置きみたいな気がする。確かにあのせいでハラハラさせられましたけど。婚約者も執事も、船が沈むっていうことはまだ知らないんですよね。

和田　三等の方には水が来てるけど、一等の人たちは全然知らなくて、結構のんびりしてるんですね。救命具は着けててもそんなに慌ててない。

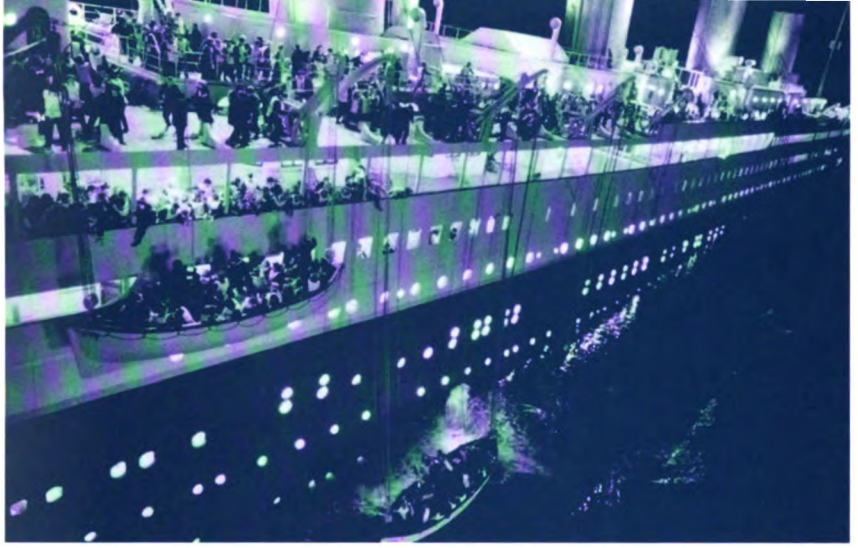
三谷　アンドリュースさんだけは、あと一時間か一時間半かで沈むってことが分かる。ローズに「早く逃げなさい、救命ボートの数は知ってますね」と言う。

和田　船長はSOSを打電するんですけど、救助が来るのに四時間もかかるから、もう間に合わないんで救命ボートで避難し始める。

註⑥「わんわん物語」
捨てられた犬レディと野良犬トランプに、レストランの親父トミーがミートボール・スパゲッティを御馳走してくれる。

註⑦　カクテルに氷を入れるのは「歴史は夜作られる」。

Digitized by Google



三谷　ここで楽隊が、皆の気を落ち着かせるために演奏を始めます。やっぱり楽隊がローズとどこかで知り合うシーンがもっと前で欲しかったですね。本当はあったのにカットされたのかな。

和田　ここだけ楽隊が突然出て来ますもんね。凄くいい役なのに。

三谷　そうですよね。「SOSタイタニック」にもこの楽団のエピソードが出てくるんですけど、やっぱり感動的で、皆が逃げまどってる中で彼らが演奏していると、「誰も聴いてないからもう止めよう」って一人が言うんです。そこまでは同じなんですけど、するとバンマスが「それは食事の時だって同じじゃないか。皆聴いてないけど、俺たちは胃の消化に役立ってるんだ。今も同じなんだよ」って言う。それでもう一度演奏を始めるんです。

和田　なるほど。「胃の消化に役立ってる」っていうのは今回はなかったですね。

三谷　エリック・アンブラーの脚本のこういう部分がいいなと思って。それと不思議なのは、バンマス役の役者さんが凄く似てるんですよ、「SOSタイタニック」と「タイタニック」は。

和田　実際のバンドの写真が残ってて、それに似せてるのかも知れない。そんな間にも船はどんどん沈んでいって、ローズはボートに避難させようとする婚約者を振り切ってジャックを探しに行きます。

三谷　沢山あるタイタニック映画の中でも今回のが優れてると思うのはここからです。前回の「薔薇の名前」の時も言いましたけど、黒澤映画と一緒で、どうやって船が沈んでいくのか、今どこに誰がいて、ローズとジャックがどうやって逃げていくのかが克明に分かるじゃないですか。今までの映画では、船が沈んでいくのは分かるんだけど、どう沈んでいくのかが全然分からなかった。

和田　なるほど。

三谷　今、船がどの位傾いているのかがはっきりしないんです。それに比べると、やっぱりこの映画は凄いですよ。

和田　ローズがジャックを探しに行くと、下のフロアはもう水浸しなんですね。この辺は、時間の嘘というか監督術だと思うんだけど、本当はもっともっと水がきてる筈なんだけど、ギリギリのところまでサスペンスを盛り上げるために、リアルな時間を延長してると思うんですよ。スピルバーグもよくやるでしょう。「インディ・ジョーンズ」なんかで、後ろから何かダーッと迫ってきて、もう絶対に追いつかれるタイミングなのに、次のカットでまだ後ろにいるとか。ここでもそういう手を使ってると思う。

三谷　手錠で繋がれたジャックの部屋にもどんどん水が上がってくる。この辺は、例の幻の名作の誉れ高い「最後の航海」のイメージですね。

和田　そうそう。「最後の航海」ではドロシー・マローンが何かの下に挟まれてて、ロバート・スタックが助けに行く。キャメロンも見てるでしょうね。

三谷　「最後の航海」を見てると、今回も絶対に誰か助けに来てくれると思いますよね。でも誰も来ない（笑）。

和田　しょうがないからローズが自分で斧を持ってくる。

三谷　偶然通りがかった乗務員もあっさり逃げちゃう。ここで助けに来れば儲け役になるのに、勿体ない。あと気に入ったのは、手錠の鎖めがけてローズが斧を降り下ろすところ。

和田　一回棚に向かって練習して、ジャックがもう一度同じところに当ててみろって言うんだけど……。

三谷　全然違うところに当たっちゃう（笑）。

和田　ここは怖いし、ユーモアもあるし、上手いですね。上手く手錠が切れてどうにか甲板に出ると、執事が二人を見つけて、船の反対側にいた婚約者も来る。

三谷　ここで婚約者がローズにコートを着せるんです。これは一瞬、ちょっといい人になるっていうこと？

和田誠さん

三谷幸喜さん

Digitized by Google

和田　というより、ジャックを助けに行く時にガウンを脱いじゃって、ローズが毛布みたいなのを掛けてるから、「そんな格好してるな」って自分のコートを着せるんです。

三谷　体面っていうことだったんですね。やっぱり悪い奴か。

和田　婚約者は「ジャックの席も向こうのボートに用意してあるから」とローズを説得して救命ボートに乗せます。

三谷　婚約者とジャックが甲板に残りますよね。ああいう男二人の関係っていいなと思ったんですよ。同じ女を愛した、何だか微妙な関係。敵対してるんだけど、どこかである種通じ合ったところもあって。だから、その後はこの二人の友情物語になるのかと思ったら……。

和田　全然（笑）。

三谷　結局あの二人は一度も心を通わせない。それが淋しかったです。

和田　そうですね。ローズはやっぱりボートから飛び降りて、船に戻って来ちゃう。ジャックとローズは再会して抱き合うんだけど、婚約者が怒って執事のピストルを持って、バンバン撃ちながら追いかけてくる。

三谷・あの執事の描き方も何か中途半端なんですよ。いくらでも面白くなるのに。せっかくデイヴィッド・ワーナーが演じてるのに。そしてまた二人は浸水してる方へ逃げる。

和田　下の階にもどっと水が来ちゃって、上へ行こうとするんだけど柵が閉まってるんですね。今どきの映画らしくサスペンスの作りが二重三重になってます。柵に鍵がかかってる。その鍵を乗務員からやっと貰うんだけど、今度は水の中に落としちゃう、とか。

三谷　この辺り、しつこかったですね。

和田　イライラする（笑）。もうパニックになってる甲板では、ジャックの兄貴分みたいなトミーが「三等の客もボートに乗せろ」っていう騒ぎの中で船員に撃たれちゃう。

三谷　トミーもあんまり描かれてないんで、感情移入しにくい。そんな奴ばっかり。

和田　婚約者は、はぐれた子供を抱き上げて「この子をボートに乗せてくれ」って言う。一瞬いい人になって、子供を助けるのかと思わせる。

三谷　やっといい人になったと思ったら、自分も一緒にボートに乗るための作戦だった。

和田　悪い奴は最後まで悪い奴って、はっきりしてますよね。執事もそうだし。

三谷　船会社の社長がボートにそっと乗るシーンがありますよね。これもタイタニック物ではおなじみのシーン。

和田　実話なんでしょうね。

三谷　社長はこの後、相当非難を浴びて失意のうちに亡くなったらしいですけど、でも誰かは生き残らなきゃいけない気がするんですよね。一緒に死ぬことが責任を取ることとは思わないので。

和田　保証の問題とかあるしね。社長が死んじゃったらどうにもならない。

三谷　あんな負い目を感じずに堂々と乗ってればよかったのに。逆にアンドリュースも船と運命を共にして立派な人に見えますけど、設計士なんだから本当は残っちゃいけないですよね。事故の真相が分からなくなっちゃう。船長はしょうがないでしょうけど。タイタニック物を観る度に思うんです。

あの二人は簡単に手を放しちゃ駄目なんですよ

和田　もう逃げられないと諦めた老夫婦とか、親子の描写が入る。ここで楽隊が演奏を止めて、「これで最後だ」って一旦別れるんだけど、バンマスがもう一度弾き始めるとミュージシャンたちがまた戻ってくるんですね。

三谷　ここで演奏する曲が映画によって全然違うんですよ。真相を知りたいな。

和田　そこまでは記録がないのかな。楽団の人は死んじゃったんですか？

三谷　全員亡くなったみたいですよ。史実もそうだし、どの映画でも皆そうですね。

和田　演奏を聴きながら船長は呆然と船室に入って、そこも浸水して死んじゃう。

三谷　いよいよ船が傾いてきて、ジャックの親友のファブリッィオは折れた煙突の下敷きになる。結局活躍しないまま死んでいって、何か可哀想だった、いろんな意味で。

和田　甲板では神父さんがお祈りを始めたりするんですね。ジャックとローズはできるだけ長く船に留まろうとして、船の一番後ろに行きます。

三谷　最初にローズが飛び込もうとしたところ。「初めて二人が会った場所だ」って言ってました。

和田　この辺はCGの見せどころで、人々が甲板をどんどん滑り落ちていきます。これはどうやってるんでしょうね。人が落ちる途中で何かにぶつかったりしてますもんね。途中から豆粒みたいに人がパラパラ落ちて。

三谷　ローズが「一体これからどうなるの」みたいなこと言いますけど、真に迫った台詞ですよね。本当にこれからどうなるのか。

和田　船が真っ二つに折れて大勢投げ出されて、裂け目に落ちる人もいる。

三谷　そこで執事も落ちるんですよ。それまでの間、何をやってたかよく分からないんですけど。デイヴィッド・ワーナーはあれで納得したんだろうか。

Digitized by Google

和田　ずっと二人を追いかけてたような気がしてましたけど、そうでもないんですね。後半はもう自分のことで精一杯だった。

三谷　まああの状況じゃ当然ですけどね。それでも追いかけてきたら「ターミネーター」状態ですよ（笑）。沈む途中、停電になるじゃないですか。あれは怖い。海で真っ暗になるのは本当に怖いです。

和田　経験あるんですか？

三谷　船じゃないですけど、子供の頃、夜の海で泳いでて、いきなり浜辺の電気が一斉に消えたことがあるんです。すぐ点きましたけど、その時は凄く怖かった。

和田　僕の子供の頃は停電が多かったですよ、戦後すぐだから。あれは嫌な気分ですよね。

三谷　タイタニックも本当は沈む時はもっと暗かったんでしょうね。映画だから月明かりみたいになってるけど、怖かったでしょうね。

和田　いよいよ沈没する時、「絶対助かるから、僕を信じて手を放すな」ってジャックが言う。

三谷　これは一番最初にジャックがローズを助けるシーンの台詞が伏線になってるんですけど、ここで割と簡単に手を放しちゃうじゃないですか。まあ、あの状態では仕方ないのかも知れないけど、あの二人、この後ラストでもう一回手を放すでしょう。やたら手を放すんですよ、あの人達は。これが納得いかなかった。駄目なんですよ、彼らは何があっても手を放したら。

和田　そうでないと伏線にならないですもんね。まあ手は放しちゃったけど、二人とも水面に出て、ジャックは戸板みたいなものの上にローズを乗せる。一方、救命ボートのモリー・ブラウンたちは、水中に落ちた人たちを見てるんですね。史実でもあるんだし、ここはもう少しモリー・ブラウンが活躍しても良かったと思う。

三谷　彼女は「助けに行こう」って言うんですけど、船員に止められてあっさり引き下がるじゃないですか。

和田　「おとなしく座ってないと、席がもう一つ空くことになるぞ」とか言われてね。

三谷　もうひと踏ん張りして欲しいですよね。キャシー・ベイツは納得したのかな。

和田　冷たい水に浸かって凍えそうなジャックは、懸命にローズに「船のチケットを手に入れたのはラッキーだった、君に会えたから」とか「さよならを言うのは早い、君は生き延びて沢山子供を作って、暖かいベッドで死ぬんだ」と言います。

三谷　ここは皆さん、感動するところ。

和田　皆、泣いたって言うもんね。三谷さん、泣きました？

三谷　僕は映画観て割と泣く方なんで、泣かなかったとは言わないですけど……。

和田　（笑）。

三谷　でもこういうところで泣くのって何か嫌なんですよ。泣いといて言うのも何ですけど。

和田　僕もここでは泣かなかった。ジンときたのは別のシーン。最初の方で、ジャックが「本物のパーティに連れて行ってやる」って言うと次の瞬間、三等のパーティが映るところとか、やっぱり、楽団がもう一度演奏を始めるところとか。

三谷　ここだけの話ですが、キネ旬のSさんもかなりジャックのあの台詞にはぐっときたらしいです。まあ、あの人はディカプリオ・ファンだからしょうがないですけど。しばらくして、生存者を探してボートが一漕ぎだけ戻ってくる。ローズはジャックに知らせようとするんだけど、ジャックは手をつないだまま死んでるんですね。

和田　ここでもまたローズはすぐ手を放しちゃう。

三谷　だから、駄目なんですよ、手を放したら。生存者がここにいることを知らせるために笛を取りに行かなきゃいけないから、手を放すというのも分かるんですけど。分かるんですけど、何か違うんだよなあ。

和田　あの笛はどこにあるんでしたっけ。

三谷　船員が、こっちに生存者がいることを知らせるためにずっと吹いてたんですけど、

Digitized by Google

その人も死んじゃって。それをローズが泳いで取りに行くんです。確かにローズが手を放すのは、「生き延びろ」っていうジャックとの約束を守るためなのかも知れない。これから一人で生きていくんだ、という意思表示なのかも知れない。ですけど、あの放し方は違うような気がする。放すんだったら、もっとはっきり決別して欲しかった。何か、ふわんと放しちゃうんだもん。

和田　そうですね。

三谷　ここでローズが笛を吹きますよね。ここはぐっときました。手を放したのはイヤだったけど、ここは良かった。

和田　で、お婆さんのナレーションで「海に投げ出されて助かったのは、1500人中私を入れて6人だった」って。次のシーンでは、ローズはもう救助に来たカルパチア号の甲板にいる。婚約者が彼女を探しに来るんだけど、ローズは気づかないふりをして、「これが彼と会った最後だった。彼は大恐慌で財産を失って自殺した」っていうお婆さんの台詞が入る。あいつが今でも元気に生きてるっていうんじゃ嫌ですもんね（笑）。

三谷　救助船で、生存者を調べてる船員にローズが名前を聞かれるでしょう。

和田　「ローズ・ドーソン」って、ジャックの名字を言うんですよね。だから生存者の記録には残ってない。

三谷　彼女の名前も残ってないということですよね。そういうところも辻褄を合わせてくれて嬉しかった。

和田　甲板で、婚約者が着せてくれたコートのポケットに、あのダイヤモンドが入ってることに気づきます。現代に戻って、全てを話し終わったお婆さんが、その宝石を海に捨てるじゃないですか。

三谷　ということは、生涯ずっと大事にとっておいたということですよね。これもちょっと僕は納得いかなかったなあ。

和田　あれはジャックとの思い出のものじゃないでしょう。

三谷　嫌な婚約者との思い出の宝石なわけですよ、どう考えても。それを売ってお金にしたわけでもなく、大事に持っていたというのはどういうこと？

和田　あの金持ちと結婚してもよかったって気持ちがあったのかな（笑）。

三谷　それにダイヤを海に戻すっていうのも変ですよ。何度も言うようですけど、ジャックとの思い出の品じゃないんだ。

和田　ダイヤに関しては、いまいち納得いかないというか、スカッとしない。

三谷　どうも騙されてるような感じがします（笑）。自分の部屋に戻って眠ってるお婆さんの横に写真が沢山ありますよね。

和田　そうそう。乗馬やってるのとか、飛行機に乗ってるのとか。

三谷　あんなことがあった後、結構楽しい人生を送ってるんですよね。

和田　ジャックが「君はもっと自由に、乗馬をしたりジェットコースター乗ったりする人生を送れ」っていう台詞がありましたもんね。

三谷　最後、お婆さんはあれで死んでしまったということなんでしょうか。

和田　え、死んじゃうの？

三谷　思いを果たして、ベッドの中で大往生したのかなと僕は思ったんですよ。最後の船の中のシーンは、死んだ人たち全員が迎えてくれたってことかなと思ったんです。

和田　僕は寝てるんだと思った。特に理由はないんだけど。

三谷　最後、彼女の目でタイタニックの中に入っていくと、現在から徐々に当時の船に変わっていって、階段の時計の下にジャックが立ってる。カメラが第三者の目になって、二人が抱き合います。そして死んでいった乗客たちが一斉に拍手。ここだけの話ですが、キネ旬のSさんは、必ずここで大泣きするらしいです。

和田　最後の幻想のところですね。

三谷　二人は、死んでやっと会えた。

和田　なるほど、お婆さんが死んで、死後の世界で再会したってことですね。僕はそこまで考えなかった。

三谷　で、この全員集まったシーンに、『事件記者コルチャック』の狼男がいるんですよ（笑）。それも結構いい位置に立ってる。これまでまったく描かれてなかったくせに、あれはどういうことだろう。本当は彼のエピソードもあったんだけど、カットされたと踏んでるんですけど。和田さん、これ近いうちに絶対完全版がビデオで出ますよ。

和田　ディレクターズ・カットというやつが。この映画、もう何度も繰り返し観てる人が大勢いるんでしょう。

三谷　やっぱり見入ってしまう力がありますからね。

和田　キャラクターがあまりにも紋切り型だとか文句言っても、それは後になってから思うことで、見てる間にそう思ってるわけじゃない。

三谷　そうなんですよ、そこが悔しい。こんな長い映画なのに、一気に見せますからね。

和田　3時間9分もある感じはしないですもんね。退屈しないし。やっぱり監督の力量があるってことと、CGを駆使した、思わず引き込まれちゃう画の力もありますね。満腹感を味わって映画館を出てこられる映画でした。

●次回の映画は…

「猿の惑星」

Digitized by Google

追悼 淀川長治

「日曜洋画劇場」の解説をはじめ、独特の語り口で映画の素晴らしさを伝える一方、戦前から見続けてきた映画に対する厖大な記憶と深い愛情に裏づけられた鋭い批評で多くのファンや映画界に影響を与えた淀川長治さんが、さる十一月十一日、心不全のため亡くなられた。享年八九歳。一カ月ほど前から体調がすぐれず入院、治療を続けながらも、死の前日までテレビ収録をこなすなど、最後まで現役の映画評論家として活動し続けられた。本誌でも古くから常連の筆者の一人として健筆をふるい、対談、座談会などにも頻繁に登場していただいた。八二年から足かけ三年にわたっての連載となった『淀川長治自伝』では、八二年度と八四年度にキネマ旬報読者賞も受賞されている。

映画と映画ファンに対してなしえた淀川さんの業績を讃え、本誌では今号とは別にあらためて九九年一月下旬号を追悼号とする予定です。

チョーさんの仕事の素晴らしさ

双葉十三郎

チョーさんに初めて会ったのは1934年の6月13日の夕方、ぼくが住友へ入社して大阪へ転勤した時ね。だからもう65年ぐらいのつき合いになる。「6月13日の夜」(32／スティーブン・ロバーツ監督)っていう好きな映画があったんで、日付と時間をよく覚えているんです。チョーさんはユナイトの大阪支社にいた。その時観せてもらったのは「濡れた拳銃」(33／ローランド・ブラウン監督)。彼の好きな映画。わりと面白いです。ハードボイルドでね。

でもその前の話があってね。ぼくは『新映画』という雑誌に書いてて、チョーさんはね、あの頃『映画世界』なんかでちゃんと批評書いていたのに、こっちの評論欄にウイリアム・C・デミルの「明暗二人女」(32)というのを観て投書してきた。昭和7年だね、それをぼくが選んだっていうんで、チョーさん喜んじゃってね。それでも、手紙のやり取りはなかった。ぼくはそういうの不精ですから。そんなことで、初めに会った時から、もう「オウ！」っていうようなもんでね。淀川さんなんていうより、初めから「チョーさん」みたいな口の聞き方でね。でも、大阪行って、ぼくがいきなり大阪の悪口言ったもんだから、するとイヤーな顔するんです(笑)。

チョーさんにはずいぶんユナイトの映画、観せてもらった。でも、ぼくは実を言うと映画よりか宝塚(少女歌劇)とか、SKD(歌劇団)の方ばかり行っていたのよ。それに、週末には東京へ帰っちゃったものだから、彼、冷たいって怒ってね(笑)。

Digitized by Google

ぼくは3か月ぐらいで東京へ帰ったけど、後で彼も東京へ移ってきてね、近くへ下宿したの。時どき、メシを食いにきてもらった。彼は美食家だったけど、ぼくは何でも食べるのよ。食べながらおしゃべりはするんだけど、映画は一緒には観なかったな。観た映画のことも言わないし。「駅馬車」（39／ジョン・フォード監督）の宣伝でもって大当たりさせて、ウォルター・ウエンジャー（製作者）から銀時計を贈られた話はどっかに書いてあったな。

戦争中、チョーさんは東宝の宣伝部にいたのよ。ぼくが「姿三四郎」（43）をやたら褒めたもんだから、黒澤監督に会ってみようって話になって、チョーさんが紹介してくれて、野口久光君と4人でわぁわぁ喋ってて、絵コンテなんかね、（監督に）持ってきて見せてもらって。「あんた、監督になるよりは絵描きになった方がよかったのに」っていったら、（黒澤監督は）口とんがらせて、聞いてたけどね（笑）。

まあ、戦争がおわって、彼が『映画之友』の編集長になってからは、ずいぶん一緒に観た。試写の帰りには、必ず喫茶店に寄って喋ったわけですよ。そういうのわりと今はないでしょ。映画の話だけしてた。何しろ、お互い二人とも、昔から随分観てるでしょ。「あれがね」「そう。あれがね」って言う話だけで通じちゃうんだよね。ハタで聞いている人は何の映画の話かわからないって言う。座談会の時なんか随分困ったよ。いちいちぼくが注釈つけたり、司会者がテロップいれたりね、余計時間を取っちゃったりしてね。

他の人の（映画への）無知？　それは怒ったりはしなかった。ぼくもないですよ。人間それぞれだからね。でもチョーさん、そういうこと教えてやる精神があるんだよね。たしなめて教えてあげる優しさがあった。ぼくはそういうの面倒くさくてダメなんだ。

チョーさんのガールフレンド？　聞いたことなかったなぁ。ぼくも家庭の事情なんかも無視するほうだったから、（私生活には）ノータッチというつき合い方をしてました。でも、お母さんに対しては、本当に孝行しているというのははた目からでも分かった。

あの時代が一番のびのびしていて、楽しかったんじゃないのかな。自由にやっていたからね。うまくいったと思いますよ。『映画の友』とかやってさ。

彼がテレビで解説をはじめたのは1960年、『ララミー牧場』から。偉いよ。ぼくと違ってそういうことができる人は偉いよって言ってたんだけどさ（笑）。オーディオの世界っていうか、マスメディアを通して、〈映画の世界〉を広げたっていう、画期的なことをやってね。もう彼の後はああいう人は出てこないと思う。これからの人はやりにくいだろうね。今まで映画見なかった人がテレビでチョーさんのあの解説を聞いて、映画の楽しさを知ったこと、それはすごいですよ。だいぶ昔、『文藝春秋』で書いたこともあるんですけど、そういうことをやった人は今までいなかったし、彼の成功は世界的なものですよね、映画批評家、解説者としてね。

チョーさんのは関西弁でも神戸訛りで、大阪訛りと違って柔らか味があるんです。やっぱり天性というか、あの語り口調はすばらしいと思いますよ。あんまり気に入らない映画も褒めたって？　それは身すぎ世すぎですよ、しようがないんじゃないかな（笑）。彼はそういうことうまいんだよね。非常に柔軟性があって、すらりすらりと面白いとこだけを先ず喋るでしょ。そこが話術っていうのかな、話芸でしょうな。

チョーさんの批評の一番根本にあるのは、文献とか資料とかに頼らずにすべてが感性と体験に基づいているということでしょうね。外国行っても、スターや監督、プロデューサーと実にざっくばらんに話しをする。それを日本に伝えるんですね。たとえばチャップリンのことをあんなに多く熱心に語った人、いないでしょ。文字の上からではなく、彼の場合はそんな外国で書かれたものを孫引きするってことは絶対にありえないですね。美文調だけど、忠実に語っているわけで、それが非常に力強いですよね。アカデミズムというのとは違うんです。こういう人他にいないです。ぼく？　ぼくは孫引きはしないけど、彼に比べたら体験は百分の1ぐらいですよ。千分の1か。とにかく彼はわけへだてなくいろいろな人とつき合うんです。谷崎（潤一郎）さんとか、吉行淳之介とか。それがみんな彼の批評の元になっているんだよ。

それと、彼のことをみんな映画一筋に生きてきたというけれど、あれは嘘でね。本当は文楽とかね、歌舞伎とかバレエが大好きでよく見ていた。綺麗なものが好きなんだよね。文学だったら、泉鏡花が好きでしたね。これを言っておかないと、彼を語ることにはなんないじゃないかな。映画への教養っていうものは、芝居や文学とかの理解があるから、あれだけ豊かになれるっていう、そこを見逃してもらっちゃ困るんだよね。マスコミが馬鹿のひとつおぼえのように映画一筋って簡単に言われちゃ困るんだ。

最後に会ったのは10月14日ですね、東大病院で。ぼくは病院、嫌いだからイヤな予感がしたんだけどもね。別れるとき握手して帰ってきたの。ぼく、眼が悪いんですよ。一緒に行った人が「淀川さん、手だしてますよ」っていうんで、握手して帰ってきたの。声は元気だった。だってテレビ解説を毎週火曜日に収録してたからね。チョーさんとぼくの共通の友人である野口久光君が前に死んだ時にね、赤坂の病院に見舞いに行って、そのときも「野口さん手だしてますよ」っていわれて握手したんだよね。それから2週間ぐらいして亡くなっちゃた。だからふっとそれを思い出して、チョーさんと握手している最中に、不吉なものがあったんだけど……。

（構成／桂千穂）

Digitized by Google

映画の友　友の会と軽役会

日野康一

映画のこと人生のことを教わった恩師に対し、20以上も年下なのにあえて「淀川さん」と書かせていただく。ひと昔前「先生とは何事です。私は弟子を取りません。何十人、何万人、みんな映画を愛する仲間です。こんど先生と言ったら、私、口ききませんよ」と叱られた。勝手に「弟子」と名乗る人はいる。

戦前から映画世界社が発行する『映画之友』という総合ファン雑誌があった。戦争中の雑誌統合で休刊、戦後の昭和21年4月号からアメリカ映画専門誌として再発足した。CMPE（米メジャー10社を配給する占領期の巨大配給組織）宣伝部員だった淀川さんは、新しく創刊した洋画専門誌『スクリーン』を経てライバル誌『映画の友』に招かれた。編集長は厳しいので名高い映画評論家・大黒東洋士氏。そのころから淀川さんは横浜オデヲン座のロビーで月例の「映画を観て学ぶ映画会」でしゃべっておられた。東京から駆けつける熱心なファンもいた。

『映画の友』編集部・佐藤有氏が世話して昭和23年4月2日、新宿ヒカリ座で「ミネソタの娘」鑑賞会と座談会を開いた。つぎは話だけにしよう。10月30日午後2時に東京都立上野高校で第1回東京「映画の友」友の会が開かれた。階段教室にぎっしり詰まった100人以上の人いきれに驚いた。ほとんどが高校生。栃木、千葉、茅ヶ崎、大阪からも来た。淀川さんの新しい映画の話を食いいるように聴いた。出席者たちがひとことスピーチする。あっという間に2時間が過ぎて質疑応答、発言できなかった人たちが淀川さんの前へ押しかけてひざつめの質問攻め、時間大幅超過の7時に終わった。

ほとんどが初対面、つぎの瞬間、幼なじみのように打ち解けて、すごい連帯感に結ばれていた。友の会フレンドの結束は中学高校の同級生よりも強い。淀川さんの話術は回を重ねるごとに磨きがかかる。ウィリアム・ワイラー、ジョン・フォード、ヒッチコック、そしてチャップリン、西部劇、日本映画、アカデミー賞のこと。映画世界社に来た人をゲストに連れてきてしまう。ニューヨークへ出張して「モロッコ」の日本最初のスーパーインポーズ字幕を作った田村幸彦氏、漫画家の杉浦幸雄氏、シナリオ作家の井出俊郎氏、「青い山脈」のアイドル杉葉子さん、高名な映画評論家飯島正氏、ギニョール（手で操る）人形の実演。ニュース映画録音会社の御法川清一氏は16ミリ映写機をもち込み、チャップリンの短編を映写した。年末には数年前に公開された「スイング・ホテル」のアカデミー主題歌賞曲「ホワイト・クリスマス」を淀川さんの"指揮"で合唱した。

上野高校は350人の超スシ詰め、当時の上野は治安が悪く、午後6時以後は公演に入れない。第10回から移った永田町小学校600人講堂も満員だった。

目の前で痛烈に淀川さんを批判した丸坊主は「あんた、もう来ないでいいですよ」と言われた。佐藤重臣氏だった。

年齢不問、50歳以上も歓迎、会費なし、ミニ会報『グリーン・イヤーズ』（「育ち行く年」の原名にちなむ）は実費と郵送費。のちにわずかな会場費を負担した。

『映画の友』友の会は全国にひろがった。恐らく戦後最初の映画運動だろう。友の会は淀川さんによれば「読者と編集者が心をひとつにして握手する」コミュニケーションの場であり、損得とイデオロギー抜き、純粋に若い人たちと、若い人たち同士が映画を語りあった。

昭和24年3月、東京の翌日に横浜友の会がはじまった。以来40年間も鶴見の不便な場所にあるお宅から送り迎えした会員がいる。東京横浜合同で箱根へピクニックに行った。淀川さんは関西（京都、名古屋の友の会に出張した。函館、松山、岡山、大阪、平、姫路、広島、浜松、新潟、川口、松本、八王子、郡山、仙台、盛岡、札幌、秋田、諏訪、富山、金沢、尼崎、福井、武生、神戸、宇部、関門、鹿児島、大分、八幡、福岡、三井紋別、川崎、千葉、鹿児島川内、倉敷、長崎、佐賀、今治、坂出、福知山、前橋、青森、福山など一時は50を越えた。

東京友の会は昨年50周年を迎え、東京タワー前の科学技術振興会館で毎月第2土曜日に、横浜も年に1回開いている。

東京と横浜だけで万単位の人材を社会に送り出した。実業界にも大物がいる。映画やテレビ畑はザラ、大林宣彦監督、永六輔氏も友の会で見た顔のようだ。告別式に参加した新聞記者たちは「ぼくも、私も行きました」と語っていた。

『映画の友』の経営者は伊東温泉の旅館経営に手を出して失敗、伊豆急行の開通で客足を沿線に取られて行き詰まって倒産、雑誌は昭和43年に歴史を閉じた。

上野高校時代の一期生を中心に、主に洋画関係で働く十数名が淀川さんを囲む「軽役会」を結成してよく集まった。偉い重役にならず、やむなく重役になるときは抹殺されるか、罰金1万円を払えば首がつながる掟。淀川さんだけ会費を徴収しなかったら「私を仲間はずれにするの」と怒った。つねに割り勘だ。出席しないとサカナにされるから万難を排して出なければならない。昭和36年には『キネマ旬報』見開きグラビア頁「映画のファクター」に紹介された。

軽役会会員は60代オジンになった。丸の内スバル座の元副支配人・石川初太郎氏、そば評論で名高い元大映洋画部の富永政美氏、ワーナーの名宣伝部長だった佐藤正二氏は新潟友の会、ビデオ通販の佃善則氏も松山の創始者、そして筆者ほか。岡山から出てきた水野晴郎美少年は淀川さんに「水奴」と呼ばれ、外国映画輸入配給協会常任理事の要職にある竹内清和氏はフランケンシュタインの怪物のように歩くので「ポリス（カーロフ）」のニックネームを頂戴する光栄に浴し、業界では当たり前に通用している。そして『映画の友』編集部員で外国テレビ・フィルムの第一人者・乾直明氏、西部劇の権威・田中映一氏や数人の映画宣伝マンは故人になった。

この1月に洋画ポスター・デザインの第一人者・谷名洋三氏の急死をご報告したとき「苦しまないで死んだ？　それはよかったね。私も苦しまないで死にたいね」。淀川さんを囲む最後の軽役会は3月だった。かなり衰弱して大儀そうだったが「昔から知ってる人だけでワイワイ騒ぐの楽しいね」と喜んでおられた。相当疲れたはずなのに、試写室でお目にかかったとき「つぎはいつやるの、真っ先に時間を都合するから、電話してね」とおっしゃっていた。

淀川さんのモットーのひとつは「歌舞伎、文楽、新劇、バレエ、音楽は最高一流のものを、どんな高い金を払っても観ておきなさい。それは必ず血となり肉となって戻る」。「映画のことを書くときは愛情をこめ、人が精魂を込めて作った映画をこきおろしたり、偉そうに踏みつけたりしない。悪いと思ってもどこかにマシなところがある。それでも悪かったら書くのをやめなさい」と教えられた。

友の会は青春の思い出だ。軽役会もつづけて淀川さんのことを語り合いたい。

Digitized by Google

追悼 淀川長治 読者の便りから……

●淀川さんが亡くなられ、氏の偉大さというのを改めて痛感させられました。私も最初に見た映画は何かという記憶がない程、幼少の頃から映画に漬かって育ちました。三つ子の魂百までとはうまく言ったもので、いまだに映画三昧の日々を送っています。地方にいては見られない作品を追いかけて大阪、東京まで出かけることもあります。"映画ばかり見て……"と叱られた頃もあり、最近では呆れられることもあり、自分でもこんなことを続けていいのかなあと考えてしまうこともありました。しかし、日曜洋画劇場の最後の収録風景や追悼番組を見て、映画の好きな自分に、もっと誇りを持っていいんだと勇気づけられたような気がします。最後の言葉が"もっと映画を見なさい"だったと聞いて、私は誰に何を言われようと馬鹿にされようと、一生映画を見まくってやる、と心に決めました。映画って本当に素晴らしい。淀川さん、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。（**鎌田一也・香川県善通寺市・学校職員・27歳**）

●11月12日。いつものように朝刊を広げて、目に飛び込んできたのは「淀川長治氏死去」のニュース。心が凍った。いつかその日はやってくると心では思っていたが、こんなに早く訪れるとは。信じられない。寂しい。悲しい。今もまだ生きていらして、アテネフランセでお会いできるような気がする。淀川さんの大ファンの私が、アテネフランセの映画塾に参加したのは、ただひたすら淀川さんに会いたかったから、そして同じ部屋で同じ空気を吸いたかったから。講演後、厚かましくもサインをねだりに行くと、お疲れなのに、いつも快く応じてくださった。握手を求めたら、その手は、白く柔らかく小さくて、マシュマロのようだった。今でも目に浮かぶのは、4Fのホールまで、係の人に背中を押してもらいながら一歩一歩階段を上がっていらした姿。場所取りの行列をしている私達に「ありがとう。よくいらっしゃいました。」と優しい笑顔。そして係の人に「早く中に入れてあげて」と気を使ってくれた。でも、回を重ねる度に小さな体が、増々、小さくなっていくようで気がかりでした。そして、七月十八日。最期の映画塾は、車イスでの講演でした。内容は確か「東海道四谷怪談」。体調が悪いとおっしゃりながらも、映画の話になると目が輝き、初めはかすれていた声にも張りが出て、私達も淀川さんの話に魅せられ、映画の名場面が、脳裏に鮮やかに浮かんでくるようだった。そろそろ次回の映画塾のお知らせが来るかなと待っていたのに残念。TVで見せるニコニコおじさんと違って、文章になった映画評は、厳しく冷静。奥が深く感性が鋭い。何気ないシーンからも必ず何らかのメッセージを受けとる。その観察力のすごさ。私に映画を見る姿勢を教えてくださった。淀川さんはきっと今頃天国で、大好きだったチャップリンやジョン・フォード、そして黒澤監督と映画の夢を語り合っていることでしょう。さようなら淀川さん。ありがとう淀川さん。（**庄山朱実・神奈川県横浜市**）

●淀川長治さんの死去のニュースはびっくりしました。毎週テレビの日曜洋画劇場の解説で元気な姿に接していたので、淀川さんだけは永遠に生き続けるような錯覚におちいってましたが……。僕は淀川さんの弟子にあたる田中英一さんの「西部劇通信」に学生時代にかかわっていたので淀川さん本人にも何度かお会いした事もありました。勝手に淀川さんの孫弟子のつもりでいましたが、これで師を二人とも失くしてしまいました……。（**岡部司・東京都清瀬市・編集業・40歳**）

●10月下旬号で黒澤明を、11月下旬号で須川栄三を見送ったばかりだと言うのに、今度は淀川長治である。一体今年は何人の映画人の訃報を読まねばならないのだろう。淀川氏の解説でお馴染みの日曜洋画劇場は、三本立三番館の近くに住む、邦画しか知らなかった少年に外国映画（特にアメリカ映画）の面白さを教えてくれた塾のようなものだった。今にして思えば、学習塾もそろばん塾も三日坊主で逃げ帰ってしまうような私が、毎週欠かさず映画の勉強にのめり込んでいけたのは、氏の軽妙かつ愛情溢れるトークがあればこそであった。氏はどんな映画でもけなすことのない解説者として有名になってしまった感があるが、一方で誌上で垣間見せる辛口批評でどんな大作家の作品でも一刀両断してみせるスゴ味の持主であったことも、キネ旬の読者諸氏なら御存知のことと思う。そんな淀川氏の笑顔にも、ビデオソフトや衛星放送に顔を向けているうちにいつしか御無沙汰してしまっていた。いわば日曜洋画塾中退である。私は今、淀川長治死去を伝える11月12日付朝刊の、例のサヨナラポーズ写真に向かって"塾長サヨナラ"と繰り返しつぶやいている——（**間瀬知洋・愛知県名古屋市・会社員・44歳**）

●淀川長治さんに一番間近でお目にかかったのは83年2月15日に松竹セントラルで行われてたキネ旬の82年ベストテン表彰式の日でした。淀川さんはその年の読者賞を受賞され、式後思いがけなくロビーでお会い出来たので色紙にサインをお願いしたところ、お忙しいにもかかわらず心よく日付を入れてサインして下さいました。書きながら「本当は皆さんにしてあげたいのだけれどこれから予定があるのであなたで最後にしましょうね。じゃあさようなら。」とおっしゃってロビーを後にし、劇場前の交差点を東劇方向にお一人で渡って行かれました。訃報に接し15年余り前の思い出がついこの間のごとく蘇りました。ご冥福をお祈り致します。（**武修三・群馬県新田郡・会社員・46歳**）

●私が映画を観始めた中学生の頃「チャップリン映画」の大々的なリバイバルがあって確か、淀川さんがチャップリンの素晴らしさをお話ししにみえました。私自身も夢中で映画館に通い「独裁者」や「街の灯」などに感動して幾度となく、涙した記憶があります。ご自身が本当に映画が好きという気持ちが伝わってきて、人生にも共感いたしました。映画の素晴らしさをお教えいただきありがとうございました。あの世で黒澤監督と再会されているのではないでしょうか。心よりご冥福をお祈り申し上げます。（**岩瀬美智子・愛知**

Digitized by Google

県西尾市・会社員・40歳）

●どの本、どの雑誌に載っていたのか思い出せないのですが、中学時代に読んだ淀川長治氏の文章に「人間にとって最も恥ずかしいことは教養が貧しいことです」という一節があり、それは自分でも不思議なほど私の中に打ち込まれ、以来、ことあるごとに幾度も繰り返し思い出す一節となりました。氏の講演会には2回足を運んだことがあります。その講演の最中、氏は唐突に、最前列でふんぞり反って足を放り出すように座っている「教養が貧しい」若い男性を叱ったのです。穏やかで柔らかな叱り方でしたが、講演者の目に入る位置でだらしない座り方をしている不礼に対する厳しさがはっきりと垣間見えました。その時、私はつくづく氏を「正しい人」だと痛感し、更に尊敬が深まりました。何十年も前に見た映画、サイレント期の映画を、まるで現前に映像が浮かぶように語って聴かせることができる人は世界的にみても氏ただ一人だったのではないでしょうか。身も心も映画に魅了されている者ならば絶対に一度や二度は夢見ずにはいられない「映画に捧げた人生」を、氏はやり遂げたのだと思います。あちらの世界で黒澤監督は「こんなに早く来ちゃったの、えっ？」などと言っているかもしれませんん。若輩者が言うべきことではないかもしれませんが、端から見て嫉妬せずにはいられないような素晴らしい生涯だったのではないでしょうか。ですから我々は黒澤監督の「夢」の最後のエピソードのように祝福して送って差し上げるべきなのでしょう。そして私も、氏のような正しい人になれるように、これからもあの一節を大切にしていきます。（生田香枝子・愛知県名古屋市・学生・19歳）

●昨日淀川長治氏の死を知る。89歳。晩年は鶴見の自宅に帰らず、ホテル住まいと聞いた。以前映画の友の会で、先生の話がおもい出される。生涯独身をとおした。お互いにそれぞれの生き方がある。先生が蒐集した資料はいずこへ。そんな野暮な考えはどぶの中に。哀悼。（巻山晴彦・東京都荒川区・会社員）

●東宝東和の細長い試写室の最前列中央。12年前、二十代はじめの僕が知らず占領してしまったこの場所は、淀川長治先生の指定席のようなものなのだと後で聞き、恐縮した。映画界の巨人は僕にとってもカリスマであり、同時に子供の頃から親しみやすかったサヨナラおじさんそのままの人でもあった。大好きだった。安らかにお眠りください。（おだかのりよし・千葉県柏市・商売人・33歳）

●寅さんが、座頭市が、三十郎が去って、今年も黒澤明監督の新作が観れなくなった映画界。その悲しさがいえないうちに淀川さんがなくなってしまった。「サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ」なくなったときに何度もTVで流される淀川さんの言葉は本当に心にしみます。「もっと映画を観なさい」それは「しっかり生きなさい」と同じ意味だと思う。「カンゾー先生」が走って、走って、走って生きたように、今生きている人は頑張らんとな。淀川さん、チャップリンに会えたかな。ありがとう、ごくろうさまでした。（西村重喜・千葉県千葉市・会社員・46歳）

●虫の知らせというのだろうか、今頃はあまり見なくなった日曜洋画劇場の「ブラックジャック」というタイトルにひかれ、久しぶりに見て、小四の息子にこれが、サヨナラおじさんだぞと教えた。その放送の三日後に亡くなられた淀川長治先生。最初の出会いは小学生の終わり頃見た日曜洋画の「白鯨」だった。心酔!!　中学生の時には「鉄道員」の先生の解説を作文にも書いた。ファンレターも送った。年賀状も送った。大学生の時には自分でつくったミニコミ誌をさしあげ、サインもいただいた。考えてみればぼくは淀川学校の生徒だった。日曜洋画劇場のクロージングテーマ曲が今も変わらないのがうれしい。長い間、夢を有難うございました。（田中正信・山口県宇部市・鉄道員・43歳）

●淀川さんにはじめてお目にかかったのは、73年横浜・鶴見の

男性が読んでも面白い!
カルチャー情報満載で女性のオフタイムを応援する!!
Pause
月刊パウゼ1月号
11月21日発売
定価400円（税込み）
時集
DIVA（歌姫）伝説
CINEMA
イン&アウト
作品論／F・オズ　論／他
インタビュー
「6デイズ/7ナイツ」ハリソン・フォード
「アルマゲドン」リブ・タイラー
短期特別連載
小林千絵の"もっと映画を見ようよ！"
第9回ゲスト　役所広司
話題作を試写で先取り
"Pause CINE CLUB"
Vol.74「スモール・ソルジャーズ」
Vol.75「精霊の島」
Vol.76「のど自慢」
Vol.77「メリーに首ったけ」
Vol.78「レ・ミゼラブル」
©1998 TWENTIETH CENTURY FOX.
詳細は本誌をご覧ください
試写会ご優待など特典がいっぱいの
"Pauseクラブ会員"募集中!
（入会金・年会費などいっさい無料）
全国有名書店・一部コンビニエンスストアで
毎月23日発売
〒153-0043 東京都目黒区東山2-6-4 東京学参ビル2F
東京学参株式会社
☎03-3794-3151（編集）03-3794-3159（販売）

Digitized by Google

追悼 淀川長治 読者の便りから……

住宅地の路上。ぼくは当時高校2年生で、JR鶴見駅の丘側にある友人の家へ遊びに行く途中だった。向こうからTVでおなじみの淀川さんが歩いてこられるのをみてドキリとしてしまった。画面そのままの微笑みをたたえ、すれちがうときに視線が合うといっそうニコヤカになられた。ぼくは思わずおじきをしてしまったものだ。ホンワカあたたかな気持ちになり、友人宅では淀川さんや映画の話で盛りあがった。きくと、すぐ近くにお住まいで、誰に対しても笑顔で接しているのだという。ぼくは駅からみて海側に住み、その後淀川さんは引越しをされたとかで街中でお会いすることはありませんでしたが、85年、96年のトークショーでの元気な姿やおしゃべりは忘れられない。亡くなったのはさみしいけれども、きっとたくさんの人たちの心に生き続けるにちがいない。（島貫誠・神奈川県横浜市・公務員・42歳）

●淀川先生が亡くなりました。日本の映画界に貢献した偉大な映画人が亡くなったと言っても異論を唱える人はいまい。確かに監督でも俳優でもない一映画評論家にはすごませんが、お茶の間でも広く普段は映画館に行かない人たちにも映画の楽しさを教えてくれた人でもあります。もちろん私なんかが生まれる遥か以前から映画評論の仕事にたずさわり、もの心がついた小さい頃からサヨナラおじさんが紹介してくれた映画は面白いという感覚が自然と身に付きました。それは今でも変わりありません。20年程前に先生のTV番組でハガキを読まれたことがありました。そのときいただいた色紙は今も大事に家にかざってあります。多分これからもずっとはずすことはないと思います。（小沢正行・神奈川県川崎市・会社員・35歳）

●淀川長治さんがお亡くなりになられた。映画の楽しさ、面白さをとても魅力的な話術でたくさんの紹介してくれてどうもありがとうございました。淀川さんの話を聞いて、映画好きになった人達は、いっぱいいると思いますよ。（早川みつえ・東京都江戸川区・会社員・30歳）

●淀川長治氏が亡くなってしまった。せめてあと2年、1900年代を生き抜いてほしかったのに。ともあれ天寿を全うされたのだから、笑顔でサヨナラ、サヨナラ、サヨナラとお送りしたいと思います。（松村清志・東京都新宿区・映画ライター・40歳）

●淀川長治氏が亡くなられた。私にとっては小学生の頃からテレビでおなじみのサヨナラおじさんだったので、好きなスターや監督が亡くなったとは別の喪失感が日々深まってきている。淀川さんの語り口のおもしろさを実感したのはラジオ番組であった。ちょうど高校の時だったので、よけい印象に残っているのかもしれない。ラジオは音しか聞こえない。それだけに想像力を駆きたてられるのであった。「おい、ビリーやないか、こんな所で何しとるや」なんて調子で人物伝をまるでたった今見てきたような映画の一場面のように話し出すと、ぐんぐん淀川節ワールドに引き込まれ聞きいってしまったものだ。それは語り口のうまさを越え、本当に映画命というべき情熱によるものである事を今改めて思い知らされている。（小山茂昭・静岡県賀茂郡・団体職員・40歳）

●淀川長治さんが逝かれました。マスコミでの肩書が映画評論家だったり映画解説者だったりしますが、私には「映画ファン」と云う呼称が一番しっくりするヒトでした。（和田孝之・東京都千代田区）

●淀川さんが亡くなりました。日曜洋画劇場を見る度、あぁこのおじさんは映画が大好きなんだなあと思ったのを思い出しました。ここ数年、解説にわかりづらい点もありましたが、何よりハートを感じるコメントの数々。天国でもきっと映画を楽しんで下さるように……（小山知子・神奈川県横浜市・会社員・28歳）

●淀川さんを失ったこの淋しさはいったい何だろう。まるで肉親を失ったような気持ちである。私がこれまで得た知識や経験のなかには、淀川さんから受けついだものが無数にある。例えばヴィスコンティやフェリーニの作品等、私自身では理解しがたい作品もその素晴らしさを何だかわかったような気分にさせてくれた。また淀川さんがすすめている作品だから見ておこうと足を運んだ作品も限りない。映画に対するあの温かさ、そして映画ファンに対するあの温かさ、そしてお茶の間という、不特定多数のチャンネルを合わせてくれた人に対する温かさ、それはまさしく垣根なく人を愛する博愛の姿であった。それは淀川さん自身、映画に接し、チャップリンという人に接したからこそ、生まれた姿であろう。本当にお疲れさまでした。（古山喜章・大阪府大阪市・会社員・33歳）

●淀川さんが45年間も続けられた「東京・映画の友の会」に東京勤務の一年半通ったのは25年前のことになります。ある時、「まあこの会で最年少の参加者ですねェ」と云って生後6カ月の私の娘を抱かれ、一初孫を抱かれたご感想は？」と冷やかされて照れながらどなたかの写真にポーズをとられた淀川さんの笑顔を忘れられません。その写真があれば家宝にさせて頂けるのにと残念ですが、18回参加させて頂いて淀川さんから得たものは、私の心の財産となっています。淀川さん、本当にありとうございました。（青木裕輔・会社員・58歳）

●そんなことは絶対に無理だと分かっています。絶対に実現しないと分かっています。分かっていても、どうしても一度は言いたいのです。淀川長治さんに国民栄誉賞を！　黒澤明の生前に賞を与えなかったほど映画に無理解で、手塚治虫には遂に賞を与えなかったほど国民に愛された者をみて黙殺できてしまえる、そんな極東の文化後進国である小さな島国の政府が、映画評論家に賞を与えるはずが無いことは承知しています。しかし、あのような素晴らしい方に国民栄誉賞を与える国こそが真の文化国家だと私は思います。淀川さんの存在が、受賞しなかったことで軽くなるわけではありません。淀川さんに与えなかったことで、この賞の価値が軽くなるのです。（梶谷恵子・愛知県名古屋市・学生・18歳）

Digitized by Google

5　どの映画祭をプレミア上映にして出すか

カンヌ、ベルリン、ヴェネチア、モントリオールといった大映画祭の、特にコンペでは、事前に他の映画祭に出ると、出品の資格を失う。どの映画祭でも、良い映画を自分のところで発見したいという形で紹介したいから、初上映を好むが、中にはシカゴや秋のニューヨーク映画祭のように、大映画祭で評判になった作品をわが街で上映することを目的としている所もあるし、その傾向は小さな映画祭になるほど顕著である。

だから理想的には大映画祭で初上映をして、その後各地域の主要な映画祭に回って行くのが理想的なパターンだ。大映画祭でもコンペ外の部門で初上映してから、別の映画祭のコンペに出る場合も十分にある。時期のことだけで言えば、11月ごろ完成の作品なら、2月のベルリンにトライできるし、6月初めまでに字幕版が間に合えば、夏の映画祭――ヴェネチア、ロカルノ、モントリオールを狙える。問題はどの映画祭に合う作品か、またはどの映画祭に出すのがその個々の作品にとって成功なのかということだ。難しい問題だ。

6　どういう順序で各国映画祭に回していったら良いか

原則として大映画祭の場合、作品が完成してから一年間はエントリーできる。世界初上映の方が先方は喜ぶけれど、日本で公開していても、上映の妨げにはならない。プレミアとなる映画祭が決まったら、どういう形で映画祭上映をつないでいくか、細心の注意が必要だ。

例えばヨーロッパでの初上映がヴェネチアに決まったら、アメリカ大陸での初上映はトロント、ニューヨーク、とつながるのが理想的だし、カンヌが最初ならモントリオールのコンペ外部門、トロント、ニューヨーク。ロカルノが最初ならモントリオール（コンペ外）、トロント、ヴァンクーヴァー、ロッテルダムと、ベルリン・フォーラムが最初なら春のニューヨーク（ニューディレクターズ・ニューフィルムス）、香港、という具合に選ばれれば素晴らしい。ただし各国の配給状況や公開が絡んでくるレベルにまで展開される場合には、現地の配給会社やエージェントと綿密に打ち合わせてタイミングを図ることが大事。

各映画祭は様々な部門に分かれていて、それぞれの部門によって上映できる条件が違ってくる。コンペはプレミアのみ受け付けるが、コンペ外は他の映画祭で好評だったものを集めたり、ヤングシネマといっても年齢制限なのか、プリントでの製作本数での制限なのか、長編・中編・短編の分け方も60分以上、30分以内、20分以内など様々だ。規約は、同じ映画祭でも年によって変わっていくので、充分に注意しなくてはならない。

7　賞について

カンヌはパルム・ドールと長編一作目のカメラ・ドール、ベルリンは金熊、銀熊、ヴェネチアは金獅子、銀獅子、金のオゼッラ賞、ロカルノは金豹、銀豹、ロッテルダムはタイガー賞など、動物のタイトルが付く場合が多い。映画祭によって、審査員特別賞や脚本賞、主演女優・男優賞、撮影賞、監督賞、芸術貢献賞など、それぞれにタイトルを付けるのでまちまち。各賞もその年によって変わることがよくあるので、毎年の規約をよくチェックすること。

また基本的にはノンコンペの所や、コンペ外のセクションでも、ロッテルダム、ヴァンクーヴァー、釜山などのように全体のプログラムの中から観客投票を集計して観客賞とかスポンサー賞をだしたり、国際批評家連盟賞（フィプレッシィ賞と言われているもの。国際批評家連盟が認めた幾つかの国際映画祭で

世界の映画祭へ向かって
国際映画祭での上映のために
⑨映画祭への出品ノウハウ（下）

林　加奈子

Digitized by Google

は、メンバーの内の数人が持ち回りで審査員となって、賞を出してくださる。日本人でもメンバーになっていらっしゃる評論家の方々も、もちろんいらっしゃる。これはコンペだけを対象にはしていない。映画祭が決めたメインの審査員による賞は獲れなくても、この賞に選ばれた作品は、最近でも、ベルリンの「SADA」（大林宣彦監督）、モントリオールの「愛を乞うひと」（平山秀幸監督）などがあった。日本で開催される映画祭では、山形国際ドキュメンタリー映画祭でこの賞を出している。）が出される場合もある。

8　賞金のある映画祭

大映画祭のコンペは、賞それ自体が大きな名誉となるので、ほとんど賞金制度はないけれど、特にヤングシネマを対象とする映画祭では、製作費の援助と次回作への応援という意味合いで、賞金を出すところもある。東京国際映画祭のヤングシネマ部門の賞金２０００万円（だったが今年は１０００万円に変更となったのはご存じの通り）は、かなり高額なほうで、サン・セバスチャン映画祭の新人部門もエキュー換算で東京映画祭にも匹敵する賞金が用意されているが、サン・セバスチャンの場合には次回作をスペイン合作で作らねばならないというような幾つかの条件があって、キャッシュでそのままもらえるわけではない。

グランプリに選ばれれば、円への換算レートにもよるのだけれどロカルノ、トリノ、テサロニキで数百万円、ロッテルダムはちょうど百万円ほど、ヴァンクーヴァーは数十万円、という具合で、日本での製作環境を考えると、賞金稼ぎを狙っても、プール付きの家が買えるということにはならないので、多くを望まないほうがいい。ラッキーだったら、海外展開のための費用の一部が出る程度と思っていたほうが無難だ。それと、賞金が誰に支払われるかも映画祭によってまちまちだ。監督個人に出る場合、現地の配給会社に支払われる場合、製作会社に渡される場合などいろいろなので注意。

9　上映が決まったら何を準備したらいいか

正式な招待状のあと、映画祭事務局の方から細かい指示が連絡されるが、まずは映画祭のカタログ用にスチル写真、監督写真、映画のシノプシス、監督のバイオグラフィー、フィルモグラフィーといった、いわゆるプレス資料を整えて送らなければならない。

そして映画祭期間中にジャーナリストたちへの対応として、プレスセンターに常備するためのプレス、スチルなど、これはカンヌ、ベルリンクラスでは数千（３０００から４０００）という数になるので大変だ。

監督への招待が費用も含めて何処まで映画祭がカバーしてくれるのか。監督だけでなく他のスタッフも行く場合には、早目にチームリストとそれぞれのスケジュールを決めて事務局に連絡し、登録することが必要。宿泊ホテルは事務局を通して予約すると通常より安い映画祭特別料金で確保できることもある。人数が多い場合には、映画祭のメインホテルに泊まるのは難しい場合もある。とにかく早めに、その作品について映画祭に参加するメンバーのリストを作成して、それぞれが何時から何時まで滞在するのか明記して、事務局に連絡を取る事。映画祭のパスを取る上でも、これは重要。事務局との綿密なやり取りは、不可欠だ。

10　海外で商業上映をするには

その地域の配給会社がつけば、単純に言えば公開の可能性が出てくるわけだが、原則として、甘くはない。貿易黒字で輸出超過の日本にあって、絶対的に輸入の方が輸出を上回っているのは、まさにこれ、映画である。

いきなり配給業者に興味を示してもらう前に、ヨーロッパやアメリカでエージェントがついてくれれば、儲けものである。このエージェントが海外でプレミア上映の映画祭が決まったあとに直ぐに（または事前に）つくのが、理想的だ。そうすれば、初上映の映画祭で、エージェントとなった所が積極的にプロモーションをかけて、それぞれの地域での公開にこぎ着けるための配給契約を目指して動いてくれる。

ただし、こういう展開は、その作品そのものに商業上映されるだけの力があることが原則である。そして海外のエージェントと商談をやり合えるだけの力が、プロダクション側にも不可欠だ。期間中の本上映とは別に、費用をかけてマーケットで英語字幕版を上映するのも商業上映には効果がある。映画祭に出られてうれしいな、おしまい。というのではなくて、商売まで考えている場合にはただ、ボーッと待っていては駄目。プロデューサーなり売る側の窓口が、ヴィジョンを持って戦略を進めて行かないと、空振りしてしまう。まあ、作品によって状況はまちまちなので、

世界の映画祭へ向かって　目次
8月下旬号
「第1回　映画祭への橋渡し」
9月上旬号
「第2回　各国映画祭の状況（1）」
・モントリオール世界映画祭
・トロント国際映画祭
・ヴァンクーヴァー国際映画祭
・ベルリン国際映画祭
・ロッテルダム国際映画祭
9月下旬号
「第3回　各国映画祭の状況（2）」
・エーテボリ国際映画祭
・テサロニキ国際映画祭
・トリノ国際映画祭
・ブエルトリコ国際映画祭
・香港国際映画祭
・シンガポール国際映画祭
・インド国際映画祭
・シドニー国際映画祭
10月上旬号
「第4回　各国映画祭の状況（3）」
・カンヌ国際映画祭
・ナント三大陸映画祭
・ヴェネチア国際映画祭
・ロカルノ映画祭
・タオルミーナ国際映画祭
10月下旬号
「第5回　各国映画祭の状況（4）」
・ハワイ国際映画祭
・モスクワ国際映画祭
・カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭
・イスタンブール国際映画祭
・サン・セバスチャン国際映画祭
・メルボルン国際映画祭
・オーバーハウゼン国際映画祭
・ヘルシンキ国際映画祭
・サンパウロ国際映画祭
・ミュンヘン国際映画祭
・ウエリントン国際映画祭
・ニュージーランド国際映画祭
・シカゴ国際映画祭
11月上旬号
「第6回　各国映画祭の状況（5）」
・ロンドン映画祭
・釜山国際映画祭
・サンフランシスコ国際映画祭
・クレルモン・フェラン国際映画祭
・ニューヨーク映画祭
・エルサレム映画祭
・アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭
・フィゲラ・ダ・フォス国際映画祭
・ペザロ国際映画祭
・ソチ国際映画祭
・ラ・ロシェル映画祭

Digitized by Google

製作の段階からプリセールしたほうが良いとか、海外の製作会社と共同製作したほうが良いとか、一概にはどちらが良いとは言い切れない。

11　映画祭期間中にどのようにプロモーションするか

映画祭では何といっても監督がスターだから、監督が映画祭に参加してインタビューに積極的に取り組んだり、上映前後の挨拶に惜しみなく対応したりと、交流に邁進することが大切だ。ホテルのロビーをウロウロするのもいい。パーティーや食事会にも労を惜しまずに参加してもらいたい。基本的には、作品そのものの判断がされるのは当たり前のことだけれど、賞を決めるのは審査員、すなわち人間だ。好感度をアピールするのは決してマイナスにはならない。

私の方は、とにかく上映に足を運んでもらえるよう、映画祭期間中は日本映画の状況を報告して回るのが仕事になる。幸い、多くの映画祭選考担当者の顔を知っているので、アポがどんどん入り込むし、映画祭に行くことで顔見知りになれた、各地の有力な批評家やジャーナリストとも、連絡をつなげていかなければならない。場合によっては、事務局とプロダクション、もしくはジャーナリストとプロダクションのアポを取り持つことも起きてくる。上映には立ち会って、その土地での受け入れられようを肌身でとらえ、記者会見と最終の賞発表でのジャーナリストたちの反応をキャッチするのも大切な仕事だ。

映画祭事務局は、賞発表の事前に結論を私に前もって教えてくれるところもある（非公式に）。賞が取れていれば、セレモニーの際の心の準備と現実的な対応の仕方を、監督やプロダクションと打ち合わせしておくことも出来る。とにかく、一人でも多くの人と交流を持って情報を仕入れ、状況を把握して、日本からの参加者たちが気持ち良く効率的に映画祭を活用できるように動かなくてはならない。次の映画祭の担当者と、先の日本映画について打ち合わせるチャンスも逃してはならない。

それぞれのプロダクションの人々は、自分たちの持っている作品を最大限に活かしていくために積極的に活動していただきたい。今まで少し曖昧なまま書き進めてきたが、監督とプロデューサーとでは、必然的に映画祭期間中の過ごし方が、大いに異なる。監督には記者会見、上映後の質疑応答、個別のインタビューなどの仕事があるし、プロデューサーならそのインタビューの調整から、事務局との確認事項のやりとり、レセプションをやるならその準備、ジャーナリストへの働きかけから配給業者との打ち合わせなどなど、エージェントが付いていなければ、極端に言って監督がやること以外の事全てをこなさなくてはならない。でも、大丈夫。ナンにもしないでいても、観光したり、遊んじゃっても誰も怒らないから。自分が損するだけだから。映画祭期間中は何かと忙しいけれど、出来れば他の作品も見て反応を確かめたり、質疑応答の雰囲気をあらかじめ確認しておいたり、映画祭の状況を把握する努力を怠らないこと。第一に他の作品を見てみると、自分の出している映画の位置も見えてくる。せっかく国際映画祭に出てきたのだから、出席している他国の監督ともそれぞれの状況や作品について話し合える絶好のチャンスだ。日本からの監督同士も意外と国内では交流する機会がないので、仲良くなれることもある。小さい映画祭や運営が行き届いてないところでは、とかく出席者が皆で力を合わせて情報をやりとりし合いながら、サバイバルしていかなくてはならないが、それがきっかけで思わぬ人と出合えるチャンスもある。

ところで、ここまで敢えて避けてきてしまったこと、すなわち語学の問題。これは切実な課題である。かく言う私も、実はかなりいい加減な英語しか話せないのだけれど、日本からの監督は、海外で自分の意志を伝えるのが難しい場合が多い。これは、相当もったいないことである。とはいえ、英語なんかが、なまじ出来るより、いい映画を作られる監督のほうが絶対偉いのだけれど、ちょっとだけでも会話が交わせるようになれれば本当に数倍も映画祭を楽しめるわけなので、単語の羅列でも時制が目茶苦茶でも物おじしないで、前に出ていってみてほしい。

私が今までにご一緒した監督たちでも、最初まるで話さなくても、慣れてくるとなんだが相手の言ってことが分かるようになってきて、一人でどんどん映画祭に出席している人たちが少なくない。映画祭の方でも、英語が話せれば日本の監督に審査員を依頼したいと考えているところがたくさんある。私にこんなことを言う資格がないことは、よくわかっているけれど、国際的な評価を望むなら、英語くらいは出来た方がいい。

どこの映画祭には、誰が強いコネクションを持っているとか、誰かが気に入ってくれな

11月下旬号「第7回　国際映画祭での日本映画上映」
12月上旬号「第8回　映画祭への出品ノウハウ（上）」

Digitized by Google

いと映画祭に紹介されないとか、とかく噂が先行しがちだが、私はそんな風に考えたくない。確かに、ディレクターの好みは、ある。土地柄もある。映画祭の歴史もある。でも映画祭は新しい才能を発見しようと、待っていてくれているところでもあるはずだ。

だから自信ある映画が出来たら、自分で調べて、自分で直接トライするくらいの覚悟で突き進んで行ってほしい。作品が映画祭上映に合うのなら、道は必ず開けるはずだ。それと、映画祭について疑問点や判らないことが出てきたら、もちろん判っている人に聞くのが最も早いのだが、その年によって状況が変わっていくので、直接映画祭事務局に問い合わせるのが一番いい。勝手に自分たちでこうだろう、ああだろうと解釈して進めてしまうのは危険。先方が主催して先方が開催する映画祭に臨むのだから、原則としてあちら側が考えていることが基本の常識となる。それに従えないのなら、出すだけ無駄だ。まめに連絡をしていけば、あちら側も覚えてくれるし、熱意もくみ取ってくれる。

そのうちに、ディレクターが日本へ来なくても、プリントやヴィデオを送らなくても、コンピューターの送信とか、デジタル通信とかいうのなんかで、良い状態で選考がなされるシステムが出来るようになるかも知れない。情報だって、各地での新作状況が瞬時に翻訳されて、世界中へ発信されるようになるかも知れない。字幕なんか要らなくなるかも知れない。だいたい、映画祭へなんか行かなくても、見たい映画が配給網を通さなくても、何時でも家庭で見られる時代が来るかも知れない。そうかな。そんな時代が来るのかな。映画祭は、どうなっていくのだろう。まあ、しばらくはなくならないと思うのだけど。

12 総括

映画祭へ向かっての心得みたいなことを、書かせていただいてきました。数カ月お付き合いありがとうございました。これらはあくまでも私が見てきた映画祭の事でしかないので、次号には引き続いて、映画祭に参加された様々な立場の方々との座談会を考えました。イキモノである映画祭を体験していらっしゃる方々の、有意義なるナマの声を集めて、国際映画祭をもう一歩踏み込んでの理解につながったらうれしいと思っています。

また、映画祭の紹介連載中に、ジャパン・ソサエティーの平野共余子さまより、ニューヨーク映画祭の春のニューディレクターズ・ニューフィルムズで上映されたと私が明記した日本映画作品について、それらはニューヨークのジャパン・ソサエティーでの上映作品だったとご指摘をいただきました。混乱して間違えてしまいました事、訂正とお詫びを申し上げると共に、即対応で教えて下さった平野さまに心から感謝させていただきます。

さて、繰り返して映画祭はナマモノ、イキモノと書いてきた通り、既に幾つかの映画祭で担当者が変わったり動きが出てきたりしています。例えばカンヌ映画祭の監督週間は、ピエール＝アンリ・ドロー氏に代わって、来年からはマリー＝ピエール・マルシア氏が担当する事になりました。それから、トリノ映画祭のディレクターであるアルベルト・バルベラ氏が、来年からヴェネチア映画祭のディレクターに就任するというビッグニュースも入ってきました。これからも日本映画が、ますます国際映画祭でも元気でいられますように。そしてチャンスを生かして、世界の人々に楽しんでもらえますように。（了）

＊次号・次々号にわたって、連載の番外編として映画祭経験者たちによる座談会を掲載します。

Digitized by Google

World Report 1998

「プラクティカル・マジック」

© 1998 Warner Bros.All Rights Reserved

CONTENTS

from U.S.A.
●Practical Magic
●Beloved
●Soldier
●Apt Pupil
●Pleasantville
●Bride of Chucky
●A Night at the Roxbury
●The Imposters
●感謝祭からのクリスマスへのスケジュール
On the Production
●スタローン＆ユニヴァーサルの "Fatalis"
●「オペラ座の怪人」の続編 "The Phantom in Manhattan"
●ニューフェルド製作のSFシリーズ "The Up Lift Series"
●『空飛ぶロッキーくん』長編映画化
「ユニバーサル・ソルジャー」「クロウ」の続編
from ASIA
●台北映画祭（三）
●第35回金馬賞ノミネート発表
from JAPAN
●「またの日、法華」
●「死国」
●「学び座～ソーラの歌が聞こえる」
●「ナイル」

●S・ブロック、N・キッドマン共演作

サンドラ・ブロックとニコール・キッドマンが魔法使いの姉妹役で共演の「**プラクティカル・マジック**」**"Practical Magic"**（グリフィン・ダン監督）が、10月16日にワーナーの配給で公開された。

サリー（ブロック）とジリアン（キッドマン）は、魔法使いの血を継承した姉妹で、魔力の方もジェット（ダイアン・ウィースト）にフランセス（ストッカード・チャニング）という二人の伯母から教えられていた。

ただし魔法が使えることへの代償があった。それは、愛する男性には不幸な死が訪れるという運命で、ジリアンの方は少しも気にせずに奔放に暮らしているものの、普通の生活を望むサリーには苦痛であった。

実際サリーは、魔法は使うまいとの必死の努力で、結婚をし二人の娘を得ていたのだが、結局は夫は心配していた運命から逃れられず、彼女は未亡人となってしまう。

こうした状況の中、あらたな好ましき男性ゲイリー・ハレット（アイダン・クイン）が、サリーとジリアンの前に現われるのであるが……。

なかなかの女優陣を揃えた作品ではあるが、出来については、ニューヨークの批評家のほとんどから否定されている。ヴァラエティ紙の評によれば、ロビン・スウィコード、アキヴァ・ゴールズマン、アダム・ブルックスの3人による脚本、および演出それぞれに問題ありとのことで、あたら出演者の能力を空費した映画と断じられている。

ただし興行の方は好調で、最初三日間で一三一〇万ドル余、一週間では約一七〇九万ドルを売り上げ、翌週も極端な落ち込みを見せることなく推移している。これは、二人の主演スターのマジカル・パワーによるものと言うべきだろうか。

●ジョナサン・デミの新作

「フィラデルフィア」以来のジョナサン・デミ監督の新作となる「**ビラヴド**」**"Beloved"**が、10月16日にブエナ ビスタの配給で公開された。これは、ピュリッツァー賞を受賞したトニ・モリソンの小説の映画化で、「カラーパープル」の出演以後、テレビのトーク・ショウの司会で絶大な人気を確立したオプラ・ウィンフリーが、自らプロデューサーも兼ねて主演した作品ということにもなる。

南北戦争終結から八年を経たシンシナチに、セス（ウィンフリー）というアフリカ系アメリカ人の女性が、娘のデンヴァー（キンバリー・エリーズ）をは

Digitized by Google

じめとする家族と共に暮らしていた。元は奴隷の身であった彼らにとって、ようやく新たな生活が根付きつつあったが、まだまだ癒えぬ過去の傷もあった。

そんな中、奴隷時代の仲間のポール・D（ダニー・グローヴァー）が現われ、セスの一家と同居を始める。昔の苦痛を知る同士ではあるものの、陽気な彼の存在は、セスには心をなごませてくれる効果があった。

ところが、半死半生の状態で堆肥の中に発見された若い女性（サンディ・ニュートン）は、違っていた。彼女はデンヴァーの看護により、無事に回復はするのだが、セスの一家には大きな波紋をもたらしていく。

というのも、彼女が名乗るビラヴドという名は、セスが失ったばかり思い込んでいた自分の娘につけたものだったからである。単なる偶然の一致か、それとも……。セスの忘れようとしていた過去の出来事が、彼女を悩ますこととなっていく。

ウィンフリーとグローヴァー、そして以上のようなストーリー内容とくれば、「カラーパープル」が思い出されるが、それはともかくとして、今作品に対するニューヨークの批評家の評価は、おおむねで好意的である。ただ全員一致での好評ではなく、好悪相半ばという複雑な立場を取る者も少なくない。

一方の興行は、最初三日間の興収が八一七万ドル弱、一週間では一〇四五万ドル余と、まずまずのスタートではあったが、翌週には半減となってしまった。どうやら、トーク・ショウのようにはいかないようである。

カート・ラッセル主演のアクション

カート・ラッセルが主演する「ソルジャー」"Soldier"（ポール・アンダーソン監督）が、10月23日にワーナーの配給で公開された。

トッド（ラッセル）は幼いときから徹底した英才教育の下に養成された究極の兵士であったが、40歳となり、遺伝子操作を経て新たに作られた殺人マシン、ケイン（ジェーソン・スコット・リー）にとって代わられ、遠い惑星に捨てられてしまう。

そこでトッドは、ようやく平和な生活を得られたと思われたが、よりによってケインを中心とする軍団が訓練のためにやってくる。しかも、その訓練とは地元住民の虐殺である。自衛のため、トッドは強大な敵に立ち向かっていくのであった。

以上のように、かなり型通りのストーリーで、予想されるようにヴァイオレンスも満載という作品で、批評家たちからは、ほとんど総スカンである。

興行の方も、最初三日間で六四五万ドル弱の興収にとどまる低調なスタートで、翌週には六割減と大苦戦を強いられている。

S・キングの小説をB・シンガーが映画化

スティーヴン・キングの小説の新たな映画化作品「ゴールデンボーイ」"Apt Pupil"が、10月23日にソニー（トライスター）の配給で公開された。演出は、「ユージュアル・サスペクツ」のブライアン・シンガーが担当している。

利発な高校生トッド・ボウデン（ブラッド・レンフロ）は、学校で学んだホロコーストの話に興味を感じ、資料を調べていくうちに、ナチの一員として写っている男が、近くに住む老人カート（イアン・マッケレン）の若き日の姿ではないかと疑いを抱く。それは調査を続けるうちに確信へと変わり、トッドはカートを訪ねていく。

そこでトッドは、秘密を明かされたくないならと脅して、ナチの行為の詳細を聞き出すのである。この聴取は繰り返され、遂にはカートにナチの制服を着させて、行進をさせたりする。

だがトッドは、次第に主導権をカートに握られ、逆に脅迫を受けるようになってしまう。学業にも悪影響が出始めたトッドは、カートと縁を切ろうとするが、それは容易ではなかった。そして……。

「ゴールデンボーイ」

以上のように、キングの小説からの映画化と言っても今作は超常現象とは無縁である。ただし恐ろしさには事欠かないというところだが、ニューヨークの批評家の評価は、きれいに賛否半々に分かれている。

一方の興行は、キングの映画化としては期待はずれのスタートとなっており、最初三日間の興収は三五八万ドル余、一週間でも約四七六万ドルの売り上げにとどまっている。さらに翌週の週末には半減といった具合で、スクリーンからの早々の退場が避けられそうもない気配である。

昔のドラマに入り込む現代のティーンエイジャー

「ビッグ」や「デーヴ」の脚本家のゲイリー・ロスが初めて演出を担当した「プレザントヴィル」"Pleasantville"（脚本もロス自身の筆によるもの）が、10月23日にニュー・ラインの配給で公開された。

デイヴィッド（トビー・マグガイア）は、離婚した母にやかましい妹ジェニファー（リース・ウェザースプーン）と暮らす現実の生活にはウンザリしており、50年代に作られた理想的な家族を描くドラマ『プレザントヴィル』を見ることで、どうにか心を癒していた。

ところが、『プレザントヴィル』とは別の番組を見たいというジェニファーとチャンネル争いをしたことから、テレビのリモコン装置を壊してしまう。早々に修理に来てもらい、最新式というものを渡されるのだが、何とそれを使うや、デイヴィッドとジェニファーの二人は、『プレザントヴィル』の登場人物バッドとメアリー・スーになってしまうのである。

彼らには、ジョージ（ウィリアム・H・メイシー）にベティ（ジョーン・アレン）という父母もできるが、そんな新たな親の存在よりも問題なのが、『プレザントヴィル』がモノクロの世界だということであった。

だが次第に二人は、プレザントヴィルに慣れていく。以前か

Digitized by Google

ら知っているデイヴィッドはもちろん、ジェニファーも素敵なボーイフレンドが出来たことで、気は紛れていく。ところが、ジェニファーが90年代風のデート（すなわちセックスを含んだもの）をするや、プレザントヴィルに重大な異変が生じる。快楽を知った者に色が付き、しかもそれは世界全体へと広がっていくのだった。

不思議な設定の物語に、時代の価値観の変化およびその衝突を盛り込むという、野心的とも言える作品だが、ニューヨークの批評家からもおおむね好評を得ている。

さらに興行においても、最初三日間で八八六万ドル弱、一週間で一一四一万ドル余の興収を上げ、同時期トップの売り上げを記録している。確かに爆発的な数字ではないが、かなりの健闘であることは間違いない。

●「チャイルド・プレイ」の最新作

殺人鬼が人形に憑依するという設定のホラー・シリーズ「チャイルド・プレイ」の91年以来の新作（第4作に当たる）、「**ブライド・オブ・チャッキー**」**"Bride of Chucky"**（ロニー・ユー監督）が、10月16日にユニヴァーサル配給で公開された。

タイトルの通りに、今作にはチャッキーの花嫁となる、殺人鬼の元ガールフレンドのティファニー（ジェニファー・ティリー）が登場する。彼女が、証拠品として保管されていたチャッキー人形を取り戻して、修繕の末に復活させるのである。

そして彼らが結ばれるために、新たな行動に出るというわけだが、最初3作のもう一人の主人公、チャッキーに悩まされるアンディは、今回は無関係のままで済んでいる（!?）。

批評家からは、ほとんど相手にされていないものの、興行の方では最初三日間で約一一八三万ドル、一週間で一四三三万ドル余と、復活を飾るに十分な成果を上げている。第5作が作られても不思議ではないだろう。

●SNLからの映画化

おなじみのテレビ番組『サタデー・ナイト・ライブ』（SNL）の、現在の人気スケッチからの映画化となる、「**ア・ナイト・アット・ザ・ロックスベリー**」**"A Night at the Roxbury"**（ジョン・フォーテンベリー監督）が、10月2日にパラマウントの配給で公開された。

スティーヴ（ウィル・フェレル）とダグ（クリス・カッタン）の兄弟は、家業の造花業をそっちのけにして、夜ともなればクラブやディスコに出かけ熱心にガール・ハントするのだが、ことごとく声をかけた女性に振られている。

こんな彼らの夢は、地元第一級の店ロックスベリーにひけを取らぬ自分自身のクラブを持つことだったが、幸運な偶然からそこへの入場が認められ、あわせてゴージャスな女性二人からリッチなビジネスマンと誤解される。しかし、ほとなくスティーヴとダグの素姓が明らかになると……。

テレビのスケッチの舞台はニューヨークだが、映画ではベヴァリーヒルズに移されている。そして本来のスケッチでは、二人の兄弟が女性からダメを出されたところで終わるのだが、映画においては、ひねりを加え、さらにその後の話が加えられているわけである。

こうした映画化についての評判だが、ニューヨークの批評家からは、ものの見事に否定されてしまっている。肯定的意見はゼロという完敗である。

もっとも興行の方は、最初三日間で九六〇万ドル余の興収で、まずまずのスタートとなっている。これは、同じSNLからの映画化の中では、「ブルース・ブラザース」や「ウェインズ・ワールド」には及ばぬものの、かなり高水準の滑り出しと言える。ただし、予備知識のないアメリカ以外で受け入れられるかとなると、その見通しは厳しいと評さざるを得ない。

●スタンリー・トゥッチの単独監督作品

「シェフとギャルソン、リストランテの夜」のスタンリー・トゥッチが、初めて単独で監督を担当した「**ジ・インポスターズ**」**"The Imposters"**が、10月2日にフォックス・サーチライトの配給で公開された。

大不況時代のニューヨーク。俳優のアーサー（トゥッチ）とモーリス（オリヴァー・プラット）は、熱心に稽古を積んでオーディションで奮闘する（ウディ・アレンが演出家としてノンクレディットで出演している）が、仕事は得られない。

そんな中で見た「ハムレット」の主演者が、あまりにも下手なので、彼らは酒場で息巻いてしまう。ところがそこには、当の役者も来ており、二人は命からがらで逃げ、箱の中に隠れる。この箱はフランスに向かう豪華客船の積み荷で、気付いたときには海の上であった。彼らは客室担当になりすますが……。

洗練されたコメディを目指したと思われる作品だが、批評家の反応は賛否半々、興行は地味な展開になっている。

●感謝祭からクリスマスへのスケジュール

新たな年間興収の記録を樹立しそうな勢いの、98年のアメリカ映画市場であるが、その達成のためには、やはり締め括りとなる感謝祭からクリスマスへのシーズンの好成績が、必要不可欠なところであろう。業界内の観測によれば、かなり有望とのことだが、具体的な陣容は以下の通りである（全体の感じを見ていただくために、既に公開されている時期のものも含めることにした、悪しからず）。

11月13日

「**ジョー・ブラックをよろしく**」
主演ブラッド・ピット
アンソニー・ホプキンス
監督マーティン・ブレスト
（ユニヴァーサル）

「**ラストサマー2**」
主演ジェニファー・ラヴ・ヒューイット
監督ダニー・キャノン
（ソニー）

"I'll Be Home for Christmas"
主演ジョナサン・テイラー・トーマス
監督アーリーン・サンフォード
（ブエナ ビスタ）

11月20日

"Enemy of the State"

Digitized by Google

主演ウィル・スミス
ジーン・ハックマン
監督トニー・スコット
（ブエナ　ビスタ）

"The Rugrats Movie"（長編アニメーション）
（パラマウント）
11月25日

「**バグズ・ライフ**」（長編アニメーション）（ブエナ　ビスタ）

「**ベイブ都会へ行く**」
主演ジェームズ・クロムウェル
監督ジョージ・ミラー
（ユニヴァーサル）

"Tea with Mussolini"
主演シェール
ジョーン・プロウライト
マギー・スミス
ジュディ・デンチ
監督フランコ・ゼフィレッリ
（MGM）
12月4日

"Psycho"
主演ヴィンス・ヴォーン
アン・ヘッシュ
監督ガス・ヴァン・サント
（ユニヴァーサル）
12月11日

"Star Trek IX:Insurrection"
主演パトリック・スチュアート
監督ジョナサン・フレイクス
（パラマウント）

"Shakespeare in Love"
主演グウィネス・パルトロウ
監督ジョン・マデン
（ミラマックス）
12月18日

「**プリンス・オブ・エジプト**」（長編アニメーション）
（ドリームワークス）

"Jack Frost"
主演マイケル・キートン
監督トロイ・ミラー
（ワーナー）

"Playing by Heart"
主演ジリアン・アンダーソン
ショーン・コネリー
監督ウィラード・キャロル
（ミラマックス）

「**ユー・ガット・メール**」
主演トム・ハンクス
メグ・ライアン
監督ノーラ・エフロン
（ワーナー）
12月25日

"Mighty Joe Young"
主演ビル・パクストン
監督ロン・アンダーウッド
（ブエナ　ビスタ）

「ジョー・ブラックをよろしく」

"Stepmom"
主演ジュリア・ロバーツ
スーザン・サランドン
監督クリス・コロンバス
（ソニー）

"Patch Adams"
主演ロビン・ウィリアムズ
監督トム・シェイディアック
（ユニヴァーサル）

中には、当初予定していた秋のシーズンから延期になったものもあるのだが、ともかくも、ファミリー揃って見られる作品（アニメーション映画が代表と言えよう）から、ティーン向けのホラー、さらには大人が堪能できる類まで、多彩なラインアップと言われている。ただ「タイタニック」に匹敵するようなヒット作は、そう簡単には出てこないだろう。

筆者の個人的な興味は、12月に続けて公開されるリメイク作品（ヒッチコック監督の「サイコ」からの"Psycho"、エルンスト・ルビッチ監督の「桃色の店」に基づく"You've Got Mail"、そして、そもそもは「キング・コング」の続編として作られた「猿人ジョー・ヤング」を元とする"Mighty Joe Young"）が、それぞれに、どのような仕上りとなり受容はどうかということなのだが、結果については追って本欄で報告できることと思う。

〔濱口幸一〕

on the Production

●スタローン、ユニヴァーサルでの新作

まずはついに動き出すのか、この話題から紹介しよう。

「デイライト」の製作中だったと記憶しているから96年の筈だが、3000万ドル×3本という巨大な金額でも話題になった、シルヴェスター・スタローンとユニヴァーサルの契約は、その後「スパイダーマン」"The Spider-Man"を始めいろいろな企画が登場したものの、諸般の事情や、双方の納得が得られないなど、種々の状況が重なって、結局1本も実現できないまま現在に至っている。この間スタローンは、他社で企画されたアクション映画にユニヴァーサルとの契約金以下では出演できないなど、逆に足枷になってしまった面もあったようだが、この契約の1本目がようやく実現しそうになってきた。

今回報告された作品は、題名が**"Fatalis"**というもので、内容は、古代に生息した地上最大の虎、サーベル・タイガーがエルニーニョ現象の影響（？）で現代に甦り、ロサンゼルスに現れるというお話。スタローンが演じる予定の主人公は、このタイガーに立ち向かう古代武器マニアの学者だそうだ。そしてユニヴァーサルは、ジェフ・ロヴィンという作家が執筆したこの小説の映画化権を、実現すれば7桁（$）金額でオプション契約し、スタローンの主演を前提に製作を行うというものだ。あまり著名でもない作家に7桁の契約金はかなり破格だが、逆にスタローンの主演だと、この位にしないといけないということのようだ。

米誌の報道でも「『ジュラシック・パーク』のような」と書かれていたが、古代の生物が復活するということではその通りだろう。しかし今回の作品では、主人公の設定がかなり面白そうで、映画化の可能性は、この設定がスタローンの気に入るかどうかに掛かっているようだ。逆に実現すれば、シリーズ化も期待できそうな設定で、今後の展開が注目されるところだ。

なお原作者のロヴィンは、今回の作品とは別に**"Vespers"**という作品がすでにディズニーでバリー・ソネンフェルド監督の企画として進められているということで、巨大コウモリとペスト菌がニューヨークを襲うと

Digitized by Google

いうこの小説は、今年の11月にアメリカで出版される予定になっている。

●「オペラ座の怪人」の続編

お次は前回に続いての続編の話題、といってもこれも小説の話題になってしまうが、ロン・チャニーその他の主演による度々の映画化でも知られるガストン・ルルー原作の「オペラ座の怪人」の続編が、「ジャッカルの日」などのベストセラー作家フレデリック・フォーサイスによって執筆、発表された。

ただしこの続編、実は書かれたのは小説そのものの続編ではなくて、アンドリュー・ロイド＝ウェバーのロングラン・ミュージカル "The Phantom of the Opera" の続編ということ。というのもこの作品が書かれることになった切っ掛けは、昨年の12月にロイド＝ウェバーが開いたパーティの席上で、フォーサイスと話が弾んで構想が生まれたということで、フォーサイスは他に予定していた作品を棚上げにして執筆を行い、すでに完成されている小説は来年1月に出版され、その後はロイド＝ウェバーがミュージカル化を進める計画だということだ。

物語は、パリ・オペラ座での事件の後、10年が経過してのお話で、姿を消したファントムが海を渡ってニューヨークのマンハッタンに現れるというもの。そこでタイトルも **"The Phantom in Manhattan"** だそうだ。それにしても、専門の政治がらみの小説では、発表すれば必ず世界中に翻訳されて成功の約束されているフォーサイスが、他人の作品の続編で、しかもミュージカルの原作を事実上の書き下ろしで手掛けるとは、この作品の何が心に触れたのだろうか。

なお、ロイド＝ウェバーの作品では、すでに映画化された「エビータ」を始め、発表された全ての作品の映画化が計画されており、中でも "The Phantom of the Opera" に関しては、彼自身での映画化を強く希望しているということなので、それが実現すれば、当然その続編の映画化も期待できる。一方、フォーサイスも数々の自作の映画化に関わっており、この2人が組んでの映画化は注目を集めることになりそうだ。

「オペラの怪人」(25年)

●ニューフェルド製作のSFシリーズ

3つ目の話題は、「ジャック・ライアン」シリーズの製作者メイス・ニューフェルドが、新たに展開するシリーズものの計画を発表した。

発表されたのは、ケヴィン・コスナーの監督主演で映画化された「ポストマン」の原作者としても知られるアメリカのSF作家デイヴィッド・ブリンが、83年に発表した **"Startide Rising Series"** と呼ばれるSFシリーズで、人類と知性を持ったイルカによって構成される探検隊が、地球で作られた初の恒星間宇宙船に乗り組み、知的生命体の源を知るため、異星人の痕跡を求めて宇宙の奥深く探検するというもの。シリーズ第1作の後、すでに "Brightness Reef" と、"Infinity's Shore"、それに "Heaven's Reach" の全4作が発表されている。

そして今回は、この第1作の映画化権として10万ドルの着手金と、映画が完成したときに80万ドルという契約が結ばれたもので、また原作者のブリンは製作総指揮としてもクレジットされ、映画化全体のコンサルタントを務めるほか、将来続編が映画化されるときにも同様の権利と商品化権の一部を獲得するというものだそうだ。なおニューフェルドは、「この原作には以前から注目していたが、今までは技術的に実現が不可能なものだった。しかしデジタル技術の進歩がいかなる映像も可能にしたので、今回の映画化に踏み切った」と語っている。

この他にニューフェルドは、パラマウント製作の「ジャック・ライアン」シリーズの第4作 **"Sum of All Fears"** をアキヴァ・ゴールズマンの脚色で準備を進めており、また元ジャーナリストのミステリー作家マイクル・コナリーの **"Black Echo"** に始まるハリー・ボッシュ・シリーズの映画化も、パラマウント／コロンビアの共同製作、「羊たちの沈黙」などのテッド・タリーの脚色で進めているそうだ。

●「ユニバーサル・ソルジャー」「クロウ」の続編

後半は短いニュースをまとめておこう。

『空飛ぶロッキーくん』で知られる往年のアニメーション・シリーズ **"Rocky and Bullwinkle"** の長編映画化が、ロバート・デ・ニーロ主宰のトライベッカ・プロダクションで進められている。この作品は、空飛ぶリスのロッキーと、アメリカヘラジカのブルウィンクルが繰り広げる冒険を描いたもので、資料によるとロッキーが悪の組織と対決していろいろな事件を解決してみせるのだそうだ。この作品を今回は、アニメーションと実写の合成で映画化するもので、当然ロッキーとブルウィンクルはオリジナルのキャラクターがそのまま登場することになる。脚本はケニー・ロナガン、監督はトニー賞受賞の舞台監督のデス・マクナノフが映画監督デビューを飾る。また実写の出演者に、まずロッキーたちに協力するFBI女性捜査官役に「コン・エアー」のモニカ・ポッターが契約された他、悪の首領役でデ・ニーロの出演も交渉されているそうだ。

ローランド・エメリッヒのア

「ユニバーサル・ソルジャー」

Digitized by Google

メリカでの出世作となった「ユニバーサル・ソルジャー」の続編が、同作に出演したジャン＝クロード・ヴァン・ダムの出演で復活されることになった。この作品は旧カロルコが製作したもので、当然各種権利のオークションにもリストアップされていたものだが、今回その続編"Universal Soldier II"（仮題）の撮影が、85年製作「クリーチャー」の脚本監督のウィリアム・マローンと「ダイ・ハード3」を手掛けたジョン・M・ファサーノの脚本、「ツイスター」や「リーサル・ウェポン」シリーズの第2班監督やスタントを担当したミック・ロジャースの監督デビューで、11月10日に開始された。配給は前作のトライスターに代わってコロンビアが担当、公開は来年の8月の予定になっている。なおこの作品に関しては、テレビ化権は分割されているようで、TVムーヴィ版はすでに2作品が製作されて放送されているようだ。

最後に、もう1本続編の話題で、「クロウ」シリーズの第3作"The Crow: Salvation"のヒロイン役に「ジュマンジ」などのキルスティン・ダンストが発表された。ヒーロー役は未定だが、撮影は来年早々に開始されるということだ。

〔井口健二〕

★台北映画祭㊂

前号では台北映画祭、台北電影奬の、言わば予め運命付けられていた金馬奬との対比的性格――即ちより若々しく、新しい潮流の評価に積極的な性格――について、その背景にある歴史を書いたが、そのことは実際に台北を訪ねてみるとますます強く感じられるものだった。

この映画祭、その組織の名目上のトップはかつての台湾ニューウェイブの火付け役の一人・小野が務めている。呉念真と共に八〇年代半ばまで中央電影公司に籍を置き、新世代映画監督の作品を次々と生み出した立役者的脚本家、作家だ。この事自体、この映画祭の性格を象徴するものだが、実際、彼はこの映画祭ではどちらかと言えば象徴的役回りを演じたに止まる。そして各上映番組の部門や出版なども含めた映画祭全体の企画の実質的責任者は、小野よりさらに若いニューウェイブ第二世代監督・陳國富の手に委ねられていた（つまり楊徳昌『エドワード・ヤン』の「恐怖分子」の脚本を担当したコンビが、それぞれ象徴的責任者と実質的責任者を務めているわけだ）。

だがこの五八年生まれの実行委員長でさえ、映画祭スタッフのなかでは一人飛び抜けて「年寄り」の世代であることが、彼らのオフィスを訪ねてみると判明する。

彼の下で働いているプログラム・ディレクターなど各部門の責任者たちは、年齢を問いただしたわけではないが、見たところ多くが二〇代半ばから三〇代初め程度という世代。しかも組織は非常に少人数のものなので、そのオフィスは何やら大学のサークルの部室という雰囲気である。プログラムの内容が、ほとんど「ジェネレーションXムービー・フェスティバル」とでも呼ぶべき、世界からデビューしたての若い世代の監督の作品を選りすぐってきたものであることは以前紹介したが（プログラムのなかには侯孝賢やクリストファー・ドイルら今となっては重鎮クラスの映画人の作品も含まれていたが、それとて彼らのXジェネレーション時代、つまりまだプロの映画人としてデビューしたてかデビュー直前の時代の作品である）、主催者側の陣容自体もまたそう呼べるものであったのだ。

台北映画祭でどのようなプログラムが上映され、どのような活動が繰り広げられたかは、既にこの場で何度か言及しているので再び繰り返さないが、こうした若い世代の作品に絞ったプログラム構成から、新世代批評家を生み出すためのコンテストの開催まで、この映画祭は台湾の映画界（マスコミ関係者や、映画祭、映画賞の運営組織など行政面の人々まで含めた広義の映画界）の、あのニューウェイブ胎動時代に続く今一度の世代替わりの必要性を大きくアピールしたもののように感じられた。

最後に、ちょうど自作「徴婚啓事」のポスト・プロダクションの時期と重なるにもかかわらず、なぜ自分が台北映画祭の実行委員長を引き受けたかに関して、陳國富が現地のマスコミに寄稿していた面白い話を紹介しよう。そこで彼が書いているのは、自分が高校を卒業したあと台北の語学学校に通っていた時代のことだ。ある日その学校に、商業映画館ではかからない映画ばかりを集めた自主上映形式の映画祭の告知ポスターを貼りにきた若い男がいて、そのポスターを見て通った映画祭で自分は今まで自分の知らなかった種類の映画への目を見開かされ、自分が映画の道に進むきっかけとなった、というものである。そして、そのポスターを貼りに来た男こそ、若き無名時代のクリストファー・ドイルだった、と。あの時のドイルが与えてくれたような全く新しい映画世界の提示によって多くの若者たちを映画の道に引き込んでいくこと。スタッフ編成からプログラム構成に至る陳の狙いも、畢竟そういうところにあったのかもしれない。

★第35回金馬奬ノミネート発表

台湾のアカデミー賞に相当する第35回金馬奬のノミネート作・人が例年にない長い議論や紛糾を経て、ようやく発表された。その結果は以下のとおり。（各作品の下の〔括弧〕内はその作品の出品会社を、各人物の下の〔括弧〕内はその作品によってノミネートされていることを示す）。

【劇映画作品賞】

「徴婚啓事」〔縱横、中央〕
「天浴」〔呢喃的草地〕
「我是誰」〔ゴールデン・ハーベスト〕

Digitized by Google

「玻璃之城」〔アミューズ、ゴールデン・ハーベスト〕
「毎天愛你八小時」〔BOB〕
「フラワーズ・オブ・シャンハイ」〔侯孝賢映像〕

【監督賞】
陳國富〔「徴婚啓事」〕
陳沖（ジョアン・チェン）〔天浴〕
張婉婷（メイベル・チャン）〔「玻璃之城」〕
侯孝賢〔「フラワーズ・オブ・シャンハイ」〕

【主演男優賞】
洛桑我培〔「天浴」〕
黄秋生（アンソニー・ウォン）〔「野獣刑警」〕
黎明（レオン・ライ）〔「玻璃之城」〕
梁朝偉（トニー・レオン）〔「毎天愛你八小時」〕

【主演女優賞】
楊貴媚〔「洞」〕
劉若英（レネ・リウ）〔「徴婚啓事」〕
李小璐〔「天浴」〕
呉君如（サンドラ・ン）〔「洪興十三妹」〕

【助演男優賞】
王朝明〔「徴婚啓事」〕
顧寶明〔「花橋栄記」〕
曾志偉（エリック・ツァン）〔「ホールド・ユー・タイト」〕
方中信〔「毎天愛你八小時」〕

【助演女優賞】
蔡燦得〔「悪女列伝」〕
關秀媚〔「毎天愛你八小時」〕
舒淇〔「洪興十三妹」〕
李慧敏〔「9413」〕

【オリジナル脚本賞】
羅啓鋭（アレックス・ロー）〔「玻璃之城」〕
阮世生〔「毎天愛你八小時」〕
司徒錦源、遊乃海〔「ロンゲスト・ナイト（暗花）」〕
楊逸徳〔「没有小鳥的天空」〕

【脚色脚本賞】

「フラワーズ・オブ・シャンハイ」

陳國富、陳世杰〔「徴婚啓事」〕
謝衍〔「花橋栄記」〕
陳沖、嚴歌苓〔「天浴」〕

【撮影賞】
林銘國、宋文忠〔「悪女列伝」〕
呂楽〔「天浴」〕
潘恒生〔「我是誰」〕
馬楚成〔「玻璃之城」〕

【SFX賞】
科幻電腦特技〔「我是誰」〕
先濤數碼影畫製作〔「玻璃之城」〕
先濤數碼影畫製作〔「風雲雄霸天下」〕

【美術賞】
楊凡〔「美少年之恋」〕
余家安〔「玻璃之城」〕
何劍雄〔「風雲雄霸天下」〕
黄文英、曹智偉〔「フラワーズ・オブ・シャンハイ」〕

【コスチューム・デザイン賞】
郭玉芬〔「悪女列伝」〕
朴若木〔「天浴」〕
力碧君〔「風雲雄霸天下」〕
黄文英、沈歩海、宋敏慧、廖淑珍〔「フラワーズ・オブ・シャンハイ」〕

【アクション指導賞】
成家班〔「我是誰」〕
林迪安〔「風雲雄霸天下」〕
董瑋〔「殺手之王」〕

【映画音楽賞】
鮑比達〔「美少年之恋」〕
小蟲〔「天浴」〕
趙増熹〔「アンナ・マデリーナ」〕

【映画主題歌賞】
小蟲〔「天浴」〕
星工廠〔「アンナ・マデリーナ」〕
林夕〔「玻璃之城」〕
林夕、陳光榮〔「風雲雄霸天下」〕

【編集賞】
張達隆〔「徴婚啓事」〕
楊紫煒〔「天浴」〕
張耀宗、邱志偉〔「我是誰」〕
李明文〔「玻璃之城」〕

【音響効果賞】
Jay Boekieheide〔「天浴」〕
Rogor Savage Paul Pirola of Sound Film Pty.Ltd.〔「我是誰」〕
曾景祥〔「玻璃之城」〕
曾景祥〔「風雲雄霸天下」〕

【短編フィクション作品賞】
該当なし

【記録映画賞】
「台湾梅花鹿的一生」〔墾丁国家公園管理處〕
「蛍火蟲」〔玉山国家公園管理處〕
「阿嬤的秘密——台籍慰安婦的故事」〔大好伝播〕

【動画作品賞】
「魔法阿嬤」〔稲田電影工作室〕
「末日世界」〔林浩溥〕

以上のなかから各部門最優秀賞が選ばれるほか、昨年開設された新しい賞——審査員グランプリ、審査員特別賞——が今年も授与されることになった。この二つの賞は、基本的に香港、台湾両地映画界の映画イベントである金馬奨の中で特に台湾映画、映画人に絞って与えられるもので、審査員グランプリが最も優れた台湾映画に、審査員特別賞は最も優れた台湾映画人に、それぞれ授与される。またこれ以外に、正式な賞ではないが、観客による最優秀作品投票も作品賞ノミネート作品を対象に行われることになっている。

授賞式は一二月一二日に、アジア太平洋映画祭授賞式と兼ねて開催の予定。

〔暉峻創三〕

Digitized by Google

from Japan

原一男監督、劇映画に挑戦！

「さようならCP」（72）でデビューして以来、94年本誌ベスト・ワンに選ばれた「全身小説家」までドキュメンタリー映画を撮り続けてきた原一男監督が、いよいよ劇映画のメガホンに挑戦する。実話を基に女の半生を描く「**またの日の、知華**」（製作：疾走プロダクション）で桃井かおりが主演し、1999年5月クランクイン、2001年公開の予定。

作品は、1974年、愛知県豊中市の女教師が新任の男性教師と不倫のはてに出奔し、各地を転々としたあげく、売春の客として知り合った男に刺殺されるという実際に起きた事件を映画化するもの。脚本は「さようならCP」から「全身小説家」まで原監督全作品のプロデューサーで、シナリオライターでもある小林佐智子が担当。裁判記録や警察調書などを蒐集し、関係者への取材を重ねフィクションとしてシナリオ化。男を捨て、子供を捨て、社会的なステイタスを捨ててまでも、彼女が求めたものは何だったのか、成熟した〝知華〟という女の半生を浮き彫りにしてゆく。

キャストは、「ひとりの女を4人の女優を使って描きたい」という原監督の構想から、主人公・知華役は4人の女優が演じる。現在、映画の最終章・最もメインとなる「知華」に桃井かおり、第三の「知華」に金久美子の出演が決まっている。

作品は、1999年5月から2000年5月まで撮影、完成は同11月末、公開は2001年春の予定。

原一男監督

伝奇ロマン「死国」撮影スタート

直木賞作家・坂東眞砂子原作を映画化する東宝配給「**死国**」（監督長崎俊一）の撮影がスタートした。

作品は、四国・高知の山間の村を舞台に、古来からの伝承をモチーフに死者がよみがえる恐怖を描く伝奇ロマン。15年ぶりに生まれ故郷に戻った主人公・比奈子は、幼なじみの莎代里の11年前の事故死を知る。大人になれなかった莎代里の情念が比奈子や同級生らを恐怖に陥れていく。

キャストは、主人公の比奈子に夏川結衣。死者をよみがえらせる儀式〝逆打ち〟によって生き返る少女・莎代里に2812人の中からオーディションで選ばれた新人・栗山千明。

製作は、角川書店、イマジカ、東宝、アスミックエースエンタテインメント等で構成する「死国」製作委員会。撮影は11月上旬より愛媛県東宇和郡等でロケし、99年1月上旬完成。

公開は99年1月23日から全国東宝系。「リング2」（中田秀夫監督）と同時上映となる。

北海道稚内市 市制50周年記念作品

北海道稚内市市制50周年を記念して映画「**学び座 ～ソーランの歌が聞こえる～**」（製作：JTAキネマ東京新社）が製作された。

作品は、日本最北端の街、稚内市立南中学校で実際に起きた出来事をもとに映画化したもの。監督は斎藤耕一、脚本は斎藤監督と古屋和彦が共同執筆。昭和64年当時、全国の中学校は校内暴力やいじめが問題となり様々な事件が起きていた。稚内南中学でクラブ活動の一環として郷土芸能部、通称〝学び座〟を設けて日本民謡民舞大賞を獲得、校内暴力から学校を救うまでのドラマを感動的に描く。

出演者は、主人公の教師に渡瀬恒彦、校長に田村高廣、他に安達祐実、小島聖、ガッツ石松、渡辺裕之、増田恵子、田中好子らが共演。

作品はすでに完成しており、99年春に公開の予定。

吉村作治教授 映画「ナイル」に出演

エジプト考古学者でタレントとしても活躍する早大教授・吉村作治が、原作を兼ねて映画「**ナイル**」に出演する。

作品は、エジプトの財宝をめぐる犯罪シンジケートと刑事、特派員との3つ巴の物語をラブストーリーを絡めて描くサスペンス。2001年から2002年にかけて東映㈱事業推進部が全国20都市で共同開催する「古代エジプト文明展（仮）」のキャンペーンイベントの一環として東映と東映ビデオが共同製作する。

「昨年エジプト・ルクソールで起きたテロ事件により、年間6000人いたエジプトへの日本人観光客が激減。エジプト航空やエジプト観光省より同国のイメージアップのため映画製作の要請を受けていたもので、エジプト政府の全面協力で製作する」と同社の草薙常務。

メインスタッフは、監督・和泉聖治、脚本・田部俊行。キャストは、主人公のカイロ特派員に来年芸能生活30周年を迎える渡瀬恒彦。後輩記者に哀川翔。

撮影は99年3月クランクイン、全体の8割はエジプトロケを敢行する。公開は99年11月、東京・大阪など全国20都市の予定。

Digitized by Google

映画界ニュース

●第2回「映画製作専門家養成講座」募集要項

昨年12月から今年2月にかけて開催された「映画製作専門家養成講座」（主催：東京国立近代美術館フィルムセンター）が今年も行われる。これは、製作現場のベテランたちを講師に迎えて、講師が選択した映画を鑑賞し、講義やディスカッションを行うというもの。第2回の今回は、照明、記録、衣裳、技髪・美粧、装飾・小道具、特撮・視覚効果の6部門を対象となる。詳細は次のとおり。

▽講師

・総合プロデューサー＝野上照代

・照明部門（2月16、17日）＝下村一夫、佐野武治

・記録部門（2月18、19日）＝堀北昌子、白鳥あかね

・衣裳部門（2月23日、24日）＝ワダエミ、高橋靖子

・技髪美粧部門（2月25日、26日）＝上田幸夫、江川悦子

・装飾小道具部門（3月2日、3日）＝神保昭治、浜村幸一

・特撮視覚効果部門（3月4日、5日）＝関口芳則、小川利弘

▽応募資格＝映像製作の一分野に専門的な知識、もしくは助手など実際の現場経験を有する者（日本映像技能連合、日本映画テレビ技術協会のメンバーを含む）。

▽募集定員＝各部門40名。

▽応募方法＝応募用紙に必要事項を記入の上、郵送。書類選考の上、合否を通知。

〒104－0031　東京都中央区京橋3－7－6　東京国立近代美術館フィルムセンター　映画製作専門家養成講座事務局

▽しめきり＝99年1月9日（土）必着。

▽受講料＝無料。

▽問い合わせ＝☎03・3561・0823（代表）

●ソニーPCLが製作支援する作品、決定

ソニーPCLは、独立系プロダクションの映画製作を支援するプロジェクト「F－MAP（Film Making Assist Project）」の第2回作品企画募集を9月30日で締め切り、41社、47件の中から次の作品に製作支援することを決定した。

・「またの日の、知華」（製作：疾走プロダクション／監督：原一男）

・「路地へ　中上健次の残したフィルム（仮）」（製作：スローラーナー＝ブランディッシュ／監督：青山真治）

●第24回「城戸賞」決まる

第24回城戸賞は、次の作品に決定した。（応募総数は269）

〈準入賞〉

・「はなし塚異聞」　桑名英文

・「残暑」　藤村磨実也

●「愛を乞うひと」アカデミー賞へ

「愛を乞うひと」は、第71回アカデミー賞の外国語映画部門に出品されることが決定した。

訃報

エリック・アンブラー氏（英／作家、脚本家）10月22日に死去。89歳。『あるスパイの墓碑名』『ディミトリオの陰謀』『インターコムの陰謀』『最後の突撃』『情熱の友』など小説家として活躍する傍ら、「怒りの海」53（アカデミー賞脚色賞ノミネート）、「紫の平原」54、「SOSタイタニック～忘れえぬ夜～」58、「メリーディア号の難破」59、「トプカピ」64など映画の脚本も手掛けた。

淀川長治氏（よどがわ・ながはる／映画評論家）11月11日、心不全のため死去。89歳。

1909年、神戸生まれ。幼少の頃から映画に魅せられ28年に『映画世界』編集者となり、33年から、ユナイト社、東宝などで映画宣伝を手掛け、戦後は『映画之友』の編集長を務めた後にフリーとなる。60年から始まったテレビ映画『ララミー牧場』（テレビ朝日）の解説でテレビに出演、続いて66年から始まった『日曜洋画劇場（スタート時は土曜洋画劇場）』の解説を担当、独特の語り口で絶大な人気を集める。以後、執筆活動やテレビ・ラジオ・講演などをとおして、映画の魅力を語り、多くの映画ファンを増やした。勲四等瑞宝章、川喜多賞、キネマ旬報読者賞、日本映画ペンクラブ賞などを受賞。『淀川長治自伝』をはじめ著書多数。

12月13日（日）には青山葬儀所で「淀川長治さんとサヨナラの会」が開催される予定。

アラン・J・パクラ氏（米／映画監督）11月19日、交通事故のため死去。70歳。大学卒業後ワーナーのアニメ部門を経て、パラマウントで「栄光の旅路」57をプロデュース、続けてこの作品の監督ロバート・マリガンと組んで「アラバマ物語」62、「マンハッタン物語」62、「レッド・ムーン」69などを発表する。69年の「くちづけ」では監督業に進出、以後「コールガール」71、「パララックス・ビュー」74、「大統領の陰謀」76、「華麗なる陰謀」80、「ソフィーの選択」82、「推定無罪」90、「ペリカン文書」93、「デビル」97など社会性を持つサスペンス作品を多く手掛けた。

Digitized by Google

映画街

興行短信

竹入栄二郎

ゴールデングロス賞あれこれ

全興連（佐々木良一会長）が制定しているゴールデングロス賞が決定、12月1日、有楽町マリオン11階の朝日ホールで開催された「映画の日」中央式典の席上、授与式が行われた。

このゴールデングロス賞は、数ある映画賞の中で、唯一その稼ぎ高を選考の基準としている。それも、毎年1月になると、映連首脳部が発表するその前年の配給収入10億円以上の作品の順序によるものではなく、もちろん、その作品の配収額は一つの参考資料にはなるが、全国映画館での手残り（単純に興行収入とも異なる）が選考基準の最大のものさしとなっているところに特徴がある。

例えば、興収を基準にした場合と配収を基準にした場合とでは、微妙な違いが生じることがある。興収を配給会社と映画館とで分ける場合、興収の分け方を7：3であるか、6：4であるかによって取り分は違ってくるから、もし同じ金額の興収の作品が複数あった場合は、配収順位に差が出てくる。

全興連が、全国の映画館から稼ぎ高のアンケートをとって整理したところ、日本映画では、①「ポケットモンスター・ミューツーの逆襲」他、②「ドラえもん・のび太の南海大冒険」他、③「金田一少年の事件簿・上海魚人伝説」、④「もののけ姫」、⑤「プライド・運命の瞬間」が上位5本だった。ゴールデングロス賞は、邦画、洋画別に、金賞1本、銀賞4本が選ばれるが、この邦画5本の中には昨年の夏から延々ロングされた「もののけ姫」が3位に入った。これは昨年のゴールデングロス賞で金賞を受賞しているから、今年は当然省かれるが、それだけ「もののけ姫」の威力は凄かったことの証明になった。

上位4本までが東宝配給作品というのも随分偏ったものだが、「もののけ姫」が外されたことによって、⑥の「不夜城」が繰り上がり、結局、金賞「ポケモン」、銀賞は順不同となり、「ドラえもん」「金田一少年の事件簿」「プライド」「不夜城」の4本ということで落ちついた。

「ポケットモンスター・ミューツーの逆襲」

©Nintendo-CREATURES・GAMEFREAK・TX・SP・JK
©ピカチュウプロジェクト98

「タイタニック」

ちなみに松竹配給作品では「アンドロメディア」「ウラトラマンティガ&ウルトラマンダイナ」がベストテンに入っている。

外国映画では、結果的には、金賞1本はFOXの「タイタニック」は、「もの

Digitized by Google

のけ姫」の日本歴代新記録をあっという間に抜いて、世界一の金字塔まで樹立してしまったのだから、いやもおうもない。

②以下は、「ディープ・インパクト」「メイ・イン・ブラック」「GODZILLA」の3本は妥当なところで圏内に入ったが、残る1本の銀賞が難しい選考となった。

9月26日に公開された「プライベート・ライアン」は、配収としては最終的に30億円は突破するものとみられているが、ゴールデングロス賞の対象作品は、前年の11月1日から今年の10月末までに公開された作品となっており、「プライベート・ライアン」は対象期間が他の作品に比べて僅かであり、公開途中であるために、各映画館の反応はまだ確定していない向きがあった。映画館の投票結果でもベストテンに入ってはいるものの、最終的にはもっと上位に上がるのははっきりしているということから、結局、銀賞の1本に入った。

そのほか興行成績としては、「仮面の男」「セブン・イヤーズ・イン・チベット」「エアフォース・ワン」などが上位に来ている。

なお、日本映画で東宝「踊る大捜査線」は配収としては30億円にも迫る勢いで、10月31日の初日だから、ゴールデングロス賞の対象にはなるが、対象期日がたった1日しかないことから、来年回しになった。

FOXに対しては、「タイタニック」の功績から全興連特別功労大賞が別途に贈呈されている。

スポットライト

内田達夫

正月興行目前のさびしい時期に咲いた〝花〟「トゥルーマン・ショー」が好スタート

正月興行99を目前に控えた11月14日、映画街は秋興行98の後半最後となる大きな番組替えがあり、多くの作品が公開された。それらの公開が終わる頃、映画街は正月興行に突入する。「アルマゲドン」（BV）メインの東宝系と「ジョー・ブラックをよろしく」（UIP）の松竹・東急系との闘い。勝負の行方についてはいろいろ囁かれているが、一体どうなることやら……。

さて、正月興行を目前に控えた11月は、昔から映画街にとってかなり苦しい時期だった。それは各配給会社がこぞって正月映画に話題作・大作を用意するため、どうしても正月までのつなぎ的な小さな作品、地味な作品が集中するからだ。そのためかつては2週間で興行を打ち切られる作品が続出し、その穴埋めに往年の名作が続々とリバイバルされていた。ところが、ビデオの普及に伴いそれが苦しくなり始めると、秋興行前半ヒット作のムーブ・オーヴァーをしたり、作品の興行力を考えた上で正月作品初日からしっかり逆算した公開を設定する工夫がされるようになる。結果、秋興行後半のイメージもずいぶん変わったが、それでも苦しいのはやっぱり変わっていない。

そんな状況の秋興行後半戦だが、今年は何本か当たりが出た。その1本が、先述した11月14日公開組の1本、丸の内ピカデリー1系で公開が始まったピーター・ウィアー監督の「トゥルーマン・ショー」（UIP）だ。この作品、同系の前番組「シティ・オブ・エンジェル」（WB）が大ヒットとなったために、公開が大幅に遅れた。今年はこのパターンが割と多く、それが興行の明暗をクッキリと分けることが多かったが、この作品については「L.A.コンフィデンシャル」（ヘラルド、日比谷みゆき座系）等と同様、〝明〟となったようだ。上映館の一つ、新宿ジョイシネマ支配人の榎鶴康輝氏に話を聞いた。

「トゥルーマン・ショー」

「正直言って予想以上のスタートですね。普通、ヒットする作品というのは、どんなに遅くても公開1週間前を切ると窓口の前売券が売れ始め、電話の問い合わせも多くなるものです。ところがこの作品は、前売が動かなければ電話も鳴らない。〝コリャダメだ〟って気分でしたよ（笑）。だけど、そんな状態で迎えた初日、〝まあまあかなぁ〟っていう初回になった後、アレよアレよという間に数字が伸びていって……。終わってみたら「シティ・オブ・エンジェル」よりも上の数字が出ちゃったんですよ。一部のファンしか動かない作品にありがちな初日天下ではなくて2日目もそんな調子でしたし、都内の他の劇場でも同様の状態になってますからね。ホント、驚きましたよ」

「いい映画だけど当てるのは難しいのでは……」と囁かれていたこの作品。当たっただけでも驚きだったが、観客の動きにもちょっと驚くものがあった。そんなヒットになった要因は何だろうか。それについて、次号で引き続き榎鶴氏に聞いていく。

Digitized by Google

映画戦線

大高宏雄

トゥルーマン初日情景（ショー）

11月14日、例によって渋谷東急文化会館の五階喫茶室に居座ると、向いの渋谷東急チケット売り場に列ができ始めていた。時間は午後2時。次回の上映開始は3時だが、それにしてはちと列の混み具合が早すぎる。チケット購入者は劇場内に入って、入口左右に並ばされている。見ていると、5階エレベーターの扉が開くごとに人がはき出され、チケット売り場に直行している。聞けば、その時点で上映している回は空席が幾つか残っているという。ということは、前上映時に満席のためこぼれた人たちが次回待ちで、その時点で列を作っていたわけではない。あくまで3時の回に観るべく、2時段階（もっと前から?）で並び始めたようなのだ。不思議だったのは、3時近くなってドっとその量が増えると思っていたのに、意外とそうでもなかったことだ。つまり2時から3時の間に、エレベーターから平均した数の人が現れ、チケットを購入して劇場内に入って行った。映画を観る場合の一つの秩序ができ上がっているのだろうか。劇場関係者はほぼ3時時点で、立見の看板を掲げた。

そうした秩序だった観客の形を作り上げていたのは、この秋期待の1本であった「トゥルーマン・ショー」。3時近くなってどうしても劇場の人と話がしたくなって喫茶室を出た私は、ちょうど劇場の中から出てきた配給会社のベテラン女性宣伝マンと鉢合せした。彼女はどうやら、その回の終了間際数10分くらいを場内で観ていたようで、「抜群のリアクションですね。1人途中で出てきましたよ。中年の女性でしたが、若い人たちは面白がってるみたい」と開口一番。さらに彼女が言うには、銀座の劇場と違って渋谷は圧倒的に若い人が多く、「違う映画を上映してるみたい」。ここで私はなるほどと思った。今は若い人の方が、映画を観る秩序をよく知っている。つまり自身の勘で、少しでも人気が出そうな作品をかぎ当て、それで前出したような並び方を自然に作り上げているのだと（劇場の対応の仕方もよく知っている）。彼女には聞き忘れたが、年齢層が違う銀座ではこの劇場のような観客の流れはなかったのではないだろうか。

実はこの「トゥルーマン・ショー」、今年公開される外国映画の中で私が最もその興行動向に関心を抱いていた作品の1本であった。6月ごろだったか、配給会社に貼られてあったポスターにまず度胆を抜かれた。それは誰が見ても主演のジム・キャリーの顔だったが、その顔を構成する小さな正方形の部分に私は注視せざるをえなかった。もちろん、宣伝段階でこのポスターは各所に貼られていたから、今はその巧妙な仕掛けは衆知の事実になっているだろう。ただその時点で初めてそれを見た者はびっくりした。本当に小さな部分的な正方形は、それ自体映画の様々な情景ででき上がっていて、その全体像がジム・キャリーの顔になっている。内容が少し耳に入ってきた段階で、私はこの作品に興行的なポテンシャルを感じた。奇抜なポスターと特異な物語。今までに前例のない種類の作品であり、ポスターの奇妙なインパクトのせいもあって、私は「トゥルーマン・ショー」を珍しくかなり早い時期に試写で観る羽目になったのである。

実は観て、大いなる疑問を抱いてしまった。テレビ中継によってその実生活がまるまる白日のもとにさらされていく男の物語という設定を、どのように説得力ある細部の描写で展開していくのかという私の注目点が、どうにもご都合主義にすぎる気がしたのである。つまり、男がまさに閉じ込められ、そこで生活することになる街全体の機能性（装飾性も含めて）とそこに住む人たちのヤラセ的職能性がよくわからなかったのである。後者なら住民たちは、そしてもちろん男の家族たちはいかなるローテーションでヤラセを完遂してきたのか。彼らの実生活との兼ね合いは、果たしてどうなっているのか。おそらく製作者たちは、あえてそのあたりの描写をふっ飛ばしたと思われる。この作品の場合は、まさにシチュエーションのみが重要であって、それを物語の骨格にしたために、こぼれ落ちていくものが相当あった。製作者たちは、それでもいいと企画及び製作段階で突っ走ってしまったに違いない。

それは、ラストあたりでいかにもファンタジー的様相を、この作品が前半部分にも増して強めてくることからも窺える。これはリアリズムの映画ではありませんよ。そんなに深く細部を追求してはいけません。ファンタジーなんです。現代よりさらに加速化した近未来の高度物質社会の中で、かっこうのえじきになった男のファンタジーな脱出物語。これにリアリズムは必要ありません。映画はラスト近くなって、そのことをそれまで以上に高らかに宣言する。私が感じた疑問点を、この作品はおそらく呑み込んでいる。そ

Digitized by Google

異状なし

のような極めてまっとうな疑問点をあらかじめ設定した上で、ファンタジーの創出に邁進している。観た当人が感じるリアリズムとファンタジーの引き合い加減によって、この作品は評価が分かれてくるだろう。試写段階では、大方高い評価となっていたそうだが、プロの人たちでさえ現代では心優しく映画と接する人たちが増えたんだとその時私は感じたものだ。

一般観客が集う興行上においては、明快にこの作品のシチュエーションは大きな関心をもたれたように見える。この作品を予備知識が全くなく、ジム・キャリーのコメディの延長線でのみ観た年配の人が私に言った。「みんな全然笑わない。観てて何が何だか、全くわからない」。恐るべき感想だが、おそらく劇場につめかけた多くの人は、そうは思わなかったに違いない。ある程度の予備知識があり、ということは各パブリシティで内容を基本的にはつかんでおり、だからこそ劇場に駆けつけたのであろう。そしてその根本にあったのは、映画の中で男＝トゥルーマンの一挙一動に拍手を送ったパブの女性たちと同じく、好奇心であり、もの珍しさであり、そしてちょっぴりの心優しさであったと思う。プログラムがふだんのヒット作より売れているというのを聞くと、自身の興味と映画の中身に微妙な違いがあり、そのギャップを埋めたい観客が多かった気がする。何となくわかりづらいところもあって、だからこそプログラムである種の確認作業が必要だったのだろう。

「トゥルーマン・ショー」と同日公開の作品に、**「始皇帝暗殺」**と**「時雨の記」**という秋の2大話題作があった。どちらの作品も、宣伝規模においては「トゥルーマン・ショー」を上回っていたと言っていい。「リング」「不夜城」より縮小されたとはいえ、角川書店は書籍宣伝である程度のスケールを見せ（「始皇帝暗殺」）、二人の主演俳優の映像がテレビでひんぱんに流れた（「時雨の記」）。結果は「トゥルーマン・ショー」の1人勝ちということになるのだが、この彼我の作品に観られる興行上の相違は、今やとてつもないものがあると判断していい。映画の概念がそもそも大きく違ってしまっている。そして、それに伴ってそれぞれの作品に対する人々の意識が全く違う。作品存在の浸透がどのような規模で行われていくのかといったことなど、全く無関係に人々は作品に関心をもったりもたなかったりする。莫大な製作費だったり、有名俳優が出ているからといって、それは人々の映画を観る選択肢にはなり得ない。このことは本当によく考えなくてはならない。くどいようだが、ここでもマーケットの問題が大きく立ちはだかっているのだ。

冒頭の渋谷東急の情景に戻る。おそらく映画を観る観客の秩序のようなものは、「トゥルーマン・ショー」という全く新しい内容をもった作品こそが作り上げた気がしてならない。ヒットする映画は、打ち込み（第1回上映時）段階である程度の目算ができるのに、この作品の場合は前出した時間帯から盛り上がりが見えてきた。劇場関係者でさえその変則的な並び方に首をひねるほど不思議な観客動向があり、これはどうやら「トゥルーマン・ショー」がもっている作品テイストと大いに関係がありそうだ。作品が生き物であるとともに、興行も生き物であり、だからこそ不思議な秩序ができ上がったのだろう。実際、この秋ヒットした「シティ・オブ・エンジェル」とは観客層から作品のリアクションまで、「トゥルーマン・ショー」は全く違っている。当り前といえば当り前なのだが、にもかかわらず私は興行は生き物であり、生ものなのだと改めて感じてしまった。蛇足ながら、私の書いた文章が引き金になったのかどうか、渋谷東急の指定席は以前の半分になっていた。

「トゥルーマン・ショー」（下も）

Digitized by Google

キネ旬 KINEJUN LOBBY ロビイ 読者スクランブル

●結婚はしたものの……

結婚しました。夫婦仲よくペア券をもって映画館へ……。なんてのは夢の夢。本数は激減、LDやグッズのコレクションはジャマだと言われ禁断症状の続く毎日です。せっかく大阪にミニシアター、シネコンがふえるのになァ……。（木村康志・大阪府大阪市・会社員・40歳）

●理想の映画館を目指して

まだ入社して3カ月余りの若輩者ながらいつも良い映画館にするにはどうしたらいいのか考えております。ワーナーマイカルは設備はバツグンだと思いますが、映画館というよりもアミューズメントパークに似ているかもしれません。理想の映画館はどういうものかという意見を聞きたいです。一歩でも近づけるために努力したいと思います。個人的にですが（会社を動かせる力はまだないので）。（枝広昌巳・神奈川県相模原市・ワーナーマイカルシネマズ新百合ケ丘勤務・27歳）

●甘ちゃんと言われてもいい！

先日、ある映画の撮影現場に遭遇する機会があり、興味津々で見ていたところ大変驚かされました。一分足らずのシーンをとるのに何度も何度もやり直しをして半日以上かかっていたのです（もしかしたらカットされるかもしれないのに……）。一本の作品ができる迄のスタッフや俳優さんの御苦労は大変なものでしょうね。今迄は面白くないのに褒めている批評家の人を〝甘ったるい〟と思っていたのですが、一本の作品にどれだけ多くの人々の思いがこもっているかを考えた時、少しでもいい所を見つけて褒めてあげたいと思ってしまいました。こんな私って〝甘ちゃん〟でしょうか。（田川真理子・東京都世田谷区・主婦・44歳）

●今度はどこで会えるのか？

広告もチラシも無くなった「銀座並木座」の前に立って、僕はカメラのシャッターを押した。正直、僕は並木座の熱心なファンではなかった。黒澤明監督の映画を見に入って、スクリーンが全然見えない程の満員で、僕は涙を呑んで見ずに出た事があった。悔しかったが、当時の僕には休日の時間は貴重だった。だから「並木座」を語る時、どうしてもその時の悔しさが出てしまうのだ。しかし、立見でもいい、もう一度並木座で黒澤作品を見たかった。10月上旬号で鶴田浩司氏が「黒澤監督追悼特集を並木座で……」と書いているが、実は文芸座閉館前に鶴田さんと偶然お会いし、写真を撮った。その時の写真が出て来て、思わず写真に呟いてしまった。「鶴田さん、どこで黒澤映画と再会しますか？」（石塚雅晴・埼玉県行田市・調理師・40歳）

●映画を作りたくて聖林（ハリウッド）へ

英語の勉学の為にも日本語の本は読まない様にしていますが、キネ旬は別。だけど購入するにつ

ロビイ読者伝言板

■『流通部会』は20年以上前に始まり、200回以上を数える勉強会です。97年から私（熊倉）が幹事を担当しており、〝流通〟をキーワードに、なるべく幅広い視点でテーマやゲストを選ぶようにしています。本年3月にはNHK『流通戦争』を担当されたシナリオ・ライターの佐伯さん、9月には中国ビジネスをテーマに「てなもんや商社」の本木監督をゲストとしてお招きしました。12月には「ムトゥ／踊るマハラジャ」を配給されたザナドゥーの市川社長をお招きして、新しいマーケットの開拓、映画・ソフトビジネスのあり方などについて、お話をうかがう予定です。参加者も流通を始め、メーカーの方、航空会社の方、私のような広告関係など多様です。いろんな方の、いろんな意見が活発に議論され、そうした中から、不況や壁を突破するアイディア、ヒントが生まれるのではないかと考えます。毎月1回、第4木曜日、午後7時から、新橋『集&YU』港区西新橋2－13－6 ミタニビル3Fにて。費用450円（食事とビール付き）。（お問合せ〒143－0023 大田区山王2－40－1 山王メイゾン402 熊倉和男 TEL 03－5742－9192 FAX03－5742－9195 NIFTY:KHE02775 E-mail:kumakura@pol.kikimimi.ne.jp）

■ジェット・リーこと李連杰の電影新聞（vol・1）を創りました。連杰の映画の作品紹介、最新情報、よもやま話などなど連杰一色の新聞です。御希望の方は300円（送料含む）の郵便定額小為替をお送り下さい。すぐ発送致します（vol・2も年末に増刊号として出る予定です）。（〒590－0403 大阪府泉南郡熊取町大久保中2－11－17 嵯峨眞理）

■この度、西日本映画クラブ（motion picture program club）を作りました。月数回の意見交換会や会報を発行する予定です。80円切手同封で連絡下さい。（〒652－0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2－6－8 小林浩一）

Digitized by Google

は高価（輸入本ですから）すぎるので、リトル東京のライブラリーから借りています。引越す前は車で1時間もかかり、やっとの思いで行っても、読みたい号がなかったりして手ぶらで帰ってくることもしばしば。でも2〜3冊まとめて借りられた時はもうとっても幸せです（今は車で30分位）。LAに居て本当に幸せだと思うのは新しい映画が安くどんどん見られること。萩尾望都先生のコミックスを映画化したいばっかりにハリウッドに来てしまって早3年。先生、いつか必ず作りますから待って下さい。（×子・エollywooα・プロダクションコーディネーター・39歳）

●良い旅を！

看護婦をしている友人と一緒に、サイパンへ遊びに行く事になりました。私達が泊まるホテルの近くに映画館があるので、覗いてみようと思います。雨が心配です。（久保田知加子・東京都大田区・アルバイト・22歳）

●「タイタニック」より泣けた

「がんばっていきまっしょい」見ました。いや、見て泣きました。広島から高知に行く途中、ぐるり迂回して松山で見て来たのですが、その青春映画の美しさたるや、まさにタイタニックより泣ける（とは言っても、タイタニックを見ていないのですが……）。その3日後、高知から片道4時間かけてまた松山へ行き2回見て、高知に戻りました。若くてバカばっかしてたけど頑張っていた高校生時分を思い出しました。私にとって、今年No.1の映画ではないでしょうか。何より、やっぱ松山でこの映画を見られたことが嬉しいかな。（節田佑介・広島県東広島市・大学生・21歳）

●ウラ話を聞き新たな発見

11月上旬号巻頭特集「踊る大捜査線 THE MOVIE」の感想です。メイキング番組などを見ても、どうやって映画を作っているのかということは、なかなか伝わってこないのですが、進藤さんの連載からはその大変さが実感できました。製作と同時進行、そして中からの取材とあって「大丈夫かな？」「がんばれ」という気持で読んでいました。今回の特集ではスタッフ1人1人の顔が出て、皆さんの自信がうかがえましたし、特に美術さんや衣裳さんなど、普段は決して表に出ることのない方の話も、とても興味深かったです。ウラ話を聞くとTVシリーズにも新たな発見があってとても面白かった。映画が本当に楽しみです。特集ありがとうございました。（山下夏曜子・大阪府大阪市・学生・22歳）

●広島映像ライブラリー

広島に名画座はありませんが映像ライブラリーというところがあります。客の年齢層が高く、20代、30代の人は殆どいません。60歳すぎの無料入場者の人が多いのです。しかし料金は440円なのですから若い人にもっともっと入ってほしい。映画が一番活気のあった時代の作品を知ってほしい。（中野浩二・広島県広島市・会社員・46歳）

●映画もよいがドラマもよい！

ドラマ『今夜、宇宙の片隅で』がとても好きでした。三谷さんの作品の中で私は一番好きです。最近のTVドラマのただ単に10回放送する、ゴーインな話の展開にうんざりしていたので、このドラマを見た時は心底感動しました。これでこそ連続ドラマの意味があるんだなぁー、映画もよいがドラマもよいなーと思った。（岡真由美・岐阜県岐阜市・会社員・22歳）

●祝・引っ越し！

近々、引っ越します。約30年分のキネ旬をダンボールに詰めたら16箱分、古参のキネ旬ともなると4回目の引っ越しです。妻や娘は本というものがいかに場所ふさぎか、この際思いきって処分したら、と言うがとんでもない。こちらとキネ旬名誉部員だい（97年10月下旬号キネ旬ロビイ欄を見よ）。置くところがなかったら床に敷き詰めて、その上に寝ててもキネ旬は守り通す。（川崎順・埼玉県三郷市・会社員・48歳）

●捨て台詞のかっこ良さ！

11月上旬号の立川志らくのシネマ徒然草で〝黒澤明の本当はベスト1にしたい「どん底」での三井弘次の捨て台詞のかっこ良さ。史上最高のかっこ良さ!!〟と書いていただき、あまりの嬉しさにすぐペンを取りました。よくぞ言っていただきました。私も一度見て、そのかっこ良さに惚れ、又、その台詞を聞きたい為に何度見たことか。「どん底」は映画をつき抜けて、迫ってきます。私のベスト1です。志らくさん、三井弘次さん、黒澤さん、ありがとうございます。（加畑二三子・奈良県橿原市・事務・49歳）

「動画王」編集部からのお知らせ
1998年度テレビドラマ ベスト・テンの募集について

ご存じの方もご存じでない方もいるかと思いますが、キネマ旬報社では「動画王」というアニメ・特撮などを扱った不定期雑誌を発行しておりますが、来年1月下旬発売のVol.8より少しだけリニューアルをします。これまで通りアニメ・特撮は扱いつつ、テーマを少し拡大します。書名通り“動く画”で面白いものがあればなんでも取り上げていこうというテーマで誌面を作っていこうと考えます。その一つとして昨今話題になりつつあるテレビ・ドラマを積極的に取り上げていきたく思い、いきなりではありますがベスト・テンを募集したいと思います。

対象作品は、1998年1月1日〜1998年12月31日までの期間に放映された連続ドラマ作品で、本誌のベスト・テン同様1位を10点とし、2位9点、3位8点……10位1点として集計いたします。

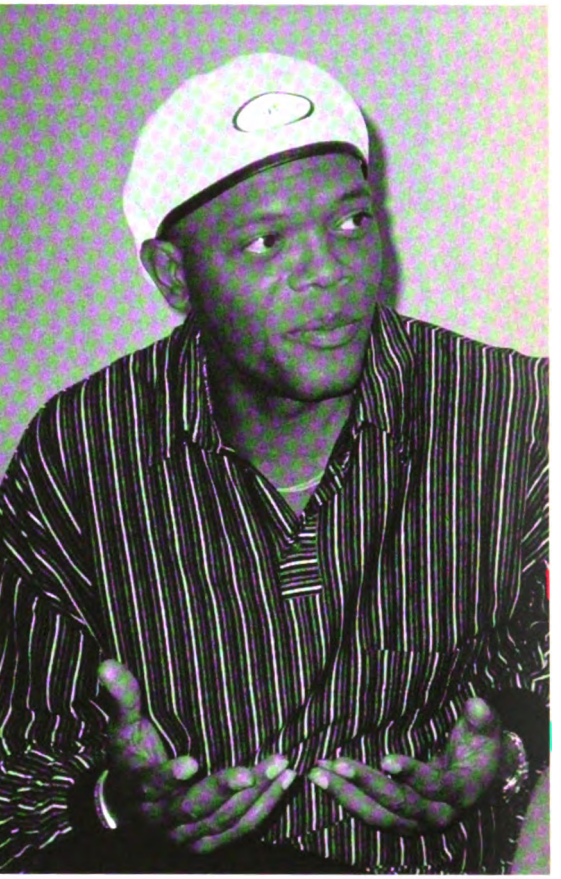
官製ハガキにベスト・テンと住所・氏名・年令・職業をお書きになって、「動画王」編集部（〒112—8502 東京都文京区小石川1—21—14 小石川吉田ビル 株式会社キネマ旬報社）までお送りください。ベスト・テン選考にあたってのコメントやドラマに対する思いなどもお書き添えいただけたら幸いです。なお締め切りは12月31日とさせていただきます。

投票された結果につきましては、99年1月下旬に発売のVol.8にて発表させていただきます。発売日などが決定しましたら本誌にて告知させていただきます。

ぜひともふるってご応募ください。

Digitized by Google

INTERVIEW



ごく普通の人にこの映画を見てもらいたい

「187」の監督・主演

ケヴィン・レイノルズ（監督）
サミュエル・L・ジャクソン（主演）

インタビュアー 石井美由季

Kevin Reynolds／1952年、テキサス州サンアントニオ生まれ。大学の卒業製作で提出した脚本がジョン・ミリアスの手によって「若き勇者たち」（84）として映画化され、映画界入り。「ファンダンゴ」（85）で監督デビュー。「ロビン・フッド」（91）「モアイの謎」（95、コスナー製作）「ウォーターワールド」（95）などケヴィン・コスナーとのコンビ作が多い。

Samuel L. Jackson／1949年、ワシントンDC生まれ。70年代後半から舞台、テレビ等で活躍を始め、「ラグタイム」（81）のギャング役で注目を集め、スパイク・リーの「ジャングル・フィーバー」（91）でカンヌ映画祭最優秀男優賞を受賞。「ジュラシック・パーク」（93）「パルプ・フィクション」（94）「ダイハード3」（95）「ジャッキー・ブラウン」（98）など話題作に次々と出演。

アメリカ都市部の公立高校の抱える問題をシビアに描いた「187」。イギリス公開時に来英した、ケヴィン・レイノルズ監督と主演のサミュエル・L・ジャクソンにインタビューする機会を得た。場所は高級ホテル街ハイド・パークにある、オープンして間もないメトロポリタン・ホテルの187号室。従業員の制服はダナ・キャラン、ロバート・デ・ニーロが出資している超高級日本食レストラン「のぶ」が入っていることで、あっという間にハリウッド・スターの発見スポットと呼ばれるようになったホテルだ。

ハリウッド映画にお決まりのエンディングにはしたくなかった

まず、ケヴィン・レイノルズ監督。ケヴィン・コスナー主演の「ロビン・フッド」や、製作費1億7千5百万ドルを費やした「ウォーターワールド」といった娯楽大作を手がけてきたのに比べると、アクションも大掛かりなセットも無い現代物で低予算の本作はやや意外に思える。

「ブロックバスターを作るのにうんざりしたんだ。規模よりも演出で見せる作品に取り組みたくなった」

そうシンプルに答えるレイノルズには、大学で映画作りを学ぶ前に歴史と法律の学位を取ったというせいか、アカデミックでキビしそうな雰囲気が漂う。私には「ウォーターワールド」でのポスト・プロダクションのゴタゴタについて尋ねるほどの勇気はなかった。

タイトルとなった数字は、カリフォルニア州刑法の殺人に関する条項を指しており、ギャングの符丁としてアメリカで

Digitized by Google

は広く一般化された単語だという。

「他のタイトルを使おうとは全く考えなかった。これが映画の意図を的確に表現しているからね。一般の観客に187の意味が伝わらない可能性より、何を表しているんだろうという興味を持ってくれる方を願った」

不良生徒たちのふてぶてしい態度や狂暴さがあまりにもリアルで、こんな状態の学校が現実に存在するものなのかと疑問にさえ感じた。

「生徒役の何人かはギャングの人間を知っていて、そこからリサーチしたようだが、彼らは一応皆プロの役者だ。不良役の少年たちは『こんな悪い役にはなりきれない』と訴えてきた。演出するにあたって、まず自分の役を好きになれ、役に同情するんだと言い聞かせたんだ。

脚本のスコット・イエグマンは元教師で、映画に描かれた75～80%は実際彼に起こったことだという。自分でもいろんな学校を廻って、生徒や教師の話を聞いてみたよ。テクニカル・アドバイザーを警察の協力で雇ったんだが、彼は少年ギャングの状況にとても詳しく、どうしてそんな世界に足を踏み入れてしまうのかを、時間をかけてリサーチした。

誇張しすぎだと思う人もいるだろうが、これが現実なんだ。もっと悪くなる可能性の方が大きい。自分の子供を学校に通わせるのが不安だよ。今の公立校は酷い状態だ。何かを学ぶ場所ではなくなっている。子供たちは教育を受ける権利を何とも思っていないから、学ぶ姿勢というものを学ばなければいけない。誰もが均等に持っている機会であり権利だということをね。大人は自分たちの税金がどのように使われているかを知るべきだ。だからごく普通の人にこの映画を見てもらいたい」

ラストシーン、学校は卒業式を迎え、トレバーから真摯な個人授業を受けていた女生徒は答辞を読む。トレバーと懇意だったエレン（ケリー・ローワン）は荷物をまとめ学校を去ろうとしている。

「典型的ハリウッド映画のお決まりのエンディングにはしたくなかった。あまりに多くの作品が結論を出しすぎている。エレンが教員免許をゴミ箱に投げ込むのは悲劇だ。教職を選んだ人間が、その現場から逃げようとしている。何かを教えるという情熱を失ってしまったんだ。これはハッピーエンドには程遠い。生徒たちもそうだ。シーザーの仲間の一人はドロップアウトして卒業式をフェンス越しに眺めている。もう一人は曖昧な気持ちを胸に秘めたまま、居心地の悪そうに参列している。何も学ばないまま卒業を迎えてしまった訳だ。トレバーの善悪の概念だって次第に不透明になっていく。こうした曖昧さが『187』には必要だったんだ。現実を伝えるものとしてね」

エモーションに富んだ複雑な役柄を演じることはチャレンジ

一方主演のサミュエル・L・ジャクソンは、落第にされた恨みから生徒に背中をナイフで刺され、一命を取り留めてもなお教職を続ける化学教師トレバーを演じている。

「学生時代はそりゃ良い子だったから（笑）、個人的体験を映画に投影はしていない。今の子供たちは僕の時代とは違う状況にいる。海軍に憧れたことはあったけど、教師になりたいと思ったことは一度もない。自分の伯母が教師だったから、その責任や教育するという苦労を身近で見ていたせいかも知れない」

カメラの動きが印象的なオープニング・シーンの、ニューヨークを自転車で走りぬけるトレバーの姿で、彼の精悍さ、ひたむきな性格が良く分かる。事件後移り住むロスでは車で通勤するが、きちっとスーツを着て、出勤前に「今日一日をやり遂げる強さをお与え下さい」と十字架に祈りを捧げるシーンに、堅気の教師という姿が見えてくる。今までの作品と比べても台詞も肉体的動きも少ないこの役を、どのように形づけていったのか。

「トレバーの喪失感に感情移入することが重要だった。彼の熱心さと誇りはナイフで刺されることで目に見える傷となって残り、それでもその過去に打ち勝とうと努力している。アクション・シーンはないけれど、トレバーは自分のためにエクササイズをして体を鍛えるような男だ。こうしたエモーションに富んだ複雑な役柄を演じることはチャレンジだった」

映画に描かれているアメリカ都市部の問題は、一体何に根源があるのだろうか。

「今の公立校は親と学校のつながりがまるでないように見える。そればかりか家庭では親と子供のつながりにさえ欠けているようでもある。僕の一人娘は私立に通わせている。幸いその余裕があるから、公立校に通わせようなんて思わない。学校に送っていったり、家族と共に過ごしたり、うん、家族の価値というのを大切にしているよ」

あなたは保守派なのですか？

「エッ、ノー（少し困惑して）。んー、でもそう言われるとそうかも知れないな、一度も自分が保守的だとは考えたことはなかったけど。父親として、夫として、息子としての役割を果たしているだけだよ」

トレバーはもともと白人を設定に書かれていたようですが、役を手に入れた経緯はどんなものだったのでしょう。

「『ロング・キス・グッドナイト』もそうだったけど、その時は難色を示していた製作側にアピールを重ねて納得させることが出来た。今回は全然問題はなかった。白人教師を主人公にした学校物は既に何本も作られているし、何より『187』の場合、エスニックの教師がエスニックの生徒に脅かされる設定にすれば、人種の問題では済まされない力強いメッセージを持ったより面白い作品になるはずだから。そう話したらすぐに製作側は同意した」

昨冬かなりジョークのきついイギリスのテレビ番組に出演した際、「実は『レザボア・ドッグス』のオーディションには落ちました」と自ら告白していた。

「自分で自分を茶化すユーモアは持ち合わせているつもりさ。俳優自体楽しい仕事だよ。特別辛い仕事だとは思っていない。ここ数年たくさんの作品に出演して、なぜそんなに働くんだと聞かれるけど、俳優という職業が大好きなだけなんだ」

だからあなたのミドルネームは〝ラッキー〟なんですね、と言ったら笑って頷いていた。

Digitized by Google

第51回ロカルノ国際映画祭

常石史子

「発見」のスリル、レトロスペクティヴの興奮

「生きない」の大健闘

チューリヒからおよそ四時間の列車の旅。遠い遠いスイスのリゾート地を、去年につづいて今年もまた訪れてしまった。ロカルノ国際映画祭は世界でも有数の歴史と規模を誇りながら、今なお小さな町が総出で手づくりしている内輪な感じをとどめてもいて、一度訪れたが最後どこまでも付き合いたいという気にさせるちょっとした中毒性をもっている。目玉は、町の広場ピアッツァ・グランデに設置される26×14mの巨大スクリーン。今年はコンペティション作品のほか、「スモール・ソルジャーズ」(ジョー・ダンテ)、「My Name Is Joe」(ケン・ローチ)、「カンゾー先生」(今村昌平)などが上映された。コンペティションの審査員には、委員長のロバート・クレイマーをはじめ、「ネネットとボニ」(クレール・ドゥニ)で一昨年の主演女優賞に輝いたヴァレリア・ブルニ＝テデスキ、「りんご」で17歳にして監督デビューを果たしたサミラ・マフマルバフ(父のモフセンが脚本・編集を担当)など多彩な顔ぶれが並び、日本からもロカルノ好きで知られる東大総長・蓮實重彦が加わった。

日本からは「生きない」(清水浩)がコンペティションに参加した。壇上挨拶で、主演・脚本のダンカンが「幸せになれる日本のおまじない」と称してピアッツァ・グランデの7千人の観客に「ババンババンバンバン!」を大合唱させた模様は、ワイドショーなどでご覧になった方もあるかと思うが、じっさい腕を振り上げて絶叫している人までいて、観客のノリの良さにはすっかり圧倒された。上映に入ると、まず'OFFICE KITANO'のロゴで早くも「キタノ〜!!」と歓声が上がり、カラオケの「昭和枯れすすき」の歌詞を情緒溢れるシャンソン調に見事さま変わりさせたフランス語字幕の貢献もあって、観客の評判は上々。終映後も多くの人が会場にとどまってスクリーンへ惜しみない拍手を送った。この映画ではしりとりが重要な小道具なのだが、コンペ出品作「Hors Jeu」のカリム・ドリディ監督は、フランス人監督たちと夜通し「フランス語しりとり」に挑戦し、えらく難しかったとぼやいていた。「生きない」は無冠に終わったものの、コンペ外の特別賞「アキュメニカル・プライズ」(全キリスト教会賞)のスペシャル・メンションに挙げられ、「生と死の意味を問うこの現代悲喜劇は、扱われたテーマのもつ力と、アイロニーの効果的な用い方によって我々を納得させた」と高く評価された。

アジア映画の〝発見〟

金豹賞を受賞したのは中国の「Mr. Zhao」(シャオ先生／リュー・ユー)。妻と愛人の両方にその場しのぎの嘘をついて袋小路に迷い込んだ不倫男が、交通事故で半身不随になり一件落着というお話。フィックスの長回しを基調に、形式面での冒険はいっさいなし、「男ってほんとこうなのよね」と心理的に深く共感する以外に利用価値なし。これが金豹賞とは大スキャンダルだと憤慨するが、授賞結果を報じる日報に「ソンブル」(フィリップ・グランドリュー)に関する付記があった。これは連続通り魔殺人犯が清純な一人の女と恋におちて別れてゆくまでを、手持ちキャメラやローキーのライティングを駆使した凝った映像で描いたもので、「この映画に倫理的な理由で反対する一派と、主題の暗さも演出・映像の力に劣らず意義深いとする一派との間に激論が闘わされた」とのことだった。この付記を書いた記者も「ソンブル」側についているのがよくわかり、少し憤りも癒される。「ソンブル」は1月30、31日に東京日仏学院で上映されるので乞御期待。

銀豹賞は、イランの「ダンス・オブ・ダスト」(アボルファズル・ジャリリ)と、キルギスタンの「ベシュケンピール」(アクタン・アブディカリコフ)の2本。前者は今年の東京国際映画祭でアジア映画賞を受賞、旧作の「かさぶた」「7本のキャンドル」も銀座シネ・ラ・セットで公開中だ。イラン本国で全作品公開禁止という信じがたい目にあっているジャリリ監督だが、彼自身が代表作と言う「ダンス・オブ・ダスト」は彼のフィルモグラフィーの中で間

Digitized by Google

違いなく突出している。一切台詞なしで――といっても「裸の島」のように誰もが不自然に黙りこくっていたりはしない――きわめて複雑な物語を語ろうとしており、まばたきをするごとに膨大な情報を取り逃がしてしまいそうな、極端に密度の濃い映画だ。もう1本の「ベシュケンピール」は、短篇のキャリアはあるものの、アブディカリコフ監督の長篇第1作であり、ほとんどの観客にとってまったく未知の映画だった。けれどたとえばモノクロとカラーを、現在／過去などの物語上の規則によらずただ画面の要請に注意深く耳を傾けることのみによって使い分けてゆく手つきの繊細さを見れば、たちまち誰もがこの作家を「発見」するに違いなく、こうしたスリルを提供する機能をマルコ・ミューラー率いるロカルノ映画祭はまだまだ失ってはいないのだと思うとまったく心強い。ただこの2本は、粘土で煉瓦を作るモチーフを偶然にも共有していたために、ロカルノのアジア映画偏重の傾向を際立たせることにもなった。主題やキャスティングの点でアルノー・デプレシャンの二番煎じと呼ばれる危険をあえて侵しながら、逆にどんどん小さな輪の中に急速度で収斂していくようなブリュノ・ポダリデスの傑作コメディ「神のみぞ知る」（今年のフランス映画祭横浜でも上映された）は、圧倒的な観客の支持にも関わらずまったくの無冠に終わってしまった。

会場風景

全キリスト教会賞スペシャル・メンションの受賞を喜ぶダンカン・清水浩監督、マルコ・ミュラー

ベロッキオ一挙上映

さて、コンペと並ぶもう一つのロカルノの目玉といえば、手に入る限りのプリントを集めて行われる大規模なレトロスペクティヴ。今年の主役はイタリアの巨匠マルコ・ベロッキオで、全29作品が一挙上映された。かつての蓮實重彦のあまりにもやさしく美しい批評（『映画に目が眩んで』所収）とともに「肉体の悪魔」（86）を受容した私にとって、ベロッキオがたぐい稀なるギャグマンだったとはまったく驚きだった。もちろん「肉体の悪魔」にも、息子の婚約者の情事に目を光らせる母親がとつぜん靴を脱いでベッドの下に放りこむという痛烈なギャグがあったけれど。ともあれ、朽ちかけた墓場をあばいて遊ぶ子供たちの昼下りを描いた見事な処女短篇「Abbasso il zio」（61／伯父を打倒せよ）に始まり、大真面目の涯ての気の違った世界を完成させた「凱旋行進」（76）を経て、次第に精神分析的な主題に傾いてゆくベロッキオの全貌を一挙に把握することができた。特に70年代には、完成度が高く興行価値も充分ありそうな劇映画が目白押しで、ろくに日本に入っていないのが不思議でならない。

「ダンス・オブ・ダスト」

50周年の特別企画として「アメリカ映画珠玉の50＋1本」を上映し、カンヌ出品作を多数招いた去年に比べると、今年のプログラムがやや淋しかったという印象は否めない。けれどレトロスペクティヴの充実ぶりはそれを補って余りある充実感を与えてくれた。またハルン・ファロッキなるドイツのドキュメンタリー作家の大特集が本人のプログラミングによって組まれ、一部でコアな盛り上がりを見せていた。六百年ぶりの猛暑という噂がまことしやかに囁かれる中、ただの一度も雨に見舞われることなく今年のロカルノは幕を閉じた。会期も後半になるとジャーナリストが帰りはじめ、町は日に日に淋しくなってゆくのだが、クロージングの「La vita è bella」（人生は美しい／ロベルト・ベニーニ）の会場に溢れかえった観客は――最後の夕食をついゆっくりとりすぎて、席を取りそこねてしまった私などとは違い――最後まで衰えぬ熱気を発散していた。すごすごと会場をあとにし、観客の笑い声が轟くスクリーンの裏側のカフェで未練がましくパフェをつつきながら、中毒のさらなる悪化をつくづく思う夜だった。

Digitized by Google

第8回アジアフォーカス福岡映画祭

友成純一

国によって異なる映画の置かれている状況

小さくない役割

一九九一年に始まった〈アジアフォーカス福岡映画祭〉も、今年で八年目を迎える。期間は九月十一日から二十日まで。会場は天神地区にあるソラリアシネマ1とエルガーラホール、そして都久志会館。八年前にはアジア映画といえば香港映画か中国映画ばかりで、それ以外の国の映画が世間から注目される度合いは低かった。それが今では日本ばかりでなくアメリカやヨーロッパでも、アジア映画の動向が大きく注目されている。東京国際映画祭でもアジアの新作は今やプログラムの目玉となっているし、私が毎年顔を出すヨーロッパの映画祭でも、アジア映画のための特集プログラムが必ずと言って良いほど組まれている。アジア映画がこれほど普及するに当たって、アジアフォーカスが果たした役割は決して小さくないと思う。

福岡市総合図書館にはアジア映画のためのフィルムライブラリーが設けられており、映画祭に出品された作品は、原則としてここに収蔵される。それ以外に新たに購入される作品群があり、フィルムを借りてきての特集上映もあり、図書館の映像ホール〈シネラ〉での連日の映画上映も、福岡の映画ファンには見逃せないものとなっている。

今年もこのシネラで、映画祭と連動したプログラムが組まれた。九月九日から十二日までの〈アジアの新進監督特集〉と、続く九月十三日から二十五日までの〈日本映画名作選〉である。前者では、マレーシアのウ＝エイ・ビン・ハジサアリ監督の「放火犯」「女、妻、そして娼婦」「闘牛士」、スリランカのプラサンナ・ヴィターナゲー監督の「城壁」「心の闇」「満月の日の死」の合わせて六本が上映された。ハジサアリ監督もヴィターナゲー監督も、このアジアフォーカスをきっかけに注目されるようになったアジアの新星である。その作品を集中的に見ることが出来たのは、大きな収穫だった。

日本映画特集では来日したゲストのことを考慮して、特に「羅生門」「晩春」「殺陣師段平」の三本が英語字幕付きで上映された。図書館は福岡市西部の百道浜にあり、映画祭会場がある天神からいささか離れているのが難点だが、この図書館がこれからも映画祭との連携を強め、こうした特集を充実させてくれることを期待したい。アジア映画の奥行きを知るには、メインの上映である新作ばかりでなく、それをフォローする特集企画も欠かせないからだ。

注目された韓国映画

さて、映画祭で上映された作品に触れよう。

今回最も注目されたのは、韓国映画だった。チャン・ユンヒョン監督の「ザ・コンタクト」と、ホ・ジノ監督の「八月のクリスマス」の二本。どちらも主演は、韓国で最も人気があるハン・ソクキュ。入場者数を見ても、他の作品がいずれも千人を切っているのに対して、前者が一五五二人、後者が一四六五人と、圧倒的に差を付けて一位と二位を独占している（ちなみに映画祭の総入場数は一四七九三人で、昨年より二二五四人増）。映画祭での上映で個々の作品の入場者数を問題にするなど馬鹿げた話だが、この二本は私も大好きな作品なので、多くの人が見たと聞くと嬉しくなる。

前者は、インターネットを背景としている。電子メールで知り合った二人が、互いの顔を見ぬままに次第に惹かれ合うようになってゆく。後者は、死の宣告を下された青年が、いかにして死を受け入れて行くかを静かに描いてゆく。死の恐怖や絶望よりも、自分がいなくなって困るであろう周囲の人々を気遣う青年の姿が、爽やかで哀しい。「ザ・コンタクト」でも、身近な人間の死が大きなテーマとなっていた。死とか、インターネットの電子メールとか、目に見えない不可知の世界を扱った作品がこんなにドラマとして盛り上がるとは。韓国ばかりでなく日本にも通ずる、現代の一側面を見る思いがする。

その他の国は？

死と言うなら、タイの「運命からの逃走」も死をテーマとしている。恋人が交通事故で死に瀕する。主人公は死神に、彼女の死は前世の悪行によるもので、死ぬべき運命にある人間を五人救えば、命を取り留めるだろうと言われる。主人公の、五人を救うための奮闘が始まる。フリッツ・ラングの「死滅の谷」を思わせる展開だが、こうした物語は世界中に民話の形で広まっているのではないだろうか。こ

Digitized by Google

キネマ旬報社の本

ハリウッド・スターたちの華麗な恋愛をリアルに綴る異色の映画史

筈見有弘・著

「ハリウッド・カップルズ」

恋を演じるスターは、
その恋にふさわしい波瀾万丈な人生を送っていた——。
スクリーンの内外で生まれた恋を追うことで、ハリウッド史を新たなる角度から綴った一冊。

A5判／本体3,800+税

好評発売中

「ザ・コンタクト」

の古典的な物語を、本作はスピーディーかつスリリングなSFXアクションに仕上げている。ほんと、まるで「バック・トゥ・ザ・フューチャー」を見ているくらい面白い。タイもついに、こんなハリウッド映画を思わせる作品を作るようになったのかと思ってしまうが、監督は香港出身のオキサイド・パンである。

絢爛たるミュージカルで若い観客から圧倒的な支持を集めているインド映画も、もちろん気になるところである。特にインドとパキスタンは、今年は核実験の問題で世界を騒がせている。核実験と映画とは全く別の問題だとは言え、嫌でもインド映画には注目せざるをえない。二年に一度開催される広島の国際アニメ・フェスティバルでも〈インド特集〉が大々的に組まれ、関心を集めた。

その中でも「ザ・デュオ」と「メロディー」が面白かった。前者は「ボンベイ」のマニラトナム監督の新作、後者は「希望の行方」のサイー・バランジペー監督の新作。二人ともアジアフォーカスでもすっかりお馴染になっている。前者は映画の世界で名をなし、政治家となった男二人の憎しみと友情の物語。後者は、ミュージカルの吹替え声優として国民的な人気を勝ち得た姉妹が、同時にライバルとして対決する物語。一方は男同士の、一方は女同士の、対決しつつも別れられない情の深さというか、業の深さを描いている。そんな人間ドラマとしてばかりでなく、インドでは映画俳優やミュージカルで歌を吹替える声優などがいかに国民的な人気を得ていて、それが政治といかに分かち難く結び付いているかを、この二本を通じて垣間見ることが出来る。どちらもミュージカルであり、歌と踊りのエンタテインメントなわけだが、だからこそインドのショービジネスの裏側をこんなに具体的に見せることもできるのだろう。

まさにこれは台湾ならではだと思ったのは、ホー・ビン監督の「国道封閉」である。ロード・ムービーだ。ロード・ムービーというと、狭い息苦しい街を離れて原野に繰り出し、広大な自然の中を抜けて行くというイメージがある。つまり解放感こそ、ロード・ムービーの醍醐味だと。しかし本作は反対なの

Digitized by Google

左はホ・ジノ監督、一人おいてチャン・ユンヒョン監督

合同記者会見より

会場風景

シンポジウム風景

だ。台湾は小さな島国である。だから道路は、島をぐるりと一周して元に戻ってくる。つまり、幾ら走っても同じところをグルグル回るばかりという、まさに閉塞状況を象徴しているような道路なのである。だからここを舞台とするロード・ムービーは欧米のそれと違って、実に息苦しいのだ。

ある蒸し暑い夜、高速道路が閉鎖された。殺人事件を起こした男にジャックされたスクールバス、彼女に会いたい一心で仕事を放り出した高級車の運転手、マージャンに駆け付けるために四駆を盗んだアーバー・ギャル……高速道路が封鎖されている間に、彼らはいったい何を仕出かすか。

日本からはドキュメンタリーの世界で独自の世界を切り開いている中山節男監督の、「原野の子ら」が出品されている。阿蘇の子供たちと教師の交流を中心に、阿蘇の草千里の原野に生きる人々の暮らしを、舐めるように描き出して行く。まだ日本での公開が未定の作品ながら、この映画祭での上映で脚光を浴び、アジアの幾つかの国の映画祭での招待上映が決まったようである。映画祭とは出品する側にとっては、貴重なプロモーションの場でもある。そのことを、改めて実感させられた。

国家と共同体

アジア映画の現状について各国の代表が報告するシンポジウムも、開かれた。インドのバランジベー監督の、「インドでは商業映画には国が援助を与えるのに、芸術的な作品がおざなりにされているのが問題だ」との発言に対し、台湾の映画評論家チャン・ヤンさんの、「台湾では逆に、芸術的な作品には国家が補助金を出すけれどもエンタテインメントには出さないので、今それが問題になっている」とコメント。映画の置かれている状況は、まさに国によって異なっている。また、インド映画がアジアでいかに大きな影響力を持っているかが話題となった。インドを中心とする文化圏では、ハリウッド映画の影響力よりもインド映画の人気の方がはるかに高いと言う。

国家とは何かを、改めて考えさせられた。インドとか中国、ロシアなどの大国では、国家があるより以前に様々な民族がそれぞれの共同体を営んでいるので、国家とは別にまず民族や共同体の意識があるのではないだろうか。たとえば我々は簡単にインド映画と呼んでいるが、そこにはヒンディ映画もあればタミル映画もあり、ケララ映画もある。ヒンディかタミルかケララか、これは関西か関東かの違いなんて甘いものでなく、国が違うくらいの違いがあるのではないか。我々はインドとかインド人と一言で片付けているけれども、インドとはあの広大な地域にある幾つかの地域と民族の集合体なのでは。何もインドのような大国のみを考えなくても、中近東やヨーロッパでは常に民族問題が発生している。国家と民族とその住む地域とは一致していないのが普通なので、国家は一つという考えを当たり前と見なしている日本人は、実はきわめて例外的な存在なのかもしれない。

世界は一つ、アジアは一つと簡単に言うけれども、その前提として、それぞれの地域や民族、国による風俗や習慣、考え方の違いがあることをまず認めなければならないだろう。今回の映画祭で各国の映画を見ながら、私はそんなことを考えないわけには行かなかった。

Digitized by Google

ヴェネチア映画祭のゲストに聞く①

大久保賢一、田中千世子

ケネス・ブラナー「セレブリティ」出演

ウディ・アレンとの仕事は快楽であり、素晴らしいスリルでもあった

大久保賢一

ウディ・アレンの新作「セレブリティ」にはその題名の通り、多くの「有名人」が登場する。女優が演じる「スーパーモデル」や、実名で顔を見せる有名人も、ごく内輪の有名人もいる。レオナルド・ディカプリオ扮する「スター」も。アレンいわく「これは有名人であるという現象についての喜劇。昨今ではこの現象は、フェラチオによって全国に知られる人物もいるくらい、ヒステリックなところまできている」。

アレンのいう「ヒステリック」は躁病的といってもいい。彼の作品に初めて出演したケネス・ブラナーが扮する主人公にも、むろんその傾きがある。ただしこの道化ぶりは、アレン自身が演ずる場合ほど自虐的ではなく、より一般的、観客と等身大の滑稽さだ。

主人公はルポライター。メラニー・グリフィス扮する女優の撮影現場インタビューから始まって、有名人たちの世界、百鬼夜行の場を経巡っていく。離婚した妻（ジュディ・デイビス）、駆け出しの女優（ウィノナ・ライダー）、出版社の編集者（フアムケ・ジャンセン）といった女たちの間でグラグラと揺れ、「自分のいるべき場所はここではない！」と叫び、ホテルの部屋をメチャクチャにする「スター」に映画の脚本を持ち込んでは振り回され……。

「結婚にも仕事にも、生の実質というものがつかめない、ミドル・エイジ・クライシス（中年の危機）というだけではすまないあせりが彼にはある。幸せとは何か、関係とはいったい何かという問いが、いつものウディの作品同様、ここにもある。もちろん、彼が本当に望んでいるものがなんなのか、それは最後まで明らかではないんだが。

ウディの作品には、常にチェーホフ的なメランコリーがある。これは今、彼以外には表わせないものだと思う（筆者註・主人公が『スター』に自作の映画脚本を説明する言葉のなかにもチェーホフがでてくる）。

彼は今は、自分で演じるよりも演出に専念するほうに喜びを見出しているんじゃないか。

ウディ自身ではなく僕がやっているんだから、その道化ぶりも違ってくるのは当然だ。体つきも動きのリズムも、文化的背景も（笑）違うしね。ウディをコピーしようとは思わなかった。彼には『インテリア』のようにやるんですかと聞いたけれども（笑）、彼は『いや、ファニーにやってほしい』と。

ただ、レオ（ディカプリオ）とのくだりのようにクレイジーな部分もあるけれど、大体は押さえ目に。状況そのものがファニーなんだから。

ウディのメランコリーは、僕が乗り回すジェームズ・ボンドと同じアストン・マーチンにも表わされている。この車はセックスと権力の象徴だけれども、主人公はその車を所有しながらそれに振り回されている。リアリティが見えなくなっていることからくるメランコリーということだね。

ウディがすごいと思うのは、コミカルであることがそのまま実存的問いになっているところだね。ときにそれがシニカルに傾くこともあるけれど、例えば『世界中がアイ・ラヴ・ユー』

Digitized by Google

で、ゴールディ・ホーンが見せたような優しく純粋なロマンスもウディの世界なんだから。

ウディの作品では、いくつもの笑いのアイデアが革新的な映像のスタイルととけあっている。これもすごいことだと思う。

彼の映画については、いかにおかしいかということばかりが語られているけれど、映像作家としてのウディ・アレンの繊細さに僕は感嘆するね。もちろん、『地球は女で回ってる』でロビン・ウィリアムスの姿がピンポケになってるようなけっさくなユーモアもウディならではのものだけど、例えば、マスター・ショットの画面のなかに写っていた人物がフレーム・アウトした後もカメラが壁や絵画などをそのまま映していて、そこに再び人物がフレーム・インしてくるような時間の流れは、観客をストーリーにのめりこませる。これはウディのセンス、直感的な才能だね。音楽が台詞にオーバーラップしてくる細かい工夫もそうだ。モノクロということも、彼がシンプルであることの美を知りつくしているから可能なんだ。

もちろん俳優としては、演技を知りつくした彼と一緒に仕事をすることは快楽であり、素晴らしいスリルでもあるけれどね」

レイチェル・グリフィス

「ヒラリー&ジャッキー」出演

原作の元になった整理されるまえの原稿を読んで どうしてもやりたいと思ったの

大久保賢一

ヴェネチアのコンペティション作品「ヒラリー&ジャッキー」は、世界的に有名なチェロ奏者ジャクリーヌ・デュプレとの生活を姉ヒラリーと弟ピアースとデュプレが綴った伝記が原作。監督はアナンド・タッカー。脚本はフランク・コットレル・ボイス（マイケル・ウィンターボトムの「バタフライ・キス」や「ウェルカム・トゥ・サラエボ」）。

レイチェル・グリフィス（「ミュリエルの結婚」「日蔭のふたり」、近く公開の「マイ・スウィート・シェフィールド」など）はヒラリー役。エキセントリックな天才ジャクリーヌ（こちらは「奇跡の海」のエミリー・ワトソン。ぴったり）に翻弄される姉。

「実在の人物を演ずるのは初めてだったから、責任の大きさを感じたわ。ジャクリーヌについてはこの話があるまで知らなかったから、もちろんヒラリーについても知らなかった。監督は私の出た映画を何本か見て、なかでもハニフ・クレイシ原作の“My Son The Fanatic”（監督ウダヤン・プラサド）で決めたと言ったけれど、でも本当に私を？　って聞いたわ。多分、これまでの作品で私を見た人は、私が脆くて繊細で傷つきやすいっていうような人物を演じることをあまり想像してなかったと思う。私自身もまあ反対はしないけれど。

でも、原作の元になった整理されるまえの原稿を読んで、どうしてもやりたいと思ったの。ジャクリーヌの死後、彼らのお母さんもお父さんも間をおかずに亡くなって、ヒラリーとピアースには、大きな喪失、大きな空隙を埋めるためにジャクリーヌとの間に存在した全ての感情を、恐れや憎しみ、憐れみまですべてをたどり直す必要があった。その感情のすべてを書きしるした原稿は六百頁もあるものだった。読んで泣いたわ。

彼らの生活の細部まで知ることができたとはいえ、正直いって、彼らが払った犠牲について理解できたとは思わなかった。それでもこの役をやることで、ジャクリーヌが存在したことで家族が払うことになった犠牲だけではなくて、犠牲としてのジャクリーヌについてももっと知りたいと思った。

愛というものが本当に複雑なものだということを改めて考えるようになったわ。誰かを本当に愛したら、その相手のために、その相手が傷つくことがふせげるなら、何でもするだろうということ。ジャクリーヌとヒラリーとの間にあったのは、ヒラリーの側からいえば、最後にはそういう感情だったと思う。もちろん、それは単純なことではなくて、動揺や懐疑、恐れや憎しみも当然、大きく存在したはずだし、苛酷な過程をへてということなのだけれど。

エミリー（・ワトソン）は素晴らしい女優だわ。私は『奇跡の海』を見て彼女の大ファンになったし、あの映画を見たときは泣けてしょうがなかった。実際にこの映画で会う前から知っていたように感じていたほど。

彼女は普段はとてもオープンだけど、本番前にはものすごく集中してそばにも寄れないくらい。反対に私は、本番直前までスタッフと冗談を言い合っていたり。プレッシャーを忘れるためにね。でも、二人とも、知的

Digitized by Google

操作として演技を作っていくのではなくて、どこか本能的にアプローチするというところは共通すると思う。これは監督の、この作品でのアプローチにも通ずることなんだけれど。

少女の頃、最初はヒラリーが音楽の才能を認められるけれども、すぐにジャクリーヌに追い越されてしまう。音楽を愛したものと音楽に愛されてしまったものの決定的な違い。姉妹の間で、歴然とした才能の違いが存在したとき、それをどのように受け入れることができるか。これは普遍的なドラマだと思う。

ジャクリーヌは彼女が不在のときでも、家族にとっては過敏な中心といえる存在だったと思う。それに対し、ヒラリーは彼女を見る視線として存在する。もちろん彼女にも彼女自身の生があるのだけれど、ジャクリーヌが存在する限り、彼女はこの妹を強く意識することから逃れられない。ジャクリーヌの奔放さは（それは痛ましいものでもあるんだけれど）ヒラリーの夫との関係を望むことまでヒラリーに告げたりする。それでもヒラリーは妹を切り捨てることは出来ない。ジャクリーヌとヒラリーは、それぞれの自我を分け合うような形でお互いに愛し合っていたのだと思うわ。絶望的な愛の形かもしれないけれど」

ロッド・ガイガー

「戦火のかなた」プロデューサー

パルチザンを演じたのは、実際の経験者たちだった

田中千世子

映画祭半ば過ぎの九月十日、ロベルト・ロッセリーニ監督の「戦火のかなた」オリジナル版が上映された。日本で発売されているビデオカタログには一一四分、イタリアの映画事典には一二四分と記されていたりするが、一九四六年のヴェネツィア映画祭で上映された時のオリジナルは一三四分だった。

「公開の時に各エピソードをすこしずつカットしたんだ。劇場での上映時間を考えてね」

上映後、エクセルシオール・ホテルのロビーにいたロッド・ガイガー氏と問わず語りのインタヴューが始まった。何という幸運。アメリカの軍人としてイタリアに上陸した若きガイガーは、ロッセリーニと知り合い、完成途中の「無防備都市」の一部を見せられ、アメリカでの上映を約束する。そして「戦火のかなた」でプロデューサーをつとめる。

「『無防備都市』は素晴らしい映画だった。私が帰国することになって、出発間際にそのプリントが届けられたんだ。助手のフェリーニ（『無防備都市』に脚本で参加）がサイドカーの横に乗ってプリントを持ってきたよ。思った通りこの映画はアメリカで大変な騒ぎさ。みんなすごく感動したんだ。イタリア人たちは疑っていたらしい。（かつて敵だった）イタリア人の映画をアメリカ人が見てくれるだろうか、と」

イタリアは第二次大戦の最初は日独伊の枢軸国でファシズムの国だった。ところが一九四三年にムッソリーニを失脚させ、連合国と休戦協定を結ぶ。と、すぐにドイツがイタリアを占領。国内はナチとむすんだファシストと、連合国と協力してイタリアを解放しようとするパルチザンのふたつにわかれる。ロベルト・ロッセリーニ自身かつてはファシズム体制の監督であり、後にパルチザン側になったのだった。そういう過去はロッセリーニだけではなかったが、イタリア人にとってはファシズムの記憶はあまりになまなましい。

「五十年前にヴェネツィアで『戦火のかなた』が上映された時は、私もいた。プロデューサーとしてね。観客の反応はよかった。しかし、熱狂というほどではなかった。『無防備都市』もイタリアではそれほど熱狂的に迎えられなかったと思う。私はロベルトと『戦火のかなた』を一緒に製作することになり、アメリカから俳優を連れてまたイタリアにやってきた。『無防備都市』がアメリカでどんなに成功したか、感動した観客の手紙や新聞記事を、ロベルトに見せてやったんだ。とても喜んでたね。私たちはロベルトの英語と私のまずいイタリア語で話したんだが、心はよく通じあった。『戦火のかなた』こそネオレアリズモだ。『無防備都市』には、古典的なストーリーがあって今までの映画とその点は同じだが、『戦火のかなた』はまったく新しい。ローマのエピソードは、あれは昔風のつくりだね。だが、他のは実際に体験しながらつくっていったものなんだよ。こんな話をして退屈ではないかね。年寄りだからつい昔の話をしてしまうんだが」

ゼーンゼン、そんなことありません。もっともっと話して下さい！

「アメリカの従軍宣教師が修道院を訪ねるエピソードは、私とフェリーニが古い修道院を見学したことから生まれたんだ。世間から隔絶した静かなところで修道僧たちがとても親切にもてなしてくれて、フェリーニも私も感激し、これを映画にしようと、すぐ話が決まった。撮影しながらイタリアを旅して、そこから次々とテーマが生まれていったんだ。最後のパルチザンのエピソードにはアメリカの俳優とイタリアのノン・プロフェッショナルの人たちが出演している。パルチザンを演じたのは、実際パルチザン経験をしたばかりの人たちだった」

今年の「戦火のかなた」の特別上映にはロッド・ガイガーと共にロッセリーニの最初の伴侶だったマルチェッラ・ロッセリーニも出席して会場の人々からあたたかい拍手をおくられた。

Digitized by Google

私の映画日誌

The Eye of Kazuma ㉖

井上一馬

『アベックモンマリ』

いやあ、新しいね。センスがいいね。感覚が新鮮だね。

大谷健太郎監督のデビュー作『アベックモンマリ』。

私はこの作品に心から拍手を送りたい。

『アベックモンマリ』の主な登場人物は四人。

離婚の危機に瀕しているタモツ（小林宏史）と美都子（板谷由夏）の夫婦、タモツの友達のマユ（辻香緒里）、そしてその夫の中崎（大杉漣）。

この四人のあいだで、ときにウディ・アレン的、ときにニール・サイモン的、ときにエリック・ロメール的、ときに中原俊的な会話が交わされて、話が進んでいく。

タモツと美都子の夫婦は、妻の美都子のほうが気が強くバリバリ仕事をこなし、夫のタモツのほうは、仕事は暇だけれども家事は何でもこなすという、いわゆる普通の夫婦とは逆のタイプ。

暇な夫のタモツは、妻が忙しくて話し相手になってくれない寂しさを紛らすため、マユと、あくまでも友達として付き合う。が、それが妻・美都子の逆鱗に触れ、二人は離婚の危機に直面して、その危機がマユ夫婦をも巻き込んでいくのである。

この夫タモツの役を、小林宏史が実に自然に演じてみせる。これが、この映画が成功しているいちばんの要因だと私は思う。

タモツは、マユと自分の友達関係に頭にきて意地を張る美都子を、まるで「母親」のように包み込んでいくのだが、そこに、ちっとも違和感を感じさせないのだ。

「アベックモンマリ」

ここに、この映画の新しさと現代性があるのである。

大谷健太郎。

将来が非常に愉しみな映画監督が現われた。

『落下する夕方』

『アベックモンマリ』以外にも、私はこしばらくのあいだに、心に残る日本映画を何本か見ることができた。

そのひとつは、江國香織の原作を合津直枝が監督した『落下する夕方』。

恋を失い、そのことで傷つき混乱しながらも、恋敵の中に自分にはない魅力を見つけて立ち直っていく若い女性の再生の物語。

主人公の女性を原田知世が、恋敵の役を菅野美穂が、恋人の役を渡部篤郎が、それぞれに持ち味を出して演じている。

静かで穏やかな映画だが、見終わったあとには、静かに、かつ穏やかに、心が満たされるのを感じる。そして、

「夕方になると心が澄んできます。そして心が満ちてきます」

そういう主人公のモノローグに、共感を覚えるようになる。

「落下する夕方」

『がんばっていきましょい』

磯村一路監督の『がんばっていきましょい』も、やはり静かで穏やかな映画だが、こちらはスポーツ映画なので、清々しい印象も残す。

二十二年前の四国、松山の高校で、ボート部を作り、ボートレースに青春を賭けた五人の女子高生の物語。

Digitized by Google

そこにはとくに大きなドラマがあるわけではないが、それでもこの映画は、主演の田中麗奈の魅力とも相まって、見終わったあとに清潔で清々しい印象を残すのである。

『のど自慢』

わかっていても、ついつい泣けてしまうのが、テレビののど自慢大会の舞台裏と、そこに出演する人々の悲喜こもごもの人生ドラマを描いた『のど自慢』（井筒和幸監督）だ。

室井滋、大友康平、尾藤イサオ、伊藤歩、松田美由紀、竹中直人、北村和夫、朝霧鏡子、光石研、近藤芳正、田口浩正……これら個性豊かな俳優たちのキャラクターをうまく生かしながら、日本的な演歌の世界が描かれていく。

「のど自慢」

私もやっぱり日本人なので、演歌にはどうしても泣かされてしまうのだ。

『宋家の三姉妹』

岩波ホール創立三十周年記念作品『宋家の三姉妹』（香港・日本合作映画）には、映画以前に、そこで描かれる（まさしく小説よりも奇なる）事実そのものにまず驚かされた。

二十世紀初頭の中国で、古い因習にとらわれずに育てられた宋家の三人の娘たち。

アメリカへ留学し、やがて帰国した彼女たちは、それぞれ激動の中国近代史の中で重要な役割を担う伴侶を得て、波乱万丈の人生を送るのだ。

長女のアイレイは、財閥の御曹子と結婚し、中国経済を左右する大財閥を築いていく。

次女のケイレイは、年の離れた革命家・孫文と結婚し、もてる情熱のすべてを革命に捧げる。

そして三女のビレイは、孫文のもとにいた野心溢れる軍の青年将校・蔣介石と結婚し、西安事件、日中戦争、国共内戦、台湾亡命という激動の時代を、蔣と運命をともにして生きるのである。

この三姉妹をめぐる大河ロマンを、メイベル・チャンがスクリーンに描き出したのが、映画『宋家の三姉妹』である。私の大好きな恋愛映画でチョウ・ユンファが主演した『誰かがあなたを愛してる』を撮った女性監督だ。

役者にも、長女アイレイに『007／トゥモロー・ネバー・ダイ』のミシェール・ヨー、次女ケイレイに『いますぐ抱きしめたい』（ウォン・カーウァイ監督）のマギー・チャン、三女ビレイに『ラストエンペラー』『枕草子』のヴィヴィアン・ウーと、人気の実力派女優が勢揃いした。

したがって『宋家の三姉妹』は、ストーリーにもキャストにも文句のつけようのない大作映画であるのだが、壮大な話がうまくまとめられているぶん、メイベル・チャン監督のもつ個性が今ひとつ発揮されていないようにも私には思われた。

同じことを私は、『さらば、わが愛／覇王別姫』『花の影』のチェン・カイコー監督とコン・リーのコンビによって作られた、やはり大作映画の『始皇帝暗殺』にも感じた。

『プライベート・ライアン』

スティーブン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』は、多くの人が指摘するように、作品冒頭から始まる二十五分間のノルマンディ上陸作戦の戦闘シーンで、永遠に記憶される作品になるだろう。

スピルバーグは、この歴史に残るシーンを、記録映画のように、数台のハンディカメラを使って長回しで撮り上げたのだという。

『プライベート・ライアン』は、主人公のトム・ハンクス率いる八人の部隊が、Dデーの戦闘後にひとりの兵士（マット・デイモン）を助け出しにいく話である。その兵士の母親は、すでに四人の息子のうちの三人を戦場で失っていた。

「その母親のために、最後のひとりだけは絶対に死なせてはならない」

指揮官からのこの命令に従って、ハンクスら八人は、空挺部隊の一員として空からフランスに上陸していたデイモンを救出に出かけるのだ。

非人間的な戦争における、砂漠の一滴のような、人間的な素晴らしい話だが、この話はひとつ間違えば、お涙頂戴的な陳腐な話に堕してしまう。戦争はそんなに甘っちょろいものではないという人間も当然出てくるだろう。

そのことをよくわかっていて、スピルバーグは冒頭の戦闘シーンをあえて徹底的にリアルに描き切ったのだろう。

そうすることによって彼は、この映画を初めから反戦映画として強く人々に印象づけ、同時に、そのあとに続くヒューマン・ドラマの素晴らしさをよりいっそう際立たせることに成功したのだ。

ニュージャージー州で過ごした少年時代から毎週土曜日になると親の目を盗んで映画館へ通い、監督としてデビューしたあと、興行成績ベスト二十位に入る映画をひとりで七本も作ってしまったスピルバーグは、やはり並大抵の監督ではない。

彼は、人々の心に訴えかける映画作りのコツを、完璧に理解し尽くしているのである。

Digitized by Google

日本映画時評 131

映画の継走

山根貞男

村本天志・冨樫森・前田哲の『かわいいひと』を見て、全篇に流れる映画的な温もりの新鮮さに嬉しくなった。周知のようにこれはポッキーのCMから生まれた作品で、オマケ用のビデオとして企画されたが、35ミリ・フィルムで撮影され、ちゃんとオマケとしての役割を果たすいっぽう、映画館で一般公開された。

三人の新人監督によって、三つの恋の物語がそれぞれ約三〇分のオムニバス形式でつづられる。奥菜恵と安藤政信、椎名桔平と中村綾乃、吉川ひなのと鳥羽潤、この三組の男女の演じるドラマはごくたわいないものだが、彼ら彼女らの爽やかな持ち味が新人監督ならではの瑞々しい感性のもとにスクリーン上で輝いて、しかも三篇が黄色い小鳥をさりげなく共通の軸にしつつ微妙に異なった恋心の行方をくりひろげる。三つの珠玉が小鳥という一本の糸でつながれたような映画、といってよかろう。

お菓子のオマケなんて形からでも素敵な映画は生まれるのか。私はそんな快い驚きを感じるとともに、それを可能にしたつくり手たちの心意気の温もりに嬉しくなったのである。

熊切和嘉の『鬼畜大宴会』は、もともと大阪芸術大学の卒業制作としてつくられ、ぴあフィルムフェスティバルの準グランプリに選ばれたあと、各地の映画館でつぎからつぎへ上映され、大きな話題になった。海外の映画祭への参加も連続し、いまもつづいていると聞く。映画がどういうふうに生まれるのかをめぐって、ここにも注目すべき一例がある。

この映画が話題になったのは、まずは学生運動活動家らしき一団の内ゲバをつづる残酷描写の凄まじさによってであり、一種の見世物として耳目を集めたにすぎないといえる。未熟な形で何かに似てしまい、描写の過剰さに向かうしかないということであろう。つくり手はそのことに意識的で、残酷描写によって映画的エネルギーを噴出させる方法論を冷静に採用している。この作品が見かけのおぞましさにもかかわらず、どこか爽やかさを感じさせるとしたら、それは、暴力衝動を"鬼畜大宴会"ゲームとして表現できる映画という器に対する確信がうかがえるからにちがいない。

昨年秋に開校された映画美学校から、この秋、「FOUR FRESH!」と名づけて四本の作品が生み出された。この学校では初めから劇場公開をめざして映画をつくることが前提になっているゆえ、学ぶことが即つくることであり、その意味では、今回一般公開された四本は、映画学校の学生のつくった作品ということでは変わりはないが、いわゆる卒業制作とは明確に異なる。

通り魔事件にからむビデオと電話による脅迫を題材にした古澤健の『怯える』、同棲相手との関係を見つめる若い女の心をつづった松本知恵の『はるのそら』、はずみで殺してしまった女の死体と暮らす男の姿を描いた伊藤晋の『死臭のマリア』、謎の組織に命じられて行なわれる不条理な死体発掘作業を中心イメージにした稲見一茂の『鼻の穴』と、各三〇分前後の四作品は、それぞれ独自の主題と方法でつくられている。未熟さは否定しようもなく、アマとプロの中間とでもいう以外ないのは、学校のあり方からして当然の結果であろう。むしろ未熟で個性的な点にこそ、映画を撮ることへの初心が脈打っている。

まったく、映画はどんなところからでも生まれる。それも愛すべき素敵な映画が。そこに露呈しているのが、映画というものの生命力であることは疑いもなくはっきりしている。初心とは、それをどう感じ取るか、どう発揮するかということであろう。

豊田利晃の『ポルノスター』は、渋谷の繁華街でシノギに精を出しては上納金を納めている若いやくざの前に、同じ年頃の男が天から降ったかのように出現し、ボストンバッグに詰め込んだ無数のナイフで無表情に殺しを重ねてゆくさまを描く。千原浩史のヒーローに殺しの理由は何もない。表情にそれだけがあるように、苛立ちが

Digitized by Google

唯一の動機といえるのであろうか。鬼丸のやくざはその一点にこそ共感を覚える。かくして血みどろの皆殺しが始まってゆく。

いわばこれは凶器のような映画であり、渋谷という現実の街を舞台にしているだけに、不条理なおぞましさでは明らかに『鬼畜大宴会』より一歩も二歩も抜きんでている。映画によって何かを叩きつける凄まじさの徹底度、そのエネルギーに先述の初心がうかがえるのである。こんな映画は既成の製作配給システムからはとうてい生み出されないと思われる。

いま、最近の新人作品を見てきたが、つくり手の出身や作品の成り立ちはすべて異なって、映画の多様な表情を見せている。新人監督もどんなところからでも生まれるというべきか。

清水浩の『生きない』をそのなかに置くと、さすがキャリアを積んだ助監督のデビュー作だけあって、方法論の明快さが爽やかに際立つ。集団自殺をめざす沖縄バス旅行の乗客たちを一貫してほんの少し俯瞰のキャメラで描くこと、当然ながら彼らは同じ方向を向いて座り、死への案内役のダンカンがつねにそれと向き合うこと、乗客たちは名所見物のときも記念写真のような形で同じ向きに並んで歩くが、やがて相互に親密さが増し、ホテルの円形の浴槽で円陣を組んで談笑するあたりから同一方向性が崩れて、死からの方向転換が芽生えること、そして軽妙かつ哀しい南米アンデスの民族音楽が印象深く流れること……。こうした表現のもと、集団自殺のドラマが生への讃歌として新鮮な力で響いてくるのである。

新しい才能はどんなところからでも出現する。これは明瞭な事実だが、視線を転じ、もうひとつの事実のほうへ目を向けよう。新しい才能が世に出てゆくとき、陰から支えたり何か媒介の役割を果たす者がいるということである。

端的な例は『かわいいひと』で、この作品は相米慎二が映画づくりやCMの現場で知り合った若い才能を集めて成り立った。フィルムによる撮影を提案したのも相米慎二である。『鬼畜大宴会』は中島貞夫を指導教官とする大阪芸術大学映像学科の卒業製作としてつくられた。「FOUR FRESH!」の四作品を生んだ映画美学校はアテネ・フランセ文化センターとユーロスペースが共同で開校したもので、黒沢清が主任講師を務めている。『ポルノスター』の豊田利晃は阪本順治の『王手』『ビリケン』の脚本執筆から映画づくりに関わった。そして清水浩は『ソナチネ』以降の北野武監督作品で助監督を務め、『キッズ・リターン』『HANA-BI』につづくオフィス北野の作品『生きない』を撮った。

写真はすべて『かわいいひと』

これらの人的関係は、わたしが目下、ひところの東映任侠映画の世界に仕事でどっぷり浸かっているせいかもしれないが、新しい才能にはいい兄貴分がいる、というふうに見える。べつに実際の年齢は問題ではないし、豊田利晃や清水浩が監督としてデビューするにあたって阪本順治や北野武が何かをしたとか、むろんそんなことではない。ましてや力の上下関係など無縁である。

先行者とそのあとを走る者とのリレー。単純化すれば、そういうことになろうか。影響がどうのこうのという話でも、誰が誰の映画づくりに直接ないし間接的に手を貸したかどうかという話でもなくて、映画をめぐる継走が見られるのである。

たとえば崔洋一の『犬、走る』は、周知のようにかつて松田優作主演作品として書かれた脚本を原案とするが、題名どおり過激な疾走感で全篇に弾けるピカレスクの魅惑に圧倒されるとき、つくり手たちの松田優作に対する熱い想いを感じずにはいられない。ここでは"走る"とは、映画を継走するという意味でもある。また、平山秀幸の『愛を乞うひと』を見れば、誰しも母娘二役をみごとに演じ分ける原田美枝子に目を瞠るが、理不尽な狂おしさに駆られて娘を責めつづける母親の姿に、増村保造の『大地の子守歌』を知っている者はあの少女の凄まじさを重ねてしまうにちがいない。これも継走の一形態であろう。今村昌平の『カンゾー先生』の場合は、父親が長年の念願の企画を実現するにあたって息子が脚本を共作したところに、同じものを見ることができる。

映画のつくり手については先行者と後走者のリレーが行なわれているとして、では、観客はどうか、批評はどうなのか、とたちまち当然の問いが湧き起こってくる。困ったことに、これに関しては答えに窮して、うーむ、と唸るしかない。

そんなふうに自問自答の立ち往生をしていたら、黒澤明につづく淀川長治の訃報が飛び込んできて、衝撃でさらに唸った。わたしにとっては父親の世代の大監督であり大批評家である。

Digitized by Google

劇場公開映画批評

きさらぎ尚／綱越峡太郎／新藤純子／森直人／鬼塚大輔／中西愛子／村岡良昭／北川れい子

ほくのバラ色の人生

MA VIE EN ROSE
ギャガ配給
11月7日公開

赤ん坊は超能力を持っている、と信じている。これは何も宙を飛べるとか、あるいは物を空中に浮かしたりといった意味のそれではない。危険や可能性に対して理論的な知識がないだけに、あることをしたい、もしくは欲しい等々の欲求に本能で行動して、何でもやってしまう、できてしまうという意味だ。しかし人は成長するにつれて、知識や経験が増え、また分別も生まれ、したがっておのずと本能で行動することは極めて少なくなり、生まれた時にはあった能力を発揮する機会もほとんど無くなり、使われない機能としてこれは退化する。むろんこれは大人になるということでもあるのだが、大人は知恵がついているだけに、それが作用して世界を狭め、そこに自らを閉じ込めて、随分とつまらない世界を作っているものだと、自嘲したりもする。

この映画は大人の知恵や知識や常識や規範といった、いわゆるスタンダードに可愛い毒矢を放つ。主人公の男の子リュドヴィック（ジョルジュ・デュ・フレネ）は、〝大きくなったら大人になる〟のと同じレベルで、〝今は男の子だけど、いつかは女になる〟のが夢で、実は今だって少女だと思い込んでいる。彼にとっては少女と少年の明確な区別などはないのだ。だから一家が引っ越して来て、近所の人を招待したオープンハウスのガーデンパーティに姉のドレスを着て、つまり女装したのも、家族やお客を驚かせて座を盛り上げようと企んだわけではない。美しくおめかしをしてパーティのお客に、ご近所デビューをしたかっただけなのだ。当然家族もお客も狼狽する。なぜ？　映画が描くのはただこの一点。人と違っていてはいけないのか、である。少年リュドヴィックのこの素朴な疑問は、私たち見る者の心に響き、差別される者とする者という色分けがくっきりしてくる。

映画は少年のカラフルな夢の世界と、夢が色褪せた大人の世界、すなわち現実とのギャップを、どちらかに肩入れすることなく等分にとらえているが、面白いのは、彼の周辺の大人たち。学校の教室ではクラスの男の子と結婚すると言い始めたり、その子の亡くなった姉の洋服をこっそり着たりして、ゴシップと軽蔑の格好の対象になる。もちろん両親（ジャン＝フィリップ・エコフェとミシェール・ラロック）にしてみれば、息子が他の子供と違うために差別を受けるのは恐怖でもあり、将来も心配だし、困った問題なのである。今のうちになんとかしなければというわけで、セラピーに通わせて、せめて外見だけでもなんとか普通の男の子らしく矯正しようとする。ただ母親は周囲の白眼視に対して忍耐強いが、父親は会社での立場が風変わりな我が子に脅かされているとあって、そうはいかない。ただ祖母（エレーヌ・ヴァンサン）だけは、育てる責任がないので可愛がっていればいいわけで、唯一の理解者になる。少年と両親、そして祖母との関係はいずこも同じなのだなと、改めて思う。

物語は息子が原因だと思しき父親のリストラで新たな局面を迎える。つまり一気にテーマへと向かうのだ。一家が引っ越した土地で、リュドヴィックが近所の男の子と見まがう女の子と友達になれたことによって、あっさり収束する。終わってみればなーんだ、という気にさせられそうなくらいチャーミングで楽しいストーリーだが、性同一性障害が医療行為として治療される今日、〝人と違う〟ことが現実の問題として強い意味を持つ。

きさらぎ尚

N.Y.殺人捜査線

ONE TOUGH COP
ギャガ／ゼアリス配給
12月5日公開

タイトルだけの印象で言えば、よくありがちな「フレンチ・コネクション」タイプのニューヨーク市警の刑事たちの活躍を描く、ポリス・アクションの典型のようだが、この映画は違う。

原題のように「ひとりのタフな刑事」の話であり、スティーヴン・ボールドウィンが演じるひとりの刑事の実話なのだ。たしかに犯罪捜査のテーマではあるものの、その本質は、友情と正義のあるべき姿に言及しようとしている、じつに誠実で勇気のある男のドラマである。

主人公の刑事ボウには、子供の頃から近所で育ったリッチーという親友がいる。彼はニューヨークのクィーンズ地区のイタリアン・マフィアの若頭だから、この友情の関係は、いわば法律の内側と外側に位置することになる。しかし、ご当人たちは至って子供の時のままの純真なつき合いをして、同じバーでよく飲み食事を共にしている。

しかし、FBIはそんな関係

Digitized by Google

をよく思っていない。情報がマフィア側に流れていることを懸念した当局は、ボウの身辺を探り、内部監査にかけて刑事の職を剝奪しようと陰謀を図る。

このことによって友情にひびが入り、リッチーの恋人だったオハラの心も左右に揺れだす。

リッチーを「マクマレン兄弟」「彼女は最高」のマイク・マクグロンが、そしてオハラを「フェイス／オフ」などのジーナ・ガーションが演じていて、この新鮮な三人の絡み合いがドラマの核となっている。これからのハリウッド映画をリードするこの三人の構図は、ロバート・タウンの傑作「テキーラ・サンライズ」でのメル・ギブソン、カート・ラッセル、ミシェル・ファイファーと類似しているが、加えてボウの同僚の役を、あの「ライアー」「レザボア・ドッグス」などの巨漢クリス・ペンが演じていて、三角関係を補強する具合になっている。

悪を警察が追うという単純な構造を超えて、この作品では、はからずも別々の世界で生きていく宿命を背負った男たちのドラマとして、ブラジル出身の新鋭監督ブルーノ・バレットは、まるで初期のシドニー・ルメットのようなシャープで堅実な視点で徹底的に描く。

「俺は最低の環境でドブ鼠のように育った。だから、そんな環境をつくった悪い奴らが許せない。刑事という仕事は俺の天職なんだ……」というボウのタフネスは、ただの正義感じゃない。これは動物的な習性だ。

原作を書き、この作品の製作総指揮をしているボウ・ディートルは、自分の刑事時代の憤怒をそのまま映像化することに精力をこめていて、その熱気がこの映画のパワーを支えていると言っていい。それは「バスキア」などのニューヨーク派のカメラマン、ロン・フォーチュナートの乾燥した映像の力もある。

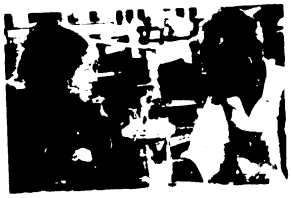
ひところスピルバーグ夫人だったエイミー・アーヴィングが実に冷血なFBI捜査官に扮しているのが印象的で、髭ズラも逞しいスティーヴン・ボールドウィンも「ユージュアル・サスペクツ」卒業生として、かなり強烈な個性を身につけていて、トム・ベレンジャーの役どころを好演して見せる。

「狼たちの午後」「カリートの道」のマイケル・ブレグマンとマーティンの兄弟プロデューサーは、決して大げさな作品ではなく、しかし骨のある男たちの心に響く映画にしているのはさすがである。腰の浮いていない、久しぶりに気合いの入った刑事映画の傑作である。

細越麟太郎

キュリー夫妻

LES PALMES DE M.SCHUTZ
アルシネテラン配給
11月21日公開



イザベル・ユペールの晴れやかな笑顔といたずらっ子のようなお茶目な表情が魅力的だ。彼女はグリア・ガースンが演じた良妻賢母型キュリー夫人のイメージを、みごとな背負い投げで追い払ってしまった。パンパンと彼女が手をたたいて、新しいキュリー夫人の舞台に上がるのが目に見えるようだ。

未来の夫、ピエールの研究室を初めて訪れるときの、上を見上げる明るい表情がいい。いつも生き生きとしてユーモラスで、なにごとにもめげない陽気なマリーを彼女は作り出した。

舞台劇が原作のこの映画はキュリー夫妻のラジウム発見で終わるから、事故で夫を失う悲劇とその後のマリーの活躍といった偉人伝の重苦しさとはまったく縁がない。終始、映画は明るくさわやかで、思わず吹き出してしまうようなユーモアに満ちている。見終わって、ああ、この映画を見に来て本当に良かったと心から思う、元気を与えてくれる映画なのだ。

偉人伝らしさがないからといって、キュリー夫人が平凡な普通の女になったのではない。ユペールの演技はキュリー夫人を偉人伝の女性から解放したけれども、それだけではなく、マリーの破天荒な天才科学者ぶりを楽しげに表現している。この映画のキュリー夫人は、時計をゆでてしまったニュートンから映画「インフィニティ」のファインマンにまで至る、どこかちょっとヘンだけど並みはずれた天才の一人である。

フィリップ・ノワレ扮する上司が架空の人物であるように、映画全体の流れは実話とは違うのだろうが、それでもこの物語の含蓄の深さにはうならされる。純粋に研究に身を捧げる夫妻と、自分の名誉のことばかり考えている俗物上司の対比も面白いが、研究ばかりで庶民の暮らしに無関心な夫妻を批判する家政婦や同僚の存在も目をひく。

科学のことなど何もわからない家政婦がラジウム発見のヒントを与えたり、発明で儲けることしか頭にない同僚が最後に心を改めたりと、天才と庶民と俗物が右往左往する中で、二十世紀の訪れを告げるラジウムの光が見えてくる。素粒子物理学がまだ若く美しかった時代の物語だ。

新藤純子

ベルベット・ゴールドマイン

VELVET GOLDMINE
日本ヘラルド配給
12月5日公開

フィクションの体裁を取りながらも非常に元ネタの分かりやすいグラム・ロック映画である。ユアン・マクレガー扮する太めのイギー・ポップ（役名カート・ワイルド）はかなり笑えるが、主人公はデヴィッド・ボウイを模したブライアン・スレイド、扮するのはジョナサン・リース・マイヤースである。映画は、かつてボウイが〈ジギー・スターダスト〉という架空の宇宙人ロック・スターを演じ、それを名曲『ロックンロールの自殺者』と共に自ら葬り去った事実を元に、スレイドが〈マックスウェル・デイモン〉という神話的な役柄をどう生きたか、そしてどうその重圧に耐えられなくなっていったかを中心に描き出す。だが、ボウイが極めて意識的に自分を操作し、グラム・ムーヴメント終了後も時流に合わせて巧妙に生き残っていったのに対し、ここでのスレイドは随分無防備に、まず破滅の道をたどる。で、その後のスレイド

Digitized by Google

はトミー・ストーンなる名の全く別人としてロック業界を生き残っていく展開なのだが、これはむろん、グラム以降のボウイの生き方をアレンジしたものだ。つまり、本作はグラム・ロックへの大いなる愛が基本にあるから、栄光の〈ジギー・スターダスト〉は完全に死んだ、〝あの時のボウイ〟と〝今のボウイ〟は別人だという視点が、悪い意味で使われているのである。何でも〝今のボウイ〟は本作への協力を一切拒否したらしいが、マ、これでは致し方がなかろう。

しかし、〝グラム・ロックへの大いなる愛が基本にある〟だけに、ヴィジュアルはものすごく充実している。シアトリカルなステージ美術もさることながら、何といってもファッションが白眉。多分スレイド（これは実在のバンドの方）やシルバーヘッドといったB級バンドの衣装／意匠もしっかり意識していると思うが、ただグラム・ロック特有のまがまがしさは薄く、キラキラの少女趣味のノリが強いのが不満といえば不満か。スレイドとワイルドのラヴ・シーンなど、完全にやおい系である。

音楽は文句なし。尚、劇中では聴けないタイトル同名曲は、ボウイ「ジギー・スターダスト」の日本盤CDのボーナス・トラックで聴けます。　**森直人**

Mr.マグー

MR MAGOO
ブエナ　ビスタ配給
11月7日公開

レスリー・ニールセンが一番可笑しかったのは「フライング・ハイ」で飛行機の乗客の一人として耳にヘッドホンの代わりに聴診器をつけて（医者なので）登場してきた瞬間であった。「フライング・ハイ」、TV版「裸の銃を持つ男」である『ポリス・スカッド』の頃までのZAZは「冷たい目をした悪玉役者」であるニールセンが、ナンセンスな状況の中で「毎度お馴染みのレスリー・ニールセン」を通すギャップから生まれる笑いをよく理解していたと思う。ところが「裸の銃を持つ男」の大成功で周囲も、そしておそらくニールセン自身も、レスリー・ニールセンは喜劇役者としイケる、という勘違いをしてしまい、このあたりからニールセンはどんどんつまらなくなっていく。

「裸の……」に途中参加するようになったパット・プロフトとニールセンが「スパイ・ハード」などでコンビを組むようになってから状況はさらに絶望的で、プロフトがシナリオを担当したこの「Mr.マグー」もちっとも可笑しくない。スキー場でのチェイス・シーンやクライマックスの滝壺でのアクションに、ジャッキー・チェン主演作品でならしたスタンリー・トンらしさが出ていると言えなくもない、いや、やっぱり言えない。ともかくお約束のギャグを垂れ流しにしているだけの九十分で、観ていて顔がひきつってきた（笑いで、ではない）。「お約束」に膨らみを持たせて笑いにかえる資質がニールセンにはないのだ。全米公開済みの「逃亡者」のパロディ、製作中の「タイタニック」のパロディ（「ディープ・タイタニック：アルマゲドン」というやけっぱちのような仮題には笑った）、「2001年・宇宙の旅」のパロディと、ニールセン／プロフトのコンビはまだまだ続くようだが、「Mr.マグー」を見る限りでは、まったく期待できそうもない。

主人公の近視をネタにしたギャグでほぼ全編が成り立っているのに、ラストに「この作品は視覚障害者を差別するものではない」てな内容の字幕が出たのには度肝を抜かれた。ブラック・ユーモアなら、この作品で唯一大笑いできるジョークだが、違うんだろうなぁ。　**鬼塚大輔**

Mr.マグー

GEORGE OF THE JUNGLE
ブエナ　ビスタ配給
11月7日公開

これは他愛なく、でも気持ちよく笑わせてくれるディズニー・スタジオ発の楽しいコメディである。

人気コミック／アニメを原作にブレンダン・フレイザーが「ジャングルの王者（でも、木には気をつけよう）」ジョージをのびのびと演じている。

ストーリーの方はロマンスがあって、悪者がいて、冒険もあるというお約束のもので、展開もやっぱりお約束通り。それでもこの作品がとても楽しめるのは、お約束そのものを笑ってしまおう、遊んでしまおうという作り手側の姿勢が愉快だからである。どこまでふざけているのかわからない、というよりはどこまでも限りなくふざけているナレーションの使い方が傑作である。サム・ワイスマン監督は、ふざけるべきところは徹底的にふざけてみせる快調な演出で全編を盛り上げている。

限りなく馬鹿馬鹿しいオハナシだが、ジャングルの動物たちにはC.G.I.とかジム・ヘンソン・スタジオのアニマトロニクスとか、もちろん本物なども使って、徹底的に金をかけているところにディズニー・スタジオの底力が窺われる。中でもジョージの親代りのゴリラの出来は傑出していて、しかもジョン・クリースの声でしゃべってクリースの声で「マイ・ウェイ」まで熱唱してくれるのだから、これは大いに笑わせてくれる。声のみの出演とはいえクリースは「ジャングル・ブック」の時よりもはるかにジャングルに馴染んでいてけっこうなことである。「黒いジャガー」ことリチャード・ラウンドトリーがすっかり老けて登場し、今までのイメージとは違ったいい味を出している。

とはいえ、やはりフレイザーのヌーボーとした個性が作品を引っ張っていることは間違いない。二枚目なのかユーモラスなのかわからない独特な風貌がこの役にぴったりである。木（とかその他いろいろなもの）にぶつかる、というジョークをしつこく、しつこく繰り返して観客を笑わせてしまうというのは演出の良さもあるのだが、ぶつかった後のフレイザーの表情が絶妙だからである。二本立ての短期公開にちょっと惜しい秀作コメディだ。　**鬼塚大輔**

©DISNEY ENTERPRISES, INC.

Digitized by Google

フギーナイツ

BOOGIE NIGHTS
ギャガ配給

ポルノ映画関係者の連中がたむろする、監督ジャック・ホーナー（バート・レイノルズ）邸のプールサイドの様子を見た時に、アンディ・ウォーホル製作、ポール・モリセイ監督の「ヒート」（72）を僕は思い出した。あふれるカリフォルニアの陽光の中、落ちぶれたハリウッド俳優や頭のおかしいゲテモノ人間達が変態行為を繰り返す、「サンセット大通り」（50）の掃きだめ化パロディとでも呼ぶべき「ヒート」のプールサイドは、まるでリトル・ハリウッドのように一見ゴージャスだが、しかし少し脇に入れば、女がドラッグで壊れていたり、人妻が嘆く夫を無視して大勢の見物人に囲まれてファックしていたりと、しょせん刹那的な王国でしかないことを見せつける「ブギーナイツ」の同じ場所に、〝栄光のハリウッド〟の究極の陰画としてまっすぐつながっている気がする。だが70年代の退廃風景として完結した「ヒート」に対して、「ブギーナイツ」はその先を描くのだから中々残酷である。ジョー・ダレサンドロ直系の全身性器美青年マーク・ウォールバーグ演じる主人公エディは、ポルノ王国の崩壊と共に現実の闇へと沈んでいくのである。

80年代突入を境に凋落していくエロ業界という観点は、ポルノ雑誌王を描いた「ラリー・フリント」（96）の歴史認識とほぼ共通しているが、レーガン時代の到来をその主な根拠にしていたアチラと違って、「ブギーナイツ」ではメタ映画の体裁だけあり、ビデオ時代の到来が最もクローズアップされている。しかも元ポルノ俳優陣の就職問題、社会の偏見など、平凡な一個人として直面する瑣末な生活の障害が丁寧に描かれているので、日本でいえば元AV女優の現在を追うドキュメント作品のように、セックス産業の影の部分がリアルに伝わってきてもう痛々しいほどだ。主人公像にしても、体制に闘いを挑む怪人ラリー・フリントなら現実を寓話に変えることもできるが、巨チンだけを頼りに夢を見た普通の青年エディでは、苛酷な現実に押し潰されていくしかなかったようである。華やかな祭りの後の寂しさが胸にしみ入る佳作といえるが、演出はもっと爆発力があってもよかったな。**森直人**

ラスト・ウェティング

UNDER THE LIGHTHOUSE DANCING
シネマテン配給
9月26日公開

天国にいちばん近い島、という言葉がふさわしい本作の舞台ロットネス島は、西オーストラリアに浮かぶ眩しいばかりにうつくしい島。白い砂浜、エメラルドの海、輝ける太陽、身も心もとろけんばかりの申し分ない風景を背に、生命力弾ける濃密な時間がしたためられていく。重病に冒され死を宣告された若い女性が、心から愛する恋人と結婚式を挙げるためにこの島へやって来る。最初さまざまな事情に阻まれてこずるが、親友たちの奔走のおかげでついに素晴らしい式を迎える。島のゆったりしたリズムによりそいながら、ごくシンプルでありふれた物語は独特な心地よさを醸しだす。

イライラした気持ちを解いてしまう不思議な魅力はなにも風景だけによるのではない。力のぬけた演出、俳優たちの演技にも注目すべき点はある。たとえば主人公エマの恋人ハリーが無人の教会を見つけ、頑丈にかかった鍵をこじあけ中に入ろうとするシーン。どんなに叩いても鍵は開かない。いらだったハリーは斧を片手に今扉を叩き割らんとする。その時エマがハリーの名を遠くから呼び、次の瞬間、見知らぬカップルの結婚式の列がスローモーションで歩みよるショットとなる。この展開はハリーの怒りをちらすだけでなく、中盤の見せ場、ストーリーの転機としてじつに印象的だ。エマを演じたジャクリーン・マッケンジーは「エンジェル・ベイビー」につづく登場だが、エキセントリックな個性が強烈だった前作に比べ、本作ではナチュラルな存在感が前面に押しだされており、オーストラリア映画界注目度ナンバーワン女優といわれるだけの才能の奥行きを感じさせた。

その恵まれた風土ゆえか、オーストラリア映画にはヒーリング・ムービー、あるいは精神性を重視する秀作が多い。70年代、オーストラリア時代のメル・ギブソンも「ティム」で精神薄弱児を演じていたのだから、ひょっとするとこの国のひとつの系譜なのかもしれない。映画としてのインパクトはやや弱く話題作にはなりにくいだろう「ラスト・ウェディング」だが、胸にしみるラスト・シーンに至るまで幸福な気分に浸らせてくれる得がたい作品だ。**中西愛子**

リバース

RETROACTIVE
ギャガ配給
10月3日公開

カイリー・トラビス（本作が映画初出演）扮する女刑事が、旅の途中誤って車をクラッシュしてしまう。ヒッチハイクで丁度その時やって来た車に乗り込むのだが、その運転手のジェームズ・ベルーシがとんでもない暴力男であった。

見境もなく叫び散らし、廻りの人を殺害するこの男から、何とか逃げ込んだ場所では、なと〈時間逆行移動〉の実験が行われていた。そこで彼女は〈過去〉に遡り、事件の解決を試みるのであった。

という内容の風変わりのSF仕立てのアクション映画であるが、なかなか楽しめる出来に仕上がっていた。

特にトラビス姉貴が合計4回にも渡って〈過去〉に戻っていくのであるが、事態を収拾するどころか、逆に戻る度に状況を悪化させてしまう所が凄まじい。結局、彼女が何もしない（ベルーシの車に乗らない）のが、一番の解決策というのだから恐れ

Digitized by Google

入ってしまう。

しかし、だからと言って、本作はダメな人間（彼女は人質事件の交渉を失敗したばかりという設定）は、何度同じ事をしてもダメに終ってしまうという意味では決してない。それ以上に、過ぎ去った時間を取り戻そうと執着する行為を愚弄しているのである。

あの時、あの時間に戻れたらという願望は誰でも持っている。だが、いくらその結果を知っていたとしても、起きてしまう事態はどうにもならないのだ。むしろ、結果を知っている故の行動の方が事を悪くしてしまう。

つまり、どのような事態が起きてしまっても、今あるこの状態こそが一番良い選択である事を認識しなければならないのだ。

ミュージック・ビデオ出身のルイス・モーニュー監督は、全体をスタイリシュな映像で纏めながらも、作品のテーマを蔑ろにしていない。ハデなアクションだけに目を奪われない姿勢は大いに評価すべきである。

さらに、この手の映画に必要不可欠な、同じ時間を共有する人々（ハイウェイ・パトロールに、ドライブを楽しむ一家）の存在もきちんと整理されており、あながち見過せない快作である。数々の映画賞受賞の肩書ではダテではなかった。

村岡良昭

Mr.マクー

東宝配給
10月31日公開

ひえっー、面白いの、なんの。まア、刑事たちのキャラクターやアンサンブル演技の呼吸の良さはテレビシリーズで磨きをかけた結果だろうが、スケールの大きい映画的な出だしといい、今日的な事件、及びその犯人像といい、娯楽映画として実に面白い。しかも描写に目配りが行き届いている。

例えばアバン・タイトルで、やがて発生する警視庁副総監誘拐事件の犯人の目星がつく。

早朝、自宅からゴルフに出かける副総監を、点数稼ぎの青島刑事（織田裕二）たちが、スワ何ごとか、と思うようにものものしく車で迎えるシーン。その人物は朝の風景の中にさりげなくとけ込んでいるが、ただの通行人とも思えない。

このあとにもその人物は事件を捜査中の刑事たちとすれ違う。冒頭とまったく同じ服装だから誰にでも気がつくはずである。

むろん、観客がこいつが怪しいと気がつくのと、劇中の刑事たちが犯人を突き止めるのとは別であるけれども、だからこそこういったさりげない見せかたが嬉しい。そもそもこの作品は、警視庁湾岸署・刑事課に所属する刑事たちのドラマで、ここで起こる事件は、刺身のツマ、とは言わないまでも、刑事たちを活躍させるための、引き立て役に近いものがある。しかし決してそれに甘えず、まず事件を先行させて刑事たちを後手に回し、彼らのあせりや手さぐりの中で多彩な個性をきちんと描き分けている。テレビでスタートした刑事ドラマの映画化ではあるけれど、初心者にも分かり易く見通せるように作られているのが頼もしくも心強い。

それにしても近年、作家の映画を気取ったひとりよがりの作品や、ドラマ性が希薄なチマチマした作品ばかりが横行し、日本映画自体がカルト化しているような傾向の中、娯楽映画のノウハウを可能な限り導入して観客に献身的にサービスするこの映画の登場は、本当に嬉しい。大ヒットも当然である。

いくつもの事件を用意し、その中で各刑事たちの個性や警察組織の不条理を描き出す君塚良一の脚本と、時にはおふざけ的なハッタリ演出も挟み込み、歯切れのいいテンポで素早くドラマを語っていく監督の本広克行のコンビに、心から敬意を表したい。ただ、欲を言えば、終盤の、犯人に刺されて重傷を負った青島刑事を、同僚のすみれ刑事（深津絵里）と本庁の室井（柳葉敏郎）が車で運ぶくだりの愁嘆場はチト長すぎた。観客は青島が何日もロクに寝てないことを知っているし、そもそもそわが主人公の青島が死ぬわけがない。唯一、ここの描写はくどいと思った。

湾岸署に乗り込んできたキャリア組の傲慢さ、またキャリア同士の足の引っ張り合いもかなり冷酷に描かれるが、結果として、この連中が、湾岸署のノンキャリア刑事たちを更に発奮させ、輝かせることになるのも小気味いい。障害物があればあるほど、それをクリアする主人公たちがカッコよく見えてくるのはこの手のドラマの定石である。

脇のエピソード以外は格別に新しい情報があるわけではないのに、痛快で弾んでいたのも、娯楽映画の定石を巧みに使いこなしているからだ。

映画ファンなら誰でも知っている過去の作品から借用した人物やトリックにしても、借用のT・P・Oに余裕と茶目っ気が感じられ、それにも感心する。

娯楽映画のツボをよく知る若いスペシャリストたちに拍手!!

北川れい子

Digitized by Google

大森さわこ

ちょっとイギリスびいき

⑯個性派作家ギルバート・アデアのパロディ小説の映画化「ラブ＆デス」

英国になんだかおもしろい作家がいるという話を人づてに聞いたのは確か去年だったと思う。その人は名前はギルバート・アデア。評論も小説も書くらしい。映画評論も彼のレパートリーとか。小説では「ベニスに死す」をパロディにした『ロングアイランドの愛と死』を書いているとか。へえ、それは読んでみたい。映画でもおなじみのあの作品をどう料理しているのだろう。

そんな話を聞いた直後に彼の評論集の翻訳が出た。『ポストモダンは二度ベルを鳴らす』（白水社）という本である。映画や現代美術など幅広いジャンルを論じたエッセイ集だ。妙にインテリきどりのところもあるが、クククと笑える風刺精神あふれる英国調が小気味いい。

そして、『ロングアイランドの愛と死』の方は、今年、映画版（邦題「ラブ＆デス」）の公開が決まり、翻訳が出た（角川書店）。

「ラブ＆デス」

最初はいかにもインテリきどりの文体がクサイ気がしたが、実はそれはパロディ的な小説のスタイルと分かる。主人公は厭世家の超インテリ作家。家にはテレビもなく、映画なんて興味もない（小説の方では自分を映画嫌いにしたのはビバリーヒルズの美容師を主人公にしたアメリカ映画ということになっているが、これは「シャンプー」のことか？）。

しかし、ちょっとしたアクシデントで映画館に入ったら（恩師E・M・フォースターの映画を見る気だった）、「ホットパンツ・カレッジ2」というアメリカの青春映画を上映している（シネコンの入口を間違えた）。低俗ぶりにあきれて外に出ようとした瞬間、彼はナイーブなアイドルスター、ロニーを見初める。

小説では恋が始まってからは爆笑の連続。主人公はソーホーのあやしげな売店にキャピキャピ文体のアメリカのティーン・アイドル誌を買いに行く。人に見られるのが恥ずかしいので、娘に頼まれイヤイヤ来たというポーズをとる。いやあ、困ったな、こんな雑誌、とかなんとか（娘など実はいない）。そして、欲しくもない車の雑誌を一緒に買い、そちらを本命に見せかける。そして、店を出るなり、車の雑誌はゴミ箱にポイ。家に帰るとメイドに見られないよう部屋に鍵をかけ、買ってきた〝ティーン・ビート〟をむさぼり読む。どこまでも世間体を気にするインテリの愚かさ、可愛さ。お目当ての記事を切り取った後はわざわざ家から遠いゴミ箱にその雑誌を捨てにいく。

別になんということもない描写なのだが、英国の知性とアメリカの大衆文化が妙にリアルに対比されている。自分を自分で笑う英国式ユーモア。自分の行動をどこかでつき放しつつ、一方で恋する自分に酔う主人公。その描きわけが巧みだ。

ジョン・ハート、ジェイソン・プリーストリー主演の映画版では、このあたりのディテールは小説ほど細かく描かれない。恥じ入りつつも、情熱に燃える日常が一人称で念入りに描写される小説に比べるとさっぱりしているが、詩人チャタートンの絵画を引用するあたりは映画独自のアイデアでおもしろい。

アメリカのロングアイランドに愛を告白に行く主人公（これじゃ、ストーカー？）。犬を追ったり、ファックスを使ったり、小道具がからむと視覚的なおもしろさが増す。海辺で白い服を着て波に打たれるロニーは、映画版「ベニスに死す」の美少年ビョルン・アンドレセンのつもり？　もっとも、「ベニスに死す」のように頽廃的なムードは皆無で、どこか可愛い中年オジサンの恋物語。英国インテリの風刺作品として楽しめる。

アデアの話に戻るが、最近、ちょっと驚いたのが、筆者が10年来、愛用してきた英国映画の本の編者（のひとり）が彼だと分かったこと。この本を買ったのは80年代半ば。あまりにも日常的に使ってきたので表紙の文字をきちんと見たことがなかった。ところが、この前、ふとカバーを見ると、アデアの名前が！　名前も知らない時から彼の本のお世話になっていたようだ。

Digitized by Google

キネ旬ニューウェーブ

周磨　要

SFサーガのあれこれ

1

SFサーガならまず「スター・ウォーズ」。構想全9部、中盤3部作のスタートの第4部から製作開始。何とも壮大なスケールだ。

しかしここでは、当初サーガの意識ゼロだったが、興行的成功で御都合主義の犠牲になり、サーガの道を転がり出したものを話題にしたい。それは、（良い意味で）とんでもないサーガの道を歩み始めた「エイリアン4」を最近見たからであり、この機会に御都合主義サーガの大先達で、現在リメーク中、悲惨な末路を辿った「猿の惑星」5部作も総括したくなったからだ。

2

「猿の惑星」第1作は、文明への絶望というペシミズムに溢れた傑作だった。とりわけラストシーンは、原作と同類の落ちながら、原作を知る者にも強烈な衝撃だった。

原作と映画は微妙に違う。原作は、「猿の惑星」を脱出し未来の地球に帰還した主人公が、同様に「猿の惑星」と化していた地球に衝撃を受ける。だから、原作を知る者は、映画前半のイメージの、想像力の乏しさにウンザリする。地球を遥か何光年も離れた惑星の風景がどう見てもアリゾナのモニュメントバレー。異星生物なのに、猿は御都合主義に英語を話す。何とも貧しいSF世界であると思ってしまう。

そして、ラストが近付くにつれ、不安定な気分になる。いつまでたっても地球帰還の見通しが見えてこない。上映時間は残り少ない。そんな気分が高まった所で、廃墟に傾く自由の女神を目にするのである。

ドラマとしてのドンデン返しと同時に、感性にも鮮やかなドンデン返しを喰らう。異世界の造形が貧しい？　猿が英語を話すのがおかしい？　当然ではないか。「猿の惑星」は地球なのだ。猿は、核戦争で壊滅的打撃を受けた人類の後裔なのだ。言葉は英語でおかしくはない。

文明の極限で人類は自滅し猿に支配され、後裔の猿もまた、同じ道の第一歩を踏み出しつつある。基本テーマは原作も映画も同じだが、映画は大胆な改変で廃墟の自由の女神一発で止めを刺し、映像ならではの力を大いに発揮した衝撃だった。進化した猿と退化した人類、猿と人が逆転したユニークな映像世界も、強烈なインパクトだ。TVシリーズ「ミステリーゾーン」で異世界構築に優れたロッド・サーリング脚本の功績も大きい。監督はシャープな演出が持味のフランクリン・J・シャフナー。主演はチャールトン・ヘストン。大スターが抵抗なくSF映画に出演する契機となった作品であり、SFをガラクタおもちゃ箱からA級大作へと格上げした作品でもあった。

3

「猿の惑星」は大ヒットした。映画の常で、では続編となる。しかしねぇ、進化した猿が退化した人類を支配する地球に、一人残された主人公の行く末。見たい気もするが、無限に絶望的な状況を、衝撃の自由の女神で締め括ったから余韻があるとも言えるのではないか。ともあれ「続　猿の惑星」は製作された。

地球には、進化した人類が地底に生き残っていた。生き残りを賭け猿と新人類は戦争になる。生物は進化してもどこまでも愚かだ。ヘストンの絶望は極点に達し、その果てに核兵器のボタンを押し地球を消滅させて、決着をつける。

柳の下のどじょうは悪評だったが、私はまあ面白く見た。第1作の深い絶望を受ければ、地球消滅くらい持って来なけりゃ納まるまい。潔さがむしろ爽やかだった。続編の常で製作費もグンと嵩み、猿の数も格段に増え、地底人類との戦闘は壮大なスペクタクルだった。監督はテッド・ポスト。シャープだが画面造りのスケールは決して大きいとは言えぬ前作シャフナーに対し、大物量を堂々と使いこなしていた。

テッド・ポストは数年後「ダーティハリー2」を撮る。初作ドン・シーゲル作品が大傑作なので、これも割を食い悪評だったが、なかなかのものだった。正義感の勇み足で違法寸前の捜査をするハリーに対決するは、社会正義の大義名分で組織的私刑集団と化した警官達。初作が強烈なだけに、これもこの位の敵役を出さなければ納まりがつくまい。見せ場を団子の串刺しにした構成を、スケール大きく一気に見せきった演出は見事だった。

テッド・ポストの名前にあやかり、ポスト○○○と評価されてもいいのに、悲運の監督である。

4

地球を壊滅させ、シリーズに止めを刺した「続　猿の惑星」は、そのスケールの大きさ故にヒットした。そこで、柳の下に

Digitized by Google

どじょうの3匹目は、とんでもない反則を出す。

地球壊滅寸前、二匹（二人？）の猿が、ヘストンのロケットで脱出していた。到着したのは現代（製作時点の70年代）の地球。こうして「新　猿の惑星」はスタートする。

ヘストンが宇宙に飛び立ち、未来の地球に到着するのは、相対性理論の一応の裏付けがあるが、過去に到着とはどうしたことか？　ここからシリーズは、御都合主義で何でもありのサーガへの道を歩み出す。

ただ、洒落たアイデアではある。第1作は、猿と人間の立場を逆転させた世界で、知能ある人間へストンの存在に猿が驚愕する。今度は知能が高い会話する猿に、人間が驚愕するのだ。初作のユニークな逆転のイメージを、さらに再逆転させたダブルひねりだ。こういうのをセンス・オブ・ワンダーと言うのだろう。

「猿の惑星」

知能ある猿は研究材料になり、人類は未来の歴史を知ることになる。そして地球の「猿の惑星」化を防ぐのは、知能ある猿の絶滅だとの結論に達する。二匹とその後生まれた子猿の一家皆殺しを画策し、皆殺しは成功する。いや、土壇場で母猿はわが子とサーカスの普通の子猿を入れ換え、知能を有する猿の血は残されるのである。

洒落た幕切れであり、猿と人間を再逆転させても、進化した生物はエゴのため絶滅の道を辿るとの初作のテーマもキッチリ押さえてもいる。

だが、残念なことに「新　猿の惑星」の面白さは、あくまでも初作のネガで、初作あっての面白さである。猿はたったの3匹で筋立ては地味、監督は手堅いだけが取柄のドン・テイラー。洒落っ気もセンス・オブ・ワンダーも、映像表現で高まることはなかった。

「エイリアン」

5

「新　猿の惑星」は不評、ヒットしたとも聞かなかったが、興行的にはそこそこだったのだろう。さらに続編が造られることになった。監督はアクション派の才人J・リー・トムプソン。トムプソンは結局、第4作の「猿の惑星　征服」に続き、最終作「最後の猿の惑星」へと連投することになる。

これは才人トムプソンにとって不幸だった。答は第3作ですべて出た。生き残った知能ある猿の増殖→人類の自滅→猿の惑星と化す地球→きっかけとなるヘストンの宇宙船が過去から到着。確定されたタイムパラドックスのレールを、走るしかないのである。

それでも「猿の惑星　征服」ではトムプソンは、アクション派として頑張った。猿軍団の物量も多分過去最高であろう。人類と猿の乱射乱撃の大戦争は、壮大な見物ではあった。ただ、アクション派の限界、センス・オブ・ワンダーに乏しい。中央コンピュータ破壊で、あっさり人類文明が崩壊する単純さにはゲンナリだ。最近の「インディペンデンス・デイ」もそうだが、重要コンピュータ・システムのセキュリティはこんなお粗末ではない。軍事用ならなおさらだ。そのあたりの説得力の乏しさは致命的である。

最終作「最後の猿の惑星」、もうトムプソンのできることは何もない。落ち目の人類は進化した猿との戦争に次々と敗れ退化し、一部は地底に逃走し別の進化を遂げていく。第一作に戻るためのストーリーを、辻褄合わせに語っていくだけだ。文明に対する絶望なんて、すでに初作で強烈に表現され尽くしているのである。

結局「猿の惑星」サーガの行く末は、御都合主義の犠牲と縮小再生産の負け戦であった。

6

さて、「エイリアン4」。「猿の惑星」に負けず劣らず御都合主義の反則に出たが、こちらはとんでもない拡大再生産に向かいそうなのだ。

まずは、第1作「エイリアン」。ここではサーガの意識は毛頭ないビックリ箱風のホラーだ。恐怖に震える半裸の美女に迫るベム、パルプマガジンSFで、昔のB級SFの定番である。リドリー・スコット監督は、これに「2001年宇宙の旅」以後の大作SFリアリズムの外観を与えた。そして、自身の超現実的美学を調味料としてふりかけた。さらに、人類を絶滅させかねないエイリアンを、我欲のために地球に持ち込もうとする人間の恐ろしさをテーマに据え、ホラーに内面性を与えた。今振り返ると、そのすべてがサーガの素因を有していた。

強いヒロイン、シガニー・ウィーヴァーのリブリー。第1作は70年代末期だから、強い女は後代の先取りとも見えるが、実はちがう。前述の半裸の美女に迫るベムのセオリーだ。この頃の若く美しいシガニーが、スキャンティーとTシャツを身につけただけで、怯えつつエイリアンと対峙する姿は、後の強い女のイメージとはやや異なるのだ。

「エイリアン」はヒット作となり、ジェイムズ・キャメロンが続編「エイリアン2」を手掛ける。キャメロンは、悉く意表をつく手に出て、続編を大成功に導く。

第1作のエイリアンは、いわば「ゴジラ」だった。出るぞ、出るぞと恐怖感を煽り、肝心のエイリアンはなかなか見せない。そこで2作目は思い切って逆の手に出た。一匹のエイリアンを小出しに見せた初作と対照的に、多数を一気呵成に見せつくした。原題もズバリ「ALIENS」である。エイリアン登場はもはやショッキングではない。ショッキングなのはエイリアンVS人類の戦闘の激烈さだ。そうなればアクション監督キャメロンの

Digitized by Google

お手のものである。ホラー然たる初作コピー「宇宙ではあなたの悲鳴は誰にも聞こえない」を、「今度は戦争だ」と見事に転換させた。

女は強し、母はさらに強し。これもキャメロンのテーマである。前作のパルプマガジンSFの半裸の美女の捨て身の反撃は、タフな女のイメージに転換される。死に別れた娘の代償を求めるかのように、少女を守りエイリアンと戦うリプリーへと進化する。

こうしてキャメロンは、前作を大転換させたが、一方で初作のセオリーも踏まえシリーズの一貫性も保った。

出るぞ、出るぞの思わせぶりの魅力は、女王エイリアンという隠し玉の見せ方で踏襲する。しかも、リプリーVS女王エイリアンで母性VS母性の戦いというキャメロンならではのテーマとも、しっかり連動させていくのだから見事だ。

我欲のためにエイリアンを地球に持ち帰らんとする勢力も、引き続き登場しサスペンスを盛り上げる。こんな戦争状態になっても、まだ人間は懲りないのだ。激しい戦争映画に変貌した第2作は、第1作のテーマを別の形で深化させたのである。

7

初作のイメージ百八十度大転換のウルトラCは、困難なパート2を大成功させた。映画界の常で当然パート3製作となる。後を受けたディヴィッド・フィンチャーこそ不幸だった。キャメロンの力業の後、いったい何をやればよいのか。手詰まりが本音だろう。

案の定「エイリアン3」は不評だった。光と影を巧みに駆使したスケールの大きい画面造形に、私は感心したが、注目した者は少なかった。後年、フィンチャーは「セブン」で世間の話題を一手にさらう。私に言わせれば何をいまさらであり、「ザマー」てな心境だ。こういう先物買も映画ファンならではの楽しみである。

「エイリアン3」にあまり理屈はいらない。フィンチャーのスケールの大きい光と影の陰鬱な世界に浸ればよい。ただ、内容もそれに呼応して十分絶望的に陰鬱だった。

地球に帰還するはずのリプリーは、宇宙船の故障で男ばかりの囚人惑星に不時着、命を懸けて守った少女は冬眠装置のトラブルで死亡、やがてエイリアンの幼虫の体内侵入も判明する。エイリアンを我欲のために地球に持ち込み利用せんとする組織の暗躍も相変わらずである。絶望の果てにリプリーは、自らを溶鉱炉に沈めることで、エイリアンと人類との接点を永遠に絶つ。

異人リドリー・スコット、馬力のジェームズ・キャメロンの後を受けて、フィンチャーは自分の陰鬱な個性をフルに発揮、完全決着をつけてしまった。なかなかのものだ。私は感心した。

8

この大団円にも関わらずパート4をやるという。監督は鬼才ジャン＝ピエール・ジュネ。負け戦にしかなりようのないパート4を、ジャネはどう捌こうというのか。

クローンによるリプリー復活という御都合主義にまず呆れる。これが許されりゃもう何でもありだ。ところが映画の進展につれ、呆れは大きな期待へ変質する。

個性的悪夢世界を構築するジュネが、「エイリアン4」では部分的に持ち味を押さえ、ある面ではエイリアン・サーガのセオリーに忠実に従った。ビックリ箱的ホラーもあれば、戦闘大アクションもある。ショッキングなアンドロイドの登場、タイムリミットに迫られる宇宙船からの脱出、エイリアンを真空中に放逐する決着、すべてある。エイリアンを我欲に利用せんとする組織の暗躍も勿論継続される。ここまでマンネリに徹し、ここまで御都合主義を重ねてシリーズを継続するのかと最初は呆れた。しかし、それはここまで無理を重ねてエイリアンを地球に持ち込む人類の救いの無さの呆れへと、いつしか変貌してきた。御都合主義とマンネリを逆手に取り、ジュネは人類の愚かさの鮮烈な表現に到達した。

グロテスクなリプリーのクローンの失敗作の数々。ジュネならではの悪夢イメージだが、それは人類の野望のグロテスクな映像化でもあった。

そして、ついにエイリアンの遺伝子を有したリプリーは地球に到着してしまった。地球はエイリアンが蠢く修羅場と化すのか。サーガはどう進展していくのか。パート5は誰が引き継ぐのか。「猿の惑星」とは逆に、期せずしてとてつもない拡大再生産の道を、驀進開始した予感がする。

9

日本映画にも、そんな予感がするサーガの卵がある。「ガメラ」だ。

怪獣映画はSF映画の一ジャンルながら、これまで最もSF的でなかった。伊藤和典の脚本は、それを本格SFとして構築した。こだわりの特技監督・樋口真嗣、シャープな演出の金子修介がそれに呼応した。それが「ガメラ」である。

「怪獣はなぜ日本を襲うか？」「ガメラはなぜ人間の味方か？」怪獣映画の暗黙のセオリーを、「ガメラ　大怪獣空中決戦」はSF的にしっかり意味付ける。超古代文明を持ち出したのがうまい。多少の矛盾は、超古代文明だからしょうがないと、逃げることができるのだ。

超古代文明は爛熟の果てにギャオスに滅ぼされた。ギャオスは文明の爛熟の果ての人類を滅亡させに現れる超自然界の存在だ。超古代人は滅亡寸前に未来の希望としてガメラをセットする。次にギャオスが現れた時、ガメラが蘇るようにしたのだ。

こうして、ギャオスが日本に登場する説明は十分につく。頽廃享楽社会の日本は、正に爛熟そのものだ。ギャオスの出現は当然であり、ガメラが人類の味方として蘇り対峙するのも必然である。骨格は怪獣対決だが、金子演出はディティールをリアリズムに徹し、見事に阪神・淡路大震災の危機管理まで予見して見せた。

「ガメラ」は大ヒットまではいかなかったが、作品的にはベストテン入りする程高く評価され、2作目の製作となった。ガメラの位置付けが明確になっただけ「ガメラ2　レギオン襲来」は

Digitized by Google

楽だ。ガメラに関する解説は省略、新怪獣レギオン造形に精力を注ぎ、対決盛り上げに専念すればよい。

ただ、2作目にして早くもヤバいと思わされた所もある。このままでは、今後はガメラVS新怪獣の不毛の繰り返しに終始しそうだ。かつてのお子様ランチ「ガメラ」、子供の味方のガメラに堕落するのではないか。「レギオン襲来」で、仮死のガメラの復活を子供達が祈るシーンは完全にヤバかった。

しかし、金子＝伊藤＝樋口トリオは、土壇場で大逆転を見せた。ガメラは人類の味方としてレギオンを滅ぼしたのではない。地球環境の守護神としてレギオンを抹殺したのだ。初作のギャオスとの対決が別の意味を持ってきたのである。地球環境の敵、それならばギャオス・レギオンもさることながら、最大の敵は人類ではないのか。ガメラの巫女的存在だった藤谷文子の勾玉は、「レギオン襲来」の終盤で砕けてしまっている。

この後、ガメラVS人類はどんな展開になるのか。来春の「ガメラ3」はとてつもない拡大再生産のサーガ開始の予感がする。

10

一本の映画のヒットが興行的要請から、次々と続編を産む羽目になり、つまらぬものも面白いものも玉石混淆取り混ぜて、果てし無きサーガを次々と産み続ける。それはSFに限らない。映画製作は、多くの人と膨大な物が必要な多額の金を要する商品だから当然である。

そんなサーガはかつて日本映画の専売特許だった。各社が週に1～2本の映画を提供せねばならぬマーケットを有し、それを求める膨大な観客も存在した。埋めるには、1本1本の企画を吟味する暇はない。これが、通称プログラム・ピクチャーだ。ヒット作が出れば御都合主義サーガで、どんどん番組を埋める。監督は作家精神よりそれを転がすのが先決で、機会を捕らえ隙を見て自分の表現を押し込む。三隅研次も森一生も、石井輝男も降旗康男も、舛田利雄も小沢啓一も、そして深作欣二も、そんな作業を通じ優れた映画作家の地位を確立した。「座頭市」も「網走番外地」も「無頼」も「仁義なき戦い」もそうして生まれたサーガの数々だ。本田猪四郎や大森一樹の「ゴジラ」、山田洋次の「男はつらいよ」の如く、世界的あるいはギネスブック級の大サーガも誕生した。

映画人口の減少・プログラム・ピクチャーの消滅は、映画からこうした楽しみを奪うかに見えた。だが、御都合主義サーガは、アメリカで復活する。前述のSF「猿の惑星」と「エイリアン」を始め、「ダーティハリー」「ロッキー」「ランボー」など皆大サーガだ。映画製作がビッグプロジェクト化し、一方、大ヒット作とコケる作品の落差が拡大、映画製作が博打化したからだろう。良い企画の争奪は激化する。だが、良い企画なんてそうはない。かくて、以前のヒット作の安定性に頼り、アメリカ映画にサーガが氾濫する。ビデオの普及で、ヒットした優れた旧作が常に市場に出回っている高度情報化社会も、この傾向に拍車をかけていよう。「ガメラ」の素晴らしさは、ハイレベルなアメリカ映画同様の発想で、日本映画に新たなサーガ構築を目論んでいることである。

とにかく、映画ファンから御都合主義サーガの楽しさが、奪われる恐れはなくなった。

良い作品は、沢山映画を見ている者にもそうでない者にも、そんなに差が無く楽しさを与えてくれる。しかし、御都合主義サーガの出来の悪い一本を取り出したら、誰でも楽しめるとは限らない。数多くそして長い期間映画を観続けた者のみが、過去のディティールを思い出し関連付け、楽しみを発見することが出来る。サーガに限らない。個ではなく群、点でなく面として捉え、どんな映画にも楽しめる場所を見つける。これぞ、映画ファンの特権だ。そんな楽しみ方をする者を増やすこと、それが映画復興の道でもあろう。

（東京都国分寺市泉町3－6－15・会社員・51歳）

キネマ旬報社の本

ニコラス レイ
ある反逆者の肖像
ベルナール・エイゼンシッツ著
吉村和明訳

ジェームス・ディーンの神話的イメージを創出し、ジム・ジャームッシュ、ヴィム・ヴェンダース、ジャン＝リュック・ゴダールを熱狂させた孤高の映画作家ニコラス・レイ。

30年代の左翼演劇から出発し、赤狩の時代を経て、60年代のカウンターカルチャーを疾走し続け、アメリカ現代史そのものを苛烈に生きた偉大な反逆者の実像に迫る、画期的な傑作評伝！

好評発売中
A5判■800頁■本体6000円+税
お求めはお近くの書店か
小社営業部まで
TEL 03(3815)7131

Digitized by Google

読者の映画評

●応募要項　住所・氏名（ペンネーム使用の方は本名を忘れずに）、年齢、職業、電話番号を明記の上、800字前後で、縦書き。原稿用紙、またはワープロ打ちされたものでご応募下さい（レポート用紙不可）。〒112　8502　東京都文京区小石川1　21—14小石川吉田ビル　キネマ旬報編集部『読者の映画評』係まで。

森田祐子／渡辺一弘／塩沢哲／須田総一郎

Mr.マクー

この作品の奥底に響く哀切感には奇妙なシンパシーを憶える。それは主人公の姿が現代の我々の姿と似ているせいかもしれない。

本作が描く未来はヒトゲノム計画が完了した時代、すなわちDNAの塩基配列がすべて解読され、人の生体的情報が完全に掌握された世界である。世の価値基準もDNA中心で、DNA鑑定による身元調査や差別が横行している。作品中では就職時のDNA差別が理不尽な行為とのニュアンスで描かれていたが、この描写は我々に示唆を与える。ガタカ社の社員は様々な人種で構成されている。彼らはDNA鑑定によって知力、体力の潜在的優位性のみを基準に選考されているからだ。考えてみれば、あくまでも能力の有無だけを問い人種等による選別のないこの会社は公正と思える。現実には能力による選別は差別と言わないのだから。20世紀の今は能力の仕様書たるDNAを読みとる技術がないため試験によって実際の出力の数値を測っているだけで、根本は同じなのだ。我々は常に評価にさらされ能力を問われている。本作はそんな競争社会の閉塞状況とそこに生きる現代人の重圧感を、DNA差別という形で見事にあぶり出して見せたのだ。

不正な手段でガタカ社に入社した主人公は、日々努力を怠らず適正者として自身を偽り通す。この主人公の有り様も企業のサラリーマンの姿に重なる。その邁進ぶりは、周囲の評価と期待に沿うべく日夜努力を重ねる企業戦士達のそれに他ならない。しかし、そんな主人公が恋人に事実を知られた時、その瞬間だけ彼はありのままに自分に返ることができた。沈黙の内に自身を相手の眼前に晒すその姿は、自分が自分として存在することにDNAも名前も身分も関係ない、と訴えているようだった。が、結局、彼は再生でなく逃避の道を選ぶ。地球上に自分の居場所はないと、故郷に帰る思いで宇宙に出て行くのだ。同じ時、主人公にDNAを提供し続けて彼の成功を支えていた青年が、自らを滅ぼさんと焼却炉に入る。青年を焼く炎が宇宙船の噴射の炎と重なる。それはDNAの呪縛から最後まで自由になれなかった主人公が、自身のドッペルゲンガーを抹殺することによって安寧の地に旅立った、悲しい結末であった。

森田祐子
神奈川県横須賀市・社会福祉施設勤務・33歳

Mr.マクー

今年の東京ファンタの2日目に製作25周年を記念して「燃えよドラゴン」の特別版が上映された。今回新たに追加されたシーンはわずか2カ所だが、「ディレクターズ・カット」という価値以上の手応えが確かにあった。

特に冒頭での主人公と高僧との会話シーン。彼が「私は無の境地で闘います」と述べたとき、高僧が「敵はまやかしの姿をしていて、その裏に野心が隠れている。だからまずその虚像に打ち込みなさい」と忠告するという、ラストの解釈が多少違ってくる重要な場面が付け加えられている。有名な鏡張りの部屋での激闘は、オーソン・ウェルズの「上海から来た女」のラストシーンから引用しているとも言われていたが、高僧のこの台詞があえて冒頭で語られるからこそ、最後の一騎討ちの大舞台がなぜあの場所でなくてはならなかったのかという、強烈な説得力が生まれてくる。

オリジナル版では、怒りに突き動かされていた彼が、周りの鏡を壊した末に敵を発見するという展開になっていた。だが本作では敵を打ちのめす戦いとしてだけではなく、劣勢の中で己を見失っていた彼の心に高僧の言葉が甦り、鏡に映された自分を戒めるかのように叩くことで怒りを静め、無我の境地でこそ敵をも凌駕できるという求道的な要素が見え隠れしている。そして『エンター・ザ・ドラゴン』という原題が示す通り、自分の殻を打ち破って新たな存在へと進化しようとする闘いでもあったのだと、哲学的な深読みが改めて勝手に楽しめる感触になってもいる。

敵を倒した後、鏡張りの部屋から外に出てきた彼の、戦い終えた後の達成感とそのことに対する喪失感が微妙に混じり合った表情を見ていると、冒頭の会話は絶対必要であったと思わずにいられない。「史上最強の男は誰だ」という夢のような空想が格闘ファンの間では議論されたりするが、肉体が消滅しても

Digitized by Google

なお、スクリーンの中に不敗神話を焼き付けてしまった彼こそが、その称号にふさわしい永遠の男であると、本作は確信させてくれる。

渡辺一弘
東京都武蔵野市・映画ライター修業中・28歳

Mr.マクー

都会でもなく地方でもない、あいまいな場所に暮らす僕のなかに、二つの引き裂かれた思いがある。時代の先端と伴走したい、あるいは伴走せねばならないという一種の強迫観念。もうひとつはそれと対照的に、都会発の最新の流行や情報などを一切必要としない、己れの身の回りだけで自己完結した生活に対する憧れのような気持ちだ。

メディアに依存し、東京の顔色をうかがわずにはいられない者にとって、そんな生き方は幻想でしかないのかもしれない。だがその幻想はなぜか懐かしいものを感じさせる。僕らが都市メディアの網から自由でいたのは、せいぜい生活の範囲が自宅と学校の間ぐらいだった中学、高校のあたりまでではないか。「がんばっていきまっしょい」は、そんなある意味幸福だった時期を舞台にしている。

ボートに励む地方の町の女子高生たちを、映画は淡々と描いていく。その視点の高さは徹頭徹尾彼女らの位置にあり、周囲の親、教師といった大人のものではない。彼女らの目線に自分のそれを重ねるとき、時間は「あのころ」の速度で流れ始める。

時代設定が一九七〇年代後半というのも大きなポイントだ。日本の隅々まで東京化が進行した八〇年代よりも少し手前、地方のたたずまいもそこに暮らす人々の心性も大きく変わる前夜、都市という外部に侵入されることのないそこだけで完結した場所が確かにあった。映画の中でボート部コーチが一時住んでいたことになっている「東京」という土地も主人公たちには単なる記号に過ぎない。彼女たちはそんな、ここではないどこかではなく、確固とした「この場所」を生きているのだ。

この作品じたいもまた、時代背景や世相風俗といった「外部」を排することで混じりけのない青春像を抽出した。出演者たちも青く硬かった当時の高校生の雰囲気を出している。哀調を帯びたテーマ曲が、携帯電話もポケベルもルーズソックスもなかった青春への鎮魂歌のように聞こえてくる。

塩沢哲
埼玉県北葛飾郡・自営業・34歳

Mr.マクー

大都会を生きる現代人は孤独である。ツァイ・ミンリャン監督の「河」では、無機質な都会に生きる若者の孤独感が絶望的に描かれていた。若者は、頼りになる筈の家族もが崩壊する中で、死体のまねをするように自己を全面否定することや肉体的欲望を醜く処理することでしか、生を確認できなかった。

人間は知性、心、肉体がバランスして生きている。日頃の仕事や人間関係におけるストレス、恋人の独占欲、肉体的な疲れなど、いくら辛いことがあろうと、怠惰であろうと、人間は生きている筈だ。しかし、本作における保険の勧誘活動で見る人々の顔が無表情かつ無機質で生きた気配が感じられないように、マニュアル化された当たり前の生活では、生を実感できないのが現代人である。

ビルの谷間に捨てられ放置された猫の死体は、都会の中で埋もれ孤独に死んでいくことの絶望感と我々が心の隅に潜ませている不安感を強烈に表現する。反吐を吐くほどの嫌悪感は自分自身の姿を見せられた辛さの現れかも知れない。

本作の各登場人物は生きていることを確認するかのように肉体を傷つける。ここでは、流れる血、腫れ上がる顔こそが生きていることの証明なのだ。津田は殴られることで自分の存在を実感した。

ボクシングとは相手を殴り、倒し、血を流す、現代に残された「野蛮」なスポーツだが、その鍛えられて完成された肉体は生きていることを実感させてくれる。冒頭のボクシングジムで拳をふるう男達。一つの拳が高層ビルを撃つ。生きている肉体が、無機質な生きていることを実感できない大都会を撃つ。このワンシーンだけで、人間の生を証明しようとする本作のテーマが明確化される。

小島は津田の裏切りに対する反発から、そのボクシングで鍛えた肉体を使ってひづるを誘惑し、恋人を奪う事によって自らの生を確認する。ひづるは入れ墨やピアスで身を刺すこと、血を流すことで二人の男性について行こうとする。典型的な肉体の欲望の発露であるセックスに加え、乳首をピアスで傷つけることで、男達と同じように生きていることを実感しようとする事が明確になる瞬間である。

小島に殴られて割れる電球が、津田の顔を覆うように隠す。この瞬間、津田の心に灯が点いたのだろうか。ひずるに殴られ頬に傷を負ったまま都会の喧噪にたたずむ津田の表情が良い。ラストの巨大なサンドバッグは心臓の鼓動の如く響き、暗黒のナチ占領下でもフランス人が人間として生きていることをアピールした、マルセル・カルネの「悪魔が夜来る」を思わせる。無機質な大都会における、現代人の孤独感と生きていることの証明を見事に明らかにしてくれる作品である。

須田総一郎
東京都目黒区・会社員・43歳

●第一次選考通過者
（応募総数165通）
「プライベート・ライアン」笠原健史、周磨要、中山景雅、萩田明子、藤井智恵
「学校Ⅲ」三吉啓司
「ブギーナイツ」松村清志
「萌の朱雀」小泉美佐

Digitized by Google

文化映画

渡部　実

日本企業映像フェスタ'98レポート

10月13日より28日まで東京・大手町の経団連会館にて「日本企業映像フェスタ'98」（財）経済広報センター／経済団体連合会・共催）が昨年に引き続き開催された。不況の嵐が吹きまくる中、企業は求人や自社のイメージアップに必死の努力を続けている。企業の存在を今の社会にどのように印象づけるか？これらスポンサーによる企業映像作品は多種多様の趣を呈している。フェスタの主旨は審査基準として①企画力に優れ、作品の目的が明確で興味深いか。②作品の構成要素（ユーモア、ストーリー性、ヒューマニズム、テンポの良さ、知的興味など）は、視聴者に製作目的、企画意図を伝達するのに適切なものであるか。③技術水準（構成、画像、音声等）は水準に達しているか。などの諸条件をクリアすることが前提となる。

今回は映像作品部門で75本、WebSite部門で26本の応募があった。審査は吉原順平氏（審査委員長・㈱イメージシステム代表取締役）を筆頭に各企業の広報、作者、映画評論家などの専門家を加えた20数名の審査委員で第1次審査から開始された。そこでここでは昨年に続き入賞作品をご紹介したい。

「就職なんてしたくない!?」

【スタッフ】企画・トヨタ自動車、製作・映像設計、南北社、コア。製作・神野富三、脚本・神野富三、渡辺武久、演出・渡辺武久、撮影・山崎浩一ほか。

【内容】題名の語尾に「!?」のつくこの作品は、企業のリクルート映像である。ここに登場するのは高校を卒業して自動車工場の生産部門（ライン）に就職する若者たちの会社での生活をそれと極めて近い。本編は新入社員の入社時点から数カ月にわたり数人の新入社員の生活を追っていく。当初、不安と寂しさを隠せなかった青年もしばらくのち表情が明るくなっていく。企業の製品などのPRではなく、どこまでも企業の根幹は人間の育成にある。むしろ、その意味で本編は企業の〝見えない領域〟を鮮やかにとらえている。新入社員の将来を保証する体勢、円滑な人間関係こそがこれからの企業のあるべき姿であることを明快に示した一作といえる（企業活動1位。経団連会長＝グランプリ賞受賞）。

量子ゆらぎを超えて——36人の熱い科学者たち

【スタッフ】企画・科学技術振興事業団創造科学技術推進事業部、製作・イメージ・サイエンス。

【内容】量子論は現代の科学技術の基盤となっている研究学問あるが、ここでは科学技術振興事業団の山本量子プロジェクトの若い研究者たちの主張と実験を紹介している。量子研究といってもさまざまなアプローチがあり、一見して難解ともいえるこの分野でも最新鋭の機器によって研究が行われている。研究や学問は当事者たちの尽きない好奇心と興味がその働きを促す。ここに見られる研究者たちの発見の喜び、柔軟に発想する言動を見ているととても頼もしく思われる。このような映像もひとつのリクルートであろう（技術・研究開発1位。企業映像委員長賞受賞）。

電波でさぐる宇宙

【スタッフ】企画・文部省国立天文台、製作・イメージ・サイエンス。

【内容】最近、子供たちの理科離れが目立っているという。この作品は天文の分野から子供たちにより理科の面白さを知ってもらう目的をもって製作された。天文観測は古代から視界に入る光の観測を行ってきたが、宇宙からの電波が発見されてから天文観測は飛躍的に進歩する。この作品では宇宙から電波が出て来ることの意味、発見の経緯、電波観測で何が分かったのかをエピソードや観測成果を交えながら平易に解説している。子供ならず一般教養としても楽しめる作品に仕上がっている（社会・環境・文化1位。金賞受賞）。

Digitized by Google

「就職なんてしたくない!?」

「安全一筋に人生を託した男」

安全一筋に人生を託した男　日下部啓知

【スタッフ】企画・アイチコーポレーション、製作・プランチング　アンド　プロダクション。

【内容】この作品は異色の内容である。日下部啓知氏は長年、配電工事の仕事をしてきたベテランである。配電工事は何時如何なる時でも臨機応変に対応しなければならない仕事であり、しかも高度な技術にもかかわらず、危険が伴う。日下部氏の父親も配電の仕事をしていたが工事中に殉職した。その苦しい経験もあり、氏は長年の実績をもとに後輩へのインストラクターとして余生を捧げることにした。本編では全国、何処へでも出掛けてゆき、指導と講演をする日下部氏の姿が記録されている。まるで一篇の人生ドラマを見るような趣が感じられる。「就職なんてしたくない!?」とともに本編を高く評価したい（企業内コミュニケーション1位。銀賞受賞）。

One More Life——生まれ変わってもゼロックス

【スタッフ】企画・富士ゼロックス、製作・アートパブリシティ。

【内容】コピー機器の老舗、富士ゼロックスはコピーマシンの生産の本拠地、海老名工場で使用済みのコピーマシンを回収しリサイクルを行っている。私たちが普段使うマシンも優れたリサイクル製品である。その理由は自然環境への配慮である。機器を廃棄ゼロにすることが将来の企業の在り方のひとつとすることをアッピールした本編はさわやかな印象を残した（個別事業1位、銅賞受賞）。

その他、以前、本欄にても取り上げた作品——企業活動2位の「Time Travelers——小さな冒険者たち」（企画・トヨタ自動車、製品・イメージサイエンス）など話題作も多く参加した。

WebSite部門では最優秀賞（経団連会長賞）に「にしてつグループホームページ」。企業映像委員長賞に「サントリー・イタリアワイン紀行」（企画・サントリー、製作・アートパブリシティ）。奨励賞に「Mercian Wine journal」（企画・メルシャン、製作・博報堂、プランネット）がそれぞれ受賞した。このフェスタは全体をとおして企業の〝今〟を生き生きと伝えている点で意義のあるものであり、ぜひ、継続を期待したいものである。

キネマ旬報社の本

キネマ旬報・臨時増刊

映画賞・映画祭データブック

映画賞・映画祭　受賞一覧○映画界年表

世界の主な映画祭○映画祭早見表

アカデミー賞／ゴールデン・グローブ賞／カンヌ映画祭／ベルリン映画祭／ヴェネツィア映画祭／キネマ旬報賞／ブルーリボン賞／毎日映画コンクール／日本アカデミー賞／フランス・シネマ大賞／ニューヨーク映画批評家賞／ルイ・デリュック賞／カルロヴィ・ヴァリ映画祭／ベルリン国際映画祭／ジャン・ヴィゴ賞／モスクワ映画祭／ジュルジュ・サドゥール賞／東京国際映画祭／アヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭／サンダンス映画祭／映画芸術ベストテン・ワーストテン／ぴあテン＆もあテン／報知映画賞／横浜映画祭

定価2500円（税込）

■B5判■240頁

Digitized by Google

その場所に映画ありて

田中眞澄

41 明日待子よ永遠なれ Ⅱ

新宿ムーラン・ルージュの活動は一九三五年前後にピークを迎えたとされる。東京の都市化の進行で西郊に膨張した厖大な人口を後背とする新興の盛り場には、新たな都市文化が芽生えていた。ムーラン近辺では洋画の殿堂武蔵野館や洋画二番館の昭和館があり、全面ガラス張りの喫茶店フランス屋敷があり、紀伊国屋書店や中村屋も程近い。つまり知的大衆の新時代生活様式の拠点であった。映画がトーキー、即ちどこで見ても同じものになり、徳川夢声や山野一郎ら名説明者が去った武蔵野館に代わって、ムーランがライヴの人気の焦点になった。

演目は何本かの芝居とヴァラエティ（歌や踊り）。その芝居は軽演劇と呼ばれたが、文芸部に人材が集まり作家性が強く、都会的で洒脱、時に社会性を帯びた諷刺喜劇を基調として、定員四三〇名の空間にユニークな小劇場大衆演劇運動を展開し、知識層や若い世代に支持された。時勢が逆流する中で〝自由を我等に〟の思いもあっただろうか。戦前ムーランの代表的作家の一人伊馬鵜平（のち春部）を、村山知義は〝日本のルネ・クレール〟と評した。ムーランは或る時期、国家のナショナリズムに対し都市のリベラリズムの感性で、時代の青春たり得たといえる。だが、四四年には《作文館》と改称を余儀なくされ、四五年五月の空襲で灰燼に帰した。

ムーランの骨格をなした作家陣、無慮三百人以上の出演者たち、客席に現れた多くの著名文化人（志賀直哉まで！）を語れば際限がない。いっそムーラン史論でも書きたい気分だが、ここではその作者や俳優たちが、戦後、ラジオや初期のTVの重要な人材供給源になったことを指摘するにとどめて、そろそろその後の明日待子の出番にしたい。少女時代、徹夜の舞台稽古の翌日、出番を待つうち客席で眠ってしまった明日待子なのである。

本拠を失った座員は《明日待子一座》を組んで地方を回った。北海道公演を手がけた札幌・須貝興行の御曹司のもとに彼女は嫁いだ。夫は早稲田の学生時代からのファンだった。

歳月が流れた。彼女の動静は時折話題になった。元明日待子として、そして……。

一九九六年、『北海道新聞』一月四日夕刊で、正派五條流家元の五條珠淑（たまとし）が過去と現在を語っている。彼女こそ往年の明日待子その人である。ムーラン時代の四〇年に五條流師範名取となって、新橋演舞場で披露した明日待子なのである。その記事を紹介しよう。

結婚するときには、松竹新喜劇やNHKの『とんち教室』からの誘いもあった。それでも結婚を選んだのは、新しい人生への期待と、興行の世界の魅力だった。〝おかみさん〟の仕事は来演する大勢の役者、芸人の食事の支度。自分で買い物をしたことがなかった彼女が市場に買い出しに行った。

五五年、宗家の依頼で五條流舞踊研究所を開く。第二の芸能人生の出発になった。以後の活動はここに記すまでもない。この九六年秋、門下一千名以上による喜寿の祝いが催される。

「その会に〝ムーランの灯は消えず〟と副題をつけるつもり。だって、私の中では、ムーランも五條流も同じですもの」

赤い風車は回り続けている。それにしても、明日待子が或る時代、或る世代の日本人に忘れ難い印象を残したのはなぜなのか。七三年、『毎日新聞』朝刊読者欄でのやりとりに、一つの暗示がある。『あしたまちこの年月』という一主婦の投稿があった。地方の少女だった彼女は明日待子の舞台は知らない。ただ、母の婦人雑誌のグラビアでよく見た。都会的な容姿とともに明日待子という芸名に心ひかれた。今にして自分の人生は常に明日を待ち続ける〝あしたまちこ〟であったと思う。だがこれからも希望を失わない〝あしたまちこ〟でいたい、という内容。

数日後、それに対する明日待子の感想が寄せられた。幸せな近況を記した一方で、〈灰色の同時代を同じような心境で過ごしたいわば大切な青春時代を暗い戦時下で送った私たち〉という表現も見られた。脚光を浴びていたアイドルにしてこの言あり。その彼女の存在を己れの青春として生き、或いは死んでいった若者たち。閉塞状況の今日を、明日を待つことで耐えねばならなかった彼らにとって、明日待子とはまことに象徴的な名前になった。しかも、それを若く生命力に溢れた美しい少女が体現したところに、彼女がその時代の中で放ったアウラがあった。そして不幸や絶望がこの世の道連れである限り、人は永遠に明日待子を求め続けるであろう。

「春爛漫狸祭」は芸能史的に情報量の多い映画であり、ムーラン・ルージュの話題も山ほどある。しかし、第一義的にクローズ・アップするとしたら、明日待子しかあり得ない。

明日待子、一九二〇年生まれ。諏訪根自子、李香蘭、原節子も生まれたアイドルの当たり年。次は諏訪根自子の唯一の映画出演作『幸運の椅子』（四七、高木俊朗）の出番だよ。その明日が待ち遠しい。（この項終り）

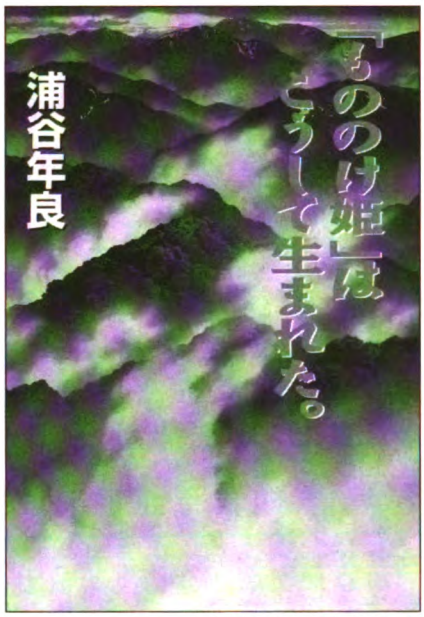
Digitized by Google

映画の本 BOOK REVIEW

『「もののけ姫」はこうして生まれた。』

〝理想の少年〟の〝少年の理想〟

浦谷年良・著
文＝森卓也



徳間書店・刊／本体1900円＋税

27～28ページに、登場人物の帯についてのアニメーターへの注意書きの話が出てくる。今では、洋服の常識で、着物の帯の位置が高くなっているが、本来はヘソ下であるとイラストで指示。そして、高すぎる結び方の絵に「これは『七人の侍』の三船敏郎以来の結び方、アシタカだけに使う」と記されている。著者（取材者）が宮崎駿に意味を訊ねると、「三船のあれは、子供だってことでしょ」。

黒澤明を論ずる人はゴマンといるが、これは、まさしく作家が作家を読む着眼である。そして、宮崎駿が描く主人公が、一貫して〝理想像としての子供っぽさ〟を持っていることを、あらためて思い返さずにはいられない。もともと子供が主役の場合は気づかないが、「カリオストロの城」のルパン三世も、「紅の豚」のポルコも、一皮むけば気恥かしいまでの〝子供〟であり、それが私たち観客に、素直な共感を呼ぶのが、アニメーションの有難さなのだろう。

「もののけ姫」のアシタカも、のっけから作者に〝野性の祟り〟を理不尽に背負いこまされながらも、外面の明るさ凜凜しさは少しも変わらない。エボシやジコ坊たち権謀術数の大人たちと対比すると、彼が結末まで生き永らえること自体が奇蹟で、それも祟りの御利益なのか、と怪しまれるほどである。

しかし、このアシタカが、従来の少年（的）ヒーローと決定的に違うのは、〝倒すべき悪の権化〟を与えられていないことだ。本書の中でも宮崎の口から再三語られているように、事件や状況に翻弄され続けるアシタカは、悩みや絶望を決して見せない。まっすぐな彼がひたすら奮闘し続けたことで、事態は辛うじて両者全滅の破局を免がれるけれど、むろんメデタシメデタシとは程遠い。だが〝この世はまだ生きるに価するかもしれない〟と、ひとまず観客に思わせて終るためには、〝理想の少年〟の〝少年の理想〟は、不可欠なのである。

作者の素養や知識は、作品の上に、はたして何割位現れるのだろうか。せいぜい一～二割とも言われるが、映画興行の全盛期には、資質ゼロで、ただ現場監督的に威張っているだけの人物でも、けっこう演出者としてまかり通っていたと聞く。ともあれ、本当に才能のある映画監督ほど、画面に現れない水面下の部分は巨大な道理である。

いや、画面に現れていても、まず気づかないこと、見逃していることは実に多い。かつて藤山寛美や大村崑が、丁稚や子供を演ずるとき、ことさら帯を胸高に締めることで、幼さを喜劇的に誇張したものだが、いま「もののけ姫」で、アシタカだけ帯の位置が高いのに、寓意の含みもこめて注目した観客が、何人いただろうか。

もっと重大な例。タタリ神の呪いを受けたアシタカは、掟として、村を追われる形で夜ひそかに去って行く、そのアシタカを〝兄さま〟と呼び、玉の小刀を手渡すカヤは、妹ではなく、アシタカの嫁になることを周囲が認めていた娘である――。

予備知識ぬきで映画を見て、そこまでわかった人は大したものだ。実は私もわからなかった。わからなかったのがシャクだから言うのではないが（内心少しシャクなのだけれど）、今回の宮崎駿ほど、観客に〝多くを求めた〟映画作家はまれなのではあるまいか。だからこそ私は、計六時間四十分のビデオ「もののけ姫はこうして生まれた」を見て、さらに、それを構成した浦谷年良によるこの著作で、ますます興味津津なのである。

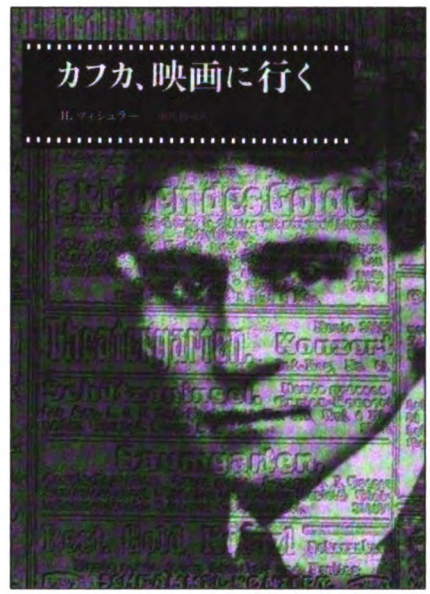
そういえば私は、浦谷氏が二十年前に演出したTV番組「あゝ、にっぽん活動大写真」で、マキノ雅弘が、「次郎長三国志」（52～54）の、森繁の石松が、藤の花を居合抜きで斬り落とす場面で、抜く手も見せず斬ったように見える動作を指示した話を覚えている。それは本書の63～66ページの〝目くらぁし〟のコツにも通ずる。大切なは〝どう見えるか〟なのである。

二年間〝宮崎さんの「授業」を受けてきたような気もする〟という浦谷氏は〝映画創りが終わった後で会った宮崎さんは、（中略）製作中の「いい人」とは別人のように感じられた〟（193ページ）と述懐している。〝自分でも総括できない〟映画をつくった作家の孤独は、それほど深く果てしないのであろう。

Digitized by Google

『カフカ、映画に行く』

19世紀と20世紀の間にあるもの



みすず書房・刊／本体2500円＋税

ハンス・ツィシュラー著
瀬川裕二・訳
文＝杉原賢彦

19／20世紀。その間にあるもの。わたしたちはそれが、ニーチェであったことを知っている。わたしたちはそれが、ヴァグナーであったことを知っている。わたしたちはそれが、T型フォードの発明であったことを知っている。そしてなによりわたしたちは、映画がその事件を象徴していることを知っている。

本書は、19／20世紀の間にあるものを見るため、ひとりの作家を召喚した書物であるということもできるだろう。召喚されたのは、ドゥルーズ＝ガタリによる企みの記憶も新しいフランツ・カフカ（『カフカからカフカへ』朝日出版社参照）。1883年生まれの作家カフカが、19世紀から20世紀へとどう飛び越え、あるいは飛び越えられなかったかを本書は見る。そしてそこに映画がどんな役割を担っていたかを、推測しようとする。

「彼（カフカ）自身は、執筆にあたって特定の映像もしくは映画の場面を援用したことに関しては、いささかの情報も、ヒントすらも残していない。（……）というよりも、カフカはあたかも映像を散文から排斥しているかのようであり、（……）映画の残像を別のフィクションへと変形させる、あるいは歪曲させるカフカの行為には、きわめて多様な段階が存在しているが、『キネマ』の映像をかりそめの不十分なものとしてしか記録できない」と、本書の著者ハンス・ツィシュラーは書く（ツィシュラーとは、ヴェンダースの「さすらい」でライン河にビートルで飛び込んだカミカゼ野郎だ。あるいはゴダールの「新ドイツ零年」で、旧東ベルリンをヘーゲルの『哲学史講義』を抱えて横切るあの人物だ。彼はまた、デリダの諸著作の、ドイツ語への翻訳者、哲学者としても知られる）。

ツィシュラーの本書での企みは、上に引用したように、あるかなきかの、カフカの作品における映画への（あるいは映画的なるものへの）探究ということができる。そして、そのカギともなっているのが、速度だ。本書にも引用されている、ドイツの碩学ヴォルフガング・ジヴェルブシュの著書『鉄道の歴史：19世紀における空間と時間の工業化』（法政大学出版。残念なのは、本訳書では、この『鉄道の歴史』をはじめ翻訳がある書物がそうとは知らされず、一時的な訳語が与えられているに終わっていることだ）などを手がかりに、馬車的な速度しか持ち得なかったパノラマと、優れて近代だった鉄道（＝映画）の速度とか対比的にとらえられ、その間で戸惑い、それを表現へと昇華させてゆくカフカの姿がしばしば描かれる。

「遊歩行し、目によって統制され、（……）カフカの自我は、書くという行為を通じて、（……）硬直状態から脱する。パリは彼の記憶のなかでは、『かたわらを走りすぎる』（……）列車となる」と本書のなかで綴られるそのとき、カフカがとらえるものは、まるで列車のなかから覗いた流れる風景——それはふと視線を逸らせると、まるで映画のカット割りのように、断続するシーンの連なりのようになる。……「破線で描かれた」（ツィシュラー）風景。

このときカフカの自我は、歩行時のなめらかな直線を得ようとして、新たな表現を求めようとするのだと、そうツィシュラーは推測するのだ。

しかし、それを証明するための材料はあまりに少ない。実際に提示されるのは、カフカが友人マックス・ブロートとともに行った、共同著作の冒険での、成功されなかった断片にすぎない。19世紀にとどまったマックス・ブロートと、20世紀へと越えようとしたカフカ。そのふたりが残した筆跡の対比に、ツィシュラーの冒険は集約されているかのようだ。

だからこそ、本書は魅力的だ。あるかなきかの、細い痕跡をたどるツィシュラーの手つきはまるで、詩人の繊細さと大胆さを合わせもつ。本書はそれゆえに決して研究書ではない。

「場面を〈脱＝現実化〉し、映画へと変換するというカフカ独自の技法」という言葉を目にし、そして「線＝雨は映画の薄片であり、投影である。パリの街は、その彼方で知覚される」という一文に出会うとき、カフカの創造の一端に触れたように感じたのは、錯覚にすぎないのだろうか。刺激的企みの一書だ。

Digitized by Google

⑱『陽のあたる坂道』

石坂洋次郎・著／新潮文庫

西脇英夫 映画より面白い

本作品は昭和三十一年十二月から翌年十月まで『読売新聞』に連載され、戦後間もなく発表された『青い山脈』に劣らぬ人気を博した。外見は恵まれていて、いかにも幸せそうに見える田代家にも、その内部には複雑な事情が潜んでいた。それは二男の信次が妾の子で、本人や兄妹もそれに気付いていて、父母を含めた家族内での微妙な心理的バランスが働いていることだ。ところが、妹の家庭教師として女子大生の倉本たか子が訪れたことから、まず、互いにたか子に好意を持った信次と兄とのバランスが崩れ始め、さらに信次の生みの母と種違いの弟が偶然、たか子と同じアパートに住んでいることから、互いの家庭に血縁問題に絡む波紋が投げかけられる。

こうして、たか子を媒介として、二つの家庭が複雑にからみ合い、それぞれの自立と家族の絆という、或る意味では相反するテーマを、石坂文学特有のやや理屈っぽい会話の応酬で明快にきわだたせていく。ドラマの中心素材としての信次が、妾の子だったという旧態的設定は、戦前の作品『若い人』のヒロインが私生児であったこととよく似ているが、そうした古い形態から生み出された若者が、そのことを少しも恥じたり隠したりしない、新しい価値観を持った人間として描かれているところに、石坂文学の面目躍如たるところがある。

また、こうした主人公を取り巻く環境も、主人公が傷つきボロボロになるほどには保守的でも偽悪的でもなく、むしろ偽善的なまでに優しくてものわかりがいい。唯一、そうした情況にあえて反抗を示すのは信次の種違いの弟だけで、しかし、それも最後には信次の闊達さの前に、あえなく屈服してしまうのである。

映画化にあたっては、これ以上の適役はない石原裕次郎が信次役を演じ、監督の田坂具隆の名演出もあって、戦後の石坂文学の映画化では最高水準の作品となった。このため、著者は始めから裕次郎をイメージしてこの小説を書いたのではとさえ言われた。すでに裕次郎が一年前に同じ石坂文学の映画化『乳母車』に出演していることから、案外正しい読みかもしれない。

なお小説では、信次の養父母の友人として、山川という大学の教授でクリスチャンの独身男が重要な役目を担っていて、養父母が結婚する以前、三角関係にあり、二人が善人の山川を裏切る形で結婚したという過去が尾を引き、夫婦の関係がしっくりいかない要因の一つともなっているのだが、この人物は映画には出てこない。

また、女遊びのやめられない父と、女性を自己確認の道具ほどにしか思っていない兄が、偶然同じ女と関係を持ち、三人がラブホテルで出っくわすという、滑稽な愁嘆場が小説にはあるが、これも映画にはない。

つまり、小説は大人の世界と若者の世界を等分に描くことで、時代の全体像をとらえようとしたが、映画では若者を中心に据えることで、映画としての若さと大衆性を、より強くもたせたのではないかと思う。

ただし、それ以外はほとんど完璧に近い映画化で、石坂文学独特の長いセリフもみごとに映像化され、やや舞台劇的な臭さはあるものの、俳優たちの嫌味のない演技に救われ、時代的にはリアリティの乏しい物語ながら、それなりの説得力をもった心地よい作品となった。

新刊紹介

『始皇帝暗殺 メイキング&ストーリーブック』角川書店・刊／本体2300円＋税

映画だけを見て内容が理解でき、楽しめるのが大前提だが、歴史ものなどの場合、その背景となる史実についての知識があればより楽しい。現在劇場公開中の陳凱歌の最新作「始皇帝暗殺」も一大スペクタクルとして充分面白いが、楽しめば楽しむほど、陳監督が描いた〝始皇帝の時代〟についてもっと詳しく知りたくなる。本書はその要求に十二分に応えたもので、監督、出演者へのインタビューに始まり、撮影レポート、衣装・美術デザインのカラーによる紹介、原案ストーリー、さらには始皇帝をはじめとする関連人物とその時代の詳細な歴史、年表など、豊富な図表、写真などを駆使して紹介。通常のメイキング本とは一線を画した充実ぶりで。歴史読み物としても楽しめる本に仕上がっている。

Digitized by Google

池田　敏

衛星チャンネルに異変あり

いよいよＴＶ界は……ボーナス商戦である。少し前までは春と秋、二度の改編だけ盛り上がったのが、今やＢＳやＣＳなど、さらなる加入者獲得をめざすペイＴＶ局が夏と冬のボーナス期、力の入った番組を投入するようになったので、まるで自動車業界や家電業界のようにボーナス商戦という言葉が出てくる次第。時代は変わった、のかもしれない。

今年の目玉になりそうなのは、黒澤明監督や淀川長治氏の追悼企画。これらは次号でまとめて紹介するとしよう。その前にちょっとショッキングな話題を。スカイパーフェクＴＶ！　の未公開欧州映画専門チャンネル「avanz tv／チャオ！　キネマアモーレ」の放送が終わることになった。業界紙の報道によれば、運営していた会社は再開をめざす、それ以上の具体的なプランについては何も触れられていない。誤解を招かないよう記すと、同じくヨーロッパ映画に力を入れるシネフィル・イマジカは健在（最近はインド映画も充実）なのだが。

この「キネマアモーレ」、木～水曜の１週間に１本の映画を繰り返し放送し続ける編成で、１年に50本前後の作品しか放送しないというのは正直なところ、他の映画専門チャンネルと比べて本数が少ない。関係者やファンには厳しく聞こえるだろうが、受信セットとアンテナの取り付け工事併せて（安くても）まだ５万円以上はするスカパーとしてはキツイ話だ。またこれは余談だが、９月の同局の放送作品「ザ・ビューティフル・ワイフ」に関して某ＣＳ誌には思い切り“エンニオ・モリコーネ監督作品”と書いてあった。作品を見ていないので断言はしないが、筆者がインターネット等を調べた限りではモリコーネが監督した映画など１本も見つからないし、ついでにいえば「ザ・ビューティフル～」がどんな映画なのかも分からなかった（関係者の顔ぶれが異なる同名の映画はあったが）。ライターが“裏”を取ったのかと聞きたくなるのは無理もないのでは。

何でもチャンネルのせいにするだけではなく、そうしてチャンネルが消えていく事態を、プラットフォームや放送免許を付与した関係省庁はどう視聴者に説明するのか。これは今後も見逃せない問題だ。

ＮＨＫ衛星第２『衛星映画劇場』は７～10日と14～17日に「００７」シリーズを、「００７／ドクター・ノオ」（７日）から「００７／死ぬのは奴らだ」（17日）まで、第１～８作をオンエア。これぞボーナス商戦らしい分かりやすい編成（笑）で、ファンが悪い気分になるはずがない。なお同局は来年に第

「狂熱の孤独」

９～14作も放送予定とのこと。期待したい。そして同局の『土曜映画劇場』は12日、大映のオールスター歴史大作「秦・始皇帝」をオンエア。まるで「始皇帝暗殺」公開にあわせたような、タイムリーな放送！　まだおカネ（製作費）があった頃の日本映画らしい、台湾ロケ満載スペクタクル編。そして13日深夜“コメディつながり”で「凸凹猛獣狩」「底抜けやぶれかぶれ」「底抜けふんだりけったり」を連続オンエア。いずれもビデオ廃盤or未発売なので貴重なオンエアである。できればそのうち、怪作「底抜けてんやわんや」も放送してほしいなあ。やはり同局の『ミッドナイト映画劇場』は10日深夜にオーソン・ウェルズ監督・脚本・出演の未公開作「ストレンジャー」を放送。ナチスの戦犯が米国コネチカット州で暮らし、正体を暴かれるまでの日々を描いたシリアス編。ビデオ未発売の貴重作。

ＷＯＷＯＷ『ヨーロッパ・クラシックス』枠（土曜）の12月分は“ジェラール・フィリップ特集”。関東では秋からレトロスペクティヴ上映やイベントが相次いでいる人気男優フィリップ。その主演映画から「パルムの僧院」（12日）、「狂熱の孤独」（19日）、「赤と黒」（26日）の３本をラインナップ。

秀作チャンネル、シネフィル・イマジカの貴重作デー『シネフィル・プレミア』の７・15日は97年フランス作品「マーサ、夜明けの誓い」。第一次世界大戦下のフランスを舞台に、負傷した兵士と女性教師の出会いと恋を描いた、ラブストーリー。監督は「フランスの思い出」のジャン＝ルー・ユベール。14・22日は97年フランス作品「砂漠伝説」。遊牧民である父親に引き連れられ、サハラ砂漠を旅することになった少年の姿を圧巻のロケ満載でつづる。21・29日は92年フランス作品「情事の終わり」。20歳で平凡な暮らしをするヒロインが浮気と盗癖、二つの悩みを抱える、洒落たタッチの女性ドラマ。

Digitized by Google

豊崎岳彦

DRAMA&SPECIAL

ディジタルTVの新動向

今回も、最近の本欄では恒例のようになっているディジタルテレビ（以下ＤＴＶ）の動向から始めてみたい。去る11月には東京タワーからの電波送信試験も始まるなど、まさになし崩しの進撃を続けるＤＴＶ放送だが、世界的に見ても5000ドルを超えるハードの価格を何とかしなくては、普及など到底おぼつかないという分析が一般的だ。むろん低価格化への模索は各方面で進んでいるが、ものがディジタルだけにデータ送受信も視野に入れるなど、単なる画像受像機とはもはや言えない厄介な代物ゆえ、四方が丸く収まって……というような妙案はなかなか出てこない。そこで家電→電脳化ではなく、電脳→家電化という逆のアプローチから最初の一撃がもたらされた。松下電器とコンパックが共同開発した「P-C-DTV Tuner/Decorder Card」と、フィリップスの開発となる「Coney Board」の２種がそれ。ともにパソコンで地上波のディジタルＴＶ放送（&現行ＴＶ放送も）を“低コスト”で見ることができるというのがウリだ（前者はＯＥＭ供給で10万円程度、後者は米で小売りされ実に200ドルを切るという驚きの価格！）。もっとも、家庭用テレビに比較してお世辞にも大きいとはいえない画面サイズのパソコンでＴＶ放送を楽しむ層は現在でも極めて少ない。いかに安価だとはいえ、将来的にこちらが主流になるとはさすがに開発したメーカーの側も思ってはいない。それでも、パソコンの普及台数から見て、これらのボードの販売予測台数は、ＤＴＶ受像器の普及へのカーブ（非現実的な価格に基づいて算定されたものだが）を遥かに陵駕している。かつてのＣＤＶやＤＶＤのように、新し物好きはまずはパソコンでということか。しかし、いくらパソコン本体が勘定に入ってないとはいえ、25倍もある価格差っていったい何なのさと思わずにはおれぬ。

閑話休題。初老の主人公たち（作者と同年代）が時流の波に飲まれてにわかに転機を迎え、彼らのあがきに巻き込まれた年若い者たちの物語と重奏する。芸術祭参加の山田太一ドラマ『大丈夫です、友よ』は、いつもの山田節と言ってしまえばそれまでだが、情緒に訴えながら決してそれに溺れない筆さばきが出色の１編。飽きっぽい視聴者を引き付けるために水に油を混ぜ、油の比率が上がればまた水を……という風な感じでプロットばかりを重視する最近のＴＶドラマに比して、小さな突発性が波紋のように連関しつつ展開する王道のドラマ作りだ。長崎のハウステンボスにロケをしつつ、主役の市原悦子に「なんだよこんな観光地」みたいなことをこっそり言わせる批評性にも好感が持てる。ただし、老いを感じた主人公の逡巡の裏側で、小さな達成を果たす若者たちが相互に補完しながら、結局は「濁世がかろうじて何とかなっている」ことに収斂する山田ドラマの型式は、単発ではあまりにさらりとし過ぎる印象。この手法はやはりディテールが描き込める連続ドラマ向きではないか。いずれにしろ本作で萌芽の見えた、山田氏の新境地に期待する。

ＴＶフィーチャー旬報1998年11月　下旬

◆新宿ホスト殺人事件　女借金取りVS買い物依存症の女
（11.2／TBS 21：00〜22：54）
監＝井坂聡／脚＝土屋斗紀雄／出＝浅田美代子、久本雅美、生瀬勝久、雛形あきこ、袴田吉彦、赤井英和、石立鉄男、小林稔侍＊「サラ金地獄主婦が暴く事件の謎！犯人を携帯電話が登録した」

◆盲人探偵松永礼太郎10　復讐幻想
（11.3／日テレ21：03〜22：54）
監＝吉川一義／脚＝宮川一郎／出＝古谷一行、ケーシー高峰、高橋一生、柏進、一色彩子、山口美也子、田中広子、八代朝子、矢島健一、斉藤清六＊「キミノ恨ミ晴ラシマシタ…パソコン通信の落し穴」

◆山村美紗サスペンス　ニュースキャスター　沢木麻紗子（1）京都・出雲殺人事件
（11.6／フジ21：00〜22：54）
作＝山村美紗／監＝林徹／脚＝前川洋一／出＝羽田美智子、研ナオコ、別所哲也、山村紅葉、本田博太郎

◆ようこそミセス再出発セミナーへ
（11.7／NHK 総合21：00〜22：15）
監＝東山充裕／脚＝東多江子／出＝松下由樹、渡部篤郎、田中健、松下麻希、伊藤友乃、キムラ緑子、久野麻子、小林千絵、清水邦彦

◆超完全犯罪の女
（11.7／テレ朝21：00〜22：51）
監＝池広一夫／脚＝碇崎好／出＝浅野ゆう子、細川直美、永島敏行、緒形幹太、でんでん、和泉史郎、水谷誠伺、山田明郷、小川隆市＊「双子の弟を殺した若妻を許せない！淡路島ー明石海峡大橋、史上まれにみる復讐計画…」

◆冬の特選サスペンス　埋葬された愛
（11.9／TBS 21：00〜22：54）
作＝エミール・ゾラ／監＝宮田吉雄／脚＝原田菜緒子／出＝麻生祐未、椎名桔平、不破万作、袴田吉彦、斉藤洋介、山崎一、梶尾善、洞口依子、久本雅美、小宮健吾、吹越満、樹木希林、有馬稲子

◆小京都ミステリー24　吉備津鳴釜殺人事件
（11.10／日テレ21：03〜22：54）
監＝合月勇／脚＝夢建日子／出＝片平なぎさ、船越英一郎、大木実、羽場裕一、加納竜、木村理恵、奥由香里、江藤漢、緒沢凛、桂小金治、村野武範＊「刀鍛冶の天才か凡才か？カマ占いのお告げは凶」

◆尾張幕末風雲録　維新を動かした男・徳川慶勝
（11.10／テレ東19：00〜20：54）
作＝野口勇／監＝宮越澄／脚＝鈴木則文／出＝三田村邦彦、辰巳琢郎、本倉さつき、鈴木由香、梅沢富美男、西田健、隆大介、芦川よしみ、池上公司、五味洋平、山宮近司、高崎隆二、井上高志、藤田まこと

◆大丈夫です、友よ
（11.13／フジ21：00〜23：07）
監＝深町幸男／脚＝山田太一／出＝市原悦子、藤竜也、井川比佐志、深津絵里、柳葉敏郎、坊屋三郎、前田まゆみ、西川亘、内藤達也、山田孝子※芸術祭参加作品

◆余命半年　生前給付金3000万円の夢〈前〉
（11.14／NHK 総合21：00〜22：15）
作＝／監＝／脚＝／出＝野村万之丞、余貴美子、尾野真千子、堀ちえみ、藤岡弘、宮川大助、笑福亭松之助、加藤武

◆心室細動
（11.14／テレ朝21：00〜22：51）
作＝結城五郎／監＝小田切正明／脚＝／出＝村上弘明、稲垣吾郎、野際陽子、佐野史郎、麻生祐未、岸田今日子、高橋ひとみ、洞口依子、佐藤慶、北村総一朗、渡辺いっけい

Digitized by Google

杉原賢彦

NEW MEDIA

ANTZができるまで

ドリームワークスの新作「アンツ」は、全編CGによる作品である。先行の「トイ・ストーリー」が製作会社の性格もあってか、限りなく漫画映画に近いテイストを持っていたのに対し、こちらはCGであることを前面に打ち出した画面作りとなっているが、王女に恋した働きアリが伝説の楽園を求めて、とストーリーは驚くべき古さ。CG技術の素晴らしさを充分に賞味してもらうためには、お話は明快でなくてはならないということなのか。

現在、メジャーに分類される中で、ドリームワークスは、唯一、WWW以後に設立された会社。当初からWWWの利用は宣伝の重要な部分として位置づけられているようで、第1作の「ピースメーカー」では自らのサイトを持つと同時に、ペプシコーラのサイトでも大々的にページ展開をしていたが、「アンツ」の〈楽園〉には、ペプシが登場。ということで、この作品もペプシのサイトで大々的に取り上げられている。もちろん、独自のオフィシャル・サイトがあるし、さらには、CGを担当したPDIのページとも有機的に繋がっている。しかも、そのどれもが素晴らしいできで、オールCGムービーの面目躍如といった感がする。

ペプシのページでは、まずANTという大きな文字が出てくる。続いて小さなアリがZを運んでくる。ANTZとなったところでENTERの表示が出るので、クリック。下の方に、小さな図が現れるが、それらがなんであるかは、小さすぎて良く分からない。近づいていくと、虫メガネの形が出てきて、その円の中に図が拡大され、それらがストーリー、ビデオ、スティール、キャラクター、ゲーム、ビハインド・スクリーン（声の出演者、製作陣、プロダクション・ノート）への入り口であることがわかる。誰でも思いつきそうなアイデアではあるが、このページに見るスマートさは、誰もができる技ではない。

このペプシの入り口ページだけではなく、どのページも基本的に〈動く〉ページとなっているが、そうしたページに共通して感ずる反応の遅さはない。これまでだと、たとえば、こちらは単にスタッフの文字データがほしくてアクセスしているのに、その前の各種の仕掛け画像等を呼び出す時間ばかりかかってイライラすることが常だが、オフィシャル・ページを含めて、そのようなことはない。どんな手段を使っているのか、筆者の知識では推し量ることはできないが、何しろ速い。オールCG映画の製作関係者ともなれば、WWW上での、そんな表現も、

http://www.antz.com

しごく簡単なのであろう。

オフィシャル・ページも、全体の作り、含む情報の質や量はペプシと似たり寄ったりだが、目を引くのは Contact Uz の文字。クリックするとPDIサイトに移り、求人情報のページとなる。実用一辺倒のページであり余分な仕掛けはない。オフィシャル・ページから見るとフレームの中で展開されるので、求人情報を知りたい人は、PDI側のそれもテクストオンリーでアクセス（Employment Opportunities）した方が、手っ取り早いし、見やすい。

求人をしている職種は、キャラクター・アニメータ、エフェクト・アニメータから、プロダクション・スーパーバイザにシステム・プログラマやシステム管理者と、CG作り全般に及んでいるが、そのおのおのに具体的な要求が示されている。コンピュータの操作とは直接関係ないので、一般的に解りやすいということで、ドキュメント類のテクニカル・ライターの場合を例にあげると、「2年から4年のテクニカル・ライター歴があること」「2D、3Dグラフィクスの実務的知識があること」「アニメーションや映画製作の経験があること」「UNIXに詳しいこと」等々である。

FAQ（よくある質問）のページもあるので、アメリカで働いてみたいと思っている人には必見である。だからといって、誰でも応募できるわけではなく、テクニカル・ライターは履歴書をメールで送るだけでよいが、他の職種を希望する人は、履歴書プラス自作のサンプル映像、またはアートワークのサンプルの送付を要求される。

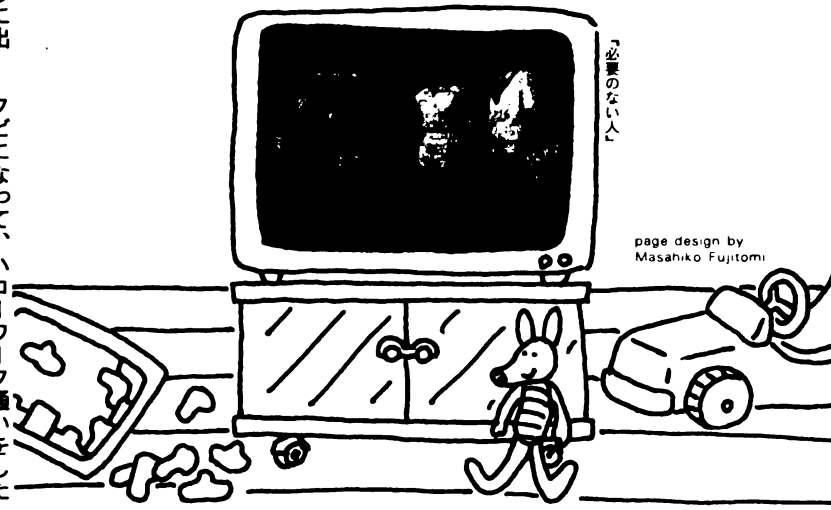
そのサンプル映像（デモ・リール）についてのガイドラインも示されているが、その中に「あなたのベストの仕事を1、2分にまとめたものを」とある。「なにしろ、PDIでは、毎週何千というリールを見なくてはならないから」ともある。競争は激しい。

Digitized by Google

テレビ・トラベラー

ぼくらのTVカルチャー史　樋口尚文

㊹ドラマも人も自分をさがして



このところ、しめしあわせたように出向やリストラを素材にしたドラマが目白押しだ。TBS『なにさまっー』では岸谷五朗扮するスポーツ採用された食品会社の社員が、不向きなイタリアン・レストラン経営の辞令を受け取るところから始まり、フジ『ソムリエ』では武田鉄矢扮する営業畑ひとすじの商社マンがこれまたフレンチ・レストランの支配人に異動になる。変わったところでは、フジ『殴る女』の和久井映見は広告代理店をクビになって、ハローワーク通いをしたあげくボクシングジムのトレーナーにたどりつくのだった。これほどモチーフが類似してしまうというのは、普通なら企画の芸のなさを感じさせてしまうところだが、これらのドラマがあながち悪い出来ではないのはなぜだろう。

これはどうも、バブル期にどこか浮世ばなれしたトレンディー・ドラマがはやったのとは様子が違うようである。現在の深刻な不景気は、いままでにない切実さで視聴者に自分自身を、家庭を、仕事を見直させる契機となっているようであり、ドラマの送り手もさすがになまなかな態度でリストラや出向を扱っては深刻さを抱える視聴者に食い込めないと感じているのかもしれない。

したがって、『ソムリエ』にも『殴る女』にも、ただ企画の現在性だけにとどまらない、生き方をめぐる問いかけの真摯さがある。とりわけ『ソムリエ』は、リストラとワインブームを足した安易な企画かと油断させながら、なかなかどうしてこういうご時世ゆえのやさしさ、なごみの大切さをワインに絡めて語るしゃれたストーリーが、稲垣吾郎のウィットあるキャラクターともども正直言って予想をうれしく裏切る出来栄えに結びついている。レストランを舞台にしたシチュエーション・ドラマといえば『王様のレストラン』という越えづらい傑作があるので、見る側の評価も手厳しいジャンルだと思うのだが、『ソムリエ』はかなり健闘しているのではなかろうか。

このほか、こういうリストラから発した題材といえば、内館牧子のNHK『必要のない人』にふれないわけにはいかないだろう。これは文字通り、仕事の第一線から突然用済みとして不本意にはずされてしまった50歳も目前のサラリーマンとその家族をめぐる物語だ。一流新聞社政治部のデスクというやりがいもプライドもみなぎる役職から、いきなり子会社のカルチャーセンターに出向になってしまう大野彰（風間杜夫）。不意の左遷にとまどいつつ、そのプライドから妻・美紀（高橋恵子）がとめるのも聞かずに辞表を叩きつけた大野だが、いざ肩書を捨てるとそれほど世間は彼を必要としていないことに気づかされる。ついこの前まで大物政治家と懇意にしてもらって政界入りまで勧められた男が、気が遠くなるほどうらかなカルチャーセンターに追いやられて動転するさまを、内館は共感の持てるきめこまかさで描く。このドラマの引きつけるところは、そんな悲劇の人である大野が空元気で価値観を転換して現実を受け入れようとするも、ことごとく身についたプライドに邪魔されてうまくいかない点である。職を辞したのも誇り高さゆえのことだから、せっかく見つけたライターの仕事もこれは自分の器にふさわしくないと突っぱねてしまう。この見えっ張りゆえに報われない大野は、かつての部下・宮本愛（南野陽子）に慕われると、自信喪失から一転、けっこういい気になってしまう。かつて内館の傑作『都合のいい女』でも好演していた風間杜夫は、とぼけたモノローグを含めて、こうした「しょうがない人」の雰囲気を巧みに出している。さらに内館は、大野の伯母・田村かほる（森光子）が経営する銀座の老舗そば屋の挿話をもう一本の軸に据え、年齢も辞令も関係なく生涯を祭りのように過ごすいきいきとした彼女の姿を対置して奥行きを出す。本作にせよ大石静『ふたつの愛』にせよ、NHKの『水曜ドラマ』枠は大人が落ち着いて見られる貴重なドラマを連打して期待させられる。

Digitized by Google

群像劇のように描いてみたり、自由奔放に見えるその語り口は、戯作者の名人芸を見ているようだ。それにも増して素晴らしいのは紺碧の青空を中心に艶やかな色彩を設計した岡崎宏三の映像だ。群青の空に翻る旗のおかしさといったら！

グルメ必見なのが「喜劇・とんかつ一代」。博識の川島ダンナらしく、とんかつの歴史や蘊蓄が随所に溢れ、その知識たるやにわかグルメが土下座するほどだ。これ一本見れば、ぴあグルメもいらない!?（ウソ）。森繁久彌が歌う主題歌なんて「とんかつの脂がついた接吻をしようよ」という、ものすごい歌詞で、アルゴ・ピクチャーズの細谷隆広の愛唱歌となっており、磯田“マニアック”勉はレコードまで持っているほど、一部熱狂的ファンの間では有名な曲。すごいよ～。

東宝時代の川島作品は、松竹、日活時代の失敗作のように、やる気がないんじゃないかと思えるほどの致命的な破綻がない点が、欲をいえばモノ足らないといえるだろうか。それだから合間に大映へ出向いて撮った「女は二度生まれる」「雁の寺」「しとやかな獣」といった３本の奇矯に歪んだ傑作に埋もれてあまり語られなかったに違いない。

しかし、改めて見てみれば、川島雄三らしさに溢れた冴えと遊び心に気がつくはずだ。たとえば「特急にっぽん」ではヒッチコックばりに走る列車の窓からカメラが擦り抜けて、そのまま別の車両の窓から再び列車内に戻ってくるというアクロバットまがいのカメラワークが見られるし（それがあんまり意味のないところがまた川島らしい）、「喜劇・とんかつ一代」では突拍子もないカメラアングルの連続で観客を驚かせたりする。「箱根山」では、川島がこだわりを見せた画面外の解説者の声が変則的使用で物語を導いて、唖然とさせられるし、「縞の背広の親分衆」には精力剤、「喜劇・とんかつ一代」にはクロレラ食品が登場して、新しもの好き、クスリ好きの川島の一面を裏付けてくれる。いやはや。

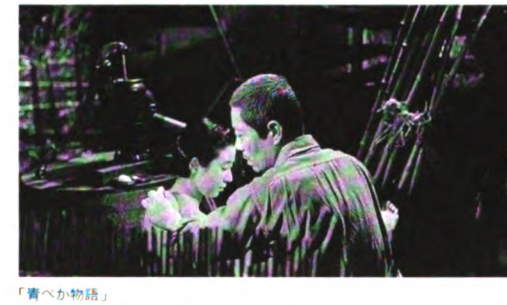
川島雄三作品の24時間連続放送にぴったりの句を川島ダンナ自身が詠んでいる。こんな句である。

「稀人の来て長き夜の脹はへる」（川島雄三）

長い夜を没後35周年を迎える川島雄三の映画三昧で過ごすのもオツではないだろうか。

「人も歩けば」

「接吻泥棒」



「青べか物語」

「喜劇・とんかつ一代」

川島雄三　二十四時間まるごと特集は12月23日スカイパーフェクTV！　日本映画専門チャンネル（Ch707）にて放送予定。作品は、「真実一路」(54)、「青べか物語」(62)、「特急にっぽん」(61)、「縞の背広の親分衆」(61)、「夜の流れ」(60)、「接吻泥棒」(60)、「喜劇・とんかつ一代」(63)、「赤坂の姉妹　夜の肌」(60)、「箱根山」(62)、「花影」(61)、「人も歩けば」(60) の11作品（午前５時よりの放映順）。

Digitized by Google

MOVIES SPECIAL

24時間まるごと川島雄三大特集

ふうむ、やっぱりそうなるか……と思ってしまったのは、一九八七年に下北沢の本多劇場で演劇舎蟷螂の芝居『銀幕迷宮　キネマラビリンス』(小松杏里作・演出)を見たときの感想である。奇才として知られる映画監督川島雄三を主人公にして、彼の撮った映画が彼の生い立ちや実生活と錯綜し、虚実入り乱れるとかいう内容のチラシに釣られ、これは川島ファンとしては見ないわけにはいかんだろうと観劇したのだが、芝居を彩る道具立ては、川島が生まれ育ち、彼が生涯愛憎を抱き続けた故郷青森の土着的風土であり、筋肉が萎縮する奇病であり、シャイ・狷介・お洒落・博識・酒乱といった川島雄三を慕う人々が異口同音に口にする伝説的な映画人の姿だったのである。つまり、川島の直弟子である今村昌平が編纂した名著『サヨナラだけが人生だ』や藤本義一の小説『生きいそぎの記』で描かれた川島雄三像から一歩も出ていないのだ。

これではイカンでしょ、と思いつつ、しかしながら川島雄三といえば誰でもが反射的に代表作は「幕末太陽傳」と答えるが、そのほかの作品はあまり知られていないのではないのか、いやほかにも川島には大映で撮った「雁の寺」「しとやかな獣」という傑作もあるけれど、案外川島雄三という名前ほどその作品の全貌は語られていないのではないのか、と思い当たった。

もちろん熱心な川島ファンの集まりである〈KAWASHIMA CLUB〉が、毎年のように資金を募って上映プリントのない作品の16ミリニュープリントを焼いているし(感謝！)、大井武蔵野館でも繰り返し特集上映が行われてはいる(感謝！)。にもかかわらず、まるで残存するフィルムが3本しかない山中貞雄のように、川島雄三について数本の作品と伝説に幻惑された人物像だけしか語られないのはどういうわけなのだろうか。

まあ、無理もない。なにせ川島の映画は、キネマ旬報刊一九七六年版『日本映画監督全集』の川島雄三の項を執筆した白井佳夫氏のいうように「軽妙な都会的風俗喜劇から、奇矯な戯作者意識の濃厚な重喜劇、あるいは抒情的なメロドラマから重厚な陰影に富んだ人間劇まで、複雑多岐にわたって、一筋縄では集約し難い」「商売用の歌謡メロドラマや手のつけられぬプログラム・ピクチャーがあるかと思えば、ベスト・テン級のユニークな秀作も数多い」のだから。そしてそれ以上にやっかいなのは、作品以上に彼にまつわる伝説が魅力的だということだ。そこにこそ川島雄三の悲劇がある。

そこでだ。来る12月23日、スカイパーフェクTV！　の日本映画専門チャンネルで川島雄三の映画が24時間にわたり、一挙11本連続放映されるのである。それもいわゆる公式的な代表作は1本も含まれていない、ホンマにだいじょうぶかいなというプログラム。川島は松竹、日活、東宝と高給に釣られて各社を渡り歩いたが、今回放映されるのは文芸作「真実一路」が松竹、ほかの10本はすべて東宝(もしくは東宝傘下の東京映画)作品というラインナップ。そのうち9本はビデオ未発表というから、これは嬉しい悲鳴を上げるべきか、はたまた暴挙と呼ぶべきか。すごいことでっせ、これは。

とりわけ東宝時代の作品は、川島雄三の新たな魅力を発見する絶好の作品群がズラリと並んでいる。蛇行するストーリーがどう結末をつけるか何度見ても最後まで予測できない「人も歩けば」、石原慎太郎が最高におかしい「接吻泥棒」、しっとりとした情感漂う「赤坂の姉妹より・夜の肌」、徹底したアチャラカコメディ「縞の背広の親分衆」、瀬川昌治の“列車シリーズ”と比較してみるのもおもしろい「特急にっぽん」、獅子文六原作の映画化、というよりも「ロミオとジュリエット」を茶化した「箱根山」など、どれもウェルメイドな作りに川島の職人として力量を見せつけてくれる作品ばかり。

その中でも特にお薦めしたいのが「夜の流れ」「花影」「青べか物語」「喜劇・とんかつ一代」の4本。「夜の流れ」は成瀬巳喜男との共同監督作で、撮影・照明・美術などスタッフ編成もダブルシステムで撮影された画期的作品。成瀬の発言によると、川島が撮ったと思われる部分は成瀬自身、成瀬が撮ったと思われる部分は川島が撮った、ということだが、どうやらそれは成瀬の韜晦らしい。見ればなんとなく両者の分担が分かるはず。

「花影」は公開当時話題にもならなかった作品だが、池内淳子の“よろめき女優”のイメージに先駆けた記念すべき映画。自死を決意したヒロインが過去の男たちとの恋愛を回想する物語がフラッシュバックする構成で、全編に濃密な死の翳が漂い、澄明な印象さえもたらす。中平康の「美徳のよろめき」と並んで、通俗的な題材にテクニックが光る、評価されるべき“よろめきドラマ”の一作だといってもよい。

そして「青べか物語」こそ川島らしさが最も出た作品だといってもよいだろう。エピソードの連なりをどう処理するか。物語を入れ子にして構成したり、

Digitized by Google

DISC REVIEW

サントラ・ハウス

賀来 卓人

スモール・ソルジャーズ

♫ジェリー・ゴールドスミス
◎カルチュア・パブリッシャーズ
11月26日発売／定価2520円
CPC8-1033

ジェリー・ゴールドスミスがジョー・ダンテと5年ぶりにタッグを組んだ。スピルバーグの導きにより「トワイライト・ゾーン／超次元の体験」で出会って15年。年月だけを追えば、あのフランクリン・J・シャフナーに次ぐスケールの関係となる奇人監督との深い友情は、少々のブランクでは揺るがない。最近TVでハミー・マンとの共同作業が続いたダンテとて、よもやベテランとの麗しきキャリアをドブに捨てるようなことはしまい。

よくよく考えれば不思議な信頼に結ばれたそんな両者の「マチネー／土曜の午後はキッスで始まる」に続く新作は、オモチャの兵隊が郊外の裏庭で暴れるミニミニ・アクション。相変わらずユニークな発想でぶっちぎるダンテに対して、御大も楽しそうに仕事をこなしている。

まず耳に残るのは、兵隊たちの実直な使命感をモチーフにしたかのような軍隊調マーチだろう。ふくらみ豊かなホルンと流麗な弦を基調にしつつ、シンセサイザーとスネアドラムをリズム部に配したそれは、木管の丸みもあるためか、澄んだ高揚感を醸す。音がどこまでも厳しくならないのは、やはり思春期ドラマも内包する物語の性格の所以だろう。主人公のささやかな想いを代弁する弦、木管、電子楽器の旋律は実に耳に優しい。加えて、善玉フィギュアの憧れを示すファンタジーの温もりも音色配分への影響も大きいはずだ。やがて始まる決戦のクライマックスが躍動感に満ちる一方で深刻な血腥(ちなまぐ)さを伴わないのは、ぬるま湯映像の失敗でも音楽設定の甘さによるものでもない。ブラックな趣向と明朗な精神性の発現であり、それこそはダンテ&ゴールドスミスの真骨頂ではないか。

音楽的な仕掛けという意味では、やはり南北戦争期の民謡《ジョニーが凱旋するとき》が節々に挿入される点が興味深い。古くは「騎兵隊」「博士の異常な愛情」に、最近では「ダイ・ハード3」に使用されてきた名曲だが、作品の性格を思えばジャッキー・チェンの「プロジェクトA」の主題歌に意識は近いか。戦いに向けての忠誠心をどこかコミカルにまとめていて悪くない。さしずめ「マチネー」における《夏の日の恋》みたいなものだろう。ここにもダンテとゴールドスミスの協調性が花開いている。

人によっては「腐れ縁」との評も顔を出す仲よしコンビの不思議は、実のところ、そのミステリーとユーモア自体が既に作品の肥やしとなっているかのようで面白い。余人の追随の及ぶところなく友情が続くことを祈って、必聴。

スモール・ソルジャーズ

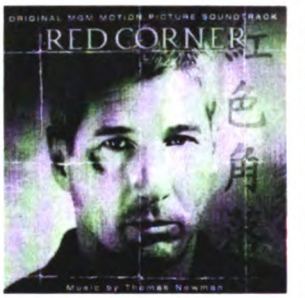
♫ジェームズ・ホーナー
◎ソニー・クラシカル
8月21日発売／定価2520円
SRCS-8711

公開順でいけば、今夏の「ディープ・インパクト」に続き、またもスピルバーグからの信頼を浴びた形のホーナーである。もっとも、こちらは彗星衝突映画を挟んでの都合5か月に亘る大掛かりな録音となった労作。確かにそれだけの時間をかけただけの充実が見てとれる。

メロディアスな起伏に富んだ弦を取り混ぜながら、伸びやかな金管が心地よく絡む。例によってスッと耳に馴染むバランスの良い管弦の配置に感心するが、やはり今回は音色の面白さが特に耳をひく。スパニッシュ・ギター、フラメンコ・タップを取り込んでのそれは、無論スペイン領カリフォルニアという舞台背景を考慮したものだろう。さらに、それが音色的興味や地域色の捻出という目的以上に、最近の作曲者の仕事にない軽快な律動感を同時に生んでいるスリルはどうか。緊張が高まると即座にブヒョォと鳴る尺八のワンパターン挿入にも、目をつむってもいいかと思わせる粋な配慮だ。問題はそれが今後も続くかどうかだろう。

Digitized by Google

北京のふたり



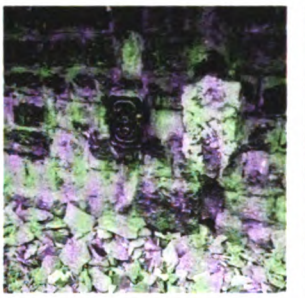
♬トーマス・ニューマン
◎キングレコード
8月21日発売／定価2500円
KICP-659

ジョン・アブネット×トーマス・ニューマンの4度目の顔合わせである。思えばアブネットがプロデューサー専業だった時代からの長き付き合いであり、それが双方のキャリアの良き発展につながっている事態は微笑ましいかぎりだ。

サスペンス味の濃い共産圏法廷劇となった今回は、これまで感情の機微をつづるドラマに専念してきた両者にとって新鮮な題材だったろう。どこかバルトーク調の鳴らしぶりもある種々の打楽器の挿入がまず目を引く。トーマスらしいアンビエント・ミュージックをベースとしたそれは、ドラマに適度な緊張感を与えて悪くない。胡弓を始めとする中国の地域色を醸す楽器群も随所に混じり、概してバランスのいい仕上がりといえる。

とはいえ、やはり胸を打つのは主人公と女弁護士の交感を彩るリリカルな調べだろう。弦を主軸にした伸びやかな慕情の音であり、中国的な音階によるエキゾチシズムも手伝って、熱い情感を引き出した。コンビの良き関係をここに見る。

空想からの映像連鎖



♬周防義和
◎kick up
発売中／定価2500円
BMCD-9802

最近ではTVドラマ『奇跡の人』でいい味を出している周防義和のソロ・アルバム。BREW—BREW、COMAという最近の2ユニットを経ての初の単独盤であるが、蓋を開けてみればアルバム用のオリジナル曲はわずかに5曲。ほかは映画、舞台、CMなどのために作られた楽曲が占める、映像媒体に向けた作品集との趣が強く、その意味では表題から喚起されるイメージから遠くない。

リズム・ポップと形容すべき軽妙なサウンドの心地よさは目的、ジャンルを問わずここでも健在だが、とりあえず映画ファンにはサントラ盤未発売に終わった「恋と花火と観覧車」の使用曲4曲が日の目を見ている点が注目だろう。主人公とその想い人のロマンスを彩るピアノのロマンティックな響き、律動感あふれる弦音楽の作曲者らしい柔らかさ。いずれも耳当たりさわやかである。ジャズの名曲《オータム・ノクターン》をアコーディオンに託したナンバーも和やかに迫る。楽しくも味わい深い仕上がりだ。

茂みの中の欲望

♬トラフィック、
スペンサー・デイヴィス・グループ
◎ビデオアーツ・ミュージック
5月27日発売／定価2548円
VACK-3015

クライヴ・ドナー監督、バリー・エヴァンス主演の68年作品のサントラ盤。スティーヴ・ウィンウッド率いるトラフィックとスペンサー・デイヴィス・グループによるポップ・ナンバーが、青春喜劇の明朗と60年代感覚をよみがえさせる。

紳士泥棒／大ゴールデン作戦

♬バート・バカラック
◎ビデオアーツ・ミュージック
5月27日発売／定価2548円
VACK-3016

バート・バカラックがヴィットリオ・デ・シーカと組んで66年に発表したカルト・コメディがついにディスク化。ピーター・セラーズがヴォーカルに参加したタイトル・ソングを筆頭に、軽妙かつ国際情緒あふれたナンバーが並ぶ。

TOPICS

神奈川県フィルハーモニー管弦楽団演奏によるジェリー・ゴールドスミスの初来日コンサートは12月11日、横浜みなとみらいホールにて予定通り開催されるが、好評につき、その追加東京公演が決定した。詳細は右記の通り。

●

「ジェリー・ゴールドスミス／ハリウッド映画音楽の夕べ」
指揮／ジェリー・ゴールドスミス
演奏／神奈川フィルハーモニー管弦楽団

●

日時／12月16日（水）午後7時開演
場所／五反田ゆうぽうと簡易保険ホール
演奏曲／「猿の惑星」「パピヨン」「エイリアン」「チャイナタウン」「L.A.コンフィデンシャル」「ムーラン」など
料金／S席7000円、A席6000円、B席5000円、プレミアシート（限定）10000円
※プレミアシートは来日記念グッズ付き
問合わせ／神奈川フィル☎045（331）6699、ヨシノ音楽事務所☎03（3934）9857

●

演目は横浜公演と変わらない。しかし、ハリウッドきっての名手の指揮ぶりがナマで見られる機会も滅多にない。既に横浜公演の入場券を手にした人もそうでない人も、是が非でも行かねばならぬ一大イベントであろう。友人、縁者を募っての多数来場を期待する。

Digitized by Google

VIDEO, LD&DVD GARDEN

リンダ・リー来日！ ブルース・リーの魂よ永遠に

「ディレクターズカット『燃えよドラゴン特別版』」コレクターズボックス発売

金澤誠

73年7月20日、自らの名を世界に知らしめることになる「燃えよドラゴン」の公開前に、32歳の若さで急逝したブルース・リー。映画界に〝生身〟のクンフー・アクションの素晴らしさを広めた俳優であり、一方では独自の哲学に基づく〝ジークンドー〟を創り上げた武道家だったリーが死を遂げてから25周年にあたる今年。今だに世界のファンを魅了してやまないあの「燃えよドラゴン」が、ディレクターズカット特別版として帰ってきた。この特別版には、公開時にはカットされていた、冒頭のブルースと高僧が会話をする、彼の武道哲学が盛り込まれたシーンや、その会話と関連するラストのハンとの対決シーンが3分ほど追加されている。ブルースの未亡人、リンダ・リー・キャドウェルの言葉を借りれば、これこそ〝ブルースが生前に試写室で観たものと同じ「燃えよドラゴン」〟なのだ。今回、この特別版の発売と、東京国際ファンタスティック映画祭での特別上映を記念して来日した、リンダ・リーに、ブルース・リーの思い出を伺った。

リンダ・リー・キャドウェル／1964年にブルース・リーと結婚。後に映画撮影中に事故死を遂げたブランドンとシャノンの一男一女をもうける。現在ブルース・キャドウェルと再婚、アイダホ暮らし。

彼女は、生前ブルースが「燃えよドラゴン」の試写を観た時、今回追加された哲学的な会話のシーンを彼は特に気に入っていたと語る。「ブルースは、すごく哲学的なことが好きな人でした。ですからオープニングで高僧と話しているシーンや、少年に武道を教えて月を指さすシーン、ああいうところが気に入っていたようです。あれらのシーンには、ブルース本人の意向が入っていると思いますね」

没後25周年を経て「燃えよドラゴン」が、こういう形で甦ったことについて、彼女は特別な思いがあるようだ。

「映画が初公開された時、皆さんはブルースを俳優というふうにしか見ていなかったと思うんです。それが25年かかって、やっと彼が真の武道家でもあったことが解っていただけたと感じます。この間に、お客さんが映

「燃えよドラゴン」

Digitized by Google

2001年 ソフトの旅

吉川明利

ビデオ業界にも貢献 ありがとう、淀川さん

98年という年は映画界及びビデオ業界にとって、本当に悲しいものになってしまった。黒澤明監督の後を追うようにして、映画評論家・淀川長治さんが亡くなられた。友人黒澤監督の死が本当にこたえたのであろうか、まさか今年中に〝私は明日死にますからね〟が現実になるとは夢にも思わなかった。

多くの日本人は淀川さんの顔を知っているだろう。しかし、その本来の職業である映画評論文は読んだことがない人が大半なのだ。それだけ淀川さんは活字というメディアで映画を大衆に知らせるのではなく、自ら映る映像メディアという媒体を主にして映画を語ってくれていた。

淀川さんが映画業界に残された功績は本当に語り尽くせないであろうが、それはビデオ業界においても同じなのである。ひとりでも多くの人に名作を見てほしい。しかしそれらは映画館上映がもはや不可能な作品群、しからばビデオでどんどん紹介してしまおう。そんな機会さえ与えてくれれば進んで解説を引き受けますよ、という情熱の持ち主であった。そんな淀川さんだったからビデオメーカーのコンベンションでの講演依頼はよくあったようだ。この連載の第一回目に書いた「ラ・マン　愛人」発売記念の講演は見事に淀川さんらしかった。作品と監督（J＝J・アノー）についてすこし喋った後は残り時間すべてがグリフィスの「散りゆく花」（この2作品の関連性にキネ旬読者だったらニッコリでしょ）だった。終了後にメーカー担当者が「あの話いったい何の映画について？」と首をかしげる姿は大いに笑わせてくれた。

淀川さんの大好きなサミュエル・ゴールドウィン作品発売記念での講演は素晴らしかった。熱い語りでビデオで「嵐ケ丘」や「打撃王」が見られる喜びを語ってくれた。残念ながら発売を手がけたのが、気まぐれ商社と映画に無知なレコード会社だったので現在ではアッサリと廃盤。では淀川さんの熱い語りは何だったのか、という思いが強い。再発を目ざすなりしてビデオ業界は淀川さんの業績を讃えるべきではないだろうか。

画をキッカケにして、ブルースのことをもっと知りたい、研究したいと思ってくれたことが、今こうして『燃えよドラゴン』が再々度陽の目を見たことに繋がったのでしょう」

私生活でのブルース・リーとは、どういう人物だったのだろうか？

「私生活も、皆さんが映画でご覧になったブルースとまったく同じです。彼は性質的にも肉体的にも〝動く〟ということがすごく好きな人でした。また、彼はよく、〝常にハードルを乗り越えることが大事〟だということ、〝自分というものをなくして、常に自由でピュアな自分を見つけようとすることが大事〟だと言っていました。ハードルを乗り越えるというのは、流れに逆らって進むのではなく、自分も流れと共に生きることだ、とも言っていました。わたしもその言葉を胸に刻んで、それに従うように生きています」

今回のディレクターズカット特別版には、トロント国際映画祭で〝ベスト・ドキュメンタリー賞〟に輝いた、ジョン・リトル監督による、ブルース・リー本人のインタビューシーンで構成されたドキュメンタリー（約19分）が、特典映像として付いている。この作品について、彼女はこう語る。

「ワーナー・ブラザースの方から、今回ディレクターズカット特別版を出すにあたって、何か映画以外の作品を付け加えられないかという話があったんです。そこで、ブルースの事に関しては、私より詳しいジョン・リトルの名前があがりました。彼は、ブルースが生前にTVなどでうけたインタビューのビデオやフィルムを世界中で探しました。香港にもそういうものがあったはずなのですが、残念ながら見つかりませんでした。今回の作品で大部を占めるインタビュー・ビデオは、カナダ人のピエール・バートンが、71年12月9日にブルースにインタビューしたものです。このビデオは長い間行方がわからなかったのですが、ジョン・リトルの努力によって見事な作品に生まれ変わっています。ジョンは、12歳の時に『燃えよドラゴン』を観て以来、ブルースの哲学的な面も含めて熱心に彼のことを研究してきた人です。今彼は、6千枚以上の残されたブルースの資料を研究して、12冊からなる〝ブルース・リー・ライブラリー〟という本を作ろうとしています」

アメリカでの成功を夢見ながら、志のとば口に立ったところでこの世を去ったブルース・リー。その彼がリンダ夫人に語っていた、将来の夢とはどんなものだったのだろう。

「彼は、未来について様々なプランを持っていました。考えていたストーリーや企画も沢山あります。ですから、アメリカに進出していたら俳優だけでなく、監督業にも乗り出したでしょう。また、武道家として格闘技というものが、すてきな文化であるということを、もっとアメリカに広めていったのではないかと思いますね」

ディレクターズカット
燃えよドラゴン《特別版》

73年（公開）●監督／ロバート・ワイズ　製作／フレデリック・ワイントロープ、ポール・ヘラー　主演／ブルース・リー、ジョン・サクソン、ジム・ケリー

●WHVより12月18日リリース
※DVD発売中（5大特典付コレクターズ・ボックス／9800円　単体ビデオ／2980円　DVD／3400円）
※LDはパイオニアLDCより12月22日コレクターズボックス発売予定（税抜／12000円）

Digitized by Google

公開作&未公開作

●丸山尚輝

CASPER MEETS WENDY　キャスパー　マジカルウェンディ

98年（未公開）●監督／ショーン・マクナマラ　出演／ヒラリー・ダフ、ジョージ・ハミルトン、テリー・ガー●フォックス・ホームエンターテインメント（95分）　12月18日リリース

いよいよクリスマス・シーズン。この時期になると大挙リリースされるのが家族で楽しめるファミリー向け映画。そんな中で、今年のイチオシなのがこの作品だ。おなじみお化けのキャスパーが大活躍する「キャスパー　誕生」の続編で、今回は小っちゃな魔女・ウェンディとの交流をほのぼのかつハラハラ感いっぱいに描く内容に仕上がっている。主演はキュートな笑顔が印象的な子役、H・ダフ。この他、悪役・デズモンドに「ゴッドファーザーPART Ⅲ」のG・ハミルトン、魔女3姉妹にテリー・ガー、キャシー・モリアティ、シェリー・デュヴァルらが出演している。

魔法使いランキングのナンバー1のデズモンドは、自分の地位を脅かす魔女・ウェンディの存在が気にくわない。そこで、ふたりの部下を使ってウェンディ抹殺計画を企むのだった。一方、そんなデズモンドの攻撃から身を隠す為、ウェンディと彼女の3人姉妹のおばさん魔女たちは、あるリゾート地へ出かける。ところが、彼女たちは休暇を楽しみにやってきたキャスパーと3人のおじさんお化けたちと遭遇。ウェンディとキャスパーはすぐに友達になるのだが、大人たちはそうはいかない。ふたりはお互いのおばさん&おじさんたちを仲良くさせようとするのだが、そこへデズモンドが現れて…。

SURVIVAL ON THE MOUNTAIN　アバランチ2　雪崩

97年（TM）●監督／ジョン・パターソン　出演／デニス・ポウトシカリス、マーキー・ポスト、ヒロ・カナガワ●アドバビクチャーズ（90分）　12月4日リリース

今年も様々なディザスター・ムービーが映画ファンをドキドキハラハラさせたが、その締めくくりとして雪山を舞台にしたサヴァイヴァルものが登場する。それほど大がかりな作品ではないが、人間の生命力と絆の強さを描いた内容は胸を熱くさせる。そして、何よりこの作品に注目して欲しいのは、製作総指揮にコッポラとビリー・クリスタルが名前を連ねていること。巨匠と名優が手がけた作品、映画ファンなら見逃せない。

ジョーとエイミーの夫婦は、愛する子供たちを両親に預けてヒマラヤ登山を決行した。ところが、そんな彼らを突然の台風とそれに伴う猛吹雪が襲う。方向を見失い、極寒のヒマラヤをさまようことになってしまうジョー夫妻とクルーたち。彼らに生き残る手段は残されているのか…!?

THE UNINVITED　白い眼

97年（TM）●監督／ノーマン・ストーン　出演／ダグラス・ホッジ、レスリー・グランドハム●エスピーオー（101+100分）　12月4日リリース

今年、最も元気だった国のひとつ、イギリスが生んだ傑作SFテレビ・シリーズが、前後編併せて豪華にリリースされる。イギリスのテレビ史上、最高の視聴率を稼ぎ出したというだけあって、全編目を離せない緊迫感に包まれている。

ある夜、写真家のスティーヴは車の炎上事故を目撃した。ところが翌日、車を運転していた国立原子力発電所の所長・ジェイムズが普段と変わらぬ姿でスティーヴの前に現れたのである。このことに疑念を抱いた彼は、離婚した妻で新聞記者のジョアンナの協力を得て調査を開始。これまでにも死んだ筈の人間が生きているという奇妙な事件が起こっていたことを知る。そして、その人物たちの過去を探るうち、彼らは9年前に水没したある街にたどり着くのであった。

ビデオ新譜

※＝廉価版、（R）＝レンタル

●IVC

※8「カラマーゾフの兄弟」※「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」※

●ケイツーエンタテインメント

※9「ウインター・ゲスト」（R）

●CICビクタービデオ

※8「デジタル・ニューマスター版／5つの銅貨（五つの銅貨）」※「デジタル・ニューマスター版／グレン・ミラー物語」※「ディープ・インパクト」「デジタル・ニューマスター版／ベニイ・グッドマン物語」※「ボクサー」「デジタル・ニューマスター版／ホワイト・クリスマス」※

●ジュネス企画

※10「サラトガ」※「プラチナ・ブロンド」※

●小学館

※1「ピカチュウのなつやすみ（併録作品あり）」

●シンエイ動画

※8「映画クレヨンしんちゃん／電撃！ブタのヒヅメ大作戦」

●ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

※2「メン・イン・ブラック」※

●大映

※1「三兄弟の決闘」※「桜田門」※「忠臣蔵（渡辺邦男監督版）」※「晴小袖」※「風来物語　任侠篇」※「風来物語　あばれ飛車」※

●東映ビデオ

※1「いろは若衆／花駕籠峠」（R）「紅梅行燈／ふり袖天狗」※「極道の妻たち／危険な賭け」※「極道の妻たち／決着」※「極道の墓場　フリージア（フリージア極道の墓場）」（R）「Dr. スランプ　アラレちゃん／んちゃ!!わくわくハートの夏休み」※「ドラゴンボ

Digitized by Google

望月美寿の

アジアのピンキリ

ーそのまたキリー

見逃すわけにはいかない〝もう一つの始皇帝〟劇

「異聞　始皇帝謀殺」は「始皇帝暗殺」と並行して企画・製作された〝もうひとつの始皇帝もの〟である。ただし完成は「始皇帝暗殺」より2年早い。脚本は「さらば、わが愛／覇王別姫」のルー・ウェイ。監督は「麻花売りの女」がガツンと面白かったチョウ・シャオウェン。主演は、「太陽の少年」のチャン・ウェン。そう、これは「始皇帝暗殺」撮入直前に降板した彼が、33歳とは思えぬ貫禄で始皇帝を演じた大作なのである。

紀元前3世紀。秦王には燕の国に天才音楽家カオ・ジアンリという乳兄弟がいた。天下統一の暁にはジアンリに頌歌（国歌）を作曲させることが王の宿願だった。だが、燕征服の際、手違いから額に奴隷の焼印を押されてしまったジアンリは、服従よりも死を望む。それを思いとどまらせたのは、美しくも気性の激しい秦王の長女ユエヤン（「人生は琴の弦のように」のシュイ・チン）だった。二人は恋におち、脚のわるいユエヤンがジアンリに処女を捧げると奇跡が起こって脚が治る。裏切りを知った王は激怒するが、ジアンリを処刑できぬままさらに巨大な野望へと突き進んでいく――。

残忍にして孤独な権力者と、その影となることを強いられた悲劇の音楽家。二人の葛藤の狭間で愛にめざめていく姫。その背景で無慈悲に流されていくおびただしい人民の血、血、血。大河が真っ赤に染まるほどに……。それにしても、と考えてみる。歴史の波に翻弄される男ふたりの愛憎の凄まじさは尋常ではない。もしもジアンリ役をレスリー・チャン系の美形が演じていたらそれこそ「覇王別姫」のごとき別の映画になっていただろう。だからあえて長渕剛似のクー・ヨウ（「生きる」でカンヌの男優賞受賞）なのね。パチもんと思って見逃すのはもったいない一大歴史絵巻である。

異聞　始皇帝謀殺

異聞　始皇帝謀殺　秦王／The Emperor's Shadow　96年●製作総指揮／ジミー・タン・シュイ・チン　監督／チョウ・シャオウェン　脚本／ルー・ウェイ　撮影／リュ・シン・ウェン　出演／シュイ・チン、チャン・ヨウ、ジャンヘ・ウェン　●日本イーライルド映画（131分）12月18日

VIRTUAL OBSESSION　バーチャル・ウォーズ3

98年（TM）●監督／ミック・ギャリス　出演／ピーター・ギャラガー、ミミ・ロジャース、ジェイク・ロイド　●エスピーオー（136分）12月19日リリース

コンピュータが作り出す、感情を持たず学習能力に長け、永遠の命を獲得するパーフェクトな人間創造、「脱生物学的人間」の研究に没頭する科学者・ジョーの前に、ある日、彼の研究の信奉者である若くて美しい女性・ジュリエットが現れた。彼女はアシスタントとしてジョーの研究を手伝うようになるが、実は脳に動脈瘤を抱えて余命幾ばくもない体であったのだ。そんなある日、ジュリエットは自分の脳をコンピュータにダウンロードして、永遠の命を得ようとするが…。

人気シリーズ「バーチャル・ウォーズ」の名前を借りての登場となる作品だが、そんなことしなくても充分に楽しめること保証付きのSFドラマ。「ラストサマー」に出演していた新星、ブリジット・ウィルソンがジュリエット役を熱演。

BUTTERFLY KISS　バタフライ・キス

95年（公開）●監督／マイケル・ウィンターボトム　出演／アマンダ・プラマー、サスキア・リーヴス　●シネカノン（85分）12月18日リリース

快進撃を続けるイギリス映画界からまたひとつ、注目すべき作品が誕生した。

北イングランドのランカシャー州に、ジュディスという名前の女性を探してガソリンスタンドを訪ね歩くユニースの姿があった。彼女は、自分を「神様から忘れられた」存在であると思い込み、次々に殺人を犯していく。その行為は、罪深き自分を見つけてというサインでもあった。そんなある日、ユニースはミリアムという女性と出会う。ミリアムはユニースを救おうと、彼女と共に旅に出るのであったが…。

女性ふたりの奇妙な旅の姿が、殺伐とした北国の風景の中に描かれる魂の救済の物語。主役のユニースを演じるA・プラマーの圧倒的な存在感が印象的な作品だ。充実のサントラも必聴の1本。

ールZ／危険なふたり！　超戦士はねむれない」※「ヒューゴ・プール」（R）「ブライド　運命の瞬間」（R）「ふり袖侠艶録」※「ふり袖捕物帖／ちりめん駕篭」※

●日本コロムビア

12/19「怪傑ゾロ／サン・オブ・ゾロ」

●日本ヘラルド映画

12/5「セブン・イヤーズ・イン・チベット」※

12/18「クラッシュ（ディヴィッド・クローネンバーグ監督版）」※「スリーパーズ」※「評決のとき」※

●バップ

12/5「アンパンマンとおかしな仲間」※「それいけ！アンパンマン／てのひらを太陽に」

●バンダイビジュアル

12/18「とつぜん！ネコの国／バニパルウィット」※

●ビームエンタテインメント

12/8「ローレル&ハーディー⑥」※「ローレル&ハーディー⑦」※「ローレル&ハーディー⑧」※「ローレル&ハーディー⑨」※「ローレル&ハーディー⑩」※

●ブエナビスタホームエンターテインメント

12/18「レインメーカー」

●フォックスホームエンターテインメント

12/18「オスカーとルシンダ」（R）

●ポニーキャニオン

12/18「ザ・ブレイク」

●ワーナー・ホーム・ビデオ

12/18「チキ・チキ・バン・バン」（THX）※「沈黙の断崖」※「ファーザーズ・デイ」※「ディレクターズカット／燃えよドラゴン　特別版・コレクターズボックス」（限定版、W）「ディレクターズカット／燃えよドラゴン　特別版」（W）※「ゴダールのリア王」※「リーサル・ウェポン4」（R）※

Digitized by Google

WHEN THE BOUGH BREAKES Ⅱ　犯罪心理捜査官2

98年（未公開）●監督／ハワード・マッケイン　出演／ケリー・マクギリス、ブルース・ダーン
●マイピック＝ポニーキャニオン（100分）　12月18日リリース

すっかり熟女女優としての魅力が開花したK・マクギリス主演によるサイコ・サスペンス。美人犯罪心理捜査官と猟奇殺人犯との因縁の対決が、スリリングでテンポのよいストーリー展開の中に描かれる秀作だ。

テキサスのある街で、キャリア・ウーマンばかりが次々と誘拐、殺害されるという事件が発生。被害者はいずれもドレスを纏い、手に花を持ち、装飾品で彩られ、まるで人形のような格好で遺棄されていた。犯罪心理捜査官＝プロファイラーのマクレアーは、地元の警部・スワガートに依頼され、捜査に加わることに。捜査を進めていくうち、骨董品業者のドゥエインという男が容疑者として捜査線上に浮上するが、彼はマクレアーの忌まわしい過去の出来事に関係のある人物であることが分かり…。

RICHIE RICH'S CHRISTMAS WISH　リッチー・リッチ　夢のマシンをとりもどせ！

98年（未公開）●監督／ジョン・マーロウスキー　出演／デイヴィッド・ギャラガー、レスリー・アン・ウォレン
●ワーナー・ホーム・ビデオ（85分）
12月18日リリース

クリスマス・シーズンを目前に、ファミリー向けの作品をもう一本。マコーレー・カルキン主演でヒットを飛ばした続編をご紹介しましょう。

クリスマスイヴ。お金持ちの家に生まれ心優しく育ったリッチー少年は、孤児院にプレゼントを運ぼうとしていた。ところが、いとこのレジーの意地悪で全てがパーに。すっかり落ち込んだリッチーは、おかかえの発明家が作った夢を叶える機械の前で「自分なんか金持ちに生まれてなんかこなければよかった」と呟いてしまう。すると、なんと彼は〝レジー・リッチ〟の牛耳る世界に放り込まれるのだった…。

「3人のゴースト」などに代表されるクリスマス・ファンタジーに属する、ハートがリッチになるような気持ちのいい作品。

PROVOCATEUR　クライング・スパイ

97年（未公開）●監督／ジム・ドノヴァン　出演／ジェーン・マーチ、リロ・ブランカート、ニック・マンキューソ
●HRSフナイ（104分）
12月4日リリース

秘密工作員として、アメリカ軍の軍事基地へ核兵器の情報を盗み出す任務を授かった少女スパイ、ミヤの活躍を描くサスペンス・アクション。主演は「薔薇の素顔」のJ・マーチ。か細い体をフルに使った彼女の体当たり演技は必見。

TRIAL AND ERROR　Mr.ダマー2½

97年（未公開）●監督／ジョナサン・リン　出演／ジェフ・ダニエルズ、マイケル・リチャーズ
●東宝（98分）
12月4日レンタルのみ

ジム・キャリー主演で大ヒットした作品を彷彿とさせるおばか映画。主演は、「Mr. ダマー」のJ・ダニエルズとTV界の人気コメディアン、M・リチャーズ。ある弁護士の資格を問う裁判で、彼の代わりに俳優が出廷して大騒ぎに…。

HAWK'S VENGEANCE　ザ・シューター

97年（未公開）●監督／マーク・F・ボイザー　出演／ゲイリー・ダニエルズ、ジェーン・ハイトマイヤー
●インタラクティブシネマ（96分）
12月18日リリース

〝臓器移植〟の裏にはびこる巨大闇マーケット壊滅の為に、兄を殺された英国海軍の弟が、ニューヨークの女刑事と挑むアクション。主演は「アベンジャー」のG・ダニエルズと「フル・ブラスト」のJ・ハイトマイヤー。

Ms.SCROOGE　新クリスマス・キャロル

95年（TM）●監督／ジョン・コーティ　出演／シシリー・タイソン、キャサリン・ヘルモンド
●CICビクタービデオ（87分）
12月18日リリース

クリスマスには欠かせないディケンズの名作「クリスマス・キャロル」の主人公を、女性に置き換えて描いた感動作。3人の幽霊が冷酷な金貸し老女の心を解きほぐす。主人公のスクルージ役に、名女優C・タイソン。

LD新譜

（W）＝ワイド、（D）＝デジタル（DD）＝ドルビー・デジタル

●パイオニアLDC
12/25「おさな妻」（W、DD）
12/18「リーサル・ウェポン4」（W、DD）

●バップ
12/5「まことちゃん」

●ビームエンタテインメント
12/18「ベルトルッチの殺し」「マンマ・ローマ」（未、W）

DVD新譜

●EMOTION
12/18「ウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナ（「ウルトラニャン2」を併録）」（W）

●カルチュア・パブリッシャーズ
12/18「KILLER／第一級殺人」（W、DD）「裁かるゝジャンヌ」（DD）「サムシング・ワイルド」（DD）「ジキル博士とハイド氏」（DD）「十誡」（DD）「雀」（DD）「西部戦線異状なし／完全版」（DD）「大地のうた」（DD）「大河のうた」（DD）「大樹のうた」（DD）「男性と女性」（DD）「テス」（DD）「南部の人（炎のサウザナー）」（DD）「羊たちの沈黙」「ペン・ハー（フレッド・ニブロ監督版）」（DD）「ミッション」（DD）「レボリューション／めぐり逢い」（DD）「ローカル・ヒーロー／夢に生きた男」（DD）

●コムストック＝テレビ東京＝ポニーキャニオン
12/18「ドーベルマン」（W、DD）

●日本コロムビア
12/21「美空ひばり／リンゴ園の少女」

●日本ヘラルド映画
12/18「スリーパーズ」（W、DD）「ヒート」（W、DD）

Digitized by Google

オリジナルビデオこだわりチェック

中村勝則

OV界に一石投じられるか!? "NEO CINEMA" 始動

このところAVメーカーのOV参入が相次いでいるが、そのひとつに数えられるトライハートコーポレーションが〝NEO CINEMA〟という新レーベルを立ち上げた。

これは映画はもちろん、TV、ビデオ（AV）も含め、あらゆる映像分野で活躍、あるいは将来が有望視される監督に発表の場を提供し応援していこうというプロジェクトである。

そしてその第1弾として、軽い気持ちで出張風俗を思いついたうだつの上がらない男とそこにやって来たリストラOLとの切ない恋を描いた『ラブドール・リストラOLレンタル中！」（野火明監督）、浮気がバレて家を追い出された父親と同居することになった娘が、父と恋人との狭間で揺れ動く『Tabo～近親愛～』（安原伸監督）、兄と同居するレズOLがひょんなことからSMの世界へと入り込んでいく姿を描く『壊れた女たち』（雪村春樹監督）の3本が同時リリース。基本的にいずれも人気AV女優を主演にしたエロティック・ドラマなわけだが、それ以上にゆうばり国際冒険ファンタスティック映画祭出身の野火明、安原伸を起用したのをはじめ、ジャンルを問わず個性的な映像を送り出そうという姿勢は注目すべきだろう。特に安原伸はこれが初の商業作品となるだけに、今後の展開も気になるところだ。

なお〝NEO CINEMA〟第2弾として、勝山茂雄監督『若妻のフェロモン・ガラスの結婚』、中野貴雄監督『犬の器～犯されつづける男』、青山浩監督『熱い視線～狙われた部屋～』の3作品が完成しているのをはじめ、以降も月1ペースで作品を発表していくとのこと。またこれからもユニークな人材をどんどん起用し、OV界に一石投じてもらいたい。

ラブドール リストラOLレンタル中！

98年●監督・脚本・撮影／野火明 出演／浜崎ゆき、横市勝徳、川岡博博、徳田中博史、也、大久保運、荒木知夫、野忠、橋本隆司、天津慶亮、雪村春樹、南みか ●トライハートコーポレーション（60分）11月27日リリース

A CHANGE OF HEART　チェンジ・オブ・ハート　天使が舞い降りた街

98年（TM）●監督／アラン・メッツガー 出演／アンドリュー・マッカーシー、ミシェル・ラーンド ●ポリグラム（91分）12月18日リリース

養子縁組によって子供を授かったキースとキムの若い夫婦。ところが、キムが子宮癌を患い他界してしまったことから、彼は子供をも手放さなければならなくなる…。家族の愛を熱く描いた感動のヒューマン・ドラマ。

HIDEOUS!　ホムンクルス　新種誕生

97年（未公開）●監督／チャールズ・バンド 出演／ロンダ・グリフィン、メル・ジョンソンJr. ●ABC出版（82分）12月18日リリース

汚水処理工場で発見された繭状の細胞組織に包まれたふたつの頭部を持つ奇妙な胎児を巡って巻き起こるエゴと恐怖の世紀末ホラー。「パペット・マスター」のクリーチャー製作スタッフが手がけた〝ホムンクルス〟はみもの。

THE RIGHT CONNECTION　ライト・コネクション

97年（TM）●監督／チャック・ヴィンソン 出演／メリッサ・ジョアン・ハート、M.C.ハマー ●CICビクタービデオ（97分）12月18日リリース

かつてのヒップホップ界の大スタア、M.C.ハマー主演によるホーム・コメディ。母子家庭に育った4人の子供たち。彼らは母親を助けようと、滞納した税金を払う為に賞金目当てでヒップホップの大会に出場しようとするが…。

MARABUNTA　マラブンタ

98年（未公開）●監督／ジェイムズ・チャールストン 出演／エリック・ルーテス、ジュリア・キャンベル ●アルバトロス（94分）12月19日リリース

アラスカには生息する筈のない〝マラブンタ〟という巨大アリが大発生した。奴等は動物ばかりか、次第に人間を襲い始めるようになり…。まだまだ根強い人気を誇る動物パニック映画。マラブンタが大行進するシーンには思わずゾゾッ。

TOPICS

●パイオニア
12/10「PERFECT BLUE」（W、DD）

●バンダイ・ホームビデオ
12/8「HANA-BI」（W、DD）

●ポニーキャニオン
11/18「ジングル・オール・ザ・ウェイ」（DD）「好きと言えなくて」（DD）「プレデター」（DD）「ワーキング・ガール」（DD）
12/15「コマンドー」（DD）「上海グランド」（W、DD）「すべてをあなたに」（W、DD）「プレデター2」（W、DD）「ボルケーノ」（DD）

●ワーナー・ホーム・ビデオ
11/4「キャメロット／特別版」（W、DD）「スフィア／特別版」（W、DD）「2001年宇宙の旅／特別版」（W、DD）「2010年」（W、DD）
12/1「追跡者／特別版」（W、DD）「真夜中のサバナ／特別版」（W、DD）「ディレクターズ・カット 燃えよ、ドラゴン／特別版」（W、DD）
12/18「悪魔を憐れむ歌」（W、DD）「風と共に去りぬ」（DD）「11人のカウボーイ」（W、DD）「ニュージャック・シティ」（W、DD）

●デジコンBEAM★DVDキャンペーン開催

ビームエンターテインメントでは、〝DVDの普及とソフトの充実〟を目指して、ソフト購買者対象のキャンペーンを、12月から99年2月末まで実施。同社特約店などにある『デジコンBEAM』誌上に告知されている応募方法に則り、松下電器、東芝、パイオニア、シャープ各社のプレーヤーを10名、もしくはソフトを全100名にプレゼントする。

Digitized by Google

アニメーション&吹替版

●米田由美

火聖旅団ダナサイト999.9

98年●原作・総設定／松本零士　監督／小島正幸　音楽／大野克夫　声／緒方恵美、桜井智●エイチエムピィ（60分）12月18日リリース　7800円

黒色彗星の飛来により壊滅的な打撃を受けた2024年の地球は、宇宙支配を企むトレーダーフォースの支配下にあった。巨大隕石の落下から奇跡的に助かった高校生・台羽哲郎は、ある晩謎の生命体メロウと出会い、そのためにトレーダーフォースに捕らわれてしまう。だが彼は、操縦できるはずもない戦闘機を奪って逃亡。「なぜこんなことができるのか」と自問する哲郎の前に、やはり不可思議な力を手に入れた有紀玲が現れた。メロウは、彼らがDNAの時間軸を自由に操り、過去や未来の記憶でさまざまな力を身につける進化生命体になったのだと告げる。こうして、地球に生まれた新人類たちは宇宙規模の闘いに巻き込まれていくのだった。

「999」「エメラルダス」と松本イヤーだった98年のクライマックスに登場する、東京ファンタでも上映された最新アニメ。生命の進化という自然のプロセスを、壮大なる宇宙に映し出す発想にまず驚かされる。そこに「ハーロック」と「999」と同じ世界を舞台にしたお得意のSFロマン、宇宙に飛び出す地球人というリアルな展開が加味されていく。また人気声優だけでなく、永井一郎や池田昌子といった松本アニメでお馴染みのベテランを起用した配役もみごと。まさに松本零士の集大成的作品と呼べる一編なのだ。

クレヨンしんちゃん　電撃！　ブタのヒヅメ大作戦

98年●原作／臼井儀人　監督・脚本／原恵一　声／矢島晶子、ならはしみき、藤原啓治●バンダイビジュアル（99分）12月18日リリース

悪の秘密結社ブタのヒヅメが凶悪なコンピューターウイルスを完成させた。奴らの陰謀を阻止するため、SMLなる正義の組織の秘密工作員〝お色気〟がブタのヒヅメに潜入。みごとにパスワードを入手して、とある船に逃げ込んだ。だがそこは、しんのすけたち一行が大騒ぎで盛り上がっている屋形船だったのだ。否応なしに事件に巻き込まれたしんのすけたちは、なぜか日本を飛び出して…。

さらにパワフル&ユニークになった劇場版第6弾。我らがしんちゃんは、サイバーワールドで大暴れしてくれる。主題歌を担当するSHAZNAのボーカル、IZAMがあのままのイメージでアニメキャラとして登場するのも見逃せない。

カウボーイビバップ　Vol.1

98年●監督／渡辺信一郎　脚本／横手美智子　声／山寺宏一、石塚運昇、林原めぐみ●バンダイビジュアル（75分）12月18日リリース

広大な宇宙を舞台に、賞金稼ぎに燃える男たちの活躍を描くSFアクションアニメ。テレビ東京系で抜粋でのオンエアだったので、待望の全話ビデオ化と呼べる。サンライズお得意の宇宙世界描写や、シュールなメカデザインも目を引く。

火屑の月　秋狂言　Vol.1

98年●監督／浜津守　声／子安武人、日高のり子●SPE・ビジュアルワークス（29分）12月19日リリース　5600円

混沌とした鎌倉末期を舞台に、相手に合わせて自らの雌雄を変化できる半人半獣と稀代の陰陽師が思い合い、活躍する伝奇ロマン。平井摩利原作の人気コミックを「アルスラーン戦記」の浜津守監督が映像化。これぞ美形アニメの極みだ。

ツインビーPARADISE Vol.0

98年●　監督・脚本／井出安軌　声／國府田マリ子、椎名へきる、山口勝平、田中真弓●ビーム（45分）12月18日リリース　5800円

ゲームやラジオ、CDと絶大な人気を誇る「ツインビー」シリーズの新作OAVがこれだ。勢いのある展開、ファンも納得の画質と魅力満点。シナモン博士が作った危険な薬によって、子どもたちは大冒険を繰り広げることになるが…。

こっちむいてみい子　Vol.1

98年●原作／おのえりこ　監督／吉沢孝男　脚本／山口亮太　声／天神有海、矢島晶子●東映ビデオ（55分）12月11日リリース

少女向けコミックをアニメ化。なんとか両親のためにお手伝いしようとするが、失敗ばかりの小学5年生・山田みい子の日常を描く。絵柄こそギャグタッチだが、内容は等身大でリアル。ごくごく普通の出来事が、ほっとした雰囲気を生み出す。

Digitized by Google

ヴォイス大百科 弓家保則

—第十九回—

山寺宏一［後編］

「火星旅団ダナサイト999．9」（V・LD）60分●原作／松本零士　声／緒方恵美、山寺宏一●エイチエムビィより12月18日リリース

ジム・キャリーを見て、こいつだ！と思った

前回からのゲストは、山寺宏一さん。大学時代は落研で活躍。大学卒業後、上京して、現在所属する〝俳協〟付属養成所で、役者の勉強を始めたそうだ。やがて、アニメの仕事は順調に増えたのだが、本人の中ではひとつの悩みがあったそうである。

「アニメはアニメでやりがいのある仕事なんですけど、僕は、田舎で育ったので、あまり映画館に行くことがなく、TVで放映される洋画劇場が身近なものだったんです。その意味で、声の仕事であれば、昔、自分が慣れ親しんだ洋画の吹替をしたい、という気持ちがあって、ウズウズしていたんです。ところが、なかなかそういうチャンスがなくて、マネージャーやディレクターさんに色々と相談しているうちに、少しずつ吹替の仕事が入ってきた。最初はひとつの作品で、名前のないような役を4、5役やらせていただくところから始まって、メインでやらせていただいたのが『ヤング・シャーロック／ピラミッドの謎』でした。主人公のヤング・シャーロック役をやらせていただいて、ちゃんとした役で台本に名前が載るようになったのは、それが最初ですね。とても嬉しく信じられなかったですね」

その後、洋画の仕事も増え、たくさんの役者の吹替を演じるようになり『ドアーズ』のヴァル・キルマー、『アラジン』のロビン・ウィリアムス、『蜘蛛女』のゲイリー・オールドマン等が印象に残っていると言う。そして、ジム・キャリーには特に思い入れがあるそうだ。

「映画紹介の番組でナレーションをやっていた時、日本でのロードショーにはまだ時間があったんですけど『エース・ベンチュラ』のジム・キャリーを見たんです。彼を一目見た時、大袈裟だけど『こいつだ！』と思って（笑）。ちょっと見るといい男、でも、わかりやすく顔を作ったオーバーな表現で、馬鹿らしくも面白い、これをやりたい、とすぐに思いました。だから『マスク』が僕に来た時は、とても嬉しかったですね。おまけに、TVとビデオで2度も演じることができた。望んでいれば来るんだな、と思いましたね」

「マスク」のジム・キャリー

洋画やアニメで声の役者として活躍する一方で、山寺さんは、子供達にとってアイドルなのである。現在、テレビ東京系で放映中の『おはスタ』でメインキャスターを務めており〝やまちゃん〟の愛称で親しまれている。

「スタートから1年が過ぎ、番組そのものが育っていって、番組をやっている山ちゃんだから、ということではなく、僕達から滲み出てくるものから、何かを感じ取ってもらえれば嬉しいですね。たくさんの子供達に見てもらえることがやりがいで、今までも十分やりがいのある仕事を与えていただいてきましたが、30代後半に本当やりがいのある仕事を与えていただいています。それと、この番組をやっていることで、他の仕事ともつながってくるような気がするんです。番組に来る葉書に〝やまちゃんは洋画の吹替もやっているんですね。いいと思いました〟といったことを書いてくれたものがある。そういうものを違和感なく見てくれて、表現者としての僕を応援してくれているんですよね。基本的には裏側の顔が見えない方が、作品を見ている時はいいと思うんです。もし僕の友達が僕の出演している作品を見て、僕の顔を思い浮かべなければ成功、と思っています。いつもそれだけを心掛けているわけではないんですけど、どんな声の仕事をやる時でも『そうありたい』とは思っていますね」

やまでら・こういち　1961年6月17日、宮城県生まれ。吹替の主な出演作は「レインマン」「7月4日に生まれて」（トム・クルーズ）「ドク・ハリウッド」「ハード・ウェイ」（マイケル・J・フォックス）「ミセス・ダウト」「アラジン」（ロビン・ウィリアムス）「マスク」（ジム・キャリー）等。その他の出演作は『新世紀エヴァンゲリオン』『それいけ！アンパンマン』『男はつらいよ』（アニメ）等がある。また、11月26日には、オリジナル音楽アルバム『CUBE／9（キューブンノキューブ）』をパイオニアLDCよりリリース。

Digitized by Google

日本映画紹介

製作会社　配給会社　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー　（使用フィルム：F＝フジ／EK＝コダック／A＝アグファ）BU＝ブローアップ　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／EV＝ヨーロピアンヴィスタ／CS＝シネマスコープ　D＝ドルビー／DSR＝ドルビーSR　上映時間　フィルムメートル数　映倫選定（青少年映画審議会推薦／R指定／成人指定）　封切代表館　M＝モーニングショー／L＝レイトショー

SADA■愛を乞うひと■生きない■怯える■はるのそら■イノセントワールド■死臭のマリア■鼻の穴

SADA

松竹作品（製作協力＊PSC／企画協力＊ghien）／松竹配給　98・4・11　C・一部BW（EK）・V132分　丸の内松竹

［STAFF］監督／撮影台本／編集＝大林宣彦　製作＝鍋島壽夫　プロデューサー＝大林恭子　制作担当＝佐々木孝裕　原作＝西澤裕子「SADA」　脚色＝西澤裕子　撮影＝坂本典隆　照明＝西表灯光　録音＝北村峰晴　音響デザイン＝林昌平　美術＝竹内公一　装飾＝浜村幸一　衣裳＝万木利昭／東宝コスチューム　音楽＝學草太郎　音楽プロデューサー＝加藤明代　編曲＝山下康介　スクリプター＝竹本貴久子　スチール＝石原宏一　助監督＝盧田完／南柱根　主題歌＝マキ凛子「定のサバダバダ」

［CAST］阿部定…黒木瞳　喜久本龍蔵…片岡鶴太郎　岡田征…椎名桔平　立花佐之助…ベンガル　滝口…嶋田久作　阿部いと…赤座美代子　阿部卓造…三木のり平　喜久本よし…根岸季衣　信吉…石橋蓮司　調査官…井川比佐志　裁判官…小林桂樹　斉藤敏彦…池内万作　とき…入江若葉　宮崎利三郎…坂上二郎　金ちゃん…田口トモロヲ　豆腐屋…奥村公延　老女…東恵美子　若い兵士…林泰文　職人風の男…河原さぶ　若い刑事…天宮良　年配の刑事…渡辺哲　ふり返る青年将校…竹内力　ドーナツ屋…大前均　太鼓持ち…真田健一郎　煙草屋老人…三坪浩　斉藤家女中…及森玲子　宮崎家女中…柴山智加　尾久の旅館の女中…正力愛子　都楼の女中…小河麻衣子　電気を消す女中…松野朋子　巡査…大久保了／南柱根　品川の旅館の女中…伊藤歩　少女時代の定…長木唯　若い板前…李鍾浩　モガ…明日香七穂　号外を配る男…栩野幸知　カフェーの女給…伊藤美穂　定の応援団…左時枝／山本未来／宝生舞／石橋けい／小林かおり／藤谷美紀　語り…石上三登志

［解説］昭和11年、愛した男の性器を切断するという事件を起こして世間を騒がせた阿部定の半生を綴る人間ドラマ。監督は「三毛猫ホームズの推理」の大林宣彦。脚本は、自らの原作を基に執筆した西澤裕子。撮影を「良寛」の坂本典隆が担当している。主演は、「失楽園」の黒木瞳と「でべそ」の片岡鶴太郎。第48回ベルリン国際映画祭国際批評家連盟賞受賞作品。

［略筋］1919年夏。14歳の定は、慶応ボーイの斉藤に旅館に連れ込まれ、処女を失う。ひどい痛みと出血に泣きじゃくる定。そんな彼女を介抱してくれたのは、同じ慶応ボーイで医学生の岡田であった。優しい岡田に定は想いを寄せるが、岡田は定を一度も抱くことなく彼女の前から姿を消してしまう。その後、定は近所のガキ大将・金ちゃんらと不良生活を経て、1923年、義兄・滝口の紹介で芸者置屋の門を潜る。神田の畳屋の末っ子として生まれた定は、三味線や歌に秀でており、たちまち売れっ子となった。時は流れ、あちこちの遊郭を転々とした定・29歳の時。政府外郭団体の大物・宮崎の妾宅に暮らしていた彼女は、名古屋市議会議員の立花を紹介され、彼の愛人となる。立花の寵愛をうけ、安定した生活を送るようになる定。埼玉に住む両親にも孝行が出来るようになった彼女であったが、しかし今でも気がかりなのは岡田の行方だ。そこで、立花に無理を言って岡田の行方を探して貰うが、実は岡田はハンセン氏病で瀬戸内海のある島に隔離され、生死も定かでないことが判明する。1936年、31歳になった定は、立花の薦めで料亭「きく本」に見習いへ出る。ところが、彼女は店の主人・喜久本龍蔵といい仲になってしまうのである。龍蔵との濃密な情交に溺れていく定。そのことが女将・よしに知れると、彼女は店を飛び出し、龍蔵と待合を渡り歩く暮らしをする。もはや、彼女は龍蔵なしでは生きていられないほど彼を愛していた。同年5月17日の夜、定は龍蔵の首に腰紐を巻きつけ殺害。男根を切断すると、それを帯の間に大切にしまって姿をくらますのであった。彼女が逮捕されたのは、それから2日後のことだった。彼女の事件は当時の新聞を騒がせたが、一般には恋に生きる女性として好意的に受け取られた。その年の暮れ、彼女に懲役6年の判決が下りる。その後、彼女がどのように生きたか詳しく知る者はいないが、ハンセン氏病の隔離政策も解かれた現代・1998年。もし、定が生きていれば93歳になっている筈である——。

愛を乞うひと

東宝＝角川書店＝サンダンス・カンパニ

Digitized by Google

ー作品（企画＊サンダンス・カンパニー／企画協力＊三五館）／東宝配給 98・9・26 C（EK）・V・DSR 135分 日劇東宝

［STAFF］監督＝平山秀幸 製作＝藤峰貞利／高井英幸／阿部忠道 プロデューサー＝藤田義則／木村典代／宮内眞吾 共同プロデューサー＝瀬田一彦／赤井淳司 台湾製片＝王明偉 製作担当＝福島聡司 原作＝下田治美「愛を乞うひと」 脚色＝鄭義信 撮影＝柴崎幸三 照明＝上田なりゆき 編集＝川島章正 録音＝宮本久幸 美術＝中澤克巳／許書毓 装飾＝松本良二 衣裳＝二宮義夫／楊雲舒 音楽＝千住明 音楽プロデューサー＝高桑忠男 スクリプター＝松葉勢津子 スチール＝竹内健二 ビジュアルエフェクト・プロデューサー＝中子真治 ビジュアルエフェクト＝橋本満明 音響効果＝斉藤昌二 特殊メイク＝レイコ・クルック／ドミニック・コラドン 助監督＝原正弘

［CAST］山岡照恵／陳（和知）豊子…原田美枝子 山岡深草…野波麻帆 陳文雄…中井貴一 5歳の山岡照恵…小井沼愛 10歳の山岡照恵…牛島ゆうき 15歳の山岡照恵…浅川ちひろ 和知三郎…國村隼 和知武則…うじきつよし 王東谷…小日向文世 王はつ…熊谷真実 4歳の和知武則…前田弘 7歳の和知武則…塚田光 11歳の和知武則…五十畑迅人 中島武人…モロ諸岡 竹内俊男…マギー 司郎 片倉修司…中村有志 高田イネ…新村礼子 村田幸子…今吉諒子 酒井千鶴…西田尚美 キャバレーの客…佐藤正宏 高土新太郎 花王おさむ 山梨ハナ

［解説］幼い頃に実母に折檻を受け続けた記憶から脱しきれないひとりの中年女性の姿を通し、親子の絆とは何かを問う人間ドラマ。監督は「学校の怪談2」の平山秀幸。脚本は、下田治美の同名小説を基に「岸和田少年愚連隊」の鄭義信が脚色。撮影を「学校の怪談3」の柴崎幸三が担当している。主演は「絵の中のぼくの村」の原田美枝子。文部省特選、第22回モントリオール世界映画祭国際批評家連盟賞受賞作品。

［略筋］早くに夫を亡くし、娘の深草とふたり暮らしをしている山岡照恵は、昭和29年に結核でこの世を去ったアッパー（父）・陳文雄の遺骨を探していた。そんなある日、彼女の種違いの弟・武則が詐欺で捕まったという知らせが届く。30年ぶりの弟との再会に、照恵の脳裡に蘇ってきたのは幸せだとは言い難い幼い頃の母親との関係だった――。文雄の死後、施設に預けられていた照恵を迎えに来たのは、かつて父によって引き離された筈の母・豊子だった。ホステスをしている豊子にバラックの家に連れていかれた照恵は、そこで新しい父・中島武人と弟・武則と引き合わされる。やがて、中島と別れた豊子はふたりの子供を連れて〝引揚者定着所〟に住む和知三郎の部屋へ転がり込む。和知は傷痍軍人を偽り街角でお貰いをしている男で、子供たちには優しく接してくれた。ところが、この頃から豊子の照恵に対する折檻が日増しにひどくなっていく。照恵が文雄の形見の手鏡を隠し持っていたことを知っては殴り、友達と花火を見に行く小遣いをねだれば蹴り、和知の前で着替えることを恥じらえば打った。だが、ただひとつ髪を梳く時だけは豊子は照恵を褒めてくれ、その時ばかりは照恵も母の愛を感じられた。中学を卒業した照恵は、建設会社に就職し独り暮らしを考えるようになる。しかし給金は全て豊子に取り上げられる始末で、このままでは母に振り回される日々から一生解放されることはないと思いつめた照恵は、豊子が和知を捨て子供たちを連れて家を出ていこうとした日、遂に家を飛び出すのであった――。文雄の遺骨の手がかりを辿るうち、照恵は深草と共に父の故郷である台湾の沙鹿を訪ねることになる。ところが、そこで待っていたのは照恵たちの訪問を快く思わないアベー（伯父）一家だった。ここに父の遺骨の手がかりははない、そう感じた照恵はかつて父と親交の厚かった東谷夫婦を台湾の奥地・車埕に訪ねる。東谷夫婦から文雄と豊子の出会いや照恵の誕生の話を聞かされる照恵。自分が文雄と豊子の子供ではないのではと疑っていた彼女にとって、それは嬉しい収穫だった。日本に帰った照恵は、区役所で父の遺骨の行方を探し当てる。そんな照恵に、深草が豊子に会いに行くことを勧めた。「母さんはお骨を探す旅をしてたんじゃなくって、お婆ちゃんを探してたんでしょ」母親を否定し続けてきたつもりの照恵は、その言葉で自分の本当の気持ちを悟り豊子との再会を決心する。年老いた豊子は、ある漁村でビューティーサロンを営んでいた。客を装い母に再会を果たす照恵。だが、豊子もそれが照恵だと気づきながら、ふたりは親子の名乗りをあげることをしなかった。母親との別れを自分なりに済ませた照恵は、帰りのバスの中でそれまで母親の顔色ばかりを窺い無邪気に泣くことすら許されなかった子供時代の思いを深草の胸に放出させる。その後、再び文雄の故郷を訪れた照恵の表情には、全てに解放された晴れ晴れとしたものが浮かんでいた。

生きない

バンダイビジュアル＝TBS＝TOKYO FM＝日本ヘラルド映画＝オフィス北野作品／日本ヘラルド映画＝オフィス北野配給 98・9・26 C（EK）・V 100分 テアトル新宿

［STAFF］監督＝清水浩 プロデューサー＝森昌行／柘植靖司／吉田多喜男 協力プロデューサー＝濱名一哉／古川一博／坂上直行 ラインプロデューサー＝小宮慎二 製作担当＝山本章 原案＝中原文夫「不定期バスの客」 脚本＝ダンカン 撮影＝柳島克己 照明＝高屋齋 編集＝太田義則 録音＝武進 美術＝磯田典宏 衣裳＝岩崎文男 音楽＝MAYA 選曲＝秋田康宏 スクリプター＝松澤一美 スチール＝斉藤里美 音響効果＝帆苅幸雄 助監督＝大野伸介

［CAST］新垣…ダンカン 美つき…大河内奈々子 伊藤…村野武範 木村…尾美としのり 小沢…左右田一平 神田…小倉一郎 野口…石田太郎 八代…温水洋一 能勢…グレート義太夫 望月…

Digitized by Google

岸博之　小松…三橋貴志　田口…砂丘光
男　福田…春木みさよ

［解説］保険金目当ての自殺志願者ばかりを集めたバスツアーに、関係のない女の子が紛れ込んだことから起こる騒動を描いたブラックな笑い満載のロードムービー。監督は、これが初監督作となる清水浩。脚本は、本作がやはり本編初脚本作となるダンカン。撮影を「ジューンブライド　6月19日の花嫁」の柳島克己が担当している。主演は、「チンピラ」のダンカンと「ズッコケ三人組―怪盗X物語―」の大河内奈々子。第51回ロカルノ国際映画祭アキュメニカル特別賞受賞。

［略筋］旅行会社サンシャインクラブの添乗員・新垣は、保険金目当ての自殺志願者ばかりを集めた「2泊3日の沖縄初日の出バスツアー」を企画。12月30日、いよいよ出発の日を迎えようとしていた。ツアーの参加者は、離婚の慰謝料&子供の養育費の借金に苦しむ伊藤、女に騙され借金を背負った教師の木村、病弱な子供を持つ神田、バブル期に美味しい想いをし過ぎた野口、経営不振の町工場を抱える小沢、借金に苦しむ宗教家の能勢と設計技師の望月、自分を振った女へのあてつけに自殺を考えている小松、借金ばかりでなく難病で余命幾ばくもない八代、そして不倫の関係にある運転手の田口とバスガイドの福田の11名。ところがそこへ、本来参加する筈だった叔父さんの代わりにやってきたという若い女の子・美つきが紛れ込んでしまう。予定外の人間をツアーに参加させていいのか。新垣は悩むが、ひとりくらい自殺願望のない人間が紛れ込んでいた方が後々怪しまれなくて済むとばかり、13人を乗せたバスを発車させる。こうして開始されたツアーは順調に沖縄の観光地を巡って、やがて宿泊先のホテルに到着する。しかしその夜、ツアー客たちは人生最後の夜を楽しもうと街で大騒ぎ。そんな彼らを、新垣は自覚がないと叱責するのであった。ところが、この騒動でツアーの目的が美つきにバレてしまう。ツアーの目的を知って、自殺を阻止しようとする美つき。だが、ここまできたら後戻りはできない。翌日、新垣は美つきを睡眠薬で眠らせると無理矢理バスに乗せ、ツアー客と共に事故の多発する海岸線の道路へと向かう。しかし、客たちは美つきを巻き込んでまで自殺するということに疑問を抱き始めていた。死を目前に不思議な絆で結ばれた彼らは、事故多発のポイントを回避すると、飽くまで計画を実行に移すんだとねばる新垣を残して去っていく。果たして、ひとり残された新垣は崖からその身を海中へ投げた……。ところがその後、バスはタンクローリーと衝突。ツアー客全員の死亡が確認されるのだった。

怯える

映画技術美学講座作品／映画技術美学講座配給　98・9・26　C（16ミリ・EK）・S　34分　ユーロスペース　L

［STAFF］監督／脚本＝古澤健　製作＝横川一郎／別府文隆　撮影＝井上史浩／大石始／安里麻里／山中隆史　撮影アドバイザー＝宮武嘉昭／内藤雅行　照明＝八木太郎／木田貴裕／春川和代／井上かおり　編集＝筒井武文　録音＝石谷岳寛／近藤麗子／シネマンブレイン　整音＝真弓信吾／鈴木昭彦　美術＝堀内玲奈／川口俊平／茅野太滋　音楽＝パーバスクリプター＝山本直樹　スチール＝山口博之　助監督＝谷川誠司／庭山貴裕／岡村忠征

［CAST］近藤聡…鈴木卓爾　岡崎ゆみか…長門かおり　岡崎れいこ…太田ゆき江　黒幕…高橋洋　女子高生…花本ちなみ　男…下田温泉　公園の子供…岩嵜友樹　母親…岩嵜功美　車の男…川口俊平　警官…横川一郎　若者…山本直輝／藤飯淳　女…関口華子

［解説］通り魔犯人を怯えさせる不気味な恐怖を描いた短篇サスペンス。アテネ・フランセ文化センターとユーロスペースが97年秋に開校した「映画技術美学講座」の中で製作された作品で、「FOUR FRESH!」という特集企画で上映された一本。監督・脚本は、「home sweet movie」でPFF入選経験を持つ古澤健。主演に「夜9時20分のワンピース」の鈴木卓爾があたっている他、脚本家・高橋洋が声の出演を果たしている。

［略筋］平凡な専門学校生・近藤の元に、差出人不明の一本のビデオテープが送られてきた。そこには、近藤が通り魔事件を起こした時の様子が映されており、最後に携帯電話を購入してその番号を駅の伝言板に書いておけという指示がしてあった。ほどなく「私はあなたのファンです」という犯罪盗撮マニアの男から電話がかかってくる。そして男は、再びビデオを撮りたいから犯罪を犯せと近藤を挑発してきた。恐ろしくなった近藤はそれを機に通り魔を止めようとするが、再び実行に及んでしまう。しかし、犯行は失敗。襲われた女子高生は、付近に停まっていたバンに救いを求めて逃げるのであった。だが数日後、近藤と同じような境遇にある男の訪問によって、近藤はマニア男が女子高生を〝始末〟しておいたこと、そして近藤の彼女・ゆみかを誘拐したことを知らされる。ゆみかを取り戻すべく、廃墟に駆けつける近藤。しかし、ゆみかは既に近藤の犯罪ビデオを見せられた後だった。助けなければならない立場にありながら、自分の犯罪を見てどう思ったかをゆみかに詰問する近藤。逃げ出したい一心でまだ近藤を愛していると言うゆみかだったが、近藤の隙を見て彼女が逃げ出した先には、いつかのバンが停まっていたのであった……。

はるのそら

映画技術美学講座作品／映画技術美学講座配給　98・9・26　C（16ミリ・EK）・S　38分　ユーロスペース　L

［STAFF］監督／脚本＝松本知恵　製作＝竹下耕平／高良宣克／小野靖之　撮影＝斉藤健治／清水崇／門脇時子　撮影アドバイザー＝宮武嘉昭／内藤雅行　照明＝宇賀神雅裕／名倉寛／原瀬涼子　編集＝筒井武文　録音＝良井真一／北原庸平　整音＝真弓信吾　美術＝小川原聖

Digitized by Google

子／鹿角優邦　音楽＝相馬大　スクリプター＝柳内里美　スチール＝山口博之　助監督＝佐藤文平／加藤節子／松田孝洋　主題歌＝peeping tom(saya)「Ly ra Ly+more」

［CAST］ハルコ…水高ニキ　ケンジ…鹿角優邦　サトちゃん…川崎桜　社長…平岡育子　キョウコ…億田明子　山野…加藤四郎　紙切人…古澤良治郎　子供時代のハルコ…黄麗那　母親…金丸みよ

［解説］仕事と恋愛に揺れ動く、20代後半の女性の心の機微を描いた短篇ドラマ。アテネ・フランセ文化センターとユーロスペースが97年秋に開校した「映画技術美学講座」の中で製作された作品で、「FOUR FRESH!」という特集企画で上映された一本。監督・脚本は松本知恵。主演は自主映画を中心に活動する水高ニキ。

［略筋］デザイン事務所に勤務する20代後半の女性・ハルコは、仕事も恋愛も充実した日々を送っているつもりだった。しかし、写真家を夢見ながら未だにフリーターである同棲相手のケンジの生活力のなさを上司に指摘されたり、まさかと思っていた女友達が結婚することになったりで、次第に焦りを感じ始める。そして、ハルコは何かをふっきるようにケンジに黙って会社を辞めるが、後でそのことを知ったケンジと大喧嘩。暫くの間、別々に暮らすことになった彼女は、好きな絵を描いたりしてひとりの時間を満喫しようとするが何か物足りない。やがて、自分自身、更にケンジとの関係を見つめ直したハルコは、ケンジとの仲を回復する。

イノセントワールド
INNOCENT WORLD

フジテレビ＝ポニーキャニオン＝東北新社作品／東北新社＝ゼアリズ配給　98・10・3　C（スーパー16BU・EK）・V　97分　シネ・アミューズ

［STAFF］監督＝下山天　企画＝河村雄太郎／南條昭夫／田辺隆史　プロデューサー＝室希太郎／公野勉　製作担当＝　原作＝桜井亜美「イノセントワールド」　脚色＝小川智子　撮影＝小野寺眞　照明＝市川元一　編集＝平澤政吾　録音＝八木隆幸　美術＝丸尾知行　音楽＝土井宏紀　スチール＝　効果＝助監督＝檜垣雄二　主題歌＝竹内結子「ただ風は吹くから」

［CAST］珠泉アミ…竹内結子　珠泉タクヤ…安藤政信　高森和也…豊原功補　高森啓子…伊藤かずえ　ミズキ…木村剛　珠泉祥子…范文雀　珠泉道隆…長谷川初範　長塚忠志…高木均　カッターの男…山崎一　ミヤダイ…宮台真司　看護婦…川崎未希子

［解説］自分の本当の父親である精子ドナーを探す女子高生と、知的障害を持つ彼女の異父兄の心の旅路を描く青春ファンタジー。監督は「CUTE」の下山天。桜井亜美による原作を基に、「アタシはジュース」の小川智子が脚色。撮影を「CUTE」の小野寺眞が担当している。主演は、「リング」の竹内結子と「キッズ・リターン」の安藤政信。

［略筋］日頃、頭の中で自分の名前を呼ぶ何者かの声に悩まされていた今時の女子高生・アミは、17歳の誕生日に自分が今の父親の本当の子供でないことを知る。彼女の母親は知的障害を持つ兄・タクヤを生んだことにショックを受け、次の子供であるアミを人工受精で出産したのだ。自分たちを物のようにしか思わない両親の愛の欠如に失望したアミは、ある日、〝僕のうさぎ〟を探しているタクヤを連れて本当の父親である精子ドナーNo.307なる人物、果たしてそれが頭の中の声の正体なのかを探る旅に出る。当時の担当医師・長塚博士を病院に訪ね高森という男の名前を聞きだしたふたりは、風車がそびえ立つ北の果て・龍飛岬で開業している高森の診療所を訪れた。そこには、ひたすら天気図を書き込む〝人間感情の欠如した男〟高森と、高森との結婚生活により人間不信に陥った妻で看護婦の啓子がいた。高森は冷え切った夫婦の間に突然現れたアミたちとの共同生活を受け入れるも、啓子はふたりに不審感を抱く。やがて、彼女はアミが高森の子供ではないかと勘ぐるようになり、高森にその思いを告げるが、高森は17年前に精子を提供したことをあっさり認めるのだった。こうして、自分が持つ遺伝子のルーツである人物を探しあてたアミの心は、しかし物足りなさを残していた。高森は頭の中の声の正体ではないのだ。アミが東京へ帰る日、タクヤが海に落ちた。高森のお陰で一命はとりとめるが、その時アミは声の主がタクヤであったことに気づく。そして、タクヤの探していた〝僕のうさぎ〟も赤ん坊の頃のアミのことだと分かる。アミは、困難に満ち溢れた世界の中で、しかし自分とタクヤだけは強い絆で結ばれているのだと確信すると、未来へ向けてふたりで生きていくことを誓う。

死臭のマリア

映画技術美学講座作品／映画技術美学講座配給　98・10・3　C（16ミリ・EK）・S　27分　ユーロスペース　L

［STAFF］監督／脚本＝伊藤晋　製作＝村主暢子／玉田洋／西條朋行　撮影＝木暮洋輔／志水健市／田月香織／井上史浩／斎藤健治　撮影アドバイザー＝宮武嘉昭／内藤雅行　照明＝木田貴裕／杉本瑞樹／中田美紀／茅野大滋／宇賀神雅裕　編集＝筒井武文　録音＝斉藤陽／大九明子／シネマンブレイン　整音＝真弓信吾　美術＝粟津慶子／夏目多代／村瀬友紀　衣裳＝鈴木七枝　スクリプター＝御園生涼子　スチール＝山口博之　特殊造型＝松井祐一　助監督＝南川要一／谷口二郎／加藤久雄

［CAST］菊池健太郎…横山豊蘭　秋川真理…五郎丸典子　秋川恵理…小栗えりか　ウェイトレス…三瓶晴美　作業員…佐野裕靖／杉山登志樹／玉田洋

［解説］誤って隣人を殺してしまった男が辿る運命を描いた短篇ドラマ。アテネ・フランセ文化センターとユーロスペースが97年秋に開校した「映画技術美学講座」の中で製作された作品で、「FOUR FRESH!」という特集企画で上映された一本。監督・脚本は伊藤晋。主

Digitized by Google

演は、書道パフォーマーとして知られる横山豊蘭。

［略筋］定職もなく、いよいよ生活に困った健太郎は、アパートの隣家に忍び込む。ところが、住人の真理が帰ってきて鉢合わせ。動揺した健太郎は、誤って彼女を死なせてしまうのだった。そこへ真理の妹・恵理が訪ねてくるが、その場は真理の彼氏だということでごまかし通して事なきを得る。しかし、どうしたものかと考えあぐねた健太郎は、変声機を製造してアリバイ工作をしてみるが、その一方で真理の肉体は確実に朽ちて、異臭を放ち始める。切羽詰まった健太郎は、十字架の形をした棺桶の中に死体を入れて外へ運び出すことを計画。その姿は、まるで十字架を背負わされたキリストのようであった。

鼻の穴

映画技術美学講座作品／映画技術美学講座配給　98・10・3　C（16ミリ・EK）・S　30分　ユーロスペース　L

［STAFF］監督／脚本／音楽＝稲見一茂　製作＝元宮正吾／斉藤幸子　撮影＝根本伸一／北村卓嗣／大石始　撮影アドバイザー＝宮武嘉昭／内藤雅行　照明＝清野弥生／安井利江／宇賀神雅裕／八木太郎／原瀬涼子　編集＝筒井武文　録音＝佐野淳子／石谷岳寛／シネマンブレイン　整音＝真弓信吾　美術＝大鹿知子／鷲谷花　スクリプター＝鏡堂正昭　スチール＝山口博之　助監督＝市沢真吾／安里麻里

［CAST］マル…菅原光男　ハナ…田中ゆかり　リキ…渋谷実　花泥棒…古川琢也　番人…佐々木誠　運転手…ピコ下端…永井尋己　所長…広田照子

［解説］赤い玉を巡って繰り広げられる男女の不思議な体験を描く短篇ドラマ。アテネ・フランセ文化センターとユーロスペースが97年秋に開校した「映画技術美学講座」の中で製作された作品で、「FOUR FRESH!」という特集企画で上映された一本。監督・脚本は稲見一茂。主演は、自主映画を中心に活動している菅原光男と映画初出演の田中ゆかり、「サディスティックソング」の渋谷実。

［略筋］仲間のマルを裏切って逃亡を図ったハナとリキ。ところが、それに感づいたマルによって、リキは河原で半殺しの目に遭ってしまう……。気づくと、ハナとマルは謎の組織に森の奥の一軒家に拉致されていた。かつて組織のメンバーが埋めたという男の死体を掘り出すよう指示されたふたりは、番人の監視の下、オカマの花泥棒と共に首に一発であの世行きになる装置をつけられ穴を掘るハメに。やがて、ハナは口に赤い玉をくわえたリキの頭を掘り出す。だがその時、番人が装置のボタンを押した。ハナの体に電気が流れ彼女は死亡。一方、マルは地中から現れた手によって配線を切断され、一命を取り留めた。と思いきや、マルは半殺しにした筈のリキに河原で後頭部を思いきり殴打されるのであった……。

10月の公開作品（日本映画）封切り表

封切日	題名（配給会社）	製作所	撮影（録音）	監督（監修）	出演	上映時間	紹介	批評	グラビア
10.23	知恵ONANME 濡れた唇（エクセスフィルム）	サカエ企画	夏季　忍	新田　栄	石堂　亜依・竹本　泰史 川島　ゆき・久須美欽一	60			
10.30	人妻と老人 不倫ハメ取り（新東宝映画）	KOKUEI	向　清作	横口　卓明					
10.30	未亡人の下半身 濡れっぱなし（新東宝映画）	新東宝映画	武田　浩介	深町　章	吉行　由美・根生みゅう 柏沢　知美・熊谷　孝文				
10.31	境界線の向こう側	オフィスガレージ	今村　千佳 小谷内郁代	横口　卓明	八幡　現代・西岡　秀記 根生みゅう・野上　正義				
10.31	男 THE MAN（大蔵映画）	アンカーズプロダクション	園　子温	園　子温	伊藤　猛・瀬岩　研輔 石川　雅也・堀　祐輔				
10.31	体験情報 しちゃった（大蔵映画）	大蔵映画	小林　悟	小林　悟	風間今日子・牧村　耕二 里見　瑤子・佐々木麻子	59			

Digitized by Google

外国映画紹介

製作国＊製作会社　配給会社　製作年　封切日　C＝カラー／BW＝モノクロ／PC＝パートカラー　S＝スタンダード／V＝ヴィスタ／CS＝シネスコ　D＝ドルビー・ステレオ　U＝ウルトラ・ステレオ　DSD＝ドルビー・ステレオ・ディジタル　DTS＝デジタル・シアター・システム　SDDS＝ソニー・ダイナミック・デジタル・サウンド　SR＝スペクタクル・レコーディング　上映時間　EP＝エグゼクティヴ・プロデューサー（製作総指揮）

従妹ベット■恋の秋■ジャングル・ジョージ■地球は女で回ってる■TOKYO EYES■ネネットとボニ■ハーフ・ア・チャンス
ビッグ・リボウスキ■マーキュリー・ライジング■Mr.マグー■リプレイスメント・キラー■ワイルド・マン・ブルース

従妹ベット

Cousin Bette〔従妹ベット〕

米＊フォックス・サーチライト・ピクチャーズ作品／20世紀FOX映画配給　98＝98・10・31　C・V・D（SR）　106分　字幕＝古田由紀子

〔STAFF〕監督＝Des McAnuff　製作＝Sarah Radclyffe　ep＝Susan Tarr／Lynn Siefert／Rob Scheidinger　脚本＝Lynn Siefert／Susan Tarr　原作＝Honore de Balzac　撮影＝Andrzej Sekula　音楽＝Simon Boswell　美術＝Hugo Luczyc-Wyhowski　編集＝Tariq Anwar／Barry Alexander Brown　衣裳＝Gabriella Pescucci

〔CAST〕Bette Fisher…Jessica Lange／Jenny Cadine…Elisabeth Shue／Cesar Crevel…Bob Hoskins／Hector…Hugh Laurie／Count Wenceslas Steinbach…Aden Young／Hortense Hulot…Kelly MacDonald／Adeline Hulot…Geraldine Chaplin

〔解説〕自分をないがしろにした一族への復讐に燃えるヒロインの姿をコミカルに描いた一編。フランスの文豪オノレ・ド・バルザックが1846年に『人間喜劇』の一部として発表した同名作の映画化。監督は劇作家・舞台演出家として知られるデス・マカナフで、本作が劇場映画デビュー。脚本は劇作家でもある「クール・ランニング」のリン・シーファートとスーザン・タールの共同で、ロブ・シードリンガーと組んで製作総指揮も担当。製作は「ベント　堕ちた饗宴」のサラ・ラドクリフ。撮影は「バルプ・フィクション」のアンジェイ・セクラ。音楽は「シャロウ・グレイブ」のサイモン・ボズウェル。美術は「ニル・バイ・マウス」のヒューゴ・ルジック・ウィホウスキー。編集は「英国万歳！」のタリク・アンワールと「クルックリン」のバリー・アレクサンダー・ブラウン。衣裳は「スカーレット・レター」のガブリエラ・ペスクッチ。主演は「沈黙のジェラシー」のジェシカ・ラング。共演は「リービング・ラスベガス」のエリザベス・シュー、「ニクソン」のボブ・ホスキンス、「仮面の男」のヒュー・ローリー、「ハーモニー」のアデン・ヤング、「トレインスポッティング」のケリー・マクドナルド、「チャーリー」のジェラルディン・チャップリンほか。

〔略筋〕パリ。1846年。ベット（ジェシカ・ラング）は貴族ヒューロット家の一員ながら、下町でバーレスクの衣裳係の仕事をしていて、一族では日陰者扱い。さて、ベットはかつて恋した当主ヘクター（ヒュー・ローリー）を美しい従姉アドリーヌ（ジェラルディン・チャップリン）に奪われた。アドリーヌの急死で、ベットは後妻の座を期待したが、放蕩で財産を食い潰したヘクターからは、娘ホルテンス（ケリー・マクドナルド）の家政婦になれと屈辱的な仕打ちを受けただけだった。そんな折り、ベットはアパルトマンに住む年下貧乏彫刻家のウェンセスラス（アデン・ヤング）の世話を焼くうちに恋仲に。ところが、彼のことを知ったホルテンスが彼を誘惑したあげく結婚してしまう。怒れるベットはここに復讐を開始。ヘクターの元愛人でもあるなじみのバーレスクの歌姫ジェニー（エリザベス・シュー）の協力を得て、彼女にウェンセスラスを籠絡させ、一族を底なしの借金地獄に追いやったのだ。ヘクターはショックで再起不能となり、逆上したホルテンスはジェニーを殺そうとしてウェンセスラスを死なせてしまい、投獄される。その6カ月後。民衆の騒動のさなか、廃人同然となったヘクターの横に、ホルテンスとウェンセスラスの子供をあやすベットの姿があった。

恋の秋　四季物語

Conte d'automne〔秋物語〕

仏＊レ・フィルム・デュ・ロザンジュ＝ラ・セプト・アルテ＝ローヌ・アルプス・シネマ作品／フランス映画社配給　98＝98・11・28　C・V・D（SR）　112分　字幕＝松岡葉子

〔STAFF〕監督＝Eric Rohmer　製作＝Francoise Etchegaray　脚本＝Eric Rohmer　撮影＝Diane Baratier　音楽＝Claude Marti／Gerard Pansanel／Pierre Peyras／Antonello Salis　録音＝Pascal Ribier　編集＝Mary Stephen

〔CAST〕Isabelle…Marie Riviere／Magali…Beatrice Romand／Gerald…Alain Liboit／Etienne…Didier Sandre／Rosine…Alexia Portal／Leo…Stephane Darmon／Emilia…Aurelia Alcais／Gregoire…Matthieu Davette／Jean-Jacques…Yves Alcais

〔解説〕秋の穏やかな自然の空気に包まれながら、40代男女の恋模様を軽やかなタッチで描いた一編。監督・脚本は名匠エリック・ロメール。「春のソナタ」

Digitized by Google

(89)「冬物語」(91)「夏物語」(96)に続く、本作が【四季の物語】シリーズの完結作となる。製作はフランソワーズ・エチュガライ。撮影は「木と市長と文化会館」からロメール組に加わっているディアーヌ・バラチエ。音楽はクロード・マルティ、ジェラール・パンサネル、ピエール・ペイラス、アントネッロ・サリス。編集は「木と市長と文化会館」以来ロメールと組むマリー・ステファン。録音は「レネットとミラベル　四つの冒険」からロメール組に参加するパスカル・リビエ。出演は「冬物語」のマリー・リヴィエール、「レネットとミラベル　四つの冒険」のベアトリス・ロマン、「ベルニー」のアラン・リボル、「ジェリコー・マゼッパ伝説」のディディエ・サンドルほか。98年ヴェネチア国際映画祭で最優秀脚本賞を受賞。

〔略筋〕 南フランスの小さな町、サン・ポール・トロワ・シャトー。本屋を経営する主婦イザベル（マリー・リヴィエール）は、ローヌ渓谷の小さな農園でぶどう酒造りに打ち込んでいる親友マガリ（ベアトリス・ロマン）が独り身でいるのを心配していた。マガリの息子レオ（ステファーヌ・ダルモン）の新しいガールフレンドの女子大生ロジーヌ（アレクシア・ポルタル）も奇しくも同じことを心配。イザベルとロジーヌは、それぞれ勝手にマガリの恋の相手を探そうとする。イザベルは新聞の結婚交際広告欄にこっそり投書、ビジネスマンのジェラルド（アラン・リボル）と身代わりでデートし、彼をマガリにそれとなく会わせるように事を進めていく。一方ロジーヌは、最近別れた自分の元恋人の哲学教師エチエンヌ（ディディエ・サンドル）を、マガリに紹介しようとする。そしてイザベルの娘エミリア（オーレリア・アルカイス）の結婚式の披露宴ガーデン・パーティで、彼女らの企みを何も知らないマガリの前に、男二人が現れた。マガリはジェラルドのことを気に入ったが、偶然、イザベルがジェラルドに思わず抱きついたところを目撃。その後ようやくイザベルはジェラルドをマガリに紹介、マガリはジェラルドの車で自宅まで送ってもらったが、事の不可解さにマガリは不安がり、二人の仲はうまくいかない。マガリは夜になってからパーティ会場に戻り、イザベルに真相を聞き出す。するとジェラルドも会場に戻ってくる。そこで二人は互いの気持ちを確認しあい、また会う約束をして別れるのだった。

ジャングル・ジョージ

George of the Jungle〔ジャングルのジョージ〕

米＊マンデヴィル・フィルムズ＆ヴネットカーナー・プロ作品（ウォルト・ディズニー提供）／ブエナ　ビスタ　インターナショナル　ジャパン配給　C・V・DSD／SDDS／D　91分　字幕＝稲田嵯裕里

〔STAFF〕監督＝Sam Weisman　製作＝David Hoberman／Jordan Kerner／Jon Avnet　E.P.＝C. Tad Devlin　脚本＝Dana Olsen／Audrey Wells　キャラクター原案＝Jay Ward　原案＝Dana Olsen　撮影＝Thomas Ackerman　音楽＝Marc Shaiman　美術＝Stephen Marsh　編集＝Stuart Pappe／Roger Bondelli　衣装＝Lisa Jensen　特殊効果＝Jim Henson Creature Shop　視覚効果＝Dream Quest Images

〔CAST〕George…Brendan Fraser／Ursula Stanhope…Leslie Mann／Lyle Van de Groot…Thomas Haden Church／Kwame…Richard Roundtree／Ape(voice)…John Cleese／Max…Greg Cruttwell／Beatrice Stanhope…Holland Taylor／Arthur Stanhope…John Bennett Perry

〔解説〕 67年に誕生して大ヒットしたディズニー製作のアニメーション「ジャングル・ジョージ」の実写版リメイク。監督は「D2　マイティ・ダック」のサム・ワイスマン。キャラクター原案はジェイ・ウォード。脚本は「透明人間」のディナ・オルセンの原案を基に、オルセンとオードリー・ウェルズが共同。製作はデイヴィッド・ホッパーマン、ジョーダン・カーナー、「フライド・グリーントマト」の監督でもあるジョン・アヴネットの共同。製作総指揮はC・タッド・デヴリン。撮影は「ジュマンジ」のトーマス・アッカーマン。音楽は「ファースト・ワイフ・クラブ」のマーク・シャイマン。美術はスティーヴン・マーシュ。編集はスチュアート・パッペとロジャー・ボンデッリ。衣装はリサ・ジェンセン。動物の特殊効果はジム・ヘンソン・クリーチャーショップ、視覚効果はドリーム・クエスト・イメージズがそれぞれ担当。主演は「原始のマン」のブレンダン・フレイザー。共演は「ラストマン・スタンディング」のレスリー・マンのほか、「危険な動物たち」のジョン・クリーズがゴリラの声を担当。「Mr.マグー」が併映され、2本立て公開された。

〔略筋〕 アフリカ。ジョージ（ブレンダン・フレイザー）は墜落した飛行機から救われ、人間の言葉もペラペラのゴリラの"ゴリ"（声／ジョン・クリーズ）に育てられた野生児にしてジャングルの王者。ある日。彼はひょんなことでサンフランシスコの大富豪の娘アースラ（レスリー・マン）と出会い、恋に落ちる。彼女をジャングルに引っ張ってきた婚約者のライル（トーマス・H・チャーチ）ははぐれた彼女をジョージの小屋で見つけて思わず発砲。その怪我の治療のため、ジョージはアースラに連れられ、大都会サンフランシスコにやってくるが、行く先々で大騒動を巻き起こす。世間体を気にしてライルと強引に結婚させたい母（ホランド・テイラー）の妨害も気にせず、アースラはジョージとの結婚を夢見るが、そんな矢先、ジャングルからゴリが密猟ハンターの手中に落ちたとの知らせが。ジョージは急ぎジャングルに帰り、ゴリを助ける。ところがカルト教団に入信したライルの一党がジョージを追ってきたアースラを誘拐。ジョージはアースラを魔の手から救出した。かくしてジョージはジャングルで彼女と盛大な結婚式を行い、幸せに暮らすのだった。

Digitized by Google

地球は女で回ってる

Deconstructing Harry〔脱構築するハリー〕

米＊ジーン・ドゥマニアン・プロ作品（スウィートランド・フィルムズ提供）／松竹富士配給（松竹＝テレビ東京提供）　97＝98・10・31　C・V・D（SR）　96分　字幕＝古田由紀子

〔STAFF〕監督＝Woody Allen　製作＝Jean Doumanian　ep＝J. E. Beaucaire　脚本＝Woody Allen　撮影＝Carlo Di Palma　美術＝Santo Loquasto　編集＝Susan E.Morse　衣装＝Suzy Benzinger

〔CAST〕Harry…Woody Allen／Doris…Caroline Aaron／Joan…Kirstie Alley／Richard…Bob Balaban／Ken…Richard Benjamin／Burt…Eric Bogosian／Larry…Billy Crystal／Lucy…Judy Davis／Cookie…Hazelle Goodman／Beth…Mariel Hemingway／Jane…Amy Irving／Grace…Julie Kavner／Hilly…Eric Lloyd／Leslie…Julia Louis-Dreyfus／Harvey…Tobey Maguire／Helen…Demi Moore／Fay…Elisabeth Shue／Paul…Stanley Tucci／Mel…Robin Williams

〔解説〕泥沼の女性関係に悩む小説家が、現実とイマジネーションの世界を行き来しながら自分について思考するコメディ。監督・脚本・主演は「世界中がアイ・ラヴ・ユー」のウディ・アレン。製作は「世界中がアイ・ラヴ・ユー」のジーン・ドゥマニアン。製作総指揮はJ・E・ボケール。撮影は「ハンナとその姉妹」からアレン作品の大半を手掛ける名匠カルロ・ディ・パルマ。美術のサント・ロカスト、編集のスーザン・E・モースもアレン組の常連。衣装はスージー・ベイジンガー。共演は「光る眼」のカースティ・アレイ、「ミルク・マネー」などの監督として知られるリチャード・ベンジャミン、「彼と彼女の第二章」のビリー・クリスタル、「目撃」のジュディ・デイヴィス、「マンハッタン」のマリエル・ヘミングウェイ、「愛のイエントル」のエイミー・アーヴィング、「G.I.ジェーン」のデミ・ムーア、「リービング・ラスベガス」のエリザベス・シュー、「グッド・ウィル・ハンティング　旅立ち」のロビン・ウィリアムスほか。

〔略筋〕NY。自分の私生活をネタにして数々のベストセラーをモノにしてきた小説家、ハリー・ブロック（ウディ・アレン）は、最近スランプに陥っていた。ある日、既に別れた三番目の妻であるジェーン（エイミー・アーヴィング）の妹で、肉体関係があったルーシー（ジュディ・デイヴィス）が、ハリーの元に怒鳴り込んでくる。自分たちの関係をハリーが著作の中で暴露したためであった。翌日、精神分析医を訪れたハリーは、書きかけの短編の内容を打ち明ける。それは一人だけピントがボケてしまう俳優メル（ロビン・ウィリアムス）の話であった。その足でやはり精神分析医をしている二番目の妻ジョーン（カースティ・アレイ）の元に向かったハリーは、明日、母校で行われる自分の表彰式に息子のヒリー（エリック・ロイド）を連れて行きたいと頼んだが、断られた。そこで親友のリチャード（ボブ・バラバン）と別れた恋人のフェイ（エリザベス・シュー）に同行を頼むが、フェイは冒険家のラリー（ビリー・クリスタル）と明日結婚式を挙げる予定であった。代わりにハリーは、娼婦のクッキー（ヘイゼル・グッドマン）に同行を頼む。そして翌朝、リチャードとクッキーと共に車を出したハリーは、途中で学校に寄り、ヒリーを車に乗せてしまった。道中、ヒリーを退屈させないように遊園地へ寄ったハリーは、そこで自分をモデルにした作中人物のケン（リチャード・ベンジャミン）と遭遇。また姉ドリス（キャロリン・エアロン）の家に寄った後には、ドリスとジョーンを合成した作中人物のヘレン（デミ・ムーア）が現れた。そして目的地の大学が近づいてきたが、到着寸前、リチャードが突然死してしまった。しかもハリーはヒリーを誘拐したとして警察に追われ、オマケにクッキーが麻薬を所持していたため逮捕されてしまった。留置所で地獄の妄想を見るハリー。それをラリーとフェイが保釈してくれた。そしてようやく大学の舞台に向かうハリー。そこには作中人物たちが拍手で彼を迎えていた。

TOKYO EYES

Tokyo Eyes〔東京の眼〕

日＊ユーロスペース＝仏＊ルーメン・フィルム作品／ユーロスペース配給　C・V・D　98分　日本語版での上映

〔STAFF〕監督＝Jean-Pierre Limosin　製作＝堀越謙三／Hengameh Panahi　脚本＝Jean-Pierre Limosin／Santiago Amigorena／Philippe Madra／坂尻裕二　撮影＝Jean-Marc Fabre　音楽＝Xavier Jamaux　音楽監修＝Eric Michon　美術＝矢野貴章　編集＝Danielle Anazin　録音＝菊地信之

〔CAST〕K…武田真治／Hinano…吉川ひなの／Roy…杉本哲太／Naomi…水島かおり／バス運転手…大杉漣／美容室オーナー…油井昌由樹／ビデオショップオーナー…モロ師岡／ビデオショップの客…光石研／DJ…タナカフミヤ／特別出演…ヤクザ…ビートたけし

〔解説〕世紀末の東京を舞台に、謎の発砲事件を続ける青年と彼にひかれる少女のつかの間の関係を鮮烈なタッチで綴った一編。監督・脚本は「天使の接吻」のジャン＝ピエール・リモザンで、東京（渋谷・下北沢など）でオールロケ、日本人のみを俳優に使い、オール日本語で撮り上げた。撮影クルーもリモザンと撮影監督のジャン＝マルク・ファーブル（「a. b. c. の可能性」）以外は日本人を起用。製作は堀越謙三（ユーロスペース）とヘンガメ・パナヒ。音楽はスコアをグザヴィエ・ジャモー、音楽監修をエリック・ミションが担当。美術は矢野憲章。編集はダニエル・アヌダン。録音は菊地信之。主演は「NIGHTHEAD 劇場版」の武田真治と「デボラがライバル」の吉川ひなの。共演は「キリコの風景」の杉本哲太、「犬走る」の大杉漣のほか、「HANA-BI」のビートたけしが特別出演。

〔略筋〕東京。分厚い眼鏡を目印に"薮睨み"とあだ名される謎の青年による無差別な拳銃による恐喝事件が続発。

Digitized by Google

下北沢。美容院でバイトするＨｉｎａｎｏ（吉川ひなの）は刑事の兄Ｒｏｙ（杉本哲太）と二人暮らし。ある晩、ＨｉｎａｎｏはＲｏｙが持ち帰った事件の書類で"薮睨み"の犯人の似顔絵を見て興味を持つが、その矢先、電車で偶然、その似顔絵とよく似た青年Ｋ（武田真治）を見かけ、後をつける。翌日、ビデオカメラを持って青年のアパートを訪れたＨｉｎａｎｏはＫに見つかってしまう。ゲームのプログラマーをしているというＫはレコードで満杯の部屋に住んでいて、Ｈｉｎａｎｏに親しげに身を寄せてくる。その後外出したＫはＨｉｎａｎｏの目の前で、ビデオ屋の店員（モロ師岡）、イラン人にからむバス運転手（大杉漣）などに次々に銃を向けていく。街に再び"薮睨み"の記事があふれた。不安にかられるＨｉｎａｎｏに、Ｋは銃には仕掛けがしてあり標的は外している、分厚い眼鏡は多くを見ないようにするためだと語り、"薮睨み"とはもう縁を切ると語る。二人に理解が芽生えかけた矢先、Ｋの元にヤクザ（ビートたけし）が訪れ、貸していた銃を返せと言い、照準の狂った銃を弄ぶうち、ヤクザはＫの腹を撃ってしまう。ヤクザは逃げ出す。Ｋはやってきた Ｈｉｎａｎｏと外に出るが、ずっと腹を押さえたままだ。一番高いビルの屋上で会おうとＫは言い、二人は別れるが、ビルにＫは来なかった。ヤクザは銃を工事現場に流し込まれたコンクリートの中に捨てた。Ｈｉｎａｎｏは街を歩き続ける。

ネネットとボニ

Nenette et Boni〔ネネットとボニ（人名）〕

仏＊ダシア・フィルムズ＝ラ・セブト・シネマ
作品／キネティック配給　96＝98・11・2
C・V・D　103分　字幕＝細川直子
〔STAFF〕監督＝Claire Denis　製作＝Georges Benayoun　脚本＝Claire Denis／Jean-Paul Fargeau　撮影＝Agnes Godard　音楽＝Tindersticks　美術＝Arnaud De Moleron　編集＝Yann Dedet　衣裳＝Elizabeth Tavernier　録音＝Jean-Louis Ughetto
〔CAST〕Boni…Gregoire Colin／Nenette…Alice Houri／Boulangere（パン屋の女房）…Valeria Bruni Tedeschi／Boulanger（パン屋）…Vincent Gallo／Monsieur Luminaire（ネネットとボニの父親、ルミネール氏）…Jacques Nolot／L'oncle（叔父さん）…Gerard Meylan／Le gynecologue（産婦人科医）…Alex Descas／La sage-femme（産婆）…Jamila Farah

〔解説〕両親の別居で別れて暮らしていた兄妹の再会と微妙な共同生活をナイーヴなタッチで綴った一編。監督は「パリ、18区、夜。」のクレール・ドゥニ。脚本はドゥニと、彼女とパートナーを組むジャン＝ポール・ファルジョーの共同。撮影は「ベルリン、天使の詩」「パリ、18区、夜。」のアニエス・ゴダール。音楽は英国のロックバンド、テンダースティックス。美術はアルノー・デ・モレロン。編集はヤン・ドゥデ。衣裳はエリザベス・タヴェルニエ。録音はジャン＝ルイス・ウゲット。主演は「ビフォア・ザ・レイン」のグレゴワール・コランと新鋭のアリス・ウーリ。共演は「私の男」のヴァレリア・ブルニ＝テデスキ、「気まぐれな狂気」のヴィンセント・ギャロほか。

〔略筋〕マルセイユ。19歳のボニ（グレゴワール・コラン）は、幼い頃に両親が別居、父親は妹のネネットを連れ、ボニは母親と暮らしていたが、その母の死後は移動屋台のピザ屋で生計を立てながら、母が残した家でひとり暮らしていた。思春期のボニは毎晩パン屋の豊満な若妻（ヴァレリア・ブルニ＝テデスキ）を犯す夢を見ている。そんなある日、寄宿学校から逃げ出してきたネネット（アリス・ウーリ）が転がり込んでくる。ネネットは15歳。久しぶりに再会した兄妹だが、ボニは父を憎んでおり、妹に対しても母の死に目にも来なかったことで恨んでいた。はじめは気に障り妹を追い出したボニだが、翌日現れたネネットから自分は妊娠していると告げられ、心が動く。彼はネネットを産婦人科に連れて行き、5カ月だと知らされた。妹の妊娠が彼の空虚な生活を少しずつ満たしていく。だが、ネネットが子供を里子に出すと言うのを聞いてボニがそれを罵倒すると、ネネットは風呂場で子供を堕ろそうとする。それを制止するボニ。こうして迎えた出産の日。ボニは赤ん坊を抱き、温かい気持ちに包まれた。

ハーフ・ア・チャンス

1 chance sur 2〔チャンスは二分の一〕

仏＊フィルム・クリスチャン・フェシュネール＝ＵＧＣＦ＝ＴＦ１フィルム・プロ作品／シネマパリジャン配給（アミューズ＝テレビ東京＝デジタル・メディア・ラボ＝シネマパリジャン＝東京テアトル提供）　98＝98・11・7
C・CS・DTS　109分　字幕＝寺尾次郎
〔STAFF〕監督＝Patrice Leconte　製作代表＝Christian Fechner　製作総指揮＝　脚本＝Patrice Leconte／Patrick Dewolf　原案＝Bruno Tardon　台詞＝Serge Frydman　撮影＝Steven Poster　音楽＝Alexandre Desplat　美術＝Ivan Maussion　編集＝Joelle Hache　衣裳＝Annie Perier-Fouion
〔CAST〕Julien Vignal…Alain Delon／Leo Brassac…Jean-Paul Belmondo／Alice Tomaso…Vanessa Paradis／Carella…Eric Defosse／Trenchcoat Killer…Aleksandr Yakovlev／Ledoyen…Michel Aumont／Anatoli Sharkov…Valeri Gatayev

〔解説〕美しき娘のために体を張る二人の初老の犯罪のプロの活躍を描く娯楽アクション。フランス二大俳優、アラン・ドロンとジャン＝ポール・ベルモンドが「ボルサリーノ」（74）以来24年ぶりに再共演、ドロンが本作を最後に映画俳優として引退宣言を行ったことでも話題に。監督は「リディキュール」のパトリス・ルコントで、本格的なアクション作としては「スペシャリスト」（85）以来14年ぶりとなる。製作代表は「スペシャリスト」のクリスチャン・フェシュネール。脚本はブリュノ・タルドンの原案を基にルコント、「タンデム」のパトリック・ドゥヴォルフが執筆、「パトリス・ルコントの大喝采」のセルジュ・フリードマンが台詞を担当。撮

Digitized by Google

影はスティーヴン・ポスター。音楽は「ラブ etc.」のアレクサンドル・デズプラ。美術のイヴァン・モシオン、編集のジョエル・アッシュ、衣裳のアニー・ペリエ＝フーロンはルコント作品の常連。共演は「エリザ」のヴァネッサ・パラディ、「ミナ」のエリック・デフォス、「ボーマルシェ　フィガロの誕生」のミシェル・オーモンほか。

【略筋】高級車窃盗常習犯のアリス（ヴァネッサ・パラディ）は出所後、服役中に亡くなった母親ジュリエットが遺したカセット・テープで、自分の父親が彼女が20年前同時に愛した二人の男のどちらかだと知らされる。二人の男とはジュリアン・ヴィニャル（アラン・ドロン）とレオ・ブラサック（ジャン＝ポール・ベルモンド）。ところが、ジュリアンは表向きはレストランのオーナーだが実は名うての宝石泥棒、レオは今は中古高級車販売業者ながらかつては外人部隊で鳴らしたエリート軍人だった。突然娘として現れたアリスをめぐってお互いに父親だと張り合う二人だが、ひょんなことからアリスがチェチェン・マフィアのドラッグ取引の大金を積んだ高級車を拝借してしまい、マフィアの魔手が3人に伸びる。3人はマフィアのドン、アナトーリ（ヴァレリー・ガタエフ）の誕生パーティ会場に乗り込んで大暴れして反撃、マフィアに挑む。マフィアはアリスを誘拐するが、二人は敵の本拠地に殴り込み、みごとアリスを救出し、凱歌をあげるのだった。

ビッグ・リボウスキ

〔The Big Lebowski〔ビッグ・リボウスキ（人名）〕〕

米＊ワーキング・タイトル作品（ポリグラム・フィルムド・エンターテインメント提供）／アスミック配給（アスミック・エース　エンタテインメント＝テレビ東京提供）　C・V・DTS／SDDS／D（SR）　117分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Joel Coen　製作＝Joel Coen　脚本＝Ethan Coen／Joel Coen　撮影＝Roger Deakins　音楽＝Carter Burwell　美術＝Rick Heinrichs　編集＝Roderick Jaynes／Tricia Cooke　衣裳＝Mary Zophres

〔CAST〕The Dude…Jeff Bridges／Walter Sobchak…John Goodman／Maude Lebowski…Julianne Moore／Donny…Steve Buscemi／The Big Lebowski…David Huddleston／Jesus Quintana…John Turturro／Nihilist (Dieter Hauff)…Peter Stormare／The Stranger…Sam Elliott／Knox Harrington…David Thewlis／Jackie Treehorn…Ben Gazzara／Brandt…Philip Seymour Hoffman／Bunny Lebowski…Tara Reid／Nihilist…Flea/Torsten Voges

【解説】富豪の若妻の誘拐事件に巻き込まれたヒッピーくずれの中年男の珍騒動を描いた一編。「ファーゴ」のジョエル＆イーサン・コーエンの監督第7作で、監督・製作をジョエル、脚本・編集（ロデリック・ジェインズ名義、本作ではイーサンの妻トリシア・クークとの共同）を弟イーサンとジェエルの共同で担当するというお決まりのスタイルは本作でも同じ。製作総指揮のティム・ビーヴァンとエリック・フェルナーのコンビ、撮影のロジャー・ディーキンズ、音楽のカーター・バーウェルはコーエン兄弟作品の常連。美術のリック・ヘインリックス（「バットマン リターンズ」）、衣裳のメアリー・ゾフレスは「ファーゴ」に続いての登板。主演は「白い嵐」のジェフ・ブリッジス。共演は「バートン・フィンク」のジョン・グッドマンとジョン・タトゥーロ、「ファーゴ」のスティーヴ・ブシェーミとピーター・ストーメア、「ブギーナイツ」のジュリアン・ムーアとフィリップ・シーモア・ホフマン、「サンタクロース」のデイヴィッド・ハドルストン、「陰謀のセオリー」のベン・ギャザラ、「トゥームストーン」のサム・エリオット、「D.N.A.」のデイヴィッド・シューリスほか多彩なキャストが顔をそろえる。

【略筋】1991年、湾岸戦争下のLA。70年代のヒッピー生活を引きずる中年独身男デュードことジェフ・リボウスキ（ジェフ・ブリッジス）はある晩、二人のチンピラに襲われる。女房の借金を返せと言うが、全く身に覚えのないこと。チンピラは同姓同名の富豪ビッグ・リボウスキ（デイヴィッド・ハドルストン）と彼を間違えたのだ。怒りがおさまらないデュードは唯一打ち込んでいるボウリングの仲間のウォルター（ジョン・グッドマン）とドニー（スティーヴ・ブシェーミ）にことの次第を話す。するとヴェトナム帰りでまだ血気盛んなウォルターは、富豪のリボウスキにねじこめとけしかける。デュードは早速富豪を訪問したがすげなく追い返された。ところが数日後今度は富豪から呼び立てられ、妻バニーが本当に誘拐されたので協力してほしいと要請される。ところが百万ドルの身代金の受け渡しの現場に強引についてきたウォルターが勝手に狂言誘拐と決めつけ、金ではなく下着の入ったカバンを渡したばかりか機関銃まで乱射して大混乱、あげくは大金の入ったカバンを車ごと盗まれた。大弱りのデュードを呼び出した富豪の義理の娘でフェミニストにして前衛アーティストのモード（ジュリアン・ムーア）は、彼に事件は彼女が管理する財団から金を引き出すために仕組まれたものだと告げる。キナ臭い展開に困惑するデュードをまた呼び立てたのが、ポルノ映画界の大立者ジャッキー・トリホーン（ベン・ギャザラ）。ようやく真相が見えてきた。富豪は財団の金をわがものにするために妻の偽装誘拐を仕組んだのだ。呆れはてたデュードだが、ニヒリスト"ピーター・ストーメア、フリー、トルステン・ヴォルグ）と名乗る利用された犯人一味は黙っていない。ボウリング場の駐車場で一戦交えたはいいが、巻き添えを食らったドニーが心臓麻痺を起こしてあの世行き。二人は海辺でドニーの死を弔い、ウォルターは灰を撒き散らした。かくして珍騒動は終わりを告げたが、デュードたちの日常は変わりなく続いていくのだ。

Digitized by Google

マーキュリー・ライジング

Mercury Rising〔マーキュリーの顕現〕

米＊ブライアン・グレイザー・プロ作品（ユニヴァーサル映画＝イマジン・エンターテインメント提供）／UIP配給　98＝98・10・10　C・CS・DTS／SDDS／DD　112分　字幕＝戸田奈津子

〔STAFF〕監督＝Harold Becker　製作＝Brian Grazer／Karen Kehela　製作総指揮＝Joseph M. Singer／Ric Kidney　脚本＝Lawrence Konner／Mark Rosenthal　原作＝Ryne Douglas Pearson　撮影＝Michael Seresin　音楽＝John Barry　美術＝Patrizia von Brandenstein　編集＝Peter Honess　衣裳＝Betsy Heimann

〔CAST〕Arthur 'Art' Jeffries…Bruce Willis／Nicholas Kudrow…Alec Baldwin／Simon Lynch…Miko Hughes／Thomas 'Bizzi' Jordan…Chi McBride／Stacey…Kim Dickens／Dean Crandell…Robert Stanton／Leo Pedranski…Bodhi Pine Elfman／Emily Lang…Carrie Preston／Peter Burrell…L.L. Ginter／Shayes…Peter Stormare／Lomax…Kevin Conway／Jenny Lynch…Kelley Hazen／Martin Lynch…John Carroll Lynch

〔解説〕偶然政府の機密情報システムを解読する暗号を解いた少年を命がけで守るFBI捜査官の闘いを描いたサスペンス。監督は「訣別の街」のハロルド・ベッカー。脚本はライン・ダグラス・ピアソンの原作『Simple Simon』を基にローレンス・コナーとマーク・ローザンタールが脚本を執筆。製作は「身代金」のブライアン・グレイザーとカレン・ケヘラ。製作総指揮はジョゼフ・M・シンガー、リック・キドニー。撮影はアラン・パーカー作品で知られるマイケル・セレシン。音楽は「ダンス・ウィズ・ウルブズ」の名匠ジョン・バリー。美術はパトリツィア・フォン・ブランデンスタイン。編集は「L.A.コンフィデンシャル」のピーター・ホーネス。衣裳は「パルプ・フィクション」のベッツィ・ハイマン。主演は「ジャッカル」のブルース・ウィリス。共演は「アポロ13」の子役マイコ・ヒューズ、「ゲッタウェイ」のアレック・ボールドウィン、「さまよう魂たち」のチ・マクブライド、「北京のふたり」のロバート・スタントン、「GODZILLA　ゴジラ」のボッジ・パイン・エルフマン、「ファーゴ」のジョン・キャロル・リンチとピーター・ストーメア、「大いなる遺産」のキム・ディケンズほか。

〔略筋〕FBIのヴェテラン囮捜査官アート・ジェフリーズ（ブルース・ウィリス）は潜入捜査の際、強硬な突入で一味の少年を殺した上司といさかいを起こし左遷された。そんなある日。自閉症ながらパズルには天才的な才能を見せる9歳の少年サイモン（マイコ・ヒューズ）は、マニアックなパズル雑誌に掲載された暗号を偶然解読してある場所に電話。彼は理解していなかったが、それは米国の全世界のスパイ網を保護する国家安全保安局の機密情報システム“マーキュリー”を解読する極秘コードだったのだ。責任者のクドロー中佐（アレック・ボールドウィン）は機密保持のため配下にサイモンの抹殺を命令、無理心中に見せかけて彼の両親を殺す。事件の捜査の応援に派遣されたアートは、押し入れの奥に隠れていたサイモンを見つけた。アートはサイモンの父親（ジョン・キャロル・リンチ）の死体の手に残された銃に不審を抱き、事件が仕組まれたものと疑い、サイモンに護衛をつけさせるが、はたして二人を殺し屋が襲う。通常のコミュニケーションがとれないサイモンに手を焼きながらも危地を脱したアートは、同僚のビッツィ（チ・マクブライド）の助けを得て敵の正体を探り出そうとする。アートに接触を図った暗号プログラマーのレオ（ボッジ・パイン・エルフマン）とディーン（ロバート・スタントン）はあえなく殺された。だが、ディーンが生前に残した真実を記した告発状をアートは入手、クドローにサイモンの身の安全を保証するため、真実の公表を迫る。クドローは罠をかけてサイモンとアートの抹殺を図るが、事件の真相を知ったFBIが急行して二人の命を救い、クドローは銃弾に倒れるのだった。

Mr.マグー

Mr. Magoo〔マグー氏〕

米＊ベン・マイロン・プロ作品（ウォルト・ディズニー提供）／ブエナ　ビスタ　インターナショナル　ジャパン配給　C・V・DD　87分　字幕＝石田泰子

〔STAFF〕監督＝Stanley Tong　製作＝Ben Myron　co-P＝Andre E. Morgan／Robert L. Rosen　脚本＝Pat Proft／Tom Sherohman　撮影＝Jingle Ma　音楽＝Michael Tavera　美術＝John Willett　編集＝Michael R. Miller／Stuart Pappe／David Rawlins　衣裳＝Tom Bronson

〔CAST〕Mr. Magoo…Leslie Nielsen／Luanne Leseur…Kelly Lynch／Agent Gus Anders…Ernie Hudson／Agent Chuck Stupak…Stephen Tobolowsky／Bob Morgan…Nick Chinlund／Waldo…Matthew Keeslar／Stacey Sampanahoditra…Jennifer Garner／Ortega Peru…Miguel Ferrer／Austin Cloquet…Malcolm McDowell

〔解説〕60年代に人気を博したディズニー製作のドタバタコメディ「Mr.マグー」の実写版リメイク。監督は「ファイナル・プロジェクト」のスタンリー・トン。製作はベン・マイロン。製作総指揮はアンドレ・E・モーガンとロバート・L・ローゼン。脚本はパット・プロフトとトム・シェロマン。撮影は「レッド・ブロンクス」のジングル・マー。音楽はマイケル・タヴェラ。美術はジョン・ウィレット。編集はマイケル・R・ミラー、「ジャングル・ジョージ」のスチュアート・パッペ、デイヴィッド・ローリンズ。衣裳はトム・ブロンソン。主演は「裸の銃を持つ男」シリーズのレスリー・ニールセン。共演は「ヘブンズ・プリズナー」のケリー・リンチ、「野獣教師」のアーニー・ハドソン、「ジキル博士はミス・ハイド」のスティーヴン・トボロウスキーのほか、「ロボコップ」のミゲル・フェラー、「ヒューゴ・プール」のマルコム・マクドウェルが特別出演。

Digitized by Google

〔略筋〕億万長者のマグー氏（レスリー・ニールセン）は強度の近視ゆえ周囲にトラブルを巻き起こす日々。さて、マグーは出席した博覧会でテレビカメラのコードをテープカットしてしまい、その混乱のさなか、高価なルビー"スター・オブ・クリスタン"を美人宝石泥棒のルアン（ケリー・リンチ）が盗み出した。ところが、ひょんなことでルビーはマグーの手元に転がり込んでしまう。ルアンは正体を偽ってマグーに接近。FBIとCIAの捜査官アンダース（アーニー・ハドソン）とステューバック（スティーヴン・トボロウスキー）はマグーを犯人と疑い、彼を追う。正体を隠してマグーに近づいたルアンはまんまとルビーを手中に。そんなこととはつゆ知らず能天気なマグーだったが、真相を知った彼は一躍奮起。マフィアの手に渡ったルビーを追って南米まで大追跡、大騒動のあげく見事ルビーを取り返すのだった。

リプレイスメント・キラー

The Replacement Killers〔替わりの殺し屋〕

米＊バーニー・ブリルスタイン＝ブラッド・グレイ・プロ＝WCGエンターテインメント作品（コロンビア映画提供）／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給 C・CS・SD DS／D 87分 字幕＝岸田恵子

〔STAFF〕監督＝Antoine Fuqua 製作＝Brad Grey／Bernie Brillstein ｴｸﾞｾﾞｸﾃﾞｭｰｻｰ＝John Woo／Terence Chang／Christopher Godsick／Matthew Baer 脚本＝Ken Sanzel 撮影＝Peter Lyons Collister 音楽＝Harry Gregson-Williams 音楽総指揮＝Ralph Sall 美術＝Naomi Shohan 編集＝Jay Cassidy 衣裳＝Arianne Phillips

〔CAST〕John Lee…Chow Yun-Fat／Mae Kover…Mira Sorvino／Stan "Zeedo" Zedkov…Michael Rooker／Terence Wei…Kenneth Tsang／Michael Kogan…Jurgen Prochnow／Ryker…Til Schweiger／Collins…Danny Trejo／Loco…Clifton Gonzalez Gonzalez／Alan Chan…Randall Duk Kim／Peter Wei…Yau-Gene Chan

〔解説〕非情な組織に背いた殺し屋の死闘をスタイリッシュなタッチで描いたアクション。「男たちの挽歌」シリーズなど香港ノワールはじめ、"亜州影帝"と呼ばれた香港のトップスター、チョウ・ユンファのハリウッド主演第1作。94年の「大陸英雄伝」以来4年をへて、満を持しての銀幕復帰となる。監督はMTVの俊英アントン・フークァ。脚本は新鋭のケン・サンツェル。製作総指揮はチョウ・ユンファの盟友で本作の企画実現の立役者である「フェイス／オフ」のジョン・ウーと、彼のパートナーのテレンス・チャン、クリストファー・ゴシック、マシュー・ベアーの共同。製作はブラッド・グレイとバーニー・ブリルスタイン。撮影は「バッドボーイズ」のピーター・リオンズ・コリスター。音楽はスコアをバリー・グレッグソン・ウィリアムス、音楽総指揮をラルフ・サルがそれぞれ担当。美術は「フィーリング・ミネソタ」のナオミ・ショワーン。編集は「アルビノ・アリゲーター」のジェイ・キャシディ。共演は「ミミック」のミラ・ソルヴィーノ、「クリフハンガー」のマイケル・ルーカー、チョウ・ユンファとは「男たちの挽歌」シリーズで共演作しているケネス・ツァン、「イングリッシュ・ペイシェント」のユルゲン・プロホノフほか。

〔略筋〕殺し屋ジョン・リー（チョウ・ユンファ）は、自分の息子を手にかけた刑事ジーコフ（マイケル・ルーカー）への復讐のため、彼の息子を殺せという、チャイニーズ・マフィアのドン、ミスター・ウェイ（ケネス・ツァン）の命令に背いた。彼は人質にされている家族の身を守るため国外脱出を図り、偽造屋のメグ・コヴァーン（ミラ・ソルヴィーノ）を尋ねるが、組織がそこを急襲。逃れたジョンは脱出の唯一の切り札としてメグをつかまえ、協力を要請。はじめは協力を拒んだメグも、家族の命を守るためだけに生きようとするジョンの一徹な生きざまにひかれた。そうこうするうちにもウェイは右腕のコーガン（ユルゲン・プロホノフ）に命じて、手段を選ばぬ新手の二人組の殺し屋リカー（チル・シュエイガー）とコリンズ（ダニー・トレオ）を繰り出し、ジョンの大切な友人の僧侶までをも惨殺して二人の抹殺を図る。同時に組織はジーコフの息子を再度殺そうと図っていた。敵とあれば当事者だけでなく家族の命をも冷然と奪う組織と完全に決別すべく、ジョンはジーコフと息子を救出に向かう。かくして、ジョンは組織の本拠地に乗り込み、死闘の末ウェイを倒すのだった。

ワイルド・マン・ブルース

Wild Man Blues〔ワイルド・マン・ブルース（ルイ・アームストロングの同名曲より）〕

米＊ジーン・ドゥマニアン・プロ作品（スウィートランド・フィルムズ提供）／コムストック配給／97＝98・10・17 C・V・D 102分 字幕＝関美冬

〔STAFF〕監督＝Babara Kopple 製作＝Jean Doumanian ｴｸﾞｾﾞｸﾃﾞｭｰｻｰ＝J. E. Beaucaire 撮影＝Tom Hurwitz 編集＝Lawrence Silk 録音＝Babara Kopple／Peter Miller

〔CAST〕（本人として）Woody Allen&New OrLeans Jazz Band

〔解説〕「地球は女で回ってる」など映画監督としてだけではなく、俳優・作家・脚本家など多岐に渡る才能を発揮しているウディ・アレン。クラリネット奏者としても知られる彼が自身のバンド、ニューオーリンズ・ジャズ・バンドを率いてのヨーロッパ・ツアーの模様と、アレンの知られざる素顔を追ったドキュメンタリー。ツアーに同伴した恋人のスン・イーなど、彼の私的な一面も見ることができる。監督はドキュメンタリー作品『American Dream』（日本未公開）などの作品を手掛けたバーバラ・コップル。製作は「ブロードウェイと銃弾」以降、アレン作品のプロデューサーを務めるジーン・ドゥマニアン。製作総指揮は「地球は女で回ってる」のJ・E・ボーケア。撮影はトム・ハーウィッツ。編集はローレンス・シルク。録音はバーバラ・コップルとピーター・ミラー。

Digitized by Google

10月の公開作品（外国映画）封切り表

（注）封切日は東京中心。●＝白黒作品　★＝パートカラー　＊＝地方封切作品　※完全版など

公開日（製作国）	タイトル	年度	監督	出演	配給（上映時間）	紹介	批評	グラビア
10.3（米）	**アベンジャーズ** **The Avengers**	98	ジェレマイア・チェチック	レイフ・ファインズ／ユマ・サーマン／ショーン・コネリー	WB（89）	1269	1268	1265（特）1266
10.3（米）	**エクセス・バゲッジ シュガーな気持ち** **Excess Baggage**	97	マルコ・ブランビヤ	アリシア・シルヴァーストーン／ベニシオ・デル・トロ	ソニー・ピクチャーズ（101）			1266
10.3（米）	**リバース** **Retoroactive**	97	ルイス・モーニュー	ジェームズ・ベルーシ／カイリー・トラヴィス	ギャガ（94）	1269	1273	1267
10.3（米）	**ピガール** **Pigalle**	95	カリム・トリディ	フランシス・ルノー／ヴェラ・ブリオル	シネマパリジャン（93）			1267
10.3（米）	**エベレスト** **Everest**	98	グレッグ・マクギリブレイ	（ドキュメンタリー）	フィルミック・ヴィンヤード（46）	1269		1266 1267
10.10（米）	**北京のふたり** **Red Corner**	98	ジョン・アヴネット	リチャード・ギア／バイ・リン	UIP（103）	1271	1267	1265
10.10（米）	**マーキュリー・ライジング** **Mercury Rising**	98	ハロルド・ベッカー	ブルース・ウィリス／アレック・ボールドウィン	UIP（112）	1273	1269	1266
10.10（米）	**マスク・オブ・ゾロ** **The Mask of Zorro**	98	マーティン・キャンベル	アントニオ・バンデラス／アンソニー・ホプキンス	ソニー・ピクチャーズ（137）	1269	1268	1265（特）1266
10.10（米）	**友情の翼** **The Brylcreem Boys**	96	テレンス・ライアン	ガブリエル・バーン／ビル・キャンベル	ヘラルド（107）			1267
10.10（米）	**ブギーナイツ** **Boogie Nights**	97	ポール・トーマス・アンダーソン	マーク・ウォルバーグ／パート・レイノルズ	ギャガ（155）	1271	1266（特）1273	1265
10.10（米）	**イヴの秘かな憂鬱** **Female Perversions**	96	スーザン・ストライトフェルド	ティルダ・スウィントン／ポーリーナ・ポリスコフ	パイオニアLDC（114）		1267	1267
10.10（米）	**マルセイユの恋** **Marius et Jeannette**	96	ロベール・ゲディギャン	アリアンヌ・アスカリッド／ジェラール・メイラン	シネカノン（102）		1271	1266
10.17（米）	**モンタナの風に抱かれて** **The Horse Whisperer**	98	ロバート・レッドフォード	ロバート・レッドフォード／クリスティン・スコット＝トーマス	ブエナ　ビスタ（167）	1272	1269（特）	1266（特）1267
10.17（米）	**相続人** **The Gingerbread Man**	98	ロバート・アルトマン	ケネス・ブラナー／エンベス・デイヴィッツ／ロバート・ダウニー・Jr.	ヘラルド提供／東北新社（114）		1272	1268
10.17（米）	**ザ・グリード** **Deep Rising**	98	スティーヴン・ソマーズ	トリート・ウィリアムス／ファムケ・ヤンセン	東宝東和（107）	1271		1268
10.17（台＝仏）	**フラワーズ・オブ・シャンハイ** **上海花** **Flowers of Shanghai**	98	ホウ・シャオシェン	トニー・レオン／クリストファー・ドウ／フェイ・ユー／[illegible]美智子	松竹富士（121）	1271	1268（特）	1268

公開日（製作国）	タイトル	年度	監督	出演	配給（上映時間）	紹介	批評	グラビア
10.17（米）	**ワイルド・マン・ブルース** **Wild Man Blues**	97	バーバラ・コップル	（ドキュメンタリー）ウディ・アレン	コムストック（102）	1273		1266（特）1268
10.17（米）	**クロスゲージ** **Most Wanted**	97	デイヴィッド・グレン・ホーガン	キーネン・アイヴォリー・ウェイアンズ／ジョン・ヴォイト	ギャガ（99）			1267
10.17（独）	**エデンへの道** **ある解剖医の一日** **Der weg nach eden**	95	ロバート・エイドリアン・ペヨ	（ドキュメンタリー）	アップリンク（94）			1267
10.24（米）	**ダイヤルM** **A Perfect Murder**	98	アンドリュー・デイヴィス	マイケル・ダグラス／グウィネス・パルトロウ	WB（107）	1271	1265（特）1266	1265
10.24（米）	**沈黙のジェラシー** **Hush**	98	ジョナサン・ダービー	ジェシカ・ラング／グウィネス・パルトロウ	ソニー・ピクチャーズ（95）			1267
10.24（仏＝日）	**TOKYO EYES** **Tokyo Eyes**	98	ジャン＝ピエール・リモザン	武田真治／吉川ひなの／杉本哲太／ビートたけし	ユーロスペース＝日活提供／ユーロスペース＝ルーメン・フィルム（98）	1273		1266
10.24（米）	**ガンモ** **Gummo**	98	ハーモニー・コリン	ジェイコブ・レイノルズ／ニック・サットン／ジェイコブ・セーウェル／クロエ・セヴィニー	ケイブルホーグ提供／ギャガ＝タキ・コーポレーション（95）		1269	1269
10.31（米）	**リプレイスメント・キラー** **The Replacenment Killers**	98	アントワ・フークァ	チョウ・ユンファ／ミラ・ソルヴィーノ／マイケル・ルーカー	ソニー・ピクチャーズ（87）	1273	1269（特）	1268
10.31（米）	**従妹ベット** **Cousin Bette**	98	デス・マカナフ	ジェシカ・ラング／エリザベス・シュー／ボブ・ホスキンス	FOX（106）	1273	1267（特）1268	1266 1267
10.31（蘭）	**ドレス** **la robe**	96	アレックス・ファン・ヴァーメルダム	アリアーヌ・シュルター／アンリ・ガルサン／リッキー・クール	アスミック・エース協力／日活（103）	1271		1266
10.31（米）	**地球は女で回ってる** **Deconstructing Harry**	97	ウディ・アレン	ウディ・アレン／ジュディ・デイヴィス	松竹富士（96）	1273	1271（特）	1267 1268
10.31（仏）	**ネネットとボニ** **Nennette et Boni**	96	クレール・ドゥニ	グレゴワール・コラン／アリス・ウーリ	キネティック（103）	1273	1268 1271（ケ）	1268
※● 10.31（米）	**キッスで殺せ** **ディレクターズ・カット** **KissMe Deadly**	55	ロバート・アルドリッチ	ラルフ・ミーカー　アルバート・デッカー	ヘラルド（107）			1268

Digitized by Google

ガクノススメ

第一一〇話 サヨナラの美学

牧野 守

十一月十五日の日曜日の夜九時、テレビ朝日の日曜洋画劇場は映画に先立って三十分の特別番組を放映した。『サヨナラ淀川長治さん　八十年の輝ける映画人生　数々のスター交遊録！今夜最期の解説作品!!』である。

十一日午後八時七分、淀川長治さんは大動脈瘤破裂のため、東京都文京区の東大病院で亡くなった。八十九歳であった。

死の前日の十日、入院先の本郷にある東大付属病院から六本木のスタジオに直行し、十二月十三日放送分までの収録を行った。死の当日も昼にビデオ会社の関係者とおしるこを一緒に食べた。「にこにこしていたのに」と語る関係者の談話が新聞紙面の追悼記事に掲載されている。

二か月前の九月六日、八十八歳で死去した黒澤明監督の密葬が八日に都内で行われたが、弔問に訪れた淀川さんの車イスの姿をテレビカメラが写し出していた。「クロさん、私もすぐあとから行くよ」という追悼の言葉も身につまされるような真実味が込められていた。

しかし、その反面、身近なひとには「人間死んでしまったらおしまい。動かなくなってしまうから」と迫りくる死期への想いを語っていたそうである。

ここ数年、少なくとも八十歳を過ぎてからは口癖のように死を意識した言動が目立っていた。昨年十二月の日本経済新聞の文化欄『私の履歴書』に三十回にわたって、彼の映画一筋の生涯を回想した自叙伝を執筆した。これが話題となって、彼の誕生日の四月十日にこの回想録を纏めて『「生きる」という贅沢』（日本経済新聞社）が刊行された。この掲載を始めるにあたって、淀川さんは「これは私の遺言書」ですと語っている。その言葉に違わず、自分の在りのままの姿を率直に、と云うよりは少しクールに、つまり自分の来るべき最後すらも客観視している。それは二十世紀の始めに映画とともに生まれ、その世紀末に逝った彼の八十九歳の生涯の足取りは、老境に到達した日本人特有の諦観、無常感といった枯れた人生観、美意識とは無縁であったことは確かである。

八七年暮れ、と云うと十年位前ごろから過労が原因で体調を崩し二カ月の入院生活を送った。退院後、横浜市の自宅を離れて都内のホテルでの一人暮らしを始めた。そのホテルもレギュラー番組の収録に便利という配慮から、テレビ局のスタジオの棟続きという立地条件の東京全日空ホテルを選んだ。九一年ごろから映画観賞には致命的ともいうべき白内障にかかり、右目がほとんど見えない状態となった。

しかし「映画が見られなくなったら、僕はおしまい」と、試写室では最前列に座って左目だけで見ていた。渡された宣材を手にして、宣伝担当の説明に体を前に傾けて、懸命に聞き入る姿に、真剣勝負のすさまじいばかりの気迫を感じた、と同席した評論家が語っている。

死の前日に収録された映画解説の画面は、それまでのダンディーで、身嗜の良い淀川さんとはうって変わって、掠れた声で、痛々しいまでにやつれた姿であった。とは云っても、映画を語る彼の言葉は明晰で、いつもの淀川節に何の変調も認められなかった。しかしながら一瞬、これまでして出演しなければならないのか、といった印象を抱いた。だが、次の瞬間、収録したビデオをスタジオで再チェックしている淀川さんが眼前に現れた時、思わず襟をただした。その食い入る様な鋭い眼光に、生への執念を越えた鬼気迫るような烈しい気迫に打たれたからである。すでに淀川さんは生死を超越した世界で純化された魂だけがスクリーンの光芒の中に存在していることを実感した。

今年の七月十八日、東京・神田駿河台のアテネ・フランセ文化センターでの「淀川長治映画塾」は最終回を迎えた。この塾は彼を講師として二十年以上も続けられてきた。第三十四回の最終回には車イスで登場し、「僕、もう死にますから。これが最後ですから、何でも聞いて下さい。『淀川、お通じあるのか？』でも何でもいいから、聞いて下さいね」とジョークを混じえて、一時間半にわたって恐怖映画の魅力を語って聴衆を魅了した。その二カ月後の九月二十五日に東大病院に入院した。

実は入院中も周囲の反対を押し切って、慶応大学の藤沢キャンパスでの講演を行っている。車イスですっかり声量も衰えていて、そのことを意識した冒頭のお詫びの云い訳をテレビで見て、その頃から病状が進んでいることを知った。しかし、若い人々を前に、映画の語り部としての淀川さんの気力はいささかの衰へも感じさせなかった。

劇場での映画上映の最終回、エンド・マークがフェイド・アウトして、会場が明るくなる。

観客も三々五々、席を立って、がらんとした客席に、一人身動きせずに座っている観客がいる。後片付けの係員が「お客さん、もう終わりです」と声をかけると、その観客は映画を見たまま息が絶えていた。そんな最後を迎えることが出来たら理想的だと、常日頃淀川さんは語っていたそうである。しかし「サヨナラ　サヨナラ　サヨナラ」が彼のキャッチ・コピーのような死亡記事を目にすると、実は「ハイ、またお会いしましたね」という語りかけが、淀川長治さんにとってはキーワードとして大切だったと思わずにはいられない。

Digitized by Google

今号の筆者紹介

（ ）は掲載ページ数

内海陽子　映画評論家。今年のカンヌで主演の2人が女優賞をダブル受賞した「天使が見た夢」が面白かった。（15）

春岡勇二　ライター。11月下旬号で、友人のイラストレーター、阿部真理子画伯と誌上再会を果たし、嬉しかった。（18）

杉原賢彦　サイバージャーナリスト。淀川氏、最後の収録。己を見る眼光。そのすさまじさは、忘れられない。（20）

持永昌也　「ダークシティ」主義者。98年のキネ旬ベスト・ワン洋画は「ダークシティ」に決定しました。拍手!!（22）

斎藤芳子　ライター。10数年前「日曜洋画劇場」淀川さんの解説収録風景を見学したのは貴重な体験でした。合掌。（22）

水原文人　映画批評家。スコセッシの「クンダン」をLDで見たミーハーは影響され坊主にして風邪をひく。（24）

佐藤友紀　フリーライター。ミュージカル舞台『フォッシー』の凄さを語る言葉が見つからない。ただ見て見て！（31）

大森さわこ　映画評論家。単行本が二冊続き、オコモリ生活。試写に行く時間が十分とれないのが悲しい。（32）

森直人　文筆仕事。最近ちょっとしたカフカ的状況に陥っております。深い意味はないです。ハイ。（34）

今井孝子　ライター。ケイト・ウィンスレットが無名の助監督と電撃結婚。式はパブでソーセージ。さすが！（36）

吉田真由美　朝起きたらガスが止まってた。昼になったらファックスが故障した。こんな日の〆切、守れまへん。（37）

黒田邦雄　映画評論家。「トップレス」「女と女と井戸の中」などを観ると、女性監督の底知れぬパワーを感じる。（44）

品田雄吉　映画評論家・多摩美大教授。淀川長治さん逝去。選考委員長を務めてきた〈淀川賞〉をどうしたらいいのか。（46）

上島春彦　編集者。大ざっぱに要約してしまえば98年は失望の年だった。99年は新しい長編論文に取りかかる予定。（49）

荻尾瞳　映画評論家。バンデラスが『オペラ座の怪人』を歌うビデオに欣喜。これ、お正月にWOWOWで放映。（50）

大和鼎　シネマライター。淀川長治氏が亡くなって、大きな喪失感と共に映画が百歳を越えたことを改めて実感。（56）

野村正昭　映画評論家。ベストテン選考の季節到来。苦労して邦洋ベストワンをようやく決め、ホッと一安心する。（59）

田中千世子　映画評論家。「キノ」の佐藤監督にインタヴューしていよいよひかれ、『オリーブ』掲載のイラストに感心。（61）

野崎歓　フランス文学。ジャン・リノワールの全エッセーを集めた書物を翻訳中。来年こそ刊行するつもり。（68）

きさらぎ尚　映画評論家。願いごとを用意して、しし座流星群を待つも流れ星は見えずに、がっかりしました。（71）

森卓也　「ラブゴーゴー」で、パン屋へ現れたリーファを矢印が示すギャグは、映画祭上映版のみだそうです。（77）

門間貴志　評論家。韓国版「失楽園」のVを入手。未見の日本版と比較すべくビデオ屋へ行く。少し恥ずかしい。（82）

河原畑寧　文筆業。社会思想研究会という大学時代のサークルの最後のセミナーで、年の初めにオーストラリアへ。（90）

浅野潤　映画評論家。東京国際映画祭で会った青木編集長、山根貞男氏、柴田社長。異口同音に「大阪でも会わないのに」（94）

浦崎浩實　東京グランプリ『オープン・ユア・アイズ』と劇団一跡二跳『ONとOFFのセレナーデ』の共通性に驚く。（94）

鉄屋彰子　フリーライター。台湾で林青霞に関する取材をしたが、北京語が話せなくてもどかしかった。（97）

あずまゆか　在米映画ジャーナリスト。今夏に生まれた赤ちゃんの世話に追われ雄一のオフの時間が唯一の取材日!?（101）

横森文　ライター＆役者。「バグズ・ライフ」を観て大感激。すでに我が家はバグズ・グッズの山に…。（102）

日野康一　映画評論家。淀川さんの告別式の後『映画の友』友の会一期生の集い〝軽役会〟を開いて師を偲んだ。（113）

矢吹申彦　イラストレーター。毎年12月は20日で仕事仕舞。その後の小一カ月は好きな東京の暮と正月を愉しむの。（119）

立川志らく　落語家。12月16日18時30分より、独演会「第50回スペシャル・志らくのピン」を国立演芸場で。（123）

橋本治　作家。『双調平家物語』全十二巻刊行開始。ここだけの話、書くのが大変。私はともかく周りは未だパニック。（126）

芝山幹郎　翻訳家。日米野球を見て、一部日本選手の志の低さと一部観客の愚劣さに愕然。やはりアメリカで見よう。（128）

田沼雄一　映画評論家。「ジョー・ブラック～」のジョーは実在の黒人初のメジャーリーガー・投手（ピッチャー）。知ってました？（130）

和田誠　イラストレーター。粉雪まみれインタヴュー集『デコボコ映画館』の装丁をしました。題名より真面目な本。（132）

三谷幸喜　ようやくビデオで観た「現金に体を張れ」。ラスト近く、犬神佐清もびっくりの殺戮シーンに啞然。（132）

双葉十三郎　映画評論家。64年に及ぶ親交があった淀川長治氏に先だたれ、取り残された感じで、心細い日々。（139）

林加奈子　映画祭コーディネーター、在香港。大収穫の一時帰国。でも本とビデオで帰りの荷物は追加料金に。（145）

濱口幸一　今年は、やはり人間とは永遠に生きてはいられないものだと、繰り返し痛感させられた年となりました。（149）

井口健二　SF映画評論家。TIFFではどうにか半分程を鑑賞。中では「レッド・バイオリン」に興味をひかれた。（152）

暉峻創三　映画評論家。台北映画祭でも抜群の評判だった「8月のクリスマス」日本公開が決定したようで嬉しい。（154）

竹入栄二郎　興行通信記者。11月下旬、北京方面の観光旅行。日本の真冬なみだそうだが、ナニタ張を思えば。（158）

内田達夫　シネマライター。始めに淀川長治ありき――本当にお世話になりました。ご冥福をお祈り致します。合掌。（159）

大高宏雄　映画記者。雪の北京でホームレスを見た。10元進呈した。あまり映画は見ない国民だという。何故だろうか。（160）

常石史子　表象文化論。東大博物館で12月10日から開催する、小津安二郎×厚田雄春展の準備に追われています。（166）

友成純一　『電脳猟奇』（ぶんか社）好評発売中。また同社より『友成純一＆鬼畜スペシャル』も年内刊行予定。（168）

大久保賢一　映画評論家。別府での映画

Digitized by Google

祭「笑うアジア」に千四百人の観客。スタッフ、ボランティアにも最大感謝。(171)

井上一馬　エッセイスト。遅ればせながら、インターネット通信を始め、毎日ハマっています。(174)

山根貞男　映画評論家。ディレクTVの三船敏郎一周忌特集座談会の司会をした。放映は12月23日と24日。(176)

新藤純子　映画評論家。十年ぶりに某SF誌で仕事したら、いやがらせの連続でビックリ。これって、いじめ？(178)

綱越峰太郎　淀川長治さんのご冥福をお祈りします。40年前に初めてお会いした瞬間が昨日のようです。(178)

鬼塚大輔　教員。森直人様。ぼくは今夏、新大阪駅のキオスクで、坂田利夫キーホルダーを買いました。(178)

中西愛子　物書き。F・ワイズマンの「バレエ」は素晴しかった。終わり方なんて最高。ブラボー！(178)

村岡良昭　子供の頃から憧れていた納谷悟朗氏の舞台をようやく見る事が出来て感動しています。(178)

北川れい子　映画評論家。第8回TAMA CINEMA FORUMの充実した内容と関係者、客席の熱気に感動。(178)

渡部実　映画評論家。ビデオでエリア・カザン監督の「ベビー・ドール」を初見。迫力ある画面に魅入られました。(190)

田中眞澄　四分の熱。世田谷文学館の吉行淳之介展に出品された島尾敏雄の葉書で、島尾の小岩時代の住所確認。(192)

西脇英夫　映画評論家。老いてますます健在、新藤兼人監督の「生きたい」に深く感動した。(195)

池田敏　ライター。面識はありませんでしたが淀川長治さんの逝去はやはり大きくのしかかる物があります。合掌。(196)

豊崎岳彦　売文家。「可能事などは好きな奴にくれてやれ」などとつぶやきつつ、雑務のただ中で苦闘する毎日。(197)

望月信夫　映画評論家。天保山のIMAXでは寝不足で、はからずも眠ってしまった。次はちゃんと見ましょう。(199)

樋口尚文　映画批評家。「御法度」の記者会見に出かけて松田優作ジュニアの風貌を拝み、たいへん納得感あり。(199)

木全公彦　愛を乞う人。こんな夢を見た。「生きる」「生きたい」「生きない」「生きてみたいもう一度」4段活用4本立。(200)

賀来卓人　映画関係文筆家。引っ越し完了。しかし箱詰めされた荷物は依然山積みのまま。土石流と化す日は近い。(202)

吉川明利　タワーレコード渋谷店勤務。実は「タイタニック」だけでなく「ガンダム」も品不足だったんですよ。(205)

丸山尚輝　ライター。知人・岡野輝男脚本作「人妻不倫痴態　女医・弁護士・教師」(新田栄監督)がお正月公開(206)

望月美寿　ライター。ある事情があって最近、試写室から遠く離れている私。復活の暁には見てろよー(って何を？)。(207)

中村勝則　シネマライター。この場で何ですが、今年は喪中につき年末年始のご挨拶はご遠慮申し上げます。(209)

弓家保則　役者&ライターetc。"東京ファンタまんがまつり"を見た。久しぶりに童心に帰って楽しめた。(211)

米田由美　田舎暮らし実行中ライター。山陰の冬は厳しい。東京とはまた違う辛さ…。ま、お金がないから余計にね。(210)

牧野守　日本映画史研究。十一月二十日、草月ホールでの"ワイズマン監督特集上映"初日のフィーバーに驚かされた。(225)

《チケット・セゾン メンバーズ大募集!!》

この指とまれ

エンタテイメントNo.1クラブ
これであなたも満足

コンサートや演劇、スポーツ観戦が大好きな
あなたの強い味方…それが
チケット・セゾンメンバーズなのです。

メンバーズだけの優先予約や優待特典

一般発売前にメンバーズだけが予約できる…それが優先予約。
超人気公演の獲得チャンスが2度あるのはメンバーズだけってこと。
ほかにも優待割引など毎月たくさんの優先・優待特典をご用意。

チケット情報満載の会員誌「tj」が毎月お手元に

エンタテインメント情報が満載の
本格的情報誌「tj」が毎月お手元に。
優先予約や優待などウレシイ情報を
はじめ、あなたが知りたいことを
バッチリ教えてくれます。そして
なんといっても簡単予約でおなじみの
Sダイヤル(プッシュホン自動予約)コード付きがウレシイ。

WAVEでCDがメンバーズ優待価格で

取り扱い店：WAVE六本木店・池袋店・渋谷店・
吉祥寺店・錦糸町店(吉祥寺・錦糸町は97年5月1日よりサービス開始)

《セゾン》カードをお持ちの方は入会金が無料に

チケット・セゾン会員募集中！
入会金510円　年会費3365円(税込)
入会の手続きは簡単！便利！電話1本でOK
お申し込みは、チケット・セゾン会員センター
03-5276-4145～6(土日祝休/10時～17時)
または、《チケット・セゾン》カウンターまで。

TICKET SAISON

Digitized by Google

デジタル・ムービーワーク・ショップ〝冬期集中3日間〟参加者募集

デジタルで映画製作はもっと身近なものになる。

撮影はデジタル・ビデオ、コンピューターによるノンリニア編集、最終的にフィルムに変換という順路で製作される方法を〝デジタル・ムービー〟という。

この方法により、高価で熟練の技術を必要とする35ミリカメラでの映画製作から解放。映画を作りたいと思った瞬間から、より早く実際的に映画製作の場を獲得できる、新時代のシステムだ。

アップリンクでは〝デジタル・ムービー〟を体験できる3日間のワークショップをこの冬開催、参加者を募集中。映画製作に必要なことは方法論ではなく技術論でもなく、まずは撮りたいものを今すぐ撮ることだと実感できるだろう。

〈募集要項〉

●期間＝［クラスA］12月24日（木）～26日（土）［クラスB］12月27日（日）～29日（火）

●定員＝各クラス40名

●上映作品＝「WAX」「ウォーターメロン・ウーマン」「リメンバランス」「アムステルダム・ウエイステッドー」「BLUE」「アヴェティック」「ザ・ガーデン」「エグザイル・イン・サラエヴォ」

●参加料金＝25000円

●申し込み締め切り＝12月20日（日）

●申し込み方法＝①希望クラス（A or B）②名前③年齢④学校名or会社名⑤住所⑥電話番号orFAX番号orメール・アドレス⑦ビデオカメラ、コンピューター所有の有無⑧参加動機を明記のうえ、ハガキかファックスかe-mailで左記に応募。

●申し込み・問合せ＝〒150－0041 東京都渋谷区神南1－8－17横山ビル3F アップリンク『D・M・W』係 Tel 03・5489・0755 FAX 03・5489・0754 e-mail film@uplink.8.jp

北海道

■むらの活動写真

12月13日（日）

「キートンの酋長」「瞼の母」

※カラード・モノトーンによる生演奏つき

時間＝13時

料金＝大人500円／大学生400円／高校生以下無料

会場＝北海道開拓の村・ビジターセンター講堂

問合せ＝011・898・2692

関東

■『KON』刊行記念 市川崑監督&森遊机トークショー

12月20日（日）

時間＝14時

料金＝無料（先着120名・要予約）

※『KON』（光琳社出版刊）を青山ブックセンター各店でお買い上げの方、当日レシート持参にてサイン受付。

会場＝青山ブックセンター本店読売カルチャーサロン青山

問合せ＝03・5485・5513

■東京国立近代美術館フィルムセンター

〈シネマの冒険 闇と音楽98〉

12月15日（火）・24日（木）「女神」

12月16日（水）・22日（火）「アスファルト」

12月17日（木）・25日（金）「ボルシェヴィキの国におけるウエスト氏の異常な冒険」

12月18日（金）・26日（土）「伊豆の踊子」

12月19日（土）・23日（水）「農夫の妻」

時間＝18時30分、土祝16時

料金＝一般810円／学生490円／小人350円

問合せ＝03・3272・8600 NTTハローダイヤル

■川崎市市民ミュージアム

〈アラヴィンダン映画展〉

12月5日（土）①「黄昏」②「オリダッド・あるところで」

12月6日（日）①「追われた人々」②「黄金のシーター」

12月12日（土）①「サーカス」②「サハジャ」「魔法使いのおじいさん」

12月13日（日）①「エスタッパン」②「黄昏」

12月19日（土）①「オリダッド・あるところで」②「追われた人々」

12月20日（日）①「サハジャ」「エスタッパン」②「追われた人々」

時間＝①13時30分②16時

料金＝大人500円／小中生300円／スカラチケット10枚綴り4000円

問合せ＝044・754・4500

■アモス・ギタイ映画祭

上映作品＝A「フィールド・ダイアリー」B「ベルリン・エルサレム」C「ゴーレム、さまよえる魂」D「ラシュミア谷の人々～この十年」E「メモランダム」F「エルサレムの家」

12月11日（金）A 15時B 17時C 19時

12月12日（土）D 13時E 15時F 17時30分

12月15日（火）B 14時30分C 16時30分D 19時

12月16日（水）E 14時30分F 17時A 19時

12月17日（木）C 14時30分D 17時E 19時

12月18日（金）F 15時A 17時B 19時

12月19日（土）C 13時〈アモス・ギタイ監督を囲むシンポジウム〉15時

料金＝1回券1200円／3回券3000円／全作品券5000円／（㊎）1回券1000円／3回券2500円／全作品券4000円）

会場＝アテネ・フランセ文化センター

問合せ＝03・3291・4339

■第4回アート・ドキュメンタリー映画祭

上映作品＝A「ルー・リード・ロックンロール・ハート」B「ピエール&ジルラブ・ストーリー」「ボーイ・ジョージの肖像」C「KAWAMATA PROJECTS BY GILLES COUDERT」「椅子の回廊」「椅子たちの旅」「トランスフェール」D「エンター・アキレス」「ストレンジ・フィッシュ」E「ジェルジ・リゲティ」F「ポール・オースター」「ジョン・ガリアーノ」G「KAKIBAKA 黒田征太郎」「バナマレンコ」

12月5日（土）①F②桜沢エリカ（漫画家）×生駒芳子（ジャーナリスト）トーク〈③B④C⑤石井相互（映画監督）トーク〉⑥A

12月6日（日）①F②E③B④C⑤G⑥D

12月7日（月）①D②C③G④A⑤B⑥F

12月8日（火）①G②A③F④C⑤D⑥B

12月9日（水）①B②E③D④A⑤G⑥F

12月10日（木）①G②C③F④E⑤A⑥D

12月11日（金）①D②E③G④C⑤B⑥A

時間＝①12時②14時③15時30分④17時30分⑤19時⑥21時

料金＝1500円／学生1300円／シニア1000円／3回券3600円（㊎1回券1300円／3回券3200円）／トークショー1000円

会場＝ユーロスペース

問合せ＝03・3461・0211

■ニュー・ジャーマン・シネマ回顧展

上映作品＝A「昨日からの別れ」B「サーカス小屋の芸人たち」C「突然裕福になったコムバッハの貧しい人々」D「とどめの一発」E「都市の夏」F「ゴールキーパーの不安」G「蜃気楼」

Digitized by Google

H「シュトロツェクの不思議な旅」I「不安と魂」J「シナのルーレット」
12月10日（木）③A④B
12月11日（金）③F④E
12月12日（土）②C③D④J
12月13日（日）①I②G③H
12月17日（木）③G④D
12月18日（金）③C④J
12月19日（土）②H③I④A
12月20日（日）①F②B③E
時間＝①13時②15時③17時④19時
料金＝1回券500円／5回券2000円
会場＝イメージフォーラム
問合せ＝03・3357・8023

■衣装デザインにみる映画の魅力～衣装デザイナー柳生悦子の仕事～
資料展示、
～平成11年4月11日（日）
展示資料＝「智恵子抄」「裸の大将」「風林火山」「敦煌」「忠臣蔵」「佐々木小次郎」などの衣装デザイン原画、スチール写真。
映画上映&トーク、
12月5日（土）「智恵子抄」14時（柳生悦子×川本恵子（ファッション・ライター）トーク『衣装デザイナーの仕事について』）16時30分
12月6日（日）「裸の大将」14時
12月12日（土）「風林火山」14時（高橋昌弘（映画監督）トーク『東京時代劇における衣装デザインについて』）17時
12月13日（日）「敦煌」14時（佐藤純彌（映画監督）×柳生悦子トーク『衣装考証と衣装デザインをめぐって』）17時
料金＝200円／大高生150円／小中生100円／映画鑑賞・トーク無料
会場＝世田谷文学館・文学サロン
問合せ＝03・5374・9111

■BOX東中野レイトショー
黒澤潤短編作品集、
12月5日（土）～11日（金）
「東京天使病院」「スピノザのレンズ」「片足の神様」「Un Ange Passe」
黒坂圭太作品集、
12月12日（土）～18日（金）
「みみず物語」「箱の時代」「春子の冒険」「個人都市」
時間＝21時20分
料金＝1500円
問合せ＝03・3479・7499

■マウス・ピース・無限大記念日～小さき神のつくりし子ら～
11月22日（日）「ヒュルル…1985」19時「魚の部屋」20時
12月10日（木）～12日（土）「羊泥棒」18時30分「プリンキング・イット・オール・バック・ホーム」19時30分「魚の部屋」20時
12月19日（土）「羊泥棒」18時30分「100％の女の子」19時30分「魚の部屋」20時
12月26日（土）「羊泥棒」18時30分「RUNNING HIGH」19時30分「魚の部屋」20時
料金＝1000円（㊎900円）
会場＝なかのZERO本館地下2F視聴覚ホール
問合せ＝03・3487・8391

■日比谷図書館文化映画会
12月9日（水）「にっぽん泥棒物語」
12月16日（水）「落葉樹」
時間＝14時
料金＝入場無料
会場＝日比谷図書館講堂
問合せ＝03・3502・0101

■「報告書」上映会
12月7日（月）
時間＝17時20分／18時05分／19時45分／20時30分
料金＝1000円
会場＝銀座小劇場
問合せ＝010・80・34596

■堀井彩映像個展
上映プログラム＝A「さあかす」「ジャニスに捧ぐ」B「記憶の片隅」「暗闇に抱かれて」C「忘れられない女」「東京女」D「わがまま日和」
12月11日（金）②C③D④C⑤D
12月12日（土）①D②A③B④C⑤D
12月13日（日）①D②C③A④B⑤D
時間＝①13時②14時15分③16時④17時45分⑤19時30分
料金＝1プロ1000円／2プロ1800円／3プロ2400円／4プロ2500円（㊎1プロ800円／2プロ1500／3・4プロ2000円）
会場＝新宿Fu－
問合せ＝03・5373・8693

■自由が丘武蔵野館レイトショー
12月5日（土）～11日（金）
「食神」
時間＝20時50分
12月12日（土）～18日（金）
「チャイニーズ・オデッセイ」
12月19日（土）～25日（金）
「欲望の街　古惑仔」
時間＝19時30分
料金＝1300円
問合せ＝03・3717・6341

■新宿武蔵野館シネマ・カリテ3
〈ハリウッド・クラシック〉
12月5日（土）～11日（金）
「ロング・グッドバイ」11時40分／14時05分／16時30分／18時55分
12月12日（土）～18日（金）
「オペラは踊る」11時10分／13時10分／15時10分／17時10分／19時10分
12月19日（土）～25日（金）
「オーシャンと11人の仲間」11時10分／13時45分／16時20分／18時55分
12月26日（土）～1月1日（金）
「若草物語」11時10分／13時45分／16時20分／18時55分
1月2日（土）～8日（金）
「スティング」11時10分／13時45分／16時20分／18時55分
1月9日（土）～15日（日）
「お熱いのがお好き」11時10分／13時45分／16時20分／18時55分
1月16日（土）～22日（金）
「ガーブの世界」10時40分／13時25分／16時10分／18時55分
問合せ＝03・3354・5670

■立川市中央公民館・定例映画会
12月12日（土）
「哀愁花火」
時間＝14時30分
料金＝無料（定員先着300名）
会場＝立川市中央公民館
問合せ＝042・524・2742

■彩の国さいたま芸術劇場
上映作品＝A「二人が喋ってる。」B「聖なる劇場」「ヤマトナデシコ」C「雷魚」D「フレンチドレッシング」
12月5日（土）①A②B
12月6日（日）①B②A
12月12日（土）①C②D
12月13日（日）①D②C
時間＝①16時②18時
料金＝500円
問合せ＝048・858・5503

■伝統文化記録映画会
12月10日（木）
「狂言鑑賞入門－棒縛・宗論をみる」
「木の生命よみがえる－川北良造の木工芸」
時間＝14時30分
料金＝無料（定員先着100名）
会場＝かながわ県民センターホール
問合せ＝03・3561・7408

北陸

■「風の歌が聴きたい」上映会
12月10日（木）18時
料金＝1700円／学生1500円／小学生1200円／障害者手帳お持ちの方1200円（㊎1400円／小学生1000円／障害者手帳お持ちの方1000円）
会場＝長岡リリックホールシアター
問合せ＝0258・33・1231

関西

■「暗殺のオペラ」日本最終上映

Digitized by Google

12月13日（日）～23日（水）
時間＝13日～19日10時20分、20日～23日16時45分／18時45分
料金＝1500円／学生1300円／シニア・小中高生1000円（㊎1200円）
会場＝京都みなみ会館
問合せ＝075・342・4050

■京都文化博物館
12月5日（土）
「赤線地帯」
12月6日（日）・7日（月）
「土」
12月11日（金）・12日（土）
「暴れん坊街道」
12月13日（日）・14日（月）
「浪花の恋の物語」
12月18日（金）・19日（土）
「妖刀物語花の吉原百人斬り」
12月20日（日）・21日（月）
「恋や恋なすな恋」
時間＝13時30分／17時
料金＝一般500円／大高生400円／中小生300円
問合せ＝075・222・0888

■三重優秀映画鑑賞会
12月23日（水）
「眠る男」
時間＝14時／16時20分／18時40分
料金＝500円（入学金1000円）
会場＝津リージョンプラザお城ホール
問合せ＝059・228・2755

■メイシアター名作映画劇場
12月18日（金）
「どっこい生きてる」
時間＝14時／19時
料金＝1000円（㊎800円）
会場＝吹田市文化会館・メイシアター小ホール
問合せ＝06・380・2221

■中華民国（台湾）電影会
12月12日（日）
「旧情綿綿」
時間＝18時30分
料金＝500円（烏龍茶付き）
会場＝大阪市立北市民教養ルーム
問合せ＝0798・67・2300

■「ベイビークリシュナ」上映会
12月6日（日）
時間＝11時／14時／16時／18時
※12時30分より高岡茂監督を囲んでのトーク有。
料金＝1700円（㊎1400円）
会場＝コミュニティ・ラボ・めふ
問合せ＝06・376・3990

■奈良シネマクラブ
12月19日（土）・20日（日）
「冬冬（トントン）の夏休み」
時間＝19日19時、20日10時
料金＝1000円
会場＝奈良市立ならまちセンター
問合せ＝0745・78・5799

■山形国際ドキュメンタリー映画祭・京都上映
12月13日（日）
「母がクリスマスに帰るとき…」
時間＝14時／16時30分／19時
料金＝1200円
会場＝京大会館
問合せ＝075・344・2371

中国

■第3回うべ市民映画祭
上映作品＝A「カンゾー先生」B「中国の鳥人」C「SF サムライ・フィクション」D「学校Ⅱ」
12月18日（金）A13時／19時B16時
12月19日（土）A10時B13時C16時〈渡部保子氏講演〉D19時15分
12月20日（日）C13時／19時、D10時／16時
料金＝1700円／中高生1000円／小学600円（㊎1500円／ペア券2800円／カルテット券5200円）
会場＝宇部市文化会館
問合せ＝0836・35・3911

■広島市映像文化ライブラリー
〈特集・1930年代の日本映画〉
12月4日（金）「祇園の姉妹」
12月5日（土）「人情紙風船」
12月6日（日）「浅草の灯」
12月11日（金）「阿部一族」
12月12日（土）「泣蟲小僧」
12月13日（日）「太陽の子」
12月18日（金）「愛染かつら〈総集篇〉」
12月19日（土）「鶯」
12月20日（日）「土」
時間＝10時30分／14時／18時（日曜18時の回なし）
料金＝大人440円／小人220円
問合せ＝082・223・3525

■周南シネクラブ映画祭98
12月11日（金）「SF サムライ・フィクション」19時30分
12月12日（土）「SF サムライ・フィクション」11時／16時30分「学校Ⅲ」14時／19時
12月13日（日）「学校Ⅲ」11時／16時30分「SF サムライ・フィクション」14時
料金＝1800円／大学生1600円／中高生1300円／小学生1000円（㊎1600円／大学生1400円／中高生1100円）
会場＝徳島市市民館小ホール
問合せ＝0834・22・5079

四国

■小夏の映画会
〈巨匠映画監督木下恵介の世界〉
12月8日（火）
「二十四の瞳」12時30分／19時15分「太陽とバラ」11時／17時40分「女の園」15時15分
料金＝1800円（㊎1500円）
会場＝高知市あたご劇場
問合せ＝030・783・4016

■高知シネマクラブ
〈巨匠映画監督木下恵介の世界〉
12月17日（木）
「夢翔る人 色情男女」
時間＝18時15分／20時05分
料金＝1800円（㊎1500円）
会場＝県民文化ホール・グリーン
問合せ＝0888・25・0400

九州

■福岡総合図書館映像ホール・シネラ
〈イスラエル映画特集〉
12月5日（土）①「過越しの祭」②「メモランダム」
12月6日（日）①「新しき国」②「ナナ 通りの恋わずらい」
料金＝800円／大高生600円／小中生400円
〈アジアのコメディ映画特集〉
12月9日（水）①「詐欺師」②「奥様万歳」
12月10日（木）①「おとぎ話」②「やさ男」
12月11日（金）①「メルセデス、わが愛」②「夢がほんとに」
12月12日（土）①「熱帯魚」②「雲幻師 弟 人嚇人」
12月13日（日）①「裸足のピクニック」②「詐欺師」
12月16日（水）①「熱帯魚」②「雲幻師 弟 人嚇人」
12月17日（木）①「裸足のピクニック」②「メルセデス、わが愛」
12月18日（金）①「熱帯魚」②「雲幻師 弟 人嚇人」
12月19日（土）①「奥様万歳」②「おとぎ話」
12月20日（日）①「やさ男」②「メルセデス、わが愛」
料金＝500円／大高生400円／小中生300円
時間＝①14時②19時（土日①11時②15時）
問合せ＝092・852・0608

Digitized by Google

※劇場の都合により番組が変更になる場合がありますので、ご確認の上お出かけ下さい。（11月25日現在）＊印は次回作品。

ご愛読者劇場招待券プレゼントのスケジュール

●ご招待券ご希望の方は本誌挟み込みの（試写会ハガキ）でお申込下さい。
しめきりは12月20日消印有効。プレゼントは1月中有効の招待券（ペア）です。

	劇場名	TEL	招待組数	12/5 ⑥ 土	日	7 月	8 火	9 水	10 木	11 金	12 土	⑬ 日	14 月	15 火	16 水	17 木	18 金	19 土	⑳ 日	21 月	22 火	㉓ 水	24 木	25 金
銀座	丸の内松竹	03(3214)3366	2	ショムニ																				＊花のお江戸の釣りバカ日誌
	丸の内ピカデリー1	03(3201)2881	2	トゥルーマン・ショー															ジョー・ブラックをよろしく					
	丸の内ピカデリー2	03(3201)2881	2	ナイトウォッチ															トゥルーマン・ショー					
	丸の内ルーブル	03(3214)7761	5	始皇帝暗殺															6デイズ／7ナイツ					
	松竹セントラル1	03(5550)1631	2	ダークシティ							ロスト・イン・スペース													
	松竹セントラル2	03(5550)1631	2	187〈ワン・エイト・セブン〉																				
	松竹セントラル3	03(5550)1631		ダイヤルM																				＊花のお江戸の釣りバカ日誌
	東劇	03(3541)2711	3	シティ・オブ・エンジェル																				＊トゥルーマン・ショー
	有楽町スバル座	03(3212)2826	5	私の愛情の対象																				
	銀座シネパトス	03(3561)4660	5	ムトウ　踊るマハラジャ																				
				ムトウ　踊るマハラジャ																				
				N.Y. 殺人捜査線															パパラッチ					
	シネ・ラ・セット	03(3212)3761	5	かさぶた／7本のキャンドル																		マイ・スウィート・シェフィールド		
新宿	新宿ピカデリー1	03(3352)1771	5	トゥルーマン・ショー															ジョー・ブラックをよろしく					
	新宿武蔵野館	03(3354)5670	5	タイタニック							プライベート・ライアン													
	新宿ジョイシネマ	03(3209)6180	5	トゥルーマン・ショー															ジョー・ブラックをよろしく					
				ナイトウォッチ																				
				リプレイスメント・キラー							プライベート・ライアン													
	テアトル新宿	03(3352)1846	10	夜の騎士道							しのび逢い								あ、春					
	新宿昭和館	03(3352)2471	10	東京流れ者／紅の流れ星 鉄砲犬							女賭博師・花の切り札／関東無宿／日本侠客伝・斬り込み						十三人の刺客／宮本武蔵・巌流島の決斗							
渋谷	渋谷松竹セントラル	03(3770)1990	2	ショムニ																				＊花のお江戸の釣りバカ日誌
	渋谷ジョイシネマ	03(3462)2539	10	ナイトウォッチ																				＊マイ・フレンド・メモリー
	渋谷シネパレス	03(3461)3534	10	シティ・オブ・エンジェル																				＊トゥルーマン・ショー
	シネ・アミューズ イースト／ウエスト	03(3496)2888	2	ハーフ・ア・チャンス																				＊のど自慢
				Beautiful Sunday															ラストゲーム					
池袋	シネマサンシャイン	03(3982)6101	5	ダークシティ							ロスト・イン・スペース													
				トゥルーマン・ショー															ジョー・ブラックをよろしく					
				ショムニ																				＊花のお江戸の釣りバカ日誌
				時雨の記															ビーストウォーズ					
				プライベード・ライアン							アルマゲドン													
				X－ファイル　ザ・ムービー																				
	テアトルダイヤ	03(3983)9793	5	踊る大捜査線　THE MOVIE							モスラ3　キングギドラ来襲													
	シネマ・ロサ	03(3986)3713	10	モンタナの風に抱かれて							踊る大捜査線　THE MOVIE											スモール・ソルジャーズ		
				ナイトウォッチ																				＊マイ・フレンド・メモリー
浅草	浅草松竹	03(3841)2022	5	ショムニ																				＊花のお江戸の釣りバカ日誌
	浅草中映劇場	03(3841)2400	5	アベンジャーズ／エクセス・バゲッジ							ノック・オフ／リバーズ													
	浅草名画座	03(3841)3028		東京キッド／太平洋の嵐／他				水戸黄門／元禄忠臣蔵〈前・後篇〉									極道の妻たち　三代目姐／花と竜／子連れ狼・子を貸し腕貸し／つかまつる					マルサの女／マルタイの女／他		
東京	早稲田松竹	03(3200)8968	10	アベンジャーズ／オースティン・パワーズ				GO NOW／バタフライ・キス					太陽がいっぱい／見憶えのある他人											
	中野武蔵野ホール	03(3389)3301	5	在日															アクアリウム					
	自由が丘武蔵野館	03(3717)6341	10	踊る大捜査線　THE MOVIE							モスラ3　キングギドラ来襲													
	三軒茶屋シネマ	03(3421)3322	10	ドーベルマン／フル・モンティ																				
	下高井戸シネマ	03(3328)1008	10	地球交響曲　第二番							地球交響曲　第三番								ダロウェイ夫人					
	バウスシアター	0422(22)3555	2	始皇帝暗殺																				＊6デイズ／7ナイツ
	バウスシアター2	0422(22)6631		ダークシティ							ロスト・イン・スペース													
	大井武蔵野館	03(3771)4934	10	影法師　宮本武蔵／絆・影法師　龍虎相博つ／他				稲妻草紙／魔像				右門捕物帖　拾万両秘聞／鬼警鉄〈総集篇〉／他			戦馬天狗・薩摩の密使／朝光桜吹雪			明るい日くもる日・前後篇／旗本やくざ				高田馬場決闘(初祝二刀流)／三味線武士／他		

Digitized by Google

	劇場名	TEL	招待組数	12/5 土	⑥ 日	7 月	8 火	9 水	10 木	11 金	12 土	⑬ 日	14 月	15 火	16 水	17 木	18 金	19 土	⑳ 日	21 月	22 火	㉓ 水	24 木	25 金
東京	キネカ大森	03(3762)6000	5	踊る大捜査線 THE MOVIE							モスラ3 キングギドラ来襲													
				誰かがあなたを愛してる																				
				白痴							夜の騎士道							しのび逢い						
	亀有名画座	03(3601)3350	10	〔縄の女王女慢列伝 vol.2〕			変態家族・兄貴の嫁さん／性感極秘マッサージ全身愛撫／他							戦国ロック・疾風の女たち／レイプ25時・暴姦／他								暴行！／濡れた荒野を走れ／他		
横浜	横浜日劇	045(251)1815	2	ザ・ブレイク／ピース・キーパー／ライヤー									仮面の男／コレクター											
	シネマ・ジャック	0120(198)009		砂の器				霧の旗				内海の輪				わるいやつら				疑惑				
				風の視線	愛のきずな					影の車				黒の奔流				告訴せず				球形の荒野		
	シネマ・ベティ	0120(198)009		ムトゥ 踊るマハラジャ																				
	関内アカデミー劇場	045(261)8913		ラブ＆デス																	＊アイ・ウォント・ユー			
	関内アカデミー2	045(261)8913		初恋						ニューヨーク・デイドリーム														
弘前	弘前マリオン	0172(33)3365	2	ボンベイ ※9日は休館							アルテミシア							オースティン・パワーズ						
新潟	新潟シネ・ウインド	025(243)5530	5	ねじ式																				
松本	松本エンギザ	0263(32)0396	5	踊る大捜査線 THE MOVIE							モスラ3 キングギドラ来襲													
静岡	静岡ミラノ1	054(253)8758	2	アンツ																				
	静岡ミラノ2	054(253)2713		ダークシティ																				
	静岡ミラノ3	054(253)2713		アウト・オブ・サイド																				
	静岡オリオン座	054(252)3652		始皇帝暗殺							アマルゲドン													
愛知	名古屋シネマスコーレ	052(452)6036	10	南京1937／プライド・運命の瞬間														ネネットとボニ						
	ヘラルドシネプラザ1	052(241)1581	10	アンツ																	＊スモール・ソルジャーズ			
	ヘラルドシネプラザ2	052(241)1581		リプレイスメント・キラー ＊スモール・ソルジャーズ〔日本語版〕																				
	ヘラルドシネプラザ3	052(241)1581		従妹ベット														ビーストウォーズ						
	名古屋ゴールド劇場	052(451)0815		ハーフ・ア・チャンス																	＊ぼくのバラ色の人生			
	名古屋シルバー劇場	052(451)0815		ルル・オン・ザ・ブリッジ																	＊ベルベット・ゴールドマイン			
	名古屋シネマテーク	052(733)3959	5	男性・女性							ゴダールのリア王							〔第12回自主製作映画フェスティバル〕		休館			ガンモ	
	今池国際シネマ	052(732)1880	5	リーサル・ウェポン							がんばっていきまっしょい													
	今池国際劇場	052(732)1880	5	踊る大捜査線 THE MOVIE							モスラ3 キングギドラ来襲													
大阪	テアトル梅田	06(359)1080	10	CUBE							ニ・ヴァーナ													
				ハーフ・ア・チャンス														ビッグ・リボウスキ						
	シネ・ヌーヴォ梅田	06(365)0094	5	〔利重剛スペシャル〕							187〈ワン・エイト・セブン〉 ＊たどんとちくわ													
	国名小劇	06(213)9229	3	イヴの秘かな憂鬱							知らなすぎた男													
	シネ・ヌーヴォ	06(582)1416	5	ネネットとボニ							ニキ・ド・サンファル～美しき獣													
	第七藝術劇場	06(302)2073	5	ザ・ウィナー／シーズ・ソー・ラヴリー							〔フレデリック・ワイズマン映画祭〕							未定						
近畿	朝日シネマ1	075(255)6760	5	キャメロット														ベルベット・ゴールドマイン						
	朝日シネマ2	075(255)6760		キャラクター 孤独な人の肖像							地球は女で回ってる													
	祇園会館	075(561)0160	5	不夜城／絆							〔インド映画祭'98〕											リーサル・ウェポン4／TAXi		
	アサヒシネマ1	078(251)9877	5	スライディング・ドア ＊スモール・ソルジャーズ〔日本語版〕																				
	アサヒシネマ2	078(251)9877		ナイトウォッチ ＊マイ・フレンド・メモリー																				
	アサヒシネマ3	078(251)9877		ダロウェイ夫人							ベルベット・ゴールドマイン													
広島	広島サロンシネマ1	082(241)1781	10	ディープ・インパクト																	＊プライベート・ライアン			
	広島サロンシネマ2	082(241)1781		普通じゃない							夢翔る人 色情男女							スウィート・ヒアアフター						
	広島シネツイン	082(241)7711		北京のふたり							ダロウェイ夫人													
九州	シネテリエ天神	092(781)5508	10	アンナ							ガンモ										＊アンナ・マデリーナ			
	シネサロン・バヴェリア	092(852)5650	10	河							恋するシャンソン													

◆次の各劇場へ今号の本誌挟み込み〈試写会ハガキ〉を持参されると、各劇場規定料金にて割引ご招待いたします。
【高知】●高知東映●高知松竹●あたご劇場●高知にっかつモデル劇場（高知キネ旬友の会協力）　【高松】●グランド松竹●ライオンカン●高松東宝（高松キネ旬友の会協力）　【松山】シネ・リエンデ●シネマサンシャイン　【福岡】●福岡松竹ピカデリー●ニュー大洋●福岡東映劇場●駅前ロマン●福岡オークラ劇場●西新アカデミー（福岡キネ旬友の会協力）

Digitized by Google

試写会

ドライ・クリーニング

特製ポストカードセット

フランスとスイスの国境の小さな街でクリーニング店を営む平凡な夫婦の前に、突然孤独な青年ロイックが現れる……。ミウミウ主演の本作が、12月25日にレンタル・リリースされるのを記念して。官製ハガキに住所、氏名、年齢、職業を明記の上、〒150―0002 東京都渋谷区渋谷2―21―1　第4奥野ビル5F㈱ばど内　エキスプレスレーベル事務局　キネ旬係まで。

〈エキスプレスレーベル提供〉

10名

GODZILLA

オリジナルジャンパー

日本が生んだスーパーキャラクター、ゴジラがついにハリウッド・メジャーデビュー！今度はニューヨークに上陸して摩天楼を暴れまわる。製作費130億円を投入し、ミニチュア、アニマトロニクス、CGIなどあらゆる特殊効果と最新技術を駆使して作り上げた大ヒット作が、12月22日にレンタル・リリースされるのを記念して。

〈東宝提供〉

3名

ラッシュアワー

■東京　メルパルクホール
■1月21日(木)
■6時開場／6時30分開映

めっぽう口の達者なLAPDの刑事カーターと、めっぽう腕の立つ香港警察のリー捜査官。異色の二人が中国領事令嬢誘拐事件捜査のため手を組んだ！ジャッキー・チェンが「フィフス・エレメント」のクリス・タッカーと競演した全米大ヒット・アクション。12月20日必着。

〈ギャガ提供〉

30名(15組)

ブラックアダー

ビデオ発売記念特製クリップトーチ

イギリスBBCで7年間にわたって放映された超人気コメディ番組『ブラックアダー』。ミスター・ビーンことローワン・アトキンソン主演、イギリスの時代劇やコメディを番組を茶化して英国アカデミー賞ほか数々の賞を受賞した話題作が、全9巻のビデオとなって発売スタートしたのを記念して。

〈バップ提供〉

3名

ベラ・マフィア　ファミリーの女たち

ビデオ・リリース記念テレカ

華麗なる犯罪組織一族の血塗られた復讐劇に女たちが終止符を打つ！　ハリウッド版「極道の妻たち」と称されたテレビドラマが12月19日にビデオ・リリースされるのを記念して。出演はナスターシャ・キンスキー、ヴァネッサ・レッドグレイヴ、ジェニファー・ティリー、フランコ・ネロほか。

〈日本コロムビア提供〉

10名

スター・チャンネル特製99年版

オードリー・ヘップバーンカレンダー

映画専門CS放送スター・チャンネル特製の、オードリー・ヘプバーン・カレンダー99年版。この世を去って5年、今なお根強い人気を誇る“永遠の妖精”オードリーの魅力を盛り込んだ、毎年ご好評をいただいているカレンダー。

〈スター・チャンネル提供〉

5名

●プレゼントの応募は本誌綴じ込みハガキでどうぞ。12月19日必着です。

編集部だより

■今年はUK98開催年ということもあって、イギリス関連の様々なイベントが日本各地で行われた。なかでも東京国際映画祭協賛イベント英国映画祭98は、話題作揃いのラインナップと来日映画人を多数迎え、盛り上がりを見せた。活況を呈す、イギリス映画。その秘密を、本特集で読み解いて欲しい。

出版事業部だより

■祝「踊る大捜査線」大ヒット！これまで特撮やアニメ中心だった「動画王」を少しリニューアルします。書名通り〝動く画〟で面白いものがあれば取り上げていこうという方針のもと、テレビ・ドラマも積極的に取り上げていきます。1月下旬発売のVOL8では、98年度のドラマのベストを選びます。是非読者の皆様もご参下ください。投票については、ロビイ欄に掲載されていますので、そちらをご参照ください。

営業部だより

■キネマ旬報バックナンバー在庫一覧に掲載されているものの中には、残りがかなり少ないものも含まれております。お求め忘れの号などございましたら、お早目にお近くの書店、または小社営業部までお問合せ下さい。

Digitized by Google

キネマ旬報
平成10年12月下旬号
No.1273

発行人
土橋寿男（風井和男）

編集主幹
植草信和

編集長
青木眞弥

副編集長
関口裕子

編集スタッフ
金田裕美子
前野裕一
志水邦朗

広告部長
御澤茂喜

広告スタッフ
島崎智明

表紙デザイン
峰岸孝之

レイアウト
島岡進
梅津由子

発行
株式会社キネマ旬報社
〒112-8502
東京都文京区小石川1-21-14
小石川吉田ビル　2F
TEL　03-3815-7131
FAX　03-3815-7140
振替東京00100-0-182624

印刷・製本
凸版印刷株式会社

ISSN　1342-5412

本誌記事・写真の無断転載を禁じます。

編集後記

■今号のお正月映画ガイド・座談会を聞いて一番面白かったのが、「鮫肌男と桃尻女」をめぐるカルト／メジャー談義。ガイド枠なのでほとんど割愛せざるを得なかったのが残念ですが、いわゆる主流と目されていた作品群が、普通の人にとってあまり注目されない昨今、両者の境はとても曖昧だし、若い人ほどカルト寄りな気もする。各々のマイブームがメディア等を通じて瞬間最大風速的にマジョリティを得るしかないのかも。**志水**

■ありきたりな言葉ですが、私も淀川先生が掛けた橋を渡って、映画の世界に深くはまっていった一人です。名人芸ともいえるあの名調子できいた数々の言葉の中で、今でも強く印象に残っているのが「いいものを観なさい。それも映画だけではなく、いろんなものを」「立喰いそば屋でも、フランス料理のレストランでも、その場を楽しめる人間になりなさい」という意味の二つ。未だ実行できずにいます。改めて心にとめて合掌。　**前野**

■高校一年生の時、「イノセント」を観に行ってぐっすり眠り込み、伸びをしたら首がグキッ。痛む首筋をおさえつつ雑誌を読んでいたら、淀川先生が『イノセント』の美しさが分からなきゃ駄目。僕はたとえ子供の頃にこの映画を見たとしても感激してたよ」というようなことを書かれていて、己の未熟さに唖然とした。以来、成熟した大人を目指しているが（!?）まだまだ道は遠い。もっともっと教えて頂きたかったです、先生。**金田**

■淀川先生が語られる古い映画の話には、いつも聞き手をタイムマシンに乗せ、その時代に連れていったかのような、時代の空気と臨場感がにじんでいた。私のように、見る端からさっさと忘れてしまうような者はさておき、映画を吸収するように覚えていらっしゃる多くのスペシャリストの方々の中でも、淀川先生の語り口は特別だったと思う。先生を通過した映画の話は、初めて見る映画のように、私の心をわくわくさせた。　**関口**

■相米慎二監督久々の新作「あ、春」がとてもいい。1日だけ撮影現場を覗いたのは確か今年の4月。静かで落ち着いた、暖かい陽気。でも時折り強い風が吹くような日だった。そんな春の季節そのままの印象の映画である。佐藤浩市、斎藤由貴、富司純子、藤村志保、山崎努ら大人の俳優たちが素晴らしい。幸福な気持ちにさせてくれる映画だ。

■98年の映画を振り返ってみると、「タイタニック」に始まり、夏の「ポケットモンスター」と「ディープ・インパクト」、秋には「踊る大捜査線」、単館では「ムトゥ　踊るマハラジャ」など、大きな話題を呼んだヒット作が何本かあった。その一方で、ヒット作に観客が集中し、埋もれてしまう佳作も多いというのはここ数年の傾向通り。

■さて、来年は1900年代最後の年。どうなるだろうか。そしてキネマ旬報は実に創刊80周年を迎える。記念号をはじめ、幾つかの企画を準備しているので、お楽しみに。

■その前に、この年末は恒例のベストテンの季節。既に幾つかの賞は決まってきているようだが、本誌はこれから。前号12月上旬号で読者ベストテンの投票要項と投票葉書を掲載しているので、どうぞ皆さん奮ってご参加を。12月10日締切です。なお、授賞式は来年2月11日、東京有楽町・朝日ホールにて行うことが決まっている。こちらの詳細については次号にて。　**青木**

次号予告

1月上旬新年特別号［No.1274］／12月19日発売／特別定価860円（税込）

巻頭特集●アジア映画百花繚乱（仮題）

中華電影、韓国、インドの最新映画事情／「アンナ・マデリーナ」「モーテル・カクタス」「ヤジャマン　踊るマハラジャ2」など新作映画を紹介
金城武、ケリー・チャン、アニタ・ユン、チョン・ウソン、マニラトナム他インタビュー

企画特集●映画館主義　名画座奮闘篇

名画座の楽しみ／支配人インタビュー／名画座の現在とこれから

作品特集●「あ、春」「6デイズ／7ナイツ」「精霊の島」「ムービーデイズ」「アイ・ウォント・ユー」
新春話題作グラビア●「メリーに首ったけ」「ユー・ガット・メール」「スネーク・アイズ」「ラッシュアワー」

ピンナップ●金城武　Face●大竹しのぶ　対談●相米慎二×富司純子
インタビュー●ハリソン・フォード、大塚寧々、フレドリック・F・フリドリクソン、マイケル・ウィンターボトムズ、ケネス・ブラナー、レイチェル・グリフィス

Digitized by Google

KINEMA JUNPO CINEMA DATA BASE

CD-ROM

キネマ旬報　シネマデータベース シリーズ

Macintosh & Windows

アメリカ篇 AMERICA

- 約11,000タイトル収録
- 動画9タイトル収録
- スチル写真500枚収録
- 音楽10曲収録

各8925円（税込）

アジア・ヨーロッパ篇 ASIA&EUROPE

- 約6,000タイトル収録
- 動画10タイトル収録
- スチル写真約1000枚収録
- 音楽10曲収録

多彩な検索機能で様々な角度から映画が探せます！

お求めの際はパソコンショップまたは、小社までご注文ください。
基本的に書店では取り扱っておりませんのでご注意ください。
小社にご注文の際は、本誌挟み込み振替用紙、または現金書留で、住所・氏名・希望機種（MacまたはWin）を明記の上、税込金額8925円を同封のうえ、下記までお申込ください。

株式会社キネマ旬報社　営業部
〒112　東京都文京区小石川1－21－14　小石川吉田ビル
TEL 03-3815-7131 ／ FAX 03-3815-7139

●動作環境

【Macintosh版】
- ●CPU：68030　16MHz以上またはPower PC
- ●メモリ：5MB以上の空きメモリ
- ●ディスプレイ：640×480ドットで256色表示以上（3200色以上推奨）
- ●ハードディスク：5MB以上の空き容量（10MB以上推奨）
- ●CD-ROM：倍速ドライブ以上
- ●OS：漢字Talk7.1以上

【Windows版】
- ●CPU：486TMS×33MHz以上（66MHz以上推奨）
- ●メモリ：Windows3.1の場合　7.6MB以上（9.6MB以上推奨）
- ●メモリ：Windows95の場合　12MB以上（16MB以上推奨）
- ●グラフィック：640×480ドットで256色表示以上（3200色以上推奨）
- ●サウンド：PCM
- ●ハードディスク：5MB以上の空き容量（10MB以上推奨）
- ●CD-ROM：倍速ドライブ以上
- ●OS：Microsoft Windows 95/3.1（Windows95オートプレイ対応）

資料提供・製作協力：（株）キネマ旬報社　製作・開発・発売：ＮＥＣインターチャネル（株）

Google

中華電影完全データブック
中国語圏映画全封切リスト／中華電影人名録
●1240・11月下旬号　☆820円
ラヂオの時間／ＮＹ検事局／喝采の扉［虎度門］／時をかける少女／中国映画祭97／インタビュー：北野武
●1242・12月下旬号　☆820円
セブン・イヤーズ・イン・チベット／スリング・ブレイド／阿片戦争／インタビュー：松田美由紀・大林宣彦
●1243・臨時増刊　☆1600円
天晴れ！時代劇
萬屋錦之介メモワール／勝新太郎メモワール／時代劇を生きた人々

1998 ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―
●1244・1月上旬号　☆860円
新春中華圏映画大特集／ＣＵＲＥキュア／ピースメーカー／北京原人ーWho are you？／インタビュー：ブラッド・ピット
●1245・1月下旬号　☆820円
ＨＡＮＡ－ＢＩ／桜桃の味／ラブ&ポップ／グリッドロック／城戸賞受賞シナリオ「砂の蝶」／インタビュー：吉岡秀隆
●1246・2月上旬号　☆820円
フェイス／オフ／ハムレット：映画とシェイクスピア／Ｇ．Ｉ．ジェーン／コップランド
●1247・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ②『北野武』
対談：北野武×淀川長治／北野映画大事典他
●1248・2月下旬号　決算特別号　☆1300円
97年度ベスト・テン／公開作品リスト
●1249・3月上旬号　☆820円
映画の用心棒　追悼：三船敏郎／「ユキエ」とこわれゆく女たち／アミスタッド／台湾映画祭／PERFECT BLUE
●1250・3月下旬号　☆820円
俳優が監督するとき／追悼　伊丹十三の記録／グッド・ウィル・ハンティング旅立ち／銀河鉄道９９９エターナルファンタジー／Ｆ
●1251・4月上旬号　☆860円
エイリアン４／オスカー・ワイルド／ドーベルマン／エンド・オブ・バイオレンス／シーズ・ソー・ラブリー
●1252・4月下旬号　☆820円
ジャッキー・ブラウン／ＳＡＤＡ／恋愛小説家／マッド・シティ／上海グランド／ジャンク・フード／ロッテルダム国際映画祭
●1253・増刊　☆4400円◇送料380円
映画ビデオイヤーブック1998
'97年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果
●1254・5月上旬号　☆820円
第70回アカデミー賞のすべて／スターシップ・トゥルーパーズ／ディアボロス　悪魔の扉／連載対談再開：和田誠×三谷幸喜
●1255・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ③『クエンティン・タランティーノ』／タランティーノ大事典他
●1256・5月下旬号　☆820円
ブルース・ブラザース2000／バタフライ・キス／友情Friend Ship／絆／ソウル・フード
●1258・6月下旬号　☆820円
レインメーカー／中国の鳥人／大いなる遺産／真夜中のサバナ／ツイン・タウン／ライアー／スペイン映画の魅力
●1259・7月上旬号　☆860円
普通じゃない／インド映画特集／Ｌ．Ａ．コンフィデンシャル／ディープ・インパクト／愚か者　傷だらけの天使／愛の破片
●1260・7月下旬号　☆820円
GODZILLA（ゴジラ）／ブルガサリ／ねじ式／アンラッキ・モンキー／キリコの風景／追悼：フランク・シナトラ、前田陽一
●1261・8月上旬号　☆820円
「仮面の男」と新世紀映画の旗手《俳優》／ニュー・エイジ・ホラー再考／ウェルカム・トゥ・サラエボ／ディカプリオ・ピンナップ
●1260・臨時増刊　☆2100円
黒澤明と木下恵介
特別対談：山田洋次×佐藤忠男／初公開未映画化シナリオ「どら平太」他
●1263・8月下旬号　☆860円
ガンダム20年あるいはアニメーション1998／踊る大捜査線撮影現場レポート①／TAXi／ＳＦ　サムライ・フィクション
●1264・増刊　☆1600円◇送料380円
フィルムメーカーズ④『ジェームズ・キャメロン』／ジェームズ・キャメロン完全データ
●1265・9月上旬号　☆820円
ボーダーレス・アクターズ：金城武、チョウ・ユンファ他／リメイク映画を愉しむ方法／イヤー・オブ・ザ・ホース／踊る大捜査線②
●1266・9月下旬号　☆820円
『ＥＲ』と外国ＴＶ映画の現在／現代ピンク映画考：ブギーナイツ、夢翔る人　色情男女／生きない／踊る大捜査線③
●1267・10月上旬号　☆820円
プライベート・ライアン／愛を乞うひと／従妹ベット／がんばっていきまっしょい／ＤＶＤ徹底検証／踊る大捜査線④
●1268・10月下旬号　☆860円
追悼　黒澤明／フラワーズ・オブ・シャンハイ／犬、走る　DOG RACE／踊る大捜査線⑤
●1269・11月上旬号　☆820円
踊る大捜査線　THE MOVIE／モンタナの風に抱かれて／リプレイスメント・キラー／カンゾー先生／学校Ⅱ／ハーフ・ア・チャンス
●1270・臨時増刊　☆2500円◇送料380円
映画賞・映画祭データブック
世界の主要映画賞・映画祭年度別受賞一覧／映画祭早見表／映画界年表他
●1271・11月下旬号　☆820円
Ｘ－ファイル　ザ・ムービー／トゥルーマン・ショー／落下する夕方／始皇帝暗殺／踊る大捜査線撮影日誌番外編／ジェラール・フィリップ映画祭
●1272・12月上旬号　☆820円
ニッポン新個性派時代／ビッグ・リボウスキ／宋家の三姉妹／ドクター・ドリトル／アンツ

■英国映画

●1242・'97・12月下旬号　☆820円
もっとイギリスびいき！

■ブラッド・ピット

●1242・'97・12月下旬号　☆820円
セブン・イヤーズ・イン・チベット
●1244・'98・1月上旬号　☆860円
インタビュー：ブラッド・ピット

■市川準

●1225・'97・6月下旬号　☆820円
東京夜曲
●1249・'98・3月上旬号　☆820円
「たどんとちくわ」撮影現場訪問

■'99年をリードするスター特集

●1272・'98・12月上旬号　☆820円
ニッポン新個性派時代

■本欄掲載以外の号の内容リストもございますので、御希望の方は100円切手を同封の上お申し込み下さい。
■バックナンバーのお申し込みは、最寄の書店に御注文いただくか、小社宛、現金書留または本誌挟み込みの郵便振替用紙にて、御希望の号数、御住所、御氏名を明記のうえ、定価に送料をあわせて御入金下さい。また、下記の書店の映画書コーナーにてバックナンバーを扱っておりますので、御利用下さい。

札幌市　パルコＢＣ冨農堂
東京都　八重洲ＢＣ本店・三省堂書店本店・書泉グランデ・書泉ブックマート・書泉ブックタワー・三省堂書店渋谷店・大盛堂書店・パルコＢＣ渋谷店あおい書店六本木店・ブックストア談原宿店・芳林堂書店池袋本店・リブロ池袋店・旭屋書店銀座店・教文館・紀伊國屋本店・紀伊國屋新宿南店・アイブックス成城店・パルコＢＣ吉祥寺店・阪急ブックファースト渋谷店・シネシティ・ジュンク堂書店池袋店
横浜市　有隣堂書店横浜東口ルミネ店・有隣堂書店イセザキ本店
名古屋　ちくさ正文館本店・パルコＢＣ名古屋・ヴィレッジヴァンガード生活倉庫店
京都市　駸々堂京宝店
大阪市　旭屋書店本店・シネ・ヌーヴォ
金沢市　ＧＲＯＯＶＥ！金沢本店
神戸市　ジュンク堂書店サンパル店・駸々堂神戸三宮店
広島市　パルコＢＣ広島店
福岡市　リブロ福岡店

Digitized by Google

キネマ旬報バックナンバー在庫一覧

☆＝定価　送料は各120円
2／下、臨時増刊は160円

1986

●942・8月下旬号　☆735円
松竹創立90周年記念号

1989

●1000・1月上旬号　☆840円
1000号記念／日本映画史上ベスト・テン

●1001・1月下旬号　☆840円
1000号記念／外国映画史上ベスト・テン

1994

●1125・2月下旬号　決算特別号　☆1223円
93年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1136・臨時増刊　☆1529円
小津と語る　シナリオ「瓦版かちかち山」「お茶漬の味」「月は上りぬ」「青春放課後」

●1140・9月上旬号　☆836円
トゥルーライズ／ウディ・アレン研究／北朝鮮映画事情

●1142・10月上旬号　☆866円
四十七人の刺客／二大監督研究・ジャン・ルノワールとロバート・オルトマン

●1149・12月上旬号　☆836円
トリュフォー特集／今そこにある危機／オリーブの林をぬけて

●1150・12月下旬号　☆836円
河童／酔拳2／34丁目の奇跡

1995

●1152・1月下旬号　☆836円
フォレスト・ガンプ／東京兄妹／東京デラックス

●1154・2月下旬号　☆1325円
94年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1157・4月上旬号　☆866円
白い馬／クイズ・ショウ／中国映画の全貌

●1164・7月上旬号　☆866円
ダイ・ハード3／学校の怪談＆トイレの花子さん／ポール・ニューマン特集／レニ

●1166・臨時増刊　☆1529円
宮崎駿・高畑勲とスタジオジブリのアニメーションたち　押井守語る／全作品解説

●1167・8月上旬号　☆836円
ウォーターワールド／ポカホンタス／レッド・ブロンクス／エドワード・ヤンの恋愛時代

●1168・臨時増刊　☆1529円
戦争映画大作戦　史上最大の作戦／コンバット／想い出の戦争映画を語る

●1170・9月上旬号　☆836円
マディソン郡の橋／野球映画特集／幻のオーソン・ウェルズ映画

●1173・臨時増刊　☆1631円
世界映画オールタイムベストテン
映画生誕100年記念特別号(1)

●1174・10月下旬号　☆836円
クリムゾン・タイド／スモーク／東京フィスト／眠れる美女

●1176・臨時増刊　☆1631円
日本映画オールタイムベストテン
映画生誕100年記念特別号(2)

●1178・12月上旬号　☆836円
恋愛映画大特集／特別企画リュミエールとメリエス

1996

●1184・2月下旬号　決算特別号　☆1325円
95年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1185・3月上旬号　☆836円
ニクソン／ジェラール・フィリップ映画祭／KYOKO／愛と哀しみの邦題

●1186・3月下旬号　☆836円
ブロークン・アロー／トイ・ストーリー／ダニエル・シュミット監督研究

●1190・増刊　☆4282円（送料380円）
映画ビデオイヤーブック1996
'95年公開映画全記録／米国・日本配収ベストテン／映画祭受賞結果

●1192・5月下旬号　☆866円
スクリーンを彩る若手女優たち／アンカーウーマン／ピクチャーブライド／ルネ・クレマン、クシシュトフ・キェシロフスキ追悼

●1193・6月上旬号　☆866円
スクリーンで闘う若手男優たち／いつか晴れた日に／必殺！主水死す／白い嵐／和田誠×三谷幸喜／林海象×ジェームス小野田

●1194・6月下旬号　☆836円
フロム・ダスク・ティル・ドーン／映画業界就職ガイド／ゲット・ショーティ／女人，四十。／カンヌ国際映画祭レポート

●1199・8月下旬号　☆866円
上半期映画決算／イレイザー／シクロ／ジャパニーズ・ホラー／パトリス・ルコント

●1200・9月上旬号　☆836円
ACRI／愛のめぐりあい／栄光と狂気／八つ墓村・撮影現場豊川悦司／石井竜也監督インタビュー／日本映画プロデューサーは今

●1201・9月下旬号　☆866円
追悼・渥美清／ウォン・カーウァイ監督大研究／リービング・ラスベガス

●1202・10月上旬号　☆836円
スワロウテイル／ザ・ロック／ティン・カップ／訣別の街／恋の力学／東京国際映画祭

●1205・11月上旬号　☆866円
八つ墓村／豊川悦司ピンナップ／関西映画ガイド／クロッシング・ガード／ザ・ファン

●1206・11月下旬号　☆836円
インデペンデンス・デイ／ファーゴ／ルイ・マルの軌跡／パリのレストラン／弾丸ランナー／アトランタ・ブギ

●1207・12月上旬号　☆836円
日本映画は越境する／クリスマス黙示録／クライング・フリーマン／追悼　藤子・F・不二雄／天海祐希インタビュー／ブラック・ジャック

●1208・臨時増刊　☆1020円
SUNDANCE／レッドフォードの映画に賭ける夢　サンダンス・フィルム・フェスティバル大特集

●1209・増刊　☆3262円（送料380円）
アニメ・データ・ブック1996　テレビ・オリジナルビデオ・映画の1995年のアニメーションのすべてを網羅

●1210・12月下旬号　☆836円
アル・パチーノのリチャードを探して／シェイクスピア・ブーム／追悼　小林正樹／誘惑のアフロディーテ

1997

●1211・1月上旬号　☆866円
虹をつかむ男／デイライト／花の影／秘密と嘘／竹中直人／アンナ・パキン

●1213・2月上旬号　☆836円
マイ・ルーム／エビータ／クラッシュ／ある貴婦人の肖像

●1214・2月下旬号　決算特別号　☆1325円
96年度ベスト・テン／公開作品リスト

●1215・増刊　☆2450円（送料380円）
戦後キネマ旬報ベスト・テン全史
1946年度～1996年度まで収録

●1216・3月上旬号　☆836円
マーズ・アタック！／ジャック／聖週間／コメノ銀河／追悼・マルチェロ・マストロヤンニ

●1218・3月下旬号　☆836円
新世紀エヴァンゲリオン劇場版　シト新生／ジャン・ルノワール映画祭／シャイン

●1219・4月上旬号　☆866円
ロミオ＆ジュリエット／スリーパーズ／そして僕は恋をする／太陽の少年

●1221・5月上旬号　☆850円
傷だらけの天使／ゴールデン・ウィーク映画ガイド／第69回アカデミー賞／田口トモロヲ隔号新連載開始／香取慎吾インタビュー

●1222・増刊　☆4300円（送料380円）
映画ビデオイヤーブック1997
'96年公開映画全記録／米国・日本配収ベスト・テン／映画祭受賞結果

●1223・5月下旬号　☆820円
スター・ウォーズ　ルネッサンス／失楽園八日目／瀬戸内ムーンライト・セレナーデ

●1224・6月上旬号　☆820円
ザ・エージェント／目撃／「うなぎ」と今村昌平監督／追悼・杉村春子・田中友幸・田村孟・田山力哉

●1225・6月下旬号　☆820円
誘拐／ビーター・グリーナウェイの枕草子／東京夜曲／蔦屋錦之介・追悼と再発見

●1227・臨時増刊　☆1800円
テレビの黄金伝説　外国テレビドラマの50年　ジャンル別年代史／TV映画人物事典

●1228・7月下旬号　☆820円
20世紀ノスタルジア／ロスト・ワールド／ラリー・フリント／追悼　キン・フー(3)／インタビュー：ブラッド・レンフロ／西田尚美

●1229・8月上旬号　☆820円
アニメーション1997・夏：もののけ姫、ジャングル大帝他／作家研究：マイケル・チミノ／学校の怪談3／カンヌ映画祭レポート

●1230・臨時増刊　☆1800円
ブルース・リー・リターンズ・超人伝説
「燃えよドラゴン」シナリオ完全収録　インタビュー：チャウ・シンチー、ドニー・イェン他／対談・平岡正明×内藤誠

●1231・8月下旬号　☆860円
上半期映画界決算／スピード2／セドリック・クラピッシュ監督研究／追悼：役者魂　勝新太郎／追悼・筈見有弘

●1232・9月上旬号　☆820円
フィフス・エレメント／インタビュー岸谷五朗／追悼特集　アメリカの心と魂：ジェームズ・スチュアートとロバート・ミッチャム

●1233・臨時増刊　☆1600円
宮崎駿と「もののけ姫」とスタジオジブリ　対談：宮崎駿×佐藤忠男／宮崎アニメのヒロインの系譜／スタッフインタビュー他

●1235・10月上旬号　☆860円
Lie lie Lie／「マルタイの女」と伊丹十三監督／ウォン・カーウァイ監督インタビュー

●1236・10月下旬号　☆820円
「フェイク」＋選ばれし男たち／ボルケーノ／マーティン・シャーマンの世界／三谷幸喜監督作「ラヂオの時間」撮影現場レポート(1)

●1237・増刊　☆1600円（送料380円）
フィルムメーカーズ(1)「リュック・ベッソン」／リュック・ベッソン完全データ他

●1238・11月上旬号　☆820円
東京日和／萌の朱雀／バウンス ko GALS／黒い十人の女／「ラヂオの時間」撮影現場レポート(2)

●1239・臨時増刊　☆2200円

Digitized by Google

キネマ旬報社の本 最新刊

お問い合わせは、お近くの書店または、
弊社営業部 電話03-3815-7131まで

好評発売中

香港電影的広東語 續集

香港映画で学ぶ広東語 名作・名シーン・名セリフ集 第二弾

陳敏儀 著

A5判／本体2,000円＋税

レスリーの、黎明の、小春のセリフの
本当の意味はなんだったのか。
香港映画のあの感動の場面を再現する
最新名作シナリオ対訳集。

［収録作品］

- 恋する惑星
- 君さえいれば
- 月夜の願い
- ポリス・ストーリー3
- 欲望の街／古惑仔
- 008 皇帝ミッション
- 女人、四十。
- ラヴソング

33 133SU XL 3366 3/99 31155-116

Digitized by Google

KOJI YAKUSHO × KEN WATANABE

2大スター競演！

珠玉のハードボイルド・ミステリー！

一発の銃弾が運命を変えた――

役所広司

渡辺　謙

絆

―きずな―

10年の時を隔てて放たれた銃弾。
引き裂かれた"絆"を巡るドラマが今、幕を開ける！

Directed by
KICHITARO NEGISHI
Starring KOJI YAKUSHO　KEN WATANABE
YUMI ASO　KATSUO NAKAMURA

根岸吉太郎監督作品

役所広司・渡辺　謙／麻生祐未　中村嘉葎雄

斉藤洋介　川井郁子／津川雅彦　田中 健　萩尾みどり　夏八木勲

原作：白川道『海は凪いでいた』（新潮文庫刊）　製作：中川敬　脚本：荒井晴彦
音楽：朝川朋之（サントラ盤：ポリグラム）　製作：東宝映画

©1998 TOHO CO.,LTD.All rights reserved

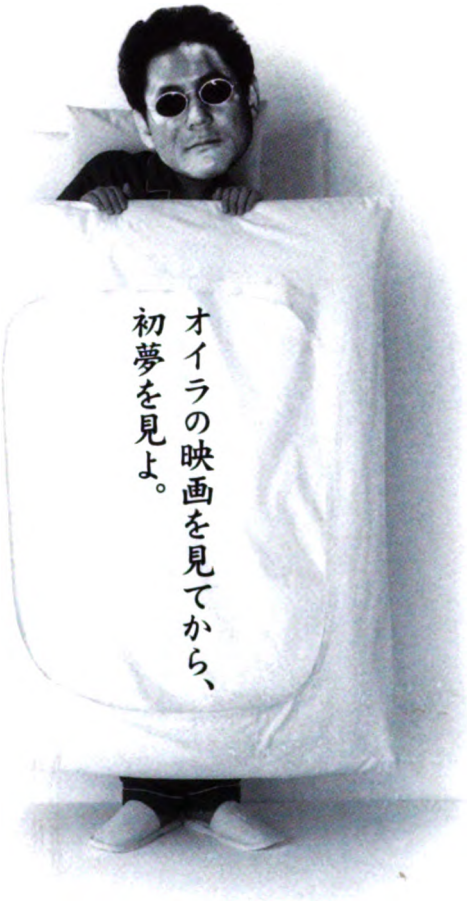
12/4 RENTAL RELEASE

TG4974R／カラー・123分／HiFiステレオ／ビスタサイズ／1998年度作品

SKY PerfecTV!

24時間まるごと北野武

～完全なる北野映画の世界



日本映画専門チャンネル

元旦 TV史上初登場!「HANA-BI」ほか北野武監督全7作品完全放送。

さらに"メイキング・オブ・HANA-BI"、秘蔵VTR"京都映画祭ヴェネチア凱旋シンポジウム"も放送!

HANA-BI
©1997 OFFICE KITANO INC.

キッズ・リターン
©1996 OFFICE KITANO INC.

みんな～やってるか!
©1994 OFFICE KITANO INC.

ソナチネ
©1993 松竹第一興行

あの夏、いちばん静かな海。
©1991 OFFICE KITANO INC.

3-4x10月
松竹富士 提供

その男、凶暴につき
松竹富士 提供

2日 24時間まるごと原節子～節子さんに乾杯!

原節子と名匠の世界に酔う

- ●晩春 (1949) 監督：小津安二郎
- ●お嬢さん乾杯 (1949) 監督：木下恵介
- ●安城家の舞踏会 (1947) 監督：吉村公三郎
- ほか5作品

3日 24時間まるごと解説 竹中直人～甦る!東宝・青春・若大将

竹中直人の愛情あふれるノンストップ解説

- ●何処へ (1966) 監督：佐伯幸三 原作：石坂洋次郎 出演：加山雄三／星由里子
- ●あこがれ (1966) 監督：恩地日出夫 原作：木下恵介 脚本：山田太一 出演：内藤洋子
- ●銀座の若大将 (1962) 監督：杉江敏男 脚本：笠原良三／田波靖男 出演：加山雄三／星由里子 ほかW作品

日本映画専門チャンネル 今なら、月額~~880~~円→400円 '99年3月まで期間限定

お気楽極楽、日本映画専門チャンネル登場! 新作・なつかしの名作・話題作などあらゆるジャンルの映画を年間500タイトル以上放送!

日本映画専門チャンネル(Ch.707)はスカイパーフェクTV!でご覧になれます。

●お問い合わせは
スカイパーフェクTV!カスタマーセンター
0570-037-816
受付時間 9:00～21:00 (携帯電話、PHSからは045-332-8100)

スカイエンターテイメント株式会社

雑誌 20723-12/15 Printed in Japan 定価820円 本体781円 T1120723120829

Digitized by Google

Digitized by Google

Stanford University Libraries
3 6105 125 251 525

HOOVER INSTITUTION

To avoid fine, this book should be returned on
or before the date last stamped below

Digitized by Google

Digitized by Google

Digitized by Google